
【アニメ化決定！】アラフォー男の異世界通販生活

朝倉一二三

HinaProject Inc.

注意事項

このPDFファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をPDF化したものです。

このPDFファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】

【アニメ化決定！】アラフォー男の異世界通販生活

【Nコード】

N2945EG

【作者名】

朝倉一二三

【あらすじ】

皆様のおかげをもちまして

「アラフォー男の異世界通販生活」アニメ化決定しました！

2025年1月9日、放映開始！

ツギクルブックス様より、「アラフォー男の異世界通販生活」1～3巻が発売中！。

アラフォー男の異世界通販生活コミックス1巻～8巻（完結） 累

計130万部突破！

うみハル（著），朝倉 一二三（著），やまかわ（キャラクタ原案）

よろしく願いたします。

流浪のおっさん、1クリックのネット通販でやりたい放題！

わけも分からず異世界に転移してしまったアラフォー独身男のケンイチは、転移の際に授かったネット通販能力によって魔物が蠢く危険な森の中から無事脱出する。

買い取り機能を利用して異世界の物を換金し、現代日本の商品を購入。それを市場で売り始めると、たちまち人気商品として完売してしまった。

このまま店を大きくしていくこともできたが、ケンイチの目的はあくまでもスローライフを送ること。

街外れの森の中にネット通販で買った組み立てキットの家を建てて、自給自足の通販生活が始まった。

ネット通販を使って自給自足はおかしい？

そんな細かい事は言わずに、異世界スローライフを満喫しようじゃないか。

おっさんの異世界通販生活が今はじまる！

完結いたしました。

1話 ステータスオープン!

<i300418—15982>

——気が付くと、森に立っていた。

鬱蒼とした大木が立ち並び、見える範囲では終わりが見えない暗い森。

暗くて、下草が生えていないので、結構な範囲まで見渡せる。俺のいる場所は、針葉樹らしい真っ直ぐな巨木が根っこを露わにして倒れているので、その空間だけがポツカリと森に穴を開けている。

木——特に針葉樹つてのは意外と簡単に倒れる。真っ直ぐで長い程倒れやすいのはテコの原理だ。

木が倒れて森に穴が開くと、どうなるか？ 上を見ると空が見えて、そこだけ陽の光が差し込んでいる。

空は青空だ。

さて、この状況はなんなのであろう。

自分の記憶を洗ってみる——自分の名前も歳も思い出せるし、住んでいた住所も思い出せる。

田舎にやっと開通した光ケーブルを使って、インターネット上でイラストを描く商売を細々としながら、家庭菜園をしたりとスローライフを楽しんでいたオッサンだ。

近所の山へ山菜採りにでも行って、事故にでも巻き込まれたのであろうか？ それにしては、身体に異常は無いしピンピンしている。

「なんだってんだ……」

独り言を呟つぶやいてみても、当たり前だが何も解決しない。

どうすりゃいい？ どこにいるのかが解らなければ、文字通りの遭難だ。

この場に留まってもどうしようも無い。俺はあてもなく、歩き始めた。

――――◇◇――――

しばらく森を歩くと汗ばむが、長袖シャツを腕まくりしたりは出来ない。森には虫や蛭がいるからだ。

どういう状況かは解らんが、長袖シャツを着ていて良かったぜ。下はいつも履いている安い作業ズボンとデイスカウトショーツで買ったスニーカーだ。

森の中なら、長靴を履いていれば完璧だったが……致し方無い。

本当は、首周りにもタオルを巻きたい。首元が開いていると、ここからダニに侵入されて、背中を食われたりする。

山菜採りで度々ダニにやられて、病院の世話になったりしているからな。

住んでいたのは田舎なので、小さな町の病院でも数十km先だ。蜂に刺されてアナフィラキシーショックでも起こしたら、病院へ辿り着くまでに死んでしまう。それが田舎ってやつだ。

森を歩いても、起伏の無い平坦なので、山でもないのだろう。俺が住んでいた近所でこんな場所は無かったはずだ。

平坦な場所は田畑に開墾されており、森と言えば山だった。

「ふう……」

一息ついて、辺りを見回す――何も無い。

何も無いのは良いが、熊でも出たら終了だな。だが、このままじゃ水も食料も無いし、いずれは人生が終了するのが目に見えている。

喉が渴いたし、腹も減ったが何も無く、ポケットを弄まさぐってみても空……。

周りにはキノコが生えているのだが、どんな種類なのか、見た事がない物ばかりだし、危なくて食えない。

「こりゃ、拙まちいぜ。 どうかしてこの森を抜けて、人里に出ないと」

再度辺りを見回す。すると、何か白い物が光ったような気がした。とりあえず、そこへ行ってみることにした。

————◆◆————

「おお……なんじゃこりゃ」

何か光った場所に辿り着く。そこにあつたのは大木の根元に横たわり、錆が浮いている銀色の甲冑。

中世の騎士が着ているような、プレートアーマーとか呼ばれる鉄製の鎧だ。野生動物に荒らされたのか、少々バラバラになっているが……。

中身もちゃんと入っており、顎と首が外れた骸骨が、こんにちは——している。

「やべえ、死体発見だよ」

ビビりながら周りを探すと、剣も落ちていた。両刃の真っ直ぐの剣——恐らく、両手持ちの立派な物だと思われるが……。

刃こぼれしてかなり錆びてはいる。研いでも使うのはちょっと難しそうだ。これなら、打ち直した方が早いと思われる。

仏様には少々可哀想だが、非常事態につき死体を漁らせてもらう。なにも持っていなかったが、指輪とナイフを手に入れた。

ナイフは紐の付いた鞘付きなので、俺のベルトに固定して使う事に。

とりあえず武器は、なんとかあったが、問題は食い物だ。

それにしても、このプレートアーマーは、なんなのであるうか？
ウチの田舎でこんな酔狂をやってる奴なんて知らないしな。

造りだって半端じゃない。どう見てもレプリカ等では無く本物だ。
しかも、傷が入っててかなり使い込まれているし、補修された跡だ
ってある。

趣味で、ごっこ遊びをするぐらいじゃ、こうは年季が入らないだ
ろう。

それに、この使い込まれた剣だって銃刀法に引かかるはずだ。
無論、本当の鋼で模造刀のような合金製ではない。

なんだろう——この状況は？

罠か？ 何者かが、俺を陥れようとしているのか？

しかし、こんな有名人でもない田舎のオッサンを陥れてどうする
？ 騙したって金なんか持ってないぞ？

それに、何もかもが大掛かり過ぎる。

こんな場所だって見たことが無いしな。このアーマーと剣だって
タダではないはずだ。

——なれば、もしかして……まさか、異世界？ 冗談のような本
当の話？

「じゃあ、『ステータスオープン！』とか言ったら開くのかよ！」
その言葉に反応してか、俺の目の前に光り輝く白い板が現れた。

「マジで出たわ」

【名前】 ケンイチ・ハマダ

【年齢】 38

☆シャングリ・ラ

☆アイテムBOX

☆ゴミ箱

「は？ コレだけ？ HPとかMPとかは？ スキルとか魔法とかは？」

それに、シャングリ・ラってなんだよ。真っ先に思いつくのは、いつも俺が使ってた通販サイト。意味が解らん。

とりあえず、シャングリ・ラー——と言葉に出してみるが、何の反応も無し。それじゃ——触れてみる。

画面が変わった。そしてそこに表示されたのは、俺がいつも使っていた通販サイト——シャングリ・ラの画面が現れた。

シャングリ・ラは総合ネット通販会社で、マジで何でも売ってる。本と生鮮食料品から、衣料品、玩具、新車&中古車の車やバイク、トラックや重機まで売ってる。

月に1000円払えば、電子書籍や動画も見放題だ。売ってないのは、飛行機や銃火器ぐらいなものだな。

——そう思ったんだが、最近検索したら、ビジネスジェット機まで売ってて驚いた。

「マジでか。こんなのアリ？ どんなチートだよ」

続いて、アイテムBOXとゴミ箱にも触れてみると、白いウインドウが表示されるだけ。

「アイテムBOXっていうぐらいだから、物が入るのか？」

試しに、鎧の側に転がっていた剣を画面に近づけてみると——中に吸い込まれた。

「うわ！」

画面は――。

【錆びついた剣】×1

――と表示が変わった。そして、その画面の【錆びついた剣】の項目を触れると、別のウインドウが立ち上がった。

【取り出しますか？】 【ゴミ箱】

――の2択。取り出しのボタンを押すと、再び俺の前に剣が現れた。

「おお！ こりゃ、便利」

試しに、ゴミ箱を選択すると、ゴミ箱のウインドウへ移される仕様のようだ。そして、ゴミ箱ウインドウの下には、渦巻きボタン。

「これは……？」

渦巻きボタンを押すと、別のウインドウが立ち上がった。

【ゴミ箱を空にしますか？】

ははあ、PCのOSと同じ仕様って事か。ゴミ箱を空にしないで、一定時間は保持されるってことだな。ゴミ箱から再度取り出す事も可能だ。

アイテムBOXもゴミ箱も、どのくらい入るのかは、現時点では不明……。

とりあえず、なんとなく仕様は解った。しかし、これをそのまま使っているのだろうか？

タダでこんな便利な物が使えるなんて、不気味だろ？ 対価は？
散々使った後に、料金払えって詐欺じゃないのか？

それとも、最後に悪魔が出てきて、料金の代わりに魂をよこせ――
グヘヘへってネタじゃないのか？

――だが、しかし。

わけの解らん能力でも、今は頼らないと――このままでは数日で
体力を使い果たして餓死だ。

ここに転がってる鎧の騎士と同じ運命になる。

この能力を使う事に腹を決めたので、シャングリ・ラの方へ目を
移してみる。

画面を確認すると、いつも使っていたサイトと同じ物だな……。

何はともあれ使ってみる事にするか。

画面の上部に検索窓があって、そこをタップすると、スクリーン
キーボードが起動する親切設計。

【パン】と入力してみる。

――すると、普通に検索結果が表示される。うーん、便利だ。い
つも使っている物と全く変わらないな。

【初回限定】おいしいパンの詰め合わせ

――という、パンが10個程セットになっている物を選択して、
カゴに入れる。後は飲み物だな。おいしい牛乳ってのが、3パック
纏めて1000円程で売っている。コイツにしよう。

カゴの中身を確認すると、2500円ぐらいだな。【購入】を押
す……。

【残高不足です】

――無情に表示される悲しい文字列。

「ええ？ 金か？ そりゃ、金は必要だろうが、そんなの持ってないぞ？ どうすりゃ良いんだ？」

悩んでいると、残高不足の下に【チャージ】という項目があるのに気がついた。【チャージ】を押してみる。

——すると、新しいウィンドウが立ち上がった。

「ここへ金を入れろって事か……でも、金が無いならどうすりゃいい？」

ブツブツ言っても、ウィンドウは何も答えてくれない。やけくそになって、先ほどアイテムBOXへ入れたりしていた剣を突っ込んでしまう。

「これでも持ってたけどロボウ！」

だが、剣はウィンドウの中へ吸い込まれた。

【錆びついた剣】×1

そして、その下に――。

【査定・買い取りしますか？】

ええ？ 買い取りも出来るのか？ 鉄の地金の値段かな？ とりあえず、ポチッと押してみる。

【査定結果】 【錆びついた剣 買い取り値段100,000円】

「いちじゅうひゃく――10万円か？ そんなに高いのか？」
買い取り査定の下に更に項目がある。

【詳細を表示する】

どういう査定なのか、教えてくれるのか。こりゃ、便利だな。

【錆びついた剣（地金） 査定値段5,000円】

【石^{ルビー} 査定値段95,000円】

え？ ルビー？ ルビーなんて、どこかに付いてたのか？ 錆びついて汚れて見えない所に石でも嵌っていたのかもしれない。

だが、すぐに金は欲しい。この値段で買い取りをしてもらうことにした。

「ポチっとな」

すぐに決済されて、10万円がチャージされた。

「よっしゃ！ でも、これが本当なら、とりあえずは食い物に困らないが……」

しかし、10万円ぐらいじゃ、こんなの毎日使ったら、1ヶ月ぐらいしか持たないぞ？ どうしても人里に行って、金を稼ぐ必要がある。

もしくは、貴金属やら宝石が出る鉱山があれば、チャージ出来るだろうが、そんな所を今からどうやって探す？ ——不可能だろう。悩んでも仕方ない、とりあえず飯か——。

嘘か本当か、はたまた冗談か解らないが、商品を入れたカゴを表示して【購入】ボタンを押す。

——すると。

何もない空間から、ドサドサと袋に入ったパンと、パックの牛乳が3本落ちてきた。

ちよっと落ちてくるのはどうなのよ？ 精密機械だったら壊れちゃうだろ？

まあ、そんな事より、腹の虫を黙らせる方が先決か……だが、目の前にある鎧の白骨死体が気になる。

「うーん……」

しばし考えたが、白骨死体から鎧を外し、シャングリ・ラでスコップを購入——2000円也。

地面を掘り起こすのに使うコレ、俺の地元じゃスコップと呼んでいるが、JIS規格ではシャベルと言うらしいから、そっちの方が正しいかもな。

地方によって、呼び方が違うらしい。

新品のシャベルが手に入ったので、穴を掘る。腐葉土なので、土は柔らかい。50cm程の深さで良いか……。

穴が開いたら白骨を入れて、埋め戻す。

「成仏してくれよ」

シャベルをアイテムBOXへ入れて、手を合わせるが——この世界に仏様はいないだろうなあ。神様だって違うはずだ。

だがしかし、俺なりに礼は尽くした。手に入れた物は、ありがたく使わせていただく。

白骨死体から剥がした、プレートアーマーも買い取りウィンドウに突っ込んでみると、すぐに査定が出た。

【査定結果】 【プレートアーマー（中古） 買い取り値段50,000円】

ふむ、5万円か——結構いい値段だな。大体、買い取りって言っても、どこが買い取ってるんだよ。意味がわからん。

目の前の白骨死体も無くなったので、パンを食おうとしたんだが——せっかく通販が使えるんだから、試してみたいことが頭に浮かんだ。

シャングリ・ラでカセットガスコンロを買う——2000円也。ついでに、カセットガスを購入、3本で300円。1本100円だな。

小さいフタ付きの鍋を買う1000円。そして、水——ナントカの天然水が2L6本で1200円。最後にカレーカップ麺ビッグが12個で2500円。

「【購入】っと」

ドサドサと購入した物が落ちてきた。

早速、ガスコンロにカセットガスをセットして鍋を載せ、水を入れてお湯を沸かす。お湯が沸いたらカップ麺に入れて——3分待つ。そうそう、割り箸も買わないとな。俺は竹のやつが好きなんだ——100膳入りで500円。これだけあれば、使い捨てでもしばらく使えるだろう。

「ははは！ 完成だ！ これぞ、文明の味！」

カレーカップ麺ビッグをすすりながら、パンを食う。

「うめー！」

これは、キャンプとかに持っていったら滅茶苦茶便利だな。エベレストだって登れちゃうじゃん。

本当に、ここが異世界なのかは解らんが、とりあえず俺の腹は満たされた。

2話 森から脱出!

なにやら、異世界らしき世界に紛れ込んだ、オッサンの俺。

異世界らしく、ステータスオープン出来ちゃって、ネット通販も出来るんだと。一体全体どんな能力だよ。ワケワカメだよ。

とりあえず、カップ麺とパンを食って落ち着いた。人間、腹いっぱいになると、楽観的になるもんだ。

しかし、このままではジリ貧だ。なんとか人里まで行って、商売か物々交換をして金を稼がないと。

稼いだ金で通販して、さらに高く売ると——なんとかかなりそうじゃね? こういうので定番と言えば、香辛料だ。

詰替え用の一袋100円の胡椒とかが、高く売れちゃうんだろ? もう楽勝じゃね?

まあ、そのためにも、この森を脱出しないとな。

「さて、どうするか……」

ショッピング・ラでコンパスを1500円で購入。これで方角が解るはずだ。コンパスの針は一定の方向を指しているので、この世界にも磁界は存在しているようだ。

そして、少々値は張るが——マウンテンバイクを2万円で購入。

一応、商品の評価を見て、評価が高いやつを購入してみた。

酷い物になると、強い衝撃でフレームが折れたりする粗悪品もあるようだが、ここで無駄遣いは出来ないので、妥協する事にした。

まあ、なんとかなるだろう。

それにしても、アイテムBOXはマジで便利だな。あれだけ色々買ったのに手ぶらだぜ。

このアイテムBOXを利用して、運び屋なんかも出来るかもな。恐らく、アイテムBOXにアクセス出来るのは俺だけだろうし。

「さて、行くぜ！」

マウンテンバイクに跨がり、出発進行！ 森の中をコンパスを確認しつつ、ゆっくりと走り人里を目指す。

別に慌てる必要は無い。とりあえず、食い物はあるんだ。これぞ、満腹者の余裕。

—————◆◆———

——マウンテンバイクに跨がり2日め。

ゆっくり進んでいるとはいえ、すでに数十Kmは進んでいるはずだが、一向に森の切れ目は見えない。

どんだけ広い森なのか。延々と巨大な針葉樹が並んでいるのだが、植林でもしなければ、こんな感じにはならないと思うのだが……。

原生林ってのは針葉樹広葉樹が入り乱れてるのが普通だからな。

一休みして、水を飲む。そして、アイテムBOXから取り出した、虫除けスプレーを全身に掛ける。

やはり、森の中の為、虫もそれなりにいるようだ。

途中で、シャングリ・ラで購入した食い物を食べつつ、アイテムBOXやゴミ箱の能力も確かめたりしている。

例えば、生きている昆虫はアイテムBOXに入らないが、死骸なら吸い込まれ——【虫（甲虫）】×1のような表示に変わる。

ならば、植物はどうなのか？ シャベルで掘り起こした苗を入れても——【苗】×1のように表示される。

植物は物によっては、固有名が表示される物もあるので、名前が付いている物もあるのだろう。

面白いのは熱湯を入れたコップを入れても、そのまま保持される事だ。しばらく時間を置いても冷める事は無く、いつまでも温かい。これだけでも、何か面白そうな商売が出来そうだな。肉や野菜をゲットしても、アイテムBOXへ入れておけば、腐ることは無いのだから。

そして、ゴミ箱は何でも飲み込むブラックボックスだ。お菓子の袋や、カップ麺の残り汁など、何を突っ込んでも、渦巻きボタンを押せば消えてなくなる。

どこへ行ってるかは知らないが、生き物は入らないのは、アイテムBOXと同じ仕様のようだ。

もしかして、人間や生き物を巻き込まないような安全装置が働いているのかもしれない。

異世界へやって来て2日目が暮れようとしている。

早めにマウンテンバイクを降りて、大木に立てかける。キャンプに備え、1人用のテントを張る。これもシャングリ・ラで購入した——2000円だ。

昼間は穏やかな気候で少々暑いぐらいなのだが、朝方はちょっと冷え込むので、寝袋も買った——これも2000円だ。

焚き火に火を点けるための着火剤と、カセットボンベに取り付けるガスバーナーを購入——2500円也。

火があれば、暖も取れるし生き物避けにもなる。

今日はちょっと豪勢に焼き肉にしてみるかな。豚こま肉が1.5kg2000円で売っているので、そいつを購入。余ったら、アイテムBOXへ入れておけば良い。

焼き肉のタレは、俺が愛用しているジンギスカンのタレだ。ジンギスカンは羊肉だが、そのタレを普通の焼き肉に使っても美味しい。ジンギスカンのタレ1Lが1本1000円。

そして、焼き肉とくれば、ご飯だな。保存パックに入ったご飯が24個3000円程で売っているので、購入。

ご飯を温めるために、コンロでお湯を沸かしている間、カセットガスコンロをもう1個購入して、肉を焼く準備をする。

コンロに載せる金網を1000円で購入して、火を付けて加熱すると肉を焼く。もうもうと白い煙が立ち上り、脂の焼ける香ばしい匂いが立ち込める。

野外なので、煙出したい放題だ。2〜3枚肉を焼いて食ってみる。

「美味しい！ 美味すぎる！」

俺の貧乏舌なら安い肉で十分だが、シャングリ・ラには高級な肉も結構売っている。金を儲けたら買ってみるのも良いかもな。

だが、本当にここが異世界なら、異世界ならではの美味しい肉があるかもしれないな。

そんな美食を探すのも、異世界冒険の醍醐味ってやつだろ。

飯が温まったので、紙皿に盛る。紙皿なら洗う必要もないので、食い終わったらゴミ箱へ入れれば良い。

コンロや焼き肉の網は洗う必要があるけどな。脂ならアルコールを購入して拭けば良いし。

「焼き肉とご飯は至高の組み合わせ！ それに、野外で食うと、何故か美味く感じるんだよな」

だが、焼き肉に浮かれて調子に乗っていた。焼き肉の匂いが、ヤバイ物と呼び寄せているのに俺は気づかなかったのだ。

飯を食い終わって背伸びをすると、なにやら視界に黒い物が映った……。改めて辺りを見回す。

10頭程の黒くてデカイ異形の影——狼のような生き物が俺の周

りを取り巻いていたのだ。どうやら、焼き肉の匂いでおびき寄せてしまったらしい。

山でそんな匂いをさせたら、動物が寄ってくるのは十分に考えられたはずだ。

俺は、調子に乗った行為を後悔した。まさに、後悔先に立たずだ。辺りは既に暗くなり始めているのだ。

「おわああ！ 武器！ 何か武器を！」

焚き火から、火のついた薪を取り、黒い動物へ向かって投げつけ――それと同時にシャングリ・ラの画面を出して武器を探す。

「武器！ えーと、弓はどうだ？」

いや、弓なんて使ったことがない、いくら威力があるとはいえ、いきなり使って命中させる自信が無い。

銃のようなクロスボウもあるが、どうやって扱うか全く解らん。だが、同じ弓の検索ページに、ゴムで弾を飛ばすスリングショットが乗っていた。

「これだ！ これなら、俺にも解る」

スリングショットは、家庭菜園にやってくるカラスを追いつめために、シャングリ・ラで購入した事がある。以前買った物と、全く同じ物を購入した。

一緒に弾として、9mmのベアリングボールも購入。さらに噴き出し花火セットも購入した。

花火セットは、実家で飼っていた犬が花火を凄く怖がっていたので、この黒い生き物にも通用するかと閃いたのだ。

スリングショットは6000円、花火セットは3000円、ベアリングボールは80個2000円だ。

購入した物がドサドサと落ちてきたので、噴き出し花火の導火線に目の前で燃えている焚き火を使って点火。3つ程奴らに投げつけ

る。

白い火花が噴水のように勢い良く噴き上がると、もうもうと煙を吐きながら辺りを白く照らす。この明るさに、さすがにビビったのか、黒い奴らは、ウロウロと彷徨くように後退し始めた。

「よし！」

俺は、奴らに追い打ちを掛けるように、袋からベアリングボールを取り出すと、そのままポケットに突っ込み、スリングショットで連射し始めた。

1発2発3発――少しずつ修正をしていくと、4発目で奴らの一匹にヒットした。

「ギャン！」

犬のような泣き声を上げて、後退りする黒い獣。

俺は間髪を容れずに、噴き出し花火を次々と放り投げると、スリングショットを連射し続けた。

「キャイン！」

俺の攻撃に、1頭が飛び上がって逃走し始めた。スリングショットの弾が、どこか急所に当たったのだろう。目か或いは鼻か……。

このスリングショット、薄いベニア板なら貫通するぐらいの威力がある。

これだけ攻撃をしていると、徐々に命中率も上がってくる。1発2発と命中弾が多くなってきた。

「ギャン！」「キャン！」

1頭2頭と脱落していき、少々身体がデカイボスらしいのが逃げ出すと、他の奴らも一斉に逃げ始めた。何を使って攻撃されているか、全く解らないのだろう。

「ふおおー！」

俺は、大きな溜息と共に腰を抜かして、尻もちをついた。危機一髪だったが、撃退に成功したようだ。

しかし俺は、あまりに迂闊すぎた。動物に全く出会わなかったのに、恐怖心が薄れてしまっていたのだ。

慌ててテントを畳み、焼き肉の道具も何もかもアイテムBOXの中へ突っ込むと出発の準備を始めた。ここに留まるのは危険だ。

辺りはもう暗いが――奴らが舞い戻ってくるかもしれない。野生動物ってのは、意外と執念深い。

俺は、暗闇の中にマウンテンバイクを漕ぎだしたのだが――全くこのアイテムBOXってやつは便利だな。こんな時でも、手ぶらで運転に専念する事が出来る。

だが、暗すぎる。全く見えない。マウンテンバイクにもライトが付いているが、全く見えないのだ。

やむを得ず、シャングリ・ラの画面を開いて、頭に付けるヘッドライトを購入した。鉱山で働く人が、頭に付けている奴だ。

300ルーメンで3000円という物を購入。単3形乾電池が使えるので、乾電池を20本まとめ買いをした――600円だ。

早速、乾電池を入れて、頭に装着してみた。

「スイッチオン！ おおっ！ こりゃ明るい！」

これだけ明るいなら目潰しにも使えそうだ。この光を当てられたら、目の前が真っ白になるだろう。

先ほどの恐ろしい場所から離れたい一心で、マウンテンバイクをひたすらに漕ぐ。

離れろ！

離れろ！

何も考えられず、ひたすら念仏のように頭の中で呪文のように唱える。

暗闇の中を2時間程漕いだだろうか。大木の間にテントを張ると焚き火をおこし、キャンプをする。

暗くて薪が採せないの、シャングリ・ラで薪を購入した――2000円だ。

今まで、かなり物を購入したのだが、まだアイテムBOXは一杯にならない。容量を教えてくださいパーセナージやらが無いので、見当もつかない。

寝なくてはダメなのだが、先ほどの恐怖から目が冴えてしまって全く眠れない。また襲われたらどうしよう――そんな事ばかり考えてしまう。

武器としてクロスボウの購入も考えたのだが、高い！ 4万6万円ぐらいするのだ。

かなり金を使ってしまったので、ここで大金を使うのはちょっと避けたいところだ。この先にも何があるか解らないから――だが、しかし。

うゝむ、悩む。

敵が現れても、この明るいライトで目潰しして、スリングショットでなんとかするだろう。だが、あくまで希望的観測だ。

全く眠れず、ひたすら焚き火の前で朝を待つ。夜がこんなに怖いとは思わなかった。今までが樂觀し過ぎだったのだ。

やっと、ウトウトし始めた頃には、空が白み始めていた。

夜が完全に明けると、道具を全部アイテムBOXへ突っ込み、朝飯も食わずに、俺はまたマウンテンバイクをひたすら漕ぎ続けた。なんととしても、早くこの森を脱出したかったのだ。

— — — — — ◆ ◆ — — — — —

アイテムBOXからパンを取り出し、囓りながらひたすら漕ぐ事
5時間程——いい加減、ケツが痛い。

眠いし、そろそろ休んだほうが良いだろうか？　だが、俺の目の
前に明るい光が見え始めたのだ。森の切れ目だ。

明るさが増す程に下草が多くなり、森が切れる場所では、人間の
背丈もある草が緑色の壁となって行き先を閉ざす。

「うわあ——こりゃ、森は途切れたけど、今度は草むらかよ……」
とりあえず、この先がどうなっているのかが、知りたい。俺は、
シャングリ・ラの画面を出すと、アルミ製の6段の脚立を購入——
9000円。

少々高い買い物だが、仕方ない。こいつを平に広げて、木に立て
かけると、5m程の高さになる。これなら、結構遠くまで見渡せる
だろう。

10000円の単眼鏡を購入して、脚立に登る。脚立は手軽だが、
事故も多い。簡単に数メートルの高さまで登る事が出来るが、事故
とその高さから叩きつけられるからだ。

まあ、ここの下は柔らかい腐葉土なので、死にはしないと思うが、
こんなところで怪我をしては命に関わるので、慎重に登る。

ある程度の高さまで登ると、背の高い草むらの先まで見通せるよ
うになった。そして、その先には——城壁に囲まれた都市が見える。
単眼鏡を使って確認してみると、確かに都市で、人が動いている
のも見える。

都市からこちらに向かって道路が延びているので、森の中を通っ
ているのかもしれない。

つまり俺は、その道路と並行にずっと森の中を走っていたわけだ。
——となれば、このまま右に進めば、道路に出る事が出来るはず……。

「やった……」

脚立から降りた俺に、強烈な睡魔が襲う。進むべき道筋が見えてほっとしたのかもしれない。

そのまま俺は、大木の根元で眠りについてしまった。

3話 都市へやって来た

森の中で焼き肉をしていたら、黒くてデカイ狼のような生き物に襲われ——恐怖心に駆られた俺は、森から早く出るべくマウンテンバイクを漕ぎ続け、やっと森の切れ目に到達した。

そこで緊張が解けて安心したのか、眠り込んでしまった。

——目が覚めた。

寝込んでしまった事を少々後悔したが、幸いまだ日は高い。眠っていたのは3時間ぐらいか？

早く、ここから右手に進んで道路を目指さなければ……。だが、この世界って、異世界人の扱いはどうなんだろうなあ。

もしかして、いきなり捕まって奴隷とか？ あり得るな……。しかし、このままではどうしようも無い。

とりあえず、パンをかじりながら、シャングリ・ラの画面を出して残金を確認してみる。

「7万6千円ちょっと……もう半分使ったのかよ」

ヤバイ。チャージした金が既に半分ぐらいになっている。やはりなんとかして金を稼がないと——とか言いつつ金を使ってしまう。

疲れたので、甘い物が食いたい。シャングリ・ラでチョココレートを検索——訳ありの割れチョコが1kg 2000円で売ってるじゃないか、これにしよう。

このチョココレートやら、お菓子を売るのも良いかもしれないが、この世界に無い物を売るとヤバいかもしれんしなあ……。

チョココレートを食べながら頭を捻^{ひね}る。甘いチョコの味が俺を元気づけてくれる——疲れた時には糖分が一番だ。

うゝむ。ここはやはり、定番の胡椒でいってみるか。何より一番無難そうだ。ナイフとか刃物でも良いだろうが、胡椒の換金率が一番高そうな感じがする。

シャングリ・ラなら、詰替え用が100g400円で売ってるし、これが金貨や銀貨に化けるなら、大儲けが出来るだろう。

しかし、ナイロンパッケージの袋やガラス瓶も、やっぱり拙いまず気がするな。ガラスも無い世界だとトラブルになるかもしれん。

こんな物をどこで手に入れた！ とかな。捕まって拷問とかはゴメンだぜ。

シャングリ・ラで入れ物を探す。

「革製の巾着袋とか無いかな？ お！ あるじゃん」

1個3000円だ。胡椒より遥かに高い。巾着袋を購入して詰替え用の胡椒の中に入れる。

それを腰のベルトに括りつけると――おお！ RPGの装備っぽい！ こんなのをゲームで見たことがあるぞ。

これがダメなら、都市まで行ってから市場を回って、売るものを決めよう。商売の前に俺の存在が、この世界でどう捉えられるかが問題だしな。

脚立を出しっぱなしなので、アイテムBOXに収納。マウンテンバイクに跨ると、今までやって来た方角から右手――3時の方向へ漕ぎ始めた。

「電動アシストマウンテンバイクが欲しいけど高いよなあ」
「シャングリ・ラで検索しても、10万円ぐらいする。勿論、人前もちろんでは使えないが……」

腹が減ったので、チョコをもう少し食う。

1時間程漕ぐと、森の切れ目に道らしき物が見えてきた。

「ここからは、マウンテンバイクは拙ますいだろう。徒歩にするか……」
マウンテンバイクをアイテムBOXに入れて歩き出すと、すぐに道路に出た。勿論、舗装はされておらず、砂利も敷いていない。タダの土の道だ。

こりゃ、雨が降ったら、泥濘ぬかるみそう……。だが、森の中よりは歩きやすい。アイテムBOXのおかげで、荷物も無いしな。

しばらく歩くと、結構交通量が多いのに気がつく。荷物を積んだ馬車がひっきりなしに通るのだ。

幌付き、幌なし色んな馬車が通る。皆形が違うので、全部手作りのオーダーメイドなんだろうな。

馬車の邪魔にならないように、道の端っこを歩いていると、突然声を掛けられた。

「あんた、歩きかい？」

「は？」

突然の声に振り向くと、横に一頭立ての馬車が止まっていた。馬は黒毛で大型、かなりがっちりした体格だ。

「ダリアまで行くのかい？」

カーキ色の服を着た、若い男が俺の方を見ていた。いや、そんな事より——問題は、言葉が通じるって事だ。

「もしかして、俺の事か？」

「あんた以外に誰がいるんだよ？ この先のダリアに行くんだろ？」
「ああ、そうだ」

森の所から見えた都市は、ダリアというらしい。やはり、言葉が通じる。こいつはラッキーだ。

「乗っていくかい？」

「有り難いが、金を持っていないんだよ」

「ダリアはすぐそこさ、タダで良いよ」

マジか、渡りに船だな。マウンテンバイクが使えれば、すぐに到着するんだが。男の顔を窺っても何か裏がありそうな気もしないの
で、素直に乗せてもらうことにした。

「俺の名前はフヨウだ、よろしくな。 商人だよ」

「俺はケンイチだ」

「はは、変わった名前だな」

人が良さそうな男なので、ここぞとばかりに色々と聞いてみるが
――俺の黒い髪も珍しくはないようだ。

馬車にガタガタと揺れて、男との会話が続く。男の胸の所には、
首から下げた棒状の金属で出来たアクセサリのような物が光って
いる。

先端には石が付いているな。

「それじゃ、あんたの在所じゃ、黒い頭ばかりだったのかい？」

このフヨウって男の髪の毛は、赤っぽい茶色だ。染めたのではな
くて、元々こういう色らしい。

「ああ、そうだな。恥ずかしながら、この歳になるまで、村の外に
あまり出た事がなくてな」

「まあ、商人でもなきや、そういう奴は多いよ。あんたも商売でも
するつもりで、村を出てきたのかい？」

「ああ、そんなところだ」

とりあえず、そういう事にしておこう。家じゃ畑仕事もしていた
し、ど田舎だったんで、それなりの農業知識もある。

「それにしては、手ぶらじゃねえか……あんた、もしかしてアイテ
ムBOX持ちか？」

「アイテムBOXを知ってるのか？」

こいつは驚いた。アイテムBOXって単語がすでにあるのか……たしかにステータス画面にはアイテムBOXって書いてあるがなあ。画面は日本語で書いてあるし……。

「滅多に持つてる奴がいなくて話だけど、俺もアイテムBOX持ちに会ったのは初めてだぜ」

「そうなのか」

「アイテムBOX持つてるのに、今まで商売をしてこなかったのか？」

「ああ、畑で取れた野菜とかを入れていた。中に入れておけば、芽が出たり腐る事も無いしな」

無論、嘘だ。

「そんな話は聞いたな。そりゃ、便利だよなあ。生物なまものの荷物や貴重品の運搬でも稼げるじゃん」

「まあな。色々試してみようかと思っている」

彼は、商人らしいので、商売のやり方について色々質問する。商売をするのには、商業ギルドに登録しなくてはならないらしい。登録料は銀貨1枚だと言うが、銀貨1枚がどのぐらいの価値なのかは不明だ。

途中、小さな川に架かった石橋を越える。橋の上から見ると、河原で子供達が魚取りをしているようだ。子供が元気な街は良い街だと思う。

——彼と話をしている間に街に到着した。分厚い城壁を潜り、中に入ると街が広がっている。

高い建物は見当たらない——高くても石造りで3階程だ。通りは人通りも多く活発な街だという印象を受ける。

入り口には歩哨が立っていたが、何か検査をさせるようでもなく、

全くのスルーだったな。

他の人達も、自由に出入りしているようだった。そのまま馬車で街の中を進む。

「街に入るのに検査とか、税金を取られたりはしないのか？」

「税金は無いねえ。そういうのがある街の話も聞くが――この辺りには無いな。野盗が出たりすると、城壁の扉が閉まったりする事もあるが、滅多に無いしな」

5分ぐらい進むと目的地についたようだ。荷物を下ろし始めたので、俺も手伝う事に。

「悪いね」

「何、乗せてくれたお礼だよ」

作業が終わった後、彼に商業ギルドと宿屋の場所を教えてもらう。こういうのは地元の人間に教えてもらうのが一番だ。ボツタクリの心配も無いしな。

「兄さん良い人だし、色々と教えてもらったんで、コレをやるよ」俺は、腰に付けていた胡椒を入れた革の巾着袋を彼に差し出した。

「なんだいこりゃ？」

男が巾着袋を開けて、そして匂いを嗅いで驚いた。

「こりゃ、胡椒じゃねえか！」

「そうだ」

「おいおい、冗談だろ？ こんな高い物貰えないぜ？ 金を払うよ」

「いや……」

「おっと待ちねえ――俺たち商人は、安い物は好きだが、タダじや物は貰わねえ。何故だか解るかい？」

しばし考えて、俺は人差し指を立てた。

「ただより高いものはない」

「その通りだ。あんたは商人に向いているぜ。商売の基本は物々交換だ。対価の無い物は取引しない。これが基本さ」

男はそう言うのと、懷から金の入った袋を取り出し、俺に銀貨を2枚寄越した。

「大体こんなもんだろ。それに、この革袋も上等な物だな。これの値段は銅貨6枚ってところだろ」

一緒に銅貨も貰った。

「随分と堅いな」

「堅くなきゃ、商売は出来ないぜ。石橋を叩いて渡らないってな。ハハハ」

しかし、現金は手に入った。価値はちょっと不明だけどな。だが、高価な物と言って、対価を渡してきたのだから、それなりの金額なのだろう。

「ちょっと変な事を聞くかもしれないが、銀貨は何枚で金貨になるんだ？」

「ここは、銀貨4枚で金貨1枚だな。まあ場所によって換金率が違う国もあるから、聞くのは、おかしい事じゃないと思うぜ」

「そうかありがとう」

「ははは、あんた変わってるな」

そりゃ、異世界人なんだから、変わってるのは当たり前だのクラッカーだな。

「しかし、あんた。まさか、胡椒で商売をするつもりじゃないだろうな？」

「ダメかな？」

「この香辛料は、バコパって連中が抑えてる。そいつ等に目を付けられると厄介だぜ？」

「価格協定や、流通の制限をして値段を釣り上げているのか？」
まあ、どこにでもある話だな。儲かるものには利権が出来てそいつに群がるってわけだ。

「その通りさ。あんた中々やるねえ」

「気をつけるよ」

「じゃあな」

若い商人に別れを告げ、俺は宿屋に行ってみる事にした。とりあえずの活動拠点が必要だ。

しかし、胡椒や香辛料で簡単に儲けようと思ってたら、出鼻を挫かれたな。残念……市場を回って、何か他の物にしないと。

— — — — — ◆ ◆ — — — — —

通りをしばらく歩きながら、街を観察してみる。中々賑やかだな。ちよつと上等そうな建物の窓には透明な板が入っているので、ガラスは存在しているが、高価な代物なのだろう。

ガラスじゃなくて、テクタイトやらファンタジーな物質かもしれないが……。

5分程で、教えられた宿屋らしき建物が見えてきた。石造りの2階建てで、壁には白い漆喰のような物が塗られているのだが、かなり剥げ落ちている。

そして、木の扉の上には、肉と皿が描かれた看板——。

「いかにも、それっぽいな……」

扉を押して中に入ってみると、後ろで勝手に扉が閉じた——見れば、錘と滑車を使った装置で自動で閉まるようだ。

外側は石造りだが、中は板張りで薄暗く、木製のテーブルが8つ

とその周りに椅子が並んでいる。宿屋というよりは食堂だな。

奥にはカウンターが見える。

客はいないのだが――既に昼を過ぎていて、今は恐らく2時頃だろう。昼飯の客もいなくなって、空いているのだと思う。

「いらっしやい。食事？ それとも、泊まり？」

「泊まりだ」

出てきたのは、後ろで纏めた黒髪にエプロンのような前掛けをしている、ちよっとつり目の女の子。18歳ぐらいであろうか、中々可愛い。

「泊まりだと、飯付きで小四角銀貨1枚、素泊まりなら銅貨3枚」
飯は、シャングリ・ラで色々と買えるからな。現地通貨は節約しないと。

「素泊まりで頼む」

「代金は前払いだよ」

若い商人から貰った銅貨を3枚渡す。

「お一人様泊まりで」

「はいよ」

奥から、ここの主人らしき男の声が聴こえる。

「ここの娘なのか？」

「違うよ。近所に住んでて、ここで働いてるの。おじさんは？
この辺りの普請で稼ぐために、口利き屋でも探しているの？」

「いや、商売をやるうと思ってるな」

「じゃあ、読み書き計算が出来るんだ」

「うっ！」

そうか、読み書きがあったか。すっかり失念してたぜ。俺がシヨ

ツクを受けていると、女の子が宿帳らしき物を持ってきた。

「読み書き出来ないのに、どうやって商人になるのさ。商業ギルドの登録には読み書き計算が必須だよ?」

「そうなのか……異国の言葉なら読み書き出来るんだけどなあ。それに、計算もできるぞ」

「じゃあ、リンカーが12個入った袋が4つありました。リンカーの数は全部で何個?」

リンカーがなんだか解らんが、答えは解る。

「48個だろ?」

「すごい! 本当に計算は出来るんだ! おじさんの名前は?」

「ケンイチだ」

「ふーん、変な名前。あたしは、アザレア。よろしくね」

アザレアが宿帳に俺の名前らしき物をスラスラと書いている。この子は読み書きが出来るようだ。

——しかし、書かれたその文字は——なんだか、ローマ字のよう
な……。

「アザレア、ちょっと頼みがあるんだが……」

「なんだい?」

「簡単に良いので、俺に読み書きを教えてくださいませんか?」

「ええ?」

俺のいきなりの頼みに、彼女は少々困惑しているが——そりゃそうだな。だが、手っ取り早く読み書きを覚えるなら、彼女に聞くのが一番早い気がする

「簡単に良いんだ。お礼に、異国のお菓子をやるぞ?」

「本当に? お菓子って甘い?」

お菓子の言葉に、アザレアの目が子供のようにキラキラと輝く。

「ああ、甘いのもある」

「じゃあ、仕事が入ってない時なら良いよ」

「そうか、それじゃ頼むよ。簡単に良いんだ」

俺は、2階の部屋に案内された。板張りの部屋にベッドだけ。天井板もなくて、上部の構造物が剥き出しになっている。

だが――幸い清潔で綺麗そうなので、俺は一安心した。やっとベッドで眠れる。

「シーツは毎日、このカゴに入れて出してね。洗濯物が他にもあるなら、追加料金になるから」

「ああ、解った。それじゃ、暇な時で良いから、文字をちょっと教えてくれよな。ここには、何日か泊まるつもりだから」

「解ったよ。お菓子忘れないでね」

「大丈夫だ」

アザレアが部屋から出ると、俺はベッドに倒れ込んだ。肌触りからシーツは麻だな。

とにかく、色々とありすぎだ。異世界らしきこの世界で――これから何とかして、暮らしていかなければならないのだ。

しかし、やっと辿り着いたベッドに安心してしまった。

ちよつと、横になるだけのつもりだったのだが、そのまま眠ってしまったのだ。

4話 文字は簡単

やっと森から脱出出来た俺。若い商人に助けてもらい、ダリアという城壁に囲まれた街へやって来た。

宿屋に泊まり、久々の柔らかいベッドに寝転がると、そのまま眠ってしまった。

「はっ！」

ベッドの上で目を覚まして慌てた。辺りは既に暗くなっているが——何時頃だろうか？

「ヤバイヤバイ……」

くそ、暗くて何も見えない。明かりを出すか……シャングリ・ラで検索を掛ける。

森の中をマウンテンバイクで走った時に頭に付けたLEDヘッドライトならあるが——あれを部屋の中で使うわけにもいくまい。

無難なところなら蝋燭だが、ちょっと暗いだろうな——ランプで検索を掛け直す。

「LEDか……」

LEDのランタンが安いが、オーバーテクノロジーのLEDはちよつと拙いますような気がするなあ。まあ、誰にも見られなければ良いのだが。

魔法のランタンだって言って誤魔化せるかな？ いや、魔法があるか、まだ解らんしな。

同じページに灯油ランプがある。なるほど、灯油ランプって手もあるか。だが——。

「灯油って売ってるのか？」

灯油の検索を掛けても売ってないが、ホワイトガソリンなら売ってるな。同じ検索ページにホワイトガソリンを使ったランプが並んでいる。

値段は12000円で、結構高い。だが、しばらくは使えるだろう。これなら、油を使ったランプだと誤魔化せるしな。

勿論、もちろんこんな高性能な物は、この世界には無いと思うが……消耗品のパーツも売っているので、このステータス画面が出る限りは使いつける事が出来るはずだ。

ガソリンランプとホワイトガソリン——4L2500円を一緒に買う。また金を使ってしまったが、何事にも初期投資は必要だ。

購入ボタンを押すと、箱に入ったランプとホワイトガソリンのタンクが、大きな音と共に落ちてくる。

「壊れるだろ！」

壊れたら返品きくのかよ？ はなは甚だ疑問だ。

荷物がやって来たのだが、真っ暗で何も解らん。結局アイテムBOXから、LEDヘッドライトを出して頭に装着した。

昔ながらの灯油ランプなら使った事があるのだが、こんな加圧式のカソリンランプは使った事が無い。

箱に入っていた説明書を読む。

「なになに——」

まずは燃料を入れて、ポンピングして加圧するらしい。そして——。

「マントルを取り付けて空焼きして下さい」

マントルってのは、網みたいな物だ。こいつに炎が当たると光るらしい——なるほどな。

ランプの中心に取り付けたマントルにカセットボンバーナーで火を付けると、みるみる火が広がっていく。

「空焼きしたマントルは脆く、すぐに崩れます。注意して下さい——か」

ランプの蓋を閉めて、バーナーで火をつけると——すぐに明るく輝き出す。普通の灯油ランプに比べるとかなり明るい。

明るさの調整は、燃料を送るバルブを回して行うらしい。完全に閉めると、消火になる。

「やったぜ！　こりゃ、かなり明るいな」

ランプの明るさに目を細め、ヘッドライトをアイテムBOXへ突っ込む。

代わりに牛乳を取り出すのだが、飲みかけの牛乳をアイテムBOXに入れても、腐る事も無い。こいつは全くもって便利だ。

アイテムBOXの表示は【牛乳（飲みかけ）】×1に変わっている。

そして、ちょっと深めの皿を800円で購入、一緒に1kg900円のグラノーラを買う。

皿に開けたグラノーラに牛乳をぶっかけて、いざ食おうとしたら——スプーンが無かった。いやはや……。

900円で3本セットのスプーンを買うのだが、実家を出て引越した時みたいな感じだな。鞆一つで上京して、安アパートの中には何も無い——そんな感じだ。

妙な郷愁に浸りながら腹いっぱいになり、食い終わった皿にアルコールのスプレーを吹き付けて、ティッシュで拭く。とりあえず、こんなもんでいいだろう。

水が沢山ある所へ行ったら、洗剤で洗えば良い。シャングリ・ラ

には洗剤もスポンジも売ってるからな。

多分、皿やスプーンなどの生活必需品も、この街の市場で買った
りするよりは、ショッピング・ラで購入した方が安いに違いない。

こういう世界ってのは、全部一品物で手作りだろうからな。工場
生産の量産品なんてあるわけがない。

さて、アザレアにあげるお菓子は何にしようかな……チョコは拙
い気がする。もっとシンプルな——金平糖？ いや、ここは——。

「サ○マ式ドロップスだろ」

ろろっぷろろっぷのサ○マ式だ。缶入りのドロップは一つ200
円。ついでに、前に購入した革の巾着袋を再び買って、ドロップを
10個程中に入れてみた。

巾着袋の方が、かなり高いが仕方ない。これぐらいしか入れ物が
無いのだ。壺を検索してみても、小さい壺ってのは骨壺ぐらいしか
無いんだよな。

まさか適当な入れ物が無いからといって、プラケースとかステッ
ンケースに入れて渡すわけもいくまい。

「だが、待てよ……」

『木製 箱』で検索を掛けてみる——おおっ、いいのがあるじゃ
ん。300円ぐらいの塗装していない、宝石箱らしい。

これなら、お菓子入れにピッタリだろう。その木製の宝石箱をカ
ートに入れて、購入ボタンを押す。

それから読み書きを勉強するには、紙が必要だろう。コピー用紙
やら中性紙は拙い^{ます}だろうから、和紙を検索してみた。

「ほう、和紙のプリンタ用紙ってあるんだな」

50枚で500円だ。そうだ、紙を売るって手もあるかな。紙は
多分貴重品だろ？

「ポチッとな——購入っ」と

そんな皮算用をしながら、宝石箱にドロップを入れてみると、ちようどドアをノックする音が聞こえてきた。

慌てて、プリンタ用紙を袋から取り出し、包装をゴミ箱へ突っ込んだ。

「どうぞ。開いてるよ」

ドアが開くと、燭台と何かの道具を持ったアザレアが顔を覗かせ、目を皿にしている。

「何？ この明るいの」

「油を使ったランプだよ」

「へえ。でも灯油ランプってこんなに明るくないよ？」

「灯油ランプってあるのか？」

「持ってくる？ 追加料金が掛かるけど……」

「いや、これがあるから良い」

「でしょ？」

へえ、灯油ランプってあるのか。しかし、この世界の灯油の値段ってどのぐらいするんだろうな。

「ここだと、灯油の値段ってどのぐらいする？」

「えーと、このぐらいの壺で小四角銀貨2枚」

彼女が示した壺の大きさは、人間の頭ぐらいだな。小四角銀貨2枚と言われても、ピンと来ないが、ここの飯付きの宿賃が小四角銀貨1枚って言ってたから、2日分の宿賃か。

かなり高い代物だな。それなら、俺がシャングリ・ラで買ったホワイトガソリンの方が安い。

アザレアが、小走りにやって来ると、ランプを覗きこんでいる。

「魔法じゃないのね？」

「魔法のランプってあるのか？」

「私は見たことがあるよ。こんな明かりの色じゃなくて、青っぽい光なんだ」

なんと、やっぱり魔法があるのか。さすが、異世界！　だが、俺が使っているステータスオープンも魔法と言え、魔法と言えなくもない。

「今日は、仕事は無いのか？」

「そう、暇なんだ」

彼女がベッドに腰掛けると、脚をブラブラさせている。

「ほら、これが報酬のお菓子だ。甘いぞ」

「え？　ホントに？」

アザレアは確認もしないで、ドロップを一つ摘むと、自分の口へ放り込んだ。

「甘い！」

「そんな、よく確認しないで、口に放り込んで大丈夫なのか？　俺が悪い奴だったらどうする？」

「こういう商売して、いろんな人間みてるから、大体どんな人間か解るのさ。ケネイチは悪い人じゃないと思うよ」

「そりゃ、どうも。それは置いといて——これの事は、人には話さないでくれよ」

俺は、煌々と灯っているランプを指さしたのだが——それを聞いた彼女が、黙って手を差し出した。

何かと思ったが、口止め料を要求しているのだろう。

「ほら、お菓子を追加してやる」

ドロップの缶を取り出すと、宝石箱の中を一杯にしてやった。宝

石箱の中にドロップ——結構それらしく似合っている。

「えへへ……」

「しっかりしてるな」

「男を手玉に取るぐらいになりなさいと、いつも母さんから言われてるんで」

彼女は母親の事を話しながら、もう一つドロップを摘むと、口に入れた。

「んー！　こんなお菓子が食べられるなんて、まるで貴族様みたいドロップを口に放り込んだアザレアは、両手を頬に当ててなにやら悶えている。

「貴族っているのか？」

「そりゃ、いるさ。あまり関わらない方が得策だよ。こんなお菓子持っているのがバレたら、取り上げられてしまうかも」

「そいつは困るな……それよりも、読み書きを教えてくれよ」

「はいよ」

彼女が用意したのは紙とペンだ。わざわざ持ってきてくれたらしい。

「紙は高いだろう。俺があるから、コレを使ってくれ」

「なるんだ。紙の料金も上乘せして取ってやろうかと思ったのに」

「ははは」

本当に、しっかりしてる。

2人で紙とペンを使って文字を書き出して、付き合わせていく。何の事はない、少々違いがあるがローマ字とほぼ同じだ。

数字も10進法だし、桁管理もアラビア数字と同じ。これなら、対応表を作れば、すぐに覚えられる。

アンチヨコを作るとしよう。

「なくんだ。ケンイチ、読み書き出来るじゃない」

「この国の文字も、俺の国と然程変わらないみたいだな」

「これなら、商業ギルドに登録するのは簡単だと思うよ」

読み書きの心配をしていたが、杞憂に終わりそうだ。

「アザレアも読み書きが出来るなら、商売でもやれば良いのに」

「商売をやる上で大事な事って解る？」

ちよつと考える――。

「もしかして、仕入れか？」

「そう！　こんなお菓子とかランプとか仕入先が解らないよ。商売覚えるために、どこかに丁稚奉公するにも歳を取り過ぎてるし」

「そうか」

「でも、ケンイチは商売で成功すると思うなく今から愛人候補になつておくかな？」

「こんなオッサンは止めとけ。お前の親父さんと変わらん歳だろう」

「父ちゃんいないし」

「ああ、そうなのか……スマンな」

ヤバい、地雷だよ。

「いいよ。ケンイチ良い人だし」

少々気まずいネタを振ってしまったので、誤魔化すために、彼女の似顔絵を描いてみることにした。商売は素人でも、絵は一応プロだ。

紙とペンで、クロッキー的な物を描き始めた。

「アザレア。ちよつと動かないでくれよ」

「なになに？」

10分程で、絵は完成したので、彼女に見せる。ランプに照らさ

れて浮かび上がる、アザレアの肖像。

「ええ〜！ 凄〜い！ 肖像画描いてもらえるなんて、本当に貴族様みたい〜」

彼女は、絵を胸に抱えて、凄くはしゃいでいる。そんな喜んでもらえるとは、思ってたなかったな。

喜んでるのは良いが、何故かアザレアが服を脱ぎ始めた。ランプの光に浮かび上がる白い裸体。

くつきりとした白と黒の陰影が、ことさら肢体の形を際立たせている。

上着とスカートを脱ぐと、いきなり裸だったので、下着らしいものはこの世界には無いらしい。それ故か——街の女性は皆ロングスカートだったな。

「おおい！ 何をするんだ」

「お菓子も貰って、肖像画も描いてもらったんじゃ、あたしが貰いすぎでしょ」

そうか？ そうなのか？ 異世界にやって来た早々、こんな事で良いのだろうか……。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

——次の日の朝。

結局やってしまった……ベッドの上には裸のアザレアが寝息を立てている。

「はあ……こんな若い子に、何やってんだ、俺」

落ち込んでいても仕方ない、やるべき事があるのだ。アザレアを起こして、牛乳を掛けたグラノーラを食わせる。

「なにこれー！ パリパリして甘くておいしい！」

「旅行用の保存食だよ。乾燥させてあるから、日持ちする」

裸のアザレアがグラノーラを頬張っている。会話の前に服を着てほしいのだが……。

「コレも売れると思うよ」

「砂糖や果物を使っているからなー高い物じゃ、街の人間は買わないだろ？ 貴族は相手にしたくないしな」

アザレアが甘い物を食べて、貴族様みたいと言っていたので、多分、砂糖も貴重品だと思われる。

故に、安くは売れないだろう。

「そっかぁー凄く美味しいのに。金持ちに売れると思うよ」

「金持ちの間で流行ったら、絶対に貴族の耳にも入るだろ？」

「それもそうだね」

普通に食事をしている姿は、18歳の女の子だ。

ついでに、彼女に硬貨の事も聞く。俺の元世界との感覚と照らし合わせると、銅貨は1枚1000円ぐらいの価値らしい。

銅貨が5枚で小四角銀貨（5000円）、小四角銀貨が10枚で銀貨（5万円）、銀貨が4枚で金貨（20万）——という感じだ。

もつとも、通貨制度も国によって違うらしいが。

——という事は、この宿賃は1日3000円って事だな。まあ、素泊まりで3000円ならこんなもんだろう。

しかし、昨日も金を使ってしまったので、早く現金を稼がないと。俺も飯を食ったら、商業ギルドへ行ってみなければ。

それに昨夜、彼女と話していて、面白い事に気がついた。俺のステータス画面が、彼女には見えないらしい。

どうやら、本人にしか見えない物のようだ。それに、文字を書いた紙をアイテムBOXにいれて、それを選択すると画面上に表示さ

れるのだ。

これで、ギルド登録の際にテストがあっても、カンニングし放題、アンチヨコをアイテムBOXに入れておけばOKってわけだ。

飯を食い終わって着替えたアザレアに、今日の宿賃を銀貨で支払い、お釣りを貰う。銅貨もまだあるが、両替するためだ。

金は全部アイテムBOXへ入れたが——枚数を勘定して表示してくれるから、便利だな。

同じ物が沢山あるものを取り出す時には——【何個取り出しますか?】という表示もでる。

ギルドの登録料は銀貨1枚って言ってたから、約5万円か……結構高いが仕方がない。

まずは、ギルドに登録して市場調査だな。

5話 ギルド登録と市場

俺は、商売をするために必要な登録をするために、商業ギルドへ向かった。手っ取り早く稼がないと、手持ちの金が底を突く。

宿屋のアザレアの話では、肉体労働でも稼げると言うが、長年P Cに向かってデスクワークをしていた俺に、そんな力仕事が出来るはずない。

せいぜい、家庭菜園で畑を耕すぐらいなのだ。

教えられた場所にやって来た。目の前にあるのは、白い石造りで3階建ての建物。石には模様が刻まれており、かなり豪華な造りで、窓には全部ガラスがはめ込まれている。

「ここか……」

立派なドアを開けて、中に足を踏み入れる。窓にガラスがあるせいか、中も明るく広く感じる。

正面にはカウンターがあって、受付嬢が座っているのだが、あちこちにカウンターがあるので、部署によって分かれているようだ。

立ったまま様子をうかがっていると、商売の相談やら貸付なども行なっているらしい。とりあえず、正面のカウンターへ行く。

受付嬢は白い服を着て、まるで看護師のように見えるが、これがここの制服なのか――頭には長四角の帽子を被っており、それがまた看護師風なのに拍車を掛けている。

「あのー」

「はい、今日はどのようなご用件でしょうか？」

「ギルドへの登録をお願いします」

「承知いたしました。登録料は銀貨1枚になります。それと、この紙にご記入下さい」

差し出されたのは手書きの書類だが、まだ印刷技術が無いのだろう。項目は、氏名や年齢その他――出身地の欄もあるが、この都市ダリアで良いだろう。

他の地名なんて知らないしな。その右側には、数字の問題が――多分、これがテストなのだろう。

3桁の足し算が3つ、2桁の掛け算が2つ――こんなのがテストとは拍子抜けだ。

まだ昨日の今日で、文字についてはあやふやなところがある。アイテムBOXを開き、アンチョコの表示を出してカンニングするのだが、他の人には当然見えていない。

全て書き込んで、受付に差し出すと、OKが出た。

しばし椅子に座って待つ……受付嬢が持ってきたのは、上部に穴が開いている細い棒状の金属。これは――あの若い商人が首から下げていた物か。

これが、ギルドの証なんだな。商売をする時には、見える所にこれを掲げないとダメらしいので、普通の商人達は首から下げているようだ。

登録は無事に済んだし、これで商売しても問題無し。隣の帝国という国には売上の何割かを毎月納める税金のような物があるそうだが、ここには無い。

――次は、市場調査だな。

ギルドで市場の位置を教えてもらい、外へ出た。ギルドの人の話では、通りに出て人の流れに付いていけば市場へ行けると言っていたが――。

本当にその通りに到着した。乱雑で人で溢れる賑やかな場所――並んでいる店は殆どが露店で、屋根が付いている物付いていない物、色々ある。

販売されている品物も区分けはされておらず、刃物や石、果物や野菜などの生鮮食料品が、ごちゃ混ぜに所狭しと並べて売られている。

商人たちも、結構アバウトに客とタメ口だ。身分が高い連中が相手でなければ、敬語は使わないらしい。

紙も見つけた。ちょっと茶色な紙が1枚銅貨1枚（1000円）だ。こりゃ、紙を売っても儲かるかもな。後は……食器かな？ シヤングリ・ラで売っているような白い無地な皿が小四角銀貨1枚（5000円）以上で売られているのが目につく。

柄が入ると値段が跳ね上がるが、あまり売れている印象は無い。この市場にやってくるのは、一般の街の人間ばかりで、値段の高い物は中々買えないのだろう。

何箇所か見たところ、刃物も結構高く、粗末なナイフが1本銀貨1（5万円）枚以上する。シヤングリ・ラなら5000～6000円ぐらいで、結構いいのが売っているからな。

あれなら、銀貨2枚（10万）で売れるかもしれない。

でも、錆びないステンレス鋼とかは大丈夫かね。青紙やら炭素鋼を使った刃物は滅茶高いし。

売ったとしても、いきなり気づかれる事もないだろうが、ヤバくなったら他の都市へ逃げるしかないな。

それに、金さえあれば、シヤングリ・ラを使って何処でも暮らせるわけだし。

アザレアが言っていた灯油も見つけたが、凄くサラサラで元世界の灯油に近い。だが、臭いが違う——何か、魚臭い。

売っている店員に話を聞くと、海にいる海獣の脂らしい。へえ、所変われば品変わるってやつだな。

ここは海に近いので海獣の脂が手に入るが、もっと内陸の国では、植物から取った油を灯油として使っているという話だ。

「海が近いって話だが——さすがに、海産物は無いな……」

海産物どころか、生の魚すら無いが——まあ、保存が利かないからな。アイテムBOXがあれば、海の魚をそのまま持ってくる事も可能だろうけど。

「果物を食ってみたいな」

シャングリ・ラでも野菜と果物の詰め合わせが2500～3000円程で売っている。だが、この世界にしか無い珍しい果物等は、当然ながらここでしか手に入らない。

「おじさん、買っていていけない？」

果物を積んでいる女に声を掛けられる。箧ぎらに積まれている果物は10個で銅貨1枚（1000円）らしい。

銅貨の下にも小四角銅貨があり1枚100円相当なのだが、計算が面倒なのか、細かい商品は、まとめ売りが殆どを占めている。

「うーん……色んなのが食いたいんだが、3種類3個ずつで銅貨1枚にならない？」

「いいよ」

なんだOKなのか、言ってみるもんだな。買ったのは赤、緑、黄色の果物だが、リングっぽい赤い実を1個残して、その他は全部アイテムBOXへ入れた。

アイテムBOXの表示は——【リンカー】【リンヨ】【リンズ】となっている。なるほど、この赤いのが、アザレアが言っていたリンカーか。

一口食ってみる——甘酸っぱくて、美味い。見た目はリングっぽいけど——味は、桃とリングを合わせたような風味だな。

こりゃ、この世界でしか食えねえ。

「ねえ旦那。今、買った物をアイテムBOXへ入れた？」

果物を売っていた女が、俺のやったことを目ざとく見ていたようだ。

「ああ、そうだ」

「いいなあ、便利でしょ？」

「小さいけどな。凄い便利だぞ」

女との会話を聞いていたのか——角刈りのような頭をした、体格の良いマッチョな男が話しかけてきた。

「旦那、アイテムBOX持ってるんだって？」

「まあ、小さいがな」

「ちよっとデカイ買い物をしちまってよ。運ぶのを手伝ってもらえねえか？」

「あんたは、随分力持ちそうに見えるがな。まあ、金による」

「銅貨1枚でどうだ？」

時給1000円か——ちよっと少ないな。

「それじゃ、ちよっとな。人を雇ったって、もっと取られるだろう？」

「頼むよ、金が無いんだよ。銅貨2枚でどうだ？」

「知り合いにでも頼んで、酒でも奢れば喜んでやってくれるぞ？」

「そんな金があったら、俺が飲むに決まってるだろう？ それじゃ、銅貨3枚だ！」

随分と必死のようだが、一体何を買ったんだろう。このムキムキで運べないとは……時給3000円か、まあ、ちよっとしたバイトなら良い稼ぎだろ。

「解ったよ。それじゃ銅貨3枚で運んでやっても良いが——何を買ったか知らないけど、アイテムBOXへ入らなかったら、諦めてくれよ」

「よっしゃ、そうこなくっちゃな」

話していても悪意は感じないし、怪しい感じもしない。本当に何か運んでほしいだけなんだろう。

男の後に付いて、買った物が置いてあるという場所へ行く事になった。男と並んで話していると、後ろから別の男に話しかけられた。

「よおよお旦那。アイテムBOX持ってるんだって？ 美味しい話があるんだが、一つ乗らないか？」

話し掛けてきたのは、顔色の悪い卑屈そうな顔をした、少々猫背の男だった。うーん、こいつは、見るからに怪しい。

しかし、美味しい話ってのはロクな物がないからな。美しい花には刺がある。美味しい話にゃ罠がある。

俺の仕事でも、美味しい話に飛びついたのはいいが、支払いが遅れた挙句、取引先が飛んだり手形が飛んだり……思い出しても、ロクな事がない。

話を聞けば、海から海産物、山や氷穴から氷を運ぶ仕事だと言う。

「いい金になるぜ？」

「確かに高い物になるだろうな。そんな物を買う奴がいるのか？」

「へへ、貴族様だよ」

「ああ、悪いが貴族には関わり合いになりたくない」

聞いていたマッチョが、話に割り込んできた。

「止めとけよ旦那。貴族なんぞロクなもんじゃねえ。散々こき使って、いらなくなれば、つまらねえケチを付けてコレだぜ？」

男は、手刀を自分の首に当てる。普通に首を刎ねられるという意味だろう——冗談じゃねえ。

「そうだな」

「それによ、デカイアイテムBOX持ってる奴なんて、戦場まで引

っ張られて、こき使われるみたいだぜ」

「戦場？ 武器でも運ぶのか？」

「それもあるけどよ。貴族様のために食料を運ぶのよ。そうすりゃ、戦場でも贅沢な食事を楽しめるって寸法さ」

「本当にろくでもないな」

「だろ？」

男は手を広げて、首を振っている。

「——というわけだ。貴族様にゃ、関わりたくないから、お断りする」

「こ、後悔するなよ！」

捨て台詞を残すと、猫背の男は小走りにその場を去った。やはり、このアイテムBOXという便利な物があると、拘束されたりするようだ。

こういう世界で、王侯貴族ってのは絶対権力者だからな。逆らったらヤバイだろう。

「触らぬ神に祟り無し、君子危うきに近寄らず、臭いと解って嗅ぎに行く奴は愚か者ってな」

「旦那、学があるねえ」

「なに、かじった程度さ」

道がてら、男に森のことを聞いてみた。

「森に黒い獣がいたんだが……知ってるか？」

「黒い？ 猫か？」

「いや、犬——というか狼みたいだったが」

「そりゃ、黒狼だな。街道沿いに出るとは聞いたことが無いが」

やはり狼なのか。場所によっては、魔狼と呼んでいる地域もあるらしい。

「いや、森の中だ」

「なんで森の中なんか——ははあ、近道でもしようとしたんだろ？」

「まあ、そんなところだ。迷った挙句、襲われて食われるところだったよ」

「森の中には入らない方がいいぜ。同じ光景が延々と続くんで、どこに向かっているのか解らなくなるって話さ」

「本当にそんな感じだったな。進めど進めど針葉樹が延々と立っているだけ……。俺は方位磁石を持っているので、迷わなかったが。」

俺の地元でも、山菜採りなんかで遭難するやつがいたな。山の中に入ってしまうと目印がなくて、どこにいいのか解らなくなるんだ。知り合いなんて、歩き続けて山の反対側の隣町へ出てしまったという、笑い話もあった。

男と一緒に目的地に到着した。見たところ、道具屋——だな。

「買ったのはコレさ」

男が指さしたのは、大きなベッド——いわゆる、ダブルベッドだ。この世界に合板など無いので、全部無垢の木。

ちよっと端を持ち上げてみたが、かなり重たい。おそらくは50kg以上あると思う。これじゃ確かに、1人では無理だな。

「こんな大きなベッドをかうって事は結婚したのか、それとも、これからするのか？」

「へへへ」

デカイ男が、頭を掻いて赤くなっている。

「——という事は、コイツの運搬を頼むと、銅貨3枚以上掛かるって事か」

「そうなんだよ。だからさ、タダか安く手伝ってくれる知り合いを

探してたんだが……」

「そこで偶然、俺に会ったってわけか。しかし、めでたい事だ。なんとか運んでやりたいが」

このぐらいなら余裕でアイテムBOXに入るはずだが、容量が小さいという話にしているので、失敗したらゴメンな——と断りを入れる。

「よっと」

ダブルベッドが、アイテムBOXの中へ吸い込まれ、【ダブルベッド（中古）】と表示が追加された。

「おお、すげえ。これがアイテムBOXか」

「上手くいってよかったな。それじゃ、あんたの家へ行こうぜ」

男の家は街の外れ、城壁のすぐ側にあった——木造の小さな家で、壁は鎧張り。中は居間と寝室の2部屋で、居間に台所が付いている。元世界で昔に流行った、文化住宅を彷彿させるな。

「それじゃ、部屋に入れるか」

だが、寝室にはすでにベッドがある。これを運び出さないと、ダブルベッドは入れられない。

その前に——。

「おい、これって、玄関と寝室のドアが狭すぎて、ダブルベッドを運び込むなんて出来ないぞ？」

「あ……」

男も気がついたようである。一応分解は出来るようだが、木槌等の道具が無いと、ちよつと大変そうだ。

「まあ、俺に任せろ」

先ずは、持ってきたダブルベッドを外に出す。そして、寝室のベ

ツドもアイテムBOXに入れて、外へ出す。

そして、アイテムBOXにダブルベッドを入れて寝室で出せば――設置完了だ。

アイテムBOXの容量はベッド2つぐらい余裕で入るのだが、容量が少ないと言ってる手前、こんな回りくどい事をしなければならぬ。

「ありがてえ！ 恩に着るよ」

「この今まで使ってたベッドはどうするんだ？」

「旦那にやるよ。アイテムBOXに入れて持っていつてくれ」

「いいのか？ 売れば金になるぞ？」

「運ぶのに、また旦那に頼まないとダメになるからなあ。それに、部屋の中を片付けないとな」

まあ、嫁さんがくるなら色々と揃えるものがあるし、ベッドの処理どころじゃないのだろう。

それに、俺が首から商業ギルドの証を下げてるから、商人だと彼も解ってるはずだが……。

「俺がベッドを売ってしまっても良いのか？」

「もちろんだ。旦那じゃなきゃ――他の奴に頼んでベッドを運んできても、部屋に入れられなくて途方に暮れてるところだぜ」

男は苦笑いをしているが、その通りだろう。そこまで頭が回らなかったらしい。

「それじゃ、運び賃はこのベッドで良いよ」

「それでいいのかい？」

「ああ」

試しに、目の前のベッドを買い取りの所へ入れてみると――すぐに結果が出た。【査定結果】 【ベッドシングル（中古）買い取り値段20,000円】

じゃあ、上手くいけば、3〜4万円には、なるって事か。でも、ちょっと貰いすぎだな。

俺は、ショッピング・ラの画面を出すと、麻のダブルシーツを検索した。ノーブランド物が4000円で売っていたので、そいつを購入。

綿なら2000円ぐらいであるのだが、宿屋のシーツが麻だったので、こちらを選んでみた。【購入】のボタンを押すと、ダブルのシーツが目の前に落ちてくる。

「新婚祝に、シーツをやるよ。まだ買っていないだろ？」

「本当に、ありがてえ！ 旦那、人が良すぎるぜ」

ムキムキの男が、なんだか涙目なのだが――俺はベッドを貰って、損はしてないからな。あまり感謝されると、良心が痛む。

だが今度、あのダブルベッドを外へ運び出す時には、一旦分解しないとだめだろうな。

ベッドの男に別れを告げると、市場をぐるりと回り――商人に金を少々渡したりして、聞き込みもしてみる。情報収集は大切だ。

そして、日が暮れ始める前に宿屋に帰ったのだが、時間が時間なので沢山の客が訪れて食堂が賑わっている。

「おかえりなさい」

「おう、ただいま。これ、おみやげだ」

アザレアにアイテムBOXから取り出した、リンカーを1個渡した。

「リンカーだ！ ありがとう、これ甘くて大好き。ギルドに登録出来たの？」

「ああ」

彼女に金属製の細い棒――ギルドの証を見せる。

「やったね」

さすがに夕飯時で忙しそうなので、会話もそこに俺の部屋へ戻る。仕事の邪魔しちゃ悪いだろう。

腹も減ったので、市場で買った果物を食べてみようか。リンカーは食ったので、次は緑色のリンヨに挑戦。

果物ナイフを1000円で購入して、緑色の皮を剥くと、クルクルと渦を巻く。

「すっぺえええ！」

シャリシャリとして甘みもあるのだが、物凄く酸っぱい。これは、干して梅干しみたいにしたら、美味いかもな。

続けて、黄色のリンズを食ってみる。

「うん、甘い」

酸味は全くなくて、実の固いマンゴーのような味だな。こいつもいけるな。市場にはまだ買ってない果物が沢山あるので、楽しみだ。シャングリ・ラで紐を購入——100円だ。証に紐を通して、首から下げる事にした。

市場を見ても、そのスタイルが一番多かったのでそれに従う——郷に入れば郷に従えってな。

さて、市場の感じも解ったし、明日から、ちょっと商売の準備を始めてみるかな。だが、儲けなくても、そこそこで良いのだ。

飯を食えるぐらい稼げば、必要な物はシャングリ・ラから物を買えるからな。

とりあえずの目標は、3000円投資で1万円の売上。

目指すのは、異世界でのスローライフ。果たして成功するのか。

6話 商売準備

――次の日。

おおよそ市場の事も解ったので、商売を始める準備をする。先ずは……露店のブースを造らないとな。

最初は組み立て式のブースを作って、現地で組み立てようとしていたのだが、何の事はない。

宿屋の部屋で工作して、出来上がったら、アイテムBOXへ突っ込めば良いのだ。

その前に、金が少々心細くなってきたので、小四角銀貨をチャージに入れてみる事にした。

現地通貨でチャージ出来るのだろうか？ 恐る恐る入れてみる。

【入金しました】の文字が出て、5000円がプラスされた。どうやら、俺の想定していたレートは間違っていなかったらしい。

それじゃ――後1枚小四角銀貨を入れる事にして、全部で1万円入金しよう。残高は5万4千円ちよいになった。

朝飯にパンと牛乳、そして、昨日買った酸っぱいリンヨを取り出し皮を剥く。レモンのような味が、良い目覚ましになる。

ビタミンCが豊富そうな感じた。

さて、それじゃ作るか――まずは設計図だな。紙を出して設計図を描くために鉛筆を買う。木を加工するために印を付けたりするにも鉛筆が必要だ――2Bで6本入りが500円。

その鉛筆を削るために、カッターも買う、200円。

1本500円で2mの細い角材を買って、幅1m、高さ2m、奥行き1.5mの箱を組み立てる事にした。

元世界でもDIYはやっていたので、このぐらいは余裕だ。

日曜大工

角材は10本で5000円、箱組の強度を上げるために角に取り付けるL字金具が16個——1200円。木用ネジセットが800円。

ネジは手で回しても良いが、こんなに多くのネジを回すとなるとかなり大変だ。やはり、電動ドライバーが必要だろう。

だが、電気がなく充電器が使えないので、シャングリ・ラで買える乾電池式を選んでみた。2000円でパワーはちょっと足りない玩具みたいな物だが、意外と使える。

組んだ木を止めるのにネジを使うのだが、ネジはオーバーテクノロジーのような気がする……。

だが、ちょっと離れれば釘にしか見えないのでセーフとしてみた。それから、木組みにいきなりネジを使うと木が割れてしまうので、下穴を開ける必要がある。

そのためにも、電動ドライバーが必要だ。そして、穴を開けるためのドリルの刃のセットを買う——1000円だ。

【購入】ボタンを押すと、ドサドサと荷物が降ってきた後に、ランガランと角材が落ちてくる。

いつもながらの乱暴な荷物の落ち方にちょっと引く。

「さて、やるか……」

——と思ったのだが、角材を切るために鋸ノコが必要だ。替刃式の折りたたみ物を選んでみた。切れなくなったら、刃を替えれば良いので便利だ——1500円。

この替刃式の鋸ノコは売れないが、替刃式じゃない両刃の物も2000円ぐらいで売ってる。これなら売れるかもな。

街には沢山、木造建築が建っているのだから鋸ノコぐらいはあるだろう。

まずは、鉛筆で印を付けて——と思ったら、今度は曲尺かねじゃくが無いな。曲尺かねじゃくってのはL字型の定規で寸法測ったり、材料に線を引っ張ったりする物。

曲尺は500円だが、もっと長物に線を引っ張る時は、墨壺すみつぼを使う。

角材に曲尺で寸法を測って印を付け、ドリルで下穴を開けネジで止める。そして、補強のためにL字金具をネジで固定する。

完成した箱組を少々押してみたりしても、ぐらつく事はない。だが細い角材なので、寄りかかったりしたら壊れてしまうが。

後は屋根をどうするか？ 結構日差しが強いので、長時間露店にいと日に焼けてしまうだろう。それを考えると、やはり屋根はあった方がよい。

何か良い材料を検索していると、1000円で麻のムシロを見つけた。そいつを購入して、木組みの上に藁縄で固定する——縄は900円だ。

しかし、マジで何でも売ってるな。

「おおっ！ それっぽいぞ」

——だが、やはり角に取り付けたL字金具が目立つな……。ちょっと場違い感が強い、うーん……。

ムシロをもう一枚買って、ハサミで細長くカット。それを角に巻きつけてL字金具を隠し、縄で縛ってみた。

「お、良いんじゃない？」

ドンガラは完成したので、後は中だな。商品を置くテーブルが必要だ。テーブルを検索してみるのだが、鉄パイプ製のテーブルなら安いのがあるのだが……。

この世界にも合いそうなテーブルを見つけたが1万円以上する……ちょっと高い。——となれば、作るしかないだろう。

そんなわけで――テーブルの天板に使う板を、シャングリ・ラで探すのだが、良い物が無い。だが、安い合板のコンパネならある。

コンパネってのは、コンクリートパネルの略だ。本当は、コンクリートを流し込む時の枠組みを作ったりする時に使うもんだが、手頃なのでDIYによく使われる事が多い。

合板もオーバーテクノロジーではあるが、ぱっと見じゃ普通の板にしか見えないから大丈夫だろ。

それに、麻のシートをテーブルクロスのように掛ければ板目は見えないしな――それでいこう。

方針は決まったが、ちょうど良い具合のコンパネが無い。一番近いのは60cm×90cmの1500円のものだ。長さは良いが、幅は50cmが良いな……切るか。

曲尺で線を引いて、鋸で切り始めた。丸鋸があれば一発だが、電気が無いからな。

ギーコギーコ、鋸のデカイ音が鳴り響く。――そりゃ当然、何事かとアザレアが下から飛んでくるわけだ。

「ケンイチ、なにやってるの?!」

「ああ、店を作ってるんだよ」

完成しつつある、屋根の付いた木枠を見て、彼女は驚いたようだ。

「ええ? ケンイチって大工さんも出来るの?」

大工さんも出来るって言い方は少々変だろうと思いつつも、返事をする。

「まあな。別に、この部屋は傷つけてないし、木屑は後で片付けるから、心配要らないよ」

「へえ、何か変わった道具が沢山あるね」

俺の大工道具に彼女は興味津々だ。

「危ないから、触るなよ」

天板をカットして、角材を更に4本追加。長さ80cmにカットして、4脚として固定した。

「それ何？　すごい！」

俺の電動ドライバーを見て、アザレアは感激しているのだが。

「これは、魔法で動く道具だ。人に喋るなよ」

――すると、また彼女の手が伸びてくるので、昨日買ったリンヨとリンズを1個ずつやる。

「これ、酸っぱいから嫌。リンカーにして」

しょうがないな。リンヨをアイテムBOXへ入れて、甘いリンカーを1つ取り出した。

「えへへ」

ニコニコ顔のアザレアだが、中々したたかだ。こういう世界では、多少のしたたかさがなければ、良いカモになってしまうのかもしれない。

ブースの中にテーブルを設置して、椅子を買ってみる――丸い天板のスツールってやつだ、3000円。

テーブルの右側に、木製の棚を設置――2000円。その棚に突っ込むように丸い棒を渡して、左側を木枠から縄でぶら下げて固定。これに、商品やチラシをぶら下げて、アピールするつもりだ。

「ふむふむ、中々良いんじゃないか？」

「すごい！　お店みたい」

「お店みたいじゃなくて、お店なんだよ」

ついでに、紙と鉛筆が出ているので、ベッドの絵を描いて丸棒にぶら下げてみる。

『TYUKOBETUDO ARIMASU SS／／7』——
中古ベッドあります 小四角銀貨7枚(3万5千円)

殆どローマ字だが、促音——ッなどは、上にマークが付く。長音は、普通にーだ。SSは小四角銀貨、Sは銀貨、Gは金貨だ。

「ベッドなんてどうしたの？」

「買い取ったんだよ」

「ふうん、もう商売してるのね。すごいなあ、あたしなんて、どうやったら良いか全然解らないよ……」

まあ、俺のは、わけわからん能力だから、アドバイスも何も出来ないけどな。

ベッドの絵を吊り下げるために使う木製の洗濯バサミを購入する——200個入って1000円だ。その洗濯バサミで絵を挟んでみると、アザレアがまた叫ぶ。

「なにそれ！ 欲しい。洗濯物を挟むやつでしょ？」

「そう、これと似た物があるのか？」

彼女の話では——細い木を割って尻を紐で結んだ洗濯バサミらしき物はあるのだが、上手く挟めなくて、すぐに落ちてしまうらしい。

「これも売るのが？」

「ああ、売ってもいいな——2つで銅貨1枚ぐらいか」

彼女のリアクションを見て、これは売れるんじゃないかと思った。200個1000円の物を2個1000円で売るのは、かなりボツタクリのようだが、このような物が存在していないなら、その価値はある。

元は大量生産だから安いが、コレを手作りしようと思ったら、それなりの値段になると思う。

それにこれは、真似をしようと思えば、この世界でも作れるだろうから、オーバーテクノロジーでも無いだろう。

アザレアを見れば、物欲しそうな顔をしている。

「ほら、口止め料だ。4つやる」

「もう、2つ……」

「わかった、6つな。商売の秘密なんだから、誰にも喋るなよ」

彼女は洗濯バサミを抱えて、黙って頷うなずいている。

露店が完成したので、ホウキとチリトリを買って、床を掃除した。チリトリはトタン製だ——2つで2000円。

「それも欲しい……」

どうやら、トタンのチリトリが欲しいようだ。

「ほらよ」

「ありがとう！」

抱きついてキスをしてくるのだが、そんな事をされると、夜のことを思い出してしまうじゃないか……。

パタパタと階段を降りていくアザレアに、年甲斐も無くそんな事を思う。しかし、チリトリでなあ——。

イカンイカン！ とりあえずは、商売だ。

完成した木枠やテーブルをアイテムBOXの中へ入れると、問題なく吸い込まれた。

「よし！」

気合を入れるが、問題は何を売るかだな。安くて売れそうな物を選択しなければ。残金を確認する——3万ちょい。

まずは皿——5枚500円の物を4セット20枚。1枚800円

の深皿を3枚。同じく800円の外周に青線が入った物を3枚。

全く同じ物だが、模様が入った物の方が高く売れるだろう。

5000円と6000円のナイフを1本ずつ。それから、一昨日買った和紙を30枚ぐらい並べよう。

後は、無地の白いハンカチなんてどうだろう——800円で簡単な刺繍が入った物が売っているので、2枚購入。

白いハンカチは、刺繍の量が増える程金額が上がるようだ。全周に刺繍が入ったものも買ってみるか——2000円だ。

とりあえず、コレでいってみるか……。全部をアイテムBOXへ入れる。

残金は……残り1万切った！　ぬおお、マジでヤバイ。

準備が出来たので、宿の階段を降りる。

「ケンイチ、市場へ行くの？」

「ああ。行ってくるぜ」

「頑張ってるね」

応援有り難いが、マジで頑張らねば、もう金が無くなる。まあ、それなりの値段で、元世界の品質の物が手に入るんだ。全く売れないって事は無いだろう。

そう信じるしかない。金がマジで無くなったら、昨日の怪しい男でもとっ捕まえて、危ない橋でも渡ってみるか。

俺の口からは苦笑いしか出ない。

————◆◆————

天気は快晴、商売日和だ。先ずやる事は、場所の確保。市場で商売をやっている所は殆どが露店。

商品が手に入ったら、朝にやって来て店を広げて、晩になったら帰る。農業をやっている者などは、朝に取れた野菜や果物をそのま

ま持ってきて、売ってすぐに帰ってしまう。

その他の畑仕事があるので、市場にはずっと居られないようだ。人を雇ったりすれば、経費が掛かるしな。

露店の場所は、指定されたりしてはいないのだが、ベテランと老舗の場所はほぼ決まっていて、市場の中心に陣取っているようだ。

つまり、市場の中央からベテランが埋めていき、新人のペーパーが一番端っこって事だ。

まあ、これはしょうがない。新参者は大人しくしてないと。トラブルを起こしたりすれば、市場で商売出来なくなってしまうからな。

市場の一番端っこへ行って、店を広げる準備をする。一応、隣の店に声を掛ける。

「ここ空いているかい？」

「大丈夫だよ」

隣に居たのは、初老の女性だ。商人ってのは、ちょっと派手な格好をしてる奴が多い。飾りやアクセサリを沢山付けてたりな。

この女性もネックレスを沢山付けていた。もしかして、それも売り物なのかもしれない。

自作した木枠のブースをアイテムBOXから取り出して、隣の露店との位置に合わせる。

「旦那、もしかしてアイテムBOX持ちかい？」

「ああ、小さいけどな」

「羨ましいねえ。手ぶらで色んな物が運べるんだろう？」

「ああ」

そりゃそうだな。アイテムBOXがなければ、店の部材を一々荷車で運んで、組み立てなければならぬ。

「アイテムBOX持ちなら、もっと市場の中心に行けば良いのに」

「ここへ来たばかりだからな。新参者がデカイ面出来ないよ」

「結構堅いんだねえ……」

テーブルを置き、店を組み立てて、白いシートをテーブルクロス代わりにして、商品を並べていく。

だが、ちょっと風が吹いていて、紙が飛んでしまうので、300円の文鎮を2個購入した。

「ちょっと、皿を見せておくれよ」

また、隣の女性に声を掛けられたので、一番安い物を一枚渡した。

「これ、新品かい？」

「ああ、出来たてのホヤホヤだぞ」

「これ、いくらで売るんだい？」

「うーん、銅貨3枚だな」

「これなら、もっと取れるよ」

なるほど、銅貨3枚は中古の皿の値段に近いのかも……だが、一枚100円の皿だからな。

だがとりあえず、バーゲンセールでもなんでも売って現金を確保しなければならぬ。

「店を開いたばかりなので、ご奉仕価格さ。先ずは、客に覚えてもらわないとな」

さて、準備は整った——それじゃ、商売してみますか。

7話 商売は順調な滑り出し

シャングリ・ラにチャージした金が尽きそうなギリギリのところ
で、商売を始めた。

だが、まだ手持ちの小四角銀貨は4枚残ってるし、アイテムBO
Xに入ってるベッドをシャングリ・ラに買い取らせれば、もう少し
頑張れる。

あれは、2万円の査定が付いてたからな。

そうそう、ベッドのチラシをせっかく作ったんだから、貼り出さ
ねば。

木製の洗濯バサミに紐を結んで角材から吊り下げて、チラシを挟
む。一緒にハンカチも仲間いりだ。その隣にはナイフが角材から縄
でぶら下がっている。

「旦那、それって洗濯物を挟むやつだろ？　ちょいと見せてくれな
いかい」

隣の女性がまた声を掛けてくるので、物を見せる。

「これっていくらなんだい？」

「2つで銅貨1枚（1000円）」

「じゃあ、6つ程おくれよ！」

「買うのか？」

「別に隣の店が買っちゃいけないって決まりは無いじゃないか」

「そりゃ……6つで、1個オマケってわけにはいかないよなあ」

「何言ってるんだい！　シーツとか大きいものは3つとか4つとか
使うんだよ」

なるほど、洗濯をする女性の意見だ。洗濯と言えば、俺もそろそろ着替えて洗濯をしたい。ずっと着たきり雀だからなあ……。

金が入ったら、着るものも揃えよう。下着はシャングリ・ラでいいけど、上着はこちらの世界の物を揃えたい。

でもまあ、着るものより食う物の方が先だし。いくら汚くても、死にはしないが、腹が減れば死ぬ。

隣の店の女性に洗濯バサミを7個売り、銅貨3枚(3000円)を貰う――毎度あり。

洗濯バサミが売れそうなので、チラシも作ることにした。

『KATUKITEKI SENTAKUBASAMI 2KO
K／1 6KODE 1KO OMAKE』――画期的洗濯バサミ 2個で銅貨1枚 6個で1個オマケ

スツールに座り、客を待つ。市場をグルグルと回ってみたが、呼び込み等をしている店はあまりない。

静かに、商品を客に吟味してもらうってのが、この世界の流儀らしい。

客の値切りもあるらしいのだが、新品だと殆ど無いと言う。

客が来ない時は、シャングリ・ラの画面を出して、電子書籍を読む。月1000円払えば、読み放題だ。

異世界で、異世界ラノベを読む――何という混沌カオスだろうか。

「おっ！ 昨日の旦那じゃねえか。ここに店を出したのかい？」

言われて、顔を上げると――ダブルベッドを運んでやったマッチョな男が、俺が作った店の枠組みをしげしげと眺めている。

「もしかして、この店も旦那が作ったのかい？」

「まあな。物を作るのが好きなんだよ」

「全く、玄人はだしじゃねえか。出来る奴は何でも出来て羨ましいぜ」

「部屋の片付けは終わったのか？」

「もう、バッチリよ」

男がガッツポーズをする。その割には、平日のこんな時間だ。

「今日の仕事は、どうした？」

「あぶれちまったよ」

残念そうに語るこの男は、力自慢を活かして、普請や公共事業やらの日雇いをしていると言う。

「この皿良いじゃねえか」

「新品だよ。新婚生活に新品の皿はどうだい？」

「そうだよなあ。新しい生活が始まるんだ、新品の皿ぐらいは欲しいってところだぜ」

その割には、彼が見ているのは、外周に青いラインが入ったものだ。それは値段を高く付けようと思っている。

「その模様が入ってるのは高いぞ？」

「いくらだ？」

「1枚、小四角銀貨2枚（1万円）」

「うゝむ……」

俺の感覚では少々高い気もするが、この世界で模様入りはこんな値段だ、しかも新品でお値打ち価格。

「よし！ 買った！」

一大決心したのか、はたまた清水の舞台から飛び降りたのか……。
勿論、異世界にゃ清水の舞台は無いが。

「おいおい、大丈夫か？ 金が無いと言ってたろ？」

「なあに、その分は酒を止めて働けば良いんだ」

「それじゃ、こっちの安い皿も2枚付けてやるよ。それから、ハンカチを1枚、お客さんの女房にオマケだ」

「良いのかよ」

「ほら。俺は、ベッドを貰ったからな」

俺は、ベッド売り出しのチラシを指さす。

「旦那、昨日も言ったが、人が良すぎるぜ」

「はは、金は持つてる奴から取るから大丈夫だ」

マツチヨな男は小四角銀貨4枚（2万円）を払い、皿を抱えて喜び勇んで帰っていった。

— — — — — ◆ ◆ — — — — —

——そして、昼過ぎ。昼飯のパンをかじる。

昼前は、マツチヨな男が皿を買った後、洗濯バサミが結構売れた。30個程が捌^はけて、オマケが4個——15000円の売り上げだ。1日1万円稼げればOKと思っていたが、洗濯バサミだけで食えそうな感じだな。だが、商品が売れば似たような物を真似して作ってくるやつもいるだろうし、色々と商品も考える必要がある。

汁気のないパンを咀嚼^{そしゃく}していると、声が掛かった。

「このナイフを見せてもらいたいのだが」

顔を上げると、金髪の好青年って感じの男が立っている。だが、腰に帯剣しており、街の人間とは身のこなしが明らかに違う。

アーマー等は着ていないが、恐らく騎士か何かだろう。だとすると、身分が高いはずなので、敬語の方が良いか。

男が指したのは、グリップが黒い6000円のナイフの方だ。

「はい、どうぞ。新品でございますよ」
男にナイフを渡すと、興味深そうにマジマジと観察している。

「良いものだな。いくらになる？」

「これは、銀貨2枚（10万円）でございます」

「ほう、高いな——しかし、こんな綺麗な刃は見たことがないし、それも納得だ。しかし——」

「なにかご不満な点が？」

「もう少し大きいのが欲しいのだが……」

元世界には銃刀法ってややこしい法律があったからなあ、あまり大きい刃物ってのは無いんだよ。あるとすれば、剣鉞けんなたか……。

しかし、白紙や青紙等の炭素鋼を使った割り込み物はかなり高い——シヤングリ・ラでも、2万5千円から5万円ぐらいまでである。

注文打ちなら10万とかな。

だが、この騎士は、買ってくれそうだな。ちょっと現物を見せてみるか。

俺は、売上の小四角銀貨4枚（2万円）をシヤングリ・ラにチャージして、刃長30cm2万5千円の剣鉞を購入した。

「大きいのだと、こんな感じになってしまうのですが——鉞として打たれた物ですが、柄とヒルトを交換すれば、戦闘にも使えると思います」

それを見せると、騎士は革製の鞘から剣鉞を抜いた。

「おおっ！ こいつは、美しい！ これは、いくらになる」

「金貨1枚（20万円）です」

「高い……高いが、このように美しい物は……うーん」

高い買い物なので、随分真剣に悩んでいるようだ。だが、これはあまり安くできないし、大金を払えそうな客からは取らないとな。

騎士様が、うんうん唸っていると、別の男から声を掛けられた。

「そのムシロは売り物なのかい？」

「は？」

——声を掛けられて、そちらを向くと、全身に毛皮を纏った、虎のような男——多分男だろう——が立っていた。

頭の上に突き出た三角形の耳が、ぴこぴこ動いている。

「うお！——も、申し訳ない」

ビククリして、変な声を上げてしまった事に謝罪をする。

「旦那、獣人は初めてかい？」

獣人——獣人か。マジでビククリしたわ。なんだか、きぐるみみたいだが、マジもんの生物だ。さすが、異世界と感心するしか無い。

「ああ、すまん。俺の村では獣人がいなかったんでな」

「獣人がいないとか、随分と僻地から来たんだな」

「そうだ、家族と親戚ぐらいしかない感じだったよ」

「でも、俺の故郷もそんな感じだったぜ。もっとも、俺の村は獣人しかいなかったけどな。ハッハッハ」

彼は、俺のブースの天井に張ってある、麻のムシロが欲しいのだと言う。

「この大きさの物が、1枚銅貨3枚だが」

「それじゃ、そいつを3枚くれ」

「銅貨9枚だが、3枚買ってくれたから、オマケして銅貨8枚でいいぜ」

「銅貨8枚も持ってねえ……」

「じゃあ、小四角銀貨1枚と、銅貨3枚だ」

男は、金を数えているが——なんだか、計算が苦手そうな感じだ。

「銅貨は2枚しかねえ」

「それじゃ、小四角銀貨2枚くれれば、釣りが銅貨2枚だ」

「え、え——」

「店主が言ってるのは、合っているぞ」

「なんだか、困っている獣人を見かねたのか、騎士が助け舟を出してくれたようだ。」

「そうか、申し訳ねえかつちけねえ。俺っち獣人はよお。計算が苦手なんだよ。それで、金を誤魔化される事が多くってな」

「シャングリ・ラからムシロを3枚買って、獣人に釣りと一緒に渡す。」

「はい、まいどあり。大変だな、ウチは金を誤魔化したりしないから、安心しろって」

「何に使うのかは知らないが、獣人の男はムシロを担いで喜んで帰っていった。」

「よし、私も買うぞ。この店は信用出来そうだ」

「買いますか？ それでは、オマケにコレを付けさせていただきます」

「俺が、シャングリ・ラで買ってオマケに出したのは、2000円の砥石。目の違う砥石が貼りあわせてある物だ。」

「ほう、コレは砥石か。変わっているな」

「こっちの茶色が荒目。草色の方が細目で御座います」

「なるほど、2つをくっつけたのか。これは便利そうだな。よし！

では、金貨1枚」

「お買い上げ、ありがとうございます」

「騎士は満足そうに、剣鉈を持って帰っていった。柄とヒルトの直

しは、懇意にしている武器屋がいるそうなので、そこに頼むそうだ。他店で買った武器のメンテなんて、嫌な顔をされないか心配になるが、そんな事はないらしい。

大物が売れたので、今日は上がるか……。毎日このぐらい売れてくれればいいけどな。まあ、取らぬ狸の皮算用は止めておこう。

「なんだい、もう帰るのかい？」

片付けを始めると、隣の店の女性が話し掛けてきた。

「初日から、デカいのが売れたからな」

「景気が良くて羨ましいよ」

「まあまあ、洗濯バサミ2つやるから、元気だしなって」

「ありがたく、もらっとくよ」

商品と木枠、テーブルをアイテムBOXへ突っ込めば、帰宅準備完了だ。簡単で良い。

金も入ったし、下着を買って洗濯をしたいんだよ。宿屋の裏に井戸があるそうだからな。そこを使わせてもらおうつもりだ。

帰りに衣服などを見て回る。格好良い革のジャケットやジャンパーらしき物もあるのだが、値段が高い。おおよそ銀貨2枚（10万円）程だな。

こういった物は、一生ものとして、修繕しながら使い続けるようだ。

革ジャンなら、シャングリ・ラで買った方が安い^{ます}が、皆ファスナー仕様だからなあ。この世界で、ファスナーは拙^{ます}いだろう。

宿屋へ帰ってきた。

「お帰り」

「5日分の宿賃をまとめて払うよ」

小四角銀貨3枚（1万5千円）を、アザレアに渡す。

「儲けたの？」

「まあまあだな」

俺の部屋へ戻り、シャングリ・ラの画面を開く。そこで、Tシャツを3枚購入。

「パンツはどうするか……うーん」

どうやら、この世界には下着らしいものは無いようだ。貴族様はドロワーズのような下着を身につける事もあるようだ。

郷に入れば郷に従え——今日からはノーパンスタイルで行くか……。脱いだパンツをアイテムBOXへ放り込んだ。

さて、上着はどうしようか……。シャングリ・ラで色々と探してみたら、襟なしの黒いボタンシャツがあった。これなら、この街でもそんなに違和感ないかも。

下着を脱いだので、洗濯をしたい。それ用のタライと洗濯板を探すのだが、木のタライが売っていない……。プラ製は拙いだろうなあ。妥協してトタン製のタライにした。少々小さめのやつが3000円、洗濯板は2000円だ。

洗剤は、洗濯機などに使う粉石鹼ではなくて、昔ながらの洗濯石鹼ってやつを、300円で買って見たが、ついでに普通の石鹼も買う。

井戸で身体と頭を洗いたいし、ついでに髭も剃ろう。貝○のT字カミソリ10個セットを買う。

タライと洗濯板と洗濯石鹼を持って、宿屋裏の井戸へ。釣瓶でガラと水を汲み、タライを満たす。水が入った釣瓶はクソ重いわ。

「これ、明日絶対に筋肉痛だろ？」

だが、筋肉痛がすぐに出なくなってきた今日この頃、お元気ですか、僕は異世界で元気です——認めたくはないが、最近衰えをちょっと感じる。

宿屋の飲料水も、この水を使っているらしいのだが、飲水として使うには水石という水を浄化する石を使うと言う。

まあ、俺の飲料水は、〇〇の美味しい水があるから、水石とやらは必要ないけどな。

洗濯石鹸を使って下着を洗濯板の上でゴシゴシやる。まさか、今の時代に、こんな物を使うなんて思ってもみなかったよ。

でも、ガキの頃、婆さんの家で使った記憶があるような無いような。

シャングリ・ラを見ると、球状の手動でぐるぐると回す洗濯機が売ってるな。これなら、人のいない所なら使えるかも。

だが、商品欄の評価は散々だな——「手で洗った方が早いです」——なんて書かれてる。

まあ、一発ネタみたいなもんか。

俺が井戸で洗濯をしていると、アザレアがやってきた。

「あゝ洗濯してる。出してくれたらやるのに。ケンイチ、泡が出るけど、石鹸も持ってるの？」

石鹸もこの世界にはあるようだが、それなりに高いらしい。普通の家は、木灰を使うようだ。

「持ってるよ。洗濯は追加料金だって言ってたろ？」

「そうだけど……儲けたんなら、そのくらい良いじゃん」

「いや、節約出来るところは、節約します。ほら、身体も洗いたいんだから、仕事に戻りな」

「あたしが、洗ってあげるよ」

「待て待て！ 裸になるんだから」

「もう、触って、啜えて、挿れたじゃん。何を今更」

「公衆の面前で、そういう事を言うのは止めなさい。ほら、石鹼1個あげるから、仕事に戻りな」

「やったあ！」

ふう——彼女のテンションが高くて疲れる。

それに——やってしまった後で、今更ちょっと心配だったのだが、避妊について聞いてみた。彼女の話だと、専用の薬品があるようだ。

事後に、それを入れればOKらしい……一般的に利用されており、副作用も無く、性病の予防にも使えると言う——さすが異世界。

頭と身体を洗い、髭も剃って、スッキリ！ だが、熱い風呂に入りてえなあ……だが、この世界で風呂に入れるのは王侯貴族だけらしい。

だが、洗濯物を干しながら、シャングリ・ラを検索すると、2万円ぐらいでドラム缶風呂が売ってるぞ。

これに川の水等を溜めて、焚き火で温めれば良いって事か。水の汲み上げには、ポンプを使えば良い——これは、いけるぞ。

そのうち、実現しなくては。

8話 良い裏ワザを考えついたかもしれない

洗濯が終わったので部屋に戻り、部屋の中に縄紐を張ると、洗濯物を干す。

シャングリ・ラで買ったバスタオルで、頭をゴシゴシする。

「ふいゝさっぱりしたあ」

髭の剃り残しがないか、アゴを撫でて確かめる。

商売初日は、いきなり高額商品が売れてラッキーだった。だが、いつもこう上手くいくとは限らない――気を引き締めないと。

だが、もう少し効率の良い売り物は無いだろうか。売った中で一番良かったのは洗濯バサミだったが……。

だが俺は、売上の硬貨を勘定していて、良い事を思いついた。

「地金……はどうだ？」

シャングリ・ラなら、金や銀の地金を売っている。それを直接換金すれば良い。

早速、シャングリ・ラで地金を検索してみると――銀の1オンスインゴットやコインが4000円前後で売っている。

コレを買って、この街の両替商に持ち込めば、1枚5万円で見えるこの国の銀貨と交換出来る。

しかし、待てよ……シャングリ・ラでは銀貨は安くて4000円の価値しか無い、だが、現地通貨では5万円相当でチャージ出来るってのはどういう事なのか？

そういう仕様なのか？ シャングリ・ラで安い銀貨を大量に買って、現地通貨に鑄造しなおせばOKって事なんだろうか……？

謎だ。

もしかして、触れてはいけない所に触れようとしている？ このステータス画面だって、誰かが管理しているから存在しているはずだ。

ルール違反で、いきなりBANとかされないよな？ ゲームじゃないこの世界でBANって事はイコール死だったら、困るぞ。

だが、いっぺん試してみる価値はありそうだ。

ついでに金の地金も探してみると、1オンス金貨が、約18万円だったので、金貨の価値はこちらと、あまり変わらないようだ。

やはり、狙うとしたら銀貨か……。

今日ゲットした、金貨をシャングリ・ラのチャージに入れてみる——すると、20万円の入金となった。

「やっぱり、レート的には間違ってたか」

企みを実行に移すために、1オンスの銀貨3枚と四角いインゴットを2枚購入してみる。1枚4000円なので、全部で2万円だ。

【購入】を押すと、チャリンと硬貨が落ちてきて、床の上をコロコロと転がっていく。危うく、床に開いた板の節目に落ちそうになった。

こういうのは普通パッケージに入ってるんじゃないのか？ しかし、物を買っても包装とかダンボールとかは一切無いからな。そういう仕様なのかもしれない。

試しに、買ったばかりの銀貨を買取査定に入れてみる——1枚3900円だ。

やはり、この世界の硬貨へ換金しないと、価値が上がらないらしい。

ひよっとして、バグや裏ワザを見つけたかも——と思ったのだが、そうは問屋が卸さなかったようだ。

「おおっ！　すげえ綺麗だな」

ピカピカに磨かれ、鏡面仕上げになっている銀貨——って、こんなピカピカじゃ拙い^{まず}じゃん。

外へ行くと石を拾ってきて、銀貨と一緒に革の巾着袋に入れ、ガチャガチャと揉む。

とりあえず、傷だらけにはなったが、使い込まれた感じが全くない……。

「うーん、確か銀製品って燻蒸液みたいのが、売ってなかったか？　いぶし銀で検索してみると——発見した。銀いぶし液と言うのか——そのまんまだな。2000円でその液体を購入して、説明書を読む。」

「なにに——熱湯の中に、いぶし液を混ぜて、銀製品を入れた後、黒くしたら水で洗ってよく乾燥させます……か」

その後ペーパー等で磨くらしい——なるほど。

カセットコンロをアイテムBOXから出し、お湯を沸かして説明書の通りに行ってみると、確かにピカピカの銀貨は黒くなった。

サンドペーパーを購入して、シコシコ磨く——。

「おおっ！　確かに、それっぽくなった。これならバレないだろう」

明日、市場で露店を開く前に、買い取りに持ち込んでみよう。銀は銀だ、偽銀じゃないし問題無い——と思うのだが。

銀貨を眺めていると、誰かが階段を上がってくる音がする。小細工した銀貨をアイテムBOXの中へ入れた。

ノックと共に入ってきたのはアザレアだ。

「もう、何もないぞ」

「そんな言い方しなくても良いじゃない——」

どうも、面白いオヤジだと思われているらしく、ちよくちよく顔を出してくる。

まあ、街の事は、彼女に聞くのが一番手っ取り早いので、俺も重宝しているのだが。

—————◆◆———

——次の日の朝。俺は、朝から肉とご飯を食っている。パンばかりだったので、肉が食いたくなつたのだ。

ただ、金網を使って焼くと、煙モウモウになってしまうので、フライパンを買って、弱火で焼いている。タレは、愛用のジンギスカンのタレだ。

フライパンで焼くと、余計な脂が飛ばないので、ギトギトになってしまうのが、欠点だな。だが、仕方ない。

飯を食った後を片付け気合を入れると、昨日買った襟なしの黒いシャツを着て宿屋を出た。

「さて、銀貨を持って凸してみるか！ 吉と出るか凶と出るか」

宿を出て、先ず向かうのは、あのマッチョな男がダブルベッドを買っていた道具屋。銀貨を道具屋で買い取ってもらえないか、聞いてみる事にした。

市場を通りこし、店先に色々な物が積まれている店に到着して、薄暗い店の中に入る——。

暗い店の中も、色んな物が積まれていて、何が何やら……。

「ちわー！」

「なんじゃな」

「うわ！　びっくりしたわ」

暗闇の中から、白髪と白髭の爺さんが出てきた。暗い緑色のローブを着ているせいで、よく解らなかった。

白い顎髭は長く伸び、いかにも見た目が魔法使いといった風体。

「爺さん、銀貨の買い取りとかやってるかい？」

「どれ、見せてみい――」

俺がポケットから取り出した件の銀貨を、爺さんが手に取る。すると明るい光が彼の手元を照らし始めた。

なんだ？　魔法か？　見た目魔法使いっぽいなと思ったが、本当に魔導師なのか？

「ふむ、見たことが無い銀貨じゃの。お前さん、コレをどこで手に入れた」

「場所は言えないが、拾ったんだよ」

「ダンジョンにでも、潜ったのか？」

「まあ、そういう事にしておいてくれ」

何？　ダンジョンとかあるの？　そういえば、市場の奴らが、冒険者ギルドがどうのこうのって言ってたなあ。

「残念ながら、ここでは買い取れんの。この国は、通貨の規制が厳しくての。この国以外の硬貨の使用は禁じられておる。もしこれを使いたいのであれば、国立の両替商へ行くべきじゃな」

「随分と厳しいんだな」

「お前さん、外から来た人じゃな」

「ああ、来たばかりだ」

「以前、贋金が大量に出回った時があつてな、それ以来、国が神経を尖らせておるのじゃよ」

「なるほどな、それじゃ爺さん。その国立両替商ってやつを場所を教えてくださいな」

俺は、銅貨を1枚爺さんに手渡した。

「市場に来る手前に交差する大きな通りがあるじゃろ、そこを真っ直ぐに行けば良い。通り沿いじゃから、すぐに解るぞ」

「爺さん、ありがとうな」

贖金かぁ——そりゃ、穏やかじゃねえな。どこの国でも、経済に直結する贖金造りってのは、重罪だからな。

店から出ようとすると、薄く四角い五徳がついたコンロのような物を見つけた。

「爺さん、これは何だい？」

「なんじゃ、知らんのか？ 火石コンロじゃよ」

爺さんが、コンロをいじると、火が点く。

「おおっ！ なんかすげえ。魔法なのか？」

「魔法と言えば魔法かもしれんが……」

火石という燃える石を使った、コンロらしい。なんだよ、意外とハイテクだな。この火石を点火装置に使った、灯油ランプも見つけた。

アザレアが言ってたのはこいつか。

だが、物凄く値段が高い。コンロは中古で30万円相当、灯油ランプは10万円だ。これならシャングリ・ラで買った方が、断然安い。

道具屋から出て、爺さんが教えてくれた通りに歩くと、硬貨に剣が突き刺さった紋章が描かれた看板が見えてきた。

石造りの三階建てで、玄関は一段飛び出した造りになっており、そこから短い階段が伸びている。窓には全てガラスが嵌^{はま}っており、立派な造りだ。

さすが、国営の施設。

中へ入るために、商人の証をポケットの中へ突っ込む。もしもの時に身バレを防ぐためだ。――大丈夫だ、決心して中へ脚を踏み入れる。

建物の中も、大理石のような石で出来た豪華な造り。窓ガラスのせいもあるが、白い石に反射した光で中も明るい。

俺は、メガネを掛けた若い男が座ったカウンターへ向かった。この職員は、白いシャツとブラウスに、下は黒いサスペンダーで吊るされた、ズボンかスカートを穿いている。

首には男女共に蝶ネクタイだ。

カウンターの奥に、髪の毛をアップにして、メガネを掛けた女性職員がいるのだが、遠目に解るほど巨乳でここの制服が実に似合っている。

うゝむ、素晴らしい。

いや、そうじゃねえ――。

「あゝ、外国の銀貨を両替したいのですが」

俺は、ポケットに入れていた全部の銀貨とインゴット5枚をカウンターの上に置いた。

メガネを掛けた若い男は、銀貨を木皿に入れて、そのウチの一枚をマジマジと見た後に、答えた。

「あちらに、おかけになって、お待ち下さい」

手のひらで指された先には、赤いクッションの椅子が並んでいる。しょうがない、黙って待つことにするか。

待っている間に暇なので、シャングリ・ラの画面を出して、電子書籍を読む事にしたんだが――。

なにやら、カウンターの奥が慌ただしい。天秤やら、水槽やらを持ちだしてきて大騒ぎをしている。

恐らく、銀が本物かどうか調べてるんだと思うが……大丈夫かな？
だが、シャングリ・ラから買ったんだ、銀の品質は最高のはず。

あまり考えてもしようがない。先程の巨乳女性職員に絵描きの性が疼くので、紙と鉛筆をアイテムBOXから出して、スケッチをすることにした。

ふむ、やっぱり女はこのぐらいの歳じゃないとなあ。アザレアも可愛いけど、やっぱり大人の色気च्छゅーもんが……。

年を食って、かなり好みが変わったと思う。最近、近くが見えづらく老眼が入ってきたしな。

はあ、歳はとりたくねえな。

なんだか、ツマラン事で少々落ち込んでいると、呼びが掛かった——30分程経ったと思う。

「銀貨の両替でお越しのお客様」

「あ、はいはい」

俺がカウンターへ駆け寄ると、メガネを掛けた職員が丁寧に説明をしてくれた。

「厳正な検査な結果、お客様が持ち込まれた銀貨は、間違いなく銀と証明されました。しかし、鑄造し直す手間を入れると、銀貨5枚で金貨1枚の両替になりますが、宜しいでしょうか？」

「まあ、仕方ありませんね。このままでは使えないとなると、持っ
ててもしょうがないですし……」

「お客様、個人的な見解を申し述べ宜しいでしょうか？」

「は、はい、どうぞ」

なんだ、なんだ、何か問題があるのか？

「お客様、これを何処で手に入れましたか？」

「ダンジョンですが……」

「なるほど——この銀貨にはかなり高度な鑄造技術が用いられており、然るべき工房へ送り詳細に調べた後であれば、その価値は数段上がる物と思われます。硬貨を扱い、様々な物を拝見して参りましたが、このような素晴らしい物を見ることができ、まさに眼福がんぷくでございました」

なんだか、淡々と丁寧に硬貨への愛を語るこの男も、少々変わっているな。だが、元世界のコインはプレス加工だったはず。

「あの……俺に難しい事を言われても解らねえし。使える金貨に交換してもらえれば、それで良いですよ。調査とやらは、そちらでやって頂ければ……」

とりあえず、笑って誤魔化す。

「承知いたしました」

男が残念そうにメガネを——くいと上げると、木皿に金貨が一枚出された。

「お手数おかけしました」

金貨をゲットしたので、早々に立ち去る。上手くいったは良いが、心臓バクバクだ。

こんなの、これ以上持ち込めねえ！ 絶対に問題になる。良い考裏えだと思っただが、かなり問題があるようだ。

銀貨を大量に持ち込んで、出処を追及されたらヤバイ事になる。

俺が銀貨を潰して、鑄造し直せばOKかもしれないが、貨幣の私鑄造は極刑だろう。何もそんな危ない橋を渡る事は無い。

儲ける方法はいくらもあるのだ。

例えば、異国の銀貨は使えないが、銀のアクセサリなら全然問題無く、市場にも色々と銀製品が売っている。

勿論もちろん、それなりに高価だがな。

シャングリ・ラを検索すれば、2000～3000円の安いシルバークセサリーが大量にある。それを売れば良いのだ。

だが、売値が高くなるので、買える客を限定してしまう心配があるが……。

市場へやって来る客の月収は10万円ぐらいらしいからな。そんな人達が2万～3万円のアクセサリーを買うには少々無理があるだろう。

金持ちに伝^{つて}があれば良いのだが……と言って、貴族は相手にしたくねえし。

まあ、とりあえず現金が追加で手に入った。銀細工でも並べて、客を待ってみよう。

たまたまやって来た、金持ちの目に止まるかもしれない。

時間を食ってしまったが、市場へ向かう事にした。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

遅れて店を出したが、さすがに昨日のようなラッキーは続かず、洗濯バサミが30個程売っただけ。

やはり、この洗濯バサミは定番商品になりそうだな。もっとディスプレイを考えた方がいいかもしれない。

洗濯バサミを繋ぎ合わせ、モールを作ってブースを飾る——とかな。

今日は早々に店じまいかな？ ——と思ってたら、声が掛かった。

「このベッドを見せてもらえないか？」

声を掛けてきたのは、がっしりとした体格の口髭の中年男だ。俺は、テーブルの下を潜ると、外に出た。

「ここに出すんで、ちょっと離れてくれ」

「出す？ ああ……」

アイテムBOXから、目の前にベッドを出してみせると、男が一步下がって驚きの表情をしている。

「こりゃ、噂に聞くアイテムBOXってやつか」

「そうだよ。ベッドは、使い込まれてるけど、まだしっかりしてるよ。買ってくれたら、オマケにシーツを1枚付けるから」

「うゝむ……もう一声」

「それじゃ、今日はもう店じまいなんで、アイテムBOXを使って家まで運んでやるよ」

「そいつは助かるなあ……よし、買った」

「毎度ありゝ」

小四角銀貨6枚（3万円）で売れた。

こういった生活必需品なら、少々高くても売れるんだが、アクセサリーなんてのは贅沢品だからな。

ベッドを運んで今日の仕事は終わりだ。

銀貨の件は上手くいかなかったが、仕方ない。

9話 洗濯バサミがよく売れる

銀貨ロンダリング計画は失敗に終わった。まあ、次の手を考えよう。

宿屋に戻り、少し早いが晩飯にする事にした。

「少し余裕が出たし、何か他の食い物を……カレーが食いたいな」
——と言ってもカレーを作って煮込むわけではない。袋に入ったインスタントカレーだ。

シャングリ・ラで検索をする。金が入ったから、ちよつと高いやつにするかな——【ご当地カレー4種セット】か、これがいい感じだ。

4袋入りで1600円だから、1袋400円でインスタントとしては、結構高い。

カレーの袋と、パックご飯を温めるために、コンロを出してお湯を沸かす。温まったら、皿に盛れば完成だ。ゴミはゴミ箱へ。

「いただきます」

さすが高いだけあって、スパイシーでコクもある。中々美味しいな。1袋100円とかのやつと比べたら雲泥の差だ。

ここに來てからそんなに経ってないのに、凄く久々にカレーを食った気がする。

食った後はティッシュで皿を拭いて、最後はアルコールスプレーを掛けて、もう一度ティッシュで拭く。

アルコールで脂は落ちるし、殺菌されてるはずなので、これで大丈夫なはずだ。大体、潔癖症には異世界生活は無理だな。

膨れた腹で、シャングリ・ラを検索——銀細工を調べてみる。
やはり、2000〜3000円も出せば、銀のアクセサリーが結構ある。石が嵌っているものもあるが、当然ダイヤや水晶ではなく、ジルコニアやカットガラスだ。

だがこれでも、この世界では、それなりの価値があるだろう。ネックレスとブローチ、イヤリング等を5点程1万円で購入した。買ったアクセサリーを眺めていると、ドアがノックされた——アザレアだろう。

「開いてるよ」

「今日はどうだった？——あゝ！銀細工が沢山ある！」

「これはダメだぞ。売り物だからな」

「解ってるよ……ねえ、身体で払うのはダメ？」

「ダメ」

「ふん………どうしてもダメ？」

「ダメ」

抱きついてきたり、胸を押し付けてきたりと色々やって来るのだが、今日はダメだ。

不満気な表情の彼女だが、なんでもかんでも、やるわけにはいかない。

意外としつこいので、早々に追い出す。あまり懷かれても困るんだよな。この先どうなるのかも解らんし……。

両替商にいた受付の巨乳のお姉さん辺りに、色っぽく迫られたら、俺の心も揺れ動いちゃうかもしれないけどな。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

——次の日の朝、朝からカレーを食う。朝カレーだ。
小学生の時、晩の残り物のカレーを朝食って学校へ行った事を思い出す。だが、郷愁に浸ってる暇は無いな。

異世界スローライフ計画のためには、まだまだ資金が足りない――
――頑張らねば。

市場へ到着して、店を広げる――いつもの場所だが、店は増えていない。隣の女性に挨拶をするが、今のところ新参者は俺1人だけらしい。

前から考えていたように、洗濯バサミを繋げてモールを作り、店先を飾ってみた。

中々、派手で良いじゃない。商売なら、目立ったもの勝ちだな。呼び込みが出来ないなら、ディスプレイに凝るしかないってわけだ。赤色灯でも回せば、客の気を引けるかもしれないが、そうはいかないだろう。

だが、洗濯バサミに色を塗ってみたりするのもいいかもしれない。

横棒に銀のネックレスや、ブローチ等を引っ掛け吊り下げる。こうやって、キラキラしてくれて、人の目に付く事を願う。

店を開いて30分ぐらい――客は来なかったので、スツールに座り、街ゆく人達を眺めていた。

すると、毛皮を着た大きな耳をした女が尻尾をフリフリ歩いてくる。

獣人ってのは裸でも平気らしいが、それだと公序良俗に反するって事で、申し訳程度の服を着ている。

簡単な布製のベストと尻尾を出したミニスカートという出で立ちだ。一般の女達は、下着を付けていないので、くるぶしまであるロングスカートが普通になっている。

へえ、今まで気が付かなかったが、獣人ってそれなりにいるんだな。しかし、暑くはないのだろうか？ 犬も猫も暑さには弱かったはずだが。

その獣人の女を見ていたら、彼女の動きがピタリと止まった。

あ、ヤバイ。見過ぎたか？女は尻尾を立てると、こちらへ一直線に向かってきた。

「へい、いらっしやい」

とりあえず、挨拶をして誤魔化す。だが女は何も言わず、くんくんと辺りの臭いを嗅いでいるようだ。

「何か――？」

「香辛料の臭いがするにゃ！」

にゃ？ 獣人の女の顔がアップになるので、見れば――マジで、顔まで毛が生えている。黒い毛皮っぽいのが、よく見るとトラ柄だな。やはり、人というよりは猫だ。それにしても香辛料か――もしかして、朝のカレーかな？

だと、するとかなり鼻が良いな。

「それが何か？」

「香辛料持ってるなら、売ってほしいにゃ！」

「ああ、持ってるが、売り物じゃないんだよなあ。それに、ここじや香辛料を売ったりするとヤバイって話も聞いたし」

「そうだよ旦那。バコパに目をつけられたら面倒だよ」

隣の露店の女性が、話に割って入ってくる。

「ほらな」

「にゅ」

がつくりして、尻尾まで垂らして可哀想だが、スパイスシンジケートに目は付けられたくない。獣人の女は肩を落としてトボトボと帰っていった。

それから、1時間洗濯バサミが6つ売れただけ。まあ、こんな時

もあるさ。

暇なので、シャングリ・ラを開いて電子書籍を読んでいると、声が掛かった。

「洗濯バサミを下さい」

顔を上げると、細い目のメイドさんが立っていた、紺のロングワンピースに白いエプロン、黒い髪のおさげを両方でドーナツみたいに纏めて^{まと}いる。

彼女はサンプルの洗濯バサミを指でニギニギしていた。

「何個必要だい？」

「100個」

「ひゃく〜？」

「在庫がありませんか？」

「いや、あるけど。100個だと——え〜と、銀貨1枚になるぜ？」

「値段は知ってましたから、代金は持ってきました」

話を聞けば、彼女は大きなお屋敷のメイドさんらしい。そりゃ、奉公人が何十人も入れば、洗濯バサミを100個ぐらい使うかもな。知り合いが買って自慢していたので、それを見た彼女が、雇い主に掛け合ったと言う。

「いちにいさん……」

洗濯バサミをテーブルの上に10個積んでタワーを作る。この横に同じ高さのタワーを作れば、一々数える必要が無い——コインと同じだな。

「はい！ 100個。 6個で1個オマケなんで、16個オマケにするよ」

「ありがとうございます」

メイドさんが、ペコリと頭を下げると、持ってきた布袋に洗濯バ

サミを入れはじめた。

「ああ、ちょっと広げててくれよ。俺が入れてやる」
ガシャガシャと、洗濯バサミを布袋の中へ放り込む。

「ありがとうございます」

再び、頭を下げた彼女であったが、頭を上げると目の前のネックレスに気がついたらしい。

手に取ると、じゅっと見ている。

「こ、これは――ダイヤモンド金剛石なのでは？」

「それは、磨いたガラスだよ。こちらの色付きもそうだ」

「ガラス……」

本当は、ジルコニアだけだな。ダイヤモンドじゃないから、ダイヤモンドと言うわけにはいかないだろう。

「値段は？」

「小四角銀貨6枚（3万円）だな」

「それでも、かなり安い……」

彼女はジルコニアが入った銀のネックレスをじゅっと見てる。本当に穴が開くほど見てる。

かなり安いと聞こえたが、場所を選べば、もっと高くても売れるって事か。

「気に入ったのなら、取り置きしても良いぜ。まあ、簡単には売れないと思うが」

「お願いします」

「本当にかい？」

「はい」

なんだか、あまり喜怒哀楽が無いように見える彼女だが、ネック

レスが気に入ったようなので、置き置きという事にする。

メイドさんは、洗濯バサミを116個抱えて、帰っていった。

なるほどなく大きな屋敷なら、洗濯バサミも大量に使うのか。デカイ屋敷を歩きまわって、直接売り歩く手もあるな……。

まあ、歩くのは面倒だから、この場所で良いが。

結局夕方になっても、今日は洗濯バサミしか売れなかった。それでも、洗濯バサミだけで5万円以上だ。

それにネックレスも一つは売れる予定が入ったしな。今日は、このぐらいで引き上げるか。

撒収の片付けをしていると、黒い影に囲まれた——見れば、毛並みの良い毛皮を纏った獣人達だ。全部で4人。

男たちは皆、布製ベストを着て、縄をベルト代わりにした半ズボンのような物を履いている。

その1人は、朝に俺の匂いを嗅いでいた女の獣人、そして、もう1人は——恐らく、初日にムシロを買っていた獣人だと思う。

毛皮の種類も色々と模様があるんだな。これは、元世界の猫と一緒に感じが……。

「悪いが、もう店じまいだぞ」

「旦那、俺たち達に香辛料を売ってもらえねえか？」

「ええ？ ダメダメ。ヤバイ所に目を付けられたら、ここで商売出来なくなっちまう」

「そこをなんとか」

頭を下げる獣人達だが、下げられても困るなあ。

「おいおい、獣人のあんちゃん達よ。あまり無茶言っちゃいけないぜ？ その旦那だって、生活掛かってるんだからよ」

「うう……」

通行人からも、ヤジが飛び始めて、獣人達は尻尾を垂らしてしょんぼりだ。

「しょうがねえなあ……」

獣人達を集めて円陣を組むと、ヒソヒソ話をする。

「香辛料は売れないが、街の外で香辛料を使った料理を奢る事なら出来る。それなら文句は言われないだろう？」

「良いのか？」

「でも、1回だけだぞ。街へ来る途中に川があつたろ。あそこの河原で飯を食おう」

「「「ヒヤッホウ！」」」 「ニャ〜！」

獣人達が小躍りしているのだが、そこへいつの間にか、隣の店の女性がニヤニヤしながら混じっていた。

「あたしも御相伴にあずかろうかね、へへへ」

調子の良いBBAだな。まあしょうがねえ、袖振り合うも多生の縁ってやつだ。この女はアマナという名前らしい。

店をアイテムBOXへ入れて、獣人達を入れて6人で街の外の河原を目指す。

普通に歩いていたら、時間が勿体ないと――獣人達が俺とアマナを背中に背負って走りだした。

「おおおっ！ 速えええ！」 「ひゃあああ！」

悲鳴を上げる俺とアマナを背負って、人間では考えられないようなスピードで河原に到着した。なんちゅースピードだ。それでも全力疾走ではないらしい。

6人で河原に降りるが、そろそろ空が紫色になり始めた。

獣人達は火をおこす準備をすると言う。それじゃ、俺は料理を始めるか――。

店に使っていたテーブルをアイテムBOXから出して、場所を作る。カセットコンロを2つ出して、シャングリ・ラで大鍋とデカイ中華鍋、そして野菜詰め合わせセットを買う。

皿とスプーンも足りないな。まあ金に少々余裕が出来たので、色々揃えるか……。

大鍋に水を張って、お湯を沸かす。スープはポタージュにしよう――袋に入っているインスタントポタージュスープを買う。

「あれ？ 旦那、火石コンロ持ってたんですかい？」

これは、火石コンロじゃないけどな。説明する必要もないだろう。獣人達が料理のために焚き火を用意してくれたが、日が暮れると少々冷え込むので、料理に使わなくても火は必要だ。

「まあな」

「何もない所から出したのは、アイテムBOXってやつですかい？」

「そうだよ」

「初めて見たぜ。なあ？」

獣人達は、色々と出てくる道具を不思議そうに見つめている。

「あたしも手伝うよ」

アマナが買って出てくれたので、手伝いをお願いする。

「それじゃ、この野菜を細かく薄く切ってくれ。適当で良いぞ」

「なんか、見たこと無い野菜ばかりだけど……」

「全部食えるから大丈夫だ」

俺は中華鍋を加熱する。初めて中華鍋を使う時には、少々儀式が必要だ。加熱して色が変わってきたら、油を回して捨てる。

廃油は後で纏めてゴミ箱へ捨てよう。本当は、もっと時間を掛け

て儀式をやらないとダメなのだが時間が無い。

「野菜切り終わったよ」

「よっしゃ！ 野菜投入！」

炒めている間、中華ダシとオイスターソースをシャングリ・ラで購入して、鍋に投入。そして、味付けの塩、鷹の爪を一杯。

「お湯沸いたにゃー」

鍋のお湯に、ポタージュスープの素を16袋全部投入して、弱火にする。こいつらなら、このぐらいいは食うだろ。

投入した粉は、すぐに固まり黄色く粘りを増してくる。

「鍋が焦げ付かないように、棒でかき混ぜててくれ」

「解ったにゃー」

アイテムBOXから以前買った豚こまを出して、中華鍋の中へ全部投入する。多分、750gぐらい残ってたはずだ。

しかし、中華鍋がデカ過ぎて火力が足りない。こりゃ、カセットボンベバーナーも投入して、火力アップ。

「アマナ、この炎を上から当ててくれ」

「こうかい？」

見たこと無い道具ばかりで、彼女はちよつと引き気味だ。

具材に火が通ったら、缶に入ったカレー粉を投入して、しばらく炒める。

「よし！ カレー風味、肉野菜炒めの完成だ」

「いい匂いだにゃー！」

「おおっ！ たまんねえぜ！」

皿を人数分購入して、カレー風味炒めと、ポタージュをよそう。一番最初買ったパンの詰め合わせ3袋と、大皿を買って、それ

に山盛りにして出した。

「好きなだけ食ってくれ」

「「「うおお！」」」

獣人達は、一斉に料理に群がった。

さて、異世界風カレー風味肉野菜炒めの評価はいかなものか。

10話 河原で獣人達と宴会

スパイス料理を食いたいという獣人達と知り合い、河原でキャン
プして料理を奢^{おご}ってやる事になった。

「そら、パンは食い放題だ」

目の前の大皿に、山盛りになったパンを指さす。

「うひょー」「なんだ、このパン！ 柔らかくて甘くて、うめえ！」

「美味しいにゃ！」

「本当に柔らかくて美味しいね」

パンは皆に好評だ。カレー風味炒めはどうだろ？

「こっちの香辛料料理もうめえ！ 辛いけど、うめえ！」

「なんじゃこりゃ、こんな美味しいの初めて食った！ このスープも
うめえ！」

「にゃー！ ピリピリ来るにゃー！ 美味しいにゃー」

「ひゃー、こんなに美味くていいのかね。それに、銀のスプーンで
食べるなんて、貴族様みたいだよ。見たこと無い野菜ばかりで、
一時はどうなることかと……」

そりゃ、ステンレスで銀じゃないんだけどな。普通の家庭では、
木のスプーンを使っているようだ。皿も陶器は高いので、木の皿だ
ったり。

シャングリ・ラでも木の皿は売ってるが、陶器の方が高く売れる
からな。

ともあれ、口に合ったようでよかった。だが、えらい勢いで食っ
てるんだけど、全然足りないんじゃないかね？ かなり大量に作ったつも

りだったんだが……。

足りなかったら、なにか他のもので腹を満たしてもらうしかないな……。

なんて考えている間に、獣人達が料理を平らげてしまい啞然。すげえ、食欲だな——こいつ等の家庭はエンゲル係数が凄く高いとみた。

しょうがねえ、追加でウインナーの詰め合わせを1kg購入する。

「足りないなら、コイツを焚き火で焼いて食え」

言われた通りに、木の枝にウインナーを刺して焼く、獣人達。シユールな絵面だな……なんだか、微笑んでしまう。

「おっ！ コイツも、皮がパリっとしててうめえ！」

「こりゃなんですか？」

「肉を潰した物を、動物の腸に詰めた物だ」

「ええ？ 本当ですかい？」

「あたしゃ、聞いたことがあるよ。他の国で、そんな保存食があるって」

アマナがウインナーに似ている物を聞いたことがあるらしい。

「しかし、こんなのを食うと、酒が欲しくなるなあ」

「あんた等、ちよつと遠慮しなよ。こんなの食ったら、普通は1週間分のメシ代がすつ飛ぶんだよ」

「まあ、アマナ。せっかく皆楽しんでるんだ、酒も出すとするよ。だが、口に合わんかもしれないぞ？」

「なあに、酒精が入ってりゃ、なんでもいいですぜ」

シャングリ・ラで、ペットボトルに入った4Lの焼酎を買う。酒飲みが、これに手を出したら、ヤバいというやつだ。

「ほら、これだ。だけどな、ここで飲み食いした物に関しては、皆に秘密——他言無用だ」

「解ってますよ」

「この透明な入れ物何にゃ？ 中は水にゃ？」

「これは、魔法で作った入れ物で、中に入っているのも酒だよ、これも秘密な」

カップを購入して渡し、手酌でやってもらう。獣人達は、味も確かめもせずに、ぐいっと一杯いった。

「ほおお！ コイツは強い酒だぜ」

「水みたいな酒だな。こんなのは初めて飲んだな」

「けど、臭いのとか、酸っぱいのに比べりゃ、断然美味いぜ」

「結構いけるね」

本当に一番安い酒なんだが、皆には好評みたいだ。だが、臭いのとか、酸っぱいのってどんなのだ？ 動物の乳から作った酒が酸っぱいって聞いた事があるが。

男達は皆酒を飲んでいるが、獣人の女は飲んでいない。

聞けば、不測の事態に備えて、1人はシラフの奴を残しておくそうなのだ。

皆は酒だが、俺は基本飲まない人間。ジュースを片手に飲兵衛さんに付き合う。

酒を飲んでいない女にも、ジュースを振る舞う。

「美味いにゃー。これは、果実の汁だにゃー」

彼等があっという間に4L飲み尽くしそうなので、追加で4Lを出す。空きのペットボトルはゴミ箱へポイ。

「旦那、甘やかし過ぎですよ」

どうも、アマナはお小言が多いタイプらしい。

「そういえば、まだ名前も聞いてなかったな。俺はケンイチだ」

「俺っちは、ニャケロ。女はミヤレー、後の2人はニャルメロとニャンジーだ」

俺の所からムシロを買ったやつがリーダーでニャケロというらしい。

——既に日は落ち、周囲を漆黒が包み始めている。

俺は、後片付け中だが、アマナに手伝ってもらい、焚き火の灰を使って食器を洗ってもらっている。

ここでは、灰を使うのが定番らしい。彼女にはスポンジを貸してある。

「旦那、これって海綿ですか？」

「お、海綿って知ってるのか？」

「ええ、これでも、大きな屋敷で下働きをしてた事があるんですよ」

「そこで、海綿を使っていたのか？」

「何せ、高い食器が多かったですからねえ」

食器を傷つけないような配慮なのだろう。試しにシャングリ・ラを覗いてみると、海綿って普通に売ってるんだな。

これは知らなかったよ。

空を見上げると、黒い空に星が出ている。空気が綺麗なのか、星の数が凄い。

「大分暗くなったな」

俺の眩つみやきに、ニャケロが反応した。

「今日はもうダメだなあ」

「ダメ——というと？」

「門が閉まるんでさ」

ああ、なるほど、暗くなると門が閉まるのか……。門を閉めるのは、魔物や野盗の侵入を防ぐためだと言う。

「そういう事が多いのか？」

「こちら辺じゃ、聞かないけど——40リーグ（60km程）ほど離れた山の中に、シャガってヤバい奴らがいるんだよ」

アマナがちよっと興奮気味に話す。

「なんだ、野盗か？」

「そうなんだよ、かなりデカイ野盗の集団で、なんでもアリのヤバい奴らなんだよ」

そいつ等は、森の中の朽ち果てた古城跡を根城にして、近隣の村や街を襲い略奪を繰り返していると言う。

「今日は、ここに野宿だけど、こちら辺は大丈夫なんだよな？」

「森に入らなきゃ大丈夫だよ」

そういえば、薪を買ったままだったな。アイテムBOXから薪を取り出す。

「薪も残ってるから使ってくれ」

「それが、アイテムBOXですか。なんでも入ってるんですね」

「あまりデカイ物はいらないがな」

「それでも、便利な物ですねえ」

「ああ」

なんだ、酔っ払っているのか、喋りが緩慢になってきたな。

そのまま黙って飲んでいるかと思ったら、獣人達が服を脱ぎ始め

た——勿論、女もだ。

「おいおい、何を始めるつもりだ？」

「身体を洗うんでさあ」

何だよ、びっくりしたわ。目の前で乱交でもされたら、どうしようかと思っただぜ。彼等は、焚き火で照らされた真っ黒な川へ入ると、ゴシゴシと身体を洗い始めた。

毛皮の手入れを怠ると、ダニやノミで大変な事になるらしく、毎日身体を洗うらしい。凄い綺麗好きって事だ。

彼等獣人達は、毛皮を着ているので、服を脱いでも恥ずかしいという感覚は無いと言う。

「ほら、石鹼をかしてやるよ！」
アイテムBOXから石鹼を取り出すと、彼等に白い塊を放り投げた。

「うひょー！ 石鹼を使えるなんて、マジで貴族様だぜ」
「にゃー！」

彼等は、毛皮に石鹼を塗りとくると、ゴシゴシと擦りはじめた。さすがに、盛大に泡が立って、雪だるまのようになっていく。

「ケンイチ、後ろ塗ってにゃ」
ミャレーが、石鹼を持って俺のところに来て来たので、背中を石鹼でゴシゴシしてやる。

毛皮を着ているから、解らなかったが、まるで筋肉の塊だ。あれだけ速く走れるのも納得出来る。

「旦那、それは売り物でしょ？ 良いんですか？」

「石鹼は俺が使ってる物だから、大丈夫だ。売る分は取ってあるし」
「よく、人が良すぎるって言われないかい？」

アマナの目には俺が浪費しているように映るようだ。

「まあ、そう言われる事もあるが。俺自身は人も良くないし、優しくもない。自分勝手に、自己中心的な人間だ。今日のも、タダの気

まぐれだしな」

「そうなんですか？」

「今日は奢^{おご}るが、彼等が俺に集^{たか}ってくるようだったら、俺も手のひら返すし。それに、馴れ馴れしくされるのも嫌いだしな」

「安心しましたよ」

「アマナも、川で身体を洗ったらどうだ？」

「あたしや、これでも女ですよ！」

「あはは、すまん」

そのまま獣人達を眺めていたのだが、男達が川で泳ぎ始めた。

「うひょー、気持ち良いぜ！」

そりゃ、酒で火照った身体に、冷たい水は気持ち良いだろうが…。

「おいおい！ 酒飲んで川へ入って泳ぐとか、大丈夫なのか？」

「ははは！ 大丈夫でさあ——あ——ゴボゴボ」

返事をしていたニヤケロの動きが突然止まり、ゆらゆらと川の流に任せるままになってるようだ。そのまま暗闇の中へ消えていく。慌ててアイテムBOXから、LEDヘッドライトを取り出して川面を照らす。

「早速、溺れてるじゃねーか！」

俺が川へ入ろうとすると、ミヤレーが飛び込み、ニヤケロの下へ向かい始めた。

正直俺じゃ、奴のような巨漢を川から引き上げたりする事は出来ないだろう。

ニヤケロを引っ張ってきた彼女は、軽々と巨漢を担ぎあげると、河原へ放り投げてよこした。

「ふぎゃ！」

カエルを踏みつぶしたような声を上げたニヤケロだが、もうデロンデロンだ——恐らく、強い酒を飲んで泳いだりしたので、一気に酒が回ったのだろう。

「こういう事が度々あるので、誰か1人はシラフなのにゃ」

「なるほどな。それにしても、この暗さで、よく見えたな」

「うち等、夜目が利くにゃ」

さすが、獣人——天然スターライトスコープってやつだ。鼻は良いし耳も良い、それに夜目も利く。だが、視力自体は人間と変わらないらしい。

「旦那、それ魔法のランプかい？」

「ああ、そんなもんだ」

「商売の上手い人は色々と持ってるんだねえ……」

不満そうに焼酎をチビチビと飲むアマナだが、俺のヘンテコ能力については説明出来ん。

それにしても、ずぶ濡れになって、身体の線が露わになった獣人達は筋骨隆々だ。こんなのに襲われたら、絶対に助からんな。

それに、ナニもデカイ。こりゃ、人間は敵わん……。

彼等は、動物と違い知能もあるし、武器も使うからな。ミャレーは弓を使った狩りが得意だと言う。それで、生計を立てているようだ。

俺から買ったムシロは、獲物を運ぶための袋を作ったらしい。

また、そういう仕事をするには、冒険者ギルドって所へ登録が必要だよだ。

まあ、今の俺には必要ないかな……。

「それは良いが、ずぶ濡れで寝たりして風邪をひいたりしないか？」

「こんなのいつもだから、大丈夫にゃ」

そういうもんなのか。しかし、濡鼠ぬれねずみの彼女が可哀想なので、アイ

テムBOXからバスタオルを取り出すと、濡れた身体を拭いてやる。

「ふにゃ〜」

彼女は気持ちよさそうだが、バスタオルはあつという間にびしょ濡れ。シャングリ・ラからもう一枚バスタオルを購入した。

だが、2枚でも足りないな。こりゃ3枚か4枚必要かも。

「もう、大丈夫にゃ」

拭きが半端だが、彼女はこれで良いと言う。すぐ乾くらしい。それにしても、1回拭いただけで、バスタオルが毛だらけになってしまった。

溺れてひっくり返っているニャケロ以外の獣人達は、焚き火に当たって毛皮を乾かしている。

「なるほど。こういうのが普通なのか」

まあ、ここにはドライヤーとかが無いしな。だが、ドライヤーで乾かしてやったら、さぞかしフワフワになるに違いない。

夜もふけて、少々冷えてきたので、毛布を2枚シャングリ・ラで買う。獣人達は、そのままでも無くても平気らしい。

「アマナ、毛布を貸してやるよ」

「こんな上等な物を……」

それでも、一番安いやつなんだがな。高級羽毛布団やらを売ったらどのぐらいになるんだろうか？

河原に寝転がると、ゴツゴツとして痛いので、安いコンパネを買って敷いてみた。板が小さいので、上半身しかカバー出来ないが、直接寝るより遥かにマシだ。具合が良いのでアマナにも板を敷いてやる。

毛布に包まってうつらうつらしていると、川面に大きな青い光が飛び始めた。

「おわ！　なんだ?!」

「旦那、蛍ですよ」

「蛍？　これがか？」

少し離れた所に止まった、それをみると、デカイ甲虫のように見える――これが蛍なのか。コガネムシぐらいの大きさはあるぞ？

「それにしても、焚き火をこれだけ焚いているのに、虫が寄ってこないな」

「虫除けの魔石を持ってるにゃ」

そう言って、ミヤレーが俺の毛布の中に入ってきた。まるでデカイぬいぐるみだ。

魔法の虫除けか。俺も虫除けのスプレーを使ったり、シャングリ・ラには蚊取り線香も売っているが、匂いも無く虫除けが出来るとなると――異世界方式の方に分があるかな？

「買うと値段はどのぐらいするんだ？」

「銀貨2枚（10万円）にゃ」

「銀貨2枚?!」

「にゃ」

そいつは高いな。だが、凄く便利そうだ。田舎でスロ―ライフも良いが、虫との戦いだからな。10万円でも価値はあるかもしれない。

虫によって媒介する厄介な病気やらも多いしな。元世界だって、有名なマラリアを始め、日本脳炎やら、ツツガムシ病、リケツチア等々色々ある。

置くだけで虫が寄ってこないとかいう薬を買った事があったけど、全然効かなかったし。

「もしかして、雑草が生えなくなる魔法とかもあるのか？」

「聞いたことがあるにゃ、大きな屋敷では使ってるって言うにゃ」
だが、いくら魔法でも特定の植物だけ駆除するのは無理だろう。
使ったら、花や畑の植物の成長も阻害するに違いない。

「温かいにゃー」

いや、抱きつかれた俺の方が温かいわ。ミヤレーはこのまま眠るつもりらしいが、彼女は服を着てないので一応裸なのだが……いいのか？

彼女だけ石の上は可哀想なので、もう一枚コンパネを買って、彼女の下に敷いてやった。

しかし、河原でのキャンプは、増水の危険があったりで普通は拙いのだが。獣人達は何回もここでキャンプしているらしいので、危険は無いと言う。

洪水等であふれた事も無いらしい。

俺は寝転がったまま、シャングリ・ラの画面を出して、電子書籍を読んでいる。

どういう仕組みなのか、白い画面が暗闇でもよく見える。だが、画面は光っているように見えるのだが、その光で周囲を照らす事は無いようだ。

——ということは、実際に存在していない？

それに、実際に目の前に表示されているのであれば、他の人からも見えるだろうし。もしかして、俺の脳内に擬似的に再現されているのか？

それとも、視神経に割り込み処理が掛かっている？

画面だけじゃなくて、荷物が何処から送られてきて、精算はどうなっているのか？ 考えるほど、あまりに謎な能力だ。

ステータスオープンと言っても、名前と年齢しか乗ってないしな。スキルとか称号とかレベルとかそんなものも無いし。

どうやら、この世界にはそういった物自体が存在していないようだ。

俺は、画面を閉じて眠りに就いた。

11話 良い取引先

——河原にキャンプして、次の日の朝。

俺が目覚ますと、獣人達は既に起きて片付けをしていた。

「おはよう——ふあああ。昨日は随分と飲んでたが、大丈夫か？」
「大丈夫でさあ。久々に愉快だったので、飲み過ぎちゃった——面
目ねえ」

「まあ、良いってことよ。朝飯も食うか？」

「とんでもねえ、散々飲み食いして、これ以上は世話にはなれませ
んぜ」

思慮とか配慮とかはある連中のようだ。これなら、彼らと付き合
っても良いだろう。

「アマナは？」

「大丈夫ですよ」

「よっしゃ！それじゃ、家に帰って飯にするか。俺は宿屋だけだな」
「にゃー！」

また、獣人達に背負ってもらい、宿屋まで運んでもらう。本当に
速い。

彼等と別れて、宿屋へ戻る。だが、飯を食ってまた市場へ行かな
いとな。まあ、そのまま向かってても良いのだが、宿代は前払いして
いるし。

一応顔は出しておこうと思う。

「おはよーさん」

「あ！ ケンイチ、昨日は何処へ行ってたの？」

「外で、獣人達と飲んだ」

「はあ？　なんで外で？　ははあ、外で遊んでて、暗くなって戻れなくなっただけでしょ」

「まあ、そんなところだ」

「獣人の女なんかと遊ぶぐらいなら、あたしと遊べばいいじゃん……」

「別に獣人の女と遊んだりは——」

——と言いかけたら、アザレアが黙って俺のシャツを指さした。

黒いシャツはミャレーの抜け毛でいっぱいになっていた。

あちゃー。

言い訳をしかけたのだが、アザレアはプイと顔を背けて、奥へ行ってしまった。嫌われてしまったかな？

……まあ、仕方ない。俺の目指すスローライフに女は必要ないしな。

とりあえず、2階へ上がって朝飯を食って、シャツに洋服ブラシを掛けた。

だが、毛が取れず——しばし悩む。

シャングリ・ラで粘着テープのコロコロを買って、コロコロした。これが一番よい感じがする。

—————◆◆———

朝食後、何時ものように市場へ行くと店を出す。

今日は、無地の木製宝石箱を3つ程並べてみた。アザレアヘッドロップを入れてプレゼントしたのと同じ物だ。

それから、2000円で購入した両刃の鋸ノコを吊り下げている。いつも商品が一緒だと飽きられてしまうからな。

たまに違う商品が並んでいれば、なにか良い出物が無いのかと、客が足を運んでくれる。

並べた木製宝石箱は、午前中に1個売れた、あまり売れる物ではないらしい。買った女性は小物入れに使うようだ。

客足も途切れてスツールに座り、シャングリ・ラの画面で電子書籍を読んでいると、声が掛かった。

「この紙が欲しいのだが」

店の前に立っていたのは、緑色のローブを着た爺さんだ。中は上下の黒服で、白髪交じりの黒い髪と髭を生やしている。

この土地は、変わった毛色も多いが、黒い髪も多いな。おかげで、俺が目立たなくて済んでいる。

「はい、いらっしゃい」

「この紙は薄くて丈夫だな」

どうやら、紙をご所望のようだ。指で触って感触を確かめている。

「品質には自信がありますよ、何枚程ご入用ですか？」

「100枚だな」

「ひゃく？」

「揃えられんか？」

「いいえ、大丈夫です。2〜3日頂けるのであれば……しかし、1枚銅貨1枚ですので、100となると銀貨2枚（10万円）になります」

本当はすぐにでも出せるのだが、いつもすぐに出すと怪しまれるかもしれないので、そういう事しておく。

「大丈夫だ。金はある」

「これは、失礼致しました。……もしかして、本をお書きになる？」

「いや、わしは写本家だ」

「写本と言うと、1枚1枚、本を写していくと言う」

「その通りだ」

この世界に印刷技術はまだ無い。本を作るには全部手書きだ。原本が出来たら、写本家が写本してコピーを作って売るのがだろう。著作権なんて無いからな。

「ちなみに、本というのは1冊どのぐらいするのでしょう？」

「1から10――^{ペンキリ}だ。装丁に凝れば、金貨10枚（200万円）でも20枚（400万円）にでも、する事も可能だ」

「ほう、そんなに高価な本の中身はどういった物が多いのでしょうか？」

「多いのは色事物だな」

爺さんは、片目をつぶって髭を撫でている。

「金貨10枚で、色事物ですか？」

「ふはは、金を持っていても、人の中身が良くなるわけでもないわ。わしも、それで飯が食えてる」

「それで御座いますねえ……それでは、3日後には確実に入荷しておりますので」

「うむ、承知した。頼むよ」

爺さんなのに、足取りも軽やかだな。まだまだ達者そうだ。歳を食っても元気なら良いのだから。

しかし、この世界で病気とかしたらどうなるんだろうか？ 魔法があるようだから、治癒魔法とかで病気も治るのかな？

その後、洗濯バサミが20個程売れる。やはり定番商品になったようだ。

話が広まれば、もっと売れるかもしれない。先日ここへ来たメイドさんのように、大きな屋敷からの注文があれば、大量に捌ける可能性^はがある。

だが、午前の客はそれでお終いだった。

昼飯にパンを食った後、午後になってもしばらく客足は途絶え、シャングリ・ラの電子書籍を一冊読み終えようとした時――。

2人の客が店を訪れた。

「マーガレット、この店ですか？」

「はい、お嬢様」

1人は紺色のメイド服――そう、前に俺の店から洗濯バサミを100個買っていったメイドさんだ。

もう1人は――流れるような金色のストレートヘア、上等そうなフリルの付いた白いブラウスに紺のロングスカート。

いかにも、お嬢様って感じの女性だ。歳は――20歳ぐらいだろうか？ 切れ長の目に知性を感じる。

当然、見るからに金持ちそうな客なので、もちろん接客は丁寧。

「いらっしやいませ」

金髪のお嬢様は、店先に釣り下げられたネックレスを手に取り、しげしげと見ている。

「メイドさん、置き置した商品を取りにきたのかい？」

「はい」

アイテムBOXの中から、銀のネックレスを取り出して、メイドさんに差し出す。

「はい、小四角銀貨6枚（3万円）だ」

「ありがとうございます……お嬢様これを――」

「まあ！ これは、ダイヤモンド金剛石では、ないのですか？」

「店主の話だとガラスだと」

「ガラス……」

なにやら、メイドとお嬢様が揉めている。いや、揉めているわけでもないが、俺が渡したネックレスで、あれこれ話し合っている。

だが、結論が出なかったのか、お嬢様が俺のところへやってきた。

「少々お聞きしたいのですが……」

「なんでございましょう？」

「このネックレスについているのは、ダイヤモンド金剛石ではないのですか？」

「ええ、違います。磨いたガラスでございますよ」

「……」

なにやら、考えごとをしているようだ。

「何か？」

「他のアクセサリもあるのなら、見せていただけますか？」

「承知いたしました」

俺は、シャングリラの画面を開くと、違うデザインのネックレスを検索して、購入ボタンを押した。値段はおおよそ、2000円〜3000円の間だ。

突然、目の前に現れる銀の宝飾にお嬢様が反応した。

「アイテムBOX！」

正確にはシャングリ・ラから送られてきているものだから、アイテムBOXから出しているわけではないのだが、端から見ればそう見えるのだろう。

故に、俺もそれに合わせた。

「さようでございます」

「……」

お嬢様は細い顎に手を当て、また何やら思案を巡らせているようだ。そして、結論を出したように話し始めた。

「ご店主、少々お願いがあるのですが」

「なんでございましょう」

「私マロウ商会の長女、プリムラと申します」

「これはご丁寧に、私はケンイチと申します。お見知りおきを」

「突然の申し出で申し訳ないのですが、我が商会を訪れて、我が父に会っていただけないでしょうか？」

本当に突然だな。しかし、怪しげな商会だと困るな。例えば、バコパって所はヤバいって聞いているし……。

隣の店のアマナにマロウ商会の事を耳打ちしてみる。

「ちょっと、アマナ。マロウ商会って知ってるか？」

「この街でも有数の大店だよ」

「よく話に出てくるバコパって連中みたいな危ない所ではないのか？」

「マロウ商会は、まともな商いをしている所さ」

「ふむ……」

なるほど、そんなに悪い話ではないようだ。大店って事はこの街の顔役でもあるだろう。そのような人物とパイプを作っておくのも悪くない選択だ。

「承知いたしました——今すぐでしょうか？」

「今日は、父が屋敷にいますので、可能であれば今日のほうが……」

「承知いたしました」

「無理を申し上げ、申し訳ございません」

金髪のお嬢様が、頭を下げる。大店のお嬢様なのに、俺みたいな吹けば飛ぶような、新参者の商人に頭を下げるなんてな。

どんな商人かは知らんが、このお嬢様を見る限り、父親はかなりの人格者に思える。

俺は、店を片づけてアイテムBOXへつつこむと、金髪のお嬢様に連れられて、マロウ商会の屋敷へ向かう事になった。

市場の外れには、黒塗りの馬車が待機しており、執事らしき男に

案内されて馬車へ乗り込んだ。

なかなか立派な馬車だ。俺を待っていたのは、ふかふかの真っ赤なシート。だが、貴族様って奴らの馬車はもっと豪華なのだろう。

「こんな立派な馬車には初めて乗りましたよ」

「ほほ、貴族の馬車はもっと豪華ですよ、ねえマーガレット」

「はい、お嬢様」

相変わらず、細目のメイドさんはクールな対応だ。

「ウチが売った洗濯バサミは役に立っておりますか？」

「はい」

メイドさんは、端的に淡々と答える。

「私も、すぐに洗濯バサミを拝見いたしました。あれも、商品としては、すばらしい物ですね」

「ありがとうございます」

「知り合いの工房へすぐに試作品を作らせただのですが、合わせ目をピタリと合わせる事が出来ませんでした」

そう、毛抜き等もそうだが、可動させて面をピタリと合致させるには、かなり高度な工作技術が必要になる。

俺が売ってる洗濯バサミは、コンピュータ制御の加工機によって作られたものだろう。

単純で作るのが簡単そうに見える代物だが、あれを家内制手工業で再現するのは少々難しい。

コイル状のバネもそうだ。この世界に押出成形機は無いだろう。バネ1つでも鍛造しなければならない。

「一見単純そうに見えますが、あれを作るのは高度な技術が必要でして」

「お抱えの職人も、そう申しておりましたわ」

洗濯バサミの話をしていると、屋敷が見えてきた。立派な門を潜ると、広い庭に石造りの豪華な建物。

建物の規模は、俺が銀貨を両替しに行った、国立の両替商と同じぐらいか。貴族の屋敷は更にデカいと言うのだから、格差社会やねえ。

根っから貧乏な俺にはちよつと無縁の世界だ。こんな立派な建物を見ても、掃除が大変そうだなあ——とか、そんな事ばかり考えてしまう。

プリムラさんと執事に案内されて、客間で待つ。ソファアはフカフカ。家具はどれを見ても1級品だろう。

ここにある家具ならアンティークとして、シャングリ・ラの買取りでも高額な値段が付くに違いない。

思わず、シャングリ・ラの買い取りウィンドウを開いて、家具を突っ込んでみたくなる衝動に駆られるのを、ぐっと堪えていると——ドアが開いた。

「ケンイチさん、父がお会いしたいそうです」

プリムラさんに案内されて、マロウ商会の主人の下へ向かう。この屋敷の書斎という部屋で待っていたのは、派手な格好をした恰幅の良い初老の男性。

鼻の下には立派な黒い髭が蓄えられている。

出で立ちは、草色の上下に金糸の入った赤いチョッキという原色な色使いだが、一見して商人だと解る格好をしているのだと思う。

商売の世界では、先ずは名前を覚えてもらうのが先決。商人達は、それぞれ頭を捻^{ひね}り、商売相手に印象付けるあれこれに趣向を凝らしている。

ウチの隣のアマナがやっている、ネックレスジャラジャラもその類だろう。

彼の机の上には、メイドさんへ売ったネックレスが置かれていた。

「よくぞお越しくございました。マロウ商会のマロウで御座います」
座っていた椅子から、勢い良く立ち上がり俺に挨拶をしてくる。

「はじめまして。そちらのお嬢様のお招きにより、まかりこしました、ケンイチと申します。お見知りおきを」

「これは、ご丁寧に。こちらこそ、よろしくお願い致します」
手を伸ばしてくる様子は無いので、この世界には握手は無いようだ。この街にやってきてから、一度も握手に遭遇していないしな。

「お父様——」

プリムラさんが、商会の主人——父親に駆け寄ると何か耳打ちをしている。

「なんと！ そちら様は、アイテムBOXをお持ちだそうで」

「はい、小さい物ではありますが」

「実は、私も——」

彼の前——何も無い空間から、金の置物が現れた。なるほど、俺のアイテムBOXも端から見ると、こんな具合に見えるのか……。

「マロウさんも、アイテムBOXをお持ちなのですね」

「そうです。私はこれを使って、商会をここまで大きくいたしました」
「た」

「それは凄いですねえ。私など、農家で作物の倉庫にしか使っておりませんでした」

「それは、勿体ない」

「それで、ご用件の程は……？」

彼は考えるように少々間を置くと、ズバリ切り出してきた。

「端的に申しますと。この商品をマロウ商会へ卸して頂きたい」
この商品というのは、机の上に置かれた、銀のネックレス等のア

クセサリーだ。

「なるほど、そちらのお嬢様の反応からすると、然るべき所へ持つていけば、さらに高く売れる商品であると……」

「その通りです」

「しかし、それならば、私の店から安い値段で買った商品を、そのまま転売なされば宜しいのでは？」

「そんな事をして、それがそちら様の耳に入ったらどうなるか……」
主人は椅子に座ると、顔の前で指を組んでいる。

「私は——銀製品の取り扱いを止めるでしょうね」

「そうです。それに、我々の商売敵がそちら様に押しかけて、もつと良い契約を結んでしまうに違いありません。目の前の利益に目が眩み、大きな商売を逃してしま——商人としては、最も愚かなる行為です」

「なるほど……解りました。それで、掛率はいかほどで？」

「5掛けを考えておりますが……」

「よし、それで手を打ちましょう」

「宜しいのですか？」

「はい」

俺としては、シャングリ・ラで買った20000〜30000円の銀のアクセサリーが数十万円になるのだから、万々歳。2〜3掛けでも良いぐらいだ。

もちろん
勿論、金製品の方が高く売れるのだろうが、金はシャングリ・ラでも値段が高い。

シャングリ・ラと、この世界との価値の乖離かいりを利用するなら、銀製品が一番効率が良い。銀貨のロンダリングには失敗したが、良い取引先を見つけたようだ。

簡単に言えば、市場に露店を開いてセコセコ商売しなくても、月に銀製品を2〜3個売れば余裕で暮らせるって事だ。

まあ、露店をすぐに止めるつもりも無いのだが。

主人が、俺の方へ駆け寄ると、手を差し伸べてきた――握手だ。なるほど、ここで握手をする事で契約完了という事になるのか。

逆に言えば、迂闊に握手するとヤバいという事だな。

その後契約書を交わして、マロウ商会への銀製品の卸売が決定したが、同時に洗濯バサミの卸売も決まった。

プリムラさんが大層気に入ったようで――貴族の屋敷等で、大量の需要が期待されると言う。

無論、大店の商会にしてみれば、洗濯バサミの儲けなど微々たるものだろうが。

そのついでに、さらに高額の商品を売る等の機会に恵まれるのだ。

良い取引先が決まったと喜んでいたのだが――。

世間話に事が及んで――大店の商人とは言え、単なる親バカの娘自慢が延々と始まってしまい、逃げるのに苦労した。

大切なお得意様なので、このぐらいの話し相手になってあげてもバチは当たらないと思うのだが……。

マロウ商会での銀製品の売値は50万円から100万円の間だと言う。

そのほかに、製品を更にチューンナップした物――ジルコニアをダイヤモンドに、ガラスを水晶に交換した物も販売しているようだ。ただ、この世界の宝飾のカット技術は未熟だ。本当の石より、美しく綺麗にカットされたジルコニアやカットガラスの方が、人気があると言う。

それなら、ブリリアントカットされたダイヤモンドを持ち込めば、高く売れると思うが――。

だが、明らかなオーバーテクノロジーの持ち込みには、注意しないとな。

無理に稼がなくても、異世界でスローライフを目指せる金さえあれば良いのだ。

勿論、もちろん金もあるに越した事は無いのだが。

12話 森のなかに家に建てる準備をしよう

この街の大手、マロウ商会との取引が始まった。最初の銀製品の取引だけで、俺の取り分は100万を超え――。

シャングリ・ラのチャージ金は、あつという間に3桁万円に突入した。

――それから数日後、紙を注文した爺さんがやってきた。

「紙が100枚入ったよ」

「おお、ありがたい。これで、仕事が進むわい」

爺さんは紙の束を握りしめて、感触を確かめている。

「100枚買ってくれたんで、10枚オマケしておいた」

「それは、いかん。その10枚分の金も払うぞ」

「しかし……」

どうも、おまけが嫌いな爺さんらしい。

変わった人もいるもんだ。まあ、写本家なんて珍しい商売やるんだから、変わり者なのは間違いないと思うのだが。

だが、真面目でコツコツタイプの人でなければ、到底続かない職業なはずだ。

俺の店の紙を随分と気に入ってくれたようなので、写本家という商売柄、お得意さんになってくれるだろう。

――――◇◇――――

後日、マロウ商会から、変わったアクセサリはないか？――

というリクエストを受け、それに応えるために、カメオのアクセサリーを持ち込んでみた。

シャングリ・ラを見ると同じ商品が並んでいるので、おそらく機械彫りだと思われるが、それでも値段は高く10万円前後する。

「まあ、すばらしい！ お父様、これは私が購入してもよろしいでしょうか？」

カメオのブローチを見たプリムラさんが、歓喜の声を上げた。

「全く、困った娘だ」

大店の商人とはいえ、娘には甘いようだ。こちら辺は異世界も変わらないという事か。目に入れても痛くないってやつだな。

彼女が示した値段は金貨10枚（200万円）だが、これは卸売りではない、彼女が直接購入したのだ。

カメオのブローチを付けてご満悦の彼女に聞いても、このようなアクセサリーは、ここには存在しないと言う。

だが、プリムラさんが付けていたカメオのブローチを見た貴族の女性達の反応はすさまじく、同じ物が欲しいと注文が殺到したらしい。

シャングリ・ラから買うのは簡単だが、機械彫りの同じ商品を幾つも卸す訳にはいかない。プレミアム感が薄れるからな。

売り逃げであれば、それでもいいのかもしれないが――トラブルがなければ、この街にしばらくいるつもりでいるから、そんな商売は出来ない。

デザイン的にも良いと思われる物を厳選して、3つ程卸したのだが、一気に値段が高騰し1点が金貨50枚（1000万円）を超える値段となった。

プレミアが付いてしまったが、カメオの卸値は1個金貨10枚（200万円）である。

一気に俺の懐は暖かくなった——そして、金が出来れば、俺のスローライフ計画を進める事が出来る。

その拠点となるのが、森の中だ。

森の中は危険だと言うが、森との境界線から200m程中に入っただけでは、危険性が跳ね上がるわけでもないだろう。

その地点の木を切り倒して、場所を作って家を建てようかと思っている。シャングリ・ラを検索すると、ログハウスのような小屋が、170万円程で売っているのだ。

三角形の屋根と、3箇所に窓、玄関前にはウッドデッキも付いていて、デザインのにも中々洒落ているし、秘密基地感もあって良い。ここの気候は穏やかだし、気温が低い訳でもないの、ログハウスのな物でも十分だろうと思われる。小屋の内部は12畳程あるし、一人暮らしなら十分だと思う。

このログハウスを見て、俺の期待は跳ね上がった。

元世界でも、自分で建ててみようかと、雑誌等を購入して計画した事もあったのだ。ログハウス専門誌なんてのも出版されているしな。

資金が出来たので、市場の露店は2日に1度程にして、異世界スローライフを実現するための作業に取りかかった。

まず、行うのは——森へ続く道を作る事だ。

森の中に住んで、街へやってくる度に歩くのは面倒なので、自転車等を使って時間を短縮したい。

電動アシストマウンテンバイクも考えたのだが——今のところ電気の問題がある。

自転車等を人に見られると拙い^{まず}のだが——幸い、街と森の間は、

人の背丈を超える程の草むらに覆われている。

そこを切り開いて、自転車の通るための道を造るのだ。そうすれば、人目を避けて自転車を使うことが出来る。

草刈りにはエンジン式の草刈り機を使用する。

そこで問題となるのはエンジンの燃料だが――2ストエンジン用の混合ガソリンがシャングリ・ラでは販売されているので、それでクリア出来そうだ。

混合ガソリンというのは、ガソリンと2ストオイルが予め混合された物で、エンジン草刈り機や、チェーンソーなどに使用されている。

都会では馴染みはないだろうが、田舎ではアチコチから、けたたましい2ストの音が響くぐらいに使われて、メジャーな物だ。

草むらの下は土なので、草さえ刈れば、道を作るのには問題は無いと思われる。

手作業で草を刈るのは大変な作業だが、俺にはシャングリ・ラがある――そこで、文明の力エンジン草刈り機の出番だ。

草刈り機には電動もあるが、この世界には電気は存在していないので、当然使用出来ない。

それに、自分の家でもエンジン草刈り機は使っていたから、手慣れた作業だ。

獣人達と酒盛りをした河原から、森の入り口まで、一直線に草を刈って道を作る計画を実行に移す。

俺は、草むらの入り口へ立って、呪文を唱えた。

「おりゃ！ エンジン草刈り機召喚！ ポチッとな」

【購入】 ボタンを押すと、チャージから3万円が引かれ、空中からエンジン草刈機が落ちてくる。

毎度、毎度、落ちてきて、物が壊れないか要らぬ心配をするので、マットを購入して、その上に落ちてくるようにしてみた。

落ちてくる地点を観察してみると――その場所は、俺の立ち位置や物の大きさによって、ある程度決まっているようだ。

無事に草刈機をマットでキャッチしたので、混合ガソリンも買う、4Lで1000円――リッター250円で普通のガソリンに比べたらかなり高い

だが、仕方ない。この世界にはガソリンなどは売っていないのだから、これを買うしかないのだ。

ランプなどに使用するホワイトガソリンは売っているが、ホワイトガソリンはオクタン価が低いので、エンジンの燃料には使用出来ない。

草刈り機に混合ガソリンを入れ、チョークレバーを操作してリコイルスターターを引っ張ると、一発でエンジンが始動した。いつも家の周りの草刈をやっていたので、こんなのは手慣れた作業だ。

スロットルを開けると、けたたましい甲高い音を立てて、唸りを上げるエンジン。これを使って、緑の壁を切り開けば良い。

肩から草刈り機を吊り下げ、バリバリと音を立てて、背の高い草を刈っていく。刈った草は、堆肥などに使うために、アイテムBOXの中へ放り込む。

幸い、ススキか芦のような植物で、笹や竹のような堅い茎ではない。草刈り機で簡単に薙ぎ払う事が出来、みるみる道が出来ていく。高い草むらに囲まれて、辺りの様子が全く見えないため、時々方位磁石を確認して道が一直線になるように気をつける。

せっかく作った道が、ウネウネと曲がっていたら、走りにくいかな。

後から気が付いたのだが――自分では密かに計画を進めていたつ

もりだったが、城壁の上にいる警備兵隊から見ると、丸見えだったらしい。

変な奴が変な事をやっていると、笑い物になっていたようだ。

そりゃ、この街で森の中に住もうなんて奴は、いないらしいからな。

それどころか、草むらに道まで作っているのだから、変人の類と思われても仕方無い。

草むらに道を作りつつ、砂利も敷いていく。シャングリ・ラには砂利も売っていたので、使ってみた。2級碎石ってやつで20kg 400円と格安だ。

道に敷くなら、これで十分。元世界のように、長雨が降るような土地ではないらしいので、これでもなんとかなるだろう。

草むらの切り開きが完成したら、次は、ログハウスを建てる場所の確保だ。

エンジンチェーンソーをシャングリ・ラで購入して、大木の伐採に挑む。

元世界の俺の自宅は薪ストーブだったので、チェーンソーも使い慣れてはいるのだが、こんな大木を伐採するのは初めてだ。

確保するスペースは、ログハウスを建てる場所。そして、小さな畑もやってみたいので、そのスペースも取る。

大木の間隔はそれなりに離れているので2本程切れば、場所を確保出来るだろう。足りないようだったら、再度伐採すれば良い。

ログハウスの上に木を倒すような間抜けを演じなければ、大丈夫だろう。

木の伐採に使用するチェーンソーも2ストエンジンで、燃料は混合燃料を使う。もっとも、最近は環境云々で、4ストエンジンの物

も出回っているようだが。

個人的には、2ストエンジンの方が、パワーがあって使いやすい
——と思う。

なお、木の伐採には結構な危険が伴う。

木が倒れる時に、枝などが引っかけ、あらぬ方向へ倒れる事
があるのだ。

元世界で俺が住んでいた田舎も、昔は林業が盛んだったが、しよ
っちゅう事故の話を聞いていた。

俺の爺さんも、林業で働いていた事があったのだが、事故の話ば
かりだったな。

俺の同級生などは、丸太を固定しているワイヤーが切れて、耳が
吹き飛んだ。後数cmずれていれば、顔面直撃で即死だったと言う。

そんな危険な林業が今は重機一台で済んでいる。昔は数十人でや
っていた作業が1人のオペレーターで出来てしまうのだ。

重機で木を掴み、切り倒してそのまま枝を払って、適当な長さに
切りトラックへ積む。

——誰が買うのかは知らないが、シャングリ・ラを検索すると、
林業用の重機も売っている。

コイツを購入すれば、俺1人で山を切り開く事も可能だろう。ま
あ、そんな事をするはずも無いが。

覚悟を決めて、大木を伐採するために、チェーンソーで三角に切
れ込みを入れる。倒す側は大きく——そして、反対側は小さく切る。
徐々に切れ込みを大きくしていき、慎重に事を進め、さらに鉄製
の楔を打ち込んでいく。

楔が幹に深く食い込んでいくと——メキメキと音を立てて、大木
が倒れ始める。それを確認すると、俺は急がず——だが、素早く
離れた。

この際、ダッシュで離れたりすると逆に危ないらしい。木の根っ子に引っかかり倒れたりして、巻き込まれたりする事があると、爺さんから聞いた。

大木が倒れると腹に来る地響きと共に、数メートルの高さまで飛び上がり転がっていく。

あの近くにいれば、巻き込まれて大怪我——下手をすると、死んでしまう可能性だってある。

そのすぐ後、もう一本、大木を切り倒した。

「ふう……」

無事に大仕事が済んだので、シャングリ・ラでコーラを購入して飲む。残念ながら冷えてはいない。

だが、エンジン発電機を購入すれば、それに冷蔵庫を繋いで、飲み物を冷やす事が出来るようになるはずだ。

その快適な生活をエンジョイするため、是非ともログハウスを購入入りたい。

大木の切り倒しに成功したが、これを片付けなければならない。

このままでは邪魔だ。

ここで、俺は一つの実験を閃いた。アイテムBOXってのは、どのぐらいの大きさの物が入るのか？

とりあえず、切り倒したばかりの大木を入れようとしてみた——が、失敗。大きすぎるようだ。

大木は30m程ある。30mは大きいということか……。それでは、その半分はどうか？ 大木の真ん中をチェーンソーでカットしてみた。

言うのは簡単だが、凄く大変だ。チェーンソーの振動で、手が痺れてくるのを我慢して、少しずつ大木に切れ目を入れていき、最後に繋がっている部分をカットする。

だが、木が曲がっていたり、転がっている場所が不安定だったり

すると、跳ね上がったたり転がったりするので、注意が必要だ。

やっと作業が完了して——再び実験。

15mではどうか？——だが、アイテムBOXには入らない。

15mでも長いのか。

「それじゃ、10mはどうだ？」

——吸い込まれた！アイテムBOXの表示には【丸太（大）】
×1と表示されている。

まあ、10mの物が入るなら、大抵の物が入るだろう。大型重機
だって10mはないはずだ。

まさか、バケットホイールエクスカベーターがあるわけでも無し
……ないよな。一応念の為に、バケットホイールエクスカベーター
を検索してみたが、【お探しになっている商品はありません】——
と表示された。

「ふう……」

俺は、何故か安堵した。だが、確かセミトレーラートラックは1
2m程あったので、入らない可能性がある。

まあ、そんな物を使う予定も無いが。免許だって、中型免許しか
持っていない。乗れるのは確か8tまでのトラックだ。

8tあれば、大抵の物は積める。ユ○ック車なら、なおよし！

ちよっと待て、なんでトラック運転する前提になっているんだ、
トラックから離れろ——今は丸太だ。

アイテムBOXへ収納されたのであれば、後は簡単。カットした
丸太をアイテムBOXへ入れて他の所へ持っていき、取り出せば良
いのだ。

だが、せっかく切った丸太だ。薪に使ったり出来るので、すぐ近
くに置いておく事にした。

丸太はどかしたが、まだ残っている物がある——切り株だ。巨大な切り株が、文字通りに地面に根を張り鎮座している。

切り株もアイテムBOXへ入るかと思ったのだが、地面から掘り起こさないとダメのようだ。

チェーンソーを使って少しずつカットして切り刻む。シャベルで根っこを掘り起こす。掘り起こす——掘り——。

「やってられるか、こんなの！」

俺はシャベルを放り投げて、呪文を唱えた。

「やって来い来い巨大メカ！ ユ○ボ召喚！ ポチツとな」

余りに果てしない過酷な作業に業を煮やした俺は、中古のユ○ボ——バックホーパワーショベルの購入ボタンを押してしまったのだ。

13話 ユ○ボ召喚！ でも燃料は？

商売が上手いきき、持ち金も増えた——異世界でのスローライフを満喫するために、拠点を構える事にした。

森に小さなログハウスを建てるために、大木を切って、整地をしようとしたのだが——。

俺は非力過ぎた。大木の切り株を処理するのもままならず——ブチ切れた俺は、シャングリ・ラからバックホーパワーショベルを召喚してしまったのだ。

購入したのは、緑色の重機。街の道路工事等で使われ普通に見える中型の物だ。少々使い込まれてサビも浮いている物だが、排土板も付いているし動けばOKという事で、値段は120万円程。

デカイ買い物だが、あれば何かと便利だろう。例えば、シャベルで深い穴を掘るのは超大変だが、重機を使えば1分も掛からないし、疲れない。

壊れたら、修理不可能ではあるが……なんとかなるだろう。

シャングリ・ラには、溶接機や旋盤、フライス盤まで売っているのだ。電子部品等のトラブルでなければ、何とかなる……はず。

どうしてもダメなら、新しいのを買えば良い。その頃にはもっと金を稼いでいるだろう——あくまで、希望的観測だが。

何はともあれ、動かしてみよう——。少々破れた、黒いビニール製の座席に座ると、右側を見る。

キーは座席の横に付いているので、そいつを捻ればエンジン始動だ。無事に重機が咆哮を上げて、座席にブルブルと振動が伝わる。

だが、エンジン音を聞いて——俺は、はたと思った。

「これ、ディーゼルじゃね？」

そりゃ、そうだ。重機といえば、ディーゼルじゃねえか！ 燃料
どうするんだよ。

慌てて、シャングリ・ラで軽油を検索する——当然売ってない。
だが、添加剤は売っているのを見つけた。

灯油を軽油に変え、ディーゼルエンジンで使えるようにする薬剤
だ。こんな物を買わなくても、○ストオイルを混合すりゃ良いとい
う話もあるのだが……。

元世界で、それをやったら脱税で捕まるので注意だ。だが、私有
地のディーゼル発電機等に使うのなら、OKだったはず。

それじゃ、灯油でも良いのだが、以前ランプを使った時に灯油を
検索したら、無かったよなあ……。

万事休すか？ いや、待て待て。こんなデカイ買い物をして、簡
単に諦められるか。灯油をもう一度検索して、最後まで調べてみる
と——。

関連商品に、パラフィンオイルという物を見つけた。商品の説明
欄を読むと、白灯油だと書いてある。

白灯油ってのは、灯油を精製して煤や煙を出さないようにした油
で、ランプなどに使う。これなら使えるかもしれない。

さらに、白灯油で検索を掛ける——なるほど、白灯油ならキャン
プ用品で売っているな。1L1800円と高価だが、これしか無い。
街で売っている海獣油の灯油が使える可能性があるが、中位の壺
一つ——おおよそ4Lで1万円。

シャングリ・ラの白灯油なら4L買っても7200円だ。こちら
の方が品質も安定しているだろうし安い。

これと、灯油をディーゼルエンジンで使えるようにするための添
加剤が4Lで5000円。一応、燃料のセタン価を上げるための添
加剤も2000円で買ってみた。

色々計算してみると——リッター2500円／3000円ぐら
いになる、恐ろしく高価な燃料だ。

だが、重機が動けば、俺1人では出来ない事も出来るようになる。
致し方無い。

「しかしなあ、本当に使えるのか、これ？」

確かに心配だ。この燃料を入れて動かなかったらヤバイ。何かい
い方法は……。

何か良いヒントは無いかと、ディーゼルエンジンで検索してみる
と——某国製のディーゼル発電機が9万円程で売っている。

そうだ——コイツを買って、この白灯油改燃料で動かしてみるか。
また金を使ってしまうが、120万の重機を壊すよりはマシだし、
発電機も色々使い道がある。

「よし！ 発電機召喚！ ポチツとな」

梱包もしていない、黄色いディーゼル発電機がドス！ という音
を立てて森の腐葉土にめり込む。

しかし、発電機はよく使ったが、ディーゼルは初めてだな。一緒
に付いてきた説明書を見てみる——読めねえ。日本語じゃねえし！
本当に使えるのか？ 少々怪しくなってきたが……まずは試して
みるしかないだろう。白灯油改燃料をタンクに入れてみる。

ガソリンエンジンじゃないので、始動のチョークは必要ない。ス
イッチを入れて、リコイルスターターを引こうとするのだが、クソ
重い！

ディーゼルエンジンで、圧縮が凄く高いために、スターターが引
けないようだ。

「なんだこりゃ、どうすりゃいいの？」

日本語で書いてない漢字と英語の説明書を一応読んでみる——な
るほど、デコンプレバーがあるようだ。

デコンプってのは、圧縮を抜くための装置だな。昔、ヤ○ハ製の単気筒エンジンのバイクに乗っていたが、そいつにもデコンプが付いていた。

デコンプレバーを引いて、エンジンのピストンを上死点まで持ってきてから、リコイルスターターを引く——と書いてあるらしい。その通りにしてみよう。

「やった！」

けたたましい音を出してエンジンが動き始めた。白い煙を吐いているが、動いてはいる——しかし、キンキンガンガンとクソやかましいエンジンだ。

これで、1時間程放置して、様子を見てみよう。燃料に問題があるなら、これで解るはずだ。

無負荷で長時間稼働させると問題がありそうなので、シャングリラからドラム式の延長コードを買って、100Wの電球を2つ点灯させてみた。

オレンジ色に明るく灯る電球——。

おおっ！ この世界で初の100V電気の明かり。だが、電圧の変動が大きいのか、電球がパカパカと波打っているように見える。

これでは、電子部品が入った家電などは使えないだろう。さすが某国製——もちろん勿論、PCなどを繋ぐのは論外だ。

——そして、2時間後。

念の為に2時間、発電機を回してみたが、問題なく回り続けている。長期的に使うと、燃料ポンプやらの問題が出るのかもしれないが、この世界に軽油に相当する物はこれしか無い。

辺りは既に暗くなり始めている。せっかくスペースを作ったんだ、今日はここに泊まってみよう。

煩いめんどくさい発電機は、何もかもぶち壊しなので、早々にアイテムBOX

へ収納した。こいつの出番はもう無いかもしれない。

試しに、買い取りへ入れてみたら、査定が4万円と出たので、売ってしまうかもしれない。

発電機を買うなら、日本製のガソリン発電機の方が、遥かに高性能だし静かだ。

しかし、日本メーカーの発電機もメイドイン某国だったりするんで、注意しなければならない。

大木を切り倒した際に出た、木っ端を集めて焚き火をする。

「そうだ。森の中に住むなら、獣人のミャレーが言っていた、虫除けの魔石ってやつが欲しいな」

恐らく、この世界で生きていくなら必需品だと思うので、この際買っても良いだろう。

俺が銀貨を持ち込んだ――あの爺さんの道具屋で売ってるかもしれない。明日、露店を広げる前に行ってみるとするか。

腹減ったな――さて、何を食うか。

獣人と酒盛りした時に買った野菜が残っているな。なんでも焼きにするか。

なんでも焼きとは、冷蔵庫等に余った野菜をなんでも切り刻んで、小麦で溶いて焼いた物である。

それを、マヨネーズとソースで食べる。まあ、お好み焼きの亜種だが、こんなのお好み焼きと言ったら、怒る人もいるかもしれない。

肉が無くなったので、追加で買う。そして、卵が欲しいな。

ショッピング・ラで卵を検索してみると――あった。【訳あり】不揃い卵40個、値段は800円だが、規格外品って奴だな。

規格外でも、中身は一緒だ。沢山買っても、アイテムBOXの中へ入れておけば、腐る事も無いしな。

元世界でも、近所に養鶏場があって、そこで規格外品の卵を買っ

たことがある。大きさがバラバラとか、変形しているのとか色々がある。

面白いのは、双子だ。双子の卵は気持ち悪いと敬遠する人がいるらしく、検査で事前に全部はねられている。

それが、養鶏場の売り場で売られているのだ。勿論、もちろん売ってるのは全部双子。

双子の卵は黄身が多いので、同じ分量でもホットケーキを作ったりすると、味が濃くなったりする。

せっかく薪を燃やしているので、フライパンに入れたこいつを直火で焼いてみるか。遠赤外線が沢山出ているので、美味く焼けるかもしれない。

ジュウジュウと何でも焼きが焼ける音が森の中に流れる。暗闇の中は本当に静かだ。

だが、ここでも黒狼とやらの襲われるようなら、ここでの計画は水に流すしか無いな。

ここを整地した後の計画を頭の中で練っていると、何でも焼きが上手く焼けた。

「おお、なんだかガスで焼くよりふっくらしているような」

そしてマヨネーズとソースを上から掛ける。マヨネーズは普通のキ○ーピーだが、ソースは色々試してお○ふくソースに落ち着いた。ずっとイ○リソースを使っていたのだが、試しにお○ふくを使つて、嵌ってしまった。今はこれが俺の定番だ。

気のせいかもしれないが、いつも食っていた物より、美味く感じる。こんな大自然の中で食っているせいだろうか？

なんでも焼きで腹が一杯になった後、テントを張る。

さて、なんの対策も無しに寝るわけにはいかないな。不測の事態

には備えなければならない。

暗い中、焚き火に当たりながら、シャングリ・ラを検索すると、12Vの赤外線センサーが売っている。

住宅の玄関等に取り付けられていて、人が近づくと明かりが点灯したりする、アレだ。1個400円ぐらいなので、4つ購入する。生き物が来るとすれば、森の奥からだろう。

12Vのバッテリーと電線も購入して、センサーへ繋ぐ。そして、センサーの出力には、12Vのライトとブザーを繋いだ。

試しに、センサーへ近づくと——ライトが点灯して、ブザーが鳴る——成功だ。

これで、生物等の接近には備えられるだろう。後でスイッチを付けたり等の加工が必要だろうが、このままでも使える。

さて、寝るか——肉体労働したせいか、滅茶疲れたわ。風呂に入りたいが……朝、市場へ行く途中で、川で身体を洗おう。

あ、パワーショベルを出しっぱなしだわ……まあ、良いか。

————◆◆————

——次の朝。森の中で目が覚める。警報のブザーは鳴らなかった。で、生き物はやって来なかったようだ。

アイテムBOXからパンを取り出すと、齧りながらパワーショベルをアイテムBOXへ収納してみることにした。

「こんなデカイのでも入るんだろうな。まあ、デカイ丸太が入ったんだから……」

そんな心配もよそに、パワーショベルはアイテムBOXへ吸い込まれた。表示は【バックホーパワーショベル（中型）】×1になっている。

アイテムBOXから、マウンテンバイクを取り出し、自分の作った道を初めて走ってみる。

中々快適だ。舗装路みたいに速くは走れないが、こんなもんで十分だろ。

だが、待てよ。マウンテンバイクを止め、シャングリ・ラでアスファルトを検索してみると――売っている。

確かに、アスファルトが売ってはいるが、10kg1600円と中々高価だ。これで、この道全部を舗装なんてできっこない。こりゃ無理だな。

森の中から10分程で、川までやって来た。やはり、歩くより断然速い。マウンテンバイクをアイテムBOXに入れて、川で身体を洗おう。

洗おうといっても、獣人達のように素裸で、飛び込むわけではない。水を少々取って、身体を拭くだけだ。

「あゝ、風呂入りてえ」

そうだ、風呂に入ろう。ドラム缶の五右衛門風呂が2万円で売ってたじゃないか。

ポリタンクに川の水を入れて、アイテムBOXに突っ込んで運べば、森の中で風呂に入れるぞ。

それとも――ここでドラム缶に水をいれて、そのままアイテムBOXへ収納出来るなら、もっと簡単だ。

よし！今日は風呂だな。

道が完成して、森の中に拠点が出来たので、もう宿屋には泊まらなくても良いな。

宿屋に挨拶しに行こう。

――――――◇◇――――――

「おはようさん」

「あ、ケンイチどこへ行ってたの？」

アザレアが出迎えてくれた。

「住む所を作ってた。ここには世話になったんで、挨拶しておこう
と思ってな」

「住むって、どこに住むの？」

「森の中だよ」

「ええ？」

アザレアが驚くのも無理もない、この街の人間でも、森の中へ住
んでいる変わり者なんて、誰もいないらしいからな。

1日中作業しても、実際に人影を見たこと無い。

それに、彼女に聞くと、森の中に住むな——みたいな禁忌がある
らしい。

禁忌と言っても、住んでも罰則があるわけでも無く、昔から続く
暗黙の了解みたいなもののようなのだ。

「短い間だったけど、ありがとな」

「本気なの？」

「本気も本気。ハハハ」

彼女は呆れ返っているが、まあ仕方ない。

「でも、前払いで貰っている宿賃は返せないんだけど……」

「ああ、解ってる。ただ、挨拶に來ただけだから」

宿屋の主人にも挨拶を済ませ、市場へ向かう——と、その前に、
道具屋へ行ってみないとな。

俺は、市場を通り過ぎて、爺さんがやっている道具屋へやって来
た。

店は相変わらず、薄暗い。魔法を使えるようだったから、魔法で明るくすれば良いのに——と思うのだが。

「本当に、暗いなあ」

「余計な世話じゃ」

「うおっ！　なんだよ、爺さん驚かすなよ」

本当に、暗闇の中から爺さんが出てきたような気がする。本当にいるのかどうか、解らなかった。何か——そう、隠蔽のような魔法を使っているのかな？

「今日は、何の用じゃ。また、妙な物でも持ってきたのか？」

「爺さん、客に向かってそりゃないぜ。ここに、虫除けの魔石って奴、置いてる？」

「あるぞ。これじゃ」

爺さんは店に置いてある、沢山の箱が並ぶ薬箆笥のような家具から、青い楕円形の石を取り出した。

「銀貨2枚（10万円）って聞いたが」

アイテムBOXから、銀貨を取り出すと、爺さんの目が光った。

「それが噂のアイテムBOXか」

どうやら、市場でアイテムBOXを使っている奴がいると、噂になっっているようだ。

まあ、かなり珍しい能力みたいだから、噂になるのもしょうがない。

「そうだけど……」

「その中に、何か珍しい物が入ってはいないのか？」

「珍しい物？　それが入っていたら？」

「魔石を少々値引きしてやろう」

「本当か？」

本当らしいが——まさかオーバーテクノロジーアイテムを出すわけにはいかないな。

アイテムBOXの中身が表示されているウィンドウをチェックしてみる。

このアイテムBOXの便利な機能——例えば空箱を入れると、他の小アイテムをドラッグアンドドロップで、その中に入れる事が出来るのだ。

だが、小さい箱に大きな物をいれようとする、【容量が不足しています】の表示が出る。

その機能を使って、野菜の詰め合わせを買った時に一緒に入っていた、みかんを1個取り出してみた。

「そりゃ、なんじゃ」

「外国の果物だよ」

みかんの皮を剥いて、食べるように促^{うなが}してみる。

「ふむ、こりゃ珍しい——そして、甘酸っぱくて美味い。だが、これだけではな……」

それじゃ次は、こいつも食わせてみるか——アザレアにも好評だったしな。

俺は、皿と牛乳を出して、グラノーラを爺さんに食わせてみる事にした。

「でも、爺さんじゃ、歯が悪くて食えないかな？」

「馬鹿にするなよ」

言うだけあって、牛乳が掛かったグラノーラをパリパリと美味しそうに食べている。

「こりゃ、甘くて美味い！ 食った事が無い食い物じゃ！ これを、

もう少しくれば、魔石の代金から小四角銀貨2枚（1万円）を、
まけてやろう」

「よっしゃ、商談成立だな」

空の小壺を爺さんに用意させると、その中にグラノーラを満たしてやった。

やった、虫除けの魔石ゲットだぜ。

その後爺さんは、俺から貰ったグラノーラをヒントにして、旅行用の保存食を作って売りに出した。

乾燥させた芋やドライフルーツを練り込んで焼いた、塩味の煎餅みたいな物だ。

それをパリパリと割って、皿やカップに入れて、水やミルクを掛けて食うらしい。そして、お湯を入れれば、スープにもなる。

俺の紹介で、マロウ商会にも卸し、結構売れていると言う——爺さん、中々やるな。

————◆◆——

今日の露店の売上は2万円弱だったな。

洗濯バサミも、マロウ商会系列の店でも売り始めたので、そんなに数は出なくなった。

そりゃ、マロウ商会から売りだせば、同じ商品でもブランド物だからな。

夕方近くになり店を畳むと——俺は、風呂計画を実行に移す事にした。

14話 森で風呂に入ろう

風呂に入りたい。熱い風呂だ。井戸や川で身体を洗っていたが、やはり日本人なら熱い風呂だ。

しかし、この世界で熱い風呂に入れるのは貴族様だけらしい。なんという格差社会。

だが、俺にはシャングリ・ラがある。ここにドラム缶で作られた五右衛門風呂が2万円で売っているのだ。

俺は、森の中で風呂に浸かって、異世界での疲れを癒やす計画を実行に移した。

獣人達と宴会をやった河原へやって来ると、画面を開く。

金はまだあるので、とりあえずは水だ。ドラム缶は確か200Lぐらい入るからな。灯油を入れたりするポリタンクは18L入るはず。

シャングリ・ラで見ると――白い水用のタンクってのが売ってるな。20Lで1500円だ。こいつを10個買う事にした。

水用と、灯油や油用のは一緒には出来ないから、別途購入する必要があるな。

灯油用は赤や青の色が付いている、ホームセンター等でよく見かける物だ。家の灯油ストープにも給油するのに使っていた。

【購入】 ボタンを押すと、ガラングランとデカイ音を立てて、ポリタンクが河原の石の上に転がる。

こいつの蓋を開け川へ沈めて水を入れる。これならポンプは要らないからな。満杯になったらアイテムBOXへ入れて――これを10回繰り返し返せば良い。

こんな物をまともに持って歩いたら大変だが、アイテムBOXのおかげで手ぶらで森まで帰れる。

全くアイテムBOX様様だ。

俺の切り開いた森までの道をマウンテンバイクで走る。森のほうが少々高台になっているらしく、帰りは昇りだ。

まあ、変速ギアが付いているので、ギアを落とせば良い。朝は10分ぐらいで出勤だったが、帰りは15分ぐらいだな。

それでも、歩きよりは断然速いし楽ちんだ。

森へ入ってくると、すでに少々暗い。夕方になると殆ど森には光が入ってこなくなるので、手元が明るいうちに火を焚く事にした。さて、シャングリ・ラからドラム缶風呂を買ってみるか……。

「ポチツとな」

ドスンという音と共にドラム缶が降ってきた。色は青く塗ってあり、一番下には真鍮製の水抜きバルブが付いている。

あゝなるほどな。水を入れる事ばかり考えていたが、抜くのは考えてなかったな。

そして、木製の丸いスノコが付いていた。これを湯船に浮かべて、入るわけだな。そうしないと、ドラム缶の底は熱いので火傷をしてしまう。

つぎに、釜床を作らないといけない。地面に置いたままじゃ火が焚けないから、どうしても必要だ。

コンクリブロックを購入し、地面に並べてその上にドラム缶風呂を載せるのだが……これが重い！

角を立てて、転がすようにしながら苦勞してブロックの上に載せる。

「ふうう……後は水か」

風呂に入る前に汗だくになっちまうぜ。

高い所から水を入れれば簡単だ——と考えて、脚立を出してみる。その上にアイテムBOXから取り出した、水の入ったポリタンクを直接載せれば簡単じゃん——と、思ったのだが……これが上手くない。

脚立の上がもっと広ければ良いのだが……出現位置の微妙なコントロールが出来ないのだ。

アイテムBOXから直接出すのは諦めると、とりあえずポリタンク1個を持ち上げて脚立の上に登ってみたのだが——重い！

そりゃ、水が20Lで重量は20Kgだ——当たり前だのクラッカー。水をドラム缶に入れつつ考える。

こりゃ、風呂に入る前に疲れ果ててしまう。何か良い物は——再びシヤングリ・ラを検索する。

電動の灯油ポンプ等を検索してみたのだが、良さげな物が中々無い。ホースが短すぎるのだ。

ホースの長い、ロータリー式の物はドラム缶用だ。ドラム缶からポリタンク等へ灯油を移す時に使う物であって、その逆に使う物ではない。

それに、ロータリー式を使ったことがあるのだが、結構時間が掛かる。

だが、良い物を見つけた。100Vの電動ポンプだ。四角い赤いボディで外国製らしい。値段は1万円。

ホースと、それを繋ぐアタッチメントと一緒にポチッと購入すると、赤い電動ポンプが落ちてきた。

ポンプにホースを繋ぐと、アイテムBOXからディーゼル発電機を取り出す。まさか、こいつの出番が再び来るとは思わなかったな。コンセント差し込むと、発電機を起動させる。

「スイッチON！」

モーターの唸りを上げて、ポリタンクからドラム缶へ水が送り出される。こりゃ早い！ 30秒程で入れ終わってしまった。

ポリタンクは10個持ってきたが、全部入れたらドラム缶になみなみになってしまう。8個を入れて、2つは温度調整用に使う。既に2つ入れたので残りは6個だが、これなら3分で入れ終わる計算だ。よっしゃ！ これならすぐに終わる。

あつという間に入れ終わって、ポンプと発電機をアイテムBOXへ収納。

後は、火を焚いてお湯を沸かすだけだ。

しかし、これでも少々失敗をした。釜口が狭すぎるのだ。もう少し高くしないとイケなかったようだ。

だが、失敗は成功の元。風呂に入って水を捨てた後、ブロックをもう少し積んで高くすれば良い。

今日は、コレでいくしかない。焚口にドンドン薪を突っ込んで燃やす。

そうそう、温度計も設置しなければならない。ドラム缶の縁に棒を渡し、1000円で買ったデジタル温度計を括りつけた。

この温度計は料理用らしいが……。まあ、使えればOKだろう。たまに板でかき混ぜながら1時間程でお湯が沸いた。結構、時間が掛かるものだ。

釜床をもっと広くして火力を上げられれば、もうすこし風呂焚きの時間が短縮出来るだろう。

風呂を沸かしている間に、カップラーメンとパックのご飯を食う。このパックのご飯は便利だな。

街の市場を探したけど米は売ってなかったし、いつでも米の飯が食えるってのは日本人ならありがたい。

でも、せっかく焚き火をしたりしてるんだ、飯盒炊爨はんごうすいさんってのも面

白そうだ。

そして、お湯が沸く間にシャングリ・ラを検索して良いアイテムを見つけた。ポリタンクの蓋部分に取り付けるバルブである。

これをポリタンクに取り付けて横倒しにすれば、水道の蛇口のように使える。これで水をお風呂に入れて温度調節すれば良い。

脚立の上に、温度調節用のポリタンクを設置。徐々に風呂らしくなってきたぜ。

もう1つ小さな脚立を買って風呂へ入るための足場にしてみた。だが、実際に見てみると――これって入るの難しくね？

イメージでは――鉄棒を横に渡して懸垂みたいにして入った方が良さそうな……。

シャングリ・ラで、単管パイプを一本購入。ドラム缶の縁に渡してみた。コレを足場にする作戦だ。

「さて、いよいよ入ってみるかあゝ」

すでに真っ暗な森の中でスッポンポンになる。フリンで脚立に昇ると、ドラム缶の縁に置いた単管パイプに掴まって、ゆっくりとスノコを踏み、お湯に浸かる。

「ふいふいふい」

思わずおっさんみたいな声が出るが、おっさんだから仕方ない。しかし、良いお湯だ。この異世界へ来て初めての風呂。

しかも、森の中ときた。これぞ、スローライフの極地。真似しようにたって中々真似出来っこ無い。いや、たまらん。

いっぺん外に出て身体を洗う――だが気が付いた。汚水の処理をどうしようか？

ここで生活するとなると、汚水の処理と便所の処理をしなければならぬ。

元世界でも下水も無い所では、地下浸透といって垂れ流しになっているが……あれって臭いんだよな。タダのドブだし。

便所は堆肥を作れば良いか——草も沢山あるしな。下から出た物と刈った草を切り刻んで、土と混ぜれば良い。

ここら辺一帯を耕して畑も作りたいからな。昼の間は光も入ってくるし、簡単な野菜ぐらいなら作れるだろう。

後は下水か……だが、いい方法を思いついた。

ステータス画面のゴミ箱へ捨てれば良いのだ。試しに、さっき食べたカップ麺の空にお湯を入れて、ゴミ箱へ入れてみると……。

表示は【発泡スチロールカップ】【お湯】 になっている。そして——ゴミ箱を空にするボタンを押せば……。

「はい、空になった」

よし、これで汚水の処理は目処がついた——要はゴミ箱へ捨てりゃ良いって事だ。お湯に浸かり、下水の具体的な処理方法を考える。コンクリートで沈殿槽を作って上澄みはゴミ箱へ、溜まったヘドロは堆肥にすりゃいい。

シャングリ・ラにはセメントも売ってるし、コンクリートやDIYに関する書籍もいっぱい売っている。なんとかなるだろう。

穴掘りにもユ○ボがある。

まあ、そんな本格的な事をしなくても、デカイプラ製のプールにでも溜めても良いしな。

綺麗な環境を維持するには、手間暇と金が掛かる。昔は、便所は汲み取りで肥溜めも沢山あったし、下水は垂れ流し。

街のアチコちにドブ川があって異臭を放っていた。洪水でも起きたらもう大変。

ドブ川や便所へ水が流れこむと、全部逆流して街へ広がるのだ。街中が異臭で覆い尽くされるといふ悲惨な状況になった。

だが、それを考えると――ダリアの街は綺麗なんだよな。異臭もしないし。

そういえば、あの街の下水はどうなってるんだろうか？ 今度、街へ行ったら聞いてみるとするか。

だが、いい感じに道が見えてきたぞ。

異世界でもスローライフが出来そうな予感がしてきた。

――――――◇◇――――

――翌日。今日は1日、店を休んでパワーショベルを使って整地しようか。

「よし！ ユ○ボ召喚！」

アイテムBOXから重機を取り出す。こんなデカイ物が入っているんだが、いったい中はどうなっているのか？

考えたって解らんけどな。

早速乗り込んで、エンジン始動！ パワーショベルには車のように足下にはアクセルは無い。

座席の右側にスロットルレバーが付いているので、こいつでコントロールをする。

エンジンを速く回すと、アームの動きも速くなるわけだ。アームの操作は目の前にある2本のレバーで行う。

そして、中央にもレバーが付いているが、これは移動用だ。前に倒すと前進、後ろに倒すと後進、右に捻^{ひね}ると右に方向転換する。

操作を覚えれば簡単だ。ゲーム機のコントローラーに似ていると思う。

木を切り倒した後に残っていた切り株をチェーンソーで切り刻み、パワーショベルで掘り起こす。

さすがのパワーだ。こんなの1人じゃ絶対に無理。周辺も掘り起こすと木の根っ子が沢山出てくる。

こいつを全部きれいにしないと畑には使えない。地面をドンドン掘り起こして根っこを取り出す。

まあ、出てくるわ出てくるわ、10m×20mぐらいしか掘り起こしてないのに木の根っ子が山のようになった。

これは乾燥させて薪にしよう。だが、半年〜1年程乾燥させないと薪には使えないので、しばらく山積みだ。

いやあ——重機の運転は楽しい。もう、そこら辺を掘り起こした気分だわ。童心に返るってのはこの事だな。

小屋を作る場所を入念に均す。なるべく平坦にしないと。しかし、基礎はどうしようか？

この手の小屋の定番はベタ基礎だが……まあ、簡単な束石つかいしを置く感じで良いだろう。

大体、小屋を買ってみたいな事には、どのぐらいの大きさかも解らないしな。

しかし、小屋を購入して、どうやって基礎に載せようか。シャングリ・ラを検索すると油圧ジャッキも売っている。

こいつを小屋の下に潜り込ませて、徐々に上げるしかないか？
うーん、とりあえず実物を見てみない事には解らんな。

だが、パワーショベルという大物を買ってしまったので、少々残高が少なくなった。

また、マロウ商会に何か卸して資金を調達しよう。何が良いかな？ 砂糖が貴重品みたいだったから、砂糖にしようか。

これも異世界物なら定番品だろう。白砂糖を購入して、同時に買った白い壺に入れる。

この白い壺は——実は骨壺だ。ちょうど良い大きな物を探したら、

コレしか無かった。

まあ、骨壺といっても中古じゃないのだから何も問題は無い。

後は――銀のネックレスやアクセサリー、カメオが1個、ためしに金メッキのアクセサリーも持っていてみるか。どういう反応を示すだろうか？

シャングリ・ラには金のアクセサリーもある。18金物だが、さすがに高い。ネックレスだと20万円以上だな。

だが、換金の効率が悪いんだよな。シャングリ・ラでは銀が安いので、こちらで高く売れば凄く換金率が良い。

やはり、売るとしたら銀製品だろう。

その日の晩飯は、卵が余っていたので他人丼にした。

そういえば、自分の家でも他人丼はよく食べるのに、親子丼を食った記憶があまりないな……。

唐揚げならよく食べるのに……。

そうだ、唐揚げも食いたいよな。材料は買えば良いし今度作ってみるとするか。

――――――◇◇――――

――次の日、俺は品物をアイテムBOXに入れてマロウ商会を訪れた。

主のマロウさんと娘プリムラさんが出迎えてくれた。

「お待ちしておりました。ケンイチさんの品物を心待ちにしているお客様が沢山いらっしゃるのですよ」

「もう少し、手に入れば良いのですが、貴重な物ばかりで中々手に入りませんで――申し訳ございません」

「いえいえ、あれだけの物をととなると、そうは簡単には手に入らないでしょうから、それも仕方ありません」

そのまま客間に通されて、俺のアイテムBOXから取り出された品物が、テーブルの上に並べられた。

「まあ、これなんて素敵ですわ。お父様あゝ」

プリムラさんが取ったのは、金メッキにカットガラスで飾られたブレスレット。中々、デザインが洒落ている。

「しょうがない娘だ。お前が取ってしまったては、お客様に回らなくなってしまうではないか」

——と、言いつつ娘のおねだりには、かなり弱いマロウさんだ。

「プリムラさん。それは金色ですがメッキでして」

「メッキですか？　メッキと言うと——水銀を使って金を貼るという……」

「その通りです。よくご存知で」
本当は電気メッキで違うがな。

「そんな手間の掛かることを何故？」

「まあ、作った職人が変わり者なのですよ」
もちろん
勿論、大嘘だ。

俺はアイテムBOXから蓋のついた白い壺を取り出して、低いテーブルの上に置いた。

「今日は変わった物を持ってきました」

「これは……」

プリムラさんが、壺の蓋を取って中身の白い粉を眺めている。

「これは、砂糖で御座いますよ」

「え？　これがですか？　こんな白い砂糖なんて」

この世界の砂糖は、殆どが精製されていない黒砂糖だ。

「職人が秘伝の製法を使って、手塩にかけて精製した物で御座います」

砂糖なのに手塩にかけるとはこれいかに。

マロウさんとプリムラさんは、指で砂糖を舐めて味見をしている。

「ほう！　これは確かに砂糖だ。しかも、なんのエグミも無い……」

「手間を掛けてアクを全部抜いてあるのですよ」

「いや、これは素晴らしい」

——そう言いながらも2人の顔は冴えない。

「何か問題でも？」

「ケンイチさんは外からやって来た人なのですよね？」

プリムラさんが念を押すように言う。

「その通りですが……」

「この国の塩と砂糖は国の専売なのですよ」

「え？」

マロウさんの言葉に俺は合点がいった。確かに塩と砂糖は貴重品だ。元世界でも塩が専売だった事がある。

「しかし、この砂糖は素晴らしい。当家が個人的に購入いたしましたし
よう」

マロウさんが示した卸値は——砂糖1壺金貨1枚（20万円）だ。
やはり結構高い。それと入れ物に使った白い壺——骨壺も銀貨1枚
（5万円）で引き取ってもらえた。

砂糖なんてシャングリ・ラで買えば、1kg200円ぐらいだからな。こいつは換金率が非常に良いと思ったんだが……。
専売か……仕方ない。

砂糖と塩がダメなのは解ったが、金持ち連中に評判が良いのが、カメオだ。

「これをもっと欲しがっている方も多いのですが……」

「これは製作に手間が掛かる物でして」

「色の違う瑪瑙石めのうの層を削りだすのですよね？」

「その通りです」

「知り合いの宝石商にも見せたのですが、同様な物を作るとなると――手間が掛かりすぎて売り物にするのは難しいと申しております」

取引も順調に終わり、ゲットした金貨は15枚（300万円）。これで小屋を購入して、テント生活にピリオドを打てる。

屋敷からの帰り際、下水の話をマロウさんに見せる。

「ああ、水石をつかった浄化槽があるのですよ。ご存知ありませんでしたか？」

「ええ、田舎だと流れ流しが多かったもので……」

「確かにそうですね」

一応、街へ住むなら浄化槽を作る決まりがあるそうだ。なるほど

――水を浄化する水石で処理槽を作ってたのか。

それなら街が綺麗なのも頷ける。

ちなみにトイレは汲み取り式で、それを郊外で処理して肥えを作る専門業者がいるようだ。

その日は、お昼ちょっと前から市場に露店を出して、売上は1万

円弱だった。

マロウ商会と取引を始めたので露店を止めても良いのだが、どんな人と人脈が出来るか解らんからな。

実際、マロウ商会との縁も露店を訪れたメイドさんからの繋がりだし。

俺は小屋をゲット出来る事にウキウキして、キャンプ地へ戻った。

—————◆◆———

——さて、購入してみるか。

シャングリ・ラを確認して、ログハウス風の小屋をカートに入れる。値段は170万円、デカイ買い物だ。

「いってみるか——ポチッとな」

俺は購入ボタンを押した。

すると——空からガラガラと降り始める、大量の角材と板。ガラスの窓枠もある。それが地面の上に山積みになった。

「なんじゃこりゃ！」

なんでバラバラなの？

シャングリ・ラのページを改めて確認してみる。

「セルフビルド……セルフビルドオオオオオオ？！」

そう、小屋は組み立てキットだったのだ。

マジかよ……。

15話 小さくあれど一国一城の主

素敵なログハウス風の小屋があったから、買ってみたら組み立てキットだった。

何を言ってるのか解らねえと思うが——いや、道理で安いはずだよ。こんな立派な小屋が170万円って、マジで安いと思ったもん。しかし、どうしようコレ？

確かに、ログハウスを建てようと色々調べてみた事があったけどさあ……。どさあ……。

これ、棟上げとかどうするの？ 俺1人じゃ無理だろ。

「はあ……」

思わずため息をついて、その場にへたり込んだ。だが冷静に考えてみると——そういえば重機があるんだ、梁^{はり}の1本や2本どうって事ねえ。

バケットに吊るして持ち上げれば良い。

なにはともあれ、組み立て説明書を読んでみるか。

「うーん……」

説明書を読んでみた。

なるほど、構造は普通のログハウスと一緒にだ。積み上げた板で壁を作り、それで屋根を支える。だから太い柱は無い。

壁の板も本格的なログハウスのような丸太ではなくて普通の板だ。普通の家は外壁があって部屋の中には内壁があるが、これは板1枚で外だ。

要は、デカイ板を立てて壁が作れないから、細い板を並べて大き

い板を作っていく。

梁^{はり}も他の構造も板の集合体で、太い材料は一切使っていない。これなら、なんとか1人で組み立てが出来るかもしれない。

「ここまで来たんだ、やるしかないだろう。もう買っちゃったし……」

もう一度、説明書を読むと作業に取り掛かった。
まずは材料を確認する。

「あゝ！ 窓ガラス割れてるじゃん！」
一緒に降ってきた窓枠に、当然ガラスが嵌^{はま}っているのだが、その一枚が割れている。

だが幸い、割れたのは3つの窓枠の内の一つだ。田の字になっている窓ガラスの右下が割れている。

なんだよくこそ。責任者出てこい！ 当然、誰も出てこないし、これだけ返品もきかない。

大体、サイトに返品項目が見当たらないのだ。異世界までサービスして送ってやっているんだから、そのぐらいは何とかしろと言うことか。

サービスが良いんだか、悪いんだか解らねえな。

やむを得ず修理することにしたのだが、窓用の薄い板ガラス単体つてのがシャングリ・ラで見つからない。

板ガラスはあるのだが、棚等に使う分厚い強化ガラスが多いようだ。

「うゝん」

板ガラスは無いが、アクリル板ならあるな——この際アクリル板でいいか。1000円でアクリル板を買って、窓枠に合わせてカッターで切る。

ガラスはゴム枠を使って嵌めこまれているタイプだ。ちなみに俺が田舎で住んでいたボロ屋は昔ながらの木枠留め。

1cmぐらいの小さな釘を使って木枠を固定する。今どきあんなのは売ってない。

確かガラス釘とか言ってたような——そのガラス釘をシャングリ・ラで検索しても出てこないが、今どき需要が無いのだろう。

実家にはガラス釘を打つ専用の小さなトンカチまであったし、よくガラスが割れたりしたのでガラス切りもあったな。

ガラス切りの先端はダイヤモンドなんだぜ——オヤジのウンチク話に、目を光らせたガキの頃を思い出す。

そういえば、ガラスにヒビがはいってテープを貼っている家も見かけなくなった。

いや、そんな郷愁に浸っている場合ではない。

窓の修理が終わったので、地面にコンクリ製の束石つかいしを並べて、その上に小屋の底辺になる材木を四角に並べる——この上に壁が乗るわけだ。

束石は1辺に10個。底辺の材木との間に隙間が無いように高さを調節しなければならない。

シャングリ・ラで水平器も買って、水平出しもきちんとする。

そして、板を積んでいく。材料には、切れ込みが入っており、そこを組み合わせるようにして、上へ上へとドンドン積んでいく。

高い所へ載せるのが少々苦勞したが——先ずは脚立を3つ並べる。

その上に、パワーショベルを使って複数枚を束ねた板を持ち上げ——一旦載せる。

それから、壁を作る作業を続けた。

壁板は載せるだけなので釘は必要ない。だが隙間が空いている場所があるので、コーキング剤等は必要になるだろう。

板には小さく番号が振っており、組み立て説明書の通りに組み立てていけば、間違える事はない。

——市場に露店を出しつつ、この作業で1週間が過ぎた。

次は床だ——。

板を縦にして格子状に組んだ物を床に入れていく。ここら辺から徐々に問題が出始めた。材料の微調整が必要なのだ。

例えば、少々長くて入らなかったりするものがある。これ进行处理するために、切断機と丸のこを購入。

当然、工具を動かすために電気が必要なので、ディーゼル発電機を出しっぱなしにしている。こいつが、こんなに活躍するとは思わなかったな。

床に格子が嵌^{はま}ったら、その上に合板を載せていく。そして、さらにその上に格子を組んで、格子の間に断熱材を入れる。

その上に、床板を張れば、床の完成だ。

壁は単構造だが、床はこのように二重構造になっている。実際、こんな感じにしないと、床からの冷気が結構上がってくるからだと思われる。

この世界は、それほど寒くはならないようなので、これでも大丈夫だろう。

この作業中、途中で釘を打つのが面倒になったので、ネイルガンを購入した。ネイルガンは3000円ぐらいで、釘は2000本入って1000円だ——安い。

しかし、ネイルガンを使うにはエアが必要だ。ネイルガンには、それに対応した高圧コンプレッサが必要なので10万円で購入。

だが、せっかく買ったが——ネイルガンぐらいにしか使い道が思い浮かばない。

まあ、アイテムBOXへ入れておけば、困ることは無いからな。
これだけ工具を買ったら普通は小屋の中が一杯になってしまいうの
だが、アイテムBOXのおかげで困ることは無い。

——床の仕上げまでやって、さらに1週間程経過。

今度は屋根だ——。

板を組み合わせた棟木^{むなぎ}を屋根の中心——屋根の一番高い所へ横に
固定。そこから、板を縦にした垂木^{たるぎ}をスタレのように垂らす。

それが完成したら、その上に合板を貼っていく。そして板が張り
終わったら黒い防水シートを被せて止める。

シート貼りにはタッカーというホチキスのデカイ奴を使う。手で
ハンドルを握ると、ホチキスのような針がダンダンと打ち込まれる
のだ。

値段は1500円ぐらいで安いが——これをニギニギしていたら、
あっという間に手が疲れてしまつて放り投げた。

こんな事をやってられるか——と、タッカーで検索すると、バッ
テリータッカーとかいう素晴らしいアイテムが売ってるじゃないか。
これを6000円で購入。

「めっちゃ、楽！」

引き金のボタンを押すだけで、ドンドン針が打ち込める。こりや
はかど
捗るわあ。

しかし、せっかく買ったが、この作業が終わったら他に使い道が
無さそうだ。これもアイテムBOXの肥やしになるに違いない。

屋根の最後の仕上げに屋根板を貼る。

板同士が重なるように貼る、鎧張りをしていくが——等間隔に綺
麗に貼るのは中々に難しい……。

一応、絵描きを職業としている身としては、ブサイクなのは我慢

出来ないので、少々頭を捻^{ひね}る。

屋根の両側と上部に、等間隔になるように調整した屋根板を仮止めて横に糸を張ることにした。この糸をガイドに使っていけば、等間隔に綺麗に貼れるだろう。

早速、貼る。ドンドン貼る。ここでも、ネイルガンが大活躍だ。こんなのトンカチを持って叩いていたら、いつ終わるか解らん。

プロの大工なら口から釘を出して、リズミカルに打ち込んでいくのだろうが、そんな真似を素人の俺に出来るはずもない。

大体、釘って真っ直ぐに打つのは難しいんだよ。曲がったりしたら釘抜きを使って抜かないとダメだし。

そんな事をするぐらいなら、ネイルガンの方が便利だ。

屋根板が貼り終わったら、最後に屋根のてっぺんにカバーを取り付けて、完成だ。

このカバーの名称は不明だが、組み立て説明書では、ただの板を三角形に合わせた物。

俺は少々追加加工する事にした。防水シートを貼って、その上にさらに板を貼ったのだ。これで完璧だろう。

こちら辺は日本みたいに長雨が続く事もないようだし、これで問題は起きないはずだ。

都合1ヶ月程掛かったが――素人の俺でも、なんとか家の形を完成させることが出来た。

まあ、素人と言っても田舎でDIYしてたから、工具は殆ど使った事があるし工作事も経験済みだ。

だが、こんなデカイ物を組み立てたのは初めてだ。やっている事は本棚等を組み立てているのと然程変わらないのだが……。

出来上がった家を見ると、もっとデカ物でも自分で建てられそうな気がしてきて、気分が大きくなる。

完成したのは正方形の敷地に建つ、ログハウス調の立派な小屋。
だが小屋というよりは家だ。

敷地は正方形だが、建物の一角が欠けた構造。そして、その部分には玄関が付いており、その前がデッキになっている。

形は完成したが――やることは、まだまだ残っている。デッキには板を貼らないとダメだし、窓枠も取り付けないといけない。

そうだ、デッキには手すりも必要だろう。だがその前に、壁や屋根に塗料を塗る必要があるな。

デッキと玄関は結構高い場所にあるので、そこへ上がるための階段も必要だ。

手抜き of 階段なら簡単にすぐに作れる。シャングリ・ラから、コンクリートブロックを買って積み重ねれば良い。

しかし、見た目に情緒もなくでもないな。暇を見て分厚い板とかで作直そう。

さて、今後の作業の優先順を決めよう――やっぱり先ずは窓枠だな。

部屋の中に入れておいた窓枠を壁に嵌める。場所は3カ所だが、アルミサッシではなくて木枠の窓である。

窓枠には、昔懐かしいねじ込み式の鍵が付いているが、こんな窓に立派な鍵をつけても壊されて終了なのだから、簡素な物で良いだろう。

玄関に扉を付ける。建てたのはログハウス調の小屋だが、窓と扉を付けると、一気に家らしくなった。

別荘地や観光地にコテージとか言って小さな建物が置いてあるが、モロにそんな感じだな。これが170万円なら安い。

もちろん

勿論、こういうのは手間賃が高いのであって、これを大工に頼んだら工賃が500万円ぐらい掛かるに違いない。

実家でトタンで作った小さな小屋を建てたが、その時の工賃200万円とか言っていたからな。

コンクリブロックで作った階段を上り部屋の中に入ると、中は12畳の空きスペース。がらんどうな部屋には当然、何も無い。

台所も無いし、便所も無く、タダの箱だ。だが、シンクを取り付けて台所を作る事も可能だろう。どんな仕様も自分の思い通りだ。

今日から、この中で寝泊まりする事にしよう。その前に殺風景な床を何とかするための、フローリングを貼る。

そのための簡単なフローリング材がシャングリ・ラには売っている。ぱつと見、黒檀にも見える黒い床だが、シール状になっている樹脂製だ。

保護シートを剥がして、シールを貼るように床にペタペタと貼っていけば、あっという間になんちゃってフローリングの完成だ。

そこに安い絨毯を敷いて、その上にベッドを置く。

ベッドは色々迷ったが、【天然スノコベッド】というのを1万6千円で購入してみた。

そして、マットレスが5000円、敷き布団が6000円、そして羽毛布団が1万円だ。

早速、出来たてのベッドへ飛び込む。

「おおーっ、フカフカだぜえ」

寝転がって天井を見る。当然、天井板は無いので梁が剥き出しだ。はり

勿論、天井板を貼れば天井だって作れるし、内壁も貼って壁紙を貼れば、元世界風の住宅にもする事が可能だ。

だが、この方がスローライフっぽいので、このまま行く事にした。

全体がこげ茶色で塗られて、軒先と窓が白い家だ。

家の隣には10m×10mの畑のスペースが造られて、敷地を囲むように柵も作ってみた。杭はシャングリ・ラで買うと高かったので、川沿いにあったアチコチの木を切り倒して自作。

杭や柵板にはシャングリ・ラで購入した防腐剤が塗ってある。

そして柵の周りには黄色とオレンジのマリーゴールド。こいつは虫除けに使える。

一応、虫除けの魔石を買ったが効果範囲が余り広くなく、畑までカバーできそうにないので、この黄色の花を植えてみた。

この世界を遺伝子汚染してしまう可能性があるが、効果が無かったら引っこ抜こう。

風呂は位置の調整のために移動して、釜口を大きくした。そのせいでドラム缶を高い場所に置かねばならなくなってしまい――。

さすがに手では持ち上げられなくなってしまったので、シャングリ・ラで玉掛けの本を買って、少々勉強。

積み上げられたコンクリブロックの上にパワーショベルを使って固定した。

そしてドラム缶風呂の周りに階段付きのプラットフォームを作って、入浴の際の出入りを改善。

周りを板で囲み、上にも簡単に屋根を付けている。誰も見ていないとはいえ、丸見えだと精神衛生上宜しくない。

だが、入浴はすこぶる快適で、たまの風呂日はかどが捗っている。

そのための補助機能として掴まるためのパイプも用意してある。またドラム缶の中に入っているスノコには、プラ製の椅子を固定して、風呂から上がる時は、こいつを踏み台にするようにした。

勿論もちろん、入浴中に座るための椅子としても利用出来る。

部屋の奥にはシンクを付けて台所を作ったが、柵等の収納は作っ

ていない。全部アイテムBOXに収納出来るからだ。

また下水は当初の計画から変更。半分に切ったドラム缶が1万で売っていたので、こいつを2個購入して沈殿槽を作った。

階段状に並べた半切りのドラム缶の上部にヘドロが沈殿し、下部に上澄みが落ちる。

ここに水石をいれて浄化するのだが、どのぐらい綺麗になるものなのか？　とりあえず、やってみない事には解らない事が多い。

もしヘドロが溜まったら敷地の片隅に作られた堆肥スペースへ持っていく処理するというわけだ。

堆肥をたまにかき混ぜるのは大変だが、パワーシヨベルでやれば良い。

その近くにはプラ容器とプラ製の洋式便器を使ったトイレも設置し、周りには小屋を建てて屋根付きの隔離スペースを作っている。

見た目は元世界のトイレとなんらかわりが無い。便器の蓋も閉まるのでハエや虫もシャットアウト出来る。

トイレは狭いに限る——何故か広い所や開放的な場所だと落ち着かなくて、出る物も出なくなってしまう。

やはり排泄中というのは無防備であり、隠れて事を済ませたい——という、かつて動物だった時の名残なのであるのか？

勿論、この溜まった糞尿も堆肥にしてリサイクル。そして、その堆肥で作物を育てる。

これぞ、スローライフ。

だが、この便所を夜に使うのは、ちょっと怖そうだな。

懸案だった電気だが森の木を3本追加伐採してスペースを確保。

そこに1枚1万円の太陽電池を20枚並べた。

一枚の発電量は50Wらしいので、20枚で1kWの出力だ。それにバッテリーを購入。

バッテリーは車などの物ではなく、充電機能が付いたモバイルバッテリーを購入した。値段は一台4万5千円だ。

これなら充放電コントロールを使わなくても、直接太陽電池に繋いで充電する事が出来る。こいつを3台買って交代で使うことにした。

そして、このバッテリーで足りない分はガソリン発電機で補う。実際に使ってみても、電気が必要なのは部屋の灯り程度。電球にLEDを使えば消費電力も少なく、このぐらいでも十分に使える事が解った。

TVなどは、シャングリ・ラを使って動画を見れば良いので欲しいと思わない。

ただ、冷たい飲み物を飲みたい事が多いので、小さなモバイル冷蔵庫を買った。これなら昇圧しなくても12Vに直接繋がられるからだ。

発電量がもう少し欲しければ、さらに木を伐採して太陽電池の数を増やせば良い。

城が完成して、一国一城の主となった俺の異世界スロライフが始まった。

15話 小さくあれど一国一城の主(後書き)

こちらも↓ 異世界で目指せ発明王(笑) 【長期連載中】
<https://ncode.syosetu.com/n5969cw/> h

16話 森の中で彼女を拾う

森の中で暮らし始めて1ヶ月程が経った。

暗い森の中にも慣れたので、少々散策を開始してみる。勿論、迷うわけにはいかないので対策は、ばっちりと練る。

森で迷うのは、延々と同じ景色が続く事で、自分の位置が把握出来なくなるためなのだが――。

その対策は簡単。木の幹にピンク色のペンキのスプレーで印を付けていく。

これだけで、道に迷ってもピンクの印を探して追っていけば、家まで戻る事が出来るって寸法だ。

太い針葉樹の幹に印を残しながら、暗い森の中を散策。シャングリ・ラで買ったデジカメで森の中に咲く花や、珍しい植物の写真を撮りながら彷徨う。

こんな事をして何の意味があるかと言うと、何の意味も無くただの趣味だ。元世界でも同じような事をやっていたので、ただの習慣みたいなもの。

見たことがない美しい花や植物で、アルバムが埋まっていくと楽しいのだ。ゲームのキャラを集めて、コンプリートを目指すような感じによく似ている。

SDカードにセーブしておいて、アイテムBOXに入れておけば保存がきく。

しかし、アイテムBOXに物が沢山入っているが、元世界に戻れるとなったら中の物は一体どうなってしまっただろう？

やっぱり消滅かな？ その前に帰れる感じが全くしないんだが……。

まあ、元世界でも、ど田舎で似たような事をやっていたので、ここでスローライフをやって暮らしても殆ど同じ事なのだが……。

「おお、こいつは綺麗な花だな」

大きな花卉が美しい。白い花をカメラのファインダーの中に入れる。このカメラもシャングリ・ラで購入した中古の一眼レフカメラだ。

値段は3万円で型落ちだが、これで十分。

暗い森の中ではそのまま使えないので、フラッシュ用のデイフユーザーを取り付けている。

カメラを構えながら大きな木の周りを回る。すると、木の根本にあった黒い物が動いた。

突然の出来事に俺は飛び上がり尻餅をつき、放り投げられたカメラが腐葉土の上に転がる。

大木の根本にいたのは黒い獣。黒光りする短い毛が全身を覆っている4脚だ。よく見れば、それはデカイ猫。

猫と言っても家猫のような可愛い大きさではない。

大型犬並みの体長を持ち、細長く伸びる美しい脚とくねる尻尾、そして頭の上にはピンと伸びる長い三角形の耳――豹^{ひょう}、いや山猫か。全身真っ黒かと思ったのだが――よくよく見れば、黒い中にも薄い虎柄が見える。

呼吸をして腹が動いているので、まだ生きているのだが……ぐったりとして動かない。じつくりと見回すと、左後ろ脚の付け根に怪我をしているようで折れた矢が刺さっている。

「ありゃ可哀想に……なんとかしてやりたいが……」

しかし、こんな大型の獣を触って大丈夫なのか？
噛みつかれてもしたら。一発でアウトなんだが。

それでも、ちょっと触ろうとしたら気が付いたらしく、激しく威嚇されてしまった。威嚇の仕方は猫と一緒にだ。

だが最後の気力を振り絞ったの威嚇だったのか——それで体力を使い果たしてしまったようで、その後はぐったりとして動く気配が無い。

噛み付き対策として——シャングリ・ラから座布団を買って、腕に巻き付け紐で固定する。

それから獣の攻撃と言え——狙われるのは首だろう。色々と探索を試みたが、バイク用のネックガードを購入して肩に掛けてみた。

これで首から肩にかけてをガード出来るから、急所へ噛みつくことは出来ないだろう。我ながら良い考えだと自画自賛してみる。

だが、これでもはつきり言って、超怖い。

犬に噛まれた事があるが——獣に噛まれると、まるで刃物を突き立てられたような深い切り傷になる。

そこに太い動脈があったりしたら致命傷になる可能性が高い。

意を決して黒い獣の後ろ脚に突き刺さったままの矢を引き抜く。

突然の激しい痛みに驚いたのだろう。体を起こして噛みつくような素振りを見せたのだが、すぐにそのままぐったりとしてしまった。

もう、体を起こす体力すら無いと思われ、俺のなすがままだ。

弱肉強食の野生の世界では、こんな怪我をしてしまったのでは他の野獣の良い標的になってしまうだろう。

獣の顔を見れば、そんな事を察してか諦めているような顔にも見える。

矢を引き抜いた毛皮の周りを確認してみる。指先には短く滑らか——黒光りするビロードのような手触りが伝わってくる。

傷口の周りの毛は黒く濡れ、触るとかなり熱を持っているのが確認できる。

「こりゃ化膿しているな」

熱もかなり出ているはずだ。ぐったりしているのは、そのせいだろう。

さて、どうすりゃいいのか？

とりあえず、シャングリ・ラから洗浄用の生理食塩水を買う。プラ製のボトルには細長い口が付いており傷口を洗うのにピッタリだ。ジャバジャバと食塩水を注ぎ込んで傷口の中まで洗浄した後、アイテムBOXから消毒用のアルコールとティッシュを取り出して、傷口の周りを消毒する。

黒い毛皮なので黒く濡れているようにしか見えないが、傷口を拭いたティッシュが赤く染まる。

あとは薬か……。

シャングリ・ラには薬も売っていたよな。普段見るのは人間用の薬だ。動物、しかも異世界の生き物に人間用の薬が効くのか？

検索してみると動物用の薬も売っている――だが皮膚病や胃腸薬が多いようで、傷薬等は売っていないな。

動物に薬を飲ませるための、針の無い注射器のような器具も見つけたので、カートに入れてみた。

人間用の薬を、ダメ元で使ってみるしかないか……。

使ってダメなら、これ以上俺にはどうする事も出来ない。

シャングリ・ラで抗生物質を検索する。

何件がヒットしたが、あるのは軟膏だけだ。

「化膿止め、グラム陽性菌などに広い抗菌力……これかな？」

元々は皮膚炎の薬っぽいが、売っている抗生物質は、これしか無い。

チューブに入った軟膏を購入して、傷口と黒い毛皮に擦り込む。俺が薬を塗っている間も黒い大猫はぐったりしたままだ。

鎮痛消炎剤としてロキ○ニンを買い、1錠を砕いて水で溶き、さっき買った注射器のような器具で獣の喉の奥へ流し込む。

これで良いのか？ 効くのか？ 全く不明。

そもそも人間用の薬って動物に飲ませちゃイカンって話があったような気がするが、今はコレしか無い。

とりあえず処置はしたが、ここにこのまま放置しては他の動物の良い餌食になってしまうだろう。

こいつもそれを恐れて、他の獣が少ない森の切れ目の近くまでやってきたに違いない。

しばらく運ぶ手段を思案——生き物はアイテムBOXへ入れられないからな。どうしようか……。

まずは、シャングリ・ラでキャリアを検索。

元世界で、キャタピラ式のキャリアを見たことがあったので、そいつを探してみたのだが売っていなかった。

だが——ワイルドキャリアという、折りたたみ式で4輪の箱型キャリアが9000円で売っている。

荒れ地に対応した幅広の低圧タイヤを履いているので、これなら腐葉土にめり込んだりしないだろう。

こいつを購入する事にした。

「ポチツとな」

キャリアを組み立て中に茶色の毛布を敷き詰めると——ぐったりとして動かなくなった黒い身体を抱えあげる。

「お、重い！」

腰を落として、なんとか担ぎ上げる——こりゃ30kg以上あるだろう。抱え上げてもキャリアの中にそっといれても、俺のなすがままでピクリとも動かない。

もしかして、もうダメなのかなあ……。

このまま、ゆっくりと家まで運ぶ——アイテムBOXの中へ入れる事が出来れば、こんな苦労はしなくても済むのだが。

暗い森の中を4輪のカートをゆつくりと引きながら——俺は樹の幹に付けたばかりのピンク色の印を辿りながら、家を目指した。

——
——
——
◇◇
◇◇
——
——
——

家まで獣を連れてきてしまったが、これからどうしようか。

犬用のケージを検索してみたが、こんな狭い檻の中に入れるのは可哀想だな。

——かと言って、一緒に部屋の中にいて、寝ている間に噛み付かれたら最後だ。

「うーん……」

しばし悩む。だが、こいつを家の中に入れて、俺が外にテントを張って寝りゃ良いんだ。

そうと決まったので準備をする。部屋の隅に青いビニールシート。その上に毛布を敷いて、そこに寝かせる事にした。

抱えた時に確認したのだが、股間にお稲荷さんが無かったので、この黒い身体を持ち主は彼女のようなのだ。

後は——トイレか。シャングリ・ラで猫用のトイレを検索するが小さい物ばかり。こんな大型の猫用なんて売ってない。

暫くあれこれ検索した後——青いプラ製の四角いタライを買って、猫トイレ代わりにすることにした。購入後、落ちてきたタライの中

と一緒に買った猫砂をタップリと入れる。

これをトイレとして使ってくれるかは不明だがな。その彼女は毛布の上で、ぐったりとして動かない。

そして小さな皿に水と猫缶を1つ開けた。こいつがグルメだったら困るので高い奴にしてみたが、いかななものか。

だが目の前の食べ物にも反応せずに、じっと目を閉じたままだ。せめて飯が食えるようになってくれれば、体力も戻ると思うのだが……果たして。

家の前にテントを張って、俺はキャンプの準備に入った。せっかく家を作ったのに外でキャンプとは少々間抜けだが、致し方無い。彼女が助かるかどうか数日で結果が出るだろう。少々可哀想だが、こんな世界に獣医なんていないだろうしなあ。

もしかしたら治癒魔法みたいなものがあるかもしれないが……。

——次の日の朝。

外のテントで目を覚まし部屋を覗いてみるも——彼女に全く変化無し。水も猫缶にも口を付けた跡は無い。一応、水と猫缶は新しいのに交換してみた。

ここで、じっと見ても仕方ないので、市場で商売するがてら動物の治療について聞き込みをしてみることにした。

その手の情報に詳しそうなのは道具屋の爺さんだろう。この街にも詳しいし、人脈もありそうだ。

そんなわけで爺さんの道具屋を訪れた。
相変わらず暗い店内で爺さんの姿を探す。

「……ちわゝ」

「何じゃな？」

「うわ！」

何も無かったような暗闇から突然出てきた、ローブを被った爺さんに驚く。前もこんな感じだったが……。

「爺さん、それって魔法なのか？」

「……ほほ、想像に任せる。それで、なんの用じゃな？　また変な物でも持ち込むのか？」

爺さんが、ニヤニヤと白い髭を撫でている。

「この街に動物の医者っていないのか？」

「……これはまた奇々怪々な事を尋ねてくるの」

爺さんの話では、人間の医者すら滅多にいないのに獣医なんて職業すら無いという事だった。

「それじゃ治癒魔法とかは？」

「まさか畜生に治癒魔法を使おうと言うのではないじゃろうな？」

「ダメなのか？」

「ダメとは言わんが……うゝむ」

爺さんは複雑な表情をしているが、そんな酔狂な事に協力してくれる魔導師がいらないらしい。

「でも王侯貴族が持っている名馬とかが怪我をしたら、治療したりするんじゃないのか？」

「それでも、そういう話は聞かんの」

そういう場合になっても特に治療らしき治療は行われず、成り行き任せ——自然任せらしい。

まあ馬は脚を怪我したら、身体を支えられなくなって死ぬしかないのだから……。

どうも、この世界は動物⇨獲物か消耗品扱いのようだな。

大体、外科手術等が存在していないようだし薬も薬草の類だけ。

ゲームのように薬草を食べたら傷も治って体力全回復！——というわけにはいかないようだ。大怪我をしたら、そこで終了だな……こりゃ。

「お前さん、何を助きたいんじゃない？」

「森で拾ったデカイ猫だ」

「黒いのじゃろ？」

爺さんは獣の正体にすぐに思い当たったのか、白髪の眉毛を片方上げて俺を見た。

「そうだ」

「そりゃ森猫じゃな。森猫の毛皮は高く売れるぞ？ 超高級品じゃ確かに、あのビロードの様な手触りは高そうだが……だから狙われたのか。普通は仕留めて皮を剥ぐ獲物なのだ。それを助けようとしている俺の行動が、爺さんには理解出来ないらしい。

価値観、倫理観が違うのに、話し込んでもしょうが無い——諦める事にして道具屋を後にした。

それに傷口の洗浄をして化膿止めも塗っている。あれで大丈夫のはずだ——と、市場の露店でスツールに座りながら自分に言い聞かせる。

それでも何か薬は無いかと、シャングリ・ラの中を隅々まで検索を掛けて眺める。

商品が並ぶ画面を見ながら、黒い毛並みの彼女の事を悶々と考えていると突然話し掛けられた。

「旦那、何を考え込んでいるんだい？」
隣の店のアマナだ。

「いや、ちよつとな」

「男が考えこむってのは、金か女の事だろ？」

女は女かもしれないが……アマナに森猫の事を話してみる。

「はは……こりゃ、また随分と酔狂だねえ。変わっている御仁だと思つてたけど本当に変わり者だよ」

「悪かったな」

すっかりと呆れ顔のアマナと話していると、突然、違う女からも話し掛けられた。

「森猫の匂いがするにゃ！」

振り向くと声の主は——その森猫と似たような毛皮を纏まとっている獣人の女、ミヤレーだ。

そんなに匂いがするかな？ そりゃ森猫を抱きかかえたりして服もそのままだが……。

元世界のように毎日風呂に入ったりとか洗濯したりとかは中々出来ない。

ミヤレーに森猫を助けた話をする、彼女を見たいと言う。彼等獣人にとって森猫というのは神様の使い——つまり天使らしい。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

夕方近くになり露店を畳むと、ミヤレーと一緒に俺の家がある森を目指す。

俺が森の中に住んでいるという話を聞いて、彼女も少々驚いているようだ。狩りで森へ入る獣人からみても俺の行動は変らしい。

「それじゃ獣人達は森猫を大事にしているのか？」

「しているにゃ！」

でも普通の人にとっては森猫は高級毛皮の素材でしかないわけだが――矢を射って森猫を仕留めようとしたのは獣人以外って事になる。

「でも犬人は違うにゃ。森猫をやったのは多分奴らニャ！」

同じ獣人でも犬人という狼のような種族は、俺が襲われた黒狼――魔狼という黒い狼を神の使いだと崇めている。

このような思想の違いと宗教的な違いから、ミヤレーのような猫人と犬人の仲は、昔から悪いらしい。

「それじゃ猫人は黒狼を狩るんだろう？」

「当然にゃ」

これに関しては何も言えないなあ。森猫を助けたのも、たまたまだし――もしかして黒狼が1匹だけで死にかけてたら助けてしまったかもしれない。

だが森猫を助けたという事で――ミヤレーの中では俺は猫人の仲間という認識みたいだな。

しかし犬人と会ってしまったら、どうするべきか。俺の不注意が原因とはいえ、森で襲われてしまったので黒狼に対するイメージが宜しくない。

うーん……まあ、その時に考えよう。

川に掛かる橋を渡り、河原に降りて、俺の家へ続く道を歩く。ミヤレーがいるから自転車は使えない。

まあ、使っても良いのだが、変な噂を立てられると拙い^{まず}からな。

「森へ道を作ったにゃ？　すごいにゃ」

俺は草刈機を使ったので簡単だったが、これを全部鎌^{かま}でやったら、さすがに大変だろうと思う。

俺の歩みが遅いというので、彼女に背負ってもらって、家へダッシュで向かう。男程の体軀は無いが、獣人の女も十分すぎる程のパワーの持ち主だ。

酒に酔った男を放り投げるぐらいの力があるんだからな。

俺なんて、人を背負ったら歩くので精一杯で、多分膝がガクガクになると思う。

彼女の背中に掴まり森の中を疾走した後、見えてきた俺の家を見てミャレーが再び驚く。

「森の中に家を作ったにゃ?! ケンイチが作ったのかにゃ?」

「そう、苦勞したんだぜ」

まさか組み立てキットだとは思ってなかったからな。でも逆に、キットだから組み立てられたようなもんだ。

これを1から設計して建てるとなると、俺には少々無理だからな。材料と道具があるし、重機もある――出来ない事は無いと思うが長い時間が掛かると思う。

「この臭いは何にゃ?」

「臭い? なんかするか?」

彼女が気になるのは、柵の外周に植えた虫除けのマリーゴールドの臭いらしい。本当に鼻が良いんだな。

小さな階段を上り、これまた小さいデッキから続く玄関の扉を開けると、ミャレーを俺の家に招き入れた。

「いらっしやい」

17話 獣人と森猫

森の中で、森猫という黒い毛皮を持つ動物を助けた。それは、獣人——猫人が信仰する神の使いだと言う。

獣人の女、ミャレーを俺の家に招きドアを開けた。

「中はそんな広くないけどな」

「凄い綺麗だにゃ〜！」

街には、これよりボロい家が沢山ある。こんな自作の家でも、豪商や貴族の屋敷を除けば、この世界ではかなり上等な部類に入る。部屋の中には相変わず何もない。ベッドと敷物だけだ。家具等を入れなくても、アイテムBOXの中に全部入ってしまうからな。俺が、そのままアイテムBOXの中へ入る事が出来れば、家も要らないんじゃないかと思うんだが。

部屋の隅に敷いた毛布の上には、まだ森猫が、うずくまったままだった。

だが——猫缶が少し食べられている。水も少し飲んだようだ。

「お、少し食べた跡がある。このまま食欲が戻ってくれば良いんだが……」

「脚の付け根を怪我してるにゃ。可哀想だにゃ……」

「折れた矢が刺さっていたんだよ」

「やっぱり彼奴等にゃ」

彼奴等というのは犬人の事らしいが、証拠も無いのに決めつけるのはどうなのか。

傷口を消毒して再び薬を塗る。だが薬が滲しみみるのであろうか、森

猫が首を回して傷口を舐めようとしている。

「ああ舐めちゃダメだ——こういう時に使う動物の首に巻くのがあったよなあ」

シャングリ・ラで検索を掛けてみる。——そう、エリザベスカラ―だ。大型犬用のデカイ奴を購入する——3000円だ。

落ちてきた透明な三角すいを、黒い毛皮の首に巻く。為すがまにされている彼女の顔も憤懣やるかたない表情に見えるのだが、俺の気のせいだろうか。

動けないのを良い事に好き勝手しやがって——みたいな目に見えなくもない。

「だが君のためなんだ解ってくれ」

三文芝居のようなセリフを吐きつつ身体を撫でてやるのだが、エリザベスカラーを見たミヤレーが不思議そうな顔をしている。

「それは何にゃ？」

「傷口を舐めないようにする物だよ。傷口には薬が塗ってあるからな」

「ケンイチは医者なのかにゃ？」

「違うけど傷の手当ぐらいなら出来る——と思う」

森猫が口を付けた猫缶を新しくするために皿を下げようとしたのだが。

「それはどうするにゃ？」

「新しくするから捨てようかと……」

「それなら、うちが食べるにゃ！」

「えー？　ちょっと待て。他に食い物もあるんだぞ？」

そろそろ夕飯の時間だから何か作ろうと思っていたのだが。

「それが美味そうだから、それが良いにゃ」

「これは動物用の食べ物なんだぞ？」

「動物が食べて大丈夫なら、うちが食べても大丈夫にゃ」

「そりゃ、そうだが……」

何が楽しゅうて猫缶を食いたいのだろうか。彼女が言うには美味そうに見え、匂いも良いらしい。それに安売り品じゃなくて結構高い奴だしな。

まあ猫が喜んでまっしぐらだからなあ――獣人がまっしぐらになっても、おかしくはないが。

「明日、鳥を獲ってくるので、それと交換してにゃ」

「いや、どうしても食いたいなら別に良いのだが」

客に猫缶を食わせるのが、どうにも気が引ける。ここは異世界――気にしたら負けなのかもしれないが。

ミャレーの皿を用意して、森猫が食いかけの猫缶をそこへ移した。新しいのを用意すると言っても、これで良いと言う。

猫缶を食ったことがないが塩味が薄いと聞いた事があるので、追加の塩と胡椒をアイテムBOXから出してやった。

試しに醤油も出してやったのだが匂いがダメらしい。

発酵食品だからな、そりゃ独特な匂いがあるのかもしれないが、俺が気にならないのは日本人だからか。

「美味しいにゃ！」

テーブルに座って、猫缶を一口食べた彼女が感嘆の声を上げた。

「そうなのか？」

まあ、人間が食っても平気だって話もあるし、ネットでも猫缶やドッグフードを食うネタはあったと思ったので、大丈夫だとは思っているのだが。

彼女の話では、すこぶる美味いと言う。そうか、そうなのか？

ミャレーの食事を横目で見ながら、森猫にも新しい猫缶を出してやった。

食事が猫缶だけじゃ何なので、スープとパンも出してやる。

「美味いにゃー！ ケンイチの食事は美味いにゃー！」

ミャレーが喜んでるのは良いのだが、俺としてはちょっと複雑な心境だ。

猫缶を美味しそうに頬張る彼女に、獣人達が欲しがった香辛料の事を聞いてみる。

「故郷の料理に沢山使われるにゃ」

なるほど彼らのソウル・フードって奴だ。日本人でいう米の飯や醤油に相当する物なのだろう。

たまに無性に食いたくなるが、ここでは香辛料の値段が故意に釣り上げられて買えない——それ故、困っていたようだ。

本来はもう少し安い物らしい。

美味しい物を食べて森猫の事はどうでも良くなったのかと思えば、そうでもない。やはり心配らしい。

「森猫は良くなりそうにゃ？」

「ここに連れてきた時は全く動かなかったけど、少し元気になったようだし、食事にも口を付けたみたいだ。多分、良くなるのではないだろうか……」

「ケンイチが良い人で良かったにゃ。他の奴だったら絶対にギルドに持ち込んでいたにゃ」

「ギルドに持ち込んでどうするんだ？」

「買い取ってもらって毛皮の素材にするにゃ」

なるほどな。ミャレーの話では、獣を仕留めて冒険者ギルドに持ち込めば解体してくれるのだと言う。

獲物を運ぶためには、内臓を抜いたり水で冷やしたりしないと傷んでしまうのだが、俺のアイテムBOXに入れて運べば腐ることも無い。

「毛皮は売って肉だけ貰うとかも可能なのか？」

「にゃ」

それじゃ冒険者ギルドにも入っていた方が良くかもしれないな。冒険者ギルドは元世界で言う職安らしいので、普通の仕事の斡旋もやっているようだ。

隣の帝国という国では、お仕事紹介ギルドという、まんまハロワみたいな名前らしい。その帝国のギルドでは税金を取られるようだが、この国では無い。

「それじゃ冒険者ギルドに入って、仕事に困ったらそこへ行けば良いのか」

「そうにゃ。子供なんかも薬草を取ったりする仕事をしているにゃ」冒険者ギルドで薬草取りか……RPGの一番最初のお使いイベントみたいだな。

だが、ミャレーの話を聞いてみると、獲物を取ったり、鉱物を探したり、珍しい植物を探したり、そのまんまRPG。

商売の他にも、そういう稼ぎ方もあるって事か。しかし初期登録料は銀貨1枚（5万円）だ。子供には少々高いのでは？

「分割も出来るにゃ」

金のある時に、少しずつローンで払えるらしい。但し、1年間の期限あり。払えないと普請の現場などで、強制労働が待ち受けているらしい。

子供にゃ少々大変だろうとは思いますが、滞納する奴は滅多にいないらしいから大丈夫なのか。

まあ毎日仕事していれば、500円ずつ返しても3ヶ月半もあれ

ば払える金額だしな。

飯を食った後、ガソリンランタンを灯して、ミヤレーと話し込んでしまったが、こいつ泊まっていくつもり満々だぞ？　良いのか？

「だって森猫が心配だにゃ……」

「いや別に俺は良いけどな。ベッドは一つしか無いんだぞ？」

「一緒に寝れば良いにゃ」

あっけらかんと言う彼女だが獣人の女ってのはそうなのか？

「そんな事ないにゃ。森猫を助けてくれるケンイチは絶対に良い人だから良いにゃ」

良い人だから——イマイチ、この世界の貞操観念が解らん……獣人だからかもしれんが……。

まあ、良いか。ミヤレーは中々可愛いしな。

「それじゃ、風呂に入るか？」

「風呂？　風呂って温かい風呂かにゃ？」

「そうだ。お湯の風呂な」

「入るにゃ！」

ぴよんぴよんと跳ねて喜んでいる彼女だが、飛びすぎて天井の梁^{はり}に頭をぶつけそうだ。

そのまま掴まると逆上がりして、梁^{はり}の上に忍者のように飛び乗った。

「なんだ、すごええ！」

動きが映画のCGみたいだぞ。特撮無しで凄い映像が撮れそうだな。そのままの梁^{はり}から彼女が飛び降りてきた。

「凄いな！」

「このぐらい獣人なら子供でも出来るにゃ」

ええ？ 身体能力高すぎだろう。だが獣人ってのは、読み書きも計算も出来ないらしいからな。天は二物を与えなかったか。

ミヤレーが風呂に入ると言うので、家の外に作った風呂場にランタンを持っていく。もう森の中は真っ暗だ。

ドラム缶風呂は入浴のためのプラットフォームを板で作っており、補助用の手すりとかも取り付けてある。

ランタンを風呂の脇に置いて薪を焚く。

「これが風呂にゃ？」

「ミヤレーは温かい風呂に入った事はあるのか？」

「ないにゃ！ お湯の風呂に入れるなんて貴族様ぐらいだにゃ」

「多分、貴族様の風呂は、こんなシヨボイのじゃなくて石造りなんだろうな」

こんなシヨボイドラム缶風呂でも、真似をして作るとなると多大な労力が必要となるだろう。

手作業で薄い鉄板を伸ばして――溶接も無いだろうから、ろう付けかハンダ付けで組み立てねばならない。

こんなドラム缶風呂でもミヤレーは、はしゃぎ回っている。余程、嬉しいらしい。

とりあえずお湯を沸かすが獣人のお湯かげんが解らん。猫舌なんて言うぐらいだから熱いのは苦手かもしれない。

少々、^{ぬる}温めの温度にしてみる。

「ここを倒せば水が出るから、お湯が熱かったら入れてくれ」

「解ったにゃ」

答えた彼女が勢いよく服を脱いで裸になる。獣人は毛皮を着ているので服を脱いでも裸という感じはしない。

だが胸を見ればポッチがあるし、風呂の縁を跨いだ股間にはゴニヨゴニヨがちゃんとある。当たり前だ。

ミャレーが生まれて初めてというドラム缶風呂だが、実に気持ちよさそうに目を細めながら浸かっている。

場所によっては大衆のサウナのような所はあるそうなのだが、獣人は毛が抜けるので入れてもらえないらしい。

それじゃ、お湯の風呂が街にあっても入れないのかもしれないな。

「初めての風呂はどうだ？」

「あったかいにゃ」

目を瞑って極楽気分だろうか？

風呂から出た彼女が身体を洗うために、俺から貰った石鹸を毛皮に擦り込むと、みるみる白いブクブクが立ち泡だらけになる。

「ケンイチは入らないにゃ？」

「そうか俺も入るか」

俺も服を脱いで裸になるも彼女は何の反応もしない。男の裸を見ても、なんとも思わないようだ。

風呂に浸かり、ランタンに照らされたミャレーの身体を眺めるのだが――ランタンに照らしだされて、くっきりと陰影のついたそれは、まるで彫刻のような芸術作品に見える。

泡塗れになって、くねくねと動いている自分の尻尾も捕まえて泡立っているが、全身を毛皮が覆っているので隅々まで洗うのは中々大変そうだな。

風呂から出ると、桶でお湯をミャレーに掛けて泡を流してやる。

洗い場は、セメントでスペースを作って、地面の下に埋めたプラ製の船に排水が溜まるようになっていいる。

セメントなんて扱うのは初めてだが、シャングリ・ラにはその手の建築系の本も沢山あるので、勉強し放題だ。

本当は川の近くに家を建てれば、もっと快適になりそうなんだが

なあ。

「はは、ミャレーの泡を流したら、お湯が無くなってしまったぞ」
「にゃ」

それでも、ミャレーはドラム缶の中にしゃがみこんで、再度お湯に浸かっているのだが、俺はこのまま上がるとするか。

ズボンだけ履いて彼女のためにバスタオルを何枚か用意する。河原で身体を洗った時もそうだったが、全身を覆う毛皮を拭くには、タオルが1枚じゃ足りない。

彼女のためにヘアドライヤーでも用意しようかと考えたのだが――
――良い事を思いついた。

工場や倉庫等で暖房として使われている、ジェットエンジンみたいな灯油ヒーターで温風を送ってみるか。

あれなら普通のドライヤーより強力だろう。

シャングリ・ラの画面を出して検索をすると――スポットヒーターとかジェットヒーターとか言う物らしいな。

あまり大型の物も要らないだろうから、小型の物を購入してみる。
値段は3万6千円だ。

燃料は灯油だが白灯油がまだ残っているので、こいつを使おう。
だが、これは狭い部屋の中では使えないな。

家の外にアイテムBOXからテーブルを出して、その上に乗せて使ってみる事に。手元が暗いので小型の電池式のLEDランタンも購入してみた。

青い光の魔法のランタンという物が、この世界にもあるらしいからLEDでも誤魔化せるだろうと思う。

白灯油を満タンにして、いざ使おうとしたら――100Vの電源が必要なのね、コレ。ついでにモバイルバッテリーを出してコンセントに繋げる。

「スイッチオン！」

カチカチという連続音と共に、ファンが回りゴウゴウという音を立てて風を送り始める。ほうほう、風を送るためのファンが回るので電源が必要なのか。

おお！　こりゃ、凄い。紅い炎が噴き出す見た目は、まさにジェットエンジンの。これなら、ミャレーの毛皮もすぐに乾くだろう。

「ミャレー、こっちへ来て濡れている毛を乾かしな」

「何にゃ、これ？　熱い風が出てるにゃ」

彼女は不思議そうに、ヒーターから出てくる熱風に手をかざしている。

「灯油を燃やして魔法で風を送っているんだよ」

「このランタンは魔法のランタンにゃ？」

青白い光を放つLEDランタンにも気がついたようだ。

「まあな。売り物じゃないんだけど」

「ケンイチは何でも持ってるにゃ」

しかし熱風が出てくるヒーターは気に入ったのだろう、その前に立ち、身体中を撫で回して毛を乾かしている。

まるで、ダンスを踊っているようで中々に艶かしい。

しかし、お尻を向けて乾かしたり、片脚を上げて股間を乾かしたりし始めると、さすがに目のやりどころに困ってしまう……彼女は全く気にしていないのだが。

「おお、なんか凄いフワフワになったんじゃない？」

「にゃ、熱い風で乾かすと、こんな感じになるのにゃ。焚き火で乾かしても、こんな風にはならないにゃ」

彼女の毛に触れてみても、フワフワだ。その手触りは癖になりそ

う。

テーブルやヒーターを片付けて家の中に入る。

「何か飲むか？」

「そんな事よりじゃ……」

ミヤレーが、フワフワの身体で抱きついてきて、尻尾を俺の腕に絡めてくる。

うわあああ——あったけえええ。

あまりの手触りの良さに、思わず流されてしまいそうになるのだが——。

「いや、ちょっと待て待て。神様の使いが苦しい思いをしているのに、俺達はその横で楽しんで良いのか？」

「うにゃ？ うにゃ」

俺にそう言われて、ミヤレーも、はたと考えなおしたようだ。

シャングリ・ラの画面を出して、風呂あがりの飲み物を探す。風呂

あがりと言え、コレだろう——フルーツ牛乳。

「美味いにゃ！」

フルーツ牛乳を初めて飲んで、ミヤレーは感激したようだ。

彼女の話では森猫は人を襲わないようなので、ベッドで寝ることにした。森猫を家で寝かせて俺が外のテントで寝ていた話を話すと、ミヤレーは笑うのだが——。

だって襲われたら怖いじゃん。

その後——1つのベッドで、一緒に就寝。フカフカになった獣人の毛皮は、どんな上等な毛布より温かった。

18話 家庭菜園を作ろう

――朝起きると。ミャレーがいなかった。

俺が起きるのが遅いので、早めに起きて帰ってしまったのか。

森猫を見ると猫缶を半分ぐらい食べている。

「やったな。このまま良くなれよ」

背中を撫で、再び傷口を消毒して薬を塗る。なんだかんだで、この薬も効いているようだ。

アイテムBOXからパンを取り出して頬張る。

「さて、飯の後は草刈りでもするかな」

森の太木を切り倒して太陽発電パネルを設置したのだが、日光が入るようになったので日が当たる所に草が生え始めたのだ。

まだ1ヶ月ほどしか経ってないのに、この草は何処からやって来たのだろうか？

柔らかい雑草ばかりなので草刈機にはチップソーではなくて、ナイロン紐のカッターを使う。これで十分だ。

多分このまま放置すると、森の外の平原のような背の高い草で覆われてしまうのだろう。

草を刈り終わって草刈機をアイテムBOXに収納していると、背中に弓を背負ったミャレーが森の奥からやって来た。

彼女の手には青い羽が光る鳥の首が握られている。大きさは鳩ぐらいか。

「ミャレー、帰ったんじゃないのか？」

「昨日、鳥をあげると言ったにゃ」

「そういえば、そんな話もしたか……」

鳥を獲ってくるから猫缶をくれという話だったな。別にタダでも良いのだが。

「弓なんて何処から持ってきたんだ？」

「朝起きてから家に帰って持ってきたにゃ」

「一旦、家まで帰って、またやって来て森の奥まで行ったのか？」

「にゃ」

どんだけ、スピードとスタミナがあるんだよ。

彼女が鳥を捌くと言うので、やり方を教えてもらう。

「ミャレー、鳥を捌いた事がないから、やり方を教えてくれよ」

「良いにゃ」

ミャレーに鳥の解体の仕方をレクチャーしてもらう。やはり内臓は傷み易いので、早目に抜いた方が良さらしい。

可能なら冷やせば良いと言うのだが、俺にはアイテムBOXがある。どんな獲物でも、つつこんで置けば腐る事はない。

「次に羽を^{むし}るにゃ」

おっと、筆^{むし}ってそこら辺を羽根だらけにされると困る。シャングリ・ラから麻袋を買って、その中で筆^{むし}ってもらう。

「この袋貰っても良いにゃ？ この鳥の羽根は引き取ってもらえるにゃ」

「ああ、青くて綺麗だな」

こういう素材の引取も冒険者ギルドで行われているらしい——ふむむ。

レーザーサイトかドットサイトを付けたボウガンを買って、狩をするのも良いかもしれない。

「後は残った羽を焚き火で焼くにゃ」

「ああ、それは俺に任せろ」

アイテムBOXから、カセットガスバーナーを取り出して火を付け、裸になった鳥の表面を焼いていく。

チリチリと、タンパク質が焦げる臭いが辺りに充満する。

「それ便利だにゃ！」

「魔法を使っているから売り物じゃないけどな」

なんでも魔法で済んでしまうという、この便利さ。しかも獣人はあまり難しい事が解らないので追及もしてこない。

本職の魔導師等に、こんなのを見せたら魔法で無いのが一発でバレてしまうから、アウトだろう。

「ミャレー、朝飯食ったか？」

「食べてないにゃ」

「じゃあ、これを焼き鳥にして食おう。一口サイズ——じゃねえ、一口の大きさに切ってくれ」

「このぐらいかにゃ？」

ミャレーに肉の下ごしらえを任してしまい、俺はシャングリ・ラで焼き鳥用の竹串を探す。

業務用、鉄砲串って奴だな。250本入りで、800円。そうそう焼き鳥のタレもいるな——ポリ容器に入った物が600円だ。

カセットコンロをアイテムBOXから出して、焼肉用の網を敷く。その上に串を打った鳥肉を早速焼いてみる。

「こうやって焼いて食うんだ」

「にゃ！」

鳥だから、しっかりと焼かないとな。しかも野鳥だ。ヤバい病気とか持っている困る。

肉に火が通ったら、タレを付けて再度焼く。

「ほら、一本食ってみろ」

「にゃ〜！」

喜び勇んで食いつこうとしたミヤレーだったが動きを止めた。

「どうした？」

「前に嗅いだ変なソースの臭いがするにゃ。それに何か別な臭いもするんにゃけど」

「臭い？」

焼き鳥を1本取って、クンカクンカしてみる。なんだろう？ イマイチ解らん。

瓶のタレのほうか？ 瓶のラベルを確認してみると醤油が入っている。

あゝ醤油はダメだって言ってたからな、このせいかな？ だが、彼女の話だと醤油の臭いだけではないようだ。

「どんな臭いがするんだ？」

「なんか野菜が腐ったみたいな臭いだにゃ」

「ん〜？ まさか」

おれは、カセットガスバーナーのバルブを開けて、ガスを少々彼女に嗅がせてみる。

「この臭いだにゃ！」

「ええ〜？ 鼻が良すぎるだろう」

そうか直火で焼くから、ガスの臭いが付いてしまうのか。

獣人は鼻が良いので、臭いに敏感なようだ。しかし、これはイカシな。

——となると……。シャングリ・ラで七輪を探す——あった。しかも、バーベキュー用の四角タイプだ。これが良いだろう——

1000円だ。

ついでに燃料の備長炭をさがす。いろんなタイプがあるが、お徳用って奴は安いが評価を見るとあまり宜しくない。

ここは、1kg1800円の少々高い物を買ってみた。しかし野鳥の焼き鳥を炭火で焼くなんて贅沢過ぎるな。

こんなの元世界で食ったら、どんだけ金を取られるか解らん。ツグミとか美味いらしいけど禁鳥で獲っちゃダメなやつもあるし。

しかし七輪で炭を起こすとなると、少々時間が掛かるぞ。必死に炭を起こしている俺にミャレーがひやうが呟く。

「うちは、昨日の美味しいので良いにゃ」

昨日の美味しいのって猫缶かよ。どうも調子が狂うな。せつかく美味しい焼き鳥を食おうとしているのに、猫缶で良いと言われてしまふとは。

しかし腹を空かせているミャレーが可哀想なので、猫缶を買ってみた。しかし、マジで良いのかよ……。

猫缶を検索して一番高いゴールド缶って奴を購入してみる。昨日、彼女に食わせた物は肉だったが、金の帯が入っている高級缶の中身は魚らしい。

皿をアイテムBOXから出して猫缶を乗せて見せる。

「これは魚らしいぞ」

「にゃ！」

飛びついたミャレーが一口頬張る。

「う、美味いにゃー！」

口からビームが出そうなぐらいに叫んでいるが、そんなに美味しいのか。

そんな事をやっているうちに炭の準備が出来たので鳥を焼き始め

る。俺もパンを少し食ったが焼き鳥の1本2本なら腹に入る。

真っ赤に焼けた炭の上に鳥の脂が滴り落ちて、白い煙をモウモウと上げる。それと一緒に漂ってくる香ばしい匂い。

やっぱり炭火で焼くと美味そうに見える。タレを塗って更に焼いた奴を――パクリと一口。

「美味い！」

少々肉は堅いが臭みなどは一切なく美味しい肉だ。ブロイラー等と違って皮に脂身等は少ないが、それでも美味い。

「ほら、こっちも焼けたぞ。食ってみろ」

焼き鳥のタレはイマイチらしいので、ミャレー用には塩で焼いてみた。俺から差し出された串を頬張る、ミャレーなのだが――。

「美味しいけど、こっちの魚の方が美味しいにゃ」

マジかよ、猫缶に負けるのかよ……オジサン超がっかりだよ。

ミャレーが帰った後、森猫にも焼き鳥を3切れ程おすそ分けをする。

さて今日は畑起こしでもするかな。

――――◇◇――――

10m×10m程の小さな畑なので、鍬くわで良いかと鍬くわを買ってやってみたのだが――早々にギブアップ。

文明の利器があるんだから無理をしない事にした。なんのためにシャングリ・ラがあるんだ。

早速、耕うん機で検索を掛ける。うーん――こんな小さな畑なら電動でも良いかもな。エンジン式だと後の手入れが少々面倒だ。

キャブレターからガソリンを抜かないと詰まったりするからな。

まあ、アイテムBOXに入れておけば時間経過は無いみたいだから、使用後のままだと思うが……。

しばし考えて電動にした。

「ポチツとな！」

ガシャ！ と電動耕うん機が落ちてくる。普通はダンボール等で包装されて送られてくるのだが、何故かそこら辺は省かれている。包装があっても取り出す手間が掛かるだけだし、ゴミが出なくて良いのだが……。

落ちてきた電動耕うん機を見てみる。俗に言う耕うん機は極太タイヤが付いていて、その後ろに逆転ローターが付いているタイプだ。だが俺が購入した物は簡易型。耕うん機のタイヤの所が順転のローターになっている。

そのまま使っても、ローターで地面の上をコトコトと走るだけ……。これでどうやって畑を耕すかというところ……。

耕うん機の後ろに棒が付いている。こいつを地面にグサリと刺すとブレーキが掛かって、ローターがズブズブと地面に潜っていくのだ。

適当なところで、地面に刺した棒を抜いて前に進む——同じ事を繰り返すと、ドンドン畑が耕せるという寸法だ。

ディーゼル発電機を出して、エンジンを掛け電源を繋ぐ。俺は耕うん機の取っ手を持っているだけなので楽ちん。電動なので凄く軽い。

やってみると意外と面白いので、30分程で耕し終わってしまった——早い！

これを鋤でやったら翌日筋肉痛間違いなしだ。耕した畑は森の腐葉土がたっぷりだから、栄養満点だろう。

畝を作りながら考える。何を作ろうか。

先ずは定番のトマト、ナス、芋かな……ってみんなナス科だよ。これじゃローテーションが出来なくて連作障害が出ちゃう。

畑で同じ種類の物を連続して作ると色々障害が出て、まともに育たなくなってしまう。

連作障害が出にくい植物もある。例えばイネ科の植物——米、麦、トウモロコシ等だ。

だが、これも厳密に言えば、連作障害が出るらしいが、地元にも俺が小学生の頃から延々とトウモロコシを作付している畑があったりしたので……実際はどうなのか？

もしかして、あの農家のマル秘テクニクがあつたりしたのかもしれないが、詳しくは学者じゃないので解らん。

とりあえず、トマトだけ植えてみるか。色々料理に使えるしな。

トマトの苗を検索してみるが、さすがに苗は無いようなので種を買う。種類は適当だが桃太郎で良いだろう。有名な奴だ。

スーパー等で売ってるトマトの殆どはコレだったはず。後は——。黒いトマトが珍しいので黒い種類を買ってみる事にした。栽培した事も無いし、食べた事も無いので楽しみだ。

芽出し用のポットを買って、トマトの種を植え畑にはマルチを張る。

マルチってのは、畝にビニールシートを張って雑草を防いだり乾燥を防ぐ物だ。

正式には何と言うか不明。農家は皆、マルチマルチと呼んでいるので、マルチで通用する。

シャングリ・ラで野菜も買えるのに、こんな菜園をやる必要も無いのだが、スローライフと言えば菜園じゃん。

これは外せない。かなりチートだけどな。

もしかして魔法が使えれば、すぐに実がなったりとか便利な呪文

があつたりするのもかもしれないが――。

逆に、すぐに大きくなって結実したんじゃ栽培する楽しみがなくなると思うんだ。

後は何にしようかなあ……採れたてで美味しい野菜か。

「そうだ、アスパラガスなんてどうだ？」

「さすがに俺も家庭菜園でこれは栽培した事がない。通常、アスパラを種から育てると、大きくなるのに4年ぐらいの年月が掛かってしまう。」

だが、採れたてのアスパラガスは本当に美味しい。親戚の畑に植えていたのを採った事があつたが――甘みが全然違う。

俺の地元の農家でも、アスパラガスが沢山栽培されていた。アスパラは『畑の豚』というぐらい、肥料をバカ食いして凄いスピードで成長する。

それ故、アスパラは摘み取っても自分の栄養を使ってドンドン成長してしまい、切ってから時間が経つと全然甘みが無くなってしまふのだ。

通常、畑で収穫してから街のスーパー等に並ぶまでには、少なくとも2〜3日は掛かる。

その間に甘みが抜けてしまい、市販のアスパラガスで美味しい物を食べるというのは、かなり難しい。

ここはチャレンジしてみるか――と、シャングリ・ラでアスパラガスの苗を検索してみることにした。

――ある。アスパラガスの苗だ。種類も色々あるが結構高い物なんだな。まあ手間と時間が掛かってるからな。

10株5000円の物を購入した。

パサっと、根っこだけが落ちてくる。んん？ この根っこを植えれば、アスパラガスが生えてくるって事なのか？
多分そうなんだろう。何分、自分でもアスパラは作ったことが無いので色々と解らん。

とりあえず一緒に肥料も大量に購入して畑に植える。そして水もやる。水はポリタンクに入った川の水だ。

しかし一々ポリタンクを使って、川から森まで運んでくるのも面倒だな。森の中で井戸は掘れないものか？

何も釣瓶つるべを落とす大型の井戸は必要ない。手動式のガチャポンプも売っているし、前に購入した電動ポンプがアイテムBOXには入っている。

ドリルでも使ってホースやパイプを通すだけの穴が開けば良い。シャングリ・ラには塩ビ管も沢山売っているしな。

それに、これだけ森に巨木が生えているのだ。この森の地下には、それなりの水が蓄えられているに違いない。

そのシャングリ・ラで井戸を検索してみる。

ほほう——穴掘りの機械も売ってるな。2ストエンジン式で4万5千円だ。だが、こんな1m程のドリルで水が出るはずがない。

井戸なら5m〜7mぐらいいは掘らないとダメなはずだ。

穴掘りドリルのオプションで1mの延長棒が4000円で売ってるが、7mを掘るとなると——2万8千円か。

ここでダメでも他の場所で見える可能性もあるが……こんな特殊な機械の購入は、ちょっと悩むな。

だが、穴掘りの機械は杭を立てる時にも使えそうだな……。パワーショベルがあるから最初に重機で2〜3m掘れば、もって作業も楽にはなるが……うーん。

ちよっと保留かな。

井戸の知識を得るために井戸掘りの本をシャングリ・ラで購入した。

購入した本には様々な地方や地域での井戸掘りの実例が紹介されており、大変に参考になった。

これは素晴らしい物だ。偉大な先人に畏敬の念を抱かざるを得ない。

ベッドに寝転がり、1日中読みふけてしまった。

だが読むと試したくなってしまうな。

19話 井戸を掘れ

――翌日。

朝起きる。眠気眼で天井を見ると、いつもと景色が違う――梁^{はり}に何かいる……。

「……ん？」

何だか解らんで目を擦って焦点を合わせようとする。黒い物体が白い帯を巻いているのが見えるのだが……。

目を凝らすと、それはエリザベスカラーを首に巻いた森猫だった。いつも彼女が寝ていた場所を見ると当然そこにはいない。猫缶を開けた皿は綺麗に全部平らげられていた。

「飯が食えたのか？ そんな所に登れたということは元気が出たのか？」

人語など理解出来ないと思ったが、とりあえず話し掛けてみる。俺を襲うつもりなら、もうとっくに殺られているだろうから彼女に敵意は無いはずだ。

それに、ミヤレーは森猫が人間を襲う事はない――と言っていたからな。

「うげっ！」

森猫が俺のベッドの上へ飛び降りてきた。30kg程もある大型の獣に乗られたので、かなりの衝撃だ。

「にゃん」

彼女は俺の顔に頭をスリスリしてくる。こんなにデカくても鳴き声は猫なのかよ。だが……尖った耳がピンと凛々しく、ピコピコ動くのは結構可愛い。

喉を撫でてやると、ゴロゴロと喉を鳴らすのも猫と一緒にだ。

そして俺の顔をじっと見てくる。なんとなく言いたい事が解った。エリザベスカラーを取ってほしいのだ。

首に巻いた白いカラーを取ってやると、彼女はベッドから飛び降りて玄関まで行き、ドアをカリカリと前足で引っ掻き始めた。

この仕草もなんだか猫っぽい。おそらく外に出たいのだろう。

ベッドから降りてズボンだけ履くと、玄関まで行き鍵を外してドアを開けた。

森猫は左右を確認、大きな耳をクルクルと回して辺りを警戒すると、ゆっくりと慎重に歩みを進める。

少し歩くと回りを警戒して、また歩く——そして柵を飛び越えたと彼女は暗い森の中へ消えていった。

まだ、ちょっとフラフラしているみたいだが、あのぶんなら大丈夫だろう。元気になったようで良かった。

俺が出来るのは、ここまでだ。達者で暮らしてほしいものだ。

————◆◆————

朝飯の後——。

今日は露店を出す日なのだが、サボってしまった。サボって何をするのかというと井戸掘りだ。

場所は家の左前。重機を使う予定なので、場所を確保するために柵を分解してスペースを作った。

まず重機——パワーショベルを使って2m程穴を掘る。開いた穴から掘り始めれば、その分時間が節約出来るだろう。

井戸が掘れたら周りを埋め戻せば良い。

もっと広く掘ってスロープを作り、パワーショベルを穴の底へ入れるようにすれば更に下まで重機で掘れるが、そこまでの事もない。

井戸掘りの本によると水が出る地形は――土――粘土――砂――粘土――という感じになっていて、砂のところに水が溜まるらしい。パワーショベルで穴を掘ると森の腐葉土が50cmぐらいで、その下は粘土だった。

粘土の下に砂の層があれば、ここでも水が出る可能性が高いという事だ。

何事も経験だ。ここで水が出なくても、他の場所に移転した時に井戸が掘れるかもしれないからな。

意を決して穴掘りドリルをかう――3万9千円也。ドリルの長さは1m、直径10cmだ。

こんな狭い井戸では釣瓶つるべを使う事は出来ないが、ポンプを使って汲み上げるので、そのスペースだけ空ければ良い。

エンジンは2ストなので草刈機と同じ混合燃料が使える。燃料を入れて、チョークを使ってリコイルスターターを引っ張ると一発で始動。

とりあえず掘ってみる――が、手で持って使うのは大変だと解ったので、ブロックを積み上げ、そこにドリルを設置して手で押さえるように改良した。

最初の1mは簡単だったが、延長棒を次々と足していくと徐々に難易度が上がってくる。

穴を掘るのも継ぎ足し継ぎ足し、土を掻き出しドリルを上げるのも何回も分解が必要で凄く手間が掛かる。

ここで問題が起きた。引き上げたドリルに付いた土を取るのが意外と大変なのだ。

――次の日。

ここまでやってしまったら井戸が完成するまで露店は休みだ。

井戸の中の砂を汲み上げる仕組みを作るため、シャングリ・ラで塩ビ管を購入――それを改造して先端に鉄板製の弁を付けた物を製作した。

先端を斜めに切った塩ビ管を穴に押し込むと、砂がどんどん内部に入っていく。それを引き上げる時には先端の弁が閉じるので、管の内部に溜まった砂を穴の外へ出すことが出来る。

管の中には同時に水も入ってくるので、水抜き穴を6mmのドリルで沢山開ける事にした。

しかし、以前買った玩具のような電池式の電動ドライバーでは完全にパワー不足。本格的な18Vの充電式電動ドライバーを購入した。

塩ビ管の連結には、はめ込み式のアタッチメントを使うが、文字通りはめ込むだけなのでそのままでは抜けてしまう。

だが接着剤を使ったのでは、分解が出来なくなる。

そこで、アタッチメント部に電動ドリルで穴を開け、ボルトを差し込むことで連結部を補強する事にした。

そして砂を抜く作業が始まると色々と問題が出てきた。

5mの塩ビ管は、その中に濡れた砂が入ってる状態ではかなりの重量がある。入れたり出したりはかなり大変だ。そこで、パワーショベルを使う事にした。

バケットに鉤の付いたワイヤーを括り付け、後端に取手を付けた塩ビ管を引き上げれば良い。

そして、再び井戸へ押し込む時にも、パワーショベルのバケットを使って押せば簡単だ。

ただ、重機は微妙な手加減が出来ない。TVで重機操作の達人が卵を持ったりする映像があったが、素人にそんな真似は無理だ。

慎重にやらないと破損してしまうので注意が必要なので気を使う。土の中で管が折れたりすれば取り出すのに苦労しそうだからな。ひよっとすると取り出し不可能になってしまうかもしれない。

せっかく、ここまでやったんだ、それは避けたい。

パワーショベルで長い塩ビ管を引き上げると中に溜まった水が滴り落ちる。管を地表に横倒しにして高圧洗浄機を使い内部の砂を吹き飛ばす。

掘った井戸から溢れた水で、あっという間に穴の中が水浸しだ。膝の下まである長靴を4500円で購入して水に備える。

穴の中は、すでに泥^{ぬかる}んでグチャグチャ、このままでは作業がままならない。

そこで、コンパネを購入し井戸の回りに敷いて足場を作った。これなら、なんとかなる。作業が終わったら、このまま埋めてしまえば良い。

昼前に作業を始めて――15回程、砂を引き上げると塩ビ管の中に砂が入らなくなった。

そのまま塩ビ管を井戸に挿入したままにし、穴が崩れるのを防止するための枠にする。普通の井戸は石組みを使っているが、それを塩ビ管で代用しているわけだ。

井戸の先端から飛び出た塩ビ管を延長しながら、パワーショベルを使って穴を埋め戻す。この重機には排土板も付いているので、土を均す作業にも使える。

苦労の末、なんとか井戸が完成した。

地表にはカタピラの跡が付いているので、ちょっとアレだが……後で綺麗にしよう。

しかし井戸といっても、この世界にある普通の井戸とは趣がかなり違う。地表に塩ビ管の先端が出てるだけだ。

この管に連結した細い塩ビ管を挿入して、水を電動ポンプで組み上げるわけだが果たして上手くいくのか？

だが、ここまでやって日が暮れてしまった。残りのポンプを繋げる作業等は明日だ。

物事を始めてしまうと続きが気になって仕方ない性格なので、どうしても一気に作業をしがちだ。

我ながら飯を食わずに、よくやると思う。まあ腹が減るので、スニッ○ーズやら、S○YJOY等を齧^{かじ}りながら作業をしているのだが。

さて夕飯だが――シャングリ・ラを見て悩んだ後、餃子を食う事にした。

【専門店の餃子48個入り1200円】というのが売っている。評価欄を見ても、ユーザーの評価も高いようだ。

「これにするか……」

カセットコンロで焼いた餃子を20個程、中華スープと一緒に食べた――中々美味だった。

――――――◇◇――――

――次の日、いよいよ、ポンプを接続する。

試しに発電機をアイテムBOXから出して、以前買った安い電動ポンプを使ってみたのだが、全然パワー不足で7mの底から揚水出来ない。

「こりゃ本格的な井戸ポンプが必要だな」

シャングリ・ラを検索すると、井戸専用のポンプが何種類か売っている。外に設置するので、プラ製のカバー付きの物を購入する事にした。

——よく一緒に購入されている商品という項目に、井戸用砂取器というのが載っている。

確かに砂の層から汲み上げているのだから、砂が混じるかもしれない——ここは買ってみるか……。

同時に購入して、ポンプと合計で5万円也。

シャングリ・ラで購入したコンクリブロックを積み上げて、位置を調整しつつ塩ビ管と砂取器を接続する。

ポンプから曲がり管等エルボーを駆使して、地上から50cmの高さに水の出口を下向きに付けた。

そこから青いビニールホースを切った物を垂らす。ここが蛇口になるわけだ。

早速、アイテムBOXからポリタンクを取り出して、ポンプの試運転を兼ねて水を出してみる事に。

ディーゼル発電機のコンセントにポンプを接続して、スイッチオン！

だが、ブーンという音は鳴っているが、待てど暮らせど一向に水が上がってこない……。こりゃ、なにか失敗か？ 井戸の中には水は溜まっているはずだが。

ポンプの説明を読む——呼び水が必要だと書いてあるな。

「なるほど……」

パイプの中に水が入っていないので、羽車が空回りしているわけか。それと、出口を閉じて、管内部の負圧を上げないと、水が上がってこないらしい。

ポンプの上のプラ製カバーを外すと、水をいれる場所があるので、そこへ呼び水を入れた。

水の出口には蛇口をつけようと思ったが、とりあえず青いホースに詰め物として濡れたタオルを押し込んでみた。

「よっしゃ、再度挑戦。スイッチオン！」
モーターが回り、すぐに水が上がってきた。

「お！ 来た来た！」

慌てて青いホースをポリタンクの中へ突っ込んだ。

これで風呂への水入れが捗るぜーいや……待て待て、せっかくポンプが繋がったんだ。

ここから塩ビ管を分岐させて、ドラム缶風呂へ直接水が入るようになりゃ良いんだよ。うん、そうしよう。

一旦塩ビ管をバラし、最初に作った出口にはバルブを付け途中から分岐を作ると風呂へと管を延ばす。

距離は約5mだ。問題は無いだろう。

風呂の裏側からドラム缶風呂の中へ水が入るような経路に塩ビ管を組み立ててみた。

完成してポンプを動かすと、塩ビ管から水がドラム缶の中へ注ぎ込まれる。

元世界の水道のように圧力は掛かってないので、勢いよく出る事はないが、黙っていても水が溜まる。

その間に他の作業が出来るのは大きい。水位センサーでも置いてブザーが鳴るようにすりゃ良いのだ。

もっと自動化するなら、ブザーの電源でリレーを駆動して、ポンプの電源が落ちるようにすりゃ良い。

いいね、そういうピタゴラススイッチ的な物は大好物なんだよ。回路とか仕組みとか考えているだけで1日過ぎてしまう。

我ながら偏執病パラノイアだ。

シャングリ・ラを調べると、風呂用の水位センサーが2000円で売っている。

センサーを設置してから早速、風呂に入ってみよう。
塩ビ管からドラム缶へ注ぎ込まれる水に手を当ててみる。

「冷たい！」

そう、井戸水は冷たいのだ。この冷たさに、ガキの頃、川で泳いだのを思いだす。

下流は田んぼの農薬やら、生活排水等の大腸菌で危険なので上流へ行くのだが、山側へ行くほど水が冷たい。

湧き水などは脚が浸けていられないぐらいに冷たいのだ。真夏に川で泳いでいてもすぐに唇が紫色になって、ガタガタと震えが止まらなくなるのだ。

井戸を掘ったが、これを飲水に使うつもりはない。飲水にはシャングリ・ラで売ってる〇〇の美味しい水があるからな。

あれなら間違いなく安全だし。街の住民が水を浄化するのに使う水石という物を使えば、飲料水にも問題無いと言うのだが……。

実際に俺が泊まった宿屋でも利用してたみたいだしな。

そうそう浄化槽を作るために、水石も道具屋の爺さんの所で買ってこないとな。

いやあ色々やる事があるな。でも、スローライフっぽくなってきたかな？

発電機とポンプが剥き出しなので板を丸のこで切って犬小屋のような小さな囲いを作った。

雨もそんなに降らないようなので、このぐらいでも十分だろうし屋根には一応防水シートも貼ってある。

このディーゼル発電機は井戸のポンプ専用にして、家用の発電機はもう少し良いガソリン発電機にしよう。

地面に走っている塩ビ管も目立つ。雰囲気をぶち壊している感が

強いので木の板でカバーを作って隠した方が良いかもな。

地中に埋めるといふ手もあるが――さすがにそれは少々面倒臭い。それに例えば――何かトラブルを起こして、この場所から立ち去らなければならなくなった時に撤収に時間が掛かってしまう。

それにしても色々と考えて作るのは楽しい。これを商売にしたら大変なんだろうけどな。好き勝手も出来ないし。

俺は無名だがプロの絵描きで絵を描くのも好きだが、商売をしていれば気に入らん絵でも描かなければならない時が多い。

そもそも俺の描きたい絵⇨客の欲しい絵――では、ないからな。

ドラム缶風呂が水で満たされると森はすでに暗くなり始めている。ちょうど良いな。汗をかいたから、ひとつ風呂浴びてから飯にするか。

手を付けていると痺れるぐらい冷たかった水は、時間が経って温くなっていった。

風呂を焚くためにドラム缶の下に作った竈かまどに薪を入れて火を点ける――だが突然、背後から予想もしない声を掛けられて飛び上がった。

「ケンイチさん?!」

聞き慣れた声に後ろを向くと、そこには知っている顔が――白いブラウスと紺のロングスカート姿のマロウ商会の娘、プリムラさんだ。

「プリムラさん? なんでこんな所に?」

「ケンイチさんがお店をしばらく休んでいるので心配していたら、獣人の方に森にいるからと――川の入り口まで案内して頂きました」
ここを知ってる獣人と言えば、ミャレーだろう。

訪問してくれるのは別に構わんのだが――もう暗くなってるぞ？
良いところのお嬢さんが供も連れずにこんな所へ……。
それに、この時間では、すぐに城壁の門が閉まってしまうのだが
……。

20話 プリムラさんのお風呂

森が暗くなる中、マロウ商会の娘——プリムラさんが俺のスローライフの拠点を訪れた。

しかし、何もかも出しっぱなしである。もちろんユ○ボも……こりや拙い^{まず}。

「プリムラさん、こんな所に供も付けないで魔物に襲われたらどうします？」

「魔物は——ケンイチさんが住んでいるので大丈夫なのでしょう？」
「そりゃそうだ。だが当然の如く、プリムラさんがパワーシヨベルに気がついた。」

「ケンイチさん。あの鉄の塊は……？」

「いやあ、そのーそう！ あれは私の忠実なる下僕、召喚獣でして」

「ええ？ 召喚ですか？ ケンイチさんは魔法も使えるのですか？」

「ええ……まあ。申し訳ないのですが、この事はご内密に」

「もちろんですわ。ケンイチさんは大切な取引先ですから。それに——ケンイチさんは不思議な方だと思っていましたけど、その秘密が1つ明かされましたわ」

うーん、ちょっと弱みを握られてしまった気がするが——まあ、プリムラさんなら大丈夫だろう。

悪意があるなら、とつくに仕掛けてきているはずだからな。

重機のエンジンに火を入れて、実際に動かしてみせる。
クルクルとまわって、アームを振り上げる。

「まあ！ 本当と言う事を聞くのですね！ ——という事は、ケンイチさんは調教師テイマーでもいらっしゃる？」

「うーん、そういう事になるんでしょうかねえ」

俺は、パワーシヨベルをアイテムBOXの中へ収納した。

「素晴らしいですわ」

「もう一度お願い致しますが、この事はご内密に」

「そうですわね。この事が王侯貴族の耳にでも入れば——」

絶対に利用するだけ利用して、後はポイって感じになるだろう。

冗談じゃねえ。

「そうなるのは絶対に避けたいのです」

「マロウ商会としても、せっかくの取引先を王侯貴族に取られてしまつては悔しいですから。それに王侯貴族の方々は取るだけ取つて何も保証してくれない方ばかりですし」

やっぱりそういう感じなのか。それで言う事を聞かないと死刑だとか言い出すんだろ——やだよだ。

隣の帝国って国は凄く魔法使いだとバレると、強制的に帝国魔導師として軍へ徴発されるらしい。

うわあ、そんなのは勘弁してもらいたいですわ。

「しかし、プリムラさん。おそらく門が閉まつてしまいましたよ」

「ええ、そうですわね」

「まさか、ここにお泊りになる？」

「あら、ケンイチさんはお優しい方だと思つておりましたが、女の私に森の中で野宿しろと？」

「あの、ベッドが一つしかないのですが？」

まあ、ベッドをシャングリ・ラから買えば良いのだが、そういう事ではないのだ。

「構いませんわ。買い付けで長期旅行などをすれば、男の方と雑魚寝も普通ですし」

大店になる前は馬車一つで国中を買い付けで旅をした事もあるらしい。中々、逞しいな。タダの金持ちのお嬢さんではないって事か。本人は泊まる気満々だし、まさか取引先のお嬢さんを放り出すわけにもいかない。丁重に、おもてなしをしなければ。

家の方へ案内しようとしたのだが、プリムラさんが家の外にあるドラム缶に気がついた。

「あれは?!」

何か宝物を見つけたように彼女の目が煌めく。

「あれは風呂ですよ」

「お風呂?!」

彼女が慌てて風呂へ走ると、水の入ったドラム缶を隅々まで観察している。

「この鉄の筒に水を入れて、下で火を焚くと風呂になるんです」

「是非入ってみなくては!」

「ええ? あのお風呂に入るって事は裸にならないとダメなんですが」

「もちろんですわ。実際に使ってみなくては良い商品かどうか解りませんでしょ?」

「良いのですか?」

「はい、私は――ケンイチさんを信じてますから」

いや、信じるとかそういう問題では無いのだが……まあ大切な取引先のお嬢さんに手を出すほど愚か者ではないと思ってくれているのだろう。

それに当人が風呂に入りたいと言うのであれば断る理由も無いし

な。

そうと決まれば温度センサーを設置して火を焚く。

「それは？」

「お湯の温度を測る——まあ、魔導具です。これは非売品なので悪しからず」

お湯が沸くのには1時間ぐらい掛かる。

家の方へ案内しようとする、彼女は俺から離れて家の方へ走っていく——だが何かに驚いて飛び退いた。

「きゃあ！」

慌てて家の前へ向かうと、そこには黒い森猫が香箱座りをしていた。もう暗くなっていたので完全に保護色になっている。

いつの間にやって来ていたんだ。プリムラさんの相手をしていたので、全く気が付かなかったな。

それとも、もっと前からいたのか？

「なんだお前か。身体は良くなったのか？」

彼女の黒光りする身体を撫でると頭をすり寄せてくる。そして目の前には彼女が捕らえたと思しき白い動物が——。

ウサギかな？　だが、ふさふさの白い毛皮をした獣の頭には角が生えている。

「それは角ウサギですわ」

角が生えているからツノウサギか——解りやすい。森猫は、そのウサギを軽く啜えると俺の前に差し出してくる。

「なんだ、俺にくれるってのか？」

そう言って彼女の顎を撫でると喉をゴロゴロと鳴らしている——

全く猫だな。

獲物に触るとまだ温かい。だが今はどうしようもないな、とりあえず後回しだ。

角ウサギをアイテムBOXへ収納すると、シャングリ・ラから猫缶を買って開けようとした。

——すると、森猫が立ち上がり階段を上ると玄関の前に座る。

「はいはい」

扉を開けると彼女がずりりと家の中へ吸い込まれた。猫は流体である——なんて話があるが、本当に流れるようにするつと入るな。

「あ、あの森猫は」

「怪我をしたのを助けてやったんですよ。お礼を持ってきてくれたのでしょう」

彼女からすれば、どうせお前は獲物も捕れないんだろうから私が恵んでやるぜ——ぐらいの感覚かもしれないが。

「さすが調教師テイマーですわ。森猫と仲良くなるなんて」

「あいつを捕まえて、ギルドへ差し出さないで下さいよ」

「もちろん、そんな事はしませんわ」

プリムラさんと部屋に入ると、ガソリンランタンを点ける。

「小さくても素敵な部屋ですわ——まあ！」

プリムラさんが、ベッドへ駆け寄ると羽毛布団に抱きついている。

「これは？ 羽毛団ですよね？」

「ええ、そうですよ」

「これも、うちへ卸していただけますか？」

プリムラさんが羽毛布団を抱いたまま俺の目を見つめてくる。

「それは、あまり数が無いのですが、よろしいですか？」

「はい、もちろんですわ」

恐らく羽毛布団なんて使えるのは貴族様だけだろう。それならば、あまり数は多くなくて良いはずだ。

プリムラさんと話をしていると、森猫が俺の身体へ巻き付いて何かをアピールしている。そして部屋の角へ行くと俺の顔を見るのだ。

「ああ、解った」

俺は彼女が使っていた毛布を取り出すと、床に敷いてやる事にした。ついでに猫砂も必要だろう。

アイテムBOXへ仕舞ったままだった猫砂がいっぱいに入ったプ
ラの箱を出した。1回も使っていないので、ここで用を足すかどうかは解らないが、床でされると困るからな。

ついでに森猫の食事も用意もする。猫缶を2缶、皿に開けてやると彼女は嬉しそうに食いついた。

「なんだか随分と仲がよろしいように見えますけど」

「森猫に嫉妬されても」

「そんなのじゃありませんわ！」

羽毛布団を抱いたままプリムラさんが横を向いてしまうのだが、そんな様子を見ると、ちょっと幼さが残っているようにも見える。

俺の目がおっさん視点だから、そう見えるのか？ 俺ぐらいの歳だと、彼女ぐらいの歳の女性と付き合ってもロリコンだと言われる――マジで。

60の爺が40の女性と付き合ってもロリコンだと言われる。

森猫は飯を食い終わると、俺の敷いてやった毛布で丸くなっている。彼女も今日はここにお泊まりのようだ。

風呂はまだ沸かないので飯にしよう。

風呂を待っている間に簡単に出来るもの――という事で、インス

タントカレーにした。

カセットコンロでお湯を沸かし、レトルトパックを温める。

「これは？」

「食い物を温めているんです。これも非売品です」

「非売品が沢山ありますのね」

「申し訳御座いません」

パックのご飯も見せたのだが、米を見たプリムラさんの反応が宜しくない。

食べた事が無い物なので拒否反応があるようだ。まあ無理に勧める事も出来ないので、俺もパンにする事にした。

温めたカレーを皿に盛り、後はパンと牛乳と野菜ジュース。

しかし、ご飯がだめだと日本食はダメな物が多いな。ミヤレーは醬油もダメだったしな。

「この香辛料の料理は辛いですが、とても美味しいですね」

プリムラさんは、カレーにパンを浸けて食べている。この世界のパンは固いので、こういった食べ方が普通だ。

「香辛料が安くなれば、こういった料理も流行るんですけどね」

「徒党を組んで値段を釣り上げても、結局市場が狭くなって儲ける機会を損失していると私も思うのですが……」

これは、バコパというスパイスシンジケートの事を暗に批判しているのだ。

「この冷たい野菜のスープも美味しいです」

「それは飲み物代わりに飲むものなんです。野菜だけだと、とても飲めないで、果汁も入っているんですよ」

「野菜と果物だけで、こんなに美味しいスープになるなんて——本

当に変わった食べ物が多いです」

夕飯を食い終わると、風呂に仕掛けた温度センサーが適温を教え
てくれる。

「なんですか？」

「お湯が沸いたんですよ。本当にお風呂に入るんですか？」

「もちろんです」

アイテムBOXから、LEDランタンを出して外へ行く。

「そ、それは魔法のランプでしょうか？」

「まあ、そんな感じの物です」

「……」

プリムラさんが何か考えごとをしている。ヤバイ品物を売ってく
れと、せがまれると困るなあ。

しかし、せっかく森の中まで来てくれたのに、もてなさないのも
人としてどうなのよ？　——って感じだしな。

いや、プリムラさんは聡明な人だ。きっと解ってくれる——人は
それを希望的観測と言うが。

風呂場を囲っている板にランタンを掛けて、板で風呂をかき混ぜ
手を入れる——いい湯加減だ。

「ここには水が入っているので、温度を調節して下さい。お湯を使
う時は、この手桶で」

俺が水の入ったポリタンクを指さして、実際にレバーを倒して水
を出して見せる。

「この容器も非売品なんですよね？」

「もちろんです。それでは私は家にいますので、何かあれば呼んで
下さい。ここに石鹸も置いておきますので」

「あ、あの！ ちょっと……」

「なんでしよう？」

「ここにいてくれないと、1人だと怖いのですが……」

「それじゃ、この板の陰にいますので」

彼女を見ると、それでも心配そうな顔をしているのだが、まさか堂々と素っ裸になるシーンを凝視するわけにもいくまい。

いや凝視する必要もないのだが。それでも見て良いと言うなら見るだろ。だって男の子だもん。

シュルシュルと衣擦れの音が暗い森の中に溶け込む。本当に静かなので音がよく聞こえる。

静かな場面でシーンという単語を使ったのは、かの漫画の神様らしいのだが、本当にシーンという言葉が当てはまる。

風でもあれば、枝同士が擦れ合うざわざわという音が森中に響くのだが。

「あの、ケンイチさん、いらっしゃいますか？」

「はい、いますよ。お湯に入る時は、浮かんだ板を踏みながら入って下さい。火炙りになっている底は熱いですから」

「解りました」

まるで夜中に1人でトイレに行けない女の子のようだ。

板越しに、チャプチャプとお湯に浸かる音が聞こえてくる。

「大丈夫ですか？ 入れそうですか？」

「だ、大丈夫です」

なんとか風呂に入れたようだ。

「あ、あの！」

「なんでしよう？」

「お風呂に入っているのです、こちらへ顔を出していただけませんか？」

「いいのですか？」

「はい」

まあ彼女がいいと言うのだからいいのだろう。風呂の前へ行くと、プリムラさんが肩までお湯に浸かっていた。

今更、女の裸にどきまぎするような歳でもないからな。

「湯加減はいかがでしょう」

「とても良いです。こんなに簡単にお風呂へ入れるなんて……」

貴族式の風呂だと石で風呂を作って、ボイラーを作って、配管を作って——と大変な事になり、最低でも数千万円は掛かるらしい。

彼女の顔は真っ赤だが、お湯で赤いのか、それとも恥ずかしくて赤いのか、それとも両方か。

「恥ずかしいのなら陰に隠れていますか」

「いいえ、ここにいてくれないと……」

「そんなに怖いのなら、次の機会にするとか他の選択もあったでしょう」

「いいえ、商売というのは機会を逃すと一生巡り合わない事もありますから」

元世界には一期一会って言葉があったが、この世界にはあるんだろうか？

「しかしなあ——良家のお嬢さんが見ず知らずの男の前で裸になるとは、いかななものなのでしょうかねえ」

ちよっと嫌味っぽい言い方だが、プリムラさんの強引さも気になる。

それだけ俺の持っている商品が魅力的なのかもしれないが。

「マロウ家は成り上がりの商人で良家でもなんでもありませんわ。それに、ケンイチさんも見ず知らずではありませんし」

彼女に、アイテムBOXから出したタオルを渡すと、気持ち良さそうに首の周りを拭いている。

「私が悪人だったらどうします?」

「獣人を助けて、森猫を助けるような方が悪人だとは思いません。普通は怪我した森猫を見つけたら止めをさして、ギルドへ持ち込むでしょう?」

「そりゃ、そうだ」

ミヤレーから色々と聞いたようだ。彼女が身体を洗うと言うので再び板の陰に隠れる。

洗っている音を聞くと髪も洗っているようだ。石鹸で髪を洗うとゴワゴワするんだよなあ。

「プリムラさん。髪の毛を洗ったなら、この薬品を髪に付けて、少し経ってからお湯で流してください」

アイテムBOXから、リンスのボトルを渡す。

「どうやって出すのでしょうか?」

「ああ、頭を押すと出ますよ」

「……できました!」

彼女が喜んでいるような声が聞こえてくるのだが、姿が見えないので何をやっているかさっぱりと解らん。

さて、シャングリ・ラを開いて、新しいバスタオルとバスローブを買うか。

それと髪を乾かすための、ジェットヒーターを準備する。獣人のミヤレーの毛皮を乾かす時に使ったのと同じ物だ。これなら彼女の長い髪もすぐに乾くだろう。

プリムラさんがお湯から出る音が聞こえてくるので、準備した物を渡す。

「プリムラさん。拭き布とローブです。汗が引くまでそれを着てください」

「まあ、この手触り！ これも非売品なのですか？」

「どうやら、タオルの手触りが気になるようだ。獣人達は全く気にしなかったのだが、さすが商人といったところか。」

「うーん、それは若干数なら卸しても宜しいかと。ローブを着ましたか？」

「はい」

金色の髪を濡らし、白いローブから赤く染まった白い肌がチラリと露出している彼女は、まるで森の中の妖精だ。

ちなみに、この世界の服は全部右前になっているので、女性だからといって左前に着る事はない。

彼女の前にジェットヒーターを出して点火すると、ゴウゴウという音と共に温風が吹き出してくる。

「これで、髪の毛を乾かして下さい」

「こ、これは魔法ですか？」

「プリムラさんが私のことを信用して下さいから、私も秘密の魔道具を沢山見せているのです。全部、他言無用で願いますよ」

「解っております」

黙って髪の毛を乾かしている彼女だが、何かを考えているようだ。恐らくは俺の持っている数多くの未知のアイテムについてだろう。プリムラさんの事を信用してはいるが、その信用が崩れるような事があれば、ここから撤退する事も考えなくてはいけなくなる。

俺は、この街が気に入っているので、そうならないようにと願うのだが。

家の中に入り、ベッドの縁に座る彼女にフルーツ牛乳を差し出す。

「美味しい……これは？ 牛乳ですよね？」

「牛乳を果実の汁で割った物ですよ」

「こんな物まで——それに私の髪の毛がサラサラに……。いつも石鹸で髪の毛を洗うと、ゴワゴワになってしまうのですが」

「髪に付ける薬品をお渡ししましたでしょ？」

「あれのお陰ですか……」

彼女は、フルーツ牛乳が入ったカップを握りしめて何かを言おうとしている。

「これだけの商品があれば、ダリア——いえ、この国一の商人になる事も可能だと思うのですが」

「ああ、私はそんな事は望んでいません。静かに暮らして美味しい飯が食えるぐらいの稼ぎがあれば良いのです」

「……」

「私の趣味をお見せしましょう」

俺は、アイテムBOXからスケッチブックを取り出すと、プリムラさんに広げて見せた。

「これは、ケンイチさんがお描きに？」

「ええ、こういうものを静かに描いたり、色んな物を作るのが趣味なんですよ。それに必要な分の稼ぎがあれば良いわけでした」

「宮廷画家に、なれるのでは？」

「はは、まさか」

いい機会なので、ローブを着たプリムラさんの姿をクロッキーさせていただく。

沈黙する2人の間に鉛筆が紙を擦る音がしばらく響いた後、出来上がった作品を彼女に見せると驚いたような表情を見せる。

「これを、いただいてもよろしいですか？」

「もちろん、どうぞ」

彼女はスケッチブックを胸に抱きしめている。

それを横目に見ながら、俺はシャングリ・ラから安いパイプベッドを取り寄せた。ベッドが9000円で、シングルのマットが2700円だ。

森猫が丸くなっている対面の角にベッドを移動させると、マットと敷き毛布をアイテムBOXから取り出す。

プリムラさんには新品の寝間着を用意した。上からすっぽりと被るタイプのワンピースタイプで裾にフリルがついている——色はピンクだ。

彼女が着替えている間、俺は後ろを向いているのだが——横を見ると森猫が何か言いたげにじゅっと俺を見つめている。

「今日はもう寝ましょう」

ランタンに手を掛けた俺に、プリムラさんが頷く。うなず

今は恐らく午後8時頃だが、この世界は暗くなったら寝て、明るくなったら起きる。

灯油も蝋燭も高いので、あまり夜更かしする人もいない。夜更かししているのは金持ちだけだ。

「おやすみ」

「おやすみなさい」

暗くなった部屋——ベッドの上で俺はシャングリ・ラについて考えていた。

こいつには、かなり大きな問題点がある。シャングリ・ラに入金する金額が多大になったらどうなるか？

サイトの取引に制限が無いとすれば、それは金を無限に吸い込むブラックホールと言える。

金さえ入れば凄い物がじゃんじゃん買える。王族などに取りい

れば、数十数百億の取引でも可能になるだろう。

だが、ブラックホールに入れた金は戻ってこない。いずれは国の金^{きん}が底を突く。

そうなれば、国を襲うのが経済の破綻だ。俺は国を滅ぼした張本人としての責を負うだろう。

それとも次々と国を滅ぼしながら逃亡生活を行うか。

それ故、個人的に使う程度の金額しか取引が出来ないのである。

この世界にある無価値な物で、シャングリ・ラから金を吐き出させるか、チャージが可能になれば、それも防げるのだが……。

何か上手い方法を考えなければ。

21話 他にもいるのか？

——重い……助けてくれ……。

ってマジで重いんだけど！ 俺は暗い中、目を覚ました。すると目の前には森猫の顔が……。

「なんだ、お前かよ。重いんだけど」

「にゃあ」

そう言う俺の顔に右手を乗せてくる。いや右手じゃないか右前脚だ。

「なんだなんだ」

俺が身体を起こすと彼女はベッドから降りて、ドアの前に座ってこちらを向いている。

どうやら外に出たいらしい。

「解った解った」

ちよっと肌寒い中、毛布を巻いてドアを開ける。外はまだ暗いが、少し明るくなっているようで色が黒から青に変わりつつ――。

一面に薄い霧が発生していて遠くの方が白くなり、立ち並ぶ巨木が溶けて消えている。

森猫がそのまま霧の中へ消えていくのを見て、彼女達の朝は早い事が解った。

「ふあああ」

明るくなったら起きるのがこの世界だが、さすがにまだ時間が早い。まだ眠いわ。もう一眠りする事にしよう。

プリムラさんの方を見ても安らかな寝息を立てている。

それにしても俺が若い時に結婚していれば、このぐらいの娘がい
てもおかしくはないよな。

しかし同じおっさんのよしみとして、こんな美人で出来た娘を他
の男に取られるというのは、どんな胸の内なのであろうか？

あのマロウさんの心中を察すると、気の毒すぎて俺は手を出す気
にはならない。

しかし俺の行動も、ちよつと迂闊過^{うかつ}ぎるかなあ。

日本語が通じると、出会った人が良い人ばかりなので、日本の
延長のような価値観で付き合ってしまったている。

隣店のアマナだって、人が良すぎるって言っていたいな。

たまたま出会った人々が良い人ばかりだったので調子に乗ってし
まったが、そのうち詐欺や美人局等^{つもとせ}が、やってくるかもしれないな。
注意しなければ。勝って兜の緒を締めよ——ちよつと意味が違
うか？

ちなみに、こちら辺では——森を抜けるまでは喜ぶな——と言
うらしい。

俺はベッドに入ると再び毛布を被った。

————◆◆————

明るくなって目を覚ますと、すでにプリムラさんが起きていた。

「お早うございます」

「お早うございます」

普通に挨拶を交わす。

ベッドをアイテムBOXへ収納して、テーブルと椅子を出す。部
屋が狭くても収納や物置は必要ないので、このぐらいの広さでも十

分に暮らせる。

例えば8畳の部屋でも周囲に机やタンス、棚などを置いてしまえば部屋の中心部分しか使えない。

だがアイテムBOXがあれば部屋が丸ごと使えるのだ。ベッドは普段から置きっぱなしだが、これも収納してしまえば部屋は広々。

何か家の中で工作したりする時や、大人数を呼んでパーティーをしたりする時も^{はかど}捗るってわけだ。

さて朝飯は何にしよう。

ミャレーや道具屋の爺さんにも好評だったグラノーラにするか。宿屋のアザレアにも好評だったしな。

皿とスプーンを出して、グラノーラと牛乳を用意する。

「これは？」

「牛乳を掛けて食べる物ですよ。色んな人にも食べさせましたが皆に好評でした」

プリムラさんは早速食べてみるようだ。

「美味しい。これは美味しいですね」

彼女は口に手をあてて、驚いたように目を見開いている。

「乾燥させてありますから保存食にもなるんですよ」

「これは似たような物を作れるような気がします」

さすが商人の娘だな。常に商売の事を考えるのを欠かさない。

「あの……この寝間着を売っていただきたいのですが」

「気に入りましたか？」

「はい」

金色の髪が、ピンク色の寝間着によく似合う。いや、これだけ美人なら何を着たって似合うはずだが。

昨日洗った髪の毛がサラサラに見えるのは、やはりリンスを使っただけか？

「必要であれば、少量卸す事も可能ですよ」

「いえ、これは私だけの物に……」

そう言って彼女が示した買値は銀貨2枚（10万円）。この手の着物は、このぐらいするそうさ。そりゃこの世界の着物は全部手織りだからな。

しかし、そいつの生地はポリエステルなんだが、大丈夫なのか？ プリムラさんは生糸か何かとっているようだが。

それで通用するなら、それで良いのだが。解析する手段もないだろうし。

飯を食い終わったので、プリムラさんと一緒にマロウ商会へ行く事になった。

取引先のお嬢さんを一泊させてしまったんだ、一応弁明しておく必要があるだろう。

家から出ると、プリムラさんに太陽電池パネルを見つけられてしまった。

昨日は暗くて解らなかったのだろうが、わけの解らん板が沢山並んでいるんだ。そりゃ気になるだろう。

だが魔法に使う道具だと誤魔化しておいた。とりあえず意味不明な事や物は――魔法。これでゴリ押しする。

それに魔法だと言うと意外と納得してくれるのだ。

――――――◇◇――――

プリムラさんがいるので自転車は使えない。2人で歩いて街まで向かうが仕方ないな。

街へ入ると乗り合いの馬車に乗る。一応主要な地点には、この馬車が走っていると言う。だが料金は小四角銀貨1枚(5000円)でかなり高い。

庶民が気軽に乗れるものではない。

赤いソファーに座り馬車に揺られながら、プリムラさんに質問をしてみる。

「プリムラさん。人力車というのは無いのですか？」

「人力車？」

解らないようなので、アイテムBOXからスケッチブックを出して人力車の絵を描いて見せる。

「こうやって人が引く1人用の乗り車です」

「まあ面白い。でも見たことがありますわ」

「獣人は走るのが得意みたいですし、こういう仕事があれば、彼等も金が稼げるのにな。それに、これなら馬車より安く出来るでしょう？」

人力車なら、この世界のテクノロジーでも作れるだろう。馬車とそんなに変わらないし。

「中々面白そうですけど、獣人達を家畜扱いしているようで……」

「ああ……そういう見方も出来ますか、それじゃちょっと難しいか」

「そういえば、西洋で人力車って見たことがないな。そこら辺が関係しているのだろうか。」

マロウ邸へ訪れると、マロウさんが玄関で待ち構えていた。

「どこへ行っていたんだ。連絡も無しに」

「城壁の外にいたのですが、帰れなくなってしまったので、ケンイチさんの家へ泊めて頂きました」

「大切な取引先のお嬢さんを野宿させるわけにもいかず、やむを得ず私の所でお預かりいたしました」

「これは、娘が大変ご迷惑を……」

あれ？ 怒られたり抗議されるかと思っていたが、そうでもない。彼女と俺の歳が離れているので、そんなに心配をしていないのか――それとも、それだけ信用してもらっているのか。

「一体、誰に似たのか……」

「お父様に決まっているではありませんか。いい商売があると聞けば、矢の降り注ぐ戦場や、魔物が跋扈する森もお構いなしでは、ありませんでしたか？」

「はぁ……」

マロウさんは、プリムラさんのお転婆ぶりに手を焼いているようだな。

父親としては、娘に商人として国中を渡り歩くより、落ち着いて家庭へ入ってほしいと考えているに違いない。

そりゃ、こんな可愛い娘を危険な目には遭わせたくないわなあ。

俺だってそう思う。

「その甲斐があって、良い商品を仕入れる事が出来ましたよ」

「困った娘だ」

マロウさんの書齋へ通されて、商売の話になる。机の上に、バスタオルやバスローブ、プリムラさんが買った物とは別デザインの寝間着が置かれている。

「ほう、これは変わった布だ。湯浴みの際の拭き布や、風呂上がりに着るものですか」

「吸水性に優れて、肌触りも良いと思います」

バスローブの卸値は1着銀貨1枚（5万円）、タオルは1枚小四角銀貨5枚（2万5千円）だ。それぞれ5枚ずつ卸す事になった。

すでにデカイ買い物を全て済ませてしまつて家まで建てた。

後はスローライフをするだけのメシ代を稼ぐだけで良いのだから、別に派手な取引はする必要が無い。

ベッドの中で考えていた、シャングリ・ラのブラックホール問題もある。これからは少々取引を控えるつもりだ。

「こんな物もあるのですよ」

俺はシャングリ・ラから、向こうが透けて見えるピンクのセクシ―系の寝間着を取り寄せた。

だが俺が広げた物を見たマロウさんが目を覆う。

「おお、なんと破廉恥な……」

「まあ！」

父親の表情に対して、プリムラさんの目がキラキラと輝く。

「これぞ！ ――という意中の男性の前で、これを着ればどんな堅物もイチコロという――」

そう言いかけたのだが、マロウさんの表情を見て、それを引っ込めた。

「申し訳御座いけません。悪ふざけが過ぎたようです」

「ああ……」

アイテムBOXへ仕舞った透け透けに、プリムラさんが残念そうな表情を見せて手を伸ばす。

少々気まずい雰囲気が漂う中、ドアが開いてメイドさんが沢山の帳簿を持ってやって来た。このメイドさんは、俺の露店から洗濯バサミと銀細工を買った女性だ。

「さすが大店ですね。帳簿が山のように」

「帳簿の方式が新しくなりまして、書き換えている最中なのですよ」

「ほう？　どのような方式なのでしょう？」

異世界方式であるのかな？　俺は常に井勘定だからな。シャングリ・ラの残金と、アイテムBOXに入っている硬貨の数で見えないし。

「これは最近、帝国で発明された複式簿記という物でして。大変な優れ物ですよ」

「え？　複式簿記ですか？」

「ご存知で？」

「いやあ、その名前だけは……」

マロウさんの話では、帝国のとある地方商業都市で、そのギルド長が発明したらしい。

あつという間に帝国中に広がり、その実績から発明したギルド長は、次期の商業大臣に推される可能性が高いと言う。

しかし複式簿記か。偶然なのか——それとも……。

俺が思案していると、帳簿を持ってきたメイドさんが、プリムラさんの髪の毛をじっと見ている。

「お嬢様……御髪が」
おくし

彼女が、プリムラさんの髪の変に気がついたらしい。

「ああ、これは——その」

プリムラさんが俺の方へ向くので、メイドさんが俺の方へやって来た。

「じー」

見てる見てる。

「なんででしょう？」

「じー」

俺の問い掛けにも、ただひたすらに、じっと俺の事を見続けるメイドさん。正直怖い。

「じー」

彼女の無言の圧力に、ついに俺は折れてしまった。

「解った、解りました。貴方にも差し上げますので。でも、くれぐれもご内密に」

それを聞いたメイドさんが、コクリと頷く。うなず

こういうタイプは苦手だ。下手に断ると、いきなり刺されるかもしれない。

プリムラさんが気まずそうな顔をしているが、彼女は確かに何も言っていないからな……。

「それはそうと、お父様。今日はアレの実験の日ではありませんでしたか？」

「そうだ。品物が出来上がったと職人から連絡があったので、今日の午後に試験をするよ」

「それならば、そこでケンイチさんが持っている物も一緒に見ていただきたいのですが」

「外でか？」

「はい、大きな物なので」

彼女が言っているのは、ドラム缶風呂の事だろう。しかし新製品の試験って言ってるな。何を作ったんだろう？　ちょっと気になる。

「ケンイチさん、よろしいですか？」

「私は良いのですが新製品の実験に部外者が立ち会ってもよろしいので？」

「ああ、構いませんよ」

商会トップのマロウさんの許しがあるなら良いのだろう。
だが、それは午後からか。時間があるな――。

「それならば私は午後に、もう一度お伺いしたいと思います」

「承知いたしました。それではお待ちしております」

午後まで時間がある。それなら冒険者ギルドへ行って登録を
しよう。

プリムラさんに冒険者ギルドの場所を聞くと大通り沿いにある
という。

高い料金の馬車に一々乗ってられない。30〜40分も歩けば
到着するのだ。

通りにあったのは、剣と盾の看板が掲げられた石造りの2階建
の建物。結構古い物で中々に風格があり、建物の端が蔦で覆わ
れている。

窓にはガラスが入っているので、中に入っても明るい。

結構人がいて賑わっているが――そりゃ、この世界のハロワだ
という話だからな。職を求めている人が沢山いるんだろう。

とりあえず正面の窓口へ行ってみる。白いブラウスに赤いベス
トのお姉さんが対応してくれた。

「いらっしやいませ。今日はどのようなご用件で？」

「登録をお願いしたい」

「はい、承知いたしました。お客様、他のギルドへの登録はな
されてますか？」

「ああ、商業ギルドへの登録をしています」

「それでは登録料銀貨1枚と、ギルドの証をここへお願いいた
します」

どうやら、ギルドの証は共通で使用できるらしい。そりゃ便利
だな。また書類とかを書かなくても済む。

お姉さんが奥へ引っ込むとすぐに戻ってきた。

「登録が完了いたしました。お仕事の依頼は、あちらの掲示板へ貼り出している物をご覧ください。また特殊な件は窓口でもお伺いしております」

「ありがとうございます。あのく依頼とは別に買い取ってもらいたい物があるんですが？」

「それなら、一番左端の窓口へどうぞ」
「言われるままに一番左端へいく。」

「おう、何を持ってきたんだい？」

そこに居たのは、全身に傷が目立つ口髭を生やした、ごついおっさんだ。なんだか歴戦って感じがするな。

「角ウサギを1匹頼む」

「丸ごとかい？」

「肉だけ貰えるかな？　その他は買い取りで」

俺がアイテムBOXからウサギを出すと、男が驚く。

「アイテムBOXか、久々に見たぜ。それに、まだ温かいじゃねえか」

男は何やら黒板^{プレート}を見ながら、チェックをしている。予定が入っているのだろう。

「夕方には出来てるから取りに来な」

そう言われて数字が入った金属製のチップを渡される。これが引換証らしい。失くさないようにしないと。

ついでに依頼が貼られている掲示板をしてみる。

珍しい薬草採り、探しもの、尋ね人――何でもあるね。その一番

上段には高額賞金の指名手配犯の似顔絵が貼ってある。

以前に聞いた、シャガという野盗の物もあるようだ。頬に大きなキズがある親玉に懸かっている賞金は――金貨100枚（2000万円）だ。

野盗は50人程いるらしいが、ギルドからの賞金プラス国からも報奨金が出るらしいので、全滅させればかなりの金額になると言う。稼ぎに税金等は取られないが、獲物の処理を頼んだり色々すると手数料が取られるようだ。だが、そのぐらいは仕方ないよな。

冒険者ギルドを出ると少し早い昼飯にすることにした。

立ち食いの店に入ると料理を頼む。

ごく普通の野菜と肉が入ったスープとパンだ。何の肉だか解らんが一口すする――うーん、イマイチ！

隠れてアイテムBOXから、だしの素を出してパラパラと振り掛ける。

「うん、美味い！」

ほんの一振りで、イマイチの料理が普通に食えるようになるのだから旨味調味料は偉大だ。

ウチの田舎の爺婆共も、その味に感激したのだろう。なにしろ戦中戦後の貧しい食事がご馳走になったのだから。

その記憶が鮮烈なのか爺婆は山のように旨味調味料を入れる。

後は砂糖。どんな料理でも大量に砂糖を突っ込むので辟易した事がある。だが甘い物イコールご馳走だった世代なのだ、それも致し方ない。

だが納豆やトマトにも砂糖を掛けるのは勘弁してくれ。美味い上等な刺し身にも旨味調味料を掛けて食うし……。

いや、異世界でそんな感慨に浸っている場合ではないな。

飯を食い終わったので、またてくてくと歩いてマロウ邸まで戻っ

てきた。

街中でも自転車が使えれば楽なのになあ。だが初期の自転車で地面を蹴って進むタイプがあったじゃないか。

あれなら、この世界でも作れるかもしれない。

マロウ邸へ赴くと実験とやらの準備は整っていた。場所はマロウ邸の裏庭にあった井戸。

だが、そこにあったのは――。

「これは、ガチャポンプ?!」

俺の言葉にマロウさんが反応した。

「ご存知でしたかな?」

「この棒を上げ下げすると、井戸から水を揚げられるカラクリで御座いますよ?」

「ほう、さすがケンイチさん。お耳が早い。これも帝国で普及し始めた物なので御座いますよ。早速取り寄せて職人に試作品を作らせたところです」

さすが著作権や特許がない世界だ。すぐにコピーしまくり。

いやしかし、ガチャポンプとはな。昼前の複式簿記もそうだが偶然にしちゃ出来すぎだ。元世界からやって来た奴が俺の他にもいる? まじかよ。

複式簿記を発明して、帝国の商業大臣になるって男がそうなのか? だが帝国は敵国らしいし接点はなさそうだな。機会があれば会ってみたいとは思うが……。

俺が他の転移者について考えていると実験が始まった。

マロウさんが、ポンプのレバーを一生懸命動かしているのだが一向に水が揚がってこない。

「水は出てきませんね、お父様」

「そのようだな」

2人が途方に暮れているので俺が代わる。だが、レバーを動かしても手応えが無い。

これは俺が作った井戸と同じ現象だ。中に水が入っていないので、ポンプが空回りしているのだ。

「これには呼び水が必要なですよ」

釣瓶つるべに入った水をドボドボとガチャポンプの上から注ぎ入れる。それから、レバーを上下させると綺麗な水が滔々とうとうと流れ始めた。

「お父様！」

「おおっ！ これは凄い！ すぐに生産をしなくては！」

その後、俺の持ってきたドラム缶風呂もマロウさんに見せたのだが、ガチャポンプの後ではインパクトに欠ける。

風呂よりは、このポンプの方が明らかに売れるだろう。マロウさんの反応も宜しくない。一旦、保留という事になった。

そりゃ風呂よりはポンプの方が売れるよなあ。今すぐに必要な物だもん。

「ケンイチさん、申し訳ございません」

「いえいえ、プリムラさんのせいではありませんから。それに、このカラクリの方が絶対に売れますよ」

でも、ちょっと悔しいので、アイテムBOXからスケッチブックを出して脚で蹴って進む自転車の絵を描いてみた。

「プリムラさん。こんな乗り物はどうですか？」

「ほほほ！ これは何ですか？」

「脚で地面を蹴って進む乗り物なんですが」

「ほほほほ！ お父様これを見て下さい」

プリムラさんは腹を抱えて大笑いしている。余程、ツボに入ったようだ。

「ん？ ははは！ これは珍妙だ。ケンイチさんは絵もお上手だが、冗談の素質もお持ちとは」

どうも、相当に珍妙に見えるらしい。何事もパイオニアってのは嘲笑の対象になるものだ。

この世界で空を飛べると言ったりしたら爆笑されるだろう。

「しかしこれは、走ったりするより速く移動できて、疲れない乗り物になると思いますよ。好事家に売れませんかねえ？」

「ふう——そう言われてみれば、走るよりは楽そうに見えますなあ。機会があれば作らせてみましょう」

機会があればってのは無理かなあ。プリムラさんはまだ笑っているし。

俺のマウンテンバイクを見たら、彼女は何と言うだろうか。

マロウ邸からの帰り、冒険者ギルドで処理済みのウサギの肉をもろう。

毛皮と角は小四角銀貨1枚（5000円）の買い取りだった。肉も食えるし、1日1匹捕れば普通に生活出来ちゃうよな。

——だが、その一ヶ月後。

1台の足蹴り式の自転車を街の中で見かけた。話を聞けば、マロウ商会で売りだした物だと言う。

それから2台と3台と数が増え、いつの間にか街の中で普通に自転車を見かけるようになった。

絵に描かれた自転車を笑っていたマロウさんではあったが、数日後その便利さに気づいて試作品を作ったと言う。

それを街の中で走らせて、デモンストレーションを行なって宣伝をしたようだ。さすが一流の商人だ、儲ける事には鼻が利くらしい。役所の連絡等にも用いられているようで、元世界のメッセンジャーに近い職業か。

そして俺は、アイディア料として金貨5枚（100万円）をゲットした。

元世界の特許料に比べれば安いと思うが、ネタに金を払ってくれるだけかなり良心的だ。

だが、これで俺のマウンテンバイクを見ても、あまり怪しまれる事は無くなるかな？

まあ街の中で、あれに乗ろうとは思ってないが。

マロウさんは自転車という発明で国の改革をしたという功労が認められ、領主から表彰を受けて、苗字——家名を許される事になったらしい。

もちろん自転車のアイディアを俺が出したという事は内緒にしてもらっているし、俺の名前は一切出てこない。

22話 森の中でほのぼの生活

——それから数ヶ月後。

森の中で、のんびり生活。

街ではドライジーネと呼ばれる足蹴り式の自転車が走り回るようになったが、俺の生活は変わっていない。

シャングリ・ラには動画も電子書籍も山のようにあるから、暇つぶしに困ることもない。

しかも、ドンドン新作が更新されているのだ。どんなシステムなんだよ、コレ。

やってることは元世界の田舎に住んでいて、ネット通販で生活していた頃と全く変化なし。

これで言葉が通じなかったり、シャングリ・ラも無かったら、元世界への郷愁で帰りたくなったとは思うが全くそんな気も皆無だ。

たまに露店を開いてはいるが、しばらくマロウ商会へは訪問していない。

マロウさんも井戸ポンプと自転車の販売で忙しそうだな。

森の散策も道具屋の爺さんから良いアイテムを売ってもらい^{はかば}捗っている。

子機と親機がセットになっている小さな像で、親機を自宅に置いておく。

すると、胴体がリング状になっていて水平にくるくると回る子機の指が、親機の方角を正確に示すという魔道具だ。

この世界ではメジャーな物で元世界の方向探知機みたいな物らしい。

冒険者には必須のアイテムだと爺さんが言っていたからな。値段

は銀貨2枚（10万円）と結構高いのだが、この性能は買いだろう。これが手に入ったので、森の木々に付けていたピンクの印は黒で塗りつぶしておいた。

家の畑では順調に野菜は採れるし、肉等は森猫と獣人達が獲物を持ってきてくれるようになった。

それで俺の所で猫缶パーティを開いて帰っていくのだ。

俺は貰った獲物を冒険者ギルドへ持ち込めば、小遣いと肉を手に入れる事が出来るってわけだ。それだけで十分に生活が出来る。

しかし、こんなに獣人達と仲が良くなるなら、家の建築を手伝ってもらうんだったぜ。

「うめえええ！」「こいつはたまらねえ！」「にゃー！」

俺の家へやって来た獣人達が、フローリングの上で胡座あぐらをかいながら猫缶をぱくついている。

猫缶が美味いと言うのはミャレーだけではないようで、彼等には、まっしぐらな味らしい。

胡椒と塩を掛けて食べているのだが実に幸せそうな顔をしているのが印象的だ。

まさに、この世の春って顔なのだが、そんなに美味しいのだろうか？

「1人、2つまでだからな。街の奴らに俺の事を言っていないだろうな」

「もちろんでさあ！ こんな美味しい物を人に教えたら俺達の食う分が減るじゃありませんか」

「その通りだな、兄弟！」

彼等と酒を飲んでいると俺の胡座あぐらの上に森猫が乗ってくる。ズシリとくる——いや、重いんだが……。

膝の上にセメント袋を乗せられているようなもんだ。だが黒く短い毛皮を撫でてやると実に気持ちよさそう。

それならばと、シャングリ・ラから【高級キャットブラシ】ってのを購入してみる。高級って言うわりには2000円だが。毛は何の毛だろうか？ 一応説明を読んでもみると豚の毛ってなっているな。

シュツシュツ——森猫の身体の上をブラシが走る。それに合わせて毛皮の艶が^{つや}増々^{まし}になるような気がするが。

ブラッシングってのは結構効き目があるのかもしれない。

それが終わると、まるでピカピカに光るビロードのような手触り。森猫には可哀想だが——これならば超高級品の毛皮として取引される^{うなず}ってのも頷ける。

森猫のブラッシングをじっと見ていたミヤレーが、突然服を脱ぐと俺の膝の上にいた森猫を押しつけてきた。

そして彼女の代わりに俺の膝の上に滑りこむと、その場所を占領した。

「うちの背中も撫^なでてにゃ……」

「はいはい」

ミヤレーの背中をブラッシングしてやると、彼女は気持ち良さそうにゴロゴロと喉を鳴らしている。

だが、ブラシが尻尾の根本に当たると、ピクピクと反応している。

「そ、そこはダメだにゃ……」

「あ、ごめんごめん、尻尾の所は苦手なのか」

ピクピクと痙攣している丸いお尻をブラッシングして太腿まで撫^なでると結構抜け毛が絡んでいる。

「結構、毛が抜けるなあ」

「だから毎日手入れしないと大変なんだにゃ」

ペットを飼っていると抜け毛が凄^こいからな。特に季節替わりは凄^こい。

「ふにゃ〜」

潤んだ瞳になったミヤレーが仰向きになって白い毛で覆われた腹を出している。今度はお腹を撫^なでてほしいらしい。

お腹は、さらに細かい毛でフカフカだ。

俺とミヤレーの様子を見ていた男共が、突然服を脱ぐと俺に背中を向けてきた。まるで肉の壁だ。

どうやら彼等も撫^なでてほしいらしい。

「待て待て、ブラシを一個ずつ出して、やるから自分等でやってくれ」

「旦那。そりゃ、ないですぜえ」

「何が悲しくて男の背中を撫^なでないとダメなんだよ」

シャングリ・ラからキャットブラシを3つ購入して、彼等に1つずつ渡す。

「それが欲しいなら売ってやるぞ。獲物1個と交換だ」

「本当にそれで良いんで？」

「ああ」

返事をする^と獣人達は喜んで体中をブラッシングし始めた。当然、部屋の中には毛が舞い散る。

おいおい外でやってくれないかなあ……こいつ等が帰ったら掃除機を掛けよう。

それを見ていたら森猫とミヤレーが一緒に俺の身体にスリスリをしてくる。まったく俺の服まで毛だらけじゃないか。

獣人達との交流はこんな調子だ。基本的に素直で気立ての良い奴ばかりなので付き合い易い。嘘を吐^つくのも下手なようだしな。

彼等は計算が出来ないので、手間賃を少々貰って取引の立会人になってやる事も多くなった。

生活が安定してきたので――ウチの畑で取れる野菜以外は、なるべく市場で野菜を買うようにして、シャングリ・ラを使う機会を減らしている。

市場で大量に野菜を買っても、アイテムBOXへ入れておけば、いつでも新鮮なままで料理に使えるからな。

だが品種改良が進んだ元世界の野菜とくらべて、こちらの物は味が落ちる。それ故、ついついシャングリ・ラを使ってしまう。

その他にも、コーヒーも飲みたいし、コーラも飲みたいし、アイスだって食いたいからな。

アイスやポテチはこの世界の原料で作れない事も無いが……機会があれば色々試してみたいとは思っている。

一時期、市場は俺という珍しい存在の噂でもちきりになっていたが、その噂の主がたまにしか露店を出さなくなって、いつの間にか話題にも上がらなくなったようだ。

人々は勝手に――奴は破産した、病気になった、死んだ、引越した――などと勝手な憶測をしているようだが、それで良い。

それでも写本をやっている爺さんのように固定客もいるので、たまに露店を開いていると――まだ、生きてたよ――なんて話し声がどこからか聞こえてくる。

余裕が出来たので、マロウ商会との取引も少なくなってしまったが、商会へ貴族からの注文は引き続き入っているという。

だが手持ちの物を全部卸してしまったので、在庫が無くなってしまいました――という事にして商品を卸すのを断っている。

マロウ商会へ行く事は少なくなったのだが、その代わりプリムラさんが度々ここへ訪れるようになっていた。

「しかし、良かったのですか？ マロウ商會が家名を名乗れるようになったのは、ケンイチさんが描いてくれた絵のお陰ですのに……」
「ああ、その事でしたら構いませんよ。以前に言った通り飯を普通に食えるぐらいの稼ぎがあれば良いのです。逆に名前を出されると困ってしまいます。ハハハ」

マロウ商會としても俺の名前を出すと貴族や他の商人達が、俺の所へ直接押し寄せてしまうので、それは避けたいだろう。

「でも……その、あのドライジーネを最初に見た時に笑ってしまったて申し訳ありません」

「いえいえ、それも気にしていませんから。それにしても、マロウさんはさすがです。笑っておられましたか、すぐに試作品を作らせてしまったのですから」

「ええ、出来上がった物を試乗してみても——これは凄い物だとすぐに気が付きました」

自転車という発明によって家名を受けたということで、その家名はドライジーネと呼ばれる事になり——そして、プリムラさんの正式名はプリムラ・ネ・ドライジーネになった。

「まあまあ、終わったことは、そのぐらいにして、これをどうぞ」
俺は、テーブルの上にあった、ポテチを彼女に勧めた。

「これは？」

「芋を薄く切って油で揚げたお菓子ですよ」
牛乳をアイテムBOXから出して、テーブルの上のカップに注ぐ。彼女は恐る恐る手で掴み、一口——パリパリとポテチの割れる音が部屋に流れる。

「これは、美味しいですね！」

プリムラさんが驚いたように叫ぶ。

「歯ごたえが良いでしょう？」

「ええ。油で揚げるだけなのですか？」

「2度揚げした方が良いでしょう。そうしないとぺたぺたになってしまつて……ああ、油は植物油じゃないと。灯油はダメ——だと思ふけどな」

こちら辺の灯油は海獣油だ。いわばラードみたいな物だろうから、それでも良いのか？ 試してみない事には何とも言えないが。

「帝国では肉を油で揚げた料理が流行っているそうなのですが」

「へえ、唐揚げみたいだな」

「そうです！ 旅の商人から聞いた話では唐揚げという物だと言つてました」

「ええ？」

唐揚げまで売ってるのか……こりゃ決まりだな。だが帝国とやらに俺が行く事は無いだろうが。

「うーん、それじゃ夕飯に唐揚げを作ってみましようか」

「ケンイチさんも作れるのですか？」

「ええ」

テーブルをだして料理道具を一式並べる。カセットコンロも2つ出して、油はどうしようか——ゴマ油が残っているのでこいつで良いか。

鍋に油を開けて、カセットコンロに火を付ける。一つには鍋を掛けて、お湯を沸かす。

スープはインスタントのクラムチャウダーにしようと思う。

唐揚げと言ったが鶏肉が無い。角ウサギの肉があるので、こいつで揚げ物を作ってみようと思う。

角ウサギは焼いて食ってみたが、癖もなく普通に美味しいので、これで唐揚げを作っても大丈夫だろう。

元世界にいた時は豚こまの唐揚げをよく作っていたが、普通に美味かったしな。

肉を一口サイズに切り揃え溶き卵に潜らす。そして、シャングリ・ラで買った唐揚げ粉の定番だ。

【しょうゆガーリック味】ってのにしてみたが匂いがきついかな？
とりあえず、2〜3個揚げてみて、プリムラさんに判断してもらおう。

苦手な風味なら、もっとベーシックな唐揚げ粉の方が良いかもしれない。

揚げ終わった唐揚げを1個、皿に置いて、プリムラさんに差し出してみる。

「プリムラさん、風味はどうですか？ 苦手な匂いなら違う粉にしますが」

「いえ、とても香ばしくて食欲をそそる匂いです」

あれ？ 大丈夫そうだな。それじゃ全部この粉で揚げるか。都合20個程、揚げる。残ったらアイテムBOXへ入れれば良い。

そうすればいつでも食えるのだ。

お湯も沸いたので、インスタントのパッケージを出してクラムチヤウダーを作るが、俺が出す変わった品物にも、もう彼女も慣れっこだ。

皿にウチの畑で収穫したレタスを千切って並べ唐揚げを盛る。後はパンだ。

以前、パスタも見せたのだが評判が宜しくない。気持ち悪いと言うのだ。獣人達も同じ事を言うので麺類はこの世界には合わないようだな。

アイテムBOXから畑で採れたアスパラガスを取り出し、斜めに切って油で炒める。味付けはシンプルに塩コショウ。

シャングリ・ラで買ったアスパラガスの根っこを畑に植えたら無事に生えてきたので、採れたての物を、すぐにアイテムBOXへ入れておいたのだ。

これで、いつでも美味しいアスパラが食えるってわけだ。

さて、料理が出来上がったので、プリムラさんと一緒に食べる事にしよう。

「美味しい！ パリパリしてて中から肉汁が――」

「ウサギの唐揚げも美味しいな。獣人達から肉はもらえるしな。こりや定番になりそうだ」

「この変わった野菜も甘くて美味しいです」

彼女が食べているのはアスパラガスの炒め物だ。とれとれのアスパラは本当に美味しい。

だが小便が臭くなるのが欠点だな。あの臭いを嗅ぎ分けられるのも遺伝で決まるなんて聞いた事があるが本当かは解らない。

特定の遺伝子を持っていないと、あの臭いが解らないそうなのだ。

「でも、ケンイチさん。角ウサギには気をつけて下さいね。捕まえるのが簡単そうに見えて怪我をする方が多いですから」

近づくとも角で頭突をしてくるらしい。死んだふりをするのもあるので、可愛く見えるが意外と危険な動物のようだ。

「ケンイチさん。この白いスープはどうやって作るんですか？」

「ええと――これには貝が入ってますが、具はなんでも良く牛乳と小麦粉で煮た物です」

生クリームとか使ったりしたような気もするが、ここには生クリームは無いしな。

まあ、シャングリ・ラには料理の本もあるし、彼女が正確に知りたいというなら、本を買って調べた方が良いかもな。

でも、この世界に無い食材もあるし、そこら辺はアレンジが必要だろう。

「貴族様の料理で、そんな感じのスープの話を聞いた事があるので、これかもしれませんね」

「さすが貴族は良い物食ってるんだなあ」

「ケニイチさんの料理もそれに劣らないと思いますよ」

夕飯も食い終わったが、プリムラさんは、また泊まるつもりなのだが——いいのかなあ……。

父親ぐらい年齢が離れているので、安心していいのかもわからないが。

彼女と商売談義に花が咲くが、どうも会話の間が持たない。

元世界の話なら、いくらでも出来るのだが、想像もできない異世界の話をしても仕方ないだろう。

だが、お伽話として聞いてもらえるだろうか？

うーん、そうだ。お伽話で良いなら映画とかどうか？ オーバーテクノロジーだが、プリムラさんなら大丈夫だろう。

俺は、DVDのソフトを検索し始めた。俺が映画を見るだけなら、シャングリ・ラで観ればOKなのだが、それだと彼女が観る事ができない。

だが、SF映画や現代映画を彼女に観せてもしょうが無い。この世界に時代背景が近そうで、そんなに違和感が無い映画と言えば……。

クレオパトラ——昔の古いやつな。

或いは――。

も○ひとりのシェイクスピア。

うーん、【薔薇○名前】はどうだ。これなら、この世界に近い世界観のような気がする。

もちろん、吹き替え版だ。日本語で字幕が出ても彼女には読めないからな。

「いったい何を……」

困惑するプリムラさんを手で制して準備を始める。

先ずはDVDプレイヤーだ――再生専用なら3000円ぐらいで売っている。モニタは高いので、プロジェクターを使う。安い物なら1万円で買える。

そしてスクリーン、3000円だ。

薔薇○名前のDVDは中古が500円で売っていた――安い。今はブルーレイなのか？

床にクッションを敷いて【購入】ボタンを押すと、機材がドサドサと落ちてくるが設置は簡単だ。

プロジェクターはテーブルの上に載せて、スクリーンは壁から吊るす。電源にモバイルバッテリーをアイテムBOXから出した。

これで準備OK。

プロジェクターの電源を入れて、DVDの再生ボタンを押すと、ガソリンランタンの灯りを小さくする。

プロジェクターとスクリーンを距離を調整すると物語が始まった。

「あれ？」

音が出ない！ 慌てて、シャングリ・ラから2000円のアンプを買う。スピーカーは迷ったが、FOSTERにしてみた。

思わずJOLを買いそうになったが、ぐっと堪える。スピーカーケーブルも買って被覆を剥いたり大忙し。

だが彼女はキョトンとして俺の行動を見ている。
やっと繋ぎ終わった。それじゃ気を取り直して最初から――。

物語が始まると彼女は驚きの声を上げる。

「あの！ あの窓の中に人がいるんですが」

「違う世界の出来事を魔法を使って覗いているんですよ」

「魔法……」

彼女は言葉少なめに、映像に食い入るように観ている。文化や風習が違うので俺の解説付きだ。

映画は、ある修道院へやって来た修道士が連続怪死事件を追うストーリーだ。

スピーカーから出ている音声も彼女は聞き取れているようだ。――ということとは、この世界は本当に日本語互換の言語なんだな。

脳内で変換されているだけかと思ったら、そうでもないらしい。

まあ、ローマ字モドキの文字を読むのを見れば、そうでないのは自明の理なのだが。

映画が終わったが彼女は興奮冷めやらぬ感じで色々と質問してくるので、それに答えてやる。

俺も歴史等には、あまり詳しくはないからなあ。あまり突っ込まれると困るんだが。

「ケンイチさんと話していると、まるで賢者様と話しているみたいです」

「あはは、こんな賢者がいたら困るな」

「そんな事はありません……」

外はすでに真っ暗、この世界では寝る時間だ。

「さて、夜も更けたし、そろそろ寝ようか」

「あ、あの……」

「ああ、寝間着を出してあげますので、ちょっとまって下さい」

「あ、あの……出来れば……以前見せていただいた、透けた物……」
座ったままのプリムラさんが、モジモジしながらとんでもない事を言い出す。

「え？ あんな物を買っては、お父様に叱られますよ」

「良いんです。私も、もう子供ではありませんし」

「あれを買って勝負を賭けたい意中の方がいらっしゃるんですか？」

「今です……けど」

「え？」

「……」

「ちよっと、プリムラさん。そこへお座りなさい」

「座ってますけど」

オヤジの説教タイムが始まる。

「若い子ほもっと自分を大切にしないではいけませんよ。こんなオッサンなんか興味を持つちゃダメ！ もっと輝かしい未来を約束されている、うら若い男性がいるでしょう」

「そんな事はありません。ケンイチさんは素晴らしい方です」

「ああ、嘆かわしい。プリムラさん程の女性なら貴族からも引く手数多でしょう？」

「確かにそういう話も頂いておりますけど、商人の娘が正室になれるはずありませんし。妾めかけとしか見られていません。そんなものが女の幸せと仰るのですか？」

貴族から見れば商人の娘は金づる。商人から見れば貴族は利権への窓口。そこに女の幸せは無い。

逆に借金で首が回らなくなった貴族の娘が商人に嫁ぐなんて事もあるらしい。

「それなら私の露店に、よく来て下さる騎士様はどうでしょう？」

すこし、プリムラさんは考えているが、思い当たる人物がいたの
だろう。

「……ああ、ノースポール騎士爵様ですね。あの方は良い方ですが
……」

「こんな事になって、マロウさんがなんと仰るか」

「父は反対していませんけど」

お父さん、そこは反対してよ！ でも賛成もしていないんだろう。
父親から見たら自分ぐらいの歳の男に娘を取られるなんて、かなり
複雑な思いのはずだ。

「申し訳ありませんが、それについては保留にしておいて下さい。
あまりに責任が大きすぎて即断できかねます」

「そ、それでは、一緒に寝るだけでも……」

プリムラさんの顔は真っ赤だが食い下がるなあ。

「うーん、寝るだけ。寝るだけですからね」

一応、念を押す。

「はい！」

プリムラさんにピンクの寝間着を出してあげて、一緒に寝ること
になってしまった。

何が悲しゅうて、こんなオッサンをご指名なのか。まったくもっ
て意味不明。

しかし相手は取引先のお嬢さんだ。小遣い稼ぎの宿屋のアザレア
と寝るのは、わけが違う。

暗い中、一つのベッドで彼女と2人。

プリムラさんが抱きついてくると、温かい体温が伝わり、漂って
くる何かの香り。

石鹼だろうか？　それとも香水のようなものか？

しかし本当に良いのだろうか？

23話 急転直下

——朝起きる。

隣にはプリムラさんが可愛い寢息で寝ているのだが、先に起きてベッドの縁に腰掛けると軽いため息をつく。

「なんで、こんなオッサンが良いんだろうなあ……」

アイテムBOXから出したテーブルの準備をしていると、プリムラさんが起きてきたので朝食にする事にした。

彼女がグラノーラで良いと言うので——彼女に牛乳、俺はコーヒーだけにする。

「その黒い飲み物は？」

「これはコーヒーって飲み物ですが」

プリムラさんが飲みたいと言うので、一口飲ませてあげる。

まあ、いわゆる間接キスであるが、いい年したオッサンがそのぐらいでオタオタするはずも無い。

彼女も別段気にしている風でも無いしな。

「……あの、苦いんですけど」

「はは、慣れると、この味が癖になるんですよ」

食事をしながら、アイテムBOXの話になった。

俺のアイテムBOXの容量の大きさに、マロウさんは気がついていたようだ。さすがに同じアイテムBOX持ちにはバレていたか。

実は、マロウさんのアイテムBOXもそれなりの容量があると言う。だが、それがバレると悪巧み目的で近寄ってくる連中が多いので、ずっと隠していたらしい。

それ故、俺が容量を隠しているのにも、なんとなく察しが付いて黙っていてくれたみたいだな。

取引先のマロウさんが良い人で良かった。たまたま本当に運が良かっただけだな。

食事が終わったので、川の所までプリムラさんを送って家まで戻ってきた。

彼女の話では、1ヶ月程買い付けの旅行へ出かけるので、その期間はマロウ邸は留守になると言う。

旅行に彼女も同行するようで、大店になっても自分で買い付けをこなすのがマロウ流らしい。

「さて、畑でも見るかな……」

だが畑をみると――実がなり始めたトマトの苗が綺麗に全部倒れている。そりゃもう見事に――。

「なんじゃこりゃ！　もしかして根切か？」

根切ってのは、蛾^がや甲虫の幼虫が作物の茎の中に入ってしまった、根本から食われ倒れてしまう食害である。

本当に見事に倒れる。葉っぱじゃなくて茎なので倒れたらそのまま枯れてしまう。もう本当に笑うぐらい簡単に全滅する。

元世界の家庭菜園でも、これで一面が全滅して途方に暮れた事があった。

「マジかよ！　異世界にも根切がいるのかよ……マリーゴールドは効かなかったか？」

脱力しながらシャングリ・ラを検索――根切用の農薬も確かに売っているが、道具屋の爺さんの所から、虫除けの魔石をもう1個買った方が良さな。

魔石は高いが農薬を使うよりは良いだろう。スローライフと言え

は無農薬のイメージがあるしな。

でも元世界の家庭菜園では農薬を普通に使っていた。だって薬を使わないとマジで全滅するからな。

使い過ぎなければ便利な物は使うべきだ。だが、ここには魔石という便利な物があるので、コレを使う。

相当がつくりきたが、このまま放置するわけにもいかない。

ダメになった植物を片付け、堆肥置き場へ持っていくと畑に耕うん機を掛ける。

耕うん機をアイテムBOXへ収納して、鋤くわで畝うねを作っていると不意に後ろから声を掛けられた。

「もし」

「は？」

ふり向くと見覚えがある顔だ——それは俺の店に、よく来てくれる騎士爵様だった。

だが、いつもと違い立派なプレートアーマーを着込んでいる。フル装備って奴だ。

「貴公は……森の中に怪しい男が住んでいるという事だったので、調べにきたのだが」

「これはこれは騎士爵様。こんな所でお会いするとは」

「森の中に住んでいるというのは貴公だったのか」

「ええ……まあ。しかし森の中に住んではいけないという決まりも無いので御座いましょう？」

「それはそうだが……よくこんな所に、このような家を建てたな」
彼は俺の建てた家を眺めているが、ちよつと呆れているようにも見える。

「結構、苦勞しましたよ」

苦笑いする俺だったが、騎士様は外に並んでいる太陽電池パネルに気がついたようだ。

「あれは？」

「えーと、あの……魔法に関する物なので、申し訳ございませんが、お話しする事ができません」

ヤバイ！ やっぱ、あれは目立つよなあ。だが快適な生活のためには、どうしても電気は必要だし。

人がいないような僻地では、街へのアクセスが面倒になるし……。

「魔法？ あのような奇々怪々な物を使うとは——貴公は魔導師なのか？」

「ええ、まあ……申し訳ございませんが、この事はご内密に……」

俺が、アイテムBOXから金貨を出して、彼に手渡そうとすると手で制された。

「そうだな——貴公が強力な魔法を使う魔導師と解るといささか拙い事になるな」

「それ故、ひと目を避けて、ここで暮らしていたのですが……」
勿論、大嘘だが。人目を避けていたのは本当だ。

「私も貴族の端くれだが——確かに貴族の横暴には目に余る物があるし、身分を隠したいと言う貴公の気持ちも解る」

彼のような騎士爵というのは一代貴族で、子供に継がせる事は出来ない。役職もなければ治める領地も、もちろん無い。

「それでは……」

「まあ、叶うならば、1つ願いを聞いてもらいたい」

「なんででしょうか？ 私に出来る事ならば、なんなりと」

彼は腰にぶら下がっていた短剣を取り出した。

それは俺が露店で売った剣鉈を改造した物で、オリジナルと違って大きな鰐つばが付けられて戦闘用に改良されていた。

「貴公から買った、この短剣は大変に素晴らしい。願わくは、これと同じ物で大剣が欲しい」

「うーん、私の所では長物は扱っていないのですが……」

銃刀法何とかで、剣なんてシャングリ・ラでは売ってないからな。俺は改めて検索してみるが、そんな物は売っていない。まさかコスプレ用に売っているエクスカリバーの模造刀を渡すわけにもいくまい。

だがナイフを検索していて良い物を見つけた。

「それでは、こういたしましたでしょう。私は大剣を扱ってはいないので、鋼材は持ちあわせています。その鋼材を騎士爵様にお渡しいたしますので、そちら様が懇意にしている鍛冶に剣を打ってもらうというのは、いかがでしょうか？」

「なるほど——そういう手もあるか」

俺は、シャングリ・ラからナイフ用の鋼材を取り寄せた。

彼に売った剣鉈は青紙という鋼材なのだが、それは売っていなかったので、AOS134という物を取り寄せた。

これは強靱で錆びず中々の優れ物で、俺もこの鋼材を使ったナイフを何本か持っていた。

値段は寸法5mm×200mm×600mmの物が7万円だ。これが4枚もあれば大剣でも何でも作れるだろう。とりあえず1本だけを彼に渡してみる。

「これになります」

鋼材を見た騎士爵様の目が煌きらめく。

「これは凄い！　まるで刃物で切り出したかのようだ」

ああ、鋼材じゃなくて正確な四角さに感動したわけね。

「これを4枚程差し上げますので。それならば、どんな大剣でも造る事が出来ましょう」

「ううむ……よし！　その話に乗ったぞ」

「ありがとうございます。ああ、1つだけ注意すべき点が――その鋼材と他の物を混ぜないでいただきたい。性能が落ちますので」

「解った」

残りの鋼材を3枚渡す。かなり重いが大丈夫だろうか。鋼材の値段は、しめて28万円……痛い出費だが口止め料として致し方無い。シャングリ・ラから、40cmぐらいの麻で出来た巾着袋を買って彼に渡す――1300円だ。

「これに入れて、お持ち下さい」

「これは、かたじけない」

「騎士爵様、この鋼材の出処も、くれぐれもご内密に」

「解った」

俺はテーブルと椅子をアイテムBOXから出すと、彼を誘った。

「お急ぎでなければ、少々お話とお飲み物でも」

「そうか――それでは馳走になるか」

さて、何を出したのか……

「まさか、騎士爵に牛乳ってわけにもいきませんし――まだ昼前ですが、お酒でよろしいですかねえ」

迷ったが、シングルモルトウイスキーから、グ○ンフィディックの12年350ml――2000円を選んでみた。緑色の瓶が綺麗だ。

すぐに【購入】ボタンを押しそうになったのだが、スクリュウー

キャップとかラベルとか拙^{ます}いじゃん。

一旦家へ入ると、シャングリ・ラからコルク栓を購入してフタ代わりに、ラベルもアルコールを吹きかけて慌てて剥がした。

木の盆に乗せて、陶器のコップと水、そして酒瓶と一緒に並べて騎士爵様にお出しした。

「強い酒なので、水で薄めてお飲み下さい。水は浄化して御座いますので」

「ほう！ これは美しい酒瓶だ」

椅子に座った騎士爵様が、緑色の瓶を覗き込むように見ている。瓶に映った自分の顔を見ているのかもしれない。

「異国の酒で御座いますよ」

彼は琥珀色の酒を注ぐと、水で割らずにグイッと一口でいった。

「はあ！ 確かに、こいつは強い！ だが美味い！ こんな美味しい酒は初めてだ」

「それは良かった。よろしければ、こちらもお持ち下さい」

「よろしいのか？」

「もちろんで御座います」

2000円で口止め出来るなら安いもんだ。男を落とすなら金と酒と女と相場が決まっている。

ここで女もいれば最高だが、ここにはいないからな。

「これだけ美味しい酒を貰って、タダというわけにもいくまい。聞きたい事があれば答えるぞ」

彼は、おかわりの酒をグラスに注ぎ足した。

「はは、お見通しで御座いましたか——それでは、この国の対外関係はどのような状態なのでしょうか？」

「商人となると、他国の事も気になるか？」

周囲の国については全く解らんからな。街の住民じゃそういうことは全く知らないし。

商人達にとっても大切な情報故、対価も無しに聞かせてくれる事も無い。タダで聞けるのは、せいぜい噂話程度だ。

やはり、ある程度の地位がある人間でなければ正確な情報も入ってこないだろう。

「それは、もちろんで御座います。戦が近くなったりすれば、売れる物売れない物がはっきり致します故」

「そうだな——国境沿いで、帝国との小競り合いは続いているが、帝国での内紛問題が解決するまでは、しばらくは問題ないだろう」

「帝国内で揉め事で御座いますか？」

グラスに口を付けている彼の目が光る。

「ああ、皇帝と皇太女が権力闘争の真っ最中だ」

「皇帝と皇太女って——実の親子なのですよねえ？」

「その通り正真正銘、母と娘だ。だが皇帝は溺愛している第二皇女に後を継がせたいようだな。皇太女を暗殺しようとして失敗。それから確執が決定的になった」

うわあ、実の母娘で殺し合いかよ。ドン引きだわ。それにしても伊達政宗もこんな話じゃなかったか。

「それでは問題は長引きそうですか？」

「いや、それでも無い。皇太女側が独自魔法ユニークを持った強力な魔導師を手に入れてな。戦力が逆転しそうなのだ」

独自魔法ユニークってのは、普通の魔力を使う魔法と異なる全く異質な物で、対価が必要なく普通の魔法より際限無く使えるのが特徴らしい。それじゃ俺が使ってるシャングリ・ラムも独自魔法ユニークって事になるのか？ 自分では魔法を使っているって感じはしないけどな。

「地方商業都市の大貴族、アインシュテュルツェンデノイバウテン公爵家が、皇太女側に付いたという情報もある」

アイン……？　なんだって？

「その独自魔法ユニークというのは、どのような物なのでしょうか？」

「なんとかという、黄色い物を大量に造り出して、辺りを埋め尽くすらしい」

「黄色い物？　なんですか？」

「なんと言ったか——マヨ……マヨ」

「もしかして、マヨネーズ？」

「そう、それだ！」

なんだそりゃ！？　マヨネーズを造る能力？　そんなのありか？

「そして、それから大量の油を生み出す能力もあるらしい。魔物の群れを大量の油の海に沈めて、焼き殺したという逸話もある」

「それは恐ろしいですね」

「まったくだ。その魔導師が我が国との戦に参戦すれば、拙い事まちずになるのは必至だ。何せそいつはドラゴンも倒したという話だからな」
彼はグラスの酒を飲み干した。

「ドラゴン?!」

マヨネーズなんて、何の冗談かと思ったが、大量に作れるとなると武器としても利用出来るってわけか。

だが間違いないな——そいつが例の転移者だ。しかし戦は勘弁してほしいわ。そうならないように願うしか無いが……。

それから帝国では魔法を使う者の商売を禁止していると言う。商人に不利になるからという理由らしいが。

この国では魔導師の商売は禁止されていないみたいだな。

「あの——帝国、帝国って言いますが、帝国の正式名称って何と
言うのでしょうか？」

「んん？」

「私は、僻地の田舎にいたものですから……」

「デイルイヒフォームメートヒエン（少女帝国）だ」

騎士爵様の話によると——女帝が即位すると神器を使って、少女
の姿となりて国を統治する習わしがある国家らしい。

それで、少女帝国かよ。どこの中二病国家だ。

ウイスキーを2杯程飲んだ騎士爵様は上機嫌で帰っていった。

ここへ来た理由も、森に住んでいるのが野盗ますずの類だと拙いので確
認しに來ただけらしい。

それならば——森にいたのは俺の知り合いで変わり者のオッサン
でした——と彼に報告してもらえば良い。

多分、大丈夫だろう。

—————◆◆———

——それから1ヶ月後。

そろそろ、マロウ商会のキャラバンが帰ってくる頃だ。

野盗もいるようなので、完全武装の護衛を連れたキャラバンらし
い。

帰ってきているなら、顔出しをしておかないとダメだろうな。何
か変わった商品があるなら見てみたいし。

昼前に、いつものように街へ行く——だが様子がおかしい。何か
人々がざわついているようだ。

通りへ向かう通行人に話を聞くと、マロウ商会のキャラバンが野
盗に襲われたらしい。

「なんだって?!」

そりゃ、ヤバイやつじゃん！　今、冒険者ギルドにマロウさんが来ていると言う。

良かった、マロウさんは無事だったか……。

俺は急いで大通りにある冒険者ギルドへ向かった。

「娘を！　娘を助けてくれ！　誰でも良い！　金を出す！」

冒険者ギルドの前で必死に叫んでいる初老の男性。草色の服がロボロになって汚れているが――。

マロウさんだ。

「マロウさん！　ご無事でしたか！」

「おおっ！　ケンイチさん！　私は無事でしたが、娘が！　娘がぁ！」

なんだってえええ？！

彼の話では――マロウ商会のキャラバンが野盗に奇襲を受けて、散り散りになってしまったという。

護衛に守られて、マロウさんとプリムラさんが脱出したのだが彼女は逃げ遅れたらしい。

それでも彼は護衛に引きずられて何とか逃げ延び、このダリアまで辿り着いたと言う。

生き残ったのは、マロウさんと護衛が2人だけ。

襲ったのは、シャガという札付きの野盗。アマナもヤバイ野盗がいるって、いつか言ってたな。そいつらか。

マロウさんは冒険者ギルドへ討伐の依頼を出してきたらしいが……。

「娘を助けてくれ！　金ならいくらでも出す！」

渾身の力を込めて叫ぶ彼の声に通りの人々の反応は薄い。冒険者ギルドの中からも人が出てきているが反応はイマイチだ。

聞けば、30リーグ（50 km）程離れた、森の中に野盗のアジトがあると言う。そいつ等に略奪を受けた村は1つや2つでは無いらしい。

そんなにヤバイ奴らなら、国で討伐隊が組まれるべきなのでは？

しかし野盗に捕まっているプリムラさんの事を考えた俺は、マロウさんの肩を掴み顔を向き合い叫んでいた。

「マロウさん！ 俺が何とかする！」

気がつけば、そう叫んでいた。無茶かもしれない——いや、無茶だろう。

当たり前だのクラッカー、俺はタダの素人だ。だが俺にはシャングリ・ラがある。

戦闘なんてやったことがないが、シャングリ・ラにある物で何とか出来るかもしれない。

俺は誰から貰ったか、どうして貰ったかも解らないシャングリ・ラという能力に一縷の望み^{いちる}を託した。

24話 装備を整え野盗討伐へ出発!

「マロウさん! 俺が何とかする!」

彼の肩を掴んで、そう叫んでしまった。

マロウのキャラバンが野盗に襲われて全滅してしまったという。

その時に彼の一人娘、プリムラさんが逃げ遅れたらしい。

彼にしてみれば、最愛の一人娘を残して逃げるのは断腸の思いだっただろう。

引き返そうとするマロウさんを護衛の連中が引きずって街へ戻ってきたらしい。

だが、キャラバンとしては依頼主を守るためには、そうするしかない。

俺の言葉を聞いて街ゆく人々達は——この男は一体何を言っているんだ? ——という顔をしている。

そりゃ、そうだろう。ベテラン冒険者でもない、全く素人の男に何が出来るのか? 皆がそう考えているのに違いない。

「しかし、どうやって……」

俺の言葉を聞いたマロウさんも、にわかに信じられてないような顔をしている。

彼にしてみれば——娘を助け出すため藁にもすがりたい思いだろうが、俺はその藁にもなっていないという事か。

だが、お姫様が拐^{さら}われたら、助けに行くのが騎士の務め、ここでももしなかったら俺は後々絶対に後悔をする事になるだろう。

異世界に巣食う外道を叩いて砕く、俺がやらねば誰がやる。

さりとて、本当に何の力も無く、こんな事を言っているのであれば

ば、ラ・マンチャの男ならぬタダの道化だが、今の俺にはシャングリ・ラがある。

「マロウさん、支度金が必要です。後で商品で埋め合わせをいたしますので都合できませんか？」

「それならば、この金を使って下さい！ 娘を助け出すためならば金に糸目はつきません！」

彼が差し出したのは金貨が大量に入った袋。何枚入っているかは不明だが、そいつを受け取るとシャングリ・ラにチャージを始めた。入金したのは都合、金貨50枚（1000万円）である。

先ずは戦力を奴らのアジト近くまで運ぶ脚が必要だろう。冒険者や街にいる連中で馬を持っている人間は少ない。

馬を飼うのは凄い金が掛かるからだ。それ故、遠出する時などは馬屋からレンタルをする。

別に馬を買う必要はない。シャングリ・ラで乗り物を探せば良い。もう、ヤケクソだ——どうとでもなれ。

俺は、シャングリ・ラを検索した。とりあえず荒れ地で物を運ぶなら4WDトラックだろう。俗に言う4ト車なら、20〜30人は運べるはずだ。

「よし、これか」

俺は目当ての物を探し当てると、周りの見物客に注意を促した。うなが

「これから俺の召喚魔法を使う！ デカイ物が召喚されるので、ちよつと場所を空けてくれ！」

「召喚魔法だって？」 「あいつは魔導師だったのか？」

「ケニイチさん、一体なにを——」

「マロウさん、本当に召喚しますので注意して下さい。やって来い来い！ M菱 キ〇ンター5.2 ワイド ロング ディーゼル

4WD 三方開 17万Km 210万円!」

俺はシャングリ・ラの【購入】ボタンを押した。

空中から4tトラックが出現して地面へ落下。フレームとサスペンションが軋む大きな音を立てて着地——バウンドした。

本当はユ○ック付きにしたかったが、それは後で考えよう。とりあえず人員と物資を運べれば良い。

17万Km走っている中古車だが、トラックで10万kmなんて慣らし運転の範疇。20万km過ぎてからアタリが出て本調子になるぐらいだ。

「うあああ!」「なんじゃこりゃ!」

突然出現した巨大な鉄の化物に人々は逃げ惑う。

「大丈夫だ! これは俺の言う事しか聞かない、馬なしで動く鉄の車だ」

「う、馬なしで動くだって?」

逃げ遅れて尻もちをついている男が車を見上げてつぶや呟く。

ドアを開けて運転席へ乗り込む。俺の免許なら中型まで乗れるし、トラックの運転も出来る。問題は無い。

まあ異世界で免許なんて関係無いけどな。

だが、こんな異世界でトラックに乗るとは思わなかった。キーを捻ると、ディーゼルエンジンが始動する。

最近のトラックはATもあるようだが、こいつはMT仕様だ。オートマ マニュアル ニュートラルN

にいれると、ちよつと派手目にエンジンを吹かす。

轟くエンジン音が怪物の咆哮に聞こえたのだろう。人々は次第に後ろに下がり始めた。

1速に入れると、クラッチを繋ぐ——すると、唸りを上げている鉄の塊はするすると前に進み始めた。

「おおっ！」「ホントに馬なしで動いてるぜ！」「魔法か？」
人々の驚く声を聞きながら、バックで元の場所へ戻ってきた。

俺はトラックから降りると、荷台に上がって皆に向かって叫んだ。

「こいつを使って野盗のアジトまで戦う奴を運んでやる。後、武器と盾も供給するぞ！これは一攫千金の好機だぞ！」

皆がざわざわと隣同士で話をしているが、名乗りを上げる奴は今のところはいない。

だが聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「どんな武器だにゃ？！」

尻尾を振りながら、トラックの荷台にいる俺を見上げている獣人の女。

「ミャレーか。そういえば、お前は弓が得意だと言っていたな」

シャングリ・ラから75ポンドという一番強いコンパウンドボウを購入する。コンパウンド式つてのは、滑車を使った複合式の弓だ。フレームにカーボンを使っているし完全にオーバーテクノロジーの代物だが、非常事態につきやむを得ない。

75ポンドともなると男でも引くのが大変だが、獣人はパワーがある。彼女でも十分に引けるだろう。

「にゃ！にゃんだこれ？！こんな凄い弓は見たことが無いにゃ！」

コンパウンドボウを俺から貰った彼女は目を皿にしているが、早速カーボンの矢を番^{つが}えてみせる。

関連商品に狩猟用の矢じりが売っているので、後でこいつに交換しよう。相手は外道だ、問答無用で良いだろう。

俺は、アイテムBOXから木の板を取り出して荷台から飛び降り

ると建物の壁に立てかけた。

だが、ミャレーはいつもと違うコンパウンド式の弓の扱い方が解らないらしい。

「ミャレー、もっと引いて。引き切ると軽くなるからな」

「こうにゃ？　——本当に軽くなったにゃ！」

「それで、ゆっくりと狙いが付けられる」

そして、カーボン製の矢が放たれると、板は真っ二つに割れて木片が飛び散った。

「凄い威力だにゃ！」

「でも引くのになんと時間がかかるので連射には向かないがな」

それを見ていた聴衆の中から獣人の男達が歩み出た。いつも俺の家で飯を食っていた獣人の男3人組だ。

リーダーのニャケロが一步前に踏み出してきた。

「俺たち達にも武器は、もらえるんで？」

俺が彼等に手渡したのは、150ポンド仕様のコンパウンド式のクロスボウ——値段は5万5千円だ。上部には光学式のサイトが装着されている。

普通の人間なら先端に付いている輪を足で踏んで両手で引き上げなければならぬが、獣人達は軽々と片手で引いてみせた。

「この弩弓の上についている丸い筒は？」

「それを覗いて十字に捉えれば、そこへ矢が飛んでいく。勿論、矢は山なりに飛ぶので、距離によって調節しなければならないが」

「へえ……」

ちょうど、ニャケロが覗き込んだ先、屋根の縁に留まっていた白い鳥がいる。

彼が狙いを定めて引き金を引くと、カーボン製の黒い矢が、白い羽を飛び散らせて獲物を貫通した。

「なんじゃこりゃ！ 凄すぎるぜ！ この大きさで、軍隊が持っている弩砲ぐらいの威力があるだろ」

「それなら、らくらく鎧も貫通するにゃ」

「ケンイチ、俺は剣が欲しいんだが」

「剣か……あまり大型の剣は無いんだよなあ」

だが、そんなことは言ってられない。再度シャングリ・ラで検索をしてみると、大型のマチェトが目に入った。

これなら結構デカイな。関連商品にハンドガードが付いた物も売っている。商品名はカッタラスとなっているな。

カッタラスと言えば、海賊映画で悪玉の船長が持っているような奴だろう。

一番デカイマチェトは全長80cmもある。これは銃刀法ナントカは平気なのだろうか？

ハンドガードが付いているマチェト2本と、全長1mのバトルアックスを購入してみた。3本とも1万前後の代物だ。

アックスは刃の反対側はピック状になっていて鋭く尖っている。これで殴られれば薄い鎧は容易く貫通するだろう。

目の前に購入したマチェトとアックスが落ちてくる。

「俺が持っている在庫では、これしか無いな。これでダメなら街の武器屋で購入するしか無いが……」

「随分と薄い刃だな。折れちまわねえか？」

獣人が2人、マチェトを取ると突然斬り合いを始めた。だが本気でやっているわけではない。軽い模擬戦だ。

だが、そのスピードは半端ではなく、剣がぶつかる度に金属音と火花を飛ばす。

「へへえ！ 薄いから軟かと思ったら、折れも曲がりもしねえ。こいつは氣に入ったぜ」

「魔法で強化してあるからな」
大嘘だ。

「マジかよ」

「それじゃ、俺はこの斧をもらうぜ」

鉄無垢のバトルアックスなので結構な重量があるのだが、男は片手で楽々と振り回している。

こんなの食らったら真っ二つだな——剣呑剣呑。

「おっしゃ！ この話、乗ったぜ！ そろそろ、デカイ稼ぎをしようと思っただころだしよ」

リーダーのニヤケロの話に他の2人も頷く。勿論、ミヤレーも話に乗るようだ。

「そうか、やってくれるか」

「おう！」

3人の獣人が剣と斧を掲げてクロスさせ氣勢を上げる。

これで俺を入れて5人か……。

「それでは私も参加させていただくかな」

やってきたのは俺の店のお得意様——騎士爵様だ。

「おお！ 騎士爵様が一緒に行ってくれるとは、これは心強い」

「貴公も、やむを得ず魔法を見せてしまったのだろうが、このような物まで出せるとは……」

「もう、ヤケクソですよ」

「それより、我がウルフファンクが完成したぞ？」

騎士爵様が銀色に光る刃渡り1m程の大剣を掲げる。おそらく俺が提供した鋼材――A〇S―34で打たれた剣だろう。

「ウルフフアングとは……?」

「当然、この剣の名前だ。しかし鍛冶屋の親父も、この鋼材の扱いには相当苦勞したらしく泣いていたぞ」

なんだか、うっとりとした表情で剣を眺める彼だが、この人もちよつと変わった人だったようだ。

「なにせ普通の鋼鉄とは違いますからね」

「うむ。シャガ狩りとは我がウルフフアングの初陣に相應しい。たつぷりと悪人どもの血を吸わせてやることにしよう」

「よろしくお願いします」

さて、これで6人か。確かに騎士爵様が合流してくれたのは、こころ強い。何があっても彼が証人になってくれる。

この世界で公人が一緒にいるというのは、色々はかどと捗るのだ。

だが――まだまだ戦力が足りないな。

「ほほ、中々面白そうな事をしようとしているな。命知らずも良いところじゃ」

暗い緑色のローブを着た白髭の爺さんが、そこにいた。俺がいつもアイテムを買っている道具屋の爺さんだ。

「まさか爺さんも、やろうってんじゃないだろうな。年寄りの冷水だぞ?」

「何を言うか。それでも元冒険者じゃぞ? ほれ」

爺さんが下から上へ手を動かすと、地面に小さい火柱が立ち、地面を焦がす。

「おお！ 爺さん、やっぱり魔導師だったのか？」

「すでに引退した身じゃが。最後に一花咲かせるのも悪くないじゃろ。それに、お前さんが使っている魔法にも興味があるしな」

「魔導師がいれば、戦力としてかなり強化されるな」

前衛を獣人達に任せれば、後衛から強力な魔法が使える。RPGのセオリーだ。

「ほほ、そういう事じゃ」

これで、7人……。

だが、もう一人男が歩み出た。そいつは俺が家までベッドを運んでやったマツチョコな男だ。

「あんたか……あんたも元冒険者とかなのか？」

「一応登録はしてあるぜ。黒狼狩りに参加した事もあるしな」

「でも、あんたは新婚だろ？」

「ああ、そうなんだが——実は旦那の店で色々買い込んだら、女房から怒られちゃってな」

「金を使いすぎたか？」

「生活するならボロで十分、新品なんて要らないのに——って言われちゃって」

「なんだそれ、滅茶苦茶良い女房じゃないか」

ノロケか？ ノロケなのか？

「そうなんだよ、俺には勿体無いぐらいの女だ。だから女房には良い暮らしをさせてやりてえ」

おい、ちょっと待て。

「そのためには金があるじゃねえか」

こら、止めろ。変なフラグ立てるんじゃないやねえ。

「どうしてもやるのか？」

「おう！ 俺はやるぜ！」

「そうか、やるのか」

ちよつと危険なフラグが立って危ない気もするが、これで8人だ。猫の手も借りたい気分なので大変にありがたい。

「ちよいと！ あたしを仲間外れなんて酷いじゃないかい！」

そう言って現れたのは、派手な服装にアクセサリーをジャラジャラと鳴らした、ウチの隣店の店主アマナだ。

「何を言ってるんだ、アマナ。戦闘なんだぞ？」

「いくら戦闘だって飯は食うんだろ？ 飯の用意ぐらいは出来るさ」

「うーん、そう言われればそうだな」

「その代わり危なくなったら、あたしや逃げるけどね」

「解った」

アマナが加わってくれたが、戦力としては期待出来ない。もう少し戦力が欲しい。

俺はもう一度、荷台に乗ると聴衆へ向けて叫んだ。

「俺も、戦闘用の召喚獣を使うぞ、超強力な鉄の魔獣だ！ 見てろ！」

荷台の上から呪文を唱えた。

「ユ○ボ召喚！」

4tトラックの横に緑のパワーショベルが出現する。

俺は座席に乗り込むと、エンジンを始動させて、スロットルを全開にした。

そして、その場でグルグルと回ってみせて、アームを高く掲げると――そのまま地面へ向けて振り下ろす。

地面を揺るがす大音響と共に鋼鉄製のバケットが地面へ食い込む

と、それを見ていた聴衆は腰を抜かした。

「どうだ！ この鉄の魔獣があれば、野盗の10人や20人は軽く薙ぎ払えるぞ！ もう一度言う、これは一攫千金の好機だ！」

「お前さん、調教師テイマーなのか？」

爺さんが驚いた顔をして俺の所へやって来た。

「まあな」

このデモンストレーションが効いたのか、冒険者7人が名乗りを上げてくれた。

正直、噂の通りで相手が50人の悪党だとすれば、それでもかなり分は悪い。

だが馬鹿正直に正面から当たる必要など無いのだ。寝込みを襲う等、奇襲を掛ければチャンスはある——と思う。

コンパウンド式のクロスボウを10台購入して使いたいやつに配る。マチェトも欲しがっている奴がいたので、追加で3本購入した。

「言っておくが武器は貸すだけだからな。後で回収するぞ？」

「こんな凄い武器なんて金じゃ買えねえ。それも仕方ねえな」
クロスボウをいじっている冒険者の1人がつぶやく。申し訳ないが完全にオーバーテクノロジー品だからな。巷に流れると拙ますい。

——っってもう遅いかもしれないが。

メンツが決まったので冒険者ギルドで、シャガ討伐の申し込みをする。

職員から驚きの表情で見られるが至って本気だ。

成功すれば、ギルドからの報酬、マロウ商会からの報酬、そして国からの報奨金が合計され、かなりの金額になるのは間違いない。

まあ、生きて帰ればの話だが。

「ケンイチさん！ 何か隠し事をしている方だとは思っておりまし

たが、このような魔法を使える方だとは、つゆ知らず……」

「マロウさん、お願いがあります」

「わ、私に、できることなら、なんなりと」

シャングリ・ラには冒険者の装備として無い物が多い。例えば鎧や防具だ。

一応、鎧やアーマーで検索を掛けてみたが、そのような物は売っていないかった。

マロウさんの知り合いの武器屋を紹介してもらい、足りない武器や防具を揃えてもらう。

レザーアーマーやスケルメイル、チェーンメイルなど、当人の好みによって違うようで、それぞれの好みに合わせて購入している。

武器も、より大きなツーハンドソードなどが欲しい者がいる。だが、どうせ戦闘で使うのだ中古の防具で十分だ。

中古の装備であれば、マロウ商会の金を使って購入してくれる事になったので、冒険者達もここぞとばかりに装備を新しくしているようだ。

そして弓を使う者は矢筒を買っているが、矢は俺から供給する事にした。

この世界で売っている矢では、コンパウンド式のクロスボウに合わないかもしれないからな。

俺も一番軽いレザーアーマーを買ってみた。

勿論、剣など振ったことがないし、斬り合いに参加するつもりもない。使うならコンパウンドボウか、スリングショットだろう。

「ああ、盾は俺が良い物を持っているので買わなくても良いから」

「その盾ってやつも魔法が掛かった凄い奴なんだろう？」

ニヤケロが俺に話しかけてくる。

「まあ、そんなところだ。ここでは出せないので、街から出てから

見せてやる」

「へへ、そいつは楽しみだ」

「飯も全部、俺が用意してやるから心配するな。全部アイテムBOXに入っているから美味しい物が食えるぞ」

「ひょー！ そいつは楽しみだぜ」

冒険者の1人が、表情をほころばせる。

「旦那の飯は美味いからなあ」

「にゃー！」

獣人達も飯に期待しているようだ。

「遠征に向かうと不味い飯ばかりになるからなあ」

「美味しい飯を食うだけで、やる気が違うつてもんよ」

運転席に乗り込んで燃料計を見ると軽油があまり入っていないが、50kmぐらいなら保つだろう。

殴り込みの前に食事を取るので、その時に追加の燃料を入れるか。

装備を整えるのを終えた15人の冒険者と1人の女が、4トトラックの荷台に武器などの装備と一緒に乗る。

昼が終わる頃、人々に見送られ街の西門を出て荒野を目指し出発した。

人々の中には指を差して嘲笑を送る者もいる。
たった15人で敵うはずが無いと言うのだ。

だが、男にはダメだと解っていても、行かねばならぬ時があるんだよ。

25話 荒野の討伐隊

俺は4トトラックに冒険者達を乗せて、シャガという野盗の集団を討伐するために荒野を目指す。

アジトの近くまで行くのに街道を走るが、この世界は左側通行である。日本と同じだ。

トラックに乗っているメンツは——俺を合わせて15人と女1人。隣店の女主人アマナが飯炊き役を買って出てくれたのだ。

野盗のアジトは街から50km程離れている森の中と場所は判明している。

朽ちた古城の跡を本拠地として悪事を働いているのだ。その数はおよそ50人。

人を人と思わない凶悪な奴らが揃っているらしい。そんな奴らに捕まった、プリムラさんは一体どうなっているのか？

ハンドルを握りつつ、そんな事をついつい考えてしまうのだが——いや止めよう。今は彼女を助ける事だけを考えるのだ。

冒険者ギルドでも何回か討伐の計画があったようなのだが、人数が集まらず中止となっている。

これだけ被害が出ているのであれば、国で軍を挙げての大規模な討伐隊が組まれても良いはずなのだが——。

何故か軍の腰は重いと言う。

「結局お偉い人は、あたし達みたいな下々の事なんて考えちゃいないのさ」

助手席に乗っている、アマナがそんな事を言う。確かになあ——何か理由があるのかもしれないが。

騎士爵様なら何か情報を知っているかもしれない。

「しかし本当に馬なしで、こんな速さで走れるなんて驚きだよ！魔法って凄いんだね！ 乗り心地も凄い良いしさ。 馬車でこんなスピードを出したら大変な事になるよ」

そりゃ、ゴムタイヤでもなく碌なサスペンションも無い馬車では、荒れ地での乗り心地は最悪だろう。

アマナは、この車を魔法だと信じているようなのだが、それは荷台に乗っている男達も同じだ。

俺としては魔法だと思ってくれていたほうが助かるのだが……だって説明のしようが無い。

畑が広がる街道を抜けると、そこは荒野。昔から畑作が行われて、土地が痩せてしまった結果なのか荒涼とした土地が広がる。

街道を外れて荒野の中へと進路を変える。敵のアジトがある森は、この向こうだと言う。

結構凸凹の道だが、4WDのトラックにしてみれば、なんてことは無い。

元世界でも、畑へそのまま乗り込んで農作物の積み込みをしたりしているのだ、このぐらゐの荒れ地なら物ともしない。

雨でも降れば泥濘ぬかるむ可能性があるが、雨はそんなに降らないようなので、その心配も無いだろう。

横をみると、獣人達がトラックに追走しているのが見える。

この鉄の車と駆けっこをしているのだ。

「本当に馬なしで速く走れるんだな！」

「ああ、もっと速度も出るが、荒れ地で凸凹しているから、ゆっくり走っているんだ」

今は速度を落として時速30km程のスピードで走っている。

もっと速く走れない事もないが、荷台に乗っている男達が、とんでもない事になるからな。

いまでもケツが痛いだろうから、大きなクッションを買って尻に敷いてもらっているのだ。

1時間程走り目標まで残り10kmの地点まで来たので一旦停止。飯の準備をしつつ今後の作戦を練る事になった。

作戦と言っても急遽集められた冒険者の集団に高度な作戦が出来るはずもない。

打ち合わせるのは何時頃突入するかだ。

「こんなに早く着いちゃったぜ！」

「全く、こりゃすげえもんだ。それに馬車より乗り心地が良いときた」

「これが本当に魔法で動いているのなら世界が変わるのじゃが……」
まあ、魔導師の爺さんはこれが魔法じゃないと、気がついているようだが――。

「爺さん、こいつは油を食うんだ、大量にな。1回動かす度に大瓶1つぐらいの油を食う」

「なんじゃと！ それでは油代だけで破産するわい」
俺の説明に、爺さんがタマゲた。

「ハハ、そうそう都合の良い物は無いって事だよ」

ここに中継基地を作る事にして、とりあえず腹が減っては戦はできぬ。飯の準備をする。

先ずはスープだな。カレー味のスープにしようと思う。あくまでスープで、とろみの付いたカレーではない。

しかし、どのぐらい作ればいいのだろうか？ 1人500mlと

して、16人で8Lか……。ちょっと多めに10L作るか。

シャングリ・ラを検索して大型の鍋を探している間に、アイテムBOXから薪を出して火を起こしてもらおう。薪も山ほどあるからな。火熾しは爺さんが魔法でやるというので、任せた。

サイトで業務用の圧力鍋を見つけた、容量が20Lで5万円だ――大は小を兼ねる、これで良いか。

カマドを作る石が無いので、コンクリートブロックをアイテムBOXから出して、転がって落ちてきた圧力鍋を乗せる。

「それはまた見事な鍋じゃのう」

「爺さん、これは非売品だからな」

「そりゃ残念」

鍋にアイテムBOXから出した水を半分入れる、20Lの鍋に半分入れたんだから、これで10Lだろう。

アマナと暇な奴に野菜の皮を剥いてもらい鍋に次々と投入。

俺は、カセットコンロに中華鍋を出して肉を大量に炒める。アイテムBOXに入っていた角ウサギの肉も使ってしまう。

炒め終わったら、こいつも投入。だしの素を大量に投入して、塩で味付け。

「こんなに大量に作ったのは初めてだわ」

「相変わらず旦那は手慣れてるねえ。男でその手際は拙い^{まず}んじゃないのかい？」

「この歳まで独身なら、このぐらいは出来るぞ」
「それは自慢出来る事なのかい？」

この世界では12〜13歳で働き出して、早ければ15歳ぐらいで結婚してしまう。俺ぐらいの歳まで独身って言うのはちょっと、何か問題があると思われるけど仕方ないようだ。

「俺の故郷ではな、この歳まで独身なら誰でも魔法使いになれるっていう話があるぐらいだ」

「それで、魔法使いになれたのかい？」

「違うけどな」

「もう、旦那の話はどこまで本当なのか……」

俺のテキトーな話に、アマナが呆れている。

塩梅は良いので圧力鍋の蓋をする。火が強いので、20分もすりゃ美味しいスープが出来る。

すぐに、カタカタという音が鳴り、蓋の頭から蒸気が吹き出してきた。

「おおお——いい匂いがしてきたぜえ」

「もうすぐ出来るからな。煮えるまで待ってくれ」

昼飯無しでやって来たからな腹が減っているだろう。

彼等と話しながら、10分程で火から下ろす。このまま予熱を使っても十分に煮えるからな。

——10分後。

カチャ！ という音と共に鍋の圧力弁が落ちる。

そして最後の仕上げを行うために、シャングリ・ラからカレー粉を購入する。箱に入ってるカレーパウダーではない。赤い缶に入っている粉の奴だ。

それを、ザザザっと一缶丸ごと投入し、かき混ぜればカレー風味スープの出来上がりだ。

シャングリ・ラで無地の皿とスプーンを人数分用意して、お玉杓子で取り分け。

パンもシャングリ・ラで買った物を山盛りだ。スープもパンも余ったらアイテムBOXに入れば良いのだから遠慮することはない。だが、この戦いで俺が死んだら中の物は永久に失われるか、このサービスをやっている所に回収されて終了なんだろうな。

「うめえええ！　こりゃ、香辛料を使ったスープか？　これは奢^{おご}ったもんだな」

冒険者の1人がスプーンを天に掲げて叫ぶ。

「いやいや、この旦那の料理はいつもこんな感じよ」「そうだにゃ」
ニャケロ達は何やら得意気なのだが、何故お前らが得意気になるんだ？

アイテムBOXから猫缶を4つ出して彼等に手渡した。

「最初に名乗りを挙げてくれて助かったよ。無事に帰れたら、もっと奢^{おご}るからな」

「ひゃっほう！」「にゃー！」

獣人達は大喜びで猫缶をぱくついているが――それを見ると俺はいつも複雑な気分になる。

「獣人達は何やら美味そうな物を食っておるの」

「爺さん、あんたもか？　アレは獣人用の食い物なんだが……」

「そんな物があるのか？　獣人が食えるのなら、わし等だって食えるじゃろ？」

爺さんの催促を断れず彼にも猫缶を皿に開けてやる。

「む、柔らかくて、こりゃ中々いける」

マジかよ……それでいいのか？

「あ、そうだ。酒も出さないとな。強い酒は拙^{まず}いからワインで良いか」

この世界じゃ基本的に飯の時にはワインを飲む。生水が信用出来ないからだ、水石で浄化した水があっても、それは変わらないよ
うだ。

ワインも赤しか無いからな、白は拙い^{ます}。検索をして、【お徳用赤ワインセット12本入り】これにするか——値段は6000円なので、一本500円だ。

「とりあえず12本出した。戦前だから、こんなもんで良いだろう？」陶器製のカップも12個出す。スクリューキップに皆が戸惑っているようなので、開けてやる事にした。

もう、ここまで来て何も隠すつもりが無くなった。ここで死んだら終いなんだ、後は野となれ山となれだ。

もしかして復活の呪文が使えるかもしれないが、使えなかったらどうする？

この世界の蘇生について考えていると、ワインを飲んだ1人が大きな声を上げた。

「おいおい、こんな上等なワインを飯時に出していいのか？」

「まあ好きなだけ飲んでくれ。でも戦えないのは困るぞ？」

「うむ、確かに上等なワインだな。これは大貴族の屋敷で飲んだ物と、そう変わらない」

シャングリ・ラで売っている赤ワインでも、一番安い類だがなあ。

騎士爵様がそう言うのだから間違いは無いのだろう。

「そういえば騎士爵様に庶民の食べ物をそのままお出ししてしまったのですが、お口に合いましたでしょうか？」

「いや、これなら王侯貴族の屋敷で出る料理に比べても遜色は無いだろう。実に見事なものだ」

「ありがとうございます」

飯も食い終わり腹も膨れたので焚き火を囲んで作戦の打ち合わせをする。

「やっぱり寝込みを襲うかい？」
アマナが切り出した。

「そうだなあ。でも、この鉄の車で突入したら、どのみち奴らが起きてきそうだな。そういえば砦には門とかは、あるのか？」

「そりゃ古城を根城に使ってるからなあ。あるんじゃないか？」
ニヤケロが、そう言うワインの瓶を一口呷った。

「門があるなら、わしが魔法でなんとかしよう」

「爺さん魔法で吹き飛ばしたり出来るのか？」

爆裂系の魔法か――爆裂魔法エクスプロージョンとかかな？

「まあ、そんなところだ」

「それじゃ寝込みよりは酒を飲んでいい気分になっているところをやるか。急に動けば、へべれけになって動けなくなるだろう」

俺はニヤケロが酒を飲み、川で泳ごうとして溺れた時の事を思い出していた。

「そりゃ良いかもな。ああいう連中は三度の飯より酒と女が好きだからな」

いつもと違う防具姿のマツチョが俺の考えに賛同してくれた。

「うむ、私もそれに賛成だ。酒が入れば思考力も低下するからな。統率も乱れるだろう」

「それに、酒や飯を食ってる時なら、防具も付けてないだろうしな」
この世界は大体、夕方暗くなると飯を食いながら酒を飲み始める。酔いがピークになるのは2時間後ぐらいか……。

騎士爵様も賛成してくれたので、それに合わせて作戦が練られる事になった。

まず、ミヤレーが斥候で出て、見張りがいれば潰す。夜目が利く

彼等は偵察や斥候にぴったりだ。

それに彼女の身体は黒っぽいからな、暗くなったら溶け込み解らなくなるだろう。

俺は斥候するミャレーのために、シャングリ・ラから5Wのトランシーバーを購入した。評価欄を見ると1kmぐらいは電波が飛ぶらしい――一台3万円だ。

「ミャレーには、これを貸してやる。遠く離れた場所から会話が出来る魔道具だ」

「本当に会話できるにゃ?!」

彼女の耳と尻尾がピン! と伸びる。

電源を入れて彼女に使い方を教えてやる。会話するだけならボタンを押すだけだから簡単だ。

「おーい聞こえるか?」

「にゃ! この中から、ケンイチの声が聞こえるにゃ!」

「会話をするときは、そのポッチを押してな」

「聞こえるにゃ!!」

声がデカイ! すると、ミャレーはトランシーバーを持って全力で走り始めた。

かなり遠くまで彼女が駆けて行って、ゴマ粒のようになったところで、再度トランシーバーに向かって話し掛けた。

「おーい! ミャレー聞こえるか?」

『にゃあー! 聞こえるにゃ! 凄いにゃ! なんだこれにゃ!』

「魔法だよ魔法」

『魔法かにゃ! 凄いにゃ!』

凄い凄い連発してて会話にならん。

「お前さん、そんな物まで持ってるのか……そんな物、帝国の魔導師でも持つとらんぞ？」

何を今更、ディーゼルエンジンのトラックとユ○ボだって持っていないだろ。

「爺さん、見なかった事にしてくれ」

ミャレーに、こいつを持たせて斥候に行かせれば敵の様子が解るだろう。

彼女が戻ってきたので、コンパウンドボウとクロスボウの矢じりの交換をする事にした。

矢は全部ねじ込み式になっていて、目的に応じて自由に交換出来るのだ。

矢はカーボン製で12本3500円——コンパウンドボウとクロスボウは12台、それに24本ずつ配るから、3500円×2×12台＝8万4千円だ。

狩猟用の当たったら死にそうな矢じりは6個で900円。全部の矢に、こいつを装備すると——4万3千200円だ。

皆に矢じりを配って付け替えてもらう。相手は50人なんだから、これだけあればなんとかなるだろう。

「なんだ、この矢じりは……芸術品なのか？」

矢を一本手にとった騎士爵様が呟く。寸分の狂いもなく同じ形に作られた元世界の文明の利器。ステンレスとアルミで出来たその形は、菱形でステルス戦闘機かロケットのようにも見える。

交換し終わった矢を使って、各々が射撃練習を始めた。

特に、ミャレーは念入りだ。敵の見張りを狙撃する仕事があるから遠距離射撃をしなくてはいけない。

コンパウンドボウなら100m以上余裕で届くから十分に可能だ。

「凄いにゃ普通の弓の倍以上簡単に届くにゃ」

そう言うと、彼女は100mほど離れた枯れ木に矢を見事命中させてみせた。

「ミヤレー凄いな」

「これぐらい余裕だにゃ」

「いや、マジで凄い」

「ふにゃ、それ程でも——あるにゃ……」

やはり自分でも弓は自信があるらしい。

「そうだ、盾を渡す約束だったな」

俺はシャングリ・ラから、ポリカーボネート製のロングシールドを購入した。暴動鎮圧とかでよく使われる奴だ。凄く軽くて丈夫——1枚4万円だ。

とりあえず5枚程購入。

「なんじゃこりゃ！　すげえ軽いぞ！」

ロングシールドを受け取ったマツチヨが叫んでいる。

「透明だけどガラスなのか？　こんなに軽いけど、これで大丈夫なのか？」

初めて見る素材だろうし心配になるのも無理はない。

「ニヤケロ、ちょっと切ってみな」

彼が俺から貰ったカッタラス刀を振りかぶると、ロングシールドに向けて切りつけた。

鈍い音を立ててシールドがたわみ、白い傷が入るが裏までは到達していない。

「何回も同じ所を傷つければ裏側へ抜けれると思うが、戦闘中にそん

な事をするのは、ちょっと無理だろう」

「おおっ！ ペラペラで、ちょっと心配だったが結構凄えじゃねえか！ なんかすげえ物ばかりだぞ！」

「これだけの装備があれば悪党共にも対抗出来るだろう？」

「おう！」

冒険者達は、それぞれに氣勢を上げて士気も高い。

「ヒヒヒ、こいつを売れば良い金になるなあ」

「お前さん、そいつは洒落にならん冗談じゃな。欲をかくと碌な事にならんぞ？ 野盗を討てれば大金が舞い込んでくるじゃろうが」

ちよいと捻くれていそうな冒険者が言った言葉を爺さんが窘めた。たしな

「なんだよ軽い冗談だろ？」

「どうだかのう」

死ぬかもしれない討伐の仕事から逃げ出して、目の前の小銭を欲しがる奴がいてもおかしくはない。

だが仲間を捨てて途中で逃げたりしたのがバレれば、ギルドからの処分もあり得る。仕事の斡旋停止とかな。

まあ全滅しそうになったので撤退したって言われれば、それまでののだが――生き残りがいて証言されれば、そこで終了だ。

嘘を見破る独自魔法ユニークなんてものもあるらしいしな。

今回、俺達と一緒に付いてきたアマナは、討伐隊のメンバーには登録していない。

それ故、危なくなったら逃げると公言しているのだ。

彼女は、このキャンプに留まって俺達の帰りを待つ事になった。

1日経っても俺達が戻らなければ討伐は失敗。アマナはそのまま街へ戻って、ギルドへ報告を入れる手はずになっている。

「騎士爵様、盾は？」

「私はいらないな」

「ケンイチ、俺たちには、もっと小さい盾がないか？ あれじゃ動きまわるのに邪魔だ」

「そうか」

獣人達のリクエストにお応えして、ロングシールドの半分ぐらいのラウンドシールド――バックラーを購入した。これもポリカーボネート製だ。

「これはどうだ？」

「おほ、このバックラーは、俺たちにぴったりだぜ」

ニャケロが、バックラーに腕を通して振り回している。中々具合が良いようだ――これは6000円だな。ミャレーも欲しいようなので、これを4枚購入した。

ロングシールドは全部で9枚購入して、合計36万円だ。

全く戦ってのは金が掛かるもんだな。

だが装備は整い俺達は日が暮れるのを待つ事になった。

26話 突入！突入！突入！

暗くなるのを待って突入する事になったので、それまで待機する事になった。

改めて装備の確認をする。

何か良い物がシャングリ・ラにないか——これなんか、どうだ？
忍者が使っていたクナイに似ている投げナイフだ。

刃渡り10cmぐらいで持ち手にはパラコードが巻いてある。後端はリング状になっており見た目はモロにクナイだ。

「こんな物もあるが——投げナイフだ」

俺が目の前に投げナイフを2本出すと冒険者達が飛びついた。

「おおっ！ これも良いじゃねえか。 旦那、色々と良い物を持ってるな」

それぞれ2本ずつを10人程に配った。1本3500円なので合計7万円だな。

「これぐらいなら後で返さなくてもいいぞ」

「マジか。旦那、中々太っ腹だな」

シャングリ・ラじゃ3500円だが市場で買えば銀貨1枚（5万円）とか普通にするからな。

俺用には、エアガン用のレーザーサイトを買ってみた。戦場は暗闇だろうからクロスボウに装着すれば役に立つかもしれない。

近距離なら、こいつの赤い光に合わせれば百発百中だろうが、スITCHの入れ方や扱い方が面倒なので冒険者達には向かないだろう。

敵の根城へ行くのが昼間なら、ドローンで偵察も出来ると思うのだが真っ暗じゃ無理だな。

それに、いきなりイジって飛ばせるかも解らないし。

シャングリ・ラを覗いて色々悩んでいると爺さんが戦闘用の交換した矢じりを見ている。

「ほう、これは見たことがない金属じゃの」

爺さんが何か魔法を使おうとしたようだが――突然、眩^{まばゆ}い光が瞬き始めた。

「こりゃ！ イカン！」

光が弾けて辺り一面に輝く破片となって散らばる。

「爺さん、何をしたんだ?!」

「いや、ちよいと簡単な魔法をな……金属や石には魔法の触媒に使える物があるのじゃよ」

「それじゃ――見たことが無い金属があったので、それを試してみようとしたのか？」

「その通りじゃ」

爺さんが持っていたのは、皆に渡して交換した矢じりだ。多分、ステンレスだと思うが……先端は鋼のチップが付いている。

シャングリ・ラでステンレス製のカップを買って爺さんに渡してみた。

「爺さん、これはどうだ？」

「どれどれ……」

爺さんが魔法を試すが目の前に小さな光の玉が浮かぶだけ。

「これではないようじゃな」

うーん？ それじゃなんだ？ 矢じりを改めてみると先端は鋼だがシャフトの部分はアルミかもしれないな。

シャングリ・ラから、肉厚10mmで10cmぐらいのアルミ板を購入して爺さんに渡してみた。

そいつを手にとって爺さんが魔法を発動すると目くらま^{まばゆ}ような眩い光が辺りを照らす。

「おお！ これじゃ！ これを、わしにくれ！ これがあれば討伐の褒賞なんぞ要らんわい」

「本当かよ」

「本当だ。どうじゃ？」

「それで良ければいいぞ。長年、道具屋やっている爺さんが見たことが無いってことは珍しい金属なんだろう？」

「ああ、こんな金属は見たことが無い！」

爺さんは年甲斐も無く大はしゃぎしているようなので良いだろう。

「若い頃に、こんな物が手に入っておれば、わしももっと活躍出来たののに」

そんなに凄^{まじ}いのか？ それじゃ、この世界でアルミ製品を売るのは、ちよつと拙^{ちやう}いな。材質等に気をつけないと……。

後、使えそうな物は……。おお！ これなんか、どうだ？

俺がシャングリ・ラから購入したのは爆竹だ。これは威嚇や混乱に使えるだろう。

火を点けるためのターボライターも購入する。爆竹は300円、ターボライターは1個1000円だ。

「よし！ 俺の魔法も、ちよつと見せてやる」

そう言っ^て爆竹に火を点けると、人のいない所へ放り投げた。けたたましい連発音が轟き、飛び散る紙の破片が舞う。

「ふぎゃーっ！」

ミャレーが毛を逆立てて逃げはじめ、他の冒険者達も尻もちをついている。

「ははは！ これに殺傷能力は無いが威嚇に使えるだろう」

辺りに白い煙と火薬の臭いが立ち込める。

「畜生！ びっくりしたぜ」

「確かに威力はなさそうじゃが十分に使えるな」

魔導師の爺さんのお墨付きも出たが、顔面近くで破裂すれば十分な威力があるし、耳を塞ぎ行動不能にさせる力も十分にある。

ガキの頃、手に持って破裂させた事があったが内出血で大変な事になった。

武器といえば草刈機やチェーンソーも立派な武器になるが――人間相手にあれを使うのはなあ。

相手が外道なら、それでもいいのか？ でも、やはり抵抗はある。

そうそう、トラックの燃料を入れないとな。車体右側にある黒塗りの燃料タンクの蓋を開けると、アイテムBOXから白灯油を改造した燃料を20L程入れた。

燃料タンクには容量70Lと書いてあるが、この討伐が終わって街へ帰れるぐらいは保つだろう。

確かリッター8〜9kmぐらいは走れるからな。タンクに30L入っているとすれば、240km〜270km走れる計算になる。余裕だ。

まあ無事に帰ればの話だが。

これだけ装備があれば何とかなるだろう。俺達は決戦のためにキャンプ地で夕方を待つことにした。

— — — — — ◆ ◆ ◆ — — — — —

——そして夕方。

空が赤く染まる頃、俺達は行動を開始した。

トラックに皆を乗せて敵の本拠地を目指す。オドメーターで5 km程の地点で森になった。

森には古城までの道が付いており、これだけ場所が判明しているのに国が何も手が打てないってのはイマイチ解らん。

すでに森の中は暗いのだが、ヘッドライトは点けずに走行しているので、ノロノロ運転だ。

その俺達の前を、ミャレーがトランシーバーを持って斥候として先行している。

「ミャレー、敵はいないか？」

『いないにゃ！』

ガタガタ道をハンドル片手にトランシーバーを使ってミャレーと交信をする。

彼女も、トランシーバーの使い方に慣れてきたようだ。

所々に水たまりもあるが、4WDのトラックなら心配要らない。

左右に大きく揺さぶられながらクリアする。

幸い泥濘ぬかるみにはなっていないようだ。

徐々に辺りも暗くなり、この世界には外に灯り等は一切無い。

灯りといえば空に光っている月と星ぐらいのものだ。元世界と同じように月は1つだが、見慣れた星座が夜空に一個も無いのが少々寂しい。

森に入ってから4 km程の地点で一旦停止、エンジンを止めた。

運転席を降りて荷台へ行くと、皆と一緒にミャレーとの通信を聞

く。残りの距離は1 kmぐらいなはずなので、ミャレーとの交信もギリギリ可能のようだ。

「ミャレー、どんな感じだ？」

『石の城壁に囲まれて、大きい木の扉が付いているにゃ』

「敵はいそうか？」

『城壁の上に櫓やぐらが伸びてて、見張りがいるにゃ』

「中に人はいるか？」

『声を聞くと、沢山いるにゃ』

数が数えられない獣人に具体的な数字は無理だが、かなりの人数がいるらしい。

こりゃ、かなり無謀な作戦になるなあ。解りきっていた事だが、かなりのハードモードだ。

それから、1時間程じっと待つ——辺りは完全に真っ暗だ。

「さて、そろそろ行きますか？」

「うむ、頃合いだな」

騎士爵様の合図を持って行動を開始する。この中では若いながら、彼が一番身分も高く実戦経験も豊富だ。

これだけの人材が1代限りの騎士爵なのだからこの国の先行きも危うい。

恐らくは王侯貴族の愚息共が、主要な地位を占めてしまっているのだろう。

「旦那、これやっつけ」

獣人から1枚の葉っぱを渡される。

「旦那は戦闘の経験が無いみたいだから、やった事ないだろう？　こ
うやって噛むんだよ」

そう言うと、ニヤケロが葉っぱを噛み始めた。

「こうか？」

葉っぱを咀嚼そしゃくすると口の中に青臭い臭いと苦味が広がる。

「なんだ、苦！」

すると次第に口が痺れてきて呂律が回らなくなる。

「なんらこれ、らいりようむなのか？」

「ハハ、大丈夫大丈夫、すぐに効いてくるぜ」

なんだか狐につままれたようだが身体に異変が起きた。

目の中がパチパチと弾け光の粒子に満たされる。

すると急激に視界が広がり暗いものにもかかわらずに色が鮮明に見えるような気がする。

「ハハハ、なんだこれ！　ハハハ、これってヤバイ葉じゃないのか？」

「大丈夫だって。やり過ぎると廃人になるらしいが余程馬鹿じゃないと、そこまで行かぬえ」

「ハハハ！　やっぱり、ヤバイ奴だろ」

なんだか解らんがやたらに楽しい。これから死地へ向かうというのに笑いが止まらない。

「よっしゃ行くか！」

「「おう！」」

トラックの運転席に乗り込み、エンジンを掛けると、トランシーバーでミヤレーと通信する。

「ミヤレー、行くぞ！」

『解ったにゃ！　見張りを仕留めるにゃ！』

「行くぞオオ！」

ヘッドライトをオンにすると、アクセルを踏み込む。残りの距離は1kmも無い。1分〜2分もあれば到着する。

森の中の細道を、トラックで疾走する。後ろの荷台の事など全く考えていられなくなってしまった。

とにかく楽しくて仕方ないのだ。

およそ、1分半後、石で出来た古い砦と大きな木の扉が見えてきた。高さは3m程はあるだろう。

俺達のトラックを見つけて、見張りを片付けたミヤレーが荷台へ飛び乗ってきた。

「爺さん！ 頼むぜ！」

俺は窓から首を出して爺さんに声援を贈った。

「任せてもらおう。『虚ろな異空へと通じる深淵の縁よ、消え逝く魂から我に力を与えよ』」

彼の呪文の紡ぎに合わせて扉の前に青い光が集まっていく。

エクスプロージョン
「爆裂魔法！」

青い光が赤い爆炎に姿を変えると、巨大な扉が粉々に吹き飛び辺り一面に破片が散乱し舞落ちる。

同心円状に衝撃波が走り森の草木を揺らすと、爆心地に近い大木が枝がこすれ合う音を立てて地面へ倒れこんだ。

だが勢い余ったのか石の城壁まで吹き飛んだようだ。

「すげえええ！ 爺さん、すげえな！」

「ははは、お前さんから貰った金属のお陰だが、ちょっと制御が難しいようじゃな」

だが目の前の障害物だった大きな扉は消し飛んだ。

「爺さん！ その凄いのは、もっと撃てるのか？」

「いや今日は、これで打ち止めじゃな」

さすがに、大魔法は何発も撃てないようだ。そりゃ、そうだな。

「行くぜええええ！」

俺は、アクセルを踏み込むと、まだ残っている爆炎の中へ飛び込んいく。

ガタガタと破片を乗り越え、煙を通り抜けると広場に出た。

広場の何箇所かに、かがり火が焚かれており薄っすらだが周りを見渡す事が出来——ここにくる前に噛んだ葉っぱのせいなのか視界もクリアに見える。

目の前には高台があり、さらに高床式になっている木造の建物。

右手には木造の宿舍と思われる大きな建物が2棟。

ブレーキを踏んでハンドルを左に切ると後輪が滑る。

大きくドリフトしながら焚かれたかがり火を跳ね飛ばし、正面の建物に腹を見せるようにトラックは停止した。

俺は運転席から降りると急いで荷台へ飛び乗り、アイテムBOXからクロスボウを取り出した。

騒ぎを聞きつけた正面の建物から悪党達が10人程現れる。

俺達の目論みは的を射ていた。酒を飲んでどんちゃん騒ぎをしていた敵の男達は、上半身裸のズボンだけの状態で剣を持ちだしていたのだ。

ポリカーボネート製の盾を立てたトラックの荷台から、クロスボウが次々と発射され賊共を串刺しにしていく。

弓矢の攻撃を受けて思い浮かぶシーンと言えば、胸などに矢が突き刺さる場面だが——。

このクロスボウから発射された矢は軽々と敵の胴体を貫通して、

その後ろの木の壁に次々と突き立った。

だが、クロスボウの威力は凄いが装填は遅い。次の矢を装填しているうちに、新たな敵が現れた。

「よっしゃー！」

ニヤケロを始めとした獣人達が、荷台の側板を踏み台にして次々と敵に切り込んでいく。

獣人が大きく振りかぶったカッタラス刀を振り下ろすと、敵の1人が頭の上で剣を水平にして受けたが――。

獣人の強大パワーに負けて、そのまま頭蓋へ刃が食い込んだ。

そいつを蹴り倒し、刃を水平になぎ払うと勢い余って更に敵の首が2つ飛ぶ。

「ははは！ こんなペラペラな刀なんで心配だったが、こいつはとんでもなく切れ味が良いぜ！」

獣人4人で次々と悪党共を血祭りに上げていくのだが凄すぎる。

獣人達の戦闘力だけで十分なんじゃないのか？

しかも彼等は夜目も利く。この薄暗い中でも、はっきりと敵が見えているだろう。

続いて獣人達の横に騎士爵様が飛び降りた。

「ふふふ、今宵のウルフファンクは血に飢えている」

斬りかかってきた敵の剣を下から摺り上げるように受け流すと、くるりと1回転して敵の脇を下から斬り上げた。

「さすが――見事な切れ味だ」

血に塗れた剣をじっと眺めているのだが目が据わっている――怖いわ。

いつも紳士的な騎士爵様だが怒らせると怖い人なのだろう。今後

は気をつけねばなるまい。

出発の前、ちょっと危険なフラグを立てていた、マッチョな男も無事だ。

とりあえず、ポリカーボネートの盾を立て、トラックの荷台にいれば死ぬことは無い。

いよいよダメなら、トラックに飛び乗ってアクセル全開で逃げりゃ良い。

正面からの敵の相手をしていると、右手にあった大きな宿舎からも敵が湧いて出てきた。

俺は、アイテムBOXから爆竹を取り出すと、ターボライターで火を点け新たな敵の正面へ投げつけた。

激しい爆裂音が辺り一面に鳴り響き、立ち込める白い煙が爆発の閃光に照らしだされ――。

敵は突然の出来事に狼狽^{うろた}えて後ずさを始めた。

「ユ○ボ召喚！」

広場にパワーショベルが出現すると相棒に颯爽と乗り込み、クロスポウを足元へ置くとエンジンを始動させた。

ディーゼルエンジンの音に酔いつつ、スロットルを全開――ヘッドライトのスイッチを入れると、眩い光が悪党どもの姿を浮かび上がらせた。

鋼鉄の重機は、カタピラの音を軋ませながら前進しつつ、アームを伸ばす。

「ははは！ ユ○ボ大回転！」

――そして俺の掛け声に合わせてグルグルと重機は高速回転を始めた。

鋼鉄のバケットに弾き飛ばされて転がる悪党達。かなりの重量物

が凄いスピードで衝突するのだ、タダで済むはずが無い。

アームを伸ばせば4 mぐらい先まで伸びるが、そこでグルリと回れば円周約25 m。1周1秒で回るとすると――外周の速度は時速90 kmにもなる。

だから工事現場で稼働しているパワーショベルには注意書きがしてあるはずだ――作業半径立入禁止と。

飛ばされて転がる悪党達共に、アームを3 mの高さまで振り上げつつ近づくと一気にそれを振り下ろす。

地面に軽々と穴を掘りコンクリを打ち砕くそのパワーを、生身の人間が受けられるわけがない。

鉄の爪が悪党の身体を切り裂き、ひしゃげ、勢い余って下に転がっている男の胴体を真っ二つにした。

そしてバケットで煽り臓物を吹き飛ばしてぶちまけ、再び鎌首をもたげると生き残っている男達へ近づいていく。

眩い光を発し――ギッコンギッコン、アームを上下させ排土板で死体をかき分けながら迫り来る鋼鉄の異形に、野盗達はパニックになった。

「――「ば、ば、ば――化物だああああ！」」

いくら百戦錬磨の悪党共だろうと、恐怖に駆られては二束三文の価値しかない。トラックの荷台から背中次々と矢を射られて死んでいく。

「ははは！ ヒヒヒヒ！」

俺は完全に狂っていた。無敵感に溢れていた。今なら矢の雨の中へ飛び込んでも死ぬことはないだろうと本気で思う。

正に無敵状態。だが本当に無敵なはずは無い。

目の前で人が死にまくっている、俺が殺しているのだ。だが、な

んの抵抗もなく罪悪感も微塵もない。そこには心の底から湧き上がる陶酔感だけ。

戦いの前に噛んだ葉っぱのせいなのだろう。ひたすらに高揚しかない心の隅に、ちょこんと座っている冷静な俺がそう思う。

残りの野盗が逃げ込んだ木造の宿舎を、振り上げたバケットで破壊する。

バリバリと盛大に板が引き裂かれる音を出して壁とドアが木っ端微塵になった。

「「「きゃああああ！」」」

中から黄色い叫び声が響く――女か？

「女がいるなら端に隠れてろ！」

宿舎を破壊した場所から獣人達がなだれ込み、生き残っている悪党共に止めをさして血祭りに上げていく。

「ぎゃああ！」「ひいいい！」「助けてくれえ」

逃げ惑う悪党に思う――何を今更である。この期に及んで助けてくれえ――とか、悪人の矜持は無いのか？

もう1つの宿舎も破壊して残党を掃討した。

「てめえ等！ こいつを見やがれ！！」

突然の大声が広場にコダマした。

正面の建物に備え付けられたデッキの上に髭面で長髪の男が立っていた。頬には大きなキズがある。

冒険者ギルドに貼ってあった手配書の男――恐らくはあいつが、この親玉――シャガだ。

その男の前には剣を突きつけられたプリムラさんが立っていた。

「大方、この娘を助け出すために組織された討伐隊だろうが、昨日の今日で、そんな化物を操れる凄い魔導師がやって来るとは思わなかったぜ」

「プリムラさん！」

「ケンイチさん！」

「この悪党め！ プリムラさんを離せ！」

とりあえず主人公らしいセリフを吐いてみる。

「離せ——と言われて離す悪党がどこにいる！ お前等こそ武器を置かねえと、この娘の命はねえぜ！」

こちらも実に悪党らしい悪党である。妙に納得してしまったのだから納得している場合ではない。

どうも薬のせいかな変な事ばかり考えてしまう。悲壮感が全くないのだ。

まるでTVドラマを外から観ているみたいに他人事のように感じてしまう。

しかし彼女を助けなければ——と言う事だけは解る。

突然、シャガがプリムラさんのブラウスに手を掛けると、力任せに大きく引き裂いた。

彼女の白く丸い豊かな胸が冒険者たちの面前に晒しだされる。

「きゃああああ！」

「プリムラさん！ 何をするんだーっ！ 許さん！」

「ははは！ くそつたれ！ こんな事になるなら貴族の言う事なんぞぶつちして、こいつを存分に可愛がってやれば良かったぜ」

そう言うと、シャガは彼女の頬を舌で舐め始めた。

おいおい、今なんか凄い事を言ったような……。

「ううう……」

プリムラさんから嗚咽が漏れる。

「ミャレー聞こえるか？」

俺の声に彼女の耳がこちらを向く。少し離れていても獣人の聴力なら聞き取れるはずだ。

俺は、クロスボウからレーザーサイトを取り外すと、電源を入れてシャガの身体に照射した。

「敵の親玉の身体に赤い光が見えるか？」

彼女の耳がピコピコと動く。

「あの光で敵の目玉を潰すから、お前が弓で仕留めろ」

彼女の耳が再びピコピコと反応した。

「いいか？　せうの！」

俺はレーザーサイトの赤い光を、シャガの目玉に合わせた。

「あがぁ！　なんだア？！　くそつたれ！」

シャガが、プリムラさんから手を離すと目を押さえてしゃがみ込んだ。

「今だ！」

ミャレーが目にも止まらぬスピードで矢を番^{つが}えると――放たれた一閃がシャガの掌ごと目玉を貫通して頭蓋の後ろから矢じりが飛び出した。

無論、即死である。

その横にいたシャガの部下達にも一斉にクロスボウから矢が放たれて、ハリネズミの如く串刺しになった。

暗闇の中、辺りに訪れた沈黙――恐らくは、これで野盗は全滅したものだと思われる。

「「「やったぜえええ！」」」

数分の沈黙の後、獣人達が吠える。

「ひょおおお！ まじで、やっちゃまうとは！」

「うおお！ これで、大金せしめたぜええ！」

倒れたかがり火が燃え、オレンジ色に染まる広場に冒険者達の声がこだました。

27話 戦いの後

シャガという極悪非道の野盗の巢に飛び込んだ、俺を含む15人の冒険者達。

奴らの根城になっていた古城跡で暴れまくり、全ての敵を掃討した——と思われる。

「各々方、油断するのはまだ早いぞ」

騎士爵様が冒険者達に注意を促す。うながさすが歴戦。

全員が生きているようだが怪我人もいる。その負傷者達に爺さんが治癒魔法らしき物を使っているが、幸い重傷ではないようだ。

「なんだよ爺さん。治癒魔法が使えるんじゃないか」

「そりゃ使えるが、畜生に使うなど言語道断じゃぞ？」

やはり価値観の違いは、いかんともしがたいらしい。その会話を聞きながら獣人達が耳をクルクルと回している。

「とりあえず聞こえてくるのは女の泣き声だけだ。怪しい音はしねえ」

獣人達は耳が良いからな。だが騎士爵様の言うとおりの警戒は怠るべきではないだろう。おこた

俺は、プリムラさんに駆け寄った。

「プリムラさん！ 大丈夫ですか？！」

「ケンイチさん！」

彼女が片方の胸をさらけ出したまま俺に抱きついてきた。

葉が効いているせいかな、そのまま押し倒してしまいそうな衝動に

駆られる——落ち着け、落ち着け、俺！

俺は、アイテムBOXから毛布を取り出すと、プリムラさんの肩に掛けた。

「プリムラさん、こいつが野盗達の親玉——シャガで間違い無いですか？」

彼女の近くに倒れている頬に大きなキズがある男を指さす。

「はい。他の悪党からも、そう呼ばれてました」

「騎士爵様！ シャガが、さっきとんでもない事を言っていました……。貴族がどうのこうの——と」

「確かに、そんな事を言っていたな……うむ」

騎士爵さまは転がる死体の服を使って剣に付いた血糊を拭きとっている。

だが、それについて、プリムラさんから驚くべき証言が飛び出した。

「その男の話では——私の拉致を、ある貴族から金で頼まれたと言っていました」

「な、なんだと！ それが事実であれば由々しき事態だ！ これは洒落にならんぞ。腐っている輩が多いと思っ貴族てはいたが、ここまでは……」

大方、街で評判の美人である彼女を拉致、奴隷にでもして弄ぶもてあそもりだったのだろう。

「騎士爵様にはアジトを搜索していただいて、その証拠の確保をお願いできますか？」

「うむ！ 心得た」

俺は、貴族の事は解らんからな。それは他の冒険者達でも同じだ。せっかく見つけた証拠を見逃してしまうかもしれない。

俺が重機を使って破壊した宿舎から女達が連れだされてきた。皆が裸で胸と股間を隠しながら恥ずかしそうに歩いている。

聞けば全員が、あちこちの村々から拐さらわれてきた女達らしい。だが女の中に1人だけ飛び抜けてデカイ女がいるのが目に付く。

「裸で歩かせるなんて可哀想じゃないか」

シャングリ・ラで毛布を検索。1枚20000円程で売っていたので購入する事にした。

女達の人数を確かめると、19人——20000円×19枚で3万8千円だ。

皆に毛布を配ったのだが身体を洗いたいらしい。正面の建物の裏手に井戸があるという事だったので、アイテムBOXからLEDラントンを出して、そこへ向かおうとしたのだが——。

正面の建物から別の女が1人、冒険者によって手を引かれ、デッキの階段を降りて広場に連れてこられた。

だが、そいつは手を引かれるのを嫌がるように後ずさりして逃げようとしている。それに他の女達と違い結構上物の服を着ているのだ。

その女を見た、毛布に包まった裸の女達が叫んだ。

「そいつは悪党共に尻を振って、あたい達を虐めていた女だよ！」

「なに？ それじゃ、シャガの仲間か」

非難を浴びた女ではあったが、元々は拐さらわれてきた女だったようだ。言葉巧みにシャガに取り入り、悪党の情婦として女達を虐めていたらしい。

「そいつのせいで、ポーリアが！ ううう……」

「あたいだって生き残るために必死だったんだよ！ 悪党共を利用して何が悪いのさ！」

その言葉を聞いた女の1人が転がっていた短剣を手にとると、毛

布を開けて裸の身体ごと女に突進していく。

2人が衝突して纏れ倒れこむと、暗闇を引き裂くような女の悲鳴が広場に響いた。

「ぎやああああ！」

裸の女がゆっくりと起き上がると、下敷きになった女の胸には突き立った短剣が光っている。

「あぐ……あぐ」

女の口から黒い液体が溢れ出る。勿論、口から出ているのは血なのであるが、かがり火の薄っすらとした灯りの下では、その色は不鮮明だ。

刺された女の動きが止まると、その場で裸の女が両手で顔を覆い泣き崩れた。

「これは仕方ないな——野盗にやられた事にしよう……」

俺の言葉に他の冒険者達も頷いた。泣いている女の肩に毛布を掛けてやる。

「俺達はダリアからやって来た、この野盗共の討伐隊だ。何もしないから心配しなくて良い。帰りたい所があるなら連れて帰ってやるぞ」

「本当かい!？」

「ああ」

だが故郷へ帰りたいと申し出た女達は9人だけ。残りはダリアへ行きたいと言う。

悪党共に拐われた後に助けてもらい故郷へ帰っても、奇異の目で見られる可能性が高いらしい。

親兄弟や亭主を殺してしまった女もいるらしく、それならば知り合いのいないダリアへ行きたいと言うのだろう。

頼る者がいなければ、女1人でなんとかして生きていかなければならない。人が多いダリアなら仕事も多いしな。

なるほどな……彼女達の好きにさせてやろうと思う。

とんだ修羅場になってしまったが、女達が身体を洗いたいという事なので、LEDランタンで照らしながら建物の裏手にある井戸へ行く。

そこには古そうな石造りの井戸があった。

俺は、LEDランタンを井戸のそばへ置くと、アイテムBOXから石鹸を取り出して彼女達に貸してやる。

「ほら石鹸だ。好きなだけ使って良いぞ」

まあ、リンスは要らんだろ——と思ったら、プリムラさんもやってきた。

一緒に身体を洗いたいと言う。それならば、リンスを出すか。

「石鹸で頭を洗ったら、この薬を使え。使い方はこの人が知っている」

タオルとバスタオルがいるな——シャングリ・ラを検索して、5枚3000円のバスタオルを4組と10枚1500円のタオルを2組買う。

それから女達の服が必要だろう。プリムラさんの服も破れてしまっているからな。

黒いリボンがついたシンプルな白いブラウスを1枚購入してみても、彼女達の意見を聞いてみる。

「みな同じ物になってしまいが、これで良いか？」

「助けてもらって服までもらえるなら、なんでも良いですが……あ、でもこれ、合わせ目が……」

シャングリ・ラに売っている女物の服は全部左前だ。だが、この世界の洋服は全部右前で統一されている。

「あ！　そうかあ。こりゃ、しまったなあ」

改めて検索を掛ける。合わせ目の無い頭からすっぽりと被るタイプの白いブラウスを出すと、皆がそれで良いと言う。

1枚2000円程だな、サイズはMそれが20着――4万円だ。

それから、スカートだ。この世界でメジャーな紺色のマキシのロングスカートを出してみた。

これは問題が無いようだ1枚2000円で、これもサイズMが20着だ。

だが、1人デカイ女がいるのを忘れていた、はつきりって獣人の男ぐらいデカイ。

スカートの胴回りはLサイズなのだが、背が高く脚も長いのでマキシのスカート丈が半端になり、イマイチおかしい。

それでもズボンを履くよりは、スカートが良いらしい。

上は肩幅も広く女物は全く合わない。仕方なく男物のTシャツと紺のジャケットを着せた――中々似合う。

彼女の話では力も強いので物運びや畑仕事をやらされていたようだ。

「え？　畑なんかもあるの？」

「ありますだ。宿舎の裏にありますだ」

声も低くてハスキーボイスだが、赤い髪をポニーテールにしている顔は結構可愛い。

女達が裸になって身体を洗い始めたので俺が退散しようとする、ミャレーが汚れたボロボロの服を着た1人の子供を連れてやってきた。

「この子も洗ってにゃ」

顔は真っ黒で、長くて黒い髪の毛がボサボサだ。だが、その黒い頭に何か白い物が動いたような気がする――。

アイテムBOXから、LEDヘッドライトを出して光を当ててみた。確かに髪の毛の中に白く蠢く物がある――虫？

「なんだこれ？ 虱か？」

「ふぎゃ！？ ギャああ！」

子供を連れてきたミヤレーが脱兎の如く逃げ出した。そりゃ獣人のような毛皮を着ている奴らには、この手合は恐怖でしか無いな。シャングリ・ラで虱を検索してみる。

ほう、結構色々と売ってるんだな。虱なんて昔の話だと思ったが――虱取りの薬用シャンプーと、歯が長い専用のすき櫛を購入する。全部で4000円だ。

「プリムラさん、この子も一緒に洗ってやってくれませんか？ 髪の毛は短く切って下さい」

裸になって胸を隠している彼女に鋏を渡す。だが、それを見たプリムラさんが驚いた。

「え？ これは何ですか？」

「こうやって髪や紙を切るものですが……」

俺が鋏を持って子供の髪の毛を、少々チヨキチヨキしてみせた。

「こ、これも商会で売ってもよろしいですか？」

興奮した状態になり裸で彼女が迫ってくるのだが目のやり場に困る。そうか、この世界には鋏がないのか……。

しかし、こんな状態でも商売の事を忘れないとは、さすが商人の娘だ。

「ちよいとお、良いところのお嬢様が裸で男に迫るのは、はしたないんじゃないかもしれません？」

「ははは」

「えっ？」

女達のツツコミを受け、我に返ったプリムラさんが必死に胸と股間を隠そうとしている。

「プリムラさん、これは虫用の薬です。これを使って、この子の頭を洗ってやってください。他の人は使っちゃダメですよ」

「はい……」

すき櫛の使い方は、女達が知っているようだ。村でも櫛を使って子供の頭についた虱を取ったりすると言う。

しかし裸の女達の身体を見ても妊娠しているような節は無い。そこら辺を、それとなく聞いてみるが、女が孕^{はら}んだりすると悪党も扱いに困るので、しっかりと避妊をしていたらしい。

女達はプリムラさんに任せて広場へ戻る。

広場には、殺された野盗共の屍^{かばね}が集められていた。ちょうど薬も切れてきたようで、オレンジ色の薄暗みの中、目の前に広がる悲惨な光景が俺に現実を突きつける。

中でも俺がやった死体が一番酷いのだ……。

いくら薬のせいだとは言え、これはイカン。思わず口を押さえてしまうが――俺の目の前でさらに衝撃的な光景が繰り広げられる。

獣人達は屍^{かばね}の頭を落とし始めたのだ。

「おいおい、何をするんだ？」

「何って――討伐の証拠のために首を持っていくんじゃないませんか。旦那、こういうのは初めてかい？」

「ああ……」

「まあ冒険者やってれば、こういうのはしょっちゅうだからな。慣

れるこった」

慣れる——って、こんなの慣れるのか？　だが首を持っていかなければ、討伐完了とならないのであれば、それは仕方ない。

数だけ勘定するなら、耳とかで良いらしいが、今回は悪党共の顔の確認が必須だ。何と言っても、報奨金の金額がデカイからな。

それが、この世界の掟^{ルール}なのだ。さすが異世界、甘いものじゃなかった——一步、街から出れば、コレだ。

腹から湧き上がってくる物を無理やり飲み込むと、獣人達の所へ行き落としたばかりの生首を掴んだ。

「そ、それじゃ、首は俺のアイテムBOXへ入れとくよ」

ガクブルしながら、アイテムBOXへ突っ込む。

「そいつは助かるぜ！　何しろ時間がかかると臭くてなあ。塩でも大量に有れば良いんだが、さすがにこんなに沢山の首を埋めるだけの用意はねえし。運ぶのさえ大変だぜ」

アイテムBOXへ入れていけば腐る事もないからな。しかし——まさか、こんな物をいれる羽目になるとは……。

どうしてこうなった！　スローライフはどこへいったんだ？

首をよく見ると黒い刺青をしている者がいる。

「ニヤケロ、この首の黒いのはなんだ？」

「旦那、知らないのかい？　そいつは奴隷ですよ」

「奴隷？」

「恐らく逃亡奴隷でしょ」

彼の話では逃亡奴隷を見つけたら、通報して金をもらっても殺すも自由だと言う。つまり、この世界の奴隷には人権は無いのだ。

「それじゃ奴隷を匿^{かくま}ってやる代わりに悪事を手伝わせていたってわけか」

「まあ、この手の話は結構ありやすぜ」

彼は俺との話をしながらも、耳をくるくると回して辺りを警戒しているようだ。

「お前の耳や鼻でも、潜んでいるような敵の気配は無いのか？」

「ありやせんぜ」

「そうか……」

^{かばね}屍を数えると、52体だな。50と聞いていたから、ほぼ数は合っていたようだ。

俺が調子に乗ってユ○ボアタツクをした^{かばね}屍はバラバラだ。^{はらわた}腸がそこら中に散らばって、生臭さと酸い臭いが辺りに充満している。

うわあ——マジでやっちゃまったあ、トラウマになりそう……。

頭を抱えていると、ふと広場に置きっぱなしの相棒が目に残まる。

あ、その原因となったパワーショベルを出しっぱなしだわ——収納しないと。

その前に、ポリタンクの水を取り出して軽く洗浄した。なんでこんな事をする羽目に……。

ユ○ボをアイテムBOXへ入れていると、女達がランタンを片手に俺が渡した服を着て広場へやって来た。

「おお、みんな似合うじゃないか」

「こんな上等な服を、もらっちゃまってえ……」

「何、良いつて事よ」

見れば、皆の髪——黒茶金赤、色とりどりの毛がまだしっとり濡れている。長い髪が多いから簡単には乾かないだろう。

そうだ、あれが使えるか。

俺は、アイテムBOXからジェットヒーターとテーブルを取り出

した。

「え？ それって何ですか？」

テーブルの上に現れた、銀色のジェットエンジンのような物体を女達が食い入るように見ている。

まだ燃料も残っているし、これで女達の髪の毛を乾かせば良い——と、思ったが——。

これって、100Vがいるんだったわ。発電機は持ってきてないし、モバイルバッテリーも家に置いてきてしまった……。

どうしよう……新しいバッテリーを買っても良いが——しばし考える。

そうだ！ トラックがあるんだ、シガーソケットから取るタイプのインバータ（昇圧器）を買えば良い。ジェットヒーターのファンは30W程だから、一番容量の小さい奴で十分だ。

シャングリ・ラでインバータを見ると——3500円で目当ての物が売っていた。

「よし、【購入】！ ポチツとな」

落ちてきたインバータをトラックのシガーソケットへ突っ込み、ジェットヒーターの電源コードを繋ぐと、スイッチを入れて点火ボタンを押す。

カチカチという点火音が鳴って、すぐに轟々という赤い火が出始めた。

「ほら、ここから熱い風が出るから、ここで髪の毛を乾かせば良い」

「ほえーこれって魔法っすか？」

「まあ、そんなもんだ」

「ほえー」

女達が不思議そうに機械を覗きこんでいる。

「お前さん、そんな物を、いくつ持っているんじゃない？」

「それは内緒だよ爺さん」

ジェットヒーターを見たミャレーが指差して叫んだ。

「この前使ったやつにゃ！　それがあるなら、うちも身体洗ってきて良いかにゃ？」

「これ石鹼ですだ」

ミャレーは石鹼を受け取ると井戸の所へすっ飛んでいった。彼女は灯りが無くても眼が見えるからな。

獣人達は毛皮を着ているので、血糊が乾くと面倒な事になるらしい。

俺は虱取りのシャンプーを貰って、アイテムBOXへ収納した。

「ケンイチさん……これを、あの娘が使ったって……」

「ああ……その、なんだ――家に森猫がいただろ？　彼女を見たいって、ミャレーの奴がな……」

「呼び捨て……私はまだ『さん』づけなのに……」

「いやあ、君は大事な取引先のお嬢さんじゃないか、ははは」
プリムラさんの目が怖いのだが。

「極悪野盗を皆殺しにするぐらい強くて、こんだけ気前も良いんだ、そりゃ女は放っておかないよ、ねえ？」

女達が皆で頷く。

まてまて――だが、助けた女達に悲壮感があまり無いのが良い。

もしかして無理をしているだけだと困るのだが。

実際、彼女達は明るく振舞い笑っているのだが、笑い顔が痛々しく硬い。

そりゃ酷い目に遭ったんだ。心を壊していてもおかしくはない。全く笑わずに、もくもくと髪を乾かしている女もいる。

だが、ダリアへ行きたいと言う女達は皆が前向きのようなのだ。

プリムラさんから逃げるようにニヤケロの所へやって来た。

こっちはこっちで死体から首をちょん切っている真っ最中だ。どんなカオスな状況なんだよ。

ニヤケロの方を見ないようにしながら放置されているポリカーボネート製の盾を人数分回収した。

特に獣人達が使っていたバックラーは白い傷が入りまくっている。そうそう、クロスボウとミャレーのコンパウンドボウも回収して矢も集めないとな。

矢はカーボン製だし矢じりは合金製だ。この世界にはオーバーテクノロジーすぎる。

「この後どうするんだ？」

首を切っているニヤケロに恐る恐る話しかける。

「どうする？　って勿論、装備を剥ぎ取るでしょ？」

「ああ、やっぱり……」

「明るくなりや家の中も探して、金目の物は片っ端から全部かつぱらいきましょうや！」

「どっちが盗賊だか解らねえ……」

「ははは！　悪事を働かなけりゃ、こいつらも死ぬこともなかったんですぜ？」

「そりゃ、そうだが。その前に身体を洗ってきたらどうだ」

「おっと！　そういえばそうだ。首を切るのに夢中ですっかり忘れてたぜ」

井戸へ走っていくニヤケロ達を横目で見ながら、俺は意を決して生首を次々とアイテムBOXへ突っ込んでいく。その数52――。

当然アイテムBOXの中には【首（人間）】×52――という表示が追加された。一体どういう状況なんだよ……。

女達の方を見れば、さっきの子供が髪を短くカットされてジェットヒーターで頭を乾かしている。

よくよく見れば女の子のようだ。

「ああ、女の子だったのか？」

「……」

女の子がコクリと頷いた。うなず

「それじゃ女の子にも服をやらんなあ」

早速、シャングリ・ラで検索する。あまり派手なのはダメだろうし、シンプルなやつだな。

紺のワンピースで襟が白い物を見つけた。これがシンプルでいい感じだ――3000円で購入。合わせ目も無いし、これならOKだろう。

「ほら、これをやるから着ていいぞ」

女の子にワンピースを渡すのだが、じっと見ている。

「着方が解らんか？　ちょっと着せてやってくれ」

「はいよ」

女の子が着ていたボロボロの服を、女の1人がスカートの裾を持つて一気に脱がせる。

裸になった彼女の頭から紺のワンピースを押し込んだ。

「中々似合うじゃないか、名前は何て言うんだ？」

ショートボブ風になった黒い髪の毛に、紺色のワンピースがよく似合う。ちよつとつり目がちな目で、俺をじっと見続けている。

「……アネモネ」

「アネモネか――いい名前だ、宜しくな」

獣人達は暗闇の中で宝探しに没頭している。夜目があるから暗闇でも関係無いしな。

それは彼等に任せて俺と女達は寝ることにした。

シャングリ・ラからブルーシートを買って地面へ広げた。

少々ゴツゴツするが寝れない事もない。女達は、ろくに毛布も与えられず皆が雑魚寝だったらしいが、今日は俺がやった毛布がある。

俺が寝転がって星空を眺めていたら、女の子——アネモネが俺の隣へ来て抱きついてきた。

反対側には、プリムラさん。そして、ミヤレーがアネモネの隣へ来たいようなのだが躊躇している。

恐らく虱シラミの心配だろう。

——実に温かいのだが、ちょっとこれは困ったな……。

ミヤレーじゃないが、虱シラミが伝染らないだろうな？

まあ、シャンプーして櫛くしも掛けたらしいから今日は大丈夫だとは思うが。

何日一緒かは解らんが、毎日シャンプーしてやらんとな。

俺は石鹼の香りの中で眠りに落ちた。

28話 イキナリ大所帯

――次の朝。

ふと、何かが燃える臭い。

「なんだ!？」

慌てて飛び起きた。

目に飛び込んできたのは、メラメラと燃えている山積みの死体。こりゃまた朝っぱらから、へビー過ぎるな……目が一発で覚めた。さすがに50を超える屍^{かばね}を放置するわけにもいかず、爺さんが魔法で燃やしているらしい。

「お早うさん。爺さん大変な事をやらされてるな」

「おお、起きたか。なあに、魔導師なら誰もが通る道じゃよ」

軍に徴発されたりすると、このような事を日常茶飯事的にやらされるという。戦死者の死体を放置して、腐敗させれば疫病の原因にもなるしな。

やっぱり軍に捕まると碌な事にならんようだな。

天へ長く伸びる黒い煙をじっと見つめている女達。皆が俺の用意した白いブラウスと紺色のマキシのスカートを履いている。

昨夜は暗くてよく解らなかったが、悪党共が自分達の好みの女を残したのであろう、結構美人揃いだ。

だが、焼かれて黒焦げになった死体を見ているその顔は、悲しみの表情に見えるのだが――。

「お前達を散々苦しめた奴らのために悲しんでやるのか？」

「いいえ、そりゃ酷い事はされましたが、男共の話を聞くと悲惨な生い立ちの奴等ばかりでねえ」

ああ、こりゃストックホルム症候群ってやつだな。人質等になつて長時間狭い場所に一緒にいると、好意が芽生えてしまうというやつ。

女達と少々話していると爺さんが俺が渡したアルミ板を見つめている。

「爺さんどうした？」

「金属に変化が無いか確認をしているのじゃよ」

「本当に触媒なら変化は無いはずじゃないのか？」

「その通りだが、内部で何らかの変化が起きていて劣化等があるかもしれないぬな……」

まあ魔法が、どうやってアルミを触媒に使っているかなんて解らないけどな。

そして、この屍かばねの山を作った獣人達は剥ぎとった装備を山のよう
に積み上げていた。夜目が利くので夜半までやっていたと言う。

「こんなに持って帰るのか？」

「だって全部、金になるんですぜ？　ここに捨てていたら勿体ねえじゃないですか」

「そりゃ、そうだが。帰りは女達も荷台に乗るんだぞ？」

「ありゃ、そういえばそうか！　でも建物の中にも金目の物が沢山あるんですぜえ？」

他の冒険者達も、捨てていくのは勿体無いという意見で統一されているようだ。

「それじゃ仕方ない。俺のアイテムBOXの中へ入れてやるよ」

「さすが旦那！　そう来なくっちゃ！」

俺の言葉を聞いた獣人と冒険者達は、建物の中にあつた家具まで運び出し始めた。

マジかよ。まあ容量的には問題無いと思うが……。

街へ帰れば、ギルドからたんまり金が出るっていうのに、それを忘れてるんじゃないのか？

はした金は捨てて良いと思うんだがなあ——まあ、皆の世話になつたんだ好きにさせてやるか。

「さて、漁りは男共に任せて朝飯を作らなきゃな」

だが人間が増えたので俺の圧力鍋で足りるか？ 16人で鍋の半分ぐらいだったから、そこから女が19人+1人増えたから——ちよつと足りない？

いや、増えたのは女ばかりだから、男共より飯を食う量は少ないだろう。

ギリギリ間にあうか。足りなかったら、インスタントスープでも飲ませよう。

俺がアイテムBOXから圧力鍋を出すと背の高い大女が叫んだ。

「野菜やら畑に沢山ありますだ。掘ってきますだ！」

「ああ、そりゃ助かる。それじゃ俺は肉を出すよ」

荒野で冒険者と食事をした際に、アイテムBOXへ入っていた肉は殆ど使ってしまったので、シヤングリ・ラから買うことにした。

えーと、豚肉の細切れ——1kg800円の物を買うが、どのぐらい必要だろう？ 1人300gとして36人いるから……約11kg！ 8800円だ。

ちよつと多いか？ いや戦勝祝だ、ドーンと買ってやれ。

よし、味付けはコンソメにしよう。業務用コンソメの素500gを500円で購入したが、パウチに入っている半練り状だったので

皿に出した。

コンソメの素は、1Lに18gって書いてあるから、20Lで360g——余裕だ。

女達が圧力鍋に井戸水を汲んでくれたので料理を始める。

火を起こして、お湯を沸かしていると大女が野菜を井戸で洗い持ってきてくれた。

すると、女達があちこちから包丁やナイフを持ち寄って皮を剥き始める。

まあ、これだけ女がいるんだから料理は任せても良いか。

「それにしても何かを忘れているような……うーん」
しばし考えて思い出した。

「あ！ アマナを荒野に置きっぱなしだよ！ 迎えに行かないと、あいつは街へ帰って討伐失敗の報告をしてしまうぞ」

こりや拙い^{ます}。迎えに行かなければ。

丁度、建物から出てきた騎士爵様にアマナの事を話した。

「ああ、あの女の事をすっかり忘れていたな。それよりも、ケンイチ殿。今回の騒ぎに貴族が関わっている証拠を見つけたぞ」

騎士爵様が差し出したのは手紙——それには赤い封蝋が押されている。

封蝋に使う印は、いわば印鑑のような物なので、持っている貴族本人にしか使えない。

「こんな証拠を残してしまうなんて、お粗末過ぎますねえ。それとも余程バレない自信があったのか」

「いやケンイチ殿。貴族が関わっていれば討伐の情報など筒抜けになっってしまう」

「そりゃそうか。討伐が来る日になったら逃げてしまえば良いってわけだ」

「そういう事だ」

「——って、それは騎士爵様にお任せいたしますので、私はアマナを迎えに行つて参ります」

「承知した」

俺は慌てて料理をしている女達の所へ向かい事情を説明する。

「ちょっと悪い！俺は人を迎えに行つてくる。野菜が煮えたら、この調味料で味付けしてくれ。一気に全部入れないで塩梅みながらな！すぐに帰ってくるから」

「解りましたよ」

俺は、トラックに飛び乗ると、エンジンを始動した。10 kmの距離なんてトラックならあつという間だ。

爺さんが魔法を使って破壊した門を潜ると、森を抜け荒野を目指した。

時速40 km程しか出してなかったが、15分程でキャンプ地へ到着。彼女が1人でポツンと待っていたが、俺のトラックを見つけて勢いよく手を振り始めた。

「おい！アマナ！」

「旦那！生きてたんですか！」

「そりゃ、生きてるに決まってる。負傷者はいるが軽傷で皆は無事だ。マロウ商会の娘さんも無事だ」

「良かったですねえ」

アマナが俺にすがり、おいおいと泣き始めた。まさか泣かれるとは思ってなかったな。

「あたしゃ、こうやって一緒についてきましたけど、ダメだと思つてましたよ」

「はは、正直なやつだな。よし荷物を積んで皆の所へ行こうぜ。女達が飯を作っている」

「女？ 野盗に捕まってた女達ですか？」

「そうだ」

彼女を助手席に乗せて、やって来た道に戻ると再び戦場となった古城跡に引き返す。

破壊された門を潜ると、トラックを乗り付けた。

「おおい！ 戻ってきたぞ！」

「よくまあ、皆無事で」

皆の無事な姿を見て、アマナが再び泣き始めた。随分と涙もろいやつだ。

まあ、年を食うと涙腺が弱くなる。俺も、ちょっとした事で、うるうるしてしまうことがあるからな。

「マロウ商会の娘さんもよく無事で！」

「はい、ケンイチさんに助けていただきました」

俺とプリムラさん、そしてアマナで再会を喜んでいると料理をしていた女達が驚嘆の声を上げた。

「ええ？ もう戻ってきたんですか？ さっき出たばかりでしょ？」

「言っただろ。あの馬なしの車って奴は俺達獣人並に脚が速いんだよ」

「へええ」

側にいたニヤケロが得意げに女達に説明をしているのだが――それを横目に見ながらアマナがアネモネを見つけた。

「こんな子供まで……」

アマナがアネモネへ近づくと彼女の頭を優しく撫で始めた。

「ぐすっ……あたしの子供も生きてりゃ、このぐらいの歳に……」

「え？ お前、子供いたのか？」

「ええ——流行病で亡くしてしまいましたけどね……もう10年ぐらい経つかねえ」

聞けば、行きずりの男との間に生まれた子供で、小さいうちに病気で死んだらしい。

この世界は医療が発達していないからなあ。子供の生存率は高くないだろう。

アマナの相手はアネモネに任せて料理を仕上げよう。腹が減ったからな。

「野菜は煮えたかい？」

「まだですよ。この鍋の使いかたも解りませんし……」

量が多いので、さすがに煮えるのに時間が掛かるらしい。

「爺さん、魔法で鍋をちよつと加熱出来ないか？」

「そうじゃな。ワシも朝から働いて腹が減ったわい」

爺さんが何かの魔法を使うと数分で鍋がぐつぐつと沸き始めた。

「さすが爺さん。よっしゃ、いい感じだ」

俺が圧力鍋の蓋を閉じると、すぐに蒸気が上がり始めた。これで、10分もすりゃ食えるようになる。

「すぐに食えるようになるぞ、食器を用意してくれ。人数分あるか？」

「本当ですか？ 食器は野盗の男たちが使っていた物がありますから」

野盗は50人以上いたからな。この人数でも大丈夫だろう。

女達によって用意された深皿やスプーンは殆ど木製だが十分に使

える。

「ああ——騎士爵様には俺の食器を用意した方がいいかな？」

「気にすることはないぞ？」

いつの間にか俺の後ろに騎士爵様が立っていた。周りを散策してきたらしい。

「戦場では食事すら満足に出来ないこともしばしばあるからな。こんな所で美味しい食事が出来る事自体ありがたい」

「戦にも参戦した事が、おありなんですか？」

「ああ、何度かな。だが殊勲を取ったわけでもなく、未だに無役の騎士爵のままだが」

「今回のこの討伐で、役ぐらいいは貰えますよ。だいたい騎士爵様のように優れたお人が無役^{うなず}って事がおかしい」

今回同行した冒険者達も領^{うなず}いている。

「世の中、中々上手くはいかん」

「どうせ役立たずの大貴族の子息様とかいう連中が重役を占めてしまつて、能力のある人材が割を食っているんでしょ」

「まあ、そんなところじゃな。そんな連中は戦になつても後衛で飯を食っているだけじゃからの。ホホホ」

あまり笑い事じゃないがなあ。

鍋が煮えたようなので、圧を抜くと白い噴水のように勢いよく蒸気が吹き出す。

「それはどういう仕組みなのじゃ？」

「鍋の蓋を締め閉じ込めて中を圧縮するんだよ。そうすると早く煮える」

「ほう、魔法でも圧縮すると温度があがるぞ。なるほど理に適つて

おるのう」

「あの、ケンイチさん。その鍋を商会に卸していただくのは……」

「これは、ちょっと拙い^{ます}かなあ。しかし原理が解^とったなら似たような物を作れると思います」

「その通りじゃ、要は蓋をぴったりと閉めれば良いのじゃろ？」

「まあな」

話をしつつ、コンソメの素を入れる。商品の袋には水1Lに対して18gと書いてあったから、水は20Lで360gあればいいわけだ。

こいつは500gあるから約3／4だな。

皿に乗っていたコンソメの素、3／4をヘラで鍋に入れ、だしの素と胡椒も1／2瓶入れてしまう。加減が解らんが40人近くいるんだ、こんなもんだらう。

ちょっと味見をしてみる。

「ん、美味しい」

ニャケロや他の冒険者達にも味見をさせてみる。

「美味しいけど、もう少し塩気が欲しいな」

肉体労働した後だからな、塩分が欲しいのかもしれない。残っていたコンソメの素を全部鍋へ投入した。

そして、シャングリ・ラから【訳ありパンセツト一袋】という1200円の物を20袋購入して、ビニール袋のまま地面に並べた。もう皿に移すとかやっている場合じゃない。とりあえず食えればいい。

準備が整うと皆が一斉に料理にかぶりつきはじめた。

「おおっ！ 今日のスープもウメエ！ 旦那の料理はうめえな！」
「今日は女達が手伝ってくれたぞ」

「わたし等、野菜の皮を剥いただけじゃないですか」

「ひゃあ、このパンは柔らかくて美味しいよ！それに甘いんだ！」
「これじゃ、スープが要らないね」

この世界のパンは硬くてガチガチで乾燥している。それをスープに浸して食べるのが一般的だ。

今日の料理も皆に好評のようだ。

ただ、女達の中にいた大女——アリッサと言うらしいが、彼女は
大食らいの獣人並に飯を食っていた。こいつは食事もヘビー級だ。

だが、パワーは凄い。男達に混じってデカイ家具や荷物を軽々と
持ち上げていた。

「ほら、たんとお食べえ。パンもあるよ」

「……うん」

アマナはアネモネに、スープを盛ってやったり、パンを分けてあげたりと——甲斐甲斐しく世話を焼いている。

死んだ子供の面影を重ねあわせているのだろう。アネモネも嫌がっている風には見えないから好きにさせてやろう。

さて、飯も食って腹もいっぱいになったのだが、男達は再び建物内へ入り込むと中を物色し始めた。どんだけやるつもりなんだ。

それどころか畑も掘り起こして全部持っていくつもりらしい。

「だって、せっかく丹精込めて作ったのに、捨てていたら勿体ねえべ？」

アリッサはそう言うのだが野盗の畑を丹精込めて作る事もなからう——と思うのだが。

まあ、とにかく彼女が真面目な性格なのは解った。

しかし俺の目の前に山と積まれた鹵獲品があるのだが少々困った事がある。

これを、アイテムBOXに入れようとしても一個ずつしか入らないのだ。とりあえず箱か何かに入れる必要があるのだが……。

シャングリ・ラでコンテナを検索してみたが、家庭で使うような小さい物しかない。値段で高い順にソートしてみると横が2m程ある大きいのが出てきた。

だが値段が高い――20万円以上だ。こんなの買ってられないぞ？他に何か良い物は……と物色すると、あった。120cm×80cmの木製のパレット。パレットってのは、これに荷物を積んで、フォークリフトで持ち上げるやつだ。

中古だが、1個3000円で売っている。これに荷物を載せて、パレットをアイテムBOXへ入れれば、その上に載せた物も一緒に入るかもしれない。

試しに木製のパレットを1個買って、やってみることにした。

「おい、暇なやつはちょっと手伝ってくれ」

俺の呼びかけに食事に後片付けからあぶれた女達が、パレットへの荷物の載せ替えを手伝ってくれた。

「旦那、これをどうするんですか？」

「まあ、見てなって」

アイテムBOXへパレットを収納すると案の定、上に載った荷物も一緒に吸い込まれた。

「やった！ 成功だ。そうと決まれば、パレットをもっと買おう」追加でパレットを9個買い、次々と荷物を載せて、アイテムBOXへ収納していく。

「これがアイテムBOXってやつですか！ 凄いもんですねえ」女達が口々に驚きの声を上げている。

「お前さん。あの見たことも無い金属もそうじゃが——こんなに大きなアイテムBOXを持っているのが貴族共に知られたら事じゃぞ？」

「爺さんが黙っててくれれば良いんだよ」

「わしゃ当然、黙っているがの。人の舌を抑えることは誰にも出来んぞ？」

元世界で言う——人の口に戸は立てられぬ——ってやつだ。

だが、こうなってしまったら仕方ない。稼ぐだけ稼いで、ヤバくなったら、とんずらするしかない。

昼前に全ての荷物をアイテムBOXに詰め込む作業が終わったので、故郷へ帰りたい女達をトラックで送るために出発する。

女達を村へ帰すために寄り道する事に関しては冒険者の男達も賛成している。

里帰りを希望しているのは9人。一番遠い村は、ここから30リグ（50 km）程離れているらしい。

「そういえば、アネモネの村は？ どこらあたりなんだ？」

「ウルップ……」

「そりゃ、また遠いなあ」

その村を知っていた冒険者の1人が呟く。距離はここから75リグ（120 km）の彼方のようにだ。

「帰りたいか？ この車なら送って行けるぞ？」

だが彼女は黙って首を振るのみ。

「旦那！ 多分、この子は口減らしに売られちゃったんですよ！」
アネモネが否定しないという事は、アマナの言う事は間違いないらしい。

貧しい農家等は多人数を養っていけない、女の子では労働力にも足りない——と、そんなわけで、この手の話は多いと言う。

彼女は自分の親によって人買いに売られて、その商人をシャガが襲い——彼女が、こんな悪党の住処へやって来た顛末のようだ。

「可哀想にねえ」

アマナがアネモネを抱きかかえて、また泣き始めたのだが……。

「アマナ、泣いてる暇はないぞ。女達を故郷へ届けるんだからな」
「解っていますよ」

「それじゃ、アネモネ。皆と一緒にダリアの街に行くか？」

彼女は黙って頷いた。うなず

長旅ではないが、2、3日の村回りといえども、この人数だ——
とりあえず水がいる。

アリッサに手伝ってもらい、20Lのポリタンクを10個用意して井戸から水を汲むと、アイテムBOXへ突っ込んだ。

それとトラックの燃料が必要だな。追加で20Lの改質灯油を作
って燃料タンクへ入れる。

さて、情けは人のためならず——ちよつと遠回りしますか。

29話 村を巡る

「行けども行けども……」

荒野は続く。たまに草地はあるが、あまり林や森が無いな。

灌漑の技術が無いせいか、川から離れると畑作が大変なようだ。

オマケに雨が余り降らないんじゃないかと乾燥するわけだ。

俺が住んでいる森から北は緑も多いという話なのだが、緑が多いと今度は魔物も多いらしい。

どっちが良いか？ ——と人に聞いても、どっちもどっちという答えしか返ってこない。

俺の隣の助手席にはアネモネとプリムラさんが乗っているが、馬なしで動く車に乗って楽しそうだ。

その他の客は皆が荷台に乗っているが、街道沿いを走っているため道もそれなりに良い。荷台でも乗り心地もそんなに悪くはないだろう。

荷台からは笑い声も聞こえてくるから和気あいあいだ。

出発する前、討伐成功の報告をするために獣人の1人に食料と水を持たせ街へ走らせた。

獣人の脚なら、ゆっくりと向かっても数時間で到着出来るだろう。

トラックのハンドルを握りながら代わり映えない景色に飽きた。車載ラジオが付いているといっても放送が入るわけもない。

仕方なく歌を口ずさむ。

——蘇州夜曲だ。

「その歌は何という歌なのでしょう？」

助手席で俺の歌を聞いていたプリムラさんが曲名を聞いていた。

「蘇州夜曲だよ」

「いい歌ですねえ。今度教えて下さい」

「ああ」

日本語が通じるから歌も通じるってわけだ。

それからしばらく街道沿いにトラックを走らせ村々を巡る。

村の場所を知っている連中の話を統合して、なるべく無駄が出ないように、一筆書きで回れるようにコースを決めた。

すれ違う人々もトラックには驚くのだが、俺が召喚した魔法で動く召喚獣だと言うと納得してくれる。

言い訳に使う魔法という言葉が最強過ぎだな。

とりあえず説明が付かない事は魔法だと言えば信じてもらえるのだが、本当に信じているのかは少々疑問が残る。

それでも、この世界には実際に魔法で光るライトや、魔法で動く小物もあるらしいので、まんざらの外れでもないらしい。

まあ、魔法を使う爺さんにはバレバレみたいだが、詳しいツツコミはしないでくれているので非常に助かる。

村へ近づくと、1人また1人と女達が降りていく。俺からもらった白いブラウスと紺のスカート、そして麻で出来た袋に毛布と自分の持ち物を入れて。

どの女達も村ヘトラックを入れる事を拒み、かなり手前で降りて歩いていくのだ。

ひっそりと帰って、ひっそりと暮らしたのであろう。

女達には餞別として金貨を1枚ずつ渡してやった。

街でも月に銀貨2枚（10万円）もあれば暮らしていけるって話なので、約2ヶ月分の金って事になる。

「ありがとうございます」

「なあと、街へ戻れば討伐成功の金が入ってくるんだ。このぐらいはさせてくれ」

ペコリと静かに頭をさげて、また1人女が村へ戻っていく。

「本当に――旦那は人が良いんだから」

「野盗に酷い目に遭わされたんだ、彼女達にも金をもらう権利が多少はあると思うがな」

「そんな話は聞いたことはありませんよ」

アマナの話では被害者の賠償請求みたいなものは、この世界には無いようだ。

村を3つ程回り4人の女が降りて日が暮れた。残り5人だが、明日中には全て回れるだろう。

辺りが暗くなり小川の近くでキャンプをする事になった。

アイテムBOXから、野盗のアジトの畑で採れた野菜を出すと女達がそれをもって小川まで洗いにいく。

たわしは、そこら辺の枯れ草を束ねて縛り自分達で作るようだ。さすがに手慣れている。

さて、スープは何にしようか。もっと他の料理を出しても良いのだが、手間のかかるのは無理だな。

醤油が受けないようなので、和食もダメだろうし。麺類もダメ――うーん、難しい。

そんな感じで、いつものスープとパンになってしまうわけだ。

だが街の人間も普段の食事はスープとパンらしいので、文句も出ていない。

それどころか美味いと好評なのだから。

「旦那！ 前に食った、とろとろのスープにしてくれ」

獣人達からスープのリクエストがあったのだが、とろとろのスープ？ 多分ポタージュの事だろう。

シャングリ・ラで検索してみる。1箱8個入りが300円だ。えーと、冒険者が16人——女が4人いなかったので16人で、合計32人か。

普通は1食1袋なんだろうが、1人前をタップリと作りたいところだから1人に3袋は使うな。——という事は、109袋、14箱買えば良い。

肉を再び10kg買って、女達が洗ってカットしてくれた野菜と煮る。

火が通ったら、ポタージュのスープの素を109袋入れれば良い。まあ言葉で言うのは簡単だが、100袋以上あると大変だ。皆に手伝ってもらう事にした。

「この袋を千切って、粉をお湯の中に入れば良いのですか？」

「プリムラさん、頼みます」

「ほう、これはスープの素か？ どうやって作るのじゃな？」

爺さんが、インスタントスープに興味を示したようだ。

「出来たスープをドンドン乾燥させて、水分を全部抜くんだ。それを砕いて粉にしたのが、これだ。水分が無いので腐らないから日持ちがする」

「ほう、これまた理に適っておるのお」

「魔法で乾燥って出来ないのか？」

「無論、出来る」

白い髭を撫でて爺さんが得意げな表情で言う。

「それじゃ、爺さんの魔法を使えば、作れるんじゃない？ あの、カリカリした保存食もそうやって作っているんだろ？」

俺のやったグラノーラを参考にした保存食だ。爺さんはそれを、

マロウ商会経由で卸して販売している。

「ほほ、バレたか」

そんな話をしているうちに出来上がったポタージュを皆で食う。

今日の料理も皆には好評なのだが、ミャレーが立ち上がって、俺に身体をスリスリし始めた。

「今日のスープも美味しいんだけどにゃあ〜うち等、あれが食べたいにゃ〜」

あれってのは猫缶だろう。本当に好きだな。まあ、このぐらいは良いだろう。

「よお、旦那。酒は無いのかい？」

獣人達に猫缶を配っていると、マツチヨが切り出した。

「ちょっと！ あんた達！」

アマナのお小言が始まりそうだったので、手で制してシャングリ・ラから酒を買った。

ペットボトルに入った例の4Lの焼酎だ。

女達の中にも飲みたい者がいるようなので、人数分の陶器製のカップも購入した。

それにしても【4L焼酎】で検索すると、色んな種類が各メーカーから出ているな。

みんな同じじゃねえか——と思うのだが——。

この手を愛飲していた知り合いに話を聞くと意外と個性があるらしく、好みに合う合わないがあるらしい。

「これしかないけど、これで良いか？ 以前、獣人達に飲ませた時は好評だったぞ」

「うひょー、ちゃんと酒があるじゃねえか」

「ちよいと、旦那」

アマナが呆れているが、戦勝祝だ。酒ぐらいは良いだろう。元々の軍資金は、マロウさんからもらったものだしな。

「まあ、いいじゃないか。そいつも大金が入って、女房と良い暮らしが出来るんだ。酒ぐらいは飲みたくなるだろう」

「へへへ！ 旦那のお陰でさ」

出発する前に変なフラグを立てまくりだったのだが、何事も無くて良かったな。

「お！ こりゃ、美味いぞ」 「ああ、どんな酒かと思ったら、街の飲み屋の酒より上等じゃねえか」

ペットボトルの焼酎を飲んだ冒険者達は上機嫌だ。

「私は――前に貴公から、いただいたのと同じ物を所望して良いか？」

「はいはい、これで御座いますね」

騎士爵用にシングルモルトウイスキーを購入した。前はスクリュ―キヤップを交換したり、ラベルを剥がしたりしたのだが、もうそのままだ。

「うむ、これだ」

カップにウイスキーを入れた騎士爵様は満足そうに飲んでいるのだが、水で割ったりはしないようだ。

まあ、この世界の生水はちょっと信用出来ないってところもあるから、そのせいもあるのかもしれない。

水石を使って浄化すれば大丈夫なのだが、そういう習慣自体が無いのかも……。

「騎士爵様、このような回り道をして申し訳ございませんねえ」

「なんの、これも民のため。女子供が困っているのだ見捨てるわけにはいかぬ」

みんなで集まって飯を食ってるのだが、すでに何人かカップルが出来ている。

荷台の上で意気投合したらしい。そりゃ、街へ帰れば大金持ちだからな。女から見れば優良物件なのかもしれない。

男に酷い目に遭わされたのに、男を頼らないと暮らしていくための選択肢が少ないという、この世界の事情が複雑に絡んでいる。

「女達とアネモネは果実の汁でも飲むか？」

シャングリ・ラから、みかんジュースを購入して、カップに注いでやる。

「美味しい！」

珍しく、アネモネが声を上げた。

「甘酸っぱくて美味しいねえ。まるで貴族様の飲み物だよ。まあ、男共が酒を飲んでいいるなら、あたし等も飲んで良いよねえ」

アネモネの隣にいるアマナも、みかんジュースを美味しそうに飲んでいいる。

その後、男達は暗い中でどんちゃん騒ぎを始めたので、少し離れた所で火を焚き、俺と女達は寝ることにした。
付き合ってもらえん。

寝る前に、アネモネの頭を虱取りシャンプーシラミを使って、アマナに洗ってもらおう。

これを1ヶ月ぐらい続けければ、大丈夫だろう。

— — — — — ◆ ◆ — — — — —

——次の日。

俺が目を覚ますと、すでに女達は起きていて後片付けをしてくれていた。

俺が出したペットボトルの焼酎は見事に全部空だ。焼酎だけではなくて騎士爵が飲んでいたウイスキーの瓶も空だ。

元氣な女達と対照的に、男共は見事にへたり込んでいる。恐らく宿酔ふっかよいだろう。

「呆れたよお！ こいつら馬鹿なんだからさ、酒なんて出してもあるだけ飲んじまうのさ！ 何ですか騎士爵様まで一緒になって！」

「め、面目ない……」

アマナのお小言に答える騎士爵様の顔も中々に酷い有様だ。

役に立たない男共を尻目に、女達は食事のスープを作っていく。

朝は中華スープにしよう。業務用の鶏の胸肉が2kg1200円で売っているので、こいつにするか。

女達も圧力鍋の使い方が解ったようで、材料さえ揃えれば勝手に作ってくれる。

「この鍋は便利ですねえ」

「そのうち、マロウ商会で売り出すかもな。でも、マロウ商会で売ると高くなりそうだな」

要は蒸気を閉じ込めれば良いのだから、蓋を乗せて上から重石でも掛ければ良い。

問題なのはパッキンだな。この世界にはゴムがないからな。それが、この鍋を異世界で売れない理由だ。

だが、何か代わりになる——異世界ならではの素材が見つければ圧力鍋も作れるかもしれない。

スープが出来たので、男共にも配る。

「ふうう……スープか。ありがてえ」

「獣人でも宿酔ふつかよになるんだな」

「そりゃ、なりますぜ」

「でも、普通はこうなる前に金が無くなるからにゃ」

まあ、ミャレーの言うとおりなのだろう。こんな調子じゃ貯金も無いはずだ。

病気でもしたらどうするのか？ ——なんて考えるのは日本人だからか。

飯を食い終わったので、再び皆をトラックの荷台に乗せ、村巡りのために出発した。

だが、荷台に揺られている宿酔ふつかよいの男共は、辛そうである。

「こんなの自業自得ですよ」

醜態を晒している男達に女達の視線が冷たい。カップルになりそうだった奴らも、百年の恋から冷めてしまったか？

「もうねえ！ 若い頃は見てくれが良いとか、多少金を持っているとか目の前の事ばかり気になるけどね！ 男は誠実さが一番だよ！ ちよつとぐらい金を持ってたって、ろくでなしじゃあつという間に文無しになっちまうからね」

なんだか、荷台でアマナの演説が始まってしまった。

「さすが姉さん、参考になりますだ」

「そりゃ伊達に長く生きてないよ」

まあ、アマナと女達は20歳ぐらいは歳が違うだろうから、それなりの人生経験に裏打ちされている発言ではある。

「じゃあ、ケンイチの旦那みたいな人かい？」

「ああ、ダメダメ。ああいう人は女なんてどうでも良いのさ」
「ギクッ！」

「自分のやりたい事があれば、女なんて捨てちまって、どっかへ1人で行っちゃもう人だね」

「ギクッギクッウ！」

クソ、さすがに長く生きてねえな。俺の本質を見抜いてやがる。

「にゃー！ それじゃ、うちは愛人で良いにゃー」

「まあ、遊びならそれでも良いんじゃない？ でも、すぐに捨てられても、泣くんじゃないよ？」

「にゃはは」

ミヤレーはケラケラと笑っているのだが、嘘なのか本気なのかよく解らん。

「ケンイチさん——アマナさんの言ってる事は本当なのですか？」

「まあ、当たってるかねえ……俺は趣味に生きる人間だからな」

「……」

ずっと荒野だが電信柱の一本も無い長閑な風景。高い建物など一切無いので空が広く、地平線まで見渡せる。

これまた長閑な村々を巡り女達を故郷へ返していく。村まで送ると、どんな愁嘆場が待ち受けているか解らん。

そういう場面に皆を巻き込みたくない——という思いも、故郷へ帰る女達には、あるのかもしれない。

昼過ぎにパンを配って、軽い食事にする。

この世界では農家などは皆が1日2食だ。1日3食、食うのは街の商人ぐらいだな。基本は朝晩でドカ食い。

だが貧しければ、そのドカ食いも出来ないのだ。

午後3時頃に、一番遠くの最後の村へ到着して、女を1人降ろし

た。

ペコリと頭を下げて、村へ歩く女を見送りながら、トラックをダリアに向ける。

「もう、夕方になるよ？　こんな遠くの村から本当にダリアの閉門前に着くのかい？」

まあ、アマナの疑問ももつともだ。

恐らく、ここからダリアまで100 km程度。時速50 kmで走っても2時間で着く。

門は6時頃に閉まるから、余裕だ。間に合わなければ、もう1泊すれば良い。

荷台に皆を乗せて、傾きかけた太陽を背にトラックはひた走る。だが、事故は起こさないようにしないと――注意一秒怪我一生。

「禍福は糾える縄の如しってな」

「何ですか？」

プリムラさんが――疲れてしまったのか眠っているアネモネを、助手席で抱えている。

「縄ってのは、2本を手にとって緬^なうじゃありませんか。そのように幸と不幸は隣り合わせで絡んでいる――という比喻ですよ」

「確かに、その通りですわ……父と買い出しの旅をしていたのに、このような事に……」

「まあ、こちらには犠牲者は出ませんでしたし、上々の結果ですよ」

「これで、ケンイチさんが、ダリアに帰ったら英雄扱いですよ」

「ははは、止めてくれよなあ。そんなの性分に合わないし」

「村々も正式に訪問すれば歓待してくれたと思いますよ。あのシャガという野盗には度々襲われていたという話でしたし」

「でも、捕まっていた女達が人々の目を集めてしまい、暮らしにく

くなってしまうからなあ。これで良かったと思うよ」

「ケンイチさんらしいですわ。名誉欲とか全くありませんのね」

「ないない、全く無い。とりあえず飢えない程度に稼いでゆっくりと暮らしたいだけ」

それが、なんでこんな事になったんだ。

だが、救える可能性があったのに、プリムラさんを見捨てるわけにはいかなかった。

空が赤く染まり、影が長く伸びる頃——やっとダリアの城壁が見えてきた。

「おおい、着いたぞ！」

窓から顔を出して後ろの荷台に呼びかけた。

「本当にやゝ！ もう着いたにや！」

「これじゃ俺達獣人並の速さだぜ」

「すごい！ マジで着いたんか！」

冒険者達が荷台で沸いているのだが、はしやぎ過ぎて落ちるなよ。だが閉門間近なので、門は少々馬車で混雑している。皆が閉門に合わせて急いでやって来るからだ。

「はいはい！ 御免なすって、御免なすってえ」

通りに出ると、馬車を追い越して冒険者ギルドへ向かう。

ギルドの前には、マロウ商会の馬車が停まっていた。

その前で、ウロウロと落ち着かない動きをしている緑色の服を着た男——マロウさんだ。

トラックのクラクションを鳴らし、マロウさんの注意を引く。彼もすぐに気がついたようで、こちらへ走りだした。

ギルドの少し手前でトラックを止めると、左のドアを開けて、プ

リムラさんが飛び出していく。
そして道の真中で親子が抱き合った。

「お父様！」

「プリムラ！ おおお！ プリムラア！ よくぞ無事で！」
抱き合いながら、おいおいと泣き合う2人だったのだが――。

「プリムラー――これは随分と上等なブラウスじゃないか」

「ええ、お父様。ケンイチさんからいただきました」

「これは――商会でも扱える」

途中から商売の話になっていて、さすが根っからの商売人だ。どんな時も商売を忘れない、商売人の鑑だな。

抱き合う親子を見ながら、ギルドの前にトラックを横付けした。
そのトラックの天井へ乗っかり、獣人のニャケロが叫んだ。

「野盗のシャガを俺達が殺ったぜ！ 俺達を笑った奴は前に出てこ
いってんだ！ ハハハ！」

だが言葉だけでは信じていない奴もいる。

「旦那！ シャガの首だ！」

えええ？ ここで出すのかよ！ だが仕方ない。気色悪いが、シ
ヤガの生首をアイテムBOXから取り出すことに……。

なんの因果で、俺がこんな目に……しかし、これが異世界らしい
と言えは、その通りだ。

俺から渡された鮮血滴るシャガの生首を高く掲げるニャケロ。

「どうだ！ こいつがシャガの首だ！」

「――「おおお！」」 「確かに、手配書の通りに左頬にデカイキ
ズがあるぜ」

騒ぎに集まってきた観客が、お互いに顔を見合わせながらあれこれ話をしている。

住民の予想通りの反応に、ニヤケロは鼻高々だ。

さて、これで一件落着とはいかない、事後処理をしないとな。

30話 金を山分け

野盗の首をアイテムBOXへ入れて、俺達はダリアの街へ帰ってきた。

獣人のニャケロがトラックの上に上り、首を高らかに掲げて勝利宣言をかました。

さて、勝利宣言をただけでは終わらない。

冒険者ギルドへ入って、討伐を成功した事を報告しなければならぬ。

だが観客が何故かざわついている。どうも見るからに上等な白いブラウスを着た綺麗どころが同行しているのが気になるようだ。

野盗の下で囚われの身だった彼女達だが、悪党共のお気に入りが残った結果で中々の美人揃いだ。

それが身体を石鹸で洗い髪をまとめ――身だしなみを綺麗にして並んでいるのでは、嫌でも野次馬達の気を引く。

ひととき大きな身体を持つ、アリッサにも好奇の目が向けられているようだ。

集まる住民達に構わず、総勢15人の冒険者達がギルドへ入っていく。

ニャケロが手に持ったままの生首をカウンターの上にドスンと置いた。

「ひいひいっ！」

目の前の白目を剥いた血も滴る生首に、受付の女の子が飛び上がった。そりゃ当たり前だ。もうすこしデリカシーってものが無いの

か？

「おらあ、野盗の親玉——シャガの首だ。存分に見分しやがれってんだ」

「こ、ここに置かれてもこまりますう」

「これだけの獲物だ、お前らも徹夜でやりやがれ！　ハハハ！」

なんだか、ニヤケロの奴はギルドに鬱憤でも溜まっているのか？
逃げ惑う女の子達に代わって男の職員が出てきた。

「あの、首はどのぐらいあるのでしようか？」

「えーと……じゅう……じゃねえや——えーと、旦那！　いくつだった？」

「シャガの首を含めて52だ」

「そう！　それだ！」

獣人は指で数えられる10以上になると、全くダメだ。まれに計算が出来る獣人もいるようだが、滅多にいないと言う。

職員の前に騎士爵様が歩み出た。

「ノースポール騎士爵だ。ギルドマスターに会いたい」

「これは騎士爵様。ここでしばらくお待ち下さい」

騎士爵様は、この件に貴族が関わっている事をギルドマスターに報告するのだろう。

「ケンイチ殿。私は明日にでも、ここを治めているアスクレピオス伯爵に会いに行ってくる」

「貴族が絡んでいる事を、ご報告なさるのですね？」

「そうだ」

「そちらは騎士爵様にお任せいたします。相手が貴族であれば、我々平民には手出しが出来ませんし」

「任せよ」

ニヤケロは徹夜で仕事をしろと言っていたが、本当に今から見分を始めるようだ。

慌ただしく職員が走り回り、ギルドの備品であるランプ等が集められていく。

だが、さすがにギルドの建物内に生首を並べるわけにもいかず、いつも魔物や動物の解体に使われている処理施設が選ばれた。

血と臓物の匂いが染みこむ建物内に、首が52個――俺のアイテムBOXから出されて並べられた。

「あ、あの……首がまだ温かいんですけど……」

慣れない作業に女子職員達は及び腰だ。

「首を落としてすぐに、あの旦那のアイテムBOXへ入れて持ってきたからな。出来たてのホヤホヤよ」

「こんなホヤホヤ要らないですう」

「何言ってやがる。腐ってドロドロや、塩漬けでしわくちやの首より余程良いだろうが」

「へへ、悪党の首もこれだけ並ぶと壮観だな。こいつがシャガの野郎か。確かに悪そうな面をしているぜ」

以前、俺の持ち込んだ獲物を解体してくれた口髭と傷だらけの職員は、この手の仕事は慣れっこのようで平気な顔をしている。

職員総出で手配書との照合が始まった。勿論、この世界には写真等は無いので、皆が似顔絵と犯罪者が持つ特徴とを照らし合わせて見分が行なわれる。

だが、一緒のパーティに騎士爵様がいてくれて遥かに信憑性が上がった。

やはり地位の高い人がいると物事がスムーズに運ぶ。そうでなければ、これが違うあれが違うと難癖を付けられて、金が減額される事もあると言う。

ニヤケロがギルドに少々負の感情を持っているのはそのせいなのだろう。

身分が低いし、知能もあまり高くない——という事で足元を見られる事も多いらしい。酷い話だ。

見分している最中に俺はやることがない。通りに停まっていたトラックをアイテムBOXへ収納する事にした。

突然、目の前から消える鉄の化物に集まった住民達は驚きの声を上げる。

一応、アイテムBOXへ仕舞ったのではなく、召喚獣の召喚を止めたから消えた——という事になっている。

信じようが信じまいが、これで押し通す事にした。

プリムラさんとマロウさんは皆に頭を下げまくった後、馬車で帰宅した。色々あったんだ、親子水入らずで自分の家でゆっくりとしたいだろう。

首が並べられた現場に戻ると、背の高い痩せた男が加わり現場を仕切っている。緑色の法衣らしきものを着て、少々長めの焦げ茶色の頭と、顎には薄い髭が生えたナイスガイ。

どうやら、この眼光鋭い男がギルドマスターらしい。

「師匠、話を聞いてまさかと思いました、年寄りの冷水は程々に」

「何を言うか。わしゃまだまだやれるぞ？ 今回の討伐で見なおしたじゃろ？」

それにの、色々と発見もあった事じゃし」

「その発見というのは？」

「内緒じゃ。弟子だからとて、何でも教えてもらえと思うたら大間違いじゃぞ？」

ええ？ ギルドマスターの師匠って……。

「爺さん、結構凄い人だったんだな」

「ホホホ、見直したか？」

「まあな」

「それでの、後で頼みがある」

「世話になったし俺に出来る事ならな」

騎士爵様だけじゃなくて、ギルドマスターの師匠ってのが同行していたんだ、この討伐の真偽について、もう疑いを挟む奴はいないって事だ。

全部の首が見分されて間違いなくシャガ一味の物と確認された。だが、この場で金の支払いがされるのではない。何しろ大金で、金庫にも金が入っていないだろう。

内訳は――。

シャガの首 金貨100枚(2000万円)

幹部の首 金貨50枚(1000万円)×10人 合計金貨500枚(1億円)

手下の首 金貨25枚(500万円)×10枚(200万円)

×41人 合計金貨825枚(1億6千500万円)

ギルドからの賞金 金貨100枚(2000万円)

マロウ商会在が掛けた賞金 金貨100枚(2000万円)

国からの報奨金 金貨100枚(2000万円)

総額金貨1725枚(3億4千500万円)

1人あたり金貨115枚(2300万円)

――の稼ぎである。

これプラス、敵のアジトから奪ってきた諸々の物資がある。これ等の売却代金も均等に分けられる予定だ。

だが――。

「わしの稼ぎは、お前さんにやる。その代わり、あの金属の板をも
う一枚くれ。そちらのほうが貴重で金では買えん」

「爺さんがそう言うなら、それで良いが」

特殊な金属を触媒に使って、魔法のブースター代わりに使えら
なれば、確かに金では買えないアイテムだ。

この世界には、俺がシャングリ・ラから取り寄せた分しか無いか
らな。

アルミが存在しないというこの世界――もしかしたらアルミの原
料であるアルミナがあるかもしれないが、あれを精製するのは電氣
を大量に食う。

この世界風に電撃の魔法等で代用出来るかもしれないが、そう簡
単ではないだろう。

爺さんの分も合わせて4600万円の稼ぎか――命がけで戦った
のだから、このぐらいはもらってもバチは当たらんよな。

見分が終わると、すでに辺りは真っ暗――普通の住民達は一杯飲
んで、寝始めている時間帯だ。

だが、デカイ出来事があったので、未だにギルド前では野次馬の
人ばかりが出来ている。

娯楽に飢えているので、こういうのはすぐに飛びつくようだ。

暗くなったギルドのカウンター前の広間で、皆で打ち合わせと金
の計算をする。

獣人達は勘定も計算も出来ないの、あたふたしているのだが、
爺さんや騎士爵様がいるのだから大丈夫だと言いつける。

広間の壁際にある椅子には、敵のアジトから連れてきた女達と――
眠っているアネモネを抱いているアマナがいる。

そこに、1人の女性がズカズカと入ってきた。

紺のスカートに白い粗末なブラウス――この世界で標準的な服装
だが小さな前掛けをしている。

少々小太りだが痩せれば美人そう。

その女性は、マッチョの下へ直行すると、いきなり男の頬を殴った。

「オカトラ！ 新婚だったのに、いきなり女房を未亡人にするつもりかい！」

「あいたあ！ セルリア、ちょっと皆が見ている前で勘弁してくれ」
「どうやら、マッチョ——オカトラと言うらしい。彼女は、こいつの女房のようだ。」

「あたしに何の相談もなく！」

「お前に相談したら反対するに決まってるだろう？」

「当たり前だよ！ このトンチキ！」

「ええ？ お前、女房に黙って参加したのか？ そりゃ怒るに決まってるだろ」

「はは、面目ねえ」

もう一度手を振り上げた女房の前で、借りてきた猫のようになるオカトラ。トラなんて付いているのに、マジで猫だろ、そりゃ。

だが、女はオカトラに抱きついて泣き始めた。

「金なんか入ったって、あんたが死んじゃ何もならないじゃないか！」

「すまねえ……」

「悪いと思ってるんだね？」

「そりゃ、もちろん思ってるさ」

「それじゃ入った金は全部、あたしにおよこし！」
女が顔を上げると、オカトラを睨みつけた。

「そりゃないぜ、セルリア」

「お黙り！ どうせ、あんたに金を持たせたって、あつという間に

使い込んだ拳銃、無一文。また危ない橋を渡ろうとするに決まっている！」

「そうそう！ その通りだよ。女房に金を持たせた方が良いよ。男が金を持つとろくな事に使わないんだから」

話を聞いていたアマナの茶々が入る。

「勘弁してくれよお……」

マッチョな身体を小さくして泣きが入るのだが、尻に敷かれているようだから、こりゃ無理そうだな。

打ち合わせの結果、色々と道具を用立ててくれて、美味しい飯も食わせてくれた——ということで、皆が俺に分け前をくれるようだ。中々義理堅い連中だな。俺としても断る理由もないので、ありがたくもらっておく。

金がいくらあっても困る事はないからな。アイテムBOXにいれておけば、重くもないし安全だし。

その金額は金貨5枚（100万円）→10枚（200万円）、14人で合計で金貨80枚（1600万円）程になった。

全部で6200万円の稼ぎだ。

それと、俺の出したアイテムについて、他言無用とすることをお願いした。

だが、これだけ派手に暴れたんだ、噂が広まるのは避けられないだろうな……。

「アマナ、お前は討伐に加わってないが、金貨5枚ぐらいで良いか？」

「ええ？ 要らないよ、そんなもの。あたしゃ、まったく働いていないじゃないか。怖い思いもしてないしさ」

「だが、色々と手伝ってくれたじゃないか……それじゃ、金貨1枚

（20万円）ぐらいなら受け取ってくれるか？」

「そりゃ、まあ……料理の用意も手伝ったし、この子の面倒もみた
いし、そのくらいならもらっておこうかね？」

アマナに金貨を渡す。アネモネは、とりあえずアマナの家に泊ま
るようだ。

一緒にいた女達にも、金貨を1枚ずつ渡す。

「いいんですかい？ 金貨なんかいただいて……」

「職を探すのにも、寝床を探すのにも金がいるじゃないか。良いか
らもらっておけて」

「そりゃ文無しですからねえ。ありがたく頂戴いたしますよ」

女達は金を受け取ると、宿を探すようだ。

「困った事があれば、アマナかあそこにいる爺さんを頼れば良い。

この街で顔が広いからな」

「任せておきなっ」

俺は、この街に———というか、この世界に来たばかりの新参者だ
からな。

さて、すでに門は閉まってしまった。俺も泊まる所を探さないと
ダメだが——最初に泊まった宿で良いか。

表には、まだ人が沢山いる。ギルドの裏口から出て通りをてくて
くと歩いて宿屋を目指す。

もうすでに夜空にはグラニュー糖をぶちまけたような星空。

10分程歩き、アザレアがいる宿屋に到着した。

「こんばんは、泊まりたいんだが、部屋は空いてるか？」

「ケンイチ！ ケンイチらしい人が、鉄の化物に乗って野盗の討伐
へ行ったって聞いたんだけど?!」

宿屋の食堂で酒を飲んでいた連中が一斉にこちらを向いた。

「ああ、違う違う、人違いだから」

「なんだあ、そうだよねえ」

無論、大嘘である。大金が入るって事を知られたら、皆にたかられるからな。

話を聞いていた客達も、また酒を飲み始めたのだが――アザレアが急に抱きついてきて、上目遣いで俺を見てくる。

「ねえ、あたしを愛人にしてくれるって約束は覚えてるう？」

「いや、全く覚えてないな」

「酷い！ あたしの事遊びだったのね！」
見るからに嘘泣きだ。

「まあ、お前も小遣い稼げたし良かったじゃないか」

「……ケンイチはもっと、お人好しかと思った」

彼女は独自の嗅覚で――俺が金を持っている事を嗅ぎつけたんだろう。もしかして討伐が成功したのは、俺だと解っているのかもしれない。

「ハハハ、ごめんな俺は悪いオッサンだから。ほら、お釣りはお前の小遣いにして良いから」

この街へ来てから色々世話になってるアザレアにや悪いが、小四角銀貨1枚（5000円）を渡して2階へ上がる。

色々アイテムもくれてやったし、その義理も果たしているだろう。

俺がいつも使っていた部屋が空いていたので、そこに泊まる事にした。朝飯は無しだ。

疲れていたのも、そのままベッドに倒れ込む。

だが、疲労困憊していると中々ぐっすり眠れない。うつらうつらしていると、ドアが開いた。

燭台を持ってオレンジ色の光の中に立っていたのは、アザレアだ。

「おい、アザレアか。俺は疲れてるんだよ」

俺のその言葉を聞いたはずなのだが、アザレアが服を脱いで毛布の中へ潜り込んできた。

「今月は稼ぎが少ないんだよ。先っぽだけで良いからさあ」

「何言ってるんだお前、先っぽだけで金を取るのか？」

「じゃあ、奥まで入れる？」

埒が明かないので、結局やることにした。

だが、事が終わってスッキリしたせい快眠する事が出来たのだ
が――。

しかし、これで良いのか？

全くスローライフっぽくないのだが。

――――――◇◇――――

――次の日。

ベッドでアザレアがまだ眠っているが、そのままにして宿屋を出るとギルドへ向かう。

冒険者ギルドへ到着すると、すでに皆が集まっていた。何故か女達も一緒にアマナとアネモネもいる。

騎士爵様は昨日の話通りに、この地を治めている伯爵様とやらいかに会いに行ったらしい。

これから野盗のアジトで集めた物を売りに行くのだ。

皆は宿屋や自宅で飯を食ってきたらしいので、俺はアイテムBO

Xからパンを出して齧りつつ後をついていく。
ワイワイと皆で話しながら通りを歩くのだが――。
金が入ったら、やってみたい事を口々に皆が夢を語る。

「贅沢や無駄遣いすると、あつという間に金が無くなるぞ？」

「そうなんだよねえ、中々上手くはいかないよ」

「金持っていると、怪しい人間が金に集ってくるしな」

「本当に碌なもんじゃないよ」

アマナも小金を稼いで転落していった奴らを沢山見ていると言う。
ここら辺は、どこの世界でも一緒のようだ。

美味しい話なんて物は無いって事だ。本当に美味しい話は誰にも言わない――俺のシャングリ・ラみたいにな。

皆で話し合いをして、武器や防具などは出発の際に装備を揃えた武器屋で売ることにした。

それに野盗達が旅の商人やら、キャラバンから分捕った物が多いので、良い品物が多い。

盗賊1人当たりから剥ぎ取った装備を15万円相当として15×52人で780万円――。

結構な金額だ。商人の中には、この剥ぎ取りで財を成した連中も多いと聞く。

店に到着すると、店員に建物の裏手へ案内してもらい、52人分の武器や防具をアイテムBOXから取り出した。

「こ、こんなにですか？」

店員が山積みになった武器と防具に目を見開く。

「ここは本店だから、このぐらいは大丈夫だろ？　しばらく在庫に困らなくなるぞ」

「し、しかし……」

「買い取ってあげなさい」

奥から出てきたのは、ここの主人だ。

恰幅がよい体型に紺色の上下——目が細くスキンヘッド。例えるならば大仏様か。

「ここら辺一帯で荒稼ぎしていた野盗の武器と防具だ。良い物が多いぜ。お買い得だろ？」

店の主人が色々と調べているようだが、見た目にも良い物が多い。人の血を吸いまくって、使い込まれている物が多いが、それで価値が落ちる事も無い。

何故ならば、それだけ実戦で使っても壊れないと証明されているからだ。

プロの中には、この手の物を好んで使う奴もいると言う。

車で言えば、慣らしが終わって当たりが出てきた——といったところか。

武器屋での売却が終わり、次の店へ向かう。

シャガが集めていた絨毯やら陶器やら宝剣やら——そういった高価な物はマロウ商会に買い取ってもらう。

こういう物は買う相手が貴族や金持ちだから、客層が全く違う。家具やらは爺さんの道具屋で買い取ってもらえば良い。

それと、悪党のアジトには金貨も100枚程あった。そいつも皆で山分けた。

そして全ての売却が終わって、その総額は——金貨178枚（3560万円）

15人で山分けして1人当たり金貨11枚（220万円）。端数は女達にやることにした。そのほうが後腐れなくて良いだろう。

ギルドからの金は支払いに少々時間が掛かるらしい。

金を分けた後、ギルドからの金を受け取る日に皆で集まる約束をした。

皆と別れると、やっと森にある自宅へ脚を向けたのだが――。

俺の後を何故か女達が付いてくる。

アネモネも一緒だ。

「おいおい、何で俺の後を付いてくるんだ？」

「あのお、こんな事を頼めるのは旦那しかいないと思ってえ――皆で相談したんだけど……」

話を聞けば、住む所と仕事を見つげるために金を節約したい。それで俺の家へ泊まりたいと言う。

「皆の話では、自分の家を持っているの、旦那だけみたいですし……」

「ええ？ 俺の家は小さいぞ？ 11人も寝られるかな？ それで良いのか？」

「はい、雨風しのがりや、それで良いです」

「アネモネはアマナの所が良いんじゃないのか？」

「……ケンイチの食事の方が美味しかったから」

イカン、餌付けをしてしまったか。

「旦那あ！ 畑があるなら、オラがやるっぺ。任せてくんろ！」

そう言って、アリッサがポニーテールを揺らして、言うのだが――。

マジですか？

31話 異世界の女子校は森の中

野盗の討伐が成功して金の分配も済んだ。

ギルドからの金は大金になるので、支払いにはもう少し時間が掛かるという。

事が済んで、いざ家に帰ろうとしたら女達が俺の後を付いてくる。話を聞けば、住居と仕事を探すまで金を節約したいので俺の所へ泊めてほしいというのだ。

まあ、可哀想な目に遭った女達が困ってるって言うんだから放っておけないが……。

「俺の家は森の中にあるんだぞ？ それは聞いたか？」

「ええ、ちょっと怖いですけど旦那は住んでるんでしょ？」

「まあな、今のところは大丈夫だ」

「畑もあるんだべ？ オラが手伝うからよ！」

アリッサが腕をまくり、力こぶを作って俺に見せてくる。

「畑っていつでも小さな畑だぞ？」

何故か皆が乗り気だ。断る理由も無いし人助けのついでだ。

それに、いつまでも居候だと困るが、仕事を探すまでの間って約束だからな。何ヶ月もいるつもりでも無いだろう。

女達をぞろぞろと引き連れて門から城壁の外へ出ると――俺が作った道を通して家に到着した。

「ほら、ここだぞ？ この小さい家に12人も泊まるって言うのか

？」

女達は、辺りを見回しながら森の中に建てられた焦げ茶色の家に驚いている。

「旦那が良いのなら、わたし等は狭くても全然構いませんけど……」
まあ、悪党のアジトでは狭い所へ押し込まれて、雑魚寝させられていたようだからな。

「宿賃は要らないけど食費は取るぞ？　これだけの人数だと食材だけでも大金が掛かるからな」

その件も皆が了承してくれた。

あまり、わがままを言うようなら断っても良いのだが、身寄りのない女達ばかりだ。

他に頼る所が無いんだろう——仕方ない。

皆で家に近づいたのだが、陰にいた黒い動物に女達が飛び上がって叫んだ。

「ぎゃああ！」

「なんだ?!」

陰から出てきたのは森猫だった。

「なんだ、お前か」

彼女の口には黒い毛皮の獲物が咥えられている。だが、3日程留守だったので、すでに死後硬直が起きて獲物の鮮度がかなり落ちている。

こりゃ肉にするのは無理だな……。毛皮としてもどうなんだ？

一応、アイテムBOXへ入れておいて後で冒険者ギルドで聞いてみるか。ダメなら彼女には悪いが、ゴミ箱行きだな。

「よしよし、ありがとうな」

彼女の喉を撫なでると、ゴロゴロと音を鳴らして応えてくれる。

「はああ、びっくりしたあ。その森猫は旦那の知り合いですか？」

「ああ、噛んだりしないから心配するな」

アネモネが俺の隣へやって来て、一緒に森猫の背中を撫なでてニコニコしている。

あまり笑顔を見せない子だが、森猫は可愛いらしい。

「調教師テイマーだって聞いたけど、本当だったんですね」

「もう、そこら辺も内緒にしてくれって言ったのに」

まあ、本当は調教師テイマーじゃないけどな。家の扉を開けると森猫が黒い身体をくねらせ中にするりと入った。

「あそこにある板は、なんだい？」

女の1人が、太陽電池パネルに気がついたようだ。

「ああ、あれは魔法に関する物だから、聞かないでくれ」

「畑も、もっと広くするっぺ！」

畑を見たアリッサが大声を上げたのだが――。

「俺1人なら、このぐらいで十分だよ。それに畑を広げて、作物が大きくなる頃には誰もいなくなるんだろ？」

だが、皆が黙る。

何故、黙る？

少々、先行きに不安を感じながらも、ここまで来て、いまさら追いつけぬわけにもいかない。皆で一緒に住むことになった。

本当に、マジデスカ？

だが、この人数が住むとなったら、多少は手を入れないとダメだ

ろうな。

先ずはスペースの問題だが、それは2段ベッドを購入して解決することにした。

女達が10人だから、2段ベッドが5つあれば良いだろう——というところで、シャングリ・ラを検索して、一番安いパイプベッドを2万円で購入した。

木製のベッドも4万円程で売っているのだが——この2段ベッドは、これっきりしか使わないだろうから、なるべくコストを抑える事を優先する。

このベッドは女達がいなくなったら下取りに出してしまおう。

力持ちのアリッサにベッドの運搬と組み立てを手伝ってもらう。

ただ、大人数でワイワイガタガタと騒々しいので、家の中にいた森猫は不機嫌そうに、シンクの前で丸くなっている。

「これなら、上下で2人寝られるから、雑魚寝にならないで済むだろう?」

「こんな立派なベッドを用意してくれなくても良いのに、旦那は人が良いって聞いてたけど、本当に人が良いねえ。こんな人じゃ悪い女に騙されるんじゃないかと心配だよ」

「別にお前らに心配されなくても大丈夫だ。その手の修羅場は、それなりにくぐっているんで、騙されたりはしないから」

「え? それって、どんな修羅場なんですか?」

「あたしも聞きたいんですけど?」

「あたいも」

あゝ非常に煩い。^{うるさい}女が3人いれば、かしましいって言うが——それが10人だからな。

女子校の教師とか、こんな感じなんだろうな。

「そんな事よりベッドの設置を手伝え」

「「はーい」」

完全に乗りが女子校だ。

2段ベッドは買ったが、下に敷くマットレスも買わないとダメか。うーん、一番安いマットレスが3000円か……こいつも10枚必要だな。

それとシーツだ。この世界では定番の麻のシーツを買おう。

「ポチッとな！」

マットレスとシーツが10枚落ちてくるので、女達にベッドへ敷かせる。毛布は俺がやった物があるので、それで十分だろう。

この狭い中に俺とアネモネ、そして女達が10人。狭い部屋の中には女達の匂いが充満する。どんな状況だよ、これは。

結構、美人揃いなので、ハーレムと言えない事も無いが……。

だが、困った問題が1つ起きた。

アリッサの巨軀がベッドに入らないのだ。

デカイダブルのベッドを買えば良いのだが……。

「あたしなら床で寝るだべ」

「それでいいのか？ それじゃ、その柔らかい敷物マットレスを床に敷いてくれ」

それに床に直敷きすると、身体から出る水分で床が濡れるんだよな。畳なら通気性があるから大丈夫なんだが……。

こういうフローリングだとマットレスにカビが生えたりする。毎日、乾燥させないとダメだ。

「それじゃ2段ベッドが1箇所開くからそこにアネモネが寝れば良い」

だが、その話を聞いたアネモネが首を振る。

「え？ 嫌なのか？ それじゃどうしたら良い？」

「ケンイチと一緒に寝る……」

「えゝ、俺とか？」

「……」

アネモネの顔が急に悲しげに変わる。

「待て待て、アネモネの事が嫌いじゃないんだよ——解った解った、一緒に寝てやるから」

「……うん」

まあ、いきなり親に売られたりしたからなあ。子供としてはショックだったろうな——そのせいで愛情に飢えているのかもしれない。

「アネモネには読み書きと計算も教えてやるからな」

「えゝっ！ ずるい！ あたし等にも教えてよ！」

「ええ？ お前等にもか、そりゃ構わないが……」

「だって、読み書きと計算が出来れば、仕事だって色々出来るでしょ？」

「なるほど、一理あるな」

この世界で女達が出来る仕事ってのは限られている。女には厳しい世界だ。

「勉強もそうだが、ブラウスとスカートを、もう1着ずつやろうか？ 換えが無いと、洗濯をする時に不便だろう？」

「いいんですよ旦那、そこまでしなくても。そのくらいは自分達のお金で買いますから。もう、本当に人が良いんだから」

俺にしてみれば、シャングリ・ラで一番安いブラウスだからな。だが街で買えば、その20倍〜50倍以上は軽くする。何せ全部手織りなのだから。

故に金の無いやつは、服がボロボロになっても継ぎ接ぎをして着続けるのだ。

ベッドの設置が終わったので、外を案内する。

「ここが水場だ。この鉄の瓶ドラム缶の中に水が溜まるから、これを使ってくれ。洗い物とかもここでな」

ここは風呂場だが、この人数で風呂は無理だ。そのまま水瓶として使う事にする。

井戸で身体を洗ったりするのは、この世界では普通なので、それで我慢してもらう。

「旦那、井戸はどこにあるんだい？」

「あの、小さな祠ほくらみたいのが井戸で、魔法を使って汲み上げているんだよ」

「へえ」

続いてトイレへ案内する。

「これが便所だ。こうやって座ってする」

「ええ？ 変なお」

この世界の便所はウンチングスタイルだからな。当然、洋式便器は無い。大体陶器製の便器なんて超高級品だ。

王侯貴族しか買えない。

「し終わったら、この紙でケツを拭け」

「ええ？ 紙をこんな事に使ってもいいんですか？」

「ああ、街の奴らには内緒だぞ？」

「へえええ……」

なんだか感心しきりなんだが。まあ、この世界じゃ紙も高級品だからな。紙でケツを拭く奴なんて誰もいない。

それが貴族様でもだ。

それじゃ、皆はどうやってケツを拭いているかと言うと――便所にある溜め水で、パシャパシャ洗うわけだ。

「便所の下にある容器が一杯になったら、あそこにある土と枯れ草を混ぜて肥料にする」

ただ、さすがに10人にもなったら、すぐに一杯になりそうだな。重機で穴を掘って、もっと大型の容器にするか——それとも、毎日こまめにやるか。

うーん、女達がいるのは、そんな長期じゃないはずだからなあ。このままでも良いかな……。

汲み取りも肥え作りも、この世界では普通の作業だ。どこでも普通に行われているので、女達にも抵抗は皆無。

俺が住んでいた元世界のド田舎でも、普通に汲み取りだったから俺も平気だ。

だが、元世界で生まれた時から水洗トイレしか使っていなかった奴が、こんな世界へ転移してきたら、さぞかしストレスが溜まると思う。

「じゃあ、最初からあそこでしちゃえば良いんだべか？」

アリッサが堆肥のある場所を指差す。

「お前がそれで良いなら、構わないが……」

どうも、文化の違いってのは、いかんともしがたい。

だが、合わせて12人分の下の量はかなりになる。きちんと管理しなければならぬ。

身の回りを清潔に保つ——ってのが、文化的な生活の第一歩だからな。

それと、薬用石鹼で手を洗わせる習慣を付けさせないと。寄生虫とかの心配があるからな。

それから12人ともなると洗い物の量も膨大だ。それ用に大型の洗濯機を購入するか迷ったが——。

皆が手洗いをするようなので、それに従う事にした。
大型の電化製品を買っても彼女達が居なくなれば無用の長物だからな。

部屋の中はベッドで一杯になってしまったので、食事は外にテールブルを並べてするしかない。

雨が降ったら大変だな。その日は家の中でパンでも食うしかない。カセットコンロでお湯は沸かせるので、カップスープぐらいは出せるだろう。

それでは——ということ、皆で晩飯の準備をしていると森の外からミャレーがやってきた。

「楽しそうだなー！ ウチも泊まるにゃ！」

「おいおい、家の中はびっちりなんだぞ？」

「ウチ1人ぐらいどうとでもなるにゃ。梁^{はり}の上で寝ても良いにゃ」

「本気か？」

獣人は3世代ぐらい一緒に住む大家族構成。しかも一夫多妻もありらしいので、家の中が騒がしいのは普通だと言うのだが。

「しかしミャレー、こんだけ人数がいるから、風呂は無理だぞ？」

「まあ、仕方無いにゃあ」

皆で一緒に食事をして、終わる頃には辺りは真っ暗。

後片付けをする女達にランプを渡して、俺は部屋の中へ戻る。

この世界は暗くなったら寝る——そして明るくなったら起きる、そんな世界だが寝るにはちょっと早すぎるな。

そうだ——女達の勉強の準備でもするか。

シャングリ・ラを検索すると、A4サイズの黒板が売っていた——値段は1500円でチョークと小さな黒板消しが付いている。

これだな、こいつを11枚購入する。それから追加のチョークか。

これは72本入りで500円で売っていたので、こいつで良いだろう。

この世界でも黒板と白石というチョークのような物があるので、女達に持たせたら、そのまま使えると思う。

餞別に持たせてあげよう。

問題は教科書だな。例えば読み書きを教えるのに五十音表が人数分が必要になる。

まさか、このためにPCとプリンタを買うわけにもいくまい。さて、どうしたものか？

「印刷——印刷かぁ、そうだ！ ガリ版はどうだ？」

シャングリ・ラでガリ版を検索すると、油紙やスクリーン、インクとローラーまで売っている。

全てセットになってる物が売っていたので、そいつを購入してみた——7000円だ。

珍しくダンボールに入ったセットがドシャ！——と落ちてくる。中を覗くとそれらしい物が入っているのだが——。

俺の記憶の中にあるガリ版は、鉄筆とヤスリのような鉄板を使っていたはずだ。それが無い。

だが、説明書を読むと印刷は出来るようだが、ガリ版というよりはシルクスクリーン印刷に近い物らしい。

原理的には一緒かもしれないが、何か違うよなあ……。まあ、無い物ねだりをしてもし方がない。

それとガリ版と言えば、わら半紙だ。1000枚が2000円で売っていたので、こいつを購入した。

これで、皆の教科書を作る事にしたが、本を作って市場で売っても面白いかな。挿絵は俺が描けばいいわけだし。

「何やってるにゃ？」

「皆が読み書きを習いたいって言うから、その準備だよ。ミヤレ
ーもどうだ？」

「あにゃにゃ！　ウチ等は読み書きは全くダメだから要らないにゃ」
獣人達の記憶力が悪いわけではない。道も覚えているし、人の顔
だって覚えている。記憶力はそんなに悪くない――むしろ良いぐら
いだ。

だが、文字がまったく覚えられないらしい。

元世界でも難読症っていう読み書きが困難な病気があるから、種
族単位でそれに近いのかもしれない。

かくして女達10人と俺、そして女の子1人の寿司詰め共同生活
が始まった。

朝起きて飯を食ったら女達は街へ行き、仕事と住む所を探す。

一応、仕事が決まりそうになったら、アマナや道具屋の爺さんに
勤め場所の評判を聞くように勧めている。

慌てて就職しても、とんでもないブラックだったら困るからな。

そして夕飯を食ったら、寝るまで皆で読み書き計算のお勉強。

しかし勉強を始めてはみたが、小学生低学年レベルとはいえ、や
はり教育ってのは子供の頃にやったほうが良いな。

当然のことながら、女達の中で覚えがいいのは一番若いアネモネ
だ。

それが1ヶ月程続き――ギルドから報奨の金をもらい、皆で集ま
って酒を飲んだり騒いだり。

街の噂じゃ、貴族の1つが改易になったという話を聞いたり。

騎士爵様が陞爵して小さな領を任される男爵様になり、新しい領
地では絶賛領民を募集中って話を聞いたり。

アネモネの頭にいた虱シラミを退治したり。

戦闘の時に使った薬の後遺症を心配したり。

俺の家にミヤレーやプリムラさんの訪問を受けたりして日常を繰

り返していた、ある日――。

俺の所へ珍しくアマナがやって来た。

彼女は何か思いつめているような表情をしている。

いつも、ひょうひょうとしていた彼女だが、どうしたのだろうか？

アマナの話聞いてみる事にした。

女達は何人かいなくなり、2段ベッドの数が減ると、テーブルを置くスペースが出来た。

アマナと向き合って座り彼女の話を聞く。2段ベッドには女達も座っているのだが――。

「人払いは良いのか？」

「別に構わないさ。内緒話じゃないし」

「それにしても、アマナがここにやって来るのは初めてだな。街の人間でもまったく寄り付かないのに」

「そりゃ、気味が悪いさ、でも――」

アマナが思い詰めたように、話を切り出した。

「アネモネを私の所へ、くれないかい？」

「くれて言われてもなあ――犬猫の子供じゃないんだぜ？ まあ、アネモネも12歳っていえば働き始める年頃だろ？ 自分で選択する権利がある。本人が何て言うかだよ」

「アネモネ！ わたしの所へ来れば商売だって教えてやるよ。一緒に住んで商売をやろうよ」

必死に訴えかけるアマナに、彼女は少しも考える節を見せずに即答した。

「……ケンイチと一緒にいる」

その答えを聞いたアマナは、奈落の底へ落ちたような顔をして両

肩を落とした。

余程ショックだったのだろう。

「ははは！ アマナ姉さん！ 12歳っちゃ、もう大人だよ。母親代わりより男が良いのさ」

すでに半数程に数が減っていた女達が、アマナに茶々を入れる。

「お黙り！ アネモネ、辛くなったらいつでも私の所へ来ても良いんだよ？」

アマナはアネモネの両肩をつかむと、優しく彼女に呟いた。

「……うん」

アマナは憔悴した顔つきで帰路についたが——大丈夫かな？ 余程ショックだったようだが……。

まあ、これは本人の選択だからな、俺には何も言えない。彼女には悪いが、アネモネが望むようにしてあげたい。

「そりゃ旦那！ 女の幸せってのは好きな男と一緒にいる事でしょうや」

「そうそう！」

女達はそう言うのだが、アネモネが望んでここに残ったのだ、出来る事はしてやりたいと思う。

「それにしても旦那あ」

「なんだ？」

「こだけ女がいるんだから誰に手を出すか——皆で賭けをしていたんですが、本当に手を出さないつもりですか？」

2段ベッドに腰掛けている女達は何やら言い出した。

「何を言うんだ。男に嬲られて酷い目に遭った女達に、そんな事を

出来るはずないだろ」

「はあ……こんな、人が良い旦那で大丈夫なのかねえ。あたしや心配で働きに行けないよ」

「旦那なら、どんな事をされても良いのにねえ」

「そうそう」

「そんな心配は要らんから、とっと働き口を探してこい！」

「はいよ」

「」「あはははは！」

酷い目に遭った女達だが明るく前向きなのが救いだ。

早く皆の仕事が見つかれば良いのだが……。

32話 旅立ち

野盗のアジトから助けだした女達と一緒に狭い家で暮らしている。これだけ人数がいれば――あいつが気に入らないとか、こいつがダメだとか普通は始まるのだが、苦境を共にした女達故、結束は固い。

それから女達は男を見つけて転がり込んだり、就職したりで1人また1人、俺の家からいなくなり――最後にアリッサだけが残った。アネモネもいるのだが、まだ12歳だ。この世界では働き始める歳だって言うが、もう少し勉強させてやりたい。

結構頭も良いし覚えも良い。磨けば光る宝石だと思う。

しかし、アリッサは困った。

街では、貴族が俺の事を探しているなんて話も聞こえてくる。

市場の人間は、皆が貴族嫌いなので口を噤んでくれているようだが、いずれはバレるだろう。

そりゃ街中でトラックや重機まで出して、あれだけ暴れたんだ。人の口に戸は立てられない。

限界だな――。

早急にアリッサの勤め口を探さなくてはいけない。

それと並行して撤収の準備を始める事にした。家の周りに植えたマリーゴールドを抜き、柵をばらし始める。

完全にバラバラにする必要もない。ある程度パーツになっていれば、そのままアイテムBOXへ収納出来るのだ。

太陽発電パネルも収納して、エンジン発電機に切り替えた。これ

なら咄嗟とつとの撤収でも、すぐに逃げられるからな。

アリッサと話して、仕事が決まらない原因が何かを知る必要がある。

「あたしは、上がり症なんで……面接やらになると、喋れなくなってしまうだ……」

「力は強いし、正直で働き者なんだがなあ。その良い所をアピール——いや、雇い主に訴えられないとな」

これだけ力が強いなら冒険者でも良いんじゃない？ ——と思うのだが、この力持ちは血が全くダメ。凄く臆病者なのだ。

俺は最後のコネを使うことにした。

————◆◆————

「よくぞいらっしゃいました」

マロウ邸の裏庭で主のマロウさんが出迎えてくれた。

そう、俺の最後のコネはマロウ商会だ———というか、コネがあるのは、ここしかない。

「この度は無理なお願いをいたしまして、申し訳ございません」

「いいえ、何をおっしゃいます、娘の命の恩人に報いねば商人の名が廃ります故。こちらが多大な御礼をしなければならぬのに商品まで頂いてしまって……」

「戦の支度金は、あくまで前借りでしたから——商人ならば、約束を守らねばなりません」

「そう言っていたかと、助かりますが……」

マロウさんに、アリッサを紹介する。

「この娘なんですがね。とても正直者で力は強く、良く働くのです

が、口下手のせいかわ職が決まりませんで……」

「おお、そうでしたか」

早速、彼女の働きっぷりを見てもらう。論より証拠だ。

マロウ邸の裏庭を少し歩いた所に、倉庫と荷物の積み下ろし場所がある。

そこで、アリッサのパワーのデモンストレーションを行う事になった。

彼女は、大の男でも数人がかりで運ぶ荷物を軽々と持ち上げて荷馬車へ積んでいく。

「ほう！ これは凄い力持ちだ」

「獣人並ですね」

マロウ親子も驚くその圧巻のパワー――まさに人間起重機。

獣人は読み書きと計算は出来ないし、複雑な手順などは覚えられないが彼女は違う。

「彼女は読み書きと簡単な計算も出来るんですよ。ただ、玉に瑕と言っちゃなんですが、非常に大飯食らいでして……」

アリッサは口下手なので、俺が彼女の説明をする羽目になっている。彼女は本番に弱いタイプだ。

「3人分の力持ちは、3人分飯を食うというわけですね。よろしい、雇わせていただきますしょう」

「ありがとうございます。ほら、アリッサもお礼を言って」

「あ、ありがとうございますだ！」

彼女は大柄な身体を小さくして、ぺこりとおじぎをした。

「ああ、もう一つ。彼女は非常に力持ちなのですが、凄く臆病で戦い等には向きませんので、そこら辺を考慮してやって下さい」

「お優しいですね」

プリムラさんは、女達が寝泊まりしていた俺の家へ何回か訪れているから、彼女の事も少々知っている。

最初、女達と一緒に暮らしている事を知ったプリムラさんは不機嫌だったのだが、人助けの為だと理解してくれたようだ。

「よ、よろしく願いますだ。お嬢様！」

「プリムラでいいですよ」

アリッサはひたすら恐縮しまくっている。大丈夫かな？

彼女の心配をしていると、プリムラさんが俺に話しかけてきた。

「ケンイチさん。人の心配をするよりも自分の心配をなされては？」

「ああ、貴族の事ですか？ 街の噂は聞いていますよ。なあに、私がいなくなれば全てが解決するでしょう」

「ケンイチさん！ 街を出るおつもりなんですか？」

「まあ、そういう選択もあるって事です」

「一度、領主様に謁見してお話を聞かれた方がよろしいのでは？」

ここの領主、アスクレピオス伯爵様は、そんなに悪い方ではありませんよ？」

「それでも私が凄い魔導師だとバレて、徴発を命令されたら逆らえないのでしょうか？」

「た、確かにそうですが……」

マロウ親子には世話になったが、プリムラさんを助けた事で恩は返しただろう。

やはり、そろそろ限界だ。

マロウ邸を出て家に帰ると、アネモネに今後の事を聞いた。

「アネモネ、俺はこの街を去る事にした。このままだと貴族に捕まって働かされる事になるからな。君はどうする？ アマナの所へ行

くか？」

「……ケンイチと一緒に良い」

「住む所がなければ、しばらく野宿になるかもしれないぞ？」

「うん」

「そうか——解った」

多少読み書きを教えたからといって、放り出すわけにもいくまい。アマナの所が良いと思ったが、本人が望むのであれば仕方ない。

そうと決まれば、早速、逃げる準備を始めた。

柵は撤去し終わっていたので、後は風呂と便所と井戸だけだ。

みんなバラしてアイテムBOXへ収納。井戸は途中まで塩ビ管を引っこ抜いて、パワーショベルで埋めた。

苦勞して井戸を掘ったが仕方ない。この経験は次に活かせるはずだ。

水場のコンクリートもパワーショベルで破壊してステータス画面のゴミ箱へ全て投入。

堆肥は……そのままで良いか。森の栄養になってくれるだろう。

下水の浄化槽なども全て取り外した。

残るは家だけだ。こいつをアイテムBOXへ収納すれば、全てが無くなる。

だが、辺りが暗くなってきたので、次の日に持ち越すことにした。

家——アイテムBOXへ入るよな？

大きさ的には大丈夫のはずだ。トラックだって入ったんだし……。

夕飯をアネモネと一緒に食べた後、シャングリ・ラで中古のオフロードバイクを購入した。

バイクの免許はちゃんと持ってる。中型免許ってやつだ。今は呼び方が違うらしいが。

俺の親父が車の免許を取った時は、自動二輪ってやつがタダで付いてきたらしい。

限定解除しなくても大型バイクに乗れる羨ましい免許だ。

買ったのは、250ccの古い2ストバイク——10万円也。わざわざ古い2ストにしたのは、シャングリ・ラで売っている混合燃料を使えるからだ。

それにシンプルな構造で壊れにくい。まあ燃費が悪くて環境にもよろしくないけどな。

オイルタンクに入っている2ストオイルは要らなくなるので、デフォルトで装備されているオイルポンプを殺す。

街ではドライジーネと呼ばれる自転車が流行っているので、一見変わったドライジーネって事で誤魔化せるだろう——多分。

こいつで、スローライフのために良い場所が見つければ良いのだが。

—————◆◆———

——次の日。

朝起きると、飯を食って出発の準備をする。

だが荷物は全てアイテムBOXの中だ。着の身着のままで出発できる。なんという便利機能。

そして少々心配なのだが、家をアイテムBOXへ収納してみた。

「家、収納！」

消えた——見事に消えた。アイテムBOXの中には【小屋】×1となっている。俺の心配は杞憂だったようだ。

しかし、家じゃなくて小屋なのかよ。アイテムBOXの判断では、これは小屋らしい。

まあ買った時の品名も小屋だったしな……。

だが土台まで一緒に吸い込まれたのは良かった。家の一部と、みなされたのか。

これで綺麗さっぱり無くなった。残っているのは畑だった所だけ。

アネモネに子供用のゴーグル付きのヘルメットを買ってやる。

「これを被ってな。倒れたりすると危ないから」

「うん」

地面に小さい板を敷き、アイテムBOXからオフロードバイクを取り出して、チョークを引く。

板が無いと、スタンドが腐葉土にめり込んでしまい、バイクが倒れてしまう。

キックでエンジンを掛けると、甲高い2ストエンジンの音が森にこだまし、サイレンサーから白い煙が噴き出る。

まずは俺が乗ってから、地面に敷いた板をもらいアネモネを乗せる。

恐る恐るバイクに跨る彼女だが——まあ、こんなの乗るなんて初めてだろうから、おっかなびっくりなのは仕方ない。

「横に飛び出ている所に足を乗せて、手で俺の腰を掴んでくれ」

アネモネに腰骨の所に掴まるように指示する。

「こう？」

「よし、いい感じだぞ。これに乗ってるときは、後ろで勝手に動くなよ、危ないからな」

「うん」

いざ出発！——と思ったら、森から黒い影が出てきて、俺の脚に絡みついた。

「なんだ、お前か」

「にゃーん」

やって来たのは、森の間から差し込む木漏れ日に黒い毛皮が艶やかに光っている森猫だ。

彼女は身体を擦りつけてくるのだが――。

「よしよし、お前も達者で暮らせよ」

「にゃーん」

森猫の頭を撫でて、さよならをする。

「じゃあな」

俺はスロットルを煽ると、クラッチを繋いで森の腐葉土の中を走り始めた。進行方向は西だ、街道を目指す。

なに、急ぐ必要はない。ゆっくり時速10 km ～ 20 km ぐらいで走れば良い。

心残りと言えば――マロウ親子をはじめ、世話になった皆に別れの挨拶が出来なかった事か。

だが話せば辛い別れになるだろう。それに皆を俺のゴタゴタに巻き込む事もしたくないしな。

これで良いんだ。

勝手な解釈で自分を納得させる。

しかし横を見ると――森猫が付いてくるではないか。

「おいおい、俺達は別の所へ行くんだぞ？ 森猫が故郷の森を出て良いのか？」

何回か止まるのだが、それでも森猫が付いてくる。

「もしかして、俺達と一緒に行くってのか？ 本気なのか？」
言葉が解っているのかは不明だが、彼女は身体を俺の脚に擦り付

けるのだ。

「解った解った」

バイクを止めて一旦休止だ。シャングリ・ラを検索して、エー○ンステーという穴が開いた汎用の長い板を買う。

ボルトとナットと一緒に購入して、ステーとリアキャリアを交差するように水平に2本取り付け。

その上に箱を取り付けて、彼女を乗せたいと思うのだが――いい箱が見つからない。

木の箱が良いのだが、あまり大きいのは売っていないようだ。森猫が入るのだから横は80cmぐらいは欲しい……。

少々悩んで、透明なプラ製の衣装ボックスを買うことにした。これに木目調のシートを貼って誤魔化す作戦を実行する。

木目調になった衣装ボックスをボルトでステーに固定して、中に彼女が使っていた毛布を敷き詰めて完成だ。

「俺達と行くとなると、こいつに乗らないとダメだぞ？ 乗れるか？」

まさか、ずっと走って同行させるわけにはいかないからな。

俺の言葉を理解したのか、森猫は全身のバネを使ってぴょんと飛び上がると、衣装ボックスの中へ着地した。

「そうそう、そんな感じだが――これで大丈夫かな？ 落ちるんじゃないぞ？」

まあ、野生動物だ。このぐらいの高さから落ちても平気だろうとは思うが……。

改めて、俺とアネモネが乗り込んで、オフロードバイクを発進させる。

2人乗りの経験はあるが3人乗りなんてやった事がない。ゆっくりと柔らかい腐葉土の上を進んでいくと、5分程で街道へ出た。

ハンドルを右に切ると北へ向かう。ここから先は森と緑が多いと言う。

どこか水のある場所——眺めの良い綺麗な池か湖の畔ほとりが良いが、そんな場所はあるだろうか？

不安はあるが期待もある。そこで今度はスローライフが行えるだろうか。

もう金はあるんだ。アイテムBOXを見せて商売をする必要も、しばらくはない。黙って普通に暮らしていれば、怪しまれる事もないだろう。

なるべく、この世界の金を使って現地の食材で暮らせば、シャングリ・ラというブラックホールへ金を入れないで済む。

それか、どこかの鉱山で貴金属でも掘って、シャングリ・ラヘチヤージする手もあるな。重機も道具もあるんだ。燃料代以上を稼げれば、ワンチャンある。

それに、この世界では役に立たない鉱石でも、シャングリ・ラなら買い取ってくれるかもしれない。

それから俺以外の転移者がいるようだが、相手は敵国にいるようだし、あまり会いたくはないな……。

転移者同士で戦うなんて勘弁だぜ。

まあ時間はあるんだ。落ち着いてから、ゆっくりと考えれば良ささ。

時速30kmで30分程街道を進むと、前方から見覚えのある顔が荷馬車でやって来た。

一番初めに街へ案内してくれたフヨウという商人だ。

「やあ！ フヨウさん。お久しぶりです」

「こりゃ、いつぞやの」

商人が馬車を止めて、挨拶を返してくれた。

「私も商人になりましたよ」

彼に商人の証——細い金属の棒を見せた。

「これからどちらへ？ その乗っている物は、街で流行りのドライジーネですか？ その後ろにいる見事な森猫は？」

立て続けに質問が飛んでくる。

「行く先も決まっていない、あてもない旅ですがね。これは私専用のドライジーネ。後ろに乗っているのは彼女ですよ、ははは」
俺の軽い冗談だったのだが、商人はちよつと引き気味の表情をしている。

後ろに乗っている少女と森猫、どちらが彼女だと言っても、あまり良い冗談ではなかったようだ。

だが、ドライジーネと聞いて、マロウ親子の事を思いだした。
バイクを止めて、アネモネと森猫に降りてもらう。

そして、スケッチブックをアイテムBOXから出して、以前に書いた新しいドライジーネのページを捲った。
自転車

俺が、スケッチブックに描いていたのは、元世界で昔に流行った前輪が大きい自転車と、足踏み式の自転車だ。

そこにマロウ親子への手紙を描いた。マロウさんなら、この自転車を実用化してくれるだろう。

「フヨウさん、この手紙をマロウ商会へ渡してくれませんか？」
手紙と一緒に駄賃の小四角銀貨1枚（5000円）を渡した。

「マロウ商会ですね？ ははあ、そのドライジーネはマロウ商会の

物ですか……確かに受け取りましたよ」

勝手に勘違いをしてくれたようだが、都合が良い。

「よろしくお願いいたします」

「それでは、旅の安全を願ってますよ」

「ありがとうございます」

フヨウという商人に別れを告げて、街道を再びオフロードバイクで走り始めた。

森の木々の間からのぞく、青い空と白い雲。

そのうち、なんとかなるかな？

こうして、オッサンと少女、獣1匹の次の目的地探しが始まった。

33話 湖の辺りにて

しばらく住んでいたダリアという街を去り、後ろにアネモネと森猫を乗せて、オフロードバイクは森の中の街道をひた走る。

勝手に動く乗り物と、後ろに乗せた見事な森猫の組み合わせに通る過ぎる人達の視線を集める。

話し掛けてくる商人もいたりするのだが、魔法で動く新型のドライジーネだと言うと納得してくれるのだ。

すべて魔法で済んでしまう。まさに魔法の言葉。

売ってくれとせがまれる事もあるが、こんなオーバーテクノロジーを売れるはずもない。

こんな姿では目立ってはしまうのだが、とりあえずは貴族から逃げる移動の間だけだ。

どこかに住み着いたら、オフロードバイクは緊急時以外は使わないだろう——と思う。

バイクのオドメーターで100km程来たが、ここから5〜6km進んだ所に次の街があると言う。

街の名前はアストランティア。それにしても、とんでもなく広い森だ。

ダリアと同じように街の一手手前まで森が続いているらしい。

これは迷い込んだら出られない——日本で有名な富士の樹海など可愛い物だ。

しかも奥にいけば行くほど凶悪な魔物が住むというからな。

それでも、忘れ去られた遺跡やダンジョンを探して、足を踏み入れる冒険者が多いと言う。

一攫千金——この言葉に、この世界の住民も弱いようだ。大抵の

場合それは失敗に終わるものなのだが……。

それに宿屋のアザレアが言っていたが、ダリアーアストランテ
イア間をショートカットするために森へ入る者も多い。

その理由は――最初ダリアの街を出た時は北に向かったのだが、
いつの間にか東へカーブを始めて回りこむような所にアストラン
テイアの街がある。

結果的に、かなり遠回りをするような形になっているため、これ
を嫌い森の中を抜けてショートカットしようとする連中が結構いる
のだ。

何故このような道になったかという、魔物が薄い地域の森
を切り開いた結果らしい。

森が少々切れた所に小川が流れていて、その上に石造りの小さな
橋が掛かっている。

バイクを止めて、橋の上から覗くとキラキラと輝く水面に魚影が
見える。

「魚がいっぱい、いるね！」

アネモネと森猫がバイクから降りると、下を覗きこんでいる。

魚達は橋の陰へ隠れているようだ。こうやって上空からやってく
る鳥等の襲撃に備えているのかもしれない。

「こりゃ、魚を捕るしかないな」

時間も丁度昼前だ。昼飯の準備をするには良い時間だろう。

バイクはアイテムBOXへ収納して、橋の下へ降りる。川幅は2
m程で、河原の両脇には森が迫ってきている。

水は澄んでいて、とても綺麗な水だが結構冷たいので森の中にあ
る湧き水が源泉かもしれない。

「さて、どうやって魚を捕るか……」

シャングリ・ラを見ると釣り竿のセットが2500円ぐらいで売っている。必要な物が全部揃っていて、すぐに始められるキットだ。こりゃ便利で安い。

「ポチツとな」

専用の鞆に入った、釣り竿セットが落ちてくる。伸縮する竿でリールや毛鉤等まで付いている。至れり尽くせりだ。

釣りなんて何十年ぶりだろうか。正直、小学生以来だな。30年近く前か……。

その時の釣りと言えば竹竿にテグスを付けて、ミミズで釣るのだ。こんなリールやら毛鉤なんて使ったことがない。ウチの親父が釣り好きだったのだが、俺は釣りがあまり好きではなかったのだ。

子供の頃、無理やり釣りに親父に連れていかれた事もあったが、暇を持て余した——俺は待つのが苦手なんだよな。

そのくせ、ウチの親父なんて短気でどうしようもないのに、釣りだけはじっと座ってやっている。全く意味不明だ。

とりあえず、虫除けの魔石を置いて場所を確保。

たまに橋の上を馬車が通りすぎていくが、覗きこまれないと下は見えない。

こんなリールを使った釣りなんてやった事がないので、どうやって釣るのかも解らん。まずは適当に、テグスに毛鉤けばりを付けて水面へ投げてみる事にした。

水面にぽちゃんと毛鉤が落ちると水の上を漂い、そのまま下流へと流れていく。

これを水に落ちた虫と勘違いをした魚が食いつくわけだな。しかし鮎のような苔食っている魚は、これじゃ釣れないのだが——。鮎も毛鉤で釣る方法があると——聞いたことがあるのだが、ウチの近所ではやってる人はいなかったので詳しくは解らない。

ウチの親父は鈎針で引っ掛けるような仕掛けを作って鮎を捕っていたが、あれは違法だ。

まあ、ここには漁業権等はないだろうから、どんな捕り方をしても良いだろうが電気ショック等は使いたくない。

あれは、ちよつとスローライフには相応しくない。どうしても食料が欲しくて切羽詰まれば別だろうが食事には困ってないからな。

毛鈎を引き上げて再度投げ込む――突然、水面が跳ねた。

慌ててリールを巻き始めると、パチャパチャと水面をかき分けて、黒い斑点と虹色の輝く魚が上がってきた。

「おおお！ 釣れたわ！ こんな簡単でいいのか？」

大きさは20cmぐらい――元世界のニジマスに近いのか？ だが色がとても綺麗だ。

アイテムBOXからカメラを出して写真を撮る。

こういう写真を集めて図鑑を作りたいのだ。そうすれば、アネモネにも教える事が出来るからな。

俺に鑑定する能力はないが、鑑定する事は出来る。こいつをアイテムBOXへ入れれば良いのだ。

そうすれば名前がある物は名前が表示される。

「すごい！」

釣り上げた魚に、アネモネが手を叩いて喜んでいる。やはり応援してくれる人がいると気合が入るものだな。

川岸にシャベルで穴を掘って生け簀を作ると釣ったばかりの魚を入れた。

「さて、もっと釣ってやるか！」

気合を入れて竿を握ったのだが――横目で見ると、さっき入れた生け簀の魚を森猫が狙っている。

「おい、ちょっと待て！」

目にも留まらぬ右フックを繰り出すと、森猫が魚を弾き出し啜え
て逃げた。

お魚くわえた森猫く某国民的アニメの音楽が頭の中にリフレイン
する。

そんなに捕るの上手いなら最初から捕ってくれよ。

まあ森猫が食うって事は安全なんだろう。淡水魚で毒持ちつての
は聞いた事はないが、何と言ってもここは異世界。

何があってもおかしくはない。ただ、人間には毒だが、動物は平
気ってのは意外とある。

例えば、マムシに噛まれると人間はヤバいが、犬は平気——とか
な。

ウチの親父が海釣りをしていると、フグがよく掛かるそうなんだ
が、危なくて食えないので放り投げる。

すると、それを若いカモメが食うわけなんだが、バタバタと痺れ
るだけで死にはしないらしい。

だが、いっぺん毒に当たると、カモメも食わなくなるようだ。や
っぱり学習するんだな。

しかし生魚とか食って寄生虫は大丈夫なんだろうか？

野生動物は基本全部生食だよなあ……影響あると思うが。

シャングリ・ラで検索すると【犬猫用の虫下し】が普通に売って
いる。これから察して、やはり影響は少なからずありそうだ。

彼女が痩せてきたりしてたら飲ませてみよう。

俺が魚を釣っている間、アネモネにお湯を沸かしてもらおう。

水は水石を入れた川の水だが、沸かせば大丈夫だろう。生き物も

住んでいるし、鉋毒の心配もなさそうだ。

川の水ってのはどんなに綺麗に見えても、色々なプランクトンや原生動物がいるからな。

アメーバー赤痢の心配もある。生水は危険だ。

ふたたび毛鉤を川面に投げ入れ、都合5匹——いや、森猫に食われた分を入れて6匹釣った。

その1匹を、しめてアイテムBOXへ入れてみると——【虹マス】と表示が出た。

そのまんまやん。

早速、まな板をアイテムBOXから出して、三枚におろす——と言っても刺し身で食うわけではない。

淡水魚は寄生虫が怖いからな。ちょっと無理。

アイテムBOXから、モバイルバッテリーとフードプロセッサーを出して、三枚に下ろした魚を投入。

調味料、塩、小麦粉——後はなんだっけ？ そうだ、つみれと言えば生姜だな。

シャングリ・ラから瓶に入った生姜を買う、250円だ。

全部をフードプロセッサーへ投入してスイッチON！ あっという間に粘りが出るから、それを丸めて鍋へ投入すれば良い。

中華スープの素を入れて、圧力鍋の蓋を閉じる。

これで20分もすれば、つみれ汁の完成だ。つみれから出汁が出るから、塩か醤油でも良いんだけどな。

時間が来たので圧力鍋を川に浸けて温度を下げると、勢いよく蒸気が吹き出す。

「よっしゃ！ 完成だ。食おうぜ」

「うん！」

スープを深皿に盛り付け、パンもアイテムBOXから出す。

川辺で魚を釣って、つみれ汁か——これはスローライフっぽいぞ。ちよっとポイント高いんじゃないかね？

この調子で、シャガ討伐戦というバイオレンスに傾いた非日常から脱出するのだ。

あれは悪夢！ 無かった事にしたい！

「美味しいね！ ケンイチの料理は、みんな美味しい！」

最近、よく食べるアネモネだが彼女の自己申告によると12歳——だが、それにしても身体が小さい。

多分、碌な食事でありつけず栄養不足なんだろうなあ——と思う。俺も一口つみれを食べてみる。中々美味しいな。生姜が魚の生臭さを上手く中和している。

ヤマメやイワナ等の川魚は生臭かったりするからな。やはり生姜は必須だろう。

腹もいっぱいになったので、今後の作戦を練る。

このままアストランティアの街に行くのもなあ……それじゃスローライフにならないぞ？

この川沿いに良いところがないかな？ この川なら魚も沢山いるみたいだし……。

このまま川を下ってみるか……。

だが、良い事を思いついた。

「ドローンはどうだ？ ここから飛行させて、周囲の地形を把握出来ないだろうか？」

「どろん？」

俺の独り言を聞いたアネモネが不思議そうな顔をしている。

早速シャングリ・ラでドローンを検索する。 評判良さそうなの

は、2万円ぐらいの機種だな。

あまりショボイのを買っても後悔する事も多い。安物買いの銭失いって奴だ。

要はラジコンみたいな物だから、この世界でも使えるだろう。トランシーバーだって使えたしな。

だが、スマホ必須みたいな物もあるようだ。この世界じゃスマホは使えない。

中古のスマホを買って、スタンドアロンで動かせば良いのか？———と思ったのだが、アプリをダウンロードしてインストールしなければいけないようだ。

それじゃ無理だな。

「ポチッとな」

漆黒のアタッシケースが落ちてきたが、これがドローンの箱らしい。そいつを開けて黒いドローンを取り出すと、ローターが4つあるクワッドタイプだ。

コントローラーは液晶モニター付き———ということは、このモニターを見ながら飛ばせるって事か。

すげええ。ドローンなんて初めて買ったが、今はこんなにハイテクになってるのかよ。

世の中進歩しているな。歳を取ると新しい事に挑戦する事が億劫になってしまふんだよな。

これじゃダメだと解っていても腰が重くなってしまふ……。

いやいや、そんな事はどうでも良い———とりあえず飛ばしてみよう。

ドローンとコントローラーにバッテリーを挿入して、スイッチON！

こいつにはジャイロが入っているので、操作は簡単だと書いてある。別に飛び回らせる必要はないのだ。

高い所に登って、周囲を見渡せれば良い。説明書には高度は10

0 m程と書いてある。

「よし！ いけえええ！」

コントローラーのレバーにかかっている親指に力を入れると、機体がふわりと浮かんた。

「凄い！ 飛んでるう！ これって魔法？」

ドローンを見たアネモネがはしゃぎ回っている。

「まあ、そんなもんだ」

機体は安定して、ホバリングも可能のようだ。そして、モニターにはドローンに搭載されているカメラからの映像が映し出されている。

こいつはマジで凄い。感激もそこそこに、ドローンを垂直上昇させて周囲を見渡す。

モニターに映ったのは、川の向こうに見える大きな湖。

「へえ、この川は湖へ流れ込んでいたのか」

そして、川の左手には、小さな村が見える。

街道の途中に小さな脇道があって、看板にはサントンカと書いてあったから、その村の事だろう。

そのままドローンを180度回すと、彼方にアストランティアの城郭が見える。

アストランティアの背後には結構高い崖が続いているのだが、その崖に沿うように街道が続いているようだ。

「よし、決まった！ とりあえず湖まで行って、景色の良いところを探そう」

「うん！」

そのままドローンを少し飛ばしていたら、上空に黒い鳥が集まっ

てきた。

どうやらドローンが彼等の縄張りに入ってしまったらしい。攻撃をしかけようとしている。

「ヤバイヤバイ」

すぐにドローンを降下させて回収した。こいつには、まだまだ使い道はある壊されちゃ堪らん。

例えば、崖の上がどうなってるか調べるとか、廃墟の中がどうなってるか調べるとかな。

食事の後片付けをして、ドローンをアイテムBOXへ収納すると、両脇に木々が茂る河原を下流へ下り始めた。

ちよつと河原は凸凹しているので、バイクは使えない。

そういえば、森猫の姿が見えないが、どこへ行ったのであろうか？ 新天地の縄張りを主張すべく辺りをうろついているのかもしれない。

緩やかな小川なので道は険しくない。歩いた距離は3km程であろうか。

木々が途切れると目の前に、深い緑に囲まれた巨大な湖が広がっていた。

俺から見た正面、森の向こうには山が見える。標高は500～600mぐらいだな。

「こりゃ、デカいな！」

こんなに大きな湖でも森の木々に遮られているので全く存在が解らなかった。

鏡のような水面——そんな例えがあるが正に鏡だ。湖畔に行くと小さな砂浜にチャプチャプと、これまた小さな波が打ち寄せている。

「こりゃ、綺麗だわ」

「うん」

透き通る冷たい水、かなり深くまで底が見え青から緑色にグラデーションが掛かったように色の変化が美しい。

これだけ綺麗なら、保養地や別荘地になってもおかしくないのになあ。

見渡す限りでは家らしき物は小さな村だけだ。

シャングリ・ラで双眼鏡を検索すると20倍の双眼鏡が2500円ぐらいで売っている。恐らくは某国製だと思うが、評価は悪くない。

【購入】ボタンを押すと双眼鏡が落ちてきた。

双眼鏡を覗き込む——結構よく見えるじゃないか。高いのは手振れ補正とかが付いているのだが、これでも十分だ。

村の方を覗くと、小さな舟がいくつも見える——という事は、この湖の魚を捕っている漁村なのか。

反対側を双眼鏡で覗くと、高さ10m程の崖が湖に沿って走っているのだが、そこに木々に埋もれるような滝を見つけた。

「おっ！ 滝だ！ あそこなら、景色が良いんじゃないか？」

アネモネにも双眼鏡を覗かせてみる。

「凄い！ 遠くが近くに見える！」

俺はオフロードバイクをアイテムBOXから取り出すと、首に双眼鏡を掛けたままのアネモネを後ろに乗せて、湖畔を走り出した。

アネモネは双眼鏡をえらく気に入ったようだ。

水際は砂が固まっていて走りやすい。滝までの距離は5km程だろう。

水しぶきを上げて、オフロードバイクでゆっくりと走っていくと滝が見えてきた。

水際から滝までの距離は100mぐらいだろうか。滝の水量はあ

まり多くななく腹に響くような低音もない。

滝壺からそのまま湖へ注いでいる川の所で森の木々が途絶えて、向こう岸にはまた緑が続いている。

この湖の周りは、森で囲まれているのだ。

危険性はどうなんだろうか？ 漁村があるぐらいだから、岸边なら大丈夫そうだが……。

「にゃーん」

何処かへ行っていた森猫が、木々の間から出てきた。

彼女の顔を見ても大丈夫そうだな。

「良いな、ここなら水がたっぷりあるし、井戸を掘らなくても済む」
この周りを少し伐採して畑を作れば良い。便所も水洗に出来るかもな。

ここを、第2のキャンプ地としてみるか。

33話 湖の辺りにて（後書き）

ツギクルブックス様より書籍化いたします

詳しくは活動報告にて←

<http://syosetu.com/userblogmanage/viewblogkey/1955568/>

34話 新天地

ダリアから逃げ出した俺達だが、100km程離れた場所に湖を見つけた。

ここは既に、ダリアを治めていた貴族の領地を離れ、別の家が統治する地域へ入っている。

俺達が移動に使っているバイクなら100kmの移動も簡単だが、通常の馬車のスピードは時速10km程だ。

ダリアから朝一で出発し、休み無しで走らせてギリギリでアストランティアの閉門時間に間に合うか否か——そんな感じらしい。

通常は途中で一泊して、休みを取る。この街道の丁度中間辺りに小さな宿場町があって、皆はそこへ泊まる人が多いようだ。

だが馬車を持っているのも金持ちか商人だけだ。普通の人間は徒歩で、100kmを歩かねばならない。

もちろん勿論、途中では野営も必要だ。だが、街道で魔物に襲われる事はないと言う。

高校生の頃、全校強歩とやらで25km程歩いた事があるが、死ぬかと思ったよ。

まあ交通機関も無く、毎日それが当たり前なら慣れてしまうとは思うのだが……。

俺の親父がガキだった頃は、交通機関も無い山の中を毎日10km以上普通に歩いていたという話だったしな。

湖の畔をバイクで走り、そこに見つけたのは落差10m程の滝。ロケーションとしては申し分無い。

危険性などはイマイチ不明だが景色が良いので、ここに住んでみ

ようかと思っている。

俺達と一緒にやって来た森猫も、しばらく森の中を彷徨ウロウロした後、俺の所に顔をだした。警戒している様子も無いので、ここに危険は無いのだろう。

俺は動物の直感を信じる事にした。

今の時間は午後3時頃。とりあえず家を出したい。

滝壺より溢れ出る川から20m程の所、緩い斜面に場所を決めて整地を始める事にした。

「よし！」「ユ○ボ召喚！」

俺と一緒にアネモネも叫んだ。いつも俺が言ってる台詞を覚えてしまったようで、ケタケタと笑っている。

やって来た時は、無口な彼女だったが、最近よく笑うようになった。子供が笑っているのは、やはり良い。

アイテムBOXから緑色のパワーシヨベルが出てくると、早速重機に乗り込み、エンジンを掛けて整地を始めた。

そんなに難しい作業ではない、斜面を少々削り排土板で水平に均すだけだ。

たまに重機から降り、角材と水平器を使って水平を確認する。

辺りが暗くなり始める頃、整地が完了した。

これ地鎮祭とか、やらんで大丈夫なのか？　まあ、この世界に日本ニッポンの神様はいないだろうが。

「かしこみーかしこみー申すー。いくぞ！　家召喚！」

整地した場所に家が現れた。本当に、このアイテムBOXは便利だ。これがチートでなくて、なんであろう。

だが出現した位置が少々左過ぎた。一旦収納して、立ち位置を右に修正して再び家を召喚。

「よし！」

思った場所にピッタリと収まった。だが、よく見るとコンクリート製の束石が浮いている場所がある。

これは明日、調整しなければならぬだろう。デッキへ上がるための階段を取り付けて、家の設置は完了だ。

さて、仕事も終わったし食事しよう。

アイテムBOXから、以前に作ったカレーを取り出して焚き火で温める。

料理を作りすぎて余っても、アイテムBOXへ入れておけば傷む事も無くいつでも食える。

一緒にお湯を沸かして、パックのご飯を温める。

白い米の飯に最初は気持ち悪がっていたアネモネであったが、俺が食べているのに興味を持ったのか、少し食べてその旨さが解ったようだ。

今じゃ、すっかりと、ご飯好きになっていた。

「カレーは大好き！」

何を食いたいか聞くと――カレーと答えるぐらいに、彼女はカレーが大好きである。

そりゃ子供はカレーが好きなのは当たり前田のクラッカーだが、ちよつと好き過ぎるだろう。彼女曰く、こんなに美味しい物は食べた事が無いと言う。

まあ満足に食い物が無い環境で育った子供にカレーの印象は強烈だったかもしれん。

カレーの国の住人は毎日カレーなんだろうから、毎日カレー食っても良いんだけどさ。

どうでも良いことだが、俺がほぼ毎日カレー粉を使った料理を食っていた時は小便が出にくくなった事があった。

カレーのスパイスは漢方薬と同じだから、前立腺の肥大等のなん

らかの副作用が出たのかもしれない。

こんなの俺だけかもしれんが……。

森猫も一緒に食事中だ。俺が出してやった猫缶2つを美味しそうにたいらげている。

彼女は足りなければ森で食事を探すだろう。あまり餌付けしても拙い^{まず}と思うしな。

カレーを食い終わって後片付け。

家の中に入ると当然、アイテムBOXへ収納した時と全く同じ状態に保たれている。

森猫も一緒に家の中へ。部屋の隅に彼女の毛布を用意してやると、そこへ丸くなった。

部屋にガソリンランタンを点けて、アネモネとお勉強。

そうそう、太陽電池パネルの設置場所も決定しないとな。だが、ここなら日当たりも良いし、森の中よりは発電量が見込めるだろう。設置枚数は半分でもいいかもしれない。まずは10枚だけ設置してみるか。

とりあえず、しばらく様子を見なくてはな。色々と設置した後、何かトラブルが起きて、すぐに脱出しないといけなくなったりするのは面倒だ。

そうだな——最初は橋を架けてみるか。向こう岸に渡れるようにして、そこに畑を作りたいな。

「さあ、寝るかあ。明日から色々やらないな」とな

ここは新しい土地だ。夜に魔物やら何やら襲ってこないとも限らない。

一応、武器を出して敵に備える。シャガ戦で獣人達に買ってやったカットラス刀を一振り購入。

レーザーサイト付きのボウガンを引いて、アイテムBOXへ入れる。こうしておけば、アイテムBOXから出してすぐに射撃出来る。

弓を引きっぱなしだとバネが弱くなったりするだろうが、アイテムBOXへ入れておけば、その心配も要らない。

後は火を点けるためのターボライターと爆竹。こいつは戦闘に意外と効果的だと解ったからな。動物にも効くだろう。

「アネモネ、もう君は大きいんだから、1人で寝ないとな」
そう言うのと、彼女が凄く悲しそうな顔をする。

「ああ、解った解った。そんな顔をするんじゃない。一緒に寝てあげるから」

「……うん」

甘い！ 甘すぎる！ カロリー控えめ甘さは砂糖の10倍——そのぐらい甘い！

自分でもそう思うのだが、あんな顔されたら何も言えないじゃん！
そこら辺のガキならともかく、彼女は身の上も可哀想だしなあ……
…おじさんは、こういうのに弱いだよ。

ガソリンランタンを消して、アネモネと2人ベッドに潜り込むと、森猫も真ん中に入ってきた。

「お前も一緒に寝るのかよ！」

別に悪いとは言わないが——こりゃ、ダブルベッドを買った方がいいかもな……。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

——次の朝。

夜に何かあるのでは無いかと心配していたが杞憂に終わった。
何かヤバイ物が近づいてくれば、森猫が真っ先に気がつくだろうしな。

飯の準備をしていると、彼女が扉の前に座っている。どうやら外に出たいようだ。

「はいはい」

扉を開けるとスルリと外へ出ていく。朝飯は自分で捕るようだ。

――別に、獲物も捕れないあんたらの世話になるつもりは無いんだからね！――そんな彼女の気概を感じる。

それにしても彼女も一緒に住むなら名前が必要だな。いつまでも森猫じゃ拙い^{ます}。

「名前は何にしよう……」

朝食のグラノーラを準備しながら呟く^{つぶや}。

「名前？」

「森猫の名前だよ。そろそろ名前を付けてやらないとな。一緒に住んでいるんだし」

「うーん、クロ！」

「ストレート過ぎる！」

「すどれーと？」

「いや、なんでも無い。シュバルツ？ いや、長いな……もつと短くて端的な名前の方が良いかも」

ちなみに実家にいた白いネコは雪之丞だった。

「ひねってクロウ！ そりゃ、カラスだ。猫にカラスは拙い^{ます}だろう。うーん――毛皮がベルベットみたいな手触りだからベルでどうだろう」

「ベル？」

「短くて良いだろう」

「うん！ ベルが良い！」

彼女の名前はベルに決まった。可哀想だが彼女に拒否権は無い。

だが、ずっと森猫って呼ばれるよりは良いんじゃないかと思うのだが。

森猫の名前が決まったところで、今日の仕事に移ろう。

先ずは家の土台の修正だ。高い所は掘り下げ低い所は油圧ボトルジャッキ——2500円で家を少々持ち上げて、土を盛ってから下ろす。

しかし、土台が家にくっついてくれて助かった。バラバラに収納されたのでは家を土台に載せる作業はかなり難しくなる。

次は橋の設置だ。滝壺から流れる幅1.5m程の川に橋を架ける。アイテムBOXからチェーンソーを取り出して、森で太さ20cm程の木を2本ぶった切る。なるべく真っ直ぐなやつだ。

そいつを4m程に切り揃えアイテムBOXへ入れる。そして川の所へ行ってアイテムBOXから取り出せば良い。

選択画面で2本一緒に選択すれば、一緒に並べて取り出す事が出来るからな。

一度、地面の上でやってみたが横向きに木が出現するようだ。それじゃ仕方ないな。靴を脱いでズボンを捲り上げ冷たい川の中へ入ると、真ん中でアイテムBOXから木を取り出す。

「やったぜ！」

見事、川に丸太の橋が掛かった。

あまり広い川だと、この手は使えないな。俺が溺れてしまう。

まあ、ロープを張ったりとか舟の上でアイテムBOXを使うとか方法はありそうだが……。

丸太橋が動かないように石を置いて固定して、その上にコンパネを貼る。

ネイルガンとコンプレッサーを出す程ではないので、トンカチを

使って釘を打っていく。

「おい！ アネモネ！ 橋が出来たぞ」

彼女は双眼鏡であちこちを覗いているのだが、遠くを見るための道具は、すっかり彼女の玩具と化している。

まあ何か面白い物を見つけてくれるかもしれないからな。子供ならではの視点ってやつも中々侮れないし。

「やったあ！」

「これで、こっちの岸にも渡れるぞ」

対岸は草が伸びているのでまずは草刈りをしよう。

エンジン草刈機を出して草刈りをする。こいつは危ないので、作業している時は絶対に近づかないようにアネモネに注意をする。

このエンジン草刈機の事故って凄いいんだよねえ。

田舎でも結構事故がある。人も危ないし自分も危ない。マジでたまに死人がでるぐらいに危ない。

柔らかい草ばかりなので安全性を考えて金属製のチップソーではなく、ナイロン製の紐を使っている。

竹や笹などの固い茎を持った植物でなければ、ナイロン紐で十分に刈る事が出来るからな。

魔物への攻撃も草刈機やチェーンソーを使えるとは思うが――あまり使いたくはないな……。

シャガ戦の時も一瞬、脳裏を掠めたが結局使わなかった。

用意してたら、あの葉っぱが決まった状態で使いまくってたに違いない。

ああ考えるだけでスプラッタだ……止めよう。

畑の大きさは10m×20mで、森の中の時より若干広くした。

ここなら日当たりも良いし作物もよく育つだろう。

パワーシヨベルをアイテムBOXから出して土を掘り起こし、根

っこやらデカイ石やらが沢山出てくるので除ける。

デカイ石の処理は簡単だ。アイテムBOXへ入れてからステータス画面のゴミ箱へ入れれば良い。

フハハ、ゴミ箱万能説。

途中で昼飯を挟みながら作業を続けた。

畑を耕うん機で耕し畝^{うね}を作り、芽出しポットに種を植えて本日の作業は終了となった。

明日は、太陽電池パネルを設置しようかな。

夕方、森猫が帰ってきたが、角ウサギを一匹捕まえてきてくれた。すぐにアイテムBOXへ収納する。解体の仕方を覚えた方が良いと思うが、下手に解体すると肉が食えなくなるし毛皮等も売り物にならなくなってしまう。

アイテムBOXへ入れておけば、腐ることもないのだから、その道のプロに任せた方が無難だろう。

ここに落ち着いたら、アストランティアの街へ行って冒険者登録をしてこようと思う。

それまでは、獲物はアイテムBOXの肥やしだな。

「そうそう、お前の名前はベルに決まったからな。よろしくな」
「にゃあ」

解っているのか、いないのか。彼女は一言だけ返事をした。

——そして晩飯。

アネモネはパンとスープと焼いた肉、俺は焼きそばを食った。森猫にはいつもの猫缶を2つだ。

ご飯は食べられるようになった彼女だが、まだ麺類は気持ち悪いらしい。

「だって虫みたいだし……」

「まあ、そう見えなくてもない」

そりゃ、皿に載っているのが、ミミズだったりチューブワームだつたりしたら、キモいだろう。

ああ、そんな事を考えていると食欲が無くなるので止めよう。

夕飯の後片付けをして、ガソリンランタンに火をつける。

ベッドをアイテムBOXへ収納して、シャングリ・ラでダブルベッドを検索する。

一番シンプルな何も付いていない、マットレスベッドが2万円で売っているの、それにした。

【購入】ボタンを押すと、ドシャ！ とベッドが落ちてくる。ついでにダブルのシーツも購入——3000円だ。

羽毛布団もダブルがいるだろう——こいつも2万円だ。

ベッドメイキングをしていると、そこにアネモネが飛び込んだ。

「ひろーい！」

「ハハハ、森猫も一緒となるとデカイ方が良いからな」

手足をバタバタとさせて、泳ぐ格好をしているのだが、彼女は泳げるのだろうか？

「アネモネは泳げるのか？」

「うん、少しなら」

まあ、俺も少しだなあ。最後に泳いだのっていつの事だろう？

会社の社員旅行で行った、ホテルの温水プールだったかなあ……確か日光だったはず。

元世界で普通に生活してたら泳ぐ事なんて無いわなあ。スイミングスクール等に通ったりしなければ。

ベッドを整えた後、アネモネに勉強を教える。

彼女が勉強している机をガソリンランタンが照らしているのだが――。

ホワイトガソリンは売っているし混合燃料は売っている、そして白灯油もある。高いけどな。

しかし軽油が無いんだよな。ディーゼルエンジンの重機を使うと燃料が高い。

計算すると、リッター2500円〜3000円ぐらいだ。まあリッター3000円として、重機は一日使うとタンクが空になるから――タンクが60Lだとすると……。

1日18万円！ 高！ 燃料代で破産するわ。

大型重機だと400Lは入るから、1日120万円かよ……。

なんとかならねえかな？ そもそも重機を使うなって話もあるんだが――。

でも、こんなの手作業で、やってられるかよ！

せっかく文明の利器があるんだ、使って何が悪いのか。

シャングリ・ラで改めて【油】で検索を掛けてみる。最初に出てくるのはキャノーラオイル等の俗にいうサラダ油だ。

これなら、リッター300円なのに……。

ピン！

閃いた。そういえば天ぷら油などの廃油を加工して、ディーゼルエンジンに使うって話があったじゃないか。

ニュースで見たぞ――確か、バイオディーゼル燃料とかナントカ……。

早速、シャングリ・ラで検索を掛ける。ほうほう——結構本が出ているな。

バイオディーゼル燃料関連の本を電子書籍で買って片っ端から読むことにした。

「何してるの？」

俺の怪しい行動が気になったのだろう。

「本を読んでいる」

「ええ！ 私も読みたい！」

「え〜？ 外国の本だから外国語で書かれているんだぞ？」

「その外国語を覚えたら本が沢山読めるの？」

「ああ、読める」

「私、覚える！」

アネモネが一大決心をしたかのように立ち上がった。

彼女の物覚えは悪くない。悪くないどころか結構良い部類に入るだろう。

せっかく彼女が覚えると言ってるんだ。勉学の炎を消してはいけない。

しかし日本語なんて覚えてメリットあるのか？ 確かに覚えればシャングリ・ラで買う本が読めるので知識は広がるだろうが……。

先ずは絵本を買ってみた。小学生低学年向きだな。

買おうとしたのは絵本で定番ネタの人魚姫とシンデレラだが、購入ボタンを押そうとして絵本に驚いた。

「萌え絵じゃん！」

「もえ？」

「いや、こっちの話だが——」

購入ボタンを押した。

「ポチツとな」

バサツと絵本が落ちてきた。古本で一冊30円だ。子供用に買ったのも大きくなったら読まないからな。売りに出されてしまうのだろう。

「凄い！　綺麗！」

落ちてきた絵本に、アネモネの目は釘付けになった。そりゃ、こんな綺麗なカラーの絵本なんて、この世界には無いからな。

しかし、今の絵本って萌え絵なの？

だが、このままでは彼女が読めないのも、この世界の表音文字と、ひらがなの変換表を作ってやった。

漢字は難しいと思うが、ひらがな・カタカナぐらいはすぐに読めるようになるかもしれない。

「ち　　よ　　う　　ど　　お　　ひ　　さ　　ま　　が――」

彼女は俺の作った対応表と絵本の1字1字を見比べながら、ゆっくりと絵本を読み始めた。

だが人魚姫の半裸姿が少々刺激的らしい。倫理的に拙いのかもし
まずれないが――2人の内緒って事にしてもらう。

彼女は顔を赤くしながらも、ものすごい集中力で読んでいる。

俺は彼女の読書の邪魔をしないように――電子書籍のバイオディ―ゼル燃料の本を読むことにした。

2人の読書は、ガソリンランタンの下で寝るまで続いた。

34話 新天地（後書き）

書籍化決定しました

詳細は←へ

https://mypage.syo-sei.com/mypageblog/view/userid/657514/blogkey/1956196/

35話 絵本を作ってみよう

――次の日。

森猫のベルが朝のパトロールに出かけた後、朝食を食べる。

普通にスープとパンだ。アネモネに元世界の物を食べさせると拙ますいと思っているのだが……。

でも喜ぶので、つつい食べさせてしまう。

ここへやって来て2日目だが何も問題はないようだ。

モンスターとのエンカウント率、非常に高し！――とかだったら困ったことになると思ったのだが杞憂だった。

今日は太陽電池パネルを設置する事にしよう。

だが、アネモネは絵本を読むために、家で日本語の勉強をするようだ。余程、絵本が気に入ったらしい。

邪魔をしないように俺だけ外に出てパネルを設置する事にした。先ずは方位磁石で方向を調べる。南向きにセットしなければなら
ないからな。

「ああ、そっちが南か……」

てつきり滝を正面にして湖側を南だと思っていたが、川と並行して家がある方が南――対岸が北らしい。

どうりで夕日が湖の向こうへ沈むわけだよ。

ダリアを出た時には北へ向かって出発したはずだが、街道がうねうねと曲がっていたからな。方向感覚が狂ったらしい。

朝は崖の影が落ちるが、すぐに日向になる。当初の予定通り緩い斜面に太陽電池パネルを10枚設置した。

だが、こいつはやっぱり目立つなあ……。

シャングリ・ラでカモフラージュネットを買って、パネルの北側と西側の2方を囲ってみよう。

「うーん、無いよりはマシか」

不自然な感じはするが、金属パネルとフレームがむき出しよりは良い感じだ。

早速、モバイルバッテリーをアイテムBOXから取り出して充電を開始する。

「後は、便所と風呂か……」

風呂と便所をアイテムBOXから取り出す。

ここには水が沢山あるからな。井戸を掘る必要もない。

トイレは橋の上に小屋を作って水洗にしようとしたのだが前の便所を使って、また堆肥を作る事にした。

草刈りで出た枯れ草も沢山あるしな。やはり堆肥を作ってリサイクルした方が、スローライフっぽいだろう。

ただ生活排水は水石で浄化してから、川に流す仕様にする。

家と風呂、そして便所の配置は森の中に建てていた時とほぼ同じだ。

後は柵が残っているのだが、それはおいおい立てる事にしよう。

前に柵を作った時は結構苦労したのだが、井戸用に買ったエンジンドリルがあるからな。

あれで杭の穴を掘って差し込めば良い。もう使わないからアイテムBOXの肥やしになるかな？———と思ったが意外と使えるぞドリル。

俺が便所の設置を調整していると——家の右側、暗い森の陰になっている茂みがガサガサと動いている。

「なんだ？」

俺はアイテムBOXからクロスボウを取り出した。矢は既に装填済みだ。

「おい！ ベルか？」

俺がクロスボウを構えながらゆっくりと近づいた――。

「ニャアアアアア！」

「うわあああああ！」

突然、黒い生き物が俺に飛びかかってきた。危うくクロスボウを撃ちそうになったのだが、聞き覚えのある声で引き金から指を離れた。

「酷いにゃあああ！」

俺に飛びかかってきたのは、黒い毛皮を着て背中に弓を背負った獣人のミャレーだった。

「お前かよ！ 危うくクロスボウ――いや弩弓で撃つところだったぞ！」

「酷いにゃ！ 黙っていなくなるなんてにゃ！」

「どうやってここを見つけたんだよ」

「臭いを辿ってきたにゃ。ケンイチの使う変な油の臭いと森猫の臭いにゃ」

油つてのは軽油代わりに使っている改質白灯油とかバイクの混合燃料の事だろう。

「ええ？ マジか――それで解るなら、絶対に獣人から逃げられないじゃん」

「狙った獲物は逃さないにゃ」
ミャレーの目がキラリと光る。

「俺が延々と川を歩いたらどうだ？」

「上流か下流に走ったら絶対に岸に上がるから、そこからまた追えば良いにゃ」

水の中なら臭いを追えないだろうと思ったが、さすが狩りのプロだ。動物ならそれで撒けるかもしれないが、獣人には知恵があるからな。

そう簡単には逃げられない。計算や読み書きは出来ないが、狩りや戦闘にステータスを全振りしているような連中だ。

「そりゃそうか……まあ、解ったから俺の上から降りてくれ」

「ところでベルって誰にゃ？ また新しい女かにゃ？」

「またってなんだよ。森猫の名前だよ」

「にゃんだ、そうかにゃ」

まさか、そこまで鼻が良いとは思わなかった。こりゃ獣人を敵に回すのは得策じゃないな。

どうしても逃げ切るなら追手を殲滅するしかないって事だ。

彼女の手には獲物——鳥が握られている。

「途中で捕ってきたにゃ」

「ミャレー、俺を追ってきたのは解ったが、これからどうするんだ？」

「そんなの、ケンイチと一緒に住むに決まってるにゃ」

「決まりなのかよ……一緒に居た獣人の男達はどうした？」

「もう、あいつらの面倒を見るのは飽きたにゃ！ これからは、ケンイチに面倒見てもらうにゃ」

男達が酔っ払って何かしでかす度に、彼女が尻ぬぐいをしていたようだ。それに飽き飽きしたらしい。

「いいけど——自分のメシ代は稼げよ。それから、アストランティアの街へ、お使いを頼んだりするぞ？」

「任せるにゃ！」

ここから街までは、ドローンで見た感じでは直線距離で6kmぐらいだろう。

獣人なら時速30kmぐらいで走れるからな。12分もあれば着く。崖沿いに森の薄い所を行けば、魔物も少ないはず——そこら辺は彼女達の方が心得ているだろうが。

「ミャレー、四脚^{ケモノ}の解体は？」

「下拵えなら出来るにゃ」

下拵えってのは内臓を抜いて肉を水等で冷やすことだ。こうしないと肉が劣化してしまう。

「それじゃ鳥は食う事にしてだなあ——四脚^{ケモノ}は下拵えをした物をアイテムBOXへ入れておくか。街へ行った時に、纏^{まと}めてギルドへ出せば良い」

「解ったにゃ」

喜ぶミャレーであったが、俺が移築した家を見て驚いた。

「もう家を建てたにゃ?!」

「アイテムBOXへ入れた家を出したんだよ」

「そんな事も出来るのかにゃ！」

「出来るんだなあ——これが」

ミャレーがやってきた途端に外が騒がしいので、何事かとアネモネが外へ出てきた。

「あ、ミャレーが来た」

「にゃーアネモネも一緒にゃ！」

彼女達は仲が良い。ミャレーはアネモネを肩に乗せて走り回っているが、その姿は姉妹のようだ。

「おゝい！ 俺は、家の中に入るぞ」

「はゝい」「にゃ」

家の中で、アイテムBOXから缶コーラを出して飲む。ポータブルの冷蔵庫で冷やした時にアイテムBOXへ入れておいたので冷たいまだ。

テーブルの上には、アネモネが読んでいた絵本がある。

「絵本か――ガリ版印刷機とわら半紙があるから、俺でも本が作れるな。この世界じゃ本は貴重だから薄い本でも売れるぞ」

薄い本と言っても、アレじゃないぞ？

俺が絵本を眺めていると、アネモネとミャレーが入ってきた。

「それは何にゃ？」

「絵本だよ」

「にゃゝ！ 凄い綺麗な絵が描いてあるにゃ！ これなら字が読めなくても解るにゃ」

萌え絵は獣人にも理解出来るらしい。これは意外な発見だ。

「そうかぁ、字が読めない人も多いからな。絵本は良いかもな」

だが、元世界の童話を絵本にするのもなあ……何か良い題材は……。

「ここら辺に伝わる、お伽話とかはないのか？」

「あるよ！ 森のエルフ様のお話」

話を聞くと、人間の男とエルフの女が種族の隔たりを越えて恋に落ちる物語らしい。

元世界の人魚姫みたいな物か。やはり、この手の話ってのは定番なんだな。

面白そうなので、表紙を入れて12枚ぐらいの構成で1日1枚、2枚の絵を描いて、ガリ版で絵本を作ってみようと思う。

ガリ版なら同じ本が何冊も作れるからな。10冊ぐらいは作るか。値段は——そう、1冊小四角銀貨1枚（5000円）ぐらいで。10冊売れば5万円、100冊売れば50万円だ。定期的な収入源として見込めるかもしれない。

小学生の頃、ガリ版で文集を作った事があるから、その経験からすれば50枚や100枚ぐらいいは印刷出来るはず。

昔の学校のテスト用紙なんて、ガリ版とわら半紙だったからな。

その頃はもうコピー機が普及し始めていたと思ったが、ウチの学校はガリ版刷りだった。

単に、ど田舎だったせいもあるかもしれないが。

それでも皆がコピー機を使うようになって、ガリ版関係の道具を作っていた会社が次々と撤退、ガリ版はすぐに無くなったな。

俺がガリ版を使っていた最後の世代かもしれない。

ガリ版は置いておいて——本を作っても、1冊小四角銀貨1枚なら一般人でも買えない金額ではないはずだ。

まあ確実性を狙うならエロ草子の方が良いんだけどな。

そっちの方が絶対に高く売れる。だが倫理的問題があるし、そういうのがアウトな世界で——公序良俗に反するって事で捕まったりしたら拙い^{ます}。

だが、ウチのお得意様だった写本の爺さんの話からすれば、高い本でもエロが人気らしいからな。

まあ別に危ない橋を渡る必要も無い。

俺が捕まったりすれば、アネモネが路頭に迷ってしまうしな。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

それから家の周りの柵を作ったり畑の世話をしたりの、空いた時間を使って絵本の原稿を描いた。

ペースは1日2枚ぐらいだが、ここら辺は元プロの絵描きなので造作も無い。

最初に使おうとしたわら半紙はA4だったのだが、この世界の本は紙を節約するためか大きさが少々小さい。

それに合わせてB5サイズに変更して、新しいわら半紙をシャングリ・ラから購入した。これは学校等で使うノートと同じ大きさだ。

絵を描く合間に、バイオディーゼル燃料についての電子書籍にも目を通し、おおよその把握が出来た。

簡単に言えば、アルカリとアルコールをサラダ油等に入れ、エステル交換という反応を起こしてディーゼル燃料に必要な成分を分離するらしい。

シャングリ・ラで検索してみたが、目当てのアルカリもアルコールも売っている。

劇薬を使うので注意は必要だが、簡単な器具を使い自作できるようだ。

こりゃ、やるしかないだろう。

とりあえず絵本を作ったら、次はバイオディーゼル燃料作りだな。成功すれば、ディーゼル機関が^{はかど}捗るぜえ！

絵本の原稿も出来たので、刷ってみる事にした。

夕飯を食べた後、LEDランタンを部屋に灯す。太陽電池パネルが稼働し始めたので、電氣が使えるようになったのだ。

アイテムBOXからガリ版印刷の道具を出す。

「それでまた紙に何か描くの？」

「俺が描いてた絵があるだろ？　これを紙に移すんだよ」

以前、森の中で女達に読み書き算盤を教えるために、このガリ版を使って教科書を作ったのだが、その様子をアネモネは見ている。

「へえ〜！」

本を作ると言う俺の言葉に、アネモネの目がキラキラと輝いている。

「ケンイチ、本を作れるにや？」

「まあな」

「凄いにゃ！ ケンイチは何でも作れるにゃ〜！」

「別に何でもってわけじゃないんだが……」

印刷機のスクリーンヘインクを塗り、ローラーで延ばした後、スクリーンを上げると――。

「ほら」

俺は刷り上がった絵本の表紙をアネモネに見せた。

「すごおお〜い！」

とりあえず10部作りたいから、同じ絵を10枚刷ろう。

「これ、私も欲しい」

「それじゃ、11枚か――」

「ウチも欲しいにゃ！」

「字が読めなくても良いのか？」

「絵が描いてあるから、話が解るにゃ〜！」

「そうか――それじゃ、12枚刷るか」

インクを落としローラーで延ばしては――スクリーンを上げる。作業は簡単だ。

「私もやってみたい！」

「おお、良いぞ。簡単だからな」

一枚やらせてみたが問題なく出来たので、連続で刷らせてみる。

彼女も楽しそうだ。

「凄い！ 何枚も同じのが出来るね！」

「12枚ずつだぞ。終わったら次の絵に交換な」

「うん！」

アネモネが凄く楽しそうなので、今日のお勉強は休みにして、本を全部刷ってしまう。

とりあえず12部作るが、原版があれば摩耗するまで刷る事が出来る。

枚数が多くなると徐々に印刷が潰れてきてしまうので、そうなたら原版の寿命だ。

本当はパソコンでも購入してIllustratorとかでページを組み、この世界のフォントを作ってプリンターで出力した方が綺麗なのだが。

まあ、それは野暮ってもんだろう。この手作り感が良いのだ。

もっと印刷のクオリティを上げて確実に枚数を増やしたければ、銅版画にすれば良いしな。

銅版画も高校の美術部で経験済みなので問題ない。

シャングリ・ラで銅版画を検索してみると、ミニプレス機がセツトになっているキットが10万円で売っている。

マジで何でも売ってるな——全く感心するわ。思わず笑ってしまう。

「何をニヤニヤしてるにゃ？ どこかの女の事でも考えてるにゃ？」

「いや、何でもない。女なんていないし——よし、今日は遅いのもう寝よう。明日はこれを本にするぞ」

「まだ眠たくない」

——とか言いつつ、アネモネの目は閉じそうだ。そりゃいつも寝ている時間を大幅に過ぎていくからな。

「ダメダメ、明日な。それに汚れてしまったから川で手を洗ってこないと」

「うん……」

印刷に夢中になってたせいか、アネモネはインクだらけだ。これは石鹼で落ちるかな？

LEDランタンを持って暗い外に出る。頭上は満天の星だ。

森の中では木が邪魔で真上しか星空を見ることが出来なかったが、ここでは360度見渡せる。

滝のある崖のところが唯一陰になっているが、ほぼ全周が星空だ。ここで天体観測も良さそうだなあ。だが知らない星座ばかりだ。やはり、ここは地球ではないらしい。

改めて現実を見せられて軽くショックだが、今更悩んでも仕方ない。住めば都で、ここではここに合った生活を送れるだろう。

何と言っても、シャングリ・ラというチートがあるじゃないか。まるで夢みたいだが、ところがどっこい夢じゃありません。コレが現実。

アネモネに石鹼を渡して手を洗わせる。

だが、手を洗っている最中に船を漕ぎ始めた。

「おっと！ 危ない！ 川に落ちたらどうする」

彼女を川から離すと、そのままアネモネが俺に抱きついてきた。どうも眠気が限界のようだ。

ランタンを手に持ち、アネモネを抱きかかえて家へ入る。

「眠っちゃったにゃ？」

「ああ」

仕方ない、彼女の服を脱がして裸にすると寝間着に着替えさせる。アネモネの手を見ると、インクが取れてないのだが……。

試しにアイテムBOXからアルコールを出して拭くと綺麗になった。

「俺たちも寝るかあ」

「にゃー!」

ミヤレーが服を脱いで裸になる——どうやら、彼女も一緒に寝るようだ。当然、ベルもやってくる。

3人と1匹じゃダブルベッドでも狭いんだが……。

どうしよう。

そんな事を考えていると、ミヤレーが抱きついてきた。

「ケンイチ……」

「ここら、隣にアネモネがいるからダメだったの」

「寝てるから大丈夫にゃ」

「意外となあ、子供って起きてたりするんだよ、こういう時に」

「ウチも、父ちゃんと母ちゃんがウチの横でしてたにゃ」

「だから、ダメだって言ってたんだろ!」

変なトラウマを植え付けたらどうする。子供の精神衛生上宜しくない。

揉めていると——俺とミヤレーの間に森猫が入ってきてくれた。

獣人達にとって森猫は神の使い、邪険には出来ない。彼女は大人しく引き下がった。

本当にもう。獣人達は欲求にストレート過ぎる。

まあ、獣人とやっても子供は出来ないらしいのだが——つまり混血不可能って事だ。

それが良いのか悪いのかは解らないが。

36話 近所の人がやって来た

――アネモネと一緒にガリ版刷りをした次の日。

朝起きて飯を食う。今日からミャレーが住人として増えたので一気に騒々しくなった。

俺とアネモネなら、あまり話さないからな。

ミャレーも俺たちと一緒に牛乳を掛けたグラノーラを食べている。

「街の住民は俺がいなくなって何か言ってたか？」

「ウチは、ケンイチの家が無くなっているのを見つけて、すぐに追いかけてきたので解らないにゃ」

「本当に着の身着のままやって来たのか。行き当たりばったり過ぎるだろ」

「獣人は、こんなもんなのにゃ」

ミャレーは口の周りを牛乳だらけにして返答した。

「自分で、それを言うのか」

1人でもサバイバルは出来るし、弓を持っているから狩りも出来る。
る。

フラリと旅へ出ても何も困らないわけか。だが彼女のサバイバル能力は当てに出来る。強力な助っ人になるだろう。

「狩りをしてくれるなら、シャガの時に使った弓を貸してやるよ」

「あの凄いのにゃ？」

「ああ」

「あれがあれば、デカイ獲物も捕れるにゃ」

「無茶はするなよ」

彼女の話では通常デカイ獲物は複数人でパーティを組んで行うと言う。

デカイ獲物を捕っても人数がいないと処理も出来ないし運べない。だが俺には、どんなデカイ物も飲み込むアイテムBOXがある。

彼女が仕留めた所へ行き、アイテムBOXへ入れて街へ運べば良い。

飯も食い終わったので絵本の製本を行う事にした。

さて、どうやって製本するか、それが問題だ。表紙を入れて12枚刷るのだが、それを真ん中で折って袋とじにする。

見開きに絵と文章が入る構成になる——コピー同人誌みたいにホ○キスか？ いや、この世界でホチ○スは拙い^{まず}だろ

後は、糸と針で縫うか——面倒だな。

こういう時は、なんでも揃っているシャングリ・ラを検索してみる。

「あった！」

製本機というのが売ってるじゃないか。こいつを買ってみよう——5000円だ。

ガリ版刷りのセット7000円と合計で1万2千円の出費だが、これは先行投資だ。

本を小四角銀貨1枚（5000円）で10冊売れば5万円になり、すぐに投資は回収出来る。

機械には100Vが必要なので、モバイルバッテリーをアイテムBOXから取り出して、電源プラグを接続——そして予熱ボタンを押す。

予熱が完了したら、原稿を纏め本の背中を下にして機械へ投入する。これで熱で溶けた糊が、本の背中を固めてくれるようだ。

しばし待つ——ブザーが鳴れば製本完了らしい。

糊を加熱しているので冷却が必要なようだが、冷やした後――本をペラペラと捲ってみる。

「おおっ！ 本になってるぞ！」

「見せて！ 見せて！」

アネモネが俺から受け取った本を喜んで捲っている。

「要領は解った、ドンドン作るぞ」

「次はウチのにゃ！」

纏めて投入できるようなので、合計12冊を製本機へ入れ加熱した後、製本は完了だ。

だが、本の縁がちよつと凸凹しているなあ――これを裁断機で切り揃えなければならない。

「そうか裁断機もいるか」

裁断機を検索すると6000円だ。これで初期投資は1万8千円になってしまったが、本が売れば回収は出来る。

「ポチッとな」

ドスッ！ ――という音をたててフローリングに裁断機が落ちてきた。

「それ、知ってるにゃ！ ワラを切るやつにゃ！」

ミャレーの話では、ワラを裁断する刃物にそっくりだと言う。なるほど、そういうえばそんな器具をTVか何かで見たことがあるな。

背中に目隠しの紙を貼ると、裁断機を使って背中や上下を切り揃える――これで本が完成だ。

「よっしゃ！ 出来たぞ、全部で12冊だ」

「わぁーい！」

「にゃー！」

自分達を作った本にアネモネとミャレーは大喜びだ。

「アネモネ、これ何て書いてあるにゃ？」

「むかし ふかいもりのおくに うつくしい エルフが すんできました」

文字は当然この世界の文字だ。

「にゃー！ アネモネは字が読めるのにゃ。凄いのにゃ」

「えへへ」

アネモネはミャレーに褒められて得意気である。この世界の寓話を集めたり、元世界の話をこちら風にアレンジするのも面白いかもしれない。

製本に夢中になっていたので、時間はすでに昼近く。

出来上がった10冊の本と製本に使っていた道具をアイテムBO
Xへ収納して外へ出た。

外は良い天気である。日差しは燦々と降り注ぎ、空は青い。

さて、本も一段落したので畑仕事でもするか。家の近くに置いた
芽出しポットの苗がいい感じに育っているのだ。

「今日は苗を植えるかな」

昼飯を食う前に芽出しポットを畑に運ぶと畝うねを作り、マルチを貼
る。

マルチの切れ込みに苗を植えていると、湖から1艘そうの舟がやって
きたのが見えた。

櫓ろを使った細長い舟で男が3人乗っている。1人は鼻のまわりが
黒いシャム柄の獣人だ。

全員、粗末な丈の短いズボンと麻のシャツを着ている——武器は

持っていないようだが……。

俺は咄嗟とつさに、アイテムBOXからクロスボウを取り出した。

「誰だ！ 何の用だ！」

叫んだ俺に、無精髭を生やした男達が驚いたように反応した。

「待て待て！ 物騒な物を下ろしなよ。俺たちや、あそこの村の住民だ」

リーダーらしき、黒い頭でちよつと長めの髪を後ろで結んでいる男が、左手にある漁村を指さした。

男達は全員30代といったところか——獣人の歳は、よく解らんが……。

「俺は商人だが、ここに住んじゃダメって決まりでも無いんだろう？」

「そりゃ、そんな決まりは無いが、野盗でも住み着いたら大変だからって、村長に見てこいって言われてな。それで見にきたんだ」

「なんだ、こんな所に家が出来てるじゃねえか。いつの間に作ったんだ？」

後ろにいる男が呟つぶやいた。

「もう一度言うが俺は商人だ」

首から下げた金属棒——商人の証を見せる。

「何故、商人がこんな場所に？」

「街で揉め事に遭ってな」

「揉め事？」

「ああ、良い物を安く売ってたら、大店がチンピラを使って脅しを掛けてきやがった」

勿論もちろん、大嘘です。

「ああ、よくある話だ」

「その、よくある話で面倒になり、ほとぼりが冷めるまで、ここに住む事にしたってわけだ」

「事情は解った」

外の異常に家の中に居たミヤレーも気がついたのだろう。弓を手にとって玄関から飛んできた。

「待て、ミヤレー。敵じゃないみたいだ」

「本当かにゃ？」

「獣人の女もいるのか？」

「ああ」

心配なのか、玄関からそっと顔をだして、アネモネが覗いている。

「危ないから家の中に入ってなさい！」

俺の声を聞いて、玄関の扉がパタリと閉じられた。

「子供もいるのか」

アネモネの姿を見たリーダーらしき男が驚きの表情を見せる。

「まあな」

——その時、森から出てきたベルが俺たちの間に割って入った。異変に気づいて、朝のパトロールから戻ってきたのだろう。

「なんで森猫が！」

「彼女は俺たちの仲間だ」

「森猫が？」

「そのとおりだ」

そう言って、ベルの背中を撫なでると彼女が俺に身体をすり寄せてきた。

「クロトンよ。オイラは、この旦那の言う事を信じるぜ。森猫が懐いている人間が悪人のはずねえ」

後ろに控えていたシャム柄の獣人がリーダーらしき男に耳打ちしたのが聞こえた。獣人は声がデカイので耳打ちになっていないが。

「お前が言うんだから間違いは無いんだろう——疑って悪かった。俺は、あそこのサンタンカのクロトンだ」

クロトンという男が頭を下げた。

「商人のケンイチだ。宜しくな」

「商人っていうぐらいだから、何か売ってるんだろう？ 何を売ってるんだ？」

「今はあらかた商品が捌^はけてしまつてな、大した物は残ってないんだが——何が欲しい？」

「毛布がボロボロになってしまつてなあ。家族に新しい毛布を買つてやりたい」

「ちょっと待っててくれ、持ってくる」

アイテムBOXから出すと、また噂が広まるからな。すぐにバレルかもしれないが一応念のため。

家に走っていくと、すぐにシャングリ・ラから一番安い2000円の毛布を買い、戻るとそれを見せた。

「これで良いか？ 銀貨一枚（5万円）だ」

元世界の感覚だと高いのだが毛布の相場はこのぐらいだ。なにせ全部手織りだからな。

街で商売して、おおよその物価は把握している。

ムシロみたいな粗末な物でも、この世界では、それなりの値段がするのだ。

「これはえらい上物だが——新品か？」

「そうだ」

「ううむ……」

5万円となると、中々出せない金額だろう。しばらく悩んでいたクロトンという男が切り出した。

「毛布もそうだが——実は娘の誕生日が近くてな、何か良い物はないか？」

「誕生日の贈り物か……それは重要だな。下手な贈り物をして、お父さんなんて嫌い！——とか言われたら大変だ」

「その通りなんだよ。中々、難しい年頃でな……」

男がやるせなさそうに頭を掻いている。お父さんは大変だあねえ。

「ふむ……そうだ！」

俺は後ろを向くと、彼等から見えないようにアイテムBOXから作ったばかりの本を取り出した。

「本なんかどうだ？ 文字の勉強にもなるぞ？ 薄い本だが小四角

銀貨1枚（5000円）だ」

「小四角銀貨1枚とは安いな——森のエルフ」

男は本を手にとると、タイトルを読んでみせ、パラパラとページを捲っている。

「字が読めるのか？」

「ああ、これでもアストランティアで役人をやっていたんだ」

「なんで役人が、こんな辺鄙^{へんぴ}な漁村——いやすまん」

「まあ確かに辺鄙^{へんぴ}だな。理由はあんたと同じだよ」

「ははあ——同じ街落ちした、よしみだ。毛布を買ってくれるなら、その本を付けてやるが」

「良いのか？ よし！ 買った。金は明日持ってくるから、その

時に毛布をくれ」

高価な買い物を決断したように、男は手を打った。

「解った」

取引成立だ。元役人だけあって、話が常識に沿って進むのが良い。トラブルにならなくて良かった。

田舎から一步も出たことがない人間だと、妙に排他的だったり、地方独特の偏見に凝り固まっていたりするからなあ。

そういう俺の思考も偏見なのかもしれないが。

後ろにいたシャム柄の獣人がミャレーに色目を使っているのだが、彼女は手で追ひ払うような、つれない仕草をしている。

男達と別れ、舟が離れていくのを見届けると、家の中に入った。

カモフラージュネットを掛けた太陽電池パネルには、何やら変な顔をしていたが質問はされなかった。

擬装の効果は、それなりにあるようだ。

「大丈夫だった？」

アネモネが心配そうに話しかけてきた。

「ああ、近所の村の人達だったよ。悪い人が越してきたりしたら困るから、見にきたらしい」

「失礼しちゃうにゃ！ こっちには森猫がいるのににゃ」

「普通の人間達に森猫の加護は通じないだろう。それにしても獣人の男に冷たすぎだろ？ 同じ種族じゃないか」

「獣人の男はもう懲り懲りだにゃ！」

ミャレーは口をへの字に結ぶと、腰に手を当てて尻尾をブンブン振っている。

イライラすると、この尻尾の動きらしい——貧乏揺すりみたいなものか？

「ニャケロ達は、そんなに悪い奴等とは思わなかったが……」

「酒を飲まなきゃ我慢できるけど、酒を飲まない獣人の男はいないからにゃ」

彼等が酒を飲む度にやらかす不始末の尻ぬぐいに嫌気が差したのだろう。俺と一緒に河原で飲んでいた時も、川で溺れたりしてたからな。

「確かに、そんな感じだな」

「ケンイチは飲まないから良いにゃ」

「俺は、基本的に飲まない人だからなあ。夜に飲んでしまうと勉強とか出来なくなるし」

「ケンイチは大人になっても勉強するの？」

アネモネの疑問ももつともだ。

「人間は一生、死ぬまで勉強だよ。力が無い人間でも知恵を付ければ強者に対抗出来るようになるからな」

「うん」

「獣人は頭が悪いからにゃ」

「獣人だって狩りの仕方とか色々考えるだろ？ それと一緒にだよ」

「そうかにゃ」

どうも獣人達の狩りは学習というよりは、本能に近い感じもするが。

「もっといろんな人が勉強が出来るように学校を沢山作ってくれば良いのに……」

「民が賢くなると、王侯貴族の地位が危なくなると思ってるんだよ」

「それはそうにゃ。ケンイチみたいな凄い奴が一杯街にいたら、貴族なんて要らないにゃ」

「いや、要らないってことはないと思うが……」

昼も近くなったので、軽く昼飯を食う事にした。
飯を食いながら、ダリアでの噂話について尋ねてみる。

「ミヤレー、ダリアの街で何か変わった噂は無かったか？」

獣人は耳が良いからな。普段からくるくる耳を回して、周囲の会話を聞いている。

「にゃ！ マロウの娘がウチ等と一緒に戦った男爵様から求婚されたって話は流れてたにゃ」

「えええっ！？ そりゃ、めでたい。うん、俺みたいなオッサンより、そっちのほうが全然良いじゃん」

「しかも騎士爵から男爵になったにゃ。玉の輿にゃ」

「そうだよなあ。しかも正式に求婚されたってことは、正室になるって事だろ？」

普通、貧乏領の貴族のお相手は、同じ下級貴族の娘とか領内の実力者——例えば庄屋の娘が多い。

「多分、そうにゃ」

なんで、そんな噂が流れるのか？ ——それは、そういう噂を先行して流して断りにくくするためだ。

つまり既成事実化を狙っている。ここにはマスコミが無いから、よく使われる手だと言う。

婚礼の儀があったら参加したいぐらいだが——それも、もう叶わないが。

飯を食い終わった後、橋を渡ってミヤレーと森へ入る。植物探しをしてみるためだ。

使い捨てのゴム手袋を付けて、目についた植物を片っ端からアイテムBOXへ入れていく。

ゴム手は念のため、触っただけでヤバイ植物って意外と多いからな。

漆とかイラクサとか、カエンタケとか。全草毒だと切った時の汁がヤバイ事もあるし。

キョウチクトウだと周囲の土壤まで毒になるって話だしな。そんなのが庭先に普通に植えられているのだが、意外と怖い。

ベラドンナとかトリカブトとかエンゼルランペットとか植物毒ってのは結構多い。

野菜だってジャガイモの芽なんて食ったら死ぬぐらいヤバイしな。

アイテムBOXへ入れた植物達、ただの雑草は——【雑草】としか表示されないが——【青露草】のように名前が表示される物がある。

元世界のように、わけの分からない植物まで名前が付けられて分類されている方がちよつと異常。

この世界で名前が付いているということは、これ等には何らかの理由で名前が与えられているはずだ。

名前が表示される物をチェックして、集めていく。

これを、ギルドへ持ち込んで鑑定してもらえば良い。

一度聞けば、どんな役に立つ植物なのか、毒なのか解るだろう。

この世界の植物図鑑等があれば良いのだが——あっても印刷技術がない世界だ。おそらくとても高価な物だろう。

俺が植物採取していると、ミヤレーが背中に抱きついてきた。

「こらこら、草採ってる最中だから」

「にゃん、ここならアネモネもないにゃん」

仕方なく、喉を撫でてやるとゴロゴロと喉を鳴らしている。

彼女は短いスカートを下ろすと大木に手を付き、丸く美味しそう

な尻を突き出し尻尾をくねらせ、俺を誘っているのだが――。

しかし、大自然の原生林の真っ只中、木漏れ日が降り注ぐ中で青姦かぁ――それがスローライフなのか、否か？　それが問題だ。

37話 重機の燃料を確保しよう

家の周りの作業は殆ど済んだな。

ここに居着いてから半月程が経過したが、何も問題は起こっていない。

景色は良いし、湖に映る夕日は綺麗だし言うことなし。

前の森の中と違い日当たりも良いので、畑の生育も順調だ。水もたっぷりあるしな。

残るは――。

バイオディーゼル燃料の精製に突撃してみるか？

これが成功すれば、値段が1／10のサラダ油をディーゼル燃料に使えるので、一気に重機が使いやすくなる。

重機が無くても生活は出来るが、機械の力は百人力だ。せつかく文明の利器があるのだから、使わない手はない。

先ず危険な実験をするので、家から離れた場所に実験場を確保する。

次は隔離スペースだ。薬品を弄ったりしている時に、好奇心で一杯のアネモネや森猫がやって来たりしたら大変。

それにバイオディーゼル燃料を作る反応に時間が少々掛かるらしい。そいつを安置する場所も必要だ。

そうなる――屋根が付いている小屋が欲しいな。

シャングリ・ラを検索すると、3万5千円で窓なしの小屋が売っている。これも組み立てキットだ。

だが、俺が組み立てた家より遥かに簡単。大きさは2m×2.5mぐらいで、木材に金属製の金具をネジ止めして行う。

力持ちのミヤレーに手伝ってもらい、電動ドライバーで次々に金具をネジ止め。

組み立てたフレームを立てて、小屋の骨組みを作る。そして壁と屋根に合板を貼り、出入口の扉を付ければ完成だ。

実験の際に換気が必要なので、壁の一部に板を貼らずに穴を開けている。

実に簡単——まあ、合板で出来たタダの箱だからな。

本格的に使うなら、屋根や壁に防水シートを貼ってからトタン板を貼ればパーフェクトに完璧パーペキ（死語）だろう。

一度作ってアイテムBOXに入れておけば、色々と使い道がある。簡易の宿泊施設としても利用出来るしな。

ペラペラのテントよりは安全なはずだ。

組み立ては1日で終わった。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

——次の日。

実験を始めるのにあたって、朝食中にアネモネとミヤレーに注意うながを促す。

「今日からちよつと危ない魔法の実験をするから、小屋には近づくなよ」

「にゃ？」

「猛毒を使うからな」

「怖い……」

「だから、近づいちゃダメ。解った？」

「うん……」

アネモネは解った顔をしているのだが、ミヤレーの方は怪しそう

だ。注意しないとな。

好奇心は猫を殺すって言うが、猫人だからなあ。

朝食の後、後片付けをして、シャングリ・ラから真っ白い化学防護服を買う。一枚1000円だ。

結構安いけど、この手の防護服は全部使い捨てだ。作業が終わったら処理される。

俺の場合は、ステータス画面のゴミ箱へポイで良いだろう。

とりあえず着てみる——頭からスッポリと被り銀色のスーツを着た未来人みたいなスタイルになる。

後は、有機ガス用のマスク——ゴーグルとマスクがセットになっている物を1200円で購入。

1個1100円の交換用フィルターも6個追加購入。

全部装着してみる——こんな格好をTVで見たことがあるなあ。

原発の事故現場じゃないか。

「これは結構暑そうだな」

雨合羽を着てたりすると、中が蒸れてびっしりになったりするけど、そんな感じになりそうだ。

しかも、閉めきった部屋の中の作業で、作った小屋には窓が無い。後付で窓は付けられると思うけど、今回は作業を優先する事にした。とりあえず、やってみないと成功するかどうか解らないからな。

「にやははは！ 変な格好にゃ！」

ミヤレーが腹を抱えてケタケタと笑っているのだが——。

「この服で毒を防ぐんだよ。蜂とかの大軍でも平気だぞ——多分」

「触手も平気じゃ？」

「触手？」

「うにゃ、巻きつかれて刺されたりすると、とても痛いにゃ」

「まあ、多分大丈夫だと思う」

なんだそりゃ、それも魔物なのか？ 陸のイソギンチャクみたいな物か？ 魔物ってのも色々多彩だな。

防護服を一旦脱いで、使う器具をシャングリ・ラで揃える。

まずは、ステンレス製の容器、65L入る大型で4万円だ。アルカリ薬品を使うので普通の鉄やアルミ鍋では腐食してしまう。

そして、アルカリ薬品——水酸化ナトリウム、2kgで4500円也。

劇物譲渡書にサインが必要です——という注意書きがあったが【購入】ボタンを押したら普通に買えた。

後はメタノールだ。18L、つまり一斗缶入りの物が2700円。なんでも売ってるな。

道具は揃った。しかし大量に合成するのは早急すぎるだろう。まずは少量で実験してみて、経験値を積みねば。

1Lから始めてみるとしよう。

小型のステンレス容器をシャングリ・ラで購入して実験を開始する。

まずは、メスシリンダーを購入してメタノールを200cc計り、そこへ水酸化ナトリウムを3.5g投入してナトリウムメトキシドという物質を作る。

こいつが猛毒らしい。発する蒸気も毒なので防毒マスクが必須だ。だが中々溶けないので時間を要する——これは何か、かき混ぜる道具を自作した方が良さだろう。

コンクリートやモルタルを混ぜる時に使う攪拌機を使えば良いかもしれないな。回転が速過ぎるようなら、汎用のインバータを使えば良いし。

小型のインバータはシャングリ・ラで2万程で売っている物が使える。

よく家電で言われるインバータ制御——何を制御しているのかと

言う、交流の周波数だ。

簡単に言えば、家庭用100V50Hzの交流で毎分50回転するモーターがあるとする。

そいつをインバータで交流の周波数を10Hzに落とせば10回転に落とす事が出来る。勿論、^{もちろん}0Hzにすれば停止させる事も可能だ。

電圧を変えてモーターの回転を制御する場合、抵抗やスライダックトランスで熱として無駄なエネルギーを捨てている故――。

それがなくなれば無駄もなくなるってわけだ。その分、省エネになるって寸法。

ちよいと脱線したが、ステンレス容器にサラダ油――キャノーラ油を1L入れて加熱。

温度は50度前後が良いらしい――温まったら、そこへ先程作ったナトリウムメトキシドを投入して攪拌する。

すると徐々に、ステンレス容器の底に赤茶色のドロドロが固まってくる。

「何やってるにゃ」

「あ！　こら、毒を扱ってるって言ったろ！　近づいちゃダメだ！」

「ふぎゃ！　何の臭いだにゃ！　それは魔女の大鍋にゃ？」

――魔女の大鍋。確かに、端から見ればそう見えるかもしれない。言い得て妙だ。

容器の底に溜まったこのドロドロ。これが植物油をディーゼル機関に使う時に邪魔な物――グリセリンだ。

そのグリセリンを分離させた、この上澄み液がバイオディーゼル燃料になるってわけだ。

「やった。上手くいった」

喜ぶ前に、実験が上手くいったのか？——ディーゼル発電機で試してみる必要がある。

ただ、念の為に2ストオイルを混ぜた方が良いと、本には書いてあるな。

2ストオイルなら安い。シャングリ・ラで購入——分量を計って投入してみた。

その前に俺は、化学防護服を脱ぐと川の中へ飛び込んだ。全身汗まみれなのだ。

「くそっ！ 暑いわ！」

頭から盛大に水をかぶりまくる。夜は風呂を焚くか。

ずぶ濡れのまま、アイテムBOXからディーゼル発電機を取り出して、作ったばかりの燃料を入れる。

デコンプレバーを引いてリコイルスターターを引くと、けたたましい音と白煙を吐いてエンジンが掛かった

少々白煙が多いような気がするが——。

「使えるな」

なにやら、天ぷらのような香ばしい匂いが辺りに漂う。

「この匂いを嗅いだら、天ぷらが食いたくなったな。晩飯は天ぷらにするか」

今回1Lの油を処理したが、これを50倍にすれば、50Lのサラダ油を処理してバイオディーゼル燃料を作る事が出来る。

それには、器具が色々必要な事も解った。

しかし、これだけの手間を掛けて、バイオディーゼル燃料を作る意味があるだろうか？

だが高価な燃料の値段が1／10になるのは魅力だ、金は大事だからな。その割には、いろんな事に金を使いまくっているが……先

行投資だよ先行投資。

世の中やってみなきゃ解らん事も多いから、とりあえずやってみる事が肝要。

経験値を積みめば、いずれ役に立つ日がやってくる。コレが俺のポリシーだ。

色々と思案を巡らせながら、脱いだ化学防護服をステータス画面のゴミ箱へ投入した。

このゴミ箱へ、とんでもない毒物とか放り込んでも平気なのかね？ 誰かが画面の向こうで処理してたらとんでもない事になりそうなんだが……。

今まで、ゴミやら廃液やら色んな物を捨てているが、警告を受けたりした事はない。

大体そんな注意書きもないしな。

多分、俺の想像では亜空間へそのまま投棄されて素粒子レベルに分解される——みたいなSFチックな処理かと思う。

それ故、サリンとかタブンとかソマンとかVXとか捨てても大丈夫だと思う——多分。

合成した燃料を試していると既に辺りは暗くなり始めている。今日はここまでとするか。

今日は風呂にも入りたいので、ドラム缶風呂の竈かまどにも火を入れた。

焚き火でスープ用のお湯を沸かすが、今日は天ぷらにするので、カセットコンロも出す。

焚き火や竈かまどだと火力の調節が難しいので、カセットコンロの方が便利だ。

鍋にごま油を入れて加熱するが、ごま油を使うのは個人的な好みなのだが油が高いのが欠点だな。

さて衣は卵と小麦粉を使うのだが、ここで手抜きをするために小

麦粉にマヨネーズを入れてしまう。

マヨネーズの中身も卵なので、似たような感じになるってわけだ。そして隠し味に昆布だしを少々。

それにマヨネーズを入れる事によって塩味も少々付くしな。塩やめんつゆ等を付けなくても、そのままで食える。

料理をしていると、ミヤレーとアネモネが家から出てきた。

「いい匂いだにゃ、何を作るにゃ？」

「天ぷらだよ」

「てんぷらにゃ？」

まあ、食ったことはないだろう。そもそも、この世界には唐揚げも無かったぐらいだからな。

天ぷらの具材は元世界の野菜達を使う。この世界の野菜は味がイマイチで、とてもサラダなんかで食えた物じゃない。

その前に生の野菜を食うって習慣自体が、あまりないようなのだが。

ただ山菜等アクの強い物でも天ぷらにすると美味くなる物があるので、こちらの世界の野菜も何種類か揚げてみる事にした。

料理をしながら、松〇谷由実のチャイ〇ーズスープを歌うと、アネモネと一緒に歌っている。

俺が料理をする時に、いつも歌っているので覚えてしまったのだ。

「出来た！ さて食おうぜ」

「にゃー！」

「わーい！」

みんなでテーブルに用意された料理に群がる。パンとスープはインスタント。そして作りたての天ぷらだ。

パンに天ぷらが合うか微妙だが――そう言えば、元世界でも天ぷらでパンって食ったことがなかったような気がする。

「サクサクで甘くて美味いにゃ！」

ミャレーが食っているのは、サツマイモの天ぷらだ。

「香ばしくて美味しいね」

「おっ！ 市場で買った野菜も天ぷらにすれば美味しいわ。アクが抜けたりするのかもしれない。こりゃ皆に食わせたら流行るかもしれないな」

これは嬉しい誤算だ。アネモネとミャレーも喜んでいたので、この世界の住民の好みにも合うはずだ。

まあ、この世界では油自体が高いので流行らせるのは少々難しいかもしれないが。

皆で夕飯を食っていると、風呂に設置した温度センサーのブザーが鳴った。

「風呂が沸いたか。ミャレー、お前が先に入るとお湯が無くなってしまいうから最後に入ってな」

「にゃ」

「アネモネ、そろそろ1人でお風呂に入りなさい」

「……」

「またそういう悲しそうな顔をする。男の人の前で裸になったら君も恥ずかしいだろう？」

「恥ずかしいけど……ケンイチなら良い」

良いとか悪いとかの問題じゃないんだよなあ。そういう悲しげな顔をすれば、俺が許してくれると思ってるんだろ？

でも、許しちゃう！ 悔しい！ ビクンビクン。

LEDライトを持って薄暗い中、アネモネと一緒に風呂に入る。暗くて辺りは見えないのだが、川の音と滝の音だけが響いてくる。

家の中に入ると気にならないのだが。

まったくもう、こんなの元世界なら完全にアウトだ。児○事案発生だぞ。

ちなみに元世界で銭湯へ行くと、このぐらいの女の子を連れて男湯に入ってくるお父さんがいたんだが、止めて下さい。

よろしくお願いいたします。

2人で交互にドラム缶風呂に入っていると、ミャレーも尻尾をふりふり裸でやって来た。裸といっても、毛皮を着ているので裸っぽくはないのだが。

「アネモネ、頭が痒くなったらすぐに言うんだぞ」

「うん」

彼女の頭についていた虱しらみは退治したはずだが、どこからか貰ってくる可能性もある。

「しかし獣人に虱しらみやノミが付いたら、大変だな」

「もう、悪夢にゃ！」

「でも宿屋で床虱やノミに、やられる事もあるんだろ？」

「あるあるだにゃ！ 泊まらずに、すぐに出てきた事もあったにゃ！」

ミャレーの話では、その手の宿屋は獣人同士のネットワークで、評判の甲乙丙丁によりランク付けされていると言う。

「獣人達には深刻な問題だからなあ」

「その通りにゃ」

皆で石鹸を使い身体を洗って、最後にミャレーへ盛大にお湯をぶっかけて泡を流す。

ミャレーとアネモネに使うためにアイテムBOXからジェットヒーターを取り出した。

お風呂の排水も、溝を掘って川へ流れるようにしたいな。

轟々と温風が出る中で、彼女達が髪の毛や毛皮を乾かしている。

その後、湯冷めしないように、身体を温めながらアネモネと一緒に勉強。

風呂に入ったせいか、アネモネも直ぐに寝てしまった。

俺も寝るとしよう。

――――◇◇――――

次の日から、俺のバイオディーゼル燃料作りが始まった。

おおよその要領を得たので、攪拌機などを自作してから燃料の合成を開始した。

攪拌機はモルタルなどを攪拌するのに使う物を使い、攪拌用のプロペラは腐食に強いステンレス製を選んだ。

そいつを自作の木製フレームで支えて攪拌を行う。

回転の制御は汎用のインバータを使い――M菱製をチョイスしてみた。

電源ケーブルを切断してビニルの被覆を剥き各機器を接続する。

エンジン発電機――インバータ――攪拌機――という構成になる。

――そして、50Lのキャノーラ油を2回処理して、約95Lのバイオディーゼル燃料を得る事に成功した。

これでしばらくは燃料が保つだろう。副産物で出たグリセリンはステータス画面のゴミ箱へ直行。

グリセリンから石鹼を作ったり出来るのだが、石鹼ならシャングリ・ラでいくらでも買えるし……無用の長物と判断した。

有機物なので、肥料に使えるという話もあるのだが。

だが、バイオディーゼル燃料の精製に付きつきりになっていたせいか、アネモネをすっかり放置してしまっていた。そのせいで彼女の機嫌がすこぶる悪い。

「なあ、アネモネ機嫌直してよ」

「知らない」

俺のごきげん取りに、彼女がつれない返事を返してくる。

「新しい絵本を買ってあげるからさあ」

ピクリと彼女が反応したが、それだけでは効果が薄いようだ。

「それじゃ、アストランティアの街へ行ってみようか？」

「本当?!」

「ほんとうにゃ!」

「ああ、そろそろアイテムBOXの中に、ミャレーとベルが捕ってきた獲物が溜まってきたしな」

「わぁーい!」

泣いたカラスがもう笑っているよ。やはり、まだまだ子供だ。何故かミャレーも一緒になって喜んでいる。

ついでに、アストランティアの冒険者ギルドへ登録してこよう。商業ギルドは――アストランティアで商売はしないから良いか。商売をするために、ギルドの許可が必要なのは、その街の中だけだ。道端で商売をしたり、村々を巡っての取引にはギルドの許可は必要ない。

だが地方や道端でも、普通はギルドの証を掲げて商売をしている、そのほうが客にも安心感があるからな。

アストランティアへの道は、崖沿いを通る事にした。

ここら辺を散策したミャレーによれば、崖沿いには魔物はいないと
言う。

それじゃ、アストランティアへ行ってみますか。

38話 アストランティアの街

――次の日。

近くの街、アストランティアへ行くことになったので、朝食は街で食べる事にした。

戸締まりを厳重にして、アイテムBOXからオフロードバイクを出す。後ろの荷台に取り付けられていた森猫用のBOXを取り外す。家に鍵を掛けても木製の窓だから壊されたら終了だけだな。だが盗む物は何もないが。

部屋にあるのはベッドだけ。その他のアイテムは全部アイテムBOXの中へ収納されているからな。

ヘルメットも取り出して、アネモネに被らせた。

「その変な乗り物でここまで来たにゃ？」

「そうだ。ダリアの街でも走っているだろ？」

「にゃ、ドライナントカってやつにゃ」

「これは魔法で動くけどな」

「野盗の所へ行く時に使った、馬なしで動く荷車と同じにゃ？」

「まあそんなところだ」

俺たちはバイクで森の中を走るが、ミャレーは走っていくと言う。獣人の最高速は時速60kmぐらいらしいからな。バイクと十分に並走出来る。

それに、ここからアストランティアまで5〜6kmってところだ。それぐらいの距離なら、スタミナも余裕らしい。

まさに、ステータスを運動能力へ全振りしたような種族だ。

「よし、行くか。アネモネ、ちゃんと掴まっているよ」

「うん」

チョークを引いて、キック一発でエンジンが始動した。パンパンと乾いた甲高い音と共に白い煙がマフラーから流れる。

「ああ、この臭いにゃ！」

どうやら、ミヤレーはこの2ストエンジンの排気煙の臭いと微かな森猫の匂いを辿って俺達に追いついたらしい。

スロットルを開けて、時速10Km→20km程で森の中を走り始めた。ゆっくりと走っても30分もすれば到着するはずだ。

左手に高い崖を見ながら森の中につきもり積もった柔らかい腐葉土の上をバイクで走る。まるでふわふわの絨毯の上を走っているようだ。

ちよつとエンジンを吹かすと、後輪が空転して落ち葉を巻き上げる。

真っ直ぐに森の中を走れば良いのだが、木の根っ子や倒木等があるから迂回する事も多い。

ミヤレーは、それを飛び越えながら真っ直ぐ走ってってしまうのだが、俺はアネモネと2人乗りをしているから、あまり無茶は出来ない。

俺1人で乗っているなら多少の無茶をしても良いのだが、コケてアネモネに怪我でもあったら大変だ。

それでも30分ぐらいで、森の木々越しに石造りの城壁が見えてきた。

前に居たダリアよりは少々小さい街のようだ。魔物や野盗等から備えるために、大きな街は城壁を備えているのがデフォルトのようだな。

「ミヤレーはアストランティアへ来た事があるのか？」

「何回かあるにゃ」

まあ獣人の脚とスタミナなら100kmの旅行もそんなに苦ではな

いとは思うが……。

そのまま直進して森の切れ目に向かって走る。そして街道の手前でバイクから降りてアイテムBOXへ収納した。

このバイクは目立つからな、いくら自転車まずが普及し始めたと言っても街の中では拙まずいだろう。

ここから街道を歩いていく。ミヤレーの話では街の門までは1kmぐらいだと言う。

俺達が目指すのは街の東門だ。湖にあるサンタンカの村からは街の西門の方が近い。

「アネモネ、歩けるか？」

「うん」

この世界の住民は基本歩きだ。どこへ行くのも歩き。馬を飼うのも結構金が掛かるし、それなりに裕福でなければ馬車も持てない。

田舎でも土地を持っていて農場をやっているとかな。

だが、小さい頃から歩いて暮らしているので、このぐらいの距離を歩くのは慣れっこだと言う。

俺もこの世界へやって来て散々歩きまわっていたので、かなり足腰が強化された。普段の運動不足が解消されたのだろう。

歳を取るとどうも億劫が先に立って、出不精になるからな。

それに元世界——田舎の人間程、歩かない。100m離れた店へいくのにも車を出してしまう。

それ故、都会の人間の方が、よく歩いていると思う。

通勤で家から駅まで歩く——改札から階段を登り降りしてホームへいく——そして駅から会社まで歩く。これだけでも結構な距離だ。排気ガスがなくて空気が綺麗なら、都会の人間のほうが健康的だと思うのだが。

城壁の門を潜る——。

この街でも、検査を受けたりする事はない。通りを見ると、この

街にもドライジーネが何台か走っていた。

「まずは、冒険者ギルドへ行って登録だな」

「私もいく!」

「うちもにゃ!」

「ミヤレーは、ここの冒険者ギルドへは登録しているのか?」

「していないにゃ」

「それじゃ、ミヤレーは登録しておいた方が良いかもな。ギルドへ、お使いを頼むかもしれないし」

「にゃ」

冒険者ギルドの場所はミヤレーが知っていた。登録はしていないが、場所は知っているらしい。

仲間の誰かが登録をしていれば、全員登録する必要もないからな。それは、メインストリートに面した場所にあった。石造りで2階建ての建物だ。1階部分の窓にはガラスが嵌^{はま}っている。

この世界の建物は、こういった建築様式が多いな。大きさは、ダリアのギルドより一回り小さい。

剣と盾の看板もダリアと同じ物だが、この看板はギルド共通の物らしい。

別に建物の大きさをギルドの勢力図が解るわけでもないが、街自体もダリアより少々狭いし街の大きさに合わせて、こんなものなのだろう。

両開きの扉を開けて中へ入る――。

中は明るく、透明な窓ガラスから斜めに日差しが入り込んできている。

冒険者ギルドは、この世界のハロワでもあるため、多くの人々が訪れて壁に貼られた掲示板をチェックしている。

とりあえず正面の受付へいく。白いブラウスに紅いベストを着たお姉さんが対応してくれた。

しかも巨乳である——巨乳。

大事なことなので二回言いました。

どこの世界でも、受付は見た目重視なのであろうか。巨乳に目を奪われていると、アネモネとミャレーの視線が刺さる。

「いらっしやいませ。今日はどのようなご用件でしょうか？」

「登録をお願いしたい」

「他のギルドへの登録は済ませていらしゃいますか？」

「はい、ダリアの商業ギルドと冒険者ギルドへ登録をしています」

「では、証を提示して下さい」

「後、こっちの獣人の登録もお願いしたい」

俺と、ミャレーの証をギルドの受付のお姉さんへ渡す。

「少々お待ち下さい」

証を受け取ったお姉さんが奥へ引っ込むと、すぐに戻ってきた。

「あ、あの！ ケンイチさんはダリアでシャガの討伐をした方なんですか？」

「おい、個人情報漏洩は困るな」

「し、失礼いたしました！」

慌てて口を押さえるお姉さんであったが可愛いから許す。でも情報漏らされると困るな。

「登録完了いたしました。登録料は銀貨2枚（10万円）です」
ミャレーの分も金を渡したのだが、ミャレーには異議があるようだ。

「ウチの分は、ウチが払うのにゃ」

「俺の仕事を頼むかもしれないからな」

そういえば、シャガの討伐をした時に彼女も大金を貰ったはずだ。どこへしまっているのだろうか？

「金なら、ギルドの証の中へ入っているにや」

どうやら、この証はキャッシュカードみたいな事も出来るらしい。証を持っていけば、登録しているどこのギルドでも引き出す事が可能のようだ。

もちろん勿論、大金を引き出すとなれば事前に連絡等が必要になるのだが。

しかし金の勘定が出来ない獣人達に大金を持たせて、大丈夫なものなのであろうか。

それは余計な、お世話かもしれないが。

受付で買い取りのカウンターを教えてもらい、そこへ向かった。ミヤレーとアネモネは掲示板へいつて依頼の張り紙を見ている。ミヤレーは字が読めないなので、アネモネが読んであげているようだ。

「おう、何を持ってきたんだい？」

金髪で長く黒い前掛けをしているニヤニヤした若い男が対応してくれた。

少々態度は気になるが、こういう所を任されているんだ仕事は出来るのだろう。

「角ウサギ3匹と鳥が4羽——それから」

日本ではないので、ウサギが3羽とは数えないようだ。

後は、大ネズミという黒いネズミが2匹。さすがにネズミの肉は食った事がないのだが、味はどうなのであろうか？

ミヤレーの話では不味くはないらしいのだが。

「おおっ！ アイテムBOXかよ、久々に見たぜ。全部買い取りかい？」

何もないところから獲物を出したので、男が驚いたようだ。

「いや、肉だけ欲しい。その他は買い取りで」

男は俺がアイテムBOXから取り出した獲物の状態を手を当てて確かめている。

「獲物は、まだ温かいか……これなら全部大丈夫だな。そうだなあ、今日は予定が入っていないので、全て夕方には出来るだろう」

「それじゃ、その時に取りに来る」

「あいよ」

男から金属製の受け取りに使うチップを貰う。ここら辺も、ギルド共通仕様のようだ。

そうそう、植物についても聞かないとな。再び受付のところへ向かった。

「ちょっと聞きたいんだが、植物の種類等が解る本とかは置いてないか？」

「薬草採取、初心者用の冊子ならございますが」

「ちょっと見せてくれないか？」

受付のお姉さんが巨乳を揺らしながら、棚から数ページの紙が纏められた冊子を取り出してくれた。

「これですけど——小四角銀貨1枚（5000円）です」

なるほど——よく利用される薬草やらが絵入りで書かれている。

もちろん、ここには印刷技術は無いので全て手書きだ。

これは役に立ちそうだな。全部覚えるか書き写したら、この冊子を他の奴に売れば良いのだ。

ギルドで5000円だが、3000円ぐらいなら欲しい奴がいる

かもしれない。勿論、^{もちろん}買う。

アイテムBOXに入っている草の名前と解説が載っていた。

よく見かけた【青露草】と【赤露草】は薬草らしい。その他の植物も薬草が多いようだ。

薬草と言っても、腹に効く——とか痛みに効く——とか色々と効能があるからな。

「常に必要な物は、常時買い取りを行なっております」

その場で赤露草10本を小四角銀貨1枚(5000円)、青露草10本を銅貨3枚(3000円)で買い取ってもらう。

アイテムBOXの中に【無我虫草】という物もあるが、こいつは毒らしい。毒の需要もそれなりにあるようだが、掲示板に貼り出してあれば買い取ると言う。

保留だな。

試しに、シャングリ・ラの買い取りへ赤露草を入れてみた——だが。

【これらの買い取りは1kg単位となっております】——と表示された。

1kgかよ。こんな草1kgって結構な量を入れないとダメだぞ？　こりゃ薬草の類はギルドの方が買い取り値段が高いとみた。

元世界で漢方薬の買い取りとか袋単位だろうしなあ。

例えば貴重な薬草——冬虫夏草みたいな物は高いかもしれないが。

「あの……虫にキノコが生えてるのって解ります？」

「ああ、ムシタケですね。あれは高いですよ。下についている虫の種類によって値段が違います」

「それは良い事を聞いた」

その話を聞きつつ、アイテムBOXの中を覗いて冊子に載ってな

い物を見つけた。

「この【黒紅玉草】ってのは冊子に載ってないのだから？」

俺は収納から黒い葉っぱに真っ赤な実がついている植物を取り出した。実の大きさは、さくらんぼぐらいか。

「ああ、これは紅玉を香辛料に使うのですよ。うーん、これだけ新鮮な物であれば、1本小四角銀貨1枚（5000円）でお引き取り致します」

マジか？ それじゃ、2本あるからこれで1万円か。

薬草採りでも結構金になるな。薬草の群生地を見つけたら、少しずつ採取してローテーションを回せば良い。

そうすれば定期収入が望めるってわけか。ふむふむ、勉強になるわあ。

アイテムBOX内に溜めていた物は殆ど売れたので、アネモネ達に声を掛けた。

「おおい！ 薬草が売れたから、飯を食いにいこうぜ」

「はーい！」「にゃー！」

少々小金が入った1万8千円——冊子の金を引いても1万3千円である。

この世界の少々高い食い物の味はどんな物なのだろうと、通りにあった、ちよいと立派なレストランに入ろうとしたのだが——。

入店お断り……原因はミャレーだ。

「獣人差別かよ。酷いな」

「まあ、いつもこんなもんにゃ。ウチ等は毛が抜けるからにゃ——」
ミャレーはいつものことらしくて、余り気にはしていないようだが。

仕方なく、市場の露店で飯を食う。

市場は、ダリアと同じように人の渦状態——景気は良いらしい。良い事だ。

出てきた料理は出汁も取らずに、野菜と肉を煮ただけのスープと硬いパンだ。

まあ、こんなのが、この世界では普通の料理だ。

アイテムBOXから鰹だしを出してスープに振り掛けた。そして胡椒を少々——。

「若干まともになったかな」

他の客から見えないようにして、アネモネとミャレーの皿にも鰹だしと胡椒を入れてやる。

「美味しくなったね」

「にゃー」

アネモネとミャレーがヒソヒソ声で話しているのを聞きながら、スープにパンを浸して食べる。

とりあえず——イマイチながらも腹は満たされたので、市場を散策する。

品揃えはダリアとあまり変わらないかなあ。しかし、こう見ると俺が露店に並べていた品物がかなり突飛な物だったと改めて気づく。

そりゃ食いつく奴が沢山いるわけだよなあ。

口直しに露店でリンカーを30個買う、一山銅貨3枚(3000円)だ。

「甘くて美味しいね」

リンカーを頬張るアネモネが、ミャレーに微笑みかける。

「にゃー！」

このリンカーが、市場で売っている果物の中では、一番甘みと酸味のバランスが取れている。

野菜はイマイチな世界だが、この果物は美味いと思う。

ついでに野菜も色々買う。味はイマイチだが家の畑に野菜が育つには少々時間が掛かる故、仕方ない。

リンカーを食いながら市場を回り、外れに道具屋があるのを発見した。

こいつは、お宝の臭いがぷんぷんするぜー入ってみるか。

看板には【スノーフレイク道具店】と書いてある。

「ちわー」

「はいよ」

中から出てきたのは、カーキ色のローブを被った婆さん。ローブの中は黒い服だ。胸には大きな緑色の宝石が光っている。

歳は不詳だが結構な歳だろう。だが随分と達者そうだ。

デカイ釜で、ぐつぐつと怪しげな物を煮ている姿がよく似合いそうな気がする。

この婆さんがスノーフレイクって名前なのか？ その割には真っ黒なのだが……。

ウロウロと道具屋の中を見て回る。何に使うのか解らない道具が一杯だ。

「ほえー全然解らん」

「兄さん見かけない顔だねえ」

兄さんときたか。まあ、この婆さんから見れば兄ちゃんあんかもしれんが。

「ダリアから来た。ダリアの市場の近くにも道具屋があったが……」
「あの爺、まだ生きてたかい？」

「んあ？　もしかして知り合いかい？　爺さんはギルドマスターの
師匠とか言ってたけど……」

「ああ、そいつさ。間違いない」

「あの爺さんも元気だな」

「あいつが、何か凄い発見をしたとか手紙を送ってきたけど、ボケ
たんじゃないだろうねえ」

「そういえば道具屋の爺さんにも悪い事しちゃったなあ。色々と世
話になったのに。」

「アネモネも色々興味深そうな顔で見物して回っているが、ミヤ
レーは全く興味がないううだ。」

「何か買うのかい？」

「ああ、それじゃ射程400の可変式プラズマライフルをくれ」

「生憎それは品切れさ。在庫がある物にしておくれ」

勿論、これは冗談ではあるが——婆さんもちろんもワケが解らん事を言わ
れたので、在庫が無いと言っただけだろう——と思う。

ウロウロと歩きまわっていると、奇妙な道具を見つけた。

細長く黒い器具で上に大きな器が載っている——そして中間には
小さな器。

器具の両脇からは、傘のように斜めに45度に彫られた溝が伸び
ていて、何かが滴り落ちる構造なのか？

器と溝の内側はガラスのような物でコーティングされている。
こいつの形を漢字で例えるならば【不】——に似ているか。

「ばあ——いや、お姉様よ。こいつは一体なんの道具だ？」

「ほほほ、そんな物に興味があるのかい？」

婆さんは黙って手を差し出す。デモンストレーションでもしてや

るから金を寄越せて言っているのだろう。

彼女に小四角銀貨1枚（5000円）を渡す。

「随分と物分かりが良いねえ。そういう良い子には、きちんと教えてあげようかねえ」

金を貰った婆さんはニヤニヤと笑いながら器具の準備をし始めた。

ちょっと多めに渡して正解だな。この世界でタダの物は無い――
何にでも対価が必要だ。

婆さんは奥へいくと、壺に入った何かを持ってきて、器具の上の器に注ぎ込む。

色と臭いからすると、ワインのようだ。続いて下にも器をセット――そして中間の小さな器に透明な液体を注いだ。

すると――斜め45度になった溝を液体が滴り落ちてきた。

左側の器に流れてくる液体は透明だが、右側へ流れ滴る雫は紫色のままだ。

「こっちは水だな。だが、こっちは……」

紫色した液体はかなりドロドロになっていてるがワインだ。――
だが、舐めてみるとアルコールの濃度がかなり上がっている。

それから導かれる結論は――。

「もしかして、上の器に入れた物から特定の物を分離する道具か？」

「ほほほ、中々察しが良いねえ。ここの中間の器に入れた物が抜かれて左側へ落ちるんだよ」

「それじゃ、中間の器に水をいれたから、ワインから水が抜かれた――って事か？」

「ご明察。これはねえ錬金術師が使う道具さ」

どういう仕組みかは解らんが魔道具ってやつか。科学では計り知れない動きをするな。

使えるのは液体だけで、金属類には使えないと言う。

だが、待てよ……こいつを使って植物油からグリセリンを抜く事が出来れば、安全にバイオディーゼル燃料を作れるんじゃないか？
そうすれば、あんな危険なアルカリとか使わないで済む。

「婆さん、これいくらだ？」

「はぁ？ 買おうってのかい？ あんたが？」

どうも婆さんは俺が買うとは思っていないようだ。

「まあ、値段次第だが……」

「金貨5枚（100万円）だよ」

「よし！ 買った！」

「本気かい!？」

婆さんが、しわくちゃの顔を驚きで一杯にする。

「本気も本気」

「ほほほ、こりやまた随分と酔狂がいたもんだねえ」

婆さんに金貨5枚を払って、魔道具をアイテムBOXへ収納する。

「アイテムBOXかい!？ こりや、タマゲた！」

「婆さん、他にも面白そうな物はないかい？」

「ふむ……」

婆さんは顎に手をやると何やら思案をしていたのだが、何か思いついたように部屋の奥に消えていった。

「何を持ってくるつもりだろうか」

しばらくすると、婆さんが表紙が厚い古びた一冊の本を持ってきた。
た。

怪しげな雰囲気醸し出す、その本の厚さは漫画の単行本ぐらい

か。

「これは？」

「魔導書さ」

魔導書キター！ 実に異世界っぽいファンタジーな響き。

「魔導書？ 読むと魔法が使えるようになるってやつか？」

「魔力の無い人間がいくら読んでも使えるようにはならないけどね」

しかし魔法か……異世界ときたら魔法だろう。ここら辺で俺も魔法ぐらい覚えても良いんじゃないのか？

「値段は？」

「金貨10枚（200万円）だね」

「そりゃまた随分と高価だな」

「だが、これは財産にもなるからねえ」

「そうか、魔法を覚えた後、いつでも欲しい奴に売れるってわけか

……」

「そういうこった。それで？ どうする？」

「うーん……よし！ 買うぞ！」

俺はアイテムBOXから金貨を10枚取り出すと、婆さんに手渡した。

「ほほほ、今日は店じまいだねえ。魔道具は今日持って帰って良いけど、魔導書の登録には1週間程掛かるから改めて来ておくれ」

「登録？」

「魔導書ってのは通し番号が振ってあって、持ち主が代わったら報告を義務づけられているんだよ」

それだけ危険な物って事か？ 元世界の日本刀の登録みたいだな。婆さんの話では、未登録の魔導書が見つかった場合でも役所に届

け出て番号を貰わないとダメらしい。

無許可所持は違法である。だが未登録で流通している魔導書も、まれにあると言う。

機嫌の良い婆さんから、アネモネには銀の指輪を——ミヤレーには緑色の石が入ったネックレスをサービスに付けてもらった。

そして、店から帰り際——。

「婆さん、あの薬ってあるか？ 女とやった後に使う——」

「ああ——あるよ。おやまあ、あの獣人の女だけじゃないのかい？ ほほほ、あんたも好きだねえ。あたしも混ぜてくれんかねえ」
冗談じゃねえ。恐ろしい事を言うなよ。

貰ったのは小さな布に包まれた黒い丸薬。10個で小四角銀貨1枚（5000円）だ。

売りをしているような女は自前で持ってるもんだが。備えあれば憂いなしってな。

デカイ買い物をした俺は、婆さんの道具屋を後にした。
おまけをもらったアネモネ達も嬉しそうである。

さて、冒険者ギルドで肉が出来るまで、まだ時間があるな。
どうするかな？

39話 となり村のクロトン一家

俺たちは、アストランティアという街へやって来ている。

怪しい婆さんがやっている店で、魔道具と魔導書というちよいとデカイ買い物をしてしまったが、これも先行投資だ。

魔道具は色々な薬品の合成に使えそうだし、魔導書は魔法が使えようになるかもしれない。

ただ婆さんの話によると、魔導書については魔法の才能が全くなければ使えないと言うのだが。

その時は、また誰かに売れば良いのだ。魔導書は希少価値から値段が下がらず高く売れるらしい。

買った魔導書はファイヤーボールの魔法——これは汎用の魔法で魔導書の数も多い。

それ故、金貨10枚(200万円)という値段で購入出来たが、強力な魔法や珍しい魔法の魔導書ともなると、桁が1つ〜2つ跳ね上がると言う。

冒険者ギルドで肉が出来上がるのは夕方だ。それまでには少々時間がある。

一度家に帰って、俺だけバイクでやって来ると言う手もあるのだが、アネモネも街に居たいと言う。

久々の街なので楽しいのだろう。ここら辺は、まだまだ子供だ。

皆で市場を見て回り、時間を潰す。

だが歩き疲れて、どこかに腰を下ろそうかと思案していると、路地に人影が見えた。

何ともなしに見てしまったのだが、どこかで見た顔だ——。

湖の畔にあるサンタンカという漁村に住んでいる、クロトンという男——そう、俺から毛布と絵本を買っていった男だ。

何やら、ガラの悪いチンピラ風の男共に絡まれているようだが。だが絡まれているのは彼だけではなく、腰にはアネモネと同じぐらいの歳の子供が、しがみついているのが見える。

栗色の長いウェーブヘアをポニーテールにしている、麻のワンピースを着た女の子だ。

おそらく、彼の話にあった年頃の娘ってのは彼女の事だろう。

ガラの悪いチンピラは3人——チビ、ガリ、デブ——テンプレのような組み合わせである。

どうしようか——俺が迷っていると、アネモネが俺の袖を掴まえた。

「助けてあげないの？」

また、そういう悲しげな顔をする。おじさんは、そういう瞳に弱いんだよなあ。

これで絡まれているのが巨乳で美人のお姉さんなら、電光石火で助けるんだがなあ。

それに俺はバイオレンスをやるようなキャラじゃないんだけど……薬のせいとはいえ、悪党をぶっ殺しまくってしまっただけなんだが。

「くそ、しょうがねえ。ミヤレー、俺が危なくなったら頼めるか？」

「任してにゃ」

俺は意を決したが、顔を見られると拙いまずかもしれないな。俺はともかく、無頼達の矛先がアネモネへ向かうと困る。

顔を隠すためマスクをシャングリ・ラで探してみた。見れば仮面舞踏会等で使うようなマスクが売っている——300円か安い。

これってベネチアンマスクっていう名前なんだな。初めて知った

わ。

だが、並んだ商品の中に、黒い鳥のクチバシのようなペストマスクを見つけた。

これだー！ お値段なんと7500円。勿論、もちろん無駄遣いだが、これには忘れていた俺の中二心うずが疼いた。

男には買わねばならぬ時がある。

「ポチツとな」

落ちてきたペストマスクをつけて、アネモネに注意うながを促した。

「悪者に顔を見られると拙ますいから、隠れてなさい」

「……うん」

俺のナイスなマスク姿に、アネモネがドン引きしているように見えるが、気のせいだ。

俺は、クチバシをつけたまま男達の下へ向かった。

「ちょっと待ちなあ！」

男達の視線が一斉にこちらを向く——うつ！ このプレッシャー！

「なんだ、てめえは？」 「なんだ、こいつは？」

チンピラも、ペストマスクをつけた俺にドン引きしているように見えるのだが、多分気のせいだ。

「善良な親子に因縁をつけるとは穏やかじゃねえな」

「ハハハ、こいつが善良ってか？」 「ハハハ」

どういう事だ？ 何やら訳がありそうだが……。

「そうか、それじゃ親父は仕方ないとしても、女の子は助ける事にするか」

「なんだあ？ やるってのか？ ああ？」

「悪い事は言わん。ここで引き下がらないと、俺様の魔法が炸裂するぜ？」

「なに？ 魔法だぁ？」

俺は、アイテムBOXから爆竹とターボライターを取り出すと、導火線に火を点けてチンピラの前へ放り投げた。

爆竹の、けたたましい連続した炸裂音は路地の壁に反響しまくり、それはさらに増幅されて耳の奥がキンキンと痛い。

その音を聞いたチンピラ達は腰を抜かして尻もちをついた。

「「ひいいい！」」

「どうだ俺様の魔法は？ 次は、お前らの身体の中で炸裂するぞお？」
ハハハ！」

「に、逃げろおお！」

恐怖心に駆られたチンピラ3人衆は脱兎のごとく走りだし、1人は脚がもつれたのか盛大にコケて置いてあった木箱へ頭から突っ込んだ。

ぐったりとした男を、残った2人が担いでその場から逃げるように立ち去った。

こういうシーンでの付き物の――「覚えていろ！」が聞けると思ったのだが、そんな余裕もなかったようだ。

だが、余りの大音響に街の住民も集まってきてしまった。

見れば、クロトンもその場に硬直してビビりまくっている。娘さんは、もう半泣き状態だ――こりゃ魔法が、ちょっと効きすぎたな。俺は慌てて散らばった爆竹の不発弾を集めると、クロトンと彼の娘の手を引き、その場から脱出した。

――――――◇◇――――

クロトンと彼の娘を人気のない所まで連れてくると、俺はマスク

を外し素顔を見せる。

「可愛い娘さんを抱えて面倒事かよ？」

「あんただったのか——助かった。礼を言う」

「パパ、この人は？」

「お前の絵本を売ってくれた商人さんだよ」

「ああ！ 本をありがとうございます！」

彼女はポニーテールを前後に揺らし、勢い良く礼をした。

俺の臭いを辿って、アネモネとミヤレーもやって来た。こういう時には獣人の鼻が役に立つ。

「あんた、魔導師だったのか？」

「ああ、その事は他言無用でな」

「無論、俺達の恩人だ。約束する」

立ち話も何なので、近くの食堂に入った。そこは木造の2階建てで古色蒼然だが、中々に味わい深く歴史がありそうな佇まいたたずをしている。

子供達とミヤレーは別のテーブルでミルクを飲む——ミルクは1杯小角銅貨5枚（500円）と結構高い。

そして俺達は男同士で話をする事にした。クロトンはエールを飲んでるが、俺はミルクだ。

エールってのはビールみたいな物だが、はっきり言って不味く——元世界のビールを知っている人間には飲めた代物じゃない。

ただ誤解があるようだが、エール自体は不味くないし、ビールに比べて劣っているわけでもない。元世界のような美味しく作る技術が無いだけなのだ。

「なんだって、あんな連中に囲まれていたんだ？ 彼奴等の話じゃ知り合い風だったぞ？」

「ああ——役人をやっていた時にな、小遣い稼ぎに奴等に情報を売

ったり、手心を加えたりと色々とやっていたんだ」

「それを逆手に取って強請ゆすりでも始まったか？」

「そうなんだ……」

「ああいう連中が、良い顔をしているのは最初だけさ。それで街落ちして、あんな所に住んでいたのか？」

「そんなところさ」

「まあ、俺もな——商人の揉め事ってのは嘘で、さっきみたいな魔法の件で貴族に追われている」

「そりゃ、凄い魔法持ちとくれば、貴族は放っておかないからな。あんた逃げて正解だよ。あんな子供がいれば、人質に取られる事もある」

「そりゃ、あんたも同じだろう？ どこか遠くに逃げた方が良くんじゃないのか？ 女房子供に危険が迫るぞ？ それとも、まだ街に未練があるのか？」

「……」

返事がないって事は、まだ心残りがあるのだろう。

彼の話では、昔の伝を使って悪事の片棒を担がせようと、奴等が接触してきたらしい。

ああいう連中は、しゃぶり尽すまで止めないからな。

だが、これ以上は彼の問題だ。俺がどうこう言う話ではない。

子供達の方を見ると、アネモネとクロトンの娘は、すっかり意気投合してしまったらしい。

歳が近い子供が近くにいなかったからな。アネモネの初めての友達かもしれない。

「あの本ね、私も作るのを手伝いたんだよ」

「え、本当に？ 新しい本を作る時にマリーも手伝って良い？」

「うん！」

返事をしたアネモネが俺の所へ、とことこやって来た。

「マリーが新しい絵本が欲しいんだって！ ケンイチは新しい本は作らないの？」

「そうか、それじゃ作るか」

「やったあ！ マリー、新しい本を作ってくれるって！」

アネモネは喜び勇んでテーブルへ戻り、彼女と話し込んでいる。

「あの本は、あんたが作ったのか？」

「まあな。本当は絵描きなんだよ」

クロトンは黙ってエールを飲んでいるのだが……。

「あんな可愛い娘と女房——娘さんはあんたに似ていないから、奥さん似なんだろ？ それじゃ美人のはずだ。それだけのお宝抱えて、この街に何の未練があるって言うんだ？」

「……その……好きな女がいてな」

「んあ？ 女房以外にか？」

「ああ……」

「こいつは呆れたな。どうせ高嶺の花とかで、手の出しようもない女なんだろ？」

「馬鹿な奴だと笑ってくれ……」

エールのカップを両掌で抱え、下を向くクロトンではあるが。

なんとまあ、こいつには呆れたわ。娘は良い子なのになあ……。

食堂を出て彼等と別れる。彼等は普通に歩きなので、今から帰らないとサンタンカの村に着く前に暗くなってしまう。

俺たちみたいな自転車やバイクがあるならともかく、徒歩で魔物に出会ったりしたら逃げられないからな。

クロトンの娘、マリーが手を振っている。アネモネと遊ぶ約束をしたようだ。

漁村のサンタンカは橋の架かっていない川の向こうにある。川幅

3mぐらいの浅い川なのだが、子供だけでは少々危険だな。
行き来するなら注意しないと。

そして日が傾く頃、冒険者ギルドへ向かい出来上がった肉を受け
取ると、俺たちも帰路へつく事にした。

門を出て街道を歩き森へ到着すると、木々の間は既に青から黒に
変わりつつある。

アイテムBOXからオフロードバイクを取り出すと、エンジンを
掛けてヘッドライトを点けた。

ミャレーはこの暗さでも十分に見えるらしいからな。

ヘルメットを被ったアネモネを後ろに乗せると、家へ向かって走
りだした。

右手に崖を見つつ走れば自然に到着するのだから、暗くても迷う
事もない。

「その明かりは明るいにゃ〜！」

「目がくらむから見ないほうが良いぞ」

彼女の話では魔物の気配はないと言う。

まあ、30分もすれば家に到着するんだ。それぐらいは何とかな
るだろう——と思っていたのだが。

「わわわ！ こいつはちよつと失敗したな！」

森の中をヘッドライトを点けて走っているので、意外と虫が集ま
ってくるのだ。

こいつは誤算だ。後で電球をLEDに交換しよう。

ヘッドライト用のハロゲン球を、そのまま交換出来るタイプのL
ED球があったはずだ。

虫に追われながらも、森を抜けて無事に到着。

普通は暗くなった森を抜けたりする奴はいない。電気という科学
の光とバイクがあるから出来る芸当だ。

「ふえーやっ」と到着した」

「虫が凄かったね」

「虫ってのは、お日様と勘違いして、明かりに集まってくるんだよ」

「そうなのにな？」

「へえ」

「でも、魔法の光には集まってこないにや」

「青い光には集まってこないんだよ」

「そうなのにな？」

大雑把だが、そういう事にしておこう。LEDの説明をしても解らないだろうしな。

既に辺りは真っ暗なのだが、暗闇の中から何かが襲いかかってきた。

「うわぁ！」

押し倒され顔を舐められて、それがベルだと解った。

「なんだ、脅かすなよ」

ミャレーが警戒しない時点で危険がないのは解っていたのだが、突然だとやはり驚く。

森猫の背中を撫でながら辺りを見回すが、真っ暗——これじゃ外で料理は出来ない。

家の中でカセットコンロを使い、お湯を沸かしてインスタント物を食べる事にした。

そして彼女達のリクエストは——。

「カレー！」「カレーにゃ！」

「君等、本当にカレー好きやね」

「だって美味しいもん」「にゃー！」

——というわけで、カレーに決まった。

何かいつもカレー食ってるような気がするが、彼女達がそれで良いと言うのだから仕方ない。

だが、インスタントのカレーは肉が少ないので、今日ゲットした角ウサギの肉を炒めて追加する事にした。

インスタントでも一手間掛ければ、それなりに美味くなる。

ミヤレーはそれに胡椒と鷹の爪を足している。見るからに辛そうだ。

俺とアネモネはご飯、ミヤレーはパンを食べて、森猫には猫缶を2つだ。

「美味しいね」「にゃー！」

カレーを頬張る彼女達は、本当に幸せそうである。

さて、飯が食い終わったら、新しい絵本でも描くか……アネモネがあの子に約束してしまったようだしな。

題材は何が良いだろうか？

カレーを食べているアネモネに尋ねてみた。

「シンデレラが良い」

「君は、その本を持ってるだろ？」

「マリーにも見せてあげたいの！」

「なるほど、そうか」

それじゃ、シンデレラに決定だな。

ヒロインが王子様と結ばれる話だから、女の子受けも良さそうだ。オリジナルは結構酷い話なんだがな。小さいガラスの靴に無理やり足をいれるために、指をちょん切ったりとか。

ご飯を食べ終わった後、アネモネはしばらく勉強をしていたが、随分と眠たそうだ。

あちこち歩きまわって疲れたのであろう。

今日は早めに寝ることにした。

————◆◆————

——次の日。

アネモネが本を描いてとせがむので、早めに仕上げる事にした。婆さんから買った魔道具を使って、バイオディーゼル燃料が作れるか実験をしたいのだが、やむを得ない。

まあ、バイオディーゼル燃料はまだ100L近くあるからな。急ぐ必要も無いか——。

白黒の絵なら、飯の支度とかしながらでも1日3枚ぐらいは仕上げられる。

俺が絵を描いていると外でアネモネが叫んでいる。櫓を漕いだクロトンが舟で彼の娘——マリーとやって来たのだ。

ここへ来るなら、舟でやって来た方が早いだろう。

クロトンが湖で漁をする前に、マリーを俺の所へ置いて、漁が終わると連れて帰っていく。

マリーも同じ歳の友達が出来て嬉しいようだ。子供達と一緒に遊んでいるミャレーも楽しそうなのだが、精神年齢が近いのか？

外で遊び回り疲れたのか、子供達が家の中へ入ってきたので、おやつにミルクを出してやる。

ミルクを飲みながら、家の中で絵を描いている俺の姿を、アネモネとマリーが食い入るようにじっと見ている。

この世界で絵を描くような職業は滅多にいないし限られている。所謂、いわゆる宮廷画家のような職業しかないので珍しいのだろう。

「そんなに絵を描いているのが珍しいのか？」
一休みして、マリーに質問してみた。

「うん——凄い。どうしたら、そんなに綺麗な絵が描けるの？」

「そうさなあ、一杯絵の勉強して一杯描いたんだよ」

「そうなんだ」

「沢山勉強すると、沢山お金が掛かるね」

アネモネは随分とシビアな感想を持つが、的を射ている。

「そうだな。勉強するのは金と時間が掛かるな」

俺がアネモネに渡した元世界の絵本は、人に見せてはダメ——と言っている、彼女もマリーには見せていない。

それ故、シンデレラの絵本を作って、彼女に見せてあげたいのだろう。

それから何日か、マリーが遊びにやって来る日が続き、シンデレラの絵本も後は印刷をするだけになった、ある日の午後3時頃——。クロトンと一緒にいた獣人の男と美しい女性、そしてマリーが船でやってきた。

そして、いきなり俺の前に麻袋を置いて懇願した。麻袋から出た音からして硬貨が入っているらしい。

「旦那、助けてくれ！」

「なんだ？ どうした！ 藪から棒で、全然解らんぞ？」

「ク、クロトンの奴が帰ってこねえ」

「はあ？」

一緒に来た女性はクロトンの女房だと言う。やはり、マリーは母親似らしい。マリーと似たような栗色の長い髪を後ろで纏めている。

——美人じゃん！ しかもスタイルも良い。

こんな可愛い娘と美人妻のどこに不満があって、高嶺の花が忘れられないなどと——だが今はそれを言うまい。

クロトンは昔付き合いがあった無頼共にまた目をつけられたので、サントンカの村から逃げ出そうとしていたらしい。

しかし引越しには金が必要。荷物を運ぶには荷馬車も要るし、徒歩では最低限の荷物しか持てない。

一番近いダリアまで100km、反対側のアキメネスまでは200km近く離れている……それで一稼ぎしようと考えたようだ。

クロトンは無頼共の隠れ家に香辛料が隠されているという情報をどこから仕入れて、そいつをネコババしようと画策――。

だが、それが失敗して捕まったらしい。悪党共から使いが来て、助けたければ金を持ってこい――と言われたそうだ。

まあ、当たり前田のクラッカー――博打で負けが込んでくると一発逆転を狙いたくなるのだが、それは九分九厘失敗に終わる。

「くそう！ オイラが力づくでも反対すれば良かったぜ……」

今更そんな事を言っても後の祭り。カーニバル

クロトンの女房が金が入っているらしい麻袋の中を開いて見せた。

「私達の全財産です。こんな事を頼める義理ではないのは重々承知の上でございますが……敢えてお願いいたします」

クロトンから俺が魔法を使えると聞いたのであろう。しかしなあ……。

袋の中を見ると、銀貨と銅貨が一杯――金貨が数枚で70～80万円あってところか。

なるほど、この金で荷馬車を買って引越しをするとすると少々心もとない。それで一発逆転を狙ったか。

しかし、クロトンへの身代金は金貨20枚（400万円）である。そんな金があるはずがない彼等は、切羽詰まって俺の所へやってきたようだ。

「足りないのであれば、私の……」

マリーを抱いた、奥さんにそんな事を言われてしまうのだが――
そりゃ、美人でスタイルも良い。うゝむ……だがまあ、悩む場面じゃないし、そんな事を要求するはずもない。

「いやいや、そんな事したらアネモネに嫌われちゃう」
アネモネは、この奥さんと俺との会話が何を意味しているのかが解らないようだが、俺の胴にしがみついた。

「ケンイチ！ マリーのお父さんを助けてあげて！」
また、アネモネが悲しそうな顔をする。そんな顔をしなくても助けてやるっての。

俺がその顔に弱いのが知っててやってるでしょ。

「お父さんを助けて下さい、お願いします」
マリーも小さな手を合わせて懇願しているのだが――。
ああ――こんな可愛い女の子に懇願されたら、無下に出来ないよなあ……。

「はあ……ミヤレー。これはまた、先手を打って闇討ちかなあ」
「そうだにゃあ」

「まさか、今日中に襲ってくるとは思うまい」
「にゃー」

ミヤレーの目がキラリと光る。

「おっと、夜襲を掛けるってなら、オイラも行くぜ」
シャム柄の毛皮を着た獣人も眼光を光らせた。

「報酬なんてないんだぞ？ いいのか？」
「クロトンには世話になってるんだ。サイネリアもマリーも俺に優しくしてくれた――ここで借りを返さなきゃ、男が廃るってもんよ」

サイネリアってのは奥さんの名前らしい。俺は、クロトンを助け出すための準備に入った。

しかし、殴り込みか……全然スローライフじゃないぞ？

なんでこうなるんだ？

しかし、シャガ討伐に成功したからって俺も調子に乗りすぎかな？

これが日本なら、「放っておきなさい。警察に任せろ」で終了なだけだな。だが、ここは異世界——それじゃ終わらない。

もし金が用意出来ても、解放されるはずもない。更に金をよこせと言ってくるはずだ。

クロトンの奥さんも獣人の男も、それを知っているから助けられる力を持っている俺を頼ってきているのだ。

幸か不幸か俺にはシャングリ・ラというチートがある。

聞けば、シャガよりは人数も少ない、大した悪党ではないようだし、所謂雑魚いわゆるってやつだ。

まあ、乗りかかった船ってやつだな。

『本当に、旦那は人が良いんだから！』

アマナのお小言が聞こえてくるようだ。

40話 救出作戦

家の近くにあるサンタンカという漁村に住んでいるクロトン一家。その娘――マリ―とアネモネが友達になり、一緒に遊んだりと楽しい日々を送っていたのだが……。

その一家の主、クロトンが悪党一味に捕まったらしい。

彼はかつて無頼達と組んで悪さをしており、その上前をはねて他の都市へトンスラしようとして失敗したらしい。

クロトンの女房と獣人が俺に助けを求めてきた。

本来なら無視してもいいのだが、アネモネと友達になってくれたマリ―のために何とかしたい。

アネモネからも頼まれてしまったし……。

だが、ここにいても何も解決しない。

俺たちは、舟に乗ってサンタンカの村へ行く事になった。

「アネモネはどうしようか。ここに1人置いて行くわけにもいかなしい……村で預かってもらうか？」

「私も、一緒に行く！」

「おいおい、君が捕まってた、シャガのような悪党共の巣へ行くんだぞ？」

「うん！ 解ってる」

しばし悩んだが仕方ない。襲撃の際は離れた所で隠れてもらうか……。

「ミャレー、危なくなったらアネモネを連れて逃げろよ」

「解ってるにゃ」

アネモネを含めて6人が舟に乗れるのか？

「このくらいなら大丈夫だぜ。子供が2人だしな」

獣人が太鼓判を押すので、恐る恐る舟に乗る。

元世界の公園の池にあるような木造の舟だが縦に長い構造になっている――まあ5人ぐらひは大丈夫なのだろう。

サンタンカの村までは直線距離で、ざっと3km。鏡のような水面を舟で進み20分程で到着した。

だが到着した村では、村長が住民達に囲まれて揉めているようだ。揉め事を引き込んだ、クロトン一家を追放するべきだという意見が出されているらしい。

村長は深緑色の上下に黒いシャツを着て帽子を被っている短い顎鬚が生えた白髪の爺さんだ。

「村長！ 皆様にご迷惑をお掛けいたしましたして、申し訳ございません。主人が帰ってきたら、この村を出ていきますので」

「奥さん、家財道具を運ぶのに荷馬車が必要だろう。この金を使ってそいつを買い。村長あたりが持っているんじゃないのか？」

「そのお金は貴方様の報酬で……」

「着の身着のまま文無しで、一家3人徒歩で行くってのか？ どの街へ行くのにも60リーグ以上（約100km）は離れているんだぞ？」

「解っております……」

考えるだに無理な話だ。村長の顔を窺^{うかが}うと荷馬車を持っているよなので、アイテムBOXから金貨を2枚取り出し、クロトン一家の金に追加をした。

「この金貨を合わせれば、荷馬車の値段には十分だろ？」

いや相場より、かなり高いはずだ。黄金色の金貨を見せられて村長は渋々OKを出した。

「あんたに金を借りても返す当てが無いぜ」

「やはり、私がご奉仕を……」

「いや、子供達の前でそういう話は止めてくれ。俺が悪者になるだろ。心配しなくて良いよ」

殴り込みをしたついでに、敵のアジトから何か金目の物をかっぱらおう。そうすりゃ、すぐに元が取れる。

それに荷馬車が無けりゃ、引っ越しの際にマジでどうしようも無いからな。

そろそろ夕方だ。急がないと街の門が閉まってしまう。

村長からボロい荷馬車を受けとると、引っ越しの準備をさせる事にした。しかし、こんな荷馬車に100万円以上とは、高い買い物だぜ。

だが、クロトンの女房とマリーも俺達に付いてくると言う。

女子供は危ないから待っていると言っても、言うことを聞いてくれない。実際、主人のクロトンが死ねば、この一家は路頭に迷う。

この奥さんが身体を売るぐらいしか金を稼ぐ手立てが無くなるのだ。

居ても立ってもいられないのだろう——気持ちちは解るが……。

それに、俺達が突入した際に、アネモネを一人にさせるよりは、仲間がいた方が良くかもしれないな。

やむを得ず、皆をボロい荷馬車に乗せて、アストランティアへ向けて出発した。

荷馬車の手綱は獣人の男が取っている——名前はニヤニヤスだ。

「ニヤニヤス、奴等のアジトは解っているのか？」

「ああ、北門から外れた所にある悪所の中だ。そこが金の受け渡し場所になっていた」

街道に繋がっているのは東西の門だ。北門と南門はあまり使われていない。

「簡単には金を集められないと思ってるから、今日来るとは思えない」

悪所ってのは吹き溜まりだな。まっとうに街の中を歩けないような連中が集う所だ。

普通なら足を踏み入れれば、とてもヤバい事になる。だが逆にいえば、少々騒ぎを起こしても役人もやって来ないって事だ。

底辺と底辺が足を引っ張り合う一画——人間の、さもしさがうずたかく積みもった、まさに吹き溜まり。

彼の話では、敵は10人程のグループだと言う。

荷馬車のスピードは時速約10 km。村から街までは、おおよそ9〜10 kmぐらいだろう。1時間もあれば到着する。

ギリギリ閉門には間に合うだろう。

馬車に揺られながら、ニヤニヤスの身の上話を聞いてみる事にした。

「クロトンとは長いのか？」

「ああ——仕事の世話してもらったり、部屋を借りるときの保証人になってもらったり、金の勘定をしてもらったりさ。世話になりっぱなしさ」

「役人なら保証人にはもってこいだな」

「役人は獣人なんて相手にしないのが普通なんだが、色々と助けてもらってよ。こちら辺で、ドカンと借りを返しておきてえじゃねえか」

「そうだな。だがクロトンを助けたら、一家は他の土地へ行くんだぞ？ お前は どうする？」

「オイラも一緒に行くぜえ」

「そうか。3人の道中を守ってくれよな」

「任せろってんだ」

ニヤニヤスと対照的に、がっくりと肩を落としているのがクロトンの女房だ。

一家離散の危機だからな。元世界じゃ離婚案件だが、この世界で女の身一つで何か出来る事は限られているので、離婚というのは滅多にない。

それに、彼女もクロトンを見捨てるつもりは無いようだし……。

村へ続く脇道から街道へ出て、そのままアストランティアの街へ到着。門が閉まる時間には間に合った。

「さて、どうする？ 無頼達がアジトで酒を飲んで、出来上がる頃に襲撃しようと思うんだが、まだ時間がある」

「なるほど、そういう事か。オイラはてっきり寝込みを襲うもんだと……」

ニヤニヤスが俺たちの作戦に合点がいったようだ。

「前にやった時に効果的だったからな。なあ、ミヤレー」

「そうだにゃ。酔っ払ってへべれけなら、まともに戦えないからにゃ」

「なんだよ、意外と剣呑な旦那だったんだな。あぶねえ、喧嘩売らなくて良かったぜ」

「多分、瞬殺されてたにゃ」

「マジかよ……」

ニヤニヤスの話では時間を潰す当てがあると言う。

「クロトンの役人時代の知り合いがいる。そこへ行こうぜ。奴なら頼みを聞いてくれるはずだ。だが、奴は役人だ金が少々いるぜ」

「これを使え」

ニヤニヤスに銀貨1枚（5万円）を渡した。俗にいう袖下つてやつだ。

辺りが暗くなりつつあるなか——その場所は街の中央街から少々過ぎた場所にあった。所謂、高級住宅街だ。

窓ガラスが嵌った少々上等な家が建ち並び、街並みも街ゆく人々の風体も心なしか上品だ。

ニヤニヤスは、その中の1軒を訪ねた。木の柵に囲まれ白い漆喰の壁が目立つ美しい上品な家——庭には木々や花も植えられている。

「ラナンの旦那！ クロトンの使いだ、開けてくれ！」
扉を叩くニヤニヤスだが、すぐに扉から光が漏れた。

「おう、お前か？ クロトンの奴は、どうした？ こんな時間にやって来るとは」

「クロトンは訳ありで来れねえ。明日、他の土地へ行くんで、言付かってきた」

「何？ そりゃまた急だな。午後に奴が来て、近々引っ越しをする——という話だったので餞別を渡したんだが……」

彼は、ここを訪れていたのか。

玄関から出てきた男の後ろから、美しい女性が顔を出した。金色のウェーブヘアに薄い上着を纏い、いかにも上流階級風である。

憂いに満ちた瞳と色っぽい艶やかな唇。

その女性を見て——俺はピン！——ときた。

ははあ、この女がクロトンの心残りってやつか……友人の女房に横恋慕ねえ。大方、最後の名残に彼女に会いにきたんだろう。

それで捕まったら世話はねえ。

「ラナンの旦那、悪いが連れの友人達がいるんだ。2時間程、庭先

を貸してもらえねえか？」

ニヤニヤスが、俺の渡した銀貨を男に差し出した。

「ああ、そのぐらいなら良いが、面倒事は御免だぞ？」

「合点承知ですぜ」

「解った、2時間だけな」

「へへ、感謝いたします」

家の主から許可が出たので、家の門を開き荷馬車を庭に入れる。2時間後にここを出て、悪所に着けば良い頃合いになっているだろう。

庭で休んでいる俺たちの所へ、ニヤニヤスが戻ってきた。彼の耳元でひそひそ話をする。

「あの美人さんが、クロトンの心残りか」

「まあな、そうらしいぜ」

「どうでも良いが――俺はクロトンを助けるんじゃない。マリーはアネモネの友達だし良い子だ。そのお父さんがいなきゃ一家が路頭に迷うから、マリーののために助けるわけだし」

「旦那、クロトンが戻ってきてても、あまり奴を虐めねえでくれよ」

「責める気なんて無いぞ、嫌味は言うかもしれないが」

ニヤニヤスが、この家の主から聞いた話では、クロトンの奴が昔の知り合いをくまなく回り、餞別を集めていたらしい。

その仕上げが、8〇3の倉庫からの香辛料ちよろまかしか……。

金が無くて必死なのは解るが、どうも力の入れどころを間違っているのではなからうか？

チンピラが惚れた女と足抜けしようとして、組織の金に手を付ける――そんな、ありがちな話を彷彿させるな。

失敗してボコられるところまでが、まさしくテンプレだ。

そして、時間がやって来た。俺達は街の北――この街の悪所へ向

かって荷馬車で走りだした。

辺りはすでに真っ暗だが手綱を取っているのはニヤニヤスだ、暗闇でも問題無い。

彼に手綱を任せ荷馬車の上で戦いの準備をする。アイテムBOXに入っていた円形のシールド―バックラーを3枚取り出した。

そして、カッタラス刀を3振り再購入。前に買った物は獣人達へ渡してしまったからな。

ミャレー用のコンパウンドボウと、クロスボウも収納から出した。催涙スプレー等も一瞬考えたんだが、一緒にいるのは鼻の良い獣人達だ。スプレーは恐らく逆効果になるだろう。

「アイテムBOX?!」

クロトンの女房が驚いた声を上げる。

「そうだ。他言無用でな」

緊急時だ、やむを得ない。それに彼女等なら信用がおけるだろう。

「ほら、この弩弓を貸してやる。もう一度言うが貸すだけだからな」

「こ、こんな凄い武器を……」

「だから、貴族に狙われているんだよ」

「旦那達が最初から勝つ気満々なので、どうかと思ったんだが、とんでもねえ御仁だったぜ」

ニヤニヤスが手綱を取りながら、横目で弩弓をちら見している。

「俺が一発ぶちかまして建物を崩すから、混乱したところを襲えば良い。奴等、酒も入っているからまともには戦えないはずだ」

「ぶちかますって魔法かい？」

「まあ、そんなもんだ。明かりが落ちて暗くなれば、獣人の出番だろう?」

「ハハハ、任せな!」

さて、顔を隠すマスクを用意しないとな。俺は、この前に買った黒いペストマスクがあるが――。

そうだ――目出し帽なんてどうだ？ 元世界の強盗の定番だぞ？ シャングリ・ラで【目出し帽】を検索してみた。

色々揃っているが面白い物を見つけた。黒くて骸骨が描いてある目出し帽だ。暗闇なら骸骨に見えないか？

一枚1000円だ。

「ポチツとな」

落ちてきた骸骨目出し帽を被ってみた。

「「きゃああ！」」

驚いたアネモネがミヤレーに飛びつき、マリーも母親に抱きついた。

「にやにやにや！」

ミヤレーも全身の毛が逆立っている。こりゃダメだな――目立ちすぎるだろう。街が大騒ぎになってしまうな。

他に良い物が――あった。

目出し帽に犬の写真が印刷してある変わり種だ。これを被れば、獣人の振りをして誤魔化せないだろうか？

1枚600円だ。

「ポチツとな」

落ちてきた犬の写真入り目出し帽を被ってみた。

「にやんにや！ それにや！」

アネモネは平気なようだが、ミヤレーが凄じ警戒している。

「頭に被る布に、絵が描いてあるんだよ。これで獣人の真似が出来

ないかな？」

ミヤレーは必死に臭いを嗅いでいるのだが獣の姿なのに臭いがしないのが凄く不自然らしい。

「にゃ！　これを被って、犬人の犬ところ共に罪を被せるにゃ？！」

「旦那も悪どい事を考えるじゃねえか。ハハハ！」

ニヤニヤスが爆笑しているのだが、もちろん勿論そんなつもりは無い。

「それじゃ、止めるか？」

「それでいこうにゃ」「それでいきましようや」

ミヤレーとニヤニヤスがハモる。

作戦が決まったところで、俺は黒いペストマスクを――他の皆は犬の写真が印刷してある目出し帽を被る事になった。

猫人が犬の面を被るってのは凄いシニールだな。なんとも言えない絵面だ。

俺たちはそのまま、荷馬車に乗って悪所に足を踏み入れた。

街灯も無い暗い街、明かりは窓から漏れる少量の光だけ。客引きの立ちんぼがいるが、こちらには全く気づいていない。

暗い中ちよつと離れるとそれ程違和感は無いうだ。

そのまま悪所を抜け少々開けた場所に出た。城壁の中なのに、まだ草むらが少々残っており、ここだけ開発が遅れているように見える。

手に負えない奴等がたむろっているので、一般人が手を出せないのだろう。

元世界でも、8〇3が持っている土地に手を出せないのと似たようなものだ。

そこにポツンと1軒の家がある。暗くてよく解らないが1階が石造り、2階が木造の2階建ての建物のようなうだ。

窓にはガラスなど無く戸板がスイングして開くタイプで、隙間か

ら明かりが漏れている。

離れた場所に荷馬車を置き、ミャレーを斥候に出す。

「アネモネは、ここにいろよ」

「うん……」

「奥さんとマリーもな」

「はい……解りました」

3人には毛布を被らせて、荷台に潜ませる事にした。辺りは真っ暗だ——これなら解らんだろう。

奥さんは細い肩を震わせている。余程恐ろしいのだと思うが、なんとかしたくて、ここまでやってきたのであろう。

しばらくしてミャレーが戻ってきた。

「彼奴等、酒を飲んで出来上がってるにゃ！ 1階には、男は見当たらないにゃ」

「それじゃ2階か」

「多分、そうだな」

ニャニヤスが腕にバックラーを装着して腰にはカッタラス刀、そしてクロスボウを構えた。

「こんなすげえ弩弓は見た事がねえ。それに、このバックラーは随分と軽いが大丈夫なのかい？」

「大丈夫だよ——前に獣人達が使ったが、問題無かったしな」

「本当かよ」

「本当にゃ」

「よし！ 頃合いか——行くぞ」

俺は頭にLEDヘッドライトを装着すると、荷馬車にアネモネ達を置いて無頼達の住処へ向かう。

明かりが漏れる建物からは男共の笑い声が聞こえてくる。すぐに地獄へ落ちるとも知らずに——。

「旦那どうするんで？」

「窓から俺の魔法を投げ込んで中を混乱させる。その後、俺の召喚獣を使って玄関を破壊するから、お前達が乗り込んでくれ」

それを聞いたニヤニヤスが驚いた。

「召喚獣って、マジかよ？」

「マジだにゃ」

「ニヤニヤス、これは誰にも話すなよ」

「……」

建物の開いている窓は2箇所ある。そこへターボライターで火を付けた爆竹を投げ入れる。

すぐに、けたたましい爆発音が響き渡り――そして、もう1箇所の窓へも投げ入れた。

部屋の中は、すぐに大混乱となった。

「よし！ ユ○ボ召喚！」

目の前に緑色の相棒が現れた。また世話になるぜ。本来はこんな使い方をする機械じゃないんだけどなあ。

これを設計して作ったメーカーさんには、全く申し訳無い気持ちで一杯になるが、これも異世界の掟だ。

少し破れた黒いシートに座ると、エンジンを掛けて、スロットル全開――。

レバーを操り、アームを高々と振り上げた。

「ユ○ボアタック！」

鋼鉄の爪によって木が引き裂かれる音と、石組みが崩れる轟音が闇夜に響く。

次に鉄の腕を水平になぎ払うと、石壁が大きくガラガラと崩れ屋根が半壊して落ちてきた。

石組みは接着しているわけでもなく、ただ乗せているだけなので、横からの攻撃には簡単に崩れる。

中で灯っていた明かりが落ち、大きく崩れ口を開けた暗闇に向かって、次々とクロスボウから矢が打ち込まれる。

「うぐっ！」「ぎゃああ！」

無頼達の叫び声が聞こえてくるが、闇雲に撃っているのではない。獣人達には敵がハッキリと見えているのだ。

そして、カットラス刀を抜いたミヤレーとニヤニヤスが、中へ躍り込んだ。

「うわああ！」「なんだ！ クソ！ 何がどうなったあ！ ぐあっ」暗闇の中で、獣人達に対抗出来るはずも無く——無頼達の断末魔の悲鳴が途絶えると、ニヤニヤスが首を出した。

「旦那！ クロトンは2階だ！ 上から臭いがする」

「そうか、下は任せろ」

ニヤニヤスが2階へ上がっていくと——上からバタバタと音が聞こえる。上にも何人か敵が居たようだ。

女の悲鳴も聞こえるのだが……。

「おい！ ニヤニヤス、大丈夫か？」

「おう！」

まあ、接近戦なら獣人には敵わないだろうが——。

「ミヤレー、何人か逃がしたか？」

「多分、1人か2人逃げたにゃ」

「まあ、そのぐらいなら大丈夫か。別に討伐じゃなくて、クロトンの救出が目的だからな」

「にゃ」

「さて、俺はお宝でも物色するか。多少でも取らないと、赤字にな
ってしまうからな」

俺は頭に付けたLEDヘッドライトの電源を入れた。

「うわあ……こりゃ、スローライフとは程遠いなあ……」

すると、目の前に広がる悲惨な光景。血の海に沈む腕が落ち腸が
飛び出て転がる数多の死体。

断末魔に見開いた目が、俺と合ったような気がする——南無阿弥
陀仏。心の中で念仏を唱える。

チンピラ極悪人でも、死んだら皆仏。多分、全員が地獄行きだと
は思うが。

生臭い臭いと酸い臭いが鼻に付くが、この臭いは慣れないな……。
全くなんでこんな目に……。

ひっくり返ったテーブルの下に硬貨が入った袋を見つけた。床に
も金貨らしきものが散らばっている。

分前でも勘定してた最中だったか？ 丁度良かったな。

床に落ちた金貨をせっせと集めて、無頼達の装備も剥がして搔っ
攫う。死んだ奴等にはもう必要ないだろう。

裸一貫で三途の川か。渡り賃を持ってないし、服も着てないんじ
ゃ川は渡れないな。

金を拾いながら死体や壁に刺さった矢も回収する。2階へ上がれ
ば、まだ色々あると思うが長居は無用だ。

あらかた拾い終わった俺は、パワーショベルをアイテムBOXへ
収納した。

上から、ニヤニヤスの肩に担がれたクロトンが降りてきた。

かなり痛めつけられたようで、ボコボコだが、とりあえず生きて
はいる。

「あ、あんたが助けに来てくれたのか」

「アネモネとマリーから頼まれて仕方なくな」

「申し訳ない……」

「クロトン、死体の中に、こいつ等の頭はいるのか？」

「ああ、その髭面がそうだ」

LEDライトで照らすと髭面が恨めしそうに俺を見ているのだが、とんだお門違いだ。

とりあえず、リーダーをやったのなら追撃は無いだろう……。

一緒に降りてきたニヤニヤスの話では、2階に居た無頼達は女と合体していたらしい。

「女も殺したのか？」

「いや、部屋の片隅でガタガタ震えていただけだから、そのままに
してやったが」

「そうか」

娼婦かもしれないし、シャガの所に居たような、どこからか拐わ
れてきた女達かもしれないからな。

だが今回は一々確認している暇は無い。

すぐに、ここを離れないと。

「旦那！ なんですかありゃ？」

クロトンを抱えたニヤニヤスが、俺にユ○ボの事を聞いてくる。

「鉄の化物の事か？」

「そうですぜ」

「あれが、俺の言う事を聞く召喚獣だよ。解ってると思うが喋るな
よ？」

「あんなの話したって信じてもらえねえ」

クロトンを荷馬車の所へ連れていくと、犬の面を脱いだ彼の女房とマリーが顔を出した。

「お前達、こんな所にまで」

「あなた!」「お父さん!」

親子3人で感動の再会だが、そんな時間は無い。急いでここを離れないと。

皆を荷馬車に乗せると、ニヤニヤスから武器を回収——闇夜の中を走りだした。

クロトンの話では、村へと繋がっている東門の近くに廃屋があると言う——そこへ向かう事になった。

「マリー、お父さんが助かって良かったね!」

「うん……」

マリーがアネモネに抱きついて涙を流している。2人は良い友だちになれそうだったのになあ……。

「あなた、ごめんなさい。家の貯金を全部使って、この方に助力をお願いしたのです」

奥さんが、ここへやってきた事情を彼に話す。

「こんな事に巻き込み、まことにすまない。まさか助けが来るとは思ってたなかった……」

「可愛いマリーと美人の奥さんをお願いされちゃ、断れんだろう。」

アネモネからも頼まれたしな」

「面目ない……」

「忙しいのはこれからだぞ? 明日中に荷物を纏めて村を出ないと

ダメなんだからな」

「ええ?」

俺の話に、クロトンは驚きを隠せないでいるのだが、奥さんが事

情を説明した。

「すまないサイネリア。全部、俺のせいだ」

「家で新しい土地を見つけましょう」

抱き合う夫婦だが、クロトンの顔は暗い。

「そうだな……しかし……」

クロトンの心配は金の事だろう。まあ、それも何とかなる。

荷馬車は暗闇の街をひた走る。花街以外で、夜中に散歩している連中など殆どいない。

俺たちは、ほぼ無人の街を抜けて、東門近くの廃屋へと到着した。

41話 クロトン一家との別れ

サントンカのクロトンという男を悪党共の手から救出するため――。

俺達はアストランティアの街にある悪所に巢食う無頼達のアジトを急襲、これを壊滅させた。

後はこの街を脱出して、クロトン達は村から引越しをしなければならぬ。

無頼達の主要メンバーは殲滅したので、追手が掛かる事はないだろうと思われる。

だが、街の門は朝まで開かないので門の近くにあった廃屋へ一時避難する事にした。

門の近くには何台か馬車が止まり、そこでキャンプをしているのだが、宿屋に泊まると金が掛かるので節約のために車内泊をしているのだ。

――俺達は、クロトンが言っていた廃屋へ到着した。

馬を繋ぐと、その井戸を使って獣人達が血糊を落とすために身体を洗い始めた。

「ミャレー、石鹸な」

「にゃ」

俺は馬に井戸の水をやる事にした。俺たちが暴れていた時に、馬は道草を食べていたようだったから飯は大丈夫だろう……多分。

草をやるうにも、こちら辺には無い。可哀想だが門が開くまで我慢してもらえないのだ。

シャングリ・ラから、4人分の毛布を買う。クロトン親子と、ニヤナスの分だ。

俺やアネモネの分は、アイテムBOXの中にしまっているんで、それを使う。

「ほら、夜は冷える。この毛布を使い」

「ありがたい。だが、これは売り物なのだろう？」

「まあそうだが。代金は悪党の巣から持ってきたから気にするな。そのまま持っていっていいぞ」

「ありがとうございます」

クロトンの女房が頭を下げる。

「それよりも、身体は大丈夫か？」

「ああ、なんとか……」

「明日、治癒魔法を使える奴を探してみるか？」

「いや、そこまで世話になったんじゃ……」

「せっかく助けたのに、予後不良じゃ困るからな」

魔法が使えるそう——となると、道具屋の婆さんか。ダリアの爺さんとも知り合いつて事は魔導師なんだろう。

魔法にも詳しくあったしな。

「しかし、アイテムBOX持ちとはなあ。それに凄い魔法——そりゃ、王侯貴族から逃げるわけだ」

「解ってくれたか」

「お母さん、お腹減った……」

マリーが空腹を訴える。父親が助かってホッとしたので、空腹感が襲ってきたのかもしれない。

確かに、3時頃からバタバタして何も食べていなかったからなあ。

「子供が腹を空かしてちゃイカンな。それじゃ寝る前に飯を食おう

か——何を食う？」

「カレー！」「にゃー！」

アネモネとミャレーが叫ぶ。

またカレーかよ。まあ、それでいいと言うならいいのだが。野菜も肉も炭水化物も取れるから、栄養的には問題はない。

このメンツでインスタントってわけにはいかないだろう。

アイテムBOXから道具とカセットコンロを2つ取り出して、1つに水を入れた圧力鍋を掛ける。

大人が5人と子供が2人だから……4Lもあればいいか。余ったらアイテムBOXへ入れればいい。

LEDランタンの青白い光で照らしながら、料理の準備をし始めた。

材料の野菜と肉もアイテムBOXの中に、たつぷりと入っている。クロトンの女房がいるので野菜の皮を剥くのを手伝ってもらう。

野菜は全部、アストランティアの市場で買った物だ。少々アクの強い野菜が多いので、アク抜きをする。

カセットコンロでお湯を沸かし重曹を投入して野菜を煮た後、水を替えながら20分程晒す。

手間が掛かるが、まともな料理ってのは時間が掛かるもんだ。

腹が減っているマリーも、じっと料理が出来るのを待っている——良い子だな。

肉を炒めて、圧力鍋のお湯が沸いたらアク抜きした野菜と一緒に投入。

最後に、SOBの赤い缶に入っているカレー粉を投入して塩梅を整えれば完成だ。

まあ、カレーというよりは、いつものカレースープだが。

アイテムBOXから皿やスプーン等を出す。シャガ討伐の時に冒険者達の為に沢山買った物だ。

シャガのアジトから連れてきた女達に餞別として、色々と持たせてやったのだが、それでもまだ残っている。

パンは、シャングリ・ラでいつも買っている訳あり商品の袋詰パンのセットだ。

「美味しい！」

カレーを一口啜ったマリーが感嘆の声を上げた。

「美味しいよね。ケンイチの料理は皆凄く美味しいんだよ」「にゃー！」

「これは、香辛料のスープかよ。こんなの滅多に食えねえ」

ニャニヤスもカレーを食べて、尻尾を立てている。

ダリアにはバコパというスパイスシンジケートがあつたが、この街にも似たような組織があると言う。

それだけ香辛料は儲かるって事なんだろう。それを、くすねようとして、クロトンは失敗したらしい。

「このパンも柔らかくて甘くて美味しい！」

「あの……うちのマリーは野菜嫌いで困ってしまうのですが、どうやったらこんなに野菜が美味しくなるのでしょうか」

カレーを食べたクロトンの女房が野菜の味に気がついたようだ。

「ああ、野菜にな——苦い成分やら変な味がする成分が含まれているんだよ。それを抜かなければならない」

「野菜を煮る時に使った白い粉がそうなのか？」
クロトンが、目ざとく見ていたらしい。

「俺は専用の薬品を使っているがかまじ竈の灰でも同じ事が出来る。灰で煮て、一晩水に浸ければいいんだ。あまり煮過ぎないようにな」

「竈かまどの灰ですか？」

クロトンの女房が信じられないような顔をしているが――。

「まあ、試しにやって見ればいい。山野菜にも使えるぞ」

「旦那、独身かい？」

カレーを食いながら、ニヤニヤスが妙な質問をしてくるのだが。

「ああ、それがどうした？」

「男にこんな料理を作られたら女房の立場がないな。そりゃ女が寄り付かない訳だ。ハハハ」

「余計なお世話だ」

この手の話は、皆から言われるな。アマナも同じような事を言っていたし。

飯を食い終わって後片付けをする。アイテムBOXの中に入っている木灰を取り出して洗剤代わりにした。

灰は肥料にもなるし色々と使い道があるので、なるべく集めて保存しているのだ。

クロトンの女房にも手伝ってもらうが、マリーとアネモネは腹が一杯になったのか、もう眠っている。

そりゃ、いつもならとっくに寝ている時間だからな。

クロトン親子は荷馬車の荷台の上で毛布を被り、川の字になって眠るようだ。

俺は、バイオディーゼル燃料の実験をした時に作った小屋を、アイテムBOXから取り出した。

「俺たちは、この中で寝ようぜ」

「俺もいいのか？」

ニヤニヤスが遠慮がちに聞いてくる。

「狭いが、何とか眠れると思うが……」

縦は2m50cmぐらいあるので、図体のデカイ獣人でも大丈夫だろう。

とりあえず、中に入って毛布を被ってみたが、なんとか横になれる。地面で寝るよりはマシだ。

門の近くなので暴漢に襲われる事もないだろう。

外で、アイテムBOXからコーラを出して一休みしていると、クロトンが俺の所へやってきた。慌ててコーラを隠す。

「助けていただき、本当に感謝している」

「はは、あんな可愛い娘と美人の奥方を置いて、友達の女房に横恋慕とは良いご身分だな」

彼は一瞬驚いた顔を見せたが、すぐに察したようだ。

「面目ない……」

一応、元役人だ。それなりに学もあるはずで頭は悪くないのだろう。だが、学があるのに馬鹿な奴はいる。

「さっきも言ったが、アネモネとマリーに頼まれたからな。俺としては、もっと嫌味を言いたところだが――すでにボコボコのように、良い子のマリーと奥さんに免じて許してやるよ」

「すまない……」

とりあえず、夜が明けるまで寝ることにした。

――――◆◆――――

――次の朝。

小屋の中で目が覚めた。この小屋には窓がないので、イマイチ時間解らん。

扉を開けると辺りは白みだしていたが、少々肌寒い。

回りの家々を見ると竈^{かまど}の煙が上がっているので、すでに起きている住民がいるようだ。

俺は暖を取るための薪を燃やし、アイテムBOXからカセットコンロを出すと、鍋に井戸の水を汲んでお湯を沸かし始めた。

朝の食事は面倒なので、インスタントスープにしてしまおう。インスタントならとりあえず、お湯を沸かせば飯が食える。

このままサンタンカの村へ帰って、引っ越しの準備という力仕事をするとすると朝飯は必須だろう。

お湯にインスタントスープの素を入れて、かき混ぜていると皆が起きてきた。

「お早うございます」「おはよう」「にゃー」「おっす、ふあああ」

大きなあくびをしたのはニヤニヤスだ。

疲れが溜まっていたのか、マリーとクロトンはまだ眠っている。

俺と一緒に寝ていた連中は皆が起きてきたので、宿泊に使っていた小屋をアイテムBOXへ収納した。

この小屋は中々便利だな。ちよつとした宿泊に使える。テントよりも安全だしな。

小さい窓をつけたり、荷物が置けるような棚を付けたり、改造するのも面白そうだ。

「お世話になりっぱなしで、申し訳ございません」

クロトンの女房が、料理をしている俺に頭を下げてくる。

「いいってことよ。一樹の陰一河の流れも他生の縁ってな」

彼女が髪の毛や身だしなみを気にしているので、アイテムBOXから櫛を出してやった。

髪を櫛でとかし、合間に見えるうなじが妙に色っぽい。さすが大

人の女だ。

やっぱり女はこのぐらいじゃないとなあ、大人の色気ってもんが——いかにいかに。

「もう、食事は出来るぞ。クロトンを起こしてくれ」

「解りました」

皆で朝食を取った後、門が開いたのでサントンカの村へ向かう前に、道具屋の婆さんを訪ねた。

案の定、彼女は治癒魔法を使えると言うので、金貨1枚（20万円）を払ってクロトンに治療を受けさせた。

内臓をやられてたりして、旅の途中で急変とかされると困るからな。

その治療の合間に、ミヤレーに噂話を街中で拾わせる。

街に流れている噂では、悪所に犬人達を引き連れた化け物が出たらしい。

巨大な腕で建物を薙ぎ払って、無頼達に多数の死者が出た——という話になっている。

「これなら、追手はかからないな」

「にゃ」

「しかし、犬人達に罪をなすり付けて良かったのか……」

「良いに決まっているにゃ」

「そうでさ」

「いいのかなあ……」

荷馬車は村に向かって出発したが、荷台で揺られている子ども達はまだ眠たそうだ。

クロトンに今後の予定を聞いてみる事にした。

「サンタンカを出て行く宛てはあるのか？」

「それが……無いんだよ。何しろ急だったからな。しかし、こんな荷馬車まで用意してもらって、俺達には対価が……」

「荷馬車は、奥さんが村長から買った物だ」

「それでは、あんたへの御礼の分が……」

「それは、昨日の晩に悪党共からもらってきたから、心配するな」

「しかし……」

言葉に詰まるクロトンだが、うつむき加減だ。家族を抱えて未知の土地へ行くんだ、不安が一杯だろう。

「行く宛てが無いなら――ダリアへ行って、そこからノースポール男爵領へ行けばいい。最近出来たばかりの領だが領民を募集している」

「それはありがたい」

「男爵様は俺の知り合いだから紹介状を書いてやる。貴族だが話の解るお人だ。きっとよくしてくれるだろう」

新しく出来た男爵領では、人手不足だろう。この男は元役人で役に立つはずだ。

「何から何までありがとうございます」

奥さんが頭を下げてくる。

「お礼はマリーに言うんだな。アネモネと仲良くしてくれたからな」

「ケンイチ、マリーに絵本を作ってあげて……」

アネモネが俺の腕を掴んできた。

「ああ、そうか。絵本作りの途中だったな。後は刷って綴^{とじ}るだけだしな。多分すぐに出来るし餞別に贈ってあげるか」

「うん」

別れが決まっているので、アネモネも寂しそうだ。せつかく出来た
た
同
い
年
の
友
達
な
の
に
な
。

俺たちはサンタンカの村へ到着した。

生きて帰ってきたのを喜んでいる住民もいるが、トラブルを引き
込
ん
だ
と
し
て
反
発
し
て
い
る
住
民
も
多
い
。

やはり、引越すしかなさそうだ。

クロトン達は家財道具を荷車に積んで引越しの準備を始めた。

——とは言っても、小さな荷馬車だ。荷物もそんなには持つては
行
け
な
い
。

小さなタンスと机、小物が入った木箱が少々。ベッドは載るかな
あ
——マリーの小さなベッドは載るだろうが、夫婦用のダブルベッ
ド
は
無
理
だ
ろ
う
。

色々と置いていくしかない。

力仕事はニヤニヤスとミャレーがいるので困らないはずだ。ニヤ
ニヤスと一緒に旅へついていくらしい。

俺は、マリーに贈る本を作るために、村の外れにアイテムBOX
か
ら
小
屋
を
取
り
出
し
て
中
に
籠
も
る
事
に
し
た
。

小屋の中にテーブルを出すと、ガリ版刷りの道具と裁断機。そし
て製本機とそれに繋ぐモバイルバッテリーを収納から取り出す。

1枚ずつだけガリ版で刷ればいいのだから簡単だ。それに一度作
っ
て
い
る
の
で
要
領
も
解
っ
て
い
る
。

印刷した紙を纏めて本の背中に糊を塗り込むと、バッテリーを繋
い
だ
製
本
機
へ
入
れ
て
ス
イ
ッ
チ
オ
ン
！

暫し待つ——ブザーが鳴れば完成だ。

3方を裁断した本を持って、クロトンの所へいくと、山積みにな
っ
た
荷
物
を
荷
馬
車
に
ロ
ー
プ
で
括
り
つ
け
て
い
た
。

アネモネはマリィと一緒にいたので、出来上がった本を彼女に渡す。

「クロトン、手伝えなくてすまん。アネモネ、君から絵本をマリィに渡してあげな」

「うん！」

アネモネは俺から絵本を受け取ると、マリィに手渡した。

「元気でね！」

「うん……」

マリィが大粒の涙をポロポロと流し始めると、アネモネは黙って彼女を抱きしめた。

「ニヤニヤス、これを持っていけ」

俺は、アイテムBOXからカッタラス刀を取り出して彼に渡した。

「こんな良い剣をいいんですかい？ あれだけ暴れたのに、欠けもしないなんて普通の剣じゃないでしょうや」

「マリィを守ってやってくれ」

俺はクロトンに金貨を5枚（100万円）渡した。

「これは餞別だ。文無しじゃ、どこへ行くのにも困るだろう」

「しかし、これだけしてもらって、俺には……」

「なあに、金は悪党共の巣からかっぱらってきたんだから心配するな」

一応、マロウ商会と道具屋の爺さんの場所も伝えておく。物を揃えるなら爺さんのところがいいだろう。

「ああ——俺が、どこにいるかは聞かれても内緒でな」

「解った……」

「そして、コレが紹介状だ。元役人だし、仕事も出来ると認めた^{したた}る。きつと良い仕事をくれるだろう」

「ありがとうございます」

俺の所へやって来た、クロトンの奥さんが俺に礼を言うのだが、彼女に苦言を呈する

「奥さん、今度コイツが下手を打つような事があったら、本当に見捨てた方がいいぞ」

「いや、大丈夫だ！ 心を入れ替えて働くから」

クロトンと奥さんが顔を見合わせて頷くと、何かを差し出した――彼の掌に載っていたのは金の指輪が2個だ。

「申し訳ないが、俺達に残っている金目の物はこれぐらいしかない」
「おい、これって結婚指輪じゃないのか？」

「^{あつち}逃えた物じゃないんだ。昔、古道具屋で買った物さ。金貨1枚分の価値もないと思うが受け取ってくれ」

「いや、しかし……」

「頼む……」

「解った。それじゃ、これは担保として貰っておく。金貨5枚は貸しという事でな。いつか金が出来たら、その時この指輪と交換してやるよ」

クロトンが手綱を取り、荷馬車が出発した。

一緒についていくニヤニヤスは、走っていくと言う。

まあ、時速10kmぐらいじゃ、獣人にとっては歩いているようなものか。

「マリー！ 元気だね！」

「アネモネもね！」

涙を流し手を振り合う2人であったが、すぐにカーブした道で彼

等の姿は見えなくなった。

アネモネはしばらく、彼等が消えた先を見ていたのだが――。

「ふう……疲れたわ。俺たちも帰るか」

「うん……」

一応、サンタンカの住民にも挨拶をしたのだが、彼等は俺たちには興味はないようだ。

所詮よそ者だからな。

ニヤニヤとクロトンの女房が俺達に助けを求めたのも、村からの疎外感があったのかもしれない。

これから彼等が向かうノースポール男爵領は新規の住民が多い。移民には向いているだろう。

アネモネを抱え太腿まで浸かり川を渡る。湖に流れ込んでいる所は流れは速くない。

川を渡り終えた後、村から見えない所で、オフロードバイクをアイテムBOXから取り出してアネモネとタンDEMした。

やはり、バイクは速い！ あっという間に家に到着した。

「にゃーん！」

ベルが黒い毛皮を光らせて出迎えてくれた。

だが、その顔は――お前ら私を放置してどこに遊びにいったんだよ？ ――みたいな顔に見えなくもない。

「悪い悪い」

彼女の顎下を撫なでると、ゴロゴロと嬉しそうに喉を鳴らす。色々とやったが、一段落してホッとした。

全く、人助けなんてするような柄じゃないんだがなあ……。可愛い女の子達に頼まれちゃしょうがねえ。

なんだかんだで、もう昼だ。

「朝が早かったからな、腹が減ったな。何か食うか？」

「カレー！」

「にゃー！」

「またかよ！」

いいけどさ——昨日の夜に作ったのが、まだ残っているからな。だが、温めるついでに手間加える。

昨日作ったのはカレースープみたいな物だったが、ちょっとトロ味をつけよう。

カセットコンロを出して、家の前で料理を始める。

フライパンを出し油を入れて、小麦粉をキツネ色になるまで炒める。こいつをカレーに入れると丁度いいトロ味と香ばしさが付くのだ。

「出来たぞ」

「何か、香ばしい匂いがするにゃ！」

ミヤレーはカレーの皿に鼻を近づけて、クンカクンカしている。

「流石、ミヤレーは鼻がいいな」

「アネモネ、ちょっとトロ味を付けたから米の方がいいぞ」

「うん！」

ミヤレーはパンにカレーを載せているのだが、実に美味そうに食っている。

「にゃー、カレーって色んな味があるにゃ！」

「色んな物にも合うしな」

「カレーは最強！」

アネモネも美味しそうにカレーを頬張っているが、悲しい事があった時は美味しい物を食うのが一番だと思う。

酒を飲んでも解決にはならん——と思うのは、俺が呑んべえじゃないからかもしれないが。

無論、異論は認める。

「ミャレー、分前をやるよ」

俺が、アイテムBOXから金貨を取り出そうとすると、彼女が止めた。

「要らないにゃ。金ならまだギルドにたっぷり入っているにゃ」

「いいのか？」

「いつも、ケンイチに美味しい料理を作ってもらっているから要らないにゃ」

「そう言うなら、いいけどな」

獣人は金の勘定が出来ないから、金遣いが荒そうなイメージがあるのだが。

「男共はそうだにゃ。多分あつという間に金を花街辺りで使いまくって文無しになるにゃ」

「ありがちな」

「そうすれば、女に集^{たか}ってくるのは目に見えているにゃ」

なるほど、ミャレーが男共から離れたのは、そのせいもあるのか……。

飯の後、改めて奪ってきた金貨を数えると、30枚程あった。

600万円か……結構良い稼ぎだな。

剣やら装備も拾ってきたしな、売ればもう少し金になるだろう。

テーブルの上に積み重なる、金色の山に目が眩^{くら}む。

笑いが止まらない。

「ははは！　なんだよ簡単に稼げるじゃないか。これを本職にした

方が早いんじゃないのか？」

「にゃ！ それじゃ悪所で、もう2〜3箇所襲うかにゃ？」

ミャレーはすっかり乗り気だ。

「はははは……はは……あれ？」

「ケンイチ、どうしたにゃ？」

「……………」

俺の思考は停止し、固まった。

待て待て待て——どうしてこうなった？ 相手が悪党共とはいえ、なんで殺しで、かっぱぐのがデフォルトになってるんだ？

記憶を反芻はんすうしてみる。むしゃむしゃしてやった、今は反芻はんすうしている。いや、そんなネタの話ではない。

熟考の結果——俺は一つの結論に辿り着いた。シャガを襲った時に齧かじった、あの葉っぱだ。

副作用や後遺症はないと、安心していたんだが……。

「ミャレー！」

「はいにゃ？」

「シャガの所へ行く時に齧かじった葉っぱがあつたよな？ あれって、殺しに抵抗がなくなったり、殺戮の衝動に駆られたりする副作用はないのか？」

「にゃ？ 副作用って何の事だか解らにゃいけど——そういう葉っぱなんだから、殺しが平気になるのは当たり前だにゃ」

ちよつとまてええええ！ 思いつき副作用があるじゃねえか！ ヤバイ……自重しないと……。俺のやった事を改めて考え直すと、背中に冷たい汗が流れる。

「次は、どこを襲うにゃ？ また、悪党共が酔っ払ったところを襲うにゃ？」

落ち着け——悪魔の囁きに耳を貸すな……。

「いや——今回は成り行きで、ああなったただけだから。アネモネもいるし——危険な事は、もう止めよう」

「止めるにゃ？ わかったにゃ。ウチは、ケンイチに従うにゃ」

「別に俺に従う必要はないんだぞ？」

「獣人が強い奴に従うのは当然だにゃ」

「気をしっかりと持て、とにかく自重だ。」

俺はスローライフから大きく逸れた舵の切り直しをしなければならなくなった。

42話 牙熊退治

湖畔にあるサンタンカの村から、クロトン一家を見送ってから数日後――。

俺は道具屋の婆さんから買った魔道具を試していた。大枚叩いて買ったんだ、使えないと困るからな。

目下の目標は重機で使うバイオディーゼル燃料の精製だ。

今までは燃料に混ぜ物をした白灯油を使用していたが何せ値段が高い。

何とかして燃料代を抑えたいのだ。そこで白羽の矢が立ったのが、バイオディーゼル燃料だ。

安いサラダ油等を薬品を使い改質してディーゼル燃料として使う。だが問題がある。使う薬品がアルカリで毒性が高く非常に危険なのだ。

そこで見つけたのが、この魔道具。

上の器に入れた液体から、指定したある成分を抜き出してくれるという優れ物。

魔法という、元世界の科学力でも説明が付かないこのチートっぷり。さすが異世界。

サラダ油をディーゼル燃料として使う時に邪魔になるのが、油に含まれているグリセリンだ。

こいつを魔道具で抜けばいい。

魔道具の上の器にサラダ油を注ぎ――中間の小さな器にシャングリ・ラで買ったグリセリンを入れる。

俺が薬品を使って、バイオディーゼル燃料を自作した時に出来た

グリセリンは赤茶色のドロドロだったが、購入した物は無色透明——トロトロの液体だ。

だが、真ん中の器にグリセリンを入れた途端、両脇の通路から液体が流れ始めた。

「おいおい！ いきなり始まるのかよ！」

そういえば婆さんがやったデモンストレーションでも、先に器を両脇に置いてたな。

慌てて液体が落ちる場所へプラ製の容器を置いた。

左側へ落ちる液体は茶色のトロトロ——右側へ落ちるのはサラサラの黄金色の液体。

指でちよつと摘んでみる——灯油や軽油というよりは、粘度の低いサラダ油って感じだな。

「こりゃ使えるわ」

液体が落ちるのに時間は掛かるが、器に油を入れて放置しておけばいいのだから、寝ている間にでもディーゼル燃料を作らせておけばいい。

落ちる時間は5分で500mlぐらいだ。10分で1L——1時間で6L——12時間稼働させれば、72Lの油を処理出来る。

出たグリセリンも燃えるからな。燃料としても使えるし、植物由来なので堆肥に混ぜて肥料としても使えるかもしれない。

ただ、グリセリンは甘いんだよね。アネモネやミヤレーがペロペロしないように注意をしなくては。

高い保湿ティッシュが甘くて美味しいなんて話があるのだが、あれは保湿成分にグリセリンを使っているせいだ。

定番なのは石鹼を作ったり化粧品を作ったりだが、それはシャングリ・ラで買えるからな。

魔道具の使い道もこれに限らない。例えば、液体の濃度を上げる

のにも使用出来る。

試しに、上にスコッチウイスキーを注いでみた。

左側に流れるのは水——そして右側へ出てくるのはアルコール度数100%に近いスコッチウイスキーだ。

普通に蒸留器を使ってもこうは出来ない。

こりゃ凄い。

試しに、約100%スコッチを飲んでみる。

「ふおおおお！　ゲホッゲホッ！！　咳にも火が点きそうだぜ！」

こりゃ酒好きに売れるかもな。酒は強いほうが美味いって言う飲兵衛さんも多いし。

アルコールから水を抜いて濃縮出来るって事は他の薬品でも可能って事だ。

シャングリ・ラを検索すると、便所の洗剤として10%の硝酸が売っている。こいつから水を抜いて濃縮すれば硝酸が手に入る。

同じく10%の硫酸も1000円以下で売っている。

硝酸と硫酸があれば、ニトロ化が可能だ。原料のグリセリンが目の前にあるし、シャングリ・ラではトルエンも売っている——。

——という事は、ニトログリセリンでも、トリニトロトルエンでも、トリニトロベンゼンでも好きなだけ作れるって事だ。

「まあ作らないけどな。危なすぎるし」

これでリッター約3000円の燃料が300円で作れるようになったのだが、その差額は2700円か。

これで100万円の元を取ろうとすれば——えーと370L以上作ればいいか。

まあ400Lとしても直ぐに元が取れるな。大型重機なら400Lは燃料が入るし。

しかも、他に使い道が色々あるしな。これは良い買い物をした

かもしれん。

例えば、塩水から水を抜いて塩を残したりも出来るのだが、通路に結晶がこびりついてしまい掃除が大変だと解った。

牛乳から水分を分離して、生クリームやバター等も作れる——道具の使い方はアイディア次第だ。

だが、出来上がった燃料を試験的にディーゼル発電機に使ってみたのだが、調子がよろしくない。

どうも燃料の生成に失敗しているようだ。再度、バイオディーゼル燃料の本を端まで読んでみる。

人生、何事も勉強である。失敗は成功の母というが、マザーボード、マザーテープ、母国語——お父さんはどこへ行ったんだろう。まあ、そんな事はどうでもいい。

本を読んで解ったのは、単純にサラダ油からグリセリンだけを抜けばいいという物ではなく、燃料生成のためにはアルコールとアルカリを使ったエステル化は必要ようだ。

これは生成の方法を変える必要がある。

先ずは、サラダ油にアルカリとアルコールを投入して、エステル化を行う。

そいつを魔道具の上の皿に乗せて、真ん中の皿には既に出来上がったバイオディーゼル燃料を入れる。

すると当然、両側から液体が滴り始める。左側から落ちるのは出来上がったと思われるバイオディーゼル燃料。

そして、右側にはドロドロのグリセリンを含む不必要な成分が滴る。これでいけるはずだ。

実験で出来た燃料をディーゼル発電機へ投入してみたが、問題無く稼動し始めた。

「ふう……いきなり重機に試さなくて良かったぜ」
高価な重機をぶっ壊すところだったな。何事も経験ってやつだ。

—————◆◆———

魔道具の実験が上手くいったので、畑の世話をする事にした。
トマトが大きくなっているので、脇芽を取って挿し木にする——
こうすれば、どんどん増やす事ができるのだ。
シャングリ・ラでメ○デルという薬品を買う。挿し木にはこいつを使う、定番商品だ。

畑に虫除けの魔石を置いているので、結実のための虫媒は望めないな。ト○トトーンも買っておくか……。

シャングリ・ラを眺めて、色々と思案していたのだが——なんだか、森がざわついているような——なんだろう。
すると、何かの叫び声が聞こえてきた。

「ふぎやああああ！」

この声はミヤレーか?! なんだいったい?
バキバキと枝が折れる音を出して、草が激しく揺れると、ミヤレーが飛び出してきて俺の後ろに隠れた。

そして、その後ろには巨大で真っ黒な生物がくつついてきているではないか。

「ガアアアアッ！」

黒い巨軀を怒らせ毛むくじらの怪物が4脚を踏ん張り、デカイ牙を剥きだして俺たちを威嚇する。

——それは巨大な熊。しかし元世界のヒグマより巨大で、長く鋭い牙が口からはみ出ているのだ。

「うああああ！」

俺は腰を抜かして畑に手を付いたのだが——熊と俺の間に黒い影が素早く割り込んだ。

「フシヤアアッ！」

負けじと牙を抜き出して敵を威嚇する黒くしなやかな身体——俺の前に現れたのはベルだった。

彼女が牽制している間、俺は体勢を立て直すとアイテムBOXから、クロスボウを取り出した。

何台かのクロスボウには、非常用として矢が装填されたままになっている。

クソッ！ これじゃトレイン^{*1}じゃねえか！

鋭い爪を持つ腕を天高く振り上げて立ち上がった熊——デカイ！4 m以上はあるだろう、バンザイすりゃ5 mに届く。

俺たちの前に立ち塞がる黒く巨大な壁に向かって、クロスボウを発射した——命中！カーボン製の矢が深々と熊の身体へめり込んだ。

だが熊の動きは止まらない。

アイテムBOXからもう1台、装填済みのクロスボウを取り出して再度発射！

俺の後ろからも気力を取り戻したミャレーがコンパウンドボウから矢を放った。

戦意を喪失していた彼女ではあったが、俺という心の支えが出来たせいで、再び敵に立ち向かう行動を起こしたのだろう。

「クソ！止まらんぞ？！タフ過ぎるだろ！」

このままでは、ただ殺られるだけだ。何かないか……威嚇でも何でもいい。

「そうだ！ 爆竹で逃げないか？！」

俺はアイテムBOXから爆竹を取り出すと、ターボライターで火を付け、熊へ向かってほうり投げた。

だが黒い毛むくじゃらは何を考えたのか、その爆竹へ食いついたのだ。

まるで、投げたボールを犬が口でキャッチするように――。

熊の口の中で連続した炸裂音が鳴り響く。どんな凶悪な生物だろうと、口の中で爆竹が爆裂したらどうなるか？

「グオオオオ！」

黒い巨躯の獣は完全に戦意を喪失し口から血を流しながら、畑の上で七転八倒し始めた。

「ユ○ボ召喚！」

畑の上に現れたパワーショベルに乗り込むと、エンジン全開――レバーを操作して、アームを高く振り上げた。

「ユ○ボアタック！」

のたうち回る熊の頭へ向かって、鋼鉄のバケットが振り下ろされる。

地面へ伝わる振動――鋼のアームとバケットが軋む音。

「おりゃ、もう一発！」

再びバケットが黒い巨躯にめり込み、漆黒の毛皮を持った獣はピクピクと痙攣したまま動かなくなった。

「念の為に――」

再度、バケットで小突いてみるが反応はない――完全に沈黙した。辺りに静寂が戻る……しかし、せっかく作物が大きくなっていた

畑はメチャクチャになってしまった。

「はあ……ミヤレー、こんなのを連れてくるなよ……」

俺は、パワーシヨベルの座席の上で、うなだれた。

こんな事は考えたくはないが、これがゲームならNPCノンプレイヤーキャラクターを使ったMPKMPK^{*2}だな。

いやいや、変な事を考えるのは止めよう。

しかし、この世界へやってきた時には逃げるしかなかった俺だが、こんな化け物に立ち向かって仕留める事が出来るようになったのも、あの葉っぱのおかげなのか？

だとすれば、正に諸刃の剣だな……。

「ごめんなさいにや……逃げきれなかったにや」

そりゃ、熊は森の中でも時速60kmぐらいのスピードが出るからな。

「ケンイチなら何とかしてくれると思ったにや」

「そりゃ、頼ってくれるのはありがたいけどな」

流石の獣人も単騎で熊には太刀打ち出来ないようである。

ライフルでもあればなあ。それか矢に炸裂弾を仕込むとかな。非常用に少量でも爆薬を作ってみるか？

「ケンイチ！ 大丈夫？！」

家から、騒ぎを聞きつけてアネモネが走ってきた。

「大丈夫だが、せっかくの畑がダメになってしまったよ」

「ごめんにや……」

「ミヤレー、気にするな。こういう事もある。それに大物も仕留められたしな——これは熊だろ？」

「牙熊にや」

凄い牙が生えているから牙熊かよ。しかし、この牙だけでも素材になりそうだな。

それに、この毛皮も凄いだろう。敷物にしたら暖かそうだ。

しかし獣臭い！ 漂ってくるのは、洗っていない汚い犬の臭いを酷くしたような悪臭で鼻が曲がる。

極太の腕と爪も凄い。こいつで引き裂かれたら一発でアウトだな。

熊の攻撃で怖いのは、内から外へ弾き出すようなパンチだ。そいつを喰らえば人間などは即死。

逆に、こいつ等は自分の胸や腹は叩けない――身体構造的に無理なのだ。

それ故、立ち上がった瞬間に懷に飛び込めば攻撃は受けない。まあ、そう言うのは簡単だが実際にやるのはかなり不可能に近いが。

だが立ち上がった熊の懷に飛び込み、熊がぶっ倒れるまで一緒にダンスを踊り続けて、熊を倒したという逸話もある。

また、熊の口の中へ拳を突っ込み窒息させて勝ったという人もいるのだ――マジで。

為せば成る、勝負は時の運――そうは言っても普通は逃げるが勝ちなのだが……。

「ミヤレー、これだけの大物なら、かなり高く売れるだろう？」

「毛皮だけでも金貨3枚ぐらいになるにゃ」

60万円か。敷物等に加工されれば数百万円で取引されるという。熊の敷物とか成金が好きそうだな。

通常は10人程で仕留める獲物を2人で仕留めたのだ。それだけ分前も大きい。

「しかし、こりゃ下拵えも出来んなあ」

「ウチも、これは無理だにゃ」

「しょうがない。アイテムBOXへ入れて、街の冒険者ギルドで処理してもらおう」

「にゃ」

「明日、俺一人で街へ行ってくるよ」

そろそろ、道具屋の婆さんの所で魔導書の登録も済んでいる事だろう。

俺は、毛むくじらの熊の屍かばねをアイテムBOXへ収納した。

これだけ巨大な熊なら肉にもしばらく困らないだろう。それに俺は熊の肉は初めてじゃないしな。

田舎で何回か食った事がある。独特の臭みはあるが、羊肉でジンギスカンが食えるなら大抵の肉は食えるだろう。

もつともヒグマと、この熊が同じ味っていう保証もないわけだが。ミャレーの話では肉は普通に食えるそうだから問題はないだろう。

――――◇◇――――

――次の日。

朝食の後、オフロードバイクをアイテムBOXから取り出して、出発の準備をする。

そろそろ燃料も入れるか……シヤングリ・ラからいつもの混合燃料を購入した。

チェーンにチェーンルブもスプレーする――こいつは1500円だ。長く使うには、細かなメンテが必須である。

「さて、行ってくるか」

アネモネとミャレーに留守番をさせて、木漏れ日が溢れる森の中をバイクで走りだした。

そして、街道へ出てから青空の下、徒歩で街へ入る。相変わらず街は賑やかだ。ダリアもそうだったが、人々が重税や

圧政に苦しんでいる風でもない。

この国の政治はそれなりに上手くいっているようだ。

無頼達のアジトが潰された事件も、悪党共の縄張り争いとして処理された模様。

こちらにとっては好都合だな。

市場を少し見て回ってから道具屋へ向かった。

「ちわー。婆さんいるかい」

ダリアの爺さんの所もそうだが、物が沢山あって暗いつてのはこの世界の道具屋のデフォルトなのか？

たまには明るくて、巨乳のお姉さんがやっている道具屋もあるんだろうか？

「おっと、兄さんかい。魔導書の登録は出来てるよ」

俺は大口のお得意様だからな。顔を覚えてくれたらしい。

その婆さんが分厚い表紙の本を出してくる。ページ数はそんなにないのだが、表紙が立派で厚いのだ。

中身に書いてある事が大事なのなら、ペラでいいと思うのだが……。

それは日本人感覚なのであろうか？

例えば、その内容をコンピュータで割付してプリンタで打ち出したらどうなるのか？

「婆さん、こいつの内容を、複写したらどうなるんだ？」

「ああ、魔法の素人ならそう考えるだろうね。一番後ろのページを見てみな」

言われるままに、本の一番後ろのページを捲めくると薄く加工された黒い石が嵌はまっている。

「それは魔石さ。その本に書いてある呪文とそいつが紐付けされてるから、石が無いと式が起動しないんだ」

「よく解らんが、本だけを写しても意味がないって事か」

「その通りだね」

だが魔導書はゲット出来た。

次は冒険者ギルドだ。

ギルドの中へ入ると人で賑わっている。ここは街のハロワでもあるからな。

小さな子どももいる。薬草などを採取して小遣い稼ぎをしているらしい。

ここなら人の紹介もいらなし、何の資格も要らないので、とりあえず仕事が欲しい奴はここにやって来る。

溜まっていた赤露草と青露草を換金したついでに、受付のお姉さんの巨乳を見て目の保養。

十分に堪能した後、アイテムBOXに入っている大物を換金にく。

「ちわ」

「おう、何を持ってきたんだい？」

相変わらずチャラそうな金髪の兄さんが対応してくれるのだが――

「ちょっと大物なので、ここでは出せない」

「ん？ おお、アイテムBOXを持ってるオッサンか。それじゃ裏に来な」

どうやら、俺の事は覚えていたようだ。

カウンターの扉を開けて、そのまま受付の部屋を通り抜けて裏口

から外へ出る。

裏手には、解体の工房があるので、そこへ向かった。

「ここでいいだろう。大物はここで解体するんだ」

通された所は、巨大な分厚いテーブルが置いてある部屋。

俺は、そのテーブルの上に、アイテムBOXに入っていた牙熊を取り出した。

「牙熊かよ！ こいつは大物だな」

近くにいたギルドの職員も、熊を見に集まってきた。

「仕留めてすぐにアイテムBOXへ入れたから、新鮮だ。あまりに巨大で、下拵えも出来なくてな」

「これだけの大物なら解体して冷やすだけでも、一苦労だしなあ。全部買い取りかい？」

「いや、肉だけ欲しい」

「それだと、肉を冷やすために、魔導師を雇わなくちゃならんから、その分の料金が追加になるぜ」

「構わん。素材の代金から引いてくれ」

「解った。しかし、この傷は……」

男は、牙熊に残った傷が気になるようだ。

「これは、矢傷だが頭のこりやなんだ？」

「デカイメイスで殴ったのさ」

「相当デカイメイスじゃなきゃこんなにはならないぜ？ オーガにでも殴らせたのか？」

「別に仕留めた方法を報告する義務はないのだろう？」

「そりゃないけどさ。気になるじゃん」

随分と気安いのだが、こういう人間はあまり好かん。

「説明するのが面倒だ。どうでもいいから肉だけもらえればいいよ」
「ちえっ！　しかし、この分だと魔石は取ってないな？」

「ああ」

魔石？　魔物に魔石があるのか？

「魔石があったらどうする？　それも換金か？」

「それじゃ魔石と肉を、こちらにくれ」

とりあえず、なんだか解らんが魔石というのが欲しいので、貰う事にした。

魔導書に入ってたような物が、魔物の中に入っているのか。

「はいよう。じゃあ早速やるか。これだけの大物じゃ高く売れるだろうし、処理が遅れて傷めたら、どやされちまう」

「頼むよ」

「急ぎでやるんで、夕方には出来るぞ」

「解った」

夕方に出来るのは解ったが、朝一でやって来たから、昼にもまだ時間がある。

こりゃ、一度家に帰ってから、夕方にまた顔を出すか。6時間も7時間も待ってられないからな。

—————◆◆———

一度、家に戻り、午後の4時頃、再び街を訪れた。

ギルドからの引取が遅くなったら街へ泊まるかもしれないと、アネモネとミャレーには言っている。

夕飯の準備も済ませてきたし、朝の分のパンやインスタントスープも置いてきた。

作り方は教えてあるので心配ない。

だが、ギルドへ顔を出すと出来上がっていると言う。

「それじゃ金が金貨3枚（60万円）と、銀貨1枚（5万円）だ。それと、魔石だな」

男がくれたのは黒い石。滑らかでツルツルしている。

「魔導師を雇った分は？」

「ちゃんと引いてあるぜ」

「そうか、ありがとうな」

「また、大物を頼むぜ」

こいつの給料は基本給十歩合制らしい。つまり大物が多いと、もらえる給金が増える寸法だ。

ギルドを出て通りを歩き家路を急ぐ。すぐに辺りが暗くなってしまう。

だが、いきなり後ろから腕を掴まれた。

「見つけましたよ」

まるで地の底から聞こえるかのような声に振り向くと、そこには白いブラウスと紺色のロングスカートの女性が立っていた。

少々やつれて、金髪がボサボサになっていたが――。

それは、マロウ商会の娘――プリムラさんだったのだ。

＊1 MMORPG等で、モンスターなどを引っ張り特定プレイヤーになすりつけて、killを狙う行為

＊2 MPK Monster Player Killerの略 モンスター等を使って、プレイヤーをkillする行為

43話 プリムラが加わった

ギルドで牙熊を換金して家に帰ろうとしたら、いきなり腕を掴まれた。

誰かと思ったら少々やつれ顔のマロウ商会の娘——プリムラさんだった。

「プリムラさん！？ 何故ここに？」

顔はやつれて、美しかった金髪はボサボサ——寝不足なのか目の下にはクマが出来ている。

プリムラさんがいきなり俺に抱きついてきた。

「酷いじゃありませんか！ いきなりいなくなるなんて！ そんな酷い方だと思いませんでした！」

「いや、俺が貴族に捕まれば、匿^{かくま}っていたマロウ商会にも迷惑が掛かるから」

「迷惑かどうかなんて私達マロウ商会が決める事で、ケンイチさんが決める事ではありません！」

「そりゃそうだが……他の商会からのやつかみもあるだろう。俺が逃げて、そんな人だったなんて知らなかったんです——で、丸く収まるのに」

「ケンイチさんから教えていただいたドライジーネでマロウ商会は、家名まで頂きました。森の木々から柄を作った斧を持って森へ木を切りに行けと言うのですか？」

あゝ、日本語で言う——恩を仇で返すって意味だろうな。

「まあまあ落ち着いて——」

とりあえず立ち話も何なので近くのレストランへ入る。この世界に洒落た喫茶店などはない。

食堂、レストランのほとんどが、宿屋と一体になっている形式なのだ。

酒を飲むのも飯を食うのも食堂で、その二階に泊まり部屋があり、女給やウエイトレスが小遣い稼ぎに客を取ったりするのが普通だ。

俺が最初に泊まった宿屋にいたアザレアもそんな暮らしをしている一人だ。

そして店のランクが上がるのにつれて、料金も高くなる。当然、女のランクも上がる。

賑やかな大通りに面した好立地に建つこの店は中の上辺り。まさかプリムラさんを連れて場末の飲み屋に入るわけにもいくまい。

中へ入ると、高級材木を使った流石に良い内装をしている。

席につくと、飲み物とお菓子を頼む。すぐに注文した物がやって来た――お茶と小麦に砂糖を入れて焼いた、クッキーに近い物。

砂糖が貴重品なので、こんなお菓子でも結構な値段がする。

シャングリ・ラで買った元世界のお菓子など売ったらとてもない事になるな。

それに手を付けず、延々とマロウ商会がどれだけ俺の世話になったかを訥々^{とつとつ}と話すプリムラさん。

個人的にそんなにお世話したっけな？　むしろ俺がマロウ商会にお世話になりっぱなしだった気がするんだが。

だが俺の納品した品物が貴族に大評判で、上流階級の人々のマロウ商会への覚えも非常に良くなったと言う。

それで取引量がさらに増えるという、倍々ゲームになったようだ。

「そればかりではありません、私の命も助けていただきました！」

「それは確かにそうだが……」

ああ、それなのに別れも告げずに、いきなりいなくなるなんて——と、彼女は眠れぬ日々を過ごしたと言う。

「街の噂じゃ、ノースポール男爵への興入れが決まっていたと聞いたが」

「そういうお話は確かにいただきましたが、お断りさせていただきました」

えー？ 男爵のメンツが丸潰れなんだけど——大丈夫かな？ ま

あ、あの人は嫌がらせ等をする人ではないと思うが。

多分、がつくりと肩を落としているのに違いがない。

「凄いい縁談だと思ったんだが、騎士——いや男爵様も人格者じゃないか」

「そうなんですけど……父に言われて何回かお会いしたんですが、お腰の剣を凄い自慢なさって、ブツブツと刃に語り掛ける姿が、なんだか怖くて……」

ダメじゃん！ ちょっと男爵様あ——少々、朴念仁風ではあったが、根っからの変わり者だったみたいだな。

有能なのに出世出来ないのは、そこら辺に問題があったのか？

「街の人達も、水臭いと怒ってました」

「まあ、別れも言わずに、いなくなったのは悪いと思ってる。だが——皆に迷惑が掛かるからな」

「それも先程、言いましたけど——！」

プリムラさんが激昂して、席から立ち上がろうとするのを諫める。

「解った！ 俺が悪かったよ。解ったから、ダリアに帰って皆に伝えてくれ」

「帰りません」

「え？」

「帰りません！ もう、父には別れを告げてきました」
俺の方をキッと見つめて、そう言う彼女の目からは確固とした意思を感じる。

「ええ?! お父さんは、どうするのよ？」

「父は、ケンイチさん連れて帰るまで待つと言ってくれました」

「えええ?!」

正直、俺は戻るつもりはないんだが……可愛いそうなマロウさん。

「俺は戻るつもりはないんだが……」

「それなら、私も戻りません」

「ええええ?!」

しかし、よくこの街にいるのが解ったな。

「アストランティアにいと解ったのは？」

「商業ギルドと冒険者ギルドへ手を回して、他の街で登録がないか調べました。先日、情報が更新された時、ケンイチさんの名前を見つけたので、すぐにやって来ました」

「それで、この街へやって来て探し回っていたのか」

都市間には馬車の定期便が出ているのだが、急ぐために馬車をチャーターしたと言う。さすがに金持ちだ。

「冒険者ギルドで、アイテムBOX持ちの方は滅多にいませんので、すぐに解りました」

「いやいや、ギルドのコンプライアンスはどうなってるのよ? 情報駄々漏れじゃねえか。」

「それじゃ貴族がギルドの情報を使う事もあるって話か……」

「いいえ、冒険者ギルドと貴族は仲が悪いので、多分大丈夫だと思います」

それに引き換え、商業ギルドは大店商人や貴族からのバックアップを受けているので、情報が筒抜けになる可能性が高いと言う。アストランティアじゃ商業ギルドへ登録していなかったが、それが正解だったな。

でも、それじゃ商売出来ねえじゃん。アネモネを代理に立ててやるという手もあるが……。

「うーん、話は解った……だが、もう直ぐ門が閉まる。街を出て俺の家へ行こう」

「行きません」

「え？」

「今日、ここで私を女にしてくれるまで、行きません！」

「ええ？　ちよつとちよつと、プリムラさん」

「さん付けも、止めて下さい」

彼女はそう言うのと、膝に乗せた両拳をギュッと握りしめている。

「ああ、解った解った……」

梃子でも動かないプリムラさんに、根負けした俺は覚悟を決めざるを得なかった。

そして給仕を呼ぶために手を挙げた。

「はい、何か？」

「ここに泊まりたい、部屋は空いているか？」

「少々お待ちください」

すぐに給仕が宿屋の台帳を持ってやって来た。そこに2人で名前を書く。

代金は前払いで小銀貨4枚（2万円）。俺が初めて泊まったアザレアの宿屋は1泊3000円ぐらいだったから雲泥の差だ。

給仕に案内されて2階へ上がり、部屋へ案内される。

ガラス窓から入る夕日に照らされてオレンジ色の板目が美しい、

ゆつたりとした部屋に上等な絨毯。

その絨毯の上には飾りが付いた大きめのベッドが1つ。

部屋にある調度品も良い物を使っているのが一目で解り――。

ベッドに天蓋等は付いていないものの、掃除も隅々までいき届いており、さすがに高い宿屋だと思わせる。

「いい部屋だな」

「はい……」

彼女は返事をする、すぐに服を脱ぎ始めた。

「ちょっと、いきなりかい？」

「ここでやらなければ、また逃げるつもりなのでしょう？」

白いブラウスを脱ぐと現れる、白くて丸い胸――スカートの中心からは、細く美しいしなやかそうな脚。

「いや、そんな事はない……けどな」

服を脱いであられない姿になった彼女は、恥ずかしそうに両腕で胸と股間を隠している。

「ほ、本当は湯浴みをしたいのですが……」

いくら高い部屋でも、元世界のようなシャワーも風呂も無い。水浴びをしたければ、宿屋の裏手で井戸から水を汲むしかないのだ。

そこら辺は、宿屋の値段の高低に違いはない。

窓から入るオレンジ色の光に照らされているプリムラさんの身体は、本当に美しい。

「プリムラさ――プリムラは、そのままでも綺麗だから」

「で、でも……しばらく湯浴みをしていなかったの……あの」

「大丈夫――でも、髪の毛は荒れているな。枝毛が沢山――俺の家へ行ったら髪を洗い、あの薬品を使って手入れをしよう」

「はい……」

俺たちは、夕日の中で抱き合った。

しかし、いいのかなあ……マジで。

——
——
——
◇◇
◇◇
——
——
——

——次の朝。

宿屋で目を覚ます、当然ベッドの隣にはプリムラがいる。

「はあ……調子に乗りすぎた」

初^{うぶ}なプリムラが可愛すぎて、手当たり次第に色々やってしまったのだ。

だって、嫌だって言わないし。

この手の知識は全く無かったようで、俺のなすがまま。
どうも、ごちそうさまでした。

あああああ！

ここで頭を抱えても仕方ない。覚悟を決めよう。俺も男だ。

これで、女2人、子供1人、森猫1匹の命が俺の双肩に掛かってくるわけだ。

しかし、腹が減った———そういえば、晩飯を食わずにやりっぱなしだからな。

途中で何か食べようと言っても離れないし……。

無論、事後に避妊もした。そこら辺も十分に話し合い、落ち着くまで子供は作らないという事になった。

「ふう……」

軽くため息をついて、プリムラを起こす。

朝飯を食って家に帰らないと、アネモネが心配する。まあ、ミヤレーがいるから大丈夫だとは思うが……。

「うう……」

ぐったりとしているプリムラを連れて、下の食堂に降りて朝食を食べる。

白いテーブルクロスの上に出てきたメニューは芋と肉とキノコのスープらしい。

だが出汁も取らないこの世界のスープにしては妙に美味く、五臓六腑に染みわたる。

多分このキノコから旨味が出てるんだな。

「おいしい」

手を挙げて給仕を呼ぶと、料理の事を聞いてみた。

「このキノコは、なんて言う名前なのかな？」

「これはノビキノコで御座います」

「ああ、これがそうか……」

そういえば、冒険者ギルドで貰った冊子の中に、その名前があったような。

木の周りにフェアリーリングを作って、背の高いキノコが生えたと書いてあった。

特徴があるので間違えにくいとも書いてあったな。こんなに旨味がでるなら、鍋に入れても美味いだろう。

今度、森で探してみよう。

「プリムラ、大丈夫か？」

彼女は余り食欲がなさそうだ。

「はい……」

「もう、初めてなんだから、そこそこにしておけばいいのに」

「だって離すと、ケンイチがまた何処かへ行ってしまうのではと……」

「いくらなんでも、今更そんな事はしませんよ」

朝食を食べ終わり宿屋から出ると、プリムラが泊まっていたという所へ荷物を取りに向かう。

だが彼女の歩き方が少々変だが――まあ察しは付く。

だが出会った時の様子からは打って変わって彼女の足取りは軽い。美しく上品そうな外見からは想像出来ないが――プリムラは父親のマロウさん譲りの度胸と行動力もある。俺にとって怖い存在になるかもしれない……。

心の中で冷や汗をかいている俺とは裏腹に彼女の表情は明るい。彼女が泊まっていたと言う、宿屋に到着した――暁亭と書いてある。

「お早うございます」

「おお、嬢ちゃんかい。昨日は帰らずに――って、そいつが探していた男かい？」

プリムラを出迎えたのは、この宿屋の女主人だ。

深緑色の上下のワンピースに白いエプロンをして、頭には頭巾を被っている。

「はい、無事に見つかりました」

「嬢ちゃん程のいい女が必死に探しているから、もっといい男かと思っただがねえ」

はいはい、どうせ普通のオッサンですよ。十人並みですよ。

「そんな事はありません。ケンイチは私の大切な人です」

「ああ、悪かったよ」

プリムラが2階から取ってきた革で出来た衣装ケースを受け取る。宿屋に別れを告げて通りに出ると、人目の付かない所で彼女の荷物をアイテムBOXへ入れ、水と鎮痛剤を出す。

思いのほか痛そうなんだな。

定番のバ○アリンのパチもんのバ○サリンだな。成分は同じアスピリンだから効き目は同じだ。

「プリムラ、この薬を飲め。痛み止めだ」

「はい」

薬を飲んでも、すぐに効き目があるわけでもないが、歩いているうちに効いてくるだろう。

街の通りを彼女と手を繋いで歩く。

「俺が書いた手紙は届いたか？」

「はい、フヨウという商人が届けてくれました。彼の話では北に向かったという事でしたので、貴方がアストランティアにいる可能性が高いのは解っていたのですが」

「ありゃ、そういえば――あの商人に口止めするのを忘れていたよ
うな……。」

「あれに書いていた、新しいドライジーネは？」

「今、父が職人に頼んで試作中です」

チェーンは製作するのが難しいからな。

昔ヨーロッパで流行った、前輪がデカイ自転車なら似たような物が作れるだろう。要は三輪車のお化けみたいな物だが。

ここでオフロードバイクを出せば早いのだが、あまり目立つのは得策ではないだろう。

青空の下、門を抜け街道を歩くと森の中へ入る。

「アストランティアの街に住んでいるのではないのですね」

「色々と魔道具を使いたいから、ひと目の付かない場所の方がいいんだ」

森の中へ進むと、人目のない事を確認して、オフロードバイクを出す。

「こ、これは？」

「魔法で動くドライジーネだ。漕がなくても進む」

「シャガのアジトから私達を乗せてきた、馬なしで動く荷車みたいな物でしょうか？」

「その通りだ。俺の言う事を聞いてくれる召喚獣だ。こういう物を街の中で使えないだろ？」

「直ぐに商人や貴族が押し寄せてくると思います」

「シャングリ・ラから大人用のヘルメットを1個購入して、彼女に被せる。」

「これは、兜ですか？」

「そう、コケると危ないからな」

バイクに跨がりエンジンを掛けると、彼女に後ろに乗るように促す。うなが

恐る恐るバイクのシートに跨がる彼女に、俺の腰を掴むように言う。

「こうでしょうか？」

スロットルを煽ると、乾いたエンジン音と共に森の中をバイクで走りだした。

木漏れ日の中、立ち並ぶ木々の間を縫うように走り抜ける。

「わわわわ……」

プリムラは、バイクのスピードに戸惑っているようだが、そんな

にはスピードは出していない。

何回か街への行き来をしているので道も定まってきて、区間タイムが上昇している。

別に急ぐ必要もないので安全第一。しばらくすると森を抜けて家の近くに到着した。

家の前では、アネモネとミャレーが待っていた。

「ただいま」

「ケンイチ」

「にゃ？ 誰を連れてきたにゃ？」

プリムラがヘルメットを被っているので、解らなかったようだが、すぐに匂いで彼女だと解ったようだ。

「マロウの娘もきたにゃ？」

「ケンイチ！ 私は置いてきぼりだったのに、彼女は連れてきてえ！ 貴方の中では、私はその程度の女だったのですか？！ ケンイチがお付き合っている女の中でも、私が一番だという自惚れがあったのに……」

「いやいや、プリムラ落ち着けードウドウ」

バイクから降りて激昂する彼女を^{まだ}宥める。

「私は馬じゃありません！」

「待て待て、ミャレーは連れてきたんじゃない。こいつは自分の鼻を使って俺たちを追ってきたんだよ」

「にゃふり、狙った獲物は逃がさないにゃ」

ミャレーは腰に手を当てて、自慢の鼻を天に向けて得意満面だ。

「それじゃ、アネモネは？」

「彼女は子供だ。放り出すわけにいかないだろ？」

「……解りました。今日のところは、許してあげます」

「今日だけなのか？」

キッ！ プリムラの厳しい視線が、俺を睨む。

「その人も住むの？ 家が狭くなる……」

アネモネの言葉に――彼女とプリムラの間に、火花が散っているような……。

「おいおい、一緒に暮らすんだから、仲良くやってくれ」

「これ以上増やさないでね」

アネモネが俺に向かって言うのだが――。

「……大丈夫だ」

「なんで、即答じゃないんですか？ まだ、どこかに女がいるのですか？」

「いや、いないから心配するな。本当だって」

プリムラが詰め寄ってくるのを両手で制する――まあ、シャガの所から救い出した女達と一緒に暮らしていた頃に比べれば、大した事はない。

ベッドが部屋一杯に並ぶ事になるが、朝起きたらアイテムBOXへ収納すれば、部屋が丸ごと使えるからな。

「いくら人がいいと言っても。手当たり次第に人を助けていたら破綻しますよ」

「それは、解っている。君の言うとおりだ」

「にゃん」

俺とプリムラが揉めていると、森の中から森猫がやって来た。

「おお、ベル。仲間が1人増えたんだ、よろしくな」

だがベルは、プリムラの方を見ると尻尾を振りながら、そつぽを向いてしまった。

ちよつとイライラしているサインだ。

「わ、私は森猫以下ですか……?」

「プリムラ落ち着けて、彼女も付いてきたんだよ」

まあ嘘だ。荷台に乗っけてきてしまったのだが――何とか誤魔化し、彼女を宥めるのに苦労した。

住人が増えたので、家も少し拡張できればいいのだが……もう一棟作って連結するのかな。

でも、大きくなるとアイテムBOXに入らなくなるし。2階建てにするとなると難易度が高そうだし……。

アイテムBOXへ入る事を前提に10m×10m×10mに収まる建物をプロにお願いするという手もあるが。

まあ、家具類や荷物は全て、アイテムBOXに入っているから、今のままでも十分な広さはあると思うのだが。

個人のプライベートルームが欲しいなら、小型の小屋を追加で作る手もある。

それなら、アイテムBOXへ入れられるからな。

――――――◇◇――――

――その日の夕方。

早速、貰ってきた牙熊の肉を食ってみる事にした。

先ずは薄く切って、シンプルに焼いてみる事に――焚き火に鉄板を乗せて鉄板焼きだ。

ジュウジュウと肉の焼ける匂いが食欲をそそののだが……。

ただ熊肉には食中毒を起こす旋毛虫という寄生虫がいるので、十分に焼かなくてはならない。

とりあえずシャングリ・ラで買った市販のタレで食う。

「む——肉が——か、固い」

固いのは仕方ないとして、臭いが——やはり熊だ。前に地元で食った味と同じ味がする。

「ふにゃ〜熊の肉は苦手なのにゃ」

「獣人にも好き嫌いがあったのか」

「あるに決まってるにゃ」

アネモネもプリムラも、ちょっと熊肉は苦手そうだ。

それじゃ対策を練ってみる。固い肉はぶっ叩けばいい。

シャングリ・ラで肉叩きを買い、まな板の上で肉をぶっ叩く。

そして臭み対策だ。

ウチの秘伝のタレを作る。まあ秘伝って程でもないんだが……。

先ずは醤油——そこに一味唐辛子と胡椒を入れて、ミカンの皮を入れる。

ミカンの皮は、陳皮という漢方薬名でシャングリ・ラで売っている。まあ、ミカンじゃなくても柚子でもいいんだが。

ミャレーは醤油が苦手らしいので、塩と胡椒とガーリック、そして陳皮を入れた特製塩を作って、それを振りかけた。

そして、これに付けて食ってみると——。

「やはり大分マシになるな」

口に入れると、みかんの皮の香りが口内から鼻に抜けて、熊肉の臭いが和らぐ。

「にゃ！ これなら香辛料が利いてて、それなりに食えるにゃ」
「うん」

「プリムラ、苦手なら違う肉を出すか？」

「だ、大丈夫ですわ」

「なにせ、この熊肉が山のようにあるんだからな」

「……」

彼女は複雑そうな顔をしているが――焼き肉だけなら何とか食べそうだが、これは煮込んだらイマイチな感じ。

元世界でも熊の煮物は食ったことがない。ウサギは味噌鍋が定番だったのだが……。

それとも何か美味しい食い方があるかもしれないから、研究してみる手はあるな。

シャングリ・ラには、料理の本も揃っているし。

例えば臭い羊の肉でもマトンカレーがあるから、カレーはどうか
な？

色々試してみなくては。

44話 ファイヤーボール！

新しい住人、プリムラが増えた。

正直これでいいのか悩んでしまうが、彼女の決意は堅いようだ。

実家にいれば何不自由なく暮らせるし、貴族への興入れも決まっていたというのに、このオッサンのどこがそんなにいいのだろうか？
全く解らん。

歳が近い俺からすると、娘に捨てられてしまったマロウさんが不憫だ。

さて、住民が増えたとなると、色々と不都合が出てくる——先ずは風呂だ。

夕飯を食べた後、皆に風呂の話をする。

「風呂は皆でいっぺんには入れないので、2回に分けて入ろう。アネモネとミャレー、そして俺とプリムラだ」

「私もケンイチと一緒に入る！」

「ウチもにゃ！」

「おいおい、お湯が足りないんだよ。もう少し大きい風呂を作ればいいんだが……」

シャングリ・ラを検索すると、プラ製の湯船は売っているが風呂釜はガスしかない。

昔は薪の風呂釜とかもあったんだがなあ。

お湯を沸かしてプラの湯船に入れるのなら、ドラム缶風呂と変わらんしな。

「うーん——そうだ！ ドラム缶をもう一つ出して沸かせばいいん

だ。それなら皆で入ってもお湯がなくなる事はないだろう」

早速、シャングリ・ラからドラム缶風呂をもう1つ購入して、ブロックを積んで釜口を作る。

俺1人の時は、ドラム缶を乗せるのに苦労したが、今は力持ちのミヤレーがいるので楽々。

一緒に持てば楽々だし彼女1人でも平気なぐらいだ。ここは、すぐ隣に川も流れているので水にも困らないしな。

アイテムBOXから電動のポンプを出して、ホースを繋げると川から水を汲み上げる。

水が入ったら早速、火を入れて風呂を沸かす。設置した温度センサーが適温を教えてくれる。

1時間程で、ブザーが鳴ったので風呂に入る準備。

風呂の洗い場はすでにモルタルで製作済みで、排水も塩ビパイプで川へ流れるようになっていた。

浄化していない垂れ流しではあるが、俺たちだけの生活排水ぐらいであれば平気だろう。

台所から出る排水は以前作った沈殿槽を設置して、上澄みだけを流すように細工済み。

前の場所からもってきた風呂には、入るためのプラットフォームが設置されていて屋根もあるが、新しい方は何もない。

アイテムBOXから脚立を出して、ドラム缶に角材を渡して湯船に浸かる。

「私もそっちに入る！」

「うちもにゃ！」

「こらこら！ 分けた意味ないだろ。皆でこっち入ってどうする——その前に3人は無理だ」

一緒に入ると言うて煩いので、アネモネだけ入れてやる。

「そろそろ、1人でお風呂に入れるようにならなきゃな」

「や！」

俺とアネモネが湯船に浸かっていると、裸になったプリムラが内股になって胸と股間を隠して、モジモジしている。

「プリムラ、隠してないで風呂に入ったら？」

「だ、だって恥ずかしいですし……」

「それじゃ、プリムラだけ1人で風呂に入る事にする？」

俺にそう言われて覚悟を決めたのか、プリムラがもう一つの湯船に脚を入れた。彼女は何回かこの風呂に入っているので慣れたものだ。

「こちらの風呂にも上り台を作らないとなあ——」

風呂の最後は、ミャレーにお湯をぶっかけまくって泡を流して終了。

風呂あがりは、ジェットヒーターで髪の毛を乾かすのもいつもの光景だ。

だが、その光景の中にも金髪の女が1人増えた。

——
——
——
◇◇
◇◇
——
——
——

——次の日。

俺はアイテムBOXに大量に入っている熊肉の食い方を、朝から模索していた。

先ずはカレーだろう。

叩いた肉を牛乳に一晚漬け込み、油で炒める——それをカレーにしてみた。

そして試食——。

「ふむ……いいんじゃないね？ 確かにクセはあるが結構美味しいぞ」
これは、アイテムBOXへ入れて保留にしておく。女性陣が苦手のようなら俺の飯にすればいいからな。

続いて、肉を叩いてハーブとスパイスを摺り込み、焼き肉用はブランドーに漬け、煮込みならワインに漬ける。

肉をマリネしている間に畑仕事をこなす。

牙熊によって、かなり荒らされてしまったが半分ぐらいは何とか無事だ。無事な苗を集めて植え直した。

畑仕事の後、料理を再開。

ブランドー漬けはステーキにして、ワイン漬けはポトフにする。

「おお……これは上品かもしれん——実に洋風料理だ。それなりにクセはあるが普通に食える味だな」

時間がある時に大量に漬け込みを作ってアイテムBOXへ入れておけばいい。

とりあえず夕飯に、出来たカレーを3人に食わせてみた。

「美味しいよ！」

「美味しいにゃー！」

アネモネとミャレーがカレーに、ぱくついている。2人には熊カレーは評判が良さそうだ。

しかし、カレーばかり食っててよく飽きないな——と、言いつつ俺も食ってるが。

やはり、異世界でもカレーは正義か。

プリムラが俺とアネモネのご飯をじっと見ている——何回か俺の家へやって来て、米は見ているのだが彼女は未だに食おうとしない。

「それは美味しいのですか？」

「麦と似たような物だよ。こちら辺では麦を煮たりして食わないのか？」

「病気の時の食事として、麦を砕きドロドロに煮て食べる事はありませんが……」

麦の粥か――不味そうなイメージはあるが、麦飯自体はそんなに食えない程不味くはない。

俺がガキの頃は、金がなくて麦飯って事はあったんだが、今は健康ブームか何かは知らんが麦飯の方が高いからな。

だが異世界の麦と、俺が食った元世界の麦とでは色々と異なるかもしれない。

「それは美味しいのか？」

「……」

プリムラに麦粥の事を聞いても返事がない、やはり不味いようだ。

「まあ、それと似たような物だよ。機会があれば食べてみればいい」
「……」

だが彼女からの返事はまた返ってこない。未経験の食べ物なのと、麦粥が不味かった記憶からなのか警戒しているようだ。

それでも、カレーの味には満足しているらしい。

「あの臭い肉が、こんなに美味しくなるなんて！」

プリムラもカレーを食べて驚いている。カレー自体は俺の所で何回か食べているからな。

「まあ、少々肉のクセはあるが結構美味いよな。それに臭さで言ったら他の動物の肉だって、それなりに臭みはあるし」

「ケニイチにかかれば、どんな肉も素晴らしい料理に変わってしまうのですね」

「そんな大袈裟な。でも、美味しく食べようとする手暇は掛かるもんだ」

この場合、牛乳代や酒代が掛かるし、スパイスやハーブも必要だ。だが、ジビエ狩猟肉を食うつてのはスローライフっぽくていいな。

「野菜も苦くなくなるにゃゝまるで魔法にゃゝ」

「そういえば、市場に売っている野菜なのに、苦味やえぐみがありませんね」

プリムラが野菜の味にも気がついたようだ。

「ウチは教えてもらったにゃゝ。竈かまどの灰で煮るにゃゝ」

ミャレーは得意気に種明かしを始めた。

「灰で？」

「野菜や山菜に含まれる苦味を灰汁ひたに浸す事によって中和出来るんだよ。煮なくても一晩浸けておけばいいんだ」

「前にも言いましたが、ケンイチはまるで賢者様です」

こんな事で賢者などと言われると、尻が痒いぜ。

「苦い木の実とかも食えるようになるが手間が掛かってな。他に食うものがあるから、そこまでしなくてもいいわけだし……」

もしかして魔法でアク抜きとかも出来るのかもな。

晩飯の後、勉強しているアネモネの横で魔導書ってやつを開いてみる。

「ふむ——何々……」

色々を書いてあるようだが——要は全身を巡る魔力を一箇所に集めて顕現させるって事らしい。

そんな事が出来るのか？ イマイチ不明だが……。

このファイヤーボールって魔法だと、指先や掌に集めるって事になっっているが。

論より証拠、やってみるか。

身体の中を巡る——巡る——巡るって、そんなの本当にあるのか？
どうも何回試しても、それらしい物が俺には感じられない。

一応、呪文らしきものも魔導書には書かれているが、呼び水みたいな物で、熟練すれば詠唱も必要なくなるようだ。

「我が内なる力から生み出されし灼熱よ目前の敵を焼き尽くせ憤怒の炎」
の炎」

うわ、中二っぽい。だが何も起きない。

婆さんが言っていたように俺に魔法の才能がないって事なのか？

「ケンイチ、その本を見せて」

アネモネが魔導書を見たがっているの、見せてやる。

うゝむ、使えないとなると高い買い物だったな。

「プリムラ、魔導書の類ってすぐに売れる物か？」

「ええ、魔法を使えなくても、収集している方もいらっしやいますし」

ああ、なるほど。コレクターがいるわけか。それなら、すぐに売れるかもしれないな……。

俺が役に立たない魔導書を売るかどうか迷っていると——。

『我が内なる力から生み出されし灼熱よ目前の敵を焼き尽くせ』

俺の隣で、魔導書を読んでいた、アネモネの前にザワザワと煌めく青い光が集まり始めた。

「おっ、ちょっと待て！ アネモネ！」

だが、彼女はトランス状態のようで俺の言葉は聞こえていないようだ。

そして、集まってきていた光は、突然炎にその姿を変えた。

『フアイヤーボール憤怒の炎!』

彼女の咆哮と同時に火の塊が撃ち出されて、家の壁を真っ赤に覆い尽くした。

「おわああああ! 消火器! 消火器!!」

「ふぎやあああ!」

「きやあああ!」

俺は急いでシャングリ・ラを検索すると、最初に出た消火器を選択して【購入】ボタンを押した。購入したのは3つだ。

ドスドスドス!! という音と共に落ちてきた消火器を掴むと、黄色いピンを抜き黒いレバーを握ってホースを火に向けた。

勢いよく噴射されたピンク色の粉が部屋中に舞う。

「俺の真似をして、残りの物を使ってくれ。その黄色いのを抜いて、黒い取手を握ればいい!」

「こうにゃ?! ふぎやあああ!」

勢い良く出た消火剤にミャレーがビビったようだ。

「こうですか?!」

意外とプリムラは冷静だ。やはりマロウさん譲りなのか、肝が据わっている。

3人で消火剤を掛けまくり何とか炎は鎮火した。

消火剤のピンク色の粉で覆われてしまった家の壁だが、かなりの範囲で黒く焦げてしまった。

だが、表面が焼けただけで中まで火は通っておらず炭化もしていない。

火炎の瞬発力はあるが持続力はあまりないようだ。

だが、この炎で包まれば気管や肺の中を焼かれて致命傷になる。さすが魔法——恐ろしい。

「ご、ごめんなさい……」

アネモネが自分のやってしまった事に驚いて、ぷるぷると震え放心状態になっている。

いや、怒るよりも——。

「すげえええ！ 凄いでアネモネ！ 魔法が使えるんだな！」

「これなら、牙熊も仕留められるにゃ」

「でも、この魔法で焼いたら、買い取ってもらえないぞ？」

「にゃ！ そうだにゃ」

固まっていたアネモネだったが、その場で横に倒れこんでしまった。

「おい、どうした！？」

顔が真っ赤なので額に手をやるが——熱がある。

「多分、魔力酔いだにゃ。初めて魔法を使った子供なんかがなるにゃ」

「ケンイチ、ベッドに寝かせましょう」

「そうだな」

皆で寝られるようにダブルベッドを買ったが場所を占領するので、いつもはアイテムBOXへしまっている。

「看病するなら小さいベッドの方がいいか」

アイテムBOXから最初に使っていたシングルベッドを取り出し、お姫様抱っこでアネモネをそこへ寝かせた。

しかし——彼女の体重がかなり重くなっているな。

俺と初めて出会った時に比べて、二回りぐらいデカくなっている気がする。

この年頃は成長期だからな。1年で15〜16cmぐらい伸びる奴もいるし、1ヶ月に1cm以上も大きくなるって事だ。

タオルと桶を出して、水を注ぐ。

「ミャレー、魔力酔いってどのぐらいで治るもんだ？」

「大体は一晩で治るって話だにゃ、熱が下がらないなら、魔法に詳しい人に見せた方がいいかもにゃ」

「魔法に詳しくそうと言うと――あの婆さんか」

皆で交代しながら、おでこに濡れタオルを乗せる――ああ、熱〇まシートを買えばいいのか。

シャングリ・ラで検索してボタンを押す。

「ポチツとな」

すぐに商品が落ちてきた――12枚入りで500円だ。

パッケを破いてシートの保護紙を剥がすと、アネモネの頭に貼る。

「それは、なんにゃ？」

「おでこが冷える魔法だ。ミャレーは毛があるからダメだと思うぞ」
「ふみゃ〜」

試してみたのだろうか、ちよつと無理だろう。毛皮が邪魔でシートが肌に密着しないからな。

それを見ていたプリムラがそわそわしている、試してみたいらしい。

「そら」

シートを剥がして、プリムラのデコに貼る。

「ひゃ！ あ——本当に冷たい」

おでこに貼ったシートを上目で見ようとしているのだが、自分のデコが見えるはずがない。

「ずるいにゃ！」

「皮膚に直接貼らないとダメなんだよ。ミャレーの毛を刈ってもいいのか？」

「にゃんて事言うのにゃ！」

獣人の自慢は美しい毛皮。それ故、毛が抜けてハゲが出来たり、毛を刈られたりするのが最大の屈辱らしい。

「それじゃ諦めろ」

「ふみゃ〜」

「それより、この粉を片付けよう。これが水を吸ったりすると、えらい事になるから」

「どうなるにゃ？」

「こびりついて取れなくなるんだよ。乾いている今のうちだ」

「解りました」

皆で、消火器の粉を片付けてから、アネモネの看病を交代ですると熱は朝までには下がった。

何ともないようで良かったな。医者もろくにいない世界だから、怪我や病気には気をつけないと。

ベッドの上で寝巻き姿のアネモネは、ちょっと元気がないようだが大丈夫そうだ。

だが、食欲がないと言う。高熱で消耗したのだろう。

そのために俺はシャングリ・ラである物を検索した——あった、値段は650円だ。

なんか昔懐かしいパッケージなのだが、昔から変わってないのだろうか？

しかし随分値上がりしたもんだな。昔は100円ぐらいで買えたような記憶があるんだが……。

「病中病後と言えば定番はこれだな——桃缶」

俺がガキの頃は、病気の時は桃缶かりんゴだったんだが、めっきりこいつを食べる機会はなくなったな。

俺自身も30年ぶりぐらいじゃないか？ それぐらい、食った記憶がない。

桃缶を見つめ郷愁に浸っていたのだが、重要な事に気がついた——缶切りが無いじゃないか。

再びシャングリ・ラを検索する。これまた昔懐かしい3徳缶切りが未だに売っている。1個500円だ。

ギコギコと缶切りで缶を開ける。今はプルトップでパツカンだからな。やっぱりこの儀式がないと缶詰を食う気がしない。小皿が無いので、カップに桃を入れてアネモネに渡す。

「何？ これ……」

「果物を甘く漬けた物だよ。病気の時に食うんだ」

「……ぱく……凄く甘くて美味しい！」

「にゃー！ 美味いにゃ？ ウチも食べたいにゃ！」

ミヤレーがアネモネのベッドの周りをウロウロしている。

「ダメダメ、病気の人しか食っちゃダメなんだ」

「ふにゃー！ ウチも腹が痛くなったにゃー！」

「腹が痛いんじゃない物を食っちゃダメだろう」

俺はシャングリ・ラから、正露丸を検索して購入した。ちなみに正露丸の商標権は一般化しているとの判断から消滅しているらしい。落ちてきた正露丸の蓋を開けてミヤレーに嗅がせる。

「ほら、腹痛いなら、この薬を飲め。薬草を固めた物だ」

「ぎゃーっ！　なんにゃ、その臭いは！　鼻が曲がるにゃー！　腹が痛いのは嘘だにゃ！」

彼女は毛を逆立てて、部屋の隅で小さくなってしまった。

「ははは！　この果実漬けは、蓋を開けてしまったので皆で食おうか」

臭い正露丸をアイテムBOXへいれて仕舞い、テーブルを出して皆のカップを出して桃缶を分けて食う。

「ふにゃ！　う、美味いにゃ！　ちよっとリンカーに似ているかもにゃ」

「あ！　これは美味しい！　とても甘いですね。凄く大量に砂糖が使われているのでは？」

「そうそう砂糖漬けだな。塩に漬けても保存できるけど、甘くしてもそれなりに保存が利くんだ。リンカーの砂糖漬けとか美味そうだな」

「でも、これでは貴族ぐらいしか食べられません……」

「まあ、そうだな。この国では砂糖も専売らしいからな」

皆で桃缶を食うのだが、食欲がないアネモネでも桃缶は食えるようだ。

「アネモネは今日1日寝ているよ」

「もう大丈夫だよ」

「ダメダメ。ふう——俺は床と壁を直さないとな」

「ご、ごめんなさい」

アネモネがベッドの上でカップを持ったまま縮こまる。

「気にするな。それより、アネモネが魔法を使えたってのが凄いぞ」
「多分、その才能があったのでしょ」

「プリムラ、魔法の勉強って出来るのか？ 例えば、学校とかはあ
るのか？」

「王都に大学がありますよ。それを卒業すれば聖魔導師になれます」
「おおっ！ 凄い！ アネモネ、学校へ行きたいなら、行かせてや
るぞ？ 女子寮とかもあるんだろ？」

「ありますが、王侯貴族や大店の子息が多いので、一般から入学す
ると苦勞が絶えないようですよ」

「ああ、まるで絵に描いたような……」

正にテンプレ。だが、アネモネにそんな気持ちはないらしい。

「ケンイチと離れるのは嫌」

「まあ、無理にとは言わないよ。でも行きたくないったら相談してく
れよな」

「うん」

「魔法が使えるなら、女でも食うには困らないだろう？」

「ええ、色々と仕事がありますからね。でも、炎の魔法だけでは――
逆に戦闘等に駆り出されてしまうかもしれません」

「なるほどな」

しかし、魔法が使えるとなれば、他の魔導師に金を払って魔法を
教えてもらおうとか、魔導書を購入するとかで持ち魔法の種類を増や
す事が出来ると言う。

無論それにも――但し才能があればと注釈は付くが。

「あ！ この魔法って風呂を沸かすのに使えないかな？」

「ええ？ ぷっ！ あはは！ 憤怒の炎でフアイヤーボールお風呂を沸かすなんて初
めて聞きました」

プリムラが、腹を抱えて笑っているのだが――。

「うん、元気が出たら挑戦してみる」

アネモネがやる気を出してるぞ。これは期待が出来るかもな。

成功すれば、風呂を沸かす時間が大幅に短縮出来る。

スローライフに相応しい魔法の平和的利用法だ。

45話 プリムラの商売

魔法酔いで熱を出してしまったアネモネは大丈夫なようで安心した。

すぐに回復しそうである。

皆で桃缶を食べた後、4人プラス1匹で朝食を取ると、アネモネが魔法で焼いてしまった壁を修理することにした。

「さて、どうしようか」

この家はログハウスのように外壁を積み重ねて造る構造になっているので、途中から壁を切り出してしまつては強度が落ちるだろう……。

シャングリ・ラで板材を検索する。

厚さ6mmで約2m×12cmのヒノキ材が10枚入り6500円で売ってる。

「これだな——結構高いな」

とりあえず、こいつを購入して、壁一面に縦に貼り付ける事にした。

アネモネが焦がした壁側には窓が無いので、窓に合わせてカットする必要も無い。

スケールを取り出して部屋の寸法を測る。壁の長さは約4m——ということとは33枚縦に並ぶのか。

天井の高さは約2m30cm。板の長さは2mなので30cm程足りない。継ぎ足して貼り付けるしか無いな。

他の板材を探してみたのだが適当な物が無かった。計算なら、こ

の板材を4セット買えば壁全てが埋まるはずだ。

外に出て、シャングリ・ラから板材を購入した後、アイテムBO
Xから発電機と丸鋸切断機を出し、板をカットして壁に合わせて微
調整する。

上手く寸法が合ったら、これを雛形にして板材を全部カットすれ
ばいい。

俺が加工を始めると切断機が出すけたたましい音に、プリムラが
家から出てきた。

「煩^{めんど}いが、しばらく我慢してくれ」

「そんな魔法の道具を、いくつも持ってるんですね」

彼女は俺が使っている工具を興味深そうに眺めている。

「まあな。いくら君にでも全ては見せられない。勿論^{もちろん}、アネモネに
もミヤレーにもだ」

「でも……」

「君にも心に秘めている事があるだろう？」

「そ、それは——そうですけど」

彼女は俺が色々と隠し事をしているのが気になるようだ。だが親
しき仲にも礼儀あり——彼女は解ってくれると思うが。

話している間にカットは終わった。

後は、コンプレッサーとネイルガンを出して板を壁に打ち付けれ
ばいい。壁の終端に半端が出るだろうが、その時に加工する。

ついでに、断熱材として板状の発泡スチロールを買って、打ち付
ける板材の下へ入れる。これには防音効果もある。

約2m×約1mで厚さ1cmの物が10枚で6000円だ。

ミヤレーとプリムラに押さえてもらい、縦にした板材に次々と釘
を打ち込んでいく。

彼女達の協力の下、2時間掛からずに壁が完成した。

後は、床にシールを貼ったなんちゃってフローリングシートを剥がして、新しいのを貼り直せばいい。

「よし！ 完成だ」

「綺麗になりましたね」

今まで、外壁だけで内側は剥きだしだったが、そこに内壁が出来た事になる。

「この板材に合わせて、他の壁も貼り直した方が格好いいだろうな。そのうち施工して徐々に内装も綺麗にしていこう」

「この板は良い匂いがするにゃ」

板材はヒノキだから木の匂いが強いが、獣人達にも嫌な匂いではないようだ。

「ほら、アネモネ。綺麗に直ったぞ」

「うん」

壁を焦がした事を随分と気にしていた彼女であったが、綺麗に直った壁を見て笑顔が戻った。

良かった良かった。

工具を出したついでに、前に作った小屋の改造も行う。

小屋の入り口から入った正面の壁に小さな窓を取り付ける事にした。

よくトイレの窓に使われている、正方形で外側へスイングして開くタイプの物だ。

今までは窓が無かったから真っ暗だったからな。

バイオディーゼル燃料を作った時は換気のために板を剥がしたりしていたが、いつまでもそんな使い方をするわけにもいくまい。

屋根と壁には防水シートを貼って45cm×90cm――180

0円のガルバリウム鋼板を買って貼り付けた。
これで耐久性はかなり上がるだろう。

後は小屋の中に柵を作って作業は完了だ。

これでテールを出せば、簡単な作業は出来るし緊急用のシェルターにもなる。

——シェルターと言えば、戦闘用のバリケードが欲しいな。

牙熊などの大型魔物等に襲われた時に、間を遮る物が欲しい。

直径10cm程の木をチェーンソーで伐採して寸法に合わせてカット。先を鉛筆のように削り3本纏めて『入』型に組む。

先の尖っている物を向けられれば、どんな動物でも本能的に恐れを感じる。これで怯^{ひる}ませて、後ろからクロスボウで撃てばいい。

シャングリ・ラを検索すると、有刺鉄線まで売っている——100mで5000円だ。こいつをバリケードに巻けば完璧だ。

これなら戦争用にも使える。使うつもりは無いけどな。

同じ物を6基製作した。これで小屋をシェルターにした時にバリケードを使って防御出来る。

こんな物を移動させるだけで大変だが、アイテムBOXへ入れれば楽々だ。

だが、チェーンソーを使っていて、ふと思う——。

「ああ、牙熊にチェーンソーアタックすりゃ——ダメか。近づく前に爪で殺られるな」

「それも、魔道具なのですか？」

プリムラが爆音と白い煙を吐き出すチェーンソーを遠巻きに見ている。

「そう、魔法で動く、木を切る魔道具だ」

「……」

「そんな顔をして、もしかして——そろそろ帰りたくなってきたのか？」

「そんな事は絶対にありません！」

「俺は賢者どころか、悪魔かもしれないんだぞ？」

「悪魔なら、可哀想な境遇の女達を助けたりしませんでしょ」

「そりゃ、そうか。ハハハ」

工作がし終わったので、プリムラと薬草を探しに出かける。

「私も行く！」

家からアネモネが走ってきた。

「大丈夫なのか？」

「うん！」

アネモネは楽しそうなのだが、俺と2人きりになれるチャンスを逃したプリムラはなんだか不機嫌そう。

赤露草と青露草を少量見つけたのだが、ここら辺にはもう無いのだろうか？

もう少し範囲を広げた方がいいと思うのだが、あまり森の奥まで入ると魔物とエンカウントする危険性が上がるしな。

あんな牙熊みたいのが、ゴロゴロいるんじゃ、ちょっと躊躇してしまう。

だが、ミヤレーの話では、大型の魔物の気配はないと言う。

かなり森の奥地まで行ったようだが、魔物が少なすぎて逆に不自然らしい。

何か原因があるのか？

薬草を見つげるために下を探していた顔を上げて左手を見れば、木々の間から湖の水面がキラキラと光って見える。

「ああ、湖を渡るっていう手もあるな」
ボートか何かで湖を横断すれば対岸まで行ける。だが、この湖は
かなりデカイ。

シャングリ・ラを検索するとゴムボートが売っているが、2人乗
りが多い。

うーん、シヨボーイのは3000円ぐらいだが、しっかりした物は
3万円以上するな。

安物を買って湖の真ん中で沈んだりしたら洒落にならん。水難事
故ってのは結構多いんだよな。

漁師の事故も多い——船底一枚下が地獄だと知り合いの漁師も言
っていたし。

船外機が取り付け可能な物は6万円とか——そこまで投資して薬
草とかが欲しいわけでもないしなあ。

「ケンイチ、私はアストランティアで商売がしたいのですが」

彼女は大店の娘で、買い付けの旅行にも同行するぐらいの女性。

こんな森の中の小さな家にじっとしているのは我慢出来ないだろう。
マロウさんは、彼女が結婚して家庭へ——とそんな事を願ってい
たようだが、そんな当たり前の人生を送る女性には見えない。

「プリムラも商人の娘なんだから、当然ギルドには登録してあるん
だよな」

「はい」

「でも、売るのがあまり無いぞ。持っていた物はダリアで殆ど売
ってしまったし。何を売る？」

シャングリ・ラで追加購入はできるが、暮らしに困らない金はある
ので、無理に商売して目立ちたくはない。

「これから考えます……」

「そうだ、この前作った絵本があるが」

「絵本？」

プリムラに、エルフの森とシンデレラの絵本を見せる。

「素晴らしいですわ、これは売れます！」

どうやって作ったかは、説明していない。この世界で印刷技術は、かなり画期的な代物だと思うからな。

ドライジーンのように大事になる可能性がある。あまり大々的にやらないほうがいいかもしれない。

たまに絵本や草子物を作って、そこそこ儲かればいいのだ。

「しかし、それだけじゃなく野菜ができれば、野菜を売るか。魚を釣って干物でも造るか」

「それでは——」

プリムラのアイディアで熊肉の煮物と、リンカーを甘く煮た物を売る事になった。

リンカーの煮込みは、朝に桃缶を食べた時の会話からヒントを得たと言う。

————◆◆————

——次の日。

前の晩から熊肉にスパイスとハーブを擦り込みワインに浸け一晩置き、野菜は皮を剥いて灰汁に漬け込んでいる。

これらの材料を使って朝に煮込みを作る。俺からは、だしの素を少々提供した。

味見をしてみたが、街で売っているスープに比べれば雲泥の差——汁は、まるで高級スープだ。

そして、俺のアイテムBOXに入っていたリンカーの皮を剥き甘

く煮こむ。

リンカーの甘みです——と言いつけが通じるぐらいに砂糖を入れる。俺からはリンゴの皮むき器を提供した。ハンドルをくるくると回すと皮が剥ける機械だ、1台1500円。

玩具みたいな物だが意外と良く剥ける。ちよつとでも手間は少ない方がいい。

リンカー煮の味は緩く煮たコンポートだが凄く香りがよく甘くて美味しい。これは売れるな。

プリムラが作り方を覚えたので、明日からは自分で作ると言う。スープとコンポートの値段はパン付きで1000円。これも街では普通の値段だ。パンは街で買うれしい。

スープは20L作ったので、スープが一杯300mlとすれば、66杯分。全部売れば6万6千円だ。

コンポートも全部売れば10万円を超える売上だろうが——。

「ケンイチさん、魔石コンロを貸して下さい」

「いいよ」

魔石コンロー——と言ってるカセットコンロの使い方を教える。

すぐに稼いで自分の魔石コンロを買うので借りるだけだと言うのだが、魔石コンロは中古でも30万円ぐらいする。

毎日10万円の売上がマジであれば、30万円のコンロはすぐに買えると思うが……。

「それじゃ、パンを焼く石窯でも作るか？」

シャングリ・ラを調べると、大型の石窯が8万円程で売っている。

「その釜で、パンを何斤焼けますか？」

「いいところ、2斤かな……」

「スープや、リンカー煮が売れたとすれば、パンは20斤以上必要

になりますわ」

パンは1斤、銅貨1枚（1000円）程するから、追加で2万円の経費が掛かるわけか。

「それじゃ焼く時間がとても間に合わないか……」

餅は餅屋——うゝむ、さすが商売のプロの娘だな。

それに俺達だけで焼きたてのパンが食いたいなら、発電機を出してホームベーカリーを動かした方が効率的だ。

さて、商品は出来たが、物を運ぶのが大変だ。

プリムラの父親はアイテムBOX持ちだったが、彼女は持っていない。

それに森の中を通って街まで行かねばならない。崖沿いの道で今まで魔物に遭遇した事はないが、やはり徒歩では少々危険が伴う。俺のアイテムBOXへ荷物を入れて、バイクでタンデムして街の手前まで彼女を送る事にした。

街道まで行ったら——前に怪我をした森猫を運ぶ際に購入した4輪式のキャリアに荷物を載せて引く。

これなら、彼女だけでも荷物を引けるだろう。

キャリアの箱はプラ製なので、木目調シートを貼って、その上から麻布を掛けて誤魔化してみた。

ぱっと見は変わった荷車にしか見えないだろう。

彼女1人でアストランティアの街で商売をして、夕方に戻ってきたら俺のバイクでタンデムして帰るわけだ。

——そして、夕方。

オフロードバイクに跨がり、プリムラを迎えに行く。

街道へ到着したのだが少々早かったようだ。

街道脇にスツールを出して、シャングリ・ラで電子書籍を読む。しばらくするとカートを引くプリムラの姿が見え、彼女は手を振っている。

だが、その横には背の高い獣人の女が並んでいるのだが……。

「ケンイチ！」

「プリムラ、料理は売れたかい？」

「完売です！　だってケンイチの料理が美味すぎるんですもの。高級店でしか食べられないような煮物が、露店で食べられるなんて、客が放っておくわけがありません」

カートには空の鍋とカセットコンロ、そして明日の料理に使うリンカーと野菜が積んである。

これで魔石コンロも買えば、ほぼこの世界の物を使って商売が成り立つわけだな。

「そしてコチラの獣人は？」

背が高く筋肉質で虎柄の女だ。毛が少々長めで、ボサボサしているような感じ。

毛が長いせいか余計に身体が大きく見えるのだが。鋭い彼女の視線が俺をじっと見ている。

ボロい麻のシャツと、短めの紺のスカートを履いているのだが、どうも獣人つてのは申し訳程度に服を着ているので、ファッション等には興味がないらしい。

別に裸でも問題ないのだが、普通の人間が嫌がるので仕方なく着ているようなものだ。

「ニヤメナだ、よろしく」

「女の売り子だけだと、甘く見て絡んでくる男が多かったので彼女を護衛に雇ったのです」

「あはは！ 男共を睨みつけていれば、1日小四角銀貨1枚（500円）だってんだから、こんなに美味しい仕事はないねえ」

プリムラが引いてきたカートをアイテムBOXへ入れる。

「お！ アイテムBOXかぁ、久々に見たなあ」

アイテムBOXは珍しい能力だが、それなりに持っている人はいるらしい。

また、秘密にしている人もいるようだから、実際はもっと多いのかもしれない。

プリムラは彼女を家に招待して、夕飯を食べさせたいと言う。

「せっかく、お近づきになれたのですから、よろしいでしょう？」

「ああ、プリムラを守ってくれる人だからな」

しばらく森の中を進むと、アイテムBOXからオフロードバイクを出す、それにニャメナが反応した。

「そりゃ、街を走っているドライなんとかってやつだろ？」

「これは魔法で動く特別製だ。誰にも話すなよ」

プリムラを後ろに寄せ、エンジンを掛けて走りだすと、ニャメナが驚きながら追いかけてくる。

「漕がなくても進むのか？ どうなってるんだ？」

「だから魔法なのさ」

「うふふ」

暗くなりつつある森の中を獣人の女と潜り抜け、家まで帰ってきた。

「こいつはびっくりだね。森の中でも、あんな速度で走れるとは…それにしても、良いところじゃないか」

ニャメナが辺りを見回している。すでに暗いのだが、彼女の目に

は綺麗な風景が見えているのだろう。

バイクをアイテムBOXへしまっていると、プリムラが本の話をしてきた。

「あの本も全部売れましたよ。ケンイチは小四角銀貨1枚と言っていました、小四角銀貨2枚（1万円）で売れました」

「本は18冊あったから、金貨1枚弱か……」

「そうです——けど……」

プリムラが下を向いて、なんだか言いづらそうにしている。

「どうした？」

「本を買っていった男達が、もっと女の裸の絵が載っている、いやらしい本はないかと……」

「ったく男共ってのは、あのての事しか考えてないからねえ」

ニヤメナが左手を腰に手を当てて右手をヒラヒラ——呆れたように話す。

「そういう本を作れば売れるとは思うが、役人に目をつけられるだろう。公序良俗に反するってな」

「ケンイチはそんなの作りませんよね？」

「ああ、作らないよ」

こんな女ばかりの家で、そんなの作れるはずがないだろう。

だが、生活に困ったらしい手もありか。そんな需要があるのが解っただけでも収穫だな。

俺たちが帰ってきた音を聞きつけたのだろう、ミヤレーが家から飛び出してきた。

「ケンイチ——！　ぎゃ——！　その女はなんにゃ？！」

ミヤレーがニヤメナを見て毛を逆立てた。

「プリムラが雇った護衛だよ。夕飯をごちそうしたいんだと」

「なんにゃくそうかにゃ。また、ケンイチの女が増えたのかと思っ
たにゃ」

「またってなんだ、そんなわけないだろ」

家の中から森猫も出てきて、俺に駆け寄ってきた。

「にゃん」

「よしよし、ただいま」

頭と顎の所を撫でてやる——黒いビロードのような毛皮が俺の手に吸い付く。

「え？ 森猫が！ ははあ——解ったよ。あんな魔法の道具とか森猫と一緒に暮らしているから、こんな森の中に暮らしているんだね」
「察しが良いな——そういう事だ。誰にも言わないでくれよな」
「解っているよ」

いつもカレーばかりなので、今日はシチューにするか。

熊肉の臭い抜きした物とアク抜きした野菜は、大量に作ってアイテムBOXへいれてあるから取り出せばいつでも料理が可能だ。

鍋が出来たら、小麦を油で炒めた物と牛乳と生クリームを投入してしばし煮込む。

もっと色々料理を作って食べたいのだが、見たこともない料理だと警戒されるからな。

「よし、出来たぞ」

俺は出来上がったシチューをテーブルへ並べた。

テーブルの上に並んでいる白いスープに、ニャメナはびっくりしているが、彼女がこれを食べた感想はどんなものだろうか？

他の獣人にもシチューの評判は良かったので、問題ないと思うのだが……。

46話 崖の上を調べよう

家に獣人——ニヤメナという女がやって来た。

プリムラが街で雇った彼女の護衛だと言う。やはり若い女1人では、色々と嫌がらせやセクハラが多いようだ。

彼女がニヤメナに夕飯をごちそうしたいというので、俺がシチューを作ってテーブルに並べたのだが——。

「なんじゃこりゃ、白いスープ？」

見たこともない白い煮物に、ニヤメナは目を見開いている。

今日のパンは、プリムラの店で売れ残った街で売っている堅いパンだ。

「美味しいのにゃ〜」

「美味しいよね」

ここにいる皆は、すでにシチューを経験済みだ。

「小麦粉と牛乳で煮たんだよ。だから白いんだ」

「牛乳で煮たって？ そんなの食った事がないぞ」

「他の獣人も美味しいと言っていたから、君の口にも合うと思うんだが……」

「うう……」

ニヤメナが恐る恐るシチューをスプーンで口へ運ぶ。

「う、美味しい！ 口の中でとろけるし、凄くコクもある！」

得体の知れない白いスープが美味しいと解った彼女は、次々と口へ入れはじめた。

凄い食欲に、すぐに皿が空になりそうだ。

「おっと、酒を忘れていたな。飲むだろ？」

「ああ」

カップにシャングリ・ラで買った一番安いワインを注いでやる。
一番安い物でも、この世界では上等品らしいからな。

「うめえ！ おい、こんな上等なワインを飯時に飲んでいいのかよ」
ワインを一気飲みした彼女が叫ぶ。

「ああ、俺達は飯時には飲まないのが多いからな」

「いやはや、悪いね」

——そう言いながら、ニヤメナはワインを手酌でカップに注いだ。

「料理のおかわりいるか？」

「いいのか？」

「お客様だからな」

ニヤメナに、おかわりのシチューを盛る。

「私も！」

「ウチもにゃー！」

アネモネとミヤレーが皿を差し出すが、プリムラはこれで十分なようだ。

「いやー、部屋は明るいし、料理は美味しいし、酒は美味しいし、ここは天国かよ、ははは」

皆でシチューを食い終わり、上機嫌なニヤメナと一緒に後片付けをした後、風呂を沸かす事にした。

暗い中——ドラム缶風呂に水を満たし、ミヤレーと一緒に風呂へ

入るための上り台を退かす。

「さあアネモネ、今日は派手にやっていいぞ」

「うん」

「何をするんだい？」

「魔法で風呂を沸かそうと思ってな」

上り台を避難させたのは、そうしないと魔法で燃えてしまうからな。

「魔法で？」

精神集中をしていたアネモネが、呪文を唱えた。

『むっ！ 憤怒の炎！』

ファイヤーボール

彼女の前から出た火の玉がドラム缶に衝突して、風呂釜へ入っていた薪に引火すると巨大な火柱へ姿を変える。

燃え上がるオレンジ色の光が、辺り一面を照らしだす。

「おおっっ！」

「すごいじゃ〜」

火力は凄いのだが持続力はないようで直ぐに下火になってしまった。

魔法の効果を調べるために、ドラム缶の中へ手を入れてみる。

「おおっ、結構温まってぞ。これなら早く風呂が沸く」

「じゃ、もう1つの方もいくよ〜！」

「大丈夫なのか？」

「うん！」

「ケネイチ、魔法は使う回数を増やした方が成長するのですよ」

「経験値が上がるようなものか」

「経験値が何かは解りませんが、熟練度が上がります。勿論、個人もちろん

による限界はあるでしょうが」

もう一つのドラム缶にも火柱が上がる。いつも1時間掛かる風呂が30分程で沸いた。

アネモネは魔法を使って疲れているようだが大丈夫だろうか？

ミヤレーと同じように、ニヤメナも素裸になっても、恥ずかしがる風もない。

より背が高く、筋肉質のニヤメナのボディは迫力がある。贅肉の1つもない引き締まった肉体。

ミヤレーの尻は丸いが、彼女の尻は四角い——実に締りがよさそう……ゲフンゲフン、思考がオッサンでイカンな。

その、アスリートのような美しい身体を隠す気もないのだから、目のやりどころに困る。

彼女は、おっかなびっくりだが——ドラム缶風呂の縁を大股で跨ぎ湯船に浸ると、目を静かに閉じている。

「はー、お湯に浸かるなんて、お大尽か、はたまた貴族様か——マジで天国だぜ、ははは！」

「湯加減はどうだ？」

「いや最高さ。まさか風呂まであるなんてねえ。街に風呂があったって、俺等獣人は入れないからな」

「らしいな」

風呂から出た後は、いつものようにジェットヒーターで皆の髪と毛皮を乾かす。

「これも魔法かい！」

「そうだ」

「ふわあああーこいつがあれば、いつもの水浴びもすぐに毛皮が乾くのかなあ」

ニヤメナは温風に尻を向けて尻尾を乾かしている。

「いつもはどうしてるんだ？」

「焚き火さ」

「焚き火だと、気がつかないうちに毛が焦げたりするにゃ」

「そうそう！」

獣人の、あるあるネタらしい。毛皮があるぶん断熱材的な効果で温度が伝わりにくいようだ。

毛皮と髪が乾いたので皆で家の中に戻ると、アネモネはお勉強タイム。プリムラは俺から教えられた通りに明日の仕込みをやっている。

ニヤメナ用に、ベッドを1台出した。昨日アネモネが寝ていたベッドだ。

ベッドが現れると、そこへニヤメナが飛び込んだ。

「このベッドもふかふかだぜえ、俺もここに住もうかなあ」

「ダメだにゃ！ これ以上増えたら、部屋が狭くなるにゃ」

「なんだよ！ いいじゃねえか」

「ダメだにゃ！」

押し問答をしていたニヤメナだが、アネモネの勉強をじっと見ている。

「あんたが勉強を教えているのかい？」

「ああ、読み書き計算が出来た方が仕事の幅が広がるからな。それだけでなく女の仕事は少ないらしいし」

「そうだねえ」

「アネモネ、プリムラと一緒にいって、商売の仕方を勉強したらどうだ？」

だが、俺の提案にも彼女は首を振るのだ。

「私は、もっと魔法を覚えてケンイチを助けるの！」

「助けてどうするんだ？」

「ケンイチと一緒に冒険に出るの！」

「ええ？ 冒険かく出来るなら俺は、あんまり戦闘はしたくないんだけどなあ」

「ケンイチならドラゴンでも倒せるはず！」

「アネモネが、そう言って俺に抱きついてくるのだが……」。

「無理無理〜！ 勘弁してくれ、命がいくつあっても足りん。だが、帝国でドラゴンを倒したやつがいるんだってな」

俺の話に、ベッドに寝転がってたニャメナが飛び起きた。

「ああ、その話は俺も聞いたよ。倒した奴は魔導師で魔法で殺ったらしい」

「ドラゴンって魔法が効くのか？ そもそも、ドラゴンって金になるのか？」

「魔法は知らないけど——そりゃ、金にはなるさ！ 肉から牙から、そして鱗、竜胆、竜涎香、お宝の山だよ！」

「ドラゴンの肉って美味しいのか？」

「らしいね」

ニャメナは頭の後ろに腕を組むと再びベッドへ寝転がった。

「それは食ってみたいがな……それじゃ、ドラゴンを倒した奴は大金持ちになったのか」

「普通はそうなんだろうけど、その魔導師は帝国の第1皇太女の近衛魔導師だったらしくて、全部お姫様に取りられたって話だよ」

「そりゃ、酷いな」

「まあ、王侯貴族ってのは、そんなもんさ。それでね！ そのドラゴンを売った金で戦金いくさがねをつくって、皇太女が皇帝に反旗を翻したって話なんだよ」

「ほう！ 中々面白いな」

「地方で燻っている貴族や商人なんかは、中央に返り咲く良い機会だからねえ。協力する奴等も出てくるのさ」

「それが、アインシュテュルツェンデノイバウテン家か」

「旦那、よく知ってるねえ！」

「まあな、齧^{かじ}った程度だが」

彼女と帝国の話をしていると、突然ミヤレーが抱きついてきた。

「ふぎゃー！」

「おわっ！ なんだよ、ミヤレー。驚かすな」

「そんなに警戒しなくて盗りやしないよ。でも、旦那から求められたら……」

「ふぎゃー！」

なんだよ焼き餅^{もち}か。ミヤレーが煩いので、ニヤメナから離れて、ベッドの反対へ座る。

アネモネやプリムラに対しては何も言わないのに、獣人のライバルは獣人って事らしい。

「プリムラ、ニヤメナとはどうやって知り合ったんだ？」

「彼女は、お客だったんですよ」

「いやあ、あまりに料理が美味くってさ、おかわりをしちまったよ。でも、ここの料理を食って納得だね」

料理は1人前1000円だが、おかわりは500円追加だ。

「女性の護衛なら女性の方がよろしいでしょ？ 獣人の女性なら強いですし」

「まあな。腕には自信があるから任せておきなよ。それにしても、女1人で商売なんて凄いねえ、肝が据^すわってるよ」

「彼女の父親が、凄い商人でな」

「ああ、それでか。只のお嬢さんじゃないと思ったよ」

話の途中で、プリムラがお金を出してきた——銀貨2枚（10万円）だ。この中には、本の売上も含まれている。

本は俺が彼女に卸した事になっているのだろう。売上の半分は俺にきたという事になる。

実際、俺が5000円だと踏んでいた値段の本を、1万円ですべて売りきったのは彼女の手柄だ。

「なんだ？ 分前なら要らないぞ？」

「そうはいきません、魔石コンロも借りていますし。商人なら対価を払わないと」

「そうか」

そう言われたら貰うしかない。彼女にも商人としてのプライドがあるのだろう。

「旦那も凄い商人なんだろう？ なんで商売をしないんだ？」

「ああ、ある程度稼いだから、ゆっくりしているのさ。やりたい事もあるしな」

「へえ、商人にしては変わってるねえ。商人ってのはいつでも金金——金のためなら親兄弟でも売るってのが相場じゃない——と、あんたの事じゃないよ？」

口にして、しまったと思ったのだろう——ニヤメナがプリムラに謝っている。

「ふふ、確かにそうですわ」

「俺はなあ、のんびりいききたいんだよ」

「旦那は変わってるねえ」

「いつも言われるよ」

まあ、それもこれも、シャングリ・ラがあって、余裕がある生活が出来るからなんだけど。

この能力がなければ、生活するだけで必死で人の事なんて考えて

いられないだろうと思う。

それから2時間程、勉強したり料理の下拵えをしたりをしてから灯を落とす。

「はは——森猫が一緒のベッドに寝てるなんて、こんな事を言っても誰にも信じてもらえないね。神様の使いと仲がいいなんて、あなたが神様じゃないんだよね？」

「とんでもねえあたしや神様——そんなわけないな」
「そうか……」

しかし、広いダブルベッドといえど、4人で寝て森猫も寝るんじや狭いぞ……。

アネモネやベルは、いつも俺の上に乗ってくるし。もっと広いトリプルベッドってないのか？

シャングリ・ラで探してみたが、それはなかった。

だが連結ベッドというのを見つけた——しかし高い！ 10万円以上する……。

うゝむ、悩む。

しかし、これを置いたら部屋の中がベッドで一杯になるな。

まあ起きたら、ベッドはアイテムBOXへ入れるので問題ないのだが。

——
——
——
◇◇
◇◇
——
——
——

——次の朝。

皆で朝食を食べた後、街までプリムラを送っていく。勿論、もちろんニヤメナも一緒に出勤だ。

プリムラは朝早く起きて、1人で料理を作っていたらしい。こうやって彼女の父親——マロウさんも、ゼロからのし上がった

んだろうな。

しかし俺の料理が美味かったからと言っても初日から完売とは、やはり彼女の商売の才能は非凡なものがあるようだ。

プリムラを街へ送った後、家へ帰ってきた。
さて、これからどうする？

そろそろ、行動範囲を広げたいところなんだが、森の奥には魔物がいるしなあ。

湖を渡るのも、なんだか怖い。大体、俺はほとんど泳げないしな。プールの端から端まで泳ぐぐらいで精一杯だ。バイクで、湖の岸をぐるりと回る手もあるが――。

その時、俺の目に少し離れた場所にある滝が目に入った。

「そういえば、崖の上にも森があるな」

元世界のギアナ高地のような隔離された地形なら、植物だけで鳥以外の動物はいないかもしれない。

それに前人未到なら採取されていない植物は大量にあるはずだ。魔物がいなくて植物がある――。

――次は決まったな。崖の上に登ろう。

そうと決まれば、崖の偵察へ向かう。滝のところへは行ったのだが、まだ崖自体は調べてなかった。

崖までは100m程なので歩いて向かう。

目の前まで来るとマジで巨大な壁、ほぼ90度にそそり立つ大崖――高さ10mぐらいか？

「高ええええ！」

間近にみると本当に高い。

色とりどりの地層が縞模様になっていて、それなりに綺麗だ。

化石とか出るかもしれないが、こんな世界で化石なんて価値は無いだろうな。

だが、シャングリ・ラの買い取りなら、値段が付くかもしれない。

これをどうやって登ろうか？ ロッククライミング？ そんなのデキッコナイス。

「とりあえず、偵察してみるか」

アイテムBOXから以前買ったドローンを取り出して発進させる。事前に行く先が偵察出来るのは、かなり強みになる。例えば、森がどこまで続いているのか？ ――とかな。

この世界へやって来た最初の森でも、こいつを飛ばして森や辺りを偵察すれば良かったのか……でも、こんなの思い付かなかったしな。

飯を食ったりするしか、頭になかったし……。

ドローンが上昇するにつれて、コントローラーに搭載されているモニターに景色が映し出された。

縞模様になった壁が切れると、緑の森が見えてくる。

このドローンの限界高度は100m以上ある。このぐらいの高さなら余裕だろ。

だが、この高地の全体像を把握したいので、限界近くまで高度を上げた。

高度が高くなると、テーブル状の高地の様子が徐々に露わになる。アストランティアの街も見えるが、高地へ繋がるような道も見当たらないし、開発が入っているような節も見えない。

高地は、まだ奥へと続いているようだが、果てがどうなっているのかはよく見えない。

だが、山と繋がったりしているようには見えない。

ここの滝へ流れてきている川は、この高地で集められた水だけで潤っているのだろうか？

ギアナ高地にはエンジェルフォールという巨大な滝があるが、あの流れも高地の水だけで成り立っていたと思う。

「これはいけるか？」

俺は、ドローンを収容して上に登る方法を模索し始めた。

「何をやってるの？」

やって来たのは、首に双眼鏡を掛けているアネモネだ。

「この壁の上にも森があるので、上に登ってみようかと思ってな」

「こんなところを登れるの？」

「まあ、何か方法はあると思う」

「へえ……」

アネモネが双眼鏡を使って壁を覗いている。

「何か見えるか？」

「縞々の岩が見える——あ！ 鳥の巣があるよ！ 雛が頭を出してる！ 凹んだ所に花も咲いてる！」

こんな壁の隙間にも植物が生えてるんだよね。

凄い珍しい鳥の卵等なら、崖を登る価値もありそうだが——。

元世界のツバメの巣なんかは、断崖絶壁に足場を組んだ所で採取してたよね。

「あ！ あれ、なんだろう？！」

双眼鏡を覗いていたアネモネが、俺の興味を引くような声を上げた。

「なんだ？ なんかに珍しい物があるそうか？」

「岩の中に炎色の石が見える……」

この世界にはオレンジも橙もないので炎色なのだ。

「石？ 光ってるのか？」

「うん、キラキラして見える」

アネモネが指差す方向を見ると、黒い縞々の地層に沿って、オレンジ色の線が微かに見えるような気がする。

何か宝石か？ こりゃ確かめねば。

俺は再びドローンを出すと、そのオレンジ色の下へ向かわせた。コントローラーのモニターに映し出されたのは――岩の間に挟まれた、オレンジ色の透き通る石の層。確かに宝石っぽい。しかし、オレンジ色の宝石ってあったかな？

実際に採取して調べてみないと解らない。その場所は崖の上部にあるので何か方法を考えねば。

「うーん、高い場所と言えば――高所作業車？」

早速、シャングリ・ラを検索してみる。

売っているな――色々と車種があるが、250万円～450万円ほどの値段だ。

大型の物でアームの長さが15mというのがある。ここの崖は10m程なので、こいつを買えば余裕だ。

だが崖の高さは正確には計っていないので、詳細は不明。

「正確な高さが知りたいな……」

シャングリ・ラでレーザー式の距離計を検索する。前に林業をする人が持っていたのを覚えていたのだ。

日本のニオン製で1万5千円。説明によると550mまで測れるらしいが、他にも使い道が色々あるだろう。

敵との距離を正確に計ったりとかな――敵って誰だよ。

「ポチッとな」

自分で突っ込みを入れて購入ボタンを押すと、レーザー距離計が落ちてきた。早速使ってみる。

装置をビデオカメラのように握り、覗きこんで親指でボタンを押すと中に距離が表示された――12mだ。

こりゃ使える。

それなら、アームが15mの高所作業車を買えば解決するな。

待て待て！ なんでも重機で解決するのは止めようじゃないか。

高所作業車ってのは動かしている間、車のエンジンも回りっぱなしだからな。

掘削作業などをするなら、やはり足場を組むのが得策だろう。

シャングリ・ラには工事現場等の足場に使う単管やクランプ、ジョイント等が売っている。

先ずは10mの単管の足場を組んで、そこから最後の2mは梯子を使って崖の上に登る――ってのはどうだ？

非常時には上の梯子だけ外せば、足場は丸ごとアイテムBOXへ入れられる。

高いビル等の足場にも単管パイプは使われている、このぐらいの高さでも問題はないだろう。

俺は、崖に光るオレンジ色の宝石らしき物を調べ、更に崖の上を開拓するために足場を組む事に決めた。

47話 崖の上

崖に埋まっているオレンジ色の石を採取するため――。

そして更に、崖の上に広がる前人未到の森を目指すため、俺は工事用の足場に使われる単管という鉄パイプを使って、上に登るための足掛かりを作ることにした。

まずは、足場を組むための土台を作る。足場を置くなら水平になくちやイカンからな。

「ユ○ボ召喚！」

呼び出した重機に乗り込むと、足場を作る場所の地ならしを始めた。

燃料は魔道具を使用して作ったバイオディーゼル燃料がタツプりとある。

地面が水平になったら板を敷き、単管を立てるための固定ベースを8個置く――400円×8個で3200円。

そこに3mの単管を立てていくのだが幅は1mだ。つまり、3m×3m×幅1mの骨組みの箱を9個積み重ねて、足場を作るわけだ。単管を組むためには、黄色にメッキされた単管クランプという物を使い――こいつのナットを電動ドライバで締めていく。

「何を始めたにゃ？」

「鉄の管で、この崖を登るための足場を作ろうと思ってな」

「この崖を登るにゃ？」

「多分、誰も登った事がないと思うから、葉草やらが一杯あると思うぞ」

「魔物や獲物もいるにゃ？」

「魔物や動物がこの崖を登れると思えないんだが——上には動物はいないんじゃないか？　鳥は飛べるから住んでいると思うが」

高い木から飛び移ったりする事はあるかな？　実際、どうなっているかは、行ってみない事には解らないが。

「面白そうだなー！　手伝うにゃ」

「おお、頼む。力持ちのミャレーがいれば助かるよ」

一応、設計図も描いた。

1 mの単管2000円が24本——4万8千円

3 mの単管3000円が48本——14万4千円

筋交いに4 mの単管が欲しいのだが、売ってないようなので、2 mの単管を連結して使う事にした。

2 mの単管2500円が42本——10万5千円

これに、管を連結するためのジョイントと単管クランプを山のよ
うに使う——全部で10万円前後か。

おっと、上に登るための階段を忘れていたな。

2 m＋2 mの単管を45度の角度で取り付け、そこに自在ステ
ップという板を設置して階段を作る。

各階段には板が10枚必要だ——階段の材料費はざっと14万円
也。

それと足場には水平の板が必要だ——長足場と言うらしい、こ
いが8枚で8万円

めて約62万円の材料費プラス人件費無料。

高所作業車を買えば400万円はするのだから、かなり安い。

崖の岩を削って階段等を作ったら、いつ出来上がるのか解ったも
のではない。

だが、この単管を使った足場なら数日で組み上がる。

本当は崖の上まで足場を組むことが出来ればいいのだが、これ以上デカくすると、アイテムBOXへ入らなくなる。

こんなオーバーテクノロジーを放置して逃げないとダメ——そんな事態になったら困るからな。

そんなに色々心配なら何もしない選択もあるのだが——いくらスローライフとはいえ、そんなのはつまらないじゃないか。

崖に埋まっているオレンジ色の石もそうだが、上の森にもお宝があるかもしれないのに。

電動ドライバーをもう1台買って、ミャレーに単管クランプを締めさせてみたが、上手いこと道具を使う。

こういう単純作業は得意なようだ。そして高い所にも平気で登っていく。

安全帯を付けろと言っても、要らないと言う——高さに対する恐怖心が全くないようだ。

「私もやる！」

俺とミャレーの作業を見ていたアネモネも手伝うと言う。まあ、電動ドライバーを使って、ボルト締めぐらいは出来るか。

勿論、アネモネには安全帯を付けて、使い方もしっかりと教える。もちろん子供だと過保護にしないで、出来る事はやらせる。俺自身も、もっと彼女を信頼してやらねばならない。

彼女達に手伝ってもらった結果、3日で足場は完成した。

安全のために崖にもアンカーを打ち込んでロープを使って固定しているが、こんな物を作るのは初めてで、これで安全なのかも不明なのだが……。

「おお！ やった！ 完成した！ いやあ、為せば成るもんだな」

「にゃー！」

ミヤレーは足場へ駆けていくと、まるでジャングルジムへ登るように、次々と鉄パイプを伝って上に登っていく。

「うみゃー！ 高いにゃー！」

「私も登る！」

アネモネは単管で作られた階段を登って上にいくと、ミヤレーと一緒に氣勢を上げている。

気がつけば、いつの間にかベルもやって来て足場を隅々まで調べていた。

俺も階段を登り、そこから見える景色を眺めて楽しんでいたのだが――。

「ヤバ！ もう、こんな時間か。ミヤレー！ プリムラを迎えに行ってくる」

完成したのが嬉しくて、プリムラを迎えに行く時間を少々過ぎていた。

この世界には個人用の時計はないが、街の鐘の音で大体の時間が把握出来る。聞くところによると日時計と水時計で時間を計って鐘を鳴らしているらしい。

日時計で正午を決めて、それに合わせて水時計を設定する仕組みだと言う。

俺も、この世界の正午に合わせて時計をセットしている。

慌てて、バイクに跨がり彼女を迎えに行くと、既にプリムラは街道で待っていた。

「御免よ、プリムラ」

「いいえ――崖で作っていた物は完成しましたか？」

「まあ、おおよそな」

「よっ！ 旦那！」

今日もプリムラの護衛——ニヤメナが一緒だ。

「今日も遊びに行っていていいかい？」

「言っておくが、もうお客さん扱いはしないぞ？」

「はは、解ってるよ旦那」

ニヤメナと一緒に家へ帰り、出来上がった足場を彼女に見せた。

「こりゃ一体なんだい？」

ニヤメナは一言漏らし、足場へ走っていくと鉄棒の蹴上がりのように次々と上に登って、こちらを見下ろしている。

どうも獣人は、この手の物を見ると登らずにはいられない種族のようだ。

「そこから、上の崖に登ろうと思ってな！」

足場のてっぺんにいるニヤメナに声を掛けると、彼女が飛び降りてきた。

身の軽さがもの凄いな。特撮無しでアクション映画を見ているような感じだ。

「上に登るって？」

「この崖の上に登った話って聞いた事があるのか？」

「いや、ないねえ。大体、どうなっているのかも解らないし」

「上にも森があって、あそこの滝はこの高地だけの水で潤っている。そして——多分、何処にも繋がっていないから魔物もいない」

「なんで、そんな事が解るんだい？」

「魔法を使って空から見たからな」

「はあ……？」

ニヤメナが呆れたように、掌を上に向けた。俺の言う事を信用し

ていないのだろう。

「あの……ケンイチ」

「なんだい、プリムラ？」

「前から聞こうと思ってたんですけど……こういった鉄の管やらが、沢山アイテムBOXの中へ入っているのですか？ それに、私達が毎日食べている柔らかいパンとか——」

「さすがプリムラ、気がついてしまったか……実はな、俺が魔法で作りに出しているんだよ」

「パンをですか……？」

「そう」

彼女も俺の言葉を信用していないような顔をしているのだが。

「ほらほら、段々俺が信用出来なくなってきただろ？ 帰るならいまのうちだぞ？」

ちよつと強引にプリムラを抱き寄せて口づけをする。

彼女も嫌がる風でもなしに、それを受け入れているのだが——。

「帰りません……」

彼女のその言葉を聞きながら、腰から尻へと撫^なでて太腿の辺りで止めた。

「旦那あ——そういう事を目の前でやるのは勘弁してくれませんかねえ、俺には目の毒だ」

「なんだ、良い女なのに相手がいないのか？」

「は！ くだらん男なんて、こっちから願い下げだねえ」

「ケンイチ——！」

「にゃ——！」

家から、アネモネとミャレーがやって来たので、家に戻る事にし

た。

夕飯の後、皆で風呂に入る事に。また、アネモネの魔法の出番だ。

「だが、待てよ……」

道具屋の爺さんが、アルミを触媒にして魔法の出力を上げられると話していたな。

実際に使ってみて、威力も上がったらしい……。

試しにアネモネにも使わせてみるか。

俺は、シャングリ・ラからアルミ板を購入して、彼女に手渡してみた。

「アネモネ、この金属を握って魔法を使ってみな」

「これ？」

「この金属があると、魔法の威力が上がるらしい」

「ああ、道具屋の爺さんもそんな事を言ってたにゃ」

耳の良いミヤレーは、俺達の会話を聞いていたようだ。

「うん、やってみる！」

2つ並べたドラム缶風呂に水を入れて、その前にアネモネが立つと精神を集中し始めた。

追加したドラム缶風呂の方にも簡単な上り台を付けてあるが、それを外して彼女の魔法に備える。

アネモネの精神集中に呼応するかのようには、空中から煌めく青い光が生まれて集まっていく。

『むゝ！ 憤怒の炎！』
ファイヤーボール

顕現した火炎は巨大な炎の柱と化して、ドラム缶を包み込んだ。

「おわっ！ あちちっ！」

凄い熱量だ。威力凄すぎだろ！　これじゃ、牙熊も一発で黒焦げになるぞ。

そして、突然火が消える。普通の炎と違うところはここだな。突然現れて突然消える。

ドラム缶はカチカチと音を立てて、かなりの熱量で炙られたのが解る。元世界の家で使っていた薪ストーブを思い出した。

「凄いにゃ！」

「こんな小さい子が凄いねえ！　これだけの威力の魔法はベテラン冒険者でもそうそういないよ」

歴戦らしいニヤメナが言うのだから間違いないだろう。

「び、びっくりしたあ！」

その魔法を使った本人が一番びっくりしている。

「魔法を使った感じはどうなんだ？　いつもより沢山魔力を使って疲れたとか？」

「ううん、そんな事ないよ。前と同じぐらいかな？」

「それじゃ、前と同じ威力なら、少ない魔力で沢山魔法が使えるって事か」

「うん、そんな感じかな……」

どうやら、未知の体験なのでアネモネも戸惑っているようだ。

「あちゃー！　これ、お湯が熱すぎるにゃ！」

風呂に手をつっ込んだミヤレーが飛び上がった。！

「どれどれ？　あちっ！　マジで熱い！」

こりゃ熱くて入られない。薪を使わないで風呂が沸く程の威力って事か。

「どうするにゃ？」

「まあ、このお湯をそっちの風呂へいれて、水で埋めればいいだろ」
「ああ、そうだにゃ！ さすが、ケンイチにゃ」

こんな事で感心されても困るな。

とにかく、魔法1発で風呂が2つ沸いてしまった。こりゃ便利だ。
アルミなら、シヤングリ・ラでいくらでも手に入るしな。

だが、爺さんの魔法でも解っていた事だが——こりゃアルミの流出を防がないといけないな。

今日作った足場から崖の上に登るために、アルミ梯子を使おうと思ったが、それは止めるか……。

何かあって梯子を回収出来なかったりすると、トラブルになりそうだ。

これだけ威力が上がるなら、悪用や戦に使おうとする奴が出るに決まっている。

もし人に渡すのなら、慎重に人選をしなければならないな。

崖の上に登る手段は——普通に45度の単管で、また階段を作っておいた方が良さそうだ。

一体化しなければ、別々にアイテムBOXへ収納出来るだろう。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

——次の日。

プリムラに聞くと今日は休みにすると言う——どうやら俺が作った足場が気になるようだ。

皆で寝たベッドをアイテムBOXへ収納した後、そこにテーブルを出すと牛乳を掛けたグラノーラと一緒に食べる。

「だって、気になるでしょ？」

「俺も気になるねえ。お！ これもパリパリしてて甘くて美味えなあ、こんな美味しい物ばかり食っていいのかね」

ニャメナもグラノーラの味が気に入ったようだ。

「崖の上には誰も登った事がないんだろ？」

「そりゃ旦那。あんな凄い物を誰も作れないし。岩を削って階段を作るとなると、国の事業じゃないと無理だよ。少なくとも俺は聞いたことがないねえ」

「これだけ世界は広いんだ、変わり者が1人ぐらいいてもいいと思うがなあ」

「そんな変わり者は旦那が初めてって事さ」

「そうか」

「そうですわ」

プリムラも俺を変わり者だと思っているらしい。実際に異世界人で変わり者だからな、仕方ない。

皆で朝食を食い終わった後、最後の仕上げに取り掛かる。

1mと3mの単管、そして自在ステップを組み合わせて、45度の階段を作って足場の上に置く。

足場は、3mの単管を縦に3本使ったので地上から9mだが、その足場の天辺と同じ高さにオレンジ色の石の層が斜めに入っている。この石を採掘したいのだ。キラキラと光る透明なオレンジ色の石が輝いている。採掘の邪魔にならないように階段を設置した。

「この石を掘りたいんだよ。そのためにもこの足場を使うつもりだ」「へえー、こりゃ綺麗だね。価値はあるのかい？」

ニャメナも一緒に、オレンジ色の石を興味深そうに見ている。

「とりあえず、掘り出してみないと解らないな」

「けど、金槌とタガネで掘るのは大変だぜ？」

「まあ、いい魔道具があるんだよ。街の奴等には話すなよ」
「解ってるよ。世話になってるのに、そんな事をするはずがないじゃないか」

最後に設置した階段の天辺から崖の上へ4 mの長足場を渡せばいい。1枚だと狭くて危険なので、3枚を並列に設置して、ずり落ちないようにロープを使って固定した。

これで落ちる事はないだろう。

さて、渡ってみるか——と、思ったのだが。

——崖の上は丈の長い草に覆われている……。長足場が緑を分けて向こうへ渡っているのだから、間違いなく接地しているはずなのだが……。

なんとも言えない不安が残る。

「にゃー！」

ミャレーがぴよんぴよんと足場の上を飛んで崖の上に一番乗りをした。

「大丈夫か？」

「大丈夫だにゃ！　だって、ケンイチが作った物だにゃ！」

いやいや、ちょっと信用しすぎだろ。獣人の恐怖心のなさが少々羨ましい——ビビりながら、俺も足場を渡り崖の上に到着した。

「やった！」

崖の上からの展望は素晴らしい、キラキラと光る湖面が眼下に見渡せる。

しかし下を見ると当然ながら急転直下で奈落の底だ。キン○マがムズムズする——通称タマヒュンだ。

キン○マがない女にはない現象と思いきや、女にも同様な感覚があるらしい。

「おおっ！ いい眺め！」

足場の上から2mの違いだが、また違う景色に見えるような気がする。

俺が喜んでいると、下から声が聞こえた。

「ケンイチ、私もそっちへ行きたい」

アネモネの声だが少々待ってもらおう。草が伸び放題なので、どこが崖の縁か解り難いのだ。

「アネモネ、ちょっと待て。今、草を刈るから」

アイテムBOXから草刈機を取り出すと、バリバリと草を刈り始める。

「な！ なんの音だ？！」

けたたましいエンジンの音に、ニャメナが戸惑っている。

「草刈の魔法の音だ。直ぐに終わる」

周囲をぐるりと刈って、崖の縁が見えるようになった。渡した長足場の端に杭を打ち込むと、こちらからも動かないように固定した。

「ケンイチ！ 行ってもいい？」

「ああ、いいぞ。気をつけてな」

「うん」

アネモネがプリムラと一緒に階段を手を付いて上り、恐る恐る長足場を渡ってくるのを抱きとめた。

「わああ、凄い！ 湖の端まで見えるね」

「ああ、あそこにサンタンカの村も見えるぞ。だが村の他には、湖の周囲に人が住んでいるような節は見えないな」

クロトンの一件以来、サンタンカの連中は何も言っていない。こちらには全く興味がないようだ。

それに、クロトンというよそ者を入れたために、トラブルを引き込んでしまったのだから、余計に排他的になったのかもしれない。干渉されるのは好きじゃないから、好都合って言えば好都合なのだが。

「本当に崖の上に上れるとは……旦那、凄すぎるよ！」

「人には内緒でな」

「こんなの誰も信用してくれないよ」

ニャメナが呆れた顔をするのだが――それを見たプリムラが笑う。

「ふふ、皆さん同じ事を仰るのね」

プリムラの言うとおりだな。

金属のパイプで数日で足場を組んで、崖の上に上るための階段を作った――なんて言っても誰も信じないだろう。

「にゃー！」

喜び勇んでミャレーが森の中へ駆け込んでいくと――それに一緒についていく黒い影。

いつの間にか階段を上ってきていた、ベルだった。

梯子だと彼女は上れなかったかもしれないが、この階段なら森猫でも上れるのだろう。

「おいおい、もうちょっと慎重になれ！」

「旦那、怪しい気配はないけどねえ」

「そうなのか？」

獣人達は警戒していないし、ベルもそうだ――という事は大丈夫なのだろう。

しかし、こうやって突っ込んでいって、デカイ魔物をトレインさ

れるのは困るんだがなあ。

「ケンイチ！ いい物があるにゃ！ こっちへ来るにゃ！」

「なんだなんだ」

ミヤレーの大声に惹かれて、森の中へ脚を踏み入れる。

中へ入れば薄暗いので下草が殆ど茂らず腐葉土が見えるのは下の森と一緒にだ。

ミヤレーが叫んでいる場所へ向かうと大木の周りに薄っすらと白い輪が見え、そこから細長い物が生えている。

「ノビキノコにゃ」

「これがそうか」

この細長いのが伸びきると、小さな傘を開いてすぐに枯れると言う。それ故、傘が開く前の物が採取に向いているらしい。

「早速、採って晩飯に使おう」

確かに、このキノコは分かりやすく、目にもつきやすい。

キノコの場所から戻ってくると、アネモネとプリムラが薬草を探していた。

「ケンイチ！ ケンイチが刈った草の中にも赤露草があったよ」

「本当か？ 気が付かなかったな」

「俺が探してやるよ。足元にあるなら匂いで直ぐに解るから」

ニヤメナが自慢の鼻で手伝ってくれるようだ。

「頼むよ。ノビキノコで美味しい晩飯を奢るからな」

「そいつは楽しみだね」

やはり、この崖の上は当たりだったようだ。

「アネモネ、プリムラ、あまり崖の端には行くなよ。崩れて落ちるかもしれないからな」

「うん」

「解りました」

しかし子供に、こんな危険な場所へ来させるのはなあ——とは言っても、この世界じゃ12歳になれば、働き始めて大人扱いされるって話だし……。

子供扱いは良くないのか——子供なんて全く縁がなかったのに、いきなり子持ちみたいなものだからな。
どう接していいものか……悩むねえ。

48話 ロードナイト

俺たちが組んだ足場を使って崖の上へ上ると、そこには手付かずの薬草やキノコが豊富に生えていた。

やはり、人が足を踏み入れていない土地には獲物が豊富にあったのだ。

午前中は薬草の搜索に力を入れて、50本近い薬草を手に入れた――大漁だ。

昼飯には早速、採ったノビキノコを使って料理を試みる事にした。

キノコパスタが良いと思ったのだが、この世界の人間には長いパスタの人気がない。マカロニにも拒否反応を示していた。

多分、類似の食べ物がないせいだと思うが……四角いのや蝶々型のパスタなら大丈夫かもしれない……。

だが、嫌がっているのに無理に食わせる必要もない。彼らにも食えて、美味しい物を作れば良いのだ。

そこで餃子にしてみた。

小麦粉を練って、中に肉を詰めた料理がこの世界にもあるらしいので、これなら拒否反応は出ないだろう。

餃子の皮から作るの面倒なので、シャングリ・ラから買う。

「ケンイチ、それは何ですか？」

「うーん、小麦粉を練った物を薄く延ばした物だよ。これに肉や野菜を詰めて焼くんだ」

肉は臭みを取るために牛乳に浸けておいた熊肉を使う。皮の中に

閉じ込めて焼くので、アルコールに漬けた物は合わないだろう。

それをひき肉にするために、ひき肉マシーン——ミンサーを買う、
2500円だ。

「アネモネ、手を洗ってから、肉をこいつに入れて、取っ手を回してくれ」

「回すとうなるの？」

「肉が潰れて出てくる」

「解った！」

川で手を洗ってきたアネモネが、ミンサーに肉を入れて一心不乱にハンドルを回している。

「すごい！ おもしろーい！」

「プリムラは、この野菜を刻んでくれ。なるべく細かく」

「はい……これは？」

「葉っぱを食べる野菜だよ」

俺がアイテムBOXから取り出したのは白菜。やっぱり餃子と言えど白菜だろう。ウチの実家はキャベツを入れたりしてたが。

出来上がったひき肉に塩——それと中華ダシを少々投入。そして今回の主役ノビキノコを刻んで入れてよくタネを練る。

野菜を刻んだり練ったりするのはフードプロセッサーでも良いのだが、人手があるのだから手伝ってもらった方がいい。

ただ、こういう時に獣人は役に立たない。手伝わせると毛が混入してしまうからな。

そして出来上がったタネを皮に包むのだが、ここでシャングリラの出番だ。

餃子包み器なる物が700円ぐらいで売っているのだ。これをつ購入して、アネモネに手伝ってもらおう。

「アネモネ、この薄い皮に出来上がったタネを入れて、周りに溶いた小麦粉を塗る——そしてペタンと閉じる。ほら完成だ。出来るか？」

「うん、出来る！」

2人でペタペタと餃子を作りつつ、プリムラにはカセットコンロと鉄板で焼き始めてもらう。

だが、焼きあがった餃子を獣人達がつまみ食いをしている。

「うみゃー！」

「こいつは、美味しいねえ！ 全く熊肉がこんなに美味しい料理になっちまうんだから……」

「こらこら、つまみ食いをするな。何個分けるのか解らなくなるだろう」

「ふみゃ」

俺の言葉に、ミヤレーが慌てて手を引っ込めた。

焼きあがった餃子はべて70個。これだけあれば十分だろう。残ったらアイテムBOXへ入れれば良い。

餃子だけが——餃子の皮は小麦粉だし炭水化物で、肉と野菜も入っている。これだけでほぼ完全食だ。

タレは——俺は醤油とラー油だが、この世界の人間は醤油が苦手のようなので、塩とマヨネーズを出してみた。

マヨネーズは邪道かもしれんが、ソースよりはマシなのではあるまいか。

しかし、餃子を醤油以外で食えと言われた事がないからな。だが、ソースと辛子で食ってる奴も見ることがあるような……。

肉に練り込んだ塩でも、それなりに味は付いているのだが。

「美味しい！」

「あふっ！ 中から肉汁が……」

皆、マヨネーズを付けて食べているようだが、アネモネとプリムラにも好評だな。

どれ俺も1つ——うん、熊肉だが餃子にしても、そんなに違和感はないな。こういう料理ですと言えば、こういう料理だ。

それに、一緒に入れたキノコがいい味を出している。これはマジで美味しいキノコだな。

元世界で言えば、ホンシメジ級だ。

「皮をもつと厚くすれば、スープに入れても良いな」

「それは美味しそうですわ。私の店でも売ってみたいと」

「でも、それだけ手間が掛かるぞ？」

「街で人を雇って、手伝われば良いのです」

さすが商売人だな、俺は1人で何とかしようって考えてしまうのだが、最初から人を使う前提で商売の予定を立てている。

「ケンイチ、料理の際に粉を入れているようなのですが、あれは何ですか？」

「海に生えている海藻や、魚の干した物を砕いて粉にした物だよ。あれを入れると味に深みが出る」

旨味と言っても解らないだろうからな。

「にゃー！　それで、肉料理なのに、魚の味がしたりするのにゃ」
ミヤレーはカツオダシの味に気がついていたようだ。

「けど、実際に魚の干物をスープに使ったりするのは結構難しい。長く煮込んだりすると魚臭くなってしまったりするからな」

「美味しい料理を作るのは優れた知識と手間暇が掛かるものなのですね」

皆で美味しく餃子を食べた後、午後の作業に入る。

アネモネとプリムラは崖の上で薬草探し、ミヤレーとニヤメナは森の中の探索。

そして俺は、崖の途中にあるオレンジ色の岩の調査に乗り出した。

足場の天辺から1m程の所に黒い地層が斜めに走り、その中に鮮やかな色の塊が点在している。

オレンジ色と言っても、ミカンのような色ではない。ずっと赤みが掛かって深い色合いだ。

先ずは、崖と足場の間に少々隙間が空いているので、それを埋めるために板を貼った。

そして掘り出した石が下へ落ちないようにブルーシートをガムテープで崖に貼り付ける。

さて、どうやって掘削するか――。

普通に電動ハンマで良いだろ。道路工事等でダダダ！ とコンクリートを砕いたりしているあれだ。

しかし、ハンマなのかハンマーなのか――メーカーによって呼び名が違うのか、それとも何か登録商標なのか？

シャングリ・ラを検索すると色々と売っているが、日○製の5万円のを購入してみた。

大は小を兼ねる。鉋石を掘り出すとなれば少々大型の方が良いだろう。

そして、アイテムBOXからディーゼル発電機を取り出した。さすがに、こいつを動かすのにモバイルバッテリーはパワー不足だ。

この発電機も、すぐにお払い箱かと思ったのだが殊の外役に立っている。こいつの実力を少々侮っていたぜ。

電動ハンマを発電機へ繋いで、リコイルスターターを引っ張ると、一発でエンジンが始動した。

しかし、相変わらず煩いエンジンだ。

「さて、行ってみるか……」

ハンマを構えて、トリガーを引く——動き出したのだが振動に力がない。しかも動き出しが悪いこともあるのだ。

発電機もエンジン全開になっている——こりゃ容量不足だな。つまり発電量が足りていない。

これって、並列運転が可能なのだろうか？ 最近の発電機であれば、物を並列に繋いで容量をアップする事が出来る。

シャングリ・ラで以前買ったページを探してみた——が、無い！ ページそのものが無い。こりゃ売り逃げか？ ったく、これだから彼の国製は……。

これじゃ故障したり、ハズレを引いたら、そこで終了じゃないか。仕方ない、もう一つのガソリン発電機を使おう。こちらは日本のY葉製で並列運転も可能な2kW出力の大型だ。

こいつなら大丈夫だろう。ガソリンは2スト用の混合燃料しかなく、少々白い煙を吐くが問題ない。

無論、長期的には問題が出るかもしれないが。

そうだ、あの液体を分ける魔道具で混合燃料から2ストオイル成分を抜けないかな？

そうすれば、普通のガソリンとして使えそうなのだが……。

ディーゼル発電機をアイテムBOXへ収納して、仕切り直す。

「よし！ 行くぞ！」

発電機を回してトリガーを引くと、勢い良くハンマが振動を始めて岩を次々と崩していく。

「なにになに?!」

崖の上からアネモネが覗きこんでいる。

「ケンイチ何をしているの？」

「ここに綺麗な石があるから掘ってるんだよ」

「後で見せてね」

「ああ」

数分で、拳大の濃いオレンジ色の石が転げ落ちた。そして、透き通った石を天に翳す――。

「結構綺麗だな。しかし、こんな色の宝石ってあったっけ？」

こんな時はアイテムBOXへ放り込む。こいつに名前があれば、画面に表示されるはずだ。

――そして、画面に出てきたのは【薔薇輝石】

「薔薇輝石？ ナンジャラホイ？」

それ以上は解らない。こういう時は、シャングリ・ラだな。鉱石関係の電子書籍を物色する。

これが良いか――【カラー図鑑、サルでも解る鉱石&宝石の本】

「ポチツとな」

早速、電子書籍を開いて、薔薇輝石を調べてみる事にした。

何々……薔薇輝石、ロードナイトケイ酸塩鉱物の一種でマンガン鉱床に産出する。

へえ、こんな石があるのを初めて知ったよ。知る人ぞ知る石なのか？　もしかして貴重？

こんな時も簡単、シャングリ・ラの買い取り査定へ入れて見れば良いのだ。

「どれどれ……？」

【査定・買い取りしますか？】

よろしく願いしますよ――ポチツとな。

【査定結果】 【薔薇輝石 買い取り値段20万円】

20万円？ マジで？ こんな石が？ いや、これが宝石なら、原石の大きさとすればかなり大きい。

むしろダイヤモンド等に比べたら安いかもしれん。ダイヤやルビーでこんな大きさの原石があったら数十億円だろう。

しかし、金になる事は解ったし、これ1個で電動ハンマと発電機の元が取れた事になる。

いやまてまて、まだ慌てる時間じゃない。この足場の元も取らない限りは安心は出来ないじゃないか。

だが、オレンジ色の石はまだまだある。これは、ひょっとして楽勝か？

「これって当然、原石の大きさがデカイ方が査定が高いだろうな……よし！」

電動ハンマを駆使してなるべく大きな原石を取れるように、作業を開始した。

長足場の上を安全帯を付けたまま電動ハンマを振り回して、あっちへこっちへ――。

ここがすっかり地上から9mの高さだと忘れている。

そのまま夕方まで作業を続行して最初の石より二回り大きい原石と、それよりちょっと大きめの原石を掘り出した。

シャングリ・ラの査定結果は――40万円と60万円。

「よっしゃー！ 元は十分に取った」

しかも、この石でチャージすれば、シャングリ・ラ・ブラックホールに、この世界の金を入れずに済む。

見た所、炭色の地層の中に埋もれている感じなので、他の黒い所

も掘り返せば、まだあるかもしれない。

これは、大々的に掘削した方が良いか？

油圧ブレーカを搭載した大型重機を買えばもっとガンガン掘れるぜ。

いや——待て待て。何でも重機で解決させるのは止めようと、自ら戒めたばかりじゃないか。

デカイ重機を買って掘り出したのが、これだけだったらどうする？
しばらく、これで様子を見るとしよう。

辺りが暗くなり始めたので、上にいるアネモネとプリムラに声を掛ける。

「おおーい、そろそろ飯にしよう」

「はーい！」

彼女達が上から階段を降りてきた。

「ほらアネモネ、これが石だ」

俺は最初に掘り出した拳大のオレンジ色の石を彼女に見せた。

「あゝ綺麗！」

「これで、どのぐらいの価値があるのですか？」

商人のプリムラは値段が気になるようだな。

「解らない——街へ行って、道具屋の婆さんにでも聞いてみるか」
シャングリ・ラの査定は20万円だったが、この世界での値段はいくらなのか？
例えば、金貨数枚とかなら、街で換金した方が効率が良いという事になるな。

「ミヤレーとニャメナは？ どこへ行っただ？」

「わかんない」

「まあ、彼奴等は夜目が利くんだ。暗くなったら戻ってくるだろう。それまでに飯の用意をするか」

「うん！」

皆で足場を降りて、家に帰ってきた。

外でスープを作り、テーブルの上に、いつものパンを出す。

メインディッシュは、ブランデーに漬けた熊肉のステーキだ。

鉄板で焼きながら、豪快に火を付けてアルコールを飛ばす。

「わあ！」

立ち上る炎にアネモネがたじろぐ。いやいや、君の魔法の方が凄
いから。

ただ魔法を使っている時は一種のトランス状態なので、あまり感情
の変化がないらしい。

それ故、自分の炎に驚く事もないと言う。

肉を焼く匂いに誘われてきたのか、暗闇の中からベルがやって来
た。

——と、いう事は、あいつ等も帰ってくる頃だろう。

「にゃー！」

「おおい！」

ほら、帰ってきた。

「遅かったな、どこまで行ってたんだよ」

「かなり奥まで行ってきたよ。旦那の言うとおり、このデカイ柵は
どこにも繋がってないね。魔物もまるつきりいない」

「にゃー！ でも、鳥はいたにゃ」

「そりゃ、鳥は空を飛べるからなあ。崖は関係ないだろう」

2人共、鳥を3羽ずつ仕留めたようだ。青や白や色とりどりの
鳥を手を持っている。

「ケンイチ、街へ売りに行くまでアイテムBOXに入れてにゃ」

「場所があったら、俺のも入れてくれ」

「ああ、いいけど、でもメシ代として1羽徴収するぞ」

「それぐらい構わないよ。街じゃ普通の金を払っても食えないような飯ばかりだし」

「ケンイチ！ これも見つけたにゃ」

ミャレーが差し出したのは、少々緑掛かった小さな卵。ウズラの卵より少し大きい。

「卵？」

「これにゃ、コッカ鳥っていう、高級食材になるにゃ」

「1個どのぐらいするんだ？」

「多分、銅貨2枚（2000円）以上しますわ」

この卵の事は、プリムラも知っていたようだ。

そりゃ高いな。こんな小さな卵が1個2000円か——ちなみに、この世界では卵1個2000円ぐらいな。

コッカ鳥の親鳥も、かなり美味いらしい。ミャレーがしばらく巢に張り付いて待っていたらしいのだが、気取られたようで親鳥は帰ってこなかったようだ。

「ケンイチ、この卵もお願いにゃ」

「まあ、割れたら大損だからな」

卵は5個、全部で1万円か——しかし、これは売値だ。卸値は5千円ぐらいだろう。

「なんじゃこりゃ！」

熊肉のステーキを食った、ニャメナが叫んだ。

「どうした？ 口に合わなかったか？」

「逆だよ、美味すぎるんだけど。でも、なんだろうこの香りはワインじゃないだろうし……」

「ああ、熊肉の臭いを消すために漬けた酒の匂いだよ」

「酒?! 旦那、ちよいと頼みがあるんだけど」

「なんだ?」

「今日の獲物を全部あげるから、その酒を飲ませてくれないかな」

「ああ、少しだけならいいぞ」

俺は、カップを出すと、アイテムBOXから出したブランデーを半分だけ注いだ。料理に使うので、1本1000円ぐらいの安いやつだ。

「かなり強い酒だから、注意してな」

「おお、いい香り!」

そして、ニヤメナがブランデーを一口含むと黙った。

「どうした?」

「ああもう、俺はこんな贅沢をして、街で暮らすのが辛くなっちゃまうよ。こんなの味わっちゃったら、街で飯が食えないじゃないか」

「自分が不幸なのを知らないってのは幸せなんだぜ」

「とほほ……」

「にゃあ! 美味いにゃ! ニヤメナじゃないけど、熊肉がこんなに美味くなるにゃんて」

「美味しいね」

「これだけで、高級店が開けますわ」

「俺は興味がないから、プリムラが料理を教えて誰かにやらせればいい」

「けど、ケンイチが持っている美味しいお酒がないと……」

「酒造りは専門じゃないから、どうやって作るのかは解らないなあ。けどワイン煮なら出来るな」

「でも、あのワインも貴族が飲んでいるような上等な物ですよ？」

「ああ、ノースポール男爵も、そう言っていたな」

プリムラと話していると、ニヤメナが絡んできた。

「もう！ どうしてくれるんですかあ、こんな美味い物知っちゃ街に住めませんよお！」

「俺のせいじゃないだろ。こいつ、絡み酒か？」

抱きついてくる彼女を引き離そうとするのだが、獣人のパワーで掴まれたら逃げられない。

「ふぎゃー！ 離れるにゃ！」

「別に盗ったりしないよお。飯だけ食わせて、近くに住まわせてくれればいいんだから」

「まあ、プリムラの護衛として、ニヤメナは必要だな」

「ぎゃー！ こいつは信用出来ないにゃー！」

「そんな事はないだろ、なあプリムラ？」

「ええ、とても正直な方ですよ」

「ぎゃー！」

ミヤレーが煩^{うるさ}いが――彼女は俺が作る料理と酒が目当てのようだ。護衛や狩り手としても優秀なようだしな。

「プリムラが良ければ、俺はいいんだが」

「そうですわね、ニヤメナさんの目当ては料理と酒のようすし」

プリムラの目が、俺の方を睨^{にら}んでいるのだが――別にニヤメナに興味はないぞ。

嫌なら断ればいいと思うが、彼女としてもニヤメナは欲しい人材なのだろう。

女で腕の立つ護衛ってのは中々いないからな。男の護衛だと余程の人物でなければ信頼がおけないだろうし。

「この家は、もういっぱいなので、離れの小屋で寝る事になりそうなんだが、それでいいか？」

「別にいいですよ。寝るだけですし、雨風凌げればあ。今、借りてる部屋だって屋根裏で狭いネズミの住処みたいな所だし」

ニヤメナの呂律が少々怪しい、ブランデーが回っているようだ。

「解った、それで良ければいいぞ。飯は保証する」

「やったあ！」

「ふぎゃー！」

「ミヤレー、別の場所に寝るって言ってるんだからいいだろう？」

「あみやみやみゃ……」

ミヤレーが尻尾をブンブン振り回しているのだが、これはイライラしているのだろう。

だが、あの小屋で彼女がうん——と言うかな？

すでに辺りは真っ暗だ。小屋を出して準備したりするのが間に合わないので、ニヤメナの住処を用意するのは明日にする事にした。

飯を食い終わって後片付けをすると、家の中へ入りプリムラは明日の料理の準備を始めた。

「ケンイチ、熊の肉ってまだありますか？」

「ああ、まだまだタツプリとある」

何せ、肉だけで数百kgだからな。毎日1kg食っても1年近く掛かる。

ミヤレーは、ニヤメナと俺との間に入って、彼女を近づけまいとして威嚇を繰り返している。

そんなに警戒しなくても。

明日は、プリムラと一緒に街へ行って溜まっている獲物を換金し

たり、道具屋の婆さんの所でオレンジ色の石の値段を聞いてこよう
と思う。

49話 村民が増えた

——崖からオレンジ色の石を掘り出した次の日。

どうやら、今日から住人が増えるらしい。昨日の夜は彼女も酒が入っていたからな。本気かどうか一応聞いてみる。

「ニャメナ、昨日の話は本気なのか？ 酔っ払っていたけど、記憶は大丈夫だろうな？」

「確かに強い酒でしたが、そこまで酔うほどじゃありませんよ。ここに住むって話でしょ？ 本気ですよ」

「家ってこれしか無いんだが……」

俺はアイテムBOXから、家の横にガルバリウム鋼板を貼った小屋を取り出した。

「ええ〜っ！ これって鉄の板で出来た家ですか？」

「ああ、魔物に襲われた時に避難出来るように作ったからな」

まあ、薄い鉄板なので気休めかもしれないが——でも、黒狼ぐらいなら防げるだろう。

一応、中も見せる。2.5m×2mで5平米——約3畳だ。

「ベッドも、お前が寝てた物をそのままやるよ」

「本当に、これをもらえるんですか？」

「貸すんだぞ？」

「ええ、解ってますよ。家賃は高いんでしょ？」

「別に要らんぞ。プリムラの仕事を手伝ってくれるなら」
だが、それを聞いた、ニャメナの顔が曇った。

「旦那、俺に一体何をさせるつもりなんで？ そりゃ、旦那のためなら多少の事はやりますがねえ——あっ！もしかして、俺を性奴隷に……」

「変な勘違いをするな。タダで気が引けるってのなら、1ヶ月に四^ケ脚^モの獲物1匹でいい」

「なーんだ、ちょっと期待したのに——賃料は本当ですか？」

——まったく、何を言い出すんだ。

「ああ——でも、この狭い所で本当にいいのか？」

「俺の住んでいる所に比べたら豪邸ですよ」

「いったい、どういう所に住んでいるんだ……」

彼女の話では、物件を借りるにも保証人が必要なので、それが無ければロクな所が無いと言う。

それこそ屋根裏はまだマシで、壁の隙間とかそんな所もあるらしい。

獣人の保証人になる人間なんて滅多にいないそうだから寝る場所があるだけラッキーのようだ。

ミヤレーはどうしていたかというと、あの仲間と一緒に住んでいて、家賃を一括で前払いしていたようだ。なるほど、それなら保証人は必要ない。

今、彼女が住んでいる場所は、天井裏の隙間みたいな場所で半畳ぐらいのスペースらしい。

それに比べたら、この小屋でも上々ってことか……。

とりあえず話は決まった。同居人というよりは村人が1人増えた感じだな。

「話は済みましたか？」

「ああ、決まったよ」

「ふぎゃー！」

ミャレーがまだ反対している。

「家も別にするし、一緒に寝るわけじゃないのだからいいだろう？
村人が1人増えたようなもんだ」

「はは、旦那ならいつでも相手になるんだけど」

ニャメナがミャレーを、からかうように俺に抱きつくとき長い尻尾を絡めてくる。

「ぎゃー！」

「こら、あまりミャレーを、からかうな。そろそろ街へ行くぞ」

「はいよ」

今日は、俺も街へ行って石の価値やらを調べなければならない。
プリムラの荷物をアイテムBOXへ収納すると、オフロードバイクを出し、ヘルメットを被った彼女とタンデムをする。

木漏れ日の中を、ニャメナと並走するとすぐに街が見えてきた。

いつもは、ここで別れ、プリムラがカートを引っ張って市場まで荷物を運んでいくのだが――今日は俺のアイテムBOXがある。

市場まで送っていき、そこで荷物を広げる事にした。

市場へ到着すると、プリムラがいつも商売している場所ではすでに人が待っていた。

「あ、来た来た。早く売っておくれよ」

「はい、ただいま用意致します」

商売スペースの後ろに行き、ニャメナの陰に隠れるようにして、
アイテムBOXから荷物を出した。

「お客さん、そんな壺で買いに来ているのか？」

「ああ、これが夕方と明日の朝のスープってわけさ。スープだけな

ら、1人前が小角銅貨5枚（500円）だろ？ 肉も野菜もたっぷり入っているし——この値段で、こんな美味しいスープは他に無いからねえ」

プリムラの店にはすでに固定客が入るようだ。値段もそこそこで美味いといければ流行るのも無理は無い。

店が流行ると嫌がらせが始まったりするのだが、ニヤメナがいるから、それも大丈夫だろう。

「プリムラ、俺はギルドへ行くけどいいか？」

「はい、荷物ありがとうございます」

ここは彼女に任せて、俺は冒険者ギルドへ行く事にした。

騒々しい市場を出ると、大通りへ引き返し大通り沿いにある冒険者ギルドへ入る。

相変わらず人が多い。カウンターにいる、いつもの巨乳お姉さんに尋ねる——。

「ここは、鉱物の買い取りはしていないのかい？」

「はい、そういう依頼があれば買い取りもしますが——普通は、道具屋等へ持ち込むですよ」

「そうか、ありがとう」

「どういたしまして」

一番端の買い取りカウンターへ向かう。いつもの兄ちゃんが対応してくれる。

「今日は何を持ってきたんだい？」

鳥が7羽に角ウサギが4羽だ、そして穴熊ケモノのような四脚が1頭、全部肉にしよう。

ミヤレーの話では近場の角ウサギは狩り尽くしてしまったようだな。

ゲームとは違うので時間が経てば自動ポップするわけでもない。

それから葉草が昨日の分を入れてめて60本程。

「おっと、葉草が多いな、いい群生地でも見つけたか？」

俺に顔を近づけて、ひそひそ話をしてくる。こういう場合、獲物の採れた位置に聞き耳を立てている奴が多いのだ。

ギルドからそんな情報が漏れたとなれば、責任問題になるからな。商業ギルドのコンプライアンスはザルだが、冒険者ギルドは少々マシらしい。

「まあ、そんなところだ」

「鳥が多いが——殆ど金にならないぜ？」

「肉だけあればいいよ」

「変わってるな」

余程綺麗な羽根を持つ鳥や、ミャレーが捕り損ねたコツカ鳥みたいな獲物でなければ値段は付かないようだ。

「鳥の羽根は一応素材になるのか……」

「ああ矢羽根に使ったり、枕へ入れたり、それぐらいかなあ」

いつものように夕方の仕上がりになると聞き、引き換えのチップをもらう。

受付のお姉さんに軽く挨拶をし、ギルドを出て道具屋の婆さんの所へ向かった。

相変わらず薄暗い道具屋へ入る。

「ちわー、婆さんいるかい」

「おや、兄さんかい」

「ここ、スノーフレークって名前が書いてあるが、婆さんの名前なのかい？」

「そうだよ」

やっぱり、そうなのか。スノーフレークねえ……。

「なんだい、その顔は？ あたしの名前に何か言いたいっていうなら、話を聞こうじゃないか」

「いやいや、いい名前じゃないか」

「ふん——で、何か買いに来たのかい？」

「この石が、いくらぐらいになるかな——と」

俺は、崖から採取した薔薇輝石をアイテムBOXから取り出して婆さんに見せた。

「ふうむ……銀貨2枚（10万円）」

「そんなもんか……」

「こりゃ原石だからねえ。ここから加工に金が掛かるのさ」

「そりゃ、そうだな。まあ、それじゃ売らないで持っているよ」

「ちよっと待ちなよ！ それじゃ銀貨3枚（15万円）！」

婆さんが慌てて、値段を上げてきた。

「いや、いいよ。アイテムBOXの中へ入れておくから」

「それじゃ金貨1枚（20万円）！ これ以上は出せないよ！」

なんだよ結局、シャングリ・ラの買い取りと同じ値段か。

しかし、ここまできて婆さんに売らないと後々サービスが悪くなるかもしれないな。

ここは、婆さんに売っておくか……。

「解った婆さんに売るよ」

「全く、この石の価値を大体把握してたんだろ？ いやらしいねえ」

「まあ、そんなところだが、婆さんだって買い叩こうとしてたじゃないか、お互い様だろ」

婆さんはブツブツ文句を言ってるが、オレンジ色の石と引き換えに金貨1枚をもらう。

これを加工して宝飾品にすれば、金貨5～50枚（100万円～1000万円）って値段になるようだ。ここら辺は元世界と一緒だな。

「兄さん、この前の魔導書は役に立ったかい？」

「ああ、俺はダメだったけど、女の子が使えたよ」

「へえ、あの年でねえ……才能があるよ。学校へ行かせたりしないのかい？」

婆さんは俺と話しながら商品の整理をしていたが、驚いてその手を止めた。

「王都の学校の話も出たんだが、本人が興味無いみたいなんだよ。俺と一緒に暮らしたいんだと」

「勿体ないねえ。王都の学校へ行けば、大店や貴族の愛人ぐらいにはなれるかもしれないのに」

「でも、そういう連中ばかりだから、一般からの入学は大変だと聞いたぞ」

「まあ、そうだねえ」

「婆さんも魔法が使えるようだが、そういう学校へ行ったのかい？」

「ああ、大昔にね」

「そうなのか？ それじゃ、婆さんに浮いた話は無かったのかい？」

「あったよ……あたしも若かったねえ……自分で言うのもなんだけど、学園の華と呼ばれていたもんさ」

「立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花ってやつか」

「芍薬や牡丹が何だか解らないけど、百合の花には、よく例えられたよ」

何か昔を思い出すように――婆さんはじっと商品を見つめている。彼女の話では貴族の子息と恋仲になり子供まで産んだと言う。貴族の目に止まるってことは、やっぱりかなりの美人だったのか。

「ええ？ それじゃ子供はどうしたんだい？」

「貴族に取り上げられてしまって、手切れ金を貰ってそれっきりさ」
この店は、その手切れ金で建てたと言う。

「貴族だと御家騒動とかあるからな。血の繋がった子供を管理するために、取り上げたんだろ」

「まあ、そんなところだね」

王侯貴族の血筋が途絶えてしまって、探したら落とし子がいると判明——急遽、国中を探させる。

そんな話は、ありがちなパターンだ。そうならないように前もって取り上げたのかもしれない。

「子供はどうなったか、全く知らないのかい？」

「いいや、子供も王都の学校を出て貴族と結婚し、孫もいるらしい。その孫も学校を出たようだよ」

「なんだい、随分と詳しいじゃないか」

「結構、有名な王都貴族だからね。噂がここまで伝わってくるってわけさ」

「会いたいとは思わないのか？」

「そりゃ、会いたいけど……二度と会わないって約束で手切れ金も貰ったしねえ……」

婆さんの話では、相手はナスタチウム侯爵という名前の貴族のようだ。

「学校の話はともかく、アネモネには魔法をもう少し覚えさせたいな。婆さん、爆裂魔法等の魔導書があったら、少々高くても買うから」

「あまり出物はないけど——期待しないで待ってな」

とりあえず石は売れたので、市場のプリムラの露店へ戻った。

だが、露店の中に新しい女の子がいる。17歳ぐらいの女の子だ。麻のブラウスと紺のワンピースを着て、長く黒い髪の毛をお下げにしてプレッツェルのように丸くしている。

「ただいま、彼女は？」

「彼女は見習いです」

「これは、お嬢様のお父様ですか？ 初めまして、アイリスと申します」

「ぷっ！ ははは！」

突然、ニヤメナが笑い出した。まあ、父親と言っても過言じゃない歳の差だしなあ……。

「父じゃないよ」

「え?! それじゃ、旦那様ですか？ 失礼いたしました！」

「そうです、私の旦那様のケンイチです」

「ちょっと旦那様って……」

「何か？ 問題でも？」

ニコニコと微笑む、プリムラが怖い――否定出来ない状態だ。

「見習いって、店を手伝わせるのか？」

「それだけじゃありません、料理と商売を覚えさせて支店を出させます」

なるほど、フランチサイズ方式だな。さすが商売人だな、どんどん拡張するつもりだ。

「いざという時は支店を切り離せば良いのですから、万が一またケンイチが逃げても直ぐに追いかけられますので、心配ありません」

「別に、そんな心配は必要ないけど……」

やっぱり、ニコニコと微笑むプリムラが怖い。俺のことを全く信用していないって顔だ。

アイリスという彼女、読み書き計算は出来るそうだ。さすがに、読み書き計算が出来ない子供の^{でっち}丁稚を雇うのは大変だ。

丁稚だと、寝食の場所も提供しないとダメだしな。俺の所に住ませるにしても、街への通勤が問題になる。

森を切り開いて道を作って4WD車で送迎すればなんとかなるが、それはやり過ぎというものだろう。

それにしても、料理の煮物とリンカーのコンポートが既に半分ぐらいしかない。まだ昼前だ。

「ケンイチ、魔石コンロをもう1台貸してもらえませんか？」

「ああ、いいよ」

カセットコンロを貸すと追加の料理を作ると言う。肉と野菜の下拵えした物を、アイテムBOXから出してやると、プレミアムは料理を始めた。

「アイリス、手順を教えますので」

「はい！」

なかなか、やる気のある見習いのようだ。

ここは彼女達に任せて、俺は一旦家に帰る事にした。

――――◇◇――――

家に帰ってきて、新しい小屋を作る事に――。

石が金になる事が判明したので追加を掘りたいところだが、ニヤメナに小屋を貸してしまったからな。

何かあると困るから、優先順位は小屋の製作が先だ。シャングリ・ラでまた小屋のキットを買う――以前買った物と同じ物だ。

ミャレーに手伝ってもらい骨組みを組み立てているうちに、夕方になった。

だが、まだミヤレーは、ぼやいている。

「まだ、ぼやいているのか？ 獣人なら大家族は普通って話だろ？
寝る場所は別なわけだし」

「うう、どうも、あいつは気に入らないにゃ」

「別に俺目当てでもないんだし、気にしすぎだ。ミヤレーが気に入るから、あいつも面白がって、からかうんだよ」

「うみゅみゅみゅー」

どうやら馬が合わないってやつらしい。しかし、雇ってるのはプリムラだからな。

俺からは、どうこう言えないな。

ニヤメナの小屋にベッドを入れて新品の麻のシーツを3枚置く。

あと、何が必要かな？ 棚は備え付けがあるし——ああ、ランプがあるか。

シャングリ・ラで4000円のハリケーンランタンという灯油ランプを買っておいだ。

小屋の組み立ては途中だが今日は、ここまでだな。部品をアイテムBOXへ収納して街へ向かう。

冒険者ギルドへ到着すると、処理を頼んだ肉は出来上がっていた。

「おう、出来てるぜ」

「いつも済まないねえ」

「それは言わない約束だぜ」

意外、異世界でもこのネタが通用するとは。

肉を手に入れアイテムBOXへ突っ込むと、市場へ向かう。

撤収準備をしているプリムラに話を聞くと、アイリスという、お下げの女の子も家に連れていくと言う。

「新人の歓迎会か？」

「そうです。それに材料の仕込みや複式簿記の付け方も教えませんと」

プリムラは彼女をリーダーとして育てて、支店を出した際に他の店員の教育も任せるつもりのようなのだ。

なんか手際良く着々と進むなあ。行き当たりばったりの俺とはエライ違いだ。

「しかし、どうやって連れていく？ 俺のドライジーネは2人しか乗せられないぞ？」

「俺が背負っていくよ」

「ああ、その手があったか」

前に河原で飲み会をした時に、獣人に背負ってもらったが、普通に走り回っていたからな。

女の子1人ぐらい背負っても平気なのだろう。

「ひゃあああ！」

既に夕方――森の木々の間は既に暗くなっている。その暗闇を疾走するニャメナの背中ではアイリスが悲鳴を上げている。

結構なスピードが出るからな。

獣人は暗くても目が見えるだろうが、普通の人間は恐ろしいだろう。夜の道路、無灯火で車を運転するようなものだ。

俺たちは、アイリスの悲鳴を聞きながら森を抜け家に到着した。

「はあ、怖かった……」

「はい、お疲れ様」

「あの……旦那様、そのドライジーネは？」

アイリスはヘッドライトを点けて煌々と前方を照らし、アイドリ
ング中のオフロードバイクをじっと見つめている。

「これは、魔法で動く俺の専用のドライジーネだ。人に言わないようにな」

「わ、解りました」

アイリスは両足を揃えて、ぺこりとお辞儀をした。

「にゃー！ ふぎゃ？ また、増えるにゃ？！」

家から出てきたミャレーが、アイリスを見て尻尾を立てた。

「違う違う、彼女はプリムラが雇った店の店員だ。色々と教える事があるらしい」

「ぐ……ぐみゅ」

「そう警戒するな」

皆が揃ったから料理をするか。いつものスープを作り、メインデ
イッシュは何にしよう……。

たまに変わった物を——異世界定番のお好み焼きでもしてみるか。
あれなら簡単だ。

とりあえず肉とか野菜を刻んで入れて焼けば良いからな。

だが、お好み焼きと言えばキャベツだ。シャングリ・ラからキャ
ベツを購入する——10kg4000円だ。

肉も熊肉よりは豚こまの方が良いだろう。

俺はお好み焼きの調理に取り掛かった。

50話 見せてもらおうか、本物の商人の实力とやらを

俺の家に、プリムラの店の見習い——アイリスという女の子がやって来た。

プリムラは、彼女をしばらくここへ通わせて、商売の仕方を教えるようだ。

俺は夕食のメニューにお好み焼きを焼いてみる事に——。

カセットコンロ2台に、それぞれ鉄板を敷き、加熱しておく。

なお、コンロ2台を連結して長い鉄板を載せたりすると、爆発する事があるので注意が必要だ。

キャベツは千切りにして卵と小麦粉を投入。ダシも入れてかき混ぜる。長芋を入れたりする人もいるが、好みによるだろう。

鉄板に豚こまを敷いて、その上からタネを掛ける。まあ、作り方には色々と流派があるだろうが、俺はこんな感じで作っている。

隣のカセットコンロでプリムラが俺の真似をして、お好み焼きを作っているのだが、これも作り方を覚えて売るつもりだろうか？

火が通ったら、ヒックリ返すのだが肝心な物がなかった。

シャングリ・ラで慌てて、コテを購入。2個で1000円。

「よっと！」

「わぁ！」

「上手いじゃ！」

焼けたら、最後にオ○フクソースとマヨネーズを掛けて完成。かつを節はどうか？ 警戒されるかもしれない。

「好みで、これを掛けてみるか？」

俺が乗せたかつお節に皆が反応している。

「木の削りカスに乗せてどうするにゃ？」

「これは、魚の干物を削った物だよ」

「旦那の言うとおりだ、魚の匂いがする」

警戒している獣人達を横目に、真っ先にアネモネが食いついた。

「美味しい！ これ、美味しいよ！」

「そうか、口に合って良かった」

「ふみゅ？ もぐもぐ——美味しいにゃー！」

「ふおっ！ こいつは美味い！」

「そうだ、ニャメナ用に酒を用意しないとな」

アイテムBOXから赤ワインとカップを取り出した。

「はあ、こんな美味しい物と美味しい酒。もう、金なんて要らないね」

「本当か？」

「だって、飯食うために稼いでるのに、美味しい物が用意されてるんじゃないか」

ニャメナはお好み焼きを頬張ると、ワインでそいつを流し込んだ。

「何か欲しい物はないのか？」

「そりゃ、武器とか欲しいけどさ」

「そこら辺も俺が貸してやる」

「本当かい？」

「ああ、ミャレーが持つてる弓や剣も俺が貸している物だしな」

もつとも、ミャレーはシャガの討伐で大金をせしめたので、実は金持ちだ。

いい装備も買おうと思えば買える。

だが、全く金を使う気配はないのだが。飯も装備も全部俺が賄っ

ているからな。

「——という事は売り物なんだろう？ いいのかい？」

「ミャレーやニャメナが頑張ってくれれば、元は十分に取れるからな」

「そう聞いたら、遠慮は要らないって事か」

「多少はしろよ？」

「ははは！ 解ってるって」

ニャメナは大笑いをして、ワインが入ったカップを夜空に掲げた。

「あの、これって凄く美味しいんですけど……このソースが決め手ですよ」

お好み焼きを食べていたアイリスが、鋭い分析をしてきた。

そう——ソースとマヨネーズだ。片方だけで食ってもイマイチ。

両方をあわせる事で渾然一体の旨さが出る。しかし、他の料理でソースとマヨを混ぜてもイマイチなんだよなあ。

中々、彼女は頭が切れるようだ。プリムラの話では役人の娘らしい。それ故、読み書き計算も出来る。

就職しないと、すぐに嫁にいけと言われるので、職を探していたらしい。

女性1人で商売をしているプリムラを市場で見つけ一目惚れをしたようだ。

「前の餃子って料理にも使ってたけど——これは？」
プリムラもマヨが気になるようだ。

「これはマヨネーズだな」

「ああ！ これがそうなのか？ 帝国で凄い流行っているって話を聞いたぜ、何にでも合う黄色いニユルニユルしたソースだってな」

ちなみに、黒いソースに似た物はこの世界にも存在している。マヨネーズだけが無かったらしい。

帝国で流行っている物は、元世界から転移してきた奴が広めているのだろう。

「原料は何なのですか？」

「それはな、プリムラー――酢と卵と油だ。油は植物油な。海獣油はダメだぞ？」

「植物油と言うと、豆の油とか、花の油とか？」

「そうだが――原料が高いから売るのはどうかな？　帝国で広めている奴は魔法で作り出しているようだし」

プリムラが原価計算をしているようだが、高価なソースになるだろうから、商売としてはどうかな？

おれが、マヨネーズを卸してもいいのだが――。

俺から物を供給して商売をすると、俺がいなくなった時に、すぐに商売が破綻してしまう。

スープや煮物なら俺がいなくても他の材料で代用が利くからな。ダシの素ぐらいなら乾物でも代わりになるし。

思いのほか、お好み焼きは皆に好評だった。

――――◇◇――――

食事が終わって、風呂に入る事になったのだが――。

「え？　お、お風呂ですか？　でも、男の人の前で裸になるのは……」

そりゃ、年頃のアイリスなら仕方ないだろう。

「それなら、俺は家に入ってるよ」

「私も家に入って、勉強する！」

「アネモネ、今日は風呂には入らないのか？」

「うん！」

「でも、お風呂のお湯だけ魔法で沸かしてやってくれ」

「解った！」

風呂が沸いた後、俺とアネモネは家で勉強。外からは、女達のキヤッキヤウフフが家の中まで聞こえてくる。

風呂あがりのジェットヒーターはすでに設置済み。使い方はプリムラが覚えているので彼女に任せた。

風呂から上がり、ふわふわになった寝間着にエプロン姿で、プリムラとアイリスは料理の下拵えを行っている。

これが終わったら帳簿の付け方の勉強をする予定だと言う。結構ハードなスケジュールだが、彼女はしばらく、ここへ通うようだ。そんなに結婚したくないのだろうか？

「だって、相手がオジサンとかなんですよ！ そんなの嫌じゃないですか」

まあ、これが正常な反応だな。

「――という意見に、オジサン好きなプリムラお嬢様は、どのような考えでしょうか？」

「男性は誠実さと甲斐性ですよ。見てくれがどうのこうの、惚れた腫れたなんて言うのは若いうちだけ、歳なんて関係ありません」

なんとまあ、達観しているのだろうか。商売で色んな人をみているせいだろうか。

「君も十分に若いんだけど……」

「私は実を取りますので」

商人らしいというか何というか。

明日の下拵えと勉強の邪魔をしちゃ悪いので、俺は外にあるニヤメナの部屋へいつてみた。

「どうだ？　こんな感じの部屋だぞ？」

「もう、最高さ！　ランプまであるじゃないか。もう天井裏のネズミに齧られなくてもすむんだ」

一体どういう生活をしていたのか。耳を齧られて青くなったりしていたのか？

「それに、晴れた日の昼間なんて灼熱なんだぜ」

確かに屋根裏部屋は暑そう。俺の家も屋根が結構熱くなるからな。

「ランプの灯を点けられたのか」

この世界に売っている灯油ランプは火石による点火式だ。しかも燃料を火石の熱で気化させてから燃やすという、結構ハイテクな仕掛けだ。

だが、俺が買ったのは行灯のような単純な灯油ランプ。

「これがあるからね」

ニヤメナが取り出したのは、先端に赤い石が付いている棒。

こいつの尻を捻ると先についてる火石で火が点けられるという――いわゆるマッチ。

灯油ランプは高価なので、皿に芯を浸した行灯も、この世界では広く普及している。

もちろん蝋燭もあるが動物の脂から作るので、やはり高価だ。

「シートは3枚やるから、洗うのは自分でやってくれよ」

「はいよ」

「虫除けの魔石は持ってるか？」

「大丈夫だよ」

「そうか、それじゃな」

「あら、女の部屋へやって来たってのに、何もしないで帰るんですか？」

俺が小屋から出ようとする、ニヤメナがベッドから立ち上がり俺に抱きついてきた。

だが、それと同時に小屋の扉が勢い良く開いた。

「ふぎゃー！ 帰りが遅いと思ったら何をやってるにゃ！ そんなにやりたかったら、ウチとやればいいにゃ！」

「なんだよ、こっちに少し回してくれてもいいじゃないか」

「断るにゃ！」

「もう、俺の方が上手いからさ。締りもいいし」

ニヤメナは俺を誘うように、尻を向けて尻尾で、おいでおいでをしている。

「そんなのウチも負けないにゃ！」

ミヤレーも負けじと、尻を向けてくるのだが――こいつ等は……。

「俺は口でも上手いよーやってみる？」

「ウチ等、牙があるのに口なんかで出来るはずないにゃ！」

全く、なんちゅー会話をしてるんだ。とても、アネモネには聞かせられん。

「あーなんだ知らないのかい？ そういう技があるんだよ。試してみろ？」

ニヤメナは長く筋肉質の両手を俺の首に回してきた。彼女は俺より背が高いので、本気でこの状態になったら逃げられないな。

「離れるにゃー！」

「はいはい、お前ら騒ぐなって。今日は黙って寝ろ」

ニヤメナの腕を外して身体を離す。

「なんだよー乗りが悪いなあ」

彼女は、俺が誘いに乗ってこないのが不満のようだ。マジなのか冗談なのか、イマイチ判別が出来ないのだが。

「ケンイチは、そこら辺にいる男共とは違うのにゃ」

「それは認めるけどさ」

ニヤメナにおやすみなさいをすると、俺は家に戻ってきた。

――――◇◇――――

――次の日。

プリムラとアイリスは、朝から売るためのスープを作っている。

鍋1つでも足りなくなったので、2つ仕込んだようだ。

荷物をアイテムBOXへ入れて、いつものように街へプリムラを送っていく。そして街の手前で、収納から4輪カートを出した。

「今日は荷物が多いな。この荷車をもう1つ出すか……」

「荷車に入りきれない分は、ニヤメナに運ばせようかと思っていたのですが」

「同じ物がもう一つあるから、アイリスに引かせればいい」

アイリスに複式簿記を仕込んだ後は、彼女の家で仕込みをさせるようだ。

そうすれば、俺の家から運ばなくても良くなる。

彼女達を見送った後、俺は家に帰ってきて、ミャレーと一緒に小屋作りの続き。

昼前には形は完成した。

ここに小さな窓を備え付け、防水シートとガルバリウム鋼板を貼

っていく。これで2度目の製作だ――殆どの作業は把握しているの
で滞りなく進む。

夕方、プリムラ達を迎えに行き、帰ってきたら飯を食う。それを
何日か繰り返し、間に畑作業を挟んだりしたが小屋は完成した。

「さすがに2回目は早いな」

「にゃー！」

ミャレーが屋根の端を掴まえると、屋根の上に飛び乗った。
身体能力が凄すぎる――だが、屋根に手を付いたミャレーが、叫
び声を上げた。

「あちゃー！」

彼女は慌てて、屋根から飛び降りた。直射日光で屋根が加熱され
ていたのだ。

家の屋根は板張りだが、この小屋はガルバリウム鋼板だ。

もしかして――ドアを開けて中に入ると――もわっとして熱気が
小屋の中に充満している。

俺は慌てて窓を開けると、ついでに、ここで実験をする事にした。

液体を分離する魔道具を使って、混合燃料から2ストオイル成分
を抜く実験だ。

現状オレンジ色の鉱石を掘るためには大型のガソリン発電機を使
わないとダメだ。この大型発電機は4ストロークエンジン。

だが、シャングリ・ラで手に入るガソリンは草刈機やチェーンソ
ーに使う2ストロークエンジン用の混合燃料だ。

こいつには予め2ストオイルが混合されている。

このままでも発電機の燃料として使えない事もないのだが、余計
な2ストオイルが入っているために白い煙を吐いてしまう。

そいつを取り除いて、普通のガソリンを精製するつもりなのだ。

小屋の窓を開けると床に魔道具を出して準備を始め、上の器に混合燃料を入れる。

そして、中間の器に2ストオイルを入れる。ここに入れた物が、上の器から引かれるわけだ。

直ぐに、左右の通路を液体が流れ始めた。

「これで、10分で1L程処理出来るから——えーと、この缶は4Lか……40分程だな」

——そして40分後、分離は出来たようだが、どうやって確かめようか。

発電機にいきなり使うわけにはいかない。高価な発電機を壊してしまうかもしれないからだ。

「さて、どうしようか……」

シャングリ・ラで、安い4ストエンジンを検索してみる。

そいつで動作試験をして問題なく使えるようなら、ガソリン発電機でも使用出来るだろう。

しばらく検索して1万円ちょっとの4ストエンジンの草刈機を見つけた。

この値段なら彼の国製だろうが、とりあえずガソリンで動作チェックだけ出来りゃいい。

「ポチッとな」

落ちてきた草刈機は簡単な半キットになっているので組み立てる。このぐらいなら、組み立て説明書が無くても大丈夫だ。

一緒に入っていた説明書は漢字ばかりで日本語じゃないし。刃は付属していたチップソーをそのまま使う。

ゲージを見ると一応オイルが入っているようだが、全く信用出来ないので全部抜いてから1流メーカー製を入れた。

本気で使うなら、全バラしてチェックしたいところだ。

昔、ネットオークションで、スーパーカーの彼の国製ピーコエンジンを買った事があったが、酷い出来だった。

エンジン内には金属粉が一杯、ベアリングはガリガリ、そのまま使ってもすぐに故障を起こしただろう。

そんな苦い思い出を頭に浮かべながら——実験用に精製したガソリンをタンクに入れて、キャブに燃料を送るボタンを押す。

チョークを引いて、リコイルスターターを引くと一発で始動した。いつもの2ストエンジン仕様に比べると、かなり静かだが順調に回っている。

「大丈夫そうだな」

そのまま、辺りの草刈りをしてみることにした。

草刈機を振り回し生えている青草をなぎ払う、一面に広がる青臭い香りが鼻に付く。

「キー！」

「あっ！」

——と思ったが、もう遅い。草むらの中に隠れていた、ネズミのような生き物を真っ二つにしてしまう。

うわぁ——これは後で洗って油を点さないと……血が残っていると錆びるのだ。

これは、草刈機を使っていると結構ある出来事。蛇やらネズミやら、時には狸やら。

もちろん人間を切る事故也多発する。非常に危険な道具なのは間違いない。

しかし、実験用のガソリンを入れたエンジンは順調に回っており、1時間程、草刈りをしたが問題ないようだ。

これで、ガソリンの問題も解決したな。混合ガソリンは4Lで1000円程だから、リッター250円だ。

元世界の感覚からすると少々高いが致し方ない。

それにガソリンはあまり使わないからな。重機やトラックはディーゼルだし。

乗用車を買ったとしても、ディーゼルエンジンのSUVなどであれば、バイオディーゼル燃料が使えるから困ることもない。

この燃料があれば、ガソリン発電機を使って、薔薇輝石をガリガリ掘れるわけだ。

————◇◇————

それから1ヶ月、プリムラ達を街へ送迎した後、ガリガリと岩を掘り続け、採掘したオレンジ色の石の査定総額は1500万円ちょっと。

まだ、石はあるのだが、崖の内部に入り込んでいたので、これ以上掘るとなると大きく崖を崩さないと無理だ。

それこそ大型重機や爆薬等が必要になる。

崖の上の森は、アネモネのキノコや薬草集めと、ミャレーとニャメナの格好の狩場として役立っている。

そしてプリムラの店だが——。

アイリスの親を巻き込み保証人にさせ、小さな倉庫を借りると、そこで商品の仕込みを始めた。

彼女の親は役人だ——絶対に儲かる——この言葉に弱い。

実際に、プリムラの店は儲かっている。毎日15万円〜20万円を売り上げて年商は7000万円を超える勢いだ。

俺が命がけでやった討伐の報奨金を1年で軽くオーバーしてしまう。

しかもアイリスを総支店長兼教育係にして店員を集め、既に支店

を2店出しており、グループ年商は2億円に迫る。

娘が大金を稼いでくる、アイリスの親もホクホク顔だ。

これが本物の商人の力か。俺みたいなナンチャッテとは、わけが違う。

ただし縛りはある。商品の料理に俺がシャングリ・ラから買って供給しているダシの素を使っているのだ。

これが無ければ、人気のある料理の味にならない。うま味調味料は偉大だ。

店員の誰かが裏切って似たような店を出しても、この味は簡単には出せないのだ。

「お嬢1人でなんでも出来ちゃうんだなあ。俺なんて計算も出来な
いから、何が何やらさっぱり解らないうちに、どんどん店がデカく
なるんだからさ」

暗闇とLEDランタンの明かりの中、家の前に置かれたテーブル
に並べられた晩飯を食いながら、ニヤメナがつぶやく。

「そんな事はありませんよ。全てケンイチが教えてくれた知識と魔
法、そしてアイテムBOXのおかげです」

「いや、君の手腕は凄い物だよ。さすが大店マロウさんの娘だ」

「ケンイチのお膳立てがあればこそですよ。これをゼロからやろう
としたら、並大抵の事ではありません」

確かに俺のチートがなければ色々と苦労はするだろうが、彼女な
らやるだろう。

プリムラが稼いだ金は商業ギルドに預けられて、彼女が持つギル
ドの証の中へ伝票が収められ――。

そして普段使う金や余った金は、俺のアイテムBOXの中へ入れ
ている。

ギルドの口座へ入れておけば他の都市のギルドでも引き出す事が出来るのだが、元世界と違うところは利子が付かないところか。

元々銀行ではないので、これは仕方ない。それに利子どころか僅かだが口座保管料が徴収される。

それでも盗まれる心配がないので、ギルドへ預けている者は多い。

「でも、お嬢。店を大きくしても、アストランティアへ根を張るわけじゃないんだろ？」

「ええ、いつでも支店を切り離して旅立てるようにしてあります。誰かさんが逃げ出しても、すぐに追いかけられるように」

「プリムラ、それに関しては俺が悪かったよ。ただ、あの場合はマロウ商會に迷惑が掛かると思ってだな……」

「聞きません」

「はは！ 大丈夫だよ、お嬢。旦那が逃げたって俺の鼻ですぐに追いつけるから。特に旦那が使う変な魔道具の臭いは独特だ。逃げられっこねえ」

「にゃー！ ウチも絶対に逃さないにゃー！」

くそう、文明の利器による移動は速度は速いが、跡が残りやすい諸刃の剣。

「頼りにしていますよ」

ダメだ、プリムラの中では、俺の信用がガタ落ちしているらしい。

まあ、それも仕方ないのだが……。

暗闇の中、夕飯は続いたがプリムラが何か考え事をしている。

「プリムラ、どうした？」

「……あの、お願いがあるのですが？」

「まあ君の願いなら、可能な限り応えたいが……」

彼女の話では、貴族のための宝石が欲しいと言う。

もう貴族とパイプを作ったのか？

俺は面倒なのは嫌いなので、貴族を避けているが、プレミアムやマロウさんは貴族を利用するだけ利用する、本物の商人だ。

何はともあれ話を聞いてみる事にした。

50話 見せてもらおうか、本物の商人の实力とやらを（後書き）

5月10日 アラフォー男の異世界通販生活の書籍版が発売になります。

<https://syosetu.com/syuppan/view/bookid/2564/>

51話 ダンジョン?

——夕飯時、プリムラが俺にお願いがあると言う。
彼女が知り合った貴族の女性がカメオを探しているらしい。

「ユーパトリウム子爵夫人という方なのですが、ダリアへやって来た時にアスクレピオス領の貴族に、あの宝飾のブローチを自慢されて大変悔しい思いをしたという事で……」

宝飾というのは、勿論カメオもちろんの事だ。

「そのために、あれが欲しいと言うのか」

「はい……」

貴族の見栄張り合戦か——実に下らないが。

だが貴族の話をし始めた彼女の顔色が、いまいち優れないような気がする。

「ユーパトリウムっていやあ、お嬢。この領の領主じゃねえか」

「そうですよ」

「そうですよって……」

「プリムラの実家はダリアのアスクレピオス家とも付き合いがあったからな。アストランティアで走っているドライジーネも彼女の実家マロウ商会で作ってる物だし」

「えー？ あれってお嬢の実家で作った物だったのか」

「そうです」

「彼女の家名はドライジーネだからな」

ニヤメナは齧っていた肉を口から落として、大声を上げた。

「ええ〜?! そんな家名もある大店のお嬢なのかよ。なんでこんな所で露店とかやってるんだ?」

「なんでだろうなあ。俺もよく解らんのだが――貴族との婚姻も放り投げてきちゃうし……」

「貴族って――呆れたぜ。お嬢、旦那の事は俺に任せて、ダリアへ戻った方がいいんじゃないかねえのか?」

「そうはいきません」

プリムラがスプーンを止めると、ジロリとニャメナの方を睨む。

「ぎゃー! このトラ公やっぱりケンイチの事を狙ってたにゃ!」

「旦那の相手は俺様の方が似合いつて事よ」

「そうはいくかニャー!」

「あゝ、お前こいつら煩い」

俺はシャングリ・ラでカメオを検索した。色々と並んでいるが――女性の顔が彫られた大型の物を購入してみた。

カメオではよくあるデザインの物だ。青い石に上品そうな女性の横顔のレリーフが彫られている。

値段は高い――6万円だ。だが、貴族相手ならすぐに元が取れるだろう。

こいつを買って貴族仲間を見返してやりたいと思っているなら、多少高くても買うはずだ。

ポチッとな。

「プリムラ、こんなのならあるが」

俺は、テーブルの上に落ちてきたカメオのブローチをプリムラに手渡した。

「まあ! 女性の顔が彫られているなんて」

「ほえゝ、まるで生きているみたいだな」

ニヤメナが、プリムラの横からカメオを覗きこんでいる。

「人の顔が彫ってあるのは、意匠的に難しいか？」

「いいえ、この石に彫られている方は、ユーパトリウム子爵夫人によく似ていらっしやいます」

「おお、それなら——夫人のために特別に作らせましたと言って、金がたっぷりと取れるかもな」

「その通りですわ」

「「うふふふ……」」

「なんかご主人様達が、悪い笑みを浮かべているぞ」

「いつもの事にゃ」

「まあ、値付けは君に任せるよ」

「解りました」

しかし領主の夫人と、もうパイプを作ったとはなあ。

まあ、カメオのブローチ1個ぐらいならいいだろう。

貴族の事は彼女に任せる事にした。

うーん——なんだか、少々プリムラの元気がないのが気になるが……。

—— — — — — ◆ ◆ — — — — —

「なんだって？」

プリムラ達を街へ送った後——畑仕事をしていた俺に、ミヤレーが面白そうな事を言ってきた。

「ダンジョンにゃ！」

「ダンジョン？ ダンジョンって地下へ降りる洞窟とかそういうのか？」

「その通りだにゃ」

彼女の話では、ダンジョンには2種類あるらしい。

自然に出来た洞窟や風穴に魔物が住み着いたダンジョン。もうひとつは遺跡などの人工物に魔物が住み着いたダンジョンだ。

人工物のダンジョンの方は、過去の遺物や魔道具、魔導書等が見つかる事が多く、実りも大きい。

無論ゲームではないので、一度攻略されてしまえば、お宝が再ポップしたりはしないわけだが。

ただ長い時間を経れば、また魔物が住み着く可能性はある。

だが、お宝もなく魔物しか住んでいないダンジョンに潜る奴はいないそうだ。

そりゃ、この世界じゃ経験値もなく、レベルアップして強くなるわけじゃないからな。

魔物の素材も、それなりに金にはなるが、そんな危険を冒すよりは、お宝を探した方が効率が良いつてわけだ。

彼女の話では、昨日見つけたと言う。

「夕飯の時に、そんな話は出なかったが？」

「そんな話をしたら、あのトラ公も来るじゃにゃいか」

「お前ら、そんな事で張り合うなよ」

「これは獣人同士の問題にゃ」

だが、ミヤレーが気になる事があると言う。

「気になる事？」

「虫の臭いが強いにゃ。多分、デカイ虫の巣になってる可能性が強いにゃ」

「虫か……でもとりあえず、行ってみたいな」

「にゃ」

ミヤレーと一緒にダンジョンへ潜る準備をしていたら、アネモネがやって来た。

「私も行くー!」

「遊びに行くんじゃないんだぞ? 魔物がいるかもしれないし」

「ケンイチの冒険を助けるって、私が言っただでしょ!」

俺と初めて会った時は物言わぬ少女だったが、最近自己主張が強い。

「だが、俺とミヤレーがダンジョンに潜ったら、アネモネが家に1人か――どの道危険のような……」

「だから一緒に行く!」

「解った解った」

「わーい!」

一度怖い思いをしたら、一緒に行くと言わなくなるかもしれない。ダンジョンへ潜ると言っても、プリムラを迎えにいけないとダメなので、タイムリミットがある。

時計を出して、時間を確かめる――遅くても4時頃には迎えにいかない。

「ミヤレー、どのぐらい離れた場所にあるんだ?」

「ここから北へ半時(30分)程の所にある、崖の割れ目にゃ」

「半時ってお前の脚で半時だろ?」

「そうにゃ」

――という事は、ここから10kmぐらい離れた場所だ。結構奥地だな。

「他のデカイ魔物はいないのか?」

「いないにゃ」

前にも、ミヤレーが言っていたが、それはそれでちょっと不自然だな。

何はともあれ、行ってみて場所だけでも確認してみなくては。

とりあえず装備を確認して、オフロードバイクを出す。アネモネにヘルメットを被せたら出発準備完了だ。

殆どの物はアイテムBOXに入っているし、足りなければシャングリ・ラで購入すればいい。

手ぶらでダンジョン攻略可能だ。

30分程、森の中を走って目的地へ到着した。

場所が把握できていれば、湖畔沿いをバイクで走った方が速いかもしれないな。

目の前には、5m程の崖の裂け目が黒い二等辺三角形を作り、ぽっかりと口を開けている。

「ここか……ミャレーは入ってみたか？」

「ちよつと入ってみたけど、明かりがなかったので直ぐに戻ってきたにゃ」

夜目が利く獣人でも、月明かりや星明かりすら無い暗闇では何も見えないだろう。

アイテムBOXから頭に装着するLEDヘッドライトを出す。

追加で同じ物を買った。ミャレーとアネモネの分だ。アネモネにはバイクのヘルメットの上から装着させた。

「頭を岩にぶつけないように、これ在中でも被ってな」

アネモネに被せたヘルメットをコンコンと拳で叩く。

「うん」

裂け目の入り口は5m程だが、中へいけばどんどん天井が低くなるのだろう。

入り口に方向探知機の親機を置いて、武器を整えると暗闇の中へ脚を踏み入れる。

ポケットから方向探知機の子機を出すと、正確に親機の方を指し

ている——こいつは便利だ。

こんなのはシャングリ・ラでも売ってないからな。

文明の利器が凄いのは当然だが、魔道具ってやつも負けてはいない——科学で説明出来ない動きをするのだ。

例えば、電波を使えば科学の力でも方向探知機を作れるが、岩の中や水の中まで正確に方向を示す事は出来ない。

だが、この魔道具の方向探知機なら、それが可能になるのだ。

「この明かりはいいにゃ！ 頭に付けるので両手を使えるにゃ」

前衛のミャレーはコンパウンドボウを背中に背負って、俺が貸したカトラス刀とポリカーボネート製のバックラーを装備している。俺はナイフとクロスボウを、アネモネにもナイフを渡しているが戦闘は無理だろう。

彼女は後方から魔法を使つての援護だ。

「アネモネ、後ろも見えてくれよ。今のところ一本道だが、分岐があったりしたら、後ろから襲われる可能性があるからな」

「うん……」

アネモネは流石に怖いようだ。俺の背中にひつついている。

「うおお——超怖えええええ」

やつぱり暗闇ってのは本能的な怖さがあるな。こればかりはどうしようもない。

簡単に体験してみたければ、夜の海や川へ潜ってみればいい。下手な肝試しより怖いので——おすすめは出来ないが。

足元をチョコチョコとトカゲのような生物が走り回り、明かりから逃げるように闇の中へ消えていく。

ミャレーのような獣人は夜目が利くので、このような暗闇でも何も感じないらしい。

魔物の気配があれば、直ぐに解ると言うし——まるで生体レーダ

ーだな。

それにしても虫の臭いか……。虫は苦手なんだがーデカイGだつたりしたらどうしよう。

「ケンイチ、後ろから何か来るにゃ！」

「なに？」

ヘッドライトで後ろを照らす。すでに入り口の光も見えず真っ黒なのだがー。

「バリケード召喚！」

俺たちの前に、丸太を組んで作ったバリケードをアイテムBOXから出した。

尖った丸太の後ろに広がる暗闇に、ライトの光が動く物を捉えたのだが。

「うわぁっ！」

思わず俺は、クロスボウを構えた。だが、耳に飛び込んできたのは聞き覚えのある鳴き声。

「にゃー」

何かと思ったら、ベルだよ。森猫がバリケードの横をすり抜けると、長い身体を俺にすり寄せてくる。

俺たちの後ろをつけてきたのか？

「ふうー脅かすなよ」

胸を撫で下ろして、バリケードをアイテムBOXへ収納する。

ー再び、3人と1匹で列を作り、歩き出してから20分程経過。慎重に進んでいるので、かなりゆっくりとした足取りだが入り口から1000mぐらいは進んでいるはずだ。

ずっと一本道、何もない岩肌が続いているだけで変化に乏しい。
通路の高さも2 m程になってきたが幅はそれなりにあるので、窮
屈な感じはしない。

期待外れな感じに、少々がっかりしながら暗闇をLEDで照らす
と何かがキラキラと反射してみえる。

「ミヤレー、何かあるぞ？」

「本当だにゃ？ 何か光ってるにゃ」

俺達がそこへ行ってみると、1 m程のどら焼きのような形に水晶
の鉱脈が露出していた。

LEDの光をキラキラと反射して、洞窟の岩肌に星をまき散らす
——まるで、ミラーボールだ。

「おおっ！ こりゃ凄い。俺はこれを掘るぞ！ お前らは焚き火で
もして休んでいろ」

「ふう……怖かったけど何もないね」

「そうだにゃ」

ミヤレーが火をおこしている間に、ガソリン発電機と電動ハンマ
をアイテムBOXから取り出し——俺は掘削の準備を始めた。

アネモネのリクエストで、パンとフルーツ牛乳をアイテムBOX
から出す。

焚き火が岩肌をオレンジ色に染める中で、俺が発電機のスタータ
ーのスイッチを押すと身震いするように彼が起動する。

電動ハンマのプラグを差し込み作業を開始。なるべく大きく取り
たいので、結晶の周りから掘り始めた。

電動ハンマが岩肌を叩く音が洞窟内に反響する。かなり煩いうるさが止
むを得ない。せっかくのお宝だ。

後ろを見ると、ミヤレーが耳を伏せている。獣人は耳が良いから

な、これは辛いかもしれない。

彼女を外に出して俺だけで掘るか……などと、考えていたのだが。
——突然、ミャレーが叫んだ。

「ケンイチ！ 何か来るにゃ！」

ミャレーの言葉に電動ハンマを放り投げて、目の前に再度バリケードを召喚した。

見れば、ベルも牙を剥きだして警戒をしている。こりゃ、マジで何かいる。

LEDの光にチラチラと白い影が見える——デカイ。

針金のような毛が沢山生えた節が連なる長い脚、頭部らしき所に輝く青い幾つもの目。

「蜘蛛か？」

「洞窟蜘蛛にゃ！」

体高は2 m程だが脚まで含めれば更に大きいだろう。だが洞窟の幅が狭いため、長い脚を折りたたむようにして移動しているようだ。虫の臭いってコイツか。

「バリケード召喚！」

出したバリケードを3角形に並べ、さらにその上に重ねて同じ物を載せる。そして鋭利な丸太の先が蜘蛛に向くようにした。

突然出現した障害物に大蜘蛛が戸惑っているのを見ながら、クロスポウを構えて——発射。

だが、硬い表皮に弾かれた。

「ギィィ！」

蜘蛛の金切り声のような音が洞窟内に反射する。

「ミャレー撃て撃て！」

「にゃー！」

彼女が放った矢が、幾つも光る大蜘蛛の目の1つに突き刺さった。硬い敵も目玉は弱点――。

「ギイイ！」

「アネモネ！ 魔法だ！ 憤怒の炎！」
ファイヤーボール

「あ……あう……」

アネモネは突然の出来事に固まってしまっている。これは、イカ
ン――戦意喪失だ。

俺はアイテムBOXから爆竹を取り出すと、火を付けて蜘蛛へ向
かって投げつけた。

炸裂する大音響が洞窟内に跳ね返る。そして、もう一発。

怯む大蜘蛛を見て、俺はアイテムBOXからオフロードバイクを
取り出すと、エンジンを掛けた。

その間、ベルが大蜘蛛を牽制してくれている。

「アネモネ！ 乗れ！ ミャレー逃げるぞ！ 撤退だ！」

「ケンイチの魔道具はどうするにゃ？！」

「後で取りにくりゃいい！ アネモネ！」

だが、俺の呼びかけにも彼女は、まだ固まったままだ。

「ウチが担いで逃げるにゃ！」

「頼む！ ベルも行くぞ！」

俺はバイクのヘッドライトを点灯すると、スロットルを開けて洞
窟内を走り始めた。

森猫がついてきているか心配だが確認している余裕もない。

だがバイクより、アネモネを担いだ、ミャレーの方が速い。

前方を照らすヘッドライトが、洞窟内の岩肌を環状に照らして浮
かび上がらせ――その凸凹がハンドルを通して俺の手に伝わって
くる。

俺はシートから腰を浮かせて、その振動を受け流すように出口を目指した。

チラリと後ろを見たが、大蜘蛛が追ってくるような様子はない――ミャレーの背中を追うように数分の後、洞窟内を脱出した。

そのまま洞窟の入り口を離れ、100m程森に入った所で様子を見る事にした。

「追ってくる感じはないな」

「にゃー」

ベルも無事に脱出して俺の所へやって来た。

「洞窟蜘蛛の狩りなら夜だにゃ」

「あそこを住処にしているのか」

「多分、奥に巣があるにゃ。でも、虫がいるのは解っていたけど、こんな所に洞窟蜘蛛がいるとは思わなかったにゃ」

デカイハエトリグモみたいな奴だな。

「くそぉ、あの水晶は掘りたいんだがなあ」

あんなにデカイ結晶なら、かなりの金額になるはずだ。

バイクから降りると――まだ、かたかたと震えているアネモネを抱きしめる。

「やっぱり、まだ早かったな」

「まあ、だれでも初戦は、こんなもんだにゃ」

「ミャレーも、こんな感じだったのか？」

「うにゃ？ 初めて牙熊に遭った時は固まったにゃ。にゃはは」

獣人は物心ついた時から狩りを始めるので、6歳〜7歳の時の話らしい。

「ミヤレー、俺達はこのまま真っ直ぐ湖畔に出て岸沿いを走って帰るから。そっちのほうが走り易い」

「解ったにゃ」

しょんぼりしているアネモネをリアシートに乗せると、森を突っ切って湖畔へ到着。

一旦バイクから降りると――ここが入り口だと解るように、湖畔の木々にピンクのスプレーで印を付けた。

そして、そのまま左に進路を変えると、滑らかな水辺を水を切って走る。

砂や小石が水で固まっていて、アスファルトのように走り易い。

だが、突然大きな石があったりするので、あまりスピードは出さない方が賢明だ。

10分程で家に到着したが、それから15分程経ってからミヤレーが到着した。

時計を見れば、まだ11時半頃だ。

家に入ると、俺は昼飯を軽く食べる事にした。

ミヤレーとアネモネは、洞窟の中で軽く食べていたからな。それに、アネモネはショックで食欲がないようだ。

「ごめんなさい……」

うつむく彼女の頭を撫でてやる。

「まあ、気にするな。初めてだから仕方ない」

「うん……」

「にゃー」

ベルがアネモネを慰めるように、黒い身体を摺り付けている。

その後は夕方まで畑仕事――重機を出して堆肥をかき混ぜたりしながら仕事をこなす。

畑にはトマトがなり始めている。もう少しで収穫出来るな。

――――◇◇――――

――夕方、街から戻ってきたプリムラ達と皆で夕飯にする。

今日は簡単にパスタにしてみた。だが、長い物やマカロニ、はたまたクルクル状の物は食い物に見えないらしい。

丸い板状のパスタを見せたら拒否反応がなかったので、そいつを使ってみた。

ソースはミートソースで、1号缶というデカイ既成品を購入――1500円だ。

「あら？ 意外と美味しいですわ」

「おお、うめえ！ へんてこな料理だったんで、旦那にしては珍しく外れかと思ったが、こいつはいける」

「こういう料理は、こちら辺にはないのか？」

「ええ、ありません」

「これも、小麦粉料理なんだがなあ」

こういうのを具にして、スープで煮込んだものはあるらしい。

パスタに舌鼓を打っていたニャメナだったが、落ち込んでしょんぼりしているアネモネに気がついたようだ。

「どうした、アネ嬢？ そんなにしょんぼりして」

彼女に洞窟であった出来事を話した。

「何い！？ なんで、そんな面白そうな事に俺を誘ってくれないんだよ！」

「いやあ」

一応、誤魔化そうとしたのだが――ニャメナの矛先はすぐにミャレーへ向かった。

「くそ！ てめえだな、このクロ助」

「トラ公には関係ないにゃ。それに、あのダンジョンはウチが見つけたものだにゃ」

「こらこら、喧嘩するな」

掴み合いをしようとした獣人の間に入って、席に戻らせる。

「でもよく、こんな所に洞窟蜘蛛とはなあ」

ニヤメナの認識でも、この魔物の住処は、もっと森の奥地だという印象らしい。

「どの道、俺は機材を取りにもう一度穴へ入らなくちゃいかん。方向探知機の親機も置きっぱなしだし……」

慌てていたので、すっかりと忘れてた。あれも高いので回収しない。

「よっしゃ！ それじゃ俺も行くぜ？」

「おいおい、プリムラの護衛の仕事はどうするんだよ」

「そ、それは……」

口籠もるニヤメナが、チラリとプリムラの方を見る。

「構いませんよ、私の店も休みがほしいと思っていたところですから」

彼女は店を休んで帳簿のチェックをすると言うのだが——いつもの元気がない。

怪しい——何か隠しているのか？

「プリムラ、何か心配事か？」

「……いいえ……なんでもありません」

なんだよ、その間は——黙って下を見ながら食事をする姿を見る

限り絶対に何かあるだろ？

「俺に隠し事か？」

「……」

間違いないな。

「プリムラ」

「あっと、旦那。お嬢を責めないでやってくれ。俺が言うから」
「ニヤメナ！」

プリムラが止めようとしたのだが、ニヤメナは構わず原因を話し始めた。

「何？ 嫌がらせ？」

「ああ、よくある話さ。女だけで切り盛りしている店が繁盛しているのが、気に入らないんだろ。オマケに、お嬢は目の覚める美人ときたら格好の的さ」

本店、支店に、チンピラを使った嫌がらせが始まってしまって、店の運営が難しくなっていると言う。

いくらニヤメナの腕が立つと言っても、同時多発でやられると手も足も出ない。

彼女の元気がないように見えたのは、そのせいかな。

「なんだよ、もうすこし早く言ってくれよ」

「ケンイチには心配掛けられません……それでなくても、色々と手助けをしてもらっているのですから」

「相手は解っているのか？」

「ああ、ソガラムって鼻つまみ者の商人さ」

ニヤメナが相手を知っているようだ。

「なんだ、それなら話が早い。俺の召喚獣を使って、そのソガラム

って奴の店を更地にしまえば……………」

そう言いかけて俺は口を塞いだ。あぶねえ……また、バイオレンスルートに突入するところだったぜ。

自分の行動や考えが、自分のものではないような奇妙な感覚に襲われる。

なんだよ——あの葉っぱは副作用ありまくりじゃねえか。

戦闘の度に葉っぱを噛みまくってたら、そりゃ頭がおかしくなるわけだ。

「旦那！ 召喚獣ってなんだよ？ そんな凄い魔法が使えるのか？」

「ケンイチは凄いのが使えるにゃ」

「なんだよ！ それじゃ、もうやるしかねえじゃねえか」

「ウチもやるにゃ！」

聞くな——小悪魔達の言葉に耳を傾けるな。

「……と思ったが、止めよう」

「ええ？」 「うにゃ？」

飛び上がった獣人達が、椅子にペタンと座った。

「プリムラも、あまり荒事は望まないだろう？」

「はい……商人には商人の戦い方がありますから」

「それで、いい方法はありそうか？」

「それが、まだ……」

プリムラは、また下を向いてしまった。

「それで、貴族との繋がりを作ろうとしたのか。カメオを売った貴族に仲裁は頼めないのか？」

「今の状態で頼み事をする、不利益の方が大きいでしょう。貴族に借りを作るのは得策ではありません」

カメオを売ったぐらいでは、アドバンテージにはならんみたいだ

な。まあ相手も大金を払っているだろうし。

何か貴族に恩を売れる方法でもあればいいんだが。

同じ8〇3に仲裁を頼む手もあるようだが、それには金が掛かる。それに、8〇3といっぺん関わりあうと中々手が切れなくなる。

それは、この世界でも同じらしい。

「うーん、もっと貴族に大きな貸しを作った方がいいって事か。とりあえず保留するとして――それで、どうする？　しばらく店は休むのか？」

「はい。雇った女の子達に何かあれば、親御さんに申し訳がたちませんし」

丁度いい機会なので、彼女は予定通りに帳簿の整理をするという。

「それじゃ、俺達はダンジョンの方へ集中しよう。近所の洞窟に、あんなのが住み着いていたんじゃ、安心して暮らせない」

それを聞いたニャメナが椅子から立ち上がった。

「それだよ旦那、餌が無くなりゃこっちに来るかもしれねえ」

「そうなんだよ、それが心配だ」

「よっしゃ！　旦那、決まりだ！　俺も行くぜ！　むしゃくしゃしてたし、久々に大暴れしたい気分だしよ、ははは！」

「そうは言ってみたものの、あんなデカイ魔物を本当に退治できるかな？」

「ははは！　大丈夫だって！」

何？　その根拠のない自信は。

どうも、獣人ってのは、あまり深く考えない人種らしい。

「魔物退治に戦力は欲しいからな――ミャレーいいか？」

「仕方ないにゃ」

「ははは！　洞窟蜘蛛か、こいつは腕が鳴るぜ」

「武器は貸してやるから心配するな」

「全く、至れり尽くせりだな」

ニャメナは景気良く、カップに注がれたワインを飲み干した。

「アネ嬢、寝る前に俺の所へ来な」

「……」

「どうするんだ？」

俺の問いに、彼女はアネモネに冒険者の心得を教えると言う。

まあ俺よりニャメナの方が経験豊富だからな。良いアドバイスがもらえるかもしれないが――。

「ニャメナ、まさか葉っぱじゃないよな？」

「葉っぱ？　――ああ、戦前に齧^{かじ}るやつかい？　あれは、危ないか

らあまりやらない方がいいぜ」

もう、遅いっちゅうの。

まあ葉っぱじゃないなら彼女に任せるか――女同士なら色々と話せる事もあるだろうしな。

51話 ダンジョン? (後書き)

5月10日 明日、アラフォー男の異世界通販生活の書籍版が発売になります。

<https://syosetu.com/syuppan/view/bookid/2564/>

52話 巨大蜘蛛と対決！

――次の日。

洞窟に住む、あのデカイ蜘蛛を退治して、水晶を掘り出したい。
あのぐらい巨大な結晶なら、1千万円は超えるんじゃないか？
かなり大きな収入だ。

だが、正直に言えば――金を全部プリムラに預けて、その金で彼女に商売をしてもらった方が儲かりそうなのだが。

しかしそれじゃ、ヒモじゃないか。

男として、ヒモでスローライフをしては矜持にかかわる。

「蜘蛛か……」

何か良い物はないかな――出発前に蜘蛛退治に使えそうな物をシヤングリ・ラで探す。

簡単なのは火を掛ける事なのだが、あんな狭い所で灯油やガソリンを使ったら、こっちまでヤバイ。

そう考えると、アネモネの魔法が不発で良かったか？　だが、魔法の火は、すぐに消えるからな。

後は爆薬か？　――作った事はないし作っている時間もない。しかも使えるかどうか解らん。

それに、使用すれば洞窟が崩れる心配もある。経験豊富そうなニヤメナに聞いてみるか。

「ニヤメナ、洞窟の中で憤怒の炎ファイヤーボールってどうなんだ？　危険じゃないのか？」

「ああ、油を掛けたりすれば危険だけど、魔法の火は直ぐに消えるからね」

洞窟が袋小路ではなく貫通している場合——所謂、煙突効果が起きて焼け死ぬ事もあるらしい。

それに炎が燃え続ければ、酸欠が怖い。

「これなんかどうだろうか？」

シャングリ・ラで良い物を見つけた、効くかどうか解らんが試してみようかと思う。

とりあえず、そいつを20本購入した。1本1000円だ。

「アネモネ、大丈夫なのか？ 怖かったら、家に居て良いんだぞ？」

「大丈夫！ 頑張る！」

アネモネは、ニャメナに気合を注入されて元気を取り戻したようだ。

何を言ったのか気になるところだが——まあいいか。

「そうだアネ嬢、女は強くなっちゃな！」

「うん！」

「皆さん、無理はしないで気をつけて下さいね」

戦闘力が全く無いプリムラは店の帳簿整理のため、お留守番だ。

一応、防御のためにボウガンを2丁彼女の下へ置いていく。

「はは、無理をしなければ、シャガを倒して君を助けられなかったし」

「そうですか……」

「お嬢から聞いたけど、悪名高き野盗のシャガを討伐したのって旦那なんだってな」

「それは、街の奴等には言わないでくれよ」

「解ってるよ。でも、その討伐をした凄い魔導師って奴が、ダリアから逃げ出したって噂は聞いたけど、それが旦那の事だったなんて……」

「面倒な事になりそうだったんでな」

「それで、お嬢を置いて逃げたのかい？」

「うぐ……まあ、それがなんだ……」

「私など、ケンイチからすれば、そこら辺に転がる石ころに過ぎなかった——という事です」

プリムラの冷たい視線が俺に突き刺さる。やっぱり未だに恨んでいるようだ。

「そうじゃないんだけどなあ」

「旦那あ——お嬢みたいな良い女は滅多にいないぜ？」

「それは解ってる」

それはひとまず置き——。

元氣が出たアネモネをオフロードバイクのリアシートに乗せて、出発だ。

硬くなった湖の水際を水しぶきを上げて走る。当然淡水だからな、錆びる事もない。

こんな事を海沿いでやったら、洗車をしないと大変な事になってしまう。

バイクは最高速で時速60km程出ているのだが、それでも獣人達は並走している——彼女達のスピードに舌を巻く。

10分程で、ピンク色の印を付けた木が見えてきた。

「その魔法で動くドライジーネは、すごい速さで走るんだな」

「まあ、お前らも速いな」

「短時間なら、もうちょっと速く走れるぜ」

——それじゃ、最高速は時速80kmぐらいか？

ニヤメナが、印を付けた木に気がついたようだ。

「あの変な色の印は、旦那が付けたのか？」

「解りやすいだろ？ このまま真っ直ぐに森に入って崖へ向かえば、洞窟の正面に出るはずだ」

そのままハンドルを右に切ると、獣人達を引き連れて森の中へバイクを入れる。

しばらく暗い森の中を進むと、黒い裂け目が見えてきた。

「あれか……結構高さがあるな」

「だが、奥のほうは狭くなってるぞ」

「それでも、突然広い場所が広がっていて、そこが巣になってたりするんだ」

住み着くのは洞窟蜘蛛だけではなく、牙熊や他の魔物も同様だと言う。

「それじゃ魔物を退治しても、しばらくすれば他の魔物が巣にしている事もあるわけか」

「それはあるぜ。けどよ、大物の魔物狩りなんて滅多に行われないんだ。なぜだか解るかい？」

「――大きすぎるのか？ 運んだりするのが大変だろう」

「その通りさ」

大型の魔物を運ぶには馬車が必要だが、森の中では車輪が埋まってしまう馬車は入る事が不可能だ。

木の伐採や運搬用に幅広車輪が装着された大型の馬車もあるのだが、森を切り開いて道を作らねば運用出来ない。

大体、運んでいる間に魔物が腐ってしまう。

解体するのにも人手がいるし、保存するためには冷却系の魔法が使える魔導師を雇う必要がある――等々。

その場で解体して素材を運べるのも獲物のほんの一部だけ。命がけで魔物を仕留めても全く割に合わないらしい。

それこそ、アイテムBOXが必要なのだ。

頭にLEDヘッドライトを付けた獣人達が先頭——俺が真ん中、そしてヘルメットを被ったアネモネがしんがり殿だ。

アネモネのヘルメットにも、LEDヘッドライトを取り付けた。とにかく、この洞窟の中は真っ暗なのだ。

ふと気が付くと、いつの間にかベルが、またパーティーに加わっていた。狩りだと皆の雰囲気で解るのだろうか？

その隊列で洞窟を進み、大蜘蛛に襲われた所までやって来た。

「こりゃ、すげえな。魔法の光かよ。旦那、マジで何でも持ってるな」

ニャメナの頭から照射された青い光に照らしたされる水晶の結晶と青い発電機。

「ここだ！」

「そうだにゃ！ 焚き火の跡もあるにゃ」

放置したままの発電機と電動ハンマが、そのまま転がっている。

発電機はエンジンを掛けっぱなしだったので、燃料切れを起こして、そのまま停止していた。

俺が召喚したバリケードは少々崩れており、一緒について来ていたベルが、バリケードに付けられた臭いを嗅いでいる。

尖った丸太の先には魔物の破片や毛らしき物がこびりついているのだ。

「障害物を越えようとして引っ掛けたな。どうする？ ここで迎え撃つか？」

「いいぜ、この障害物は、このまま使えそうだしな。どうやって誘き出すんだ？」

「俺が魔道具を動かしたら、やって来たので、また動かせばいいんじゃないのか？」

「よし！ 旦那、そいつをやってみてくれ」

「アネモネいいか？」

「大丈夫だよな?! アネ嬢！」

「うん！」

アネモネの気合も十分なようだ。

「アネモネ、狭い洞窟の中だからな。魔法の威力を増す、あの金属は使わないでくれよ」

「わかった」

俺は、アイテムBOXからシャングリ・ラで買った新兵器を取り出した。

買った物――それは、黄色い缶に入ったバズーカみたいな殺虫剤だ。

これなら12mは飛んで、バリケードの向こうにも十分に届く。本来は蜂用の殺虫剤だが、成分にはピレスロイドと書いてある。

同様に、蜘蛛用の殺虫剤にも同じ薬剤が書いてあったので、こいつも蜘蛛に効くだろう――と思う。

「この武器を使ってくれ。こうやって手でもって、弩弓みたいに構えて引き金を引くと毒が発射される」

「本当かよ！」

ニャメナが、バリケードの向こうに狙いを定めて、引き金を引くと白い霧が勢い良く暗闇の中に飛んでいく。

「こりゃ、すげええ！」

「にゃにゃ！」

「こらこら、あまり使うな、直ぐに薬剤がなくなるからな。洞窟蜘蛛に効くかどうかは解らんが」

「こうなりゃ、何でも使ってみようぜ」

そうと決まれば作戦開始だ。

蜘蛛を誘き寄せるために、発電機にガソリンを入れてスターター

を押す。

発電機が回り始めたので、そのまま電動ハンマを使って水晶を掘り始めた。

けたたましい騒音と、岩肌を伝わる振動。前も掘削をし始めたなら、すぐに蜘蛛がやって来たからな。

「ひゃあ！ こいつは煩え！ こんなにデカイ音がするんじゃ、近くまで蜘蛛がやって来ないと解らねえぞ！」

「どうせ、近くまでこないと何も出来ないにゃ！」

「そりゃ、そうだけどよ……」

しばらく、岩肌を電動ハンマで叩いていると、奥から奴がやって来たらしい。

「ケンイチ、来たにゃ！」

「マジで来やがったぜ！」

「シャーッ！」

ベルが激しく暗闇へ向かって威嚇をする。

俺は、すぐに発電機のエンジンを切った。またガス欠になったら、ガソリンが勿体ない。

暗闇の中に浮かび上がる、針金のような毛が生え、折りたたまれた白く長い脚。

そして、青く輝く目玉の1つには、ミャレーが放った矢が突き刺さっていた。

「俺たちを襲ったのと同じ奴だ！」

「こいつか！」

「にゃ！」

「毒だ！ 毒を使い！」

皆で黄色い缶のバズーカを構えて、一斉に薬剤を噴射した。

「隙間だ！ 甲殻の隙間を狙え！」

30秒程で空になった缶を捨てて次々と缶を噴射。薬剤を蜘蛛の化け物に浴びせかける。

「ギイイイイ！！！」

大蜘蛛は悲鳴を上げると左右の岩肌に衝突を繰り返し、洞窟内にその揺れが伝わる。

「アネモネいけるか？ 憤怒の炎だ！」

ファイヤーボール

「うん！」

俺達は急いで、蜘蛛と距離をとった。近くでは魔法に巻き込まれるか、酸欠になる可能性がある。

「ぬー！ 憤怒の炎！！！」

ファイヤーボール

彼女の前に展開した炎の弾が、バリケードを越えて大蜘蛛に衝突すると、巨大な炎となって天井まで吹き上がった。

熱せられて膨張する空気の塊が俺達を襲う。

しかし今回は、魔法の威力を増すアルミ板は使っていないはずなのだが、少々威力がデカイ。

もしかして、俺達が撒いた殺虫剤に引火したのかもしれない。

「あちち！」

「すげええ！」

「にゃー！」

炎がなくなった洞窟の奥に目を凝らす。

「ギイイイイ！！！」

殺虫剤が効いたのか、それともアネモネの魔法が効いたのか……。戦意を喪失した敵は、そのまま後退りするようにフラフラと闇の

中へ消えていった。

「アネモネ、やったな！」

「すげえぞ！ アネ嬢！」

「にゃにゃ！」

「うん！」

「にゃー」

ガッツポーズをしているアネモネに、ベルが黒い身体を擦り付ける。

アネモネは、しゃがみ込むとベルの身体に抱きついた。やはり、内心は凄く怖かったのかもしれない。

「でも、丸焦げになるかと思ったが魔法があまり効いてなかったな……」

「魔法は、魔法にある程度耐性があるにゃ」

「だから、ああいう殻を鎧に使えば、魔法よけになるんだよ」

「へえ」

喜ぶのはまだ早い、それでどうするか？

「毒は効いていたようだぞ？」

「そうみたいだったな、旦那」

「うにゃー」

「毒はまだあるのかい？」

「あるぞ」

とりあえず更に20本追加注文して、落ちてきた殺虫剤をアイテムBOXの中へ入れた。

「こりゃ、やるしかねえ」

「にゃー！」

「そうか、やるのか」

「おー！」

苦難を乗り越えた、アネモネもやる気満々だ。ここで追撃して敵を倒させ自信を付けさせた方が良くかもしれない。

「よし、バリケード収納！」

三角形に積まれたバリケードを4基、アイテムBOXへ収納。少し魔法で焦げたようだが、まだ使える。

その後、俺達は闇の中へ更に脚を進めたが、5分程歩いた所で目の前の道がなくなっている。高さ2m程の崖だ。

飛び降りてもいいが、暗いので足元が不安だし怪我でもすると面倒だ。アイテムBOXからアルミの脚立を出すと下に降ろした。

下に降りてから数分でポツカリと空いた広い空間に出る――まるで大広間のような場所だ。

上を見れば5m以上の高さがあるようだが、暗い中なので正確な高さは不明。

天井の一部に穴が開いていて、上に繋がっているように見えるが、ここからでは確認出来ない。

アイテムBOXからレーザー距離計を出して天井の高さを計ってみる――7mらしい。

真っ暗なので、イマイチ状況が掴めない……頭についているライトでは照射範囲が狭すぎるのだ。

広間の中心近くまで行くと――俺はシャングリ・ラから、LED投光機を購入した。50Wで防水仕様らしい。

ついでに、モバイルバッテリーもアイテムBOXから取り出して、投光機を接続。

暗い洞窟内に、直視出来ないような明るさの真っ直ぐな光の筋が伸び辺りを照らす。暗い海の闇を裂く灯台のように――。

「あそこにいるぞ！」

広間の端——俺達が殺虫剤を掛けた洞窟蜘蛛が瀕死になり、巨大な岩の前で懸命に身体中を脚で擦り、変則的な動きを繰り返している。

それは殺虫剤を掛けた虫が、でたらめな動きをするのに似ていて断末魔なのだろう。

「トドメを刺すか？」

「おう！」

その大蜘蛛に近づこうとした瞬間、奥にあった巨大な岩が動いた。

「おわっ！　なんだこりゃ？！」

「旦那！　これって！」

「ふぎゃー！」

「あー！」

投光機の白い光に照らし出されたのは巨大な白い蜘蛛。俺たちが戦っていた蜘蛛より倍以上デカイ。

小さい方と明確に違うのは目が赤いところか。そのデカくて赤い目が俺たちに狙いを定めているように見える。

「旦那！　こりゃ、メスだ！」

ニャメナが叫んだ。

「メス？　メスの方がデカイのか？　それに、あんなデカさじゃ通路を通れないぞ？」

「だから、オスが狩りをして、メスを食わせていたんだよ」

それじゃ、そのオスを瀕死にってしまったら、あのメスはここで餓死するしかないって事か。

小さい時に、この洞窟へ入り込み、オスに食わせてもらってここまで大型化したのか。

「おい！ 逃げるぞ！ 餌を運んでいるオスが死んだら、あのメスは直ぐに死ぬだろ」

「そりゃそうだ！」

「にゃー！」

俺達が踵を返そうとした刹那――巨大なメス蜘蛛は、瀕死に喘いでいたオス蜘蛛を長い脚で弾き飛ばすと、俺達の後方へ回り込んだ。

「あ！ クソッ！」

「飯係のオスを殺られて、怒ってるのかね？」

「そんなところだろ」

「ウチ等を殺しても、どうせ死ぬにゃ」

「畜生に、そんな理屈は通用しないだろ」

死なば諸共かもしれないが――ニャメナの言う通り、飯係のオスを殺られて怒っているだけだろうな。

俺は、アイテムBOXから再び殺虫剤を取り出した。

「バリケード召喚！」

俺は手持ちの丸太バリケードを全部前方に並べた。

すると、一緒について来ていたベルが、バリケードを飛び越えて、真っ先に大蜘蛛へ攻撃を仕掛けた。

蜘蛛の繰り出す巨大な爪を華麗に躲^{かわ}すと、脚の上を走り赤い目へ爪を立てた。

「ギィィ！」

だが、彼女の爪じゃこの硬い甲殻には齒が立たないだろう。

やはり俺達の出番だ。

「俺が、この明かりで目潰しを掛けるから、お前等は毒を吹き付けろ！」

「あいよ！」

「にゃ！」

森猫が離れたのを確認すると――LEDの刺すような光が向けられて巨大な蜘蛛の赤い目を潰す。

「ギィィ！」

オスの声に似ているが、かなり低い叫びが広間に反射してエコーが掛かっているように聞こえるのだ。

しかし、明かりに怯んでいる今がチャンスだ。

「今だ！」

ミャレーとニャメナが放ったバズーカ殺虫剤が巨大な蜘蛛に吹き付けられる。

「ギギギィィ！」

「よし！ イケイケ！ アネモネ、魔法を撃てるか？！」

「むゝ！ ファイヤーボール 憤怒の炎！！！」

彼女の前に集まっていた炎の弾が、一直線に白い山へ向かって弾けると、巨大な火柱に変わった。

その炎は広間の天井まで吹き上がり岩肌を焦がす。

「ギギギィィ！」

だが、メス蜘蛛は炎に包まれながらも動かない。

それに余り効いていないように見えるのだ。獣人達が言うように、魔法に耐性があるに違いない。

それにしても何故動かないのか？

俺達も蜘蛛が向かってきたら爆竹を投げつけ、その横をすり抜けて通路へ逃げ込む算段をしていたのだが、その目論見は今のところ外れている。

「何故動かない？」

「旦那、こいつはもしかして、このまま通路を塞いで心中するつもりなんじゃ？」

巨大な蜘蛛の尻がスッポリと嵌っているので、こいつをどかすのは一苦勞だろう。

甲殻に穴を開けるにしても、矢も刺さらないぐらい硬質な皮だしな。

デカイので、殺虫剤もあまり効いていないようにも見える。

「ああ、クソお！ やっぱり死なば諸共かよ！ 根性糞色ねせいだぜ、こいつは！」

「旦那！ どうする？」

「こいつが死ぬのを待てばいいにゃ」

「餓死するまで3、4日待つのか？ 虫は冬眠する奴もいるぞ？ そうなりゃ数ヶ月は掛かる」

「旦那、こんな所で寝泊まりなんて俺は嫌だよ！」

俺だって嫌だ——プリムラも心配するだろうしな。

それに疲れて寝た瞬間に、奴が襲い掛かってくるだろう。いや、それが狙いか？

くそ……更に、100本ぐらい殺虫剤をぶっかければ死ぬかもしれないが……。

「このクソ野郎——！ チート持ちを舐めるなよ！」

こいつはメスなので野郎ではないのだが、そんな事はどうでもいい——俺はシャングリ・ラで中古の大型重機を検索した。

よっしゃ！ これだ！

「やってこいこい、コ○ツさん！ 総排気量6690cc157馬力——950万円！ ポチツとな！」

俺の目の前に巨大な黄色い車体が地響きを立てて現れた。

コ○ツさんは巨大構造物等の工事現場で活躍する、頼れる憎いナ

イス・ガイだ。

でも、コ○ツさんの前で、ユ○ボと連呼しちゃいけないよ。機嫌が悪くなるからな。これは男の約束だ。

「おい、お前等！ 危ないから、この明かりを持って広間の隅へ行つてろ！」

俺は蜘蛛の前に設置していたバリケードを収納した。

突然現れた鉄の化け物に、ニヤメナが驚いて腰を抜かしているのが見える。

だが、アネモネが俺と一緒にコ○ツさんに乗り込んできた。

「ミャレー達と一緒にいろ！」

「や！」

ミャレーがLED投光機を抱えて、大蜘蛛に光を当て続けるのを引き受けてくれた。

アネモネが一緒のままだが、やむを得ない。ミャレーに引っ張られているニヤメナを確認すると――ガラスに覆われたコクピットへ乗り込み右側のコンソールにある始動スイッチを回す。

大きな振動と共に、ディーゼルエンジンが始動した――燃料はOK。

右手前に点灯したコンソールの中からパワーモードを選択。

「え」と

探したが、ヘッドライトは装着されていないようだ――仕方ない。だが、ミャレーが投光機で照らしてくれているので、敵は見える。

「この下等生物が！ 文明の利器を思い知らせてやるぜ！」
フットバーを踏んで前方へ重機を移動させながら、車体を右に振る。

「コ○ツスイング！」

車体を左へ旋回させると、巨大な鋼鉄のバケットが白い大蜘蛛を直撃——除夜の鐘のような大音響が岩の広間に鳴り響き、魔物は塞いでいた通路から吹っ飛ばされた。

「ははは！　コ○ツアタック！」

広間の天井まで振り上げられた鋼鉄のバケットが大蜘蛛に振り下ろされる。

だが、それを躲かわしたメス蜘蛛が、コ○ツさんのアームに取り付いた。

右のディスプレイに何か表示されてブザーが鳴る。アームに重たい物が乗っているので、荷重の警告だろう。

「畜生の分際で猪口ちぐい才さいな！　あゝくそ！　アームが動かない！」

メス蜘蛛の重量がありすぎて、アームがびくともしない。それどころか、アームを持ち上げようとすると、車体のケツが浮かんてしまふ。

「くそつたれ！」

俺は両足でペダルを踏み込むと、アームにしがみついた巨大なメス蜘蛛を壁にそのまま押し付けた。

何かの警告音が鳴りっぱなしだが、構ってられない。

「ギィィ！」

「オラオラ！」

軋む車体とアーム。ディーゼル機関の重低音と共に、金属製のカタピラが岩を擦る音が響き、暗闇に火花が散る。

俺は更にペダルを踏み込むと、ガリガリと魔物の硬い甲殻を岩肌に擦りつけた。

岩肌でヤスリがけをされたのか、甲殻の隙間から液体が滴り落ち

る。それは人間のそれと似たような赤い体液。

「むゝ！ 憤怒の炎！」
ファイヤーボール

アネモネの魔法が直撃して、滴った体液がジュワジュワと蒸発をし始める――これは、ちょっと効いているように見える。

そして、コ〇ツさんとアネモネのコンビネーション攻撃に脚の力が緩み――メス蜘蛛は、しがみつく力を無くしてそのまま地面へ落下。

瀕死になりながら、よろよろと左右にふらついている。

「コ〇ツアタック！」

俺のレバー操作によって天高く振り上げられた鋼鉄の爪が、メス蜘蛛へ振り下ろされた。

硬く鋭い鉄の爪が頭部へ食い込むと巨大な身体がひっくり返った。抉られた損壊箇所からは赤い液体が流れだし――巨大な白い敵は、そのまま動かなくなり沈黙した。

そして長く白い脚が合掌するように、ゆっくりと身体の中央に集まっていく。

念のために、バケットで蜘蛛を小突いてみるが大丈夫だ――動かない。完全に息絶えたようだ。

「ふう――恐れいったか」

俺は大きく深呼吸した。

くそ、こいつのせいで、また盛大に無駄遣いをしてしまったぞ。まあ発電機を放置した場所の水晶を掘り出せば、パワーシヨベル代ぐらいにはなるかもしれないが……。

アームを折りたたみ、エンジンを停止させると重機から降りて、アイテムBOXへ収納する。

難なく黄色い重機は収納されて俺の目の前から消えた。

続いて、白いメス蜘蛛の巨大な軀むくろを収納した。アイテムBOXに

入ったって事は完全に死んでるんだろう。

「ちょっと旦那、旦那あ！」

ニヤメナが慌てて駆け寄ってきた。

「なんだ、ニヤメナ」

「あの鉄の化け物はなんなんだよ！」

「あれが、俺の召喚獣だ」

「召喚獣？ アレがかい?!」

「ああ」

「ケンイチに逆らうと、あれで八つ裂きにされるにや。シャガの連中もそうなったにや」

かたかたと震えているニヤメナを見る――彼女が、そんなにビビるとは思わなかったな。

「アネモネ、明かりを持ってきてくれ。オス蜘蛛の方も収納しないとな」

「うん！」

「魔法を3発も撃ったが、大丈夫か？」

「ちょっと疲れたけど、大丈夫だよ」

投光機を持って、オスの方も探す。

いた――メスに弾き飛ばされて、広場の壁へ激突して息絶えていた。

メスの食事を運んで尽くしていたのに不憫な奴。ふびんそう思うと可哀想な気がする。

オスの蜘蛛もアイテムBOXへ入れて、辺りを見回す――メスが居たあたりに白い壁がある。

触ると、トランポリンみたいに弾力がある布のような……。

「ケンイチ、これは虫糸にや。これで編んだ布は魔力を弾くと言わ

れているにゃ」

虫の糸でも蜘蛛の糸でも、総称して虫糸と言うらしい。

「それじゃ、これを服屋に渡して装備を作ってもらえば、魔法の防御ができるって事か？」

「その通りにゃ」

アイテムBOXから脚立を出して、布のような虫糸の白い壁を切り取った。

そして中から現れたのは——丸いサッカーボールぐらいの大きな白いもふもふの玉が5個。

「なんじゃこりゃ？」

「旦那、多分蜘蛛の卵だよ」

「ははあゝなるほどな。んで、こいつは食えるのか？」

「はあ？ 蜘蛛の卵を食うなんて聞いたことがないよ！」

中々物知りなニャメナもそんな事例を知らないと言う——まあいいや。とりあえず、アイテムBOXの中へ入れて後で考えよう。

そのまま白い玉はアイテムBOXへ収納された。

あれ？ 生き物はアイテムBOXへ入らないと思ったが、卵は平気なのか？

そういえば、シャングリ・ラで買った卵もアイテムBOXへ入れてたなあ。

それとも、有精卵はダメで無精卵ならOKとか？

まあ、それは後回しで、いいか。

この広間を調べたが、ここで行き止まりのようだ。

——という事は、このダンジョンは安全になったので、あの水晶がゆっくりと掘れるって事だ。

なるべく綺麗に掘り出して、
コ〇ツさんの代金を回収しなくては。

53話 蜘蛛の卵の味は？

ダンジョン——というよりは、一本道の洞窟だったが、そこに巢食っていた洞窟蜘蛛という大物を退治した。

最初に俺たちが相手にしていたのはオスで、奥の住処には更に大型のメスが控えていたのだが——。

俺は新しい相棒——コ○ツさんのパワーを持って、これを粉碎。戦利品をアイテムBOXへ入れて、水晶がある場所まで戻ってきた。

「俺は、ここで水晶を掘っていくから、お前等は先に帰ってもいいぞ。この魔道具は煩いから獣人達にゃキツイと思うし」

まだ昼前だ時間はたっぷりとある。

「それじゃ、ウチは先に帰っているにゃ」

「ミヤレー、プリムラに皆は無事だと伝えてくれ。ニヤメナはどうする？」

「うーん」

「私はここにいる！」

アネモネは俺と一緒にいるようだ。

「いいのかアネモネ？ 岩を掘るだけだぞ？」

「いいの！」

腰を下ろした彼女がヘルメットを脱ぐと、一緒について来ていたベルが横に丸くなった。

掘削音がかなり煩いと思うが彼女の大きな耳で大丈夫かな？

彼女の傍らに水と猫缶を出してやる。

「それじゃ、俺も一足先に戻るよ」

ニャメナも戻る事にしたようだ。そりゃ、この暗い中じゃ彼女達が出来る事が何もないからな。

獣人達と別れて、俺は発電機を回して電動ハンマで水晶を掘り始めた。

いくら派手に掘っても、もう奥からは何もやって来ない。そりゃそうだ、俺達が退治したからな。

そのまま3時頃まで掘り続けて、結晶の半分程が露出した。この結晶をまるごと掘り出して、高額査定をもらう作戦だ。

こんなチマチマとやっているとか昔のテキ屋であった、カタヌキを思い出すな。

「さて、残りは明日だな。そろそろ帰るか」

「うん」

「こんな所に居てもツマランだろ？」

「いいの！ ケンイチと一緒にいたいの！」

「そりゃ、アネモネがいいって言うのなら、いいんだけどな」

洞窟内にオフロードバイクを出して、アネモネをリアシートに乗せると、洞窟内を走り始める。

後ろを見てないが、森猫もついて来ているだろう。

「おっと忘れるところだったぜ」

洞窟の入り口へ放置したままだった方向探知機の親機を回収。結局、一本道の洞窟だったから、これの必要はなかったな。

そのまま洞窟を出ると湖まで一直線——水際を走り帰宅した。明日いっぱい掘削をすれば結晶が取れそうだな。バイクで帰った俺達をプリムラが迎えに来てくれ、飛びついてきた。

「ケンイチ！　よくご無事で！」

「ミャレーとニャメナから無事だって聞いてただろ？」

「でも……」

そつと、プリムラの柔らかい金髪を撫^なでる。見れば涙目じゃないか。

まあ確かに、あのメス蜘蛛はヤバかったけどな。その苦戦の様子を、獣人達から聞いたのかもしれない。

「にゃー」

ベルが俺の下にやって来た。

「よしよし、ありがとうな」

彼女の毛並みの良い毛皮を撫^なでてやる。

「そうだ、プリムラにも大蜘蛛を見せてやるよ」

「え？」

俺は、アイテムBOXからメスの大蜘蛛を取り出しプリムラの前へ出現させた。

洞窟内では暗くてよく解らなかったが、白い甲殻はキラキラとした結晶のような物で覆われているようだ。

それが陽の光に反射して、この全体の見た目にそぐわぬ程に美しい。

「……ひい……」

目の前に現れた大蜘蛛を見て、プリムラの顔がみるみる血の気を失い――その場で昏倒した。

俺は慌てて、崩れ落ちる彼女を支えたのだが――。

「おい、プリムラ！　大丈夫か？」

慌てて、大蜘蛛をアイテムBOXへ入れ直すと、彼女をお姫様抱っこして家に戻る。

部屋にベッドを出すと、そこにプリムラを寝かせた。

「ふう……焦ったぜ。こんなに驚くとは」

「旦那、そりゃ普通の人間が森に入って、こんな大物に出会う事は滅多にないからねえ」

「ああ、もしかして、この一帯にデカイ魔物が少ないのは、この蜘蛛に食われてたせいかな？」

「あり得るね」

部屋に椅子を出して、ニャメナと話をしていると、ベッドで横になっていたプリムラが目を覚ました。

「うん……」

「プリムラ、大丈夫か？ 悪かったな驚かせて」

「あ、あんな巨大な魔物を仕留めたのですか……？」

「ははは、まあな」

「全く——旦那が、あんな鉄の化け物を操れるなんて思ってもみなかったぜ」

「ケンイチは調教師テイマーですよ」

それを聞いたニャメナが膝を叩いた。

「ああそれで、森猫も懐いているんだな」

「懐かない魔物もいるけどな」

「あの蜘蛛でも、操れるのかよ？」

「さてな、時間を掛ければ或いは……意思の疎通が出来ないから無理かな？」

「全く、信じられないよ」

だが、ミャレーとニャメナに聞いても、あの蜘蛛が金になるかどうかは不明だと言う。

「魔物の甲殻は貴重なんだろう？ 魔法を弾く鎧だと……」
「あんなデカブツを処理出来りゃいいけど……ギルド次第だな」

倒れたプリムラは大丈夫そうなので、外に出て検証をしてみることにした。

検証——何をするのかというと、蜘蛛の卵だ。

アイテムBOXから大きめのステンレス製のボウルを出し、その中へ毛玉のような蜘蛛の卵をいれる。

サッカーボールぐらいの大きさがあるから結構デカイ。

「旦那、何をするんだい？」

「中身を見てみようかと思って」

「うえええ！ 正気かい？」

ニヤメナが露骨に嫌そうな顔をするのだが——中身はどうなっているのか、俺は気になるんだがな。

「何をしてるにゃ？ ふぎゃ?!」

「なになに？」

アネモネは平気のようなだが、獣人達はちょっと混乱しているようだ。

「アネモネは平気なのか？」

「私も中身を見てみたい」

「中から蜘蛛が出てくるかもしれないぞ？」

「それじゃ、私が魔法で燃やすから！」

随分と遅たぐましくなったものだ。ボウルに入っている蜘蛛の卵に包丁で切れ込みを入れる——。

すると、中から流れ出すクリーム色のドロドロとした液体。

「残念、中身は蜘蛛の姿じゃなかったな。もしかして、メスが産んだ直後だったのかも」

卵の殻も虫糸で出来ているようなので、川で洗ってから干す事にした。川でじゃぶじゃぶと洗い、ジェットヒーターを出して温風を当てて乾かす。

その間に、俺が自ら実験台になってみよう。

「旦那、一体何を……？」

ニヤメナが恐る恐る聞いてくるのだが、説明しても解らんだろう。先ずはpH^{ペーハー}試験だな。シャングリ・ラでpH試験紙を買い——紙が巻いてある物で200円だ。

紙を引き出すとオレンジ色なので、そいつを卵の中身に漬ける……変化なし——という事は中性だ。

アルカリや酸性だったりすれば、色が変わるわけだ。サイトでは、こんな物も売ってるのだが、何に使われているのだろうか——と評価欄を見てみる。

ははあ、熱帯魚の水質を管理するために、pH^{ペーハー}試験紙が必要なようだ。

卵の中身が中性って事は酸性で鉄が溶けるとかじゃないわけか。一応、ボウルをステンレスにしたのは、腐食耐性重視のためでもあるのだが。

「それじゃ、ちょっと食ってみるか」

アイテムBOXからカセットコンロとお玉杓子を出して、ほんの少し卵の中身をお玉に塗って加熱する。

クリーム色の中身が直ぐに固まり、薄いシート状になる。

ふむ——見た目は普通の卵を焼いたような感じなのだが……。

「ぱく」

「ひいっ!」「ふぎゃ?」

煩^{わづら}い獣人達は放置して、少しでも口に入れてみた――が、変な味はしないし、旨味もあるようだ。

――というか、結構美味い。

これでしばらくして、腹が痛くなったりすれば毒が含まれている事になるのだが。

卵の中身つてのは、身体が構成される前のタンパク質がドロドロの未分化の状態なので、この段階で毒って事はないと思うのだが――一応念のためだ。

時間を置いて大丈夫であれば、さらに食う量を増やしてみる事にする。

「旦那、正気かい？」

「ああ、まあな。お前たちに食わせたりはしないから心配するな。ははは」

獣人達は耳を閉じて尻尾を股の間に入れている。見るからに完全にテンションがダダ下がっている状態だ。

その後、そのまま夕方になったが腹の具合はなんともない、明日はもう少し食う量を増やしてみようと思う。

あまり無茶して七転八倒したりすると皆に迷惑が掛かるからな。慎重に事を運ばねば。

まあ、そこまでして無理に食う事もないような気もするが、せっかくのファンタジーらしい食材じゃないか。

ジビエとかスローライフっぽいしな。何より日本人なら、食えるのか？ 美味しいのか？ とても気になるじゃないか。

外で夕飯の準備をする。スープはプリムラが用意すると言うので任せてしまう。彼女はすっかりスープ作りの名人だ。

皆で食事を取った後――闇夜の中で、家からちよつと離れた場所にアイテムBOXから小屋を出した。

そして中には液体を分ける魔道具を設置。

何をするのかというところ——大食らいの大型重機を買ってしまったので、燃料が大量に必要なのだ。

調子に乗ってデカイのを買ってしまったが、あのコ○ツさんの燃料タンクは400Lぐらい入るからな。

ユ○ボとコ○ツさんの大きな違いは、なんといってもその大きさ。アームを振り上げた高さは、ユ○ボの4mに比べて、コ○ツさんは9m以上と倍以上違う。

重量も、ユ○ボは4トトラックにも積める3ト程だが、コ○ツさんのほうは——以前聞いた話だと20ト前後と超重量級。

シャングリ・ラにはもっとデカイ重機も売っているのだが、寸法的には、この重機の1.5倍の大きさぐらいならなんとかかなりそうな感じではある。

俺は、その大物が食らうための大量の燃料を生成する仕掛けを作った。

魔道具の上の器に水位センサーを取り付けて、油面が下がったら電動ポンプで追加の油を汲み上げるカラクリだ。

これで連続してバイオディーゼル燃料が大量に作れる。

さて、油を入れる容器だが、浴槽がいいかな？ シャングリ・ラで浴槽を検索すると、青色のジャンボタライというのを見つけた。

容量は120Lある。これなら余裕だ。

シャングリ・ラで一番安い植物油を探す——キャノーラオイル1.5Lで400円の物があつた。

120Lって事は、こいつが80本あればいいって事か。

これがガソリンなら、こんなやり方はかなり危険だが植物油やディーゼル燃料（軽油）なら大丈夫だろう——と思う。

小屋の外へ出て、キャノーラオイルを80本購入すると、次々と1.5Lのペットボトルが降ってきた。

「はは、こりやすげえ量だな。これでもコ〇ツさんのタンクの約1／3だよ」

1人でペットボトルの封を切って、油をドボドボ入れていたら、ニヤメナがやって来た。

「旦那、また変な事をしてるのかい？」

「ああ、あの鉄の召喚獣の餌を作っているんだよ」

「これって油だろ？ 餌って油なのか？」

「まあな。でも、普通の油じゃ言う事を聞かないから、色々手間が掛かるんだよ」

「これって錬金術だろ？ 旦那って本当に魔導師なんだな」

だが、いつもの彼女の様子とちよつと違う。俺の事を警戒しているようだ。

「普通の魔導師とはちよつと違うけどな――って何をビビってるんだよ。お前みたいな威勢の良い女でもビビるのか？」

「そりゃ俺だって、怖い物ぐらいあるさ。あんな鉄の化け物と戦って勝てるはずないだろ？」

「操っているのは俺だから、俺を倒せば消えるんだぞ？」

「そりゃ、そうだけどさ」

何かしおらしくなって、もじもじしているニヤメナが可愛いので撫でてやると、ゴロゴロと喉を鳴らしている。

「後で可愛がってやるから、この油を青いタライへ入れてくれ」

「解ったよ」

だが、すぐにミヤレーもやって来たので、それどころではなくなってしまった。

とりあえず、油は全部入れた。動作チェックもして、油面が下があれば電動ポンプが動くのも確認済みだ。

こいつに、アルカリとアルコールを投入して、エステル化させる。

それを魔道具へ通せば、バイオディーゼル燃料が出来るって寸法だ。

これで順調にいけば、朝起きた時にはタツプリとコ〇ツさんのご飯が出来上がっているだろう。

――――◇◇――――

――次の日。

小屋を覗いたらバイオディーゼル燃料が目論見通りにたっぷりと出来上がっていた。装置は上手く作動したようだ。

プラ製のジャンボタイごとアイテムBOXへ入れる。要らないグリセリンと不純物はステータス画面のゴミ箱へ入れてしまう。

よしよし、これでどんどんバイオディーゼル燃料を作ろう。

大型重機を買ってしまったのは仕方ないし、せつかくあるのに利用しない手はないからな。

プリムラが貴族の所へ向かうというので街まで送っていこうとしたのだが、ニヤメナが背負っていくと言う。

まあ、彼女の店はしばらく休業だ。今日は荷物も無いしな。ニヤメナに任せてしまおう。

俺もやる事がある――昨日の続きで蜘蛛の卵を、もう少し多めに焼き醤油を掛けて食べてみた。

卵の白身のような黄身のような変わった味だ。これでマヨネーズが作れるかもしれないな。

これで昼間までに身体に異変が起きなければ、ほぼ大丈夫だろうと思う。

さて、俺がやる事は――。

洞窟にあった水晶の掘り出しだな。

蜘蛛はアイテムBOXへ入れておけば腐る事もないから後回しだ。

俺がバイクで洞窟へ向かおうとしたら、アネモネも一緒にいくというので、ヘルメットを被らせリアシートに乗せる。

「洞窟の中なんてツマランだろう？」

「ケンイチと一緒にいいの！」

まあ断る理由もない。敵もないのが解っているのです、そのままバイクで洞窟内まで乗り込むと掘削作業を続ける。

けたたましい掘削音が響く洞窟内。ふと作業を中断し、後ろを振り返る。

LEDの明かりの中でアネモネが日本語の本を読んでいる。大分日本語を覚えたようで、簡単な漢字も読めるようになっていく。

この世界で日本語を勉強しても役には立たないと思うんだがな。だが、本人のやる気があるのに、削ぐのは得策ではない。

それに、言語を習得する時は、多言語と一緒にやった方が効率があがるような話も聞いたことがあるし。

再び掘削を続けて、昼過ぎには巨大な結晶を掘り出す事に成功した。

長さ1m高さ50cm程のどらやき型――皮の部分が岩で中の餡が水晶だ。

ゴツゴツとした岩から何枚も薄皮を重ねたような縞模様が続く、その中に薄青く光る結晶が美しい。

「綺麗！」

「綺麗だよな」

早速、シャングリ・ラの買い取り査定へ突っ込んでみる。

【水晶原石（大型） 査定金額2200万円】

「おおっ！ コ〇ツさんの代金を回収したぜ」

「コ○ツさん？」

「あの黄色い鉄の召喚獣の名前だよ」

「小さい方はユ○ボさんだよね？」

「そうそう、ははは」

俺が、ユ○ボを連呼していたので、覚えてしまったらしい。

「それじゃ、馬なしで動く荷車さんは？」

「あれは、キ○ンターさんだな」

「へええ」

水晶を掘り出したので、ここにはもう用はない。

アネモネと一緒にバイクで家に帰ると、プリムラ達も帰ってきていた。

「プリムラ、貴族様の様子はどうだった？」

「カメオを、とても喜んでおいででした」

販売価格は金貨35枚（700万円）である。そして、カメオを卸した俺の取り分は金貨17枚。

普段より高いが、やはり横顔が夫人に似ていたのが効いたらしい。貴方様のため特別に^{あつら}誂えた逸品ですよ——などと言われたら、コロリといくだろう。

やっぱり貴金属を売った方が金にはなるよなあ。だが、この国の金貨をシャングリ・ラに入れるのは、なるべく避けたい。

だが、貴族との販売交渉の席でも、彼女の店に嫌がらせをしている無頼達の話は出なかったようだ。

やはり頼み事をするなら、もうちょっと恩を売るか良い取引材料がないとな。

プリムラが帰ってきたので飯にしよう。

皆はいつものスープとパンだが、俺はちよつと冒険を試みよう

と思う。

蜘蛛の卵を使ったマヨネーズだ。昨日、毒味で食べる量を増やしたのだから何ともないので、これは安全という事だろう。

材料のリンゴ酢とオリーブオイルをシャングリ・ラから買う。

ボウルに2つを入れて、ハンドミキサーで攪拌する――が当然混ぜられない。水と油は混ざらないからな。

「旦那、何を作るんだ？」

「まあ、お前達は飯を食ってろ」

しかし、ここに蜘蛛の卵を入れて、混ぜると――白く乳化して固まる。これが、マヨネーズだ。

「ペロ」

「うえええ、なんか食ってるぞ」

「うにゃ〜」

獣人達が煩^{うるさ}いが無視だ。う〜ん、ちょっと淡泊^{たんぱく}だな。少しダシの素と砂糖を入れよう。

「再び、ペロ――おおっ！ こりゃ美味しい！」

これは、シャングリ・ラで売ってる市販のマヨネーズより美味しいぞ。色は白っぽくてマヨっぽくないけどな。

さて、これを使って何を作ろうか……ここは、簡単にサンドイッチはどうだ。

いつも食っている訳ありパンをアイテムBOXから取り出して、半分に切る。そこに、レタスとハム、そしてマヨネーズとケチャップを入れる。

そうそう、ピクルスも入れた方が美味しいか？ ちょっと入れてみよう。

「完成だ！ 一口、パクッ！ 美味しい！ 美味すぎる！ これぞ、

異世界の味」

「異世界？」

サンドイッチを頬張りながら呟いた俺の独り言だが、それを聞いていたアネモネが、不思議そうな顔をする。

「まあ、こっちの話だ」

「ケンイチ……私も、それを食べてみたい……」

「アネモネも挑戦してみるか、ほら」

恐る恐るサンドイッチを口にしたアネモネであったが、一口食べて声を上げた。

「美味しい！　これ美味しいよ！　パンの中に色んな物が入ってる！」

「そうだろう」

俺は、獣人達の方をチラ見するのだが、彼女達は顔を背けて手を振っている。

プリムラの方は――背中を向けてしまった。まあ、無理に食わせる必要はない。

これは、異世界ならではの珍味だな。

普通に玉子焼きや、茶碗蒸しを作っても美味いかもな。

こりゃ、面白い食材が手に入ったな。

54話 異世界茶碗蒸しを食おう

――次の日。

洞窟の水晶も掘れたので、蜘蛛をギルドへ持ち込んでみるかな……と思ったのだが。

あれだけの大物を持ち込むと、あれこれと詮索をされそうだ。牙熊の時でさえ、ギルドの職員にあれこれと質問されたからな。

とりあえず、金に困っているわけでもないし、こいつの肉が食べられると思えん。それに殺虫剤も掛けてしまったし……。

当分は、アイテムBOXの肥やしでいいだろう。

普通に朝飯を食ってから、アネモネは獣人達と崖の上に薬草や食材を採取にいくようだ。

プリムラの店はしばらく休業状態なので、部屋で帳簿の整理をすると言う。

彼女の店に嫌がらせをしている連中の対策も練らないとだめなのだが、良い手を思いつかない。

なるべく、バイオレンスルートは回避したい。ここは暮らすのに良い場所だからな。騒ぎを起こして、ここを離れるのは避けたいのだ。

――といったつ、クロトン一家を救うために大立ち回りをしてしまったのだが。

良い手が思いつかないのに、あまり悩んでも仕方ない……俺は蜘蛛の卵を使って茶碗蒸しに挑戦してみるか。

プリムラが部屋で机を出して帳簿の整理をしているので、俺は外で料理をする事にした。

「おいしい、クロ助。旦那が、また変な料理を作ってるぞ」

「放っておけばよいにゃ」

「えらい言われようだな。絶対に美味しいのに……アネモネは蜘蛛の卵使った調味料は美味かったろ？」

「うん！ 美味しかったよ」

獣人2人は、顔を見合わせて、「うえーっ——という顔をしている。まったく食わず嫌いだな。

なんでも、とりあえず食ってみるという、日本人の爪の垢でも煎じて飲めっちゅーの。

まあ、俺は我が道を行こう。

アネモネと獣人達は、崖の前の足場を登って、崖の上へ向かった。ベルも一緒に付いていくらしい。

先ずは、ボウルに残っている蜘蛛の卵をアイテムBOXから出す。ボウルをもう一つだして出汁を作る。いつも使っているダシの素と、ノビキノコを煮た汁を混ぜて出汁が完成。

そこに、蜘蛛の卵を適量入れる。普通の卵は混ぜる必要があるが、こいつは黄身も白身もないから、このまま使えるってわけだ。

一見、生クリームみたいなの、とろみがある白い液体だ。そして砂糖を入れる。

ウチの地元の茶碗蒸しは甘いのだ。砂糖がデフォで入っているのが普通。

そして具だな。ウチの茶碗蒸しを思い浮かべて、何が入っていたか思い出す。

「うーん——鶏肉と栗、そしてカマボコだな。三つ葉はどうしようか——少々癖がある野菜だから、今回は止めておくか」

三つ葉は子供の頃は嫌いだったんだが、大人になるとああいう癖がある物が好きになるよな。

ピーマンとか人参も、子供が嫌いな野菜だが、大人になると美味さが解る。人参はたまに臭いのがあるから、あれは嫌われても仕方ないと思う。

甘くて美味しい人参は、本当に美味しいのだが……。

普通の茶碗蒸しは銀杏が入っているようだが、ウチの茶碗蒸しには栗が入っていた。

近くにイチヨウが生えていないので、代用品として入れているのかもしれないが——その本当の理由は謎だ。

理由を聞いたこともないし、疑問に思った事もないからな。そのせいもあって、甘い茶碗蒸しに拍車をかけている。

さてさて、蜘蛛の卵が食えない子達に、無理矢理食わすのも仲間はずれも可哀想だからなあ——普通の卵バージョンも作ってやるか。アイテムBOXから普通の卵を取り出して、同じ作り方で茶碗蒸しの出汁を作る。

そして、茶碗蒸しといえば、やっぱりあの蓋のついた茶碗だろう。シャングリ・ラを検索すると波文様の茶碗が売っている——1個1000円だ。Wof iのマークみたいなやつな。

もっと安い物があるのだが、こいつの文様が気に入ったので、購入することにした。

具材もシャングリ・ラで購入して、適当な大きさにカット。栗は甘露煮を使う——一瓶1000円。

鳥肉はミヤレーとニャメナが採ってきてくれたものが、アイテムBOXに入っている。

栗を始めとした数々の具材を茶碗の中へ敷き詰め、そこへ卵を溶いた出汁を流し込むと、蒸し準備完了だ。

茶碗蒸しというぐらいだから、蒸さなければならない。それには蒸し器が必要。

ステンレス製とアルマイトの物があるが、アルミはこの世界では危険なので、ステンレス製にするか……2500円だ。

「ポチツとな」

ガシャン！——という音と共に、2段重ねの蓋付きの鍋が落ちてくる。

アイテムBOXからカセットコンロを出して、蒸し器の一段目に水を入れ、2段目には出汁が入った茶碗を5つ並べる。

森から拾ってきた松の葉っぱを刺して、こいつが茶色になれば、蒸しあがりだ。

蒸し器から、白い湯気が立ち昇る。

料理をしていると、家からプリムラがやって来た。

「何の料理をしているのですか？」

「君らが眉をひそめている、蜘蛛の卵料理だよ」

「……うっ」

プリムラが露骨に嫌そうな顔をする。

「まあ、そんな顔をするのを予想していたので、君たちの分は普通の卵を使っているから」

「もう、意地悪ですわ」

「はは——まあ、無理をして食べさせるつもりはないよ」

「ケンイチのアイテムBOXには美味しい食べ物沢山入っておりますのに、何故蜘蛛の卵などを……」

「何故って言われると——美味しいから——としか答えようがないな」

彼女とそんな話をしていると、茶碗蒸しに刺した松の葉っぱが茶

色になった――蒸しあがりだ。

「あちち！」

蓋の熱さに、思わず放り投げて自分の耳たぶを掴む。

せつかく、お湯が沸いているんだ、他に何か蒸し料理を作るか……何がいいだろうか。

うーん、蒸し物か……肉まん？　そうだ、肉まんはどうだろう。

早速、シャングリ・ラで肉まんを検索してみる。有名メーカーの肉まんピザまん12個セットが2300円で売っているな。

こいつでいいか。

「ポチッとな」

透明な袋に包まれて落ちてきた、中華まんセットを拾い上げると、シャングリ・ラから鍋つかみを買う。

綿が入った手袋みたいなやつだ。

「ケンイチ、それは鍋つかみですよね？」

「似たような物が、ダリアにもあったろ？」

「確かにありました、そんな見事な物は……」

シャングリ・ラでは、一番安物ではあるが、これと同じような物を街で作ろうとすれば、数万円が掛かってしまう。

一般の家庭では、そんな高価な物は使えないって事だ。

「これは、防寒具としても使えるぞ」

熱さを防げるなら、寒さも防げる。実際、俺の地元には鍋つかみのような綿入りの防寒具があった。

市販の手袋に押されて、既に廃れてしまったが、亡き祖母がよく作ってくれたのを思い出す。

鍋つかみを嵌めると、完成した茶碗蒸しを外に出して、蒸し器の中へ中華まんを並べていく。

昼飯には少々時間が早いと思うのだが、蒸しあがったらアイテムBOXの中へ入れておけば、いつでもアツアツが食える。

5人で2個ずつあれば足りるだろう。

「この料理は、冷えてもいいのですか？」

「ああ、大丈夫だ」

茶碗蒸しって普通、冷えているよな？ 普通は冷やして食う物ではないだろうか。

「このカップも変わっていますが素晴らしい文様ですわ。正確にぐりりと全てが繋がっているように描かれていて、とても見事です」

「これは、海の波を表しているんだよ」

「まあ」

プリムラは茶碗蒸しが入った茶碗を、掲げるようにして隅々まで見ている。

それは手描きじゃなくて、プリントなんだけど——そんな事を言っても解らないか。

中華まんは15分程蒸して完成。そのままアイテムBOXへ直行する。

だが、5人で2つずつなら10個で2つ余る。残り2つを俺とプリムラでつまみ食いする事にした。

包丁で半分にして、肉まんとピザまんそれぞれを半分ずつ食べる。

「あつ、あつ！ すごく柔らかくて、中に肉料理が——」

「まあ、既成品ならこんなもんか」

コンビニで売っている、あの味だ。

「あの、こっちは……もしかしてチーズですか？」

「ダリアにもチーズがあったのか」

「ええ、凄い高価なのですけど……製法が不明なので、一部でしか作られていません」

「チーズなら――」

シャングリ・ラから、400円ぐらいのおつまみチーズを買って、プリムラに食べさせてみる。

「え？ 食べても、いいのですか？」

「もちろん」

「ああ……」

プリムラは、ピザまんちとチーズを一緒に食べて、恍惚の表情を浮かべている。

それほど美味くはないと思うんだがなあ……。

もしかして、チーズを固める時に使う、レンネットもシャングリ・ラで売っているとか？

すかさず、検索してみると――売ってる！ 本当に何でも売っているな。3gで1500円ぐらいらしい。

説明を読むと、1gで50Lの牛乳を凝固出来るらしい。すげえ！ 早速、購入する。

「プリムラ、この薬を使って、チーズを作れるぞ」

「え？」

「薬の製法は秘密な」

「あの！ ぜひ作ってみたいのですが、いいですか？」

「ああ、いいよ」

なんだ、プリムラのチーズに対する食い付きが凄いな。そんなに、チーズが好きなんだろうか？

買ったレンネットに、チーズの作り方が載っていたので、プリムラと一緒に作ってみる事になった。

アネモネと獣人達は、まだ帰ってはこないし、時間は十分にある。

まずは、シャングリ・ラで道具と牛乳を買う。最初にレンネットの重さを測る、精密秤が必要だ。

デジタル秤が安いのだが、昔懐かしい上皿天秤が売っていたので買ってみた――2000円だ。

小学校の理科の実験とかで使ったな。重りがついていないようなので、重りのセットを別途購入する――1800円。

1gで50Lを凝固出来るって事はだ、0.1gで5Lか。上皿天秤でレンネット0.1gを測る。

「なになに……まずは牛乳を加熱して消毒して、冷やします――か」そして、レンネットを加えて凝固させ、湯煎しながら小さく千切って、ホエーを取り除く……えらい手間だな。

最後にまとめたら、塩水に1時間浸けた後、1晩寝かせて完成。

「手間が掛かる物なのですな！」

「チーズの作り方には色々種類があるから、これが正解ってわけでもないんだ」

「やっぱり、ケンイチは賢者様です！」

プリムラの俺を見つめる目がキラキラしてて、眩しい。宝石等を売った時より、きらめいていないか？

そんなにチーズがジャストミートしたのか。

「そんなにチーズが好きなら、もっと簡単な方法があるよ」
「えっ?!」

牛乳を2L程ボウルに空けて、そこにリング酢を入れる。リング酢は街の市場では売っていないが、リンカー酢なら購入可能だ。

同じように使えるだろう。かき混ぜると、すぐに塊が出来てくる。こいつを集めてガーゼで濾し、水分を適当に絞ってから塩を振れ

ば完成。

所謂、カッテージチーズ。

「はああ、これも美味しいです。そして、とても新鮮……」

プリムラは行儀悪く、指でカッテージチーズを掬うと、舌でペロペロしている。まるで子供のようだ。

「そりゃ、今出来たばかりだからな」

2人でカッテージチーズの味見をしていると、アネモネと獣人達が狩りから戻ってきた。

「何を食べてるにゃ？」

「こりゃ、チーズの匂いじゃないか？」

「そうだ、試しに作ってみた」

「ちよっと待ってくれ、旦那！ チーズの作り方を知っているのかい？」

「まあな」

「……旦那って、もしかして神様か何かなのかい？」

賢者から神様にレベルアップか。そのぐらい、この世界ではチーズは高級品らしい。まあ、貴族の食べ物ってことになる。

「私は、最初に会った時から、ケンイチは神様だって思ってたよ」

アネモネが、カッテージチーズを指で舐めながら、そんな事を言う。

「なんで俺が神様なんだ？」

「毎日、神様をお願いしてたの！ 美味しい物がお腹いっぱい食べれますようにって」

「ああ——それで、毎日美味しい物を食べさせてくれる俺が、神様だったか？」

「うん！」

もしかしてそれが、アネモネが俺についてきた理由なのかな？

「あのな——神様ってのは、何人にも平等なんだよ。^{なんびと}君たちが家族だからって美味しい物を食べさせてたら、そりゃえこひいきじゃないか」

「けど、神様を拝んでいる連中は、毎日拝めば神様が救ってくれると思ってるぜ」

「神様の前では、金持ちも貧乏人も関係ないからな。毎日拝んでいるからって助けたら、それもえこひいきだろ？」

「うーん」

獣人にはちよっと、難しいのだろうか？ ミヤレーとニヤメナは2人で腕を組んでいる。

「だからさ、俺は神様じゃないぞ、ははは」

チーズだけでは食事にならないので、さっき作った茶碗蒸しと肉まんピザまんも、アイテムBOXから出した。

「おおっ！ このパンみたいの、柔らかくてうめえ！」

「中に肉が入っているにゃー！ 何か、肉の匂いがしてたけど、これだったにゃ」

アネモネはスプーンで茶碗蒸しを食べているのだが、口を開けたまま固まっている。

「アネモネ、あまり美味しくないか？ 蜘蛛の卵で作った料理なんだが……」

「ううん！ 甘くて、とても美味しいよ！ プルプルで柔らかくて、こんなの初めて食べた！ 色々な物が入っているし、この甘いのは木の実？」

「そう、木の実を甘く煮た物だな。そっちの白いのは、魚の切り身をすり潰して、蒸した物」

「やっぱり、ケンイチは神様なんだ……」

「なんでそうなる」

「だって、お肉、魚、木の実、卵……この世界の物が、この中にみんな入ってる」

「それ確か？ プリムラも食べてみる、君のは普通の卵で作っているから大丈夫だぞ」

蜘蛛の卵は黄身と白身が分かれていないので、卵の黄身の濃厚さには劣るが、とてもクリーミーな味わいだ。

茶碗蒸しにするなら、蜘蛛の卵の方が美味しいと思う。

「まあ、甘くて滑らか——こんな食感のは初めて。これは貴族の間でも大流行しそうな料理ですわ」

「しかし、これは蒸し料理だからな。手間が掛かる。煮たり焼いたりする方が簡単だ」

「貴族なら、美食には手間暇は惜しみませんから。心配無用です」
肉まんピザまん、そしてチーズ。茶碗蒸しも皆にとっても好評だった。

さて、昼飯も食ったし、午後から何をしようか。

せっかくコ〇ツさんを買ったのだから、崖に残っている薔薇輝石を掘り出そうか。

あのパワーなら、電動ハンマでは無理な場所まで掘削出来るだろう。

崖の近くで、コ〇ツさんを召喚して、アームを伸ばしてみる。高さが少々足りない。それに作業をするなら余裕もほしい。

——という事は、重機を使って掘削をするためには、2 m程盛り土をしなくてはダメだな。

そのためには、足場が邪魔になるので、位置をずらさなくてはいいけない。

足場をアイテムBOXへ一旦収納すると、位置をずらして再び設置した。こんな事もアイテムBOXがあれば簡単に出来る。

その後、コ〇ツさんを使って、盛り土を行う。

「旦那〜！ 今度は何をするんだい？」

「この召喚獣を使って、崖に残っている鉱石を掘り出そうと思ってな。そうすりゃ、いっぱい掘れるだろう」

「はいはい、好きにやってくれ。それじゃ、俺達はまた狩りにいくよ」

「気をつけてな」

狩りは彼女達に任せて、俺は重機を操る。コ〇ツさんの旋回半径を利用して、少々離れた場所を掘り返して土砂を運ぶ。

あまり近くに穴を掘ると、崩れて重機が落ちるかもしれないからな。

「よし、ユ〇ボも召喚しよう」

土砂を山盛りにして、ユ〇ボの排土板を使って均し、コ〇ツさんの重量を使って踏み固めた。

そして、再びアームを振り上げて、崖の上にある鉱脈まで伸ばしてみる。

「うん、十分に届くな」

そんな俺の一人土木工事を黙って佇み、見上げているプリムラ。
たたず
何か考え事をしているようだ。

だが、このバケットでは、鉱石は掘る事が出来ない。そういう仕事をするためには、新しいアタッチメントが必要。

それは――油圧ブレーカだ。

油圧の力を使って、杭を打ち込み対象物を粉碎する。解体工事等

で、コンクリを砕いたりしているのを見た事があるので、このぐらの岩ならば、崩せるだろう。

シャングリ・ラを検索すると、この重機用の交換アタッチメントも売っている。勿論、もちろん全部中古だ。

交換用の大型油圧ブレーカは一台200万円也。これだけで、小型のユ○ボが買える値段。

「よし、購入！」

地響きを立てて、交換用の油圧ブレーカが落ちてきた。しかし、こいつは数百kgはある。交換は俺一人では無理かな……？

だが、アタッチメントは太い金属ピンで繋がっているだけだ。穴を正確に合わせれば力はいらないはず……。

先ずは、コ○ツさんのバケットを繋げているピンを、ハンマーで叩いて抜く。上手く穴の位置を合わせると、意外と簡単にデカイピンがするりと抜けた。

続いて、油圧ブレーカの位置を合わせて……だが、こいつが重い！俺の力では無理なので、ユ○ボを使って押したり引いたりするのだが、ピンの位置が見えないので微調整が上手くいかないのだ。

やはり、パワー自慢の獣人達に手伝ってもらうか。

――――◇◇――――

夕飯前、獣人達が帰ってきたので、コ○ツさんのアタッチメント交換作業を手伝ってもらう。

彼女達のパワーを使って位置合わせをして、金属ピンを入れる。最後に油圧の配管を接続すれば、交換完了だ。

「ちょっと試運転してみるか」

コ○ツさんのエンジンを掛けて、右側のコンソールからブレーカ

ーモードを選択。

そして、近くの崖にいくと、ブレーカーの杭を当てる。

「おっしゃ！」

金属が岩を叩く音が響き、次々と大きな破片が岩肌から転げ落ちてくる。

「なんじゃこりゃ！　　すげえな！　　あの鋼鉄の杭は岩も砕くのかよ！」

「にゃー！」

大きな音に獣人達が耳を伏せながら、岩を破碎する様子を見物しているのだが、そのパワーに驚いているようだ。

「よし、大丈夫だな、十分に使える。こいつで明日からガンガン掘るぞ！」

最低でも油圧ブレーカの代金200万円は回収しなくてはいいけないが、みたところ石はまだ残っているので、そのぐらいは余裕だと思われる。

だが懸念もある。こいつの燃料タンク容量は400Lあり、1日稼働させると丁度タンクが空になる。

つまり、その燃料代以上の石を採掘しなければならないのだ。

55話 お宝のヒント?

「おりゃああ!」

鋼鉄製の杭が岩を叩く音が辺りに響く。ガラガラと岩の破片が落下して、土埃ならぬ岩埃を上げる。

相棒のコ○ツさんを、いつもの鋼鉄製のバケットから、油圧ブレーカという杭を打ち込むアタッチメントに交換して、崖の薔薇輝石を掘削している真っ最中。

以前の電動ハンマを使用した作業のように微妙な加減が出来ないので、ただひたすらに強引に崩すといった感じだ。

それでも、パワーが段違いなので、結構大きな結晶を採取する事も出来る。まさしく文明の利器。

ただ、問題もある。こいつの燃料タンクは400L。そして、丸一日稼働させれば、燃料タンクが空になってしまう。

俺の魔道具で植物油を処理してバイオディーゼル燃料を作ったとしても、1時間に6Lしか作れない。

100L作るのに、17時間以上掛かる計算だ。つまり4日魔道具を稼働させて燃料を400L作り、1日で使い切る。

現在、バイオディーゼル燃料に掛かるコストはリッター300円程。400Lの燃料代は12万円だ。

そのぐらいなら、ちよっと大きめの結晶を掘り出せば、元が取れる。

最初は、1本1.5Lで400円の普通のスーパーで売っているようなプラ容器入りの植物油を買っていたのだが、400Lとなると270本近く必要。

さすがに、これじゃイカンという事で、シヤングリ・ラを探すと、1斗缶（18L）入のキャノーラ油を見つけた。

それでも400Lとなると、22缶以上が必要だ。とにかく大量に購入しているわけだが個数制限とか売り切れとかは、ないのだろうか？

ある日突然、販売出来ません——とかいわれると詰むな……。そもそも、重機を使わなきゃいいじゃんって話もあるんだが。

これを1ヶ月間続けて、4000万円近い薔薇輝石を掘り出した。もちろん勿論、黒字である。コ○ツさんの代金も油圧ブレーカの代金も余裕で回収した。

まあ、コ○ツさんの代金は以前掘り出した水晶で回収しているし、まだアイテムBOXに入ったままの洞窟蜘蛛も金になるだろうから、購入は正解だったな。

バイオレンス目的で使うなら、戦に投入して城壁を破壊したりも出来るだろうが——そういう使い方は勘弁願いたい。

だが、今回の重機運用を踏まえて、機械を動かさない時にも常にバイオディーゼル燃料の生成をして、アイテムBOXへストックしておくべき——という結論に達した。

そうすれば、不意に急な運用に駆られても、困ることはなくなると思われる。

「旦那、そんなに石を掘ってどうするんだい？ どこかに売りにいっている風でもないし……」

俺が重機を降りて一休みしていると、ニヤメナが話しかけてきた。懸命に石を採掘している俺を見て、彼女は疑問に思っているようだ。一緒にプリムラもいるのだが、彼女は何も言わずに黙っている。根っからの商売人である彼女は、商売が出来なくなって少々元気がない。

可哀想なので何とかしてやりたいのだが——俺のオッサン脳には、いい方法が思い浮かばないのだ。

「これは秘密なんだけど……」

「うん」

「俺の魔法を使ったり、召喚獣を呼び出すのに、石が必要なんだよ」
重機を買ったりするのに金が必要だが、その後にも燃料代が掛かるからな。

「石が？ 石を使うのかい？」

「そうだな、石に限らず——価値がある物を対価にして魔法を使っているわけだ」

「よくわからないけど——価値がある物なら、金貨じゃだめなのかい？」

「無論、金貨でもいいんだ。けど、金貨を使うと無くなってしまいうんだよ。そうするとどうなるか……」

「……難しい事は解らねえ……」

腕を組んで頭を捻^{ひね}るニヤメナに代わって、プリムラが答えた。

「街の金貨をかき集めて魔法に使ってしまったら、そのまま消えてしまう。そうすると街から金貨が消えてしまいます」

「さすが商人だな。その通りだよ、プリムラ」

「つまり、皆が買い物したり、ギルドの報奨金の受け取りが出来なくなるって事か？」

「まあ、大量に集めれば、そういう事になる。だが俺が金脈を探しだして、金を掘ってそれを使うなら問題ない」

「しかし、金や銀の鉱山は殆どが国の管轄になっています。無断で採掘を行なったとすれば、罪に問われる可能性が大きいです」

「そうだろうな。国の経済の根本に関わる問題だからな」

だが、この世界で使われない金属等なら問題はない——マンガン

とかニッケルとかコバルトとかな。

——とはいえ、そんなに無理をして採掘をする必要もないのだが。他にも方法は色々ある。例えば、商売で金貨を集めて、その金でアンティーク家具や芸術作品を買って、シャングリ・ラに買い取りさせる——とかな。

掘削作業は終了して、夕飯になった。

「あちあち！ 熱くて、こいつはうめええ！」

「熱いじゃ〜」

「見てみて、こんなにチーズが伸びるんだよ」

「はふっはふっ。この赤い火のようなソースが……」

日が落ちて、焚き火のオレンジ色の光の中、皆で夕食をとる。

今日のメニューはピザである。プリムラが、チーズの製法をマスターしたのだ。皆で外のテーブルを囲み、ピザに舌鼓を打つ。

ピザの生地とピザソースはシャングリ・ラで購入したもの。冷凍のピザ生地が10枚セット1500円とかで売っているのだ。

そして上に載っている具材は——チーズ、鳥肉、野菜、こちらで揃えた物。

そいつを自作の釜で焼いたものだ。釜はコンクリートブロックと、耐火レンガを使って製作した。

釜の加熱には、アネモネの憤怒の炎を使った。全く魔法ってのは便利だな。

これでピザぐらいは焼けるし、使わない時はアイテムBOXに収納できる。他の料理にも使えるかもしれない。

パンを焼くには少々小さいかな？ それに、一からパンを作ろうとすると、手間暇が掛かるからなあ。

人数分を用意する事を考えると買ったほうが早いのだが、ちょっと挑戦してみたい気持ちはあるのだ。

アネモネにパンの作り方も教えてあげないとダメだしな。

「このレンネットという秘薬さえあればチーズが作れますね」

「この薬は錬金術で合成した物だが、草食動物の子供の胃袋に含まれていると聞いた事があるぞ」

「……えっ!? 本当ですか?」

ピザを食べるプリムラが固まり、驚きの声を上げる。ピザソース塗れの手で抱きつこうとするのを制す。

「草食動物でも子供の頃は母親の乳を飲むだろう? その時に必要らしい。さすがに本物の胃袋で試した事はないけどな」

「ああ、やっぱりケンイチは賢者様です」

プリムラがキラキラとした視線を俺に向けてくるのだが……。

「違うよ! 神様」

アネモネは、俺をどうしても神様にしたいようだ。こんなオッサンの神様がいるかよ。

「賢者でも神様でもないんだがなあ……」

「けど、旦那。神様の使いの森猫を侍らせているって事は、やっぱり……。あんなデカイ鉄の召喚獣も使えるしさあ」

「そうにゃ」

「違うっての。ああ、そういう事を人前で言わないようにな。邪教徒だと迫害を受けるかもしれん」

慌てて、アネモネが口を手で塞ぐ。

そういえば、気になる事があったので、獣人達に尋ねてみる事に。うっかりしていたのだが、猫って玉ねぎを食べさせちゃだめなんじゃなかったっけ? 肉まんには、それが入っていたはずなのだ。もしかしたら獣人達にも何か問題があるのかな? ——と思った

のだが、今のところは問題はなく、2人共身体の不調等は訴えてはいない。

おそらく、森猫のベルには食べさせちゃ拙いものと思われる。

俺は、シャングリ・ラで買った玉ねぎを一つ取り出した。

「こいつに似た野菜って、見たことがないか？」

ミヤレーとニヤメナ、そしてアネモネと3人で、匂いをクンカクンカしている。

「こんなに大きいのは見たことがないが、こりや玉根じゃね？」

「そうだにや。ウチもそう思うにや」

「お前等、食べて大丈夫なのか？」

「え？　あまり市場に並ばない野菜だけど、食っても大丈夫だけど……」

「うにや」

どうも、似たような野菜はあるらしい。まあ、ノビルやエシヤロツト、らっきょうもそうだな。そんな感じの野菜なのかな？

「そうか、こいつは森猫には毒になるから、猫人族もそうなのかな
？
とってな」

「ウチ等、猫じゃないにや」

「そうだよ、旦那」

「そうだよな、ごめんごめん」

まあ、考えてみればそうか。猫っぽいから、そう見えるのだから、人なんだよな。

少々悪い事を聞いてしまったが、もし毒になったらすると困るかな。

食事の後、ランタンを点けてベッドに寝転がる。

すでに窓の外は真っ暗、ニヤメナは自分の小屋に戻り、部屋の隅にはベルが丸くなっている。

そして、俺の腹の上にはアネモネがうつ伏せになって本を読んでいるのだが――重い。

小柄な彼女だが、ベルより重いかな。恐らく35kg〜40kgの間ぐらいはあるのだろうか？

「お腹いっぱいになったか？」

「うん！」

何が楽しいのか――頭を撫^なでてやると俺の腹の上でゴロゴロしているのだが。

「ちょっと、ミヤレー、膝枕してくれ〜」

「はいにゃ〜！」

ミヤレーが俺の頭の所に正座すると、彼女の太腿の間が枕になる。ピッタリ嵌るように収まりがいい。

彼女の太ももは、ふわふわの柔らかい毛で覆われており温かく――最高の枕だ。

俺は、アイテムBOXから指輪を取り出して見ていた。クロトン夫妻から貰った物だが、すっかり忘れていたな。

「それ、マリーのお父さんとお母さんから貰った指輪？」

「そうだよ、アイテムBOXに入れっぱなしで忘れてた」

「金で、できているにゃ？ あいつらに貸した金の足しになりそうかにゃ？」

「それは無理かもしれないなあ」

「そんな事ばかりしてたら、いつか破産するにゃ」

この台詞は色んな人から言われるな。だが俺は、マリーと奥さんに貸したんだ。クロトンの奴には期待してねえ。

まあ、最初から金が返ってくるとは思っていないが。

目の前にある指輪は少々ゴツイデザインで、丸くて平らな石が嵌められている。だが、それを見た俺は、あるアニメのシーンを思い出していた。

2つの指輪を向かい合わせると、境目に文字が入っているというストーリーだった。

それを思い出して、指輪の石同士を合わせて、クルクルと回してみる――すると、本当になにやら文字らしき物が入っているではないか。

「ああ、『2人の愛を共にここに刻む』――とか、そういう臭い台詞が入っているんだろう」

文字が解読出来るように、指輪を回してみる。

「んー、本当に文字が入ってるな。なにに……アストランティアを臨みし眼まなこに、これを収めよ」
アストランティアを臨むって事は、上から見るって事だろ？ そんな場所ってのは、崖の上からしかないだろう。

「なんか解ったにゃ？」

「もしかして、何かお宝の隠し場所かもしれないぞ？」

「本当にゃ？」 「本当？」

俺の腹の上で寝転がっていたアネモネも顔を上げた。

「ああ、崖の上からアストランティアを見渡せる場所に、この指輪を使う何かがあるみたいだ」

「にゃー！ 早速、探しにいくにゃ！」 「私も行く！」

「そうだな明日、探索に行ってみるか」

3人で宝探しの話で盛り上がっていると、プリムラが会話に加わってきた。

「プリムラも行くか？」

「いいえ、私は街へ行きたいのですが……」

「何か買物か？」

「はい……それで、夕方になったら、迎えに来てほしいのですが」

「ああ、いいよ。お宝探しも、そんなには時間は掛からないだろうし……多分な」

「一人で行くのか？」

「いいえ、ニヤメナを連れていきます」

「彼女もお宝探しに行きたいところだろうが、プリムラに雇われている身だしな、ははは」

ふむ、プリムラは何を買うつもりなんだろうな。迎えに来てほしい——という事は、俺のアイテムBOXへ入れるような大きい物を買うつもりなんだろう。

何かな？ 高く売れるような、いい家具でも見つけたか？ まあ、彼女は目利きだ、そこらへんは任せよう。

明日の予定が決定したところで、アネモネの勉強をみてやった後、就寝した。

56話 ちょっとしたお宝探し

ベッドの上で寝転がり、指輪を眺めていたら、お宝の隠し場所らしき暗号を発見した。

これは、宝探しに行くしかないだろう。

――次の日。

朝食の後、プリムラはニヤメナに背負われて、予定通りに街へ行く事になった。

「ニヤメナ、残念だな。宝探しに行けないで」

「まあ――俺は、お嬢に雇われている身だからねえ。お宝を見つけたら見せてくれよな」

「もちろん」

プリムラとニヤメナを見送った後、俺とミヤレー、そしてアネモネの3人で足場を登って崖の上を目指す。

足場の横には、俺が薔薇輝石を掘り出した大穴が開いている。

「ケンイチ、もうあの穴からは石は出ないの？」

「まだ、あるようだが、これ以上掘るとなると大変だからな。金と労力を掛けて掘っても実りが少ない」

簡単に発破でも掛けられればいいんだが……爆薬か？

そういえば、シャガの討伐をしたときに爺さんが爆裂魔法エクスプロージョンを使っていたな。

魔法で発破ってのは無理なのだろうか？

色々と試してみたい事はある。

「ウチは計算は苦手じゃ」

まあ、計算の苦手な獣人に損益分岐点などは解らないだろう。

そんな彼女は背中にも弓を背負っている。速射が出来る小型の弓だ。俺が貸している大型のコンパウンドボウでは威力がありすぎて、鳥を突き抜けてしまう。

丁度、矢が鳥に突き刺さるぐらいの威力なら、矢も回収出来て次に使えるわけだ。

この矢も彼女達の手作りだ。それなりに手間暇と熟練の技が込められているので、使い捨てというわけにはいかないらしい。

損益分岐点などを計算出来ない彼女達でも、無駄が多くなればトータルで損をすると感覚では解っている。

崖の上に広がる草むらを抜けて、森の中へ脚を踏み入れる。

下の森と同じように木々の間は暗く、腐葉土が積重なる地面には下草は生えていないのだが、巨木は見当たらない。

皆、背の低い木ばかりだ。

俺達が仕留めた洞窟蜘蛛がいた空間の上方には穴が開いていた。

もしかして、落とし穴のように腐葉土で隠された穴が潜んでいるかもしれない。棒で突きながら注意して歩く。

「ケンイチは用心深いじゃ」

「そんな事を言ってもな、穴があったら大変だろ。この高さから落ちたら死ぬぞ。お前等、ここに狩りをしにやって来て注意してないのかよ」

「平気だじゃ」

そりゃ、獣人の身体能力なら平気なのかもしれないが……。しばらく、暗い森の中を進むと、再び崖の方へ出る。

ミャレーはいつも来ているので、彼女の案内に従って歩くのだが……獣人は歩くのも速い。

しかし、ここでオフロードバイクを出すわけにもいかないしな。
いや、出してもいいんだが……穴が怖いし。

ぶつぶつと独り言を言いながら、崖の縁までやって来た。

ここは、崖が岬のように突き出ており、アストランティアに一番
近くて、街を見渡せる場所といえ、ここだろうと思われる。

実際、ここからアストランティアの街が一望出来る。

「よし、ここだろう！　ここら辺で、何かを探してくれ」

「何かって何にゃ？」

「解らん。指輪を眼に入れろって書いてあるんだからな、石の像か
何かじゃないか？」

「うん、解った！」

俺達は、何かを探し始めたのだが――人間の背丈程の深い草に覆
われて全く先が見えない。

「アネモネ、崖の端っこには気をつけてな。それから蛇な」

こんな崖の上なのに、どこからやって来たのか蛇とネズミがいる
のだ。

蜘蛛がいた洞窟のような場所から、割れ目が崖の上まで続いてい
たりするのもかも。

だが、俺とアネモネの会話を聞いていたミヤレーが飛び上がった。

「蛇にゃ?!　どこにゃ?!　どこどこにゃ?!」

「まてまて、落ち着け。蛇に気をつけろ――て話だよ」
「ふにゅ」

ダリアの森にいた時から知っていたのだが、獣人達は蛇が苦手ら
しい。彼女だけではなく、男達も蛇が苦手だった。

それから、しばらく草を掻き分け掻き分け、何か探しが続く。

「おいしい、あったか？」

「無いよ」

「無いにゃ」

「くそ、草を刈ってみるか……そうすりゃ一目瞭然だろ。おいしい！
草を刈る魔道具を使うから、近くに寄るなよ」

「うん！」

「解ったにゃ！」

アイテムBOXから草刈機を出して、エンジンを始動する。念の
為に繰り出し式のナイロンカッターにした。

紐をぶん回して草を刈るわけだ。こちら辺の草は柔らかいので、
これでも十分に役に立つ。

バリバリと、けたたましい音を立てながら、一面の草を刈ってい
く。

この刈り倒した草は肥料に使えるので、アネモネとミヤレーに束
に纏めさせる。

そして1時間程、草を刈りながらついに見つけた——高さ50cm
の石の像だ。トータムポールっぽい。

だが、人がモチーフではないな——多分、フクロウのような猛禽
類がモデルだと思われる。

「これかにゃ？」

「多分な」

「何が出てくるのかな？ わくわく」

「指輪をこいつの目に入ればいいのか。多分、指輪に小さい魔石
が入っていて、鍵として反応するのかもしれない」

とりあえず像の目に開いている穴に、指輪を嵌める……すると、
像が台座から後ろに動き始めた。

ほう、まるでRPGのお使いイベントだな。

「おおっ！　なんか、ハイテクだな。これを使って自動ドアとか作れそう」

「はいてく？　自動どあ？　って何？」

「えーと、手を使わずに開く扉だよ」

「あー、そういうの聞いた事があるにゃー。魔導師の家とかであるとか、にゃんとか」

やっぱり、あるのか。考える事は皆、一緒だな。

像がズレて開いた黒い穴の中を、アイテムBOXからLEDライトを取り出して照らす。棒で突いたりもしてみた。

罨があったりしたら、大変だからな。

「大丈夫っぽいな」

「ケンイチは心配性だにゃ」

ミャレーの話を聞き流しつつ、黒い穴に恐る恐る手を入れる。中にあるのは――箱？

縦に入っていた、箱らしき物を引っ張り出したが、出てきたのはやっぱり茶色に塗られた箱だった。

結構重い……。

「この茶色はなんだ？」

ミャレーが臭いを嗅いでいる。

「多分、樹液を乾燥させた物にゃ」

「松脂みたいな物か……」

「にゃ」

多分、土の中に埋めている箱を湿気から守るために、塗られた物と思われる。

アイテムBOXからナイフを取り出して、樹脂をガリガリと剥がしていく。

「だが、結構重いぞ。石じゃなかったら、金貨かもな」
「にゃにゃ！」

喜ぶミャレーと違い、アネモネは興味深そうに箱を見つめている。
金貨より他の何かが入っているのを期待している顔だ。

ナイフを蓋の隙間に入れてこじると、蓋が開く。

「さて、何が入っているかな」

「わくわく」「にゃー！」

「おりゃああ！」

勢い良く蓋をあけると、中に入っていたのは本——と袋に入った何か。袋を持つとずっしりと重いので、こいつは金貨かもしれない。
だが、本は……。

「こりゃ、魔導書か？」

「本当に？」

ページを開くと——色々と文章が書いてあって、最後に呪文が書いてある。

「虚ろな異空へと通じる深淵の縁よ——こりゃ、爆裂魔法だ」
エクスプロージョン

シャガのアジトを襲った時に、砦の門を吹き飛ばした爺さんが、同じ呪文を唱えていた。

魔導書をアネモネに渡すと、彼女は真剣に、その内容に目を通して
いる。

「虚ろな異空へと通じる——」

「わー！ 待て待て！ ここじゃなくて、もっと安全な所で魔法は
試そうな？」

「解った」

ふう……あぶねえ。魔法の詠唱に入ってしまうと、トランス状態
になるので止められないからな。

本当にぶん殴って止めるしなくなる。

こんな所でぶっ放して、崖が崩れたりでもしたらヤバイ。

一緒に出てきた袋には、金貨と銀貨が入っていた。金貨が10枚、銀貨が12枚だ。これは半日の稼ぎとしては破格だろう。

そして、いつもの通り、ミャレーは分前は要らないと言う。

「本当に要らないのか？」

「要らないにゃ。もっと面白い仕掛けがある宝箱だったら、良かったのにゃ」

「面白い仕掛けってどんなのだよ」

「お宝を取ったら、ゴーレムが起動するとか、そういうやつにゃ」
「そっちの方がヤバイだろ！」

だが、像があった場所から、突然青い光が広がる。

「なんだ？」

俺達が一箇所に集まり、辺りを見回していると、土がボコボコと盛り上がり始めた。

土から出てくる白い棒のような物が、徐々に姿を現してくる。

土まみれで、形がよく解らないが――骨？ そう、骨が立ち上がり俺達の方へ、よたよたと向かってきたのだ。

「スケルトンってやつか？！」

「動く骨にゃ！ これも魔法で動いてるにゃ」

こんな骨だけで、関節も筋肉も怪しいのに、どうやって動いているのか謎なのだが、とにかく動いているし、手には錆びついた剣も握られている。

「むゝ！」

「待て待て！
ファイヤーボール ここで憤怒の炎とかを使うと、刈った草に引火するぞ！」

「弓も骨には効かないにゃ！」

動きがトロいんだから、逃げりゃいいか？　――そう考えていると、スケルトンが剣を振り下ろしてきた。

「あぶねえ！」

意外と速い！　ミヤレーとバイクのスピードなら逃げきれると思うが。

カタカタと不気味に迫り来る骨――いや、こんなのを放置して森の中でウロウロされたら、色々と拙^{まず}いだろ。

狩りとか薬草採取に支障が出る。そうとなれば、戦うしかねえ！

「ユ○ボ召喚！」

目の前に現れた鋼鉄の相棒に座ると、エンジンを始動。

スケルトンが手に持っている錆びついた剣でバケットを叩いているのだが、俺はそれに構わずレバーを操作して鋼鉄の爪を振り上げた。

「ユ○ボアタック！」

振り下ろされ地面まで食い込んだバケットが、スケルトンの1体をバラバラに粉碎し、白い破片に変える。

スケルトンは壊し方が半端だと復活してくる印象があるのだが、ここまでバラバラにすれば、その心配もあるまい。

「よっしゃ！　残りも成仏しやがれ！」

続けざまに残りの2体も粉碎し、ユ○ボのカタピラで踏み潰し粉々に――戦いは呆気なく終了した。

「ふう……」

「ケンイチの召喚獣は強すぎるにゃ。普通は動く骨を相手にすると、もっと苦戦するにゃ」

「そうだな——炎は効くのか？ 電撃はダメだろ。中途半端に壊すと復活する」

「その通りにゃ。ケンイチは詳しいにゃ」

相手には、恐怖心もないから脅しも通用しないしな。今日は3体だったが、こんなのがゾロゾロと数十体集まってきたら厄介だな。

「けど、爆裂魔法エクスプロージョンでバラバラに吹き飛ばせば、いいんじゃないね」

「こんな近くで爆裂魔法エクスプロージョンを使ったら、ウチ等まで巻き込まれるにゃ
そうか……そりゃそうだな。強力な魔法を使うときは、それなりに距離をおかないとダメって事か。」

一段落したのだが——ミャレーが石の像を強引に蹴倒した。すると、像の底に穴が空いている。

「何をするんだ？」

「これが動いて、動く骨が襲ってきたって事は、中に魔石が入っているにゃ」

そう言われれば、そうだな。

穴に手をつっ込んだミャレーが、黒いツルツルで拳大の石を中から取り出して、俺に渡してきた。

「おお、本当に魔石だ」

天にかざしてから、ミャレーに返そうとしたのだが、要らないと言う。それじゃ、アイテムBOXへしまっておこう。

おっ、そうだ。この像ももしかして、価値があるかもしれない。アイテムBOXへ突っ込んで、道具屋の婆さんに鑑定してもらおう。フクロウらしき像をアイテムBOXへ入れる前に、両目に嵌っていた指輪を回収する。

「あぶねえ、忘れるところだった」

一応、クロトン夫妻の借金の形^{かた}って事になっているからな。アイテムBOXへいれておかないと。

金貨の収入も大きかったが、当たりは爆裂魔法^{エクスプロージョン}の魔導書だ。こいつも金貨数十枚の価値があるに違いない。

それに、魔導書の中には金を積んでも買えない物もあるらしいし。だが、道具屋の婆さんの話だと、魔導書は登録をしなければなら
ないと言っていたな。

まあ、アネモネが魔法を覚えた後に、アイテムBOXへ入れておけば、バレないだろう……多分。

ミヤレーじゃないが、探しものが簡単に見つかってしまったので、まだ昼前だ。

昼飯を食ってから、爆裂魔法^{エクスプロージョン}の魔法でも試してみるか——それとも、プリムラ達も魔法を見たいかもしれないから、全員が揃ってからにするか。

無事にお宝をゲットして、家に戻ろうとしたのだが——俺は、あ
ることに気がついた。

「ああ！ 最初から像をユ○ボでぶち壊すか、地面掘り返せば良かったんじゃない？ そうすりゃ、罫も起動しなかったろ」

「まあ、そうかにゃ。普通はそんな事しにゃいけど」

くわあゝ何故か、ご丁寧にお使いイベントの指示に従ってしまうという——とはいえ、ここに鍵を入れてみるって書いてあれば、壊す前に入れちゃうよな。

しかし、なんのための仕掛けだったのか、あんな物を作れるって事は魔導師だから、何かの遊びのつもりで作ったのか？

ミヤレーの話では、こういう仕掛けは結構見かけるらしいが、意図は不明のようである。

元世界でも、宝の地図や暗号をばら撒いて、宝探しをさせた金持ちとかもいるからな。

やっぱり、何かの遊びなのか？

57話 天然物

指輪に刻まれた宝の隠し場所らしき、文面を発見した。

それに従い、アストランティアの街が見渡せる崖の上で、宝探しを行うと――あっさりと、それは見つかった。

フクロウ型の像の下から出てきたのは、金貨と銀貨が詰まった袋エクスプロージョンと、爆裂魔法の魔導書。

この指輪は、クロトン夫妻へ貸した金の形として預かっかたているものだが、十分にその元は取ったようだ。

昼飯を食うために、崖に設置した足場を降りる。

「にゃー！」

崖の上の森をパトロールしていた、ベルと一緒に降りてきた。上の森は彼女だけの森だからな。探検し放題だろう。

「ミャレー、クロトンに貸した金は、今日だけで回収出来たぞ」

「こんなの、たまたま上手くいっただけじゃ」

彼女は、儲からない人助けにはあくまで否定的なようだ。世知辛いねえ――こういう世界で生きていたら、仕方ないのかもしれないが。

家に到着したら、パンと牛乳で簡単に食事を取る。

そして、ちよつと作ってみたいデザートがあるのだ。蜘蛛の卵で茶碗蒸しを作ったが、これでプリンは作れないだろうか？

具を入れないで、出汁の代わりに牛乳を使い――砂糖を多めにし、蒸せば、ゼラチン等を入れなくてもプリンになると思うのだが…

…。

「まあ、何事もチャレンジだ。やってみるか」

ボウルに入れた普通の卵に牛乳を注ぎ、砂糖を多めに入れる。ミヤレーにも食べさせたいので、普通の卵だ。

牛乳は少なめにした、多くすると多分固まらないだろう。

そして、アイテムBOXから蒸し器を出して、カセットコンロの火に掛ける。

茶碗蒸しと同じように、上に刺した松の葉っぱが茶色になれば蒸し上がりだ。蒸しすぎると、スが入ってしまう。

「この前の美味しい料理と、ちょっと違うね！」

「これは、お菓子だよ。初めて作ったんだが、出来たら冷やして食べてみよう」

「うん！」

お菓子と聞いてアネモネが嬉しいのか、コンロが載ってるテーブルの周りでクルクルと回っている。

彼女と手をつないで、ミヤレーも一緒に踊りだした。2人は本当に仲がいい。その2人の周りを、ベルもクルクルと回り始めた。

とりあえず動いているものがあると、反応してしまうらしい。

プリンが蒸しあがったので、滝から流れる流水に浸ける。これで、すぐ熱が取れるだろう。

——30分後。冷えたので、早速試食してみる事に。

「甘くてプルプルで美味しいよ！」

「美味しいにゃ！ 卵の香りがするにゃ」

「うーん、これだと——甘い茶碗蒸しか、ゆで卵みたいな……」

この匂いを消して、お菓子らしい香りになると……………バ

ニラエッセンスか。

シャングリ・ラからバニラエッセンスを購入して、再び作り始めたプリンへ投入する。

今度は本番なので、俺とアネモネ用には、蜘蛛の卵を使った。

「それなんにゃ?! 凄く良い匂いがするにゃ」
臭いに敏感なミャレーが反応した。

「本当! とても甘そうな匂い!」

「香料だよ。凄くいい匂いだけど、これ自体は不味いからな」

アネモネの手の甲にバニラエッセンスを垂らしてやった、その匂いをクンカクンカしている。

再び、プリンを蒸し器に入れて、蒸しあがったら水に浸けて冷ます——完成だ。

これは、夕飯のデザートにしよう。

「魔法の実験は明日にしようか。明日なら皆が揃っているだろうし

……」

「解った」

アネモネは、すぐにでも試したいようだが、エクスプロージョン爆裂魔法となると簡単には試せない。広い場所が必要だろうしな。

ここで、そんな場所といえば——湖か。

それに、ニヤメナが留守なところで、あれこれやったりすると、彼女がへそを曲げそうだ。

夕方になり、日が傾き始めたので、プリムラとニヤメナを街へ迎えに行く事にした。

だが街道に到着した俺を待ち受けていたのは——。

「モー!」

俺の目の前にいるのは、焦げ茶色で小さく長い脚をした子牛——
だろう。多分、牛だと思う。だって、「モー」って鳴いているしな。
プリムラとニャメナが、子牛を連れていたのだ。

「プリムラが買ったかったのは、これだったのか？」

「そうです」

「家で飼うのか？　しかし、こいつは、まだ乳離れしていないと思
うんだが……」

「その通りです。だって、このくらいの子牛じゃないと、役に立た
ないでしょ？」

「……まさか。子牛の胃袋を使って、チーズが本当に出来るかどう
か、調べるつもりか？」

「はい、この目で見るまでは信じられませんので」

なんということだ、本当に子牛の胃袋に含まれるレンネットを使
って、チーズが作れるかどうか確認するために、子牛を買ってきた
ようだ。

「何故、確かめよう？」

「それが本当なら、貴族相手の取引材料として、有効だと思ったか
らです」

なるほど。チーズの作成法は秘匿されているらしいから——それ
を取引材料にして、彼女の店への嫌がらせを止めさせるように交渉
をするつもりか。

いくら相手が悪徳商人でも、領主の命令を無視するわけにはいく
まい。

「ダメでしょうか？」

彼女が、じっと俺の顔を見てくるのだが……。

まあ、元世界の知識とはいえ俺の専売特許というわけでもない。
重機を使ってバイオレンスモードに突入するよりは、スマートな取

引といえるだろう。

「いや、構わんよ。無頼相手に大立ち回りするよりはいいだろう」

「俺としては、そっちの方がいいんだけどなあ」

ニャメナは不満そうなのだが、派手に暴れてしまうと、この街からも逃げないといけなくなるだろ。

「しかし、プリムラ。俺のアイテムBOXは、生き物は入らないぞ」

「なんだ旦那。そんな事か」

ニャメナは街道から外れて、森の中へ子牛を連れていくと、ナイフを取り出した。

「ちょっと……」

俺が声を掛けるより先に、ニャメナは何の躊躇もなく子牛にナイフを突き立てた。

それは一瞬の手練の技で、子牛は小さな唸り声を上げてその場に崩れ落ちた。

「こ、殺してよかったのか？」

「はい、どうせ胃袋を取り出すのですから」

プリムラも実に淡々としている。見たこともない巨大な大蜘蛛には青くなった彼女であったが、買い付けの旅に出たりすると、狩りで仕留めた動物を食べる事も多いらしいから、こういうのは慣れっこなのだろう。

さすが容赦ない世界だ。だが市場で売っている肉も、シャングリラで売っている肉も、皆こうやって処理されているのだ。

かくいう俺も、四脚は捌いた事はないが、夜店で買ってきたカラーひよこがあつという間にデカくなってしまい、コケコッコと煩いので、絞めて鶏鍋にしたことはあった。

あの時は知らなかったが、カラーひよこって全部オスなんだよな。

たった今まで、子牛だった物をアイテムBOXへ入れる――複雑な思いが交差するが、魔物を仕留めてアイテムBOXへ入れるのと同じ事だ。

「――そうか」

子牛をアイテムBOXへ入れると、ある事を思いついた。

「旦那、どうしたんだい？」

「いや、なんでもない」

これはちよつと、彼女達にも話せないな――死体をアイテムBOXへ入れて、そいつをステータス画面のゴミ箱へ投入すれば、消えて無くなるのだ。

つまり死体も残らない……恐ろしすぎる。血糊等を残さなければ完全犯罪も可能。

密輸もし放題だし、こいつを悪用しようとするれば、なんでも出来るな。勿論、そんな事をするつもりもないが。

プリムラをオフロードバイクの後ろに乗せて、家まで帰ってきた。

「プリムラの店の従業員達の様子はどうか？」

「皆、おとなしくしていますよ。さすがに今のところは手の打ちようがないですからね」

「ええと、あの子――アイリスだっけ？ 彼女の親は役人だと聞いたが、その伝は使えないのかい？」

「稼ぎが途絶えたアイリスの親が、役人の上層部を使おうとしたのですが、多額の袖の下を要求されたようで……」

「はあ、順調に腐っているなあ」

「全くだね……それはそうと、旦那。崖の上でお宝は出たのかい？」
ニヤメナが、頭の後ろで手を組み、俺達の後についてくる。

「ああ、金貨と銀貨、それと魔導書が一冊だ」

「そりゃ、結構大当たりじゃないか」

「まあな」

耳のいいミヤレーが、俺のバイクの音に気がついたのだろう。家からアネモネと一緒に出てきた。

「プリムラ、今日はもう暗い。チーズの検証は明日でいいか？」

「もちろんです」

「ケンイチ〜！」

アネモネが、俺に抱きついてきた。

「よう、クロ助。今日の宝探しは当たりだったんだってな」

「まあまあにゃ。でも、動く骨とかが出てきたにゃ」

「本当かよ！ 結構面倒な事になったな」

「でも、ケンイチの召喚獣で叩き潰したにゃ」

「ははは、確かに――あの鋼鉄の腕で潰されちゃ、動く骨も手も足も出ないだろ。それで分前はちゃんと貰ったのかい？」

「うにゃ？ 貰ってないにゃ」

「旦那〜？」

ニヤメナが横目で俺を、じと〜っと見ている。

「分前を渡そうとしたが、彼女が要らないって言ったんだぞ」

「そんなのは要らないにゃ」

「あっ！ そういえば、こいつは金持ちだった！ くそ〜つ、余裕かましやがって」

彼女は、ミヤレーが俺と組んでシャガの一味を討伐した詳細を聞いたようだ。

「にゃはは」

ニヤメナが、ミヤレーの余裕顔を見て地団駄を踏んでいる。

「旦那におんぶに抱っこしてもらってただけじゃねえか。今日だってそうだろう？ タダの運だろ？」

「運も実力の内にゃ」

ミヤレーは俺の所で飯が食えるので、多少の分前は要らないって事なんだろうが。

実際、ギルドから貰った報奨金には全く手を付けていないらしいからな。

嫌味や挑発にも乗ってこないミヤレーに、ニヤメナは悔しそうだ。

「ちくしょう！」

「そう、腐るな。そのうち、ニヤメナにもいい儲け話が回ってくるよ」

「俺も、いずれはあやか肖りたいね」

「でも、ニヤメナ——今日の街では随分と男性にモテていたようでしたが……」

プリムラが、街での出来事を教えてくれた。

「へえ、本当か？」

「おう！ 旦那聞いてくれよ！ ここで風呂に入って、小奇麗に毛並みがちよつと良くなったら、男共が寄ってきやがってよ！ 以前は、見向きもしなかったくせに」

一度、毛皮にもリンスを使った事があったのだが、殊の外効き目があったようだ。

「それでも、モテれば嬉しいんじゃないのか」

「てやんでえ！ ふざけやがって！」

不機嫌ではあるのだが、モテた事実には違いはないので、彼女もまんざらでもなさそう。

辺りが暗くなってきた紫色に包まれる中、家の外にテーブルを出して食事の準備をする。

今日は、皆のリクエストに応じて、シチューにした。ベルにも猫缶を開ける。

そして食事が終わった後――昼に作った牛乳プリンを食べてみる事に。

「おほっ！ 甘い！ それに、この香りは……」

「プルプルにゃー！ それに、昼に食べたのより、香りがいいにゃー」
「んー、お昼のより美味しく感じるのは、やっぱり香りのせい？」

アネモネは昼に食べた香料なしのバージョンと、頭の中で味比べをしている模様。

「確かに、チャワンムシは料理でしたが、これはお菓子です。しかも、まるで貴族が食べる逸品のように上品な……」

「まあ、確かに貴族には受けそうだな。牛乳と卵があれば作れるから、これ売り込むのもいいかもしれないぞ」

「ケンイチ、これは何というお菓子ですか？」

「プリンだよ」

「プリン……」

プリムラは、茶碗に入ったプリンをじっと見つめている。しかし、プリンなら透明な器に入れて、底にカラメルも入れた方がいいだろうか？

個人的には、カラメルが好きではないので、入れたくはないのだが……。

「いえ、先ずはチーズの製法を売り込む事にしましょう」

「しかし、子牛を1頭犠牲にして、作れなかったら大赤字だな。子牛はどのくらいの値段なんだ？」

プリムラの話だと10万円ぐらいの値段らしい。そして成牛になると100万円ぐらいのようだ。

一財産だが相手は生き物だ。病氣になったり怪我をしたり、何かあるか解らん。

特にこの世界は獣医がないようなので、家畜を失う事も多いだろう。

「旦那、この甘い香りは、なんなんだい？」

「にや、ウチも氣になるにや」

「これは、お菓子用の香料だよ」

「どうやって作るのかは、知らないんですか？」

プリムラは香料の製法が気になるようだ。

「えゝ？ 花の種から作るって聞いたが、詳しい事は解らないな」

「そうですか……」

これも、商売のネタにしようとしたのかな？ そりゃ、俺が持っている物は殆どが商売に使えるとは思うが。

茶碗蒸しも好評だったが、このプリンも皆に好評だった。

牛乳と卵と砂糖だけなので、この世界の材料でも作れるだろうが、砂糖がかなり高価なので、一般には普及しないと思う。

貴族用のお菓子だな。

思いつきで、蒸しプリンを作ってしまったが、シャングリ・ラデ
デザートの本を購入して読んでみる。

ふむふむ、ゼラチンが入っていないのは、カスタードプリンらしい。なるほど〜これがカスタードプリンかあ。

本ではオーブンで焼いているのだが、蒸しても構わんだろ。出来上がりは同じだからな。

――次の日。

朝飯を食べた後、天然レンネットを検証するために、子牛を解体する。――といっても、胃袋を取り出すだけだ。

「ギルドで、家畜の解体もしてくれるのか？」

「ああ、やってくれるよ。革などの加工業者でもやってくれるけど、ギルドの方が早いぜ」

それなら、下手に解体して使えなくするよりは、プロに任せた方が安心だろう。

ニャメナが子牛の腹を裂き、胃袋を取り出す――殺してすぐにアイテムBOXへ入れたので、まだ体温が残っている。

「牛の胃袋は4つあるんだが、どの胃袋が使えるのかは知らないんだ」

「それでは、試してみしよう」

ステンレス製のボウルを4つ用意して、それぞれに牛乳を入れる。牛の胃袋も4つに解体、それぞれの胃液を採取して、ボウルの中に入っている牛乳へ投入してみた。

「本当に固まるのかよ？」

どうも、ニャメナは懐疑的のようだ。

「この方法でチーズが作られているのは、本当だぞ」

「あっ！ 固まってきたよ！」

牛乳をかき混ぜていたアネモネが叫んだ。

「本当に、固まるにゃ！」

「マジかよ?!」

使ったのは4つ目の胃袋だ。話には聞いていたが、本当に固まる

んだな。これがレンネットのオリジナルなんだから、当たり前って
いえば当たり前なんだが。

「どうやら、使えるのは4番目の胃袋みたいだな」

「凄い！ 本当に、ケンイチがくれた秘薬と同じです！ これを交
渉材料に使えば……」

「チーズの作り方だけで足りないようなら、あのプリンの手り方も、
教えてやればいい」

「いいのですか？」

「ああ、召喚獣で暴れるのよりはいいだろう」

シャングリ・ラから小瓶を購入して、プリムラに渡す。

すると彼女は、子牛の4番目の胃袋に残っている分泌物を集めて、
その小瓶に入れると大事そうに両手で包んでいる。

天然のレンネットは、子牛を犠牲にしなければならぬので、と
ても貴重だ。

再び、子牛の屍かばねをアイテムBOXへ入れる。街へ行った時に、ギ
ルドへ寄って肉にしてもらおう。

チーズの実験は上手くいったので、今度はアネモネの魔導書の実
験だ。

こちら辺で広い所といえば――湖しかない。皆で湖まで歩き、魔
法の見物をする事にした。

「魔導書があれば、どんな魔法も使えるようになるわけでもないん
だろ？」

「ええ、魔法は詳しくはありませんが、個人の能力や適性のような
ものも絡んできますので」

「そうか――。よっしゃ！ アネモネ、ぶちかませ！」

「うん！」

アネモネが魔導書に目を通すと、詠唱を始めた。

「虚ろな異空へと通じる深淵の縁よ、消え逝く魂から我に力を与えよ——爆裂魔法！」
エクスプロージョン

青い閃光が走ったかと思うと、それは赤い爆炎に姿を変えて大きく膨れ上がった。同時に、激しい爆風と衝撃波が俺達を襲う。最後に湖の水面が盛り上がり、岸に津波となって押し寄せた。

「ひゃああ！ こいつはすげえ！」

「にやにやにや！」

「きやああ！」

プリムラの長い金色の髪が、爆風に煽られる。純粋なエネルギーの解放だけなので、礫や破片が飛んでくる事はないようだ。

「おおおっ！ 道具屋の爺さんが使ってたのと同じぐらいの威力だな」

でも、爺さんは魔法の威力を増す、アルミ板を使ってたんだが…。

「はあはあはあ……」

アネモネは、1発で疲労困憊して肩で息をしている。辛^{つら}そうだ。

「アネモネ、大丈夫か？ また、熱を出すんじゃないのか？」

「すぐく疲れたけど……多分、大丈夫」

「そうか。無理はするなよ」

「うん」

エクスプロージョン
爺さんも、爆裂魔法は1日1発が限度だと言っていたからな。だが、爆風の後、獣人達が湖を見て騒ぎ始めた。

「おおっ！ 魚だ魚！ おおおっ！」

「にやにやにや！」

水面で爆発を起こしたので、沢山の魚が浮いているのだ。

獣人達が湖に走りだしたのを見て、シャングリ・ラでゴムボートを検索する。

ちよつと大きめの4人乗りの物が、1万8千円で売っている。オイルもついているし、これにするか。あまり安い物を買うと、品質が心配だ。

購入ボタンを押すと、畳まれたゴムボートが落ちてくる――そう、空気を入れなくてはならない。

アイテムBOXから、発電機とコンプレッサーを取り出す。コンプレッサーは、家を作る時にネイルガン用に購入した高いやつだ。ゴムボートに空気を入れるには、アダプタが必要なので、2000円で購入。

「ケンイチ、それは何ですか？」

プリムラが、潰れてペラペラのゴムボートを覗きこんでいる。

「空気を入れて膨らまず、船だよ」

「これが、船？」

コンプレッサーの電源を入れて、ゴムボートへ空気を送り込むとドンドン膨らみ、それは丸い船と化した。

1箇所が破れても沈没しないように、空気室が分かれているのだが、それでも2分程で空気の注入が完了した。

これを手でやったら、時間が掛かる事だろう。

「おおい！ この船に乗って、魚を拾え」

ゴムボートを抱えて、湖の水で毛皮がペションとなっている獣人達の下へ向かう。

「旦那、それが船なのかい？」

「そうだが」

「こんな薄皮みたいなので、大丈夫なのかい？」

ニャメナはゴムボートの耐久性が気になるようだ。

「柔らかいけど結構丈夫だぞ。爪を立てたり、剣で突き刺したりして穴を開けなければ大丈夫だ」

「本当かよ」

ニャメナは半信半疑だが俺からゴムボートを受け取ると、それを湖に浮かべ、そつと乗り込んだ。

「おっ！ 大丈夫だぞ！ 浮かんでいる！ ちゃんと櫂オールも付いているな。クロ助乗れ！」

「偉そうに指図するんじゃないにゃ！」

——と言いつつ、ミャレーもゴムボートに乗り込むと、オールで湖の上を漕ぎ始めた。

「おおお！ 取れ取れ！ 大漁だ！」

「トラ公！ そっちにいくにゃ！」

「ばか、こっちにもまだあるんだよ！」

怒鳴り合いながらも、ゴムボートの中へ次々と魚が引き上げられている。

そして、大方拾い尽くすと、岸まで戻ってきた。ゴムボートの中には、魚の小山ができている——30匹ぐらいかな？

結構大物もいるようだが、殆どがマスの仲間だと思われる。前にアネモネと一緒に食べた虹マスもいるようだ。

「マスなら食えるな」

「旦那のアイテムBOXへ入れてくれ」

「勿論もちろん、いいが——これだけあるなら、干物を作った方がいいかもしれない」

「おおっ！ そりゃいいな。干物なら日持ちもするし、美味しいな」
「にゃー！」

俺達が、ゴムボートの上に載せられた魚の山を前にして、今後の予定を練っている――。

どこからともなく黒い影がやって来て――爪で大物を引っ掛けゴムボートから弾き出すと、口に咥えて疾風のように逃げた。

ベルなのだが――行動が本当に猫だなあ……。

58話 スモークサーモン

アネモネが爆裂魔法^{エクスプロージョン}の魔法を使った。

湖の上で爆発が起こり、その衝撃で魚が白い腹を見せて水面^{みなも}に浮かぶ。

それを、ゴムボートに乗ったミヤレーとニヤメナが、一心不乱に集めている。

魚を数える――大中小合わせて36匹だな。その内の大きな獲物をベルによって持ちさられてしまったから、全部で37匹獲れた事になる。

大漁だな。

全部をそのままアイテムBOXへ入れておけば、いつでも新鮮な魚も食えるのだが、ここでは生で食う習慣が無い。

保存を兼ねて、干物にする事にした。

「それじゃ、やるか。よし皆も手伝ってくれ」

「ウチ等がやると、毛だらけになるにゃ」

「乾かす前に洗えば大丈夫だよ」

先ずは、頭を落とし腹を割きワタを出して綺麗に洗う――そして、3枚に下ろす。

アネモネにも包丁を渡して手伝わせるが――。

「アネモネ大丈夫か？ 休んでもいいんだぞ？」

「大丈夫だよ」

魔法の影響で疲れてはいるようだが、大丈夫のようだ。

獣人達は自前のナイフを使って魚を解体しているのだが、中々上手い。

プリムラの包丁さばきも中々のものだが、魚を下ろすのは初めてだと言う。

「よし、そしてこの毛抜で骨を抜いてくれ」

俺がシャングリ・ラで買った毛抜きを渡す。ド○ツのゾ○リンゲン製らしい――1個1000円。

元世界でも、同じ物を愛用していたが、合わせ目が広くて使いやすい。

だが、シャングリ・ラを見るときと高い物もあるようだ。

「ケ、ケンイチ！ これは、さぞかし高名な職人の手による作品なのでは？」

「お？ さすがプリムラ、解るか」

「ええ、こんなに先の広い面積をピタリと合わせるには、熟練の腕が必要です」

「街の人間も毛抜きを使ったりするのかい？」

「いいえ、こういった物を使うのは、化粧をする王侯貴族に限りますけど」

「まあ普通の平民じゃ、化粧なんてしている暇がないか……売るなら、どのぐらいになると思う？」

「これほどの品なら――1個銀貨2枚（10万円）ゝ金貨1枚（20万円）でも欲しい方がいらっしやるのでは……」

「なるほど、その値段なら売ってもいいな」

プリムラが、自分の産毛を抜いて、使い心地を確かめている。

1個1万円ぐらいにすれば、中小商人の奥方や娼婦にも売れるかも。

しかし、元世界の商品をばら撒くのは注意しなければ。貴族に少数売るぐらいで丁度いいと思う。

王侯貴族に売るなら、シャングリ・ラで1個4000円ゝ5000円の高級品の方がいいかもしれないな。

「俺等からすれば、わざわざ毛を抜くなんて信じられないけど」
「にゃ」

「まあそうだろうな」

それはさておき、皆で毛拔を持って、魚の小骨を抜き始めた。これをしないと川魚は小骨だらけで食べたもんじゃないからな。後は骨切りをするかだな。

「ふう、魚をこんなに丁寧に捌いたなんて初めてだよ」
「にゃー」

「普段はどうやって食ってるんだ？」

「焼いて丸かじりにゃー」

実に獣人らしい豪快さだ。

そして3枚に下ろした全部を塩水に3〜4時間ほど浸ける。今から漬ければ、寝る頃にはいい塩梅になるだろう。

「それでは、続きは明日って事になりますね」

「そういう事だ」

「ふう、手間暇掛かるぜーこんなの初めてだよ」

「手間暇掛けないと美味くならないからな」

「旦那の言うことを信じるよ」

「にゃ」

残りの作業は明日ということになった。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

——次の日。

朝、パンケーキを作る。小麦粉と卵と砂糖の一番単純な物。ふくらし粉を使わずに、卵白を泡立てて、ふっくらさせる。アネモネに料理も仕込まないとな。俺におんぶに抱っこの食生活

に完全に慣れてしまうと拙い^{まず}。

「私はケンイチについていくから！」

彼女はそう言うのだが、不慮の事故や病には勝てない。俺がいなくなっても、彼女一人で生きていけるようにしてあげなくては。

簡単なパンケーキだが――先ず、卵と砂糖が簡単には手に入らないんだよなあ。

そうなれば……小麦粉に塩を入れて練り、焼いてスープと一緒に食べる。

インド料理のナンに近いと思うが、そんな料理がこの世界の定番。だが、街にはパン種は売っているので、パンを焼いて食べる事は出来る。勿論^{もちろん}、砂糖は入ってなく塩味のパンだが。

食事が終わったので、昨日の夕方に作った干物作りの続きをする。シャングリ・ラから、干物を作るためのネットの箱――干しカゴを購入――1個1500円の物を5個。

こういうネットの中に入れて干さないと、蛆だらけになってしまう。

机の上に並べられた青いネットのカゴを、プリムラが興味深そうに見ている。

そんなプリムラを横目に見つつ塩水に浸けた魚の切り身を、干しカゴの中に並べていく。

作業をしているとベルがやって来て、後ろ脚で立ち上がり、俺に切り身をねだるのだが――。

「ベル、これはしょっぱいのだが……」

だが、言葉が通じているのか、いないのか。

彼女が立ち上がると、俺の背より大きい……そのまま押し倒されて、手から切り身を奪われた。

そして、それを啜えたベルは、少し離れた所で食い始めたのだ。

塩辛い物は、猫に食わせちゃイカンのだがなあ。

「えらい手間が掛かるな」

作業しながら、ニヤメナのボヤキが聞こえる。

「昨日も言ったが、手間を掛けないと美味くならないからな」

脚立に乗り――家の軒下に干しカゴを吊るしながら、アネモネに提案を一つする。

「昼にパンを焼いてみるか」

「うん！」

パンの作り方も教えてあげないとな。何せ、彼女はそういった教育を両親から全く受けていないようなのだ。

それどころか、食事も満足に与えられていなかったと言う。

まあ、暮らしが苦しかったせいもあるのだろう。

「いつも、お腹が空いてたから、神様をお願いしてた……」

「兄弟姉妹はいなかったのか？」

「弟と妹がいた。でも、私は本当の子供じゃなかったから……」

彼女は行き倒れの女性から引き取った子供だったらしい。彼女に親の愛情が注がれていないのは、そのせいもあるのだろう。

「弟と妹も、お腹を空かせてたのかい？」

「うん……いつも一緒に森へ行って、木の実とか食べられる物を探してた」

ほぼ、サバイバルだな。

それでも、にっちもさっちもいなくなって、アネモネだけが口減らして売られてしまったのだろう。

出会った時はガリガリだったし、あんな状態じゃ力仕事だって無理なはずだ。

「やれやれ」

アネモネの頭を撫^なでてやる。この世界は、こんな感じなのが普通なんだろうな。

「でも、アネ嬢。魔法が使えるようになったんだから、もう食うには困らないと思うぜ」

「うん」

「にゃ、あんな凄い魔法が使えるなら、冒険者からも引っ張りだこにゃ」

「冒険なら、ケンイチと一緒にするから」

「おいおい、俺はちよつと危ないのは勘弁だがなあ」

別に、そんな危ない事をしなくても食うに困らない金はあるし。

「そうですよ。そんな危ない事をしなくても、私が商売をして、ケンイチを食べさせてあげますから」

「それは、それでちよつとなあ。男として拙^{まじ}いんじゃないか？」

「ははは、それじゃヒモだよな」

まあ、ニヤメナの言う通りだな。それも、ちよつと勘弁してもらいたい。

「ケンイチと一緒に冒険に行くの！」

「私と一緒に商売をするのが、平和的でケンイチには合っていますわ」

「「ぐぬぬ……」」

アネモネとプリムラの間に、見えない火花が飛んでいるような。

「あつ、そうか！」

突然、ニヤメナが膝を叩いた。

「なんだ？ 何かあったのか」

「アネ嬢が凄い魔法が使えるのって、嬢のオカン譲りなんじゃね？」
「それも、そうだな……そう考えるのが妥当だろ。本当の母親に関する物って残っていないのか？」

彼女が黙って首を振る。まあ、俺と出会った時にも何も持っていなかったからな。

「でも、私の名前は、本当のお母さんが付けてくれたみたい」
だが、彼女の凄い魔法の力を見ると、母親は結構有名な魔導師だったのかもしれないな。

「探せば、親戚やらも見つかるかもしれないが……」
「ううん」

彼女がまた首を振る。全く、そういったものには興味がないようだ。

「旦那——女は、目の前に好きな男がいれば、後は何もいらないんだよ」

「どんだけ歳が離れていると思ってるんだよ。大体プリムラだって親娘ぐらいの歳の差なのに」

「何言ってるんだよ、旦那。愛があれば、歳の差なんて障害にもならないのさ」

獣人からそんな台詞を聞くとは思わなかったな。

「何かさう旦那を見ると、まだ女が増えそうな気がするんだよね？」

「多分、気のせいだ」

「ウチもいつも言ってるにや。ケンイチは人が良すぎるにや。そのうち悪い女に引っかかると思うにや」

「そんな事言ってもなあ。知り合いの女が拐さらわれたりしたら無視す

るわけにもいかないだろう」

「ああそうにゃ！ あの時に、貴族がケンイチを探していると言つて、そのまま街から逃していればウチが独り占め出来たにゃ」

「まあ、プリムラがいないと、ニヤメナとも知り合いにならなかつたからな」

「てめえ、クロ助！ 腹の毛は白いのに、腹の中は真っ黒かよ！」
「にゃはは」

ミヤレーが言ってるのは本気か冗談か解らん。

でも、プリムラを助ける時に真っ先に加勢してくれたのは彼女だったからな。まあ、冗談だと思いたい。

皆が俺の顔をじゅつと見ている。

「大丈夫だったの。もう正妻がいるから無理だって断れば良いんだろ？」

「妾^{めかけ}でもいいって言われたらどうするにゃ」

「断って下さい！」

「大丈夫だって、そんな仮定の話で責められてもなあ」

だが、干しカゴを吊るす作業は終了。後は魚が乾燥するのを待つだけだ。

昼用にパンを焼いてみる事にした。

ホームベーカリーを発電機に繋げて放置すれば、パンが出来上がるのだが、それではアネモネのためにならない。

強力粉に砂糖と塩、そしてパン種（イースト菌）を入れて練り、ボール状にする。

パン種はこの世界の市場にも普通に売っているので、入手に困ることは無いが、何から作っているかは不明だ。

そして、1時間程放置すると、倍の大きさに膨らんでいるのだが、さすがにこの作業は獣人達には手伝わせる事が出来ない。

生地が毛だらけになってしまうからな。

そして、これを焼くわけだが――シャングリ・ラでタ〇さんパン焼き器という、ドーナツ型で真ん中が盛り上がった底の深い分厚い鍋を購入。

黒く分厚い鉄製の鍋で、1台7000円と少々高価なのだが、これと似たような鍋がこの世界でもパン焼き器として使われているのだ。

一般家庭でパンを焼いたりするときには、こういったパン焼き器を使う。

コンクリブロックで簡易カマドを作ると、焚き火でパン焼き器を加熱。温まったら、まるく千切った生地を並べていく。

「ふぁー、こんなの初めて見た」

アネモネが、丸いパン焼き器を覗きこんでいる。

「家でパンを焼いた事はなかったのか？」

「こんな立派な鍋も無かったし……」

彼女の話の聞くと、1日に1食――野菜クズのスイトンみたいのが主食だったみたいだな。

ドーナツ型いっぱい生地が膨らんだら、蓋をして15分程加熱。そして、ひっくり返して更に10分加熱。

「いい匂い！」

「うひゃー香ばしいねえ。匂いだけで美味って解るぜ」

蓋を取ると、湯気と焼きたてのパンと、イーストの香りが辺りに立ち込める。

「いい感じに焼きあがったんじゃない？」

「にゃー！」

焼きたてパンを千切って皆に分けると、一斉にかぶりついた。

「うめえ！」

「うみゃー！」

「ほおお！」

「美味しいですわ」

皆がパンの美味さに目を丸くするが——プリムラだけ反応が普通だ。自分の家で焼きたてのパンを食べていたからだろう。

「焼きたてのパンが美味しいのは当たり前だけど、旦那のはやっぱり違うぞ？」

「そうにゃ」

「多分、小麦粉自体が違うのですわ」

「さすが、商人の娘だな」

この世界で小麦粉といえば全粒粉。つまり、小麦を全部挽いて粉にしたもの。

元世界のように、用途によって小麦粉を分けたりはしないが、全粒粉なので栄養はある。

米の、白米と玄米みたいな関係だろう。勿論、もちろん製粉技術の違いもあるだろうが。

「でも、作り方は同じだぞ。市場で小麦粉とパン種を買って、今日と同じように作ればパンが焼けるって事だ」

「うん。パンは私が焼くよ！」

「おおっ！ 任せたぞ」

それなら、今日買ったタ〇さんパン焼き器を追加で2個購入するか。3つで焼けば5人分ぐらいにはなるだろう。

昼飯も食ったので、畑仕事を少々やる。

トマトが赤くなっているので収穫だ。シャングリ・ラで買った、黒いトマトもある。

完熟トマトは甘くて実に美味しい。

「旦那、この赤い実は果実なのかい？」

「一応、野菜って事になっているけど、果実としている所もあるなあ」

「この黒いのも一緒にや？」

「ああ、黒いけど中身は一緒だ」

「さく箆に採って、アイテムBOXへ入れる。一つずつ、皆にもおすそ分けた。」

「甘〜い！」

「これは果実だにゃ！」

「おおっ！ こいつも美味しいな」

「美味しいですわ……とても、みずみずしい」

「生で食べても美味しいが、スープに入れても美味しいぞ」

俺は、アイテムBOXから醬油を出して、トマトに掛けて食う。

地元の爺婆は、砂糖を掛けて食ったりするのだが。

後は何を植えようか。キャベツなんか色んな料理に使えそうだな。もやしなんかも欲しいんだが、買ったほうが早いかな？

昔、水栽培でスプラウト栽培をした事があったが……。

一応、シャングリ・ラで検索すると、普通のもやしも、スプラウトの栽培キットも売っている。

緑豆スプラウトの栽培キットとか面白そうだな——買ってみるか。

「ポチッとな」

プラ製のボウルと網、緑豆のセットが落ちてくる。

水をひたひたに入れて、豆をばら撒くだけでいい……実に簡単だな。

「それは、なあに？」

アネモネが、俺が購入した物を不思議そうに見ている。

「豆を発芽させて、野菜として食べるんだよ」

「へえ」

「プリムラ、そういう食べ物は、この辺にないのか？」

「ありませんわ」

「俺も聞いたことがないなあ」

「そうか、後で食わせてやるよ」

だが、彼女達は半信半疑———というか食った事がないので、警戒しているのか。

食わず嫌が多いなあ———とは思うのだが、日本人が何でも食い過ぎなのか。

——夕方、日が傾く。

軒下に吊るした干物をチェック。いい感じに乾燥している。こういうのも、魔法を使うとすぐに完成するのもかもしれない。

乾燥した切り身をすべて取り入れて、アイテムBOXへ収納。

そして、最後の仕上げをするために、シャングリ・ラから大型の燻蒸鍋を買う———3600円だ。

一緒に燻蒸に使うための桜のチップを購入。

「旦那、何をするんだい？」

「燻蒸だよ」

「へえ」

外にテーブルを出すと、アイテムBOXからコンロを出して設置。燻蒸鍋に桜のチップを敷き詰めて加熱し始めた。

煙が出てきたら———燻蒸鍋の網の上に、さっきの乾燥させた切り身を並べて蓋をする。

時間は10分〜20分ぐらいで良いだろう。

「わあ、いい香り」

「これは、香木ですね」

アネモネとプリムラが、燻蒸鍋の周りで、立ち昇る煙をクンカクンカしている。

確かに、桜の木は良い匂いがする。元世界で貰った薪の中に、桜の木が入っている事があるのだが、それを思い出した。

「よし！ いいかな」

蓋を開けて完成したのは、スモークサーモンだ。元世界で海で育てたニジマスがサーモントラウトだったから、これもサーモンでいいだろうーと思う。

ちよっと味見をしてみる……塩味と、鼻腔に抜けるスモークの香り、そして舌の上に旨味が広がる。

「うん、美味しいな」

「旦那、そのまま食うのかい？ それって生じゃ……」

「燻蒸してあるから、大丈夫だよ」

「私も食べる！」

とりあえず、俺が食うものなら大丈夫だと学習したのか、アネモネが飛びついた。

「少ししよっぱいけど、美味しい！ これ、本当に魚なの？」

「俺が作るの見てただろ？」

俺とアネモネの会話を見ていたニャメナが、勇気を出して食べてみるようだーパクリと一口して、噛み切ると口を動かしている。

「……」

「どうだ？ 口に合わないか？」

一緒に食ったミャレーも黙々とスモークサーモンを食っている。

「旦那！ 酒！」

黙っていたニャメナが叫んだ。

「はぁ？」

「酒だよ、酒！ こいつは酒の肴にピッタリじゃないか！」

「ああ、そういう……待ってろ。魚じゃワインは合わないからな――日本酒でいいか」

シャングリ・ラを見ると、2Lで1000円の紙パックに入った純米酒が売っている。これでいいか。

日本酒は飲まないからな、どれが良いか解らん。

「ポチツとな」

落ちてきた、純米酒をカップに注いでやる。

「ワインじゃないのか？」

「ワインは魚には合わないと思うからな」

「ふくん……うおっ！ なんだこれ？」

純米酒を一口飲んだニャメナが、驚きの声を上げた。

「旦那、これって果実酒なのかい？」

「いいや、穀物から作った酒だぞ」

「穀物？ これが？ 匂いを嗅いでも、果実酒のような……しかし、こりゃ美味いっていうか……」

「どうした？」

「ああっ！ もう！ こんな俺に食わせて、飲ませてどうしようってんだ！ 畜生！ もう、俺をどうにでもしやがれてんだ！」
ニャメナが、テーブルから離れると地面に大の字になった。

「「何言ってるんだお前」にゃ」

「旦那になら、どんな酷い事をされてもいいからさ」

「なんだそりゃ、どうしてそうなる？」

「ふぎゃー！」

ミヤレーが、ニヤメナに飛びかかったのだが、虎柄の毛皮がヒラリと躲^{かわ}した。

2人でギャーギャーと揉め始めた。

「ああ煩い。お前等静かにしろ」

「お嬢！ こりゃヤバイよ。どんな女でも旦那の料理を食べたらイチコロだ！」

「そりゃ、大袈裟だろ」

「下手すりゃ、王侯貴族でもヤバイかもしれない」

「それだけ上流階級なら良い物を食ってるだろ。俺の料理なんか、なびくとは思えないがな」

「……」

プリムラは黙って、スモークサーモンを味わっているように見えるのだが……。

「旦那は料理だけじゃなくて、賢者並に物知りじゃないか。美味しい料理を食いつつ、見知らぬ世界の雰囲気の良い話なんかされたら、王侯貴族のお堅い女でもコロリといくと思うね」

「ゴホッ！ ゴホッ！」

プリムラが、むせているので、アイテムBOXに入っていたお茶を飲まず。

「さっきも言ったが、仮定の話で責められてもなあ。それに王侯貴族なんて興味はないぞ？」

「旦那が興味なくてもさあ」

「それに、正妻がいるから断るって、さっきの話でも出てただろ」

「相手が王侯貴族なら、手切れ金をお嬢にポーンと渡して……」

プリムラを見れば、泣きそうな顔をして俺の方をじゅっと見てい

るので、彼女を抱き寄せる。

「はいはい、そんなありもしない事で腹を立てるのは止めなさい」

「……………はい」

「ニヤメナも、プリムラを焚きつけるのは止めろっての。もう飯を食わせないぞ」

「うっ！ 解ったよ……」

「ケンイチ！」

後ろを振り向くと、アネモネが両手を差し出してくる。抱っこをねだっているのだ。

「はいはい」

アネモネを抱っこしていると、プリムラが下を見ながらブツブツと独り言を言っている。

ありもしない話で落ち込んでいると思ったら、これは商売の事を考えているのだ。

「……この燻製は売れますわ」

「お嬢！ ダメダメ！ こいつは、俺が全部食うから！」

「そうはさせないにゃ！ ウチも食べるにゃ！」

どうやら、スモークサーモンは獣人達に大人気のようだ。

「それではケンイチ、この製法を売ってもいいですか？」

「売る？ どこへ売るんだ？ こんなのを貴族が買ったりはしないと思うが……」

彼女が黙って、サンタンカの村を指し示す。

「なるほど。サンタンカの村でこいつを作らせて、君が仕入れて街で売るわけか」

「そうですわ」

「さすが商人だな。燻蒸用の香木も森で代用品が見つかるかもな」
上手くいって村の特産物になると解れば村長も乗ってくるかもしれない。

そこら辺の商売は、プリムラに任せてしまおう。

プリムラのチェーン店もそうだが――俺は、売上の何割かを貰えばいいのだ。そうすれば黙って数千万円の金が入ってくる。

残りの切り身を全て燻蒸するために、縦型で高さ60cm程の燻蒸器を購入――2万円だ。

明日、全部燻蒸してしまおう。

夕飯は、スモークサーモンとトマト、そしてチーズと野菜を使ってサンドイッチを作った。

皆に凄く好評だった。

59話 赤飯

皆で魚の燻製——スモークサーモンを作ったが、とても好評だった。特に獣人達には堪えられない味のようだ。

プリムラの話では、街でも売れると言う。彼女は、サンタンカの村へスモークサーモンの作り方を売り込んで、商売にするつもりだ。村から出来上がった物を卸してもらい街で売る。村の住人は漁は出来るが、商売をするとなると難しい。

そもそも、計算が出来る人間が少ないのだ。餅は餅屋というのが、商人に卸した方が手間暇を考えると得策だろう。

俺は、三枚に下ろしてから燻蒸したが、普通に開いて干物から燻蒸しても、商品としての価値はあるだろう。

手間がより掛かるスモークサーモンは、高級品として売り込む手もある。

——次の日。

昨日食べた、サンドイッチが食べたいという、皆のリクエストに応えて同じ物を作る。

スモークサーモンとトマト、そしてチーズと野菜を使ったサンドイッチだ。

パンは、アネモネが丸いドーナツ型のパン焼き器で作ってくれたものを使っている。

「おおっ！ パンは、いい出来じゃないか。上手いぞ、アネモネ」
「えへへ……」

俺は、アネモネがパンを焼いている横で卵を茹でてスモーク——
燻玉を作った。

「パクッ——んぐ！ 旦那、酒！」

燻玉を一口食べたニャメナが、とんでもない事を言い出す。

「朝っぱらから、酒なんて出すわけないだろ。スープで我慢しろっての」

生水が飲めないこの世界でも、朝からワインを飲んだりはしない。まあ飲む奴もいるが、普通はスープか白湯が多い。

「もう、一口でいいからさあ」

「ダメダメ、朝から酒を飲む奴なんて、ここから追い出すぞ。それに、これから貴族の所へ行くってのに、どうする気だ」

プリムラが、この地を治めている領主の所へ行くので、護衛に彼女も同行するのだ。

「どうせ獣人なんて、屋敷に入れてくれませんよ」

「お酒はダメですよ。ニャメナ」

「はいはい、お嬢に言われちゃしょうがねえ」

ニャメナがふてくされているが、こればかりは認めるわけにはいかない。こんな時間から飲んだんじゃ、アル中一直線だからな。

「獣人も酒の中毒になるのか？」

「そりやなりますけど……普通は、そこまで飲む金がありませんからねえ」

「うみゃー！ これは、美味いにゃ」

「茹で卵はよく食べましたが、それを燻製にするなんて……驚きです」

普通の家じゃ、卵なんて病気の時しか食えないが、さすがマロウ

商會は大店だ。

だが、一人静かな子がいる――アネモネだ。

「アネモネ、どうした？ 食欲がないのか？」

「ううん……」

彼女が燻玉を食べながら首を振る。

「なんだ元氣無いな。何か、あったのか？」

「……………ケンイチが嫌がっているのに、プリムラが貴族の所へ行くのが、わかんない」

「んゝそうかあ――確かに、貴族は面倒臭そうなので、勘弁してほしいんだが、暮らしていくには金がいるからな」

「……お金」

「そうだ。こういうのんびりした暮らしをするにも、先ずは金だ。

金が無かったら、日銭を稼ぐために四苦八苦しなけりゃならん」

「私の家も、お金が無かった」

アネモネは、テーブルのスープをじっと見つめている。

「それに、アネモネは俺と冒険をしたいと言っていたが、それにも金が必要だぞ」

「そうだよ、アネ嬢。装備を揃えたり、仲間を雇ったり、食料を買い込んだり。どうしたって金がいる」

「プリムラと君を助けたシャガ討伐も、マロウ商會から軍資金が出たから可能になったんだ」

「そうだにゃゝ、金が無いと人は集まらないにゃゝ」

「しかし、ウチには凄腕の商人がいる。彼女に金を稼いでもらって、資金が潤沢になれば色々と安泰だ」

「私には、剣を振ったりは出来ませんが、お金でケンイチを支えてみせますよ」

適材適所、俺達は実動部隊。プリムラは後方で財務担当。役割分

担は必要だ。

「そして、商売を大きくするには後ろ盾が必要——それが貴族だ。お偉いさんのご威光があれば、今回の揉め事だって荒療治をする事なく、綺麗に解決する事が可能になるってわけだ」

「俺は、荒療治の方が好きなんだけどねえ」

「ニャメナは黙ってな」

「へいへい。アネ嬢、ガチの戦をやる時にもよく、そりゃすげえ金が必要になるんだ。それこそ国が傾くぐらいのな。その時に金を動かすのが商人よ。せっかく身内に、すげえ商人がいるんだから利用しねえ手はねえ。お嬢には悪いがな」

「そんな事はありませんよ。それが商人の仕事ですから」

「解った……ケンイチが嫌じゃないならいい」

「大丈夫、嫌じゃないからな」

「うん」

彼女も納得はしたようだが、やはり何か元気がない。

しかし、俺にも家族が増えたし、いつまでも、このままってわけにはいかない。

俺に何かあった時に、家族が路頭に迷わないようにしなくては。それに、俺の能力が枯渇する事態にも備えなくてはならない。その時のためにも金が必要。

こんな誰からもらったのかも解らないような能力だ、いつ無くなってもおかしくはない。

スローライフを望んでいるのだが、そのような事態になればスローライフどころではなくなってしまう。

だが、プリムラは商人で自立しているし、ミヤレーとニャメナは全く平気だろう。

問題はアネモネだ。その彼女のために冒険者ギルドへ登録をさせ

て、彼女名義で口座へ入金を始めた。

俺に何かあった時は、その金を使うように言っている。

朝食の後、俺とプリムラ、そしてニャメナで街へ行く。アネモネとミャレーは、崖の上で狩りをするという。

プリムラとニャメナは、そのまま領主の所へ向かうようだ。

「上手くいくといいな。貴族への土産が足りないようなら、プリンの作り方を教えてもいいぞ」

「いいえ、おそらく大丈夫でしょう」

「それじゃ旦那、行ってくるぜ」

「おう、暴れるなよ」

「お嬢がいるのに、そんな事をするはずねえだろ！」

「ははは」

彼女達を見送った後、冒険者ギルドを訪れ――いつものカウンタ―へ行くと、子牛の処理を頼む。

「おお！ アイテムBOXのオッサンじゃないか。何か面白い物を持ってきたのかい？」

本当は、アイテムBOXの中の洞窟蜘蛛を処理したいところなのだが、ここで出したら大騒ぎになるだろうから、止めておく。

「家畜の処理もしてくれると聞いたが？」

「おう、やってるぜ」

「子牛を一頭頼む」

「また、肉だけで素材は売りか？」

「ああ、それで頼む」

「でも、普通の牛じゃ金にはならないぜ」

「構わんよ」

10万円で子牛を買って、素材の金が数万円と一頭分の肉を入手

しても、金額的には大赤字だな。

まあ、仕方ない。夕方には出来るとい事なので、婆さんがやっている道具屋へ行く。

「ちわゝ」

相変わらず、よく解らない道具が並んだ暗い店内。

「はいよゝ」

いつものように、黒い服にカーキ色のローブを着た婆さんが迎えてくれる。

俺はアイテムBOXから、崖の上でゲットしたフクロウの姿を模した像を取り出した。

「ふむ、これはまた面白い物を持ち込んだね」

婆さんは、あちこちを丹念に調べている。

「これに魔石が付随していたはずなんだけど、持っているかい？」

「ああ、これか」

俺はアイテムBOXから、像の中に入っていた拳大の魔石を取り出した。

「ふむふむ、像の目に鍵を入れると起動する術式のようなだね」

「解るのかい？」

「そりゃ、当たり前さ。像と魔石、そして鍵込みなら金貨10枚で買うけど」

「いや、鍵は困るな。人から預かった物だからな。像だけならいくらだ？」

「像だけなら、ガラクタだねえ。モノ好きが買うかもしれないから、小四角銀貨1枚(5000円) ってところだね」

アイテムBOXへ入れておいても仕方ないから、その値段でもいい

いか。

そういえば、魔導書もあったよな。どうしようか……。

「婆さん、未登録の魔導書を手に入れたら、どうすりゃいい。黙って持っていればバレないか？」

「余計な面倒を増やしたくないなら、登録をしておくべきだろうさ。別件でやられる事もあるんだよ？」

ああ、そういう事もあるか……俺はアイテムBOXから爆裂魔法エクスプロージョンの魔導書を取り出した。

「これを見つけた、登録してくれ」

婆さんは、俺から魔導書をもらうと、パラパラと中身を確認めている。

「爆裂魔法エクスプロージョンかい。中々良い物を見つけたねえ。これなら金貨30枚（600万円）はくだらないよ」

彼女の話では、魔導書の新規登録をするために銀貨1枚（5万円）の費用が必要だ。まあ、高いが必要経費ってやつだな。

登録された魔導書は財産にもなるわけだし。

「あの子が、これを使えたのかい？」

「ああ」

「あの歳で、たいしたもんだねえ。あの娘の親も魔導師なんだろう？」

「いや、行き倒れの女性から、子供を引き取った農家によって育てられたらしい」

「あれまあ」

うーん、婆さんは色々と魔導に関して詳しそうだ、ちょっと聞いてみるか。

「それじゃ、このフクロウの像はタダで婆さんにやるから、ちょっと

と教えてほしい事があるんだが……」

「なんだい？」

「今から10年ぐらい前に、若くて有名だった女の魔導師が行方不明になった事は無かったか？」

「あん？ そりゃまた……ふむ、なるほど、10年前ねえ——10年前といえば……黄金のハナナ、いやあいつは若くはなかったねえ、白金のアルメリアか」

婆さんは、自分の記憶を遡るように、顎に手を当てて考え込んでいる。

「婆さん、そのアルメリアって魔導師に会ったことがあるのかい？」

「チラリと見かけた事はあったねえ——確かに、あの娘と同じ黒い髪だったが、何か証拠はあるのかい？」

「いや、全くない。俺と初めて会った時も、何も持ってなかったし」「それじゃ、ちょっと難しいかね、大体あの娘がそれを望んでいるのかい？」

「いや、全く興味がないようだ」

婆さんは何を思っているのか、俺の方を眺めてニヤニヤしている。

「まあねえ、女にとって大事なのは、目の前にいる男だからねえ」

「男って、親ほど歳の離れたオッサンだぞ？」

「歳なんて関係ないさ」

婆さんが、ヒヤヒヤと笑うのだが、そんなものなのだろうか？

とりあえず、婆さんに魔導書の登録を頼んだ。1週間程掛かるらしい。

「これを、あの娘に持って行ってあげな」

婆さんが、一冊の本を持ってきた。

「何の本だ？」

「簡単な生活魔法の本だよ。これは魔導書じゃないから、使うには訓練が必要だとは思うけど、あの子なら使いこなせるだろうさ」

「おおっ！ 恩に着るよ」

婆さんから本をもらい、追加で虫除けの魔石を買うと、道具屋を出た。

ギルドで肉が出来るのも夕方だ。いっぺん家に帰るか……。

――――◇◇――――

家に帰ってきて畑仕事。ミャレーとアネモネが帰ってくる昼にはまだまだ時間がある。芽出しポットにキャベツの種を植える。

土をいじりながら、ふと崖の方を見る。コ○ツさんの油圧ブレイカーによって大きく崩れているのだが、まだ鉦脈は残っている。

「うーん、ドリルで崖に穴を開けて、エクスプロージョン爆裂魔法で発破を掛けられな
いかな？」

そんな事をして、鉄砲の銃身のように吹き出して終わりだろうか？

だが、銃身の強度より大きな爆発なら当然周りも吹き飛ぶに違いない。

早速、シャングリ・ラでハンマードリルを検索してみる。こいつは、普通のドリルと違って、振動を与えながら、コンクリート等に穴を開ける機械だ。

消費電力1000Wの緑色のハンマードリルを4万8千円で購入。次に長いドリルビットを探す。

「あるかねえ……」

サイト内を検索すると、1mのドリルビットを見つけた。とりあ

えず、こいつが一番長い物らしい。

そして、長さの違う物を何本か揃えて購入。全部で2万円程だ。購入ボタンを押して、落ちてきた物を確かめてみるのだが――長い！　なんか、ポキッと折れそうな感じなのだが、大丈夫なのだろうか。

最初は、短い物を使って穴を開けて、徐々に長い物に切り替えていくしかないか……。

悩んでいると、崖の足場からアネモネが降りてくるのが見える。

だが、様子がおかしい……なんだか泣いているようだ。

慌てて彼女に駆け寄る。

「アネモネ！　どうした？！　怪我でもしたか？」

「……お腹が痛い」

俺の問いかけに、彼女はそう答えた。

「腹？」

「……血が沢山出てきて……私、死んじゃうの……？」

「え？　は？」

言われて、彼女の身体を確かめると、ワンピースから出ている脚の内側が赤く濡れ、靴まで滴ってきている。

「あゝあああああっ！」

ちよつとまてえ！　落ち着け、落ち着け、俺！　ひっひっふーひっひっふー。

しかし、どうする？　男の俺から説明するのも……なんだその……。

あゝプリムラよく早く帰ってきておくれ！　だが、その時、森の方から天の助けが聞こえてきた。

「おーい旦那あ！」

その声の方を見れば、プリムラも一緒だ。

俺は全力で手を振って、彼女達を呼び寄せた。

「おおーい！ 早く来てくれ！」

俺の慌てる様子に、ニヤメナがプリムラを抱きかかえると、ダッ
シュで俺達の所までやって来てくれた。

「何事だい！？ 旦那あ」

「プリムラさんやーい！」

「なんですか？ 変な呼び方をして」

訝^{いぶか}しげなプリムラに後ろを向かせて、2人でひそひそ話をする。

「実は、アネモネに初めての月のものが来たようだな……男の俺より女性の君から説明してもらった方が良さだろうし……」

「まあ！ まあまあ！ 解りました！ 私に任せて下さいませ！」

プリムラがアネモネの所へいくと、しゃがみ込んで彼女に話しかけた。

「それは、病気ではありませんから。2人で家の中でお話をしましょう」

不安そうに俺を見つめるアネモネを^{なだ}宥める。

「大丈夫だよ、アネモネ。プリムラが教えてくれるから」

「……解った」

あゝ、とりあえず何を渡せば良いだろうか？ 全く解らんぞ。シヤングリ・ラで売ってる生理用品はオーバーテクノロジーなような気もするし……。

つつか、どれがいいのかも、さっぱり解らん。

プリムラに聞くと、布が必要らしい。この世界で布っていえば麻

布だ。シャングリ・ラで1m 1mの麻布をポチツとする。

「これで良いか？」

「こんな上等な物でなくても……」

「とりあえず、これしか無い。それと、これは痛み止めの薬だ。一粒飲ませてやってくれ」

彼女に鎮痛剤と水を渡して、家の中に入っていく2人を見送る。

「はあ……こういう時は、男は全く役に立たんな」

しかし、この世界の女は大変そうだな。俺の周りの女達が全くそんな素振りも見せないの、すっかりと忘れていたぜ。

プリムラは、どうしているんだろうか？

俺は、滝から流れてくる川の側でへたり込み、シャングリ・ラで買った缶コーヒーを飲む。

こういう時は缶コーヒーだ。甘い砂糖の味がストレスを軽減してくれる。

側にいるニヤメナにも、缶コーヒーを勧めてみたが、気味悪がって飲まない。

そこへ崖の上から、ミヤレーとベルが戻ってきた。

「にゃー！ あれ？ どうしたにゃ？」

うなだれている俺に、おかしいと思ったのだろう——彼女に事情を説明した。

「あーにやんだー獣人以外の人の、あの日かにゃー」

「そういえば、獣人はあるのか？」

つい聞いてしまったが、こりゃセクハラかもしれん。だが彼女達があっけらかんと、俺に答えを返してきた。

「ないにゃ」

「ないのか？」

「ああ、ないねえ。旦那、賢者のくせに、そんな事も知らないのかい？」

だって賢者じゃないしな。それに他の世界からやって来た人間だし。

2人の話では、獣人に月のものはない。ただ、年に1回発情期のようなのが1週間程あって、その時にやると100%出来るらしい。もちろん、獣人同士だけだが。普通の人間とは混血は出来ない。

「それじゃ、一斉に赤ん坊だらけになったりしないか？」

「その時期はバラバラに来るから、それはないにゃ」

「そうか……」

2人と話していると、アネモネが家から走ってきた。

プリムラから説明を受けたせいかな、それとも鎮痛剤が効いているのか、彼女の顔はいつものように明るさを取り戻している。

「ケンイチ！」

アネモネが俺に飛び込んでくると、その後から、プリムラもやって来た。

「プリムラから、話は聞いたかい？」

「うん！ 私、赤ちゃんが産めるようになったんだって！」

「そうだ、今日はお祝いをしないとな」

「うん！ 私、ケンイチの赤ちゃんが欲しい！」

俺は家に戻るために、飲みかけの缶コーヒーを空にしようと口をつけていたのだが、それを嘔き出した。

「ゲホッ！ ゲホッ！」

「どうしたの？ ケンイチ」

「ゲホー——まあ、アネモネ落ち着きなさい。そりゃ確かにその通り

なんだが、君のその小さい身体じゃちょっと無理だ。もっと大きくならないとな」

「じゃあ、どのぐらい？」

「そうだなあ……後、5年ぐらいは……」

「そんなに？」

「だって、胸も大きくならないと、赤ちゃんに乳もあげられないし……」

「まあ、アネ嬢。旦那の言う通りだな。もうちょっと待った方がいいと思うぞ」

大体12歳ぐらいから働き始めるこの世界だが、さすがに結婚して子供を産むのは15〜17歳が多いようだ。

「解った……」

納得したようなアネモネの後ろで、プリムラが怖い顔をしており、俺の手を引っ張ると耳打ちをしてきた。

「ちょっと、本気なのですか？」

「まあ、待て待て。今はあんな事を言ってるけど、年頃になれば、街で知り合ったちょっと見てくれの良い若い冒険者とかに、コロリと惚れちゃう事だってある」

「そうでしょうか？」

「『私、お父さんと結婚するの！』とか言ってた娘が――突然、見ず知らずの男を連れてきて、『この人と結婚したい！』とかいうのは、よくある話だろ？」

「それは、私に対する当て擦りですか？」

「え？ プリムラもお父さんにそう言ってたの？」

「……」

「ああ、可哀想なマロウさん」

今度はプリムラの機嫌が悪いのだが、どうしようもない。現時点では先延ばしが最善策だろう。

あまりの出来事に、ギルドへ肉を取りに行くのを忘れるところだったので、慌てて引き取ってきた。

その日の夕方は赤飯になった。後はミートボールの唐揚げと、肉とスープの晚餐。量はいつもあり多めだ。

引き取ってきたばかりの肉をふんだんに使った。ミートボールの唐揚げは初めて作ってみたのだが、出来はどうだろうか。

子牛の肉をミンサーに掛けてひき肉として、刻んだ玉ねぎと繋ぎ、そして調味料を入れて団子にまとめる。

ミートボールに火が通らないと危ないので、お湯で煮た後に衣を付けて再度、油で揚げてある。

「今日は、いっぱいあるにゃ！」

「お祝いだからな」

「獣人にゃ、こういうしきたりは、無いからなあ」

「この赤い穀物は？」

「これは赤飯だよ。俺の地元では、めでたい事があると、これを食べる」

この世界では、市場で探しても小豆は無いようだ。

ちなみに俺の地元では、甘納豆が入った甘い赤飯を食べる。もしかして———と思ってシャングリ・ラを検索してみたが、さすがに甘い赤飯は売ってないらしい。

「私も少し食べて良いですか？」

「これか？」

プリムラも赤飯を食べてみたいようだ。ご飯には、今まで興味を示さなかったのにな。

「縁起物なのでしょう？」

「ああ」

アネモネとプリムラが、赤飯をスプーンで掬って口へ運ぶ。

「すごい、モチモチしてて、美味しいかも！」

「これは菌ごたえが……でも、美味しいです」

アネモネとプリムラには好評だ。

「お前等はどうだ？」

「止めておくにゃ」

「俺は、酒があるから、これでいい」

獣人達は、意外と保守的らしい。

「でも、この丸い唐揚げは美味いにゃ！ 噛むと中から肉汁がたっぷりだにゃ！」

「へへへ、こいつは酒の肴にピッタリだぜ」

一時は、どうなることかと。でも、アネモネの年頃だと普通にある事だよなあ。

すっかりと失念していた。

「アネモネ、もう一つ贈り物があるのを忘れていた」

俺は、アイテムBOXから、婆さんからもらった魔法の本を取り出した。

「生活魔法の本らしい。魔導書じゃないらしいから、すぐには使えないらしいけど」

「ケンイチ、ありがと〜！」

アネモネは俺から本を受け取ると、早速ペラペラとページを捲っている。

「光よ！^{ライト} の魔法、乾燥の魔法——役に立ちそうなのが、沢山あるよ！」

「はいはい、本を見るのは食事が済んでからにしような」

「うん！」

「ああ、アネモネの騒ぎで、すっかりと忘れていたが、貴族様の方はどうだったんだ？」

「ええ、上手くいきましたよ。子爵夫人は、チーズの製法にとっても驚いておられました」

彼女の話では、実際に牛乳からチーズを作ってみせたという。

「閣下には会えなかったのかい？」

「子爵様は、王都へご出向中のようで……でも子爵夫人は、女の私達がやってる商店への嫌がらせを卑劣だと、とても憤慨しておられました」

この点では、同じ女性である子爵夫人に相手をしてもらって良かったかもしれない。

「それで、ご威光を示していただけたら？」

「ええ、あのソガラムという商人は以前にも騒ぎを起こしていたようで……」

「なるほど、常習犯だったか」

「そうみたいです」

そうか、バイオレンスルートに突入しないで良かったな。

「なにはともあれ、平和的に丸く収まりそうだな」

「全てケンイチのお陰ですわ。ありがとうございます」

「プリムラの店が儲かれば俺にも金はいってくるわけだし、それに——妻の店のために何かするのは、夫として当然だろう」

「……はい」

プリムラは、ミートボールを食べ、モジモジしながら赤くなって

いる。

「むゝ」

それを見た、アネモネがむくれているのだが……しかし、これで彼女の店が再開出来そうだな。

店が動き出せば、サンタンカの村で干物を作る話も進む事になるだろう。

だが、排他的なあのかの村の住人が、よそ者の話を聞くかな？
そこらへんは、プリムラに任せるしかない。

60話 大爆発

プリムラによる貴族との交渉が上手くいったようで、嫌がらせを受けていた彼女の店が再開出来るようになった。

早速、街で借りている倉庫での仕込みも開始されて、支店も始動。店は開店休業中だったが、育成した人材の流出を防ぐために、休業にもかかわらずに店員には給金が支払われており、すぐに店を再開出来た。

プリムラのチェーン店に出資を行ない協力していた支店長アイリスの親も、胸を撫で下ろしているだろう。

そして、商売が再開すると、店先はすぐに客で溢れた。店の再開を待ちわびていた客が沢山いたのだ。

問題なく営業が再び軌道に乗ったので、プリムラはサンタンカの村へとプレゼンを始めた。

湖で採れる魚を使って、干物やスモークサーモンを生産させて、それを街で売るためである。

俺のようなオッサンが行っても警戒されてしまうだろうし、クロトンの件で村とは少々揉めているからな。

その点、彼女は有名なマロウ商会の娘。ダリアの本店であり、ドライジーネを作ったマロウ商会はアストランティアでも名前を知られている。

やはり信用が違う。彼女は干物やスモークサーモンのサンプルを持って、交渉に当たっているのだが、プリムラはマロウ商会でも、マロウさんの右腕として働いており、交渉術にも長けている。

そりゃ子供の頃から、商売や交渉の手ほどきを受けているんだ、

英才教育ってやつだろう。

その彼女に、村へのお土産も持たせた。俺が使っているのと同じ、高さ60cmの燻蒸器だ。

運んでいるのはニヤメナだが、トタン製でペラペラなので、そんなに重くはない。

ちよっとオーバーテクノロジーかもしれないのが気になるが――まあ、似たような物を鋳物や木の板で作れない事もないから、大丈夫だろう。

後は、スモーク用のチップだが、村には獣人もいる。彼等の鼻を使えば、香木を見つけるのも難しくないと思われる。

――そのプリムラが帰ってきた。

「村の反応はどうだった？」

「とても良かったです。燻製もとても美味しいと評判でした」

「作ってくれそうか？」

「はい、村長も乗り気になってましたが――それから……あの」
「なにやら、プリムラが言いにくそうにしているのだが、何かあったのだろうか？」

「ん？ どうした？」

「湖で爆発を起こすのは止めてくれと言われました。魚が採れなくなるからと」

「ああ、それは悪い事をしたなあ。何かお詫びの品を持っていくか？ 何か良い物はないかな？」

「村では、油を欲しがっていましたから、それでどうでしょう？」
油なら、シャングリ・ラで買えばいいからな。安上がりだ。

しかし、容れ物が無いな――シャングリ・ラで壺を検索。3升（5.4L）入る信楽焼の壺がある。これでいいだろう。

壺と一緒に、一斗缶入りのキャノーラ油を購入して、容れ物の中を満たす。

今度、村へ行く時にニヤメナに持っていかなければいい。

村の方はプリムラに任せていいが――さて、俺はどうしようかといえは……。

アネモネの騒ぎで有耶無耶になってしまったが――崖に穴を開けて、アネモネの魔法で発破を掛けられないかの実験だ。

発破が出来れば、他の場所で鉱石を掘ったりするのに使えるかもしれない。

一度、試してみたい。

プリムラとニヤメナが街へ出勤。ミヤレーが狩りに出かけた後、アネモネに魔法の実験を頼んでみる。

「アネモネ、君の爆裂魔法で試したい事がある。手伝ってくれるか？」
「いいよ」

彼女の了承を得たので、計画を進める事にしたのだが、さて……どうするか。

コ○ツさんの油圧ブレイカーで採掘するために、足場をずらしてしまったので、登るためのスペースが無い。

再び、足場をずらすのも、新規に足場を組むのも面倒だ。

「うーん、また文明の利器に頼るか？ 掘り出した薔薇輝石は沢山あるしな」

シャングリ・ラを検索すると、M菱キ○ンターの高所作業車が350万円で売っている。

アームの長さは15mで、その先に付いている作業スペース――プラットフォームも広い。

「こいつか……」

当然中古だが、走行距離は2万kmとこの手の機械では、まだ新品同様ってところだ。

こいつもディーゼル機関なので、俺が作っているバイオディーゼル燃料が使える。

うーん、買おうか買うまいか、それが問題だ——しばらく悩んだのだが……。

「よし、ポチツとな」

崖の側でシャングリ・ラの購入ボタンを押すと、空中から現れた長いアームを備えた青い車体が地面にバウンドする。

ここは、コ〇ツさんで整地した場所なので、硬さは十分だろう。

結局、買ってしまった。金がちよつと入るとすぐに無駄遣いをしてしまうんだ。昔からそうだ。

だから、お金が中々貯まらない。そして、たいして使わない道具やアイテムがドンドン増えていく……根っからの貧乏性なんだな。だが、わかつちやいるが止められない。

「新しい召喚獣だ！ これは、何をしてくれるの？」

「あの長い首を伸ばして、俺をあそこまで運んでくれるんだよ」

「凄い！」

——とは言ったものの、こんな機械は扱った事がない。試行錯誤が必要だ。

まずは、車に乗り込み位置を微調整——運転席のインパネを見る。燃料は心配無いな。

そして車体を固定するための4本の脚——アウトリガーを設置。プラットフォームにアネモネと一緒に乗り込み、そこにガソリン発電機と、ハンマードリルをアイテムBOXから取り出して並べる。

操作盤のレバーを操作すると、油圧アクチュエータの音と共に、俺等に乗せたプラットフォームが移動を開始した。

「動いた！」

「こんなの初めて動かすからな」

おっかなびっくりの操作だが――それでも、操作盤には上下、水平、旋回等々の文字が書かれているので、なんとか解る。

エンジンのONOFFも、ここから可能みたいだ。

初めての操作に苦労しながらも、鉋石が露出している場所へ到着したので、エンジンを停止。

発電機のエンジンを掛けると、一番短いドリルで岩を掘り始めた。岩肌を叩く振動と白い粉が舞う。

「マスクした方が良いかな？」
「シャングリ・ラから、20枚入りの防じんマスクを購入――1500円。」

アネモネにもマスクを着けさせて、ドリルを徐々に長い物に交換しながら、1時間程掛けて深さ1mの穴を掘った。
ビットは、折れずになんとかなったようだ。

「ふう……」

「これ、本当に穴が開いてるの？」

「もちろん」

マスクを外して、発電機のエンジンを止める。プラットフォームの操作盤で、収納スイッチをいれると自動で定位置まで戻った。

高所作業車から降りると、上を見上げる。

「穴が……見えないよな」

作業車をアイテムBOXへ収納すると、50m程離れた場所に再

び設置した。

そして、アームを伸ばして宙に浮く。

「この距離じゃ双眼鏡も無理か……天体望遠鏡だと、逆さまに映るしなあ」

シャングリ・ラを検索して、スポッティングスコープを探す。バードウォッチング等に使う単眼の望遠鏡だ。

光学系に金をケチるとロクな事がないので、奮発する。KOWAのフローライトレンズ仕様——18万円也。

前々から欲しかったりしたアイテムなのだが、今なら買える！
こんな異世界で。

傾斜型といって、上から覗き込むタイプにしてみた。こちらの方が覗きやすい。

ついでに、60倍までズーム出来る接眼レンズも購入。三脚も購入して、プラットフォームの上に設置する。

「どれどれ！ おおっ！ 見えるぞ、私にも敵が見える！
敵って誰だよ。」

「見せて見せて！」
アネモネにも見せてやる。

「すごい！ あんな遠くなのに、凄く近くに見える！」
「そんな召喚獣を出して、何をしてるにや？ また新しいやつにや？」

下を見れば、ミヤレーとベルがいたのだが、アームを伝ってスルスルと俺達の所までやって来た。

「ここから、崖の1点を狙って魔法が使えるか実験をしようと思っ
てな」

「1点にゃ？」

ミヤレーにスポッティングスコープを覗かせる。

「にゃ?! にゃにゃ?!」

ミヤレーは、接眼レンズを見たり崖を見たりして、何度も見比べている。

「崖が凄く近く見えるにゃ! 魔法かにゃ?!」
当然、魔法という事にする。

「どうだ、アネモネ。これを覗きながら、あの穴の奥に爆裂魔法^{エクスプロージョン}が使えるかな？」

「うーん、やってみないと解らないけど……失敗しても怒らない？」

「はは——怒るわけないだろ。実験だからな。こんなの無理を承知で言ってるんだから」

「解った、やってみる」

一応、安全のために、アイテムBOXからポリカーボネート製のロングシールドを取り出す。シャガの討伐戦に使ったやつだ。

「すーはーすーは」

アネモネは手を広げて、深呼吸を繰り返す。そして、ミヤレーと同じように、崖を見たりスコープを覗いたりを何度も行う。

「んーんー」

「無理しなくていいんだぞ？」

「黙って!」

そして、スコープの接眼レンズを覗いたまま、動かなくなつた。

「どうしたにゃ？」

「しっ!」

小声で聞いてくるミャレーを制して、準備をする。

エクスプロージョン
「爆裂魔法！」

彼女の声と同時に崖の一部が大音響と共に吹き飛び、白い土埃が宙に舞う。

だが、崖の表面で爆発したようで、然程崖は崩れてない……失敗だ。

「ごめんなさい」

「ああ、いいよいいよ。気にするなって。あんな遠くの直径数センチの穴の奥に魔法を入れようなんて、ちよつと無理があったな」

「あんな遠くの小さな穴に魔法を使ったにゃ？」

「そうだ、崖は崩せなかったが、こいつを覗きながら魔法を使えるのは解った。遠くにいる魔物の退治とかも出来るぞ？」

「そうにゃ！ 目で見えないような遠くから仕留められるにゃ」

「けど、爆裂魔法エクスプロージョンなんて使ったら、獲物がバラバラになっちゃうけど……」

「うーん、それもそうか。でも、あんな遠くに魔法を使えるのは凄いで！」

「本当に？ えへへ……」

アネモネは照れ笑いをしているのだが、マジで凄と思う。
これは使えるぞ。

—————◆◆———

シャングリ・ラでパラソルとデッキチェアを購入する。リゾート地の海岸等に並んでいるやつだ。

パラソルは1万円程——デッキチェアは木枠に布が張ってある物を購入。映画でもこういうのが出てくるよな。

いっぺん使ってみたかった——7000円だ。

湖畔に設置したデッキチェアに寝転がり、パラソルの日陰でアイスコーヒーを飲む。

「ふう〜」

アイスコーヒーは、紙パックに入っている安物だけだな。まあ、気分ってやつよ。

サイフォンとコーヒー豆をシャングリ・ラで買って、淹れてもいいんだけど。

氷は、太陽電池パネルからモバイルバッテリーに充電し、製氷機を動かしている。

一度氷が出来たら、アイテムBOXへ入れておけば、いつでも氷が使えるしな。

どこか寒い地方にでも行った時は、大量に氷をストックするのも手だろうし商売にも使えるかも。

なんとという長閑で平和な景色。

そんな景色の中で、俺はのんびりと読書。電子書籍で読んでるのは、爆発物について。

エキスパロージョン爆裂魔法での発破に失敗したので、爆薬に頼ってみようと思う。

それに、この世界では洞窟で戦ったデカイ蜘蛛のような、巨大な魔物に襲われる可能性があるのが解った。

蜘蛛戦では、なんとか勝てたが、強力な武器が必要ではないかと考えたのである。

エキスパロージョン

アネモネも爆裂魔法のような強力な魔法を使えるようにはなったが、日に何発も撃てるわけではない。

やはり、攻撃の選択肢は多いほうがいい。

銃も選択肢に入れたのだが――本体はモデルガンの機構を参考になんとかなりそうでも、弾を作るのが難しい。

そんな怪しげな改造銃を実戦に使うのも、躊躇ためらわれる。肝心な時

に暴発、故障、不発——とてもじゃないが使えない。

武器というのは信頼性がモノを言う。

先込め式のパーカッションならなんとかなると思うが、近距離ならクロスボウと然程威力も変わらないだろう。

多数を揃えて、部隊で運用するなら威力大であるが、先込め銃が1丁あっても……つまり、余りメリットがない。

試しに、ミャレー達に拳大の石を投げさせてみると、200m以上の遠距離投擲をこなした。こりゃ、発射装置も要らないじゃないか。

要は爆発物だけあれば銃は要らないって事だ。

さて、爆発物——所謂火薬だが、異世界で定番になるのは黒色火薬だ。いわゆる

幸いシャングリ・ラには、黒色火薬の原料になる物が揃っている。木炭は普通に売っているし、硫黄も入浴剤として手に入る。

問題になるのは硝石（硝酸カリウム）だが、これも何とかなる。硝石自体は売っていないが、シャングリ・ラで手に入るゴニョゴニョの中身が過塩素酸カリウム——こいつが酸化剤として使用可能だ。

もう一つの候補は——液体を分ける魔道具を持っているので、シャングリ・ラで揃う物から、濃硫酸も濃硝酸も作れる。

トルエンやらセルロースも売っているので、TNT火薬やニトロトリニトロトルエンセルロースも作れるって事になるが——。

科学実験レベルでこういう物を作っても、実用に耐えられる物が出来るか疑問が残る。

第一候補は、やはり黒色火薬だろうが、試してみたい物がある。普通に売っている肥料を爆薬に使う、硝安油剤爆薬——アンホ爆薬だ。

農協に肥料の硝安が袋詰で山積みになっているのをみて、いつペんやってみてえ！

——常日頃思っていたのだ。もちろん勿論、元世界でそんな事をすれば、すぐに白黒の車が赤色灯を回しながらすっ飛んでくるだろうが、ここは異世界。

自重する必要はないのだ。幸い、シャングリ・ラにも肥料として硝安は売っている。

売っていないければ、叩くと冷えるゴニョゴニョの中身が硝安なので、こいつが使える。

アンホ爆薬の原料は硝安とゴニョゴニョを少量ゴニョゴニョするだけ——実に簡単だ。しかも、滅多に爆発しないので、安全性も高い。

——というか、爆発させるのが難しい。火をつけても、電気を流しても爆発しないのだ。

プライマーに別の爆薬が少量必要。黒色火薬は不可。

だが、俺の下には、エクスプロージョン爆裂魔法という魔法を使える少女がいるではないか。

彼女の魔法を使ってアンホ爆薬を起爆出来るかもしれない。こいつが使えるれば彼女の魔法も節約出来るし、薔薇輝石を採掘するための発破に使えるのではないか？

——そういう結論になった。

早速行動に移す。

シャングリ・ラから硝安を購入——ステンレスボウルにピンク色の粉を空け、アイテムBOXに入っていたゴニョゴニョと混ぜ混ぜする。これだけだ。

容れ物はどうしようか……ここは、過激派御用達の圧力鍋爆弾だな。

シャングリ・ラで一番小さい圧力鍋を購入して、圧抜き我非常弁

を叩いて殺す。

そして、鍋の中に出来上がったアンホ爆薬を詰めれば完成——簡単。実戦では、威力を増すために釘を混ぜればいい。

「おーい、アネモネーまた魔法の実験を手伝ってくれ」

「解った」

「何するにゃ？」

一緒にいたミャレーも気になるようだ。

「魔法の実験だよ」

「またにゃ？ 賢者様は色々考えるにゃ」

「まあな」

アネモネにヘルメットを被せると、湖畔をオフロードバイクで飛ばす。あまり近くで爆発物の実験を度々すると、またサンタンカから苦情がくるかもしれない。

湖沿いに10km程やって来たが、ミャレーも走ってついてきた。アイテムBOXから圧力鍋爆弾を取り出す。

「ミャレー、こいつを向こうへ投げ飛ばしてくれ」

湖の岸沿いを指さす。

「解ったにゃー！」

鍋の黒い柄を持って彼女がスイングすると、圧力鍋は放物線を描いて、かなり遠くまで飛んだ。

湖畔に落下してゴロゴロとバウンドしたが、それでも爆発はしない。

「鍋でも、こんなに飛ぶのかよ。すげえパワーだな」

アイテムBOXからレーザー距離計を出して、鍋との距離を測る——98mだ。凄すぎるだろ。

湖畔にしゃがみ、スポッティングスコープとポリカーボネートのタワーシールドを出す。

「アネモネ、あの鍋の中に爆裂魔法を使えないか？ 威力はなくていいから」

「小さい爆裂魔法でいいの？」

「ああ、ぼん！ ぐらいでいいと思う」

「やってみる」

彼女も、シールドに身体を半分隠しながらスコープを覗く。

「これは的が大きいから、前より簡単だと思う」

「出来そうか？」

「うん」

「じゃあ、やってみてくれ」

アネモネが精神統一をして魔法の準備にはいった。

「む！ 爆裂魔法（小）！」

——その瞬間、白い土埃を残し大音響と共に鍋が破裂した。

爆裂魔法は爆炎を生じて赤い火が上がるのだが、こいつは純粋な爆発だけ、地面を這ってくる衝撃波が俺達を襲う。

使った爆裂魔法以上の爆発が起きているので、これは起爆成功だろう。

「凄い音だにや！ 爆裂魔法とは違うのにや？」

「錬金術を使い、少しの魔法でも大爆発を起こすのが可能なんだよ」

「へええ、ケンイチ凄い！」

「これがあれば、大量の敵に囲まれても、何回も爆裂魔法と同じような爆発が使えるだろ？」

「うん！」

魔物には魔法は効かないというが、こいつは純粋な化学反応なの

で、効くんじゃないのか？

試してみないと解らないけどな。

家に戻ると、アイテムBOXから再び高所作業車を出して、以前開けた穴に、ピンク色のアンホ爆薬を詰め込む。

的が解りやすいようにピンクのスプレーで○を書いてみた。

そして、離れた場所から再び発破に挑戦する事に。

今度は、崖の表面を狙えばいいので、高所作業車に乗る必要もないだろう。

アイテムBOXから盾とスポッティングスコープを出して、発破に備える。

「今度は、穴の中を狙う必要はないから、粉が詰まっている表面に小さい爆裂魔法エキスプロージョンを当てるだけでいい」

「うーん、それなら出来そうな気がする」

「それじゃ、やってみてくれ」

「うん」

彼女がスポッティングスコープを覗いて、精神統一をする。

「紅く丸が書いてある真ん中を狙えばいいの？」

「そうだ」

「む！爆裂魔法エキスプロージョン（小）！」

大砲のような音と共に、崖が大きく崩れて、白い煙が上がる。

「やった、成功だ！」

「上手くいった?!」

「ああ！凄いな！ アネモネやったな！」

彼女を抱きかかえると、小さい脚が宙に浮く。

「えへへ……」

エクスプロージョン

爆裂魔法（小）なら、1日何回でも使える。発破し放題だ。

それから、3回程発破を掛けて、1000万円分の薔薇輝石を回収。

高所作業車の元は十分に取った。

そして、オレンジ色の石の鉱脈もそれで尽き、採掘は終了となったが、アンホ爆薬も十分に使える事が解った。

こいつは色々はかじと捗るねえ……楽しみが増えたぜ。

61話 ツリーハウス

サンタンカの村で、本格的な干物とスモークサーモン作りが始まった。

作られたスモークサーモンは高級品として、商人や貴族達に販売されており、アストランティア外からの注文もある。

だが、スモークサーモンは燻製にしてあるとはいえ、5日程しか保たない。

それ故、隣の都市――ダリア以外への輸出は基本的には無理。アイテムBOX持ちの業者がいれば別だが、今のところ申し出はないようだ。

それでも、密かに転売している奴らがいるので、アイテムBOX持ちがそれに関わっているらしい。

ダリアへの輸出は勿論、マロウ商会が携わっている。
プリムラも商業ギルドを介して、マロウさんと手紙で連絡を取り合っている模様。

なるほど、ギルドにはそういう使い方もあるのか。住所がなくても手紙のやりとりが出来るって事だ。

スモークサーモン作りが始まったサンタンカには俺からの商品も卸されている。

それは商品を作る際、骨を取るために必要な毛抜きだ。シャングリ・ラで買くと1本10000円の毛抜きだが、それをお友達サービス価格の銀貨1枚（5万円）で販売している。

スモークサーモンの口当たりを良くするためには、この毛抜きが欠かせない。

だが、同じ物を貴族に販売する時には1本銀貨2枚（10万円）である。だが貴族の女子は、皆がこの毛拔きに飛びついた。身だしなみを整えるためにどうしても必要だからである。

アストランティアやダリアはもとより、遠く離れた領地の貴族からの注文も入っているらしい。

わざわざ買い付けのための使者を寄越してまでも、手に入れた品物という事なのだろう。

——さて、商売はプロフェッショナルのプリムラに任せてしまつたし、俺は何をしようか。

せっかく高所作業車を買ったんだ、何か活かせる事があればなあ……。

「高所、高所——木の上………ツリーハウスなんてどうだ？」
ガキの頃、板を持ち合つて木の上に秘密基地を作ったりしたが、もっと本格的なやつを作る——これだな！

「決まりだ」

ツリーハウスを作るのに、高所作業車があれば作業は捗^{はかど}るだろう。早速、シャングリ・ラでツリーハウスの電子書籍を購入して、研究に次ぐ研究。

だが、参考例に載っているツリーハウスは、とんでもない高度な物ばかり……こんなのデキッコナイス。

普通に想像するツリーハウスといえば、家の真ん中に太い幹が刺さっていて——そんなイメージだが、それを作るとなると中々に大変だ。

大体、近くにはそんな巨木がないのだ。森の奥まで行けばあるのだが、やはり家の近くでないと不便だろう。

ツリーハウスの写真を見ながら、俺にも作れそうな物を検討する。

立っている木を柱に見立てて、ステージを作り、そこへ小屋を建てる。小屋は皆で住んでいる家と同じメーカーのキットが50万円で売っている。

6畳1間の造りだが、ツリーハウスならそれで十分だろう。そして床の角に穴を開けて、はしごで登れるようにする……中々よさ気だ。

普通の階段を作ってもいいのだが、ちょっと秘密基地感を出したい。

小屋は後載せなので、アイテムBOXへ収納出来るがステージは固定だ。

ここから撤収する際には放置という事になってしまうのだが、やむを得ない——男のロマンを優先する。

まずは小屋のキットを買って、そいつを組み立てる事にした。キットは何度も組み立てているので、手慣れた作業だ。

小屋を完成させてからサイズを測って、それを載せるステージを木の上に作る。

そして、ステージが完成したら、そこへ小屋を載せればいい。通常ならデカイクレーンが必要になるが、俺にはアイテムBOXがある。

最後にアイテムBOXへ収納した小屋をステージの上に出せばOK。簡単楽ちゃん、これがチートでなくて、なんなのか。

しかし皆に仕事をさせて俺だけ遊んでいるような……いや、家を建てるのは遊びじゃないのでOKだろう……多分。

それに崖から掘り出した薔薇輝石だけでも、しばらく食えるだけの金になった。

しかし元世界で結婚をして、裏山にツリーハウスを建てたい——とか言ったら大反対されるんだろうな。

幸い、俺の周りにいる女性陣は、男のやる事に寛容だ。それには感謝をしたい。

「ポチッとな」

最初の家の時と同じように、空中からガラガラと板や窓が落ちてくる。

以前、購入した時は窓が割れたりしたんだが、今回は大丈夫だったようだ。

3角屋根で正面には扉、部屋は正方形で6畳、玄関には小さなデツキがある――それが完成図。

「また、家を作るにゃ？」

「ああ、今度は木の上に作ろうと思ってな」

「にゃ！ それは良いにゃ。獣人の村では、木の上に家を作ったりするにゃ」

「へえ、そいつは見てみたいなあ」

獣人は高い所が好きそうだからな。彼女の話では、普通は部族のリーダー等が住んでいると言う。

ミヤレーとアネモネにも手伝ってもらい、小屋を組み立てる。

通算これが4つ目だし、今回は高所作業車もある――楽勝だ。最初の家に比べてかなり小さいので、4日程で完成。

やはり力持ちの獣人がいれば早い。

森の中に家を建てた時も、獣人に手伝ってもらえば、半月ぐらいで完成出来たのではないだろうか。

「旦那、この家を木の上に載せるのかい？」

飯を食い終わった後も、明かりを点けて仕上げの作業等をやっていると、酒の入ったカップを片手にニャメナがやって来た。

「ああ、中々いいだろう」

「しかし、旦那は何でも出来るねえ」

「まあ、皆が手伝ってくれてるし、召喚獣もいるからな」

「あいつら、本当に働き者だな」

「獣人も木の上に家を作るって聞いたけど？」

「ああ、確かにそうだけど、木の上に住んでいるといえば、エルフだろうな」

ふむ、彼女はエルフに会ったことがあるのか——本当にいるんだな、興味深い。

「エルフに会ったことがあるのか？」

「ああ、森の中で何回かあるよ。お高くとまって、いけ好かない連中さ」

ニヤメナの話では、独自の言語を持ち、話があまり通じないらしい。そして極端に排他的だと言う。

容姿を聞くと、ファンタジーに出てくるエルフそのものだな。

耳が長くて、青や緑色の服装を着こなして、弓矢や精霊魔法を使う……そして不老で美男美女揃い。

森の中から出てくる事も滅多にないので、街の中で見かける事もないと言う。

なるほどねえ。

————◆◆————

プリムラの店は順風満帆。何の問題もない。俺は、ツリーハウスの続きをしよう。

近くに立っている木を柱に見立てて小屋を載せるステージを作り、最終的には、そのステージがそのままテラスになる。

小屋の大きさは、4 m 5 0 cm 3 m——テラスの幅は1 m欲しいから、ステージの大きさは6 m 5 0 cm 5 m、地上からの高さは5

mを予定している。

木が丁度良い具合に長方形に並んでいれば、そのまま使えるのだが、中々そうはいかない。

近くの森を探し回って木が3本利用出来る場所を見つけたので、残りの1本は俺が丸太を立てて、それを柱とする。

丸太はアイテムBOXに入っていた10m弱の丸太を使用する。

こいつは、以前いた森で伐採した物だ。

木の質や大きさ等は、以前住んでいた森の方が良いようだ。

シャングリ・ラには長い角材が売っておらず、全部辺りで伐採した材木を使用している。

伐採したての材木は当然生木。このままでは使用出来ないので、皮を剥き乾燥をさせなくてはならない。

俺とミヤレーで木材の皮を剥いていたのだが、あまりにも大変なのでシャングリ・ラで何か良い物が無いか検索する。

すると、チェンソー用のアタッチメントで木材の皮を剥く機械が売っていたので――早速、購入。

「おおっ！ こいつは早いぜ！」

バリバリという音を立てて、丸太の皮が剥かれていく。機能としては電動カンナに近いだろうか。

とても便利なので、チェンソーをもう一台買って、アタッチメントをつけっぱなしにしている。

「凄いにゃ！ それも魔道具にゃ？」

「まあ」

そして、最後の仕上げはアネモネに仕事を頼む。

「よし、アネモネ。ここに積んである木をやってくれ」

「解った！　むゝ、乾燥！」
ドライ

彼女が唱える魔法と共に、木から白い湯気がもうもうと出始め、ピキピキと音を立てて変形収縮していく。

ここで活躍したのは、アネモネが新しく覚えた乾燥ドライの魔法。対象物から水分を抜いて乾燥出来る。

もちろん勿論、洗濯物も乾かせるし、魚や肉も干したり出来る。凄く便利。道具屋の婆さんが――彼女は生活魔法も使えるはずだと言っていたが、マジであっさりを使いこなしてみせた。

やはり、彼女は魔法について凄い才能を有していると思う。

先ずは、正確な測量と位置出し。建築する場所は畑の横、森の入り口から30m程奥に入った場所。

そこに丸太で柱を立てるために、ユ○ボで穴を掘り――コ○ツさ
んで、防腐剤を塗った丸太を釣り上げて立てる。

ユ○ボとコ○ツさんの2台体制になったので、色々はかどと作業が捗
ぜ。

そして、ユ○ボで埋め戻せば、柱立ては完了。こんな的人力じゃ絶対に無理だろ。

重機で釣り上げながら横にも細い丸太を渡し、筋交いや貫通ボルトで固定していく。

生えている木を一切傷つけないで、建てる事も出来るらしいが、俺には無理。

恐らく、獣人達やエルフのツリーハウスはそのような構造になっている物と思われる。

そして、完成した4辺の中に田の字型に丸太を組んで、その上に板を貼っていく。

自然の丸太は、曲がっていたり凸凹なので、板を水平に貼るのは

大変だ。

皮を剥く時に使った、チェーンソーに付けたアタッチメントで丸太を削ったり、シャングリ・ラで購入した角材で位置を調整したりして床を水平に保つ。

そして苦勞の末――木漏れ日の中、地上5mの高さに平らなステージが現れた。

「うーん、ミニチュア版清水の舞台みたいなの……」

後は、ここに小屋を載せて、仕上げをするだけだ。

強度的には大丈夫であろうか？　とりあえず、載せてみない事は解らないのだが。

ガキの頃の遊びの延長という事で、木の上にツリーハウスを作る。そのためのステージが、地上から5mの高さに出来上がった。

中々、いい出来だと思う。だが、シャングリ・ラには長大な角材等が売っていないため、殆どを森の木々で賄った。

そこで活躍したのが、アネモネの新しい乾燥の魔法。^{ドライ}生活魔法というものだが、とても役に立つ。

普段の生活でも、重宝しそう。

「うにゃー！」

ミャレーが柱代わりに使っている大木にしがみつき、桁に使っている丸太に手を掛けると、流れるような動きでステージの上に飛び乗った。

「結構広いにゃ！」

「そこに小屋が乗るからな」

どこからともなくベルがやって来て、ミャレーに続き木に爪を立てて登っていく。そして、木の上に出来た新しい陣地を隅々までチ

エック。

「みゃ！」

ミャレーがステージの上で、連続バク転をして、最後に空中回転を披露。まるで体操選手だ。オリンピックでも金メダルだな、こりや。

「ミャレー！ 捻りは出来ないのか？」

ステージの上でポーズを決めている、ミャレーに声を掛ける。

「ひねりにゃ？」

俺が手のひらを捻ねじってお手本を示すと――彼女は、その通りにクルリと空中で捻りを見せた。

「おおっ、出来るのか」

「そりゃ旦那。あれは敵の背後を取る基本技だよ」

いつの間にか、俺の横にニャメナが立っていた。なるほどなあ――敵の頭上を飛び越して背後を取るのか。

今日は、プリムラの店の休日らしい。支店長のアイリスがやって来て、プリムラと一緒に帳簿の整理をしている。

それじゃ全然、休日になっていないような気がするんだが、2〜3時間で終わるので、その後は休みとなるようだ。

料理の仕込みのために街で借りている調理場でも、清掃などが行われているという。

「アイリスは帰ったのか？」

「ああ、俺が背負って街道まで行ってきた」

ニャメナも、ステージの上に登りたいのか、そわそわしている。

「昼飯でも食っていけばいいのに……」

「たまの休みは家族と食事をしないと、親父さんがうるさいんだとそれなら、「早く嫁にいけ」——とか言わなきゃいいのに。」

「アネモネは？」

「アネ嬢は家で本を読んでいるよ」

俺達もアルミ脚立をアイテムBOXから出して、ステージの上に登る。

見下ろすと結構な高さがある。平屋建ての屋根の天辺に登った感じに近いかな。

今のところ、ステージは只の板。このままでは端から落ちてしまうし危険だ。柵を設置する必要があるだろう。

「それにしても、旦那」

「なんだ？」

「崖の所にあるような、鉄の管で足場を作って、その上に家を載せればもっと簡単だったんじゃない？」

「そりゃそうだが……森の中に鉄は合わないだろ。せっかく木の上に作るんだから、木で作らないと」

「そういうもんかねえ」

とりあえず小屋を載せてみるか……ミャレーとニャメナに注意を促す。ベルにも端に寄ってもらう。

「よし、この上に小屋を載せてみるから、注意してくれよ。崩れそうになったり、危なくなったら逃げろよ」

「にゃ！」「大丈夫だろ？」

まあ、獣人やベルは平気だろうな。一番危ないのは俺なんだが……だが落ちるとすれば真ん中辺りだろうな。

崩落してもステージの4辺は残れると思われる。

「よし、小屋召喚！」

アイテムBOXから、予め完成させていた小屋を取り出す。載せた直後は木が軋む音がしたが、なんともないようだ。

小屋も固定をしておらず只載せただけだが、自重があるので動いたりはいしないようだ。

森の中の木が風を遮ってくれるので、風で動くこともないだろう。それに危険があるようなら、小屋をアイテムBOXへ再び収納して補強を入れればいい。

「にゃー！」

小屋の正面玄関から、ミャレーとベルが飛び込んで、中をチェックしている。

「この家は梁がないにゃ」

そう、板を積み上げた外壁に、蓋のように屋根が乗っているだけの簡単な構造。

「旦那、出入りはここからするのかい？」

「いや、玄関の横の隅に、穴を開けて下から出入りする造りにしようと思ってる」

「階段付けた方が便利だろ？」

「いや、便利は解るんだが、その方が木の上に住んでいる感が出るかなーと思ってる」

「まあ、旦那がそれならいいけどさ」

ニヤメナは合理的な方が良いという考え方のようだ。まあ、理解は出来る。

だが、これは俺の趣味だから——譲れん。

小屋の床とステージに補強を入れてから、隅に四角い穴を開ける。人一人が通れるスペースがあれば十分だろう。

デカイ荷物があるなら、俺のアイテムBOXへ入れればいいからな。

そして、穴に登るためのハシゴを設置するのだが、一本の長いハシゴだと怖いので、2段階にしてみた。

1段目のハシゴ——短い踊り場——2段目のハシゴ——穴——という感じになっている。

獣人だけなら、どんな物でもいいのだろうが、アネモネやプリムラがいるからな。

秘密基地感を残しつつ、彼女達でも登れるようにしなくてはいいかん。

最後に床に開けた入り口に蓋を付けた。

「うーん、いいんじゃない？」

とりあえず、部屋の中にシャングリ・ラからベッドを買って並べてみる。ベッドだけでぎゅうぎゅう詰めだ。

テーブル等はテラスに並べればいいので、部屋の中はベッドだけにしたい。むしろ、部屋全体をベッドにする感じが。

ベッドの上に寝転がってみる。壁には窓が1箇所、そして扉についているガラスしかないので、部屋の中は少々暗い。

上からランプもぶら下げてみた。

「ひゃっほう！ ベッドはふかふかだぜ！」

俺が出したベッドにニヤメナが飛び込んだ。

「あれ？ ミヤレーは？」

ベルも何処かへ行ったようで、見当たらない。

「知らね。旦那、これで完成かい？」

「いや、周りに手すりというか柵を付けないと危ないだろ」

幸い、シャングリ・ラを検索すると、簡単に柵を作って固定するための金具が売っている。

それを使う事にしよう。

「旦那あ」

俺がベッドで寝転んで、次の計画を練っていると、ニヤメナが甘い声で呼ぶ。

「なんだ？」

俺が、彼女の方を向くと目の前に丸い尻がある——ベッドの上で猫のように香箱座りになったニヤメナが尻尾を使って、おいでおいでをしている。

「ニヤメナ、俺の事は興味なかったんじゃないのか？」

「そんなわけないだろ？ 獣人の女が強い男が嫌いなわけじゃないじゃないか。旦那はそんなに強いのに、なんで俺を好きにしないのか不思議だよ」

「別にそんなつもりで、住ませてるわけじゃないからな。プリムラの護衛なんだぞ？」

「旦那は俺の事が嫌いなのかい？」

「そんな事はないけどな」

彼女の突き出したお尻の上で、うねうねしている尻尾の付け根をマッサージする。

「んあっ！ なおっ！ なおおん！」

だが、ニヤメナが甘い吐息をもらし始めた刹那——俺が作った地面へ通じるハッチから、黒い物体が這い上がり、俺を押し倒した。

「フシャーッ！」

凄い力で俺を押さえつけたのは、ミャレーだ。彼女は、白い牙を

剥き出すと俺の首の根本に噛み付いた。

「あいでででで！ ちょっと待て、ミヤレー！ 本気噛みになつてから！ 死んじゃう！」

しかし、俺の悲鳴が外に届いたのか、ハッチから黒い疾風が壁伝いに天井まで駆け上がり、ミヤレーの背後を取った。

「フシャアアッ！」

ミヤレーより長く鋭い牙を誇示する、森猫のベル。勿論、この状態でミヤレーへ噛み付けば、只では済むまい。

傷や頸動脈がどのより、首が折れて即死するものと思われる。森猫に背後を取られたミヤレーは、尻尾を垂らし俺の首筋から離れた。

ミヤレーがいなくなった俺の腹の上では、得意げな表情をしたベルが香箱座りをしている。

「ありがとな、ベル。助かったんだが、すげえ重いんだけど……」
首の辺りを撫でてやると、ゴロゴロと喉を鳴らし、気持ち良さそうな顔をしている。

その横では、ミヤレーとニヤメナが並んで正座だ。

ニヤメナは、「俺は知らねえ」という顔をして、ミヤレーは尻尾をブンブンと振り回し、いかにも機嫌が悪そう。

だが、このままでは埒が明かない。2人で話し合いをしてもらう。獣人の社会は序列がしっかりとしており、上下関係が厳しい。その点からも、はっきりとさせたほうがいいだろう。

「どうしたの？」

ハッチから、アネモネが顔を出した。皆が帰ってこないので見に来たらしい。

しょうもない修羅場を見られなくて良かったわ。

後日、2人の話し合いの結果――2人の実力は伯仲。スピードのミャレー、パワーのニャメナといったところか。

だが、俺との付き合いが長いという事で、ミャレーの方が取り分が多く――2人の間での分前は6対4となったようだ。

何がロクヨンなのかは知らん。

アイテムBOXから鏡を出して見るが、牙で開いた穴は背中の方にあるようだ。

触るとぬるぬるしているので、出血している模様。消毒液を出して首の傷口へ塗る――そして、ワセリン。血止めだ。

最後は、ワンタツ○パッドを貼り付けて終了。身体を起こしてみるのが、シートには血は付かなかったようだ。

まあ、ミャレーも本気なら、頸動脈近くを齧るだろうからな……。

その後、テラスの四方へ柵を取り付けて、森の中にツリーハウスは完成した。

木漏れ日の中、木の上に作られたテラスの上に、小さな小屋がこじんまりと載っている。

子供の頃からの夢が一つ叶ったか。それも異世界で。これが冗談ではなく、マジってんだから笑ってしまおう。

俺は、完成したツリーハウスを見上げてニヤニヤしていた。

62話 貴族様がやって来た。

皆に協力してもらい、ツリーハウスが完成した。

俺の城がまた一つ完成したわけだ。だが、こいつはここに固定なので、動かすこともアイテムBOXへ入れる事も不可能だ。

上に載っている小屋だけは、アイテムBOXへ収納できるが。

「わーい！」

アネモネが、テラスの上ではしゃぎ回っている。そして部屋の扉を開けると、ベッドだけで部屋はいっぱい。

「ここには、ベッドしか置かないの？」

「そう、寝るだけの部屋だ。たまにここで寝るのも、良いだろうって思ってた」

テラスにはテーブルと椅子も備え付けているので、ここで読書をしたりするのもいいだろう。

こういったツリーハウスは虫だらけになってしまうのだが、この世界には虫除けの魔石がある。

婆さんの所で買ってきた魔石をセットすれば、虫除けは完了だ。

「そういえば、蛇って木も登るよな」

「ふぎゃ？」

「まあ旦那がいれば大丈夫じゃね？」

「確かに俺は蛇が平気だが……後で、柱に蛇返してもつけるか」

「そのほうがいいにゃ！」

ミヤレーは本当に蛇が嫌いなようだな。

完成したツリーハウスで夕飯を食べるために、下で料理をしてアイテムBOXへ入れる。

アイテムBOX内では時間が止まるようなので、こんな事も可能だ。

今日は、リクエストでカレーにした。なんかいつもカレーを食っている気がするが……。

そして、今日はツリーハウスの完成祝いなので、ハンバーグカレーにしてみた。

この前、処分した子牛の肉がまだあるのだ。

子牛の肉をミンサーに入れ、ひき肉にしてから、繋ぎの卵と小麦粉、玉ねぎのみじん切り、そして塩と胡椒少々。それらを良く練る。

「よし、アネモネはこれをグチャグチャに混ぜて、よく練つてくれ。プリムラは、カレーを焦げ付かせないようにな」

ベル用に玉ねぎ抜きバージョンも作ろう。

「うん!」「はい」

「焼く時に1つにするなら、細かくに切らなくてもいいのにゃ」

「硬い肉でも美味しく食べられるし、普通の肉焼きより、こっちのほうが好きってやつもいるぐらい美味いんだぞ?」

「相変わらず、旦那の料理は凝ってるねえ」

練上がった種の真ん中を凹まして、鉄板の上で焼く。

「いい匂いにゃ!」

「たまたねえ!」

獣人達が我慢しきれず、よだれをタラ〜りと流している。

ハンバーグが焼きあがる頃、タイミング良くご飯も炊きあがった。米を食べているのは俺とアネモネだけだが。

料理が完成したので、ツリーハウスへ皆で登る。

上に登るにはハシゴしかないので、アイテムBOXが無ければ大変な事になりそうだが、その心配もない。

テラスに設置されているテーブルの上に、出来上がった料理を並べた。

ベルには、俺達と同じハンバーグに追加して猫缶を開けてやる。彼女のハンバーグは塩分を控えめにしてある。

「ケンイチー！私も、その白いのを食べてみたいのですが」

「ご飯か？」

この前、プリムラは赤飯を食べて美味かったらしいので、米に興味が湧いたらしい。

「うにゃ！肉が柔らかくて美味いにゃ！」

「おほ！確かに、硬くて噛みきれない肉も、こうすりゃ美味いだろうなあ。しかし食事の度に、あんな手の込んだ事なんて出来ねえ」

「それなりに手間暇掛けないと、美味しい料理は出来ないぞ。ベルが食っている、お前達が好きなあれも、手間暇掛けて加工してあるんだから」

あれというのは猫缶である。

「なるほどなあ……でも、俺達が肉なんて練ったら毛だらけになっちまう」

「別に手でなくてもいいんだぞ？木のヘラで練ってもいいんだ」

「そうか、そうだな」

「でも、柔らかい肉ばかり食っていると弱くなるとか言う、頭の堅い男もいるにゃ」

「ああ、いるなあ〜そういうやつ……」

どうも獣人の男、あるあるネタのようだ。確かに顎の力は鍛えられるから、噛み付きの攻撃力は上がるかもしれない。

「けど、獣が獲物を仕留めたら、柔らかくて栄養のある内臓から食うんだぞ？」

「そうだよなあ」

あれこれ喋りながら食べている獣人を横目に、アネモネとプリムラは黙々と、カレーを食っている。

「アネモネ、今日は静かだな」

「美味しい物は、じっくり味わうの！　こんな美味しい物が2つ合体するなんて、今日は特別な日でしょ？！」

「今日は、家の完成祝いだからな」

「カレーに、この穀物は合いますわ！　これは、とても美味しいです。ケンイチがいつも食べているのも納得です」

そりゃ、不味ければ米は主食にならないからな。

「多分、麦でも美味しいと思うが……」

麦ごはんではカレーって食った事があったかな？

記憶にないが……。

「街の奴らもよお——香辛料を買い占めて値段を釣り上げている奴らに文句を言えば、こういう美味しい料理が食べられるようになるってのに」

「そうにゃ！」

「しかし、こんな洗練された香辛料料理の事を、街の人達は知りませんから」

プリムラの言うとおりだ。

「旦那が言ってたけど、自分が不幸だって知らないってのは、幸福な事なんだな」

「まあな」

「でも、俺は知っちゃったから、もう戻れない……」

「ウチもにゃ……」

「全く、旦那の料理は、女を虜にする悪い薬みたいなもんだぜ」

「人聞き悪いなあ」

プリムラにサントانカの村の様子を聞いてみるが、順調に干物やスモークサーモンの生産が行われているようだ。

まあ、手間が掛かるだけで、そんなに難しくはないからな。魚を三枚に下ろすのだって、特別なテクがいるわけじゃないし。

村では、子供と女達が総出で、俺から買った毛抜きを使って骨を抜いているらしい。

忙しくなれば人手が欲しくなる。排他的だった村でも、新しい村民を募集しているという。ちゃっかりしている。

「そりゃ貧乏な村だからさ、新しい仕事が出来て金が儲かると解れば、考えを改める奴だっているんじゃないね」

「泣いていた子供にリンカーをあげれば、泣き止むみたいなもんじゃない」

そのリンカーだが、スモークサーモンを作る際の燻蒸チップに、リンカーの木が使えるという事だ。

俺も、チップを貰って匂いを嗅いでみたが、リンゴのチップによく似た匂いをしている。十分に燻蒸に使える。

魚の干物やスモークサーモンも順調に売れているようだが、かなり大きな湖なので、獲物に困る事はないだろう。

— — — — — ◆ ◆ — — — — —

プリムラの店も順調。サントانカで生産している魚の加工品の卸売も順調。家の周りも平和そのもの——。

そんなある日の午後、湖から1艘そうの船がやって来た。

アイテムBOXから、双眼鏡を出して覗く。

乗っているのは、白いドレスを着た女性。そして、その後ろには2人の騎士。兜は無いが、フルアーマーに近い鎧を着込んで帯剣している。

そして、もう1人はマントを羽織りヘソを出した背の高い女――。長いスカートにはスリットが入っているらしく、白く色っぽい太ももが見えている。

この世界では、ヘソを出したり脚を露出するのは、はしたないとわかっていて、普通の人間がそんなファッションをする事はない。こういう格好を好んでする連中――それは魔導師だ。

そして、先頭に座っている女性――白いドレスは地味ではあるが、かなり上等な代物で、街の住民が着れるようなものではない。

大体、護衛の騎士が側に付いているなんて、普通の身分ではないだろう。

船の後ろには、プリムラとニャメナも乗っているのが見える。

このドレスを着た女性は貴族だと思われた。

船が岸についたので、そこへ駆け寄る。

身分が高い人間がやって来たと解っているのに、無視するわけにもいかないだろう。

理由はともあれ、ここにやって来てしまったのだから。

プリムラと一緒にいるという事は、この地を治める子爵様の関係者だと思われる。

俺は出迎える事にしたのだが、船が岸に着くと、プリムラとニャメナが水の中に飛び降りて、慌ててこちらへ走ってきた。

「あの、ケンイチ！ あの……」

「ああ、解った解った、大体察しはついているから」

船の横には、水の中に膝を突いた騎士の2人が人間棧橋と化して、貴族らしき女性の踏み台になっている。

最後は、魔導師らしきヘソを出した女性に手を引かれて、白い鳥は岸に降り立った。

その姿は、優雅で艶やか——やはり、普通の女性とは違う雰囲気を出している。

編みこんだ金色の髪を後ろで纏めて、大きく胸が開いた白いドレスが湖畔の風にたなびく。

多分、外出用のドレスだろうが、街で見た事がないぐらい上等な品。

湖と同じ色の目で俺の事をじっと見つめている。

俺は、その女性の所へ行くと膝を突いた。

「このような所へ、良くぞお越しくできました。ここの長をしております、商人のケンイチと申します。お見知りおきを」

「ふむ——ユーパトリウム子爵正室、カナン・ル・ユーパトリウムである。よしなに」

あゝ、やっぱり子爵夫人かよ。なんだってこんな所にやって来たんだ。

貴族の奥方というだけあって、確かに美人だ。チラリと見た横顔は、プリムラが夫人の所へ持っていたカメオに刻まれていた像によく似ている。

歳は30代前半か——だが、その美しい瞳の奥は寂しそうに見えるのは気のせいかな。

とりあえず、家の前まで案内して、外にテーブルを出す。

家の中はベッドしか無いからな。

「申し訳ございませんが、我々の家は小さい故、中にはベッドしか

ありませんので」

「構わぬ」

椅子を勧めると、子爵夫人は席についた。

向かって右には騎士の男、金髪の短い髪と青い目。もう一人の騎士は、赤い髪をしている若い男。

その夫人に、魔導師らしき女性が耳打ちをする。ウェーブした赤い髪が腰まで伸びて、大きな胸とくびれたウエストが目につく。

彼女達の視線の先には、警戒した顔のアネモネとミャレーが立っていた。

「ほほ、随分と可愛らしい魔導師のようだが、我らはここに喧嘩をしに参ったわけではない」

「アネモネ、ちよつと家の中に入ってなさい」

「……」

アネモネとミャレーは警戒している表情は崩さないまま、黙って家の中に入ると扉を閉めた——いや、隙間からこちらを窺っている。夫人に飲み物を出す。少々迷ったが——フルーツ牛乳にしてみた。それに、いつもの陶器のカップじゃ拙ますいだろう。

シンプルなガラス製のタンブラーに注いで出した。

「今日はまた、どのようなご用件で、こんな辺鄙へんぴな所まで」

「む——まさか、アイテムBOX持ちとは……ケンイチ……？ アイテムBOX持ちで、ケンイチとな？ 其方まさか、ダリアでシャガ一味を討伐した魔導師か？」

「はて、何のことやら……それで、ご用件のほどは？」
とりあえず、とぼけてみる。

「むう……近くまで来たものでな。それに、あの素晴らしい魚の燻製には其方が関わっているそうではないか」

そうか、スモークサーモンの出処を探っているうちに、ここまで辿り着いたのか。

「まあ、その通りでございますが」

「それに、村の者に聞けば、こちらから大きな爆発音まで聞こえるという話……」

爆発の音って、結構遠くまで届くんだなあ。ちょっと、派手にやり過ぎたか——これは誤魔化しが利かないようだ。

「ああ、それは魔法の実験でございます」

「其方のか？」

「いいえ、先程の小さな魔導師の魔法で」

「何？ あのような小さな子どもが、爆発系の魔法だと？」

夫人の横にいた魔導師の女性が驚いた。

「ええ、あの子には天賦の才能がございます故」

「むう……」

何やら考えこむ、美しき子爵夫人。さすがに貴族の頼みとなれば、プリムラは断りきれなくて、ここに案内してしまったのだろう。

そのプリムラは、俺の後ろで小さくなっている。横にはニャメナも一緒だ。

しばらく考えていた夫人ではあるが、目の前の飲み物を試してみなくなったのだろう。

テーブルに置いてあったフルーツ牛乳を——横にいる騎士の前に差し出すと、金髪の若い男が口にくくむ。

恐らく、毒味だと思われる。

「む！ これは美味しい！ あ、いや、失礼いたしました」

「其方が我を失うとは、さぞかし美味しいであろう」

——そう言うと、夫人も一口フルーツ牛乳を飲んだ。

「なるほど、これは美味である。これは一体……？」

「それは牛乳を果実の汁で割った物で御座います」

「ほう……私の勘は鈍っていなかったようだ。このような場所で、このような味に出会えるとは」

夫人は、フルーツ牛乳を一気に飲み干すと、席を立ってスタスタと崖へ向かい緩い斜面を登り始めた。

俺は、テーブルと椅子をアイテムBOXへ収納すると後を付いていく。いやあ、あまり詮索されると困るんだがなあ……。

「これは？」

夫人が指したのは、カモフラージュネットで偽装された、太陽光発電パネル。

「これは、魔導の秘術に関わる事なので、お答えできかねます」

「何！ 貴様！」

騎士が剣に手を掛け、食って掛かろうとしたのだが、夫人が止めた。

「其方——やはり魔導師なのであろう？」

「まあ、そういう事になりますかねえ」

夫人と、魔導師の女が俺の姿をジロジロと品定めしている。とてもそんな風には見えないと言いたいのだろう。

魔導師の女はアネモネが魔法を使えると看破したようだしな。

「なるほど……」

夫人はそのまま、崖へやって来た。当然、そこには崖の上へ登るための足場がある。

「こ、これは一体なんだ？」

「崖の上に登るための足場でございますが」

「が、崖の上に登るなどと、今まで聞いたことがない」

「木の足場等を使って、登る事もなかったのでございますか？」

「そのような事に金を使っても、見返りがあまりに少ない……もつと金を使う場所が山ほどある故」

「確かに、葉草や鳥しかいませんしねえ」

「鉄の管を使った足場か……このような奇々怪々な物を……」

夫人が足場に登ってみたいと言うので、彼女の手を引いて天辺まで登る事に。

本当に柔らかい手だ。こういう人は、スプーンより重い物を持った事がないんだろうなあ。

プリムラもお嬢様だが、実家では荷物の積み下ろしを手伝っていたりしていたそうだから、結構体力もあるし。

夫人の手を握っている俺を、お付の騎士が睨んでいるのだが――仕方ないだろう。

「おおっ！ こんな高い場所に簡単に登る事が出来るとは！ アスチルベ湖の対岸まで見える！ まさか、アゲラタム高地へこのような形で登る事になるとは……」

アゲラタム？ 崖の上にも名前があったのか。それにアスチルベ湖か――一応、地名が付いているんだな。

まあ領主なら自分の土地にも詳しくて当然か。

夫人が崖の下を覗きこんでいる。

「端まで行くと、危のうございますよ」

「崖が崩れているのだが……」

「爆発系の魔法の実験でございました」

「地面が掘り起こされているのは？」

それは当然、俺がコ〇ツさんを使って掘り起こした跡だ。

「……それは、私の魔法でして、お答え出来ません」

「貴様！」

また、騎士が俺に突っかかってくるのだが、無視する。

「やめよ。騎士が2人と魔導師を見ても臆する事がないということ
は、この男がその気になれば我らを瞬殺出来るといふ事だろう」

「くっ！」

「まるで、巨大な爪で掘り起こされたような……得体のしれない何かを操るとみえる」

「これは、ご彗眼でございますなあ」

「其方が、そのような魔法を使えるのであれば、私を——いや、この子爵領を助けてはくれぬか？」

「助ける？」

「そうだ、この通り」

騎士達が止めるのも構わずに、子爵夫人が頭を下げる。余程、何か困っている事があるらしい。

「うーん——貴族様に頭を下げられて、無視するわけにもまいりませんなあ。まあ、お話をお聞きいたしましょう」

俺は、アイテムBOXから再びテーブルと椅子を取り出し、夫人を座らせると——彼女の話聞く事にした。

夫人の話を伺うと、どうやら子爵領で行われている普請が予定通り進んでおらず、拙い状態ままになっているらしい。

それは他領との合同で行われ、国王の命令で進められている公共事業——用水路の建設だ。

貴族領同士の柵しがらみを越えての大用水路網を作り、農地を増やそうという計画のようだ。

用水路といっても、道路の側溝のようなチャチな物ではない。

それ故、他の貴族領が用水路を計画通り完成させているのに、この子爵領だけが工事の完了が出来ないとなると、メンツに関わるという。

まあ、確かにそうだろうな。他の貴族領といっても、ダリアがあるアスクレピオス伯爵領はこの計画には参加していないらしい。間に大きな森があるからな。あそこを重機もなく人力で切り開くのは、かなり無理があるだろう。

夫人の話では、残っている工事区間は約3リーグ（5 km）だと言う。それを1ヶ月で完成させなければならぬ。

なるほど、人力で用水路を掘るか……大量の人夫を入れて1日どのぐらいの距離を掘れるものであろうか？

50 mぐらいは掘れるとすれば――1ヶ月で1.5 km……間に合わないな。

1日100 mでも3 kmだからな、ちょっと厳しいだろう。

「この通りだ！　なんとかならぬか？」

夫人が再び頭を下げる。だが、この手の話をするなら、領主――つまり子爵様がやって来るのが道理なのでは？

「この非常時に子爵閣下はどちらに？」

「子爵様は、王都へ出向中だ。突然、呼び出されてな」

貴族が呼び出されるということは、国――つまり国王からの命令か要請だろう。

忙しい時期に重なるというのは、少々おかしい……何か謀略に嵌められているのでは？

夫人の話では、役に立つ家臣も少ないようだ。人材の育成をしてこなかったのが、裏目に出たといったところか……。

陣頭指揮を執る子爵閣下が留守で、普請の知識もない夫人が四苦八苦している光景が目に見えかぶ。

「褒美が欲しいというのであれば、何でも申せ。私の身体でも良いぞ！」

慌てて、騎士達が止めに入る。夫人も、なりふり構ってられないのだろう。

「それは、必要ありません。金貨以外で何か褒美になるような物をご用意いただくことは可能でしょうか？」

「何？ 私の身体は要らぬと……そして、金貨以外の物だと？」

夫人は俺の言葉にショックを受けたらしく、しばらく固まっていたのだが、何かを思いついたようだ。

「其方も魔導師ならば、魔導書に興味があるだろう？」

「ほう、どんな魔導書でしょうか？」

ハイプロテクション

「至高の障壁だ」

もちろん

勿論、初めて聞く魔法だ。だが、俺の後ろから、ニャメナの声が聞こえてきた。

ハイプロテクション

「至高の障壁だって、マジかよ」

「ニャメナは知っているのか？」

後ろを向いて、彼女に確認する。

「そいつは帝国で作られた魔法なんで、魔導書になっている数は極端に少ないと思うぜ。隣のアキメネスで大討伐が行われた時に、王都からやって来た大魔導師が使ったのを見たことがある」

ニャメナの話では、嘘か真か知らないがドラゴンのブレスも防げるという、上級の防御魔法だ。

もちろん

それがマジなら凄いお宝だ。是非、アネモネに使わせてやりたい。勿論、彼女にその才能があればだが。それに、それだけ貴重な魔導書なら、価値も高いだろう。

つまり、お宝だ。

しかし依頼を受けるか否か——それが問題だ。

63話 お仕事を引き受けよう

貴族様——この地の支配者である、子爵様の夫人が俺に頼み事だと言う。

どうやら用水路の工事が間に合わなくてヤバいらしい。

それぐらいの工事であれば、近代科学の粋を集めた重機のパワーを以ってすれば容易い事なのだが問題もある。

確かに用水路を掘るだけならコ〇ツさんを使って、なんとか出来るだろう。

だが恐らく、燃料が間に合わない。重機を動かし続けるために使う大量のバイオディーゼル燃料を作っている暇がないのだ。

——そうになると、シャングリ・ラで売っている、白灯油を使うしなくなる。こいつは値段が高い。

ディーゼル機関で使うために、白灯油＋改質剤＋その他で計算すると、リッター13000円程する超高価な燃料を大量に使わなくてはならなくなる。

それには勿論、もちろん金が必要だ。

「承知いたしました。それでは、お教えいたしましょう。下にある穴は、私の召喚獣を使って掘ったものでございます」

「何？ 召喚獣とな？」

「はい、それを使えば、用水路ぐらいであれば、掘ることも可能だと思われます」

「それでは、引き受けてくれると？」

「いえ、それには少々金が掛かります。私の召喚獣は大飯食らいでして、1日の餌代が金貨6枚程……」

「金貨6枚か……だが、金には代えられん。今とて、1日小四角銀貨1枚（5000円）の人足を百人以上雇っておるからの。金をケチって普請が間に合わなければ、拙い事になる」^{ます}

夫人の渋い顔から察するに、相当困っているようだ。

5000円の日給で100人だと1日50万円の経費か。

それに1日120万円、30日だと3600万円の経費が追加される事になる。まあ、そのぐらいの金は貴族なら払えるだろう。

「それに、金貨でなくてもよろしいですよ」

「ならばやはり、私の体か？」

夫人が身を乗りだす。

「違います」

なんで、身体を一押ししてくるんだ。不貞にならないのか？

「貴族様であれば、使っておられない家具等が余っておりませんか？」

「ああ……それなら、倉庫に沢山あるが」

「それでは、それ等と引き換えでも、よろしゅうございます」

貴族が持っている家具ならシャングリ・ラで高額査定間違いなしだろう。マロウ邸にあった家具でさえ、かなりの代物だったからな。

この世界の家具作りの技術はかなり進んでいるように思える。勿^{もち}論、その分値段も高いのだが。

「何！？ 私の身体より家具の方が良いと申すのか？ 貴族の正室を好きに出来るのだぞ？」

「私は、実を取りますので。カナン様も金貨を節約したいのであれば、家具で済むという私の申し出は渡りに船ではありませんか？」

「ぐっ……」

何やら、子爵夫人が悔しそうな顔をしているのだが、何があるか解らんに抱けるかつーの。

この貴族様が、一体何を考えているか不明だ。

単に金を節約したいのか、それとも――それなりに自信がある自らの身体より家具の方が良いと言われたので、プライドが傷ついたのか。

「なにはともあれ、下に降りて私の召喚獣をお見せいたしましょう」
「承知した……」

テーブルと椅子を収納して――再び子爵夫人の手を取り、足場を降りると下へやって来た。

「コ○ツさん召喚！」

俺の声と共に、巨大な黄色の重機が地響きを立てて出現した。

「ひい！」

さすがの貴族様も驚いたようで、尻もちをつきそうになり、騎士によって両脇を支えられている。

俺が重機に乗り込むと、黒煙を吹き出して鉄の召喚獣が咆哮をあげる。崖からの薔薇輝石の採掘は終わったので、再び普通のバケツトへと換装済みだ。

そして長いアームを振り回すと、鋼鉄のバケツで地面を一掬いした。

「おおおっ！ こ、これならば確かに、用水路などあつという間に完成するであろう！」

ここでちょっと実験だ。地面に10mの印を付けて、そこを掘り返してみる。

実験の結果、普通の土であれば、10分で5～10mは掘り返せるようだな。

まあ、少々少なめに見積もって1時間40mとしても、1日10時間で400mか……。

30日あれば、12kmを掘り進む事が出来る計算だ。5kmなんて余裕だろう。

「これなら、なんとかなりそうですね」

「それでは引き受けてもらえるのか？」

「まあ……貴族様であれば、私を無理矢理徴発する事も可能だったでしょう？ 何故、それをしなかったのですか？」

「このような魔法を使える其方は、独自魔法使いユニークであろう？ ならば、一筋縄ではいかない道理。無理に従わそうとすれば、子爵領が取り返しの付かない状態になる可能性がある」

子爵夫人が腕を組んで、目の前にそびえ立つ黄色いコ〇ツさんの巨体を見上げている。

「そういう事例があったのですか？」

「うむ……とにかく、独自魔法使いユニークは、奇人変人の類が多くてな。扱いが難しいので有名なのだ」

「帝国にいる独自魔法使いユニークは、ドラゴンも倒したそうですからねえ」
「その通りだ。しかし、この鉄の召喚獣であれば、ドラゴンをも倒せるのではないか？」

夫人が組んでいた腕を解き、俺の方を向くと目を煌めきらかせている。

「こいつは防御が出来ませんからねえ——そのためにも、カナン様から魔導書をいただかなくては」

「それでは、契約は成立だな」

夫人の顔がパツと明るくなったのだが――。

「いいえ、ここで契約書を書いていただきます。プリムラ〜！」
「はい」

「契約書を書いてくれ」

「何？ 貴様！ カナン様を信じられんと言うのか？」

横から騎士が出てきて剣を抜こうとしたのだが、アイテムBOXから装填済みのクロスボウを取り出して突きつけた。

「商人というのは、口約束は信じないものですよ」

「ぐっ！」

「このクロスボウから発射された矢は、このぐらいの鎧なら容易く貫通しますよ？ それとも弩弓ではなく、この鉄の召喚獣と戦いますか？」

「ぐぬぬ……」

騎士の額に血管が浮き出て脂汗が滲む。

「控えよ」

「……はっ」

夫人にたしなめられて、騎士が引き下がった。

プリムラにその場で契約書を作らせて、夫人のサインを入れさせる。裏書に2人の騎士のサインも入れる——完璧だ。

早々に、俺の召喚獣を使って工事を進める約束をした後、おやつに誘う。

契約が決まったとなればお客様、おもてなしをしてあげよう。まあ見た目は美人だしな。

たまには、絵本から出てきたお姫様のような女とおやつを食うのも悪くはない。

これで、もうちょっと若ければと思うのだが、年齢を重ねなければ出てこない色気もあるし。

アイテムBOXからテーブルと椅子を出して、夫人の目の前にカスタードプリンを出す。作り置きをしていたものだ。

「これは？」

「お菓子でございますよ」

夫人が黄色いプルプルをスプーンで一掬いすると、騎士の口に運んだ。

「う、美味しい！　なんだこれは！？　今まで食べた事もないような口触り――し、失礼いたしました」

若い騎士が、取り乱してあたふたしている。

「ふ、ここには得体のしれない、飲み物や食い物が山のようにあるようだな」

だが、冷静さを装っていた夫人も、プリンを一口食べて、驚きの表情を隠せないようだ。

「こ、これは？！　確かに、いままで食べた事がないような魅惑の食感、そして芳しい甘い香り……どうやら、元は卵のようだが」

「御明察、卵と牛乳とを合わせて蒸した物で御座いますよ」

「ほう、しかし……この香りは……」

「それは、私の秘伝で御座いまして、お教えする事は出来ません」

「くっ……このような物を持っている賢者を相手に、交渉は難しかったようだの。私の身体に興味を示さないのも道理だ」

「別に貴方様の美しさを認めていないわけではありませんよ」

「ほう――脈はあるという事か？」

「いえ、ございません」

「くっ！」

俺と夫人との会話を聞きながら、隣に立っている魔導師の女性がそわそわしている。

おそらく、プリンを食べたいのだろう。俺はもう一つプリンをアイテムBOXから取り出した。

「お食べになりますか？」

「え？ いいのか？」

「まあ、同じ魔導師の誼で」よしみ

「あ、ありがたい！」

大きく胸が開いたデザインの服を着た魔導師は、俺からプリンの入った茶碗を受けると、大きくスプーンで掬い口へ放り込んだ。

どうも、胸の所へ目がいつてしまう。だって男の子だからな、仕方ないのだが――あまりガン見していると、後ろからのプリムラの視線が痛い。

「う、美味しい！ 甘くてプルプル！ そしてこの香り！ 甘露だ！」
甘露ときたか。女の人ってのは、どこの世界でも甘い物に目がないんだな。

プリンを食べ終わると子爵夫人一行は船に乗り込み、サンタンカの村へ戻っていった。

貴族と付き合うのは少々不本意ながら、この事態になってしまつては、黙って仕事を引き受けた方が得策だろう。

無理矢理徴発してくるでもなく、きちんと頭を下げてきた事だし。貴重な魔導書も手に入りそうだしな。

――そして、その日の夕飯。

今日は、ロールキャベツにした。アネモネの魔法で、畑の野菜が促成栽培出来るようになったのだ。こりゃ便利だ。

子牛の肉がまだ残っているしな。だが、いつもテキトーにロールキャベツを作っていたので、料理の電子書籍をシャングリ・ラで購入して、見なおしてみた。

個人的には良い出来だと思う。もう一品、森のキノコと野菜のソテーも作ってみた。

森には、ノビキノコ以外にも、何種類か食えるキノコがあるようだ。

だが、この世界でも、高級料理にはキノコが使われているのだが、一般市民にはあまり人気がない。

美味しいのを知っていても、栄養がないのを知っているのだろう。同じ金を払うなら栄養がある物を食べたいらしい。

「今日も変わってる料理だな、こりゃ肉を葉っぱでくるんだのかい？」

「そうだ。美味いぞ」

「にゃー！」

一口、ロールキャベツを食べたところで、ニャメナが大きく溜息をついた。

「ふう……今日はどうなる事かと……」

「相手は貴族だ、断りきれずに連れてきてしまったんだろう？」

「まあ、そんなところだけど。あの貴族様も、ちよつと強引でな」

「それだけ、切羽詰まった状況なんだろう」

「むう……」

だが、美味しい料理を食べているのに、アネモネの機嫌が悪い。そして、プリムラの方をじっと見つめている。

「アネモネどうしたんだ？」

「プリムラは、ケンイチと貴族を引き合わせようと、仕向けたんじゃないの？」

「そんな事はありません」

「俺もプリムラの事は信じているし、そんな事はないと思うんだが——貴族様が、ここへやって来た経緯は詳しく聞きたいなあ」

「旦那？」

ニャメナが驚いた顔をしているが、彼女は貴族の屋敷には入って

いない。獣人を貴族の屋敷に入れるはずがないからな。
それ故、プリムラと子爵夫人が何を話していたのか、彼女は知らないのだ。

「夫婦で隠し事なんていけないよなあ。プリムラは貴族のお屋敷で何があったか、俺にきちんと教えてくれるよねえ」

「も、もちろんですわ」

そう言っているプリムラなのだが、ちょっと様子がおかしい。
これはあやしい……。

「それじゃー今日は、あそこの木の上の家でじつくりと2人つきりで話しあおうか？」

「いえ、あの……」

迫ってくる俺に、プリムラがキョドっている。

「俺のアイテムBOXの中に、何が入っているか君も知りたいだろう？」

「それは……知りたいのですが……」

プリムラは硬くなり、両手を太ももの上に載せている。

「じゃあ、2人きりでな」

「……はい」

俺とプリムラの会話を聞いていた獣人達がヒソヒソ話をしている。

「おい！ クロ助、旦那が怖えぞ！」

「多分、アイテムBOXの中には、女を拷問する魔道具が山のように入っているにゃ」

「なんだよ、そりゃ」

「多分、縛り付けられて、体中を蛇責めとかされるにゃ」

「バカ！ 止めろ！ 飯食ってる最中だぞ」

声がデカイから、ヒソヒソ話になってねえ。自分から弱点を晒していくスタイルか。

「ニヤメナ」

「はい！！　な、なんだい、旦那」

俺の呼びかけに、ヒソヒソ話をしていた、ニヤメナが飛び上がった。

ハイプロテクション
「至高の障壁って帝国の魔法だって言ってたけど、帝国の方が魔法は優れているのか？」

「ああ、そうだな。国を挙げて研究をしているからな」

「それじゃ、魔法文化も発達している？」

「まあ、そんなところさ。それに、金の無い奴とか孤児でも、積極的に魔法の適性を調べて魔導師を育成したりしている」

「へえ——でも、その場合は強制的に国家の召し抱えになるんだろ？」

「そりゃまあ、国の予算を使っているから当然さ。でも孤児から、それで成り上がった奴もいるぜ。有名なのは夜烏のレイランって奴だ」

そして、民間人でもある程度の実力や独自魔法ユニークの使い手と認められると、帝国魔導師として問答無用で軍へ編入されるという。

それ故、魔法を使えるのを隠している者も多いらしい。政策としては良し悪しだな。

「ニヤメナは詳しいな」

「へへっ、飲み屋に行くと、こういう噂話が酒の肴だからねえ」

マスコミが無いから、飲み屋がコミュニケーションと情報交換の場所となっているんだろう。

ミャレーは酒をあまり飲まないの、そういう場所にも行かないようだ。もっぱら市場で聞き耳を立てて、情報収集を行っている

らしい。

「それで、ニヤメナは蛇責めがご所望なんだって？」

「止めてくれよ！」

「蛇ってなく穴があると、潜り込むんだってなあ？」

「俺は、旦那を裏切ったりしないからさ！ 今日の事だって、俺は外にいて知らなかったんだよ！」

まあ、そうなんだろうな。

彼女が椅子に座ったまま、ズリズリと後ろにずり下がっていく。

「俺が怖いなら、ここから逃げてもいいんだぞ？」

「そんな……逃げたら、こんなに美味しい料理も、酒も飲めなくなるじゃないかよお……」

まあ、確かに。ここで美味しい物を食って、口が肥えてしまったら、街の安い食堂なんかじゃ満足は出来ないだろう。

「はは、怖がらせて悪かったな。冗談だよ、冗談」
ニヤメナの頭をナデナデしてやる。

「みゅーん」

「なんだ、その可愛い声は、はは」

「なんだよ！ 俺だって可愛い声上げたっていいだろ！」

ニヤメナもこういう可愛い仕草をする事もあるんだな。

だが、まだアネモネの機嫌が直らない。

「なんだよアネモネ。まだ何かあるのか？」

「ケンイチは、あの女魔導師のヘソとか胸とかばかり見た」

「えっ！？ そんなに見てないだろ」

「見てた………私もヘソ出した服を着て、胸も出す！」

「やめなさい——そんな、はしたない格好をするなんて。そういう事は、もっとボインボインに胸がデカくなって、脚がピチピチに伸びてからやりなさい」

「むう……」

彼女はずつとむくれている、困ったもんだ。

————◆◆————

——その夜。

暗い湖面に月が映る夜。女の叫び声が、漆黒の森の中に響く。

木の上のツリーハウスで、プリムラを丹念に可愛がってあげると

——屋敷で何があったのか詳細が解った。

俺の所へ子爵夫人がやって来たのは——どうやらプリムラが、俺の魔法について口を滑らせたのが原因らしい。

だが、故意に俺と貴族を引き合わせようとしたわけではないようだ。

あの夫人は、プリムラの話を通り、俺の魔法に一縷の望みを託してやって来たのか。

まあ、過ぎてしまった事は仕方ない。

仕事をこなして、アネモネのためにレアな魔導書をゲットしないとな。

64話 工事現場へ向かうぞ

——次の日の朝。俺とプリムラは、ツリーハウスのベッドの上。俺が身体を起こすと、まだプリムラが幸せそうな顔をして眠っている。

彼女が俺の秘密について、少々口を滑らせてしまったようなので、お仕置きをしてしまったのだが……あまりこれは、お仕置きになっ
ていないような……。

「……んんっ」

彼女の頭を撫なでていると、目を覚ましたようだ。

しおらしくしているかと思ったら、毛布をはね除け裸のまま俺に抱きついてきた。

「私が過ちを犯せば、昨晚のようなお仕置きを受けられるのですね」
「……プリムラ、お前反省してないな？ 重大な秘密を漏らすなんて、商人としても致命的な失策なんだぞ？」

「……モチロン、ハンセイシテオリマスヨ……？」

プリムラは俺から目を逸らす。何故、逸らす？

彼女は、そこら辺にいる——所謂、お嬢様いわゆるではない。自分の理念を持って動き、内面に野心をたぎらせている強い女性だ。

そんな彼女が俺にくつついているのが、イマイチ理解できないのだが……ある種の打算によるものなのだろうか？

だが、普段の行動をみると、とても打算だとは思えない。

「プリムラ、もし俺の独自魔法やアイテムBOXがなくなったら、君はどうするんだ？」

「どうするって……そうなれば、ケンイチはマロウ商会を頼らざるを得ないでしょう？ 私が養ってあげますよ」

「男の矜持から、それは避けたいのだが……」

「あら……また逃げるおつもりですか？ 絶対に逃がしませんけど」俺に抱きついたまま見上げるプリムラの目が怖い。

だが、彼女の視線とは別の視線を感じて、ツリーハウスの床に設けたハッチの方を見る。

そこには少し蓋を開けて、こちらの様子を窺っている3人組がいた。

勢い良くハッチの扉を開けると、アネモネが床に仁王立ちになり、着ていた青いワンピースを頭から脱いだ。

そして素裸になった彼女は、俺に飛びついてきた。

「こら、アネモネ。服を着なさい」

「や！ プリムラばかりズルい！」

「プリムラは、お仕置きだったんだよ——なあ？」

「ええ、もう死んでしまおうかと思いました」

獣人の2人も、ハッチから這い出てきた。

「お嬢、大丈夫かよ？ 昨日、すげえ叫び声がしてたんだけど……」

「にゃ！」

耳の良い彼女達は、どうやら盗み聞きをしていた模様——というよりは、耳が良すぎて普通に聞こえてしまっただろうな。

赤くなっているプリムラを見て、アネモネは不機嫌だ。

「全然お仕置きになってない！」

「貴族がここに來たのは、俺達が魔法でドンパチやり過ぎたせいもあるんだよ」

「むゝ！」

アネモネをなだめた後、ツリーハウスの上で朝食にする。これか

ら色々と準備をしなければならぬ。

1ヶ月間、水路を作る作業をするとなれば、ここは留守になる。

このまま放置出来ないで、持っていけるものはアイテムBOXへ収納する予定だ。

ここが、日本であれば放置でもいいのだが……物がなくなったりするのは、嫌だからな。

先ずは、ツリーハウスの小屋を収納。ツリーハウスの土台になっている部分は木の幹に固定されているので、アイテムBOXへは入らない。

そして崖の上に登るための足場を収納。2分割になっているので、それぞれをアイテムBOXへ入れる。

太陽光発電パネルをカモフラージュネットごと収納。風呂などの水回りをアイテムBOXへ入れて――。

最後に――。

「家、収納！」

綺麗さっぱり、なくなった。もちろん勿論、隣にあるニヤメナの小屋も収納する。

これで工事現場を本拠地にして、再び家を設置すればいいわけだ。たまに、こういう事があっても、逃げるときの訓練になっていいかも。

畑は収納出来ないでそのままだが、実ってる野菜は勿体無いので、アイテムBOXへ取り込む。

1ヶ月間留守にするので、トウモロコシでも植えていくか――アネモネの魔法で芽出しをしてもらい、畑に植える。

畑の世話する人がいないと枯れてしまうかもしれないが、その時は諦めよう。

「家が持ち運び出来るってのはすげえよな」

「けど、あまりデカイ家は入らないぞ。今の家ぐらいが精一杯だ」

「それでも、すげえよ」

「にゃ！」

今まで、家があった場所の匂いを、ベルがクンカクンカしている。さて、この人数でどうやって移動しようか。もう、バレバレになつてゐるんだから、隠してもしようがねえし。

それに子爵夫人から聞いた話では、独自魔法ユニークの持ち主は警戒されているようだしな。

簡単に手出しをしてこないって事は、堂々と正面から乗り込んでやれ。

「ケンイチ、移動はシャガの時に使った馬なしの車を出すにゃ？」

「馬なし？ クロ助、馬がいなくってどうやって馬車が動くんだよ」

「魔法で動くにゃ」

「そうだな、あれでも良いが――乗り心地が悪いからな。それに荷物も無いし……」

新しいのを買うか……。

早速、シャングリ・ラで中古車を検索する。えーと、ディーゼルエンジンで4WD――SUVだな。

ここはやはり実績と信頼で、○田のラ○クルか。正式名称はラ○ドクルーザーだけどな。

ハ○エースと迷ったのだが、やはりこういう世界では走破性が決め手になるだろう。

だが、本家のラ○クルは値段が高い。そこで、ラ○クルプ○ドを買う。

おあつらえ向きに、少々リフトアップして、シュノーケルまで付いた改造車が100万程で売っていた。

年式が古く20万km走っている中古だが、この手の車は丈夫だから、このぐらいの走行距離は問題ない。

ディーゼルエンジンも丈夫だからな。20万kmぐらいどうって事はない。

それに、シュノーケルがついていれば、少々深い川でも渡る事が出来るし、こいつは3列シートなので7人まで乗れる。

フロントには、少々錆び付いているが頑丈そうでゴツイカンガルーバーも付いている——パーペキ（パーフェクトに完璧）だ。

「よっしゃ、ラ○クルプ○ド召喚！ ポチッとな」

大きな音と共に、太いタイヤを履いたSUV車が落ちてきて、地面でバウンドする。

ドアを開ける——さすがに古い車なので、内装はくたびれているが走ればいい。

こいつはMT^{マニュアル}車だが、それも大丈夫だ。MT免許持ってるし。座席に座り、キーを捻^{ひね}る——燃料はOKだな。

スターターを回してエンジンを掛ける。マフラーから黒煙を吐き出し一発で始動した。

車を買ったが、お守りが欲しいところ。

購入したプ○ドのボディカラーは白。シャングリ・ラで買った風水の電子書籍によれば、白は金と組み合わせる事によって、金運がアップするらしい。

商人なら、交通安全よりは、金運アップといきたいだろう。

シャングリ・ラで検索をかけると、金色の招財樹というのを見つけたので、1000円程で購入。

金メッキで造られた、ツボに入った木のミニチュアアクセサリーだ。木の葉は黄色で透明な石で出来ている。

こういう風水グッズは、当然のように彼の国製。ダッシュボードに置くとすぐに壊れそうなので、ルームミラーからヒモで吊るしてみた。

ルームミラーに成田山のお守りとかを吊るしているやつもいるが、異世界なら成田山よりは金パワーの方が効き目がありそうな気がする。

「おいおい！　なんか唸ってるけど、大丈夫なのかこいつは?!」
俺が室内であれこれやっている、外ではニヤメナが黒い排気ガスを吐き出す鉄の化け物にビビっている。

「大丈夫にゃ。ケンイチの言う事しか聞かないからにゃ」
「へえ」
そういうものの、ニヤメナはかなり腰が引けている様子。

「この取っ手を引っ張ると、扉が開くにゃ」
「馬車と似てるな」

乗り方を教えようとしたのだが、ミヤレーがニヤメナにレクチャーをしている。彼女は、4トトラックのキ○ンターに乗った時に覚えたのだろう。

皆で車内に乗り込んできて、助手席にはアネモネとベルが乗り込んだ。

「俺は一番後ろでいいよ」

そう言って、ニヤメナが3列目のシートへ座る。席順で揉めるかと思っただが、すんなりと決まったようだ。

動物を後ろに乗せたりすると、乗り物酔いをする事があるので、窓が開く席の方がいいかもな。

「これは、以前乗った物に比べると、内装が上等ですわね」
彼女は運賃が高い乗り合いの馬車に乗ったりするからな。貴族の豪華な馬車にも乗った事もあるらしいし。

しかし、ラ○クルといえ、最近は高級車なんだよなあ。

プリムラが、車内を見回しているが、すぐにルームミラーにぶら下がっている金色の招財樹に気がついた。

「これは、金運を呼びこむお守りだよ」

彼女が見たがっているので、金色の木のミニチュアを手渡す。

「これは、本当に金貨が集まりそう……」

これは意外——プリムラがこういうのを好きだとは思わなかったな。彼女の話では金持ちに売れると言うので、売っても面白いかも。

「旦那、それって本当の金なのかい？」

「いや、これは鑄造にメッキをした物だよ」

「つまり、偽の金？」

「まあな。プリムラ——1ヶ月の間、君が街からいなくなっても、お店の方は大丈夫なのか？」

「ええ、全部を彼女達に任せてありますので」

「お嬢、金とか持って逃げられたり、店を乗っ取られたら、どうするんでえ？」

「その時は、単に私の人を見る目が無かったという事でしょう——それに」

「それに？」

「その時は、別の店を作って——あっという間に、そういう輩の息の根を止めて差し上げますので」

「おい、お嬢が怖いんだけど……」

まあ、この分なら、お店の心配はなさそうだな。

「よし、出発！」

硬くしまった湖沿いを走り、ザブザブとそのまま川を渡る。人間の太ももぐらいの深さなので余裕だ。

おまけにこいつにはシュノーケルがついているので、殆ど水没し

でも走るはず。

そのままサンタンカの村へ行く道を逆走して街道へ出る。

いつも森の中を通って街へ行く時は街の東門に出るのだが、この道を進んで街へ行くと、到着するのは西門だ。

人々の好奇の視線の中、街の大通りを進み、目的地である子爵の屋敷へ向かう。

普通は、こんな物が走っていたら大騒ぎになるところだが、「魔法で動いている」と言えば、なんとかなってしまうのが、この世界。便利なんだか、便利じゃないんだか——考えても仕方ない。

俺達は、街の高級住宅街へ車を進める。クロトンが横恋慕していた、役人の女房が住んでいるのもここだ。

そして、その一番奥に鎮座する、巨大な白い建物へやって来た。

黒い鉄製で飾りの付いた立派な門の前で車を止めると、プリムラが車を降りて、門番と何か話をしている。

「ケンイチ、大丈夫です。中へ進んで下さい」

彼女と話していた門番も、馬なしで動く俺の車に目を白黒させて口を開け立ったまま。

「はは、皆驚いているな。そりゃ馬車が馬なしで動けばなあ」

ニヤメナが呟く——馬車が馬なしで動いたら、馬車ではないと思うんだが……まあ、この世界じゃ動く車イコール馬車だからな。

正面玄関に到着すると、俺とプリムラは車から降りて正面のホールで待つことに。アネモネと獣人達は車でお留守番だ。

すると、映画のヒロイン登場シーンの如く、子爵夫人が階段から降りてきた。

階段を降りる度に白いドレスがたなびく——こうしてみると、マジで絵に描いたような貴族である。

「ケンイチ殿、よくぞ参った。そのまま逃げ出すのではないかと、ヒヤヒヤしていたぞ」

「契約書まで交わしたのですから、約束はお守りしますよ」

「うむ——しかし随分と早かったな。馬車でやって来たのか？」

夫人に、俺達が乗ってきた車を見せる。

「なんと、これも召喚獣なのか？ やはり其方、シャガ討伐をしてダリアから逃げ出したという魔導師であろう？」

「もう、隠しても仕方ないので白状いたしますが、その通りでございます」

「むう」

夫人は何か考え事をしているようだ。

「カナン様、何か野心をたぎらせている暇がありなら、その前にお家の一大事をなんとかしてはなりませんよ」

「……そうだったな」

「それに、私は誰にも仕えるつもりもありませんので」

「金なら払うぞ？」

「私がその気になれば、金貨などいくらでも稼げますので、然程意味はございません」

国を潰したり、経済が大混乱するのを覚悟の上で、シャングリ・ラを使うのであれば、どうとでもなる。

シャングリ・ラを使わなくても、公序良俗に反する薄い本などをパソコンで作り、プリンターで打ち出して大量にばら撒くとかな。

「くっ——金で動かぬ者というのは、本当に厄介だな」

俺は、明後日の方向を見て、夫人の言葉を聞こえないふりをしていた。

「それで、カナン様。今回の作業の軍資金として、こちらの屋敷で

使っていない家具を譲っていただけの件は……？」

「こちらだ」

夫人に案内されて、屋敷の裏手にある倉庫にやって来た。

あるある——古くなって使わなくなったのか、それとも流行に合わなくなったのか、大量に積まれている埃を被った家具達。

俺は、飾りの付いた棚らしき物をアイテムBOXへ入れてみた。

そして——査定。

【査定結果】 【アンティーク家具 買い取り値段1千万円】

は？ マジですか？ それじゃ、こっちのテーブルセットは？

応接間にあるような大きなテーブルと6脚の椅子がセットになっている。

【査定結果】 【アンティーク家具 テーブルセット 買い取り値段2千万円】

これも高い。それじゃ、天蓋のついた立派なベッド。骨組みしかないが——。

【査定結果】 【アンティーク家具 ベッド 買い取り値段2千万円】

うわあ、全部めちゃ高いなあ。元世界でも、貴族が使ってたようなアンティーク家具って、このぐらいするよなあ。

しかし、この買い取った家具はどこへいくんだろ？ 謎だ。

その他、全部で5セットの家具をゲットした。全部で買い取りの総額は8千万である。

「それでよいのか？ 全部持ってもよいぞ？ 邪魔で困っているのだからな」

夫人のお言葉に甘えて、さらにアイテムBOXへ追加し、その総額は1億2千万円になった。

これだけあれば、コ〇ツさんの燃料を使いまくっても、金に困る事はないだろう。しかも、金貨ではないので、シャングリ・ラへ入

れても平気だ。

ついでに貴重な魔導書ももらえるし、今回の仕事を上手くこなせば大幅な黒字。

よっしゃ！　ちよつと頑張ってみるか。

だが子爵夫人に話を聞けば、現地は60数リーグ（約100km）以上彼方。隣の都市のアキメネスまで約200km――その中間辺りに、現場があるという。

そんな離れた場所に馬車で行ったら、何日掛かるか解らない。俺の車に子爵夫人を乗せて、現地へ向かう事にした。

車の助手席に乗り、キヨロキヨロと辺りを見回す子爵夫人。俺の後ろにはプリムラ、その横にはアネモネとベル。

そして3列目のシートには、ミヤレーとニヤメナが座っている。

ベルは、開けた窓から顔を出して外の景色を眺めているのだが、自分で走っていないのに景色が動いているのが、不思議なのかもしれない。

夫人は現地で陣頭指揮を執るつもりのように、彼女が1ヶ月間滞在するだけの物資も持ち込むようだ。

そのための準備や、物資の搬入等まで待っていたら、いったいこのことになるやら……。

のんびりし過ぎだろ？　お家の一大事じゃなかったのか？

少々危機感に欠ける気もするのだが、貴族とはこういうものなのか。

隣都市のアキメネスまで200kmだが、その先にあるこの国の王都まではさらに400km程の距離があるという。

アストランティアから、王都まで馬車で行くと2週間以上掛かるらしい。

「これは速いな！ 信じられん、もの凄い速度だ！」
車のハンドルを握る俺の横で、助手席に乗った子爵夫人がはしゃぐ。

「おそらく、カナン様が仰る普請の現場まで、2時間程で到着いたしますよ」

「何？ そんなに早くか？ こんなに速く走って大丈夫なのか？」

「旦那、こりゃ俺達が走るぐらいの速度が出てるんじゃない……」

一番、後ろに座っているニヤメナがつぶやく。

「そうだな、前に獣人達と、かけっこをした事があるんで、その通りだと思うぞ」

「でも、こいつは疲れないで、ずっと走れるんだろう？」

「まあ、餌の油がある限りな」

「なんという事だ……このような物がこの世界にあるとは。そして、私の目の前でブラブラしているこれは？！」

夫人が指さしたのは、ルームミラーにぶら下がった金メッキの招財樹。

「これは、金運が増すお守りですよ。金は金に集まるとい……」

「もう無いのか？！」

「お譲りしてもよろしいですけど……」

一応、金メッキだと説明をしておく。メッキが剥がれて、騙したと言われると面倒だからな。

シャングリ・ラを検索してみたが、サイズが大きい物は売っているが、18金で造られた物はないようだ。

車が走る左手には延々と崖が続いているが、右手には広大な土地が見えてくる。今は使っていないようだが、ここに水を引いて農地へ転用する計画のようだ。

なるほど——街道と並行するように、既に完成した水路が走っている。

その農地へ使う水は、隣の貴族領にあるカズラ湖という湖から引く工事で、国王の勅令によって行われているという。

なるほど、それじゃこちらの都合だけで工事計画を遅らせるわけにはいかないな。

「湖の水といえば、私達の家があった場所からは引けないのでしょうか？」

「ここより、アスチルベ湖の方が低いのだ。それは、無理であろう？」

それならば、この崖の上に流れている川の向きを変えて、こちらへ流せば——と思うのだが、余計な事を言っていると、余計な仕事が増えそうなので口を噤む。

そんな事をしてやる義理もないしな。

「其方……」

「はい？」

「本当に私の身体は要らぬのか？」

「必要ありませんねえ。私には妻がおりますので」

「私もいるし！」

後ろで、アネモネが叫ぶのだが、それを聞いた夫人が白い目で俺を見る。

「其方、あのような子供まで……？」

「子供の戯言でございますから」

「それにしても、森猫まで手懐けているとはのう——プリムラ殿の言う通り、調教師テイマーというのも本当らしいの」

夫人が、後ろで窓から首を出しているベルを見つめている。

「プリムラ〜？」

ルームミラーを使い、後ろで小さくなっているプリムラを見る。

「そう奥方を責めるな。このような非凡な殿方を主に持てば、自慢したくなるのも道理であろう」

「そりゃ、私だってプリムラを自慢したくはなりませんけどね……」

「確かに、奥方の商売の知識は素晴らしい。女手一つで、複数の商店を切り盛りしているそうではないか」

「その件でございますが――妻の店に嫌がらせをしていた商人を排除していただき、誠にありがとうございます」

「何、チーズの製法との取引だからの。それに、女の店と侮りおつて、ああいう輩が一番癪に障る」

プリムラの店に嫌がらせを行っていた商人は、営業を自粛しているらしいが――かといって廃業をしたわけではない。

個人的には、少々処分が甘いようでムカつくのであるが……それでも、俺が甘い処分に不満を持っているのは察してくれているようではある。

だが、子爵様がいない状態では、これが精一杯なのだろう。

「本来、女性だからといって然程の理由もなく下に見られる事自体が間違っておりますからねえ」

「全く、その通りだ。奥方は、其方の事を賢者だと自慢しておったが、まんざら過言でもないようだな」

この子爵夫人は、男女平等主義者みたいだな。この世界では、ちよつと難しい主張のような気もするが……。

だが、隣の帝国では女性が皇帝だというし、彼の国の方が革新的なのであろうか？

「賢者と言える程の知識はございませんよ。それにしても、妻も口が堅い方だと思っておりますが、それをあっさりと陥落させると

は——カナン様の話術も巧みのようで」

「はは、それほどでもないわ。それに奥方の店で売っていたスープも飲んでみたが、貴族の料理といっても良いぐらいに洗練された物であったぞ？ あれも、其方が元を作った物なのであろう？」

「わざわざ、お飲みになられたのですか？」

「流行りの店と言われれば、どんな味か気になるだろうが」

「そうで御座いますか」

「そんな自慢する程美しい奥方がいると申すわりには、後ろには獣人もおるではないか。私が欲しくなった時には、いつでも夜這いに来るがよい」

「それは、絶対にございませんので」

「むう……何故、断言するのだ？ 全く興味が無いわけではあるまい？」

そう言つて、夫人はハンドルを握っている俺の顔をマジマジと覗きこんでくるのだが……。

「貴族様とのお付き合いは、可能な限り最低限にしたいと思っておりますので」

「貴族と付き合いがあれば、なにかと便利だぞ？」

「その分、柵も増えますよね？」

「むう……辺境の華と言われた私が、こうも疎かに扱われるとは……」

どうも、テキトーに扱われるのに、プライドが傷ついたらしい。

「そんなに華として自信がおりなら、王族の妃候補にでもなれば、よろしかったのでは？」

「そういう話もあったのだが、貧乏貴族の娘では家柄が釣り合わぬと、子爵夫人が精一杯であったよ」

「では、愛情があったり、好きで一緒になっているわけではないのですか？」

「貴族同士の婚姻に、そんなものがあるはずなからう」
単なる政略結婚ってわけか。相手はどうでもいいらしい。

「そりゃまた、世知辛く乾いた話でありますねえ」

「である。だが、これは事実だ」

そんなこんなで、子爵様と夫人——両方に愛人がいたりして、他の男とやるのにも問題はないらしい。

だが一般的な貴族では、男の方には愛人が沢山、女には貞操を守らせるのが普通のようなのだ。

いやはや——やはり貴族というのは俺には理解不能——思想的に合わない方々のようだ。

そんなゴタゴタに巻き込まれるのは、御免被りたいねえ。

子供には、あまり聞かせたくない話をしているうちに、普請の現場が見えてきた。

65話 工事開始

アストランティアを治めている子爵夫人に泣きつかれて、用水路を作るという普請の手伝いをする事になった。

他領との合同でやっている工事なので、こちらが遅れるとメンツに関わるという。

上手くいけば、貴重な魔導書が手に入るといっているので仕事を引き受けた。

さて、現場へ到着したのだが――なるほど、工事が行われている真っ最中だ。

沢山の馬車が並び、簡易のテントが張られている。恐らく、ここで働くための物資を供給している商人の部隊だろう。

しかし、すぐ目の前には、森があるではないか。

「森！？　もしかして、森を切り開く作業が残っているの？」

「左様だ」

「左様って……こりゃ、参ったな」

これじゃ、残り5kmが殆ど森の中って感じだろ。こんな工事は人力じゃ絶対に間に合うはずがない。

「本当に、こんなに早く到着するとはな！」

車を停止させると、夫人はドアを開けて現場監督らしき、役人の所へ向かった。

少々小太りで、緑色の服を着た男が、ペコペコ頭を下げている。その男も、叩き上げ――という感じではない。

どこぞの貴族の息子とか、そういった素性なのだろう。

「ケンイチ、ごめんなさい……私が、口を滑らせたばかりに。まさか、こんな大変な普請だとは」

「まあ、気にするな。子爵夫人は貴族社会で揉まれた方だ。老獪さでは君より一枚上手だったんだろう。年の功ってやつだ」

「誰が歳だ!」

少し離れた場所で、現場の視察をしていた夫人がこちらを振り向く。

「うおっ! 地獄耳……」

しかし、仕事を引き受けてしまったからには、何とかせねばなるまい。とりあえず、ここをキャンプ地とする。

現場から少々離れた場所の草むらを刈り、家を設置する。

車を降りたベルが、早速周囲のパトロールを始めた。しかし草むらに入ると、本当に姿が隠れて見えなくなるな。

こんな感じで、魔物に近づかれて襲われたら対処出来ないが、それを防ぐためにベルがパトロールをしてくれているわけだ。

それに、耳の良い獣人達もいるしな。

「ここが家になるにゃ?」

「旦那、もう少し草を刈った方がよくねえか?」

「まあ、とりあえずな。普請の現場が移動すれば家も移動するから、こんなもんだろう」

夫人の所へいき、現場監督と今後の打ち合わせをする。辺りには人夫が沢山働いているのだが、さすが力仕事だけあって獣人が多いようだ。

ミャレーやニャメナのような猫人ばかりで、犬人の姿は見えない。

「其方、あの家を持ってきたのか?」

「ええ、そのために小さい家になっているのですから」

夫人に、役人へ紹介していただく。

「ボリジ、私が雇った魔導師である」

「初めまして、カナン様に雇われた魔導師のケンイチと申します」

「ボリジです。よろしく」

「ボリジよ、この者の召喚獣を使って作業を進める故、心してかれ」

「し、召喚獣でございますか？」

現場監督が訝^{いぶか}しげな顔で俺を見ている。

「カナン様、実際に見せた方がよろしいでしょう」

「そうであるな」

作業している人夫達にどいてもらい、コ〇ツさんを召喚する。

「召喚！」

アイテムBOXから出すだけなので掛け声は必要ないのだが、一応、魔法という事にしてあるので見せかけだ。

地響きを立てて、黄色の巨体がアイテムBOXから呼び出される。

「うわあああ！」 「なんじゃこりゃ！」 「化け物だ！」

逃げ惑う人夫の中——俺は颯爽と運転席に乗り込むと、人夫達が掘り起こしていた場所を鋼鉄製のバケットで一掬いした。

一掬い重量としては、おおよそ1tぐらいであろう。

「うむ！ これだ！ なんとという力強さと頼もしさよ！ どうだ、ボリジよ。この召喚獣がいれば、普請の終わりも見えたのではないか？」

「は、はい、その通りで……」

「すげえ！」 「鋼鉄の魔物か？」 「ずっと唸ってるけど、大丈夫なのか？」

人夫達が、ビビって遠巻きにコ○ツさんを眺めている。

「良かったなポリジよ。この普請が間に合わなければ、其方の首が飛ぶところであったのだから、ケンイチ殿は命の恩人という事になる」

「カナン様、まだ終わったわけではありませんよ。残っているのが、殆ど森ではありませんか」

俺はコ○ツさんのエンジンを止めて下に飛び降りた。

「うむ！　だが、この召喚獣があれば、なんとかなるであろう？」

「ポリジ様、水路はこれを使って私が掘り進めますので、人夫達には森の木々を伐採させて下さい」

「わ、解りました」

「手持ちの斧は揃ってますか？」

一応、聞いてみたのだが……。

「いえ、まだ……でして……」

どうも手際が悪すぎるな。

ここから、アストランティア、アキメネス共に100kmは離れているのだ。馬車で行って帰ってくるだけ4日は掛かる。

今から商人に発注して、あちこちからかき集めても、下手をすれば1週間程掛かる事も考えられる。

間に合わなくなるぞ。

「カナン様、とりあえず私の手持ちの斧をお売り致します故——え」と……」

シャングリ・ラを検索する——大体1挺1万円ぐらいだな。サンブルで1挺購入して、夫人に見せてみる。

「これになりますか……」

斧を受け取った夫人は、しげしげと確認すると人夫の1人呼びつけた。

「これで、木は切れるか？」

「は、はい……こりゃ、新品でござえますね。こんな良い斧を使わせてもらえるんで？」

「うむ！」

その隙に、プリムラを呼んで耳打ちをする。

「プリムラ、あの斧を街で売るとしたら、1本いくらぐらいだ？」

「えー、新品で打ちたてでしょうから、金貨1枚（20万円）ぐらいでは？」

「カナン様、本来は1本金貨1枚なのですが、お友達価格という事で、1本銀貨2枚（10万円）でお譲りいたします」

「なに?! お友達だと?」

「ダメでございますか? それでは通常価格の金貨1枚という事で……」

「いや、我等はお友達であろう! うん! その通りだ!」

「承知いたしました。それでは、これを20本お譲りいたしますので、総額金貨10枚（200万円）という事に」

「あい解った」

早速、シャングリ・ラから新品の斧を残り19挺購入する。購入ボタンを押すと、ガシャガシャと斧が落下してきた。

「ア、アイテムBOXでございますか？」

「その通りである！」

驚いているボリジの横で、何故か夫人が得意げなのだが。

「ボリジよ、この斧を持たせて、早速森の木々を伐採させるがよい！」

「承知いたしました」

俺の渡した斧を持って、人夫達がバラバラと森の中へ入っていく。森の中なのだが魔物はどうなんだろうか？ 近くに街道も通っているから比較的安全なのかな？

「ポリジ様、森の中で魔物の危険性は？」

「昼であれば、大丈夫だと思われませんが……街道で襲われたとは聞いたことはありませんし」

昼なら安全か……だが、工事が進めば、徐々に森の中でキャンプをしなければならぬだろう。

「獣人は猫人だけでしょうか？」

「ああ、森の中の普請となれば、黒狼に遭遇する事が多いので……その」

「黒狼は犬人達の神の使いという事ですからねえ。森の中で襲われたりすると退治せねばなりませんし……」

「そういう事でございます」

なにはともあれ、少しずつでも進めないと終わるものも終わらん。俺は早速作業にとりかかる事にした。

「旦那あ、俺達はどうするんで？」

ニヤメナが手持ち無沙汰だ。

「ああ、召喚獣の飯の用意をしてくれ」

「はあ？ どうやって？」

コ○ツさんの燃料消費量は1日で400Lだ。バイオディーゼル燃料を作っていたんじゃないので、当初の予定通りに、シヤングリ・ラで売っている白灯油を使う。

白灯油は1缶2600円で4L入りだ。400Lって事は、こいつが毎日100缶必要になる。

購入個数に100と入れてボタンを押すと、ガラガラと空中から鉄の四角い缶が100個降ってきて、山積みになる。

ちゃんと100降ってきたな。品切れとかあるのかな？

途中で品切れになったら、1L入りのを400個買う羽目になるな……それはちょっと勘弁してもらいたい。

もっと、大きな重機も購入出来そうなのだが、絶対に燃料の用意で詰むなこりゃ。

それから、120L入る青いポリの浴槽が4つだ。

「ポチツとな」

デカイポリ製の浴槽が4つ落ちてきた。これに足すことの、白灯油に混ぜてディーゼル燃料にするための改質剤と、2ストオイルが少々——まったく大変すぎるぜ。

「えーと、君たちの大事な任務は、この鉄缶の中に入っている油を、この青い容れ物の中へ空けてくれ」

「この蓋を開けて、全部流し込めばいいのかい？」

「そうだ。数は沢山あるけど、手分けすれば簡単だろ？」

「ケンイチ殿、その大量の油が、この召喚獣の食料なのか？」

「その通りでございます」

「むう……油代で破産するの……」

しかも、ここら辺で灯油として使われている海獣油では、重機の燃料としては使えないし値段も高い。

燃料の用意を皆に頼み、ついでにテーブルや食材もアイテムBOXから取り出し準備をする。

パンやスープなど、彼女達に用意してもらう物を、それぞれに任せる。

アネモネはパン、プリムラはスープ作りの達人だ。獣人達には獲物を用意してもらえばいい。

俺が、重機に乗り込もうとすると、草むらの中からベルがやって来た。

「よしよし……森の中は大丈夫だったか？」

ベルの顎下を撫でていると、黒い毛皮の獣人が話しかけてきた。

「魔導師の旦那、その森猫は旦那の使いなんで？」

「ああ、そうだ。俺の彼女だからな、手を出したりするんじゃないぞ？」

「そ、そんな、森猫様に手を出すなんて滅相もねえ」

俺の隣に凜としたポーズで座っている森猫の前に、獣人達が並んで座りはじめた。

そして、次々と礼をしてから作業へ戻っていく。

「森猫が、猫人達にとって神の使いってのは本当なんだな」

「そりゃそうだよ、旦那」

さて、俺も作業に取り掛かるか。

コ〇ツさんが咆哮を上げて、巨大なバケットで土の山を掬い上げ――そして脇へ小山を作る。

勿論、適当に掘っているわけではない。測量した通りにまっすぐ掘らなければならないし、凹んでいる所は浅く、出っ張っている所は、多めに削らなければならない。

夕方には森の入り口まで、まっすぐな水路が掘れた。距離で200mぐらいであろうか。

この世界では手元が暗くなったら、作業終了である。ろくな明かりのないこの世界では、余程の事がなければ残業等はない。

高額な金を払えば別だろうが、そんな仕事をさせれば人夫が逃げてしまい、作業が続けるのが困難になってしまう。

その気になれば、俺だけでも明かりを点けて夜の作業も可能なのだが、そこまで切羽詰まった状態でもないしな。

まあ、今日のところはこんなもんだろう。

作業が終わった人夫達が森から出てきた。今日は、ここでキャンセルになるようだ。

そして男達が、役人の馬車らしき所から何かを貰っている。

「あそこで、今日の給金を貰うのですか？」

一緒にいた夫人に、質問してみた。

「いや、ここで貰うのは、これだ」

夫人が見せてくれたのは鉄のチップ。どうやら、これがここだけで通用する貨幣の代わりになっているらしい。

某漫画のペ○カみたいなものか。そしてそれを持って、商人の馬車の所へ行くと、あれこれと買い込んでいる。

彼等が手に持っているのは食料や酒であるが、工事が終わった時に街で最終的な精算をして、金貨銀貨に交換するシステムらしい。

「何故、このような仕組みに？」

「本物の大金を馬車に置いていけると、野盗等に狙われるからな。それに盗みがあったりしても換金出来ぬわけであるし」

「あの派手な明かりが点いている馬車は？」

灯油ランプだろうか？ それとも、魔法を使ったランプなのか、結構明るい赤やピンク色の光を放っている。

「あれは移動娼館だ」

はあ、そりゃ100人以上の男共がいるんだ、客には困らないってわけか。

ここで稼いだ金を、全部使ってしまう男も沢山いるという。

「宵越しの金は持たねえってか」

潔いというべきか、それとも刹那的というべきか——まあ、彼等の稼いだ金だ、どう使おうが彼等の自由だ。

さて家に戻るか。

「カナン様、よろしければ私の家でお食事でも。貴族様がお食べになるような上等な料理ではないかもしれませんが」

「私の馬車も到着しておらぬし、馳走になるか」

だが俺の家族達の下へ戻ると、獣人達がなんだか不機嫌そうだ。

「どうした？ 何かあったのか？」

「ここを娼館だと思ってる奴らがいるにゃ！」

「全くふざけやがって！」

なるほどなあ。移動娼館みたいな物だと勘違いしたか。

「まあ毛並みの良い綺麗どころが揃っているからなあ。明日には噂が広まっているだろうよ」

「ふふ、まさかこんな所にまで家を持ってきたとは、夢にも思えない」

夫人の感想が普通の人間の思考って事だな。

「だが、その鳥や獣の山はなんなんだ？」

香箱座りしているベルの前に、うず高く、鳥や小型の獣が置かれている。

「森猫様にお供えだにゃ」

「森の中で仕事をするんで、森猫様にお供えをしているんだよ」

「よく行われる儀式なのか？」

「そうにゃ。木の枝に吊るしたりするにゃ」

「へええ」

まあ、このままここに置いてても獲物が傷んでしまう。彼女には猫缶を捧げて、獲物は俺のアイテムBOXへ入れる事にした。

辺りが暗くなり始めた頃、あちこちにオレンジ色の焚き火が灯り、煙がまっすぐに立ち昇る。

「パンは出来てるよ！」

「スープも出来てます」

「ウチも鳥を捕ってきたにゃ！」

「捌いてあるぜ！」

「おおっ！ ありがとう。それじゃ、鳥があるから唐揚げにするか」

「「おおっ！」」

一口サイズに切ってもらった鳥肉を、溶かし卵に潜らせて——シヤングリ・ラで買った唐揚げ粉をまぶす。

そして、カセットコンロで温めた油で揚げる。

「アネモネ、ちょっと魔法で油の温度を上げてくれ。あまり上げ過ぎないようにな」
「うん！ むゝ温め！」
ウオーム

すぐに、鍋に入った油がチリチリと言いだした。

「やっぱり、アネモネの魔法は便利だなあ」

「えへ」

唐揚げ粉をまぶした鳥肉を次々と投入。その間に、アイテムBOXから食器をだして、テーブルに並べてもらう。

「まさか、こんな野外で本格的な食事が出来るとは」

次々とテーブルの上に並ぶ料理とパンに夫人が驚く。そして、最後に大皿に山盛りになった唐揚げが置かれた。

ベルには素揚げの鳥肉をあげよう。

「よっしゃ、食うぜ！」

「にゃー！」

真っ先に獣人達が飛びついた。彼女達には、テーブルマナーも何もないからな。

「申し訳ございません、無作法で」

「構わぬ、私が無理を言って馳走してもらっているのだ。それに我等は友人ではないか」

だが、唐揚げを一口食べた夫人が驚く。

「おおっ！ これは美味しい！ カリカリな歯ざわりと、噛めば口の中に肉汁が溢れる。単純だが実に洗練されている！」

「お気に召したようで、なにより」

夫人にワインを注ぐ。ニャメナには手酌でやってもらう。

「なんと！ このワインも上等ではないか。このような逸品は中々ないぞ？」

いつもニャメナが飲んでいる、シャングリ・ラでも安いワインだ。

「やっぱり、焼きたてのパンは美味しいな。アネモネはすっかりパン作りの達人だな」

「えへへ」

「うむ、確かにパンも美味しい……しかも甘い。スープも晩餐会に出されても申し分ない程、美味だ。これなら宮中晩餐会でも使える」

「王族の方々が食しても平気でしょうかね？」

「これなら太鼓判を押せるだろう」

夫人も、しばらく食事を楽しんでいたようなのだが、そのうちに言葉が少なくなってしまうた。

「カナン様、何か？」

「いや——皆、楽しそうであるな……と」

「そりゃ、楽しいに決まってるだろ！ 仲間と食べる美味しい料理に、美味しい酒！ アハハ！」

ニヤメナは少々酒が回っていて上機嫌だ。

「そうか、そうであるな……」

皆で食事を食べながらワイワイしてやっているの、周りにいる人夫達も気になっているようなのだが、子爵夫人がいるのでは覗くに覗けないでいるらしい。

さて食事も終わったし、あとは風呂だな。1日中、車と重機の運転をしていたので疲れた。

だが貴族様もいるし、人夫達が周りでキャンプしている道路際でドラム缶風呂を沸かすのもなあ……。

「うーん……」

少々悩んだが、ツリーハウスに使っていた小屋をアイテムBOXから取り出して、こいつの中に風呂を入れる事にした。

それなら外からは見えないだろうし、ゆっくりと出来るだろう。

今まで、風呂のお湯は焚き火やアネモネの憤怒の炎で沸かしたりしていたのだが、彼女が生活魔法を覚えた事で、もっと簡単に沸かせるようになったのだ。

さて貴族様の風呂がドラム缶風呂じゃ拙い^{まず}だろう。シャングリ・ラを検索して、FRP製の白い風呂を見つけた。

楕円をしたお椀型で猫の脚のような金色の足がついており、洋画で美女が泡風呂に使ってそうなやつだ。

1台10万円ぐらいだな。似たような形で数百万円する物もあるのだが、こっちは本物の陶器製かもしれない。

だが軽くて丈夫だし、FRP製で十分だろう——こいつを2つ購

入して小屋の中に並べれば良い。

ここで最近発見した裏技を使う。

アイテムBOXの中には、川の水が入ったプラ製の大型容器が多数収納されている。

先程、購入したFRP製の浴槽をアイテムBOXへ入れープラ製の容器から水を選択して、そこへドラッグアンドドロップする。

そして、その浴槽をアイテムBOXから取り出すとー。

水で満たされている白い浴槽が目の前に出てくるって寸法だ。

川や湖から水だけを選択してアイテムBOXへは入れられないが、このようにすれば水の移動も出来るってわけ。

当然、このまま水を選択して、ゴミ箱へも捨てられる。

ガソリンランタンを吊るした小屋の中に、水がたっぷりと入った、白い浴槽が2つ並べられた。

小屋から出てアネモネを呼ぶ。

「おーい、アネモネ」

「はーい！」

「この白いお風呂を2つ、魔法で沸かしてくれ。2つだけど大丈夫か？」

「うん、いつものお風呂と同じぐらいだよね？」

「多分な」

「むー！^{ウォーム} 温め！」

お風呂なので沸騰させる必要もない。すぐに湯気が立ち始める。

魔法ってのは便利なもんだ。

^{ファイヤーボール} 憤怒の炎と違って、魔力の消費も少ないらしい。

^{ファイヤーボール} いままでは、火炎放射器で目玉焼きを作るみたいな事をやっていたからな。

「カナン様、お湯が沸きましたので、湯浴みをどうぞ」

「なに?! こんな所で風呂だと?」

「はい、こちらへ」

夫人を小屋の中の風呂場へ案内する。床が濡れてしまいが、風呂の水を捨てた後で、アネモネの魔法で乾燥させればいい。

「なんと! まさしく風呂だ!」

小屋の中へ足を踏み入れ、お湯で満たされた湯船を見て夫人が叫んだ。

「これが拭き布で、こちらが湯上がり後のローブでございます」
俺がバスローブを夫人に見せると、彼女がそれを手に取り、手触りを確かめている。

「これは、なんと上等な……」

「それでは、ごゆるりと」

「其方は入らぬのか?」

「私は家族と入りますので」

「よし、それでは命令だ。私と一緒に湯浴みをするがよいぞ」

ええ? すぐにこういう事を言い出すんだから、貴族ってのは困ったものだ。

66話 子爵夫人

貴族様の依頼を受けて、重機を使つての用水路の工事を引き受けた。

とりあえず、一日目の仕事を終えて、夕方の食事で腹もいっぱいになった。

そして、子爵夫人のために風呂を用意したのだが……。

「私と一緒に湯浴みをするがよいぞ」

「えゝ？」

戸惑う俺に、夫人が背中を向けてくる。彼女が着ている白いドレスは背中が紐で編んであり、1人では脱げない仕様。

普段は、使用人や従者を使っているのだろう。

「使用人の到着も明日ですか？」

「そうだな。何せ、其方の馬なしの車が速過ぎる故」

背中が紐が取れると、次は腕を抜き――最後は頭から脱ぐ。この世界に下着は無いので、ドレスを脱げば素っ裸だ。

髪をとめているピンを抜くと、金色の髪がバサツと背中まで降りる。

そして、くると前を向く夫人の姿は確かに美しい。白く艶かしい肌にバランスの良い丸い胸。

自ら辺境の華を称するのは伊達じゃないってわけだ。抱きついてくる彼女をするりと躲し、風呂の説明をする。

「お湯が熱いようであれば、ここの水を柄杓で汲んでください」

「つれないのう……女からの誘いを、まったく無視するとは……」

「私には家族がおりますので」

夫人はお湯の温度を確かめると、水を少々いれてから、そつと足を入れた。

「ふうう」

そのまま、ゆっくりと湯船につかり横になる。そう、ドラム缶風呂だと、このポーズが出来ないんだよなあ。

風呂に浸かってリラックスするには、こういった湯船が必須だ。

夫人は目を閉じたまま、チャプチャプと肩口にお湯をかけている。

「湯加減はいかがでございますか？」

「うむ、最高である。まさか、こんな所で風呂に浸かれるとは……」
湯船に浸かっていた彼女が呟いた。

「家族か……あの子供は本当の子供ではないのであろう？」

「その通りですが、血は繋がっていなくても、家族には変わりありませんよ。夫婦だって元は赤の他人ではありませんか」

「それもそうだが……」

「失礼ですが、カナン様——公子様は？」

「おらぬ、10年以上あらゆる手を尽くしたが、出来ぬ」

「ご無礼をいたしました。お許し下さいませ」

そりゃ、大変そうだな。こういう世界の貴族ってのは子供を作れ、跡取りを作れ、政略結婚のための駒となる娘も欲しいって感じだろうしな。

「構わぬ……それにの」

「は？」

「我が殿は——淡泊での。回数も少なく、あれでは活力に溢れる良い子が生まれるとは、私でも到底思えぬ」

「それでも、公子様が生まれなとなれば、領の危機でございまし

よう？」

「それ故、養子の話が持ち上がっておる」

「側室様は？」

「おらぬ……そもそも我が殿は、あれに興味がないのかもしれない」
「どうも、不妊の原因は領主——子爵様にありそうな感じだな。」

「其方達は楽しそうだな。私は、笑って食事をした事などなかった……」

「カナン様のご実家でもですか？」

「私の父と母は、私をどこに興入れさせるか、それしか考えておらぬ方々だったよ」

「広く豪華な部屋に贅沢な料理。そして物言わぬ家族——私が想像するに寒々しい食事風景でございますね」

「ほぼ合っておる。私が求めてきた女の幸せとは、いったい何だったのか……」

夫人は、湯船に浸かったまま、バシャバシャと顔を洗い始めた。

「じゃあ、そういう事で」

「待つがよい！ 今の会話で何も思わんのか？」

「いやあ、私のような平民には、遠く離れた異世界の話のように思えますが。あまりにも住む世界が違いすぎますね」

残念ながら俺は、20歳過ぎた女の涙は信用しない事にしている。
彼女は長くしなやかそうな脚を上げて、その美しさを誇示しはじめた。

「これだけ女が、無防備に肌を晒しているのだ、もうちと何かあるであろう？」

夫人は身体を捻ひねると、丸くて白い尻を持ち上げて、俺を誘ってくる——なるほど、金髪なので下の茂みも金髪だ。

いや、そんなことはどうでもいい。

「いやあ、全然。そんなに相手が欲しいのであれば、カナン様なら、よりどりみどりでございましょう？ 例えば、騎士の連中とか……」
「あやつらは、いざという時には借りてきた猫だ。何の役にもたたぬ。もう、私も小娘ではないのだ。この熟れた身体を持て余し、いったいどうすればよい？」

「はっはっはっ、全く子供には聞かせられぬ話でございますなあ。それでは、そういう事で」

「待つがよい！！ 女の、このような身の上話を聞いて、其方は何も思わんのか？」

「さあ、私には住む世界が違いますので」
「キィー！」

夫人は、俺が思い通りにならないのに腹を立てて、湯船の水面を脚でバシャバシャとした後、そのままお湯の中へ沈んでしまった。話は解るし、可哀想だとは思うのだが、俺にメリットが全くいっていいほど何もない。

それに後で面倒事になるのは、目に見えてるからな。俺は小屋から出ると、外にいたプリムラに話しかけた。

「プリムラ、夫人は何か鬱憤が溜まっておいでだ。話し相手になつてくれないか？」

「解りました。何か商売の良い話をいただけるかもしれません」

「これ、石鹼とリンスな」

一緒に、タオルとバスローブも渡す。夫人は友達もいないようだし、話し相手なら同性の方が良いだろう。

「俺らは、最後に旦那と一緒に入るかあ」

「そうだにゃ」

「アネモネも、プリムラ達と一緒に入ってもいいんだぞ？」

「私も、ケンイチと一緒にだから！」

2人が風呂から上がってくるのに備えて、ジェットヒーターを設置しておく。

風呂がある小屋の中は静かだ。2人が裸の付き合いで何を話しているのかは不明。

俺は家に入ると、ベッドと寝間着を用意した。夫人用のベッドも出す。

そして飲み物だ。風呂あがりといえばフルーツ牛乳。

しばらくして、2人がバスローブを羽織って小屋から出てきたが、俺の顔を見た夫人は、そっぽを向いてしまった。

俺に無視されたので、彼女のプライドが傷ついたのだろう。

「カナン様、この魔道具から温かい風が出ますので、御髪をお乾かしになって下さい。使い方は、プリムラが修めておりますので」

夫人はプリムラに任せて、俺達も風呂に入る事にした。

お湯が少なくなっているので少々足して、アネモネの魔法で再び温める。

「まったく魔法ってのは、便利だねえ」

「獣人で魔法を使えるやつはいないのか？」

「聞いた事がないよ。大体、字も読み書き出来ないんだからさ」

「うーん、そうか」

まあ、適性があるって事だよな。皆で裸になって風呂に浸かる。

「このお風呂は一緒に入れるからいいね！」

「そうだな」

俺とアネモネ、隣では獣人同士と一緒に湯船に浸かっている。

「おらクロ助、もうちょつと端へいけ、俺の長い脚が入らねえだろ」
「ウチとそんなに変わらないくせに何言ってるにゃ。それなら、ウチの長い尻尾の方がはみ出るにゃ」

いつも喧嘩をしているように見える2人だが、意外と仲は良さそうである。

戻ったら風呂を作りなおすか。お湯もアネモネの魔法で沸かせるようになったしな。

「でも、旦那あ。家の中を水浸しにしているのかい？」

「ああ、お湯を捨てた後で、アネモネの魔法で乾燥させればいいと思ってるんだが……」

「なるほどにゃ」

「多分、大丈夫」

アネモネもそう言っているし、多分大丈夫だろう。

しかし、これから1ヶ月間この場所で風呂に入るとなると、水の確保をしないといけないな。

この近くに川は無いようだし、水路の水源になるという、隣領の湖まで汲みに行かないとダメか。

距離的には20〜30kmぐらいらしいから、数日に1回往復する羽目になるのかな……。

風呂から上がると、俺とアネモネはバスローブを着ているが、ミヤレーとニヤメナは裸のままだ。

そして2人は、ジェットヒーターの前で濡れた毛皮を乾かすためのダンスを踊り始めた。

彼女達は、そのつもりはないのかもしれないが——このダンスは、いつ見ても艶かしいんだよな。

するとニヤメナが、足元の小石を拾って暗闇へ投げつけた。

「覗くなら、金持ってきてやがれてんだ！」

辺りは暗くなっており、俺の目では解らなかったのだが、出歯亀がいたらしい。

アネモネの髪の毛も乾いたので、小屋に行くと――脱いであった夫人のドレスをアイテムBOXへ収納する。

次いで浴槽も収納して、中の水をゴミ箱へ捨てる。

シャングリ・ラでデッキブラシを買い、残っている水を部屋の隅に開いているハッチから追い出すと準備完了。

玄関と窓を全開にして、アネモネに魔法を使ってもらう。

「むゝ！
乾燥！」
ドライ

彼女の声を共に床から白い湯気が立ち昇り、小屋の中へ充満する。これでサウナも作れそうだな。

床に足を置いてみると、すでに完全に乾いている。こりゃ凄い。

まあ、伐採したての生木が完全に乾燥するぐらいの威力だからな、このぐらいは余裕か。

この魔法を俺の髪の毛に試した事があったのだが、乾燥しすぎてパサパサになってしまい、髪の毛にはダメージになるらしい。

下手をうって、禿げたり脱毛したりしたら大変。人体には使わない方がいいという結論になった。

加減によっては人間の身体もミイラのようにになってしまう。

ただ、アネモネの魔法が上達すれば、微妙なコントロールも可能になるかもしれない。

家に戻ると、ガソリンランタンの明かりの下――プリムラと子爵夫人は、既にピンク色の寝間着に着替えて、フルーツ牛乳を飲んでいた。

2人共美人なので何を着ても似合うな。特に一番端のベッドに腰掛けている夫人は――若いころは、さぞかし美しかっただろうと思われる。

いや、今でも十分に美人であるし、脂が乗っている今が盛りとい

うべきか。

確かに、勿体無いといえば勿体無い——とはいえ、人妻である。
やはり不貞行為は、よろしくない。

「狭い所で申し訳ございません」

アイテムBOXから、夫人の白いドレスを出して、ハンガーに吊るそうとしたのだが、引っ掛ける所がない。

シャングリ・ラから、ねじ込み式のフックを購入。ハンガーは似たような物が、この世界でも使われている。

「はは、馬車の中で寝る思いをすれば、これは夢のような話であるよ」

「王都へ馬車で移動となれば、数週間は掛かると思いますが、ずっと馬車の中なのでございますか？」

「そうなの。近くに宿場町が無い所では馬車の中で寝泊まりとなる」
そりゃ大変だな。車内泊もしたことがあるが、座席を寝かせて板でも敷き、完全にフラットな状態にしないと、寝た気がしない。

1回でもやってみれば——やはり人間は、ベッドで寝るという事が大事なのだと痛感する。

夫人も、まだ怒っているのかと思ったが、問題なさそうだ。

俺もベッドの上に寝転がる。

すると、俺の腹の上に、ベルが乗ってきて香箱座りになった。下が柔らかくて温かいのが良い感じの居場所らしい。

アイテムBOXからキャットブラシを出して、アネモネに渡すとベルの毛皮を撫で始めた。

彼女も実に気持ちよさそうに、ゴロゴロと言いながら目を細めている。

「トラ公は外で寝ろにゃ！」

「なんだよ、俺の小屋は旦那のアイテムBOXに入っただまなんだよ。それに旦那がベッドを用意してくれたって事はここで寝てもいいんだろ？」

「まあミヤレー、たまにはいいじゃないか」

「さすが旦那！今日は俺が膝枕してやるぜ」

そう言って、彼女が俺の頭を太ももの上に載せてくれる。

「おおーいい感じ」

「へへへ、そうだろ？じゃあ、これはどうだ？」

ニヤメナはベッドの上で脚を開くと、彼女の股間の上に俺の頭を載せた。

「おおっ！こりやまた、絶妙な柔らかさが、くせになりそう」
位置を決めるようにクニクニと頭を動かす。

「ち、ちよつと旦那あ、あまり頭を動かさないでくれよ……あっ！」

「どさくさ紛れに何やってるにゃ！」

「むー！」

キャットブラシを握りしめたまま、アネモネが俺を睨む。いや、この柔らかさは抗いがたいものがあるんだよ。

それを見ていた、子爵夫人がケラケラと笑っている。

「獣人に森猫が同じベッドの上か……まるで混沌が這いよってくるようだの」

「申し訳ございません、騒がしくて」

「全く、仲睦まじいようで、羨ましい」

ワイワイと皆が騒がしい中、プリムラを見ると、1人で何かを考えている。

「プリムラ、どうした？」

「……はい、皆が森猫に貢いでくれた鳥肉があるので、明日から鳥のスープを作りたいのですが」

「ああ、この人夫達に売るのが」

「はい、見たところ、あまり上等な食事をとっていないようでしたし……」

「そうだな。人夫達に頑張ってもらうためには、食事も大事か」

「そうです。食事は良い仕事をするために、大切な事ですから」

俺とプリムラの会話を聞いていた夫人が唸った。

「なるほどのう……私は外で仕事などしたことがないからの」

貴族様は人を誘惑するより、領のために優れた人材を育成する方が先なのではあるまいか。

今まで、こんな現場までやって来て陣頭指揮をする事もなかったのだろう。

よくこれで、政が回まわってたな。今回の子爵領の危機まひつてのもの、自分達のメンツが潰れるってだけだし、領民に直ちに影響がでるわけではない。

まあ俺は、この仕事を早く片付けてしまおう。

—— — — — — ◆ ◆ — — — — —

—— 次の朝。

プリムラは朝早くから起きて、鳥を捌きスープを作り始めた。

その横では、自慢の髪を乱雑にまとめ、俺から貰った藍色のワンピースを着た子爵夫人が、プリムラの作業を手伝っている。

全く美人ってのは卑怯だな、何を着たって似合うんだから。

だが、汗水を流す夫人の姿を見た現場監督が慌てて走ってきた。

「カ、カナン様、何もそのような下賤な作業を……」

「黙れ、ポリジ！ 其方は作業の準備を進めるがよい！」

「ケンイチ、コンロをお願いします」

「解った」

プリムラに言われてテーブルの上に、アイテムBOXから必要な物を並べる。

アネモネは丸いパン焼き器でパンを焼くのだが、自分の魔法を使っているの、火やコンロを使わず焼き具合をコントロールしている。

「まったく、若いのに恐るべき魔導師だの。完全に魔法を使いこなしておる」

「カナン様は、こういった心境の変化ですか」

単なる気まぐれとも思えないが……。

「なに……昨日ずっと其方達を見ていて、私に足りない物が見えてきたのでな」

それから1時間程で寸胴鍋3つ分のスープが完成した。

大半が鳥だったので鳥ベースなのだが、小型の獣肉も入っている、ごった煮スープだ。

「おいしい！ こちらに温かいスープがあるぞ！ 子爵夫人自らのお手製だ」

「スープだって？」 「温かいのか？」 「いい匂いがするぜ」

「よし！ 其方達、ここに並ぶがよい！ これは私の奢り故、たっぷりとお食するがよいぞ！」

「「「おおっ！」」」

こんな所でスープを売ったり作ったりしている商人はいない。ここで売っている食料は、硬いパンと干し肉、そしてワイン。

輸送するのに時間が掛かるので、腐らないように、このようなラ

インナップになるのは仕方ないところ。

皿すら持っていない奴が沢山いるので、シャングリ・ラで500円ぐらいの深皿を80枚以上購入して彼等に分け与えている。

無論、これらの経費も子爵様に請求するため、プリムラがしっかりと帳簿に記してある。

「うめえ！　こんなうめえスープを朝から飲んでいいのか？」

注いでもらったスープをすぐに、人夫が一口啜^{すす}って声を上げる。

「腹いっぱい食して、今日も働くのだぞ！」

「へい！」

「おい、お前等！　時間があつたら獲物を捕ってきてくれ。それを材料にして、スープを作ってやるからよ」

「そうすれば毎日、温かくて美味しいスープが飲めるって事か？」

人夫の1人から返答がくる。

「そういう事だ」

「「おおっ！」」　「そうと解かりや、やる気が違うってもんだ」

料理に並ぶ人夫達が差し出す皿に、お玉でスープを注ぎ、大きな青いリボンで纏めた金髪。

そして額に流れる汗を拭う、朝日に煌^{きら}めく夫人の笑顔。その顔をじっと眺めていると、俺の視線に夫人が気がついたようだ。

「どうしたのだ？　化粧をしておらぬ私の顔が変か？」

「いいえ、今のカナン様があまりに美しく魅力的なので、危うく惚れそうになるところでございました」

「はっはっはっ！　やっと私の魅力に気がついたか」

「「「じゅっ」」」

アネモネとプリムラをはじめ、獣人達もじっと俺の顔を見ている。

「さてさて——大丈夫だって、惚れそうになったと言っただけで、惚れたわけではないからな」

「私はいつでも、いいのだぞ？」

「いいえ、不貞はよろしくありませんから、やめましょう。私には妻も家族もありますし」

「なあに、まだ1ヶ月あるからの」

夫人がなにやら、ニヤニヤしているのだが、ぶっちゃけありえない。

主人が留守だからといって、この人は、はっちゃけ過ぎだろう。

「ありえませんが」

「それと、ケンイチ殿！　このように髪が美しくなる、あの薬品は私にも卸してくれるのであろう？」

「あれは私の秘薬で非売品なのですが……」

「すこしぐらいよいではないか、よいではないか」

女が、美しくなる薬を見つけたら、そりゃ欲しがるわなあ。

シャングリ・ラで売っている化粧品等を王侯貴族へ売ったら、こりゃ大騒ぎになるな。

それだけ金になるって事だが——しからみ柵が膨大に増えそう。

秘薬の製法や在処を聞きだそうと、アネモネやプリムラが人質に取られたりして……あり得る。

注意しなければならない。

皆の食事も終わり、人夫達が森の中へ入っていく。

俺もアイテムBOXから、コ〇ツさんを取り出して、作業にとりかかる事にした。今日からは森の中での作業になる。

アイテムBOXから、昨日女達が開けてくれた白灯油の入った青い浴槽を取り出して、燃料の調合を行う。

それを電動ポンプを使って、コ〇ツさんに流し込むと、腹いっぱい

いになった鉄の召喚獣を目覚めさせる。

「気合を入れていかねば」

俺は重機に乗り込むと、エンジンを始動。

フットバーを踏み込むと、鋼鉄のカタピラを軋^{きし}ませて巨大な身体を森の中へ進入させた。

67話 役に立たない連中に困り果てる

背の高い大木が並ぶ暗い森の中、巨大な黄色い重機が黒い煙を吐き出しながら、丸太を転がし木の根っこを掘り出している。

ガタガタとシートに伝わる振動、巧みなレバー捌き。

「俺もすっかりとベテランだな。元世界に帰ったら、免許の実技は満点かもな」

だが、全て我流。実家が農家で重機を運転してた奴は、変な癖がついているので一発でバレるというし。

「「「おおおっ！」「」「すげええ！」」「こんなの掘り出すにや数十人がかりで半日は掛かるぜ」

外から、そんな声も聞こえてくるのだが、たとえば数百人の人夫がいても、このコ〇ツさんが無かったら間に合う仕事だったのか？

工事が遅れたらどうなるのか？ その点を少々夫人に聞いてみた。メンツが潰れて、王都で肩身の狭い思いをするのは当然なのだが、予算が削られたり統治能力を疑われて領地を没収される事もあると言う。

そうなれば、他の領地に吸収合併されるか、別の貴族がやって来て統治する事になる。

ユーパトリウム子爵は無役の有象無象の貴族に成り下がるわけだ。貴族の領地は代々受け継がれているものだから、空きが少ない。

子爵様が突然王都へ呼び出されたりしている話を聞くと――そこで無理やり空きを作って、誰かが子爵領を乗っ取ろうと企んでいるのかもしれない。

なるほど、確かに子爵様の危機だが、その割には――やはり危機

感に欠けているような気がしてならない。

コ〇ツさんで大木の根っこを掘り起こしたら、次はアイテムBOXの出番だ。

根っこをアイテムBOXへ入れて、離れた場所へ出す。力も労働力も、全く必要ない。

切り倒した木はそのまま転がして放置だ。ここに運搬用の馬車を入れるためには道路を整備しないとダメだし、ここから100km運んでも元が取れない。

10mにカットすれば、アイテムBOXに入るが……運んでくれないと言われないので、黙っている。

余計な仕事が増えるからな。

「こいつがアイテムBOXか」「滅茶苦茶便利だな」「でも、持っている奴が減多にいないって話だ」

人夫達のひそひそ話を聞きながら、再び重機の座席へ戻り――水路を掘っていく地道な作業。

そして今度は、水路上に巨大な岩だ。

少々試してみたが、このままではアイテムBOXへ入れる事が不可能らしい。どうやら土と一体と認識されているようだ。

油圧ブレーカで砕く手もあるが――アタッチメントの交換の手間を考えると、周りを掘り出して土から分離させた方が簡単だと思われる。

頭が土の上に出ているが、本体は地面の中に埋まっている模様。

岩の本体より地面の下を掘り返して、ゴロリと転がせばいい。

コ〇ツさんなら地面の下も9mぐらいは掘れるので、余裕だろう。

――とはいえ、海を漂っている氷山のように、9m以上の巨大な本体が隠れていたらアウトだが。

だが、4m程掘ったところで、岩の下が見えてきた。さらにその

下を掘り返す。

「おーい！ そっちから押せないか？」

「解りやした！」

人夫達が数十人集まると、巨大な岩に丸太を差し込み、テコの原理で動かし始めた。

俺も重機のバケットの爪を岩に引っ掛けて少々アシストする。

しばらくの格闘の末、苔むした岩は地面から引き剥がされて、コ○ツさんが掘った穴へ落ち込んだ。

「この鉄の爪はすげえな！」 「どのぐらいの深さまで掘れるんだ？」

「俺達なら、迂回するしかなかったな」

ああ、そうか迂回すりゃよかったか。

だが、真っ直ぐにしないと、水の流れて水路が削られて蛇行が酷くなってしまう。

掘り起こせないぐらい大きな岩なら、上を削るしかなかったな。

しかし、こんな巨大な岩がどこからやって来たんだ？ 崖から転がってきたのか？

かなり苔だらけだったので、かなり前から埋まっていたと思われ
るが……。

アイテムBOXへ岩を入れて、水路から離れた所へ転がした。

「「「おおおっ！」「」」

アイテムBOXを使う度に、人夫達に受けているのだが――まあ、最初だけ物珍しさで騒いでるだけだろう。

外に出さないで、ゴミ箱へそのまま入れてもいいのだが、あれの存在は家族の皆にも秘匿しているからな。

再び、コ○ツさんへ乗り込もうとすると、夫人が現場監督を連れてやって来た。

彼女は、俺がプレゼントした紺のワンピースを着たままだ。ドレスでは動きづらいのだろう。

2人の話を聞くと斧の数が足りないと言う。商人から購入しようとしたのだが、かなりふっかけられたようだ。

そりゃ、慌てて購入しようとするれば、足元を見られるのに決まっている。やむを得ず、追加で斧10挺と砥石を10個程渡す。

その後は、順調に森の腐葉土を掘り起こし、森の中へ200m程進んだ。

一日200mなら25日で5km——なんとかかなりそうだな。今日みたいな岩がなければ200m以上掘れるだろう。

暗くなってきたので、ベースキャンプへ戻る。

家では、すでにスープが出来上がっていた。作業の休みの合間を縫って、脚の速い獣人達が、スープの素になる獲物を持ち込んでいたようだ。

「獣も皆で捌いたのか？」

「ああ、素材としての売り物じゃないんだ、それならなんとか内臓を傷つけなければいいんだからな」

「にゃ」

アネモネが、焼きたてのパンを差し出してきた。一口頬張る。

「美味い！ アネモネも解体を手伝ったのか？」

「うん！ 内臓を捨てる場所がないので、魔法で乾燥させてから燃やした。スープを作る時の燃料にも使っているよ」

そうか——水分がなくなれば脂身も多いから、よく燃えるかもしれない。

皆の協力がないと、とてもじゃないが、こんな仕事は出来ないな。完成しているスープは、人夫達に振る舞われるが、当然、俺達の食事にもなる。

子爵夫人も一緒に、プリムラ達を手伝っているのだが、見慣れない女性が複数人いる。

「彼女達は？」

「ああ、これは私のメイド達だ。やっと私の馬車が到着したのでな」
「まさか、カナン様がこのような事をしているとは思ってもみませんでした」

「私達が不甲斐ないばかりに、カナン様に……」
紺色のメイド服と白い前掛けをしたメイドさん達が、夫人にペコペコと頭を下げているのだが。

「其方達、勘違いするなよ。私は好きでやっているのだ」

そう断言する夫人の顔は明るい。それと対照的に、ちょっと離れた場所で、憤懣やるかたない顔をしているのは、夫人の護衛をしている若い騎士達だ。

彼女がこういう下賤な仕事をしているのが、我慢出来ないらしい。まあ、俺が無理やりやらせているとでも思っているんだろう。

最初俺達の所へやって来た時に同行していた女性の魔導師は、付いてきていない。

何もない僻地で1ヶ月もの苦行のため、固辞されたようだ。

料理は全てプリムラ達が用意してくれたので、俺の出番は全くない。

焼き肉もあるので、最後にシャングリ・ラで買った焼き肉のタレを付けて食う事にした。

白い飯を食いたいところだが、せっかくアネモネが美味しいパンを焼いてくれたからな。

皆で焼き肉のタレをつけたり、塩胡椒で食べているのだが、醤油系が苦手だった獣人達も最近は少しずつタレに慣れてきたようだ。

市販のタレは、香辛料やニンニクなどが入っているから、ベースになっている醤油の臭いが気にならないのかもな。

「ん〜！ 今日の料理も美味しいの！ 何の肉だかは解らぬが。このソースも美味しいの」

夫人は笑っているのだが、恐らく大ネズミとか大トカゲみたいな生き物だと思う。

この世界では普通に食われている素材なので、何の問題もない。だが、夫人の後ろでは、メイドさん達があたふたしている。

主人が何かヤバイ物を食わされていると思っっているのかもしれない——そんなわけないだろ。

「それに、料理には香辛料がタップリと使われているではないか？ ケンイチ殿が持っているのか？」

「ええ、街では売れませんから、個人的に使っているわけです」

「なるほどのう……ソースも美味しいが、塩と香辛料の組み合わせも単純だが実に美味しい。それに今日のスープは少々辛いが、それもまた食欲をそそるのう」

「それでは——カナン様の家臣の方々がおいでになったという事は、今日からそちらでお休みになるということでしょうか？ ですね」

それを聞いた、夫人の動きがピタリと止まった。

「私が邪魔だから、追い出すのか？」

彼女が俺の顔を覗き込んでくる。

「そんな事はありませんが」

「ならば、厄介になるとしよう」

「カナン様がそう仰るのであれば、しかし……」

「それとも——夫婦と愛人共との営みのために、私が邪魔だと申すのか？ それなれば問題はないぞ。私も一緒に混ぜればいい」

俺と彼女の会話を、プリムラ達がじっと見ている。

「ははは、カナン様は冗談がお好きなようで」

「乗りが悪くてつまらんのう……」

天真爛漫な性格は魅力的、これが貴族っぽさかもしれないが——かのフランス王妃、マリー・アントワネットは、革命が起きてパリから脱出する際に豪華な馬車や家具や食器、ワインの樽まで積み、ノロノロ逃避行で逃げそこなったって話だからな。

飯を食い終わったが、水が少ないために入浴は3日に1度ぐらいになってしまう。

入らない日は、身体を拭いて終了——これはしょうがないな。

しかし、近くに水場が無いために、人夫達は1ヶ月も風呂に入らない。水をもらい身体を拭く程度——汗をかく力仕事をしているのだ。

人夫の中には綺麗好きな獣人達もいる、彼等は汚れているようにも見えないし、身体の洗浄はどうしているのだろう。

カップに、いつもの焼酎を一杯注ぐと——焚き火の前で横になっている身綺麗な獣人へ話を聞いてみた。

「この酒をもらっていいんで？」

白黒斑の彼は身体を起こすと、両手で酒を受け取った。

「ああ、獣人は綺麗好きだろ？　こんな場所でどうやって身体を綺麗にしているのかと思ってな」

「へへ……おお！　うめえ！　強いけど、こりゃ美味しい酒だ」

「隣の領にあるカズラ湖まで走っているのか？」

「最初は、毎日行ってたんでやんすが、森の中で泉を見つけましてね」

彼の話では2 km程、森の中へ入った所に泉があると言う。

木々の切れ目に大きな凹みがあり、そこに水が溜まっているらしい。地下水が湧き出ているのか？

それなら、コ〇ツさんで大穴を掘れば、水の確保は出来そうだが……。

「綺麗な水か？」

「ええ、もちろんでさあ」

隣の領にある湖までは片道20km以上あるというからな。獣人の脚なら2kmは大したことはないだろうが、普通の人間じゃちょっと大変だ。

近くに綺麗な泉があるのならコ〇ツさんを動かすより、水の確保を獣人に頼んだ方が得策だ。

「おい、獣人達、ちょっと酒代を稼がないか？」

横になっていた、獣人達がむくりむくりと身体を起こして、こちらを見つめている。

俺はアイテムBOXから、20L入る白いポリタンクを取り出した。

「この容器に水を持ってきたら、酒をカップに一杯やる。この男が今飲んでいるが、美味しいぞ」

「おう！ 強くて、マジで美味しい酒だぞ」

獣人達が、俺の周りに集まってきた。

「その容れ物の数はいくらあるんでやす？」

さて、風呂一つで120Lぐらいか……2つで240L。20Lのポリタンクが20個あれば、色々と水を使っても足りるか。

「20個あるから、20人に酒をやる」

シャングリ・ラから、ポリタンクを20個購入すると、ガラガラ

と黒い空から白いプラ容器が降ってきた。

「よっしゃ！」「俺によこせ！」「バカ俺だ！」「こっちは5日ぐらい飲んでねえんだぞ」「んなことしるかボケ」

食事にワインは支給されるが、彼等にとつて水みたいな物だ。

商人が売っている酒やツマミは高い。某漫画に出てくるペ○カが使える地下王国のように……。

おまけに、ここには移動娼館まで揃っている。金が出ていくばかりだ。

獣人達はジャンケンらしき物で、ポリタンクの取り合いを決めると、暗い森の中へ消えていく。

彼等の脚と夜目があれば、水を汲んで戻ってくるぐらゐは容易いだろう。

多分、すぐに戻ってくると思うから、カップを20個と酒を用意しないとな。

俺が酒を用意している10分ぐらいで、次々と獣人達がポリタンクを持って帰ってきた。

「よっしゃ、順番に並んでくれ」

ポリタンクと引き換えに、カップに入った焼酎を獣人達に渡す。

「うひゃ！こりゃ、うめえ！」「強い酒だな！」「こいつはいいぜ」

この焼酎はダリアの連中にも好評だったからな。この世界に蒸留酒は無いようなのだが――。

俺の買った液体を分ける魔道具を使えば、アルコール濃度は上げる事は出来るから、どこかに強い酒は存在しているかもしれない。

とりあえずこれで水に困る事はなさそうだ。食器を洗ったりも出

来るしな。

蓋を開けて中身を確認してみたが、澄んでいる水だ。沸かせば料理にも使えるだろう。

「上手く人を使うのう」

「私など、大した事はございません。妻のプリムラはもっと人使いが上手いですよ」

「ほう……」

俺が上手いというよりは、ここの役人達が役に立たなすぎだ。

————◇◇————

それから10日、森の中へ2.5km程進んだ所で作業中。

ベースキャンプも森の中へ入り、皆が森の中で寝泊まりしている。人夫達も作業が終わった後で疲れているのに、森の外までテクテクと40分程歩くのは面倒なのだろう。

今のところ危険はないようだが、交代で見張りを立てている。

戦いは数だからな——こちらには人夫が100人以上いるので、魔物も襲ってはこないという判断なのだが。

それに近くに街道も走っているし、そんなに危険は無いという話ではある。

それでも商人達や移動娼館は仕事が終わると、さっさと森の外へ退避してしまう。

俺がアイテムBOXからトラックを出して、ピストン輸送してやれば移動も可能だろうが、そんな事をしてやる義理もない。

獣人達は俺から容れ物を借りて、他の人夫達にも泉で汲んできた水を売り始めた。ちよつとしたバイト代だな。

人夫達も、少々小奇麗にしないと、皮膚病や感染症の危険性が高まる。

こんな場所で、皆で固まって生活しているんだ、集団感染もあり得るからな。そんな事になれば、ますます作業が遅れる。

街から離れた僻地で作業をしているというのに、現場を管理している役人達は全くそういう対策を練っていない。

これじゃ、作業が捗^{はかど}らないわけだ。

子爵夫人は自分の馬車があるのに、俺達と一緒に寝泊まりを繰り返しているのだが――全く、何が楽しいやら……。

「楽しいに決まっているではないか！ 美味しい料理に美味しいワイン、そして聞いたこともない国の興味深い話。其方は本当に賢者だの」「カナン様、もう勘弁して下さいよ。いつまでお遊び感覚なんですか。それに、カナン様が連れてきた役人達が、全く役に立たなくて、殆どの業務をプリムラが代行しているんですよ」

そう、全く役に立たない役人達は商人達の言いなり、そしてボツタされまくりで全く機能しておらず、見かねたプリムラが代行し始めたのだ。

歳は若いが子供の頃からの英才教育を受けた、ベテラン商人のプリムラが入って、状況が一変した。

誤魔化しも利かなくなり、商人達が不平不満を言うのであれば、俺がシャングリ・ラからの物資を回せばいいのである。

買い込んだ物資が全く売れないとなると、彼等も大赤字になってしまう。渋々値段を下げて適正価格で売り始め、俺達の話も聞くようになった。

「帳簿までプリムラがつけているんですよ！」

見かねて――シャングリ・ラから、『そろばん』を買ってあげたのだが、彼女はすぐにそれを使いこなした。

^{もちろん}勿論、電卓もあるのだが、アラビア数字を覚えないとダメだし、この世界にはオーバーテクノロジーすぎる。

夫人の話では、そろばんに似た計算機が帝国から入ってきているらしい。

「あの、ケンイチ。私、帳簿付け好きですし……」

「そういう事を言ってるんじゃない」

「ごめんなさい……」

プリムラの言葉に俺はハツとなった。別に彼女が悪いわけではない。

「いや、済まない。プリムラが悪いわけじゃないんだよ。全部、子爵領の役立たず共のせいなんだから」

彼女が役人の代行をして手が一杯になってしまったので、料理の手伝いは夫人のメイドさん達がやっている。

あれこれ煩い彼女達だが、能力はあるようだ。

「いや、それについては申し訳ないと思っている」

夫人が珍しくしょんぼりとしているのだが。

「本気でそう思っているのであれば、身分などに関係なく、もう少しまともな人材を確保した方がよろしいですよ」

「……」

その話を後ろで聞いていた、いつもの若い騎士が食って掛かってきた。

「貴様〜！ カナン様に向かって」

もう、うんざりだ。俺はアイテムBOXから爆竹を取り出すと、火を点けて騎士へ向けて投げつけた。

それが何か知っている俺の家族は、一斉に耳を閉じた。すでに暗くなっている森の中に、閃光と爆裂音が響く。

突然の出来事に、人夫達はその場を逃げ出し、若い騎士は剣を放

り投げて屍もちをついた。

これは、恥ずかしい——騎士が剣を手から離してしまつては戦意喪失であり、最も不名誉な事。

冒険者は剣を投げたりするが、騎士は投げないというからな。

俺は、アイテムBOXからカッタス刀を取り出すと——それを突きつけられた騎士は、両膝を突いてうなだれた。

「くっ、殺せ」

くっころ、キター！ でも、男かよ！ くっころは女騎士だろ。
男のくっころとか誰得なんだよ。

「それじゃ、俺の言うことは何でも聞くって事だな」

「……」

黙っているということは、その通りなんだろう。だって、殺されてもいいって事なんだからな。

「それじゃ、俺のやる事に口を出すな。何もするな」

戦意を喪失したもう一人の騎士と、煩い^{うるさ}メイド達、そして役人達にも約束を徹底させる。

もう本当に、働き者の無能ほど恐ろしいものはない。

例えば、5日で終わる仕事があるとする。やり方を工夫して皆で頑張れば3日で終わるのに、それが1週間〜10日と、いくらでも無駄に増えていくのだ。

ダリアではかなり優秀な人々が多かったので、あれがこの世界のデフォルトかと思っていたのだが、そうではないらしい。

あの領は、かなりまともな部類で、プリムラもアスクレピオス伯爵を高く評価していたので、そういう事なのだろう。

そりゃ、クロトンみたいな役人が蔓延^{はびこ}るわけだ。

アイテムBOXに刀を収納すると、鼻息を荒くした夫人が、いきなり俺に抱きついてきた。

「ケンイチ殿！ 其方の強く逞たくましいたぎる物で、私を貫くのだ！
ハアハア」

「どこが、なんでそうなるんだ！」
夫人を引き離そうとするのだが、意外としつこい。

「あゝやっぱり、こうなるよな」

「思った通りにや」

「むゝ！」

獣人達が呆れているのだが、アネモネは俺を睨んでいる。

「解りました！ そんなに仰るのなら、相手になって差し上げましょう！ もうたっぷりとな」

「あ……」

プリムラは俺の言っている事を理解したようだ。

そんなにやりたいなら、たっぷりやってやろうじゃないの。

その晩、漆黒の森の中、家から離れた所に出した小屋の中から、夫人の叫び声が終夜続いた。

68話 工事は無事に終了

「黒狼だあ!!」

外からの叫び声に俺は暗闇の中、飛び起きた。

慌てて外へ出ると、すでに人夫達は火のついた薪を手に持ち、円形に固まっていた。

俺はアイテムBOXからLEDライトを出して、暗い闇を照らす――。

20〜30頭程の黒くうごめく物が見えるが、実際はもっと数がいるのかもしれない。

ライトの光に照らされて、赤く光る目が2つずつ無数に見える。まさか、こちらは100人以上いるのに、襲ってくるとは思わなかったな。

アイテムBOXから、カッタラス刀とハンドアックスを10本ずつ出し、足りない分はシャングリ・ラから購入した。

ガシャガシャと出てくる武器を獣人達に持たせると戦闘準備だ。その他は伐採に使っている斧を使ってもらう。

獣人なら片手で振り回せるだろう。そして、シールドだ。アイテムBOXに入ってた、ポリカーボネート製のタワーシールドとバツクラ―を彼等に配る。

「皆、これを使いえ! 武器のないやつは円陣の内側へな。女達は俺の家に入っている!」

狼型の魔物とはいえ、家の壁をぶち破ったりは出来まい。

「にゃ! ケンイチ! ウチの武器も出してほしいにゃ!」 「俺にも武器をくれ!」

ミャレーとニャメナに、コンパウンドボウとクロスボウを渡す。
この暗さでも彼女達なら見えるだろう。

早速、ミャレーが矢をつがえると、闇の中に放った。

「ギャイン！」「ギャン！」

暗闇に野獣の叫び声が響く。

「うおおおっ！」

「あ、ばか！」

何を思ったのか――暗闇の中に剣を振りかざした若い男が2人で
駆けていく。夫人の護衛の騎士達だ。

寝ていたからアーマーは着ていないようだが、護衛なら夫人を守
つてろと思うんだが……。

「ユ○ボ召喚！」

こういう時は小回りが利く、ユ○ボの方がいいだろう。それに、
こいつにはヘッドライトがついているからな。

早速、エンジンを掛けると、ヘッドライトを使い前方を照らす。
すると――当然のごとく黒い魔獣に囲まれている男達。金髪の男
が獣に腕を噛み付かれている。

フットバーを踏んでユ○ボを前進させ、その修羅場へ近づくと、
アイテムBOXから爆竹を取り出して投げつけた。

閃光とけたたましい爆音が轟く。黒狼が怯んだところに俺の攻撃
が炸裂した。

「ユ○ボアタック！」

鋼鉄のバケットの一撃で背中から、獣が半分に千切れ飛ぶ。

さらにカタピラを進め群れの中に突っ込むと、地面スレスレに長
いアームを伸ばし車体をグルグルと回転させる。

「おりゃー！ ユ○ボ大回転！」

「ギャワン！」 「キャン！」

高速で迫るバケットに、次々と黒狼が弾き飛ばされてゴロゴロと転がっていく。

「ウチ等も来たにゃ！」

「旦那、俺にも獲物を分けてくれよ！」

ミャレーとニャメナと一緒にやって来たのだが、その後ろから飛び出した黒い影。

疾風となったベルが、黒狼の群れに突っ込むと、その一頭の首に噛み付いた。

「キュ！」

魔物の一頭が叫び声も上げる間もなく沈黙。恐らく即死だと思うれる。

口で咥えたまま黒狼を地面へ叩きつけ、敵を睨みつける森猫。その彼女の勇姿に黒狼達はジリジリと後退をし始めた。

「森猫様に続けえ！」 「うおおっ！」 「おりゃアア！」

続いて獣人達が黒狼の群れの中へ切り込むと、次々と敵を斬殺していく。

「森猫様が、ついてくださるんだ！ 俺等が負けるはずねえ！」 「はは！ その通りよ！」

森猫が獣人達の間で信仰されているというのは、本当なんだな。思わぬ反撃を食らった黒狼の群れは、ボスらしき個体の呼びかけで速やかに群れを纏めると、一旦距離を取った。

だが、付かず離れず一定の距離を保って、こちらを窺っている。諦めてはいないようだ。

エクスプロージョン
「むゝ、爆裂魔法！」

高い声と共に青い閃光が走り、赤い爆炎と化して、暗い森の中をオレンジ色の光が照らす。

爆風が巨木を数本なぎ倒し、落ち葉を巻き上げた衝撃波が俺達を襲う。

黒い敵の群れは、アネモネの魔法の一発で沈黙したようだ。魔物は魔法に耐性があるといっても、これは効くだろう。

この世界へやって来た時に俺を苦しめた魔物も、魔法一発か。

「すげえ……」「こりゃ、たまげたぜ」

獣人達も沈黙する、アネモネの凄まじい魔法。だが、あらかた敵は片付いたし、残った敵も逃走を始めた。

「ふああ……寝る」

「俺も寝るか」

だが、俺の身体を、アネモネがぐいっと押し返した。

「あの女の匂いがするから、や！」

ええゝ、するか？ 身体中をクンカクンカしてみるが解らん。

「旦那！ 黒狼の素材はどうするんでえ？」

獣人の人夫の1人が、そんな事を尋ねてきた。

「ああ、好きにしていーぞ！ 俺は要らん」

「俺は、ちょっと欲しいかな」

「ウチは要らないにゃ」

ニヤメナは素材剥ぎをするようだが、俺は寝る。

「火が残っているようなら、消しておいてくれ」

獣人達に、シャベルを2本渡そうとしたのだが、手持ちがあると

言う。まあ用水路を掘る工事だったからな。

寝る前に、へばっている騎士達を家の方まで引っ張っていくと、一発ぶん殴った。

こいつ等に比べると、シャガの討伐戦で戦ったノースポール男爵は、はるかに有能だったな。

「治療の代金だ」

騎士の上腕は黒狼に噛まれた傷で、大きく引き裂かれている。

針金を編んだような帷子かたびらは着込んでいたようだが、その上からやられたようだ。

とりあえず帷子を脱がせ、アイテムBOXからアルコールを出して傷口を消毒する。その上からワセリンを塗り、包帯を巻く。

今は、これしか出来ん。他に傷を受けた者が何人かいるので、アルコールを渡して消毒させる。

「それは酒精だけど、飲むなよ。そして、これは血止めの軟膏だ」

——と言ったそばから、アルコール瓶に口につけている獣人がいる。だが、すぐに吐き出した。

「おええ！ なんじゃこりゃ！」

「それは薬なんだ。変な味を付けないと飲む奴がいるんで、そうなっているんだよ」

エタノールだから、飲んでも害はないはずだが。

「ははは、兄弟みたいな奴がいるってこった」

「だって、酒精って聞いたら飲んじまうだろ」

「違いねえ」

幸いな事に重傷者はいないようだ。

役人は——馬車に隠れてガタガタ震えているだけで、役に立たな

い。

子爵夫人は小屋の中で失神中。

「はぁあゝ」

溜息をつくしかない。まあ、夫人をやってしまったのは俺だが、目が覚めていたとしても役には立たなかっただろうし……。

「あの……魔導師様」

「ん？ 俺か？」

「近くで女を虐めるのは止めてくれませんかねえ。ムラムラして眠れねえ」

「おう、オレっちもだぜえ。お陰で黒狼相手に随分と張り切っちゃまった」「俺もだ」

どうやら、夫人の声が耳の良い獣人達には筒抜けだったみたいだな。こりゃ悪いことをした。

「ああ、すまん。今夜だけだから。お詫びに明日の夜は酒を奢ってやるよ」

「本当ですかい？」「へへ、得したな」

明るくなったら状況を確かめて、けが人を街へ搬送するか決めよう。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

——そして、朝。

朝から不機嫌な子爵夫人が、テーブルで朝食を食べながら管を巻いている。

だが、その顔はツルツルのテカテカだ。

「こんな恥辱は初めてだ！ 変な魔道具で責め立てられ、散々弄ばれた挙句、男の物も使わずに放置とは、こんな屈辱受けたことがない！」

「カナン様、その台詞はこうですよ『くやしい！ でも、感じちやう！ ビクンビクン！』」

「そ、そんな恥ずかしい台詞が言えるわけなからう！」
俺は、アイテムBOXから一枚の紙を取り出した。

「そ、そんな証文を私から取ってどうするつもりだ」
そう昨夜、夫人にサインさせたこの証文は、俺の言うことを聞く、どんな事でも絶対に逆らわない——という事を記した物。

「別にどうもしないが」

「嘘を申せ！ 夜な夜な私に身分を偽らせ街を徘徊させた挙句、汚らしい下賤な男共とまぐわらせて、金を稼ぐつもりであろう！」
十分に恥ずかしい台詞を言っているのだが……。

「何？ その具体的な例は？」

「え？ いや、あの、その……」

俺は、証文をちらつかせて彼女に質問をしてみると——どうやら主人に相手にされず、身体を持て余して、そういった本をよく読んでいたと言う。

そういえば、写本を商売にしている爺さんも、そういう本が多いと言っていたなあ。

何百万を掛けてエロ本かよ……しかし、そういう本の中身つてのは、どの世界も変わらないんだな。

「大体、金を稼ぐなら、もっと上手い方法がいくらでもある」

「そ、それでは、なんのために……」

「何もさせないためだよ」

「そんな殺生な！ ほら、何をしてもいいのだぞ？ この身体が自由になるのだ！」

紺色のワンピースの上から、自らの胸を揉んで、寄せて上げる仕事を草をする。

「いらん。とにかく、俺達の邪魔をするな」

はしゃいでいた彼女が、がっくりとテンションを落とすと、この世の終わりのような顔になる。

一体、何を考えているのやら。

「……し、承知した。昨夜は魔物を退治に尽力いただき、感謝する」
一応、領主の奥方らしい仕事もするのだが。

「子爵夫人から、かのようなお言葉を賜り、光栄の至り。これから怪我をした騎士の様子を見て、街へ運ぶかどうか判断しなくちゃならん」

「其方に任せる……」

「はいよ」

いつものように、アネモネの焼きたてのパンを頬張ったのだが、いつもよりしょっぱいような……。

そのアネモネの機嫌は悪い。まあ俺が悪いので仕方がないのだが。

「旦那！ 俺の取り分をアイテムBOXへ入れておいてくれよ」

「解った、何頭いるんだ？」

「4頭だな、矢で仕留めたのは俺とクロ助の分だけだったから、すぐに解ったぜ」

ミャレーは要らないと言うので、彼女の分もニャメナが貰ったよ
うだ。

「よし、この仕事が終わったら換金しよう」

「でも、アネ嬢の魔法でやったのは、バラバラとか丸焼けだったぜ。あれじゃ素材にもならないし、肉にも使えねえ」

上手く解体して、血抜きをしっかりしない動物の肉は、臭くて食えたもんじゃない。

他の獣人達が剥ぎとった物は、この工事へ付き添っている商人達へ売ろうだ。

買い叩くようなら、俺のアイテムBOXへ入れてやってもいい。

アストランティアの街へ帰ってから、冒険者ギルドへ持ち込めば、正規の値段で買い取ってくれるんだからな。

「それじゃ、屍を集めて後で召喚獣を使って埋めた方が良いか？」

「もう集めてあるよ」

「そうか、それじゃ飯を食ったらやるか」

新たな魔物を呼び寄せる危険性もあるし、放置して腐敗させると衛生上よろしくない。まだ工事は続くのだ。

アネモネの魔法で乾燥させて燃やす手もあるが、盛大にやると火事になる可能性があるからな。

「にゃー、お金の事はよく解らにゃいけど、こんな仕事をしてて黒字なるにゃ？」

ミャレーは、俺みたいな商売をして儲かっているか不安に思っているようだ。

実際には、子爵様の屋敷にあった、中古のアンティーク家具だけで大幅な黒字だからな。

だがそれは、誰も知らないシャングリ・ラの買取査定の話なので皆には内緒にしてある。

「なるよ、俺の計算ではなってるし、プリムラからも子爵様へたっぷりと請求がいく」

「うぐ……お手柔らかな」

「いや、絶対に取るだけ取るから」

「今回の仕事で、最高の褒美は私の身体なのだぞ？　それを其方が拒否するから……」

「そんなものは要らんし、個人的には至高の障壁の魔導書^{ハイプロテクション}だけで、十分に黒字だ。そのためだけに引き受けた仕事——と思ったら、とんでもない役立たずばかりで、へそが茶を沸かしたけどな」

「ヘソにゃ？　何にゃ？」

「ああ——えくと、バカらしくて笑ってしまう——みたいな意味か」
「それでは、『馬も笑う』でしょうか」

プリムラが、それらしい単語を教えてくれた。

「金が無いなら——俺達が住んでいた土地の短期譲渡でもいい」

「し、子爵様に伝えておく」

「たのむよ」

「それから、プリムラ。街へ帰ったら、子爵領の財務を見てやってくれ。絶対に拙い^{まず}事になってる気がする。勿論^{もちろん}、有料でな」

「解りました」

飯を食い終わったので、けが人の様子を見に行く。

獣人達の怪我は大した事がない。毛皮と分厚い皮膚に覆われているからな。

だが腕を噛まれた騎士は、少々熱を出しているようだ。痛みでよく眠れなかったらしい。

「消毒はしたから、化膿する事はないと思うんだが……これは、やつぱり街へ搬送した方が良いかな？」

街へ戻れば治癒魔法を使える人間がいるからな。騎士なら、そのぐらいの金は持っているだろう。

「うう……」

「この薬を飲め」

「こ、これは？」

「解熱と鎮痛の薬だ。とりあえず痛みと悪寒は楽になる」

「かたじけない……」

すっかり、しょんぼりとしているな。あの威勢の良さはどこへ行ったのやら。

彼等の馬車で帰らせても良かったのだが、プリムラが自分の店の様子を見たいという事だったので、俺の車で街へ向かう事になった。工事の日程は、まだ大丈夫で余裕がある。

コ○ツさんを使って大穴を掘り、魔物の死体を埋めた後――。

アイテムBOXからラ○クルプ○ドを出すと少々燃料を補給。怪我をした騎士を乗せて街へ向かう事になった。

――車の中で蘇州夜曲を歌う。

プリムラにも教えたので、彼女も歌っている。後部座席では騎士がぐったり中だ。

だが薬が効いたのか、大分楽になっている模様。

「まったくなあ――これじゃ、俺達で全部事業を受けた方が儲かるってもんだ」

「本当にそうですわね」

国から公共事業を受けて、俺が重機を使って仕事をこなせば、人手も日数も掛からない。丸儲けだ。

まあ、そんな仕事をするつもりもないのだが。

何事もなく、約1時間半後には、アストランティアに到着。

「し、信じられん、こんな短時間で……ここは、本当にアストラン

ティアの街なのか？」

「ああ、間違いないから、とっとと降りろ。歩けるんだから大丈夫だろ？」

「かたじけない……」

騎士を車から降ろして、プリムラの店へ向かう。

街ゆく人々にジロジロと見られてしまうが、無視だ無視。

プリムラの店も順調に回っているようで問題ない様子。俺が供給していた出汁の素を各店に補給すると話を聞く。

支店を巡っても嫌がらせをしていた商人からの報復等もないようだ。

だが、敵がのうのうと商売しているのは、やっぱりムカつく。どうかしてやりたいと思っても、無理に事を荒立てれば、せっかく上手く回り出したプリムラの店に迷惑が掛る。

まあ、ここは自重だな。

— — — — — ◆ ◆ — — — — —

——それから、10日後。

水路は無事に隣の領——ツンベルギア子爵領の水路と繋がった。

隣の領の水路はすでに完成しており、誰もいない状態。遅れていたのは、本当にこちら側だけだったようだ。

そりゃまあ、あの体たらくっぷりなら納得なのだが……それに加えて、領主が不在なのだからな。

夫人は、急に領主が王都に呼び出されたと言っていたが、早めに工事を終了させていれば、何の問題もなかったはずなのだ。

繋がる数日前に、隣の都市アキメネスに使者が送られて、一応式典をする事になった模様。

貴族にとっては、こういう行事は大切な事なのか、隣街から馬車

を数台連ねてツンベルギアの領主が現れた。

青い上下に金糸の刺繍が施された服を着ている。鳥の羽根を付けたベレーのような青い帽子をかぶり、背の低い太った男だ。

顔は赤く、血圧が高そう……。

「ユーパトリウム子爵夫人、この度は国王陛下から承った水路の普請が完成した事は誠にめでたい」

「全く、その通りですな」

「しかし、1ヶ月程前の報告では、まだ森の手前で、森を突っ切る普請は無理だと報告を受けていたのだが……」

「確かに。だが、我が友人の魔導師が駆けつけてくれたのだ!」

「魔導師?」

「ツンベルギア子爵様も、聞いた事があるだろう。ダリアで極悪野盗シヤガを討伐した魔導師ケンイチの名前を」

「まてまて! 何、バラしてんだ、こいつは!」

「何? 確かにその名前の報告は受けたが……」

「そのケンイチ殿の素晴らしい魔導の数々を使って、困難な普請を成し遂げたのだ!」

「むむ……まさか、そんな魔導師がユーパトリウムについているとは……」

「何やら、あれこれ話している夫人と子爵様を遠くから眺めていると、ミヤレーが話しかけてきた。」

「貴族様の帽子についている青いのがあるにゃ、あれがコツカ鳥の尻尾の羽根にゃ」

「あれがそうか、へえ」

「羽先が青で、縞模様がグラデーションになりつつ、最後は白くなる——美しい羽根だ。」

しかし、相手の貴族の様子を見ると、こちら側の工事が失敗

すると踏んでいたようだな。

まあ、グダグダなのは見れば解ると思うんだが……もしかして、こいつらが色々と企み事に絡んでいるのかもしれない。

今の領主がクビになって新しい領主が赴任してきても、頭が挿げ替わるだけで、俺の住んでいる場所に影響があるとも思えない。

それに、工事は上手くいったんだ、危機は去ったというべきだろう。

プリムラを貴族のところへ向かわせて、財務のチェックをさせるから、問題も洗い出せると思う。

式典も終わり、俺達も街へ戻る事になった。皆で俺のラ○クルプ○ドに乗り込み、アストランティアを目指す。

貴族連中は、夫人だけが俺の車に乗り込み、他の役人やメイドは馬車で帰領する。

現場にも大型の空馬車が4台程やってきて、人夫達を乗せていく。だが、獣人達は自分の脚で走った方が速いので、利用しないらしい。時速30km程で走れるので、途中で狩りをして腹ごしらえをしながらでも、今日中には街へ到着してしまうという。

だが、50人以上の獣人達が並んでマラソンをしている姿は、まるで走る民族大移動だな。

毛並みも色々な種類がいて、見ていて楽しいし、なんだか微笑ましい。柄の種類は元世界の猫と全く同じに見える。

車を運転しながら、並行して走る獣人達を眺めていると――彼等も、こちらに気づき手を振ってくれる。

それどころか、車の窓からベルが首を出すと、両手を合わせて拝む奴まで出る始末。

「男の三毛柄っていないんだろ？」

「旦那、よく知ってるな」

「そうにゃ！」

「でも、ごく稀くに、男の三毛もいるんだろ？」

「その通りにゃ！」

「でも、本当に珍しいから、貴族に飼われて見世物になったりするんだぜ」

「そりゃ、可哀想だな」

「ここら辺も猫の柄と一緒にだな。」

「それよりもだ……。」

「おい、カナン様、なんで俺の名前を出したんだよ」

「そ、それは……素晴らしい友人がいたら、自慢したくなるのは道理ではないか」

「本当に、友達いないんだなあ」

「ふん、貴族の友人などありえん。全てが脚を引っ張り合う敵同士だ」

「殺伐としてるねえ。そうなのか？ プリムラ」

「私が知る限りでは、仲のよろしい方々もいらっしやいますけど……」

「全てが上っ面だけであろ！」

「どうも、夫人は貴族社会に幻滅をしているようだ。」

「それじゃ、机の上でニコニコと握手をしていても、机の下では脚を蹴り合っている？」

「全く、その通りだ！」

今回の出来事で、隣の領に俺の名前が知られてしまった。これで加速度的に噂が広まってしまっただろうか？

そうこうしているうちに、アストランティアへ到着した。

「もう到着したのか。全く、この召喚獣は、すばらしいのう！」

「私の友人が、凄い魔法と召喚獣を操って！——とかいう自慢を他の人には、しないでくれよ、カナン様」

「なぜじゃ！ 先程も申ししたが、素晴らしい友人がいたら自慢しても良いではないか！」

夫人が俺に向かって、そんな事を言ってくるのだが……。

「こっちが困るんだよ。あちこちから俺の所へ面倒事が押し寄せでましたら、子爵領を出て何処か遠くへ行かなければならなくなるだろう」

「いやそんな事はない。子爵様の庇護の下にあると解れば、他の貴族もそう簡単には手を出してはこないであろう」

「それでも、水面下では接触してくるぞ？ 子爵領より金持ちで、良い条件を出すと思われるデカイ領は沢山あるんだろう？」

「其方！ 友達だと申したのに、金で私を裏切るのか？」

「そんな事はないけどさあ」

「ならば、私も助けてたもれ！ 守ってたもれ！」

「そういうのは、夫人の夫である領主様や、騎士の仕事でしょう？」

「そこは、私を抱きしめて愛の言葉ではないのかえ？！」

この方、人妻なのだが——どうも暇を持て余した挙句、物語と現実をごっちゃにしているな。

この夫人の言うとおりに、他の貴族が手を出すのを諦めてくれればいいのだが。

話を聞いていたプリムラは少々呆れ顔をしている。

「はあ……これなら最初からアスクレピオス伯爵の加護に縋るのも、手だったかも知れないなあ」

「なっ！ あのような大貴族では、私に勝ち目がないではないか？」

「プリムラ、そうなのか？」

「ええ……まあ。それに私も以前に、そういう選択もあり得るのでは？ ——とお話ししましたでしょ？ それなのに、ケンイチが逃

げてしまうから……」

「だが、街の人間の貴族嫌いの話を聞いているとな。実際、俺もそう思ってたし——あはは」

ユーパトリウム子爵も、この夫人も、悪い人間ではなさそうなのだが。

ちょっと政まつりごとには向むいていないような気がする。

69話 アストランティアへ帰ってきた

子爵領から請け負った用水路の工事を完成させて、アストランティアへ戻ってきた。

そのまま子爵様の屋敷へ行くと、至高ハイプロテクションの障壁の魔導書をもらう事に。

「しばし、待たれよ」

夫人に言われるまま応接室へ案内されて、待つことに。

さすがに貴族の屋敷だ。立派な造り——白い石造りの壁だが、下側には黒いマホガニーのような板が貼ってある。

並んでいる家具も一流品だ。素人の俺が見ても凄いと思うのだから、間違いない。

実際に、倉庫にあった家具をシャングリ・ラの買取査定に突っ込んだら凄い金額が出たので、これらも高額査定間違いないだろう。

「待たせたな」

白いドレスに着替えてきた夫人が差し出した魔導書。黒い革製の表皮に金の細工が施され、中心に大きな石が嵌った立派な物。

見た目でも、価値がありそうな感じではある。それにしても、やっと手に入れたぜ。

「我らは友人なのであろう？ その……其方の所へ遊びに行っても良いかの？」

「まあ——だが、断る！」

「何故じゃ！」

「ケンイチ、カナン様が可哀想ですし……」

「君が敵に塩を送る人間だと思わなかった」

「塩ですか？　よく解りませんが、友達がいけないのは寂しい事です」

ああ、これは日本のことわざだったな……まあ、意味はなんとなく通じるだろう。

プリムラも、子供の頃から親父さんの商売に付き合わされて、あちこちへ飛び回っていたので、同年代の友人がいらないらしい。

子供らしい遊びもしたことがないという話も聞いた事がある。同年代の男に興味を示さないのも、その辺の事情があるのかも。

「まあ、プリムラがいいと言ってるから、良しとしましょう」

「本当か！」

夫人の顔にパツと華が咲く。

「反対！　反対！　！」

「アネモネが反対しているから、やっぱりダメだな」

「私は子供以下なのか？」

「だって、アネモネはとっても役に立つ良い子だしな」

ハイプロテクション
至高の障壁の魔導書を持っているアネモネの頭を撫でる。

まあ、子爵領の財務を見るために、プリムラがここを訪れるんだ、話し相手ぐらいはするだろうし、それで我慢してもらおう。

帰り際、夫人から羊皮紙を一枚もらう。ギルドへ口添えの書類だと言う。

彼女の話からすると、街の中で動物を連れて歩くためには鑑札が必要らしい。

動物というのは、森猫のベルの事だ。

「それじゃ、最初は冒険者ギルドへ行くか」

「俺の獲物も、旦那のアイテムBOXに入っているしな」

「そうだな」

車で冒険者ギルドに乗り付け、アイテムBOXへ入れる。駐車スペースも要らないし、便利この上ない。

元世界でも、これがあれば色々と捗っただろうな。それどころか世界が変わるぞ。

輸送だって、引越しだって、自由自在なんだからな。

ベルと一緒に冒険者ギルドの扉を潜ると、中にいた人々から驚きの声が上がリ、黒い神の使いに獣人達は頭を下げに来た。

いつもの受付のお姉さんの所へいく。

「あのー、この森猫の鑑札が欲しいんですけど……ここに、ユーパトリウム子爵夫人からの書状もあります」

「少々お待ちください！」

書状を確認した、受付のお姉さんが、奥に消える。

そしてしばらくすると、赤いベストを着たメガネを掛けた中年の男性が出てきた。

「あの、森猫と一緒に、こちらの部屋へ来ていただけますでしょうか？」

「はい——皆はちょっと待っていてくれ」

「あ、旦那！ 黒狼を出してくれよ。俺が窓口へ持っていくからさ」
「そうか、解った」

アイテムBOXから、4頭の黒狼を出してやる。ニャメナとミャレーでカウンターまで運ぶようだ。

俺とベルと一緒に奥の部屋に向かうと、応接室のような所へ案内された。

赤い絨毯と低いテーブルと革製のソファ。貴族の屋敷のようにはいかないが、中々立派な部屋だ。

ベルと一緒にソファに座り、ギルドの職員が出した書類にサインをする。そして、彼女の手型というか、足型も取る。

「本来は、本当に獣や魔物が主人の支配下にあるかの試験があるのですが、ユーパトリウム子爵夫人からの書状もありますし、今回は特例になります」

「良かったな」

ベルの顎を撫でると、ゴロゴロと喉を鳴らす。

「しかし、こんな見事な森猫をどのようにして……？」

「ダリア近くの森でな」

そして、銀で出来た鑑札の首飾りを貰ったので、彼女につけてやる。

鑑札に繋がっているのは、ただの紐だが。後で組紐などに替えてあげよう。

それに、これが必要なのは街の中だけだ。俺の家や、森の中でこんなのは必要ないからな。

森の中で、どこかに引っ掛けて紛失したり、狩りの時に邪魔になるだろう。

「これって紛失した場合は？」

「すぐに届けていただければ、再発行いたしますので」

ギルドの情報は各都市で共有されているので、どこで申請しても大丈夫のようだ。

ただ、情報の更新には少々時間がかかるようなので、それは気を付けねばならない。

例えば、俺が車で街道を行けば、明日にでも王都に到着してしまうが、そこでは当然まだ情報が更新されていない。

まあ、こういう世界なので、それは仕方ないといえる。

ギルドのホールへ戻ると、ニャメナ達が待っていた。

「黒狼は売れたか？」

「ああ、旦那のアイテムBOXに入っていたからな。出来たてのホヤホヤで、いい値段になったぜ」

彼女は、黒狼を丸ごと売ったらしい。まあ、アイテムBOXの中に肉はあるしな。

「あゝ、ベルに首輪がついた！」

「そうなんだ。街にいる時は、こいつを付けてないとダメらしい」
「へえ」

ベルが、アネモネに身体を巻き付けて、スリスリしている。

冒険者ギルドから大通りへ出る。ここから、婆さんの道具屋へは然程の距離はないので、皆で歩いていく事にした。

大通りでも、黒光りしている身体のベルは注目の的だ。

そりゃ、普段は森の深い所にいる生き物が、街の中を堂々と歩いているんだからな。

わざわざ、走ってきて挨拶していく獣人もいる。

「ちわり、婆さんいるかい」

「はいよ」

よく解らない物が乱雑に積まれた店の奥から、ローブを被った婆さんが現れた。

「おや、兄さんかい」

「こんにちは！」

「おや、お嬢ちゃんも……随分と今日は団体さんだねえ。これ、全部あんたの『これ』かい？」

婆さんが小指を立てた――この世界でも、こういうのは小指なのかい。

「家族だよ、家族」

「中々やるもんだねえ、ホホホ……どうだい、このお婆も養ってみ
ちゃ」

「冗談はよせ」

「ホホホ、つれないねえ」

「にゃー」

「なんと！ 森猫までいるのかい？ 兄さん、調教師テイマーか何かかい？」

「まあ、そんなところだ。婆さん、魔導書の名義変更を頼む」

アネモネが、大事に抱えていた魔導書を婆さんに差し出す。

「ふむ……こりゃ、たまげた！ 至高の障壁ハイプロテクションかい！ こんな物をどこで手に入れたんだい！」

「ある仕事をしてな。ここの領主様から貰ったんだよ。なあアネモネ、皆で頑張ったんだよな」

「うん！」

「なんとまあ、こんなの見るのも初めてだよ」

「魔法に詳しい婆さんでも見たことない物があるのか？」

「そりゃそうさ。こいつは帝国で作られた物で、この国に入っている絶対数が少ないからね」

「らしいな」

ダリアの爺さんに見せたら、喜ぶかもな。

とりあえず、婆さんに名義変更を頼んだ。

「婆さんから貰った生活魔法の本はとても役立っているよ。この子もすぐに使いこなしたからな」

「やっぱり、才能があるよ。王都に行ったらどうなんだい？」

「や！ ケンイチと一緒にいるの！」

「まあ、女だったら、そうだねえ……よしよし」

婆さんが、アネモネの頭を撫なでている。

しかし、せっかく皆で街へ出てきたんだ、何か……そうだ、アイテムBOXに蜘蛛の糸が入りっぱなしだったな。

「婆さん、服の仕立てをしてくれる店で、オススメの所はないか？」
「この通りをちょっと行った所にあるよ。何をするんだい？」

アイテムBOXから、蜘蛛の糸を出して婆さんに見せる。

「これで、アネモネのローブを作ってやろうかと思ってな」

「こりゃ、立派な虫糸だねえ。私にも売ってくれないかい？」

「皆の服を作って、余ったらな」

「兄さん、やっぱり私を養うつもりはないかい？」

「ははは、もう増やすなって言われてるから、無理だな」

婆さんの道具屋を出て、彼女に教えてもらった、服屋に行く。

この世界に既製品は売ってない。全部、新品の注文品か中古かのどちらかだ。

デザインを見せるためのサンプルを置いてある店もあるのだが、そのまま着れる物を売っている店は無い。

元世界のように、S M Lなどの標準サイズ等も無いからだ。それ故、普通は自分のサイズに合う中古を買って着る事が多い。

無地でシンプルな物が多く、デザイン性などは望むべくもない。

「いらっしやいませ——ひい！」

店主らしき女性が出迎えてくれたのだが、ベルを見て驚いたようだ。

「ああ、俺が主^{マスター}になっていいるから大丈夫だ。ほら、ギルドの鑑札もついている」

だが、店の中に入るのは少々拙いかもしれない——服に毛がついてしまうからな。

ベルに店の入り口へ待ってくれるように頼むと、店先の床に香箱座りをした。

丁度、玄関から日差しが入ってきているのだが、その影に入るように座っている。

ぱっと見、影と一体化して解らないから置物か何かだと思うだろう。突然動いたら驚く人もいるはずだ。

森猫に驚き顔の店主は、少々胸が開いた派手な色合いのワンピースに石を繋げたアクセサリをジャジャラとつけている。

派手な服装で商人をアピールしているのだろう。ダリアのアマナを思い出す。

「この糸でローブと服を作ってもらいたい」

アイテムBOXから蜘蛛の糸をだすと、店主に見せた。

「虫糸ですか？ これは見事な……しかし、糸を紡いでからの注文ですと、値段が跳ね上がりますけど」

「構わない。前金を払ってもいいぞ」

「かしこまりました、それでは……」

「この2人だ」

店内で服を眺めていた、アネモネとプリムラを引っ張ってきて、採寸をしてもらう。

「ミヤレーとニヤメナはどうだ？」

「森の中を走り回るのに、そんな上等な物は要らないよ」

「そうだにゃ」

彼女達には、蜘蛛の甲殻で作ったアーマーの方が似合いそうだな。

「色はいかが致しましょう？」

「青！」

アネモネは自分が着ている青いワンピースに合わせた青をすぐさま選択したようだ。

「それでは、私も青で……」

プリムラも青で、ブレザーのような上着を注文した。冠婚葬祭、どれでも使えるだろう。

「青の染料は良い物が入ってますよ」

「じゃあ、決まりだな」

店主の話では、仕上がりには1ヶ月程掛かるようだ。前金に金貨1枚（20万円）払う。完成したら金貨2枚（40万円）だ。

プリムラの話では、普通の値段の模様。上限は無く、いくらでも積み増しが出来るという。

「けど、刺繍とかいれたくない？」

「質素の方が飽きがこないですから」

プリムラはそう言うのだが、刺繍を入れてもらうことにした。デザインを選んで注文する。

追加で金貨1枚——仕上がりが、さらに1ヶ月延びる。

まあ、仕方ない。せつかく高い金を払うんだ、良い物が欲しいじゃないか。

「そうだ、ここに組紐は売ってないか？」

「ございますよ」

「金糸を使った物が欲しい」

店主にサンプルを見せてもらう。黒い糸と金糸を組み合わせた物がいい感じなので、購入する事にする。

組紐は計り売りらしい。この組紐はベルのために購入するので、店主に測ってもらう。

「……あ、あの……」

だが、店主は森猫に近づくのを怖がっている。

まあ、チーターとか豹を飼っている奴に、「慣れているから、大丈夫だよ」と言われても近づき難いものがあるだろう。

「アネモネ代わってやってくれ」

「うん！」

アネモネが店主からメジャーらしき物をもらい、ベルの首周りを測っている。

「あの、金具もございますが……」

「いや、金具は手持ちがあるからな」

「承知いたしました」

金物は、シャングリ・ラで買ったほうが安いし、クオリティが高い。家に帰ったら首輪を作ってやろうと思う。

さて、買うものは全て買ったし、家に帰る事にするか！——といっても、家自体はアイテムBOXの中に入っているんだけどな。

皆で、車に乗り込み、アストランティアの街を後にする。

日が傾く頃——街道を走り川を渡り、家のあった場所へ帰ってきた。

夕日に染まりつつある鏡のような水面——やっぱり、ここの景色は美しい。

「やっと帰ってきた〜！」

アネモネの言葉と同時に、ベルが窓から飛び出した。早速、パトロールだろう。

車をアイテムBOXへ収納すると、家を元あった場所に召喚した。だが、位置合わせが中々難しい。全く同じ場所であっても構わないのだが、やはり気になる。

何回か繰り返し、妥協点を見つけた。

「ケンイチ！ あの女のベッドを片付けて！」
あの女ってのは子爵夫人の事だ。アネモネは夫人の事が嫌いらしい。

「そんなに嫌わなくてもいいじゃないか。友達もいなくて可哀想な人だろ？」

「友達なら私だっていなかったし！」

「君は弟妹がいたじゃないか。あの人は一人っ子らしいし」
そういえば、貴族で一人っ子は珍しくないか？ 普通は子供が多い印象があるが……。

「そうですねえ、普通はやっぱり子供が多いでしょうか……」

プリムラの話でも普通は5〜6人は子供がいるようだ。

だが、アネモネの言うとおり、夫人が寝ていたベッドは必要ない。片付ける事にする。

後のツリーハウスや、崖に登るための足場等は明日で良いだろう。

もう暗くなりそうだ、飯を食おう。

「何を食う？」

「カレー！」 「にゃー！」

「またかよ。いいけどさ」

時間がないので、レトルトにする。

だが、一手間加える事によって、レトルトもそれなりに美味くなる。

アイテムBOXに入っていた鳥肉を大鍋に取り出して野菜と一緒に炒める。鳥肉は獣人達が獲ってきてくれた物だ。

そして炒めながらアネモネの魔法を併用する。

「む、温め！」
ウオーム

これで簡単に火が通る。そして出汁の素を少々。
そしてレトルトカレーを鍋にあげて再び魔法で加熱すれば完成だ。
正確には、肉野菜炒めぶっかけカレーだけどな。それでも、レトルトカレー単体よりは数段美味くなる。

「もっと、大量にカレーを作ってアイテムBOXへ入れておけば良いんだが――それでも、あっという間になくなるからな」

「だって、美味しいし！」

「にゃー！」

「食おうぜ！」

「はい」

ベルの鑑札を取って、焼いた鳥肉と猫缶を開けてやる。ここじゃ、鑑札は必要ない。

俺とアネモネとプリムラはご飯。ミヤレーとニヤメナはシャングリ・ラのパンだ。

アネモネがパンを焼いている暇がなかったからな。

「うみゃー！」

「いつ食ってもウメエゼ！ たまんねえ」

「いろんな種類があるしね」

「何にでも合うしな」

「このご飯という穀物も美味しいですね」

プリムラもすっかり米派になってしまったようだが、食わず嫌いで、1度食べれば日本の米が美味しいのは解るだろうし。

ただ、炊きたての匂いは少々苦手のようだ。

「ケンイチ、子爵領の事で、父を頼っても良いですか？」

「ああ、構わんよ。人材を揃えるにも、ダリアの方が楽だろうし」
ダリアの方がデカいし、人口も多いからな。

アストランティアでは、コネもあまり無いだろうし。まあ、この商人からの反発も少々あるだろうが、子爵様直々のご指名なら逆らえまい。

まして、子爵様や役人が商人達の言いなりになっているのをいいことに、好き放題やってきたんだからな。
ここら辺で、ご退場願おうじゃないか。

食事も終わったので、風呂を設置する。

シャングリ・ラから『すのこ』を買って、その上に工事現場の森で使っていたFRP製の白い浴槽を2つ並べるのだ。

ドラム缶風呂のように入るのに苦労することもないし、皆と一緒に入れるからな。

水を入れるのは簡単。家の隣に流れている川に沈めて、それをアイテムBOXへ入れればいい。

そして、すのこの上に浴槽を設置すれば、準備完了だ。ここは近くに川も湖もあるから便利だ。

やっぱり、住処の近くに水があるってのは基本だな。

「アネモネ頼む」

「むゝ！ 温め！」
ウォーム

水はすぐに適温になり、風呂に入れるようになる。料理のように沸騰する温度まで上げる必要はないからな。

「ケンイチ、このお風呂もう1つないの？」

「そうか——3つあれば、皆で一緒に入れるな……よし！」

同じ浴槽をもう1つ買う。金はあるし余裕だ。すのこも追加で購入して、白い浴槽を3つ並べた。

「しかし、湯船に3つもお湯を沸かして平気か？」

「平気だよ、余裕！」

皆で素っ裸になって風呂へ入る。獣人達は毛が抜けるので、一緒の湯船だ。

相変わらず、押し合いへし合い、仲が良いのか悪いのか悪態をつきながら浸かっている。

アネモネはプリムラと——思ったのだが、俺の湯船に脚をいれてきた。

「プリムラと一緒に入りなさいよ」

「や！」

「アネモネ、何故当然のように、ケンイチと一緒に入るのです。私にだって、ケンイチと一緒に入る権利があるのですよ？」

バスタオルを巻いたプリムラの抗議を受けて、アネモネは口を尖らせる。

「むゝ」

アネモネは素っ裸のまま、外へ出るとプリムラと向き合い——気合をいれて、手の甲を突きだして、サインを出し始めた。

プリムラもそれに応える。どうやら、この世界のジャンケンらしい。

「「チ・チ・チ！」」

どうやら勝負がついたらしい。

「今夜は私の勝ちですわね」

負けたアネモネは、そのまま1人でドボンと湯船に飛び込んだ。入り方が乱暴なので、彼女が不機嫌なのが解る。

そして勝ったプリムラは、バスタオルを外すと俺の湯船に入ってきて、向かい側に座る。

「大人げないねえ」

「何をおっしゃいます。あれの日も来たのですから、もう立派な大人です。なれば、大人として扱ってやらないと」

「そうだなあ」

「ケンイチも、そう思っているから、彼女にパン作りや料理を任せ始めたのでしょうか？」

「まあ……」

彼女はそう言うのと、身体をクルリと回し、俺に背中をくっつけてきた。

俺も彼女を抱きかかえるように手を回す。

「あゝ！ プリムラ、くっつきすぎ！」

「今日は私が勝ったのですから、私の好きにします」

「むゝ！」

アネモネが湯船から出ると、俺の背中に強引に割り込もうとしてくる。

「ちょっとアネモネ、3人は無理だから止めなさい。お湯が溢れるだろ」

俺に窘められたアネモネは、黙って自分の湯船に戻った。

「そんなに胸が触りたいなら、私の胸を触ればいいのに……」
なにやら、アネモネがブツブツ言っているが、あえて無視する。

「……しかし、この開放感はやっぱ良いよな。森の中じゃ周りに人夫達が沢山いたから、こんな格好は無理だったし」

「ウチ等は関係にゃいけどにゃー」

「でも、獣人の男共が沢山覗きに來てただろ？」

「森猫に怒られて、すぐに來なくなっただにゃ」

さすがにスケベな男共も、神様の使いに怒られたら退散するしかない。

風呂から上がり、皆で家に入る。ニヤメナの家は設置してないで、今日も一緒だ。

そして俺は、テーブルを出して少々工作だ。

寝る前に、ベルの首輪に使う組紐の加工をする。シャングリ・ラで丁度良い金具を見つけた。

イヤホンジャックのように、スポツと差し込むとロックされる金具だ。

組紐の両端に、エポキシ接着剤を塗って金具に固定。

「アネモネ、ちょっとこの金具の所を魔法で乾燥させてくれ」

「むゝ！ 乾燥！^{ドライ}」

魔法が終わった後、強く引っ張ってみても紐は抜けてこない。完成だ。

全く、魔法ってのは便利だぜ。

70話 至高の障壁

約20日程の出稼ぎ工事の仕事を終えて、俺達は元の家があった場所へ帰ってきた。

戻ってきて解ったのだが、この場所はやはり落ち着く。

朝食を食べた後、色々と設置をし直す。

ツリーハウスを設置、崖を登る足場を設置、そしてニャメナの小屋を設置。

そうそう、太陽電池パネルも設置しなひとな。これがなくてもガソリン発電機があるので、それなりに生活出来てしまうのだが。

プリムラはニャメナと一緒に、子爵様の屋敷へ行っている。財務状態のチェックをするためだ。

以前は獣人を屋敷には入れてくれなかったが、俺の件以来、プリムラの護衛としてニャメナは屋敷に入れてもらえているようだ。屋敷内を自由に歩き回ったりは、させてもらえないようだ。

貴族と関わる事を避けていたが、やむを得ずここの領主夫人と付き合ってみて解った事がある。

この領地を治めるユーパトリウム子爵は、あまり頭の切れる人間ではないらしい。

夫人も世間知らずのお嬢様だしな。今、子爵領に群がっている虫達（商人）を排除出来れば、代わりに俺が色々と便利に使える寸法だ。

夫人が俺の名前を出したことで、他の貴族にも知られてしまっただろうが、ユーパトリウム領で保護されてる事になれば、他の貴族

は手出し出来ないだろう。

これは、いい隠れ蓑になる。色々としようもない事が続き呆れた水路工事だったが、棚から牡丹餅、瓢箪から駒だったかもしれない。

さて、貴族の事はプリムラに任せて、俺は畑をいじろう。

出かける時に、畑にトウモロコシを植えて、アネモネに魔法を掛けてもらったのだが、かなり良い感じに生育していた。

緑色に真っ直ぐに延びて、天辺には花が咲いている。こいつはスイートコーンなので、背は低い。

天辺に咲いているのが雄花で、ヒゲが生えているトウモロコシの部分が雌花。

北海道を回ると、背のデカイトウモロコシ畑を見かけるのだが、あれはデントコーンで家畜用だ。食ってもクソ不味い。

下にトウモロコシが3つ程出来かけているのだが、一番下を除き摘んでしまう。こうやって、1個だけに栄養を回して、糖度を上げるためだ。

ベルが、摘み取ったトウモロコシの山をクンカクンカしている。

「へえゝ変わっている植物だね！」

アネモネが不思議そうにトウモロコシを手にとっている。

「こういう穀物は見たことがないのか？」

「ない！」

「ウチもないにゃ」

この世界には、トウモロコシがないのかもしれない。デントコーンを売るだけでも儲かりそうだが……。

けど、種を渡したら、それっきりだな……うーん。珍しい植物だからといって、種だけで何千万円も出してくれそうにないしな。

周りの雑草を抜いて、追肥と水をタツプリとやる。滝から流れている川が近くにあるので、土が乾燥し過ぎるという事はないようだな。

「アネモネ、植物に魔法を頼む」

「むゝ！ 成長促進！^{グロウ}」

これを何回かやれば、すぐに食えるようになるかも。

「なんで、実を摘んでしまうにゃ？」

「1個に栄養を集めて、美味しくするためだよ」

「にゃゝ、そんな贅沢な事、普通は出来ないにゃ」

「そうだねー」

この世界の農法は、間引いたりせず結実させるだけ結実させる。ならば、市場で売っているリンカー等も、適度に間引いて栽培すれば、もっと大きくて美味しい実がなるのかもしれない。

「ミヤレー、森の中でリンカーの若木を見つけたら、掘ってきてくれないか？」

「家の近くに植えるにゃ？」

「ああ、あれは美味いからな」

あんな美味しい果実が、森の中に普通に生えているんだからな。

「解ったにゃ。でも、あれは虫だらけになるから、ちよつと家から離して植えたほうが良いにゃ」

「ほほう……」

とりあえず、栽培してみないと解らない事も沢山あるな。

木に虫除け魔石となると、ちよつと贅沢な気もするし……でも、マジで黒山の虫だらけになるようなら、魔石が必要になるか。

だが、トウモロコシを見ていたら、ポップコーンを思い出して食

べたくなった。

トウモロコシというと、網の上での焼きトウモロコシを想像するやつもいるかもしれないが、俺の地元じゃそんな食い方をするやつはいない。勿論、もちろん異論は認める。

シャングリ・ラを検索すると、業務用の爆裂種が売っている。これは買うっきゃない——1kgで500円だ。

ちよつと昼には早いが、食ってみよう。テーブルとカセットコンロをアイテムBOXから出して、フライパンにはバターをたっぷり。そこへ、爆裂種を投入する——量はテキトー。溶けたバターが種に絡むように揺する。

「この種を温めると、弾けて食べられるようになるんだよ」

「へえー！ それじゃ、魔法で温めてあげる」

「ちよつと、ま——」

俺が止めるより早く、アネモネが魔法を使ってしまった。

爆裂音と共に一瞬で全部の種が弾け飛んで、テーブルにポップコーンが溢れた。

「ふぎゃ！」

大きな音にミャレーが慌てて後方へジャンプして、毛を逆立てている。

ベルも驚いたのか、森の中へ隠れてしまった。

「なにこれ！ 面白ーい！」

「溢れてしまったが大丈夫だな」

大きな皿をアイテムBOXから出すと、ポップコーンを拾って入れ、俺も一口。

「うん、香ばしくて美味しい」

「美味しい！」

「にゃに？ 美味いにゃ？」

2人の言葉を聞いて、ミャレーがすぐに飛びついた。

「うみゃー！ 塩味だけど、これは香ばしくて美味しいにゃ！」

「美味しいよね！ これも、畑で作ってたトウモロコシって奴なの？」

「まあ、そうなんだが、ちょっと種類が違うんだ」

「ふーん」

アネモネは頷きながらも、むしろむしゃと、ポップコーンを食べ続けている。

「にゃ！ にゃ！ これは、美味しいけど、歯に何かが挟まるにゃ！」
口をモニョモニョしていたミャレーが、自分の爪で歯に詰まった物を取り始めた。凄く気になるらしい。

「プリムラとニャメナにも食べさせてあげたいから、もうちょっと作るか」

「私も、もっと食べたい！」

「解った解った」

彼女はポップコーンが気に入ったようだが。やめられない止まらない例のお菓子ではないが、単純だが後を引く美味さ。

沢山作ってもアイテムBOXへ入れておけば、いつでも美味しく食べられる。

大鍋で大量に作る事にした。爆裂種に熱したバターを絡ませて、アネモネの魔法で炙ればいいのだから簡単だ。

結果、大鍋に溢れるぐらいの大量のポップコーンが出来た。

戻ってきたベルにポップコーンを差し出して見たが、匂いを嗅ぐだけで食べなかった。どうもお気に召さないらしい。

残ったポップコーンをアイテムBOXへ収納、アネモネはミャレーと狩りにいくらしい。

さて、俺は工作でもするかな——議題は武器の拡充である。
アンホ爆薬を使って圧力鍋爆弾は強力で使えると判ったが、起爆
が困難。

起爆に必要な爆裂魔法エクスプロージョンを使えるアネモネがいないと、使えないの
である。

もう少し、簡単に使える物がほしい……となると、やはり黒色火
薬を使った手投げ弾だろう。

なにはともあれ、とりあえず試してみないとな。

シャングリ・ラから酸化剤となるゴニョゴニョを購入。こいつを
バラして、過塩素酸カリウムを取り出す。

よく黒色火薬に使われている硝石より、こいつで作った方が威力
がデカイ。

フヒヒ——ガキの頃から、こんな事ばかりしていたので、ここ
らへんの知識はばっちりよ。

爆発は男のロマン！ だからな。

そして、硫黄と木炭——この2つはシャングリ・ラでも普通に売
っている。

木炭はアルコールに浸けると、威力を増す事が出来るようなので、
試してみよう。

アネモネ達はいないので、デジタル秤を出して、正確に重さを量
る。火薬は混合の比率が大事。

大量に作ると、事故った時に大変な事になるので、小分けにして
使わない分はすぐにアイテムBOXへ入れる。

これで安全だ。とにかく、アイテムBOXへ入れておけば、爆発
する事はない。

火薬はこら辺が怖いんだよね。静電気でも発火する事もあるし、
油断は出来ない。

爆薬やら作って、自爆で部屋を吹き飛ばすなんてネタはいくらでもある。

とりあえず完成したので、点火実験を試みる。

テーブルの上にステンレスの皿を置いて、その上に完成した黒色火薬。そして、そこへ火を近づけると――。

「おっ！」

赤い炎を上げて、一瞬で火薬が燃え上がり、白い煙がモウモウと舞い上がる。そして漂う硝煙の匂い。

よっしゃ！ 上手くいった。

さて、点火はどうだろうか……普通に導火線でも良いんだが、もっと使い勝手を良くしたい。

うーん、ここはタイマー点火だな。

使うのは1.5Vの豆電球。まずは、こいつのガラスを割る。そして、剥き出しになったフィラメントに火薬をまぶし、乾電池へ繋ぐ。

すると赤い炎が上がる――こいつを点火線に使えばいい。

そしてタイマーは、シャングリ・ラに売っている普通のデジタル式のキッチンタイマーを使う――800円。

こいつはボタンで時間をセットして、ゼロになるとアラームに電流が流れて音が鳴る仕掛けだ。

そのアラームの接点から豆電球へ線を引き出せばいい。そうすれば、タイマーがゼロになった時に起爆が出来る。

デジタルタイマーなら、時間は正確だ。しかも1秒単位で指定可能。最長で……最長で何分だ？

ちよっと試してみる――99分みたいだな。1時間39分だ。9分の次は00に戻ってしまった。こういう仕様なのだろう。

少々長めに時間をセットして、陽動等にも使えるかもしれない。

問題は手投げ弾の本体だ。シャングリ・ラを検索すると、鉄製の手榴弾の複製が売っていた。

試しに購入してみる。実物から型を取った物らしいが火薬を入れるスペースがあまりない。

うーん……しばし悩んだが、足場を作る際に使った単管パイプを切断して、その中に火薬を詰める事にした。

パイプの両端を塞ぐために、溶接機を購入——8万5千円。

そして鉄板を使って蓋を作るために必要なプラズマ切断機を購入——コンプレッサー内蔵タイプでこいつも8万5千円也。

溶接機は使った事があったが、半自動溶接機は初めてだ。それに、プラズマ切断機は初体験。

恐る恐る、鉄板に切断機のノズルを当てて、トリガーを引くと、青い閃光と共にシャワーのように火花が飛び散る。

「こりゃ、すげえ！ 鉄板が紙みたいに切れるわ」

しかし、鉄板を丸く切るのが難しい。だが、ノズルを固定して、鉄板をクルクルと回せばいいんだ。

一緒に溶接用の自動遮光面を購入。窓が液晶で強い光を感知すると自動で暗くなって遮光してくれる——1万円だ。

元世界で欲しかった工具が色々と買える。こりゃ、たまらん。もう無駄遣いしまくりである。

普通ならこんなに買い込んだら、小屋の中が一杯になってしまうが、アイテムBOXに入ればそんな心配もない。

ああ、ここまで来たら旋盤とフライス盤も欲しいな……色々欲しい物が増えてしまうが、それは後回しだ。

溶接機を使って単管パイプの両端を塞いだら、シャングリ・ラでボール盤を購入

ボルト用の穴を開けてネジ穴をタップで切り――そして、ボルトに縦に貫通する穴を開ける。

ボール盤は少々高いが、日本メーカー物を購入。

安い彼の国製もあるのだが、ベアリングがすぐに死んだり精度が悪くて、結局最初から高い物を買った方が外れない。

ボルトに開けた穴に豆電球を使った点火線を通して、エポキシパテで固定。

手投げ弾に火薬をいれて、点火線のボルトをねじ込めば、起爆完了だ。

タイマーで時間をセットして、スタートボタンを押す。そして、表示されている数字がゼロになれば爆発するわけだ。

作業に熱中しすぎて、辺りは日が傾いていた。

子爵邸へ行っていた、プリムラ達も戻ってきてしまった。

「ただいま戻りました」

「旦那あ、また何か怪しい事をしているのかい？」

「新しい武器の開発だ」

「武器？ その、変なのが？」

ニャメナが、テーブルの上に乗っている怪しげな異形に、訝しげな視線を送っている。

「にゃー！ 帰ってきたにゃー！」

「戻ったよ」

アネモネとミャレーも戻ってきてしまったが、一発だけテストをしたい。

アイテムBOXから、ポリカーボネートの盾を取り出す。

「皆、危ないから、この盾の中に隠れてくれ」

「にゃ？」

タイマーをもう1個購入——手投げ弾のタイマーも1分にセットして、100m程離れた森の中にあった木のウロに手投げ弾を仕掛けて、スタートボタンを2個同時に押す。

そして、全力で戻ると、皆と一緒に地面へ伏せた。

「旦那、なんだってんだい？」

「錬金術を使った、爆裂魔法だよ」
エクスプロージョン

「この前のやつと似たようなやつにゃ？」

「今度のは、アネモネの魔法がなくても、爆発するんだ」

手持ちのタイマーは時間を刻んでいく——30秒——10秒。

「5、4、3、2、1——」

大音響と共に木の幹が木っ端微塵に吹き飛んで、バキバキという音を立てながら倒れこんだ。

「よっしゃ！ 成功だ！ こいつは使える！」

本番では、圧力鍋爆弾と同じように、パイプの周りに鉄釘を巻けば殺傷能力をアップ出来る。

「魔法にゃ?!」

「ひょえーなんだよこれ?!」

「魔力がなくても爆発するから、獣人にも使えるぞ？ お前等にも使い方を教えてやる」

「ええー、そんな怖いのは要らないよ。持ってて爆発したら、バラバラになっちまうじゃないか」

「まあ、それが無いとは言えないが」

「にゃー、ウチも要らないにゃー」

「じゃあ、戦闘の前に配るから、使い方だけ教えておくよ」

「「……」」

どうも獣人達は、この新型兵器を信用していないらしい。
まあ未知の技術だし、わけがわからない物を使いたくないっていう気持ちは、理解出来るけどな。

皆で夕飯の支度をして、食事を取る。

食事をしながら、プリムラに子爵邸の様子を聞いてみた。

「思った以上に酷くて……大変でした」

彼女の話では、商人からの物資購入予算は彼等の言いなり——帳簿に記載されていない物も沢山あって、物資が横流しされていたようだ。

その事を、子爵夫人に報告すると、財務担当の役人は即時に解雇された模様。

コネやら何やらで雇った、貴族の子息連中だろうが、犯罪をしていたとなれば、解雇は当然。処刑されて財産没収されないだけマシと考えねばならない。

とてもじゃないが、プリムラー1人ではどうしようもないので、予定通りに商業ギルドを通じて、ダリアのマロウ商会に応援を頼んだらしい。

「あの夫人や子爵様も、そういう業務を全く見ていなかったみたいだしなあ」

「そうみたいですわ。全部を部下に任せっきりだったようです」

「よく、行政が破綻しなかったな」

「それは、本体を殺す程の血を吸い取ってしまえば、寄生虫も死んでしまいますからね」

「生かさず殺さずってやつか……」

不正が正されて、予算が他にも回せるようになれば、色々と行政で出来る事が増えるかも。

これがきっかけで、アストランティアの街も、もう少し発展する

かもしれないな。

—— — — — — ◆ ◆ — — — — —

——1週間後。

プリムラ達と一緒に街へ行って婆さんの道具屋に顔を出すと、魔導書の名義変更が終わっていた。

そして、魔導書をもらった俺は、すぐに家に帰ってきた。

この魔導書をアネモネが待ち焦がれているからだ。早く使ってみたいのだろう。

オフロードバイクで森を抜けると、アネモネとベルが待ち構えていた。

「魔導書は持ってきた？」

「ああ、名義変更は終わってたよ」

「やったあ！」

「しかし、高価な珍しい魔導書を入手出来ても、使えるとは限らないんだぞ？」

RPGでいうところの魔力が足りないとか、適性がないとか——使えない理由は色々ある。

俺なんて、シャングリ・ラ以外は全く使えないしな。

「うん、わかってるよ」

アネモネに魔導書を渡すと、両手でそれを天に掲げた。

「わあ！」

それを胸に抱えたまま、広い場所へ走っていくと本を広げた。その後ろでベルが見守るように座っている。

「おい、いきなり使うのか？」

「どうしたにゃ？」

ミヤレーが俺達の声聞いて、駆け寄ってきた。

「アネモネが、至高ハイプロテクションの障壁の魔法を使うらしい」

「使えるにゃ？」

「さあ——やってみない事には、なんともなあ」

アネモネの胸の辺りが青く光り、煌めく光点が無数に集まってくる。何か——ゆらゆらと空間が揺れて見えるのは気のせいかな？

『万物の源たる光の礫つぶよ、私の呼びかけに応え、等しき並びをもつて、仇なす力を遮る盾となれ——至高ハイプロテクションの障壁！』

光の点が立方体を重ねる積み木のように並び、それが消えるとかうっすらと透明な壁のような物があるように見える。

心なしか、空間も歪んで見えるのだが——光の屈折率が変化しているとか？

「成功したのか？」

「にゃ？」

俺は地面に転がっている石を拾うと、アネモネの方へ向かって投げしてみた。

——すると、音も無く石が静止して、ポトリと地面へ落ちた。

「すげえ！ バリアだよ、バリア」

「にゃ？ にゃんだそれ？」

「いや、コッチの話」

俺は、コ○ツさんを召喚した。

目の前に現れた重機に乗り込むと、エンジンを始動させる。

「見せてもらおうか、至高ハイプロテクションの障壁の実力とやらを！」

俺は、レバーを操作してコ○ツさんのアームを高く掲げると、見

えないバリアらしき物に振り下ろした。

「コ○ツアタック！」

——だが、鋼鉄の巨大なバケットは音も立てずに、何かに阻まれるように静止。

再度、振り上げて攻撃をしても、同じ結果となった。

「すげええ！　これなら、マジでドラゴンの攻撃でも耐えられるかも！」

俺が重機から降りて、アイテムBOXへ収納すると、アネモネが力尽きたように膝をついた。

それと同時に見えない壁は消失したようである。

「アネモネ大丈夫か？」

俺がアネモネに駆け寄ると、彼女はベルに抱きついていていた。

「ハアハア……うん、大丈夫だよ」

「凄いな！　本当に、こんな凄い防御魔法が使えるなんて」

「にゃー！　こりやもう、大魔導師並にゃー！」

「そうそう、ニャメナは大魔導師がアキメネスで使ったって言うってたよな」

俺達がアネモネの魔法の成功を喜んでいると、一台の馬車が湖畔に現れたのだ。

どうやら、川を渡ってきたらしい。まあ大きな馬車なら超えられる深さではあるが、中々豪快だな。

ボディをエンジ色に塗られた中々凝った作りの、4頭立ての大型馬車だ。

しかし、この馬車って何処かで見たような……。

その馬車から降り立つ2人の男。

草色の上下に、馬車と同じエンジ色のベストを着て、口髭を蓄えた初老の男性。

そしてもう一人は、深緑色のローブを着た、白髪の長いヒゲの老人――。

「マロウさん！ 爺さん！」

俺は、彼等の下へ走りだしていた。

71話 異世界で親戚ができた

俺の家にやって来た一台の馬車。

見たことがあるなうと思ってたら、降りてきたのはマロウさんと、ダリアの道具屋の爺さんだった。

「マロウさん！ 爺さん！」

俺は、彼等の下へ走り寄った。

「ケンイチさん！ お久しぶりです」

「マロウさんもお元気そうで」

「この！ 薄情者が！」

いきなり爺さんが持っていた杖を振り回して怒りだした。

「爺さん怒るなよ。これでも悪いと思ってるんだから」

「全く、お前さんには、冒険者ギルドの重職をやってもらおうと思っておったんじゃ。それがいきなりいなくなるとは、わしの面子が丸潰れだったぞ？」

「ええ？ 嫌だよ、そんな仕事は。俺は気ままに生きたいの。畑やったり、魔法や錬金術の研究したりとな」

「まったく、最近の若いもんは……」

「俺は若くねえけど」

「余計悪いわい！」

爺さんは下を向いてブツブツ言っているのだが、耳を立ててみると、「魔導師は奇人変人揃い」とかなんとか聞こえる――。

「爺さんだって、その奇人変人の魔導師だろ？ おまけに偏屈とき

た」

「うぐ……うぐぐ……」

「マロウさんとは、正式にお話をしなくてはなりません」

彼等を家の前まで連れてきて、パラソルとテーブル、そして椅子を出す。

「これは……？」

「日除けですよ。天気の良い日に外でじっとしていると、日焼けをしてしまうじゃありませんか」

ちなみに、この世界に傘はない。それ故、日傘もないから、こういった物を見るのも初めてなのかもしれない。

「なるほど……天幕は張るのが面倒だが、これならば……」

考えこむマロウさんだが、多分商売の事を考えているのだろう、その仕草がプリムラそっくりだ。

そして、立ち上がると、パラソルを開いたり閉じたりし始めた。

「いやいや、とりあえずマロウさん、お座りください」

商売の事になると、周りが見えなくなる。これもプリムラそっくり。

「ああ、これは失礼いたしました」

彼が椅子に座り、落ち着いたところで、話し始めた。

「マロウさん、プリムラー——いやお嬢さんを私にください」

まさか、この歳になるまで女には全く縁がなかったのに、こんなセリフを言う事になるとはなあ——しかも異世界で。

どうしてこうなった。

「はは……さしあげるも何も、娘は貴方の所へ押しかけてしまつて

いるではありませんか。全くもって我儘わがままな娘で申し訳ない」

あれ？ 嫌味の一つでも言われるかと思ったが、そうでもなかったか。

だが、俺みたいなオッサンに最愛の娘を取られる、彼の心境は如何に……。

「それでも、私と一緒に暮らしていますから、父親であるマロウさんのお許しが必要です。ノースポール男爵様との婚姻も蹴ってしまったそうじゃないですか」

「全く困った娘です。しかし、さすが我が娘、色恋沙汰で我を失っているかと思いきや、金の匂いには敏感なようで安心いたしました」
「それは、この子爵様関係の話ですか？」

「そうですとも。結局、娘の選択は間違ってた事になりますなあ」

やれやれと笑うマロウさんの話では、わざわざ彼がアストランティアまでやって来たのは、商会の支店を出すためだと言う。

ユーパトリウム子爵領の中枢へ人材を送り込み、経済的にこの領を押さえる腹のようだ。

子爵夫人も、自らを騙していたアストランティアの商人達に見切りをつけて、マロウ商会を受け入れるつもりでいる。

子爵領の経営を立て直すには、どうしてもマロウ商会の力が必要になるだろう。

「それでは、お義父さんと呼ばせていただいても」

「この歳で息子が出来るとは……妻と死別して十余年、男手一つで娘を育ててまいりましたが、あの娘にも寂しい思いをさせたと思います」

「お義父さん！」

ちよっと、芝居掛かっているが……まあ、たまにはいいだろう。

彼と固い握手を交わす。そして親子になったのだから、俺の魔法

の秘密を教える。顔を寄せて、ヒソヒソ話だ。

教えると言っても、シャングリ・ラの事を言うわけではない。商品魔法を使って作っている——と簡単に説明するだけだ。

どうせ、シャングリ・ラとアイテムBOXの区別は外からは解らないのだ。

「え？ 魔法で商品を？」

「そうです。価値のある物と交換したり、作り出したり出来るのです。プリムラには説明してあります」

「むう——そんな魔法があるとは、もし王侯貴族達に知られたりすれば……」

「私が逃げた理由はそんな訳でして……」
「なるほど」

腕を組んでいるマロウさんであったが、とりあえず洗濯バサミが欲しいという。俺がいなくなった事で、売れ筋の商品の仕入れが途絶えてしまったのだ。

職人に試作をさせているのだが、中々に難しいという。そりゃ、機械による大量生産品に家内制手工業じゃ太刀打ち出来ないだろう。

「お前さん、魔法の研究と言っておったが、さっきの膨大な魔力の流れはなんじゃ？」

マロウさんと俺との会話が一段落したところで、爺さんが会話に割って入ってきた。

そうか——普通の魔法を使える魔導師なら、そんな感じで解るんだな。

それじゃ、重機召喚が魔法じゃないってバレてるかもしれない。少なくとも、この爺さんは疑ってた。

「魔法の実験をしていたんだよ」

「ほう？ どんな魔法じゃ」

「至高の障壁だよ」
ハイプロテクション

「なんじゃと！ 至高の障壁？ お前さんがか？」
ハイプロテクション

「いや、彼女だよ」

魔導書を抱えたまま少し離れた場所からこちらを窺っていたアネモネを指さす。

「あの少女は——シャガの所から救い出してきた子供じゃろ？」

「そうなんだが、とんでもない魔法の才能があつてな。憤怒の炎も
ファイヤーボール
爆裂魔法も使いこなして、今日至高の障壁をも起動させてみせた」
エクスプロージョン

「信じられん！ あのような子供が……」

俺が、アネモネを呼ぶと、魔導書を受け取る。

「ほら、爺さんも見てみるかい？」

「これが……至高の障壁……わしも初めて見るわい。婆さんが、こ
ハイプロテクション
の魔導書を見つけたと手紙に書いてよこしたが……」

「おおい！ 客の個人情報が駄々漏れか？ まあ、俺が持っている
とは書いていなかったようだが……」

「婆さんってスノーフレーク婆さんだろ？」

「そうじゃ、お前さんと知り合いだと聞いてびっくりじゃ」

「こっちだって、あの婆さんが爺さんと知り合いだと聞いて、驚いたぜ。それで——爺さんは試してみないのかい？」

「はは、わしじゃ無理だろう……この歳になれば、自分の力の把握
ぐらいは出来ておる」

爺さんがパラパラと魔導書をめくっていると、最終ページらしき
ところで止まった。

「どうした？ 爺さん？」

「この隅に何か書いてあるの——これは魔導文字じゃが、ええい
よく読めん」

爺さんが目をしばしばさせて、本を離したり近づけたりしている。多分、老眼だろう。

俺はシャングリ・ラで老眼鏡を検索した。1000〜2000円ぐらいだな。かなり目は悪そうなので、+3という物を購入する。

「爺さん、こいつを掛けてみる」

「これは……目ガラスかの？」

この世界でもメガネを見たので、存在はしているようだが、爺さんは持っていないようだ。

「おおっ！ こいつはよく見えるわい！」

「そいつをやるから、文字を読んでくれ」

爺さんの話では、魔導文字——普通の書き文字と違い、魔導師が暗号に使ったりする文字らしい。

「なんて書いてあるんだ？」

「うゝむ、かすれてて、よく読めんが——『我が娘アネモネに贈る、縁があれば……巡りあう事でしょう』——と書いてあるかの」
えに

「アネモネって、うちのアネモネの事か？」

「さあ？ どうかの？」

爺さんは魔導書を閉じるとテーブルの上にメガネと一緒に置き、長いヒゲを撫なでている。

「あの子は、行き倒れの女性から農家が引き取って育てていたらしいんだよ」

「なんじゃと……それでは、あの娘の親が魔導師という可能性があるのか？ いや、至高の障壁ハイプロテクションを使える程の才能を持つておるなら、間違いないじゃろうが……」

「婆さんの話では、白金のアルメリアって女性の可能性が高いんじゃないかと」

「ほう、アルメリアか？ 確かに、あの女は十数年前こちら辺を訪れて、それ以来消息不明ではあるが……まさか」

「まあな、証拠はないんだが……」

アネモネをこちらに呼ぶと、魔導書を見せる。

「なあに？」

「ここに、『我が娘アネモネへ贈る』——と書いてあるそうなんだ」
「……」

「つまり、君の本当のお母さんが魔導師なら、もしかしてこの魔導書は、君のお母さんの持ち物だったかもしれない」

「本当に？」

「まあ、確証は何もないんだけどね」

「……うん、解った」

彼女は、なんとも言えない表情をしている、嬉しいのだろうか？
まあ、一度も会った事がない母親の事だろうしなあ……。

マロウさんは、支店を出すための不動産の購入や立ち上げの準備のため、アストランティアへしばらく滞在する予定だと言う。

ここへやって来たのは、この馬車1台であるが、アストランティアには5台の馬車が人材と物資を乗せて向かっているらしい。

マロウさん本気だな。とりあえず、デカイ麻袋に3つ程、山盛りの洗濯バサミを渡してやる。

そして、アストランティアに出来る支店から、定期的に商品を送る事になった。

爺さんは俺に会いに来たのと、噂の至高の障壁の魔導書を見に来たらしいのだが、俺が持っているとは思わなかったらしい。

「爺さんもマロウさんと一緒にアストランティアへ滞在する予定なのか？」

「そうじゃの、こちら辺で婆さんにも会っておかんと、今生の別れ

になるかもしれぬし」

「2人共、まだまだ長生きしそうだけど……」

「人生ってのは一寸先は闇だぞ？」

まあ、アネモネの母親って女性も旅路で命を落としてしまったようだしなあ。

マロウさんの馬車がここを出発した後、そのまま夕方になり、ニヤメナだけが帰ってきた。

「ニヤメナ、プリムラは？」

「お嬢の親父さんがやって来て、一緒に宿屋に泊まるって言ってた」「ああ多分、支店や子爵領の財務の打ち合わせやらをするんだろう」「はあ、旦那も凄いけど、お嬢も凄いよ、ドンドンいろんな事が決まっていって目が回る。あんなのを見ると獣人に商売は絶対に無理って解るよな」

「商売やっている獣人ってのはいないのか？」

「聞いた事がないねえ。皆が日銭を稼いで、その日暮らしが普通さ」プリムラがいないので、スープをアネモネに作らせて、パンはシヤングリ・ラの物を食べる事にした。

俺は肉を焼いて、炒めものを作ろう。

ミャレーが採ってきてくれた山菜の茎を重曹でアク抜きして食べやすい大きさに刻む。

油揚げとさつま揚げをシヤングリ・ラで購入して、これも短冊形にカット。油揚げは油抜きした方がいい。

それらをフライパンで炒めて、出汁の素を少々——最後にメ○ミで味付けして完成。

メ○ミってのは度々、俺が料理で使っているが、地元で味付けに使われている『めんつゆ』みたいな物。

最近、獣人達も醤油の味に慣れてきているので、大丈夫だろう。

生醤油は未だにダメみたいだが。

いつものように外にテーブルを出して、夕食を食べる。

「ぷはー！ うめえ！」

ニャメナが、焼酎を飲んで炒めものを酒の肴にしている。醤油系の炒めものにワインは合わないからな。

「今日の料理は……凄く美味いってわけじゃないけど、なんだかほつとする味だな」

「これは、俺の地元で普通に食われてた惣菜だよ」

「この茶色いのは？ なんか魚っぽいけど……」

「魚のすり身を固めて蒸して、油で揚げた物だな」

「こっちの黄色いのは？」

「そりゃ、油揚げだ。」

「豆を煮て、そいつをすり潰して絞った汁を固めた物を、最後に油で揚げた物だな」

「なんで、そんなに手間暇掛けた食材ばかりが、アイテムBOXに入っているんだい？」

「なんでって——そりゃ、美味いからだよ。お前等があまり好きじゃない、豆を発酵させたソースだって、半年から1年ぐらい掛けて作るし」

「はあ……」

彼女が焼酎を入ったグラスをテーブルに置くと、うなだれる。

「ニャメナが溜息をつく事はないだろ」

「俺は呆れてるんだよ」

「美味けりゃ、なんでもいいにゃ」

ミャレーは美味けりゃいいタイプなのだが、ニャメナは色々と気になる性格のようだ。

普段の行動をみていると、ニヤメナのほうが大雑把そうに見えるんだが、意外と細かい。

「アネモネが作ってくれたスープも美味しいな」

「えへへ……がんばったよ」

彼女は、普段と変わらないように見えるのだが。

「アネモネ、本当のお母さんの事、気になるか？」

「ううん、だって全然覚えていないし……」

まあ、前に話が少し出た時もこんな感じだったな。本人が気にしていないなら、触らない方がいいか。

今頃、プリムラは親子水入らずか——それとも、喧々囂々の大論争か。

明日、ニヤメナは1人で出かけて、子爵様の屋敷でプリムラと合流する予定のようだ。

— — — — — ◆ ◆ — — — — —

——それから1週間程、マロウさんは、アストランティアで支店の立ち上げに奮闘しているようだ。

プリムラは、マロウさんが引き連れてきた部下を使って、子爵領の財務の洗い出しを行っている。

そんな忙しい日々を過ごしている彼女は3日にいっぺんしか、家に帰ってこなかった。

帰ってきた彼女を見れば、かなり疲れているように見える。彼女は大丈夫だと言うのだが……。

そして朝、皆で朝食の準備中——アネモネはパンを焼き、プリムラはスープの調理。

「プリムラ大丈夫なのか？ 凄く疲れているように見えるが……俺が代わろうか？」

「大丈夫です。仕事はたいした事はないのですが、父と喧嘩をしてしまっ……」

「ええ？ お義父さん？ 君がマロウ商会の事に口を出すはずも無いし、マロウさんも子爵領の話には口は突っ込まないだろう？」

「――となると、俺の事が原因か？」

「……」

黙っている彼女を見れば、凶星なのだろう。

疲れている彼女のために、シャングリ・ラでユ○ケル液を購入する――1本2000円する高級なやつだ。

しかし値段を見てみると特価で2000円だが、定価だと4000円以上するじゃねえか。

こんなのマジで飲む人いるのか？ でも、ドラッグストアに行くといろんな種類が売っているからなあ……飲む人いるんだろうな。

「プリムラこれを飲め」

「これは？」

「疲れているようだから滋養強壮薬、1本小四角銀貨4枚（2万円）ぐらいする」

いろんな物をシャングリ・ラから購入して、街の物価と照らし合わせてところ、最低でもネットの値段の10倍が街の物価に近い。

「えっ!？」

「まあ飲んでよ。多分、不味いとは思うけど」

スクリューキャップを取り俺が差し出した小瓶を、彼女は受け取ると一口呷あおった。

なんか複雑な表情をしているのだが、残りを一気に飲み干した。

「飲めない事はありません——というか、普通に飲める味です。泥を舐めているような、もっと酷い薬も飲んだ事があるので余裕です！」

プリムラが握りこぶしを作って、『ふんす！ ふんす！』と気合を入れている。まあ、そんなすぐに効くはずがないのであるが。

「お義父さんと何で揉めたんだ？」

「父が……貴方を利用しようとしているようで……」

「それは仕方ないだろう。娘の婿になった俺は、お義父さんの息子だ。息子を当てにするのは仕方ない事だろう？」

「でも……」

彼女は、心ここにあらずといった感じで、スープをただひたすらにかき回している。

「それに君だって、最後は俺をマロウ商会に連れて帰ると言っていたじゃないか」

「そうですが……ケンイチと一緒に住んでみて、そういう人じゃないんじゃないかと思いはじめて」

「まあ、確かに。商人はついでで、金があれば働かないし——魔導や錬金の研究をしたいし、絵も描きたい」

「アマナさんも言っていましたけど、そういう人は物事が面倒になると、突然いなくなってしまうのでは——と」

「実際に1回やらかしているからなあ……無いとは言えない」
くそ、あのアマナめ。的確に俺のことを分析しやがって。

「それでも私は、貴方に付いていきますけどね」

「はは、解った解った——今度は置いていかないから」

「むう……くつつきすぎ！」

いつの間にかアネモネが、俺とプリムラの間に入ってきて、2人を押しのけた。

「面倒臭くない程度には利用されてもいいよ。俺は、ガキがそのまま歳を食ったような、しょうもない大人だが、そのぐらいの親戚付き合いは理解出来る」

「そんな事はないと思うのですが……」

「ははは——ただ商売の実務は勘弁な。俺は、基本どんぶり勘定で、本当は商売が苦手なんだから。そうお義父さんにも言っておいてくれ」

「解りました——それにしても、ケンイチが独自魔法使いだと解った途端に集まってくる人が多くて……」

「そりゃ、そうさ。何と言っても金になる」

金に人は集まる。だが、そういう連中は金がなくなると、Gのようにマッハでいなくなるからな。

「そうですけど……」

「夫人が『独自魔法使いは奇人変人』って言ってたが——何かある度に呼び出されて、金儲けに利用されりゃ、そりゃ人間不信や人間嫌いにもなるだろ」

「ケンイチが、そうなるのではないかと心配です」

「はは、俺は君がいるから大丈夫さ——さあ、食事しよう」
心なしか、プリムラの表情も明るくなったような。

プリムラとニヤメナを街へ送り出して、ミヤレーとアネモネは崖の上に登った。

俺は、湖畔にまたパラソルとデッキチェアを出して、のんびりしながら電子書籍を読む。

しかし、人付き合いが増えると、柵しがらみも増えるねえ——まあ、しょうがないといえ、しょうがないけど。

かといって、プリムラがシャガに捕まった時に、あのままトング

ラ出来たか？　　っていえば出来ないよな、やっぱり。

何の力も無く、マジでタダのオッサンのまま、この世界へやって来ていたなら躊躇しただろうけどな。

――――◇◇――――

――そして、昼すぎ。

アネモネとミャレーとで軽く食事を取った後、2台の馬車が湖畔へ入ってきた。

一台は、エンジ色でマロウさんの馬車だろうが、荷台にニヤメナが乗っている――ということは、プリムラも一緒に戻ってきたのかもしれない。

もう一台の白い馬車は……結構豪華な2頭立ての馬車だ。おそらく貴族仕様――ということは子爵夫人か？

馬車から降りてきたのは、マロウさんと道具屋の爺さん。そして、やはりプリムラも一緒だった。

そして白い馬車からは、俺の予想通り子爵夫人と――青い服を着て、短い茶色の頭をした小太りの男性。

なんか、ここから見ても普通の男って感じなのだが、もしかしてあの男がここの領主様か？

子爵夫人が、手を取って寄り添っているので、多分そうなんだろうなあ。

72話 子爵様がやって来た

俺の家にまた来客だ。

マロウさんと爺さん、そして白い立派な馬車から降りてきたのは、子爵夫人と、少々小太りの男。

夫人と一緒にいるという事は、この男がユーパトリウム子爵だと思われる。

子爵様の護衛に、前に来た女の魔導師と若い男の騎士がいる。黒狼に齧^{かじ}られた、金髪の小僧はいないらしい——クビになったかな？

相手が貴族となれば、出迎えないわけにはいかんだろう。その男の下へ向かう。

「よくぞ、このような所までお越しいただきました。ここの長をやっております、商人のケンイチと申します」

「まだ、商人だと言っているのか？」

夫人から物言いが付いたのだが、マジで一応商人だし。

「本当に商人でございますから」

「ガラム・ド・ユーパトリウム子爵です」

青い服を着て短い茶色の頭をした小太りの男性が胸を張る。

「お目にかかれて光栄で御座います」

「うむ」

さすがに、貴族らしい上等な服を着ているのだが、凄く普通そうな人だ。

歳は俺より、ちょっと上ぐらいだな……多分、服装を変えたら貴

族だって解らないかもしれない。

子爵に事情を話し、外にテーブルを出す。椅子は――どうしようか。子爵にいつものスツールとかは拙いまずよな。

シャングリ・ラを検索、木製のダイニングチェア2脚セットが売っていたので、こいつを購入してみた――7800円である。

テーブルに子爵と夫人、そしてマロウさんと爺さんが座り、プリムラは俺の後ろに立つ。

子爵の横には騎士と魔導師の護衛が立っているのだが、その後ろには何やら荷物を持った男がいる。

「今日は皆様お揃いで、どのようなご用件で？」

「ケンイチ殿！ 私は、前に食べた柔らかくて甘いのが食したいのだがの！」

「はいはい、プリンですね」

「子爵様は、甘い物はいかがですか？」

「いや、私は甘い物は……ちょっと苦手なのですが」

そうなのか――ぱっと見、好きそうな感じなのだが……。それじゃ子爵様には茶碗蒸しを出そう。

最近、リクエストが多いので、作り溜めをしてあるのだ。どうせ蒸し器を使うなら大量に作った方がいいしな。

蒸し器を縦に積み重ねれば、蒸す量も増やせるし。皆に、カスタードプリンと、フルーツ牛乳を出す。

「おおっ！ これだ！ この味だ！」

「ケンイチさん、これは？ 今まで食べたことがない食感だ。官能的ですらある」

「お義父さん、息子なのでですから呼び捨てで構いませんよ。それは卵を牛乳で溶いて、蒸して固めた物です」

「ほほう、ゆで卵や卵焼きを甘くして固めたような物か。誰もが考えつきそうなのだが、誰も作っておらんかったの」

長く生きて、あちこちに顔が利く爺さんも食べた事がないって事は、プリンに似た食べ物はこの辺には無いって事になるか。

「こ、これは！ 確かに甘くないし、食べたこともない料理です。しかも絶品……」

子爵様が、茶碗蒸しを食べたまま固まっている。

「子爵様の物は牛乳ではなく、スープで溶いて蒸して固めた物で御座います」

「そして、中には数々の具材が入ってるようですが」

「中身は、鳥肉、魚のすり身を加工したもの、木の実、キノコで御座います」

「よくもまあ、この器の中にこれだけの物を詰め込んだものですね……まるで、この世界を圧縮したような……」

「家人も似たような事を申しております」

「カナンが賢者と申すのもあながち間違いではないというわけですね」

「賢者じゃと？」

子爵の言葉を聞いた爺さんが、スプーンを咥えて俺の方を見る。

「ははは、爺さん。皆が俺の事を賢者だと言うんだよ」

「確かにお前さんの、その知識量には舌を巻くが……」

「そんな事はないさ、知らない事は沢山あるぞ。田舎育ちだから、この王国の各都市の事は全く知らないし」

「カナンの話では、ケンイチ殿はチーズの作り方もご存知だったとか」

「何？ チーズじゃと？！」

爺さんがプリンを吐き出しそうになる。

「ケンイチ殿の製法でチーズが作れるのを確認いたしましたので、

マロウ商会と組んでアストランティアの大きな産業にしようという話なのですよ」

「その通りです」

「なんとまあ、信じられぬわい」

子爵とマロウさんとの間で、そこまで決まっているようだ。

まあ、俺はマロウさんの義理の息子だ、息子が発明した物なら気兼ねなく使えるって事だろう。

こちら辺の話がでて、マロウさんとプリムラの言い争いになったのかもしれないな。

「おい、荷物をこちらに」

「ははっ」

子爵の言葉に、供の者が持っていた荷物が開けられる。

そして、子爵に渡されたのは本らしき物——それって、わら半紙みたいな。

「この本の販売経路を探ったところ、出処がプリムラ嬢の店と解りましたが、ケンイチ殿が作った物ですか？」

子爵が見せてきたのは、俺が作り、プリムラが街で売った本『森のエルフ』。

「ええ、まあ」

「これは、文章も絵もペンで書いた物ではありませんし、版画でもありません。いったい、どうやってこのような物を？」

子爵に話を聞くと、彼は物語や絵を描いたりするのが好きな——いわゆる所謂、こっち側の人間。

領の経営そっちのけで、そんな事ばかりをやっていたようで、全部を人任せにしていたため、財務が傾いてしまったらしい。

少し悩んだが、それほどオーバーテクノロジーでもないのので、ガリ版刷りのセットをアイテムBOXから出してみた。

「これは蠟を染み込ませた紙です。そして黒いのはインク。蠟が塗ってあれば、当然インクは染み込みませんが、紙を硬い物で引っ掻いて傷を付けると――」

「ほう！ 傷を付けた所だけ、インクが通り抜けて紙につく――という事じゃな？」

年の功、一番初めに爺さんが、ガリ版刷りのカラクリに気がついた。

実際に、俺が描いた『森のエルフ』の原版を出して、紙に印刷をするデモンストレーションをしてみた。

「これは凄い！ これがあれば、同じ本を安価に製作する事が可能に……」

子爵が印刷されたわら半紙を手を持ち、興奮している。

「さすがにペンで書いたものには、美しさでは敵いませんが」

「それでも金持ちの王侯貴族でなければ、読めるなら安い物でいいという奴らは多いじゃろ？」

「爺さん、これを買った時に、卑猥本の要望が多かったみたいだが」

「ほほ、まあそうじゃろうな。王侯貴族でもそうじゃよ」

爺さんが、ヒゲを撫でながら呆れている。

「そうなんですか？ 子爵夫人」

「ええ？ それを、私に振るのか？」

夫人は今日は大人しいな。そりゃ、夫である子爵様の前で、はっちゃけるわけにはいかないだろうからな。

「私の――私の書いた作品を、沢山の人に読んでもらいたいのです！」

子爵が力説しているのだが、いくら自作小説を書いたとしても、

誰にも読んでももらえないのでは、そりゃモチベーションが上がらないだろう。

この世界でも、紙を作る技術はそれなりにあるっばいからな。本を作るのには問題はないようだ。

「それに、安価で本を作れるとなると、他の人も本を書き始めるかもしれませんね」

「そうだ！　それが私の願いなのです。本というと、淫猥な物という風潮を改めたい」

「それは、いいですねえ」

「解ってくれますか？」

「ええ、解りますとも」

子爵は、自分の意見に賛同者がいたのが嬉しいらしい。

「うーん、ケンイチ。これは画期的な発明だよ」

「勿論、マロウ商会で扱ってもよろしいですよ、お義父さん。そうなる——また、マロウ商会の名声が高まってしまうですねえ」

「ふふふ、そうだな」

「このままいけば、王都への進出も叶うのでは？」

「うーん——まだまだ、それは取らぬ獣の皮算用というものだ」

この世界にはタヌキがいらないらしい。意外と、マロウさんは慎重派らしいな。だが、そこまで視野に入れているだろう。

とりあえず、俺からガリ版刷りの機材のサンプルを買って、子爵領とマロウ商会で研究するらしい。

この世界にあるもので、再現しなくてはならないからな。そんなに特殊な物使っていないので、問題ないと思うが。

「あの——ケンイチ。そこで困った問題が持ち上がっているのです」
プリムラが俺の後ろから話しかけてきた。

「困った事？」

彼女の話では、マロウ商会在アストランティアへ進出してきた事で、地元の商会在反発していると言う。

そりゃそうだろうが、子爵様が決めた事なら、言うことを聞くしかないのでは？

「不正や誤魔化しばかりして子爵領を食い物にしてきた商人達を、子爵様が切るって話なんだから、強制排除でいいのでは？」

「それが、我が領には戦力が無くて……」

子爵が言うには――予算が苦しいということで、一番金がかかる軍事を削減していて、この領には騎士団も無いらしい。

だが、なんとか領の運営をやってこれたのも、その判断が功を奏したようだ。

野盗の襲撃や、大型の魔物に襲われる事もなく、なんとか乗り切ったらしいが――運が良かっただけとも言える。

まあ、運も実力の内か。だが皆が一斉に俺を見ているので、なんとなく察した。

「あゝはいはい。俺にやらせようっていうのか？ 要は、その反発している商人達の筆頭を潰せばいいんだろ？ なんていう商人だ？」

「ソガラムという商人だ……」

えゝ？ そいつって、プリムラの店に嫌がらせをした商人だろう？ 無頼を沢山雇っているらしいからな、それなりの戦力を持っているのだろう。

子爵領が戦力を持っていないために、そいつ等を当てにする事も多かったようだ。

プリムラの店に嫌がらせをした連中に、処分が甘かったのが不満だったが――そういうカラクリがあったのか。

つまり、処分したくても出来なかったわけだ。

まさしく、持ちつ持たれつの蜜月の関係だったらしいが、ハネムーンは終了した。

役目が終わった役者が、出ずっぱりでは劇が進まない、そろそろ退場の時間。

そして、その時はきた。

「ああ——解った。それなら引き受けよう」

ソガラムって奴にはムカついていたが、騒ぎを起こすと色々面倒——どさくさ紛れの闇打ちでもしてやろうかと、あれこれ考えていたのだが、子爵様の許可があるなら遠慮する必要はないよな。

たっぷりとお礼をしてやる事にして、街の事情に詳しいニャメナから情報を仕入れる。

「へへ——旦那あ、やっぱりやるのかい？」

「子爵様から、やっていいって許可を貰ったからな」

「ウチも行くにゃー！」

「私も！」

「おいおい、魔法の出番は無いぞ。街の中で魔法を使ったりすれば、大惨事になってしまう」

「むゝ」

アネモネは不満そうだが、フアイヤーボール憤怒の炎では火事になるし、エクスプロージョン爆裂魔法では周囲に被害が出てしまう。

江戸時代の日本のように、木造家屋ばかりではないので大火になる事はないが、消火技術が未発達だ。

被害が大きくなるのが目に見えている。それでは子爵に批判が集まってしまうだろう。

「あの、お手柔らかに頼むよ……」

子爵様直々にそう言われてしまった。

まあ、あえて人死を出す必要もない。コ○ツさんで店を更地にするぐらいで許してやるつもりだ。

だが、子爵を初めマロウさんと爺さんも俺のコ○ツさんを見たいと言う。

子爵夫人とプリムラから、それぞれ聞き及んでいて実物を見てみたいのだろう。

「コ○ツさん召喚！」

地響きを立てて、黄色い巨体が地鳴りと共に落ちてくる。

「「「おおおっ！」」」

「これが、そうか！？」 用水路の普請をあつという間に終わらせたという」

子爵が驚いているのだが、近くまで寄って鋼鉄の車体をぺたぺたと触っている。中々好奇心に溢れている御仁だ。

「その通りで御座います」

俺は、コ○ツさんの運転席に乗り込んでエンジンを始動させた。車体を身震いさせて咆哮と一緒に黒い煙を吐き出す。

レバーを操作すると付近の土を一掬いした。デモンストレーションの度に穴を掘るので、後で埋め戻したりと色々大変である。

「「「おおおっ！」」」

「まさしく、この力強さ！ カナンから聞いた通り、素晴らしい！」

「シャガの時に、お前さんが使った召喚獣より、倍以上大きいのう……」

俺は、エンジンを止めると下へ降りてきた。

「これがあれば魔物や帝国軍でさえも蹴散らせるのでは？」
なんだか子爵様が物騒な事を言い始めた。

「まあ、そう考えるのが妥当じゃろうが……」

「爺さん、こいつは、シャガの所で使った召喚獣より4倍の油を食うんだぞ」

「なに？ お前さんは、あの馬なしの車の時も、同じ事を言っておったの」

「ああ、こいつを1日動かすと、あの小屋一杯分ぐらいの油を食う」
俺は、ニヤメナが暮らしている小屋を指さした。

「やはりのう……」

「それでは、油代だけで破産をしてしまうではないか」

「子爵様——例えば、調教師テイマーの私がドラゴンを飼い馴らしたとします。そりゃ、凄い戦力になるでしょう。どんな大軍であろうと、炎のブレスで全て黒焦げに」

「そりゃ、そうじゃが」

爺さんが、コ〇ツさんを見上げながら、白いヒゲを撫でる。

「しかし、ドラゴンを飼うための餌代はどうします？ もしかしたら、1日100頭の家畜を食べるかもしれません」

「この鉄の召喚獣も同じという事ですか？」

「その通りで御座います、子爵様」

「まあ何事にも対価が必要という事じゃよ。そんな都合の良い物があるはずもない」

やろうと思えば国家予算を突っ込み、シャングリ・ラからトラックを沢山出して、この世界で機械化歩兵師団を作る事も、重機を並べて機甲師団を作る事も可能だろう。

トラックや重機の運転も、教えりゃ出来るだろう。そうすれば、この世界の統一も可能かもしれない。

だが、それだけの金貨をシャングリ・ラに入れたら、この国から金貨が無くなってしまふ。

そうなれば、統一した後の経済活動に影響が出るものと予想される。

藩札のような紙幣や、代替硬貨の導入も考えられるが、そうならばインフレは加速するだろうなあ。

その時、国民にそっぽを向かれた国がどうなるか？ 想像に難く^{かた}ない。

難しい話はおいとして、とりあえずは街にいるソガラムって奴に、プリムラとお店の女の子達を虐めた仕返しをさせてもらおうとしよう。

————◆◆————

子爵は夫人と同様に——崖にある足場を登り、上から湖の眺望を楽しんだ後、アストランティアへ戻る事になった。

アイテムBOXからラ○クルプ○ドを出して、皆を乗せる。勿論、^{もちろん}森猫も一緒だ。

街へ行くので、彼女には銀の鑑札も付けた。そして、俺の助手席には子爵が乗っている。

俺の後ろの席にはいつもはプリムラが乗っていたのだが、今日は子爵夫人が乗り込んでいる。

どうしても乗りたいと言い出して譲らなかったのも、やむを得ず乗せたのだが、ソガラムの所へ行くのなら、夫妻を揃って証人として乗せた方が良さだろう。

そのために、プリムラと代わってもらい、彼女はマロウさんと爺さんと一緒に、馬車でアストランティアへ向かう。

車を発進させて、川を渡る。

水深50cm程だが、こいつのはシュノーケルが付いているので、1mぐらいの水深でも平気だ。

「おおっ！ 本当に馬なしで動いておる！」

子爵が車に乗って感動しているのだが、俺の後ろに乗っている夫人が何やらブツブツと呟つぶやいている。

「ここには橋を架けねばな」

「カナン様、勘弁してくださいよ。あまり人に訪れてほしくないんですけど」

「私が友人の下を訪れるのに、何の不都合があるのだ。橋がダメなら、あの怪物で森を切り開けばいい」

「今日の話を聞いていましたでしょ？ 油を大量に食うんですよ、

あの召喚獣は。大体、私に利点メリットが全くないのですが……」

「ならば、やはり橋だの！」

全く話を聞いちゃいねえ。

「そんな事より、財務を立て直すのに、やる事が大量にあるでしょう」

「それは——そうであるが……そんなものはマロウ殿に任せればよいではないか」

「義理の父は信用できる人間ではありませんが、子爵様側でも確認をしていただかないと、欲に目がくらんだ者が出るかもしれません」

「いや、その通りだケンイチ殿。私も心を入れ替えて、父から受け継いだこの領を立て直したいと思っています」

夫人は相変わらずだが、子爵は固い決意を示す。

今までは——嫌なことから現実逃避、そして子爵領が傾き始めた事から目を背けたくて、さらに現実逃避——という負のサイクルに嵌っていたようだ。

そして懸案だった、頭上のたんこぶであるソガラムという商人も排除されようとしている。

心機一転やる気を出したのかもしれない。だが結局、全部人任せのような……本当に大丈夫かね。

それでも、マロウさんが人材をダリアから引っ張ってきたお陰で、少なくとも財務はまともになると思う。

「子爵様、一つお聞きしたい事があるのですが？」

「はい、何でしょうか？」

「私が謝礼に頂いた魔導書なのですが、どういう経緯で子爵領にあった物なのでしょう？」

「ああ、先代——つまり亡き父が、旅の魔導師から手に入れた物らしいのですが、詳しくは知りません。誰も使う事ができず死蔵されていたのですが、子爵領を助けるために役に立ったのです。父も天で喜んでおられるでしょう」

なるほどな。その魔導師ってのが、アネモネのお母さんなのか？
そんな話をしているうちに、街が近づいてきた。

73話 殴りこみだ!

俺の家族と子爵夫妻を乗せた車が、門を潜り街の中へ滑り込む。
大通りを進む車には、相変わらず街の住民からの好奇の目が突き刺さる。

「ほうほう! これは、民から注目の的ですね。この馬なしの車を私に売ってもらう事は?」

「閣下、これは召喚獣ですので、私の言うことしか聞きませんし、操る事も不可能です」

「そうですか、実に惜しい」

「それに長い腕を持った巨大な召喚獣もそうですが、特殊な油が餌になっており、それを食べさせないと、すぐに死んでしまいます」

「そういえば、旦那は魔道具を使って油を作ったり、いろんな薬品を混ぜたりして、餌を作ってたよなあ」

一番後ろの席から、ニャメナの声が聞こえてくる。

「そういう事だ。意外と繊細なんだよ、こいつは」

そんな話をしているうちに、件の商人の店へやって来た。

大通りに面した、石造りの大きな3階建ての建物。ニャメナの話では、ここは店舗兼倉庫と従業員の寝床。

主であるソガラムの屋敷は別の場所にあると言う。

1階には大きな組み立て式の庇^{ひさし}が張り出し、その下には商品が色々々と並べられている。

こうしてみると普通の商店みたいだが、色々な場所で圧力や脅しを掛けまくって、集めた品だと思われる。

俺は、子爵夫妻を車に置いたまま店員らしき男の所へ向かった。
細い目をした狐のような男で、頭には赤いバンダナらしき物を巻いている。

「いらっしやいませ、何かお探しで？」

男が揉み手で近づいてきた。

「ここは、買い取りもしているのか？」

「ええ、どんな代物でも買い取りますよ」

「ほう、どんな物でもか？」

「ええ、もちろんですとも」

「それじゃ、こいつを買い取ってくれ」

俺は、アイテムBOXから、以前仕留めた洞窟蜘蛛のメスを取り出した。

地響きと共に現れて、店の入り口を押しつぶした白い巨体。倒し
てすぐにアイテムBOXに入れたので、まだ新鮮なままだ。

流れ出る赤い体液が、店先の品物を紅く染めていく。

「うわあああ！」「きゃあああ！」「なんじゃこりや?!」

突然現れた魔物に、あちこちから悲鳴が上がる。

「俺が仕留めた、魔物だ。こいつを買い取ってくれ」

「お、お客様、こんな物は困ります！」

腰を抜かして尻もちをついた、店員が叫んだ。

「お前が何でも買い取るって言ったんじゃないか、それは嘘だったのか？」

「し、しかし——まさか、こんな物とは……」

「一体、何事だ！」

奥から、大きな金のボタンが目立つ茶色の服を着た男が出てきた。

歳は俺より10歳程上か……赤い髪をオールバックにしている。

「よお、あんたがソガラムさんか」

「お前は？ 何者だ?!」

「俺はケンイチ。魔導師ケンイチだ」

「ケンイチ？」

「俺の妻の店に散々嫌がらせをしてくれたな。お礼にきてやったぜ」

「お前の女房など知らん！」

「市場でスープを売っていた露店だ。知らないとは言わせないぜ？」

「……ああ、あの小娘の店か。ちよつと痛めつけられ、すぐにひざまずくと思ったのだが、子爵まで担ぎだしてきおって……」

店の奥から、柄の悪そうな連中がゾロゾロと出てきた——数は20人程。

「おい！ このふざけた奴を黙らせろ」

「し、しかし、ソガラムの旦那！ こんな化け物を仕留められる奴じゃ……」

「アイテムBOX持ちらしいが、大方森で死んでた魔物を持ち込んだんだろう！ 奴に騙されるな！」

「なるほど、そう言われればそうかもな」

ソガラムの言葉に納得したのか、手向かうようだ。随分と単純な奴らだな。

その中から、猫人の男が歩み出てきた。うゝん、こいつはちよつと厄介だな。

俺がアイテムBOXから武器か重機を出そうか迷っていると——それを見た黒い影が俺の脇を通り抜けて、猫人達の前に立ちふさがった。

「フシャアアア！」

白く輝く鋭い牙を剥き出し、獣人達を威嚇する森猫——ベルだ。

「な、なんで森猫様が……」

「彼女は俺の女だ」

突然、街の中に現れた神様の使いに、猫人達がたじろぐ。彼女の背中を撫でながら、奴らを睨みつける。

「森猫様が悪人の味方をするはずがないよなあ。つまりは森猫様到手向かう、お前等は悪人って事で間違いないわけだ」

「ううっ」「ま、まっしてくれ!」

猫人達は明らかに困惑している。

「猫人が神様の使いと戦って死んだら、その魂は一体どうなるのかな?」

「お、おい! ソガラム! 俺は抜けるぞ!」「俺もだ!」「こんなので死んだら、地獄行き間違いなしじゃねえか」

ほほう、こんな連中でも地獄へ行くのは嫌なのか。しかし、悪さをしていて、天国へ行けるとも思わないがなあ。

しかし、ベルの脅しが効果的だったのか、猫人達はバラバラと逃げはじめた。

「おい! 待て! くそ、こんな事で」

「ははは! やっぱり、猫共に任せるのが、間違ってもんだ」

ソガラムの後ろから声が聞こえてきた。

「お前はやってくれるのか?」

「猫の1匹や2匹どうって事はねえ」

後ろから歩み出てきたのは、灰色の毛皮を着た背の高い犬人。この種族をまともに見たのは初めてだが、まるで狼のような風体をしている。

なるほど黒狼によく似ているな。こいつら、黒狼を神の使いとし

て崇めているらしい。

犬人が剣を抜くと振りかざし、こちらへ攻撃を仕掛けようとした瞬間、男のがら空きになった胴体を2本の矢が貫通した。

撃ったのは、ミャレーとニャメナだ。

「犬コロが舐めるんじゃないにゃ」

「森猫様に手を上げるとは、許せねえ」

おい、容赦ないな。本当に仲が悪いんだな。

「ぐっ！ くそ……」

犬人が膝を折ったところへ、さらに2本の矢が頭へ突き刺さった。無論、その時点で即死である。

残っていた無頼達も、後ろへ下がり始めた。

「きゃああ！」 「うわあ」

周りで喧嘩を見物していた、野次馬からも悲鳴が上がる。

「くそう！」 「てめえら、やりやがったな！」

他の男達も、剣に手を掛けて、白い刃を引き抜いた。

「ユ○ボ召喚！」

対人戦闘なら、小回りが利くユ○ボの方が有利だ。レバーを操作しながら、フットバーを踏み込む。

「ユ○ボ大回転！」

グルグルと高速で回転する重機のアームが、無頼達を次々と弾き飛ばしていく。

「ぎゃあ！」 「ぐわああ！」 「ぐえっ！」

そして転がる悪漢達に次々と矢が突き刺さる。そして、立ち上が

ろうとした男の首筋にベルが噛みつき、そのまま獲物を地面へねじ伏せた。

鋼鉄の怪物と森猫の圧倒的なパワーに、男達が後退りしていく。

「くそ、こんな白昼堂々、人を殺めてタダで済むと思っ^{あや}ているのか？」

1人で立っているソガラムの額に脂汗が滲む。彼の後ろにはまだチンピラは控えているのだが、完全に戦意喪失している。

「いやいや、その犬人が剣を抜いた瞬間に、お前等は子爵様の殺害を企む極悪人になったから」

「なにい！」

そう言う俺の横に、子爵夫妻が立っていた。

「ソガラム、其方とは何かと縁があったが、私の殺害を企んでいるとは知らなかった」

「てめえ！ このクソ子爵があ！ 裏切りやがって！」

「これは、異なる事を――其方と組んだ事など1度もなかったが」
ちよつと頼りない貴族様だと思っていたが、中々大した玉だな。
腐っても貴族というわけだ。

だが、これでこいつ等を討つ、大義名分が出来たってわけだ。

敵は戦意を喪失、対人戦闘が終了したので、一旦ユ○ボを収納した。

「よし、コ○ツさん召喚！」

俺は、洞窟蜘蛛をアイテムBOXへ収納すると、続いて大型重機を取り出した。

空中から現れた鉄の巨体が、店先の品物を押しつぶし煎餅^{せんべい}のように平たくする。

「なんだあ!」「化け物だあ!」「ひい!」

ギャラリ―から悲鳴が上がる。

重機の運転席に座ると、黄色い巨体は咆哮を上げ鋼鉄のバケットを9mの高さまで振り上げた。

見物客が、コ〇ツさんを見て騒いでいるが、重機のエンジン音で遮られ、何を言っているかはここまでは聞こえない。

鋼鉄の爪が石造りの壁にめり込むと、壁をガラガラと崩し始めた。

「うわあああ!」「助けてくれえ!」「こんな化け物が相手なんて冗談じゃねえ!」

ソガラムが雇っていた残りの無頼達も、その場から遁走し始めた。さて、盛大にぶっ壊してやろうとしたのだが、コ〇ツさんの足元でマロウさんが手を振っている。

遅れて馬車で今到着したようだ。

「ケンイチ! これ以上は壊さないでくれ!」

「ええ?」

エンジンを停止して重機から降りる。残ったソガラムには、獣人達が武器の照準を合わせている。

「この建物は使えるよ。勿体無い」

立派な建物を壊すのは勿体無いので、これをマロウ商会の支店に使いたいようだ。まだ、いい物件が決まっていなかったらしい。

「てめえはマロウ!」

「ソガラムさんお久しぶりで」

「あれ、お義父さん、知り合いましたか?」

「まあ、なんというか、ははは……」

商業ギルドの集まりや、貴族のパーティ等で顔を合わせる事もあったのだろう。

「お義父さんだと？」

「ああ、お前が嫌がらせした女はマロウ商会の娘だ。その女は俺の妻だから、この方は俺のお義父さん——解ったか？」

「くそっ！ 全員で俺を嵌めやがって！」

「滅相ありませんよ。貴方が他の商人達と、おとなしく退場してくれば、こんな強硬策に出る必要もなかったのですから」

「ソガラム、お前の女房と娘は美人らしいな。俺がたっぷりと可愛がった後、苦界に落として稼がせてもらおうとするか」

まあ勿論、もちろん本当にそんな事をするつもりはない。ただの脅しである。

「待てえ！ 女房と子供は関係ねえだろう！」

「何を言ってるんだ、人の女房に手を出したくせに。脅して跪いてきたら黽こつてやろうと思ってたんだろうが。なんで俺が同じ事をしようとするのがダメなんだ？」

「く……」

ソガラムはがっくりと膝を落として、地面へ座り込んだ。

敵がいなくなったと判断したのか、ベルが車にいるアネモネの所へ戻った。

「さうて、どんな魔法の実験台にしようかなあ」

「待てえ！ 待ってくれえ。俺の負けだ。俺と家族はこの街を出る！ それで手打ちにしてくれ！」

「ケンイチ殿、少々穏便に解決してはくれないだろうか」
スポンサーの子爵様にそう言われちゃしょうがないな。

「それじゃ、全財産を放棄して、手に持てるだけは認めてやる」
「……解った」

ソガラムは地面へ座り込んだまま、下をじっと見つめている。

これで一件落着か——本当は、殺してしまったほうが後腐れなくていいんだがなあ——って考えが頭をよぎるのは、あの葉っぱの副作用だろうか。

だが、マロウさんも子爵夫妻も、それは望んでいないようだ。ただ、この街から出ていってくれればいいらしい。

「子爵様、これでよろしいですか？」

「うむ、何の問題もない」

「くそ……」

ソガラムは悔しそうであるが、もう手下は全員逃げて、すでに決着は付いた。

まとめ役であるソガラムが白旗を揚げたとなれば、他の商人達もおとなしくなるだろう。

今日の騒ぎで出てきた鉄の化け物の話も広まるだろうしな。

どうせバレたんなら、派手にバラした方がいい。アホな連中が絡んでこないようにな。

「ああ！ アイテムBOXを持って鉄の召喚獣を使う魔導師って、ダリアでシャガって極悪野盗を討伐したっていう——」

「俺も聞いたぜ。ダリアから逃げ出して、いなくなったって聞いたけど、アストランティアにいたのか？」

見物客が、ザワザワと騒ぎ始めると、ソガラムが俺の顔を再び見上げる。

「くそ、なんでそんな魔導師がこんな所にいるんだよ」

「ダリアから逃げてきて、アストランティアでおとなしくしようと思ってたら——妻の店に手を出した間抜けな奴がいてなあ。困ったもんだよ」

うなだれるソガラムと対照的に、マロウさんは上機嫌だ。このぐらゐの事件は、商売をやっていれば日常茶飯事なのだろう。

動揺している節もない。

「ほほほ、これは良い物件がタダで手に入りましたねえ」

「少し壁を崩してしまいましたが大丈夫ですかね、お義父さん」

「このぐらゐの修繕ならすぐに出来るでしょう。まったく孝行息子を持ったものです」

「「ははは！」」

「なんか、旦那とお嬢の親父さんの方が悪人に見えるんだけど」

「そうにゃ」

ミヤレーとニヤメナが、弓とクロスボウを持ったまま、ヒソヒソ話をしている。

その後ろでプリムラがちょっと、恥ずかしそうだ。

「ニヤメナは俺がタダのお人好しのオッサンだと思ってたのか？」

2人に話を聞くと――まあ、そんな感じらしい。

「俺だってやる時はやるぞ？　そうしないと、アネモネやプリムラを守れないからな」

「俺達はどうでもいいのかよ」

「2人は十分に強いだろう？　でも、危なくなったら、勿論助^{もちろん}けるけどな」

拗ねているニヤメナの頭を撫^なでてやると、嬉し^なそうである。

だが、色々あったが、プリムラに嫌がらせをしていた奴には仕返しをして、やっとさっぱりした。

まあ、多少の人死には出てしまったが、街の鼻つまみ者ばかりだから擁護する連中もない。

これで、この子爵領も多少は良くなるだろう。

— — — — — ◆ ◆ — — — — —

ソガラムは街にある全財産を処分して、家族と共に小さな馬車だけでアストランティアを後にした。

ダリアと反対方向へ向かったので、アキメネスかイベリスへ向かうのだろう。

奴の女房とも話したのだが、意外と普通の女性で、夫が悪さをしているのを当然知っていたらしい。

悪い事をするのを止めてほしかったようなので、今回の騒ぎで街を追放されるのをかえって喜んでいるようにも見えた。

ソガラムの店の後には、マロウ商会のアストランティア支店が入り、他の商人達も傘下に加わる事になった。

プリムラの店もマロウ商店傘下となり、仕入れ等が一括で行われている。これで、大幅なコスト削減が可能になるだろう。

元々は俺が仕留めた牙熊の肉を消費するためのスープの店だったが、野菜やパンの購入費は削減出来ると思われる。

アストランティアのスパイスシンジケートも解散させられたので、スパイスなどは、他の都市よりは安く購入出来るようになった。

色々あったが、一段落したので、また平和でのんびりとした日々が戻ってきた。

アネモネの魔法のお陰で畑にトウモロコシが実ったので、皆で一緒に食べる。

先ずは、シンプルに焼いて食べてみる事にした。アネモネの魔法で加熱して火を通してから、溶きバターを塗って、炭火で焦げ目を付ける。

香ばしい匂いと、白い煙が辺りに充満する。

だが何故か子爵夫人も一緒だ。3日に1回は来てるんじゃないのか？

「カナン様、こんな頻繁に遊びにいらして、子爵様は大丈夫なのですか？」

「大丈夫だ！ 今日も愛人の所へいらしておる！」

「はあ？ ちょっと、政は大丈夫なんですよ？」

「それは、大丈夫だ」

夫人の話では、子爵の愛人は夫人より、かなりのデー——ふくよかな女らしい。

「なんじゃそりゃ、そういう趣味なのか——それとも母親の代わりを求めているのか……」

所謂、マザコン……。

「おそらく、両方であろ！」

「もしそうなら、カナン様は好みじゃないだろうなあ……」

「くくく……このような屈辱を……ケンイチ殿！ まだ、この黄金色をした野菜は焼けぬのか？」

「いや、もうそろそろ良いでしょう」

良い感じに焦げ目がついたので、皆でトウモロコシに行儀悪く齧り付く。

「うみゃー！ なんでこんなに甘いじゃ？！」

「だから、前に見せたら。残した一本だけを成長させて、栄養を集中させるんだよ」

「それじゃ旦那が植えた、あのリンカーの木も、実を少なくすればもっと甘くなるのか？」

「大きさもデカくなるし甘くもなると思う——多分な」

俺達の話も聞かずに、夫人は焼けたトウモロコシにかぶりついている。

「はふはふ！ なんとという贅沢な！こんなに甘いのに、果実では

ないのか？」

「野菜というか、麦なんかと同じ仲間ですよ」

「なんじゃと！　これがか？」

夫人の話でも、トウモロコシに似た植物は見た事がないという。

「夕飯は、こいつでスープを作ろう」

「わーい！」

「けど、あんまり料理の方法がないんだよな。煮るか焼いて食うのが一番美味しい気がするが」

「パンは出来ないの？」

パン担当のアネモネは、そこが気になるようだ。

「乾燥させて挽けば、粉になるが——どちらかといえば、芋の粉みたい。でも、小麦粉を混ぜれば出来たような」

「所謂、いわゆる澱粉か」

「その通りですカナン様」

「ケンイチ殿、この野菜の種はないのか？」

「ありますけど、お渡しするんですか？　私に利点メリットが全くないのですが……」

夫人はバン！　とテーブルを叩いた。

「ケンイチ殿が、この子爵領の至宝である、私の身体に興味がないと申すからだろうが！」

お宝とか自分で言うか？

「そんなものは全く興味がございません。私には妻もおりますし」「私もいるよ！」

「獣人も2人いますしね」

「くうう！　この私が、子供やら獣人以下とは、何たる屈辱……いたいという事なのだ。これだから、独自魔法ユニーク使いは……」

やけ食いをしている夫人の横で、プリムラがしょんぼりしている。

「プリムラどうした？ 全部、丸く収まって、マロウ商会のアストランティア進出への足がかりも出来たのに」

「私が、アストランティアで商売したいと言い出さなければ、こんな事にはならなかったのでは……」

まあ、そうだな。俺が仕留めた肉を消費するためのスープが元だし。

「それでも、商売になりそうな物があれば、我慢出来ないのが商人だろう？ 俺も商売して明るそうにしているプリムラが好きだし」

「そんなに変化がありますか？」

「ああ」

「ブツブツと独り言を言いながら考えこんでいると思ったら、突然ニコニコしながら、はしゃぎ回ったりしてるよね？」

アネモネの指摘に、プリムラは顔を赤くしている。

「ケンイチも、ウロウロ同じ場所を熊みたいに歩き回って、突然見えない敵と戦いだすし」

アネモネはよく見てるなあ。見えない敵って——そりゃシャドーボクシングだな。男ならシャドーボクシングはするだろう。

本当は電灯の紐をペシペシしたいのだが、ここには無いからな。

後は、「振りかぶって——第一球投げました！」とか、傘を持たらゴルフスイングとか。

「それで！ このトウモロコシとやらの種の件はどうなったのだ？！」

「解りました、お譲りいたしますよ。恐ろしい悪の魔導師から、子爵夫人が身体を呈して手に入れた——などと噂を流せば、夫人の人氣も上がりましょう」

「おおっ！ それは良いの！ それを子爵様に物語にしてもらい、本にいたすのだな」

マジで、その設定を使うのかよ。でも、そんな話を聞いていると、子爵と夫人の仲が悪いわけでもないようだ。

公務の時とかも一緒にいるしな。

「しかし、種をお渡ししたからといって、上手く育つとは限りませんよ」

「解っておる。各地の庄屋に少量渡して、試行錯誤させればよい」
本当にトウモロコシの栽培を始めるようだ。

色々と利用価値は高い植物だから、栽培が上手くいけば全国へ広まるかもしれない。

しかし、マジで俺にメリットが全くない。

だから、お人好しって言われるんだが……。

74話 王都へ向かうぞ

子爵領を食い物にして、プリムラの店にも嫌がらせを繰り返していたソガラムというゴロツキ商人を、アストランティアから追い出した。

悪徳商人だったのだが、意外と家族には優しく子煩悩であったようだ。

妻子という弱点を俺に知られてしまったので、仕返しをしてくる事もないと思われる。

俺の家を度々訪れる子爵夫人からの要望で途中の川に橋を架ける事になった。

川の幅はそれ程ないので、10mの丸太を渡して橋にする予定。

川の兩岸に、崖を崩した時に出た岩と土を使って、橋の土台を作る。

そのためには、岩と土を運ぶ手段が必要だ。コ〇ツさんで一々運んだのでは、量も少ないし時間も燃料も掛かってしまう。

ここは新しい重機を買うしかないな。

シャングリ・ラで検索を掛ける——見つけたのは、M菱の土砂ダンプ。ダンプといっても用途によって色々と種類がある。

土砂不可って書かれた物もあるので、やはり土砂が運べる物を購入した方が良さだろう。

走行距離は70万km——錆びてボロボロだが、動けば問題ない。その代わり値段は350万円と安い——はず。

ダンプなんて買った事がないからな。だが聞いた話では、新車で買えば1千万円以上したはず。

車検も100万円ぐらいとかな。まあ、異世界なんで車検なんて関係ないが。

壊れたら新しいのを買うしかない。

「ポチツとな」

大きなタイヤが10個ついた大型ダンプが地響きを立てて現れる。新しい相棒へ乗り込むと、エンジンを始動——燃料は問題なし。1速へ入れると、そのままそろそろと、コ○ツさんの所へ向かい停止。

今度は、コ○ツさんを使って岩と土をダンプへ積み込む。なんという、一人土木工事。

「すげえええ！」

「凄いや！ ケンイチ1人でお城も建てられるにゃ！」
獣人達がダンプの荷台の上で、はしゃいでいる。

「おおい！ 土砂を降ろすから、どいてくれ！」

「にゃ？ どうやって降ろすにゃ？」

俺がハンドル下のボタンを押し運転席の右のレバーを引くと、荷台が徐々にせり上がる。

スロープになった荷台からは大量の土砂が滑り落ちた。

「これも、凄い召喚獣にゃ！」

ダンプで普通に走っているが——燃料を節約したければ、俺が動いてアイテムBOXから出し入れすれば、燃料の節約は可能。

橋の両端に土砂を下ろしたら、ユ○ボの排土板で均してスロープを作り、ダンプで踏み固める。

スロープには、シャングリ・ラで買った砂利を敷いて、耐久性を上げる事にした。

最後に、俺が川の真ん中へ入り、アイテムBOXから10mの丸太を出し橋を架ける。

後は板を張れば完成なのだが、丁度いい板がシャングリ・ラで売ってない。そこでアストランティアの材木屋を利用する事にした。

もう隠す必要もないので、堂々とオフロードバイクで、街まで乗り込む。魔法で動くドライジーネって言えば、丸め込めるわけだ。

アイテムBOXにバイクを収納すると、店員に声を掛ける。

「板を探しているんだが。ちょっと、どんな種類があるか見せてもらえるかな？」

「裏手へどうぞ」

白いエプロンのような作業着を着て、頭に布を巻いている男が相手をしてくれた。

屋根だけで壁がない倉庫のようなところに、所狭しといろんな木材が立てかけられてズラリと並んでいる。

収納と乾燥を一緒にやっているのだろう。元世界のホームセンターでもこんな光景を見た事があるかも。

そこで幅30cm長さ約3mの分厚い板を購入する――1枚小四角銀貨2枚(1万円)だ。

商品の値段は、あまりシャングリ・ラと変わらないか？　むしろ安いかもしれない。

「何枚ぐらいご入用ですか？」

「とりあえず、そこにある分を全部くれ」

そこで板を50枚程購入――金貨2枚と銀貨2枚だ。たまには街で買物をして、金貨を還元しないと。

店員の話では、ここで大工の斡旋もしているようだが、プロを頼む程の事でもない。後は橋に板を打ち付けるだけだからな。

帰りに、プリムラの露店へ寄り、顔を出す。忙しそうなプリムラと対照的に、護衛のニャメナはすっかりと暇になってしまったようだ。

店の後ろで腕を組み、大きなあくびをしている。

マロウ商会の傘下になった事と、悪徳商人のソガラムを追放してしまったので、市場がすっかりと平和になってしまったのだ。

「ニャメナ、暇そうだな」

「あんな鉄の召喚獣を操れる魔導師の女房がやっている店に、ちょっとかい出してくる奴なんていやしないよ」

「そりゃ、そうか」

まあ、色々と街の皆にも知られてしまったのだが、それが抑止力になっていくようだ。

冒険者ギルドへ行っても、話を聞かせてくれと――話しかけられる事が多くなった。

それに野盗を討伐したといっても、俺だけでやったわけじゃないからな。男爵もいたし魔導師の爺さんもいた、それに獣人達もいたしな。

アストランティアの商人達によるスパイスシンジケートも解散させられてしまったので、この街では普通に香辛料が売られるようになった。

値段もそこで買えるとあって、隣のダリアやアキメネスからもまとめ買いをしにやって来る連中もいるらしい。

他の街の商人が圧力を掛けたくても、領主がバックアップをしているし、極悪人のシャガを倒した魔導師がいると解っては手出しが出来ない。

いずれは、ダリアやアキメネスではスパイスの売上が落ちるはずで、値段を下げざるを得ないのではないか？

そうすれば、スパイス料理も、もっと盛んになるかもしれない。

スパイス料理が大好きな獣人達も喜ぶだろう。

家に戻ってきて、アイテムBOXから板を取り出し、力自慢のミヤレーに並べてもらう。

「全部並べればいいにゃ？」

ひよいひよいと、板を軽々と持ち上げて、ぶんぶんと頭の上で回している。多分、30kg以上はあると思うんだが。

「この板切れを挟んで、隙間が空くように等間隔に並べてくれ」

人間の脚が落ちないぐらいの隙間を空けて張れば板を節約出来る。そして俺は、アイテムBOXから、ネイルガンと高圧コンプレッサーを出して釘を次々と打ち込んでいく。

森に、ダンダンという板を叩く音が響く。

「もう、ケンイチと召喚獣だけで、全部出来ちゃうにゃー」

「でも、俺1人じゃこんな板を持ち上げるのも大変だからな」

30kgの板を運んでいるだけで、ヘトヘトになるだろ。重機はこういう微妙な工作には向かないしな。

「お城でも作れちゃうんにゃ？」

「どうだろうなあ」

「ケンイチの召喚獣なら、ゴーレムにも勝てるにゃ」

「ゴーレムか……」

ミヤレーの話では、デカイ普請ではゴーレムが使われて、重機のような役割を担っているという。

ダリアやアストラティアでは、そんな物を見た事がないのだが、高位の魔導師でないと使えないらしいので、辺境で使われる事が少ないらしい。

それに、ゴーレムの起動には国の許可がいるらしい。

コ○ツさんをお城の建築で使うとなると――アタッチメントで、マジックハンドのようなつかみ機というのがある。

そいつで石を掴み、積み上げれば城も作れるかもしれないが、石をカットする作業もあるし、やっぱりマンパワーが必要だろう。

ただ、工作のスピードアップが図れるのは間違いない。

ネイルガンを使っているので、あつという間に釘打ちも終わって、橋が完成した。

「たった一日で、橋が完成したにゃー！」

3mの幅があるし、橋に登るスロープも長めに作ったので、大型の馬車でも問題無いと思われる。

この川の水源は森の中の泉らしいので、氾濫する事もないようだ。

ミヤレーが完成した橋の上で連続バク転を見せてくれる。橋の板の間に隙間があるんだけど、大丈夫なのか？

――と思っていたら、大丈夫らしい。

ベルもやって来て、橋の隅や丸太のところをクンカクンカしている。

しかし、この橋を渡って、ベルがサンタンカの村へ行ったりすると、住民が警戒したりするかなあ。

一応、俺が森猫を飼っていると知っているはずだが。あの村には獣人もいるしな――多分、大丈夫だろう。

――――――◇◇――――

――次の日。

お宝探しの時に刈り取った草が、アイテムBOXの中に入りっぱなしだったので、堆肥を作る事に。

まずは、ユ○ボで穴を掘る。そして刈り取った草を押切で刻み、

穴の中へ投入。

掃除で集めた落ち葉やゴミ等も全部入れて、ユ○ボで土を被せて混ぜる。

発酵して湯気が出てきたら、また重機でかき混ぜればいい。

土で汚れたバケツトは、川でバシャバシャ洗う——その後、アネモネの魔法で乾燥してもらえばいい。

「乾燥！^{ドライ}」

黒く濡れていたユ○ボのバケツトは、みるみる白く乾燥していく。

「魔法は便利だなあ……」

俺も簡単な魔法でも使えればいいんだが—— 一番初歩である生活魔法すら反応がないからな。

まあ、シャングリ・ラが使える時点で十分にチートなのだから、ないものねだりかもしれないが。

そんな事をやりつつ、畑で大きくなっていたキャベツ等を収穫している——出来上がったばかりの橋を渡って白い馬車がやって来たようだ。

あれは子爵様の馬車だろう。早速やって来たか。

あまり付き合いはしたくないのだが、そうも言ってられないだろう。

馬車が止まると、子爵夫人が白いドレスをワシワシヤさせて、降りてきた。

「ケンイチ殿！ もう、橋を作ったのか？」

「はい、1日で出来ましたよ」

「これも召喚獣の力か……」

「いやあ、ウチには力自慢の獣人もいますからね」

「カナン——今日は、そんな話をしに参ったわけじゃないよ」

後から、子爵が馬車のドアから降りてきた。相変わらず、パツとしない子爵様だな。

「そうでした」

かしこまる夫人と一緒に、子爵を家の前まで案内すると、テーブルと椅子を出す。

丁度、昼飯時なので、朝作ったスープと、シャングリ・ラのパン、そしてミルクをお出しした。

夫人が柔らかそうなパンに興味を持ったのか、一つ摘んで千切って口に入れた。

「むっ！　なんと柔らかいパンだ！」

夫人に釣られたのか、子爵もパンを一口頬張った。

「なんと！　確かにこれは柔らかい！　そして、甘い！　……いや、そうではないのだ。今日は大事な用件があって参ったのです」

「なんででしょうか？　また何か問題でも？」

「誠に申し訳ない！！！」

いきなり子爵が、突っ伏してテーブルに頭を擦りつけた。一緒に夫人も頭を下げているのだが……。

「そんな、いきなり子爵様に頭を下げられても、わけが解りませんよ」

「理由はこれです！」

子爵が、紙を丸めた物を差し出してきた。茶色の紙——おそらく羊皮紙だと思われる。

「読んでもよろしいので？」

「勿論です」

「えー、『ユーパトリウム子爵領領主、ガラム・ド・ユーパトリウ

ム殿。貴領に滞在している、魔導師ケンイチなる人物を、直ちに王都へ登らせよ。国王ラナン・キュラス・カダン』」

右下には、尻尾の長い鳥が大きな羽を広げている、赤い蠟印が押してある。

ここは、カダン王国っていうのか——初めて知った。皆が王国、王国としか言わないからな。

さすがに聞くわけにもいかないし……。

「これは——もしかして国王陛下直々のお呼び出しですか？」

「その通りです。大恩あるケンイチ殿に、誠に申し訳ありませんが、陛下からの勅令であれば、我々は逆らう事はできません」

「そりゃ、王侯貴族は縦社会ですからねえ。上からの命令は絶対でしよう」

「そうなのです！」

命令絶対、規則はいっぱいか——そんな歌があったな。

「ここで、私が逃げたりしたら……」

「それは、困ります！ 勅令に逆らって我が領が逃したか、匿っているとの疑いを掛けられて——下手をすれば謀反の疑いありと看做みなされてしまう」

「そうですよねえ」

面倒だが子爵夫妻に恨みがあるわけでもない。しかし、マスメデアとか全くないのに、人の噂は千里走るなあ。

あるいは、この子爵領を潰そうとしている奴らがいるのか……しかし、そんな事にまで首を突っ込みたくないな。

——とはいえ、国王からの呼び出しを無視するわけにもいかない。

「承知いたしました。王都へ向かいます」

「解ってくれたか。我が領を救ってくれたのに、こんな事になってしまって誠に申し訳ない！」

再び、子爵がテーブルに突っ伏した。

まあ仕方ないだろう。避けて通れない事もある。

子爵の話によれば、国王陛下から送られてきたこの手紙が、通行証になると言う。

なにせ、本物の国王の蠟印が押してあるからな。水戸黄門の印籠みたいなものだろう。

「ケンイチ殿！ 王都での事が済んだら、またここへ戻ってきてくれるのか？」

「カナン様——私は、この場所が大層気に入っているのです。用事が済めば、また家と共に戻ってまいりますよ」

「そうか……」

夫人が安心した顔を見せる。一緒に付いていくとか言われたら、どうしようかと思ったが一応節度はあるようだ。

「本当は、私も付いていきたいのだが——チラッチラッ
チラッチラッじゃねえよ。全く何を考えているのか。」

「はいはい、夫人が他の男と長期旅行なんてダメに決まっているではありませんか」

「私は、一向に構わないが」

あゝ、この子爵様は本当にもう。それに子爵夫人なら王族が顔を知っているだろう。

自ら、辺境の華とか自称するぐらいなのだから、有名人だろうし。俺と同行していれば関係を勘ぐられる……むしろ、それが狙いか？

「それならば！」

「ダメです！」

身乗りだしてきた夫人を両手で制する。

何があるか解らないのに、世間知らずのご婦人のお守りと厄介事

は御免被りたい。

この世界を知らないって意味では、俺も同じなんだがな。
足手まといにしかならないし、怪我や病気でもされたら、どうする？

当然、拒否である。

――その夜。

皆でベッドの上に座り、今後の作戦会議をする。

「というわけで、俺は王都に行く事になったが、お前達はどうする？」

「一緒に行く！」

「妻ですから、当然行きますわ」

「行くに決まっているだろ、置いていくつもりかよ」

「当然、行くにゃー！」

「にゃー」

ベッドの横にいた、ベルまで返事をしている。

「別に家をここに残したまま、ここで暮らして待っててくれてもいいんだぞ？」

「ケンイチと一緒に冒険に行くって話をしてたでしょ！」

「旦那あ、そんな水くさい事は言いつこなしだぜ？」

「そうか――それじゃまた、家やら足場やらをアイテムBOXへ入れて、出かける準備をしなくちゃな」

「にゃー！」

ベルが、ベッドに飛び乗り、俺の顔にスリスリとしてくる。

ギルドの鑑札がついているから、森猫が王都に行っても大丈夫だよな。

— — — — — ◆ ◆ — — — — —

——次の日。

皆で朝食を食べた後——家やツリーハウスを始め、俺の作った施設を次々とアイテムBOXへ収納する。

もちろん勿論、足場や太陽電池パネルも全部だ。

「へへ、やっぱり、住み慣れた家を持っていけるってのは便利だね」
ニヤメナが、腕を組んで俺の収納作業を眺めている。

「そのために、わざわざ小さい家に行っているんだからな」

「小さい家を積み重ねて、大きい家にすればいいにゃ」

「まあ、それも手だな」

プレハブのような積み木を重ねた家なら次々とアイテムBOXへ入れる事が出来るだろう。

「モジュール化か——いいね」

「もじゅーる？」

アネモネが聞きなれない言葉に首を傾けている。

「まあ、こっちの話だ」

試しに、シャングリ・ラでプレハブを検索してみたのだが、さすがに売ってない模様。

プレハブが売っていれば、わざわざキットの小屋を建てる必要もなかったな。ミャレーに言われるまでプレハブには気が付かなかった。

この前作った橋もアイテムBOXへ入れられるのだが、こいつは必要ないだろう。

例えば橋が無い川があっても、車をアイテムBOXへ入れて俺が

渡り、対岸でまた車を出せばいいのだから。

小さい川なら、アイテムBOXの中に丸太が何本か入っているし、そいつを使えばいい。

しばらく留守にするかもしれないので、畑の野菜も取り込んだ。

後は放置プレーになってしまいが仕方ない。

車——ラ○クルプ○ドを収納から出して、皆で乗り込む。

異世界の空の下、今日もエンジンは一発で掛かり快調だ。

作ったばかりの橋を渡り、街道を走る馬車を追い越し、街へ到着。そのまま真っ直ぐメインストリートを抜けて、東門へ抜ける。アストランティアの街を迂回するバイパスは無いので、ここを通るしかない。

人混みを抜けてノロノロ運転だが、馬なしの車に気がついた奴らが、車の方へやって来る。

「魔導師様、お出かけですかい？」

俺も街では有名人になってしまったからな。車の中に森猫の姿を見つけた獣人達が拝み始めた。

「いやあ、国王陛下に呼ばれてな。王都まで出かけるんだよ」

「ええっ！ 国王陛下に?! そりゃ、大出世じゃないですか?」
話を聞いた、街ゆく人々がどよめく。

「そういう話ならいいんだけどな。それに俺は出世とか仕官とか興味ないんだが」

「なんですかそりゃ、勿体無い!」

この世界で出世といえば公務員——つまり仕官して公職に就くこと。

それ故、俺の言葉が信じられないらしい。

「まあ、話が済んだら、すぐに戻ってくるつもりだよ」
「本当ですかい？」 「信じられねえ」 「せっかくのお話を……」
別に、仕官の話がきているわけじゃないからな。行ったら行ったで——ろくでもない案件かもしれないし。

「旦那、こいつらの言うとおりでよ。マジで仕官の話なら、勿体無いぜ？」

「書面には、そんな事は一言も書いてないからな。王侯貴族の気まぐれで、面白半分で呼びつけただけかもしれないし」

「ありえますわ」

貴族の事をよく知っているプリムラは、あり得る話だと言う。

「そりゃ、そうだけどさ」

「けど、相手が王様にやら、話を聞かなくちゃいけないにゃ」

「そうなんだよ。無視出来ないからな。でも俺が仕官なんて事になったら、皆と遊べなくなるじゃないか。ニヤメナはそれでいいのか？」

「そりゃ……役人なんかになったら、獣人とは遊べないかもしれないけどさ……」

ニヤメナはしょんぼりして、黙ってしまった。

「まあ心配するな。そんな事はないからさ」

そんな話をしながらのノロノロ運転——だが、この街を出る前に寄る場所がある。アネモネのローブとプリムラの上着の製作を注文した服屋だ。

糸から紡ぐので、時間がかかる。王都から帰ってくるまで、どのぐらいの時間が掛るか解らないので、一応話しておいた方がいいだろう。

車を店先に停めて、俺だけ店の中へ入る。

「へえ、王都まで」

前に来た時と同じように、女の店主は大きく胸の開いた派手な色のワンピースを着ている。

「ちょっと、どのぐらいで帰ってくるか解らないんだよ。ローブと服が出来ても、置いていてくれるかい？」

「よろしゅうございますよ」

「保管料が必要な金を払うよ」

「いいえ、あれだけ上等なローブと上着の縫製で、料金も過分に頂いてますので、大丈夫でございますよ」

「それじゃ、よろしく頼む」

「お任せください」

店を出ると、再び大通りをノロノロ運転だ。そして人混みを通り抜けて、東門を潜った。

とりあえず、この前に用水路の工事をした場所を抜けて、先ずは隣街アキメネスへ向かわなければならぬ。

隣街までは約200km――安全運転で時速60kmぐらいで走っても、3時間ちょっとで着くから、昼前には到着するな。

75話 丘を越えて

俺達を乗せた車は、アストランティアの街を出て、街道をアキメネスへ向かう。

左手には、俺達が登っていた大崖、そして右手には工事で掘った用水路が走っている。

もう、水路には水が流されているようだ。

青空の下、舗装もされていない土の道を車は走る。砂利も敷いていないので、雨が降ったら大変だろう。

こいつは四駆で、デフロックも付いているし、多少の悪路も平気だと思われる。

「丘を越え行こうよく口笛吹きつつ」

歌を口ずさむ——ちなみに、この歌の著作権は切れているらしい。

「でも、せっかく王都まで行くなら、新しいアネモネのローブとプリムラの上着は着せて行きたかったなあ」

「虫糸から紡ぐのであれば、致し方ありません。そんな贅沢品なんて、普通は着ることさえ出来ないのですから」

「ケンイチは、歌も沢山知っているんだね！」

「まあな」

元世界じゃ、音楽に囲まれて生活していたからな。流行りの歌じゃなく、童謡なんかでもかなりの数を知っているかも。

具体的に数えた事はないけどな。

「ガアガア」「メエエエ！」

車の中で、皆で大合唱だ。この世界でも解りやすい歌詞であるの

だろう。

アヒルはいないみたいだが、山羊はいるみたいだし。アヒルの歌詞の部分を鶏にしてコケッコーにすりゃいい。

車の中で、皆で笑いながら騒いでいたのだが、突然ニャメナが変な事を言い出した。

「旦那あ！ 俺、やっぱり嫌だよ！ 旦那が役人になるなんてさ」
「なんだ突然。さっきの話をまだ引きずってたのか」
アストランティアの街で、そんな話をしていたのである。

「トラ公はケンイチの事、何も解ってないにやあ。ケンイチは、そういう仕事をする人間じゃないにや」

「そうそう、そんな面倒な仕事なんて、ごめんだな。人生は明るく、そして楽しく！ ナントカ団心得、人生エンジョイ&エキサイティング！」

「何語にや？」 「さあ？」

しばらく車で進むと、右手に大きな湖が見えてきた。

結構大きな湖で、名前はカズラ湖。俺がコ〇ツさんで掘った用水路は、ここから水を引いているらしい。

だが俺達の家の前にあった湖はもっとデカイ。元世界でいうと琵琶湖が丸くなったぐらいの大きさがあるのではないだろうか。

そして、そこから1時間45分程で、アキメネスの街が見えてきた。

どの街にも城壁があるのか、この街にも石造りの壁が見える。街の大きさは、アストランティアよりちょっと大きいぐらいだ。

木造と石造りの建物が交じり合った街。アストランティアと同じように、高い建物はせいぜい3階建てだ。

高い建物がないので、空が広いのはどこでも同じだな。

そのまま車で街の中へ進入する。アストランティアと同じように、見たこともない乗り物に、住民たちの好奇の視線が集まる。

「はは、大人気だな」

「そりゃ、こんな馬なしで走る車なんて、王都でも走ってないにゃ」

「俺だって、聞いた事がないよ。それに、この速さ！ 今日中に王都に着いちまうんじゃないのか？」

「多分、順調に行けば着けると思うけど、急ぐ旅じゃないんだ。王様だって、今日到着するとは思ってないだろ」

プリムラの話では、手紙等が到着するのに最短で――1泊2日。

これは獣人を使った飛脚によるもので、これが手紙配達の最短時間という事になる。

恐らく、俺が貰った国王陛下からの手紙は、この飛脚による特急便だろう。

ただし料金は高く、量も運べないので、通常の手紙は馬車で荷物等と一緒に運ばれて、1週間程掛かるらしい。

「プリムラ、伝書鳩はないのか？」

「ハト？ なんですか？」

ああ、この世界には鳩がないのか。

「――鳥の帰巢本能を使って、彼等に手紙を運ばせるんだよ」

「あの、詳しく教えてください」

彼女に、伝書鳩の仕組みを教えてあげる。

「それは、どんな鳥でも可能なのですか？」

「帰巢本能が強くて、人に馴れやすくして飼育が容易――そして速さと長距離を飛ぶ体力――種類は限られていると思うよ」

「でも、それを使えば、手紙をやりとりする速度が上げられると…

…」

「まあ、そうだねえ。もし、それに適した鳥種が見つければ、アストランティアから王都だと1日で運んでくれるぐらいの速度は出るはずだよ」

「そんなに！」

元世界の伝書鳩だと、平均で時速70km以上、最高速は100km以上出るらしいからな。

獣人達は時速60km――瞬間的には80km近くは出せるが、あくまで短時間で巡航速度は1時間に30km程。

彼女の話では、この世界ではワイバーンやドラゴンに乗ったりする航空便はないらしい。

「それに普通の手紙だけじゃなく、戦の時に本国へ戦況を知らせるのにも使えるぞ」

「シャガの時に、ケンイチが貸してくれた、遠く離れた場所と話す魔道具は使えないのじゃ？」

「あれは、使えて数リーグだな」

シャングリ・ラを検索すると20Wクラスのアマチュア無線機器が売っているが、まさかこれ売るわけにはいくまい。

それにコイツを使うには、デカイアンテナを張らないとダメだ。

アキメネスの街の中をゆっくりと走る俺達の車に、物珍しさから人々が集まってくるのだが、車から顔を出す黒い森猫に、獣人達が気が付くと慌てて手を合わせている。

「この街は、犬人も多いみたいだな」

「たまに来るけど、嫌な街だにゃ」

「俺も、あまりこの街には、やって来ないなあ」

急ぐ旅でもないので、アキメネスの市場を見物するために、車を降りてアイテムBOXへ収納する。

車で困るのは駐車スペースだが、それもアイテムBOXがあれば

心配いらない。

街中にはドライジーネが何台か走っているが、生産しているのは今のところダリアだけなので、ダリアから離れると徐々に値段が上がり、購入する人も少なくなる。

そのうち真似をしてコピーを生産する業者も出てくるかもしれないが、マロウ商会は次の新型の開発も進めている。

この世界には特許やらのシステムがないので、儲けるためには一歩先を進まなくてはならない。

王都の商人と契約を結んで、新型を生産する工房を立ち上げる計画の話もあるようだ。

さすが、マロウさん。どんどん行くねえ。

「品揃えはアストランティアとそれ程変わらないなあ」

「まあ、そうですわ」

小腹が減ったので、露店で売っていた串焼きを買う。焼いて塩を振っただけだ。

アイテムBOXから胡椒を出して、振りかける。

「ほら、お前等にも掛けてやる」

「ありがてえ」

「にゃー！」

「美味しいね！」

皆で串焼きにかぶりついているが、何の肉かは不明だ。獣肉というよりは、鳥のササミっぽいのだが――。

獣人達の話だと、トカゲのようだ。

「胡椒をパラパラと振りかけるだけで、串焼きがご馳走になるんだから、止められねえ」

「そうだにゃ」

「アストランティアじゃ、香辛料の組合シンジケートが無くなったから、このぐ
らいの料理は市場で売られるようになるかもしれないぞ」

「そうですわね」

胡椒が掛かってない肉を串から外し、ベルに食べさせると、パク
つと丸呑みだ。

森猫と一緒にいると、商人達が集まってきて売ってくれと言われ
るのだが——無論、拒否。

まあ、人間に馴れている森猫ってのは、そのぐらい珍しいんだろ
う。

露店を見まわっていると、そのうちの一軒——その店主が、見
慣れた物を使って計算をしている——そろぼんだ。

木で出来た菱型の珠が沢山並んでいる——少々大きいが、その姿
形も間違いなく、そろぼん。

その店主にちょっと金を渡して、話を聞く。この世界、対価無
しじゃ情報は全く得られない。

金をケチると、ろくなことがないのだ。

「ご店主、その計算器はどこから手に入れた物なんだい？」

「ああ、これは帝国から入ってきている物であ。帝国との国境に
近いソバナの街から流れてきているんだよ」

プリムラの話では、国境を挟んで2つの街が並ぶように隣接して
いると言う。

帝国側が、ドンクレスウエストエンドシュタット、王国側がソバ
ナという街らしい。

「使ってみると、とても便利でな、手放せなくなっちゃったよ」

「私もそうですわ。父に教えたら、大変興味を示していましたし」

「まあマロウ商会なら、同じ物が作れるだろう」

ダリアの職人に作れるなら、高い金を出して帝国から輸入する必

要もない。

しかし、この帝国で使われているそろばんというのは、例の転移者が考案した物だろう。

この世界は特許が無いので、こういう発明品をしても儲からないんだよな。

だが、マロウ商会のように、発明品で社会に多大な貢献をしたと認められれば、家名を名乗れて箔が付く。

そうなれば、金回りが良くなるのも事実だ。

ついでに、この街の道具屋の場所を何箇所か聞く。

何軒か回ってみたのだが、全部外れ。最後の一軒を訪れてみた。

この世界の道具屋といえば、ダリアの爺さん、そしてアストランティアの婆さんの店のように、乱雑なイメージがあるのだが――。

訪れた店は、それに反して小奇麗な店。石造りの2階建てで、1階にはガラスの窓が嵌っている。

店の中に入る。中も明るく小洒落た感じで、爺さん婆さんの真っ暗な店とは対照的なのだが、あの道具屋のワクワク感がないのは少々残念な気もする。

「こんにちは」

「いらっしやい」

店主は妙齢の女性――栗毛のウェーブヘアに胸の開いた暗い紫色のタイトのワンピースを着て、腰には飾りを巻きつけている。

彼女も魔導師なのだろうか？　こういうちょっと派手な格好をしているのは、魔導師だと思うのだが。

俺と一緒に付いてきた皆も、店の中をキョロキョロと見回し、ベルは入り口付近で座って待っている。

「何かお探しで？」

「魔道具や、魔導書を探しているのだが」

「あいにく出物は無いねえ。魔導書は爆裂魔法エクスプロージョンがあるけど……」

「爆裂魔法は持っているからな」

何やら無関心そうだった女店主が、ピクリと反応した。冷やかしかと思つたら、金の匂いを感じ取つたのだろう。

「名義変更はしてあるのかい？」

「ああ、アストランティアでやってもらった」

「あの婆さんは、まだ生きてるのかい？」

「生きてるぞ。知り合いかい？」

「まあ、魔導師ってのは、だいたいが知り合しさ」

それじゃ、あの人の事も聞いてみるか……。

「白金のアルメリアという魔導師は知っているか？」

「んあ？ そいつは、10年程前行方知れずになって、それっきりって噂だけだねえ。あんたは関係者かい？」

「まあ、そんなところだ」

彼女にも少々金を渡して世間話をする。

「ここで、大討伐が行われたって聞いたんだが、獲物は何だったんだ？」

「ああ、レッサードラゴンさ。この連中じゃ手に負えなくってねえ、王都から大魔導師様がお出ましってわけさ」

「おい、ニヤメナ。レッサードラゴンって普通のドラゴンと違うのか？」

「大きさや火力が全然違うよ。ドラゴンモドキなんて言う奴もいるけど、レッサードラゴンだって、討伐するのは大変なんだぞ」

「じゃあ帝国でドラゴンを倒した奴ってのは、大偉業だったんだな」「そりゃ本物のドラゴンを初めて討伐したんだぞ？」

なのに儲けを全部取られて不憫な奴。やはり王侯貴族には十分に

気をつけないとな。

「あの森猫は調教^{テイム}してあるのかい？」

「ああ良い子だよ」

「なかなか、やるもんだねえ」

実際のところ――森猫が何故こんなに懐いてくれているのかは不明なのだが。

この店からは、虫除けの魔石を何個かと、親子の方向探知機があったので1セット買った。あると便利だからな。

例えば、俺が子機を2つ持って、アネモネと家に親機を持たせたり設置すれば、双方の位置関係を把握出来る。

アネモネが狩りから帰ってこなかったり、行方不明の時にも対処出来るってわけだ。

まあ獣人がいれば臭いで追えるから、要らないといえは要らないが、備えあれば憂いなしって言うじゃないか。

腹ごしらえを終えて、買い物も済んだので、アキメネスの街出る事にした。

皆でラ○クルプ○ドに乗り込み城壁を潜ると、また街道を走りだす。

「次の街は、なんていう街なんだ？」

「イベリスです。王都の隣街だけあって、かなり大きな街ですよ」

アキメネスから先は、ダリアやアストランティア近辺のように大きな深い森はなく、小さな森が点在するだけの穀倉地帯。

イベリスという街があるエキナセアベア公爵領は、豊かな土地であるようだ。

そのイベリスは、王都の人口100万人に次ぐ、30万人程が暮らす大都市らしい。

それだけの大都市となると、インフラの整備が大変だと思うんだが、都市が維持出来てるって事は、魔法とかで何とかしているのかもなあ。

下水の浄化も、水石って石でなんとかするみたいだし。魔法ってのは侮りがたいよな。

道の途中――アストランティアの悪徳商人だったソガラムらしき馬車を追い越した。

彼等はアキメネスを通過したらしい、つぎのイベリスへ向かうのか、それとも王都まで行くのか。

だがもう、彼等とは終わった話だ。

穀倉地帯の中を真っ直ぐ延びる街道を走ると、2時間程でイベリスの街が近づいてきた。

車の時計では、午後3時過ぎ――ただ、時間はタダの気休めだ。こんな世界だ、アバウトな時間が解れば良し。

このままイベリスを突っ切って王都まで向かえば、閉門には間に合うと思うのだが、無理をする必要もない。

高い城壁の外にも、入りきらない住宅が並んでいるのだが、粗末な家が多い。

俗に言うスラム街なのだろう。人が多いって事は、そういう人口も多いってことだ。

「城壁の外にいるのは、職が無い日雇い労働者や、離農者などが多いですよ」

プリムラが、この街の様子を教えてくれる。この街やこの先の王都にも行った事があるようだ。さすが、お嬢様。

「ダリアやアストランティアは、城壁の中に貧民街があったけどなあ」

「人が多いので、外に溢れてしまっているのです」

「この分だと、王都もこんな感じなのかい？」

「ここしばらくは王都を訪れていませんが、以前行った時には、こよりもっと酷い有様でした」

「王都に行けばなんとかなると、考えてしまうのかなあ。ダリアのノースポール男爵領みたいなどろに行けば良いのに……」

「ダリアまでの旅は困難なのですよ。旅にはお金が掛かりますし」
うーん、元世界の感覚で考えてしまうからなあ。

車なら100kmぐらいはすぐなんだが——ここには馬、馬車、そして徒歩しか移動手段がない。馬車に乗るにはかなり高い運賃が必要だし。

徒歩での旅行となると、1ヶ月以上掛かるか……途中のメシ代もあるし、街へたどり着けなかったら魔物や野盗の危険があるのに野宿しないとダメだしな。

例えば、ダリアとアストランティアの間でも約100km離れている。都市間で走っている高速馬車で2日——途中で1泊。

馬車に乗れなければ、危険な森の中で何泊もしなくてはならない。戦闘力が高い獣人などが同行していればよいが、戦闘が出来る者がいなければ護衛を雇う必要がでてくる。

それには金が掛かる。この世界で、貧乏人が他の土地へ行くというのは、文字通りの決死なのだ。

それ故、生まれてから1歩も故郷から出ないで一生を終える住民が多い。

城壁の門を潜ると、石畳の立派な道路。石造りの高い建物が並んでいる。パツと見ただけで、4階建ての建物も見える。

ダリアやアストランティアに比べると、かなり近代的な感じがする街だ。

俺は、車を脇道に入れると、皆を降ろしてアイテムBOXへ収納した。

余り脇道に入ると、危険が増すと皆が言うので注意をする。そう

いうのが、この世界の常識のようだ。

「さて、宿屋を探すか……」

「おい、クロ助、俺達も探そうぜ?」

「そうだにゃ」

獣人達は、別々に宿屋を探す算段をし始めた。

「ちょっと待て、一緒に泊まらないのか?」

「旦那あ、獣人と一緒に泊まれる宿屋なんてないよ」

「けど、獣人が泊まれる宿屋はあるんだろ?」

「そりゃあるけど、あまり上等な宿屋じゃなくて、木賃宿だよ?」

「まあ、良い宿が無かったら、街の外へ出て野宿しようぜ」

「はあ……旦那って本当に物好きだねえ」

「何言っているんだ、家族じゃないのか?」

「そうだよ!」

「……!」

俺とアネモネの言葉を聞いたニヤメナが泣きそうな顔になっている。まあ、獣人には涙腺がないので涙は出ないのだが。

「とりあえず、ここの冒険者ギルドへ行ってみようぜ。そこで聞くほうが早いだろ」

「そうだにゃー」

道で露店をやっている婆さんに銅貨を渡し、冒険者ギルドの場所を教えてもらう。

この街には2カ所の冒険者ギルドがあるようだ。さすがに、デカイ街だな。

その一つ、南街冒険者ギルドへ向かう。

「ということは——王都にはもっと沢山の冒険者ギルドがあるって事か?」

「いいえ、王都には冒険者ギルドは一箇所しかありません」

プリムラが奇妙な事を言う。100万人もいるデカイ都市で、冒険者ギルドが1箇所しかない……？

「え？ どういうことだ？」

「冒険者の仕事がないのです」

「ああ、そういう事か……」

つまり、森も無くて周りは全部畑——魔物もないし、薬草も生えてない。やることがないのだ。

ある仕事といえば、下水のネズミ退治や、害虫駆除の仕事ぐらいしかないという。

そんな仕事なら、ギルドへ入らなくても日雇いやらでやりゃいいからな。

「ここ、イベリスも人口に比べれば冒険者の数は少ないはずですよ」
「なるほど、冒険者ってのは地方の仕事なのな。でもドラゴンとか、デカイ魔物が出たらどうするんだ？」

「そういう時は旦那。軍隊のお出ましさ」

ここの公爵領も王都にも、立派な騎士団が存在していて歩兵などの軍隊もいるという。

「そりゃ、確かに冒険者の出番はなさそうだな。けど地方なら、子供でも薬草を摘んで小遣い稼ぎが出来るのに、ここら辺じゃそういうのも無理って事か……」

「その結果が、あの貧民窟なのです」
街が大きいってのも良し悪しだな。

そんな話をしながら、この街の冒険者ギルドへやって来た。石造りの4階建ての建物、窓にはガラスが嵌っていて、玄関の作りも立派だ。

中も明るく広い、床は板張り。柱は石なのだが、壁は木の板が張ってあるようだ。

とりあえず皆を引き連れて、正面の受付へ行く事にした。赤いベストを着た女子職員が座っている。

どこのギルドもこの制服なんだな。だが、森猫に気がついた、獣人達がゾロゾロと寄ってきた。

「この鑑札は――旦那がこの森猫様の主人なんで？」

サバトラの男の獣人が話しかけてきて、ベルの首に飾ってある銀の鑑札に気がついたようだ。

「まあな、森猫様を拝んでもいいぞ」

俺にそう言われて――凜と座っているベルの前に、屈強そうな男達がペコペコとお祈りをし始めた。

「森の中で、森猫に会うのは難しいのか？」

「そうにゃー、結構森の奥に行っても滅多に会わないにゃー。だからにゃー木の上にお供えをして、出てきてもらうにゃー」

ああそれなのに、出てくるのは黒狼ばかりなので、猫人がブチ切れるってわけだ。

しかしそうなると、この辺りにはもう大きな森はないという事なので、森猫に会う確率はゼロって事か。

そりゃ拝みたくもなるかもな。お祈りが終わった獣人達は、凄く幸せそうだ。

――「これで、俺にもツキが回ってくるかもしれないぜ」――そんな事を考えているのかもしれない。

ひと通り、獣人達のお祈りが済んだようなので、ここの受付へ向かい話を聞いてみる事にした。

76話 面倒な冒険者ギルド

俺達は、王都一步手前の街、イベリスへやって来ていた。

非常に大きな街で人口も多い。この街で1泊する事にしたのだが――どうせ泊まるなら皆で一緒に泊まりたい。

だが、獣人達と一緒に泊まれる宿屋というのは、余りないという。それを探すために冒険者ギルドへやって来てみたのだが……。

受付の赤いベストを着た女子職員に宿の事を聞いてみる事にした。

「少々聞きたい事があるんだが」

「ギルド証をどうぞ」

赤い髪を肩辺りまで伸ばした女が、事務的に答える。

「いや、この街のギルドには登録していないんだが、宿の場所だけ教えてほしい」

「ご利用するなら、登録をしてからにしてください」

嫌そうな顔をして、そんな事を言うのだが――何という、つつけんどんな職員なのか。多少美人でも、こりゃムカつく。

ダリアやアストラランティアでも、登録しないとこんな感じなのだろうか？

その前に登録すると銀貨1枚（5万円）も取られるだろうが。要は、それを寄越せて事なんだろうけど。仕方なくギルド証を出す。

「登録料は銀貨1枚です」

やむを得ず、言われる通りに銀貨も払う。

「少々お待ち下さい」

職員が奥へ引っ込むのを見て、溜息をつく。

「登録しないと、どこのギルドもこんな感じなのか？」

「まあ、こんな感じだけど、ここはちょっと酷いねえ」

「そうだにゃ——でも相手が獣人だと、こういう対応される事多いけどにゃー」

それも、ちょっと酷い話だな。シャガを退治した時に、獣人の男達がギルドに鬱憤をぶつけるような事を言っていたのを思いだす。

獣人達と話していると、慌てて女子職員が戻ってきた。

「あの！ ケンイチさんは、極悪野盗のシャガを討伐なさった方なんでしょうか？」

ちよつと待て！ 人の個人情報——。

「そうだけど、人の情報を余り漏らさないでほしいな」

「申し訳ございません！」

「それで、国王陛下から呼ばれて王都に行く途中なんだが、この街で宿を探している」

「ええっ！ 陛下から?!」

俺がアイテムBOXから、国王の蟬印が押された羊皮紙を取り出して、女子職員に提示する。

「あの！ 少々お待ち下さい！」

その手紙を持って、女子職員が奥に引っ込んだ。おいおい、ちよつと……。

そして、しばらくすると戻ってきたのだが、奥の部屋へ来てほしいうという。

「なんなんだ」

皆にロビーで待ってもらい奥の部屋に通される。

中は木造だが、結構良い造りになっているようだ。使っている木材も良い物だと思う。

応接間らしき部屋に通されると、赤い革が張られた木製のソファーに男が座っていた。

土色の上下に、腰にはベルトと短剣。金髪の短い頭をした俺と同じぐらいの歳の男。そして机には俺の手紙が置いてある。

「このギルドのマスターをしております、テイカと申します」

「ケンイチと申します、よろしく。何か問題でもありましたか？」

その手紙も、ユーパトリウム子爵様経由で頂いた本物ですよ」

「いいえ、この蠟印に疑いなど抱いておりません」

そりゃ、こんなの偽造したら首が飛ぶどころじゃ済まないし、疑えば国王への忠誠を疑われる事になる。

まあ地方のギルドマスターにどのぐらいの忠誠心があるかは解らんが。

「それでは……俺は、なんでこんな部屋へ呼ばれたんです？」

「そちら様は、どのようなご用件で、このギルドへ？」

「この街へ泊まろうと宿屋を探そうとしたのですが、仲間に獣人がいるので、彼等と一緒に泊まれる宿屋はないものかと——それじゃ、ギルドで聞いてみるかという話に」

「そいつは難しいですね……木賃宿などの素泊まりならありますが」俺は、席を立つと窓からギルドの裏庭を覗く——結構いいスペースがある。

「ちょっと、あそこの裏庭を使わせてもらえませんか？ あのぐらいの広さがあれば、家が出せる」

「家？」

俺が口に出した単語に訝しげな顔をする、ギルドマスター。

「アイテムBOXに小さい家が入っているんだ」

「ああ、アイテムBOX持ちだという噂も聞いてます」

もう、こんな所まで話が伝わっているのか、そりゃ居場所がバレたら王都から手紙が来てもおかしくはないよなあ。

「まさに、噂千里を走るだな」

「そういう事でしたら、条件次第では、裏庭の使用を認めてもよろしいですよ」

「なんだ、その条件ってのは？」

「依頼を受けていただきたい」

「俺に、利点^{メリット}が全くないな。街を出て外で野宿する事にするか……」

「ギルドマスターの権限を使って、強制する事も出来るんですよ？」

「そんな事を言われてもな。シャガ討伐の時には、ダリアの腕利きの冒険者達も多数参加していたが、今は家族だけだし」

「ケンイチという魔導師は、強力な鉄の召喚獣を使用出来るとの報告を受けておりますが？」

「む……」

くそ、面倒だな。そこまで知られているのか。

ここで依頼を断って、後々ギルドの使用に制限が掛かったりすると面倒だ。有名になると、こういう面倒事も増えるのか。

「……とりあえず話を聞くが、俺は国王陛下からの呼び出しを受けているんだぞ？」

「それを押してお願いしたい」

ギルドマスターの話では、街から少々離れた所にある小さな森に遺跡があると言う。

その遺跡にゴブリンが住み着いているらしい。森から付近の村々を荒らしながら辿り着き、50匹程の子鬼が、そこを根城にしているようだ。

森から離れているこのイベリスの街には、対処出来る腕利きの冒

険者がいないらしい。

ゴ布林というと、元世界では雑魚のイメージがあるが、小柄ながらパワーもスピードも普通の農民などを上回っており、中々厄介な存在のようだ。

つまりは、シャガの連中と同じぐらいの脅威度か。

「ダリアやアストランティアから、腕利きの冒険者を呼び寄せればいい」

「ゴ布林退治に、そんな予算は出せませんよ」

そうなれば、報奨金にプラスすることの往復の旅費まで捻出しなければならなくなるらしい。

多分、それだけで赤字——しかも依頼主は農民達だ、金など持っているはずがない。

シャガの時は被害が甚大過ぎて、報奨金の金額もかなり上がっていたが、ここはまだそこまでいいのだろう。

「この公爵様に泣きつくのは？」

「ゴ布林退治ごときに予算や兵力を出せないと、断られました」
ギルドマスターが首を振る。一応、やる事はやっているようだ。

「領民が困っているんだ、それを助けるのが領主の務めだろう？」

「それが、討伐をする程の被害が出ていないとの判断のようでした」

……」

村が全滅しているわけでもないし、被害は農作物と十数人って感じらしい。元世界なら、これでも大騒ぎになる事件だけどなあ。

それにゴ布林などを退治しても名誉にならないって事か。相手がドラゴンなら名誉になるのかもしれないが……丸焦げになって終了だと思う。

民が少ない領であれば、すぐに対処しないと拙^{まず}いだろうが、これだけ大きな貴族領だ。代わりはいくらでもいる——そんな感じなの

だろう。

「話は解った。だが俺の一存では決められん。仲間と相談してみる」
「よろしくお願い致します」

高圧な感じもしないし、マジで困っているだけだと思われる——
しかしなあ。

報酬は金貨10枚らしいが、10人で行ったら金貨1枚(20万円)だぞ。

相手は50匹の子鬼達——脅威度はシャガ戦と同等、命がけで20万円……これじゃ、やる奴がいけないのもうなずける。

廊下を歩き、皆の下へ戻ってきたが、ホールが騒がしい。

「一体いつになったら、ゴ布林共を退治してくれるんだ!？」
「女や子供もさらわれているんだぞ!？」

「ただいま、検討中では……」

受付の女がカウンター越しに、粗末な服を着た沢山の男達に囲まれている。

つぎあてだらけで土で汚れた服——ベルトの代わりに荒縄を腰に巻いているのだが、恐らくは農民だろう。

大人だけではない、小さな子供までいるではないか。

「いつも検討中じゃないか! どうせ金にもならない農民の依頼なんて無視するつもりなんだろう!」

「そんな事はありませんが——あっ! あの方は凄腕の冒険者さんです!」

おいこら、まて! コツチに振るな!

「あんたが引き受けてくれるのか?!」 「おおっ!」

「待て待て、まだ決めたわけじゃない。これから仲間で話し合いを

しなくちゃな」

とりあえず農民達を押しつけて、皆の所へいく。

「旦那、こりゃいったいどうしたんだい？」

「なんにゃ？」

「どうしたの？」

「何のお話だったんですか？」

「にゃー」

待ちわびていたのか——ベルが黒い身体をスリスリと俺に擦りつけてくる。

「それがなあ——ゴブリン退治をしてくれて言われたんだよ」

彼女達に、ギルドマスターからの依頼の内容を伝える。

「そりゃ、旦那とアネ嬢がいりゃ、ゴブリンの50匹ぐらいは平気だと思っけどなあ……」

「そうだにゃ」

歴戦の彼女達が分析してもウチのパーティの戦力はかなりの物らしい。

まあ、上手いことゴブリン共を一箇所に纏められれば、アネモネエクスプロージョンの爆裂魔法か、俺の圧力鍋爆弾で一発だが。

しかし戦いに侮りは禁物。なにせ、ガチで命がけの戦闘なのだ。

「依頼を断ってもいいけど、後々のギルドの使用に制限がついてしまう」

「そりゃ面倒だな——脅されたのかい？」

「まあ、そんなところだが——どうする？　あまり危険な事はしたくないので、このままバックレてもいいんだが……」

「ケニイチに任せるにゃ」

「うーん……」

俺が悩んでいると、農民のリーダーらしき男が俺の所へやって来た。

「頼む！　お願いだ！　このままでは離農者が続出して村が崩壊する」

そうならば、街の外にいたような貧民窟の人間がまた増えるのだろうか。

「そうは言われてもなあ――命がけの割には金は安いし……」
だが、俺の言葉を聞いて、子供達がトコトコと前に出てきた。

「これ……」　「僕のお小遣い全部……」　「……」
それぞれに、銅貨を差し出して潤んだ瞳で見つめてくる。

手に持っている硬貨の価値は、大体500円～1000円ぐらいなのだが、農民の子供にしてみれば大金だと思われる。

「ケンイチ、助けてあげないの？」

アネモネも俺を見上げてくる――クソッ！　止めてくれ、その攻撃は俺に効く。

威力絶大の子供達のお願い攻撃である。お前等、オッサンの弱点を突きやがって、これじゃ断れねえじゃねえか！

「解った、解った――引き受けよう」

「本当か？」　「やった！」　「これで村は救われる！」

「ちょっと待て！　気が早過ぎるぞ。人手不足なんだ、お前等にも手伝ってもらうぞ？」

「戦闘はやった事がないが、できる事があれば、なんでも言ってくれ！　これ以上は犠牲者は出したくないからな」　「そうだ！　俺もやるぜ！」　「仇討ちだ！」

まあ農民だからなあ。でも教えればボウガンを撃つ事ぐらいは出

来るだろう。

「よっしゃ！ 決まりだな。それじゃ旦那、俺は助っ人を集めるためにギルドに来てる連中に声を掛けてみるよ」

「ニヤメナ、頼む——ふう……すまんなプリムラ」

「いいですよ。ケンイチがいつも言ってるじゃありませんか、『情けは人のためならず』——と」

一応、俺の家族は、依頼を受けるのには反対はしていないようだ。

「ミヤレーは、『また、ケンイチのお人好しが始まったにゃ』って言わないんだな」

「思ってるけどにゃ。でも賢者のケンイチのやる事には、間違いはないと思うしにゃ」

まったく賢者はやめてくれ……受付のカウンターへ行く。

「おい、このギルドマスターにゴブリン退治の依頼を引き受ける」と伝えてくれ。それで裏庭を貸せて伝えろ。それからなあ——」

「なんでしよう？」

「人の個人情報ペラペラと話すのは止める。次にやったら魔法で血液を沸騰させるぞ？」

受付の女に思いつき顔を近づけて、脅しを入れる。ダリアとアストランティアの冒険者ギルドは何の問題もなかったが、ここはちよつと酷い。

「きゃん！ も、申し訳御座いません！」

青い顔になった受付の女が慌てて奥へ消えていく。

すぐにギルドマスターの使用許可が出たので、20人の農民と子ども達を連れて裏庭へ向かった。

裏庭の隅にアイテムBOXから家を出す。

「おおっ！ 魔法？」

「アイテムBOXだよ」

「これが、アイテムBOXか……」

「どうやら、ここに居る農民達はアイテムBOXを見るのは初めて
のようである。」

「なんでもすると言ったんだが、手勢になってもらうぞ？ 武器は

俺が貸してやるから心配するな」

「は、はい……」 「でも、戦いに参加した事などは……」

「まあ、剣を持って戦えとは言わないから大丈夫だ」

それを聞いて農民達もほっとした表情を見せる。

「ここで皆で泊まって、明日そのゴブリンがいるという遺跡へ連れて
いってやる」

「え？ いったいどうやって……」

「おれの召喚獣の背中に乗せてやるんだよ」

「し、召喚獣？」

「馬なしで動く車にゃ」

「馬なしで馬車が動くんですか？」

とりあえず、アイテムBOXから薪を出して火を焚く。料理には
コンロ等があるが、夜はそれなりに冷え込むからな。

まずは腹ごしらえの準備だ。

「プリムラ、アネモネ——沢山人がいるから、カレーがいいかな？」

「そうだね！」

「わかりました」

アイテムBOXから、大型の鍋とコンロー——そして野菜と肉を引
っ張りだす。

子供達にも手伝わせて、野菜の皮を剥き次々と鍋へ入れる。そし

て、肉もたっぷりだ。戦いに向かうなら栄養を付けた方がいい。

それに、もう圧力鍋も必要ない。アネモネの魔法で加熱すれば、肉にも野菜にも簡単に火が通るのだ。

鍋ごと電子レンジに入れてチンをするようなものだな。

料理は彼女達に任せて、俺達は軍事訓練をする。

ニャメナが連れてきた助っ人は獣人が2人――背の高い三毛の女と、黒白の大柄な男。

男の方は白い手袋が可愛いのだが――ミャレーの話では結構年寄りらしい。獣人の歳は全然解らん。

首に、何かの牙らしき物を繋げた首輪をしている。多分、今まで仕留めた獲物の物だろう。

粗末な上着に、丈の長い半ズボンのような物を履いている。獣人の男は大体こんな格好をしているな。

女は、ベストのような上着に、ミニスカ――女は、こんな格好が多い。

ファッションや流行りなんて無い世界だ。とりあえず、手に入る物を着る、それで精一杯なのだろう。

助っ人代は1日金貨1枚(20万円)だ。結構いい稼ぎのように思えるが、命がけだからな。

結局、この2人しか手を挙げてくれなかった。なんだか獣人と少なからず縁があるのだが、決して俺の趣味ではない。

それに獣人達が寄ってくるのは、俺が森猫を連れているせいもあるのだろう。

「爺さん、大丈夫にゃ？」

「ここしばらくは戦いからは遠ざかっていたがな、まだまだやれるぜ？」

声は凄く低くて渋い声だ。この爺様獣人に声優をやらせてみたい。

「それにな——今度、孫が生まれるんだ。何か買ってやりてえじゃねえか。それに森猫様と一緒に戦えるなんて、孫に自慢が出来るぜ」

「それはめでたいな」

「そうだろう」

女の獣人は中年のようだな。やっぱり歳は解らない。

「よろしくね。ここらでちよつと稼ごうと思ってたところさ。森猫様と一緒に戦って、あたかも肖^{あやか}りたいねえ」

爺様獣人と同じように、こちらも低くて渋い声なので、獣人は歳を取ると声が低くなるのかもしれないな。

助っ人獣人には、ポリカーボネート製のバックラーとカトラス刀を貸す。

「残念ながら、鎧^{たぐい}の類はないんだよ」

アーマーも、獣人用となるとサイズが全然違うからな。売ってる事が少ないので、彼等は自作する事が多いようだ。

「いやあ、こんな立派な武器を貸してもらえただけで十分さ」

女は、カトラス刀を構えると、凄いスピードで振り回している。

「なるべく近接攻撃はさせないつもりだからな」

「それじゃ、どうやって……」

獣人の男が、疑問の声を上げるのだが、俺は黙って農民達を指さした。

「農民達には、飛び道具を使ってもらおう」

俺はアイテムBOXからコンパウンド式のクロスボウと、以前刈った草の束を取り出した。

こいつを的にするために、建物の壁にコンパネを2枚重ねて立て

かけ、その前に草の束を置く。
とりあえず農民達に手本を見せる。

「こうやって構え——この筒を覗いて引き金を引く。簡単だろ？」
俺が引き金を引くと、デカイ音を立てて矢が発射され、草の束に深く突き刺さった。

「「「おおおっ！」」」

「やってみろ」

クロスボウはニャメナが一台使うから、手持ちが9台——後11台必要だな。

購入ボタンを押すと、シャングリ・ラからクロスボウが11台落ちてくる。アイテムBOXから出した分を入れると合計で20台だ。それぞれに、クロスボウを持たせて射撃訓練をさせる。

10人ずつに二手に分かれて、射撃と装填を繰り返し、それなりに連続した攻撃が可能になるだろう。

よく話に出てくる3段階ちのようにするのは、訓練が必要だしな。それに、あれは創作だって話もあるみたいだし。

弦を引いて矢をセット、構えて引き金を引く——簡単だ。農民でもすぐに手順を覚えた。

皆は鍬くわを振り回して農作業をしているので、それなりにパワーはある。

スコップもついているので、そんなに外れる事はない。

「筒の中に十字が切ってあるだろう。そこへ向けて矢が飛んでいくから、狙い易いはずだ」

「こりゃ、すげえ！」「こんなの公爵領の軍隊でも使ってたねえ！」

「どうだ？ こいつを使って離れた所から攻撃するのなら、お前等でも出来るだろう」

「やれますよ!」「これなら、女房の仇が討てます!」「よっしゃやるぜ!」

1人当たり、20本ぐらい射撃をしたらどうか。アイテムBOXから透明なポリカーボネートのタワースールドも出して訓練をする。2人1組になって、盾に隠れつつ、装填と射撃を繰り返す訓練だ。悪戦苦闘する皆の様子を香箱座りしたベルがじっと見つめている。そんな俺達の様子をギルドの職員達が覗いていたのだが――その報告でも受けたのだろう。ギルドマスターが見学しにやって来た。

「弩弓ですか? 私にも見せてくれませんか?」
興味深そうに見ているギルドマスターにクロスボウを渡す。

「おおっ! これは……なんという見事な弩弓!」

ギルドマスターは鮮やかな手並みで矢を装填すると、放った矢を的に命中させた。

やはり、ギルドマスターともなると、それなりに手練てだれのようだ。

「それに、素晴らしい威力と精度!」

「あいにく非売品だからな。いくら金を積まれても売れないぞ?」

「それは残念……それにしても、アイテムBOX持ちだとは聞いていましたが、これほどの物とは。王都から呼び出しが掛かるのも道理ですね」

「なるべく、バレないようにしていたのだが、色々と派手にやり過ぎたな」

そりゃ何もしないで、ひたすら森の中でじっとしていれば、バレなかっただろうが、そんなのツマラナイだろう?

せっかくの異世界とチートだ。楽しめるところは楽しまないと。だが、バレると同時に色々と面倒事が増えたのも事実だな。

まあ物は考えようだ。王都まで行って、国王を味方に付ける事が

出来れば、他の貴族共は一切手出しは出来なくなるだろう。
だが問答無用で徴発されたりするのなら、逃げるけどな。
とりあえず金は出来たので――そうになったら今度こそは、何もせずに森の中でひっそりと暮らすのも良いかもしれない。

なんだかんだで、アイテムBOXには2億円近くの商品が詰まっている。

後40年生きるとして、年間500万円――1ヶ月40万円以上金が使えろが、食料だけで毎月そんなに使う事もないだろう。

農民への簡単な軍事訓練が終わり、辺りが暗くなる頃には、いい匂いがしてカレーが出来上がっていた。

人数が多いので、皆で地べたに座って食事を取る。メニューはカレーとパンだ。

パンは量が多いので、アネモネが焼いたのでは間に合わない。シヤングリ・ラから買ったパンを出している。

「いっぱい食べて下さいね」

「美味しいよ!」

プリムラとアネモネの声と共に、皆がカレーを食べ始めた。

「うめえええ! なんじゃこりゃ!」 「美味しい!」 「香辛料料理か?」

叫ぶ農民の男達と一緒に子供達も、カレーを食べている。

「こりゃ! 美味すぎるだろ! こんな美味い物、孫にも食わせてやりてえ!」

「あたいも、こんな美味いものは、生まれて初めてだよ!」

口の周りをカレーだらけにしている獣人達を横目に、黙ってカレーを食べている子供達に声を掛ける。

「美味いか？」

黙って頷く子供達は黙々と食べているのだが、食べるスピードが落ちないので美味しいのだと思う。

酒を飲みたい者には、1杯ずつ酒も出してやる。一番安い焼酎だが。ボトルで出すと、獣人達が全部飲んでしまうからな。

「しかし、よろしいのですか？　こんな高価な香辛料を使った料理なんて、食べさせていただいて……」

「それに、これは銀の匙じゃ……」

スプーンは、いつものようにステンレス製なのだが、説明してもわかるまい。

「そんなに色々と気にしながら飯は食うな。とりあえず食っとけ。

明日は戦闘になるんだ、栄養を付けないとな」

「そうそう、せっかくこの旦那が奢ってくれるんだ、景気付けて事で、ありがたくゴチになりなよ」

助っ人の獣人の女が、盃を掲げている。

飯は食わしてやるが、討伐で得た物は全て俺の物という話になっている。
アイテム

カレーに舌鼓を打っている皆と一緒に、訓練を見学していたギルドマスターも料理を食べている。

「この料理といい、素晴らしい弩弓といい——貴方はいったい……？」

ギルドマスターが、カレーの皿を持ったまま神妙な顔をしている。

「普段は、アイテムBOXを使った商売人なんだよ。どうだ？　貴族様から、お墨付きを頂いた香辛料料理は？」

「全くもって、実に素晴らしい」

建物の陰から、あの受付の女が、料理を食いたそうにチラチラこちらを見ているのだが――。

そいつのところへ――小さな器に盛ったカレーとパンを一個だけ子供達に持っていかせた。

全く俺も、大概お人好しだな。

77話 対ゴブリン戦闘

皆で泊まれる宿屋を探して冒険者ギルドへ行ったら、ゴブリン退治を頼まれた。

何を言っているか解らねえと思うが――マジでどうしてこうなった？

まあ、確かに面倒な仕事を押し付けられてしまったのではあるが――。

今回の仕事は、なんとか困っている農民の願いを叶えてやりたいという、ギルマスの思いから出たものだと思われるし……。

彼としても、厳しいギルドの経営の中、領主に掛けあっても一向に動いてもらえず、やむを得ず俺に頼ったのだらう。

それに、あんな子供達の姿を見せられたんじゃ、ここでやらねば男が廢る。

――次の日。

朝飯のパンとスープを食った後、皆で出発の準備をする。プリムラと子供達は冒険者ギルドで待機だ。

「よし！ これから出発するが無理はしないぞ。危なくなったら、すぐに撤退して作戦を練り直す」

「「はい！」」「「へい！」」「よっしゃ！」

ギルドからの依頼に失敗しても、明確なペナルティ等はないが、ギルド内でのランク付けは下がるようだ。

あまり失敗が続くと、依頼を回してくれなくなったりするらしい。まあ実力がない奴は、葉草でも探してろって事なんだろう。

出立式の様子を、ギルドマスターが見送ってくれているのだが、

パーティに混じっているアネモネの姿に訝しげな顔している。

「あのー、こんな子供も連れて行って大丈夫なのですか？」

「彼女は、俺の部隊の大魔導師だよ。爆裂魔法だって使える」
パーティ
ハイプロテクション
エクスプロージョン

至高の障壁の事は秘密にしておこう。だが正直言って、こんな子供を戦闘へ連れて行っていいのか悩む。

獣人達の話では、それが当たり前。冒険者になるなら、避ける事が出来ないと言う。

そりゃそうだが……。当の本人——アネモネも冒険者になりたがっているし、覚悟は出来ているようなので、何も言えなくなってしまう。

「えっ？　こんな子供がですか？」

「ああ、実戦経験も豊富だ」

「そうそう、アネ嬢は街のヘッポコ魔導師より数段実力が上だよ」
ニヤメナが右手を挙げて力こぶを作る。

「そうにや」

「にゃー！」

ベルがアネモネに黒い身体をすり寄せる。

「確かに、昨日の夕飯の時に魔法を使っていましたけど……それ程とは……」

「まあ心配は要らないって事だよ」

「それは解りましたが、これだけの人数をどうやって運ぶのです？
馬車の手配はいたしましたか？」

「いや、俺の召喚獣で運ぶ」

「……噂の鉄の召喚獣が見れるわけですね」

ギルドマスターは腕を組み、半信半疑といった感じだ。やはり自分の目で見えるまでは信じられないのだろう。

「よし、ちょっと場所を空けてくれ！　デカイのを召喚するからな。下敷きになるぞ——やって来い来い、M菱キ○ンター！」

空中から、4トロングボディのトラックが落ちてきて、石畳でバウンドする。

「「うわあああ！」」「なんじゃこりゃ！」「ひい！」

農民たちは、突然現れた鉄の魔物に腰を抜かしている。街ゆく人々も、目の前に現れた巨大な物体にどよめく。

どこで出しても大体似たような反応だな。やはり身近に魔物がいる世界なので、魔物の怖さをよく知っているのだろう。

「これが、お前たちを背中に乗せて運んでくれる召喚獣だ。俺の言うことしか聞かないから、襲ったりはしないで、大丈夫だ」

「本当に大丈夫なんですかい？」「噛み付いたりしませんよね」

「大丈夫だよ。さあさあ皆、荷台に装備を持って乗り込め」

俺に急かされて農民達も覚悟を決めたようだ。次々と荷台に脚を掛けて乗り込む。

獣人達は側板を掴むと、ひょいとジャンプして飛び乗った。

「馬なしの馬車って聞いてたけど、本当に馬がいなくて動くのか？」

「さあ、魔法の事は解らねえし」「そうだな」

「お父さん頑張れー！」「行ってらしゃい！」

荷台に乗る心配顔の大人達へ——プリムラと一緒に残る農民の子供達が手を振るのを見ながら、俺はトラックに燃料を入れた。

メーター読みでは大丈夫だと思うが、念のためだ。大事な時にガス欠とか洒落にならんからな。

全員乗ったのを確認すると、エンジンを始動。

「おおっ！」「なんか唸り始めた！」「大丈夫か？」

後ろから何か聞こえてくるが、まあ——すぐに慣れるだろう。とりあえず、この街から出なくてはならない。

ゆっくりと発進すると、街の北門を目指す。

「なんだありゃ」「馬なしで荷車が動いているぞ？」「魔法か」荷台にいる農民だけではない——街ゆく人々も、こちらに注目して、あれこれ騒いでいる。

こりゃ目立ち過ぎだ。さっさと街から出たい。歩いて街を出てからトラックを出すとなると、結構距離があるし時間が勿体無いからな。

大通りを進み、やっと街を通過して北門を潜ると、真っ直ぐに続く街道へ出る。

辺りは一面の穀倉地帯で、小麦の緑が敷き詰められている。だが、元世界の小麦畑と比べると、少々ヘロヘロだ。ろくに肥料もやってないのだろう。こんな世界だ仕方ない。

農民の話だと、ここから10数リーグ（20 km程）離れた場所にある小さな森の中に、敵が巢食っていると言う。

「10リーグ程なら、半時（30分）も掛からないぞ？」

「この乗り物は——そ、そんなに速いのですか？」

「まあな」

運転席の窓を開け、荷台にいる農民達と話をする。

10分もすると森が見えてきたので右の脇道へ入るが、ここから一本道らしい。それじゃ迷う事もないか……。

森を半分ほど進み、木漏れ日の薄暗い中——トラックを停止させる。

「よし、ここからは歩きだ。見つかると拙いからな」

「よっしゃ!」「よし、いくぞ」

皆が、武器を携えてトラックから降り始めた。

「旦那、このまま突っ込んだ方が良くねえか？」

荷台から勢いよく飛び降りた助っ人の獣人の男が、強攻策を唱える。

「いや、戦闘に不慣れな農民ばかりだ、乱戦にはしたくない」

「そりゃ、そうさ。男ってのはこれだからねえ。突っ込む事しか考えてないんだから」

同じ助っ人でも、女の獣人は強攻策には反対のようだ。

「まあまあ、ここは旦那に従った方が正解だぜ？」

ニヤメナが、爺様を窘めるのだが、彼は不満顔だ。

「そうだにゃ。ケンイチの言うとおりだにゃ」

「にゃーん」

「しかし、せっかく森猫様と一緒に戦えるってのに、派手にいきたくないところだぜ」

爺様獣人はベルの方を見ながらそんな事をつぶやいたのだが――その言葉を聞いた彼女が黒い尻尾をペシペシと地面に打ちつけて、じっと獣人の方を見ている。

「まあ、今回の頭は旦那だ。従うけどな」

爺様獣人としては、森猫様の前で良いところを見せたかったのであろうが、その彼女から否定されてしまったのは、意見を引っ込めるしかない。

「助かるよ。それに、獣人達には先陣を切ってもらうつもりだから、森猫様に見せ場は作れると思うぞ」

「へへへ、そうこなくっちゃいけねえ」

全員が降りた後に、トラックをアイテムBOXへ収納する。辺りを警戒しながら、しばらく歩く。こちらには獣人とベルがいるので敵の気配があれば、すぐに解る。

そして前方に森の切れ目が見えてきた……あの先が、ゴブリン共がいる遺跡らしい。

「ちょっと待て、俺の召喚獣に偵察をさせる」

「旦那、まだ凄いのを隠しているのかい？」

爺様獣人が、俺の事をジロジロと見ている。

「隠すなんて人聞きが悪いな」

アイテムBOXからドローンを取り出すと、すぐに発進させて木々の間から青空が見える真上に上昇させる。

「空を飛んだ?!」「なんだ?」「これが召喚獣なのか?」

周りの農民達が騒いでいるが、辺りを偵察——なるほど、その先は開けて広場になっているようだ。

「おいおい、あまり騒ぐな。見つかるだろ」

「なんだ? 小さな窓に景色が写っているぞ?」「なんじゃこりゃ!」

皆が、俺が持っているドローンのコントローラーに映る映像を食い入るように見つめている。

「あの空飛ぶ召喚獣から見た景色が写っているんだよ」

「魔法なのですか?」

「まあ、そんなところだ」

周囲を警戒しながら、身を低くしてドローンの画像を見ながら付いていく——その先に見えてきたのは、崩れている遺跡だ。

崩壊した石造りの建物が野ざらしになって、草や蔦に覆われているのだが――上からみると辺りの状況がよく解るな。

建物の入り口だったらしい場所に穴が開いていて、歩哨のゴブリンが二匹。

小さく黒い身体に、粗末で最低限の布のような物を巻きつけている。

入り口の上は崩れた壁が踊り場のようになっており、弓を持ったゴブリンが二匹、ウロウロと歩き回り辺りを警戒中だ。

その先は――屋根が落ちたホールだろうか。周囲を石の壁に囲まれた大きな部屋になっており、そこを子鬼達は根城にしているようだ。

俺の現在位置は木の陰に隠れており、ドローンの回収は難しいので、目立たない所へ着地させた。戦いが終わった後で回収すればいいだろう。

「敵の大体の配置は解ったな」

仲間を全員集めて作戦を伝える。

「よし、さっきも言った通り――先ずは、助っ人の獣人の2人に突っ込んでもらう。上にいる弓兵は、ミヤレーとニャメナが仕留めてくれ」

「よっしゃ！ 暴れるぜ！」 「任せておくれ」

助っ人の獣人は気合充分だ。こういう時に、勇ましい獣人は本当に頼りになる。

「任せろ旦那。クロ助、ヘマするんじゃねえぞ」

ミヤレーとニャメナが、コンパウンドボウとクロスボウを構える。

「誰に物を言ってるにゃ。トラ公より腕は上だにゃ？」

「なんだと？」

「お前等、後にしろ」

「うっ！」 「ふにゅー」

「旦那、これは誘き出しだね？」

女の獣人が俺の作戦に気がついたようだ。

「そうだ、派手に暴れてくれ。そして奴らの仲間が遺跡から出てきたところを大魔法で吹き飛ばす」

女の獣人に圧力鍋爆弾を渡して作戦を説明する。

「この鍋を入り口の前に置いてくればいいのかい？」

「なんで鍋？」

爺様獣人が不思議そうな顔をするのだが、鍋の正体を説明する。

「そいつは魔法で爆発する鍋だ」

「うおっ！」

俺の話を聞いて、爺様獣人が慌てて鍋の側を離れた。

「はは、逆に魔法を使わないと爆発しないって事だろ？」

「その通りだ。無理をする事はないぞ。誘い出せばいいんだからな。逃げ遅れると、魔法に巻き込まれて吹き飛ばされるぞ」

「おほっ！ 剣呑剣呑」

爺様が首を竦める。

「中にいる連中は火を掛けられれば簡単なんだがなあ」

「魔導師様！ 中に囚われた女や子供がいるかもしれません。それはちょっと待っていただきたいのですが」

「ああ、そうか。そういう事も考慮しなくっちゃなあ」

そして大魔法で数を減らした後は、中から出てくる敵を遠距離から狙い撃ちする作戦だ。

ギルドの裏庭でやった訓練通りに、2人1組になって、ポリカーボネートのタワーシールドの陰に隠れて、装填と攻撃を繰り返すのだ。

これなら戦闘を経験した事がない農民達でもなんとかなるだろう。本格的な戦闘なので、アネモネに魔法の触媒に使えるアルミ板を渡す。

「アネモネ、必要なら使え。判断は任せる」

「うん！」

「よし！ 作戦開始だ！」

「よっしゃ！ 行け！」 「あいよ！」

助っ人の獣人の男女が氣勢を上げ、カットラス刀と透明なバックラーを掲げて、ゴブリンの歩哨がいる入り口へ^{とっかん}呐喊する。

「うおおおっ！」 「いやあああっ！」

突然の襲撃に対処が遅れたのか、歩哨の頭蓋に刀が深く食い込むと、辺りに脳漿をまき散らした。

「ギア！」 「ギィィ！」

突っ込んできた獣人に、上から弓矢の照準を定めようとした黒い子鬼の頭に矢が突き刺さる。

「アグ」 「ギ！」

無論、即死である。この距離から一発で仕留めるとは、やはりミヤレーとニャメナの腕は凄い。

いくら凄いコンパウンドボウやクロスボウでも、狙撃となれば非凡な腕が要求される。

「やるにゃ、トラ公」

「クロ助もな！」

突然の騒ぎに、辺りが騒然となり始めた。奥のほうでギャアギャアと何かが叫ぶ声が聴こえる。

会話のようにには聞こえないのだが、彼等はいったい何を言っているという。

敵の大軍の接近を感じた獣人達は、圧力鍋爆弾を入り口へ置いて戻ってきた。

出てくる出てくる、黒いのがワラワラと――まるで虫。

「アネモネいけるか？」

「うん！ 大丈夫だよ」

ポリカーボネートのタワーシールドを斜めに構えて、アネモネが圧力鍋爆弾に狙いを定める。

まさか、あの鍋が爆弾だとは思えない。

「皆！ 伏せろ！ 透明な盾の陰に隠れるんだ！」

「ん！ エクスプロージョン 爆裂魔法（小）！」

圧力鍋が一瞬で白い煙を上げて弾け、周辺に破片と数百本の釘をまき散らす。魔法の爆発と違うのは、その速さだ。

エクスプロージョン 爆裂魔法を使うと、ゆっくりとした爆炎が見えるのだが、こいつは一瞬で弾ける。

文字通り吹き飛んだゴブリン達は、内臓をぶち撒けてバラバラの死体と変わり果てた。

バイオレンスルートは避けようとしても、結局こうなってしまうという。

俺が力を持っていると解ると、それを当てにして群がってくる連中が沢山いるのだ。

元世界と違い、この世界に必要なのは純粋な力。力こそ全て。

「うわぁ……」

いくら魔物とはいえ、人型がバラバラになっているのは、ちょっと堪えるな。

しかも血まで赤い。魔物らしく、黒や青い血が流れてくれればSON値が減らなくて助かるんだが……。

別に、こいつらに恨みはないのだが……この世界の掟^{ルール}ならば仕方ない。

こちらが攻撃しなくても、向こうは敵意を剥きだしにして襲ってくる。しかも話し合いは不可能。

殺られる前に殺るしかない。

「な！　なんだあ！」　「これが爆裂魔法^{エクスプロージョン}だってのかい？！」

助っ人の獣人達が驚く、この2人は爆裂魔法^{エクスプロージョン}を見たことがあるのだろう。

土埃が晴れると、入り口が大きく崩れて塞がれていた。

「おい、チャンスだ！」

「ちゃんす？」

「あ、いや、好機だ、好機！　皆で突撃だ！」

「は、はい！」　「行くぞ！」　「おおおっ！」

ゴブリン達の死体を乗り越えて、皆で遺跡へ押し寄せるが、当然入り口は塞がっている。

ここで秘密兵器をアイテムBOXから出す。崖の上まで行ける9mの足場だ。こいつなら崩れた遺跡の上に登るなんて余裕。

皆で足場を駆け登ると遺跡の上に出る。そして遺跡の内部を見下ろすと、20匹ぐらいのゴブリンがまだ残っていた。

黒いのがわらわらと――俺はその光景を見て、越冬するてんとう虫を思い出した。

派手な格好したちよっと大きめな個体もある。あいつが小ボスだろう。

「袋のネズミだ！　こちらは地の利を得たぞ！　落ち着いて狙え！　撃ち方はじめーっ！」

訓練通りに盾に隠れつつ装填し、そして射撃をする。下から、弓矢や石礫の攻撃があるのだが、こちらには地の利がある。

そんな攻撃ではポリカーボネートの盾は抜けないしな。

ベルが突っ込んでいくかと心配していたのだが、彼女は殊の外賢い。上からじっと攻撃が終わるのを待っている。

「このこの！」　「くらえ！　女房の仇！」　「死ねえ！」

ゴブリン達は勝てないと悟ったのか、奥の扉から逃げようとし始めた。

だがそうなれば、俺達はその1点を攻撃すればいい。

「むー！　ファイヤーボール　憤怒の炎！」

仲間を盾にして逃げようとした小ボスが、ファイヤーボールを食らって火だるまになる。

アネモネにとっても、初の人型モンスターだったのだが、躊躇したりとかはしないようだ。

こういう戦闘が身近にある世界なので、一度踏ん切りが付けば問題ないのか。

そしてクロスボウからの集中砲火が浴びせられて、残りのゴブリン達も全てハリネズミになった。

「よおし！　撃ち方やめえ！」

下に広がる広間は子鬼の死体で埋め尽くされているのだが、魔物でも血は赤く――文字通りの血の海。

外から登れないこの壁も内側には階段がある。その階段を皆で降りて下へ行く。

獣人達が、うごめいてるゴブリンに止めを刺し始めた。

「こいつらは、死んだ真似が上手くてな」「こっちは、あたいに任せな」

「おい、クロ助、どっちにする?」

「右にゃ」

「何の話だ?」

彼女達の話によると、討伐の証明のために耳や牙が必要なのだと言う。

そのため、切り取る耳をどちらかに統一しないと、左右で1匹とカウントされて損をするらしい。

そりゃ、50匹やったのに、25匹とカウントされたら損するわな。

今回の依頼は討伐数で褒賞の金額が変わるわけではないが、討伐の証拠は必要だ。

「おい、手の空いている者は、矢の回収を手伝ってくれ」

アルミとステンレス製の矢は、この世界ではオーバーテクノロジーだ。しかも、アルミは魔法の触媒に使える。

こいつが出回ると拙い^{ます}。幸い上からの撃ち下ろしなのでロストする事もなく、回収は容易だろう。

「しかし臭えな」

獣人達の言う通り、この中には異臭が充満している。鼻の良い獣人達には応えるだろう。

「旦那、そっちの扉からも音がするぞ?」

「なに? 生き残るか?」

皆で囲み――獣人の男に突入してもらう。中は窓も明かりもなく真っ暗だ。

「くそ!」

中に入った獣人が吐き捨てる。

中にいたのは、さらわれていた女達。素っ裸で嬲られていたように殆ど死んでいたが、3人だけ息があった。

「ふう……火は使わなくて正解だったな。この死体も村に運んだ方がいいのか？」

余りの悪臭に思わず吐きそうになるが、なんとか持ちこたえている。

「いえ、これでは……ここの森に埋めてやろうと思いますが……」
この世界では余程の要人以外、墓は無い。普通にそこら辺に埋めて終了だ。

遺族に出会っても、森に埋葬したといえど安心するのだ。

それでなくても死体は野ざらしになって、動物や魔物に食い荒らされたりする事が多い。

「ああ、それなら俺に任せろ。召喚獣ですぐにやってやる。ミャレーとニャメナには剥ぎ取りを任せろぞ。ろくな物がないとは思うが……」

「旦那、そんな事はないよ。旅人や冒険者から奪った装備もあるようだし」

「そうか任せる」

「はいよう」「にゃー」

剥ぎとった装備や、ゴブリンの耳を入れるためのプラケースをアイテムBOXから出す。

皆が慌ただしく、装備の剥ぎ取り作業をする姿を、ベルが香箱座りでじっと見つめている。

女達の死体や、おびただしい骨をプラケースに入れてから、アイテムBOXへ収納する。

こんな惨事を平気でやらかす、相手は人型に見えても本当に魔物

って事か。これじゃ有無を言わさず殲滅もやむなしって感じだな。

女達の死体もステータス画面のゴミ箱へ入れれば簡単なのだが、それは出来ない。吊ってやらねば。

遺跡の外へ出ると――俺は犠牲者達の遺体を埋葬するため、森まで行ってコ○ツさんを召喚した。

78話 戦いの後処理

王都へ行く途中、イベリスという街へ寄ったのだが、その冒険者ギルドから面倒な仕事を押し付けられてしまった。

その仕事とは、ゴ布林退治。そして農民達と一緒に、子鬼退治をしたのだが、そこには沢山の犠牲者の遺体。

その遺体を埋葬するために、俺はコ○ツさんを召喚した。

「おおっ!」「ひっ!」「なんじゃこりゃ!」

突然、目の前に現れた鉄の巨体に驚く農民達を尻目に、深さ4m程の穴を掘ると、その中へ死体や骨を入れて埋め戻した。

通常なら浅い穴を掘るだけでも1日仕事だが、俺のアイテムBO Xと重機があれば30分も掛からない。

「すげえ……鉄の魔獣だ……」

「ナンマンダブナンマンダブー」成仏してくれよ。皆が頑張ってくれたから、今回は召喚獣の出番はなかったけどな」

いや、この世界の神様は違うだろうから、成仏は拙いのか?
ます

足場を登って中に戻ると、ゴブリンの死体が山積みになされていた。そしてアネモネの魔法で乾燥させた後に火が放たれた。

生身の死体は水分で燃えないが、乾燥させれば松明のようによく燃える。

ゴブリンの死体もゴミ箱へ入れればいいのだが、こんな物を入れたくはない。

それに、ゴミ箱があるのは皆に秘密にしているしな。

「旦那、結構銀貨があったよ」

「にゃ」

獣人は数が数えられない。パツと見だが金貨が数枚と50枚程の銀貨と銅貨があるようだ。

ゴブリンは金を使ったり買い物をする事もないらしいので、ただ集めているだけのだろう。

彼等は経済活動もしないらしいからな。何の生産もせず、ただひたすらに人の物を奪うだけの存在なのだ。

「あと、これもあったよ」

アネモネが見せてくれたのは、汚物塗れの黒い本。

「これ魔導書か？」

「多分そうだと思う。中身は回復^{ヒール}って書いてある」

「おおっ！ ついに回復系の魔法が！ 棚からぼた餅、鰯網で鯛！ 後で綺麗にしような」

「うん！」

臭いので、とつとアイテムBOXへ突っ込む。

遺跡の中は片付いたので、足場を収納して遺跡の外を片付ける。

コ〇ツさんで大穴を掘り、ユ〇ボの排土板でゴブリン共のバラバラ死体を穴の中へ押し込んで埋め戻す。

「わはは！ 孫に自慢したいと言ったが――鋼鉄の魔獣や、いきなり現れる鉄の管を使った足場。これがありゃ、城攻めだって出来るじゃねえか」

「そうだな、それは可能かもしれないな」

「こんなの話しても、孫に信じてもらえないぜ？」

「子供なら荒唐無稽な話は大好きなはずだから、見たまま話せばいい。多分、目を輝かせて食いつくと思うぞ」

「しかし、ゴブリンを50匹以上討伐して、かすり傷を負った奴すらいらないなんてな」

切り取った耳を勘定した結果ゴブリンは53匹いた。結構な大所帯だ。

「まあ、運が良かっただけさ。勝負は時の運ってな」

「ふうん——本当に実力あるってやつは、そういう言い方をするんだよねえ」

助っ人の三毛の女がコ○ツさんを見上げているのを横目で見ながら、皆から武器とシールド、そして集めた矢を回収。

アイテムBOXからトラックを出すと、その荷台へ生き残った女達を乗せて、新品の毛布を被せてやる。

1人は受け答え出来るが、1人は朦朧——最後の1人は息はあるが、意識はない。

ベルがやって来ると荷台に飛び乗り、女達をクンカクンカしている。

「ケンイチ、回復^{ヒール}の魔法を試しちゃだめ？」

「うーん、どうかなあ……」

だがこりゃ、人体実験になってしまうよなあ。

「あのお、治癒魔法が使えるようなら、お願いしたいのですが……」
俺とアネモネの会話を農民達が聞いていたようだ。

「この子が初めて使う魔法だから、成功するか解らんぞ？ それでも良いのか？」

「しかし、このままでは……」

魔法の治療を受けるのは金が掛かる。農民達に治療を受ける金はなく、医学も発達していないこの世界では、助かる見込みが少ない。魔法の実験台として、タダで治癒魔法を使ってもらえれば、僥倖というわけだ。

「それじゃ——魔法の実験台として、無料で施術するって事で同意するか？」

「はい……」 「魔法を使ってももらえるだけで、ありがてえ」 「どのみち、これじゃ……」

農民達は、アネモネの魔法実験に同意した。本人の同意がないのだが、非常事態につきやむを得ない。

アイテムBOXから、回復の魔導書を出す。

「くそ、こりゃ汚ねえな」

アイテムBOXからティッシュを取り出して、とりあえず拭く。
汚れたティッシュはステータス画面のゴミ箱へ。

「洗^{クリーン}浄の魔法を使ってみるよ」

「お？ 新しいやつか」

「うん！ 洗^{クリーン}浄！」

アネモネが魔法を唱えると、汚物まみれだった黒い魔導書を青白い光が包む——それが終わると、若干綺麗になったような……。

「うーん？ もう1回やる！ 洗^{クリーン}浄！」

結局、3回程魔法を使い、やっと臭わなくなった。なるほど——この生活魔法ってのがあれば、電化製品は要らないかもな。

金持ちは魔導師を雇って、電化製品代わりに使っているのかもしれない。

アネモネは荷台に乗ると、毛布を被せた女達の前で魔導書を開く。そして精神を統一し始めると、青白い光が彼女の胸の前に集まっていく。

女達の側にいたベルが荷台から飛び降りると、俺のところへやって来たので、しゃがんで身体を撫^なでてやる。

『全ての根源たる真理よ、傷つき病に倒れた者を癒やす光を与え給え』

眩しく光る小さな玉が、動かない女の身体へ染み込んでいく。

魔法が終わったようなので、荷台に昇って女の様子を確かめる。

「んー、若干顔色は良くなったかな？　だが、しばらく経たないと成功したかは解らないな」

アストランティアの婆さんの所で治癒魔法を見たが、この世界の回復ヒールの魔法はこんな感じらしい。

ゲームのように、いきなり死にかけが復活したりとか、無くなった手が生えてきたりはしない。

まして、復活の呪文で生き返ったりもしないのだ。残りの女達にも魔法を使った。

「手伝ってくれてありがとうな。お前達にも何か分前をやるうか？」

「と、とんでもありません。治癒魔法まで使っていただいたのに」

「魔法は実験台にしてしまったのだから、気にするな」

「しかし……」 「仲間や女房の仇が討てただけで、万々歳ですよ」

「そうだなあ、犠牲者どころか、けが人も出てないし」

「まあまあ、皆で頑張って討伐を成功させたんだ、何か手土産があつてもいいだろう？」

「俺みたいに、牙で首輪を作ったらどうだ？」

会話に割り込んできた爺さま獣人が、自分の首に掛けている動物の白い牙を指差す。

「いやあ、ゴブリンの牙なんて……」 「なあ……？」 「ちよつと、それは……」

どうやら、ゴブリンは不浄の象徴らしく、手元には置きたくない模様。

「それじゃ、こいつはどうだ？」

俺は、シャングリ・ラから2500円の鍬くわと4000円の鋤すきを購入してみた。鋤の方が作るのに手間がかかるのか、値段が高い。

「こ、こんな新品の農具なんて」「こりゃ、立派なもんだな」

「手伝ってくれた褒美に、どちらか好きな方をやるよ」

「ええっ!? 本当にいいんですか？」

「ああ」

お札に銀貨1枚、2枚となると、日本円で5万円、10万円だ。シャングリ・ラで買った鍬や鋤で済むなら、そちらの方が安上がり。しかも、この世界で新品の農具を買うと、全て注文打ちで10万円、20万円相当と高価なのだ。

農機具を買えない貧しい農家は、庄屋からレンタルして借賃を払う。しかも、壊したら弁償しなくてはならない。

農民としては銀貨を貰うよりは、品質の高い新品の農具を貰った方が嬉しい——つまりこれは、WIN-WIN。

シャングリ・ラから、鍬を9挺、鋤を11挺購入して、農民に渡した。新品の農機具を手にした彼等は、実に嬉しそう。

ゴ布林退治をした時より嬉しそうにしているのが印象的だ。

「ねえ旦那あ。凄い召喚獣とか凄い物とか沢山持ってるしい、獣人にも別け隔てないみたいだし、もう1人ぐらい獣人を雇わない？」
農民達と話していると、助っ人の三毛の毛皮を着た女が身体をすり寄せてきた。

「ふしゃー！ この年増！ 何やってるにゃ！」

「身体をすり寄せて、変な匂いを付けるんじゃないか！」

「ああん、あんな小娘達より、あたの方が何倍もいいんだから……」

そう言いながら首に手を回してくるので、顎なを撫でてやるとゴロ

ゴロと喉を鳴らす。

女はクルリと尻を向けると、長い尻尾でおいでおいでをしている。ミニスカで下着を履いていないので、ゴニョゴニョが丸見えだ。

「はは、これ以上増やすなって言われてるからな。無理だな」

彼女の尻尾を撫^なでてやると、俺の手に絡みつく。

「もう、簡単にふるんだねえ」

「ゴメンな」

三毛の女は尻尾をピュンピュンと振ると、俺から離れた。それと同時にミャレーとニャメナが飛んで抱きついてくる。

「うにゃ！ 油断も隙もあつたもんじゃないにゃ！」

「おい、クロ助ヤバイぞ。美味しい料理に、美味しい酒。俺達に優しくしてくれるし、毛皮にもブラシを掛けてくれる。どんな獣人の女でもイチコロだ！」

「ええーっ！ ブラシも掛けてくれるのお？ そりゃ、当たり前じゃないか？！」

「へへへっ——もちろん、当たり前さ」

「そんな良いご主人さま、あたいにも分けておくれよお」

「ダメに決まってるにゃ！」

2人で白い牙を剥きだしにして、威嚇をしながら懸命に俺に身体を擦りつけて、匂いを上書きしようとしている。

彼女達が話している『当たり前』とは何の事かと思ったのだが——。

この世界には3種類の人種の男がいるらしい。

1つ——獣人が嫌いな男。

2つ——獣人は相手にするが、ただゴニョゴニョするだけの男。

3つ——獣人を好きだし、可愛がってくれる男。

「どうやら俺は、その3番目で『当たり』という事らしく、数が少ないらしい。えっ？　そうなのか……こんなに可愛いのに。」

「毛皮だってもふもふだぞ？　そんな事を考えている俺の足元へやって来たベルもスリスリを始めた。」

「あゝあ、森猫様のお手つきじゃ、あたいじゃ敵いつこないじゃないーちえっ」

「三毛の女は残念そうだが、諦めてもらうより仕方ない。」

とにかく全て片付いた。忘れる前に最初に飛ばしたドローンも回収し、アイテムBOXへ収納した。

「よし！　ギルドへ帰るか！」

「「「おおっ！」」」

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

皆をトラックに乗せて帰路につく。

ギルドに到着すると、昼ちよつと過ぎ。トラックを横付けして、皆を荷台から降ろすと、プリムラが出迎えてくれた。

「おかえりなさい、ケンイチ」

「「「おかえりなさい！！」」」

プリムラと一緒にだった農民の子供達が、元気よく挨拶してくれて、無事に帰ってきた大人達と抱き合う。

「ああ、ただいま。心配したろ？」

「いいえ、ケンイチがゴ布林ごときに負けるはずありませんもの」

「まあ、けが人も出ないで良かったよ。皆も頑張ってくれたしな」

皆でギルドの中へ入ると、受付へ行く。あの受付嬢がいるカウン

ターの上に、ゴブリンから切り取った耳がたっぷりに入った壺を置く。

「ひい！ あの……ゴブリンを全部、討伐したんですか？」

「その通りだよ！」

アネモネが、受付嬢の言葉に胸を張る。

「ああ、数えたら全部で53匹だった。それから、さらわれていた女を3人救助した。手当を頼む——一応、うちの魔導師が治癒魔法を使ったが」

「あ、あの……治療の代金は？」

「おい！ そのぐれえ、そちらで背負ったらどうなんでえ！」
受付に食って掛かろうとした、爺様獣人を止める。

「……俺の報酬から引いてくれ」

「承知しました」

彼等を責める事は出来ない。こういう都市は冒険者の仕事はなく、ギルドの運営は厳しいのだろう。

逆に商業ギルドは儲かっていそうだけどな。
持ってきたゴブリンの耳を検品している間、ホールで待っているとギルドマスターが顔を出した。

「まさか、こんな短時間で討伐を成功させるとは。噂は本当だったのですね」

「まあ、けが人もなくてよかったよ。助けた女達の治療代も払ったんだ、最後まで面倒を見てくれよな」

「それは、承ります」

提出した討伐部位の検品も終わり、女達の治療代を引いた金貨9枚（180万円）を受け取った。

そこから、助っ人の獣人達へ金貨1枚（20万円）ずつを渡す。

「へへっ、1日で金貨1枚か。良い稼ぎだぜ」

「まったく、あんな楽な戦闘で金貨1枚だからねえ」

危ない橋を渡ったなら、金貨1枚じゃ不満も出るかもしれないが、今日のは危なげない戦闘だったからな。

ここで、皆に提案をする。

「せっかくだ、ここの裏庭で飯でも食っていかないか？ 討伐成功祝だ」

「いいのですか？」

願ってもない言葉に、農民達が沸く。

「勿論」
もちろん

「酒も飲んでいいんで？」

獣人達は酒を飲みたいようだ。

「まあ、まだ日も高いし、少しならいいぞ。お祝いだしな」

「うひょ！ 旦那、話が解るぜ！」

「爺様、人の良い魔導師様に、あまりつけ込むんじゃないよ？」

女の獣人が、爺様獣人を諫めるのだが、彼はあまり気にしていない様子。

「俺だって、それぐらいは心得てるぜ？」

「どうだか」

「まあまあ、カップで2杯までな」

「旦那の出す酒は強いんで、それぐらいで十分でさあ」

皆から飯のリクエストを聞くと、カレーが食いたいらしい。カレー！ 大人気だな。

皆で食事を取った後、ほんのちよつとの間の祝勝パーティだったが、農民と獣人達は、ほろ酔い気分で在所に帰っていった。

時間は午後3時頃だが、村人達は今から帰らないと明るいうちに村へ到着出来ない。

俺達も、いまから王都へ出発するのは少々時間が遅い。ギルドの裏庭でもう一泊する事にして、明日の朝一で出発する事にした。

そうと決まったら時間が余ったので、皆でこの街の道具屋巡りをする事に――。

だが、何軒か店を回ってみたが、めぼしい物は売ってなかった。ついでに、ゴ布林共から剥ぎとった物を売却したが、大量にあったのに、全部で金貨1枚ちよつとにしかならなかった。

まあ、宝箱に入っていた金貨と銀貨――そして回復の魔導書^{ヒール}だけで、十分に元は取ったけどな。

ニヤメナは、ゴブリンの小ボスが持っていた、少々上等な剣を装備してご満悦だ。

どこかの騎士か何かを襲ってゲットした物なのだろう。

ゲットした金額を数えると金貨銀貨合わせて約460万円相当――それと魔導書。回復の魔導書^{ヒール}は金貨25枚(500万円)以上はするようだ。

アネモネは魔導書をゲットしたので、分前を辞退。

「今回、ウチも分前を放棄するとトラ公の取り分が増えるから、ウチも分前を貰って、ケンイチに預けておくにゃ」

「てめえ、クロ助。分前を取らねえなら俺によこせよな」

「嫌だにゃ」

結局、ニヤメナの取り分は金貨8枚(160万円)だ。まあ一日の稼ぎとしては破格だな。

ゴブリンの宝箱に入っていたのは、殆ど銀貨だったので、彼女に

も銀貨で分前を渡した。

「うひょー、こんな纏まった大金見るのは初めてだぜ！」

「良かったね」

「ウチは、シヤガを倒してもっと稼いだにゃー」

だが、ニヤメナは銀貨の詰まった袋を見ながら少々悩んでいる様子。

彼女の持っている銀貨の詰まった袋を、ベルがクンカクンカしている。

「ニヤメナどうした？」

「旦那——この金を旦那のアイテムBOXへ入れてもらっていいかい？」

「ああ、構わないぞ」

冒険者ギルドの口座へ預ければ、ギルド証に記録されて、どこの都市のギルドでも金が下ろせる親切システムなのだが——。

この街でギルドのサービスを利用しようとすれば登録しなければならぬ。登録料は銀貨1枚（5万円）だ。

ニヤメナは、その金が勿体無いと考えたようだ。今後、この街でギルドを使う予定はないだろうからな。

俺だって、嫌々登録させられて、仕事までさせられたんだから。

アイテムBOXの中は、フォルダを作れて仕切れるので、ニヤメナの分はそこへ入れておけばいい。

ミャレーのフォルダもあって、彼女の分前は、そこに入れてある。

「ケンイチ、預かり金を取ればいいにゃ」

「そんなの取らないよ。ニヤメナ、金を少しずつ増やしたいなら、アストランティアに帰った時に、プリムラの商売に投資すればいい」

「そう、言いまして、損をする事があるのが商売ですから、絶対

に儲かるわけではありませんよ」

プリムラは謙遜するのだが――。

「いや、獣人の俺が何かするよりは、お嬢に頼んだ方が確実だ」

まあ、アストランティアに帰るまでは、まだ日がある。しばらく悩んでもいいだろう。

皆で、ギルドへ戻ってくると、日は傾いて丁度夕飯の時間だ。

皆で飯の用意をする。パン焼き器を出して、アネモネにパンを焼いてもらおう。

さすがに、あれだけの人数のパンを焼くのは不可能だったからな。プリムラにはスープを作ってもらい、俺は肉を焼こう。

アイテムBOXに、畑で収穫したトマトが残っていたので、トマトスープにしてもらう。

カレーもまだ残っているのだが、さすがにカレー連発は飽きる。アネモネと獣人達はカレーでもいいらしいが、俺が飽きた。

「プリムラ、子供達の相手をさせて悪かったな」

「いいえ、中々楽しかったですよ。でも、子供の世話があんなに大変だとは思いませんでした」

その様子を思い出したのか、プリムラがぐったりとしている。子供ってのは小型の台風みたいなもんだからな。

それが、何人もいるんじゃない、さぞかし煩かっただろう。

「でも、計算の仕方や文字の書き方を教えてあげたら、静かになりましたよ」

「文字って、何を教えたんだ？」

「自分の名前の書き方です」

農民なら読み書きが出来ないのが普通。子供に教えてやりたくても、親も知らないのだから教えようがない。

まさしく負の連鎖。

料理の匂いに誘われて、ギルドの連中がやって来た。

「お前等ふざけるなよ。人から金取って、無理やり面倒な仕事押し付けやがって」

「ああん、このギルドは経営が苦しいんですよ」

受付のあの女が泣きついてくるのだが……。

「そんなのは俺の知ったこっちゃないね」

「ひーん！」

「泣いても知らん。大体、お前は20歳過ぎてるだろう？」

「……はい」

「じゃあ、ダメだな。ゆるさん」

「何がダメなんですかあ！」

だが、泣きつく受付嬢との間を割って、ギルマスが頭を下げてきた。

「今回は、無理な仕事を押し付けてしまい、誠に申し訳ない。職権濫用と言われても、否定出来ない行為だ」

「まあ、この経営も苦しいようだし、少ない予算でもなんとか農民を助けてやりたい——と白羽の矢が立ったのが俺なんだろう？」

「その通りです」

「俺もギルドのために仕事を引き受けたんじゃないしな。農民を助けるために受けたわけだし」

「ありがとうございます」

再び、ギルマスが深々と頭を垂しうげれた。

「ですからあ、私達も大変なんですよ」

再び、受付の女が泣きついてくる。

「お前はダメだな。ゆるさん」

「なんでですかあ！」

見かねたプリムラが間に入ってきた。

「まあ、いいじゃありませんか」

「それなら、金を取るぞ。1食銅貨2枚（2000円）、酒は1杯銅貨1枚（1000円）だ」

「わかりました」

プリムラがギルドの職員達と交渉を始めたのだが、昨日、料理を食べた受付嬢から話を聞いていたのだろう。

皆が素直に金を払うようだ——というわけで、ギルドの職員には、アイテムBOXに残っていたカレーを出した。

「美味しい！」「この、香辛料料理は最高だ！」「美味しい！」「このの初めて食べた！」

ギルドの職員達が絶賛しながら、カレーを食べているが、ギルドマスターには俺達が食べている料理と同じ物——酒も安いブランデーをチョイスしてみた。

「む！ この酒は……？」

「秘蔵の酒だよ。元はワインと同じ物なんだがな」

「これが、ワインと……？」

「旦那あ、そいつを俺にもくれないか？」

酒に目がないニャメナがブランデーを飲みたいようなので、少し注いでやる。

「ふはー！ こいつは相変わらず、うめえ！」

「だからなあ、舌を余り肥やすと後で大変だぞ？ 自分で言ってたじゃないか」

「むーうー、んー」
ニヤメナが唸りながら困り顔で、ブランデーをちびちび飲んでいる。

「いや、貴方の言うとおりだ。こんな酒を知ってしまったては、明日から酒を飲むのが辛くなる……」

「はは、つまらん仕事を押し付けてくれた仕返しさ。俺が助けた女達の様子はどうだい？」

「治癒魔法を使ったようですね。命に別状はありませんが、魔法でも心の傷は癒やすことが出来ません」

「まあな」

アネモネの魔法は上手く効いたようだな。

「彼女達が、村へ戻るかは解りませんよ」

「シャガって悪党の所から沢山の女達を助けたが、約半分は村に帰らなかったからな」

女達の事はギルドマスターに任せていいだろう。その後、彼から王都についての情報を仕入れる。

王都も、このこと同じように冒険者ギルドの力が弱く、商業ギルドの方が隆盛を極めているようだ。

まあ、大都市の中じゃ冒険者なんて呼びじゃないからな。

中々帰らないギルドの職員から金を取って酒を出し、騒ぎは深夜まで続いた。

お前等、さっさと帰れよ。

79話 キャッツ&ドッグス

皆で泊まる事が出来る宿屋を探すために冒険者ギルドへ行つたのだが、ゴ布林退治などという余計な仕事を押し付けられた。

だが無事にクリア。回復の魔導書ヒールも手に入ったし、結果オーライだろう。

俺達はイベリスを後にした。

車で普通に走れば、王都まで1日で到着する距離なのだが、余計な時間を食ってしまった。

だがアストランティアから王都まで普通の馬車で向かえば、1週間〜10日はかかるのだ。

それを考えれば2〜3日の遅れは、どうってことはない。車を北へ街道を走らせる。

途中、小さな集落への脇道と、続く小麦畑。そして背の高い草むら。低木はたまに生えているが、森や林は見当たらない。

集落があると、その近くでは燃料として木が伐採されてしまうようだ。

今は火石があるので伐採も少なくなったようだが、それでも火石を使ったコンロ等はそれなりに高価。

それ故、金がない家庭では未だに薪が使われていると言う。

そんな景色を見ながら鼻歌混じりのご機嫌ドライブなのだが、にわかには空が真っ黒くなりポツリポツリとフロントガラスに雨が落ちてきた。

この世界に雨はあまり降らず、少ないと感じるのだが、それは日本人の感覚らしい。そう考えると日本は、ちょっと降り過ぎのよう

だ。

——だが次第に雨脚が強くなってきた。ワイパーを動かして視界を確保する。

「すごい雨だな」

だが、ギッタンバッタン、目の前で動く黒い枝に、獣人達とベルが釘付けになっている。

左右にワイパーが動く度に、首を左右に振ってそれを追う。

助手席にアネモネと一緒に乗っていたベルが猫パンチを出し始めた。

「おいおい、飛びかかるなよ」

「気になるにゃ〜気になるにゃ〜」

「ああ、もう！ 我慢出来ないぜ！」

こりゃ、アカン！ それに雨脚が一層強くなってきて視界が悪い。こりゃ、ゲリラ豪雨ってやつか？

こんな激しい雨は、この世界にやって来て初めてだな。

道から外れて車を止める。これだけ視界が悪いと、馬車に追突されそうだ。

だが、この雨の中じゃ馬車に乗っていてもずぶ濡れだろうから、停車していると思うが。

「はあ〜この召喚獣はすごいねえ。こんな雨でも濡れないんだからさ」

「そうにゃ」

「ちよつと高めの馬車なら囲いもしてあるし、窓にはガラスも嵌っている。雨風はしのげるだろう？」

「それでもありませんよ。あまり激しい雨だと、雨漏りしますし」
プリムラがそう言うのだから、マロウ商会のあの立派な馬車でも、

雨漏りするんだろう。

防水する技術がないのだろうか？

「防水の技術は何かないのか？」

「防水ですか？」

プリムラの話では、木の接着には膠にかわが使われているが、コーキング剤のような充填剤はないようだ。

それに、木に塗る塗料もあまりないようだしな。馬車に塗っている黒い塗料は木タール、白いのは鉛白を使った物らしい。

「鉛白って、化粧品に使われてたりしないよな？」

「水銀や鉛白は昔は使われていましたが、今は毒性があるのが知られてますから、使われていませんよ」

だが、毒性が知られるまで犠牲者が山のように出たらしい。ここらへんは元世界と同じようだな。

「そうかあ、ここには漆がないからなあ」

「ウルシ？」

聞いた事がない単語に首を捻ひねる皆のために、シャングリ・ラから漆のお椀を1個購入。

「これだよ」

「こ、これは……軽いですが木の器ですか？ でも、この滑らかな塗料は……ワニスですか？」

「ワニスに近いね。ある種の木の樹液を薄く何層にも塗り重ねて、磨いた物さ」

俺が買ったのは、1000円ぐらいの量産品だけだな。

「これは素晴らしいですわ」

雨に打たれる車の中で、プリムラが漆器を掲げる。

家具などにワニスが使われているし、馬車の内装にも塗られているが、外装に使われる事はないようだ。

そもそも、雨があまり降らないので、防水の技術が発達しないだけらしい。

「この器も売れますわ……」

プリムラの顔を見ると、どのぐらいの値段にするか、打算している顔だ。

「もしかして、森の中を探せば漆もあるかもしれないが……」

中国や東南アジアでも生えているらしいから、ここにもあるかも……。

「旦那、そりやどういう木なんで？」

「樹液に触れると、かぶれるんだ。そういう木に森で出会った事はないか？」

「かぶれる……ないねえ。刺さるといたい草なら結構生えているんだけどな」

「そうにゃ」

刺さると痛いってのは、イラクサか何かだな。

漆はないらしい——ということは、漆器が貴重品になる可能性があるって事だ。

「プリムラ、売るならこういう高めの方がいいかもな」

俺は、シャングリ・ラから1個1万円の漆器を購入し、彼女に見せた。黒地に金の蒔絵が施された物だ。

「これは、素晴らしい！ 王侯貴族が飛びつきますわ！」

多分、持ち上げて軽さにびっくりするだろうな。「これって木なの？」って感じで。

会話に入ってこれないアネモネの機嫌が悪いので、フルーツ牛乳をだしてやる。

お茶うけは、かつ○えびせんだ。降りしきる雨の中、一心不乱に皆でカリカリと食う。

「うめえ!」「あと引くにゃ〜!」「本当だね!」

「これって、小麦粉を油で揚げた物ですか?」

「俺が作ったわけじゃないから、解らないが――多分そうだ」

特殊な原料は使っていなかったはず。しかしパッケを見ると、ノンフライと書いてある。

そうなのか……だが、説明が難しいな。具体的作り方は解らないし……。

かつ○えびせんを食い終わっても、雨は止まない。

「しょうがねえよ、旦那あ。ゆっくりしようにぜ」

ニャメナは、1人で座っている3列目シートで横になって、脚を上げている。

狭い車の中でやることもないので、音楽でも聞いてみるか。車にはCDデッキがついている。

シャングリ・ラでCDを物色する。ポップスを聞かせるのもなあ……ギター――クロード・チアリとかはどうだろうか?

CDを購入して、車のデッキへ挿入する。

すると、車載スピーカーからギターが流れ始めた。雨の日にふさわしい、悲しげな曲だ。

「にゃ! にゃんだ! どこから、音楽が聞こえるにゃ?!」

獣人達が、耳をくるくると回し始めた。

「クロ助、この穴から聞こえるぞ？」

「これはリユートですか？」

プリムラは目を瞑ってじっと音楽を聞いている。

「まあ、それに似たような楽器だな。魔法で音楽を出しているんだよ」

「なんか、悲しそうな音楽……」

結局、雨が止むのに3時間ぐらいかかった。でも、すごい雨だったので、3時間で200〜300mmぐらい降ったものと思われる。獣人達に聞いても滅多にない、まとまった雨らしい。

「よっしゃ！ それじゃ、行くか」

「ええっ？ 大丈夫なのかい旦那あ？」

「ん？ 何か問題があるのか？」

ニヤメナが異議を唱えたのだが、道へ出てみて、その意味が解った。

この世界の道は土道である。しかも砂利なども敷いておらず、雨が降ると泥濘んでぐちゃぐちゃ。

それでも4WDであれば、どうって事はない。多少のスタックならデフロックで抜け出せる。

完全に、スタックしたのであれば、一旦アイテムBOXへ収納した後、泥濘んでいない場所に出せばいい。

道には、スタックしている馬車が、あちこちに停まっている。あの細い木の車輪では、すぐにめり込んでしまうだろう。

だが、車輪を太くしてしまえば、抵抗が大きくなって、馬が引くのが大変になってしまう。

だが、森などで伐採した木々を運び出す大型の馬車には、そういう幅広車輪タイプもあるようだ。

スタックしている馬車の間を縫うようにして街道をゆっくりと進

んでいく。

こりゃ、今日中に着くのは無理だな……そんな事を考えていると、さらにまずい状況が目の前に見えてきた。

轟々とコーヒー牛乳色の川が自然堤防から溢れ出て周りを浸している。

だが、それはまだいい。川に掛かっていた木造の橋が真ん中から落ちているのだ。

「ありゃ、橋が落ちてる」

「げ！ 本当だ！」

「本当にゃ！」

獣人達が、車の窓から身を乗り出した。

落ちた橋の手前で数台の馬車が停まって立ち往生。こりゃ復旧にしばらくかかりそうだ。

だが俺達なら、車を一旦アイテムBOXへ収納して、なんらかの方法で向こうへ渡った後、また車を召喚すれば良い。

とりあえず、車から降りて偵察だ。皆が降りたら、ラ○クルプ○ドをアイテムBOXへ収納した。

目の前で轟々と流れる茶色の濁流を眺める。俺達の他にも派手な格好をした商人らしき者達が、途方に暮れている。

その商人達も、俺達の中に見事な黒い毛皮を着たベルを見つけて、ヒソヒソ話をしている。

「ケンイチどうします？」

「あの柔らかい船で渡るにゃ？」

「いや、この激流じゃ危険だろう、ひっくり返ったりしたらあの世行きだ。数日待てば水は引くと思うが……」

俺達はすぐに渡れると思うが、この橋が復旧するには、数ヶ月掛るだろうな。

「うーん……」

「橋が落ちている距離を測ってみるか……。俺はアイテムBOXからレーザー距離計を取り出し、覗きこんでスイッチを入れた。

結果、8mらしい——ということは、アイテムBOXに入っている10mの丸太を出せば、渡せるかもな。

試しにやってみるか……。

俺は、橋が落ちているギリギリの場所へ行くと、足元をドンドンと踏み鳴らし、安全を確かめた。

「丸太召喚！」

だが、アイテムBOXから出てきた丸太は俺に対して、横に出現した。

当然、そのままボンとデカイ水しぶきを上げて川へ落下。小さな虹を出しながら下流に流されていった。

「ありゃ、やっぱりそうか」

家の前の丸太橋を架けた時も、俺が川に入ったんだよな。やはり橋に対して直角に立たないと、丸太橋を架けられない。

さて、どうするか……。コ○ツさんのアームを伸ばして——と考えたのだが、重機をこの橋に載せたら落ちるだろうな——多分。

土手も水に浸かってるし、脆くなっているだろう……。

「どうするの？」

アネモネとベルが俺の顔を見上げている。

「こりゃ無理だな。とりあえず水が引くのを待とう」

水が引いてから、ゴムボートで渡るのが一番安全そうだ。

少し街道を戻り、道脇の草を草刈機で刈る。終わったら、シャン

グリ・ラで1級破石ってやつを買う。20kgで500円もしない。10袋購入して、皆で協力し家を置くスペースに敷く。

「よし、家召喚！」

敷いた砂利の上に家が落ちてきた。

「ジタバタしてもしようがない。休むとしよう」

「あの、ケンイチー——ここで商売してもいいですか？」

「いいけど……」

プリムラは根っからの商売人だ。本当に物を売って、金を稼ぐのが好きなようだ。それが、小銭でも構わないらしい。

「それじゃ、ウチは晩飯を獲ってくるにゃー！」

「俺も行くぜ！」

こちらの獣人は根っからの狩人だ。

「よしよし、行ってこい」

「にゃー」

ベルもパトロールへ行くようだ。大丈夫だろうな、ここら辺の住民に見つかって狩られたりしないだろうな。

彼女の顔を見ると、「私はそんな間抜けじゃないわよ」みたいな顔をしているので、黙って見送る事にした。

プリムラはスープや食べ物売りたいようなので、道具や食材をアイテムBOXから出してやる。

アネモネも、やる事がないのでプリムラの料理を手伝うようだ。ついでに晩飯の作りおきを作ってしまうと言う。

「皆に任せて、俺は休むよ」

家の前はプリムラとアネモネに任せて、俺はベッドを出して、家の中で横になる事にした。

——目が覚めた。横になっていたら、ちょっと眠ってしまったようだ。

だが、なにやら外が騒がしい。

外へ出ると、プリムラの露店は客で一杯だった。なにやら知らない女も働いている。

「これは美味しいスープだ!」「焼きたてのパンも美味しい!」「こんな所でこんな食事が出来るとは……」

旅先だと保存食が多くなるからな。パンも保存が利くようにカチカチだし。

「ああ、ケンイチいいところへ。ワインを出してください」

「なんだ、ワインも売るのか?」

「はい」

「それは、良いが——その女性は何?」

「忙しいので雇いました」

「あはは、だって今日半日、手伝っただけで小四角銀貨1枚(5000円)だって言うしさ」

中年の女性だ。ちょっと小太りだが胸がデカイ。粗末な麻の上着と紺のロングスカートを履いて、小さな前掛けをしている。

さすがプリムラ。役に立ちそうな人材には、目ざといな。

俺は後ろを向くと、シャングリ・ラから1万5千円で小型のオーク樽のワインサーバーと、12本で6000円の赤ワインを2セット買う。

本物のワイン樽も売っているのだが、新品とアンティーク含めて5万円〜15万円ぐらいする。

結構高い物なんだな。それに容量も225Lとか半端ない。

このワインサーバーには10L入るようだから、750mlボトルの赤ワインが12本で9L——ちょうどいいぐらいに一杯になる。ワインのスクリューキャップやコルクを抜くと、漏斗を差し込んだオーク樽の中へドボドボと流し込んだ。

銘柄が違うのに中で全部混じってしまうが、一番安いワインでもここでは上物らしいから、これでいいだろう。

そして、テーブルをもう一個追加して、ワインサーバーをデーン！と載せた。

「悪いが、手酌でやってくれ。この取手を押すと、ワインが出るから」

俺に言われて、金を払った商人らしい男が、自前のカップにワインを注いだ。

緑色の服を着た、口髭を生やした40ぐらいの男だ。そして一口飲む。

他の客がそれをじっと見つめている。おそらく金を払う価値があるのか、様子を窺っているのだろう。

さすが商人だ。価値のないものには絶対金を出さない。

「おおっ！ こいつはなんと上等なワインだ！ これが銅貨1枚だと？！ 売ってくれ！ この樽ごと売ってくれ！」

「いやいや、他のお客さんもいるので、そいつはちょっと拙いなあ」「おい！ 独り占めは止めろよ！」「こっちにも飲ませろ！」「そうだそうだ」

案の定、他の客からブーイングが出始めた。

そして、他の客も金を払うとワインの立ち飲みを始めた。橋は落ちているし、どうしようも出来ない。ほぼ、やけ酒に近いのかもしれない。

売れ行きが良さそうなので、樽をもう1個買って、次の12本を入れる。

ワインは1杯銅貨1枚（1000円）だ。カップが1杯250m
lだとすると9Lで36杯取れる。売上は3万6千円。

1回樽を空にすれば、樽2つとワインの元が取れる計算だな。次のセットからプラスになるわけだ。

「おおっ！　こりゃ、マジで美味いぜ！」　「こんな上等なワインが銅貨1枚とは……」　「貴族邸で飲んだ物より上等なのだが……」

商人が集まってきて樽ごと売ってくれコールが凄いのだが、瓶のワインを樽に入れるのが面倒なので断った。

一応、シャングリ・ラで樽入りのワインを探したのだが、売っていない。

「プリムラ、ワインの空樽ってどのくらいするんだ？」

「えー、金貨3枚ぐらいだと思います」

60万円か？！　ワイン樽だけでも、一財産だな。そういえば、この世界は物を運ぶのにワイン樽に突っ込んで運んでいる場合が多い。

小物や、果物、豆類、穀物などもワイン樽で輸送されたり、売られてたりしている。

ボロボロになった穴あきのワイン樽でも、コンテナ代わりとしての需要があるようだ。

ワイン樽って丈夫だからな。

「お客さん、ワインは売れないが空樽なら売ってもいいぜ」

俺はシャングリ・ラから、新品のワイン空樽を購入した。容量は225Lで7万5千円だ。

それを客の目の前に出した。さすがにこれだけ大きな物を出すか
らには、人の目は誤魔化せない。

「アイテムBOX！」

客から、ざわめきが起る。

「こ、これは、なんと見事なワイン樽だ。さぞかし名のある名工の手による物では？」

商人達はしゃがみこみ、樽の隅から隅までチェックを入れている。

「まあな」

「この樽がいかほど……？」

「ここだけの特価、金貨3枚（60万円）でいい」

「買った！ 3樽くれ！」

「いいのかい？ 橋が落ちてるから、しばらく動けなくなるんだぜ？」

「構わん。商売とは出会いだ、出会った時が運命だと思って買わねば、その後一生会えないかもしれんからな」

日本語でいう、一期一会か。

「あゝ、解りますぞ。ワシも若い頃のあの時に、借金でもして買っておれば……と後悔する事も多いです」

えんじ色の服を着た、ヒゲの爺さん商人が割って入ってきた。

それを聞いた他の商人も頷いている――どうやら、商人のあるあるネタのようだ。

新品の樽を買った商人が、手代を連れてきて樽を運んでいる。

それを見た、他の商人も樽を買うようだ。空樽だけで10樽売れ、金貨30枚（600万円）である。下手な商売より儲かる。

他にも樽が欲しそうな顔をしている商人もいるのだが、ここで買う余裕がないのだろう。

日が傾き始めた頃、獣人達が帰宅。手には獲物の鳩ぐらいの鳥が2羽ずつ握られている。

すでに毛が耷まれて下拵えが出来ているようだ。

「ケンイチ、これで唐揚げを作ってにゃ〜」 「俺のも！」

「よっしゃ、今日は唐揚げだな」

カセットコンロと鍋を出して準備をした後、獣人達がぶつ切りにした鳥に唐揚げ粉をまぶして、油で揚げる。

ジュワジュワと油の弾ける音と香ばしい匂いが辺りに充満する。

「その料理も売ってくれ！」 「俺にもくれ！」 「こっちもだ！」
未だに残っていた客が叫びだした。

「4個で銅貨1枚（1000円）！」
客の声にプリムラが反応した。売れと言われると、何でも売ってしまうのが、商人らしい。

「よし！ 買った！」 「こっちもだ！」 「俺にはワインをくれ！」

「ちよっとちよっと、プリムラ〜俺達の晩飯が無くなるだろ」

「……しかし」

「しょうがない」

シャングリ・ラから冷凍の袋パックされた唐揚げを買う。1kg入って1200円ぐらいだ。

それを3つ程買って、大皿に山盛りにする。客に売るならこれで十分だろう。

せっかくの、野鳥を使った出来たてアチアチの唐揚げを取られたくない。

「アネモネ、この山を魔法で加熱してくれ」

「解った、^{ウォーム}温め！」

すぐに、唐揚げの山がチリチリといいだし、湯気といい匂いが立つ。

「ほらよ。出来たでだぞ」

嘘である。

だが、一斉に客が唐揚げに飛びついた。

「あちあち！」「おほう、こいつは美味しい！」「なるほど、鳥の肉を小麦の衣でくるんで油で揚げたのか……」

食いながら断面をしげしげと眺めて、分析している商人もいる。さすがプロだ。

彼等の頭の中で、材料費と人件費等々を計算して、ソロバンを弾いている真っ最中なのだろう。

俺達の晩飯の唐揚げも揚がったので、皆で食う。

俺は、ご飯を食べたいので、もう一工夫。唐揚げを卵でとじて、ご飯に載せたら、唐揚げ丼の完成だ。

アネモネもご飯を食べるので、彼女の分も作った。

商売に忙しいプリムラは、目の前にある寸胴に入ったスープを飲んで、売り物の唐揚げを摘んでいる。

一緒に働いている、臨時のバイトの女性も同じだ。

店を閉めりゃ良いのに……商人の血がうずいて、止められないようである。

「ふわぁ——美味しい！　口の中が幸せでいっぱい」

唐揚げ丼を食べて、口の周りにご飯がついているアネモネの感想である。

「うん、美味しいな。ちょっと肉が固いが、いい味が出てる」

「うみゃー！」「相変わらず、うめえ！　ははは、ワインは勝手に樽から貰ってるぜ」

「にゃー」

ベルには、衣を外した唐揚げと、猫缶を2缶開けた。

最近、獣人達は猫缶を食べないようである。他に美味しい物が沢山あると解ったからかな？

猫缶よりカレーの方が大好物になったようだ。

飯を食い終わったのだが、家の前では酒盛りが始まってしまった。ここは飲み屋じゃないんだがなあ……。

ワインが空になったので、2つ樽のサーバーに大〇郎をなみなみと入れて、前金で金を貰った。

そのまま放置して、俺達は寝る準備を始めた。

念の為に、家の周りには、丸太のバリケードを設置。

酒を飲まないミャレーは家に入ってきたが、ニャメナはまだ飲んでるようだ。

こうやって飲み屋を渡り歩いて、世間話から情報を集めるのが彼女の趣味みたいだが――。

俺達と住み始めてから、飲み屋歩きが疎遠になっていたようだから、久々のどんちゃん騒ぎが楽しいのだろう。

延々と酒盛りが終わらないようなので、俺はそれを放置して寝ることにした。

80話 商人悲喜交交

王都へ行く途中、ゲリラ豪雨のような大雨に見舞われて、街道に架かっていた橋が落ちてしまった。

水が引いたら、ゴムボートで渡る算段をし、道端に家を出して一泊したのだが――。

プリムラが家の前で始めた露店。その前で客達が酒盛りを始めてしまい、結局は深夜まで続いたようだ。

ニヤメナも一緒に飲んでいたので、そのうち戻ってきてベッドで寝るのかと思っていたのだが、いつまで待ってもやってこなかった。

――そして朝。念の用心のために出した丸太のバリケードをアイテムBOXに収納する。

そして道端には、酔いつぶれたと思われる男たちが寝転がっている。

「なんだこりゃ……」

ニヤメナを探すと、草むらで裸になり大股開きで寝ていた。当然、ゴニョゴニョが丸見えである。

「おい、ニヤメナ。起きろ」

「うーん、旦那あ――もう食えない……」

何を寝ぼけているんだ。そんな事をしているうちに、道端で寝ていた男達も起き始めた。

「あんたら、こんな所で寝て大丈夫だったのか？」

俺にそう言われて、男達は我に返ったのか、体中を撫でまわし始めた。

金銭等、取られた物がなかチェックするためである。だが、幸いな事に、物をなくした者はいなかったようだ。

この世界で、道端なんかで無防備に寝ていたら、何をされるか解らんからな。

そのぐらい迂闊な行為と言えよう。

その迂闊の極みにいるニヤメナを起こす。

「おい、ニヤメナ！」

ニヤメナの毛皮に指を埋め身体を揺さぶると、彼女が目覚めた。

「……うん……」

「お前、こんな格好で寝て——まさか輪姦まわされたんじゃないだろうな？」

俺の言葉に、ニヤメナは、そのまま起き上がると胡座をかいて、身体中をポリポリと掻いている。

何を言われたのか、解らないような顔をしていた彼女だったが、徐々に目が覚めてきたのだろう。

「そこら辺の男が束になっても、俺を押し倒したりは出来ませんよ——ふああああ！」

彼女は大きなあくびをした。

「それならいいが……」

「心配してくれるんですか？」

「当たり前だろ」

その言葉を聞いたニヤメナが俺に抱きついてきた。裸なので毛皮

がもふもふで、実に心地よい。

「なあ、ニャメナ」

「なんだい旦那あ」

「しっぽの付け根と前を同時に弄ったらどうなるんだ？」

「そんな事されたら俺、飛んじゃうかも……」

そんなアホな事をやっていたら、ミャレーが家から出てきた。

「ぎゃー！ 何やってるにゃ！」

「なんだよ、クロ助いいところで。もうちょっと寝てろよ」

「そうは、いくかにゃ！」

アネモネとプリムラも起きてきたので、悪ふざけはこのぐらいにして、朝飯にする。

朝飯は、昨日の商売で売っていたスープの残りど、シャングリ・ラで買ったパンだ。

ニャメナに話を聞くと、大店らしき商人達は、手代が迎えに来てきて、自分達の馬車へ戻ったらしい。

最後まで残って、道端で寝ていた奴らは、1人で商いしている連中のようなのだ。

馬車とか荷物とか、放っておいて平気なのだろうか？

だが、俺達が食事をしているのをみて、スープやパンを売ってほしいという奴らがやって来た。

そうすると黙っていられないのが、プリムラだ。

俺からインスタントスープとパンをもらうと、食事もそこそこに家の前で売り始めた。彼女は、俺が粉のスープの素を持っていると知っているからな。

どうも目の前に客がいると我慢出来ないらしい。

だが商売をしている彼女は、本当に楽しそう。

「商売をしているプリムラは、生き生きしているよな」

「ウチ等が、狩りをしている時と同じにゃ」

「そうだよなあ」

多分俺は、工作をしている時とか、鉱石を掘っている時には、ああいう顔をしていたんだと思う。

プリムラに商売は任せて、俺達は川の方へ行ってみる事にした。

まだ流れは速いが、水の濁りはなくなり、大分水量も減っている。これなら、ゴムボートで渡れるだろう。

ちよっと上流へ行ってから斜めに下ればいい。確かゴムボートは5人乗りだから――大人4人と子供1人、そして森猫、多分大丈夫だろう。

一旦、家に戻り、出発の準備をする。

戻ると、プリムラが汗を流して商売をしていた。

「朝からそんなに頑張る事はないだろう」

「いいえ、客がいて、売る物があれば、汗を流すのが商人ですから」
そう言われると、俺みたいなインチキ商売人は耳が痛い。

だがキリがないので、商売をほどほどにさせて、出発の準備をしなくては。

「ケンイチ、汗をかいてしまったので、身体を拭きたいのですが……」

「解った、着替えも出すよ」

俺も手伝ってやろうと言ったら、顔を赤くして、家の中へ逃げ込んだ。夫婦でも、まだ恥ずかしいのか。

プリムラの準備も出来たので、家やテーブル等をアイテムBOXへ収納した。

「おおっ！」

ギャラリーから、どよめきが起こるが――渋い表情をしている商人らしき者もいる。

もしかして羨ましいのかもしれない。そりゃ、商人がアイテムBOXを持っていたら、鬼に金棒だからな。

マロウさんのアイテムBOXの容量は、4畳半の部屋1つ分ぐらいらしい。それでも馬車1台分は入るからな。

それに重さは関係ないので、馬車に積めないような重量物もアイテムBOXで運べる。こいつは強力だ。

それでも、マロウさんはアイテムBOXに依存する事なく、どうしても馬車で運べない物や、貴重品、生鮮品などに限って使っているようだ。

皆で川へ行くと、川辺に降りて、アイテムBOXからゴムボートを出す。

川へ半分だけボートを浸けて、先ずはアネモネとプリムラを乗せた。そしてベルだ。

「よし、ベル！ 乗れ！ 爪を立てないでくれよ」

俺の声で、ベルがぴょんとボートへ飛び込んだ。

続いて俺、最後に力自慢の獣人の2人に押してもらう。そしてボートが水に流れ始めたら、獣人達がひょいと飛び乗ってきた。

「よっしゃ！ 漕げ漕げ！」

皆でバシャバシャと水を掻き、獣人の2人はオールを使っている。多少、水しぶきで濡れてしまうが仕方ない。

対岸まで1分ぐらいだと思うのだが、凄く長く感じる。これも走馬灯現象なのだろうか？

そして対岸に接触したら、獣人達に先に降りてもらい、ゴムボ―

トについている紐を引っ張ってもらう。

「ふう！ 到着！」

「怖かった！」

「こんな具合に川を渡ったなんて初めてですわ」

しかし、なんとか川は渡れた。ここから車をアイテムBOXから出して王都へ向けて、また出発すればいい。

少々服が濡れたので、アネモネの魔法で乾かしてもらう。

「んー乾燥！^{ドライ}！」

王都は、ここから100km程らしいので、2時間もあれば到着するだろう。地面も乾きつつあるし、今日中に到着出来るはずだ。

——だが。

「俺達も渡してくれ！ 頼む、金なら払う！」 「俺もだ！」

そして渡ってきた対岸からも、その要請があった。対岸——つまり、王都へ向かう商人の方が多いし、切羽詰まっているように見える。

「ふう、俺は興味ないが……ニャメナ、渡しをして小遣い稼ぎするか？」

「え？ いいのかい旦那？」

ニャメナの顔に花が開く。

「いいけど、俺は手伝わんぞ。プリムラ、渡し賃ってどのぐらいがいいと思う？」

「そうですわねえ——小四角銀貨2枚（1万円）程だと」

「おおい！ 小四角銀貨2枚なら、渡ししてやる」

ニャメナが、周りの商人達にデカイ声で告げた。

「くそ……しょうがねえ」「背に腹は代えられない……」
なんか、ブチブチ言っている奴がいるが、嫌なら止めろって話だ。
こっちは渡してやる義理はないんだからな。

「ミヤレーはどうする？」

「ウチは金があるから、やらないにゃ」

「ちくしょう、俺だって金を稼いでやるからな！」

余裕の表情を見せるミヤレーに、ニヤメナは悔しそうである。

とりあえず、午前中だけという約束で、渡しを始めた。そんなに客がいるかな？———と思ったのだが意外というようだ。

商人は荷物もあるので、1回につき2人しか渡せない。ニヤメナ1人なので、客にもオールを漕がせている。

そして上流までボートを持って行って、斜めに下る———というのを何回も繰り返す。軽いゴムボートだから出来る芸当だ。

普通の船じゃちょっと無理だろう。俺達は土手の上で椅子とテーブル、そして日よけのパラソルを出して、ニヤメナを待つことにした。

体力自慢の獣人だから、体力的には問題ないだろう。

ゴムボートを売ってくれ！———という商人もいるのだが、当然非売品。売るわけにはいかない。

アネモネは、テーブルについて読書。日本語の本なのだが、難しい漢字でなければ、かなり読めるようになっていく。

やはり彼女は非凡である。ベルはテーブルの下で香箱座りになって、橋が落ちた所にたむろしている人達を、じっと眺めているのだが、何か気になる物でもあるのだろうか？

そして、プリムラはというと———俺のアイテムBOXから出したドライジーネに乗って、停車している馬車を巡り、掘り出し物を物色しているようだ。

このドライジーネは、アストランティアでマロウさんから貰った物である。彼のアイテムBOXの中に入ってきたのだろう。

赤く塗られて、金色でカービングが施された、プリムラ専用機である。当然、三倍速——くはないが。

勿論、只乗り回しているわけではない。彼女の実家であるマロウ商会の製品——ドライジーネの宣伝も兼ねている。

それに、こいつは新型だ。最初に作られたドライジーネは、ハンドル固定で真っ直ぐにしか走れなかったが、こいつにはハンドルがついている。

俺が後で送った手紙に書いてあった自転車を見て、改良を加えたのだろう。

土手でのんびりしていると、ニヤメナの商売は終わったようだ。丁度プリムラも帰ってきた。

俺が数えていた分では、15往復を2〜3人ずつ客を乗せて、60〜80人運んだ計算だ。1人小四角銀貨2枚なので、120枚以上の小四角銀貨を手にした事になる。

「おおい！ 旦那！ 見てくれ、この銀貨の山！ ははは！」

皆で数えると、小四角銀貨が132枚あった。1枚5000円相当なので、66万円稼いだ事になる。

だが、ずっと渡しをしていた彼女は、ずぶ濡れだ。身体に直接、乾燥の魔法は危険なので、ジェットヒーターを出す。

轟々と出る熱風の前で、ニヤメナが毛皮を乾かしている間に、金貨に換算する。

「金貨にすると、3枚だな」

「ひょー！ 昼前に渡しをしただけで金貨3枚かよ。どうだクロ助」
「まあまあ、だにゃ」

そう言うミヤレーだが、ちょっと悔しそう。美味しい仕事だと思

ったのだろう。

「お嬢、旦那に分前はどのくらい払えばいいんだ？」

「3割程度でよろしいのでは？」

「3割って金貨1枚だろ？ いいのか？」

「だって旦那の軽い船がなきゃ、こんな商売なんて出来っこないんだから当然だろ。半分でもいいくらいだぜ」

「そうですよ」

こういう商売をすると、7〜8割取られる事も少なくないと言う。

まあ、本人も納得しているようなので、金貨1枚分の小四角銀貨を分前でもらった。

ニャメナの分を、俺のアイテムBOX内にある、ニャメナフォルダの中へ入れる。

そして軽く昼食を取る。だが、ニャメナは重労働をしてたので腹が減ったと言う。

簡単に四角いパスタと缶入りのパスタソースで済ませる事にした。

「悪いね、俺だけ」

「まあ気にするな」

彼女は出来上がったパスタを大口でかきこみ、ワインで流し込んでいる。

「んぐんぐーぷはあー！ いやー金を儲けた後の酒は格別だね」

そして食事の後――俺達がテーブルやパラソルを片付けて、出発の準備をしていると、1人の商人がやって来た。

30歳ぐらいの男で、髪は茶色、藍色の上下に金のボタンをしている。

足元にはデカイ革袋がある。

「なあ、あんた、アイテムBOXを持っているんだろ？」

「……まあな」

「頼む！ 俺の荷物を王都まで運んでくれ」

ミャレーが言うには、渡しで乗せた客だと言う。とりあえず、荷物が渡れないので、自分だけでも王都へ向かうつもりだったのか。

「断る。俺に利点も何もないからな」

「金なら払う！」

「量は？」

「急ぎの荷物が、馬車半分程……」

「それじゃ、金貨3枚だな」

「法外な！」

別に法外であろうが、輸送代は俺が決める事だからな。すると期限に荷物が間に合わないと手形が飛ぶ——とかなんとか言い出した。そんな事は、俺の知ったこっちゃない。

「なるほど——手形が飛べば、お前の店も飛ぶわけだな」

「そ、そうだ」

「それじゃ、輸送代は金貨5枚だな」

「何故、上がるんだ！」

「荷物を運べば、お前の店は助かるんだろ？ それじゃ俺は命の恩人じゃないか。命を助けてもらうのに、金貨5枚でも安いと思うが——」

「そ、そんな金はない……」

商人は、下を向いたまま固まってしまった。

「金がないなら、証文を書いてもらってもいいぞ。お前は女房子供はいるのか？」

「王都にいる……」

「それじゃ、金が払えなかったら、女房子供を奴隷に落とすって事で——」

「そ、そんな無茶な！」

「じゃあ、ダメだな。どのみち借金残して店が飛べば、奴隷に落ちるぞ？」

「……」

俺の隣にいるアネモネが黙っている。いつもの「助けてあげないの？」攻撃がくるかと心配していたが。

「アネモネ——今日は、『助けてあげないの？』って言わないのか？」

「今日のは、ちょっと違うと思う……」

「ほう、どう違うんだ？」

「商人っていうのは、儲けたり損をしたりするんでしょ？ 儲けた時に、皆に分け与えたりしないのに、損をしそうだから助けてくれるのは、ちよつと違うと思う……」

「そうだな、子供でも解る理屈だったな」

「くっ！」

商人は立ち上がると、革袋を担いで王都へ向けて走りだした。

「アネモネは賢いなあ」

「その言い方は、ちよつと嫌」

黙って見ていた獣人達がやって来た。

「俺りゃまた、旦那助けちまうのかと思ったよ」

「にゃー」

「馬鹿を言うな、俺は皆が言うほどお人好しじゃないぞ。王都に戻れなきゃ手形が飛ぶって事は、一か八かの勝負に出たって事だ。博打に負けそうだから助けてくれって、そんな虫のいい話があるはずがない」

「その通りですわ。余裕のある商人は、この状況でも仕入れをしただけでしょ？」

「ああ、そうだったな。旦那から樽を買ったりな」

これで、商人が美人の女だったりすれば、また話は違うのだが。

「でも、サンタンカの奴らは助けたから、ケンイチはまた助けると思ったにゃ」

「クロトン一家は、先ず全財産を俺に差し出して、『助けてくれ』って言ったからな」

「そういえば、クロ助からそんな事を聞いたような……さっきの商人は金の事も後出しだったし、高いとか文句言ってたな」

「そういう事だ」

クロトン一家には、アネモネと遊んでくれたマリーがいたしな。知り合いなら、多少の贖身はある。

プリムラだって、マロウ商会と全く接点がなかったのであれば、助けに行こうとは思わなかっただろう。

「あんな状態では、今回は凌げても、いずれは……」

「そうだよな」

中小企業で、運転資金のために街金に手を出したり、手形をジャンプしていたら、いずれ破綻する。

早いか遅いかだけの話。だが、なんとかしようとして結局、倒産間際に膨大な借金を抱えてしまう。

途中で廃業すれば、ちよいマイナスぐらいで済むのにな。

準備が終わったので、皆でラ○クルプ○ドへ乗り込み、出発する。土手に集まっていたギャラリーは、何もない所から車が出てきて驚き、馬なしで動き出した鉄の塊を見て、再度驚きの声を上げた。

「出発〜！」

そして、車が発進してすぐに――オドメーターで3km程進むと、さっきの商人が道端でへろへろになっていた。

「あゝあ、走れメロスのように」
少し、追い越して車を止めると、道端で倒れこんでいる男に話しかけた。

「王都まで行くのか？」

「ハアハア……」

「こいつに乗れば、今日中に王都へ着けるぞ。運賃は銀貨1枚だ。そのぐらいいは持つてるんだろ？」

「……本当に今日中に着くのか」

「もちろん」

リアゲートを開いて、荷物スペースに男を座らせる。日本じゃ違法だが、ここは異世界だ。

「なんだ旦那、結局助けるんじゃない」

「王都へ連れていくだけだぞ。その後は知らん」

荷入れを待ってもらうのか、それとも代替の馬車を用意して、なんとかするのか。

だが車が動き始めると、男が騒ぎ始めた。

「なんだこれは！ う、馬なしで動くのか？」

「だから言っただろう。今日中に着くってな」

俺はスピードを上げた。もう道路は乾いており、所々に水たまりがあるだけなので、それを避けながら走る。

この世界も左側通行だ。剣を左側に差すので、ぶつからないようにするためだ。

まあ、鞆がぶつかったりしても、『決闘！』とはならないのだが。

それから2時間、男から身の上話を聞いたりする。

聞けば案の定、一か八かの勝負に出たようだ。まあ、そういう商

売は普通は失敗に終わるのが常なのだが。

そんな話をしている間に王都の街が薄っすらと見えてきた。

「ほ、本当に王都へもう着いたというのか？」

「目の前を見てみる、本当だろ？」

小山の上に城を建てて、その周りを城郭で3重ぐらいに囲った造りのようだ。

プリムラの話では、増築を繰り返しているので、もっと構造が複雑らしい。

そして城郭の中に収まり切れない小さな家々が、外にも溢れだし、その面積の方が壁の中より遥かに大きい。

人口は100万人以上らしいからな。北海道でいえば、札幌ぐらいの大きさがあるって事だ。

札幌で例えるなら、大通り公園辺りから札幌駅、すすきの辺りが城郭の中で、それ以外は壁の外。

——ちょっと例えがローカル過ぎるか。

81話 お城と王女様

俺の家族と、途中で拾った商人の男を乗せたラ○クルプ○ドは、ついに王都までやって来た。

「ほえー、もう王都だよ。俺も、この目で見ても信じられねえよ」
ニヤメナが、窓から首を出して王都の街並みを眺めている。

その前にはベルが窓から顔を出しているが、街へ入るので首に鑑札を付けさせた。

「ほ、本当に、王都へ着いてしまった」

「どこで降ろせばいいんだい？ 城郭の中まで行くのか？」

その商人の話では、城郭の外に住んでいる商人のようだ。そして商売で成功して、いつか壁の中へ店を構えるのを夢見ているらしい。

「もうちょっと行った所で、降ろしてほしい」

「はいよー」

街ゆく人々も、馬なしで動く奇妙な鉄の車に目を見張っている。

1 km程進んだ所で、男を車から降ろした。

「それじゃあな」

革袋を担いだ男に別れを告げると、再び車を走らせた。下街の中を抜けるだけでも、結構時間がかかるな。

人が多いので、あまりスピードも出せないし。街の中とはいえ舗装はされておらず土のままだ。

プリムラの話では、城郭の中は石畳で舗装されているらしい。その城郭が徐々に近づいてきた。高さ7〜8 mはあるだろうか――

―巨大だ。これだけ作るのに、どれだけの年月と延べ人数が掛かったのだろう。

「あの商人は上手くいくかね？」

ニヤメナは、商人の行く末が気になるようだ。

「さあな。勝負は時の運、運も実力の内ってな。商売で成功するやつは、総じてツキが太くて博打も強い。俺の経験則だけだな」

「それじゃ、マロウやプリムラも博打が強いにゃ？」

「多分な」

「私は博打はやりませんが、父は負けた事がないと言っていました」

まあ、そんなもんだろう。持ってるやつは持っているんだ。

だが、異世界へやって来た俺だが、こんなチート能力を授かったんだ。俺にもツキが回ってきていると思いたい。

城壁に近づくと、何やら茶色の巨大なロボットらしき物が動いているのが見える。

まさか、本当にロボットがあるわけないだろうが……。大きな石を持ち上げて、城壁の修理を行なっているようだ。

「ありゃ、なんだ？ 随分と大きいが……」

「旦那、ありゃゴーレムだよ」

ニヤメナが巨大なゴーレムを指さす。

「へえ、アレがそうか」

まあ、ファンタジーなら出てくるな。つまり、魔法で動く人形だ。

「地方じゃ全く見なかったからなあ」

「ゴーレムを使役するには、かなり高位の魔導師でなければなりません。そうすると、あまり地方にはいないと思いますよ」

プリムラがそう言うのだから、間違いないのだろう。

「それに、ゴーレムを起動するには、国の許可がいるにゃ」
「国のか？」

「そうです。手続きを踏まない、魔法生物の起動は違法ですよ」
「どうやら、この世界の解釈では、無機質な人形でも勝手に動く物は、生物って事になるらしい。」

「それだけ危険って事か」

「まあ、あんなのが悪事に使われたら、確かに大変だよな。下手すると、俺の重機もゴーレムって言われる可能性があるそうだな。」

「アネ嬢なら、ゴーレムも動かせるんじゃない？」

「やってみたい！」

「ダメですよ。見つかったら大変な事になります」

「だが、山の中や、森の奥などで暮らしている変人魔導師は、ゴーレムを使役させている場合があるようだ。」

「手伝いやら、警戒やら、戦闘に使えるからな。」

「まあ、小さな人形を動かすぐらいならバレないんじゃない？」

「うん」

「ゴーレムに関する本や魔導書とかもあればいいな」

「これだけデカイ街だ、本屋ぐらいはあるだろう。」

「車は大通りを進み城壁の門を潜る。だが、警備の兵士に呼び止められた。」

「帷子を着て、手脚に簡易のアーマーを付けた兵士だ。帷子の上から模様が描かれたゼッケンのような物をつけている。」

「止まれー！」

「はいはい、なんでございましょう？」

「こ、この乗り物は何だ？」

「これは、召喚獣でございます」

「何？　これが?!」

俺がアクセルをあおると、エンジンが唸りを上げて、尻から黒い煙を吐き出す。

それを見た兵士達が、ビビって後退りする。

「実は、陛下から呼び出しを受けているんですが」

俺は、アイテムBOXから、国王陛下の署名入りの手紙を出して兵士に見せた。

「こ、これは、確かに……解った、通ってよい！」

「ありがとうございます」

まるで水戸黄門の印籠だな。

そんな事を3回程繰り返した後、徐々にお城に近づいてきた。

「中々着かないにゃ」

「城郭の街の中を一直線にしてしまったら、敵に攻め込まれてしまうでしょ？」

「ああ、それで迷路みたいな造りになっているのか」

壁の中は石畳になっているので、土よりは良い感じもするが、ゴツゴツと突き上げる感じがずっと車体を襲う。

3階建てや、4階建ての建物も多く、見通しもあまり良くない。

「ケンイチ、平民は正門からは入れませんよ。裏門に回らなくてはいいけません」

「はいよくせめて、地図があればな」

「それも、都市防衛のための秘密なのでありません。地図を作っているのがバレたりしたら間諜の疑いを掛けられて、拷問とかもあり

ますよ？」

「なにそれ怖い！」

間諜ってのは、スパイの事だな。地図は重要な軍事機密って事か。GPSでナビが使えればな——無理に決まっているが。ドローンを飛ばして、上空から都市の様子を把握する手もあるが……。

だが余計な真似をして、大事になったら大変だ。そのうち、走ってりゃ着くだろう。

お城を周り込むようにぐると回ったのだが……。

「行き止まりじゃん！」

——というか、180度ターンして今度は、反対方向へ向かうようだ。

そのまま、道なりに進むと——お城の正門に着いてしまった。正門じゃイカンというのに……。

とりあえずそのまま道なりに進み、ぐるとお城の周りを回ってみる事に。

だが、また180度ターンして、今度はお城から遠ざかり始めた。

「なんじゃこりゃ！」

やむを得ず、車を止めて露店の爺さんに道を聞くことにした。あまり新鮮そうじゃない、リンカー一皿に銅貨2枚(2000円)を払う。

聞けば、このまま道なりに行って、再び180度ターン、そして左へ曲がれば、裏門へ行く道になるようだ。

なんとややこしい。こんな街でも長年住んでいれば、道は覚えるんだらうな。

露天の爺さんが言うとおり、お城をぐると回る道になり、やっとお城の裏門が見えてきた。

こりゃ、車じゃなかったら、街を歩くだけで1日とか掛かりそうだな。

やっとお城の裏門へ到着。お城の周りはぐると堀で囲まれており、その上にはゴツイ石橋。

橋を渡った先には石造りの門があり、2人の衛兵が見える。

俺達は車から降りて石橋を渡ると、衛兵に話しかけた。

2人とも、プレートアーマーを着ているのだが、重くないのだろうか。

「あのー、国王陛下から呼び出しの手紙をいただいたのですが……」
衛兵に羊皮紙の手紙を見せる。

「むっ！ これは確かに。しばらく待て！」

「あの！」

その場から立ち去りそうになった衛兵に、重要な案件を伝える。

「なんだ？」

「イベリスへ向かう街道の橋が落ちていたんですが」

「なんだと！ それは本当か？」

「はい、両岸で沢山の商人が足止めを食らって、辟易しております」
た

「解った！ 報告してくれて感謝する！」

衛兵は重そうな甲冑をガシャガシャと鳴らしながら、奥へと消えていった。

残った衛兵にちょっと金を渡して情報を仕入れる。

王都の人口は100万人以上。毎日大量の物資を消耗する。それ故、四方八方から物資を輸入しているのだ。

その物流の大動脈が1つでも塞がれば深刻な物不足に陥ると言う。

「なるほど、そりゃ慌てるわけだ」

だが、待てと言われたので、待たねばならない。

アイテムBOXからテーブルとパラソル。そして椅子を出して皆で座る。

ベルはテーブルの下で香箱座りだ。

「買ったリンカーでも食うか」

だが、取り出したリンカーだが、腐っているものも多い。

「旦那、こりゃ酷いぜ」

「こんなのも銅貨2枚（2000円）だからな」

ダリアでも、アストランティアでもこんな酷い物は売っていないかったし、もっと安かった。

「まあ、腐った所をそぎ落とせば、食えない事もない」

「王都ってのは、見掛け倒しにゃ」

「こんな物でも売り物になるぐらい、物が不足しているのですわ」

プリムラの言うとおりでろう。彼女が、テーブルに置かれたリンカーをじつと見ている。

さて、やる事もないし暇なので、シャングリ・ラで暇つぶしに使えるような物を適当に検索する。

この世界の住民でも出来る物——ゲーム？ それともパズルか？
トランプも良さそうだが、アラビア数字だしなあ。UN○も皆で出来そうなのだが、こいつもアラビア数字だ。

チェスや将棋はルールが複雑すぎるし……。

だが、よさ気な物を見つけた——バックギヤモン。バックギヤモンってのは、西洋のすごろくみたいなゲームだ。

これなら、ルールを説明すればアネモネやプリムラは解るだろう。獣人にはちよつと難しそうではあるが。

「ポチツとな」

トランクのような箱に入ったバックギャモンのセットが落ちてきた――4000円だ。

「ケンイチ、これは？」

プリムラが興味深そうに、緑と赤の模様が並ぶ盤面や白黒の駒を眺めている。

「これは、駒遊びだよ。この角から出発して、ぐるりと周り最後は、この溝に全部先に入れた方が勝ち。遊び方を教えるよ」

「へえ」 「なんだか、難しそうだなにゃ」

ゲームをしながら、プリムラやアネモネにルールを教えると、一発で覚えた。

まあ、そんなに難しいルールじゃないからな。

――とりあえず、やってみたのだが。

強い！ 強すぎる！ プリムラが強すぎるのだ。大店の商人は博打が強いつて話をしていたが、彼女も生まれながらにして持っているようだ。

多分、博打をやらせても強いと思われる。だが、博打なんかをやらなくても、彼女はそれ以上の金をすぐに稼げるのだ。

「面白い！」

アネモネもバックギャモンが気に入ったようだ。

「これは、面白いですわ。ケンイチ、これも売ってもいいですか？」

「ああ、これなら、似たような物をすぐに作れるだろうし」

ルールも難しくないし、この世界でも流行るかもしれない。元世界でも、かなり歴史があるゲームだからな。

「あゝ、俺達にはちよつと無理だな」「そうだにや」

バックギャモンでだめとなると、獣人達にボードゲームやカードゲーム等は全部ダメだな。

裏門の前に陣取り、皆でゲームを楽しんでいると、役人がやって来たので中断。

だが役人らしき黒と金糸の制服を着たオッサン連中や、護衛らしき若者を従えた、白いドレスの女の子がいる。

背中まで伸びるウェーブした美しい金色の髪と、パッチリとした青い目。豪奢ではないが、フリルがついた上等そうな白いドレス。

そして、頭の上には銀のティアラー——こりゃ、もしかして王族か？ 歳は15歳ぐらい、身長は150cmぐらいか……。

見るからにやばそうなので、皆で膝を折り平伏する。

「其の方が、父の手紙を持ってきた者か？」

「ははっ！ 商人のケンイチと申します」

「これには、魔導師となっているが？」

「いやあ、本人は商人のつもりなのですがねえ」

お姫様らしきその少女は、なにやらニマニマしている。子供がよい玩具を見つけた顔だ。

「それで——街道の橋が落ちていたと言うのは真か？」

「はい、イベリスへ向かう街道で——ここから60リーグ（約100km）程行った所の橋が完全に落ちていました」

それを聞いた、後ろの役人達が「あの橋か——」「確かに老朽化が進んでいたな……」などと、あれこれ騒ぎ始めた。

「それはいつの事だ？」

「えゝ、昨日の朝過ぎてから、前が見えなくなるぐらいの大雨が長時間降りまして——多分、その時に流されたものと……」

「何？ 昨日の朝？ その事をどうやって、其方が知り得たというのだ？」

「はい？ そこから、我々が街道を通って、王都までやって来ましたので……」

「なに?! 其方も申ししたが、あそこからは60リーグは離れているのだぞ？ どうやって、1日で到着する?!」

「お前達！ 王女殿下の前で、いい加減な事を言うと――」

後ろにいた、護衛の1人が俺に掴み掛かりそうになる。それよりも、やっぱり王女様が……。

「私の召喚獣に乗って、街道を走って参りましたので」

「なに？ 召喚獣だと？」

「お見せいたしましょう」

皆をどかして、車を出すスペースを作ってもらう。

「ラ○クルプ○ド召喚！」

目の前に鉄の白いボディが現れて、堀の上に作られた橋の上でバウンドする。

「なんじゃこれは?!」

「ですから、私の召喚獣でございます」

俺は車に乗り込むと、キーを捻りエンジンを掛けた。今の車はプッシュスタートだが、こいつは結構年代物だ。

咆哮を上げた白い車を橋の上で走らせて、バックで戻ってくる。

「我々は、これに乗り込み数時間で、橋が落ちた所から王都までやって来たのです」

だが、俺の話を聞いた王女がドアを開けると、助手席に乗り込んできた。ドアの開け方は俺を見たのだろう。

「「殿下！」」

王女は役人や護衛達の心配の声など、齒牙にもかけない。

「もう一度、走らせるがよい！」

「承知いたしました」

アクセルをちよつと多めに踏み込むと、加速でシートに押し付けられる。

そして、再び橋の上を走りだすと道まで行き180度Uターンをして、元の場所へ戻ってきた。

「これは凄い乗り物だの！ 確かに、これなれば60リーグぐらいはあつという間じゃろう」

「王女殿下、不用心に訳の分からない乗り物にお乗りになって、このまま連れさられたらどういたします？」

「ほう！ それは面白そうじゃの！ やってみるがよいぞ」

あ——このお姫様は、平穏な日常に波風立てまくって、トラブルを起こすのが大好きな人だ。

「ほんの冗談でございます。ご無礼をいたしました」

「なんじゃ、つまらんのう」

車から降りた王女に、部下が駆け寄ってきた。

金糸が施された黒い制服に身を包んだ若い連中は、近衛騎士らしいな。

「殿下、あんな訳の分からない物にお乗りになられて、何かあったらどうなさいます！」

まあ、皆そう言うわな。

「は！ 其方達が心配しているのは妾の事ではなく、其方達の首の事じゃろうが——それよりもじゃ。はよ、父上に橋が落ちた報告を

するがよい！ 王都の一大事じゃぞ？」

「ははっ！」

役人達が、バラバラとその場を離れてお城の中へ吸い込まれていく。そして王女の護衛だけが残った。

その光景を横目で見ながら、アイテムBOXへ車を収納する。

「ケンイチと申したな」

「はい」

「このような魔法を使う其方は独自魔法使いユニークである？」

「端から見れば、そうなるんでしょうかねえ……」

「少なくとも、商人ではないな」

王女はテーブルの下でじっとしているベルに目を付けたようだ。売れとか譲れとか、無茶を言われるかと思ってハラハラしていたのだが――しばらくベルとにらめっこをした後、諦めたらしい。

「一応、商業ギルドにも登録して、商売もしているのですが」

「ふうむ――面白いのう。これなら、ナスタチウム侯爵のあの娘も、ぎゃふんと言わせられるかもしれぬ」

ぎゃふんって今日日聞かねえなあ……だが、王女の顔はなにか悪巧みをしている顔だ。

随分とお転婆なお姫様っぽいな。

「ケンイチ、よくぞ素早い報告をしてくれた。礼を申すぞ」

「これは、王女殿下より過分な褒めのお言葉を賜り、光栄の至り」
上腕を腹に当て、礼をする。

「貴族の真似事は止めよ、胸糞が悪くなる」

「姫様！ そのようなお言葉を――」

「黙れ！ ロウ！」

護衛の1人が、王女の言葉遣いをたしなめようとしたのだが――

王女に一喝されて、大人しくなってしまった。

黒い制服と金色の剣がよく似合う、金髪の男前だ。近衛騎士なのだから腕前は確かなのだろうか？

それとも子爵領の騎士のように縁故採用の、へなちょこだろうか？全部で3人の護衛がいるのだが、その1人は女だ。茶色の巻き髪を肩まで伸ばしている。

ちよつと太い眉毛をしているので、男装させたら似合いそう……。そんな事を考えていたら、王女から褒美があると言う。

「それでのう、ケンイチ。其方に褒美を取らす」

「褒美でございますか？」

「そうじゃ。なんなりと申してみよ」

王女がニヤニヤしている。俺が何を言うのか、楽しみにしているようだ。

うーん、俺はちよつと考えたが、すぐにいい案が浮かんだ。

「それでは——国王陛下への謁見が認められるまで泊まる所がありません。片隅で構いませんので、お城の裏庭に宿営させていただきますたい」

「なんじゃと？」

「私の家族には——ご覧のとおり獣人がおりますので、一緒に泊まれる施設が少ないのです」

「旦那あ、俺達のために、そんな事までする必要ないのに」

「そうにゃ」

だが、俺の回答を聞いた、王女が腹を抱えて笑い始めた。

「ははは、城の裏庭に宿営させてほしいだと？　このような願いは前代未聞じゃ」

「だめでしょうか？」

「はは……もっと価値のある物を求めぬのか？」

「私にとっては、家族と一緒にいる事が、最高に価値のある事でございます故」

「……解った、許可しよう」

「殿下、お城の裏庭に下賤な者をいれるなどと……」

「黙れ！ 其方等の小言は聞き飽きたわ。妾の決めた事に不満があるのなら、職を辞したらどうじゃ」

「……」

王女に、「気に入らないのなら仕事を辞めろ」と言われたんじゃ、黙るしかないよな。

「本当によろしいのでございますか？」

俺の再度の確認にも、王女は即答した。

「うむ、二言はないぞ。それに、父との謁見が決まれば、すぐに連絡がつく所に居たほうが探さずに済む故、一石二鳥じゃろ」

ただ、国王との謁見がいつになるかは不明だと言う。申し込んでから数ヶ月掛る事もザラらしい。

皆で宿屋に泊まっていたら、宿代だけでもとんでもない金額になるな。

王女の案内で、お城の裏庭へ入る。石造りの高い塀に囲まれた中には、花壇やら公園が完備されていた。

管理が行き届いている、緑溢れる公園だ。さすがに金が掛かっているが、天守閣にある中庭はもっと豪華で素晴らしいという。

だが、平民がそんな場所へ入り込めないだろう。ここで十分だ。お城の裏には、警備や門番、メイドさん達の詰め所もあるようだ。

その裏庭の片隅に空き地があった。塀のすぐ近くであり、黒い影の中に雑草が生えている。

小さい小屋があるので、庭を管理するための用具置き場に使われ

ているのだろう。側に小さな井戸もある。

こりゃ、宿営地にうってつけた。俺が場所の確認をしていると、隣に王女がやって来た。

「ここなら良いじゃろう。好きに使うがよい」

「ありがとうございます。それでは――家召喚！」

王女の前に、俺達の家が出現する。

「なんじゃ、これは?!」

「私達の家を出したのでございますよ」

「アイテムBOXか？」

「さようでございます」

王女が家に駆け寄り、ペシペシと木の壁を叩いている。その反対側にはベルが駆け寄り、家の周りのパトロールを始めた。

「こんな大きなものが入るアイテムBOX持ちとは……」

「ずっと隠しておりましたが、色々とやっているうちにバレてしまいました、はは」

「ユーパトリウム子爵の庇護だと聞いておったが……」

そこまで知っているのか。もしかすると、今回の呼び出しには、この王女様も一枚噛んでいるのかな？

「最初はダリアにいたのですがねえ」

「どう見ても、アスクレピオス伯爵の方が力が上だと思うが」

「それも知っておりますが、まあ色々と訳がございまして」
「なるほどのう」

王女は、いきなり家の扉を開けた。もう、やんごとなき身分なので、やりたい放題だ。

「ベッドしかないではないか」

「他の荷物はすべてアイテムBOXの中に入っておりますので、随時入れ替えて使用します」

「不便のような、便利のような」

「いいえ、これで十分暮らしていきますよ。それにこれ以上家が大きくなりますと、アイテムBOXの中に入らなくなってしまいますので」

「よし！ 決めた！ 妾は、ここに泊まるぞ？」

「ええーっ！ ちょっと、お待ちください。家族には獣人もおりますれば……」

「旦那、俺達は外で寝るよ。流石に王族と一緒に寝るわけにはいかないだろう？」

「そうだにゃ」

俺達の会話に、王女の護衛達が割って入ってきた。

「殿下！ わがままも大概になさいませ」

「もう、其方等の話は聞かぬ故、何を申しても無駄じゃぞ」

王女とお付の護衛が言い争っているが、どう見ても王女の方が強い。

最終的には押し切られる格好になった。

「本気ですか？」

「無論じゃ！ こんな面白そうな事を放っておけるか」

「それじゃ、やむを得ない。ニヤメナの小屋を出すので、そこで二人寝てくれるか？」

「しょうがねえなあ。クロ助を泊めてやるよ」

「恩を着せるんじゃないにゃ。元々ケンイチの小屋のくせに」

「こらこら、喧嘩するな」

2人はいつも言い争っているが、互いをライバル意識しているだけなので、陰悪ではない。

「それでは、王女殿下。何のおもてなしもできませんが、それよろしいですか？」

「うむ、こちらが無理を言っているのは承知している故、気にする事はないぞ」

少々わがままだが、話が通じないタイプではないらしい。

まあ、相手が相手だけに断れないよなあ……。

突然やって来た、少々面倒なお客様にアネモネは不機嫌、プリムラは致し方なしといった表情をしている。

プリムラは王族の怖さを知っているからな。

82話 王女様を接待

やっと王都に着いて、お城にも入る事が出来たのだが、わがままな王女様に押しかけられてしまった。

何が楽しゅうてと思うのだが――身分上仕方ないのか、面白い事や娯楽に飢えているようだ。

家の設置が完了したので、続いてニャメナの小屋を出す。

ミャレーのベッドも出してやると、早速獣人2人でセットアップを始めた。

いつも言い争っている彼女達だが、ここでは完全なアウェイだ。こういう時には同族の結束がある。

いがみ合っている部族間でも、それを超える危機が襲えば直ちに結束すると言う。

次にトイレの設置だ。どのぐらいの長期戦になるか解らん。

ユ○ボで穴を掘って、その上にトイレを設置する。

「ユ○ボ召喚！」

座席に座りエンジン始動。移動して穴を掘り始めたら、座席に王女が乗ってきた。

花のような匂いと共に、目の前に金髪が煌めき、触れた肌には温かい王女の体温が伝わってくる。

「なんじゃこれは！」

「ちよっと、殿下危ないですから！」

稼働中の重機へ近づくのは非常に危険だ。

「これが、報告にあった、鉄の召喚獣じゃの！」

慌てて、王女の護衛がやって来たのだが、咆哮を上げるユ○ボに、ビビって近づけないでいる。

鋼鉄のバケットが、土を深く掬う——ここを去る時に埋めればいいからな。そのため、ちよつと深めに穴を掘る事にする。

「なるほどのう！ この鉄の魔獣で、ユーパトリウム領の普請を終わらせたのか」

「ちよつと、殿下。降りていただけませんか？」

「もう、終わりか？」

「はい……」

降りようとしたのだが、王女が俺の首に手を回し離れない。

「殿下、お戯れを」

彼女が離れないので、やむを得ず文字通りのお姫様抱っこして重機を降りたのだが——当然、護衛に囲まれた。

「貴様！ 殿下のお身体に気安く触れるなどと、なんと無礼な！」

騎士が金色に輝く剣に手を掛けたので、アイテムBOXからポリカーボネート製の大盾を取り出す。

次の瞬間、透明な盾に騎士の剣が弾かれた。くそ、本当に抜きやがって。

俺がアイテムBOXから、クロスボウを取り出すと、金髪の騎士は後ろに飛んで距離を取った。

しかし、アストランティアにいた、へなちよこ騎士とは動きが雲泥の差だ。

さすがに王女の護衛ともなると実力者が選ばれているようである。

「むー！」

アネモネの胸の前に青い光が集まっていき、溢れ出た光で周囲を青く染める。

「ちよ、ちよっとアネモネ、待て待て！」
ファイヤーボール

「憤怒の炎！」

魔法の炎が騎士に届く前に、女騎士が間に割り込んだ。

プロテクション
「聖なる盾！」

見えない透明な盾が、アネモネの放った魔法を遮ると炎は霧散した。これは至高の障壁の下位互換のような魔法だろう。
ハイプロテクション

プロテクション
簡単な防御なら、聖なる盾でも十分だな。今度、魔導書を探してみよう。

「おおっ！」

「むー！」

アネモネが次弾の装填に入った。

「おい、アネモネ！　こら待て！」

「双方！　剣を収めるがよい！」

騎士が剣を収めたので、アネモネも次の魔法を撃つのを止めたようだ。

「其方、その若さで魔導師だったのか？　名はなんと申す？」

王女はアネモネに興味を示したようだ。

「アネモネ……」

「アネモネと申すのか。妾はリリスじゃ。名前で呼ぶがよいぞ」

「王女殿下、アネモネは私の冒険者家族の大魔導師でございます」

「何？　大魔導師とな？　他にはどんな魔法が使えるのじゃ？」

エクスプロージョン
「……爆裂魔法とか回復とか……」

アネモネは、そう返答したのだが――さすがに、至高の障壁は隠したようだ。使える者があまりいない、高位魔法らしいからな。

「何？ 爆裂魔法エクスプロージョンとな？ ははは！ 聞いたな、ロウよ！ 初弾がファイヤーボールファイヤーボール 爆裂魔法エクスプロージョンであつたら、其方達は2階級特進であつたの！」

王女は意地悪そうな笑みを浮かべると、言葉を続けた。

「まあ、これが実戦であれば、其方達は妾を守れなかった事になるな」

「くっ……」

膝をつく騎士は、凄く悔しそうな表情を浮かべている。

「護衛はロウを残して、皆下がれ！ ロウ！ 其方は――妾を守れなかった無能として、間抜け面を晒すがよい！」

「……王女殿下の御心のままに」

2人の騎士が、すぐごと奥へ消えていった。俺としては、この金髪の騎士より、女騎士の方に残ってほしかったところだが。

「王女殿下、お騒がせして申し訳ございません。これから、私達は食事の準備になるのですが……」

「なんじゃ、妾に馳走してはくれぬのか？」

「……庶民の食事を一緒に取られるおつもりで？」

「妾は構わぬぞ」

俺達に負けた騎士は、もう何も言ってこない。完全に王女の言うがまま――護衛の任務だけをこなす、人形と化している。

さて、料理は何にしようか。アネモネに聞いても「カレー！」という声しか聞こえてこない。

それにプリムラもカレーに賛成のようだ。獣人の2人とベルはい

つの間にかいなくなってた。

どこへ行ったんだ？　あまり、ウロウロすると拙い^{ます}ような気がするが……。

それはさておき、カレーはどこで食わせても好評だし、王家の間も食べた事がないだろう。

ここはやはり、異世界でも正義の地位が揺るぎないカレーで攻めるのが吉か。

アネモネとプリムラに手伝ってもらい、カレーの準備をする。

玉ねぎを大量に刻んで炒める。そのための肉や野菜も炒める。とりあえず、大量に野菜を入れて無水カレーにしてみるつもりだ。

元世界にいた時もたまに作っていたが、美味かったからな。

そして米も出して、ご飯も炊く。アイテムBOXへ入れておけば、炊きたてのまま保存できるので大量に炊く。

カレーの準備をしていると、王女が興味深そうに覗きこんでいる。こういう庶民の料理風景を直に見たことがないのかもしれない。

すると、物陰からベルが獲物を啜えてやって来た。鳩ぐらいの大きさの青い鳥だ。頭には縞模様の冠がついて伸びている。

「おおっ！　ベル、早速獲物を獲ってきてくれたのかーって、これってお城で飼ってる鳥じゃないよな」

一応、王女に確認してみたが、お城の庭に住み着いている、普通の野鳥のようだ。

今日はカレーなので、鳥はアイテムBOXへ入れよう。ベルには猫缶を3つ開けてやる。

ベルが猫缶を食べ始めると、ミヤレーとニヤメナも帰ってきたが、彼女達の手にも同じ鳥が握られていた。

「お前等、弓もないのにどうやって」

彼女達の武器はアイテムBOXにしまったままだ。まさか武器を持って、お城の中をうろつかせるわけにもいくまい。

「くくり罠だよ」「そうだにゃ」

獣人ってのは、ガキの頃に罠作りをしこまれるという。子供で武器が扱えなくても、罠を作れば獲物を捕らえる事が出来るからだ。本当にサバイバルに特化した種族だよな。

「其方達はいつもこうやって、獲物を捕らえて暮らしておるのか？」

「その通りでございます。普段は森の中に住んでおりますので、獲物に困る事はございません」

「何？ 森の中に……魔物は？」

「当然、おりますよ。その魔物も狩って、食料に致します」

「むう……」

なんだか、王女は感心しているようだ。

「ちょっと見てみますか？」

「何？」

俺は、アイテムBOXの中に入りっぱなしの洞窟蜘蛛のオスを取り出した。

王女の目の前に白い甲殻と毛に覆われた巨大な蜘蛛が現れた。

「おおっ！ こ、これは!？」

「殿下、これは洞窟蜘蛛でございますね」

1人残った、ロウという騎士が獲物の名前を知っていたようだ。

「これがそうか！ 実物を見るのは初めてだぞ！ これから甲冑な

どが作られるというではないか」

「その通りでございます」

「よし！ ケンイチ！ この蜘蛛は王家で購入するぞ」

「真でございましょうか？」

「うむ！」

「実はこれはオスでございまして、更に巨大なメスもあるのでございますが……」

「なんじゃと！」

だが、飯の前なので、メスを出すのは止めた。食欲が無くなるからな。

蜘蛛の処遇は後日する事になって、カレーが出来上がった。

「いい匂いじゃ！ これは香辛料のスープか？」

「その通りでございます」

「その白い粒は？」

「これは、穀物を炊いた物でございしますが――王女殿下にはパンをご用意するつもりでありましたが……」

「妾もその白いのを食してみたい」

「かしこまりました」

さて、王族にお出しするのに、普通の皿は拙ますいかもしれない。シヤングリ・ラで高い皿を物色してみる。

俺でも名前を知っているロ○ヤルコペンハ○ゲン製の皿を見つけた。

皿の縁が金の文様で縁取られて、中心には植物の絵が描かれている。

一枚――何と40万円だ。この世界なら400～500万円、金貨25枚以上の価値があると思われる。

スプーンも同じメーカーの物にした、金のスプーンで柄が模様の入った陶器で出来ている凝った作り――1本で20万円だ。

「むっ、これは見事な皿とスプーン……」

「なかなかの逸品でございましょう？」

そう、言いながらロ○ヤルコペンハ○ゲンの皿に、ご飯を盛って

カレーを掛ける。

まあ、ロ○ヤルコペンハ○ゲンだろうが、マ○センだろうが、魯山人作だろうが、道具は使わんと意味がないからな。

準備が出来て、テーブルについたのだが、ミヤレーとニヤメナは地面に胡座をかいて食べ始めている。

さすがに、王族と一緒に席に座る度胸はないらしい。別のテーブルを出してやろうと言ったのだが、要らないという。

「旦那、一緒に料理食べたっただけで、一生自慢が出来るぜ、はは」「その通りにや」

彼女達は別段気にもしていないようなので、俺達も食べる事にした。

王女がカレーをスプーンで掬い、後ろから隣にやってきた騎士に差し出した。とりあえず毒味だろう。

だが、食べた事もない、茶色いドロドロに、騎士の顔は恐怖にうがんでいる。

大げさな——こんな事で動揺するなんて、王女の盾となる仕事が終わまるのか？

「うう……パクっ——う、美味しい？」

「そうか」

その言葉を聞いた王女も、スプーンに盛ったカレーを口に運んだ。

「むぐむぐ……こ、これは！ 美味しい！ 見た目はアレだが、口にいれれば香辛料の香りが、実に食欲をそそる！」

「10種類以上の香辛料を巧みに組み合わせ、その味を作り出しているのですぞいます」

「これは素晴らしい、しかも美味しい！ 庶民は、いつもこんな料理を食べているのか？」

「いいえ、これは私の故郷の食べ物でして……この国の街々では、香辛料ギルドが幅を利かせており、値段が釣り上げられております故、庶民がこういった料理を食べるのは難しいのが現状でございます」

「む——確かに、そのような話は聞いた事があるが……」

「そこにいる獣人達などは、香辛料料理が大好きなのに、食べたくても食べられないのでございます」

「なるほどのう……して、この香辛料の組み合わせは教えてもらえぬのか？」

「私が創りだしたものではありませんので、組み合わせは秘匿されております。ですが——もしかしたら王宮の料理人であれば再現出来るかもしれません」

俺は、シャングリ・ラからS○Bの赤いカレー粉の缶を購入して、王女の前に差し出した。

スプーンで鉄の蓋を開けて中身を見せる——当然、中には黄金色のカレー粉が入っている。

「ほう！ それは面白そうじゃの！ いつも、出来ない料理はないと豪語している連中だ。これは愉快的光景が見られるかもしれない」
なにやら、王女がカレーを頬張りながら黒い笑みを浮かべている。本当に娯楽に飢えているんだろうなあ……。

だが、カレーは気に入ったようである。えらい勢いでパクパクと食べている。アネモネも対抗するようにカレーを食べているのだが――。

「代わりじゃ！」

「え?!」

「ダメか？」

「いいえ、滅相も御座いません」

再び、高価な皿にご飯とカレーを盛る。

結局、この王女様2回おかわりをした。この細い体のどこに入っているんだ？

「ふう……これは、実に美味しいの！ 満足じゃ……」

王女はちよつと崩した座り方をして、すでに赤くなり始めた空を見上げている。

「王宮の料理人が、美味しく再現できれば、お城の名物になるかもしれませんね」

「そのとおりじゃ！ ケンイチ、この皿とスプーンも気に入った。購入するぞ？」

「え？ 本当にございますか？」

「其方、商人だと申したではないか、売り物なのであらう？」
もちろん「勿論で、ございます」

隣にいるプリムラに値付けをひそひそ話で尋ねる。

「皿は金貨20枚、スプーンは金貨10枚ぐらいだと思うんだが……」

「皿はそれで――スプーンは金貨20枚はいけるでしょう」
なるほど……この世界に、金と陶器を合わせた、こんな造りのスプーンはないようだ。

「では、王女殿下、皿とスプーン、それぞれ金貨20枚でお譲りいたします。それで数はいかほど……」

「中々、良心的じゃの。それでは――これをいれて10ずつ購入しよう」

王女が自分が使っている皿とスプーンを指さす。

えゝ金貨400枚だから、8000万円か……さすが王家、こんな買物もポンと――財力が違う。

「誰かある！」

王女が声をあげると——どこからともなく、白いフリルと紺のワンピースのメイド服を着たメイドさん達が現れた。

うゝむ、さすが王宮に勤めているメイドさんだ、美人ばかり。いつ何時、声が掛かってもいいように、見えない所に控えているんだな。

ここから王侯貴族のお手つきになって、愛人になったりするものいるんだろうな。

俺は、シャングリ・ラに子爵領でゲットした金貨をチャージ。ロ○ヤルコペンハ○ゲンの皿と金のスプーンを10ずつ購入した。

しかし、マジでこんな感じでシャングリ・ラに金貨をチャージしまくり、王侯貴族達に商品を売りまくっていたら、市場から金貨が消えるな……。

テーブルの上に出現した皿とスプーンを、メイドさん達が配膳室に運ぶらしい。

「それから、この香辛料の粉を料理長のところへもっていけ。そして、妾の命令で同じ物を作れと——そう伝えるがよい」

「かしこまりました、姫様」

他のメイドさんより、ちょっと臺が立ったメガネを掛けたメイドさんが、カレー粉の赤い缶を運んでいった。

黒い髪を後頭部で纏めてうなじが見えている。うゝん、色っぽい……いいねえ。

だが、メイドを見ている俺に、アネモネとプリムラの視線が突き刺さる。

「なるほどのう——商人というのも、あながち嘘ではないのだな。そのアイテムBOXの中に数々の逸品が収納されておるのだろう」

「その通りでございますが、中に何がはいっているかは、家人や妻

でも知りません」

「恐れ多くも王女殿下、主人の言うとおりでございます」

「まさか、ご禁制の品とかは扱っておらぬだろうの？」

王女が、ジロリと俺の方を見るが――。

「商売の秘密でございますから、お答え出来ませんし、他人には確かめる術もございません」

「むう……アイテムBOXには生き物は入らぬと聞いたが？」

「その通りでございます」

「それでは、人間等を拐^{さら}うのは無理かの……」

王女が物騒な事を言い出したな。

「まあ、確かに無理でございますが、裏ワザはございます」

「裏ワザとな？」

彼女の目が光る。

「魔法か薬物等で仮死状態になれば、アイテムBOXへ入れられると思います。試した事はございませんが……」

「ふむ――それでは料理に薬を混ぜて、妾を拐^{さら}う事も出来ると言うわけじゃな？　しかし、妾を拐った後、どうやってこの城を抜ける？」

「この城壁を越えれば良いのですよ」

俺は、家の近くにある高い城壁を指さした。

「何？　こんな高さをどうやって越える？　魔法か？」

俺は、王女を連れて城壁まで行くと、足場をアイテムBOXから取り出した。

「足場召喚！」

突然、目の前に出現した鉄管のジャングルジムに、王女は驚きの

声を上げた。

「なんじゃこれは！」

「鉄の管で作った足場でございますよ。さあ、御手を」

俺に言われるまま、手を引かれて足場の階段を登ると、城壁の上に辿り着いた。

そして、すぐさま足場を収納したのだが、いつの間にかアネモネとベルも登ってきていた。

「こうすれば、追手は登ってこれませんし、反対側へ足場を出せば、下に降りる事が出来ます」

「これは、凄いの！」

城壁の上から見る景色は中々の物だ。城壁の下には城の周りを囲むお堀。

そして夕日に赤く染まる王都の街並みが遥か遠くまで続いている。これで電灯があれば夜景は綺麗だと思うが、ここにあるのは灯油ランプぐらいだろうしな。

だが王都なら以前から聞いていた魔法のランプ等があるかもしれない。

「貴様あ！ 王女殿下を、どうするつもりだ！」

城壁の下で、王女を連れ去られた護衛の騎士が喚いている。

「ははは！ ロウ！ 妾がこのまま連れ去られれば、王女を守れなかった役立たずとして、其方の首は胴体と生き別れになるの！」

「くっ……」

「あまり、虐めにならぬ方がよろしいのでは？」

「あの者は選民思想の塊のような男だから。たまには平民に負けて痛い目に遭う方がよい」

なんだか、わがままなのか部下の事を考えているのか、よく解ら

人だな。

「しかし、ここから降りても、堀があるぞ？　それはどうする？」

「アイテムBOXの中に船が入っておりますので、それを使います」

「なんと！　なんでも、入っておるの——それで？　妾をさらって
いかがいたすのだ？　裸に剥いて楽しむのか？」

「そうですね——私のアイテムBOXの中には、女を虐める魔道
具が沢山入ってますから、それを使いますか……」

「ほう——それで、妾の心を折ろうと言うのじゃな？」

「しかし、王女殿下は少々手強そうでございますから、数ヶ月を掛
けてじっくりと……」

「そうなれば、妾はもう城には戻れぬな。野に下り、汚らしい男共
の慰み者になるのかの」

しかし、この設定はどこかで聞いたような……。

「ユーパトリウム子爵夫人が全く同じような事を仰っておられたの
ですが、そういうネタの元があるのでございますか？」

「う……」

「ははあ、巷で出回っている薄い本等でございますね。若いうちか
ら、そのような物を読むのは感心しませんねえ」

「何を申す。あと数年すれば——妾も嫁ぎ、子を成す。遅いぐらい
じゃ」

ええーっ、そうなのか。政略結婚ってやつか。まったく王侯貴族
も大変だな。

「外から見れば、華やかに見える王侯貴族様も、大変なのでござい
ますね」

「綺麗に見えるのは、外側だけだぞ！　中はドブより酷いからの！」
だが、王女との会話にアネモネが割って入ってきた。

「もう、2人共くつつきすぎ!」

彼女が自分の身体を割り入れて2人を強引に引き離すと、俺の腕を掴んだ。

「なんじゃ、いいところで。アネモネはケンイチの娘ではないのか？」

「娘ですが――野盗から救い出して彼女を保護したので、血は繋がっております」

「なるほどの」

「あと、5年したら、ケンイチの子供を生むんだもん!」

「それはいいが、アネモネ――子供産んだら冒険者は出来なくなるぞ?」

「う! うう……」

商人なら子持ちでも問題ないと思うが、冒険者で子持ちは拙いだろう――と思う。

子供担いで、戦場へ行くようなものだからな。

「彼女の魔法も其方が教えたものなのか?」

「いいえ、私の魔法は独自魔法ユニークでして、人に教える事が出来ません。それ故、彼女には魔導書と魔法に関する本を買い与えました」

「ほう……見ず知らずの子供に、魔導書を与えるなど、なかなか出来ぬ事じゃな」

「それほどまでに、彼女の魔法の才能は秀でていたのでございます」
「うゝむ、確かに……」

王女と話をしていると、辺りも暗くなってきたので、足場を出して下に降りる事にした。

家に入ると、王女に寝間着を出してやる。

一応、シャングリ・ラで高価な寝間着を検索してみたのだが、そ

ういった物は見当たらない。

アネモネとプリムラが着ているようなフリルがついた白いワンピースタイプの物を用意した。

「ほう！ これを着て寝るのじゃな？ このような泊まりは初めてじゃ！」

「王女殿下、本当によろしいので？」

「妾も王族。人を見る目には自信があるぞ。それに――」

王女は、部屋の隅で丸くなっていたベルを指さす。

「森猫は悪人には決して懐かぬそうではないか」

そういう見方もあるか……。

はしゃぐ王女にはまだあどけなさが残っているが、さすが未婚の王族と一緒の部屋で同衾どうきんする事は出来ない。

俺は、プリムラに後を任せて外に出ると――そこには、ポツンと護衛の騎士が座っていた。

「ここで護衛か？ 夜は冷える。これを使え」

アイテムBOXから毛布を2枚出してやる。それから、飯を食っていないようなので、カレーとパンを渡した。

だが、騎士は顔を横に向けてしまった。

「情けは受けん！」

「あつそ……まあ、気が向いたら食べな」

俺は地面で火を燃やして、アイテムBOXから寝袋を出すと、中へ脚だけ潜らせた。

すると、隣の小屋から、ニャメナとミャレーが出てきた。

「旦那も外で寝るのかい？」

「まさか、未婚の王族と同衾するわけにいかんだろう。間違いなく

首が飛ぶぞ」

「違うにゃー」

ニャメナが酒を飲みたいと言うので、少量出してやる。
騎士にも注いでやったのだが――飲むようだ。

「む！ この酒は……」

ぶつぶつ言っていた騎士であったが、カレーとパンも食い始めた。

全く素直じゃないね。

83話 王女の依頼

この国の国王に呼び出されて、王都へやってきた。

散々道に迷った挙句、お城へ到着したのだが、肝心の国王との謁見がいつになるか解らないという。

お城の裏門へやって来た王族らしき女の子に、中庭への宿営の許可を求めると、すんなりと認められた。

周りにいた護衛から察するに、この少女は、この国の王女だという。

そして、その王女様は、俺の家で一泊すると言いつ出した。

——とはいえ、まさか俺が同衾するわけにはいかないので、俺は外で寝袋に入って寝た。

——次の日。

目を覚ますと、俺の隣に毛布を被ったアネモネが寝ていた。その反対側にはベル、その周りにはミャレーとニャメナが寝ている。

「ん……なんだ、みんな結局外で寝たのか」

王女の相手はプリムラに任せておけば大丈夫だろう。貴族との付き合いもあるので、扱いは心得ているはず。

「ふああ」

皆はまだ寝ているが飯の支度をするか。アイテムBOXからテールと道具を取り出して準備を始めた。

しばらくするとアネモネが起きてきた。

「アネモネ、おはよう。あそこにある井戸で顔を洗ったら、朝飯の準備を手伝ってくれ」

「うん」

彼女が井戸の所へいくと、釣瓶つるべを使って水を汲み始めた。シャガの所で捕らえられていた時に、水汲みやらを散々やらされたそうなので、意外と体力がある。

それでも、残飯が食べられただけ、実家にいた時よりはマシだったようだ。

釣瓶の落ちる音を聞いて、すぐに獣人達も目を覚ました。

「んゝ」「にゃゝ」

獣人が2人で伸びをする。それに釣られたのか、一緒にベルも伸びをしている。

前脚をピンと伸ばしてお尻を上げ、大きな口を開けて伸びをする姿は猫のままだ。

獣人達はそのまま井戸へ行くと、アネモネの代わりに釣瓶を上げ始めた。側にあった桶に水が貯められると、皆で顔を洗っている。

「うひょゝ、つめてえ！」「目が覚めるにゃゝ」

いつも使っている川の水は冷たくないが、井戸の水は冷たいのだ。

「アネモネ、パンを焼いてくれ。それから、ミャレーとニャメナは鳥さんの下拵えをしてくれ」

「うん」「はいよゝ」「解ったにゃゝ」

シャングリ・ラから、透明なゴミ袋を購入して、彼女たちに鳥と一緒に渡す。

「ほら、この袋をやるから、この中で毛を筆筆ってくれ。内臓やらもこの中にな。お城の中庭を散らかすわけにはいかないからな」

「おおっ、なんだこりゃ、ぺらぺらの袋だ」「うにゃゝ」

獣人達が不思議そうに、ゴミ袋を掲げた後、鳥の毛を耂り始めた。それを横目で見ながら、女の騎士がやって来た。昨日、王女の護衛についていた女騎士である。

どうやら、ロウという騎士と交代するようだ。

「こりゃ、羽根が飛び散らないでいいな」「にゃ」

鳥の下拵えができたら、ぶつ切りして野菜と炒めてから、圧力鍋のスープヘッドボン。

しばらく加熱すればスープは完成。ついでに、ゆでたまごも作るうか。

そうこうしているうちに、パンも焼きあがった。

テーブルに食器を並べていると、家の玄関の扉が開いた。

そこから出てきたのは、頭がボサボサで、まだ白い寝巻き姿の王女。そして俺に駆け寄った。

「ケンイチ！ 花摘みじゃ！」

「はいはい、この小屋ですけど、ここですます？」
俺が作ったトイレに案内する。

「こ、これはどうやって使うのじゃ！」

「こうやって、蓋を開けて座ります。用が済んだら、ここにある紙で拭きます」

文化的な作法のデモンストレーションを行う。

「何？ 紙だと?!」

「はい、柔らかい特別製の紙ですから大丈夫ですよ」

「ほう、これは……解った！ ここでいたす！」
ボタン——と勢いよく扉が閉まった。

「騎士様も、一緒に朝食はいかがですか？」

「朝食は済ませてきたので、お心遣いすまない」

この女騎士は、あのロウという騎士よりは話が通じるようだ——多分。

茶色の巻き髪に、黒い制服がよく似合う。金色の剣も皆同じものを装備しているようだ。

女騎士の制服姿に見とれていると、トイレのドアが勢い良く開いた。

「王女殿下、井戸に水があります」

「うむ！」

しゃがんで手と顔を洗う彼女に、タオルを渡す。

「拭き布でございます」

「うむ——ふう。それにしても、城の中庭でこんな経験が出来るのは新鮮じゃの」

「しかし、護衛の方々は苦勞しておいでですが……」

「それが騎士の仕事故、其方が心配する事ではない。それから、妾の事はリリスと呼ぶがよい」

「それでは、リリス様とお呼びいたします」

まさか、王女を呼び捨てにするわけにもいくまい。

「誰かある！」

王女の声で、ドレスや飾りの付いた箱を持った数人のメイドさんが集まってきて、俺の家の中に入っていた。

ミャレーとニャメナは待ちくたびれたのか、地面に座って朝食を食べ始めてしまった。

一緒に、ベルにも猫缶を開けて鳥肉をやる。

そして、しばらくすると玄関のドアが開いた。

「待たせたな！」

白いドレスを身に纏い、頭にティアラを載せた王女が現れた。
その後ろにはメイドさん達と、プリムラが並んでいる。

「殿下——リリス様、私達と同じ朝食でよろしいのです？」

「うむ！ 昨日食べた料理と同じ水準の物であれば、なんの問題もない。王家の食卓に並んでも、不満が出る事はないはずだ」

食器もいつも普通に使っているものを用意した。毎回、高いの買
つてられないし。

「これは、もったいないお言葉」

俺のテンプレ挨拶に、王女が訝しげな顔をする。

「其方——まさか、元貴族ではあるまいな」

「いいえ、代々生粋の平民でございます」

「それにしても、商人らしくないぞ——昨日の夜に話を聞いたのだ
が、其方の妻も商人らしいの」

「その通りでございます」

王女が席についたので、俺の隣に座ったプリムラに声を掛けた。

「プリムラすまん。王女様の相手をさせてしまって」

「いいえ——とても、有意義な話を沢山聞かせていただきました。
金銭に代えられない貴重な体験です」

「そりゃ、いくら金を積んでも王族と話す機会なんて滅多にないだ
ろうしな」

「そうですね。父でさえ、王族にお会いした事はありませんし」

「おおっ！ それじゃ、プリムラは商人としても、お義父さんの一
歩先を行ってわけだな」

「それはどうでしょうか、うふふ」

王女が鳥肉と野菜のスープ、そしてアネモネが焼いたパンを食べ

ているが、満足そうだ。

「このパンはアネモネが焼いたのか？」

「うん、そうだよ」

王女の質問にアネモネが得意げに笑う。

「ほう、大したものじゃのう……柔らかいし、とても香ばしくて美味い」

パンを食べている王女に、ゆでたまごを勧めた。

「ゆでたまごは、行儀悪く手づかみでどうぞ」

メイドさんが、山積みになっているゆでたまごに手を伸ばし、殻を剥いてから王女に手渡す。

「塩でもよろしいですが、これも美味しいですよ」

俺は、白い皿に盛った、黄色いうねうねを差し出した。

「ほう、これはマヨじゃな？」

「はい、何やら帝国で凄く流行っているそうで」

「王国でもソバナから入ってきての。城でも使い始めておる。なんにでも合う……むぐむぐ——万能ソースじゃ」

輸送に時間が掛かるので、マヨネーズがそのまま入ってきているわけじゃないだろう。多分、製法が入ってきたって意味だな。

しかし、原料の卵も油も高価な物だからな。金持ちの間でしか流行らんだろう。

そんな事を考えているうちに、王女は、ゆでたまご4つ食ったぞ。この細い身体で、えらい大食漢だな——いや、男じゃないので大食漢は適切じゃないか。

「ふう——城にいながら旅行気分が味わえるとは……こんな事を人

に話しても信じてもらえそうにない」

「ここには井戸もありますので、風呂にも入れますね」

「なんと！ 風呂まであるのか?!」

「はい、アイテムBOXの中に入っております」

「むう……それでは、今日の夜も泊まろうかの……」

だが、メガネのメイド長らしき女性が割って入った。

「姫様。あまり、わがままをおっしゃられましても」

「たまにはよいであろう。それに、昼間は勉強やら公務をこなして、夕方からなら何の支障もあるまい」

「それはそうですが……」

メイド長さんは、ちょっと心配な顔をして、俺の方をチラチラ見ている。

「この者達であれば心配いらぬ。まるで邪気がないからの」

「そんな気は毛頭ございませんよ。早く謁見を終わらせて、在所に帰りたいだけですから」

「やれやれ。望んでも一生謁見が叶わぬ者もいるというのに……」
王女が呆れているが、ハッキリ言って全く興味がない。プリムラとマロウ商会にしても、王都に進出すれば実力で謁見が叶うと思うし。

食後のお茶を出すために、シャングリ・ラでティーセットを買った。マ○セン製で63万円だ。

白い肌に、青い釉薬で書かれた模様が美しい逸品。紅茶の葉っぱはアールグレイで500g3万8千円。

こんな高いお茶なんて飲んだことがないよ。ヤカンに入れた水を、アネモネの魔法で沸かしてもらい、紅茶を入れる。

だが、この世界に紅茶はない。お茶と言えば日本の薬草茶に近い。

「む！ これはまた、見事な茶器」

紅茶を淹れて、皆に出す。

「おお！ お茶なんて全然解らんけど、こいつはうめえって俺でも解る！」 「そうだにゃーいい香りだにゃー」

「こんな美味しいお茶は初めてですわ。それにこの芳しい香り……」
獣人達にも紅茶の美味さは解るようだ。プリムラは当然わかるよな。だが、アネモネの口には、紅茶は合わないようだ。

やっぱり、お子様にはちよつと紅茶は早いか……。

彼女には砂糖とミルクを入れてあげた。

「美味しくなった！」

喜ぶアネモネであるが、果たしてこんな高いアールグレイをミルクティーにしてよいものなのか。

「……」

だが、王女は黙って紅茶の香りを嗅いで、じつくりと味わっているように見える。

「リリス様、お口に合いませんでしたか？」

「逆だ。これが茶だと？ いったい、いくらするのじゃ？」

「えー、小壺で金貨2枚ほど……」

「は！」

王女は呆れたような声を上げた。

「うえ！」「にゃー！」「ええっ？」

俺の家族達からも驚きの声上がる。

「これを飲ませて、王侯貴族の度肝を抜けるのであれば、金貨2枚は安いじゃろうの。この茶を口に含んだ瞬間に驚嘆し、そして次に襲ってくるのは強烈な身を焦がすような嫉妬じゃ」

王侯貴族はそのような見栄の張り合いに命をかけているらしい。それは、こういう世界だけではない。日本の戦国時代——茶器を巡って様々なドラマが繰り広げられた。

口数少なく紅茶を楽しんでいる王女に質問をする。

「リリース様は、ご旅行でお城の外に出られる事は……？」

「殆ど無い。父に頼めば、許可はもらえるだろうが、護衛の騎士団やら、メイド達がわらわらとついて来て、鬱陶しい事この上ない」

「それは致し方ありません。御身に何か大事があれば大変ですからまあ、国王からすれば当然だろう、可愛い娘なんだからな。」

「全く其方やアネモネが羨ましい。どこでも好きな所へ行けるのだろうか？」

「勿論、その通りでございますが、一步街を出れば凶悪な野盗や追い剥ぎ、森へ入ればゴブリンや牙熊、そして黒狼と危険がてんこ盛りでございますが。そのためにも、リリース様に強力な護衛は必要でありましょう？」

「その通りなのじゃが……1人で、街をぶらぶらしたい時もあるう」

「お城の何処かに街へ抜ける秘密の通路等は？」

お城の抜け道は、定番の設備だろう、敵に攻められたときに、お城を脱出して落ち延びる時に使用するのだ。

「無論、あるが……ネズミと虫と蜘蛛の巣だらけじゃ。あんな所を非常時以外に通ろうと思わん」

「一応、試してみようとは思ったのですね？」

「……」

王女は黙っているが、その通りなのだろう。多分、場所は王族しか知らないはずだ。

そこを本当に使われたら、騎士達もまかれてしまうだろう。その当事者である女騎士を見ると——少々渋い顔だ。

使われたら困るだろうな。

「それに、姫様。それがもしや地下にあるのであれば、今はネズミだらけでしょうから、危険でございますよ」

「解っておる！」

メイド長の言葉に声を荒らげる王女であるが——その口調から察するに、実際にネズミに追っかけられたのかもしれない。

「んーそうじゃ！ ケンイチ、妾の頼みを聞いてもらえぬか？」

「なんでございましょう？」

「今の話に出た通り、城にはネズミが溢れておっての、どこもかしこもネズミだらけなのじゃ」

「それは、もしかして地下から登ってきているのでは？」

「……多分、そうじゃろうと思う……」

ネズミ退治か——こういう仕事はどこが受け持つのだろうか。前に聞いた話では、王都の冒険者ギルドは、ネズミ退治ぐらいしか仕事がないと聞いていたが。

「冒険者ギルドにネズミ退治の依頼は？」

「勿論、出しておるのだが、引き受ける者がいなくてな。そんな依頼は冒険者の仕事ではないと申すのだが、王都で魔物等が出るはずもあるまい」

「なんだよ、王都の冒険者ってのは、随分と贅沢だなあ。俺なんて下水に潜ってネズミ退治とか普通にやったぜ？」

ニヤメナのやっかみの声が聞こえてきた。

「しかしながら騎士団にネズミ退治をさせるわけにも参りませんしねえ」

女騎士を見ると——俺の言葉にしかめっ面をしている。まあ、そりゃ嫌だよな。

だが事情は把握出来た。

「ははあ、私にネズミ退治をさせようというのですね」

「その通りじゃ」

うーん、どうせ謁見にはしばらく時間がかかりそうだしなあ。やる事もないし——バイトをするのもいいかもな。

それに、シャングリ・ラにはネズミ用の罠や殺鼠剤も売っているし、なんとかなるだろう。

「よろしゅうございます。お引き受けいたしましょう」

「おおっ！　引き受けてくれるか」

王女によると、ネズミ1匹銅貨2枚（2000円）でギルドには仕事を発注したと言う。

ネズミ1匹で2000円なら、結構いい小遣い稼ぎになると思うんだが……なんで、ギルドは引き受けないのかね？

「それでは、ネズミを100匹仕留めれば、金貨1枚でございますね」

「その通りだが、そんなにおるじやろうか？」

「よっしゃ！　旦那、俺も行くぜ！」

俺と王女の話聞いていたニヤメナが立ち上がって拳を挙げた。

「ウチもにゃー！」

「私も！」

「おいおい、毛皮に臭いがついても知らないぞ？」

それに、アネモネ——地下じゃ魔法は使えないぞ？　せいぜい、光よ！^{ライト}　の魔法

ぐらいだ」

「それでも行くの！」

アネモネも言い出したら聞かないからな。それに彼女が持っている魔法の明かりは便利だ。

ゲームのダンジョンだと何故か通路が見えるが、実際は真の闇――本当に何も見えないからな。

「ははは、ドブ掃除とネズミ退治で鍛えた、俺の忍耐強さを知らないな」

住んでいたところもそうだが、ニヤメナは本当に苦労していたんだな。

「ニヤメナ、お前は苦労したんだな。俺の所にいれば幸せにしてやるからな」

「だ、旦那あ……こんな所で、そんな事言われちゃ……」

「なんで、ウチには言わないにゃ！」

「勿論ミヤレーもちろんもな」

「にゃふー！」

ミヤレーが腕を組んで、ふくれっ面をしている。

王女はお城へ戻り、各所へネズミ退治を行う旨の通達を出すようだ。そうしないと怪しい奴だと捕縛されたりするかもしれん。

そして戻るまえに、マ○センのティーセットをお買い上げだ。値段は金貨30枚(600万円)で、アールグレイは2kgで金貨6枚(120万円)也。

シャングリ・ラへ金貨を10枚チャージしても、それが100枚になって戻ってくる。正に錬金術。

だが、こんな事をやっていたら、マジでこの国から金貨がなくなる。

「ベルは、ここでプリムラとお留守番な。それから、あちこちへ散歩しないでくれよな。お城の人間が驚くといけないから」

「ふあああ」

やる気のなさそうなベルが、白い牙をむき出して大きなあくびを

した。彼女もやる事がなくて暇そうだ。

王女は、これから勉強やら習い事やらがあるらしい。

「しょうがねえ。じっとここで待つか……」

俺達は昼まで待つことにした。

――――◇◇――――

――そして昼。軽く昼飯を食べているところへ王女がやってきた。下水の入り口へ案内するという。

その場所とは、俺達のいる裏庭の丁度反対側の城壁の近く――そこに小さな小屋があった。

扉は施錠されており、ロウという騎士が俺の顔を睨みながら鍵を開ける。

扉を開けて中を覗くと、石で組まれた地下へ降りる階段があった。当然、中は真っ暗で何も見えない。

そして、生臭い臭気が昇ってくる。

「ここが入り口ですか」

「その通りじゃ」

「ここかーやっぱり臭うな」「そうだにゃ」「臭い」

アネモネが鼻を摘む。

「アネモネ、止めてもいいんだぞ？」

「そんな事言っても無駄だから」

小声で隣にいる王女と話す。

「あの、ロウって騎士が、私の事を恨んでいるようなんですが、闇討ちとかされないでしょうね」

「近衛というのは、いざという時に主を守る聖なる盾になるべき存在じゃ。そんな腐った輩なら要らぬ。其方の好きにせよ」

はい、言質いただきました〜って、仕掛けてこなけりゃ何もするつもりはないけどね。

まあ騎士の誇りはありそうだし、そんな人間ではないと思いたい。王女も、色々と騎士達に意地悪をしているようなのだが、そういった行為でストレスを与えて相手を観察しているように見える。

そういう時にこそ、人間の本性が出るからな。それで人間性を見極めて、手元に置くか否か——判断をしているようだ。

やんごとなき人ってのも、中々大変だねえ……。

そして王女から大きな鍵を1つ貰った。

現場は俺達に任せて王女が去ると、その後ろを護衛がぞろぞろとついていく。

ああやって、金魚のフンみたいに四六時中くっついていいのか。

それよりもだ。

ここを攻略しないとな。

おれは、シャングリ・ラで対ネズミ兵器を物色し始めた。

汚くて汚れるから、使い捨ての防護服とかいいかもな。防毒マスク等で臭いも防げるのかな？

メタンガスの可能性があるから、ランプは不可——LEDランプでいいな。

それから殺鼠剤とネズミ罠か。

だが、どのぐらい用意すればいいか、現地を見てみないと判断出来ないな。

やはり下に降りてみるしかないか……。

俺は白い使い捨ての防護服をシャングリ・ラで購入すると、アネ

モネと一緒に着こむ。

子供用の防護服はないので、大人用をガムテープを使って短くしてみた。

だが獣人の2人は防護服の必要はないと言う。

「そんなの着てたら動けないよ」

「そうだにゃ」

「それに、そんなのは息苦しそうだよ」

どうも、獣人達は身体が汚れるよりも、動けなくなる方が問題らしい。

だが、ネズミってのは病気を持っている可能性が高い。有名なのはペストとかな。

それに、俺が知らないような未知の病気だって、この世界にはあるかもしれない。

彼等は毛皮を着ているので、普通の人種よりは防御力が高いが、どのぐらいのネズミがいるか解らないのだ。

一応の防御はするべきだろう。

「いや、ネズミに噛まれたら病気になったりするぞ？　そうなりゃ余計な金が掛かる。せつかく稼いだ金を減らす事はないだろう」

「そういえば、ドブさらいをした時に、熱をだした事があったなあ……治療魔法で蓄えが飛んだっけ……」

「ニャメナ、『転ばぬ先の杖』っていうんだ。どんだけネズミがいるか解らん。最初はこの白い服を着ておけ」

「……わかったよ。旦那の言うことを聞く」「ウチもそうするにゃ」
そして、足元を守るために長靴も購入。獣人達用はかなり大きめの物を買ってみた。

そして、厚手のゴム手が必要だろう。

「これを履けば足元も濡れないから」
「へえ」 「こいつは便利だにゃ」

白い防護服に身を包んだ俺達は――階段を降りてみることにした。

84話 甘い毒

王都のお城にやって来た俺達。国王陛下との謁見に時間がかかるという。だが、やることもないし暇だ。

王女からの依頼を受けて、王宮の地下に繁殖しているネズミ退治をする事になった。

この世界のネズミは普通の大きさである。日本でいう、ドブネズミだろう。

その上に大ネズミという種類があるが、猫ぐらいの大きさがあり食用にされている。

街の市場でも売られているし、俺も食った。味には癖はあるが、ネズミと言わなければ解らないだろう。

皆で白い防護服を着て、頭にはLEDヘッドライトを装着する。そして地下への階段を降りると、途中に鉄格子が見えてきた。

王女から貰った鍵はここで使うようだ。錆びた鉄格子の扉が軋みをあげて開いた。

そのまま長い階段を降りる。防護服に装着されている防毒マスク越しにも、臭いが侵入してくる。やっぱり生臭い。

俺でも臭いんだが、鼻が敏感な獣人達はもっと臭いはずだが……今のところは、なんともないようだ。

この世界には、水石という水を浄化する石があるのだが、ここにはそれは使われていないようだ。

この城から下水が流れ出るところに浄化槽があるらしい。だが建設からかなりの年月が経つ、この建物の地下を改造して、

いまさら城内に浄化槽を設けるのは困難なためだろうと思われる。

「アネモネ、大丈夫か？」

「うん、臭いけど大丈夫」

「何もこんな所までついてこなくても……」

「いいの！ ケンイチと一緒に冒険するって言ったでしょ！」

そんな話をしているうちに、下に着いたようだ。ライトで照らした限りでは地下も石造りらしい。

地下の通路の真ん中に凹みがあり、そこを排水が流れている。確かに臭いはするが、そんなにドロドロのヘドロで塗れている感じではない。

通路には蜘蛛の巣が一杯だが、こんな暗闇にも蜘蛛がいるのだろうか？ だが、チラチラと動く虫のような物が見える。

元世界でいうGやカマドウマに近い生物だろう——この虫をエサにしているのかもしれない。

うーん、この光景はいかにも地下ダンジョンっぽいな。しかし、アニメカ○オストロの城じゃないが、白骨死体がゴロゴロじゃないだろうな……。

20〜30 m程進み、アネモネに明かりを付けてもらう。

魔法の光には熱はないので、ガスは平気だろう。

「アネモネ、魔法で明かりを」

「うん、光よ！」

青白い光が丸い球体を形作り、地下の通路を照らす。

とりあえず、ガスチェックをする。どうやってそんなことをするのかといえば——シャングリ・ラだ。

サイトを検索すれば、メタングスチェッカーが1万6千円程で売っているので購入。

早速使ってみるが、ガスの反応はない。

石造りの通路内に溢れる魔法の光。

だが、何かがその光に照らされて蠢いているような気がする。ヘッドライトの光を当てると無数に輝く小さな光点。

「うえ！　もしかして、通路の床が全部ネズミか？」

「ぎゃー！　なんにやこれ！」

通路が綺麗な理由がわかった。こいつらに全部食いつくされていたんだろう。

振り返ると、いつの間にか後ろも蠢く黒いネズミで通路が覆い尽くされていた。

「旦那！　数は数えられないけど、100匹なんてもんじゃないだろう？」

「ああ、こりゃ1000匹単位だな」

「アネモネ火の魔法は使うなよ！」

「うん！」

返事をした彼女は俺にしがみついている。

「わわ！　まとわりついてきたにゃ！」　「にゃろ！　あっちいけ！」

獣人達が、必死にネズミを踏みつけたり蹴りをいれて追い払おうとしているが、何せ数が多くてきりがない。

やはり防護服を着ていてよかった。それでなきゃ、ネズミに囓られまくりだったぞこりゃ。

「くそ、やむを得ん！　俺の魔法で追い払う！」

とりあえず、メタンガスの反応はない。

アイテムBOXから爆竹とターボライターを取り出して、火を付けて放る。

そして、地下通路の中にこだまするけたたましい爆音。

「ぎゃー!」「うるせえええ!」

思わず、獣人達が耳を塞ぐ。

だが爆竹が効いたのか、ネズミは潮が引くように見えなくなった。

「ほっ! 効き目はあったようだな」

「どうする旦那! こんな剣や弓じゃどうしようもないぜ」「そうだにゃ」

「毒を使う」

「毒?」

シャングリ・ラで殺鼠剤を検索する。異世界のネズミにどれが効くか解らないので、色々と投入してみよう。

とりあえず、クマリン、ブロマジオロン、ワルファリン、そしてガラス瓶に入った液体――エチレングリコールを30個ずつ買う。

エチレングリコール以外は全部固体で、金属缶に入っている。

そして、液体を入れるための使い捨てのプラ皿を買う――100枚で3000円だ。

元世界では殺鼠剤に耐性があるネズミもいたようだが、異世界ならそれもないだろう。

「よし、お前等、金属の筒の蓋を取って、中の毒を辺りにばら撒け。手袋は脱ぐなよ」

「解ったにゃ」「おっしゃ!」

また、ちよろちよるとネズミが集まり始めているのだが、それを目掛けて殺鼠剤をぶつける。

アネモネには、通路に置いたプラ皿にエチレングリコールを入れてもらう。

「ケンイチ! 何か甘い匂いがするにゃ! いい匂いだにゃ」
「本当だぜ」

彼女達が気付いたのは、エチレングリコールの臭いだ。

「甘い臭いがして、実際に舐めると甘いんだが、毒だからな。絶対に舐めるなよ！死ぬぞ！」

「にゃ！」「毒なのに甘いのかよ！こえええ！」

エチレングリコールやジエチレングリコールは人体にも有毒だ。違法な甘味料として使われて多数の死亡事故を起こした事もある。

こんな世界で、こんな毒があることが知られたら、暗殺に使いまわされるだろう。

「甘い毒の事は誰にも喋るなよ。絶対に暗殺とかに使われるようになるからな」

「おお、剣呑剣呑……」「恐ろしいにゃ！」

とりあえず、近場には撒き終わったので、場所を移動する。

アイテムBOXから、ゴミ袋を出して殺鼠剤を分担して運びながら、バラ撒いていく。

この地下道は結構広くて入り組んでいる。

迷ったら大変なので、シャングリ・ラから、折ると光るライトスティックを購入。道しるべに置いていく。

一晩は光っているらしいので、殺鼠剤を撒く時間ぐらいは十分に光っているだろう。

「やっぱり、この服を着て正解だったな。汚れは大した事はないが、ネズミの大群に囓られまくりだったぞ」

「けど、こいつは暑くて息苦しいぜ」「そうにゃ」

「たしかにな……アネモネ、冷却の魔法を使えないか？」

「やってみる——皆、並んで」

3人で横に並ぶ。

「むー冷却」
リフリジレイション

どうやら、温める魔法より、冷却の魔法の方が難しいらしい。

「お！ 涼しくなった、すげえ！」 「涼しいにゃー」

その後、アネモネが自分に冷却の魔法を使った。

一休みして、涼しんでいるとまたぞろネズミ達が押し寄せてきた。

「旦那、また集まってきやがったぜ？」

「よし、もう一発お見舞いするか」

ネズミの大群の中に、再度爆竹を放り込むと、凄い勢いで、あらゆる隙間や穴にネズミが入り込んで逃げていく。

「ここは、多分雨水も流すはずだから、街道の橋が落ちたような大雨が降るとヤバイだろうな」

「けど旦那、あんな雨は滅多に降らないよ」 「そうにゃ」

皆で手分けをして、殺鼠剤とエチレングリコールを床に置いていく。30個でも足りないので、ドンドン追加だ。

地下を殺鼠剤だらけにしてやる——皆で調子よく毒を撒いていたのだが……。

獣人達が、何かに反応して耳をくるくると回している。

「ケンイチ！ 何か来るにゃ！」 「旦那、クロ助の言う通りだぜ」

LEDの明かりで通路の奥を照らすと、大きく光る赤い宝石のような物が見える。だが、こんな所に宝石などがあるはずがない。

明かりに照らされて現れたのは、通路を塞ぐような巨大な黒いネズミ。

「大ネズミだにゃ！」 「こ、こんなデカイのは見たことがないぜ！」
尻尾を入れたら体長は2m以上か。殺鼠剤の入ったゴミ袋を投げ捨てると、アイテムBOXから武器と矢筒を取り出し、獣人達に放る。

ポリカーボネートのタワーシールドも取り出して放り投げた。

「アネモネ、俺達の後ろの上に光よ！^{ライト}の魔法を」

「うん！ 光よ！^{ライト}」

アネモネが出してくれた魔法の光をバックに、俺も装填済みのクロスボウを取り出して構えた。

そして、すぐさまネズミの頭へ向けて発射。

「ぎいい！」

巨大ネズミの突進を、ポリカーボネートの盾で受ける。激しい衝撃でふっ飛ばされたが、なんとか大丈夫だ。

その隙に、ミャレーとニャメナが横から、大ネズミの胴体へ向けて、矢を放った。

「にゃー！」 「おりゃ！」

「ぎいい！」

巨大ネズミが怯んだ。俺は、すかさずアイテムBOXからカットラス刀を取り出すと、ネズミの頭蓋へ向けて鋭い刃を振り下ろした。

「ぎい！！！」

刀がネズミの頭へ食い込むと、ひっくり返った黒い毛むくじやは、尻尾を振り回し、脚をバタバタさせて、すぐに動かなくなった。

「はぁ……」

「ケンイチ、大丈夫？」

アネモネの心配そうな声を横に、俺はその場でしゃがみ込み、防護服のフードを脱ぐ。

そして深呼吸をするように大きな溜息をついた。防毒マスクをしたままで運動すると息苦しいのだ。

それは獣人達も同じようで、フードを脱いだ。だが、マスクを外すとやっぱり臭い。鼻が曲がりそうだ。

ユ○ボが出せれば、このぐらいの敵ならどうって事はないんだが、この狭い通路じゃ無理だ。

「くそ、こんなのがいるなんて聞いてねえぜ」

「あの、お姫様に一杯食わされたにゃ」

「ギルドが引き受けなかったのは、このせいかもしれんが、引き受けてしまったものは仕方ない」

俺は、巨大ネズミの死骸をアイテムBOXへ収納した。こんなのは入れたくはないが、致し方ない。

「まだいるかもな」「そうだにゃ」

「その可能性は高いな。他のが集まってこないうちに、毒をバラ撒こう」

獣人達にも、透明なバックラーと剣を渡す。結局フル装備だ。

大ネズミ用の毒もあるな。シャングリ・ラでプラ製の大きめな洗面器を買って、その中をエチレングリコールで満たす。

大きな敵がいるのが解ったので、皆で固まって行動する。

そして、主要な通路には毒を撒き終わった。脇道などは放っておいても、エサがあれば出てくるだろう。

その毒エサに食いついてくれるかが問題だ。

道しるべに置いた、スティックライトを回収しながら、出口を目指す。

ネズミがまた大量に集まってきたのを、爆竹で蹴散らしながら上に登る階段までやって来た。

そして階段を登り、鉄格子の扉に再び鍵を掛ける。

あのデカイネズミは、鉄格子を突破出来ないだろうが――小さいネズミなら、この階段からも登ってこれるな。

「あちあち〜！」「暑いにゃ〜」

「暑〜い」

アネモネが防護服を脱ぐのを手伝ってやる。皆で装備を外し、防護服を脱ぎ捨てると汗だくだ。

防護服は使い捨てなので、ステータス画面のゴミ箱へ直行だ。ポケットに入れていた時計をチラ見する。

結局4時間程、籠っていたらしい。2時間ぐらいな感じがしてたんだが……。

「アネモネ、どこか齧られたりしてないか？」

「大丈夫だよ」

「ミャレーとニャメナは？」

「ふう……大丈夫さ。けど旦那の言うとおり、この服を着ていてよかったよ」

「あんなに沢山のネズミに食いつかれたらヤバかったにゃ」

「全く酷い目に遭ったが、毒が効けば労せずして、金が入るってわけだ」

「もう、十分苦勞しているんだけど……」

ニャメナが、愚痴をこぼすのだが――千匹以上のネズミや、あのデカイ化け物と対峙するよりはマシだろう。

「あのデカブツにも毒が効けば良いけどな」

「沢山食えば効くんじゃね？」「そうだにゃ」

「毒で死んだ仲間の屍かばねを食った共食いでも毒が効くからな」

「うえ〜考えたくもねえ」

「その死体を食ったネズミも死ぬにゃ？」

「ああ、死ぬ死ぬ」

某G用に売っているコ〇バットやホウ酸団子と同じ仕組だ。

けど、共食いされて数が減ると、もらえる金が減るな――まあ、危ない橋を渡るより全然良いか。病気にでもなったら大変だしな。

汗まみれになってしまったので、ベースに戻ると井戸から水を汲んで浴びる。

当然、皆で素っ裸だ。お城の裏庭でこんな格好をしていいものなのか微妙なところなので、衝立ついたてを買った。

茶色い板が4枚ジグザグ形に繋がっていて、これを3組たてると、完全に目隠しができる。

1組8000円ぐらいだな。

「冷てええええ！ こっちは冷たすぎる」

そう、井戸の水は冷たいのだ。

「アネモネ、被るならちよつと魔法で温めた方がいいぞ」

「大丈夫だよ」

「ウチ等も平気だにゃ」 「このぐらいどうって事ねえ」

獣人達は勢い良く、ザバザバと水を浴びている。俺は彼女達のために、アイテムBOXからテーブルとジェットヒーターを取り出した。

ミヤレーとニヤメナが毛皮を乾かしているうちに――夕飯の準備でもするか。

「お疲れ様でした」

家の扉を開けて、プリムラとベルが出てきた。

「ああ、凄かったぞ。プリムラが一緒だったら、卒倒してたな」

「ええ？ そんなにですか？ ネズミが？」

「数もさることながら、デカイ大物がいた」

俺は、アイテムBOXから、巨大ネズミを取り出した。

「キャアア！」

叫び声を上げて、プリムラが俺の後ろに隠れてしまったので、すぐにアイテムBOXへ戻した。

目の前に現れた巨大なネズミにベルが興味を示したようなので、たしなめる。

「おっと、ベル。今のは飯じゃないからな」

「にゃー」

「こんな大きいネズミがいるんですか？　大ネズミでも、もっと小さいですよ」

「ミャレーやニャメナも初めて見たっていうから、大ネズミと違うそういう種類なのか、はたまたお城のゴミの栄養が良すぎて巨大化したのか……」

ジェットヒーターで毛皮を乾かしていたニャメナが会話に入ってきた。

「さすが、お城だよ。食い物を捨てるなんて、俺達の街じゃ考えられないからな」「そうだにゃ」

あんなに沢山のネズミの住処になるぐらい、エサがあるのか？　虫も沢山いたからな。そういうのもエサになっているのか。

そんな話をしているうちに、すっかり夕方だ。獣人達も毛皮を乾かし終わったので、飯の準備をする。

いつもカレーばかりなので、何か他の物を――ちょっとシャングリ・ラを検索する。すると、ビーフシチューを見つけた。

ビーフシチューか――あまり食った事がないな。カレールーと同じようなチョコ状の塊になっているようだ。

要は、スープを作って、ビーフシチューの素を入れれば、出来上がるのだらう。1箱300円ぐらいだ。

肉が欲しいので、牛肉を買う。脂身は要らないので、もも肉を買

おう。1kg3000円らしいので、2kg買う。

獣人達にはジャガイモの皮をピーラーで剥いてもらおう——だが、
まてよ。ビーフシチューって芋入れるのかな？

まあ、いいや、いれて食えないって事はないだろう。

「アネモネはパンを焼いてくれ」

「うん」

俺は肉をぶつ切りにして、玉ねぎと一緒に炒める。

2kgあるので、どんどんやらないとな。終わった物は、皮を剥いたジャガイモと一緒に圧力鍋の中へ投入。

火が通ったら、ビーフシチューのルーを入れれば完成なんだろう——多分。

「旦那、いつものカレーとは違うのかい？」

「たまには違うのも食ってみたいだろ」

「ウチはカレーでも良いけどにゃ」

「私も！」

そう言われると、なんだか自信がなくなるけど、普通のシチューだって美味しいと言っていたから、ビーフシチューも大丈夫だろ。

あと、ハヤシライスって手もあるな。けど、あれもデミグラスソースだから、ビーフシチューと似た感じだと思うが……ちよつと乱暴か。

料理が出来上がって、食器の準備をしていると、王女がやって来た。護衛には、朝にいた茶髪の女騎士が同行している。

「ケンイチ、首尾はどうじゃな？」

「リリス様。こんなのがいるとは聞いてませんでしたよ」

俺は、アイテムBOXから巨大ネズミを取り出した。

「おおっ！ やはりな……」

「その様子だと知ってましたね」

「まあ、話には聞いていた」

「これじゃ、タダのネズミ退治じゃありませんからね。ギルドで引き受ける者もないでしょう」

おそらくは、何人かは引き受けたのだろうが、割にあわないと途中で放り出してしまったのでは……。

「言えば、其方も引き受けてはくれぬじやろ？」

「とにかく、この大ネズミは別料金でお願いしますよ。1匹につき金貨1枚でお願いいたします」

「むむむ……」

「出していただけなら、他の冒険者と同様——放置して逃げますよ？」

「わかった、支払えばよいのだろう」

腕を組んで渋そうな顔をしているが、他に頼る者がいないのだろう。まさか、騎士団を投入するわけにもいくまい。

「ありがとうございます」

「それはそうと、他のネズミはないのか？」

「それは明日以降になります。今日はとりあえず様子見ですが、1000を超えると思われるネズミが地下に蠢いておりました」
「1000？」

護衛の女騎士が声を上げたのだが、すぐに非礼を詫びた。

心なしか、ちょっと彼女の顔が青いような——もしかして、ネズミが嫌いなものかもしれない。

「いやはや、数が多いとの報告も受けていたが、1000を超えるとは。それで、其方は退治出来るのか？」

「まあ、なんとかして可能な限りは数を減らしましょう」

「承知した。其方に任す」

「ありがとうございます」

話は終わったのだが、王女がそのままスタスタとテーブルに行くと、椅子に座ってしまった。

まあ、今日も来るんじゃないかと、多めに作っておいたけどな。それに、この王女様は大食いだし。

「そちらの騎士様も一緒に」

「え？ 私は……」

「妾は構わぬぞ。遠慮するな」

「そ、それでは……」

女騎士も席について、一緒に食事をする事になった。

騎士は居心地が悪そうだが、まあ花は多いほうがいい——って男は、俺1人しかないけどな。

「このミレットとは、年少の頃からの付き合いでな。姉妹のようなものだ」

「そんな、恐れ多い」

「リリス様は女性ですから、護衛も女性の方がなにかと、ご都合がよろしいでしょう」

「まさに、そのための護衛として任命されたからの」

深皿にビーフシチューを盛る。そして、アネモネが焼いてくれたパンだ。

獣人達は王女が来たので、また地面に座ってビーフシチューをパクついている。

「おおっ！ これはうめえ！」 「美味いにゃ！」

「ふむ——む！ これは、なんというコクととろみ」

「美味しい……」

王女と騎士の口にも合うようだ。

「今日の料理にはあまり香辛料は使っておりません。どうだアネモネ、この料理は？」

「美味しい！——けど、カレーの方が好き」

「そうか」

やっぱり、お子様はカレーの方が好きかあ。

だが、獣人達と傍にいたベルが、妙な動きをしている。キヨロキヨロと同じ所を見ているのだ。

「どうした？ 何かいるのか？」

「いや、解かんねえけど、何か気配が……」 「にゃ」

俺の目には何も見えない……不思議がっていると、プリムラから声が掛かった。

「ケンイチ、このスープの作り方も教えて下さい」

「ええ？ これか、確かえらい時間が掛かったはずだから、ゼロから作るのは大変だぞ？ これはスープの素を使ったからすぐに出来たけどな」

「何？ スープの素とは？」

王女に、アイテムBOXから出したスープの固形ルーを見せる。

「ほう！ スープを乾燥させて固めた物か」

「小麦粉等をいれれば粘りが出ますので、乾燥させれば固くなります」

「王女殿下、これがあれば遠出をしてもスープが飲めます。兵士の兵糧にも利用できるのでは？」

「なるほど、乾燥されているから腐らぬわけか。うむ！ これは研究させよう」

「似たような物は、ダリアで商品化されてすでに売っておりますよ」 「真か？」

「はい、妻の実家のマロウ商会で」

元々は、道具屋の爺さんが作ったグラノーラモドキだったのだが、砂糖が高価なので塩味にして、お湯に溶かせばスープになる食品として売られているのだ。

「ほう！ マロウ商会といえば、ドライジーネとかいう乗り物を作っているところだの」

王女はプリムラが商人だとは聞いたが、マロウ商会の娘だとは聞いていなかったようだ。

「その通りでございます」

「ケンイチ、其方のアイテムBOXの中にドライジーネは入っておらぬのか？」

「入っておりますが……妻の身長に合わせた物ですので、リリース様だと脚が届かないのでは……」

「それは、妾が決める！」

「プリムラはいいかい？」

もちろん
「勿論ですわ。光栄な事でございます」

俺はアイテムBOXから、プリムラの赤いドライジーネを出した。

「おおっ、これか！」

とりあえず、俺が乗って見本を見せる。ペダルはついていないので、脚で地面を蹴って進むのだ。

「おおっ！ よし、食事が終わったら、妾に貸すがよい！」

——と言いつつ、王女はビーフシチューを4杯お代わりして、満足したようだ。

そして食事の後、王女がドライジーネに跨ったのだが、やはり脚が届かないようだ。

「後ろから押すがよい！」

「王女殿下、危のうございますよ！」

女騎士が心配なのか、ハラハラした表情で叫ぶ。

「大丈夫だ！ ケンイチ、其方に頼む」

「ひっくり返ったからといって、打首にしないでくださいよ」

「そんな事をするわけがなからう」

俺には、王侯貴族ってのはそういうイメージしかない。

王女がドレスを翻して跨ったドライジーネを俺が押す。すぐにコケるかと思ったのが、王女は一発で乗りこなしたようだ。

「おおっ！ これは速いの！」

花壇を回って元の位置に戻てくると、俺はヘトヘト——ギブアップした。

「はあはあ——騎士様、代わってください」

「ミレット、押すのじゃ！」

女騎士は仕方なく付き合っている感じがありがたいのだが、王女が毎度この調子なので、苦労しているようだ。

だが、ドライジーネが気に入った王女は、これを買うと言い出した。

プリムラも了承したので、売買成立——値段は金貨5枚である。なにせ、全部手作りだからな。塗装等をしていないタイプなら、もっと安いようだが。

しかし、マロウさんが愛娘にプレゼントした物を売ってもいいのだろうか？

「買い手があって、売り物があるのなら、売るのが商人ですよ」
プリムラはあまり気にしていないようだ。

王女はこのドライジーネをプロトタイプにして、王室お抱えの職人に同様の物を作らせるらしい。

さすが王家。財力が半端ないな。

85話 ネズミネズミ&ネズミを回収

「おおっ！ 風呂じゃ風呂じゃ！」

「王女殿下、あまりお湯を飛ばさないでください！」

目の前にある小屋から、王女と女騎士のキャツキャウフフが聞こえてくる。

ツリーハウスの上に載っていた小屋をアイテムBOXからだして、バスルームに転用しているのだ。

森の中で用水路の普請をした時と同じだが、そのバスルームには王女と女騎士と共に、お世話するメイドさん達も一緒。

メイドが一緒といっても、裸になって風呂に浸かっているわけではない。

それは、シャンプーやリンスの使い方を教えているプリムラも同様だ。

子爵夫人は一緒に入れとか言っていたが、相手が未成年の王族ではさすがに拙い^{ます}だろう。純潔に疑いがかかるからな。

さすがに、そんな事になれば、国王からも狙われる事になってしまう。

俺は、王都にある王宮に滞在中だが、やることがないので、軽い気持ちでお城の地下に巢食っているネズミ退治を引き受けた。

だが、とんでもない数の個体が生息している事が判明して、王女に一杯食わされた格好だ。

ニヤメナも愚痴をこぼしていたが、ちょっと大仕事になってしまった。

だが仕事を引き受けたからには、王女が納得する結果を出さない

とな。

それに色々と仕事をこなせば、王家から何か価値のある物をもらえるかもしれない。

外でニヤメナの晩酌に付き合っていると、バスローブを羽織った王女と女騎士がバスルームから出てきた。

その後ろにはメイドさん達とプリムラがいる。

風呂からあがった彼女達のために、既にテーブルとジェットヒーターが準備万端整っている。

「リリース様、この魔道具にて御髪を乾かしてください」

「何？ 魔道具？」

俺がジェットヒーターのスイッチを入れると、カチカチという音と共に、熱風が吹き出し始めた。

「おおっ！ これは凄い！」

「これは、ちょっと欲しいかも……髪が長いと中々乾かないから」

「私もは、獣人達の毛皮を乾かすのに重宝しております」

「なるほどのう……」

王女がジェットヒーターの前に立ったまま——その周りにいるメイド達が、銀色の筒から出る熱風に御髪をかき上げて晒している。

「姫様、御髪が……」

「おおっ！ 髪がさらさらのふわふわじゃ！ 髪を洗った時に使った、あの薬品のせいかな」

「その通りでございます」

「これもマロウ商会で手に入るのか？」

「いえこれは、合成出来るのが私しかおりませんので、市販化されておりません」

「むう……しかし、女子おなごならこれは飛びつくぞ」

女騎士も、リンスの威力に驚いているようだ。やはり長い髪の毛には効き目があるだろうし見た目にも解りやすい。

王女と女騎士がメイドさん達と家に入ると、プリムラが1人でお風呂に入るといふ。

そのプリムラがアネモネを呼んでいる。お湯が、ぬるくなってしまったので、再び温めてもらうようだ。

王女は女騎士と一緒に、俺の家に泊まるようで、すっかりと別荘にされてしまった。

「なあ旦那。なんでこんな事になったんだ？」

「さあ俺にも解らん。王女様のいい玩具にされてしまったな」

「そうだにゃ」

「言う事をそれなりに聞いて、国王陛下との謁見が終われば帰れるんだ。それまでの辛抱だな」

「退屈はしないからいいけどさあ」「狩りが出来ないのは寂しいにゃ」

ミヤレーにはそれが一番応えるようだ。ニヤメナはアストランテイアで色々と仕事をしていたので、狩り専門ってわけでもないらしい。

プリムラの風呂を沸かし終わると、アネモネが風呂場から出てきた。

「アネモネは入らないのか？」

「水浴びしたから要らない」

薪の前で、胡座をかいていると、その上にアネモネが座ってくるので、2人で毛布にくるまる。

「ウチも入るにゃー！」

その毛布の中にミヤレーも入ってきた。獣人が入るともふもふで

すぐにあたたまる。

そのまま3人でウトウトしていると、ジェットヒーターの音が聞こえる。

プリムラが風呂から上がったようだ。道具を片付けないとな。

テーブルやらジェットヒーターをアイテムBOXへ収納していると、家の玄関が開いた。

「ケンイチ！　ここへ来て、其方の話を聞かせるがよい！」

やれやれ——と言いたいところだが、この国の情報を得るための貴重な機会だ。商人レベルでは知らないような事も聞ける。

無下にするべきではないだろう。

「むう！」

俺との時間を王女に取られてしまって、アネモネは不機嫌だ。だが、お相手せざるを得ない。

しかし、この狭い家の中に王女と女騎士、そしてメイドさん。俺とアネモネとプリムラ——ぎゅうぎゅう詰めだ。

「むふ！　面白い！　全くもって、其方の話は面白い！」

色々と王女と話をするのだが、どういう話題がいいのか悩むところだ。

宗教的な話はちょっと危なさそうだし、禁忌に触れるような話題もあるだろう。

例えば、天動説と地動説とかな。世界は丸いってのも危ないかもしれない。

だが、王女から他の国の情勢についても聞けた。

隣の帝国は皇帝が代わり、勢力の地盤固めをしている最中なので、しばらく危険はなさそう。

逆に危ないというのが、帝国と反対側にあるマグロイア共和国だ。こんな世界にも共和国があるのかよ——って思うのだが、あるらしい。

村は共同体という単位で管理され、農業、工業、医療、教育等々、全てを賄える自給自足ユニットとして、作られているという。

当然、それらを全てこなすためには、ある程度の人数がいないと不可能なので、強制的に人が集められて移住させられている。

例えば、共同体に医者がいなければ、医者や治療魔法が使える者が強制的に集められて派遣されてくるらしい。

共同体の生産物、売り上げ等は全て共有財産として管理運営されて、国への税金が引かれたあと、全ての共同体構成員に再分配される。

一見、素晴らしいシステムのように思えるが、共同体を構成する優れた人材がそうそういるわけでもない。

例えば、水準に達していない医者や教育者、職人等が派遣されてくる場合が多々あり、現場の混乱に拍車をかけている。

そして、予め決められた年次計画によって開発が進められているので、それに従った税金が徴収される。

だが、飢饉や事故等で生産が大幅に滞る事になれば、共同体構成員の分前が減る。

年次計画が達成出来なければ、政治犯として奴隷落ちするので、村の財産を切り売りするしかなくなり、そうなれば一時的にはしのげても結局は破綻する。

だが破綻しても逃げ出す事も出来ずに、餓死者を大量に出しているらしい。

まるで絵に描いたようなディストピアだが、それを人民の目から逸らすために、帝国やこの王国への侵攻の噂が絶えない。

「それ、絶対にヤバイ国じゃん」

「その通りじゃ、我が国としても頭の痛いところよ。それでも奴らは『地上の楽園』を称しているのだから、笑える」

全く、どこの世界でも似たような感じになるんだなあ……。

「マグロイアには、他の少数民族はいないのですか？　例えば、エルフとか？」

「おる。マグロイアは、そのエルフやらドワーフ達でさえ、共同体というのに加えようとしておってな」

「そんな無茶な」

従わない民族には軍隊を投入しているというが、森の奥深くで暮らしているエルフやドワーフ達は、逃げまわっているようだ。

こんな話はさすがに商人からは聞けないな。さすが王族だ。彼女は14歳ぐらいらしいが、かなり高度な教育を受けている。

「そういう妾と対等に対話出来る其方も異常じゃぞ？　それで、タダの商人だと言うのだから、馬が笑う」

「そうでしょうか？」

「大臣や政務官同等——という事でなければ、おかしいと申しておる」

「ケンイチは賢者なんだから！」

一緒についてきたアネモネがそんな事を言う。

「何？　賢者とな？」

アネモネが神様って言い出さなくてよかった。

「皆が冗談らしく、そのように言うのですよ」

「むう……」

王女が腕を組んで考えているのだが、あまり喋るとボロが出そうなので、途中で切り上げて外に出た。

だが、一緒にアネモネも出てきた。

「ベッドで寝ないのか？」

「ケンイチと一緒にいるの」

焚き火の前でアネモネと一緒に横になるが、ゴツゴツして具合が悪い。

一緒に入れる寝袋があればいいんだが……そうだ、車内泊をやっていた連中がエアマットを使っていたな。

早速シャングリ・ラで検索する。収納する時はくるくると丸めてあって、使う時には空気を入れるやつが売っている。1個4000円ぐらいだ。

それに、アイテムBOXに入れるなら、一々空気を抜かなくても大丈夫だ。

「ポチッとな」

丸まったエアマットが2つ落ちてきたので、そいつを開いて口を付けて空気を入れる。

女の子でも、なんとか空気を入れられる。空気を入れ終わったら、マットを2つ並べて、アネモネと一緒に寝転んだ。

「こいつは結構良いかも」

コンパネを敷くよりはいいかもな。柔らかいし。

「旦那あ、そんな良い物があるなら、俺達にも貸してくれよ」「いやー」

「おお、そうだな」

追加で、エアマットを2つ購入。獣人達の肺活量なら、あつという間にマットが膨らんだ。

そいつを地面へ敷くと、獣人達も寝転んだ。

「へへっ、こいつはいいぜえ!」「だにゃ」

それを見ていた俺の所へ、マットを持ったミヤレーがやってきて、俺とアネモネの隣につなげた。

「これで一緒に寝られるにゃー」

「ああっ! てめえ、クロ助! 抜け駆けかよ」

「早い者勝ちにゃ」

「そうはいくか」

ニヤメナも負けじと俺達の隣にマットを並べた。

そして、皆で横になったのだが――いつの間にかやって来たベルが俺の腹の上に乗った。

「おおーい、ベルよ。重いんだけど……」

「にゃー」

彼女は尻尾をペシペシと振っている。

「にゃーじゃねえ」

何かいい物は……閃いた。

俺はシャングリ・ラから50cm程のダンボールを10枚購入――セットで2000円だ。

いつもスーパ―とかでもらっていたけど、買うと結構高い物なんだな。

腹の上からベルをどかすと、落ちてきたダンボールを組み立て、2つをガムテープでつなげた。

「どうだベル。お前も猫ならそそらないか?」

ベルがダンボールをクンカクンカした後、伸び上がって中を確認

――ぴよんと飛び上がった中へ着地した。

そして、中で丸くなった。

「ケンイチ！　なにや、それは？」

「ええ？　紙の箱だよ」

なんだか、ミヤレーも興味津々なので、ベルが入ったのと同じダンボールを組み立ててやった。

すると、ミヤレーもダンボールの中へ飛び込んだ。

「おおっ、これは暖かいにゃー！」

そう言った彼女がダンボールの中で丸くなった。なんだ、獣人もダンボール好きか……。

「ニヤメナにも作ってやるか？」

「えー、あーうー」

何だか、否定したいようなのだが、本能的な物に逆らえないような感じだな。

とりあえず、同じ物を組み立ててやるとーニヤメナも、ダンボールの中にエアマットを敷いて丸くなった。

「こりゃ、マジで温けえ」

巨大なダンボールが3つ並ぶ……なんというシュールな光景。

だが、ベルはすっかりとダンボールが気に入ったようなので、これで俺の上に乗られずに済む。

「アネモネも、あの中で寝てみるか？」

「要らない」

彼女はそう言って、俺に抱きついた。

――――――◇◇――――――

――次の日。

朝起きると食事の用意をする。王女がいるけど、グラノーラでい

いだろう。

口に合わないようだったら、インスタントスープでも飲ませよう。アネモネに魔法でお湯を沸かしてもらい、またゆでたまごを作る。

お城の方からメイドさん達が集まってきて、俺の家へ入っていく。王女の着替えだろう。

食事の準備が終わると、王女が家から出てきた。待ちきれない獣人達は、とっくに地面に座って朝食を食べている。

家から王女が出てきた。

「リリス様おはようございます」

「うむ！」

「今日の朝は、簡単な朝食で失礼いたします。そうそう豪華な朝食は食べられないものですから」

「これは？」

王女に、グラノーラの説明をする。他の者と違うところは、見た目で食わず嫌いが無いところだな。

王族なので、津津浦浦の珍味を食い尽くしているせいかもしれない。

俺の説明もそこそこに、王女が毒味もなしにスプーンに載せたグラノーラを口へ運んだ。

「ふむ！ これはパリパリしてて香ばしく中々美味じゃな。食欲のない朝でも食べられる」

「リリス様でも食欲のない朝がおりになるのです？」

「それはある。いつもならスープ4杯のところ、2杯しか入らぬ——とかな」

それは食欲がないというのか。

「これは美味しい……」

王女の隣の席についた女騎士もグラノーラを食べて、呟いた。街の人間にも食わせて好評だったからな。

この世界の人間の口にも合うはずだ。王女の後ろにいるメイドさん達も食べたそうな顔をしているのだが、やはり興味があるのだろうか？

結局、王女はグラノーラ4杯とゆでたまごを4つ食べた。

「其方、今日も地下に潜るのか？」

「はい、今日からが本番でございます。数が多いようであれば、明日も潜らなければならないでしょう」

「頼りにしておるぞ？」

「はは、有難き幸せ」

だが、王女の顔が少々訝しげだ。

「そなた、本当に元貴族ではないのだろうか？ 他国から流れてきたとか……」

「いえいえ、片田舎出身のただの平民でございます」

「タダの平民が、妾と会話が成り立つ事自体が怪しいのじゃが」

「実は、在所の森の中が変わった爺さんが住んでおりまして、子供の頃から色々と教わったのでございますよ」

「ほう——では、その老人が都落ちした賢者の可能性があるの、そして其方は賢者の弟子という事になる。それならば、辻褄は合う」

王女はなんとか、その設定で納得してくれたようだ。

我ながら少々口からでまかせ出放題だが、中々良い設定ではないだろうか。今度からは、この設定を使おう。

ふと、後ろを見ると、獣人達とベルが、またあらぬ方向を見たまま固まっている。皆が同じ方向を見ているのだ。

「どうした？ また、何かの気配がするのか？」

「ああ、旦那。ここって絶対に何かいるぜ？」「なんだから、怪しい気配がするにゃー」

「にゃー」

ベルも同じ意見のようだ。

「なんだ？　もしかして、ゴーストとかレイスか？」

「旦那、レイスなら夜か、ダンジョンみたいな暗い所じゃないと出てこないはずだけど……」

咄嗟とつさに魔物の名前を出してしまったが、話は通じているようだ。

「ネズミがいた地下じゃそんな気配はしてなかったんだろ？」

「そうだにゃ」

とりあえず、王女に確認してみる。

「リリース様。お城でゴーストやレイスの目撃情報は？」

王女は、しばらく言うかどうか迷っていたような表情を見せたのだが、重そうな口を開いた。

「……実はある」

「後ろにいるメイドさん達はどうですか？　おかしい気配がするとか、なんだか誰かに見られているような感じがするとか？」

「あの――実は、そういう事が結構あって……」

「ふん――この王家を維持するために死んだ人間は山のようにおるし、恨んで死んだ者も数えきれぬじやろう。別に城がゴーストだらけになってもおかしいやうない」

「やれやれ……」

やっぱり、某カ○オストロの城みたいに、謀略等で死にまくっているんだろうなあ。こちらも気をつけないとな。

そんなのに巻き込まれたくねえし、いざとなったら全力でバックレよう。車で逃げりゃ絶対に追いつっこねえ。

森の中に逃げ込めば、軍だって手出しは出来ないだろう。

朝食も終わったので、王女と別れて再び俺達は地下へ潜る事にした。

プリムラとベルは、また家でお留守番だ。プリムラの活躍の場が少ないが致し方ない。適材適所ってやつだしな。

それに彼女だってこんな所に潜って、ネズミの相手はしたくないだろう。

再び、白い防護服に身を包んで、地下へ潜る。

そして頭に装着されたLEDライトが、地下の通路を照らす。

「なんじゃこりやあああ！」「ぎゃー！」

通路に、ニヤメナとミヤレーの絶叫がこだまする。

「あゝ、お前等煩い。見たら解る、ネズミの死骸だろうが」

通路を埋める無数の黒い屍。その上を生き残ったネズミ達は、ぴよんぴよんと飛び跳ねている。

まだ、生き残っている奴らがいるのか……。

シャングリ・ラからデカイ麻袋を買う。縦が1mぐらいある大型の袋だ。日本で使っていたようなゴミ袋では破れてしまうだろう。

1枚400円なので20枚程買ってみるか……1000匹いるなら、1袋100匹で10枚、50匹で20枚——まあ、足りるだろう。

そして、ネズミを拾い上げるために、火バサミを買う。手で触るのは危険だ。

普通の火バサミではなくて、先っぽに幅が広いグリップがついている物を買う。1400円と普通の物より少々高いが、こちらの方がいいだろう。

「ほら、袋だ。そして、こいつで摘んで袋に入れろ。手で触るなよ。毒が残っているかもしれないし、ネズミは病気だらけだからな」

「はいよ」 「解ったにゃ」 「うん！」

「アネモネ、重いから無理するな。床に置いて周りにいるネズミだけ入れとけ」

「わかった」

彼女の力では、ネズミの入った麻袋を担ぐのは無理だろう。

そして、次々とネズミの死骸を火バサミで摘んで、袋に突っ込んでいく。

1袋には50匹程度しか入らないようだ。ちょっとサイズがデカイからな。まあ袋が足りなかったら、ショッピング・ラからまた買えばいい。

ネズミでいっぱいになった麻袋が、3つ4つとドンドンアイテムBOXの中に増えていく。

「まったく毒で全滅させるとか、普通は考えつかないよ。俺は旦那が怖くてしかたねえぜ」

「それじゃ、トラ公はケンイチの下から抜けるにゃ？」

「そうは言ってねえだろ！」

ニャメナの言葉を聞いて、ちょっと焦ったが、抜けるつもりではないようだ。

ブツブツと言っていたニャメナであったが、細い路地に入って叫び声を上げた。

「うわあああ！」

「ニャメナどうした?！」

彼女の下へ駆けつけると、そこにあったのは巨大なネズミの死骸が2つ。

「やっぱり、まだいたのか……」

「ケンイチ！ こっちにもデカいのが転がっているにゃ！」
まじかよ。いったい何匹いるんだ。

巨大ネズミの屍を次々とアイテムBOXへ入れていく。全部で5匹だ。

洗面器に入れたエチレングリコールは全部なくなっていたので、こいつが効いたのかもしれない。

そして、ネズミの死骸を入れた麻袋は全部で14になった。だが、まだネズミがちよろちよろと走り回っているのだ。

「この分だと、まだデカいのもいるかもしれない。再度、毒をバラ撒こう」

「よっしゃ！ やるなら徹底的にやろうぜ」「そうだにゃ」「うん」
再度シャングリ・ラで殺鼠剤とエチレングリコールを購入すると、皆で通路にバラ撒きはじめた。

死骸の回収には3時間程掛かったが、ネズミはかなり少なくなったので、毒のバラ撒きは順調に進み、1時間半ほどで終了。

「ははっ、こんな簡単な仕事でいいのかね」

「ケンイチがいるから、簡単なんにゃ、トラ公はそんな事も解らないのにゃ？」

「俺だって、そのぐらい解っているよ！」

「こらこら、喧嘩するな——よし！ 残りは明日だ」

「うにゃー！」「ふうう……」

ニヤメナが溜息をついている。

「凄い、ネズミの量だね」

アネモネがネズミの死骸が入った麻袋を覗きこんでいる。

「本当だな。多すぎだろう。そりゃ、お城の中もネズミだらけになるわけだ」

「くそ、あのお姫様め。旦那じゃなかったら、人死が出てるところだぜ」

ニヤメナがネズミを見つめながら愚痴を漏らす。

「俺もそう思う。ギルドが断るのも無理もない」

「そうだにゃ」

残りは明日だ。俺達は外に出て昼飯を食うことにした。

86話 宮廷料理人は凄い

ただいま、お城の地下でネズミを退治中。俺の殺鼠剤作戦は的中したようで、大きな麻袋で14袋分のネズミが捕れた。

一袋50匹なので、全部で700匹だ。だが、ネズミはまだいる。再度、毒をバラ撒いて明日潜る事になった。

汗をかいたので、今日は井戸の水浴びではなく風呂に入る事にした。

しかし、水汲みは大変だな、井戸に電動ポンプを付けたいところだが……色々聞かれると面倒だ。

まあ、全部魔法で動いている、全部秘密です——で押せない事もないのだが。

風呂から上がり、しばし考える。

「あつ、そうだ」

そういえば、帝国からガチャポンプが入ってきているじゃないか。マロウさんの所でデモを見たしな。

あれなら問題ないだろ。

シャングリ・ラでガチャポンプを検索する——2万円ぐらいだな。こいつに取り付ける塩ビ管と、台座に使うコンパネを買う。

塩ビ管はオーバーテクノロジーだが、見えないからいいだろう。

井戸に、穴を開けたコンパネで蓋。そこに塩ビ管を通して、ガチャポンプに接続する。最後にポンプを台座にボルトで固定すりゃいい。

俺のポンプの設置風景を皆が見ている。プリムラはマロウ商会でポンプのテストに立ち会っているの、これが何か知っているのだから——。

「旦那あ、こりゃなんだい？ 井戸を塞いだら、水が汲めないだろう？」

「これはガチャポンプといって、井戸から水を汲み上げるカラクリだよ。帝国で流行っているんだぞ、なあプリムラ？」

「はい。これはとても便利な物ですよ」

ガチャポンプの中に呼び水を入れて、文字通りにガチャガチャとポンピングする。

すると――滔々と鉄の口から水が溢れでた。

「水が出てきたにゃー」「なんだこりゃ、すげー！ 旦那の魔法かい？」

「違う違う、普通のカラクリだから、お前等がやっても水は出るぞ」

「旦那、俺にもやらせてくれ」

ニヤメナが、レバーを上下させて、感動している。

「すげー！ なんじゃこりゃ、帝国もたまには良い物作るじゃねえか！」

「そうだにゃー！」

これで、水汲みは楽になるぞ。

――そして、夕方。

また王女がやってくるのかと思ったら、やっぱりやって来た。だが少々様子が違う。

後ろに大きな寸胴鍋らしき物を抱えた、白装束の男たちが控えているのだ。

白いつなぎのような服なのだが、その格好から察するに料理人だろうか。

「ケンイチ、今日は妾が馳走するぞ」

王女がそう言うので、テーブルをアイテムBOXから出した。
その上に寸胴が置かれて、蓋を取られる。その中にあったのは、
ドロドロの緑色の物体。

「これは……でも、なんだか匂いはカレーのようだけど」

「そうだよ旦那、こいつはカレーの匂いだ」「ウチもそう思うにゃ」

「そうだ。これは、其方から貰った香辛料を、宮廷料理人達が複製
をしたものだ」

「なんと、一発で複製出来たのでございますか。さすがは宮廷料理
人ともなると、非凡でございますねえ」

「うむ、この者達も、数日で複製が出来ると豪語したので、任せて
みたのだ」

「どうですか？ 我々のカレーとやらは？」

前に歩み出て得意気なのは、金髪の髪と金髪のカイゼル髭を生や
した紳士。どうやら料理長らしい。

「これは素晴らしいです。香辛料の違いのせいかな、色が違う以外は
完璧です」

「そうだろう」

料理長は鼻高々だが、これは確かに凄い。一発コピーとはな。

多分、料理を食べたりスープを飲んだだけで、材料が解っちゃっ
たりする人なのだろう。

まるで、美味○んぼだな。

「ケンイチ、これを皆で食おう。あの白い穀物を出してたもれ」

「ははっ！ 王女殿下から、馳走していただくとは、私の一生分
の運を使い果たしそうですございます」

「そのような貴族臭い台詞は要らぬ」

どうも王女は、常日頃からこういう台詞を聞かされて、うんざり
しているせいか、否定的だ。

でも、やらないと、周りから無礼だと言われるかもしれないし……。

突然の出来事で飯は炊いてないので、シャングリ・ラからパック飯を買う。特盛りとかいう、デカいのを見つけたので、こいつでいいだろう。

この王女様は大食らいだしな。パンもまだ焼いていないので、シャングリ・ラから購入。

テーブルの上に皿が並び、今日は緑色カレーの日になった。元世界にもグリーンカレーってのがあったので、俺は気にはならない。

昨日と同じように、護衛の女騎士が王女の隣に座っている。俺と揉めた騎士はお役御免だろうか？

皿に盛ったカレーを、地面に座っている獣人達の所へ持っていたのだが、何か躊躇をしている。

「ええ？ 旦那、宮廷料理人が作った料理を、俺達が食ってもいいのかよ……」 「そうだにや……」

「リリース様、よろしいのでしょうか？」

「ああ、構わぬ。もう？ サンバク？」

「姫殿下がそう仰るのであれば」

料理長が深々と礼をする。許可が出た獣人達はカレーに飛びついた。

「うめええ！ こりゃ、上物の香辛料の匂いがぷんぷんするぜ」 「いい匂いだにゃ」

そして、俺も食ってみる。作りたての香辛料のせいか、香りが鮮烈だ。

カレーじゃベルは食べられないので、鳥と猫缶を開けてやる事に。アイテムBOXの中にはネズミが山のように入っているが、毒を使

ったので食べない。

「確かに、これは香辛料の香りが鮮烈でございますね。私の香辛料は作ってからかなりの日数が経っていますから」

それに、あれは大量生産品だしな。王宮に集まってくる香辛料なら、一級品ばかりなのだろう。

「そうであろう。サンバク、これは城の新しい名物が誕生したの？」

「その通りでございます、姫殿下」

「また貴族共がくやしがる顔を、眺められるというわけじゃな」

どうも王族ってのは、貴族をからかって楽しんでいるようだ。

「どうだ、アネモネとプリムラは？」

「美味しいね！ ケンイチのも美味しいけど、これも美味しい！」

「そうですわ。多分、使っている香辛料も目が飛び出るぐらいの値段なのでは……」

「なかなか、鋭いですね。大変貴重な香辛料もふんだんに使わせていただきました」

料理長の目がきらりと光る――さすが王宮だ。

「それでは、これを街で流行らすわけにも参らぬのう……」

そもそも、王都にもスパイスシンジケートが存在しており、スパイスを使えるのは金持ちだけだ。

「ケンイチ、昨日の妾が食べた肉のスープはまだ残っておるか？」

「はい、ございますが……」

「このサンバクに食わせてやってくれ」

アイテムBOXからビーフシチューの入った鍋を出すと、皿に盛って料理長へ渡す。

そして男がスプーンで一口食べて驚きの声を上げた。

「これは、美味しい。口の中に広がる、なんというコクと旨味……」
「どうじゃ？ 中々美味であろう」

「ううむ……肉と、野菜がたっぷりと――トロみは小麦粉、そしてソースとこの酸味はなんであろうか……野菜か果物の酸味だと思われるが……」

俺もビーフシチューの原料は知らん。何かでケチャップを使うとか読んだ事があったので、酸味はケチャップかもしれない。

だが、この世界にはトマトはないようなので、他の果物が野菜で代用するしかないだろう。

でも、カレーをコピー出来る人なら、デミグラスソースは問題ないのではないだろうか。

そんな話をしながら、王女が次々とカレーをお代わりしていく。ご飯を追加購入して、アネモネに温めてもらう。

「それでサンバク。それと同じ料理を作れそうか？」

「おそらくは……」

「よし、その料理も食卓の品に加えるがよい。むしろむしろ」

「ははっ！」

「じゃが、ケンイチ」

「なんでございましょう？」

「其方のアイテムBOXの中に、サンバクに再現出来ないと思われる食い物はないか？」

えー？ またそういう事を言い出す。

「リリース様。それはまた随分と意地悪なご希望でございますね」
「いつも、この者が作れない料理はないと、豪語しているが故」
それが原因で、この有能な人がやめちゃったらどうするつもりなんだろうか。

まあ、辞めるなど勅令を出せば。それに従うしかないのだろうか

ど。

俺は、しばらく悩んで、シャングリ・ラからチョコレートを買った。

有名なゴ○イバ製で、20個5400円である。購入ボタンを押すと、金の箱が落ちてきた。

「それは？」

目の前に現れた金の箱に、王女が瞳を輝かせた。

「これは、食後のお菓子にどうぞ」

俺が蓋を開けると、正方形に仕切られたスペースに様々な形のチョコが並んでいる。

「なに?! 菓子じゃと! ちと待っておれ! これを食ってしま
う故」

カレーを必死に食べている王女であったが、それを見た料理人達が複雑な表情をしている。

彼等の囁きに聞き耳を立てると、いつもはこれほど料理を美味しそうに食べる事はないらしい。

それ故、自分達が作っているいつもの料理が王女にあまり評価されていないのでは? ——とそう考えたようだ。

カレーを食い終わった王女がスプーンを置くと、駆け寄ってきたメイドさんが、王女の口の周りを拭いている。

「これが菓子か——見たこともないの」

王女が箱の中心にあったチョコレートを指で摘むと口へ放り込んだ。箱のどこを取るかで性格も解りそうだな。

「んっんっ——おおっ、甘い! そして、コクと甘みが舌の上でと

ろけるぞ！ これは一体、何で出来ているのじゃ？」

王女が目を見開き、舌の上でチョコレートを転がしている。

「植物の木の実と、植物の油、それと牛乳の成分と砂糖かと——あいにく私が作った物ではありませんので」

「ん！」

王女がもう1つチョコを口へ放り込むと、箱ごと料理長の前へ差し出した。

そして彼も1つ摘んで、口へ運ぶ。

「こ、これは何という、深い甘みと味わい……かなりの苦みがあるが、それが深いコクを生み出しているのか。し、しかし、頭の中に使用している原料が全く思い浮かばないとは……」

料理長は、脂汗を流しながら下を向いてしまった。

「どうじゃ？ これと同じ物は作れそうか？」

「随分と過酷な問いに聞こえますが……」

「そうか？ サンバクよ？」

「いいえ、宮廷料理人たる者、王族のお求めになる料理を作るのが、その務め——ですが……」

「料理長殿が菓子原料で悩んでおられるのは、この国に存在していない材料を使用しているせいだと思われます」

「さもありなん、我が国に類似する物が一切ないのであれば、そのような事もあり得るだろうの」

「くくく……恐れ多くも姫殿下、今の私では、これと同じ物を作るのは困難だと言わざるを得ません」

「ほう、其方でも作れない物があるのか、ははは」

他の料理人達にもチョコが振る舞われたが、皆が首を傾げるばかり。

そりゃそうだ。未知のお菓子なんだからな。

王女は、なんだか楽しそうだが——意地悪いなあ、もう。

真剣に悩んでいる料理人達を見ると、ちょっと気の毒になってしまったので、ヒントになればと、シャングリラで、カカオニブという物をゲットした。

紙袋に入った物が落ちてきたが、カカオの実を砕いた物らしい。

「この木の実が原料なのですが。とても栄養があり、薬としても利用されています」

料理長が紙袋からカカオを取り出すと、口に入れた。

「こ、これは、単体でも苦いですな——しかし、サクサクとした歯ごたえとコクがある。これを、あのような洗練された菓子に昇華するとは、これを作り出した者はただ者ではない」

そういわれれば、チョコは誰が作ったんだろうな。聞いたこともないな。どこかの原住民が飲んでいたみたいな話は何かで読んだが。

料理人達が円陣を組んで、あーでもないこーでもないと、会議が始まってしまった。

「ケンイチ！ 私も食べたい！」 「私もですわ」

アネモネとプリムラからチョコレートのリクエストだ。

同じゴ○イバのチョコレートで、ちょっと小さな箱を買う。再び現れた金色の箱に王女が**咄**く。

「この箱は紙か？ その上から金箔を貼り付けたのか？ たかが菓子の箱に、この造りは凝り過ぎであろう」

「王侯貴族様に喜ばれるでしょう？」

「その通りじゃが……この箱だけでも欲しがる者は多いじやろうの」「ふああああ、甘くて美味しい……」 「なんとという官能的な香りと

甘さ—— 一粒だけでも、このお菓子の虜になりそうですわ」

チョコを、傍観していた獣人達にも差し出してみる。

「ええっ？ 要らないよ、旦那」

「どうした？ 何か嫌な匂いでもするのか？」

「そうじゃないけどさ……これ以上美味しい物を食っちゃ、旦那から離れられなくなりそうで……」

「うにゃートラ公は、ケンイチの所から出るつもりにゃ？ 後はウチに任せるにゃ」

ミヤレーがチョコの1つに手を出した。

「誰もそんな事は言ってねえだろ！」

「う、うみゃー！ 甘くて美味くて甘くて美味いにゃ！」

同じ事を繰り返しているが、語彙が少々足りないであろうか？
だが、チョコを食べたミヤレーがいきなり俺に抱きついてきた。

「こら、ミヤレーちょっと待て！ 人前だから！」

「クロ助、てめえ俺の前で何やってんだ？！」

「抜ける奴には、関係ないにゃ」

「誰もそんな事言っただけだ！」

そう言ったニヤメナは俺の手渡したチョコを口に放り込んだ。

「……確かに、甘くて美味くて甘くて美味くて……ちくしょう——
これが褒美だっていうなら旦那の言う事をなんでも聞いちゃいます
だ」

「なんでそうなる？」

俺と獣人達の絡みをみていた王女が、笑い声を上げた。

「ははは、確かにのう。これは危険な菓子じゃ。この味に取り付かれた貴族の女どもが、菓子欲しさに股を開くかもしれぬ」

「またあ、リリース様。王族の口からそんなお話を」

「十分に考えられる事じゃぞ？ サンバクが複製に成功しなければ、この蠱惑の菓子が存在するのが其方のアイテムBOXの中だけ——という事になるであろう？」

「その通りでございますが。まあ、王宮御用達という事にすれば、他の貴族様には手出しが出来なくなるでしょう」

それに、王宮の料理人達は優れた能力を持っているようだ。原料さえ手に入れば、意外と早くコピーを作るかもしれない。

「なるほどのう……とりあえず、この菓子と、その原料の見本は買収する、幾らじゃ」

「うーん、原料込で金貨3枚（60万円）ですかねえ」

「かなり、足元を見よったな……しかし他では手にはいらぬ。あい解った、払ってつかわす」

「ありがとうございます」

この会話を聞いていたニヤメナが驚いた。

「菓手に金貨……とんでもねえ物を食っちゃった……」

文字通りの山吹色のお菓子でございます——だ。

「もう、戻れないにや。にやはは」

「笑い事じゃねえぞ、クロ助。多分、一生夢に出てくるかも……」
そんなに衝撃的だったか？

だが、チョコを食べる獣人達を見て、思い出した事があった。

猫にチョコってダメなんじゃなかったか？ でも獣人は人で、猫ではないって話だったから——玉ねぎも大丈夫だったし。

心配で、しばらく彼女達の様子を見ていたのだが、問題なさそう
だ。

「この箱には12個入っていますから、全部で金貨2枚（40万円）
として——1個小四角銀貨3枚（1万5千円）以上……」

咄嗟^{とつさ}に、プリムラが単価を計算してブツブツと言っている。アネモネは喜んでいるが、獣人達は複雑な表情。あまりに現実と乖離し過ぎているのか。

「ケンイチ、その者達は放っておいて、ネズミの件はどうなったのじゃ？」

「アイテムBOXの中に入っておりますが——おいしい食事の後で、あれをご覧になるのですか？」

「やむを得まい、確認して代金を支払わねばならぬ故」
「承知いたしました」

俺は、アイテムBOXからネズミの入った麻袋を取り出した。ネズミがパンパンに入っている袋が14——巨大なネズミが5匹だ。

「きやああ！」

それを見ていたメイドさん達から悲鳴が上がる。

「これが全部地下にいたのか……」

「まだ残っておりますので、明日もう一度潜ります」

「むう……上は綺羅びやかだが、下はネズミで溢れている——実に我が城を象徴しているの」

「恐れ多くも殿下——地下にゴミを捨てているようですが、それを改めた方がよろしいのでは？　ネズミは多くの疫病を媒介いたします。これだけのネズミがいれば、疫病の発生源がお城になる可能性も上がるかと……」

「正に、その通りじゃな。一番、ゴミを出しているのは、厨房じゃぞ？　サンバクよ」

「ははっ！」

話を聞けば——数百人いるお城の警備や騎士団の食事を賄う下級厨房も全部ゴミを地下に捨てていたようだ。

そりゃ、そんな事したらネズミが増えるのに決まっている。当

たり前田のクラッカー。

それどころか、どんなにゴミを捨てても溢れてこないのは、これは便利と思っていたらしい。

そんなわけあるか！

俺はネットで見かけた、死体がなくなる井戸の話思い出した。男が殺しをして、井戸に死体を投げ込むと、いつの間にかなくなるという話だ。

最後は、うざかった母親を殺して井戸に投げ込んだら、いつまでも死体が残ったままだった——というオチ。

それはおいといて、ネズミをこれ以上増やさないようにするために、生ごみを地上で処理する方法を考えなくてはならない。

殿下に土とおがくずを混ぜて堆肥にする方法を提案してみた。

「何？ 肥料とな」

「はい、その肥料でお城の花壇や、裏庭に畑をつくるのもよろしいかと。そうすれば、料理に新鮮な野菜を使えます」

「なるほどのう——一考の余地ありじゃな。それにしてもネズミで金貨7（140万円）枚、巨大ネズミで金貨5枚（100万円）、合計で12枚（240万円）か——高くついたのう」

「ネズミは、まだいますからね」

「其方の見立てでは、後どのぐらいじゃ」

「ネズミが300〜400匹、大ネズミはちよつと解りません」

「なんという事じゃ……」

今後の事を話し合っている王女の下へメイドさん達が集まってきた。

「姫様——昨日、お話ししていた事もお願ひしたほうがよろしいのでは？」

「何？ おるかどうかも解らぬ世迷い言を頼めと申すのか？」

「しかし……絶対に何かいますよ」「私もそう思う……」「いつも何かに見られている気がするし……」

一体、何の話なのであろうか？

「リリース様、何のお話でしょうか？」

「ああ――すまぬが、笑わないで聞いてやってくれ。メイドや、その他の者も、城に何かがとり憑いていると申すのだ」

「ははあ、昨日話していた、ゴーストやらレイスの件でございますね。確かに、獣人達が言うのには何かがいる気配がするのは間違いないようですし……」

「なるほどのう」

「それでは、ネズミ退治が終わったら、再度そのお話をするという事でよろしいでしょうか？」

「うむ！ 頼む」

後ろで話を聞いてた料理人達も、ざわざわと話している。彼等も何かの気配を感じる事が多いと言うのだが……。

「しかし、俺もアネモネも退魔等や浄化の魔法があるわけじゃないからな」

「旦那、そういう魔法は特殊な人間しか使えないぜ」

当てずっぽうで言ってみたが、マジでそういう魔法はあるようだ。だが使える人間は少ないと言う。

まあ、それは後で考えよう。

――――――◆◆――――

――そして次の日。再度地下に潜り、ネズミの死骸を7袋と巨大ネズミを2匹回収した。

正確な数は数えていないが、追加で金貨5枚と銀貨2枚をゲット

した。合計で金貨17枚と銀貨2枚。
報酬を王女から賜る。

「ははっ、王女殿下、御自ら賜るとは光栄の至り」

「うむ、この度は大儀であつた」

4人で分けると、金貨4枚（80万円）と銀貨1枚（5万円）と小四角銀貨5枚（2万5千円）である。

「それと、リリース様。この大量のネズミはいかが致しましょう」

「これだけ大量だと処分にも困るのう」

「私のアイテムBOXへ入れたまま、どこか森の奥にでも捨ててお
きましようか？」

「やってくれるか、助かる」

——といったつ、ステータス画面のゴミ箱へ捨ててしまうのだが。
仕留めるのに毒を使ったので、こいつが市場へ流れたり、他の動物
が食べたりするとヤバイ事になる。

ゴミ箱へ捨てるのが一番よいだろう。そして、今回手伝ってくれ
た3人への金の分配が終わった。

「旦那の取り分が多くてもいいのに」「そうにゃ」

「そうはいかんよ——それじゃ皆、俺のアイテムBOXへ入れてお
いていいんだな」

「いいぜ。それが一番安全だし」「いいにゃ」「うん」

金貨を持ち歩いているなんて、狙われやすいからな。それに金を
持っているバレると、まとりついてくる人間が増える。

「けど、アストランティアに戻ったら、ギルドへ預けた方がいいぞ。
アイテムBOXは、俺が死んだら取り出せなくなるからな」

「ははは、その時はその時さ」

「ウチは、ギルドに預け分がまるまる残ってるからにゃ」

「だいたい旦那の所にいたんじゃ、金を使う事がねえ。美味しい飯は食えるし酒も飲める。その上武器まで支給ときた」

「そうにゃ」

たいしたトラブルもなく、ネズミ退治出来てよかった。

だが普通の人間が中に入ったら、結構大変だったろうと思う。

87話 悪霊退散！

お城で国王陛下への謁見を待っている。なんだかんだで時間が掛かるらしい。

その間に、この国の王女からの依頼を受けたりして、時間を潰している。

その王女、2日程俺の家に泊まったりしていたのだが、さすがに飽きたのか、3日目は泊まらなかった。

俺も数日ぶりにベッドで寝た。

——そして次の日の朝。

朝起きて、アネモネがパンを焼き、プリムラがスープを作る。ベルが花壇で鳥を獲ってきてくれた。

そして、皆で朝食を食べ終わるとまったりとしている。

俺はコーヒーを飲みながら、ベルの漆黒で滑らかな毛皮にブラシを掛ける。

「なあ旦那、国王陛下に会えるのはいつになるんだろうな」「遅いね」

「解らん。でも、普通に街で宿屋に泊まったら、宿代で大変な事になるな」

プリムラの話では——謁見を申しこんで一旦地元へ帰る。そして謁見の日時が確定するとお城から手紙がやってくると言う。

「普通はそうなんだろうな。でも、俺は国王陛下から手紙で直接呼び出しを受けたわけだし……」

「ケンイチが召喚獣を使ってやって来たので、あまりの登城の早さ

に混乱しているのでは？」

普通は、馬車でやって来ると数週間かかるらしいからな。

「まさか、数日で王都に来るなんて思ってたにゃ」

「ありえますわ」

さて、王女からはゴースト退治がどのと言われていたが、そんな事が出来るのか？

食後のコーヒーを飲みながら、悩んでいると――王女がやって来た。

しかも、ドライジーネに乗って。だが王女は地面を蹴っていない。いや、そもそもこのドライジーネはプリムラの身長に合わせたサイズなので、背の低い王女では足が届かないのだ。

だが、ドライジーネは前に進んでいる――歩くぐらいの速さだが。よくみると前輪の上に何かドラム状の物が取り付けられている。

それが回転力を生んでいるようだ。

元世界でも、自転車に取り付けできる後付けのエンジンやモーターを見た事があったが、それに類似している。

「ケンイチ！ これを見てみよ！」

「お早うございます、リリース様。地面を蹴らなくてもドライジーネが動いておりますが、魔法でしょうか？」

「この筒が魔道具で、回転力を生む仕掛けらしいぞ」

「このような魔道具を作る魔導師が、お城にいらっしゃるわけですね」

「うむ！ カールドンといってな、魔道具の製作を得意としている変わり者じゃ」

王女が変わり者っていうぐらいだから、かなりの変わり者なのだろう。しかし、こんなモーターのような魔道具があるって事は、中々侮れないな。

「このような魔道具はよく見られる物なのでしょうか？」

「よくは知らぬが、カールドンの話では、これで紐などを巻き上げて、扉を開閉したりするらしい」

へえ、そういえば自動ドアがあるなんて話を聞いたな。これが元か。

なるほどな——こういう物があるなら、俺の車やら重機を見ても魔法で動くと思じて疑わないわけだ。

デカイゴーレムなんて、巨大ロボットだしな。

「リリース様、こういう物がありますなら、箱に4つ取り付ければ、乗って移動する物が出来まする」

俺は、アイテムBOXに入っていた4輪のカートを取り出した。

プリムラが露店へ荷物を運ぶために使っている物である。

これに魔道具のモーターを取り付ける事を提案する。

「おおっ！ 確かに！」

アイテムBOXから、スケッチブックと鉛筆を取り出すと、モーターから車軸を伸ばして、後輪を動かす——ミニ四駆のような構造を描く。ついでに並行リンクを使ったステアリング機構もサービスだ。

「このような形になります」

「む！ 其方、絵も中々達者じゃのう」

「恐れ入ります」

王女が、メイドを呼んで俺の描いた絵を渡した。

「これを、カールドンの下へ」

「かしこまりました」

メイドさんが一礼して、奥へ消えていった。

「それでの、ケンイチ」

「はい、なんでございましょう」

「我が母も、昨日の菓子所望での。チョコと申したか」

「ええ？ あれでございますか？」

「まだ、在庫はあるだろうかの？」

俺は、シャングリ・ラから昨日と同じゴ○イバのチョコを購入した。

「金貨2枚でございます」

「おおっ！ 助かる！ 我が母は、ちよつと気むずかしくてのう……怒らすと大変なのじゃ」

「もしかして……先に王女様が美味しい菓子をお食べになられたので、ご機嫌が斜めになってしまわれたとか」

「まあ、そんなところじゃ」

しかし、娘にお菓子を食べられたからといって、不機嫌になるのもちよつと……。

だが俺の怪訝な表情に、王女が気がついたようだ。

「何か変かえ？」

「いいえ」

「妾は母の实の娘ではないからの、実の親子と少々違うところもあるやもしれん」

「これは気付かず、申し訳ございません」

「構わぬ。別に仲が悪いわけでもないしの」

どうやら、王女は亡くなった側室の娘らしい。そして、いまのところ王女が唯一の子供なので、国王から溺愛されているようだ。

親子というか、歳の離れたライバルのようなものか。

「一応、其方にも言っておく。いずれ会うとは思いますが、我が母を怒らすではないぞ？ 無理難題を押し付けてくるようなお方ではない

が、怒らすと面倒じゃぞ？」

「はは、肝に銘じまして」

そして、話はゴーストの話になった。

「本当にやるのでございますか？」

「メイド共がうるさくてな」

「それでは少々お願いがございます。ゴーストの気配を察知出来るのは、家人の獣人と森猫だけでございますので、彼女達のお城への立ち入りを許可してください。勿論、もちろん監視をお付けになって構いませんので」

「承知した」

しかし、ゴーストってどうやって祓うんだろうな。

シャングリ・ラでその手の電子書籍を漁って、ペラペラと捲ってみる。おおっ、悪霊退散の呪文が載っているじゃないか。

——ノーボータリツハラボリツシャキンメイシャキンメイタラサンダンカエンビイソワカー——らしい。

そして悪霊退散といえば、漫画やアニメによく出てくるのは聖水ってやつだが……。

諸外国の聖水は泉等の水を儀式によって聖水化するんじゃないかなかったか。でも、そんな儀式は出来ないぞ？

日本式で言えば、お神酒か……要は日本酒だよな。そして清めの塩か。

日本酒に塩を溶かしたら、効き目が倍増しないだろうか？ ちなみに、アルコールに塩は溶けないが日本酒は殆ど水なので解ける。

「聖水か……」

一応、シャングリ・ラで『聖水』を検索してみる。『お嬢様○聖水』っていう怪しいのがヒットしたが、これは違うよな——酒らしいが……。

だが、ページを捲っていくと——『聖水』がある。また何か怪しいグッズだろうか？

商品説明には、『聖職者の祝福を受けた水です』と書いてある。

マジで？

さすが、シャングリ・ラ、なんでも売っているな。

嘘か本当かは判らないし、元世界の宗教の聖水が、この世界のゴーストに効くかも解らないが、物は試しだ。

よし、日本酒＋塩にこいつを混ぜてみよう。和洋折衷で聖水をパワーアップだ。

まずは聖水を撒くための道具を買う。4L入るプラ製の白いタンクがついている噴霧器を1800円で購入。

手動でポンピングして蓄圧、除草剤を撒いたりする時に使う物だ。俺も除草剤を撒くのに使っていた。

噴霧器を開けて日本酒と塩を入れ、シャングリ・ラで購入した聖水とやらを投入してよく攪拌する。

そして噴霧器の取手を掴んでポンピングする。こいつで内部を加圧するためだ。

「ケンイチ、それはなんなのじゃ？」

「これは、噴霧器でございます。そして中には浄めの聖水を入れました」

噴霧器の持ち手のところについているトリガーを引いて、聖水を出してみせる。

「おおっ！ これは便利じゃのう」

「ドライジーネの魔道具を作った方なら、複製出来るかと」

「しかし、妾がこれを持っても、使い方が浮かばぬ……」

まあな。この世界には農薬も除草剤もないだろうし——いや、木酢液ぐらいはあるだろうか。

「それでリリース様、いつから始めましょうか？」

「たった今からじゃ！」

王女は暇なのか、俺達について城内と一緒に回ると言う。それに除霊の結果が、どうなるか興味もあるようだ。

「リリース様、効果がないかもしれませんので、予めご了承くださいませ」

「妾も無理難題を申ししている自覚がある故、大丈夫じゃ」
王女を筆頭に獣人達とベルを引き連れて歩く。アネモネは俺の後ろにいる。

プリムラは留守番だ。どうやらゴーストが怖いらしい。

皆と一緒に、お城の内部へ——と思ったら、外側の廊下で既に反応があるらしい。

獣人達とベルが廊下の片隅を見つめている。

「あの角にいるのか？」

「そんな心配がするにゃ」「ああ、こっちを見ている感じがする」

「にゃー」

皆が同じ意見なので、マジでいるのかもしれない。俺や王女の後ろを付いてきているメイドさんや、護衛の騎士には全く見えていないようだが。

俺は噴霧器のノズルを目一杯に伸ばし、電子書籍のアンチチョコを開いた。

「悪霊退散！ ノーボータリツハラボリツシャキンメイシャキンメ
イタラサンダンカエンビイソワカ！」

とりあえず自作聖水を噴霧器でぶっかけてみる——霧状の聖水が

天井へ向けて発射された。

これで、本当に効き目あるのか？

「何語じゃ?!」

俺の怪しげな呪文に、王女とギャラリーがざわついている。

「あ、いなくなったにゃ!」「旦那、なんか消えたぞ?」「にゃー」

マジで？

本当かよ。

「すごい!」

いや、アネモネ、実はあまり凄くないから。

「面白い! ケンイチ、次じゃ! こちらへ来るが良い!」

次に向かったのは、メイドさん達の詰め所。メイドさんがキャツキャウフフしている所だ。壁に鍵が付いた小さな扉がずらりと並んでいる。

心なしか、いい匂いがする気がするのだが、あまりクンカクンカしていると、変態だと言われる可能性大なので自重する。

だが、元世界のロッカールームというよりは、昔の銭湯の脱衣所みたいな感じだ。鍵も木製の木札を使っているらしい。

ガラス窓が入っている明るい部屋であるが、常に何かに見られている感じがして、メイドさん達も長居したくない場所らしい。

ここに常駐しなければならぬのに、得体のしれない物が居るかもしれない――となれば業務にも支障が出るだろう。

今回のこのゴースト退治も、メイドさん達のたつての願いらしいからな。

「ここは、どうだ? 何か、いそうか?」

「ここは、私でも解るかも……なんか居たくない感じがする」

アネモネもそう言うのだが、確かに明るいの、なんとなく不気味な感じがしないでもない。

くると部屋を見回していた獣人とベルであったが、その視線が部屋の片隅で止まった。

沢山並んでいる小さな扉の付いた棚の隅——壁との隙間があるのだが、そこを2人と1匹がじゅつと見つめている。

再び呪文を唱えながら、噴霧器で聖水を噴射する。すると——獣人達の視線が移動して、天井に張り付いた。

皆が一樣に同じ動きをしているので、やはり何かいるという事なのだろう。

再び、天井へ向けて聖水を噴霧した。天井から、日本酒の水菓子のような匂いが漂ってくる。

「はぁ、いい酒の匂いだぜ」

「だめだぞ。仕事が終わったら飲ませてやるからな。それよりどうだ？ まだ何か感じるか？」

「うにゃ、いなくなったにゃ」「にゃー」

本当に効いているのか？ 彼等を信じるしかない。

「何か圧迫感がなくなった気がする」「視線を感じません」「本当だ！ 凄いかも！」

ええ？ 本当に？ プラシーボ効果じゃないのか？

どうもピンとこないが、獣人達とベルの意見も一致しているので、偶然とは言いがたい。

その後も、王女に引つ張られて、お城中をあちこちへ——だが徐々に廊下の装飾が立派になってきている。

廊下には赤い絨毯も敷かれているし……。

「おいおい、旦那——俺達がこんな場所に入ってもいいのかよ。獣人が入れるような場所には見えないぜ」「ウチもそう思うにゃ」

「まあ、王女様が一緒だから平気だろうよ。お城の中に入ったと、飲み屋で自慢できるぞ?」

「誰も、こんなの信じちゃくれないよ」

そう言われれば、そうかもしれない。平民でお城の中に入ったなんてな——普通じゃ考えられないらしいからな。

王女が最後に訪れたのは、青と金糸で覆われた大きな天蓋がついたベッドが鎮座する部屋。

壁の装飾も金で覆われていて、どう見てもタダの寝室ではない。壁際に設置された棚の上には装飾が施された大きな花瓶などが置かれている。

「わあ、綺麗な部屋」

アネモネが、思わずそんな言葉を漏らすような部屋だ。

「あー、ここは普通の寝室じゃないですよね?」

「ここは、我が母の寝室じゃ」

「ええ? それじゃ王妃様の?」

「その通りじゃ」

「そんな場所に入ってしまったって、大丈夫なんですか?」

「妾が一緒じゃから、大丈夫だ」

王女の話では——王妃様が、身体の不調でもないのに寝付きが悪く、悪夢にうなされる事が多いと言う。

「それじゃ、ここにも何かがいるって——」

俺がそう言いかけたのだが、既にベルがじっと、ある一点を見つめていた。

その視線の先にあるのは、大きな花瓶。青い釉薬を使った模様で

覆われており、金色の細工も見事だ。

「ベル？　これか？」

「にゃー」

俺が花瓶を持つと、ベルの視線も花瓶に付いてきた。

一応、聖水もシュパシュパしてみたのだが、効き目がないようだ。

「リリース様、この花瓶が原因のようなので、どこか違う場所へ移すか、処分なさった方が良くと、王妃様に進言していただいてよろしいですか？」

「そうか、あい解った」

これで、俺の御役目は終了となった。本当に、こんなのでいいのかね？

「其方には随分と世話になったのう。何か褒美を取らせるぞ」

「褒美……というと？」

「何でもよいぞ。また金貨か？」

うーん、なんでも金貨じゃ——他に何か良い物はないかな？　王家なら魔導書があるかもしれないが。

「リリース様、お城に魔導書の類は……？」

「魔導書か……魔導書はないが、魔法に関する書籍なら多少はあるぞ」

おおっ！　魔法の本か、それは貴重かもしれない。

「それを閲覧させていただくというのは……？」

「うーむ——其方達なら、いいだろう。ついてくるがよい」

獣人達とベルは家に戻らせて、俺とアネモネでお城の書庫へ向かう。

王女によって案内されたのは、お城の外れにあった小さな部屋。

だが、見上げると天井が高く、3階建て分ぐらいの高さがある。

4面が本棚で埋まり、天井まで本が沢山詰まっていた。細い足場と階段を登って、高い本棚を行き来する仕様のようだ。

「おおっ！ こりゃ凄い」

「よいか、読むだけじゃぞ？ 持ち出しは厳禁じゃ」

「承知いたしました」

「妾も子供の頃から、ここによくきたものじゃ」

今は昼前だから、4時間程時間がある事になる。

王女は2、3、注意事項を言うと、その場から立ち去った。監視の人間が来るようでもない。

「チャ～ンス！ アネモネ、魔法関係の本を探せ」

「うん！」

信用していただいた王女には申し訳ないが、コピラせてもらう事にする。言いつけ通りに、本を持ち出すわけではないので、問題ないはず。

アイテムBOXからテーブルを取り出した。

「本を探してどうするの？」

「本を複製する」

「複製？」

アネモネには何の事かわからんだろうが、要は本のデジタル化だ。シャングリ・ラには、本をデジタル化するための自炊用のスキャナが売っている。

蛍光灯スタンドのような形をしていて、下に本を広げて置くと、取り込んでくれる文明の利器。

取り込むだけ取り込んで、後でじっくりと読めばいい。

そのドキュメントスキャナという商品を購入する――1万8000円。そしてこいつを使うためには、接続するパソコンが必要だ。

安い中古のノートPCでいいだろう。

金はあるが、高価な物は異世界では必要ないだろう。10万円ぐらいの物を購入した。

落ちてきた、スキャナとノートPCをテーブルの上にセッティングする。

「なにそれ？」

「アネモネ、こっちはいいから、君の読みたい本を探しなさい」

「うん」

ノートPCを立ち上げて、USBでスキャナを接続すると、使用可能になった。試しに、近くにあった本を取り込んでみる。

取り込んだ画像がノートPCに表示された——成功だ。

これで、じゃんじゃん取り込めばいい。

よし、俺も本を探そう。

「これなんて良さそうだぞ？ ゴーレム製作の基礎と応用」

「これも面白そうだよ——召喚技術の歴史と、実用例」

「大陸魔法体系——」

「呪文構築基礎編、応用編、実用編——全3巻」

「禁呪に至る病」

「防御魔法の黎明期」

俺とアネモネで30冊以上の本を集めた。この大陸の歴史等も、おもしろそうなのだが、なにせ時間がない。

急いで、実用に値する物だけを優先的に取り込まなくてはいいけない。

「アネモネ、本を開いてこの魔道具の下に置いたら、合図してくれ」

「解った——はい！」

「よし、ポチッとな」

一瞬で画像が取り込まれる。普通のスキャナはヘッドがウィーンと動くのだが、こいつは簡単にいえばデジカメのようだ。

PCのリターンキーを押すと、シャッターが切られる。

本は分厚いのだが、羊皮紙で1ページの厚みがあるので全部でも数十ページしかない。

紙の本もあるのだが、やはり元世界の本に比べると1ページが分厚い。

「へえ、本が魔道具の中に入っちゃうんだね！」

「そうだ、そして家に帰ってから、じっくりと読めばいいってわけだ」

「でも、これって悪い事だよね？」

「そうだな……だから、王女様には内緒だよ」

「うん！」

まあ、バレなきゃOK。アネモネも悪い事だと理解しているようだが、好奇心には勝てないようだ。

本当は俺が諫める立場なのだが、そんな俺も好奇心には勝てないでいる。

王女の言うとおり、本は持ち出していないからセーフーであるうと、勝手な解釈をする。

ははは、こんな手段で持ち出すとは、お釈迦様でも気がつくめえ。

これらは多分、貴重な本ばかりだろう。街の本屋や道具屋で買ったら、いくらになるか解らんし――。

そもそも、門外不出の品ばかりで、もう2度とお目にかかれないかもしれない。こんな機会を逃す手はない。

アネモネと2人で協力して合計35冊の本をPCへ取り込んだ。本を元の場所へ戻し、道具とテーブルをアイテムBOXへ収納する。結局4時間程籠っていた計算になる。

そして、書庫から出ると外には黒いショートヘアのメイドさんが

1人待っていた。

「あっと、ずっと外で待っていたらしたんですか？ 私達のために申し訳ない」

「いいえ、これも仕事ですから。お二人共、本がお好きなんですね」「ええ、まあ……ははは。それにしても貴重な本ばかりで、眼福でございました」

「値段が付けられないような貴重な本が多いんですよ」
「やっぱりそうか——まさか、その本をコピーしてたとは言えん。メイドさんが書庫の中に入ると、本を確認している。」

「入れる場所が違ってある本がありますが、後で直しておきます」
「おっと、恐縮です。とりあえず沢山持ちだして、かたっぱしから読んでいたものですから」

このメイドさんも本が好きなようで、メイド兼司書をしていると言う。どこにどんな本があるか全部把握しているから、本が持ちだされれば一発で解るわけだ。

俺達はメイドさんに連れられて皆が待つ家に戻る事にした。
そろそろ飯の時間だ。ミヤレーとニャメナが首を長くして待っているだろう。

87話 悪霊退散！（後書き）

11月10日 アラフォー男の異世界通販生活2 発売！

88話 秘密のご褒美

お城で国王への謁見を待つ間、王女からの依頼をこなす。

ネズミを獲ったり、幽霊退治したりと依頼はバリエーションに富んでいるが、その褒美として王家の書庫に入る事を許された。

これはちよつとラッキーである。シャングリ・ラで購入したPCとスキヤナで、貴重な魔法の本をデジタル化——というチートな方法で持ち出しに成功した。

メイドさんに連れられて、お城の裏庭に設置した家に戻ってきた。辺りは日が傾き始めて、城壁の影が長く伸びてきている。

「旦那、遅かったな。ハラが減ったぜ」「ウチもにゃ」

獣人達とベルが地面に座り込んで、俺の帰りを待っていた。

「悪い悪い。面白そうな本が沢山あったな」

「ケンイチ、本を読みたい」

「夕飯を食べてからな」

「うん!」

「旦那、アイテムBOXに残り物があるなら、俺はそれでいいぜ」

「カレーがあるなら、カレーを食いたいにゃ」

獣人達は残り物で良いと言うので、ニヤメナにはビーフシチューを、ミヤレーにはカレーを出してやる。

「ニヤメナには酒な」

除霊している時にも日本酒を飲みたそうだったので、日本酒を出してやった。

「そうそう、これこれ」

「肉料理なら、ワインの方がよくないか？」

「はは、飲みりゃどっちでもいいよ」

「うみゃー！」

ミヤレーはカレーがいいようだ。ベルには猫缶を開けてやる事にした。たまに、マグロ缶にしてみるか？

ベルの皿に猫缶を開けてやると、美味しそうにぱくついている。

「うーん、俺は久々に牛丼が食いたいな」

「ギユウドン？」

アネモネが聞きなれない言葉に首を傾げた。まあ、実際にサンプルを食わせてみた方がいいだろう。

大食らいの王女がやって来ていたので、ご飯は沢山炊いてあるからな。

シャングリ・ラで1個500円の丼を3つ購入。その1つにご飯をよそう。

そして、シャングリ・ラで吉〇家の牛丼の素を買う。店で出ているのと同じ物がパックになっていて売っているのだ。

大盛り30食入りで1万5千円。1食500円か……牛丼の大盛りっていくらするっけ？　しばらく食ってないから忘れたな。

俺が若い時、北海道には牛丼屋はなかった。東京で初めて牛丼を食ったのだが、当時特盛りで550円ぐらいだったような。

もう殆ど毎日食ってたな。牛丼のパックを3つアネモネの魔法で温めてもらい、その1つを丼のご飯へ掛ける。

「アネモネ、牛丼ってこれだぞ？　食べてみるか？」

「うん！」

スプーンで一口掬って、アネモネの口へ運んでやると、美味しそ

うに食べている。

「美味しいよ、これ！」

「そうか、じゃあ夕飯で決まりだな。プリムラはどうする？ 同じものにするか？」

「ええ、私も挑戦してみますわ」

彼女がそう言うので牛丼を差し出す。すると早速、口へ運んでいく。

「はふはふ——お肉にスープが染み込んでいて、とても柔らかいですわ」

「そういえば、こういった料理は、街にはないなあ」

俺も牛丼を一口食べる。タレが染みた牛肉の味と米の飯が、口の中で渾然一体となる。

「こんなにお肉が沢山では、値段が上がってしまい、街の住民では食べられません」

まあ大規模な畜産が行われているわけでもなく、肉はそれなりに高級品だ。

普通の露店でスープを買っても具なんて殆ど入っていないかったりするしな。

アネモネとプリムラはスプーンで牛丼を食べているが、俺もスプーンだ。

この世界へ来てから、箸で食ったのはカップ麺ぐらいかな。餃子もスプーンで食べたし。

たまにはカップ麺も食いたいのだが、皆に合わせていると麺類を食べる機会がない。

あの王女様なら、面白がって麺類も口にするかもしれないが……。

夕飯を食べ終わったので、コピーしてきたデータをアネモネが読めるようにしよう。

シャングリ・ラには、電子ペーパーを使った独自の電子書籍リーダーがあるので、そいつを購入する。

ノートPCをアイテムBOXから出して、取り込んだ本のデータを電子書籍で読めるように変換する。

そして電子書籍リーダーをノートPCにUSBで接続すれば、ストレージとして認識するので、コピーすればいい。

試しに、取り込んだ一冊をリーダーにコピーして、起動してみる。

「んー、おっ！ 意外と綺麗に読めるな」

電子ペーパーなので、完全な白黒だ。ちょっとレスポンスが悪いが十分に使用可能。

アネモネに電子書籍リーダーの使い方を教える。

「絵を拡大するときは、指2本でこうな」

「すごい！」

「お城の人間がいる所で、その板を出さないようにな」
「うん！」

よし、上手くいったので、残りのデータも変換してしまおう。貴重な本なので、バックアップもしなくちゃな。

外付けのHDDを買ってコピーする。SDカードなどは、通電してないとデータが消えると聞いた事があるからな。

アイテムBOXに入れておけば、HDDも劣化はしないだろう。

CD-Rとかも消えるって話だしな、丈夫だと言えばMOかな？
シャングリ・ラを検索すると、MOのメディアもドライブもまだ売っているようだ。

懐かしい。以前は仕事でデータ持ち込みといえば、MOだったのだ。暇をみて、MODドライブを買ってコピーするか。

「あの……それってもしかして……？」
「どうやら、勘の良いプリムラが俺達がやった事に気がついたよう
だ。」

「ははは、プリムラは俺の妻だから、一蓮托生だよなあ」
「？」

彼女が首を傾げている。

どうも通じてないようだ。

これは仏教用語だからか？ もしかして、蓮はすという植物がないせ
いかも。

言葉の意味を説明した。

「勿論もちろんですけど、バレたら首が飛ぶかもしれませんよ」

「別の場所で複製を作ったと言えば、証拠はないから大丈夫さ」

「もう、本当に……」

プリムラは少々呆れ顔であるが——もしかしたら、アネモネをこ
の世界一の魔導師に出来るかもしれないのだ。

何の因果か解らんが巡りあった才能だ。十二分に資金を入れてあ
げようじゃないか。

全部の本を変換し終わったので、電子書籍リーダーへ転送する。3
5冊が全部リーダーの中へ入った。

ニヤメナに頼まれてアイテムBOXから捌いた鳥を出す。焚き火
で焼いて酒の肴にするようだ。

「そういえば、ゴースト退治の分前がいるな……」

「はは、あんなの仕事のうちに入らないから要らないよ。俺達は、
ただウロウロしてただけじゃん」「そうだにゃ」「にゃーん」

暗くなった、お城の裏庭で、LEDランタンを点けて、まったり
としていると、メイドさんが1人やって来た。

それを見たアネモネが端末を隠した。

「ケンイチ様、姫様がおよびで御座います」

「旦那あ、やったな。夜のお誘いだぞ？」

ニヤメナがとんでもない事を言うので、プリムラの顔が怒りで赤くなる。

「未婚の王族だぞ？　ありえないだろ」

だが用件はどうであれ、呼び出されたという事は、参らなくてはいけないだろう。

メイドさんに案内されて、お城の中へ入った。

手に持った明かりで、暗くなった廊下を照らし階段を上る。そして案内された部屋。

大きな茶色の立派な扉が待ち構えていた。

扉を開けると、天蓋付きの大きなベッドと、その脇に立つ王女とメイド長さん。だが、ここは王女の私室というよりは、来賓者のベツドルームのような……。

「リリース様、およびでございましょうか？」

「うむ！　色々与其方には世話になったからの、褒美を取らせようと思うての」

「褒美でございますか？」

うーん、それなりに褒美は貰ったつもりだったが。書庫の貴重な本もコピーしてしまったしな。

「其方、このマイレンのような女子おなが好みなのであろう？」

アップした黒い髪と、メガネ——そして豊かな胸と白と紺のメイド服。これが嫌いな男がいるだろうか？　いやいるはずがない（反語）。

「はい？ 正直好みですが、よくお解りで？」

「其方、妾の事なぞ目もくれず、ずっとマイレンの事を目で追っておったろう？」

えゝ？ そこまで凝視してたかな。だって王女はまだ子供だしな……アネモネと2歳ぐらいしか変わらないし。

「これは、お恥ずかしい限りでございます。それで私にどうしろと？」

「うむ、これが褒美じゃ。このマイレンを其方の好きにするがよい」
王女がとんでもない事を言い出した。

「ええゝっ！ ちょっと、お待ちください」

「不服か？」

「滅相もございません。光栄なのですが、私には妻もおります故……」

「なんじゃ意外と堅いの。もっと野心に溢れる者かと思うたが」

「いえいえ、片田舎で静かに暮らしたいだけの、平民でございますから」

「ふむ――」

王女は、ニヤニヤと何かを考えているのだが、あまり良い事を考えている顔ではない。完全に悪巧みを思い浮かべている表情だ。

「それでは――其方のアイテムBOXの中には、女をいたぶる魔道具が沢山入っていると申したな。それをこのマイレンに使ってみるがよい」

「ええええ?!」

チラリとメイドさんの方を見るのだが、赤くなって下を向いてしまった。

「どうした？ まさか、それも出来ぬと申すのか？」
ちよつと、メイド長さんにヒソヒソ声で話しかける。

「よろしいので？」

「あの……姫様の無理難題には慣れておりますので……それに、逆らうのは得策ではありません」

そう言うのと、メイド長さんは長い紺のスカートをたくし上げた。
うーん、これは彼女には悪いが、逆らえる状況ではないらしい。
俺は、アイテムBOXから、色々とアイテムを取り出した。

「あの、やさしくしていただけますか？」

残念、男はその台詞を聞いてしまうと、野獣と化してしまうのだ。
そして、暗いお城の廊下にメイド長さんの悲鳴がこだました。

「ひいいいっ！ 姫様お許しおおお！」

お尻を丸出しにしたメイド長が、床に四つん這いにされて、王女からお仕置きをされている。

うーむ、なんというファンタジーな光景——まさに男のロマン。

「これは、素晴らしい威力だね！ メイドに仕置きをする時には、これを使えばよいのか」

「リリス様。残念ながら、それを使うためには特殊な魔力が必要で、私にしか充填出来ません」

「何？ それは残念じゃのう」

「はひっ！ あああっ！」

「しかし、お城には魔道具作りが得意な魔導師がいらっしゃるので、は？ その方に複製を作らせてはいかがでしょう」

「おおっ！ そうじゃ！ 誰かある！ カールドンを呼べ！」

パタパタと走る音が聞こえたので、誰かが件の魔導師を呼びにい

ったようだ。

その間にも、王女はメイド長を責め続け、メイド服の肢体が床の上でぐったりと失神した時——1人の背の高い男が現れた。

黒い装束に、黒い外套、黒く長い髪を後ろに結び——神経質そうな男が丸い小さなメガネを左目につけている。

歳は40近いだろうな——俺と同じぐらいか。

「王女殿下、お呼びでございましょうか？」

「うむ、近う寄れ」

魔導師は、絨毯に大きなシミを作り、床に転がっているメイド長には目もくれず王女の下へ膝をついた。

女には興味がない奴なのか、それとも、こんなのが日常茶飯事なのでどうでもいい事なのか——あるいは両方か。

「この複製を其方に作ってもらいたい」

「拝見いたします」

魔導師は、玩具を隅々まで観察して、スイッチを入れて驚いた声を上げた。

「ほう、振動を発するカラクリですか」

「そうじゃ」

「振動を起こすのは魔石でも可能でございますが、この首の所の造りは……」

「ケンイチ」

王女から説明を求める声がかかったので、俺はアイテムBOXからスケッチブックを取り出して、構造図を描いた。

「この首の所には、図のような鋼の線を螺旋状にした物が入っているはずですよ」

「なるほど、それで自由に動くわけですね。これは興味深い——これを貸していただくわけには？」

「それはちょっと困ります。私が秘蔵している魔道具なので」

「そうですか。残念ではありますが、おおよその構造は解りましたので、製作は可能でございます」

魔導師は再び王女に向き直ると膝をついた。

「よし、直ちに製作に移るがよい」

「ははっ！」

魔導師は一礼すると、その場から立ち去った。本当に複製が作れるとなると——王侯貴族の間に、この玩具が流行ったりして。

「ところでケンイチ——其方、本当にやらぬか？　このように準備万端整っておるぞ？」

そんな事を言いつつ、剥き出しになっているメイド長の白く大きな尻を叩いてみせる。

「いたしませんか……」

「なんじゃ、つまらぬのう」

「だいたい、私が出したとして、リス様はどうなさるので？」
「当然、見物するのだが？」

王侯貴族ってのは、やっぱり平民とはちょっと違うようだ。こんな事を見世物にするというのだから。

「それじゃ勃つものも勃ちませんよ。それに、こういう事は、2人の愛情を確かめ合うものでなければなりません」

「ほう？　それでは、妾のような政略結婚の駒には一生無理じゃの」
「そんな事はありません。見知らぬ貴方と見知らぬ君が、一目会ったその日から恋の花咲く事もある！」

「其方、中々詩人じゃの」

まあなあ、あのアストランティアの子爵夫人もそうだったが、愛情とはちよつとかけ離れているような……。

「お褒めいただきありがとうございます。しかしながら、このような事をお求めになられても、私は小心者でございますから」

「ははは、それは中々面白い冗談だの。小心者が、このような状況に置かれて平常心でいられるわけがない」

「そうでしょうか？」

「うむ、其方はどんな状況でも切り抜けられると思うておるから、平気なのじゃろ？」

「平気というか——いざとなれば、アネモネの魔法と私の召喚獣を使って、お城を半壊させて逐電するつもりではあります」

「やはり、独自魔法使いは剣呑^{ユニク}じゃのう。はてさて、このような危険な者を召して、父上はどうするおつもりなのか」

この言葉からすると、今回、俺を呼び寄せた事に王女は関わっていないようだ。

てつきり、暇を持て余した王女が、国王に玩具をおねだりした結果なのか——そんな事を考えていた。

「何もしてこなければ、何もせんけど」

「反対に、何かしてくれば——この前話したように、妾を人質にして逃げるのか？」

「その手もありですねえ」

「そうなれば——妾もこうなるのか？」

王女が床に転がっているメイド長の尻を踏むと、彼女が恍惚の表情を浮かべている。

メイドさんが一方的にイジメられて、ちよつと可哀想と思ったのだが——これは、いつも行われている双方が了承済みのプレイなのかも……。

「それは、リリース様次第でございますれば」

「ふむ、それはそれで、面白そうじゃの」

しかし、そうなれば王族の地位を追われる事と同義なのだが――その事を尋ねると。

「妾はどちらでもよい。ただ、我が父は怒り狂うであろうがな」

王女は、王族の地位には執着はないようだな。色々あったが、マジで用件はこれだけらしい。暇だったから玩具にされたようだ。

それと大事なことを聞いた――そろそろ謁見が決まりそうだという事だ。やっとか。

再び、メイドさんに連れられて皆の所に戻る事にした。

家に戻ると、皆は家の中に入っていたので、外にあったテーブルをアイテムBOXに収納して家に入った。

ニヤメナは自分の小屋で寝ているらしい。

オレンジ色のガソリンランタンの下、皆がベッドの上や、縁に腰掛けている。

そこからベルがやって来て、身体を擦りつけてくるのだが――いつもと違う人の匂いにするせいであろうか？

しかし、王女とメイド長と一緒にいただけだから、匂いはそんなについていないと思うのだが。

「あ、帰ってきたにゃ」

「おかえりなさい」

「何のご用件だったのですか？」

「魔道具について、色々と聞かれたよ」

まあ、本当の事は言えるはずもないし、一応、嘘も言っていない。

「それと、謁見の予定が決まりそうだよ」

「やっとかにゃー！　こんな所にいると、身体が鈍るにゃ、狩りも

出来ないし」

「にゃー」

ベルも狭い所にずっといるので、退屈のようだ。

「ケンイチ、これってどうやって作るの？ 作りたい」

アネモネが見せてきたのは、電子書籍リーダーの画面。丸い頭の付いた十字架のような物が載っている。材質は木らしい。

イメージ的には、海にいるクリオネに似ているような……。

説明を読むと、ゴーレムの核のようだな。こいつを使ってゴーレムの身体を構成するのか――。

核の大きさがゴーレムの大きさに比例するとも書いてある。そうすると、工事に使っていた巨大なゴーレムには同じく巨大な核があるって事か。

もちろん 勿論、デカイ核は魔力も沢山消費するようだ。

うーん本を読んでも、よく解らん。とりあえず同じ形になっていれば、OKって事なのか？

まあ、なにはともあれ作ってみない事には解らない。

アイテムBOXから板を一枚取り出した。

「まずは、板に形を描く」

「うん」

「そして、周りをノコギリで切り出します」

この世界にも、ノコギリは存在しているので、彼女にも使い方を教える。

もちろん

勿論、この世界の物よりも、シャングリ・ラで売っている1000円の替え刃式の方が高性能なのだが。

「切り出した後は、小刀や切出しで角を落として丸くすればいい」
「解った！」

彼女に、1本1万円の鍛造の切出しを買ってやると、床に座って核の角を削り始めた。

見ていてハラハラするのだが、ちよつとずつでも教えていかなうとな。

「使っていて切れなくなったら、刃物は研がないとダメだぞ。研ぎ方も教えてやるから」

「うん！」

「やっぱり、師匠は大切だにゃー」

「獣人は親から習うのか？」

「親からも習うし、一族の大人全部から習うにゃ」

獲物の獲り方、捌き方、罠の作り方、道具の手入れの仕方、多岐に渡るといふ。

「そりゃ効率的だな」

これで読み書きが出来れば、獣人最強説なのだが――天は二物を与えなかった。

「でもにゃ、教え方が違うとか、ここがこうだとか、あーだこーだ結構喧嘩になるにゃ」

「ああ――人によって流儀みたいなものもあるからな」

この子はワシが育てた！　って言いたいだろうし。

「そうなのになー、ウチ等はどうでも良いのににゃ」

魔法の本を読むと、木の人形――核の出来によって、ゴーレムの性能が違ふなんて書かれている。

それじゃ、工作機械等で作ったら性能アップしたりするのか？
木工旋盤で削ればいいんだからな。

そのうち、ちよつと試してみたくなるじゃないか。

— — — — — ◆ ◆ — — — — —

——次の日。

皆で朝飯を食っていると、お城から使いがやってきた。
国王との謁見は昼過ぎに決まったようだ。

「今日の昼過ぎか……」

「やっと決まったな、旦那」「うにゃー」

そこへ王女が、派手な服を着た商人らしき男たちをぞろぞろと引き連れて、やって来た。

太っている、背が高い、若い、年寄りで白髪——と色々と揃っているが、皆が原色の色使いの服をまとっている。

「ケンイチ、其方のアイテムBOXに入っておる、巨大蜘蛛を買いに来た連中だぞ」

あんな蜘蛛を仕留めても運ぶ手段がない。それ故、王都まで運ばれる機会は滅多にないというから、貴重なのかもな。

王女の話では、皆が御用商人のようだ。この商人達が獲物を買って加工——鎧などを製作して、王家に卸すらしい。

王女に言われて、アイテムBOXから、オスとメスの洞窟蜘蛛を出した。

アイテムBOXを占領していた巨大な蜘蛛も、やっと引き取り手が決まるか。

目の前に現れた、巨大な二匹の蜘蛛に、商人達がたじろぐ。

「「「おおおっ！」「」「これは、なんと見事な」「損傷も殆どない」

損傷は、俺がコ〇ツさんでどついた頭の部分だけだな。アネモネ

ファイヤーボール
も憤怒の炎を撃ったのだが、焦げている風でもない。
魔法に耐性があるというのは本当のようだ。

「ウチに売ってくれ」「いや、ウチだぞ」「こちらは、そいつ等より金を払う!」

——という事は、オークションになるな。商人達の相手となれば、プリムラの出番だろう。

「プリムラ、任せた。君の出番だぞ」

「もちろん勿論、任せて下さい。やっと私の出番がやって来ましたね」

餅は餅屋。商人には商人。俺も商人だが、インチキだからな。

商人達のオークションの結果。デカイメス蜘蛛は金貨350枚（7000万円）。小さいオス蜘蛛の方は、金貨80枚（1600万円）となったようだ。

少々高い気もするのだが、この甲殻から削りだして作られたプレートアーマーとなると、1億を超える値段になるそうだから、原料の仕入れとしてはこんな感じらしい。

軽くて丈夫、しかも魔法を弾く——金がある騎士や貴族なら、欲しい逸品だろう。

しかも、こいつは白くて美しいからな。見栄えもするだろう。金持ちの虚栄心をくすぐると思われる。

しかし、売ったは良いが、商人達にも運ぶ手段がないというので、俺のアイテムBOXへ入れて、サービスの配達という事になった。

まあ、大金で買ってもらったから、このぐらいのサービスはいいけどな。

一応、毒を使ったので、肉は食わないでくれ——という話をしたのだが、笑われてしまった。

いや、もしかして美味いかもしれないじゃん。
まあ誰に聞いても食ったことはないらしい。

焼いたら美味そうだな……。

オークションの後、俺のアイテムBOXを知った商人達が、荷物を運ぶ仕事をしてくれとしつこい。

生鮮食料品も運べるし大物も運べる。商人から見れば、かなり魅力的なようだ。

だが、そんな仕事をしなくても十分に金は持っているからな。
大体、義理の父であるマロウさんでさえ、そんな事は俺に頼んてこないのだ。

もつとも、彼自身がアイテムBOX持ちであり、そういう連中につきまとわれて、難儀した経験があるせいかもしれないが。

88話 秘密のご褒美（後書き）

書籍版 アラフォー男の異世界通販生活 2巻 11月10日発売
！

89話 死闘！ 謁見の間

王都へやって来ていた俺達だったが、謁見には時間が掛かるようだ。

俺達が車を使ってあつという間にやって来たので、面を食らったのかもしれない。

それでも、かなりあちこちへ寄り道をしたのだが――ゴブリン退治もしたしな。

だが、やっと国王陛下にお目通りが叶うと思ったのだが、少々揉めた。

獣人達とベルを謁見の間に入れるかどうかで、一悶着あったのだ。だが、皆が一緒に謁見に臨む事が認められなければ、このまま帰るとゴネたら訴えは認められた。

「旦那あ、俺達のために、そんな無理をしなくてもいいんだぜ？」

「そうだにゃ」「にゃー」

「何を言ってるんだ。前にも言ったが、俺たちは家族じゃないか」

獣人達は、俺の言葉に感激しているのだが――勿論、もちろんその言葉に偽りは無い。

だが何かトラブルがあった時のために、彼女達の力が欠かせないのも事実。

王族が無理難題をふっかけてくる事も考えられるからだ。

逐電する際に関しても、獣人達にアネモネとプリムラを担いでもらえば、移動速度がかなり上げられる。

そうなれば騎士などの追撃も振り切る事が出来るだろう。

何にしても戦力は多い方がいい。

皆で一列に並んで案内人に従い、お城の中へ入る。赤い絨毯が敷かれた少々薄暗い石造りの長い廊下をてくてくと歩く。

元世界なら、どこへ行っても煌々こうこうと明かりがついていて、光に溢れていたのだが、この世界は薄暗い所ばかりだ。

それは、この世界の頂点ともいえる、お城の中でも変わりない。俺のすぐ後ろを黙ってついてくる、黒い毛皮が光るベル。

彼女の顔を見ると――心配するなよ、私に任せろ――みたいな顔をしている。

皆が黙って歩いているのだが、ニヤメナは何かそわそわと落ち着きがない。

「なににゃトラ公、ビビってるにゃ？」

「誰がビビるかよ！」

「とはいえ獣人で謁見の間に入るなんて前代未聞かもな。そこところは、どうなのでしょう、案内人さん？」

俺の前を歩いているのは、深緑色のすっぽり身体が隠れるローブを着た若い男。

「さあ、どうなのでしょう。しかしながら私の記憶が確かならば、謁見の間に獣人が入った事はありませんねえ」

「ほら、ニヤメナ、酒場で自慢が出来るぞ？」

「こんなの、誰も信じてくれなくて、ホラトラ呼ばわりだよ」

「そうだにゃーにゃはは」

まあ実際、ニヤメナの言う通りなんだろうな。

「さすがのプリムラも緊張気味か？」

「それはそうですね。陛下に謁見なんて、父でも承った事がない大役ですから」

「プリムラはお父さんの一步先を行った事になるな」

そんな俺の冗談にも顔がひきつる彼女に比べて、アネモネはいつもと変わりない。

肝が据わっているというよりは、あまり事の重大さが解らないのかもしれない。

彼女にひそひそ話をする。

「アネモネ——念の為に、魔法の触媒に使えるこの金属を渡しておく」

「うん」

「もし魔法を使うような事になったら、遠慮無くぶちかましていいからな」

彼女にアルミ板を渡す。小さな銀色の板に、ゴム紐を通して手首に巻けるようにした物だ。

長い廊下が終わり、立派な飾りがついた大きな両開きの扉が開かれると、そこには大広間が俺達を出迎えてくれた。

ビルの吹き抜けのような高い天井。その上には明かり取りの窓が開いて、光が射し込んできている。

その高い天井を支えるために等間隔で並んだ太い柱。真ん中には、奥に控える玉座まで走る幅広い真っ赤な絨毯。

絨毯の脇にはフルプレートの騎士や、金糸が施された派手な色とりどりの衣装に身を包む、貴族だと思われる面々。

だが、その中に気になる人物がいる。胸の部分が広く開いた裾の長いワンピース。腰には金の飾りが巻かれており、スカートの側面から入った長いスリットが腰の上まで延びている——こんな格好をしているのは魔導師だ。

だが他にも、そこまで派手な格好ではないが、魔導師らしき老若男女が多数いる。

おそらくは貴族の護衛か何かだろうが——こりゃもう嫌な予感し

かしい。

「なんでこんなに貴族が集まっているんだ？」

そりゃ、これだけの人数の予定を合わせるのであれば、謁見の準備に時間が掛かるのも当然だと思われる。

しかし、ここまで来てトンスラするわけにもいかないだろう。無理を言って、獣人の謁見まで認めさせたのだから。

きらびやかに並ぶ大勢の貴族達の中を進んで、ホールの中心辺りにやって来た。周りから貴族達のざわめく声が聞こえる。

「奴が魔導師なのか？」「そんな者には見えないが……」 「謁見の間に獣人や畜生を入れるとは、陛下も悪ふざけがすぎる」

言いたい放題である。まあ、いわゆる上級階級の言い分としては、そんなもんだろう。

普段なら俺達平民とは接点すらない、やんごとなき人々なのだから。

それにしても国王との距離が開いているように思えるが……。

その国王陛下——金色の背の高い玉座に座り、白い飾りがついた赤いマントと大きな宝石が付いた勺杖を持っている。口ひげと顎髭を生やしたいかにも王様って感じた。その隣には同じぐらい背の高い玉座に座った女性。

白い胸の開いたドレスを来て、金色の髪を後ろ頭で金銀の飾りを使ってまとめている。

歳は30代半ばか——さすが遠目でも美人だと解る。

あれが怒らすと怖い王妃様か……。

俺たちは、全員平伏すると膝を突いた。

すると俺達の前に、役人らしき男が立った。黒い髪をオールバツ

クにして黒い制服を着た、背の高い男である。

そして、ざわつく観衆達に両手を上げて叫んだ。

「皆様静粛に！」

静まり返ったところで、男は俺の方を見ると、顎をくいっと上げた。

あゝはいはい。

「国王陛下からのお招きにより、まかり越しました、辺境の魔導師ケンイチとその家族にございます」

「その魔導師ケンイチには、今から陛下の御前で試合してもらおう」

「はあ？ おいこら、ちよつと待て？！」

一斉に周りにいた貴族や騎士達が距離を取る。

「対するは――王都の、きらびやかな新星、メリッサ・ラナ・ナス
タチウム様！」

「「「おおおっっ！」」」

周りから歓声があがる。なるほど――なんでこんなに人が集まっているかといえば、何のことはない、見せ物に集まったただの暇人共だ。

くそ、人を見せ物にしゃがって。

俺の相手は――嫌な予感的中した通り、黒いロングワンピースを着ていた女だった。

胸の開いた所から、こぼれ落ちそうな白い乳房、スリットから覗く細く長い脚。茶色の巻き毛が腰まで伸びている。歳は――18ぐらいか、若い。

こんなムカつく場面でなければ、じっくりと鑑賞したい身体だが、そんな事をいつている場合ではない。

この若さで貴族達に混じってこんな場所にいるのだから、かなりの手練なのだろう。

しかし待てよ……ナスタチウムって言ったか？ 確か——アストランティアの婆さんが昔付き合ってた貴族ってのが、ナスタチウムって家じゃなかったか？

それじゃこの女が——もしかしたら、あの婆さんの孫？ あの婆さんも若い時はこんな美人だったのだろうか？

学園の華とか言われてた——と自慢していたから、多分そうなんだろうなあ。

それじゃ、ダリアの道具屋の爺さんもナイスガイだったのかもしれん。

「あはは！ 辺境から凄い魔導師がやって来ると言われて、興味本位で参上してみれば——タダのオッサンじゃない」

「オッサンで悪かったな！」

「それに、こんな場所にわざわざ家族まで連れてきた挙句、巻き込んで。馬鹿な男！」

「ウチは、家族で1つの戦力なんだよ、あの娘だって立派な魔導師だぞ」

実際、俺1人じゃ重機の運転しか出来ないしな。

「呆れた！ あんな子供を当てにするなんて！」

突然の出来事に、どうしようかと迷っていると、女の魔導師がなにやら唱え始めた。

『私の願いに応えよ闇の倦族、我に徒なす敵に黒き裁きを与えよ』
怪しい呪文を唱えた魔導師の胸が揺れると、目の前に光文様が顕現——いわゆる魔法陣ってやつだろうか？

そして、まるで地獄の扉が開いたように、そこから巨大な生物が

現れた。

四つ脚で踏ん張る長い尻尾を持った、巨大なトカゲ。硬そうな鱗を逆立ててこちらを睨み、赤い目を光らせている。

「「「おおおっ！！」」」

周りの見物客達から歓声が上がった。

だが、やばい！ こいつは一目で解る。やばい奴だ。

「コ○ツさん召喚！」

「旦那！ こいつはレッサードラゴンだ！」

ニヤメナの叫び声と同時に、黄色い巨大な重機が地響きを立てて現れた。

「こいつがレッサードラゴンか！」

「「「おおっ！」」」 「これはなんだ？！」 「召喚獣なのか？」

さすがに相手の魔導師もコ○ツさんを見て驚いたようだ。全員が目を見開き、大きな口を開けて上を見ている。

しかし、そんなお見合いのつかの間。

大きくレッサードラゴンの口が開いた。

「旦那！ 火炎フレスがくるぞ！！！」

「アネモネ！」

俺はプリムラの手を握り、重機に脚を掛けながら叫んだ。

「むっ！ 至高ハイプロテクションの障壁！！！」

ギリギリのタイミングで顕現した、きらめく透明な壁が巨大な魔物から吐き出された火炎を押し広げて遮る。

轟々という唸りを上げて灼熱の火炎が押し寄せるが、当然の如く俺達までは届かない。

「なっ!？」

ハイプロテクション

アネモネの至高の障壁に、魔物を召喚した女魔導師も驚いたようである。

「「至高の障壁だ!？」」

ハイプロテクション

「「そのような高等魔法をあんな平

民の子供が?」 「信じられん!」 「ありえん!」

信じられまいが、なんだろうが、目の前で起こった事は事実だ。

だが火炎の勢いが余ったのか――魔導師を雇っていない下級貴族や騎士達の何人かが火炎に巻き込まれて、火だるまになった。

それを見た上級貴族達から失笑が漏れる。やっぱり特権階級の貴族って奴らはこんな感じなのか。

全く最悪だぜ。ダリアを治めていたアスクレピオス伯爵や、アストランティアのユーパトリウム子爵はそれなりにまともに思えたのだが、王都に近づくほど俺が思い描いてた王侯貴族に近づいている気がする。

そっちがその気なら、こっちも遠慮なく反撃出来るぜ。

ニヤメナに、アイテムBOXから出した圧力鍋爆弾を放り、ミヤレーにはコンパウンドボウを投げ渡す。

「ニヤメナ! 障壁を回りこんで、こいつをやつに投げつけろ!

ミヤレー、援護だ!」

プリムラを運転席の後ろに押しこめると獣人達に指示を出す。アネモネは俺の膝の上に乗ってきた。

爆弾と武器を受け取った彼女達は、自慢の素早さで魔物の両サイドに回り込み――。

「喰らえにゃ!」

ミヤレーの放った矢が、レッサードラゴンの目にヒットした。

「ゴワアアア！」

全身を硬そうな鱗に覆われた魔物が、目を貫かれて腹に響くような叫び声を上げた。

それを目掛けてニヤメナが、鍋の黒い取手を振り回し、白く鋭い牙をむき出している魔物の口へ、そいつを投げ込む。

ナイスコントロールだ！

「アネモネ！」

重機の座席に座った俺の膝の上——アネモネが、すかさず魔法を唱えた。

「爆裂魔法（小）！」
エクスプロージョン

大音響と白煙と共に圧力鍋が破裂し、辺りに音速の破片と釘をまき散らす。

「きやあ！！！」

轟音と振動に揺さぶられて、運転席の後ろからプリムラの叫び声が響く。

俺達へ向かって飛んでくる破片は、アネモネが作り出した障壁で停止した。

獣人達も、上手く障壁の内側へ潜り込んだようだ。さすが、ウチのパーティは、コンビネーションがバッチリだ。

その鉄の礫ツブテで騎士達にも犠牲者が多数。薄いプレートアーモナーら、たやすく貫通するだけの威力だからな。

その爆発の直撃を食らったレッサードラゴンだが、口の周りを半分失いながらも、まだ生きている。

ハイプロテクション
その時、アネモネの至高の障壁は、光の粒子となって消失した。

「そんな！ レッサードラゴンの身体が爆裂魔法エクスプロージョン一発で損壊するな

んて、あり得ない！」

女魔導師が何やら騒いでいるが、それは魔法じゃなくて爆薬っていう物理攻撃だから。

女の台詞から察する——魔物は魔法に耐性を持っているから、普通は爆裂魔法エクスプロージョン一発じゃ大したダメージは与えられないのだろう。

魔物が、まだ動いているのを確認すると、俺は膝にアネモネを抱えたまま、コ〇ツさんのエンジンを始動させた。

咆哮と黒い煙を吹き上げて、鋼鉄の腕を高さ9 mの高さへ振り上げ——。

「コ〇ツアタック！ それは、この世界の不条理に抗う、憤怒の一撃！ 相手は死ぬ！」

俺の掛け声と共に鉄の爪を、半死となった魔物の頭上へ振りおろす。

攻撃を食らったレッサードラゴンは、頭を床に打ちつけ、食い込んだバケットの爪から真っ赤な血と脳漿が吹き出した。

「おりゃ！ もう一発！」

振り上げたアームが再び振り下ろされ、床の石材まで食い込んだ鈍い金属音が謁見の間に響いた。

赤くどろどろした物が床一面に溢れだして、巨大なトカゲはあえなく息絶えた。

山のような肉の塊にベルが近づくと——クンカクンカしている。食いたいのであろうか？

レッサードラゴンの後ろでは、自慢の召喚獣が撃破されてシヨツクの余り——女魔導師が放心状態で座り込んでいる。

俺はそのままフットバーを踏み込むと重機を前進させ、下に敷かれた赤い絨毯をカタピラで切り刻む。

そして、屍となったレッサードラゴンをアイテムBOXへ収納——

―それを見た観客から再び驚きの声があがった。

女魔導師の前を通り過ぎ――ガタガタと床の敷石に傷を付け、重機を太い柱の前まで移動させると、長いアームを再び振り上げた。

一緒に付いてきている獣人達とベルは周囲を警戒中。アネモネは大魔法を使ったが、俺が渡したアルミのせいだ魔力にはまだ余裕があるようだ。

「取り押さえろ！」

重機の周りに騎士達が集まってくる。

「腕を振り回す！ ミャレーとニャメナ！ 当たるなよ！」

重機の陰に隠れている獣人達に声をかけると、バケットを床すれすれの所まで下ろし、ぐると車体を一回転させた。

「コ〇ツ大回転！ それは、我が行く手を遮る物を地獄へ導く、車裂きの刑！ 相手は死ぬ！」

鋼鉄の腕に弾き飛ばされた鎧達が、なすすべなくごろごろと転がっていく。

こいつらに恨みはないが、命を狙われたんじゃ反撃するしかない。その時、観客の中にいた1人の魔導師から、光の矢がコ〇ツさんに向かって放たれた。

だが俺の乗った運転席の前を黒い影が過る。そして大きくジャンプすると、命中寸前の光る矢を明後日の方向へ弾き飛ばした。

「ベル！ 助かったぜ！ ありがとうな！」

彼女は、弾むようにそのまま観客の中へ突っ込むと、魔法を使った魔導師の首へ噛み付き、そのまま引き倒した。

「ウウウ！」

男の死体を啜えたまま、ベルが他の魔導師達を威嚇する。魔法を使えば、お前達も命はないと言っているのだろう。

「アネモネとプリムラは大丈夫か？」

「……はい」

「全然、大丈夫だよ」

抵抗を排除したところで、再びアームを高く振りかざした。

そして、シャングリラを検索。拡声器を購入してスイッチを入れた。手に持って使う、メガホン型のやつだ。

「あゝあゝただいまマイクのテスト中。本日は晴天なり本日は晴天なり。あめんばあかいなあいうえお。えゝ国王陛下！ この度は、趣向を凝らした素晴らしい歓待をしていただき、誠にありがとうございます。私の家族を危険に晒していただき、怒りが心頭に発しましたので、我が召喚獣の威力をもって、この謁見の間を倒壊させて逐電する事にいたします。そして――見事逃げおおせた暁には、私の持つ全知略を以って、この国を傾けて地獄へ引きずり込んで差し上げましょう！」

どよめく貴族達を尻目に、レバーに手をかけて、アームを振り下ろそうとした刹那――。

「待つがよい！！」

声がした方向を見ると、そこにいたのは王女殿下。

「其方の言い分は解る。いくら王族とはいえ、人を面白半分で呼びつけ、見せ物にして良いという道理はない！ しかも、愛する家族を危険に晒されたのじゃ。其方が怒るのも当然じゃろう」

実際に、巻き込んでしまったのは俺だが――彼女達の力添えがなければ、レッサードラゴンによって火炙りになっていた。

「私を懐柔なさろうとしても無駄ですよ？」

「まあ待つがよい……。ここから逃げ仰せたとしても、平穏な生活は、もはや叶わぬぞ？」

「それもまた人生でありましょう」

「其方は、それでいいかもしれぬが、其方の家族はどうじゃ？ 其方の妻は商人だと申したな？ その者の実家も安泰には暮らせぬぞ？」

くそ、汚い。やはり王侯貴族は汚い。運転席の後ろからプリムラの声がする。

「ケンイチ——何があっても、私や父は貴方を責める事はありません」

マロウさん父娘はそうかもしれないが——マロウ商會を巻き込めば、末端家族を含め千人近くが露頭に迷う。

勿論、その家族からも恨まれる事になるだろうなあ……うゝむ。

アネモネも頷いているのだが、獸人達の様子がちよつとおかしい。

「なあに、この場の收拾は、ある条件を飲めば簡単じゃ」

「その条件とは？」

そう聞いた所で、虎縞の毛皮が重機を這い上がり、俺に抱きついてきた。

「ニヤメナか！？ どうした」

「ふうふうう！」

涎を垂らし、血走った目は完全に何かがおかしい。

「おい、どうした！？」

だが、俺の言葉を無視して、ニヤメナが俺の首元に噛み付いた。

「あいたたたた！ ちよつと、待て待て！」

「ケンイチ！ この臭いは、あの日だにゃ！」

コ○ツさんの下から、ミャレーの声がする。あれって、あれか？
獣人が年に1回発情すると言う？

「ふがふがふが！」

ニャメナは、俺の首に齧りついたまま、離れてくれない。

「あいてて！ ミャレー、こりやどうすればいいんだ！？」

「ケンイチ！ 酒だにゃ！ こういう時は、酒を浴びるほど飲ませるにゃ！」

慌てて、シャングリ・ラで酒を検索する。彼女のお気に入りだった、ブランデーでいいだろう。

購入ボタンを押すと、ブランデーが2本落ちてきた。

「ほら！ ニャメナ！ お前の好きな酒だぞ！」

酒を見たニャメナは、俺の首元から離れると、豪快にブランデーをラッパ飲みし始めた。

そして彼女は空になった瓶を投げ捨て、カタピラの上でふらふらになると、そのまま重機の下へ落下。

それをミャレーが受け止めた。45度ぐらいあるブランデーを丸ごと1本ラッパ飲みすりゃ、そりゃひっくり返る。

「もう、世話の焼けるトラ公だにゃ」

「大丈夫か？」

「多分、大丈夫にゃ」

ふう、なんでこんな時に――。

重機の下で呆然としている王女に声を掛ける。

「えーと、リリース様。なんでございましたっけ？」

間が悪く――口上を中断されてしまい、やる気を削がれたような王女だったが、気を取り直したようだ。

「えーい！！ 魔導師ケンイチよ、我が物になるがよい！」

「お断りいたします」

俺の即断に王女はあっけに取られ、しゃがみこんだ。また貴族や騎士達がどよめく。

「即断かえ?! もうちと、考えるとか迷うとか色々あるじゃろう?!」

どうやら王女は、俺が彼女の申し出を断ったのが、意外だったらしい。

「王族の玩具になるのは、まっぴらごめんです」

「むう……やはり、一筋縄ではいかぬようじゃな——それでは妾の女子としての些細な願いを一つだけ聞くがよい！」

「願い？」

俺の訝しげな顔色を見た、王女が続ける。

「其方、まさか幼気な乙女の僅かな願いも聞き入れないつもりではあるまいな？」

「自分で幼気とか言いますか？ ——では、一応お聞きいたしますけど……」

「近々、妾の誕生日での！ 其方の贈り物次第では——妾が父上にお願ひしてこの場をおさめ、陛下の御威光の下、其方とその家族を無罪放免にしてやる」

無罪放免って、俺と家族は何も悪くないのだが。だって正当防衛だし——だが王族が黒と言え、白い物でも黒になる世界だ。

それに魔導師や騎士団にも犠牲者が出てしまった。

これを丸くおさめるには、やはり王族の強権が必要だろう——だが、その彼等のお遊びから引き起こした事件なのだが、全く面倒な……。

「私に利点が全くないように思われますが……」

「そんな事はないぞ。無罪放免の他に、陛下の御威光があれば、ほかの貴族共は一切手出しが出来なくなる」

死んだ貴族や騎士達の親族による敵討も認められないって事だな。

「なるほど……しかし、贈り物ですか……」

「其方のアイテムBOXの中には、妾が見たこともないような物が詰まっておるのじゃろ？」

「いままで、リリース様にお売りした物や、お食べになった物では足りませんか？」

「うむ、その通りじゃ。あの手の物ならば、少なからず貴族共からの貢物がくる故——」

つまり他の王侯貴族に自慢できるような決定的な物が欲しいのではあるまいか？

全く、こんな茶番につき合う必要もないのだが……。

「どうじゃ？」

「承知いたしました」

「ほう、それは楽しみじゃのう、いったい何が出てくるやら。ちなみに妾が宝飾の類では驚いたりすることはありえんぞ？ 我が王家に伝わる宝飾に敵う物があるとは思えん」

そう言われると、宝飾で勝負してみたくなるじゃないか。

ブリリアンカットのダイヤなんてどうだろうか？ いや、プリムラにカットガラスを見せても、確かに驚いてはいたが、驚愕ってほどじゃなかったな……。

それじゃ、超精密加工の宝飾？ ブレゲが作ったマリー・アントワネットみたいな超精密時計とか？ だが金に糸目をつけなきや、それもなんとかなりそうな感じもするしなあ。

この世界で、金を出しても買えないような宝飾か……。

俺は、シャングリラで宝飾のページを検索する――だが、それに当てはまる物を見つけた。

確かに、これもこの世界にはありそうだが、いくら金を積んでも買えなさそうな物だ。

シャングリラで購入した値段は350万円――これはイミテーションではなく本物なので、この値段だ。

コ〇ツさんを降りて王女の下へ向かうと、俺の買った物を差し出した。

ちよつと黒味がかり、きらめく丸い玉が多数繋がった首飾り。だが、その首飾りを見た王女の表情がみるみる強張る。

「こ、これは!?!」

俺のプレゼントを見た王女は、驚愕の表情で固まった。

90話 王国の危機?

やっと国王陛下との謁見が叶ったら、いきなり戦闘させられるという無理難題。

王女は、俺のアイテムBOXの中に入っている、見たこともないようなプレゼントが欲しいらしい。

子供っぽい願いのようだが――まあ王族とはいえ、実際に子供だし、歳相応か。

俺が持っている物は、アイテムBOXに入っているんじゃないくて、シャングリ・ラから買っているのだが……。

そのシャングリ・ラから買ったプレゼントを王女に見せると、彼女は驚愕の表情で固まった。

「こ、これは?!」

「ご存じありませんでしたか? これは『真珠』といわれる物で――」

「そんな事は知っておる! 王家にも伝わっておるからの! だが真珠だと? これが真珠と申すのか? こんな巨大な粒と色の揃った玉が連なった首飾りとは……この世にあらざる物じゃ……あつてはならぬ物じゃ」

「驚きになりましたか?」

俺達の会話に、周囲の貴族達もざわめく。

「真珠だと?」「あれが真珠?」「あのような巨大な粒揃いの物が?」「ありえん!」

貴族達も真珠という物は知っているようだ。だが、これらは元世

界の養殖技術によって作られた物。

それ故、養殖技術がないこの世界には存在しない物だ。

王女は、まじまじと真珠のネックレスを見つめると、俺にネックレスを手渡し、背中を向けて金色の髪をかき上げた。

「はいはい」

王女の首の後ろでネックレスの留め具が閉じられると、彼女は陛下の下へ走っていった。

そして父親の膝の上に乗ると、首元に抱きつき、なにやら話している。国王は彼女の事を溺愛しているらしいからな——これは効くかもしれない。

待っている俺の下へ、ベルがやって来て、身体をスリスリしている。

「ベル、ありがとうな。お前大丈夫なのか？」

魔法を弾き飛ばしたベルの身体を撫^なでてチェックするが、別に異常は見当たらず。

森猫の毛皮も魔法を弾くと言われているので、それを使ったのかもしれない。

そして辺りを見回す——俺の家族は皆が無事。ベルが殺った魔導師の他にも騎士団やらに犠牲者が多数。

こんな王侯貴族のお遊びに付き合わされて、命を落としたんじゃないか。

俺達と対峙した女の魔導師は、しょんぼりしたまま佇んでいる。あれが、スノーフレーク婆さんの孫か。あの婆さんも若い時は、あんな性格だったのかもしれないな。

そして王女と陛下のしばらくの会話の後、紙と羽根ペンが載った板が国王の下へ届いた。

だが、それを隣で見ていた王妃が俺の方を睨んでいる。まるで黒

い死神の赤い目が光っているように……。

やべえええ——超怖えええ、さっきのレッサードラゴンより、こっちの方がヤバいんじゃないのか？

羊皮紙に国王のサインが終わると、王女がそれを持って俺の下へやってきた。

「ほれ、其方の物じゃ。これを持っていれば、天下御免じゃぞ？」

「ははっ、ありがたき幸せ」

茶番に付き合わされてかなりムカついたが、これで丸く収まるというのであれば、鉾を収めた方が得策だろう。

これ以上関わり合いになりたくないし、早々にトンスラするに限る。

皆も巻き込まずに済むしな。それに——これさえあれば、他の貴族が絡んできたり嫌がらせ等も、全て排除出来る。

例えば、プリムラの店に行われていた嫌がらせ等も、王の名の下に於いて排する事が可能なのだ。

何か騒ぎを起こしても、逃げまわる必要もなくなるってわけだな。

「しかし、この首飾りの代金としては、安いぐらいじゃぞ？」

「あ、あの……リリス様、王妃様がこちらを睨んでおいでなのです……」

「ああ、陛下の書状も、母には通用しないので、上手く切り抜けるがよい」

「それだけですか？」

「妾には、どうしようもできぬ！」

王女とそんな会話をしていると、俺の近くにいつの間にか王妃がやってきていた——まるで気配もなく。

床に膝について平伏するのだが、すごいプレッシャーだ。背中が冷や汗でびっしょり。

「其方、ケンイチと申したか」

「ははっ、名前を呼んでいただき、恐悦至極」

俺は凄いプレッシャーを受けて固まり、蛇に睨まれたカエル状態に――。

陛下から天下御免の書状をもらって、後は帰るだけ――と思ったのだが、一難去ってまた一難。

俺の前に王妃が立っている。

大きく胸の部分が開いた白いドレスに、銀のティアラ。編みこんだ長い髪を金銀の飾りを使って、後ろで留めている。

玉座に座っている時は解らなかったが、結構背が大きくて脚が長く肩幅も広い。

モデルというよりは、アスリートのような……。

遠目では全く解らなかったが、御目の下には泣きぼくろが見える。

それにしても得体のしれない圧力は――何か魔法のような特殊な力を持っている人なのかもしれない。

「其方に問いたいのだが……娘に、あのような首飾りを贈り、まさか妾にはない――とか、そのような事を申すつもりではないのだろうか？」

どうやら、この世界にあり得ないような、真珠のネックレスを娘が先に手にした事が気に入らないご様子。

俺の家族を危険に晒した王族だが、こりゃヤバいのが本能的にビンビンに解る。

王女が、「王妃を怒らせるな」――と言っていたが、本当にその通りの人のようで、ここで逆らうのは得策ではないようだ。

「滅相もございません。勿論、^{もちろん}王妃様への贈り物をご用意させていただきます
ただいております」

俺は慌てて、シャングリ・ラを検索する。王女に贈った物より玉の数が多いネックレスが550万円で売っていたので、そいつを購入入。

王女にアレコレと売りつけて小銭を稼いだのだが、かなり吐き出してしまった。

落ちてきた真珠の首飾りを慌ててキャッチすると、王妃様に差し出す。

「これにございます」

俺が差し出したネックレスを見た王妃の目が輝くと同時に、プレッシャーはなくなった。

そして、王妃がくると背中を向ける。

「それでは、失礼いたします」

文字通りの虹色に光るネックレスを王妃の白いうなじに巻き、後ろで留める。

それにしても、色っぽいうなじだ。思わず吸い付きたくなるような衝動を抑えて――俺はある事に気がついた。

正面を向けば、あのゴルゴンやメドューサのような恐ろしい視線を浴びる事になるのだが――後ろを向かせれば恐ろしくない。

多分、目隠しをすれば平気なのではあるまいか？ 無論、そんな事が出来るはずもないが。

俺は、そんな事を考えつつ、シャングリ・ラでパイン材枠の姿見を購入した――6500円である。

俺が出した鏡の前で王妃は、あれこれとポーズをつけはじめた。心なしか、顔も赤みを帯びて興奮しているようにも見える。恐ろしい死神のような女性かと思いきや、こんな顔もするんだな。

その王妃を見ている、貴族達もざわめいている。

「あんな巨大な真珠とは……」「一体いくらになるのか……」「あんな物を正室にねだられたら、領が傾くぞ……」

貴族達が何やら要らぬ心配をしているのだが――俺がシャングリ・ラから購入したこの真珠は、これしかない。

故に値段は付けられないな。もし付けるのであれば、国宝級――天文学的な数字になるだろう。

「王妃様、大変お似合いです。そのお姿を見た貴族の夫人達は、嫉妬の余り悶死するでありますよ」

「ほほほ！ 全く其方の言う通りだの、しかし――」

「何か？」

「国王陛下にも買えぬような贈り物にどんな値段を付ければよいのか見当もつかぬ……」

「いえいえ、王族とお近づきになれるのであれば、その価値は計り知れません」

「ほう……」

「それに、国宝級のお宝であれば、まさに王族の下にあるのが相応しいかと」

「なるほど……しかし、これだけのお宝をもらい、タダというわけにもいかぬ」

王妃はそう言うと、どこからか金色の物を取り出して、俺の前へ差し出した。

「鍵？」

金色に輝いていたのは、見事な細工の入った鍵。これだけでもかなりの値段がするものと思われる。

「うむ」

「一体どこの鍵でしょうか？ それとも、どこかダンジョンへの入り口への鍵とか……」

「ほほほ——ダンジョンとな。それは妾の寝室の鍵じゃ」

「ええっ！」

未到達ダンジョンよりヤバい物だった。話に聞き耳を立てていた、貴族達が一斉にざわめく。

「母上、お戯れもほどどになされては？」

王女が割って入ってきたのだが、王妃は全く意に介さず会話を続けた。

「妾の身体では不服かえ？」

「いくら何でも、そりゃ拙い^{ます}のでは？」

「本人が問題ないと申しておるのだから、問題ないであろう？ それに金に替えられないとなれば、もうこれしか思いつかん」

突然何を言い出すやら。そういえば、ユーパトリウム子爵夫人も似たような事を言っていたな。

この世界の王侯貴族は、「金じゃ買えないものイコール自分の身体」と考えているようだ。

そりゃ俺が騎士なら、「主と褥^{しとね}を共に」——なんて最高の名誉かもしれないが、生憎、俺は騎士でもないし忠誠も誓っちゃいない。いやいや、その前に国王陛下が——と陛下の方を見ると明後日の方向を見て、知らんぷりを決め込んでいる。

だめじゃん！！

どうも、この陛下は王妃を持て余しているようだ。

面倒くさい王妃を俺に押し付けようとしているようにも見える。

この国は大丈夫なのか？ 要らぬ心配をしてしまうが、王妃に子供が出来ないのは、このせいもあるのではないだろうか。

俺の出した姿見の前でポーズを決める王妃。

そりゃ、美人でスタイルもいいよ。こんな美人の王族とゴニョゴニョ出来るなんて、そりゃ男なら夢見るのは間違いない。

だが、こんな恐ろしい女に裸で迫られても、俺の息子はシオシオのパー（死語）だ。

何か話題を逸らしてなんとか誤魔化さないと……俺の頭にあるワードが閃いた。

「王妃様、寝室といえば、よく眠れるようになりましたでしょうか？」

「おおっ！ それもあつたな！ その事も礼を言わねばと思うておったところだ。其方のお陰で快眠を貪っておる」

「それは、よろしゅうございました。それでは、原因はあの花瓶で間違いないという事ですね」

「うむ」

王妃は、どこからか扇子を出して、パツと広げた。

扇子か——この世界にも扇子はあったのか、それとも帝国にいる奴が広げたのか？

「それでは、あの花瓶は処分なされたほうがよろしいかと。出処は判明しているのでしょうか？」

「それよ！ あの花瓶を贈ってきた伯爵に尋問したところ、呪いが掛かっていると承知で、妾に寄越したそうだ」

尋問——って多分拷問か、そういう魔法の類があるんだろうな……。

「えー、それじゃ……」

「うむ——伯爵家は閉門。男子は全て打首、女子は王都所払いとなる」

周りにいる貴族達がざわめく——。

平然とそんな事を言う、この王妃はやはり恐ろしい。まさに王家

が具現化したような方だ。

「それじゃ、お取り潰しですね？」

「うむ」

知っててやったってことは、王妃の暗殺未遂事件だからな。

「しかし女子所払いっていつでも、何の生活力のない貴族の女が城壁の外に出されても……」

貴族が、咎人の家族を保護しようとすれば、反体制派の仲間と疑われる。

元貴族を売りに高級娼館へ流れるか、それとも大店の商人に囲われるか……どちらにしても、まともな生活は出来そうにない。

「それは妾の知った事ではないな。其方のお陰で反体制派の貴族を芋づる式に粛清できる——と、この手柄だけでも褒美に十分に値する」

「それじゃ、何か他の物で……」

「ん？ なんぞ申したか？」

ニコニコ笑う王妃の目が光り、再び凄いプレッシャーが俺を襲ってくる。

俺の横にいたベルが、毛を逆立てているのだが、彼女を抑える。

「おいベル、襲いかかるなよ」

しかし、こりゃいったいどうしたらいいんだろうなあ……。

俺が頭を抱えていると、遠くから救いの声がやって来た。

「一大事でございます!!」

やって来たのは汗だくになって、ライトアーマーを着た役人だ。

お城の役人とは格好が違うので、外からやって来たのかもしれない。

「陛下、一大事でございます!!」

「なんだ、騒々しい!」

王妃が、やって来た役人に声を上げた。

「王妃様——」

王妃の前に役人が膝を突くと、事の次第を語り始めた。

「国境の街ソバナへと続くベロニカ峡谷で50カン（約100m）に渡り谷が大崩落! 完全に街道が埋まってしまった!」

「なんだと!」

王妃が手に持った扇子で、自分の掌を叩いた。

さすがに、奥の玉座に座っていた国王陛下も立ち上がった。

「ベロニカ峡谷が?!」 「イベリスへの橋も落ちたというではないか?!」 「これは、拙い事まずに……」 「ソバナと言えば、塩の供給が止まるぞ?」 「南からの海塩の供給は?」 「イベリスの橋が落ちたではないか」 「まずは、そちらの復旧を急ぐべき……」

俺たちを囲っていた貴族や騎士達が騒ぎ、城内は喧々囂々となった。

あの時の大雨が橋を流してしまったが、それだけではなく、がけ崩れも起こしていたのか。

だが、これは逃げるチャンスだな。

「あのく、なんだか皆さんお忙しくなりそうなので、我々はここらへんでおいとまいたします」

だが、帰ろうとした俺にがっしりと王女が抱きついてきた。

「其方! まさかこのまま、在所へ帰ろうと言うのではあるまいな?」

「私のような辺境の魔導師は、お役に立てそうもありませんし」

「王国の危機だというのに、其方は何も思わんのか？　それでも臣民かえ？」

「いやいや、王侯貴族の方々から、とても身に余る歓待を受けましたので」

「其方！　意趣返しのもりかえ？！」

「いえいえ、滅相もございません。それに、王都には立派な騎士団や軍があるではありませんか。そちらを投入なさっては？」

「軍が王都からいなくなっただとなれば、ここぞとばかりに共和国に侵攻されるじゃろが！」

それを聞いた貴族達が、またざわついている。

「その通りじゃ……」　「いや、ベロニカ峡谷が塞がったと帝国に伝えられ、越境されてソバナに侵攻される可能性が……」　「ソバナを落とされると、非常に拙い事まずに……」

貴族達の言うとおりだな。その峡谷が塞がっているなら、王都からソバナって街へ援軍が送れないって事になる。

「それじゃ、そういう事で」

「待つがよい！　これで、イベリスとソバナへの街道が絶たれた！

王都は民を養うために膨大な物資を四方から輸入しておる！　それが2箇所絶たれたという事は、手足をもがれたも同然じゃ！」

王女が俺にぶら下がって引きずられている。

「そりゃ、復旧に1年と掛かってしまったら、王都は餓死者で溢れてガタガタになるでしょうね」

「それを其方は、なんとも思わんのか？」

「そう言われましても」

「これは、すでに王国そのものの危機じゃ！」

「しかし、リリース様。先程、臣民と申されましたが、我々のような

地方の平民にとって、ここにいるような、やんごとなき人々の首がスゲ変わっても、我々の生活に何の支障もございませんし……あそこの玉座に座るのが——えーと、誰でしたっけ？　そう！　帝国皇帝ブリュンヒルド様になるだけでございませよ？」

「貴様あゝ！」

王女が、突然俺の腕に噛み付いた。

「あいででで！　何をするんですか？　リリース様！」

「ふがふがふが！」

王女とすったもんだしていると、玉座を降りた国王陛下が俺の所へやって来た。

「儂からも頼む！　其方呼び出して見世物にした事も、命の危険に晒した非礼も詫びる！　どうか、この通りだ！　王国を救ってくれ！」

平民に頭を下げる国王に貴族達がどよめく。

「国王陛下が、平民の私などに頭をお下げになられては……」

「いや、民が助かるなら、こんな頭などいくらでも下げる！　国王などと玉座に座っていても、儂には何も出来ん。だが其方の操る鉄の召喚獣であれば、きっと役に立つ！」

そりゃそうだ。あの召喚獣と称しているのは、元々それ用の機械なのだから。

しかし——国王が頭を下げたのに、それを無下にしたのは、今度はこちらが悪者になってしまうなあ。

貴族達からの反発もあるだろう。だが、国王は頭を下げたのだが王妃は知らんぷりだ。

「ケンイチ——妾からも頼む……」

そう言う王女は——それなりに申し訳無さそうな顔をしている。

今回の試合には彼女は関わっていないようだ。

それにしても——短気を起こして、王族を敵に回さないで良かったな。

もうダリアにも、アストランティアにも帰れなくなって、帝国へ亡命——なんて事になって国境へ向かったら、通行止めの峡谷とやらで捕まっていたかも……。

でも、重機とアネモネの魔法で谷を完全に崩して追手を阻み、時間稼ぎをした後で追跡をかわせたか……。

しかしそうなる——峡谷の復旧には膨大な時間と多大なりソースを使う事になり、国境の街ソバナを失い、この国はマジで傾く事になる。

俺は大罪人としてこの国を追われ、カダン王国の民からも恨まれる事になっただろう。

頭を下げた国王のファインプレーだ。ファインプレーには賛辞を送るしかない。

今回の事はムカつくが、男として国王のメンツは立ててやりたい。

「……ふう……：……しょうがねえか。おーい、皆！　ちょっと回り道になっちゃおうが、いいか？」

「ケンイチがそう言うなら、いいよ」

「構いません……」

「遠回りにゃ！」

「にゃー」

皆に異論はないようだが、ニャメナはぶっ倒れたままで、ちょっと心配だ。

「「「おおおっ！」「」」」

貴族達が湧くと円陣を組んで、今後の打ち合わせを始めた。

いち早く部隊を編成して、一番乗りをする事が出来れば、国王陛下

下や国民にアピール出来るからな。

人気取りに最高のイベントだ。国の事ではなく、自分達の人気取りを一番に考えているところが貴族らしい。

しかし、気になることがある——貴族の仲間や騎士団からも犠牲者が出たのだが、それに対する反応が薄い。

全て織り込み済みなのであろうか？

俺が思案していると、王妃が床に座り込んでいる魔導師の所へ行った。婆さんの孫らしいあの魔導師だ。

「メリッサ・ラナ・ナスタチウムよ」

「ははっ！」

魔導師が、王妃の前で膝をついて畏まる。

「最近、慢心していたようだが、ちと懲りたであろう。今日の醜態を雪ぐ機会を与える。あの者に同行して、作業の手助けをするがよい。其方の持つゴーレムなら、土木作業を支援する事が出来るであろう？」

「ははっ！ 王妃様のお慈悲を心に刻み、邁進いたします」

「うむ、心してかれよ」

王族の命令とはいえ——俺と家族の命を狙った奴と遠出か、まさに呉越同舟だな。

もしかしたら、この騒ぎは——辺境に突如現れた怪しい召喚獣を使う魔導師の力の程を知るために、王妃が仕組んだ事なのか？

それを使って、天狗になっていた魔導師の鼻も折った。王女を俺のところでは好き勝手させていたのも、そのためか？

だが、王女が止めに入らなかったら、俺はマジで城を半壊させて逐電してたぞ？

リスクがデカすぎるだろう。

見れば国王陛下は人の良さそうな普通のオッサンっぽいし、実質の権力はこの王妃が握っているのだろうか？

いつも王妃が色々とやらかした後、国王が頭を下げて事態の收拾をする——本当にそうならば、ちょっと陛下が気の毒だ。

だが王国の危機に、とりあえずの対策が練られる事になって貴族達にも安堵の表情が見える。

——そう思ったのだが、群がっている貴族達をよく見れば……紙切れのような物を持っている。

「プリムラ、貴族達が何か持っているな。紙切れだと思うが……」

「ああ多分——賭札だと思います」

「なに？ 賭け?!」

「おいおい！ 見世物だけじゃなくて、賭け事の駒にされてたのか？ その旨を王女に問い詰める。」

「リリース様！ 我々を賭けの駒扱いですか?!」

「そう怒るな。これは普通に行われている事じゃぞ?」

「それで——リリース様は、どちらにお賭けになられたので?」

「当然、其方じゃ！ 貴族連中は皆、『優美なるメリッサ』に賭けたが——其方が凄い魔法を使う事を、誰も知らぬからの！ 大儲けじゃぞ？ はははっ!」

よくもぬけぬけと……だが、さすがしたたかだ。

プリムラによると——このように貴族の前で魔導師や騎士が試合をするのは、結構あると言う。

簡単に言えば就職活動——売り込みだ。こんなに素晴らしい魔法や、剣技をもってますよ——とアピールして貴族に雇ってもらうためだ。

それに著名な魔導師や騎士に勝負を挑み売名行為を働く者も多いと言う。

普通は返り討ちに遭うようなのだが……そのため、今回のような試合というのも珍しくないらしい。

貴族達も浪人達の売り込みを見ているつもりなら、それを見物したり賭けの対象にしても罪悪感等はないという事か。

彼等からすれば犠牲者が出たことも、賭けレースのサーキットで事故に巻き込まれて不運だったね——ぐらいの感じなのか？

こういう行事を知っていたプリムラも、まさか俺達が戦う羽目になるとは思っていなかったという。

だってなあ、ただの謁見だと思ってたし……マジで。

謁見も勝負も終わり、貴族達があわてて帰り始めた。

これから物資と人員を急遽集めなくてはならない。国としても動く必要があるだろう。

子爵領での水路工事と同じように、各領から数百人の人員を突っ込めば、それを支えるための物資が必要になる。

その確保と輸送が急務だ。だが今回その仕事をするのは国王陛下。下。

おれは、それに協力するだけだ。

処置が遅れば国が傾く案件なのだから、可及的速やかに事が進むだろう——多分。

帰り支度を始めた貴族の中から1人の男がやって来た。

金糸が施された青色の上下を着て、白髪交じりの長い髪を後ろで束ねている初老の男。

「恐れ入りますが、私ユーフオルビア伯爵と申します」

「はい、魔導師のケンイチです。初めまして——ご丁寧にどうも」

物腰は柔らかそうで、まともそうな貴族だ。だが、信用出来ないけどな。

あんな出来事の後で、貴族を信用しろという方が間違っている。

91話 狂気と優しさ

王都へ続く街道で崖崩れらしい。

俺達が王都へやってくる時にも橋が落ちていたしな。多分、あの大雨が引き金になったものと思われる。

この都は膨大な民の食料を四方から輸入しているという。このままでは物資の供給が滞り、餓死者が多数でると予測される。

王宮でとても素敵な歓待を受けた俺は、そのままバックレようとしたが、国王の謝罪と説得を受けて、崖の崩落現場へ向かう事になった。

だが、1人の貴族に呼び止められた。男はユーフォルビア伯爵というらしい。

「ケンイチ殿は、そちらの小さな魔導師様を、アネモネと呼ばれましたね」

「はい——確かに、あの子はアネモネですが……」

「私、ユーフォルビア伯爵は、大魔導師白金のアルメリア様と懇意にさせていただいております……」

「そのアルメリアという魔導師は辺境で病死なさったらしいと……」

「え？ 行方不明なのは存じておりますが、病死なさったのですか？」

貴族はかなり動揺をしている。その大魔導師と何か関係があったのかもしれない。

「いや、そのアルメリアさんだとは確証はないのですが」

その貴族によれば、アルメリアという魔導師から手紙をもらい、

辺境でアネモネという子供を産んだという連絡を受けたようだ。

「こういう物もあります」

俺は、アイテムBOXから至高の障壁ハイプロテクションの魔導書を取り出して、貴族に最後のページを見せた。

「こ、これは確かにアルメリア様の直筆——これをどこで？」

「これは、ユーパトリウム子爵から譲り受けました。先代のユーパトリウム子爵が旅の魔導師から買った物だというお話でした」

「あの若さで、至高の障壁ハイプロテクションという大魔法を使いこなし、名前もアネモネ——これはもう、アルメリア様の忘れ形見で間違いないのでは？」

「俺も、そう思うんだが……おーい、アネモネ」

アネモネが俺の側にやってきた。

彼女に伯爵様を紹介して、白金のアルメリアという魔導師の事を改めて話した。

「どうでしょう？ 貴方がその気であれば、我が伯爵家で支援して、さらなる魔導の高みに——」

「興味ない」

「は？ ——いや、大学等で学べば、より高度な魔導の世界が……」

「魔法ならケンイチから教わるから要らない。それに学校の先生より、賢者のケンイチの方が色々な事を知っていると思うし」

「……は？ 賢者？」

俺達の会話に王女が割り込んできた。

「その者と数日話したが、妾が舌を巻く程の博学じゃぞ？ あれだけの知識を、大学の教師共が持っているとも思えん」

「王女殿下がそう仰るのであれば……」

「だから要らない」

アネモネはつつけんどんだ。そもそも、こんな事態に巻き込まれて、貴族に良い印象を持てっていう方が間違っている。

「呆れた！ 魔法を独学で学ぶ？ そんな事出来るわけないじゃない！」「

「独学？」

突然、会話に入ってきたメリッサという魔導師の言葉だが、アネモネが聞きなれない単語に首を傾げている。

「独学ってのは1人で勉強する事だよ」

「1人じゃない！ ケンイチも一緒！」

「賢者か何かしらないけど、あの訳の解らない召喚魔法だけしか使えないのよね？」

ぐっ、鋭い！ あの戦いだけで、他に魔法がないってのがバレたようだ。

「それでも、憤怒ファイヤーボールの炎も覚えだし、爆裂魔法エクスプロージョンも覚えた！ ケンイチ、腕を出して！」

さつき王女に囓られた傷を見せる。

「回復ヒール！」

彼女の魔法に導かれるように、俺の腕に青い光が集まってくる。

「――ほら！ 回復ヒールだって使えるし！」

アネモネの魔法で、血が止まり痛みがひく。普通、かみ傷は治りにくい、魔法なら跡形も無く治るのかもしれない。

ついでに、ニヤメナに囓られた所にも魔法を掛けてもらう。

「そんなのは、全部魔導書で覚えたものでしょ？ それじゃゴーレムは？ ゴーレムを操る魔法に魔導書はないわよ？」

ゴーレム系の魔導書はないのか？ それじゃ、簡単に覚えるってわけにはいかないな。

「そんなの平気！ 本が沢山あるし！」

「本？」

「おっと！」

不思議そうな顔をしている魔導師を横目に――アネモネと一緒に後ろを向いて、ひそひそ話をする。

「アネモネ、王家の図書館から複製した話は内緒な？」

彼女が慌てて口を押さえた。

「俺は無理に彼女を学校へ行かせたりはしないよ」

「ふん、好きにすればいいわ」

随分と鼻っ柱が強い女だな。あの婆さんもこうだったのか？
しかし、あの性格じゃ――スタイル良いのに勿体ない……。

「ケンイチは、ああいう服が好きなの？」

「えっと、あの……」

「私も、ああいうのを着る！」

「いや、君にはちょっと早いから」

出る所が出て、引っ込む所は引っ込んで、脚がスラリと伸びてからにしてほしいね。

そんな事より――遠出をすると決まれば、ちょっと準備がいるな。
件のベロニカ峡谷は王都より東へ200km先らしい。

どういう場所かも解らんし、情報も欲しいな。

その前に色々と用意しなければ……お城の中庭に滞在しつつ、色々と考えていた事があるので、実行に移す。

「リリス様、魔導具に詳しい魔導師様がいらっしやいましたよね？」
「カールドンじゃな」

「その方に、もう一度会わせていただけないでしょうか？」

「承知した、奴の所へ案内してやる」

「いいえ、場所だけ教えていただければ……」

「其方が何をするのか、妾も興味があるからの」

だが、俺と王女の会話を聞いていた王妃様がへそを曲げたようだ。

「リリスには頼みごとをして、妾には何も頼みごとをせぬのかえ？」
「え……」

そんなことを急に言われてもな。

「それでは王妃様。峡谷の土砂を排除する普請を、私が手伝う事になったのですが、色々と用意しなくてはなりません。そのためには軍資金が必要です」

「なるほどな。妾に金を用意しろと？」

「いいえ、王宮で使っていない家具はありませんか？」

「家具？ それはあるが……」

王妃は扇子を開いて顔を覆い、訝しげな顔をしている。

「それを軍資金代わりにいただきたいのです」

「売って金にするのかえ？」

「最終的にはそうなりますが、売却するためには、時間がかかります故、当面は私の金を使います」

「慌てて売ろうとすると、足下を見られるからな……」

「その通りでございます」

王妃が斜め上を見て、何かを考えている。俺の真意を汲みかねているのだろう。

まあ確かに、シャングリ・ラというわけの解らない能力を使う事

を行動原理にしているのだ。

常人には理解不可能だろうな。

「金が必要なら、妾が用意するが……？」

「不要な物を売却して、金にできるのであれば、双方にとって利益になるでしょう」

「確かに倉庫に山積みになっており、邪魔だから……よし、それでは早速倉庫へ案内しよう」

「あの、先に魔導師の所へ……」

「ん？ 何ぞ申したか？」

「いいえ」

有無を言わせてくれない。

「皆は、家に戻っていてくれ」

「解りました」

「にゃー」

ミヤレーの肩にはニヤメナが担がれている。

「ミヤレー、ニヤメナは大丈夫そうか？」

「多分、大丈夫だにゃ」

「なんだってまた、こんな時に……」

「多分、ケンイチのせいにな」

「俺の？」

彼女の話では、レッサードラゴンという大物を一発で屠ったので、過剰な興奮状態に陥り、それで発情期が早まったのではないか？

——という事だった。

「ウチも、時期が近かったらヤバかったにゃ。あんなの見せられたら、獣人の女は我慢出来ないにゃ」

「そうなのか……まあ、ニヤメナを頼むよ。酒も後2本ぐらい渡し

ておくか」

「もう、トラ公はしょうがないにゃ」

ニャメナに恩を売れそうなミャレーは機嫌が良い。
だがそれと対照的にアネモネが不機嫌だ。

「すぐに戻ってくるから、心配いらないよ」

「それでも、心配」

「別に、捕って食われるわけじゃないし」

「にゃはは、別の所を食われるにゃ」

「子供の前でそういう事を言うんじゃない」

「子供じゃないから！」

子供って言われて怒るのは、子供の証拠なんだなあ。

それに大丈夫に決まってるだろ——多分……大丈夫だね？

「それじゃ、王妃様と一緒に行くか？」

「……それは、怖いから止めとく……」

アネモネも怖いのか。

それじゃ、まずは軍資金作りといこう。コ〇ツさんを使えば文字通りの100人力。

何せ、本来はそのために作られた文明の利器なんだからな。

それを異世界へ持ち込んで、とんでもない事に使っているのは——私です。

重機を動かすには、また大量の燃料が必要になるし、他にも必要な物が増えるかもしれない——それを揃えるためには金が必要だ。

そのために王宮にある不要な家具を、シャングリ・ラへ買い取らせて、金をいただく。

普通に金をもらうより、アンティーク家具を譲り受け査定してもらったほうが金になる。

王家としても、要らない家具を処分できるのだから、まさにWIN WIN。

だが俺と王妃様の後ろから王女もついてくる。

「リリス、なぜついてくるのだ？」

「母上とケンイチを二人きりにするのは危険じゃ」

「それって、どういう意味ですか？」

「いろんな意味で危険だと申しておる」

王女の言葉が冗談だとは思えん。

俺と王女の会話にも王妃は背中を向けたままだ。何を考えているかは不明。

「リリス様、私は生きて戻るんでしょうね？」

「とりあえず、妾と一緒にいれば、母上も無茶はせん」

王女との会話を聞いていた王妃が振り向くと大声をあげた。

「それだ！」

「な、何がでございますか？」

「リリスは名前を呼んで、何故妾は王妃なのだ?!」

「えゝ? それではなんと呼びすればよろしいので？」

「アマランサスだ。アマラでよいぞ」

「それでは、アマラ様とお呼びいたしますが――そんな事で王女と張り合わなくてもよろしいのでは？」

「……」

王妃は黙っているが、母娘とはいえ血は繋がっておらず、実質ライバル。

張り合いたくもなるのだろうか――全く何を考えているか不明。

美人母娘に挟まれて暗い廊下を進み、行き止まりにあった倉庫へ

ついた。

王妃が茶色のニスを塗られた両開きの扉を引くと、錆びついた蝶番の音と共に開いた。

殆ど使っていないのだろう。窓のない暗い部屋に家具やら、椅子やらが山積みになって、埃をかぶっている。

床も埃だらけで、俺達の足あとが残る。

「おおっ！ ケンイチ、これがよいぞ」

王妃が小ぶりで棚付きの机を指さした。

「中々、良い物ですね」

「ここを見ているがよい」

王妃が指で埃を拭い、指差したところに何か書いてある。おそらく、何かで傷を付けたものだろう。

「ア マ ラ……かな？」

「そうだ。妾が小さき頃に使っていた勉強机だ」

「え？ これをお売りになってよろしいので？ 思い出の品では……？」

「だからこそ、手放したいのよ。これを見ると、小さい部屋に閉じ込められて、来る日も来る日も、勉強させられた、あの地獄のような日々が蘇るようだ」

王妃は小さい頃に、このお城にいたのか……ということは、このお城のお姫様って事になる。

もしかしたら、あの国王はマ○オさんなのか？ まあ、それじゃ立場も弱いかな。

だが側室を迎えて、その子供も王女として認められているし、国王も王族って事か……。

ひょっとして近親婚？ しかし、そんな込み入った事を聞けるはずもない。

「そうですか……では——」

俺は机をアイテムBOXへ収納すると、査定に入れた。

【査定結果】 【アンティーク机 買い取り価格2000万円】

ひょえっ！ やっぱり小さい机でも高い。

次は立派な飾りが彫られた、ガラス入りの扉が付いた本棚だ。

【査定結果】 【アンティーク本棚 買い取り価格6500万円】

どひゃー、そりゃ本物の王族が使っていた、本物のアンティークだからな。

こんなの元世界なら博物館級だろう。

「あと、こいつの処分に困っておるのだ」

王妃が指さしたのは、埃で塗れているが微かに金色が見えている天蓋付きのベッド。

骨組みだけになっているが、全周に彫刻が彫られて、見るからに只物ではない。

「これは……」

「これは、先代の王妃が使っていたベッドだ」

「ええ？ これを手放してもよろしいので？」

「臨終までこのベッドで横になっていたのだぞ？ そのベッドに誰が寝たいと思うのだ？」

「確かに、そう言われればそうですが……」

本当に誰も使いたがらないので、供養のために燃やそうかという話もあったらしい。

「いや——燃やすのであれば、いただきますよ」

「うむ、どこへ売るのは知らぬが、先代の強欲が移らねばいいがの」

「そういう、お方だったのでは？」

黙っている王女の方を向くと、彼女も頷いている。

王妃も色々と苦勞しているのだな。まあ、それよりも査定だ——。

【査定結果】 【アンティークベッド 買い取り価格1億5千万円】

どへー！ さすが、元世界風に言えばマリー・アントワネット級が寝たベッドって事になるからな。

歴史的な遺物と考えれば、これでも安いかも……。

「ありがとうございます。これで十分でございます」

「もう、よいのか？ 其方は欲がないの……」

だが、王妃は何かを考えている。

「王妃——いや、アマラ様、何か？」

「うむ……其方、ネズミ退治に毒を使ったと聞いたが？」

「あゝ、毒をお譲りする件であれば、お断りいたしますよ」

「何故だ？ 金なら言い値で払うぞ？」

「母上！」

割って入ろうとした王女を、王妃が止める。

「私が売った毒で見ず知らずの方が亡くなるのはぞっとしませんし、回り回って、お二方の口に入るかもしれないよ。私の故郷では、人を呪わば穴二つ——といえます」

「穴とはなんだ？」

「死体を埋めるための穴ですよ。ダリア周辺では、『呪いは、小鳥が巣に戻るように自分に返ってくる』というらしいですよ。せつか

く知り合いになった美しいお二方が亡くなられては悲しいですからね」

とりあえず、ゴマをすっておく。

「ふむ、解った——其方が、簡単に毒を売るようであれば、付き合いを考え直さねばならぬところだった」

王妃に試されたようだな。危ない——金欲しさに毒を簡単に売り渡すような者と判断されれば、刺客が送り込まれたかもしれない。

「アマラ様、いつもそうやって人を試したり、真意を確かめる企てをしておられるのですか？」

「はは、王族故の悲しい性だ、^{さが}許せよ——人は追い詰められた時に本性を出すからの。敵か味方か、確かめねばならぬ」

俺や家族にした事を多少は悪いとは思っているのか？　だが行動原理が、王族らしい王族といえる。

「しかし謁見の間で、ドラゴンを使って試合をさせるのは悪ふざけが過ぎるのでは？　私の小さな魔導師が至高の障壁ハイプロテクションを使わなければ、全員死んでおりましたよ？」

「ふふ……まさにの。だが、かなりの実力者と報告を受けていたから、敢えてぶつけてみたのだが？」

「王妃様……」

「おおっ！　怒ったのか？　怒ったのかえ？　ならば、その怒りを妾の身体にぶつけてみるか？　王族の肢体を蹴ってみたいである？」

王妃はそんな事を言いながら、俺に抱きついてきた。

挑発に乗るなあ——こういう人間は、人を挑発して遊んでいるだけだ。

「謁見の間も盛大に壊れましたが？」

「その通りよのお——結界が張ってあったとはいえ予想外に壊れた

わえ。敷石は交換が必要だろうの。だが其方を闘技場などへ呼び出したら、絶対に逃げておったろ？」

「まあ確かに……」

「多少の経費は掛かったが、其方とその家族がドラゴンすら退ける力を持つ魔導師だと判明したぞ？　これは万金に値する」

この世界で優れた魔導師は戦力になるし、国に貢献が求められる。王族としても本当の実力を把握しておきたいのだろう。

それでも、やり過ぎではないのか？　王族の務めと退屈しのぎの悪ふざけが一体になった結果なのだろうか。

「貴族に死人も多数出ましたが？」

「全員、承知の上であそこにいた者ばかりだ。強制したわけではないぞ。魔導師の売り込みや売名の試合など珍しくないからの」

「らしいですね」

「むしろ、それに巻き込まれて死んだなどと、笑い話にしかならぬ」
そういう事なのか。暇人の貴族達が売り込みに来た魔導師の試合を見物にやってきて巻き込まれた。

しかも、受けた相手が『優美なるメリッサ』という大魔導師、激戦になるのは必至で、その対策を怠った奴が悪い……ということか。

「騎士達が死んだのは？」

「王族を守って死ぬのは騎士の誉れ。レッサードラゴンを一撃で仕留める者に躊躇なく向かっていったのだから、褒めてやらねばならぬ」

これが異世界——王族の思考なのか。ちょっと日本人には相容れないものがあるな。

「……」

王妃が俺の首に手を回し、身体に抱きついている。鼻腔を擦る甘

い匂い。

何かの香料か、それとも魅惑成分を含んだりしている何かか。

「ふふ——何の変哲もない、普通の男の身体よのう」

王妃が俺の身体を——背中から脇腹、そして胸へと撫で回す。

「王女が止めに入らなかったら、お城が半壊した挙句、国が傾いていましたよね？」

「——ほんにのう危機一髪だの」

俺の台詞にも全く動揺する気配はない。

「その時は、どうなさるおつもりでした？」

「リリスは優しいからもう——其方達の命を助けるべく、必ずや間に入ると思っていたわえ」

その話を聞いた王女が、顔を赤くして下を向いている。そこまで計算ずくか？

「国が傾いたら、王族の責任が問われておりましたね？」

「その時はやむを得んのう——玉座を追われたのであれば、其方に困ってもらえばよいであろう？」

王妃が俺に抱きついたまま、身体をくねらす。

「母上、悪ふざけが過ぎますぞ?!」

王女が王妃を引き離そうとするのだが離れない。

「私が、貴方様を助けるとお思いで？」

「ふふ——血がつながっておらぬ子供に獣人が2人——困っている女子おなこを見ると、手を伸ばさずにおられんのだろ？」

俺とアネモネを見れば、血が繋がっていないと一目で解る。人種が違うし、全然似ていないしな。

「そんな事はありませんよ。私だって相手は選びますから」
だが、この際だ色々聞いてみるか――。

「最初から私の能力を確かめるために、こんな茶番を？」

「その通りだが、最初は半信半疑だったの。大抵この手の噂でやってくるのは、凡なる者ばかり――というのが普通だ。だが王女の報告で、本当に鉄の召喚獣を使う事や、妾の寝室の謎解きをした手練、本物だと確信した」

「それで、あの女魔導師をけしかけた？」

「その通りだ。あの者は最近驕り高ぶっておっての。あれでは自滅する可能性が高いため、仕置が必要だと思うたわけだ」

王妃の言う自滅というのは――悪事に手を染めたり、魔導をあらぬ方向へ使う――つまり『禁呪』への一里塚だ。

そのために急遽、貴族達を集めたり魔導師を呼んだりで時間がかかったようだ。

「のう――ケンイチ。この身体のどこにその秘密があるのか、妾にちと見せてみぬか？」

「お断りいたします」

「つれないのう――妾が嫌いか？」

「嫌いです」

その言葉を聞いた王妃は、一瞬で顔をクシャッと変える。そして俺に背中を向けると、顔を掌で覆って震え始めた。

嗚咽を漏らしているようだ――。

「嘘泣き乙」

俺の言葉で嗚咽がピタリと止んだ。俺は20歳以上の女の涙は信用しない。

「ちっ！　やはり敏腕の狩人も、狩りを怠れば腕が落ちるものよのう！」

「やっぱり、嘘泣きか……」

「おおっ！　怒ったのかえ？　怒ったのかえ？　さあ、妾の身体を蹴るがよい！　どんな行為も其方の思うがままだ。家族の命を狙った妾を、どうしても許せぬと申すのであれば、鋭き刃で腹を割き子袋を引きずり出してもよいのだぞ？」

再び王妃が俺に抱きついてきた。

だめだ。こういう人種には嫌味も何も通じない、無視するのが一番。

「お断りいたします」

「即断かえ？　もうちと、悩むとかはないのか？」

俺の即断に王妃は不満顔だ。

「ありません」

「うら若き王女の願いを拒否する男が、母上の願いを聞くはずがないでしょう」

「若さが最強の武器と思うているうちは、子供よのう——若さ“だけ”が取り柄とならぬようにの」

「「ぐぬぬ……」」

2人の王族の間に火花が飛ぶ。

「いやはや、王族というのは色々大変なのでございますね」

「それはそうだ。国内外に目を光らせ、人心を把握し、そして殺すか殺されるか——だからな」

「でも、それは森の中でも一緒にございますよ。私達は魔物を狩り、魔物は私達を襲ってくる」

「だが、そ奴らは罌を仕掛けてきたり、毒を盛ったり、呪いの品を持ってきたりはせんである？」

王妃のやるせない表情をみると、そういう事が多々あるようだ。実際に呪いが掛かった壺が、王妃の寝室へ持ち込まれていたのだから。

「では、そろそろ、カールドンという魔導師の所へ……」

「おや、ここでは何もせぬのか？」

王妃が俺に軽いくちづけをした。意外としつこい。

だが憂いに満ちた美しい瞳に光るまつ毛——その下には小さい泣きぼくろ。

顔だけみれば、絶世の美女。顔だけは——大事なことになるので二回言いました。

「母上！」

「アマラ様、お戯れを。こんな所を誰かに見られたらいかがなさいます」

「構わぬ、陛下もそろそろ、うら若い側室が欲しかろうて」

「その側室に権力を握られても、よろしいので？」

「はは——それが望みであれば、妾も公務から引退出来て万々歳よ。やっと晴れて自由の身になれるわ。ただし我が目に適う人物であれば、という注釈はつくがの」

逆にいえば、目に適わない輩が座を狙ってくるのであれば容赦なく迎え撃って叩き潰す——ということだ。

王妃が、俺から離れて言葉を続ける——。

「それに、そろそろ男子が生まれねば王家が危ない。陛下は妾を真剣に抱いてはくださらぬようであるし……」

それは、王妃様に問題があるのでは？ ——と言いたところだが、口を噤む。

そんなことを言えるはずもない。

「そう考えると、ルクリアの死は、国の大きな損失だったの」
今は亡き、王女の実母——側室だった方らしい。

「新しい側室よりは、リリスの嫁ぐ姿を見る方が早いかな——」
その話を聞いた王女は、横を向いてしまった。どうも、その話は聞きたくないようだ。

まあ意にそぐわない男に嫁がなければならぬのだ。いくらお家のためとはいえ、少なからず抵抗はあるだろう。

「もう、お相手は決まっておられるので？」

「王家の傍流の血を引いた公爵家がある。そこから相手を迎える話が進んでおる」

ここで話されているのは、国家の行く末を決めるトップシークレットだな。

とてもじゃないが外では話せない。

「リリス様は、お気に召さぬ様子ですが……」

「気に入るも気に入らんも、王族の務めだからの」

おそらくは、自分もそうだったので、王女にもそうしろと言いたいのだろう。

話はここで終了。

なるほど、この王妃は優しさと狂気が複雑に絡み合った方。こりゃ逆らったり、怒らせると怖いわけだ。

選んだアンティーク家具をアイテムBOXへ入れると、カールドンという魔導師の所へ向かう。

王女の案内だが、王妃も一緒だ。

場所は——階段の下の扉から入る半地下。階段を降りると高い所に明かり取りの窓があるが、あそこが地上だろうか？

しかし、この造りだと雨が降ったらここへ流れこんできそうだが。

そして、四隅を鉄板で補強してある分厚い木で出来た扉の前にや
つて来た。

ここが、カールドンさんの工房か。

92話 出発準備

峡谷へ向かう前に、魔道具の事を尋ねるため、宮廷魔導師のカールドンさんの工房を訪れた。

場所は――王宮の外れ。階段の下の扉から入る半地下へ潜る。

そして、四隅を鉄板で補強してある分厚い木で出来た扉の前にやって来た。

「この部屋じゃ！ カールドン！ おるかえ？！ リリスじゃ！」
部屋の奥からバタバタと、走ってくる音が聞こえて扉が開いた。
出てきた魔導師は、かなりラフなツナギのような服を着ている。
髪もまとめていなくて、バサバサだ。のんびりとしているところ
だったのかもしれない。

「これはリリス様！」

だが、彼は一緒にいる王妃を見て驚いたようだ。

「王妃様まで！ このような格好でお許し下さいませ。こんな辺鄙な場所へ何の御用でございますか？ 王女殿下ご依頼の魔道具はまだ出来ておりませんが……」

「別件じゃ」

「カールドン様、貴方が魔道具にお詳しいと聞いて、お聞きしたい事が――」

「おお、ケンイチ殿でしたな！」

俺はアイテムBOXから、いつも燃料を生成するのに使っている『不』型の魔道具を取り出した。

「これは液体の成分を分ける魔道具なのですが、これと同じ物を作るか——もしくは、どこかで購入する事はできないでしょうか？」

「ふむ？ ふむふむ——おおおっ！ これは懐かしい！」

左目に嵌ったメガネをくりくりして眺めていた彼だったが、突然何かを思い出したように大声を上げた。

「え？ 知っておられるのですか？」

「これは、おそらく私の祖父が作った魔道具だと思います。私が子供の頃に見た記憶があります——いや、この意匠は間違いない」

「それでは、同じ物を製作していただくというのは……？」

「いいえ、祖父は既に亡くなっておりまして——」

「そうですか……」

だが、カールドンが何かを思い出したようだ。

「いや、さてよ？！ そういえば、売れ残りでこれと同じものが、実家の倉庫に埃を被ったままだったような……」

マジか！ それは欲しい！ しかし、こんな凄い物が売れ残りだとは……そりゃ、使い方が解らなければ粗大ゴミだからな。

「それが本当であれば、是非とも購入したいのですが！」

「いやあ、タダで差し上げますよ。本当に邪魔で仕方ないのですから、あはは。でも母が捨てたり、燃やしたりしていただければいいが……」

男のロマンは女性には理解されにくい。「貴方が死んだら、そんなの全部ゴミよ！」そんな幻聴が聞こえてきそうだ。

「しかし、こんな魔道具をどこで買われたのですか？」

「アストランティアの道具屋ですよ。スノーフレークって婆さんなんだけど……」

「ほう！ そんな所におったのか？」

「王妃様、スノーフ레이크婆さんをご存知なので？」

「ナスタチウム侯爵の母である？」

マジで知っているようだ。でも、侯爵の母って事は——取り上げられた子供は男の子だったのか。

そこら辺は婆さんに聞いてなかったな。

王妃様に話を聞くと、先代の王妃様と婆さんは同じ学校だったらしい。

もっとも先代王妃は普通科、スノーフ레이크婆さんは魔導科で、直接の付き合いはなかったようだが、やはり美人で有名人だったという。

「平民出なので、子供を取り上げられて、手切れ金を渡されたと……」

「まあ、よくある話だな」

王妃もやるせない表情なのだが、どうしようもないのであろう。

「それで——これをいくらで購入されたのです？」

「金貨5枚（100万円）です」

「え？ そりゃまた、ぼったくられましたね」

あのBB A。まあ、婆さんも売れるとは思ってなかったんだろう。

「だが、十分に元を取ってくれていますよ。私にとっては、とても大事な物です。それ故、もう一台欲しいと思った次第です」

「そうでしたか。そんな方にもらっていただけなら、祖父も喜ぶでしょう」

そして明日、彼の実家へ向かう事になった。まあ車で行くなら時間には掛からんだろう。

用は済んだので、王妃様と別れる。

「待っておるからの！」

「いやいや、待ってても行きませんから」

「つれないのう」

笑っているが目がマジだ。本当に暇を持て余しているんだろうな。

「それから、ケンイチ！」

「はい？」

「城の蔵書は有意義に使うのじゃぞ？」

「は？」

一言残し、王妃はニヤリと笑うと通路の暗闇の中へ消えていった。

うえ！？　もしかして蔵書をコピったのがバレて、敵対勢力だと

疑われたのが、今回の顛末か？

それとも単なるカマかけか――？　いや待て待て、まさかそれだけが原因って事はないだろう。

それとも、あそこには極秘の資料等もあったのだろうか？　俺達

は魔法関連の本しか目に入らなかったからな。

お城の暗い通路を王女と2人で歩き出した。俺の目の前で歩く王女の金髪が揺れている。

「ケンイチ、大丈夫であろうな？」

王女の心配は、俺の顔色の事か――それとも王妃との関係の事か。今は動揺を隠すのが精一杯だ。

「つ、妻も子供もおりますから」

「だいいいが……それにしても、色々とすまぬのうケンイチ。許すがよい。しかしとて、妾ではどうにも出来んでな」

「い、いやまあ……国王や王妃様のお立場もありましようから」

「――それにしてもケンイチ、よく母の挑発に乗らなんだのう」

「わざと怒らせようとしていたのが、見え見えでしたから」

敵対勢力だと疑われたのは仕方ないとして――王妃の挑発で、俺がマジで斬りかかりたりしたらどうするつもりだったのだろうか？ 歩きながら、そこらへんを王女に問う。

「命拾いをしたのは其方のほうじゃぞ？」

「そうなんですか？」

「あの部屋では、其方の召喚獣を出せぬであろう？」

「まあ、そうですね……」

「民には余り知られておらぬし、剣技も滅多に見せぬが――母上は、剣の達人でもあるからの。狭い部屋では魔法が発動する前に剣が届く」

「それは貴族様達も、ご存知なので？」

「無論じゃ」

そういう事か――俺がマジ切れしても、軽くなせるぐらいの実力者なので、あんな挑発をしても平気なのか……。

そりゃ国王の頭が上がらないのも無理もない。もしかして、俺に頭を下げたのも王妃にやらされていたのかも。

象徴としての国王はあるが、実権を握っているのは王妃か……。しかし、いくら相手が剣の達人とはいえ、いざとなればチェインソーもあるし、草刈機もある。アイテムBOXには爆薬もはいっているしな。対抗手段はいくらでもあるぞ？

「しかし剣でございますか？ 持ってはおられぬようでしたが……」

「母は、小さいがアイテムBOX持ちじゃぞ？」

「えっ?!」

クソセーフ！

ブチ切れないで良かった。そういえば、どこからか扇子や鍵を出していたな……。

何の事はない。その気になれば――王妃1人で、あそこにいた俺

達全員を始末して事態を收拾出来たのだ。

それじゃ、あの凄いプレッシャーは殺気って事か——剣呑剣呑。

「申し訳ございませんリリス様。助け舟を出していただいた事に気が付きませんで」

「いや、妾もああ言えば、其方が乗ってくるとうぬぼれておった、許すが良い。しかし其方が真珠などを持ちだしてくるとは——思いもよらぬ結果となつてしもうた」

「いけませんでしたか？」

「あんな国宝級のお宝を目の前にぶら下げられて、正氣を保てる女子はおるまい。あれですっかりと、母の氣を引いてしまったぞえ？」

「はあ……」

ため息しか出ない。まさに綱渡り——だが、もしかしたら身から出た錆の可能性が。

「しかし、私を切り捨てたとして、峡谷の事はどうするおつもりだったのでしょうか？」

「それは決まっておる。王家と貴族共で通常の対応じゃ」

「……それはつまり、いくら強大な力を持っている者でも、王家に御せぬ者なら必要ないと？」

「その通りじゃ。下手に反体制派に取り込まれたり、帝国にでも寝返られたら事じゃからな」

うゝむ……やっぱり、強大な力を持っているとバレると——こういう権力闘争に巻き込まれる事になるのか……。

しかし、帝国へ亡命したとしても、彼の国だと魔導師は強制的に軍に徴発されるらしいし……。

ドラゴンを倒した帝国の転移者らしい奴も、ドラゴンを取り上げられたって話だ。

理不尽な裁きを受ける王国と、軍に徴発されて死地へ追いやられ手柄を横取りされる帝国——どっちもどっちだな。

制度的に共和国は選択肢にありえないとして——お飾りなのかは知らないが、国王から天下御免の書状も貰ったし、あの王妃の顔を伺って王家に恩を売っておけば、王国の方が安全といえる。

「それにしても……あのようなお方^{王妃}が国の頂点にいらつしやると、下々の方々は大変そうでございますね」

「はは、いつも戦々恐々としておる。しかし全て国のため故、狂気とも言える行動にも、誰も悪く言えぬのじゃ——それに」

「それに？」

「正直、陛下——父上では、帝国皇帝ブリュンヒルドや、共和国のチル将軍に対抗出来るとは思えん」

国をまとめるには強烈なカリスマが必要って事か。独裁の絶対君主制国家なら必須だよなあ……。

「帝国皇帝の話はよく聞きますが、共和国の将軍とやらもやり手なので？」

「うむ、彼の者は理想家故——無理難題とも言える自分の政策を押し付けて国が傾いている事は確かじゃが、強力な軍を駆使し前王国を倒し国を統一した手腕は侮れん」

革命したまではないが、その後の内政でグダグダってのはありがちなパターンだな。

「それにつけても、我が力の矮小な事よ。城の地下にいるネズミのような存在じゃ」

そんな事はないと思うが——王女には王女の進むべき道がある。

俺に、「王族の物になれ」とか「贈り物が欲しい」とか一体何かと思ったが——供物の羊を助けるために、14歳の少女が精一杯考えてくれたんだろうな。

俺の事で、この王女を巻き込んでしまった感がある。

「それでも、私はリリス様の味方でありますので」

「そうか……其方に幾千万の感謝を」

ついでに、ちょっと気になる事があるので、王女に聞いてみた。

「あのー、陛下の御側室のお話というのは本当にあるのでございますか？ あの王妃様に対抗出来るとなると……」

「そのような話があるはずがなからう。貴族の女共がやって来ても、母の前では顔すら上げられまい」

「そう——ですよねえ……そうすると、リリス様のご母堂様という方は、王妃様に匹敵するような豪胆な方であらせられたのでしょうか？」

「いや、我が実母は掴みようがない方だったの。全くアマランサス様の事も気にしてはいなかった」

「対立する事もなく？」

「そうじゃ——実際、仲も良かったしの。実母が亡くなった時も、アマランサス様は大層悲しんでの。妾を実の娘として育てる——と宣言された。その時から、妾もアマランサス様を母と呼んでおる」

「……」

あーなんだか元世界からすると、信じられないような面倒なお家事情だなあ……。

「しかし陛下に精力的に頑張っていただき、王妃様との間に男子が生まれれば、全てが丸く収まるような」

「その母の前で、使い物になる男がいると思うのかえ？ ちなみに、陛下の物は一度も役に立たなかったそうじゃ」

年頃の女の子がそんな事言っちゃ、いけません！

「確かになあ——ちよつと無理そうかなあ……」

「其方は、どうなのじゃ？」

「はは……蛇に睨まれたカエルで、冷や汗でびっしりでございま

したから、多分——王妃様の裸体を前にしても……無理でございましょう」

「だろぅの……その分、妾に盃が回ってきておるのじゃ！」

盃が回る——多分お鉢が回ってくるって意味だろうな。

こういう話を聞いていると、王族っていうのも面倒事ばかりで、羨ましくもないな。

ついでに、込み入った事まで王女に聞いてしまう。

あの王様は別家の長男で、王妃は本家の長女。親等的には従兄妹になるらしいが、家の格では本家が絶対。

——当然のように国王と王妃は幼馴染。だが国王は小さい頃から、王妃に全く頭が上がらなかったようだ。

幼馴染が一緒になる——言葉だけなら、なにやら甘酸っぱい感じがするが、この場合は全然羨ましくない。

「あのく恐れ入りますが、それって近親婚……」

「その通りじゃ」

「近親婚が危険なのは……」

もちろん

「勿論、知っておる。純血とか宣って、近親婚を繰り返した挙句、

のたま

滅んだ貴族家や王家は数知れん」

元世界ではヨーロッパのハプ○ブルク家なんかが有名だな。

王女のお相手も王家の血が入っている公爵家みたいだし、近親婚には違いない。

王妃が言っていた、「王家が危ない」ってのはこういう事か。

王女に今後の予定を話す——。

明日、カールドンさんの実家へ行き、魔道具をもらった後、そのまま峡谷へ向かう事を伝える。

王女に峡谷の事を尋ねてみる。

「リリス様。ペロニカ峡谷の途中に街はないのですか？」

「峠の頂上に宿場町があるが、具体的にどこが崩落したのか解らん」
崩落したって情報だけで、正確な場所等は解らないか……その前に地図すらないしな。

街で売っている地図も、都市や山川のアバウトな位置ぐらいしか記されていない。

大体、正確な測量すら行われていないだろう。それでも、ないよりはマシなのであるが。

お城の通路が途切れると、王女とも別れて皆の所へ戻る――ニヤメナが心配だ。

「おーい――明日、魔道具を貰った後に、峡谷へ発つ事になったから」

家の前にいた皆に声を掛けると、プリムラが駆け寄ってきた。

「ケンイチ！ 大丈夫でしたか？」

「問題ないよ。それより皆を危険な事に巻き込んでしまって御免な」

「そんな事ないにゃ！ どう見ても、あいつらが悪いにゃ！」

「ケンイチ……王族の方々に、また何か無理難題を押し付けられたとか……？」

「いや、金策と魔道具の交渉をしてきただけだから」

一応、お城の書庫の本をコピった事も伝えておく。

「本当に、これが原因だったら、本当に申し訳ない」

「お話は解りましたけど、多分それだけが問題ではなかったと思いますわ」

「王族は何を考えているか解らないにゃー」

本当に解らん。あそこに何か秘密があったかもしれないが……王女の許可もあったしなあ。

「しかし王族の方々とお付き合いするのは困難が伴うと話には聞いていましたが、これほどとは……」

「どうも、王族の中でしか通じない独特の価値観があるみたいだよ」「そのようです……」

しかし後ろ盾としては、この国でこれより強力なものはない。

「ケンイチ、私のせい？」

アネモネが本をコピーした事を心配しているのだが、もちろん勿論彼女のせいではない。

全部、俺が悪いのだ。

「でも、ケンイチの事だから、あの王族をぶっ殺してトンズラすると思っただにゃ」

ミヤレーの気持ちも解るが、それをしても何も解決しない。

「おいおい、そんな事したら国中から追われるだろ？ それに、あの王妃は只者じゃないぞ？」

「確かに、あの殺気は魔物並にゃ。そんな感じがしたにゃ……ケンイチでも敵わないかにゃ？」

「やってみなくちゃ解らんが、そんな事に皆を巻き込みたくないよ」
相手が剣士と解っているなら戦いようがある。

例えば——いくら達人でもポリカーボネートの盾は一刀両断出来ないだろう。

周囲から大盾で押し込めて、熊スプレーとかスタンガンを使うとかな。まったくもって卑怯千万だと思うが、戦いなら勝てばいい。
だがそこに魔導師や、命を捨てて突っ込んでくる騎士団が絡んでくると、簡単にはいきそうにない。

日本で例えるならば——国会に呼ばれたが、扱いが不当だからと言って大臣や総理をぶっ殺しても何の解決にもならない。

「それに帝国へ逃げたりしても、魔導師は軍へ徴発されるって話だろ？ 結局、同じ事の繰り返しだ」

「はい、特にケンイチのような凄い魔導師であれば、帝国が見逃すはずがありませんし」

「それなら——ちよつとムカついたとしても、ここの王族に頭を下げてりゃいい。商人風に言えば、頭なんて幾ら下げてもタダだからな」

「私もそう思いますが——ケンイチの好きなようになさってください」

まあ、逃げるしかなかったても手はある。軍も入れないような隔絶した森の奥地へ逃げるとかな。

とりあえずの方針は決まったが、ニヤメナが心配だ。

「ミヤレー、ニヤメナの様子はどうだ？」

「酔っ払って寝てるけどにゃ……」

「獣人のこれって、初めてなんだけど——やっぱりアレをやった方がいいのか？」

「そうだにゃー」

「ミヤレー的には、いいのか？ ニヤメナと張り合ってるから、反対すると思ったが……」

「相手がいない時にこれになると辛いからにゃー」

やはり、獣人は獣人の苦しみが分かるらしい。

相手がいない時に発情期がきたらどうするのか？ ——ひたすら

酒を飲んで寝ていると言う。

「ミヤレーは飲まないみたいだけど、それでも飲むのか？」

「もう、どうしようもできないにゃ。外へ出て、男共^まにバレたら輪^ま姦されるだけだしにゃ」

「そ、そりゃ大変だな……」

ニヤメナのある状態で外へ出たら、黒狼の群れの中へ肉を投げ込むようなものだな。

「しかし、毎回こんな具合になるんじゃないや大変だな」

「普通はこんな風にはならないにや。余程、ケンイチがレッサードラゴンを倒したのが効いたにや」

「そんなに影響があるものなのか？」

「獣人が強い男の精を求めるのは、本能的なものだから仕方ないにや」

「じゃあ、ミヤレーもああなる可能性があるのか……」

「ウチは、理性的だから多分大丈夫にや」

ミヤレーから理性的とかいう単語を聞くとは思わなかったな——偏見か。

「——というわけで、プリムラとアネモネはゴメンな」

「仕方ありませんわ、見てて辛そうでしたし……」

「……」

子供だが、アネモネも男と女が何をするかは解っている。

捕まっていたシャガの根城で、それを散々見てきたのだから。

実に、子供の教育上よろしくないのかもしれないが、この世界じゃ普通だからな。

それじゃ、覚悟を決めてやる。ミヤレーのアドバイスでは、革のアーマーを着た方がいいと言う。

確かに、アイテムBOXの中には、シャガ戦で使ったライトアーマーが入っているが——。

しばし悩み——シャングリ・ラで、革製のライダーズジャケットを買う。これなら分厚くていいだろう。

襟を立てれば、首元もガード出来る。

そしてジャケットを着て、ニヤメナ的小屋の中へ入る。

「おい、ニヤメナ……」

「しゃああ！」

目を覚ましていたのか、俺を見るなり彼女が跳びかかってきた。

「ちょっと待て待て、ええい——とりあえず、やらないとダメなんだろう！ 仕方ねえ！」

——というわけで、やってやってやりまくる。文明の利器も使いまくる。

とにかく、彼女の身体を満足させりゃいいんだろう。しかし、パワーが凄い。

全力を出しても、とてもじゃないが押さえ切れない。抱きつかれて、デカイ万力で挟まれているようなもんだ。

囓られまくり、爪を立てまくられて、それが一晩中続いた。

革ジャケットを着てて良かったわ。だが、かなり貫通したぞ。これを脱いだら傷だらけだろうな。

空が白み始める頃、ニヤメナは小屋の床に大の字になって気を失っている。

腰が抜けた俺は、ズボンだけなんとか履いて、ニヤメナに毛布を掛けると小屋の外へ這い出る。

そこへベルがやって来て、身体をスリスリ。

「なんだ、起きてたのか？」

ボロボロになってしまった革ジャケットは、ゴミ箱へポイ。

アイテムBOXから水とタオルを出して身体を拭く。

ニヤメナも風呂に入れた方が良さそうだが——彼女も伸びてるしなあ。

「あいてて――」

案の定、あちこち傷だらけだ。こりゃ熱がでるかな？
シャングリ・ラから傷薬の軟膏を買って、体中へ擦り込む。

「おう！ 結構冷えるな」

体中に鳥肌が立つ。空を見れば、大分明るくなってきているが、
天井はまだ満天の星。

天気が良いと放射冷却現象で気温が下がる。そりゃ気温が下がっているのに、水で身体を拭いているんだ。

寒いにきまっている。

これから寝たら寝過ぎかもしれない。家の前にテーブルと椅子を出して、牛乳とグラノーラを出した。

とりあえず朝は、これを食っててもらおう。ここはお城の中だ、盗まれるって事はないだろう。

俺は厚手の長袖の下着を買って着ると、アイテムBOXから寝袋を出して中へ潜り込んだ。

すると、俺の上にベルが乗ってくる。

「ちょっとベル、重いんだけど……」

「にゃー」

へとへとだし……しょうがないので、そのまま寝る事にした。

93話 呉越同舟

獣人特有の発情期がきてしまったニヤメナの相手を一晚中した。もうクタクタの傷だらけになってしまったが——彼女達と付き合うならば、これも受けいれないとダメってことだ。

——目が覚める。見上げれば青空。

「うーん……」

だが、慌てて飛び起きると、アネモネとプリムラは椅子に座っていた。

ミヤレーは地面に胡座をかいている。

「ケンイチ、起きたにゃ？」

「ふああゝすまん、寝過ごしたな。皆、飯は？」

「皆、食べたにゃ」

「悪いな、飯の用意も出来なくて」

「構いませんよ。それより大丈夫なのですか？ まるで殴りあって戦っているような感じでしたけど……」

「いや、本当にそんな感じだったぞ」

俺は下着を捲って、身体についた傷を見せた。

「まあ！」

「私が治してあげる！ 回復！」ヒール

駆け寄ってきたアネモネの声と共に、青い光の粒子が集まってきた。俺の身体の中へ染みこんでいく。

「ふう——獸人のアレ、皆こんな感じなのか？」

「普通はこうはならないにゃ。まったくトラ公は仕方ないにゃ」

「悪かったな……」

不意の言葉に、小屋の方をみると、素っ裸の彼女が開いた扉に寄りかかっていた。

さすがに疲れ果てた顔をして、ぐったりとしている。

「おい、ニヤメナ。大丈夫か？」

だが、ニヤメナに近づこうとすると、彼女は俺を避けるような動きをして、もじもじしている。

「どうした？」

「あの——旦那……悪い、こんな事になっちゃって」

ニヤメナの手を引くと抱き寄せて、彼女の毛皮の中に埋まる。

ふわふわのふさふさで、極上の毛布のような抱き心地。

「いいって事よ。獸人と付き合うつて事は、こういう事も受け入れないとダメって事だろ？」

「旦那……」

彼女の顎を撫^なでてやると、うっとり目を閉じてゴロゴロと喉を鳴らす。

「トラ公、1つ貸しだにゃ」

「解ったよ！ クロ助が盛った時には、俺も相手してやるから」

「にゃ！ なんにゃ！ ウチはそんな趣味ないにゃ！ 冗談じゃないにゃ！」

「そう、遠慮するなよ」

「ぎゃー！」

ミヤレーが毛を逆立てて、逃げまわっている。余程、嫌らしい。

「そうだニャメナ。身体を洗った方がいい。アネモネ、お湯を沸かしてやってくれるか？」

「いいよ」

アイテムBOXから浴槽を出して、その中を井戸の水で満たす。

「むゝ温め！」
ウォーム

すぐに適温になり湯気が立ち上る。全く便利だ。

その中にゆっくりとニャメナが脚をつけて、そして全身を沈めた。

「ふううう……」

湯船に浸かり目を瞑っているニャメナに質問する。

「獣人のあれって、いつもあんな感じなのか？」

「とんでもねえ！ 俺も、あんな事になったのは初めてだよ……レツサードラゴンを倒した旦那を見ていたら、身体の芯から熱い何かが込み上がってきて、自分が何をしているのかも解らなくなっちゃまって……ああ」

彼女がお湯でバシャバシャと顔を洗っている。

「記憶はあるのか？」

「……なんとなく……」

恥ずかしそうにしているのではあるが、獣人の顔色というのは判りにくい。

「腹減ったな……ニャメナは腹減ったろ？」

「……ちよつと食欲がないよ……」

「ふゝむ、こういう時はあれだな」

俺は、シャングリ・ラから桃缶を購入した。

「にゃ！ それ、美味しいやつにゃ！」

「お？ 皆も食べるか？ そういえば、前に食った時はニヤメナはいなかったな」

皆も食べたいというので、もう1缶購入して。缶切りで蓋を開ける。

桃を小鉢に盛って、スプーンと一緒にニヤメナに渡す。

「甘酸っぱい果物を、砂糖漬けにしたもんだ」

「美味いにゃ！ トラ公が食わないなら、ウチがもらうにゃ」

「……うるせえ、食うに決まっているだろ！」

彼女が桃を一口食べた。

「う、うめえ……」

「これなら、食欲がなくても食えるだろ。消化もいいし栄養満点。言うことなし——あつ、そうだ！」

俺は、シャングリ・ラからブランデーを購入した。

「ニヤメナなら、少し酒を入れた方がいいかもな」

ほんの少し、ニヤメナの持っている小鉢に、ブランデーを注ぐ。そして、それを食べた彼女が呟いた。

「……旦那、もう少し……」

「そうか」

小鉢の中へブランデーをドボドボと注ぐ。

「あーうめえー！ 五臓六腑に染みわたるぜ！」

この世界でも五臓六腑って言うのかよ。

「ニヤメナ、身体の方は収まったのか？」

「まだ身体は熱いが、もう大丈夫だ。あんな事にはならないと思う。もう半年分ぐらいイッた気がするぜ……」

湯船の中で、桃缶を頬張っているニヤメナのために、テーブルにジェットヒーターを出す。

皆で桃缶に舌鼓を打っていると、王女がやってきた。いつもの白いドレスではなくて、タン色の上着に紺の乗馬ズボンのような物を履いており――。

金髪も編みこんで短くまとめてある。

「朝っぱらから風呂かえ？ 豪気じゃの」

「はは、ちよつと身体を汚してしまったので……」

「其方達、何を食しておる。妾にはないのかえ？」

まあ桃缶なら、王女の口にも合うだろう。俺達と同じ小鉢に桃を入れて王女へ渡す。

「ほう、果物か……」

「果物の砂糖漬けでございますよ」

「ふむ――なんと！ 美味い！ 柔らかく爽やかな酸味と強烈な甘み」

「リリース様のお口に合ったようで、なによりです」

「リンカーに似ている気がするが、このような果物は食した事がない……」

「リンカーも、煮てから漬けると似たような感じになりますよ。妻の店でそれを売って好評でした」

「なるほどのう……代わりじゃ！」

どうせ、山ほど食うのだろう。新しくシャングリ・ラで買った桃缶を開けて、缶ごと王女へ手渡した。

「これは、ちよつと品がないのではないかの？」

「これは失礼いたしました」

「まあよい！」

俺は器に入れ直そうとしたのだが、彼女は缶を持ったまま、むし

やむしゃと食べ始めた。

そして、あっという間に1缶を平らげてしまった。

「あの――畏れ多くも王女殿下。お太りになりませんか？」

「今のところは大丈夫なの？」

「今は成長期かもしれませんが、成長が止まってもそのままの食生活だと……」

「其方も医者と同じ事を申すの！　だが、王家で太った者はおらぬ
どうやら、そういう家系らしい――まったくもって羨ましい。

俺も40近くなって、ちよつと食い過ぎると太るようになってしまった。

それだけ新陳代謝が落ちているって事なんだろうな。20歳前は、いくら食っても太らなかつたのに……。

風呂から上がったニヤメナが、ジェットヒーターで毛皮を乾かし始めた。

桃缶とブランデーでエネルギーが補給出来たのか、さっきよりは元気になったようだ。

「ええい、妾の目の前で裸で踊るとは――毛皮を着ているとはいえ、
なんとかせよ！」

「はいはい」

王女は獣人に偏見があるタイプには見えないが、目の前で毛皮を乾かすためのセクシードダンスを踊られたので、我慢出来なかつたようだ。

これで周りが男だったら、拍手喝采だったと思う。

しかし、なんとかしろと言われたので、やむを得ず――テーブルの前に衝立を2枚出して、完全防御。
ついたて

「うむ、それで？　いつ、ベロニカ峡谷へ向けて出立するのじゃ？」

「カールドンさんがいらしたら、すぐにでも……」

「そうか、其方に持っていてもらいたい物があるので、それまでしばし待つがよい」

「承知いたしました」

「それからの――妾も同行するぞえ？」

「ええっ?!」

王女がとんでもない事を言い出した。

「不服かえ？」

「いいえ、滅相もございませんが、何が起こるか解りませんから……それに、お城とは段違いに不自由な生活を強いられますよ」

「承知しておる！ それに、其方はその家も持っていくのだろうか？」
「勿論でございます。私共の家でございますから……」

「其方がいれば、不自由はしなくても済みそうだの」

ああ、俺目当てか――そりゃ、アイテムBOX持ちだし、シャングリ・ラから食料でも何でも購入出来るからな。

「しかし……」

「まあ、待つがよい。其方が妾の世話が面倒なのも解る」

「名誉な事ですから、そうとは言いませんが……」

「まあ聞くがよい。現場では、妾が王家の代理となって指揮を執る。そうすれば面倒な事が起きてもお城まで早馬を飛ばす必要もなくなるじゃろ？」

なるほどな……王女が王家の人間として、現場の全ての責任を引き受けてくれると言っているのだ。

「よろしいので？」

「うむ、陛下や母上も了承済みじゃぞ？ まさか、陛下が御自ら現場へは向かえんからの」

まあ、そりゃそうだ。王家の跡取りとなる男子がいない現時点で、

国王が事故にでも巻き込まれたら、政変で大変な事になる。

「しかし何かあれば全ての責任がリリース様へ――」

「妾は王族じゃぞ？ そのぐらいの覚悟はいつでもできておる」

「それで私が持っていく物というのは……？」

「まあ、しばし待て」

やって来たカールドンさんと一緒に、テーブルに座って飲み物を飲む。

カールドンさんの実家へ行って魔道具を受け取るわけだが――彼の手元にはドライジーネがある。

「そのドライジーネはカールドンさんが作った物ですか？」

「はい。街の噂を聞き、商人に現物を見せてもらい、似たような物を作ってみました」

前輪には、王女のドライジーネに付いていたような、魔法で動くモーターのような物が装着されている。

これで自走出来るのだろう。だが俺が持っていくアイテムつてのは、カールドンさんとは関係ないらしい。

魔道具の話をしているうちに、外から荷馬車に積まれた、何かやって来たようだ。

「来たようだの」

「あれですか？」

そして馬車と一緒にやって来たのは、黒いロングワンピースから覗く白い太ももが色っぽい魔導師。

メリッサとかいう、スノーフレーク婆さんの孫だ。

「なんじゃこりゃ」

馬車の荷台を覗いた俺に目に飛び込んできたのは、長さ2m程の

丸太で出来たデカイクリオネ。

この形は本で見たな――。

「貴方、アイテムBOX持ちだそうね」

「ああ俺はケンイチだ。改めてよろしくな」

「ふん……」

女魔導師はそっぽを向いてしまった。俺にやられた事が、まだ気に入らないのだろう。

「これは、ゴーレムの核コアだろ？」

「へえ、よく解るのね」

「まあな」

その話を聞いて、皆が荷馬車へ集まってきた。

「へえーこんなデカイゴーレムの核コアだって？」

「こんなの初めて見たにゃ」

「大体、辺境でゴーレムを見ませんしね」

あちこち商売で渡り歩いているプリムラが見たことがないのであれば、他の者も見たことがないのは当然。

それを聞いたメリッサが顎を上げて得意げに、まるで漫画に出てくる悪役令嬢のようなポーズで話す。

「ほほほ――こんな大きな核コアを使ったゴーレムを動かすには、それなりの魔力が必要だから。辺境の田舎魔導師には無理でしょうね」

「それに、ゴーレムを動かすには、国の許可がいるんだろ？」

「それよ！ ケンイチ」

俺達の会話を聞いていた王女が声を上げた。

「は？」

「現場でゴーレムを使うのであれば、妾がおればすぐに許可が出せ

るであろう？」

「ああ、なるほど——リリス様の言う通りでございますねえ」

「この無礼者！ 王女殿下のお名前を呼ぶなど——」

「よいのじゃ、メリッサ。妾が許可した」

「そ、そんな……」

メリッサは王女の言葉にショックを隠し切れない様子。田舎の魔導師である俺が、王女の寵愛を受けているのが、ショックなのだろう。

「あゝそうか。城壁を修理していた、あのデカイゴーレムの核がこいつか……」

「そうよ……」

確かに、あの馬鹿デカイゴーレムなら、土砂や岩を退かすのに役に立つかもな。

俺は、アイテムBOXへゴーレムの核^{コア}を収納した。

「随分と容量のあるアイテムBOXのようね？」

「デカイ洞窟蜘蛛を商人へ売ったばかりだからな。空きがある」
「洞窟蜘蛛ですって？」

「本当じゃぞ、メリッサ。妾も見たからの」

「……」

どうも素直に俺の力を認めたくないようだな。

そりゃ、王都でも有数の大魔導師の彼女が、田舎の魔導師に実力で負けていると思いたくないのだろうが……。

まあ実際、魔法でも何でもないのだが、レッサードラゴンを1発で屠ったのは紛れも無い事実だし。

それはさておき、気になる事を聞いてみた。

「君は、スノーフレーク婆さんの孫だろ？」

「何故、その名前を！」

「婆さんは知り合いだからな」

「ふん！ 父を金で売った裏切り者！」

やっぱり、そう言われて育ったようだな。

「婆さんの話では平民の出だったから、無理やり子供を奪われて金を渡されたって話だったぞ？」

「嘘！ あいつは父を捨てたのよ！」

「先代王妃が同じ学校で、婆さんも有名人だったみたいだし、彼女を知っている年寄りには王都にもいると思うが……」

「それにしても、母親が子供を捨てるなんて！」

「貴族に平民が逆らえるわけないだろ。お前の俺に対する態度をみれば、そのままナスタチウム家の婆さんに対する態度を彷彿とさせるんじゃないのか？」

「……」

この女も真実を求めてあちこちへ聞き込みしたりはせず、ただ家人の言う事を鵜呑みにしてたっぴいな。

それ故、俺の言葉を完全否定出来ないのだろう。

さて他人の家の面倒事に首を突っ込むのはこれぐらいにして、移動を開始するか。

だが人数が凄く増えてしまったな。

「リリース様の関係者は何人いらっしやるので？」

「妾の他は、メイド長のマイレンと後メイドが1人——荷物が少々」

王女やメイドさんの荷物は俺のアイテムBOXへ入れればいい。

こちらは俺を入れて5人と森猫が1匹。後は、女魔導師——メリッサとカールドンさん。

合わせて10人と森猫が1匹。

「リリース様、護衛の騎士様は？」

「大魔導師級が3人もいるのに必要ないじゃろ？　現に、騎士達はその方等に手も足も出なかったではないか」

そりゃ、そうだが——騎士の面目が丸潰れだな。

「しかし——」

「剣技となれば騎士ではないが、あのマイレンとメイドもかなりの腕前だぞ？」

へえ、やっぱり王女の周りにいるって事は只者じゃないんだな。

「ケンイチ、この人数じゃ、いつも乗っている箱の召喚獣でも乗り切れないにゃ」

「旦那、あの馬なしで動く荷馬車に乗せるのかい？」

「まさか、王女殿下を荷車に乗せるわけにはいかないだろう」

「其方に乗せてもらった、あの妙な乗り物では、この人数は確かに乗れぬの」

仕方ない新しいのを買うか……。王家からアンティーク家具を手に入れたしな。

しかし、この人数か……。マイクロバスは少々大きすぎる——そういえばT田のハ〇エースのデカイやつがあったな。

田舎で爺婆達を乗せて、介護バスやらで使用されていた。

なんだつけ——シャングリ・ラの中古車を検索する。そうそう、ハ〇エースコミューターだ。

2800ccディーゼルエンジンで14人乗り。程度の良さそうな車は、5万kmで320万円だ。

少々高いがオプション装備でLSD（リミテッド・スリップ・デフ）も付いている。

4WDといっても、デフロックが出来ない車種は、対角線のタイヤが空転するスタックを起こす事がある。

LSDが装着されていれば、それを防げるってわけだ。悪路が多いこの世界を走るためには必要な装備。

このハ〇エースは少々高いが――これは必要経費だ。やむを得ないな。

「T田ハ〇エースコミュニタ――召喚！」

バウンドして、白い車体が落ちてきた。前世界で有名、よく盗まれる車ナンバーワンだが、異世界で盗まれる事はないだろう。

それに、これはディーゼルエンジンなので、俺が作ったバイオデューゼル燃料が使える。

「「「おおおっ！」「」」

空中に現れて落ちてきた、四角い鉄の箱に皆が驚きの声を上げた。

94話 魔道具をゲット!

俺達はベロニカ峡谷という所へ向かう事になった。

だが、移動するには人数が多く、いままで使っていたラ○クルプ
○ドは使えない。

そこで新しい車を購入した。よく盗まれる車ナンバーワンとも言われるT田ハ○エースコミュニーターだ。

さて、新しい車を買ってしまったてから言うのもなんだが……。

「皆の意見も聞かずに、王族や俺達と戦った魔導師と一緒に旅をする事が、なりゆきで決まってしまったのだが――」

「にゃ？」

「気が乗らない者がいるなら、金を渡すから王都で待っててもいいぞ？」

「そんな事を言うなよ、旦那！」

「今更かにゃ？ 王侯貴族が横暴なのはいつもの事にゃ」

ミャレーの言葉に王女が苦笑いをしている。

「私は、ケンイチがいいなら、いい」

「マロウ商会、金儲けの秘訣――商売とは相手の人格を計るものではなく、財力を計るものである」

金儲けの秘訣――そんなのがあるんだ。要は、金持ちなら気に入らない連中でも、とりあえず付き合っておけ――って意味だろ。

皆の意見は俺に賛成。王族も――王女を俺の所へ送り込んできた

って事は、これ以上敵対するつもりもないのだろう。

それにスノーフレーク婆さんの孫とも揉めたくはない。まかり間違って、殺したり大怪我をさせてしまったら、あの婆さんがかわいそうじゃないか。

それでも、あくまで敵対するのであれば、やむを得ないが……今のところは、そんな様子もなさそう。

俺達家族の話し合いの間にも、カールドンさんが、ハ〇エースの周りをぐるぐると回っている。

「こ、これは、何ですか？ 荷馬車？ 馬なしで動くのですか？」
空中から落ちてきた車に皆が驚きの声を上げたが——こういうメカが大好きそうな彼が、真っ先にアレコレ聞いてきた。

「私の言うことを聞く、召喚獣ですよ。私が作った特殊な油を食べて走ります」

ドアを開けて運転席を見ると、キーが挿さっていたので抜く。

側面のスライドドアは片面だけで、キーのリモコンスイッチを押すとドアが自動で開く。

「おおっ！ 勝手に開いたぞ？ 魔法かえ？」

「まあ、そのような物です。これに皆様を乗せて、ベロニカ峡谷の崩落現場へと、お運びいたします」

「こ、これはどのぐらいの速さで走るのですか？」

「休みなしで、今日中には峡谷へ到着できると思います。何も問題がなければですが……」

「なんと！ それは凄い……」

女魔導師のメリッサもあっけに取られている。

「君も乗って行くだろ？」

「も、勿論^{もちろん}よ。早く着くに越したことはないから……」

「これは凄い、柔らかな車輪？ 一体何で出来ているのですか？」

「そりゃ召喚獣だから、柔らかな部分もある」

無論、大嘘だ。

「なんと……」

カールドンさんが、床の下に潜り込んでいる。

ドライジーネを自動化するようなメカマニアなのだから、自動車のメカニズムにも興味があるのだろう。

しかし、あまり探られてしまうと、単なる機械だとバレてしまうかな？

エンジンも見せたりしなければ、想像もつかないと思うけど……。

彼を放置して、王女の荷物を確認をする。

「リリース様。お荷物はどのぐらいあるのですか？」

「もうすぐ、メイド達がやってくると思うのだが……」

待っている間に――家とニヤメナの小屋をアイテムBOXへ収納する。

そして、トイレも収納――アイテムBOXからユ○ボを出して、穴を埋める。立つ鳥跡を濁さずってな。

かなり深く掘った穴だから、臭いがしたりすることもないだろう。

「おおっ！ これが、謁見の間で暴れた召喚獣ですか！」

メカ好きのカールドンさんが、ハ○エースの下から土まみれで這い出てきた。

「暴れたのは、これより2回りは大きい物だったの」

「ほほう！」

俺達の家を収納し、後始末を終えると――メイドさん達が10人

程、荷物の詰まった鞆を運んできた。

全部で鞆が10個か。

「普通は天幕^{テント}も運んだりするのじゃが、それは其方の家があるから、
必要ないじゃろ？」

「そうですね」

アイテムBOXからパレットを出して、その上に王女の荷物を載せてもらう。

「収納！」

荷物がアイテムBOXへ収納されて消えると、メイドさん達から歓声があがる。

「「凄い！」」

ニコニコしているとアネモネにズボンを引っ張られた。

「ケンイチ、ニコニコし過ぎ」

「はは、悪い——それではリリース様。出発いたしますか？」

「おう！ この中に乗ればよいのじゃな？」

「好きな席へどうぞ」

「妾は其方の隣がよいのだが——こら！ カールドン！ いい加減にせい！」

カールドンさんが、再びハ〇エースの下へ潜っていたのだが、這い出てきた。

「はい！ 申し訳ございません。年甲斐もなく、興奮してしまいました」

「仕方ないのう」

彼が、置いてあったドライジーネと一緒に車に乗り込む。

「それでは、リリース様はこちらへ」

俺が助手席のドアを開けて、王女をエスコートする。

「うむ」

だが、助手席を取られたアネモネとベルは、ふくれっ面をしている。

偉い人優先だ。仕方ないじゃないか。

「よっしゃ、皆乗ってくれ。好きな場所でいいぞ」

「クロ助、俺たちや、また一番後ろへ行こうぜ」

「にゃ」

アネモネとベルは、運転席のすぐ後ろの席に座っている。

「こ、これは――乗って大丈夫なのでしょうか？」

ビビって腰が引けているのは、メガネのメイド長のマイレンさんだ。

「鉄の車体に見たこともない素材で出来た内装。見事な作りの椅子。これは素晴らしい！」

カールドンさんが、車の内装を見て興奮し、自分の椅子の作りを確認し始めた。

「皆乗ったか？」

「「はい！」」

「旦那あ！ 大型の馬車でもこんなに人数は乗れないぜ」

一番後ろの座席から、ニヤメナの声がする。都市間を走っている定期便の大型馬車でも、7〜8人乗りらしい。

「ニヤメナ、身体は大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ」

「食欲は？」

「ちよつと腹が減ったかなあ……」

「これでも齧ってる」

アイテムBOXから、パンの入った袋を出すと、後ろへ送ってもらう。

「飲み物がほしいところだけと……」

「贅沢言うんじゃないにゃ」

準備が整ったので――ハンドルの右下にある、スイッチを押す。するとパワースライドドアが閉じて、発進準備完了だ。

「凄い！」「魔法です！」

後ろから声がする。

「それじゃ、出発！」

「」「おうっ！」「」

車がそろそろと動きだす。この車はオートマなので、運転はラ○クルプ○ドよりは楽だ。

お城の裏門を潜り、驚く門番達に挨拶をする。

そのままお堀に架かった石の橋を渡り、城下町へ入る。

目指す峡谷は王都の東。だが、まずはカールドンさんの実家へ向かう。

「カールドンさん、道案内を頼む」

「はいはい！ お任せください！」

俺の後ろに、カールドンさんが来ると、ナビを始めた。

「その丸い輪を回す事で、この乗り物の行き先を決めているのですか？」

「まあ、そうですねえ」

あまり詳しい説明は出来ない。

ルームミラーで、ちよつと後ろを見ると――あのメリツサという魔導師が静かだ。

まあ、静かならよしとしよう。

カールドンさんによれば、彼の実家は城下町の東の外れにあると言う。

それに、ちょうどベロニカ峡谷へ行く街道の途中に屋敷があるらしい。これは好都合。

ゴミゴミした市街地を離れて、デカイ屋敷に住んでいるようだ。それに魔導の研究をするなら、人があまりいない場所の方がいいだろう。

彼の案内で街を出て、大きな川に架かる橋を渡る。

橋から川の右左を見渡してみるが、あまり利用はされていないように、小さい船しか見えない。

「研究中の魔道具って爆発したりするんですか？」

「爆発する事はありませんが、魔石が弾けたりして怪我をする事がありますよ」

充電池の過充電みたいなもんか？

橋を渡り――郊外へ出てしばらく進むと、広大な畑の中に大きな屋敷が見えてきた。

彼の祖父の代から代々王室お抱えの魔導師のようだから、給料も良いのであろう。

「どうじゃ、ケンイチ。妾の物になれば、あのような屋敷に住めるのじゃぞ？」

「暮らしていくには、小さな小屋とアイテムBOXがあれば他は必要ありません。1つの鍋で顔を洗い、手足をすすぎ煮炊きをする。人間、起きて半間、寝て1間の広さがあれば十分でございます」

「ちっ！ これじゃから、欲のないものは扱いにくい」

「それにしても、この乗り物――召喚獣ですか？ まるで雲の上にいるような乗り心地はすごい。全く揺れないし、凸凹道にもびくともしない！」

「全くのう、馬車で旅行をすると、それだけで疲れてしまうのだが……これは凄いの」

屋敷の黒く細い鉄の棒で出来た門を潜り、カールドンさんの実家を訪れた。

2階建ての青い屋根が綺麗な屋敷の前にハ〇エースを止める。屋敷の前にはホウキをもった初老のメイドがいる。

「まあ、坊ちゃま。突然のお帰りで……この馬なしの乗り物は、坊ちゃまの発明品で？」

「カロリナ、坊ちゃまは止めてくれ。私もこの歳なのだから」カールドンさんが、メイドにあれこれ説明した後、一緒に屋敷からちょっと離れた場所にある木造の納屋へ行く。

木の扉を開けると、薄暗い中――埃を被った訳の分からない道具で一杯。

「確か、一番奥の方に――母が捨ててないと良いんだが……」彼が探し物をしていると、外から声がする。

「カール！ 帰ってくるなら、帰ってくると、連絡をおよこし！」

「母さん、お爺さんの発明品捨ててないでしょうね？」

納屋に入ってきたのは、背の高い上品そうな年を召した女性。白いドレスの上に青いベストのような着物を羽織っている。

「こんなゴミは捨てるか燃やしたいのに、お前が捨てるなど言うから、捨てていませんよ」

「ホルト夫人、久しいの」

いつの間にか、ハ〇エースを降りて王女が納屋の所へやって来ていた。

「えっ!? これはこれは、王女殿下! こんな所へお越しとは! カロリナ! カロリナ! お茶のご用意をして!」

「構わぬ、カールドンが探している荷物を見つけたら、ベロニカ峡谷へ向かわねばならぬ」

「峡谷へ?」

「峡谷が崩れての、街道が不通になっているらしい」

「そ、それは一大事でございますね! それでは王女殿下、御自ら普請の指揮をお執りに?」

「まあ、そんなところだ」

夫人と王女が話をしている間に、暗い納屋の中でアイテムを探す。

「あった! これでしよう!」

彼が掲げたのは、まさしく『不』の形をした、黒い魔道具。

「これですよ! 間違いありません。それじゃやはり私が持っている物も、カールドンさんのお祖父様がお作りになった物なのですね」「これは画期的と祖父が自慢していたので、よく覚えていますよ」確かに画期的な物なのだが、使い道を知らなければ、よく解らない魔道具で終わりなんだよな。

見つけた魔道具をカールドンさんから受け取ると――俺達は再びハ〇エースで峡谷へ向け出発した。

カールドンさんは車から降ろした自走式のドライジーネに乗って、お城へ帰ると言う。

どうやら、自分の作った発明品の耐久試験をやりたいようだ。

研究熱心だな。車の下へ潜り込み、サスペンションなどを詳しく

見ていたので、ドライジーネや馬車に応用した物が作られるかもしれない。

一緒についてくると言われたらどうしようかと思っていたのだが――お城の仕事もあるので、そうはいかないのだろう。

――――◇◇――――

新しい車――ハ〇エースコミューターを駆って、9人でベロニカ峡谷という場所を目指す。

どうやら、そこで大規模なげ崩れが発生して、街道が塞がってしまっているらしい。

俺達が王都へやって来る前に、街道の橋も落ちていた。これで、主な街道が二箇所で不通って事になる。

王都は多くの住民の生活を維持するために、四方から食料を輸入し――普段から食料不足気味で、地方では売らないような傷んだ果物も売られていた。

そして街道が塞がってしまったということは、国境の街へ帝国の侵略等があっても、援軍を送れない事を意味する。

「其方の力を貸してほしい」――と、国王陛下に直に頼まれてしまったのだ。

陛下の娘である王女が同行して、俺達は一路崩落現場へ向かう。途中で休憩も挟み、ハ〇エースは街道をひた走る。

まばらな穀倉地帯を抜けると、浅い森へ入る。だが、街道脇の木は伐採されており、王都へ運ばれているのだろう。

ここに人が住み着けば、畑になるのかもしれない。

だが、ここでの開墾作業は全て人力か――あっても馬や牛。

王都で動いていたデカイゴーレムを使えば、木の根っこを抜く作業等は捗りそうなのだが……。

「ほおお！ 全く凄い速度で走るの！」

助手席で王女が喜んでいいるのだが、彼女に何かあると拙いので、シートベルトを締めさせたいのだが……。

それ故、安全運転のため車の速度はかなり控えめだ。

「それでも、かなりゆっくりと走っておりますよ」

そう、舗装もされておらず道が凸凹なので結構危ない。4WDではあるが、ラ○クルに比べたら走破性能は落ちるだろう。

「なんと！」

「後ろは、皆大丈夫か？」

「大丈夫にゃー！ この乗り物は広いにゃー！」

「ば、馬車に比べたら、かなりマシな乗り物ね」

外の景色を見ながら素直にメリッサが感想を述べている。

アネモネは——ルームミラーに隠れて見えないが、パッドを使ってお城で取り込んだ本を読んでいるらしい。

俺は車で本を読んだりすると乗り物酔いをするのだが、彼女は大丈夫なのだろうか？

「リリース様。こういう場所の開墾にゴーレムが使われる事はないのですか？」

「ふむ——あまり聞かんのう。普通は力自慢の獣人などを集めて行われるようじゃが」

「ゴーレムを投入して穀倉地帯を拡大すれば、あちこちから食料を輸入しなくても済むのでは？」

「其方の言うとおりにゃが、大型のゴーレムは1時間程しか稼働出来ぬ」

王女が横目でチラリと後ろに座っているメリッサの方を見る。

1日1時間労働か——そのために、魔導師を地方へ赴任させてお

くのは、確かに効率が悪い。

「私は召喚獣を使って、自分の畑を開墾いたしましたけど……」

「其方の召喚獣は、1日中動けるのかえ？」

「はい、食べ物となる特殊な油がある限り」

王女は、召喚獣——重機の稼働時間に感心しているのだが、俺が開墾までして畑を作っているのが、不思議なようだ。

「其方のような変わり者も珍しいの。普通は人を使って、自分は楽をしようとするものではないか？」

「私は、物を作るのが好きなのでございますよ。お城にいたカールドンさんと似ていると思います」

「ああ、なるほど……」

俺の説明に王女が納得した。自分で言ったが、カールドンさんは気が合いそうだ。

ただ、オーバーテクノロジーを余り見せると、理解してしまう可能性がある。彼は優秀だ。

「リリース様。お城を出発するのが、少々遅くなってしまいましたけど、急げば今日中には現場に到着出来ますが……」

「いや、峠を走っているうちに、日が傾くであろう？」

「おそらくは……」

「峠道は曲がりくねっており、狭い。しかも横は崖で、暗くなっているからの走行は自殺行為じゃ」

ガードレールがない峠道か。元世界の外国の映像でそんな道を見たことがあったような……。

確かにヤバそうだな——酷道ってやつか。

俺の田舎から都市へ出るための峠道も、かつては曲がりくねっていて酷道だった。

峠を越えるためには、乗客が降りてバスを押して峠の頂上で1泊

——それが今では、車で30分で峠越えだからな。

「それでは、どこかで1泊いたしますか」

「峠の上り始めに、宿場町がある。そこで1泊するでしょう」

「王女殿下が、お泊りになるような高級宿もあるのでございますか？」

「確かに本陣があるが——其方達はどうするのだ？」

「街の外で家を出しますが……」

「まさか、妾を追いつ出そうというのかえ？」

王女が、ハンドルを握っている俺の腕を掴むので、危ない。

「違いますよ。そんな事するはずがないでしょう。しかし外で野営して御身に何かあれば……」

「大魔導師が3人もいて、何かあろうはずもあるまい」

「確かにそうでございますが……」

「出発する前にも申ししたが、メイド達も手練じゃぞ？」

ただの王女の玩具ではなかったんだな。確かに——能力がないのに王女のお付きになるはずもないか。

森の切れ目から横に連なる大山脈が見えてきた。あそこを越えるのか……。3000〜5000m級だろうか？

峠の標高はどのぐらいであろうか？

この山脈は王都の遥か北から、南はダリアを過ぎた所まで延びていて、王国を分断している。

それ故、通れる場所は限られているのだろう。そこがペロニカ峽谷ってわけだ。

そのまましばらく進むと、黒い峠に囲まれた宿場町が見えてきた。

だが、そのまま近づくとただの峠ではなく窓が見える——それは建物と一体となった峠だった。

つまり、デカイタイヤのような円形の建物に外周が覆われている。もちろん、その中にも建物があるのだが。

人口は1万人ぐらいらしい。名前は――アグロステンマ。

街の少々手前、小さな小川が流れている場所で車を停める。ここなら水の確保も出来るだろう。

それに峠に上るなら、水は少々多めに確保しておいた方がいいかも。

よし、ここをキャンプ地とする。皆を降ろして車をアイテムBOXへ収納。

そして、家を出す場所の草刈りをする。ベルは早速、周囲のパトロール。

「おおっ、それは!？」

俺がバリバリと草を刈る機械に、王女が興味を示したようだ。

「草を刈る魔導具でございます」

「面白そうじゃの! 妾にもやらせてたもれ」

「危のうございますよ! 回転する刃が全てを切り刻みます故、万が一刃が当たれば致命傷になります」

「姫様、あまり危ない事はおやめください」

「解ったわえ!」

メイド長にたしなめられて王女は横を向いてしまった。ちょっと草刈り機は――マジで事故が多いからな。

「よし! 家召喚!」

草刈りが終わった後、家を設置して、その隣にニヤメナの小屋も出す。トイレは1日だからいらんだろう。

王女の荷物が載ったパレットもアイテムBOXから出すと、必要な物をメイドさんが家に運び込んでいく。

さて、女性陣は家の中。俺はまた外で寝よう。雨が降ったらテントを出せばいい。

町の近くなので人通りも多く、ジロジロと見られるのだが、もう慣れたものだ。

テーブルを出して料理の準備を始める。

「そういえば、あれが使えないかな？」

俺は、アイテムBOXからお城で仕留めたレッサードラゴンを取り出した。

地響きと共に現れる、鱗に覆われた黒い巨体。

「くっ！ それは私のドラゴンなのに！」

「俺が仕留めたんだから、もう俺の物だろ？　ねえ、王女殿下？」

「まあ、そういう事になるかの」

「……」

メリッサは実に悔しそう。だが、召喚魔法ってのはどういふものなのか、彼女に召喚魔法についてあれこれ聞きたいのだが――。

俺の重機や車も召喚魔法だと言っている手前、それを尋ねるわけにもいくまい。

「旦那、もしかしてレッサードラゴンを食うのかい？」

「そうだ、ドラゴンってのは美味いんだろ？　レッサードラゴンだって美味いだろ？」

「そういう話は聞くにゃ」

「試しに食ってみようぜ。そこにいる召喚主には悪いけどな」

「くっ！」
ちょっと嫌味が過ぎたか。これから共闘しないと駄目だし、なるべく仲良くしないとな。

「ああ、自分の召喚したドラゴンを食いたくないなら、他の食い物

を用意するけど……」

「別に構わないわ」

「愛着があったりしないのか？」

「コンパクト契約したとはいえ、魔物だし……」

召喚して思い通りに動かすには契約が必要になるのか——なるほどな、それがないとタダの魔物だからな。

自分に襲いかかる可能性もあるだろう。

「飯が出来るまで時間がかかるから、アネモネに召喚魔法の簡単な説明でもしてやってくれないか？」

「貴方が教えればいいじゃない！」

「俺のは自己流でな。説明が上手く出来ないんだよ。ちゃんとした学校を出た、正統派の魔法理論ってやつを披露してくれよ」

「ふん、いいわ。初歩の初歩ぐらいは教えてあげる——」

メリッサは、召喚魔法について説明を始めた。

95話 転移者の影

ペロニカ峡谷へ向かう途中の宿場町、アグロステンマの外で一泊する。

王女の話では暗くなった峠を走るのは自殺行為らしい。

町には王女が泊まるような立派な本陣もあるというのに、俺達と1泊するようだ。全く物好きだな。

そして、飯が出来るまで時間があるので、メリッサが召喚魔法について教えてくれる事になった。

食事の準備のため、レッサードラゴンを解体しながら、俺も一緒に話を聞く。

彼女の説明によると――召喚魔法は、俺のアイテムBOXと似たような仕組みらしい。

魔法で作った空間に生き物を入れておける仕組み。アイテムBOXには生き物は入らないのだが、召喚魔法は、その逆で生き物しか入れられない。

「生き物なら、なんでも入れられるの？」

「そりゃ入るけど、入れた生物は魔力によって魔物化するから」

つまり普通の犬や猫を入れても、魔物になってしまうらしい。

ちなみに生きた人間を入れても魔物になるという。なにそれ怖い。

「そんな実験をやった奴がいるのか？」

「勿論、私はやったことがないけど、そう言われているわ。学校の授業でも習ったし……」

紙の上の学問と実地は違うんだけどなあ。だが確かめるわけにも

いくまい。

多分、犯罪者や死刑囚を使って実験したんだろうな——恐ろしい。

メリッサの話に恐怖を感じながら、レッサードラゴンの硬い鱗を剥がし太腿の肉を切り取る。

この鱗もスケルメール等の材料として高く売れるようだからな。

大切にアイテムBOXへ保管する。

まるでセラミックのように軽くて硬く、合わせると、チンチンと乾いた音がする。

作業をしつつ話を続ける。

「それじゃ、ものすごい魔力を持った魔導師やらが、自分で自分を召喚したらどうなるんだ？ リッチとかになるのか？」

「リッチ？」

「にやんだそれ？」

「俺もしらね」

皆が聞きなれない言葉に首を傾げている。

「よくリッチなんて知っているわね。でも、それは当然、禁忌、禁呪とされているわ」

「ははあ、それが『禁呪に至る病』か——」

「その本を読んだの？！」

メリッサが俺に掴みかかってくるが——顔が近いので、下を向くと彼女の胸の谷間が目に入ってしまう。

うーん、中々に良いおっぱい。

「お城の書庫にあった」

「な、なんで貴方なんかが！」

「その者は城に巣食っていたゴースト退治をしてくれたのよ。その褒美として王室の書庫の閲覧を認めた」

王女がメリッサに、ことの成り行きを話してくれた。

「そ、そんな……私だってそんな場所に入室を認められた事がないのに……」

皆にリッチの説明をする。

「リッチってのは、魔物化して不死になった、超強力な魔導師の成れの果てだ」

「そんな恐ろしいのが、いるのにや？」

「へええ」

街の噂などに詳しい獣人達も知らないって事は、一般には全く知られてないって事だな。

「相変わらず其方の知識には舌を巻くのう」

「恐れ入ります——しかし一般常識には疎いですから」

「そうじゃの」

王女が否定してくれない。まあ、その通りだから仕方ないけどな。

40 cm程の肉を切り取り、レッサードラゴンを再びアイテムBOXへ入れる。

倒してすぐにアイテムBOXへ入れたので、まだ温かいままだ。

本当は内臓を抜き血抜きをして冷やしたいのだが、こんなデカブツをどうやって処理すればいいのか、皆目見当も付かない。

大きな川を見つけたら、入れてみるか——それとも、アストランティアへ戻った時に、ギルドへ頼むか……。

いつその事、重機を使って——いやいや内臓を傷つけたりすれば、せっかくの肉が全部台無しだ。

さて血抜きをしていないので、小分けにして一度煮てみる事にする。

アイテムBOXから一番大きな寸胴を出して、肉を入れて水で満たす。

「アネモネ、水を温めてくれ」

「うん！ ウォーム 温め！」

アイテムBOXから野菜等の材料を出して、アネモネにはパンを——プリムラにはスープを作ってもらおう。

9人分——王女の分をいれて、15人分ぐらい作ればいいか。

プリムラは、アストランティアで売り物のスープを作っていたので、このぐらいの量はどうって事はない。

野菜などの皮むきは、メイドさん達にも手伝ってもらっている。

「呆れた！ いつもそんな事に魔法を使っているの？」

「魔法の平和的な利用法だろ？ ファイヤーボール 前は憤怒の炎で風呂を沸かししたりしたぞ、あはは」

人殺しや戦争に魔法を使うよりは100倍マシだと思っただが。

レッサードラゴンの肉が煮えると灰汁が大量に出るので、そのままお湯を捨て新たに水を入れる。

そして再び、アネモネにお湯を沸かしてもらい、煮えたらちよっと切って味見——うん、大丈夫だな。

「脂身が全然なくて癖もないし、鳥の肉みたいだな」

サイコロ状に切ってから油で炒めて、プリムラの鍋へ大量投入。

そして、余った方は薄く切ってカツにしてみよう。

チキンカツのような感じになるに違いない。水と小麦粉、そして卵を入れた物に肉をくぐらせて、パン粉をまぶす。

「そのトゲトゲの粉は何なのだ？」

「パンを砕いて粉にした、パン粉でございますが——お城にはありませんか？」

「初めて見るのう」

そして油で揚げれば、レツサードラゴンカツの完成だ。大食らいの王女がいるので、大量に揚げる。

「スープ出来ました！」

「パンも出来たよー！」

「さあ、盛りつけて、皆で食おうぜ！」

「「「おうっ！」」」

「全く、手際がいいのう」

「そりゃ、在所では毎日やってますからね」

テーブルの上にはアネモネが焼いた焼きたてのパンと、プリムラが作った美味しそうなレツサードラゴンスープが並ぶ。

そして、俺が作ったレツサードラゴンカツだ。酒が飲みたい人には赤ワインを出す。

「リリース様は、パンと穀物を炊いた物、どちらをお召し上がりになりますか？」

「穀物をもらおう」

王女も、米の飯の虜になったようだ。俺とアネモネもご飯を食べる。

地面に座っている獣人達が一足先に、料理にかぶりついた。

「ひょーうめー！」

「肉なのに、サクサクにゃー！」

獣人達は刺激のある味が好きなので、マスタードを少し多めにやる。

「辛えー！」

「けど、鼻に香りが抜けて美味いにゃー！」

パトロールから帰ってきたベルにも、猫缶と揚げていないドラゴ

ン肉の塊をあげる。

前脚で肉を押さえながら、豪快に引きちぎって美味そうに食べている。

「ほう！ パンを砕いた粉で肉を覆い、油で揚げるとはな」

王女の隣には、メリッサが座って一緒に料理を食べている。

「そういえば、リリース様。もう毒味はしませんので？」

「其方達相手に、それは不要じゃろ」

まあ、信頼してもらっているという事か。大変名誉な事ではあるのだが……。

その後ろにはメイドさんが2人立っている。食事は後で取るようだ。中々大変な仕事だな。

「お城に似た料理は、なかったですか？」

「小麦粉をまぶして焼く料理はあったが、このような物は初めてじゃ」

王女は、カツを豪快に大きくナイフで切ると、口へ運んでいる。

「メリッサはどうじゃ？ 口に合うかえ？」

「はい、とても美味しいです。王女殿下」

「リリース様は、食べ物には偏見はないようですね？ 変わった物を食べてみますか？」

「変わった物とな？」

俺はアイテムBOXから、蜘蛛の卵のマヨを取り出した。

「これは、洞窟蜘蛛の卵から作ったマヨでございます」

「なんと！ 蜘蛛の卵じゃと？ ちとたもれ！」

やはり好き嫌いもないし、食わず嫌いもない。美味しい物ならなんでも食べるようだ。

「ほう！ これはコクがあるのに、なんと軽やかな味わい！」

「さすが、リリス様。とても美味しいのに、私の他はアネモネしか口を付けないのでございますよ」

「なんと勿体ない」

「メリッサはどうだ？ マヨを食べてみるか？」

一応、女魔導師にも勧めてみる。

「い、要らないわ！」

だが、否定しながらカツを赤ワインで流しこんで、彼女が固まっている。

「どうした？」

「あ、あの、このワイン、凄く美味しいのだけど……」

「うちの酒はみんな美味いぞ」

「そうそう、旦那の酒は貴族が驚くぐらい美味いんだ！」

ニャメナがワインの入ったカップを掲げている。

驚きつつ食事をしているメリッサだが――自分が飼っていたレッサードラゴンの肉なので、心中は複雑だろうけど。

しかし相手は魔物だからな、愛着のあるペットを絞めて鍋にしている感じではないと思うのだが……。

一応、本人もそう言っていたし。――だが、そういう俺は、夜店で買ってきたカラーひよこを鍋にしてしまったが。

「リリス様、ちょっと品がないと思いますが、こういう食べ方もございますよ」

アネモネが焼いてくれたパンを取ると半分に切る。そして、マヨとマスタードとソースを塗ってカツを挟む――カツサンドだ。

「こう、手づかみで、パクっと――」

「はは、こうか？――これは美味い！確かに品はないがの！絶対に城ではこんな食べ方はさせてもらえぬぞ?!」

後ろにいるメイドさん達が、「あちゃー」みたいな顔をしている。

「トラ公、ウチ等もやるにゃ!」

「おう！真似しようぜ！この黄色い辛いやつをたっぷり塗った方が美味い」

獣人達はマスタードが気に入ったようだ。肉に付けても美味いかな。

「おほっ！辛くてうめー!」

「にゃー!」

獣人達は、マスタードの辛味を楽しんでいる。

「この黄色い辛いのも、香辛料なのか？」

「はい、植物の種を潰した物でございます」

カラシナー――要はアブラナなんだが、この世界には白菜もキャベツもないみたいだから、アブラナもないのかもしれない。

道端を見ても、アブラナの類は見たことがないしな。

皆の食事が終わった後、カツサンドと、カップに入ったスープをメイドさん達に渡す。

「マイレンさん達も、皆と一緒に食べればいいのに」

「そうはまいりません」

そう言いながら、メガネのメイド長さんが、カツサンドをパクリ。

「お、美味しい！口の中で、パンと肉とが混然一体となって――」

「メイド長！こうやっていろんな物をパンに挟めば、時間がない

時にはつまんで簡単に食事をとる事が出来ますよ!」

「そうですね、これは真似いたしましょう」

食事の後片付けは、メイドさん達に頼む。さすがプロだ。手際が凄くいい。

「ニヤメナに町へ行ってもらって、噂を収集してきてほしかったんだがなあ」

街道を走っている馬車もいるので、門が閉じるにはまだ時間があるようだ。

「俺は、まだちょっとダメだぜ? 多分、男どもが臭いで集まってきたまう」

人間には全く解らないが、獣人には解る臭いのようなのだ。

「ニヤメナみたいないい女がそんな事になってたら、黒狼の中へ肉を投げ込むようなもんだな」

「そうだにゃ。ケンイチ、ウチが町へ行ってくるにゃ!」

「そうか——それじゃ頼んだぞ。軍資金は銀貨(5万円)でいいか?」

「それだけあれば、十分だにゃ」

金を受け取ったミヤレーが、凄い速さで街道を駆けていく。

噂を集めている間に門が閉じてしまうので、戻ってくるのは明日の朝になる。

「さて、風呂の準備でもするか」

「え? お風呂?」

メリッサが驚いた顔をする。まあ、そりゃ驚くよな。

「そこに小屋をもう1つだして、そこを風呂の部屋にするから。お城にいた時には、リリース様も利用なされたぞ」

「はは、メリッサよ。中々快適だったぞ」

「ここから峠に行くと、湯浴みなどは出来なくなるかもしれないから、今のうちにした方がいい」

まずは水の確保だよな——料理に使う水なら、シャングリ・ラから水を買ってもいいんだけど、風呂となるとな……。

サイトを見ると、2Lの水が9本、つまり18Lで1000円だ。湯船には200L入るから——12セット買えば、売ってる水でも風呂を沸かせる。1回1万2千円だ。

湯船は2つあるから、1日2万4千円……あれ？ 10日連続で風呂に入って、金貨1枚——王女の財力からすれば屁でもないな。それよりも、現場に家を出す場所があるかが問題だな。

「けど、こんな所で裸になるなんて……」

「ちゃんと風呂専用の小屋を出すんだぞ。そんな格好をしているのに、裸は恥ずかしいのか？」

「これは魔導師の正装よ！」

恥ずかしいけど、魔導師の正装なので着ているということだろうか？

小屋をもう1つ出し湯船を設置して、アネモネとメリッサにお湯を沸かしてもらう。

メリッサも乗り気じゃないみたいだが、王女から「協力せよ！」って言われたら、従うしか無いだろう。

本人だって風呂は入りたいだろうし。

そして風呂小屋で、女子達のキャッキャウフが始まった。

メイドさん達は、やっぱり入らず。後で入るようだ。

だが、アネモネが俺の胡座の上にいる。

「アネモネは入らないのか？」

「入らない……」

「女の子なら、綺麗にしている匂いがしている方がいいんだがなあ……」

「ケンイチはそういうのが好きなの？」

「もちろん」

「じゃあ、入ってくる……」

アネモネは立ち上がると、小屋の中へ入っていった。

石鹸&シャンプー、リンス全部、中に揃っているからな。

さて、ジェットヒーターの準備でもするか……。

――――◇◇――――

――朝、外の寝袋で起きる。女子達は家の中で寝ているが、狭い部屋の中――ベッドでギュウギュウだ。

だが、外で寝るよりはいいだろう。普段は馬車の中で眠るか、天幕を張ってその中で毛布を敷いて寝るようだ。

こんな場所でベッドで寝られるだけでも凄い事。不満を言う女性
は1人もいない。

メリッサの話では、結界の魔法があるそうなので、それを使ってもらった。王女の御身を守るためだ、嫌とは言わない。

結界は、普通の人間や小さな魔物なら遠ざける事が出来るようだ。
勿論、^{もちろん}敵に魔導師がいれば解除されてしまうが、それなりに効果はある。

外に張った小さいテントの中。俺の隣にはアネモネが寝ている。
シャングリ・ラを検索すると、2人用の寝袋が売っていたので購入してみた。

普通の布団の三辺が閉じた封筒のような作りになっていて中々暖かい。寒冷地でなければ十分に役に立つ。

この中ではゴニョゴニョするのも可能だろう。寝袋の上にはベ

ルがいて――起きたのに気がつく、ザラザラの舌で俺の顔を舐めてくる。

腹が減ったのかもしれない。

「ふああ、さて起きるか」

川まで行って、デカイプラ容器に水を汲んでくる。

テーブルを出して朝食の準備をする。王女は昨日食べたカツサンドが食いたいとご所望なので、アイテムBOXに入っているレツサードラゴンカツを取り出す。

しかし朝っぱらからカツサンドかよ――ヘビーだな。

とにかく、王女のバイタリティは凄い。このぐらいじゃないと、魑魅魍魎が跋扈するお城の中で平然とした顔をして暮らせないんだろうな。

豆腐メンタルじゃ、とても持ちそうにない。

起きたアネモネにパンを焼いてもらい、スープは昨日の残り物だ。朝食を並べていると、町からミヤレーが帰ってきた。

「おはようにゃ！」

「町で襲われなかったか？」

「そんな奴は、ぶっ飛ばしてやったにゃ」

口ぶりからすると、からんできた男はいたようだな。彼女の毛皮はいつもブラシをかけてるからピカピカだ。

そりゃ、獣人の男は放っておかないってわけだ。

獣人達以外はテーブルについて朝食にする。カツサンドを食っている王女以外は、皆グラノーラを食べている。

「このパリパリも美味しいわ」

メリッサが呟くが――これを不味いと言ったやつはいないので、この世界の万人に好かれる味なのだろう。

「ミヤレー、何か面白い話はあったか？」

「物が入ってこなくなるって、値段が上がっていたにゃ」

「そりゃ当然だな」

「それから峠にいた連中が、戻ってきてるにゃ」

峠が不通になってるんだ、いてもしょうがないだろうな。お城にも100m程崩れたって情報が入ってきたのだから、誰かが確認したんだろう。

「通行止めになってるんだ、待ってても仕方ないだろう。しかし迂回路とかあるのか？」

「ダリアから東へ行けば、峠がもう1つありますよ」
プリムラが迂回ルートを知っているようだ――。

「王都からダリアまで行って、さらに峠を越えて、北上してソバナを目指すルートか？」

「ダリアに来る砂糖や塩などは、その峠を越えてやって来ます」
しかし、ソバナから王都へ荷物を運ぶとなると、めちゃくちゃ遠回りだな。時間も2ヶ月は掛かる。

商人達が引き返すって事は、そっちのルートに賭けるのかもしれない。

でも、イベリスの橋も落ちているぞ？ その情報は伝わってないのかな？

何せ人の噂でしか情報が伝わらないからな。

「何人かは崩れた土砂の上を、歩いて荷物を運んでいるらしいにゃ」
「なんだそりゃ、そんな事をして大丈夫なのか？ 下は崖なんだろ？」

「全く、自殺行為じゃの」

王女の言うとおりで。物資が不足すれば、物の値段が上がる――

となれば、少しでも運べば金になるって寸法だ。

それに、そういう仕事をするのは、身軽でパワーがある獣人達だろう。

「しかし、そりゃ博打だな」

「そうです。商売で博打をするのは感心しませんわ」

プリムラは、堅実な商売をモットーとしているからな。

彼女の言葉で思い出した――商売で博打といえば、橋が落ちた所で車に乗せた若い商人はどうしたかな？

「他に何か面白そうな話はないのか？」

「あるにゃ！ 国境の街の反対側に帝国の街があるにゃ？ えーと

――にゃんだっけ？」

「ドンクレスウエストエンドシユタット」

ニヤメナの突っ込みが入った。王国と帝国、2つの国の国境線に背中合わせになるように、2つの都市が隣接しているのだ。

王国側がソバナ、そして帝国側がドンクレスウエストエンドシユタットというらしい。

帝国側の特徴として、人名や土地名がやたらと長いのが挙げられる。

「それにゃ！ そのナントカシユタットに、帝国の『ドラゴン殺し』が来てるって話にゃ」

「ドラゴン殺しって、前に話が出てきたあいつか？」

「そうにゃ」

マヨネーズを作り出すという特殊能力をもつ、俺のような転移者だと思われる人物だ。

帝国魔導師であり、皇帝ブリュンヒルドに仕える近衛魔導師。

「もしかして帝国の軍隊が侵攻してきているのか？」

「そんな事実があれば、真っ先に王族の下へ話がやって来ているはずじゃ」

王女の言うとおりで。それなら、単独で先行しているって事なんだろうか？

「リリース様、帝国側へ越境の許可というのは、すぐに下りるものなのでしょうか？」

「商人で、それなりに実績があれば認められるが……其方まさか？！」

「その帝国魔導師に会ってみたくて……」

「会ってどうする気じゃ？！　　もしや、妾を捨てて帝国へ寝返るつもりではないじゃろうな？！」

帝国へ寝返る事を心配するなら、あんな素敵な歓待をするなよ——
—と思う。

まあ王女は助けてくれたのだが。

「いやまさか、王都に咲く可憐な花を捨てて、帝国へ渡るなどありえませんか」

「そのような棒読みの台詞を、もう一度妾の目を見て申してみるがよい！」

「私が家族を捨てて、帝国へ亡命するなどありませんよ。そんなに心配なら、私の家族を人質に取ればよろしいでしょう」

「ぐぬぬ……」

王女が躊躇するって事は——この国では王侯貴族が人質を取るとなると、彼等の誇りに傷がつくという文化なのかもしれない。

まあ、こちら辺は国によって違いがあるだろうな。人質が普通という国もあるだろうし……。

「いつもそうやって、謀略やら欺瞞やらを巡らしているから、お互いに疑心暗鬼になるんです」

「隙を見せれば地獄へ引きずり込まれる——魑魅魍魎が跋扈する世界なのだから、致し方ないであろう」

「いやはや、困ったものですねえ」

「だからこそじゃ！ 其方のような柵しがらみがない者が欲しいのじゃ！」

「リリース様の味方になるとは申しましたが、それはお断りいたします」

俺の即答に、また王女ががっくりと肩を落とす。俺達の話の傍で聞いていたメリッサも何か言いたそうに口を開いたのだが、そのまま黙ってしまった。

「また、即答かえ？！ 少しは妾の願いを聞いてくれてもよいじゃろう！」

「リリース様のお願いはお聞きいたしましたけど——それとも、あの首飾りは返却なさいますか？」

「いやじゃ！ あれは妾の物じゃ！」

貴族出身だと確かに柵は多そうだな。

「姫様！ 姫様の傍らには、いつも我らメイドが寄り添っております故——」

「おうおう——其方達だけじゃ、妾の味方なのは……」

王女と膝をついたメイドさんが抱きあって涙を流している。残念ながら、そんな三文芝居に心を動かされるようなオッサンではない。特にマイレンさんは、20歳過ぎているので、その涙は信用出来ないな。顔とスタイルは凄い好みなんだけどねえ。

でも、それを口に出すと絶対に色仕掛けがやってくるから、言わない。

「冗談はさておき、リリース様。そのドラゴン殺しは、私と同郷の可能性が高いのでございますよ」

「それは真か？」

「はい、それ故——もしかしたら、その魔導師を王国へと引き抜く事が出来るかもしれません」

そいつも転移者ならば、元世界の食い物などに飢えているだろう。それで釣ればいい。まあ無理だとしても、ただ会うだけでもいい。なにか、この世界へやって来た情報が掴めるかもしれない——とはいえ、別に戻りたいとも思っていないだけだねえ。

俺の故郷のど田舎で暮らすのも、この世界で暮らすのも然程変わらないし。

いつも思うのだが——シャングリ・ラがあれば別に生活にも困らない。

これでネット通販もなく、アイテムBOXもない状態で苦勞の連続——そんな状況なら帰還を願うかもしれないが。

「逆に言えば、帝国の魔導師に説得されて、其方が寝返る事もありえるであろう?！」

「先程も申しましたが——家族を残して、それはありえません。王侯貴族なれば親兄弟でも信用出来ないのは解りますけど」

「うぐぐ……」

「この無礼者!」

メリッサが怒るのだが事実だろ。だが街道を埋めている土砂の除去が上手くいったら、国境の街ソバナまで行ってみようと思う。

人口20万人の都市が背中合わせ、40万程の人が住んでいて、国境を挟んでの貿易も盛んらしいしな。

だが王女がとんでもない事を言い出した。

「妾も行くぞ?!」

「ソバナへですか?」

「其方が逃げ出さないように、監視しなくては!」
まだ言ってるよ。

本気なのか? 再度確認しても本気だという。

マジですか？

「にゃー」

俺の足下にベルがやってきて、ズボンに身体を擦りつけている。
しゃがむと彼女の黒光りする毛皮を撫でる。

「よしよし、お姫様は——俺が、君たちを置いて逃げるつもりだなんて言うんだぜ。全く身内も信用出来ない王侯貴族様はこれだからなあ……」

「そんなの絶対にありえない！」

アネモネも走ってきて俺に抱きついた。

「妾も好き好んで、こんな暮らしをしているわけではない！」

ちよっと冗談が過ぎたか——暗い顔をする王女の前に立つと、深々と礼を言う。

「双肩に国民の命が懸かっていると言われては——私などでは、とても耐えられません。リリース様の心中お察しいたします。どうかご無礼をお許し下さい」

「……」

何不自由なく暮らせても、王侯貴族の暮らしってのは、全く憧れない世界だな。

96話 崩落現場へ到着

大崩落している峠の向こうにある街――ソバナ。その街と国境を挟み背中合わせにするように、もう一つ帝国の街がある。

名前はドンクレスウエストエンドシュタット。そこに俺と同じ元世界からの転移者が訪れているらしい。

そろばん等を普及させていることから、日本人の可能性が高いと思うんだが――そろばんって元は大陸だっけ？

俺達が土砂を除去した後、ソバナへ向かうと言うと――王女もついてくると言う。

その理由を聞けば、「俺が逃げるかもしれないから」らしい。ぶっちゃけありえない。

朝飯を食ったし情報もゲットしたので、いよいよ峠へ踏み込む。

近くの小川へ行くと、プラ容器を大量購入し、水で満たしてアイテムBOXへ収納する。

そして家や小屋も収納して、ハ〇エースを取り出すとバイオディゼル燃料を給油。

もっと乗客が増えるなら、T田のコースター（マイクロバス）もいいかもな。

「ケンイチ、それは何じゃ？」

「これが、この召喚獣の食事でございます。私が魔法で合成した特殊な油しか食べません」

「それがなければ動かないのか？」

「はい、もし私を殺して、これを奪ったとしても、すぐに動かなくなってしまうです」

「むう……」

「姫様、珍妙な生き物でございますね」

メイドさんが王女に耳打ちするのが聞こえる。

「全くその通りだの」

腕を組んでいる王女を助手席に乗せ、皆もハ○エースに詰め込み出発。

馬なしで動く車は好奇の視線を集め、アグロステンマの町を抜ける。

さすが交易が盛んな街道の町だな、いろんな人種がいる。獣人も猫人と犬人が一緒にいるようだ。

「おい、犬人も一緒に暮らしているようだけど、お前等的にはどうなんだ？」

「どうって聞かれても旦那——ここで暮らすしかねえなら、我慢するしかねえ」

「そうだにゃ」

端からそういうのが我慢出来ない連中は、こういう街には近づかないって事か。そりゃそうだな。

外側の城壁がそのまま建物になっている変わった町だ。時間があれば滞在してみたかったが……。

だが先ずは、崩落現場をなんとかするのが先決だ。

町を抜けると、いよいよ峠に入る。元世界の峠なら、沢を埋めたり橋を架けたりして道を真っ直ぐにしようとするのだが、もちろん勿論そんなものは一切ない。

ただひたすらに岩を削って作った道が崖にへばりつく。道は細く馬車がすれ違うのもやっと。

場所によっては、すれ違いも出来ない難所もある。そんな、うね

うねと蛇のように曲がりくねっている道が延々と続く。

そしてガードレールもなく横は崖が剥き出し。こりゃマジで暗くなってから通るのは自殺行為だわ。

滑り落ちれば数十メートルは転落するだろう。いくら文明の利器とはいえ、転落すれば皆の命はない。

ハンドルを握る手に汗が滲む。勿論スピードは20～30kmの微速前進。

それでも坂道を進む馬車に比べれば、かなり速い。

「これが名高い、『地獄街道』じゃ！」

王女の言葉通り――まさに落ちたら地獄。ウチの田舎の峠は、『棺桶街道』って言われてたけど、それを彷彿させるな。

王都の住民を養うために、こんな街道を行き来しなくちゃダメなんて、こいつは相当ヘビーな仕事だぜ。

だが、それだけ商売としては儲かるって事なんだろう。

なにせ経費が高くついて値段が高くなっても、買ってくれる客がいるって事だからな。

「ひょえー！　すげー！」

「これは凄いにゃー」

一番後ろで獣人達が喜んでいるが、彼女達は高い所は平気だ。

他の女性達は、椅子にしがみついている。しかしこの世界の馬車ってステアリング機構がついていないから、曲がるのは大変だと思うが……。

途中、多くの下りの馬車とすれ違う。

「おっと、あぶねえ！」

「きゃああ！」

メイドさん達の悲鳴が聞こえる。悲鳴を上げたいのはこっちだ。

下りでスピードが出た馬車に突っ込まれそうになり、焦る。

馬車のブレーキは貧弱だ。車輪を板切れで押さえてブレーキを掛ける。当然、ドラムブレーキもディスクブレーキもない。

ステアリング機構がない代わりに片輪だけブレーキを掛けて、馬車の方向を変えているようだ。

貧弱なブレーキでも、ないよりはマシだと思われるが、壊れたらそこで終了——馬共々、谷底へ真っ逆さまだな。

「冗談じゃねえ、もらい事故でも地獄へ一直線じゃねえか」

愚痴りながら峠を登る。そして、曲がりくねった道の先に崩落の現場が見えてきた。だが依然として10台程の馬車とこが留まっているようだ。

そして馬車列が近づいてきたので追い越す。王女には、お城で使った拡声器を渡してある。

『あゝあゝ！ これは、本当に声が大きくなるの！ 妾はカダン王国王女、リリース・ララ・カダンである！ この崩落現場の除去作業の指揮を執りに参った！』

馬車にいる連中が、皆こちらを見ている。突然やって来た馬なしで動く車や、大声で叫ぶ少女——そりゃ何事かと思うだろ。

ついに馬車列の先頭へ辿り着いた。目の前には、てんこ盛り土砂が街道を斜めに埋めている。

とりあえず車を降りて偵察だ。

「はあゝ、こいつはすげえなあ。こんなの本当になんとかなるのか？」

「それでも、なんとかせねば国が瀕死になるぞえ?!」

「それは解りますが……どうだ？ 王都の大魔導師様は？」

「……こ、これは大変そうね……」

メリッサも思わず、たじろぐぐらいの凄まじい大崩落だ。

しかし、先が見えないので、全くどうなってるのか、さっぱりと解らん。

王女の話では、峠の頂上にある宿場町の手前らしい。標高はざっと1000mぐらいであろうか。

車や重機のエンジンはディーゼルで燃料噴射だから空気が多少薄くなっても平気だ。過給器ターボもついているしな。

「ドローンを出して、上空から偵察だな」

アイテムBOXから、クアッドドローンを出して、偵察させる事にした。

とりあえず100m程上昇させれば全体像は解るだろう。

コントローラーのレバーに掛かる指に力を入れると、甲高い音をたててドローンが垂直に上昇した。

「おっ！ なんじゃ？ 空を飛んだぞ？！」

「お姫様、あれも旦那の召喚獣ですよ。空から何があるか、教えてくれるんですぜ。ゴブリンの巣を潰した時も上から丸見えだったぜ、はは」

ニャメナが、得意げにドローンの説明をしている。そっちは彼女にまかせていいだろう。俺は操縦に集中しないと。

谷底へ墜落させたら、そこで終了だ。

「あんな物を見たことないわ！」

メリッサが驚くが、そりゃあたり前田のクラッカー。魔法でも召喚獣でも、なんでもないんだからな。

ドローンからもたらされる映像は、間違いなく100m程の大規模な崩落。

確かに100mに渡り崩落しているのだが、途中で曲がりくねっているので、俺達のいる所からは土砂の終点が見えない。

崩落の反対側の街道にも何台かの馬車が止まっているのが見える。
その先の峠の頂上には宿場町。

ドローンを降ろして、録画した映像を王女に見せる。

「こ、これは、どういう仕組みなのだ?!」

「空を飛んでいる召喚獣が見た事を記録出来るのでございますよ。
あまり遠くへは飛べませんけどね」

「な、なんと! このように上空から見れば、敵軍の配置などが一
目瞭然ではないか!？」

「やっぱり、そういう使い方を想定してしまうのか。戦に引っ張り
だされそうになったら逃げよう。」

「戦の為には使いませんよ?」

「うぐ——しかし、国の危機となれば——」

「今は、こちらが優先でございます」

「ぐぬぬ………やはり、崩落の規模は約50カン程で間違いなさ
そうじゃな」

長さの単位1カンは約1.8mぐらいらしい。初代の王様の身長
からその長さが決まったという。

その元になった棒は、今も王家に大切に保存されているという話。

「あの——メリッサ様」

後ろから声を掛けられた。振り向けば、白髪と髭を蓄えた60歳
程の男性。

商人らしく派手な色使いの服装をして、チャラチャラと多数のネ
ツクレスが揺れている。

「ああ、ジニアか。こんな所で会うとは奇遇ですね」

「知り合いかえ?」

「ナスタチウム侯爵家にも、出入りしている商人でございます。こ

ちらは王女殿下であらせられる。失礼があつてはなりませんよ」

「ははっ！」

後ろに集まってきた商人も一緒に膝を折って平伏する。

「よいよい、そんな事をしている場合ではない故」

「私達が、この崩落を除去するための先遣隊として送り込まれたのですよ」

メリッサの言葉を、商人達は真剣な眼差しで聞いている。

「しかし……恐れ多くも、この規模の崖崩れを、この人数では……他の貴族様達は……？」

「そうさな——これから人手を集め、準備をして、徒歩でここまで行軍——3週間はかかるの」

「ああっつ、やはり……」

商人達が、王女の言葉にがつくりと肩を落とす。まあ、おおよそは想定していただろう。

「しかも、崩落は50カンにも渡っています。これを人力で除去するとなると——早くて半年、遅くて1年……」

「ありえるの」

俺の言葉にまた商人達は、どん底へ落ちたような顔になった。

「なんということじゃ……やはり引き返すべきか……」

商人たちは円陣を組んで、伸るか反るかの会議を始めてしまった。後ろの馬車には、獣人の姿もチラホラ見える——おそらく積み下ろしなどの力仕事と護衛の任務を兼ねているのだろう。

だが、猫人ばかりだな。犬人の姿は見えないようだ。

先ずは作業を始めるために、キャンプ地を作らなければならない。街道は狭く、これじゃ家を出ただけでイッパイイッパイで何も

置けない。

商人達に事情を説明して少し馬車を下がらせる——だが邪魔になっっている空馬車がある。

「あそこにある馬車が邪魔になっているのですが……持ち主の方は？」

俺の質問にも、商人たちは顔を見合わせて、齒切れが悪い。

「あの……その馬車の持ち主は、この現状を見て悲観してしまっていますな。そこから飛び降りてしままして……」

「ええ？」

荷物が運べないとなると、倒産する商人も出るってわけか……。

「いや……王都に戻っても万策尽きて、首を吊る者も出るかも……」

「その通りじゃ……」 「全く洒落にならん……」 「この歳まで順風満帆だったのが、ついに死の神に捕まったか……」

「孫の顔も、もう見れぬとは……」

止めろ、そういう話は俺に効くから止めろ。

商人達も明日は我が身と心配している。死んだ男の荷物は他の商人で分配して、馬も余裕がある者が引き取ったらしい。死人が持つていても仕方ないからな。

こんな場所で泊まっていて、馬の飼葉はどうしているのだろうか？聞けば——商人達が金を出し合い、飼葉を運ぶ荷馬車をチャーターして、アグロステンマから運んでいるらしい。連絡係には、獣人を使っているようだ。彼等なら数十kmのマラソンは余裕だからな。

このまま邪魔な空馬車を放置しては作業が出来ない。空馬車を俺のアイテムBOXへ入れた。

「「おおっ！ アイテムBOX！」」

商人たちの目が輝く。彼等にとって、アイテムBOXは憧れの的だ。

邪魔な空馬車がなくなり、スペースを確保する事が出来た。

先ずは家を設置するスペースを作ろう。しかし、大量の労働者がここへやって来たら、どうやって補給をするんだろうな。

力自慢の獣人達が多いと思うが、彼等に飯を食わせて、寝るスペースも確保しなくてはならない。

しかし、ここに余分なスペースなどない——こんな狭い街道の上に数百人が寝泊まりして、飯を食うのか？

見るからに無理そうだ。

「リリース様。ここへ数百人の労働者がやってきたら、物資の補給が大変そうですね——」

「その通りじゃ。この峠の工事でも難工事で、犠牲者が山のように出たという事じゃ」

コ○ツさんを召喚するが——スペース的に大丈夫だろうな。重さで道が崩れたりしたらアウトだな。

どの道、重機なしでこの土砂を取り除くなんて不可能に近い。人力でやってたら本当に1年ぐらい掛かってしまう。

「よし、コ○ツさん召喚！」

地響きを立てて、黄色い巨大な重機が落ちてきて、グラグラと地面が揺れる。

その振動で崖上からパラパラと小石が降ってくるが——セーフ。

「おおっ！」

「だ、大丈夫か？」

王女と一緒に辺りを見回すが大丈夫のようだ。鋼鉄の召喚獣を見て、商人たちがあわてふためく。

「お城でも見たけど――この鉄の魔物が召喚獣だと言うの？」

メリッサが鋼鉄の塊であるカタピラに触れているが、バレるかな？
まあ、その時はその時だ。

ミヤレーとニヤメナに手伝ってもらい、コ〇ツさんのバケットを油圧ブレーカーに換装することにした。

「おい、ミヤレーとニヤメナ、手伝ってくれ」

「よっしゃ！ こいつの鉄の爪を交換するんだよな？」

「任せてにゃ」

アタッチメントの交換は以前に手伝ってもらった事があるので、問題ないだろう。

「にゃー」

暇なのか、ベルが俺の所へやって来た。ここじゃパトロールも出来ないし、狩りも出来ないよな。

彼女には、ちよつとつまらない場所だと思われる。

俺達の作業を見ていた商人の隊列から、獣人達がやって来て、こちらを見ている。

「ほら、ベル。出番だぞ」

獣人達の前にベルが座ると彼等がペコペコと拝み始めた。こんな所に森猫がいるなんてありえないからな。

その中から、三毛の女の獣人がこちらへやって来た。

「森猫様の仕事なら、あたいも手伝うよ！」

「別にいらねえよ！」

「そうだにゃ」

だが、やって来た三毛が、ニヤメナの身体の異変に気がついたようだ。

「あれ？ あんた、あの日だね？ あの旦那に、かわいがってもらったかい？」

「ああ、たっぷりとな。だから、お前の手助けはいらねえ」
「おいおい、コッチまで会話が聞こえているんだぞ。」

「なんだよ。森猫様がいるって事は良い人なんだろう？ あんな凄い鉄の魔獣も使えるし——当たりのご主人様じゃないか。あたいた達にも分けておくれよ」

「誰がやるか」

「そうだにゃ」

爪の交換作業が終了すると、メリッサが俺の所へやってきた。

「ケンイチ！ 私の核^{コア}を出して」

「解った」

「貴方ばかりに、いい格好はさせられないから」

別に張り合っているつもりはないんだがな。俺は作業を終わらせてアストランティアのあの場所へ帰りたいたけなのに。

そうそう、その前にソバナの反対側にいるっていう日本人らしき男に会わないとな。

アイテムBOXへ収納していたゴーレムの巨大な核^{コア}を、崩れている土砂の所を出す。

すると、メリッサが何やら呪文を唱え始めた。

『大いなる万物に連なる者よ、この石の礫^{かりそめ}に仮初の命を与え給え』
道を塞いでいる土砂が核^{コア}の周りに集まると、みるみる大きさを増し、二本足で立ち上がった。

デカイ！ 高さ10mぐらいか——前にも見たが完全に巨大ロボだ。これで肩に乗ったら、鉄人20号か、はたまたGロボか……いや、大きさ的にはボムズか。

そして巨人が動き始めると、大きな岩の塊を掴んで谷底へ放り始めた。

両手で持ち上げて、ポイって感じだな。多分、野球のような複雑な投げ方は不可能だろう。

「「「おおおっ！」」」

「すげええ！」「すごいにゃ！」「わー」「凄いですわ」

商人達、そして俺の家族からも驚嘆の声が上がる。

確かに、こりゃ凄い！　だが、こんなのがマジで動くのであれば、その隣で俺の重機が動いていても、別に不思議はないように思える。

「私もあれを動かせれば、ケンイチのユ○ボさんや、コ○ツさんといっしょに色々できる！」

「そうだな。もっと高い崖に登ったりするのも、ゴーレムで出来るようになるかも」

「よし！　ふんすっ！」

アネモネが気合を入れている。王家の書庫でコピーした物の中には、ゴーレムの本もあったはずだ。

彼女には才能がある。それも可能だろう。

俺も負けてはいられない――運転席に乗り込むと、右側の液晶パネルからブレーカーモードを選択。

「よっしゃ！」

ガンガンガン！　と金属を叩く大音響と共に、鋼鉄製の杭が岩の壁を崩し始めた。

重機に装着されたブレーカーにより、崩れた岩が下に山積みになる。

「どんどん行くぜ！」

俺は、コ○ツさんを操るレバーに力を入れた。
一心不乱に崖を掘る。

「「……………!!」」

外が何やら騒がしいが、重機が動く騒音で全然聞こえない。

そして奥行き3m、長さ10m程のスペースを作った。これで結構広くなったはずだ。

コ○ツさんを収納。代わりにユ○ボを出し、こいつの排土板を使う。掘り出した岩石を崖下へ押し落とすのだ。

ガタガタとカタピラを軋ませ、土砂を押し寄せていく。

そして、綺麗になったスペースに、アイテムBOXから家と小屋を出して設置。

やっと、一息つけるかな。それとほぼ同時に、稼働していたメリツサのゴーレムも元の土砂へ還った。

ゴーレムを谷底へ身投げさせれば、身体を構成していた土砂も捨てる事が出来るが、核も一緒に落ちてしまうからな。

「ゴーレムはどのぐらいの時間、動かせるんだ？」

「1時間ぐらいよ……貴方の召喚獣は？」

「エサの油がある限り、一日中動く」

「……信じられない」

「実際に、アストランティアの子爵領で、用水路の普請を短期間で終わらせたからな。嘘じゃないぞ」

「メリツサよ、その者が申しておる事に偽りはない。通常では考えられぬ程の速度で普請を終わらせたのじゃ」

王女と話していると、商人達がやって来た。

「王女殿下！ この鉄の魔獣とゴーレムがあれば、あっという間に街道が開通するのでは?!」

「それはどうかの？ 何事もやってみぬと解らぬぞ？」

だが、商人達の顔は明るく、希望に満ちている。

余裕が出来たので、双眼鏡を出して辺りを確認する。

峡谷には川が流れているが、小川程度の水量しかなく、崖からは少々距離がある。

土砂を捨てて川がせき止められてしまうと、洪水の危険性があるが――ここなら投げ落としても、スペース的には問題ないだろう。そして下を覗いていると、身投げしたという男の遺体が目に入ってしまった。

すぐに目を逸らしたのだが、なんだか見憶えのある顔のような……。

もう一度、覚悟を決めて覗く……それは、落ちた橋から王都まで乗せてやった若い商人だったのだ。

「ケンイチ！ なんじゃ、それは！？ 妾にも見せてたもれ！」

「はい……」

「おおっ！ これは遠くが近くに見える！ 魔法かえ？」

「いいえ、メガネに使うガラスの板を複数重ねると、そのような能力を持たせる事が出来るのです。多分、カールドンさんなら、似たようなカラクリを製作出来ると思いますよ」

「ほう！ 是非とも、作らせねば！」

王女に双眼鏡を持たせて、皆の所へ戻ったのだが、俺の様子がおかしいのに気がついたようだ。

「ケンイチ、どうしたのですか？」

「ケンイチ、どうしたの？」

プリムラとアネモネが俺に駆け寄ってくる。

「ああ、下に落ちてた遺体が、俺が橋の所から王都まで乗せてやつ

た商人だった」

「あちゃー！ これだから商売ってのは怖いよなあ。儲けりゃ天国だけど、損すりゃ地獄だ」

「そうだにゃ」

「多分、博打の負けを博打で返そうとしたのでしょ」

「まあ、そんな所だろうな」

橋が落ちて荷物を運べなかった損失を、ソバナ―王都間のリスクの高い商売で取り返そうとしたのだろう。

競馬のメインレースで負けて、有り金叩いて最終レースに賭けるようなもんだ。

最終レースでバス代まで賭けて、オケラ街道を歩いて帰る奴とか、靴を売って勝負して裸足で帰る奴なんてのも、マジでいた。

彼にも家族がいたって話だったが……しかし明日は我が身。

気を引き締めていかないと。俺の家族も路頭に迷う事になる。

だが、獣人二人は俺がいなくても平気だろうし、プリムラも実家に帰れば、問題ないだろう。

残るはアネモネか……それなりに生活知識も仕込んだし金もギルドにあずけてある、なんとか出来ると思うのだが……。

「なんかあったのかい？」

1人でいた俺に、三毛の女が話しかけてきた。

「ああ、そこの崖に身投げした男が、ちょっと知った顔だったんだな」

「ありゃ、そういう事も――まああるよ………あたいが慰めてあげようか？」

直ぐ様、ミヤレーとニヤメナが飛んできた。

「てめえの出番はねえ！」

「そうだにゃ！　ちよつと目を離すと、これだにゃ！」

「なんだよ、ケチ！」

獣人達のもみ合いを止める気もなく眺めていると、プリムラがやってきた。

そして俺の背中に抱きつくと、背中から彼女の声が聞こえる。

「別にケンイチが悪いわけではありませんから、気にする事はありませんよ」

「こういうのは、商売をやっていると、よくある事なのか？」

「ええ、父と一緒に行商に出て、たくさん見ました」

売掛金を回収にいくと、店で首を吊っていたりとか、マジであるらしい――ナンマンダブナンマンダブ。

彼女はマロウさんと一緒に商売で各地を回り、こういう光景を沢山見てきたんだろうなあ……。

随分と女の子にはヘビーな環境だな。そりゃ強くもなるし、実を取るのを信念として商売で危ない橋を渡る事もないわけだ。

マロウさんもプリムラも、博打が強い。だが商を博打にはしないという商売の秘訣を、家訓にしているようだ。

しかし他の商人達も、それを見ているはずなのに、それでも商売を博打にしてしまうのか。

死んだ男は気の毒だが、リスクを知った上で勝負に挑んだんだからな。

97話 ホイールローダー

俺達は、ベロニカ峡谷という峠へ来ている。

その峠を走る街道が長さ100mに渡って崩落、それをなんとかしなくてはならない。

この国の国王や王妃様に、俺の重機のパワーを見込まれてしまった。

貴族達も、人員を集めて応援に駆けつけるようだが――王女の話では3週間は掛かる模様。

とてもじゃないが、待つてはいられない。俺達だけでなんとかする事にした。

そのためには、まずキャンプ地を作らなければならない。

――というわけで、油圧ブレーカーに換装したコ○ツさんで、岩の壁を崩しスペースを作る。

とりあえずは家と小屋を置くスペースがあればいい。今は馬車が2台すれ違うのが精一杯のスペースしかないからな。

そしてスペースを作った後、家と小屋を設置して、とりあえずの本拠地は出来た。

次に重機を動かすためには、大量のバイオディーゼル燃料が必要となる。

コ○ツさんの燃料タンクは400Lだ――その燃料を合成するための小屋を作ろう。だが、組み立てキットの小屋を建てている時間はない。

大型のテントで誤魔化そう――というわけで大型のテントをシャングリ・ラで検索する。

中心に柱を立てて、円錐状に屋根が広がる、サーカスのテントみたいな形の物が売っている。

大型なので、当然値段も高い——6万5千円だ。

だが、これだけ大型の物なら、緊急避難用のテントとしても十分に使えるな。

「ポチッとな」

ドシャッ！ と部材が落ちてくる。こいつも組み立て式だが、組み立てに時間は掛からないだろう。

下に床となる円形のビニールシートを敷き、真ん中には屋根を乗せるための柱を立てる。

こいつを固定するために地面にペグを打ち込むのだが、地面が岩なので簡単ではない。

発電機とハンマードリルをアイテムBOXから出し、穴を開けてからペグを固定する——全く大仕事だ。

柱とペグによって屋根が固定されているので、壁がなくても自立するわけだ。

ハンマードリルなんて、もう使わないかな？ ——と思っていたが、意外な出番があって自分でも驚く。

最後に壁となるビニールシートを屋根から吊り下げれば、テントは完成。

本当に子供の頃に見たサーカスのテントみたいだな。

そういえば、最近はサーカスって言葉をほとんど聞かないような気がする。

「そのような、見たこともない魔道具が次々と——其方は一体何者なのじゃ？」

「辺境の商人兼魔導師でございますよ。それ以上でも、それ以下で

もございません」

俺の返答に困惑する王女を横目に、皆がテントの中に滑りこんでくる。

「わあゝひろゝい！」

アネモネと一緒にやって来たベルも早速、隅々までクンカクンカしている。

「おおっ！ これは、なんという立派な天幕！ 是非、売ってほしいのだが――」

商人達が売買の交渉にやって来るのだが、もちろん勿論これは非売品。

「旦那、ここで寝泊まりするのかい？」

「いや、ここでは重要な作業をしてもらう。俺の召喚獣が食べる油の生成だ。子爵領の普請でもやっただろ？」

「魔道具を使って、油を分けるやつにゃ？」

「そのとおり」

シャングリ・ラから安いプラ製の浴槽と、一斗缶入りのキャノーラ油を30缶購入。

一斗缶だから18L×30個で540L、プラ浴槽には250L入るから、2つがほぼ満杯になる。

値段は1缶3600円だから、合計で10万8千円。1日重機を動かすと、このぐらいの燃料代が掛かる。まあ必要経費だ。ついでに新しい柄杓ひしゃくも2つ買うか。

プラ容器にキャノーラ油を満杯にして、薬品を加えて前処理を行う。

後は、こいつを『不』型の魔道具へ通せばいい。カールドンさんから、同じ物をもらったので、燃料の生成速度は2倍になった。

「ここにある油を、柄杓で魔道具のてっぺんに入れ、左側の油を取

る——以前と同じだ。油を混ぜないでくれよ。召喚獣が腹を壊してしまう」

「解ってるよ、旦那」

「もう、こんな場所じゃ何もやる事がないから、これをやるしかないにゃ」

ミヤレーの言うとおりだ。左右は崖。どこへも行けない。

獣人の脚なら峠を駆け下りて、下の森へ狩りに行くことも可能だろうが、面倒らしい。

「旦那のアイテムBOXに入っている足場を使って、この崖の上に登れないかい？」

「まあ無理だろう。ざっとみても、ウチにあった崖の数倍の高さがある」

それに、こここの崖は斜めになっているからな。足場を置いただけでは登れない。

「うにゃー」

ぼやくミヤレーの後ろから——いつの間にか三毛の女がテントの中へ入ってきて、俺に抱きついた。そして大きな胸を俺の腕に押し付ける。

「ねえ、旦那あ——獣人が2人もいるんだから、もう1人ぐらい雇わない？」

「妻も子供もいるからなあ……ちょっと難しいな」

「ふぎゃー！　ちよつと油断してると——このミケ！」

「ザケンなあ！　変な臭いつけんじゃねえ！」

「あんたのくっさい臭いの方が、酷いじゃないのさ！」

獣人の女達が睨みあって一触即発状態だ。

「こらこら止めろ、喧嘩すんな。これ以上、増やすなって言われて

るからな」

「もう！ そんなにあっさり断らなくてもいいじゃんか！」

2人も3人も、同時にあの日になられたんじゃ、身体が保たないからな。

三毛の女が離れると、ミヤレーとニヤメナが俺に身体をすり寄せて、匂いを上書きしようとしている。

「ゴブリンの時にも似たような奴がいたけど、全くもう油断も隙もあつたもんじゃないにゃ」

「こういうものは、早い者勝ちなんでえ！ しっしっ！」

やって来た奴を次から次へと入れて、ハーレムにしまつては、アネモネやプリムラから刺されるかもしれん。

特に怖いのがプリムラだ。ああいう真面目なタイプは思いつめると何をするか解らん。

実際に実家を捨てて、俺の所へ来てしまったのだから。

「くっそくクロ助、他にも色目を使ってるやつがいるぞ」

「本当にもう、冗談じゃないにゃ」

「いやニヤメナ、男達の視線は、どう見てもお前を見ているぞ？」

「げっ！ 冗談じゃねえ！」

「寝るときは、結界を使った小屋の中で寝た方が得策だな」

「旦那、そうするよ……」

それはさておき、重機を使うために、油圧ブレーカーから普通のバケットへの交換作業を手伝ってもらう。

もういつその事、コ〇ツさんをもう一台買って、ブレーカー用のバケットを装着した二台体制にするか？

今度、油圧ブレーカーを使う事があつたら考えよう。

「ありがとうな」

「それじゃ、ウチらは油を作るにゃ」

「頼む」

獣人達に油の生成を頼んで、俺はパンを齧りながら重機で試し運転をしてみよう。

他にも、腹が減った奴にはパンを配る。メリッサも、ゴーレムで魔力を使い果たしたようなので、今日は無理だな。

アネモネとプリムラには、夕飯の準備を始めてもらうために、道具を家の前に用意した。

「ケンイチ、少し多めに出してほしいのですが……」

「また料理を売るのか？」

まあ、プリムラもここじゃ、やる事がないからな。それに目の前には客がいる。

それじゃ、以前使ったワインサーバーとワインも大量に用意しよう。ゴミはまとめてもらって、後でゴミ箱へ放り込めばいい。

「それじゃ肉を多めにするか？」

「はい」

アイテムBOXからレッサードラゴンの死体を取り出す。

「「「おおおっ！？ ドラゴン！？」」」

商人達が驚いてやって来る。

「そ、それも売り物ですか？」

「いや、こいつの肉を使って、そのプリムラが美味しい料理を作ってくれる。良かったら食ってくれ。ワインもあるぞ」

「なんと、こんな所で、温かい料理とは！」

俺とプリムラで硬い鱗を剥ぎ、肉の塊を切り出す。昨日のように、一回煮て灰汁の出るゆで汁を捨てた方がいいだろう。

商人達が鱗を売ってほしいというので、売ってやる。プリムラに相場を聞くと、一枚小四角銀貨1枚（5000円）だ。

硬くて魔法も弾くということで、それに肖あやかって——お守りとしても人気があるらしい

「この肉で餃子を食べてみたいな」

「解りました、作ってみましょう」

挽き肉用に、ミンサーも出して、餃子の皮も大量にシャングリ・ラから購入。

肉に脂身が全くないので、バターやラードの投入はどうだろうか？

「アネモネ、作り方を覚えているか？」

「うん、大丈夫だよ」

ミンサーのセッティングをしていると、早速客がやって来た。

「酒があるんだって？」

「あたい達にもおくれよ」

様々な毛色をした獣人達が6人程。その中には、さっきの三毛の女もいる。

男達は、ニヤメナの方をチラチラと見ているが、ニヤメナは露骨に嫌そうな顔をして、拒否のポーズだ。

「無料の炊き出しじゃないから、金はもうぞ」

だが、酒を飲もうとしている獣人に、商人達から物言いがついた。

「お前たち、護衛の仕事を忘れるんじゃないぞ！」

「わーってるよ、そんな事」

「こんな所に魔物がいるかよ。いるのは、あいつらだけだろ？」

黒白の男の獣人が指差した先には、黒いカラスのような鳥がいる。だが尻尾が長く、カラスとはシルエットが違うし、カーカーとも鳴かない。

「あれは、なんて鳥だ？」

「旦那、あれは死告鳥だよ」

死を告げる鳥——死肉を漁る、スカベンジャーらしい。つまり、あの鳥がいる所には死体があるって事のようだ。

「あれは狩らないのか？」

「冗談！」

誰も手を出さない。皆が口を揃えて言うのだが、「不味い」らしい。

——とはいえ、誰も食ったことがなく、噂を又聞きしているだけのようだが……。

元世界でも、カラスは不味いと聞かされて育ったのだが、食って食えない事もないらしいからな。

多分、あれもそうなのかもしれないが、美味しい肉があるんだ、無理をして食うこともないだろう。

王女のために、テーブルと椅子も出す。一緒にお茶のセットと、お茶菓子も用意しよう。

「お湯は、アネモネに沸かしてもらうか、コンロをご用意致しますので」

「うむ、至れり尽くせりじゃな。こんな僻地で茶が飲めるなど、普通はありえん」

「しかし、王女殿下がお出かけとなれば、荷物を積んだ馬車がずらりと——」

「貴族にはそういう事をする連中もおるようじゃが、そんな無駄な事をするより、金の使うところは他にも山ほどある」

なんと、意外と儉約家なのか——いや、使い所を心得ていると言ったほうがいいのだろうか。

料理と商売は、プリムラとアネモネに任せて、俺は重機の運転をしなくては。

運転席に乗り込むと、コ○ツさんが黒い煙をもうもうと吐き出して、高くバケットを振り上げる。

そして高い所から土砂を崩して――掬い、崖の下へ落とす。

「うーん、効率悪い……」

高い所から崩すのは、バックホーでもいいが、大量の土砂を一気に掬い上げるには、別の重機が必要だ。

つまり、ホイールローダー――。

まあ金ならある。王妃様から軍資金代わりに貰った机1個で重機1台ぐらい余裕で買える。

バックホーと同じ黄色のコ○ツにしようと思ったが、俺の家族に伝える時に、色や名前が違った方が良かった……。

――となると、ヒ○チ建機のオレンジ色のホイールローダーが目にとまった。

値段は中古で1000万円。かなりデカく見えるんだが、これってアイテムBOXに入るか？

これでも中型らしい。まあ、ダメならバケットを外せば、なんとかなるか。

黄色い車体のコ○ツさんをアイテムBOXへ収納すると、呼び出しの呪文を唱えた。

「よし！ やってこいこい、ヒ○チさん！ ZW160 175p S！ ポチツとな！」

黒くてデカイタイヤがバウンドして、オレンジ色の車体が落ちてきた。中古だが、まだ新しい。

でけえええ！ マジでアイテムBOXに入るかな？ こりゃ、ちよっと心配。

しかも、マジでデカイタイヤだな。人間の背丈ぐらいある。こんな空気を入れられるかな？ しかも重機のタイヤって、もの凄い空気圧が高かったような……。

タイヤが破裂して、死人が出たってニュースもよく見たし。

「「「おおおっ！」「」」」

商人達から驚きの声上がる。

「なんじゃこれは？！ 別の召喚獣かえ？」

「そうです。こいつはあの巨大な爪が付いた箱で沢山の土砂を掬いあげて運ぶ事が出来ます」

この世界にはオレンジも橙もないので、重機を見上げている王女に車体の色を聞くと――炎色だという。

なるほど、炎か……ピンとこないな。

「これは一体なんなの？！ これが魔法だというの？！」

メリッサもオレンジ色の車体を見上げている

「メリッサよ、この者は独自魔法使いじゃ。我々の知っている魔法とは全く違う物を操るのじゃ」

「これが独自魔法……まったく、デタラメだわ！」

デタラメと言われても――俺も、なんでこんな力を使えるか解らないのですよ。

それはさておき、とりあえず乗ってみよう。

タラップに脚を掛け、ガラスのドアを開けると、運転席へ乗り込む。

バックホーと違って、ハンドルがついていて車と同じだ。

アクセルとブレーキも車と同じだが、ブレーキペダルが2つついている。

右足でも左足でも踏めるようになっていたのだろうか？ 前進後

退は左のコラムレバーで行うらしい。

だが正直、ホイールローダーなんて運転した事がない。

「しかし——こんな狭い極限状態で初運転かよ。平地で練習したかった……」

とりあえず、キーをひねってエンジン始動。座席の後ろもガラスになっており、車体後部にあるエンジンから振動と共に、黒い煙が吹き出したのが見える。

「燃料はOKだな……オートマだと思うから、アクセル踏めば動くと思うが……」

パーキングブレーキを解除して——少しアクセルを踏むと前進したので、慌ててブレーキを踏む。

そして、右脇の2本のレバーで、バケットをコントロールするらしい。

「ひよえええ、落ち着けえ落ち着け、俺——ひっひっふー！ 落ちたら、おしまいだぞ……」

前進して、ちよっと土砂を掬い、そしてバックして左にハンドルを切ると崖下へバケットをひっくり返す。

操作を1つ1つ確認しながら慣れるまでひたすら、それを繰り返す。シャツは汗でびっしょり。

魔物と戦うのとは、全く違うストレスがある。こんなストレスをかけて、禿げたらどうする？

某漫画で金のために1本橋を渡っていた連中は、こんな心境だったのかもしれない。

車体後部は全く見えないが、バックモニターが装備されていて映像が出るようになっている。

こいつは便利だな。結構新しい機種のようにだから、色々と機能が揃っているようだ。

それにしても……くそお——何故こんなことに、俺のスロライフ計画はどこへいったんだ。

美人の奥さんと可愛い子ども、もふもふの獣人達と森猫、それらとキャッキャウフフする人生から確実に遠ざかっている。

やはり王侯貴族と関わるとロクなことがない。

それでも、1時間程運転していると、かなり慣れてきた。なんとかなりそうだ。だが、めっちゃうちゃ神経を使って、ヘトヘトになった。

日も傾いてきたので、今日の作業は終了。明日から本格的な作業に入る。とりあえず飯を食おう。

ホイールローダーから降りると、アイテムBOXへ収納してみる。こんなデカいのがマジで入るのか？

「ホイールローダー収納！」

オレンジ色の巨大な車体が、吸い込まれるように消えた。

「やった！　よかったあ！」

そのまま、ふらふらと歩いて、獣人達が油の処理をしているテントへ倒れ込んだ。

「旦那、どうしたんだい？」

「どうしたにゃ？」

「っ、疲れた……」

獣人達が作業を中断して駆け寄ってきてくれた。

「俺が膝枕してやるよ」

「それじゃウチは、毛布代わりだにゃ」
そう言って、ミヤレーが俺に覆いかぶさってきた。

「ああ、もふもふじゃ」
腹の上にいるミヤレーを撫でる。

しかし、ちよつと身体を起こして、アイテムBOXから缶コーヒ
ーを取り出すと、一気飲み。
疲れた時は、これが効く。

「ふううう」

「旦那、随分と疲れているようだけど、あの新しい召喚獣のせい
かい？」

「ああ、あれを操るのは初めてなんだよ。それで、一步間違うと谷
底だろ？ こんな所で落ちたら、間違いなく死ぬからな」

「大変そうだにゃ」

そこへ、アネモネがやって来た。

「ケンイチ、夕食食べる？」

「ああ、食べる食べる。腹減ったわ」

「俺達はここで食うよ」「そうだにゃ」

テーブルへ行くと、すでに王女が餃子を頬張っていた。

「はふはふ——この料理も中々美味しいの！ 城で出てくるパイ包み
料理に似ているが、美味さを凝縮した感じじゃの！」

王女は、醤油とかラー油を使って餃子を食べているのだが、発酵
食品も平気のようだ。

「あふ——中から美味しい汁が……」

メリッサも美味しそうに食べているので、味に問題はない模様。
俺も食ってみるか——中々美味しいな。脂身がないパサパサした肉

だから、脂を足して正解だった。

ラードとバター・バージョンがあるが、どちらもうまい。もしかしたら他の肉との合い挽きもいけるかもな。

バターは塩気があるので、そのまま食べても美味しいし、醤油に合わせても美味しい。

そりゃバター・醤油味とか、あるぐらいだからな、相性はいいだろう。

「プリムラ！ 君は食べなくていいのか？」

「お客様がいるので！ 後で食べます」

この場に踏みとどまっている商人達が、プリムラの作ったレッサードラゴンスープを食べるために並んでいる。

「おおー！ 美味しい。こんな場所で、温かい料理を食べられるとは！」

「全くですな。しかも、レッサードラゴンの肉とは……孫に自慢ができますわい」

「このワインも、絶品ですよ！ こんな所で出して良い物ではない！」

ワインも売ってくれと言われてるみたいだが、面倒なのでパス。樽のワインがシャングリ・ラに売っていればいいのだが、探しても見当たらない。

「しかし、商人さん達は、ここにいつまで踏みとどまるんだい？」

まあ、俺も一応商人なんだが。

「我々は、王女殿下と、ここにいる大魔導師様達に賭けてみようかと思っております」

「俺の妻も商人だが、商売を博打にするのは厳禁だと言ってるぞ？」

「確かにそうですが――男なれば勝負しなければならぬ時もありま

す故」

それを聞いたプリムラは渋い顔をしている。彼女ならこういう場合、どうするだろうか？

すぐに引き返して損切り、別の堅実な商売で穴埋め——という感じになるのかな？

「ほんに、其方の妻は商売が好きそうじゃの」

「ええ——客がいて、大きな利益を生み出せるのを確信すれば、自分の持ち物まで売ってしまいますからね」

「ははは……しかしのう、商売のためなら、自分の親兄弟でも売るといのが商人じゃが？」

王女の言葉に、プリムラが反応した。

「それはございません。マロウ商会、金儲けの秘訣——身内は裏切るべからず」

出たぞ、商売の秘訣。全部でいくつぐらいあるんだろうか？

「ははは」

王女は笑って餃子を頬張っている。

その後、暗くなってから女子は小屋で風呂に入った。

アイテムBOXの中には、まだ川の水があるから、後2〜3回は風呂に入れるかな。

俺は、お湯で身体を拭いて終了だ。別に風呂に入らんでも死にはせん。

だが、寝ようとする、商人達の護衛をしている獣人の女達が3人やって来た。

「ちょっと、旦那。頼みがあるんだけど」

交渉相手は、あの三毛の女だ。

「なんだ？　くんずほぐれつの乱交しようぜ！　っていうのは、断るぞ」

「バカ、そんなんじゃないよ！　それもいいけどさ——旦那のところの、あの女が変な臭いをさせてるんで、周りの男どもが殺気立って危なくて仕方ねえ。責任取っておくれよ」

「ああ——なるほどな。あそこの家には王女殿下が寝ているから結界が張ってある。家の前で寝れば安全だ。俺が交渉してやるよ」

「ありがと旦那、恩にきるよ」

緊急時に備えて結界の中に入れる魔石を渡されているので、それを使う。

王女に確認すると、構わない——という事だったので、獣人の女達を結界の中に入れる事にした。

まあ、仕方ないな。

98話 ロケットパンチ!

ベロニカ峡谷という峠が崩れたということで、俺達は土砂の除去をするためにやって来ている。

この峠が繋がっている街道は、王国の生命線ともいえる街道で、不通になれば王都が干上がり国が傾く可能性がある。

現場へ到着すると、確かに峠が100mに渡って崩れて塞がっている。

これは一筋縄ではいかない。頼れる相棒のコ○ツさんでも荷が重い。

そこで、新しい重機を購入した。オレンジ色のホイールローダーのヒ○チさんだ。

しかし、ホイールローダーなんて運転するのが初めての上、この狭い道で操作を誤れば、谷底へ真っ逆さま。

日が傾き、重機から降りると――俺は疲労困憊で倒れ込んだ。

――次の日。

朝食を食べる。プリムラが作ったスープとアネモネが焼いたパン。そして、シャングリ・ラからベーコンを買って、ベーコンエッグにした。

「ほう！ なんじゃこの肉は?! 旨味が凝縮されておる!」

「肉を塩漬けにして、塩抜きをした後に、燻蒸した物でございます」

「なに? 塩漬けの肉が、こんなに美味くなるのか?」

「これは、美味しいわ」

メリッサもベーコンの味に満足しているようだ。

保存食としての塩漬け肉はこの世界にもあるようだが、さすがにベーコンはない。

「うひょーこりゃ、うめえ！ 旦那はまだこんなうめえもん隠していたのかよ！」

「にゃー！」

胡座をかいているニャメナとミャレーの隣で、3人の獣人の女と一緒に飯を食っている。

1人は三毛、もう1人は白くて小さいが子供ではなく、顔に大きなキズがある。そして最後の1人は黒くて大きい――が太っているわけではない。横に広いタイプで体格がいいのだ。

「はぐはぐはぐ！」 「美味しいな！」 「美味しいね」

「なんで、お前等と一緒に飯を食ってんだよ！」

「あんたが変な臭いをばらまくから、男どもが殺気立って、近くで寝られないんだよ！ そんな奴が外をウロウロしてんじゃないよ！」

「うっ――そりゃ悪かったよ。仕方ねえだろう……旅先でなっちまっただから……」

女の獣人達に責められて、ニャメナはバツが悪そうだ。

「だいたい、女なら、あの時期は把握してるもんだろ？」

「俺も、まだ先だと思ってただけど――あの旦那が、レッサードラゴンを一発で仕留めたのを見たら、我慢出来なくなっちまって……」

「なっ？！ レッサードラゴン？」 「マジかよ？」 「そういえば、あの旦那――レッサードラゴンの死体を出してたね」

飯を食っている獣人達の目が光り、涎を垂らしながらこちらを見ている。だから、もうダメです。定員いっぱいです。

大体、身体がマジで保たねえ。

「それにしても、結界を潜る魔石を使った故、てっきりケンイチが夜這いにきたものじゃと思うたら……」

「王族にそんな事をしたら、首が飛びますでしょ？ それに、プリムラとメリッサ、メイドさん達もいるのに、どうやってするんですか？」

「妾だけ外に連れ出すとか、あるじゃろ？」

「お断りいたします」

「其方、もうちと他の言葉はないのかえ？」

「もう、仕事を放り投げて逃げますよ？」

「……」

俺を玩具にして遊びたいのだろうが、そんな事をしている暇はない。

朝食の後、ホイールローダーに出来上がったバイオディーゼル燃料を給油。

燃料が満杯に入った浴槽を、アイテムBOXから出して重機の後部に載せる。

そこから、ホースを使って燃料を流し込むわけだ。給油口より浴槽が高い位置にあるので、勝手にタンクへ流れていく。

よしよし、獣人達にはドンドン燃料を作ってもらわねば。

なんといっても、この浴槽2つ分の燃料を毎日食うわけだからな。

「それは、そんなに油を食うのかえ？」

「はい、毎日この浴槽で2つ程……」

「下手をすると、油代で破産するの？」

「それ故、軍資金が欲しいと申したのでございますよ」

「なるほどのう……」

普段の生活で1日中重機を動かす事なんてないからな。1～2時間ぐらいで終わるような作業ばかりだし。

しかし、このホイールローダーがあれば、土木工事は捗るが、故

障しても修理も出来ないから買い換えるしかない。

コストパフォーマンスは悪そうだ。大体、こんなデカイタイヤの交換だって出来ないぞ？

いや、コ○ツさんでタイヤを吊り上げて——みたいな事をやれば、出来ないこともないか？

まあ、その時になったら考えよう。

アイテムBOXからレーザー距離計を出して、ホイールローダーの大きさを測ってみる——全長8m。

アイテムBOXに入れられる大きさ、ギリギリである。

メリッサのゴーレムもスタンバっているが、あいつで土砂を運ぶのは効率が悪い。

重機で持ちあげられない大きな岩等が出てくるまで、待っててもらう。

運転席に座り、エンジンを掛ける。昨日、1日の習熟運転で、かなり慣れた。

今日はそれなりに動けるだろう。

「よし、いくぞ！」

周りを確認すると、アクセルを踏み込み土砂にバケットを食い込ませる。

そして満杯になったバケットを持ち上げると、崖下へ投げ捨てる。崖に近い所は、そのまま押して下に落としてしまった方が早い。

「「「おおおっ！」「」」

商人達から、歓声があがる。

すごく順調だ。これなら、殊の外早く土砂を排除出来るんじゃないのか？——そう思ったら、3m程のデカイ岩にぶつかった。さすがに、これは持ち上がらない。

「おおい、メリッサ！ 頼む！」
ホイールローダーをバックさせて、ゴーレムのためのスペースを作る。

「やっと私の出番ね」
アイテムBOXからゴーレムの核^{コア}を出すと、彼女の魔法でゴーレムが起動する。

そして、大きな岩を持ち上げるとポイと崖下へ投げ捨てた。

「「「おおおっ！」「」」」

また商人達から歓声があがる。彼等も商人として、生きるか死ぬかの瀬戸際だからな。

俺達に期待しているのだと思う。本当は彼等からも謝礼をもらいたいところなのだが、これは国王から依頼された公共事業だし。

代金を支払うとすれば、国王陛下——つまり国だろう。

メリッサのゴーレムを引っ込め、再びホイールローダーで土砂を運ぶ。

下の土砂がなくなったら、コ〇ツさんをアイテムBOXから取り出して、上から崩す。

完全に1人土木工事だよ、こりゃ。しばらくすると、更にデカイ岩が土砂の中から出てきた。ゴーレムと同じぐらいの大きさがある。こりゃ重機じゃ無理だ。運転席から降りて、アイテムBOXへ収納を試みるが——ダメだ。

大きさは10m未満だと思うんだが——土砂に埋まっているせいだろうか？ メリッサに頼む。

「メリッサ、こいつもゴーレムでいけそうか？」

「やってみるけど……」

このデカイ岩がゴーレムで動くかな？　彼女も自信がなさそうだ。
メリッサが詠唱を始める。

『大いなる万物に連なる者よ、この石の礫に仮初の命かりそめを与え給え――』

俺がアイテムBOXから出した核コアに土砂が集まり、ゴーレムの形となる。

そして巨人は、同じぐらい大きな岩と相撲を始めた。だが、びくともしない。やはり半分以上土砂に埋まっているせいだろうか？

「ダメだな。掘り起こした方がいいかもしれない」

「――そうね」

掘り起こすのであれば、コ○ツさんの出番だろう。

彼の巨大な腕と、鋼鉄の爪で岩の周りを掘り露出させる。

作業後、コ○ツさんを収納すると、メリッサの所へ行く。

「これで、どうだ？」

「やってみる」

再び巨大なゴーレムが起動して、岩と格闘を始めた。

「メリッサ、こう――岩を捻るようにして、ちよつとずつ移動させられないか？」

「そんな複雑な動きは難しいのよ？」

だが、ブツブツ言っている彼女だが、やってみるようだ。

岩をちよつと傾け、回転させて、今度は反対方向へ傾ける。これを交互にやることで、ちよつとずつ動かせるはずだ。

だが、こんな動きをさせた事がないのだろう。汗をかきながらメリッサがゴーレムを必死にコントロールしている。

だが、すこしずつではあるが、確かに岩が動いて土砂から出てきた。

「メリッサ、ちょっと試させてくれ」

ゴーレムを待機させると、アイテムBOXへの収納を試みる。

「収納！」

目の前から巨大な岩が消えた。

「「「おおおっ！」「」」

また商人達の声だ。だが、アイテムBOXへ入ったなら後は簡単。収納した岩を崖の外へ出せばいい。

アイテムBOXから出された巨大な岩が地響きを立てて、崖下へ転がっていく。

ドスンドスンと振動が身体に伝わり、上から小石がパラパラと落ちてくる。

一応、上も警戒しないとな。サッカーボールぐらいの岩でも、頭や身体に当たったら致命傷になる。

その後は問題なく作業が進み、1日が終了。

結局10m程進んだ。1日10m進めるってことは、埋まった区間が100mなら、10日で街道が開通するってわけだ。

夕方になり、また商人達がプリムラの料理を食べにやってきている。

「この分だと10日もあれば、通れるようになるのでは？」「10

日の損失であれば、そんなに大きくはないな」

馬車で商品を運び、街道に魔物や盗賊が出るこの世界では、10日ぐらいの遅れは許容範囲なのか？

身を投げた若い商人も、もうちょっと待っていれば、なんとかあったかもしれないのになあ……。

だが、初日が調子良かったただけかもしれない。例えば、アイテムBOXに入らないような巨大な岩が埋まっているかもしれないしな。そうなる——爆薬が必要になるな……。

皆が、プリムラのスープを食べると言うので、俺はカップ麺を食べることにした。

さすがに、麺類は未だに不評だ。だれも食べると言わない——1人を除いては。

「おおっ！ ケンイチ、それはエルフの虫料理か？」

「エルフ？」

王女の話では、エルフ料理で細い虫を煮た料理があると言う。あゝマジでそんなのがあるのか、そりゃ皆が虫だと言うはずだわ。

「リリース様。虫ではありませんよ。小麦粉を細長く伸ばしたものです」

「よし、妾も食べてみるぞ」

「ええ?!」

マジかよ。王女にカップ麺とか食わせていいのか？ この王女様、マジで何でも食うな。

だが、本人ご所望であれば仕方ない。アイテムBOXからカップ麺を取り出すと、お湯を入れて王女の前に出す。

「しばらく、お待ちください」

「どのぐらいじゃ？」

「えゝと、ゆっくり180数えるぐらいです」

「ほう、解った」

王女が目の前のカップ麺を見つめながら、ブツブツ言っているので、マジで数えているようだ。

「そろそろ時間でございましょう」

「何？　そうか」

カップ麺の蓋を取ってやる。

「おおっ！」

箸は使えないので、使い捨てのプラ製のフォークをシャングリ・ラで買う。

「これで、お食べくださいませ」

「なんと、軽い！」

王女はプラ製品に驚いたようだ。そして、麺をフォークで掬い、口に運ぶとまた驚いた。

「おおっ！　これは美味しい！　珍妙な食い物じゃが、実に美味しい」

「私もそう思うのですが、家人にはすこぶる評判がよろしくないのでございます」

「ははは、見た目はまさにエルフの虫料理じゃからのう」

ハフハフと言いながら、王女は麺を食べているのだが、^{すす}吸れないようだ。

麺を吸る食いは、日本人の特殊技能と聞いた事があるし、麺類を初めて食べた王女が吸れなくてもおかしくはない。

「ケンイチ！　美味いが量が足りぬぞ！」

「えー？　それでは、いかほどおかわりをご用意いたしますか？」

「3つじゃ！」

「2つで十分ですよ」

「3つじゃ！」

どこかで聞いたようなやりとりをしながら、カップ麺の追加をシャングリ・ラから購入した。

包装をはがすと、蓋を開けてお湯を注ぐ。食うのが早いので、全

部一緒に作ってもいいだろう。

「ケンイチ、私も食べたい……」

アネモネからもリクエストがきた。王女が美味しそうに食べているので、興味が湧いたのだろう。

アイテムBOXから追加でカップ麺を出してお湯を入れる。

「ほうほう——時間が経つとふやけて柔らかくなるの！　じゃが、これはこれで美味い」

王女は伸びたラーメンも好きと——カップ麺は多少伸びても食えるけど、本物のラーメンは伸びたら不味いような気がする。

実に美味そうに食べている王女であるが、その横にいるメリッサや、後ろに控えているメイドさん達は横を向いている。

やはり、気持ち悪いらしい。そんなに嫌そうな顔をしていると、王女に罰ゲームとして食わされそうな気がするのだが……。

「どうだ、アネモネ？」

「うん、すごく美味しい！」

やっぱり見た目だけの食わず嫌いだよな。食えば美味さはわかると思うし。

食事が終わると、アネモネが何かを持ってきて、テーブルの上に載せた。

「人形？」

土か泥で出来た、人形に見える。

「えへへ……」

アネモネがニコニコ笑っている。そして何かを唱えると、土塊つちくれがよたよたと動き始めた。

「これってゴーレムか？」

「そうだよ」

「へええ！ 凄いなアネモネ！ もうゴーレムが作れるようになったのか？」

頭を撫^なでてやると、彼女は嬉しそう。

「なんですって？ 何故、こんな事が出来るの？ 私だって、初歩的なゴーレムを動かすだけで数ヶ月掛かったのに！」

「本で覚えた」

「本！？」

「昨日――いや一昨日か。話しただろ？ 王家の書庫で本を読んだんだよ」

「それだけで、出来たですって？ 嘘を言いなさい！」

「だって、本当だよなあ。実際に目の前で動いているじゃないか。なくアネモネ？」

「うん！」

俺がアネモネを抱き上げて頬ずりをすると、ゴーレムが崩れた。

「大体、国の許可がない魔法生物の起動は違法なのよ？！」

「妾が許可した」

「王女殿下……」

自分に味方してくれない王女の言葉に、メリッサがショックを受けている。

「其方のゴーレムの起動も王族である妾が許可を出しておるのじゃ、アネモネのゴーレムの起動に許可を出してもなんの問題もないじゃろ？」

「アネモネのゴーレムも実戦に使えるようになれば、土砂の除去も捗りますしね」

「ケンイチの言うとおりじゃ」

「お、王女殿下の、御心のままに……」

メリッサが一礼すると、引き下がった。

まあ、そのためにわざわざ王女がこんな僻地までやってきてるんだからな。

「使えるものは何でも使って、1日でも早く街道の開通を目指すべき——それが王族の務めじゃ」

俺がアネモネを地面に降ろすと、彼女は再びゴーレムを起動した。気に入ったようだ。そりゃ、ロボットのラジコンと似たような物だからな。

出来るなら、俺もやりたい。

しかし、こんな物を動かせるぐらいなら、空を飛ぶ仕掛けを作れば、空を飛ぶゴーレム——ラジコン飛行機も作れるかもな。

俺は、よたよたと歩く、アネモネのゴーレムを見てある事を思いついた。

「アネモネ、ゴーレムの手をぐるりと回して、ちょうどいい所で腕だけ切り離したら、飛ばせないかな？」

「なにそれ？ 面白そう！」

アネモネが俺の言った通りに、ゴーレムの腕を回して切り離れた。だが、タイミングが遅かったのか、腕はテーブルを逸れて足下へ落ちてしまった。

「ちょっと、遅かったな？」

「うん」

再び彼女が挑戦するが、今度はタイミングが早すぎたようだ。斜め45度に飛んで放物線を描いた。

だが、腕を飛ばせるのは確かだ。なくなった腕は、新しい土から

補充すればいい。

「よし！ もう一回！ えい！」

アネモネの掛け声と共に、ゴーレムの腕が水平に飛ぶ。

それを見て、俺はシャングリ・ラから白い紙コップを買って、テーブルの上に並べた。

「アネモネ、これを狙って落としてみる。そして、呪文は『ロケットパンチ！』だ！」

「ロケットパンチって何？」

「腕を飛ばす時の呪文だよ」

「よし！ ぐるぐる――ロケットパンチ！」

タイミングよく発射されたゴーレムのロケットパンチが、紙コップを「ポコッ！」という音と共に、テーブルから弾き落とした。

「やった！ 上手いぞ、アネモネ！」

「えへへ……」

再びゴーレムから発射された腕が紙コップを落とすと、王女が叫んだ。

「こ、これは武器に使えるではないか！」

「まあ、確かに」

あゝ生臭いなあ。こんな世界だから仕方ないのかもしれないが、なんでも戦に結びつけてしまうとは……。

確かにロケットパンチは武器なんだけど。

「ゴーレムに岩を投げさせたりする攻撃はあったけど、自分の腕を飛ばすなんて……」

「くくく――メリッサ、そこは発想の勝利だ」

俺は右手で顔をおおい、ポーズをつけて指の間から呆れるメリッ

サを見る。

しかし、発射した瞬間から魔法が切れてしまうので、土は固まる力をなくして散弾のように広がる——それ故、射程は短い。

人間のような物を投げる動作を人形にさせると動きが複雑過ぎる。だが腕を回して切り離すだけなら、そんなに難しい制御も要らないはずだ。

アネモネがテーブルの上で、トコトコとゴーレムを動かしている——突然、下から黒い手が現れ、動く人形を叩き潰した。

ゴーレムは崩れて土に還り、テーブルの上に放射状に残骸が広がる。

「だめえ！」

アネモネが叫ぶが——目の前で動く物に、ベルが反応してしまったようだ。

だが、これは本能みたいなものなので、やるなと言われてもやってしまうだろう。それでなくとも、彼女はここでは暇なのだ。

ベルの見えない所でやらないとダメだな。

しかし、ある事を思いついた。ゴーレムの核^{コア}って俺でも作れるのだろうか？

作るのは簡単だ——クリオネみたいな形を作ればいいんだからな。ただ、作る過程1つ1つの挙動に全て魔力を込めないとダメ——そんな作り方であれば無理。

「アネモネ、ゴーレムの核^{コア}って削る時にも魔法が必要なのか？」

「そんな事ないよ。人が作った核^{コア}でも、上書きで使えるみたいだし」
「なんだそうなのか。それじゃ、俺が作った核^{コア}をアネモネに使ってもらって事も可能なわけだ。」

シャングリ・ラで糸鋸盤を買う。安い某国製もあるが、ここは安心の日本メーカー製だろう——2万円だ。

アイテムBOXから出した発電機に糸鋸盤を繋ぐと、一緒に出した板に核^{コア}の絵を描き、切り出していく。

「おおおっ！」

見たこともない工作機械に、王女が驚く。

そして、切り出しが終わったら、今度は核^{コア}の角を丸めなくてはならない。

アネモネは切り出しで削っていたが、俺は工作機械を使う——ベルトサンダーだ。

これも日本製で2万円。ぐるぐる回転するベルト状になったサンドペーパーが、みるみる核^{コア}の角を丸くする。

「うるさいにゃー」「そうだな……」

愚痴を言っている獣人2人に、甘い物と酒を渡す。

胴体と同じように腕を作って、両方に凹型の切れ込みを入れて合体。最後はドリルで穴を開けて木ネジで固定。

「よっしゃ完成だ！」

出来上がったのは長さ10cmぐらいの核^{コア}。

「なんじゃと、もう核^{コア}が出来たというのかえ？」

「今、見てましたでしょ？」

使った道具をアイテムBOXへ収納する。こういうのって作るのは楽しいのだが、片付けるのが面倒。

だが、アイテムBOXへ収納すれば一発で片付く。

俺が作った物をアネモネに渡す。

「これでちよっと、ゴーレムを動かしてみてくれ」

「うん」

アネモネがなにやら、呪文を唱えている。核^{コア}を使用者に合わせて
イニシャライズする儀式のようだ。

形は似ているが、これで動くのだろうか？　そして、腕の固定に
金属の木ネジを使ってしまったが、影響はあるのか？

そして起動の呪文を唱えろと――テーブルの上にあった土が集ま
り、ゴーレムがトコトコと動きだした。

「やった！　俺が作った核^{コア}でも動かせるじゃん」

「もうデタラメだわ……こんな物でゴーレムの核^{コア}を作るなんて……」
デタラメだろうがなんだろうが、作ったもん勝ちだ。

別に核^{コア}を作るのに道具を使ったとか、材料に金属が混じっている
とかは関係ないようだ。

例えば金属はダメとか、接合もダメとなると――巨大な核^{コア}を作る
ためには、より大きな丸太が必要になる。

それが解っただけでも、実験した甲斐があった。

寝る前に、また獣人の女達がやって来たので、結界の中に入れて
やる。

本当に襲われたりするんだな――マジで大変そう。しかも警察と
か裁判とかない世界だから、自分の身は自分で守らないといけない。
女には厳しい世界だ。

――――◇◇――――

それから数日、順調に土砂の除去が進んでいく。

巨大なホイールローダーが鋼鉄のバケットで土砂を押しわけ、運
び――崖の下へ投げ落とす。

徐々に伸びていく街道。喜びはしゃぎ回る商人達。もう勝負に勝
ったも同然って顔をしている。

これから何があるのかも解らないのに。

「『森を抜けるまで喜ぶな』——ですよね」

ダリア地方の諺を^{つぶや}呟く、プリムラの言うとおりだ。

そして誰かが峠の入り口の町まで行ったのか、一旦峠を下りた商人達が、再び峠を登ってきたのだ。

最初に残っていた商人の馬車10台程だったのだが、それが15台になり20台程になった。

作業をしている最中にも、崩れた土砂の上を越えて、単独の商人達がこちらへ渡ってきている。

作業は順調だが、準備は怠らない。

もしかしてアイテムBOXに入らないような巨大な岩が出てくるかもしれない。

発破が必要になるかもしれないから、肥料の硝安を使ったアンホ爆薬も追加で作っておこう。

お城で、圧力鍋爆弾も1個使ってしまったしな。もう2発ぐらい作っておくか……備えあれば憂いなしってな。

そして工事は順調に進んでいたように見えたが俺の悪い予感が的中した。

土砂を除去しながら進んでいくと——アイテムBOXにも入らないような巨大な岩が土砂に埋もれていたのである。

どーすんのこれ？

99話 ゴーレム、大地に立つ！

峠の街道を埋めてしまっている土砂を取り除く作業をしている。

王都から一緒にやって来た王女も一緒。

俺に戦いを挑んできた女魔導師も一緒、これが本当の呉越同舟。新兵器のホイールローダーも購入して、順調に土砂の除去が進んでいた。

——だが目の前に、巨大な岩が大量の土砂と共に埋まっているのだ。

ちょっと手前から土砂の上に頭が出ていて、嫌な予感はしていた。アイテムBOXから取り出したレーザー距離計によれば、高さ約15m。

この大きさでは俺のアイテムBOXにも入らないし、メリツサのゴーレムでもびくともしないだろう。

アイテムBOXを使って取り除いた巨大な岩でも、やっという感じだったし……。

「ひゃーっ、でっけえな！」 「そうだにゃ！」

獣人達が掌で底^{ひさし}を作り、岩の天辺を眺めている。

「ケンイチ、どうするのじゃ？」

「うーん、どうしましょうかねえ。下を掘って転がすか？」

いや、こんな巨大な岩の下を掘るとなると、街道全部を崩さないとだめだ。

そうになると、コンクリートもないこの世界で、復旧出来るかどうか。

「その大穴の復旧で、かなりの時間と労力がかかるぞえ？」

「いっそ、岩をそのままにして、脇を掘り進めるか？」

「いやいや、それもとんでもない時間がかかるな。」

「其方の鉄の召喚獣であれば、それも可能であろうが……」

「それでは——この巨岩は放置。我々が歩いて土砂の上を渡り、反対側から作業を進めますか——」

「難しい問題があったら、それは後回しにして他の問題をやる——テストの定石だ。」

「其方達だけで行くのかえ？」

「リリス様に、この土砂越えは無理でございましょう。それに御身に何かありましたら、大変でございます。家も残しますし食料も置いていきますので……」

「嫌じゃ！ いや じゃ！ 其方と別れとうない！ ここでなんとかするがよい！」

「そんなワガママおっしゃられましても……」

「嫌じゃ！」

「姫様——ケンイチ殿の仰る事も一理ございます」

「メイドさん達の説得にも王女は腕を組んで、そっぽを向いてしまった。」

「あゝ、こりゃ困ったぞ。まあ確かに、魔導師全員が反対側へ行っってしまったら、王女の護衛がいなくなるからな。」

「それが不安なのかもしれない。それは解るが——しかし、なんとかってどうするんだよ。」

「とりあえず、発破でもしてみるか……」

「巨岩の周りの土砂を可能な限り除去。アイテムBOXから単管の足場を出す。」

足場の上に発電機とハンマードリルを出して、巨岩の真ん中付近に発破用の穴を開け始めた。

この中にアンホ爆薬を入れるので、少し斜めに掘る——合計4箇所。

その穴の中に、ピンク色のアンホ爆薬を注ぎ込む。ゴニョゴニョで溶いてあるので、ドロドロした液体状だ。

作業が完了したので、足場を収納した。

「これから爆裂魔法を使いますので、リリース様は、家の陰に隠れていてください。メリッサは聖なる盾でも使って防御をよろしく」

家を設置した場所から、かなり土砂の除去が進んだ。ベースと巨岩がある場所とは40〜50m程、離れている。

「解ったわ——でも岩を崩すのに爆裂魔法じゃ……それに、あの変な色の物は……？」

普通は、岩の表面で魔法が発火するからな。それじゃ、中までダメージが入らない。

爆裂魔法ってのは爆発によって対象を破壊するというよりは、生み出した衝撃波で広範囲の敵をなぎ払う魔法だ。

皆を下がらせ、俺とアネモネだけが巨岩の正面へいく。アイテムBOXから透明なポリカーボネートの大盾を出して、地面へ伏せる。発破作業自体は、崖から薔薇輝石^{ロードナイト}を掘り出す時に、アネモネと一緒に何度もやったので問題はないはずだ。

アネモネが双眼鏡で覗きながら、ピンク色のアンホ爆薬に爆裂魔法^{エクスプロージョン}を使って点火する。

「おーい！　いくぞお！」

手を振って、皆に知らせる。爆薬が何かをしらなくても、爆裂魔法^{エクスプロージョン}

法は知っているからな。

アネモネが点火地点を双眼鏡で覗いている。

「アネモネ、大丈夫か？」

「何回もやっているから平気」

「よし、それじゃ頼む」

「エクスプロージョンむゝ爆裂魔法（小）エクスプロージョン爆裂魔法（小）エクスプロージョン爆裂魔法（小）エクスプロージョン爆裂魔法（小）」

彼女が連続で魔法を唱える。巨岩の岩肌に白い埃を伴った爆発が4箇所起こると、それに伴った爆風で辺りに破片がばら撒かれる。もくもくと白い埃が上がり、岩が隠れてしまったが――徐々にそれも晴れてきた。

爆発があった場所には、深さ1m直径3m程の円錐状に開いた穴が4箇所。

穴は飛び飛びになっているので、繋がっていない。これを繋げようとする、後3〜4回の発破が必要だ。

「これを使って、岩を割るのも可能だろうが、10日以上は掛かるな……」

俺がその場で思案していると、メリッサが走ってきた。

「今のは、何なの？！」

「やっぱり、こんな感じか――もっとデカイハンマードリルを使って奥まで穴が掘れればなあ」

「ちよつと！ 今のは何なの！？ 答えなさいよ！」

「エクスプロージョン爆裂魔法だよ。見ただろ？」

「あんな連続で、しかも4発も使えるはずないでしょ？！」

「それが使える方法があるんだよ。奥義だよ、奥義！」

「――もしかしたら！ あの変な色の水に秘密があるのね！」

「極秘の奥義で教えられません」

メリッサが教えるとしつこいが、教えられるはずもないし、教えても解らんだろう。まして同じ物を作るはずがないしな。

そんな事より、もっと上手い方法は——何も思いつかないようなら、発破をし続けるしかないのだが。

メリッサのゴーレムでも、動かないとなると——もう一体核^{コア}を作って、アネモネに動かしてもらおうか？

デカイゴーレムが2体いれば、岩も動くかもしれない。

その前に、そんなデカイゴーレムをアネモネが動かせるかどうかなんだが……。

——いや、もっとデカイゴーレムが作れないかな？

ゴーレムの核^{コア}は、俺が作ってもいいんだ。メリッサの核^{コア}より大きな物を作れば、もっと巨大なゴーレムになるはずだ。

メリッサのゴーレムが、ボ○ムズ級なら、こちらはガ○ダム級って事になるか。

そいつをメリッサに動かしてもらえば、あの岩も動かせるかもしれない。

よし、物は試しだ。やってみるか——実際、俺も巨大ゴーレムが出来るか興味があるしな。

俺はアイテムBOXから一番太い丸太を取り出した。丸太なんて何の役に立つかと思っていたが、こんな使い方をすると羽目になるかは……。

「ケンイチ、何をする気じゃ？」

「リリース様の言う通り、なんとかするのでございますよ」

「そんな丸太でか？」

「これで、もっと巨大な核^{コア}を作って、もっとデカイゴーレムを作れないかと思ひまして」

「なんじゃと?!」

「なんですって？」

王女とメリッサが驚くが、凄腕の魔導師も試した事はないようだ。

「まあ物は試しってやつよ」

丸太の長さは以前に切ったままの10mだ。これを8mに切断して。更に半分に切れば、それが胴体と手になる。

そいつを加工して、十字に組み合わせれば核の形になるってわけだ。

勿論、ちゃんと核の形に合わせた加工はするけどな。要は、俺がアネモネに作ってやった形を、そのまま拡大コピーすりゃいいんだろ。

そうすれば、メリッサが持っている2mの核の2倍の大きさの物が出来上がるって寸法。

2mの核で10mのゴーレムが出来るのなら、4mなら20mの巨体を作り出す事が可能はずだ。

だが、あくまで予想ってやつだが。しかし何事もやってみなくっちゃ解らん。

まずは、丸太を切断して4mにする。アイテムBOXからチェンソーを出した。

けたたましい音を出して、丸太を切断する道具に、王女が何か叫んでいる。

「なんじゃこれは?!」

多分、そんな事を言っているのだろう。チェンソーの音がうるさいので、よく聞こえない。

ずっと使っていると難聴になるぐらい、うるさいからな。

「ケンイチ、それはなんじゃ?!」

チェンソーをアイドリングさせていると、王女が近くへやって

来た。

「木を切る魔道具ですよ」

「そ、それがあれば、開墾の作業も驚くべき速さで行えるであろう?!」

「残念ながら、独自魔法ユニークで作った魔道具なので私にしか使えません」「なんじゃと?」

王女は放置して、丸太の皮を剥ぐ。以前に買ったチェーンソーに装着するアタッチメントが使える。

このアタッチメントはカンナのように木を削れるので、丸太の加工の仕上げにも使えるだろう。

皮を剥いたら、獣人達に手伝ってもらい、使わない丸太に斜めに乗せ、頭の部分を丸く加工する。

チェーンソーで荒く削り出してから、アタッチメントを使って、カンナを掛けるように滑らかに丸めていく。

俺は元々絵描きだからな。こういうのは得意だぜ。フルスクラッチでフィギュアも作った事もあるしな。

そして、脚へいくほど胴体は細くなり、最後は小さく二股に分かれている——いい感じに出来た。

次は手と腕だ。これは簡単——両端が細くなっているだけなのだ。チェーンソーで大きく削ってから、アタッチメントを付けて、仕上げをしていく。

そして、胴体と腕に凹型の切れ込みを入れて、十字に組み合わせる。

これは獣人達のパワーでも持ち上げるのが大変だったので、コ〇ツさんで吊り上げて合体させた。

最後に、ハンマードリルで穴を開けて、貫通ボルト4本で固定する。

材料に金属が混じっても、核^{コア}としての使用に問題がない事を確認済みだからな。

「さあ、メリッサ一発頼む！」

「こ、こんなの無理に決まっているでしょ?!」

「やりもしないで、無理っていうのはどうなのよ?」

「そんな事を言われても……」

彼女は腕組みで大きな胸を持ち上げて、核^{コア}の大きさに戸惑っているようだ。実際に、こんな大きな物は見た事がないのだろう。

「それじゃ、私がやってみる！」

名乗りを上げたのは、アネモネだ。

「アネモネ、こんな大きなものを動かすなんて、大丈夫か?」

「あの岩を動かせれば、いいんでしょう?」

「そうだ、岩が動けば短時間でいい」

俺の言葉にアネモネが、核^{コア}をイニシャライズする作業に入ると言う。

「ちょっと! 危険よ! 子供に無理をさせないで!」

「子供じゃないから!」

止めに入ったメリッサの言葉に、アネモネが反発して、ムキになっってしまったようだ。

やると、言って聞かない。再度確認して、作業を続行する。

コ○ツさんで、核^{コア}を引きずって土砂の所へセットする。

核^{コア}の大きさが大きい程、より多くの魔力を必要とするようだが、ハイプロテクション至高の障壁という大魔法を使える彼女なら、魔力の量も十分にあるものと思われる。

だが、こんな実験に子供のアネモネを使っているのだろうか？
後ろめたさが、巨大なゴーレムを動かすという好奇心にすっかり
と負けてしまっている。

「いく！」

彼女の周りに青い光が集まってくると、胸の前に出した掌の間へ
光球となって光りだす。

何らかのパワーが膨れ上がり、彼女の黒髪や青いスカートを巻き
上げる。

『大いなる万物に連なる者よ、この石の礫に仮初の命かりそめを与え給え――』

核に次々と瓦礫がまとわりつき、徐々に大きな塊になってくる。

最初は胴体と頭。次に腕が伸びて、最後に脚が伸びて胴体が持ち
上がる――。

本当に、高さ20mと思われる土砂で出来た巨人が立ち上がった。

「「「おおおっ！」」」

「なんと巨大なゴーレムじゃ！」 「あんなの、王都でも見た事がな
いぞ！？」 「信じられん」

「あの子供が操っているのか？」
かなり離れた所で見物していた商人達が騒いでいる。

「アネ嬢すげええ！」 「アネモネ凄いにゃ！」

「なんじゃこりゃ?!」 「ちよっとまっておくれよ？ これって夢
じゃないよね？」

獣人の女達も、巨大なゴーレムを見上げて叫んでいる。

「なんと!？」 このような巨大ゴーレムが本当に作れるとは！ 信

じられぬ！」

「ば、馬鹿げているわ。こんな事が本当に可能だなんて……」

王女の言葉は純粹な驚きだが、メリッサの眩きには——自分が無理だと断言した事に、アネモネがあっさり成功した事に対する、嫉妬のようなものが含まれているように感じる。

ゴーレムが地響きを立ててゆっくりと目標に近づき、巨岩の天辺に取り付いた。

ゴーレムの動きは凄いゆっくりに見えるのだが、人間の感覚で手足を振り回すと、終端が凄いスピードになってしまい、身体を構成する物質が飛び散ってしまう。

巨大な風力発電機の風車はゆっくりと回っているように見えても、ブレードの先端は音速に近いのだ。

それと同じ現象が起こってしまう。

多分、このゴーレムで腕を振り回して、ロケットパンチを繰り出すと速度は音速を超えるかもしれない。

だが、ゴーレムが巨岩を引き倒し、地面が揺れると同時にゴーレムがガラガラと崩れる。

そして俺の目の前で巨大なロボを操っていたアネモネも倒れてしまった。

「アネモネ！」

俺は慌てて、彼女の下へ駆け寄って、身体を抱え上げた。

見れば鼻血を出している。おそらく、巨大なゴーレムの操作を行ったファイードバックが彼女の小さな身体を襲ったのであろう。

俺の心は後悔の念で一杯になった。やはり、無理をさせるべきではなかったか……？

「アネモネ、大丈夫か?!」

「……大丈夫」

「鼻血が出ているじゃないか、本当に大丈夫なのか?!」

「ズズッ! 大丈夫」

鼻血をすすろうとした彼女を制し、アイテムBOXからウェットティッシュを取り出す。

鼻の周りを拭いてあげると、ティッシュが橙色に染まる。

「ごめんな! 子供にこんな事をさせるべきじゃなかったよ」

「……子供じゃないから!」

おっと、この言葉は使わない方がいいな。

「頭が痛いとかないか? 他に身体で痛いところはある?」

「大丈夫だから!」

俺のしつこい問に、アネモネが声を荒らげる。

「御免よ。でも、今日はもうお休みにしような?」

「………解った………」

俺とアネモネの所へ皆も駆け寄ってきた。

「アネ嬢、大丈夫か?」 「大丈夫にゃ?」 「アネモネ、大丈夫ですか?」

「大丈夫だから」

皆から一斉に「大丈夫?」と質問されて、アネモネが少々ムツとしている。

「いやはや——妾もかなり驚いたが、身体に負荷が掛かったのじゃろう」

「いきなり、あんな物を動かしたら、術者への跳ね返りがあったって当然でしょう?」

魔法の専門家、メリッサの目には、俺達の行為がかなり危険な物

に映ったようだ。

そりゃ、皆が素人だからな。それに、アネモネの下地と才能が凄
いので、俺も彼女の才能に頼ってしまっていた。

自己流でも、なんとかなってしまっていたので、イケイケドンド
ンだったのだが、もっとステップを踏むべきだった。

「御免な、アネモネにこんな事をさせて……」

「ケンイチは悪くないの！ 全部、私がやるって言ったんだから！
！」

「しかし……」

「むう！」

「ははは……」

いきなり王女が腹を抱えて笑い出した。

「リリース様——」

「其方の姿を見ると、まるで我が父^{国王}のようじゃぞ？ 鬱陶しい事こ
の上ないから、止めてやるがよい」

「……」

じっとアネモネの顔を見る。

「お姫様の言うとおり」

「解った——だけど、今日の作業は止めような」

「……解った」

アネモネをお姫様抱っこして、テントへ行くと寝袋の上に載せる。

「悪い、メリッサ。使えるならアネモネに回復^{ヒール}を掛けてやってくれ。
金なら払う」

「バカ言わないで。こんな子供に働かせて、金なんて取ったら、『
優美なるメリッサ』の名前が泣くわ」

「子供じゃないから！」

皆から子供扱いされてむくれるアネモネに、メリッサの回復が掛かる。アネモネは身体が小さいからなあ……やっぱり、皆がそう見てしまうようだ。

だが見たところ、アネモネの身体にそれほどダメージはないようだ。

テントの中にいる獣人達に、魔道具を指して頼む。

「今日の作業は中止だが——悪いが油の生成だけは、やっててくれ」
ついでに、追加の油もシャングリ・ラから購入した。

「解ってるよ旦那。この油はいくらあっても困らないんだろ？」
あの召喚獣は本当に大食らいだにゃ」

「よろしく頼むよ」

病中病後といえど——桃缶。やはりこれだろう。シャングリ・ラから桃缶を購入する。

「アネモネ、これを食べよう」

「いらない」

くっ！ これはもしかして——アネモネが反抗期？ これって反抗期なのか？

まあ、自分自身でも経験があるが、こういう時は無理やり食べさせようとしても逆効果なんだよね……。

反抗期が訪れたって事は、自立し始めたって事。これだけの大魔法を使いこなし、苦難を乗り越え経験値を積みめば、自分に自信がついても当然。

ガリガリでボロボロの、物言わぬ子供だったアネモネが……。
いつの間にかやって来たベルが、前脚を俺の肩に乗せた。

「にゃー」

「おおっ！ お母さんもそう思うか」

俺がアネモネのお父さんだとすると、ベルはお母さんだ。

「よし！ 今日ほめでたい、俺は基本飲まない人だが、今日は飲もう！」

アイテムBOXから赤ワインとカップを取り出すと、少量注いだ。ベルには、シャングリ・ラから猫用のジャーキーを買ってみた。

「さあ、ベルも食ってくれ」

「にゃー」

俺は、桃缶を食べてワインで流し込む。

だが、その様子を後ろで見ていたニャメナ達が騒ぎ始めた。

「あゝ旦那！ 飲むなら俺にもくれよ」「ウチはその森猫が食べているのを食いたいにゃ」

「肉は干し肉だぞ？」

確認すると、干し肉でも食いたいというので、普通のジャーキーを買ってやった。

ニャメナにはワインを一緒にやる。

「にゃんだー！ この干し肉は美味いにゃ！」

「干し肉なんて硬いだけだったり、塩辛いだけだったりするけど、これは美味しいな！ 酒の肴にピッタリだぜ！」

ニャメナとミャレーがジャーキー食っている場所へ、商隊にいる獣人の女達——3人組がやってきた。

「ちょっと、トラさんよ！ 何食ってんだよ、美味そうじゃん」「あたい等にもおくれよ」「食べたい」

「ダメに決まっているだろ、これは旦那の女になったやつだけ食えるんだよ」「そうにゃ」

「それじゃ、あの王女様や魔導師様も、旦那の女なのかよ」

その台詞を聞いた俺は、桃を喉に詰ませた。

「ぶっ！ おいおい、とんでもない事を言うなよ。誤解を招くだろ」
「なんだよ、このトラ公！ 違うじゃねえか！ 俺達にも食わせろ！」

「ははは、だが断る！」「にやにや、断るにや」
喜ぶミャレーとニャメナの後ろで、獣人達が騒ぎ始めた。

「ふざけんなよ！ てめえ等ばかり美味しいもん食いやがって！」
しかし、ニャメナ達に言っても無駄だと解ったのか、獣人達は直接俺の所へやって来た。

「ねえ旦那あ！ 後生ですから、ちよいと分けておくれよお。あんな美味そうに食べられちゃ我慢できないよお」

「あたい達の事を好きにしてもいいからさあ」

「私達、ちよっとボサボサですけど、旦那さんに撫^なでてもらえば、あの人達みたいにピカピカになりますから」

獣人達に抱きつかれて、毛皮の匂いをクンカクンカー——なるほど、匂いにも個性があるような気がするな。

鼻が高性能な獣人達なら、もっとはっきりと解るんだろうな。

だが、俺に擦り寄ってきた獣人達に、ミャレーとニャメナが毛を逆立てた。

「あゝっ！ お前等、何やっているにゃ！」

「てめえ等も懲りねえな！」

「まあまあ、今日はめでたい日だから、お前等にも奢るよ」
商隊の獣人達にもワインとジャキーを出してやった。

「ひょえー！ こりゃ何て美味しい干し肉だ！」「うめえ！」「本当に美味しいね」

獣人達の様子を見ていたプリムラが、ジャーキーに興味を示したようだ。

「私にもください」

「はいよ」

そして、一口食べて驚いた。

「これは確かに美味しい干し肉ですね！ 味がしっかりとついていて、噛めば噛むほど旨味が口の中に広がります」

「味を付けたタレで肉を煮てから、干しているんだよ」
だが、王女の事をすっかり忘れていた。

「リリース様。干し肉と果物、どちらをご所望ですか？」

「妾は甘い方がいいのう……」

メリッサも桃缶が良いというので、深皿に盛ってやる。王女には1缶丸ごとだ。

「なんで、皆で美味しそうに食べてるの！」

皆で楽しそうにしているので、アネモネが不機嫌になっている。

「だって今日は、アネモネが自立して大人になった日だから」

「私は、ずっと大人だから！」

「よしよし、解った大人だな。それじゃ好きな男が出来たら、お父さんとベルお母さんに会わせてくれよな」

それを聞いた、ニャメナ達が立ち上がった。

「何?! アネ嬢に男が出来たって?! よっしゃ俺達にも会わせろ! アネ嬢に相応しい男かどうか、俺が確かめてやる」

「にゃー! ウチも確かめるにゃー!」

「あら、経済的にも女を十分に養えるか、私も試験をしなくては…

…」

「ははは！ アネモネを娶る男は、大変そうじゃのう」

皆で笑っているとアネモネが大声を上げた。

「だれもそんな事を言っていないから！ ケンイチがいるのに！」
「だって俺の事を嫌いになったようだから、だれか好きな男が出来たんだろう？」

「そんな事ないから！」

「じゃあ……桃缶食べる？」

「要らない！」

アネモネは再び横を向いてしまった。

「えー？ もう、こんなに美味しいのになあ……ぱくぱく」
彼女が俺の方をじっと見ている。

「……………ケンイチがチューしてくれたら、食べてもいい」

「本当か？ じゃあ！ おでこにチュー！ ほっぺにチュー！」

アネモネを抱き寄せて、おでこほっぺにキスをした。

「口には！？」

「それは、もっと大きくなってから」

「もう！」

アネモネは桃缶が入っている深皿を取ると、勢いよく食べ始めた。
魔法を使うとカロリーを消費するので、腹が減るはずなのだ。
なんにせよ、身体にダメージがないようで良かった。

そのまま夕方になり——プリムラの作った食事を取る。

アネモネも普通に食べているので、問題はないようだ。

だが、アネモネは疲れたのか、暗くなると早々に寝てしまった。

テントで、2人用の寝袋の中、アネモネと一緒に寝ていたのだが、俺は眠くないので、タブレットを使ってお城の書庫でコピった本を読んでいた。

これは、シャングリ・ラじゃ買えない貴重な本だからな。

タブレットを見ていると、誰かがやって来た。

テントの入り口を見れば――白い寝間着を着た王女。

「王女殿下が夜這いに来てよろしいので？」

「妾のワガママに巻き込んでしまって、悪いと思っておる」

「俺達が、街道の反対側へ行く話でしょうか？　まあ――魔導師が全員、リリース様の下からいなくなるのが不安なのは解りますよ。やつぱり、騎士団を連れてくれば良かったですねえ……」

「人数が増えれば、その分また其方に負担を強いる事になるじゃないか？」

「その前に、騎士団の連中が、私に養われて良しとしませんか――
はは」

「勿論、それも^{もちろん}ある」

王女が何か言いたそうなのだが、こんな所を人に見られたら、何を言われるか解ったもんじゃない。

彼女の手を引っ張り、家に向かおうとするのだが、抵抗するので――抱き寄せて抱え上げた。

家の前で寝ている商隊の獣人3人組の横を通り、玄関のドアを叩く。

「メイドさーん、すみません」

「……！」

家の中でバタバタした後、ドアが開いた。

顔を出したのは、メイド長さんだ。髪がボサボサで、メガネもズレている。

もしかして、メイドさん達も寝ていたのかもしれない。

「王女が外をウロウロしていたので、お連れいたしました。何もいないとは思いますが、危険ですよ」

「姫様！ ウトウトしてしまい、申し訳ございません！ さあ中へ！」

王女が家の中に入るのを確認すると、テントに戻る。寝袋の中に脚を突っ込み、隣で寝ているアネモネの頭を撫でていると、奥から声が聞こえる。

「旦那、夜這いに來た女をそのまま帰すなんて……」 「そうだにゃ」
「起こしてしまったな、すまん」

獸人達は、ちよつとした物音にも反応して目を覚ます。
下手なセンサーより感度が良い。

「何を言ってるんだ——王族に手を出せるはずがないだろ。首が飛ぶぞ」

俺は再びタブレットを点灯すると、本を読み始めた。

100話 大人と子供

街道を塞ぐ土砂の撤去作業中。15mはある巨岩が土砂の中に埋もれていたのだ。

これは重機でも動かないし、発破をするにも時間が掛かるって事で――取り除くために、巨大なゴーレムを作る事にした。

巨大なゴーレムを作るためには、同じく巨大な核^{コア}がいる。

それを、アイテムBOXに入っていた丸太と電動工具を使って作り上げた。

そしてその核^{コア}を使い、アネモネがゴーレムの起動に成功したのだ――過大な負荷によって、彼女が倒れてしまった。

まったくもって、俺のミスだ。だが彼女の身体には異常がなく、ほっと一安心。

――次の朝。皆で起きて朝食を取る。

アネモネがパンを焼いてくれたが、身体の調子は問題ないようだ。余り心配をすると、また反発されるかもしれないので、身体の判断は彼女に任せるとしよう。

アネモネは俺が子供扱いするのが気に入らないようである。

まあ、この世界では12歳ぐらいから働いて、そうなれば一人前扱いされる。

どうも元世界の常識が脚を引っ張ってしまうのだが――俺も彼女を子供扱いすべきではないのかもしれない。

朝食のメニューはアネモネのパンと、プリムラのスープ。

シャングリ・ラから購入したバターを出してやったら、皆がパンに塗って食べ始めた。

アネモネの魔法で温めてもらって食べているが、メリッサだけは自前の魔法を使っている。

「ケンイチ！ これはチーズとは違うのじゃな？」

「これはバターといって、同じく牛乳から作るものでございますよ」「どうやって作るのじゃ？」

「ええと——秘匿されているので……」

「解った！ 金を払えばよいのであろう？」

「それでもちよつと……」

「ぐぬぬ……」

実際は生クリームから作るらしいのだが、具体的にはやったことがない。

生クリームを冷やしながら振り回すと、固まる——みたいな事は聞いた事があるのだが……。

「アネモネ」

「……なあに」

返事はしているのだが、こちらを向いてくれない。

「寝ながら考えたんだが——岩を動かして崖下へ落とすだけならゴーレムを人形にする必要はないと思うんだ」

「うん」

「スライムって知っているか？」

「ヌルヌルしててぐちゃぐちゃのやつでしょ？」

「そのスライムみたいなゴーレムでもいいから、岩を押せばいいんじゃないかな？」

「……解った、やってみる」

「なるほどのう。物を押すだけなら、わざわざ人形にする必要はないの」

「その通りでございます」

巨岩は、アネモネが作ったゴーレムによって引き倒されて、路上

に転がっている。

こいつを、核コアによって制御された流れる土砂の上に載せれば、動かせるだろう——多分。

核コアを作った時もそうだったが、物事やってみなくちゃ解らん。

朝食を食べ終わったので、早速巨岩の除去作業に移る。

核コアを出して土砂の近くに置く。巨岩の近くには、アネモネが作って崩したゴーレムの成れの果てが小山を作っている。

それをそのまま使うわけだ。

「アネモネ、君に任せる」

「うん」

彼女が魔法を唱え始めると、土砂が核コアを包み始めて山を作る。ぐねぐねと動く土砂の山だ。

その山が巨岩に近づく——それを包み込み、ゆっくりと押し始めた。

「おおっ！ 上手くいきそうじゃな」

「はい」

「な、なるほど——こういう形でゴーレムを使った事がなかったわ……」

「正式に学問として習ってしまった事で、ゴーレムってのは人形っていう固定観念から抜け出せなくなってたんだろ」

「それは——否定出来ないわ」

「俺達の魔法は自己流で、ゴーレムに関しては素人だからな。固定観念もクソもないわけで自由な発想が可能なわけよ」

「そう言うと聞こえはいいけど、要はデタラメって事でしょ」

「結果が出せりゃいいんだよ。戦なら勝てばいい」

山津波型のゴーレムで敵兵を飲み込む戦術を王女に提案する。

「ほう！ 確かにの！ 人形のゴーレムを出して、岩を投げたり踏み潰すよりは効果的じゃ！」

「そ、そんな恐ろしい事をよく思いつくわね……」

そう言われれば、たしかにな。元世界で読んだ本やネットの知識を総合するともものすごい量になる。

この世界の住民達には想像も出来ない量だろう。

だが——しまった。こういう提案をすると、戦に引っぱり張られるじゃないか。

どんな事でも全力出してしまうという、日本人の性^{さが}が悲しい。

ゆっくりと岩が少しずつ動いているが——両手を前に出して集中しているアネモネの様子に変わった所はなく、安定している。

そして岩が崖の縁までくると、ゆっくりと落ち始め——そして、あつという間に加速すると谷底へ激突して地響きを立てた。

「「「おおおっ」」」

谷を覗きこんでいた、商人や獣人達から歓声が上がリ、抱き合つて小躍りをしている。

俺もアネモネの所へ行つて、彼女を抱き上げる。

「凄いぞアネモネ！」

「だったら、チューして」

「おでこにチュー、ほっぺにチュー」

「もう！」

「ははは」

アネモネを連れて、テントの所へ戻つてくると、商人達に囲まれた。

「こんな小さい子が、あんな巨大なゴーレムや巨岩を？」 「さぞかし、名のある魔導師に仕えておるのでは……？」

「私の師匠はケンイチ」

アネモネが短くそう答えた。

「失礼ですが、こんな凄い魔導師が今まで無名とは……」

「俺達は辺境の魔導師ですから――王都までは噂が届かないのでしよう。人前にも滅多に出ませんし」

「なんと……」

「そのアネモネの母親は『白金のアルメリア』らしいぞえ」
遅れてやって来た王女が、商人達に種明かしをする。

「なんと、白金の？」 「十数年前に行方しれずなのでは？」 「儂もそう聞いたの」

「母親は亡くなったのですが、私が引き取ったのですよ」

まさか大魔導師の子が人減らしで奴隷として売られて、野盗に捕まっていたとか言えん。

しかしアネモネの名声が広まると、育ての親達がどんな行動に出るか心配だな。

まあアネモネの意志を尊重するが……だが彼女の口から育ての親や一緒に育った弟妹の事を聞いた事がない。

本人としても触れたくない過去なのだろう。

残ったスライム型ゴーレムの残骸がうず高く小山になっているので、これをホイールローダーで除去すればいいだろう。

それに、核コアの周りに土砂を集めて小山を作れば、一々コ〇ツさんを出して土砂の山を崩さなくても済む。

つまり土砂を集めるために、ゴーレムの核コアが使えるのだ。その事をアネモネに伝える。

「解った」

これで、さらに土砂を取り除く作業のスピードアップが図れるぞ。

しかもコ○ツさんを動かさないの、燃料の節約にもなる。
しかし、盛り上がっている商人達を見て、プリムラが渋い顔をしている。

「プリムラどうした？」

「ケンイチやアネモネの力を利用して、私もあんな顔をしていたのかと思うと……」

「なんだそんな事か。まあ確かに俺の召喚獣を初めて見た時のプリムラの顔は——」

「はい——この人の弱みを握ったと思いました……反省いたします」

「ええ？ 商人らしくてよかったと思うけど」

「そんな意地悪を言わないでください」

「どうも、プリムラはそんな事を気にしている感じだ。」

俺が商売相手なら、気にしなかったのであろうが、身内になってしまったからな。

「まあ気にするな。身内なんだから利用してもいいけど」

「でも、マロウ商会金儲けの秘訣——身内に甘えるべからず……」

「確かに、同族で商売すると甘くなるよなあ」

「そうなんです……」

同族企業ってのは社員の不満も溜まりやすい。俺も経験がある。

社員が頑張って会社が儲かってても、社長の家や車が大きくなるばかりじゃ、やってられないからな。

朝食の時にアネモネと打ち合わせた通りに、核コアに土砂を集めて小山を作り、それをホイールローダーで崖下へ投げ落とす。

うーん、こりゃ作業が捗はかどるぞ。例えば、重機で土砂を移動させようとする——ホイールローダーで運んだり、ダンプに積み込んで移動させる必要があるが——。

スライムゴーレム状態にして土砂を小山で移動させれば、一気に

作業が進む。

作業の合間、身軽さに自信がある獣人に頼んで、土砂の上を越え
てもらい、頂上にある宿場町へ連絡を入れてもらう。

もちろん
勿論、もうすぐ開通するって連絡だ。

——そして夕方。今日だけで、かなりの量の除去が進み、街道を
覆っている土砂の残りは半分を切った。

あと、5〜6日で開通するだろう。

夕食の用意をしていると、峠の下から白い馬がやって来た。

「王女殿下〜！」

王女を呼ぶ声だが、聞き覚えがある女性の声。見れば、茶色の
巻き髪が美しい女騎士。

王女の護衛をしていたミレットという騎士だな。

やって来た騎士が身を翻し颯爽と馬から降りると、王女の前にひ
ざまずいた。

「王女殿下！ このミレット、居ても立ってもいられなく、命令に
逆らい推参いたしました事をお許し下さい」

「おおっ、ミレット。よいところへ来た。今日はここで1泊して、
明日王都へ引き返し貴族共に伝えるがよい！ 後1週間も経たずに
街道が開通する故、作業部隊の派遣は中止しろとな」

「は、はい？」

女騎士は下げていた頭を上げて、間拔けな返事を返した。

「だからもう、土砂の除去が完了するのだ！ もう半分以上、取り
除かれたのじゃぞ？ そこにいる商人共にも聞いてみるがよい」

「騎士さま。恐れ多くも王女殿下の仰る通りでございます、見た

こともない巨大なゴーレムや、土砂を運ぶ鉄の召喚獣とやらで、あつという間に街道を塞ぐ邪魔物が取り除かれてしまいました」

「理解したか？ ミレットよ」

「はあ……」

どうも女騎士は、なんだかよく解らないようだ。そりゃ、いきなりそんな事を言われても理解できないかもしれない。

ここで一部始終を見ている者でなければ、妄言だと言われるだろう事も想像に難しくない。

「しかし、リリス様。貴族様達が集めた物資が無駄になりますね」「まあ仕方ない。普通なら国家事業になる普請が10日余りで終了してしまうのだ。貴族達の損失など微々たる物じゃ」

別に俺とて、貴族達の心配をしているわけではないのだ。はつきり言っただうでもいい。

国王から貰った天下御免の書状で、もう付き合う事も追い回される事もなくなるのだからな。

1人人数が増えてしまったが、夕食の量的には問題ないだろう。大食らいの王女がいるから、大量に作ってある。

今日のメニューはレツサードラゴンハンバーグだ。脂身がなくてパサパサしているの、ラードを少々混ぜてある。

餃子を作った時にラードを混ぜて中々美味かったので、ハンバーグでも同じようにしてみた。

並べたカセットコンロに載った鉄板の上で、ジュージューと美味そうな音を立てて、大量のハンバーグが焼かれている。

付け合せはフライドポテトにした。これは温めればOKなやつだ。アネモネの魔法で加熱してもらうと、すぐに食べられるようになる。

「肉も柔らかくて、肉汁がたっぷりだが、この付け合せは？」

「それは、芋を切って油で揚げた物でございます」

「これは美味しい！ この付け合せをもっとたもれ！」
王女はハンバーグより、フライドポテトの方が気に入ったようだ。
しかし、よくこんなに食って太らないな。

「うめー！ 前にも食ったけど、ドラゴンの肉でも同じ料理が出来るんだな」「これ芋なのきゃ？ カリカリしてて甘くて美味いにゃ！」

「おおっ！ うめー！」「お前等いつもこんな美味しいもんばかり食ってるのかよ！」「美味しいね！」

商隊の獣人達の「食わせろ」コールがうるさいので一緒に食わせている。勿論、いつまでもタダ飯^{もちろん}ってわけにはいかないから、金を取っている。

獣人達にもフライドポテトが人気だ。

「はう……肉を叩き潰して焼いただけの料理なのに美味しい。そして、それをワインで流し込むと——はああ、悔しい！」

メリッサは悔しがりながら、ハンバーグを食べている。こういう人間も珍しい。

「これは——食べたことがない料理です。一旦バラバラにした肉をまとめて、焼くなんて……」

騎士のミレットも、唸りながら食べている。まあ、ハンバーグは形を少々弄った肉なので、警戒はされていないようだ。

「ほんにのう。これは王宮料理でも作らせねば。それとケンイチ！」「はい、何か？」

「風呂に入れるだけの水はあるのかの？ 早駆けをしてきたミレットを、風呂に入れてやりたい」

「大丈夫でございます」

——とはいえ、アイテムBOXに入れてあった川から汲んだ水は

すでに品切れ。

ここには水はない。谷底には水は流れているが、水を汲むだけに危険な崖下りをするのはちょっと……。

それで予てからの予定どおりにシャングリ・ラから水を買う。試算では浴槽一杯分が1万2千円。

浴槽2つで2万4千円、これが後5日続いたとしても、12万円――少々高い風呂だが、金額的には余裕だ。

金ならアンティーク家具でもらっているからな。それに、俺が殺ったレツサードラゴンも金になる。

何せ鱗が一枚5000円だ。この鱗だけでも一財産になる。

しかし、ペットボトルの水で風呂なんて贅沢だな。牛乳風呂とかワイン風呂に匹敵するんじゃないのか？

飯を食い終わったので、早速風呂の準備をする。

小屋に置いてある浴槽にシャングリ・ラで買った水を入れる。プラキャップを取ってチマチマ入れている場合ではないので、刃物でペットボトルを真つ二つにして豪快に入れる。

何せ浴槽が250Lなので、2Lのペットボトルが125本だ。だが、皆で協力していれば、そんなに大変でもない。

「ほう！ この透明な入れ物は何なのじゃ？ 軽くて素晴らしい！ 水筒として十分に使える」

「私が魔法で作った物なので、譲渡不可でございます」

「これも金を積んでもダメなのかえ？」

まあ、ペットボトルぐらいならいいかな？ 消耗品だし。

だが、切ってしまったペットボトルは使えないので、ゴミ箱行き。

「しかし、高い金を出されても、いずれ壊れて穴が開く代物ですし」「ふむ……そう言われれば、そうであるが……其方が使っていた透明な盾と似たような素材であろう？」

「さすが、リリス様。その通りでございます」
アネモネの魔法で風呂が沸く。プラ容器に予備の水も出す。入浴準備完了だ。

そしてここは、一糸纏わぬ乙女達のキャツキャウフフの場となる。俺のようなオッサンは退散しよう。眩しすぎる――だが、アネモネも一緒に出てくる。

「アネモネは入らないのか？」

「ケナイチと一緒にいるからじゃない」

「もう大人なら、風呂は1人で入るべきだと思うんだが……」

「……いいの！」

「それはズルくないか？」

「ズルくていいの！ 大人はズルいんだから！」

その通りだ。大人はズルい。本音と建前を取っ替え引っ替えする。

テントから、ちょっと離れた所に、商人達のキャラバンが並んでいる。

今や、その数は増えて30台程になった。プリムラの作っているスूपも作っただけ売れている。

そして俺の所からワインを買って、皆で飲んでいる。

絶体絶命状態のどん底から、後5日もすれば開通するってんだから、そりゃ浮かれるのも無理もない。

そして、俺達がテントに戻ってくると、ここで風呂に入ろうという事になった。

プラ浴槽はキャツキャウフフで使っているので、前に使っていたドラム缶風呂を出した。

シャングリ・ラからペットボトルの水を買って、皆で容器をぶっ

た切って風呂を満たす。

そして、アネモネの魔法でお湯を沸かす。最初はドラム缶風呂に入るのにも苦勞していたのだが、今や簡単に入浴出来るようになった。

ドラム缶風呂の足場を出すのは面倒なので、脚立を使った。

俺が1人で風呂に入っていると、裸のアネモネがドラム缶の縁を跨いで入ってくる。

「アネ嬢、大人だったら1人で入るんじゃないの？」 「そうだにや」「いいの！」

皆からツツコミが入るので、アネモネは不機嫌だ。

皆で身体を洗った後、獣人達にお湯をぶっかけて終了。

濡れてしまったテントの中は、アネモネの魔法で乾かす。

テントの脇を開けて――。

「乾燥！」
ドライ

濡れていた足下が白い蒸気となって、一瞬で乾く。凄い便利。

だが熱を加えて水蒸気になっているわけではない、ココらへんが法理を端折っている魔法っぽい。

だが、ジェットヒーターが向こうのキャッキャウフフで使用中だ。あゝどうしよう……もう1個買うか。シャングリ・ラからジェットヒーターを追加で購入すると、テーブルを出してセッティング。燃料を入れて点火すると、轟々と青い炎が吹き出す。

ドラム缶はアイテムBOXへ入れて、中の水をゴミ箱へ投入すれば、綺麗になる。

服を着ると、向こうのキャッキャウフフも終了したようなので、

アネモネと一緒に風呂を片付ける。

そして濡れた床を再び魔法で乾燥させる。

「乾燥！」
ドライ

「アネモネ、ありがとうな」

「うん」

後は寝るだけだ。巨大なスライムゴーレムを使ったアネモネだが、二足歩行ロボットを作るよりは負担が少ないと言う。

そんなに集中やコントロールをする必要がないのだろう。

そのまま皆で就寝。

寝袋でアネモネと一緒に寝る。俺はまたタブレットで読書だ。だが、テントの外から足音がする。テントは薄いので、地面を歩く音がよく聞こえるのだ。

テントの出口が開くと、月明かりをバックに姿を見せたのは、薄ピンク色の寝間着に身を包んだプリムラ。

「プリムラ、どうしたんだ？」

「あら？ 用がなくて来てはいけないんですか？」

「そ、そんな事はないけど……」

2人用の寝袋でも3人は入れない。シャングリ・ラで新しい2人用の寝袋を購入して、プリムラと一緒に入る。

「これ、凄く暖かいですね……」

そう言いながら、プリムラが俺に抱きついてきた。

「ちょっと待てプリムラ、もしかして、ここですか？」

「あら？ ダメですか？」

「ダメって言うか——多分、ニャメナとミャレーも気がついてるぞ

？」

「構いません。彼女達とする時に私が我慢しているのに、逆はダメだと言うのですか？」

「そうは言わないけどさ……」

そりゃ、この寝袋なら、出来ない事もないが……。

だが、結局やってしまった。

— — — — — ◆ ◆ — — — — —

——次の朝。

目が覚めたアネモネが怒っている。

「なんで、私と寝てたのに、プリムラと一緒に寝ているの?!」

「あらアネモネ——貴方は大人なんだから、1人で寝た方がいいでしょう?」

プリムラはそう言って、俺に裸のまま抱きついてきた。2人して、この格好で寝袋に入っていたら、そりゃ怒るかも。

「それじゃ、私も大人だから、裸でそれをする!」

「それは、もうちょっと大きくなってからな」

「ズルい!」

「だって、大人はズルいんだろ?」

「むむむむ!」

一応、アネモネにも謝る。あまり弄ってグレてしまったら困るかな。

「ふあああ、全く、2人がやっている横で寝ているのはキツイぜ」「全くにや」

耳の良い獣人達は、やはり気がついていたようだ。

「にゃー」

テントの入り口からベルが入ってきて、俺の身体にスリスリをしてくる。

「はいはい、腹が減ったんだな。わかったよ」

朝の準備はしてないので、またシリアルとシヤングリ・ラのパンで良いか。

スープは——プリムラの売り物の残りがあある。なんといっても、レッサードラゴンの肉が腐るほどあるからな。

この死体も、どこかで内臓を抜いて冷やしたいんだがなあ。

まあ、アイテムBOXへ入れておけば、時間はほぼ停止しているんだから、傷むことはないのだが……。

皆で朝食の準備をして、食事を始める。

騎士のミレットは、このままトンボ返りするらしい。

「ミレットよ。大変だと思うが、頼むぞ。連絡が遅れば、貴族共が出立してしまう」

「承知いたしました」

「それから、街道が開通した場合、妾はそのままケンイチ達と一緒にソバナの街へ行くと、陛下に伝えるがよい」

「え?! 王女殿下それは?」

「其方の意見は聞かぬぞ?」

「し、承知いたしました……」

多分、帰ったらミレットが怒られるんだろうな。全く、すまじきものは宮仕え——大変そうだな。

メイドさんが、王女の荷物から紙とペン——そして印を持ってきた。王女は陛下へ手紙を書くようだ。ソバナへ向かう理由も詳しく記した。

王女は陛下へ手紙を書くようだ。ソバナへ向かう理由も詳しく記した。

さないと拙いだろう。

そして、書き終わるとクルクルと丸められて、赤い封蠟がされた。

王女の手紙を携えたミレットの出発を見送り——そのまま午前中は、順調に土砂の除去が進む。何の問題もない。

このまますんなりと開通してしまうのか。

昼飯を食べて、午後の作業を開始する。

峠の直角コーナーに溜まっていた土砂を、ホイールローダーの巨大なバケットで崖の下へ押し落とすと——先が見えてきた。

峠の頂上らしき場所には小さな宿場町が見え、土砂の向こうには——こちらと同じように10台程の馬車が並んでいる。

おそらく、開通するのを待っている馬車だろう。

宿場町には連絡を入れたので、開通する事は知っているはずだ。

——そして、3時の休み時。

皆で雑談をしながら、お菓子を食べて飲み物を飲む。何事もなく開通しそうだというので、皆の表情も明るい。

俺は、この作業が終わったら、国境の街ソバナまで行くつもりなので、そのことに思いを馳せていた。

だが、上を見ると——何かが飛んでいる。

「おい、何か黒い物が空を飛んでいるぞ？ 前にいた、告死鳥かな？」

「んあ？ ——旦那、あれは告死鳥じゃないぞ、大体長い尻尾も形が違っちゃないか」

「なんか、ずいぶんとデカくないかにゃ？」

「そう言われれば……」

俺にはさっぱりと解らないが、ニャメナが叫んだ。

「あ、ありやワイバーンだ!!」
彼女が叫ぶと同時に、その巨大な何かは俺達に向かって急降下を
開始した。

101話 ワイバーン撃破

峠で土砂の除去作業をしている。残りが1／3程になり、ブラインドコーナーをクリアすると終点が見えてきた。

そして、3時休みに一服していると、上空にデカイ黒い鳥がいる。大きな翼を翻し尻尾がすごく長い――だが、それは鳥ではなかったのだ。

「ワイバーンだ！」

「ワイバーンって、ドラゴンか？」

「ドラゴンだよ！ ドラゴン！」

ワイバーンって飛竜のはずだから、そりゃドラゴンだ。

ニヤメナが叫ぶ。商人達のキャラバンもパニック状態だが、こんな狭い谷の道じゃ、どこにも逃げ場がない。

ワイバーンは、こちらに狙いを定めたのか、ゆっくりと螺旋を描きながら降下を始めた。

「皆、壁に貼り付け！」

壁際なら、上空からの攻撃を躲せるだろう。

だが、敵もそのぐらいいは知っているのか、谷側から滑空して攻めてきた。

鋭い鉤爪を剥き出し、大きな翼を広げて降下してくる。

「シャアアア！」

ベルが盛んに毛を逆立てて威嚇をしているが、いくら彼女でも空飛ぶ敵には打つ手がない。

『光の矢よ敵を討て！ その力を与えしは、深淵より汲みえし我なり！
マジックミサイル魔法矢！』

『むゝ憤怒の炎！』
ファイヤーボール

メリッサとアネモネから撃ち出された魔法だが――光の矢は躲され、火の玉は命中したのだが、ダメージにはなっていない。

「「うわあああ！」」「「ぎゃああ！」」

街道に並んでいた商人達の馬車が、何台かワイバーンの爪によってズタズタに引き裂かれた。

全身を黒く光る鱗に覆われ、巨大な蝙蝠のような翼をばたつかせ小ジャンプ攻撃を繰り返す。

足下の白い爪は、軽自動車ぐらいなら握り潰せそうだ。顔は馬面なトカゲといった感じ。

おそらく、商人が乗っている荷馬車に食料などがあるのを知っているのだろう。

当然、商人達自体も魔物の餌となるが、上手く逃げているようだ。

「旦那、召喚獣は？！」

「相手が空飛ぶ魔物じゃ無理だ！ メリッサ、あいつを魔法で飼いならしたりは出来ないのか？」

「あんな空飛ぶ魔物相手に無理に決まってるでしょ！」

彼女が使う本物の召喚獣にするためには、色々な魔法の儀式が必要らしい。

メリッサと2人で顔を見合わす。

「――そうだ！ メリッサ、崖下に捨てた土砂を使って、ゴーレムを作れないか？」

「た、多分、なんとかなるかも……」

「デカイゴーレムを盾にすれば、ビビって逃げるか、攻撃してきても防げるんじゃないか？」

「わかった、やってみる」

「リス様とメイドさん達は、家の中へ！ プリムラも！」

「承知した！」

「解りました」

商人達には悪いが、ここは王女を守るのが先決だろう。ここまで来て、あとちょっとで街道も開通するのにワイバーンの餌食になるなんて、運が悪いとしか言いようがない。

まさに天国から地獄だ。

「姫様、こちらへ！」

王女の避難を確認すると、アイテムBOXからメリツサの核^{コア}を出す。

すぐさま彼女は、ゴーレムの起動の準備に入った。

「アネモネ、爆裂魔法^{エクスプロージョン}は使うなよ、商人達まで吹き飛んでしまうぞ」
「う、うん」

崖下へ落としてしまった瓦礫を集めて、ゴーレムを作っているの
で、少々時間がかかる。

だが形を成した巨大な人形を見て、ワイバーンが谷底へ飛び降り、
翼を広げて滑空に入った。

わけの解らん巨大な生物を見て、警戒し一旦距離を取ったのだろ
う。

その隙をつき——商人達は荷物を捨てて、王女が隠れている俺の
家の周りへ集まってきた。

命あつての物種だからな。とりあえず生きていればチャンスもある。

巨大なゴーレムが盾になっているので、いくらワイバーンでも簡単には突破出来ないだろう。

しかし、このデカイ土塊の寿命は1時間程である。

後は、アネモネのゴーレムを使うか、それとも、至高の障壁ハイプロテクションを使うしかないが、どちらも短時間しか保たない。

「おい！ お前たち儂を守れ！ そのために金を払っとるんじゃぞ！」

「このクソ爺！ 相手がワイバーンじゃ、手も足もでねえだろ！」
「あんなのどうやって戦えっていうのさ」「そうだね……」

商隊の獣人達と、商人が侃々諤々とやっている。

相手が盗賊や野盗なら、なんとかなるだろうが、相手が空飛ぶ飛竜じゃな。

俺のコ○ツさんだって打つ手なしだ。だが、そうも言ってはいられない——何か武器は……。

クロスボウなんかじゃ傷も付かない。圧力鍋爆弾エクスプロージョンじゃ飛んでる敵に当たらないし……大体、起爆のための爆裂魔法エクスプロージョンが当たらないだろ。何かいい方法は……そうだ！ 爆弾をくつつけられればいいんじゃない？

アンホ爆薬だと、起爆に爆裂魔法エクスプロージョンを使わないとだめだが、以前作ったタイマー式の爆弾がある。

くつつけて起爆させれば、ダメージが通るかもしれない。アイテムBOXから、タイマー式のパイプ爆弾を出す。

鉄パイプに自作の黒色火薬が詰まっており、デジタル式のキッチンタイマーで起爆出来る。

さて、これをどうやって、ワイバーンにくつつけるかだ……。

「旦那！ また来たぞ！」

ワイバーンは翼を広げてやって来ると、ゴーレムの頭に攻撃を仕掛けた。

奴は人形を生物だと思っているので、頭を狙っているのだろう。

バサバサとホバリングしながら、しきりに鋭い爪をゴーレムへ叩きつけている。

どうするどうする？ ガムテープか？ いや、そんなもんじゃくつかないだろう。接着剤か？

いや違う——ペタリと強力にくっつけるためには……。

「トリモチはどうだ？」

トリモチなんて、しばらく見たことがないけど、あれなら強力だぞ？

しかし、トリモチなんて売っているのか？ 早速、シャングリラで検索。

トリモチ、トリモチ——あるじゃん！ 平らで丸い缶に入ったトリモチが売っている。

どんなのが来るか解らんから5個ぐらい買おう。特級品って奴で1缶2000円だ。

「ポチッとな！」

ガラガラと落ちてきた缶の蓋を開けると赤い。トリモチって白いイメージがあったのだが、赤いのか。

アイテムBOXから箸を取り出し、タイマー爆弾に塗りたいくる。ベタベタだが、よくくっつきそう。

「よし！ こんなもんだろう、タイマーのセットカウンントは30秒、これが最後の決め手だよゲ○ル君」

ゲ○ルって誰だよ。

タイマーをセットして、ニャメナに渡す。

「ニャメナ！ 急いでこいつを、あのワイバーンに投げつけろ！ 赤いネバネバには触るなよ！ 取れなくなるぞ！」

ワイバーンは、まだゴーレムの頭を攻撃中だ。

スタートボタンが押された爆弾を受け取ったニャメナは、大慌てでワイバーンへ向かって投げつけた。

こいつが、大木を吹っ飛ばす程の威力があるって知っているからな。

続いて、もう1つタイマーをセットして、ミャレーへ渡す。

「ミャレーも頼む！」

「にゃにゃにゃにゃー！！」

獣人によって投げられたタイマー爆弾は、上手くワイバーンの胴体と翼の部分へくっついたようだ。

「退避ー！ 逃げろー！ 爆発するぞー！！」

皆でバラバラと街道の上り下りに逃げ始めると、メリッサの集中力が途切れたのか、ゴーレムが崩れ始めた。

ワイバーンもそれにつられて、攻撃を止めたのだが――1発目のタイマー爆弾が起爆。

大きな爆発音と共に、ワイバーンの翼が折れて道へ叩き付けられた。

ついで、2発目の爆発。うつ伏せになっていたワイバーンの身体が爆発でひっくり返る。

「やったぜ！」

「まだ生きてるよ！」

翼が折れたので飛べないようだが、未だピンピンしている。さすがにしぶとく、バサバサと翼をばたつかせている。

タイマー爆弾では少々威力が足りないようだ。

「キシヤアア！」

奇声を上げ、威嚇しながらバタバタと暴れる魔物——これでは、
コ○ツさんも近づけない。

それを見た、アネモネが叫んだ。

「ケンイチ、私の核^{コア}を出して！」

「お、おう？」

急いでアイテムBOXから巨大な核^{コア}を取り出して、地面へ寝かせ
る。

「むゝ！」

アネモネが精神を集中すると、崩れたメリッサのゴーレムや、崖
下から土砂が集まってきて、巨大な人形が立ち上がった。

「「「おおおおっ！」「」」

驚く俺達に、ゴーレムが創りだした黒い影が覆い被さる。
そして、巨大な土塊の腕がゆっくりと回転運動を始めた。

「ロケットパンチ！」

アネモネの掛け声と共に、ゴーレムの身体から、ぐると回した
腕が切り離された。

非常にゆっくりとした動きに見えるのだが、飛び出したゴーレム
の腕は時速数百kmだろう。

超高速の石塊を食らったワイバーンは、谷底へとふっ飛ばされた。
さすがの魔物も、この攻撃は効いたらしい。

皆で崖の縁まで駆け寄ると下を覗く。谷底でまだワイバーンが動
いている。だが間違いなく瀕死だ。

「よし！俺が降りて止めを刺してくる。あのワイバーンも欲しい
しな」

レッサードラゴンが食えるなら、ワイバーンだって食えるだろう。これで数年は肉に困らんで済むぞ。

ドラゴン系の肉なんて珍しいだろうから、精肉としても高く売れるかもしれない。

シャングリ・ラから20mの登山用ロープを3つ購入した――3000円×3だ。レーザー距離計で測ったところ、谷底までは40m弱。

色々なロープが売っていたが、登山用のロープが売っていたので、餅は餅屋――ちよつと意味が違うか……こいつを買ってみた。

ロープの塊をばらして3本を繋げれば、長さは十分だろう。実際にロープを谷底へと垂らしてみたが、問題なし。

そして、シャングリ・ラからクライミングハーネスを購入する――7000円だ。

胴体と太ももにベルトを巻いて、ロープを繋げるためのハーネスだ。

とてもじゃないが、腕一本では支えられない。

しかし、ロッククライミングをするには、色々足りない気が……。

ロープを送ったり、止めたりする器具があったはずだ。

関連ページを検索すると、アセンダーという器具が3200円で売っている。

購入して説明書を読むと、やはりこいつでロープをコントロールするようだ。

体重が掛かっているときはロックするが、フリーになるとロープがするすると動く。

なるほど崖を降りる時に、ポンポンと跳ねるように降りる映像をよくみるが、こいつを使っているのか。

このアセンダーとハーネスを繋ぐための、カラビナという輪っか

も購入。

「よっしゃ、これで行けるだろう」

「旦那、大丈夫かい？」

「力持ちの獣人達に引っ張ってもらえば平気だろ？」

「そうじゃなくてさ……」

こんな事を見るのも、やるのも初めてなのだろう。この世界にロツククライミングなどあるはずもないからな。

「大丈夫だ。さっさと止めを刺さないと暗くなってしまう」

放っておいても死ぬとは思われるが、一晚放置したら肉が傷み、食えなくなってしまう。

とっとと仕留めてアイテムBOXへ入れないと。せっかくのお宝だ。

「プリムラ、飯の準備をしておいてくれ。商人達も疲れているだろうから、炊き出しを兼ねてな。周りにいる連中にも手伝わせばいい」

「はい、解りました」

アイテムBOXから、道具や食材をタップリと出す。レッサードラゴンの肉も切り出して、アイテムBOXに入れてあるので、いつでも食える。

「獣人達は、俺の縄を引っ張っててくれよ」

うちの獣人達に加えて、商隊の獣人達もいる。これだけいれば俺1人を引っ張り上げるくらい余裕だろう。

「任せるにゃ」

「にゃー」

ベルが心配そうな顔をして、俺のところへやって来た。彼女の目

には俺が自殺でもするように映っているのかもしれない。

獣人達に縄を持たせて、崖の縁に脚を掛けた。人生初ロッククライミングが異世界かよ。

どうしてこうなった！

「ケンイチ！」

「アネモネ、心配するな」

家から王女も出てきた。俺が崖下へ降りようとしているので驚いているようだ。

「其方、何をするのじゃ！」

「ワイバーンがまだ生きているので、トドメを刺してまいります」

「待て！ 魔物は瀕死なのだろう？ 放っておけば死ぬではないか」

「そんな事したら、肉が食えなくなってしまうですよ」

「なっ！ ほんに、呆れたわえ！」

どうも、王女には俺の行動が理解できないようだ。

まあいい——縄を掴んで岩を蹴りながら、崖を降りていく。

こんなの初体験だが、実戦をやらずに覚える。しかし降り始めて解った——手が痛い。

こりゃ、しょうがないな。慣れるしかないのだろう。

谷底へ降りると、カラビナを外す。

「旦那あ！ 大丈夫か！？」「にゃー！？」

上から獣人達の声が聞こえると、周りからコダマがかえってくる。

「ああ、大丈夫だ！！」

さて、しぶといワイバーンはまだ動いている。だが崖から落ちた衝撃で、手足は曲がってはいけな方向へ曲がり、文字通りのグチャグチャだ。

こいつに止めを刺さないといけないわけだが——幸い、重機を出すだけのスペースはあるようだ。

——とはいえ、ちょっと足下が不安だな。ユ○ボなら大丈夫だと思うが、コ○ツさんはちょっと拙い^{ます}かもしれない。

だが、トドメを刺すなら、コ○ツさんじゃないと、ちょっと無理っぽい。

「うーん、そうだ！ ユ○ボで地ならししてから、コ○ツさんを出せばいい」

アイテムBOXからユ○ボを出し、排土板を使って辺りを整地。随分と悠長だが、魔物は瀕死で危険はない。

このままアイテムBOXへ入れられれば、なんの問題もないのだが、生きているうちは入らないからな。

綺麗に整地を完了して、いよいよ本番に入る。

「コ○ツさん召喚！」

地響きと共に、黄色の車体が現れた。早速運転席に乗り込み、エンジンを開始させる。

ガタガタとワイバーンの下へ行くと、アームを9mの高さへ振り上げた。

「コ○ツアタック！ それは、黒い魂を冥府へと送り返す、慈悲の一撃！」

鋼鉄のバケットが魔物の頭を叩き潰すと目が飛び出し、口から血反吐を吐き出す。

「おりゃ！ もう一発！」

もう一度、バケットが再度振り下ろされたが、反応はない——完全に息の音が止まったようだ。

しかし、かなりデカイ！ 身体は小さいのだが、翼を広げて尻尾

まで入れたら完全に10mオーバーだ。

だが翼を折りたたみ、尾は丸めれば10mの範囲に収まるだろう。

「アイテムBOXへ収納！」

息の根が止まり、コンパクトに折りたたまれたワイバーンの死体が目の前から消える。

「ふう……全く、どうなることかと……」

これでレツサードラゴンに続き、ワイバーンも手に入ったぞ。しばらくは肉に困らんで済むな。

コ○ツさんを収納して、下流を見ると――アネモネがゴーレムで落とした巨岩がすっぽりと谷に嵌まりダムを作っている。

そこへ歩いて行ってみる。ドンドンと岩を脚で踏んでみるが、当然びくもしない。

完全に固定されているので、こいつが山津波の原因――って事にはならないと思う。

「こりゃいい、せっかくだ、水を汲んでいこう」

ここで水を汲めば、シャングリ・ラから高いペットボトルの水を買わないで済む。

幸い、水は澄んでいて綺麗だ。飲水には煮沸させないとダメだろうが、風呂の水には十分に使える。

アイテムBOXからプラ容器を出して、次々と清水で満たしていく。

ついでに、プラ容器も追加購入して、たっぷりと水を持っていく。

そうか――ここにワイバーンやレツサードラゴンを入れれば肉を冷やせるが……。

明日、ここへ降りてくるのが面倒だな。それに告死鳥って鳥もい

たから突かれる可能性がある。
アイテムBOXの中に入れておけば問題はないし、川か湖のある
所まで待つとするか。

水を汲み終わったので、ロープの所へ戻る。

「おい！ 引っ張って上げてくれ！」

「にゃー！！」

ミヤレーの声が聞こえると――そのまま崖をズルズルと引っ張られて登っていく。

本職のロッククライマーなら、自力で登れるのかもしれないが、俺は無理だ。

最後は手を引いて上げてもらう。獣人なら、女でも男1人を軽々と持ち上げる。

「旦那っ！ はふはふ！」

地面に立ったところで――いきなり、ニヤメナに抱きつかれた。また明らかに目がおかしい。

「ちょっと待て！ お前、また始まったのか？」

「なおおおん！」

「にゃおーん」「なーん」「みゅーん」

商隊の女獣人3人組も、俺に抱きついてきた。皆が同じ症状だ。

「ぎゃー！ 皆がおかしくなったにゃ！」

「さ、酒だ。酒を飲ませよう！」

シャングリ・ラから、ブランデーをまた買う。4人いるから、4本でいいだろう。

「おら！ お前等の好きな酒だ！」

スクリュューキャップを取って、俺に抱きついてる奴らに酒の匂いを嗅がせると、皆がそれに飛びついた。

「「「んぐんぐんぐん！」」」

そして、ブランデーを1本ラッパ飲みすると、皆がぶっ倒れた。

「こいつら、なんなのにな。自制がなさすぎにな。ウチだって我慢しているのににな」

「すまん、ミヤレー」

「もう、後でたつぷりと貸しは返してもらうにや」
ぶっ倒れた獣人達だが、放置は出来ない。

「メリッサ、すまん。結界を張って中にこいつらを寝かせてやってくれ。放置すると男共に襲われてしまう」

「世話の焼ける連中ね」

文句を言いつつ、メリッサがテントに結界を張ってくれた。種族は違って同じ女だ。察しはつくのだろう。

俺は結界をキャンセル出来る魔石をもらっている。女達を担ぐとテントへ寝かせた。

「ふう……重労働だぜ」

「にゃーん」

ベルがやって来て、身体をスリスリしてくれる。

それにしても腹が減った。ワイバーンの肉を食ってみたいが、プリムラの料理がスタンバっている。

だが怪我人もいるので、そっちが先決だろう。

「ふう——アネモネ、魔法の残りは大丈夫か？」

「まだ大丈夫だよ」

「怪我している商人に回復ヒールを掛けてやってくれ。相手が商人なら金を取ってもいいぞ」

「解った」

アネモネがぐったりとしている商人達の所へ駆けていく。俺も彼女と一緒に商人達の様子を見る。

「どうした？　そんなに重傷か？」

座り込んで、うなだれている男に声を掛けた。

「いや——馬車が壊れてしまっとな」

ワイバーンによって大破した馬車は二台。うーん、そうだ。身投げした商人が残した空馬車がアイテムBOXへ入っているな。

「こいつを使って、なんとか出来ないか？」

俺はアイテムBOXから空馬車を出した。

「いいのか？」

「元々、死んだ商人の空馬車だ。馬車を失った商人同士で協力して、散らばった荷物を集めて何とかならないか？」

「わ、解った、やってみよう。おーい！」

男は周りの商人達に声を掛けて交渉を始めた。この空馬車を牽引していた馬もいるからな。

そいつを譲ってもらえばいい。とにかく、荷物さえ運べれば利益は出るらしいからな。

「ヒヤヒヤヒヤ、兄さん、随分と甘いもう」

笑っているのは、獣人の女達を雇っている、年寄りの商人だ。

「まあ、あの馬車は俺の物じゃないからな。それに街道が開通すれば、王家からタププリと謝礼が取れるだろうし」

「その通りじゃな。まったく、長生きすると珍しい物が見れるわい

！ ヒヤヒヤヒヤ、それにしても笑いが止まらんのう！」

「何がそんなに面白いんだ？」

「勝負に勝った事じゃよ。これだから、博打は止められん」

商売を博打だと言うこの爺さんは、プリムラー——マロウ商会とは相容れない存在だな。

「ソバナにつくまでが勝負だろ？ 喜ぶのはまだ早いと思うぞ」

「そうじゃな、いや全く。お前さんの言うとおりじゃ」

「爺さんが雇っている護衛の女達は、今日は使い物にならないぞ」

「全くしょうがない連中じゃ」

商人達は大丈夫そうなので、王女の所へ戻ってきた。

「其方のアイテムBOXの中には、ワイバーンが入っておるのか？」

「はい、谷底から拾ってまいりましたので」

「妾にも見せてたもれ」

アイテムBOXから、王女のリクエストにしたがって、ワイバーンを出して見せた。

「「「おおおっ！」「」」」

道の上に姿を現したワイバーンに商人達から驚きの声上がる。

血まみれで腕は折れ曲がり、頭は潰れている。それを見た商人達が駆け寄ってきた。

「う、売ってくれ！」 「儂にも売ってくれ！」 「俺は、翼の膜が欲しい」

「膜？ 膜は何に使うんだ？」

「軽くて丈夫、魔法を弾く外套に使えるぞえ？」

王女がワイバーンの商品価値について説明をしてくれた。

「ああ、それじゃダメだな。俺も利用したいし。肉はウチの家族で

食うからだめ。鱗も、とりあえずは無理」

俺の言葉に商人達がしょんぼりと引き下がる。目の前に王女がいるので、あまり醜態は晒せないのだ。

出しておく、肉が傷むので早々にアイテムBOXへ収納した。

「ふう——全く、レッサードラゴンに続き、ワイバーンも一撃かえ。こんな事は前代未聞じゃぞ？」

王女の話では——ドラゴンクラスになると普通は軍隊が出るようだ。

「レッサードラゴンはメリツサの召喚獣ですよ」

「それにしてもだ！ ケンイチ！ 其方は、王族を救ったのじゃ！」

「私だけの力ではありませんが——皆が協力一致した結果でありまして……」

「そんな事はどうでもよい！ そこへ直れ！」

王女が、自分の目の前を指さす。

「はい？」

「いいから、早う！」

なんだか解らんが、王女の前にひざまずく。

すると、王女は手を広げて、何かを唱え始めた。言霊に伴い、彼女の身体が金色に輝き始める。

「「「おおおっ」」」

商人達の驚く声が聞こえる。

「なんにゃー！」

テントの前にいるミャレーも、騒いでいる。

「なんだ？ なんだ？」

魔法か？ 王族も魔法が使えるのか？

『古より連なる王家の血筋を使い、リリス・ララ・カダンの名において、聖なる契約コントラクトを結ぶものなり』

王女は俺の所へ歩み寄ると、膝について俺の首に手を回した。

『エンゲージメント
聖なる契』

王女が俺の唇に、自分の唇を重ねる。

その瞬間、俺の身体に何かが流れこんでくるのを感じる。まるで体内を火炎放射器で炙られているような感覚。

「はあはあ！ 一体、何を！？」

「聖なる契は済んだ」

まるで力を使い果たしたように倒れこむ王女の身体を支える。

まだ身体が燃えるようだが、病気のような気分の悪さではない。まるで、身体の奥底から力が沸き上がってくるような――。

「リリス様。これは魔法ですか？」

「たった今から、其方は聖騎士となった……」

「はあ？ 騎士ですか？ 私は王家に忠誠を誓ったりしていませんけど？」

「そんな物は関係ない。王国の危機を救い、妾の命を救ったのだ。其方には十分にその資格がある……」

王国の危機を救ったって、まだ工事の途中なんですけど……。

この光景をみたメイドさん達が駆けてきた。

「姫様！ お身体は？！」

「大丈夫じゃ。大事無い」

「しかし、よろしいのですか？」

「よろしいも何も、妾が望んだ事じゃ」

「……陛下や王妃様、王族円卓会議の面々が何と仰るか……」

「そんなものは知らぬ！ 国を救い、民を救い、妾の命も救った者に王族の祝福を与えて何が悪い！ いざとなれば身分など捨てればよい！ マイレンも妾を見捨てて構わぬぞ？」

「私は、姫様のお側にずっとおりますので、そのようなご心配には及びません」

「ちよっとちよっと、また面倒事に巻き込まれる予感なんだが……勝手に巻き込んでくれるなよ。」

だが、王女がぐったりしてしまったので、メイドさん達に彼女を家まで運んでもらう事にした。

王女の様子からみて、かなり消耗しているようだ。

彼女の話では——王国の危機を救った者に対して、王族から与えられる祝福らしい。

「マイレンさんは、これが何か知っているのですか？」

「あの……王族の力は秘匿されているので……その」

「よい……」

ぐったりとしている王女が、許可を出した。

「本家王族の中には、死ぬまでに一度だけその力を行使する事が出来るお方がいらっしゃるのです」

「リリース様はその1人だと？」

「はい……」

心配そうにやって来た、プリムラにも尋ねてみるが、知らないようだ。

「私も初めて聞きました」

聖騎士ってのは何なのか。

もしかして魔獣の革と筋肉で作ったオーラナントカに乗れちゃう？ あれは「聖戦士」だっけ？

王女の回復を待って、詳しく聞いてみない事には、なんとも言えない。

うーん、とりあえず飯を食おう——腹が減った。

102話 峠が開通！そして聖騎士とは？

もう少しで街道が開通するのだが、一難去ってまた一難。

ワイバーンの襲撃を受けた。だが皆の協力を得て、これを撃退。

ワイバーンの軀むくろを手に入れた。

この飛竜も食えるそうなので、どんな味が楽しみだ。

だが、谷底へ落ちたワイバーンを拾って戻ってくると、王女が俺に何やら魔法のようなものを使った。

王女の話では、俺は『聖騎士』とやらになったらしい。

しかし、誰もその正体を知らない。各地を渡り歩いている商人達も知らないようだ。

力を使った影響か——王女は体力を消耗してしまったらしく、俺の家で休んでいる。

彼女が元気になったら、『聖騎士』とやらがなんなのか、詳しく聞いてみるつもりだ。

——とりあえず、腹が減ったので飯を食う。

商人達にも炊き出しをするために、プリムラが大量のスープ等を作ってくれた。

アネモネが焼いたパンだけでは、とても間に合わないので、俺もシャングリ・ラからパンを購入した。

商隊の護衛の面々にはタダで炊き出し、商人達からは金を取っている。

彼等も商人のプライドがあるから、金があるのにタダでくれとは言わない。

いくら金にがめつい商人でも、そんなことをすれば、周りから軽

蔑の視線が浴びせられる。

スープを飲み、パンを食べる。スープはレッサードラゴンのスープだ。

脂もあまり浮かず、あっさりとした味わい。俺は米の飯を食いたくなったので、シャングリ・ラからパックのおにぎりを購入。

アネモネに魔法で温めてもらう。

「私も、それを食べたい」

アネモネもおにぎりを食べたいようなので、追加で購入。

「あちあち、おにぎりが熱い！」
ちよつと温まりすぎたか。

「うみゃー！」

ミヤレーは飯を食べているが、ニャメナ達はテントで寝たまま。酔いつぶれているので、しばらくは目を覚まさないだろう。

ベルも、猫缶とレッサードラゴンの肉に美味そうに食いついている。

「ミヤレー、ニャメナ達がまたおかしくなったのは、俺がワイバーンをどついたせいかな？」

「そうだよ！ もう！ あいつらがいなかったら、ウチがケンイチに抱きつきたいところにゃのに！ この尻尾のムズムズをどうしてくれるにゃ！」

そう言われても——とてもじゃないが、獣人を5人なんて相手に出来るはずがない。

それに、俺なんて最後に止めを刺しただけじゃないか。ワイバーンをぶっ飛ばしたのはアネモネのゴーレムだし。

「まあまあ、ニヤメナばかり不公平だから、ミヤレーも相手してやるからさ」

「うにゃー！」

俺の言葉にはしゃぐミヤレーだが、アネモネが不機嫌だ。

「むー」

「いつもアネモネばかり、ケンイチと寝ていて不公平だにゃ」

「それは……そうだけど」

ミヤレーが立ち上がると、俺に抱きついてきた。

「にゃー！ ドラゴン殺しと一緒にゃんて、孫の代まで自慢出来るにゃ」

いや、俺と一緒にいたら、孫なんて出来ないだろ？ だって人種と獣人には子供が出来ないんだから。

「本物のデカイドラゴンじゃなくても、レッサーやワイバーンでもドラゴン殺しになるのか？」

「当然にゃ」

しかし、本物のドラゴンってのはもっとデカくって凶悪なんだろ？ そんな相手に、パイプ爆弾や圧力鍋爆弾で効き目あるのかね？

こんな感じで、うちの家族は元気なのだが――その脇でメリッサがどんよりと暗い。

「メリッサ、どうしたんだ？ ワイバーンも討伐したのに暗いじゃないか」

「全部やったの貴方達じゃない。私はゴーレムを立たせてただけだし……」

「いや、あれで随分と時間を稼げたんだぞ。感謝している」

「貴方達と遠征して、自分が役立たずだと思ひ知らされたわ。王妃

様が一緒に行けと言われた理由が、解った気がする」

「まあ俺達は実戦第一だからな。このメンツで実戦を何回もこなしているし、連携も統率もとれている」

「はあ……」

以前と変わったのは、アネモネが積極的に自らの案をだして戦闘に加わってくるようになった事だろう。

逆に天狗にならないか心配だが――彼女は賢い。心配ないと思いたい。

皆で飯を食べていると、家からメイドのマイレンさんがやって来た。

「ケンイチ様。姫様が果物をご所望なのですが……ございますでしょうか？」

「ああ、食欲がないなら缶詰がいいか――ちょっと待って」

シャングリ・ラから缶詰を検索する。いつも桃缶ばかりじゃな。

桃、パイン、定番のみかん、そして変わりダネでナタデココの缶詰を買ってみた。

ちよっと小さめなので、1缶200円を2個ずつ購入。

「この取手を引っ張ると、蓋が取れるので」

この缶詰はプルトップ缶だ。メイドさんに、蓋を開けるデモンストレーションを行う。

「はい！ 解りました！ これは便利ですね！」

「それから、固形の食べ物があるから、どうぞ」

俺が渡したのは、固形栄養食のブロック。

同じ商品で、缶タイプの液体の物もある。10年ぐらい前に飲んだきりで不味かった思い出しかないのだが――。

シャングリ・ラの商品ページで評価を見ると、悪い評価はな

い。

ここ10年で味がかなり改善したようだ。それなら病中病後の食事として使えるかもな。

「ありがとうございます——あの……」

「まだ、何か必要ですか？」

「いいえ……あの、ケンイチ様は姫様の味方でいらしてくれるのですよね？」

「まあ、他の王侯貴族様よりは話が通じそうですし、そう思ったださって結構ですよ」

「ありがとうございます」

お盆に載せた缶詰と栄養食の黄色い箱を持って、マイレンさんが家へ駆けていく。

もしかして、あれでも足りないって言うかな？

「相変わらず、ケンイチは女に甘いにゃー」

「俺は女には優しいぞ。あの王妃を除いて」

「ケンイチ、美人に甘いから……」

「甘いから、可愛いアネモネも助けたんだけど……」

「そうだけど！」

まあ、アマナの所では商人の経験は積めたかもしれないけど、魔法の力は伸ばせなかっただろうな。

「女に優しくないケンイチなんて、想像も出来ないので、よろしいのでは？」

「プリムラ、それじゃ女が増えてもいいわけ？」

「うふふふ……」

俺の言葉に、プリムラが笑っているが怖い。

「勿論、冗談だよ。別に女なら、誰でも助けてるわけじゃないだろ。」

シャガの所から連れてきた女達には手を付けなかったし」

「確かに、そうだにゃー。テントで寝ている3人組にも手を出さないしにゃー」

俺の所へ、ベルがやって来た。

「にゃーん」

「なあ、お母さんもそう思うだろう？」

彼女の顎を撫でると、いつものように喉をゴロゴロと鳴らしているのだが、ちょっと様子が変だ。

すぐく眠たそうな顔を見ると、床へ身体を擦り付け始めた。

「ベル？ どうした？」

なんだか、マタタビを嗅いだ猫みたいな動きだが……。

「それにしてもケンイチ。聖騎士とはなんなのでしょう？」

「解らん。別に身体が変わった様子はない。直後は力が湧いてくるような感じはあったが、今は普通だ」

「お姫様に聞くのが一番早いにゃ」

「まあそうだな」

皆で飯を食いながら話していると、メイドさんがやって来た。

「あの、申し訳ございません。透明な四角い食べ物を姫様が大層お気に入りですて、手持ちがあれば追加をお願いしたいのですが」

透明ってナタデココか。シャングリ・ラから、缶詰を追加購入する。

「ああ、2つぐらいでいいかな？」

「ありがとうございます」

メイドさんが、缶詰2個を持って、走っていった。

もう全部食ったのか？ 全然、弱ってねえじゃん。タダの腹減り

か？

「ケンイチ、私もそれを食べたい」

アネモネがそう言うのだが、皆も食べたいようなので、ナタデココの缶詰を小鉢に開ける。

透明な四角い食べ物に、皆は興味津々だ。

「まあ！ 不思議な食感！」

「コリコリしてるね」

「にゃー！ 変な食い物にゃー！」

「ケンイチ、これはどうやって作るのでしょうか？」

プリムラが作り方を聞いてくるのだが、自作して売りたいのだからか？

「さあ——これは自分では作った事がないな。確か木の実の汁を発酵させると固まる——だったはず」

ナタ菌って、南の島の門外不出の菌を使っているとか、ナタデココが流行った時にTVか何かで見たような。

「こんな不思議な食べ物があるなんて……」

「スライムが食べれば、こんな感じかもな」

「「えええっ！」「」」

俺の感想に、全員が一斉に否定する声を上げた。

「いくら悪食でも、それはないにゃ！」

「そ、そうですね。魔物は食べますけど、スライムはさすがに……」

——とはいえ、皆スライムは食った事がないらしい。

RPG等で雑魚キャラのイメージが強いスライムではあるが、この世界では結構危険な生き物だ。

水と同化して音もなく近づいて捕食されるという。

だが、この世界に来てからスライムを見たことがない。ミャレーの話では――湿地帯等の水が淀んでいる場所に生息しているらしい。

「機会があれば見てみたいな」

「ケンイチは、物好きだにゃー。でも、ウチは絶対に食わないにゃ」
「食うなら、俺1人で食うから大丈夫だ」

飯の後、商人達をチェックしたが問題なし。

馬車を失った商人も、上手く交渉を果たしたようだ。

やる事もないので、寝る。王女が使った魔法だか祝福のせいなのか、疲れた感じはない。

そういう身体になったのだとすれば、結構ありがたい御業のようだ。

だが、寝袋に入る段階でミャレーから物言いがついた。

「いつも、アネモネばかりケンイチと寝てズルいにゃ！」

「む」

まあ、そう言われれば――何もしないとはいえ、いつもアネモネと一緒に寝ているからな。

ミャレーにそう言われて、アネモネも一晚を譲ったようだ。

だが、大人を自称するのであれば、当然大人の仲間に入る事になる。

つまり、こういう場合も輪番制になるだろうな。

ただ、皆の寝ているテントで、やるわけにはいかない。

家から50m程離れた地点に小さなテントを出して、ミャレーと2人で寝袋に入る。

このテントは、ダリアの森にいた時に、1人で使っていた物だ。森のなかで、スローライフとか目指していたのに、こんな場所ま

でやって来て、ドラゴンまで退治してしまうとはなあ……。
思えば遠——イカン、版權に引かかる。

ここなら邪魔は入らないだろうが、獣人の声は結構デカイからなあ……。

————◆◆————

——次の日。

朝起きると、当然俺の上に裸のミャレーが乗っている。二人用の寝袋の中に入っているが、獣人と一緒なら寝袋要らず。

だが、脇が寒いので、やっぱり寝袋はいるけどな。

服を着てテントをアイテムBOXへ収納すると、皆の所へ行くのだが、何故かミャレーがくつついて離れない。

「おはようさん」

皆も起きているので、早速朝食の準備をする事にした。

酔っ払って寝ていた獣人達も起きているが、見た目には問題がないように見える。

だがニャメナが、俺とミャレーの所へやって来た。

「クロ助でめえ、デカイ声で喘ぎやがってえ！」

「何言ってるにや、お城でやった時のトラ公の方がデカかったにや」

「確かにそれは言える」

「うっ！——そうじゃねえ！——とつとと、旦那から離れろってんだよ！」

「ふみゅん！——もう凄かったにや、尻尾の先から耳の先までビリビリになったにや」

どうやら彼女の話では、いつもと具合が違ったようだ。

「そうなのか？　もしかして例の聖騎士とやらの効果かな？」

「もう、こんなの離れられないにゃ」

「くそ！　クロ助、俺にさせろ！　コンチクショー！」

「やだにゃ」

俺の周りを、クロと虎柄がグルグルと回り始めた。

虎がグルグル回ってバターになる昔話を思い出す。

「むう……」

その光景を見ていたアネモネの機嫌が悪いが致し方ない。

ミヤレーとニヤメナが揉めていると、商隊の獣人達も騒ぎに加わってきた。

「ちょっと！　そんなに凄いなら、あたい達にも分けておくれよ！」

「そうだよ！」　「あのお願います」

「しっしっ！　分けたら量が減るだろうが！　冗談じゃねえ！」

「この凄いのはウチのものにゃ」ふああああ。抱きついているだけで、イキそうにゃ！」

「ふざけんな、このクロ助！」

「お前等、朝っぱらから、なんちゅー会話をしてるんだ」

獣人達を引き離し、朝食の準備の続きをする。

テーブルを出して、食い物を並べる。スープにパン、そしてグラノーラだ。

忙しい時は、このメニューが手っ取り早くていい。

用意をしていると、王女も家から出てきたが、普段と変わらないように見える。

「リリス様、お早うございます」

「うむ」

「朝食を食べながらでよいので、昨日の説明をしていただきますよ」

「無論じゃ」

メイドのマイレンさんが、俺の所へやって来た。

「あの、ケンイチ様。水があるようでしたら、洗濯をしたいのですが……」

「ああ昨日、谷底から汲んできたので、たっぷりとあるが――アネモネに洗^{クリーン}浄の魔法を使ってもらえばいい」

「ありがとうございます」

マイレンさんがぺこりとお辞儀をした。ちなみに、王女の使っているシーツなどは使い捨てだ。

一枚数千円だし、王家からもらった家具の値段からすれば、微々たるものだ。

この仕事が終われば、褒美だってもらえるはずだしな。

朝食を食べながら、聖騎士の話になった。

「聖騎士などというものを誰も知りませんが……」

「おそらくは60年ぶりぐらいの誕生だと思われる」

王女は、ゆっくりと見えるのだが、すばやくグラノーラを口に運んでいく。

「そもそも、どういう物なのですか？」

「約^{つづ}まやかに言えば、剣にも魔法にも耐えられるようになって、治療能力も底上げされる」

「……えゝ凄いですが……王族だと、その御力は誰でも持っているらしいのですか？」

「いや、現王族では妾^{めかけ}だけじゃ」

彼女はスプーンを止め、俺の方をじっと見つめる。

「そのような希少な能力を、私如きに使ってよろしかったので？」

「昨日も申したが、其方は王国を救い、ワイバーンを討伐して、妾の命も救った！　これは偉業じゃぞ?!」

しかし、この力を使うには、王族O B O Gによる円卓会議の承認が必要になると言う。

「はぁ……また、王妃様が怖い顔をしますね」

俺はテーブルに肘をつき、両手の掌で顔を覆った。

「知らぬ！　どのみち、この偉業からすれば、認めざるを得まい！　円卓会議が、気に入らんというのであれば、妾は王族の籍を捨てる！」

昨日もそんな話をしたな。

「ええーっ？　ちょっと早まりすぎでは……王都に戻ってから、他の王族の方々とじっくりと話してから決定されても遅くなかったのでは？」

「ははは！　もうやってしまった事は仕方あるまい！」

なんか開き直っているというか、やけくそな気が……。

「当然、家出した王女様の面倒は私が見るんですよ？」

「其方は、行く宛もない幼気な乙女を寒空に放り出すのかえ？」

「そ、そんな事はありませんが――リリス様が出ると、もれなくメイドさん達も一緒についてくるのですよね？」

「勿論です」

メイド長のマイレンさんが胸を張る。

「はぁ……」

「心配する必要はないぞ、ケンイチ。家を出るときは、妾の全財産も持って出るからの。其方に苦労はさせぬ」

「それは頼もしいお言葉、真にありがとうございます……」

俺達の会話を聞いている獣人達が、後ろでひそひそ話をしている。

「おい、クロ助。また女が増えそうだぞ？」

「そうみたいにな」

「今度は王族かよ？ もう国を作った方が早いんじゃないか？」

「ウチらも王様の愛人にゃ？ 出世したにゃ！」

「人生何があるかわからねえな！」

獣人達がゲラゲラ笑っているが、こっちはそれどころじゃないし、そんな面倒な事は御免被りたい。

大体、国の中に国を作るなんて分離独立だ。タダではすまん。

「国王陛下が、そのような事をお許しにならないでしょう？」

「そんなことはしらぬ！ それに……」

「それに？ 何でございますか？」

「……それは後で話す」

何やら大事なことがあるようだが、話してくれない。

しかし、王家にこんな力があるとはなあ……もしかして、王妃の当たりが強かったのは、この事に関係しているのだろうか？

「リリス様、お城の書庫にも、この王家の力に関する資料があったのではありませんか？」

「む？ うゝむ……ある——はずじゃ！ じゃが、そういう秘中の秘は書庫の開かずの間に保管されている故、妾も本当にあるかは解らぬ」

王女の話では、開かずの間の鍵は国王が持っているらしい。

やっぱり、王家の秘密を嗅ぎまわっていると勘違いされたのであるのか？

「王族に御業が発現する条件等は不明なのでしょうか？」

「うむ、全くもって解らぬままじゃ。かつては、血の濃さに要因が

あるものと考えられた事もあっての、極端な近親婚等も行われたそうじゃが、それで王家が滅びかけた」

「そりゃ、そうでしょうねえ」

あまり詳しくは聞きたくない話だな。だが、そんな力を人工的に作り出せれば、王家の力をかなり底上げ出来る計算になる。

躍起になっても仕方ないか……。

結局、なんだかよく解らないが、簡単には死なない身体になったらしい。

医者もロクにいないこの世界では、ありがたい能力ではあるのだが。

話も終わったので、作業を続行する。土砂の残りは後1／3程だ。多少デカイ岩もあるようだが、ゴーレムでも歯がたたないような巨大な物はないようだ。

アネモネの核に土砂を集め小山を作り、そしてホイールローダーで谷底へ落とす――楽勝である。

夕方、作業が終了したら飯を食い寝る。

だが獣人の女達がうるさいので、1回だけの約束で相手をしてやったのだが――。

皆、白目を剥いて腰を抜かした。

これは、一体――？ 例の聖騎士とやらの副作用であろうか？

次の日の夜――プリムラで試してみると、同様の結果となった。だが、あまりに恥ずかし過ぎたのか、プリムラが俺を避けるようになってしまった。ちよつと困る。

一連の実験の結果、俺の身体に何らかの異変が起きたのは確かなようだ。

俺が熟考していると、アネモネがむくれている。

「悪い悪い、そんなにむくれるなよ、アネモネ」

「知らない！」

「抱っこしてチューして、ナデナデしてあげるからさ」

横を向くアネモネを抱きかかえて、ナデナデしてあげたのだが、彼女の様子がおかしい。

「……ふああああ」

彼女の顔がみるみる赤くなる。

「んあ？ どうしたアネモネ」

「もっと、ナデナデして……」

イカン！ 慌てて彼女を膝の上から降ろす。

黙考の結果——どうやら聖騎士とやらになったせいで、身体がナチュラル回復状態ヒールになったらしいのだが、俺が触れた者に対しても回復ヒールが効くようだ。

健康な状態の者に回復ヒールを使うと、所謂いわゆるオーバードーズ状態になるらしい。

「ははは！ これは面白い！」

「リリース様、笑い事ではありませんよ」

「それは男でも効くのかの？ ちょっと試してみるがよいぞ？」

「勘弁してください……」

困っている俺に、王女はさらなる生贄を捧げてきた。

「それでは、このマイレンにしてみるがよい」

「え、姫様——あの」

「はよせい！」

モジっているマイレンさんを、王女は脚で蹴りだした。やむを得ず、彼女の両脇を触る。

マイレンさんは短い悲鳴を上げ、身体を痙攣させると膝から崩れ落ちて、ひっくり返った。

王女は完全に面白がっているが、外へも回復ヒールが使えるってのはかなり大きい。

しかしながら、この能力を使って気がついた事が1つある――腹が減るのだ。

まあ、それに関しては問題ない。シャングリ・ラから液体やゼリー状の栄養食を買って喰いまくればいいのだ。

そうすれば栄養を取っただけ能力が使えるって事になる。

峠の開通間近。ベースキャンプに設置していた、家と小屋、そしてテントをアイテムBOXへ収納すると最後の作業に入る。

残った土砂の向こうには、30台程の馬車がスタンバっている。

こちら側は、50台程に増えた。王都もソバナも10日以上物資が届かなかったので、物が不足気味になっているだろう。

そこへ乗り込めば物が高く売れるのだ、商人達は一番乗りをしよう、殺気立っている。

土砂を軽々と運び、谷へ投げ落とすオレンジ色の重機に、商人達の視線が釘付けになっている。

そして最後の土砂をホイールローダーで谷底へ捨て、街道に残った細かい石を竹箒で履く。

やった開通だ！

俺はアイテムBOXからメガホン型の拡声器を取り出した。

『あゝあゝ、本日は晴天なり！ えゝ！ 本日、街道を埋めていた土砂は全て取り除かれました。こちらは数々の危険を顧みず、この偉業を指揮してくださいました――カダン王国王女、リリス・ララ・カダン様であらせられる。皆で、崇め奉るように！』

「「「ははゝっ！！」」」

商人達が馬車の前で一斉にひざまずく。

『うむ！ カダン王国王女、リリス・ララ・カダンである。王国の危機は去った。商人共は、王国と民のために商売に励むがよい！そして、この峠を埋めていた土砂を取り除き、作業の邪魔をしたワイバーンを討伐！ 今回の偉業を成し遂げた、この者の名前は【聖騎士】ケンイチである！ この者の名前を国中に広めるのじゃ！』

「聖騎士？」 「聖騎士だって？」 「聖騎士？」

向こう側にいた商人達が顔を見合わせている。

『よいな！！』

「「「ははゝっ！！」」」

挨拶が終わったので、商人達が一斉に馬車へ乗って走り出した。待て待て、下りでそんなスピードを出して大丈夫なのか？

何かあってもしらんぞ俺は……。

確かに急がないと、峠が暗くなってしまう。それまでに距離を稼ぎたいのだろう。

それにしても、ドンドン俺の名前が有名になってしまう……どうしてこうなった！

そして丁度、お城から使いがやって来たのだが――。

「城には峠が開通したと伝えるがよい！」

「しかし、陛下からのご命令が……」

「知らぬ！ 聞かぬ！」

王女は使者を追い返してしまった。

「よろしいので？」

「其方と一緒にソバナへ参ると申したであろう？」

「確かにそうですが……」

年頃の娘を連れ回すなんて、陛下に恨まれそう……。後でまた揉め事になるんじゃないのか？

「にゃー」

ベルが俺のところへやって来て、身体を擦りつけると、またゴロゴロと転がり始めた。

「すまんなベル。やる事がなくて暇だったろう？」

ここじゃ狩りも出来ないし、パトロールも不可だ。

実際、彼女は殆どテントの中で寝ていた。

峠が開通したので、貴族達はイベリスの手前で落ちた橋の工事に全力を尽くすようだ。

さすがに大貴族達が全力を出すため、1ヶ月程で橋の修理も終わるらしい。

平坦だし橋の向こうにはイベリスという大都市もある。

峠の土砂を取り除くよりは、かなり楽な工事のはずだ。

俺達が、アストランティアに帰る頃には、橋も直っているかもな。しかし王女がいなければ、ソバナから反対周りでダリアへ向かい、

そこからアストランティアへ帰るルートもあるのだが……。

彼女を王都へ送り届けるために、もう一度都へ戻る必要があるだろう。

103話 峠の宿場町

地方都市と王都を結ぶ動脈ともいえる街道。そこを埋めていた土砂は取り除かれた。

早速、商人達は目的地へ急いで出発した。儲けるチャンスなのだ。重機を使って土砂を取り除いたのだが、王女から偉業だと言われて、王家秘伝の祝福を貰う。

防御力が上がったたり治癒能力が内外に使えるようになったりと――何やら簡単には死なくなる魔法？――らしい。

医者や医学などがなく、簡単な怪我や病気で命を落とすことも多いこの世界で、この能力はありがたい。

だが、『聖騎士』などという、俺らしくない大層な肩書を貰ってしまった、これからどうすればいいのだろうか？

巨大なロボットに乗って、大魔王とか大宇宙の悪の根源とかいう得体のしれない物と戦う羽目になるのだろうか？

不安は尽きないが、人々に聞いても大魔王はいないようだし、勇者もいない。

この世界の生物界の頂点は『ドラゴン』のようだ。

そのドラゴンの亜種である、レッサードラゴンとワイバーンを倒して、俺は『ドラゴン殺し』となった。

元世界風にいえばドラゴンスレイヤーだろうが、爆薬と重機で倒したというインチキだ。

――現在は昼を過ぎている。このまま出発しても、俺のハ〇エースであれば、峠下までたどり着けるかもしれない。

だが、途中で暗くなる可能性もあるし、街道が開通したばかりで

商人達が殺気立っている。

無茶な奴らに巻き込まれたくない。

峠の頂上にある宿場町で1泊する事になった。

宿場町がある周辺はちょっとした広場になっており、町は木の塀で囲まれている。

だが、塀からはみ出した所の段差にも家が建っている。スペースがないので仕方ないのだろう。

簡単な塀だけだが、ここでは魔物も野盗も出ないらしい。周りは崖だからな、隠れる場所も逃げる場所もない。

魔物といえば空飛ぶワイバーンだけだったが、飛竜相手では、いくら塀を高くしても無意味。

そのワイバーンも俺によって討伐された。

アイテムBOXから家と小屋を出して、宿泊の準備をする。

だが目の前に宿屋があるのだから、王女もそちらへ泊まれば良いと思うのだが……。

「妾を追い出すのかえ？」

そんな言葉を返してくる。まあ俺の家がテント代わりとすれば、それほど不便ではないだろう。

美味しい飯も出るし、ベッドは柔らかかで、シーツは見たこともないぐらいに真っ白で清潔。

そして風呂もある。かなり高級な宿屋でもこうはいかないらしい。

準備をしている俺達の横を、商人達の馬車が通りすぎて、峠を下っていく。

「ほんじゃなあゝ旦那あ！」 「また、抱いてくれよな！」 「お元気で〜！」

当然、商人達に雇われている獣人達ともお別れだ。

多分、俺達が明日出発しても、途中で追い越すと思うけどな。

一緒に土砂の除去作業をしていた魔導師のメリッサは、明日王都へ帰る予定。

宿場町に泊まっている商人の馬車に乗せてもらう交渉をするようだ。

まあ仕事は終わったからな。俺達はソバナへ向かうが、彼女は国境まで行く用事がない。

それに――。

「王都へ帰ったら、大学の昔の卒業生を訪ねてみるつもり」

「婆さんの事を聞いて回るのか？」

「ええ、祖母から父を取り上げた連中は全て死んでしまったし、貴方の言う事が本当なら、アストランティアまで行って、祖母に謝罪しなくては……」

「君の父上はどうなんだ？ やっぱ婆さんの事を恨んでいるのか？」

「恨むというよりは――母に捨てられた悲しさが尾を引いているとは思う」

「それじゃ、やっぱり真相を明らかにする必要があると思うな」

「ええ……」

あの婆さんが嘘をついているとは思えんしな。メリッサ自身も俺の言う事の方が信ぴょう性が高いと思っているのだろう。

婆さんも死ぬまでには――立派になった自分の息子と、孫に会いたいはず。

なんだか婆さんが家族と再会しているシーンを思い浮かべると、うるうるきてしまうのは歳のせいだな……。

久々にちよつと広い場所に來たので、ベルがパトロールをしてい

る。

調教^{タイム}して鑑札をつけている動物が襲われる事はないだろうが、あまり人前には行かないように、彼女に願うする。

「にゃー」

一応、返事はしてくれるのだが、解ってもらえているのだろうか？
そうしている間にも、宿場町から慌ただしく馬車が出ていく。

「おっ！ 女の商人だ」

「本当ですね」

馬車に乗り、馬の手綱を握っているのが女性だ。それに12歳前後の子供が乗っている。

子供の顔はよく解らなかったが、姿勢好から男の子ではなかろうか。

街の露店なら女の商人も珍しくないのだが、馬車に乗って手綱を持っているのは珍しい。

だが、その光景を見ているプリムラは渋い顔をしている。

「プリムラさんのには、あまり賛成出来ない光景か？」

「ええ……こんな危険な商売に子供を巻き込むなんて……」

しかし、マロウさんも娘のプリムラと一緒に買い付けの旅行をしていたはずだ。

「本当に危険な場所へ訪れるには護衛もついていたし、一か八か——という商売はしていません」

「まあ彼女達にも、何か理由があるのかもしれないし」

「そうですか……」

「王都の周りにも土地はあるし、開墾されていない所も結構ある。王都側で食料の増産をした方が良くと思うんだがなあ」

「それには理由がある」

俺とプリムラの会話に王女が加わった。

「この地は東から西へ風が吹く事が多いのだが、この峠を含む山脈にぶつかって、ソバナ側に雨が多いのじゃ」

そう言われれば、この世界へやって来てから、あまり雨に降られた事がない。

土砂降りは、この前の橋が落ちた時が初めてだ。

帝国で出来た雨雲が、ソバナと王都を隔てる山脈にぶつかって雨を降らせる。

山脈の反対側は川の水量も多いし、山からの伏流で井戸も掘りやすい。結果、ソバナ側に大穀倉地帯が広がっているらしい。

「へえ、そりゃ帝国にソバナを落とされたら、王国が瀕死になるわけだな」

「である。それ故、其方が王国を救ったというのも、当然なのじゃ」

「そもそも大雨というのも、珍しいのでございますか？」

「橋が落ちたり峠が崩れる程の大雨というのは、あまり記憶にないが、稀に大雨は降る。原因となるのはこの峠がある谷じゃ」

「ここですか？」

「うむ」

しばし考える……。そういえば地理の授業で似たようなサンプルがあったな。

谷に沿って空気が流れるので、そこだけ気候が違うと。つまり、山にぶつかるはずの湿った空気が谷を伝って、反対側まで降りてきてしまうのだ。

「谷があるということは、山脈がここだけ低い。つまり——ここを雨雲が通りすぎてしまうのでしょうか？」

「その通りじゃ！ やはり其方は博学じゃのう！ こんな話は大臣や宰相でも知らぬ」

何の事だか解らず、キョトンとしているプリムラに地理と気候の説明をしてやる。

「それでは地理である程度の気候が決まってくるという事でしょうか？」

「そうだね。例えば――大陸が大きくなるほど、海からの湿った空気が届かなくなり、中心は乾燥して砂漠になってしまう」

「まさに、その通りじゃ、帝国と共和国の間の北側には砂漠が広がっておる」

フェネル大砂漠というらしい。その北にはまた森が広がり、そして海になる。

「ケンイチは、やっぱり凄いです」

プリムラの目がキラキラしていて眩しい。

「リリース様も博学でございますねえ」

「うむ！ 暇な時は、王家の書庫へ通っておったからの！ 本の知識ならあるぞ！ ははは！」

さて、家を出して宿泊の準備は整ったが、やる事がない。

暇なので宿場町を見学する。

雑多な感じでごちゃごちゃしている町。人口が多いように見えるが、殆どが泊まっている商人と従者、そしてその護衛の連中で、ここに住んでいるのは200人ぐらいらしい。

ここで生まれて、ここで死んでいく人もいる。住めば都なのか。物価は凄く高いが物はある。ここまでやって来る運送代が含まれているし、他に買う場所がないので、高くても売れるわけだ。

富士山の頂上の缶ジュースが高いのと一緒にだな。

王女がやって来ているという噂を聞いて、ここの責任者が慌てて

やって来た。彼は町長というべきか。

緑色の上着に白いシャツ。黒いズボンを履いている。白髪が混じった頭、口にはちょびひげが生えている。

「ハアハア……お、王女殿下であらせられますか？」

男は走ってきたので肩で息をしている。

「うむ！ カダン王国王女。リリス・ララ・カダンである！」

「「ははっ！」」

周りにいた連中が一斉に、膝をつく。

「よいよい！ 其方達には迷惑は掛けぬから、放置してよいぞえ？」

「あの、本陣へのお泊りは……？」

「いや、宿場の前に家を設置したからの！ その心配は要らぬ」

「い、家でございますか？」

「この者がアイテムBOX持ち故、そこに天幕テントのような小さな家が入っておる」

なんの事だか、よく解らない男たちは皆で顔を見合わせている。

そりゃ、アイテムBOXに家が入っていると言っても、信じられないのかもしれない。

「あ、あの、しかし王女殿下。最近、ここら辺をワイバーンが徘徊しております……」

「おう、ここには連絡が来ておらぬのか？ ワイバーンなら、この者——聖騎士が退治したぞえ？」

「え？ 聖騎士様——でございますか？」

やはり、知っている人はいないようだ。

「リリス様、やはり知っている方がいらっしやらないようですね……」

「まあ、門外不出の御業じゃからの」

王家が故意に知らせないようにしている感じがするが……。

「リリース様。先に聖騎士となられた方の武勲は何だったのでしょうか？ 王国の危機を救ったのは当然でしょうけど」

「妾も詳しくは知らぬが——共和国、かつてのセロベキア王国戦で武勲を上げたとか何とか……」

すごく微妙……。

ドラゴンを倒したとかじゃなくてか。だが、本物のドラゴンを倒したのは、帝国にいるらしい転移者が初めてらしいからな。

そいつの噂なら、王国まで鳴り響いているぐらいに有名だ。

「確かにそれならば——俺がやった事の方が凄いかな……？」

「である？ 妾もそう思ったから、其方に祝福を授けたのじゃ！」

しかし、聖騎士はその後どうなったのだろう？ 王女に聞いてみる。

「王族から娘を娶り、慎ましやかに暮らしたそうじゃ」

「え？ 聖騎士になると、王族と結婚が出来るんですか？」

「……」

俺の質問に、王女が明後日方向を向いて、聞こえないふりをしてる。

聖騎士の説明で、何かを言おうとして止めていたが——この事だろうか？

その後の聖騎士は、子宝に恵まれる事もなく血は途切れ、時代の中へ埋もれてしまったようだ。

——うーん、凄い地味な話だな。こりゃ広めるわけじゃなくても誰も覚えてないわ。

だが話は地味だが、この能力は凄い。

先代聖騎士も——この能力を使い、無料で貧民を治療しまくって人々から崇められた——とかなら民の記憶にも残ったかもしれないが……。

そんな話でもないようだ——隠居という隔離をされて慎ましかに暮らしたって感じか。

「おおっ！ そうじゃ！ こやつらにも、其方が仕留めたワイバーンを見せてやるがよい！」

「承知いたしました」

目の前に現れたワイバーンに、宿場町の面々は驚きの声を上げた。

「「「おおおっ！」」」

「こ、これは確かに、この一帯を我が物顔で飛び回っていたワイバーン！ 峠が埋まる前も、何台かの馬車が犠牲になっておりました」

「そうであろう！ 皆、この者に感謝するがよいぞ！」

「「「ははっ！ ありがとうございます！」」」

あくもう、恥ずかしくてケツがムズムズするわ。

その後、王女とプリムラと一緒に町を視察。町長に宿場町を案内してもらう。

他の連中は家でお留守番している。メリッサは王都まで乗せてもらうために、商人と交渉中。

一応、町には必要な物は全部揃っているようだ。宿屋もあれば娼館もある。馬車の修繕をする鍛冶屋なんかもある。

変わっているのは風呂屋か。風呂といっても湯船がある風呂ではない。

魔法で加熱した石に水をかけ、水蒸気を起こす——蒸し風呂、サウナだ。

汗を流した後は、冷水をドバツと被って一丁上がり。

水が貴重らしいので、こういう風呂らしい。

「水はどこから？」

「谷底から汲んでおります」

その水汲み場を見せてもらう。確かに崖の上に突き出た小屋から縄が下まで垂れている。

小屋は3m程突き出ているだろうか。先端からは、崖まで斜めにつっかえ棒が伸びて戻ってきている。

これで果たして大丈夫なのだろうか？ 毎日使っているのだろうが、俺は先端には行きたくはない。

「高さはどのくらいですか？」

「10カン（20m弱）程ですな。毎日の水汲みが大変なので、あれを取り寄せたのですが……」

小屋の横には、鋳物で出来た鉄製のガチャポンプ。

「ああ、あれは3カン（5〜6m）ちよつとの高さまでしか水が上がりませんか」

「そうなのかえ？」

「知ってて売ったのか、それとも、知らないで売ったのか……それに、ここは高地なので、さらにポンプの能力は落ちます」

まあ、そんなに高地ではないので、さほど違わないと思うが……。

「どういう事なのでしょう？」

プリムラが聞いてくるのだが、この世界に大気圧などという概念はないので、説明しようがない。

「それは、空気の重さが関係してくるんだが——説明が難しいなあ」
「空気の重さとな」

「例えば、高地では水が沸騰する温度が低いんだが、それにも関係

している——とは、言ってもここら辺だとそんなには変わらないと思うけど」

富士山の頂上だと沸点は90度弱になるから、カップ麺を作るのに時間がかかる。

まあ、この世界には山登りをする酔狂もないだろうし……。

しかし、このポンプはどうしようも出来ないな。まさか、加圧ポンプを出すわけにもいくまい。

「どういう事か説明するがよい！」

「ええーっ？ 説明して、異端とか言われて迫害されたりしませんか？」

「純粋なこの世界の理ことわりについてなのだろう？ 心配するでない」

王女の言葉を信じて、俺は水で満たしたボウルと、シャングリ・ラから試験管を買った。

「ほう、その細いガラスの管は、錬金術で使う物じゃな？」

王女の言葉から、この世界にも試験管があるらしい事が解る。

そして試験管の内部を水で満たし、逆さにして水面で立てると、当然の如く水が持ち上がる。

「ポンプの原理はこれです」

「何故、水が落ちてこないのじゃ？」

「それは水面を空気の重みで押しているからでございます。空気の重み——これを大気圧といいます」

「ほう、大気圧とな……それでは、管を長くすればもっと高い所に水を上げられるのではないのか？」

「いいえ、このまま管を伸ばしても、5〜6カン（約10m）で止まってしまいます。空気の重みが限界にくるためです。そして高地などでは空気の重みも少なくなるので、水を上げられる高さも低くなります」

だが説明を聞いていたプリムラが何かに気がついたようだ。

「それでは、その容器に蓋をして水面を重石で押せば、もっと高い場所に水を上げられるのでは？」

「プリムラ、その通りだよ」

それが加圧ポンプの原理って事になる。

「なんと！ それは鉱山などの水汲みに使えるではないか！ 城に帰ったら、早速カールドンに研究させよう！」

鉱山で問題となるのが地下水の流入だ。せっかく穴を掘っても、地下水等で水没してしまつては採掘作業が出来なくなってしまう。

それ故、水の排出が大きな課題なのだ。だが加圧ポンプの開発なんて上手くいくだろうか？

視察が終わつたので、家に戻る。一緒に町長もやって来たのだが、俺の家を見て驚いていた。

食事の準備をするので、町長にも同席を勧めたのだが――王族と同席など、心臓に悪いと断られてしまった。

普通の民の感覚はこんな感じなのだろう。遠慮のない俺達が少々おかしいのかもしれない。

大仕事が終わった祝に、ワイバーンを食べてみようかと思う。レッサードラゴンが食えるなら、ワイバーンも食えるだろう。

アイテムBOXから巨大な魔物を取り出すと、鱗を剥いで肉を大きめに切り出す。

改めてみると、竜というよりは古代のプテラノドンのような翼竜に見える。

翼を含めたデカさの割には胴体は小さい。食いごたえはレッサードラゴンの方がありそうだが……。

血抜きをしていないので、レッサードラゴンと同じように煮こぼしてから、スープに入れたり、焼いたりしてみる。

タレは焼き肉のタレでいいだろう。

飛竜を解体していると、またぞろ商人達が「売ってくれ！」というさいが、もちろん勿論売るつもりはない。

いざとなれば、「王家と交渉中だから売れない」と言えば、すぐに引き下がる。

料理が完成、メニューはアネモネのパンとプリムラのワイバーンスープ。

準備は王女のメイドさん達にも手伝ってもらった。

そして、ワイバーンの焼き肉だ。最初に煮てから焼いているので、少々肉が固い。

真っ先に、地べたに座っているミャレーとニヤメナが食いついた。ベルの皿にもワイバーンの肉を盛ってやったら、美味そうに食べている。

「おおっ！ うめえ！ こりゃレッサードラゴンよりうめえんじやねえか？」 「そうだにゃ！」

「本当か？ 俺も食ってみるか……」

タレの掛かった焼き肉を口に放り込んでみる——ん？ 確かに美

味。

レッサードラゴンと同じように脂身のない肉だが、鼻に抜ける風味がよい。

「なるほどのう、これがワイバーンの肉か」

「リリス様も初めてお食べになった？」

「無論じゃ！」

「こりゃ、ちゃんと血抜きをしてから、ミディアムレアとかで食っ

たら、もつと美味いだろうな。ビフテキならぬドラテキか」

しかし最近ではビフテキって言葉も使わんなあ——死語か。

それにしても美味しい。こりゃ禁断の刺し身もいけるかもしれない——
ってやらないけどな。

どんな病気や寄生虫がいるか解らんし。

ワイバーンの肉は皆に好評で、メリッサも舌鼓を打っていた。

「メリッサ、帰りの算段は付いたのか？」

「ええ——明日の朝、王都まで行く商人の馬車へ乗せてもらうわ」

「それじゃ、君の荷物は今のうちに渡した方がいいかな？」

「ええ、お願い」

そういえば、忘れていた事がある。

「そうそう、ワイバーンの分前は どうする？」

「私のゴーレムは立ってただけじゃない。分前なんてもらえないわ。
討伐の実績に加えてもらえるだけで万々歳よ」

「それじゃ、美味しくいただくかせてもらうぜ」

だが、ワイバーンの肉を食べながら、彼女は何か考え事をしてい
る。

「どうした？」

「いいえ、いつも美味しい食事と、柔らかいベッドを用意してくれ
てありがとう。貴方がいない遠征に付き合わされていたら、ズタボ
ロになっていたでしょうね」

まあ、食事は固いパンと干し肉、そしてワイン。地面に寝転がっ
て、風呂なんて夢のまた夢だ。

「なんだ、急にしおらしくなって。そういう台詞を吐くなんて、ら
しくないな」

「私だって！ 礼儀ぐらい心得ているわよ！ それに、王家の命令

とはいえ、貴方の家族を危険に巻き込んでしまつてごめんなさい」

「ああ、それはあの王妃のせいだから」

「貴方、余程王妃様に好かれたか、嫌われたかのどちらかね」

「どちらもぞっとするから、止めてくれ」

「それに、この偉業を成し得た事で、私の名声も一緒に上がる。感謝して当然よ」

まあそういう事になるか。例えば――魔王討伐に成功した勇者パーティーに入っていれば、大した活躍をしなくても歌には残る。

「それはそうと、商人と一緒に谷底へ落ちるなよ」

「そ、それは商人に言つて！ 私だって乗りたくないんだから……」
彼女の表情を見ると、本当にやむを得ず乗るって感じだな。

「馬を買つて、1人で帰るとか……貴族なら乗れるんだろ？」

「この格好で馬に乗るの？」

まあ、そうか。色っぽい脚が剥き出しになつてしまふし、どう見ても馬に乗る格好じゃない。

それに、ちよつと金を持っている商人なら、護衛もついているしな。

この峠には敵は少ないようだが、平地になれば魔物や盗賊の心配が出てくる。

いくら大魔導師とは言え女性だ。やはり心細さはあるのだろう。

それに魔法は強力だが、接近戦や乱戦になると大変だ。ウチのパティーでもアネモネの魔法を効果的に使うためには、ミヤレーとニヤメナという強力な前衛が必須だ。

食事の後――辺りが暗くなつたので、火を焚いて暖と明かりを取る。

メリッサの黒いドレスのスリットから白い脚が覗き、焚き火でオレンジ色に染まっている。

焚き火の前で彼女と話をしていると、アネモネがやってきて、俺の胡座の上にドスンと座った。

「はい！」

そう言って、自分の青いスカートを捲って白い脚を出した。

「そんな、はしたない事をしちゃいけません」

「そんなに脚が見たいのなら、私を見れば？」

アネモネは——俺が、女の脚を見たくてメリッサと話していると思っているようだ。

「うーん、アネモネの脚も綺麗だけど、もっと背が伸びて脚も伸びたら、あのお姉さんより綺麗な脚になるだろうなあ」

とりあえず、お世辞を言っとく。

俺に変な能力が備わってしまったために、アネモネにも迂闊に触れない。

「触ってもいいよ」

「だめだめ」

「ふう」

アネモネがむくれているのだが、仕方ない。

「でも、綺麗な脚だから、ちょっとだけ触ろうかなあ」

アネモネの脚をナデナデすると、彼女の表情が途端に変わる。

「ふあああ……」

「はい、おしまい」

「もつとお！」

そう言って彼女が俺に抱きついてきた。

「ふあああ……」

「こら！ だめだめ」

俺にそう言われて、アネモネは身体を離れたのだが、彼女はチラ見でメリッサを警戒しているよう。

「心配しなくても、そんな男を取ったりしないから……」

アネモネの様子を、メリッサは苦笑いしながら呆れている。

「スノーフレーク婆さんは俺の事を気に入ってたようなんだが、孫の君は好みが違うのか？」

「は、冗談」

彼女は一言吐き捨てて両手を広げる。どうやら、俺には全く興味がないうだ。

辺りは、すっかりと暗くなり、門が閉じてしまった町にぼんやりとオレンジ色の明かりが灯る。

だが暗くなって何も見えなくなった峠を見て、獣人達が耳を立ててクルクルと回している。

ベルも起き上がって、峠の王都側の方を見つめている。

「ミャレー、ニャメナどうした？」

「何か聞こえるにゃ」

そう言われれば、何やら声が聞こえるような……。

「おい！ 助けてくれ！」

暗闇の街道に光る目が4つ浮かぶ。それは人を担いだ獣人の男達だった。

「どうした?!」

「街道で馬車の事故だ！」

あんなに慌てていたし、スピードも出していたので、事故る可能性があると思っていたが――案の定。

「俺の所に、回復^{ヒール}を使える魔導師が数人いるので、任せろ」

「そいつはありがてえ！」

地面に、アイテムBOXから出したエアマットを広げると、怪我人を載せた。

男女に、子供が1人――この子供は、女の商人の馬車に乗っていた子供じゃないのか？

商人が損をするのはどうでもいいが、人の命が懸かっている。放置してはおけない。

俺達は治療にとりかかった。

104話 バナナンバナナ

峠が開通して、王家から依頼された用件は済んだ。俺達はこのまま国境の街ソバナへ向かう。

ソバナと国境を背中合わせにしている、帝国の街―ドクレスウエストエンドシュタットに、俺と同じ転移者が訪れているらしい。そいつに会いに行く予定だ。上手く行けば、こちら側へ引き込みたい。

忠実な皇帝の犬と化している可能性もあるが、魔導師として徴発されて、討伐したドラゴンも取り上げられているという話。

これが本当なら、帝国に不満を抱いている可能性大で、こちらの話に乗ってくる脈があるかもしれない。

仕事は済んだが、すぐに出発すると峠の途中で暗くなりそうであるし、開通を待ちに待った商人達が殺気立っている。

事故にでも巻き込まれたら大変だ。俺達は峠頂上の宿場町で一泊する事にした。

だが、食事も済んでまったりしていると、暗くなった峠から、怪我人を担いだ獣人がやって来た。

案の定――馬車の事故だと言う。

俺達は治療に取り掛かった。

怪我人は中年の男と、30歳ぐらいの女性、そして12歳ぐらいの男の子。

男と女の意識はあるようだが、男の子は意識不明。女性はおそらく、男の子の母親であろう。

パツと見、男の子の怪我が一番酷い。左手前腕が完全に折れ曲がっている。

俺はとりあえず、男の子を診よう。緑色の上着に黒いズボン、頭にはバンダナみたいな布を巻いている。

そのバンダナは綺麗な状態なので、頭部からの出血はないようだ。

「メリッサ、手伝ってもらっていいか？」

「もちろんよ」

「アネモネは、その女の人を見てやってくれ」

「解った」

俺も『聖騎士』とやらになって、回復^{ヒール}が使えるはずなのだが、使い方がイマイチ解らん。手探り状態だ。

手をゆつくりと、かざしていくと――怪我の場所で磁石が吸い付くような感覚がある。

なるほど、こうやって俺の生体エネルギーみたいな物を治療に使うのか。

だが、そうと解れば、俺の手がセンサー代わりに使えるって事だ。怪我人の全身に手をかざして、怪我や病気の場所があれば、手が引き込まれるような反応がある。

男の子の身体を全身くまなく調べる。小さな擦り傷や打ち身はあるようだが、大きな怪我は左腕だけのようだ。

暗くなつての騒ぎに、町の門が開いて慌てて町長がやって来た。

「何事ですか？」

「馬車の事故だ、多分――衝突じゃないだろうか？ 町長、悪いが治療が済んだら町へ入れてやってくれ」

「勿論でございます」^{もちろん}

「この分だと、怪我人がまだ来るかもしれないし……」

さて、男の子の腕を何とかしないとな。

前腕には腕を回転させるために2本の骨がある。橈骨と尺骨だ。

俺は絵を描くのに必要なために、ちよいと解剖学を齧った。無論、医者ではないので内臓は解らないが、骨と筋肉なら少々解る。

男の子の前腕が完全に折れ曲がっているという事は、骨が2本とも折れているのだろう。

だが、このまま回復^{ヒール}の力を使ってもよいのだろうか？ この世界の回復はなくなった腕が生えてきたりはしない。

——となれば、このまま回復^{ヒール}を使えば、曲がったままくっついてしまうのではないだろうか？

やはり固定する必要があると思う。

「ニヤメナ、ちょっと手伝ってくれ！」

「はいよー！」

ニヤメナに男の子の腕を引っ張ってもらう。

「うぐうう……」

男の子の顔が苦痛で歪む。多分、意識はないようだが痛いんだろうな。

思わず、彼のおでこに手をかざす——すると、男の子の表情がスツと穏やかになった。俺の力で痛みを中和出来るようだ。

「すげえな旦那。それって男にも効くんだな」

「そんな事より、ちゃんと押さえててくれよ」

「はいよー」

男の子の腕を掌を上にして伸ばす。その下にアイテムBOXから出した板を敷き、手探りで骨を真っ直ぐにする。

上手くいかないようなら、切開をする必要があったのだが、なんとか真っ直ぐになったようだ。

そこで力を最大に使う。

「おっ！ 上手くくつついたようだ」

とりあえずでも、くつつけばなんとかなる。もう一枚板を載せて、前腕をサンドイッチ。

そしてシャングリ・ラで買ったガムテープでぐるぐる巻きにする。本当のギプスなら、石膏で固めたりするんだろうが、魔法ならすぐに治るんだろう——おそらく。

『闇夜を統べる三千世界の鴉よ私の求めに応じ、ここに治癒の聖なる奇跡を起こし給え——聖なる回復』

もちろん

勿論、呪文は大嘘だ。だが、オレンジ色の光が集まって、男の子の前腕に染みこんでいく。

マジで、魔法使いになった気分——っていうか、俺が本当に使っているんだが。

「「「おおおっ！」「」」

周りから歓声があがる。

「ほう！ 回復で骨折を治療すると曲がってくつついたりするものだが、真っ直ぐに固定してから回復を使ったのか」

王女の言葉からすると、やはり派手に骨折したまま回復を使うと曲がったまま固定されてしまうようだ。

せめて、真っ直ぐに直す努力ぐらいはしないのか？

だが医学が殆どない世界だ。複雑骨折等だと治しようがないのかもしれない。

王女に聞くと——そういう場合は切断してから、回復を使って傷口を塞ぐらしい。

しかし、骨折の破片等が残っている場合はどうするのだろうか？
外科手術などはないようなので、下手に行ったりすると、異端の
レットルを貼られる事になる。
注意しなければ。

だが、俺の身体にもナチュラル回復ヒールが備わったということは、骨
折した際には自分で真っ直ぐにしておかないと曲がって固定される
可能性が――。

自分で自分の身体を治療するのか――ブラ○クジャ○クかよ。あ
まり遭遇したくない場面だな。
どのぐらいで腕がくっつくか解らないので、しばらくそのままに
してもらおう。

男の子の母親らしい女性と、商人の男性の治療も終わったようだ。
治療が終わった男と親子を、町へ運んでもらう。一緒に痛み止め
の薬を渡した。

「プリムラ、怪我人を運んできた獣人達に、食事と酒を用意してや
ってくれ。ここまで走ってきたんだ、腹が減ったろう」

「解りました」

アイテムBOXから、鍋とパン、そしてワインを取り出す。

「だ、旦那、いいんで？」
もちろん

「勿論だよ」

獣人は黒白の男と虎柄の男。黒白の男は顔が黒いのに、鼻が白く
変わっている。

プリムラが手際よく食事の準備をしてくれた。

テーブルに並んだ美味そうな料理に、獣人達はゴクリと喉を鳴ら
すと、一斉にかぶりついた。

「うんめえ！ なんじゃこりゃ」「このワインも飲んだ事ないぐらい美味いぞ！」

「旦那、これは何の肉で？ こんな食ったことねえ！」

「そりゃ、ワイバーンの肉だよ」

「へ？ ワイバーンっすか？」

獣人達が顔を見合わせている。

「この者が申しておるのは本当じゃぞ」

「……」

目の前に出てきた少女が何者か、獣人達は不思議そうな顔をしている。

「この方は、この国の王女、リリス・ララ・カダン様だよ」

「お、お前たち頭が高いよ！」

町長が、必死に何かをアピールしている。

「お、お姫さま？！」 「王族ですか？！」

2人共、椅子から転げ落ちて、地面へ這いつくばった。

「よいよい！ 暗い中、怪我人を運んでくれた勇者じゃ。タップリと食べるがよい」

「「へへっ！ ありがとうございます！」」

獣人達は地面に座って、食事を食べ始めた。

「おい、ワイバーンの肉だってよ！」 「こりゃ、自慢が出来るぜ！」
騒ぎを聞きつけて、町の住民や泊まっている商人達も、外へ出てきて野次馬になっている。

「リリス様、まだ怪我人がやって来るかもしれませんね」
「うむ」

それじゃ、俺も腹ごしらえといくか。この聖騎士とやらの能力を使うと腹がへる。

とりあえずゼリータイプの栄養食を流し込む。後は――手軽で栄養があるといったら、バナナだろ。

ショッピング・ラでバナナを検索すると、16kgが4800円で売っている。

そんなにイラネー！　　って思うが、まとめ買いオンリーで少量は売ってないようだ。

まあ安い生鮮食料品をチマチマと販売するのは難しいのかもしれない。大量に買っても、アイテムBOXへ入れておけばいいのだ。珍しい果物だから、高く売れるかもしれない。

「ポチツとな」

ドサドサと、ちょっと青いバナナが落ちてきた。だが落ちて当たった所は黒くなるかもな。

全部で8房。16kgで8房って事は1房2kgで600円か。スーパーで買ってもこんなもんじゃなかったかと思う。

黒い斑点が出てきたら食い頃と言われているが――俺は青いバナナが好き。

1房だけ残し、全部アイテムBOXへ入れる。そして皮を剥いて食べ始めた。

「ケンイチ！　なんじゃ、その珍妙な物は？」

「果物ですけど――あまり美味しくありませんが、すごい栄養があります。食べてみます？」

王女が食べてみたいようなので渡す。他の皆は警戒している。

そんなに警戒しなくても良いと思うんだがなあ……また虫の卵か何かと思われているのだろうか？

手渡された王女が固まっているので、皮の剥き方を教える。

「むっ！ これは！ 確かに、あまり美味くはないが、ねっとりしていてなんと珍妙な味わい。今まで食べたことがない味わいじゃ！」
ウチの親父が昔——外国映画で見たバナナに憧れて、輸入された高いバナナを買った。

そして初めて食べた時の事を語ってくれたのを思い出した。どんなに美味しい物かと期待して食べて、その味にガッカリしたそうだ。

「簡単に皮が剥けるので、食べやすいでしょう？」

「それに、これには種がないの！」

「そう、種なしの果実なのです」

「なんと！ 種がなくてどうやって増やすのじゃ？」

「それは、株分けで増やします」

「ほう！ それもまた、珍妙じゃな」

原種のバナナには種があるのだが、売っているバナナには種がない。株分けで増える——つまりコピーである。

同様なものに、ソメイヨシノがある。ソメイヨシノも実がならないので種で増えない。

それ故、挿し木や接ぎ木で増やす。日本にあるソメイヨシノが全部クローンなのだ。

クローンが故、一斉に咲いて一斉に散る。

「う、売ってくれ！ いくらなら売る？」

俺の所に商人達が殺到した。

「ここで買っても、アイテムBOXがなけりゃ、5〜6日しか持たないぜ？ それに、あんまり美味くない」

「構わん！」

「それじゃ、1房、小四角銀貨2枚（1万円）だな」

「買った！」

残りの7房を全部売った——7万円である。1房600円が1万

円、中々良い稼いだな。

バナナは種がないから増やせないし。

俺達のその横で——味はイマイチと言った王女であったが、バナナを気に入ったのか、2本3本と食べていく。

晩飯食ったばかりなのに、一体どこへはいるのか？　だが、その様子を見ていた男達の様子が変だ。

なんだか、もぞもぞしている。彼等の視線は、王女の口元に集まっているようだ。俺はピンときた。

どうやら、王女の口元を見てエロい想像を巡らせているらしい——笑ってしまうが、すごく不敬だ。

その様子に気がついた奴が俺の他にもいた——ニヤメナだ。

「旦那、俺にもくれ」

「食うのか？」

彼女はこういう物は警戒して食わない。珍しい事もあるもんだ——と、バナナの皮を剥いてニヤメナに渡すと、彼女は長い舌を出してバナナをねぶり始めた。

白いバナナにねっとり絡みつく——ニヤメナのピンク色の長い舌。当然、彼女は解っていて挑発しているのだ。

この光景に我慢出来なくなったのか、男達の何人かが股間を押さえて町へ帰り始めた。

「あははは！」

ニヤメナはバナナを食いながら、腹を抱えて笑っている。

「ニヤメナ、そういう挑発をして、襲われてもしらんぞ」

「はは、大丈夫だよ旦那。もうアレは、完全に過ぎたからな」

「しかし——獣人は牙があるから、口じゃ出来ないって言ってたけど、そういう風にやるんだな」

「へへ、旦那にもやってやろうか？」

「何言ってるんだ、散々やったじゃないか。啞えて離さないし、いつ食いちぎられるかビクビクしてたけどな」

「ちょ、ちょっと旦那、それって本当かい？」

「もちろん」

ニヤメナは右手を差し出し、左手で自分の顔を押さえて固まってしまった。

「だ、旦那——ちょっと、それは忘れてくれ……」

「ええ？ 凄い良かったんで、また頼むよ」

「にやあああ！」

ニヤメナは可愛い叫び声を上げると、暗闇の中へ走りだして見えなくなった。まあ獣人なら暗くても心配いらないと思うが。

「トラ公の自爆にや」

「おう！ なるほど！ マイレン！ 来るが良い！」

「はい、姫様」

俺達の会話を理解したのか、王女がマイレンさんと呼び寄せた。

「マイレンも、その果物を食べてみるがよい！」

「はい、マイレンさん。あまり美味しくないかもしれませんが」

皮を剥いて、マイレンさんにバナナを渡すと、彼女も恐る恐る食べ始めた。王女の命令は絶対だ。

「どうぞマイレン！ もっと舌でねぶるように食べるのじゃ！」

マイレンさんが泣きそうな顔でバナナにしゃぶりつくつと、残っていた男達も、股間を押さえて町へ駆け込んでしまった。

これは中々強烈だ。

「ははは、これは面白いのう！」

そんな、しょーもない事をやりつつ時間を過ごしていると、ソバ

ナ側の暗闇からニヤメナが戻ってきた。

だが彼女と一緒に、人を担いだ獣人がいる。やっぱり追加の急患が来たか。

怪我人を降ろしてもらい、治療をする――見れば、俺達の作業の後ろで並んでいた商人みたいだな。

怪我人を運んできた男の獣人だが、毛皮の色に見覚えがある。

男の商人は、右足が折れているようだ。暗闇で馬車が崖に接触して、投げ出されたらしい。

無茶しすぎだ。

しかし完全に折れているわけではないので、男の子よりは軽傷に見える。

一応、添え木をして固定してから、回復^{ヒール}を使う。ついでに痛みも取ってやる。

「妾が与えた物だが、その力は便利じゃのう」

「全くでございます。これで多くの人々を助けられれば良いのです
が」

「そのような台詞は中々言えるものではないの。普通は金儲けに使う事を第一に考えるはずじゃ」

「そりゃ、金を持つてる連中からは取りますけどね」

「はは、なるほどのう」

それから1時間程待っていたが、追加の怪我人はやって来ないよ
うなので、寝ることにした。

テントを出して、獣人達と寝る。家には女性達だ。

「もう、アネモネは1人で寝ないとな」

「むゝ」

「だって、迂闊に触れなくなってしまったし」

「触ってもいいよ」

「だめだめ」

さすがに、もう拙いので、アネモネと寝袋を別にした。むくれてはいるが、アネモネも納得したようだ。

俺が1人で寝ていると、寝袋の上にベルが乗ってくる。

「ベル、重いんだけど……」

「にゃー」

寝袋から手を出して、ベルの首の辺りを撫でてやる。だが、しばらくすると、ベルがテントの床に身体を擦り付けゴロゴロと転がり始めた。

前に撫でた時にも、様子がちよっとおかしかったが――。

「ええーっ！ 森猫にも効き目があるのかよ」

「ケインイチの能力は危険にゃ」

「だって、あんなの使われたら、どんな女でもイチコロだぜ」

「気をつけないと、今まで以上に女が寄ってくるにゃ」

「そうだな！」

もう、ベルにも触れないのかよ。なんてこったい。

――――◆◆――――

――次の朝。

起きて、皆と一緒に食事を取る。飯を食べていると、町の門が開き、慌ただしく馬車で男たちが出ていく。

朝一で出発する商人達もいるが、ゴツイ男達もいる。

通りすがりに聞くと、鍛冶屋の連中らしい。事故って破損した馬車をその場で修理をして、宿場町まで持ってくるようだ。

幸い、衝突して壊れただけで、谷底へは落下しなかったらしい。なるほどなくそういう仕事もあるのか。

朝飯を食い終わったので、治療した親子の所へ向かう。宿場町の宿屋に寝かされているらしい。

だが宿屋に行く途中で女達に囲まれる。白や赤の派手なドレスを着て、胸の谷間を強調している。

こいつらは娼婦だ。

「ねえ！ 外で野宿してる物好きって旦那だろ？」

「ああ、まあ――」

「旦那の連れを見たって連中が――昨日の夜にドツと押し寄せてさあ」

「そうそう、昨日は大繁盛だったよ！」

娼婦達は夜の仕事を終えて、これから宿舎に帰って寝るところだと言う。

「こらこら、お前等俺に触るな」

「えゝなんでえ？ 旦那も来たらご奉仕しちゃうからさあ」

「まさか、その歳で女に触った事ないとか？」

「そんなじゃねえけど。触るなつての」

だが、俺の言葉もお構いなし、抱きついてきた女が妙な声をあげる。

「ふああああ！」

「ちよつと、どうしたのさ！」

「はああ――何これ凄い気持ちいいんだけどお」

「ほんとにいい？」 「マジで？」

次々に抱きついてきた女達が吐息を漏らす。

「ふああああ！」 「なにこれええ」

「お母さん……」

だが、1人の女が呟いた言葉に女達がパツと離れて、ゲラゲラと

笑いだした。

「ぶっ！　なんだよ、お母さんって！」

「だ、だって、そんな感じがしたんだもん！」

「まあ、確かに……」

女達が顔を見合わせている。

「こら、お前等いい加減にしろ。これは回復ヒールだからな、金を取るぞ」
彼女達は夜勤明けなので、癒やしの効果があつたんだろうと思われ。
れる。

回復ヒールの魔法だと言われて、彼女達も納得したようだ。

「昨日の稼ぎ全部渡すから、もつとしてえ！」

「あたしもお！」

「うちも、うちもお！」

「離れろっての！」

娼婦たちを振り切ると、宿屋の前まで逃げてきた。

くそ、また腹が減ったじゃないか。えらい燃費悪いぞこれ。

バナナを2本食ってから、宿屋の主人に事情を話して、怪我人の所へ案内してもらう。

最初に親子を訪ねると、2階の部屋に2人一緒に寝かされていた。
母親の方は起きていたが、息子はまだ寝ているようだ。

女は白い寝間着に、ボサボサの赤い髪を三つ編みしている。

「やあ、お早う。昨日、治療した魔導師だ」

「ありがとうございます。凄い魔導師様がいらっしゃって、不幸中の幸いでした」

「まあ、息子の方は腕がなくなってもおかしくない怪我だったからな——ちよつと子供の方を見せてもらうよ」

毛布を捲り、板とガムテープで固定した緊急のギプスを見るが、問題はなさそう。

「真っ直ぐにくつついたようだし、腫れもない。あんたはどうだ？」

「まだ、痛みはありますが、大丈夫です」

「痛み止めの薬をやる。食後に飲むように。内臓はやられてなかったから、飯も大丈夫だろ」

「ありがとうございます」

「料金は、息子と合わせて金貨1枚だな。持ち合わせがないなら相談にのるぞ」

「いえ、大丈夫です」

母親から金貨1枚をもらう。腕が折れ曲がったのに、綺麗にくつついて治るんだから、金貨1枚は安いだろう。

相手は商人だ、遠慮する事はない。こうなる事も覚悟でこの仕事をしているのだからな。

それに、プリムラに聞いても相場はもっと高いようだ。母親の方はアネモネが診たが会計は一緒にもらう。

この母親の話では――馬車を回収してもらい、養生したらすぐに王都へ出発するという。

まあ急ぐ理由があるのだろう。

「息子はちょっと時間がかかるかもしれないが……」

「息子をここで預かってもらい、1人で王都へ向かう事も考えておられます」

聞けば、夫が病で倒れて代わりに王都へ向かうのだという。

「そりゃ、大変だな。旦那は卒中か何かか？」

「はい……」

「それじゃ、子供の面倒も見れないだろうしな……」

悲喜^{ヒール}交^ル交、かわいそうであるが、どうしようも出来ん。せいぜい、追加で回復^{ヒール}を使ってやるぐらいだ。

「あの――街道を埋めてた土砂を取り除いた魔導師という方は……」

「それが、俺だ」

「ありがとうございます。このまま街道が開通しなければ、一家で心中するところでした」

その後、他の怪我人2人から銀貨を回収して、皆の所へ戻る。

「あ、ケンイチが帰ってきたにゃ」

俺が戻ると、家の前に商人の馬車が止まり、メリッサが王女に挨拶をしている。

「おおっ、メリッサは今出発か？」

「ええ、一足早く王都へ帰っているわ」

「道中気をつけてな。作業を手伝ってくれて感謝している」

「名誉に相乗りするんだから、感謝するのはこっちよ」

「はは」

メリッサが馬車の後ろへ乗り込むと、荷物の間の狭いスペースに身体を入れた。

荷崩れしたら挟まりそうなんだが、大丈夫なのだろうか？

「はい、アネモネの稼ぎ」

「ケンイチのアイテムBOXへ入れておいて」

アイテムBOXのアネモネフォルダへストックする。

「其方と一緒にいて、アネモネが金を使う事があるのかえ？」

「あまり使う事はありませんが――金はギルドへ預けて、私の身に何かあった時に使うように言っております」

「ほう、なるほどのう……」

ちよっと、王女の様子がおかしい。

「いかがなさいました？」

「すまぬのう、ケンイチ。辺境で仲良く暮らしておったのに、王家のゴタゴタに巻き込んでしまい」

「こうならぬように、なるべく力は見せぬようにしていたのですが、私も調子に乗りすぎました。それに、リリース様の味方になると口に出したのですから、その言葉が偽りにならぬように致しますよ」

「其方に感謝する」

そもそも力を見せすぎて王侯貴族の興味を引いてしまった俺が悪いのだが、こうなってしまったのは仕方ない。

だが、このまま王都へ戻ると、王家の力を使ったという事で、また揉めそうだな……。

荷物と家、そしてテントを全部アイテムBOXへ突っ込むと、ハ
○エースを召喚する。

「さあ、ソバナへ行くぞ！ 皆乗り込め！」

「いくぜー！」 「山脈の向こうへ行けるなんて思ってたんだけどにや」

「こんなに長大な旅をするなんて、父でもなかったでしょう」

「わーい！」

王女は助手席に、メイドさん2人は後ろへ乗り込む。

「マイレンさんも大変ですねえ」

「こ、これも仕事ですから……」

「マイレンの事なら心配するな。妾に酷使されると喜ぶ奴じゃからな」

彼女が頬を赤らめているが――まあ、うすうすそんな感じはして

た。

最後にベルが乗り込んだのを確認して、スライドドアをしめる。

「それじゃ、出発っ！」

「「おっ！」」

聞こえてきたのは獣人とアネモネの元気な声だ。

だが、この先は地獄街道の下り。

安全運転を心掛けよう。

105話 レッサードラゴン解体指令

峠の頂上にあつた宿場町に一泊して、俺達は国境の街ソバナへ向けて出発した。

皆を乗せたハ〇エースで峠を下る。メリッサが抜けたので、乗員は1人少なくなった。

ずっと下り坂だ。蛇のようにうねる道をひたすら下る。エンジンブレーキを使っているので、ずっと3速。

ブラインドコーナーは特に注意をする。いつ突っ込まれるか解らないからだ。

この世界は左側通行なので、俺達がいる方が崖側で、当てられると不利。

伊達に地獄街道とか呼ばれていない。だが王都への帰りも、この道をどうしても通らなければならない。

考えるだけで不安で一杯になる。

途中で上りの馬車とすれ違い、遅い馬車なるべく見通しの良い所で追い抜く。一歩間違えば谷底だ。

時速30〜40km程で、ゆっくりと下っていく。だが、これでも馬車に比べればかなり速い。

だが途中で馬車の列が見えてきた。上りと下りで車列が出来ている――どうやら事故らしい。

「リリース様、事故のようですよ」
「うむ」

こんな所で、もたもたしていられない。峠の途中で1泊はしたく

ないからな。

だが馬車の連中は、峠の途中で止まって何泊もしながら難所を乗り越えるという。

ドアを開けて、様子を見に行く。暇なミャレーとニャメナが一緒に降りてきた。

馬車の列を通り越して、事故現場へ向かう。

どうやら、コーナーで曲がりきれず馬車同士が衝突したらしい。車輪が大きく破損している。

絡み合った2台の馬車が街道を塞いでいるのだ。

商人達が集まって馬車を動かそうとしているのだが、うまくいかない様子。

「おーい！ 俺に任せてくれ」

「なんだ？ あんた？」

「先を急いでいるんだよ。この馬車をどければいいんだろ？」

「急いでいるのは俺達も一緒——」

説明するのも面倒なのだが——。

「この馬車に生き物は積んでいないよな？」

「はい」

俺は馬車の1台をアイテムBOXへ入れた。

「「「おおおっ!?!」」」

そして、少し離れた場所に再び出した。

「「「おおおっ!?!」」」

「アイテムBOX持ちか？ しかも、かなりの大容量だぞ」

「まあ悪いが、俺がどけたんだから、最初に通らせてもらおうよ」
車に戻ると、ゆっくりと発進させて、馬車の間を縫って走る。

「なっ、何だ?!」「馬なしで動いておるぞ!?!」「魔法か?!!」

「悪いね、お先く!」

開けた窓から、驚く商人の列に手を振りながら、事故現場をパス。再び峠を下り始めた。

それなりに馬車は多いな。開通したと同時に、獣人の伝令が麓の宿場町に向かっていくから、情報は伝わっているのだろう。

「其方のアイテムBOXは便利じゃのう。軍の資材も運べるのではないのか?」

「まさか、そんなに多くの物は入りませんよ。大型の魔物が2頭も入っているのです、いっぱいです」

実際、どのぐらい入るのかは、本人でも解っていないからな。

そう言うっておかないと、行軍に駆り出されてしまおう——といっても、今の段階でも可能性は十分だが。

「それがあれば、どんな商売でも出来そうじゃの」

「金を稼ぐつもりなら、いくらでも稼げます故、王侯貴族様の後ろ盾もあまり興味がないのですよ」

「むむ……」

「しかし、商売が成功してくると、やかみのいやがらせ等が酷くなりますから。今回、陛下からいただいた、天下御免の書状が、さぞかし役に立ってくれると期待しています」

「其方は変わっているのう。普通は貴族や家名をもらえる日を夢見て必死になるものじゃが」

「その通りです!」

いきなり、座席の間を通り後ろから顔が出てきた——プリムラだ。俺達の話聞いていたのだろう。

「私の父も、家名を頂いて大店になるのが夢だと、常日頃から言っていたのに、ケンイチのお陰でそれが叶いました」

「それは、マロウさん——いや、お義父さんが優秀だからで……」

「いいえ、家名を頂いた父は大層感激して、ケンイチに何があっても、マロウ商会を投げ打ってでも支えてみせると……」

「そりゃ大変ありがたいし、名誉な事であるけど。マロウ商会で働いている人もいるし、その家族もいる。そんな事は頼めないよ」

「いいえ！ 頼んでください！」

プリムラの真剣な眼差しと勢いに押される。

「ああ、解った解った」

「それにのう、ケンイチ。このまま王都へ其方が戻れば英雄扱いじや。爵位は間違いない」

「えー？ そんな面倒そうなの要らないんですけど……それって断れないんですか？」

「こ、断るだど？！ 其方、今までの話を聞いておったか？！」

「聞いてましたけど……王都の王侯貴族に対する心証が最悪なんですけど」

「其方の気持ちも解るが……」

授爵がどれだけ名誉な事かと、王女に延々と語られるのだが——正直、全く興味がない。

「うーん、プリムラ的にはどうなんだ？ やっぱ、俺に授爵してほしいのか？」

「そ、それは……ケンイチにお任せいたしますけど……やっぱ、貴族の身内となれば、その……商売的にもあの……ケンイチを利用したくないと言いましたけど、あの……私は最低な女です。罵ってくれても構いません……」

「そんな事ないけどな——解った解った。考えておくよ」

「本当ですか？」

「ああ」

「ケンイチ！」

プリムラが後ろから抱きついてきた。こんなに喜ぶとは思わなかったが、地方なら貴族の権力は絶対。

彼女の気持ちもなんとなく理解出来る——遠くの王族より近くの貴族ってな。

それ故、彼女にもノースポール男爵との縁談の話が来ていたのだ。

「待て待て、危ない危ない！ 崖に落ちたらどうする！」

「ふあああ……」

俺に抱きついてるプリムラが恍惚の表情を浮かべている。

「こら、プリムラ離れなさい」

「プリムラ、近い！ それなら、私も抱きつく！」

そんな事を言いながらアネモネもやって来た。

「こら！ お前等ダメだったの！ 危ないから！」

崖に落ちたらどうする！ だが、話を聞いていた王女が神妙な顔をしている。

「プリムラ、其方それでいいのかえ？」

「リリス様、どういう事でしようか？」

王女の話では——1代貴族や男爵なら商人の娘の正室もありえるだろうが、俺の成した偉業とやらからすれば、もっと上の爵位を授爵される可能性が高いと言う。

それぐらいの爵位になると——正室に平民の女が収まる事はまずないらしい。

「それでは貴族の女を押し付けられる可能性が高いと？」

「うむ、それに其方は聖騎士となった。相手が王族となる可能性も

十分にある」

「ええっ？ あ王妃様と親戚になるのは勘弁していただきたいですねえ。それに、私に嫁いでよしとする王族の方がいらっしやるので？」

「……た、例えば、妾とか……」

「ええっ？ それは冗談ではなかったのですか？」

「なんじゃそれは！ 嫌なのかえ？！」

「嫌って事はありませんが、話が飛躍し過ぎでは。それに、お相手が決まっているとお話が……」

「あくまで、婚約者候補じゃ！」

王女は、聖騎士となった事の重大性を説いてくるのだが……。

「どうするプリムラ？ 俺が貴族になったら、やっぱり色々と面倒な事になりそうだぞ？ 君はそれでもいいのか？」

「あううう……そ、それでも……マロウ商会金儲けの秘訣——金儲けの為には自分の魂に嘘をつく事も必要……」

それはまた随分と過酷な秘訣だな。『金は命より重い……！』そんな台詞が何かであったが——プリムラは真剣に悩んでいる。

正室じゃなくても、高位貴族の側室に収まれば、商家として多大なメリットがあるという事だろう。

地方商人なら誰もが夢見る王都への進出にも弾みがつく。商人としての本能に抗えないって事か。

「其方の妻の意志に関わらず、貴族共が自分の娘を連れて押し寄せてくるぞ？」

「陛下からいただいた、天下御免の書状があるじゃないですか」

「無論、使えるとは思うが、善意でやって来た貴族も追い返すと、彼等共の心証が悪くなるぞえ？」

「貴族の心証なんて、いくら悪くなくても構いませんが……」

「そこでじゃ！ 妾が相手に決まっておれば、貴族共は一切手出し

が出来ん！——というわけじゃ！」

自分の計画に自信満々な王女なのだが、そんなに上手くいくかよ——って思うが。

「大体、そんな事を陛下や王妃様がお認めになるはずがないでしょう」

「故に！その時は王族を捨てると申しておる！」

「ちょっと落ち着いて考えましょう、リリース様。何が悲しゅうて、こんな平民のオッサンに嫁ぐ必要があるんです」

「其方は救国の英雄なのだぞ?!」

王女も俺に抱きついてきた。

「ふわあああ！なんじゃこれは！確かにこれは堕ちる！今すぐ股を開いてしまいそうじゃ！」

何を言い出すんだ、このお姫様は。

「ちょっとちょっと危ない！」

慌てて、ブレーキを踏んで停止する。

「リリース、ケンイチに近すぎ！」

「何をいうアネモネ。妾とケンイチは『聖なる契』を結んだのじゃぞ？」

いつの間にかアネモネと王女は名前で呼び合う仲になっていた。

「ちょっと、リリース様。どういう事ですか？」

「聖なる契を結んだ者同士は、来世でもまた巡りあうと言われている！」

「なんですかそれ？初めて聞きましたけど」

「当然、今初めて言ったからの」

「それじゃ私は、来世の来世でもケンイチと一緒にいるもん」

「それなら妾は、来世の来世の来世じゃ！」

「「ぐぬぬ……」」

小学生かよ。まあ歳の的には小学生と中学生なのだが……。

「はいはい……解りましたから出発しますよ。急がないと暗くなったら大変だ」

再び車を出発させる。馬車で上り下りしている連中は暗くなったら進めないで、峠の途中でも何泊かするみたいだし。

「トラ公、聞いたかにゃ？ ケンイチが貴族になるだってにゃ。ちよっと前言ってたけど冗談じゃ済まなくなってきたにゃ」

「これだけの事をやったんだ、旦那が貴族になってもおかしくねえ。俺達も貴族の愛人になれるかもしれねえ——ってこの前話してたろ？」

「そうにゃー、でも貴族なんかになったら、女なんてよりどりみどりにゃ。きつとウチ等なんかは、お払い箱にゃ」

「旦那に限って、そんな事はねえ！」

「男なんてみんな同じだにゃ」

後ろからそんな会話が、ハ〇エースのエンジン音に混じって聞こえてきた。

すると、一番後ろの席から、ニヤメナが運転席の後ろまでやって来た。

「旦那あ！ クロ助があんな事言うんだぜ！ 違うよな？！」

「そんな事しないっての。なんでこんな美人で働きの女を捨てなきゃいけないんだ。死ぬまで一緒にいてやるから心配するな」

「旦那あ！」

ニヤメナまで俺に抱きついてきた。

「ちよっと、危ないから止めろっての」

「クロ助！ 旦那は違うって言ってるぞ？」

「ホントかにやあ？」

ミヤレーは一步引いて考える癖があるようだ。それを使って、いつもニヤメナをからかっている。

自分で理性的とか言っていたが、こういう事を言っているのかもしれない。

「ミヤレー、もうお前は撫なでてやらなくてもいいんだな？」

「おっ！ 旦那！ その分、俺を撫なでてくれよ！」

俺の言葉にニヤメナが反応した。

「ああ、そうだな」

「ちよつと待つにゃ！ にゃんでそうなるにゃ！？」

慌てて、ミヤレーも後ろの座席から飛んできた。

「だって、クロ助は旦那の事が信じられないんだろ？ それじゃ俺が代わってやるよ」

「冗談じゃないにゃ！」

俺の座席の後ろで、侃々諤々が始まってしまった。

「お前等、危ないからちゃんと座ってろっての」

皆にぺたぺたと触られたので腹が減った。困った事に、人に触られても能力が発動してしまうので、腹が減るのだ。

俺はアイテムBOXから、バナナを取り出した。だが飲み物も欲しいな……。

ちよつと車を停止して、シャングリ・ラからトマトジュースを買った。

「リリース様も食べますか？」

「うむ！」

つゝか、食うのかよ。一体どこに入っているんだ。後ろの乗客にも、リクエストを聞いて飲み物等を出してやる。

プリムラは以前食べた、か〇ぱえ〇せんが食べたいようだ。

「妾にもその菓子をとれ」

王女にか〇ぱえ〇せんとトマトジュースを渡して、また車を発進させた。

トマトジュースは大丈夫かな？ 元世界でも嫌いな奴が結構いたんだが……。

「ほう！ カリカリと香ばしい菓子じゃ！ 塩辛い菓子とは珍しい。そしてこの飲み物は、また塩辛い果物の汁とは、また珍妙なり」

意外と、か〇ぱえび〇んとトマトジュースを楽しんでいるようだ。本当に好き嫌いが無いお姫様だな。

アネモネにもトマトジュースを一口飲ませてみたのだが、ダメのようだ。凄い顔をして拒否されてしまった。

他の皆は牛乳を飲んでいる。

「塩辛なお菓子なんて！ でも、すごく美味しくて、後をひきます」

「カリカリと変わった歯触りですね」

後ろで食べているメイドさん達にも好評だ。

「丘を越えゝ行こうよゝつとくらあ」

その後はハンドルを巧みに操ると順調に進み、昼前には峠下の宿場町が見えてきた。

そして、その向こうには見渡す限りの金色の畑——大穀倉地帯が広がる。

「へえゝ！ これは凄い穀倉地帯だな！ 一面金色だ」

「である！ 『永遠に揺れる黄金とわを進み、御国の光輝かせ』——と

歌に歌われるぐらいじゃ」

そして俺達の前を走っている3台の馬車の列を追い越した。

「なんだか、見たことがあるような馬車だな……」

追い越して横を見ると、獣人の女の3人組が乗っている。

「ほう、あ奴らにもう追いついたか。たった1日で峠を下りてしま
うのじゃから、当然じゃのう」

「もつと道が良ければ、1日で上って下ることも可能ですよ」

「なんともはや……」

俺達を見た獣人達が手を振って何やらわめいているのだが聞こえ
ない。

旅は道連れ世は情けって言うが、一緒には行けない。だが、あ
いつらの行き先もソバナだ。

どこかで会うかもしれない。

「リリース様、旅は一緒にした方が楽しい——みたいな諺は王都には
ありませんか？」

「ふむ——それに当てはまるかは解らぬが『一緒にいれば、楽しみ
も悲しみも分かち合える』というのがあるが……」

へえ、中々良い言葉だな。

「さて、もう少しだから注意しないとな。何があるか解らん。『森
を抜けるまで、気を抜くな』ってな」

ここら辺なら、『峠を下りきるまで気を抜くな』——だろうな。

「其方は慎重だの」

「私の故郷に、木登り名人がおりましてね。登る時は何も言いま
せんが、降りる寸前には声を掛けるんですよ」

「そうなのか？ 何故じゃ？」

「降りる際、気を抜いた時の事故が多いそうで」

「なるほどのう」

もちろん

勿論、徒然草の高名の木登りから作った嘘話だ。

車を走らせ峠下の宿場町を通り過ぎる。そろそろ昼飯の時間だが……。

食料も持っているのに、宿場町のイマイチな食事を取るために寄る必要もない。

「さて、飯を食うのいい場所はないかな……」

そんな事を考えつつ、しばらく車を走らせると――。

「ケンイチ、木の間に湖が見えるにゃ!」 「おおっ、結構デカイ湖だぜ」

獣人達の言う通りに右手を見ると――まばらな木の間から、キラキラと光る水面が見える。

道がちよっと高い場所にあるので、見下ろす格好になっている。

「いいねえ、向こうへの道はないかな?」

湖への脇道を探すと発見したので、そちらへ車を向けた。

「そろそろ腹が減ったところだしの」

「それもありますが――アイテムBOXに入っている、魔物を処置したいのです」

「なるほど大量に水があればそれも可能か。何せ大物じゃからの」
その通りで――人がいなくて広い場所が欲しい。湖の畔ならば、スペースは十分にあるだろう。

脇道はちよっと悪路だが、一応このハ〇エースは4WDである。
ラ〇クルのようにデフロックは出来ないが、オプションのLSD（リミテッド・スリップ・デフ）が入っている。

茅かやのような長い草の間をくぐり抜けて湖へ到着した。車を降りて、辺りを見渡すと――2、3km離れた場所に漁村があるようだ。

ベルは、一番に降りて、辺りのパトロールを始めた。久々の見回りだろう。獣人達も思いつきり、伸びをしている。

アイテムBOXから双眼鏡を出して、周囲を確認する――問題なし。

右手山側から川が流れ込んで、左手の村の辺りから下流へ流れ出ているようだ。

双眼鏡で覗くと、イカダらしき物が見えるので、山から切り出した木を川を使って下流に運んでいるのかもしれない。

「マイレン！ 花摘みじゃ！」

「はい、姫様」

まあ、ベルが警戒してないって事は、魔物等はいないんだろう。

マイレンさんも手練らしいしな。

テーブルと椅子をアイテムBOXから出して、軽い昼食の用意をした後――皆で食事を取る。

「魔物の血抜きをしたいから――今日は、ここで一泊していいか？」

「ああ、いいぜ。別に怪しい気配もないし」「そうだにゃー中々良いところだにゃー」

「うむ、其方に任せる。上手く肉を処理出来れば、もっと美味しい肉が食えるのであろう？」

「その通りでございます」

「楽しみだのう」

王女は『花より団子』ってタイプだな。アネモネとプリムラも賛成なので、アイテムBOXから家を出して、設置した。

ここなら水がタップリとあるので、使い放題だ。

「魔物を解体するので、内臓系がダメな人は家に入っていた方がいい

いぞ」

そう言うと、プリムラが慌てて家に駆け込んだ。

「リリース様はよろしいのです？」

「はは、血に慣れるためだと申してな——母上に戦場やら粛清の現場へ連れていかれたわ」

そりゃまたヘビーな教育だな。王族なら、それぐらいで怯んでいては、務まらないんだろう。

先ずは、コ〇ツさんを出して、湖畔に穴を掘る。途中で水が出てくるが、お構いなし。

そして——その穴へ、シャングリ・ラで買ったブルーシートを敷く。

ここへ臓物を溜めて、ブルーシートごとアイテムBOXへ入れてから、ゴミ箱へ入れればいい。

地面に埋めても良いが、相当深く掘らないとダメだろう。

最初にレッサードラゴンだな。コッチのほうがデカイ。

腹を横にしなければならぬので、アイテムBOXから出したホイールローダでひっくり返した。

「何と力強い事よのう。普通は数百人でやる作業じゃぞ？」

「よし！ これで腹が割ける。ミヤレーとニヤメナ、これを着て手伝ってくれ」

シャングリ・ラから、よくお世話になっている、使い捨ての防護服を再び買う。

「はいよ、またその白いのを着るのかい」「それ、汚れなくていいけど、暑いにゃー」

「臓物塗れになるよりは、いいだろ？」

俺は全身を完全防御したが、獣人達は頭だけ出している。

本当は感染症やらの心配があるから、着てほしいんだがなあ。まあ、アネモネに続いて俺も治癒ヒールが使えるようになったから、なんとなかるか。

レッサードラゴンの腹を覆っている鱗を剥ぎ、一直線に腹を割くと腹圧で浮き輪のような内臓が飛び出してきた。

「ぎゃー！ 血まみれだコンチクショー！」

防護服を着ていなかったら、マジで臓物塗れだな。しかも、倒してすぐにアイテムBOXへ入れたので、まだ温かい。

さっさと終わらせた作業だが、内臓が傷つくと肉が食えなくなってしまうので、この作業に重機は使えない。

「おーい、大丈夫か？」

「はは、こりゃ凄いいぜ」

「ケンイチ！ 穴に落ちた腸はらわたは割いていいかにゃ？」

「いいけど、どうするんだ？」

「なるほど、龍香かえ？」

王女は、獣人達の行動を理解したようだ。

「龍香って、香に使う石ですか？」

元世界でも、クジラから出た龍涎香が高い値段だとかなんとか。

「その通りじゃ。よし！ もしも石が出てきたら、妾が買い取つてやろう」

「値段はどのぐらいなんですか？」

「大きさにもよるが、金貨200枚（4000万円）から400枚（8000万円）というところじゃのう」

「えー？ そんなに高い物なんですか？」

「うむ、もしもワイバーンに石があれば、そちらの方が高いはずじゃ。値段がどのくらいになるか見当も付かん」

「よっしゃ！ クロ助、王族の保証付きだぞ、気合入れて探せ！」
「任せるにゃ！ 一世一代の大勝負だにゃ！」

ニヤメナが内臓を掻き出し、ミャレーが割いて、内容物を漁っている。

その間に、アネモネに魔法を使って冷却を頼む。最初は湖に沈めようと思ったのだが、身体がデカいので冷えるのに時間が掛かる。その間に肉が傷んでしまう。王女に見えないように、魔法の触媒に使うアルミの板を渡す。

「むゝ！ リフリジレーション 冷却！」

身体が大きいので、何回かに分けて冷却をしてもらう——だが冷却が終わると、アネモネは逃げてしまった。

そのぐらい物凄い臭いなのだが、そんなのが苦にならないぐらいの大金が待っている。

そりゃ獣人達も気合が入るってもんだろう。なければ骨折り損のくたびれ儲けだけだな。

内臓を出し終わったので、ホイールローダで吊るして血抜きをする。

だが尻尾が長くて、地面についてしまう。尻尾の根元にも切れ込みを入れて、ユ○ボを召喚。

尻尾を釣り上げる事にした。ホイールローダとユ○ボで、レッサードラゴンの死体がV字型に——。

「こ、こんな巨大な召喚獣が3体も同時に出せるのかえ？ 其方は一体何者なのじゃ？」

「辺境の魔導師ですけど……今は、王女殿下の聖騎士ですか？」

実は全部アイテムBOXに収納されているなんて、口が裂けても言えない。

この他にも、ラ○クルや大型ダンプ、高所作業車も入っているしな。そうそう、9mの足場とか丸太も入っている。

改めて考えると、凄いな——まさにチートといえる能力。

しかし、高所作業車はアネモネのゴーレムがあれば要らないか——下取りに出すか？

いや、何でもアネモネの魔法に頼ってしまうのも……でも、彼女は頼ってほしいみたいだし……。

アイテムBOXの容量がなくなるなら、中の整理もしなくちゃならないが、未だにどのぐらい入るのかは不明。
しばらくこのままでもいいか。

吊り下げられた巨大な屍かばねの下からは、ダバダバと血が流れ出ている。

だが、王女の話では——竜の血も売れるということなので、プラケースに溜める事にした。

本当に売れるのか？ それと、心臓と胆嚢が価値があるらしいので、冷やしてからアイテムBOXへ収納した。

それと、食えるかもしれないので、肝臓と獣人達が切った腸は別分けにする。

ホルモンとして焼いたり鍋にして食べば美味いかもしれん。

「竜の血なんて何に使うんですか？ 飲むんですか？」

「うむ、飲めば不老長寿に効くらしいが——」

腸詰めにしてブラッドソーセージはどうか。

「リリース様も飲みますか？」

「遠慮しておく」

どうも、王女は信じていないようだ。心臓と胆嚢は万病に効くという。

当然、亜種のドラゴンより、本物のレッドドラゴン等の方が価値が高い。

その間にも、ミヤレーとニヤメナは臓物の池の中で泳いでいた。

「ねえええ！」「ないにゃー！」

石があれば匂いがするはずだという。臓物の中でも高性能な獣人の鼻が、その匂いを逃さないだろう。

「お前等、諦めろ」

「旦那、龍香はないけど、これはあったぞ！」

ニヤメナが持ち上げたのは、大きな黒い石。龍香ではなく、魔物に含まれているという魔石だ。

使う予定もないが、とりあえずアイテムBOXへ入れておく。

「畜生！ ダメか！」「次に賭けるにゃ！」

皆に手伝ってもらい臓物の詰まったブルーシートの4隅を合わせて、袋状にする。

これで、ブルーシートを収納すれば一緒に臓物もアイテムBOXへ入るはずだ——だよな？

入らなかったら、コ〇ツさんで埋めるだけだが。

「よし、収納！」

目の前にあったブルーシートが消える——成功だ。そして、肝臓と腸以外は、すかさずゴミ箱へポイ！——完璧。

そして俺は、次なる獲物——ワイバーンの解体に移った。

106話 湖で露天風呂

俺達は国境の街、ソバナへ向かう途中だ。

だが、アイテムBOXに入っている魔物の血抜きをしたい。せっかく美味しい肉なのに、ダメにしてしまつては、あまりに勿体ない。これだけあれば、数年は食える肉の量だ。

腸の一部もカットして保存したので、食べてみようかと思う。

珍しいレッサードラゴンの肉——とはいえ、やっている事はいつもと同じだ。

内臓を抜いて冷やして吊るして血を抜く。ただ、獲物は巨大なので、重機を使って吊り上げて血を抜いている。

流れ出る血の量も凄く、滝のように流れ出る。

なんとか大物のレッサードラゴンを処置出来たので、次に移る——ワイバーンだ。

こちらは、レッサーよりは小さいので、時間は掛からないだろう。寸法的には同じぐらいでも、ワイバーンは殆どが翼。処理しやすくするために、翼が付いている腕を切断した。

大きな翼を持っているが、鳥というよりは巨大なコウモリのような……。

再びブルーシートを敷いた穴に、魔物の臓物を流し込む。

「うにゃー!」

その腸の中をミャレーはらわたが歩きまわって、高価な香になるという石を探している。

内臓が全部出たので、コ〇ツさんを使ってワイバーンを吊り上げて血を抜く。

再び、下にプラケースを置いて血を集める。心臓と胆嚢もだ。

「おゝい、あったか？」

「うおおお！ どこだあ！」

「クンカクンカ、なんか臭いがするような気がするにゃ」

「ああ、何か臓物とは違う臭いがするぜ」

獣人達はそんな事を言っているのだが、臭すぎて鼻が馬鹿になって、なんだかよく解らん。

こいつも尻尾が長いので、高所作業車で尻尾を吊り上げた。

臓物と格闘する事10分程――ミャレーが大声を上げた。

「あつたにゃ！ 多分、これだにゃ！」

「くさっ！ ここまで臭ってくるぜ！」

「多分、この臭いのが高いにゃ、知らないけどにゃ」

ミャレーが掲げているのは、野球のボールぐらいの大きさの玉。玉といっても、凸凹していて丸ではない。

「おおっ！ やったな。それでどうするんだ？ 2人で山分けか？」

だが、俺の言葉に2人はキョトンとしている。

「何言ってるにゃ？ ケンイチが倒したんだから、ケンイチに権利があるにゃ」

「そうだよ、旦那」

2人は呆れているのだが、どうすりゃいいんだ？

「ええ？ そうなのか？ それじゃ――アネモネはどうする？」

アネモネは鼻を摘んで、首を横に振っている。

「そんな臭いの要らない」

「それじゃ、3等分か？」

「俺達なんて何もやってないのに、そんなにもらえねえよ」

「ええ？ えゝ、それじゃ俺が半分もらって、2人は残ったのを半分ずつにしろ」

王女に聞くと、最低でも金貨500枚（1億円）以上すると言う。

「さすがに、その値段だと妾も小遣いで払うのを躊躇するの。それに競りに掛ければもっと上がるぞ？」

「それじゃ、俺が金貨250枚で、ミヤレーとニャメナが金貨125枚ずつだ」

「……えゝと」「にゃ？」

獣人が頭を傾けている。彼等は1桁の計算がやっとだ、10枚以上になると、『1山いくら』状態になる。

「ミヤレーがシャガ戦で貰った報奨金と同じぐらいの金額か、もつと沢山もらえるって事」

「ええゝっ そうなのか？ かなり大金だって聞いたぞ！？」「やったにゃ！ 多分、ウチは獣人で一番金持ちにゃ！」

「そうかもしれないな、はは」

だが獣人を見ていた王女が、不思議そうな顔をしている。

「どうしました？」

「ん？ なに——大金を使う獣人ってのがピンとこなくてのう」

「そんな事ないにゃ！ シャガの金をもらった男共は、酒と女にバラ撒いてあつという間になくなったと思うにゃ」

「そうなんだよ、お姫様。俺たちや美味しいものを食って酒飲むために稼いでるのに、旦那の所にいると全部それが叶っちゃう」

「そうにや、ウチ等ケンイチの所へ来てから、殆ど金を使わないにや」

まあ、そうだな。娯楽があるわけじゃなし、高価な高級車があるでなし。

獣人に宝飾は似合わないだろうし。屋敷を買っても、獣人は定住しない事も多いようだし。

「貴族みたいに宝飾をまとって、ぶくぶくと太ってみたらどうなんだ？」

「ぎゃー！ そんなの獣人じゃないにゃ！」 「そうだよ、旦那！ そんなのありえないって」

彼女達によると、太った獣人は獣人じゃないと言う。実際、太った獣人は見た事がない。

たまに横に太い奴はいるけど、そういう体型で太っているわけじゃないからな。

話はそのぐらいいにして、ワイバーンの臓物もアイテムBOXへ収納してからゴミ箱へ。

だが、レッサードラゴンと同じように、内臓の一部は保存した。そしてレッサーと同じように黒く光る魔石を回収。これ等も高く売れるようだが、後回しだな。

討伐した証として、コレクションしてもいいだろう。

作業が終わったので、白い防護服を脱いでこいつもゴミ箱へ。

しかし、汗だくになってしまったので、湖に飛び込んで身体をジヤバジャバと洗う。

水がいくらでもあるので、使いたい放題だ。やっぱり住処の近くには水があったほうがいい。

「ケンイチ、温かい風が起こる魔道具出してにゃー」

「よっしゃ、任せろ」

水辺にテーブルを出して、ジェットヒーターを設置した。
ここならいくらセクシーダンスを踊っても平気だ。

「お前等、頭だけ出してたんで、臭いがついたんじゃないか？」

「石鹸で洗ったから多分、大丈夫にゃ」

「そうかな？ 毛に染み込んだ臭いって中々取れないからな」

「だから、身体は旦那の白い服を着ただけだな——クンカクンカ」
獣人達が自分の身体の臭いを嗅いでいる。

巨大な魔物の血が抜ける頃には辺りは暗くなり始めた。作業の終わりを確認したプリムラが、恐る恐る家から出てきた。

収納する前に魔物の肉を触っても冷たいままだ。これだけ大きいと温まるのにも時間がかかるらしい。

冷えるのも温まるのも、普通はゆっくりと外側から温度変化していくが、魔法だと内部まで均一に温度が変わる。

「さて、ちゃんと処理したワイバーンの肉を食ってみるか？」

俺は肉を調理するが——その間、アネモネとプリムラには食事の準備とパンを焼いてもらう。

せっかくの良い肉だ、ミディウムミディウムレアといきたいところだが、野生の肉はしっかりと火を通さないと危ない。

病気や寄生虫、何がいるか解らんからな。

「うーん、要は60度ぐらいまで温度を上げられればいいんだ」

何かで、低温調理器なる物を見た記憶が蘇ったので、シャングリラで検索してみた。

あった——電気式でサーモスタットがついており、自動で設定した温度で低温調理出来る代物——8000円だ。

「なにに――真空パックの機械がいるのか」

肉を真空パックに入れてから、お湯で温めるらしい。

王女がいるし、大食らいが多いから大量に肉がいるな……一番大型の真空パック機を買って、分厚く切った肉を透明な袋に詰め込んでいく。

「透明な箱に透明な袋かえ――それは全部、其方が錬金術で創り出した物かえ？」

「そうですが……お教え出来ませんよ？」

「解っておる！」

教えたくても、プラスティックやビニルなんかの作り方は解らないな。

そして真空パック――みるみる、袋の中の空気が抜けていく。その様子を王女が興味深そうに眺めている。

「ほう？ それは何をする魔道具なのじゃ？」

「袋の中の空気を抜いているんですよ」

「何？ 空気を？ 何故、そのような事を……」

「肉の旨味を逃さないためです」

そしてプラケースに水を入れて、アネモネに魔法で温めてもらう。

「アネモネ、風呂より熱いぐらいの温度にしてくれ」

「解った」

「姫様、いったいどんな料理になるのでしょうか？」

「解らぬ……」

メイドさん達も、俺の調理風景を不思議そうに眺めている。

しかし肉が大量で水も多い。電気式の低温調理器1つだけではどう見てもパワー不足。2個購入した。

アイテムBOXから発電機を出すと、調理器をセット。
これでもパワー不足のようななら、アネモネの魔法で手伝ってもらおう。

——そして、おしゃべりをしながら1時間後。

皆、腹が減っているのに、じっと待っててくれた。

これで不味かったら、どうしようと思うのだが——まあ、その時は謝るしかない。

とりあえず、ちょっと切って口へ放る。ほとぼしる濃厚な肉汁と、鼻に抜ける香り。

何の獣臭さもない。これは間違いなく美味い！ 脂身が全くないので、ローストビーフっぽいが、食べた事がない味だ。

こうなると——レッサードラゴンの味にも期待しちゃうな。

皿にワイバーンのステーキを載せて、シャングリ・ラで買ったソースを掛ける。

獣人達には、にんにくソースがいいだろう。

そして、ステーキを食うためには、ナイフがいる。

この世界でも、分厚い肉を食うときには細長いステーキナイフと似たような物を使う。

フォークはないので、そのままナイフで刺して食う。

獣人達にもステーキナイフを渡そうとしたら、自前のナイフで豪快に切って口へ運ぼうとして、停止した。

肉の切り口をしげしげと眺めている。

「……旦那？ これって生じゃ？」 「生っぽいにゃ」

「大丈夫、火は通ってるよ。肉に火が通るって事は、火傷と同じだ。ちょっと熱い風呂に手をつっ込んだら沸騰してなくても火傷するだろう？」

「そう言われればそうだけど……」 「ケンイチが言うなら食べて

みるにゃ」

獣人達は肉を沢山食うから、この肉の美味さを解ってくれるはずだ。

「ぱく………なんじゃこりゃ！ これって本当に肉か？」

「にゃー！ こんな肉、食べた事ないにゃ！」

「ソースも臭え！ けど、このくせえ香辛料は食欲をそそるぜ！」

そう——にんにくの臭いって食欲をそそるよな。臭いのは何故なのか？

「うおお！ ナイフが止まらねえ！」

「にゃー！ こんな食べたら、他の肉が食えなくなるにゃ！」

「そして、赤ワインで流し込むと——かぁー！ たまんねえ！」

「うにゃー！ またケンイチから離れられなくなるにゃ」

「なんだ、クロ助。旦那から離れる機会を窺っているなら、俺に全部任せて行っていいぞ？」

「そうはいくかにゃ！」

獣人達の様子を見ていた王女も、肉に挑戦してみるようだ。王女のソースは果物をふんだんに使った物。

ナイフで肉を大きく切ると、自分の口へ運んだ。

「むぐ……ふおっ！ なんじゃこれは！ これが肉だと言うのか？ いや、これが純粋な肉の味だとすれば、妾達が食べていた物は……」

「これは、本当に美味しいですわ。街で食べているような普通の肉ではないとはいえ、峠で食べた物とはまったく別物……肉の処理の仕方でこんなに違うなんて」

「ふあああ……口の中が幸せで一杯……」

アネモネとプリムラにも好評のようだ。

周囲のパトロールから戻ってきたベルには、皆が食べているのと

同じ肉と、猫缶をあげている。

「低温で調理するので、時間はかかるのですがね」

「なるほどのう……肉を調理するのには、沸騰したお湯や火——そんな固定観念がひっくり返ったわ。肉の調理が火傷と同じであれば、熱めの風呂の温度でも火傷するのう」

「少々難しいですが、お城でも再現は出来ると思いますよ」

「うむ、これで城の料理がまた美味くなるの！」

凄いい勢いで肉を平らげている王女の後ろで、メイドさん達がそわそわしている。

おそらく食べてみたいのだろう。

肉を切って、小さなフォークと一緒に皿に盛ってあげる。

「マイレンさんも食べてみませんか？」

「ええ……？」

「よいぞ、マイレン。其方も、この驚愕の料理を食してみるがよい」

「はい」

肉を食べたマイレンさんが、赤い顔をして固まっている。

「どうしました？ 喉につまりましたか？」

俺がワインを差し出したのだが、ちょっと違うようだ。

「こ、このような料理を食べてしまったのでは、日頃の食事が辛くなります……」

「はは、旦那の料理を食べた連中は、皆同じ事を言うんだよなあ」

「ウチ等なんて、外で食事出来ない身体になってしまったにゃ」

「街の酒なんて、不味くて飲めねえ」

そんな事を言って、ニヤメナがカップのワインを飲み干した。

「ほら、お代わりか？」

ニヤメナのカップにワインを注いでやる。

「かぁー！ 至れり尽くせり」

「なるほどのう。これでは、外で金を使う事もなくなるわけじゃ！」

「そうなんだよ、お姫様。金をだして外で不味い物を食べる必要なんてないからな——あはは」

飯を食いながら王女と、この地方についての話をする。

「リリス様、この湖は川に繋がっているようですが、このまま街道沿いにソバナへ向かっているのですか？」

「む？ む、確かそうだったと思うが……」

なるほど、それじゃ切り出した木をイカダにしてソバナに運んでいるんだな。

川ってのは、重要な交通機関のような気がするのだが、カダン王国では利用されている節がない。

「王都の近くにも川が流れていますが、水運には余り使われていませんよね？」

「その通りじゃな。せいぜい城下町近辺で物を運んだりするぐらいにしか使われておらん」

「下流に荷を運ぶための水路として使われないのにはわけがあるのでしょうか？」

「アニス川の広さは十分なのだが、森の深淵を通っているのじゃ」

「それじゃ、川を使うと魔物に襲われる可能性が高いと……」

「その通りじゃ」

俺達のいたアスチルベ湖という大きな湖の——山を挟んで反対側をアニス川という大河が流れているらしい。

平地で蛇行を繰り返し、三日月湖や湿地帯が広がりスライムだらけだという。

「それでは、川のそばは誰も住んでいないのですか」

「そうじゃな、いるのはエルフぐらいか。それにエルフでも、湿地帯には住まぬからの」

湿地帯か——それじゃ街は作れないな。重機を使って森を切り開き、湿地帯を埋めればいいのかもしいが。

「物好きのケンイチは大湿地へ行きたいとか言うかもしれないけど、絶対にダメだにゃ」

「そうそう、デカイスライムの巣だぜ」

スライムなんて可愛い物——ではないらしい。小屋ぐらいの大きさがあると言う。

獣人曰く——沢山いる。獣人の言う沢山は、100とか1000の単位だろう。

魔法で1つ2つ始末しても、数で押されるわけだ。確かにそれは無理だ。

それに水の中になると、同化して見分けが付かないらしい。それは怖い。

RPGだと雑魚のイメージがあるのだが、全然雑魚ではないようだ。

楽しい食事が済んだので、後片付けは皆にまかせて——俺は血抜きしていた魔物を収納する。

重機から降ろして、小さくコンパクトにまとめる。内臓と血がなくなっただので、腹に大穴が開き大分軽くなった気がする。

「よっしゃ、収納×2」

当然、綺麗に収まる。

「これで、しばらく美味い肉に困らないにゃー」

「お嬢、ドラゴンの肉は売らないでくれよ」

「とても美味しいので、売り物のスープに入れるのは勿体ないです

ね。単体で売った方が高いと思いますけど……」

「俺も——これは売りたいくないな。色々と料理をして自分で食べた
い。多分、何年も美味しい肉にありつけるぞ」

「私も、それがいいと思う」

アネモネも売るのには反対のようだ。

「やったにゃ！」

「ひゃっほう！　いくら食っても大丈夫だな。それに旦那の事だ、
そのうち違うドラゴンも仕留めるぜ」

「ありえるにゃ！　レッドドラゴン辺りを頼むにゃ！」

無茶言うなよ。

「食いきれないぐらい大量にあったら、そりゃ売ってもいいけどな」

「ああ、ドラゴンを売ることが出来るなんて……」

「プリムラ、レッサーとワイバーンの心臓と胆嚢は売ってもいいん
だぞ」

「うふふ……商人冥利につきますわ」

プリムラの目が据わっている——怖い。

水が沢山あるので、皆で風呂に入る事にした。

「アネモネ、魔法は大丈夫か？　魔物の冷却で結構魔力を消費した

と思うが……」

「お湯を沸かすぐらい大丈夫だよ」

「旦那！　俺達の風呂は、ここに穴を掘ってくれ！」

「ああ、穴に溜まった水を使って風呂にするのか」

「そういう事だにゃ」

「どうだろう？　すぐに冷えるのではないだろうか？　まあ面白そ
うだから、とりあえずやってみるか。」

上手くいけば、俺達がいた湖の湖畔でも同じ事が出来るかもしれ

ない。

「しかし、溜まる水は泥水だぞ？」

「そのぐらい心配ないにゃ」「虫に集^{たか}られた時には、泥の中に飛び込んだりするし」

話を聞いた王女が、露天風呂に興味を示しているのだが――まさか、年頃の王族が外で裸になるわけにはいくまい。

マイレンさんにもたしなめられて、すごすご俺が用意した小屋の風呂に入るようだ。

アイテムBOXからユ○ボを出して、5人で入る穴を掘る。

こういう露天風呂は石を加熱して入れたりするんだが、ここには魔法が使えるアネモネがいる。

「むゝ！^{ウォーム} 温め！」

すぐに水が温かくなってくる。まるで温泉だ。

「ひゃっほう！」「にゃー！」

素っ裸になって、獣人達が湯気が出ている露天風呂へ飛び込んだ。普通の風呂ではこんな事は出来ない。俺も風呂に飛び込んだ。

「こりゃいいな。滝の所へ帰ったら大きい風呂でも作ってみるか」

「こんな感じで、湖の近くに作るにゃ？」

「いや、滝の上がいいんじゃない？ 川から水を引けばいいし、眺めも最高だと思うぞ」

「それは、すばらしそうですわ」

プリムラも裸になって湯船に浸かった。

「あゝあ、プリムラもすっかり人前で裸になるのも平気になってしまつて……」

「ケンイチに染められてしまったのですわ。口に出せないような恥ずかしい事も一杯させられましたし……」

「旦那！ 俺にもしてくれよ！」

「何言っただ、さんざんやったじゃねえか」

「え？ だって記憶にねえし……」

「ぎゃー！ ウチとも、それをやるにゃ！」

「むー！ 私とも！」

アネモネが裸のまま俺に抱きついてきた。

「ふああああ！」

「こら、抱きつくんじゃないっての！ 腹が減るんだから」

「俺も俺も！」 「ウチもにゃー！」

皆に一斉に突進されたので、お湯の中に沈んでしまった。

「ぶはっ！ 鼻にお湯が入った！」

「ふあああ！」 「にゃあああ！」

俺に抱きついた女達が、喘ぎ声を上げている。

「こら、離れろっての！」

無理やり皆を引き離す。

「もう、飯食ったばかりなのに、腹が減っただろ」

アイテムBOXからバナナと、シャングリ・ラからエナジーバーを買う。

「本当に腹が減るにゃ？」

「本当だよ——むしゃむしゃ……」

カロリーめちゃくちゃ消費するって事だから、ダイエットにいいかもしれないが。

低血糖やらで、ぶっ倒れたら厄介だ。ブドウ糖の錠剤とかも買っ

ておいた方がいいかもしれない。

風呂から上がると、湖で水を被って泥を落とす。皆で素っ裸でバシャバシャやっても、周りには誰もいない。

元世界じゃ、こんな事考えられないよな。そして、ジェットヒーターを使って皆で乾燥だ。

小屋から白いバスローブを着た王女も出てきて、髪の毛を乾かしている。

「妾も外で入浴してみたかったの……」

「ダメですよ姫様。この状態でも、かなり拙いんですから！」

やっぱり、色々と拙いだろう。だが、こんな場所で王女が風呂に入っているなんて、誰も思わんだろうな。

俺は髪の毛が短いからあつという間に乾いたので、寝るための準備をする。

俺達の寝床にするための大型テントをアイテムBOXから出した。このテントは中々使えるな。

今日はプリムラも俺達と一緒にテントで寝るようだ。

「皆、一緒に寝るけど、俺に抱きつくなよ。腹が減って途中で起きちゃうからな」

「「「「……………」」」」」

「ほら、返事は？」

皆、解ったような、解ってないような生返事をしている。

「よし、妾に良い考えがあるぞ。ケンイチは妾と一緒に家で寝るがよい」

「そんなのダメ！」

「アネモネが言う前に——年頃の王族と同衾出来るはずないでしょ」
「ぐぬぬ……」

ちょっと勘弁してほしい。

107話 ソバナへ到着

国境の街ソバナに向かう途中の湖で1泊した。今まで仕留めた大型の魔物の血抜きをするためである。

獲物を仕留めた時には、適切な処置をしないと味が落ちる。それで済めば良いが、食えなくなる可能性も高い。

せっかくの貴重で美味な肉が、このままでは傷んでしまうので、水が豊富にあるこの場所を選んだ。

重機でドラゴン亜種達を吊り下げての血抜きは上手くいったようで、その味は格別。

家族や王女にも好評だった。

——次の日の朝。

皆で朝飯を食う。昨日の肉が残っていたので、アネモネが焼いてくれたパンを使って、サンドイッチを作った。

俺とアネモネ、そして王女が食べるサンドイッチには、蜘蛛の卵のマヨネーズを使っている。

ベルには猫缶。

「うめー！ パンに挟んだ肉うめー！」 「美味いにゃ！ 香辛料も利いてるにゃ」

香辛料ってのはマスタードの事だが、肉にも少々胡椒を掛けている——獣人達はテントの中で胡座をかいて、サンドイッチを頬張っている。

「美味しいですわ！」

「この肉とアネモネが焼いてくれたパンは、最高の組み合わせだな」
「えへへ」

俺達が話している間に、王女はサンドイッチを次々と平らげている。

「それはそうと……夜に、2回ぐらい腹が減って起きてしまったんだけど、誰が俺を触ったんだ？」

「「「……」」」

皆が明後日の方向を見て黙っている。これは皆がやったのだろう——あるいは共犯か。

誰かが抜け駆けしたのであれば、触ってない奴が騒ぐだろうし。

「けど、ケンイチ——ウチ等触ったのは一回だけにゃ……」

「えへ？」

王女を見ると、彼女も明後日の方向を見ている。

「マイレンさん、職務怠慢ですよ？」

「申し訳ございません。姫様に縛られてしまい、身動きができない状態になってしまってます……」

ああ、プリムラとメリッサがいなかったからな……。

「お城のメイドさん達は、凄い優秀な人達ばかりと思っていましたが、たまにポンコツですよね」

「……」

メイドさん達が黙ってしまった。しかし、この身体に触られるのは、なんとかしないといけないな。

だが現状じゃ、どうしようも出来ないから後回しだな……。

王女に——ここからソバナまでの距離を聞くと約100リーグ（160km）程だという。

「それなら、今日中に着けるな」

「本当かえ？」

「ええ、後は平地でしょうから。召喚獣が食べる油もたっぷりありますし」

峠にいた時に、獣人達にずっとバイオディーゼル燃料を作ってもらっていたからな。

結構な量があるし、もう大型重機を1日中使う事もないだろう。

飯も食い終わったので出発の準備。家と小屋、そしてテントを収納する。

湖畔に穴が開いたままだが、これはそのうち自然と埋まるだろう。アイテムBOXからハ〇エースを出して、皆で乗り込んだ。

「それじゃ、出発！」

「「「おうっ！」」」

来た道を引き返し街道へ戻る。

そこからは一本道——右手を見ると街道と並行するように川が流れている。

俺達がいた湖に繋がっていた川だろう。川の上には帆を張った小型の船も見える。

ここでは、川が水路として利用されているようだ。

森もないので、魔物も殆どいないのであろう。見渡す限りの小麦畑だ。

「リリース様、貴族が塩の事を言っておりましたが、ソバナ近郊で塩も取れるのですか？」

「塩は、もうちと北じゃの。バキラという小さな街で岩塩が掘られておる」

「食料豊かで、水は潤沢、塩もある——ここだけ小さな国にしたほうがいいような」

「もともとは小さな王国だったのじゃぞ。それをカダンが併合したのじゃ」

「帝国の方が近いはずですが、王国へ帰順したのは何故ですか？」

「当時の帝国は、武力を使って有無をいわず力で併合しておったからの。それに対する反発もあったのじゃろ」

ここを統めるレインリリーという家は、王家ではなくなったが、カダンから王族を娶り公爵家となっている。

王家もここを重要視している証拠だろう。

「ん？ 王家からの血が入っている公爵家って……」

「……」

王女は聞こえないふりをしている。おそらく王女の結婚のお相手は、こここの公爵家なのだろう。

時速40～50kmのスピードだったが、昼前にはソバナの街が見えてきた。

巨大な都市が国境で真っ二つになっており、ソバナと帝国側に分かれている。

国境には壁が走っている。元世界のベルリンの壁を彷彿させる。

だが城壁は一直線に見えるので、迂回すれば密入国出来そうなのだが……王女に質問してみる。

「ソバナの両脇には森がある。壁は森の中まで続いておるのじゃ。

迂回するためには森に入らねばならぬ」

そして壁は、両都市をH型に囲っていると言う。——という事は森の見えない所にも壁があるのか……。

森は都市の防衛のために敢えて残されているらしい。敵軍の侵略を阻止する防波堤の役目もあるのだろう。

それでも迂回出来るとは思うが、かなりの遠回りになるし、危険を伴うのは間違いない。

それに街や農地には水路が張り巡らされており、インフラとして利用されている。

遠回りしたりすると、橋の架かっていない水路を越えたりと困難を伴う。

街道には沢山馬車が走っているが、街の外にある運河の集積場で荷物が降ろされている。

そして水路を使って、街の中へ運び込まれているようだ。

「すごい、街が川で囲まれている」

「これがソバナの街かよ」「有名だけど、初めてきたにゃ。自慢出来るにゃ」

後ろから、アネモネや獣人達の声が聞こえる。

「賑やかで活気がありますね」

商人のプリムラはそこら辺が、やはり気になるようだ。

彼女の言うとおりに、王都などよりは活気とエネルギーに満ちている――この街は面白そうだ。

街の人口も20万ぐらいらしいので丁度いい。王都は人が集まり過ぎだな。破綻寸前って感じがするし。

峠を越えるための交通機関が、もっと整えば問題は解決するとは思うが。

だが、ここのレインリリー公爵家も、それを利用して王家に対して有利な交渉を引き出しているのかもしれない。

しかしながら、過ぎたるは及ばざるが如し――あまり無茶な要求をして、王家にそっぽを向かれると、帝国からの侵略を受けるからな。

何事もほどほどに――持ちつ持たれつが大切だ。

そのまま街の中に入る。木造、石造り、ハイブリッド——色々な形式の家が立ち並んでいるが、2階建てが多いな。

屋根の天井裏部分にも窓がある建物は3階建てって事になるんだろうか。

道も舗装されてはおらず、土が踏み固められており、その上を何台かのドライジーネが走っているのが見える。

こんな所まで広まっているのか……。でも、マロウ商会で作られたオリジナルじゃなくて、コピーだよな。

特許とか商標がないので、コピーしまくりだ。

「さて、リリース様。どこへ向かいますか？」

ハンドルを握りながら、助手席にいる王女に問う。

「レインリリー公爵家だ」

「王女殿下の婚約者様に挨拶をなさるので？」

「違う！ 宿営する場所が必要である？！ 其方達が城の裏庭を借りていたように、公爵家の隅を借りる」

否定しないって事は、ここの公爵家が王女のお相手で間違いないようだ。

「それは、ありがたいですねえ。間違いなく安全でしょうし」
「うむ」

街をぐるりと囲んでいる運河に架っている石橋を渡る。

この街、この運河に守られているので、城壁はないようだ。

「国境には城壁があるが」

「普通の城壁なら、私のアイテムBOXに入っている足場で越えられますね」

「まさに、その通りじゃが、それはやるでないぞ？ 正攻法でいくからの」

「承知いたしました」

国境の城壁を挟んで、王国側のソバナと帝国側のドンクレスウエストエンドシュタットが、背中合わせになっている。

人口はどちらも20万人ちよつと。2つ合わせれば人口50万人にも届く程の大都市って事になる。

帝国側にも穀倉地帯が広がっており、彼の国にとってもここは重要な地方らしい。

国境の城壁の真ん中に1箇所だけ大きな門が備え付けられており、そこを通じて帝国側と貿易が行われているようだ。

「国境の門を潜るためには、許可証が必要なのでしょう？」

「その通りじゃ。そのためにも公爵家に出向く必要がある」

通りに溢れる様々な人種の合間を縫ってハ○エースを走らせる。

もちろん

勿論、ゆっくりとしか走れない。その人混みの中に、背の低い髭もじやの男が見えた。

「あつ！ ドワーフみたいな髭もじやがいたな」

「ここなら、おるじゃろ」

「エルフもいますかね？」

「おるかもしれん」

そういえば、異世界だったのにドワーフもエルフもいなかったんだよな。王都にもいなかった。

ダリアやアストランティアの近くの森にも奥地にはエルフがいるって話だったんだが……。

「ぎゃー、猫人も犬人もごっちゃにゃ」「よく平気だな」

獣人達はそこが気になるようだが、これだけいたら分けていられないだろう。

「ミャレーとニャメナは、犬人と騒ぎを起こさないでくれよ」

「あいつらの出方次第にゃ」

賑やかな大通りを進み左折する。街のあちこちに流れている水路には橋が架っている。

もの凄く街並みに変化があり、観光地としてもいいかもな。

そして通りを北上すると、徐々に屋敷が立派になってきて、終点にデカイ屋敷が鎮座していた。

広い敷地に白い石造りの巨大な屋敷。中央には天守閣らしき物も見える。

元々は王国だったという事だから、小さなお城なのだろう。黒い鉄製の柵に囲まれた中には、手入れが行き届いた庭も見える。

外堀が掘られて、正門には橋が架っている。

この外堀も運河に繋がっており、水路として使用されているようだ。

「うひょー！ こいつはすげえぜ！」 「ダリアの伯爵様の屋敷よりデカいにゃ」

「地方の伯爵家と王家の血も入っているという公爵家では格が違いますよ、それにしても儲けているようですね……」

プリムラはダリアのアスクレピオス伯爵家とも付き合いがあったから、内情は知っているだろう。

商人としても——ここの公爵様がどんな商売をしているか気になるところだろう。

だが屋敷内には、人々が集まり何かをやっている様子。馬や馬車も沢山集まっているようだ。

派手な色使いの服装が見えるので、商人もいるらしい。

「さすがに、素晴らしいお屋敷でございますね。まさに王女殿下が興入れするに相応しい」

「其方——わざと言っておるじゃろ？」

「滅相もございません」

「其方は、妾の聖騎士なのだから、いざという時は守るのじゃぞ？」

「そりゃ、リリス様に何かあったら大変ですから、お守りいたしますけど」

「……」

王女は何か別の回答を期待していたのかもしれないが、普通のオッサンに過剰な期待をされても困る。

車はゆっくりと、屋敷の正面門にやってきた。俺と王女が車から降りる。

「リリス・ララ・カダン王女である！ レインリリー公爵にお目通り願おう」

「王女？」

薄い鉄板のライトアーマーを着た門番達は、信用していないようだ。

そりゃ、アポ無しだし。王女もドレスじゃなくて、乗馬ズボンだし。

「この無礼者共！」

車からメイドさん達が降りてきて、門番に食って掛かっている。

「マイレン、待つがよい！ 約束もなしに訪れてしまった、妾にも非がある」

「しかし……」

「門番よ、この指輪をもって、主のところへ行ってくるがよい。このまま、妾を追い返したりすると、其方等の首が飛ぶぞえ？」

「お、おい……」 「少々お待ちを……」

王女に気圧されたのか、門番が慌てて奥へ走っていった。

「なんという不敬な……」

「門番では妾の顔を知らぬのも仕方あるまい。あの者達を責めるのは筋違いというものじゃ」

マイレンさんは納得していないようだが、王女の言うとおりで。皆には車から降りないように伝える。

しばらく門の前で待っていると、男が2人慌てて走ってきた。金糸の刺繍が施された緑色の上下。

1人は凄く小柄で、ちょっと長めのグレーの髪、その先端がカールしている変わった髪型をしている。

その後ろにいるのは、金髪の短い頭をした普通の青年風。おそらく、この小柄な男が公爵閣下か。

その後を商人らしき人々も――余り走り慣れていないのだろう、バタバタと足音をさせながら付いてきている。

「お、王女殿下！ 大変ご無礼をいたしました――ハアハア」

「公爵、しばらくだの。ミルトニア殿もな」

公爵は走ってきたので、肩で息をしている。

「王女殿下もご壮健でなによりでございます」
「どうやら、若い方が公爵の息子――つまり、王女の婚約者候補って事になる。」

「王女殿下とは、つゆ知らず、どうかお許しを――！」
門番が2人共、地面に頭を擦りつけている。

「よいよい、突然訪ねてきた妾に非がある。地方貴族の門番では王族の顔を知らぬのも無理はない。公爵もこの者達に罰を与えたりする事のないようにな」

「ははっ！ 王女殿下のご慈悲、ありがとうございます」
屋敷の庭に入ると――公爵の後ろで商人達がずらりと、平伏した。

「随分と商人が集まっているようじゃが……」

「そ、それでございます、殿下！ ベロニカ峡谷が大崩落したという連絡を受けまして、今から調査団と実務部隊の派遣を――」

「ああ、それは既に解決した」

「は？ あの……」

いきなり、そんな事を言われても、にわかには信じがたいだろう。公爵閣下は明らかに困惑している。

「妾が指揮して、大量の土砂をどかしたのじゃ。そこにおる、ケンイチという魔導師の力を借りてな」

「ほ、本当でございますか？」

「妾が王都からやって来たのが、その証拠じゃ。妾が嘘を申しておるっても？」

「めめめ、滅相もございません」

「そうじゃ、ケンイチ！ 其方が操る、空飛ぶ召喚獣から見た動く絵があったじゃろ？」

王女の命令で、ドローンの映像を見せる事になった。

「おおっ！ これは、空から見た景色が！ 魔法でございますか？」

「うむ、妾もよくわからぬが、そのような物じゃ」

公爵親子どころか、後ろにいる商人達までが小さな液晶の動く絵を覗きこんでいる。

「た、確かに50～60カン程（100m）に渡って崩落しておりますが……これを全て、除去したのでございますか？」

「うむ！ ケンイチ、あの召喚獣も、この者達に見せてやるがよい」

「はいはい――ちよつと広く空けて下さい。巨大な物が落ちてきますので、ヒ○チさん召喚！」

俺の言葉と共に、巨大なタイヤを持つオレンジ色のホイールロー

ダーが落下してバウンドした。

「「「おおおっ！」「」」

「なんじゃこりゃ！」「鉄の召喚獣？」「見たこともない魔法じゃ！」

商人達が、目の前に現れた重機に腰を抜かしている。

「この者は独自魔法を使うからの」

王女に言われるまま、屋敷の庭でホイールローダーのデモンストレーションを行う。

皆の前で鋼鉄製の巨大なバケットを高く掲げた。

「こ、この巨大な鋼鉄の爪の中に、大量の土砂を山のように積めるのでございますね？」

公爵の息子が、ホイールローダーのバケットを見て興奮している。男だから、こういう建設機械に燃えるのかもしれない。

それは異世界人でも同じ事か。

「た、確かにこの鉄の魔獣の巨大な爪ならば、あっという間に土砂を退けるのも道理——」

「その通りじゃ。其方達が、峡谷へ派遣をする算段をしているのであれば、直ちに停止せよ。王都の貴族達もイベリスの橋の方へ、集中すると思われる」

「イベリスが、どうかしたのでございますか？」

「ああ、ここにはまだ連絡が入っておらぬのか。イベリス近郊の橋が落ちてな。峡谷の不通と合わせて、まさに王国の危機じゃったのだが！ この者——ケンイチによって、王国は救われたわけじゃ！」

「我々も、峡谷が不通になれば王都からの援軍が望めず——それが帝国側にバレれば、侵攻されるのではないかと、ヒヤヒヤしております」

「うむ、その事じゃが——峡谷が開通した事を、噂として早めに街に流した方がよいじゃろ」

何せ、この世界は情報が伝わるのが遅いからな。俺と車が速過ぎるのかもしれないが。

俺は重機から降りると、アイテムBOXへホイールローダーを収納した。

「ははっ！ 直ちに！」

公爵の部下が集められて、テキパキと指示が与えられていく。

小柄で冴えないようにみえる公爵閣下だが、中々のやり手のようだ。

「それでの、公爵」

「はい、王女殿下」

「この者は王国を救った救世主として、妾の聖騎士となった」

「そ、それは本当でございますか？」

「其方も王家に連なる者ならば、聖騎士は知っておるだろう」

「勿論でございます。王国の成り立ちに関わるものですから……しもちろん

かし、王都の円卓会議のご老人達の意向は……」

この公爵家は王族の血が入っているので、王家に伝わる何らかの秘密を知っているようだ。

「そのようなものは知らぬ！ 年寄り共の戯言じゃ。王国を救った英雄に対し、王家の祝福を与えて何が悪い！」

「確かに、そうでございますが……」

「この話はこれで終いじゃ、それでのう公爵——其方に頼みがある」

「ははっ、なんなりと」

「この者が宿営出来るように、公爵家の庭の隅を貸してもらいたい」

「それは構いませんが……王女のお連れ様であれば、正式に我が屋敷へお泊りになられてもよろしいかと存じますが」

王女に言われて、俺の家を出した。

「ア、アイテムBOXに家が入っているとは！？」

公爵の後ろにいる商人達もざわついている。そりゃ、巨大な容量のアイテムBOXは商人の垂涎の的だからな。

「家だけではないぞ？」

アイテムBOXから、レッサードラゴンとワイバーンを取り出して、皆の前に並べた。

「な、なんとワイバーンまで！」「しかも、状態が素晴らしい！」

「仕留めたてのようじゃ」

そりゃそうだ。仕留めてすぐにアイテムBOXへ入れたんだからな。

また商人達の売ってくれコールが酷いが、当然売るはずがない。そのままアイテムBOXへ収納した。

「「「ああ……」」」

商人達の残念そうな声が重なる。

「このように、鉄の召喚獣で土砂を取り除き、そこな少女が操る巨大なゴーレムで岩を放りなげ、ちよっかいを出してきたワイバーンを討伐したわけじゃ。どうじゃ？　まさに英雄——聖騎士の御業じゃろ？」

「「「ははっ！」」」

公爵と商人達が、王女の前に平伏した。

そして、つつがなく交渉は進んで、庭の一部を借りられる事になった。場所は、正面の門から左側の隅。

勿論、もちろん獣人の立ち入りも問題なし。この街は獣人が結構多いので、偏見もあまりないようだ。

力持ちの獣人は労働力として欠かせないからな。

「ケンイチ、場所を借りられて良かったですね」

「綺麗な庭だね」

アネモネとプリムラも泊まる所が出来て一安心だろう。

外で泊まるとなると、獣人達が問題になる。この街は獣人が多いようなので、一緒に泊まれる宿屋もあるかもしれないが……。

何も、宿屋に泊まって無駄金を使う必要もない。それに自分達で料理をした方が美味しいな。

「にゃーん」

森猫には間違って手を出さないように、公爵にお願いする。

「お城の次は、今度は公爵家にお泊りかよ」「信じられないにゃ」
獣人達が言うのももっともだろう。普通は敷地に入るところか、
近寄る事すら出来ないのだから。

家を一旦アイテムBOXに入れて、設置し直す。

場所は屋敷の庭の隅っこ——黒い鉄製の柵の近く。柵の向こうは
お堀なので街までは少々距離がある。

「よし！ 家と小屋を設置！ そして、テントもだな」

庭には井戸もあるようだし、この街は水路だらけだ——水に困る
事もないだろう。

宿泊の準備をしていたら、王女と公爵親子がやって来た。

「アイテムBOXに実際に住む事が出来る家が入っているとは驚き
です」

公爵親子が、俺が設置した家や小屋に驚いている。

「妾達は、この家に泊まり、あの馬なしで動く召喚獣に乗って旅を

してきたのじゃぞ？ ははは」

王女が皆が乗ってきたハ〇エースを指さした。

「信じられないような旅で御座いますな」

「うむ、このまま誰かに話しても信じてもらおう自信がない。ケンイチ、妾は公爵の所へ一泊する。そうでもしないと、彼等の面子を潰してしまう故」

その言葉を聞いた公爵親子も安堵の表情を浮かべている。

王女が訪ねてきたというのに、庭で寝泊まりしていたとなれば、良くない噂も立つ。

「やんごとなき方というのは、いろいろと大変でございますねえ」

「そういう皮肉を申すな」

王女とメイドさんは、公爵に連れられて屋敷へ向かった。

帝国への入国許可証も、公爵と交渉してくれるそうだ。彼女に任せていいだろう。

だが王女がいないという事は、おつきのメイドさん達もいないって事だ。

「それじゃ、久々に家のベッドで寝るかあ」

「わぁーい！」

アネモネが万歳ジャンプして喜んでいる。

「でも、一緒に寝られないぞ？」

「ぷー」

アネモネが顔を膨らましているが、抱きつかれるとナチュラル回復^{フル}が発動してしまうんだよ。

勘弁してもらいたい。要は腹が減らなきゃいいんだけどね。

「んゝそうだ！」

これだけ、賑やかで物が溢れている街なんだから、道具屋で良い物が売っているかもしれない。

例えば魔力を抑える的な物か何か――そもそも、この聖騎士の力が魔力と関係しているのかは解らんが……。

とりあえず試してみよう。

「街に行くの？」

俺の思いつきにアネモネが飛びついた。

「道具屋で魔導書が売っているかもしれないし、本屋もあるかもしれない」

「私も行くゝ！」

「それじゃ俺達も行くぜ！」 「ウチもにゃー！」

「プリムラはどうする？」

「私は食事の準備をしておきます。それに、貴族の屋敷内ですから問題ないと思うのですが、荷物等が心配です」

家には王女の荷物もあるので、警備の見回りをしてくれる事になっているのだが……。

「心配なら家をアイテムBOXへ一旦戻して、君も一緒にどうだ？」

「いいえ、長旅で疲れたので、ゆっくりと食事の準備をさせていただきます」

まあ、アネモネは若いし、獣人は体力お化けだ。俺も車の運転で本当は疲れているのだろうが、聖騎士のナチュラル回復ヒールのおかげで、なんともない。

これなら栄養取りまくれば、連続徹夜も平気なのではなからうか？
テーブルと調理器具を出して彼女に任せる。低温調理は時間がかかるので今日は普通でいく。

「旦那、あの肉なら普通でも絶対に美味いって!」「そうだにゃー!」

「今日は、血抜きしたレッサーの方を食べてみようぜ」

「そりゃ、どんな味か楽しみだな」「ワイバーンも美味くなったので、レッサーも美味くなっているにゃ」

まあ、血抜きしないで煮こぼした物より不味くなる事はないと思う。

——というわけで、プリムラにレッサーの肉を渡して、家と料理を任せた。

皆で歩いて、門の所へ行く。

「にゃー」

ベルもついてきた。ギルドの鑑札があるから大丈夫だとは思いますが……。

門番に袖の下を渡す。この世界では、これが効く。ケチって良い事はない。

「何日、お世話になるか解らんが、よろしく頼むよ」

彼等に小銀貨1枚(5000円)とワインを一本ずつ渡す。

「ガ、ガラスの瓶入りのワインなんて貰っていいのか?」

「ああ、よろしく頼むよ」

ガラスはそれなりに高価なので、瓶を売っても金になる。

門番に市場の場所を聞いたので、そこへ向かう。人が集まるので店も集まっているそうだ。

ラ○クルを出すと、俺達はソバナの街へと繰り出した。

107話 ソバナへ到着（後書き）

密かに連載中）

黒い穴　く底辺のオッサン、ゴミ箱と一緒に異世界に行く）

<https://ncode.syosetu.com/n6629ff/>

108話 ドワーフ

帝国との国境の街、ソバナという所に来ている。

晩飯まで時間があるので、とりあえず散策だ。プリムラは公爵の屋敷で留守番をしてもらい、皆でラ○クルプ○ドで走りだした。

人混みを縫って走るが、馬車も多い。子供の飛び出しもあるので、スピードは出せない。

何せ交通法規がない世界だ。

「おい、ありやなんだ？」 「馬なしで動いているぜ？」 「魔法か？」
あちこちから、声が聞こえる。まあ、これはどこの街でも同じなので慣れっこだな。

10分程走って、市場へ到着したので、車をアイテムBOXへ収納する。

「おおっ！」 「アイテムBOXか？」 「らしい……」

人々からのざわめきは無視して、皆で市場を歩き出す。

見渡す限りの露店が並ぶ市場、今の買い物客は晩飯の食材探しか？
色とりどりの服、色とりどりの露店の屋根、様々な人種——活気に溢れている。

辺りを見回していると、1人の男が近づいてきた。背中を丸くした、ネズミのような顔をした男だ。

ダリアにいた時もこんな男に声を掛けられた記憶が——まさか同じやつじゃないだろうか。

「旦那！ アイテムBOX持ちかい？ 良い仕事があるんだがなあ？」

「お前、ダリアにいた事がなかったか？」

男は、まじまじと俺の顔を覗きこんだ。

「え？ ……ああ！ 市場でベッドを運んでた、アイテムBOX持ちの旦那！」

「マジで本人かよ」

なんでこんな所で、こんな奴に会うんだ。

「へへへ——ここで会ったのも、何かの縁って事で」

「生憎、俺は王侯貴族との取引があるので、間に合ってるよ」

「げっ！？ 王侯貴族？」

「ああ」

一応、驚いた男ではあったが、簡単には引き下がらないようだ。

「旦那、冗談は言いっこなしですよ？ 貴族様の名前を騙るだけで

罪になるのに、王族って」

「本当だからな。今も、ここの領主のレインリリー公爵の屋敷に滞在している」

「ほ、本物かよ……！」

男は捨て台詞を吐くと、人混みの中へ消えていった。どうやら俺が成り上がったのが、気に入らない様子だったが、そんなの知るか。

そのまま、皆と一緒に露店の並ぶ市場を歩く。今度は、俺達と一緒に歩いている、森猫のベルが注目の的だ。

「森猫だぞ？」 「見事なもんだな……」 「かなりの高齢だと思うが……」

高齢なのか？ 他の森猫を見た事がないからな。

「ミャレー、他の森猫って見たことがあるのか？」

「森の中では、あるにゃ」

「ベルの大きさは、それと比較してどうなんだ？」

「この森猫は、かなり大きいにゃ」

そうなのか——それじゃ、もしかして高齢なのかもしれないな。

その前に、森猫がどのくらい生きるのかも解らないし。

ベルと同じぐらいの大きさだと元世界の豹か。でも、彼等も家猫と同じぐらいか、若干長いぐらいの寿命だったはず……。

そんな事を考えながら歩いていると、デカイ身体の獣人に囲まれた。

柄は虎柄、白黒、ハチワレ——様々の猫人だ。周りには犬人もいるのだが、争いや揉め事が起きている節はない。

「その森猫様は、旦那の眷属かい？」

「そうだ」

「頼む、拝ませてくれ！　こんな場所で森猫様に会ったのも、何かの運命に違いねえ」

「それは良いが……」

ベルは、獣人達の前で、凜と座っておすましポーズをとっている。

「「へへっ！」「」」

その前で、獣人達が土下座して拝み始めた。やれやれ——と思うのだが、こんな所に普通は森猫はいないからなあ。

東京の真ん中で、神様の使いに会ったようなもんだろう。そう考えると彼等の気持ちも解る。

「ミャレーやニャメナは拝んだりしないな」

「そんな事ないにゃよ。いつも森猫には敬意を払っているにゃ」

「そうだよ、旦那」

まあ、彼女達はいつも一緒にいるからな。その度にペコペコするわけにはいかないか……。

ついでに、拝んでいる獣人達から、道具屋の場所を聞く。地元の事は地元の人間に聞くのが一番。

本屋もあれば良いんだが——王女に聞いたところ、この世界に本は少なく、専用の本屋ってのは滅多にないようだ。

本屋の代わりになっているのが、ダリアの爺さんや、スノーフレーク婆さんの所のような道具屋だ。

道具屋といっても、何でも屋に近いんだけどな。

本が多いと言ったら、お城にあったような王侯貴族の書庫。もしくは大学の図書館が確実らしい。

獣人達に教えてもらった道具屋にやって来た。古めかしい2階建ての石造り。建物の半分を蔦が覆^{つた}っている。

「ちわー」

ドアを開けると、チリンチリンと音がする。ベルには、ドアのところで待っててもらおう事に。

店の中は雑多なアイテムで一杯。家具まで置いてある——まさしく道具屋だ。

「いらっしゃーい。あら、見かけない顔ねえ」

出迎えてくれたのは黒いドレスを着た、色っぽい女性。歳は40過ぎてるな。

小さなカウンター越しに、気だるそうに座っている。

歳の割には胸の谷間を見せているし、スカートのスリットからは、脚も出ている。

無理すんなBBAと言いたいところだが、なかなか似合っているので、これはこれでよしとしよう。

この世界はあまり化粧は発達していないので、化ける事は出来な

い。

この女は格好からして魔導師なのだろう。

「今日、この街へやって来たばかりだ」

「あら、そう……」

「ちょっと聞きたいんだが、魔力を抑える道具ってのはないか？」

「魔力を抑える——うーん」

「ないかな？」

「うふふ……あるんだなあ、これが」

女は、戸棚の薄く重なった引き出しの一つから、銀色の指輪を出した。

表面に何やら、細かい文字や模様が彫られている。

「この指輪がそうなのか？」

「この国じゃ、需要がないんだけどお、おとなりの帝国じゃ、よくある道具なのよねえ」

「ああ——帝国じゃ魔力があるとバレると、強制的に徴発されるんだっけ？」

「そうなのよ。それで、こういう道具を使って、徴発を免れるってわけ」

「それじゃ、これは帝国産か……」

「そゆこと」

アイテム自体が帝国から流れてきたか、それとも帝国から亡命した奴が不要になったので売ったか……。

「値段は？」

「銀貨2枚（10万円）」

「その値段なら、買いたいが……試してみてもいいか？ 使えないのを買っても仕方ないからな」

「いいわよ」

店主の話では、指輪の他にイヤリングやネックレス等もあるという。

指のサイズは——左手の人差し指に丁度いい感じだ。
アネモネを呼んで、彼女の頭を撫なでてみる。

「どうだ？」

「……つまんない……」

「それでいいんだよ、その歳で変な事を覚えられたら困るし」

「私は大人だから！」

「そこんところ、年長者のお姉さんの意見はどう？」

「ん？ 詳しい事情は解らないけど、察するに——もうちょっと待った方がいいかなあ……身体も小さいしい。私も女だから気持ちはわかるけどね」

「ふん」

アネモネは横を向いてしまったが、指輪の効果はあるようだ。

——ということは、王家の力ってやつも魔法の一種なのか？

「はっ！」

俺は慌てて、シャングリ・ラを開いてみた。大丈夫だ——いつもと同じように使える。

そしてアイテムBOXも使えるようだ。

これらから、シャングリ・ラとアイテムBOXは普通の魔法とは関係はないようだな。

そういえば、魔法が全く使えないマロウさんもアイテムBOX持ちだしなあ……。

王妃も魔法が使えないようだが、アイテムBOXを持っているという話だし。

だが指輪が使えるのは解った——購入する。

「はい、銀貨2枚」

「毎度〜！ 金払いのいい客は大好きさ。他に何か欲しい物はないかい？ 色々と出してあげるよ」

「それじゃ、魔導書はないか？」

プロテクション
「聖なる盾ならあるよ、金貨20枚（400万円）」

「よっしゃ！ 買った！」

「ほ、本当かい！」

女性が黒いドレスを翻して、カウンターから出てきて、俺に抱きついた。

「随分と気前がいいじゃないか。金を持ってるなら、私も雇わないかい？」

「ウチには小さな大魔導師様がいるから、間に合ってるな」
だが、俺に抱きついた女に、獣人達が毛を逆立てた。

「このBBA何やってるにゃ！」 「ざけんなぁ！」

「暗闇から伸びる漆黒の鳶^{つた}よ、生きとし生けるものを絡めとり、その動きを封じよ——拘束^{バインド}！」

女の言葉と共に、獣人達が金縛りに遭ったかのように動かなくなつた。

「へえ、そういう魔法もあるんだ」

「激しく動く相手にゃ、使えないけどね。物がデカイと数秒しか止められないし」

そう言ってるうちに獣人達が動き始めた。

「しかし、攻撃する間は十分にあるな」

「まあ、そういう魔法だからね」

「くそ、離れやがれBBA！」 「そうだにゃ！」

「まあまあ、待て待て。魔法の話を聞いているところだから」

この世界は情報源が少ないからな。僅かな情報でも、機会を逃さ

ず集めていかないと。

「ねえ？ その指輪がないと、どういう事になるの？ ちょっと興味があるんだけど？」

「やめとけ、オススメしないぞ」

「いいからあ」

女が俺の首に腕を回してきたので、指輪を外して胸をもむ。すると女は、すぐに俺から離れてしゃがみこんだ。

「おほっ！ やだ！ これはヤバイじゃないの！ 上がった生理がまた来そう！」

「子供の前でそういう事を言うんじゃない」
指輪を指に戻したが、これは使える。

「魔導書の登録は1週間ぐらい掛かるんだよね？ この街にいつまでいるか解らん。急いでやってもらえるか？」

そう言って、金貨を21枚出した。

「上客の頼みじゃ仕方ないねえ。私と一晚付き合ってもらえれば、明後日には出来ると思うけど？」

「いや、妻もいるので、それは遠慮しておく」

「なんだい、獣人の女を2人も囲っているのに、随分と堅いねえ。

あの森猫もあんたのなんでしょ？」

「そうだけど、森猫も勘定にいれるなよ」

まあ、もうちょっと若い女なら、俺の気持ちも揺らぐんだけどな。

「むう……」

アネモネが睨んでいるので、ここら辺にしておく。

ついでに、ドワーフがやっている鍛冶屋の場所を教えてもらった。ちよっと通りから離れた場所にあるらしい。

俺がアイテムBOXから出した紙に、地図を描いてもらう。

「ドワーフは気難しいから、気をつけな」

職人の爺さんって、そんな感じはするよな。

俺が持っている紙を女が欲しがっていたので、ついでに売ってやった。これで魔導書の登録もすぐにやってくれるだろう。

彼女曰く、今日の稼ぎは店の3ヶ月分の利益らしいからな。

ドワーフの鍛冶屋は、それほど離れた場所ではないので、歩いていく事にした。

途中に、アクセサリーの店を見かける。

うーん——たまには、プリムラに贈り物をした方がいいかな？

だが、アクセサリーならシャングリ・ラで買った方が良い物が買える。

真珠は拙い^{まず}だろうが、その他の宝飾でもクオリティが段違いだ。この世界では実現するのに、多大な金と時間がかかりそうな物がすぐに買えるのだから。

「アネモネも何か装飾品が欲しいか？」

「魔導書を買ってもらったからいらない。本も一杯読ませてもらっているし」

「獣人が装飾品ってのは、あまり見たことがないな」

「動く時に邪魔になるだけだぜ」「そうにゃ」

だが、ゴブリンを倒した時に手伝ってくれた獣人が動物の牙か何かで作ったネックレスをしていた。

「そういうのはあるにゃ。デカイ獲物を仕留めた記念に作るにゃ」

「それなら、ワイバーンの歯とかで作るか？ 穴開けて紐を通すだけだろ？」

「旦那、それが結構大変なんだけど……」

まあ、この世界にはドリルじゃなくて、ギリしかないからな。獣人じゃギリも持っていないだろうし。

「欲しいなら、俺が作ってやるよ」

「本当かい？」 「にゃ？」

「ああ」

「やったぜ！」 「にゃー！」

そんなに喜ぶとは思わなかった。

はしゃいでいる獣人達を引き連れ道を進み、運河に架っている橋を渡る。

道の途中でも、ベルを見かけた獣人達がペコペコとお辞儀をしてくる。

道具屋でもらった地図の通り、それらしい鍛冶屋があった。

分厚い屋根の2階建ての建物。石造りで奥に長い造り。そこが鍛冶場になっているのだろう。

鉄を叩く音も聞こえる。周りにも住宅があるようなのだが、1日中この音が鳴り響いてて大丈夫なのだろうか？

だが俺の目を引いたのは、店の正面玄関に飾られた、巨大な剣。刃渡りは3m以上あるだろうか？

「でっかい剣にゃ！」 「こんなの飾りのナマクラだろ？」

「けど、ちゃんと研がれて刃もついているように見えるが……」

サジも浮いてないし手入れもされている。それに刃先に何か黒い物が割り込まれている。なんだろうか？

店の中に入る。板の床――そして白い壁は漆喰だろうか？

所狭しと武器や防具が並んでいる。何やら店内に漂う焦げ臭さと、鉄と油の臭い。

一緒にやってきたベルは、玄関の扉の横に座り込んだ。

「良いのがあったら、買ってやるぞ」

「本当にゃ？」

「いや、旦那あ——防具や武器まで買ってもらっちゃ、俺達の金の使うところがますますなくなるじゃねか」

「細かい事は気にするなっの」

「いや旦那！ 全然細かいから！」

いかにも商品を購入しそうな俺達を見て、揉み手をしながら店員がやってきた。

分厚いズボンと麻のエプロンをした、その男は普通の人間で、ドワーフではない。

「何かお探でしょうか？」

「ケンイチ、これがいいにゃ！」

ミヤレーが指さしたのは、軽そうなレザーアーマー。だが要所には鋼板の補強が入っている。

見るからに物が良くて——ダリアやアストランティア辺りで売っていた物とは造りが違う。

「それは、金貨2枚（40万円）となっております」

「げ！ 金貨2枚にゃ？」

「ミヤレーは驚くけど、この造りは凄いぞ？ これなら高くても当然だと思う」

「みゅみゅみゅ」

「そんな悩むなよ、金は俺が出すんだから。よし、これをくれ。ミヤレー、合わせはどうする？」

「そ、それは自分でやるにゃ……いいのかにゃ？」

「いいって」

だが、一方では別の黒いライトアーマーの前でニヤメナが唸って

いる。

「そちらは、魔法防御が織り込まれた逸品でして、金貨3枚となっております」

「金貨3枚って、俺の半年分の稼ぎ……」

「よし、これをくれ」

あっさりと決断を下した俺に、ニヤメナが口をパクパクさせている。

「ちょ、ちよつと……旦那」

「ん？ 要らないのか？」

「いや、欲しいんだけど……」

「こちらも合わせは自分でやる」

「承知いたしました」

店員に金貨5枚を支払って、アーマーをアイテムBOXへ入れる。

「ほう！ アイテムBOXですか？」

「ああ」

「旦那、大事にするぜ……」「にゃー！」

「道具なんて使ってなんぼだ。でも物が良いから、直しながらでも一生使えるかもな」

「当店でも自信を持ってオススメ出来ます」

金払いがいいところを見せて、本題に移る。

「店の外に飾ってある馬鹿でかい剣は、ちゃんと鍛えてあるのかい？」

「はい、勿論ですよ。ここの親方が丹精込めた逸品です」

「幾らだ？」

「はい？」

店員は何か信じられない事を聞いたような顔をしている。

「だから、あの剣の値段だよ」

「えゝあのゝ？」

「売り物じゃないのか？」

「し、少々お待ちを——親方あゝ！」

店員は奥へ走って行ってしまった。

「ええ？ 旦那、マジで買うのかい？」 「にゃ？」

「ああ、あれは俺でも絶対に作れないからな。金を払う価値がある」
元世界でも、作れるかな？ 動画サイトで巨大な剣を作る映像を見た事あったから、作れるのかもしれない。

だが元世界では、分厚い鋼板やらが普通に売っているから作れるのであって、巨大な剣を一から鍛造となると簡単にはいかないだろう。

そして奥から背の低い男がやって来た。鋭い眼光と長い髭、浅黒い肌、そしてミャレー達のレストランぐらいある極太な腕。

髪の毛は黒だな——だが、光の加減で青っぽくも見える。

「あんたか？ 物好きってのは？」

「ああ、外のあれは売り物なんだろう？」

「その前に買ってどうする？」

男は鋭い眼光を飛ばして俺をジロリと見た。

「俺の召喚獣に持たせて使う」

「ああ？ 召喚獣だと？」

ドワーフは長い髭を撫でているが——信用してない顔だ。

「ちょっと広めの場所はないか？ 見せてやる」

「あんた魔導師か？」

「まあな」

男が奥の扉を開けると、それについていく。すると横の空き地に出た。

どうやら、材料や燃料の木炭などの集積場みたいだな。だが、コ○ツさんを出すスペースはなんとかなりそう。

「よし！ 我が呼びかけに深淵より現れよ！ コ○ツさん召喚！」
俺の言葉に導かれて、空中から巨大な黄色い重機が現れて、地面を揺らした。

「な、なんじゃこりゃ！！」

「だから、俺の召喚獣だよ。今、動かしてやる」
運転席に乗り込むと、エンジン始動。車体をスイングさせて、長い鋼鉄の腕を振り回した。

「こいつは、おったまげたぜ。鋼鉄の魔獣とは……」
エンジンを止めて、ドワーフに説明をする。

「この召喚獣に、あの巨大な剣を持たせて、魔物を退治しようかと思っただけ」

「た、確かに、こいつならあの剣を振れるだろうよ。それに、あいつの刃先はアダマントタイトだ、竜の鱗だって切れる」

ファンタジー物質、アダマントタイトキター！ 刃先に割り込みしてあった黒い物質はアダマントタイトか。

「ドラゴンって、レッサーとかじゃなくて、本物か？」

「ああ、自信があるぜ」

騒ぎに、鍛冶場にいた他のドワーフ達もやってきた。

「見物人が多いんで、俺が仕留めた獲物も見せてやろう」

アイテムBOXから、レッサードラゴンとワイバーンを取り出した。

「「おおおっ！」」

「レッサーか？」「こっちはワイバーンか?!」「すごい……」

「血抜きをして少し食っちゃったがな、ははは」

「あんたがやったのか？」

「ああ、その獣人達と、その小さい大魔導師様と一緒に
ドワーフ達の視線がアネモネに集中する。」

「こんな小さな子供が大魔導師？」

「ああ、爆裂魔法^{エクスプロージョン}も、憤怒の炎^{ファイヤーボール}も使えるし、巨大なゴーレムも動かせる」

「……」

「これで、売ってもらえるか？」

ドワーフ達が顔を見合わせている。

「……ちよっと、中で話そうや」

彼等の顔を見ると、あまり嬉しくない様子。何か事情があるようだ。

店の中に戻ると、カウンター越しにドワーフの親方と話す。

「値段は金貨300枚(6000万円)だ」

「大丈夫だ。手持ちはあるから今にでも払える」

「「おおっ」」

だが、ドワーフ達の表情は冴えない。

「何か事情があるのか？」

「ああ、あいつを渡すなら、ちよいと仕上げをしたい」

「それなら少々待つが……」

「いや、仕事で注文打ちがまとめて入っていてな、材料鋼材が足りねえんだ……それで、同業者に頭を下げるぐらいなら、あいつを潰して材料にしようかと話し合っていたところなんだよ」

なるほど、ドワーフ達の冴えない表情はその心配をしていたせい
か。

「勿体ない」

「俺も腕試しに作ったんで、愛着はあるんだが……背に腹は代えられねえ」

「それじゃ、鉄の材料があればいいんだな？」

「まあな」

鉄か——シャングリ・ラにナイフ鋼材は売っているが……。ちょっとオーバーテクノロジーだし、値段が高い。

——といいつつ、男爵様には渡してしまったが。

H鋼とか鉄道のレールがいいんだけどなあ。とりあえず、シャングリ・ラで検索しても見つからず。

後、巨大な鉄の塊とか鋼板っていったら何があるかな……。

「あの森猫も、あんたの眷属かい？」

「ああ……」

そうだ！ 重機ドーザーブレードの排土板はどうだ？ あれは鋼鉄だろ？

何も新品を買う必要はない。鋼材として使うなら、錆びてボロボロの中古でいいんだ。

早速、シャングリ・ラで検索を掛ける——あった。2 m×0.8 m程の中古の排土板ドーザーブレード。

サビサビで塗装も剥げてボロボロだが、火にくべて打ち直すのだから関係ない——値段は10万円だ。

「親方、俺のアイテムBOXに材料に使えそうな物が入っている。見てみるかい？」

「なんだって?!」

親方と他のドワーフも引き連れて、再び空き地へ。そこへ、シャングリ・ラから買った排土板を出した。

「「「おおおっ!」」」

「これが使えないか? 材料は鋼鉄だと思っただが……」
ドワーフ達が、排土板をゴンゴンと金槌で叩いている。

「こりゃ、確かに鋼鉄だ」

「使えそうか?」

「そりゃ使えるが——こんな物をいっただうやって作ったんだ? こんな物を作る職人を抱えているなら、そいつにデカイ剣を作らせればいいじゃねえか」

「生憎、人間の鍛冶は、ドワーフ程長生きじゃなくなてな」

「……そ、そりゃそうだな……」

「それに、アダマタイトなんて、加工出来なかったし」

「それについては、俺も自信がある。あいつを加工出来るのは、ここら辺じゃ俺だけだ」

シャングリ・ラにもアダマタイトなんて売ってないからな。

それに、ファンタジー物質をシャングリ・ラの買い取りに入れたらどうなるんだろう? 興味は尽きない。

だが部下のドワーフ達は異議があるようだ。

「しかし親方、こんなデカブツを放り込める炉はありませんぜ?」

「あの剣は、どうやって作ったんだ?」

俺の疑問に親方が答えた。

「ありゃ、専用の炉をこさえたんだよ。若気の至りだったなあ——あんなすげえもんを作るって自惚れてた」

「いや十分に凄いと思うが」

「しかし世の中には、こんなすげえもんを作れる奴がいるって解っただけでも、感謝するぜ」

このドワーフ達は重機を見て、どう思ったのだろうか？ 石のゴレムが動く世界なら、鉄の生き物がいてもおかしくない——そんな感じだろうか？

それはさておき——排土板は、このままじゃ使えないか……。さて、どうするか？

109話 プラズマカッター

国境の街ソバナへやって来ている。峠を埋めていた土砂は取り除いたし、仕事は終わった。

せっかく知らない街へやって来たんだ、市場を探索したり買い物をしたりと、観光を楽しんでいる。

その途中、ドワーフが経営している鍛冶屋を見つけた。獣人達に素晴らしい装備を買ってやりたりしたが、俺のお目当ては店の看板代わりに使われていた巨大な剣。

こいつを重機に装着してみようと考えたわけだ。

だが、店で受けた注文品の製作が、材料不足で滞っていると言う。そのため、店の看板である巨大な剣を潰して材料にしてしまおうと、彼等は考えたようだ。

俺は、シャングリ・ラから中古の排土板ドーザーブレードを購入してドワーフに材料として譲り、その代わりにあの巨大な剣を購入しようと考えた。だが重機用の排土板は大きすぎ、この店の炉に入らないというーそうになると、カッターするしかないのだが……。

「さて、どうするか？」

どうするといっても、カッターするしかないが。何を使ったらいいか？

ディスクグラインダー？ エアソー？ こんな分厚い鋼板をカッター出来ないだろう。

うーん、こういう時は、やはりプラズマカッターだろう。

プラズマカッターってのは、文字通り高電圧でプラズマ化した空気を吹き付けて、数万度の超高温で母材を切断する装置である。

原理は凄そうだが、普通にホームセンター等で買えるし、当然シヤングリ・ラにも売ってる。

以前に買ったプラズマカッターを、アイテムBOXから取り出して使ってみる。

一緒に、青い発電機とコンプレッサーも取り出す。

「なんじゃ？」 「魔法か？」

ドワーフ達からも声があがるのだが――試してみた結果は完全なパワー不足。

――となると……もつと性能の良い機械を買わないとダメだな。

俺は日本の某有名メーカー製の70万円程の機種に狙いを定めた。家電で有名だが、こういう機械も作っているのね。

高い買い物だが、金はあるし魔導書より安い。

シヤングリラの説明を読むと、40mmまでの軟鋼が切断可能だと書いてある。鋼板だともう少し性能が落ちるようだ。

だが、カタログスペックの40mmって数値は、綺麗に切れるってことだ。ただぶった切ればいいのなら、もっと厚くてもOKだろう。

こいつは200V用だが、青い発電機は200Vも出力出来る――問題なし。

よし、これだな。

「ポチッとな」

ドスっと、空中から灰色の機械が落ちてきた。早速、発電機とコンプレッサーをプラズマカッターに接続した。

3台の機械のスイッチをいれて、排土板にアースを接続する。

そしてノズルのトリガーを引くと、青く眩いプラズマが吹き出す。

「「「おおっ！」「」」

「この魔道具で、この鉄板を切ってやるから」

「そ、そんな事が出来るのか？」

「まあ、見てろ」

青い光を出したまま、排土板に当てる――盛大にオレンジ色の火花を散らして、向こう側へ貫通した。

もう本当に火花が滝のように出る。吹き出し花火の全開シートのよう。

「「うああ！ なんじゃこりゃ？！」」

「にゃー！」「こりゃすげえ！」

周りは騒いでいるが、十分に使える。そのままプラズマのノズルを下へずらしていくと、それを追うように火花が吹き出す。

「よっしゃ、いけるぞ」

そのままゆっくりと――10分程で排土板から細長い鋼鉄の塊を切り出した。

「ほら、これなら炉に入るだろ？」

俺はドワーフ達に、短冊形の鋼板を差し出した。

「おおっ！ 親方、こりゃいけるぜ？」

「この調子で、この鋼鉄の塊を全部細長く切ってやる」

「ありがてえ！」

「上手くいったら、あの剣を売ってくれよな」

「もちろんだ！ おう！ 野郎ども！ 早速、仕事に掛かりやがれ！」

「「おう！」」

声がデカイ！ それに怖い。

「旦那！ そんな鉄の塊が簡単に切れちゃうなんて、もしかして人

間も切れるのかい？」

「いや、これは鉄しか切れない」

要は電流を流して、プラズマを発生させているので、電流が流れないものではプラズマアークが発生しない。

だが、プレートアーマーにアースして、プラズマを当てれば裏側に貫通するだろうから——数万度の超高温のプラズマで、切れなくても火傷は間違いないだろうと思う。

もちろん勿論、ピッタリと密着しないとダメだし、当然武器としては使えない。

「だが、もしかして、ドラゴンの鱗は貫通出来るかも……」

薄い鉄板を買って、レッサードラゴンの鱗をサンドイッチにする。そして、アース線をつないで、ノズルのトリガーを引く。

凄まじい火花と共に、鉄板ごとドラゴンの鱗を青い光が貫通した。そりゃ、青いトーチの温度は数万度だからな。例えばこれがセラミックだって穴が開くだろう。

「ええっ？ レッサードラゴンの鱗を貫通したのかい、旦那!？」

「ああ、みたいだな。だが、こいつを武器にするのはちょっと難しいぞ?」

「なんてこったい！ こいつはたまげたな……」

ドワーフ達も驚く、プラズマの威力——だが、そんなことより作業を続けなくては。

「ミヤレーとニヤメナ。一足先に帰って、俺の帰りが遅くなると、プリムラに言ってくれ。多分、暗くなる前には帰ると思うから」

「解ったにゃ!」 「お嬢には、旦那の悪い癖が出たと言っておくよ」 「そうしてくれ。アネモネはどうする?」

「ケンイチと一緒にいる」

獣人達に、買ったアーマーをどうするか尋ねる。

「旦那のアイテムBOXの中でいいよ。この街の中で使う事もないだろうし」

「そうだにゃ」

「暇な時に、じっくりと直す事にするよ」

「にゃ」

「帰り道は解るのか？」

「にゃはは、獣人が道に迷う事はないにゃ」 「そうだよ、旦那」

鋭い鼻で臭いにも敏感なのだが、方角が勘で解るらしい。帰巢本能なのだろうか？

獣人達を見送り、アネモネにタブレットを渡す。彼女のやる事はないので、隅っこで本を読むようだ。

ついでに玄関の所でじっとしていた、ベルもアネモネの傍へ座らせた。彼女も店の中よりは、ここの方が落ち着く様子。

だが、暇そうに大きなあくびをしている。

作業に戻ろうとしたのだが、あることを思い出した。

「そういえば――ドワーフっていえば酒だろう？ 景気付けに酒もやろうか？」

「あんた、酒も持っているのか？」

「ああ――多分、この世で一番強い酒も持ってるぞ？」

「なにい？ この世界で一番強いっていえば、ドワーフの火酒だろうが。それよりも強いってのか？」

「まあ多分」

「おもしれえ、そんな酒があるってのなら見せてもらおうじゃねえか。もし本当なら、あの剣の代金を半額にしてやるよ」

もちろん
勿論、この排土板の事を含めてだ。

俺はシャングリ・ラである酒を検索して、購入――ドワーフの親方に手渡した。

「これだ」

スクリューキャップをひねって渡す。

「ガラスのビンか——えらい高そうだな……」

親方は瓶の酒を一口あおると、息を思いつきり吐き出した。

「どうだ？」

「どわああああ！ なんじゃこりゃ！ ドワーフの火酒が焚き火なら、こいつは溶鉱炉だぜ！ わっはっはっ！」

それもそのはず、俺が手渡したのはスピ〇タス、アルコール度数96%の酒だ。

この世界で、こんな度数の酒は作れまい——いや、俺が持っている液体成分を分ける魔道具なら作れるな。

道具はあるのに、そういう酒は作られていないんだろうか？ それとも、水とアルコールの概念がないのかもしれない。

「こんなのをどうやって作ってる？」

「錬金術を使って酒精を圧縮している」

「ははあ——なるほどなあ」

一応、納得はしているようだ。ドワーフで錬金術をやる人間がいれば、これをヒントに新しい酒が出来るかもしれない。

だが、親方の酒を見た他のドワーフ達がそわそわしている。酒に目がないドワーフ達は、見たこともない酒に興味津々のようだ。

「それじゃ、皆に一本ずつやるよ」

「え？ いいのか？」

「仕事が捗れば、俺が剣を持って帰るのも早くなるだろう？」

皆にスピ〇タスとウォトカと一本ずつ配る。親方を入れて7人だ。酒は1本2000円ぐらいだな。

全部で2万8000円——あんな凄惨な剣が手に入るなら安いものだ。

「どひゃああ！ 親方の言うとおりの口の中が溶鉱炉だぜ！」 「こりやすげえ！ 息に火が点きそうだぜ！」

「ああ、本当に火が点くと思うんで、作業場では飲まない方がいいと思うぞ。火だるまになる」

「マジか？」

ウイスキーも火が点くし、ウオトカも燃える。度数96%の酒じゃ、アルコール燃料と変わらない。

しかも青い火なので、燃えているのがよく解らないし危険だ。

皆に酒を渡した後、排土板の切断作業を続ける。短冊形を切り出すのに約10分。12本分割ぐらいにすればいいだろう。

残り11本なので、10回切断すりゃいいから100分掛かる——諸々含めて約2時間か。

ミヤレーとニヤメナを先に帰らせたが、日が暮れるまでには屋敷に帰れるな。

ノズルの先端は消耗品らしいので、1回交換したが、後はノントラブル。

さすが高価な日本製。だが故障しても、クレームを入れる場所もないし、修理も出来ない。

新しいのを買うしかない状況なのは仕方ない。

こんな異世界で、シャングリ・ラなんて通販サイトを使えるだけでも、ありえない事なのだから。

「親方、切断作業が終わったぞ」

「本当か？」

「ああ、あれなら炉に放り込めるだろう」

「いや、全くありがたいえ！」

「俺の剣も仕上げてくれよな」

「3日程待ってくれ。作業の間に仕上げをやっておく」

親方の話では、ドワーフの魔法を使って、アダマントタイトをどうにかするらしい。

ここら辺は企業秘密らしくて、教えてもらえなかった。

「それじゃ頼んだよ。ベル、アネモネ！ 帰ろうぜ」

「にゃー！」

「うん！」

店の前にラ○クルプ○ドをアイテムBOXから出す。

「おっ！ それも、あんたの召喚獣なのか？」

「ああ、言うとおりで走って、人と物を運んでくれる」

「便利な奴だな」

俺が運転席に乗り込むと、アネモネとベルは助手席に乗り込んだ。大分、日が傾いているが、まだライトを点けなくても大丈夫だろうか。明かりをつけて走ったら騒ぎになるかな？

まあ、早めに帰るとするか。

ドワーフの親方に別れの挨拶をして、車を発進させた。

うっすらと暗い街の中を車で走る。所々に灯油式のランプのオレンジ色の光が見える。

青い光は魔法の光だというのが、ここで見た限りでは見えない。市場に近づく、人通りが多くなったので、一旦車を降りて歩く事にした。

「さて、道は覚えているかな？」

「にゃー」

ベルが俺達の先頭を歩き始めた。どうやら道は彼女が知っているらしい。

だが、後ろを見ると――ぞろぞろ獣人達がついてくる。

「おわっ！　なんだ、お前等？」

「いやあ、森猫様についていくと、何かあるのかな？　——と思いやして……」

「何もないぞ、宿泊している場所に帰る所だ。道を忘れたようなので、森猫に案内をしてもらっている」

「旦那、どこに泊まってるんでやす？」

「公爵家の敷地だ」

「「「ええっ！？」」」

獣人達が、一斉に驚く。

「旦那、何か偉い人なんで？」

「俺と彼女は魔導師だ。森猫は俺の眷属」

「「「へえっ！」」」

「森猫の顔が見たいなら、屋敷の近くに来れば、見られるかもな」
獣人達を引き連れて、しばらく歩くと——公爵家へ続く大通りに
出た。

「おおっ！　ありがとうベル！　ここからなら解る」

再びアイテムBOXから車を出すと、皆で乗り込む。かなり暗くなったので、ヘッドライトを点灯した。

獣人達と、周りの住民達がざわざわと驚いているが、大騒ぎには
ならないようだ。

光よ！^{ライト}の魔法か何かだと思っているのだろう。

「それじゃな」

「その乗り物も、旦那の魔法で？」

「ああ、好きな所に運んでくれる、俺の召喚獣だ」

「「「へえっ！」」」

獣人達に別れを告げて、大通りを走りだした。

人も馬車も多いが、道が広いので走りやすい。数分で屋敷に到着した。

だが、後ろをみると、獣人達がついてきている。俺が、本当に公爵の屋敷に泊まっているか、確認をしたいのかもしれない。

門番に門を開けてもらうと、屋敷の中へ入った。酒や袖の下を渡してあるので、対応は速やかだ。

門番が交代したら、そいつらにも渡した方がいいだろう。

この世界では、こういうのがよく利く。

「おおーい！ 帰ってきたぞ」

車を降りると、留守番していた3人は椅子に座ってまったりとしていた。

公爵邸の庭の隅、黒い鉄柵の側に置いた家と小屋の前に並ぶ、白いテール。

辺りは、もう暗くなっている。

「あ、帰ってきたにゃ」「クロ助、俺の勝ちだな」

「ちえにゃ」

2人の会話からすると、何か賭けをしていたらしい。

「何を賭けてたんだ？」

「旦那が、ドワーフの所に泊まってくるか、賭けてたんだよ」

「ケンイチの事だから、ドワーフと鍛冶や魔法の事で話し込んで帰ってこないと思ってたのににゃ」

「作業が早く終わったんでな」

俺達が話している間に、プリムラが食事の用意をしてくれた。

ベルには、猫缶とプリムラが焼いてくれた魔物の肉。

「ありがとう、プリムラ」

メニューはレッサードラゴンのスープと、焼きレッサードラゴン。そして、シャングリ・ラから買ったパン。

焼きドラゴンは、サイトで買った焼き肉のタレで食う。

やっぱり、きちんと血抜きをした肉は美味い。殆どが赤みで脂はないけどな。

肉を噛むと、肉汁と旨味が口の中に広がって、タレと渾然一体となる。

「彼女達の話だと、巨大な剣を買ったそうですが……？」

「召喚獣に持たせる武器にしようかと思ってな」

「あの剣を振り回したら、大木だって一刀両断だな、旦那」

「刃先はアダマンタイトらしいから、ドラゴンだって切れるかもな」

「ひょーっ！　すげえ！」

獣人達のはしゃぎ回っている。まあ実際に使うとなると、ちょっと厳しいかもな。

だが、男のロマンが俺を呼んでいる。まあ、プリムラは少々理解に苦しんでいるようだ。

ここは、ちょっとご機嫌をとったほうがいいか？　それに獣人達にはライトアーマーを――アネモネには魔導書を買ってあげた。

プリムラにも何かプレゼントしないと不公平だろう。

シャングリ・ラでネックレスを検索。この世界は真珠が貴重なようだから、1つ玉のネックレスがいいかな。

小さなダイヤが入った三日月の下に真珠がぶら下がったデザイン
の物を購入――チェーンは18Kで値段は1万円だな。

大きい真珠でも、中身はプラスチックの玉。それを真珠が覆っているだけだからな。

真珠の層が厚いほど、輝きに深みが増し、そして高価。

「プリムラにこれをやるよ」

俺が差し出した真珠にプリムラが驚いた。

「し、真珠ですか？　これを私に？」

「ズラリと繋がった物は国宝級だが、1つ玉なら大丈夫だろう」

「でも、ものすごく高価な物じゃ……」

彼女が昇ったばかりの半月に、真珠をかざしている。

「ミヤレーとニヤメナには鎧を買ってやったし、アネモネには魔導書を買ったんだ。君にも何か贈り物をしないと不公平だろ？」

「もっと、安い物でもいいのですが……」

「まあまあ、貰ってくれよ」

「ありがとうございます」

プリムラが喜んでくれて良かった。

そういえば獣人達にもネックレスを作ってやると約束したな。

――食事の後、ワイバーンの屍かばねをアイテムBOXから出した。

まずは金ノコで牙を切るのだが、デカイ！　牙だけで10cmぐらいある。

そして中の歯髄をほじくり出した後、アイテムBOXからボール盤を出して穴を開ければいい。

獣人達が俺の作業をじっと見つめている。

「ケンイチは何でも出来るにや」

「そうだな。魔法がなくても、旦那なら十分に飯が食えるよな」

だが、シャングリ・ラやアイテムBOXがないと、ちょっと厳しいと思う。

「アネモネ、ちょっとこれを乾燥させてくれ」

「うん、乾燥ドライ！」

白く乾燥した牙をリユーターで磨いて、ピカピカにしてから穴を開ける。牙を3つ程繋げようとしたが、デカすぎるので1個で十分だろう。

そして、シャングリ・ラから、18Kの鎖を買う。

「これに、金の鎖を通せばいい」

「旦那、そんな金の鎖なんて要らないよ。なくしたら後悔しちまう」
「そうだにゃ」

「そうか？ それじゃ、普通の組紐にしよう」
金の鎖をアイテムBOXへしまつて、サイトから1000円で組紐を2本買う。

「ほら、完成したぞ。ワイバーンの牙の首飾りだ」

「ひょろっ、こいつは自慢出来るぜ！」 「デカイ牙にゃ！ こんな誰も持っていないにゃ！」

「まあ、そうだろうな。この大きさだけで、只者じゃないって解るだろうし」

それを見た、アネモネも欲しそうな顔をしている。

「アネモネも何か欲しいか？」

言葉には出さないが、黙って頷いた。

シャングリ・ラを検索して、金色の猫と小さい真珠がついたネックレスを購入――6000円だ。

デザインの、中々かわいい。

「これでいいか？」

「……かわいい、これって森猫？」

どうやら、彼女もネックレスを気に入ったようだ。

だが、アクセサリを作る作業をしているうちに、すっかりと暗くなってしまった。

「さて——今日は久々に、家で寝るぞ」

「「「おーっ！」」」

「あのお姫さまがいると、肩が凝るにゃ」

「獣人でも、そういう事があるのか？」

「もちろんだにゃ」

家の中には王女達の荷物があるので、アイテムBOXへ収納した。
そして、ベッドを並べて、皆で飛び込む。

「今日はプリムラの日だな——さあ、こい！」

「あ、あの……」

「どうした？ それじゃ、他のやつに代わってもらうか？」
そういうと、プリムラが俺にドスンと飛び込んできた。

「よしよし」

身体を撫^なでてやるのだが、彼女は黙っている。

「あの、なんともないんですが……」
抱きついたのに、俺のナチュラル回復^{ヒール}が発動しないのを、不思議に思っているようだ。

それに、少し残念そうな顔をしている。

「ああ、力を抑える指輪を買ってきたんだよ。これで普通に接する事が出来るだろう？」

「……ちよつと、残念」

ああ、それで躊躇^{ちゆうちょ}してたのか。

「え？ それじゃ、指輪を外してしようか」

「ちよ、ちよつと待ってください！ 皆がいるのに……」
もじもじしているが、皆がいなかったらOKなのか。

俺がベッドの上に寝転がると、その上にプリムラが乗ってくる。スカート越しに柔らかいお尻を握り、ちよいと力を入れた。

「ひゃああ！」

叫び声を上げると、プリムラがプルプルと震えている。

どうやら指輪で完全に力を遮断出来るのではないようだ。垂れ流しだった水道に蛇口が付いたような感じらしい。

普段は、魔力が指輪で堰き止められているが、ちよつと力を込めると溢れだす。

プリムラの叫び声を聞いて、アネモネも抱きついてきた。

「なんともないよ？」

「俺が力を込めないと、指輪で力が堰き止められているんだよ」

「じゃあ、力を込めて？」

「だめだめ」

アネモネは不満を言っているが、今日はプリムラの日だ。

だが、プリムラは俺の胸に顔を埋めながら、謝罪を始めた。

「何を謝ってるんだい？ 何かあったっけ？」

「ケンイチが貴族になるって話で——その、ケンイチが嫌なら、無理に貴族にならなくても……」

「ああ、その事か。だが——王都に帰って授爵しないと揉めそうだし、君が気にする事はないよ」

「でも……」

「商売や、領の経営は君やマロウ商会に任せればいい。そして俺達は冒険に出る」

だが、それを聞いたプリムラはじつと俺を見ている。

「それは、ちよつと悔しいんですけど……」

「そんなことをいっても、俺の身体は1つだし。どっちかにしてくれよ」

「商売もしたいし！ ケンイチにもついていきたいです！」

「プリムラ、わがまま」

アネモネがボソリと言う。

「ケンイチ！ 私を口汚く罵って下さい！ 私はこんないけない女なんです！」

プリムラが思いつきり俺に抱きつく。

「よしよし——俺を独り占めしたいんだよね？ まあ気持ちは解るけど、君だけじゃなく、ここにいる皆がそうだからさ」

「そうにゃ、どさくさ紛れにトラ公を始末すれば、ケンイチはウチのものにゃ」

「てめえ！ クロ助！ 冗談でも、そういう事を言うな！」

「商売と冒険——両方は無理だよ。それに俺は商売に向いてないし」だが、俺の言葉に獣人達は異議があるようだ。

「そうなのかにゃ？」 「旦那なら商人として十分にやっていけると思うけど……」

「俺は、わがままで短気な人間なんだよ。井勘定——って言ってもわからんか。金の管理もテキトーだし」

「そりゃ突然、訳のわからん高い物を買ったりはしているけどさあ——旦那の考えあつての事なんだろう？」

「考えている時もあるれば、まったく思いつきの事もある。生粋の商売人のプリムラから見たら、ちよつと変だろ？」

「あの……ええと、はい……」

「でもにゃ——」

短気だと言うわりには、王族に対して怒らないのが、彼女達是不思議のようだ。

「いや、怒ってるに決まっているだろ。特に、あの王妃に対しては腸が煮えくり返っているよ」
はらわた

「王族に贈り物もしてたのにゃ？」

「そうして機嫌を取らないと危なかったからな。人を殺しても平気な奴らだぞ？」

「前に、ケンイチが話していましたが、あそこで暴れるのは得策ではありませんでした」

「プリムラの言うとおりだが——今はちよつと事情が違う。峠を開通させて王女の命も助けた。そして、『聖騎士』とかいう者にもなった。これで帝国から魔導師を引き抜ければ、十分に王族と対等に渡り合えるし交渉も可能——なはず」

「私もそう思います」

獣人達が顔を見合わせている。

「それじゃ——旦那は、次にああいう事があれば、もう許さないと——」

「もちろん、そりゃそうだ！ それに王族の事情もかなり解ったからな。例えば王妃が剣の達人だとか」

「ケンイチがやるなら、ウチもやるにゃ！」 「そりゃ俺だってやるぜ」

「騎士団は大した事はない。俺の召喚獣やアネモネの魔法でなぎ払える、問題は王妃だ」

「あの王妃は只者じゃないにゃ」 「ありゃ魔物だぜ」

「魔物は知能がないけどな。相手が人間だとそうはいかない。しかも王妃はアイテムBOX持ちだ」

その言葉にプリムラが驚く。

「アイテムBOX持ちなのですか？」

「ああ王女から聞いたので間違いない」

「——ということは、どこから出てくるか解らない剣で切られるにや」

「旦那、手はないのかい？」

「ある！ 戦いの時は、お前等にも手伝ってもらうから、戦術の研究をしよう」

「任せるにゃ！」 「おう！ 王族を相手に喧嘩かよ！ こいつは腕がなるぜ！」

獣人はこういう時に躊躇がないのがいいよな。

彼女達に難しいフォーメーション等は無理だが、両サイドからフエイントを掛けるぐらいは出来る。

こちらには、飛び道具もあるし爆薬もある。トリモチで爆薬をくつつけるのもありだろう。

ちよつと非道すぎる感もあるが、相手はあの王妃だ。やるなら躊躇なしにやらねば、こっちがやられる。

当然、そうなったら、この国を捨てる選択も視野に入れなければならない。

帝国にいるという日本人らしき奴が、こちらの味方になってくれればチート持ちが2人だ——王国相手でも、なんとかなるだろう。なにせそいつは、真正正銘のドラゴン——レッドドラゴンを倒した『竜殺し』らしいからな。

だが王族を殺すのは最後の手段だ。要は相手はあの王妃だけ。後は烏合の衆だ。

その時は、王妃との1対1に持ち込む。そして、なんとか殺さずに無力化させて屈服させられないだろうか？

甘すぎるかな？

まあ、そうならないに越したことはないのだが——王女が、王家に伝わる秘密の力を無断で使ったので、もめるのは必至だと思われる。

円卓会議とかいうものもあるみたいだな。そうなれば力を授かった俺にも矛先が向かってくる事も十分に考えられる。

「——というわけで、明日飯を食ったら、戦闘訓練を行うとしよう」
「解ったにゃ!」「おう!」

「私も?」

もちろん
「勿論、アネモネも」

予定が決まったので、今日は寝る事にした。

——さて、帝国側に渡る許可証ってのは何時頃もらえるんだろうなあ。

王女が交渉してくれているはずなんだが……。

110話 帝国でエスピオナージ

俺達は国境の街、ソバナにやって来ている。

宿泊しているのは、この地の領主である公爵の屋敷だ。

——次の日の朝。久々にベッドで寝て起きた。ずっと王女に家を占領されていたからな。

そして、朝起きると皆で食事を取る。

食事の後、昨日の夜に話していた、フォーメーション戦闘の訓練を行う。

両サイドから、ポリカーボネートの大盾を構えた獣人達が圧力を掛け、俺が飛び道具で攻撃を担当する。

アネモネは後方から魔法で援護&止めを刺す。

食後の運動をしていたら、白いドレスを着た王女がやって来た。その後ろには、マイレンさん達メイドさんが付き添う。

「リリース様、お早うございます」

「うむ」

「中々、素晴らしいお召し物でございますね」

「ああ、無理やり着せられてしまったわえ。それよりも、ケンイチ」

「何か？」

「食べ物はないかえ？」

「は？」

王女の話では、朝食は食べたらしいが……。

「其方の食事を食べた後では、どんな食事も食べた気にならぬ」

王女の言葉に、訓練の後に休んでいた獣人達が反応した。

「そうだよ、お姫様。俺達なんて、外で飯が食えなくなっちまったんですから」

「そうだにゃー、馬鹿らしくて街の飯屋なんか金払ってられないにゃー」

プリムラのスープと、アネモネのパンを出す。

「おおっ、このパンの柔らかくて甘い事！ やはり、これでなくてはならぬ」

食事をとっている王女は満足そうだが――一枚の木札を差し出した。

「これは？」

「国境を越える許可証じゃ。其方は商人という事になっておる」

「まあ、実際に商人ですし……商業ギルドにも登録してありますし」

「国境の門を通過するのは、ギルドの証も必要になる」

「この街のギルドへの登録も必要ですか？」

「いや、それは問題ない。証の中身までは見ないようじゃ」

だが、俺に木札を渡した王女は不満顔だ。

「リリース様――何か、ご不満でも？」

「妾も帝国側へ行きたいと申したら、公爵に大反対された」

「そりゃ、そうですよ。向こうで何かあったら、公爵様の責任問題になりますし。王族だとバレたら、誘拐やら、人質やら――」

「むう……」

まあ大騒ぎになって、公爵の腹切ぐらいじゃすまなくなる。

「それじゃ皆、俺は帝国側へ行ってくるよ」

「私も行きたい……」

「アネモネ、許可証は一枚だけだからな。大人しく待ってなさい」
「うー」

アネモネは納得していないようだが、こればかりは仕方ない。許可なしだと密入国って事になるからな。

スパイとかの疑いを掛けられたりすると面倒な事になる。

この世界の戦略兵器である魔導師の引き抜きをして亡命をさせようっていうんだから、もろにスパイ活動だけどな。

まあ、いざとなれば国境の壁ぐらい、アイテムBOXに入っている足場で越えられる。

王女の話では――王国の金貨も同様に使えるそうだから、宿屋にも困らないだろう。

帝国側でも野宿が出来ればいいんだが……実際に見てみないと判断出来ないな。

とりあえず、3日程の予定で留守にする。

パウチ食やレトルト、そしてパンを出した。生肉はアイテムBOXから出すと腐ってしまう。

「そんなに要りませんよ」

「しかしプリムラ、3日留守にするんだぞ？」

「肉も野菜も、ここの市場で買えますから」

そう言われればそうだ。いつもアイテムBOXから出したり、シヤングリ・ラから買ってしまうからな。

「それじゃ、パン焼きの鍋と小麦粉を置いていこう」

俺の心配性に、獣人達も苦笑いをしている。

「ケンイチ、大丈夫だにゃ」「そうだよ。逆に俺達はいつも旦那に頼りっぱなしだからさ」

「そうか？」

「旦那も俺達の事を信用して、もっと任せてくれてもいいんだぜ？」
「そうだにゃ」

「うーん、俺は何でも1人でやってきた人間だからなあ……」

「ケンイチは、そんな感じがします」

プリムラもそう思うのか。

「獣人にもいるんだよ。人とつるまず、いつも1人な奴が」

ニヤメナはそう言うのだが、こういうところに、いつも一匹狼だった弊害が出てるな……まあ、彼女達が大丈夫だというなら、大丈夫なんだろう。

小麦粉等も市場で売っているしな。金をプリムラに渡しておく。

「お金も私が持ってますから」

プリムラが呆れている——どうも俺は世話を焼き過ぎらしい。それじゃ彼女達に任せる事にしよう。

暇つぶし用に、バックギヤモンと、アネモネにはタブレットを渡しておくか。

彼女はタブレットの電池が切れると、モバイルバッテリーから充電する方法も知っている。

頭が良すぎるのも、少々困りものだ。小さい頃からいろんな事を学びたかったのに、何も出来なかったから、知識欲が凄い。

出発しようとする、門番が鎧を鳴らしながら走ってきた。

「あの、すみません！ 魔導師様！ 正門前に獣人達が集まっております……」

「なんで獣人達が？」

「なんでも、森猫に会わせてほしいと……」

あちゃー！ 俺が公爵邸に滞在していると言ったので、噂が広まってしまったのか。

「申し訳ない——獣人達と話してみるよ」

「お願いいたします」

ベルと一緒に公爵邸の正門へ向かう。門番は——獣人達が正門にいると言ったが、堀に架っている橋の前にいた。

数は——男女1000人ぐらいいるんじゃないか？

デカイ図体の男が並んでいると、まるで肉の壁だ。

「おおっ！ 本当に森猫様だ！」 「おおっ！」 「本当にや」 「森猫様あゝ！」

ベルを見た獣人達が、皆で土下座を始めた。街に住んでいる獣人達は、まともに森猫を見たことがないので神格化しているのか？
ダリアやアストランティアの獣人達は、こんなに仰々しくはなかったな。

だが俺は、あることを思いついて、シャングリ・ラから1000円程の木箱を買った。

大きさはビールケースぐらいだな。

「えゝ、おっほん！ 森猫様は、美味しい肉が食いたいと申しておる。よければ、小銭でよろしいので、寄付をしていただければ、森猫様の御利益もあらうと思われるぞ？」

「「へへっ！」」

獣人達は、手持ちの銅貨を箱の中に入れはじめた。だが、たまに小四角銀貨もある。

ははは——信者と書いて儲かると読むってな。しかしながら、あまりやり過ぎると邪教扱いされたりして。

だが突然、箱に銀貨が放り込まれた。他の獣人達からも驚きの声上がる。

「ちょっと待て、銀貨はやり過ぎだぞ」

俺が銀貨を箱から取り出そうとすると、投げ込んだらしい獣人が箱の前に土下座した。

「今度あつしに、ガキが生まれるんでさあ！　森猫様のご加護があればと思い、入れさせてもらいました！」

するとベルが、その獣人の所へ行つて、頭にポンと前脚を載せた。

「「「おおっ！」」」

「ベル、お前は優しいな」

「にゃー」

だが俺は帝国領へ向かわねばならない。獣人達には悪いが程々のところでお開きにさせてもらった。

賽銭箱をアイテムBOXの中へ収納し――彼女の身体を撫でる。

「よしよし。それじゃベル、俺は帝国へ行ってくるからな。皆を頼んだぞ？」

「にゃー」

門の中に消えていくベルの後ろ姿を見送ると、道を少し歩き、人通りのない所でオフロードバイクを出した。

街の中にはドライジーネも走っているし、魔法で動くドライジーネって事で誤魔化せるだろう。

実際、カールドンさんが、魔法で動く物を作っていたしな。

アイテムBOXから出したヘルメットを被ると、バイクを発進させた。

峠から下ってきた俺達は、大通りを左に曲がって公爵邸へやって来たが。そのまま真っ直ぐに進むと、国境の門があるらしい。

俺は大通りの交差点を左に曲がってしばらく進んだ。すると見えってきたのは、大きな石の門。

その横には、遥か遠くまで石壁が築かれて、巨大な街を王国と帝

国に分断している。

合わせて人口50万人弱っていえば、結構な大都市だからな。
近くまでやって来てバイクを降りると、アイテムBOXへ収納した。

その様子を見た周りからざわつく声が聞こえる。もう慣れたので、あまり気にしないようにしている。

「壁の高さは5mぐらいだな……」

これなら足場で楽勝クリアだ。もちろん勿論、揉めるつもりもない。なるべく穏便にいくつもりだ。

門にある検問所に並ぶ列に加わる。入国と出国、2つの列が長く伸びている。

こりゃ、時間がかかりそうだ。アイテムBOXからスツールを出して、シャングリ・ラで電子書籍を読む。

周りからは見えないので、何をしているか分らんだろうな。列が動いたら、スツールを持って移動する。

だが、見れば子供も並んでいるな……粗末な服を着て商人ってわけじゃなさそうだが。

そして検問所の順番が訪れると大人を呼んでいる。

「ははあ、そういう商売なのか」

要は並び屋だ。代わりに並んで小遣いを稼いでいるわけだ。

アルバイトではなく、自分の丁稚てっちなどを並ばせている商人もいるようだ。

馬車は一応、積み荷のチェックも行なっている。袖の下を渡したりしたら、検査がゆるくなったりするんだろうか？

検問所の役人と立ち話をしている商人もいるので、顔見知りのようだ。

いつも並んでいたら、そりゃ顔見知りにもなるよな。

俺の隣にいた商人に聞いてみた。カラフルな色の上下を着た若い男だ。大きな背負子を背負っている。

「なあ、ちょっと聞きたいんだが——ここで袖の下って通用するのか？」

「大きな声じゃ言えないが、結構取られるみたいだぜ」
「なるほどね」

そして、俺の番がやってきた。

「よろしく願います」
門の暗い影の下、ギルドの証と許可証の木札を出す。

「見ない顔だな……なっ！ これは、公爵家の直々の許可証！」
役人の言葉に周りがざわつく。

「問題ないでしょう？」

「に、荷物は持っていないようだが」

「私はアイテムBOX持ちです」

その話を聞いた周りがまたざわつく。役人は訝しげな表情をしているが、何も問題があるはずもない。

まして公爵家からもらった許可証を持っているのだ。下手に疑ったりしたら、役人の首が逆に危ない。

普通は、実績に応じて商業ギルドから発行される物らしい。駆け出しがもらえるような物ではないようだ。

この世界は12〜13歳から働き始めるから、若くても結構ベテラン商人だったりする。

「通ってよろしいので？」

「通ってよし！ だが、つまらん物を持ちこんだりするなよ！」

「承知いたしました」

そのまま門を潜り帝国側へ出る。だが景色は一変した。石畳で舗装された道路。石で出来た3〜4階建ての建物が綺麗に並ぶ。

屋根は赤に塗られている物が多い——というか、ここからでは赤しか見えないな。

まあ、街の端にいれば、ブラックもあるのかもしれないが、ここは区画整理もされていて、実に近代的に見える。

王国より、帝国の方が進んでいるのかもしれない。

その代わり、命令絶対、規則は一杯——そんなイメージだ。

「さて、どうするか……」

道端に小さな露店があったので、金を払って聞き込みをする。紺色の服を着た髭の爺さんだ。

「この街に、『ドラゴン殺し』が来ているって噂を聞いたんだが——聞いた事あるか？」

「ああ、ちょっと小耳に挟んだ事はあるよ」

「どこに住んでいるか、聞いた事はないか？」

「さあ……？」

ついでに道具屋の場所を聞く。魔導師なら魔道系のアイテムを購入するために、そこを訪れていると思ったからだ。

「道具屋なら、市場の側に行けばあるよ」

「市場の場所を教えてください」

市場の場所は国境の門から、右方向——南東の方角だ。

トラブルを避けるために、バイクや車は自重して徒歩で市場へ向かう。

アイテムBOXから方位磁石を出して、方角を確認しつつ——道を聞きつつ、市場へ辿り着いた。

市場の様子は雑多としていて人で溢れ、王国と然程変わらない。

屋根付きの露店が所狭しと並んでおり、物品も充実しているようだ。商人が派手な服装をしているのも同じだな。王国と違うのは市場も石畳で舗装されているところか。

露店で串焼きを買う。日本じゃこういう串は竹串なんだが、ここではちよつと太めの木の串だ。

味付けは塩とマヨネーズだという。1本1000円ぐらいだが、マヨは500円ぐらい高い。原料の油と卵が高いから、仕方ない。

王国の金はそのまませえるようで、結構出回っているらしい。逆に王国でも帝国の金は使えるようだ。

帝国の金はセエンとかイエンという単位だというが、大量に換金するのはダメらしい。まあ当然だがな。

銅貨を払ってマヨ味を買ってみた。食ってみたが、脂がのつていて中々美味い。

豚かイノシシ系の肉だと思うが――よく解らん。魔物やら奇想天外な肉を食い慣れているせいかな。

串焼きを買ったついでに、道具屋の場所を聞く。どうやら市場の外周にあるようだ。

その露天の店主にも『竜殺し』の話聞く。白いエプロンした、スキンヘッドのオッサンだ。

「そういう話は聞くが、見たことはねえな……」

「そうか、ありがとう」

オッサンに小銭を握らせると、道具屋を探して市場の外周を歩く。

その時、鐘が鳴った。通行人に聞くと、6時、9時、12時、15時、18時に鐘が鳴ると言う。

帝国の人間はそれに合わせて行動をしているようだ。

今のは昼の鐘らしい。

「ここかな？」

道具屋らしい建物を見つけた。石造りの漆喰で塗られた白い壁を持つ建物だ——中に入る。

雑多に物は並んでいるが、鍋やら皿やらの生活用品が多いようだ。

「いらっしやうい」

紺色の上下を着た中肉中背の中年の男が出迎えてくれた。

「魔道具や魔導書を置いてないか？」

「お客さん、王国の人だね？」

「解るのか？」

「そりゃね」

店主の話では——帝国では、魔導師は商売が出来ないという。魔導師じゃないと魔道具や魔導書の価値が解らないので、道具屋では売れないらしい。

「それじゃ、そういう物を買いたい時はどうするんだ？」

「魔導師同士で直接売買するんだよ」

帝国では魔導書に登録は必要ないという。

「なるほど」

国によって、色々と面倒な事もあるんだな。どっちもどっちで、どちらが良いかは判断に難しいところだ。

だが店主に小四角銀貨を渡して人探しのヒントを貰った。

「それなら、お仕事紹介ギルドへ行けばいい」

お仕事紹介ギルド——日本でのハロワだが、王国という冒険者ギルドにあたる。

冒険者や人が集まるし魔導師の情報なら、そこが知っているかもしれないという事だ。

そのギルドの場所も教えてもらった。市場のすぐ近くらしい。

市場を離れて500m程歩き、石畳の細い路地を進む。

あった——ガラス窓の4階建ての建物だ。たくさんの人が出入りしているの、すぐに解った。

扉を開けて中に入る。さすがハロワだけあって人がいっぱい、老若男女、獣人の姿も見える。

街中なので、あまり重装備の人間はいないな。せいぜいライトアーマー止まりだ。

とりあえず、カウンターへ向かい、紺色の制服を着た職員に声を掛けた。

「ちょっと聞きたい事があるんだが……」

「はい、何でしょう？」

「この街に、『竜殺し』が来てるって噂を聞いたんだが、ここに来た事はないのか？」

「……個人情報にはお答え出来ません」

なるほど——帝国側の方が職員のコンプライアンスはしっかりしているようだ。

それじゃ、ここにいる連中に聞か。

「皆！ ちょっと聞いてくれ」

ギルドの中にいた連中の目が一斉に俺を向く。

「帝国の、『竜殺し』がこの街に来ているという噂を聞いた。会った奴はいないか？ 面白そうな話をしてくれたら、王国の銀貨1枚（5万円）をやる」

ざわざわと客達が顔を見合わせている。

「それじゃ、いいかい？」

若いニヒルそうな男が手を挙げた。

「竜殺しを見たのか？」

「いや、そいつじゃねえんだが、『夜烏のレイラン』は見たぜ」
「なに?!」「マジかよ!」「そいつも有名人だぜ?」

周りの客達から声上がる。

「夜烏のレイランって奴も有名だな。俺も知っている」

竜殺しだけじゃなくて、夜烏のレイランもこの街にいるのか。

「間違いないのかよ?」「本当か?」

客から疑問の声が飛ぶと男が答えた。

「濡れたような黒い髪に、黒いドレス。そして、あのはちきれるような爆乳! 間違いねえって!」

男は両手で女のバスの真似をしている。客達も――爆乳の話を聞いて信用したようだ。

それにしても、夜烏のレイランって女だったのか。しかも爆乳!

――それは是非会ってみたい。

だが、情報はそれだけ。誰も竜殺しに会った事や、知っている者はいないようだ。

身分を隠して潜伏しているのかもしれないが……。

「ありがたいな。面白い話だったよ」

夜烏のレイランの話をしてくれた男に、銀貨1枚を渡した。

「へへっ、これで今日の夜はたらふく飲めるぜ」

男は上機嫌だが、これ以上ここにいても仕方ないな。

ハロワから出ようとしたら、客から「依頼にしたらどうか?」と提案がされた。

なるほど、そういう手もあるか……窓口へ行って相談してみる。

「可能ですよ」

紺色の制服を着た受付のお姉さんが事務的に答えた。依頼をするだけならギルドに登録は必要ないようだ。

「依頼手続きの料金は1イエンです」

1イエンというのは、王国という小四角銀貨2枚（1万円）らしい。そして掲示板に俺の依頼を貼り出してもらった。

『帝国の【竜殺し】について、有力な情報を持っている者には、10イエン（10万円）を払う』

10イエンは王国の銀貨2枚——期限は今日から3日。あまり長い間嗅ぎまわっていると、帝国の役人から目をつけられるかもしれない。

ダメなら他の手を考えよう。ここから噂が広がれば、向こうからの接触があるかもしれない。

そして依頼の報酬と手続き料金として、王国銀貨2枚と小四角銀貨2枚を窓口へ渡す。

仕事の報酬は窓口から支払われ、その時1割く2割が税金として引かれるシステムらしい。

だがギルドに依頼を終えて外に出た俺は、アイテムBOXからスツールを出して座ると、頭を抱えた。

しかし、これがダメだったら次は、どこを探したらいいだろうな。皆目見当もつかない——うーん。

だが、このギルドに人が集まるのは確かだ。

スツールをアイテムBOXにしまうと、歩いて再び市場へ向かう。露天でリンカーを一山買う。これはシャングリ・ラにも売ってい

ないからな。美味しい。

そして、コツカ鳥の卵も見つけた――1個2000円だ。

以前、ミャレーが採ってきて、プリムラの店で売ったりしたが、食った事はなかったな。

ゆで卵にでもして食べてみるか……。3つ買ったら小四角銀貨1枚(5000円)におまけしてくれた。

しかし卵1個が2000円かよ。とんでもない贅沢だと思うが、魔導書に数百万をポンと出す奴の台詞じゃないか……。

市場の外周にあるショップも回る。店員などに話を聞くと、露店からステップアップして、市場の外周に店を開くのが商人の夢らしい。

へえ、帝国の商売ってのはそうなってるのか。

宝飾店にも入ってみる。だがやはり、加工も細工もイマイチ。シヤングリ・ラで買った物の方が数倍緻密だ。

まあ機械で加工しているのだから、当然といえば当然。

様々な石が並んでいるのだが、実際の価値は不明だ。アイテムB OXへ入れてみれば、価値が解るかもしれないが、店先でそれは無理だろう。

だが気になる物を見つけた。棚の隅に置かれた黒い手枷^{てかせ}。なんで宝飾店にそんな物が？

店主らしき男に聞く。緑色の服を着た、太ったビヤ樽のような男で口髭を生やしている。

「あの手枷はなんだい？　なぜ宝飾店に？」

「おおっ、お目が高い。あれは、アダマントタイトの手枷でして」

アダマントタイトキター！　なるほど希少金属なので、宝飾店に置いてあるのか。

何かに役に立つかもしれないし、財産としても優秀そうだ。価値も落ちる事はないだろう。

「よし、アレをくれ。いくらだ？」

アダマンタイトと聞いて、いきなりくれと言い出した俺に、店主は少々驚いたようだ。

「300イエンでございます」

300イエンって300万か？ 王国の金貨だと15枚だ。

「支払いは王国の金貨でもいいか？」

「王国の金貨だと16枚になりますが、よろしゅうございますか？」
ちよっと足下みられたか、それとも手数料なのか。はたまたレートがそうなるのか？ まあいい。

俺はアイテムBOXから金貨16枚を出した。

「アイテムBOXですか？」

「ああ」

金貨を受け取った商人は、手持ちの金貨と大きさを比べて、天秤で重さを量っている。

あれは比重を量っているのだろう。この世界でも金が一番比重が重い。

偽金や混ぜ物がしてあると、大きさが同じ場合に軽くなる道理だ。

だが、アダマンタイトをゲット出来た。

ドワーフの店にあった巨剣のアダマンタイトも帝国から渡ってきた物かもしれないな。

なるほど、こういう場所に来ると、ゲット出来るアイテムも変わってくるって事か。

持ってみると軽い！ 軽くて硬い、ファンタジー物質だ。
アイテムBOXへ手枷を入れて買い取り査定を試みる。

――【査定結果 買い取り不可】

ええーっ？ やっぱりダメ？ とんでもない値段がついたりはしなかったか……残念。

貴重な鉱物をゲットして店を出る。中々面白い物があるじゃないか。

市場を回っているうちに、日が傾いてきた。

露店の人間に金を渡して、宿の場所を教えてください。ギルドの近くにあるという。

だが、露店の髭を生やしたオヤジが言う事には――。

「あんた王国の人かい？ 宿屋荒らしが多いみたいだから、気をつけなよ」

「荒らしって、強盗か？」

「枕探しならいいんだけど、客を皆殺しにしたりするようだぜ？」

「そいつはまた、物騒だな……」

再びギルドまで歩くと――斜め向かいが宿屋だった。

宿に泊まりながらギルドへ通う人間もいるし、ギルドから食事にやって来る奴もいるだろう。

そういえば、ダリアへやって来た時の俺もそうだった。

一応、ギルドに顔を出してみたのだが、『竜殺し』の情報は来ていないと言う。

ギルドを出ると宿屋へ向かう。

宿屋は、赤い三角屋根で屋根裏部屋を含めると3階建ての建物だ。俺は小さな階段を登ると、その宿に足を踏み入れた。

111話 竜殺しの手がかり

ソバナに隣接している帝国の都市に来ている。

俺と同じ元世界からの転移者らしい奴を探しにきたのだ。だが、1日目は情報が得られず、ギルドへ情報提供の依頼をして終了した。ギルドにこんな依頼をして、大丈夫なのか？ ちよっと心配ではあるのだが、他に良い手段が思いつかない。

いつまでも、ここに居るわけにもいかないのだ。帝国側の貴族や役人に感付かれる前に、竜殺しに接触しなければ。

それにしても件の奴は、かなりの有名人らしいが、そもそも何故この街へやってきているのだろうか？

他の者からも狙われているかもしれないし、帝国の極秘任務で潜入しているのかもしれない。

だが極秘なら街に噂が流れているのは少々疑問が残る。

俺は、帝国側に宿泊するため、ギルド近くの宿屋を訪れた。小さな階段を登り、扉を開けて中に入る。

「いらっしやうい！」

給仕の女が挨拶をしてくれる。藍色のメイド服のようなワンピースを着ており、大きなエプロンをしている。

宿屋の1階は丸いテーブルが5つ程。全部、男共で埋まっている。飯を食い酒を飲んでいようだ。

すでに日が傾いており建物の中は薄暗い。オレンジ色に光る灯油ランプが2個灯っている。

「食事？ それとも泊まり？」

「泊まりだ、部屋は空いているか？」

「一番上の屋根裏部屋なら空いているよ」

「それでいい、幾らだ？」

「お客さん王国の人？」

「ああ」

食事付きで8000円、素泊まりで5000円だという。少々高い——もしくは王国の人間だと少々高く請求されるのか？

王国の金で支払いOKだというので、3日分——小四角銀貨3枚（1万5000円）を渡して、女が差し出した宿帳にサインをした。帝国でも言葉は通じるのだが、文字が違うようだ。

——名前は、『シャガ』。勿論、もちろん偽名だ。

他の人の名前を使って迷惑が掛かると拙いからな。まず帝国風に、ハンスとかペーターにすりゃ良かったかもしれないが。

まあ王国の人間だと言ってしまったので仕方ない。

給仕に案内してもらおう。部屋は3階に1つだ。天井板はなく梁が剥き出して、3角屋根の裏側がそのまま見える。

踏み込むと床板がギシギシいつて圧迫感はあるが、たいした事はない。逆に秘密基地風で中々いい。

「ランプもあるけど別料金だよ」

「ああ、持っているからいらないよ。ありがとう」

女にチップの銅貨を1枚渡すと訝しげな顔をしている。

「何も持っていないじゃないのさ」

「アイテムBOX持ちだからな」

それを聞いた女は、納得したように階段を降りていった。

さて、飯だな。こういう1人の時には、カップ麺でいいだろう。アイテムBOXに、炊いた白米も残っていたはずだ。あの王女がいるから大量に食事の用意をするからな。

食事の準備をするために、アイテムBOXからLEDランタンを出した。

あつ、そういえば、家に置いてあるガソリンランタンは3日も保つかな？ まあ彼女達がなんとかするだろう。

カセットコンロを出して、お湯を沸かす。この水は峠で汲んだ水だ。

市場で買ったコツカ鳥の卵は茹で卵にしよう。卵が小さいので、そんなに茹で時間は掛からないと思う。

とりあえず半熟でも、カップ麺に入れて食べばいい。5分程卵を茹でて、カップ麺にもお湯を注ぐ――そして3分間待つのだ。

その間に、ご飯を用意しよう。

出来上がったので、蓋を取り麺を啜る。コツカ鳥の茹で卵も食べてみよう。

小さいので殻が割り難いが――うずらの卵より二回り大きい卵を口へ放り込む。

「あ、これは美味いわ。凄い味が濃い」

そして白米をバクバク。たはあゝこいつは止められねえ。ここは3階で部屋は1個。臭いを気にする必要もない。

「美味い！ 美味すぎる！ 十万石――」

そういえば、例の帝国の奴はカップ麺とか、しばらく食ってねえんだらうな。

ご飯だって食べてないはずだ。市場でも見たことがないからな。しかしその前に、『竜殺し』は日本人かな？ 日本人以外だと、

ちと面倒だな。

そんな事を考えつつ、白米を食べていたが、ちょっと物足りない。ここは海苔を追加したい。シャングリ・ラで海苔を購入。コンロで炙って、ご飯を包み——醤油をつけて食う。

「美味しい！ やっぱり俺は日本人だよなあ」

竜殺しも、そろばんやガチャポンプを知っているから、日本人だと思うんだが……。そろばんって元々中国だっけ？

まあ、とりあえず会ってみたい事には解らないか。会えればいいけど。

飯を食い終わったので、ゴミはゴミ箱へポイ。その他はアルコーンとキッチンペーパーで拭いてアイテムBOXへ収納。

飯も食って腹も膨れたので食休み。

ベッドは少々怪しいので、床にエアマットを敷いて横になる。

アネモネがいれば、ベッドを魔法で加熱してもらえば殺菌できるんだがなあ。

食ってすぐに横になると、牛になる？　ここは異世界だからな、そんな日本の言い伝えは通じない——多分。

「さて、寝るまでに何をしようか。また異世界ラノベでも読むか？」だが、いい事を思いついた。ベルに供えられた、賽銭の勘定をしていようか。

起き上がると、アイテムBOXから賽銭箱を取り出し銅貨を積み上げ始める。

10枚で1組——それが徐々に増えていく。あそこには1000人ぐらいの獣人がいたからな。

まあ、こんな事をしなくても種類に分けてアイテムBOXへ入れれば——銅貨×200枚、みたいに自動でカウントされるんだが。

この作業が、貯金箱の中身を数えるようで楽しいじゃないか。

数えた結果――。

銅貨891枚――89万1000円。1人1枚ではなく、2、3枚入れた奴もいたからな。

小四角銀貨30枚――15万円。

銀貨1枚――5万円

合計――109万1000円也。

あそこにいた連中が全員入れたわけじゃないんだが……。

くわあゝ小銭でも集まると、すげえパワーだな。

それに高額を少人数から取るよりも、小銭をたくさん的人数から取った方が儲かるのが解る。

くくく――やはり宗教ってのは儲かるねえ。

冗談はそのぐらいにして――小銭数えに没頭しすぎ、すっかりと時間を食ってしまった。

「そろそろ寝るか……」

アイテムBOXから毛布を出す。そして寝る前に戸締まりだ。強盗が出るって話も聞いたしな。

一応、簡単なカンヌキは出来るようだが、こんなのは無理やり開ければ壊れてしまう。

森の中で使っていた、赤外線センサーを使おう。センサーとモバイルバッテリーをアイテムBOXから出して接続する。

誰かが侵入してくれば、ブザーで解るわけだ。そして、枕元にはレーザーサイト付きで装填済みのクロスボウと矢が数本。

後は熊スプレーとカトララス刀も用意しておこう。

熊スプレーは、黄色いストッパーを外しておく。一緒にセンサー

ライトも取り付けてみよう、目眩ましに使えるだろう。

大袈裟か？　だが、いつも生体センサー代わりのベルや獣人達に守られていたから、安心して寝られていたわけだ。

久々の1人だと心細さが半端ない。このぐらいしないと安心出来ない。

やっぱり、頼れる仲間ってのは大事だな……。

「――皆は大丈夫かな？」

公爵邸に居て、誰かに襲われる事もないだろうけどな……。

俺は床に置いたエアマットの上で眠りについた。

――――――◇◇――――――

――真夜中、けたたましいブザー音で、俺は飛び起きた。

真っ白に光るライトが、怪しい男2人を照らしている。ライトアーマーを着て、剣を持っているようだ。

「くそっ！」「なんじゃこりゃ！」

俺は、枕元に置いてあった、熊スプレーを吹き付けると、男達が黄色に染まった。

「ゲホッゲホッ！　ぐあああ！」「ぎゃああ！　目がいてえ！」

熊スプレーって初めて使ったが、霧が黄色いんだな。

次にクロスボウを取ると、先頭の男へ向けて発射したのだが、矢がライトアーマーごと胸を貫通しても、男は短剣を振りかざしてきた。

完全なストップピングパワー不足だ。

ライトの光が反射する白い刃が俺の目に飛び込んでくると、辺りは色をなくしスローモーションに変わる。

やられる！

そう直感した。クロスボウを捨てて身体を捻りカッタラス刀を取ると、アネモネや皆の顔が次々に浮かんでは消える――これが走馬灯ってやつだ。

コンマ数秒のはずなのだが、それは何十秒にも感じた後、暴漢の剣が俺の肩口に到達した。

そして、遅れて水平に薙ぎ払ったカッタラス刀が、男のこめかみに食い込み赤い脳漿が吹き出す。

俺は、倒れこんできた男の身体を受け止めると、左側へ投げ落とした。

「ぎゃああ！ くそっ！ 見えねえ！」

涙と鼻水を流しまくった、もう1人の暴漢が剣を振り回しながら相手を探している。

ブンブンとでたらめに振り回しているの、危なくて近づけない。俺は咄嗟に捨てたクロスボウを取ると、レーザーサイトを起動して矢を装填した。

そして暴漢の頭に赤い光点と合わせ引き金を引く。男の頭に矢が貫通すると、その場に膝から崩れ落ちた。

「はあはあ……」

身体中を撫で回して確認してみる。大丈夫だどこも切れていないようだ。

確かに肩口に剣は命中したが、なんともない。手で触っても痛みはない。

切れてない！

血まみれではあるが、これは倒した敵の血。その時、下から声が聞こえる。

「おいこら！ どうしたあ？！ 3階の奴はアイテムBOX持ちだから殺すなって言っただろうが？！」

その声を聞いて、俺は吐き捨てた。

「くそっ！」

まだ、敵はいるようだ。

俺はクロスボウに再度装填すると、手に持って部屋の外に出た。廊下には暴漢が持っていたと思われる灯油ランプが置かれて、辺りをオレンジ色に染めている。

俺はゆっくりと階段から下の階を覗いた。

その時、上を見上げたスキンヘッドで真っ黒な口髭を生やした男と目があった。

クロスボウを構えて、レーザーサイトの光点を男の眉間に合わせて、トリガーを引く。

頭蓋に矢が貫通すると、男はそのまま白目を剥いて仰向けに倒れた。

「ぎゃあ！ お頭！」

聞こえてきたのは女の声だ。再びクロスボウに矢を装填すると、ゆっくり階段を降りて2階へ行く。

2階には部屋が5つ。全ての扉が開かれて、客らしい死体が並べられていた。

寝間着姿の女や子供もいて、木の床に血が流れ出ている。

3階と同じように灯油ランプで辺りが照らされて、女が1人で震えながら尻もちをついていた。

よく見れば、この店の給仕の女だ。だが、それを見て俺はピンときた。

「お前が、この悪党どもを引き込んだのか？」

この女が、宿の鍵を開けて悪党どもを引き込み、泊客の詳細をこいつらに教えたのだろう。

「ち、違うんだよ、旦那！」

何が違うのか？ さっき、お頭って呼んでたよな？

「こいつら3人の他には？」

「い、いないよお！ 全部で3人さ」

「女、子供まで殺しやがって……」

俺はクロスボウのレーザーサイトを女の頭に合わせた。女の顔が恐怖に歪む。

「ち、違うんだよ！ 聞いておくれよ！」

「問答無用……」

引き金を引くと、放たれた矢が女の頭蓋を貫通した——もちろん勿論、即死である。

俺がアイテムBOX持ちだって事も、悪党どもに告げ口したくせに——何が違うだ。

「はぁ……」

俺は、デカいため息をこぼして、その場にしゃがみ込んだ。

「一体どうしたもんか……」

子供の死体に手を合わせる。

「仇は取ってやったから成仏しなよ。ナンマンダブナンマンダブ……」

一息つくくと、喉がカラカラなのに気がつく。アイテムBOXから

ナントカの美味しい水のペットボトルを取り出すと、一気飲みをした。

「ふう……」

だが、何かフラフラする。身体を再度確認してみるが、なんともない。

よく考えてみると――腹が減っているのだと解った。これはナチュラル回復ヒールを使った時と同じ症状だ。

――ということは、悪漢の剣が当たった時に、何らかの能力が発動したのか？ これも、『聖騎士』の力ってやつか……。なるほど簡単には死なくなっただようだ。

アイテムBOXから、バナナ2本とカロリーバーを出して食う。死体を眺めながら飯を食うなんて、俺も太くなったなあ。

なんでこうバイオレンスがデフォルトになってしまったんだ？ どうしてこうなった？

元世界に帰るつもりもないが、もし帰ったとしてもまともな生活を送れるのか心配だ。

早く、あの湖畔に帰ってのんびりしたい……だが、元世界から来た奴には会いたいよな。

腹に物をいれて、脳みそに糖分が回りだしたところで、冷静に考えてみる――さて、どうするか？

そういえば、狭い部屋で熊スプレーを使えば、自爆するような気がするが……なんともない。

多分、ナチュラル回復ヒールが働いているのだろう。もしかして毒ガスや、食事に毒が入っていても平気になったのかもしれない。

「うーん……」

そんな事より……帝国の役人等に通報したら絶対に揉めるな。悪

党4人を瞬殺したんじゃ、ただの商人じゃないってバレるし……。そうなれば、スパイの容疑だって掛かる——実際にそうだしな。宿帳には偽名を書いたので、足がつく事はないだろう。

ここは——悪党共の死体をアイテムBOX経由でゴミ箱に入れて処分。そのまま逃げる。

そうすれば宿屋が襲われ客は皆殺しにされて、賊共は逃亡中ってことになるだろう……。これでいくか。

客達の死体をこのままにするのは心苦しいが、仇を取ってやったという事で、勘弁してもらおう。

早速、悪党の死体をアイテムBOXへ入れる。あの女の死体もだ。3階の自分の部屋に戻り、2つの死体をアイテムBOXへ入れ、俺の荷物も入れるが——。

血まみれになってしまった物はゴミ箱行きだ。みれば、自分の服やズボンも血まみれだ。

上着は黒なので血糊は目立たないが、やっぱり気持ち悪い。シャングリ・ラで新しい上下の服を買って着こむ。

そして、悪党共の死体も——ゴミ箱行き。ボタンを押すと、アイテムBOXから【死体×4】の文字が消える。

部屋を確認して、証拠が残っていないか再度見回す。

シャングリ・ラから黒い毛布を買って羽織る。本当はローブがいんだが……。そう思ってサイトを検索してみた。

「おっ！ 売っているじゃないか」

シャングリ・ラに、黒い修道服のようなローブが売っている。これってコスプレ用だろうか？

まあ使えればなんでもいいや。購入して着てみる——中々良い。これで暗闇に紛れる事が出来るだろう。

LEDライトで照らしながら、そのまま1階に降りると、そこにも死体が転がっていた。

こいつは、カウンターの奥にいた、この宿屋の主だ。マジで皆殺しにしたんだな。

裏口を少し開けると、辺りを確認してから外へ出る。

街灯はないので、当然真っ暗。だが獣人は暗闇でも目が見えるので、彼等に見られたら厄介だな。

だが黒いローブで顔を隠しているし、大丈夫だろう。

そのまま、月の光に青く照らされている通りを渡り、ギルドの横道に入る。人っ子一人いない。

行く宛もないのだが、市場へ行ってみようと思う。

LEDライトで足下の石畳を照らしながら、市場へやって来た。当然誰もいない。

市場は畳まれて、露店の部材があちこちに積まれている。

「これって、盗まれたりしないんだろうか？」

そう思っていると、向こうにチラチラとオレンジ色の光が見える。おそらく、警備とか見回りの連中だろう。俺は、市場の外周にある店の陰に隠れた。

見回りを躲^{かわ}して、辺りをチェックしているといい場所を発見。

ある店の脇に半地下へ降りる階段があったのだが、その先には荷物が積まれて埃をかぶっている。

どうやら使われていない様子。ここで黒い毛布を被ったら、俺がいるのかは解らないだろう。

「よし、ここで寝るか……」

俺は黒いローブを着たまま、さらに黒い毛布を被って、狭いスペースに蹲った。

——目が覚める。いつの間にか寝ていた。周りは暗い——だが、建物の陰になっていただけで、上を見ると青空が見える。

ガヤガヤと市場の、ざわめきも聞こえている。黒い毛布をアイテムBOXへ入れると、黒いローブも脱いだ。

そして階段を上ると市場に出る。ここでは商人達が露店を組み立てている最中だった。

当然、店もまだやってない。

腹が減ったので、アイテムBOXからパンを出して食う。野菜も欲しいので、野菜ジュースも飲むか。

食い物に困らんのは、いいことだ。パンを齧っていると、声を掛けられた。

「商人かい？　こんなところで何をしている？」

「ギルドに行きたいんだが、まだ時間が早いので時間を潰している」

「はは、失業者か？　がんばれよ」

まあ仕事もせずに、こんな所で飯を食っているから、そう見えても仕方ないんだろう。

そうこうしているうちに、市場には人が溢れ始めた。時間は——朝の7時頃だろう。

この世界は、明るくなると皆が行動を初めて、暗くなったら寝る。

もうギルドも開いているはずなので、そちらへ向かう。

そしてギルドの前までやって来ると、すでにたくさんの人々が入りしている。

その斜め向かいには、俺が泊まった宿屋があるのだが——すでに人だかりが出来ていた。

おそらく、宿屋で朝飯を食おうとした客が、死体を見つけたのだろう。

「おい、ありやどうしたんでえ？」 「なんでも宿屋に押し込みらしい」「剣呑剣呑」

見ていると、黒い制服を着た、役人らしき男達と、アーマーを着て馬に乗った騎士らしき男がやってきた。

事件現場の検分をするのだろう。それを横目で見ながら、ギルドへ入った。

掲示板を見ても、俺の依頼はまだ貼られたままだ。

それから、しばらくギルドで待つ。その間に市場へ行ったり、新しい宿屋を探しているうちに日は暮れた。

どこで聞いても、人が集まるのは市場かギルドだと言う。

何の収穫もなしだが――追加料金を払って、他のギルドにも依頼を回してもらった。

この街には4箇所のお仕事紹介ギルドがあるという。

「他にいい手が思いつかん。花街辺りで聞き込めりゃいいんだが……」

ちょっと俺1人じゃ自信がないし、トラブルになって重機なんて出した日じゃ大騒ぎになってしまう。

俺は、ため息を吐きながらトボトボと宿屋に向かった。

新しい宿屋は、太った中年女がやっている小さな建物。素泊まりで3セエン（3000円）と格安。

少々ボロいが関係ない。ベッドも使わず、床にエアマットを敷いて寝るんだからな。

また、扉の前にセンサーを仕掛けて寝ることにしよう。

――――――◇◇――――

――帝国滞在3日め。今度の宿屋では何もなかった。朝から、ギルドで粘っているが反応はなし。他のギルドからも連

絡はないという。

連絡といっても、電話等があるわけじゃないからな。獣人達が飛脚で書類や手紙を持ってくるだけだ。

そして昼も過ぎた時、掲示板の前で獣人の女が依頼の張り紙を見ている。その紙は俺が依頼したものだ。

ミャレーのような黒い毛皮を着ているが、あいつの腹は白いし、よく見ると黒い縞模様なのだ――だが、この女は全身真っ黒。

そして大きな三角形の耳が頭の上に突き出ている。

獣人だが字が読めるんだろうか？ 一応、聞いてみるか。

「字が読めるのかい？」

「この依頼はなんて書いてあるにゃ？」

なんだ、やっぱり読めないのか……その獣人に文面を読んでやる。

『帝国の【竜殺し】について、有力な情報を持っている者には、10イェン（10万円）を払う』

「うーんにゃ」

「しらないか？ 話を聞いた事は？」

「うーんにゃ」

反応があるのか、ないのかよく解らん。そもそも依頼の内容が何か解らないのかもしれない。

しばらくギルド内にいたのだが、外の空気を吸いに出た。

歩道でスツールに座り、悩んでいると後ろから声を掛けられた。

「竜殺しを探しているにゃ？」

振り向くと、さっきの獣人の女。茶色の短い上着と赤色のミニスカを履いて、へそを出している。

太めのベルトに短剣を収めているようだ。

「知っているのか？」

「うゝんにゃゝ、どうしようかにゃゝ、あんたがどういう人か解らないしにゃゝ」

そりゃそうだ。もしかして隠遁生活や極秘潜入などで隠れたりしていれば、人には知られたくないはずだ。

「竜殺しとは同郷なんだよ。それで会ってみたいんだ。本当に知っているのなら、頼む！」

「同郷きゃ？ 本当きゃ？」

何か証明するいい方法は――そうだ。俺はアイテムBOXから紙と鉛筆を取り出して、スツールの上で手紙を書いた。

『俺は日本人のハマダ・ケンイチです。貴方は日本人ですか？ 日本人なら会って話がしたい』

文面は漢字かな交じりの日本語だ。

「にゃー、アキラの書く文字に似てる気がするにゃ」

「そいつはアキラって言うのか？」

「しまったにゃ！」

女は両手で口を押さえている。

「それじゃ、この手紙をそいつに渡してくれ、頼む！」

一緒に王国の銀貨2枚を渡した。一応、成功報酬と同額だ。

「どうしようかにゃゝ」

だが、女は俺の臭いをクンカクンカし始めた。

「どうした？ 何か臭うか？」

「獣人の臭いがするにゃ――それと、これは何の臭いにゃ？」

もう3日、皆の所に帰っていないが、風呂に入っていないし洗濯もしていないからな。

彼女に、獣人が2人と森猫が一緒だと説明した。

「森猫もいるにゃ?!」

彼女の話では――帝国側でも森猫は獣人達の神様の使いであるという。だが、殆どその姿は見なくなってしまったらしい。

それを聞いた女は俺に思いつき近づいてクンカクンカしている。おそらく帝国側の森猫は乱獲されて絶滅寸前なのか、それともなんらかの原因で数を減らしたのか。

「家族に獣人や森猫がいるなら、信用してもいいにゃ。それじゃ、返事は明日でいいかにゃ?」

「もちろん!」

「それじゃ明日の朝に、この場所で待ってるにゃ」

「よろしく頼む!」

獣人の女と別れる。

やったぞ! 棚から牡丹餅、瓢箪から駒。畏って事も考えられるが――獣人に小難しい細工は出来ない。

うっかり名前を言ったりして迂闊なところも獣人らしい。それに、アキラってのは、間違いなく日本人の名前だ。

それにしてもアキラか――男だよな? でも、女でもアキラっているしな。

男か女か聞かなかったな………まあ、会えば解るか。

あの獣人は、そいつの仲間か、それとも女か。日本人なら獣人に偏見もないはずだしな――多分。

ちよっとトントントン拍子すぎるかな? もしかして聖騎士になると運も上昇するとか?

それなら、マジで凄いが。

手がかりが掴めたので、ギルドに戻り依頼をキャンセルした。成
功報酬として預けた銀貨は戻ってきたが、依頼料は返却されない。
俺は太った女将さんがやっている小さな宿屋へ戻ると、明日にや
って来る出来事を想像しつつ、まったりとする事にした。

112話 帝国の魔導師

俺は国境を越えて、帝国へ来ている。

俺と同じように、この世界へ転移してきたらしい人物を探すためだ。

全く探す宛もなくギルドや市場で網を張っていたのだが、運良くその人物を知っているらしい獣人の女に接触する事ができた。

帝国の『竜殺し』と呼ばれる人物はアキラという名前らしい。

名前だけ聞くと明らかに日本人だ。ただ男か女かは聞くのを忘れた。

俺と同じように日本から転移してきたらしい帝国魔導師。そして、そいつはマヨネーズを大量に造り出すという独自魔法使いだと言う。

マヨネーズ？ 果たしてそれは本当なのだろうか？

まあ、本当かどうかは会えば解るのだが……。

——朝、小さな宿屋で起きる。素泊まりなので、そのまま女将に挨拶して、ギルドへ向かった。

ギルドの玄関の前にスツールを出して、それに座りながら朝飯を食う。

シャングリ・ラで買った、パンと牛乳——そして、カロリーバーだ。

デザートにバナナを食っていると、昨日会った獣人の女がやって来た。

「おはよう！ 手紙を見せてくれたか？」

「おはようにゃ。アキラに見せたにゃ。凄い驚いてたにゃ。アキラ

も会いたって言ってたにゃ」

「それじゃ、会わせてくれ！」

彼女の話では、彼のいる場所は、この街の外れ——国境の壁は南北に走っているの、南の壁際にある一軒家だと言う。

「それじゃ結構距離があるのか……」

「あるにゃ」

俺がバイクでも出そうかと迷っていると、彼女が背負っていくと言う。

ミャレーにも背負ってもらったことがあるし、獣人ならそれぐらいは平気だろうと思う。

「いいのか？」

「いいにゃ。アキラも早く会いたがっていたしにゃ」

それじゃ、お言葉に甘えさせてもらう。

彼女は俺を背負うと、猛スピードで南の方角へ走り始めた。

「おわあああ！ もっとゆっくりでもいいんじゃないかね？」

「このぐらい大丈夫だにゃ」

いやそうだけど、バイクでも街の中をこんなスピードで走らないからな。

しかも人混みを縫いながら、かなりのスピードで走っている。これはバイクでは真似ができない。

「ちょっと聞きたいんだけど、アキラって男か？ 女か？」

「男だにゃ」

男なのか。

そして5分ぐらいの疾走のあと、家は徐々に疎らになり、草がボーボーの荒れ地が増えてきた。

そのまま細い道を右にゆっくりとカーブした所に家が見える。国

境の壁際に建つ小さな木造の家。

以前、王女に聞いたとおり——国境の壁は、ここから遠くに見える森の中まで続いているようだ。

「アキラー！ お客を連れてきたにゃ！」

獣人の女の声に反応するように、家から男が出てきた。上下に黒い服に、富士額が目立つ黒く短い頭。

だが見るからに日本人のオッサンだ。多分、俺と近い歳だと思われる。

黒い服は、帝国の軍服であろうか？ 帝国の役人たちも似たような服を着ていた。

「おおっ！ マジで日本人か？！」

獣人の背中から降りた俺を見て、男が叫んだ。

「ああ、日本人だ」

「まさか、こんな異世界で、日本人に会えると思わなかったぜ！」

「俺もだよ、以前から噂は聞いていたんだがな、ソバナにやって来る途中で、『竜殺し』がこの街にいて聞いてな」

「はは、竜殺しか——確かにそうだが——まあ！ 立ち話もなんだ、中に入ってくれ！ 何もねえけどな」

男に敵意は感じられない。本当に日本人に会えて、喜んでいるようにしかみえない。

別に疑っているわけじゃないんだが。

家の中は板の床と板の壁、天井板はなく屋根裏が見える。

ベッドが2つと小さなチェストが1つ、床に手荷物が置いてある以外に何もない。台所に鍋と食器があるぐらいだ。

本当に仮の住まいって感じがする。そして家の中にはもう1人、金髪をポニーテールにしている女がいた。

黒色のフリルがついたブラウスに、藍色のロングスカートを履いて金色に光る帯剣している。

いかにも鍛えている体つきなので、おそらく戦士か騎士なのだろう。眼光鋭く、こちらを睨んでいる。

俺のことを刺客か何かだと思っているのかもしれない。

男の案内で、部屋の真ん中にある四角いテーブルに座った。

「改めて紹介させてくれ、ケンイチだ。一応苗字もあるが、ここでは名前だけでいいだろ」

「俺もアキラでいいぜ」

だが人の家を訪れたのに、手ぶらなのに気がついた。

「そういえば、土産も持たず手ぶらだったな。申し訳ない。元世界のもので何か欲しいものはないか？」

とりあえず飲み物ということで、俺は24本入りのコーラをショッピング・ラから購入した――2000円だ。

ダンボールがドスッとテーブルの上に落ちてくる。

「コ、コーラか？」

「そうだ。冷えてないけどな」

「ビールはないのか？」

「あるぞ、俺は飲まない人だけだな」

6本入りのエ〇スビールが落ちてきた――1200円だ。

それを見たアキラが信じられないような顔をした。そりゃそうだろう。

「おおっ！ エ〇スじゃねえか！？　なんだこりゃ？　一体どうやって……」

「俺の魔法だよ。元世界のものをある程度作り出すことができる。それとそれを入れるためのアイテムBOXだな」

ショッピング・ラのことは秘密にしておこう。

「なんだよそりゃ！ めちゃくちゃ便利なチートじゃねえか！」

「まあ——言っちゃなんだが、かなり便利」

「俺なんて、マヨネーズだぞ！ マヨネーズ！ なんだよ、マヨネーズって！ ワケワカメだろ！？」

それについても聞きたかった。マヨネーズのチートとは、一体どういうものなのだろうか？

「マヨネーズを作り出せるって本当なのか？」

「ああ、何か入れものはないか？」

俺はアイテムBOXから、カップを取り出した。

すると、アキラは人差し指から何か黄色いものを出してカップを満たした。

俺はカップを覗き込む。

「まさしく色はそれだな」

そして指を入れて舐めてみると——。

「マヨネーズだ……」

「あと、こういうこともできる——分離！」

アキラの言葉と共に、マヨネーズが茶色い液体に変わり、何かが底に沈殿した。

「こりゃ……油か？」

「そうそう、これでかなり稼がせてもらったぜ。この世界は油が高価だからな」

マヨネーズの原料は酢と卵と油だ。それらを分離して油に戻したんだろう。

油の下に澱^{おり}が溜まっているが、これは卵と酢の成分だと思われる。しかし、マヨネーズって、ほとんどが油成分なんだな。こんなの食いまくったら太るに決まっている。

「量は、どのぐらい出せるんだ？」

「かなり出せるぞ。そうだな、デカイプールに満杯にすることも可能だと思う」

「いや、それかなり凄いチートじゃないか？ 歩く油田だぞ？」

「そうなんだよ、この能力が皇帝にバレてから、資金作りのためにかなり油を作らされた」

「討伐したドラゴンを取られたり？」

その言葉を聞いた、アキラの顔色が変わった。

「そうなんだよ！ くそつたれがあ！ あの冷血女め！ 散々、俺をこき使いやがってえ！」

その言葉からすると、アキラは皇帝に不満を持っているらしい。皇帝の悪口を色々と並べ立てているが――彼の魔法が気になるな。

「マヨネーズを出すのに、何か対価は必要なのか？」

「特に何も。ケンイチは？」

「俺は、金貨や金目のものが対価になる」

「そりゃ、結構大変そうだな……」

「最初はちよつと苦労したかな」

アキラは、作り出したマヨネーズを使った粉ものの屋をやったらしい。

「粉ものって、お好み焼きとかか？」

「そう！ 元世界でも、お好み焼きって外人に人気だったろ？ それで絶対に受けると思ってな」

「売れたのか？」

「めちゃくちゃ売れたぞ」

売れすぎて、1人じゃ店が回らなくなったらしい。それで丁稚を2人雇って一緒に暮らしていたと言う。

「あの時が一番楽しかったなあ」

——とアキラが思い出すように目を細めている。

タコ焼きも考えたらしいのだが、タコに似たものが手にはいらなくて断念したらしい。

タコに似ているといったら、スライム？ スライム焼きか？

ちょっと美味しそうに思えるのだが、俺が異常なのだろうか？

「この世界に来てから、どのぐらいたつ？」

「そうだな——約2年ぐらいになるか……」

「俺は7、8ヶ月ぐらいだな」

この世界は1ヶ月28日なので、13月までである。

「そうだ！ ケンイチ！ アルミはないか？」

「アルミ？ この世界じゃアルミは魔法の触媒に使えるってのを……」

……？

「勿論、知ってる。俺は転移した時にポケットに入っていた1円玉もちろんを使ってた」

「その1円玉は？」

「消耗したのか、徐々にボロボロになって崩れてしまってた……」

「アルミといえば、ビールの缶がアルミじゃなかったか？」

アキラが出したばかりのビール缶を掲げて、注意書きを見ている。

「確かにアルミだ！ 飲んだ後にこいつを潰して使おう！」

「こりゃ、迂闊にビール缶も渡せないな……」

俺は、敵か味方が解らんやつに、アルミを渡した軽率な行為を、ちょっと反省した。

だが話している限り、彼に問題点は見つからない。

「大丈夫だって！ ちゃんと管理するからな。なにせ敵対する奴らに渡れば、こっちがピンチになる」

彼と話をしながら、部屋を見渡す。

「パーティはこれで全部か？」

「いや後は、センセがいるが——魔導師だ」

「先生？」

「俺の師匠だよ。獣人のミャアは娼館から身請けしたんだ。そっちは、俺のチ○○に負けた女騎士だ」

「わ、私は、お前のチ、チ○○などには負けてはいない！」

騎士という女が顔を真赤にして激昂、アキラに詰め寄った。

「何言っただ、昨日の夜だって負けまくってたくせに」

「くっ！ 殺せえ！ 今すぐ、私を殺せえ！！」

くっころの女騎士キター！ 俺の前には現れないで、こんな所にいたのか。

「落ち着けよ、俺のチ○○に負けた女騎士さんよ」

「その言い方は止めろおお！」

女騎士が金髪を振り乱して、アキラに掴みかかったのだが、逆にアキラに掴まれて、いきなり倒れた。

そして床の上でビクビクと痙攣している。もしかして、この能力は……。

それに彼の指には、複数の指輪が嵌っている。

「こいつは、口ではこんなことを言っているけど、いじめられて喜ぶ変態だから」

ああ、なるほどそういう——いや、問題はそこじゃない。

「それって、ナチュラル回復ヒールのオーバードーズじゃ……」

「そうそう、よく解るな」

言うか言うまいか、ちよっと迷ったのだが……。

「実は――王族から祝福みたいなものを貰って、俺も似たようなことができるんだ」

俺は、指に嵌っている、魔力を抑える指輪を見せた。

「おっ！ マジで？ 俺も皇帝から祝福を貰ったんだよ」

2人の話を統合すると、この世界の偉い人は、そういった力を持っていることがあるようだ。

帝国の皇族の能力も一般には知られていないらしい。

「パワーの限界も結構上がるぞ？」

アキラは、かなり実戦の経験が豊富なようだ。

「マジか？」

「火事場の馬鹿力みたいなものが出るようになる。すげえ腹が減るけど」

「それは試してみないとな……」

だが、いきなりアキラが立ち上がった。

「でもな！ この祝福を貰って、簡単には死なくなっただもんだから、あの冷血女が嬉々として俺を死地へ送り込みやがって……」

「冷血ってどんな感じなんだ？」

俺の質問に、アキラがストンと椅子に座る。

「もう本当に優しさの欠片もないって感じだったな。親から愛情を受けずに育つとあなるんだなって思ったよ」

今の皇帝は、自分の親すら躊躇なく殺したらしい。

「モンスターを凄い数倒したって聞いたけど……どうやったんだ？」
「それは簡単、一面を油で満たして火を点けた」

つまり、マヨネーズから作り出した油を使ったわけか。マヨネーズが、ほぼ無尽蔵に出るからできる荒業だな。

「ドラゴンも、そうやって倒したのか？」

「いや、レッドドラゴンにも火を点けたんだが耐性があってな。ダメだった」

「それじゃどうやって？」

「建物に登ってだな――」

魔法で拘束してから、そこにいる獣人の女にドラゴンの口めがけて投げ入れてもらったらしい。

「自分から、ドラゴンの口の中に飛び込んだのか?!」

「どんな強力な魔物だろうが、気管や肺がマヨネーズで満たされりや……」

「窒息したのか？」

「ああ――でも、アンデッドには使えねえけど、ははは」

確かに――どんな化け物でも、生き物である限り呼吸ができなくなれば死ぬな。間違いない。

「めちゃくちゃだな。言っちゃ悪いが、頭おかしい……」

「皇帝にも同じことを言われたが、やらなきゃこっちがブレスで火あぶりの刑だ。仕方ないだろ」

そりゃそうだ。俺だって家族を守るために自爆しかなければ、その道を選ぶかもしれない。

「だが、それだけ命がけでやったのに、手柄を横取りされたんじゃ、お前が怒るのも無理はない」

「だろ?! だから、嫌になって出奔してきたのさ」

アキラが、ここにいる理由は解ったな。これなら、こちらに引き込めるかもしれない。

「まあまあ、落ちついてコーラ飲みねえ」

俺はアイテムBOXから、自分用のコーラを出した。これは、アネモネの魔法で冷やしてもらったものだ。

それを見たアキラが、何かをすると、テーブルの上のコーラとビールのセットが消えた。

「アイテムBOXか？」

「ドラゴンを倒したあとに使えるようになってな」

マロウさんの時にも見たが、端からアイテムBOXを見ると、こんな感じなのか。

「最初から使えたわけじゃないのか？」

「まあ——おっ！ 冷えてるな！ コーラじゃなくて、ビールを飲みたいところだが、朝っぱらから酒なんて飲んでたら、センスにどやされちまう……」

「その先生ってのは怖いのか？」

「ああ……んぐんぐ！ ぷはあ！ うめえ！」

コーラを飲み干したアキラが満面の笑みを浮かべた。

アキラの顔をみると、その先生という人は怖い人らしい。だが怖いといっても色々がある。

お城の王妃みたいのだったら、ちょっと勘弁してもらいたい。

2人で冷えたコーラを飲みつつ、話を続ける。

「後は、シーフの女がいたんだが、この街で寿退社して別れた。穀潰しだったんだが、鍵の仕組みや罠を教えたら、そこら辺に才能があったらしくてな」

「俺も子供を拾ったんだが、魔法の才能が凄くてな。今や大魔導師だよ」

「この世界にはちゃんとした教育機関がないからな。センセだって孤児から成り上がったって話だし」

「あれ？ その話ってどこかで聞いたような……」

「ん？ 王国でも、センセは有名なのか？」

ギルドで、夜鳥のレイランって大魔導師を見たって奴がいたが……。

「もしかして、アキラの先生って『夜鳥のレイラン』さんか？」

「おおっ！ やっぱり、センセは王国でも有名なんだなあ」

やっぱり、そうか。

「それじゃ5人パーティだったのか？」

「いや、もう1人エルフがいたんだが、故郷の森からあまり離れられないようで、帝都で別れた」

「エルフかく。ドワーフには会ったが、まだエルフには会ったことがないんだよなあ。やっぱり美男美女ぞろいか？」

「ああ――年寄りばかりだが、全部が間違いなく目の覚めるような美男美女揃いだ」

彼が指輪を見せてくれた。エルフの言葉が解る自動翻訳機らしい。

「魔道具って凄いやなあ。元世界の科学でも実現できないものもあるし、方向探知機とかさ」

「それは俺も持ってるよ。親子になって、子供が親を指さすやつだろ？」

どうやら帝国にも同じ魔道具があるようだな。

それから彼と情報交換をしたが、この世界へやって来たきっかけや、帰還の方法などは一切不明。

だが彼も帰るつもりはないらしい。

「だってなあ、帰ったってブラック企業勤めだし……」

「なんの仕事をしていたんだ？」

「不動産関係だよ」

「土地を売ったり買ったり？」

「それはそうなんだが……競売^{けいばい}って知ってるか？」

競売ってのは、破産した奴の財産が金融機関経由で裁判所に差し押さえられて、所謂オークション^{いわゆる}に掛けられるわけだ。

土地や家のこともあるし、アパートの住民が夜逃げして、部屋を丸ごと競売に掛けられることもある。

「競売の不動産を売買していたのか？」

「ちよつと違うんだなあ。競売で安いボロ屋を落札して、リフォームして高く売る仕事さ」

「へえ、そんな仕事もあるんだ」

「へへ、結構これが儲かるんだよ」

——とはいえ、不動産には8〇3が絡んでくることもあって、結構危ないこともあると言う。

「危ないとかブラック企業とか言ってもな、命がけの仕事じゃないし……あ、一回だけ危なかったことがあったな」

「そんなことが、あったのか？」

「ああ、競売で落とした家に占有屋がいてなあ」

占有屋ってのは、不動産を不法占拠して、「どいてほしかったら、金を出しな！」っていう8〇3連中のことだ。

「8〇3と揉めたのか？」

「ハ〇エースで拉致られて、山で生き埋めにされるところだった、ははは！」

ここでも大活躍のハ〇エース。だが笑いごとじゃないような気がするが……。

「よく助かったな？」

「ああいう場合は、ほとんどが金で解決するんだよ。恨みでやっているわけじゃないからな。逆に恨まれていると問答無用だから、覚悟を決めないとアカン」

確かに、すげえブラック企業だな。だが淡々と死地へ追いやられる帝国魔導師よりはマシだというのが。

「ケンイチは何の商売をしてたんだ？」

「俺は田舎で、ネットを使って絵描きをした。イラストレーターってやつだな」

「へえ——それじゃ絵が描けるんだ？ 田舎ってどこだ？」

「北海道だよ」

「お！ 北海道はバイクで行ったぜえ！ 牧場に住み込んで働いたこともある」

彼の話では——住みこんでいた場所は、サラブレッドの生産牧場みたいだな。

「朝の3時とか4時からたたき起こされてなあ。懐かしい……この世界の馬は戦車みたいな馬ばっかだけど、かわいいよな」

「それじゃ馬にも乗れるのか？」

「ああ、乗れるぜえ」

馬の様子を嬉々として話すアキラ——動物好きには悪い奴はいないと思うのだが。

「馬もだけど、この世界で驚いたのは獣人だな」

俺の話に、アキラが反応した。

「ああ、俺は娼館で初めて見たな。本拠地だった帝国のミダルって街は、獣人があまりいなくてよ」

「俺の初めての街には結構、獣人いたけどな……」

「2人も囲っているって話だったけど？ 中々やるねえ。確かに獣人のモフモフは病み付きになるからなあ」

アキラは腕を組み、ウンウンと唸っている。

「1人は俺の知り合いだったが、もう1人は妻の護衛だからな」
それを聞いたアキラが驚いた。

「結婚しているのか?!」

「式もないし、戸籍もないけど、彼女の親には挨拶したし——そういうことになるだろうなあ」

「それじゃ、この世界に骨を埋める覚悟ができてるんだ?」

「そういうアキラはどうなんだ? その先生って人が本妻なんだろ?」

「あの、まあ——その、なんだな……そうなんだが……」

その時、後ろで話を聞いていた獣人の耳がピンと立った。

「アキラ、レイランが帰ってきたにゃ」

「おお、そうか!」

それから5分ぐらいして、玄関の扉が開いた。

「帰りましたよ」

入ってきたのは、艶やかな長い黒髪を後ろでまとめて、烏色のロングドレスを身にまとい、横に入ったスリットから出た色っぽい脚。そして、ドレスからはみ出て、落ちそうになっている爆乳……歳は20代後半であろうか。

それを見た俺は、思わず叫んだ。

「フアイヤー!!」

「「ジャストミート!!」」

俺とアキラの声がハモった。

「ははは、ケンイチも観てたくちかい？」

「まあ、俺らの世代は皆観てただろ」

TV番組の掛け声みたいなものなのだが……それを聞いたレイラ
ンさんが、目をパチクリさせている。

「お、お客様ですか？」

「こんにちは——いや、おはようございますですね。私、アキラと
同郷のケンイチと申します。どうぞ、お見知りおきを」

「あ、はい……」

「センセ、大丈夫だよ。怪しい奴じゃないからさ」

「けど女性が多いなら、違うお土産の方が良かったか……」

俺はシャングリ・ラを検索して、3000円のイチゴタルトを購
入した。

購入ボタンを押すと、白い箱に入ったタルトが落ちてくる。

「これ、お菓子ですから。皆様で召し上がって下さい」

「にゃ！ お菓子にゃ？！ 甘いにゃ？！」

「そう甘いよ。果実が入っている」

「アキラ！ 食べるにゃ！」

箱の蓋を開けると、白く丸い生地に真っ赤なイチゴのコンポート
が載ったタルトが現れた。

「うみゃー！」

「ふああああ！」

レイランさんとミヤアの目がキラキラと輝く。まあ、一目で美味
そうって解るビジュアルだからな。

ミヤアに急かされるように、アキラはタルトをナイフで切り始め
た。

「アキラ、皿とスプーンはあるか？」

「深皿は台所にあるが……」

「私が持ってきます！」

レイランさんが、取りにいってくれた。彼女もタルトには興味津々で早く食べてみたいようだ。

テーブルの上に皿が並べられたが、アキラが皆を制した。

「待て！　まずは俺が毒味をする」

「もしかして祝福のお陰で毒があまり効かない体質になっているのか？」

「そうだ。だから、怪しい食い物を食べるときは、まずは俺が毒味をすることになっている」

そう言って、アキラはスプーンを使ってタルトを大きく抉ると一口に運んだ。

「どうにゃ？」

「どうなんですか？　アキラ？！」

「うぐぐっ！　これは！　これは毒だから、皆は食わない方がいいぞ！　責任を取って、俺が全部処分するから！」

アキラは箱ごとタルト持って逃げた。

「その顔は絶対に違うにゃ！」

「アキラ、待ちなさい！」

「センス！　こんなの食ったら、絶対に太るって！　それ以上、パイオツがデカくなったらどうするんですか？」

「魔法を使っていれば、太るはずがないでしょう？！」

「そんなことしなくても、食いたいなら、おかわりもあるから心配するな」

「マジか？」

俺の言葉に、アキラがタルトを置いて皆に配り始めた。

「もう、アキラは本当に性格悪いにゃ」

「本当にそうですね」

「ははは、そんなに褒められてもな」

「褒めてませんから！」

だが、タルトを食べた女性陣が恍惚の表情を浮かべている。

「なんにゃ〜甘くて美味くて甘くて美味いにゃ〜」

ニヤメナとミャレーと同じ反応だな。獣人はボキヤブラリーが貧困すぎる。

「ほわぁ……まるで口の中が天国になったような幸福感……」

「いやぁ、2年ぶりにこんなの食ったよ。ここのお菓子ってば、クッキーみたいなしかねえからな」

アキラもタルトは気に入ったようだ。酒飲みみたいだから、甘いものは好きなのかもしれない。

「あれはあれで、まあまあじゃん」

「そうだけどさ！」

「飲み物も出すか……」

アキラが用意したカップに、ペットボトルの無糖紅茶を注ぐ。

「おい！ 俺のチ〇〇に負けた女騎士さんよ！ 美味しいお菓子だぞ！」

アキラが、床にひっくり返っている女騎士に蹴りをいれた。

「私は、貴様の情けなどは――！」

文句を言おうとした女騎士の口に、アキラがタルトを突っ込んだ。

「はあ！ もぐもぐ！ こ、これはなんという美味！ まさに、この世に在らざるもの！ これは、悪魔の菓子か！」

「文句があるなら食うなよ。俺が代わりに食ってやる」

「そうはいくか！」

女騎士は床に胡座をかいたまま、タルトをガツガツと食べ始めた。

「こんなものであるのか？ どのぐらいの種類を魔法で作れるんだ？」

「今のところ、不明だな。それに金もいるしな」

「銃とかは？」

「無理だ。武器なら弓やクロスボウなら作れるし、爆薬は自分で作った」

「マジか！」

だが、皆でタルトを食いながら、ほわほわしていると、ミャアが耳を立てた。

「アキラ！ だれか来るにゃ！」

「1人か？」

「1人にゃ。でも訓練された奴じゃないにゃ……多分、女にゃ」

「カロリンじゃないのか？」

「全然、違うにゃ」

カロリンというのは、寿退社してパーティから抜けた女の名前のようだ。

「敵か？ 大丈夫か？」

「はは、まあな」

アキラは歴戦のようで、動揺している節もなく、黙々とタルトを食べている。

「アキラ、来たにゃ」

アキラが玄関へ行くと扉を開いた。

「アキラ様〜！」

外へ出たアキラを見て、甲高い女の声が響いた。

そして、走ってきてアキラに抱きついたのは、30代半ばのふわふわ金髪の美女だ。

白いブラウスに紺のロングスカート。そして金の刺繍の入った青いストールのようなものを肩に掛けている。

「ア、アンネローゼ?! どうしてここに？」

「アキラ様にお逢いしたく、ここまで追って参りました」

ミャアが俺の所にやって来た。

「あれは、アキラが寝取った黒石屋って商人の女房にゃ」

「寝取りかよ!」

「ちょっと待て! こいつの亭主が、俺の商売の邪魔しやがったんだよ。札付きの悪徳商人だったんだぜ?」

「その通りですわ!」

女もそれには異論はないようだ。

「でもアキラは、娘にも手をつけたにゃ」

「ええ〜っ! 本当かい? それって、伝説の親子丼……」

だが、アキラは必死に弁解している。

「いや待て待て、娘には手を出してねえって! 黒石屋を凹ますために、そういうことにしてたけどな!」

「本当にゃ?」

「おいおい———そういえば、アンジェリーナはどうしたんだ?」
アンジェリーナというのは、娘の名前らしい。

「娘は、黒石屋を継ぐことになりました」

「まあ彼女はしっかり屋さんだからな、大丈夫だろ」

「主人は秘書と一緒に引き籠もり、私の居場所がなくなったのでございます。それで、アキラ様のご慈悲にすぎらうと……」

「それは、可哀想だとは思うが……」

それまで黙ってタルトを食べていたレイランさんが立ち上がった。

「アキラあ——その女とは切れたと言ってましたよねえ……」

「ちよっと、センセ！ 落ち着いて！ 切れた！ 本当に切れたんだって！」

「レイラン様！ やるならひと思いに、アキラ様と一緒に！」

「アンネローゼ！ そういうのはセンセには止めろって、マジで洒落にならんから！」

それから、しばらく修羅場が続いた。

俺は紅茶を飲みつつタルトを食って、場が収まるのを待つことにした。

113話 亡命のススメ

帝国の街を訪れて、俺と同じ元世界からやって来たという男に会った。

名前はアキラ——日本人だ。噂通り、大量のマヨネーズを作り出すという、わけの解らん能力を持っている。

そして俺と同じように——帝国皇帝から、簡単には死ななくなる祝福を授かったらしい。

俺がここへやって来た本来の目的——亡命の勧め——その事を話そうか迷っているうちに、彼が手を出した女が訪ねてきて修羅場になってしまった。

そこで俺は、もうひとつシャングリ・ラからタルトを買った。今度フルーツタルトだ。

箱から、色とりどりの果物が載ったタルトを取り出し、テーブルの上に置くと、皆の視線が集まる。

すると皆が黙ってテーブルについて、黙々とタルトを食べ始めた。

「なんという至福の甘さでしょう！ ああ、ものすごく美味しいです、これ！」

商人の元妻だという女性もタルトに舌鼓を打っている。彼女は元々、貴族の娘らしい。

「落ち着いたところで話していいか？ アキラ」

「ああ……」

「皇帝とは完全に切れたのか？」

「ああ、もう戻るつもりはない。なんで、あんなにこき使われなき

やらねえんだよ、意味が解らん。多少給料がよくても、命がけじや割に合わない」

「どうやって逃げてきたんだ？」

「あまりに人使いが荒いんで、ブチ切れてな。『一発やらせろ！』って言ったんだよ」

「ええ？ マジか」

それで本当にやったというのだが……。

「そりゃ、まずいんじゃないのか？」

「ああ、そりゃそうなんだが、やったの……ほら別の方だから……」
アキラの言葉で大体を察した。

「それでな——祝福の力を使いまくって、俺の作った魔道具も使いまくって、皇帝が白目剥いてぶっ倒れるまでやりまくって、ガバガバにして逃げてきた」

何がガバガバになったのかは問うまい。

「なんだそりゃ。そんなの捕まったらクビが飛ぶんじゃないのか？」

「まあ、飛ぶかもなあ……だから、この街に逃げてきたんだよ」

この街はソバナに接しているの、ここに討伐隊を送り込めば、王国への侵略を疑われて一気に両国の緊張が高まる。

皇帝は玉座についたばかりで地盤固めをしている真っ最中だ。他国との戦闘をしている余裕はない。

アキラ達は、そこにつけ込んだわけだ。

「もう逃げる時にな、白亜の御殿を油で満たして、赤猫這わしてやろうかと思ったぐらいだ」

赤猫ってのは火をつけるって意味らしい。

「やってたら、マジでやばかったかもな」

「俺もそう思ったし、一步手前で踏みとどまった」

なるほど事情は解った。しかし、かなり剣呑な奴だな。

こんな奴を亡命させて大丈夫だろうか？ 一抹の不安が残るが……。

「そんな貴方がたに朗報です。王国へ亡命してみませんか？」

「「ええっ!？」」

皆の声がハモった。俺が王国側からやって来た事も話した。

「王国へ来れば、帝国も手出しが出来ないぞ」

「確かにそりゃそうだが……」

「それに、俺の近くにいれば、元世界の物資もある程度、供給出来る。無論、金はもうが。それに、王族に掛け合えば、ある程度の地位は保証されると思う」

アキラだけに解るように話しているので、他の人には何がなんだか解らないかもな。

「また、こき使われるだけじゃ……」

どうも、アキラは疑心暗鬼になっているようだ。余程、過酷な労働環境だったらしい。

「まあ実力者なら、お願いはされるけど褒賞は出るよ。それに帝国と違って、問答無用で徴発されたりしないし。まあ王侯貴族の理不尽さは多少はあるけど」

俺も、それに巻き込まれた口だ。

「やっぱり……」

「だがまあ、それはどこの国へ行っても似たようなものだろう？」

俺は、国王から天下御免の書状を貰っているからな。貴族共は排除出来るぞ？」

「そんな物を貰えるとか、何をやったんだ？」

「まあ、色々——ははは」

アキラ達は顔を見合わせている。そりゃ迷うだろうな。

「帝国の王国への侵攻はしばらくなさそうだし、危ないのは共和国だな」

「それは皇帝からも聞いた。こんな世界にも共和国があるってだけで、びっくりだが」

「後は、魔物退治ぐらいだよ。それに——俺とアキラがいれば、ドラゴンだって余裕なはずだ。なんたって、ドラゴンスレイヤーが2人だから」

「ケンイチもドラゴンをやったのか？」

「俺がやったのは、レッサーとワイバーンだがな。うちにも大魔導師がいるし、『夜鳥のレイラン』も味方になってくれるとなりや、百人力だ」

「うーん……」

アキラ達は悩んでいるようだ。

「結論が出るまで、結構かかりそうか？ 数日なら、俺は外でキャンプして待っているぞ」

「ウチの前でか？」

「ああ、その道具はアイテムBOXの中に全部入っているし」

「お前のパーティは？」

「王国側のソバナにある公爵邸にいる」

「ソバナの公爵とも知り合いなのか？」

俺のパーティに王女が同行している事をアキラに話す。彼は、その話を興味深そうに聞いている。

「王女から、お前たちの引き抜きを任された」

「なんだって……そりゃ、かなり本腰を入れたスカウトなんだな？」

「その通り」

そうはいつでも簡単には結論は出ないだろ。

俺は、外に出るとキャンプの準備を始めた。アイテムBOXから草刈り機を出すと、草を刈り始める。

バリバリとけたたましい音に、アキラが玄関から出てきた。

「そんな物まであるのか？」

「ああ、便利だぞ。チェーンソーもある」

「バイクとか車は？」

「勿論ある」
もちろん

「マジでか？ 燃料はどうしてるんだ？ 魔力で補充とかいうチート？」

「いやーディーゼルエンジンしか使えないが、俺が薬品と魔道具でバイオディーゼル燃料を作っている。アキラの作る油も植物油だろうから、バイオディーゼル燃料に使えるぞ」

「それでも、チートすぎるだろ……」

彼は、かなり呆れているようだ。

「それに引き換え、なんなんだよ、『マヨネーズ能力』って、ふざけてんのか？！ 責任者出てこーい！ こんちくしょう！」

「まあ、そんなに腐るなって」

「そうは言うけどな……パソコンとかも作れるのか？」

「出せるがーネットがなきゃタダの箱だぞ？」

電卓等で計算するだけなら、そろばんがある。実際、ノートPCは買ったが、本の取り込みにしかつかってない。

表計算ソフトは、経理などに便利そうだとは思いが……。

「……そりゃそうか……しかしなあ、こんな世界に放り込まれて、こりゃ一体なんだと思う？」

「さあなあ……あれじゃね？　上で誰かが暇つぶしで見てるとか……」

俺は空を指さした。

「それで——誰が面白い事をやるかを見ているのか？　さしずめ俺の能力は、外れ能力ってやつだな」

「でも外れ能力で、レッドドラゴンを倒したんだから、大穴だぞ？　賭けをしていたら万馬券だ」

「ありえそうな話なので、そういうのは止めてくれ。洒落にならねえ。大体、大穴だったのに、なにも褒賞を貰ってないぞ？　……あ

あ、アイテムBOXが使えるようになったか……」

アキラのアイテムBOXは家1軒分ぐらいの容量だと言う。大きな限界は3m程。

俺のアイテムBOXの方がかなり性能がいい。

彼に見せるために、アイテムBOXからオフロードバイクを出した。

「おおっ！　本〇の2ストじゃないか！」

「普通のガソリンが手に入らないからな。草刈機やチェーンソーに使う混合燃料を使っている」

「乗っていいか？」

そういえば、アキラはバイクで旅をしていたと言っていたな。

彼がバイクに跨るとキック一発。エンジンが始動した。

そして、その場でアクセルターンを決めると、ウィリーをしたまま草の中の小道を走りだした。

かなり運転が上手く、乗り込んでいるのが解る。100m程疾走して戻ってきた。

「はははっ！　こりゃすげえ！　俺にも売ってくれ！」

「そりゃ、やぶさかじゃないけど。俺の近くにいないと燃料が供給できないぞ？ アキラの油じゃ動かないし。壊れたら修理も出来ない。工具もないし、メンテに使うオイルとかもないだろ？ パンクやチェーンが切れたら終了だぞ？」

「そう——だよなあ……」

バイクの話をしながら、草を刈り終わったので、小さなテントを出した。

1人ならこれで十分だ。デッキチェアとパラソルもだそう。

「アイテムBOXの拡張とか出来ないかね？」

「さあな。ステータス画面にも何も書いてないし……」

俺の呟きにアキラが食いついた。

「ステータスって見れるのか!？」

「俺は見る事が出来るが、名前と歳しか書いてないぞ」

「なんじゃそりゃ……」

彼は、かなりがっかりしたようだ。スキルとか、アーツとかそういう物が後付出来るかと期待したらしい。

俺はデッキチェアに座り、シャングリ・ラで電子書籍を読み始めた。

アキラは家に戻って、家族会議の続きをするようだ。
さて、どのぐらいで結論が出るだろうか？

— — — — —
— — — — —
— — — — —

遠くから昼の鐘の音が聞こえてきた。

腹が減ったので、飯を食うことにした。鍋に入っただまのお湯をアイテムBOXから出す。

沸かしすぎた時は、こういう事も出来るから便利だよな。
カップ麺を取り出して、お湯を入れてみると、アキラがやってき

た。

「カップ麺か？」

「お前も食うか？」

「いいのか？」

食いたそうなので奢ってやる事に。彼は一旦家に戻ると、俺の所へやって来た。

彼の仲間は家の中で食事をとっているようだ。

「マジで何でも作れるんだな？ 金が必要って言ってたけど、日本円じゃないよな？」

「普通に金貨とか宝石でもいい」

オッサンが2人で、カップ麺を啜る。

「それで、結論は出たのか？」

「ああ、亡命する事にした。元々、そのつもりだったんだ。ここで下準備をしていたんだが、色々と問題があってな……」

「問題？ どんな？」

「金だよ」

彼の話だと、仲間の財産の殆どが、ギルドカードというカードの中に入っているそうだ。

大量の金貨とか持って歩けないからな。その金額は5億円にのぼるという。

「なるほどなあ。帝国のギルドカードってのは王国じゃ使えないからな。一旦換金して王国へ持ち込む必要があるってわけだ。換金するだけでも時間が掛かるな」

「そうなんだよ」

えーと、アキラの財産が5億として――王国金貨だと2500枚だから、金貨1枚30gとして75kg……。

「金貨だけで100kgぐらいか？　まあ、アイテムBOXがあるなら余裕だろう？」

「ああ、もう俺のアイテムBOXの中に入っている――よし！　決まりだな！　飯を食ったら準備をするから待っていてくれ。ズルズルッ！　うまっ！　久々に食うと美味いな！」

アキラは、美味そうにカップ麺を啜っている。

「すぐに飽きるけどな。この啜るってのも、こっちの人間は出来ないんだよな」

「ははは。こりゃ日本人特有のスキルみたいだからな」

「この家は？」

「大丈夫だ」

この家は半年契約で借りた物だという。家賃は一括払い。

「家を借りるにも保証人がいるからな」

「帝国でもそうなのか。王国もそうだな」

「でも、やっと逃亡生活に別れを告げて、ゆっくりと落ち着けそうだぜ」

「おすすめは、俺が住んでいた地方都市のダリアか、アストランテイアだな。王都は人も多いし物資も不足している」

「ああ、帝都もそんな感じだよ。離村した連中も、帝都に行けばなんとかなる――とか考えちゃうんだろうなあ」

「スラムがあるって事は、どっちも先進国ではないってわけだな」
アキラも、話を通じる人間が出来て嬉しそうではある。横文字を使っても通じるからな。

カップ麺を食い終わったので、彼と一緒に家の中に入る。

中では、女性達は荷物をまとめていた。

「しかしアキラ。どうやって国境を越えるつもりだったんだ？　門

を抜けるには許可証がいるぞ？」

「それなんだよ。センセが闇で許可証を手に入れようと頑張ってくれてたんだが、せいぜい1通ぐらいなんだよ——それで！」

「それで？」

「裏の壁を乗り越えようと思ってた」

それで、こんな壁の近くにキャンプ地を作っていたのか。

「そうだな……俺が一度王国側へ戻って、許可証を取ってくる事も可能だけど——面倒だな。壁を越える事にするか？」

「アイテムBOXに梯子とかが入っているのか？」

「梯子もあるけど、もっといい物がある」

皆を連れて家から出ると壁際に行く——そしてアイテムBOXから単管の足場を取り出した。

目の前に現れた鉄パイプのジャングルジムに、その場にいた皆が驚く。

「なんじゃこりゃ！ 単管の足場かよ！ こんなデカイ物まで入るのか？」

「この大きさがギリギリなんだけどな」

「これを作ったのか？」

「パイプを出して、俺の家族に手伝ってもらって組み立てた」

「信じられねえ……」

これで向こう側へ行けるが、少々問題がある。アキラとレイランさんの格好だ。

いかにも帝国軍人らしい格好のアキラと、見ただけで魔導師と解るレイランさん——しかも爆乳。

「確かに俺達の格好は、ちょっと拙いかな……」

「まあ、役人に捕まっても、公爵の知り合いだって言えば、すぐに釈放されると思うんだが、トラブルは避けたいからな」

他の女達は大丈夫だろう。シャングリ・ラから、アキラとレイラ

ンさんの服を買ってみた。

アキラはズボンだけでいいと思う。

「とりあえずアキラは、ズボンを替えるだけでいいんじゃない？ ウエストは？」

「確か、日本にいた時は８８だったはず……」

「ほい」

シャングリ・ラから白っぽい作業ズボンを購入した——２０００円だ。

レイランさんには白いブラウスと、紺色のマキシのスカート。

「この世界って女物でも右前なんだよな」

「そう、娼婦は別だな」

以前、ダリアで女達に買ってやった上からスッポリと被るタイプのブラウスを買ってみた。

「はい、レイランさんにはこれを。公爵邸に到着するまでですから、少々我慢して下さい」

「解りました」

服を受け取った、アキラとレイランさんは、家に戻って着替えるようだ。

そして、しばらく待っていると、アキラが走ってきた。

「おいケンイチ！ ダメだ、服にセンセの胸が収まらねえ！」

「マジでか！ どんだけデカいんだよ」

「くくくつ、おそらくは、この世界一のオッパイだからな」

「それは認めるが——どうしよう」

——となると、伸縮性のある素材の方がいいか。シャングリ・ラで検索して、ニットのセーターを買うことにした——１６００円だ。色は黒で、肩口の部分が大きく開いているデザインだ。丈は長い

し、これなら胸も収まるだろう。

「ポチっとな」

落ちてきたセーターをアキラに渡した。

「確かに、これなら伸びるな。それじゃ、センスに渡してくるぜ！」
レイランさんにセーターを手渡したアキラが戻ってきた。

彼と話をしていると、黒いセーターを着たレイランさんが俺達の所へやってきた。

「こ、これでいいのですか？」

さすがに、セーターは伸びるので、胸は収まっているが――胸の形がパツンパツンに浮き出てなんという破壊力。

顔を赤くして、もじもじしているレイランさんを見たアキラが叫んだ。

「フアイヤー！」

「「ジャストミート!!」」

俺も釣られて一緒に叫んでしまう。そしてアキラが、レイランさんの後ろに回りこむと、爆乳をもみ始めた。

「こ、こらぁ！ アキラ、やめなさい！」

「ふひひっ！ これか！？ これがええんのか！？」

はつきりいって、オッサン丸出しである。まあ、本当にオッサンなので致し方ない。

奴の指が、柔らかかそうな胸に食い込む――正直、羨ましい。俺も揉みたい。

帰ったらプリムラにセーターを着せて、俺もやってみよう。

「ちよっとお！ ああっ！」

「こんなの見せられて、揉まずにいられようか！ いや、いられる

はずがない！ カッコ反語！」

「おいおい、アキラ——まさか、ここで始めるつもりじゃないだろうな？」

俺の冷静なツツコミに、アキラも我にかえったようだ。

「ふう……こんな事をしている場合じゃなかったな。この俺に我を失わせるとは、さすがセンスのおっぱいは只者ではない」

「もう、いいかげんにしなさい！」

レイランさんは怒っているのだが——男には揉まずにいらぬ時がある。

「フヒヒサーセン！」

「もう！ やるなら……人のいない所でしなさい……」

なんか、端から見ているだけで、ラブラブなんだが……。

「逃亡中なんだろうけど、悲壮感の欠片もないなあ
俺の言葉にアキラが反応した。」

「そりゃ、そうさ！ どんな時にも、明るく楽しく！ ナントカ団心得！」

「「人生エンジョイ&エキサイティング！ ははは！」
俺とアキラの声がハモる。」

「また、訳の解らない言葉を話してるにゃー」
アキラの家族は楽しそうだ。

「本拠地を決めて、家でも構えたら、そんなの好きなだけ出来るからさ」

「そりゃそうだな！ 安住の地を見つけるのが先決だ。俺達のサラ
ーイの地ってやつをよ！」

サライって歌もあったが、ペルシア語らしいな。

「あの……アキラ様。私もあのような服を着た方がよろしいですか？」

レイランさんのセーター姿を見たアンネローゼさんが、アキラに抱きついた。

「ふふ、そうだな。それは、家を見つけて落ち着いてからでいいだろう。たつぷりと可愛がってやる」

「あ、あの……いつも綺麗にしていますので、アキラ様のお気に召すまま欲望のはけ口になさってくださいませ……」

「こんな上品そうな元貴族の女が馬みたいに鳴くんだからな」

「は、恥ずかしい……」

「恥ずかしがる事はないぞ、アンネローゼ。そこにいる俺のチ○○に負けた女騎士なんかは豚みたいに鳴くからな」

「くっ！ 殺せえええ！」

女騎士がアキラに掴みかかった——また始まった。

「でもな、ケンイチ。ここで一番凄いのは、センセだからな」

「そ、そんな事はありません！」

「もうな——食いついたら離してくれないんだ」

「すっぽんか」

「ああ、すっぽんだ」

頷く俺とアキラの横で、ミヤアがクビを傾げている。

「すっぽんにゃ？」

「ミヤア、俺達の故郷にはそういう動物がいたんだよ。亀に近いな」

「あんなに大きいのきゃ？」

「いや、そんなに大きくはない」

亀？ アキラの話では、大型のワニガメみたいのがいるようだ。

へえ、そいつは見たことがない。

「亀か……美味そうだな」

「実際に美味いぞ。誰も食わなかったんで、俺だけ食ったんだが、美味かったぜ。肉が、クソ固かったけどな」

「すっぽんも美味いからな。すっぽん系か？」

「俺もすっぽんを食った事がないから、比較出来ないが——凄くこつてりしてて、旨味が凝縮されている感じだった。ゼラチン質も多くて美容と健康にもいいかもな」

そいつは機会があれば是非とも食べてみたいところだ。

「やっぱり日本人なら、とりあえず食うよな」

「もちろんだな。食えるのか、食えないのか。不味いのか、美味しいのか。気になるからな」

「ウチの家族は食わず嫌いが多くてな」

「はは、こっちもだ」

アキラが後ろにいる女性達を見る。

「しかし、女性が沢山だと大変だな」

「ケインイチの所も、そうじゃないのか？」

「俺の所は、妻と獣人が2人だからな。獣人はあまり主張してこないし……もう1人は子供だ」

「そうだなあ——皇帝から加護をもらってよかったのは、これだけだな。祝福がなかったときは、怪しげな薬とか怪しげな魔法とか使われて搾り取られたし」

「そ、そんな事はありません！」

咄嗟とつさに否定したのはレイランさんだが——。

「何言ってるんだよ、センセ。もうセンセが一番酷かったのに」

「……」

レイランさんが、身体の前で腕をクロスさせて、もじもじしているが、挟まれた胸が大変な事になっている。

イカン！ どうしても、そこに目がいつてしまう……。

「おほん！」

気を取り直して続きをしよう。

俺のアイテムBOXから出したパレットに、彼等の荷物を載せてもらう。こうしないと、荷物を1個1個収納する羽目になってしまう。

俺がプレゼントした、ビールとコーラもあるが、その他の荷物は鞆や袋など最低限の物しかない。

本当に着の身着のまま逃げてきて、その日暮らしをしていたようだ。

それでも、皇帝にこき使われるよりはマシって事なんだろう。

「おっしゃ！ 収納したれや！」

アキラの声で目の前から彼等の荷物が消えた。

聞けば、アキラのアイテムBOXの仕様も、俺や他の人間のアイテムBOXに準拠しているようだ。

「生き物以外はなんでも入るよな」

「そこら辺の線引はどうなっているんだろうな」

アキラの疑問も一理ある。

「詳しくは解らん。例えば、植物なんかは引っこ抜いた直後はまだ生きているだろうけど、アイテムBOXに入るしな」

普通に収納しても、空気中の微生物も巻き込んでいるはずで、そこら辺はどうなっているのかは不明。

アイテムBOXに入れておいた種を地面に撒けば発芽するし、植

物にはかなり甘い判定のような気がする。

虫等は半死状態でも収納できるが、再び出すと完全に死んでいる。ちよつと動物には厳しいルールがあるように思える。

「そんな事より、覚悟はいいのか？」

「おう！ 覚悟完了ってやつよ」

アキラの家族も頷いているので、覚悟は決まっているのだろう。皇帝に逆らってしまった彼等に、帝国では安住の地はないのだ。

そう考えると――俺も王族と喧嘩別れしなくて良かったな。結果オーライだ。

あのままガチンコでやりあえば、俺達も王国には、いられなくなる。

そしてアキラ達も帝国から追われている身――彼と会ったとしても、2人で頭を抱えていた事だろう。

しかしながら、このまま王都へ戻っても一悶着ありそうな予感はあるけどな。

――とはいえ、超強力な魔導師が2人も味方についてくれた。

まあ、なんとかなるだろう――人それを希望的観測というが。

114話 密入国

帝国の街で、俺と同じように日本から転移してきたアキラという男に会った。

彼の話によると、雇い主の人使いの荒さに嫌気がさして、王国への亡命をする準備をしていたらしい。

そこに提案された、俺からの亡命の勧め。渡りに船だったようだ。王国との国境の境目には石で出来た壁があるのだが、高さは5m程。

俺のアイテムBOXに入っている単管の足場を使って、乗り越えて密入国する事になった。

普通なら、こんな密入国を助けたとなれば犯罪幫助なのだが、これは王女の許可も取っている、言わばお墨付き。

——とはいえ、王女が滞在している公爵邸まで無事にたどり着かないと色々と面倒な事になるだろう。

そこで、アキラとレイランさんには、服装を変えて変装してもらう。

派手な魔導師の衣装から着替えたレイランさんは、逆の意味で人目を引き過ぎるような気がするが……。

目の前でバインバインと揺れるおっぱいを見せられたら、どんな男でも振り向くに違いない。

亡命するメンツが足場の前に立った。アキラと獣人のミヤア、そして女騎士は腰のベルトに剣を装備している。

しかし今日、飛び込みでやって来た女性も一緒なのだが……。

「あの……アンネローゼさんでしたっけ？　このまま亡命してもいいんですか？」

「はい。もう帝国には居るべき場所がありません。このままアキラ様と一緒に参ります。今日この日にアキラ様に出会えたのは、まさに神の思し召し」

本当に亡命する直前にやって来たからな。もう少し後なら、このまま一生彼とは離れ離れになっていたかもしれない。

「荷物も持っていないようですけど……」

「宿屋に鞆を1つ預けてありますが、捨てていきます。路銀は持っていますし、もう未練ありません」

「心配するなアンネローゼ。落ち着けば服なんて俺がいくらでも買っ
てやるから」

そう言ってアンネローゼを抱き寄せるアキラを、レイランさんが
ジロリと怖い顔をして睨む。

「センセ、そんな顔をして睨まないでくださいよ。まさかアンネローゼ1人だけ置いていくわけにもいかないでしょう？」

「私は、服なんて買ってもらった事がないのですけど……」

「なんだ、その事ですか。今まで忙しくて服どころじゃなかったじゃないですか。落ち着いたら、センセの服だって買ってあげますよ」

「騎士様もよろしいのですか？　アキラの事が嫌いなようでしたけど……？」

「この男の毒牙から、新たな被害者が出ないよう監視しなければならぬ！」

「俺のチ〇〇から離れられないって素直に言えよ。俺のチ〇〇に負けた女騎士さんよ」

「くっ！　殺せえ！」

「いっつも、アへ顔で死ぬゝ死ぬゝとか言ってるのに、全然死なね

えじゃん。いつ死ぬんだよ」

「今すぐ殺せええええ！」

またかよ——掴み掛かる女騎士を、アキラは手慣れた手つきで躲している。

「おい、アキラ。そんな事をしている場合じゃないぞ？ モタモタしていると暗くなってしまふ」

「おっ！ そうだな」

皆で足場を登り塀の上に立つ。塀の上は、幅1m程のスペースしかない。

街の中心にある壁の上はもっとスペースが広くて警備の兵もいるのだが、街の外れはこんな感じらしい。

それでも1日2回程、王国と帝国の兵士が壁の上を巡回しているという。

「1日2回の巡回って、今の時間は平気か？」

「朝と夕方だから大丈夫だ」

そして下を覗くと——塀の反対側は鬱蒼とした草むら。

茅かやのような背の高い植物が一面に生えていて、所々に低木も見える。

「皆、塀の上に移ったか？」

「これから、どうするんだ？ 飛び降りるのか？」

そんな事をする必要はない。足場を収納してから壁の反対側に出せばいいのだ。

「こういうわけさ」

「なる。そりゃそうだな」

足場を降りて、俺達は王国側へと降りた。だが、一面背の高い草むらで何も見えない。

「足場収納！」

「この草むらはやべえ。全く前が見えねえ」

「北へ進めば、OKだろ？」

「そりゃそうだが」

俺は、アイテムBOXから、草刈り機を出して混合燃料を入れる。そして、けたたましい音を出しながら、進路上の草を刈って道を作り始めた。

人が通る場所だけ刈ればいいんだから、簡単だ。

「凄いにゃー！ うるさいけど凄いにゃー！」

「まるで悪魔のような魔導具だな！ さすが、アキラの同類！」

「ははは、そんなに褒めるなよ、クレメンティーナ」

「誰が褒めるか！」

女騎士さんの名前はクレメンティーナというらしい。

そのまま500mほど進み、一本の細い道に出た。どうやら森へ向かう道のようにだ。

これを反対に進めば、街へ行く事になるってわけだ。

「これで、街まで一直線だろ？」

「まさか、こんな形で王国側へ侵入出来るとは」

「もうちょっと道が広ければ車が出せるんだがなあ」

「車って、どんなのだ？」

「ラ○クルプ○ドだよ、ハ○エースもあるぞ」

「マジかよ！ 俺にも売ってくれ！」

さつき説明をして、理解してくれたと思っていたが……。

「だから、燃料の問題があるって言っただろ？ タイヤとかプラグとかクーラントとか消耗品も必要になるぞ？ 工業規格の工具だっ

て必要になるし、タイヤに空気だって入れられないだろ？」
同じ説明をしているような気がする。

「魔法でなんとかならんのか？」
「ならんならん！」

アキラは俺の話に肩を落としてショボーンとなっている。だが、無理な物は無理だ。

俺の家の隣に住むのなら、都合はしてやれるが……。アイテムB OXがあるので、故障しても回収できるしな。

——とはいえ、燃料は錬金術と魔導具でなんとかなりそうだし、工具も腕のいい職人に作らせればいい。

ドワーフ達なら適任だろう。

クーラントって成分なんだっけ？ アルコールか？ ……んゝあ、エチレングリコールか。ちょっとこちらでの合成は無理っぽいな。

クーラント代わりに水も使えるのだが——ラジエーターに水を入れると錆びるんだよね。

鉄が錆びない、何かファンタジーな液体があるならクーラントに使える可能性があるが……。

それに壊れて使えなくなった車も、エンジンを抜いて馬に牽かせれば、ステアリングとサスペンションがついた高級馬車に使えるかも……。

「なんか、アキラ達が訳の解らない言葉を話してるにや」
「彼はアキラと同郷という話でしたので、彼等の里の言葉なのでしよう……」

さすがレイランさん。その通りです。しかし横文字がそのまま通じるのは便利だ。

細い道を北に10分程歩くと運河に出た——だが橋がない。

このまま、北へ向かえば国境の門へ通じる大通りに出るだろう。そこまで行けば俺にも道が解る。

「ケンイチ、どうする？」

「3mぐらいだな。これなら大丈夫だ」

俺は運河のギリギリに立って、斜めに丸太を出した。

「これで渡れるだろ？」

「こんな物まで入っているのか？」

アキラのアイテムBOXだとこんなデカイ丸太は入りそうにないな。短いのなら入るだろうが、こんな長いのは無理。

この丸太は結構役に立つよな。暇を見てまたアイテムBOXへ入れておこう。

アキラとレイランさんは無事に通過。女騎士もこのぐらいは余裕のようだ。

アンネローゼさんは、落っこちそうだったので、ミャアが背負って運んだ。

獣人なら、このぐらい逆立ちしても渡れるからな。

最後に丸太を収納して先を急ぐ。

徐々に民家が増えてきたが、周りはバラックばかりだ。ここは所謂スラムだろう。ここは所謂スラムだろう。

当然、治安も良くない。美人がずらずらと歩いていたら、格好的だ。

「おいケンイチ。センセとアンネローゼは走れないぞ？」

「アンネローゼさんは、それっぽいけど、レイランさんはなんで？」

「走ると、胸が揺れて痛いんだと」

「ああークーパー鞆帯切れそうだなあ。仕立屋にブラを作ってもらったらどうだ？」

「なるほど、そういう手があったか……」

シャングリ・ラにもブラは売っているが、あのサイズに合う物は売ってないだろうと思う。

だが、仕立屋にサンプルとしてブラを渡して、似たような物を作ってもらえば、彼女の負担も減らせるのでは？

そんな事を考えていると、ガラの悪そうな男達に囲まれた。だが、咄嗟とつさに女騎士が剣を抜いた。

「どけい！ 貴様達の相手などしている暇はない」

「あ！ この馬鹿騎士！ いきなり剣を抜くんじゃねえ」
アキラが女騎士を止めに入っただが、ちよつと遅かった。

「おっ！ 抜いたなあ？ もしかして、帝国からの密入国のお姉さん達かなあ？」

まあ、こんな所をうろついているんだから、バレバレか。

「おい、あの胸はすげえ！」 「たまんねえぜ」

案の定、男達の視線は、レイランさんの胸に集まり始めた。

俺はアイテムBOXから、バラした爆竹を1本取り出した。

いつも繋がった塊に火を点けていたのだが、何もあんなに連発させる必要ないからな。

威嚇するなら数発で十分だ。それに、繋げて連発させると不発が沢山出るんだ。

爆竹に火を点けて、集まってきた男達の前に放る——当然、耳をつんざく音がスラム街に響く。

周りにいた住人達が耳を押さえて固まった。

「魔法?!」

「センセ、シッ！」

「邪魔をすると、この魔法がお前等の身体の中で炸裂するぞ？」
俺はもう一発爆竹を放り投げた。

「ひいっ！」「ま、魔導師だ！」

住民達が徐々に下がりはじめて、家の窓の板が次々と閉じられる。
こんな場所にある家にガラス窓などはない。

「ガウガウガウ！ ガウウウ！」

だが爆竹の音に興奮状態になったのか、一匹の野犬が白い牙を剥き出す。

その前にアキラが出ると、野犬が猛獣と化して彼に襲いかかった。

「よっと！」

アキラはいつの間にか手に持っていた剣を横にして野犬に食いつかせる。剣は彼のアイテムBOXから取り出したものだろう。

そして牙が剥き出しになった口内へ黄色いニユルニユルを噴射――彼の独自魔法、マヨネーズだ。

「ゲボッ！ ゲヘッ！」

気管に入ったベトベトは簡単には取れない。野犬はそのままひっくり返り、泡を吹いて痙攣し始めた。

なるほど、これが彼の必殺技らしい。文字通り必ず殺す技だ。

「なるほどなあ。生きとし生けるもの、気管から肺までマヨで満たされたら、窒息するわなあ。最強の生物レッドドラゴンだって、その例外じゃない」

「まあな」

彼は歴戦らしく、少しも動揺している節がない。どれだけの修羅場を潜ったのだろうか？

数百匹の魔物を相手にした魔導師であれば、野犬の1匹や2匹など物の数ではないのだろう。

彼の話が本当なら、修羅の道にうんざりして、安住の地に落ち着きたいのも頷ける。

「うわああ！ 魔導師だ！」 「冗談じゃねえ！」

集まっていた男達が一斉に逃げはじめた。まあ住民を殺すと、色々面倒になるからな。

これで済んで良かったと言える。

「しかし、マヨネーズ使って修羅の道って……」

「端からすると冗談みてえだが、本人は全く笑えねえ」

「アキラには悪いが、俺の能力はかなり恵まれているな」

「それでも、アイテムBOXが使えるようになってから、大分楽になったぜ」

彼の話からすると、後で能力が追加される事もあるようだ。

だが、最初から凄い能力を貰ってしまった俺の場合はどうなんだろうな？

王女から祝福を貰っただけでも、結構凄い事だとは思うのだが……。

「あれが、魔法だと言うのですか？」

「あれは錬金術で作り出した、爆裂魔法エクスプロージョンの小型の物ですよ」

「そ、そんな物を……それでは魔力にも頼らず、爆裂魔法エクスプロージョンと似たような力を出せると？」

「まあ、そうなんですが——ご内密に」

「そうそうセンス、内密にお願いいたしますよ」

「アキラも知っているのですか？」

「まあ、作り方は知りませんが、ああいう物があるのは知っています」

アキラも、この世界で火薬を普及させるのは拙いますと思っていますよ
うで、安心した。

そのまま進み、広い場所に出たので、アイテムBOXから車を出
した。

「マジで、プ○ドだ！ 信じられねえ！ シュノーケルまでついて
るじゃん！」

「かなり古い型だし、走行距離も多いからな」

「ディーゼルだし、この手の車なら20〜30万kmは余裕だろ。
この世界は雨も少ないしな。ああ、貧乏世界旅行で、こいつがあれ
ばなあ……」

そう、橋が落ちたあの大雨が、この世界にやってきてから遭遇し
た雨らしい雨だった。

「一応、これも俺の召喚獣って事になっている」

「ちよつと無理やりっぽくねえか？」

「でも、デカイゴーレムもあるし、巨大な重機を俺が運転してても、
この世界の住人はなんとも思っていないようだぞ」

「重機もあるのか？！ 確かに、ゴーレムはロボットっぽいがあ
……」

皆を車に乗せる事にした。

「全部で6人だから乗れるだろう」

「そうだな。ミヤアとクレメンティーナは一番後ろだ」

「わ、私をこんな得体の知れない乗り物に押し込めようと言うのか
？」

「うるせえ！ とつとと乗り込め！」

アキラは真ん中の座席を倒すと、女騎士の尻を蹴飛ばして一番後
ろの座席に押し込めた。

続いて、ミヤアがその隣に乗り込んだ。

話を通じる相手だと話が早くて助かる。まさに阿吽の呼吸。

彼は免許も持っているようなので、臨時の運転手としても期待出来るだろう。

真ん中の座席にはレイランさんとアンネローゼさん。そして、助手席にはアキラが乗り込んだ。

「まさか、こんな世界で車に乗れるとはな」

「俺も、そう思ったよ。最初は自転車だったんだが」

「王国側で流行っているドライジーネとかいう乗り物はケンイチの発明なのか？」

「義理の父親に絵を描いて見せたら、実用化してしまっただけ」

「その親父さんは、かなりのやり手だな」

俺は車を発進させた。

「ふぎやっ！ 動いてるにや動いてるにや！ 馬もなしに動いてるにや！」

「……ううう」

ルームミラーから見える女騎士は固まっているように見える。

「なんだクレメンティーナ、ビビってるのか？」

「ば、馬鹿を言うな！ 騎士がこんな物を恐れるはずがない！」

だが、ちよつと心配になってしまう。

「彼女は、真っ先に死にそうなキャラなんだが——大丈夫なのか？」

「まあ、かなりへっぴこなのは事実だ」

だがゴブリンや人間の男ぐらいなら、対処出来ると言う。剣術の腕も並のようだ。

「これも魔法だと言うのですか？」

「レイランさん、ゴーレムみたいな物だと思って下さい。でも、ゴ

ーレムは一々組み立てないとダメですが、これはこのまま召喚されてきますので……」

「鉄の召喚獣……独自魔法ユニークですね」

「その通りです」

アキラがラジオの周りをいじくり回している。

「ラジオは入らないぞ。確かデッキにCDが入ればなしだと思ったが……」

アキラがデッキのスイッチを入れると、ギターの音が流れはじめた。

「なんにゃ！ 音楽が聞こえるにゃ！」

「おおっ！」

後ろから、獣人と女騎士の驚く声が聞こえる。

「クロード・チアリか——随分と渋い物を聞いてるな」

「ここでポップスやロックかけても理解できないだろ？」

「まあ、そりゃそうだ！ ははは」

レイランさんが、アレコレ聞いてくるのだが説明が難しい。秘密の魔導具で、お教えできません——という事で納得してもらった。

アキラによると、魔術の独自研究ってのも秘匿されているらしいし、あまり根掘り葉掘り聞くのはマナー違反らしい。

それ故、魔術学校に入ったり、有名な魔導師の弟子になるって事は結構重要だ。

そのまま音楽を流しながら、北へ進むと大通りが見えてきた。

この大通りは国境の門へ通じている道だ。ここまで来れば、後は簡単だ。

「アキラ、ちょっと寄り道していいか？」

「オッケー！」

「桶がどうしたにゃ？」

「解らぬ……しかし、これが王国の街か。帝国の方が整頓されていて美しい」

まあ、女騎士の言うとおりだな。だが、この雑多な感じがまたいいじゃないか。

俺は道具屋の正面に車を乗り付けた。

「ちょっと待っててくれ、荷物を取ってくる」

「ああ」

俺は、アキラ達を車に乗せたまま、道具屋へ入った。一応、キーは外す。

まあ乗り逃げしても、すぐにガス欠になるけどな。

「ちわり、魔導書は出来上がってるかい？」

「あらゝ、旦那。今日の朝取ってきたところだよ」

店主の女から魔導書をもらう。身体をすり寄せたり、腕を組んできたりして――はつきり言ってるうざい。

早々に立ち去る事にしよう。もうちょっと若けりゃ俺の食指も動くんだが……。

「お待たせ」

「ここは道具屋だろ？ 何を買ってきたんだ？」

「魔導書だよ。名義の変更をしてもらっていた」

「王国は魔導師でも商売が出来るからいいよなあ」

「そうそう、レイランさんが店を開いたら、男共が押し寄せるぞ、はは」

「店をやりたいとは思っているのですが……それはちょっと嫌ですねえ」

しかし、これ以上ない客寄せになりそうなのだが……。

続いて俺は、ドワーフの店に寄った。あの巨大な剣を受け取るためである。

「鍛冶屋か？」

「ここはドワーフの店だぞ。品揃えも中々良い——高いけどな」

「面白そうだ。俺も降りるぞ」

「鍛冶屋なら、私も拝見したい！」

奥から女騎士の声がする。それじゃ、皆で見学して事になった。皆が車から降りたので、一旦アイテムBOXへ収納。揃ってドワーフの店へ入った。

店の上に飾ってあった、巨大な剣は既がない。

「ちわり、親方いる？ 店に飾ってあった巨大な剣をもらいに来たって伝えてくれ」

「あ！ はい！ ただいま！」

店員が奥に駆けて消えていく。

「おおっ！ これは業物だぞ！」

女騎士が、壁に飾っている商品の剣に興奮している。彼女の視線の先にあるのは長い金の鍔がついた上品そうな剣。

「おまえなあ——稼ぎもないのに、俺に買わせるつもりか？」

アキラ達は、逃げまわっている間には仕事はしていなかったようだ。

まあ有名人だしな。だが、この世界には新聞も通信手段もなく、あるのは人の噂だけ。

本人が竜殺しだと名乗らなければ、バレル事もない。

「別に、お前に買えとは言っていない……だろ……」

「にゃー！ アキラ、ウチはこの短剣がいいにゃ！」

「よしよし、ミャアには買ってやるからな」

「……」

女騎士が1人で泣きそうな顔になっている。

「解った、解った！ 買えばいいんだろ！ ポンコツ騎士に、こんな良い剣がいるのか？」

結局、剣を買ってやるようだ。レイランさんと、アンネローゼさんも店内を見回しているが、魔導師と普通の女性が欲しい物にはここにはないだろう。

「よお！ 待たせたな！ 剣は出来上がってるぜ！」

奥から6人のドワーフに抱えられて、巨大な剣がやってきた。

「なんじゃこりゃ！ こりゃ、『剣と呼ぶには余りに大き過ぎた』ってやつだろ？」

アキラが駆け寄ってきて、降ろされた巨大な剣を覗きこむ。

「まあな」

「こんな物を買って、どうするんだ？」

「重機に取り付けて、魔物を一刀両断にしようかと」

アキラが呆れているが、重機の種類を聞いてくる。

「重機ってどんなのだよ？」

「ユ○ボだよ、ユ○ボ。アームに、この巨大な剣を取り付けて、ズバツと参上！ ズバツと一閃！」

「はは……そんな物まであるのか？ 俺もイカれてると思ったけど、ケンイチも相当だな」

「なんだかんだで戦闘が多いからな。戦闘力は高い方がいいだろ。それに、こいつはアダマタイトだっていうし貴重だろ？」

「へえ！ アダマタイトの加工は難しいって聞くぞ？」

「ここの親方はそれが出来るんだよ」
腕を組んだドワーフの親方は得意げな表情だ。

「親方、仕事の方は順調かい？」

「ああ、お前さんに都合してもらった鋼鉄の質は最高だからな。そのまま素延べで剣にしても大丈夫ときた。仕事が捗ってたまらねえぜ」

「そいつは良かった」

元々は金貨300枚（6000万円）という話だったが――。
ドワーフ達と酒の賭けをして勝ったので、代金は半額の150枚（3000万円）になった。

アイテムBOXから金貨を出して、カウンターへ積み上げる。

「そういえば、アキラの金貨も両替しなくちゃダメだな。ソバナは帝国の金貨でも使えると思うが……」

親方に確認すると使えると言うが、大量だと困るという。

「そうなんだよなあ」

「少しでもいいなら、俺が両替してやってもいいぜ」

「それじゃ頼むか」

シャングリ・ラに入金するなら、どの金貨でも同じだからな。

アキラが、女騎士の剣とミヤアの短剣の代金を支払う。それぞれ、帝国金貨10枚（100万）と帝国金貨2枚（20万円）だ。

だが、カウンターに山積みになった金貨をみて、ある事を思いついた。

「親方、ドワーフってのは金属や鉱石に詳しいんだろ？」

「ん？ ああ、自慢じゃないがな……」

俺は、シャングリ・ラから1オンスのプラチナ貨を購入した。今

のレートで15万円だ。

昔はプラチナの方が高かった印象があるんだが、今は金と同じぐらいの値段だな。

「親方、これは解るかい？」

俺はドワーフにプラチナ貨を手渡した。

「こー！　こりゃ！　もしかして、白金貨か？！　こんな物をいったいどこで？！」

「ある遺跡で見つけた。珍しい物なのかい？」

「ああ、これが本物だとすれば、1枚で金貨100枚以上の価値がある」

ええーっ！？　マジで？　それなら、金貨をシャングリ・ラにチャージしてプラチナ買えば大儲けじゃん。

まあ、そんな事をしなくても、金に困っているわけじゃないが、金の確保はたやすくなる。

以前、銀と金の交換レートの差額で儲けようとして怪しまれたが――今は、天下御免の書状があるし、王侯貴族にも知り合いがいる。王侯貴族に、ダンジョンで入手した白金貨と言って、売ればいい。

だが、真珠やプラチナで金貨を集めても、シャングリ・ラでは使えない。

この世界の金貨は、なるべく市場へ放出して経済を回さないこと……なにか金の使い道を考えよう。

親方の話では、本物の白金貨なら魔力を蓄える事が出来るという。ために、親方が魔力のチャージに挑戦してみるようだ。

親方がコインに魔力を注ぎ込むと、それがうっすらと光り始めた――何これ？　凄いじゃん！

「間違いねえ！　こりゃ、本物だ！　こ、こいつを売ってくれ！」

「えー？ それじゃ……この剣の代金をこの白金貨で払うって事に」
「それでいいのか?!」

「ああ」

取引は成立した。カウンターのの上に置いてあった、150枚の金貨はアキラが持っている帝国金貨300枚と交換した。

そして巨大な剣も収納。

「旦那のアイテムBOXにや、こういったものが山ほど入っているんで？」

「まあ、詳しくは明かせないけど――それなりに」

「旦那の在所はどこなんです？」

「アストランティアの近くに大きな湖があるのを知っているかい？」
「知ってますぜ？」

「その湖畔に住んでいたが、もしかして拝領するかもしれん。そうになったら屋敷を建てなきゃな」

「拝領ですかい？」

「ああ、王女様の話だと、そうなるらしい」

「ええ？ 王族とお知り合いなんです？」

「まあな」

その話を聞いて、ドワーフの親方が何か考えている。

「旦那が拝領して、街を作るようなら、俺達も行ってもよろしいですかね？」

「おおっ！ そりゃ、大歓迎だよ。ちなみに、こんな金属もある」

俺はシャングリ・ラから、ステンレス鋼を購入した。

「これは鍔に非常に強い金属だ。錬金術で、色んな金属を混ぜて特殊な特性を持たせてある」

「こんなのは、見たことがねえ……」

俺と親方が話していると――レイランさんが騒ぎ始めた。

「アキラ！ アキラ！」

レイランさんが、アキラに抱きついた。その目は爛々^{らんらん}と光っており、ドワーフが持っている白金貨、一点を見つめている。

「あゝケンイチ。センセが、その白金貨？　――が欲しいんだと」

「ああ、いいぞ。お友達価格で半額で良いよ」

「ほ、本当ですか？」

「これから、色々長い付き合いになりそうだし。お近づきの印つて事で」

俺がシャングリ・ラから再びプラチナ貨を購入すると、レイランさんに渡した。

「はああ……美しい……」

彼女がうっとりしながら、魔力を注ぎ込むと、コインがうっすらと発光し始める。

ファンタジー世界のプラチナにこんな力があるうとは。アキラから代金として、帝国金貨150枚をもらう。

帝国の金貨は1枚10万円相当で、王国金貨の丁度半額だからな。

「ケンイチ、あの白金貨のデザインって見たことがあるような……」

「人間が異世界に転移してくるんだ、アイテムが転移してきてもおかしくない」

「む……そういう考えもあるか……」

とりあえず、シャングリ・ラの事は黙っているつもりなので、誤魔化す。

「しかし、プラチナにこんなに価値があるとは……最初に、プラチナのアクセサリーでもつけてりゃ、もっと簡単に成り上がったのか。俺もトレジャーハンターになろうかな？」

アキラが、自分の境遇に悩んでいる。

「それも手だぞ？ 戦っても、自分のためなら納得も出来るし」

「そうなんだよ。お偉いさんのためなんてのは、もううんざりだ。俺には忠誠心の欠片もねえし！」

俺達の話聞いて、親方が話に入ってきた。

「森の奥深くの未到達領域には、誰にも知られていない遺跡があるって話だしな」

テキトーに遺跡でプラチナを拾ったと言ったが、マジでそういう事例があるようだ。

「むふふ、そいつはいい事を聞いた。遺跡攻略なんて簡単だ。油をドンドン流し込んで赤猫を這わせりゃいい」

金貨は溶けても金の価値があるし、プラチナはそのぐらいの温度じゃ溶けないしな。

生き物がいても、火炎で焼かれるか窒息するだろう。チート持ちのアキラらしい攻略法だ。

しかし、生き物の素材や紙の資料等があっても、全部燃えてしまふな。それに火が完全に消えるまでかなり時間が掛かるのではないだろうか？

そう考えると、彼と一緒に探索などの行動は出来ないな……。

「そりゃ、かなり力押しでチートな攻略だな」

「別に攻略に決まりがあるわけじゃねえだろうし」

「そりゃそうだが——遺跡なら貴重な資料等があるかもしれないぞ？」

「あまり興味はねえな」

彼は余り学術的な物には興味がないようだな。

「レイランさんはどうです？ 遺跡には貴重な魔法に関する学術的資料とか、知られていない魔導書があるかもしれませんよ」

「アキラく私に断りもなく、そんな事をしたらどうなるか……」

「は……は、大丈夫だよセンセ！ その時は相談してからにするからさ」

アキラがレイランさんに詰め寄られて、あたふたしている。

さて、買った商品は受け取ったし、公爵邸へ戻る事にするか。皆がクビを長くして待ってるはずだ。

115話 家族と再会

帝国から竜殺しという魔導師を亡命させた。その正体はアキラという日本人。

そう、俺と同じように元世界から転移してきた人間だ。それと彼の連れである夜烏のレイランという魔導師。

その他3人、計5人が帝国から亡命した。

亡命といっても、元世界のような大事ではない。国境もアバウトで警備も緩い。

ここは航空機も監視カメラ等もない世界、塀を乗り越えて簡単に亡命が成功した。

ただ、チートもなしで普通の人間がこれを行おうとすれば、それなりの危険が伴うに違いない。

ドワーフの店で大剣を受け取り、再び大通りに出る。

もしかしたら、ドワーフ達も俺たちの家の近くに来てくれるという話だ。

まだ決定ではないが、拝領して貴族になるとなれば、あの場所に屋敷も建てないとダメだろうし——そうなれば周りの森も開墾されて、人々が集まってくる。

そうなれば街ができるってわけだ。うーん信じられないが本当の話。

俺達は車に乗り込むと公爵邸へ向かう。

そして数日ぶりに家族の下へ帰ってきたが——公爵邸の前には獣人達が集まっていた。

また森猫目当てだろう。車のクラクションを鳴らし、窓から顔を

出して獣人達にどいてもらう。

お堀に架かった橋を渡って、公爵邸の立派な門まで辿り着いた。

「やあ、ただいま戻りましたよ」

門番に挨拶すると、開門してくれた。

ハンドルを左に切ると、家を設置している場所へ向かう。

皆は、外に置いてあるテーブルに座っていた。公爵の息子もいるようだが、テーブルで何かをしているようだ。

俺が置いていった、バックギヤモンをやっているのかもしれない。

「おい！」

「あ、ケンイチが帰ってきたにゃ」

「ほらな、旦那なら大丈夫だって言っただろ？」

「そう言うトラ公が一番心配してたにゃ」

「うっ！」

そんな会話が聞こえてきたが、やはり俺が遅かったので、心配していたようだ。

車を止めてアキラたちを降ろした。

「「ケンイチ！」」

アネモネと王女が俺に抱きついてきた。

「なんで、リリスも抱きつくの？」

「妾の聖騎士じゃ。抱きついて当然じゃろ？」

「リリス様、あらぬ噂が立ちますので……」

「ケンイチ！ 妾がこんな旅をして、何も困ることなく楽しかったのは、其方がいたからじゃ！」

そりゃまあ、俺のシャングリ・ラとアイテムBOXがあれば、困る事はないからな。

そして、ベルもやってきて、俺の足下へスリスリと身体をくねら

せ擦り付けまくっている。

「其方がいなくなった途端に妾を襲ってきたのは、尽きることのない不安じゃ！ もう其方とは離れとうない！」

「そんな事を仰られても、お城へ帰ったら……」

だが、王女は俺にギュッと抱きついたままだ。

「リリース様、それは置いといて、こちらをお願いいたします」

王女は俺が連れてきた客を見て、抱きついていた手を離れた。

「まさかケンイチ、この者たちが……？」

「森猫様にゃー！」

ベルの前に跪いたミヤアを見てミヤレーが叫んだ。

「ぎゃー！？ ケンイチ！ なんにゃ？ その女は！？」

「落ち着けミヤレー。この獣人はこちらの連れ合いだから。俺は関係ない」

「ほ、ほんとかにゃ？」

訝しむミヤレーは放置して、王女にアキラ達を紹介する。

「皆の者、控えおろう！ この御方こそ、カダン王国王女、リリース・ララ・カダン様であらせられる。そしてそちらは、レインリリー公爵公子様」

「「「ははっ」」」

アキラ達は膝をついて平伏し、自己紹介を始めた。

「私が、帝国近衛魔導師、アキラでございます」

「リリース様。彼が『竜殺し』でございますよ」

王女と公爵の息子が驚く。

「な、なんと！ 本当に、亡命させたのかえ？」

「はい——そして、そちらが……」

続いて、レイランさんを紹介した。セーターでパツンパツンになった爆乳に、公爵の息子の視線が釘付けだ。

「同じく、帝国魔導師のレイランでございます」

その言葉に、ニャメナが反応した。

「えっ！？ レイランって、もしかして『夜鳥のレイラン』かい？
旦那！？」

「そうだよ、ニャメナ」

「ええーっ！？ 旦那！ そ、そんな大物まで引っ張ってきたのか
い？」

まあ、そのぐらい夜鳥のレイランってのは有名な魔導師なのだ。

「まあな」

「なんと、夜鳥のレイランまで……其方どうやって？」

「私も、まさかと思ったのですが——彼女は、そちらのアキラの連れ合いだったのです」

「なんと……」

他の3人も自己紹介をした。

「ミャアにゃ」

「私は、ニーゼルレーゲンシュタットの騎士。クレメンティーナ・フォン・シュトラレンダークロイツでございます」

「私は、ミダル・ヴァッサーファルシュタットの貴族。アンネローゼ・フォン・アウンタウゼンアーマイゼでございます」

「残りの2人は、帝国貴族かえ。王国へようこそ参られた。其方達を歓迎する」

女性陣の自己紹介を聞いて俺は驚いた。確かに商人の女房にしては、気品がありすぎる。

「えっ！？ アンネローゼさんって、本当に元貴族なの？　なんで商人の嫁に？」

「それは後で説明するわ」

アキラの様子では、何か理由があるようだ。

それはさて置き——とりあえずお客様の宿泊の用意をしてもらわないと。

「それで公子様。こちらの面々の滞在のために、公爵邸にお部屋をご用意していただきたいのですが——よろしいでしょうか？」

「もちろんです！　すぐに用意させましょう」

公爵の息子がすぐに公爵邸のメイドを集めて準備を始めた。

それを聞いた女性陣は、ホッとした表情をしている。逃亡生活に疲れた身体を休めて、風呂に入って柔らかなベッドで休みたいだろう。

「ケンイチの獣人にも黒い子がいるんだな」

「語尾もニヤだしな」

「俺達風に言えば——キャラが被ってる」

「だが、こっちのミヤレーは腹が白いぞ。それによく見ると黒毛じやなくて、縞模様なんだが」

「あ、本当だな。黒い中に縞模様が入ってる——へええ」

舐めるように見ているアキラの視線に、ミヤレーがかなり警戒している。

ミヤアは全身真っ黒の黒猫なのだが、ミヤレーは腹が白い。

「旦那達——このクロ助は腹は白いけど、腹の中は真っ黒だぜ？」
「にやはは」

ミヤレーは笑っていて否定はしない。自分でも腹が黒いと自覚しているのだろうか？

「ケンイチ、あの小屋がお前達の家なのか？」

「ああ、アイテムBOXへ入れられるように作ったから、どこへでも持ち運びが出来る」

「荷物や家具はアイテムBOXに入っているから、あれでも十分ってわけだ……」

アキラは俺の家を見て、顎に手をやって唸っている。彼のアイテムBOXでは、あの家は入らない。

「その通り」

「ケンイチ、俺はこっちへ泊まらせてもらうぜ」

「ええ？ あの家は俺の家族で一杯だから、テントと寝袋になってしまうけど」

「それで、十分だよ。貴族の屋敷のキンキラキンのベッドとか、どうにも性に合わねえ」

「まあ、俺もそうだよ。日本にいた時もずっとせんべい布団だったし……」

「だが、そろそろ風呂には入りたいところだな……」

アキラに、家の風呂のことを説明する。

「なに？ 風呂まであるのか？」

「そっちの小さい小屋を風呂場として使っている。湯船は日本によくあるユニットバスみたいなやつだけど……」

「十分だよ。お湯は魔法で沸かしているのか？」

「ああ」

「俺も、地面に穴を掘って、水を引き込んで風呂に入ったりしたぜ、あはは」

アキラもかなり苦労しているようだ。だが、どんな状況でも風呂

に入ってしまうのが日本人。

知恵を絞ってなんとかしてしまおうのだ。

「アネモネくはい！　新しい魔導書だ」

「わあー！」

俺から聖なる盾の魔導書を貰って、アネモネがはしゃいでいる。
プロテクション

「ケンイチ。その子が本妻か？　このロリコン伯爵」

「冗談はよせ。本妻はこっちに決まってるだろ。なあ、お母さん」

「にゃー」

俺の足下にベルがやってきたので、光る黒い毛皮をなでなでしてやる。

「マジか……ケ、ケモナーレベルが高すぎる……」

「ケンイチ達が、訳の分からない話をしてるにゃ」

「あの旦那も、うちの旦那と同郷って話だから、故郷訛りなんだろ」
アキラと一緒にベルの背中を撫でていると――。

俺とアキラの、冗談とも本気とも付かない会話に呆れたようなプリムラがやってきた。

「もうケンイチ！　洒落にならないような会話はやめてください」

「こちらが、マジの本妻のプリムラだ。親子揃って商売の達人で、将来的には王国のトップレベルに君臨すると思うぞ」

「すげー！　こっちもレベル高えな」

「ふふふ――さすがにレイランさんには敵わんと思うが、こちらのおっぱいも、なかなかのもんだろ」

「うん、大したもんだ」

ジロジロと胸を見るオッサン2人の視線に耐えられなくなったのか、プリムラが胸を隠して悲鳴を上げた。

「きゃあ！ もう、いい加減にしてください！」

「オッサンだにゃ」

「オッサンがいるぜ」

だってオッサンなんだから、しょうがないだろ。

「アキラ、レイランからオッサンっぽいネタは止めるように言われてたにゃ」

「そう言うなミャア。オッサンは2人揃うとオッサンが捗ってイカシよな」

「まあ、どうしてもな——歳も同じぐらいだろうし。アキラは何歳なんだ？」

「36で転移してきて、2年経ったから38……だろ」

「じゃあ同期だわ」

2年も死線を彷徨ったんじゃないや、やってられないよな。

ニヤメナに堀の外にいる獣人達の事を聞く。

「ニヤメナ、外にいる獣人達はずっといるのか？」

「ああ、たまにクロ助が、森猫を連れて挨拶に行っているけど、全然減らねえ」

「賽銭も、こんなに溜まったにゃ」

彼女達が見せてくれたのは、樽一杯に溜まった小銭の山。樽は、プリムラが調達してくれたらしい。

それを見たアキラがつぶやく。

「おほー、獣人が森猫を崇めているのは知ってたけど——信者と書いて儲かるねえ」

「俺と同じ事を言ってるな」

俺とアキラの会話に王女が割って入った。

「其方達、森猫で小銭を集めるのは、程々にするがよいぞ。国から

邪教認定されると、討伐隊が組織される故」

「おほっ！ くわばらくわばら……」

アキラが肩をすくめているが、『くわばら』もここでは通じないだろうな。

アキラと話をしていると、公爵の息子がメイドを連れて戻ってきた。

「皆様、部屋の用意が整いました」

「それではリリス様、聴取をなさいますよね？」

俺の言葉に、王女がちよつと困った顔をしている。

「妾は其方と……」

「女性の相手は女性の方がよろしいでしょう？ 女性故、お話し出来る事や、お聞き出来る事もありましようし」

「まあ——それはそうじゃが……」

「アキラの話は、私が聞きますので」

「其方等、妾を置いて逃げたりはせぬだろうの？」

また始まった。俺が同郷のアキラと一緒に逃げるとでもいうのだろうか？

「アキラが家族を捨てて、逃げるはずがないでしょう。夜鳥のレイランさんは、アキラの最愛の人ですよ？」

「その通りですよ王女殿下」

「……」

王女はアキラの言葉に納得したような、してないような顔をして、公爵邸へ向かった。

実際に、俺とか公爵じゃ女性の話し相手にならないだろ。

「アキラ、ウチはここに残るにゃー」

「まあ、貴族の屋敷に獣人が入るのは、ちよつとまずいかもな」

アキラの言うとおりで。獣人のミャアは、ここに残ることになり、王女とレイランさんたちは、メイドたちを引き連れて、屋敷へ向かった。

長い女性の列を公爵の息子が先導している。
アキラはレイランさんに、元々着ていた黒いドレスを渡したよう
だ。

「ケンイチ、やんごとなき方の相手は大変だな」
王女の背中を見ながら、アキラがつぶやく。

「まだまだ子供さ。本人の前じゃ言えないけどな。お前の皇帝陛下はどうだったんだ？」

「実に淡々としていたねえ。俺と出会った時は14ぐらいだったはずだから——今は16歳か」

「子供らしさを出したりとかは？」

「全くなかったな。四六時中、実の母親から命を狙われていれば、ああなるのかもしれないが……」 噂でもそんな話だったが、それも事実だったらしい。

「それで、実の母の皇帝を倒してしまったのか？」

「まあな。俺が手引したとはいえ、命乞いをする少女の姿の母親を躊躇なく刺し殺したのを見て、吐き気がしたぜ」

帝国の正式名称は、『少女帝国』——皇帝が即位すると、超常の力をもって、少女の姿になって統治すると言われている。

「そいつは、随分とヘビーなシーンに付き合わされたな」
「全くだぜ」

「帝国って、少女の姿になって国を統治するって聞いたけど、皇帝陛下がリアル少女の時はどうするんだ？」

「20歳を超えてから、若返りの神事を行うらしい」

「へえ……」

年齢は多少前後するらしいが——若返ると妊娠できなくなるから、若返る前が後継を残すチャンスだと言うのだが……。

前の皇帝は子供を2人産んで、24歳で若返ったらしい。

「けど、皇帝って女に決まっているのか？」

「あの帝国皇帝から生まれる子供は絶対に女になるらしい」

「そういう何かがあるのか？ アイテムとか？」

「俺は、呪いだとか聞いたが……」

こりゃ、マジで皇室の近くにいた人物からじゃないと聞けない情報だな。

夕方になったので、飯を食うことにした。

「さて、何にするか——」

「カレー！」

「カレーにゃ！」

「そうか、それじゃドラゴンカレーにするか」

「カレーがあるのか？」

アキラもカレーがあるとは思わなかったようだ。

「お城の料理人にカレーを食わせたら、殆ど同じ料理を作ったから、この国でも金に糸目をつけなければ食えるかもしれないぞ」

「カレーに必要なスパイスとかあるんだ」

「あるらしい——だが、凄い高価らしいけどな」

早速、肉と玉ねぎを炒めてカレーを作る。そして、いつもプリムラが作っているスープに玉ねぎと肉を入れて、カレールウを入れれば完成。

早くて美味しい。多少、適当に作っても美味しいのが、日本式カレーの偉大さ。

ある医者が言った――「ボ○カレーはどう作ってもうまいのだ」

テーブルの上にカレーを並べる。アキラのは当然、米の飯だ。

「米もあるのか？ 俺も、さんざん探したんだけど、見つけれなかった」

「カレーなら麦飯でも美味そうだけど」

「まあな。俺も麦を炊いて食ったりしたよ……うめえ！ 本当に米とカレーだ！」

一口カレーを食べたアキラが大声を上げた。

「もちろんだよ。正真正銘すべて本物だぞ」

「うめえ……」

何だか、アキラが目には涙を浮かべている。

「なんだよ、泣くことはないだろう？」

「いや――もう二度と、こんなのは食えないと思ってたからな……」
そうか――俺は最初からシャングリ・ラを使って、色々と元世界の物を食えたからな。

恵まれていたな。

「肉はレッサードラゴンの肉だぞ」

「マジか。ドラゴンカレーかよ」

アキラは元世界風の食べ物を探していたようなのだが、それは見つからなかったのだろうか？ そこら辺を聞いてみる。

「元世界風の物って何もなかったのか？」

「ああ、そういえばチョコレートがあったぞ」

アキラから気になる情報を得た。

「マジで？」

チョコと聞いて、俺達の訳の分からない会話を聞き流していた、ウチの家族達の視線が集まる。

「エルフの栄養食みたいな飲み物が、チョコレートなんだよ。『チエチエ』って言うんだけどな」

「へえーそういえば、アキラはエルフとも付き合いがあったんだよな」

「色は赤かったが、砂糖を入れると、マジでチョコレートドリンクだったぞ」

「それじゃ上手く加工できれば、この世界でもチョコレートが普及するかもな」

ふむ、この情報は王女も喜ぶかもしれない。

カレーを食って、腹も膨れた。やっぱり家族と飯を食うのはいい。

「はあー親が死んでも食休みつてな」

エアマットに寝転がっている俺の上に、ベルが載ってくる。

「ベル、重いよー」

「にゃー」

「随分と馴れてるな。伊達に本妻じゃないな」

「勿論、なあーお母さん」

ベルの顎の辺りを撫でると、ゴロゴロと喉を鳴らす。

「本当に大きな猫だなあ」

「声はちよつと低いけどな」

食休みの後、皆で風呂に入った。小屋の中にできた立派な風呂にアキラが驚いている。

すでに、アネモネの魔法でお湯が沸いており、小屋の中に白い湯気が漂う。

「すげー！ 日本式の風呂じゃん！」

「うにゃー！」

「中々立派だろ？ 本拠地を決めて屋敷を建てたら、真っ先に風呂をつくらないとな」

「こんなのも魔法で作り出したり、アイテムBOXの中に入っているのか？」

「まあな」

日本式の風呂に飛び込みたいのか——アキラと一緒に獣人のミャアも服を脱ぎ始めた。

だが、湯船に脚をちょんちょんして、湯加減を確かめている。

「ここにタオルと石鹸、リンスとシャンプーも置いておくからな」

「至れり尽くせりだな」

「まあ、まだお客さんだし」

俺とアキラが入っても良かったのだが、家族が久々に俺と一緒に入りたいようなので、この組み合わせになった。

そして、風呂から出たあと、ジェットヒーターを見て、再び驚く。

「すげー！ これに俺の油は使えないかな？」

「いけるかもしれないが、電気が必要なんだぞ？ 今は、モバイルバッテリーに繋がっているが」

「バッテリーに充電した電気はどこから持って来たんだよ？」

「ディーゼル発電機や、ガソリン発電機を使ってる。モバイルバッテリーなら、車からも充電出来るしな」

「そういう手があったか……」

アキラはチート過ぎると騒いでいるが、そんなことを言われてもな。

「にゃー！　すぐに毛皮が乾いて最高にゃ！」

「これは、うちの獣人達にも評判がいいぞ。こいつで乾かすと、毛皮がふわふわになって最高なんだ」

「マジか？　――だがなあ」

「どうも、アキラは女達と一緒にではなく――久々に1人で寝たいらしい。」

「それ故、ミヤアは俺の家に入って、獣人たちと一緒に寝ることになった。」

「国は違うが、獣人同士で気兼ねなく会話していて、問題もないよ。うだ。」

「皆で風呂に入っただ、日本の話で盛り上がってしまい、ちょっと夜更かしをしてしまう。」

「そして就寝――家の前に、がけ崩れの現場で使っていた大型テントを出した。」

「女達は家の中、俺とアキラはテントの中。それぞれ寝袋に入るが――俺の寝袋にはアネモネも一緒に潜り込んでいる。」

「なんだ、中々快適じゃないか。こんな立派なテントまであるし。マジでチートだな。露営に比べりゃ天国だぞ」

「まあ、俺もこの能力がなければ、日本へ帰りたいて考えていたところなんだが……アキラはどうなんだ？」

「俺か？　帰ってもブラック勤めだしなあ……それにセンセと知り合っちゃったし」

「まあな。あんな美人でバインバインなんて日本にゃいないし……」

「そうなんだよ！　でも、すっぽんなのは、マジで参ったが……」

「美人でバインバインでエロい！　最高じゃないか！」

「それでも、限度ちゅーもんがあるだろ」

アキラの話によると、かなり凄いらしい。

「それで？ ケンイチの方はどうなんだ？ それは倫理的に許されるのか？ 児ポに引かかるだろ？」

アキラは、俺と一緒に寝袋に入っているアネモネを見つめている。

「手は出していないからセーフ。そう言うアキラだって、アンネローゼさんの娘を……」

「挿入してないからセーフ」

「それじゃ、俺だってセーフだよな」

俺たちの会話を聞いて、アネモネが俺に抱きついてきた。

「挿入って、してもいいけど……」

「女の子が、そういう事を言っちゃいけません」

俺とアネモネが入っている寝袋の上にベルが載ってきた。

「ちょ、ちょっとお母さん、重いんだけど……」

「おもーい！」

「にゃー」

「重いなら、俺から離れなさい」

「や！」

俺達を見たアキラが笑っている。

「その子もそうだけど、あの王女様はどうなのよ？」

「王族なんかに手を出せるわけないだろ？」

「まあ、ごもつとも。俺だったら、もっと大人の女がいいねえ」

「それなら、王妃様がオススメだぞ？ 中身はちょっとアレだが、見てくれは最高」

「アレってどんなアレなんだよ。冷血皇帝みたいなアレなのか？」

「いや、凄い優しい面もあるんだが、平気で人を殺しちゃうーみ

たいな」

「なんだよそれ、サイコパスか？」

ひどい言われようだが、まともではないのは確かだ。

「まあ、そうかもな」

その後、皇族と王族の話で、盛り上がる。まあ、どこも似たようなもんらしい。

金と権力を持ち、国を支える重圧によって、人間はそうになってしまふのだろうか？

「ねえ、ケンイチ」

「なんだ？」

「気持ちいいのして？」

「ダメダメ」

「ぷー！」

ほっぺたを膨らませるアネモネであるが、ダメなものはダメだ。

116話 王都へ向けて出発

帝国から『竜殺し』といわれる、アキラという日本人と、その家族を亡命させた。

話をきけば、彼は本当にドラゴンを倒したと言う。

そして彼の連れ合いである『夜鳥のレイラン』という大魔導師も亡命させた。

この亡命劇が明るみにできれば、帝国からの抗議はもちろん、それを理由に帝国が軍を進めてくる可能性がある。

だが、アキラの話では――新しい皇帝は地盤固めをしている最中なので、無茶な行動はしないだろうと言うのだが。

――アキラ達がソバナの公爵邸へやって来た次の日。

数日ぶりに、アネモネのパンとプリムラのスープを飲む。

ベルには猫缶をあげた。数日ぶりの猫缶に、彼女も美味しそうに食べている。

アキラの家族達は、王女と一緒に公爵邸で朝食を食べているだろう。

アンネローゼさんと女騎士は貴族だ。屋敷に泊まっても何の問題もないだろう。

だが、王国と帝国のマナーの違いみたいなものはあるのだろうか？

「はあ、やっぱり家の飯はいいなあ。外出すると途端に飯が粗末になるからなあ」

カップ麺も美味いが、すぐに飽きるし。

「皆の食事は大丈夫だったか？」

「もう、ケンイチは心配しすぎにゃ」

「そうだよ旦那。皆で市場へ買い出しに行つて、いつもと同じように食べてたよ」

「うん」

「にゃー」

皆の意見は一致しているようだ。

「そうか」

「でもなあ、やっぱり食材が違うせいかな、味は落ちちゃうなあ」

「それは、仕方ありませんよ。ケンイチが出してくれる食材は、1級品ばかりですから」

プリムラの言うとおり――この世界でも、王侯貴族並に金を出せば、かなり上等な食材を使える。

だが、シャングリ・ラで買えば安いのに、わざわざそんな無駄遣いをする必要がないからな。

家族と会話していて、アキラのほうを見ていなかったが、美味そうに食べているので問題なさそうだ。

「いや、マジで美味いって！ 毎日、こんな料理食ってるのかよ」

「うみゃー！」

アキラとミヤアがスープとパンを食べて叫んでいる。

「まあ、だいたいこんな感じだよ」

「マジか……うちは料理できるやつが、いないからなあ……」

「誰もできないのか？」

「ああ、独りキャンプ旅行で自炊とかしてた俺が一番まともだからな」

「アキラは、お好み焼き屋もやってたって言ってたしな。貴族の2人はダメだろうが、レイランさんもダメか？」

「全然だめ！ 魔法は凄いいけど、料理の才能はゼロだ」
だが、うちのプリムラだって、最初はまったく料理できなかったからな。

「プリムラもアネモネも、俺が教えてやって、料理ができるようになったし……可能性はないか？」

「俺も教えたんだけどな……寿退社したカロリンって女の話をしたろ？」

「ああ」

「そいつが一番まともだったから、全部任せてた」

「パーティにエルフがいたそうだけど……」

「基本草食だし、木の実とか虫とかが主食だからな。後はチョコレートモドキな」

アキラとミヤアは、話をしながら料理にぱくついている。

話を聞くと、戦闘もしょっちゅうだったようだし、食生活はあまりよくなかったようだ。

「料理はたっぷりあるから、おかわりしていいぞ」

「いつもこんなに量を作るのか？」

「ああ、王女が大食らいなんだよ。それに余ったら路上で、プリムラが売ったりするし。いくら作っても捌いてしまう」

「根っからの商売人だな」

それを聞いたプリムラが、フンス！ とガッツポーズで気合を入れている。

「これから毎日、こんな料理が食えるにゃ？」

ミヤアがパンを頬張りながら、スープを飲む。

「おいおい、いつまでも人様の家庭に上がり込むわけには、いかなえだろ？」

「まあ、定住する場所が決まるまでは、いいけどな。こっちは亡命させた責任があるし」

「こっちでも料理をするから、材料とか道具を支給してくれるだけでいいぜ」

「それでいいなら、大丈夫だ」

まあカレーなら、肉と野菜を煮てカレールウを入れれば美味しいカレーの完成だからな。

簡単に超美味い。カレーは正義。

朝食を食べ終わると、王女たちが戻ってきた。レイランさんたちアキラの家族も一緒だ。

レイランさんは、元のカラス色のドレスに戻ったようだ。

あのニットのセーターも捨てがたいが……。

「ケンイチ、朝食じゃ」

「はい」

やっぱり食うのか。朝食は公爵のところで食べてきたんだろうけど。

王女の台詞を聞いたレイランさんたちも驚いている。

アイテムBOXから小皿を出して、アキラにマヨネーズをもらう。

「アキラ、マヨネーズを頼む」

「ほい！」

小皿の上に黄色いニルニルが現れる。

「リリース様。これが竜殺しの独自魔法ユニークでございます」

「……なんという珍妙な。それに、レイラン殿から聞いたぞ？ ドラゴンの口に飛び込んで窒息させたそうじゃな？」

「はは、その通りでございます。何分、必死だった故、それしか方法が思いつきませんで」

アキラの返答に、王女は笑っている。どんな方法でも真種のドラゴンを倒したのには間違いない。

「センス、公爵の屋敷はどうだった？」

戻ってきたレイランさんに、アキラが屋敷の様子を聞いている。

「ええ、久々に上等な料理をいただいて、湯浴みをしました」

「悪かったねえ、俺の料理は上等じゃなくてえ……」

レイランさんの台詞をきいたアキラが拗ねている。

「そ、それは——アキラにはいつも感謝してはいるのですよ？」

「それはいいとして、アンネローゼ——俺と一緒にだと、もうこんな屋敷に住むなんてできなくなるんだぞ？」

「私の家は貧乏貴族だったので、こんな立派な公爵様の屋敷と比べるべくありません」

アンネローゼさんの実家は、黒石屋という商人に借金をした挙句、娘を借金に売ってしまったらしい。

彼女は貴族なのに——それが商人に嫁いだ理由のようだ。

「いやいや、王国は魔導師の商売は禁止してないから、アキラとレイランさんなら、十分に稼げるって。そうすりゃ屋敷ぐらいは、どうってことないと思うぞ？」

「まあな——でも金もそれなりに持ってるし」

「たとえ、泥にまみれようとも、私はアキラ様についていくことに決めましたので」

「分かった分かった、好きにしろ」

アンネローゼさんに言い寄られて、アキラがたじろぐ。

「私も、お前の悪行を阻止する務めがあるからな！ 地の果てまでついていくぞ！」

女騎士が、何故か自慢げに胸を張る。

「素直に、俺のチ○○から離れられないって言えよ」

「何を言うか！？ 貴様のチ○○などに興味ない！」

おいおい、朝から下ネタワード連呼は勘弁してほしいな。

アキラの所へ行ってヒソヒソ話をする。

「おいアキラ、子供がいるんで、エロ話は自粛してくれ」

「おっと、すまねえ！」

彼が、アネモネのほうを見て、肩をすくめた。

そして皆に今後の予定を伝える。

「王女の食事が済んだら、家を畳んで王都へ向かう。無理をすれば、1日で峠を越えられると思うんだが、なにしろ凄い峠だからな。大事をとって頂上の宿場町で1泊する」

「おう、いいぜ。どんな峠か楽しみだな」

「これだけの人数で、ハ○エース1台だとつらいので、2台体制で行く。アキラ、マニユアルの運転はできるよな？」

「ははは！ まっかつせっなっさい！ 2台にして、サバイバビリティを上げるんだろ？」

「そうだ、念のためな」

マイクロバス1台にしてもいいんだが、あの峠で小回りの利かないバスは無理だろう。

正直、運転する自信がないし、崖から落下したらひとたまりもない。

祝福がある俺とアキラだけ生き残る？ そんなことは絶対に避けなければ。

そう考えると、簡単に死なないってのは呪いにも思えてくる。

妙な考えをかき消すように、俺はアイテムBOXからハ○エースとラ○クルプ○ドを召喚した。

「おおっ！ 懐かしの白いハ○エース！ こんな異世界で相見まえるとは！」

感激したアキラがハ○エースをペタペタ触って、スライドドアを開けたりしている。

「アキラたちは、プ○ドのほうだぞ」

「オーケー！」

「にゃ？ 桶がどうしたにゃ？」

「さあ、旦那たちの話はさっぱり分からねえ」

ミヤレーとニヤメナが首を傾げているが、ミヤアと同じ反応だな。だが一々説明してられん。

朝食を食べている王女に確認をする。

「リリース様、公爵閣下にご確認は？」

「大丈夫じゃ。其方が戻ったらすぐに出発すると言ってある」

「公子様はよろしいので？」

「家が決めたことで、妾は知らぬ！ それに公子などは、レイラン殿の胸に釘付けだったぞえ？」

「まあ確かに――正直あれは凄い！ 正に凶器！」

だが、俺の言葉に明らかに王女が不満気な顔をする。

「ふん！ 妾とて、あと数年もすれば、ボン・キュツ・ボンになるわえ！」

「にゃはは、ケンイチも大きい方が好きなのきゃ？」

「獣人にはあんなデカいのはいねえからなあ……」

そう言えば、獣人で巨乳は見たことがないな。基本は筋肉重視だからな。脂肪はつかないのだろう。

「……」

「むー！」

話を聞いていた、プリムラとアネモネが不機嫌そうだ。

「男の性^{さが}みたいなんなので、勘弁してくれ。そうだ！ プリムラも、これを着てみてくれ」

俺は、シャングリ・ラで、レイランさんに渡したのと同じニットのセーターを購入。彼女に渡した。

ちなみに色違いでグレーである。アキラがレイランさんに着せたのを見て、羨ましくて仕方なかったのだ。

「これをですか？」

「ああ、プリムラに着せてみたくな」

「……分かりました」

ちよつと悩んだ彼女であったが、家の中に入ると——着替えてすぐに出てきた。

ちよつと赤い顔をしてモジモジしているが、腕で挟まれた胸の形が浮き出て、レイランさんほどではないが、破壊力抜群だ。

「フアイヤー！」

「「ジャストミート!!」」

また俺とアキラが一緒に叫んだ。

「な?！　うちのも、中々のもんだろ？」

「ああ、中々のもんだな、大したもんだ」

「……もう！」

俺は赤くなっているプリムラを抱き寄せると、後ろに回り込んだ。

「フヒヒ、これか！　これがええんか!？」

後ろから手を回すと、プリムラの柔らかい胸を揉む。指先が、セーター越しにふによふによと、二つの丘に食い込んでいく。

男には揉まずにいらぬ時がある！

「いやあ——こんな所じゃ……だめです」

「こんな所じゃなきやいいのか？」

「……はい」

小さく頷くプリムラに思わず理性が消し飛び、本能が爆発しそうになるが、ここら辺で止めておく。

なぜならば——王女が凄く怖い顔で、こちらを凝視しているからだ。

プリムラが息を荒くして赤い顔で、胸を押さえているが、その横でアネモネが真っ赤な顔をしている。

「もう！ そんなに胸を触りたいなら、私のを触ればいいでしょ！
そう言っ、俺の手を掴むと、自分の胸に押し当てた。

「あんあんあん！ どう？ 嬉しい？」

ヤキモチを焼いている可愛いアネモネを抱きかかえて、ほっぺにチューをする。

それを見たアキラが、電話をかける真似をした。

「あのもしもし！ 110番ですか？ あのですね、怪しいオッサンが少女を抱きかかえてチューをしているんですが、すぐに来てください」

「ここは、異世界だからセーフ！」

「いや、それはアウトだね」

「娘を抱っこしているんだから、問題ないだろ。ノーカン！ ノーカン！」

「屁理屈言うな！」

俺とアキラの言い争いを見ていた獣人達がドン引きしているのだが、やむを得ない。

「なんか、ケンイチが普通のオッサンになってるにゃ」

「あゝ、ちよつとなあ」

「昨日も言ったが、オッサンが2人だとオッサンがはかどるから、しょうがない」

「その通り」

「アキラ！ こいつらをまとめてオッサン時空に引きずり込め」
アキラがくるくると回って、怪しい踊りを舞い始めた。

「オッサン時空発生！ ガッチャン！」

「ボンボン！ 柱時計の鐘と鳩時計の音が周囲に鳴り響くと、辺りは七色に染まり怪しい時空に包まれた。オッサン時空では、普通の人間は通常の10倍オッサンになってしまうのだ！ だが、元々オッサンの2人には何の影響もなかった」

「「ははは！」」

うちの家族や、レイランさんたちもドン引きしているが、そんなことを気にしていたら、オッサンはやってられない。

だが、王女も朝食を食べ終わったので、テーブルや椅子を片付けて出立の準備をする。

荷物を家の中に入れてから、家自体をアイテムBOXへ入れる。

「よし！ 家収納！ 小屋収納！」

「おおっ！ マジでアイテムBOXの中に入るんだな！」

「テントでも、いいんだが、家のほうが安全だからな。黒狼ぐらいは余裕で防げるし、危険がありそうな時は、さらに丸太のバリケードを展開する」

「ほほう……すげえな」

アキラのアイテムBOXには家は入らないが、車ぐらいなら入りそうだ。

だが、レイランさんの私物が結構入っているらしい。

「それって、レイランさんの魔導の研究材料とか、本とかか？」

「そうだ。苦労して集めたらしいからな」

「レイランさん」

彼女のところへ行って、ヒソヒソ話をするが——どうしても、はち切れそうな爆乳が目がいつてしまう。

「私も王国の貴重な魔導書を30冊以上持っているんですが、見せ合いつこをするというのは……？」

「考えておきましょう」

即時、否定はしてないので、興味はあるのだろう。それに彼女は、俺のことをまだ信用していないようだ。

俺とアキラとは、日本人という暗黙の同族意識があるのだが、彼女は異世界人。

何か、胡散臭さを感じているのかもしれない。

そしてアイテムBOXから、ポリタンクに入ったバイオディーゼル燃料を出す。

「アキラ、プ○ドにこの燃料を入れてくれ」

「任せろ。これがケンイチが作った燃料か」

「ああ、でもアキラがいてくれれば燃料の油には困らなくなるな」
シャングリ・ラから一斗缶を買って、空にする必要もなくなるわけだ。

「はは、いくらでも出してやるぜ」

彼のマヨネーズは対価が要らないらしいからな。マヨネーズや油を売るだけで、十分に商売になる。

さて、車同士の連絡を取る手段が必要になるな。前に買ったトランシーバーがあるが――あれを運転しながら、使うのはちょっと難しそうだ。

「ここは、新しいのを買うか……」

シャングリ・ラを検索して、アマチュア無線用の本格機を買う。前に買ったトランシーバーは玩具みたいなものだったが、こいつはマジな無線機。

出力50Wで、日本で使うとなると免許が必要になるタイプ。だが、ここは異世界。そんなものは必要ない。値段は5万5000円が2台だ。

「よし、ポチツとな」

無線機が2台落ちてくる。

「アキラ、この無線機をプ○ドにつけてくれ。電源はシガーソケットから取れる」

「無線機もあるのかよ。マジでなんでもありだな。どのぐらいの距離で会話できるんだ？」

「こいつは本格的なやつだから、数十kmは大丈夫だろ。塔の上とか山の上からなら、100kmぐらいは通話できると思う」

「ほう、免許が必要なやつだな」
「多分」

彼には、多分と言ったが、シャングリ・ラの説明欄には要第三級アマチュア無線技士以上って書いてある。

車のダッシュボードに無線機を取り付け、シガーソケットから電源を取る。最後に、車の屋根にアンテナを立てる。

「そういえば、家にデカイアマチュア無線のアンテナを立ててる家もなくなったなあ」

アキラの言うとおりだ。離れた場所や国の人々と会話ができるつてのが、アマチュア無線の醍醐味だったのに、今はネットがあるからな。

わざわざ高い機材を買って無線機を使う人は少なくなった。

ただ、トラックなどで、違法無線を使っている連中は、昔から一定数存在する。

「ちょっとテストをしてみるか――」

アキラと一緒に簡単な取り扱い説明書を読む。この世界には無線機はこれしかない。

難しい設定は要らないはずだ。

「これでいいんじゃない？」

車のキーをONにして、電源を入れるが――動かない。

「どうした？」

アキラが覗き込んでくる。

「問題ないはずなのに、動かないな……あれ？ 電装が死んだぞ？」
無線機だけではなく、車の電装品が全部動かなくなった。

「……もしかして、ヒューズ切れたろ？ バッテリーの容量不足なんじゃない？」

「あゝ、なるほどなあ。その可能性はあるか」
とりあえず、ラ○クルのヒューズボックスを確認すると――切れてる！

シャングリ・ラから交換用のヒューズを購入して取り付けた。

後は無線機だ。

俺は、シャングリ・ラを検索して、20Wのタイプに候補を定めて――とりあえず1台だけポチった。

先に買ったものが無駄になってしまいが、動かなければ仕方ない。俺もバッテリーの容量を失念していたし。

無線機が落ちてきたので、取り付けてシガーソケットから電源を取った。

「それじゃ、スイッチON!」

ウインドウが点灯して、動き出した。

20Wなら大丈夫らしい。

通信は車と車の間だけだ。

そんなに通信距離があるわけじゃなし、これで十分か。

「これならいけるな」

アキラも早く試してみたいようである。

使えろと解ったので、もう一台同じものを購入して、アキラのプラダにも取り付けた。

「悪いなアキラ、二度手間させてしまった」

「はは、いいってことよ。異世界で無線機なんて代物を使おうというんだから、しゃーない」

取り付けが終了したので、再度無線機の実験を行う。

電源を入れると無線機が周りの電波をスキャンしてくれて、ダッシュボードに設置したディスプレイにアキラたちのものが表示された。

勝手に、電波をスキャンして通信可能な無線機を表示してくれるようだ。

まさにハイテク。

「こいつを選択すると繋がるのか？ チューニングとかそういうのも要らないんだな」

ハンドマイクのボタンを押して、アキラと会話する。

「あゝあゝ、ただいまマイクのテスト中。アキラ聞こえる？」

『聞こえるぞ、随分簡単だな。ネットに繋げるみたいな感じで無線もできるんだ』

「そうみたいだな。まるでスマホみたいだわ」

よし、これで出発の準備はできた。

『アキラ、この召喚獣を操ることができるのですか？』

『大丈夫ですよ。センセ！ ドーンと大船に乗ったつもりで』

『ここは陸で舟はありませんが……』

そんな会話が無線機から聞こえているが、問題なさそうだ。

「リリース様。出発の準備ができました」

「うむ！ 其方の召喚獣をアキラに使わせて大丈夫なのかえ？」

「彼も魔導師で、この召喚獣の事を知っていますので、扱いも慣れています」

「なんと――あの者も、鉄の召喚獣を召喚できるのかえ？」

「いえ、召喚はできないようですが」

「むう……」

メイド長のマイレンさんが、公爵邸に向かうと――閣下と公子がバタバタと走って見送りにきてくれた。

公爵邸のメイドや執事たちも一緒に、ずらりと並ぶ。

「王女殿下、おもてなしもできませんで……」

「よいよい、目的は果たせたのじゃ！」

恐縮する公爵と公子を後目に、王女がハ〇エースの助手席に乗り

込む。

そして、スライドドアから、俺の家族たちとメイドさんたちが乗り込んだ。

後ろを確認すると、プ○ドにアキラの家族も乗り込んでいる。

「私をまた、この鉄の化け物の中に押し込めようというのか？」

「うるせえ、クレメンティーナ！ とっとと乗りやがれ！」

アキラの怒鳴り声が聞こえて、女騎士をプ○ドの後部座席に押し込めた。助手席にはレイランさんが乗るようだ。

「アキラ——大丈夫か？」

「ウェーイ！」

彼が窓から手を出して叫んだ。

「それじゃ出発——！」

ズラリと並ぶ公爵邸の皆さんに、別れを告げて峠へ向かう。

だが公子の目は、明らかにレイランさんを追っている。

「公子様は、随分とレイランさんが気に入った様子ですねえ」

「ふん、レインリリー公爵家の専属魔導師にならぬかと、必死に口説いておったわ！」

「あらら、そりゃまた。アキラも彼女も、絶対にウンと言いませんよ」

「全く男というのは！ 其方何か？」

「いいえ、私には、リリス様がいらっしゃいますので」

「……うむ……そうか」

危うく、プリムラとアネモネの名前を出しそうになったが、ここはゴキゲン取りが必須だろう。

だが、後ろで話を聞いていたアネモネから物言いがついた。

「なんで、私じゃないの?!」

「もちろん、アネモネもね」

ルームミラーで後ろを見ると、プリムラのニコニコ顔が怖い。だつてしょうがないじゃん。

ハ○エースを走らせて、公爵邸の門をくぐる。

公爵邸の前には、今日も獣人達が集まっている。

「おゝい、お前等! 森猫様は、在所に帰るからな」

「森猫様の在所ってどこなんでござえますか?」

「アストランティア近くの大きな湖のほとりだよ」

このハ○エースコミュニターの右側にはスライドドアはないのだが、ガラスには小さな窓がある。

アネモネがそこを開くと、ベルが顔を出した。

「「「おおっ!」」」

獣人達が一斉に膝をついた。

「お前等も元気でやれよな――それじゃな」!

沢山の獣人達に見送られて公爵邸を後にする。バックミラーにはアキラが運転しているプ○ドが映っているが、大丈夫そうだ。

彼は道が分からないので、俺が先導する必要がある。ここにはGPSやナビはないのだ。

「しかし、亡命させた大魔導師を2人もお城に連れて行って、揉めませんかねえ」

「まあ揉めるだろうのう。じゃが誰にも真似できぬ偉大な功績には変わりない」

通りを進んでいくと、見覚えのある獣人の3人組がいた。

「よお！ お前等！ 仕事はないのか？」

俺は窓から顔出して、彼女たちに話しかけた。

「え？」 「あゝ！ 旦那！」 「おはようございます」

「俺たちは、王都經由で在所に帰るからな。元気だな」

「旦那達の在所ってどこなんですか？」

「アストランティアの近くにある湖のほとりだよ」

「へえゝ！」

俺が窓から手を出すと、彼女たちが頭を擦り付けてくる。俺の指に大きな耳が当たると、ピコピコと動く。

「こらあ！ お前等！ 変な匂いをつけるんじゃない！」

「そうだにゃ！」

騒ぐ、ミヤレーとニヤメナに、3人組が舌を出している。

「それじゃなゝ！」

3人組に別れを告げると、大通りを右折。王都への街道に入る。ここからは1本道なので、迷う心配はないだろう。

『あゝあゝ、ケンイチ聞こえるか？』

後ろのプ〇ドから通信が入ったので、ハンドマイクを取る。

「はい、どうぞ！」

『ここからは、王都まで1本道か？』

「そうだ、多少脇道があるが、太い街道は一本だから、迷うことはない」

『オッケー！』

「桶がどうしたのじゃ？」

王女も獣人達と同じ反応だ。

「私の国の言葉で、了解って意味ですよ」

「そうか——それは離れた場所と会話が出来る魔道具なのか？」

「そうですよ」

「どのぐらい離れた距離で話せるのじゃ？」

ダッシュボードに取り付けられた機材を王女が覗きこんでいる。

「およそ20リーグ（30 km）ぐらいですかねえ」
説明するのが面倒なので、数値はテキストである。

「むう——軍の指揮に使えるではないか！」

「また、そういう戦に結びつけるので？」

「妾は王族じゃぞ？ 国と民を守る義務がある！」

王女とそんな話をしつつ——皆を乗せて、ハ○エースとラ○クル
プ○ドは地獄峠へ向かった。

116話 王都へ向けて出発（後書き）

[https://syosetu.com/syuppan/vi
ew/bookid/3275/](https://syosetu.com/syuppan/vi
ew/bookid/3275/)

アラフォー男の異世界通販生活3 4月10日発売！

117話 峠を車で上る

帝国から元日本人の魔導師と、その家族を亡命させ王都へ連れていく。

戻ったら一悶着ありそうだが、それは着いてから考えよう。

元日本人のアキラも車を運転できるので、ラ○クルプ○ドを任せて、彼の家族を運んでもらっている。

マイクロバスの購入も考えたのだが、この先に待ち構えている地獄峠を小回りの利かないバスで越えるのは無理———というか自信がない。

サバイビリティを上げるためにも2台に分けた。

途中にあった川で水を補給した。飲水には使えないが、風呂などに使えるからな。

公爵邸の井戸でも良かったのだが、井戸から水を汲むのは大変だ。

アイテムBOXへ水を収納したあと———街道をひた走り、王都へ向かう荷馬車を次々と追い越していく。

左側を見ると、ドラゴンを解体した湖の湖面がキラキラと光っている。

眩しい光に目を細めていると、後ろからついてきている、アキラから無線だ。

『目の前に山があるが、あそこを越えるのか？』

無線で話す時は、ハンドマイクのボタンを押す。

「そうだ。かなり険しい峠なんで、気をつけてな」

『沢山の馬車が走っているが、こいつらも王都へ向かっているのか？』

「ああ、命がけだぞ」

『んで、その分稼ぎはいいと——』

「王都では慢性的な物不足だ。持ち込めば持ち込むだけ売れる。一攫千金のチャンスだ」

『ははは、帝都でもそんな感じだったな。魔物が跋扈する地帯を突っ切ったりするんだ』

「どこでも、やることは同じか」

後部座席を確認していないが、プリムラが今の話を聞いて、渋い顔をしているだろう。

「久々の車だろうけど、大丈夫か？」

『はは、モーマンタイ！ 身体で覚えたことってのは中々忘れないな』

「そういえば、バイクも乗りこなしてたしな」

『バイクで日本1周したんだぜ？ もう、手足のごとくってやつだ』
それは、ちよっとうらやましい。日本1周とはいわなくても、北海道1周ぐらいはやってみたかった。

峠に入る手前の宿場町で小休止する。女性陣はお花を摘みたいだろう。

軽く飲み物を飲む。プ○ドから出てきた、アキラが伸びをしている。

「んーっ！ あの峠を越えるのか？」

アキラが峠の入り口を指さした。

「ああ、かなり険しい峠だからな。缶コーヒー飲むか？」

俺は、アイテムBOXから缶コーヒーを取り出した。

「おおっ、マジか！　かつちけねえ！」

アキラは嬉しそうに、缶コーヒ―を飲んでいる。

「ゴミは俺に渡してな。一括で処分するから」

「おう！　なんか変な金属に、変な触媒効果があったりするからなあ、ゴミも迂闊に放置できねえ」

「そのとおりなんだ。パウチの袋とかカップ麺の蓋とかにもアルミ箔が貼ってあったりするし」

「ヤバイよな」

アキラと話していると、俺の足元にベルがやってきた。

「にゃーん」

「お母さんも、おやつを何か食うか？」

シャングリ・ラのお勧めに、チュールというチューブに入った猫のおやつが出ている。

ふくん、これが流行っているのかね？　とりあえず、一袋買ってみた。

パッケを開いて、中からチューブを取り出して封を切る。

「ん？　なんだそりゃ？」

「猫用のおやつらしい」

「森猫に食わせて平気なのか？」

「猫缶も喜んで食べるし、トラやライオンにもマタタビが効くって話だから、一緒じゃね？」

「ああ、マタタビの話は聞いたことがあるな……」

アキラが俺から受け取ったチュールのパッケを興味深そうに見ている。

「パッケには、このまま食べさせる写真が載ってるから、こうやる

んだよな……」

チューブから、押し出した練り状のおやつを、ベルに舐めさせる。

「ぺろぺろぺろぺろ……」

一心不乱に舌を出して舐めているけど、美味しいのだろうか？

そこへ、ミヤレーとニヤメナがやってきた。

「なにを食べてるにゃ？」

「森猫のおやつだよ」

「にゃ？　ウチも食べるにゃ！」

「ええ？　いいのかな？」

「大丈夫なのか？」

アキラも心配顔なのだが、猫缶も食べてたしなあ。

「カレーが主食になる前は、猫缶が好物だったので、平気だと思うが……」

「こうやって食べる」

チューブから、少し出して舐める真似をして、ミヤレーに渡す。

「こうにゃ？　ぺろぺろぺろぺろ……」

すごい、真顔で一心不乱に舐めているのだが——それを見た、ニヤメナも食べてみたいようだ。

「ほら、ニヤメナにもやる」

「いいのかい？　ぺろぺろぺろぺろ……」

2人とも凄い真顔だ。

それを見たアキラが叫んだ。

「おい！　ミヤア！」

「なににゃ？」

尻尾をふりふりやってきたミヤアに、アキラがおやつを渡す。

「これ、食べてみる、美味いらしいぞ？」

アキラは先に舐めている獣人達を指さした。

「こうにゃ？　ぺろぺろぺろぺろぺろ……」

舐め始めると、ミヤアも真顔になった。獣人の女が3人、揃って真顔でぺろぺろしている。

「真顔になるほど美味しいのか？　何か入っているんじゃないのか？
アキラがそんなこと言うのだが、そんな物を売ったら大問題になるだろうが。」

食べ終わった、獣人達に感想を聞く。

「そんなに美味しいのか？」

「……美味しいにゃ」「ああ……美味しい」「美味しいにゃ！」

なんか、表現に苦しんでいるようだが、美味いらしい。

「アキラ、美味いんだってよ」

「へええ」

「でも、もつと塩気が欲しいような……」「そうだにゃ」「にゃ」

「そういえば、猫缶も塩気が少ないな。人間の食べ物を食わせると病気になるって話だし」

「塩気があったら、酒のツマミに最高だな」

ニヤメナがそんなことを言う。

アキラと話をしていると、王女たちや、レイランさんたちも戻ってきた。

指差し点呼をする。置いていたりしたら、大変だ。

「レイランさんたちも、大丈夫ですか？ 乗り物酔いとかは？」

「ええ、大丈夫ですよ」

「馬車に比べたら、かなり乗り心地がいいですね」

アンネローゼさんは元貴族だ。上等な馬車に乗った経験があるの
だろう。

それと比較しても、プ○ドの乗り心地はいいらしい。

「何やら、化け物の腹の中にいるようで気味が悪いが――慣れれば、
なんてことはない！」

一番怖がっていた女騎士が、大丈夫だって言うんだから、大丈夫
か。

「さて、峠へ行くか？」

「おう！ どんなサンダーロードか、楽しみだぜ」

皆で車に乗り込むと、峠へ向けて出発した。

街道は徐々に上り坂になり右側が崖になってくる。

日本と同じ左側通行なので帰り道のほうが安全だが、遅い馬車に
追い越しをかける時には緊張する。

後ろのアキラから、無線だ。

『うひょー！ こいつはすげえぜ！』

「地獄街道っていうらしい」

『パキスタンだったかな？ フェアリーナントカ道路ってところが、
こんな感じだったぞ』

「パキスタン？ パキスタンに行ったのか？」

『ああ、大学休学してな、貧乏世界1周旅行をしたんだぜ。ははは
！』

彼の話では、バスに乗って峠を越えたらしいが――。

『もう、いつ落ちるか、ヒヤヒヤだったな。だって、下にバスやトラックの残骸がゴロゴロ転がってるんだぜ?』

「ここの、下には馬車の残骸が転がってるぞ」

無線から他の人の声が聞こえてくる。

『おい！ アキラ！ こんな所を走って大丈夫なのか?』

『うるせえ！ クレメンティーナ！ ヘボ騎士は黙ってる!』

無線からアキラが怒鳴る声が聞こえる。マイクのボタンを離せばいいんだが。

「パニックってるようだが、大丈夫か?」

『ああ、大丈夫大丈夫！ デカイ口を叩くくせに、一番ヘタレなんだ』

『私は、ヘタレなどではない!』

あゝ、うるさい。だが退屈しないで済むのは間違いない。

『丘を越えゝ行こうよゝつとくらあ!』

スピーカーから聞こえてくるアキラの歌に、助手席の王女が笑っている。

「其方と同じ歌じゃな。ほんに同郷なのじゃな」

「嘘を言ってます」

「むう——其方、妾に隠していることがあるじゃろ?」

「申し訳ございませんが、個人の秘密はありますよ。これは、私の家族だって知りませんし」

「……」

そして、しばらく進み——峠の頂上までの中間地点に到達した。かなりゆっくりと進んでいるのだが、馬車に比べたら数倍早い。

「リリース様——これなら昼過ぎには頂上へ到着できますね」
「うむ」

後ろを見ると、アキラのプ○ドが少々遅れているようだ。

「少しスピードを落とすか……」

その時、俺達のハ○エースの横を猛スピードで、馬車が通り過ぎた。

咄嗟に、ハンドマイクを取り、後方に連絡を入れる。

「アキラ！ スピード出した馬車が行ったぞ、注意してくれ」
『了解！』

そして、アキラたちを待たために少々スピードを落とすと、彼から無線が入った。

『おい！ ケンイチ！ 馬車が落ちたぞ！？』

「ええっ？！ マジか！」

『ああ！ 目の前で落ちた！』

「リリース様、確認いたします」

「うむ！」

停止して、ステッキのようなサイドブレーキを引くと——車から降りて崖下を見ながら歩く。

ブラインドコーナーを過ぎると、停止している車が見えてくる。

アキラのプ○ドも止まっているが——そこまでは100mほど離れているようだ。彼も車を降りていた。

ハ○エースもバックで下がれないこともないが、止めておく。こんな場所でバックはしたくない。

崖の下を見ながらアキラの所までいくと、下に馬車が落ちている。

「おい！ 生きてるかあ？！」

返事がない。だが布のようなものが動いている気がする。

アイテムBOXから、双眼鏡を出して覗く。

「あ、動いているな、生きているらしい」

「マジか？」

アキラに双眼鏡を渡すと、プ○ドの扉を開いて、ハンドマイクを取る。

「あゝあゝ！ ミヤレーにニヤメナ！ ちょっとこっちへ来てくれ！」

彼女たちは無線機の使い方は分からないので、返事はない。

「落ちた人が生きているのですか？」

「ええ、レイランさん達は乗っててください。ミヤア、ちょっと手伝ってくれるか？」

プ○ドに乗っていた、ミヤアに協力を頼む。

「分かったにゃ」

ミヤレーとニヤメナもすぐに車を降りて、俺達の所までやって来てくれた。

だが、そのあとを、王女とアネモネがついてきている。

俺は、アイテムBOXから、ロープとクライミングハーネスを取り出した。

この前、崖下に降りたように、再びクライミングに挑戦だ。

それに、前に降りた場所より高さは低い。ロープを崖下に降ろして、獣人達に持ってもらおう。

「崖下に降りるのか？」

「ああ、以前やったから、大丈夫だ」

「崖下に降りて、ワイバーンの死体を回収したにゃ！」

「マジか！ ケンイチも結構、危ない橋を渡ってるじゃねえか」

「けど、俺のは自発的な行為だからな。強制じゃないし」

「うむ！」

王女が強制しているわけではないと、念を押しておく。王国もブラックだと勘違いされると困るからな。

まあ、多少ブラックっぽいところがあるのは事実だが。

「ロープを持っててくれよ」

「旦那、任せろって！」

「大丈夫？」

アネモネが心配そうな顔をしているが、ここで彼女の魔法の出番はないな。

獣人達の言葉を信じて、崖を蹴って下へ降りる。ゴツゴツとした岩肌を目の前に見ながら、下に降りていくと脚が地面に着いた。

すぐに馬車の所へ向かう。そこでは商人の男が残骸の下敷きになっていた。

「おい、大丈夫か？ 助けに来たぞ」

「うう……」

息はあるようだ。だが完全に馬車の残骸に挟まっていて、手では持ち上がらない。

「足場は——大丈夫だな。よし、ユ○ボ召喚！」

重機を置けるスペースを確認して、アイテムBOXからユ○ボを出した。

「よし！」

座席に乗ると、エンジン始動。けが人を傷つけないように、そつと瓦礫の下にユ○ボのバケットを差し込み——持ち上げる。

これで、けが人が引き出せるだろう。白いシャツに緑色のベスト

を着た男を残骸の下から引っ張り出した。

頭を打ってるかもしれないので、動かすとまずいかもしれない。

「そうだな……」

シャングリ・ラを検索すると、アルミ製の担架が売っているじゃないか。

ニュースの映像で出てくるヘリコプター救助などで使われているような立派なやつだ。

だが、5万円と少々お高い——だが人命救助のためだ。

「ポチツとな」

ガシャッと落ちてきたアルミ製の担架に怪我人を寝せると、落ちないように3本のベルトで固定する。

マジで、ヘリコプターで釣り上げるみたいな感じになった——そうそう、こんな感じだ。

シャングリ・ラでロープを追加購入して、上から垂れているロープと担架を結んだ。

ちよつと引っ張ってみるが——大丈夫だ。

「おーい！ 怪我人を引っ張りあげてくれえ！」

「分かったにゃ！」

獣人たちの怪力で——担架に乗せられた怪我人が、するすると崖の上へ引き上げられていく。

その間に——可能な限り、破損していない荷物をアイテムBOXに回収する。

木箱や樽が割れて、散乱している荷物などは拾ってられない。

上にはアキラがいるので、ベルトの外し方などは分るだろう。こういう時に日本人がいると連携が取りやすい。

担架が引き上げられたあと、再びロープが降りてきた。俺のハー

ネスを接続して上に引っ張りあげてもらう。

崖下から戻ってくると、すでにアキラが治療を開始していた。

「どうだ？ 怪我人は？」

担架の上で寝ている怪我人の頭に、アキラが手をかざしている。彼も、皇帝から祝福をもらい、ナチュラル回復ヒールが使えるのだ。

「今、治療をしている。頭も打っているみたいだが、俺の経験則からすれば大丈夫だ」

「良かった」

「こいつはアルミなんだな。最初、力がオーバーロードしそうになつて焦ったぜ」

「祝福にもアルミの触媒が使えるのか？」

「ああ、戦場で使ったことがある」

これは貴重な情報だ。彼は戦場を渡り歩き、俺より経験値が上――力の使い方にも手慣れている。

アキラのために、エナジーバーとバナナを出す。

「力を使うと腹が減るだろ？ 食ってくれ」

「おおっ！ バナナかよ！ サンキュー！ 同じ力を使えるやつがいると、話が早くていいな」

「にゃ？ 産休がどうしたにゃ？」

獣人達が俺たちの会話に首を傾げているが、まあそのうち慣れるだろ。

「はは、バナナなんて2年ぶりに食ったよ！」

「俺もこの前に、久しぶりに食った」

手足もボキッとはいってないが、ヒビが入っているようだ。

そちらの治療は俺が担当、身体の治療は、アネモネの回復ヒールを使ってもらう。

「アネモネ、軽くていいからな。この金属が魔法の触媒になる」
「分かった」

プ○ドの窓を開けて、レイランさんがこちらの様子をうかがっている。

「アキラ！ 私も手伝いましょうか？」

「センス！ 座ってて大丈夫だから、もう終わるし！」

「祝福持ち二人と、大魔導師に治療をしてもらうなど、全く運の良い商人だの」

治療をじっと見ていた王女がつぶやく。

「多分、一生分の運を使い果たしたのでは？」

「そうかもしれぬ」

王女が唸っているが――治療をしているアキラは俺が使ったユ○ボが気になるようだ。

「それよりも――ケンイチ、あんな重機まであるのか？」

「ああ、もっと大型の重機もある」

「マジでなんでもありだな」

「でも、俺のは対価が必要なんだよ。プ○ドは王国金貨5枚。ハ○エースは10枚、大型重機なら50枚必要だ」

「そりゃ大金だな」

「それに大型重機を動かすと、1日にバイオディーゼル燃料を400L消費する」

「400か――ハンパねえな。チートとか魔力で燃料の補充とかできないのか？」

「それができればどんなに楽か……」

とにかく治療は終わって、容態は安定している。

プ○ドには担架は乗せられないので、獣人達にハ○エースまで運

んでもらう。

担架のあとを、王女とアネモネがついてくる。

「ミャレー、ニャメナ、座席の間の通路に寝かせよう」

「わかったにゃ」「おう」

「大丈夫なですか？」

プリムラが心配そうに、通路に横たわる怪我人を覗きこみ、ベルがクンカクンカしている。

「アキラの話では大丈夫のようだよ。あいつは怪我人を沢山治療したベテラン——いや熟練者だ」

「あの者は相当修羅場をくぐったようじゃの」
治療を手伝ってくれたアネモネを労う。

「アネモネ、ありがとうな」

「任せて！」

そうしているうちに、プ○ドがハ○エースの後ろまで来ていた——無線が入る。

『ケンイチ、大丈夫か？』

「大丈夫だ。怪我人は通路に寝かせた。それじゃ出発する」
『了解！』

けが人を乗せたハ○エースと、アキラの運転するプ○ドが再び、つづら折りの峠を走り始めた。

『こんな峠じゃ、毎日事故だろう？』

無線機からアキラの声が聞こえてくる。

「まあ、そんな感じらしい」

ちよっと予定外の時間をくってしまったが、事故では致し方ない。

午後2時頃――峠の頂上にある宿場町に、到着した。

「ふう……やっと到着」

車から降りると、王女がマイレンさんに指示を出す。

「マイレン、宿場町の町長を呼んでくるのじゃ」

「承知いたしました」

一礼すると、メイド服のマイレンさんが、宿場町の中へ走って行く。

その間、俺達は怪我人をハ〇エースから降ろすと、プ〇ドからアキラ達も降りてきた。

俺と一緒に降りたベルは、辺りのパトロールを始めた。

「いやあ――すごい峠だったな。今日はココで一泊か？」

「ああ、予定より遅れたしな。下っている間に暗くなってしまうだろう」

「暗闇の中、この峠を下るのは勘弁だな」

「だろ？」

アキラと話していると、町長が走ってきた。

「これは王女殿下！ ようこそお越しくございました」

「挨拶はよい、怪我人を受け入れてくれ」

「崖から落ちたそうで、よく助かりましたな」

「我が聖騎士が崖の下まで降りて、助けてくれたのじゃ。そして、そこな大魔導師が、治療をしてくれた」

王女が、アキラを紹介する。

「ありがとうございます。このような場所で事故を起こして助かるなど、正に地獄で神！」

「うむ！」

獣人たちに、宿屋まで怪我人を運んでもらう。

「それから、破損していない荷物も引き上げましたので、預かっていただくと助かります」

俺がアイテムBOXから、谷底から拾った荷物を出すと、町長は町の者に運ぶように命じた。

「何から何まで……あの者もきっと感謝するでしょう」

「それで町長さん。我々は町の前で宿泊するので、また場所を貸していただきたい」

「承知いたしました」

一応、町長の許しを得たので、空きスペースに家を出す。

「王女と女性陣は家で寝てくれ。俺らは天幕^{テント}で寝るから」

「ウチは、ケンイチと寝るにゃー！」「俺も！」

「それじゃ、ウチはアキラと寝るにゃー！」

獣人達は、テントで寝るようだ。さすがに、獣人達まで一緒では家に入りきらない——ぎゅうぎゅうだ。

それに王族と一緒にでは気が引けるらしい。

「私もケンイチと一緒に！」

アネモネも俺と一緒に寝るらしい。

「それじゃプリムラ、ちょっと早いが飯の準備にするか」
「はい」

テーブルやら、調理器具を出してプリムラと話をする。

「プリムラ、レイランさんたちの相手をしてやってくれ。何か商売のネタになることがあるかもしれんし」

「分かりました、帝国の大魔導師様ですからね」

レイランさんも商売をやりたいようだが、あの身体だ——男どもがわんさか集まって、商売にならないかもしれない。彼女もそういうのは嫌みたいだな。

「ケンイチ、今日は何を食うんだ？ それとも、材料だけ提供してくれば、鍋も魔導コンロもあるから、こちらでも調理ができるが」アキラは今日の献立が気になるようだ。

「まだ、お客様だから、こちらで用意するよ」

「カレー！」

「カレーにゃ！」

アネモネとミャレーが手を上げる。

「こうやって献立のリクエストを取ると、カレーになっちゃうんだよ」

「別にカレーでも良いが……」

「いや、俺たちは、レッサードラゴンのホルモン焼きを食ってみようぜ？」

「何？ ホルモン焼き？ そいつは美味しいのか？」

アキラの目が光る。

「分からん……肉は美味しいんだから、内臓も美味しいはずだ。アキラはレッドドラゴンを倒して肉は食わなかったのか？」

嫌なことを思い出したのか、アキラが俺の言葉にむっとした表情を見せる。

「そんなの有無をいわず、皇帝に——あの時はまだ皇太女だった——が———」
「……」

「倒した本人が食えないなんて、不憫だな……」

「そうだよ、泣くしかねえ」

「まあまあ、いずれまたドラゴンを倒して、肉にありつけるかもしれないだろ」

「ええ？ 冗談！ あんなのは二度と御免だけどな」

俺はアイテムBOXから、レッサードラゴンの腸を出して、下拵えを始めた。

117話 峠を車で上る（後書き）

[https://syosetu.com/syuppan/vi
ew/bookid/3275/](https://syosetu.com/syuppan/vi
ew/bookid/3275/)

アラフォー男の異世界通販生活3 4月10日発売！

118話 ドラゴンのホルモン焼きを食べ

皆を車に乗せて、峠頂上の宿場町までやってきた。

途中で事故を起こした商人を救ったが、治療の結果――命に別状はないようだ。

この世界の奇跡の御業である祝福持ちが2人、そして大魔導師が2人である。

これでなんとかならないようであれば、もう運がなかったと諦めるしかない。

けが人を宿場町へ預けたあと、ちょっと早いが晩飯の準備を始める。ずっと峠を走っていたので、皆昼飯を食べていないのだ。

カレーを作るらしいので、プリムラが準備を始めると、レイランさんが手伝いを申し出た。

「あの、野菜の皮むきを手伝います」

「センセ！ 無理しなくてもいいと思うけど」

アキラの言葉どおり、彼女は全く料理ができないらしい。

一緒に、アンネローゼさんがウロウロしているが、彼女も全く料理ができないようだ。

まあ、元貴族だからなあ。それを見ている女騎士は最初からあきらめている。

レイランさんが包丁を使い始めたのだが、危なっかしくて見てられない。

「皮むきは、これを使ってください」

彼女にアイテムBOXからピーラーを出す。

「これは？」

「こうやって、簡単に野菜の皮むきができる刃物です」

デモンストレーションをしてあげると、レイランさんが驚く。

「これなら、私にも皮が剥けます！」

「あの……それは私にもできますか？」

アンネローゼさんも、ピーラーなら皮剥きができると思ったのだろう。

彼女にもピーラーを渡して、皮剥きを手伝ってもらうことにした。なにせ量が多い。

「ケンイチたちは何を食べるにゃ？」

「ドラゴンの内臓を食べようとしているが――」

アイテムBOXから、ドラゴンを解体した時に出た、腸の一部を取り出す。

アネモネに冷却してもらって、そのままアイテムBOXに入れていたので、手の上でひんやりと冷たい。

「ぎゃー！ 臭いにゃ！」

「うおっぷ！ 旦那！ これから飯を食べるのに、止めてくれよ！」
皆から非難轟々で、ちよつと離れた場所にやって来て、テーブルを出した。

アイテムBOXから、デカイプラ容器を出し、水を入れるとジャブジャブと洗う。

水は川から汲んだので、いっぱいある。最終的には、焼いて食うので川の水で洗っても平気だろ。

「すげーデカイ腸だな、直径20cmぐらいか？」

「まあ、そんな感じだな」

白くて肉厚でブヨブヨしている環形。内側にはヒダやイボ。においては確かに臭いが――まあ、腸ってのはこんなもんだ。

「ケンイチは、ホルモン焼き食ったことがあるのか？」

「うちの母方の婆さんが、食堂でホルモン焼きを出してたことがあるんだよ」

「へえ、俺は大阪で食ったが、まさか異世界でドラゴンのホルモンを食う羽目になるとは……」

「俺だってそうだ」

水を換えて何回か洗う。

「水はあとで捨てるのか？」

「ここだけの話――俺のアイテムBOXには捨てる場所があるんだ」

「マジで？ 穴みたいのが開いてるのか？」

「そう、そこに要らない物を捨てることができる」

「なんてこったい！ じゃあ、気に入らない奴ら殺って、そこへ入れば完全犯罪……」

アキラが、腕を組んでニヤニヤしている。

「まあ、そういうことだ」

「誘拐もし放題……」

「一応、心にダムはあるから悪事には使わんど。家族に嫌われたくないからな。アキラだって、レイランさんに嫌われたくはないだろう」

「モチのロン」

「まあ、ゴミの処理などは任せてくれ」

「オッケー」

腸が綺麗になったので、テーブルの上で切る。肉が分厚いので、なるべく薄くカットしなくては。

内臓ってのは、弾力があり肉が固いのだ。

普通の包丁では薄く切れないので、シャングリ・ラから1万円ぐらいのふぐ引き包丁を買う。

薄くて刃に弾力があるので、スパッと薄く切れる——それを大皿に並べていく。

「フグさしみたいだな」

「こうしないと、歯ごたえがありすぎて、噛めないぞ」

「確かに、かなり分厚いからな」

切り身の数が揃ったので、アイテムBOXからカセットコンロを取り出して焼いてみる。

「カセットコンロかよ」

「ちゃんとガスもあるぞ。向こうで使っているのは、魔導コンロだ」
アキラも魔導コンロを持っているそうなので、カセットコンロは要らないだろう。

シャングリ・ラから、ホルモン焼きのタレを買う——3本で2000円だ。

アイテムBOXからスツールとタレ用の小皿も出す。

「ここだけ、場末の一杯飲み屋みたいだな」

俺の言葉にアキラが笑っている。

「異世界で座って飲める立ち飲み屋でござい！ ははは」

2人でスツールに座り、コンロに焼肉用の鉄板を置くと、その上で腸を焼く。

鉄板には溝が彫っており、油が下へ落ちる仕組みだ。ジュウジュウと物凄い煙がでるが、ここは外なので、いくらでも煙を出してもOK。

火が通ると、香ばしい香りをともに肉がくるくると丸まっていく。

「おおっ！ いい匂いだな！ 匂いは合格だぞ?!」
はしゃいでいるアキラに割り箸を渡す。

「味はどうか？ 不味かったら、山ほどある腸を全部捨てないと駄目だが」

「そりゃ、勿体ねえ——はふはふ、あーん。んぐんぐ」

「どら、俺も食ってみるか——んぐんぐ」

「「美味い！ 美味すぎる!!」」

2人の声がハモった。クニクニとした歯ざわりと、濃厚な脂の味が、口の中で香辛料が利いたタレとハーモニーを奏でる。

「なんだよこれ、マジで美味しいじゃねえか!」

アキラが自分のアイテムBOXから、エ〇スビールを取り出して栓を開けた。

「もう、飲むのか?」

「ホルモン焼きって言ったら、ビールだろうが! んぐんぐんぐんぐ——ぷはぁ! たまんねえ!」

「ホルモン焼きとビール。鬼のようなプリン体攻撃。異世界痛風一直線だな」

「てやんでえべらぼうめ、祝福持ちが痛風になるかってんだ」
アキラの言うとおりか。常にナチュラル回復ヒールがかかっている俺たちが病気になることはあるのだろうか?

「アキラ、実家はどこなんだ? なんか色々と言が混じってるよ
うな……」

「えー? 実家はねえなあ——親父の仕事の関係でさ、1年から半

年単位で、日本全国を巡ってたからな」

「あゝなるほど。バイクで日本1周して、貧乏旅行で世界1周もしたんだっけ？」

「ははは！ その通り！」

「それじゃ、この異世界も、旅人生のついでって感じなのか？」

「そうかもなあ……帰りたいって故郷ってのが、まったく思いつかん。異世界の帝国へ来てからも、全然定住してねえし」

「でも、そろそろ落ち着きたいと考えている——？」

「そうだなあ——センスもいるしなあ」

レイランさんも腰を落ち着けて、魔導の研究をしたいようだが、帝国にいと有無をいわさず徴発してしまうので、中々それがかなわなかったらしい。

「まあ、国の金で魔導師になったから、仕方ないような気もするが」

「防衛大学校に入った自衛官みたいな感じだからな」

日本だと任官拒否もできるのだが、帝国では無理だ。

「にゃー」

俺の足元にベルがやってきた。

焼いたホルモン焼きをタレをつけずにやる。とても美味しそうに食べている。

ベルが、これしか食わなくなったらどうしようか……。

俺とアキラがホルモンを食べながら話していると、王女がやって来て、白い煙を出して焦げている腸をじゅっと見ている。

「リリース様、お召し物に臭いが移りますよ」

「じゅっ」

「はいはい——」

アイテムBOXから椅子を出して、王女を座らせる。

「こんな下賤な食べ物を召し上がるのですか？」

「下賤かどうかは妾が決める！」

「王女様はそう言うけど、王族や皇族が動物の内臓は食べないよな。これは庶民の味だし」

アキラの言うことも、もつともだが、王女は俺たちの話を聞かず食べてみるらしい。

皿をもう一枚出して、タレを注ぐ。

彼女は箸を使えないので、フォークで食べている。

「むぐむぐ、これは菌ごたえがあるな！」

「味は、いかがですか？」

王女はしばらく肉を噛んでいたが、ごくりと飲み込んだ。

「美味しい！ これは、美味しいな！ なんとという濃厚な味。まさに肉の味！」

「——というか、脂の味だよなあ」

「この白い煙も脂が焼ける煙だしな——ケンイチ、足りなくなりそうだぞ？」

王女が入ったことで、ホルモンが凄い勢いで減る減る。

慌てて追加で腸を切り始めた。少々乱雑になってしまいが、致し方ない。

「動物で一番美味しいところってのは、内臓だからな」

ビールを飲みながら、アキラがつぶやく。

「ライオンとかも獲物を仕留めたら、まずは内臓から食うよな」

「ああ一番旨くて栄養があるからな。アバラの肉なんてハイエナの餌だぜえ」

「そうそう、ハイエナって犬みたいだけど、犬じゃないんだってな」

「へえ、そうなのか」

「ジャコウネコや、マングースの近縁らしい」

王女がひたすらホルモン焼きを食い、俺とアキラが話していると――。

アキラが、ビールの缶を咥えながら、後ろを指さした。

「おい、ケンイチ後ろ」

「後ろ？ うわぁ！」

後ろを振り向くと――口からだらだと、よだれを垂らしながら、獣人たちが立っていた。

ミャレーやニャメナだけではない。ミャアや宿場町にいたと思われる男の獣人たちも肉の壁のごとく、立っている。

漂う肉の匂いを嗅ぎつけてやって来たのだろう。

「お前等、気配を消して近づくなよ。びっくりするだろう」

「旦那ぁ……金を払うからそれを食わせてくれえ……」

「もう、我慢できにゃいにゃ……」

「うむ、獣人たちも、本能的なものには逆らえぬか。それぐらいに美味い」

これは、王女の言うとおりかもしれない。

獣人達に石で竈かまどを作らせて、アネモネの魔法で火をつけてもらった。

その上に鉄板を置く。

「魔導コンロなら貸すが――」

アキラの申し出だが、なにもコンロを汚すことはない。

「いや、多分脂だらけになって汚れると思うし、俺のカセットコンロだとガスの臭いがするんだってよ」

「ガスの臭い？ ああ、獣人は鼻がいいからな……」
それに直火で焼いたほうが美味いだろ。

「ほら、これが肉だから、なるべく薄く切ったほうが美味いぞ」

「「おおおっ！」」

獣人たちが、ドラゴンの腸に群がった。だが、薄さなんてお構いなしに、ぶった切ってジュウジュウ焼き始めた。

「うめえええ！」 「この歯ごたえは最高だぜ！」 「このタレが美味い！ 香辛料たっぷりだ！」

獣人たちの顎は強靱なので、このぐらいの歯ごたえは平気のようだ。

ついでに酒も出してやる。ビールはアルミの缶の処理が面倒なので、焼酎だ。

「ほら酒だ。手酌でやれ。ひーふーみー全部で10人か」

アイテムBOXから、カップを10個だす。そして、4Lの大〇郎を2つ。

「「うひょー！！」」

「大〇郎かよ！」

思わず、アキラのツツコミが入る。

「あれでも美味いって評判はいいぞ」

「まあな。変な臭いやら酸っぱいのやら、とりあえずアルコール発酵してれば、なんでも酒だからな」

「どんな酒でも蒸留すれば大分違うと思うんだが……」

「酒の蒸留なんて聞いたことがないぜ？」

「アキラが蒸留所でも始めてみたらどうだ？ 売れると思うぞ」

「うゝむ……」

錬金術士が乾留を使っているという話も聞くので、蒸留も教えればできるはずだと思う。

アキラに俺が持っている魔道具を見せる。

「こういう魔道具を使っているんだ。液体の成分を分ける装置だ」

「へえ、これでアルコールだけ分ければ、濃度を上げられるって寸法か」

「そうだ。俺はバイオディーゼル燃料を作るために使っているけどな」

「この世界で酒を作るのも悪くねえな」

彼にも何かやりたいことがあるだろう。それを見つければ、定住もはかどるのではないだろうか？

「ガチャポンプとか、ソロバンとか複式簿記とか持ち込んだのも、アキラなんだろう？」

「なんと！ 真なのか？」

肉を食べていた王女が、俺の言葉に驚く。

「ああ、店の権利をゲットするのに、ギルド長に複式簿記を教えてやったんだよ」

「そいつは帝国の商業大臣になったって話だったが……」

「はは、そのことで俺に弱みを握られているからな、たっぷりと利用してやったよ」

「なんと、ドラゴン殺しだけではなく、そのような重要な発明までしていた人物だったとは……」

唸る王女を横目に俺はプリムラを呼んだ。

「はい、なんでしょう？」

「帝国で複式簿記を発明したのは、こちらのアキラだそうだ。君も

素晴らしいと絶賛していたよな」

「ええ？ 本当ですか？」

「ああ、本当！ 本当の話——実は——なんちて！ ははは！」

「アキラ——ちょっと酔いが回ってきたんじゃないのか？」

「大丈夫、酔ってないから！ 複式簿記で分からないことがあれば聞いてね。手とり足取り、腰取り教えちゃうから」

酔ってないと言うやつは、酔ってるの法則。

「おいおい、ウチの家族に手を出すなよ？」

「大丈夫、大丈夫！ そんなことをしたら、センスにコロコロされちまう、ははは！」

酔っていないと言いつつも、酔いが回ってきたのか——アキラが女騎士を呼び寄せた。

「なんだ？ アキラ」

「さて！ 盛り上がってまいりました！ ってことで、これを着てみる」

アキラは自分のアイテムBOXから、赤い鎧らしきものを取り出した。

赤い部分は丁寧に磨かれており、縁は金細工のようだ。ピカピカと光を反射している。

「こ、これは……ここで着るのか？」

「嫌か？ ほら、ドワーフの店で買ってやった剣もあるぞ。この鎧もお前のために大枚をはたいて、作らせたんだ」

「くっころ……」

「はいはい——ケンイチ、着替えに家を借りるぞ」

「いいぞ」

アキラは女騎士の手を引っ張ると、家の中に入っていった。

しばらくして2人で出てくると——女騎士の鍛えられた素肌に鎧

が着せられている。

大事な所だけをカバーするように、最低限の金属だけを用いて造られた鎧。

レイランさんほどではないが、大きな胸とムチムチの太もも。

きらめく鎧を着た女騎士は、恥ずかしそうに顔を赤くして、腕で胸と股間を隠している——そう伝説のビキニ鎧である。

「フアイヤー！」

「「ジャストミート!!」」

俺とアキラの声がハモる。

「こりゃ、中々結構なお点前ですなあ」

「ははは！ そうだろ？ 一品物だぞ？ 帝国金貨200枚使った」
帝国金貨200枚ってことは——2000万円か。アホすぎる（褒めている）。

「「「おおおっ!!」」」

ホルモン焼きを食べていた獣人の男たちも、目をギンギンにして、食い入るように見ている。

股間には絶賛テントが設営中だ。

「くっころ……」

それを見ていたプリムラだが、家に入り毛布を持って出てくると——女騎士に被せた。

「もう！ なんて恰好をさせているんですか?! 可哀想じゃありませんか!」

「そうは言うけど、プリムラ嬢ちゃん。こいつは、こういう事をすると、喜ぶ変態なんだよ。なあ、こんな尻丸出しの恰好して嬉しいよな?。」

アキラが女騎士を抱き寄せて、尻に指を食い込ませる。

「くっころ……」

「アキラ様！ それでは、私もその恰好をいたします！」

アキラに詰め寄ったのは、アンネローゼさんだ。

「いやいや、アンネローゼには、似合わないだろう？」

「アンネローゼさんは、お姫様コスプレじゃないか？ やっぱり……」

「そう思うよな？」

オッサン二人が語り合うその光景を、黙って見ながら食事をしていたレイランさん。

皿を置くと、つかつかと無言でアキラの方へ向かう――。

「センス！ すみません！ 調子に乗りました！ すぐに止めますんで！」

アキラが女騎士を家の中に押し込めたので、ここでお開き。

ショーは閉幕したが、プリムラがぷりぷりと怒っている。

「もう！ 複式簿記を発明した凄い方なのは分かりますけど、ああいう方は好きになれません！」

「フヒヒサーセン！」

アキラはゲラゲラと笑っているが、反省している節はない。

「まあまあ、酔っぱらってるみたいだし、悪いやつじゃないと思うんだが……金儲けの秘訣に、気に入らない人物でも、商売のためなら付き合うべし――ってのがあるだろう？」

「あ、ありますけど……」

「アキラが出せる油だけでも、かなりの取引になるぞ？ 彼が油をいくら出せても販売網がない。そこにマロウ商會が食い込めれば――

」

「……」

彼女と話をしつつ……女騎士のビキニ鎧姿を思い出す。
俺が、プリムラの身体をジッと見つめていると——それに気が
ついたのか、彼女が腕で身体を隠して悲鳴を上げた。

「私は、あんな恰好は絶対にしませんから！」

「残念——それじゃ」

シャングリ・ラから2000円で白いビキニを買って、ホルモン
焼きを食っているミヤレーとニヤメナに見せた。

「これをつけてみてくれ」

「なんだい旦那、こんな布をつけるのかい？」 「ペラペラにゃ」

「それで、手足だけ鎧をつけるんだ」

彼女たちにドワーフの店で買った、鎧と剣を渡す。

「いいけど……」 「にゃ！ すぐ着るにゃ！」

鎧と剣を持って獣人達が、家に駆け込む。コスプレ大会になって
しまったが、獣人達なら平気だろ。

裸になってもなんとも思わないからな。

しばらく待っていると——彼女たちが、毛皮の上から白いビキニ
を着て外に出てきた。

引き締まったボディに、鎧がマッチしている。

毛皮の分だけ、ふっくらしているように見えるのだが、水に濡れ
たりすると筋肉質で贅肉一つない鋼の身体が露わになる。

「イイね！」

「ケンイチ、獣人にビキニは中々似合うな。うゝむ、只者ではない」
アキラが腕組をして唸っている。オッサン2人でなにをしている
のか。

「獣人は無駄な肉がないからな。こういうコスプレにピッタリだ」
「でもよお旦那、こんなの腹に食らったら終了だろ？」「全然防御になってないにゃ」

ニヤメナが自分の腹の部分を指さしている。

「そういうお遊びなんだよ、はは」

それを見ていたミヤアが、アキラに抱きついた。

「にゃ！？ アキラも、ああいうの好きかにゃ？！」

「ああ好き好き、大好き！」

「ウチも着るにゃ！」

——ということで、ミヤアにも白いビキニを買って渡すと、家に駆け込む。

彼女は、すぐにビキニと鎧を着てくると、剣を構えるポーズをとった。

「おおっ！ 似合うぞ！ ミヤア！」

「ホントかにゃ？ アキラは、こういうのが好きなのにゃ！ いつでもしてあげるにゃ！」

ミヤアがアキラに抱きついて、喉をゴロゴロと鳴らしている。

それを見た、ミヤレーとニヤメナも俺に抱きついてきた。

「この恰好は、毛並みが分かっていいな」

「俺たちは、こういう恰好しても構わないんだけどな」「そうにゃ」
獣人たちは裸で暮らしても平気なのだが、それをする则ちの住民から苦情がくるので、服を着ているのだ。

「けど、兜も被ったほうがいいかな？」

「ケンイチ、獣人は耳があるから無理だと思うぞ？」

「ああ、そうだな——それじゃ、ガスマスクはどうだ？」
ミヤレーに、シャングリ・ラで買った、ガスマスクをつけさせてみた。

「おおおっ——これはちよつと中二っぽいな、はは」

「これ、なんにゃ？」

くぐもった、ミヤレーの声が聞こえる。

「毒の霧を防ぐ覆面だよ」

「ははは、ちよつとマニアック過ぎるぜえ！」

オッサン2人で大笑いしながら、そんな遊びをしていたら——徐々にプリムラとレイランさんの目が釣り上がってきたので、お開きにする。

「むー！」

アネモネも、絶賛ごきげん斜め中だ。

「そんなに怒ることないだろ？」

アネモネを抱き上げる。

「私も、ああいう恰好をする！」

「ええ？ アネモネには、ちよつと早いような」

「なんで、早いのか？！」

「もっと、胸が大きくなって、脚も伸びないとなあ」

「むー！」

アホなことをやっていると、周りは暗くなっていた。火を燃やして暖と明かりをとる。

この世界ってのは、暗くなるとやる事がなくて困る。マジで寝るしかない。

アネモネとプリムラはランタンの明かりでバックギャモンをやっている。

レイランさんと、アンネローゼさんにも教えているようだ。ルールはそんなに難しくはないからな。

アキラの家族がいるのだが、女騎士の姿が見えない——家に引きこもってしまった。

「アキラ、女騎士——クレメンティーナさんは大丈夫か？」

「大丈夫、大丈夫。いつもああだから」

「……」

アキラは俺が訝しげな顔をしているのに気がついたようだ。

「別に、俺がクレメンティーナの奴を魔法などで束縛しているわけじゃあ——ないぞ」

「そういうものも、あるのか？」

「ある——奴隷契約を結ぶアイテムとかな」

「なるほどなあ……」

アキラの話では——リング状のアイテムで、奴隷契約を結ぶ双方の指を入れて契約を結ぶらしい。

やっぱり見聞つてのは必要だな。百聞は一見にしかずってやつだ。

アキラとしばらく話していたが、やる事がない——暇だ。寝るのにはまだ早いし……。

俺は、いいことを思いついた。せっかく日本人のアキラが目の前にいるのだ。

「そうだ！ アキラは麻雀は出来るか？」

「出来るが……」

「それなら、2マンが出来るな」

「2人で麻雀かよ」

「結構、面白いぞ。2マンで徹マンした事もある」

俺はアキラと一緒に麻雀を試みることにした。

118話 ドラゴンのホルモン焼きを食え（後書き）

[https://syosetu.com/syuppan/vi
ew/bookid/3275/](https://syosetu.com/syuppan/vi
ew/bookid/3275/)

アラフォー男の異世界通販生活3 4月10日発売！

119話 王家の秘密

峠の宿場町で、一泊する。

皆で食事をして、俺達はレッサードラゴンの腸をホルモン焼きにして食った。

大変美味でした。

食事の後、何もやることがないので、アキラと麻雀をすることになった。

せっかく日本人がいるのだから、日本人同士でできることをやってみたかったのだが——アキラも麻雀は好きなようだから問題ないだろう。

「にゃー」

ベルが俺の足元にやって来て、脛にスリスリをしている。

彼女の背中を撫でながら、シャングリ・ラで麻雀牌を探す——よさ気なのがあった8000円だ。

「ポチっとな」

空中から、ピンク色の箱が落ちてきた。箱を開けると麻雀牌が現れる。

「キ〇イーちゃんの麻雀牌かよ！ さすがキ〇イーちゃん、仕事選ばねえな。マジでパネェっす」

アキラには受けたようで、ゲラゲラと笑っている。彼は笑っているが、デザインのにも中々洒落ていると思うんだが……。

「結構、良いデザインだろ？」

「しかし、こんなものまで出てくるとは——ケンイチの能力はどうなってるんだ？」

「俺に言われてもな。この能力をくれた神様？ に言ってくれよ」

「なんでも出して、この世界で売りまくれば、あつという間に天下じゃねえか」

「物をつくるには対価が必要なんだよ。対価に金貨を使ったりすると、この世界から金貨がなくなって経済が破綻するぞ？」

「……あ、なるほど。そうだな」

アキラは大学に行ってたらしいから、このぐらいの理屈は分るだろう。

「大学休学して、世界旅行したって言ってたけど、卒業はしたのか？」

「いや、そのまま中退してしまった」

「金が勿体無いな——親に出してもらったんだろ？」

「いや、親父の保険金を使ったからな、はは」

ちよつと地雷っぽい話になったので、こちらで止めておく。

ついでに麻雀マットも購入。4人打ちなら、全自動麻雀卓を買うという手もあるな。

テーブルをもう1つ出して、麻雀マットを広げた。

「それで——2マンって、どうやってやるんだ？」

2マンは牌を2種類（例えばマンズとソーズ）だけ使うが、字牌ツーハイと一九牌だけは全部入れる。

「へえ」

「そして北ペーがドラになる。拾ってきたら外へ出して、王牌ワンバイから持ってくる」

「ああ！ 北海道の牧場で3マンを教わったんだけど、それだったな」

北は手持ちで使っても良い。例えば小四喜ショウスーシーなどをやる時は、暗刻あんこで使う手もある。

「点数は6万持ちで、満貫マンガン縛りな」

「いいねえ——それで、一点いくらでやる？」

アキラが当然のように賭けを持ち出す。

「賭けるのか？」

「当然！ 1000点1000円でいいだろ？ ハコで3万円」

「言っとくけど、このルールだと、トリプルハコテンや、四箱、五箱は余裕だからな」

「マジかよ、はは」

まあ、俺も賭けずにやるつもりはないけどな。

そして、ジャラジャラと牌をかき混ぜ、積み上げる。その様子のアネモネが見にやって来た。

「わあ、綺麗な石」

アネモネは、麻雀牌の綺麗な模様に興味津々だ。練牌だから石じゃないんだけどな……まずは俺が先制した。

「おっしゃー！ ツモ！ メンチンイツツーピンフドラドラ、北北ペーペー。ええ数え役満だな」

「マジか、いきなりかよ！」

「親だから4万8千な」

2マンなので、ロンでもツモっても同じ点数だ。

「だから、言っただろ？」

「よっしゃ！ 次だ次！」

次は、アキラが上がった。

「よっしゃ、北！」

「あつと、それロンだな。槍槓ちゃんかんで上がれるだろう？」

「え？」

アキラの手は国士無双ペーの北待ち。

「役満かよ」

「3万2千だな。こりゃ、中々面白いな」

2人とも乗ってきたところで、役の応酬が続く。それにしても引きがよいような気がする。

いや、良すぎるだろ。俺ってこんなに引きがよかったかな……？

「なあアキラ？」

「ん？」

「皇帝から祝福を受けて、運が上がったりしたか？」

「ああ、上がったな。多分、上がってると思うぞ」

「やっぱりか、麻雀の引きが尋常じゃないんだ」

「はは、俺もだ。この世界に来て博打なんて、あまりやった事がなかったから、明確に解らなかったが——これ祝福者同士の戦いじゃ、決着がつかないんじゃない……」

「かもしれないなあ……」

結局、北場までやって、俺の1万点浮き。1000点1000円なので、プラス1万円だ。

「ほい、帝国銀貨1枚」

アキラが自分のアイテムBOXから、銀貨を出してマットの上に置いた。

帝国銀貨は10枚で金貨1枚（10万円）らしい——わかりやすい。

今回、たまたま俺がプラスになったが、回を重ねるごとにイーブンに近づくような気がする。

気分が良いのか、アキラがアイテムBOXから、また缶ビールを取り出した。

「冷した方がいいか？」

「頼めるなら、頼む」

アネモネにアキラのビールを冷やしてもらう——だが缶を開けてアキラがビールを飲もうとすると……。

「あれ？ 出てこないぞ？ 中で固まっちゃってる……」

「ああ……もしかして、缶がアルミだから、魔法が効きすぎたかな？」

「……なるほど、そうかもな」

一旦ビールをグラスに注いでから、アネモネに冷やしてもらう事にした。

「んぐんぐんぐ！ ぷはぁー！ やっぱ冷えていると美味いぜ畜生！ またビールが飲めるようになるとはな！」

まるでオヤジだが、実際にオヤジなんだから仕方ない。

「この世界にはエールしかないからな」

「まあ、エールだってちゃんと作れば美味いんだろうけどな。この世界のエールは、はっきり言って不味い！」

アキラのビールを見て、ニヤメナがそつとやってきた。

「あのー旦那ぁ……そのエールみたいの、美味そうなんだけど……」
「ん？ ニヤメナも飲んでみるか？ さっき肉を食いながら、酒を飲んでたけど平気か？」

「食べるのに忙しくて、あまり飲んでないんだよ」

ニャメナを抱き寄せると、毛皮から焼き肉の匂いをする。

「はは、ニャメナー——毛皮から美味しそうな匂いするぞ?」

「本当かい?」

彼女は自分の腕の毛をクンカクンカしている。

「そんな匂いをさせていたら隠れてもすぐに見つかるな」

「ヤバイなあ……」

そういえば、シャングリ・ラでエールって売ってるのかな? 検索してみるとペールエールってのが売ってる。

酒は詳しくないので解らんが、エールなのだろう。ポチってみた。

プレミアムと書いた青い缶が落ちてきたが、アルミ缶なので、このままでは魔法が効きすぎる。

アキラと同じように、ジョッキに注いでから魔法で冷やしてもらった。

アルミ缶の管理は厳重にしないと。

「おおうつ、これがエールかい?! なんか泡立ってるけど?! 魔法じゃないよね?」

「まあ、飲んでみろ」

「んぐんぐんぐ! なんじゃこりゃ!? 美味すぎる! これがエールだって言うのかい?」

「そんなに美味しいのじゃ? ちよつと飲ませてみるにゃ」
だが、ジョッキにちよつと口を付けたミャレーが騒ぎ出した。

「苦いにゃ! 全然美味くないにゃ!」

「クロ助にゃ、この美味さは解らんか……ああ、俺が今まで飲んできたエールは何だったんだろう」

元世界のエールを飲んで、ニヤメナは恍惚の表情を浮かべている。

俺とアキラの所に、プリムラもやってきた。バックギャモンは止めたらしい。

テーブルの上の麻雀牌を弄っていたアネモネは、麻雀に興味が湧いたようだ。

「ケンイチ！ 私も、この遊びを覚えたい」

「これか？ 結構難しいぞ？」

「うん！」

それを聞いたプリムラも手を挙げた。

「それでは、私も覚えます。もしかして売れるかもしれません」

確かに、覚えれば面白いのは間違いないが……ルールが複雑だからな。

「ほう、ケンイチのアイテムBOXには遊戲の道具も豊富なのじゃない？」

王女も興味深そうに麻雀牌を見ている。

珍しいのは解るのだが、牌に漢字を使ったりしているので、何かなんだか解らんと思うが。

手始めに手牌を開いたまま、模擬麻雀を何回かやる。

アネモネもプリムラも頭は良いので、大体のルールはすぐに覚えた。漢字もタダの模様として捉えているようだ。

「あゝ、子供に博打を教えってる悪い大人がいるにや」

「子供じゃないから！」

アネモネが怒るのだが――賭けてなきや普通にゲームだし。賭ければトランプでもサイコロでも博打だ。

「ミャレー、獣人の男はどんな博打をするんだ？ 難しいのは無理だろ？」

「サイコロの数が大きい小さいってやつをやるにゃ」

サイコロを振って、次の目の大か小を当てるらしい。

それで博打になるんだろうか？ 博打となれば、それなりに配当の計算は必要だろう。

計算出来ない獣人達は、誤魔化されているんじゃないだろうか？

「絶対に損するのに、あんなのやる男どもはアホだにゃ」

辛辣だが、ミャレーの言う通りかもしれないが、解っちゃいるが止められないのが博打。

特にこの世界は娯楽がないからな。飲む打つ買う——これが基本だ。

アネモネとプリムラに麻雀を教えていたら、すっかりと夜更かしをしてしまった。

なんで異世界まできて、麻雀を伝授しないといかんのだ。

俺の思いとは裏腹に、プリムラは凄く興味を持ったらしく、ゲームにして売れないか思案中。

バックギャモンは、マロウ商会で売り出すと言ってるし、商売熱心なことだ。

「そうだ、ケンイチ。日本ダービはなんて馬が勝ったんだ？」

「俺が日本にいた時か？ 最後に勝った馬はマイカーネリアンって馬だったな」

「何産駒だ？」

「ディープライバー産駒だよ」

「サンデー血統か……中々衰えないな」

「これだけ血が濃くなれば、血統が衰退するかと思ったんだが、そ

の気配はないな」

サラブレッドを生産するために、種馬という馬を使う。

Aという種馬の産駒が走れば、各牧場がこぞってAという種馬をつける。人気がある種馬は年間100頭以上に種付けをするわけで、毎年兄弟が100頭ずつ増えることになる。

その息子が大レースを勝てば、息子も種馬になって種付けを始め、ドンドンA由来の産駒が増えるのだが――。

そのうち、A産駒の血統がまったく走らなくなる――所謂、血の限界だ。

近親結婚の末、血統が衰退する――この王国の王家でもまったく同じことが起こっているといえる。

「この世界で競馬をやるのも面白そうだな」

「この世界の馬なら、ばん馬じゃないか？」

ばん馬ってのは、重量物を積んだソリを馬が引つ張るレースだ。たしかに、この世界の重戦車みたいな馬なら、ばん馬にぴったりだな。

――――――◇◇――――

――峠の宿場町で宿泊した次の日の朝。

家の中は女性陣のベッドだらけだが、なんとか寝られたようだ。

俺の家には、シャガの所から救い出した多数の女たちが暮らしていたこともある。2段ベッドもあるしな。為せば成る。

獣人の女たちは、俺たちと一緒に大きなテントの中。

人数が増えたので、風呂は1日休んだ。それに、あと1日あれば王都に到着できる。

お城の風呂を使えばいいと――王女から提案があった。そうさせてもらうつもりだ。

俺とアネモネが朝食の準備をしていると、プリムラも起きてきた。人数が増えているので、アネモネがパンを焼いていたのでは、間に合わないだろう。

シャングリ・ラからパンを購入することにした。

昨日カレーを作ったが、カレールウを入れる前のスープを別にストックしてあるらしいので、それをスープにするようだ。

卵をシャングリ・ラから大量に購入して、ゆで卵を作る。

いくら作っても、あつという間になくなる。簡単に栄養があつて、しかも美味いからな。

こんなゆで卵だが、この世界では高級料理だ。

卵用に、起きてきたアキラにマヨネーズを出してもらう。

「ほらよ」

アキラにマヨネーズを出してもらっていると、ニヤメナとミヤレも起きてきた。

「アキラの旦那。そんなものが出てくるなんて、身体の中はどんなつて んだい？」

ニヤメナが、出てきたマヨネーズをじゅっと見てる。

「そんなんしらんわ！ 別に身体の中から出しているわけじゃねえし」

まあ、そりゃそうだな。身体の中から出てたら、プール一杯とか無理だし。

食事の準備が終わると、王女やレイランさんたちも起きてきた。アイテムBOXから出したプラ容器に水を張り、顔を洗ってもらう。昨日、家に閉じこもってしまった女騎士は、普段通りに戻っているようだ。

それを見たアキラが、「な？ 言ったとおりだろ？」みたいな顔。

彼等にとっては、これは日常茶飯事ってことか。

皆で朝食を取っている間、マイレンさんが、町長のところへ怪我人の確認をしてくれている。

メイドさんたちも一緒に食事を——といっても、絶対に食事を取らない。

俺たち——というか王女の食事が終わると、いつも大急ぎで食事を取っているのだ。

朝食が終わった後、昨日運んできた怪我人の所へ行く。

マイレンさんの話では、宿屋の2階に寝かされているらしい。

意識が戻っていないようであれば、そのまま出発してしまおう。待ってられないからな。

宿屋に行く途中、ひらひらのドレスを着た娼婦たちに抱きつかれた。

交互に抱きつきながら、俺の身体を撫で回す。

「あゝ、この前の旦那じゃないかあ」「また気持ちいいのしてえ」

「おい、怪我人を見てから、すぐに王都へ旅立たないとダメなんだが」

「えゝ？　ちよつとぐらいいいじゃん」

「それにな、力の調節ができるようになったから、もう抱きついただけでは、気持ちよくはならないぞ」

「……本当だ……」

女たちは顔を見合わせている。

娼婦たちを振り切ると、宿屋の2階へ上がる。助けた男はベッドの上で目を覚ましていた。

「おはようさん、昨日お前を助けて、治療した魔導師だ」

男は起き上がろうとしたようだが、まだ身体が利かないようだ。

「そのまま構わんよ」

「……ありがとうございます……まだ生きているなんて信じられない……」

崖から落っこちて、死の淵をさまよってんだからな。元世界ならともかく、この世界じゃ信じられないだろう。

「破損していない荷物も引き上げて、ここの町長に預けてある」

「荷物ですか？」

「ああ——それで悪いのだが、治療費をいただきたい。金貨1枚（20万円）だ」

命が助かって、瀕死の身体がそれなりに治って、荷物まで引き上げたんだ。出血大サービスだ。

「本当に、その金額でよろしいのですか？」

「ああ、別に金儲けのために助けたわけじゃないからな。それに、全て王女殿下のご意思である」

「え？ 王女殿下の？」

「我々の乗り物に王女殿下がご同行しておられてな。殿下の命令で助けたまで」

嘘なのだが、そういう話にしたほうが丸く収まる。

「なんという慈悲深さ。こころより感謝いたします。王女殿下にそ
うお伝えください」

「うむ、心得た」

彼が肌身離さずつけていた財布から、金貨1枚をもらう。

これで仕事は完了だ。

皆の所に戻り、出発の準備をする。

「アキラ、治療代金貨1枚（20万円）だ」

「別に要らんかったが……」

「そうはいかん」

アネモネには、俺の財布から金貨を出す。

「アネモネも金貨1枚だ」

「要らない」

「それじゃ、俺のアイテムBOXのアネモネの所へ入れておくからな」

「うん」

テーブルなどを収納。その後、家を収納。そして車を2台出す。

「アキラ、また燃料を頼む」

「おう！」

入れなくても大丈夫だと思うが、念のためだ。何かトラブルがあって、ガス欠で動けないとかは、洒落にならんからな。

車の準備をしていると、町長など数人がやって来た。

「王女殿下——なんのおもてなしもできませんで……」

「構わぬ！ これも公務で遊びに来たわけではないからの！」

「ははっ！」

平伏する町民たちをあとに皆で車に乗り込み、メンバーが揃っているか指差し確認。

王女は俺の隣——助手席だ。当たり前のように俺の隣に座るが、アネモネは気に入らないようなのだが……お偉いさんが優先だからな。

普通じゃ、口も利けないような雲の上の方だし。

「指差し確認！ ひーふーみー、ベルもいる——それじゃ、王都へ

向けて出発！ アキラ、そっちは大丈夫か？」

ハンドマイクを取って、後ろの車に連絡を入れる。

『おう！ 大丈夫だ！ 任せろ』

「峠の下りなら、馬車に突っ込まれる心配はないと思うぞ」

『ならいいけどな。こちら辺に魔物は？』

「ワイバーンがいたが、俺たちが退治したし」

『なる。ここでやったのか』

車が出発し、2台連なると峠を下る。下りではエンジンブレーキが活躍する。

ずっとブレーキをかけていると、ブレーキが加熱してフェードやベーパーロックを起こしてしまう。

そのまま2台の車は曲がりくねった道を下り続け、何事もなく昼過ぎに峠下へ到着した。

そこで昼食を軽く取り、すぐに出発。今日中に王都を目指す。

「後は、平坦な道がずっと続くだけだ。暗くなる前には王都へ着けるだろう」

『ははは、とてもじゃないが、馬車じゃ真似ができない芸当だな』

道は平坦なので、次々と馬車を追い越し、先を急ぐ。

だが、隣に座っている王女の顔がすぐれない。

「リリース様。なにか心配ごとですか？」

「……」

「私に、祝福の御業を使ったことに後悔してしゃらっしゃるのでは？」

「そんなことはない！ そなたのやったことは、正に偉業じゃからの！」

「でも、お城では反対なさる方もいらっしゃるでしょう」

「うむ……」

王女は、また黙って正面を向いてしまった。こんな場面で悪いのだが、王都へ到着する前に、彼女に確認したいことがある。

「畏れ多くも、リリス様。王家の秘密というのは、一体何なのか？」

「う……それは……」

後ろをチラ見するが、誰も聞いていないし、エンジン音やガタガタという走行音がするので、大きな声を出さないと聞き取れないだろう。

このように騒音にまみれている車内だが、獣人達はどうかな？
なるべく王女に近づいて、ひそひそ話をする。

「リリス様の聖騎士とやらになったからには、私に教えていただいてもよろしいのでは？」

「それは……そうだと思うのだが……」

王女が口ごもる王家の秘密ね——王家の成り立ちを根本から否定する何かか？

「こういう話の定番といえば——初代国王が、卑しい身分の出身とか……」

「そなた！　なぜそれを！」

王女が驚愕の表情で俺を見つめる。まあ古今東西、こういう話は多い。

日本の天下人の豊臣秀吉だって、足軽とも農民出身だとも言われているしな。

その後の徳川家康の実家、松平家だって三河の土豪だ。ちょっと偉い農民みたいなものだろう。

彼女が大声を上げたので、車の中の女性陣がこちらを見ている。

さらに王女に近づいて、声を小さくする。

「卑しい身分と言いましたが、奴隷出身とかですよ？」

「うう……」

王女の反応を見ると、凶星のようだ。なるほど、お城の書庫には、それに関する資料もあつたに違いない。

「王女様、国ができる前は、皆平民——いや平民などという身分さえありません。そこに人が住み着き、人が増え、その中に力を持った人々が現れる。そして、その力を持った者たちが、豪族から貴族となり、国をまとめた者たちが王家とられたわけでございましょう？」

「そなたの言うとおりじゃ……そして祝福という御業を持った女子おなごから、力を授かった男が初代国王となった」

「それならば——」

「じゃが、国を治めるためには、王家というのは神聖なものではなくてはならない」

「まあ、それはそうかもしれませんがねえ。初代国王が奴隷という話であれば、奴隷でも国を起こすことができるというわけです。でも——そうは国民には思われたくはない——ということなのでしよう」

「そのとおりじゃ……」

「うーん」

俺は日本人なので、さほど重要には思えないのだが——初代国王が奴隷出身。

この世界の住民にとっては、正に天と地がひっくり返るような事実なのかもしれない。

初代国王の出歴と、祝福の御業——これが、この国のトップシークレットか。

案外、帝国も同じ成り立ちなのかもしれないな。帝国皇帝も祝福

と似たような力を持っているというし。
今度、アキラに聞いてみよう。

2台の車は街道を土煙とともに走り、森の中から徐々に畑も増えてきた。

そのまま順調に進み王都の街並みが見えてくると、大きな川――アニス川を渡る。

「そなたは聖騎士になったのじゃから、正門から堂々ともよいのだぞ？」

「いえ、また時間がかかって、宿泊する可能性がありますし、逃げる時にも裏門のほうが都合が良さそうです」

「妾がおれば、そのようなことはさせぬ！」

「リリス様はそうおっしゃられても、他の方々がなんと言うか――」
「国を救った者に対し、それ相応の褒美を取らせねば、それこそ王家の名折れ」

王女はそう言うが、一悶着ありそうな予感。

『ケンイチ、そろそろ着きそうか？』

後ろの車から無線が入る。

「ああ、もうすぐだ」

『帝都と同じぐらいデカイ街だな』

「人口は100万人以上らしい」

『それじゃ、やっぱり帝都と同じぐらいだな』

チラリと座席の後ろを見ても、皆が安堵の表情を浮かべている。
やはり、あの峠を登って下るのは、緊張するのかもしれない。

実際に馬車が崖下に落ちたりしているからな。

お城への道が解らないので、後ろの座席からマイレンさんに来て

もらい、ナビをしてもらう。

王都の中はまるで迷路だ。行く時は、カールドンさんに案内をしてもらったが、一見さんでお城へ辿り着くのは、ちょっと無理に近い。

王都の中の迷路をぐるぐると走り回り、日が傾く頃――やっとお城の裏門へ到着した。

お堀に架かる石橋を車が渡る。

「開門じゃ！」

車の窓から顔を出し叫んだ王女を見て、鎧を着た門番たちが驚く。

「王女殿下！　よくぞご無事で」

「挨拶はよい！　開門じゃ！」

門番たちが門をあけると、2台の車は、お城の裏庭へ滑り込んだ。

「はい、到着！　皆様、お疲れ様でした。　レディースアンドジ

エントルメン　センキュウーベリーマツチ」

「何を言っておる！　妾は、早速報告をしてくる故、そなた！　ここで待っておれよ！　逃げるではないぞ？」

「今更逃げませんよ。仕事をした報酬ももらっていませんからね」

「うむ！」

王女が車から降りると、メイドのマイレンさんたちと一緒にお城へ向かう。

突然の帰城なので、誰も迎えには来ていない。

俺の車は、この世界のどんな連絡手段よりも速いのだ。

車を降りると、背伸びをする。ベルも車から降りて、辺りのパトロールを始めた。

アキラもプ○ドから降りてきた。

「ケンイチ、どうするんだ？」

「とりあえず、泊まる準備でもするか？」

王女が祝福の力を無断で使ったということで、一悶着ありそう——ということを彼に説明する。

「うーん……それじゃ、これから大臣やらを集めて対策会議ってところか？」

「王族円卓会議っていうのがあるらしいぞ？」

「それじゃ、あの王女様が、そこで吊し上げをくらうのか？」

その光景を思い浮かべると少々心が痛むが、俺にはどうしようもない。

「やっぱり今日中は無理か——それじゃ家を出すか」

もし、なにかあっても祝福&チート持ちが2人、そして大魔導師が2人——力押しでどうとでもなる。

王女が本当に王族籍を抜くつもりなら、連れて逃げてもいい。

お姫様抱えて逃げるなんてロマンチックではあるが——本当にそんなことになったら、おれの家族に申し訳ないな。

「もしも、まずいことになったら、すまん」

最悪の事態を想定して、アキラにも詫びを入れておく。

「なに、いいってことよ！ あのまま帝国にいても、どうしようもなかったし、元々亡命するつもりだったんだ。それにしても、やんごとなき奴らってのは、どこでも似たようなもんだな」

笑うアキラだが、修羅場を相当くぐっているらしいので、このぐらいで動揺している節もない。

俺はアイテムBOXから家を出して、夕食の準備をすることにした。

119話 王家の秘密（後書き）

月間Gファンタジー 5月号より、アラフォー男の異世界通販生活
連載開始！

← コミックスの試し読みもできます

<https://magazine.jp.square-enix.com/gfantasy/>

120話 再びの謁見

俺の家族と、帝国から亡命したアキラという日本人と、その家族を引き連れて、王都へ戻ってきた。

早速、王女は道中のできごとを報告すべく、お城へ戻った。彼女は王家の力を使ったことに対して、他の王族の説得もしなければならぬ。

俺たちはやることがないので、車をアイテムBOXへ収納。入れ替わりに家を出して設置、ここには井戸もあるし、その井戸には俺が取り付けたガチャポンプがそのままになっている。

「アキラ、あそこにもガチャポンプがあるぞ」

「本当だ。こちらでも普及しているのか？」

「帝国から入ってきたばかりだが、王国でコピーが作られるのも時間の問題だ。プリムラの実家でも帝国から取り寄せたものを、研究していたし」

「ここには特許がないから、パクリ放題だよな」

「でも、簡単には作れないものもある」

俺はアイテムBOXから、マロウ商会の定番商品の洗濯バサミを取り出した。

「ほら、この簡単そうな洗濯バサミが、実は簡単には作れない」

「はあ——なるほどなあ。これを1個1個手作りしたら、とてもじゃないが売れないな」

家の準備が終わったので、飯の準備を始めた。

「ケンイチ、材料だけ提供してもらっていいか？ 俺たちの料理はこっちでやるぜ。いつまでも食わせてもらってちゃ悪いからな」

「おうけー！ でも、金を払ってくれれば問題ないが」

「いやいや、量が増えるとプリムラ嬢が大変だろう」

アキラは自分のアイテムBOXから、テーブルやら食器類、そして料理器具を出した。

こちらからは、野菜と、レッサードラゴンの肉を提供した。

「え？ 日本の野菜か？」

「ああ」

「こんなものであるのか？」

「俺たちのいた所で畑も作ってたぞ。トウモロコシの種を近くの子爵に渡したので、上手く栽培できれば広まるかもな」

「へえ、すごいな。しかし、そう聞くとトウモロコシが食いてえな」

「前に採ったやつが、アイテムBOXに入ってたと思ったが……」
アキラの前に黄色のトウモロコシを出した。

「ひいい！」

だが、それを見た女騎士がひるんだ。

「すごい！ マジでトウモロコシだぜ！ 食っていいか？」

「もちろん」

アキラは自分の魔導コンロを出すと、トウモロコシを焼き始めた。

「アキラ、何をする！ まさか、その得体の知れないものを食べるつもりなのか？」

「うるせえ！ クレメンティーナ！ これは穀物だってーの！」

「そんな穀物があるものか！」

アキラに醤油を渡す。プラ製の容器に入っていて酸化しないと謳われているやつだ。

「おっ！ 醤油か！もしかして味噌もある？」

「もちろんあるぞ」

彼に味噌も渡した。味噌も日にちがたつと悪くなることがあるが、アイテムBOXに入れておけば、それも防げる。

アキラたちの料理は彼に任せて、こっちも料理をしよう。

アイテムBOXから大型の圧力鍋を出す。

「おい、なんだよ！ 圧力鍋じゃねえか！ 売ってくれ！」

「いいぞ。日本円で5万円だな。だけど、パッキンが死んだら、交換部品は手に入らない可能性大だぞ？」

「その時はまた、ケンイチから買えばいいんだろ？」

「それは構わんが、俺たちの家の近くに住むのか？」

「どう考えても、ケンイチの近くにいたほうが便利だろ！ こんなのが手に入るんだからさ」

アキラは、味噌と醤油を指さした。

この世界の豆でも、発酵食品を作れないことはないと思うが、多大な苦勞を伴うだろう。

レイランさんとアンネローゼさんはピーラーで芋の皮を剥いている。

じゃがいもではなくて、この世界の芋だ。

じゃがいもみたいにはぜないし、少しもつちりしている。里芋などに近いかも知れない。

それ故、煮物にしたりスープに入れると美味しい。

アキラは焼いていたトウモロコシを食い始めた。

「うひょーうめえ！ どうだ、アンネローゼも食ってみるか？」

「はい！」

アキラがポキンと折ったトウモロコシを彼女に差し出すと、黄色

の粒を指でもぎ、口に運んだ。

さすが元貴族、上品だ。まるかじりとかはしない様子。

「これは甘くて美味しいです！」

「アンネローゼ、こう見えても、こいつは麦の仲間なんだぜ？」

「本当でございますか？」

「縦にすると麦の穂に似ているだろ？ 麦の粒が大きくなったものだと思えばいい」

「まあ、確かにそう言われれば……」

だが、それを見た女騎士がそわそわしている。

「アキラ、私にも……」

「なんだよ、クレメンティーナ。お前はキモいとか言ってたじゃねえか！ 俺のチ○○に負けた女騎士は、そこら辺の草でも食ってろ！」

「なんだと！ なんで私ばかり……」

マジでションボリした女騎士に、アキラが慌てた。

「解った解った、うぜえ！ ケンイチ悪いが、トウモロコシまだあるか？」

「あるぞ」

アキラの注文で、3本追加した。レイランさんは真剣な顔をして黙々とピーラーで皮を剥いていたが、一緒に食べるようだ。

湖に戻ったら、作付けを増やしたほうがいいのかも知らないな。

トウモロコシは利用価値も高いし、栄養もある。

「これは、甘くて美味しい！ 果実か？！」

女騎士はニコニコしながら、トウモロコシを頬張っている。

「まったくもう、泣いたカラスが、もう笑ってやがる」

「なんだ、カラスというものは!? 私のカラスとやらではない!」
アキラたちの家族は、いつも賑やかだ。

「ケンイチ、私もあれ食べたい」

アネモネが、アキラたちが食べている黄色い穀物を指さした。

「トウモロコシか?」

「うん」

だが、料理に使ったりするなら、生トウモロコシより缶詰のほうが
いいだろう。

ショッピング・ラでトウモロコシの缶詰を購入する。3缶パックで
300円ほどなので、1缶100円だ。

6缶購入し、皆に缶詰のプルトップを開けてもらう。半分を鍋に
投入してコーンスープに、残りの半分は、フライパンにバターと一
緒に炒めてバターコーン炒めに……。

炭水化物にバター——最高に身体に悪い組み合わせだが、身体
に悪いものイコール美味いの法則に当てはまってしまう。

バターコーンの煙が立ち上り、周りに香ばしい匂いが立ち込める。

「かあくたまんねえ匂いだ……」

ニャメナが、よだれを流しているが——料理をしているうちに、
日が傾き始めてお城の裏庭が影で覆われる。

料理が完成したので、皆で夕食を食う。

「うみゃー! この黄色いのは甘くてうみゃー!」

「この炒めたのだって、酒の肴に最高だって!」

ニャメナがバターコーンをツマミに焼酎を飲んでいる。炭水化物
にバター、そして酒——絶対に身体に悪い。

「スープが甘くて美味しい！」

「この穀物の栽培が子爵領で上手くいけば、皆がこういう料理を食べられるようになりますね」

プリムラの言うとおりだ。この世界では麦が沢山作られているが、病気や不作などになると、飢饉になる可能性がある。

作つける農作物を分散させて、リスクを減らすべきだ。

トウモロコシの種を子爵に渡した時は、メリットがないと思っていたが――周りが飢饉になって生きるか死ぬかって時に、俺たちだけがシャングリ・ラの恩恵で悠々自適ってわけにもいくまい。

「ケンイチ！ そのコーンの缶詰売ってくれ！」

飯を食っていると、後ろからアキラがやって来た。

「これか？ バターコーンを作るのか？」

「ああ、見たら食いたくなった」

「それなら、皆に作ってやったら？ バターはあるのか？」

「へへ、実はある！」

なんと、アキラはレイランさんと共同でバターを自作しているらしい。

「魔法で作るのか？」

「魔法というか、器に入れた牛乳を魔法で回転させて、遠心分離する」

「はあ、そんなことができるのか」

考えてみれば、魔法で土塊を動かしてゴーレムにすることも可能なのだ。

器を回転させるぐらいは、できるのかも知れない。

「アイスとかは作ったことがあるのか？」

「おお、牛乳アイスも作ったぞ。冷却の魔法で作れる」

彼も色々と試しているようだ。アキラがフライパンの上に缶詰を開けて、バターコーンを作り始めた。

しかし、こんないい匂いをさせているのに、王女はやってこない。やはり、相当もめているのかもしれない。それに、チラチラとなにやら人影が見える。

「アキラ、見張られているな」

「ああ——まあ、心配するこたえねえよ、大魔導師が2人もいて、祝福とチート持ちが2人だ。下手に手を出したら、この国が滅びるぞ」

「まあ一応、この国を救ったのだから、それなりの礼儀を示してくれると思うんだが……」

俺の考えと裏腹に、国を救った英雄を迎えるにしては、なんの反応もない。

偉業を手放しで褒め称えることができず、お城の中でもめているのが容易に想像できる。

結局、王女はやってこないまま、皆で風呂に入る。

王女がいれば、お城の風呂が使えたと思うのだが、仕方ない。

その後、レイランさんに結界を施してもらい、俺たちは寝ることにした。

女性陣は俺の家だが、獣人たちは俺やアキラと一緒に大テントの中。そしてアネモネとベルが俺と一緒にいる。

アネモネが寝袋の中に潜り込むと、俺のシャツの中に頭を突っ込み、腹の上をもぞもぞ動いて襟の所から頭を出そうとしている。

「これ！ そんなことをしたら、シャツが伸びるからやめなさい！」
綿のシャツなら伸びるのだが、この世界のシャツは麻だ。

「えへへ」

本人は大人だと言うのだが、こんな仕草をみていると、まだまだ子供だ。

その様子をアキラが眺めているが、彼の寝袋にも獣人のミャアが一緒。

「いつもそんな感じなのか」

「やんちゃ盛りなんだよ」

「他の女とする時は、どうしてるんだ？」

「ちよっと離れた場所にテント出すとか、本拠地にはツリーハウスを作ったから、そこでやってた」

「やっぱり女が沢山いると苦勞するよなあ」

「まあな」

「俺もセンセがいないときにしたりとかさ、はは。でも、うるさいのはセンセだけだな。ミャアは元娼婦なので全然気にしねえし。クレメンティーナは変態だから、なんでもOKだし」

アキラは、一緒に寝ているミャアの頭をナデナデしている。

「アンネローゼさんは？」

「多分、平気だな。貴族にや、側室やら愛人がいるのが普通だからな」

「どうでもいいが、アキラ。そこでしないでくれよ？」

「はは、大丈夫だって」

そんなアホな会話をしているうちに、夜はふけた。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

——次の日。

一応、王女の食事分も作ってみたが、やってこない。幽閉でも、されてるんじゃないだろうな？

昨日の夕方と同じように、俺とアキラの家族とに分かれて朝食を取っていると、お城から使いがきた。

メイド長のマイレンさんだ。昼から国王が謁見すると言う。

王女のことか心配なので、様子を聞いてみる。

「マイレンさん。リリース様はどうなさいました？」

「姫様は、深夜まで王族の方々と大論争なさいまして、疲れて眠っておいでです」

「あれま——やっぱり」

「姫様を、よろしくおねがいたします」

マイレンさんは深くお辞儀をしてお城に戻った。

さて、謁見か——なにがあるか解らん。相手はあの王妃だ。一応、準備をしておこう。

アイテムBOXから、ソバナのドワーフの店で買った獣人たちの防具を出す。

「ミヤレーとニヤメナ。防具を装備してくれ」

「へへへ、旦那やるのかい？」

「相手次第だな。王族の連中は、なにを考えているか解らんからな。王女がいれば人質にできるんだが」

「多分、王女が戻ってこないのは、それを防ぐためだよ」

「そこまでは考えたくないが……」

獣人たちは、俺から防具を受け取ると、サイズ合わせを始めた。

「少し慣らしをしたかったがね」

ニヤメナが黒い防具の着心地を確かめている。

「時間がないからな。武器と大盾はその時に渡す」

武器もドワーフの店で買ったものを出して確認する。

「ケンイチ、ヤバそうなのか？」

準備をしているところに、アキラがやってきた。

「ははは、俺の取り越し苦労で、すんなりと褒美をもらって帰れればいいけどな。心配なのは、あの王妃だけだな。なにを考えているか、まったく解らんし——しかも武術の達人で、アイテムBOX持ちときてる」

「俺たちチーターに匹敵する能力の、持ち主か……」
「そうなんだよ」

シャングリ・ラで使えそうなものを買う。帝国の宿屋で襲撃された時に使った、熊スプレーがいいか。

怪我をさせずに無力化できる。それから——スタンガンだな。一番強力なやつを、2万円ほどで購入。100万Vらしいが、電撃の威力は電圧より電流だろ？

電圧が低くても、電流が大きければ深刻なダメージとなる。

自動車などのバッテリーは12Vだが、電流が大きいため感電するとかかなり強烈だ。

じっと裏庭で待っていると——昼になった。

その時、柱の陰から迎えがやって来た。前の謁見の時と同じ深緑色のローブを着た若い男だ。

皆で一列に並び、案内人の後ろを歩きながらお城の中へ入る。

案内人の男に質問してみた。

「イベリスへの橋の復旧は始まりましたか？」

「ええ、多数の貴族様が全精力を投じて仮橋を架橋中です」

本橋ではなくて、あくまで仮橋。それでも数ヶ月はかかるだろう。街道は王都の命を繋ぐ大動脈。開通を一刻も争うのだ。

同じ大動脈のベロニカ峡谷の峠を、この世界ではありえない早さで開通させたというのに、どうにも扱いが悪い。

まあ道中で色々とゲットできたし、貴重な体験もできたので無駄ではなかった。

サクツと褒美だけもらって、さっさと帰りたいところだ。

王女が言ってたように、拝領という話になるだろうか？

平民が成り上がり、貴族に――そして聖騎士になったという、ありえないことに、反対をしているお偉いさんもしそうな感じ。

前と同じく、赤い絨毯が敷かれた少々薄暗い石造りの長い廊下を列になって歩く。

前は俺の家族だけだったが、今日はアキラとその家族もいる――大所帯だ。

俺の横にはベルが足音も立てずに付き添う。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか。楽しみだな」

後ろでアキラが笑っているのだが、あまり洒落にならない。

「普通に、『よくやってくれた』で終わってほしいよ」

謁見の間でドンパチやった前例があるので、皆も緊張気味だ。

アネモネには、アルミの飾りを渡して万全を期すが、非戦闘員のプリムラやアンネローゼさんも一緒だ。

「――なにかあったら俺の召喚獣を出すから、プリムラとアンネローゼさんは、その中に」

車の中に隠れれば、多少の攻撃は防ぐことができる。

「はい、解りました」

返答するプリムラも緊張気味だが、俺だって緊張している。全く予想がつかないのだ。

歓迎してくれるなら、最初から諸手を挙げてくれるだろうしな。

長い廊下が終わり、大きな両開きの扉が俺たちの前で再び開かれると――眼の前に飛び込んでくる高い天井の大広間。

「へえ！ 帝国の白亜の御殿ほどじゃないが、立派だな」

アキラが謁見の間を、ぐるりと見回している。

以前と違うところは、俺が重機を乗り回して引き裂いてしまった赤い絨毯が取り除かれているところか。

その時に傷ついた、ツルツルの床石も交換されていない。

前回のように、貴族たちは並んでおらず、色とりどりの法衣のよ
うな服を着た、初老から老年の男性陣が並ぶ。

前の時はいなかったが、風体から見て――この国の大臣か宰相たちだと思われる。

お偉いさんたちから一歩下がり、脇に並ぶ騎士団の面々。黒い制服の近衛騎士団と、重そうなアーマを着た重装騎士もいて、物々しい。

その奥、左側には玉座に座った国王陛下、右には王妃様。

そして、その横には白いドレスに戻った王女殿下が立っていた。

幽閉でもされているんじゃないかと心配していたが杞憂だったな。

「あの男が、帝国の竜殺し……」 「黒いドレスの女は夜烏のレイラ
ンらしいぞ」 「なんとという胸じゃ……」

シーンとしているので、ひそひそ話が聞こえてくるのだが、帝国のドラゴンスレイヤーより、レイランさんの爆乳のほうが人気らしい。

いい年して、男は男ってことか。

俺の所に、アキラがやってきた。

「おい、ケンイチ。あれが王妃か？」

「そう」

「いい女じゃねえか」

「まあ、見た目はな」

右の列から白い法衣のような服を着た長いひげの爺さんが出てきた。

「皆のものが静まれ。陛下からのお言葉がある」

俺の家族とアキラが、平伏して床に片膝をつく。

「魔導師ケンイチよ。この度は王国の危機に際し、奇跡のような御業を使い、困難を取り除いた偉業に国王として深謝いたす」

「ははっ！ 国王陛下直々にお言葉を賜り、このケンイチ、恐悦至極にございます」

俺の言葉が終わると、王妃が玉座から立ち、俺たちのほうへやって来た。

流れるような白いドレスと、輝く金髪——そして、左目の下には泣きぼくろ。

彼女がやってくると、辺りの空気がいっぺんする。まさに王族が持っているオーラのようなものが漂っているのだ。

「そちらが、帝国から亡命してきたという、竜殺しとその家族かえ？」

「ははっ！ 帝国近衛魔導師アキラでございます」

その後、アキラの家族の紹介が続くが、外野から愚痴が漏れ聞こえてくる。

「しかし、あんな大物を亡命させたと帝国に知れば新たな火種に……」

「それどころか、それを理由にソバナに侵攻される恐れが……」
そんな話が聞こえてくるのだが——昨日の夜も、そこら辺で揉め

たのだろう。

その話に水を差すように、俺が答えた。

「恐れ多くも、その件に関しては、王女殿下の許可もいただきましたので」

「そのような重要案件を我々に相談もなしに決められては……」
その言葉を奥で聞いていた、王女が叫んだ。

「それでは、其の方らが、竜殺しの引き抜きをできると申すのかえ?!」

「恐れ多くも王女殿下——それは勿論、無理ですが、一言相談があってもよろしいのではと申しております」

「戦場は常に臨機応変じゃ! 其の方らに一々相談などしておっては、みすみす好機を逃してしまうではないか! 議論云々より、結果が全てじゃ!」

「確かにのう——帝国の竜殺しと夜烏のレイランといえば、その名を大陸に響かせる名高い大魔導師。王国にとっては、大きな戦力になるのは間違いないの……」

王妃が、どこからか出した扇子をパッと開いた。

「それにの! 帝国皇帝の面子を潰したのだぞ! いままで、王国の人間でそれをなし得た者がおるのか?」

「それ故、帝国皇帝の逆鱗に触れる可能性が——」

「其の方らは、帝国に尻尾を振る犬かえ?!」
「いくら王女殿下とはいえ、そのような、あざけりのお言葉は心外でございます」

「ふん!」

王妃が王女を制した。

話を聞いていたアキラが手をあげて、王妃に発言を求めた。

「あのーお言葉ですが……」

「竜殺し、なんぞ申してみよ」

「新皇帝ブリュンヒルドは——現在、地盤固めの真っ最中ですから、王国に侵攻する余裕はないです。それに、我々は有名ではありませんが、皇帝にとっては使い捨ての駒です」

「ほう、そなたほどの大魔導師が使い捨ての駒だと……」

「はい——実力のある魔導師は帝国にはいくらでもおりますので、我々を引き抜いたからといって、激怒することはないと思いますがねえ」

アキラの話を聞いた大臣たちが、またざわめく。

「やはり、帝国との戦力の差は圧倒的じゃ……」 「ソバナが落とされれば、王国は詰む……」

「ケンイチは、どう思うのだえ？」

「私ですか？ うーん、帝国より共和国の方が危ないって話ではありませんでしたか？」

「「うっ！」」

大臣たちが一斉に口ごもる。

「それなら、戦力が多いに越したことはないと思いますが」

「そのとおりじゃ！」

俺の言葉に王女が叫んだ。

「しかし……」

王女と、大臣たちの間に侃々諤々が始まってしまう。

「静まれ！」

王妃の一喝で、ホールは静まり返った。

「様々な要因があろうとも、超越的な御業で国を救い、あまつさえ

王族をワイバーンから救った偉業には王国として報いねばならぬ。さて、ケンイチ——褒美になにを望む？」

そう言って、王妃がニヤニヤと怪しい笑みを浮かべている。なんだよ、そっちからの褒美の提案じゃなくて、俺に選ばせようというのか？

褒美の話はともかく——聖騎士の話はまったく出ないな。おそらく宰相や大臣たちは知っているのだろうが、下級の騎士などには知られたくないのかもしれない。

王族の祝福の御業も一般には、まったく知られていないようだな。

俺は少々考えた。実は、なにを対価にもらうか、ずっと考えていたのだ。

最初は無難な選択をしようと考えていたのだが——王妃の顔を見て考えが変わった。

ちよいと意地悪をして、高慢ちきな王族を困らせてやりたくなったのだ。

ここにいる奴らが慌てふためく姿を見たくなったのだ。

そして俺は、無理難題ともいえる褒美を選択をした。

「それでは、王女殿下をいただきたい」

その俺の言葉にホールは騒然となった。

121話 聖騎士の力を喰らえ!

王都に戻ってきて、国王陛下と謁見をしている。

お城の人たちも、がけ崩れを片付けて街道を開通させたことには感謝しているようだが、その後アキラたちを亡命させたことで、もめているようだ。

問題点は多々あれど――街道を開通させて、王女を救ったことに關しては、褒め称え褒美をくれるという。

気になるのは、それを口にした王妃の顔。また俺を試すような顔をしている。

それを見た俺は、高慢な王族を困らせてやりたくなり、無理難題ともいえる褒美を口にした。

「それでは、王女殿下を私にいただきたい」

謁見の間にいた全員が、それを聞いてどよめいた。

「な、なんたる不敬!」「思い上がりも甚だしい!」

大臣たちが発した言葉を聞いた俺は、声を上げた。

「先代の聖騎士も、褒美で王族を娶ったという話ではありませんか。それなら私にも王族を娶る権利がある」

俺も本気で、こんなことを口に出しているわけではない。ただの嫌がらせだ。

「」「うっ!」「」

俺の言葉は、大臣たちの痛いところを突いたのだろう。完全に言

葉に詰まり、彼らは固まる。

「聖騎士？」 「聖騎士とは？」 「なんの話だ？」

俺たちの話を聞いた周りにいる騎士たちは、話が見えないのか、お互いに顔を見合わせている。

やはり、王女が祝福の御業を使って、俺が聖騎士になったことは秘匿されていたようだ。

「おや、下々の方々には、伝えられていないようですね？ それでは——聖騎士にまつわる王国の成り立ちから、皆に説明いたしますか？」

「待て！ 待て！」 「それは、いかん！」 「やめろ！」
宰相と大臣たちが慌てふためく。さすがに、このクラスになると、国の成り立ちも知っているようだ。

近衛騎士であれば秘密も守れるだろうが、これだけの数の下級騎士に噂が広まれば、制御することは不可能。

お偉いさんが慌てるのも無理もない。

謁見の間は騒然としているのだが——王妃は沈黙してたたずんだけまま。機能停止でもしているのだろうか？ まったく動かない。

そこへ白いドレスを翻して王女がやって来た。

「そなた！ 王族の玩具には、なりたくないと思したくせに！」

「はい、王族の玩具なんてまっぴらごめんですが、王族を玩具にするのは聖騎士の務め」

「そなた、最初からそのつもりで……？」

「はは——それはどうでしょうか？」

「それでは妾に、あんなことや、そんなことなど、口では言えないようなことをするつもりじゃな？ 薄い本のように！」

「それは勿論いたしますよ。もう身体の隅々まで調べて、玩具にしてあげます」

俺と王女のアホな会話に、王妃がピクピクと反応している。

「それで！　最後は孕ますのじゃな？　妾の腹を膨らませるのじゃな？」

「それはまあ――今後の成り行きということで……」

「ケンイチ！」

王女が走ってくると、勢いよく俺に抱きついた。

ホールにいた人々からも、大きなどよめきが起こる。

王族に手を出すつもりなんてまったくなく、勢いだけだったが、王女が否定しないのであれば、こういう人生もありなのかもしれない。

前ばかりを見ていたのだが、王女に抱きつかれると同時に後ろからも抱きつかれた。

「リリース！　ケンイチの赤ちゃんを生むのは、私のほうが先だから！」

「なにを言うかアネモネ。歳からいっても、妾のほうが先じゃろうが！」

絡み合う3人の前で、黙って話を聞いてた王妃の身体から、突然黒い霧が噴き出す。

「なんだ！？」

――ズルイ――。

王妃の口は確かにそう動いた。次の刹那、彼女の身体が一瞬揺れたかと思うと、俺の首の横で長剣の刃が止まった。

剣はおそらく、彼女のアイテムBOXから出したのだろう。

事態を把握すると同時に、俺の身体からズルズルと何かが引きず

り出され、体内を襲う強烈な飢餓感。

おそらく、刃が聖騎士の力で止まったので、その対価として身体のエネルギーが吸い尽くされたものだと思われる。

「母上！」

俺の盾になろうとしている王女とアネモネを抱いて後ろへ飛ぶと、アイテムBOXからバナナとエナジーバーを取り出して、食べ始めた。

これで間に合うかは解らんが、とりあえずエネルギー補給のために食うしかない。

謁見の間にいた騎士団にも緊張が走り――俺の後ろにいた、アキラたちも戦闘態勢に入り周りを牽制している。

「ハ〇エース召喚！」

アイテムBOXから出した車に、プリムラとアンネローゼさんが乗り込んだ。

「ベルは、彼女たちと一緒にいてくれ！」

「にゃー」

「アネモネは、プリムラたちを守ってくれ！」

「ケンイチは？」

「俺は、獣人たちとなんとかする！ アキラ！ 後ろを頼む」

「任せろ！ クレメンティーナ、突っ込むんじゃねえぞ！？」

「解っている！ そんなに私が愚かに見えるのか？！」

「どこに、そう見えない理由があるってんだ。センスも頼みますよ」

「ふう……結局、どこへ行っても、似たようなものですね……」

必死に対応している俺たちを見て、王妃が高い笑い声をあげた。

「ほほほっ！ 一撃で首が飛んだかと思うたが、聖騎士になったというのは本当なのじゃな！？」

くそ、なんで俺を狙ってきたのか解らんが、やりやがったな。どう見ても本気だったろ。

もう手加減しねえぞ。

俺は、バナナを食いながら王妃に答えた。

「ムグムグ——王妃様！ 前におっしやられてましたが、ムカついたら反撃してもよろしいのですよね？！」

「ほう！ 面白い！ 妾とやろうというのかえ？」

「やるに決まってるだろ！ このピーのクソアマ——！」

俺は、食っていたバナナの皮を、王妃の足元に投げつけた。

「この痴れ者が！」

アイテムBOXから武器とポリカーボネートの大盾を出すと、横にやって来た獣人たちに手渡す。

俺の目には王妃が接近したのが解らなかった。こんな素早い化物相手じゃ、重機を出しても追いつかないだろう。

有象無象の多人数を薙ぎ払うなら、重機は使えるが——相手は一人。

「ミャレー、ニャメナ！ 訓練通りだ！」

「わかったにゃ！」 「任せろ旦那！」

「ほほほ！ 獣人ごときで、妾が止められると？！」

「その前に、一つ頼みがある！」

突然の俺の願いに王妃は意外だったようで、動きを止め驚いた表情を見せた。

「なんじゃ、申してみよ」

「騎士団を突っ込ませるのは止めていただきたい。人死を増やしたくありませんので」

「はは——言うのう。聞いたかえ、騎士団！ 手出し無用じゃ！」

妾の間合いに入れば、問答無用で切り捨てるからの！」

ぐると騎士団を見回し威圧する王妃は余裕の表情だ。だが、ミヤレーとニヤメナが両脇からプレッシャーをかけ始めた。

「母上！ お止めください！」

叫ぶ王女を下がらせる。戦闘の邪魔だ。

「ふん！」

ニヤメナが王妃の間合いに近づき過ぎたのだろう、彼女が持っていた大盾の上部が切り飛ばされた。

獣人の大男が、パワーに任せて切りつけても、傷しかつかなかったポリカーボネートを真っ二つにするとは……。

「うひゃ！」

ニヤメナは慌てて後方へ飛び——それと同時に右側からフェイントをかけたミヤレーの動きに、王妃の注意が一瞬逸れた。

「チャンス！」

俺は、アイテムBOXから熊スプレーを取り出すと、王妃めがけて黄色い霧を噴射した。

こいつは拡散するから、少々離れていても効き目があるだろう。

「それが奥の手かえ！」

王妃は、俺の噴射した黄色い霧を難なく躲かわした——はずだったのだが……。

俺が放り投げたバナナの皮に踵を乗り上げて、180度開脚の股裂き状態になり完全にバランスを崩した。

「うきゃ！」

ちよっと可愛い声をあげた王妃めがけて、熊スプレーを噴射する。

「おりゃ！　くらえええ！」

缶から勢いよく噴射された霧が王妃の顔を捉え、ペンキを塗りたくったように黄色になる。

「ぎゃあああ！！　ゲホゲホゲホッ！！」

いくら剣の達人でも、この状態になってはまともに戦えないだろう。

念を入れて、再度熊スプレーを吹きかける。

「ぎゃあああ！　ひいいい！！　ゲホゲホッ！」

黄色に染まった王妃が、涙と鼻水を溢れさせて床の上でバタバタと転げ回り、床の上で嘔吐し始めた。

「うわ、えげつねえー！」　「あんなの絶対に喰らいたくないにや」

「毒の霧を撒いたから、こっちに近づくなよ！」

「旦那、解ったぜ。なんかこっちまで、鼻が痛くなってきやがった」
「にゃー！」

獣人たちが後ろに下がったのを確認すると、アイテムBOXからスタンガンを取り出した。

前に宿屋で熊スプレーを使った時もそうだったが、ナチュラル回復^{ヘルプ}が働いているので、俺自身は影響を受けないようだ。

だが大量に撒いたので、かなり目が痛い。

俺は王妃に近づくと、黒いスタンガンを押し付けた。青白い火花が飛び散り、彼女の身体を電流が貫く。

「ぎょ！」

一瞬で王妃の動きが止まる。俺は彼女の両脇を掴み、高らかに持

ち上げた。

普通なら、女を高く抱えあげるなんて、こんなことはできない。これも聖騎士の力だろう。

「これが、王家の源の聖騎士の力だ食らってみろ！」

俺が力を使い始めると――掲げられた王妃がバタバタと暴れ始めた。

スタンガンを食らっているはずなのに、これだけ動けるのはすごい。

「ひひひひひ！！」

いくら暴れても、こんな状態で本来の力を出せるはずがない。王妃は長身の身体をのけぞらせてビクビクと痙攣し始めた。

「ひひひひひひひ！！！！」

王妃の絶叫と共に、身体中の穴という穴から体液を噴き出し、床へ滴り溜まりを作る。

あられもない姿で絶叫を繰り返す王妃を助けようと、動いた騎士団をアキラが制した。

「騎士団動くなあ！！ お前らの足元は油で満ちたした！ 炎の魔法一発で、全員黒焦げだぞ？！」

さすが彼は歴戦――すでに手を打っていたようだ。どうやったかは不明だが、巨大なホール一面に油が撒かれている。

王妃の身体から流れる体液が尽きたころ、謁見の間に大声が響いた。

「もう、止めえい！！！！」

声がする方向を向くと、真っ赤な顔をした国王陛下が立っていた。いままですべて王妃が取り仕切り、お飾り状態だった国王だが、

俺の所へやって来て手を伸ばす。

多分、王妃を渡せというのだろう。

言うとおりに黙って彼女を渡すと——国王は抱きかかえて持ち上げようとしたのだが、尻もちをついて諦めた。

国王がメイドを呼ぶ。集まってきた女性たちが数人がかりで王妃を持ち上げ、奥の扉から消えていく。

周りを囲んだ騎士団は、オロオロと辺りを見回し、どうしたらいいのか判断に困っているに違いない。

その後、国王は宰相や大臣たちとなにか話をしていたが——それが終わると、宰相がこちらへやって来て、皆に告げた。

「皆の者、静まれ！　国王陛下のご命令である。ここにおる客人たちには手出し無用じゃ！　逆らえば、極刑に処す！　これは勅令である！」

その言葉を聞いて、騎士団は元の位置に戻ったのだが、床に油が敷かれているので、滑って床に転がる騎士が続出。

革底の靴や鉄底のアーマーを装備して、石の床に油が撒かれていれば、確かに滑りそうだ。

それを、アキラが笑っている。

「ははは！　鍛錬が足りねえな！」

「アキラ、助かったよ。悪いなこんなことになって」

「なあに、お互い様ってやつよ。それにしても、何がどうなった？

王妃は何が気に入らなかったんだ？」

それは俺にも解らん。

「さあ——『ズルイ』って言ったように聞こえたが……」

「ずるい？　なんだそりゃ？　それよりも見たか？　国王陛下は股間にテント張ってたぜ？」

「え？ そうなのか？ 赤い顔しか見てなかったからなあ……」

「動けなくなった王妃相手に、やるんじゃない？」

アキラが下品な手の動きをしている。

「ええ？ まさか？」

「そういうのが好きな性癖ってのもあるしな」

「そうなのか？」

王妃の話では――彼女の前で、国王のナニは役立たないって話だったような。

それが勃ったのだから、今がチャンスと？ 本当にそうなのか？
わけが解らん。

「いやあ、うちの皇帝陛下もさることながら、こちらもかなりの難物だな」

アキラの言うことも、もっともだ。なんでこうなったか、さっぱり解らん。

アキラと話していると、そこへ宰相がやって来た。

「閣下！ 私どもは、もう帰っていいですよね？」

「あいや、しばし待たれよ。国王陛下から、直々に褒美のお話があります故、もうちと滞在をお願いいたしまする」

「ええ？」

「何卒」

宰相が頭を下げる。

「そりゃ褒美は欲しいですけどね？ もう、なにも面倒事はありませんよね？」

「それは私の名誉にかけまして――」

「それにしても、今回の茶番も最初から仕組まれていたんですか？」

「いいえ、滅相もございません！　普通に褒美の話で終わるはずだったのですが……」

「王妃様のご乱心と？」

「そうと言うしか、ございません」

宰相の様子から見ても、完全に予定外のできごとだったらしい。

「もしかして、ご乱心の原因は、俺の言った無理難題のせいだろうか？」

そこへ王女が割って入ってきた。

「なにが無理難題か！　ケンイチが褒美を求めるのは当然じゃろうが！　むしろ妾一人では足りないぐらいじゃ！」

「王女殿下、あまり国王陛下を困らせてはなりません」

宰相は、四方からの板挟みになっていて、気の毒になあ。この人には、なんの恨みもないんだが。

「知らぬ！　父上が認めぬのであれば、妾が王族籍を抜けるまで！」

「短絡的な思考は、お止めくださいませ」

王女は今回の事件で相当切れているようだ。

「はあ……なんだか解らんが、とりあえず戻るとするか……」

「そうじゃな」

「リリス様は、王族の方々との、お話し合いはよろしいのです？」

「妾はそなたのものになったのだから、リリスと呼ぶがよい！　それにもう円卓会議の連中と話すことなど、なにもない！」

王女の様子から――相当揉めたようだ。いくら揉めても、すでに祝福の御業は使われ、俺は聖騎士となってしまうている。

いまさら聖騎士を辞めろと言われても不可能だ。

「老害どもめ、妾の純潔にも疑いを持ちおって！」

「ははあ、俺がすでにリリース様に手を出したと？」

「そのとおりじゃ！ それに様はいらぬ！ リリスと呼ぶがよい！」
俺たちの周りを囲んでいる騎士たちには不満がありそうだが、勅令と言われては逆らうわけにもいかないだろう。

撤収作業に入ると――ハ〇エースから、プリムラとアンネローゼさんを出す。

車から降ろしたプリムラの機嫌が悪い。多分、王女の件だろうが、本人から突っ込みが入った。

「プリムラ――聖騎士となったケンイチが拝領すれば、正室に貴族や王族があてがわれると話していたはずじゃぞ？」

「た、たしかに、王女殿下のおっしゃるとおりですが……」

「そなたも、妾のことはリリースと呼ぶがよい！ もう妾は、そなたたちと同じ身分故」

「そう、おっしゃられましても……」

さすがに抵抗があるらしい。

「さてーケンイチ、戻ろうぜ？」

「ああ、そうするか」

「皆様お騒がせいたしましたー。ああ、床に撒いた油の片付けお願いしまーす、ははは」

アキラの言葉に騎士たちが、「ぐぬぬ」――となっているが、これも仕事だ。

お偉いさんの後片付けをするのが下っ端の務め。

「それにしてもアキラ、どうやって綺麗に油を撒いたんだ？」

「ふふ、それは簡単。ゴーレム技術の応用だ」

「ああ、なるほど」

俺たちも、土を集めて動かす山津波みたいなことをやったが、そ

れを油でやったらしい。

ゴーレムのコアにアキラの作り出した油を集めて、床を走らせたわけだ。

さすがアキラは実戦経験が豊富だな。

それに、これは応用が利く——水を撒いて電撃で感電させるとかな。

アネモネは電撃系の魔法は使えないが、スタンガンとかバッテリーを使う手もある。

シャングリ・ラで手に入る車のバッテリーを直列につなげればいい。それでも溶接出来るぐらいのパワーがあるし。

実際、そいつを使い川に電流を流して魚を取る、違法漁法もある。

俺が、ハ○エースをアイテムBOXに収納しようとする、アキラが止めた。

「そいつで、お城の廊下を走ってみようぜ？」

「ええ？ そりゃ、廊下の幅は十分にあるから走れると思うが——」

「ははは——それじゃ、やってみようぜ！」

アキラがゲラゲラと笑っているが、確かに戦闘で疲れているのに、歩いて裏庭まで戻るのは少々たるい。

スライドドアを開けると、皆をハ○エースに乗せる。

「いいのかね？」

ハ○エースコミュニターは11人乗りなので、ギリギリ乗れる。

ぎゅうぎゅう詰めだが、裏庭まで車ならすぐだ。

謁見の間の大きな両開きの扉を開けると、ディーゼルエンジンから黒煙を吐き出し、車を発進させた。

「ヒャッハー！ いけいけえ！」

アキラがウェーイ！ 状態になっている。

お城の廊下は広く高く、床は石だ。ハ〇エースでも十分なスペースがあるが、角はギリギリ。

アキラが床に油を撒いたので、それがタイヤについたのか少々滑る。

問題はあれど、流石に車で走ると速い！ あっという間に裏庭まで戻ってきた。

「イエーイ、お城の中を車で走るなんて、中々できない貴重な体験だな」

確かに、アキラの言う通りだが――。

「普通はやろうとは思わんだろう？」

「まあな。だけど、ほら！ ここは異世界やし！」

異世界は関係ないと思うが――まあいいや。

ハ〇エースから降りたベルが、パトロールを始めると、庭の奥に消える。

それを見た獣人たちが、彼女の後をついていった。

家の前にテーブルと椅子を出して、まったりする。

アキラたちも、彼のアイテムBOXからテーブルと椅子を取り出した。

宰相が、もう安全だと太鼓判を押していたので、大丈夫なのだろう。

しかし――。

「どうしてこうなった？」

思わず俺の口から、その言葉が出てしまうと、アキラが反応した。

「そうだよなあ、本人に聞いてみたらいいんじゃないね？」

「王妃にか？」

「それしかねえじゃん」

「うーん……」

一応、王女にも聞いてみるが――。

「知らぬ！ まさに乱心したとしか言いようがないの！ 昨日の話し合いでも、峠を開通させた偉業に関しては褒美を出すということ
で意見は一致していたはずじゃ」

「俺が何か悪いことでもしたかな？ うーん？」

「普段から気難しい方ではあったが、理不尽なことはせぬ、と思うておったが……王都で、そなたの噂を聞いてから少々変じやの」

「え？ そんな前からですか？ リリス様――いや、リリスでも解らないのに、俺が解るはずがない」

当然、皆も解らず首をかしげるだけ。

俺は疲れて、椅子からずり落ちた。

地面は固いので、アイテムBOXからエアマットを出して、その上に寝転ぶ。

すると、アネモネとリリスが俺の上に載ってきた。

「私がいつもケンイチと寝ているんだから！」

「妾も一緒に寝る権利がある」

「むー！」

二人が俺の腹の上で睨み合っていると、獲物を口に咥えたベルが戻ってきた。

口に咥えているのは、以前ここで食べた青い鳥だ。

「にゃー」

「おっ！ 獲物を獲ってきてくれたのか？ ありがとう」

見れば、ミヤレーとニヤメナも獲物を手にしている。いつの間に。

「鳥さんを捌いて下ごしらえをしてくれ。今日は唐揚げにしよう」
「おっ！ いいねえ。あの茶色のカリカリは酒に合うからなあ」
「うみゃーだし！」

だが、唐揚げにアキラが反応した。

「唐揚げかよ」

「食うか？」

「食いてえが——こっちの分までは用意できないだろ？」

「できあいでいいなら出すぞ」

シャングリ・ラから、大阪○将の唐揚げを買う——1. 2 k gで
3500円。

「ほい」

「○将かよ！ それじゃ、チャーハンはないのか？」

「ちよっと待ちねえ」

同じページに袋に入ったチャーハンも載っていた——10袋で3
000円。

「ほい」

「マジか！？ それじゃ、○将といえば、餃子だろ？」

「餃子か……」

検索する——売ってるな、150個で3500円だ。

「ほい、全部で帝国銀貨1枚（1万円）だな」
彼から、銀貨をもらった。

「おおおっ！ センセ！ これを魔法で温めてくれ！」
「唐揚げはアキラが作ってくれましたが、こちらも食べ物ですか？」
レイランさんが、チャーハンと餃子を覗き込んでいる。

「そうそう！」

彼は帝国で、お好み焼き屋をやっていたそうだが、唐揚げも作っていたようだ。

「唐揚げも売ってたのか？」

「おう、肉が高いからな。1個400〜500円ぐらいするんだ。でも売れたぞ。終いには貴族に呼ばれて、料理を作ったりな」

貴族の催しで、庶民の食べ物を食べてみる——そんな企画があり、アキラが貴族の屋敷に呼ばれたという。

「料理の評判はどうだったんだ？」

「絶賛だったよ。でも、そこでブリュンヒルドと出会ったんだ。なにがどう転がるか解らねえ」

まさか帝国皇帝との出会いが、そんなことだったとは。

「波乱万丈だな」

「餃子に唐揚げ、これはビールを飲むつきやねえ！」

アキラは、自分のアイテムBOXからビールを取り出して飲み始めた。

そして唐揚げと餃子をつまむ。

「かっっ！ うめえ！」

彼が目をつぶり、首を振っている。

「この珍妙なものが、食い物だと言うのか？」

「うるせえクレメンティーナ！ お前は、そこらへんの草でも食ってろっつの！」

「私は食べてみますわ。いえ、アキラ様のお食べになるものは、私も食べなくては」

そんなことを言いつつ、アンネローゼさんが、唐揚げをつまむ。

「美味しいですわ！」

そりゃ、唐揚げは道端で売っても人気になるぐらいだから、この世界の住民にも十分に受ける。

「アキラ、ゴミは一箇所に固めて置いてくれ。俺が処分するから」「オツケー」

だが、アキラたちの食事をみていたアネモネが、俺のシャツを引っ張った。

「ケンイチ、私もアレが食べたい」

「それじゃ、ちよつと早いが夕飯にするか。獲ってもらった鳥さんは、アイテムBOXに入れておくとしよう」

ショッピング・ラから、アキラに買ってやったのと同じセットを買うと、大皿に全部空けて、アネモネの魔法で温めてもらう。

「ウォーム温め！」

魔法で加熱された料理は、すぐにホカホカの湯気を立て始めた。

「ねえ旦那——俺もエールを飲みたいんだけど……」

ニヤメナが、エールをご所望なので、出してやる。

「やったあ！」「ケンイチは、トラ公に甘いにゃ！」

皆で唐揚げと餃子を食べる。米が食える人は、チャーハンを食う。

「ケンイチ、このパラパラの料理は？」

リリスが、チャーハンを見つめている。

「リリスがいつも食べていた穀物を、さらに油で炒めたものだよ」

「ほう——むぐむぐ、む！ これも美味しいの！」

彼女は、なんでも食うなあ。チャーハンを食べるとスープが欲しくなるので、アイテムBOXに保存していたものを出して、皆に配る。

今日は、できあいの料理で終わりだな——ほっとしていると、リスがえらい勢いでチャーハンを食べ始めた。

和気あいあい、俺の家族とアキラの家族で飯を食べていたのだが、皆の動きがピタリと止まった。

リスは、チャーハンを掬ったスプーンを持ったまま固まっている。

「ん？ どうしたんだ、皆？」

「おい、ケンイチ」

アキラの声に後ろを向こうとすると、いきなり誰かに抱きつかれた。

甘い匂いと、それに混じる辛子の匂い。そして伝わってくる温かい体温。

「聖騎士様——」

「おわっ！ 王妃——！」

俺に抱きついていたのは、白いドレスの王妃だったのだ。

122話 奴隷だ?!

俺たちは王都に戻ってきたのだが、国王との謁見で、またひと悶着あった。

王妃からの攻撃を受けたのだが、なぜ攻撃を受けたのか理由が不明なのだ。

王族たちと話し合いをしていた王女——リリスの話でも、理由が解らないという。

国王や宰相、そして大臣たちも、なぜこんなことになったのか解らないようだった。

大きなトラブルはあったが——騒動のあと、国王が褒美の約束をしてくれた。

宰相から「留まってくれ」と頭を下げられてしまったのだが、俺としては——褒美は、もうどうでもいいので早く帰りたい。

仕方なく、お城の裏庭に戻ってきて、皆でちょっと早い夕飯を食べる。

和気あいあいと食事を摂っていた皆の動きが、突然止る。アキラの言葉に後ろを向こうとすると誰かに抱きつかれた。

甘い香りと辛子の匂いをさせて、白いドレスで抱きついてきたのは、王妃だったのだ。

「王妃！」

「聖騎士様……」

「懲りずに再戦するつもりか？ 今度は容赦しないぞ？」

「いいえ——」

「それじゃ、なんだ？ 王族の遊びに付き合っている暇はないんだ」
「険悪な言葉を吐き捨てる俺に向かって、王妃がとんでもないことを口走った。」

「聖騎士様、妾も一緒に旅の供させてたもれ……」
王妃は俺に抱きついたまま、うつとりとした表情で、わけのわからんことを言い出した。

「はあ？　なんで、お前を連れていけなくちゃならん。お前をベッドに運んだ陛下はどうした？」

「動けない妾を手籠めにしようとした故、死なない程度に痛めつけたわえ」

「なんだって！？　お前、そんなことをしたら……」

「ぷい！」

王妃が横を向いて、目をそらした。

チラリとアキラのほうを見ると――「あゝあ」みたいな顔をしている。

動けない女をやる――みたいな性癖があると、アキラが言っていたが、本当にそれだったのだろうか？

「だいたい、夫婦なのに……」

「夫婦でも、意にそぐわないまぐわいは、慰みものになると同義であろ？」

「たしかに、それはそうだが……」

「聖騎士様は、妾を暗い部屋から助け出すために、やって来てくれたのである？」

「はあ？」

そういえば王妃は、以前にそんな話をしていたなあ。暗い部屋で小さな机に縛り付けられて、来る日も勉強させられたと。

「あの暗い部屋で来る日も来る日も、ずっと聖騎士様を待っていたのじゃ……でも、きつと来てくれると信じて待ち続けた……」

「俺が聖騎士になったのは、王女の力でつい最近のことだろ？」

「いいえ、アストランティアからの噂を聞いた時から予感があったわえ」

「もしかして、それで俺たちを呼びつけたのか？」

「――そのとおりじゃ。そして悪夢に悩まされていた妾の寝室の闇を、たやすく解いた御業をみて確信に変わった」

その割には、謁見の間で戦闘になったじゃねえか。

「なぜそれが、謁見の間で戦闘になるんだよ」

「聖騎士様の力を確かめる意味と、ナスタチウム侯爵のあの娘の鼻を折るのと、後はゴニョゴニョ……」

「そのゴニョゴニョは、なんなんだよ」

「だって……」

「だって？」

「だって聖騎士様は、妾を無視してリリースと遊んでばかりではないかえ！ 妾はずっと、あの暗い部屋で待っておったのに！ 褒美にリリースを選ぶなど、酷いのじゃ！」

「まさか、褒美でお前を選ぶとか、本気で思っていたとか？」

「……」

彼女は黙っているのだが、自分を褒美に選んでくれるだろうとマジで思っていたようだ。

このメンヘラピーが、そんなわけあるかい！

「大体、王女の方が若くて処女だし、そっちを選ぶに決まってるんだろ？」

「妾だって処女じゃ！」

王妃がそう言うのだが……。

「それじゃ、子供ができないんじゃないかって、子作りしてなかったんじゃないねえか……」

ちよつと頼りない国王陛下だったが、あまりにも不憫過ぎる……。あの得体の知れない威圧能力で睨まれたら、普通の男なんてシオシオのパー（死語）だろう。

狩りをしていたとか言っていたが、男を引っ掛けても、散々弄んでキャッチ・アンド・リリースを繰り返していたらしい。

つまり、そういう遊びだ。こんな女に引っかかった男たちも不憫だ。

「それじゃ、お前の嫉妬で俺の家族を危険に晒したというのか？それに、お前の部下も死んでいるんだぞ？」

「それは聖騎士様が悪いのじゃ」

王妃が、プイとまた横を向いた。

「ふざけんなよ——」

王妃を引き剥がすために、彼女の身体を掴むと、聖騎士の力を使う。ナチュラル回復ヒールのオーバードーズだ。

「あひっ！ ひiiiiiiiiiii！」

途端に、王妃がひっくり返って、ビクビクと痙攣し始めた。

やはり、さっきの戦闘の後遺症が残っているようだ。彼女の力からすれば、このぐらいの攻撃をかわ躲すことぐらい、造作もないはずだ。それを見たりリスが、立ち上がると割って入ってきた。

「母上、何ということを！」

ひっくり返っていた王妃だが、リリスを無視してゾンビのように起き上がると、俺の脚にしがみついた。

まだ動けるのか？

「聖騎士様！　どんなことでもいたします故、妾も連れていったもれ！」

「どんなことでもするのか？」

「はい！」

王妃の顔がパツと明るくなる。

「それじゃ、そこに立って、白いドレスの裾を捲ってみせろ」

それを聞いた王妃は、黙って立ち上がると、ドレスの裾を持ち上げ始めた。

その顔は紅潮し、目をつぶり横を向いている。

「もっとだ！」

「あの、見えてしまうのじゃ……」

「見せろって言ってるんだよ」

ギリギリのところで、スカートが止まっているのだが、しゃがみこんで下から見れば金色の茂みが見える。

俺が指を伸ばしてそれに触れると、王妃がストンと腰を落とし、ピクピクと震えている。

「よし！　お前の覚悟は解った！」

「では！　妾も一緒に！」

王妃の顔が、再びパツと明るくなる。

「ははは！　だが、断る！！」

その言葉を聞いて、王妃が俺に抱きついてきた。

「そんなあ！　聖騎士様あ！　なんでもいたしますゆええ！」

「うぜえ！　放せ、このピーが！」

すがりついてくる王妃を必死に引き剥がす。やはり、いつものパワーを感じないので、身体は本調子ではないようだ。

そりゃ熊スプレーかけられて、スタンガンくらって、聖騎士の力を思いっきり使われたのだから、普通の人間なら数日は動けないはずだ。

動けるだけでも只者ではないのは確かだが、それがなんだというのだ。こんなピーと一緒に旅をするなんて、俺と家族に何のメリットがあるというのか。

「それならば、これを見るがよい！」

王妃が何か黒い輪を取り出した。直径10cmほどで装飾が施されている。

「母上、それをいかなさるおつもりなのです！」

叫ぶ王女を王妃が制す。王女はそれが何か知っているらしい。そして俺の指を取ると、彼女の指と一緒に輪の中にいれた。

「古の習わしに従い、ここに隷従の契約を交わす。アマランサス・ラナ・カダンよ、この契約に同意するか？ はい！」

王妃の言葉とともに、黒い輪が青い光を発する。

固く指を握られていたために引き抜けず、何かの契約が済んでしまった。

そして光が王妃の首元に巻き付くと、黒い鎖の模様になった。

「母上、何ということをして！」

「なんじゃこりゃ!？」

王妃が首の黒い鎖を誇らしげに見せている。

「ケンイチ、それは隷属の契約じゃ。つまり母上は、ケンイチの奴隷となった……」

「はあ?! なんじゃそりゃ!」

そういえば、アキラが奴隷契約出来るアイテムがあると――。

「これで、妾と聖騎士様は一心同体! もう離れられぬ!」

「おい、ふざけんなよ! 契約を解除しろ!」

「いやじゃ! ぎゃああああ!」

俺の言葉を否定した王妃が転げ始めた。

「どうしたんだ?」

「契約奴隷にとって主人の命令は絶対だ。それに逆らえば、全身に激痛が走る」

「ひいひい……」

王妃が地面に転がり、息も絶え絶えになっている。

「わけが解らん。どうすんの、これ?」

「命令を取り消せばよい」

「命令取り消し!」

王妃が、身体を起こすと肩で息をしている。

「こ、これで、妾も聖騎士様と一緒に……」

「なるほど! お前の思いは確かに受け取った」

「それでは!」

王妃の顔が明るくなる。

「だが、断る!」

「そ、そんな! 後生じゃあ! 妾と一緒に! 聖騎士様あ!」

「うぜええ! 離れろ!」

「いやじゃ！　ぎゃあああ！」

また、王妃が地面を転げ回る。

「命令解除！」

「「……」」

皆、言葉もない。当然だろう。まったく意味不明なのだ。

「んじゃあ！　解った！　俺の命令を伝える！」

「は、はい！　それでは……」

王妃が起き上がった。本当にタフだな。

「お前はここに残って、国王陛下との間に、子をなせ！」

「いやじゃ！　ぎゃあああああ！」

俺の命令に逆らった王妃が、ふたたびゴロゴロと転がる。

転げ回る王妃に向かって、命令を解除する。

「はい、命令解除！」

俺は、しゃがんで王妃の身体を掴むと、聖騎士の力をフルパワーで使う。

「んひいいいっ！」

その場でブリッジした王妃は、白いドレスを濡して滴らせ、そのまま動かなくなった。

また暴れだして、けが人が出たりするとマズいな……何かいい方法は――。

「そうだ！」

俺は――帝国の街でアダマンタイトの手かせを買ったのを思い出した。

アイテムBOXから黒い手かせを取り出して、王妃の手首にはめ

る。

そして立ち上がると、辺りを見回して叫んだ。

「おい、マイレンさん！　いるんでしょ？」

俺の言葉を聞いて、柱の陰からマイレンさんが現れると、スタスタとこちらへ向かってくる。

いったい、いつからいたのか不明だが、こんな具合にいつ呼ばれてもいいように、影に徹しているのだろう。

「お呼びでしょうか？」

「王妃様、ご乱心だ。一部始終見てたよね？」

「……はい」

「このまま寝室まで運んで、国王陛下にも報告して。この首の痣についても。それから、この手かせはアダマタイトだから、王妃でも壊せないはず」

「承知いたしました」

彼女が合図すると、他のメイドたちもわらわらと集まってきた。

「妾も行ってくるぞえ。父上に説明せねば、信じてもらえぬかもしれぬ」

「リリス、よろしく頼むよ」

「任せよ。それにしても——この分だと、また王族会議じゃぞ？」

メイドたちに運ばれていく王妃について、呆れ顔のリリスも一緒にお城へ向かった。

王妃が半殺しにしたという国王陛下の容態も気になるところだ——確認をしてもらう。

他の王族の連中も、この王妃の奇行には頭を抱えるだろう。

「はあ——なんじゃこりゃ」

俺はその場で座り込んだ。

「よ！ これで、寝取り仲間だな」

「まだ、寝取ってねえし！ あれが、アキラが言ってた奴隷契約するアイテムか？」

「少々形は違うが、この国にもあるんだな」

「でも、王妃様のお気持ちも解るような気がします。家や国の事情で意にそぐわない相手とまぐわわなければならぬのですから」

そうつぶやいたのは、アンネローゼさんだ。

彼女も家の借金の形として、商人に嫁がされて、子供まで生んだ。

「それにしたって限度ってもんがあるだろ。あいつの悪ふざけで人も死んでいるわけだし」

「それは、そうですが――思いつめた女性というのは、なにをするかわかりません」

「まあ、アンネローゼも、国を捨ててしまったしなあ。あの王妃が国を捨ててもおかしくはないぞ？」

そう言われれば、アキラの言葉にも一理ある。

「マジかよ……」

「帝国皇帝も中々大変でしたけど、この国も大変そうですね」

「センセ、やんごとなき方ってのは暇なんだよ。生きるか死ぬかっていって貧乏人は、こんなことやってられない」

レイランさんと話すアキラの言うとおりで。

俺は疲れて、アイテムBOXからエアマットを出すと、その上に寝転がる。

近くにベルがやって来ると、俺の腹の上に彼女が載ってきた。

「にゃー」

「どうしよう、お母さん」

ベルの身体をなでながら悩む。

「でもよく、旦那のことだから、そのまま連れていくかと思ったぜ」

「ニヤメナ、いくら俺でも人は選ぶ」

「でもにゃー、なんだかんだと、流されて結局連れていくような気がするにゃー」

ミヤレーはそう言うのだが、国王や王族がそれを認めるか？

だいたい、リリースがお城を出ることだって認めないと思うが――。

「むー！」

アネモネが不機嫌だが、どうしようもない。まったく想定外だし。プリムラは諦めている様子。

本当に困ったもんだが、しょーもないことで悩んでも仕方ない。

アイテムBOXから小屋を出して、皆で風呂に入ることにする。

風呂の準備をしているとメイドさんがやって来た。

お城の浴場が使えると言う。

「それじゃ、女性陣はお城の風呂に入ればいい。俺の所から石鹸やらシャンプー、タオルも持っていてもいいぞ」

「それでは、そうさせていただきます」

立ち上がったレイランさんは、お風呂と聞いて嬉しそうだ。

「プリムラ、ついて行ってやってくれ」

「解りました」

プリムラが、お風呂道具をまとめて、準備を始めた。

「レイランさんの髪の毛は、ずいぶんと綺麗になったな」

「やっぱり、シャンプーとリンスのおかげだなあ。この世界じゃ手に入らないからな」

「石鹸はあるみたいだから、作れそうな気がするが……」

シャングリ・ラを検索すると、手作りスキンケア・コスメの本が売っている。

「リンスは作れなかったが、センスの髪に卵パックはやったぜ」

「ああ、なるほど。そういう手もあるか……でも、ここは卵も高級品だからな」

「まあな」

メイドさんに話を聞くと、泊まる部屋も用意してくれるようだ。完全に、お客さんモードになったな。女性陣はお城の部屋の方がいいだろう。

「アネモネも入ってくればいい」

「私は、ケンイチと一緒にいるから要らない」

「風呂も一緒ってのは、マズいんじゃないの？」

アキラの言うとおりで。

「俺もそう思うんだが、彼女が言うことを聞いてくれないんだよ。」

アネモネ、もう大人なんだから、一人で入りなさい」

「や！」

プリムラは、お城のお風呂へ向かう。プリムラとアンネローゼさんが嬉しそうに話している。

彼女と話が合いそうな女性がいなかったからな。

女性陣はお城に向かったが、獣人たちは中には入れないので、ここで風呂に入ることになった。

謁見の間に、ミャレーとニャメナを入れるのだって、やっと認めさせたんだからな。

風呂なんて入れてもらえるはずがない。

まあ、ひと騒動あって疲れたので、のんびりしたいところだ。

俺たちとは裏腹に王族の連中は、王妃の奇行で一晩中もめることだろう。

ストレスが溜まったので、お風呂とジェットヒーターでふかふかになった獣人達と、一緒に寝ることにした。

この世界で最高の癒やしだ。どんな高級毛布も、これには敵わない。

————◆◆————

——次の日。朝起きて、飯を食う。

お城の風呂に入った、プリムラやレイランさんたちは戻ってきていない。

朝やってきたメイドさんの話によると、朝食もお城の食堂で摂るようだ。

リリスは帰ってこないの、王族の話し合いがどうなったかは解らない。

あまり結果は聞きたくないし、早く帰りたいのだが、峠を開通させたことについては、褒美をもらわないと割に合わないからな。

もらえるもんは、もらわんと——それで、なんでここまで話がこじれるんだ。

プリムラがいないので、皆で簡単にグラノーラを食べる。

パンはアネモネが焼いてくれた。

「おほく焼きたてのパンは、うめえ！」

アキラが喜んでいる横で、アネモネが俺の顔を覗き込んでいる。

「ケンイチ、怖い顔をしている」

「ごめんよ、アネモネ」

「誰にでも優しいケンイチが怒るなんて、よっぼどだにゃ」

「そりゃ、旦那だって怒るだろ。訳が解らねえもん」

ニヤメナの言うとおりだ。本当にわけが解らん。

「まあ、お城の風呂を使わせてくれたり、朝食も出してくれるんだから、危機は去ったんじゃないの？」

アキラがパンを頬張りながら答える。

「危機になること自体が、わけが解らんのだけだな」

「それは王妃が自分で言ってたじゃん。ただ嫉妬だって」

ただの嫉妬で、死人が出るのは勘弁してほしいのだが……。

そこへ、リリスが戻ってきた。

「ケンイチ、朝食じゃ」

「はいよ」

「——とはいったものの、リリスにグラノーラだけじゃ……」

「ケンイチ、妾は鳥を揚げたものが食いたい」

「朝から、唐揚げか——昨日食べたやつでいいのか？」

「無論じゃ」

またシャングリ・ラから、○将の唐揚げの袋詰を買う。

そして大皿に盛って、アネモネに温めてもらう。すぐに茶色の唐揚げがチリチリと白い湯気をたて始めた。

「うむ、美味い」

「ウチも食べるにゃ」

「俺も摘んでもいいか？」

「私も食べる」

眼の前にあると、摘みたくなるようだ。アキラとアネモネも大皿から唐揚げを摘んでいる。

「ケンイチ、タルタルソースはないのか？」

「タルタルか……ちよつとまってくれ」

アキラの言葉に、シャングリ・ラを検索するとマヨネーズと同じ会社のものが売っている。

「ポチっとな」

チューブに入っているタルタルソースが落ちてくる。そういえば――これって原料は、ほぼマヨネーズと同じだと思うのだが……。

「アキラ、マヨネーズが作れるなら、タルタルソースも作れるんじゃないのか？」

「ええ？　タルタルソースなんて、どうやって作るのか知らないぞ？」

そう言われれば、タルタルソースは作ったことがないな。

「ふおっ！　このソースは美味い！」

「美味しい！」

リリースとアネモネが喜んでいるが、朝からこんなものを食べていたら、絶対に身体に悪い。

いやいや、タルタルソースはどうでもいい。お城はどうなったのだろうか？

「それで、リリース。お城は、どうなった？」

「円卓会議の連中は頭を抱えておったぞ。王族が奴隷になるなど聞いたことがない！」

前代未聞ということだが、初代国王が奴隷上がりだったのだから、原点に戻ったともいえる。

「まあ、落ちぶれたり、滅ぼされた国の王族が堕ちることはありま
すがねえ」

アキラの話にリリスが渋い顔をしているのだが、王妃は落ちぶれ
たわけではなく、現役の王族なのだ。

「奴隷契約の解除をしなければ、王族籍を廃籍させることに決まっ
た」

「肝心の王妃はどうなんです？」

「拒否している」

話を聞いたアキラが唐揚げを摘み、タルタルソースをつけながら
つぶやく。

「そいつは面倒だなあ、下手したら自害されたりして……」

「アキラ、そんな玉じゃないんだよ。今は俺にやられて弱っている
だろうけど、身体が本調子になったら、騎士団なんて木っ端みたい
なもんになるぞ？」

「それは、かなり面倒なことになるなあ——お城が血の海になるか
？」

「それは避けなくてはならん！」

気になる国王陛下の容態も聞く。

「命には別状ないが、相当落ち込んでおったようだ。王都中の大魔
導師を呼んで治療に当たらせておる」

大魔導師っていうと、メリッサも来てるのかな？

「落ち込んでいるのは、王妃に拒否されたからってことでよろしい
ので？ 王女殿下？」

アキラの言葉にリリスが唐揚げを頬張りながら答えた。

「そなたの言うとおりでじゃな。父上が子供の頃から憧れの女性だったらしいからの」

「でも、王妃の目の前に立つと、なんにもできなかったらしいんだ」

「ああ、それで！　王妃が動けなくなった今回が、最後のチャンスだったと……」

アキラが手を叩いた。ちよつと歪んだ愛情なのは間違いない。

最後のチャンスも失敗し、他の男と奴隷契約を結んでしまった。

この顛末に国王の気持ちも王妃から離れてしまったのかもしれない。

いや、離れてどうする？　もう嫌な予感しかしねえ。

リリスの話では、今日中に国王と会うのは無理のようだ。

しょうがねえ、1日ゆっくりしよう。レイランさんたちは、俺たちが出発するまでお城の来賓室に泊まれることになった。

まあ裏庭で野宿するよりは、いいだろう。

そう思ったのだが、リリスの下にやって来たメイドの話を聞くと――。

どこから噂を聞きつけたのか、夜烏のレイランにひと目会いたいと貴族たちが押しかけてきているという。

帝国の大魔導師で美人、しかも爆乳。もう会うっきゃない！――ということなのか。

ミーハー（死語）な連中は異世界でも、変わらないらしい。

そしてプリムラは、王族たちにシャンプーやリンスを売り込んでいるというのだが――本当に、どんなものでも売っちゃうんだからなあ……。

そして午後になり、プリムラがシャンプーとリンスの追加が欲しいと俺のところに来て来た。

「あの、ケンイチ。王族の方々が真珠もご希望なのですが……」

「ああ、相手が王族ならいいぞ」

商品を片手に王族に取り入って、マロウ商会の王都進出のコネを作るらしい。

今までは、王妃と王女のコネを使おうとしていたのだが、その二人がヤバくなったので、他の王族に乗り換えるつもりなのかも知れない。

我が妻ながら、さすがしたたかだ。

いつものとおりに夕食を食べ終わって、皆で暇つぶしにゲームをやる。

そして後は寝るだけ——だが問題が持ち上がった。

女性陣がお城に泊まっているので、王女とメイドさんに俺の家を開放した。

俺と獣人たち、そしてアネモネはテントの中。

だが、リリスが俺の所へやって来て一緒に寝るというのだ。

俺の目の前に——寝巻きに着替えた彼女が、腰に手を当てて立っている。

俺がシャングリ・ラで買った、うすピンク色のリボンがついたワンプीースの寝巻きが、とても似合っている。

いや、そうじゃない——王族と同衾？ うーん、どうしよう……。

123話 ハマダ辺境伯

お城でまたトラブルだ。王妃が俺と奴隷契約を結ぶという訳が解らん状態。

なにがどうしてこうなったのか、まったく不明。

お城の王族たちも王妃の奇行に頭を抱えているという。

皆で食事を摂ったあと、リリスが俺の所へ泊まるというので、家にベッドと新しいシーツを用意。

用意万端、俺が寝ようとしていると――テントにリリスがやって来た。後ろにお付きのメイド長、マイレンさんを従えている。

王族が男と同衾どうきんなどしたら、そこで終了。貰い手などなくなる。

「構わぬである？ 妾は、もうそなた――いやケンイチのものになった。なにを困ることがある」

「一応、褒美として要求しただけで、国王陛下の許可は、まだもらっていないんだけど……」

「許可ならとったぞえ？ 妾の好きにしていいと、父上の許可をいただいた」

「こんなことになって、陛下が怒り狂って俺に刺客を送ってきたりは、しないだろうな」

「そなたを含めて、大魔導師級が4人。それに、あのぶんでは、母上もそなたの味方につくのは間違いないじゃ。下手すれば城が消えるの？ 王国が滅びるかもしれん」

「まさか……ありえるな」

王国の危機の話をしながら、リリスが俺に抱きついてきた。

「ちょっと、マイレンさんのには？」

一応、リリスお付きのメイド長、マイレンにも確認を取ってみる。

「私は、姫様についていだけですので」

「そうじゃ！　マイレンも一緒にいたすというのはどうじゃ？　ケ

ンイチは、マイレンのような女子おなこが好みである？」

「そりゃ、大好物ですけど……いやいや、それはマズいでしょう。

ねえ、マイレンさん？」

「私は、姫様のご命令とあらば」

「激しく責めたててやれば、尻を振って喜ぶぞえ？」

待て待て、初夜でそれはいいのかよ？　やっぱり王族ってのはちよつと変だ。

国王陛下のことが心配だ——心が折れてやけくそになってるんじゃないだろうな？

最愛の女性と娘を同時に失う気分は、幾許いくばくか？　しかも両方を俺に取られて。

「リリス、俺が寝るのは、この袋なんだけど……こんな所で君も寝るのかい？」

「土の上だろうと、泥の中であろうと、ケンイチと寝るのに場所は関係ない！　もはや城を捨てれば、豪華絢爛の生活には無縁になるじゃろ？」

まあ、そのとおりなのだが——そういう生活をマジでさせたら、リリスも王妃もすぐにお城へ逃げ帰るのではないだろうか？

夢や理想と現実は違う。まあ俺のチートを使った生活は、この世界の平民の生活と、かけ離れているのも事実だが。

そんな話をしていたのだが、ここにはもう一人女の子がいる。リ

リスが抱きついている俺に、アネモネも抱きついてきた。

「私が、いつもケンイチと寝てるんだから！」

この寝袋は二人用だが、3人も入るのか？ まあ、二人ともまだ小さいから、入れると思うが……。

「しかし、一緒に入れば、そこで終了……」

「もはや、覚悟はできておる！　じゃが、その……優しくしてほしいのじゃが……」

「しない、しないから」

「なぜじゃ？　いくらでもやっても、いいのじゃぞ？　そなたも、妾を孕ますつもりだと申しておったではないかえ」

「いや、言っていないから」

「むー！」

仕方なく3人で寝袋に入ることになった。マイレンはテントの外で、俺の出してやった寝袋に入っている。

「それじゃ旦那、俺たちは家で寝るからよ」「頑張るにゃー」

頑張るってナニを頑張るんだよ。まだ色々と決定じゃないんだから、やらないぞ？

獣人たちは、家で寝ることになったが——これなら最初から俺が家で寝ればよかったか。

「ふんふん！　クンカクンカ！　これが男の匂いかえ！」

リスが、俺の胸に鼻をつけている。

「王女が、はしたないでしょ？」

「もはや王女ではないのでな！」

いや、まだ王女でしょ？

「妾も、これで女になるのじゃな？ 天にまします先人様。今宵リリス・ララ・カダンは女になりますえ」

「こんなオッサンのどこが良いのやら……」

「国を救い、ワイバーンを討伐できる人間がケンイチの他にいると思うかえ？ 歳など些細なことじゃ！」

「それじゃ、私もお！」

そう言って、アネモネが俺のシャツの中に潜り込んでくる。

「それでは、妾もじゃ！」

「これ！ シャツが伸びるから止めなさいっての」
寝袋の中ではしゃぐ二人とも、全然子供だ。

「にゃー」

騒いでいる俺たちの上に、ベルが載ってくると、俺の顔を舐める。
彼女の舌はザラザラでヤスリのようなだ。

「ちょっとお母さん、舐められると痛いんだけど」

「おもーい！」

「重いぞえ！ なにが乗っておるのじゃ！」

そして夜が更けた。

なにもしていないぞ——念のため。

なにもしていないが、寝ながら考えた。

王妃のやり方は色々とまずかったし、俺の家族を危険に晒したのは許せん。

俺の感情的には納得できないが、彼女が王家を支えていたのは事実。それにあの性格だ、味方もなく孤立していたに違いない。

それに国王も国王だ。年少の頃からの王妃への想いがあるなら、なにか彼女を救える方法があったろう。

そういった要因が積み重って奇行に繋がっていると考えると、不憫に思える。

ちよつと歪んだ人間ではあるが悪人ではないはずだ……。

それを考えると——条件次第では、王妃を迎えてもいいと思っ
ている。

「ケンイチ……」

暗闇の中、王女の声が聞こえる。

「リリス、まだ起きていたのか？」

「母を助けてやってたもれ」

「今、考えているが、悪いようにはしない——と思う」

「さすが、我が夫じゃ！」

リリスが俺の胸に顔を埋めてきた。

「だがリリス——王妃が、あんなに聖騎士にこだわっていたのを知
っていたか？」

「知らぬ。まったく聞いたことがなかったわえ」

「それじゃ、独りでずっと心に秘めてたのかなあ」

「かも知れぬ……」

「ほんで、やっと来てくれたと思ったら——リリスとばかり仲良く
していたので、嫌がらせをしたり切れたりしたのか……」

「妾が知らぬことはいえ、すまぬことをした」

「リリスが謝る必要はないけどなあ……」

まあ、国王と王族の親戚連中の出方次第だな。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

——謁見の間での乱闘から2日目。国王の容態がよくなったとい

うので、会うことになった。

今度は謁見の間ではなくて、王族の会議で使っている私室らしい。会うのは俺とリリスだけ。もう危険はないと思うが、アキラたちの所へ行って、俺の家族の守護を頼んだ。

リリスと一緒に城の奥深くへ向かう。普通の人間では絶対に入れない場所。

隠し扉から階段を登り、2階へ向かう。赤い絨毯を敷かれた暗い廊下を数十m進んだ扉の前にリリスは止まった。

黒い木の扉で、立派な装飾が施されている。扉に刻まれているのは鳥か？

そういえば、呼び出しでもらった国王からの手紙にもこの鳥が書いてあったような……。

「ここか？」

「うむ」

中に入ると明るい陽の光が斜めに入り、中央にある丸いテーブルを照らしている。

壁には暗い色の板が貼られて落ち着いた雰囲気。そして天井には金色のシャンデリア。

嫌味な豪華絢爛ではなく、この部屋に合わせたものが備えつけられている。

丸いテーブルに座る、王族らしき面々。一番奥に、国王陛下が座っている。

顔が腫れているようだが——まあ大丈夫そうだ。

リリスは、円卓会議を老害だと言っていたが、若い人や女性もいるようだ。

皆、白を基調とし、金糸で彩られたワンピースや法衣のような服を着ており——成金趣味のゴテゴテではないが、上品な佇まい。

「皆様には、お初にお目にかかります。魔導師——いや今は聖騎士のケンイチでございます。以後、お見知りおきを」

「よく言いよるわ。そなたのせいで、城は滅茶苦茶なのだぞ？」

テーブルに座っていた若い女性が声を上げた。金色のウェーブヘアが美しい、青い鋭い目——こころなしか、王妃に似ている。

もちろん勿論、親戚なのだから似ていても不思議ではない。

「これは異なことをおっしゃる。私は国の大事に国を救い、王女殿下をワイバーンから救いだけただけ。まあ、ついでに帝国の大魔導師を亡命させましたが」

「ぐぬう……」

「ケンイチの言うとおりじゃ！ そのことは、何度も説明したはずですよ！ このような偉業を他の誰がなし得ると言うのです！」

リリースが、円卓会議の連中に食って掛かる。

「そ、それは……」

「そんなに私が嫌いならば、私から真珠を買うこともないのに——と思いますけどね」

「なんじゃと！ 誰が抜け駆けを！」

頭の禿げた白髪の爺さんが手を上げた。

「わしじゃ——奥に泣きつかれてのう……」

「妾として我慢しておるのに、この爺！」

王族同士で喧々囂々が始まるのだが、どうでもいい。

「それで、結論はどうなったのでしょうか？ 私は褒美だけいただきたい、在所に帰りたいのですが……」

「それは……」

王族たちが一斉に国王を見る。

「王妃――アマランサスをもたらってはくれまいか？」

「手に余した、問題児を私に押し付けようという腹ですね」

「そ、そのとおりじゃが、本人がそれでないと納得せんのじゃ！」

「アルストロメリアの言うとおり、王族が奴隷契約を結ぶなど前代未聞。こんなことが公になりでもしたら……」

ウェーブヘアの若い王族はアルストロメリアというらしい。

王族会議の連中が、それぞれに言い訳を述べるのだが、そんなことは俺には関係ない。

「私には、なんの関係ありませんが？ 私が要求したのは、王女殿下だけです」

その言葉に、一番奥の席で国王が頭を下げた。

「このとおりだ。もはや、我々ではアマランサスを制御できぬし、あれのことは諦めた。娘もそなたにくれてやる故、アマランサスももらってほしい」

「ケンイチ……」

心配そうな顔で、リリスが俺を見つめている。

血は繋がっていないが、母と呼んでいた女性が持て余されて、八分にされるのは忍びないのだろう。

少なくとも、彼女にとって王妃は良き母であったようなのだ。

それに強権的かつ独善的な手段も、国を思えばこそ。私利私欲のために動いているようではなかった。

そのため味方も少なく、孤軍奮闘していた様子が目に浮かぶ。難渋していたが故、それが限界に達して、あのような奇行になったか？

実際、命も狙われていたようだしな。俺が彼女を引き取り、お城から厳しい視線がいなくなれば、そういう連中も万々歳だろう。多分、反対する貴族も少ないと思われる。

王女を嫁がせる条件も出された。彼女の王族籍を抜くことだ。彼女が王族のままだと、俺に王位継承権が発生してしまうらしい。それは避けたいようだ。俺からすれば王位継承権なんて、どう考えてもイラネーから、どうでもいいのだが。

「それで、私に見返りは？」

「それじゃ！ そなたは一体なにを望む？ 金か？ 土地か？」

「そうですねえ、王族を引き取るの見合う金と、それから——私が住んでいたアストランティア近くの湖の土地、それからその上にあった高地のすべての権利——ですかね」

「地図を——」

国王の指示で、国土の地図が用意された。地図が国家機密とはいえ、ある所にはあるものだ。

国家機密の地図とはいえ、日本にあるような精密な地図ではなく、かなりアバウト。

「アストランティア近くの湖というのは、これじゃな？ アスチルベ湖」

「そして、その近くの高地というのはこれか——アゲラタム高地」
王族たちがテーブルの上に広げられた地図を覗き込む。

お城にある地図なのに、湖も高地も凄くテキトーだ。誰も行ったことがないので、想像で描かれているのだろう。

それに、この地図が何年前に作られたのかも不明だ。

「こんな場所だよいのか？」

王族の方々が疑問に思うのも当然だろう、なにもない所なのだから。

「ほとんど人も住んでおりませんし、私が好き勝手やっても、なん

の問題もないでしょう」

「アスチルベ湖畔は、ユーパトリウム子爵領ではあるが、割譲に何の問題もない」

「それに高地や、湖の反対側は前人未到でありましょう？ 私が測量もいたしますよ」

「ううむ……」

誰も行ったこともなく、誰も住んでいないのだが、面積はかなり広い。

俺が拝領して男爵などになっても、この広さを治めるのには家賃が高いという話になった。

「そこは特例で認めていただければよろしいのですよ、たとえば辺境伯にしていたらどうか」

「なんじやと、辺境伯だと！」

王族たちが驚くのも無理もない。辺境伯などと名称だけ聞くと、地方の役人みたいな印象だが、実際はかなり違う。

この王国だと侯爵に匹敵するだけの強力な権限を持っているのだ。領地のほとんどが前人未到の土地であり、エルフや王国に与していない他種族と接触する可能性も高い。

そんな領地を治めるのに、一々王都までお伺いを立てていられない。

臨機応変な対応を迫られるために、強力な権限を与えられている——とはいえ、人材も軍隊も領民もないのだから、現時点では、なにもできないのだが……。

「しかし、平民からいきなり辺境伯などと、前例がない！」

「その、ない前例を一気に飛び越えるから見返りになるのですよ。あの女性を抱えるということは、そのぐらいの危険があるとお考えください」

「ぐぬぬ……」

王族連中は、腕を組んで固まっている。

どうも、この円卓会議を仕切っているのは、ウェーブヘアの若い王族の女性のようなだ。

「それに、王妃を俺に押し付け——その隙にお城に側室を大量に入れて、子供を作ろうというのでしょうか？」

「うっ！　そ、そのとおりじゃ……そうせねば、王家の血が途絶えてしまう故……」

「そもそも、王家の血の限界なのではありませんか？　初代国王が祝福を受けて、奴隷から国の頂点に立ったというのがこの国の起源だというのであれば——平民出の私が辺境伯になることぐらい、なんでもないように思えますけど」

「ちょ、ちよつと待つが良い！　そなた、その話を誰から——」

「誰でもよいでしょう？　それで、いかがなさいます？　王妃が本気で暴れ出せば、止めるのが難しくなりますよ」

リリースを見ると、ちよつと気まずい様子だ。

「うう……」

「ああ、それと——お城の書庫にある全て資料の複製許可をいただきますでしょうか」

「なんじゃと！」

「色々知られるとマズい資料もあるようですけど、聖騎士となつて王族を引き取るなら、私が知っていても問題ありませんよね？」

「ぐぬぬ……どうやって複製などを作る？」

「私の持つてゐる魔道具を使います。勿論、本を傷つけたりはいたしませんので、心配ご無用」

「むう……」

そろそろ折れそう——もうひと押しという感じに見える。

「それに、私と仲良くされたほうが、いろんな素晴らしいものが入りますよ。すでに整髪料などを、ご購入なされたではありませんか」

「うむ！ あれはすばらしいものじゃ！ みよ、この髪を！ 今までの石鹸などとはくらべものにならぬ！」

女性が自分の金髪をかきあげて、美しさを自慢すると、隣の爺さんが怒り出した。

「この女狐め！ ワシに散々悪態をつきおって！」

「真珠に比べれば、些細なものじゃろうが！」

いやいや、そんなことはどうでもいいんだよ。

「それで、いかがなさいます？」

俺の言葉を聞いた、円卓会議の面々の動きが止まる。

「しばし待て」

ガタガタと椅子を動かして、部屋の隅で小円卓会議を始めた。

いくら話し合っても、もう受け入れるか拒絶して王妃が暴れて大騒ぎになるか、二者択一。

とりあえず俺の意見は述べた、ボールは向こうにある。

国王がぐったりとしているのを尻目に、王族の話し合いが続いている。

本当に、お飾りなんだなあ……。たぶん王妃は、これに対抗していたのだろう。

「話は決まった、そなたの要求を受け入れる」

王族を代表して、金髪の女性が歩みでた。

「賢明な判断ですな。ありがとうございます」

礼をする俺に、王族の連中は渋い顔だ。

俺がもらう報酬は金貨2万5000枚となった。日本円で50億円である。

この国の国家予算が1000億円ほどらしいので、国家予算の1／20を分捕った恰好になる。

高いといふなかれ、不通になった峠の復旧工事に掛かる費用、そしてその工事期間中に止まった流通で出る経済損失などを考えれば50億円の支払いは安い。

下手をすれば国が傾いたのだ。

「それで、ケンイチ殿——辺境伯となるわけだが、家名なんと名乗る？」

「ハマダでお願いいたします」

「ケンイチ・ハマダ辺境伯じゃな。あい解った。じゃが、実務方とすり合わせを行わなくてはならぬ。あと1週間ほど、ここに滞在するがよい」

「承知いたしました。それでは、その待ち時間に、書庫の閲覧と複製作業をさせていただきます」

「許可しよう」

チラリと女性が他の王族を見たが、皆が頷いている。問題はないようだ。

これで、あの書庫にある本を全部ものにできるってわけだ。

話が終わったはずなのだが、俺の眼の前から女性がどかない。

正面に立たれると、白いドレスの大きく開いた胸が気になる。

王妃に似ているが体は柔らかさがあるので、武術をするようには見えない。女性らしい体つきだ。

もやもや考えていると、女性が俺の首に手を回してきた。

「聖騎士の力とやらを、ちょっと妾にも試してみぬか？」

「よろしいので？」

「アルストロメリア様！」

リリスが叫ぶが――。

この女性は、リリス――王女の従兄弟違い、王妃の従兄弟にあたる方らしい。

それなら王妃に似ていても不思議ではないな。

俺が、彼女の両脇を掴んで力を使うと、女性はその場にストンと座り込んだ。

「ま、待て、待つがよい！　こんなのは――ああつ、待っ！　ひい
いいい！」

女性は仰け反り、ビクビクと痙攣をし始めた。この人はちょっと反応が遅れてくるタイプらしい。

床で転がる女性を横目に俺は一礼した。これ以上ここにいる理由はない。

「それでは、私は失礼いたします」

部屋から出て、長い廊下をリリスと一緒に歩くと、彼女が頭を下げる。

「どうなることかと思うたが、母を受け入れてくれて感謝する」

「もう、ここまできたら仕方ありません。私の家族の意見を聞かず、少々悪いことをいたしましたが……」

「うむ……」

隠し扉を通ると、リリスが俺に質問してきた。

「ケンイチ、家名がハマダだと言っておったが、ハマダとはどんな意味なのじゃ？」

「海岸にある畑って意味ですかねえ」

本当は田んぼなのだが、この世界に田はないので、畑と説明した。

「それでは、そなたの祖先は海岸沿いに住んでおって、その家名を持っていたのかえ？」

「詳しくは説明できませんが、まあそういうことになりますかね…」

そう言うてはみたものの——自分の名字がどうやってついたかは、不明だ。

別に由緒ある家系でもないし、多分適当だと思う。

死んだ爺さんの話では、爺さんの爺さんの時代に北海道へやって来て、その時についた名字らしいからな。

ハマダって名字だが、入植したのは海岸近くではなく山の中——ひよっとすると爺さんの爺さんの出身地にちなんだ名字だったのかもしれない。

リリスと一緒に、王妃の寝室へ向かう。俺に手かせをはめられた彼女が幽閉されているはずだ。

黒い大きな扉を開けると、天蓋がついた豪華なベッドに王妃が横になりふさぎ込んでいた。

黒いアダマンタイトの手かせと、白いドレスを着たままだ。

「アマランサス」

俺の呼びかけに、王妃が起き上がった。

「聖騎士様！」

彼女が起き上がると、俺に駆け寄り身体を擦り寄せ、そして泣き始めた。

「酷いことしてごめんよ」

彼女の黒い手かせを取って、アイテムBOXに収納する。

「うっうっ」

嗚咽を漏らす彼女の頭をなでながら、優しく諭す。

「一緒に連れて行ってあげるから、泣くんじゃない」

「本当かえ？」

顔を上げた彼女の目は腫れて真っ赤だ。ずっと泣いていたのだろ
う。

「ああ——今まで、一人でよく頑張ったな。でも、もう全部捨て
てもいいんだ、俺と一緒に行こう」

「聖騎士様 あああ！」

アマランサスがまた泣き始めた。こりゃ困ったな。ベッドの縁に
二人で座り、彼女をなだめる。

「うーん、ほら！ チョコだ、食べないか？」

俺は、シャングリ・ラから板チョコを買って、彼女の前に差し出
した。

「チョコ！」

アマランサスが顔を上げると、俺からもらったチョコを食べ始め
た。

「ケンイチ、妾にはないのかえ?!」

「はいはい、ほら」

二人にチョコを渡すと美味しそうに頬張っている。

その仕草はちょっと似ていて微笑ましい。本当の親子ではないが、
親族には間違いないのだ。

王妃と国王が本家と分家らしいので、二人は再従兄弟はとこあたりなの

だろう。

ならば、確実に親戚だ。

「リリス、アキラの話によると、エルフが『チェチェ』というチョコの原料らしきものを持っているらしい」

「なんじゃと！ それは真かえ？」

「ああ、森にその植物が生えているってことだから。そいつを栽培すれば、チョコを量産できるってことになる」

「それは、新しい領の産業になるではないかえ！」

「新しい領だと？」

アマランサスが、チョコを食べるのを止めて俺をじっと見ている。

「母上、ケンイチが——ケンイチ・ハマダ辺境伯となって、アスチルベ湖畔を治めるのじゃ」

「辺境伯とは——よくぞ、あの円卓会議の面々が認めたのう」

「そ、それは——ケンイチの手腕じゃぞ、母上」

まさか、アマランサスを引き取るのと引き換えに、強引に認めさせたとは言えない。

まあ、そのうちバレるだろうけど。

「新しい領の経営には、アマランサスの力が必要だ。手伝ってもらうぞ？」

「勿論じゃ！」

「母上、妾も一緒じゃ。新しい世界へ二人で向かおうではないか」
アマランサスが黙ってうなづく。俺が迎えに来たことと、甘味で栄養補給して元氣も出たようだ。

「でも——二人とも、もう今までのような贅沢な暮らしはできなくなるんだぞ？ それは理解してくれよな」

「ケンイチと二人でソバナに行つて、妾はなにも困らなかったぞえ

？」

つまり、あの生活——俺のシャングリ・ラとアイテムBOXがある生活なら、リリースは大丈夫ってことだ。

「二人だけズルイわえ！」

アマランサスが拗ねている。俺とリリースが、旅をしたのが羨ましかったのだろう。

「二人とも、お客様ではないわけだし、仕事と役割は果たしてもらうぞ？」

「望むところじゃ。働かざる者食うべからずじゃの」

リリースが薄い胸を張る。

「俺はあと1週間ほど、滞在することになったから、それまでに荷物をまとめておいてくれ。でも、あまり多くは持っていけないぞ？」

「そのとおりじゃの。じゃが最低でも金貨と貴重品だけあれば、路銀には困らぬであろ」

泣いてはいられなくなったアマランサスは、立ち上がるとすぐに準備を始めた。

「誰かある！」

彼女の呼びかけでメイドたちが集まってきた。リリースも準備をはじめようだ。

しばらく二人の様子を見ていたが、大丈夫そうだ。ここで俺が手伝えることはないだろう。

俺は皆の所へ戻ることにした。

124話 アマランサスの涙

俺と同じように日本からやって来たアキラという男と、その家族たち。

彼らと一緒に、お城で滞在中だが、アキラが引き連れている女性陣は、お城の来賓室で悠々自適の滞在をしている。

豪華な風呂も入り放題、身体も洗ってマッサージまでしてくれるという。まさに、至れり尽くせり。

そしてプリムラは、王族相手に商談の最中。

俺のシャングリ・ラから出てくる、この世界ではお宝の真珠とシヤンプーやリンスを取引材料として、一体どのぐらい稼ぐのか見当もつかない。

商機は逃さない――さすが商売の達人である。

王家とトラブルはあったのだが、完全に取引は成立して危機は去った。

俺は王女と王妃を連れて王都を出る。皆で暮らしていた湖の湖畔に戻り、新しい領――ハマダ領を作る。

俺は、そこを治めるハマダ辺境伯となるわけだ。

お城での手続きやらがあるので、追加で1週間ほど滞在が延びることになった。

確かに拝領したのだが、あそこにはご存知のとおりなにもない。

今後、新領がいったいどうなるのかは一切不明――すべてが未定だ。限りなく未知数なのだが――なにも成果が出なくて、領や爵位を取り上げられたとしても、俺はなにも困らない。

元の生活に戻るだけなのだ。

リスとアマランサスも、お城を出るための準備を始めたのだが、お城で俺が手伝えることはない。

すべて彼女たちにまかせて、俺は皆の所へ戻ることにした。

「おーい戻ったぞ」

「おう、ケンイチ！ 大丈夫だったか？」
椅子に座っているアキラが手をあげる。

「旦那どうだった？」 「にゃ？」
ミヤレーとニヤメナが駆け寄ってきた。

「うーん、なにから話したほうがいいか——とりあえず、あと1週間ほどここに滞在することになった」

「俺は構わないけどな。センセたちも、そのままお城の部屋を使わせてもらえるんだろ？」

アキラが椅子を後ろに倒して、ゆらゆらとバランスを取っている。

「多分、大丈夫だ」

「俺も構わないけど——」 「うちもにゃ」

「それから——スマン。王女と王妃が俺たちに同行することになった」

「「……」」

「お前たちに相談しなかったのは悪いと思っているんだが……」

「なうんだ、やっぱりそうにゃ」 「俺も、そうなると思ってたよ」
獣人たちが呆れているのだが、皆は俺の行動を予測済みだったようだ。

「むー！」

「アネモネ、そんなに嫌そうな顔をするなよ。引き換えに、お城の書庫の本を全部複製してもいいって許可をもらったから」

「え？ 本当？！」

「ああ、1週間あるんで、あの本を全部、板の中に入れようぜ」
「わーい！」

あの書庫には、まだ面白そうな本がたくさんあった。全部スキヤンしてコピってしまおう。

「けどよお、敵まで懐柔して連れていくなんて旦那らしいぜ」「そうだにゃー」

「まあ敵対したままなら絶対に連れていかないが、本人も反省しているようだし。なんでも言うこと聞くなって言ってるしな」

「おいおい――王妃を連れていくとか、国王とか、そっちのほうは大丈夫なのか？」

「アキラ、大丈夫だ。王族たちは匙を投げて、全部オレに丸投げしたんだ」

彼に、円卓会議の面々と話したことを説明する。勿論、機密に關しては伏せる。

「それじゃ、お城のやんごとなき方々にとっては、王妃は目の上のたんこぶだったのか」

「そんな感じだったな。今回の奇行を理由にして、ここぞとばかりにパージにかかったようだった」

「そう言われると、ちよつと王妃が可哀想なような……」

「だろ？ それに、彼女に子供ができないから、王族の連中はかなり焦っていた」

子供ができないんじゃないかって、完全に拒否していたのだから当然だ。

アキラに、王妃が側室の選定にも口出しして、うるさかったことを伝える。

「ああ、うるさい王妃を追いつし、側室を大量に入れてガキを量産

しようってはらか」

「神輿になる世継ぎの男子も、政略結婚に使う駒の女子も多いほうがいいからな」

事実上の表の政治を治めていた王妃と、裏を牛耳っていた円卓会議。思い通りに動かない王妃が邪魔になったのも、想像に難くない。

「やれやれ——まあ、俺は構わんぜ。これで、しばらくはのんびりできるんだろ？」

「まあ多分な」

これだけではない、まだ伝えることがある。

「それからな——俺は貴族になるから」

「ええーっ！！ 旦那、やっぱり貴族になるのかい？」 「ふにゃー！」

「ケンイチ、爵位はなんになるんだ？ 男爵辺りか？」

アキラは俺の爵位が気になるようだ。

「いや、ハマダ辺境伯だ」

「辺境伯う？ そりゃまた、でかく出たな」

「なにしろ、拝領した領地がバカでかいからな、ははは」

俺の広大な無人の拝領地について彼に説明をした。アキラは呆れているようだったが。

「旦那、辺境伯ってのは、どのぐらいの偉さなんだ？」 「あまり聞いたことがないにゃー」

「伯爵と侯爵の間ぐらいだよ」

「えーっ！ いきなり、そんな偉い人になるのかい？」 「ふぎゃー！ すごいにゃ！」

アキラは俺の家名に興味を示す。

「それじゃ、ハマダってのが、ケンイチの名字か」

「まあ、そうなんだが——アキラだって家名ぐらいは認められると思うぞ？　なんなら俺が許可してもいい。多分、それだけの権限があると思うし」

「いや、イラネーよ。名前だけで困ってねえし」

「そうだよなあ、俺も全然困らなかったし」

ついでに、アキラの名字も聞く——『カザミ』というらしい。珍しい名字だけど、芸能人でいたような……。

アキラと話していたのだが、話を聞いていた獣人たちの様子が変わだ。

「どうした二人とも？」

「旦那——貴族様になっちまうってことは、俺たちとのことも」
「にゃ……」

「大丈夫だって心配するな！　こんな美人で可愛い働き者の獣人たちをクビにするわけないだろう？」

「本当かい？」

彼女たちを呼んで抱き寄せる。

「大体、毎日なでて、毎日ブラシかけてやって、こんなにピカピカの毛皮にしてやったんだぞ？　いまさら捨てるはずないだろう」

彼女たちの毛皮はツヤツヤに光り、ビロードのように輝いて波打つ。

他の獣人たちがいれば、彼女たちの毛皮の美しさに視線が釘付けになるのだ。

「それはそうだけだよお」「にゃー」

「それにだ！　前人未到の領地を測量して地図を作らなくちゃならない。そのためには戦力がいる。お前たちが絶対に必要だ」

「それなら、がってん任せろってんだ！」「ウチもやるにゃ！」

黙って話を聞いてたアネモネも叫んだ。

「私もー！ ケンイチと一緒に冒険するうー！」

「にゃー」

いつの間にか、足元にベルもやってきて、黒い毛皮をスリスリしている。

「よしよし、お母さんもな」

「なるほどなあ——それで辺境伯なあ……」

アキラとひそひそ話をする。

「そうなんだよ。勿論、王妃を引き取るのも辺境伯の条件に入ってるんだけどな」

「ははあ——ケンイチも大変だな。俺なら、その条件でも断るが」

「まあ、乗りかかった船だし、聖騎士とやらにもなってしまったしな」

その後、王族に売るための商品を取りに来たプリムラにも事情を話す。

「……はあ。予想はしておりましたけど」

プリムラが大きなため息をついた。思いつきり呆れた顔をしている。

「ごめんよ、プリムラ。後でお義父さんにも説明をするからさ」

「いいえ、父は喜ぶと思いますよ。貴族の身内になれる機会なんて、普通は訪れないのですから。まして辺境伯ですか？」

「そうなんだよ」

「親子ともども、身に余る光栄ですわ、ハマダ伯様」

「そういう嫌味は止めてくれよ、プリムラ」

彼女を抱き寄せて、ナデナデする。

「……こうなると思っていましたから。あなたを独り占めしたくても——私の想像のはるか彼方に行ってしまうのですね、はぁ……」
「悪いと思っているよ」

「いいえ全部、私の身から出た錆です。いやらしい根性を出して、ちよっと商売を大きくしようと、子爵様にケンイチの存在を教えてしまったばかりに……はぁ……」

また、ため息をついたプリムラに商品を渡すと、それをアキラが見ていた。

「なるほど、真珠か」

「そう、この世界じゃ簡単には手に入らないからな」

「まあな、養殖技術なんて存在してないだろうし」

大きな真珠も養殖なら簡単に作れる。中に入れる核の樹脂を大きくすれば良いのだ。

大きい方がいいだろうと、そういうものを売って中身を見られたら、詐欺だと言われるかも知れない。

それに真珠の層が薄いと、あの独特の美しさが現れない。美しさを出すためには真珠層の厚さが決め手になるのだ。

「真珠の値付けは君に任せるよ。高くても王侯貴族が払える金額じゃないとな」

「王族の方々は、真珠を使って貴族たちの求心力を増す切り札として使いたいようです」

アキラが俺から借りた真珠を上に掲げている。

「王族の仲間になれば、お宝の真珠が手に入りますよってわけか」
「アキラなら、お友達価格で売ってもいいぞ？　どうだレイランさん」

「確かに喜ぶだろうけど……この前、プラチナを買ってやったばかりだし……」

「あのケンイチー——プラチナというのは？」

「これだよ。ここでいう、白金だ」

俺は、シャングリ・ラから1／10オンスのプラチナのコインを買った——5万円だ。

「まあ！ こ、これが伝説に聞く、白金ですか？」

さすが敏腕親子商人らしくプラチナのことも知っているようだ。

「そうらしい、魔力を注ぐと光るらしいが、俺でもできるのかな？」
アキラによれば、祝福の力にもアルミが触媒として使えるということだし、魔力と似たような感じじゃないのか？

ちよつとコインに、ナチュラル回復ヒールを流してみると——コインが薄っすらと光り出した。

「まあ！ なんとということでしょう！ 素晴らしいですわ！ ケンイチ、これも売ってもよろしいですか？」

「はあ？ まったく、本当になんでも売っちゃうんだからなあ。まあ、いいよ」

ちよつと判断が難しい案件なのだが、プリムラの機嫌が直ったようなので、よしとしよう。

彼女は夫に新しい女ができるより、デカイ商売の方が重要——いや、俺がとんでもないことばかりしでかすので、諦めたというべきか。

それに俺が貴族になれば、マロウ商会にもたらされる恩恵は絶大。妻としての女の感情を横に置けば、商人としてこれ以上の好機はない。

まさに千載一遇といえるだろう。

彼女にプラチナの1オンスコインや、ペンダント型になった1／5オンスのコインを渡す。

それを持つと、プリムラは喜び勇んでお城へ戻っていった。

真珠とプラチナで、一体どれだけの売上になるのだろうか？ 想像もつかない。

「ケンイチ、人数が多いと大変だな。はは、頑張れよ。なお後ろから刺されても、俺は助けないので、そのつもりで」

「肝に銘じておくよ」

時間は過ぎて、そのまま夕方になり、食事の準備。家族はインスタントカレーを――。

俺とアキラは、またホルモン焼きを食うことにした。

なにせドラゴンの腸が大量にあるのだ。このホルモンを大量に食うという案件についても、俺たちには絶大なアドバンテージがある――それは祝福だ。

いくら食っても、プリン体を大量摂取しても俺たちは痛風にならない、異世界万歳！

「アキラ、今日はワイバーンの腸を食ってみようぜ」

「おう！ ワイバーンの肉はどうだったんだ？」

「肉はレッサーより美味かったぞ？」

「マジか？！ それじゃ、期待できるじゃねえか！」

オッサンが二人、喜び勇んでホルモン焼きの準備をしていると――そこに、リリスとアマランサスが現れた。

騎士団などの護衛も連れていない。もう王族の価値はないから、どうでもいいということなのだろうか？

騎士団の姿は見えないが、メイドさんたちの姿はチラチラ見えるような気がする。

「ケンイチ食事じゃ」

「リリス、お城にいる間は、ここの料理を食べたほうがいいんじゃないのか？ あ料理長さんが嘆くぞ？」

「もう、お城の人間ではなくなる故、外界の料理に慣らしていかぬとな」

アマランサスもそう言うのだが、ホルモンは初心者にはちよつとつらいのではなからうか。

「けどな、アマランサス、俺たちが食うのはこいつだぞ？」

俺は、洗っていた巨大な白くぶよぶよな管を持ち上げた。

「なんじゃそれは！？ 虫かえ！？」

「違うって、ワイバーンの腸だよ」

「ほう！ 今日ワイバーンの腸を食うのかえ？ レッサードラゴンの腸は大変美味であつたの」

「……リリス、そなたそのようなものを……」

「母上、この世のものとは思えぬほどの美味じゃぞ？」

「……」

アマランサスは、脂汗を流しながら、じつと俺の手にある腸の塊を見つめている。

「はは、無理をすることはないぞ。こんな下賤な料理を食べる必要はない。そちらで、カレーという香辛料料理を食べているから、それにすりゃいい」

「いや、聖騎士様の奴隷として、泥水を飲めと言われれば飲み、泥を食^はめと言われれば食わねばならぬ！」

「あ、そうだ。その奴隷契約を止めろよ。もうそんなの必要ないから」

「いやじゃ！ ぎゃあああ！」

俺の命令に逆らったアマランサスが地面を転がり始めた。

「ああもう！ 命令取り消しだ！ 取り消し！」

「はあはあ……」

アマランサスが地面によつん這いになって肩で息をしている。

「なにやってんだか——泥だらけじゃないか。これは服がいるな……」

シャングリ・ラで婦人用の服を検索する。俺はハッキリ言って、ファッションなどは疎い。

疎いとかいう問題以前に、この世界とは合わせ目が逆なので、少々種類が限られるのだ。

その中から、袖の短い白いブラウスと、腰の部分にリボンがついた紺色のワイドパンツというものを購入。

ガウチョパンツとも書かれているが、正式名称は不明。

一見ロングスカートに見えるが、股が割れていてズボンなのだ。活動的なアマランサスにはピッタリだろう。サイズは、どれがい

いだろうなあ——彼女は背が高い。

俺と同じぐらいの背丈なので、175cm前後のはず——女性ならLサイズだろうか？

とりあえず購入してみる。

「ポチツとな」

落ちてきた服を、アマランサスに渡す。

「これは……」

「着替えだ。着替えるのは、あそこの家。大きさが合わなかったら言ってくれ」

彼女が服を持って家に駆け込むと、リリースがじゅっと俺を見ている。

「なんだ？」

「妾にはないのかえ？」

「その白いドレスが似合っていると思うけど……」

「もう、こんな上等なドレスは着れぬのであろう？」

「まあ、そう言われればそうだな……」

俺に服を選ばせなくてくれよ。ファッションセンスがないのは自覚しているのだから。

シャングリ・ラの画面がリリスに見えれば、彼女に選んでもらうのがいいのだが。

あんまり元世界のファッション的な奇天烈なものを選ぶわけにもいかないしな。

この世界は脚を出すのは厳禁だが、魔導師がスリットから脚を出すのは認められている。

なんだか納得いかないが、そういう慣習なので致し方ない。

リリスには、襟がフレア状になった白いブラウスと、暗い紺色のロングワンピースの組み合わせにした。

ワンピースの腰の部分にはちよつと斜めに大きなリボンがつけられている。

「ほい！　こんなのでいいか？　こういうのが欲しいって注文があるなら、なるべく近いのを用意するぞ？」

「これでよい！　早速、妾も着てくるのじゃ！」

「はいよ」

服を抱えてリリスも家に走っていった。

ふと見れば、アネモネがじゅつとこちらを見つめている。あとでご機嫌を取らなくては……。

とりあえず目の前の腸を切る。前と同じように、フグ引包丁を使って薄く切ると、皿に並べていく。

「ケンイチ、もう1本包丁はねえのか？　俺も手伝うぜ。早く食いてえし」

「それじゃ手伝ってくれ」

シヤングリ・ラから同じフグ引包丁を買って、彼に渡す。

アキラも中々料理が上手く、包丁さばきが達者だ。

腸を切っていると、アマランサスとリリスが戻ってきた。

二人とも、美人でスタイルもいいから、なんでも似合う。

アマランサスは、ちよつともじもじして、子供のような表情をする。

「ほう、まるでモデルだな……」

二人を見たアキラが顎に手をやり、つぶやく。

「レイランさんにも色々と着せたらどうだ？」

「ははは、着せてるよ。センスは恥ずかしがって外では着ないけどな」

アキラはレイランさんと二人で、コスプレごっこを楽しんでいるようだ。

「どうじゃ？」

リリスが、両手を腰に当てて、ふんぞり返る。

「似合うな。可愛いからなんでも似合う」

「ぬふふ……」

得意げな表情のリリスだが――ちよつと子供っぽかったか。もうちよつと大人の恰好でも良かったようにも思える。

それに引き換えアマランサスは、見たこともない服にちよつと困

惑しているように見える。

「これは——スカートかと思ったら、ズボンなのだな」

「そうだ。動きやすいし、活動的なアマランサスには、ピッタリだろう？」

「ふむ……」

彼女がいきなり鋭いハイキックを繰り出すと、そのまま1本脚で静止した。

まるで地面に杭を打ち込んだように、ピクリとも動かない。

「こういうことをしても、股間が見えないということじゃな？」

「そのとおりだが——すごいな」

「ケンイチ——謁見の間でお前を攻撃した瞬間、彼女の動きが見えなかったんだが、マジで武術の達人なんだな」

アキラが俺の耳元でささやく。

「そうなんだよ。アイテムBOXも持ってるし、こんな恐ろしい女を敵に回すよりは、味方のほうがいいだろ？」

「そりゃ、そうだな」

そんな話をしながら料理をしている俺たちを、王女が覗き込んでいる。

「そなたたち、男なのに料理が上手いのう」

「王女殿下、料理人や料理長も皆男でしょう？」

「それは、そうなの。じゃがアキラよ。妾のことはリリースと呼ぶがよいぞ」

「妾もアマランサスカ、アマラで構わん」

アキラが包丁を手にもったまま、両手を広げて呆れている。

本人たちが、そう言っているのだから、それでいいのだろう。

腸を切り終わり皿に並べたので、コンロを用意して焼く。前に使った焼き肉用の鉄板が、また活躍だ。

アイテムBOXから小皿を取り出して、ホルモン焼きのタレを出す。

「これは魔導コンロかえ？」

アマランサスが、ガスコンロの青い火を覗き込んでいる。

「まあな。ほら焼くぞ」

鉄板の上に肉を乗せると、もうもうと白い煙が出る。

「すごい煙じゃ！　だが食欲をそそる、本能に訴える匂いじゃ」

「ほらよ焼き上がったぞ」

「うう……」

目の前の皿に盛られた肉の塊を見て、アマランサスが固まっているのだが、引越しの準備をして腹は減っているし、いい匂いなのだろう。

食いたいのに食えない。先に食べ始めたリリスのほうを、ちら見している。

「これは……美味しい！　美味しいぞ！！」

ホルモン焼きをフォークで刺して口に入れた王女が叫んだ。

「おっ！　これは、レッサーより美味しいぞ。なんというか鼻に抜ける風味がいいし、旨味も詰まっている感じがするな」

アキラもホルモンを食べて叫んだ。

「マジか？　どれどれ？　むぐむぐ……こりゃ確かに！」

「たはー！　こりゃ、飲まずにいられん！」

アキラは自分のアイテムBOXから、ビールを取り出して飲み始

めた。

それを見ていたアマランサスであったが、我慢できなくなったのであろう。

リリスと同じようにフォークで肉を突き刺し、ついに口に入れた――。

「うーう、美味しい！ これは美味しい！ なんという美味さだ！

お城に閉じこもり、こんな美味しいものを知らずにいたとは……ああ、涎が止まらぬ！」

「口に合ったようで、なにより」

肉の味に喜んでいたアマランサスだったが、アキラのビールをじっと見つめている。

「飲むのか？ エールみたいな飲み物だけだな」

「エールもビールじゃなかったか？」

アキラがビール缶をテーブルに置くと、こちらを向いた。

「普通のビールは、なんていうんだっけ？」

「――ラガーじゃね？」

「ああ、ラガービールな。なにが違うんだっけ？」

「上で発酵か、下で発酵か――そんな話じゃなかったか？」

「そういえば酒の漫画で読んだような……」

彼女にシャングリ・ラから買ったビールをジョッキに注いでやると、口につけた。

「んぐんぐ……ぷはっ！ このエールも実に美味しい！ この肉と絶望的に合う！」

実に豪快な飲みっぷり。あまりに男前過ぎる。国王と王妃が逆だったらよかったのに。

「ケンイチ、母は底なしじゃからの」

「え？ そうなのか、それじゃその1杯だけな」

「うぐぐ……殺生な……」

「アマランサスの働き次第だな」

「にゃー！」

ベルもやってきたので、大きく切って焼いたものをやる。

前脚でそれを押さえると、引きちぎって美味しそうに食べている。ベルの様子を見ていたら、アキラが俺の後ろを箸で指した。

「もう我慢できないにゃ」 「旦那、俺たちにも食わせてくれえ……」

「うおっ！ だからお前ら、気配を消して近づくなよ」

獣人たち用の魔導コンロをアイテムBOXから出し、鉄板も用意した。

あとは皿と、ホルモン焼きのタレだな。

「ほら、肉は勝手に切って食べ。アネモネも食べるか？」

「うん」

「ひゃっほーい！」 「うにゃー！」

カレーを食べて、まだ食べるのであろうか？ 彼女たちは肉を食べて大騒ぎをしている。

「ああっ！ 美味しい！ 美味すぎて死ぬう！」 「はにゃー！」
大げさな奴らだ。ニヤメナにビールをやる。

「ぷはーっ！ エールうめーっ！」
エールじゃないけどな。

「けどお前たち、こんなの毎日食べてたら、絶対に病気になるから、ほどほどにな。俺たちは祝福があるから平気らしいが……」

「ああ、大丈夫だよ、旦那。これは身体に悪い美味さだって解る」
「にゃー！ ケンイチがいつも言ってるにゃ、美味しいものは身体に悪いって」

「美味しい！」

アネモネも美味しそうに、ホルモンを食べているのだが、食べ過ぎじゃないのか？

皆で食いまくって、腹はいっぱいになったが、なにかも油でギトギトになってしまった。

皆で一箇所に集まると、アネモネに魔法で洗浄してもらう。

「洗^{クリン}浄！」

キラキラとした青い光で、一発で綺麗になる。

これは、シャングリ・ラで買うものでも真似ができない。異世界の勝利だ。

「そうだ、リリスとアマランサス。夜はどうするんだ？ こっちに泊まるなら、俺の家を使ってもいいが……」

そう言うか言わないうちに、アマランサスが俺に抱きついてきた。

「聖騎士様あゝ、妾にお情けをたもれ……」

「ええっ？ お城を離れてからにしないよ」

「よく色男！ 敵の本拠地で寝取りは、流石ですねえ」

両掌を口に立てた、アキラの茶々が入る。

「そうだ、お前はまだ人妻だろ？」

「いいえ——すでに王族から追い出されたので、もはや平民——いや、聖騎士様の奴隷である」

「おい、仕事はえーな！ どんだけ嫌われてるんだ」

「よほど妾のことが邪魔だったのであろ？ ふん！」

彼女の言うとおりでな。

もはや王族ではなくなったが、準備に1週間の猶予をもらったらいい。

その間に荷物をまとめろってことなのだろう。

「であるからあ、聖騎士様の滾るたぎもので、妾の中をかき回してほしいのじゃあ」

「子供がいるところで、そういうことを言うんじゃない」

俺が引き離そうとしても、アマランサスは離れない。なにせパワーが桁違いだ。この細い身体のどこにこんなパワーがあるのだろうか？

「離れろ」って言うと、拒否してまた転げ回るんだろうなあ……面倒なやつだ。

すべてを捨ててしまった彼女――失うものが、なにもないやつは最強である。

アネモネとリリスに睨まれながら、城壁の隅に小さなテントを出す。

アキラが茶化しているが無視して、二人でその中に滑り込んだ。

狭い暗闇の中、彼女の肌を見たいので、アイテムBOXからLEDライトを出す。

「魔法の光かえ？」

「まあ、そんなもんだ」

青い光に映し出されてる、アマランサスの裸体。

彼女は恥ずかしそうにしているが――贅肉もない引き締まった身体で、腹筋も綺麗に割れている。

まるで石膏デッサン用のトルソのよう。

こんな王族がいるのか？ 王侯貴族ってのは、運動もしないでふ

にやふにやのイメージなのだが――俺のイメージとはまったくかけ離れている。

俺の思考とは裏腹に、アマランサスが抱きついてくると、泣きぼくろの上に涙をこぼしている。

「やっと、聖騎士様と一つに――」

このなにもかも捨てた女は、俺みたいなオッサンに、どれだけ恋焦がれていたのだろうか？

なんとも複雑な思いである。

125話 お城の蔵書をコピレ

元王妃——ということになるのだろうか？ アマランサスが俺たちと一緒に暮らすことになった。

血は繋がっていないが、娘のリリスも一緒である。

すでに籍は抜かれていて、王族ではなくなっているという。仕事及早すぎだ。

皆で朝飯を食べる。プリムラがいないので、スープはインスタントだ。

作るのが面倒なのもあるが、たまには違う味のスープも食べてみたいじゃないか。

プリムラの作るスープは、売ったりすることもあるし、ほかの料理のベースになることが多いので、基本が塩味。

今日は、ちょっと変化球で中華味のスープにしてみた。

一緒に料理を食べているが——まだ、アキラが寝取りだのなんだのと騒いでいる。

「彼女は、すでに王族じゃないし——日本で言うなら離婚届を受理された後の状態だからセーフ」

「まあ、しゃーない。寝取りは男のロマンやし。そうそう、あの栗まんじゅうとかに入っているやつやろ？ そりゃ、マロンじゃボケエ！」

アキラが独りボケと独りツツコミをしている。

「どんなロマンだよ。別にロマン目的に、やっているわけじゃないぞ？」

「ふ〜ん……それじゃ俺も手を出しちゃおかな〜」

そう言って、テーブルにやって来た、メイドさんの手を握った。

「ねえねえ、可愛いメイドさん。おじさんと一緒に遊ばない〜？」

おじさんって結構凄いんだよ」

「はうん！」

アキラの言葉とともに、メイドさんがフラフラと倒れて尻もちをついた。彼が持っている、俺と同じ祝福の力だ。

「ほらあ、気持ちいいでしょ？　もっと気持ちいいこと、おじさんとしてみな〜い？」

完全にオッサンである。いや、実際にオッサンなので、致し方ないのではあるが。

メイドの女の子に近付こうとしたアキラであつたが、彼の後ろに黒い影が立った。

「ふうん——アキラ、ずいぶんと元気そうですねえ。そんなに精力が有り余っているのなら、私の相手をしてもらいましょうか？」
アキラが声の主を確認するために、そっと後ろを見る。

「はうあ！？　センス！　いつの間に!？」

彼の後ろに立っていたのは、烏色のドレスに爆乳を揺らした、レイランさんだった。

「豪華な部屋と食事にも飽きてきたところなので、ちょうどよかった」

「あつと、センス！　ちよつと、すみません！　冗談ですから、冗談！」

アキラの弁解も虚しく、後ろ襟を掴まれたまま、アキラがズルズルと引きずられていく。

魔導師だというのに、かなりのパワーがある。

「にゃー！ アキラ、やるにゃ！？ ウチもやるにゃ！」
引きずられているアキラの周りを、獣人のミャアが、ピョンピョンと跳ね回っている。

「あゝあゝあゝあゝ」

「南無……頑張ってくれたまえ」

このあと彼は、いわゆる一つの永久運動装置、セ〇〇スマッスイーンと化するのだ。

引きずられていくアキラに、俺は両手を合わせた。

アキラのことは放置して——食事が終わると、元王族二人の引越しの準備が始まった。

シャングリ・ラから木製の大型パレットを購入して、地面に並べる。

「持っていく荷物はここに置いてくれ。そうすればまとめてアイテムBOXへ入れられる。大型の家具とかは持っていけないぞ？」

「解っておるわえ」

リリスもアマランサスもそう言うのだが、大丈夫かな？

ちよつと庶民とかけ離れているところがあるからなあ。

新しい生活を始めた彼女たちが、「もうこんな生活には耐えられない！」などと言い出しても、すでに二人には退路はない。

それを彼女たちも解っているはずだと思うのだが。

引越しの準備は二人に任せて、俺にはやることがある。

お城の書庫にある本をコピらなければならぬのだ。

この世界では本自体が貴重なのに、お城の書庫にある本は門外不出の貴重な本ばかり。

これを逃す手はない。しっかりとコピーしなければ。

複製は、以前使ったドキュメントスキャナを使うことにして、同じものをもう一台購入。

ノートPCももう一台増やした。長時間使うので、大容量のモバイルバッテリーも出す。

これらのスキャナは、もともとは自炊といって、手持ちの本をデジタル化するのに使うもの。

本格的に自炊をする人は、本を裁断して取り込むそうなのだが、王族が保有する本に、そんなことはできない。

今日1日の作業が終了すれば、1日でどのぐらいの量をデジタル化できるか、ペースが解るだろう。

計算して間に合わないようであれば、なにか手を考えなくてはならない。

お城の奥にある書庫——古い貴重な本が、細長い吹き抜けの部屋に積み上がる。

アネモネと一緒に書庫に入り上を見上げると、びっしりと本棚に本が詰まっており、その高さは数階に及ぶ。

これだけの本を1週間でスキャンできるだろうか？ 元世界の常識が俺の思考の邪魔をするが——この世界の本は1ページが分厚く、本の厚さのわりにはページ数が少ない。

羊皮紙の本などは分厚いの、1cmぐらいある立派な装丁と数十ページしかなかったりする。

PCなどの操作に慣れているアキラにも手伝ってもらおうとしたのだが、元帝国人の彼には許可が下りなかった。

まだ100%信用されていないということだろう。

俺とアネモネの他、一緒に書庫に入る人間がもうひとりいる。

以前、俺がこの書庫に入ったときに、監視をしていたメイドさん

の一人だ。

黒いショートヘアの彼女は、ここの管理兼司書をしていて本の配置をすべて記憶しているらしい。

「今日から、1週間ほど、よろしく頼むよ」

「あの……本を複製するとお聞きいたしましたが、いったいどのようにして……」

ちょっと眠たそうな目をしている彼女だが、もともとこんな感じらしいので、眠たいわけではない。

「大丈夫、本を傷つけたりはしないから心配しないで」

——と言葉で言っても訳がわからないだろう。論より証拠——俺はアイテムBOXから、テーブルとノートPC、そしてスキャナを取り出してセットした。

「それは……？」

「初めて見るだろうが、本を取り込む魔道具だ」

適当な本を1冊持ってきてセット、ノートPCのリターンキーを押して、最初のページを取り込んでみせる。

「このようにして、この板の中へ入れることができるわけだ」

「これで、いつでも本を見ることができるようになるわけですか？」

「そのとおり」

「おっしゃることが本当なら——ケンイチ様のお近くにいれば、私も複製した本が読み放題……」

「もちろん貴重な本ばかりだから、ここと同じように閲覧できるのは限定された人間になるけどね」

この世界には文字が読める人間が少ないので、必然的にその人数は絞られる。

魔法に関する本や、王家の秘密に関するものは論外だろうが、普

通の歴史書などは開放してもいいかもしれない。

「複製した本だけじゃないよ、誰も知らないような異国の本も読めるよ」

アネモネが言った言葉にメイドさんが反応した。

「それは本当ですか？」

アネモネの言葉なのに、なぜか彼女が俺にすり寄ってくる。

俺はアイテムBOXから取り出した、罨猫の本を見せた。ミャレーとニャメナのためにシャングリ・ラから購入したものだ。

書かれている言語はもちろん日本語。それを手にとったメイドさんは、ペラペラとページを捲っている。

「素晴らしいです。すごく薄くて上質な紙に書かれていますね！それにきれいな文字……」

もちろん印刷なのだが、それを説明するのは難しい。

マロウ商会とユーパトリウム子爵に、ガリ版印刷技術を教えたが、あれだって元の原稿は手書きになるからな。

鉄筆でガリガリと、蠟紙に傷をつけるわけだ。

「もう、離れて！」

アネモネが、俺とメイドさんの間に入って押し広げた。

「……」

メイドさんが、何か考えごとをして、フリーズしたままなのだが、俺たちは作業を開始した。

以前、ここでやった取り込み作業と同じように、アネモネがセツトしてページを捲り、俺がリターンキーを押す。

2台でどうやったら、効率よくスキャンできるかと試行錯誤していると――メイドさんが突然大声を上げた。

「決めました！」

突然、メイドさんが大声を上げたので、俺とアネモネで彼女のほうを見る。

「何を決めたんだ？」

「マイレン様が、王族の方々と一緒に僻地へ向かう、決死隊の募集をしていたのですが、それに応募することに決めました」

決死隊って——ちよつと大げさに聞こえるだろうが、お城の人間にとっては、そのぐらい大変なことだと認識されているようだ。

王都に住んでいる人たちにとっては、地方は前人未到の未開地扱いだからな。

「それじゃ、本を目当てに未開の僻地へついてくるというのかい？」

「はい！」

「言っておくが、お城のような快適な暮らしじゃないんだぞ？」

「解っています。それに私はもともと貧民の出です。貧乏には慣れていますから」

たまたま貧民窟で知り合ったマイレンさんにスカウトされ、お城で雇われたようだ。

両親から読み書きは習っていたらしい。

「マイレンさんに恩があるからついていくとかじゃなくて？」

「その……メイド長に助けていただいたことには感謝していますし、仕事の上でも素晴らしい上司だとは思いますが……その、あの不潔な……」

ああ察した。夜な夜な躁り広げられる、王女とメイド長のいけない遊びを見てしまったのだろう。

確かにあれはドン引きする。

俺は結構楽しくて、危うく一緒に遊びそうになってしまったけど

――男なら仕方ない。

王女とメガネのメイド長が繰り広げる、いけないお仕置きプレー――あゝ男のロマン。

まあ、それはどうでもいい。

話を聞いても彼女の決意は固いようなので――スキャンを手伝ってもらうことにした。

彼女たちが、ページを開いてセットしたら、俺はリターンキーを押す。

大体2秒に1回見開きを撮影できる。毎分30ページだ。単純計算で1時間1800ページ。

二人いるので、1時間に3600ページを撮影できる。結構いいペースじゃね？

勿論、本を取ってきたり、セットする時間も含めなくてはいい。

それを入れても2000～2500ページ前後は確実にスキャンできることが解った。

結局、3人とスキャナ2台で、1日200冊弱の本をスキャンすることに成功した。

ここにある蔵書は1000冊ちょっとらしいので、1週間なら余裕で間に合う計算だ。

よし、これでなんとかなる。

1日のスキャンが終わると、皆のところへ戻った。

ベルが走ってやって来ると、大きな体をぐるぐると俺の脚に擦り付けた。

皆は、やることなく暇そうだ。特に獣人たちは、狩りができな

いので、やることがないらしい。

せいぜいお城の裏庭にいる鳥を捕まえるぐらいだ。

彼女たちは、ゲームがあっても複雑なルールを覚えることができないしな。

暇なのはベルも同様で、日がな一日中、日陰で寝ていて、大きなあくびをしている。

まったく、こんなことに巻き込んでしまって、アキラたちには悪いことをしてしまった。

レイランさんに引っぱられていったアキラ曰く――。

「まあ気にするなって。追手の心配もなく、まったくとした日々を送らせてもらってるぜ。センセなんて、もうちょつと滞在したいって言ってるぐらいだ」

まあ、風呂も入り放題だし、王族が受けるようなマッサージや垢すりなんかもしてくれるらしい。

それプラス、プリムラが持ち込んでいる、シャンプーやリンスもある。

女性にとっては、至れり尽くせりの空間だろう。

彼女たちと一緒にいるプリムラは王侯貴族相手に、俺から持った商品売り捌いている。

売っているのは主に、シャンプーとリンス。他に代替がないので、多少高くても売れるってわけだ。

安く大量に、庶民に売ったほうが金になると思われるが――毎日毎日、シャングリ・ラからシャンプーやリンスを大量に購入し、出荷する商売は無理。

まるで俺が、シャンプーを吐き出す、工場の機械みたいじゃないか。

そうならないよう、あくまでも王侯貴族用として、少量売る算段

になっている。

シャングリ・ラに100%頼った商売では、俺に何かあった時に、あつという間に商売が行き詰まるのが目に見えている。

それはプリムラも解っているはずだ。

皆で飯を食って、風呂に入って寝る。

デカイテントをアイテムBOXから出して、その前での井戸端会議。

「せっかく家が空いているんだから、家で寝たら？ お城の自分の寝室で寝てもいいんだぞ？」

「ケンイチと一緒にいいのじゃ！」

リリースはいいとして、アマランサスは？

「妾は奴隷なので、聖騎士様のお側におるわえ」
その前に、「妾」とかいふ奴隷がいるのかよ？

「俺が辺境伯になって、正室はリリースってことになるんだろうけど、アマランサスはどうするんだ？ それとも、アマランサスが正室になるのか？」

「妾は奴隷ぞ？ 奴隷が正室になるはずがあるまい。側室だってありえぬ」

「それを言ったら、リリースだって王族籍を抜いたんだ、彼女も平民だろ？」

「妾は完全に見放されたが、リリースは復帰の道を残している故」

「ふーん、まだ円卓会議の駒として使える余地が残っているから、接触してくる可能性があるってことか？」

「そのとおりじゃ」

させるかよ、そんなこと。

結局、皆外に寝ているから、家に泊まるやつがないじゃないか。

「ミヤレーとニヤメナ、家のベッドで寝ても良いぞ？」

「ええ？ 旦那が外で寝てるのに、俺たちが中で寝れないよ」「そうだにゃ」

気にすることは無いと思うんだが……。

「それじゃ、俺たちが中で寝るか……」

「妾は外で寝るわえ」

アマランサスは奴隷に徹するため、外で寝ると言うのだが……。

「アマランサスも中で寝よう」

俺にそう言われれば、奴隷契約しているアマランサスは逆らえない。
い。

皆で暗い家の中に入ると明かりを点けてベッドの準備をする。ダブルベッドを2つ出せばいい。

俺たちと一緒に、メイド長のマイレンさんも入ってきた。

「わーい、広い！」

ベッドの上でアネモネが跳ねているのだが――。

「広いベッドが良いなら、アネモネが一人で家で寝ればいいのに……」

「ケンイチと一緒にじゃなきゃ嫌！」

「妾もじゃ！」

アネモネとリリスと一緒に抱きついてきた。

「どうだ、アマランサス？ 狭いだろ？」

「確かに狭いが――天幕^{テント}で泊まっていると思えば、どうということはない」

「まあ、在所に帰ったら、大きな屋敷も建てるつもりだから。家は広くなると思うけどな」

「大きな家を建てるの？」

アネモネの目がキラキラと光っている。

「人数も増えるし、メイドさんも10人ぐらいいてくるそうだから、その人たちの部屋も用意しなくちゃならない」

「ずいぶんと女の人が沢山増えるんだね……」

女が増えると聞いたアネモネが少々不機嫌だ。

「勿論、書庫も作るぞ。沢山本を集めよう」

「わーい！」

「でも、元王族にふさわしいような、豪華絢爛な屋敷は無理だぞ？」
一応、リリスにも確認をとる。アマランサスは、なにもしゃべらない。

「解っておる！」

ベッドで寝るので、寝間着に着替えさせる。

「はいはい、皆は寝間着に着替えてね」

「はい」 「わかったわえ」

三人の寝間着を出すと、皆が俺の目の前で裸になった。

リリスの美しく波打つ金髪と白い肌、ちよっと膨らんでいる可愛い乳房。

リリスの着付けをマイレンさんが手伝っているが、アマランサスは自ら裸体を晒し一人で着替えている。

彼女が、なにを考えているのか、さっぱりと解らない。

「あゝあ、ついにリリスの裸も見てしまったか……もう、後戻りできないなあ」

「当然じゃ！ 妾の夫になる者に肌を晒しても問題はないじゃろう？」

「それはそうだけどさあ……」

「そなた、まさか——ここまできて逃げるつもりではないじやろうな？」

「何回も言われるけど、そんなつもりはないよ」

裸のリリスを抱き寄せると、アネモネも抱きついてきた。

「私もおゝ！」

「もう大人になったんだから、抱きつくのを止めなさい」

「や！ ケンイチに抱きつくとお腹の中から嬉しいのや楽しいのが、一杯来るんだもん」

彼女の説明を聞いても、よく解らん。

リリスの着替えを手伝っているマイレンさんにも、俺たちと同行することについて聞く。

「マイレンさん。10人ほどで決死隊を組んで、僻地へ同行するつもりらしいけど？」

「地の果てまで姫様にお仕えするつもりなので、当然です」

「アマランサスにはお仕えしないんだ？」

「あ、あの……それは……しますけど……」

それを聞いたアマランサスが拗ねている。

「どうせ、妾は嫌われ者じゃ！」

「アマランサス——ほら、おいで」

俺が両手を開くと、彼女が俺の胸に飛び込んできた。

「よしよし……アマランサスが、国と民のために進んで嫌われ役をやっていたことを俺は解ってるから」

「聖騎士様あ……」

「よしよし」

ベッドの縁に腰掛け、俺の胸に顔を埋めるアマランサスの金髪をナデナデしていると、外からガリガリ扉を擦る音が聞こえる。

「ベルだな。マイレンさん、扉を開けてやってくれ」

「はい——あの、我々のご主人様にもなられるので、マイレンで結構ですから」

「解った。マイレン、扉を開けてやってくれ」

「承知いたしました」

扉が少し開くと、黒光りした毛皮がするり——一直線に俺の所にやって来るとベッドの上にジャンプ。

腰掛けている俺の背中に、スリスリと身体を擦り付けた。

「私もう!」

「妾もじゃ!」

「はいはい……それじゃ寝るとするか」

「その前に! ケンイチ、そなた——妾にいつ手をだすのじゃ?」

「え、えうと、そのうち……」

「そなた! やる気があるのかえ?」

「まあ、あるよ。だから、そのうちな」

リリスの頭をナデナデしながら、寝転がると——俺の腹の上に、ベルが載ってきた。

「お母さん、重いんだけど……」

「にゃー」

俺の言葉を見殺すように、彼女が喉を鳴らしている。

「気のせいか——森猫より妾の優先順位が低いような気がするのじやが……」

リリースの愚痴は放置。

「わーい！」

アネモネが、俺に載ってるベルの背中に載った。

「ぐええ、ちょっと重いから」

用が終わったのか、マイレンが出ていこうとするので、呼び止めた。

「マイレンはどうするんだ？」

「外に控えております」

「ええ？　ここはお城の中だからいいけど、荒野で野宿する時はどうする？」

「もちろん、同様に……」

彼女はそう言ってるが、そうもいくまい。何か考えないとな。

「俺たちと一緒に寝てもいいんだぞ？」

「そうはまいりません……」

王女との、いけないお仕置き遊びも見てしまったし、いまさら恥ずかしがることもないと思うんだが……そうじゃないのか？

とりあえず母屋の隣に設置した小屋に、ベッドを出してメイドの控室にした。

双方に、シャングリ・ラで買った乾電池式のワイヤレスインターホンを設置。

マイレンにも使い方を教えて、これを使ってもらう。

インターホンはボタンが1個ついている白い板で、上にマイク兼

スピーカーがついている——親子機セットで8000円だ。

「リリース、メイドに用がある時は、このボタンを押して話しかけるんだ」

「これじゃな！ マイレン！ 聞こえるかえ？」

『はい、聞こえます。姫様』

「これは便利な魔道具じゃの！ そなたが、妾たちを乗せた召喚獣で使っていたものと似たようなものか？」

「これはずっと単純で、隣の部屋との間でしか使えないけどな」

「うゝむ……」

リリースが、腕を組んでなにかを考えている。

もしかして、なにか良からぬことかもしれないので、聞かないでおく。

ダブルベッドで3人と1匹で寝る。アマランサスは一人でダブルベッドだ。

別に無理して、一人で寝ることもないと思うのだが、どうしても奴隷契約を外さない。

そのうち飽きるかもしれないので、そのままにすることにした。

————◆◆————

——次の日。

朝早く、プリムラが戻ってきた。

話を聞けば、アキラの家族の乱交がものすごくて、寝ていられなかったようだ。

「そんなに凄いのか？」

「……はい」

プリムラの顔が真っ赤だ。どんなプレイなんだよ。逆に気になる

じゃないか。

彼女が恥ずかしそうに話すには、「くっころ、くっころ、死ぬ死ぬ」と大騒ぎ。

プリムラだけではなく、お城のメイドさんも顔が真っ赤だったらしい。

その騒音もさることながら——そろそろ豪華な食事や、おもてなしにも飽きてきたと言う。

「……それに……」

彼女が横を向く——家族に女が増えることに対し、機嫌が悪いのか。

商売でそれを忘れていたのかと思ったのだが、そうでもないようだ。

彼女を抱き寄せて、耳元でささやく。

「じゃあ、今日はプリムラの日だな？」

「……はい」

「プリムラが気になっているようなら——アキラの家族みたいに、皆でする？」

「い、いえ！ あんなの絶対に無理ですから！」

プリムラの顔が耳まで真っ赤だ。

その話は置き——彼女が戻ってきたので、いつものようにスープを仕込んでもらう。

パンもアネモネの焼き立てのパンだ。やはりこれが我が家の味——ということになるのだろう。

皆で食事を摂っていると、アキラも戻ってきた。

「おっす！ ケンイチ悪い、朝飯恵んでくれい」

「いいけど、アキラの家族はどうした？　あまりの乱痴気乱交っぷりに、プリムラから苦情が入っているんだが……」

「あゝワリイワリイ、ははは。久々だったから、センセ溜まってたようであ。離してくんねえの。いやあ参った参った、隣の神社」

「ずっとやってたのか？」

「ふああゝもう、ほぼ丸一日だな。ほとんど寝てねえ。ヨッコイシヨウイチっとう！」

椅子に座ると、大きなアクビをしたアキラだが――最終的には、彼の能力を使いノックダウンさせたらしい。

「あれなら半日は動けねえ」

「それでも半日かよ」

「センセは自分で回復ヒールも使えるからな」

「祝福回復ヒールV S魔法回復ヒール。まさに永久運動装置……」

いくら回復ヒールが使えるとはいえ、腹は減るからいずれエネルギー切れになるのだが。

朝飯の後、再びお城の書庫で本のスキャンを開始。

協力一致の作業の下――5日で、すべての入力を終了した。

リリスとアマランサスの引越準備作業も進んでおり、すでに各々パレット5枚分の荷物を、俺のアイテムBOXに収納した。

最後に、彼女たちの財産を収納することになっているが、所有している土地や建物などは短期間では処分不可能なので、名義はそのままになっている。

王族籍がなくなった彼女たちの財産が本当に保証されるのかは不明だ。

まあ、本当に平民や奴隷になって下野するならともかく、一応辺境伯である俺の庇護の下に入るわけだから、お城の王族たちもあまり無茶もするまい。

国難などに協力が得られない可能性が出てくるからな。

スキャンしたデータを裏庭で整理していると、お城の料理人サンバクさんが現れた。

126話 皆が来たらしい

俺は貴族になった。まだ正式には決まっていなかったのだが、これは確定的。

今、お城で事務の方々が手続きの真っ最中だ。

無論、通信手段など存在しない世界なので、周知には時間がかかる。

俺の存在を知らしめるためにも、帰る途中にある街道沿いの貴族領には挨拶をしていったほうがいいと思われる。

帰った後も、隣領になる貴族領には挨拶が必要だろう。

俺が最初に暮らしていたダリアの街があるアスクレピオス伯爵領や、一緒に討伐で戦ったノースポール男爵がいる領などだ。

引っ越してきたあとの、ご近所回りみたいなものだと思えば仕方ない。当然、贈り物も必要になるだろうな。

そこら辺の選定は、プリムラやアマランサスの意見を聞けばいいと思うが――個人的にはプラチナがいいんじゃないかと思っている。

王族と交渉の末、お城の書庫にある蔵書を、複製する許可をもらった。

俺とアネモネ、助っ人であるメイドさんの一人と協力して、1000冊ほどあった蔵書のすべてをスキャンしてデータ化。

このまま電子書籍リーダーでも読めるし、プリントアウトして製本すれば、本にもできるわけだ。

スキャンしたデータを整理していると、お城の料理人であるサンバクさんが現れた。

白い料理服を着て、一口料理を食べただけで使った素材が解ってしまうという、リアル美味○んぼのような人である。

やって来た彼が、リリスとアマランサスの前に平伏する。

「長年お世話になったお二方に、なにも報えず——このサンバク、慚愧に堪えません」

「なにを申す。いつも妾と母上に、美味なる料理を振る舞ってくれたではないか」

「それが私の務めでございますから」

「妾のわがままにも、そなたは必ず応えてくれたしのう……」

「いいえ、ぬるま湯に浸かり凡俗になりがちな料理を、姫殿下の言葉が奮い立たせてくださいました」

「リリス共々、世話になったの、サンバク」

アマランサスが、彼に声をかけた。

「勿体無いお言葉」

「のうサンバク——妾と母上は、すでに王族籍を捨てた故、もはや畏まる必要などないのだぞ？」

「なにをおっしゃいますか。このサンバク——身分などに関係なく、お二方に敬意を払わせていただいております」

彼の話はこれで終わりかと思ったが、さらに続きがあった。

「もし、お許しがあれば、お二方に同行したいのですが……」

「それはならぬ。城の料理番を捨ててつもりか？」

「恐れ多くも、後継は育ててありますので心配御無用でございますし——ケインイチ様の料理や菓子に触れ、この身がいかに浅学だったと思い知りました」

王女がちらりと俺を見る。

「あゝサンバクさん。新しい領ができる、お聞きしたと思います

が、本当に辺境でなにもない状態なのですよ。当然、屋敷もあります。あなたがどの料理人が来てくださるのは嬉しいのですが、屋敷の建設が終わってからにしていたけると——どうでしょうか？」

「……この身を受け入れてくださるとおっしゃるのであれば、承知いたしました」

「ふむ……」

リリースは、「やれやれ」といった表情をしている。

以前、サンバクさんにチョコを食べてもらったのだが、複製はできたのだろうか？

そのことを尋ねてみる。

「いいえ、今のところは原料の当てすらついておらず……」

「そこにいる、帝国から亡命してきた大魔導師の情報によれば、エルフの栄養食にチョコの原料に近いものがあるということでした」

「真でございますか?!」

「ええ」

「なれば——やはり私は、ついていくしか道はございません」

彼の決意は固いようだ。見たこともない料理に対する、料理人の好奇心が抑えられないのだろう。

サンバクさんの件が終わると——今度は、お城の魔導師——カールドンさんがやって来た。

彼は、代々魔道具の研究に秀でている一族だ。

「申し訳ございません！ 研究のために部屋にこもっております、お二方がお城を出ると、先程伺いました！」

「よいよい、そなたには、妾のくだらぬ遊びに付き合ってもらった礼を言わねばな。そなたに幾千万の感謝を」

「勿体無いお言葉！ こちらこそ、私の役に立たない研究に多大な援助をしていただき、感謝の念に堪えません」

いや彼の研究は、素晴らしいものだ。彼の祖父の魔道具もそうだったが、先進過ぎてだれも理解できないだけなのだ。

「カールドンさん。あなたの研究は素晴らしいですよ。ただ、常人には理解できないので、認められないだけだと思いますけど……」

「ありがとうございます！ ……あの、ちょっと小耳に挟んだのですが、お城の書庫にあった蔵書の複製を作ったとか？」

「まあ、確かに作りました」

「一体どのようにして？」

まさかPCの説明をするわけにもいくまい。説明しようがないしな。

俺はしばし考えると、シャングリ・ラを検索して、あるものを買った。

「ケンイチ、なんだそれ？ カメラか？」

アキラが、テーブルの上に載った、木でできた機材を眺めている。

「ピンホールカメラだよ」

「ああ、科学の実験でやったりする」

ピンホールから入った光が結像する、一番原始的なカメラだ。

買ったのは単なるピンホールではなく、小さなレンズがついている、オロシア製のピンホールカメラ。

デジタルカメラではなくて、木製で大判のフィルムを入れるタイプで――値段は2万円。

形だけ見ると、大昔のカメラのようだが、今現在も販売されているものだ。

レトロな写真が撮れると、人気だったりする。

日本製のインスタントカメラも密かな愛好者がいたりするしな。

そして俺がこいつに使うのはフィルムではなくて、光に感光する

ジアゾ感光紙。

設計図などに使う、いわゆる青写真というやつだ。

暗い所で、適当な大きさに感光紙を切って、カメラの中へ入れる。

明るいテーブルの上にカメラを置き、シャッターを開いてしばし待つ。

ピント合わせなどはないので、遠景しか撮れない——F値は固定だが、多分F10ぐらいだと思われる。

構図は、お城の一角と裏庭がL字に入るようにしてみた。

「ケンイチ、それでどうなるのじゃ？」

「ちよっと時間がかかりますので、数十分ほどお待ちを」

「ほう、なにが起こるか楽しみじゃの」

開始から20分ほど後、カメラの中から感光紙を取り出して、日陰でアネモネに魔法を使ってもらう。

「アネモネ、紙を魔法で温めてくれ。お湯より熱い温度で5つ数えるぐらいで」

「解った、ウォーム温め！」

魔法で温められた紙に、青い景色が浮かび上がる。

「おおっ！ 紙に景色が！ 魔法かえ！？」

「いや、これは魔法じゃなくて、光に反応する薬品を使った錬金術だよ」

「……むむ！」

カールドンさんが、紙を手にとりつつ見つめている。

「そりゃ、ブルーフィルムってやつか？」

「おいおい、アキラ。ブルーフィルムはエロフィルムだろ？ それ

を言うなら、ブループリント」

別の言葉でいうなら、日光写真か。

「あっ！ ははは、ワリイワリイ——もう根が下品だからよ。咳ま
で下品なんだよ。ゲヒンゲヒン！ なんちて」

アキラが、頭をかいて大笑いしている。

「けど、ブルーフィルムなんて単語、久々に聞いたぞ」

「俺はブルーフィルム見たことがあるぜ。すげえBBAがセーラー
服着てるやつとか」

「ブルーフィルムをコレクションしている人もいるらしいからな」

「そうそう、マジでそのコレクターがいたんだよ。確かに、あれは
あれで貴重だぞ。昭和の文化財ってやつよ」

どうも、オッサン二人だと、すぐにオッサン話になっていかな。

「話は逸れましたが——カールドンさん。そのような機械で、本を
複写したのですよ」

「……キ、キター——！」

突然、カールドンさんが叫んだ。

「な、なにが来たのじゃ？」

驚いたリリスが、椅子から飛び上がった。

「これは、一体どのような仕組みなのでしょう？」

「えーと、光に反応して色が変わる、薬品を紙に塗ってあるのです」

「光に——それは理解できますが、景色が写るのはどういった原理
なのでしょう？」

「うーん」

俺は少々悩んで、シャングリ・ラから、科学用の教材で売ってい
る組み立て式のピンホールカメラを購入した。

ボール紙製でペラペラだが、原理は一緒だ——1000円である。
ピンホールカメラなので、先端にはピンホールが開いており、終
端にはトレーシングペーパーが貼ってある。

それを組み立てて、テーブルの上に置くと皆に見せ、さらに図を
描いて説明をする。

「このように、先端の穴から入った光が、終端に結像します」

「おおっ！ 箱の中に景色が逆さまに映っておる！」

「これは、面妖な……」

リリスは箱を覗き込み興味津々、アマランサスは疑り、訝しげな
表情をしている。

二人の性格の差がよくでている光景だ。

「これは魔法ではありませんよ。これと同じものをつくれば、同じ
現象を起こすことができます」

「なるほど！ この終端に、光で色が変わる紙を置けば、映った景
色を写し取ることができる……」

「ご明察」

「……す、素晴らしいい！ ハマダ伯様、お願いがございます」
カールドンさんが、地面に膝をつき平伏した。

「な、なんででしょうか？ まだ正式に授爵したわけではないですか
ら。ケンイチでいいですよ？」

「ケンイチ様！ このような未知の知識と見識、到底私の及ぶところ
ではございません。望みが叶うのであれば、あなた様の弟子とな
り、鍊金と魔導を極めたい所存でございます」

「いやゝあの？」

「何卒！」

「よくケンイチ、男にもモテモテだな」

アキラの茶々が入る。

「それは構わないのですが――」
先に料理長のサンバクさんにも話したとおり、現地にはなににもないことを、彼にも伝える。

「確かに、私の研究資料等も持っていかなければなりませんし、場所がないとなると……」

「そうなのですよ。私はアイテムBOXがあるので、平気なのです
がね」

「はあ……」

カールドンさんは凄いがっかりしたようだが、諦めてはいない。

「それでは、屋敷ができて街ができる頃には、小生も馳せ参じます
ので、よろしくお願いいたします」

彼は深々と頭を下げて、自分の部屋に戻った。

確かに彼の魔道具の技術があれば、この世界に革命が起こせるかも知れない。

それはそれで、この世界にどんな技術が広がるのだろうか、楽しみで仕方ない。

「ケンイチ、結構な大所帯になりそうなんだが」

アキラの言うとおりだし、本拠地に屋敷ができれば人がより集まってくることも考えられる。

人が集まれば、それを当てに商売する人も集まってきて、雪だるま式に増える。

人口が増えれば、人々の雇用を満たすための産業も必要になるだろう。

プリムラがサンタンカの村で行っていた、スモークサーモンなど
もいいだろうな。

「大所帯になったり、領の経営となると、経理が大変そうだなあ……」

「それは、私とマロウ商会にお任せください」
プリムラが名乗りを上げた。

「勿論、任せるよ。俺は基本どんぶり勘定だからな」
会計簿や、小遣い帳などつけたことがない男だ。

「魔法は私に任せて！ ケンイチのお手伝いするから！」
「おう、アネモネも頼むぞ！」

アネモネの頭をナデナデするが、これは世辞などではなく——本
当にそのぐらいの実力を伴う大魔導師に、彼女はなりつつある。

「俺たちの向かう場所って土地はあるのか？」
アキラは目的地の広さが気になるようだ。

「森で未開だけど、湖の辺りに土地はたっぷりとあるぞ」
「湖ってどのぐらいの大きさなんだ？」

「正確には測ってないけど、日本でいうと——ちよっと丸い琵琶湖
ぐらいの大きさがあると思う」

「そんなにデカイのか？」

「対岸側とか行ったことがないしな。マジで前人未到だよ」

「そりゃ——そんな広い土地を治めるとなると、辺境伯なんてこと
になるはずだわ」

それだけじゃなくて、さらに高地もあるしな。その話をしても、
アキラはピンとこないらしい。

「高地ってどんな感じなんだ？」

「元世界に、テーブル状になっているギアナ高地ってあったろ？
高さは低いけど、あんな感じだな」

「じゃあ、ちょっと高い平地がずっと続いているって感じか？」
「そうだな」

俺とアキラが話していると、獣人たちも不安を述べている。

「クロ助どうするよ？ 旦那が獣人に優しい貴族なんて話が広まったら、国中からわんさか獣人が集まってくるぜ？」

「仲間が増えるのはいいことだにや。それにケンイチなら、香辛料の売買に制限つけたりしないしにや」

「そうじゃねえよ。女がわんさか集まってくるって言うてんだよ」

「うにや！ うにやにやにや……」

ミャレーが尻尾をブンブン振っている。イライラしている証拠だ。

「そんなことになったら、ケンイチにブラシをかけてもらう時間が減るにや！」

「それだけじゃねえ、旦那は実力主義者だ。俺たちより、強い女がやってきたら……」

「ふぎやー！」

「おい待て待て、そう簡単にお前達を見捨てるわけないだろ。一緒に苦難を乗り越えてきた家族じゃないか」

「でも旦那、強力な戦力になると解れば……」

「まあ、確かにそれは欲しい。街ができるとなれば、警備だって必要だしな」

「ふぎやー！」

実力者が欲しいといっても、あくまでも戦力としてだ。

「そりゃ能力があれば雇うけど、愛人としてじゃないからな」

「旦那がそうでも、向こうから迫ってくるかもしれないじゃないか」

「そんな先の、あるかどうか解らないことで、右往左往するのは止めろっての」

「ふにゅー」

ミャレーの尻尾が垂れ下がり、完全にテンションが落ちている状態だ。

ニャメナはいつもミャレーにからかわれているので、意趣返しをしているのだろう。

「ケンイチ、騎士団を作ったりするのか？」

「いや、傭兵を雇ったりはするかもしれないが、騎士団はなあ——既得権益になりそうだし」

「まあな。騎士団というよりは、コネの公務員の団体みたいになりがちだし、ははは」

アキラの言葉から、帝国の騎士団もあまり質は高くないようだ。

最初は理想に溢れて結成される騎士団だが、2代3代と続くうちに既得権益化して、タダの名前だけの集団に成り下がるのだろう。

リリスとアマランススも苦笑いしていて、思い当たる節があるようだ。

まだ揉めている獣人たちに、リリスが苦言を呈した。

「そんなに立場を取られたくないのであれば、そなたたちが強くなればよからう」

「うっ！ そりゃ、お姫様の言うとおりだけどさあ」「うにゃー」

「そりゃ、ちよつと面白いかもな。アマランスス、ちよつと稽古をつけてやってくれ」

「心得た」

「え！？」

ニャメナがたじろぐのだが、アマランススに確認を取る。

「剣じゃ勝負にならないだろうから、素手でどうだ？」

「ふむ、よからう。娘たちよ、二人同時でもいいぞえ？」

「畜生！ こんなに舐められて、黙っていられるかってんだ！ い

くぞ、クロ助！」

「えー、ウチは気分が乗らないにゃー」

ミャレーは乗り気ではないようだが。打算の結果なのか、それとも最初から実力差を認めているので、無駄なことをしたくないのか。獣人は実力差による上下関係がハッキリしている。

血気溢れるニャメナはミャレーを説得して、二人同時に戦うことに決めたようだ。

「いっくぞー」

「にゃー！」

素手で対峙した、アマランサスと獣人二人だが――。

アマランサスは、駆け引きもなく、無防備にスタスタと間合いを詰めていく。

「なっ！ くそっ！」

動いたかと思った瞬間、ニャメナが脇腹を押さえて倒れこんだ。

「うぐ……」

「シャーッ！」

慌てて飛び上がり、後ろ回し蹴りを繰り出したミャレーであったが、難なく脚を捕まえられて、地面へ叩きつけられた。

「ふぎゃー！！」

「はいはい、終了ね！」

試合を止めて、ニャメナの傍に駆け寄ると、俺の回復ヒールを使う。

「アネモネ、ミャレーのほうを見てやってくれ」

「うん」

アネモネが近付こうとすると、ミャレーが立ち上がり、俺に抱きついてきた。

「なんでウチには、やってくれないにゃー！　ウチもケンイチのほうがいいにゃ！」

「大丈夫そうじゃねえか」

「痛いにゃー！」

「ミヤレー、ちょっとまって！　下が、コンクリや岩場だと即死しそうな攻撃だったけど……元気だな」

それについてアキラが戦場で経験した所見を述べる。

「獣人の頭蓋を見たことがあるが、かなり分厚いぞ。1cmぐらいあって、脳震盪にもかなりの耐性がある」

「なるほどな」

「あいつつ！　いてえ！」

「肋骨にヒビでも入ったかな？」

ちよつと強めに回復^{ヒール}の力を送る。

「はわっ！　ふああ！　……ふぎゃー！」

気持ちよさそうにしてたニヤメナが、飛び上がった。ミヤレーが彼女の尻尾を引っ張ったのだ。

「もう、ウチもやってにゃ！　頭が痛いにゃ！」

「クロ助、てめえ！」

「こら、喧嘩するな」

ミヤレーの頭を撫でながら、回復^{ヒール}のパワーを送る。

「にやにや、にやあああ——ふぎゃー！」

俺に頭を撫でられて、気持ちよさそうにしていたミヤレーが飛び上がった。

仕返しに、ニヤメナがミヤレーの尻尾を引っ張ったのだ。

「にやにするにや！ いいところだったのに」

「ふん！」

「お前ら余裕あるな」

彼女たちとアマランサスとの間に実力差があるとは思っていたが、これほどとは思わなかった。

これが達人の技か。

その後、リリースとアマランサスの荷物もまとめ終わったようで、荷物を積んだパレットを俺のアイテムBOXへ収納する。

その中には、彼女たちの財産も含まれている。

各々金貨で約1万5千枚——日本円で30億円。

二人の合計で60億円の大金であるが、これが彼女たちの全財産ではない。

現金化できなかった不動産などはそのままなのだ。まったく、ある所にはあるもんだ——と感心するしかない。

—————◆◆———

——何事もなく、まったりと過ごし、2日後。

お城の謁見の間に、貴族や大臣、役人たちを集めて、俺の授爵と拝領式が行われた。

奥の正面には玉座に座る国王陛下と、円卓会議の王族の女性。

——名前、なんて言ったっけ？ ……忘れた。

この謁見の間って何回目だっけ？ ——えーと、3回目か……やつともな謁見のような気がする。

今回、謁見の間に入ったのは俺とリリースだけだ。

正式な授爵ということで、いつもはラフな恰好の俺も、それっぽい服を用意。

シャングリ・ラで買った、コスプレ用の白い法衣を着用している。

正中線に金糸で刺繍がはいっており、見た目もちょっと立派に見える。

肩から、青い生地には刺繍が入った肩帯もぶら下げてみた――2つ合わせて値段は1万円である。

端から見れば、貴族というよりは、どこぞの司祭のような恰好だ。

こんなコスプレだが、リリースとアマランサスに見せても問題ないらしいので、この恰好に決まった。

謁見の間の両側にずらりと並ぶ王都の貴族や、騎士団たちだが――有力な貴族たちは、イベリスへ向かう街道で落ちた橋の普請へ出向いているので、不在らしい。

並ぶ面々であるが、ここで大暴れした平民が、いつの間にか授爵して拝領までするってんだから、苦々しく思っている連中も多いことだろう。

俺から言わせてもらえば、「知るかそんなこと」である。

大体、俺は被害者だ。もっと大騒ぎになって、この国が傾いてもおかしくなかったっていうのに、俺の寛大さに皆は、ひれ伏してほしいわ。

「あの男が授爵だど？」

「確かに魔導師としての実力はあるが、平民ではないか」

「しかも、辺境伯だというではないか」

「あの者が国の危機を救ったのは、事実として認めなくてはならないだろう」

「しかし――」

色とりどりの華やかな衣装をきた貴族たちがざわついている。

「なぜ、アルストロメリア様が玉座にいらっしゃるのだ」

「王妃様が辱めを受けて、下野されたというのは、真なのか？」

貴族たちの間でも、侃々諤々である。

「静まれーい！」

玉座から立ったアルストロメリアの一声で、謁見の間が静まり返った。

国王は、今回のことでよほど心労が溜まったのであろう——暗い顔で生気のないまま玉座の上に置物になっている。

本当にお飾りである。

「ハマダ伯が授爵し拝領することは、すでに決定事項である。これに異を唱える者は、王家への不忠とみなす！」

王族にそう言われれば、貴族たちや騎士団も、もはや黙るしかない。

そのまま式は肅々と進み、俺は貴族となった。

少なくとも、王都周辺の貴族には、新しい貴族と領ができたのを周知できたように思える。

本当に色々とあったが、後は俺たちの家があった場所に帰るだけだ。

王族のお遊びに呼び出されたようなもののなのに、なんでこんな大騒ぎになる。

どうしてこうなった？

湖の辺りに、ほんのちよつと住んだだけの場所を思えば、故郷に帰るような郷愁が湧き上がる。

やはり、あそこが俺たちの故郷に相応しい場所ってことになるのだろう。

127話 サトウキビとカカオ

俺は授爵して辺境伯になり、拝領もした。もはや立派な貴族である。

おまけに元王女であるリリスが正室でついてくる。

その上、奴隷落ちした元王妃――アマランサスまで一緒という、わけがわからない状況。

一緒に連れていくのを約束して、奴隷契約を解消しろと言っても、アマランサスは頑としてゆずらない。

意味が解らないが、放置するわけにもいかず、俺の領地へ連れていくことになった。

俺が拝領した領地は、あの湖の辺りと、その近くにあった崖の上の高地が全部。

治める領地はほとんどが無人地帯だが、あまりに広いために、異例ともいえる辺境伯の地位をいただいた。

このような事態は前代未聞であるという。

問題があるとすれば、貴族になり拝領したばかりなので、王都の一部の貴族にしかそれは知られていない。

そのため近隣の貴族領には、いずれ挨拶に向かう必要があるだろう。

丁度、王都周辺の有力貴族が、イベリスへ向かう街道に架かる橋の普請を行なっているようなので、挨拶をしていくつもりだ。

朝、出立の前に、皆で朝食を取る。

俺の家族と、アキラの家族、さらにメイドさんによる決死隊が11人も増えた。大所帯である。

決死隊とは穏やかではないが、これから向かう先は、家もなにもない僻地である。

森を切り開き整地して家を建てるまで、野宿が基本。

魔物の襲撃もあり得る話だし、決死隊といっても過言ではないとはいえ——チート持ちが二人に大魔導師が二人、その上に武術の達人であるアマランサスも戦力に加わった。

戦力としては、もはや小国の軍隊並だ。

そのアマランサスが一緒に座り朝食を摂っている。

俺の左隣にリリスが座り、その隣に彼女が座る。

「おいアマランサス、いい加減その奴隷契約を外さないか？」

「……ぐぐ……」

彼女が黙って横を向き、何かに耐えている。

主人の命令に逆らっている状態なので、苦しいのだろう。

「ふう……命令撤回。ほら、アマランサス、ここへ来なさい」

俺が、椅子を持ち上げて90度回転させると、膝の上に彼女を呼ぶ。

基本的に俺の命令に逆らえないらしいので、なんでも言うことを聞く。

別に俺もそんなことをさせたいつもりではないのだが。

俺の膝の上に載った彼女の頭とお腹をなでながら、語りかける。

「なあ、奴隷契約を解除すれば、もっと気持ちいいことをしてやるぞ？」

「……ぐぐ……」

彼女は目を閉じてじっと閉じているが、甘い言葉にも耳を貸さないようだ。

「しょうがない、好きにしてくれ。命令解除」

突然、アマランサスがぐったりする。そのぐらいに身体に負荷が掛かっていたのだろう。

こんな状態でも「うん」と言わないとなると、契約を解除させるのは無理だろうな……。

彼女を抱きかかえて椅子に座らせた後、自分の席に戻ると――今度は、リリースが俺の上に乗ってきた。

「そなたはいつ、妾に手を出すのじゃ！」

「子供なんて作れる状況じゃないし」

「ぐぬぬ……子供は作らぬとも、手を出せばよいではないか」

「まあ、そのうちな」

「もう！ 私のほうが先なんだからあ！」

今度はアネモネが抱きついてきた。

彼女たちは、本当に肉体関係を望んでいるのではなくて、甘えたいだけなのだろうと思う――多分な。

二人を抱いてナデナデする。

「「ふわあああ」」

「おっと、力を入れすぎた」

「よお！ 辺境伯様はモテモテだな」

アキラの家族も戻ってきて、俺たちとは別のテーブルで食事を摂っており――この後、出立の準備をする。

レイランさんのところには、ひっきりなしに貴族どもから専属魔導師の依頼が舞い込んでいたようだ。

そんなの受けるはずないだろうけどな。彼女も貴族が嫌いみたい

だし。

帝国にいた時から、彼女を愛人にしようと貴族たちが押し寄せて、辟易してたらしい。

「アキラも貴族になったらどうだ？　俺が認めれば、准男爵などの1代貴族ならOKのはずだぞ」

「冗談よし子さん。そんな面倒なものはパス！」

俺も正直面倒なのだが、色々と総合すると、この世界なら貴族のほうが便利そうだ。

辺境伯なら、他の貴族にまわりつかれる心配はないしな。

辺境伯の上といたら、公爵しかないわけで。

「貴族になって、レイランさんが正室になりゃ、彼女に言い寄るやつもいなくなるぞ？」

「なるほど——そういう手もあるか……」

アキラが真剣に悩んでいるが、彼の性格からして貴族になるとも思えない。

食事のあと、パレットに積まれたメイドさんたちの荷物を俺のアイテムBOXに収納。

結局、リリスとアマランサスの荷物は、大型のパレット20個分になった。

「こんなに荷物を持っていても、多分入れる場所がないと思うぞ？　そんなに巨大な屋敷なんて作るつもりもないし……」

「邪魔なら売ればよい」

「売るなら、俺の魔法の糧にしてしまおうが……」

「なら、それでもよい」

リリスとアマランサス、双方がうなずく。あまり愛着があるわけでもないようだ。

「でも、なあ——屋敷が出来たら、毎日こうやって青空の下で食事
ってわけにもいなくなるなあ」

「いままでと同じように、食べればいいでしょ？」

「アネモネはそう言うけど、領ができて屋敷ができれば、人が集ま
ってくるかもしれないし。街の皆が見ている前で、食事をするのか
い？」

「うーん……」

彼女には、ピンとこないようだが、新しい領ができれば、新しい
土地を求めて、人が集まってくる可能性は十分にある。

お城から、何人が引越してきそうだし——ソバナのドワーフた
ちも来てくれるのだろうか？

俺の足元にベルがやって来たので、毛皮をなでながら話をする。

「それで、ケンイチ。新しい領で手始めに何をするんだ？」

アキラの質問に答えて説明をする。

「まずは——移住者に土地と住宅を配って、街道までの直通道路の
敷設だな」

「公共事業か——基本だな」

「ちよっと待ってくれよ、旦那！ 住宅って、家を配るっていうの
かい？」

ニヤメナが慌てて、話に入ってきた。

「配るといっても、家も土地も領の物だし、勝手に売買とかはでき
ないぞ」

「でも、ただで配るなんて……」

「家を作るために、職人や人が集まり仕事ができるだろ？」

「人が集まれば、その人を目当てに商人が集まる……」

プリムラも会話に入ってきた。

「そう、そうやって人が雪だるま——っていつでも解らんか。とにかく、どんどん人が増えるんだ」

「そんなこと、獣人じゃ思いつかないにゃー」

ミヤレーがテーブルに肘をついて、ため息をついている。

「勿論、全ての住民には配れないから——希望者が多い時は、くじ引きで決めたりする必要があるだろうな」

アキラは、新しい領の産業が気になるようだ。

「湖にはマスが沢山いるから、スモークサーモン作りだな」

「おおっ！ いいねえ。スモークサーモンは好物だぜ。ビールに合うだろうなあ……」

「近くの崖からは、鉱石も出るし——うーん、あとは……チョコ作りをすれば儲かるかもな」

「チョコレートか！ そりゃ、王侯貴族が食いつくな！」

「なに?! チョコだと！ それは真か?!」

「それならば、妾も金を出すぞえ?!」

リリスとアマランサスが、ものすごい食いつきを見せた。

「そうすると、まずはカカオの実の問題が——」

アキラの話では、エルフがカカオに似た木の実を使って、健康飲料みたいなものを飲んでいるという。

シャングリ・ラから、チョコを買ったり、カカオパウダーを買えば早いのだが、それでは住民を養うための産業にならない。

俺に何かあれば、シャングリ・ラは永遠になくなり、そこで終了だ。

そのためには手始めにエルフと接触して——と考えて、はた思った。

シャングリ・ラにカカオの実って売ってないのか？　そう思って早速、検索してみた。

すると売ってる！　カカオの実だ。1個1500円ぐらいらしい。

「ポチツとな」

眼の前に、ラグビーボールより一回り小さい木の実が落ちてきた。茶色でぷよぷよと柔らかい。

「ケンイチ、それはカカオじゃね？」

「ああ、多分」

「エルフのところで見たのと似てるぞ」

包丁を取り出して、木の実を割ってみる。カカオの実の実物なんて初めて見たよ。

縦に割ると――白いネバネバに包まれた芋虫のような塊が出てきた。

「ふぎゃ！　虫にゃ！？」「うわっ、きめえ！」

獣人たちが騒いでいるが――まあ、ぱっと見、芋虫にも見えるし、虫の卵のようにも見える。

「おい、アキラ！　私にこんなものを食べようというのか？！」

「食わせねえから黙れ、クレメンティーナ」

女騎士と、アンネローゼさんが、カカオの実を気味悪そうに眺めている。

「マジで同じだわ！　ただ、エルフのカカオは真っ赤なんだよ」

彼は、エルフと付き合いがあったようだから、エルフのカカオを知っているらしい。

「そうなのか。それじゃ全く同じものじゃなくて、近縁植物とか？」

「かもな」

「このような木の実が、あのチョコの粉になるのかえ？」
リリスが、ネバネバしているカカオの実を指で突いている。

「そうみたいだな。アキラ、カカオパウダーの作り方は解るか？」
「俺がエルフから聞いた話では――納豆みたいに発酵させて作るらしい。その後、乾燥させて粉にする」

「難しそうだな」

「そのとおり。結構、難しいらしいぞ？」

この世界には高度な機械はないが、代わりに魔法がある。
温度管理もできるし、発酵も魔法で促進できるようだ。

「パウダー云々の前に、これを地面に埋めて、木になるかって話だよな」

「ダメなら、エルフが使ってるカカオモドキをゲットして、育てるしかねえ」

唸っている二人に、黙っていたアマランサスが口を開いた。

「聖騎士様、肝心なことを忘れてるわえ」

「肝心なこと？ そりゃなんだ、アマランサス」

「砂糖じゃ」

「「ああ」」

アキラと二人で膝を打つ。

そういえばそうだ。俺は、シャングリ・ラから買ってるから、気にしたこともなかった。

「そういえば、この世界の砂糖ってどうやって取るんだ？」
アキラがそれを知っているようだ。

「森の中にな、白やピンクの小さい花が咲くんだが……」

「ああ、見たことがあるな。カタクリに似ている……」

「そう、それ！ その植物の小さな球根に糖分が溜まるんだが、栽培が難しい」

「畑じゃ無理なのか？」

「そうなんだよ、森の中でしか育たない」

「そりゃ砂糖を取るの大変だ。それでも森の中で栽培をして、砂糖を精製している業者がいるという。」

「プリムラは当然知っているんだよな」

「はい、砂糖業者は極秘でして、貴族の直轄になっている所が多いです」

「わあ、砂糖の大量生産とかやって、利権潰したら怒るだろうなあ……」

「ははは、そりゃおもしれえ！ やろうぜケンイチ！」

「アキラが乗り気だ。だが、砂糖の元はどうする？」

「チョコと同じように、俺がシャングリ・ラから白糖を買ってもしようにない。」

「本当は、それが一番安上がりなんだけどな。」

「俺は、またシャングリ・ラを検索してみた。」

「サトウキビの苗とかないだろうか？ カカオの実が売っているぐらい、なんでもあるシャングリ・ラだ、あるかもしれない。」

「検索すると、あるじゃないか——サトウキビが。」

「ポチッとな」

「高さ2 mほどの、ススキのような植物がバサッと落ちてきた。」

「ケンイチ！ こりゃ、もしかしてサトウキビか？！」

「さすがアキラ、よく知ってるな」

「南大東島で、こいつの刈り取り手伝ったんだよー」

「ええ？ そんな島まで行ったのか？」

「ああ、小笠原諸島でコーヒーの木作って、コーヒー飲んだりしたぜ、ははは」

マジで日本中走り回ってるんだなあ——なんと羨ましい。

いや、俺にもその時間と余裕は、十分にあったはず。ただ行動を起こさなかったただけなのだ。

「俺たちが向かう先は湖で水は沢山あるし、岸は砂地だ。サトウキビ栽培にちょうどいいだろう？」

「ちがいない。オマケに琵琶湖ぐらいデカいんだろ？」

「そのとおり、場所は山程ある」

一見なんの変哲もない草に、リリスが首を傾げている。

「ケンイチ、この草がなんだというのだえ？」

「リリス、これが砂糖を作る植物なんだよ」

「なんじゃと?!」

「ケンイチ、これ食っていいか？」

「これは植えるやつだからダメだって」

シャングリ・ラを検索すると、食用のサトウキビのパック詰めが売っている。

「ポチッとな。ほらアキラ、齧るなら、これを齧れ」

草の茎が3本、ビニルパックに包まれているのが落ちてきた。

「おおうっ！ 南大東島で売ってたやつと同じやつじゃねえか！」

アキラはパッケージを乱暴に破ると、アイテムBOXから取り出したナイフで、皮を剥き始めた。

それを細長く割っている。

「そうやって食うのか？」

「ああ」

「アキラ、お前正気か？ 草を食^はむなど、馬や牛だぞ？」

「クレメンティーナ、お前は黙れ！ アンネローゼは食うよな？」

「はい、いただきます……凄く甘いですわ！ 草が甘いだなんて！」

「センセ！ センセも食べてみるかい？」

「この草が本当に甘いというのですか？」

「本当だよ。俺は嘘つくけど、アンネローゼは、つかないでしょ？
おそろおそろ、サトウキビを齧ったレイランさんだが、甘いのが
解ると、バリバリと齧りはじめた。」

「ほら、ミャアも食べてみるか？」

「うにゃ！」

その光景を見ていた、アネモネが俺の袖を引っ張る。

「ケンイチ」

「はいはい、あまり美味しいものでもないと思うけどな……」

同じ物を買うと、複数バラバラと落ちてきた。

アキラの真似をして、サトウキビの茎の皮を剥く。

「ほら、飲み込まずに齧ってチューチュー吸う感じだな」

「うん……チューチュー……噛めば噛むほど甘くなる！」

「ケンイチ！ 妾にもじゃ！」

皆にサトウキビの茎を配る。テーブルにはゴミ箱代わりのボウル
を置いた。

歯と顎が強靱な獣人たちは、そのままバリバリと齧っている。
皆でサトウキビを齧って吸っているが、すごいシユール——いっ
たいどういいう光景なんだ。

「なんじゃこれは！ 本当に草の茎が甘いとは！」

「この汁を搾って、煮詰めれば砂糖になるんだよ」

「なんと！ そなたは神か？！」

リリスが目を見開いて、とんでもないことを言い出した。

「聖騎士様！」

続いて、アマランサスが俺に抱きついてくる。

「あゝ、なんなんだよ！ 離れろ、アマランサス」

「嫌じゃ！ ぎゃああ！」

アマランサスが、地面で転がっている。

「なんなんだよ、お前は！ 命令取り消し！」

呆れて、彼女を抱きかかえると身体をなでる。痛みを取るためだ。

「はあはあ……ふわああ！」

「私もお！」

今度はアネモネだ。

「もう、こら！ いい加減にしないと怒るぞ！」

皆がさっと離れた。

「ケンイチ！ 黒蜜が取れりゃ、酒だってできる！」

「サトウキビから作る酒ってなんだっけ？」

「ラムだよ！」

「ああ、角が生えてて、虎縞のビキニ着てる……」

「その通りだっちゃ！ って違う！」

「ドワーフが来てくれれば、蒸留器も作れるかもな」

「おおっ！ 美味しい酒がないなら、自分で作りゃ飲み放題ってわけだ！」

その話にニヤメナが乗った。

「アキラの旦那。その酒って美味しいのかい？」

「ああ、美味くて、強い！ ドワーフも喜ぶだろう」

「美味くて強い酒を作るって話なら、ドワーフたちも協力すると思うぞ」

「多分な……中々面白そうだな」

アキラがやる気を出している。

「どうだ、プリムラ？ 砂糖、チョコ、そして酒！ 良い商売になりそうじゃないか？」

「ケンイチ！」

今度は、プリムラが抱きついてきた。

「ケンイチ、どうしましょう。素晴らしい商売の予感に、ドキドキが止まりませんわ」

「もしかして、マロウ商会が王国一の商会にとどまらず、大陸一の商会になるかもな」

「ケンイチ！」

興奮したプリムラが、唇を重ねてきた。こんな積極的な彼女は初めてだ。

「あゝ、私も！ 私もお！」

「妾もじゃあ！」

アネモネとリリスが一緒に抱きついてきた。

「はいはい、お前たち離れなさい！ あ、でも——砂糖って国の専売じゃなかったっけ？」

「そんなもの——妾たちがいれば、どうとでもなるわえ」

リリスがふんぞり返り、アマランサスが扇子で口元を隠す。多分、笑っているのだろう。

「ですよ〜それじゃ、方針が決まったところで、出発の用意をしないとな」

皆を身体から離して、しばし考える。

「ケンイチ、だいぶ人数が増えたけど、大丈夫か？」

「アキラには、またプ○ドを出すから、それを使ってくれ」

「それはいいが――そっちはどうする？」

「新しいのを召喚するか……」

え〜と8人とベル――一緒にメイドさんが11人。やっぱ、マイクロバスだな。

シャングリ・ラを検索する。ここはやはり信頼と実績で、T田のコ○スターだな。

29人乗り、350万円。13万km走ってるが、こういう商業車で10万kmなんて、序の口だ。

「はいはい、デカイの下ろすから、場所を空けて〜！」

「また、召喚獣かにゃ？」

「コ○スター召喚！」

長く白い車体が落ちてきて、地面でバウンドした。

ハ○エースが約4.7m、コ○スターは約7mなので、2.5mほど長い。

「「「おおおっ！」「」」」

「コ○スターか！ 確かに、これなら乗れるな」

「もっとデカイのも呼べるが、小回りが利かないからな。街角とか曲がれない」

「それは、あるな」

「それに道があまり良くないんで、デカイバスだとスタックする可能性がある」

「なるほど……ありえる」

それに、大型バスなんて運転したことがない。最近のはオートマチックATらしいけどな。

左側にあるドアの取手に触れると、スライドして開く。

早速ベルが一番乗りして、中をパトロールしている。

「ヒヤッホウ、一番のりだろ」 「トラ公ずるいにゃ！」

獣人たちが続いた。

マイクロバスの後ろに、プ○ドを出す。

「また、この化物に、私を乗せようというのか?!」

「それじゃクレメンティーナ、お前は歩いてこい」

「そんなことができるはずなからう! 大体、何リーグ離れているのだ?」

「ケンイチ、サライまで何リーグぐらいあるんだ?」

「えーと400kmぐらいだから――250リーグか」

それを聞いた女騎士が、アキラに掴みかかる。

「無理に決まってるだろ!」

「じゃあ、とっとと乗れ!」

「はあっ! ちょっとまで! ひいい!」

アキラは祝福の力を使って、強引に女騎士を車に押し込めたようだ。

マイクロバスの前では、メイドさんたちが固まっている。

メイド長のマイレンさんを筆頭に10人。そのうち一人は、俺たちと一緒にソバナまで同行してくれた女性だ。

もうひとり、知っているメイドさんがいる。お城の書庫で本のコピーを手伝ってくれた女性だ。

「メイドさんたち、辞めるなら今のうちだよ」

「いいえ、覚悟は決まっていますし」

「なにもない所に行くんだよ？ お城勤めっていえば、憧れの職業なんじゃないの？」

「確かにそうですけど……カルミアの話では、美味しいものが沢山食べられるって話だし——」

カルミアというのは、俺たちと同行したメイドさんの名前だ。

「そう！ さっき聞いてたけど、砂糖だって作るって言うじゃないですか！」

「まあな」

「それに——いい匂いにする石鹸とか、髪の毛が綺麗になる薬とかも、使えるって話だし——」

「あなた方！ 辺境伯様に対して、なんという口の利きかたを！」
マイレンさんの一喝に、メイドたちが並んで、頭を下げた。

「ああ、俺は構わんから」

メイドさんたちに話を聞いても、決意は固いようだ。

まあ、それならとやかく言うまい。

出発の準備をしていると、ぞろぞろと派手な服を着た人々がやって来た。

役人、大臣、宰相、王族円卓会議の面々もいる。

見送りに来たのか？ 別れというと、涙がつきものかと思うが、それに反して、皆がニコニコ顔だ。

筆頭らしい、アルストロメリアという王族の女性が話しかけてきた。

「出発するのcae？」

「はい、すぐに出来ます。色々とお世話になりました。本当に色々と」
「そう嫌味を言うものではないぞえ？」

「長年お城にいた王族が二人もいなくなるというのに、ずいぶんとご機嫌のようで」

「新しい門出に、暗い顔は似合わぬ故」

よく言うぜ。この女も相当なタヌキだな。

「これが、人を乗せて走るといふ鉄の召喚獣かえ？」

アルストロメリアは、鉄でできたコ○スターを眺めている。

「何人乗せて、1日でどのくらい走れるのだえ？」

「約30人乗せて、300リーグぐらいは……」

「本当かえ？」

「嘘は言いませんよ」

彼女が、俺の方を向くと、首に手を回してきた。

「領が潰れたら、妾を訪ねるがよいぞ？」

「潰れる前提ですか？」

「聖騎士なら、妾の身体も好きにしてもいいのだえ？」

「アルストロメリア様！ お戯れもほどほどになさいませ！」

慌てて、リリスが間に入ってきた。

「戯れではないのだが？」

「元王族が二人で、精一杯ですから、ご遠慮いたします」

「ふん……ユリウス！ こちらへ来るがよい！」

アルストロメリアと呼ばれて、短い金髪の若い男が歩み出た。背が高いキリリとしたイケメンだ。

黒い制服の近衛騎士とは反対に白い制服を着て、胸に刺繍が施されている。

多分、25歳ぐらいか。

若い女の子にモテそう。その証拠に、マイクロバスに乗ったメイドさんたちが、彼を見てキャッキャウフフしている。

紹介してくれた王族の話では、紋章官という職種らしい。湖の畔に連れていく人材が、増えそうだ。

127話 サトウキビとカカオ（後書き）

密かに連載中→←

白い翼の物語　→異世界で発掘した飛行機械で、ドラゴンを倒してお姫様を助けちゃう話→

<https://ncode.syosetu.com/n1853fl/>

128話 貴族たち

やっと湖の畔に帰ることが出来るようだ。

連れていく人数が増えたので、新しい車——マイクロバスを購入して皆を乗せた。

見送りに来ていた王族——アルストロメリアが、一人の男を俺に差し出した。

短い金髪が美しい背の高いイケメンである。

「ケンイチ、そなたが貴族になったのなら紋章官が必要であろう？

連れていくがよい」

「私の監視役ですか？」

「どう思ってもいいが、役に立つ男だぞ？」

一応、紋章官だという男に尋ねる。

「君は、いいのか？ 僻地でなにもないぞ？ 魔物に襲われるかもしれない」

「王家に携わり働く時点で、その覚悟はできております」

答える彼に嫌味を感じはしないし、邪な感じもない。まあ見た目じゃ解らんけどな。

「なにも、こんな貧乏クジを引かんでもいいだろ？」

「いいえ、ハマダ伯の先進的な考え方に、心を打たれました故、私もこの身を預けてみよう」と心に決めました

「ん？ 俺のことを、誰かから聞いたのかい？」

「カールドンから——」

「ああ、彼の知り合いか……彼も、あとでハマダ領に合流する手は

ずになっているから、旧知がいるのは心強いだろう」

「はい、おっしゃるとおりで」

リリースに紋章官について聞くと、貴族全般の知識や、行事の取り
仕切り等々――貴族に関する事典のような職種らしい。

貴族について知りたいことがあれば、なんでも彼に聞けばいいわ
けだ。

たしかに貴族になった俺には、必要な人材だ。

制服の胸に入っている刺繍は、紋章官の証らしい。

そんな彼がおそろおそろ、マイクロバスに乗り込む。

「この鉄の召喚獣って、噛み付いたりしませんよね？」

「大丈夫だよ。それと悪いが、ハマダ領は獣人たちと一緒だからな。
それについての抗議も意見も受け付けない」

「承知しております。謁見の間に獣人と森猫を入れさせたのは、ハ
マダ伯が初めてですから」

「ケンイチでいいよ」

俺は運転席に座ると、シャングリ・ラから、アマチュア無線機を
購入して設置した。

ハ〇エースに取り付けていたものと同じものだ。

早速電源を入れると、無線機がスクランを始めた。

ディスプレイに表示された無線機をタッチして、マイクを取ると
ボタンを押す。

「あゝあ、只今マイクのテスト中。アキラ聞こえる？」

『おゝ、聞こえるぞ。大丈夫だったか？』

「なにが？」

『コ〇スターって24Vのやつもあるからな』

「そうなのか。でも、大丈夫だったぞ。そろそろ出発するが」

『オッケー！』

皆が乗り込んだのを確認して、ハンドル右下のボタンを押して、ドアを閉じる。

後ろを見ると――王族たち、アネモネとプリムラー――次に紋章官とメイドたち、空き座席を挟んで、獣人たちは一番後ろに座っている。

山のようにある荷物は、全部俺のアイテムBOXの中。

助手席にはリリス、俺のすぐ後ろには、アマランサスが座っている。

当然のように席を取られたアネモネは不機嫌だが、すぐに電子書籍リーダーを読み始めた。

時間があるので、本を読むつもりだろう。

運転席と助手席の間には、一段高くなっているスペースがあるのだが、そこにベルがやって来て香箱座りをした。

窓から顔を出して、見送る人々に軽く挨拶。

マイクロバスはゆっくりと動き出した。こいつはATなので、運転は楽ちんだ。

「アマランサス、元王妃がいなくなるっていうのに、皆ニコニコ顔だな！　よほど嫌われていたんだなあ、はは」

ちよっと常軌を逸しているとはいえ、すべて国と王家を守るためだったのに――そう考えると少々可哀想ではある。

「ふん！　聖騎士様と一緒に新しい王国を興して、この世界をひっくり返してやるわ！」

「おい、物騒なことは止めてくれよ」

「……ぐぐぐ……」

後ろをちら見すると――アマランサスが顔を真赤にして、苦悶の表情で下を向いている。これも命令に逆らっているので、苦しいの

だろう。

「まったく——命令解除」

「はあはあ……」

アマランサスの行動に呆れつつ——俺が運転するマイクロバスは、堀に架かった石橋を渡り王都の街の中へ走り出した。

馬なしで街中を走る奇妙な鉄の乗り物を、住民たちが好奇の視線で見送る。いつもの光景だ。

運転席に、マイレンさんに来てもらい、ナビをしてもらう。

後ろの車が離れないようにしないとな。

1時間ほどで、下町を抜けて街道に出るとスピードアップをする。

「凄い速さじゃな！」

アマランサスが驚いているが、時速40kmほどしか出ていない。急ぐわけではないが、道の状態がよろしくないのです、それほどスピードは出せない。

突然大きな穴があったりするし、ハ〇エースやプ〇ドに比べたら、マイクロバスの走破性はかなり低い。

ギャップや、穴を乗り越えるたびに、車内が大きく揺さぶられる。

「ふぎゃ！」

後ろの座席で寝転がっていたニヤメナがひっくり返った。

「聖騎士様、何日ぐらいで、アスチルベ湖に到着するのだね？」

「道がよければ、1日で走れる距離なんだがなあ……まだ橋は落ちているだろうし、橋を越えれば、2日ぐらいで到着すると思う」

「そんなに早くかえ？」

アマランサスが、車の速さに驚く。

「母上、この召喚獣はもっと速くも走れるのじゃぞ？」

「真かえ？」

「ああ、獣人よりも速いし、ドラゴンと同じ速さも出せると思うが、こう道が凸凹じゃな」

「あとで、父上に手紙を書いて、道を補修するようにお願いしよう」

「あの男が、そんなことに金を使うと思うかえ？」

「アマランサスがなくなった途端に、財布の紐が緩むかもな」
後ろをちよつとちら見する。

「聖騎士様の言うとおりじゃ！　じゃが、妾はもう知らぬ！　国がなくなったら、妾と聖騎士様で新しい国を作るのじゃ！」

また床を転がるので、止めろとも言えん。

別に俺がいなくても、アマランサスだけで国が興せそうな気がするんだがなあ……。

だって、めちゃくちゃ強いし。

「おおっ！　おおっ！」

俺たちと一緒に乗り込んだ紋章官の男は、ずっと驚いている。

メイドたちは、車の揺れにキャアキャア叫んでいるが、喜んでいるように見える。

気分は遊園地の乗り物感覚なのかもしれない。

そのまま2時間ほど車を走らせると――広く開けた場所に沢山の天幕が見えてきた。

荷物を積み降ろしている商人の姿も多く見える。

働いている人間は沢山いるのだが、橋が架かっているようには見えない。

マイクロバスを停めて、皆を降ろすと、すぐ後ろにアキラたちもやって来た。

「ケンイチ、どうするのじゃ？」

俺のところに、リリースが来て、今後の行動を尋ねる。

「さて、川を渡るのは簡単だが、ここに集まっている貴族たちに挨拶をしていったほうがいいだろうなあ？　どう思う？」

やって来た紋章官のユリウスに意見を求める。

「ケンイチ様の言うとおりでございます」

「やっぱり、顔売っておいたほうがいいか……プリムラ、昼飯の準備でもしておいてくれ」

「解りました」

「それから、マイレンさん、アイテムBOXに入っている荷物から何か出したいものはあるかい？」

「あの、ケンイチ様——さん付けは必要ございませんので」

「ああ、それじゃマイレン」

「お茶のセットを出していただければと——」

「解った」

アイテムBOXから、メイドの荷物が載ったパレットを出す。

パレットでまとめて収納しているので、一つだけ出すというわけにはいかない。

マイレンが、お茶のセットを取り出すと、再びアイテムBOXに収納した。

ついでに、テーブルや椅子。食器や食材、水なども出す。

「アネモネ、ベルにオヤツをあげてくれ」

「うん」

彼女にチュールを渡すと、耳を立てた獣人たちが飛んできた。

「旦那、俺にもくれ!」「ウチにもにゃー!」

「ほらよ、ミャアにもやってくれ」

「よしきた!」「オツケーにゃ!」

獣人たちが、俺とアキラの言葉を覚えてしまっている。

「まあ、そんなに時間はかからんと思うから」

「はい、いつてらっしゃいませ」

メイドたちが、一斉に礼をする。なんだか、ケツがかゆいが、貴族になったんだから、しょうがない。

根っからの貧乏人の俺には、しばらく慣れないだろう。

「アキラも待っててくれ」

「オツケー!」

周りを見渡すと、普請のための獣人が多い。

商人たちは、どこから持ってきたのか、川に船を浮かべて荷物を運んでいるようだ。

渡りで商売をしているやつらもいる。

橋が完成するまで、船で荷物を渡して、馬車は折返し輸送をしているのだろう。

当然、これだけ人が多ければ、それを目当てにしている商人も集まってくる。

働いてる人夫たちに、食料を売ったり酒を売ったりしているのだ。食って飲んで——ときたら、最後は女。移動娼館がズラズラと並び、男たちから稼いだ日銭を雀っている。

人が集まる所には、必ずといっていいほど、この欲張りセットが並んでいるのだ。

俺と紋章官——後ろにはリリスとアマランサスが続く。

リリスはハマダ辺境伯の正室だからな。

プリムラには悪いが——以前話したとおり、辺境伯ともなれば正室が商人の娘というわけにはいかない。

本人もそれは納得している。

問題はアマランサスだが、奴隷の護衛ということにする。

首に奴隷紋が刻まれているため、ごまかしようがない。チョーカイなどで隠す手もあるのだが、本人が了承しないのだ。

強制するとなれば、また拒否をして地面をゴロゴロ転がるので、始末に負えない。

全くなにを考えているのやら……。

「さて——貴族様は、どこにいるんだろう？」
辺りをぐるりと見回す。

「ケンイチ様、貴族のいる天幕には、紋章を刻んだ旗が立っていることが多いです」

紋章官のユリウスが、俺の知らない貴族の常識を教えてください。
旗がない場合は、大きくて立派な天幕を探せば間違いないらしい。

「へえ、それじゃ俺も紋章を作る必要があるのかな？」

「強制ではありませんが、作ったほうが便利だと思われそうですよ」

シャングリ・ラで、ミシンを買って、自作してやろうか。

PCで図案を描くと、リンクを使って刺繍してくれるミシンを見たことがあったような……。

シャングリ・ラにあるかな？ あとで、探してみようと思うが——
旗みたいなのは無理かな？

「ケンイチ、あそこにあるぞえ？ ああ旗は、ジェイドバイン侯爵の旗じゃ」

どうやら、リリスが知っている侯爵らしい。有力貴族の一人だろ

う。

彼女が指さした白く大きなテントへ向かうと、周りには小さなテントが沢山並んでいる。

これはお付きの役人や、護衛の騎士たちのテントだろう。女はほとんど見えず、男ばかりのむさい光景の中を進む。

ジロジロと見られるが、仕方ない。

「おい見ろよ。とんでもねえ、いい女だぜ?」 「でも首を見ろ」 「ありゃ奴隷か?」

なにやらヒソヒソ話が聞こえてくるが、彼らが言っているのは、アマランサスのことだろう。

一般の兵士や騎士などが、王妃の顔を知っているはずがない。それに今の彼女は、平民のような服装をしているのだ。

大きなテントの前まで行くと、ごつい鎧を着て、剣を持った二人の騎士がガードしている。

「止まれ! 何用だ!」

「私は、ハマダ辺境伯である。近くまで参ったので、ジェイドバイン侯爵にご挨拶をと思った次第。閣下にお取次ぎ願いたい」

「しばし待たれよ……」

騎士が出口の布を捲り、中に入っていた。

中から声が聞こえるが、なんて言っているかは不明。獣人なら解るかもな。

話終えた騎士が中から出てきた。

「お会いになるそうだ」

扉の布を開けて、中に入ると薄暗い。

天幕の上が傘のようになっていて、横の穴から明かりが入ってき

ているのだが、それでも暗い。

明るさを補うように魔法の光なのか青白い光が、灯されている。中には大きなテーブルに貴族が5人ほど座っていて、胸元や脚を出した女性を侍らせている。

貴族たちは、派手な上着を脱いで、白いブラウスのようなヒラヒラのついたシャツ姿だ。

それを見た、リリスがしかめっ面をしている。

「皆様、はじめまして。最近、辺境伯を授爵いたしました、ケンイチ・ハマダと申します。近所まで来ましたので、ご挨拶にと推参いたしました、ご無礼をお許しください」

「ハマダ辺境伯など、聞いたことがない」

貴族の一人が脚を組んだまま、ボソリと漏らした。

「それもそのはず、数日前に拝領したばかりですし。どうぞ、お見知りおきを」

俺は、アイテムBOXから国王陛下の授爵と拝領を記した証明書のような羊皮紙を取り出して、テーブルに広げた。

「こ、これは、確かに王家の紋章……」

「ケンイチ……ケンイチとな？　もしや、城の謁見の間で大暴れしたという魔導師か？」

「その通りでございます。ついで大規模な崖崩れで不通となったベロニカ峡谷を、神速で開通させたのも私でございます」

「た、確かに、峠が開通した報告は受けたが……」

「私の家族の紹介もさせていただきます、こちらが正室のリリス、そちらが私の紋章官です」

「紋章官のユリウスでございます」

ユリウスが頭を下げた。

「紋章官のユリウスといえば、アルストロメリア様の紋章官では……？」

貴族の一人が、彼を知っていたようだ。

「その通りですが、お暇をいただきまして、新しいハマダ辺境伯領に任官することになりました」

「そうだ！ 辺境伯殿！」

「何か？」

一番奥にいた、金髪をオールバックヘアにしているヒゲの御仁が、大声を上げて立ち上がった。

彼に寄りかかっていた女たちが、支えがなくなりひっくり返り、悲鳴を上げた。

はずみで胸ポロをしてしまい、慌てて隠している。

ユリウスが俺の耳元で囁いた。彼は、大都市イベリスがある公爵領の領主、エキナセアベア公爵らしい。

なるほど、やはり紋章官というのは必要なんだな。

「貴殿、王族に大粒の真珠を売ったな！ 私にも売ってくれんか？
！ 正室と側室にねだられて、かなわんのだ！」

「公爵様、残念ながら王族との約定で、王族以外には真珠は売れないことになっておりまして」

「金なら払うぞ！？」

「真珠をお求めであれば、王族の方々にお声をかけてくださいませ」
「我々の仲間になれば、損はさせぬ！ どうだ？！」

「残念ながら、私は王族派の人間でありまして、今のお言葉は聞かなかったことにいたしまする」

「公爵様が、厚意からこう仰せであるのに、貴殿は無下にするつもりなのか？」

他の貴族たちからも非難の声が上がる。

どうやら、貴族たちで徒党を組んでいる模様。

「そう、おっしゃられましたも……」

「あと10年もすれば、カダン王家は衰退するぞ？　そうなれば我ら貴族の時代が来る」

「しかし王族の方々のお話によれば、新しい側室を大量に入れて、世継ぎを沢山産ませる——とのことでした……」

「そのようなことを、あのオーガのような王妃が許すはずがない！　ちよつとまで——俺は、知らねえつと……」

貴族たちの言葉を、黙って聞いていたリリスが大笑いをした。

「ははは！　やはり野に下らねば、解らぬことが多いのう……」

「何がおかしい、この小娘！　無礼であろう！」
貴族たちが、一斉に叫んだ。

「公爵も、ジェイドバイン侯爵も、シラー伯爵も1ヶ月ぶりだが……」

「なにい?!」

彼女の言葉に訝しむ貴族たちだが、その中の一人が気づいたようだ。

「さきほど、辺境伯がリリスと申されていたようだが……」

「リリス……?」

公爵が、じっとリリスの顔を見ている。

「お、王女殿下！」

その言葉に他の貴族たちも、椅子からひっくり返って一緒に頭を下げた。

「妾はすでに王女ではない。辺境伯の正室になる条件として、王室から抜けたのだ」

「な、なんです……」

薄暗くて、よくわからないが、貴族たちの顔色はあまりよろしくないように見える。

そのよろしくない顔色が、真っ青になってガタガタと震え始めた。俺の後ろを見れば、アマランサスから、何やら黒いものが噴き出している。

「おい、ここで暴れるなよ」

この威圧の能力は、彼女の個人的な能力のようだが、聖騎士となつた俺には効き目がなくなったみたいだ。

「そ、そちらの女は、ま、まさか……」

「これは、私の護衛の戦奴でございますが」

「な、なんだと……確かに奴隷紋があるが……」

一応、アマランサスに暴れないように念を押すと、シャングリ・ラから、貴族たちに贈る、贈呈品を検索する。

貴族たちが真珠を欲しがっているのだが、真珠はダメだ——となると……やはりプラチナがいいか。

シャングリ・ラでは金貨と同じぐらいの価値だが、この世界では金より遙かにその価値は高い。

希少価値もあるし、コスパのいい贈呈品だ。ただ贈り物なのに、コインを裸で渡すのは恰好悪い。

シャングリ・ラで宝石箱を検索すると、金の飾りのついた青い宝石箱が売っている。

1個5000円だ。それにプラチナの1オンスコインを4個入れた。

「公爵様、真珠はお売りできませんが、これをお近づきの印に——」
「これは？」

コインを見た、公爵が訝しげな顔をしている。

「これは、私が見つけた白金貨です」

「なんだと！ 白金貨？！ 本物なのか？」

「ええ——」

俺は、コインを一枚摘むと、ナチュラル回復^{ヒール}を使う。魔力を流されたコインが、薄暗い部屋のなかで、ぼんやりと光り始めた。

「「「おおおっ！」」」

公爵はコインを指で摘むと、目の前でひっくり返したりしている。

同じものをジェイドバイン侯爵には3枚、シラー伯爵には2枚、後の子爵たちには1枚ずつ渡した。

男爵がいるようなら、1／2オンス白金貨を渡せばいい。

「それでは皆様、今後ともハマダ辺境伯をよろしくお願いいたします。ああ、それから先程のお話は聞かなかったことにいたしますので、ご安心を——」

「ちよっと待ってく——」

話を聞かずに俺は天幕を出た。一応、顔見せはしたし、これ以上話すこともない。

自領をデカくするとか、野望もないのだ。その前に、領といっても前人未到の僻地だしな。

「やれやれ、貴族共の本音を聞けて、まったく貴重な体験だの」

「しかし、オーガは酷いよな、アマランサス？」

それを聞いた彼女が、俺に抱きついてきた。ファンタジーに出てくるオーガとは違うのだろうか？

ユリウスの話では、身長3m以上の毛むくじらの化物らしい。

「よしよし……」

アマランサスの頭をなでていると、リリスが俺のほうを向いた。

「ケンイチ、そなた——本当に平民なのかえ？ 相手が王族だろうが公爵であろうが、まったく物怖じの『も』の字もないではないかえ」

「間違いなく平民だよ」

「それに、ペラペラと口もよく回る」

「それは私も思いました。平民出身で貴族教育も受けていない方が、王侯貴族と対等に言葉を交わすなんて……」

ユリウスから見ても、そう見えるか。

家族といえども、本当のことを話すわけにはいかんからな。前の設定どおりにする。

「前に言っただろ？ 森の中にいた賢者から教育を受けたと——」

「それでは、ハマダという家名は？」

「祖先がそういう家名を持っていたというだけで、ここ数世代は普通に平民だよ」

「それにそなた、真珠だけではなく、白金貨も持っていたのかえ？
そういえば、リリスには白金貨を見せてなかったっけ？」

「まあな、良い贈り物だろ？」

3人を連れて皆の所に戻ると、川を渡る算段をする。
俺の所にアキラがやって来た。

「ケンイチ、架橋には参加していかないのか？」

「いや、これ以上手柄を取っちゃまずいだろ？ 物流もそれなりに流れているようだし、俺たちは先を急ごう」

「それで、どうやって川を渡る？」

「車を一旦しまつて、ゴムボートで川を何回かに分けて渡る」

「ゴムボートがあるのか？」

「ああ」

そこにマイレンがやって来た。

「ケンイチ様、とりあえずお茶を飲んで一休みなされては？」

「そうだな、ありがとう。マイレン」

皆でテーブルを囲み、お茶を飲んで菓子を摘む。

オヤツにはポテチを出した。

「おおっ！ ポテチは俺も作ったぞ。油ならいくらでもあるからな」

「この世界の芋でも出来るのか？」

アキラの家族も、ポテチを摘んでいる。

「もちろん」

「これは、塩味のお菓子なのに美味しいです」

アンネローゼさんは初めてポテチを食べたようだ。

「ケンイチ、貴族様たちはどうだった？」

「まあ、あんなもんだろ。あまり王家にいい印象を持っていないようだったな。それに元より仲良くするつもりもないし」

「ご近所付き合いもあるだろ？」

「付き合うのは近所のユーパートリウム子爵と、アスクレピオス伯爵だけでいいんじゃない？」

「そうだなあ——とりあえず、他の土地より、自分たちの家の整備だよな」

「その通り。領地の測量もしなくちゃならんし、道路の整備もある」
お茶の後、車を一旦収納して皆で川へ向かう。

人がうじゃうじゃいるので、川の近くまで車で行けないのだ。

架橋工事の上流では、商人たちの渡しが沢山動いているので、邪魔になるといけない。

俺たちは下流に向かい、ちょっと離れた場所で、自然堤防を下る。

前に、ゴムボートで渡った時は、増水直後でコーヒー牛乳のような水が轟々と流れていたが――。

今、目の前で流れている水は穏やかだ。

「よし、ゴムボート召喚！」

黄色いゴムボートが落ちてきた。

「ミャレーとニャメナ、悪いが權を漕いで、渡しをやってくれ。後でオヤツを出すから」

「任せてくれよ旦那！」 「オツケーだにゃ！」

もう、すっかりオツケーとか覚えてしまつて……。

「なるほど、川を渡ってから反対でまた車を出せば、橋がなくても渡れるつてわけか」

アキラが川とゴムボートを見つめて、唸っている。

「そのとおり」

「うわあああ！ 落ちる！ やめろおおお！」

「暴れると落ちるにゃ！」

騒いでいるのは女騎士だ。どうやら泳げないらしい。

泳げないのは、紋章官のユリウスも一緒に、かなり青い顔をしてゴムボートにしがみついている。

以前と違い、かなり人数が増えたが、獣人たちに頑張ってもらい1時間ほどで皆を渡し終えた。

「こんな方法で川を渡るなんてな。湖でも使ったのか？」

アキラが、メイドたちを乗せて川を渡るゴムボートに呆れている。

「魚を捕るときにちよつとな。水難が怖いんであまり使つてなかつ

た」

「まあ、祝福持ちでも溺れれば死ぬからなあ」

湖にいた時は、祝福はなかったが——アキラの言う通りだな。

切りつけられても攻撃が止まったりする祝福の能力だが、溺れた
り窒息すれば間違いなく死ぬだろう。

多分、アキラのマヨネーズ能力で、気管や肺を満たされても死ぬ。
祝福者の天敵は祝福者だ。

その後、しばらく歩き——人気のない場所でマイクロバスとプ○
ドをアイテムBOXから出した。

「よし、皆は乗り込んでくれ」

皆が乗り込んだのを確認すると、再び車2台で街道を走り出した。

129話 旅と吟遊詩人

お城を出発して、この世界での故郷ともいえる、湖畔へ戻る。

途中の橋が落ちたままなので、ゴムボートを出して皆で川を渡った。

川を渡る前、こちら辺を治めている貴族たちに挨拶して贈呈品を渡した。

川に架ける橋の普請を行っていた彼らだが、別に仲良くするつもりもない。

俺には野望もないし、やっと手に入れた自分の土地で、やりたいことをやるだけなのだ。

川を渡り終わると、また皆で車に乗り込む。

周りにいる作業員たちは、鉄の箱に乗り込んでいく俺たちを見て

——いったい何ごとかと、驚いている。

好奇の視線の中、馬なしで動き出す車に、また驚きの声があがる。いつもの光景だ。

俺たちは、アストランティアに向けて出発した。

後続のアキラから無線で連絡が入る。

『おーい、ケンイチ。今日はどこまで行くんだ？』

「この先に、イベリスってデカイ都市があるが、そこの公爵様には挨拶を済ませてしまったので、その先へ向かう」

『さっき行った所に、公爵閣下がいたのか？』

「ああ、王族に反抗する仲間にならないかと誘われたよ」

『はあ——まあ、よくある話だな』

「今日は、イベリスの先にある、アキメネスって街の手前までだな」
『オッケー!』

道は平坦で、天気は快晴。以前のような大雨の気配もない。
最初は怖がって緊張していたメイドたちも、今はキャツキヤウフ
フの会話を楽しんでいる。

アネモネは相変わらず電子書籍を読み、プリムラはメイドたちと
話し込んでいる。

獣人たちは一番後ろの席で船をこぐ。ベルは俺の隣で香箱座りの
まま、じっと正面を凝視。

なにもしていないのに、景色が動いているから不思議なのかもしれ
ない。

順調に車は進み、オヤツの時間にはイベリスの街へ到着した。

このまま街を抜け、夕方になるまで走り続ける予定だが、イベリ
スの街中は人や馬車の往来が多い。さすがは大都市で賑やかだ。

後ろのアキラに注意を促す。

「アキラ、人通りが多いので、注意してくれよ」

『了解! 中々デカイ都市だな』

「王都に次ぐ大都市らしい」

『へえ』

イベリスを通り抜けるためには、街の中を通らなければならない。
バイパスなどは存在しないのだが、街の壁をぐるりと回れば、回
れないこともないだろう。

時間を節約するための行為だが、最初から計画され整備された道
でなければ、その意味がない。

近道のつもりでそんなことをしても、結局は遠回りになってしま
うだけだ。

「そうはいっても、道が混んでいて、ノロノロとしか進まん……」

「別に急ぐ旅ではないのだ、気楽に行こうではないか」

「にゃー」

リリースとベルの言うとおりだが——人混みの動きが完全に止まっていた。

「ちよまでよ」

『おい、ケンイチ。どうなった？』

「解らん、完全に渋滞して止まってしまった。ちよっと降りてみるわ」

『オツケー！』

マイクロバスから降りて、先へ行こうとしたのだが、いいことを思いついて——バスの屋根に上った。

そして、アイテムBOXから双眼鏡を取り出して、先を覗く。

馬車が事故って、道を塞いでるじゃないか。これだけ人がいるんだから、人力でも動かせると思うんだが……。

まあ察しはつく。この世界の人間はタダでは動かないのだ。

まして儲けてる商人が困っているのを見ても、民は手を差し伸べてはくれない。

馬車を動かすために人手を借りると——商人は、その分の金を出費しなくてはならない。

それを渋っているのだろう。

そんな慣習なので、俺がタダで人助けをしたりすると、「お人好し」って言われるんだけどな。

この世界で、そういう施しをするのは、王侯貴族の領分なのだ。

さて、どうするか？

路地に入るとなると道が狭すぎるし、角で車がかえるかもしれない。

大通りは真っ直ぐだが、路地に入ると道がごちゃごちゃなのだ。

「しょうがねえ……降りて歩くか——よつと！」

車の中にいる美女軍団が外に出ると、注目の的になってしまいう気がするんだが——やむを得ない。

屋根から降りると、皆に伝える。

「おい！ 道が完全に塞がっている。降りて歩くでしょう」

「なるほど——歩いて、そのさきでまた召喚獣を出すのじゃな？」

リリースが、運転席の窓から顔を出した。

「そのとおり。このまま待っていたら、暗くなってしまいうし、泊まる場所もないからな」

これだけの人数が泊まれる宿屋なんてないだろう。探すのも大変だ。

皆も納得したようなので、後続の車で待っているアキラにも伝える。

「アキラ、馬車がひっくり返って道が塞がっている。降りて歩くことにしたぞ」

『しょうがねえなあ……ここにはJ○Fがねえしな』

皆が車から降りたのを確認すると、アイテムBOXへ収納する。

車に隠れて乗っている密航者などがいたら、どうなるのか？ 多分、収納されないで終わると思うんだが……。

街の通りで、デカイ鉄の箱が消えると、驚きの声があがる。

お互いの人数を確認して、1列になって歩き始めた。メイドの顔など、まだ覚えていないので、迷子になっても俺じゃ解らない。

マイレンに確認してもらうしかないのだ。

人々の間を縫って歩くが——渋滞していても、ぎゅうぎゅう詰め
の押しくら饅頭ではないので、普通に歩くペースはある。

なるべく目立たないように——と思ったのだが、歩く美女軍団の大移動に人々の視線が集まり始めた。

そりゃ、ウチの家族も、アキラの家族も、メイドたちも、皆が美女ぞろいだからな。

ピカピカに光る毛皮を着た獣人の女や、陽の光を黒く反射し優美に歩く森猫もいる。

なんだなんだと、すぐに黒山の人だかり。森猫を見た街の獣人たちは、その場でお祈りを始めてしまった。

その中でも街の男どもの視線を釘付けにしているのは、レイランさんの爆乳だ。

当の本人は、うんざりした顔をしているようだが。

この隊列に男は3人だけだが、美男子である紋章官のユリウスは、街の女たちの視線を集めている。

はは——どうせ俺とアキラはオッサンだよ。

「こうなるから降りたくなかったんだよ」

「ははは、注目の的じゃのう」

「リリース、笑い事じゃないよ。こんなところを襲われたりしたら、皆を守りきれない」

その俺の言葉に、マイレンが即答した。

「その場合は、我々メイドが盾になりますので、その隙をおつきください」

まあ、それが彼女たちの仕事なんだろうけどさあ——そうもいかんでしょう？

テロの心配はさておき、女性陣がナンパでもされたりしたら大変だと思っていたのだが、誰も寄ってこない。

俺の後ろを歩いているアマランサスが、周囲を威圧しているのだ。屈強な騎士なども動けなくなるほどの、彼女の特異能力。街の住

人を抑えるのにも十分な効果を発揮しているようだ。

そのまま歩いていくと、人の波は2つに分かれて、その中心に車軸が折れた馬車がひっくり返っていた。

「ああ、これか」

商人らしき派手な服を着た人間が、手代と一緒に荷物を別の場所に運んでいる。

「結構派手に、ひっくり返ってるな」

アキラが人混みの中から覗き込んでいる。

「日本だと、すぐに移動させないと大騒ぎになるのに、のんびりしたもんだよな」

「荷物が届くのに10日とか1ヶ月とかザラだからな。数日遅れたって、文句も出ねえし」

「数分刻みのスケジュール管理されている日本が異常だって話なんだろうけど」

俺のアイテムBOXに入れば、故障した馬車も簡単に移動できるのだが、これだけ大渋滞になってしまっただけは、原因を取り除いても人の波は簡単には解消されないだろう。

事故現場を横目に見ながら、スルーしてそのまま人混みを歩く。
結局抜けるのに1時間ほどかかってしまった。

「ふう……なんという時間の無駄」

「そう考えるのが、日本人が抜けてない証拠なんだよ」

アキラの言うとおりでな。もっと、異世界に合わせたスローな思考にしないと。

アマランサスの威圧を使って人を払い、マイクロバスを召喚する。

「プ〇ドも召喚！」

空中から、いかついSUV車が落ちてくる。

「アキラのアイテムBOXなら、プ〇ドぐらいは入るんじゃないのか？」

「どうだろう……やってみていいか？」

「おう、確かめてみたいしな」

「おし！ 収納！」

眼の前から、SUV車が消えた。

「おおっ！ いけるじゃん」

「でも、俺のアイテムBOXは小さいから、あまり荷物が入っていると、入らない可能性がある」

「なるほど」

アキラが車を出すと、家族と乗り込む。それを見て、こっちも乗り込んだ。

そこへ1人の女性が、マイクロバスのドアに突っ込んできて、顔をのぞかせた。

「あの！ あの！ これってなんですか？！」

女性は、黒く長い髪を編み込み、浅黒い肌に赤い原色の丈の短い上着と、ズボン。

腹にはヘソが見えている。背中には琵琶のような楽器を背負っているが——いや、これはリュートか。

「これは馬なしで動く、鉄の召喚獣だよ」

「鉄の召喚獣！？」

クリクリとした黒い目で車内を見渡す女が、わけのわからないことを言っている。

動かないマイクロバスに、アキラから連絡が入った。

『おい、ケンイチ、どうしたあ？』

慌てて、マイクを取る。

「ちょっと、わけのわからない女に絡まれてる」

「わけのわからない女じゃありません！ 吟遊詩人です！」

「もしもし、アキラ？ 吟遊詩人らしい」

『そいつらには気をつける。あることないこと、面白おかしく吹聴して金を稼いでるやつらだ』

元世界の週刊誌みたいな感じかね？

「だ、だれですか？！ 失礼なことを言うのは！」

吟遊詩人が、ブンブン手を振り回して、アキラの言葉に憤慨している。

「ちょっと俺たちは、旅に出るんだ。降りてくれないか？」

「ええ？ 私も乗っていいですかあ？」

「はあ？ アストランティアの近くまで行くんだぞ？」

「私もこの街から、出るところなので、ちょうどよかった！」

図々しい女はそのまま乗り込んで、空いている椅子に座ってしまった。

ここでもめて時間を取られるのも面倒だ。

「すごい、ふかふかの椅子！」

どうも椅子の座り心地がいらしい。

しょうがねえ……無線機のマイクを取って、アキラに連絡を入れる。

「アキラ、出発するぞ」

『おっしゃ！ いいぜ』

車を発進させると、吟遊詩人の女が騒ぎだした。

「わわわ！ 動いている！ 動いている！ これって魔法？！」

女が周りにいるメイドや、プリムラにあれこれ質問しているようだ。

とりあえず害はないようなので、アキラと話す。

『ケンイチ、吟遊詩人はどうした？』

「一緒に乗ってるぞ」

『まじか！？ 大丈夫か？』

「まあ——害は、ないみたいだが……」

そのまま車を走らせると、イベリスの下町を抜けて、真っ直ぐな街道を走る。

「しかし、レイランさんが外に出ると、男たちの視線が凄いな」

『ははは、いつもああなんだよ。だから普段はローブを着てるんだ』

「まあな、男なら絶対に見ちゃうよな」

その会話を聞きながら、助手席に座っているリリスが、じつと俺を見つめている。

「そんなに見るなよ、照れるじゃないか」

「ふん——ああいう女子おなこに男どもは、鼻の下を伸ばすのじゃな」

「ウチの女性陣も、皆が男を振り向かせる魅力の持ち主だと思うけど？」

「——むう、やはり胸かえ？」

リリスが自分の胸を揉んでいるが、彼女の実の母親は巨乳だったって話だし、大きくなる可能性が……。

「あれは反則級だとは思うけど、本人は結構大変みたいだよ」

「妾も、あれほどは望まぬわえ」

後ろで吟遊詩人が何やら話していたのだが、突然歌い始めた。
なにかリクエストを、もらったのかもしれない。メイドたちは喜んで
いるが、読書の邪魔されたアネモネは不機嫌そう。

歌の内容は――困った農民たちを助けるために、武器を配り戦い
方を教えて、ゴブリンを殲滅する勇者のお話。

最後は、立派な鉄製の鍬や鋤くわすきをもらって、農民たちは村へ帰って
幸せに暮らしましたとさ――というお話。

「それって俺じゃん！」

俺は、マイクロバスのハンドルを持ちながら叫んだ。

「なんじゃ、ケンイチはゴブリン退治もしたのかえ？」

「ああ、イベリスの街でな」

話の主人公は俺のようだが、物語に鉄の召喚獣は出てこない。ま
あ死体を埋める時にしか使わなかったけど。

「ほえ？」

なんのことだか解らない吟遊詩人は、間抜けな顔をしている。

「あの……そのゴブリンを倒した勇者様ってのは、あそこにいるケ
ンイチなのですよ」

「私も倒したよ！」

プリムラとアネモネの説明に、後ろから獣人たちもやってきた。

「俺たちも、やったんだぜ？」 「ウチもにゃー！」

「えええーっ！ じゃあ、この魔法で動く乗り物――召喚獣ですか
？ これが勇者御一行様の乗り物……？」

「その通りにゃ」

「その旦那は、レッサードラゴンとワイバーンも倒して、お姫様を救って貴族になったんだ」

「ほえ？」

吟遊詩人がフリーズして、しばらく停止したあと——椅子から立ち上がって叫んだ。

「えええーっ！ 貴族様だったんですか？ とんだ、ご無礼をいたしましたあ！」

吟遊詩人が、バスの床にジャンピング土下座をした。やっぱり貴族ってだけで一目置かれるんだな。

「そんでにゃ、ケンイチの横に座っているのが、お城のお姫様にゃお城から分捕って逃げてきたにゃ」

「こらこら、そういうことを言っていると、変な噂が面白おかしく広まるだろ」

ミヤレーにツツコミをいれるが——まあどの道、噂ってのは尾ひれがつきまくって、面白おかしく広まるんだけどな。

「えええーっ！ お、王女様あ？！」

本当は王妃もいるのだが、それは伏せておいたほうがいいだろう。アマランサスも黙ったままだ。

「俺のやった業績が認められて、王女様を正室として迎えることが許されたんだよ」

「結果的には、そういうことになるのう」

「へへーっ！ 知らぬこととはいえ、失礼をいたしましたあ！」

女は床に這いつくばったままだ。

「だからねーさっきの歌の最後は、偉業が認められて貴族になり、お姫様と仲良くくらししましたとき——って終わりにしてくれよ」

「へへっ！ でもそれって、おとぎ話じゃなくて、本当の話なんですよ？」

「もちろん」

「おとぎ話より、凄いなんで……」

まあな、当の本人が一番驚いているよ。俺は湖の湖畔でスローライフしたただけなのに……どうしてこうなった。

「さすがは、私の夫ですわ」

「私のケンイチだよ！」

「妾の辺境伯様じゃぞ」

「妾の聖騎士様だぞえ」

「にゃー」

「「流石です、ご主人様」」

一斉に声を揃えたのは、メイド隊だが、そんな恥ずかしい掛け声の訓練をしているのか？

自分でナチュラル回復ヒールが掛かるぐらいのダメージがある。

「へへっ！」

また吟遊詩人が土下座した。貴族だと、こんな恥ずかしいのにも慣れないとイカンのか？

「いいよ、普通に座ってて。このままアキメネスで降りるもよし、アストランティアまで行くのもよし」

「それでは、アストランティアまで一緒にさせていただきます！」

「吟遊詩人さんの名前は？」

「ポポーっています！」

変わった名前だが、俺の名前だってこの世界じゃ変わってるって言われるし。

「ポポーか。俺はケンイチ・ハマダ辺境伯だ。よろしくな」

「よろしくお願いいたします。ハマダ伯様」

「そんなにかしこまらんでもいいよ。まあ静かな音楽でも奏でてくれ」

「解りました〜!」

ポポーは打って変わって、静かなバラード調の曲をリュートで弾き始めた。

これなら、アネモネの読書の邪魔にもならないだろう。

イベリスで時間を食ってしまったので、アキメネスを越えられなかった。

宿泊の準備に少々時間を取られると思うので、早めに止まる場所を探す。

街道脇にちょうどいいスペースがあったので、そこにマイクロバスを止めることにした。

現在の時間は――午後4時頃、後ろのアキラに連絡を入れる。

「アキラ――今日は、ここらへんで泊まることにしよう」

『よっしゃ! なにせ、人が多いからな』

車を止めると皆で降りるが、見渡せば林になりかけの原野だ。

木が少ないので、昔は畑や村があったのかもしれない。一緒に降りたベルは、早速周囲のパトロールを始めた。

「さて、どうしようか。まずは飯の準備か」

プリムラ組、アキラ組、メイド組に分かれてもらう。

次にコンロや鍋、食器などを大量に買う。安いもので十分だ。

肉はドラゴンやワイバーンの肉が大量にあるので、それを使ってもらい。シャングリ・ラで買った野菜を渡す。

プリムラやアキラは見慣れているが、メイドたちは初めての食材に戸惑っている。

その中でもマイレンと、メイドの一人は、余裕の表情だ。

彼女は俺たちと一緒に旅をしたメイドだが、やはりサバイバルで経験値を積んだのが、効いているのだろう。

「こんなことでビビってちゃ、決死隊の名前が泣くぞ？」

メイドたちに発破をかけて、飯の用意をさせる。俺の使う食材に慣れているマイレンがいるから大丈夫だろう。

紋章官のユリウスも俺たちと一緒にだが、ゲテモノ料理は平気だろうか？

「王族の方々と一緒だと、お遊びでいろんなものを食べさせられるので――慣れていきます」

「結構、大変な仕事だなあ」

「王族の方々にお仕えするという、名誉と引き換えなので、やむを得ません」

開き直っているのか、ヤケクソという諦めなのか。

「ここなら、苦手なものがあつたら、断っていいからな」

「ケンイチ様のお心遣い、感謝いたします」

役人だが凄くまともだ。王族がハチャメチャだから、役人が冷めているのだろうか？

今日一緒になった吟遊詩人は、俺たちのテーブルでいいだろう。お客様だしな。

「あの、見たこともない食材ばかりで、私のような者が食べてもよろしいのですか？」

「もちろんだけど、食べそうにないものを無理に食わなくてもいいぞ」

「滅相もございません。せっかく、面白そうなネタになりそうなのに」

ああ、歌のネタにするために、取材をしたいのか。まさしくプロ

だな。

「アキラたちも大丈夫か？」

「おゝ任せろ。俺はインスタントとかでもいいんだがな」

「インスタントは金を取るぞ」

「おゝ、いいぞ」

「リクエストがあったら言ってくれ」

そう言ったアキラだが、彼の得意料理のお好み焼きを作るようだ。

「ケンイチ、こういうのもある」

彼が、自分のアイテムBOXから出したものは、丸い凸凹のついた鉄板。

「なんだこれ、たこ焼き器か？」

「そうそう、特注で作ったんだ。ケンイチ、タコは魔法で作れないのか？」

「ちょっとまってくれ――」

アキラに言われて、シャングリ・ラを検索する。そういえば、タコなんて検索したことがなかったな。

元世界でも、外人はタコが嫌いだったから、この世界でも料理に使ったことがなかった。

検索するとタコのぶつ切りが1kg2600円ほどで売っている。

「アキラ、ぶつ切りでいいか？」

「ああ、たこ焼きに使うから、もちろん」

「ポチツとな」

ビニール袋に入った、タコのぶつ切りが落ちてきた。

そのタコを見て、一緒に薄力粉も購入。多分、これが必要だろう。

「おゝっ！ やった！ マジでタコじゃん！ なんでも出てくるな

あ

「それに、たこ焼きなら薄力粉のほうがいいんじゃないのか？」

「おお！ これこれ！」

この世界で、小麦粉っていえば全粒粉なのだ。

はしゃぐアキラであるが、彼の持つてるタコを見て、クレメンテ
イーナさんが叫んでいる。

「アキラ！ なんだそれは！ もしかして、触手じゃないのか？」

「ああ、そういえば似てるなあ。まあ似たようなもんだ」

「うちの獣人たちも、触手って刺されると痛いつて言っていたが……」

「そうそう、メチャ痛くて、メチャ腫れる。手や顔なんて刺されたら、グローブみたいになるぞ、ははは」

「私は絶対に、そんなものは食べないからな！」

「それじゃ、お前は、そこら辺の草のサラダな」

「くっ、殺せ！」

まったく、いつも仲がいいな。

「私は、アキラの作る料理なら、問題ないし美味しいと思っているから、大丈夫」

レイランさんは、アキラの作る異世界料理を楽しんでいると言う。彼に全幅の信頼をおいているように見える。やはり端からみても、二人はラブラブ（死語）だ。

最初は顔を見合わせていたメイドたちも——普通にスープを作るようだ。早速、見たこともない野菜の皮を剥き始めている。

こんなことで戸惑っていたんじゃ、サバイバルには生き残れない。まあ湖の屋敷ができるまで、アストランティアにいてもらってもいいんだがな。

ユーパトリウム子爵の屋敷に厄介になるとか——そういう手もあ

るのだが、俺のわがままを言わせてもらえば、貴族に借りを作るのは避けたい。

うちの家族たちは、いつものように手慣れた作業で、スープを作りパンを焼き始めた。

メイドたちのパンは、シャングリ・ラのできあいでいいだろう。

料理は彼女たちに任せて、俺は泊まる場所の草を刈る。

アイテムBOXから草刈り機を出して、けたたましい音を響かせる。

「ハマダ伯様！ それって魔道具ですか？」

「そうだ！ 危ないから近づくなよ！ それから俺のことはケンイチでいいよ」

ポポーが耳を塞いで話しかけてくるのだが、耳を塞いでたら会話できないだろ。

「解りました、ケンイチ様！」

聞こえているようだ。

草を刈り終わったら、アイテムBOXから家と大テントを出す。

アキラたちは大テントで寝てもらうつもりだが、メイドの寝る場所がない。

シャングリ・ラから、同じ大テントをもう一つ購入した。

「おい、ミヤレーとニヤメナ。天幕を組み立てるのを手伝ってくれ」

「おう！」 「にゃー」

「それでは、私も手伝わせていただきます」

大テントの設営をユリウスにも手伝ってもらう。ぎこちない手つ

きだが頑張ってくれている彼に声をかける。

「いつもすまないねえ」

「それは、おっしゃらない約束でございます」

紋章官をしてる彼は、こんな仕事をやったことがないようだ。

「旦那、これってメイド連中の天幕かい？」

「そうだ、なにせ10人以上いるからな」

中はかなり広いので、10人ぐらいは寝れると思う。

料理からあぶれているメイドも手伝わせたので、すぐに大テントが立ち上がった。

その隣に、ちょっと小さいテントが一つ。これはユリウス用だ。

「ご主人様、すごい立派な天幕ですね。それに組み立てるのが凄く簡単です」

「ここに、君たちが寝てくれ。寝巻や毛布がないようなら、こちらで用意する」

メイドたちの話では――俺のアイテムBOXに収納されている、彼女たちの荷物の中に入っているようだ。

アイテムBOXから、荷物が載っているパレットを出して、寝具の用意をしてもらう。

「これで、いいか。そろそろ飯にしよう」

「こ、こんな巨大なものまで、ケンイチ様のアイテムBOXに収納されているなんて……」

ユリウスが、設営された大テントを見上げている。

貴族たちが使っているような天幕は、こんな簡単には設営できないらしい。

「ユリウス――悪いが、この小さい天幕を使ってくれ」

「承知いたしました。野宿に比べれば、夜露に濡れないだけでも、ありがたいものです」

彼の言うとおり、夜露に濡れたら、かなりビチョビチョになるかな。

街道脇に作られたスペースで、皆で食事を摂る。

テーブルにズラリと並ぶ美女と美少女たち——なんだか、ものすごい大所帯になってしまったなあ……。

130話 商人プリムラ

王都を出て、マイクロバスとSUV車による美女軍団の大移動。

1日でアストランティアに到着というわけにはいかず、アキメネスの一步手前で野宿することになった。

俺のアイテムBOXから、家と大テントを取り出して設置。足りない分は、新規に大テントを購入して組み立てた。

なにせ人数が多いので、何かやるにしてもすぐに終わる。

やはり戦いは数だよ兄貴——これが真理なのか。

道端に草を刈って作ったスペースにテーブルが並び、皆で食事を取る。

それぞれがチームに分かれて、それぞれの料理を作って食べている。

俺の所は、プリムラのスープ、アネモネのパン。そしてレッサードラゴンの唐揚げをタルタルソースで食べている。

ドラゴンの肉は、鳥肉に似た風味なので、唐揚げにもよく合う。

ベルには、衣を剥がしたものとネコ缶をあげる。

「ほう！ ドラゴン唐揚げにしても美味しいとは！」

リリスがいるので、凄い勢いで唐揚げが減っていく。

「ほんにのう——城では食べられない逸品じゃ。それにこのソースがよく合う」

アマランサスも武術をするせいか、普通の女性よりは沢山食べるようだ。

「これはなんと！ リリス様と、アマランサス様のおっしゃるとおり——美味しい！ 美味すぎる！」

「ユリウスの口にも合ったようで良かったよ。サンバクさんが来れば、俺がいなくても同じものを作ってくれるだろう」

「楽しみじゃな」

「レッサードラゴンの唐揚げも美味しいですわ」

「やっぱり、プリムラのスープが我が家の味だが、サンバクさんが来れば、彼が料理の担当になるのか。」

「プリムラには、領の経営を見てもらわねばならないし、マロウ商会も王都へ進出するだろう。」

「国中を飛び回ることになる彼女に、料理をする時間があるかどうか——。」

「この王国、いやこの大陸一の商人になれる能力を持っている彼女は、決して狭い辺境領だけにとどまる女性ではない。」

「かーうめえ」

「ニャメナは酒を飲みながら唐揚げを頬張り、お城の堅苦しさから解放されたように伸びをしている。」

「それはミヤレーも同じようだ。」

「美味しいにゃー、やっと堅苦しいお城から、逃げられたにゃー」

「いろいろ巻き込んで悪かったな」

「旦那、それは言わない約束だぜ」「にゃー！」

「私も、やっとケンイチと冒険ができるし！」

「アネモネの冒険とやらの前に、測量やら公共事業をしないとな。」

「なんですか、これは？ 凄く美味しいんですけどお」

「唐揚げを食べて、感動で固まっているのは、吟遊詩人のポポーだ。感激を歌にしたいのか、その場で歌い始めてしまった。」

「そんなことをしていると、どんどん分前が減るぞ？」

「そなたも中々豪胆だのう？ 貴族の家族の中へ入り込んで、歌うなど」

アマランサスが、ポポーを見て笑っている。

「こんなに沢山の女の人を従えて、みんな笑顔だし、絶対に悪い人じゃないと……申し訳ございません！」

「まあ、そのとおりじゃな。悪人どころか、人が良すぎて困っている」

リリスの言葉に、俺の向かいにいるプリムラも頷いている。

「リリス、俺が誰も助けなきゃ、ここにいるほとんどの女がいないんだぞ？」

「それは、そうじゃが……このまま増やし続けるわけにもいくまい？」

「一応、常識的な範疇で収めるから大丈夫だよ」

「どうだかのう……」

リリスが心配しながら、唐揚げを食いまくる。

俺たちの隣では、アキラが好み焼きと、たこ焼きを焼き始めたので、そこへ唐揚げを持っていった。

「アキラ——悪いが唐揚げと、たこ焼きを交換してくれねえ？ 久々に食ってみたいし」

「お！ いいぞ！ マヨネーズもいくらでもあるから、持ってけえ」
マヨネーズはもちろん、彼が出したものだ。

どうも、マヨネーズを出すシーンを見てしまうと躊躇してしまうのだが、味は普通のマヨネーズ。しかも、できたてで新鮮な味。

彼が、「一体、どういうチートなんだよ！」とぼやくのも無理もない。

ゲットしたたこ焼きは10個。とりあえず1個摘む。

外はカリカリで中はトロリ。それに加わる中のコリコリとした歯ごたえのタコ。

これらにソースとマヨネーズがよく合う。しかし、アキラは手慣れている。

タコ焼きのバイトでもしていたのだろうか？

「ほい、1個ずつな」

「なんじゃこの丸いのは!？」

「小麦粉を溶いて、丸く焼いたものだよ」

テーブルに置いた皿に、3つの手が同時に伸びた。獣人たちが素早いのは当然として、リリスの手が早い。

その尋常ならざる素早さの手に、アマランサスが渋い顔をしている。

「これ、我先に料理に手を伸ばすなど、はしたない」

「なにをおっしゃる母上。城を一步出たら、そこは弱肉強食の世界。食えるときに食わねば、生きていけぬ」

本当に、そのとおりなのだが……。

「俺がいれば、家族に飢えさせることはないと思うけどなあ」

「ケンイチの言うとおりだが、その前に料理がなくなる——ふおお！」

たこ焼きを頬張ったりリリスが、突然叫んだ。

「なんだ!？ どうした？」

「美味い! これは美味いぞ! 中に入っている、このコリコリしたものは？」

「説明が難しい……」

俺はアイテムBOXから、スケッチブックを取り出して、タコの絵を描いた。

「これは魔物かえ？」

「どれどれ、うえ！ 旦那、これって触手じゃ！？」「ふぎゃー！」俺の描いた絵を見て、ミャレーとニャメナが毛を逆立てた。

「アキラにも聞いたが、違うぞ。こいつには毒はないし」

他の家族にも、たこ焼きは好評だ。元世界でも、お好み焼きやたこ焼きは外国人に受けがよかったしな。

「ポポーはどうだ？ 口に合ったか？」

「はい、こんな美味しい料理を初めて食べました。街で食事するのがつらくなりそうです」

「にゃにゃ！ この料理を食べると、皆がそう言うにゃ」

「本当だぜ？ 金払って不味い飯を食べる気なくなるからな」

ニャメナもいつも、そう言っていたな。

あまり深く考えず、テキトーにたこ焼きの数を決めてしまった俺だが、ちよっとミスった。

テーブルについていたのは9人で、たこ焼きが1個あまったのだ。それを目にも留まらぬスピードでニャメナがかっさらった。

リリスも手を出していたのだが、本気のスピードで獣人に敵うはずがない。

「悪いね、お姫様。ここは弱肉強食だから」

「ぐぬぬ」

お城から出てしまい王女でもなくなった彼女のわがままは、すでに通じない。

いや、辺境伯の正室なのだから、地位が高いのはそのままなので

あるが……。

家族の内々の争いに、「妾のほうが身分が高いのだから譲れ！」とも言えないだろう。

困ったリリスは、俺に視線を向けてきた。

「ケンイチ……」

「解った解った、他の皆も食べたいんだろ？」

全員が、もっと食べたいらしい。こりゃ仕方ないな。俺も作るしかない。

アキラに買ってやったものと同じ、タコのぶつ切りをかう。

たこ焼きを焼くには、たこ焼き器が必要だ。シャングリ・ラで検索する。

「これだな……」

カセットガスタイプのたこ焼き器が6800円だ。24個焼けるようなので、こいつを2台かう。

沢山焼くので、プロが使うような粉つき器もあるだろう。ハンドルを握ると、タネが下に落ちるやつだ。

そうだ、タコピックもいるな。

ガスに火を点けて鉄板に油を塗ると、粉つき器の中に薄力粉と卵とダシを入れてかき混ぜる。

ホットケーキと違う、かなりシャバシャバだ。

鉄板が温まったら、粉つき器のハンドルを握って、タネを流し込んでいく。

「アネモネ、その切ったグニユグニユを一個ずつ入れてくれ」

「解った」

「私も手伝いますわ」

プリムラもタコを入れるのを手伝ってくれる。48個も入れるの

で、時間がかかる。

「このグニグニが、さっきの触手か」

「そう、単品じゃ味もないけどな」

それを聞いた、リリスがタコの欠片を口に放り込んだ。

「ひゃ！」「うにゃ!？」

獣人たちが、リリスの行動にびっくりしている。食に貪欲というか、怖いもの知らずというか、思いつきりが良すぎる。

次に、シャングリ・ラで買った、天かすをドバっとぶちこむ。

焼けたらタコピックで、ひっくり返すのだが、こんなのはあまりやったことがない。

もたもたしていると、アキラが飛んできた。

「あゝそうじゃねえ！俺がやってやるよ」

目にも留まらぬ早業で、たこ焼きをひっくり返していく。

「ほう！まるで、達人の技じゃな！」

リリスが目丸くして、アキラの技を覗き込んでいる。

「カセット式のたこ焼き器かよ。この粉つき器も売ってくれよ」

「いいぞ、便利だろ？アキラのあの鉄板は、特注か？どのぐらいしたんだ？」

「ええと、帝国金貨で5枚だから——50万円だな」

「50万かよ。まあ一品物だしなあ」

「メチャクチャ細かい注文出したしな。丸の大きさが揃ってないとダメとか」

「そりゃそうだな。揃っていないたこ焼きなんてな」

そんな話をしている間に焼き上がった。

「アキラ、バイトでもしてたのか？」

「ああ大阪でな。ははは」

やっぱりか。

出来上がったたこ焼きに、一斉に家族が群がった。

ついでに、アキラにマヨネーズを出してもらい、アイテムBOXからソースも出した。

「はふはふ、美味しい！」

「アネモネもよく食べるなあ」

「ケンイチの料理は皆美味しいから！ それに食べないと大きくな
らないし！」

アネモネは大きくなれば、俺に相手をしてもらえと思っている
らしい。

まあ、それはそうなんだが……彼女には父親として接しているか
らなあ。

リリスは、なにも言わずに、口にタコ焼きを頬張っている。

彼女もよく食べる。いったい、その小さくて細い身体のどこに入
っているのか。

「リリス、お城の客前でも、そんなに食べていたのか？」

「そんなわけがあるまい。客前で少食にして、裏でガッツリと食べ
るのじゃ」

「そういえば、ルクリアも大食であつたのう」

アマランサスが言うルクリアというのは、リリスの実母だ。

合計で、96個のたこ焼きをアキラに焼いてもらった。

まるでプロだ。いや、仕事でやってたんだから、マジでプロか。

「ユリウス、料理はどうだった？　うちの料理はいつもこんな感じ

だぞ」

「大変、美味しゅうございました。豪華ではありませんが、実に美味」

「豪華な料理ってのは、うちじゃちょっと無縁だなあ。客向けのそういう料理は、サンバクさんに任せてしまえばいいし」

「そうじゃの」

様子を見に、メイドたちの所へ行く。

「マイレン、俺たちと一緒に食べてもいいんだぞ？」

「いいえ、滅相もございません。同じ時間に食事をさせてもらえる、というだけでも、ご主人様の寛大なご厚意に甘えさせていただいておりますのに」

「そうか？ まあ、メイドたちがそれでいいのなら、なにも言わんが……」

「はい、メイドとは、いつも主人に仕え、影のように寄り添う存在でございます」

「これから苦労かけると思うけど、よろしく頼むよ」

「何をおっしゃいます！ メイドをこき使い、手をつけて、いたぶってこそ貴族！」

「「「ええ〜？」」」

マイレンの言葉に、他のメイドたちは拒否反応を起こしている。

メイド長としては優秀なのだろうが、ここらへんが少々ズレている感じがする。

マイレンのメガネが光る。

「あなた方、甘いですわね。ご主人様にお慈悲をいただき、子どもでも孕めば、母娘は一生安泰なのですよ？」

それを聞いた、メイドたちの顔色が変わる。

「そう言われると……」 「ご主人様は、お優しそうだから、ちよつとならいいかな……」 「うんうん」

まあ、俺はそんなつもりもないし、メイドが歳をとったら暇を出す——なんてこともするつもりもないけどな。

俺はシャングリ・ラから、1冊の本を検索した。パッチワークの本である。

「リナリア、こんな本をどうかな？ 異国の本だけど、図が中心だから解ると思うが」

リナリアというのは、お城の書庫の司書をしていたメイドだ。

「可愛い！」 「わぁー！」 「布の切れ端を使って、カバンや入れ物を作ったりする本ね！」

「それを貸してあげるよ」

「ありがとうございます——でも私、裁縫が下手で……」

「あら、リナリア。ご主人様からいただいた、よい機会ではありませんか？」

マイレンから、そう言われてリナリアが困っていると、一人のメイドが手をあげた。

「私が教えてあげるよ。有料で」

「金を取るのか？」

俺の言葉に、メイドたちは当然——という顔をしている。

メイドのことは、メイドたちに任せるが、本の評判はいいようだ。

メイドたちの所から戻ってくると、俺の家族がじくつとこちらを見ている。

「メイドには手を出さないよ」

「マイレンとやる時には、妾も呼ぶのだぞえ？」

「また、そういうことを言う」

「メイドに手をつけて、孕ませてこそ貴族というもの」

「どうやら、リリースもそういう考えのようだ。まったく庶民と考えるかたが違う。」

皆のワイワイガヤガヤの食事は終わったので、テーブルなどを片付ける。

明日の朝も使うので、そのままテントの脇に積んで、レイランさんの結界を掛けてもらった。

これで簡単には盗めない。

「ポポー、音楽でも弾いてやってくれ」

「解りました〜おまかせください」

彼女はリュートで音楽を弾きながら踊り始めた。
ずいぶんと器用だな。

あとは皆に任せて、俺はアイテムBOXからプードを出した。

「ケンイチ、どこ行くにゃ？」 「旦那あ！」

「今日はプリムラと一緒に寝るから。プリムラ、おいで」

「……はい！」

一瞬、なにがなんだか解らないような顔をしていた、プリムラだが、すぐに俺に抱きついてきた。

「ずるい……」

アネモネが不満顔をしているのだが――。

「アネモネは、いつも俺と一緒に寝ているじゃないか」

「私とは、なにもしないくせに……」

「だからあ——もうちょつと大きくなってからな」
「ふう」

いくら顔を膨らませても、ダメなのはダメだ。

「はは、ケンイチ、頑張れよ」

椅子に座っているアキラが手を振っているのだが、当然頑張るに決まっている。

部屋割りは決まっていたのだが、獣人たちがあふれてしまっている。

元王族が来たので、気楽に一緒に寝られなくなってしまったらしい。

リリスやアマランサスは気にしてない様子だが、獣人たちが落ちて着かないようだ。

獣人たち用に、小さな小屋を出した。

元々、ニヤメナが使っていた小屋だ。

俺は車に乗り込むと、ヘッドライトを点灯させた。この世界にあらざるまばゆい光が、闇を切り裂く。

異世界から召喚された鉄の召喚獣にプリムラを乗せると、暗闇の中を走り出した。

がたがたと揺れるが、5分も走ればキャンプ地から2〜3kmは離れる。

もう周りには誰もいないし、耳のいい獣人でも聞き耳を立てることはできないだろう。

車を止めると、後部座席を折りたたみ、そこにアイテムBOXから出したコンパネを載せる。

座席がフラットになったら、エアマットを敷けばベッドの完成だ。

後ろハッチを閉めるとプリムラを呼び入れる。

彼女は、未だに恥ずかしがるのだが、巷に女の裸があふれていた

元世界とは違う。

普段でもロングスカートを穿き、女性が素足を晒したりすることもないのだ。

下着はつけていないので、スカートをめくればそのままできないこともないのだが……。

恥ずかしがる彼女の服を脱がして裸にする。ルームライトをつけているのだが、やっぱり恥ずかしいらしい。

一緒に風呂に入ったりしているのだが、その時とは、また違うようだ。

「恥ずかしいのかい？」

「……はい、だって」

「俺と二人きりだし、恥ずかしがることもないのに」

「湯浴みもしてませんし」

「汚れてても、プリムラは綺麗だから、大丈夫」

「でも、やっぱり……」

ルームライトに照らされるプリムラの白い輝く裸体は美しい。俺の下にいる二人の王族にも引けをとらない。

明かりを消すと、暗闇の中で俺たちは抱き合った。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

しばし蜜時のあと、エアマットに二人で寝転がる。

「プリムラ、ごめんよ。沢山人が増えてしまって……」

「謝るぐらいなら——と言いたところですが、お城でも言いまして、私の自業自得です」

そう言う彼女は、大きなため息をついた。

彼女の商売の邪魔をしていた悪徳商人を排除するために、貴族の

力を借りようとして、俺の力をバラしてしまったのだ。

「こうなるのは、解っていたはずなのに……」

あつと言う間に王都まで俺のことが知られてしまい、王族から呼び出しを受けたのが、今回のことの始まり。

「まさかと思っているうちに、王族の方々まで！」

プリムラが起き上がると俺を睨む。

「いや、本当にごめん」

「謝らなくてもいいです。ケンイチを他の女に取られたというのに、巨大な商売を前にワクワクが止まらないんですから。私は本当に卑しい女です」

「そんなことないだろ。商人ならそうじゃない？」

「ケンイチを他の女に取られたのに、平気な顔で商売にうつつを抜かす女を、あなたはなにも思わないんですか！」

そんなことをいわれてもなあ……。

「うーん、プリムラは、小さな街の商人で終わる存在ではないと思っっているからさ。この大陸に鳴り響くほどの大商人になると思うよ」
「私も、そんな夢が現実になりそうだから、ワクワクが止まらないのです」

「それじゃ、いいじゃないか」

「よくありません！ ケンイチを他の女に取られて、いいわけないじゃないませんか！」

「それじゃ、商人を辞めるか？」

「いやあああ！」

プリムラが裸のままエアマットに倒れてふさぎ込む。

そりゃ、そうだよ。三度の飯より商売が好きで、売り物があれば、

なんでも売っちゃうような彼女が、商売を止めるなんて想像もつかない。

「話を総合すると――商売優先で俺のことを、ないがしろにしそうな自分が許せない――ということかな？」

「そうです！ ああゝん！」

「そんなに深刻に考える必要もないと思うけどなあ」

「深刻に決まってるじゃありませんか！」

「ちょっと、落ち着きなさいって」

泣くプリムラに、どうしようもできない。俺としても、彼女には商人を目指してほしいしな。

プリムラをなだめていると、車のドアをカリカリと引っ掻く音がある。

「ん？ 誰だ！？」

「にゃー」

「なんだ、ベルか。こんな所まで追っかけてきたのか」

森猫の嗅覚なら、2〜3kmの追跡など、お茶の子さいさいだろうけど。

後部座席のドアをあけると、黒い毛皮がすりと入ってきて、長くしなやかな身体を俺の肌にすり付ける。

「よしよし」

「にゃー」

ゴロゴロと喉を鳴らしているベルをなでていると、プリムラが大声をあげた。

「私を笑いにきたくせに！」

「ええっ！？ お母さん、そんなことないよな？」

「……」

ベルの反応をみて、プリムラがまた泣き始めた。

「お母さん、プリムラをなだめてくれよ」

「……」

明後日の方向を向くベル——マジかよ。

それじゃ、俺がやるしかねえじゃねえか。

ベルを強引に外に出して、プリムラを抱き寄せる。

無理矢理外に出されるベルは不機嫌そうだが、仕方ないじゃないか。

「悪いが、外で待っててくれよ」

「……」

いつも返事をしてくれるベルが無言でことは、相当機嫌が悪い。尻尾を乱暴に振り回している。

エアマツトの上で、裸のプリムラをなだめまくる。

そしてその結論は——。

「プリムラ、大陸一の商人を目指すんだよね？」

「決心ができました。ケンイチの辺境伯領を支えねばなりませんし、私に戦闘はできませんから。以前から言っていたように、適材適所、あなたを裏から支えることに徹します」

「ありがとう。君に商人を辞められると、正直困るし」

「私も商人以外ができるとは思えませんし……ケンイチが、他の女とあんなことをしているのを想像すると、腸が煮えくり返るのですけどお……」

「貴族なら、正室、側室、愛人とそろっているのが普通みたいだし

……」

「……」

「君が怒るのは解るんだよ」

「いいのです。さっきも言いましたけど、静かに暮らしたがっていたケンイチなのに、その力を貴族にしらしめてしまった、私が悪いんです」

その割には、ずっと俺のことをにらんでいる。

彼女は聡明な女性だ。頭で解っていても理屈と感情は別なのだろう。

そのまま二人で車で寝て、朝を迎えた。

朝靄で白くなる中、車を走らせて皆の所へ戻る。メイドたちが起きてテーブルの準備を始めていた。

プリムラも、それに加わりスープの準備を始める。いつもの光景だ。

「ぷー！」

プリムラの件は片付いたが、パンを焼いているアネモネの機嫌が悪い。

機嫌が悪いのは、一緒に戻ってきたベルもだ。

「もう、仕方ないなあ」

俺はシャングリラから、チュールを購入した。

「ベル、チュールを食べないか？ チュールだぞ」

俺の言葉を聞いた彼女が、足下に飛んでくると、封を切ったチュールの端をペロペロと舐め始めた。

ベルの毛皮をなでていると、食事の準備に参加していないリリスがやってきた。

「ケンイチ、妾の番はいつになるのかのう？」

「えー、もうちょっと先」

「そなた、本当にやる気があるのかえ？！」

「私は!？」

そこにアネモネも加わった。

「アネモネは、まだまだ先だよ」

「うー」

「妾は？」

「うーん、そのうち」

「そのうちとは?!」

「辺境伯領が安定するまでかなあ」

「その理由にする意味が、他の者とのまぐわいを優先して、妾をないがしろにする説明になっているとは思えぬのだが？」

「あーうー」

そういわれると、つらい。

アネモネは明らかに若いし体も小さい。

明確な理由があるのだが、リリスからの要求を拒否するのに、年齢は理由にするのは、ちょっと厳しい。

この世界なら、15で結婚して子供を産むなどは、普通に行われているのだから。

アキラと同行しているアンネローゼさんも、15歳で子供を生んでいる。

これ以上、リリスとの関係を引きのばすのは無理だろう。彼女のプライドも傷つけてしまう。

「よし、湖に到着したら——ということにしよう」

「真じゃな」

「ああ」

「それじゃ、私は!？」

「アネモネはもっと大きくなってから」

「ぷー!」

「もう、頭をなでてあげるから」

俺は、アネモネの柔らかい黒髪をなでる。

「ふわあああ」

それを見た、リリスが俺に抱きついてきた。

「妾もじゃ！」

「おいおい、朝っぱらからか」

やむを得ず、リリスの金髪もなでるが、彼女のほうが髪質が柔らかく、ふわふわしている感じ。

「ふわあああ」

「妾もじゃ！」

いきなり背後から、ものすごい力で締められる。

「あいたた、こらアマランサス！」

彼女の馬鹿力を振りほどくために、後ろに手を回して、腰から尻を撫でる。

「ひいっ！」

叫び声と同時にストンと膝を折ったアマランサスが、そのままひっくり返った。

カダンの王族は、本当に特殊能力持ちが多いんだな。

この世界で王族が王族をやっているってのには、ちゃんとした理由がありそうだ。

この光景を見ていたメイドたちがひそひそ話をしている。

「ねえねえ、ご主人様のアレ、凄そう」「試してみる?」「えゝっ」
メイドたちのキャッキャウフフに、アキラが反応した。

「君たち、アレに興味あるの？ 実はオジサンも同じ力を使えるんだよね？」

オッサン丸出しで、メイドたちになじり寄ったアキラではあったが、その後ろに黒い影が近づく。

「ほう、アキラ。そろそろ溜まってきたみたいですね」

「あの、センサー——冗談ですから」

「私に女の喜びを教えたのは、あなたなのですから、私を満足させる義務があるんですよ？」

「フヒヒサーセン」

レイランさんの言葉に、うちの家族も反応した。

「それじゃ私もですよええ」

プリムラが俺の首に手を回してきた。

「プリムラは、昨晚やったでしょ」

「旦那あ、そろそろ、俺もたのむぜえ」 「うちもにゃー」

「にゃー」

「にゃーって、ベルはどうするんだよ、無理だろ」

とにかく朝飯だ。なんでこうなった。

131話 アストランティアに帰ってきた

この世界での故郷ともいえる、湖の畔まであと少し。

朝食を食べたあと、家やテントを片付けると、次の街――アキメネスに向かう。

そこを治める、ツンベルギア子爵に挨拶するためだ。

アストランティアがあるユーパトリウム子爵領に、少々ちよっかいを出していたようなので、あまり仲良くはしたくないのだが、これも仕事だ。

アキラと一緒に、車にバイオディーゼル燃料を入れる。

アストランティアまで十分に保つと思うが、備えあれば憂いなしだ。

給油が完了すると、皆が次々と車に乗り込む。

俺たちと一緒に乗車する、紋章官のユリウスに声をかける。

「ユリウス、天幕の寝心地はどうだった？」

「中々、快適でございました」

「本当か？ 屋敷や家ができるまで、天幕暮らしなんだぞ？ どうしても馴染めないなら近くのアストランティアに滞在する手もあるが」

「いいえ、それではケンイチ様にお仕えする、紋章官の仕事になります」

「なにか改善点があれば、指摘してくれ。話は聞く」

「閣下は変わっておいでですねえ」

「まあ、よく言われる」

この世界とは違う価値観を持つ世界からやってきた、異世界人な

のだから、しょうがない。

プ○ドに乗っているアキラに無線で連絡を入れる。

「アキラ〜！ 出発するぞ！」

『よっしゃ！ オッケ〜！』

車は、ほぼ直線の道路を、なにごとくもなく進むと、1時間ほどアキメネスの街に着いた。

「ほええ！ 本当にアキメネスに着いたのですか？！」

「どうやら、そのようですねぇ」

マイクロバスの窓から、吟遊詩人のポポーとユリウスが外を見ている。

「ここは間違いなく、アキメネスの街ですよ」

プリムラの説明に、ポポーだけではなく、メイドたちも驚いている。

「ここまで馬車で来るとなると、数週間は……」 「うん」 「それを行った一日で」

「これが辺境伯様が操る、鉄の召喚獣の地を駆ける速さですか。これは歌のネタにぴったりで、聴衆が食いつきますよ」

後ろから聞こえてくる会話に、不安に思う——おいおい、あまり変な話を広めないでくれよ。

娯楽の少ないこの世界の住民に、そんなことを言っても、無駄なんだろうけど。

吟遊詩人に少々不安を感じているうちに、アキメネスの街に入った。

当たり前だが、前に来たときと変わっていない。

この街の作りは、アストランティアによく似ている。
南北にメインストリートが通っており、東側に高級住宅街がある。
その高級住宅街の一番奥が、子爵邸だ。

街の通りを走る鉄の召喚獣に注がれる好奇の視線に耐えながら、
後ろの車に連絡を入れる。

「アキラ、ちょっと子爵邸に寄るぞ。大通りを左折な」
『了解』

街の真ん中にある大通りの交差点を左に曲がると、辺りに上等な
住宅が増えてくる。

その一番奥が子爵邸で、白い石造りの豪華な建物と黒い飾りのつ
いた鉄柵。

アストランティアの子爵邸より、かなり立派な造りに見える。

アストランティアがあるユーパトリウム子爵領は、肝心の子爵が
あまり政に興味がない御仁まつりごとだったので経営が傾きかけ、私腹を肥や
すこともなかったと思われる。

俺が重機で手伝った用水路の完成式典で、ツンベルギア子爵にも
会ったが、中々の狸親父という印象だった。

隙あらば、ユーパトリウム子爵領の乗っ取りを計画していたよう
に思える。

正面門に到着したので、降りて銀色の鎧を着た門番と話をする。

「ケンイチ・ハマダ辺境伯である。お会いする約束はしていないが、
近くを通りかかったので、挨拶に参った次第。子爵にお取次ぎ願
いたい」

「へ、辺境伯様？ 少々お待ち下さい！」

門番は慌てて、屋敷の中に入っていた。まあ、アポなしだから

な。追い返されても仕方ない。

しばらく門の所で待っていると、門番と黒服の紳士がやって来た。ロマンズグレーで、白いヒゲを生やしている、いかにも執事っぽい。

「はじめまして、辺境伯様。この屋敷で執事頭をしておりますガラと申します」

「突然の訪問を許してくれ。近くを通りかかったので、子爵に挨拶しておこうと思ってな。ハマダ辺境伯など、聞いたことがないと思うが、1週間ほど前に授爵して拝領したばかりだ」

辺境伯の方がかなり位階が上なので、敬語は使う必要はない。

彼に、王家の印が入った授爵と拝領の証文を見せる。

「こ、これぞ正しく、国王陛下からの上意の証。失礼をいたしました」

ヒゲの紳士が深々と礼をした。

「それで、ツンベルギア子爵は？」

「申し訳ございませんが――主は、ただいま外遊に出かけております……」

「それは残念。それでは、アストランティアの近くに、ハマダ辺境伯領ができる旨を伝えてくれ、それと――これは贈り物故、子爵に渡してくれ」

シャングリ・ラで買った箱に入った、1オンスのプラチナ硬貨を渡して、中身を見せた。

「これは？」

「これは、白金貨だ」

「なんですと、白金貨?!」

コインを摘んで力を使うと、それが薄っすらと光りだす。

「なんと、本物！」

「子爵への贈り物だというのに、偽物のはずがあるまい」

「失礼をいたしました！」

「それでは――子爵には、よしなに頼む」

「ははっ！」

子爵が留守じゃ仕方ない。もしかして居留守かも？ 俺としても、あまり会いたい人物じゃないしな。

どうせ良からぬ企み事などを持ちかけられるに違いない。

アキラのSUV車を方向転換してもらい、俺もマイクロバスに乗り込む。

ユリウスの話によれば、下級貴族では紋章官を雇わず、先程のような執事が代行していると言う。

紋章官を雇うのは、侯爵級ぐらいからのようだ。

給料が特別高いというわけでもないのだが、優秀な紋章官は、王族や上位貴族に取られてしまうので、下級貴族まで回ってこないのが実情らしい。

マイクロバスを大通りに戻すと、ツンベルギアの街を出る。

「居留守を使われたかのう」

「そうかもしれないな、リリース。でも、会いたい人物でもなかったし」

「ほう」

リリースに、子爵領同士のいざこざらしきものを話す。

「確かに、ここらへんでは用水路工事が行われていたのう」

「これは、アマランサスのほうが詳しいかな？」
アマランサスを運転席へ呼ぶ。

「そうじゃな、聖騎士様のおっしゃるとおり——ツンベルギア子爵から幾度と書状が届いておったな」

「なんて書いてあったんだい？」

「ユーパトリウム子爵には、陛下がお定めになった国家事業を完遂する能力が欠如していると——」

「隣の子爵領を合併しても、私なら治めることができますので、どうか伯爵にしてください——みたいな？」

「そのようなことがしたためであつたわ。それに、ユーパトリウム子爵の統治能力が問われれば、本当にその可能性があつたのも事実じゃ」

その事実確認のため、忙しいにもかかわらず子爵がお城へ呼び出されたりしたのだろう。

「それを、俺が一人でひっくり返してしまったのか……」

「そうじゃ！ この世にあらざる特異なる力！ これは聖騎士様に相応しい人物が現れたに違いないと——妾はそう思ったのじゃ！」
「どうやっても間に合いそうにない普請を、鉄の魔獣を召喚して、完遂してしまった。」

アマランサス当人から、そう言われれば、なるほどなあ——と思う。

裏舞台じゃ、そういうことになっていたのが解つたが、これでツンベルギア子爵が、ユーパトリウム領を狙っていたのが、確定的になったな。

それじゃ、なおさらツンベルギア子爵とは仲良くはできんな。

車列が、ほぼ真っ直ぐの街道を走っていくと——それは次第に、ゆっくりと右カーブを始め、深い森がチラチラと見えてくる。

しばらく進むと、左手に用水路の水源になっているカズラ湖が見えてくる。

「これがカズラ湖で、用水路の源になっているんだ」

「ほう——城で見た、普請の計画書に載っておったの」

アマランサスが窓からきらめく湖面を眺めている。

「王族が、現地まで視察に来るなんてことはあるのか？」

「よほどのことがない限り、ないの」

ないのかよ。実際に現地や地方がどうなっているとかは、報告任せなんだろうな。

工事していなくても、工事しました——で金を巻き上げることも可能なわけだ。

勿論、そんなことがバレたら物理的に首が飛ぶだろうけどな。

「城から密かに監察官が現地に送り込まれるので、そのようなことは難しいと思うぞえ」

リリースがそう言うのだが——昔でいう隠密みたいなものか？

「それじゃ、貴族からの報告がどうであれ、その監察官からの報告が逐次入るってことか」

「そうじゃ」

そうでなければ、嘘をついて人を貶めることも可能だからな。

なるほど、俺のことも監察官が報告してたのか……ということは、アストランティアの子爵邸にも、その隠密がいるんだな。

「その話が本当なら、ユーパトリウム子爵領が経済的に傾いて、マロウ商會が経営に加わったというの……」

「無論、知っておる。だてに数百年この地を治めているわけではないぞえ」

アマランサスが、自分のアイテムBOXから出した扇子をパツと開いた。

若いリリスは、そこまで知らなかったようだが、アマランサスには情報は伝わっていたようだ。

ゆっくりとした右カーブを走り続けていると、右手には高地が見えてきた。

「リリス、あの高地の上も全部、俺の領地になるんだよ」

「あのような広大で未開な土地を、どうやって利用するつもりなのじゃ？」

「とりあえず、測量をして広さを確認してからだなあ」

木も草も生えているから畑にもなりそうだけど、無理だろうか？

「本当に誰も入ったことがないのかえ？」

「祠があったりしたから、物好きがいたみたいだけど——一人か二人はいたんじゃない？」

高地の反対側——左手には俺が掘った用水路に水が流れ、開けた場所には、開拓団が入っており、畑が作られ始めている。

緑で縦に伸びる植物が見えるのだが——。

「あれは、トウモロコシか？　もう植えてたのか」

子爵に、トウモロコシのタネを分けたのだが、早速植えているようだ。

見た分には、問題なく生育しているように見える。
後ろの車に連絡を入れた。

「アキラ、ここの畑でトウモロコシの栽培が始まっているぞ」

『ケンイチがタネをやったのか？』

「ああ、ここの子爵に泣きつかれてな」

でも間引いて甘くするとか、やらないだろうから、味はいまいちかもしれない。

それにシャングリ・ラで買ったタネを自家採種して大丈夫だろうか？

先祖返りしそうだけど……。

「アキラ——右手が、例の高地だ」

『本当に、テーブル・マウンテンで、ギアナ高地みたいだな』

「あれほど標高は高くないから、生物圏が違うとか、そんな感じにはなっていないみたいだけどな」

『へえ』

そのまま2時間ほど車を走らせると、徐々に森が増えてきて、アストランティアの街が見えてきた。

日は高く、昼を過ぎた頃だ。

「アストランティアに到着したぞ」

見慣れた街並みが俺を出迎えてくれる。戻ってきたんだなあ——という感じが、じんわりと心の奥底から湧き上がってくる。

「ええーっ！」 「もう、アストランティアまで来たんですかあ？」

「一泊二日で、王都からアストランティアまで……」

「さすがご主人様ですわ」

マイレンの決めセリフが聞こえるのだが、それを毎回言うのだろうか？ ちょっと恥ずかしいので止めてほしい。

「本当に、アストランティアみたいですよ……」

「カールドンから、ケンイチ様は信じられないような魔法を使うと聞かされていましたが……これほどのものとは」

ポポーとユリウスが驚いているが、彼らの言うとおり、この世界ではありえないスピードなのだ。

アネモネが運転席の近くにやって来た。

「帰ってきたね！」

「ああ、アネモネ——今ちよっと思いついたんだけど、土で平らなゴーレムを作って、その上に乗ったら、速く動けるんじゃないか？」

「なにそれ！ 面白そう！ 今度やってみる！」

アキラは、ゴーレム技術を油を撒くのに使ったと言っていた。

水をゴーレム技術で動かせれば、船も速く動かせるのではないだろうか？

無線機のマイクを取る。

「アキラ、油をゴーレム技術で動かせるってことは、水も動かせるんだよね？」

『ああ、多分いけると思うぞ』

「水をゴーレムで制御したら、浮かんだ船を高速で動かしたりできないか？」

『サーフィンに乗るみたいにか？』

「まあ、そんな感じ」

『うーん、面白そうだな。センセに聞いてみる』

アキラもやったことがないようだ。

「そなた——相変わらず、とんでもないことを考えるのう」

「アマランサスは、水のゴーレムやスライムみたいなゴーレムって聞いたことがないか？」

「ないわえ。ゴーレムというのは、人型に近づくほど優秀で高度と崇められてきた故」

なるほどなあ——人型にして、人を模倣することだけに技術が特化してしまったのか。

「仕事をさせるだけなら、人型などにする必要がないからな」

「そんなゴーレムの使いかたを知ったら、王都の大魔導師たちが腰を抜かすぞえ、ほほほ」

アマランサスが、扇子でパタパタと仰いでいる。

「それとも真っ赤な顔をして、邪道だと否定するか、どちらかだのリリースの言うのも一理ある。

元世界でも、ロボットは人型を模倣して進化してきた。人型に似せる――それも高度な技術ではあるが、特定の仕事をさせるだけなら、人型である必要はない。

工業用に作られた腕だけのロボがそれにあたるだろう。

車を街に入れると、挨拶をするために子爵邸に向かう。

通りを進み大交差点を左に曲がる。アキメネスと同じように、高級住宅街の終点がユーパトリウム子爵邸。

王都やらの立派な屋敷群を見てしまうと、ここの子爵邸もこじんまりとした印象に見えてしまう。

マイクロバスを降りると、正面の門にいる門番に伝える。

「こんにちは、約束はないんだが、子爵様に会いたい。ケンイチが来たと伝えてくれ」

こここの門番とは顔見知りなので、銅貨を数枚握らせると、すぐに屋敷へ行ってくれた。

ここでは辺境伯だと言わないほうがいいだろう。多分、混乱すると思う。

屋敷からすぐに門番が走って戻ってきた。

「お会いになるそうです」

「良かった」

車をそのまま入れてもいいらしいので、そのまま入る。
後ろのアキラにも連絡を入れた。

「アキラ、そのままついてきてくれ」

『了解!』

子爵も子爵夫人も、俺の召喚獣のことは知っているからな。
車を屋敷の庭に入れると、玄関に横付けした。

「リリスとアマランサスだけ、ついてきてくれ」

「承知した」

「聖騎士様の意のままに」

車を降りると、アキラの所へ行く。

「30分か1時間ぐらいだろうから、待っていてくれ」

「はいよ」

黒く立派な玄関の扉を開けると、3人で屋敷の中へ入った。

すぐに子爵と夫人が出てきたのだが――。

「「ははっ!」」

突然、目の前に現れた元王族に、子爵夫妻は床に這いつくばった。
俺の横にいる二人は元王族なのだが、お城であつたできごとなどを、この僻地にいた子爵夫妻が知る由もない。

元々は子爵領だった湖の土地が俺のものになったので、その報告をするわけだ。

国王陛下から賜った書状を読み上げる。

『アスチルベ湖畔の土地とそれに付随する高地を、ケンイチ・ハマダ边境伯に割譲するもの也。カダン王国国王――ラナン・キュラス・カダン』

同時に、湖の湖畔にハマダ辺境伯領ができて、俺が治める旨を伝える。

「ははっ！」

「まあ、お隣さんなので、仲良くやりましょう」

「あ、あのーそれは委細承知いたしましたが、なぜ王妃様と王女殿下が？」

子爵夫人がおそろおそろ、王妃に尋ねる。

「妾は既に王妃ではない。聖騎士様の奴隷である」

「え？ はあ？ 奴隷って……た、確かに首に奴隷紋がありますが、いったい――？」

「それは、ちょっと話すと長くなるので。王女は、辺境伯の正室になるのを条件に王族籍を抜けたのです」

「な、なぜ、そのような？」

子爵夫人の言葉に、リリスが不機嫌そうな顔を見せる。

「妾が、辺境伯の正室になったことに、なにか不満でもあるのかえ？」

「い、いいえ！ 滅相もございません！ でも……ケンイチ殿の所へ遊びにいけなくなってしまう……」

「カナン様、遊びに来ても大丈夫ですよ」

「真か?!」

「ケンイチ？ 其方、子爵夫人にも手を出しておったのか？」

「やめてくれよりリス。子爵の前でそんなことを言うのは。なんにもないんだからさ」

言い訳をする俺だが、それを聞いていた子爵が、とんでもないことを言い出した。

「あのー、辺境伯殿。可能なら、カナンをもらってはくれまいか？」

「はあ？ 何の話ですか？」

子爵の話では――王室と同じく、子供が生まれないので世継ぎで困っているらしい。

それを打開するために子爵が困っている愛人を正室にしたいようなのだが、夫人を側室に降格させるのは――少々問題があるようだ。

「カナンも子爵領を出たがっているようですし」

「あんな豚が正室で、私が側室だと言うのですよ！ こんなことが我慢出来ると思いますか？」

「カナン、彼女のことを悪く言うのは止めてくれ。彼女は素晴らしい女性なのだ」

この子爵の好みは、夫人のような美女ではなく、ふくよかな女性。いわゆる――デ○専。

貴族の習わしに従い、言われるままに夫人と一緒にだったが、それを止めたいようだ。

それに子爵の心は夫人からすっかりと離れてしまっているように思える。

これでは彼女は、つらいだろう。

「わぁーっ！ 子爵様は、かのようにおっしゃるのだ！」

夫人は泣き出すと、俺に抱きついてきた。

「夫人には、ご実家があるでしょう？」

「こんなことを伝えたら、勘当されてしまうであろ！」

そういえば、娘を良いところの貴族に嫁入りさせるのに必死な親だと言っていたな。

「贅沢は言わぬ、抱いてくれとも言わぬ！ 片隅でよいので、私を置いてたもれ！」

涙を流す夫人の真剣な眼差しに気圧される。

二十歳過ぎた女の涙は信用しない俺だが、この場合は仕方ないか……本当に行く所がなさそうだし。

「もう、しょうがねえなあ……解りました。お預かりいたしましう」

「真か?!」

夫人の顔がパツと明るくなったが、それを見ていたアマランサスが嫌味を言う。

「聖騎士様——まさか困っている女子おなこがいたら、全て助けるつもりかえ？」

「そうじゃないけどな——まあ知らない仲でもないし」
リリスとアマランサスが呆れているが、行き場所がないんじゃないかと可哀想じゃないか。

「それから、辺境伯殿」

「なんでしよう？」

「そちらが望むなら、この子爵領の政まつりごとも譲ってもいい」

「なんですって？ 本気ですか？」

「私は、もはや領の政に興味はないのだ」

この子爵は作家希望なのだ。性分的に向かない領の経営を放り出して、クリエイティブ作業に没頭したいのだろう。

「それは、やぶさかではありませんが——辺境伯領がどうなるか、まったく解りませんので……」

「いや、貴殿なら、なんなくこなすと思われる」

リリスとアマランサス、子爵夫人も頷いているが、財務はマロウ商会とプリムラに丸投げするつもりだったからな。

もちろん、そういう人材を抱えていることも含めて言っているのだらうけど。

その後、贈り物として白金貨を渡そうとしたが、その資格が無いと固辞された。

領を放り出すかもしれないから、受け取れないのだろう。

少々予想外の展開だったが――とりあえず話し合いは終了した。

俺と一緒に子爵邸から出てきた夫人――カナンを見て、獣人達が叫んだ。

「ちょっと！ お嬢！ まだ増えるようだぜ？ いいのかよ？」

「ほほほ――よ、余裕です」

プリムラの笑いが引きつっているが、あとが怖い。

「なんか、凄い面子になってきたにゃ」

カナンの荷物をまとめてもらい、後で取りに来ることになった。

彼女が、マイクロバスを見て驚く。

「これも、ケンイチ――様の、召喚獣なのですか？」

「ケンイチでいいけど」

「王族様の手前もありますし……」

「二人とも、もう王族じゃないからな」

「それでは、ケンイチでいいか？」

「ああ」

出発の前にアキラの所に行く。

「アキラ、どうする？ 俺が向かう場所にゃ、マジでなにもないから、領が立ち上がるまでアストランティアに滞在しててもいいぞ。車も預けておくし」

俺が子爵邸にいる間に、アキラの家族で話し合いをしたようだ。

「ケンイチ——悪いが、ウチの女たちは、やっぱり街のほうがいいみたいだ。車を貸しておいてもらっていいか？」

「いいぞ。人材の送り迎えを頼んだりすると思うけど」

「オッケー！ どうせやることもないしな」

プ○ドなら、彼のアイテムBOXに入れられるので、駐車場要らずだ。

彼に、バイオディーゼル燃料が入ったプラタンクを2個ほど渡す。

「サンキュー、恩に着るぜまったく」

マイクロバスに戻ると、プリムラが運転席にやって来た。

「ケンイチ、マロウ商会へ寄ってください」

「解った」

マイクを取って、後ろの車に連絡を入れる。

「おい、アキラ。この街にあるマロウ商会の支店へ向かうから。そこで泊まる所とかの相談をすればいい」

『了解！』

俺は、アキラたちを引き連れて子爵邸を出ると、マロウ商会のアストランティア支店に向かった。

132話 湖畔での生活がスタート

元、子爵夫人のカナンを乗せて、子爵邸を出た。

行先はマロウ商会アストランティア支店。

すぐ近くなので、運転席の後ろにプリムラが立って、案内をしてもらう。

俺はまだ、街の地理に詳しくない。

「お義父さんが支店にいるなら、挨拶をして、弁明もしなけりゃ……」

「さきほど、子爵邸に出入りしているマロウ商会の者に聞きましたが、父はダリアにいるそうです」

「そうか、落ち着いたらダリアにも行かないとな」

「父は――ケンイチが辺境伯になったなんて聞いたたら、大喜びだと思えますけど……」

そうならいいが……プリムラがそう言うなら、間違いないのだろう。

マロウ商会のアストランティア支店へ到着したので、プリムラを降ろすと、俺も一緒に降りて話をする。

「私は、ここで仕事がありますので、2～3日戻りません」

「解った。それじゃ、いざという時のために、これを渡しておく」

俺は、アイテムBOXから、青いマウンテンバイクを取り出した。ダリアの森を抜ける時に買ったものだ。オフロードバイクを買ったので、すっかりとアイテムBOXの肥やしになっていたが、街の中なら使えるだろう。

「こ、これは——なんて素晴らしいドライジーネ……」

プリムラが隅々までマウンテンバイクを眺めている。

興味を持ったものを見つめる視線が、マロウさんにそっくりだ。

車や重機は、理解の範疇を超えているのだろうが、自転車はどういうものか理解できるのだろう。

お手本で乗ってみせる。

「練習すれば——こうやって自分で漕いで乗ることができる。湖までも自力でやって来れるぞ」

「素晴らしいですわ！ 解りました！」

吟遊詩人のポポも、ここで降りるようだ。

「ここまで連れてきていただき、ありがとうございました」

「あまり酷い話を広めないでくれよ」

「そんなことしませんよ、もう！」

「それから——边境伯領が領民を募集していると、宣伝をしてくれ。本当に、なにもない所なんで、来るつもりなら覚悟を決めてくるようにと——」

宣伝料として、金貨2枚を彼女に渡す。

「こんなに！ 解りました〜！」

彼女が金貨を受け取り、深々と礼をした。

後からやってきて、車から降りたアキラにも声をかける。

「アキラ——宿屋やら借家のことなら、マロウ商会に世話してもらえばいい。俺が保証人になってもいいから」

「いつもすまないねえ……ゴホゴホ」

「おとつつあん、それは言わない約束だよ」

俺とアキラの寸劇に呆れているプリムラに、彼らのことを任せる。

「プリムラ、彼らのことを頼むよ。君なら解ると思うが、彼らは金になるぞ？」

「解っておりますわ」

ニコニコしている彼女は、アキラたちの力を理解しているのだろう。

金の匂いに敏感な彼女のことだ、こんな極上のコネを見逃すはずがない。

「あ、プリムラ。仕立て屋に服とローブを注文していただろ？」
洞窟蜘蛛の糸で特注してもらっているのだ。

「はい、あとで行って、様子を見てきましょう」
「頼むよ」

俺が、プリムラと話していると、獣人たちがマイクロバスから降りてきた。

「ちょうどいいところに来たな、ニャメナ」

「なんだい、旦那」

「お前は、プリムラの護衛なんだから、残るんだよな？」

「うっ！　そうだけど……」

俺の言葉に、ニャメナがたじろぐ。多分、自分の仕事を忘れていたのだろう。

彼女は、プリムラの護衛として雇われたのだ。

「にやはは！　トラ公、ケンイチのことは、ウチにまかせるにゃ」

「てめえ！　クロ助！　抜け駆けする気か？」

「にやはは！」

「くそっ！　こんなやつを信じた俺が馬鹿だったぜ」
その会話に、プリムラがため息をついた。

「解りました。私の護衛は別の人を雇うことにしますよ」

「す、すまねえ、お嬢！」

ニャメナが頭の上で両手を合わせた――この世界もそういう謝り方をするんだな。

「いいんですよ、あまりに信じられないようなできごとが色々ありすぎて、全部有耶無耶になっていましたから」

プリムラが、呆れた表情で俺のほうを見る。

「給料も払ってなかったしな」

「えー？ 色々と稼がしてもらってるし、住む所ももらって、美味しい飯は食い放題だし、美味しい酒は飲めるし、金なんてまったく要らねえ。逆に俺が身体で払いてえぐらいだ」

「そうだにゃー、ウチの金も全然減ってないにゃー。ウチもいつでも身体で払うにゃー」

ミャレーが俺に抱きつき、尻尾を腕に絡めてきた。

「おい、クロ助！ 俺も行くことになったんだから、旦那から離れろ」

ニャメナはミャレーを引き離そうと、手を伸ばしてきたのだが――

それを素早い動作でミャレーが^{かわ}躲すので、二人が俺の周りをグルグルと回り始めた。

「べーにゃ」

「てめえ！」

「ほらほら、喧嘩するな。湖に帰るぞ。それじゃプリムラ、マロウ商会の人たちによろしくな」

「承知いたしました」

プリムラとアキラたちをアストランティアに残したまま、マイクロバスは街を出た。

街道を右に曲がると、サンタンカの村へ行く曲がった道路を走る。湖が見えたら右折、俺が作った橋を通して、やっと湖畔へ戻ってきた。

キラキラと光る湖面、少々雑草が生えてしまった敷地。湖と反対方向を見ると白い筋が流れ落ちる滝。

トウモロコシを植えた畑は誰の手も借りずに実っていた。

マイクロバスを止めると、皆を降ろす。ドアを開けると真っ先にベルが飛び出した。

「ここか！ 中々良い所ではないかえ！」

王女が、湖面のキラメキに目を細めるが、王妃は自動車のスピードに驚いているようだ。

「こんな短時間で、王都からここまでやって来てしまうとは——聖騎士様の力、恐るべし……」

「文字通りの神速——さすが、ご主人様ですわ」

マイレンがやって来たので、メイドたちに意思の確認をする。

「ほら、メイドたち。ここを見てみる——本当になにもないんだぞ？ ここで暮らせるところか？」

「ご主人様なら、大丈夫なのでしょう？」 「アイテムBOXから、なんでも出てくるし……」

「そのとおりですよ。なにも心配はありません。メイドはメイドの仕事ですればよいのです」

「「はい、メイド長！」」

だめだこりゃ。諦めて、リリースにも声をかける。

「王都で何かあっても、数日で戻れるぞ」

「別に戻るつもりはないのだが？」

俺を睨むリリスではあるが、本当に帰る気はないのだろうか？
一緒にやって来たアマランサスも、嘘や冗談で奴隷になったり、
王族籍を捨てたりするはずがないとは思うのだが。

やっと帰ってきたが、やる事が山ほどある。人数が増えたし、こ
こを本拠地にするなら本格的な屋敷が必要になるだろう。

「地図でしか見たことがなかったが、本当に大きな湖だの。向こう
が見えぬ」

リリスが向こう岸を見ようとしているが、惑星は丸いから、3〜
4 kmぐらいしか先が見渡せないんじゃないか。なかったか。

ここは地球じゃないから、どのぐらいの大きさの星か解らんけど。
人が住む環境も同じだし、重力も同じように感じる——というこ
とは、地球とほぼ同じ大きさの惑星なのではあるまいか。

「水はたっぷりとあるし、開墾するだけの土地もある。もしかした
ら高地の上も畑にできるかもな」

「あの砂糖ができる草やら、チョコの元を育てるのじゃな？」

「ああ、そのとおり」

紋章官のユリウスにも、この場所の感想を聞いてみる。

「景色が良いところですね。ここに街ができれば、さぞかし美しい
街になることでしょう」

「その前に周りを見てみる、なにもないんだぞ？　こんな僻地に来
て、後悔はしていないのか？」

「ええ、それよりも——どんな街になり、どんな人が集まってくる
のか、今から期待が膨らみますねえ。ケンイチ様の手腕が存分に発
揮されるものと信じております」

マジで？ 話を聞いても、まったく後悔の「こ」の字もないようだ。

皆の様子を見ても、不安顔している者は誰もいない。

これだけの人数を連れてきてしまつて、正直どうなるか、まったく解らない俺だけが、不安に頭を抱えている。

これって不公平じゃないのか？ などといつても、後のカーニバル……。

話は、ここまでだ。暗くなる前に泊まる場所を作らねば。

領主になつちまつたんだから、俺には責任がある。

アイテムBOXから草刈機を出し、シャングリ・ラから鎌^{かま}を買つて、メイドたちに配る。

外国で見かける、死神の鎌みたいな巨大なやつを探したのだが、シャングリ・ラには売つてなかった。

「メイドたち、これで草を刈つてくれ。人数がいれば時間が短縮できさるだろう」

「「承知いたしました」」

俺から鎌をもらったメイドたちが、周りの草を刈り始めた。

見れば結構手慣れている。お城の草刈りも、彼女たちの仕事だったようだ。

「おーい！ アマランサスは周囲の警戒を頼む」

「心得た」

「ケンイチ、私にも鎌をたもれ」

やつて来たのは、元子爵夫人のカナんだ。

「大丈夫か？ 草刈りなんて、やったことがないだろ？」

「食客なのに、少しでも役に立つところを見せねば、追い出されてしまう……それに、小さな貴族領では、領主や夫人が作業をするの

も普通だぞ？」

「よほどの穀潰しでなけりや追い出したりはないけどな。実家に帰ればいいじゃないか」

「嫌だ！ 大体、子爵様にも離縁同然で放り出されたのに、父や母が迎え入れてくれるはずがない！」

別に放り出してはなかったろ。側室になるなら、そのままでもいいと言っていたし。

まあ、彼女のプライドからすれば、それは許し難いことだったのかもしれないが。

そう考えると実家に戻れないのは、間違いないな。

「それに……」

「それに、なんだ？」

「辺境伯様の愛人ともなれば――父や母の鼻を明かすこともできるし……」

「あそこにいる、怖い女たちの目にも、ひるまないのであれば、それでもいいけどな」

俺は、元王族の二人をチラ見した。

「真か！」

カナンの顔がパツと明るくなる。

とりあえず、やる気はあるようなので任せるが、白いドレスのままだでは作業ができない。

開いているスペースに家を出して、その中で作業着に着替えさせることにした。

作業といえば――ジャージだろ。シャングリ・ラから、側面に2本の白い線が入ったグレーのジャージを買う。

「カン、コレが作業着だ。着替えてからやってくれ」
「承知した！」

俺の渡したジャージを抱えて、カナンが家に飛び込んだのを見て、
獣人たちもやってきた。

「旦那！ 俺たちもやるぜ！」 「にゃー」

「そうか、それじゃ頼む」

獣人たちにも鎌^{かま}を渡す。人力での草刈り作業だが、人数が多いので、あつという間に家や大テントを置くスペースができた。

「ケンイチ！ 私はパンを焼くよ」

「おっ！ そうか、頼む」

アネモネのために、テーブルやコンロなどを出した。

「妾は、草刈りなどはできぬ故、アネモネからパンの作り方を習うとするか」

「教えてあげる！」

まさか王女が、パンを焼くことになるとは思わなかっただろう。

ここで重要な食事の準備だが、お城の料理人であるサンバクさんがやって来たら、任せてしまったほうがいいだろう。

俺の持っている料理のレシピなどを渡せば、寸分違わないものを作ってくれるはず。

たまに、ジャンクフードが食べたくなったら、シャングリ・ラで買えばいい。

家に小屋、大テントを全部設置して、ここが拠点となる。

元々、ツリーハウスに使っていた小屋は、ユリウスの個室になった。

中には、灯油ランプとベッドだけがある。

「ユリウス、これでしばらく我慢してくれ。他になにか必要なものはあるか？」

「小さな机をいただければ……」

「ちよっとまってくれ」

シャングリ・ラを検索——引き出しつきで、本棚と一体化しているパソコンデスクにした——1万円だ。

合板だが大丈夫だろうか。本当はスチールデスクの方が丈夫でいいんだがなあ。

椅子は、2つで1万4000円。

「ポチツとな」

机と椅子が部屋の中に落ちてくる。

「うわっ！　こんな立派なものを……」

「本棚と一緒になってるから、便利だろう」

椅子は木製だが、折りたたみ式で板状になる。

「椅子を使わないときは、こうやって、折りたたんでおける」

「これは、素晴らしい！　カールドンがはしゃぐわけだ」

この小屋は彼に任せよう。

アキラたちが使っていた大テントは、メイドたちと元王族二人の荷物置き場になった。

盗難が怖いのだが、夜中は巡回を立てるそうだ。もちろん、そういうのもメイドの仕事に入っているらしい。

夜な夜なお城の中をチェックするのは、メイドたちの仕事だったようだ。

それに、彼女たちは武術の心得もそれなりにあるし、メイド長のマイレンはかなり強いという。

作業が完了する頃には、日が傾き始めていた。

「よし！ 飯の準備をするか」

プリムラがいないので、俺たちはインスタントのスープにするが、メイドたちは、ちゃんとスープを作るようだ。

肉はもちろん、ドラゴンの肉。どんどん食って、どんどん消費しないとな。また獲れる可能性もあるし。

次の肉が手に入ったら、古い肉は売ってもいいかもな。

まあ、古いといってもアイテムBOXの中じゃ、いつまでも新鮮なままなんだけど。

太陽電池パネルで電気が作れるが、アイテムBOXがあれば冷蔵庫はいらないし、アネモネの魔法で洗濯機もいらない。

凄いぞ異世界。

飯を食い終わったので、風呂だ。数日、風呂に入っていなかったからな。

空き地に衝立^{ついたて}を立てて、風呂をアイテムBOXから出す。

屋敷には風呂も作りたいから、こうやって外で風呂に入ることもなくなりそうだな。

風呂釜じゃなくても、アネモネの魔法があれば風呂は沸かせる。

風呂の準備はできたが――今まで男は俺だけだったのだが、ユリウスが増えた。

彼まで女たちと一緒に風呂に入るわけにもいくまい。

「ユリウス、お前も風呂に入るか？」

「いいえ、ケンイチ様と一緒するなど、滅相もございません。川があるので、そこで身体を洗わせていただきます」

大テントで自分たちの荷物を整理しているメイドたちの所へいく。

「メイドたちは、どうする？ 温かい風呂だぞ？」

「滅相もございません。メイドがそんな贅沢を覚えては、日々の暮

らしが辛くなるだけでございます」

メイド長のマイレンが、メガネをくいつと上げながら答える。
贅沢を覚えると後が大変なのは確かだ。獣人たちも、俺が用意する料理を食べて、街で食事ができなくなったと言っていたからなあ。
メイドたちの顔を見ると――入りたいと思っっている顔だ。
女性だし、いつも綺麗にしておきたい、という思いも解る。

「それじゃ、石鹸と洗髪の薬だけやるよ。俺のメイドたちには、いつでも綺麗でいてほしいからな」

「ケンイチ様のお心遣い、誠にありがとうございます。お気に召したメイドがいたら、いつでも御用をお申し付けください」

「……ああ、まあ――その時には頼むよ」

そんなつもりはないのだが――ここで否定すると、彼女たちのプライドを傷つけてしまうかもしれない。

シャングリ・ラで石鹸やシャンプー、リンスを買って、プラケースに入れると彼女たちに渡す。

タオルや、バスタオルも必要だろう。

箱に詰まったシャンプーやリンスを見て、メイドたちがキャッキヤウフフしている。

彼女たちの姿が実に微笑ましく見えるのだが、それは俺がオッサンだからだろうか？

辺りが暗くなったので、LEDランタンを点ける。

衝立を立てて、湯船に水を張るのだが、ここには川があるので、水を入れるのは簡単。

アイテムBOXから出した湯船を川に沈めて、再び収納すればいい。

これで、いくらでも水が汲める。

湯船を設置したら、アネモネの魔法で温めてもらう。

「温め！」
ウォーム

これから建築する屋敷に風呂を作ったら、油を使うボイラーを設置できないだろうか？

アキラがいれば、いくらでも油は出し放題だからな。

その対価に、彼には生活必需品を供給すればいい。

外に置いた湯船は3つ。

俺が湯船に浸かると、裸のアネモネとリリスが飛び込んできた。

「までまで！ 三人は無理だろう！」

「ええい！ アネモネ、そなたは一人で入るがよい！」

「私がいつも、ケンイチと一緒に入っていたんだから！」

「妾は辺境伯の正室じゃぞ？！」

「私なんてリリスより、ずっと前からケンイチといるんだから！」

「はいはい、喧嘩しないの」

あゝもう、リリスの裸まで見てしまった。まあ正室だっていうんだから、いずれはこうなったってことなんだが……。

白く美しいリリスの身体は、もう15歳というだけあって、アネモネよりは女の身体つきだ。

ちょこんと突き出た胸は、まだまだ小さいが、彼女の実母は巨乳だったらしいので、大きく成長する可能性を残している。
ファンタジー

小さな湯船に、無理やり三人で入る。ぎゅうぎゅうだ。

風呂場は衝立で隔離されているのだが、すぐ近くにはメイドたちが控えているので、リリスが呼べば飛んでくるはず。

もちろん、俺が呼んでも同様だが、アマランサスはどうなのだろうか？

リリスは王族でなくなったとはいえ、辺境伯夫人だが、アマランサスは奴隷――。

メイドたちの対応が気になるが、アマランサス自身もメイドたちに、なにか頼む風でもない。

そのアマランサスは一人で湯船に浸かっていて、ひたすらマイペースだ。

さすが、実質的に一つの国を治めていた女傑。

贅肉一つついてないアスリートのような身体もよく見える。どう見ても、素人の身体ではない。

そのすぐ近くにバスローブで胸と股間を隠した、カナンが立っている。

「子爵夫人、どうした？ 入らぬのかえ？」

「いいえ、王妃様とご一緒するなんて、恐れ多い……」

「妾はすでに王妃でも王族でもない。ただの奴隷じゃ。遠慮することはないぞえ？」

そう言われて、カナンはバスローブを衝立にかけると、アマランサスと一緒に狭い湯船に浸かり始めた。

アマランサスも美人だが、辺境の華と呼ばれたカナン。

二人揃うと、ゴージャスさが倍増。この世が春爛漫になり、花びら舞う上空からいまにも天使が舞い降りてきそうな雰囲気。

そんな二人が、なんでこんな辺境で露天風呂に入っているのか、まったくの謎だ。

アマランサスたちの隣には、獣人たちが二人で一緒に風呂に入っている。

相変わらず、喧嘩しながらだが仲がいい。

獣人たちの様子を見ると、一緒に入っていたリリスが俺の股間に手を伸ばしてきた。

「ちょ、ちょっと！ 待て待て！」

「なにを言っておるのだえ。妾とそなたは夫婦なのだ、このぐらいするのは当然じゃろうが？」

「それじゃ、私もする！」

リリースに対抗するように、アネモネも俺の股間に手を伸ばしてきた。

「ちょっと、二人とも待ちなさいって！」

「ケンイチーそなた、湖に着いたら、妾を抱くという約束を違えるつもりではないであろうの？」

「そ、そんなことはないけどさ……」

少女二人に迫られる俺だが――いくらこの世界ではこれが普通だといわれても、元世界の常識が俺の邪魔をする。

いやいや、リリースはいいのかもしれないが、アネモネはこの世界でも完全にアウトだろ。

「ちょっと、アマランススからも、アネモネになにか言ってやってくれ。彼女は若すぎるだろ？」

「そうなのう……そういうのが趣味の貴族連中もいるようだが、普通は疎まれる行為じゃの」

「ぷー！」

そこに獣人たちも入ってきた。

「アネ嬢。あまり旦那を困らせちゃいけないぜ？ 確かに、アネ嬢みたいな小さな子どもとやるのが好きなやつもいるけどさあ」

「変態にゃ」

「子どもじゃないし！」

「俺も変態じゃないし、アネモネが子どもじゃないのは解っているけど、せめてリリースぐらいの歳になってからな」

「むー！」

皆の話を聞いて、この世界の文化に照らし合わせても、アネモネ

ぐらいの歳の少女に手を出すのは、やはりまずいようだ。
皆に説得されて、アネモネも引き下がった。

「そういうわけじゃ、それでは続きをしようぞ？」

「いやいや、そうじゃない」

「なにを躊躇っておるのじゃ。そうじゃ、ケンイチは妾の女陰ほとを洗うがよいぞ。洗いっこじゃ」

「ずるーい！ 私もおー！」

「アネモネ——全然、解ってないみたいだな。おーい、マイレン！
俺が呼ぶと、すぐにマイレンが風呂場にやって来た。

「お呼びでしょうか？」

「アネモネのような小さな女の子と一緒に風呂に入るのは、まずいよな？」

「それが、ご主人様のご趣味であれば、我々に止める術はございませんが——はつきり言って、人としていかなものかと」
はつきり言い過ぎ！

「ほら、アネモネ。まずいって、皆が言ってるだろ？」
そこに暗闇からベルが、パトロールから戻ってきた。

「お母さんも、アネモネになにか言ってやってくれ」

「にゃー」

「ぷー！ 私だけ、のけものにするう」

「そういうつもりではないんだよ。リリースぐらいの歳になるまで待ちなさいって言ってるの！」

俺に少々強く言われて、アネモネはそれ以上、なにも言わなくな
った。

俺を怒らせれば——風呂どころか、一緒に寝たりもしなくなるか
らな。

実際、彼女の歳は少々微妙だ。大人扱いはされる歳ではあるが、性行為は禁忌。

実に難しい年頃である。ひねくれて、グレなければいいのだが。お父さんはそこが心配である。

アネモネは、おとなしくなったが、リリースとはやらねばならない。アイテムBOXからテーブルを出して、その上にジェットヒーターを並べる。

「ふう〜こいつはたまらねえ」「この魔道具は凄いと思うにゃ」
ジェットヒーターは、獣人たちのお気に入りだ。彼女たちは、家の隣に出した小屋で寝るようだ。

髪の乾燥が終わったので、ナイトガウンを羽織り、家の中にアイテムBOXからベッドを出して並べる。

ここで、いつもは皆が一緒に寝るのだが、俺はリリースとの約束を果たさねばならない。

暗闇の中、俺の手に握られたLEDランタンが、辺りを青い光で照らしている。

リリースと手をつなぐと、家からちよつと離れた場所へ、一緒に向かった。

133話 村作りが始まった

食事が終わったあと、リリスと一緒に森へ向かう。

前に、湖に到着したら、彼女を抱くと約束してしまったのだ。

まだ15歳の彼女だが、この世界ではなんの問題もない。

元世界の常識からすると、少々まずいことになるので、それが俺の心を引っ張るのだ。

心にモヤモヤがあるとはいえ、約束を果たさねばならない。

俺は貴族になり、彼女は元王族——この約束は、殊の外重大な意味を持つ。

手に持ったLEDランタンが、木の上のステージを照らす——以前、ツリーハウスを作った所だ。

舞台に載っていた小屋は、他に転用してしまっているので、今はなにもない。

そこに登ると小さなテントを出した。

「こんな場所だぞ？　ここで良いのか？　屋敷が完成して、綺麗な部屋でやったほうがいいんじゃないのか？」

「そなたと一緒になら、どこでも同じじゃ。森の中で野獣のようにまぐわうのも一興」

「うーん……」

「そなた、なぜにそのように消極的なのじゃ？　妾のことが嫌いかな？」

「そんなことはないんだけどねえ。リリスのような若い娘と、したことがないからさあ」

「なんじゃ、そのようなことかえ。とりあえず、やればよい！」

リリースは凄い積極的だ。彼女の話では——このようなことは、全部に必要な知識として習うらしい。

「一緒になった方がいいが、子供の作り方も解らぬでは、話にならぬだろう？」

「そうじやな」

「心配せずとも、ほと妾の女陰は新品じや」

細く折れそうなりリスの腰を抱く。アマランサスは強靱なバネのような身体だったが、彼女の身体は、いかにも女の子のそれ。

抱き寄せる腕に力を入れると、リリースがか細い吐息を漏らす。

などと考えていると、リリースが俺のものを握った。

「あーっ！」

—
—
—
—
—
—
◇
◇
◇
—
—
—
—
—
—

小さな三角形の部屋の中で目を覚ますと、テントの生地を通して入ってくる柔らかい光に、リリスの裸体が照らされている。

ぱっと見、幼い身体に細長く伸びる脚、キラキラと光る金色の髪。まるで妖精のように美しいが、幸せそうな顔は、だらしなく涎を垂らしている普通の女の子にみえる。

その美しさに感動するわけでも、可愛らしさにほっこりするわけでもなく、俺はため息をついた。

「ふう……やっちゃったものは、しょうがねえ……」

リリスは気持ち良さそうに眠っているので、起こすのも悪い。

彼女の服をアイテムBOXから出すと、枕元に置いて、ツリーハウスから降りた。

日は昇ったばかりで、湖にはモヤがかかっている。

家に行くと、メイドたちは既に起きて、自分たちの食事の用意をしていた。

メイドたちに、シャングリ・ラのパンと卵を支給する。

卵は街で買うと結構高価なので、彼女たちは恐縮していたが、栄養をつけて働いてもらわないとな。

飯の用意のために、ここからアストランティアまで買い出しに行くのも大変だ。

早く畑を充実させたり、大型のパン焼きの窯を作ったりしたいところだ。

「俺も飯の用意をするか……」

メイドたちに作ってもらってもいいのだが、彼女たちが作るのは、この世界の料理だからな。

プリムラがないので、簡単にシャングリ・ラのパンとグラノーラにしよう。

リリス用にゆで卵も作るか。コンロに圧力鍋をかけて、卵を大量

に茹でる。

食事の準備をしていると、アネモネが起きてきて、俺に抱きついた。

「……パンを作る」

アネモネは、目をこすりながら不機嫌そうな顔をしているが、自分の仕事をしてくれるのは、やっぱりいい子だ。

シャングリ・ラのパンにしようとしたが、彼女が作るというのであれば、任せるとしよう。

パンを焼くいい匂いがたちこめる頃、獣人たちとユリウスも起きてきた。

「ふわあああ！ 久々に家で寝たって感じがするぜ」

「にゃー」

ずっと、長期旅行中だった身体をほぐすように、獣人たちが大きな伸びをしている。

「おはようございます」

「おはよう、ユリウス」

飯の用意をしていると、森の中からやってきたベルが、口に獲物を咥えてきた。

いつもは寄ってくる彼女だが、ちょっと離れた所で座っている。

「おお、ありがとうな、ベル。久々に本格的な狩りができて、嬉しいだろう」

「……」

話しかけても黙っている彼女は、獲物を置くと、プイとまた森の中へ消えてしまった。

「あれは機嫌が悪いのだろうか？」

ベルからもらった獲物は、アイテムBOXに入れておこう。

料理ができて、最後に起きてきたのは、アマランサスとリリスだ。

「ケンイチ！　しとねを共にした朝は、男の優しい言葉で起こすがよいぞ！」

「そりゃ、気がつかなかったなあ。あまりに気持ちよさそうに寝ていた姿が可愛かったからさ」

「な……そういうことは、誰もいない場所で言うがよい！」

リリスの顔が真っ赤になっているが、こういう顔は初めて見たかも。

メイドと一緒にいじめようぜ！　なんて言っているお姫様が、こういうことで恥ずかしがるのか……。

「むー」

俺とリリスを見たアネモネが不機嫌なので、あとでなだめないと。飯を食いながら獣人が予定を聞いてきた。彼女たちも、なにをやるのか気になるようだ。

「旦那、これからなにをするんだい？」　「にゃー？」

「とりあえず、砂糖を作る草を植えて、畑を整備して――家を建てる」

「家？　また、あの家と同じやつかい？」

「ああ、いつまでも天幕ってわけにもいかないし、とりあえず住む所が必要だ」

本格的な屋敷や家を建てて使わなくなったら、物置小屋にでも転用すればいい。

「けど、すぐに屋敷を建てる算段をしないとダメだろうな。そこらへんはマロウ商会を頼ろうと思う」

「無難じゃな」

リリスがゆで卵を頬張りながらつぶやく。

「しばらく紋章官の仕事もなさそうだな」

「ケンイチ様、どんな仕事でもお手伝いいたしますが……」

「まあ、無理しなくてもいいぞ。アストランティアから人手は集めてくると思うし」

「そうですね——お手伝いできることがあれば、なんなりとお申し付けください」

「その時はたのむ」

まあ、まだ慌てる時間じゃない。時間はたっぷりあるのだ。

俺の心情的には、まだまだ余裕だが——俺についてきた者たちのために、生活環境は早急に整えないとな。

俺たちの故郷を作る計画がスタートしたが、途中で頓挫する可能性もある。

難しい事業になると思うが、小さい村を作るぐらいはできるだろう。

朝飯を食い終わったので、早速仕事に取りかかる。

メイドたちには、草刈りの続きをしてもらう。ちょっと留守にしていただけで、草がボーボーになっているのだ。

鍬と鋤くわも渡して、畑すきもおこしてもらい、トウモロコシの取り込みもしてもらおう。

「私にも鎌をたもれ！」

なんだか、カナンが張り切っているのだが……。

「肉体労働をしたこともない貴族夫人が、あまり無理をすることは

ないぞ？」

「心配するな！ 私はやる！ 少しでも役に立つところを見せねば、ただの穀潰しではないか！」

「社交界に詳しかったり、ダンスが上手かったりするのでは……？」

「それも、元王族のお二人にかなうとは思えんし、ここではなんの役にも立たぬ」

それは確かにな。

女性陣が皆外に出ているので、シャングリ・ラから日焼け止めを買う。

ピンきりだが、高いやつにするか——1個3000円の日焼け止めクリームを人数分買うと、皆に配る。

「おゝい！ これは、日焼け止めの薬だ。肌が出ている所に塗ればいい」

「——「わあゝっ！」」

女たちが一斉に群がると、クリームを塗り始めた。

やはり気になるものらしい。マイレンに聞くと、外で作業をするときは、完全武装をするようだ。

「それって暑くないのか？」

「勿論、暑いのですが——背に腹は代えられません」
もちろん

まあ、女性にとってお肌は大切だからねえ。

「日焼けすると、シミやそばかすになるからな。あと、なにか欲しいものはあるか？」

「あの……ご主人様、帽子が欲しいのですけど……」

メイドたちの後列から声がした。

日焼け止めといえば、麦わら帽子だな。早速、シャングリ・ラで検索して、1個1400円の麦わら帽子を人数分購入。

「皆、同じだけど、文句は言うなよ」

「ご主人様、これは凄い綺麗な帽子ですね。腕利きの職人が作ったのでは？」

こういうのって、多分機械編みだと思うんだけど……。

「アマランサス——貴族たちは、日焼けをどうやって防いでるんだ？
日焼けした貴族たちを王都では見なかったけど」

「厚着をしたり、携帯用の天幕を使うのじゃ」

「天幕？」

話を聞くと——パラソルみたいなもので、一人用のテントを組み立てて、その中に入るらしい。

カナンは作業をするため、麦わら帽子でいいようなので、アマランサス用に日傘を買った。

3000円ぐらいで、表は白くて裏は黒い。周囲にはフリルがついている。

日傘なんて使ったことないから、どのぐらい日光を防げるのか解らない。

試しに、広げてみた。

「これは、ちゃんと日陰になるな。ほら、アマランサス。これで影を作って中に入ればいい」

彼女に日傘を手渡す。

「これは軽くて素晴らしい、携帯用の天幕じゃの！」

彼女が日傘を広げると、くるくると回して喜んでいる。気に入ってくれてよかった。

ここで作業してもらうのは、こんなもんか……。

紋章官のユリウスは、早速事務仕事をしている。

手始めに――辺境伯の授爵と拝領の挨拶の手紙を、各貴族たちに送るという。

この世界には郵便のシステムがないので、使いの者が直接運ぶか商人に頼むのが普通。

できたてホヤホヤのこの辺境伯には、使いの者なんて余っている人材はいないので、マロウ商会を使わせてもらう。

こんな事務仕事は、素人貴族の俺には、まったく解らないからな。紋章官のユリウスがいてくれるのは、非常に助かる。

「さて、まずは――」

とりあえず領内の唯一の村である、サンタンカへ挨拶に行ってみるか。

アイテムBOXからハ〇エースを取り出す。

「ケンイチ！ 妾にも、あの小さな天幕をたもれ」

リリスが、アマランサスにあげた日傘を見ていたようだ。

「あとで出してあげるよ」

話も、そこそこに車のドアを開ける。

「どこへ行くのじゃ」

「リリス、ちょっと乗ってくれ。隣にある村へ挨拶をしに行く」

「なるほど――そうじゃな。ハマダ領の領民じゃからな」

「私も行く！」

「アネモネ、村に挨拶したらすぐに帰ってくるんだぞ？」

「うん」

獣人たちとアマランサスにも指示を出す。

「周囲を警戒してくれ。しばらく留守にしていたから、魔物がやってきているかもしれない」

「解ったよ旦那」「にゃー」

一番敵に敏感なベルが、日向ぼっこして寝ているので、大丈夫だとは思うが……。

車を走らせて橋を渡り、サンタンカの村へ向かう。

直線距離で約3km——湖の畔を回れば4kmぐらいはあるが、車ならすぐ。

木造の平屋が立ち並ぶ、小さな村が見えてきた。以前訪れた時より、家や人が増えているように見える。

マスの干物やスモークサーモンを作っているので、仕事があるせいだろう。

何回かここには訪れているので、まっすぐに村長の家に向かった。

村長の家に行くと、中々上等な荷馬車が増えている——儲かっている証拠だ。

リリスと一緒に車を降りると、村長の家の扉を叩く。その様子を見アネモネは車に乗ったまま見ている。

「村長！ いるかい！？」

しばらく待っていると、村長が顔を出した。

「なんじゃい？」

短い顎ヒゲを生やした白髪の村長が顔を出した。

前は結構ボロい服だったが、以前に比べて着ている服が良くなっている。

「久しぶり」

「んん？ ああ、あんたか。何か売りに来たのか？」

「いや、国王の命令で、この湖一帯の土地をハマダ辺境伯領として治めることになったから、挨拶にと思ってな」

「はあ？」

村長は目をパチクリさせている。

「な、なんの冗談じゃい。ここらへんは、ユーパトリウム子爵領のはずで……」

「冗談ではないぞえ、ご老人。ここらへんの土地は、子爵領から割譲されて、ハマダ辺境伯領となった」

「彼女は、俺の正室でリリスだ」

「よしなにの」

国王からの書状を見せても、村長は信じられないようだが、すでに決定事項。

騒ぎを聞きつけた、村人たちが集まってきた。

「皆も聞いてくれ。辺境伯領になったからといって、いまのところはなにも変わらない」

「本当でござえますか？」

「ああ、なにか問題があれば、俺のところへ来てもらえばいい」
手土産に、シャングリ・ラから買った野菜のタネを渡す。

ほとんどが品種改良した中間種だと思うが、自家採種してどうなるかは不明だ。

「これが、野菜のタネでございますか？」

「この黄色い穀物は、隣の子爵領でも栽培が始まっているぞ」

「これが穀物ですか？」

実物を見せたほうがいいだろう。アイテムBOXから、以前に買ったトウモロコシを出して見せる。

「これだ」

「おおおっ」「これは、珍妙じゃなあ」「穀物なのか？」

「実を乾燥させて粉にすれば、小麦粉みたいに使える」

車にいたアネモネに来てもらい、魔法を使って加熱してもらおう。すぐに白い湯気が出て、食えるようになった。

電子レンジいらすだ。魔法があれば、洗濯機も冷蔵庫も電子レンジも要らない。

氷を作る魔法もあるそうなので、製氷機も要らないよな。

そりゃ科学が発達しないわけだよ。

加熱されたトウモロコシを食べた住民たちが驚きの声を上げた。

「美味しい!」「甘い!」「こりゃ、たまげた」

「上手く栽培しないと、こんなには甘くならないんだけどな」

「このタネを撒けば、この穀物になると――」

村長も、トウモロコシの美味さに驚いたのだろう。黄色い粒粒をじっと見つめている。

「そうだ」

住民たちは、あれやこれやと話し合っているが、とりあえずの挨拶は済んだ。

まだ半信半疑かもしれないが、なにかあっても子爵領からの手助けはないので、俺に頼むしかないし、当然俺にはその義務が生まれた。

そのことを住民に伝えと、車に乗って家に戻る。

「ケンイチ、それなりに儲かっているように見えたが、なにもせぬのかえ?」

「村にはしないが、領にマロウ商会の支店を出させて、そこ取引をさせる」

「なるほど――そうすれば、マロウ商会から税を取ればいいわけじゃない」

この世界に人头税や住民税などはないが、商業ギルドに登録して

いる商人は利益から税金を取られる。

俺は貴族になったので、貴族として領を経営して利益が出れば、王国に税金を納めなくてはならない。

一般人には税金がないのが基本だが、街や領によって独自の税金を課している所もある。

そのへんは、各領や都市の裁量に任されているのが普通で、過酷な税に耐えられなくなった住民が離農したり脱領することもある。

「まあ私腹を肥やすつもりもないし」

俺の家族だけなら、シャングリ・ラで購入した食料や、森で調達する獲物で十分に暮らしていけるからな。

「ケンイチならその心配もなさそうじゃな。じゃが私腹を肥やして領民をこき使い、生かさず殺さずしてこそ、貴族だという者もおるぞえ」

「そんなこと、するはずもない——皆で幸せになろうよ」

「ふふ……ケンイチの申すことも、もったもじゃが、貴族らしくないのう」

そこに後ろの座席から、アネモネが割って入ってきた。

「もう！ くつつかないの！」

「妾は、ケンイチの正室じゃぞ？　　のう、ケンイチ——昨夜のように、優しく妾を抱いてたもれ」

「ずるーい！」

「ははは、あのような身も心もとろけるような官能を味わえぬとはのう、かわいそうにのう、かわいそうにのう」

「むー！」

「リリス、アネモネを煽るんじゃない」

リリスがアネモネと言い争いをしている間に、車は家に到着した。車から降りると、アネモネが俺に抱きついてきて離れない。

「これ、アネモネ。離れなさいって」

「や！」

彼女をずるずると引きずって、獣人たちを呼ぶ。

「ちょっと、湖の近くで畑仕事をするから手伝ってくれ」

「うゝし！」「にゃ！」

水辺に近い所へ行くと、シャングリ・ラからサトウキビの苗を20本ほど買う。

地下茎を伸ばしてどんどん増えるらしいから、このぐらいでもいいだろう。

地下茎で増えるなんて、ススキや笹みたいな感じで増えるんだろうか？

アイテムBOXにも、俺が使っていたシャベルが入っているが、数が足りないのでシャングリ・ラで追加購入。

獣人たちにも渡した。

「これを埋めてくれ」

「これが砂糖になるなんてなあ」「そうだにゃー」

「勝手にどんどん増えるらしいから、栽培は簡単らしいぞ」

「へえゝ」

皆で湖畔を掘り返して、サトウキビを植える。

作業を見ていたリリスも興味があるようだ。

「そんなに簡単に増えるなら、王国中が砂糖に埋まりそうだな」

「この植物の生育には、豊富な水が必要なんだよ」

「ほう——それでは、この湖の周りの土地が最適ということじゃの」

「そういうこと。それ故、このサトウキビと製糖は、この領の産業になるはずだ」

「ううむ……」

シャングリ・ラには甜菜もあるが、甜菜だどこでも栽培できちゃうからな。

それを出すと、ハマダ領の優位性をなくしてしまう。汚いいうなかれ、これは勝負なのだ。

やるからには勝たねばならないし、この領にやって来た者たちの未来と生活が、俺の双肩にかかっている。

植え終わったら、アネモネに成長促進の魔法をかけてもらう。

「むー！ 成長促進！」
グロウ

地下茎が横に伸びたのか、植えた場所以外からも芽が伸び始めた。見る度に思うーこりゃ凄い。こんなの元世界のテクノロジーでも無理だ。

凄い魔法だが、対価なしで伸びているわけではない。植物の成長には、水と肥料が必要だ。

カラカラになって死んだ土地に、タネを撒き魔法を使ったとしても成長はしない。

魔法で成長促進させるには、ここにも肥料を沢山いれる必要があるだろう。

時間は少々かかるが、ある程度増えれば定期的な刈り入れが可能になると思われる。

「まったく、こんな草が砂糖になるなんてねえ。旦那、次は？」

ニャメナが、サトウキビの葉っぱを、不思議そうにいじっている。

「これだ」

俺は、シャングリ・ラで見つけて購入した、あるものを見せた。

色は焦げ茶で、しなびたエンドウ豆のような形をしており、見た目とおりにマメ科の植物だ。

実際になっているところを見たことはないが、シャングリ・ラの

説明には大きな木の写真が載っているの、木の実なのだろう。
その光景は、俺の地元に沢山生えていたニセアカシアを思い出す。
もっとも、ニセアカシアの実は毒なので何の役にも立たないが。

乾燥した殻を割ると、中から茶色の種を取り出した。

「マメかい？」

「まあそうだな。ちょっと齧ってみろ」

取り出したタネを、ミヤレーとニヤメナに渡すと、彼女たちがそれを口に放り込んだ。

「ほんのり、甘いにゃ。ちょっと鉄っぽい味がするかにゃ？」

「あのチョコってやつの味がするぜ？　これが原料なのかい」

「こいつはキャロブといって、チョコの原料であるカカオとは違うが、これもお菓子やパンにいれるための、材料として使えるだろ」
もしかしたら香辛料としても使いみちがあるかもしれない。

キャロブの利点は、マメ科の植物ってことだ。

これらは、根に共生している根粒バクテリアを使って空中の窒素を固定できるため、土地を選ばずよく育つ。

「私にも！」

「妾にもじゃ！」

俺にしがみついて離れないアネモネと、リリスにもキャロブの実を少し渡す。

「このタネには栄養もあるからな。飲み物としても使えるかもしれない」

「うん、美味しい」

「ほう、変わっている風味じゃの！　あとからやって来るサンバクに渡せば、美味しい菓子に変えてくれると思うぞえ？」

「そうなんだよ。それを期待している」

カカオも栽培するが、上手くいくか解らないし、選択肢は多いほうがいい。

アイテムBOXから芽出しポットを取り出して、キャロブのタネと――以前購入したカカオのタネを植える。

作業の終了後、再びアネモネの魔法を使ってもらう。

「成長促進！」
グロウ

ポットに植えたタネが次々に発芽して、顔を出す。

「よっしゃ！ こいつをもっと広い所に植えよう」

20個ずつ合計40個のポットを板の上に乗せて、アイテムBOXへ収納する。

崖に近い所に行くと、そこには、獣人たちが植えてくれたリンカーの木が生えている。

再び、獣人たちにシャベルを渡すと、キャロブの苗を植えてもらう。これらは木なので、少々離して植えたほうがいいだろう。

水と肥料をたっぷりやって、再び魔法を使ってもらうと、あっという間に40cmほどに伸びる。

早い！ キャロブのほうは、もう蕾が見えているので、花が咲きそうだ。

こんなに小さいのに、花が咲くってことは、実もなるってことだ。ニセアカシアも増えまくるが、こいつも注意しないと、増えまくるかもしれない。

木も植え終わったので、畑にいるメイドたちの所へ行く。

俺が渡した麦わら帽子を被って、あちこちでメイドたちが忙しそうに働いている。

また芽出しポットに野菜のタネを植えて水をやり、アネモネに魔

法をかけてもらう。

「なぜ、そのような器にタネを入れるのじゃ？」

「ん？ 一箇所に集めた方が、水をやりやすいし、魔法もかけやすいだろ」

最初から畝^{うね}にタネを撒いてしまうと、一々歩いて回らなければならない。

「なるほどのう」

「発芽が悪いものを間引くのも、座ったままでできる——簡単だ」

「さすが旦那」「にゃー」

「さすがですわ、ご主人様」

マイレンのその言葉が恥ずかしいので、ちょっと提案を試みる。

「マイレン、その『さすがしゅ』は恥ずかしいんだけど……」

「何をおっしゃいます。これも我々メイドの仕事でございますから俺の命令はなんでも聞くはずなのに、これはダメらしい。

主をおだてて仕事をさせるのもメイドの仕事の一つだと言いたいようだ。

「はは、実際にメイドたちが入れ替わっただけで、領の経営が傾いたみたいな話も聞くしのう」

リリスがそう言うのなら、間違いないだろう。

華やかな表舞台を有能な裏方が支えている——結構ありそうな話ではある。

メイドたちを手箒めにして支配しているつもりが、実は操られていたとか——。

ポットで10cmほどに伸びた野菜を、皆で畑の畝に植えていく。

「なるほどのう、よく考えられておるわえ。さすが賢者だのう」

それも止めてほしいのだが、自分でそういう設定にしてしまったからな。

これで畑に沢山野菜が育てば、メイドたちも自由に自炊できるだろう。

軽く皆で昼食を取ったあと、かねてから計画していた俺の作業をする。

それは、文明の利器である重機——コ〇ツさんとファンタジー武器を合体させる試みだ。

俺の胸は期待で膨らんだ。

134話 戦闘機械獣

かねてから温めていた、俺の妄想を実現に移す。

愛用の重機――コ○ツさんと、ファンタジー武器の融合。

それが今回の計画の趣旨だ。

まずは、元世界でビルなどの解体用に使われている、クラッシャーという重機のアタッチメントを買う。

こいつはバックホウの腕の先端に装着する、クワガタのハサミのような形をしている。

この大きなハサミでコンクリや鉄筋を切断して、建物を解体するわけだ。

解体用のアタッチメントを買うのだが、解体に使うわけではないので、ボロい中古で十分。

サビサビのクラッシャーが10万円ほど売っていた。こいつを利用しよう。

「ポチッとな」

ドス！ と重い鋼鉄の塊が、地面にめり込む。

とても一人で動かせるような重さではないので、力自慢の獣人たちを手伝ってもらう。

こいつに、ソバナで買ったドワーフの巨大剣を合体させる計画だ。その大剣も、アイテムBOXから出した。

「旦那、こんな巨大な剣をどうするんだい？」 「にゃー？」

「召喚獣の腕に装着させて、振るんだよ」

「ええ？ 本気かい?!」

「本気と書いてマジと読む」

黙っていたリリスが、俺の所にやって来た。

「そなた、そのような巨大な剣も持っていたのかえ？」

「ああ、リリスには見せてなかったか。ソバナのドワーフの店で買ったんだ」

黒い刃先はアダマンタイトだと説明する。

「なんじゃと、アダマンタイト?!」

「ドワーフの話によると、竜の鱗すら切れるって言ってたけど」

「これが本物のアダマンタイトなら、切れるじゃろ」

まさか、あのドワーフが嘘をつくとも思えんし、これは本物で間違いないはずだ。

リリスが、巨剣を興味深そうに眺めて、手で触っている。

彼女は、かなり好奇心が旺盛なタイプみたいだが、好奇心は猫をも殺す――注意しないとな。

獣人たちに手伝ってもらい、巨大な鉄のハサミと巨大な剣の柄の部分が合うように寝かす。

プラズマカッターをアイテムBOXから出して、シャングリ・ラから買った鉄管と鉄板を切断。

それを溶接合体し、Ω型の留め具を沢山作って、アタッチメントに固定するわけだ。

アイテムBOXから、大型発電機と、溶接機を取り出して準備をする。

溶接面を被り、周りにいる連中に注意を促す。

「おーい！ 魔法の光を出すから、直接見ると目が潰れるぞ！ 絶対に見るなよ」

「ケンイチ、真かえ？」

「本当だよ。だから見るなよ。アネモネ、ちょっと鉄を加熱してくれ」

「うん、^{ウォーム}温め！」

鉄が真っ赤になるほどの加熱はできないが、手がつけれないぐらいの温度にはなる。

発電機を起動して溶接を行うと、まばゆい白い閃光を放ち、火花が飛ぶ。

とりあえず、このアタッチメントは、これ専用になるから、がちりと溶接してしまう。

「こ、これは——真に目が潰れる光だの！」

「見るなよ！」

数十分かけて、巨剣の柄と鋼鉄のハサミを溶接——ガッチリと固定した。

「ふう——これが本当に使えるかどうかだ……召喚獣を出すから、皆下がってくれ！」

コ○ツさんの強化武装が完成したので、早速試し切りだ。

これでだめなら、固定する金具を特注したりしなくちゃならない。アイテムBOXから重機を出す。

「コ○ツさん、召喚！」

地響きを立てて、黄色い巨大な重機が現れた。

獣人たちに手伝ってもらい、コ○ツさんの腕に装備されているバケットを交換——巨大な剣に換装する。

当然、油圧のケーブルもつなげる。クラッシャーのハサミを開けば、巨大な^{つば}鋸のように見える。

重機の運転席に座ると、エンジンを始動させて、感触を確かめる。巨大な剣を水平にもできるし、立てて突き刺すこともできる。

このアタッチメントは、先端を360度回す事ができるので、剣を縦にも横にもすることが可能だ。

この重機は、アームの先端まで約9m——そこに刃渡り3mの剣の長さが加わる。

切っ先まで12mの巨人が振り回す剣。

こんなことをしなくても、アネモネのゴーレムに持たせれば良いような気もするが。

「アネモネ、ゴーレムに剣を持たせるってできるかな？」

「うゝ、難しいような……」

リリースに聞いても、ゴーレムが剣を装備したりした事例はないらしい。

戦闘に使うときは、単純に岩を投げたり、丸太を転がしたりして攻撃をするようだ。

「それで——旦那は、こいつを戦闘に使うのかい？」 「にゃ？」

「ちょっと今から試してみるぞ」

そのまま重機を移動させて、アストランティア側の森へ向かう。ここを切り開いて、アストランティアまでの直通道路を作るつもりなので、木を切っても問題ないだろう。

剣を水平にすると、コ○ツさんのアームを振り回して、切り倒す木に当たりをつける——木の太さは40cmぐらい。

2〜3回試し振りをしながら、位置を合わせていく。

「よし！　いってみるか」

近代科学の結晶プラス、ファンタジー武器。

いったい、どのような結果になるのか。

「おおい！　危険だから、離れていろよ！」

運転席から顔を出して、周囲に注意を促す。剣の固定が壊れて、飛んでいく可能性もある。

俺はレバーを握る手に、ぐっと力を入れた。

これは機械なのだから、旋回用のレバーを動かせば、毎回同じ動きをする。

勢いよく車体が旋回すると、そのまま切っ先が大木へ到達。

いったいどうなるか？ 好奇心でワクワクしながら、アームを操作したのだが――そのまま通り過ぎた。

「あれ？ 空振ったか？」

運転席から身を乗り出して、様子を窺っていると――風が吹き、森が揺れた。

それに煽られるように木がゆっくりと動き始めた。

やったか？ と喜んでいると、大木は俺のほうに向かって倒れてきたのだ。

「ちょ、ちよつとタンマあ！」

慌てて、運転席から飛び降りようとする、アネモネの声が響いた。

プロテクション
「聖なる盾！」

彼女の声とともに現れた透明な盾が、倒れてきた大木を斜めにそらすと、コ○ツさんの横に倒れてバウンドした。

腹に木が転がる重低音が響く。久々に血の気が引いた。

「ふう……焦ったぜ……」

そりゃ木を水平に切ったら、どちらに倒れてもおかしくないが、木が倒れてきたのだから、この大木を一刀両断できたのだ。

俺が喜んでいると、慌てて皆が駆け寄ってきた。

「すげええ！　こりゃ、使えるぞ?!」

「旦那、喜ぶのはいいけど、今のは、やばかったぜ？」

「そうだにゃ」

「悪い！　早くこいつを試してみたくて、あまり注意を払ってなかった」

「ケンイチにしては、珍しいにゃ」

「だが、さすがアダマタイトだ。ドラゴンでも切れるっていうのは嘘じゃないみたいだな」

この鋼鉄の野獣の振り回す剣が、本当にドラゴンに通用するかは未知数だけど。

「ケンイチ、このような化物をどうするのじゃ？」

「どうって……使うだろ？　辺境伯領を守らんとダメだし」

「でも、こんなのを使ったら、相手が騎士団でも鎧ごと真っ二つだね」

アネモネが凶悪な武器を見て、つぶやく。

「う、多分な」

そんな使い方はしたくないが、皆を守るためなら、決断しなくてはならないだろう。

そういう立場に、なってしまったわけだし。

とりあえず平和的な利用法として、倒した大木がアイテムBOXに入るように10m以下にカットするのに使う。

大剣の刃先を立てて、大木を輪切りにする。半分にすればアイテムBOXに入るだろう。

ずんばりん——と面白いように切れる。こりゃ凄い。

まるで、原子の鎖をカットするような感じで、スツと切れる。

作業をしていると、アキラのプ○ドが俺たちの所へやって来た。
運転しているのは当然アキラだが、他にも誰か乗っているようである。

俺は、アキラを出迎えた。

「よお！ アキラ、よく来たな！」

「オッス！ なんだよ、いいところじゃねえか。コテージとか建てれば、別荘地だぞ」

「あそこに、滝もあるしな。この世界の住民は、観光旅行とかしないみたいだし」

「ああ、そうだなあ。大貴族は別荘地へ行ったりすることがあるけど」

そんなことができるのは、よほどの大貴族だけだろう。

隣のダリアを治めている伯爵でも、王都に小さな宿泊用の別邸を持っただけだというし。

「やっぱり、俺だけでも、ここに住もうかな？」

「もし、そうなら、歓迎するぞ？ なにもないけどな」

「そんなの、美味しい飯と酒と女がいれば——って、なんじゃありや？」

アキラが大剣を取り付けた重機を見つけて驚いている。

「ソバナで、ドワーフから買った巨剣を、重機に取り付けて兵器として転用しようかと。名付けて戦闘機械獣！」

「そりゃ、相当いかれてるな——むろん褒めてんだけど」

「はは、サンキュー。当面、騎士団やら軍は持てないから、それに代わる兵力が必要だろ？」

「まったく領主様ってのは大変だな。俺は、貴族なんかは御免こうむるねえ」

とりあえず、重機をアイテムBOXに収納しよう。

俺の行動に呆れるアキラの後ろから、プリムラがやって来た。卸したての青い上着を着て、腕には青い布を持っている。

その横にヒゲの生えた背の小さい男がいる。白いシャツに、茶色のズボンとベストを着て、背は低いがガッチリとした肉体労働系だ。いかにも、頑固な職人風――歳は俺と同じか、ちよい上と思われるが、この世界の男は年齢より老けて見えることが多い。

若く見られる日本人とは逆だな。それだけ苦勞が多いのかもしれないが。

それとプ〇ドの近くに、白い毛皮を着た女の獣人がある。

おそらく、プリムラが雇った新しい護衛だろう。

メインのお客は、目の前にいる男のほうだ。

「プリムラ、そちらは？」

「アストランティアの大工の親方、ドラクラです」

「辺境伯様には、ご機嫌麗しく」

親方が堅苦しい挨拶をしようとするのを止める。

「そういうのは、いらないよ。ケンイチでいい」

「それじゃ、ケンイチ様。お屋敷を建てなさるそうで？」

「ああ――」

彼に建てる屋敷の大きさを伝える。アストランティアにある子爵邸のより一回り小さいサイズでいいだろう。

勿論、木造だ。いつ消滅するか解らない領のために、贅沢な石造りの建物なんて必要ない。

「それから、メイドたちの宿舎が必要だ。今後を考えて20人ぐらいが利用する造りにしてくれ」

親方が俺の注文をメモっている。

「本当は、屋敷を崖の上に建てたいんだがなあ」

「はは、そいつは面白そうですね」

「そいつは面白そうだし、景色がよさそうだな！ 秘密基地っぽくていい」

アキラも賛同してくれた。

「だろ？」

男たちは乗り気なのだが、リリスから物言いがついた。

「ケンイチ、あまり酔狂な建物にすると、後々大変なことになるぞえ？ そういう無駄遣いをした貴族が沢山おる！」

「私も、そう思います」

リリスとプリムラの言葉に、男のロマンから現実に戻された。

「ケンイチ、自宅ってのは奥様の意見も大事だからな。ちゃんと聞いたほうがいいぞ？」

「そうだな」

とりあえず、男のロマンは諦めるしかないようだが、建築の契約をマロウ商会を介して結んでもらう。

なぜマロウ商会経由だといえば、できたてホヤホヤの辺境伯領に信用がないからだ。

位階が高いのは確かだが、こんな野っ原と森しかない僻地にできた貴族領を誰も信用なんてしていないってわけ。

屋敷を建てた途端に破産した——なんてことになったら、大工の経営も危なくなるからな。

日本という連鎖倒産だ。

「材木は——開拓のために、ここの森から切り出すから、それを使

ってほしい。できるか？」

「そのためには、ここに製材所を作らにやなりませんねえ」

この世界の大工は、材料の切り出しを手配して運搬などをする材木屋の仕事も兼ねている。

ここに製材所を作れば、木材をアストラランティアへ運んで加工するより、手間が省けるはずだ。

「丸太の運搬は俺のアイテムBOXがあるから、楽だぞ」
俺のアイテムBOXから、丸太を取り出す。

「ひえ！」

突然、極太の丸太が出現して転がり、親方が声を上げた。

「いやはや、お嬢さんから領主様がアイテムBOX持ちだとは聞いてましたが……」

「あちこちで、加工して運んでくるより楽だろ？ 屋敷だけではなくて、住民たちの住居も建ててもらうつもりだし」

「こりゃ、大仕事だ。下手をすると、ここがアストラランティアより大きな街になるかもな」

「私は、そう思っておりますよ」

プリムラが、得意げに大きな胸を張る。

「それじゃ、ここに製材所を作るのは決定なのか？」

「実は、アストラランティアでは、もう仕事がそれほどないのでございます」

「この人口が増えるとなれば、いくらでも仕事が増えるからなあ」
「その通りでございます」

最初の計画として――アストラランティアまでの直通道路を作るつもりだから、工事で伐採木がでる。

「道を作るために切り倒した丸太も、場所を決めて積んでおくから、それを使ってくれ」

「切り倒す手間がいらないなんて、ありがてえことですよ」

俺は、大事なことを忘れていた。

「そうそう、屋敷の建築を始める前に、これを組み立ててくれないか？」

俺は、シャングリ・ラから、ログハウスのキットを購入した。

以前に買ったものとは違うが、似たような板を積み重ねるタイプのログハウスだ。

同じものを検索したのだが、売っていなかった。モデルチェンジしたのか、別の商品に切り替えたのかもしれない。

この手の商品は、ある程度まとめて材料を加工してあるはずで、それがなくなったら販売終了なのだろう。

五坪で150万円——俺が使っていたものと似たようなスペックの小屋だ。

「ポチッとな」

購入ボタンを押すと、空中からバラバラと板が落ちてくる。

降ってくるのは前と同じだ。途中で売り切れたら、他のタイプを購入するしかないだろう。

まあ雨風しのげれば、それほど文句は出ないはずだ。こんな組み立てキットの家だが、街に建っている住宅と比較しても、結構上等な部類に入る。

「こりゃいいー！」

親方が、バラバラになったログハウスの材料を見て、驚いている。

「材料は、すでに加工してあるので、これを10棟ぐらい組み立て

てほしいんだ。素人の俺たちがやるより専門業者のほうが早いだろうか？」

彼と一緒に落ちてきた、組み立て説明書を見せる。

「ふむ、この紙に組み立ての方法が書いてあるって寸法ですか……」

「そう、同じ家を沢山建てるなら、予め加工した材料を使ったほうが効率がいい」

「なるほどなあ……」

親方は感心するように、説明書を眺めているが――。

「どうだ？ 組み立てはできそうか？」

「あそこにある、あの家や小屋も、こういう具合に組み立てたものでございましょう？」

親方が、俺たちの家を指さした。

「実はそうなんだ。あの家は、俺が一人で組み立てた」

「それじゃ大工のあつしらが、できねえと泣き言を言うわけにはいかねえ」

まあ、彼らは家造りのプロフェッショナルだ。家の構造については、俺より詳しいだろう。

「それと、こいつは台所も便所もないので、その改造してもらいたい」
もちろん

「勿論、それはあつしらの領分です」

シャングリ・ラで売っている元世界準拠の家とはいえ、その構造はこの世界のものと、ほとんど変わらない。

それは俺も確認済みだ。

「色々決まったところでだ！ アキラ隊員、君に頼みがある」

「なんだい？ ケンイチ隊長」

「バイトしないか？」

「ああ、荷物運びだろ？ ハ〇エースでやるのか？」

「いいや、これだ」

俺は、皆を下がらせると――アイテムBOXからM菱キ〇ンターを取り出した。

長いボディが空中から現れて、地面でバウンドする。

「4トロングかよ！」

「アキラ、運転は？」

「任せろ、ダンプでもOKだ。でも材木やらを運ぶんなら、車載クレユ〇ツク付きのほうがよくね？」

そうか、確かにそうだな。アキラの言うとおりだ。

「アキラは、クレーンの操作もできるのか？」

「ああ、免許は持っていないけど、闇でやってた。ははは」

とんでもないやつだな。彼の話では、玉掛けもできるそうなので任せるとうしよう。

彼の言うとおり、色々な作業や積み込みがあるなら、クレーン付きのほうがいいだろう。

アイテムBOXから出した4ト車を再び収納して、下取りに出した。

ついでに高所作業車も要らないな。アネモネのゴーレム魔法があれば、高所作業車やクレーンの代わりを十分に果たせる。

よし――高所作業車も下取りに出そう。

「ポチツとな」

2台を下取りにして300万円ほどになったので、そいつを資金にする。

検索してみると、M菱のキ〇ンターよりワンランクアップしたフ

○イターが500万円で売っていた。

おあつらえ向きに4tのクレーン付きだ。走行距離12万km。トラックで12万kmはまだまだ序の口。

これにしよう。

「ポチッとな」

空中から、白い大きなトラックが落ちてきた。搭載されているクレーンは赤色で、荷台に対して水平に伸びている。

「おーっ！ ワンランクアップしてフ○イターになったな。マジでなんでも作れるな！」

彼には、シャングリ・ラのことを言っていない。俺の魔法で作りに出していると言っているのだ。

「なんでも作れるってわけじゃないけどな」

「ス○パークレートは？」

俺は知らなかったのだが、フ○イターの上位車種の大型車らしい。

「10mを超えるのは無理だ」

「ああ、そういう制限があるのか……」

実際、シャングリ・ラで購入するのは可能だろうが、アイテムBOXに入らなくなる。

入らないと、下取りも出来ない。いや、試していないが、購入も出来ないかもしれない……。

考え込んでいると――アキラの言葉で現実に戻された。

「ちょっと動かしてみてもいいか？」

「もちろん」

アキラが、トラックのディーゼルエンジンをかけて、クレーンを動かす。

「クレーンは4メートルだぞ」

「はは、上等！」

アキラは扱えると言っていたのだが、彼の言うとおりに、クレーンは動き始めた。

手足のように自在に動かしているので、はっきり言って俺が操作するより全然いい。

それを見た、大工の親方が驚いた。

「これは！？ 魔法で動く起重機でございますか？」

この世界にも、起重機という言葉はあるらしい。親方の話では、組み立て式の人力クレーンのようだ。

元世界でもレオナルド・ダ・ビンチの時代からクレーンはあったようなので、似たようなものかもしれない。

大型の石を使う建築には、ゴーレムをクレーン代わりにするとう。

ゴーレムを使うのなら、俺の領にもそれを扱える大魔導師がいる。うねうねと動くクレーンを見て、獣人達もやって来た。

「すげー！ 旦那、また新しい召喚獣かい？」

「にゃ！」

クレーンの先についているフックに、ミャレーが飛びついた。

眼の前で動くものが気になるのだろう。ぶらぶらとぶら下がり遊んでいる。

アキラも面白がって、グルグル回したりしているが、大丈夫だろうな？

リリースもやってみたいような顔をしているのだが、当然危ないの
で止めた。

「ケンイチ、あんなデカイ重機があるなら、もっと遊べるぞ？」

彼の話では、バケットをグルグル回して、湖に放り込むのだそう
だ。

「遠心力で飛ばすのか？」

「そうそう、もしかしたら、この世界でもトレビュシェットみたい
に石を飛ばしたりできるかもな」

「それならゴーレムを使ったほうが早い」

「なるほど、その手もあるか」

「なにやら、楽しそうな話をしておるの？ 戦かえ？」
俺の横に、日傘をさしたアマランサスがやってきた。

「違う違う、物騒なことを言うなよ」

アマランサスが残念そうな顔をしているのだが、どれだけ武闘派
なんだ。

お城の連中が煙たがるのも無理もない。

「ケンイチ、妾もその天幕が欲しい！」

そうか、リリスに日傘をやるのを忘れてたな。

シャングリ・ラで購入して、リリスにはアマランサスと色違いの
日傘を渡す。

「おお、これはよいのう！ 軽い！」

「外に出なくても、よくいる王侯貴族のように深窓の佳人に徹すれ
ばいいじゃないか」

「つまらん！ そういうのが嫌で、このような僻地までやって来た
というのに！」

そこに、俺の知らない声が割って入ってきた。

「面白そうなことをやっているじゃないか」

俺の前に現れたのは、白い毛皮を着た女の獣人。白毛なのだが、

大きな三角形の耳と手足の先が黒くなっているシヤム猫みたいな色。茶色のブルゾンのようなものを羽織り、胸には黒いビキニのようなものをつけている。

この水着みたいなものは初めてみたな……。白い太ももが覗くミニスカに、ブーツを穿いて腰にはベルトと剣を装備。

腹には、なにもつけていないので、へそが出ている――鋭い目をした美人さんだ。

「てめえは、ニヤレサ！　なんでこんな所に！？」

「ああ、ニヤメナ。しばらく姿を見ないんで、死んだかと思ってたら、こんな所にいたんだあ」

どうやら、彼女たちは知り合いらしい。

虎柄のニヤメナと、シヤム柄のニヤレサという獣人が、俺を挟んで睨み合いを始めた。

135話 ゴーレムを使う

プリムラがアストランティアから、大工の親方を連れてきた。

俺の屋敷の建設を依頼するためだ。皆がアキラの運転するSUV車に乗ってきたのだが、そこにもう一人獣人の女がいた。

彼女は、プリムラが雇った獣人なのだが、ニヤメナと知り合いらしい。

「彼女は私の新しい護衛ですよ」

「お嬢もなんだって、よりにもよってこんな女を……」

「腕は確かみたいですし」

「俺が、この領主のケンイチ・ハマダ辺境伯だ」

ニヤレサという獣人の女が俺に歩み寄ると、首に手を回してきた。

「これニヤレサ、辺境伯様に無礼はダメですよ」

「いいよ、プリムラ」

面白そうなのでプリムラを制した。本当なら、こんなことを貴族にすれば首が飛ぶかもしれないのに、なかなか豪胆な女性だ。

「へえ、あんたが貴族様？ 全然そんな感じしないねえ」

「まあ貴族になったばかりの、初心者貴族だからな」

「辺境伯様は、獣人が好きなんだって？」

「特別好きってわけじゃないけど……」

彼女の顎をなでると、ゴロゴロと大きな音を鳴らす。

そして俺に身体を擦り付け始めた。うちの獣人たちにするように腹をなでてやると——うっとりとした顔をして、俺の足下にコロんとひっくり返った。

「にゃーん」

可愛い声を上げるとお腹を出し、俺の顔をチラリと見上げる。

「はは、なんだ——随分と可愛いじゃないか。お腹をなでてほしいのか？」

彼女の柔らかいお腹の毛を、やさしくなでてやる。

「ごろにゃーん……」

「よしよしよし」

そのまま、ゴロゴロと喉を鳴らしながら、俺になでられていた彼女が——。

「にゃ………はっ！」

突然、正氣に戻ったようで、勢いよく立ち上がった。

「こ、こんなことで、あたいを好きにできると思ったら大間違いだよ！」

「ニャレサー——お前、思っきり腹を見せてたろ？」

「そうだにゃ」

彼女の行動に呆れている、うちの獣人二人からツツコミが入る。

元世界の犬猫と同じように、無防備なお腹を触らせるっていうのは、従属の証らしい。

「うるせえ！ お前らと一緒にするな！」

ニャレサが、必死に弁解している間、ミャレーとニャメナが俺にスリスリして、匂いを上書きしようとしている。

「おらニャレサ！ 帰れ帰れ！」

「そうだにゃー！ でも、これでわかったにゃ」

「なにがだ、クロ助」

「どんな獣人の女でも、ケンイチだとイチコロだにゃ」

「うっ！」

ミャレーとニャメナが、俺を挟んでひそひそ話をしているが、全部俺に聞こえている。

「そんなことするつもりはないよ」

ニャレサという獣人は、プリムラの後ろに隠れると、耳を伏せて尻尾をブンブンしている。

俺のことを、かなり警戒しているようだ。

そっちから抱きついてきたのにな。

「旦那は俺らのものだからな！ 見てみる、旦那に毎日なでられている俺たちの毛皮を！」

「ピカピカにゃ！」

彼女たちが、自慢の陽の光を反射する毛皮を、ニャレサに見せつける。

「ぐぬぬ……」

獣人たちの間でマウントを取るために、大きなポイントとなるのが、毛艶の良さだ。

彼女たちの毛皮をなでる時間も捨てがたいが、俺には大事な仕事がある。

獣人はおいておいて、大工の親方と仕事の話に戻る。

「この魔法のクレーンで荷物を積み上げて、運ぶのでございますか？」

「そうそう。その起重機と、俺たち独自魔法ユニークを操る魔導師が使役する、鉄の召喚獣だ。人力の何十倍もの仕事をこなす」

「わしらを乗せてきた、あの鉄の召喚獣と似たような？」

親方は、プ○ドとフ○イターをじっと見つめている。

「そのとおりだな」

「領主様は魔導師でもあると聞かされましたが、これほどの大魔導師とは……」

「親方も帝国でドラゴンを倒した大魔導師の話を聞いたことがあるだろう」

「はい……」

「それが、あのアキラだ」

「な、なんですと！」

親方が俺の話を聞いて飛び上がると、後ずさった。

「ケンイチの話は本当じゃぞ。ソバナで帝国側から亡命させたのじや」

「いやはや、あの御仁がそんな凄い方だとは……」

「ははは、中身はただのオッサンだけだな」

「ウエーイ！」

アキラがクレーンを振り回して遊んでいる間に、親方と話し合いをする。

とりあえず、キットのログハウスを10棟ほど組み立てるために、木を伐採してスペースを作ることにした。

「プリムラ、注文した上着ができあがっていたんだな。よく似合ってる」

「ありがとうございます」

ちよつと、よそよそしいプリムラが気になるが、俺は領主なので皆の手前、敢えてしているのだろう。

「それから、アネモネのローブを取ってきました」

彼女が、青いローブを差し出してくれた。

「おお、ありがとう——それじゃ早速仕事に取り掛かるか。おい、アネモネ！」

近くで、遊んでいたアネモネを呼んで手伝ってもらおう。

「なにをするの？」

「ちょっと、ゴーレムを作ってくれ」

「解った」

「ほら、君のローブも、できあがったぞ？」

「わーい！」

ローブを羽織ると、鮮やかな青い生地に施された、金糸の刺繍がキラキラと光っている。

それを見た、リリースが渋い表情をしている。

「妾にはないのかえ？」

「王都で売った洞窟蜘蛛の糸を使ったんだよ。もう在庫はないかなあ」

「むう……妾は正室じゃぞ？」

この青い生地は、彼女がここに来る前に注文したものなんだが……。

とりあえず、シャングリ・ラを検索してみると、ベルベットの布が売っている。この手の布は、この世界では見たことがない。

これでご機嫌とりができないかな？

「ポチツとな」

購入したのは、3000円ほどで売っていた、ちょっと暗めの赤色をしたベルベットの布。

「ほう！ これは見事な布！ でも、妾も青がよいのう」

リリスのリクエストで、青を購入する。シャングリ・ラには、同じシリーズで色バージョンが沢山ある。

「これじゃ！ この色がよいわえ！」

リリスも気に入ったようだ。

「プリムラと一緒に、アストランティアの仕立て屋に行って、好きな服を作ってくればいい」

「ケンイチは一緒に行ってはくれぬのかえ？」

「俺には仕事があるからな。ここを早く住めるようにしなくてはならないし」

「そのとおりじゃな。それまで妾も我慢するでしょう」

「いいのか？」

「いいのじゃ！ 妾は正室だからの！」

近くにいたアマランサスにも聞いてみるが――。

「妾は、聖騎士様の奴隷――豪華な服やドレスなどは必要ない」

「……」

いい加減、奴隷を止めたら――と言おうとして止めた。また拒否して、ゴロゴロと地面を転げ回るのが目に見えるからだ。

仕事のために、ログハウスを組み立てる場所に行く。俺のあとを、ズラズラと皆がついてくる。

場所はメイド達が畑の作業をしている隣だ。その近くには、俺が作ったツリーハウスの舞台がある。

「ケンイチ、あれはツリーハウスか？」

アキラもクレーン遊びを止めて、俺たちについてきた。

「そう、あそこに組立てた家を置けばツリーハウスに早変わり」

「おおっ！ 秘密基地じゃん！ 俺も遊びに来ていいか？」

「いいけど――家が增えたら、あれは解体する羽目になるから、早めのほうがいいかもな」

「オッケー！」

どれだけ人が集まるか解らないが、人が増えて手狭になってから、ツリーハウスを解体しても遅くはないだろう。

「ケンイチ、ここの木を召喚獣の巨剣で切り倒すのかえ？」

リリースが、大木の所へ行って、幹をペシペシしている。

「切り倒しても根っこが残るし、そうになると、また召喚獣を使わないとダメなので、ちょっと試してみたいことがあってな」

「それでは、どうするのじゃ？」

「木を倒すのに、アネモネのゴーレムを使う」

「ゴーレムを？」

一緒についてきた、アマランサスの話でも、そういう使い方をする場合があると言う。

「じゃが、あまり効率がいい方法とはいえぬがのう」

アマランサスが言うゴーレムの運用方法が、どのようなものか解らないが、俺の考えている方法とは違うはずだ。

なおゴーレムの起動には、通常は国の許可が必要なのだが、辺境伯にはその権限も与えられている。

辺境の開発のために、ゴーレムが必要な場合が多いからだが――。それが辺境伯が他の貴族と比較しても、強い権限を持っていると言われる所以ゆえんになっている。

「旦那たちは、いったいどうするんだ？」 「にゃ？」

「細工は流々仕上げを御覧じろってやつだよ」

アキラの言葉に獣人達が首を傾げている。

皆が訝しむ中、作業に入る。

アイテムBOXから、巨大ゴーレムのコアを出して地面に置く。
地面から直接ゴーレムの素材を取れないとなると、重機を使って掘り起こさなければならない。

「アネモネ、人型にしないでいいからな。木の高さと同じぐらいの棒型にできるか、やってみてくれ」

「解った——むー！」

彼女が精神統一をすると、青い光が集まり地面へ染み込んでいく。
いったいどうなるのか？

とりあえず、なんでも試してみないとな。

徐々に地面が割れて凸凹が増えると、コアの回りに次第に土が集まり始めた。

土の小山が、どんどん大きくなり、そのまま上に伸びていく。

魔法で固められているので、完全に物理法則を無視している動きだ。

「アネモネ、そのゴーレムで、木のなるべく上のほうを押してみてくれ」

「……」

精神統一によってある種のトランス状態になっている彼女からの返事はないが、指示は伝わっている模様。

円柱形のゴーレムから、横に腕が伸びて大木の上部を押し始めた。
徐々に大木が傾き、地面からは木の根っこが飛び出してくる。

ある程度、角度がついたところで、木がそのまま倒れて地面を揺さぶった。

「「「おおおっ!」」」

「こりゃ、すげえ……これがゴーレムか」

ゴーレムを構成していた土が、崩れて小山になったのを見て、親方がつぶやく。

これで上手く行っただので、地面を耕すのもゴーレムの魔法を使っ
てできるかもな。

「ふっ」

「アネモネ、上手くやったな!」

彼女を抱きしめて、なでなでしてやる。

「えへへ……」

アネモネが抱きついている俺の所へ、プリムラがやってきた。

「ケンイチ、随分簡単に大木が倒れたように見えました……」

それを説明するために、俺はアイテムBOXから杭を取り出して、
地面に軽く打ち込んだ。

「地面に打ち込んだ杭の根本を蹴飛ばしても、びくともしないが、
上を押してやると――」

地面にめり込んだ部分ごと土が盛り上がって、杭が倒れた。

「なるほど、テコの原理だのう」

アマランサスが、自分のアイテムBOXから扇子を取り出して広
げた。

「このやり方なら、根っこを掘り出す手間が省ける。後で俺の召喚
獣を使って、根っこをぶった切ればいい」

アネモネのゴーレムの力に、大工の親方も目を白黒させている。

「こりゃ、すげえ——ケンイチ様。普通はこんな大木なら数十人で数日かかりで処理するんですぜ？ それをたった一人の子どもが……」

「子どもじゃないから！」

「うちの大魔導師様だぞ」

「こりゃ、失礼をいたしました。申し訳ございません」

俺の傍にいる子どもが魔法を使い、しかも大魔導師だなんて、思いもよらなかっただろう。

親方は頭を下げた。

まあ、それはさておき——。

ゴーレムが使えるのなら、他の作業しながらでも、1日10本ぐらいの木を処理できるだろう。

あまり倒し過ぎても、大工たちの仕事に合わなくなってしまう。

以前は、俺がなんでもやっていたのだが——。

ここが領地になったので、可能な限り仕事を作り、人を雇って経済を回していかねばならない。

アネモネに次の木を倒してもらい——俺はコ〇ツさんに取り付けた巨剣で大木を丸太にする作業に入る。

重機を出すと、ジャージ姿に麦わら帽子を被り、走ってくるカナンの姿が見える。

なにやら思いつめたような真剣な表情をしているのだが——。

「え？ カナン様で？」

大工の親方が驚く。彼はカナンのことを知っていたようだ。

子爵邸を建てたのは、この親方ではないだろうが、仕事の付き合いはあったらしい。

たとえば、補修工事とか増築とか、仕事は色々ある。

「ケンイチ！」

コ○ツさんに乗り込もうとする俺の所へ、カナンがやって来た。

「なんだ、カナン。作業を始めるから危ないぞ。下がっている」

「メイドたちに聞いたぞ！ ケンイチに抱いてもらっていないのは、私だけだ！」

やっぱりこれか……女性が沢山いるってのは大変だ。

「ええ？ 確かにそうだけどさ」

「おおうっ、さすがケンイチ！ 子爵夫人も寝取りか？ この寝取り大明神！」

アキラが、おかしなあだ名を俺につけて呵々大笑している。

「寝取りじゃないから。ユーパトリウム子爵が、新しい正室をもらったので、俺が引き取ったんだよ。彼女の望みでもあったし」

「こんな美人の正室を追い出すって、新しい正室ってのは、どんなすげえ女なんだ？」

「こういうー」

俺は、両腕を使って、新しい正室の身体のラインを真似してみせた。

「ああ、そういう趣味の」

「まあそういうこと」

オッサン二人でうなずき合っているのだが、カナンが泣きついて離れない。

「ケンイチ、後生だ、私のことが、そんなに嫌いかな？」

「嫌いな人間を引き取ったりは、しないから」

「それでは、よいではないか！」

彼女が俺にすがりつくので、振りほどこうとするのだが、離れない。

「ああもう、解った解った。カナンは、そういうのを望まないとか言ってなかったっけ？」

「そう……確かに申ししたが――そのやっぱり、女としては……悔しいではないか……」

何やら、もじもじして可愛いのだが、元人妻でいい歳なんだからあ……。

プリムラとアネモネの視線が痛い、やむを得ない。

リリスは、「王侯貴族とは唯一の正室と側室を多数持ち、愛人を侍らせて、メイドに手籠めにするのが務め！」と思っているらしく、なにも言わない。

アマランサスもチラ見程度で興味がないようだ。

まあ、カナンとやるといっても、それは夜の話。

まずは目の前の仕事をしなくては――。

アネモネのゴーレムで木を倒してもらい、俺の重機に取り付けられた巨剣で丸太にする。

大まかな枝払いは、アマランサスにってもらい細かい仕上げは大工たちに任せた。

切り離れた根っこなどは、割って焚き付けだな。

あつという間に丸太が10本完成した。

「はは……まったく信じられねえ」

俺たちの早業に親方が、あつけにとられている。

今回、枝払いをアマランサスにやってもらっているが、これも人に任せて雇用を生んだほうがいいだろう。

同じく、木が倒れた穴を埋める作業も、人に任せれば雇用創出が

可能。

勿論、俺の重機を使えばあっという間に終わるが、それでは民のためにならない。

公共事業で金を撒き、民がその金を使い、他の民も潤うように波及していく。

元世界じゃ、選挙もロクに行ったことがないオッサンが、政をすまじい羽目になるとは……。

まあここには、この世界の政治の専門家である、紋章官のユリウスや、実質国家の首長であったアマランサスがいるんだ。

面倒なことは、彼女たちに任せてしまえばいい。

領の財務はマロウ商会とプリムラがいるしな。

「明日も10本ほど切り出すし、沢山欲しいというなら、もっと可能だが」

「いえいえ、こちらが処理しきれませんぜ」

「それじゃ、様子を見ながら決めるか……」

彼と今後の予定を話し合う。

おあつらえ向きに、ここには川がある。水車を置いて、それを動力にする丸鋸盤を設置するようだ。

勿論、俺がシャングリ・ラで工作機械を購入すれば、そっちのほうが高性能なのは当然なのだが――。

そんな文明の利器を、この世界の住民に使わせることはできない。親方との話が終わるとアキラがやって来た。

「ケンイチ忘れてた！」

「なんだ？」

「子爵夫人の荷物を預かってきていたんだ」

アキラのアイテムBOXから、カナンの荷物を出してもらおう。

大きな戸板2枚に荷物が載っていたので、そのまま俺のアイテムBOXへ収納した。

現時点では、置く場所がないのだ。

「それでは、アストランティアへ戻って、製材所を作る手配と、領主様のご依頼の家を組み立てる人員を確保いたしますので」

プリムラが大商人の娘というのは、実に都合がいい。

マロウ商会にしても、新しい領の開発にゼロから出資できるのは大儲けのチャンスだ。

しかも、俺とアキラのチートを使って、儲けられる要素が山程ある。

「そうか、よろしく頼むよ」

親方はアキラの運転するユニ○ク付きのトラックで、アストランティアへ帰るが――。

帰り際、アキラに油を出してもらう。バイオディーゼル燃料を作るのに必要だ。

タダで大量にもらえるのに、使わない手はない。それと引き換えに、SUV車などをタダで貸しているのだ。

シャングリ・ラからオープンタイプのドラム缶を4つ買い、その中をマヨで満たしてもらう。

「マヨパワー！　んで、分離！」

アキラがマヨパワーを使うと、ドラム缶の中が瞬時に黄色いマヨネーズで満たされる。

チートパワーに相応しい信じられない光景。このマヨネーズをさらに分離して、油と澱に分離することができ、ドラム缶の中が、茶色の植物油で満たされている。

こうしてみるとマヨネーズの成分は、ほとんどが油というのが目に見える。

俺のシャングリ・ラとは違い、彼の力には対価が不要なく、ほぼ

無尽蔵に湧く文字通りの歩く油田。

俺の力に負けず劣らずの強力な能力だ。

アキラに貸したプ○ドは、彼のアイテムBOXの中に入っており、移動の際の脚として利用される。

彼のアイテムBOXだが、あまり容量がないので、大きな材木などは入れることができない。

大量の大きな荷物を運ぶとなると、どうしてもトラックが必要だ。以前なら、全部自分でやっていた仕事だが、領主になったのだから人を使うことを覚えないといけない。

それは俺の家族の全員から言われている。

元世界ではイラストレーターという個人でやる仕事をしていた俺が、この歳で生き方を変えらるというのは中々大変だ。

心の中で及び腰になる俺だが――家族や、これから増えるかもしれない領民のために頑張らなくては。

アキラには、ユリウスが書いた手紙を、マロウ商会へ持っていくてもらおう、お使いも頼んだ。

マロウ商会を通じて、カダン王国の貴族たちに、ハマダ辺境伯領の手紙が届けられるのだ。

プリムラも、仕事が残っているらしいので、アストランティアへ戻る。

大工との交渉も彼女に任せているからな。

トラックの座席に3人乗り、護衛のニヤレサという獣人は荷台に乗った。

「それじゃな、ケンイチ」

「おう、頼んだぞ」

アキラとプリムラを見送ると、すでに夕方。仕事が終わったので

夕飯にする。

皆のリクエストはカレーだったし、俺もカレーを食いたいのでカレーにした。

人数が多いので、皆で準備をして、圧力鍋で煮込めばすぐにスープが完成する。

そこにカレールウを入れれば、あっという間に美味しいカレーができるのは、さすが日本のテクノロジー。

元世界でも老若男女に支持されて、国民食ともいえたカレーだが、この世界でも国民食になる可能性を秘めている——といったら大げさだろうか？

カレーは出来上がったが、個人的にカツカレーを食いたかったので、カツを揚げる。

肉は勿論、もちろんレツサードラゴンの肉。

以前食べたときは、美味しいと評判だったので、このカレーとの組み合わせも、当然期待できるといえるだろう。

カツカレーができたので、テーブルに並べて、皆で食事になった。

「旦那、揚げ物とカレーの組み合わせかい？」

早速、ミャレーがカツとカレーを合わせて口に運んだ。

「うみゃー！ これは、うみゃーで！」

なんか名古屋人みたいだが……。

「美味しい！」

「ふおっ！ これは、これは！ 美味すぎる！」

アネモネとリリスも一生懸命、カレーをかきこんでいる。

「これは……美味だのう……決して城では食えぬ味じゃ」

「これが噂になっていたカレーですか！ いったい何種類の香辛料

を組み合わせて作られるのか……」

アマランサスは落ち着いて味わい、ユリウスはカレーのその味に驚いている。

「サンバクさんが、同じものを再現していたから、お城でも食べられるようになるとは思うけど……」

それにできたての香辛料を使っていたから、サンバクのカレーのほうが、香りが鮮烈だった。

「そのサンバクが、自分の部下に秘伝を伝えておればいいがのう」

「でもなあ、あの一口食べただけで料理の材料が解る能力は、人に教えられるようなものじゃないだろうし」

「そうなのう」

俺とリリスの会話にアマランサスが、水を差す。

「味の解らぬ城の連中など、そこら辺の草でも食めばよいのだ」

愚痴っているアマランサスは牛乳を飲んでいるが、酒好きのニヤメナでも、カレーのときは酒を飲まない。

合う酒がないからだ。

「こ、これは美味しい！ はぐはぐ」

ジャージ姿でカレーを食べているのは、カナンだ。

どうも、ジャージが気に入ったらしい。

「カナン、その服でいいのか？」

「これは動きやすくて最高ではないか。もう気取る必要もないしな」
彼女は貴族生活や社交界に嫌気がさしているようだが、一時的なものかもしれないし、カナンの好きにさせてあげよう。

美味しいカレーの食事も終わったので、俺はカナンとの約束を果た

すことに――。

彼女を連れて、俺は暗い中をツリーハウスへと向かった。

136話 月に代わって

ユーパトリウム子爵の元夫人で、俺のところへやってきたカナン。まだ側室になると正式決定したわけではないし、本人がそれを望んでいるようでもなかったのだが――。

俺に抱かれていないのは、自分だけと聞かされると、やはり気になるようだ。

貴族になった俺が、正室、側室、愛人と多数の女を娶るのも問題はない。

断る理由もないのだが、彼女は典型的な貴族の婦女子といった感じで、リリースやアマランサス、プリムラに比べると能力的に心もとない。

できたてホヤホヤの貧乏边境伯領には、遊ばせておく人材は必要ないのだが、引き取るといった手前追い出すわけにもいかない。

少々悩みつつも、彼女を連れて、ツリーハウスへ向かう。

後片付けを済ますと、LEDランタンを照らし――カナンの手を引っ張って、ツリーハウスの所へ行く。

木の上に作られたステージに登る。ここにテントでも出して、そこでやればいい。

そう思ったのだが、もう少し良いものがないだろうか？

俺はシャングリ・ラを検索してみた。

組み立て式の小屋では作っている暇がない。でき合いでなにか部屋に使えるようなものがあればいいのだが……。

「これはどうだ？」

俺がシャングリ・ラで見つけたのは、灰色のコンテナハウス。

選挙事務所や飯店舗などで使われている長方形の箱だが、こんなものまで売っているのか。

広さは12畳で値段は50万円——これは色々使えるかもしれない。

小屋に使ったりもできるしな。色々使いみちがありそうなので、まとめ買いをする。

数を入力すると5個買えるようだ。在庫が5個ありますっていうことなんだろう。

合計で250万円。

住民の住居としてこいつを並べるって手もありそうだが——いくらなんでも殺風景すぎるだろ。

ログハウスのキットなら、この世界にあってもおかしくない風景だが、こいつはあまりに異質。

それに木造じゃないと、改造もできないしな。

この世界にあらざるものだが、使えそうなので、とりあえず購入。

「ポチッとな」

購入ボタンを押した俺だが——押した瞬間に、「まずい！」と思った。

こいつはアイテムBOXから取り出したものではない。シャングリ・ラから購入したものは、空中から落ちてくるではないか。

それだけではない、ここはツリーハウスの上だ。

「カナン！ ちょっと舞台の端のほうへ！」

彼女の手を引っ張ると、舞台のギリギリへ寄る。

それを待っていたかのように、木で出来た舞台の上にコンテナハウスが降り始めた。

「コンテナの重さで、舞台が崩落しないだろうな？」

大きな音を立てて、次々とコンテナハウスが積み木のように積み重なっていく。

三つほど積み重なったところで、4つめはバランスを崩して、舞台の外へ落下した。

最後に落ちてきた5つめも、暗闇の中へ消えたのだが――かえって崩れたことで、重みによる舞台の崩落が避けられたようだ。

「ふ」

俺は、思わず胸をなでおろした。

アイテムBOXからLEDライトを取り出して、舞台の下を覗いたが、下が柔らかい腐葉土だったので、破損は免れたようだ。

下に落ちたコンテナハウスをアイテムBOXへ収納すると、眼の前に積み木のようにになっている大きな箱も、全部収納した。再びコンテナを舞台の上に出すと位置を調整。

早速、アルミのドアを開けて中に入ってみるが、殺風景という言葉葉そのままになにもない。

まあ当然だが、天井には蛍光灯もあるので、発電機を繋げば使えるはずだ。

壁紙を貼ったり、外板を貼ったりすれば、見かけもそれなりにすることは可能だろう。

今日は、その暇がないので、とりあえず使えるようにする。

アイテムBOXからダブルのベッドとチェストを取り出して、設置した。

「殺風景な部屋で、すまん」

「まあ、旅の果て天幕の中だと思います、いいのだ」

カナンが後ろ向きになって、ジャージを脱ぎ始めたのだが――俺

はいいことを思いついた。

ショッピング・ラを検索して、セーラー服を検索して購入。

「ポチツとな」

ステータス画面のボタンを押すと、茶色っぽい色で、襟が白いセーラー服が落ちてきた。

「カナン、これに着替えてくれ」

「こ、これに？」

「嫌なのか？」

「だ、だって、スカートが……」

彼女の言うとおり、スカートは超ミニだ。

俺に急かされて穿いてはみたが、当然太ももは剥き出しに。

「あの、こんなの見えちゃう」

カナンは必死に隠そうとしているのだが、隠せるはずがない——だが、それがいい。

「裸で一緒に風呂に入って、尻をあげて挑発までしてたのに、こんなのが恥ずかしいのか？」

「だ、だって……」

彼女の柔らかい金髪を纏めて編み込んだ髪を解くと、お団子ヘアのツインテールにさせる。

追加で、白いフリルがついたニーソックスを購入して穿かせた。

「おおっ！ こりゃまじで、セーラーナントカ！」

ちよつと無理すんなBBAって感じで、もちろん凄く萌える。勿論、こんなことは口に出して言えない。

気分はもうオッサン、実際にオッサンなので仕方ない。

あまりにセーラーナントカ姿が似合うので、アイテムBOXから

一眼レフを出して撮影した。

「はいはい、もっと可愛いポーズして」
フラッシュにデイフューザーを装着して、シャッターを押し続ける。

「恥ずかしい……」

「ははは、今度はベッドに手をつけて、お尻をこっちに向けてえ」
金髪のツインテールが、ベッドの上を這う。

「こ、こんなの……お尻が見えちゃう……」

風呂で尻を見せてたのは、いいのだろうか？

散々撮影をして、満足したので、ベッドに押し倒すとセーラー服のままやる。

たまにはこういうのもいい。

プリムラにも頼んでみるかなあ。リリースは面白がってやってくれるかもしれない。

マイレンはそのまんまメイド長だしな——いや、スーツ姿なんて似合うかもしれない。

社長室を作って、メガネ美人秘書設定でやるか？

夢が広がるなあ。成り上がって、ベンツを買って秘書やレースクイーンを雇ったりするオッサンは、こんな心境なのだろうか？

そんなアホなことを考えながら、カナンの悲鳴とともに夜はふける。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

——朝、コンテナハウスの窓ガラスから、陽の光が入ってくる。

ベッドの上には、金髪の美しい女性——カナンだ。

リリスが、青い果実だとすれば、こちらは真っ赤に完熟したトマト。食べごろだ。

自らを辺境の華と言うだけあって、その美しさは本物。

この華を簡単に手放すのだから、蓼食う虫も好き好き——と言っちゃ子爵に失礼か。

カナンがぐっすり眠っているのだが、リリスの言葉を思い出して、起こすことにした。

「カナン、朝だぞ」

「んー、ケンイチ……」

カナンの身体を揺すってみるのだが、いくらゆさゆさしても起きない。

俺は起こすのを諦めて、皆のところへ戻ると、メイドたちが食事の準備をしていた。

辺りに、スープのいい匂いが充満している。

彼女たちには、野菜や肉などの材料を預けており、それを使ったようだ。

大量にスープを作ったというので、味見をしてみる。材料の中には、だしの素なども含まれていたのだが、上手く使いこなしている。

「おっ！ 美味しいな！ 俺たちの食事に使ってもいいか？」

「もちろんでございます」

彼女たちの顔が明るくなる。よし、プリムラがいないときは、スープの準備はメイドたちに任せよう。

これなら、このスープにカレールウを入れれば、カレーにもできるし。

大量に余っても、俺のアイテムBOXに入れておけばいい。

「むーおはようケンイチ。パンを焼く……」

「おはようアネモネ」

目を擦りながら、彼女がパンを焼き始めた。

メイドたちがパンの焼き方を覚えたいと言うので、見学させる。

アネモネは魔法を使って、早送りをしているが、時間をかければメイドたちでも同じものが作れる。

手順は覚えたようなので、アネモネが使っているのと同じ、ドーナツ型のパン焼き器を複数買い与えた。

このパン焼き器は、窯がなくても焼ける優れものだ。

この世界にも似たようなパン焼き器が存在しており、メイドたちの中にも実家で使っていた者もいるようだ。

それなら任せても大丈夫だな。アネモネが忙しいときは、彼女たちにパンを焼いてもらえばいい。

小麦粉や砂糖などを俺から提供すれば、まったく同じものが作れるだろう。

食事の準備をしていると皆が起きてきたので、準備を手伝ってもらい朝食を摂る。

ベルにも食事をあげた。

「こういう準備も人を雇って、やってもらうことになるのか——そう考えると、ちょっと寂しいね」

「ケンイチは貴族になったのだから、仕方あるまい？」

リリスが、パンをむしゃむしゃと頬張りながら答える。

「でも貧乏貴族なら、自分でやっているところもあるだろう？」
「まあ地方の男爵ぐらいなら、そういうこともあり得るだろうが……」

ノースポール男爵の所とかは、そんな感じかなあ……彼は元気でやっているだろうか。

「ユリウス、ノースポール男爵領というのは知っているかい？」

「ダリアの向こうに、最近できた領でございますね。勿論^{もちろん}存じております」

「男爵は俺の知り合いだ。彼にも手紙を送ってやってくれ」

「かしこまりました」

皆で食事をしていると、カナンがやって来た。

「ケンイチ！ 起こしてくれてもよいではないか！」

「いくら起こしても起きなかったからな」

「うゝ」

拗ねられても、俺の義務は果たした。

食事も終わったので、仕事を再開する。

「そういえば、獣人たちの家がなかったな」

今は、ニャメナが使っていた小さな小屋に二人で寝泊まりしている。

昨日、購入したコンテナハウスをミヤレーに見せてみることにした。

とりあえず、ログハウスの組み立てが終わるまで、これでしのげないだろうか？

アイテムBOXから、グレーのコンテナハウスを出す。

「ミヤレー、お前の家ができるまで、これでしのげないか？」

「にゃー！ なんにゃ！ 鉄の家かにゃ？」

彼女は、コンテナの外板をボコボコと叩いて、ドアを開けて中に入った。

「にゃー！ 中も広いにゃー！」

中は12畳だから、一人で暮らすなら十分の広さだろう。

「どうだ？」

「これ？ 使っていいにゃ？」

「まあ、お前がいいというなら……」

「やったにゃー！」

「いいのか？」

「もちろんにゃ！」

外に出ると、ニャメナもいて、俺をじっと見つめている。

「旦那……」

「もしかして、ニャメナもこれが欲しいとか？」

彼女が黙ってうなずいたが――まさか、これでいいと思わなかったよ。

「これで、いいならもう一つ出してやる」

ミャレーのコンテナハウスを置き直して、その隣に並べた。

「やったぜ！」

「これは丈夫なんだが、欠点がある。外板が直射日光で熱くなるんだ」

「それじゃ、ムシロでも載せるか？」 「そうだにゃー」

「ムシロか、ちよつと待ってろ……」

シャングリ・ラから、ムシロの20枚セットを1万5000円で購入。なんでも売っている、シャングリ・ラ、マジで神。

購入ボタンを押すと、ムシロの束が落ちてきた。

「ほら、これをやる。側面はツタとかを這わせるといいかもな」

「よっしゃ！ クロ助、あとで探しに行こうぜ」

「うにゃー！」

殊の外、獣人たちにコンテナハウスの評判がいい。

ニャメナは早速、ウキウキで引っ越しを始めた。ミャレーにもチエストやベッドを出してやる。

大工に三角屋根を作ってもらい、プレハブの上に載せればそれっぽいかも。

「ミャレーとニャメナ。それをやりながらでいいので、また召喚獣に食わせる油を作ってくれ」

「いいぜ、魔道具に旦那が用意した油を注げばいいんだろ？」

「余裕にゃ」

「頼むよ」

ニャメナが出た小屋に魔道具を2台設置して、バイオディーゼル燃料を作る。

元々、それ用に作った小屋だったからな。元に戻ったわけだ。獣人たちと打ち合わせをしていると、リリスがやって来た。

「ケンイチ、屋敷もその鉄の箱で作ったらどうなのだえ？」

「ええ〜？ これでか？ いくらなんでもそりゃ、ないだろ？」

「ふむ、面白いと思うのだが」

元世界にはコンテナを積み重ねた店舗などもあったから、それなら面白いかもしれないが……これじゃなあ。

ユリウスは自分の部屋で事務仕事。アマランサスは見回りしながら、剣の素振りをしている。

カナンは、ジャージ姿で畑作業を手伝って、アネモネは日陰で電子書籍を読む。

皆、俺についてこんな僻地にやって来て、楽しいのだろうか？

俺は楽しいからいいのだが、こんな個人的な遊びみたいなことに巻き込んでいいものなのか、少々悩む。

今は遊び感覚でも、街がデカくなったりすれば、遊びではなくなるってことだよなあ。

そのときは、アマランサスにでも丸投げしてしまえばいい。
彼女のほうが政治家としては適任だ。

皆の作業を見ながら、しばらく考えごとをしていると、荷物を満載しているトラックがやって来た。

沢山積まれている材木などの上に、獣人たちが乗っている。

大丈夫か？ 危ないような気がするが——この世界には、道交法などもないので、落ちて怪我をしたとしてもすべて自己責任。
なんの補償もない。まあ、俺から見舞いは出さねばならないだろうけど。

アキラや、大工たちへの支払いは、すべてマロウ商会から行われる。

マロウ商会が管理して立て替えた支払いが俺に請求されると、若干の手数料を足して支払う——という感じになっている。

俺は基本どんぶり勘定で、細々とした計算や管理ができないからな。

家計簿や小遣い帳すらつけたことがないし——。

自分で仕事をしていたときも、経費を表計算ソフトに打ち込むぐらいしかやったことがない。

「ケンイチー！ 運んできたぜ」

「アキラ、サンキュー！」

大工の親方もやって来た。

「それじゃ領主様、今日からやらせてもらいますぜ」

「たった1日で、随分と集まったな」

「はは、仕事にあぶれている奴らが多かったですからねえ」

「ケンイチ、川をトラックで渡れるように橋を架けようぜ」

住宅の建設地にトラックが入るためには、滝から流れてくる小さな川を渡らなくてはならない。

「そうだなあ——本格的に開発を始めるとなると、問題が山積みだ」

「リアル開発シミュレーションゲームみたいだな」

「ところがどっこい、これが現実」

「そうなんだよなあ」

川に浸かると、大工と作業員たちに注意を促す。

「おーい、ちょっと離れててくれ」

俺のアイテムBOXに入っている丸太を出す。

1、2、3、4と丸太を出して、作業員たちに手伝ってもらい平
行に並べる。

さすがに、人数がいると作業もはかどる。

川に浸かるのは、アイテムBOXから物を出すと、横向きに出る
からだ。

アイテムBOXから発電機と工作機械を出すと、大工からもらった
板材を加工して丸太に打ち付けていく。

丸鋸で次々と板が切断され、ネイルガンから打ち込まれる釘に、
大工たちが仰天する。

「ま、魔道具?!」

「ケンイチ、ネイルガンはもう一丁ないのか? 手伝うぞ」

「使えるのか?」

「任せろ」

本当になんでもできるやつだな。シャングリ・ラでもう一丁ネイ
ルガンを購入すると、アキラに渡す。

あつという間に橋が完成して、トラックの初渡りとなった。

「幅は大丈夫か?」

「大丈夫だな、余裕だ」

トラックがエンジンを吹かして渡る。その重みで、丸太が地面に少しめり込んだが、大丈夫のようだ。

「「「おおっつ、こんな短い時間で、すげえ！」」」

「この魔道具があれば、俺たちはいらねえのでは？」

作業員たちの意見ももつともだ。

「俺たちが全部やってしまったら、お前たちは金を稼げないぞ？」

それに、俺やアキラには他にも仕事があるから、大工仕事ばかりやってられないし」

「そうだぞ、お前ら。せつかく仕事があるってのに、放り出すつもりか？」

「いや、そういうわけじゃ……」

親方に発破をかけられて、作業員たちがログハウスの建築現場へ向かう。

トラックに積んでいた荷物を、アキラがユニ○クを使って降ろすと――。

建築予定地に、俺がシャングリ・ラから購入したログハウスのキットを置いていく。

全部で9棟。1棟は昨日出してしまったので、俺の家の近くに置いたままだ。

あれも、ここに運んでなくてはならない。

シャングリ・ラのログハウスのページは、10棟購入したところで、在庫がゼロになった。

これで打ち止めだろう。

しばらく待てば、他のシリーズがまた販売されるかもしれない。

「「「おおっつ！ これかあ」」」

山積みになったログハウスのキットを、作業員たちが眺めている。

「これって、もう材料は加工してあるんで？」

「そうらしいぞ？　この紙に書いてある通りに組み立てれば家になるらしい」

「すげえ」

大工と作業員たちが、円陣を組んで、あれこれ打ち合わせを始めた。

「親方、俺の家の近くにも、昨日説明のために出してしまった材料があるので、そいつもここに運んで組み立ててくれ」

「ああ、あれですか。解りやした」

ここは、プロの彼らに任せればいいな。なんでも俺のアイテムBOXを使ってしまうと、彼らの仕事がなくなってしまう。

できることは、彼らに任せないと。

打ち合わせの結果、まずはトラックに積んだ荷物を降ろすようだ。縄で縛られた材木の束が、トラックのクレーンで降ろされていく。これは、川の脇に作る製材所の建築材料であろうか？

「アキラのアイテムBOXにも、荷物が入っているのか？」

「ああ、デカイ丸鋸を持ってきたぜ」

それを水車で回し、木を切って加工するらしい。へえゝなるほど。やっていることは、元世界とあまり変わらないようだ。

アキラが持ってきた荷物の中には、作業員たちの生活必需品や、食料なども含まれている。

これらも、全部マロウ商会が手配したものだ。

こういう現場には、商人が入って食料を売ったりするのが普通であり、カズラ湖から水を引く用水路工事でも商人が入っていた。

通常、こういう普請に入っている商人はボッタクリ価格を提示し

ているのだが、プリムラがいるマロウ商会で、それはありえない。普通の価格プラス、手数料の良心的な価格。

マロウ商会、金儲けの秘訣——商売は正直に行うべし、である。

大工仕事は彼らに任せて、俺は家に戻ってくると、アネモネを呼ぶ。

「アネモネ手伝ってくれ」

「うん」

彼女は、読んでいたタブレットを肩掛けバッグに入れると、俺の後ろをついてくる。

やって来たのは、森との境界線。ここから道を切り開いて、街道までの直線道路を作る。

今は、サンタンカへ通じる、うねうねと曲がる道を通り、ぐるりと遠回りしてここまでやって来るが——。

ここから直線道路を作れば、かなり交通の便がよくなる。

まずは、アイテムBOXからドローンを出して、上空からおおよその方向を割り出す。

方位磁針で方向を確認しながら進めば、なんとなくなるだろう。

本当は、最初にルートを測量したほうがいいと思うが……。

アイテムBOXから、ピンクのスプレーを出して、5本の木に印をつける。

「まあ、とりあえずやってみるか。アネモネ、ゴーレムを使って、印をつけた木を倒してくれ」

森の中に、ゴーレムのコアを置く。

木の周りの土をコアに集めれば、根っこが露出するので、倒しやすくなるはずだ。

「解った！ むー！」

彼女の魔法に呼応するように、コアの周りに土が集まってくる。俺の思惑どおりに、土を奪われた木の根が露出を始めた。

次第に成長し始めた土の柱が木の幹を押すと――根本の土がなくなっているの、簡単にバタバタと倒れていく。

「やった、思ったとおりだ」

ものの数分で、5本の大木が倒れてしまった。

小さな木は、重機で掘り起こせばいいだろう。

「ふう……」

「アネモネ、ありがとう。しばらく休んでいいぞ」
「うん」

俺の近くで、電子書籍を読むようなので、パラソルを出してやった。

俺は大剣を装備したコ〇ツさんを召喚し、大木を輪切りにして加工していく。

木の先端や、根っこは必要ないので、所定の場所に積み上げる。薪にしたい者がいれば、ここから持っていけばいい。

他に使い道がない。

アネモネと協力して、1日で20本の大木を処理し100mほど森の中を進んだ。

街道まで5〜6kmなので、他の作業をしながらでも、2ヶ月もあれば道は開通するものと思われる。

当然、この世界では信じられないような早さである。

137話 サクラ

この異世界での俺たちの故郷を作るため、壮大な計画が始まった。なお成功するかどうかは、まったくの不明。

まあ、小さな村でもいいから、皆が平和に暮らせる所を作れればいいのだ。

まずは畑を広げて野菜を植え、湖畔にはサトウキビの苗を植えた。この世界で砂糖は高級品だ。製糖事業は、この領の重要産業になるだろう。

作物はこれだけではない。キャロブやカカオなど、木の実の栽培にもチャレンジしてみることにした。

成功すれば、この領でチョコレートの製造も可能になり、大きな産業として期待できる。

うちにいる元王族にチョコレートを食わせたところ、その美味さの虜になったので、他の王侯貴族も間違いなく大金を積むはずだ。村が大きくなり作付面積が増え、砂糖やチョコの値段も下がれば、ちよっと裕福な庶民にも手の届く値段になると思われる。

高級品の特権階級に売るよりは、大量生産して庶民に買わせるほうが儲かるのだが、はたしてそこまでできるのか？

それは、まだまだ先のことになるだろう。

手始めにアネモネと一緒に、街道までの直線道路を作り始めた。彼女のゴーレムを使って、次々と大木をなぎ倒していく。

倒した大木は、俺の重機に装備した大剣で輪切りにして、アイテムBOXに入れて運ぶ。

手作業で行えば、数百人以上の人手が投入されて行われる公共事業。

初日と2日目は俺とアネモネだけで仕事が進んだが、3日目からはアストランティアから人手が投入された。

俺の重機や、アネモネのゴーレムで全てを進めてしまつては、公共事業にならない。

雇った人手で行えるところは、どんどん任せてしまふ。

たとえば、倒した大木の枝払い作業やら、切り株が掘り出されてできた大穴の埋め立てなどだ。

俺とアネモネでどんどん先行して、現場の作業はマロウ商会から出張してきた現場監督に任せる。

人手が増えれば、必要なものも増える。

3日目には、俺が用意した大テントの中にマロウ商会の支店ができて、商品を供給し始めた。

その商品の運搬には、アキラが運転するトラックが使われている。彼はアイテムBOXも所有しており、一気に大量の荷物を運べるのだ。

マロウ商会の王都支店の話も進んでおり、イベリスで落ちた橋の再建が完了すれば、計画が実行に移されるはずだ。

その際にも、アキラのトラックによる輸送が計画されている。

なにせ道路の状況がよければ、1日で王都まで運ぶことが可能だからな。

マロウ商会では、伝書鳩の実験も始めたようだ。

もちろん、この世界に鳩はいないので、スピードが速くて帰巢本能が強い鳥を色々と探して、実験を繰り返している。

俺がアイテムBOXから出した無線機を使えば手っ取り早いのだが――。

もし俺になにかあったための、アイテムBOXに頼らない、領地づくりを心がけなければならない。

俺のチート能力におんぶにだっこでは、俺が死んだりすれば、領が立ち行かなくなる。

そうなればせっかく集まってくれた領民が、路頭に迷ってしまう。それは避けなくてはならない。

領主になってしまったからには、民の生活を守る責任があるのだ。

俺とアネモネが作っている道は、3日で約300m進んで今日の作業は終了。

他の仕事もあるし、俺たちだけがどんどん進んでも、他の作業員達の仕事が間に合わない。

アネモネと一緒に森の中に出来た道に戻る。

道といっても、処理をしていない木が倒れており、根っこが剥き出しになった地面には大穴が開いている。

これを綺麗に整地していかなければ、道としては使えない。

道の途中では、アストランティアからやって来た作業員たちが、倒れた大木の枝を払ったり穴を埋める作業をしていた。

枝を払う鉋や斧、地面を埋めるためのシャベルは俺がシャングリラから買ったものだ。

現場監督をしているマロウ商会の男に声をかける。

緑色のシャツに黒いズボン、黒いベストを着た、短い黒髪の男である。

マロウ商会の手代や従業員は、この恰好をしている者が多いような気がする。

制服というわけではないのだが……。

「引き続き作業を続けさせてくれ。無理はさせないようにな」

「承知いたしました、領主様」

「領主様あゝ、領主様の、あの凄い鉄の魔獣を使ったほうが早いのでは？」

そんなことを言ってきたのは、シャム柄をした男の獣人だ。

ニャメナの知り合いにもシャム柄の女の獣人がいたが、こっちは本当にシャム猫みたいな顔をしている。

「そりゃ、そうだが。俺が全部やってしまったら、お前たちの仕事が無くなって、すぐに失業だぞ？」

「あ、そりゃそうか」

「領主様は、敢えて仕事をお前たちに割り当てて、メシ代を稼げるようにしてくれているわけだ」

年末工事で道路を掘り返して、餅代を稼がせるようなもんだ。

現場監督の言葉に、皆も納得している。

「アストランティアの中じゃ、あまり仕事もないようだしな」

人が暮らしていれば、生活必需品は必要なので商人は儲かるが、肉体労働などで日銭を稼いでいる、獣人たちのような連中は苦しい。王都のように人だけが集まっても、ろくな仕事もなく失業者で溢れてしまう。

道路工事は現場監督に任せて、俺たちは家に戻ると――辺りに人が増えており、かなり賑やかになっている。

会社も街も、賑わって活気があるイコール、成長しているってことだからな。

これから街が大きくなっていく予感がする。

俺がシャングリ・ラから購入した、組み立てキットの家は、すでに一棟の棟上げが完了していた。

塗装していない板の家が、ちょこんと建っていて、その周りに銀色のハシゴが並んでいる。

俺がシャングリ・ラで購入した脚立や2連ハシゴだ。

とても軽いので評判がいいのだが、アルミ製なので取扱に注意が

必要。

アルミは、この世界で強力な魔法の触媒として作用するのだ。そのことは、大工の親方にも話して、詳しく説明している。

一日の終わりに数をチェックして、俺のアイテムBOXに入れるか、倉庫にしまう。

大工たちの話では、最初は慣れない仕事で建築に手間どっていたが、手順が解れば1日に1軒のペースで完成させられると言う。さすがプロだ。餅は餅屋に任せるべきだな。

その建築現場を見に行くと、ちょっとしたトラブルが起きていた。俺がいないときに、集落の指揮を任せていたアマランサスと、作業員の獣人たちが、もめているらしい。

俺は、そこへ走ると、大工の親方に声をかけた。

「親方、どうした？」

「こりゃ、領主様。獣人たちが、ごねてまして」

「何が問題だ？」

「別に俺っちたちは、働きたくねえとは言ってねえ。指図するのが、その女だつてのが気に入らねえ」

「彼女は俺の代行だぞ？ 従ってもらわないと困るが……」

「しかし、その女は奴隷でやんしょ？」

まあ確かに、そうなのだ。そこら辺がややこしくなるから、アマランサスに奴隷紋を外せと言っても、頑として譲らない。

俺は、ため息をついた。

「ふう……それじゃ、獣人のお前たちより、この女が強かったら文句はないんだろ？」

「ええ？ そりゃ、そうですけどねえ……」

獣人たちが、集まってきてニヤニヤしている。

そんな馬鹿なことがあるものかと思っているのだろう。

「それじゃ、ここで彼女と手合わせしてみろ」

「ええ？ 本気ですかい？」

「もちろん本気だ。もし勝ったら、この女を好きにしていいいぞ？」

「マジですかい？」

「ああ、こんないい女は滅多にいないだろう？」

俺の言葉を聞いて、獣人たちは俄然やる気を出したようだ。

まあ獣人たちは丈夫だから、死ぬことはないだろう。アキラによると、頭蓋骨もかなり分厚くて、脳震盪にも耐性があるらしいからな。

「領主様、いいんですかい？」

「親方、大丈夫だ」

アマランサスに声をかける。

「ここで力の差を見せつけたほうが、後々も言うことを聞くだろう？」

「聖騎士様の仰るとおりに」

お城で、アマランサスとうちの獣人たちが手合わせした。

ミャレーとニャメナは、獣人たちの中でも実力上位だと思われるが、まったく歯が立たなかった。

それに鑑みても、アマランサスが、この男たちに後れをとることはないだろう。

「領主様、本当にいいんですかい？」

「ああ、二言はないぞ？」

「いつでも来やれ」

余裕しゃくしゃくのアマランサスに、男たちもキレたようだ。

男たちの中でも身体が一番大きい虎柄が、いきなり飛びかかると、

アマランサスの両肩をつかもうとした。

普通なら一瞬で勝負が決まると、周りの奴らもそう思っただろう。巨躯の獣人の男と、ひ弱そうな女が勝負になるはずがないと――。男のグローブみたいな手が、アマランサスの肩に触れようとした瞬間、身体を躲した彼女は、そのまま毛皮を地面に叩きつけた。

凄い音とともに地面に衝突した男は、白目を剥いて、そのまま動かない。

「大丈夫か？」

いくら獣人が丈夫といっても、かなりの勢いで衝突したので、心配になってしまう。

突進したエネルギーをそのまま受け流して、獣人の体重も加味して地面に激突させたのだろう。

相手のパワーと体重を利用する――実に武術の達人らしい攻撃の仕方だ。

頭を打って倒れている場合、人間だと揺すったりしちゃまずいのだが、変ないびきをかくようなこともないので――。

ちよつと身体を揺すってみる。

「おい！　大丈夫か？！」

俺の言葉に反応したのか、獣人の男がガバッと起き上がった。

そこにアマランサスが、威圧をしながら近づいてくる。顔を引きたらせた男が、いきなりひっくり返って腹を出した。

無防備な腹を出すことで服従を誓う、降参のポーズである。

「ふむ……」

アマランサスは穿いていたサンダルを脱ぐと、素足で男の腹をふみふみし始めた。

ちよつと彼女の行動に焦ったが、力任せに踏みつけているわけではなく、足の裏で軽く踏む感じ。

家のネコの腹を足でなでる感じに似ている。

「聖騎士様のために、働くかえ？」

「姉御、聖騎士様って、領主様のことですかい？」

「そのとおりじゃ」

「もちろんでさあ」

男は起き上がると、その場にあぐらをかいた。

「俺っちは、領主様と姉御のために、尽くさせてもらいやす！」

「その他の者はどうじゃ？」

威圧するアマランサスに、皆が膝をついた。この中で一番強いらしい、この男が折れたってことは、その下も従うってことだ。

獣人たちは上下関係が、はつきりしているからな。これで彼女に逆らうやつはいなくなっただってことになる。

まさに力で手下を従わせる王者の風格。

これで作業に戻ると思ったら、他の獣人たちもやってきて、アマランサスの前にひっくり返って腹を出した。

「ほほほ、そなたたちも踏んでほしいのかえ？」

屈強な男たちが、アマランサスにお腹をふみふみされて、喜んでいる。

これが本当の女王様プレイ——いや、王妃だけど、実質女王だったからなあ。

俺も獣人たちと付き合いってきたが、お腹を出されたことは、あまりなかったな。

俺と付き合っていた獣人たちは、対等の関係だったはず。

ミヤレーとニヤメナのお腹もなでてやったけど、服従のポーズって感じじゃなかったし。

この前のシャム子が、それっぽかったけど……。

その光景を見ながら、色々と考え込んでいたのだが、獣人の一人が、半ズボンの脇から大砲を勃たせた。

「おいおい、昼間からそんな出すなよ」

「しかし、こないだ女に踏まれたんじゃ、うへへ」

男たちは、ニヤニヤしていたのだが、その大砲の根本にアマランサスの剣の切っ先が止まった。

「妾に服従するのなら、これを切り取ってもよいのじゃな？」

「ああ、アマランサスは、アイテムBOX持ちだからな。どこから剣が飛んでくるか解らんぞ？」

「「……」」

当然、男たちの大砲は一瞬で沈黙した。まったくかなわなかったどころか、手加減されていたと解ったのだろう。

そこにリリースがやってきた。

「ケンイチって、なんじゃこれは?!」

お腹を踏まれて喜ぶ、ずらりと並んだ男に、リリースが驚いている。

「獣人たちの男たちが、アマランサスに服従を誓っているんだよ」

「騎士が跪いて、剣を受けるようなものかえ？」

「それに近いのかなあ……リリース、なにか用かい？」

「それじゃ! アキラが来たぞえ」

アキラが荷物をトラックで運んできたようなので、迎えに行く。

「オッス!」

「オッスオッス!」

「ケンイチ、なんじゃその挨拶は？」

「え? ああ、俺たちの故郷の挨拶だよ」

アキラは、ここにできたマロウ商会の支店に商品を運んできたよ
うだ。

作業員も沢山入り始めたので、食料品や酒、生活必需品なども大
量に消費するようになった。

メイド達も、マロウ商会から、色々と買っている。

最初はなにもなかったのが俺が用意していたが、商品が揃うよう
になったら、普通の生活をしてもらわないと困る。

もちろん、マロウ商会にないものや、俺がマロウ商会に卸してい
る商品は、俺が直接渡したほうが早い。

たとえば洗濯バサミ。俺がマロウ商会に卸して、それをアストラ
ンティアへ持っていくって、またここに持ってきて——なんてことを
やっていたら、時間の無駄だ。

「ケンイチ、この村にそろそろ名前をつけたほうがよくね？」

アキラの提案に、俺はハツとなった。そういえば、この土地に名
前をつけないとな。

隣のアストランティアも、ユーパトリウム子爵領アストランティ
アだし。

ここもハマダ領、何々と名前をつけなくては。

「ああ、そうだな。マロウ商会の支店名も、ないと困るな」

「なんて名前にする？」

「東京とか、京都とか？」

「もうちょっと、異世界っぽい名前のほうが……」

アキラの言うことも、一理ある。

「帝国風に、オストハウプトシュタットとか、エーデルハウプトシ
ュタットとか……」

「ケンイチ！ そんな名前にしたら、妾は王都へ帰るぞえ？」
なぜか、リリスが怒っている。

「そんなに、嫌か？」

「当たり前であろう！」

「え〜？」

腕を組んでそっぽを向く、リリスのためになにか他の名前を考えなくてはならない。

それじゃ――。

「サクラはどうだ？」

「ほう！ 中々よい響きではないかえ？ なんていう意味なのじゃ？」

「花の名前だよ」

読み方はサ・クラにすると、この国風になるようだ。

「それではここは、ハマダ領サクラになるわけじゃな！」

「その通り！」

「それじゃ、領木として桜を植えたらどうだ？ ケンイチの魔法で桜は出せないのか？」

ちよつとシャングリ・ラを検索してみた。ズラズラと検索結果の中に表示される、桜の苗木――売っているな。

桜は、接ぎ木や挿し木でいくらでも増やせるので、大量に購入しなくてもいいだろう。

この世界にもリンカーという、りんごに近い植物があるので、あれが台木として使えるかも。

リンカーの木に咲く花も、りんごの花によく似ている。

形は、りんごっぽいのだが、中身はりんごと桃と合わせたような感じ。

りんごも桃もバラ科だし、桜もバラ科だ。

それはいいとして桜といえば、ソメイヨシノなのだが――。

「なあ、アキラ。ソメイヨシノは作れそうだが、ソメイヨシノって種の限界にきているとか、きてないとか——そんな話がなかったか？」

「そういえば、そんなニュースを見たような……」

「それに、この国って年中暖かいじゃん。桜が咲くかな？」

「うーん……」

「沖縄って桜が咲いたっけ？」

「ソメイヨシノじゃないが、桜はあったぞ」

アキラは、沖縄の桜も見たことがあるようだ。濃いピンク色の桜らしい。

戦時中、南方にソメイヨシノを植えたが、花が咲かなかった——なんて話も聞いたことがあったような……。

二人で悩んでいたが、試しに苗を買ってみた。

種類は、河津桜、小彼岸桜、大島桜、一応ソメイヨシノも購入した。

獣人たちに手伝ってもらい、家の近くに植える。ここから徐々に増やしていけばいい。

その様子を、リリスとアネモネも見ている。

「旦那、この木にはどんな実がなるんだい？」 「美味しいのかにゃ？」

「花が咲くだけけど……」

「えー？」 「にゃー？」

ミヤレーとニヤメナの落胆の仕方が凄い。そんなに落胆すること、ないじゃないか。

実もならないような木を、なんでわざわざ植えるのか？ みたいな顔をしている。

あまりに残念そうな顔をするので、実がなる木の苗も買ってみた。さくらんぼとアメリカンチェリーである。

山桜にも、さくらんぼがなるのだが、食べたもんじゃないからな。食べると、それなりに甘いのだが、苦味がすごいのだ。

シャングリ・ラから、さくらんぼの有名な品種である佐藤錦と、アメリカンチェリーの苗を購入した。

両方とも5000円弱である。意外と高い代物。

子供の頃から、さくらんぼを自宅で栽培したいという憧れはあった。

運動会などで母親が作ってくれた弁当に、さくらんぼの缶詰が入っていたので、特別な食べ物という印象が強い。

スーパ―などで買っても、結構高いしな。

さくらんぼを沢山食べてみたい——そんな願いが、こんな異世界で、かなうとは。

「ミヤレーとニヤメナ、こいつは実がなるから、頑張って植えてくれ」

「これは美味いじゃ？」

「美味いぞ」

植えている苗を、アキラが覗き込んでいる。

「ケンイチ、なんの苗だ？ 葉っぱが桜だが、もしかしてさくらんぼか？」

「そうそう佐藤錦と、アメリカンチェリーだ」

「マジか！ 実はないのか？」

「ちょっと待ってくれ……」

シャングリ・ラにさくらんぼは……売ってるな。

この人数だと——1kgぐらいは必要かな？ えーと6000円か……さくらんぼって高いよなあ。

「ポチッとな」

白い箱に入った、真っ赤な実が落ちてくる。

「おおっ！ これは美しい木の実じゃの！」
とりあえず、正室であるリリースに食わせる。

「タネがあるから気をつけてな」

「これは美味い！ なんという上品な味わい」
「美味しい！」

アネモネに続いて食べた、獣人達も喜んでいる。

「こりやうめえ！」 「この木の実がなるにや？」

「多分、いっぱいなるぞ」

「にゃあ！ 食べ放題にゃ！」

「ケンイチ、アメリカンチェリーはないのか？」

「あれのほうが好きなのか？」

「デカくて、食いごたえがあるじゃん」

まあ、確かに。アキラの言うとおりに、がっつりと食える感覚はある。

シャングリ・ラを探すと、アメリカンチェリーも売っていた。
こちらは1kgで3000円と、佐藤錦の半額だ。

「ポチツとな」

透明なパッケージに入った、黒っぽい実が沢山入っている。

「ほう！ こちらは、また変わっておるの！」

「ちょっと、大味っぽいんだが、大きいから食いごたえがある」
獣人達が、アメリカンチェリーを次々と口に放り込む。

「これもうめえよ！」 「にゃー！」

「確かに、味に繊細さはないが、豪快に食えるのお」

「美味しい！」

リリスもアネモネも、アメリカンチェリーを美味しくそうに頬張っており、アキラも久々の元世界の味に目を細めている。

「アメリカンチェリーなら、ジャムも作れるか」

「いいねえ。ケンイチ、作ってくれよ」

「ジャムとは？ なんじゃ？」

リリスがジャムを知りたがっているが、果実の砂糖漬は、お城ならありそうだけだな。

「木の実を砂糖で煮たものだよ」

「それ食べたい！」

「よしよし、作るか」

「ケンイチ！ そのようなことは、まずは正室の妾に尋ねることであろう？」

「もう、そんなの気にするなよ。ほら、頭なでてやるからさ」

リリスの頭をなでてやる。

「ふわああああ……って、そうではない！」

「私もお！」

アネモネが俺に抱きついてきた。

「アネモネ！ ケンイチの正室は妾じゃぞ！」

「べえ〜！」

アネモネとリリスが俺の周りをぐるぐると回り始めた。

「ほらほら、喧嘩しない」

二人の頭をなでる。

「「ふわああああ……」」

二人がおとなしくなったところで、ジャムを作ってみることにした。

シャングリ・ラで、追加のアメリカンチェリーを3kgほど買う。皆でヘタとタネを取る。大量に作っても、アイテムBOXに入れておけば問題ない。

グラニュー糖と、酒のジンを入れてかき混ぜて、アネモネの魔法の出版。

「アネモネ、温めて沸騰させてくれ」

「うん！ ウォーム 温め！」

すぐにクツクツと、チェリーに火が通る。

「魔法って、電子レンジより高性能だからなあ」

アキラが煮えるジャムを見てつぶやいた。

「そうなんだよ。アネモネが魔法を使えるようになってから、あまり電化製品を使わなくなってしまった」

獣人たちもジャムを見ていたのだが、ニャメナは他のものに興味があるようだ。

「あの……旦那。それって酒だよな。すごくいい匂いがするんだけど……」

ジンに入っている、ジュニパーベリーの香りを嗅ぎつけたようだ。アイテムBOXから、カップを出してジンを注ぐ。

「まだ日は高いから、少しだけだぞ」

「へへへ……」

「ケンイチ、俺にも……」

アキラもジンを飲みたいようだ。吾兵衛はこれだから困る。

ジンを飲み始めたニャメナとアキラだったが、匂いを嗅ぎつけた

呑兵衛がもう一人――。

「聖騎士様あ……とても、いい香りが……」

「アマランサス、お前もか。少しだけだぞ」

彼女はウワバミって話だから、気をつけないと。

呑兵衛たちが酒を飲んでいる間に、チェリーが煮えた。

アネモネの魔法で冷やしてもらって、レモンを絞る――といっても、レモン汁がシャングリ・ラで売っているので、そいつを買った。1000円だ。

「ケンイチ、それってレモン汁だよな。ジンに少し入れてくれ」

「はいよ」

「旦那、俺にも」

「妾にも、たもれ」

ジンを飲んでいるニヤメナが、膝を叩いた。

「かあー！ 一体、旦那のアイテムBOXには、どんだけ上等な酒が入っているんだよ」

「確かに、このような酒は城でもない」

「そりゃ蒸留技術がないからなあ」

「蒸留……錬金術師が使う、乾留とは違うのかえ？」

「似たようなものだよ、アマランサス。酒の醸造はアキラが興味を示していたから、ここで始めるかもしれないぞ？」

「本当かい、アキラの旦那！」

「ああ、この世――ここにゃ、酒の種類が少ないからなあ。エールだって、もうちょっとマシになるはずだ」

呑兵衛たちによる酒談義に花が咲いているが、俺は飲まない人だから、醸造にはまったく興味が無い。

皆が酒で話し込んでいるうちに、アメリカンチェリーのジャムはできた。

スプーンで掬って、リリスに食わせる。

「う、甘くて美味しい！　なんという風味！」

「お城なら、果実の砂糖煮ぐらいはあったんじゃない？……？」

「確かにあったが、こんな美味なものは……」

「私もー！」　「妾もじゃ」

アネモネとアマランサスにもスプーンで食べさせる。

「これをパンに載せたりして食べるわけだ」

「楽しみじゃー」

「うん、たのしみ」

お城から、サンバクさんがやって来れば、ジャムぐらいは余裕で作れるだろう。

彼に任せてしまえばいい。

さくらんぼの木に、アネモネが魔法をかけていると、自転車が出て来た。

プリムラである。

138話 凸して来た！

異世界での俺たちの故郷——サラリーの土地は、サクラという名前に決まった。

ここはハマダ辺境伯領サクラということになる。リリースによると、現地読みではサ・クラになるのではないかという話だ。

それを象徴するように、シャングリ・ラから桜の苗木を買って植えた。

四季がある日本で咲く桜が、温暖なこの国で咲くかどうかは微妙だが、こちらにある桜に近い植物と交配して新しい種を作れないだろうか。

それが可能なら、四季咲きの桜——なんてのも作れるかもしれない。

その場合、桜イコール春ってイメージはなくなるな。

その前に、この国に四季がないので、春自体がないのだが。

皆でさくらんぼを食べて、アメリカンチェリーのジャムを作っていると、自転車に乗ったプリムラがやってきた。

いつもアキラの車に乗ってくるのだが、彼がコチラに来ているので、単独でやって来たのだろう。

自転車を漕ぐ彼女の後ろに、新しい護衛である、ニヤレサというシャム柄の獣人が同行している。

車とも並走できるぐらいの獣人の脚力があれば、自転車に乗ったプリムラの護衛ぐらいは難なくこなすだろう。

自転車でやってきたプリムラにも驚いたのだが、そのうしろを黒い馬車がついてきている。

1 頭立ての小さな馬車で、多分二人乗りだろう。長い手綱で屋根の上に御者が乗っている変わったタイプだ。

「プリムラ、そのドライジーネに乗れるようになったんだな。それより、どうした？ 急用か？」

「はい——あの、後ろの方々が、ケンイチにお会いしたいと……」
「後ろ？」

個人用に馬車を持っているってことは、大店の商人か貴族ってことになるが——。

まさかプリムラが、商売敵をここに連れてくるわけがないだろう。そうなる——。

俺の予想どおりに、小さな馬車から、初老の男女が降りてきた。

男は、少々背が小さく、金糸の刺繍を施してある青い服の上下。一見して貴族だ。

女のほうが背が高く、緑色の胸の開いたドレスを着ているが、歳は50過ぎているはず。

歳は気になるが、凜とした佇まいとそのスタイル——若い頃は、さぞかし美人だったと思われる。

その夫人の姿を見ていた俺の頭に、誰かの姿がダブっているような……はて？

「ちょっとニヤメナ、ユリウスを呼んできてくれ」

「はいよ」

だれか解らんが、とりあえず挨拶しよう。

「ようこそ、我が領へお越しくださいました」

位階は解らんが、辺境伯より上ってことはないだろう。

そのぐらい高位の貴族が、騎士団などの護衛もなく、ウロウロできるはずがないからだ。

まあ、とりあえず声をかけたのだが、反応が薄く――すぐに夫人の返答が返ってきた。

「そなたのような下男が貴族に声をかけるなど、無礼であろう」
いきなりのストレートな言動に、俺は面を食らった。

おそらくは、普段の作業着のままだったからに違いない。

「は？ いやいや、私がハマダ辺境伯です」

「あの！ シェフレラコンパクタ男爵夫人！ こちらが、ケンイチ・ハマダ辺境伯様で間違いありませんよ！」
慌てて、プリムラが間に入った。

「これは失礼いたしました。私がライチ・メイラー・シェフレラコンパクタ――こちらが、夫のシェフレラコンパクタ男爵でございます」

夫が頭を下げた。完全に尻に敷かれている旦那さんだな。

「それで男爵夫人、当領へ御用の向きは？」

「こちらに、うちの娘がいると聞きました」

「娘――？」

そこへ、カナンがグレーのジャージ姿で走ってきた。

「父上！ 母上！ なぜ、こんな場所へ！」

こんな場所は酷いな。

「まあ！ カナン！ こんな所にいたのですか！ 子爵様のお屋敷に行けば、離縁したと寝耳に水のお言葉！」

カナンは、本当に実家に何の連絡も入れてなかったようだ。

「そのとおりです！ 私は、辺境伯様の側室になったのです」

いやいや、まだ側室じゃないぞ？ いや、やっちゃったから側室になるのか？

「辺境伯領と言っても、なにもないただの森の中ではありませんか！ おまけにその恰好！ 奴隷にでもなったのですか？」

「これは、農作業をするための作業着です！ 母上、あまりに辺境伯様に無礼が過ぎますぞ！」

「まったく、カナン殿の言うとおりじゃな」

そこへ、リリスがやって来た。

「男爵夫人、紹介しよう。私の正室で、リリスだ」

「リリス・ララ・ハマダである。よしなに」

「リリス……リリス……」

夫人の動きが止まる、リリスの顔を見覚えがあるようだ。

「まさか——お、王女殿下！？」

男爵夫人は、リリスの正体に気がついたようだ。

下級貴族は、1年〜2年に1回ぐらいしか登城しないが、なんとか王族に顔を覚えてもらおうと、必死になるらしいからな。

「今は、王族籍を捨てて、辺境伯様の正室じゃ」

「「ははっ！」」

男爵と夫人が膝をついた。俺のときと、態度が全然違うじゃねえか。

「男爵夫人、先程のそなたの言動は、貴族にあるまじき礼節を欠いた行為じゃのう……」

「「申し訳ございません」」

「なんじゃ、騒々しいのう……」

そこにユリウスを連れた、アマランサスがやって来た。日傘をさ

して口元を扇子で隠している。

「アマランサス——こちらは——」

「知っておるぞえ。シェフレラコンパクタ男爵であろう？」

「知ってるのか。えーと、男爵、こちらが——なんて紹介すりゃいいんだ？ 行政官か？」

まさか、俺の奴隷と紹介するわけにもいかねえ。いい加減に、奴隷は止めてもらえないかな。

俺の悩みも気にしないように、アマランサスが短く答えた。

「よしなに」

「こちらが、我が領のアマランサス行政官だ」

「アマランサス?!」

俺の言葉を聞いた夫人が、驚愕の表情を見せる。どうやら彼女も王妃の顔を知っているらしい。

「も、もしや、王妃さ……ま」

夫人が立ち上がろうとしたのだが、動転して貧血でも起こしたのか、その場に倒れてしまった。

「母上！」

慌てて、カナンが母親に駆け寄った。

「ありや、こりやまずいな。アイテムBOXから部屋を出すから、そこへ」

「承知した」

相手が貴族なので、獣人たちに担がせるわけにもいかない。

そういうのを気にしない人ならいいのだが、この人達は身分などにうるさそうだ。

まあ貴族らしい貴族だな。

シャングリ・ラから買ったコンテナハウスを出して、中にベッドも置く。

チェストを置いて、飲み物も置いておくか。

「カナンと男爵。そこへ夫人を寝かせてください」
見たこともない鉄の部屋に、男爵はかなり戸惑っている。

「辺境伯様、色々とご無礼をいたしましたのに、このような介護を
していただき、ありがとうございます」

男爵が俺に頭を下げた。うるさい夫人がいなければ、普通の人の
ようだ。

「まあ、気にしてませんので、娘さんとしてばらく話し合ってください
い」

コンテナハウスの中に折りたたみの椅子を3脚出した。

「承知いたしました」

「カナン、俺も一緒に話し合いをするか？」

「いや、まずは私が父母と話し合いする」

カナンが強引に、ここに来てしまったからな。その説明からか。
——とはいえ、俺もやっちゃったがなあ。

コンテナハウスを出ると、プリムラをねぎらう。

「プリムラ、悪いな」

「いいえ、貴族の相手ってのも仕事のうちですから」

「しかし、よく自転——ドライジーネに乗れたな」

「練習しました！」

彼女が両手で拳を作り、フンス！ と気合を入れている。

そのプリムラが乗ってきた自転車を、ニヤレサという獣人が乗っているのだが――凄い上手い！

トリック的な乗り方もしているし。さすが、獣人たちは運動神経の塊だ。

どんな運動をやらせても、そつなくこなせるのではないだろうか？
ただし頭をつかう運動以外な。

「おう、ケンイチ。何があった？」

住宅地のほうから、アキラがやって来た。

「カナンの両親が凸してきた」

「ははは、頑張れよ」

笑うアキラであるが、カナンは押しかけ女房だからなあ。

悩んでいると、獣人たちが俺の所にやって来て、ニヤレサの自転車を指差す。

「旦那あ！ 俺らにも、あれ！ 俺らの金から引いてもいいからさあ！」 「にゃー！」

「ええ？ 足の速い獣人たちにドライジーネは要らんだろ？」

彼女たちの話では、スピードよりも、トリックみたいな乗り方をしてみたいらしい。

それじゃ――シャングリ・ラから、それに使うBMXを購入してみた。

ペダルと後輪が直結しており、普通の自転車のようなカラカラと空回りするワンウェイクラッチがついていない。

それに前後の車軸にペグがついており、足が乗せられるようになっている。

値段は8万円――当然、この世界ではオーバーテクノロジーで、この10倍の金額を出しても作れない。

2台購入して、代金は彼女たちの預り金から引いておく。

「ポチツとな」

2台のBMXがガチャッと落ちてきた。

「ほら、でも大丈夫か？」

「ニヤレサのやつに乗れて、俺にできねえなんてことはねえ！」
「多分、大丈夫にゃー！」

初めて乗る自転車に、最初は悪戦苦闘——していたが、すぐに乗りこなした。

ウイリーして、くるくると回ってみせたり、ジャックナイフも自在。

「うひょー！ こいつはおもしれえ！」 「うにゃー！」

ギアもローギア固定のはずなのに、かなりのスピードだ。足の回転するスピードが桁違い過ぎる。

これで普通のロードに乗せたら、どのぐらいのスピードが出るのだろう。

興味はあるが、異世界の道は整備されておらず、マウンテンバイクやBMXじゃないと走るのは無理だ。

獣人たちの運動能力に改めて感心している俺だが、ちょっとコンテナハウスの周りが騒がしい。

「お前たち、鉄の箱で寝ている人がいるからな。もうちょっと離れた場所で遊んでくれ」

「はいよー」 「にゃー！」

獣人たちが、いなくなったので、ユリウスに貴族の再婚について聞く。

「離縁した貴族の女房ってのはどうなるのが多いんだ？」

「よほどのことがなければ、普通は離縁にはなりません。死別した

とかであれば別ですが……」

「その場合は？」

「良家であれば、引き取り手が見つかりますが、通常はかなり位階を下げて嫁ぐとか……」

死に別れても、政略結婚の駒にしかならんのか。

「なんか厄介者扱いだな」

「世継ぎを生むにしても、若いほうが好まれますし……」

彼も、奥歯に物が挟まったような話し方だ。

まあな——とはいえ、彼女ぐらい美人であれば、貰い手もすぐに見つかりそうだが——ユリウスは首を振る。

「そうになると、商人に嫁いだりとか……」

「十分にありえます」

カナンの行動に、リリスは不満があるようだ。

「やれやれ、カナン殿も無茶をし過ぎじゃ。勢いでここへやって来て、実家にも連絡を取らぬとは……」

「そういう、リリスとアマランサスはどうなんだ？ いきなり王族も辞めてしまって、こんな僻地までやって来るなんて」

「う……それは……」

「リリスは、まだ嫁ぐという名目はあるかもしれないが、アマランサスなんて元王妃で、今は奴隷だぞ？ 意味が解らんだろう」

「それは、妾に言っても困る！」

隣で話を聞いているアマランサスは、知らんぷりを決め込んでいる。

元王族二人とユリウス、4人で話していると、コンテナハウスから男爵夫人が飛び出してきて、俺の手を握った。

「それでは辺境伯様に、娘をお預けしてよろしいのですか？」

「はあ？ まあ、それは構いませんけど、随分簡単に掌をひっくり返しましたね？」

「ここに王族のお二方がいらっしゃるということは、ここは王家の肝いりの領地になるのでございましょう？」

「そう、決まったわけではないけどな」

「そんな領地の側室になれるなんて、これ以上の再縁はありませんわ」

こりやまた、随分と現金キャッシュなお母さんだな。まあ、俺の側室になれば、王室とも縁続きになる可能性があるのだから、無理もないか。

「ケンイチー！」

カナンがコンテナハウスから飛び出してきて、俺に抱きついた。

「ちょっと待ちなさい」

「父と母の許しも得たぞ。これで、正式な側室に――」

「そういう望みはないと言ってなかったか？」

「もう、やってしまったではないかあ」

彼女が、うつとりとした顔で、俺に脚を絡ませてくる。

「はあ……こんなに子どもを孕みたいと思ったのは初めてだ……」

「子爵は、そうじゃなかったのか？」

「前にも言ったと思うが、政略結婚に愛などあるはずがない」

横を向くカナンではあるが、ユリウスの話では、仲がいい貴族夫妻もいるということだ。

「その割には、子爵の正室が代わることに怒ってたじゃないか」

「当たり前だろ！ 私にだって、女の誇りというものがある！ まったく、10年早くケンイチに出会っていれば……」

不可能な歴史の改変に後悔するカナンのつぶやきに、後ろから声がした。

俺たちの会話を黙って話を聞いていたアマランサスだ。

「それは、妾もそうじゃぞ？ カナン。10年早ければ、妾が聖騎士様の正室じゃ」

「あんなに、お前のことを想っていた国王陛下が可哀想じゃないか」「ふん、妾に切られようとも、真正面からぶつかっておれば、妾の心も動いたかもしれぬがの！ 姑息な手ばかりを使いおって」

アマランサスは扇子で顔を隠しているのだが、目がかなり怖い。王様にも、チャンスがあったようだが、アプローチの仕方がまづかったらしい。

「今からでも遅くはない！ 私と蜜時を取り戻すのだ！」
カナンが俺に顔を近づけてくる。

「真っ昼間から止めなさいっての」
俺が彼女の顔を押しのと、リリスが割って入ってきた。

「カナン殿！ 正室の妾が先じゃぞ？」
「リリス様、そんなことをおっしゃられても、できるできないは神の思し召しですし」

「だめー！！」
いつの間にかやって来た、アネモネも一緒に割って入ってきた。

「はいはい！ 君たち離れなさいって！」
そこにプリムラがやって来た。

「あの、ケンイチ。男爵夫妻をおもてなししたほうが……」
「王族の2人も納得する、うちの料理はいいと思うのだが、夕飯を食べるとここに泊まることになるが……」

ここには屋敷も客間もないのだ。そこら辺の事情を男爵夫妻に話す。

「辺境伯様、あの鉄の部屋を貸していただければ、なんの問題もございません」

男爵夫人は、最初に会ったときは、打って変わって普通だ。上下関係がはっきりとしたので、これが貴族らしい対応なのだろう。

「あれでよろしいので？」

「はい、王都へ出かけるときには、馬車で野宿するのも普通でございますから」

従者を沢山連れて、組み立て式の天幕を運んでとなると、かなり位階が高い貴族じゃないと無理。

領地も持っていない男爵クラスでは、野宿になるのも仕方ないといえる。

「そうなる——料理は、なにがいいだろうなあ」

「カレーじゃろう」「カレーだな」

元王族の2人もカレー。

「カレー！」

アネモネもカレー。

「旦那、晩飯はカレーかい？」「にゃー！」

カレーの声を聞いて、獣人たちもやって来た。

ユリウスとアキラも笑っているので、カレーでいいのだろう。

「それじゃカレーにするか」

「」「わー！」

「やっぱ、異世界でもカレーは正義か」

アキラが皆を見てつぶやく。

「そうなんだよ。これが一番人気がある」

盛り上がる家族の中で、訝しげな顔をしている獣人がいる。
プリムラの護衛のニャレサだ。

「なんだ？　かれーって？」

「香辛料料理だよ。無茶苦茶美味いぞ」「そうだにゃ」

「領主様、そんな高級なものを、私も食べていいのかい？」

「もちろん、いいぞ。プリムラが世話になっているんだからな」
プリムラがいるので、今日の予定を聞いてみる。

「プリムラ、今日はここにいるのか？」

「はい」

「それじゃ、スープを頼む」

「解りました」

「無理をしなくてもいいぞ？」

「そんなことはありません」

アイテムBOXからテーブルと道具を取り出して並べていく。

屋敷ができれば、こういう食事の用意も、メイドたちがやることになるのだろう。

そのメイドたちは、ちょっと離れた場所に、折りたたみのテーブルを並べている。

俺がシャングリ・ラで買ってあげたものだ。

「サンバクさんが来れば、食事の用意もお付きの料理人に任せることになるのか」

「えー？　私はケンイチの料理が食いたい」

アネモネは、そう言うのだが――人数が増えてくれば俺がなんでも用意するってわけにはいなくなる。

彼女にしてみれば、俺と2人きりだったときが、一番よかったのに違いない。

まあ、まだ子どもだし、もうちょっと大きくなれば、解ってくれると思うのだが……。

本人の前では言えないけどな。

「アネモネはパンを焼いてくれ」

「うん！」

皆で野菜の皮を剥き、俺はドラゴンの肉を焼く。

それらがプリムラがかき混ぜる巨大な鍋の中で渾然一体になる。

舞台が整ったら、最後に日本が作り出した偉大なる文明の結晶である、カレールーを投入する。

一面に漂うカレーの匂い。

メイドたちもカレーにした。

この世界では、スープはほとんど毎回作る定番料理。そこにカレールーを投入すれば、すぐにカレーになる。

簡単に明快、そして美味い。これがカレーの真理。

「うめー！ こりゃ、なんだい？！ これが香辛料料理だって？！」

カレーを食べた、シャム柄の獣人が声を上げた。

獣人たちは、ちょっと離れた場所で、テーブルを別になっている。

「はは、うめえだろ？ こんな食事を毎日してたら、ニャレサも旦那なしじゃ生きられなくなるぜ」

得意げな顔をしていたニャメナに、呆れ顔のミャレーの突っ込みが入る。

「これだから、トラ公はアホだにゃ」

「なんでだよ?!」

「獣人の女を増やしたら、ウチらの分前が減るだけだにゃ」
「うっ!」

長いテーブルにつくと、プリムラが皆にカレーを盛る。

初めて見る怪しい料理に、男爵夫妻は緊張していたのだが、元王族がパクパクと食べているのを見て――。

スプーンでカレーを掬うと、口へ運んだ。

「これは、なんと素晴らしい香辛料料理でしょう!」

「まったくだな。このような素晴らしい料理は食べたことがない」

男爵夫妻は俺の前に座ってカレーを食べて、絶賛している。

「このカレーは、いつ食べても美味しい」

男爵夫妻の娘、カナンも一緒にカレーを食べているが、ジャージのままだ。

これだけは、親になんと言われても着替えるつもりはないらしい。

「これだけの素晴らしい料理は、城でもなかったのだぞ?」

「そのとおりじゃな」

元王族2人のカレー談義に、男爵夫妻も興味深そうに、耳を傾けている。

話を聞いていた俺の足下に黒いものが巻き付いた。

「にゃー」

「なんだお母さん。機嫌は直ったのか?」

ベルをなでてやると、ゴロゴロと喉を鳴らしているので、ネコ缶をあげた。

「え!?! 森猫様!?!」

驚いた声を上げたのは、ニヤレサだ。

その声を聞いたベルが、ニヤレサの所へ向かう。森猫を目の前にした彼女が地面に膝をついて拝み始めた。

「そういえば、ミヤレーとニヤメナって、ベルを様付しないな？」

「ウチの部族では、してなかったにゃ」

「俺たちの部族でもだな」

「部族によって違うのか」

理由はそれだけではないらしい。

「それに——森猫に様付けなくてもいいって言われたから……」

「ウチも、ダリアの森で会ったときに、そう言われたにゃ」

「えー？ そうなのか？」

獣人たちと森猫の間に、なぞのコミュニケーション手段があるらしい。

彼女たちに聞いても、なんとなく——みたいな感じで、はっきりとは解らないようだ。

俺の会話もかなり理解しているようだから、かなり知能は高いと思っていたが、それが裏付けされた恰好。

ちよっと、びっくり。

飯を食い終わったので、寢床の準備だ。

男爵夫妻はコンテナハウスに泊まるようだが、アキラはどうするか？

「アキラはどうする？」

「ケンイチ、あのコンテナハウスはもうないのか？」

「あるぞ」

獣人たちの家の近くに、アイテムBOXから鉄の箱を出す。

空中からコンテナハウスが落ちてきて、地響きを立てる。

中には、ベッドとチェスト、ランプと椅子……こんなもんかな。
アキラのアイテムBOXの中にも、ものは入っているからな。彼はそれを使うだろう。

「アキラ、こんなんでいいのか？」

「おお！ 上等！ 上等！」

皆での食事が終わると、辺りは暗闇の中。

男爵夫妻に風呂を勧めてみたのだが、さすがに野外で裸になるのは抵抗があるようだ。

そう考えると、俺たちが異常なのか？

そのまま夜になり、辺りは静寂に包まれる。

俺はリリースと一緒に、ツリーハウスにいた。

俺の前には、なぜか——よつん這いになり床に転がったマイレン。彼女のメイド服のスカートを捲りあげられ、大きなお尻を剥き出しにして、左右に振っている。

「ああ〜っ！ ご主人様、お許しを〜！」

「ちよっと、リリース。お許しを〜って、許していいんだけど？」

「ならぬぞえ？ ケンイチ。しっかりと、お仕置きをしてやらねばならん」

「ええ？ だって、お仕置きするようなこと、なにもないんだけど……？」

「なくても、するのじゃ！ そうせぬと、本当のお仕置きをもらうために、こやつらは露骨に手を抜き始めるぞえ？」

一応、マイレンにも確認してみる。

「ええ？ 本当なの、マイレン？」

「そんなことは、ございません〜！」

「こやつらは嘘つきじゃからの。妾を疑うのはよいが、明日から業

務が滞り始めるぞえ？」

「ええっ?！」

リリースが嘘を言っているようには見えない。その前に、こんな嘘をつく必要もないだろう。

仕方なく、リリースの言うとおり——オッサン丸出しで、マイレンにお仕置きをする。

「これか！　これがええんか!？」

「ひいいい！　ご主人様あゝお許しを〜！」

なんとも理解不能な、貴族たちの趣味というか、習わしというか……。

せっかくの機会なので、リリースにもシャングリ・ラで買った、白いフリフリドレスを着せてみた。

以前に、カナンが着たのと同じコスプレ用だが、スカートが凄く短くて、股間が見えそうになっている。

「ちょっと待つがよい！　なんじゃこの服は!？」

「おお、可愛い可愛い。やっぱり可愛いから、なんでも似合うなあ」

「しかし、これでは見えてしまうではないか！」

股間ギリギリのフリフリフィルのスカートから出た白くて長い脚が、抜群の破壊力を誇る。

これで、さらに数年たてばボインボインになるのか——まったくもって素晴らしい。

思考がオッサンだが、オッサンなので仕方あるまい。

リリースが必死に股間を隠そうとしている。あまり恥ずかしがることがない彼女であるが——。

こういう恰好は恥ずかしいようだ。

「見えそうだから、可愛いんだよ」

「ううう……」

3人で、そんな遊びを一晩中して――次の日の朝。

男爵夫妻は朝食を摂ると、アストランティアへ帰っていった。

昨日お仕置きをした、マイレンはというと――いつもより一段と艶やかな顔をして、仕事をこなしている。

どうやら、こういうものらしい。

139話 仕事分担

ハマダ領にできる街の名前は「サクラ」に決定し、街道までの直線道路の工事が始まった。

アネモネのゴーレム魔法で木を倒すと、アダマタイトの剣を装備した重機で、先と根っこを切り離す。

俺たちのあとをついてくる作業員たちが、切り倒した大木の枝を払い、根っこの穴を埋めていく。

切り開く森の中は平坦ではなく、結構凸凹しているので、出ていく所は削り凹んでいる場所は埋める。

剣を装備したコ○ツさんは、兵器として使われる予定なので、一々バケットを交換してられない。

そのため、もう1台コ○ツさんを購入して、作業用に充てることにした。

道路の水平出しをするために、シャングリ・ラでオートレベルという機械を買う――5万円だ。

一見、望遠鏡のようなこの機械。専用の棒を持って立ってもらい中を覗くと、簡単に水平出しや測量ができるという機械。

工事現場などで、三脚につけた機械を覗いている作業員を見かけたが、同じものを使うことになるとは。

水平に均す作業が終わると、近くの崖を油圧ブレーカで砕き、その石を敷き詰めてダンプで踏み固めていく。

公共事業のために作業員に仕事をやらねばならないが、道路の埋め立ての作業は俺の重機を使って行う。

街の開発に道路が必要なので、スピード優先だ。

道が完成したら俺の出番は減らし、仕事を作業員に回して、公共事業本来の役目を果たしてもらう。

今回、コ〇ツさんを追加購入して、2台体制になったが――。本当は、もう1台コ〇ツさんを購入して、油圧ブレーカ専用車両を追加したいのだが……。

それは領の経営が上手くいって儲かったら考えることにしよう。

作業は順調に進み、1ヶ月半後には道路が開通した。

この世界で、このような公共事業を行うと毎日数百人で、数年の歳月がかかる。

延べ人数で、10万人以上の労働者を生む大工事となるのだが、それをたった1ヶ月半で終わらせてしまった。

公共事業としては、イマイチってことになるのだろうが、道路が完成したことでの経済効果のほうが大きいだろう。

通常、こういう公共事業が終わると、式典をやったりするそうなのだが、俺はやらない。

貴族の面子とか見栄とか、そんなものは微塵もないし、金の無駄だからな。

完成した道路の真ん中に立つと――森を切り開いたまっすぐな道路が、ずっと続いている。

街道までは6kmほど離れているので、先は見えない。

その完成した道路を皆で眺めていると――早速アキラが、トラックで荷物を運んでやって来た。

俺たちの姿を見たアキラが、トラックを停止させる。

「オッス！」

「オッスオッス！」

トラックを降りて挨拶を交わすアキラと俺に、リリースがつぶやく。

「その挨拶は、なんとかならぬのかえ？」

「ならない」

「どうやら、さうとう珍妙に聞こえるらしい。そんなことを言われてもな。」

「どうせ、俺とアキラしか使わないし。」

「オッケーとかは、獣人たちも使っているのだが。」

そのままトラックは進み、大工たちが組み立てた10棟のログハウス群へ到着した。

10棟のうち、2棟をマロウ商会サクラ支店として使い営業中。4棟がメイドたちの仮宿舎。残りの4棟を大工たちが共同で使っている。

その他の作業員たちは、俺の用意した大テントに共同で寝泊まりだ。

このような作業になると、野宿も普通らしいので、雨風をしのげるだけでもありがたいらしい。

野宿していると、夜露で濡れてびっしょり、なんてこともあるようだからな。

建てられたログハウスは、住居に使えるように改造され、台所とトイレが設置されている。

下水は、一旦溜めて水石で浄化する、この世界のシステムに準拠したものだ。

浄化された下水は、地下に埋設された塩ビ管を通して、湖へ流される。

塩ビ管は俺が提供したものだが、これをこの世界の技術で工事しようとする、また時間がかかってしまう。

街が大きくなれば、本格的な下水が必要になると思われるが、そ

のときには他の都市と同じものが設置されるだろう。

シャングリ・ラで、土管を検索してみたのだが、売っていなかった。

セメントは売っているので、コンクリ製の土管を製造できないこともないが――。

そのときは、なにか考えよう。

サトウキビを植えた所は住居より少々離れているのだが、人が多くなれば生活排水の増大も考えられるので、場所を移すことも考えないといけないだろう。

まあ、水質を見ながらの判断だな。

ログハウスの建築が終わり、次に大工たちが取り掛かったのは、製材所の建築。

滝から流れる川の近くに製材所を作って、ここで作られた木材で街の建設材料を賄おうというのだ。

周りの森には材木になる木が山ほどある。

ここに製材所を作ったほうが、住宅建築のための材料集めがはかどるってわけだ。

その製材所で生み出される材料を使って、やっと俺の屋敷の建築が始まる。

一緒に製材所の建築を見学しているユリウスに、この世界の事情を尋ねる。

「ユリウス、なにもない所に領ができたときって、どうやって屋敷とか建ててるんだ？」

「このように、本当になにもない所に、領ができるのは珍しいですね」

普通は、ある程度開拓が進み、人が集まっている所へ貴族が送り

込まれて領になるらしい。

領主は、その場所にある建物などを利用して、領主屋敷を作る。

「それじゃ、なにもない荒野にポツンと、投げ出されて領になる――なんてことはない？」

「通常はありません。それでは領民も、いないじゃありませんか」
「そりゃそうだな」

一応、ここにはサンタンカの村があるから、通常であれば男爵領ぐらいの規模になるようだ。

「それでも、屋敷を建てるとなると、材料をはるばる運んだりするわけか」

「そのとおりでございます。ケンイチ様の鉄の召喚獣があれば容易いでしょうが、普通は大事業です」

「その話を聞くと、知り合いが作ったノースポール男爵領とかも苦労しているんだろうなあ」

「まあ、新しく立ち上げた領というのは、どこでも苦労しているはずです。但し、ここを除く」

「ははは、ここは、アストランティアが近くて場所もいいしな」
どんな屋敷になるか、いまから楽しみだ。

建築の際には、重量物の運搬などは手伝ったりする予定だが、基本は大工や作業員たちに任せるつもり。

これも公共事業だ。

夕方になると、マロウ商会の支店は閉められて、店員はアキラのトラックに乗って、アストランティアに帰っていく。

それと入れ替わるように、プリムラが自転車で帰ってくる。

道路が直通になったので、街の中から20分もあれば、自転車で到着できるようになった。

森の中を通るが、獣人のニャレサが護衛についているので、心配

ないだろう。

道路工事をしている間に、ダリアからマロウさん——義父がやってきた。

プリムラが側室になってしまったことを釈明したのだが、マロウさんはまったく気にしておらず——。

プリムラが言うとおり、俺が貴族になったことで、上流階級の身内になれたことに大喜びしていた。

その上、俺の正室は王族だ。やんごとなき方々とも親戚になれたのである。

リスとアマランサスは王族籍を抜けたとはいえ、まだ王族に顔が利く。

商人として、これだけ強力なコネはない。喜ぶのも当然だといえる。

実際、マロウさんとプリムラも、そのコネを使い倒せるだけの実力がある。

まさに、鬼に金棒、弁慶に薙刀、虎に翼。

ゲーム風に言えば、バフがマシマシになった状態か。

「プリムラ、アキラのあれで送ってもらえばいいだろう」

アキラのあれとは、トラックやSUV車のことだ。

「いいえ、これが楽しいので、これでいいのです」

このオフロードバイクを真似て、マロウ商会でなんとか製品化しようとしているらしいのだが、ちょっと無理がある。

「こいつを真似して作るのは、ちょっと無理だろう」

「そうなのです。特にこの鎖！」

彼女が指さすのは、チェーンだ。ちょっと、この世界の技術でチェーンを作るのは難しい。

彫金の技術などを使って、作れないこともないだろうが、貴金属

より高価なチェーンになってしまう。

「鎖じゃなくても、歯車とかでも伝達できるし、革のベルトでもなんとかなるかも」

俺は、アイテムBOXから出したスケッチブックに、ギアドライブとシャフトドライブの図を描いた。

「……それですわ！ 今から、アストランティアへ帰って――」

「待ちなさいって、もう夕方だ。これから戻るのは危険だろ？」

「解りました……」

いつも冷静な彼女だが、商売熱心なあまり、周りが見えなくなることがある。

「このドライジーネを売ってくれという話もあるのですが」

「故障しても直せないものを売るのはなあ。高価なものだし」

「そうなのです」

高価なものを売りっぱなしでは、商会の信用に関わる。

これから、王都にも進出しようという大店が、目先の金にとらわれるわけにはいかないだろう。

プリムラと自転車の構造について話していると、甲高い2ストエンジンの音が聞こえてきた。

やって来たのはヘルメットを被った、アキラだ。

彼が一人のときは、こうやってバイクでの移動が多い。

彼のアイテムBOXの中にはSUV車も入っているのだが、トラックは入らないのでマロウ商会の敷地に駐車しているという。

「ケンイチ！ 遊びに来たぜ」

アキラがヘルメットを脱いだが、これも俺が売ったものだ。

異世界なら道交法はないのだが、バイクってのは危険な乗り物だ。ノーヘルでコケたら死ぬと思わないといけない。いくらチート持

ちでも、頭を打ったりすれば死ぬからな。

祝福を受けているので、多少は他の人間よりは、頑丈になってい
るとはいえ——故意に身体を危険に晒すのは慎まなければならない。

「遊びに来るのは歓迎だが、レイランさんたちはいいのか？」

「いいっていいって、大丈夫大丈夫」

何が大丈夫なのか、さっぱりと解らないが、彼の家族のことに口
出しするわけにはいかない。

彼の話では、レイランさんはマロウ商会の協力を得て、アストラ
ンティアに店を出すらしい。

「店？ あんな美人が店主の店じゃ、野次馬の男どもでいっぱいに
なりそうだな」

「まあ、看板を出したりしないで、会員制みたいな感じの店にする
らしいぞ？」

「ほう——なにかアイテムを持っていないと、入り口が解らなかつ
たり、扉が合言葉で開くとかそういうのか？」

「みたいだな」

それは、ちょっと行ってみよう。

彼女が持っている魔法のアイテムや、魔導書なども手にいれられ
るかもな。

メイドたちが、スープを作ってくれたので、それで夕食にする。

俺が、だしの素や調味料などを提供しているので、普段食べてい
る俺たちの料理の味に近い。

いつものように、夕飯を食べて風呂に入る。

その風呂だが——作業員や労働者が増えてきたので、さすがに外
で風呂に入るわけにもいかず——。

コンテナハウスを、また購入して、それを風呂部屋にあてている。

このコンテナハウスは、とりあえずの居住空間を作るのに、非常に便利だ。

ちよつとスローライフっぽくなかったので、当初は敬遠していたのだが、そんなことをいつている場合ではなくなっているからな。便利なものは、どんどん利用しないと。

こんなものがポンポン出てくるから、「他の領とは違う」とユリウスに言われてしまうのだが。

あちこちに、作業員たちが燃やす焚き火のオレンジ色の光が見える。

笑い声なども聞こえてきてすごい賑やかだ。

静かな湖畔でスローライフってわけには、いかなくなってきたのは少々寂しいが……。

——
——
——
◇◇
◇◇
——
——
——

——道路が開通して数日後。

俺は、きらめく湖面と、その対岸に広がる前人未到の森を見つめていた。

対岸は緑色なので、森があるのは確かだが、誰も行ったことがない土地。

サントンカの連中に聞いても、誰も行ったことがないし、アストランティアに住んでいたニヤメナもそんな話を聞いたことがないらしい。

飲み屋で噂話を集めるのが好きなニヤメナが、聞いたことがないというのだから、そんな酔狂は本当にいなかったということなのだろう。

領主になった俺の仕事は、この巨大な湖を1周しての測量。

俺は、誰もやらないような酔狂を実際の行動に移して、この湖を

1周しなくてはならない。

崖の上から見える所だけ簡単に測量して、外周を予想する。

この湖がほぼ円だと仮定すれば――外周は150～200kmぐらいだと思われる。

毎日、20kmほど測量できれば、10日で終わる計算だが、前人未到でどんな魔物がいるか解らない。

出立に際し、家族の皆を集めて説明をする。

「これから俺は、湖を1周する測量に出かける。誰も行ったことがないらしいから、なにが待ち受けているか解らん。強制はしないで、気が向かないやつは、ここに残っていいぞ」

「えー？ 旦那、まだそんなこと言っているのかい？」

「そうだにゃー」

「だって、測量とか地味な仕事だぞ？」

「いいんだよ、そんな細かいことは」

「にゃー！」

ミヤレーが、空へ拳を突き上げた。

「私も当然行くから」

「ああ、アネモネは俺から頼む。君の魔法がないと困るからな」

「むふー！」

アネモネは、ガッツポーズで気合を入れている。

「妾も行くぞ？」

そう言い出したのは、リリスだ。

「ええ？ リリスは、ちょっと……」

「なんじゃと？！ 妾を置いていくつもりかえ？」

「だって、リリスは冒険の役にたたないでしょ？」

アネモネから、辛辣な突っ込みが入った。口に出しては言えないが、実際にその通りなのだ。

「ぐぬぬ」

俺の前で、アネモネとリリスがにらみ合いを始めてしまった。

「いや、リリス。実際かなりの危険が伴うから」

「そんなことは解っておる！」

それを押してでも、行きたいらしいので諦めた。

「それでは妾も……」

「いや、アマランサスはここに残って、開発の指揮を執ってくれないと困る」

「そんな！ 聖騎士様あ！」

アマランサスが、俺にがぶり寄ってくるのだが、ここで彼女に仕事をしてもらわねば困る。

「俺と、アマランサスの両方がいなくなったら、皆に指示を出す立場の人間がいなくなるだろ」

まあ、ユリウスに頼んでもいいのだが……。

「うう……」

「それに——ここに俺とアマランサスの国を作るんじゃないのか？ ここなら、小うるさく足を引っ張る王侯貴族たちはいないぞ？ 存分に手腕を振るうことができる」

「そ、そうじゃ！ ここに妾と聖騎士様の、きらめく黄金の国を作るのであった！」

「そうだ！ 帝国も共和国も、目もくらむような黄金の理想郷を！」
シャングリ・ラ

「おおおっ！」
「なので、俺が留守の間は頼む」

アマランサスを抱き締めて、頭をなでる。オッサンなので、ついでに尻もなでる。

細いようなアマランサスの身体だが、抱くと鉄筋を真綿で包んだような感触。

もふもふはしてないが、抱き心地は獣人に似ているかな……本人には言えないが。

「ふあぁっ……聖騎士様の御心のままに……」

アマランサスは納得してくれたので、助かった。

この三文芝居を——コンテナハウスの陰から、カナンが巨人○星の姉のようにこちらを覗いているのだが——。

「聖騎士さま、カナンには私から頼む仕事がありますので」

「アマランサス、頼む。俺には、彼女に任せる仕事がいっつかない」

「カナンは社交界に顔が広うございます。それを使って貴族間の情報収集をさせます」

「なるほど——俺には、まったく思いつかない仕事だな」

カナンを呼ぶ。

「ケンイチ——」

「測量の仕事には連れていけないが、アマランサスから大事な仕事がある。やってくれるか？」

「は、はい！ 任せてたもれ！」

カナンの明るい顔を見て、俺の心は罪悪感でいっぱいになった。普段から適材適所と言っていた俺だが、カナンの能力を見抜くことができず、使えない子扱いしてしまったことに後悔をしたのだ。

「カナン、スマン。君に任せる仕事がいっつかなくて、色々と一生懸命やってくれているのに」

「よいのだ！ 私が役立たずなのは、自覚しているからな、ははは」

「君が社交界に顔が広いので、貴族間の情報収集をしてほしいんだが」

「それなら、任せてたもれ！ 私の母も使えるぞ?!」

「それはいいな」

「それに――」

なんだか、カナンがいやらしい笑みを浮かべている。

「なんだ？」

「仕事ならば――ケンイチが持っている素晴らしいドレスとか――見たこともないアクセサリーが大手を振って使えるだろう？」

「そりゃそうだが、お前にやるんじゃないぞ。貸すんだけど？」

「ケンイチのものは、私のものも同然だろ？」

アマランサスが聞いたら、怒るかと思ったのが、神妙な顔をしている。

「聖騎士様。それらを使って、王族派の貴族への切り崩し工作に使えます」

「いやいや、アマランサス。切り崩しなんてしなくてもいいから」

「なぜです？ 私と聖騎士様の国を作るのに、必要な行為ですよ」

真正面から向かって、そう言われると否定できない。

「あうう……」

やぶ蛇だ。アマランサスの性格からいって、マジでやるし、止めると言っても聞かないだろう。

「ケンイチは、人を丸め込むのが上手いのう。あの母が簡単に納得するとは……」

「丸め込もうとして、眠れるドラゴンを起こした気がするのだが――それに、俺の話術なんて、プリムラの足下にも及ばないよ」

そのプリムラも、ここにいるが、彼女には領の経理を見てもらう、財務官をしてもらわねばならない。

「すまないな、プリムラ」

「そんな――私がついていっても、役にたたないのは解っておりますので。適材適所――領の財務を管理するほうが、私にピッタリです」

「そうなんだよ。これは君にしかできない」

「ふふ……後で、ご褒美をいただきますから」

そう言って、プリムラが俺に抱きついてきた。

世辞ではなく、この仕事は彼女にしかできない。俺は基本的にどんな勘定だからなあ。

簿記の資格を持っているアキラに頼む手もあるが――彼のことを信用しないわけではないが、やはり身内のほうが安全だろう。

行政官はアマランサス、財務官はプリムラ、これがハマダ領の最強タッグだ。

実際、他領の運営も、行政官と財務官が担っていて、領主は飾りなんて所も多いらしい。

まあねえ――元世界でも、国を動かしているのは官僚で、政治家なんてお飾りなんて人も多かったし。

そうそう優秀な人間ってのはいないもんだ。

いや――いるはずなのだが、野に埋もれてしまったまま、コネや世襲の犠牲になっている印象。

それは、この世界でも同様だ。平民に優れた人材が埋もれても、そのまま制度は変わることなく、同じことを繰り返してしまう。

その中に生まれた、まったく新しいハマダ領。

一発、一旗あげてやろうと、血気盛んな人材が集まることに期待している。

測量に行くための面子が決まった。

俺とアネモネ、リリス、そして獣人が2人。

「にゃー」

そうだ、俺の足下にやって来た、ベルも一緒だ。

次に、前人未到の土地へ向かうための装備を整えなくてはならない。

まずは足だ。前から使っていたT社のプ○ドはアキラに貸したままなので、もう1台買おう。

金もあるし、プ○ドじゃなくて本家のラ○クルだな。

シャングリ・ラを検索すると、100系で走行距離10万kmが230万円で売っている。

いつものとおり、ディーゼルエンジンで10万kmなんて慣らしが終わったところだ。

異世界に車検はないので、車検なんてなくてもいい。

「こいつにしよう。ポチツとな」

白い車体がドスッと落ちてきてバウンドした。中は枯草色の革の内装で、ちよつと豪華。

7人乗りのはずだから、これで座席は確保できる。

元世界中でも使われている定番中の定番の車。異世界での激しい環境にも耐えてくれるはずだ。

「旦那！ 新しい召喚獣かい？」

「にゃー！いつものと違うにゃ」

「わーい！」

ドアを開けて中を確認していると、リリスと一緒にインテリアを覗く。

「ほう！ これはまた、随分と立派な内装じゃの！ 王家の馬車にも匹敵するぞえ？」

「王家の馬車のほうが、もっと豪華絢爛だろ？」

「確かに金細工などを使っておるから、豪華といえは豪華じゃが…」

「旦那、こりゃ革の椅子かい？」

「そうだ」

獣人たちは、革の椅子が気になるようだ。

街ではあまり見ないらしい。そういえば、ソファアーといってもフアブリック（布張り）だな。

車をチェックしていると、助手席にリリスが乗り込んだ。

「ケンイチ！ 走らせるがよいぞ！」

「ちよっと待ちねえ。今は、色々と確かめているところだから」

「旦那！ 走ろうぜ！」 「にゃー！」

獣人たちは、いつもと同じように3列目シートに乗り込む。

「お前ら……」

まあ、試走も必要か。俺の後ろにアネモネも乗り込んだ。

「それじゃ、ちよっと走ってみるか」

運転席に座って、キーを回す。この時代のラ○クルは、まだキーシリンダー式で、プッシュボタンじゃない。

一発で始動して、ディーゼルエンジンが目覚ました。

ここ1ヶ月で、バイオディーゼル燃料の生成は、ずっと続けたので燃料の在庫は潤沢だ。

なにせ歩く油田であるアキラがいるので、燃料は作りたい放題。彼がいる限り、燃料に困ることもない。

屋敷に作る風呂も石油ボイラーにしてみるか……。

こいつはオートマなので、Dレンジにして走り出した。

この前に作った橋を通り、サンタンカと反対方向へ湖畔を進む。岸はずっと平らだし、水でしまっているので走りやすい。

この場所も何回かバイクで走ったりしているので、アクセルを踏み込んだ。

エンジンの唸りと共に、メーターの針は時速80kmに達した。

「ななな！　なんとという速さじゃ！」

リリスが、車のスピードに目を回す。

「すごい！」

「すごい！　俺たちの全力ぐらいか？」　「そうだにゃ」

獣人たちの脚も凄いが、さすがに80kmで巡航はできない。走らせても、エンジンや車体になんの問題もない。これなら、十分に使えるだろう。

「こんな感じで、湖の水際を走って回ろうと思ってな」

「ケンイチと一緒に冒険！　たのしみ！」

アネモネが後ろの座席ではしゃいでいるが、なんのデータもない土地なので、何が出るか解らない。

「アネモネ、魔物や見たこともない化け物が出るかもしれないんだぞ？」

「ケンイチと一緒になら平気だもん」

「まあ、アネ嬢の言うとおりだな」　「そうだにゃ」

いやまあ、信頼してくれているのは嬉しいんだが……。。

車の試走から戻ると、アキラが来ていた。

「おおっ！ ラ○クルかよ！」

白い新しい車を見て、アキラが叫んだ。

「中々いいだろ？」

「100系か。70系の古いのも捨てがたいがなあ……」

「ここで故障すると、修理が難しいからな。そういうのを趣味で乗れない」

「ケンイチの魔法で部品は作れないのか？」

「作れるものもあるが――修理するなら、部品取りの車を出して共食い整備だな」

シャングリ・ラには、中古の車のパーツや社外品なども売っているので、簡単な修理ぐらいは可能かもしれない。

特に、ラ○クルは人気車――こういう車は、中古パーツや社外品も多い。

マイナーな車はパーツが出なくて苦労することになる。

「アキラ、俺たちは湖の測量と領地の確認に出るから、明日からしばらく留守にするぞ」

「オッケー！ 何日ぐらいだ？」

「外周が150～200kmぐらいだと思うので、10日～15日ぐらいで回れると思う……」

「湖が予想以上に大きい可能性は？」

「崖の上から見分には、そんなに大外れしないと思うけどな」

アキラには、トラックやSUV車に使うバイオディーゼル燃料をたっぷりと渡してある。

俺がいなくても、仕事には差し支えがないだろう。

「車より、測量とか平気なのか？」

アキラの心配ももっともだ。

「まあ、大丈夫だろう」

元世界の江戸時代でも、原始的な道具だけで立派な地図を作った偉人さんもいたんだ。

俺には、シャングリ・ラから出てくる、文明の利器がある。

準備は万端、明日の朝に出発することになった。

140話 湖の測量開始

俺は、領地である湖の外周の調査と測量をするために、遠出をする事になった。

面子は、俺とアネモネとリリース、そして獣人たちの合計5人。

リリースは動きやすいズボン姿に着替えさせ、アネモネは、洞窟蜘蛛の糸で作った青いローブを被っている。

肌を出していると、虫に刺される可能性がある。

「にゃー」

ああ、俺の足下にやって来たベルも一緒だ。

「ケンイチ出発するのか？」

昨晚はサクラに泊まった、アキラがやって来た。

「出発というか、ここから測量を始めるから」

手始めに、屋敷ができる場所から湖の水際までの距離を測量する。獣人たちに、トランシーバーと自作の看板を持って水際まで走ってもらう。

看板といっても、棒に丸い板がついているだけだが、そいつにレーザーを当てて距離を測定するためのものだ。

シャングリ・ラで測量の本を買って、簡単に勉強もしてみた結果――以前、買ったオートレベルでは、短距離しか測量できないことが判明。

測量方法を変更するため、新しく1kmほどの距離を測れるレーザー距離計も購入した。

「ニヤメナ、この看板を持っていって立ててくれ」

「はいよ」

アイテムBOXから、三脚に載ったレーザー距離計を出してセツトした。

とりあえず何ごともやってみないと。多分、アバウトな測量でも、この世界の測量よりは正確な地図ができると思う。

「それで、どうやって距離が解るんだ？ そりゃレーザーか？」

水際で、ニヤメナが立てている看板を、機械の中に捉える。

「そうだ、機械のボタンを押すと距離がでる。元々、ゴルフ用に作られたものらしいが」

アキラが、機械の中を覗く。

「へえ、ちゃんと距離が表示されているな。こうやって測量ってするのか」

ここから水際までは斜面になっているので、正確な距離ではない。正確に調べたいなら斜面の角度を測って、そこから計算すればいいが、この世界で、そんなに正確な地図が必要なわけでもない。

おおよその地図が作れば、問題ないだろう。

アキラのあとに、リリースも機械を覗いている。

「ふむ、これも魔道具かえ」

「リリース、王国で測量をするときは、どうやっているんだ？」

「棒を使う」

「棒？」

初代国王の身長から作ったという1カンという単位 of 棒を使って測るのと言う。

それと、方位磁石と分度器盤らしきもので測量するらしい。

分度器盤つてのは、おそらく方位と高さを測るものだな。

おおよそやっていることは、元世界での測量とあまり変わらない。

「えーと、あそこまでの距離は——562mか」

方位磁石と、機械の円周に刻まれた目盛りから方位も割り出せる。距離が解ったら地図に書き込む。地図は上が北だ。

1万分の1の地図なら地図上では5・6cm、10万分の1の地図なら5・6mになる。

「なんか、すげー地道な作業だな」

「そんなこと言われても、しゃーない」

千里の道も一歩から、とにかくやるしかない。

な〜に、外周が200kmだとしても、1日10kmで20日。1日20kmやれば、10日で終わる。

出発しようとする、アキラに呼び止められた。

「ああ、ケンイチ。これを貸してやるよ」

彼が指から指輪を外して、俺によこした。

差し出された銀色の指輪——以前、聞いた話によると翻訳ができる指輪らしいが。

「エルフとか、野良のドワーフとか、その他の種族は言葉が通じないからな。だが、この指輪があれば無問題」

彼がエルフからもらったものだというから、その効果のほどは間違いないと言う。

「おお、サンキュー。それじゃ、ありがたく借りていくよ」

「おう、頑張れよな」

その他、他の家族の面々や、メイドたちにも挨拶をして出発する。

俺がいなくなるので、残った家族の料理やは、メイドたちが作ってくれるようだ。

一応、カレールーも、マイレンに大量に渡したので、メニューに困ったら、カレーを作っておけと言っておいた。

リリースの世話係として、メイドを連れて行ってほしいとマイレンに懇願されたのだが、車のスペースがない。

その申し出を、リリースも断った。

「リリース、いいのか？」

「たまにはいいのじゃ。それに、いつもあやつらに見張られている気がして落ち着かん」

「そりゃ見張られているだろう。呼ばれたら、すぐに駆けつけられるように。それが彼女たちの仕事だし」

「それは、そうじゃが……」

たまには、供のない旅もしてみたいのだろう。

アイテムBOXから出したラ○クルに乗って、ニヤメナの立っていた場所に向かう。

ここからまた、ニヤメナとミャレーに水際を走っていてもらい、看板を立てる。

それをオートレベルで測定して、地図に書き込むわけだ。

獣人たちはずっと走りっぱなしになってしまいが、彼女たちの脚で10kmや20kmはどうってことはない。

普通の散歩の距離だ。

さて、湖のどちら回りに周るか迷ったが、サンタンカ方向へ行く時計回りのルートを選択した。

1km～2kmぐらいの間隔で獣人たちに立ってもらい、その距離と方角を測ると、地図に書き込んでいく。

この方法だと、湖の周囲をぐるりと周り、最終的にサクラへ戻ってきたときには誤差が生じると思うが――多少の誤差はどうってことはない。

おおよそ、どんな地形で何があるかが解ればいいのだ。

測量をしながら、まずはサンタンカの村へ入った。

当然、この場所も測量する。人のいる場所はちよつと丁寧に測る必要があるだろう。

たとえば村の大きさがどのぐらいあるか――とかな。

俺たちが行なっている怪しげな行為を、村人が遠巻きにみている。ベルは車の中で待っていて、一緒にいるアネモネはタブレットで読書をしているようだ。

リリスは、村のあちこちを見学しているので、ミヤレーに護衛についてもらっている。

「ありや、ここの領主になったとかいう商人だべさ」

「なにをやっているんだか……」

心配になったのか、村長が俺の所にやってきた。

「あの、領主様。何をやってなさるんですかな？」

「ああ、測量して地図を作るんだよ。ハマダ領になったんだから、領地の把握はしておかないとな。お前たちは、なにも心配する必要はないぞ」

「はあ……」

一応、湖の対岸へ行ったことがあるやつがないか聞いてみた。

「いやあ、そんな話は聞いたことはありません」

「水際を船で一周したりとか、そういう酔狂もいなかったのか？」

「まあ、暮らすのが精一杯でしたし、湖の奥には魔物がいますし…

…」

「湖に魔物？ 行方不明者が出たり？」

「はい」

なんだよ、そんな化け物がいるなら、船で湖を渡ったりしなくてよかったな。

湖の真ん中で襲われたりしたら、そこで終了じゃねえか。いくら祝福があるといっても、溺れたら死ぬだろうし。

水の魔物ってなんだろう？ 半魚人^{マーマン}？ ケルピー？ 淡水なのに、クラークンとかはいるだろうか？

ちよっと心配だが、村人の話を聞いてみても、はっきりと魔物の姿をみた者はいないようだ。

ただの事故を魔物の仕業と思っているだけなのかもしれないが。

オートレベルを覗き込んで測量をしていると、村の子どもたちが集まってくる。

10人ぐらいか？ こんなに子どもがいたんだ。

「見せて〜」 「何を見ているの〜？」

子どもが、わらわらしているのだが、俺は一応貴族なので、大人たちは、はらはらしている模様。

「領主様！ 申し訳ございません！」

子どもの母親らしき、紺のワンピースを着た女性が、慌てて飛んできた。

「まあ、構わんよ」

子どもたちにレーザー距離計を覗かせてやる。

これ自体が望遠鏡なので、遠くの景色が大きく見える。

「凄〜い！」 「遠くが近く見える！」 「見せて見せて〜！」

子ども台風の中に巻き込まれてしまい、すごいエネルギーで攪拌されてしまう。

子どもの相手はめっちゃ疲れる。

「ふう……」

もみくちやにされて、ため息をついていると、いつのまにやら獣人の女たちが近づいてきていた。

初めて見る顔だが、新しく入った住民だろうか？ 三毛や黒い虎柄の毛皮を着て、革のジャケットや、ミニスカを穿いている。

いきなり飛びついてくるわけではないが、ジリジリと距離をつめてきているのが解る。

まさか刺客とかではあるまいし、そんな顔もしてない。

それに気づいた、ミヤレーとニヤメナが、凄い速さで飛んできた。ミヤレーは、リリスの護衛はどうした——と思っていたら、リリスも俺の所にやってきた。

「オラ！ お前ら散れ！ 旦那は俺らのもんだ！」 「そうだにや！ シャー！」

結構、毛を逆立てているので、マジギレだ。

「何だよりケチい！ 少しぐらい分けてくれたっていいじゃん！」

「分けたら減るだろうが！」

ミヤレーとニヤメナが、村の獣人たちを蹴散らし始めた……俺の身体から、なにか獣人たちが好きそうな匂いでも出てるのかな？

「ゴメンなく獣人の面子は間に合っているから、また今度な」

すぐごと帰っていく村の獣人たちに挨拶をする——ミヤレーとニヤメナが、身体をスリスリして、俺の身体に匂いつけをしている。

「ケンイチは、獣人たちにモテるのお」
リリースの言うとおりだ。

「まったく！ 油断も隙もあつたもんじゃねえ。旦那の身体から、なんか変な匂いでも出てるんじゃないのか？」

ニャメナが俺に顔を近づけて、クンカクンカしている。

「はは、俺もそう思っていたところだ」

「笑い事じゃないにゃ」

さてさて、仕事の続きだ。

村の測量が済んだので、村人に別れを告げて車に戻ると、水際を走って次の場所へ行く。

湖畔はずっと砂浜が続き、10mぐらいで森になっているので、水際を走れば車でも十分に走行可能だ。

サンタンカを出て明くる日――俺たちは湖の南端に到着し、ここからは湖を北上することになる。

所々、小さな崖になっている場所や、砂浜がなくいきなり森になっている場所もある。

砂浜がない所は車をアイテムBOXに収納して、アネモネとリリスは獣人たちに背負ってもらいクリアした。

ずっと砂浜で平坦かつ滑らかと思ったが、意外と変化に富んだ地形のようだ。

そのまま3日ほど測量を繰り返して約60kmの行程を消化。

3日目の作業も終了して、午後の3時頃になった。

1日の作業は約20kmに抑えてあまり無理をしないようにする。急ぐ仕事でもないしな。ゆっくりと進めるさ。

開けた所まで行くと、キャンプの準備をして、寝る所を確保する。車を停めると、早速ベルがパトロールに出かけた。周囲をチェックして警戒してくれる、彼女に感謝だ。

家やら小屋は、全部サクラに置いてきてしまったので、またコンテナハウスを買った。

これは便利だし。余ったら部屋や小屋に使えるからな。

アイテムBOXからコンテナハウスを取り出すと、水際から10mほどの地点に、コンテナハウスが落ちてきた。

巨大な湖なので、水際に設置しても突然の水位上昇もないので安全だ。

「ケンイチ、その鉄の箱は便利にゃ」

「おう、これは頑丈だし、簡単に使えるからな」

中にはダブルベッドを2つ縦に置く。これで寝るには十分。

ランプを設置してあるので、夜でも大丈夫。

「この部屋の箱は殺風景じゃが、使えるの」

「まあ、それように作られたものだし」

外に出て食事の準備をするため、アイテムBOXから道具を出す。

「アネモネ、パンを焼いてくれ」

「解った！」

彼女がパンを焼いているうちに、ちょっと食材を調達してみるか。数日、アイテムBOXに入っていた肉や、インスタント食品を食べていたが、変わったものが食いたい。

せっかく、目の前の湖に魚がいるんだ。魚を釣ってみよう。

たしか以前に買った、釣りの道具がアイテムBOXにあったはずだ。

アネモネの魔法を使うと大量に獲れるのだが、水面を爆破するのは止めてくれと言われてるしな。

アイテムBOXから釣りの道具を出すと、竿や毛鉤のセットをリリースが興味深そうに覗き込んでいる。

「ケンイチ、釣り針の先についているものはなんじゃ？ 魚釣りに
は、虫を使うと聞いたが？」

「これは疑似餌だよ。魚が、この毛を虫だと勘違いをして食いつく」
「賢者というのは、随分と悪辣じゃの」

「そんなこと言われてもな」

前に疑似餌を使ったところは、流れのある場所だったが、こんな湖畔で釣れるかな？

まあ、物は試しだ。

湖面に向かって、疑似餌を投げる。安物のリールがキリリと音を立てて、糸を吐き出すと、ポチャンと波紋が出来た。

そのままリールを巻いていく――が反応なし。

再度、疑似餌を投げて引くと、強い手応え――当たりがきた。

「おおっ！ こんな所でも釣れたぞ？」

しかし、ここにいるマスはどこから来たんだろうな。

元々、川と繋がっていたんだろうか。いや、湖に流れ込むばかりじゃどんどん溜まるだろうし、ここから流れ出る川が、どこかにあるのかな？

上がってきたのは30cmほどのマス。

「見事な魚じゃの！」

「中々いいな、後2匹ぐらい釣れないだろうか？」

その後、3匹釣れたので、合計で4匹になった。

全部、3枚におろして塩コショウを振って、ちゃんちゃん焼きに

しよう。

本当は鮭でやるもんだが、マスでもできるだろう。

まずは野菜を刻んで、タレを作ろう。タレは味噌と酒、砂糖と味噌だ。それに昆布だしを少々。

カセットコンロを2つ出して、鉄板にバターを引いてマスを並べて焼き、その回りに野菜を盛る。

「アネモネ、少し魔法で加熱してくれ」

本当は蒸し焼きにするのだが、面倒だ。

「うん、ウォーム温め！」

温めるのは鉄板の上だけだ。カセットボンベを加熱したりすると爆発するからな。

火が通ったので、タレをかける。周囲に香りを含んだ、白い蒸気が舞い上がる。

「かーっ！ 畜生！ いい匂いがしてきやがったぜ！」

「涎が出るにやー！」

「うまそうじゃな！」

「にゃー」

ベルが戻ってきたので、ネコ缶と火を通したマスの身をやる。

「よっしゃ完成だ！」

「「「おおーっ！」」」

完成したちゃんちゃん焼きと、アネモネのパン。スープはインスタントにした。

王族がやって来てから、違うテーブルで食べていた獣人たちも、今日は同じテーブルだ。

「うめー！ こういう魚料理もあるのか！」

「おおっ！　このような料理は城でも食べたことない！　この不思議なタレは？」

「これは、豆を発酵させた調味料だよ、それとバターも使ったしな」
最初は醤油を苦手だと言っていた獣人たちだが、最近は平気なようだ。

今日は、味噌を使ってみたのだが、美味そうに食べている。

「なんと豆か。豆から、このような奥の深い味わいが出るものなのか……」

「王族の口に合うなら、これもサンバクさんに教えたほうがいいだろうな」

「うみゃー！　これは、うみゃー！」

「ほい！　ニヤメナには、エール！」

「おおっ！　これこれ！」

彼女は、俺から缶のビールを受け取ると、一気に半分ぐらい飲み干した。

「かっっ！　きくぜ！」

目を瞑りアルミ缶を掲げて、ビールを味わっている姿は、まるでオヤジだ。

飯を食い終ると、辺りがすっかりと暗くなってしまった。

真っ暗になった湖畔は、水際のパチャパチャと小さな波が押し寄せる音だけが聞こえてくる。

アイテムBOXから薪を出して、焚き火を燃やす。

「よし！　腹一杯になったし、次は風呂だな！」

アイテムBOXからユ○ボを召喚すると、水際に穴を掘る。

5人なので小さい穴でいいだろうーといっても銭湯並の湯船だ。

「アネモネ、魔法でお湯を沸かしてくれ」

「解った！　むー温め！」
ウォーム

すぐに、穴に溜まった泥水から湯気が出てくる。

手を入れて、お湯の温度を確かめていると、服を脱いだニャメナが飛び込んだ。

激しい水柱が上がる。

「うひょー！」

「こら！　お湯が熱かったらどうする！」
続いて、ミャレーも飛び込んだ。

「うにゃー！」

「旦那が手をつっ込んでいるってことは、そんなに熱くないってことだろ？」

どうにも、獣人たちってのはアバウトすぎて困る。

皆で裸になると、お湯に浸かる。

俺の両脇には、素っ裸になって髪を上げたりリスと、アネモネ。

2人がイニシアチブを取ろうとして、睨み合っている。

お湯は濁っているの、彼女たちの綺麗な裸は見えない。

俺の正面には、獣人たちが尻を出し、尻尾をうねうねさせながら泳ぐ。

「申し訳ないねえ、お姫様と一緒に風呂に入るなんて」

「ふ、気にするな。ケンイチがいつも言うように、家族なのだからな」

そういえば、ベルはどこ行ったのか？　と思ったら、俺のすぐ近くにいた。

さすがに彼女は、風呂には入らないようだ。

どうせ捨ててしまうお湯なので、湯船の中で身体を洗い、湖の水で身体を流す。

「うひょー！ つめてえ！」 「にゃー！」

「アネモネの魔法でちよっとお湯にしたほうがいいんじゃないのか？」

「大丈夫だよ、旦那」

「リリスは平気か？」

「大丈夫だわえ」

皆で裸になって並んで、大自然の中で水浴び。

色々あって、すっかりとスローライフから離れてしまったが、こういうのは、スローライフっぽい。

最後は、ジェットヒーターで髪の毛を乾かして、皆の毛はふわふわになった。

「あ！ そういえば、サクラに風呂の準備とかしてこなかったなあ……」

一応、風呂場に使っている小屋の中には、バスタブは置きっぱなしなのだが……。

「心配いらぬぞ、ケンイチ。母がなんとかするゆえ」

確かに、リリスの言うとおりアマランサスに、任せておけば大丈夫か。

身体が綺麗になったところで、コンテナハウスに皆で入る。ベルも一緒だ。

「にゃー！」

大きなダブルベッドにミャレーが飛び込んだ。

ベッドは2つあるので、俺とリリスとアネモネが一緒。獣人たち

はもう1つのベッドだ。

「さて、毛皮が綺麗になったので、ブラシをかけてやるか」
裸のニヤメナをベッドに、うつ伏せに寝せて、背中にブラシをかけてやる。

俺の動かすブラシに、ニヤメナは尻尾をピンと立てて、声を出さないように我慢しているらしい。

「ふっ……ふうう！」

「ニヤメナ、声を出してもいいんだぞ？」

お尻から尻尾の先をブラシでなでやると、ひくひくと彼女の身体が反応している。

「——っ！！ にゃああ！！！」

突然、のけぞってプルプルと震えだしたニヤメナにミヤレーが飛び上がった。

「にゃー！！ トラ公が小便漏らしたにゃ！」

「ええ？！」

慌てて、アイテムBOXから代わりのシートを取り出した。

「小便臭いトラ公は、どくにゃ！」

「ふぎゃ！」

ミヤレーがニヤメナをベッドの下へ蹴落とすと、シートを交換し始めた。

「てめえ！ このクロ助！」

「にゃーん、次はウチの番だにゃー。ウチは抱いたまま、ブラシをしてほしいにゃ」

彼女のリクエストどおりに抱きかかえたまま、ブラシをかけてや

る。

結構難しい。

「うにゃ〜ん」

目をトロンとさせた、ミャレーが俺の首に噛みつく。

「あいだだだ！　ちょっと、ミャレー！　甘噛みでも止めなさいって！」

獣人たちの牙は鋭いので、甘噛みでも相当痛い。

獣人たちの毛皮の手入れが終わったので、俺のベッドへ戻る。

――すると、俺の腹の上で、リリスとアネモネのにらみ合いが始まってしまった。

「妾は正室じゃぞ?!」

「リリスより私のほうが、ケンイチと一緒にの時間が長いんだから！」

「それを言うなら、ウチが一番ケンイチと長いにゃ〜」

「そうだな、ダリアで最初に知り合ったのが、ミャレーだったし」
まあ、本当に最初の知り合った女は、宿屋の子だったけどなあ。
しかも、異世界初のゴニョゴニョも、やっちゃったし……。

「初めて会ったときから、香辛料の匂いをさせたりしてて、妙なオツサンだったにゃ〜」

「それは否定できないな」

「でも、ケンイチについていけば、香辛料料理が沢山食えると思ったにゃ」

「それで、俺を追っかけてきたのか？」

実際にカレーを食いまくっているので、ミャレーの勘は間違っ
てなかったといえる。

ミャレーと話している間も、リリスとアネモネのにらみ合いが続

く。

「「むー！」」

彼女たちが、俺のシャツの中に頭を突っ込んだ。

「これ！ シャツが伸びるから止めなさいっての」

「それならば、妾はこちらじゃ！」

リリスの顔が、俺の下半身に向かうと、ズボンを下ろそうとする。

「こらこら、皆がいる所では止めなさい！」

「ケンイチも、喜んでいたではないかえ？」

「そりゃ、そうだが……」

「それじゃ、私もやるう！」

「ちよつと、アネモネ！」

すったもんだした挙げ句、皆で眠りについた。

しんと静かな部屋に、かすかな波の音だけが入ってくる。

こういう音ってなんていうんだっけ？ 1/fノイズ？

そんなことを考えつつ、俺は眠りに落ちた。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

——突然、起こされる。

「旦那！ 旦那あ！」

ゆさゆさと身体を揺さぶられて、目を開ける。

「ん？ な、なんだ？ もう朝か？」

「違うんだよ！ 旦那！！ 外になにか、ヤバいのがいるんだよ！」

「なに！？」

慌てて明かりをつけると、ベルの黒い毛も逆だっている。こりや、ただ事じゃない。

リリースとアネモネを起こしていると、外壁を叩く大きな音とともに、コンテナハウスが動き始めた。

「ちょっと待てよ!? なにが動かしているんだ?」

窓から外を見ても、暗くてよく解らない。このコンテナハウスはかなりの重量があるのに、それを軽々と動かすなんて……。

俺たちが慌てていると、いきなりコンテナハウスがひっくり返り、ベッドが倒れてきた。

明かりに使っているLEDランタンがゴロゴロと転がる。

「「うわああっ!」」

「なんじゃー!」「あー!」

「ふぎゃー!」

コンテナハウスの中は阿鼻叫喚。

なんじゃこりや!

141話 クラーケン

貴族になった俺は、自分の領地——ハマダ領を把握するため、測量の旅に出かけた。

拠点となるサクラ近くのサンタンカの村を通り、3日ほど順調に測量を続け、湖で釣った魚を食べて、風呂に入り、コンテナハウスで寝ていた。

順調に進む測量に安心して、ぐっすりと眠っていたのだが、突然ニヤメナに起こされた。

「旦那！ 外にヤバイのがいるんだよお！」

見れば、ベルの毛も逆だっている。こりゃただ事ではない。

急いで皆を起こしたりしていると、コンテナハウスが動き始めた。こいつは鉄で出来ていて、かなりの重量がある。そいつを動かすなんて何がいるんだ？

慌てていると、部屋がひっくり返り、回転する世界は阿鼻叫喚。

「一体なにが、どうなって……?!」

コンテナハウスが90度横倒しになったので、窓ガラスが上にあ

る。
この部屋にはアルミ製の扉もついているが、外開きなので上に開くのは難しい。

窓を開けて、そこから這い出ようとすると、人間の胴体ぐらいの太さがある透明ななにかが窓にへばりついた。

「なんじゃこりゃ！」

LEDランタンで窓を照らすと、丸い円盤がガラスに吸着している。

「ふぎゃー！」

「旦那あ！　なんだよ、これ！？　触手か？！」

「えーっ？　これってもしかして、吸盤か？！」

吸盤があるってことは、タコかイカ？　確か、タコとイカの吸盤って何か違いがあったような……？

——忘れた。こういう化け物ってなんだっけ？　クラークン？　テンタクルス？

淡水に、クラークンとかがいるのか？　あれって、海の化け物じゃないかったか？

とりあえず相手は、なんでもいい——早く外に出ないと、このまま水の中に引き込まれるかもしれない。

窓を少し開けると、アイテムBOXからカセットボンベのガスバーナーを取り出して、火を点けた。

青い炎を、窓にへばりついている触手に当てて、ジリジリと焼いていく。

白い煙が出て、部屋の中に漂ってくるのは、ゲソを焼いたような匂い——ということは、こいつはイカなのだろうか？

熱さが触手に伝わったのか？　窓から巨大な白い物が引っ込んだ。

「よし！　今だ！」

先に、身の軽い獣人たちに出てもらい、引っ張り上げてもらう。

「外、大丈夫か？」

「うわああ！　旦那あ！　何かいる！　何かいるよ！」

ニャメナがこんなに取り乱すのは、珍しい。

それに引き換え、ミャレーは落ち着いてる。

「トラ公！ ビビってにやいで、さっさと引き上げるにや！」

獣人たちに引き上げてもらうと、アイテムBOXからLEDライトを取り出す。

青白い光を湖面に向けると、黒い水面から出ている何本もの巨大な触手。

そのうちの3本が、コンテナハウスに吸い付いているが、本体は黒い水面下にいるのか、その姿は見えない。

俺と獣人たちがコンテナハウスから飛び降り、リリースとアネモネを受け止めてやる。

「くそ！ この触手を切り離さないと！」

俺はアイテムBOXから、巨大な剣を装備した戦闘機械獣を召喚した。

「ケンイチ！ ゴレムのコアを出して！」

「解った！」

アネモネに言われるままにゴレムのコアを砂浜に投げた。

「むー！」

アネモネの魔法とともに、暗闇に青白い光が集まって、コアの回りに砂が集まってくる。

「リリースは、岸から離れてくれ。ミャレー！ リリースの護衛を！」

「わかったにや！」

ミャレーにLEDライトを持たせて、照明係になってもらう。

「ケンイチ、そなたはどうするのじゃ！」

「どうにかするしかないだろ」

「シャアアア！」

ベルが懸命に威嚇しているが、こんな巨大な敵では彼女の力でもどうしようもないだろう。

コンテナの外には出られたので、このまま逃げる手もあるのだが――それは最終手段。

重機に乗り込むと、エンジンを始動する。

運転席右側のコンソールから、パワーモードを選択すると、アームに取りつけられたアダマントタイトの剣を高く掲げた。

「コ○ツ一刀両断！ それは、常世とこよと幽世かくりよを両断する、神鉄の一撃！」

俺はレバーに力をいれると、巨大な剣を振り下ろした。

剣が通過した透明な触手は音もなく切断され、打ち付けられた砂浜から砂塵が舞い上がる。

コンテナハウスに取り付き透き通っていたそれは、瞬時に真っ白に変わり、うねうねとランダムに動きだす。

「うわあああ！ 気持ち悪いい！」

「シャアアア！」

ニヤメナとベルがそれを見て、毛を逆立てている。

化け物の巨大な触手が切断できるのは解ったが、今度は俺とコ○ツさん目掛けて触手が襲ってきた。

「くそっ！」

レバーをガチャガチャとして、アームに取り付けた剣で触手を弾こうとしたが――。

重機の反応は、そんなに速いわけではなく、本当の生き物の速さや敏捷さには、かなわない。

コ○ツさんの黄色の車体に触手が巻き付こうとした瞬間、アネモネが作ったゴーレムの砂の壁が立ちふさがった。

「よっしゃ！」

俺は巨剣を水平にすると、ペダルを踏み込み、その場で車体を1回転させた。

「コ○ツ大回転斬り！ それは、天地を両断する、神鉄の手刀！」
ゴーレム魔法が作り出した砂の壁ごと、透明な触手を水平に薙ぎ払う。

上下真っ二つになったゴーレムが崩れ落ち、白くなった触手がバタバタと砂浜の上で暴れまわる。

2本の腕が切断されたせいか、コンテナハウスに取り付いていた他の腕も引き始めた。

俺はコ○ツさんから降りると、アイテムBOXから圧力鍋爆弾を取り出して、ニヤメナに渡した。

「ニヤメナ！ 触手が出ている水面へ向かってこいつを投げろ！」
「わあああ！」

彼女は、半ばパニック状態になっていたが、仕事はこなしてくれた。

放られた銀色の鍋は、放物線を描いて、黒い水面へ着水。
攻撃の準備は整った。

「アネモネ！」

「むー！ エクスプロージョン 爆裂魔法（小）！」

「皆！ 伏せろ！」

アネモネの魔法とともに、大音響が鳴り響き、水面に巨大な水柱が上がる。

それが炸裂すると、まるで動画を逆再生するような動きで、巨大な触手が黒い水中に引き込まれた。

化け物がいったいどうなったか確認する術はない。止めを刺した

くても、こんな真っ暗な中で水中への追撃戦は無理だ。

なにもなくなった水面には、波紋だけが漂っていたが、すぐに白い魚がぷかぷかと浮き始めた。

さすがに、この状況で魚を拾う気にはならない。

切断した化け物の腕を2本と、コンテナハウスをアイテムBOXに収納すると、代わりにラ○クルを取り出した。

「皆、乗れ！ この場から離れる！」

皆が慌てて、ラ○クルに乗り込むと、エンジンを始動。

ヘッドライトを点灯して水際を走り出した。

車のライトに照らされて、光っている2つ玉がちらちらと見えるが、動物の目玉だろう。

5kmほど進んだところで、砂浜が広い場所を発見——車を停める。

水際から離れた所に、コンテナハウスを設置した。

部屋の中に入ると、ベッドがグチャグチャになっている。

一々直すより、アイテムBOXに一旦収納してから、また出して設置したほうが早い。

ベッドを出し直すと、シーツも敷き直す。その縁に腰掛けて、皆でため息をついた。

「ふうふう……」

「うにゃー」

獣人たちは、ほっとしたようにベッドに寝転んでいる。

「ケンイチ、ここは大丈夫だろうの？」

ベッドの上に座っているリリースがつぶやく。

「解らんが、この鉄の箱にいるかぎり、いきなり死ぬってことはな

いだろう」

「そうだにゃ、黒狼でも、牙熊でも平気だにゃ」

「俺たちの攻撃で、あのデカいのも痛い目にあったはず、また襲ってくると思えんし……」

ニヤメナの毛が逆立ったままなので、抱いてなでてやる。

アマランサスや、ワイバーンも平気だった彼女だが、生理的に合わない敵だったのか？

真夜中なのに、どうも興奮してしまって、心がそわそわして眠れそうにない。

精神的にも疲れたので、甘いものを飲むことにした。

なににしようか……ホットチョコミルクなんてどうだろう。

小さな鍋にチョコと砂糖を入れて、アネモネの魔法で温めてもらう。

ねちよねちよになったチョコに、牛乳を入れてかき混ぜ、再びアネモネの魔法で温める。

部屋の中に甘いチョコの匂いが立ち込める。

「ちょっと味見——こんなもんだろ」

人数分カップを用意してそそぐ。

「ふう……甘いう。チョコの味じゃ」

「美味しい」

「甘いにゃー」

黙っているニヤメナにも飲ませてやる。

「ほら、ニヤメナ」

カタカタと震えていたニヤメナだが、ゆっくりとチョコミルクを飲み始めた。

いやはや、楽勝だと思ってた測量の仕事に、こんなトラブルがあるとは。

サントンカの連中が言ってた、化け物の話は、あながち嘘じゃなかったんだな。

腹も精神も落ち着きを取り戻したら、眠気が襲ってきたので、寝ることにした。

明かりを消そうとしたのだが、皆が怖いというので、卵型の小さいライトを購入し点灯させることにした。

明るさが調節できるので、皆の意見を聞く。

ニャメナがまだ不安そうにしているので、彼女と一緒に寝ることにした。

—————◆◆———

——そのあと、なにごともなく次の日。

窓から斜めに入ってくる日の光が眩しい。生きているってことは素晴らしいことだ。

この湖にもあんな化け物があるなんて。サクラに戻ったら、皆に注意喚起をしないとな。

皆も起こす。ちょっと強制的に夜更かしをしてしまったからな。

それに精神的にも疲労困憊したろう。

皆にダメージはないようだが、心配なのはニャメナだ。なんだか、すごいショックを受けていたみたいだな。

彼女を起こしてみる。

「おい、ニャメナ——」

俺の声にむくりと起き上がった彼女だが、抱きついてきた。

「ニヤメナ、もう大丈夫だぞ」

「旦那。面目ねえ……」

「ワイバーンも平気だったお前が、こんなになるなんて、よほど嫌な敵だったんだな」

「そりやもう——思い出すだけで……」

彼女の毛皮がまた逆立つ。これは、人間でいう鳥肌状態だ。そんな彼女の毛皮をなでてやる。

「ケンイチ、甘やかすからダメなんにゃ」

「まあ、そう言うなよ。怖い敵に立ち向かってくれたんだからさ」
「……」

ニヤメナは黙ったまま耳を伏せて、俺に抱きついている。さてさて、外で料理する気にもならないので、シャングリ・ラからパンを買って、牛乳とグラノーラで済ませることにした。

こういうときは便利でいい。食欲がなくても、腹に入るし栄養もある。

ニヤメナは食欲がないようなので、ゼリー状の栄養食を食わせた。腹も膨れたので、外に出て伸びをする。

「んーっ！ まったく昨日の騒ぎで、随分と走ってしまったな。昨日の場所に戻って、測量をし直さないと」

風呂の穴を掘ったりしたので、戻っても場所はすぐに解るだろう。

アイテムBOXからラ○クルを出すと、皆を乗せる。

「ニヤメナ、戻るのが怖いなら、ここで待っててもいいけど……」

「1人なんて嫌だよ！」

尻尾が垂れ下がっているので、まだテンションが低い状態のようだ。

車を走らせると左手の湖を見る。湖面は鏡のようで、昨日のことが夢のようだが……。

ところがどっこい、あれが現実。

「ずっと湖の近くに住んでいたけど、あんな化け物がいたなんてなあ」

「本当だね！」

「そうだにゃー。まったく気配なんてなかったにゃ」

「今まで遭遇したことがなかったのかえ？」

「アストランティアの噂でもそんな話はなかったみたいだしなあ。

ただ、サンタンカの連中はなにかいるのを知っていたみたいだけど……」

実際に、行方不明者もいるらしいのだが、あいつにやられたかは不明だ。

ベルも湖を警戒している感じではなかったので、普段は湖の奥深くに潜んでいるのだろう。

この湖の底がどうなっているか、皆目見当もつかないし。

それに、なにせデカイ湖だからなあ。

外周が150kmとすれば、円周率で割れば直径は47km以上。こんなにデカイ淡水湖は、あまりないだろう。

昨日、キャンプしていた場所に到着した。

俺たちが到着すると、その場にいた色とりどりの鳥たちや、小動物が一斉に散っていく。

水際には沢山の魚が打ち上げられているが、こいつを食べていたらしい。

「魚が沢山あるにゃ」

「そいつは傷んでると思うから、食うなよ」

「もったいないにゃー」

砂浜には、穴を掘って風呂に入った跡や、コンテナが引きずられた跡が残っている。

車から降りて測量の準備をする。

「リリースとアネモネは、乗ったままでいいぞ」

「トラ公も乗ったままでいいにゃ」

「うるせえ！ もう大丈夫だよ！」

ミャレーの挑発に乗って車から飛び出たニャメナだったが、まだビクビクしている。

俺も、あまりこの場所にはいたくないので、さっさと測量を済ませてしまおう。

測量の看板を持って、獣人たちに水際を走ってもらう。

俺たちが水際を無視していると、鳥たちが打ち上がった魚をついばみに、また集まってきた。

それを、車から降りたベルが狙っている。

黒い身体を地面スレスレに伏せて、スルスルと音もなく水際に近づいていく。

鳥たちがそれに気づいて飛び立ったのだが、それに合わせてベルが大きくジャンプ！

大きな白い鳥を口にキャッチした。

「すげー！ そうやって鳥を獲ってたのか」

ベルが得意げな表情で、鳥を啜えて俺の所に見せにやって来た。啜えた鳥はまだ生きてバタバタしている。

ベルはそのままどこかへいなくなったので、鳥を食べているのかもしれない。

俺は測量の続きだが、レーザー距離計を覗き込むと、値を測定し

て地図に書き込めば終了。

簡単なもんだ。

ベルを呼び寄せると、すぐ車に乗って次の場所へ向かう。

彼女の口周りには、白い毛がついていたので、食事をした後だろう。

そのまま、昨夜避難した場所も測量しながら通り過ぎると、目の前に湿地帯が広がる。

湿地帯の中は車では進めないので、ゴムボート2艘で水際を進むことにした。

「このようなことは、アイテムBOXに信じられないようなもの、なんでも入っている、ケンイチだからできる所業じゃぞ？ 普通の貴族に任せたら、数年はかかる大事業じゃ」

「その前に、昨日の大きなニヨロニヨロで全滅しているし……」
「アネモネの言うとおりじゃな。騎士団を連れていても、あれにかなうとは到底思えん」

まあ、水の中に引き込まれたら、どんなに屈強な騎士や戦士でも戦えない。

かといって、手こぎボートがあっても、戦闘の役には立たないだろう。

あれと戦うには、巨大な軍艦が必要だぞ？

それとも、大人数で岸に引っ張り上げて戦うか。

獣人たちには、ピンク色のペンキスプレーを持たせて、看板を立てた場所をマーキングしてもらう。

俺は、ゴムボートの上にコンパネを出して、その上に三脚を載せてレーザー距離計を覗いている。

かなり不安定だが、なんとかなる。

さすがにこの調子では、距離を稼ぐ事ができないが、それでも1

0 km進むと湿地帯が切れた。

まるで未踏の大地を進む探検家だ。

大昔にいた元世界の探検家たちも、誰も知らない土地をこんな具合に探検したのだろうか？

さぞかし苦勞したかとは思うが、俺にはアイテムBOXがあるので楽勝だ。

湿地帯が切れ地面が見えた所で、コンテナハウスを設置して、そこで一泊することにした。

火を起こして、ドラゴンの肉を焼く。

肉がいい感じで焼けてきたところで、ふとあることを思い出した。昨日アイテムBOXに入れた、化け物の脚だ。

バーナーで焼いたときは、ゲソみたいな匂いがしていたし、食べるかもしれない。

アイテムBOXの表示を見ると、クラーケンの脚——となっている。

やっぱり、クラーケンなのか。

そいつをアイテムBOXから取り出した。

「ひいひい！」

白い巨大なイカの脚を見たニヤメナが逃げ惑う。

「ケンイチ、それをどうするのじゃ？」

「いや、食ってみようかと」

「ぎゃあああ！ 旦那あ！ 止めてくれえ！」

トラウマになっているニヤメナの前で、こんなものを出す俺が無神経なのは解っている。だが俺の好奇心にブレーキはかけられない。

「トラ公は、うるさいにゃ」

「まあ、試しにだよ」

白い脚をナイフで薄く削ぐ。それを、アイテムBOXから取り出した串で波型に打つ。

「こんなもんだろうな」

白い波型に醤油をかけて、焚き火の横に刺した。

すぐに、ゲソと醤油が焦げる香ばしい良い香りがしてくる。匂いだけだと美味そうだけどな。

「そろそろ焼けたかな？」

ゲソを取ると、一口食べてみる。

「ひいいい！」

ニヤメナが叫んでうるさいが——中々イケる！ 別にエグミもないし、甘みもある。普通に新鮮なイカの味だ。

やっぱりあれはイカってことになるな。まあ、アイテムBOXの表示もクラーケンってなってるし。

「うっぷ……」

俺の食事風景を見たニヤメナは、飯前なのに吐きそうになっている。

彼女が可哀想なので、脚はアイテムBOXに収納した。

これは、ニヤメナの見えないところで食わないとな。

「ケンイチ、妾にもたもれ」

リリースはなんでも食うなあ。

「安全性が確かめられたわけじゃないから、一口だけな。俺は祝福があって簡単には死なないらしいから、心配ないが」

俺が差し出したゲソの串を、リリースがパクリと頬張った。

「ほう！ 魚ともつかん、獣の肉ともつかん、まさに珍味！ この前食べたタコ焼とやらに入っておったものに似ておるの」
残りをアネモネが食べているが、普通に食べているな。
美味しいようだ。

「お！ さすがリリス、鋭いねえ。しかし、あんな化け物がいると知られていたか？」

「いや、初めて聞いたが……」

「ああいうのは、普通は海にいると思ったんだがなあ」

「ケンイチは知っておるのかえ？」

「あれは、クラーケンだな」

「クラーケンとな——確かに、お城の書庫で読んだ本の中に、海にいる魔物として載っていたような……」

俺たちの行動を見たニャメナは、完全に食欲をなくしてしまったらしい。

シャングリ・ラから流動食や、栄養食を購入して食わせる。

甘いものは平気なようなので、チョコもやる。

なにも食わないよりはマシだろう。

「トラ公が、こんなに弱いとは思わなかったにや」

「うるせえ……」

ミャレーの煽りに答える彼女のキレもイマイチだ。

辺りが暗くなり、空は紫から濃い青に変わり、湖は漆黒な鏡と化する。

「また、あのデカいのが来るかにや？」

ミャレーの言葉に、ニャメナがビクっとなっている。

「腕を2本も切り落として、エクスプロージョン爆裂魔法で脅したんだ。しばらくはや

ってこないだろ？」

「あの触手が来るかと思うと、ちょっと恐怖があるがのう——」

「あの手の生物って、かなり知能が高いんだよ。おそらく大丈夫だろう」

人類が滅亡したあと、覇権を取るのはイカやタコだという、TV番組もあった。

そのぐらいに知能が高い。

皆で肉を食っていると、ネコ缶を食べていたベルが立ち上がった。

「ん？ お母さんどうした？」

ベルがじつと森のほうを見つめている。

「なにか来たか？」

「ケンイチ、来たにゃ」

車をアイテムBOXから出して、リリースを押し込める。

マジか——暗くて解らん。シャングリ・ラを検索して、4万円ぐらいのナイトビジョンを買う。

「ポチツとな」

濃い緑色に塗られた、双眼鏡のような機械が落ちてきた。

スイッチを入れて、とりあえず覗き込む——緑色の視界に白く光る2つの目が沢山動いているのが見える。

四脚で黒い毛皮——黒狼。

「また、黒狼か」

「ケンイチ、見せて！」

アネモネが見たいというので、ナイトビジョンを見せてやる。

「凄い！ 暗くても見える！ ねえ、魔法を撃っていい？」

「ええ？ まあ、今のうち蹴散らしたほうがいいだろうなあ……」

「むー！ エクスブロージョン 爆裂魔法！」

アネモネがナイトビジョンを見たまま魔法を使う。距離感とか大丈夫なのか心配したのだが――以前にスコープを見ながら魔法を使ったこともあったし、問題ないか。

森の中の暗闇に青い光が集まると、黄色い閃光が赤い爆炎に姿を変えた。

激しい爆風が俺たちを襲い、湖の上を吹き抜けていくと、森の木々がバタバタと倒れる。

コレを食らっちゃ、狼たちはひとたまりもないだろう。

アイテムBOXから獣人たちの装備を出した。

「ミヤレー、生きてるやつらに止めを刺してきてくれ。食べそうなやつは回収も頼む」

獣人たちは天然のナイトビジョンを装備していて夜目が利くので、暗闇でも平気。

「任せるにゃ！」

「旦那、俺が行く！」

剣を持って立ち上がったのはニャメナだ。

「大丈夫か？」

「大丈夫だよ！」

「別に無理する必要はないにゃ？」

「うるせえ！」

ミヤレーがさっと、俺の後ろに隠れた。

「こら、ミヤレー！ 煽るんじゃない」

それでは、ニャメナにもやってもらおうことにした。

相手が狼なら、彼女も大丈夫だろう。

これで楽勝——と思ったのだが、生き残った多数の黒狼が、攻撃をかいぐぐってきた。

「まだ、いやがる！」

いつもは、このぐらい痛めつけると尻尾を巻いて逃げるのだが、今回は少々違うようだ。

俺は、シャングリ・ラから安いLEDランタンを6つほど購入すると、点灯させて辺りに放り投げた。

青白いLEDの光に浮かび上がる、黒い毛皮たちは——およそ10匹ほどか。

「よっしゃ！ コンテナハウス召喚！ コ〇ツさん召喚！」

俺の声と共にコンテナハウスと重機が、黒狼たちの上に落下する。

「ギャン！」「ギャイン！！」

次々と獣たちが鉄の塊の下敷きになったが、ベルの毛がまだ逆立っている。

こりゃまだ、なにかいるんだろう。

「まだ、いるぞ！」

奥から出てきたのは、一際大きいクマのような獣だが、間違いなく狼。

「旦那！ 俺が切り込む！」

「大丈夫か？！」

「任せてくれ！ うおおお！」

切っ先を地面に摺るように構えて突進したニヤメナが、黒狼の噛みつき攻撃を躲すと、下から切り上げた。

一旦、距離を置き、右左に素早いフェイントをかけながら、黒狼

の牙を躲しジャンプ。

大きく振りかぶった剣を、黒い毛皮の眉間に叩き込んだ。

ニヤメナが攻撃している間に、俺は重機に乗り込むとエンジンを始動させる。

コ○ツさんのエンジン始動音を聞いたニヤメナは、パツと身を翻し、ポンポンと連続バク転で距離を取った。

「旦那！」

「よっしゃ！ それは死の淵から振り下ろされる黒い断頭台！」

動きが鈍った巨大な黒狼の頭にアダマントタイトの刃が振り下ろされると、地面も切り裂き頭が縦に真っ二つに割れる。

これで勝負がついた。

「やったにゃ！ トラ公も中々やるにゃ！」

「やったね！」

アネモネの喝采に、ちよつとニヤメナは照れくさそうだ。

ベルが、ボス狼の所へいくと、クンカクンカしている。

「中々やりよるのう！」

車からリリースも降りてきた。

ニヤメナが残っている黒狼に止めを刺したあと、獣人たちが屍かばねを回収。

俺のアイテムBOXの中に、黒狼が25匹ほどと、巨大な黒い毛皮が1頭増えた。

142話 川を下る

湖の深部から現れたと思われるイカの化け物――クラーケンを退け、俺たちは湖の測量を続ける。

ずっと砂浜だった湖の外周はどんどん険しさと変化に富み、俺たちの行く手を阻む。

車が走れない場所は、ゴムボートを使いながら進むが、水上で測量した数値が使えるのかは微妙。

元世界のような正確な地図は求められていないから、領地のおおよその把握ができればよしとしよう。

測量した土地がサクラの領地となり、同時にカダン王国の領土となるわけだ。

困難を極める旅であるが、皆の士気も高い。

クラーケンとのエンカウントで、S○N値を削られたのか、ニャメナが危うかったが、すっかりと立ち直った。

様々なできごとがあったが、サクラを出てから5日め、俺たちの前に川が現れた。

幅は10mほどか、そんなに大きな川ではなく、流れもゆっくりと湖から流れ出ている。

流れ込む川ばかりで、溢れたりはしないのだろうか？ と余計な心配をしていたのだが、ちゃんと排出口があったようだ。

おそらく、このまま王都の近くを流れていた大河――アニス川と繋がっているに違いない。

湖にいる魚や生き物たちも、この川から遡上してきたのだろう。川から生き物がやって来たとすれば、その川は海にも繋がっている。あのクラーケンも小さい頃に海から上ってきたのだろうか？

イカが湖に自然発生するはずがないしなあ……でも、淡水で生きられるのか？

異世界の魔物で、元の世界の動物とは違うのは解るが、淡水のイカとは……。

もしかして、湖の底に塩水溜まりがあって、海まで繋がっているとか？

それを確かめる術はないが……。

そういえば、ネッシーで有名なネス湖も海底トンネルで繋がっている説があつたなあ。

昔は、そういうオカルト読本が沢山あつたのに、最近は見かけない。

元世界にや夢はなくなったが、ここ異世界には、まだまだ夢があるってわけだ。

「にゃー！ 魚がたくさんいるにゃー！」

「おおっ！ 本当だぜ」

獣人2人が川へ飛び込んだのだが、動きが素早くてそう簡単に獲れるものでもない。

俺は、シャングリ・ラからファイバーグラス製の銚を購入した——1万円だ。

「ほら、これを使ってみたらどうだ？」

「にゃ？ こんなに立派な銚なんて、使ったことないにゃ」

本当は水の中で使うもののような気がするが——ミャレーが投げた銚が、マスらしき魚の腹に突き刺さった。

「やったにゃ！」

凄く正確だな。やっぱり、獣人たちが持っている狩りの才能は凄い。

「狩りに銚も使うのか？」

「そりゃ旦那、投槍と同じだからね」

「あ、そうだ。矢にヒモをつければ、弓でも獲れるんじゃない？」

「ああ、それもやったことがあるよ」

ニヤメナに、アイテムBOXから出したコンパウンドボウを渡し、手本を見せてもらう。

シャングリ・ラを検索すると、フィッシュハンティング専用の矢っているのが、売っている。

こんなものまで売っているんだ。

「ポチツとな」

落ちてきたのは、黒いファイバーグラス製の矢が6本で4500円、高い。

普通の矢と違い先端には反しがついているが、矢羽はついておらず、ヒモを通す穴が開いている。

「ニヤメナ、この矢を使ってみてくれ」

「旦那、こんな立派な矢をなくしたら、どうするんだよ」

「大丈夫だよ」

シャングリ・ラから、ちょっと太めのタコ糸を買って、矢のうしろへ結びつける。

ニヤメナが矢を番えて、狙いをつけると、水面に水柱が上がった。

「やったにゃ！」

「どんなもんだ」

「すごい！」

褒めるアネモネに、得意げなニヤメナだが、ミャレーから突っ込みが入った。

「このぐらい、獣人なら誰でもできるにゃ」

「うぐ……」

言葉に詰まったニャメナだが、ヒモを引くと大きなマスに矢が突き刺さっていた。

魚の側面を染めている斑点と虹色の肌が、綺麗だ。

そのあと、6匹獲ったところで、昼になったので飯にする。

全部の腹を裂き腸はらわたを出して川で洗うと、3匹を調理することにした。

残りはアイテムBOXの中だ。沢山いるからといって獲りまくっても、アイテムBOXの中が魚だらけになってしまうからな。

必要な分だけ獲ればいいんだと川を眺めていると、ベルが川の中に突っ込んでマスを口に咥えた。

「おおっ！ お母さん、さすがだな」

そのまま草むらに隠れてしまったので、ゆっくりと食べるのだろう。

いつも思うのだが寄生虫は平気なのだろうか？ 心配なのだが、まさか獲物を取り上げるわけにもいかない。

前も生身の魚を食べていたので、多分平気だろうと思うことにする。

ずっと以前から森で獲物を仕留めても、生で食べていたんだろうし。

「これだけ魚がいるということは、漁業も大きな産業になるの」

俺が魚の頭を落とし、3枚におろしている作業をリリースが眺めている。

「けど、なまものだからなあ。燻蒸しても、ダリア辺りにしか輸出できない」

「アキラが操っている召喚獣トラックがあるではないか。あれなら1〜2日で王都まで行けるのであろう？」

「あれに頼りっきりになってしまおうと、俺や彼がいなくなった途端に破綻するぞ？」

「むう……」

それを考えると、保存が利く砂糖や酒がメインの産業になるだろうな。

3枚におろした身を焼いて食う。俺は醤油だが、皆は胡椒とマヨネーズを塗って、パンに挟んで食べている。

切り身を見ていると——日本人の悲しき性か、刺し身で食いたくなるが——。

「そうだ！」

以前使った、低温調理器が使えるんじゃないか？

寄生虫でも卵でも、マスの切り身を60度ぐらいに加熱すれば死ぬはず。

何かの本で、生の魚を45度ぐらいで低温調理するのを読んだことがあったが、色々と条件があって、かなり難しそうだった。

60度なら確実だろうと思ったが、シャングリ・ラで低温調理の本を見つけた。

早速、購入して読んでみると、魚料理も載っていたので、詳しく読む。温度はもう少し低くてもいいようだ。

アイテムBOXから低温調理器を出して、水を張る。

「アネモネ、ちょっとお風呂より熱いぐらいに、温めてくれないか？」

「うん、温め！」
ウォーム

すぐに手をつけると熱いぐらいにお湯が沸く。

そこに、ビニール袋に入れたマスの切り身を入れ空気を抜くと、

温度と時間をセットする。

温度は本に書いてあったとおりに52度にセット。

「ケンイチ、湯煎でもするのかえ？」

「本当は生で食いたいんだが、危険だからな。それっぽくならないかなあと思って」

「うっ……魚を生でかえ？」

ゲテモノが平気なリリスでも、露骨に嫌な顔をしているが、日本人ならここで引くわけにはいかない。

「けど——前に旦那が、ドラゴンの肉を生っぽくして食べてたから、食えるかも……」

「まあ、試しにな」

「そなた、料理人でもないのに、その食に関する食欲さはなんなのじゃ？」

「何といわれてもなあ……その俺の料理を、リリスは美味いぞ〜！
って食べてるじゃないか」

「それはそうじゃが……そんな叫んだりしたかの……？」
30分ほど加熱したので、アネモネに冷やしてもらう。

「むー冷却！」
リフリジレーション

本当は、氷水で冷やしたりなんだのと結構大変な作業も、魔法一発で済んでしまう。

ビニール袋から出して、まな板の上で刺し身を切る——当然、使う包丁は刺身包丁。

身の周りは白いが、中は美味しそうなピンク色。

小皿に醤油とチューブわさびを入れて、手づかみでちよいちよいと醤油をつけて、口に放り込んだ。

「ひええ！」 「ふぎゃー！」

獣人たちが毛を逆立てる。

「うめー！ ははは」

滑らかな舌触りと、舌の上に天然の甘み。これぞ純の味——自然と笑みが溢れる。

やっぱり日本人だな。ここにアキラがいたら、日本酒かビールを出せて言うはずだ。

「よし、妾も食べてみるぞえ」

なにやら覚悟を決めたように、リリースが叫んだ。

「え？ 無理をするなって」

「いや、夫が食べる物を、正室が食べられないというわけにはいかぬ」

「そんなことはないだろう。誰しも好き嫌いはあるわけだし」

「化け物の白い肉も美味かったし、ケンイチが食べるものに間違いはないだろう」

そういうものの考えかたもあるか。

そう言ったりリスも、恐る恐る手づかみで刺し身を摘み、醤油をつけて口に入れる。

「ほう——別に生臭くはないな。すごく滑らかな舌触りじゃな。獣の肉では味わえない官能さがある」

ゴクリと飲み込むと、舌をぺろりと出した。

「結論は、どうだ？」

「うむ、これは美味い。魚に、こんな食べ方があるとは——」

「でも、これは一応火を通してあるからな。生は絶対にダメだぞ」

「もし食べたらどうなるのじゃ？」

「寄生虫がいたりすると、内臓を食われて七転八倒する。下手をす

ると、身体の中が虫だらけになって……」

それを聞いた獣人たちが震え上がっている。

「なんでそんな思いまでして、食うんだよ!」 「そうじゃ」

「なぜって、美味いからに決まっているだろ」

それを聞いた、アネモネも刺し身に手を伸ばした。

「……うん、美味しい」

刺し身を食べたアネモネが、指を舐めている。

「あわわ……」

獣人たちなんて、肉を生で食ってそうなイメージがあるが、随分とセンチティブだな。

それだけ、俺の食い方がこの世界の常識から外れてるってことになるんだろうけど。

飯を食い終わり、食休みをしているリリスが話しかけてきた。

「ケンイチ、母のことはどうするのじゃ? 本当に、国家転覆をやりかねんぞ?」

「まさか——と言いたところだが、ありえるから困っているんだよ」

「それに、あの奴隷紋じゃが、ケンイチを思い通りに動かす道具として使っておるのを、そなたは気づいておるかえ?」

リリスが、妙なことを言い出した。

「道具?」

「そうじゃ——母が逆らえば、奴隷紋の呪いで七転八倒するじゃろ?」

「まあな。何回も転がっていたし」

「それを見たケンイチは、母が可哀想だと、言いたいことも口に出さずに、つぐんでおるのではないかえ？」

「それは――あるけど、アマランサスが、俺を利用しているとは考えたくないな。本当に、俺との国を造りたいだけなんだろう」

「そのためには、戦になるのかもしれないじゃぞ？」

「まあ、それは心を鬼にして止めるし、ちゃんと話し合う」

「ならば、よいがのう」

リリスは長年生活を共にして、アマランサスがどういう人間か正確に把握しているからな。

「けどなあ、奴隷紋はどうか？　話し合って外してくれると思うか？」

「無理であろうな」

リリスにあっさりと言われて、言葉が続かない。

領の行く末に多々の不安はあれど、まずは目の前の問題を解決しなくては。

川を渡るのは簡単だが、川がどこへ向かっているか、2日ほど下ってみるか……。

その後は、測量隊を雇って測量させてもいいし……だが、そこまですなくても、居住地がこの地まで広がることはないと思う。

もし広がるようなら、その時に考えればいい。

「旦那、どうするんだい？　川を渡るのかい？」

「いいや、川を2日ほど下って測量をする。魔物もいるかもしれないから、十分に注意な」

「にゃ」「わかった」

川の流れは緩やかで、ほとんど流れているようには見えない。

獣人たちの話を聞いても、この先は大湿地帯に繋がっているのではないと言う。

つまり、この先はずっと平坦だってことだ。

湖の水が溢れて、低いところを探しながら水が流れていき、ついには川になった——という感じだろうか。

それなら車などを出さなくても川をボートで下っていけばいい。ゴムボートを出して川に浮かべると、トランシーバーを持たせた獣人たちに先行させる。

川の蛇行などの地形に合わせて看板を立ててもらい、俺がレーザー距離計で計測した結果を書き込んでいく。

それでも、道なき道を進むよりは早いだろう。

いざとなれば、ボートに船外機を積む手もある。

ベルが戻ってきていないが、彼女は匂いで俺たちを追ってくるだろう。

もともとは、こういった深い森が彼女たちの住処なのだから、お茶の子さいさいのはずだ。

鬱蒼とした森の中を静かにボートは進む。水面には虫が漂い、それを狙って魚が飛び跳ねる。

川のある所だけ、森が開けているので、日光が注ぎ明るい。

逆に明るい場所は、草が育つので背の高い緑に覆われてしまっている。

本当に探検隊みたいだな。手作りのイカダで川を下ってみたい——という妄想を、異世界で満喫中だ。

夢の中では疲れないが、現実には疲れる。ボートを引き上げることができる平地があれば休む。

次に平地がある場所が予測つかないので、休めるときに休むのだ。

「どうだリリス、こんな森の奥地までやって来て後悔していないか？」

「そんなことはない。妾が望んだことだからの」

「まったくこんな危険なことに付き合うなんて、貴族の正室なんて屋敷にいるもんだろう？」

「それはそうじゃが——アネモネがケンイチと一緒に楽しそうにしているのは悔しいではないか！」

「べえー！ 私は、魔法でケンイチのお手伝いができるから、いいの！ ケンイチと一緒に冒険するってずっと言ってたんだから！」

「ぐぬぬ……」

アネモネの言葉にリリスは反論できない。

「それに、パンだって焼けるし」

「パンなら、妾も焼けるようになったわえ」

そのパンの焼き方も、リリスがアネモネから教えてもらったのだが。

彼女の腕も上達して、アネモネと遜色ない仕上がりになっているが、魔法が使えない分、作るのに時間がかかる。

「「ぐぬぬ」」

「ほら、喧嘩しない。リリスには政をまつりごとみてもらいたいんだけどな」

「それでは毎回、母のように置いてけぼりではないかえ」

「もう、戦えないリリスは、家にいれば？ もうちょっとすれば、私もケンイチからしてもらえるし。そうしたら、リリスはいらないでしょ？ もうお払い箱」

「なぜ、正室の妾がお払い箱なのじゃ！」

二人が、俺の周りをぐるぐると回り始める。

「こらこら！ 船の上で暴れるんじゃない！ 危ないから！」

俺に怒られた二人は、黙って口を尖らせている。

アネモネも主張が強くなってきたなあ。あちこち回って、経験を積んだのも大きいけど、実質この国の大魔導師にも匹敵する実力を持っているし。

ふと、川岸に生えている、背の高い草がガサガサと動く。
アイテムBOXからボウガンを取り出して、構えるが――黒い毛皮が顔を出した。

「にゃー」

「なんだ、お母さんか」

やっぱり、追ってきていたようだ。

水の上をボートで移動しても追ってこられるんだな。

ちようど上陸できそうな場所があったので、小休止することにした。

トランシーバーで先行しているミャレーたちに連絡を入れる。

「ミャレー！ ちょっと小休止する」

『わかったにゃ！』

小休止のため岸にボートをつけると、草むらを分けてベルがやって来た。

「にゃー」

「なんだベル。草だらけだよ」

「にゃーん」

彼女の黒い毛皮に、トゲトゲのついた草の種が大量についている。
俺の地元では――こいつを、「だっこんび」と呼んでいたが、もちろん局地的な方言だろう。

黙って草の種を窠られていたベルであったが、顔を上げてピンと耳を立てた。

「どうしたベル？ 何か来たか？」

下流の方から、声が聞こえる。

「旦那！」「にゃー！」

草むらがわさわさしているが、ニャメナとミャレーだろう。
トランシーバーはどうした。

「おいどうした?!」

「なにか来るにゃ！」

「旦那！」

なんか、前もこんなことがあったぞ？

草むらから、緑色の切れ端に塗れた獣人たちが飛び出してきた。

「ケンイチ、羽音にゃ！」「旦那、やべえくやつだ！」

「羽音?!」

俺は咄嗟に、コンテナハウスを出した。

スペースが足りないため、土手に乗り上げて少々斜めになっているが、そんなことを言っている場合じゃない。

「みんな中に入れ！」

「わわ！」「いそぐにゃ！」

「ひゃー！」「なんだというのだ！」

「ベル！」

彼女は、コンテナハウスと地面の隙間に入ったようだ。

ドアを閉めて息を殺していると、低音の唸るような音が聞こえてきた。

ガラス窓から外を覗くと、黄色いものが近づいてくる。
どうやら虫のようだが……。

「なんじゃ、あれは?!」

リリースが外を見て叫ぶ。

「蜂だよ、お姫様！」「そうにゃ」

全長50cmほどあるデカくて黄色い蜂が、コンテナハウスの回りをブンブンと飛び始めた。

「数は、10匹ぐらいか。蜂は黒いものを攻撃するらしいからな」

「それじゃ、クロ助のせいじゃねえか！」

「にゃ？」

「この箱も黒いから、敵だと思っているのかもしれないな」

羽音と一緒に、パソコンと外板にぶつかる音がする。

いくら蜂の針が鋭いといっても、金属板を貫通することはないだろうが、下に潜ったベルは大丈夫だろうか？

彼女の毛皮も黒いからな。

「さすがに空中を飛ばれたら、厄介だな。俺の召喚獣も、アネモネの魔法も分が悪い」

「弓で落とすのも大変にゃ！」

「剣で切るのは、難しいぜ」

「アマランサスなら、できるかもしれないが……さて、どうする」

このままじっとして、蜂が諦めるのを待つか？ それとも打って出るか。

とりあえず、リリスはベッドの下に潜らせた。

「多分、そこが一番安全だ」

対抗手段を考えていると、窓ガラスに巨大な蜂がへばりついて、カチカチと音を出している。

虫の裏側ってのは不気味だ。俺たち内骨格動物とは、明らかに祖先を別になっているモノコックボディ。

ワシヤワシヤ動く脚をみると寒気がする。

元世界にいたスズメバチだってヤバいつてのに、こんな巨大な蜂なんて、まさに異世界。

「うおお！ 超こえええ！」

「嫌な音だにゃ！」 「旦那、どうするんだよ！」

獣人たちの毛も逆立っているので、内骨格動物に共通して、嫌悪感と恐怖感を感じさせる音なのかもしれない。

「うーん、ちょっと思いついた。アネモネ、窓にへばりついているこいつを魔法で冷やしてくれないか？ ガラス越しなら、魔法が通るかもしれない」

「やってみる——むー冷却！」
リフリジレーション

魔法が効いたのか、蜂は動きを止めると、ドサツと下に落ちた。やっぱり昆虫だな——寒さに弱い。この国は暖かいから、寒さに耐性はまったくないはずだ。

「旦那、全部その魔法でやるのかい？」

「いや——」

俺はシャングリ・ラから、黄色いバズーカ型の蜂用殺虫剤を購入した。

獲物を手に持ち、窓を開けて周囲を確認すると、すぐに巨大な蜂が突進してきた。

すぐに窓を閉めると、隙間に強引に顔を突っ込んでこようとしている。

黄色と黒の彩られた歌舞伎役者のような三角形の頭に、茶色い大きな目。

長い触角に鋭い牙が2本、カチカチと不気味な音を立てる。

「窓を押さえてくれ！」

「わかったにゃ！」

「くらえ！」

俺は、バズーカの引き金を引くと、白い霧状のジェット噴流が黄

色い頭を直撃。

敵は一瞬怯んで飛び立ったが、再び窓に張り付いてきた。

「あれ？ 効き目が弱いのか？！ もっと強力なやつは――」
購入した殺虫スプレーの説明を読むと、スズメバチが対象に入っていない。

マジか！？

それじゃ、スズメバチ用を買えばいいってことだな。

シャングリ・ラのウインドウに並ぶ殺虫スプレーの中から、黒い缶のスズメバチ用を購入してみた。

「それでも、くらいやがれ！」

白いジェットの霧を食らった敵は、いきなり動きを止めると下に落下した。

「おっ！ こいつは効くぞ！」

「旦那！ そいつを俺にもくれ！ それから、前に使った透明な盾も貸してくれ」

「まさか、外に出るのか？」

「クロ助と背中合わせになれば、死角はなくなるって！」

「それは、いい考えだにゃ」

「おいおい！」

思いとどまるように説得したのだが、獣人たちはやるようだ。

特にニャメナは、クラーケン戦で良いところを見せられなかったので、挽回しようとしているように思える。

彼女たちのリクエストどおりに、アイテムBOXから、ポリカーボネートの盾を出す。

シャングリ・ラで、黒い殺虫剤を20本ほど買い、盾のうしろにガムテープで貼り付けた。

これで、すぐに取れるだろう。

革の鎧や剣など、彼女たちの装備も出して準備させる。

「おっしゃいくぜ！」「うにゃー！」

獣人二人が背中合わせになって、ドアから外に躍り出た。

俺たちは、窓からその様子を見ていたが、こちらからも殺虫剤を装備して援護をする。

リリースも、ベッドの下から這い出て戦いに参加することになった。こいつの薬剤は20mぐらい飛ぶので、コンテナハウスの中からでも狙える。

激しい羽音と共に、巨大な蜂が襲いかかってきた。

「うひょー！ 来やがったぜ！」「トラ公！ この盾は本当に大丈夫にゃ？」

「しらね！」「ふぎゃー！ トラ公を信じたウチがバカだったにゃ！」

巨大な蜂は、尻からナイフのような白い針を出して突進するが、透明な盾は貫けない。

「ははは！ 獣人が切っても突いてもびくともしねえんだから、このぐらいは平気だろ？」

「ぎゃー！ なんでウチばかりに攻撃してくるにゃ！？」
明らかに、ミャレーが攻撃されている回数のほうが多い。

「旦那が言ってただろ？ 黒い物を敵だと思ってるんだよ」
「トラ公に騙されたにゃー！」

その間にも、黄色い化け物たちが、ドスドスと透明な盾に突撃を繰り返している。

「おりゃ、くらいな！」「しゃー！」

白いジェット霧が、次々と蜂を叩き落としていく。

どういう成分なのか知らないが、薬剤がかかると瞬時に動きが止まり地上に落下する。

この黒い缶を作った人も、まさか異世界で巨大な蜂相手に使われるなんて思ってもみなかっただろう。

獣人たちに集まってきた蜂に向けて、コンテナハウスからも薬剤を噴射した。

「おらー！」 「やあー！」 「ははは、死ぬがよい！」

アネモネとリリースは楽しそうである。シューティングゲーム感覚であろうか。

「全部やったか？」

俺は、スプレー缶を持ったまま、おそろおそろドアから首を出した。

「ああ旦那、多分な」

上下左右を確認して外へでる。

「動いているやつには止めをさしてくれ。死んでも針で刺すことがあるから気をつけろよ」

「それなら、針を落としてしまえばいいにゃ」

ミヤレーは蜂の腹を踏んづけると、故意に針を出させて剣で切り落とし始めた。

「にゃー」

ベルがコンテナハウスの下から這い出てくると、蜂の死体をクンカクンカしている。

「ベル、大丈夫だったか。さて——俺はと……」

最初に冷却で落とした蜂のところへ行くと――やはり、まだ生きている。

当然、生かして利用するために、このようなことをしたわけだが――。

アイテムBOXから、ペラペラの荷紐を出して、2mほどにカット。蜂のくびれに結びつけた。

これがなにかといえれば吹き流しである。

「旦那！ そいつはまだ生きてるぜ？」

「ああ、生かしておいたんだ。すぐに生き返って巣に逃げ帰るだろう？ この紐を目印に追いかけて、こいつらの巣を見つけてくれ」
近くにこんな奴らの巣があったんじゃ、危なくて川を下れない。
水の上じゃ逃げ場がないからな。

「なるほどにゃー！ ケンイチはずる賢いにゃー！」
人聞き悪いな。

「巣の場所が解ればいいから、無茶はしなくてもいいぞ。この紐はかなり遠くからでも見えるからな」

普通の人間なら迷う森の中を走り回っても、獣人たちなら匂いで戻ってこられる。

「ふーん、おもしれえ」

「他の魔物などがいたら、深追いしなくてもいいからな」

「がってん」

「にゃ」

アネモネと、リリースも部屋から出てきた。

「このような巨大な蜂がおるとは……それでケンイチ、巣を見つけてどうするのじゃ」

「一網打尽にする。そのときは、アネモネの魔法の出番だ」

「うん！ 任せて！」

俺の作戦どおりに生き残った蜂を放置して、家の陰に隠れる。

こいつが再び襲ってきたら、この作戦は失敗。すぐに処理する。

俺の心配をよそに、蜂は目を覚ますと、一目散にその場を離れ始めた。

森の木々の間を、白い吹き流しが飛んでいく。

「よし、追ってくれ」

「よっしゃ！ 任せろ！ こういうのは得意だぜ」

「任せるにゃ」

トランシーバーを持った獣人たちが、森の中を走り出した。

143話 蜂の子

湖から流れ出る川を見つけたので、2日ほど下り、川の測量をすることにした。

川はほぼ平坦で、流れは激しくない。このまま大湿地帯を流れて、アニス川に合流するに違いない。

ドローンを上げてみたが、森で隠れており高度100mほどでは、あまり先までは解らないようだ。

順調に川を下りながら、測量を続けていたのだが、突然巨大な蜂に襲われた。

全長が50cmほどで、黄色と黒の縞模様——元世界のスズメバチを彷彿させる。

槍のように突き出た尻尾の針と、強靱な顎を持つ、凶悪な昆虫だ。多分、刺されたら即死だと思われる。

シャングリ・ラから購入した殺虫剤と、獣人たちの必死の突撃で、巨大蜂を撃破。

1匹だけ残して、巣の在り処を突き止める作戦に出た。

仮死状態にした蜂の胴体に、吹き流しを括り付けて、敵のアジトを突き止める。

森の木々の間を、ひらひらと飛ぶ白い吹き流しを追っかけて、獣人たちが走り出した。

「いくぜ!」「にゃー!」

森の中での獣人たちは、実に生き生きしている。元々こういう森の中が、彼らの生息地だったみたいだからな。

木の上に家を造り、大家族で住む——そういう種族だったらしい。

「あの者も立ち直ったようじゃな」

「ニャメナかい？ ああ、クラーケンのあと、めっちゃくちやびびってたんで、ちよっと心配だったが、あの手の魔物が苦手なんだろう。触手に刺されたとか言ってたこともあったし」

俺は、転がっている蜂の死体をアイテムBOXに入れた。

表示されているアイテム名は——キラーホーネットとなっている。

「こんな巨大な蜂がおるとはの」

「王都の周辺ではないのか？」

「おらぬ。普通の蜂なら、王宮に巣ができたで大騒ぎになったこともあったが……」

「これは、キラーホーネットだな」

「ほう——これがキラーホーネットかえ。書庫の本で読んだの」

「解りやすいいえば、殺人蜂とか殺し屋蜂とかが近いと思う」

「まさに、聞いた千より、見た一じゃな」

日本語だと、百聞は一見にしかずか——。

コンテナハウスにも上ってチェックする。

貫通はしてないが、黒い鉄板がボコボコだ。そんなに厚い鉄板じゃないからな。

同じ所を攻撃されたら、貫通したかもしれない。

齧られた跡も残っている。

「やべえー、あんな顎に食いつかれたら、首がもげるな」

さすが異世界、死が近すぎるが——ずっと街にいて、こんな場所に来なければ安全なのだ。

コンテナハウスをチェックしていると、トランシーバーで連絡が入った。

『旦那、見つけたぜ』

「一旦、帰ってきてても、また同じ場所に行けるか？」

『大丈夫にゃ』

「それじゃ一旦、戻ってきて飯にしよう」

『解ったにゃ！ クロ助！ 俺がしゃべってるんだろが！ うにやー！』

通信が切れた。トランシーバーの取り合いをしていたようだ。

「蜂の巣をどうするのじゃ」

「当然、始末する」

「明日か？」

「いや、夜中だ」

「なに？！」

蜂ってのは夜に飛ばないし、全部が巣に戻る。

「夜に巣に戻ったところを、一網打尽にする」

「そなた中々あくどいのう」

「また、人聞きの悪い」

家族を守るためだ。虫や魔物なんて、全滅させる覚悟でするさ。

リリスと話していると、獣人たちが戻ってきた。

「旦那、すげえデカイ巣があったぜ！」 「うにゃ！」

彼女たちの話によると、木々の間に巨大な茶色の巣を作っていたようだ。

「やっぱり蜂がデカいと巣もデカいのか――」

「それで、明日やるのかい？」

獣人たちにも、リリスに話したのと同じ作戦を説明した。

「そんなの俺たちには思いつかないよな」「真正面から戦うことしか思いつかないにゃ」

「そんな力押しじゃ、勝てるものも勝てないだろ」

時間は夕方4時頃をまわり、辺りは暗くなってきた。

夜に襲撃をかけるし、腹が減っては戦はできぬ。飯にする。

マスが残っているの、あれを食べよう。下ごしらえをしている間に、アネモネにパンを焼いてもらった。

3枚におろしたマスを焼いて、身をほぐす。

それを醤油少々とマヨネーズで和えて、白胡麻と青紫蘇を刻んで入れる。

できあがった和え物を、パンに載せて食う。

スープは昆布だしに、岩塩と卵を入れた卵スープにした。これが簡単で美味しい。

「あ、しまった！ お前らの好みを聞かないで、青紫蘇を入れちゃった」

「その香草のことかえ？」

「ああ、まあ口に合わなかったら、別のやつを作ってやるよ」

「旦那の作るものに、ハズレはないような気はするけど」「そうにゃ」

「ええ？ 蜘蛛の卵とか食わないじゃん？」

「あれは……ちょっと勘弁してくれよ」

獣人たちが露骨に嫌そうな顔をする。まあ、無理に食わせるつもりはないし。

「美味しいのにな」

「ほんにのう——じゃが、これも食べてみねば解るまい——んぐんぐ。ほう！ これは変わった香草じゃの！」

「うひょーこれもうめー！」「にゃー！ 魚なんて焼いてまるかじ

りぐらいしか知らないにゃ」

青紫蘇は大丈夫のようで、安心した。

「この沢山入っているつぶつぶは？」

アネモネは、胡麻のつぶが気になるようだ。

「アネモネ、それは草の種だよ」

「この種も香ばしくて美味しいのう」

「それは栄養もあるんだよ。油も採れるしな」

「この種も畑で栽培したら面白いのではないかえ？」

「ああ、良いかもな――胡麻とか紫蘇なんて、いくらでも増えるし」
簡単に増える紫蘇だが、野良になると臭くて食えないことも多い。

「旦那……」

ニヤメナが物足りなさそうにしている。

「夜に戦闘するかもしれないんだぞ？」

「大丈夫大丈夫」

「それじゃ、エールを1本だけな」

「うひょー！」

ビールの缶を受け取ったニヤメナが、早速プルトップを開けて、
グビグビやり始めた。

「くそー！ うめー！」

ニヤメナが口についた、泡を拭う。

「トラ公がへマしてくたばれば、ケンイチはウチのものにゃ」

「おまえなーそういうこと言うなよなあ」

「言うに決まってるにゃ」

ミヤレーは半分本気で言っているのが怖い。

飯を食い終わったので、皆で焚き火を囲む。

今日はここでキャンプだ。湖から10kmほどマッピングしたことになる。

そのまましばらく話していると、辺りはすっかりと暗闇に。

湖の畔は月の光があつて、湖面に反射したりするので明るく感じるのだが――。

森の中が真の闇に沈む頃、俺たちは行動を開始した。

足下を照らす明かりが必要なので、アイテムBOXから以前購入したヘッドライトを取り出す。

リリスの分も必要なので、その分は新規にシャングリ・ラから購入した。

乾電池でLEDが光るタイプだが、凄く明るいし、ランタンと違い両手が使える。

「ほう！ 魔法の光かえ？ これは明るい！」

「ニヤメナとミャレーはどうだ？」

「十分に見えるから、要らないよ」

「そうだにゃー」

獣人たちの夜目からすると、十分に見える明るさらしい。

「旦那――ちょっと、こっちを見ないでくれよ、その光は目が眩むから」

「悪い」

暗さに目が慣れているので、LEDの光が眩しいようだ。

コンテナハウスを収納すると装備を整え、身体に殺虫剤を巻きつける。

俺たちは暗闇の中、蜂の巣へ向かった。

「場所は解るのか？」

「旦那、大丈夫だよ」「にゃ」

暗い中を縦に並んで歩くが、足下がまったく見えない。下をLEDライトで照らしながら進む。

自分たちの臭いが残っているので、獣人たちはそれを追っていくらしい。

ミヤレーは2ストバイクのオイルの臭いを辿って、俺を追っかけてきたりしたし、そのぐらいはわけないってことか。

アネモネは一人で歩いているが、リリスはずっと俺にしがみついたまま。

「そなたたち、怖くはないのかえ？」

「まあ慣れたよ」

「私も」

人間、なんでも慣れるものだし、それなりに経験を積んだからな。

「お姫様——貴族の奥方が、こんな怖い思いをしなくてもいいだろう？」

そのニヤメナの言葉に、リリスが反応した。

「このぐらいのことで、へこたれていては、ケンイチの近くにはおられん！」

「その気持ちはありがたいが、本当に危険になったときに、リリスを守り切る自信がない」

「そのときは、そのときじゃ！ 妾はそれで満足じゃぞ？」

「あ——」

俺は言葉に詰まる——この世界は強情な女性が多い。とにもかくにも、話を聞いてくれないで行動に移してしまう。

たまたま、そういう女性が集まっているだけなのかもしれないが……。

少々悩んでいると、件の場所に到着した。

「旦那、着いたよ」

50m程先の木の間に巣があるらしいが、真っ暗でなにも見えん。アイテムBOXから、ナイトビジョンを取り出して覗く。

緑色の視界の中——大木の間に縦に伸びる巨大な巣が見えるが、周りに飛んでいる蜂は、まったく見えない。

俺の目論見どおりに、敵は寝ているようだ。

「私にも見せて！」

アネモネにナイトビジョンを貸すと、覗き込んでいる。

「すごい！ 大きい！」

「妾にも見せてたもれ」

リスがナイトビジョンを覗き込んでいると、ニヤメナがそわそわしている。

「それで旦那、これからどうするんだい？」

「アネモネの魔法を使う」

「爆裂魔法で吹き飛ばすにゃ？」

「いや違う——加熱するんだ」

「魔法で温めるの？」

俺の言葉に、アネモネも不思議そうな顔をしている。

「熱くて入れないお風呂ぐらいの温度にしてくれ。あの大きな巣を全部だが——できるか？」

「多分、大丈夫」

爆裂魔法だと、散らばった蜂や幼虫が生きている可能性があるし

——燃やせば確実だと思うのだが、森が火事になったら大変だ。

それに、ちょっと考えがあるのだ。

「よし、念の為に――」

俺は、アイテムBOXからコンテナハウスを出した。
皆で入り、箱の中から魔法で狙撃する。

「ほう、これなら、万が一蜂に囲まれても安全じゃの」

「こんなの旦那だけだよ。普通は、もっと命がけになるんだぜ？」

「そうにゃ」

「せっかく使える能力なんだから、どんどん使わんとな――アネモネやってくれ」

「わかった！」

アネモネは窓を開けると、ナイトビジョンを覗き込み、魔法を使い始めた。

「むー！^{ウォーム} 温め！」

俺もナイトビジョンを追加購入して覗く。

緑色の景色にキラキラと輝く光の粒子が沢山映っている。

カメラのセンサーにも映るってことは、物理的に起きている現象なんだよなあ……。

大きな巣の側面には出入り口と思われる黒い穴が開いているが、そこから蜂が這い出てくる様子はない。

タダの温めの魔法なので、20分ぐらいかけ続けてもらった。

火をつけると周りから加熱されるが、魔法の温めは電子レンジに近く、内部も同時に加熱される。

おそらくは魔法で原子を振動させて、熱を発生させているのだろう。

逆に原子の振動を抑えれば、冷却されるわけだ。

「よしアネモネ。もういいよ」

「ふう……」

「旦那どうなったんだい？」

「多分、全滅したと思うけどな」

「本当かい？」

獣人たちは信じられないようだが、生物を構成しているタンパク質は、45度辺りから変質を始める。

料理でいう――火が通るってやつだな。

前に食べた低温調理でも、十分に火が通っていた。

「巣が冷えるまで30分ぐらい待とう」

「オツケーにゃ」

コンテナハウスのベッドに寝転び、まったりと待つ。

アイテムBOXからブラシを出して、獣人たちの毛皮にブラシがけをしてやる。

ベッドの下には、ベルも香箱座りをしているが、緊張している様子もないので危険は感知していないのだろう。

彼女の様子から見ても、俺の作戦は成功したように思われる。

「ふにゃー、まだ敵との決着がついてないのに、こんなにまったりしていいにゃ？」

「ここから見ても、蜂どもが這い出てくる様子ねえし、大丈夫なんじゃね？」

「ふにゃーん」

ミヤレーが起き上がると、俺に抱きついて、尻尾を腕に絡める。

「こらこら、調子に乗るんじゃない。まだどうなっているか解らないんだぞ」

「そうだぞ、クロ助」

「ふんにゃ」

時間がきたので、俺だけ外に出て準備をする。

LEDランタンを点灯して、テキストに投げて周囲を照らすと、目の前に浮かび上がる茶色な巨大な巣。

縞模様の壁に出入り口の黒い穴がポツカリと開いているが、相変わらず反応はない。

「よっしゃ！ コ〇ツさん召喚！」

暗い空から黄色い車体落ちてきて地響きを立てる。

こいつは、剣装備型ではなくて、普通のバケットタイプだ。蜂の反応はないので、すばやく重機に乗り込む。

コ〇ツさんの運転席はガラスで囲まれているので、蜂が来ても多少は平気のはず。

エンジンを始動させて、アームを振り上げても、巣は静かなまま。かなりの騒音のはずで、中で生きているなら出てきてもおかしくはないだろう。

巣にバケットを食い込ませて、破壊する。コンクリートも砕く、鋼鉄の爪だ。デカいだけの蜂の巣なんて、どうってことはない。

ダンボールを引き裂くような音を立てて巣が崩れると、中から蜂の死体が滝のように落ちてくる。

巣の中には、棚状になった巣の本体が見え、白い卵か幼虫らしきものが沢山並んで見える。

「やっぱり、全部死んでたか」

コ〇ツさんのアームは高さ9mほどまで伸びる。

そのバケットで、巣をすべて崩し、地面へ落とした。

「ふう……」

深呼吸すると、重機のエンジンを停止させて、運転席から降りる。

地面には、茶色いダンボールのような巣の残骸と、黄色い巨大な蜂の屍^{かばね}。

棚状の巣には白い卵と幼虫、茶色のサナギも並んでいて羽化に近いものもある。

転がっている蜂に蹴りを入れても、全て死んでいてピクリとも動かない。

作戦は成功だが、蜂の巣と聞いてちょっと期待していた物があつたのだが、それがなかった。

蜂蜜だ。

こいつはスズメバチのような肉食の蜂なので、蜜はないのだろう。残念……。

「おい！ 大丈夫だ！ みんな死んでいる」

コンテナハウスから様子を見ている皆に合図を送ると――俺は、コ○ツさんをアイテムBOXに収納した。

「本当に死んでいるのかえ？」

リリースが、おそろおそろやって来た。

「ああ、間違いない」

「うわぁ――本当にやっちゃまうなんて……」

「にゃー」

「アネモネ、ありがとうな」

「うん！」

アイテムBOXからパレットを出す。

獣人たちに手伝ってもらい、蜂の死体をパレットに山積みにしてもらい、縄で縛るとアイテムBOXに収納する。

全部で90匹ほどの成虫だが、先に入れた10匹と合わせて100匹前後いたことになる。

その中に、ひとときワカいのがいる――女王蜂だ。

体長は、およそ1.5m。

「デカイ！ 怖すぎるだろう」

「この蜂は、どうするのじゃ？」

リリースがパレットに縛りつけられている蜂を、こわごわと見ている。

「なにかの素材に使えるかもしれない。甲殻は軽くて丈夫そうだし、細かく切って、スケイルメイルみたいにしても面白そうかも」

「なるほどのう」

残るは、棚状の巣と卵。触てみると、ぷよぷよと柔らかい。

ゆで卵にはなっていないようだ。これなら色々と使えるかも。

試しに、アイテムBOXに入れてみると――そのまま棚ごと収納された。

「よっしゃ、うまくいった」

「旦那、蜂が素材なのは解ったけど、卵や幼虫はどうするんだよ」

「もちろん、食う」

そのために、わざわざこんな回りくどい倒し方をしたんだ。

その前に、これが一番安全そうな倒し方でもあったし。

「食うのかよ！」

「蜂の子は美味いぞ？」

「食うのかよ！！」

「大事なことなので、2回言ったにゃ」

その場へニヤメナが、バタリとうつ伏せに倒れた。

「ああ、なんで俺は、こんな旦那を好きになっちゃったんだろう」

「別に、ニヤメナに食べろとは言っていないぞ」

倒れているニヤメナの背中をなでる。

「そうだけどさあ」

巢の破片に近づいて、クンカクンカしていたベルが、顔を上げて耳を立てた。

「どうしたお母さん？」

「ケンイチ、なにか来たにゃ」

「ええ？ またかよ」

「旦那、魔物じゃないような感じだぜ？」

ニャメナの言葉に、アイテムBOXからナイトビジョンを取り出す。

機械を覗いて見えたのは、緑の景色の中に白い人影——耳が大きい。

「もしかして、エルフかもしれん」

「げ！ こんな所でエルフかよ！」

相手を見て、アキラから借りたエルフと話せるという指輪を思い出し——俺はシャングリ・ラから、電池式の拡声器を購入した。

運動会などで使われるメガホン型のやつだ——2500円也。

『あゝあゝ！ 本日は晴天なり本日は晴天なり！ アメンボ赤いよあいうえお！』

「なんじゃそれは！」

リリスの突っ込みは無視して、エルフたちと会話を試みる。

彼らと話せるという指輪は借りたが、拡声器越しでも話しが通じるのだろうか？

『とりあえず、やってみるか——えゝ！ エルフの皆さんこんばんは！ 我々は敵ではありません！』

少し喋ったところで、なにかが飛んできたので、避けた。

ドス！ という音とともに地面に刺さったのは、縞々の羽がついた矢。

「とりあえず退避〜！」

「「わあ〜」」

LEDランタンも放置したまま、皆で走って、コンテナハウスの中に逃げ込む。

鉄板で囲まれたここなら、矢は貫通しないだろ。

「アネモネ、奴らとの真ん中に、ちょっと弱い爆裂魔法を撃ち込め」

「うん、むー！ 爆裂魔法（中）！」

暗闇の中に青い光が輝き、爆炎の光が辺りをオレンジ色に照らす。爆発の光で人影が見えた。10人ほどいる感じた。

俺は再び、拡声器を使って話しかけた。

『聞こえるか?! 俺たちが敵なら、今の爆裂魔法で^{エキスプロージョン}お前らは全員吹き飛んでたぞ!』

「随分と過激な交渉じゃの」

「話し合いもせずに、先に撃ってきたのはやつらだからな。こちらの戦力を見せつけるしかないだろ？」

「エルフも魔法を使うぞえ？」

まあそうだろうな。この世界のエルフに会ったのは初めてだが、魔法が得意なはずだ。

「アネモネ、魔法の反応はあるか？」

「ないよ」

「デカイ魔法が来そうだったら、至高の障壁^{ハイプロテクション}を頼む」

「うん」

しばらく反応をみていたのだが、静かなまま動きはない。ナイトビジョンで観察していると、円陣を組んでなにか話し合いをしているようだ。

突然の訪問客に面を喰らっているのかもしれない。

「エルフって攻撃的なのか？」

「すごく排他的なのは、確かだよな」「にゃ」

こちらも皆で話し合いをしていると、ベルが窓を気にして前脚でカリカリしている。

「ん？　ベル出たいのか？」

窓を開けてやると、ぴょんと窓枠に脚をかけて、彼女が外へ飛び出した。

この状況でちょっと心配したのだが、彼女は賢い。なにかわけがあるのだろう。

黙って見ていると、ベルはそのままエルフのほうへ歩き始めた。

攻撃されるんじゃないかと、ハラハラしていたが、大丈夫のようだ。

彼女はエルフたちに囲まれて、なにやら会話しているようにも見える。

人間とは話せないが、なにかコミュニケーション手段を持っているのだろうか？

しばらく待っていると、彼女と一緒に一人の人物がやって来たので、会談の舞台を設置する必要がある。

俺は窓から——コンテナハウスの周りに、LEDランタンを何個か放り投げた。

輝き出したLEDの光で、辺りがうっすらと明るくなる。

浮かび上がった人物は——金色の飾りをつけた緑色のチャイナドレスのような服を着ているが——男か女か解らん。

髪は金色で肩まで伸びたストレート。

細長い目に長い耳、絶世の美女か、それに引けを取らない美男か。

武器は、なにも持っていないようなので、俺も外に出ることにした。

「皆は中で待っててくれ」

「旦那、大丈夫かよ」「にゃ」

「大丈夫だ、心配するな」

不安げな家族をコンテナハウスに残し――暗く、足下だけがLEDの光で照らされている草の中へ降り立つ。

目の前には、ファンタジー世界の肝ともいえる美しいエルフ。肩幅が広いようなので、男かもしれない。

エルフがいるとは聞いていたが、やっと彼らに会えるとは。

ちよつと行き違いはあったが、なんとかファーストコンタクトを成功させなくてはいけません。

だったら魔法を撃つなよって話なんだが、敵意100%の相手だと交渉もクソもないからな。

俺が、エルフの前に立つと、ベルが足下にやって来て、スリスリとしている。

彼らとの仲介をしてくれた彼女に感謝しなくてはならない。

「俺は、カダン王国貴族、ケンイチ・ハマダ辺境伯だ」

俺とエルフとの交渉が始まった。

144話 エルフたち

森の中で、蜂の巣を駆除していたら、エルフがやって来た。

いきなり攻撃を受けて焦ったのだが、ベルが話をつけてくれたようだ。

まったく頼りになるお母さんだ。

目の前に、俺より背の高い、女か男か解らんイケメンが立っている。

キラキラのパツキンで脚は長く針金のように、袖のない緑色のチャイナドレスのような服を着て——俺のよく知ってるエルフと同じように、耳が長く尖っている。

ここまでイケメンなら、さぞかしモテて、人生イーजीモードなのだろう。

などと、オッサンのコンプレックスを爆発させている場合ではない。

腰に巻いた帯に細身の剣とナイフを装備しているが、矢で射られたので、弓も持ってきているのかもしれない。

俺は交渉をするために、ドアから出てエルフの前に歩み出た。

「俺は、カダン王国貴族、ケンイチ・ハマダ辺境伯だ。敵意はない」「王国の貴族？ 我々の言葉が通じるのか？ それはさておき、いきなり大魔法を撃ってにおいて、よく言う」

よく通り、低く澄んだ声——男だな。

彼の話聞く限り、拡声器を使った声は、向こうに通じていなかったらしい。

「いきなり矢で射られたのは、こっちが先だったか？」

「そちらが、我々の縄張りに侵入したからだ」

「それはすまなかったな、まさかここにエルフがいると思ってもしなかったのだ」

棘のある言葉の応酬をしていると、ベルが怒り出した。

大きな口を開けて、白くて鋭い牙を見せている。

「シャー！」

「おっと、お母さんごめんよ」

彼女が怒るなんて滅多にないので、少々ビビったのは内緒だ。

「む……」

ベルの一喝に、エルフもおとなしくなった。

「言葉が通じるのは、この指輪があるからだ」

俺は、アキラから借りた指輪を見せた。

「む——それは……すでに他の部族と交流があるということか……」
この手のアイテムは、かなり仲が良くないと、もらえないらしいからな。

俺がもらったわけではないので、インチキだが。

「湖の一角が俺の領地になったので、周辺の測量をしていただけだ。
エルフの土地をどうこうするつもりはない」

「湖の周辺は、昔から子爵領だったはずだが……」

「最近、割譲されて、ハマダ边境伯領となった。俺の村には元王族もいる」

「むう……」

エルフがなにやら考え込み——俺の後ろにあるコンテナハウスをチラ見している。

すごく若く見えるが——この世界のエルフも長寿だと聞いていたので、この男も俺よりかなり年上だろう。

「その後ろの鉄の箱は？　どこからそんなものを運び込んだ」

「俺はアイテムBOX持ちだからな。コレは、天幕代わりに使っている、俺たちの部屋だ」

「アイテムBOX持ち？　うむ……」

なにやらコンテナハウスに凄い興味があるらしい。好奇心旺盛だな。

「中を見てみるか？」

俺はドアを開けて、エルフに部屋の中を見せた。エルフが近くに来ると、草のような匂いをする。

「本当に部屋だな。む——獣人もいるのか？」

「ああ、大切な家族だ」

「こんな大きなものがアイテムBOXに入るというのか？」

「もちろん」

部屋の中にいた皆に、一旦外に出てもらい、コンテナハウスを収納する。

「ケンイチ——」

リリスとアネモネが心配そうな顔をしている。

彼女たちには通訳の指輪の効果が及ばないので、話は聞こえていないのだろう。

「大丈夫だよ、心配するなって——収納！」

「おおっ！　こんな巨大な物が入るとは！　信じられん」

「貴族といっても、貴族になりたてでな。元々はこのアイテムBOXを使って商人をしていた」

「商人？ 商人から成り上がったのか？」

「そのとおり。アイテムBOXには商品も詰まっているから、なにか欲しいものがあれば、都合するぞ？」

「いくら商人といっても、只人が持っているわけが……」

只人ってのは、普通の人——つまり人間のことだ。エルフってのは人ではないらしい。

「まあ、とりあえず言ってみなよ。そのものはないかもしれないが、なにか代替品があるかもしれん」

「それでは、期待しないで言うが、我々の食生活を支えるのに必須なもので『チェチェ』という——」

チェチェ？ ああ、アキラから聞いたな、エルフが大事にしている健康食品みたいなものだ。

それは、つまり——カカオだ。

俺は、シャングリ・ラから、カカオパウダーと、カカオニブを購入して、彼らに差し出した。

ビニール袋の中に茶色の粉が入っているが、アキラの話では、この世界のカカオは赤いと言っていたような。

「ちょっと種類が違うかもしれないが、これが近いと思う」

「こ、これは！？」

エルフの男は、腰からナイフを取り出すと、ビニール袋を切り裂いた。

溢れた茶色の粉を手にとると、舌でぺろりと舐める。

「色は違うが、まさしく、チェチェだ！」

「まあ、種類は違うだろうが——エルフのチェチェを飲んだやつがいてな。色は違うが同じものだと言っていたから、使えるはずだ」

「うゝむ……この透明な袋は？」

「それは、俺が魔法で作りに出したものだ。虫の翅などと似たような

ものだと思ってくれればいい」

「なんと……」

男のエルフは、ビニール袋を持って仲間の所へ行くと――俺たちが蜂の巣を破壊した所で円陣を組み始めた。

俺が放置したままのLEDランタンの明かりに照らされて、エルフたちの姿が浮かび上がっている。

フェアリーサークル――その姿は、まるで森の妖精たちの集会だが、どうするか話し合いをしているのだろう。

話し合いが終わると、さっきのエルフが俺の所へやってきた。

「お前を村に迎えて、族長と話をしてもらいたい」

「構わんよ。家族も一緒にいいか？　ここに残しておけない」

「認めよう」

家族と話す。俺とエルフの会話は、皆には聞こえていないからな。

「エルフの集落へ向かうことになった、皆も来ていいようだから、一緒に行こう」

「へえ！　あの排他的なエルフが迎えてくれるなんて。旦那、どんな魔法を使ったんだい？」 「にゃ？」

「彼らはチョコが欲しいみたいなんだ」

「え？　チョコがほしいの？」

アネモネが、俺の言葉に少々驚いている。

「確かに、エルフたちもチョコに似たようなものを食すと聞いたが……」

「そうなんだよ、リリス。なにかの理由で、手に入らなくなったのかもしれない」

「ほう――そこにつけ込むわけじゃな」

リリスが、悪い笑みを浮かべているのだが、もちろんそんなこと

をするつもりはない。

「そんな人聞きの悪い」

「それよりもケンイチ！ そなた、エルフの言葉も喋れるのかえ？」

「そうだよ旦那。俺も驚いたよ」

「まあな——と言いたいたいところだが、この魔導具のお陰だ」

俺の指にはまっている、翻訳の指輪を皆に見せた。

「その指輪をはめると、エルフの言葉が解るのかえ？」

「ああ、アキラから借りたものだが、エルフだけじゃなくて、野良のドワーフたちの言葉も解るらしいぞ？」

「それじゃ共通語を話せない、獣人の部族たちとも会話できるにやミヤレーが面白いことを言い出した。

「街に住んでない獣人って、言葉が通じないのか？」

「ああ、本当の森の奥地に住んでいる部族なんかは、獣人語を話しているぜ」

へえーそうなんだ。普段話している言語は、共通語と言われる言葉らしい。

皆を連れてエルフのところへ行く。

「俺の正室のリリスだ。こちらは、ウチの大魔導師のアネモネ。獣人たちは、ミヤレーとニヤメナ」

「貴族なのに、獣人たちと一緒になんてなあ。只人のくせに変わってるな」

「こんな森の奥地に正室まで連れてきているのか？」

エルフたちが、次々と遠慮なしに色々と言ってくる。全員が耳の長いイケメンだが——結構、馴れ馴れしい。

背丈はまちまちだが、皆が緑色のチャイナ服みたいなものを着ている。

「どうやら、これが民族衣装らしい。これで、少々胸が出てたら女と言われても勘違いしそうだ。」

「話すと声が低いので男っぽいのだが、ハスキーボイスの女性もいるからな。」

「一緒に生死を共にするのも、妻の役目だと言うんだ」

「ふーん、貴族の奥方なんて、屋敷で贅沢三昧なんてのが相場みたいな感じがするけど」

「そちらの子供が爆裂魔法を使ったのかい？」

「背の高いイケメンエルフに囲まれて、アネモネがビビっている。」

「ウチの大魔導師様だよ」

「おっと、そいつは失礼、ははは」

「ケンイチ、なんて言ってるの？」

「アネモネには、エルフの言葉は通じてないからな。」

「若いのに爆裂魔法エクスプロージョンを使えて、凄いつて言ってる」

「うん！」

「アネモネは喜んでいるが、まさか直訳するわけにもいくまい。」

「リリースは？ エルフに会ったのは初めてかい？」

「無論じゃ。エルフなど、余程の変わり者以外は、滅多に姿を現さぬからの」

「周りに放り投げたままだった、LEDのランタンを回収する。」

「こいつは安いし、電池で点灯するので便利だ。」

「ランタンをアイテムBOXに収納していると、ちょっと少年風で髪髪の短いエルフが話しかけてきた。」

「そいつは、なんの光で光ってるんだい？」

「これは魔道具だが、特殊な魔力を使っているので、俺にしか使え

ない。詳しくは説明できないが」

「ふうん、これをくれと言っても無理なんだろうな」

「すぐに魔力切れを起こして、光らなくなるし、俺にしか充填できない」

「なるほど……それにしても、森猫を従えているとは……」

「彼女は、俺の本妻だぞ？」

「にゃー」

それを聞いた、エルフたちが――え?! という顔をした。

あまり、いい冗談ではなかったようだが、否定するつもりもない。ベルの顔もドヤアって顔だ。

「あんたが、そういう趣味なのは解った……ところで、ここには殺人蜂の巣があったはずだけど？」

ちよつと誤解されてしまったようだが、エルフたちもここに蜂の巣があったのを知っていたようだ。

「俺たちが破壊したぞ。蜂や幼虫はアイテムBOXの中に入っている」

アイテムBOXから、蜂の成虫を出すと、彼らが驚いて飛び上がる。

「うおっ! 本当かよ」

もう1人のエルフが、横から入ってくると、交渉を持ちかけてきた。

少々垂れた目をした、髪の長い男。イケメンといっても、ハンコみたいな顔ばかりかと思ったら、意外と個性があるもんだな。

整形イケメンじゃ、こうはいかない。

「幼虫や卵を譲ってもらうわけには……?」

「エルフも、その手のものを食べるのかい? それなら構わないが」

——魔法で温めたので、多少火が通ってしまったっているかもしれないぞ？」

「それは構わないさ」

イケメンが、ちよつと手を広げる。

「それじゃ決まりだな、君たちの集落にいたら、アイテムBOXから出すでしょう」

「ふくん、アイテムBOXってのは、便利な代物だねえ……」

「エルフでアイテムBOXを持っているやつはいないのか？」

「ウチの集落じゃないね。あれば便利なんだけどね」

皆でエルフの集落に向かうことにしたが、距離が3〜4kmほど離れているらしく——小さな湖の畔にあるという。

彼らの話からすると、俺たちが下ってきた川が窪地に溜まり、湖になっているのだろう。

「ちよつと距離があるな……」

「旦那、俺たちが背負っていくかい？」

獣人たちからの提案だが——見れば、高い木に囲まれた森の中なので、下草があまりない。

エルフたちに質問を試みる。

「ここから集落までは平坦かな」

「そうだ」

俺は川のほうを指さした。

「向こうを流れている川って、どこへ向かっているか解るか？」

「下流がどうなってるか？　ってことか？」

「そうだ」

「大湿地に入り、そのまま大きな川に流れ込んでいる」

大きな川ってのは、王都から流れてきているアニス川のことだろ

う。

やはり、湖とアニス川は繋がっていた。それなら魚がいてもおかしくない。

詳しい測量は不可能だが、川の行く先が解っただけでも収穫だ。

ちょっと謎が解けた俺だが、このまま歩いてついていくのは、少々キツイ。

幸い平地のようだし、木々の間もそれなりに間隔がある。

これなら車で行けると判断して、アイテムBOXからラ○クルを出した。

「よっしゃ、ラ○クル召喚！」

森の中に、白いSUV車が落下してきた。

「皆、乗り込め、歩いて行くのはタルいから、こいつで行こうぜ」

「わーい」

「うむ、そうじゃな」

獣人たちにはどうってことがない距離だし、アネモネも平気だが、王族のリリスは体力的にしんどいだろう。

「にゃー」

ベルと、獣人たちも車に乗り込んだ。

皆でラ○クルに乗り込むと、エンジンを始動——ヘッドライトを点灯する。

白いまばゆい光が、森の中を明るく切り裂く。

「な、なんだそりゃ！」 「おおっ?!」

エルフたちが驚いて、ラ○クルの周りに集まってきたので、窓を開けて説明をする。

「俺が召喚した、忠実な俺の下僕——鉄の召喚獣だ」

「鉄？」「本当なのか？」

エルフたちが、ラ○クルのボディをボコボコと蹴り始めた。

「おい、こら！？」

俺は、クラクションを思いっきり鳴らした。

「「「おわわああ！ 怒ったあ！」」」

大きな音に驚いたエルフたちが腰を抜き、暗闇の中に隠れてしまった。

なんだか俺が持っているイメージのエルフと随分と違うんだが……これがリアルエルフか。

ボディは少々凹んだが、こんな異世界で使えば凹むのは仕方ない。

「おおーい！ どうでもいいが、エルフたちの集落へ案内してくれよ」

俺の言葉に、そーっと暗闇から出てきた彼らが、ラ○クルの前を歩き始めたので、それについていく。

ほとんど、ATのクリープ現象だけでの移動だ。荒地地でもないので、デフロックの必要もない。

髪の毛の短いエルフが、運転席の所へやってきた。

「おい、これって馬なしで動いているけど、本当に生きているのか？」

「ああ」

「あんたも魔導師なのか？」

「まあ、一応そうなんだが、ちょっと変わってるからなあ」

俺とエルフの会話に、窓から顔を出したニヤメナが割り込んできた。

「この旦那はな！ 洞窟蜘蛛を退治して、レッサードラゴンを退治して、ワイバーンも退治したんだぜ！」

「そうだにゃ！」

言っても通じないので、俺が通訳をする。

「レッサードラゴンに？ ワイバーン？ 本当かよ?!」

「まあ本当なんだよ、レッサードラゴンとワイバーンの肉は、まだ残ってるぞ？ 食べてみるか？」

「俺たちは、あまり肉は食わないからなあ」

そうなのか。でも虫は食うらしい。虫が貴重なタンパク源ってわけのようだ。

確かに、あのデカイキラーホーネットなら、食いごたえがありそうだが……。

森の中をそのまま進み、焚き火が燃えるエルフの集落らしき場所へやってきた。

集落の手前で一旦停止する。

「族長と話をしてくるから、ここで待っててほしい」

「承知した」

皆で車から降りると、ラ○クルをアイテムBOXに収納した。

真っ暗なので、LEDランタンを取り出して点灯させる。

「ほえー、エルフの集落まで来ちまうなんて」「信じられないにゃ」

「森の中で、彼らに会うことは少ないのか？」

「見かけるけど、みんな近寄らないよ」

「そうだにゃ」

「森を荒らしていると見なされると、奴らに捕まって戻ってこなくなった連中もいるし……」

意外と剣呑な種族のようだな。剣も弓も使えるし、魔法も使える

だろう。

戦闘能力は高いはずだ。

家族と話していると、エルフが呼びにやって来た。

「族長がお会いになるそうだ」

「俺の家族も集落に入っているのか？」

「もちろん」

広場の中心で火が焚かれ、オレンジ色に染まっている場所へ皆で入っていく。

広場を中心に、茅かやのような長い草で作られた掘っ立て小屋のような家が並ぶ。

全部、手作りっぽいな。

「こんばんは」

エルフの数は30人ぐらいか。俺たちの所に来たのは全部男だったが、女もいる。

なるほど、男女が並ぶと女はすぐに解るな。

少々胸があるし、服のデザインが男と違うのですぐに解る。

胸の中心が開いた物を着ているのが女だ。

当然、全員金髪で耳が長くて、美男美女揃い。

素肌に着を羽織っているだけなので、皆が生足である。

「きゃー只人だって！ 久々に見たあ」 「なんか小さい子供がいるう」

「可愛い」

俺には、女たちの会話が聞こえるが、俺の家族はまったく解らないようだ。

一番大きな家に案内されたが、ここも草でできている。

玄関の所に家族を待たせて、俺はゴザのような布の扉をめくると、

家の中に入った。

中は外のオレンジ色とは違い、青い光で満たされている。

凸凹した板の間に、草の壁と天井。その奥——一段高くなった場所に、1人の男が胡座で座っていた。

長い髪の男のエルフ。チャイナのような青い服に、肩衣を羽織っている。

胡座で座っているので、服から生足が覗く。男の生足なんて面白くもなんともないが、これだけ美男だと無視できない魅力がある。どっしりとした石のような風格。おそらくはかなりの年配で、族長と呼ぶにふさわしい雰囲気醸し出している。

その脇に側近らしき男女がいる。もしくは族長の家族か？

「はじめてお目にかかる。カダン王国、ハマダ辺境伯領、ケンイチ・ハマダ辺境伯です。お見知りおきを」

「私が、この集落の族長をしている、メーサラだ。よろしく」

早速、取引に入る。ここで恩を売っておけば、ここのエルフとの友好関係が築けるかもしれない。

「ミセラの話では、貴殿が持っているチェエを売ってもらえるそうだが……我々には王国の通貨がない」

ミセラというのは、俺と最初に交渉したエルフの男だな。

「エルフとの友好関係が築ければ願ってもない。金なんてのは、後回しで結構」

俺は、アイテムBOXから、カカオパウダーとカカオニブを取り出した。

「あなたたちが使っているものとは、種類が違うそうだが、十分に使える品質だと思っている」

彼らに品物を渡すと、脇にいたエルフたちが、茶色の粉を確かめ始めた。

「こ、これは確かに、チェチェ！」

彼らの話を聞くと、ここら一帯のチェチェの木が、なんらかの異変で枯れてしまったという。

「木が枯れた——というと、病虫害の可能性大だな」

「その通りだ、害虫による被害なのだが、それに気がついたときには、かなりの本数の木々が手遅れになっていた」

「エルフなら、魔法が使えるだろう？ チェチェの実を地面に植えて、新しい木を育てたら……」

脇にいた女が、俺の問に答えた。

「木が枯れるとは思ってなくて、種子を全部粉にしてしまつて……」
まあ普通はそうだよな。普通に生えているものだったので、栽培するってことをやってなかったんだろう。

「それなら、こういうものもあるぞ」

俺は、以前買ったことがあるカカオの実を、再度シャングリ・ラから購入した。

それを見た、男のエルフが声を上げた。

「これは見事なチェチェの実！」

「それを植えて、木を育てればいい。いままで生えていたものとは種類が違ふと思うが、そのうち他の木も復活するだろう」

カカオの実を見た、族長が唸る。

「大変ありがたいのだが、我々には対価がない」

「まあ、先程も言ったが、エルフと友好関係を築けるならば、無料

で奉仕させていただく」

「いや——それでは、只人に借りを作ることでなり、我々の教義に反する」

他種族に借りを作るのはイカンのか。まあ気持ちは解るけどな。

「族長、それでは私が、この身体を使って——」

そう言ったのは、長いストレートヘアが美しいエルフの女。

皆と同じ青いチャイナのような服を着ているのだが、両脇が開いているので、横乳が見えそう。

身体を使うってどう使うのか、気になるのだが——これ以上、女が増えるのもちよいと勘弁してほしい。

「それならば——この指輪と同じものを作れませんかね？」

俺は、指にはまっている翻訳の指輪を見せた。

「作れるが——」

「実は、この指輪は借り物でして。同じものが作れるのであれば、作っていただきたい。それを対価にいたしましょう」

「それで、本当によろしいのか？」

「もちろん。それと他に欲しいものはありませんか？ 塩とか小麦粉とか？」

「欲しいのは山々だが——」

これ以上、借りは作りたくないと言うのだろう。

族長の話では、指輪を作るのに丸1日かかるそうなので、その間この集落に滞在することになった。

話が終わったので、族長に大量のカカオを預けると、家の外に出る。

足を踏み出したところに、ベルが飛んできて、俺の後ろに隠れた。

「ベル、どうしたんだ？」

「ねえ、もつと触らせてえ」

金髪で、長い耳のエルフの女たちに囲まれる。

集団で囲まれると、草の匂いが一層強くなり、目が痛い。

草というか樟脳しょうのうみたいな匂いだな。あれも確か、植物由来の物質だったはず。

「シャー！」

俺の後ろで唸るベルから察すると、なでられまくった彼女が、エルフたちから逃げてきたのだろう。

「はいはい、ダメダメ！ 彼女が嫌がっているじゃないか」

「んもう、ケチィ！」

エルフの女たちは、俺よりはるかに年上ばかりだと思ふのだが、そんな落ち着いた様子は見られない。

なんだか普通の女みたいな感じだ。

そこに俺の家族もやって来たが、アネモネもエルフたちにつきまとわれている。

「ケンイチ、助けて」

アネモネが走ってきて、俺に抱きついた。

「ねえねえ、そのローブって洞窟蜘蛛の糸だよねえ？」

エルフたちは、アネモネが被っている青いローブが気になるようだ。

「そうだけど、蜘蛛の糸は全部使ってしまったので、もう残っていないぞ？」

「なんだあ」

エルフたちが残念そうに離れていくと、それと入れ替わるように

リリスがやって来た。

「ケンイチ、話はついたのかえ？」

「ああ、1日〓2日滞在することになった」

「ほう、エルフの集落に滞在するなど、孫に自慢ができるべきことだの」

子供もないのに、孫の話とは。

「ケンイチ——眠たい……」

アネモネが、目をこすっている。確かに、いつもなら眠っている時間だ。

エルフたちと交渉をする。

「悪いが、広場の隅を使わせてもらっていいか？」

「構わないけど、なにをするの？」

「家を出す」

俺は、アイテムBOXから、コンテナハウスを出した。

「「「おおおっ!!」「」」」

空中から現れて、地響きを立てた黒い箱にエルフたちが驚く。

「これが、アイテムBOXかぁ」

「この鉄の箱は?!」

エルフたちは、コンテナハウスに興味津々だ。

「これは、俺たちが旅先で家代わりに使っている鉄の箱だよ」
エルフたちは、遠慮なしに部屋の中を覗き込んでいる。

「おおっ、中には立派な部屋があるぞ？」

「すごい! 綺麗なベッドがある!」

なんだか本当に遠慮がないな。

「申し訳ないのだが、旅やら戦闘をして疲れているので、寝かせてもらえないだろうか？」

先に家族を家の中に入れて、あれこれ聞いてくるエルフたちの質問に答える。

異文化交流なので仕方ないが、まいったねこりや。

145話 エルフの文化

俺たちは森の深淵にある、エルフの集落にたどり着いた。

俺が思っていたとおりに、彼らは金髪で背が高く、身体が細い。

耳が長くて、美男美女揃い。

空想と現実が違うところは、少々馴れ馴れしいところか。

基本的に排他的な種族なのだが、一度中に入ると、それが一変する。

——エルフの集落で、初めての朝。

ベッドから起きると、窓からエルフたちが覗き込んでいた。

「うわぁ！」

ガラス窓にへばりついて、ゾンビ映画みたいになっていて、焦る。どんだけ物珍しいのか。

一応、鍵をかけて寝たので、中には入ってこれなかったようだ。

エルフの家は、ゴザみたいな布ペラ一枚だったからな。あれじゃ防犯もあったもんじゃないと思うんだが、どうなっているのだろうか？

なにか、魔法の結界のようなものを使うのかな？

ドアにへばりついているエルフたちをどけて、外に出る。

「ふぁぁぁ！」

大きな伸びをすると、辺りの景色を眺める。

夜に到着したので、辺りの様子は解らなかったが、集落のすぐ側に湖が迫っていた。

朝日がキラキラと湖面に反射して美しい。集落の状態も把握できたが、皆が草でできた掘っ立て小屋。

族長の家が一番立派だったのだが、それでも掘っ立て小屋には違いない。

これで十分なので、自分たちで家を建てて暮らしているのだろう。

ちょっと離れたところでは、湖の魚を使って干物を作っている女性の姿も見える。

俺のところに集まっているのは、仕事のない連中なのだろう。暇を持て余しているようだ。

俺のことが珍しいのか、10人ほどのエルフの男女に囲まれた。

「王国の貴族なんだって？」

「ああ、ハマダ辺境伯だ、よろしくな」

「なんだか全然貴族っぽくないね。只人の貴族ってのは、もっと偉そうにしているじゃない」

「そうそう、すぐに干からびて死んじゃうのにね」

まあ、エルフの寿命からすれば、そう見えるのも当然だろう。

「エルフのことはよく知らないのだが、寿命はどのくらいあるんだ？」

「えー？ 只人の暦で1000年ぐらいじゃない？」

「そうそう……」

やっぱり、とんでもなく長生きなんだな——ということは、ここにいる連中は、爺婆ばかりか。

こんな生活を1000年……気が狂いそうだが、それは価値観の違いだろうか？

「家も自分たちで建てているのか？」

「もちろん、皆で建てるんだよ」

近くにいる——金髪のショートボブが朝日に輝く、エルフの女が教えてくれる。

女性も皆スレンダーで、巨乳って感じの女性はいないようだ。髪の色は——長い短い、編み込みと色々というが皆金髪。

「そのエルフの服も、自分たちで織るのか？」

「そう、青や緑が綺麗でしょ？」

自分たちで織って染色して、刺繍もするらしい。

何百年も同じことをやっているの、どんなことでも自然とベテラン職人真っ青になるのか。

「あそこで干している魚は、マスか？」

「うーん、只人がなんて言っているのかは、知らないから……」

俺は、アイテムBOXに入っていた虹マスを出した。

「これじゃないのか？」

「あ、そうそう。これ！」

「俺の領でも、燻蒸した干物を作っているぞ。確か、サンプルが残っていたはずだ」

アイテムBOXのリストを探す。容量に制限がないので、なんでも詰め込みすぎだ。

多少整理したほうがいいのかもしれない——といいつつ、後回しになっているが。

俺は、アイテムBOXからスモークサーモンを取り出した。

「ほらこれだ。中々美味いぞ？」

「ええ？ これって生じゃん？」

「干物にして、燻蒸してあるから、半分生って感じかな。あちこちの街に売ってるけど、事故ったことはないよ」

アイテムBOXから包丁を出して、ちょっと切ると口に入れてみ

せる。

「ええ〜？ なに？ この包丁すごい！」

スモークサーモンじゃなくて、包丁に食いついたのかよ。

「凄い綺麗！ これって鉄の一枚板から切り出したの？」

「まあ、そんな感じだな」

俺が出したのは、元世界でも使っていた、シャングリ・ラでも安いステンレス包丁だ。

ブレードの部分と柄が一体型になっている。

「すごい！」

「この金属はドワーフに作らせた特殊なもので錆びにくい」

もちろん大嘘だが——包丁を見るエルフたちの目が、きらきらと輝いている。

「ほしけりや何本か卸すが——」

「ここには王国の通貨はないし……」

「女なら身体で払ってくれてもいいぞ——なんてな」

「ええ？ どうしよっかな」

ほんの冗談のつもりだったのだが、女たちが赤い顔でもじもじしている。

そういうのに、あまり垣根がない種族なのだろうか？

エルフの細長く、しなやかそうな身体が目に入ってくると、それに気がついていいのか、あからさまに扇情的なポーズを決めてくる。

森の中で、一時のアヴァンチュールも悪くない——そんなことを考えていると、後ろから声がした。

「ほう？ 朝から面白い話をしておるの？」

不機嫌な顔をして、コンテナハウスから出てきたのは、ピンク色

の寝間着を着たりリスだ。

「おはようリリス。冗談だよ」

「どうだかのう……まあ、女を手籠めにするのも貴族の嗜み。別に否定はせんが」

「手籠めとか人聞きの悪い。普通に商品の対価としての話だよ」
「ふん」

否定はしないが、怒るということなのだろう。

もちろん家族がいることで、エルフに手を出すつもりも毛頭ないが。

周りにいたエルフは、リリスの姿を見て相槌を打った。

「ああ、なるほどねえ。貴族様は、そういう趣味なのねえ」

「おい、待て待て。そういう趣味って、どういう趣味なんだよ。王国じゃ彼女ぐらいの年齢で嫁ぐのは普通だぞ」

「ええ〜?!　　すぐ小さく見えるのだけど、そんな歳になってるのお?」

どうも、エルフの目には、リリスがすごい子供に映るようだ。

「もちろんだ。彼女ぐらいの歳で、子供を生むのも普通だぞ」

元世界の常識からすると、かなり若いのだが、ここだと普通らしい。

平民でも貴族様でも、結婚して子供がいる男女も多い。

「本当?　　もう1人小さい子がいたんだけど、あの子はどう見ても子供でしょ?」

「彼女は魔導師で、そういう関係ではない」

「魔導師なの?!」

エクスプロージョン

「爆裂魔法を使う、うちの大魔導師様だぞ?」

アネモネの話をしていると、彼女も目を擦りながらコンテナハウ

スから出てきて、俺に抱きつく。

それを見た、リリスも俺に抱きついてきた。

「……」

エルフたちの疑いの眼差しが、一斉に俺に向く。

「うっ」

その時、コンテナハウスのドアが開いて、獣人たちも起きてきた。

「旦那、おはよう！」 「にゃー！」

ドアの開いた隙間から、ベルが出てきて、俺の脚にスリスリを繰り返す。

「獣人や、森猫まで一緒に寝て……」

「うゝむ、只者ではない」

男女のエルフたちが、腕を組んで俺を見ている。軽蔑の眼差しなのか、それとも尊敬なのか、微妙に判断しかねる顔をしている。

俺は言い訳が難しいと感じて、説明するのを諦めた。

「エルフたちは、なんと言っておるのじゃ」

当然、俺とエルフたちの会話は、家族には理解できない。

「欲しいものは沢山あるみたいなんだけど、対価がないから——と言っているんだよ」

「それで？ 対価にエルフたちの女をいただくと思ったのかえ？」

「別に俺から提案したわけじゃないぞ」

まあ、最初に冗談めかしたのは俺だが。

「確かに、エルフが王国の通貨を持っているはずがないからの。身体を対価にと考えても致し方ない」

「そうなんだよ」

「別に――妾は構わんど？　他種族との交渉が上手くいけば、それに越したことはない。戦などになるよりは遥かにましじゃ」

「さすが、政まつりごとをする王家の姫だなあ」

「じゃが！　理解しているつもりだが、納得しているわけではないのだえ？！」

リリスが怖い顔で俺を睨む。怒った顔は、アマランサスに似ているかもしれない。

さすが親戚だ。

「そんなに目を吊り上げなくても解っているよ。他になにか対価があればいいんだけどね」

「別に吊り上げてなどおらぬ！」

「他種族や、他国との友好関係を結ぶために、女を贈るなんて普通にあることだろう？」

「それは……そうじゃが……」

「女は贈らず、俺の身体一つで済むものなら、安いものじゃないか」「それとこれとは話が違うと思うがの！」

リリスが怒って横を向いてしまったので、抱き寄せてなだめる。それを見たエルフたちが、またひそひそ話をしている。

「アネモネ、着替えて飯の用意をしよう。パンを焼いてくれ」

「うん」

アイテムBOXから道具やテーブルを出すと、それも物珍しいのか、エルフたちが集まってくる。

こんな光景は滅多にないので、カメラを出してエルフたちを撮影してみた。

エルフたちも、こんな森の中で毎日同じことをしているらしいので、さぞかし暇なのだろう。

あれこれと質問をしてくる。

「興味があるなら、色々出してみるが。友好の印に贈り物をするのは、普通にあることだからね」

「でも――、只人に借りを作るのは……ねえ」

エルフたちが全員で顔を見合わせる。そんなに警戒するってのは、過去になにかあったのかもしれない。

その中から、1人の男が前に出てきた。

「だからなく、こんなBBA共の身体で済むなら、本当に安上がりなんだよ」

「うるせえ！ この男ども！ 向こう行つてろ！」

「そうだよ！ 決まるものも決まらなくなるだろ！」

「なんだよ、実際にBBAなのは事実だろうが」

そりゃ、皆云百歳なんだろうから、BBAなのは間違いないだろう。

「ちなみに、100歳以下っているのか？」

俺の間に、女たちは即答した。

「いまのところいないね。子供はしばらく生まれてないし」

おかつぱのエルフが、彼らの部族のあらましを教えてくれた。

「エルフは100歳を過ぎると、他の集落へ行くの」

「血が濃くならないようにか？」

「そう、解ってるじゃない」

「――ということは、ここに親子はいないってことか」

「うふふ、そゆこと」

数百年単位でゆっくりと、増減を繰り返すのか。なんとも、気の長い話だな。

まあ、その話はおいて、朝飯にしよう――腹が減ったからな。

アネモネの魔法で、パンが焼けるいい匂いがしてくる。

「それって、パン？」

黒いドーナツ型のパン焼き機にも、エルフたちは興味津々。
デカイエルフたちに囲まれて、彼女もやりにくそう。

「ほら、パンを食いたいなら、俺のパンをやるぞ？」

俺は、シャングリ・ラからパンを買うと、エルフたちの前に差し出した。

いつも買ってる訳ありパンってやつだ。多少いびつでも崩れてても、この世界のパンより遥かに上等で甘い。

「う……う」

食べたそうであるのだが、どうしても手を出さない。

「そんなに頑なに拒否することもないと思うけど。なにも入っていないぞ？」

俺は、ビニール袋を開けると、パンを一つ摘み、一口齧った。

「ほら？」

「旦那、俺にもくれ」「ウチもにゃー！」

「ああ！ もう！ すぐに焼き上がるのに！」

「大丈夫だよアネ嬢。一つぐらい食べたって平気平気」「にゃー！」
気前よく、ものをプレゼントしようとしている俺たちに、なにか裏があると思っているのだろうか？

「ちょっとお母さん、このエルフたちに説明してやってくれ。単なる好意で、なにもやましいことなんてないとな」

俺はベルに、エルフとの仲介を頼んだ。

「にゃー」

ベルが、ちょっと離れた場所に歩いていくと、その周りをエルフたちが囲み円になっている。

エルフの戦士たちも説得してくれたので、なんとかしてくれるだろう。

アネモネのパンが焼き上がったので、俺たちは朝飯にすることにした。

インスタントのスープに、牛乳とグラノーラ。手間がかからず評判がいいので、簡単に済ませるときは、いつもこれ。

足りない人は、ゆで卵を食べるのもいつもの光景だ。

俺たちがグラノーラを食べていると、ベルが戻ってきたので、ネコ缶をあげる。

彼女のあとを、エルフたちがついてきた。

「にゃー」

「ありがとうな」

ベルの黒い毛並みをなでてやる。

「それじゃ贈りもので怀柔して、無理やり領民にしようとしたり、土地を取り上げたりというのはないのね？」

「ああーそういう心配をしていたのか。彼女から聞いたと思うが、そんなことは絶対にならないから、心配しないでもいい。ハマダ領領主として、ここに宣言する」

「にゃー」

ベルも返事をした。

「それじゃ……！」

わーっと集まって、次々とパンの皿に手を伸ばす。それどころか俺のグラノーラの皿に指を突っ込んだ。

「こら、ちょっと!」

「ああ、白いのは何かの乳なのね?」

おかっぱのエルフが自分の指を舐めている。

「乳はダメか? 何かの禁忌に触れるとか?」

パンがあつという間になくなったので、追加のパンをシャングリ・ラから購入した。

「うーん、そういう食生活がないから……」

牛乳がダメだと、あれしかないじゃないか。

俺は、シャングリ・ラから調整豆乳を買った。

マジな豆乳は、豆臭くて飲めたもんじゃないのだが、これなら美味いはず。

豆乳をカップに注いでやる。

「これならいいだろう。飲んでみる」

「えー? これも何かの乳じゃないの?」

「これは、豆の汁を絞ったものだよ」

「豆え? 本当に?」

「ああ」

女のエルフが、おそるおそるカップに口をつける。

「あ! 本当に乳じゃない。豆の味がするけど、美味しい!」

「本当か!?」

「本当!」

皆で回し飲みをしているのだが、口に合うようだ。彼らにもテーブルを出して、人数分の深皿にグラノーラを開けて

やった。

「これは、木の実や果物を小麦に練り込んで焼いて砕いたものだ。これも食えるだろう？」

エルフたちは、グラノーラを摘んで口に入れている。

「これも美味しいね！」

「美味しい！ 確かに、木の実や果実の干したものが入っている」

「それを、こうやって浸して食うんだ」

俺がグラノーラを食ってみせると、エルフたちも真似して食い始めた。

「これは、パリパリして美味しい！」 「甘いねえ〜！」

「歯ごたえもいいし、この白い汁が豆とは……だが本当に、動物の乳ではない」

余程美味しいのか、彼らに笑みが絶えない。

エルフの食事を見ていたら、リリスが俺の袖を引っ張った。

「ケンイチ、妾もその豆の汁を飲んでみたいのじゃが……」

「ほい」

カップに注いでやると、リリスはじっと見つめていたのだが、口をつけた。

「ほう！ 確かに、これは動物の乳ではない！ なんと珍妙な！」

「珍妙って——ほら、お前らも飲んでみるか？」

「旦那、まさか虫の汁とかそういうのじゃ……」 「にゃ？」

「違う、マジで豆の汁を絞って調整したものだ」

獣人たちも、おそろおそろ口をつける。

「マジで、乳じゃねえ！」 「にゃ！」

一緒にアネモネも豆乳を飲んでいる。

「美味しいけど、後味が豆のスープだね」

「わざわざこのようなものを……」

「動物の乳が嫌いって人もいるからな」

「確かに、貴族でもそのような話を聞いたことがあるぞ。飲むと、身体に発疹が出るとか」

「はあ、この世界でもアレルギーはあるみたいだな。」

魔法で治らないのかね。

「極端な話をする——動物の乳ってのは、その動物の子供のもので、人間のものではない——っていうやつがいるんだよ」

「それもそうじゃな」

「それにな、動物の乳というのは、色は白だが血と同じものなんだ」

「そうなのかえ？」

リリスが驚くが、乳ってのは血液から作られる。

「へえ！ 只人でそれを知っているやつがいるなんて」

エルフたちが驚くのだが、彼らは乳と血液が同じものだと思っていたようだ。

「動物の血を毎日するなんて、できないでしょ？ だから、エルフは動物の乳も飲まないの」

おかつぱのエルフが、豆乳を飲みながら俺に微笑む。

エルフってのは、この世界にいる普通の人間よりも科学が少々進んでいるのかもしれない。

まあ1000年の寿命があれば、勉強や研究も色々できそうだしなあ……。

皆で、食事をしていたのだが——昨晚、エルフと約束していたこ

とを思いだした。

「そういえば昨晚、蜂の子をやる約束をしていたんだっただな」
俺は、エルフたちのテーブルの上に、蜂の子と卵を置いた。

「うえー!」「にゃ!」

うちの獣人たちが、思わず顔をそむけたのだが、エルフたちは集まった。

「うわあ、立派な幼虫! これもくれるの?」

「ああ、昨日の夜にエルフの戦士と約束したからな。えーとミセラだったかな」

「なんだ、もう! 我慢していた私たちが、バカみたいじゃない」

「やったあ! これで、スープを作ろう!」

エルフたちのキャツキャウフフを見ると、いつも普通に食べている食材のようだ。

「こういうものをいつも食べているのか?」

「滅多にないよ。巣を壊して採っても、食べきる前に腐っちゃうし

……」

「そうそう、アイテムBOXっていいよねえ」

「そのアイテムBOXの中に、取った蜂の子が全部入っているんだろ?」

「ああ、成虫も入っているぞ」

俺は、テーブルの上に成虫も出してみせた。

「うわあ! これをどうするの?」

「素材に使えないか、研究しようと思って。それに酒に漬ければ、滋養強壮剤として使える」

「へえ」

スズメバチの酒漬けや蜂蜜漬けが売っていたから、効能はあるはずだが、エルフにはその文化がないらしい。

それになんだっけ……プロポリスだっけ？ あれも含まれているはず。

異世界の蜂に、プロポリスが含まれているかどうかは不明だが、研究の余地はあるだろう。

「エルフに酒文化はないのか？」

「果実酒や、蜂蜜酒があるけど……貴重だから……」

「蜂蜜酒なら、俺も持っている」

俺はシャングリ・ラから、1本2000円の蜂蜜酒を購入した。

「ポチッとな」

落ちてきたのは、黄金色の瓶に詰まった酒。

「ほら、これが蜂蜜酒だ」

「わぁ！」「綺麗！ ガラスの瓶に入ってる！」

「飲んでもいい？」

「もちろん」

エルフたちは、豆乳を飲んでいたカップを空にすると、黄金色の酒を注ぎ始めた。

「甘い！」「これって蜂蜜！」「だけどお酒！」

「ねえねえ！ 街に行けば、こんなお酒が手に入るの？」

「いいや、これは俺が持っている貴重な酒なので、街には売ってない」

酒を飲んだ、男のエルフも会話に加わってきた。

「ハマダ領だっけ？ その領民になれば手に入るとか？」

「それはやぶさかではないが、物を買うには対価が必要だ。エルフ

たちが、なにか対価になるものを持っていればいいが」

「そうだよねえ……」

うなずきながら、エルフたちは蜂蜜酒を飲みまくっている。

よほど気に入ったらしい。

「ほら、君たちが欲しがっていた、包丁もやる。10本ぐらいでいいか」

「すごい、綺麗！」

「10本でいいのか？」

「いいよ、エルフは道具を皆で使うんだから」

エルフたちは、ほんの一握りの私物以外は、全ての財産が共有らしい。

家も道具も全て共有財産。壊れたら皆で修理して、皆で新しいものを作る。

夫婦という概念がなく、だれとでも寝て——もちろん子供が生まれたら、皆で育てる。

「こんな素晴らしいものを見ちゃうと、領民になるのもいいと思っちゃうねえ」

エルフたちが、俺の渡した包丁を木漏れ日にかざしている。

「しかし領民になれば、王国の経済に組み込まれることになるから——そうすると君らの文化が変質する可能性が……」

「そのとおりだ」

今までなかった、低い声が響く。

テーブルにやって来たのは、エルフの族長。

女たちから、酒をもらうと少し口を含み、包丁を見ている。

「あまり、只人の文化に染めてもらっては困る。我々には、我々の教義があるのだ」

酒には驚いたようだが、只人の文化を見せてしまったことには、少々不機嫌だ。

エルフたちが、人の街へ憧れたりすると困るというのだろう。

「これは申し訳ない。あくまで友好の証としてだったのだが」

族長が来たので、朝飯会はそこでお開きになって、エルフたちは散っていった。

蜂の子を担いでいったので、料理を作るのだろう。族長に話を聞くと、指輪は明日の朝渡せるという。それじゃ明日の朝に出発だな。

俺の所に、ニヤメナがやって来た。

「あのゝ旦那あ……」

まあ彼女の目当ては解っている。

「朝なんだから、少しだけだぞ」

シャングリ・ラから、蜂蜜酒を追加で購入して、ニヤメナに少し注いでやる。

「へっへっへーうおっ！ 甘い！ まるで蜂蜜だ！」

「甘いにゃ！？ ウチも飲みたいにゃ」

「酒を飲まないミヤレーでも飲めるかもな」

ミヤレーのカップにも注いでやると、美味しそうに飲み始めた。

「うみゃー！ これは甘くてうみゃー！」

「それなら、妾も」「私も」

「こいつは酒だから、少しだけな」

アネモネとリリスにも飲ませてやる。

「凄い、蜂蜜だー！」 「これは、また見事な――これは菓子に使えるかもしれぬの」

「ああ、サンバクさんに渡したら、素敵なお菓子を作ってくれそうだなあ」

「うーむ、楽しみじゃのう」

飯を食い終わるとなにもすることがない。

明日の朝まで時間があるので、湖で釣りをしたりして、のんびりと過ごす。

ついでに湖の周りを測量した。ま、旅の途中で、こんなにゆったりできるのもいいだろう。

明日からは、また過酷な旅が待っているのだから。

――そして夜、暗くなってから、夕飯を食べる。集落は静かで、普段と変わらないようだ。

歓迎の宴とか――そういうのが苦手な俺は、どうしようかと思っていたのだが、内心ホッとしていた。

ドラゴンの肉を焼いて食う。

エルフたちは寄ってこないのだが、1人の女が白いスープを持ってきてくれた。

とろりとした白いスープに木の実が入っている。

「これは、蜂の子のスープだな」

「そうだよ」

ニコリと笑うエルフの言葉に、獣人たちはドン引きしているので、俺とリリースで飲む。

「おー、甘くて美味しい。その中に塩味が少々」

だが、俺の記憶にある蜂の子料理とは少々違う。

こんなに旨味はないはずだが――化学調味料があるはずもないし、なにか魔法でも使っているのだろうか？

入っている木の実のは煮えていて、ほんのりと甘くて栗のよう。
タンパク質100%って感じで、高タンパクで低カロリー。

「ほう、これはまた珍味じゃのう。このようなスープは飲んだことがない」

そりゃ、巨大バチの蜂の子スープなんて普通はありえないし――
ましてエルフが作った料理なんて。

こんな深い森の中だから、食べられる珍品料理だ。

俺とリリスを見て、アネモネもスープを啜った。

美味いらしい。それじゃサクラに帰ったら、蜂の子のスープを研究しないとな。

エルフたちが近寄ってこないのは、獣の肉は食べないかららしい。
普段のタンパク源は虫で、肉を食べたりすることもあると言うのだが、そのときは鳥が多いようだ。

飯が終わって休んでいると、エルフの女たちが4〜5人やって来て、俺の手を引っ張る。

どこかへ連れていこうとしているのだ。

「やっぱり、なにもお礼をしないのは、気持ち悪いからあ」

「そうそう、あの蜂の子も美味しかったし」

俺は、リリスとアネモネに睨まれながらも、エルフの女たちに引っ張られていった。

お礼といっても、ナニをナニするとは限らない。

なにか他のいいことかもしれないし。

146話 エルフたちとの夜

エルフの集落に滞在中。

とてもいい所で、チェチェというカカオ類似の植物を渡したお礼に、族長に指輪を作ってもらっている。

アキラが持っているのと同じ、他の種族の言語を翻訳できる指輪。その効果のほどは、現在俺が使っていて、証明済み。

今後を考えても、是非とも欲しいアイテムだ。

これがあれば、未知の種族とのファーストコンタクトもはかどるってものだ。

実際、アキラから借りたこの指輪がなかったら、エルフと揉め事になっていたかもしれない。

一泊して、まる1日をエルフの集落ですごし、その夕方。

夕飯を食べたあと、エルフの女たちが迎えにきた。

俺に色々もらった礼がしたいらしい。

女のお礼というところ——ナニをナニするナニだよなあ……。

アネモネとリリスの白い目に見送られながら、女たちに手を引く張られていく。

足下が暗いので、アイテムBOXからLEDランタンを出した。

LEDの青い光に照らされて、女たちの金髪がきらめく。

長い短い、髪型は様々だが、皆が美しい金髪で長い耳をしている。

「それって魔法の光？」

女たちが、後ろをチラ見しながら聞いてくる。

「まあ、魔道具の一種だよ」

昨日のエルフたちにも説明したが、やはり気になるようだ。魔法のアイテムに見えるのだろう。

手を引かれて到着したのは、大きな木の上に作られたツリーハウス。ス。

地面から細長いはしが伸びている。

地上にある家は、草でできていて少々頼りないが、これは丸太で組まれていて、中々頑丈そう。

「へえ、これは頑丈そうな家だな。他の家もこんな感じにすればいいじゃないか」

俺の間に、エルフの女たちが答える。

「普通の家は、1年ぐらいで、建て替えるんだよ」

「そうそう、これは避難に使ったりするんで、長い期間使えるように丈夫に作ってあるんだ」

「それに草の家ならすぐにできるけど、これを建てるのに何年もかかるんだよ」

「正直面倒くさい」

「そうそう」

エルフってのは基本面倒くさがりだと判明した。

云百年もその日暮らしなので、面倒なこととはしたくないのか。

これじゃ発展はしそうにないなあ。そもそも、そんなことも考えてなさそうだけど。

この原始的な生活のままで暮らす——これがエルフの教義なのだろう。

その教義を守るために、他の文化を寄せ付けず、排他的になっているわけだ。

彼女たちに誘われて、ツリーハウスに登る。

中に入ると、青い光に照らされて沢山の女達がいた。全部で20

人ほどこか。

板の間に女たちが座り、大きな木でできたベッドもある。

狭い部屋に、これだけ人数が集まっていると、樟脳しょうのうの匂いで目がしばしばする。

族長のところにもあった、この青い光は多分魔法の光だろう。

熱を感じず、LEDの光によく似ているが、その光は柔らかく優しい。

その青い光に照らされて、彼女たちの青いドレスが、青みを増している。

「これって、村の女全員か？」

女たちは全員背が高いのだが、座るとそんなに大きさを感ぜない。その分、脚が長くて胴が短いからだ。胴長短足の日本人に、その脚の長さを少し分けてほしい。

「そうだよ、村の女が全部集まっている」

「こんなに家に入って壊れたりしないのか？」

「避難にも使うつて言ったでしょ？ 全員が入っても壊れないようにできているから大丈夫」

部屋の中にいる女たちを見渡す。耳の長い美女がびっしりと満員だ。

こんな光景は滅多に見られないだろう。

「全員集まってなにをするつもりなんだ？」

「そんなあ、もう知っているくせに。小さい子供が好みみたいだけど、大人でもいいけるんでしょ？」

「ちよっと待て、子供が好きってのは間違いだぞ。屋敷に帰れば側室もいるしな」

俺の言葉も聞かずに、エルフの女が抱きついてきた。

こいつは朝から俺たちの近くにいた、短いおっぱヘアの女だ。

「それで？　どれにする？」

「ええ？　ここから選ばせるために、皆集まったのか？」

「ええ、もちろんよ」

「村の男たちは、なにも言わないのか？」

「言わないよお、そんなこと。あはは」

「「はははは！」」

「どうやら、エルフってのは固定のパートナーを決めない種族らしい。」

「へえ、そうなんだ」

「それにねえ。何百年も一緒にいたら、もう空気みたいなものだから、色恋の対象にはならないのよ」

「まあ、そうかなあ……」

人間の夫婦でも10年も一緒にいたら、倦怠期やらなんやらと、色恋なんてどうでもよくなるしな。

それが数百年同じ面子ってんだから、そりゃ、やりたくもなくなるってわけだ。

「それで、たまに外から男が来たんで楽しもうと——そういうことか？」

「そゆこと、あはは」

「実にあっけらかんとしている。」

「只人の男でもいいのかよ？　エルフに比べたら、月とスッポン——って言っても解らんか」

「別にそんなこと気にしないし」

「たまに外に出るエルフもいるのか？」

「まあ——たまにね。でも外で暮らしても、知り合いを作ってもすぐに死んじゃうから、また集落に戻ってくるしかないんだけどねえ」

「この本みたいにか？」

俺に抱きついていてエルフの腕を解くと——前に作った自作の本をアイテムBOXから取り出した。

アネモネと一緒に作った『森のエルフ』である。

「へえ、あなたが本を作ったの？」

「ああ、この絵も俺が描いた」

「すごい！」

「でも、只人にとっては、この話はいい話かもしれないけど。エルフにとってはねえ……」

「そうそう——結局、相手はすぐに死んじゃって、森に帰ることになるんだから」

「俺の聞いた話では、幸せに暮らしました——としか聞いてないがな」

「それは只人の視点ねえ」

まあ、どこかの村で暮らして知り合いを作っても、どんどん死んでしまうからな。

やっぱり相方が死んでしまうと、肩身が狭くなるし。

彼女たちの話によると俺が書いた話は、実話のようだ。

その話を書かれた俺の本を、女たちが回し読みをしている。

「それでえ、本はどうでもいいんだけどお——誰にする？」

「誰かを選んで、他の女たちはどうするんだ？」

「ここで見てる」

「ええーっ！？ マジか」

改めて周りを見回す。こんな所で周りから見られたら、勃つものも勃たんぜ。

ストリップの、まな板ショーかよ——って、若い奴はしらんだろ
うなあ。

エルフと一緒にになった男ってのは、剛の者だったんだなあ。

「それでえ？ 誰にするの？」

「じゃあ、とりあえず君から」

「ふーん、じゃあ……どうするの？」

おかつぱのエルフが再び抱きついてきたので、彼女の小さなお尻を掴む。

「ひ！」

彼女が小さな悲鳴を上げると、そのままストンと床に座った。

「はい、次い」

座った女の所に、他の女たちが集まってきた。

「ねえ？ どうしたの？」

「ああ！ 今、ちょっと触らないで！ ヤバいからあ！」

俺は、次に目の前に座っていた、髪の毛の長い女の手を取って立たせた。

「はい、ちょっと腕を上げてえ」

開いた脇に腕を通して彼女を抱き寄せると――再び、お尻を掴む。

「ひゃ！」

彼女はそのまま床へ倒れ込むと、ヒクヒクと痙攣している。

「ええ？ なに？ 魔法？」

「魔法みたいなものだなあ。使うと腹が減るんだけどな」

2人の相手をして、もう腹が減ってきたので、シャングリ・ラからエナジーバーを買う。

女たちは、まだいるから、一気に2本食いだ。

「なにを食べてるの？」

「君たちの言う『チェチェ』から作ったお菓子だ。甘くて美味しいぞ？ 食べてみるか？」

シャングリ・ラからエナジーバーを30本ほど購入すると、床に山積みにした。

突然、目の前にできたお菓子の山に、女たちが飛びつくが――。勢い余って、最初に倒れた2人を跳ね飛ばしてしまう。

「ひいい！」 「バカ！ お前ら触るなあ！ ちょ！ ヤバい！ イクっ！」

最初に触った女が床にひっくり返った。

「腹ごしらえも終わったから、はい次」
次の女の手を取る。髪は短くて、ちょっと少年風だが、男ではない。

「あの、ちょっと心の準備があ」

「こんな場所に来てるんだから、やる気満々だったんだろ？」

「いや、まさか、こんなことになるなんて――」

四の五の言う彼女を抱き寄せると、尻を掴む。

「にゃ！」

そのまま倒れそうになったので、ゆっくりと床に座らせる。

「なに？ どうなってるの？ 魔法？」

「あゝ！ ちょっと触らないでえ！ 触るとイッちゃう！」

他の女たちが集まってきて――座ったままで、硬直しているショートヘアのエルフを囲んでいる。

「なにになに？　どうしたの？」

不思議そうにしていた女たちだが、ひっくり返っている女を放置して、俺のやったエナジーバーを食い始めた。

「あまーい！」「あゝ、これってチェチェだ！」「すごく美味しい！」

「お前らあ、私の分も残しておけよ」

ひっくり返っているエルフが、何か言ってるが、動けないでいる。

「はい、次いつてみようか」

「それじゃ、私！」

勢いよく立ち上がったのは、ちよつとくせ毛のエルフ。

ふわふわした金髪が綿あめみたいで、美味しそう。

俺のことを、イタズラ好きのような視線でじっと見つめて、興味津々の顔をしている。

「はい、こっちに来て」

「ねえねえ――耳を――触ってほしいんだけどお」

「耳？」

それを聞いたエルフたちが、止めに入った。

「ちよつとお！　耳なんて止めておきなよ！　どうなるか解らないよ！」

「だってえ――どうなるか、興味があるじゃん？」

俺の正面に立った、くせ毛のエルフの耳をそつと掴む。

すごく熱くて、ぷにぷにと柔らかい耳をなでると、彼女が身をよじる。

どうやら彼女の仕草を見る限り、エルフにとって耳は敏感な場所らしい。

「んう……」

「それじゃ」

俺は、長い耳を摘む指に力を込めた。

「ぴ！」

彼女が奇声を上げると、白目を剥いてその場にぶっ倒れる。

ガクガクと痙攣する青いエルフドレスが濡れて、彼女の身体からいろんな物が溢れ出した。

「ちよつとお！ マジでえ？！」

エルフの女たちが、座ったまま尻込みをして後ろに下がるが——ここは狭い部屋の中。

もう逃げ場はない。

「はいゝ、次いゝ」

俺は、両手をワキワキしながら、エルフたちに近づく。

「あ、あの！ 普通のでいいので、普通ので——」

彼女たちも、耳はマズいと悟ったのだろう。

まあ、俺もそれを理解した上で強引にやったりすると、強姦と一緒だからな。もちろん無理強いはいしない。

「ひ！」 「にゃ！」 「ひゃあ！」 「あ！」

エルフの女たちは、次々と床に座り込んでいる。

ひっくり返り方にも、色々と個性が溢れてて面白いが、さすがに耳を触らせようとするエルフのチャレンジャーは続かないようだ。

エナジーバーとバナナを食べて、作業を繰り返す。

そう、これはもう作業だ。

「ねえゝ、その長くて黄色いのって木の実なの？」

ひっくり返っているエルフからバナナについて聞かれる。

「そうだ、食ってみるか？」

「うん」

床に寝転がっているおかつぱのエルフに、バナナを食わす。

「あ、意外と美味しい……すごく柔らかい」

「結構、栄養もあるんだぞ」

バナナにもエルフたちが群がって、長い白い実を頬張っている。

「結構、美味しいね」「うん」

「熟す前の青い果実は、芋みたいに料理にも使えるぞ」

「へえ」

そうだ、エルフたちにバナナを栽培してもらったかどうか。

バナナとカカオじゃ栄養とりすぎかもしれないけど。

その前にシャングリ・ラにバナナの苗って売ってるのか？ 早速、

検索してみると――売っている。

さすが、なんでも売ってるシャングリ・ラだ。カカオの実も売っているぐらいだし。

バナナの苗は1ポット2000円――そいつを2株購入した。

ちよっと大きめで、つるつるの葉っぱが2枚出ている苗を床に置く。

「ほら、黄色い実が気に入ったなら、この苗を育ててみる」

「これって木の苗？」

「これはすごく大きくなるけど、草の仲間なんだ」

「へえ、変わってる」

エルフが寝転がったまま、バナナのつるつるな葉っぱをなでている。

「異国の植物だよ。実に種がないから、株分けで増やすしかないのが欠点だけ」

「種がないの？」

「さっき食べただろ？」

バナナの前種には種があるが、種ばかりで食いにくい。

バナナとカカオの栽培が上手くいけば、エルフたちにも売り物ができるな。

バナナを食べているおかつぱの頭から出ている耳に手を伸ばす。

「あっ！」

「エルフって耳が敏感なのか？」

「ち、ちよっとダメっ！ あっ！ い、イクっ！」

エルフが、おかつぱ頭を床につけたまま、エビゾリになって身体を痙攣させている。

「……はあはあ……なに？ その力？」

「祝福だよ」

「祝福？ 本当に祝福なの？」

「ああ」

「王族に知り合いでもいるの？」

「俺が連れている正室が、元王族だ」

俺の言葉にエルフが驚く。

「ええ？ 王族が正室だなんて、あなた何者なの？」

「王族の連中は、俺を聖騎士と呼んでいるが」

「本当に聖騎士なの？」

「ああ」

どうやら、エルフたちは聖騎士を知っているらしい。

「そりゃねえ。エルフってのは、ここに只人がやって来て国を作る

前から、森に住んでいるわけだし」

「俺の知り合いに魔導師がいるんだが、そいつも帝国の皇帝から祝福をもらっているんだ」

「ええ？ 帝国人もいるの？ しかも皇帝から祝福をもらったなんて、近衛なんでしょ？」

「そうらしい」

俺と、おかつぱエルフの会話を聞いていた、他のエルフたちも集まってきた。

「ええ？ なになに？！」

とりあえず、色々と説明をする。

この土地のことを、だれよりも知っている連中だし。

「そうねえ——祝福って力を持った一族が、王族や皇族になったって話は知ってるよ」

エルフたちが、床にゴロゴロと横になっている。

「その力を持った一族は、そもそもどこから来たんだ？」

「どこから来たかは知らないけど、その力は神様からもらったって話だと思ったけど」

神様ねえ——俺のシャングリ・ラやアイテムBOXなんて能力もそうだけどな。

アイテムBOXは俺の他にも使える人間がいるし、凄い魔法を使えるアネモネみたいな女の子もいる。

その力の元があったはずだと思うんだが……。

「さて、一息ついたし、続きをやるか」

まだやってないエルフの所へ行く。

金髪を編み込んで後ろで纏めている女だ。

「えっ、ちよつと……」
抱き寄せてお尻を掴むが、別に尻じゃなくてもどこでもいいんだが。

「あ！ ひっ！」

ストーンと女が座るとプルプルと震えている。

「はい、一丁上がり」

「なにこれえ……」

「はい次」

とりあえず全員とやったのだが、部屋の中は樟脳といろいろな匂いでとんでもないことになっている。

それでも義務は果たしたろう——一服して飯を食う。

エナジーバーは飽きたので、大福でも買ってみるか——。

シャングリ・ラで、色々な大福が入ってセットになっているものを購入。

こういうのは、普通は贈り物のようだ。

餡の他にクリームが入っていたり、キャラメルが入っていたりと、変化に飛んでいる。

「これ、食べたいやついる？」

「それってなあに？」

「外側は穀物を炊いて潰して練ったもの。中の黒いものは、豆を煮て砂糖を入れて練ったもの」

エルフたちは、動物由来のものは食べないっぽいので、普通の大福を購入した。

「それじゃ食べる」

寝転がっているエルフの希望者に大福をやる。

「甘くて美味しい」「この白い皮はなんでこんなに伸びるの？ 本当は穀物？」

「本当だよ」

「この黒いのも豆って本当？」

「ああ」

シャングリ・ラから小豆を1kgほど購入して、見せてやる。

「ほら、この豆だ」

「赤い豆なの、変わってるう」「小さくて可愛い」「ここでも栽培できるかな？」

「豆類はどこでも育つから、問題ないと思うぞ」

彼女たちに、エルフの畑作について聞く。

森の中にテキトーな場所を選んで、そこにバラまいて放置らしい。畑を作ったりとか耕したりもなし。

毎日森を巡回するので、そのついでに収穫するらしい。

30人ぐらいの集落ならそれでいいのか……。そのため、カカオも栽培するという概念がなかったようだ。

それはいいが、小豆って餡の他に食い方があるのかな？ 赤飯に

入っているぐらいしか知らないが。

ついでに大豆もやる。

「ほら、昼間飲んだ豆の汁はこれを絞ったものだ。ただ、あれはかなり魔法で調整してあるけどな」

「へえ、白くて丸くて綺麗ね」

大豆は利用方法が色々あるからな。重宝するだろう。

果たして、エルフがどうやって大豆や小豆を使うか、興味があるし。

なにか異世界らしい、とんでもない利用方法を思いついてくれな

いだろうか。

「さて、やることやったから寝るかあ」

せっかくベッドがあるので、ここで寝ることにした。

「あなたはしなくてもいいの？」

「うちには女が沢山いるからな」

「只人の貴族なんて、しょーもないやつだと思っていたら、とんでもないやつに引っかけたわ」

「そうそう」

「全員がまんべんなく楽しめたんだから、いいだろ？」

部屋の床に、寝転がったエルフたちが敷き詰められている。

「その前に、これっていつまで続くの？ 動けないんだけど」

「朝までには、解けるよ」

「ええーっ？」

「それじゃ耳を触ってみるか？ 一発で天国行きだぞ？」

耳を触って、失神したままのくせっ毛の女を指さす。

「じ、冗談！」

部屋にあるベッドに寝ようとしたが、ゴツゴツと硬い寝心地。

こりゃ、つらい。アイテムBOXからマットレスを取り出して、敷いた。

うん——いい感じだが、1人で寝るのには、ちょっと大きいサイズ。

「独り寝は寂しいから、誰かに添い寝をしてもらおうかなあ」

——と見回したら、最初にやったおっぱエルフが、目をそらした。

「よし！ 君に決めたあ！」

おかつぱエルフを抱き上げて、ベッドの上に放り投げる。

「あっ！ ああゝっ！」

着地したショックで、エルフがベッドの上でジタバタしている。

「よっしゃ、寝ようぜ」

「ちよっと、待って死んじやうからあ」

「大丈夫大丈夫、今まで死んだやつはいないから」

おかつぱエルフを抱き寄せると、彼女が悲鳴を上げたが、その力
はかなり頼りなく、弱体化している。

「はあはあ！ さ、触るなあ！」

「君が、エルフの代表ってことで、俺を受け止めてくれないと」

「私は違うからあ！」

そう言う彼女だが、色々と率先してやっていたように見える。

俺に抱きついてきたのも、彼女が最初だったしな。

「ひいい！」

夜中まで、エルフの叫び声が、森にこだました。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

——エルフの集落に泊まって2日目の朝。

朝起きると、床の上でエルフの女たちがぐったりとしている。

「酷い目にあった……」

そこに、くせっ毛のエルフが起き上がって、大きく伸びをした。

「うゝうん！ スッキリしたあ！ 1年分まとめてしたって感じか

な？」

「ほら——結局、耳を触って一発で失神昇天したほうが、良かったんだ」

「あう」

女たちは、返事にならないような返事を繰り返している。

「エルフなら、自分で回復魔法ヒールを使えるだろ？」

俺は腹が減ったので、家族の所に戻ることにした。

外に出るといい天気。ツリーハウスの細いはしごを降りて、集落へ向かう。

コンテナハウスの前では、すでに皆が起きて、食事の準備を始めていた。

道具は全部、出しっぱなしだったからな。

「おはよーさん」

「ふん、随分と楽しんだようじゃの……」

「そう口を尖らせるなよ、リリース。これも他種族との友好を司る、政治ってやつじゃないか」

「どうだかのう……」

「むう……」

アネモネも機嫌が悪いが、パンを焼いてくれた。

スープはインスタントにして、ベーコンエッグにしよう。

エルフの女たちは、皆へばっているの、食事を奪いにくる奴らもない。

家族で朝食を摂っていると、エルフの族長がやってきた。

「おはよう」

「おはようございます」

「コレが指輪だ」

族長が、完成した翻訳の指輪を俺に渡してくれた。

「おお、ありがとうございます」

「ミルラから聞いたぞ。女たち全員を相手にしたそうだな」

ミルラってのは、くせっ毛のエルフのことらしい。

「相手といっても、特殊な力を使っただけで、本当にやったわけじゃないからな」

「それじゃ旦那、あの力を使ったのかい？」 「にゃ？」

「ああ、とてもじゃないが、まともには相手ができないからなあ、ははは」

「むう」

それを聞いても、アネモネとリリースは不機嫌だ。

「というわけで、やってないからいいだろ？ リリス」

「そうはいくかえ！」

「やっぱり、ははは」

俺は、シャングリ・ラから、小麦粉と塩を買った。

小麦粉は、パンを焼くために使うだろうから、強力粉を購入――
20kg4500円が10袋。

塩は10kg10000円の業務用を5袋。

「楽しませてもらったから、これはお礼の小麦粉と塩だ。どっちも必要だろ？」

「しかし……」

「エルフの女たち20人とするなんて、伝説に残るべきことだからな、このぐらいは払っても当然」

族長はしばらく考えていたが、もらうことにしたようだ。

「それでは、ありがたく収めさせてもらう」
「ははは、そう言ってもらえると嬉しいよ」
そこに女たちもやって来た。

「あゝもう、酷い目にあった」

「中々できない経験だったろ？」

「そうだけども」

女たちは、なにか不満そうなのだが、せっかく相手してやったのに、なにが不満だというのか。

飯を食い終わったので、出発することになった。

ここから引き返して、また湖まで出て測量を続ける。

エルフからの情報で、この川に行く先がアニス川だと判明したかな。

エルフたちに別れの挨拶をする。

「何かほしいものがあれば、俺の屋敷までくればいい」

「辺境伯領って言ってたけど、屋敷ってどこ？」

一番仲良くしてくれた、おかつぱエルフが質問してきた。

「川の上流に大きな湖があるだろ？ その対岸だ」

「もしかして、滝がある所？」

「お、知っているのか？」

「ああ、あそこねえ」

意外と、エルフたちの行動範囲は広いらしい。

アストランティアとダリアの間にある森の深部にもエルフがいるそうだし、その他の部族との接触もありそうだ。

まあ、俺専用の指輪もできたし、これでファーストコンタクトもはかどるってもんだ。

集落にある小さな湖にゴムボートを浮かべて、ここから川を測量

しながら遡る。

川の流れはゆったりなので、逆走するのも問題ないだろう。

もちろん、下るよりは大変だとは思うが、いざとなれば文明の利器もあるしな。

ニヤメナとミャレーが乗っていたボートは、蜂に追われて放置してしまったので、新しいのを購入した。

「それじゃなー」

「これをあげるー!」

エルフの1人が、何か細長い生き物の干物をくれた。赤っぽい茶色で、縞々模様をしている。

イメージとしてはミミズだろうか。

「なんだこれ？」

「多分、管虫にゃ」

こいつの正体はミャレーが知っているようだが、とりあえずアイテムBOXに入れた。

「「「さよなら」」」

およそ30人のエルフたちに見送られて、湖から川を遡り始めた。流れに逆らうことになるので、ちょっと心配したのだが、問題ないようだ。

今回、初その他種族とのファーストコンタクトだったが、まあまあ成功だったといえるだろう。

147話 異世界の食材

俺たちは、エルフの集落で2泊3日の休日を過ごした。

ゲットしたのはエルフからもらった翻訳の指輪。

これを商売として大幅なマイナスと捉えるか、レアアイテムゲツトのためのイベントとして捉えるかは、人によるだろう。

損得抜きにして、エルフたちと友好関係を結べたのは大きい。

オッサンが無理をして、政治家っぽいこともしてみたぜ——という感じだ。

湖から川を2日ほど下ってきたのだが、上りは流れに逆らうので、3日ほどかかり——。

俺たちはマスを獲得した川の入り口に戻ってきた。

もちろん、途中で獣人たちが乗り捨てたゴムボートも無事に回収した。

湖の入り口に戻ってきたが、右の岸はやって来たときにキャンプした地点。

当然、俺たちは先に進むので、左の岸にボートをつけた。

川を渡るために、随分と遠回りをしたことになる。

暗くなってしまったので、コンテナハウスを出して飯の準備をするが——どうも獣人たちの様子がおかしい。

「旦那、俺らは魚を獲るから、飯はいらね」「そうにや」

「どうしたんだ？」

「……旦那、絶対にあの蜂を食べるつもりだろ？」

「よく解ったな」

「ぎゃー！俺らは魚を食う！」「にゃ！」

「別に無理に食わせるつもりはないぞ？嫌なら、レッサードラゴンの肉もあるぞ？」

「いや、魚が沢山いるんだ、魚を食うよ」「そうだにゃ」

どうも獣人ってのは、食に関しては保守的なようだ。

獣人たちは香辛料が好きだからカレー粉をやるのか——それとも——。

シャングリ・ラを検索すると、良さげなものを見つけた。

タンドリーチキンスパイスである。各種スパイスが混合されており、鶏肉にふりかけて焼けばタンドリーチキンになるという代物。

これが、焼き魚に使えないだろうか？

「それじゃ香辛料だけやるよ。ふりかけて焼けば多分香辛料料理になるぞ。それから、カレーの粉な」

「それは、もらっておくよ」

ミヤレーとニヤメナがスパイスの袋を開けて、匂いを嗅いでいる。

「うーん、いい匂いにゃ！」

あちらは獣人たちに任せて、俺は蜂を料理しよう。

蜂の子の安全性は、エルフたちが食べていたことで、保証されているしな。

洞窟蜘蛛の卵のときのように、安全性の試験をしなくても問題ないだろう。

「アネモネとリリスも、無理して俺につき合うことはないんだぞ？」

「エルフの里で食べたスープは美味だったのう。あれから察するに、不味いということはないはずじゃ」

「そうだねえ」

アネモネも一緒に食べるらしい。意外とチャレンジャーだ。

「だって冒険に行って、現地のが食べられないんじゃ、苦労するでしょ？」

「そりゃそうだな」

元世界の外国人は、祖国以外の飯で苦労するらしいが——日本人は、どんな料理でも食えるところが強みらしい。

まあ、とりあえずなんでも食うしな。

「それに、なんにも食べられなかった前に比べたら、食べられるだけ凄いもん」

アネモネはロクに飯も食えなかったらしいしなあ。

「アネモネみたいな大魔導師が、才能を発揮できずに餓死寸前とか、なんというこの世の損失。この世界の不条理もここに極まりだな」
「そうだのう——政を司る身分に身を置いていた妾からすれば、肩身が狭いわえ」

家族と話していると、ベルがやってきた。

「にゃー」

「お母さん、今回は助かったよ」

彼女の毛皮をなでてやり、高級猫缶をプレゼントする。

「ほんにのう——森猫というのは、不思議な生き物じゃの」
「そりゃお姫様、神様の遣いだからさ」 「そのとおりにゃ」
「にゃー」

ベルが、顔をあげてドヤ顔をしている。

「エルフたちの中でも、森猫はそんな立場だったな」
彼らの様子からみても、意思の疎通ができるようだったしな。
逆に、獣人たちでも犬人たちは、それから外れるようだ。
犬人たちは、黒狼を神様の遣いと崇めている。

猫人たちが森猫と意思疎通できるように、彼らは黒狼とそれが可能なのかもしれない。

それはさておき料理だ——白いぷよぷよの卵の中身を出してマヨネーズを作る——定番だな。

長さ50cmほどの楕円形に穴を開けて、中身をボウルに出す。アネモネの魔法でかなり熱を加えたと思ったが、中身はどろりとして完全には固まっていない。

固まっている所は焼いて、ドロドロの部分だけをマヨに使う。

ドロドロにリンゴ酢とオリーブオイル、調味料を足して、ハンドミキサーで攪拌する——蜘蛛の卵のときと一緒にだ。

味見をする——「お、美味い」

蜘蛛の卵より、味が濃いような気がするな。

余った材料はアイテムBOXに収納した。

続いて、幼虫を切って中身を取り出し、ハンドミキサーで攪拌。玉ねぎや人参、じゃがいもなどを、アネモネの魔法で火を通してもらい、一緒にハンドミキサーで混ぜる。

幼虫の中身はタンパク質だ。これだけでは旨味はないので、だしの素を投入した。

塩で味付け——ポタージュの完成だ。

「あゝ旦那が何かやってるぜ……」「見ないようにするにゃ」
獣人たちは無視して、指で少し舐めて味見をしてみる。

「うん、こんなもんだ」

デザートも作ってみよう。

蜂の卵に、砂糖と牛乳を入れて、バニラで香りつけ。飯を食べている間に蒸して、プリンにしよう。

テーブルの上に蜂料理が並ぶ。

蜂の幼虫と野菜のポタージュ、蜂の卵焼と蜂のマヨネーズかけ、そしてアネモネの焼き立てのパン。

「すごい！ 蜂だって言われないと解らないね」

「その通りじゃの。このままテーブルに出されたら、誰も蜂の子が材料だと思うまい」

「うわああ……」

ニャメナがカレー粉をかけた魚を持ったまま硬直しているが、無視する。

「ふむふむ、やっぱり蜘蛛の卵より、味が濃いような気がするな」
卵焼きを食べる。見た目は白身焼みたいな感じだが、味は濃い。
蜂の卵には黄身がないので、全部が渾然一体だ。マヨネーズソースが合う。

「蜘蛛のは卵が大きいので、大味なのだろうか？」

「そんなことはないと思うが……」

蜘蛛より、蜂のほうが食料に利用されているので、蜂のほうが美味いということだろうか。

元世界だと蟬も美味いと言われていたが、この世界に蟬らしき昆虫はいない。

「このスープは、濃厚じゃがホツとする味じゃのう」

「美味しい！」

タンパク質が十分に入っているので、濃厚だが高タンパク低カロリー。

動物の肉や魚の身をドロドロになるまでミキサーにかけたら、こんな感じだろうか。

プロテインもいらないから、ボディビルとかにピッタリだな。

上手いことタンパク質を分解してアミノ酸にできれば旨味は増すと思うのだが……。

そういえば、エルフのスープは美味かったな。
なにか魔法でも使っていたのだろうか？

ポタージュを啜り、元世界の味を思い出した。

ドロドロ濃厚系のラーメンスープの味に似ている気がするが、脂身はない。

それにあれには化学調味料が沢山使われていたはずだ。

「リリスは卵が好きだから、卵焼きが沢山食べられていいな」

「うむ、これは美味しいし、他の料理にも合いそうじゃな」

食事が終わるころ、プリンも蒸し上がったので、アネモネの魔法で冷やしてもらう。

「むー冷却！」
リフリジレーション

茶碗に入っているので、一見白い茶碗蒸しだが、これはプリン。
なお、俺が嫌いなのでカラメルはないが、生クリームを乗せてみた。

一口食う——卵プリンは卵臭さがあったりするのだが、これにはまったくくない。

ただひたすらに濃厚なプリンの味。

「おお、普通に美味しいな」

「ケンイチ、これをもっと作って！」

アネモネも気に入ったようだ。

「これは素晴らしい。お菓子としても1級品じゃ。それに、城にいてはこんなものは絶対に食えん！」

「まあな。普通の人は森の奥深くに入って、蜂と戦ったりしないし」

「旦那あ……戦うやつはいるかもしれないけど、蜘蛛や蜂を食おうなんてやつはいないと思うぜ？」

「そうだにゃー」

「ウチの教義はな、とりあえず食えそうなものがあったら、食ってみるんだよ」

「じゃが、危険なものもあるじゃろう？」

「そうだなあ、キノコはヤバイやつが多いから、かなり慎重にならないと……」

なにせ異世界、普通のキノコに似ていて、カエンタケクラスのヤバイのがあるかもしれないし。

「本当はもっと慎重なんだぞ？ 蜂はエルフが常食しているようだったので、安全性が確保されていたわけだし」

「なるほどのう」

飯を食い終わったので、食器や道具を片付けて、コンテナハウスに入る。

ここ数日、俺がエルフと一緒に遊んだことについて——アネモネとリリースに色々と言われていたが、やっと機嫌が直った。

明かりを点けた部屋の中、縦に並んだベッドの上に皆で寝転がる。

「けど旦那。エルフなんかと付き合っとうするのさ」

「彼らには、豆や木の実の苗を渡してきた。彼らが上手く栽培できれば、交易ができる」

「あんな排他的な連中が商売をするかにゃ？」

「物資は欲しいみたいだったからな。森の中で暮らすエルフだって、物は必要だ」

「そなたにも利点があるということかえ？」

「もちろん、彼らは先史以前からここに住んでいて、この世界について詳しい。その情報は重要だ」

「いままでそのようなことは考えてみなかったわえ……」

エルフは魔法にも詳しいし、全員が魔導師だからな。

「エルフの魔法で、アネモネの魔法にも磨きかけられるかもしれない」

「うん！」

アネモネが抱きついてきたので、頭をなでてやる。

「帝国の魔女もおるしの」

「まあ、無理強いはするつもりはないよ。アキラと揉めると、本当に厄介なことになりそうだし」

「ああ、いるいる。味方なら最高だけど、敵に回すと厄介なやつてのが」

ニヤメナがベッドでゴロゴロしながら、しっぽをうねうねさせている。

「そうだにゃー」

「にゃーん」

ベルがベッドの上に載ってきて、俺に身体を擦り付ける。
彼女にもそういう相手がいるようだ。

さて、明日からまた測量の日々が始まる。
皆との冒険に備えて寝ることにした。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

——次の日の朝。簡単に食事を摂ると、測量へ戻る。
ずっと砂浜が続き、車での移動が可能で、順調な測量が続く。
ずっとこんな感じなら、楽ちんですぐに終わるのに。

そのまま3日ほどかけて、約40kmの地図を作成した。

夜には砂浜に重機で穴を開けて露天風呂に浸かる。
上を見上げれば満天の星。その光景はまさにスローライフといえる。

その雰囲気を満たす俺の周りには裸の美女たち——異世界万歳。
すっかりとご満悦の俺だが、いいことばかりではない。

たまには別の部屋を用意して、彼女たちの相手をしなくてはならない。

俺の秘密のノートに、ナニした回数などを記録して、不平等にならないようにしなくては。

ナニしたプレイを記録なんて変態っぽくて嫌なのだが、これは必要な行為。

今日も、ちょっと離れた場所に2つ目のコンテナハウスを出して、そこでリリースと色々とする。

このコンテナハウスはマジで便利だな。もっと早く気がついていれば……。

あれやこれやとしたあと、ベッドに裸で寝転がるリリースによると——。

「女たちには、なるべく公平に接するがよい」

彼女は、多数の女性たちを抱える王侯貴族の事情に詳しい。

不平等にすると、女性たちの間に軋轢が生じることも多いという。

「ということは——数を増やすと、必然的に回ってくる回数が減るから、女性たちに不満が積もる」

「ゆえに！ 数をこれ以上増やすなど申しておる！」

「多分……」

「多分じゃと？ まさかそなた、エルフの女子どもおなにも、なにか約束したのではあるまいな？！」

彼女が身体を起こすと、裸のまま俺に詰め寄ってきた。

「約束というか――交易がしたいのなら、屋敷まで来いって言ったけどね」

「むう……やはり、ケンイチのものを、ここで噛み切っておくべきか……」

「そんなことをしたら、子供ができなくなるだろう?!」

「ふん!　パクっ!」

「あいたたたた!　ちよつとリリス」

「ふがふがふがあゝ!」

ちよつと洒落にならないぐらいに痛い。やむを得ず頭を撫でて、聖騎士の力を使う。

「ふああああ!　ケンイチ!　そなた卑怯であろう!」

リリスが俺から離れた。

「そんなこと言っても、痛いからさ」

「ふあっ!　まつがよい!　ああっ!　そなた、困ったことがあると、聖騎士の力で誤魔化ヒールそうとしおって!」

いくらナチュラル回復ヒールで治るといっても、噛みつかれるのは勘弁。

「俺の力なんだから、自由に使ってもいいだろう?」

「あああっ!」

とりあえず、リリスがぐったりと静かになったので、彼女を抱き寄せて寝ることにした。

――――◇◇――――

――次の朝。リリスを起こすと、2つ目のコンテナハウスを収納して、皆の所へ行く。

夕飯の道具が出しっぱなしだったので、アネモネがパンを焼いて

くれていた。

「おはよ」

「旦那、おはようさん」「おはようにゃ」
ベルが俺の足下にやって来た。

「ベルもおはような」

「にゃ」

「……」

アネモネとリリスの機嫌が悪い。

「なんだよ、今度はアネモネの機嫌が悪いのか」

「ふんだ、リリスと仲良くすればいいでしょ？」

「そんなこと言うなよ、今日は一緒に寝てあげるからさ」

「……」

アネモネとリリスのご機嫌を取ろうとしている俺を、獣人たちが笑っている。

「旦那も大変だねえ」「そうだにゃ」

今日の朝は、インスタントスープと、アネモネのパン。主役はハムエッグにしてみた。

そういえば、エルフからもらった干物を忘れていたな。

それをアイテムBOXから出してみた。

「管虫だって言ってたな」

縞々の身体で赤茶色の細長い生き物だ。虫って言ってるが、虫かは分らん。

元世界で見たもので近いと言えばミミズだが、環形動物は虫じゃないし。

ゴカイなども、みんな総称して虫って言ってるけどな。

「普通、そいつらは湿地帯にいるにゃ」

説明してくれるミャレーは平気かと思ったのだが、やっぱり嫌な顔をしているので、苦手のようだ。

「へえ。ニャメナはどうだ？」

「旦那、やめてくれ……」

ニャメナが、げっそりとした顔を見せる。

どうも細長いものが、あまり好きじゃないみたいだな。

「それじゃ蛇は？」

「旦那あ……飯時に蛇の話は止めてくれよ……」 「そうだにゃ」

「そういえば、ミャレーも蛇は嫌いだったな」

「もう、身の毛がよだつにゃ」

猫みたいにも毛が逆立つらしい。人間でいう鳥肌状態だ。

「ミャレーは、クラークンは平気だったみたいだが」

「あのぐらい大きくなると、蛇っぽくないにゃ」

ミャレーはそう考えるのだが、ニャメナはダメらしい。

獣人たちはダメなようだが、せっかくエルフたちがくれたんだ。

とりあえず、どんなものか食ってみるか。

彼女たちの料理を食べた感じから、そんなに俺たちと味覚がかけ離れていると思えんし。

「干物だが、味はついているのかな？」

俺は、干物を少し折ると、口に含んでみた。

「ひゃ！」

ニャメナが、すごい顔をしてこちらを見ている。

固いが、噛んでいると唾液で柔らかくなる。やはり塩で煮てから

乾燥させているようだ。

脂身のないサラミみたいな感じだな。

「ふむ……結構美味いな」

これは、普通に食べてもあまり美味くないのかもしれない。

乾燥させたことで、管虫の身体を構成しているタンパク質が分解されてアミノ酸に変化したのだろう。

その美味さに納得の俺だが、日本人なら醤油と生姜、ニンニクで煮込みたいところだ。

今度、管虫を捕まえたら挑戦してみるか。

ベルが、ねだってきたので、あげてみる。

あまり塩辛いものは、動物にはよろしくないのだが。

干物をもらったベルも美味しそうに食べているので、彼女も好きな味のような味のような味。

「どうだ、リリースも食ってみるか？」

「うむ」

リリースは、本当に美味けりやなんでも食うタイプだ。

「俺は結構好きな味だが」

「ほう！ これは珍味じゃのう！」

「そりゃお姫様、王侯貴族が管虫なんて食うはずがないよ」「そうだなや」

「ケンイチ、私も食べてみる」

アネモネにも少し渡してみると、彼女はおそろおそろ口に運んでいる。

リリースがなんでも食うので、対抗意識があるようだが、無理をする必要はないと思う……。

「管虫なんて、街でも見たことがなかったが……」

「壺に入った塩漬けなら売っていると思うよ」
塩漬け——まるで塩辛だな。

「臭いから、食うやつは限られてるにゃ」
やっぱり臭いのか——塩辛とかアンチョビみたいな感じか。魚醬ならぬ虫醬だな。

そんなものがあるのに、調味料として使われているのは見たことがなかったな。

もったいない。

俺はあることを思いつき、シャングリ・ラからイカの塩辛を買ってみた。

1瓶1200円もする、ちょっと高いやつだ。

「ポチツとな」

テーブルの上に広口の蓋がついた小瓶が落ちてくる。

「なんにゃ？」

俺は蓋をとって中身を獣人たちに見せた。

「塩漬けってこんなやつだろ？」

「うわわぁ！　なんで旦那は、そんなのまで持っているんだよお！」
ニヤメナの反応を見るからして、管虫の虫醬も似たような感じらしい。

恐れおののく獣人たちを尻目に、リリスの目が輝いている。

「ケンイチ、それも美味しいのかの!？」

「えー？　いや、俺は好きだけど——好き嫌いがでる食べ物だぞ？」

「そなたが食べているのなら大丈夫である！」

「どうかな？」

「美味しいから、そのようなものが、わざわざ作られておるのじゃろ

？」

「そうとも限らないのが、面白いのだが……」

どうしても食いたいたようなので、食わせてみる。まあ納豆とかよりは、平気だろうと思われるが。

パンに塩辛を塗って、その上にシャングリ・ラで買ったチーズを載せる。

「アネモネ、これを魔法で少し温めてくれ」

「うん、ウォーム温め！」

すぐに黄色いチーズが、パンの上でとろけた。

「おお！ 黄色いのはチーズか」

目を輝かせたリリスが、俺からパンを受け取ると、大きな口を開けてパクリとかじりついた。

「そんな食べ方をしたら、マイレンにお小言を言われるな」

「——ほう！ これはなんという、深みのある味わい！」

リリスがパンの上のチーズと塩辛をじっと見つめている。

「臭いはどうだ？」

「確かに癖はあるが、それを言えばこのチーズも十分に臭いからの」「苦手なやつも多いんだけどな」

「下賤の食べ物と決めつけて、このような珍味を逃すとは——気取った王侯貴族は人生を無駄にしておるのう」

塩辛は、アキラも食いたがるかもしれないな。

あのクラーケンが塩辛に使えるかもしれないし、管虫も上手く調理すれば塩辛になるかもな。

工夫すれば和食に使えそうな食材が色々と見つかるな。

リリスに対抗していたアネモネだが、お姫様の大食らいについていけずにギブアップ。

まあ、しょうがない。

食後、俺はちょっとしたイタズラを思いつき、シャングリ・ラからあるものを購入した。

「リリース、たまにはまずいものを食べてみるか？」

「まずいもの？ なんじゃそれは」

俺が取り出したのは、黒い飴。

「お菓子だよ。わざわざ作っているなら美味しいものに違いないと、リリースが言うからさ」

「そのとおりじゃ、まずいものをわざわざ作って、商売に言うのかえ？」

「まあ、食べてみなよ」

「どれ」

俺から黒い飴をもらったリリースが、それを口に入れて固まった。

「……」

あまりの不味さの衝撃に言葉も出ないらしい。

「な、なんじゃこれは！ 毒ではないかえ？」

「毒ではないよ。そんなのリリースに食わせるはずがないだろう」

「くくく……たてえようない味なのに、なぜか唾液が止まらんのは……なんと奇っ怪な……」

「吐き出しても構わんぞ？」

俺の言葉に、リリースが必死に耐えている。

「い、いや、王族たる者、このようなことぐらいで動揺してはおられん、しかし……信じられん」

「まずいものを、わざわざ作るといことがだろ？」

「そうじゃ！ わざわざこのようなものを……」

「ところがな、これが癖になって、愛食するやつもいるんだよ」

「なんということじゃ——また世界が広がったぞえ？」

皆も食いたいというので食わせたが、口に入れた途端にフリーズ。獣人たちは口からだらだら涎を垂らしている。

吐き出しはしなかったが、相当まずかったらしい。

朝飯を食い終わった俺たちは、飯の片付けをしたあと、コンテナハウスを収納して再び測量を始めた。

獣人たちに先行してもらい、方位と距離を測り地図に書き込んで、車で移動。

ずっと続く砂浜で作業は楽ちんだが、湖の北に近づくと徐々に岩肌が見えてきた。

高さ800～1000mの山が岩肌を晒して、直接湖に浸かっており、崖のようになっている。

「湖の北側は結構険しそうな地形だなあ」

双眼鏡を出して崖を覗く。

「あの様子だと、ケンイチの召喚獣どころか、歩く場所もなさそうじゃの」

「うわあ……あ！ ケンイチ、鳥が沢山いるよ」

アネモネとリスにも双眼鏡を覗かせた。

崖の窪みには、黒白の鳥が沢山巣を作っており、繁殖地になっているらしい。

「数日間、ずっと船で移動して平気だろうか」

「へへへ、獲物には困らないと思うけどな」

「そうだにゃ」

獣人たちは楽観的だが、あそこは地上ではなくて、水上だ。

なにもかも勝手が違う。

「小さな船の上で狩りなんてできるのか？」

「大丈夫だよ旦那！　なんとかなるって！」

「そうは言うけど、水の上で暗くなったら、船の上で夜を明かすことになるんだぞ？」

「うむ、そうになると、この前の化け物などに狙われたら、逃げ場がないのお……」

リリスの言葉を聞いたニヤメナの表情が変わった。

「旦那！　あの化け物はやつつけたんだよね？！」

「まあ、痛めつけたんで、あいつは手出ししてこないと思うが、他の仲間がいるかもしれないし」

「う、嘘だろ？」

「もう、ケンイチも、トラ公も心配性にゃ！　大丈夫にゃ！」

ミヤレーの根拠のない自信もすごいが、基本日本人は心配性なところがある。

やっぱり災害が多かったからだろうか。

この事業に危険を伴うことは理解しているが、地図を作り領地を把握するという、貴族の仕事もある。

「うーん……」

悩む俺の所に、ベルがやって来た。

「にゃー」

「そうだ、こういうときは、我が領の重鎮。お母さんに聞いてみよう。どうだ？　お母さんは危険があると思うか？」

「にゃー」

普段と変わらない彼女の様子に、俺は決心した。

「よし！ 湖の北側を船で横断するぞ！」

「やるにゃ！ トラ公は、反対回りに、引き返してもいいにゃ」

「ここまで来て、引けるかよ！ 俺も行くぞ」

「怖いのに、無理をしなくてもいいにゃ」

「うるせえ！」

ニヤメナとミャレーが、俺の周りをぐるぐると回りはじめた。

「アネモネとリリスも、危ないことに巻き込んじゃったら、ゴメンな」

「もう十分に巻き込まれておるから、今更じゃな。危険を承知でついてきておるのじゃし」

「ケンイチと冒険するんだから、いいの！ 私の魔法で助けてあげるんだから！」

「それじゃ頼むぞ」

「うん！」

アネモネもすっかりと、たくましくなったなあ。

オッサンの俺は、これ以上変わりようがないし。

俺は家族を連れて、湖の北側をボートで渡る決断を実行に移すことにした。

148話 管虫

少々トラブルはあったが、それなりに順調な旅で、湖の周囲をずっと測量してきた。

俺も、少々お気楽な旅行感覚だったのだが、ここにきて困難にぶつかった。

湖の北側が崖になっており、そのまま湖面に吸い込まれている。ありていにいえば、崖が存在していないのだ。

この状況がどこまで続いているのかは不明だが、俺たちは崖を測量しながら、サクラへ向かうことに決めた。

岸の砂浜が切れると、ほぼ垂直——実際は70度ぐらいの角度だと思われるが、人間が登れる壁ではない。

崖の凹みには、黒白の鳥が沢山の巣を作っており、壁が白く汚れている。

糞が沢山積み重なっていれば、元世界の南の島——ナウルのようなリン鉱石の鉱山として期待できるのだが……。

とりあえず、ドローンを飛ばして、高度100mほどまで上昇させてみる。

「ここからだ、崖の切れ目は見えないみたいだな」

「ケンイチ、すぐに湖を渡るにゃ？」

「いや、今日はもう昼を過ぎている。ここで一泊して明日の朝一で出発しよう」

「そのほうがいいじゃろうの」

そうと決まったので、砂浜にコンテナハウスを出すとキャンプの準備をする。

アイテムBOXから道具を出している俺の所へ、獣人たちがやってきた。

「それじゃ旦那！俺たちは狩りをしてきていいかい？」「うにゃー！」

「いいぞ。何を狩る？」

獣人たちは、崖に沢山いる黒白の鳥を指差した。

「ああ、あれか……それじゃ弓か」

アイテムBOXから、コンパウンドボウを取り出すと、獣人たちに手渡す。

一緒にゴムボートも必要だろう。

嬉しそうに弓をチェックしている獣人たちを見て、ちょっと心配になった。

水の上で弓を構えるなんて不安定そうだな。

一応、念の為に――シャングリ・ラからオレンジ色の救命胴衣を購入した。

1個2000円で命を守れるなら、安いものだ。

「こいつを着てくれ」

「なんだい、この妙くりんなのは」「にゃ？」

「水に浮かぶ服だ。万が一水に落ちても、そのまま浮かぶ」

「ははは、大丈夫だって旦那！」「こんなの着てたら動けないにゃ」獣人たちは、動きやすさを第一に考えるからなあ……。

シャングリ・ラを検索すると、動物用の救命胴衣も売っている。マジでなんでも売ってるんだなあ……。

湖を渡るときには、ベルにも救命胴衣を着せたほうがいいだろうか？

猫は水が苦手なのは解るが、森猫はどうなんだろうな。

元世界の森に生息していた山猫やヒョウなどは、泳ぎが上手かつ

たような映像を見たが……。

俺が救命胴衣のことを考えていると、ゴムボートに乗って獣人たちが湖に出てしまった。

そんなに遠くには行かないから、大丈夫だとは思うが。彼女たちは泳ぎも上手いし。

泳ぐときに、毛皮が邪魔にならないのかと思うのだが、それ以上にパワーとスタミナがあるからな。

俺たちは、やることもないので、半日休みだ。

砂浜にパラソルとデッキチェアを2つ出した。

テーブルも出して、飲み物——缶コーヒーを置けば、気分はもうリゾート。

ふと見れば、ベルがいないが、森に狩りに出かけたようだ。

デッキチェアに寝転がって、双眼鏡で獣人たちを覗く。

ゴムボートの上で、弓を引いているのだが、大丈夫なのだろうか？ 獣人たちを観察していると、アネモネが俺の上に載ってきて、抱きついた。

「アネモネ、隣に座ればいいだろう」

「隣はリリスが座っている」

見れば、本当にリリスが脚を伸ばして座っていた。

サクラにいたときと違い、ブラウスと動きやすいズボン姿になっている彼女は、この旅を満喫しているように見える。

サクラにいるときのワンピース姿も素敵だが、ズボン姿も凛々しくて、よく似合う。

元々、王族の女性はアマランサスを始め、すごく活動的な方が多い。

王族が率先して、パンツルックを流行らせれば、国中の女性に広まるのではないだろうか。

「ケンイチ、私にも見せて」

アネモネに双眼鏡を渡すと、リリスとアネモネにも飲み物を出してやる。

オレンジジュースでいいだろう。

「どうだ？ 狩りは上手いきそうか？」

「うーん、上を見て構えているけど……あ、ニヤメナが落ちた！」

「え？ ちょっと見せてくれ」

アネモネから双眼鏡をもらって、覗く。

確かに、ニヤメナが落ちて、バシャバシャしている。

「こりゃ、行ったほうがいいかな？」

俺は水際に行くと、アイテムBOXからゴムボートを出して、獣人たちの所へ向かった。

数分オールを漕ぐと、獣人たちの所へ到着したが、ゴムボートの縁が潰れて凹んでいる。

ゴムボートの縁にニヤメナが傷をつけたらしい。

ボートは何箇所かの区画で仕切られており、一箇所穴が空いても全部の空気が抜けないようになっている。

「ああ、傷をつけたんで、膨らみが破れたな」

「旦那、面目ねえ。船に上がろうとした時に、慌てて爪を立てちまっ……」

「ああ構わん。すぐに直せるからな」

まあ直すというか、別のやつを出すだけだが。

俺は、別のゴムボートをアイテムBOXから出すと、彼女たちに乗り移るように指示を出した。

「ほら、こっちの船に乗り移れ」

「これだから、トラ公はダメなんにゃ」

「うるせえ……」

ヘマをしてしまったので、ニヤメナの反撃も少々弱々しい。

2人でニヤメナを、新しいゴムボートに引っ張り上げると、水で濡れた彼女の身体はペシヨンとなっていてしまっている。

「熱い風を出す魔道具は、船の上では使えないぞ？」

彼女たちにタオルを何枚か渡した。

「手ぶらじゃ帰れねえから、もう一度やる！」

「揺れる船の上から狙うのは大変だろう」

揺れる船の上で——南無八幡大菩薩、願わくはこの一矢をあの的に当てさせたまえ——って扇子を落としたって話もあるがな。

「いや！ やる！ 旦那、止めねえでくれ」

「ウチも付き合うにゃ」

「解った解った」

潰れてしまったゴムボートをアイテムBOXに収納した。

幸い、コンパウンドボウは水中には落とさなかったようだが、もし落としても軽いから、浮かぶかな？

一応、彼女たちにも注意を促す。

「矢が船に刺さったりしても潰れるからな、刃物もダメだ。気をつけろよ」

「解ったにゃ」

狩人が本業とも言える獣人たちが、目の前に獲物が沢山いるのに、手ぶらじゃ帰れないのだろう。

俺は1人でボートを漕ぐと、岸に戻ってきた。

せつかくボートを出したので、パワーアップ用のアイテムでも探してみるか。

シャングリ・ラを検索してゴムボートに装着する船外機を物色。多分、長距離を漕ぐことになりそうなので、文明の利器を使う。獣人たちは、いくらボートを漕いでも平気だろうが、俺は違う。聖騎士となったとはいえ、普通のオッサンなのだ。

飯を食い続け、ナチュラル回復ヒールを使いまくれば、漕ぎ続けることも可能だろうが、パワーとスピードは如何ともし難い。

そこに船外機があれば、なにかに襲われた時に、猛スピードで逃げ切ることもできるだろう。

このボートの後ろには、船外機をつけるためのマウントも装備されている。

ここらへんの規格は統一されているはずなので、売っている船外機なら装着できるはずだ。

日本のメーカー製は4ストが多いようだが、シャングリ・ラでガソリンが売っていない。

最近は環境問題とやらで、4ストが多いのだが、ここは異世界なので環境問題は無問題。

農機具などに使う2スト用のガソリンは売っているので、2ストの船外機がいいのだが。

かといって、わけの解らん某国製とかは勘弁願いたい。

肝心なときに、エンジンがかからなくて、ホラー映画のような展開になるのは御免だ。

——主人公が、化け物やゾンビに追われている。

そこに見つけた、車やモーターボート。喜んで乗り込むのだが、鍵が見つからないとか、エンジンがかからないとかで、ハラハラさせるのがエンタメの定番だ。

それが映画ならそれでもいいかもしれないが、実際にはそんな場面には遭遇したくない。

「あつたぞ……2ストの船外機だ」

マー○ユリーというメーカーだ。船外機のメーカーなんてまったく知らないのだが、バイクを作っている日本のメーカーが作っているのは知っていた。

この会社はバイクメーカーではないが、日本のメーカーのようだ。

「ポチッとな」

砂の上にドシャ！ と黒い船外機が落ちてきた。

船外機というと、モーターボートなどに搭載されているデカイのを想像するのだが、こいつは2馬力なので、小さい。

俺でも簡単に持ち上げられるし、このぐらいコンパクトじゃなければ、ゴムボートなどに搭載できない。

船外機を持ち上げて、ゴムボートのケツに装着。クランプで固定する簡単な方式だ。

シャングリ・ラで、農機具用のガソリンを購入して入れる。

2スト用の混合燃料は2Lで1800円——リッター900円とクソ高いが、しょうがない。

ディーゼルの船外機があれば、ラ○クルや重機に使っているバイオディーゼル燃料が使えるんだが。

あいにく、ディーゼルの船外機は検索しても売っていないようだ。

取り付けが完了したので、早速進水式だ。

船外機のケツを持ち上げて、ゴムボートを湖に入れる。

燃料ポンプを押して、チョークを引き——リコイルスターターを引けば——。

「よっしゃ！」

バイクみたいな音とともに、エンジンが目覚めた。
船外機には長い棒がついており、これで舵を取る。

棒の先にはバイクのようなスロットルがついており、こいつを回すとエンジンの回転数が上がる。

排気ガスは出ないが、水中に排出されているようで、意外と静か。まずは慣らし運転だな。

俺はゆっくりと、湖の上を滑るように走りだした。まあ、時速10kmぐらいだな。

それでも手漕ぎよりは数倍速い。なんといっても疲れないし。

湖面は鏡のように滑らかなので、本当に滑るようにゴムボートは進む。

あまり遠くに行かないように、ぐるぐると回っていると、水際でリリスが叫んでいる。

ゴムボートを操ると、彼女の下へ向かった。

「どうした？」

「なんじゃそれは！ 漕がずに進んでおるではないかえ？」

「ちょっと魔法で動くようにしてみた」

「なんと！ 妾も乗せてたもれ！」

そこにアネモネもやって来た。

「私も！」

まあ、しょうがない。どのみち慣らし運転はしなくちゃならないからな。

アネモネとリリスに救命胴衣を着せると、ゴムボートを走らす。

「すごい！」

「すごい！」

2人の黒と金の髪の毛が、風にそよそよとなびいている。

水面を滑るように進むゴムボートに、彼女たちも楽しそうだ。

「長い間、水の上を進むことになるからな。それに、なにかに襲われても逃げられるだろ？」

「たしかにのう」

燃料が1・4Lしか入らないから、航続距離は限られていると思うが。

湖の上をぐるぐると周り、獣人たちの所へ行く。

「おおい、首尾はどうだ？」

一応、声をかけてみたのだが、ゴムボートの上に獲物がないのを見れば、お察しだ。

「くそ！ 中々上手くいかねえ」

地上と違い、足下がグラグラしている。発射する角度がほんの少しでも変われば、標的の近くでは大きな違いになってしまう。

「それじゃ弓から、クロスボウに替えるか？」

「ケンイチ、武器を変えても、さほど違いはないのではないのかえ？」

リリスの言うとおりだが——俺がお手本を見せるために、ゴムボートに寝転がった。

「こうやってさ——船に寝転がって、照準を定めたらどうだ？」

船に寝転がれば重心が低くなるので、揺れが小さくなるはずだ。

テコの原理だな。

背の高いバスより、車高が低いスポーツカーのほうが、ロールが少ない。

「それにゃ！ ケンイチ、クロスボウ貸してにゃ！」

「ほい！」

俺はアイテムBOXから、装填済みのクロスボウを取り出すと、ミャレーに貸した。

「あ！ てめえ、クロ助！ この裏切り者！」

「要は、手段はどうだろうと、獲物を獲った者の勝ちにゃ！」

俺からクロスボウを受け取ったミャレーは、早速ボートに寝転がって、崖の上の鳥に照準を定めた。

大きな黒白の鳥が、下の湖にいる俺たちを威嚇している。

卵か雛がいる鳥を撃つのは可哀想だが、これは娯楽ではなく、食料を取るための行為なのだ。

発射——矢が飛んでいくと、鳥の足下に当たり、驚いた鳥が飛び立った。

「あ、惜しいな」

「大丈夫、次は当てるにゃ」

ミャレーは、俺からもう一本矢を受け取ると——寝転がったまま器用に装填して、再び構えた。

今度は別の目標に、じつと狙いを定めて、再び発射！

鋭く進んだ矢が、見事に鳥に命中。黒白の大きな鳥が、岩肌を転がりながら落ちてきた。

「やったにゃ！」

「よし、俺が取ってきてやる」

船外機のエンジンをかけると、獲物が浮かんでいる場所へ行き、鳥を拾い上げた。

「大きいな、こりゃ。食いごたえがありそうだ」

「美味しいのかの？」

リリースが俺の掴んでいる鳥を覗き込む。

「食ってみなきゃ解らんが、食えないことはないだろう」
色々な野鳥を食べた話を聞いても、人によって話が違ったりする。
俺の知り合いの話では、都会のゴミを漁っているハトやカラスは
まずかったが、田舎のキジバトやカラスは美味かったらしい。
特に腐肉ばかり漁っているカラスは、頭がハゲてハゲタカのような
になるから、すぐに解ると言っていたが、本当かどうかは定かでは
ない。

獲物を拾って、獣人たちの所へ戻ってきた。

「ほら、大物だぞ」

「にゃー！ ケンイチ、その船は魔法で動くようになったのにゃ？」
「そうそう、湖の上を長距離進むことになりそうなので、改造をし
た」

「ウチは、岸に戻るから、そっちに乗せてにゃー！」

「え？ 4人は大丈夫かな？」

一応4人乗りだったはず——とか、考えてるうちに、クロスボウ
を持ったミャレーが飛び乗ってきた。

「にゃー！」

「あぶないな。ミャレーもこれを着るか？」

俺は、オレンジ色の救命胴衣を指差した。

「要らないにゃ」

やっぱり要らないらしい。

「ニャメナはどうするんだ？」

「獲るまで戻れねえだろ！」

意地でも、コンパウンドボウで獲物を獲るつもりだ。

「それじゃ、頑張るにゃー！」

「くそ！」

ミヤレーは、プライドや伝統などは関係なく、即座に判断して確実な方法を模索するタイプだ。

それに対してニャメナは、少々意固地なところがある。

ニャメナは1人で頑張ると言うので湖に残し、俺たちだけ岸に戻ってきた。

「早速、下ごしらえをするにゃー！ ケンイチ、これで唐揚げを作つてにゃ！」

「おお、いいぞ！ うまい肉だといいが、ミヤレーはこの鳥は食べたことがあるのか？」

「ないにゃ！」

「ないのか？」

「こんな場所に巢を作る鳥は初めて見たにゃ」

確かに、他にこんな場所は――サクラの後ろにある崖に近いが、下は水じゃないしな。

ここなら外敵は、ほぼゼロだろうから、繁殖地に選んだのだろう。アイテムBOXからユ○ボを出して、砂地に穴を掘る。

「ミヤレー、ゴミはこの穴にな」

「にゃ」

ちよつと離れた場所に、今日の風呂用の穴も掘ったのだが、なにやら赤くて長い紐のようなものが見える。

重機を降りると、泥水の中に漂う、それを捕まえた。

「なんだ？」

手に掴むと、ぬるりとした手触りで、それは生きてうねうねしていた。

「おわっ！ なんだこりゃ」

「んにゃ?! ふぎゃー! ケンイチ、それが管虫だにゃ! こんなところにもいるのにゃ!」

「え? これがか!」

頭には丸い口が開いていてギザギザの歯が見える。

この顔は、俺の地元にいたヤツメウナギを思い出す。

動き回る縞々の赤いボティー—うなぎというよりは、巨大なミミズだな。

サクラの周辺でもいるのかな? 砂地でも見たことがなかった気がするが……。

普通は湿地帯にいるらしいから、川を登ってきたのかもしれない。

「ミャレー、これどうやって料理するんだ?」

「し、知らないにゃ! 管虫なんて食わないにゃ!」

そこにアネモネとリリスがやってきた。

「ほう、これが管虫という生き物かえ?」

「気持ち悪い!」

リリスは、まったく動じないが——それより、こいつの料理だ。

エルフからもらった管虫の干物には、頭がなかった——ということとは、頭は食えないのだろう。

アイテムBOXから、まな板を出すと、包丁で頭を落とす。

シャングリ・ラから釘を購入して、頭がなくなっても暴れる管虫の先を打ちつけた。

管虫を押さえつけると、腹を割いていくが、うなぎのように骨はないので、どこから割いても同じ。

口から尻まで一直線で繋がっているの、真っ直ぐに内臓を出していくが——1／3ぐらいは、排泄物が詰まっていた。

ここらへんは肉も臭そうなので、切り落とした。

開いたら適当な長さに切って串を打つ。見た目は赤い蒲焼き。

「それをどうやって食うのじゃ？」

「単純に焼いてみるさ」

タッパに、シャングリ・ラで買ったうなぎのタレを入れて、蒲焼きを浸す。

俺が料理をしていると、ニャメナが鳥の首を持って帰ってきた。

「おい、クロ助、旦那はなにをやってんだ？ 嫌な予感しかしねえんだけど？」

「ケンイチは、管虫を食うって言ってるにゃ」

「え？！ ここにいるのか？」

「砂地の下にいるみたいにな」

「ふぎゃ！」

ニャメナが飛び上がった。

「おい、聞こえてるぞー！ 別にお前らに食わすつもりはないからな。その鳥で唐揚げだろ？ 解ってるよ」

そのあと、彼女たちが肉の処理をして、一口サイズの肉の塊が多数できていた。

コンロと鍋を出して、唐揚げを作り始め――試しに10個程揚げ、皆で味見を試みる。

「ぱく！ うーん、風味もいいし、臭いもないな。いいんじゃない？」

――あ、あとからちよつと苦味がくるような？」

「ふむ、なるほどのう。ケンイチの言うとおりじゃな」

「でも、許容範囲にゃ」

ミヤレーにしては難しい言葉を使ったな。

「これなら大丈夫だぜ！ 苦味なら、エールの方が苦えからな」
まあ、ニャメナの言うとおりだな。これは大人の味か。

「アネモネは？ 大丈夫か？」

「うん、ちょっと苦手だけど大丈夫」

「え？ 苦手なら、他の唐揚げを作ってやるぞ？」

「いいの！ 皆と一緒に食べるから！」

ここで世話を焼くところじれるから、彼女の自主性を育てる。

唐揚げ作りは、アネモネとリリスに任せて、俺が管虫の蒲焼きを焼きだした頃――。

辺りは、夕日に染まり始めていた。

炭火を起こして、蒲焼きを焼く。

いっちょ前に、ジュウジュウと白い煙といい香りが、辺りにただよう。

こんなのを食うのは初めての経験。前に食ったのは干物だったし。

一つ焼き上がったので、試しに一口食う。その様子を、獣人たちがすごい形相で見ている。

「ふむ……」

皮はパリパリ、中はコリコリというかボリボリというか……歯ごたえのある食感。

およそ当たり前であるが、これは動物の肉ではありえない歯ごたえ。

昔、食べたヤツメウナギに似ていると思うが――あれよりは美味しいと思う。

「ケンイチ、美味しいのかえ？」

「まあまあだな、リリスも食ってみるか」

「うむ……パク！ ほう！ これも珍味じゃのう！ 食べたこともない食感――これは肉ではないな」

「そう、肉じゃないね」

アネモネも普通に食べている。

「うん、美味しい」

「まあ、こういう食い物だと思えば、大丈夫だな」

「うえーっ」「にゃー」

獣人たちが嫌そうな顔をしているのだが――。

「こっちを見ながら食わなきゃいいだろ、ほれニャメナ。エールだ」
ニャメナにビールを渡すと、森の中からベルが戻ってきた。

「おお、ベル。お前も食ってみるか？」

彼女には、タレに浸けてない白焼きをやってみたが、美味しそうにボリボリと食べている。

結構グルメの彼女が食うってことは、やっぱりそれなりの美味しい物ってことになる。

でも、森猫は管虫が平気なのだろうか？ 調理したあとの状態だと、これが管虫だって解らないからな。

飯を食い終わったので、後片付けしてから、砂地に掘った穴の風呂に浸かる。

風呂から上がったあと、もう一つコンテナハウスを出した。

今日は、アネモネと一緒にであるが、もちろんするわけではない。

最近、あまり彼女の相手をしてあげられないので、少々拗ねぎみだ。

シャングリ・ラで買った、女の子用の服を着せたりして、彼女のご機嫌を取る。

「おお、可愛いじゃないか」

彼女に着せたのは、黒いワンピースで、裾がレースになっているもの。

魔女っ子らしくていい。これで、大きな帽子と杖を持っていたら、本当に魔法使いだ。

この世界の女性の服は基本がワンピースだからな。但し獣人たちはのぞく。

「でも、こんなので冒険できないし」

「街とかで着ればいいだろ？」

「私は、ケンイチと冒険がしたいの！」

「でも、いつまでもそんなことをしていられないし……とか俺の言うセリフじゃないな」

不満は色々あれど、ワンピースは気に入ったらしいので、アイテムBOXにあるアネモネ用のフォルダに入れる。

その間に彼女は、ピンク色の寝間着に着替えて、俺の腹の上に載ってきた。

俺はシャングリ・ラを見ているのだが、アネモネには見えていない。

無防備な俺に彼女が抱きつくと、不意に唇を重ねてきた。

「ちよつとアネモネ……」

俺は、突然の彼女の不意打ちに固まった。

まったく、アラフォーのオッサンが12歳にしてやられるなんて。

「ケンイチが、ちつとも口にしてくれないから！」

「ふう……解ったよ。チューだけは認める」

「やったあ！」

そうは言っても、唇を軽く触れるだけである。

それで彼女の機嫌が直るならよしとしよう。

149話 水中洞窟

湖の北側を走っている連続した崖を測量するため、俺たちは朝一で出発した。

この崖の問題は、切り立った断崖絶壁がどのぐらいの距離に渡って繋がっているか不明な点。

ドローンを飛ばしてみても、先が見えない点からしても、1日でクリアできるとも思えない。

そのために、コンテナハウスを出すための岸がなく、下手をする
と水の上で夜を明かす羽目になるかもしれない。

この湖には、クラークンのような化け物がいるのも確認済みなので、なんとか危険を回避したいのだが……。

獣人たちが手漕ぎで湖を崖伝いに先行して進む。

そのあとを2馬力の船外機を載せた俺たちのゴムボートが、測量しながら追いかける。

獣人たちが岩肌にピンクのスプレーで印をつけて、そこまでの距離をレーザーで測定。

方位と距離を地図に書き込んでいく。

先行している獣人たちのボートは手漕ぎでも速い。

彼女たちには、トランシーバーと食べ物を持たせてある。

ボートを漕いで、俺の測量を待っているだけなので暇なのか、ずつとトランシーバーで話している。

電池がなくなるだろうと思うのだが――まあ電池なんて安いから、いいけどな。

やることなくて暇そうなのは、こちらのボートも一緒である。
ゆらりゆらゆら、ただよう船の上。ここは湖で波はないから、酔いはしない。

女の子2人にオレンジ色の救命胴衣を着せて有事に備えているが、アネモネは青いローブを脱いで、ワンピースの上に着用している。
そんなゴムボートの上で、アネモネはパッドを使って電子書籍を読む。

それを見たリリスも、電子書籍を読みたいと言いだした。
しかたなく、リリスにもパッドを貸す。

「ほう！　これが魔法の板かえ？」

「そう、お城の書庫にあった本が全部その中に入っているんだ」

「なんと！　それは真かえ？」

「ああ、全部入れたので、入っていると思うぞ」

「それでは、子供の頃に読んだ『森に生息する魔物図鑑』は？」

リリスの言葉に、アネモネが反応した。

「それ、読んだから入っているよ」

「ほう」

「アネモネの方が沢山読んでいるから、彼女に聞いたほうが早いな」
オレンジ色の救命胴衣を着た彼女たちが、あれこれと本の話をしているのだが――。

ゴムボートの隅っこに収まるように、じっと伏せている黒い毛皮――ベルだ。

俺に無理やり、青と黄色に塗られた犬用の救命胴衣を着せられて、恨めしそうにこっちを見ている。

「そう睨むなよ。君のためなんだよ？」

「……」

「そうだベル、チ○ールをあげよう」

俺の言葉に彼女が反応した。

シャングリ・ラからチ○ールを買って、封を切つてやると、一心不乱にペロペロしている。

「そなたはすぐにそうやって、食い物で釣ろうとするの」

「美味しいものでご機嫌をとるのは基本だろ？」

「む……」

「君たちも、チョコレートはどうだ？」

シャングリ・ラから買ったチョコレートにアネモネが飛びついた。

「食べるー！ リリスは要らないよね？」

「食べるに決まっておるであろ！」

リリスはアネモネからチョコレートを奪い取って食べ始めたのだが、動きが止まった。

「どうしたリリス？」

「……その……なんじゃ……」

「ん？ どうした？」

「あの……花摘みがしたいのじゃが……」

「ああ、男なら立ちションでいいが――女の子はねえ、そうになるとこれしかないんだよねあ」

俺はシャングリ・ラを検索して、あるものを購入すると、ポトリと透明な容器がボートの上に落ちてくる。

「これでどうしろと言うのじゃ?!」

「ズボンを脱いで、その中にするんだよ」

リリスの服装は、この測量に出発する前に、動きやすいズボンを穿かせた。

そう、俺が購入したのは、女性用の尿瓶。

「そ、そんなことができるはずなからう！」

柔らかいゴムボートの縁に乗って——なんてできないし、バランスを崩してひっくり返る可能性大だ。

「それじゃ俺が抱えてあげるから、ズボンを下ろして股を広げて……してみる？」

「そなたは、女子おなこをなんだと思っておるのじゃ！」

「そんなこと言われてもなあ——他に方法がないぜ？」

「リリス貸して！ 私ならできるから！」

アネモネが、リリスの手から尿瓶を奪い取ると、自分の紺色のワンピースの中に突っ込んだ。

この世界には下着がないので、そのままできる。

「ん……」

勢いでやってみたが、やはりアネモネも恥ずかしいらしい。

「おい、アネモネ……」

「ほら！」

アネモネがし終わったものを勢いよく差し出した。

「みせんでもいい！」

リリスの言葉に、アネモネは尿瓶の中の液体を湖に捨てた。

「このぐらいできなくて、ケンイチと一緒に冒険とかできないから！ その覚悟で、リリスもやって来たんじゃないの？」

「た、たしかにそのとおりじゃが……」

「リリス、無理をするなど言いたいところだが、マジで他に方法がない……あ、湖に飛び込むとか」

「妾は泳げん！ 解った！ すればよいのじゃろう！」

顔を真赤にしたリリスがズボンを下ろし始めた。流石に凝視でき

ないので、後ろを向く。

音が終わったので、声をかけた。

「終わったかい？」

「……うむ」

俺が振り向くと――リリスが液体の入った尿瓶を俺に差し出してきた。

「どうじゃ！ これで満足であろう！」

「いや、満足とかそういうのじゃなくてさあ……」

「なんだというのじゃ！」

リリスの手から尿瓶を受け取ると、中身を湖に捨てる。

「俺とリリスは夫婦じゃないか」

「そうじゃが！ それとこれと――」

「まてまて、君が病氣や怪我で動けなくなったら、俺が下の世話までするんだよ？」

俺の言葉に、リリスの表情が変わる。

「そのようなことは、メイドたちがおれば……」

「メイドがいない、こういう場所だったら？ 逆に俺が、怪我や病気で動けなくなったら、リリスは俺の世話をしてくれないのかい？」

「私はするよ！ 絶対にしてあげる！ なんだってするから！」

大声を上げたのは、アネモネだ。

「ありがとうアネモネ」

「無論！ 妾だつてするに決まっておる！」

「それじゃ、リリスもこのぐらいは平気だよね！」

今日は、アネモネがめっちゃ突っ込みまくっている。

「わ、解った——そなたたちの言うとおりにじゃ」

「ありがとうリリス。恥ずかしい思いをさせて、ごめんな」

そうは言っても、このゴムボートの上じゃどうしようもないのも事実。

「ううう……」

納得はしてくれたようだが、やはり恥ずかしかったのか、顔が真っ赤なままだ。

「裸とか見られているのに、やっぱり恥ずかしいか？」

「そんなの決まっておるじゃろ！」

「解ったよ。それじゃ俺もするから、2人で見ればいいだろう」
そう言う俺は、ゴムボートの上から立ちションを始めた。

「見る見る！」

アネモネとリリス、2人の美少女が、俺の立ちションに興味津々で覗いている。

一体どういうプレイなんだよ、これは。

「ほう！　なるほど、このようにするものなのかえ」

「うん」

「アネモネは見たことがあるのかえ？」

「野盗に捕まっていた時に、盗賊がいつも立ちションしてたから
まあ、ああいう荒くれたちは、そんな感じだろうな。」

「騎士団の連中にさせて、観察とかしなかったのか？」

「するわけがなからう！」

「ええ？　マイレンとは、あんなことをしていたのに……」

「あ、あれは、女子^{おなこ}同士の遊びじゃ！」

し終わったので、息子をしまっていると、リリスが神妙な顔をし

ている。

「どうした、リリース？」

「なるほど、男がするようにするのは解った——じゃが、大きくなつたときは、どうやってするのじゃ？」

「まあ、ちよつと出にくくはなるが、普通にできるよ——といっても、他の男のを見たことがないから、なんとも言えないが……」

「ほう、今度2人きりのときに、見せてたもれ」

「ええっ？」

「ずるゝい！ 私も見ろう！」

「マジですか？」

「妾もそのぐらい、恥ずかしかったのじゃが？」

「解ったよ……」

まあ本当に夫婦なら、死がふたりを分かつまで一緒だからな。

「でも、リリース？」

「なんじゃ？」

「お城には、お尻拭き係とかいなかったのか？」

「そんな者がいるはずがなからう！」

「ええ？ そうなのか、俺が知っている国ではそういう専門職がいたところもあったので、てっきり……」

確か、江戸城の將軍様には、そんな係がいたとかなんとか……。

「そんなことまでして、どうするのじゃ!？」

「いやあ、やんごとなき方から出てきたものを調べて、体調の管理とかするらしいんだよ」

「……なるほどのう、そう言われると、理にかなっておるような……」

リリースが、俺の話に複雑な表情をしている。

ちよつと気になったので、獣人たちにもトランシーバーで連絡し

てみた。

「おい、そっちは用足しかどうしてるんだ？」

『だ、旦那！　なんだよ藪から棒に！　いくら旦那でも、そんなことを……』

無線に出たのはニヤメナだ。

「悪いな変なことを聞いて。今ちょうど、そのことで揉めててな」
『ウちらは、水に浸かってしてるにゃ！』『おい、クロ助！』
どうやら獣人たちは、半身水に浸かって用を足しているらしい。

「途中に岸があればいいけどなあ。今は小だからいいけど、大になつたら……」

「なつたら、どうするのじゃ！」

俺はシャングリ・ラからホーロー製のおまるを購入した。

「こういうのにするしか」

「……座敷牢にこういうのがあるの……そうか、この船の上は座敷牢と考えればよいのか」

何かを悟ったように、リリースがつぶやく。

いや、別に悟らんでもいいのだが。

「私は平気！　するよ！」

なんか、アネモネのテンションが上がってて怖い。

「ちょっと、アネモネ落ち着きなさい」

「リリースはお姫様で、こんなことできないでしょ？　屋敷にこもってればいいの！」

「なんじゃと！　なんじゃ、このぐらい！　妾にもできるわえ！　なんなら、今すぐここでしてやるわえ！」

そう言うと、リリスはズボンを下ろし始めた。

「まてまて、待ちなさい二人とも！ そのうち岸があるかもしれないじゃないか」

「「ぐぬぬ……」」

アネモネとリリスがゴムボートの上で睨み合う。どうしてこうなった。

極限状態なので、常軌を逸しているのか？

そこまで切羽詰ってる状態じゃないと思うんだが……。

ゴムボートの隅で丸くなっているベルが、俺たちの様子を呆れ顔で見、あくびをしている。

2人をなだめて、獣人たちと合流すると昼飯にする。

書き記した地図によると、3 kmほど進んだらしい。

このまま夕方まで続けると、6 kmか……意外と進むもんだな。

俺のゴムボートに船外機を取り付けたのも大きい。

「まったく、船の上で揺られて本格的な飯なんて初めてだぜ」「にや」

「俺だって初めてだよ」

実際は、青函連絡船や、苫小牧——大洗間のフェリーも乗ったことがあるのだが、ゴムボートの上での食事は初めてだ。

そういうえば——奥尻島行きフェリーにも乗ったなあ。

料理ができないので、パンやハムなどの簡単に摘めるものにした。インスタントスープも、火を使わずにアネモネの魔法で温めができるしな。

「旦那、この崖ってどのくらい続いていると思う？」「にゃ？」

「空に飛ばした召喚獣で見てみたが、まだ先は長いな。途中で少しでも、休める場所があればいいんだが……」

「けど、ケンイチのアイテムBOXや魔法があるから、こんな飯を食べたりして余裕なんにゃ」

「そうだよなあ。旦那以外の普通の役人なんかきたら、事故が起きまくって……」

「その前に、こんな船を用意できぬであろ？」
ムスツとしているリリスは、まだ不機嫌だ。

「まあ問題があるとすれば、便所の問題だけだな……出発するまで、すっかりと忘れてたけど」

本当に気がつかなかった。

「旦那の言うとおり、俺もまあ……頭になかったね」「ウチもにゃ」「海での航海は、どうするのかのう……」

「そりゃやっぱり、海にするんだろう？ それとも、おまるにして海に捨てるか」

「うぐ……それしか考えられんか……」

「ケンイチ、海って見たことがない」

アネモネは海を見たことがないようだ。

「アネモネの村って、ウルップだっけ？ ダリアよりは、かなり海に近いみたいだが……」

「海まで行ったことがないし、村と周りの森が私のすべてだったから……」

まあ子供の脚じゃ遠出するのは、無理だろうか。

「王家の本の中に、ウルップのことを記していたものがあったぞ？」
「へえ」

「たしか、『辺境の暮らし』という本じゃ」
アネモネが、タブレットを取り出して、その本を調べている。

彼女は一度読んだ本に、日本語でラベルをつけて、検索できるよ

うにしている。

「これ……」

アネモネが俺にタブレットを渡してきた。確かに、「辺境の暮らし」という本がある。

中を開いてみると、落書きのような地図が出てきた。

この世界の地図といっても、こんな感じのことが多い。

距離も正確に測ったものではなく、記録した者の主観によるものだ。

「えーと、海まで数十リーグと書いてあるな……」

多分、20〜30kmぐらいの距離だろう。子供がその距離を歩くのは大変だ。

自転車でもあれば別だろうが。

「海ってのは、この湖よりはるかにでかくて臭い。そして水が塩辛い」

「臭いの？」

「ああ、臭い。生臭い臭いにおがする。ミヤレーとニヤメナは？ 海を見たことがあるのか？」

「ないな」「ないにゃ」

「湖に繋がっているあの川を運河にすれば、海岸沿いとも交易ができるんだがなあ」

「そのような大事業、とてつもない金がかかるぞえ？」

「まあな」

「それに旦那。川や湿地帯は魔物がうようよだ。スライムもいるしな」

この世界のスライムは雑魚でなくて、かなりの強敵みたいだしな。やっぱり無理があるか……。

川が利用できるようなら、王都まで一直線に繋がっているわけだ

し、とづくに利用されていてもおかしくない。

それが放置されたままってことは、それなりのわけがあるのだ。

昼飯を食い終わったので、再び測量を始める。

進んで測り、そしてまた進む。

順調に進み――午後の3時頃、獣人たちから無線が入った。

『ケンイチ！ 穴があるにゃ！』

「穴？ 大きいのか？」

『結構、大きいにゃ！』

船外機を回し、急いでその場所へ行くと、水面に沈んだ黒い半円形がポツカリと口を開いていた。

高さ5 m、横幅は7～8 mぐらいって感じか。

「ちょっと中に入ってみるか……」

「え？！ 旦那、大丈夫かよ」

「トラ公は心配性だにゃ」

ニヤメナは反対、ミャレーは賛成のようだ。

「まあな、流石に水の上だと、俺の召喚獣が使えないから、ニヤメナが心配するのも解る」

「そうなんだよ。それに、こんな船の上じゃ戦えねえ」

「なにかいるって決まったわけじゃないにゃ」

「どうだ、お母さん？ なにかいそうか？」

「……」

警戒もしていないが、楽観もしていないって感じか。

「お前たちは、ここで待っててもいいぞ。俺だけ、中に入って見てくる」

もしかして、ここも川になってて、山の反対と繋がっていたりな。

それじゃトンネルじゃないか。

「私も行く！」

「妾もじゃ！」

「ウチも行くにゃ！　トラ公だけ、ここで待ってればいいにゃ」

「俺だって行くに決まってるだろ！」

決定だな。アイテムBOXから、LED投光器とモバイルバッテリーを出した。

この投光器は、いつぞやの洞窟蜘蛛以来の出番だな。

青い光で岩肌を照らしながら、2艘のゴムボートでゆっくりと進入を開始する。

日が入ってくるのは入口だけで、中は真の暗闇。

洞窟蜘蛛がいた、あの洞窟もこんな感じだったな。

あそこにも魔物がいたし、ここにも居る可能性はあるが――ベルをチラ見しても、警戒している様子はない。

そのまま100mほど進むと行き止まりで、ライトの光に照らされた砂浜が見えてきた。

「おおっ！　船をつけられるぞ！」

「やったにゃ！」　「おおっ！」

辺りを確認しながら、ゆっくりと岸にボートを乗り上げた。

その場所で辺りを確認する。ベルも降りて、辺りのパトロールを始めたが、地面を気にしている。

なにかいるのだろうか？　こういう洞窟だとコウモリなどがいるうだが確認できない。

奥のほうが高い斜面になっている砂浜。そのさらに奥にも細い通路が続いているようだが、探索は止めておく。

進んできた方向を振り返ると、出口の小さな光がポツンと見える。

「どうだ？ なにか怪しい音とかは？」

「んん？ なにも？」 「にゃ？」

ボートから降りた獣人たちがくるくると耳を回しているが、異常はないようだ。

「砂浜に足跡もないし、引きずったような模様もないな」

「なるほど、旦那の言うとおりだな」 「なにかいれば、足跡だらけにゃ」

「よし、今日はここに泊まるか！」

「うん！」

アネモネは賛成のようだが、リリスが渋っている。

「うう……」

「リリス、船の上で不自由するのとどっちがいい？」

「くく……これは究極の選択じゃの……」

「お姫様。少々恐ろしくても、地に脚をつけてなんとかできるってのは大事だぜ？」

「そうにゃ」

「解った、それもそうじゃな」

「お花摘みにも困らないしな、ははは」

リリスが怒っているが、事実じゃん。

俺はゴムボートを収納すると、LEDランタンをそこら中にばら撒き――コンテナハウスを設置するために、ユ○ボを出して整地を始めた。

水際から少々離れた場所にコンテナハウスを置くつもりだが、砂浜が傾斜しているので、水平にしないとダメだ。

作業が終了すると、アイテムBOXからコンテナハウスを出して設置。

ついでに洞窟の奥に、トイレの穴も掘った。

「やったにゃ！」

「ふーっ、助かった……あのまま船の上で寝るのかと思ってたよ」
獣人たちの心配も、もつともだ。

「いや実は、俺も内心は困ってた、ははは」

こいつは渡りに船というか、渡りに岸だ。

暗いのが欠点だが、地に足が着くってのは、いいもんだ。

火を燃やし、テーブルや食事の準備をしていると、ベルがなにかに反応した。

「どうした？ お母さん？！」

咄嗟にアイテムBOXから、獣人たちの剣や、ボウガンなどを出して手渡す。

「旦那？！」 「にゃんだ？！」

「解らん！」

「「ケンイチ！」」

アネモネとリリスの声が響く。

「リリスは、家の中に入ってる！」

「わ、わかったわえ！」

「アネモネ、大きい爆裂魔法^{エクスプロージョン}は使うなよ！ 洞窟が崩れるかもしれない！」

「解った！」

ベルは洞窟の奥は気にしていない。なにか怪しい気配は水中かららしい。

「コ○ツさん戦闘バージョン召喚！」

重機の腕をマックスまで振り上げると天井にぶつかるが、車体に

は十分な高さがある——大丈夫だ。

地響きをたてて、巨大な剣を装備した黄色い車体が降ってくる。

俺はコ○ツさんの運転席に乗り込むと、エンジンを始動させた。

洞窟内に、ディーゼルエンジンの煙と、天ぷらのようなバイオデ
イーゼル燃料の臭いが充満する。

俺は水面を睨みつけた。

「来た！」

なにかが水中を進んできたらしく、水面にさざなみが立つ。

「なににゃ?!」

黒い水面から水しぶきをあげて出てきたのは、赤い巨大なホース
のような物体。

いや、ホースというよりは、直径1mほどの土管か。

大きく開いた口から、水がザバザバと流れ落ちている。

「うぎゃー!! わわわわ！」

「管虫だにゃ!!」

獣人たちの叫び声が洞窟にこだますると、2人が大きく開いた巨
大な口に目掛けてボウガンを発射した。

「むー! エクスプロージョン 爆裂魔法(小)！」

アネモネの唱えた魔法だが、魔法が発動するタイムラグで管虫が
動いてしまい、攻撃は空振り。

ボウガンの矢も口の中に吸い込まれたのだが、攻撃が効いている
節はない。

「シャー！」

ベルが毛を逆立てて威嚇しているが、彼女でもこいつの相手は無
理だろう。

俺は、コ○ツさんに装備されている巨剣の切っ先を向けて、管虫を牽制。

巨大な赤い土管に果たして目はあるのか？

俺も一瞬考えたのだが、剣を向けられた化け物は、攻撃を躊躇しているように見える。

「ケンイチ！ ゴーレムのコアを出して！」

突然響いたアネモネの声に反応して、俺はアイテムBOXから、巨大な木の十字架を取り出した。

「ほら！ アネモネ！」

「うん！ むー！」

砂に放り出されたゴーレムのコアが青く光ると、水際の砂を集め、大きな壁となって管虫の前に立ちふさがる。

それはいいのだが――集められた砂の中から、赤い管虫がわらわらと無数に這い出てきた。

「うぎゃー！」

「ここは、管虫の巣にゃ！」

獣人たちの全身の毛が逆立ち、完全に戦意を喪失している。

ゴーレムで防御は出来ているが、砂の塊が攻撃のために水の中に入ろうとすると崩れてしまう。

俺は、アイテムBOXから、タイマー爆弾を取り出し、起爆時間を1分ほどにセットすると、スイッチを入れた。

「ミャレーー！ こいつをすぐに、あいつの口に投げ込め！」

「ふぎゃー！」

獣人たちにタイマー爆弾を渡そうとしたのだが、パニックになっていて俺の声が届いていない。

「ケンイチ、私にちょうだい！」

俺から、タイマー爆弾をもらったアネモネは、ゴーレムに向かって投げつけた。

それを飲み込んだゴーレムは、大きな腕を壁から生やすと高く掲げる。

腕といっても関節があるわけもなく、砂でできた触手といってもいいかもしれない。

「ロケットパンチ！」

ゴーレムの腕が風車のように1回転すると、砂の塊ごと、タイマー爆弾を管虫の口へ放り込んだ。

その攻撃に管虫は驚いたのか、するりと水中に顔を引っ込めた。水面が静かになったので、相手の出方を待っていると――岸から50mほど離れた場所で水しぶきが上がり、巨大な管虫がバシバシと暴れているのがうっすらと見える。

「ど、どうしたにゃ!？」

「多分、腹に投げ込んだ魔法が爆発したんだろ」
タイマー爆弾

「はあはあ……だ、旦那、やったのかい？」

目の前から管虫がいなくなったので、獣人たちのパニックも収まったようだが、毛はまだ逆立っている。

「止めを刺したほうがいいだろうか？ いずれ死ぬと思うが」

「か、回復すると厄介にゃ！ やってにゃ！」

「それもそうだな」

俺は、コ〇ツさんを収納すると、コンテナハウスへ向かい、リリスを外に出した。

「片付いたのかえ？」

「アネモネに止めを刺してもらおう」

コンテナハウスを一旦アイテムBOXに収めた。

「皆、洞窟の奥の方へ！ お母さんも！」

皆で避難をすると、アイテムBOXから透明なポリカーボネートの盾を取り出して皆で陰に入る。

安全を確認すると、アネモネに止めの魔法を頼む。

「アネモネ、爆裂魔法（中）だ」
エクスプロージョン

「うん！ むむむ、むー！ 爆裂魔法（中）！！」
エクスプロージョン

暗い水面に青い光が見えたかと思うと、オレンジ色の爆炎が天井まで焦がす。

次いで水面が真っ二つに割れて、それが水柱に変わり、白い波が黒い水面を走り岸まで押し寄せた。

洞窟内に炸裂音が反響して思わず耳を塞ぐ。

「わわわ！」

「にゃー！」

高いうねりではなかったのだが、砂浜に近づくにつれ高さを増す。結構奥のほうまで波が押し寄せて、辺りが水浸しになる。

引き波に持っていけないように、皆で身体を寄せ合っていると――暗く狭い洞窟内を、白い波が寄せては返して、それが徐々に小さくなった。

砂浜に置いていたLEDランタンが流されてしまったので、辺りは真っ暗だ。

「やったかにゃ？！」

ミャレーのその言葉はフラグなんだよな。

ちよっと心配しつつ、ナイトビジョンを出して覗いても、長い物体は動きが止まっているように見える。

俺は、ゴムボートを出して、管虫の所まで行ってみることにした。

「大丈夫かえ？」

「まあ、おそらくは……」

シャングリ・ラから追加で、LEDランタンを購入すると、辺りに設置する。

こいつは2つで1000円と格安なので、いくら買っても懐が痛くない。

リリースの心配そうな顔に見送られつつ——船外機を回すと注意深く管虫に近づく。

LED投光器で水中を照らすのだが、爆発の影響で水中が攪拌され、水がミルクコーヒーのように濁っている。

その中に、巨大な赤い土管が半分水没した状態で漂っていた。

「これって、アイテムBOXに入るかな？」

縞々が見える管虫の赤い身体に触れて唱えた。

「アイテムBOXに収納！」

俺の言葉とともに、目の前の水中から赤い軀むくろがなくなり、波が立った。

アイテムBOXに生き物は入らない。収納されたことは、死んだってことだろ。

「おおーい！ やったぞ！」

手を振る俺に、獣人たちが応えている。

「うにゃー！」

「よっしゃー！」

「わーい！」

とりあえず危機は去ったかな？

こんな洞窟に、こんなのがいるとは……。

ところで、これって食えるだろうか？

150話 暗い洞窟の中で

巨大な湖の北側に走る崖を測量しながら、俺たちは水面をゴムボートで進んだ。

どこにも岸が見えず、水上での一泊も覚悟していたのだが、崖の横に大きな洞窟を見つけた。

奥はふさがっていたが砂浜があり、そこで一泊と喜んでいたのだが――。

俺たちの前に現れたのは、赤い土管のような巨大な管虫。

皆の力を合わせて、これをなんとか撃破。俺のアイテムBOXには、荷物がまた増えた。

こんな巨大なものがゴロゴロ入っていても、アイテムBOXにはまったく重さを感じないし、今のところ容量の限界が見えている風でもない。

いったいどういう仕組みなのか、皆目見当もつかないが、これがなければシャングリ・ラを使えたとしても、かなりのハードモードになっていたに違いない。

アネモネの魔法によって、コーヒ―牛乳のようになってしまった水の中に漂う、巨大な管虫の軀をアイテムBOXに収納すると、皆が待っている岸に戻ってきた。

「やったぞ！ アネモネ！」

「うん！」

彼女の頭をなでてやる。

「それじゃチューして！」

「んゝ、しょうがないなあ」

彼女を抱きかかえると、軽くだが口づけする。

「なんじゃそれは！ 妾にもするがよい！」

「だって、リリスは家の中で隠れてただけでしょ？」

「ぐぬぬ……」

これはアネモネの方が正論っぽい。

彼女たちも、ほんと安心していているものと思っていたのだが、獣人たちがなにやらあたふたしている。

「旦那、まさかあれをアイテムBOXに入れてきたのかい？」

「ああ、だって食えるし、もったいないだろ？」

「うえ！」 「うにゃ！」

ああ、なるほど、そのせいかな。

「別にお前らに食えとは言わんよ——それより波にさらわれた明かりを回収するのを、手伝ってくれ」

最初に出していたLEDランタンは、アネモネの魔法によって引き起こされた波によってさらわれて、水中に引き込まれてしまった。

この世界のランタンなら、すぐに消えてしまうが、こいつはLEDでしかも防水だ。

実際、濁った水の中からうつすらと光が漏れてきている。

安物の簡易防水だが、水没したぐらいなら、なんとか保つものらしい。

「にゃー」

ベルが俺の所にやってきた。

どうやら救命胴衣を脱がしてほしいらしい。

ベルの救命胴衣をアイテムBOXに入れると、シャングリ・ラから3000円の水中メガネとシュノーケルのセットを購入。

アイテムBOXからゴムボートを出すと、服を脱いで水中メガネを装着した。

慣れれば海でも目が開けられるが、消毒されたプールの水と違い、なにがいるか解らんし。

「にやはは！ ケンイチ、それはなんにゃ？」

「これは、水の中でつけるメガネだよ」

「旦那、俺たちにも使えるのかい？」

「多分大丈夫だと思うが……」

彼女たちには毛が生えているから、気密性はどうかかな？
付け方が解らないだろうから、つけてやる。

「こうやって、水に浸けてみる」

俺は、水面に顔を浸けてみせた。

「にゃ！ すごいにゃ！ よく見えるにゃ！」

「これなら、目が痛くならないぜ！」

「そして、この筒を口に咥えて呼吸をする」

俺の手本を真似て、彼女たちもシュノーケルを咥えてみる。

管虫を見たときには、かなりパニックっていたが、もう大丈夫のようだ。

「これはすごいにゃ！ 泳いだまま息ができるにゃ！」

「これなら、顔を水面につけたまま、ずっと泳げるな！」

「でも、水に潜ると筒に水が入ってくるから、水面に上がるときは、筒から水を噴き出す」

シュノーケルから水を噴き出してみせると、彼女たちも真似をする。

獣人たちは読み書きそろばんができないが、頭が悪いわけではない。

手本を見せてやると、すぐに理解して真似をする。

獣人たちが楽しそうに泳いでいるのだが、前から気になることがある。

「獣人たちが泳いで、そのデカイ耳に水が入ったりしないのか？」

「入るけど、すぐに取れるにゃ」

「そうなのか？」

「こう、やるにゃ」

獣人たちは頭を下にして、ぴよんぴよん飛び跳ねている。

猫ってのは水が嫌いなんだけど、猫人たちは平気だな。

そういうことを言うと、猫じゃないにゃ！——と怒られるが。

ついでに1万円ぐらいの脚につける足^{フィン}ひれを買う。

安いのは脚にはめるだけだが、これは靴のように穿くタイプだ。

「旦那！ それはなんだい？」

「これは足ひれだよ。水中を魚のように泳げる」

「本当にゃ！？」

意外なところに獣人たちが食いついたので、彼女たちにも足ひれを買ってやる。

毛が生えている彼女たちの脚でも、装着できた。

「歩きにくいにゃ……」

「地上ではそうだけど、水の中では動きが速くなるぞ」

俺の言葉を聞いたニャメナが、さっそく水の中に飛び込んだ。

「おおっ！ 旦那！ これはマジですげえよ！ 船は要らないぞ！」

なんだか、とんでもないスピードで泳ぎ始めた。

シュノーケルも使いこなしているし、身体を使う能力に関しては、獣人たちの右にでる種族はいないだろう。

「使いこなしているのは解ったが、船と明かりがないと無理だろう？」

「大丈夫にゃ、ウチらはこれでやるにゃ」

「任せろよ、旦那」

ちよつと心配だが、彼女たちに任せよう。

獣人たちは夜目が利くので、暗い水の中も見えるのかもしれない。明かりもなしに暗い水の中に潜るなんて俺には無理なので、ゴムボートに明かりを載せる。

俺たちはLEDランタンを回収するので、アネモネとリリースには、食事の準備をしてもらう。

壁で繁殖していた黒白の鳥肉が、まだ残っているので、あれで唐揚げを作るそうだ。

ゴムボートで沈んでいる明かりの場所へ行くと、船に掴まり水に潜る。

泳ぎは得意じゃないが、潜るぐらいなら大丈夫だ。

ぐるぐると探し回っていると、水の濁りも収まってきたので、30分もしないうちに全て回収できた。

「いやあ、この足ひれはすごいぜ」「にゃ」

「丘に上がったら、動きにくいけどな」

水から上がると、モバイルバッテリーと、ジェットヒーターを出して身体を乾かす。

俺はすぐに乾くが、獣人たちは少々時間がかかる。

コンテナハウスを設置するためにユ○ボを使って整地したのだが、アネモネの魔法が起こした波によって、再び砂で埋まってしまって

いた。

アイテムBOXから重機を出して、再び整地しようとする。獣人たちから物言いがついた。

「旦那！　そこに部屋を置くのかい？」

「ダメか？」

「砂浜は管虫でいっぱいじゃ！」

どうやら管虫の上では寝たくないらしい。

管虫が鉄のコンテナハウスを破るとは思えないのだが、普段は冷静なミヤレーも懇願しているので、よほど嫌なのだろう。

まあ、別に無理強いするつもりもないしな。

「それじゃ、もっと奥に移すよ」

洞窟の奥はちよつと高くなっていて、岩肌が露出しているところもある。

食事の準備をしている場所も、奥に移ってもらう。

ここなら文句はないだろうが、管虫がいる砂浜とは違い水平ではないし、重機で均しもできない。

ここにコンテナハウスを置くと斜めになってガタガタしてしまう。やむを得ず、シャングリ・ラから油圧ジャッキを購入。

コンテナハウスを少々持ち上げて、隅にコンクリレンガを挿入することにした。

油圧ジャッキは5t用で6500円、コンクリレンガは8個で700円——こりゃ安い。

「ふう……こんなもんだろ」

水平にしないと、部屋の中で寝られないからな。

俺の作業が終わり、彼女たちの毛皮がふわふわになるころ、飯が完成した。

暗い洞窟内に、美味そうな料理の匂いが漂う。外も完全に暗くな

っており、出口で白く光っていた場所も、今は暗闇に溶け込んでいる。

LEDランタンに照らされているこの砂浜だけが、俺たちの世界。今、世界が終了しても、ここだと解らないかもしれない。

テーブルの上には、美味しそうな唐揚げが山盛りになっていた。早速、料理を食べる。

「おお、唐揚げはカリカリで美味しいなあ。アネモネはすっかり料理上手になったな」

「えっへん！」

「妾も手伝ったぞえ！」

アネモネは、物覚えもいいし頭もいいからな。

魔法の本を読んでもすぐに理解するし、日本語の本や電子書籍を読んで、難しい漢字でなければ日本語も読めるようになっていた。

魔導師に頭のよさは必須だと思われるが、それが料理の腕とイコールにならないのも事実。

現に、帝国の魔女——レイランさんは料理が下手らしい。

サクサクとした唐揚げの食感を楽しむ。元世界にはいなかった鳥の唐揚げだ。

やっぱり最初に食べたときのように、後味に苦味が少々あるが、マヨネーズや醤油をつければそんなに気にならない。

唐揚げにマヨネーズは、カロリーが心配になってしまうが。

「はーっ、やっぱり地面で飯を食うってのは安心するなあ」

ニヤメナが、そんなことを言いながら、ビールを呷っている。

一緒にビールを飲むなら、後味の苦味も問題ないだろう。

「そうだにゃ。ベッドでも眠れるにゃ」

「俺は、水の上で眠るなんて初めてだから、どうしようかと思った

よ」

ニヤメナの言うとおりだが、王都や国境の街ソバナでは川を運河代わりに使っていた。

家を持たずに、船を家代わりにしている人間も多いのではないだろうか？

戦後の日本でも、船で生活していた人々の映像を、なにかで観たことがある。

「ベッドに寝られるのも、ケンイチがいるからにゃー」

「まったくだな。世界中どこに行っても、旦那が一緒なら生活に困る心配はないってことだ、あはは」

それもこれも、やっぱり資金が豊富になったのが利いている。

いくらシャングリ・ラの能力があっても、それを使うには金――対価が必要になるが、一旦資金が潤沢になれば、あとは楽だ。

貯金ゼロから100万円を貯めるのは大変だが、1億円を2億円にするのにはいろんな方法がある。

金が金と呼んで、金のあるところには金が集まる。

それは元世界でも、この世界でも変わらない経済の摂理だ。

腹もいっぱいになったし、こんな洞窟の中では、やることもない外に置いてあったLEDランタンを回収すると、皆でコンテナハウスの中に入って、ベッドに座る。

ベルもドアからスルリと入ってきて、床で丸くなった。

彼女もずっとボートの上で疲れただろう。

「ふぁー、今日は疲れたにゃ」

ミヤレーとニヤメナが一緒にベッドに寝転がっている。

「ふう……まったくだな。あんな化け物と戦う羽目になるしよお。しかし管虫があんなにデカくなるかぁ？」

「聞いたこともないにゃ」
彼女たちの話によれば、あんな巨大な管虫は見たことがないと言
う。

「それじゃ、何百年も生きている貴重な個体を倒してしまったのか
も……」

「旦那、化け物は化け物だろ？ そんなことを気にするほうがおか
しいぜ？」

元世界だと、何百年も生きたエビとか、貝とか、貴重だったしな。
年齢を調べるために殺してしまったりして、非難されたとか……。

「でも、管虫は魔物じゃないにゃ」

「ひよっとすると、管虫がなんらかの理由で魔物化したのかもしれ
ぬのう」

「リリース、そんなことがあるのか？」

「うむ、たとえば召喚魔法じゃ」

アイテムBOXには生き物は入らないが、召喚魔法が作る空間に
は魔物しか入らない。

普通の生き物を強引に入れても、魔物化してしまう。

王都の魔導師、メリッサの話で出ていたな……。

「それじゃ、あのデカイ管虫を解体すれば、魔石があるってことか」
「そうかもしれぬ」

俺もベッドに仰向けで寝転がって、じっと考えごとをしていると、
あることに気がついた。

「あ！　なんか身体がすげえ、ふわふわする！　家が揺れないのに、
揺れてるような感じ！」

「なんじゃそれは？　そなた、なにを申しておる」

「皆、ベッドに寝転がって、じっとしててみる」

皆でベッドに仰向けになる。

「にゃ?!」

「なんだこりゃ?! マジで揺れてるぜ!」

「すごい! 本当に揺れているような感じする」

「おおっ! 真じゃ! ベッドや部屋が揺れておらぬのに!」

どうやら、耳の構造は人も獣人たちもあまり変わらないみたいだな。

「ケンイチ! なぜじゃ?」

彼女たちのために、アイテムBOXからスケッチブックを出し、図を描いて説明する。

「耳の奥に、渦を巻いている器官があって、中に水が入っているんだ」

「ほう……?」

「この中の水が動くことによって、頭を動かしたり、身体を動かしているのが解る仕組みになっている」

「へえ、おもしろい!」

「ずっと、身体を揺すられていて、その水の流れが安定してないの
で、そう感じるんだな」

アネモネは、面白がっているのだが、獣人たちは訝しげな顔をしている。

「旦那、どうやってそれ確かめたんだい?」

「俺は人から教えてもらったんだけど……」

「でも、そいつは人をバラしたわけにゃ?」

ああ、そういうことか……。

「まあそうだな。そうしないと人体の構造が解らないし。ほら、骨

格や内臓も描けるぞ」

一応、元プロの絵描きなので、美術解剖学は少々やっている。

「なるほど、身体の中はこのようになっておるのかえ？」

「まあな。女の場合は、更に子宮があるが……」

「子宮……？」

「えゝ子袋かな？ 子供ができると、ここが大きくなって、赤ちゃんが逆さまに入る」

「逆さまに決まっておるかえ？」

リリスが、俺の描いた図を覗き込んでいる。

「ああ、決まっている。そして出てくるときにも、頭から出てくる」
「脚から出てきたら逆子だね！」

「アネモネ、逆子とかよく知ってるなあ」

「村の家畜で、たまに逆子だとか大騒ぎしたことがあったし」
「そういう場合は、一旦戻して運動させたりするんだが……」

「へえ」

「さすが賢者じゃのう……」

感心するアネモネとリリスだが、隣のベッドでは、獣人たちが青い顔をしている。

「俺は、下手な怪談より怖い話を聞いたぜ……」

「にや」

どうやら獣人たちによると、あまり聞きたくなかった話らしい。彼らの教義からすると、こういう解剖学は禁忌に触れるようだ。

「けどな——病気や怪我を治すには、人体の構造や仕組みを知らないで治せないし」

「治癒魔法もかえ？」

「治癒魔法を使うにしても、構造を把握することで、より早い完治

が望めるようになると思うよ」

たとえば骨折した骨を繋ぐときは、骨格の構造をしらないとダメだ。

適当に治癒魔法を使つては、曲がってくっついたりしてしまう。実際、そういう例もあるらしいし。

「なるほどのう……」

腕を組むリスだが、獣人たちのテンションは下がりまくりだ。

「旦那は、ありえないぐらいに優しいけど、突然怖い話をするからなあ……」

「そうにゃ」

「まあ、獣人たちと教義が違ふところがあるからな。そこらへんは勘弁してくれよ。お前らをバラして調べたりしないから、心配するな」

「……」

獣人たちが、黙ってしまった。

あまり言い方がよくなかったか。まあ、すぐに機嫌を直してくれるだろう。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

——次の日。

朝になった——いや、なっているはず。洞窟の中は真っ暗なので、いまいち判別がつきにくい。

夜が明けた証拠に洞窟の先には、出口の明かりが小さく白く見えている。

皆も起きたので食事の準備をするが、ここは暗いし簡単に済ますことにした。

パンとグラノーラを皆で食べ、ベルにはネコ缶をやる。

果物が食いたいで、冷凍のカットマンゴーを買ってみた――1kgで2500円である。

ショッピング・ラで買うと、どうしても大量買いになってしまうが、アイテムBOXがあるので、無問題だ。

小分けにして、アネモネに魔法で解凍してもらう。

凍ったまま食べると、甘みが足りない。

「ウォーム温め！」

人間電子レンジのアネモネのお陰で、すぐに食べられるようになる。

「ほう、この果実も美味しいの」

日本の果実で近いといえば、柿だろうか。

個人的には、酸味がある果物が好きなので、あまり積極的に食べる果物ではないのだが――乾燥マンゴーは好物だ。

そういえば、ショッピング・ラにも乾燥マンゴーが売ってたな。

高いので買わなくなっていたが、今なら金がたっぷりとある。

検索すると、乾燥マンゴーも1kg2500円だ。

「ポチッとな」

乾燥マンゴーの袋が落ちてくると、オレンジ色の薄いスライスが沢山詰まっている。

「それは？」

「この果実を乾燥させた物だ。これも美味しいぞ」
袋を開けて、皆に食わせる。

「ほう！ これは歯ごたえがあって美味しいの！」

「甘くて美味しい！」

「これは、砂糖は使っておるのかえ？」

「使ってないよ。乾燥させることで果実の甘みが凝縮されたんだ」
獣人たちにも食わせてみる。昨日の話のせいで、まだなにか警戒
している感じである。

「こりゃ、うめー！」

獣人たちが、乾燥マンゴーを口に入れて目を見開いた。

「美味しいにゃ！ 砂糖も使ってないのに、こんなに甘いにゃ？」

「ああ、リンカーも乾燥させたり、ジャムにすれば甘くなるからな」
「リンカーのジャムは、こんなに甘くならないよ？」

アネモネが、オレンジ色の乾燥マンゴーをじっと見ている。

「そうだな——アネモネの言うとおりだな。多分、この果実には酸
味がないせいで、甘く感じるんだろうな」

「ほう、なるほど酸味かえ」

酸味に対抗しようとする、かなり大量の砂糖が必要になるから
な。

マンゴーが柿に似ていると思ったが、そういえば干し柿を作ると
ころも似ているな。

ドライフルーツにするなら、酸味がないほうがいいのかも。

乾燥マンゴーを食べながら、今日の予定を皆に伝える。

「今日——皆は、ここで待っていてくれ」

「ええ？ そりゃないぜ、旦那！」 「そうだにゃ！」

「いや、俺の船は魔導具で動くようになって、すごく速くなったか
ら、この先がどうなってるか一旦見てくるよ」

そう、最初からそうすればよかったんだ。

スピードが出るボートで先がどうなってるか調べてから、予定を
立ててゆっくり測量すると。

燃料は、いくらでもシャングリ・ラで買えるしな——高いけど。
そうすれば、一か八かで危ない航海をすることもなかった。

完全に俺のミスだ。

「先にケンイチが調べたあとで、今後の予定を立てようというのじゃない」

リリースが乾燥マンゴーを頬張っている。

「そのとおり！　今回、たまたまこんないい場所——でもなかったか。化け物がいたしな。こんな場所があるとは限らないし」

「それじゃ、私も行く！」

アネモネが、乾燥マンゴーを咥えたまま叫んだ！

「それなら、妾もじゃ！」

「いやいや、皆が乗ると船が重くなって速度が出ないからさ。見てくるだけだから、昼前には戻ってくるよ」

「「う——！」」

2人がごねているが、今回はダメだ。

おとなしく待ってもらう。

俺だけ出かけるので、LEDランタンの電池を換えておこう。
いざというときに、ガソリンランタンも置いていく。

なにかあったときのために、食料と飲み物、続けてゴムボートを2艘出し——。

最後に俺の船外機つきゴムボートを水に浮かべた。

「それじゃおとなしく待っているんだぞ？」

「「う——！」」

「はは、お母さん、皆を頼むな」

「「にゃー」」

皆に見送られて、俺は船外機のエンジンを始動させると、ゆっく

りと黒い水面を走りだす。

多分、全速で時速10 kmぐらい——船のスピードにすると約5.4ノットだ。

一見遅いようだが、この巨大な湖の直径が約40 kmだとすると、4時間で渡れる速さ。

この崖は15～20 kmぐらいだと仮定すれば、5 kmほど測量したので残りは10～15 kmほどだろう。

1時間ぐらい進んだところで、ドローンを飛ばせば、先がどうなっているか把握できるはず。

暗い洞窟を出ると、左に舵をとり、エンジンを全開にする。

時速10 kmでも、手漕ぎよりは断然速い。

人間が全力疾走すると、時速16 kmぐらいらしいから、それよりは遅いな。

軽くジョギングするぐらいのスピードか。

シャングリ・ラにはもっと大型の船外機も売っているので、木造船を建造すれば取り付けが可能なはずだ。

辺りを確認しながら、のんびりと進む。

左手には切り立った崖、右手には果てしなく続いているように見える巨大な湖。

この世界——この惑星の大きさがどのぐらいかは不明だが、重力がほぼ同じということは、大きさもほぼ同じぐらいだと思われる。

そうなると目線の高さで見渡せる距離は、約4 km。

それでは対岸は見えない。

1時間ほど進んだ所で、ドローンを上げて、ぐるりと見渡す。

コントローラーに映る画面に薄土色の砂浜が見えてきた。

「おっ！ 岸だ！ やっぱり崖は、20 kmほどだったのか」

俺の近くも確認すると、崖に大きな凹みを見つけたので、ドローンを回収したあと、そこへ行ってみることに。

エンジンをかけて、10分ほどすすむと、ドローンで確認した場所へやってきた。

崖の水面近くが大きく凹み、そこに砂が溜まっている。

かなり狭くて斜面になっているが、コンテナハウスを置けそうだしにコンテナハウスをアイテムBOXから出して設置——様子を見る。

「大丈夫——そうだな」

かなり斜めになってしまっているが、コンテナハウスは置けた。

この中で寝るためには、色々と対策を練る必要があると思うが——なんとかなるだろう。

ゴムボートの上で寝るよりはマシだ。

残りの距離からすると、このコンテナハウスで一泊することになるだろう。

俺は、コンテナハウスを収納すると、家族が待つあの洞窟へ戻ることにした。

151話 測量が終わる

巨大な湖の周りを測量するために、家族と一緒に冒険中。

難関である北側——延々と崖が続き岸がない地点で測量をしていた最中に発見した洞窟。

そこは管虫の住処だった。親玉である巨大管虫を撃破すると、俺は船外機をつけたゴムボートに乗り、1人で偵察に出かけた。

最初に俺が、足の速いゴムボートで偵察してから、測量の計画を建てる作戦だ。

なんだ——最初からこうすれば、家族を危ない目に遭わせなくてもすんだんじゃないかね？

俺の心は少々暗くなった。

曇りなき目で俺についてきてくれる家族を危ない目に遭わせすぎじゃないだろうか？

悩む俺だが、彼女たちが言うことを聞いてくれないのも事実。

いや、冒険は俺の力だけじゃ無理に決まっている。

俺には彼女たちの力が必要なのだ。

来た道——いや道じゃないが、水の上を進み、皆が待っている洞窟へ戻る。

合計2時間の偵察だ。

アイテムBOXからLED投光器を出して暗い洞窟を進むと、奥の砂浜に明かりが見えてきた。

「おおーい、戻ったぞ！」

「旦那！」「にゃー！」

まるで太古の昔、洞窟に住んでいた原人が住処に帰ってきたよう

な感覚に襲われる。

洞窟内に反響する船外機を停止させると、ゆっくりとゴムボートを岸に寄せた。

「ケンイチ！」

俺のところに、アネモネとリリスが走ってきて、抱きつく。

「そなたがいないのが、こんなに寂しいとは！」

「なんだよりリス。いい歳をして」

彼女の頭をなでてやる。暗闇からベルが現れて、俺の脚にスリスリを始めた。

「はは、大人気だな」

猫を留守番させて、帰ってくるとこんな感じなんだよな。

「それで旦那。どうだったんだい？」 「にゃ？」

「ああ、あと2日で、岸にたどり着ける。途中で、狭いながらも岸を見つけたので、そこに泊まろうと思う」

「ほう、なるほどの」

「いやあすまん。最初に俺が偵察に出てから予定を立てていれば、皆を危ない目に遭わせることもなかったんだが」

「そんなことないから！」

俺の言葉にアネモネが叫び、それにリリスが続く。

「そうじゃのう、その偵察とやらでケンイチになにかあれば、我らが助けられぬではないか」

「そうだよ、旦那！ お姫様の言うとおりでございませう！」 「そうだにや！」

「皆、ありがとうな」

こんなオッサンについてきてくれるなんて、涙がちよちよぎれる

だろう。

さて感傷に浸っている場合ではない、早速出発しなければ。
コンテナハウスを収納すると、アネモネとリリースに救命胴衣を着せてゴムボートに乗せる。

相変わらず、獣人たちは救命胴衣を着てくれない。

ベルにもまた救命胴衣を着せた。彼女は嫌な顔をしつつ、俺に従っている。

泳げないわけではないが、あまり泳ぎたくはないのだろう。
ゴムボートは一つ余分に出していたので、そいつも収納だ。

洞窟に入ってくるときは大変だが、出るときは簡単。

出口が白く光っているので、そいつを目掛けて進めばいい。

獣人たちには俺のゴムボートに掴まらせて、船外機のパワーで進む。

「旦那、その魔道具は便利だな」

「もっと大きな物を作れば、この巨大な湖も1時間ぐらいで横断できらるだろう」

「へえ、そいつはすげえや」

「でも、湖の真ん中にゃ、あいつがいるにゃ」

「ああ、多分な……」

ミヤレーが言うあいつってのは、クラークンのことだ。

あれが一匹だけなのか、複数いるのかは不明だが、この湖を経済的に使おうとするなら、退治する必要があるかもしれないな。

「じゃが、上手く退治できれば、他の場所にも村などができるやもしれぬ」

「そうなんだよ。もしかしてエルフたちも、交易に来てくれるかもしれないし」

「エルフと定期的に交易できる村や商人なぞ、聞いたことがないぞ

え？」

「そうだよ、旦那。あのへそ曲がり共と商売なんてさあ」「にゃ」

「まあ上手くいけばの話だ」

話をしている間に、洞窟を出て――俺たちは陽の光の下へ。

「眩しいのう！」

「眩しい！」

「ふああ！ やっとお天道様の下へ出られたぜ」「にゃー！」

「そういえば、お前たちの目も、ずっと黒目だったしな」

「あんな暗い場所じゃしょうがないよ」「にゃ」

今、獣人たちの目は縦長で、普通の猫の目のようになっている。

「ケンイチ、なんで獣人たちの目は縦長なの？」

「ああ、彼らは光を多く目に取り込むことができるんだ。だから暗闇でも目が見える」

「なるほどのう。そのため陽の光の下では、明るすぎるので、閉じておるわけじゃな？」

「そのとおり、黒目をほとんど閉じるぐらいにしないと、眩しすぎるんだよ」

「旦那あ、それも俺たちのことをバラして調べたのかい？」「にゅ？」

「俺が解剖して調べたわけじゃないよ。人がやったのを俺が教わっただけで」

「でも、やったやつがいるんだろ？」

「まあ、そうだな」

獣人たちが、俺の話を聞いてビビりまくっている。

どうやら、この手の話は獣人たちには禁忌のようだ。

アネモネに聞かれても、獣人たちのいない場所で話さないとダメだな。

再び、湖の上での測量が始まった。

レーザーで距離を測り、方角と一緒に地図に書き込んでいく――
実に単調な作業だが致し方ない。

暇なアネモネとリリスは、タブレットの書籍を読んで時間を潰す。
そのまま測量も順調に進み、昼過ぎにはコンテナハウスを置ける、
小さな砂浜へやって来た。

獣人たちから、トランシーバーで連絡が入る。

『ケンイチが言ってた、小さな砂浜があるにゃ』

「おう、そこで飯にしようぜ」

『解ったにゃ』

測量を一旦中止すると、砂浜にゴムボートをつけ、皆で砂浜に座る。

場所がないので、簡単にインスタントもので済ませようと思った
のだが、獣人たちは他のものが食べたいようだ。

「旦那、アイテムBOXに、魚がまだ入っているだろ？」

「ああ、でも捌いてないぞ？」

「俺らがやるよ」

アイテムBOXの中に入っていた、虹マスを手2匹出してやると、
彼女たちは魚を捌いて料理を始めた。

焼きたいらしいので、アイテムBOXから薪も取り出して、浜に
積む。

「こんなことができるのもケンイチのアイテムBOXがあるからじ
ゃの」

「そのとおりにゃ！」

獣人たちは火を起こし、捌いたマスを焼き始めた。

塩と香辛料で食べるらしい。

俺はやっぱり醤油だなあ――多分、アキラもそうだろう。

「リリースも食べたいなら、魚を出すけど」

「いや、止めておくわえ。昼に食いすぎると眠くなるのじゃ」

「寝てもいいが……」

「ケンイチの料理があまりに美味すぎて、自分でも食い過ぎだと思
うておるので、少し自重じゃ」

リリース自身も、食い過ぎって自覚はあったのね。

「ケンイチ、今日はここで泊まるにゃ？」

「そのつもりだ。このままもうちよつと先まで測量したら、ここま
で戻ってきて部屋を出す」

「解った！」

別にここで待っててもいいんだが、ついてくるって言うだろうし。
まあ、なにが出るか解らんしな。

昼飯を食い終わったので、再び測量に出かける。

空はいい天気で、湖面は鏡のように滑らか。

それから2時間程、先まで測量して1時間かけて戻ってくると、
小さい砂浜が俺たちを迎えてくれた。

時間は午後3時頃。

ゴムボートを砂浜に近づける。

「さて、部屋を出すか――」

アイテムBOXからコンテナハウスを出すと、砂浜が斜面になっ
ているために、斜めになる。

これは、前に確認したとおりだ。ここは狭すぎて、ユ○ボも出せ
ない。

「ケンイチ！ お部屋をしまつて、ゴーレムのコアを出して！」

「おっ！ なにか思いついたのか？」

俺の言葉に、アネモネがフンス！ と気合を入れている。

彼女の言うとおりに、コンテナハウスを一旦アイテムBOXに収納して、ゴーレムのコアを出してやった。

「むゝ！」

彼女の集中とともに青い光が湧き出て、砂浜の砂がコアに集まり再び離れる。

それを何回か繰り返したあと、砂浜が均されて平らになった。

「おおっ！ ゴーレムにこういう使い方があったとは……凄いぞ！ アネモネ」

彼女の頭をなでてやる。

「えへ——多分、もっと違う使い方もできるよ。試していい？」

「ああ、もちろん。なにをするんだい？」

彼女の指示でゴーレムのコアを水に浮かべた。

「むゝ！」

彼女の魔法が発動。

コアが動いて俺たちのゴムボートの下へ潜り込むと、皆を乗せたまま水面を動き始めた。

これはゴムボートが動いているのではなくて、水そのものが動いているのだ。

それに、かなりのスピードが出ている。これなら俺が買った船外機より速い。

素晴らしい水上航行能力だとはいえ、彼女の魔法が頼りだ。

連続で1時間ゝ2時間使えるかどうかだが、緊急時には、皆のボートをまとめて運ぶことも可能だろう。

アネモネの魔法によって、湖面をぐるりと回って、俺たちは元の

場所へ戻ってきた。

「凄いぞ！ アネモネ、こんな方法を思いつくなんて！」

「なんにゃ！ それって、アネモネの魔法で動いたのきゃ？」

「そうだよ」

「いやあ、アネ嬢もドンドン凄い魔導師になっちまうねえ。これじや王都の大魔導師様でもかなわないんじゃない？」

「確かにのう……こんなゴーレムの使い方など聞いたこともないわえ」

「アネモネは、こんな方法を自分で気づいたのかい？」

俺の言葉に彼女が首を振った。

「ううん、お城でアキラさんが、ゴーレム魔法の応用で、油を撒いたって言ってたでしょ？」

「ああ、確かに。油を動かせるなら、水だって動かせるはずだ」
ゴーレムで水を動かして、それにゴムボートを乗せて動かしたわけだ。

理論上は、もっと大きな船でも動かせるだろう。

「それに単純に動かすだけなら、術者がいなくても魔力の供給さえあればできるかもな。今度、カールドンさんに会ったら、聞いてみよう」

これは内燃機関などがなくても、この世界の画期的な移動手段になるかもしれない。

「そなた目が輝いているの？」

「そりゃそうだ。もしかしたら、この世界がひっくり返るかもしれない」

「そんなに凄い？」

アネモネも目をキラキラさせて聞いてくる。

「凄い凄い！」

「そんなに凄いなら、チューして」

「ほら！ チュー」

彼女を抱き寄せて、軽く唇を重ねる。

「ぬぐぐ！ ケンイチ！ 妾にもチューじゃ！」

「だって、リリスはなにもしてないでしょ？」

アネモネが俺の身体を押してリリスとの間に入ると、光る金髪に背中を向ける。

「ぐぬぬ！」

まさに正論。リリスがぐぬぬ状態のまま固まっているが、少々なだめたあと、砂浜にコンテナハウスを出した。

今日はここが寝床になるが、砂浜はコンテナハウスの幅ギリギリいっぱいなので、水際に扉がある。

これじゃ簡単に出入りもできないな。

扉を開けて、ゴムボートから直接乗り込むことにしよう。

まずは身の軽い獣人たちに入ってもらい、サポートをしてもらう。そのあと俺はゴムボートの収納だ。

「ミヤレーとニヤメナ、アネモネとリリスを入れてやってくれ」

「オツケーにゃ」

ゴムボートの上から、おっかなびっくり部屋へ入ろうとしているアネモネとリリスの横を、スルリとベルが通り抜けていく。

さすが猫は液体だ。

俺も中に入ると、乗っていたゴムボートをアイテムBOXに収納。振り返り中を見ると、ベッドがグチャグチャになっていた。コンテナハウスを傾いた場所に出したからだ。

皆でベッドメイキングをやっているうちに、もう4時だ。

疲れたのでベッドに横になると、皆も真似をしてベッドに横になる。

すると水の上じゃないのに、グラグラと揺れているような感覚に襲われる。

これはずっと水の上で仕事をしたりして、慣れると消えるものなのだろうか？

「やはりベッドの上で休めるというのは大事じゃのう」

「そうだね」

「お姫様の言うとおりにゃ」

「まったくだぜ。こんなの旦那のアイテムBOXがなきゃ絶対に無理だ」

さて、飯はどうしようか。外に出るのは大変だから、火は使えない。

この中でもカセットコンロは使えるが、ここで料理はしたくないな。

「飯はなにを食う？　ここじゃ料理はできないし」

「ケンイチ！　金属の筒に入ったのを食いたいにな！」

金属の筒って――ネコ缶だろ？

「コレか？」

俺は起き上がると、アイテムBOXからベル用にストックしてあったネコ缶を取り出した。

ネコ缶を見たベルも、すぐさま反応して俺の膝に前脚を載せてきた。

「それにゃ！」

「出来合いのカレーとかもあるぞ？」

「今日はそれでいくにゃ」

「マジか……」

まあ彼女がそれでいいっていうなら、いいけどなあ……。

「それじゃチ○ールもやる」

「にゃー！」

飛び跳ねるミヤレーに呆れたようにニヤメナがつぶやく。

「それじゃ、俺もそれに付き合うか」

「ニヤメナは別のものでもいいんだぞ？」

「まあ……その、俺もそれは好きだからさ……」

ニヤメナがチ○ールをチラ見している。

彼女たちのリクエストだからな。シャングリ・ラから高そうなネコ缶を色々で購入して、出してみる。

「にゃ？ 色々な種類があるにゃ！ こんなにあるのかにゃ？」

「へえ」

獣人たちが感心しているが、原料をみると、鶏とマグロとカツオが多い。

見た目もシーチキンだ。

ベルにもネコ缶をあげる。

「塩味が足りないなら、調味料や香辛料も置くからな」

「にゃー！」

コンテナハウスの中はベッドでいっぱい。

スペースがないので、食事はベッドの上で摂らざるをえない。

汚さないように、それぞれにベッドの上にレジャーシートを敷いて、ちゃぶ台を置く。

シートは3000円で、ちゃぶ台は2000円だ。

「ほい、ニヤメナには、エール」

「へへへ、これこれ！　こんな美味しいエールが飲めるってだけで、旦那についていく価値があるってもんだぜ」

「トラ公は、本当に意地汚ないにゃ」

「てやんでえ、クロ助だってそうだろうが！」

「実はそうにゃ、にゃはは。こんな美味しいものを色々食べられるなんて、他にはないからにゃ」

「まあ、そのとおりだな。貴族だって、こんなものを食えっこねえし」

獣人たちは、ちゃぶ台の上にズラリとネコ缶を並べて楽しんでいるようだ。

それじゃ俺たちもなにか食うか。

「俺たちはカレーでいいか？」

「うん」

「構わぬが……作り置きがあるのかえ？」

「ちよつと違うんだが……」

簡単にパウチのインスタントにしよう。

せっかく食うのだから、変わったカレーにしようと、シャングリラを検索する。

目に止まったのは、世界ご当地カレー15種類セットで4000円。

世界ご当地って書いてはあるが、普通のビーフカレーや、チキンカレーもある。

「これにしよう、ポチっとな」

ベッドの上に、インスタントカレーの箱が15個落ちてきた。

銀色のパウチを箱から出して、アネモネに温めてもらう。

「ウォーム温め！」

洗い物も出来ないの、紙皿で食おう。

ちょうど紙のカレー皿が売っている。50枚で1200円だ。

「よし！」

ああ、スプーンも買わないとな。使い捨てスプーンの定番といえ
ばプラスチックだが、シャングリ・ラを見ると、木製のものも売っ
ている。

プラ製品は環境に悪いとか何とか言われていたが、こういうも
のも売っているのか。

100本で1000円と安い。

「最後に飯だな」

パックご飯を買う。アネモネが1つ、俺が2つ、リリスが3つの
合計6個だな。

シャングリ・ラで購入すると、パックご飯が落ちてくる。

「アネモネ、コレも温めを頼む」

「うん」

アネモネが温めをしていると、リリスが紙皿を眺めている。

「なんと、紙の皿とは……」

「これは使い捨てなんだよ」

「な、なんだと！ 紙を使い捨て！？」

まあ、この世界で紙って結構高価だからなあ。リリスの反応も当
然と言える。

それぞれの紙皿にご飯を盛って、その上からカレーをかけて食う。
いつもと違い、あまりとろみのない黄色っぽいカレーだ。

「おおっ！ これは、いつも食べているものと風味が違うの！ 香
辛料の香りが鮮烈じゃ！」

「うん！ これも美味しいね」

俺も一口食べてみる。

いつも作っているカレーは、マイルドな味なのだが、これは香辛料の香りが明確に自己主張しているな。

東京にいたときに、スリランカカレーの店に何軒か入ったが、こんな味だったな。

リリスのご飯はパック3つ分の大盛りなので、途中でルーがなくなってしまうた。

新しいルーをかけてやる。

「ふお！ これはまた違う味じゃの！ なんとという奥の深い料理よのお！」

俺たちの食事を見ていた、ニヤメナがそろりとやってきた。

「あの……旦那あ……」

「解った、お前達も食べたいんだろ？」

紙皿にカレーを盛ってやる。パックにはマレーシアカレーとか、インドネシアカレーって書いてあるんだが、どんな味なのか？

カレーの入った紙皿を受け取ったニヤメナが、ネコ缶の中にカレーを入れた。

「おおっ！ クロ助、この中にカレーを入れてみる！ うめえぞ！」

「ウチもやってみるにゃ！」

まあ、シーチキンカレーはあるからな。あれと同じ味だと思うが。

「このカレーは、いつもより香辛料がきつめだな」

「でも、美味しいにゃ〜！ ヤバイにゃ〜こんなの食べたら戻れなくなるにゃ〜」

「なに言ってるんだよ、とっくに戻れねえっての。こんなの知っちゃったら、街の料理なんて食べねえっていつも言ってるだろ」

マレーシアとインドネシアの感想は聞けなかったが、とりあえず美味いらしい。

皆で腹いっぱいになったので、ベッドの上のレジャーシートとちやぶ台を片付けてから、寝転がる。

ニヤメナは、ほろ酔いになっているようで、俺の所にやってきた。

「旦那あ、明日には岸に辿りつくのかい？」

「ああ、間違いないな」

俺に抱きついてきたので、ニヤメナの顎を撫でると、ゴロゴロと大きな音を立てる。

「ふわあゝやっと、船の上から逃れられるよ」

ニヤメナの背中をなでながら話す。

行動的な獣人たちには、さぞかし狭い空間なんだろうな。

そこにベルもやってきてすりすりを始めたので、一緒になでやる。

彼女も狩りができなくて退屈だろう。

ずっとゴムボートの上で、丸くなっているだけだからな。

おそらく水の上で最後の夜になるだろう、ベッドの上で皆と一緒に寝た。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

——小さな砂浜の上で、次の朝。

起きて外を見ると、白い霧がかかっている。

「おわあ、こりゃ霧が晴れるまで出発できんなあ」

まあ朝飯を食っているうちに、日が高くなれば晴れるだろう。皆が起きてきたので、湖の水を汲んで顔を洗う。

大変なのはトイレ。

いちいちゴムボートを出して、玄関から乗り込み、砂浜の隅まで行ってしないといけない。

男なら立ちションで簡単なんだけどね。

「ケンイチ、面倒だからあれにする。出して」

アネモネは、俺からもらった尿瓶にし始めた——メンタルが強すぎる。

それを見た獣人たちも、笑いながらそれを見習ったのだが、リリスは王族だ。

やはり抵抗があるのだろう。

俺がゴムボートに乗せて砂浜の隅まで行き、穴を掘ってやった。彼女のお花摘みが終わるまで、後ろを向いている。

「ごめんな——王族にこんなことをさせて」

「このようなこともあるのも当然じゃ。覚悟ができていなかった妾が悪い。それに戦になれば、糞尿を垂れ流しながら戦うこともあるそうじゃ」

「そりゃなあ小便したいから待ってくれ！　といっても、敵は待ってくれないからな……」

「それに我らは夫婦じゃ。地獄まで一緒なら、このぐらいはどうとすることはない」

「別に地獄までついてくることないだろう」

「ふ、ケンイチらしいのう。そこは『地獄までついてくるがよい！』とは言えんのか？」

「あゝ、無理だなあゝ俺の性分からして」

部屋に戻ると——皆でグラノーラを食べて、霧が晴れるのを待っていたのだが、

意外と霧は晴れず。視界が開けたときには、かなり日が高くなっ

ていた。

青空の下、皆でゴムボートに乗り込むと、コンテナハウスを収納。再び、水に揺られての測量を開始した。

もうすぐ岸が見えるというので、獣人たちも張り切っている。

岸があるのはドローンで確認済みなので、間違いない。

——そのまま測量を続け、その日の3時頃、砂浜が見えてきた。

「やったぜえ！ やっと岸だ！」 「にゃー！」

先に到着した獣人たちが、岸にボートを乗り上げると、はしゃぎまくってバク転をしている。

ついで俺たちも岸に到着したが、最後の最後は、アネモネのゴレム魔法で運んでもらった。

「やっと難所を乗り越えたな。アネモネありがとう」

「私も早く岸上がりたかったし」

「やれやれ、やっとこれで、地に足がつけられるのお……地面がこんなに恋しいものだったとは」

「俺の国にあった物語の言葉に——人は地から足を離しては生きられない——というのがあったなあ」

リリースじゃないが、やっぱり地面が恋しいのは間違いない。

上陸地点で一泊したあと、順調に測量を進め、3日後にはサクラの周辺へ。

湖の東側はずっと砂浜が続き、なんのトラブルもなく、サクサクと測量は完了した。

最後の測量地点を地図に書き込むと、獣人たちをラ○クルに乗せて、サクラへ向かう。

そのまま家の前まで帰ってきた。

——およそ2週間の旅路、途中に危険なこともあったが、なんとか家まで帰ってこれた。
これも皆のおかげだ。

152話 旅のあと

約2週間の測量旅行を終え、俺たちはサクラに帰ってきた。

千切れた雲がオレンジ色のグラデーションに染まる頃――見慣れた光景が徐々に近づいてくると、なんとも言えない懐かしい気持ちになる。

たった2週間なのに――これが家に帰ってくるってことか。

海外から帰ってくる人たちは、富士山を見たときに、似たような感情を抱くのかも。

車の窓から見える、砂浜沿いに植えたサトウキビは、結構大きくなっていた。

これも魔法の力だろう。

「おおい！ 只今帰ったぞ」

車から降りた俺が声を上げた。

2週間ぶりのサクラは、明らかに人が増えており、住居が足りないために、野宿しているらしい人々も多い。

車のドアが開くと、するりとベルが抜けて、すぐに家の周りをパトロールし始めた。

それを見た作業員の獣人たちが、土下座をしている。

「聖騎士さまあー！！」

帰ってきた俺に、真っ先に駆け寄り抱きついたのはアマランサスだ。

彼女のアスリートのような身体をガッチリと受け止める。

アネモネやリリスのような気軽さでやると、ふっとばされてしまう。

「おお、アマランサス。なにか問題はなかったか？」

「ありません」

「人が増えているようだが……」

「おかえりなさいませ、ケンイチ様」

紋章官のユリウスがやってきた。アマランサスと一緒にいたらしい。

「ユリウス、俺のいなかった間の説明を」

「承知いたしました」

彼が、留守の間のできごとを説明してくれた。

「増えた人口は、土地の整地や建築のための人手です。全然建物が足りません」

「ユリウス、とりあえず俺たちの屋敷より、住民の寝床の確保が先決だ」

「聖騎士様なら、そうおっしゃると思って、すでに手配をしております」

アマランサスから説明を受けるのだが、彼女が離れてくれない。

「アマランサス――」

「いやじゃ」

一応、命令はしてないので、奴隷紋は反応していない。

「夜に、相手してあげるから」

「……」

その言葉でやっと離れたのだが、そこにリリスとアネモネがやってきた。

「どうじゃ、リリス？ 今回の旅で、なにか解ったことでもあった

かえ？」

アマランサスが、どこからか出した扇子をパツとひらいた。

「……母上、妾が役立たずだと解ったわえ。とにかく役に立たん。足手まといの穀潰しじゃ」

この世界でも穀潰しって単語があるんだなあ——と思いつつ。

「うん、そのとおりだったね」

「ぐぬぬ……」

最近、アネモネの当たりが激しい。

「リリスが俺と一緒にいたいってことはよく解ったよ。旅も一緒に楽しかったし」

「そんな慰めはいらぬ！ 妾にも元王族としての誇りがあるゆえ、ケンイチのためには他のことで、役に立たねばなるまい……」

「それなら簡単じゃ。妾と入れ替わって、リリスが政をすればよい」
「ううう……」

「なにを悩むのじゃ、それしかないであろう？」

「母上と代わりというのが引つかかるのじゃが？」

「そんなことはあるまい」

「まあ確かに、アマランサスの戦闘力が加われば百人力だ。戦闘はずっと楽になる」

「そうじゃろうのう、おほほ」

高らかに笑うアマランサスに、リリスはぐぬぬとしているが、これは事実だ。

「確かに！ 妾は未熟じゃ！ 今回の旅でそれは理解した！ 妾も政の経験を積まなくてはなるまい！」

「丁度いい凄い先生が、目の前にいるしな」

「あまり、母の手法は用いたくないのだが？」

「使えるところだけは使って、リリスの個性を出せばいい」
俺の言葉に、アマランサスが反応した。

「リリス、綺麗事では政は務まらんぞえ？」
「解っております」

彼女も、魑魅魍魎が跋扈する王侯貴族のゴタゴタは十分に承知しているはずだからな。

なにせアマランサスは国のトップにいた女性なのだ。

素人の俺も、彼女の下について、政治を学ばなければならないだろう。

成り行きとはいえ、貴族になってしまったのだからなあ――。
領民が集まってくれば、彼らの生活が双肩にかかってくるわけだし。

日が暮れてきたので道具を出して、食事の準備をしよう。
女たちが俺にベタベタするので、アネモネの機嫌が悪いが仕方ない。

「皆、久々に会ったんだから、大目に見てあげなよ」
「うー」

むくれるアネモネの頭をなでてやる。
そこにメイドたちがやってきた。

「「おかえりなさいませ、ご主人さま！」」

「ああ、皆ただいま。アネモネと一緒に食事の準備をしてくれ」

「「承知いたしました」」

そこに、ミヤレーとニヤメナがやってきた。

「旦那、手伝うことあるかい？」

「そうだな、アイテムBOXに入っただまの黒狼を捌いてくれ」

「オツケーにゃ」「よっしゃ！」

アイテムBOXから、入ったままの黒狼を出す。
とりあえず食わないとドンドン溜まるからな。

そのあと、アマランサスと話をしているとアキラのトラックがやって来た。

荷台から、がやがやと人が降りてくる。どうやら荷台に座席を載せて、人が乗れるように改造したらしい。

毛皮を着込んだ大柄な獣人たちも次々と降りてきたのだが、黒い森猫——ベルの姿を見て固まっている。

トラックの助手席のドアが開き、白いドレスの女性が降りてきた——カナンだ。

「ケンイチ！ 戻ってきたのか?!」

カナンが走ってきて、俺に抱きつく。その後ろでアキラが手を振っている。

「オッス！ 無事なようだなによりだな」

アキラは口は悪いが、「死んだと思ってたぜ」とかいう冗談は言わない。

彼自身、死線を乗り越えて、それが洒落にならないのを知っているからだ。

「オッスオッス！ 森でエルフと会ってな。これが役にたったよ、サンキュー！」

「マジか!？」

笑っているアキラに、彼から借りた指輪を返すと、アイテムBOXからカメラを出した。

画面上に、写したエルフを出してやる。

「おお、マジエルフだな。エロいのはないのか？」

「流石にない」

撮れないこともなかったが——そんなの家族に見つかったら、なにを言われるか解らんだろ？

「ははは、指輪はしばらく使わんと思うから貸しておいてもいいぞ？」

「いや大丈夫だ。ほら俺も同じものを作ってもらったからな」

「ちょっと見せてくれ」

「はいよ」

アキラは2つの指輪を見比べている。

「まあ機能は同じだろうが、部族によって、刻む模様には色々あるようだな」

彼の言うとおり、刻まれているモチーフやらがかなり違うが、エルフなら定番の伝統的な模様——というものもあるようだ。

「彼らは、王国ができる前から、ここに住んでいると言ってたぞ？」
「ああ、帝国のエルフたちも、そう言ってたな。帝国よりも前から住んでいたと」

「それから、祝福のことも知ってた」

「エルフたちは、部族間で面子の入れ替えをして、情報の共有をしているんだろう」

エルフが部族間を渡り歩くことも、アキラは知っているようだ。彼の話では、パーティの中にエルフがいたそうだしなあ。

「まあ、1000年もあれば、なんでもできるよなあ」

「そうだな」

「飯を食っていくだろ？ 沢山話すことがある」

「おお、いいねえ。こっちもまあ、話すことがあるしな」

アキラのことはひとまずおいて、俺に抱きついたままのカナンの相手をする。

「随分とめかしこんでいるな」

「貴族連中の集まりに出ていた。王室派の切り崩し工作も確実に進んでいるぞ」

切り崩し工作？ なんじゃそりゃ？

「おい、アマランサス——そんなことをしなくてもいいんだけど？」
「なにをおっしゃいます。私と聖騎士様の国を作るために必要なことではありませんか」

彼女は、まったく悪意なく本気でこう思っているから怖い。

「王国に対する、明確な謀反行為じゃないか」

「エキナセアベア公爵を始め、王家に反感を持っているものは多数いますからな」

確かに、イベリスの橋が落ちた所で、反王家派に加わらないか——と誘われたしな。

「マロウ商会が王都に進出する際に、アルストロメリア様にも便宜を図ってもらわないといけないのに」

「利用するところは、利用すればよろしいのです」

「言っておくが——俺は戦なんて、絶対に認めないぞ？」

「ふふ、そのようなことになるはずがありません」

「断言できるのか？」

「王都の騎士団が南下などしたら、どうなると思いますか？」

「あ……」

王都の食料は、ソバナという地方都市一帯の穀倉地帯や、塩が頼みの綱だ。

ソバナに行くためには、険しい峠を越えていかなければならない。

王都から、騎士団がいなくなったという情報が帝国に伝われば、ソバナに侵攻される可能性が上がる。

「お解りいただけましたか？ うふふ」

「さすが国政を担っていただけあるな。王国の弱点を知り尽くしている」

「そのとおりです」

「こんな怖い女を手放すなんて……バカな話だな」

「実権を握りたいというから、握らせてやったのです。存分に苦しめばいい」

そう言うアマランサスの顔が怖い。王都の王侯貴族に相当ストレスを溜めていたらしい。

そのストレスが、変な方向へいつてしまい、俺とのいざこざになったのかも……。

こっちはいい迷惑だな。

「この国は、南のほうが豊かだ。アストランティアやダリアで、食うに困ったなんて話は聞いたことがないし」

「聖騎士様の力があれば、深い森を切り開いて、農地を拡大することも可能でしょう」

「そこはエルフたちとの兼ね合いもあるぞ、不可侵の証をたててきてしまったし」

「エルフのいない土地も沢山ありますから……」

そういえば、サクラの上にある台地の土地はどうなんだろうな。

一応、背は低いが木も生えているから、種類を限定すれば畑作もできそうな気がするが。

川も流れていて水にも困らないし。

「そのためにだな——私もアマランサス様の指示で頑張っておるのだ。私にもできることがあって、嬉しい限りだ」

カナンに任せられる仕事ができよかった。
人の適材適所を見つけるのは、意外と難しい。

「まあ確かに――カナンは、畑仕事をしているより、ドレスを着て踊っていたほうが、様になると思うが……」

「それで、新しいドレスが欲しいのだが……」

「俺の手持ちでドレスはあまりないぞ？」

シャングリ・ラでドレスを検索してみる。

安い化繊のドレスやら、ウエディングドレスやらを適当に選んで購入。

目の前にバサバサといろいろなドレスが落ちてくる。

「ここから使えそうなものを探して、仕立直してみては？ 俺は、服飾はまったくだめだからな」

「あっ！ これなんて素敵だろう！」

カナンがレースのドレスを持ち上げたが、スカートの短さに驚いたようだ。

「これは……」

「その下に、さらにスカートを伸ばして2段にすれば使えるだろ？」

「ふむ、なるほどのう……」

アマランサスもドレスを見ているが、化繊はどうだろうか？

この世界には化繊はないから、逆に貴重かもしれないが。

「なんだか、すごい薄くてすべすべした生地ですね」

「火に弱いからな。ローソクとかは気をつけたほうがいい」

色々と買ってみたが、ちょっと見た目が寂しいな。なにか他に使えそうなものは……。

シャングリ・ラで、色々と物色すると――レースの布や、飾りなどが単体で売っているし、種類も豊富だ。

とりあえず、手当り次第にカートに突っ込んで、ポチってみた。
俺の目の前に、それらがどっさりと落ちてくる。

「ほら、こういうレースの類は使えないかな？」

「ほう！ これは見事なものじゃな」

「ケンイチ、妾にも見せてたもれ」

リリスもやって来て、皆でレースや布地などを手にとってキャツ
キャウフフしている。

やはり、女性陣はこういうものには、目がないようだ。

これらは機械編みの安物だが、この世界でこれを再現するとな
ると、途方も無い金がかかる。

100個1000円の洗濯バサミが、この世界で作れないのと同
じ理屈だ。

「確かに、これは面白い！ ケンイチ、これをもらっていいのか？」

「もちろん、役立ててくれ」

他になにか使えそうなものは――お、そうだ！

ドレスといえば、ウエディングドレス。ブライダル関係で検索し
たら、それっぽいのが出ないだろうか？

早速、検索してみると――イミテーションのティアラやネックレ
ス、花飾りなどが大量に出てきた。

こりゃいい――使えそうだが、ユーザーの評価を見ると、安いも
のは子供の玩具レベルのようで評判が悪い。

やはり、それなりのクオリティを得るには、1万円前後のものを
買わないとダメのようだ。

「ポチッとな」

目の前に、アクセサリ類が大量に落ちてきた。

「おおっ！ これは！？」

カナンが駆け寄って、ティアラを手を取っている。

「言っておくが、それは銀でもないし宝石でもない。全部、鉄とガラスだ」

「なに？ これは真珠ではないのかえ？」

リリスが手に取ったネックレスには、イミテーションの真珠がついていた。

「それは、それっぽく作った模造品だ」

「じゃが、真珠を見たことがない者に、これを見せたら真珠だと信じてしまうぞえ？」

「こういうものは売れないし、売るつもりもないよ」

アマランサスも大型のネックレスを手にとっている。

元世界じゃ結婚式でもなけりゃ、こんなネックレスをつけたりはしないよな。

元世界にも本物のお姫様もいたけどさ、これが本物だったら数億円はするお宝だろう。

「ふむ……確かに、よく見れば作りが粗いのう……」

「そりゃ、模造品だからな。でも使えるものはあるはずだし、近づいて目を凝らさないと、解りっこない」

「ケンイチの言うとおりだな」

そう言ったカナンの腕には、レースの指なし手袋が装着されていた。

このアイテムも、結婚式ぐらいでしか使う場面がない。

カナンが、山積みになったアクセサリーの山から、ガラスが沢山はめ込まれたネックレスを取ると、首に巻いた。

いくらイミテーションでも、モデル級の美人が装着すれば、まさに鬼に金棒。

眩しすぎて目が潰れそうになる。

「まったく、さすが辺境の華——似合いすぎるな」

「そうだろう！ おほほ！ 私の魅力にやっと気がついたようだな」
なんだかんだ、カナンはこういう華々しい恰好が似合っている。
アイテムBOXから出したテールの上、レースやらアクセサリを山積みにして、あれやこれやと話し合う。

——時間がそのまま過ぎて夕暮れどき、赤く染まるアストランテ
イアに通じる道。

女の獣人を護衛に従え、こちらに向かってくる自転車の姿が見えた。

見覚えのある自転車——というか、自転車は1人にしか貸していない。
あれはプリムラだ。

「おおーい！ プリムラ！」

叫んでも声は聞こえないだろうが、姿は見える。

手を振る俺の姿が見えたのか、彼女が漕ぐ自転車が加速した。

みるみる近づいてくると、自転車を放り投げて、プリムラが俺に抱きついた。

「ハアハアハアハア——ううっ」

彼女が俺に抱きついたまま、突然泣き出してしまう。

「ちょっと、プリムラ。泣くことはないじゃないか」

「プリムラは、心配してないようなふりをしていたが、聖騎士様のお顔を見て、一気に色々と噴き出したのじゃろう」

アマランサスがいつの間にか、プリムラを名前で呼ぶようになっていた。

そりゃ一緒に仕事をしている間柄だしなあ。彼女もプリムラの力

を認めたということだろう。

「よしよし——あゝ、アマランサス悪い。今日はプリムラの相手をさせてくれ」

「ふむ、妾は〱聖騎士様の奴隷であるし〱、聖騎士様が〱そうおっしゃるのであれば、やむを得まい」

彼女は、扇子で口を隠して、プイと横を向く。

「そう、嫌味を言うなよ」

プリムラと抱き合っている俺の所に、メイド長がやってきた。

「皆さん〱お食事ですよ」

「プリムラ、飯を食べようぜ」

「……」

黙ってうなづく、プリムラの肩を抱えて、俺の横に座らせる。

「うー」

アネモネは何やら不満があるらしいが、プリムラには随分と心配をかけてしまったようだからな。

「アネモネ、仕方あるまい」

珍しくリリスが、アネモネをなだめている。

久々に皆が揃ったの食事だが、獣人たちは別テーブルになってしまふ。

彼女たちも、王侯貴族と一緒にのテーブルだと嫌がるので、しょうがない。

獣人たちと一緒に、プリムラの護衛のニヤレサという女も一緒だ。3人でテーブルを囲んで食事をしているので、ニヤメナには、ビールの差し入れをした。

「ミヤレーとニヤメナは、お疲れ様だな。ありがとう」

「にやはは」「なに、いいってことよ、はは」

「ケンイチの旦那、それってエール？ あたいにもちようだいな」
ニヤレサが俺の袖を引っ張ってきて、ビールをねだる。

「ああ、いいぞ。それじゃ、ニヤメナのおごりだな」
アイテムBOXから、ビールを出してやった。

「なんで、俺のおごりなんだよ！ だいたいニヤレサ！ なんで
めえと一緒に飯食ってんだ？！」

「そんな堅いこと、いいっこなしでさあ」

「まあ、ニヤメナのおごりってのは冗談だから、はは」
ニヤレサの顎をなでてやると、ゴロゴロと大きな音を出す。

「にやうくん——はっ！ なにをするんだい！」
彼女が俺の手をはねのけた。

「あつと、すまんすまん。つい、いつもの癖でな、はは」

「あんたら——いつもこんなことをしてもらっているのかい？！」

「あゝまあな。なでてもらって、ブラシをかけてもらったりしてる」

「そうにや、ケンイチはすごく優しいにや」

「なんだよそれ！ ちよつとうらやましいんだけど……」

ニヤレサの質問に、少々照れながらミヤレーとニヤメナが答えて
いると——。

獣人たちのビールを見ていた、アキラからも声がかかった。

「ケンイチ、俺にもビール！」

「極度に乾燥しなさい、でいいか？」

「いいぜ、いいぜ」

銀色の缶をアキラの前に置くと、同じものをアマランサスの前に

も置く。

「エールじゃな」

早速、アマランサスがプルトップを開けて、美味そうに一口飲む。テーブルに並ぶ沢山の料理——黒狼と芋の香辛料スープに、黒白鳥の唐揚げ。

山菜と肉の炒めものと、アネモネが作ってくれたパン。

相変わらずの野外パーティーだが、屋敷の中で食えるようになるのはいつの日か。

遠巻きに、作業員達も飯を食いながらこちらの様子を窺っている。俺の足下にいるベルには、ネコ缶をあげた。

「ケンイチ悪いな、ゴチになって」

「なに、アキラの指輪で助かったからな」

「ケンイチは、初めて生エルフを見てどうだった？」

俺とアキラの間にアマランサスが入ってきた。

「エルフの話なら妾にも聞かせてたもれ」

「ああ、アマランサス。交易の約束をしてきたから、俺がいないときでも、彼らがやってきたら便宜を図ってやってくれ」

「心得ました。早速、辺境伯の位階が役に立ちましたな」

他種族間での揉め事になると、普通の貴族では迂闊に取り決めができない。

今回、揉め事はなかったが、問題が起きれば一々王都までお伺いを立てる必要があるのだ。

アマランサスが扇でパタパタしている。彼女のこれは、なにかを考えているポーズだ。

エルフたちをどうやって利用してやろうかと考えているに違いがないが——彼らは長寿種族。

若く見えるようでも、俺たちの数倍生きているし、彼らにしてみれば、俺たちのほうが赤子同然だろう。

「最初、揉めたんだが、森猫に仲介してもらった」

「へえ、森猫ってそんなこともできるんだなあ」

アキラが、ベルを見つめている。

「俺の言ってることも理解しているし、かなり高い知能を持っているみたいだぞ」

「なるへそね」

「にゃー」

ネコ缶をあつという間に平らげてしまったベルが、俺の所にやってきて膝にスリスリをしている。

「お母さん、いつもありがとうな」

「ケンイチ、いつも不思議に思ってたが、なんでお母さんなんだよ？」

「俺がお父さんなら、ベルはお母さんだよな」

「にゃー」

「ほらな」

笑う俺だが、食卓がひんやりと冷たくなったのは、気のせいだろうか。

アキラとアマランスに湖の説明をする。

「それじゃ湖の周囲は150kmぐらいで、間違いないってことか。デカイ湖だな」

「対岸まで40kmぐらいだろう。それと川があった」

「川？」

「そう、そこから湖の水が流れ出て、アニス川というデカイ川と繋がっていた」

「繋がっている所までは、行っていないんだろ？」

「エルフたちに確認したから、間違いないだろう」

「エルフの行動半径は意外と広いからなあ」

彼はエルフとも付き合っていたらしいからな。

「アキラは、エルフと付き合ってみてどうだった？」

「ああ、ちよっと仲間になると、遠慮しなくなるってところが面食らったが、他は普通だぞ？ 中はちよっと狭いかな」

どこの中が狭いのかは、問うまい。

「いや、この場所で、そういう情報はいいから……」

「あ、失敬失敬！ フヒヒサーセン！」

また、食卓がひんやりとする。

プリムラは黙って食事を摂っているが、まあ食欲があるなら大丈夫だろう。

飯を食い終わったので、後片付けはメイドたちに任せる。

こういうところは、メイドがいると便利だな。

「ケンイチ、なにか見せたいものがあると言っていたが……」

アキラは、飲みかけのビールの缶を持って、俺の所へやってきた。その後ろに獣人たちも一緒に見物だ。

「おい、ニヤレサ。お前は見ないほうがいいぞ？ 旦那がとんでも

ないものを出すからな」

「はあ？ いったい何を出すってんだい？」

「お前が驚いて毛を逆立てるものだよ」

ニヤメナがニヤレサを煽っているのだが、彼女は信じていないようだ。

「は！ あたいが毛を逆立てる？ そんなわけがない。あんたが腰拔けなだけだろ？」

「なんだと？ それじゃ賭けるか？」

「乗ったよ」

獣人たちの会話をよそに、紋章官のユリウスもやって来た。

「アマランサスとユリウスも見てくれ」

俺はアイテムBOXからクラーケンの足を出すと、白くて巨大なゲソが地面に出現する。

地面に触れると汚れるので、あまり出したくないのだが、どうしようもない。

その部分は捨てるでしょう。

突然現れた得体のしれない巨大な脚に、皆から驚きの声が上がった。

153話 忘れな草

湖の周りの測量を終えて、俺のこの世界での故郷ともいえるサクラに帰ってきた。

皆が俺のことを心配していたらしいが、村の様子はいつもと変わらない。

皆と食事をしたあと、俺のゲットした獲物をアキラやアマランサスに見せることになった。

まずは、湖の畔で仕留めたクラークンの脚だ。

アイテムBOXから出すと巨大な白い塊が地面に現れた。

「ふぎゃー！」

俺の周りで、クラークンの足を見た獣人たちが毛を逆立てる。

驚くはずがないと豪語していたニアレサも毛が逆立ち、ボーボー状態。

「わはは！ どうだニアレサ！ 毛が逆立っただろ？ あゝキモい！」

大笑いしているニヤメナの毛も逆立っていて、随分と自虐的な笑いだ。

「にやにやにや、にゃんだい、こりゃー！」

ここまで対象物が大きいと反応しない獣人もいるようだが、ニヤメナやニアレサのように、ダメなやつもある程度いるようだ。

「なんだこりゃ、タコかイカか？」

アキラが、白い塊を見上げる。

「イカだよイカ。クラークンだ」

「もしかして、こいつが湖にいたのか？」

「ああ、夜中に浜でキャンプをしていたら、コンテナハウスごと引き込まれそうになった」

「イカって淡水はダメなんじゃなかったっけ？」

「わからん、なにせここは異世界だからなあ」

腕を組んで唸る2人に、アマランサスとユリウスが入ってくる。

「それでは聖騎士様。アスチルベ湖を本格的に経済に組み込むとなれば、この化け物を退治する必要が……」

「この湖にこんな化け物が……」

ユリウスが、信じられないといった顔をしているが、これは事実だ。

「そうなんだよ。沖に出る度に、こんなのに襲われていたんじゃない話にならない。実際に、サンタンカの住民にも行方不明者が出ているようだし」

「こんなデカブツどうやって殺る？」

アキラが、足の表面を触って感触を確かめている。

「アキラの窒息攻撃は使えないな」

「相手がイカじゃなあ——一応エラがあるだろうから、そこに突っ込めば或いは……」

彼は、ドラゴンの口の中をマヨネーズで満たして窒息死させたという、ドラゴンスレイヤーだ。

「殺るとすれば、水中への爆雷攻撃かな？」

「ほほう——聖騎士様は、随分と荒っぽいねえ」

「水中の衝撃波は、チタンの潜水艦を潰すぐらいに強烈だからな」

帝国の魔導師ドラゴンスレイヤーと一緒にクラーケン攻略話を話していたのだが、アキラが脈絡もなくつぶやいた。

「んで？ こいつは美味しいのか？」

「ああ、いけるぞ？ 食ってみるか？」

「よっしゃ！」

さすが日本人。とりあえず、なんでも食ってみるの精神。

クラーケンの足を薄く切り取ると、アキラは自分のアイテムBOXから魔石コンロを出して、炙り始めた。

「ふぎゃー！」

俺たちがイカを食い始めたのを見て、獣人たちがうるさいが無視だ。

香ばしい、ゲソのいい匂いが辺りにただよう。

「ウチじゃ、イカを食うときは、醤油とマヨと七味だったんだが……」

「はは、俺も似たようなもんだ」

小皿を出して、醤油と七味も出す。マヨはアキラの自前があるからな。

焼き上がったゲソを、黄色のマヨネーズにつけて、アキラが口に放り込んだ。

「おっ！ 美味しいなあ！ まさか異世界でイカが食えるとは……ケンイチ、もう一本いいか？」

「ほい、極度に乾燥しなさい！」

「サンキュー！」

俺の出してやったビールを、アキラが美味そうに飲んでいる。

「かゝ！ たまんねえ！」

「聖騎士様、妾も食べてみたいのじゃが？」

「あ、アマランサス様？ そんなものを食べて大丈夫なのですか？」
ユリウスが心配しているが――。

「お！ いったみるかい？ リリスも美味しいと言ってたから、大丈夫だと思うが」

焼いたイカをアマランサスも、口に放り込んだ。

「ほう！ これは、魚とも肉ともつかない、まさに珍味！」
まったくリリスと同じ感想だ。実の親子ではないのだが、よく似ている。

ついでに、しかめっ面で黙って見ていたカナンにも勧めてみる。

「カナンも食ってみるか？」

「い、いや、私は遠慮しておく」

「ははは」

ニャメナやニャレサは、いつの間にかいなくなってしまった。
気持ち悪くなって、自分たちの部屋に戻ったのかもしれない。

アキラに、巨大管虫も見せてやる。

アイテムBOXから、赤い巨体が現れると、あちこちから悲鳴が
上がった。

見物していた他の獣人たちや、こちらを見ていたメイドたちの声
である。

「げ！ こりゃ管虫か？！」

「知ってるのか？」

「ああ、湿地には佃煮にするぐらいいるからな。しかし、こんなバ
カでかいのは……」

「それじゃ食ったこともあるんだ」

「食うなら、10cmぐらいの細いのがいいぞ。しごいて中身を出してからぶつ切りにして野菜炒めにすると、シャキシャキして美味しい」

「へえ、それは食ってみないとな。ちょっと大きいのを蒲焼きにしてみたけど、それはそれで、まあまあだったぞ」

「蒲焼きかくそういう手もあったなあ」

やはり同じ日本人同士、食材の話はすすむ。

ついでに蜂も見せる。全長1,5mの女王蜂だ。

「こりゃ、キラーホーネットだな」

アキラが、蜂の大きな目を覗き込んでいる。

キラキラとして綺麗だが、なにかに使えないだろうか？

「戦ったことがあるのか？」

「ああ、味方を呼ぶから、厄介で逃げた」

「巣ごと潰して、蜂の子も取ったから、あとで食おうぜ」

「マジか、そりゃ楽しみだなあ」

「食ったことがあるのか？」

「まあな」

アキラも蜂の子は大丈夫らしい。

「成虫はどうするんだ？」

「酒に漬けて、プロポリスエキスを抽出しようかと……」

「強壮剤か——いいねえ！」

「ちょっと寄ってく？」

「いいねえ！」

「「ラララ○○○ラララ○○○ははは！」」

2人揃うと、オッサンが加速してイカンな。

俺とアキラがはいでいる間も、ずっとプリムラは黙って側に立っていた。

アネモネとリリスは——座って、2人で話をしているが、なにを話しているのだろうか。

ビールを飲み終わった連中からは、アルミ缶の回収を忘れずに。

辺りは暗くなったのでツリーハウスへ、プリムラと一緒に行く。

中は、前と変わっていない——というか、埃も積もっておらず綺麗。

メイドたちはここも掃除をしてくれているようだ。
ありがたい。

「はい、プリムラ、ここに座って——」

俺が言うか言わないうちに、彼女が俺に抱きついてきた。

「俺が留守から帰ってくる度にこれじゃ、どうするんだよ」

「解っていますけど……ケンイチの顔を見た瞬間、我慢できませんでした。それに、あんな恐ろしい魔物まで！」

「でもまあ、俺は領主になっちゃったからさ。あのデカイのだって退治しなくちゃ、サクラやサントンカに住む領民が安心できない」

「でも！ ……私が、ケンイチの力を見せびらかすような真似をしなければ……」

「それについては、この前話したじゃないか。結果的には、マロウ商会は王国中——いや帝国まで名が轟くような商会になろうとしている」

「……」

だまって、プリムラがうなづく。

「素晴らしいじゃないか！ プリムラとお義父さんなら、間違いないできる。そんな素晴らしい商売ができるなんて、ワクワクするだろう？」

——ってこの前も話したしなあ。

「……」

プリムラが小さく首を縦に振った。

「よしよし、俺のことは心配しなくてもいいから」
彼女の頭をなでてやる。

「うう……」

プリムラがまた泣き始めた。
困ったなあ……。

「大丈夫だって、聖騎士ってのになって、そう簡単には死ななくなっているからな」

彼女がコクリとうなずいた。

そのあと彼女は、夜が更けるまで俺を離してくれなかった。

他の女性たちは普段と変わりなかったのだが、プリムラの反応だけが違った。

なぜか俺の姿を見て感極まってしまったらしい。

彼女をベッドの上でなだめるのに、一晩を費やしてしまったのだが、俺が出かける度にこれじゃ先が思いやられる。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

——朝起きて、コンテナハウスの窓から入ってくる日の光にプリムラの裸が照らされている。

見とれている暇もなく、彼女を起こす。

「プリムラ、朝だぞ」

「ううん……」

しばらく様子を見ていたのだが、彼女はいきなり飛び起きると俺に抱きついた。

「しばらくどこにも行かないから」

「……」

「ほら、飯の用意をしないと」

「……はい」

彼女と一緒に家に向かうと、すでにメイドたちが食事の準備を始めていた。

俺がいなくても、街や畑から食材を集めて、食事を出すシステムが確立されていたのだ。

さすが、王家のメイドたちだなあ——とても優秀だ。

マイレンも少々変なところがあるが、かなりのやり手だからな。アネモネもすでに起きていて、パンを焼いてくれていた。

「アネモネおはよう」

「おはよう！　すぐにできるよ！」

怒っているのかと思いきや、すごいニコニコしていて、逆に怖い。リリスのアドバイスどおりに、女性陣にはなるべく公平に接しないと。

多少の順番の入れ替えは、あるだろうけどな。

焼き立てのパンの美味しいところを、アネモネが持ってきてくれた。

それだけではない。美味しそうなスープが入った皿も俺の前に置かれる。

いつも自分でやっていたが、今日はアネモネが全部やってくれたのだ。

ニコニコ笑う彼女から、なにやら無言のプレッシャーのようなも

のを感じる。

12歳の少女から、オッサンがプレッシャーを感じてどうする。
でも——怖い。

それを見た、リリスがニヤニヤしている。

彼女は冒険のときに着ていた、乗馬服のようなパンツスタイルを止めて、いつもの白いブラウスと紺のスカート姿に戻っている。

「にゃーん」

俺の所にベルがやってきたので、ネコ缶をやる。

朝食の後、アキラが俺の所にやってきた。

「ケンイチ、ディーゼル燃料を、また頼むぜ」

「解った——また作らないとなあ」

アキラのマヨネーズから油を出してもらう。彼は歩く油田——いくらでも油が出てくる。

アイテムBOXから出した、容器に使っているプラ製の湯船がすぐにいっぱいになった。

「アキラは、金に困ったら油を売ればいいからなあ」

「ケンイチのそれだって、なんでも作れるじゃねえか」

「俺のは、一応対価がいるんだよ。最初、文無しで苦労したし」

「俺も、油を売ろうとしたら、商人から嫌がらせを受けたりしたぜ」

「ああ、やっぱり少し調子がよくなっていると、そういう奴らが絡んでくるのか……」

「まあ、どこの世界でも同じってことさ」

アキラにバイオディーゼル燃料を渡すと、トラックにカナンを乗せて、アストランティアへ向かう。

カナンは、昨日俺が出してやったドレスやらアクセサリーやらを、どっさりと抱えている。

あれを使って、アストランティアの仕立て屋で、新しいドレスを作るつもりだ。

他になにか役に立ちそうなものがあればいいが――そうだ。

俺は、シャングリ・ラからファッション雑誌を5冊程購入した。全部古本だ。

「カナン、異国の服飾の本だが、参考にならないか？ 文字は読めないと思うが……」

「こ、これは！ ものすごく精密な絵だな！」
写真のことを説明できないので、絵ということにする。

「でも、皆脚を出しているのが……その……」

ああ、この世界ではロングワンピースが伝統で、脚を出すのは、はしたないってことになっているからな。

「そのままスカートだけ長くすればいいだろう」

「そうだな………!!」

本を見ていたカナンが突然固まる。

「こ、これ……!!」

どうやら下着の写真らしい。

「俺とやらしいことをやっても、こういうのはダメのようだな。まあ人に見せなければいい」

「なぜ、皆が脚を出しているのだ？」

「うーん、どういう経緯でスカートが短くなったのかは解らないが、伝統への反逆みたいのがあったんじゃないかな？」

「反逆……」

「えーと、女性の自由の象徴……みたいな？」

正直、俺もミニスカートが流行った経緯なんて解らん。

「それでは、この本を借りてもいいのか？」

「ああ、参考になれば」

「もちろん！」

カナンは本を抱えて、アキラのトラックの助手席に乗り込んだ。

「アキラ、今日も来るのか？」

「荷物があるんで、来ると思うわ」

「オッケー！」

ディーゼルの黒煙を上げながら、トラックがアストランティアへ向けて出発した。

そのあとを、プリムラが自転車で追っかけようとしている。

その横には、護衛のニヤレサが一緒だ。

「プリムラ、君もアキラのあれに乗せてもらえばいいのに」

「これが好きなんです。それにアストランティアなら、すぐそこですし」

笑うプリムラの表情は明るい。

昨日はずっと泣いていたので、どうしようかと思っていたが大丈夫のようだ。

ニヤレサに押されて走り出したプリムラの自転車を見送る。

さて、こっちの仕事だ。

「ミヤレー、ニヤメナ！」

「なんだい旦那！」

「今日の予定は？」

「クロ助と狩りに行こうかと……仕事かい？」

「いや——俺の弓を持っていくか？」

「今日は自前の装備で行くよ。旦那の装備は性能がよすぎるんだ。」

あれに頼っていると、腕がなまっちまう」

「そうか」

ベルも獣人たちと一緒に、狩りに行くようだ。

俺と一緒に測量旅行をして、あまり狩りができてないようだったからな。

身体がなまったらう。

獣人たちにバイオディーゼル燃料の精製を頼もうと思ったのだが、諦めてメイドたちに任せるか。

魔道具に下拵えをした油を継ぎ足すだけだからな。すぐに覚えてくれるだろう。

メイドを1人、小屋に連れていき、魔導具の説明をする。

俺が組み立てた狭い小屋の中には、油の入ったバスタブと、2基の魔道具がある。

「ここに入っている油を上に入れて、下に出てくる油を集めてほしいんだ。簡単だろ？」

「あの――上から油を入れるだけでいいのですか？」

紺色のメイド服に白いエプロン、茶色の髪を2つにおさげにしている女の子が、少々困惑している。

「ああ、魔道具だからって難しく考える必要はない。上から入れて、下の油を集めるだけ」

左に出てくるのが、バイオディーゼル燃料。右に出てくるのが、グリセリンなどの要らないものだ。

グリセリンからは石鹸などが作れるが、現行は肥料にしたり、アイテムBOXのゴミ箱に捨てている。

「ずっと見なくてもいいぞ。油を切らさないようにしてくれれば、他の仕事をしながらでもいい」

「承知いたしました」

そう言った彼女だが、なぜかもしもじしている。

「なんだ？ なにかあるのか？」

「あ、あの――こんな場所で二人つきりなので、なにかあるのかな
と、えへへ」

俺は、メイドの頭を軽くチョップした。

「ひゃん！」

「仕事をしつかりするように」

「し、承知いたしました」

「メイドたちは、そういうことをするメイド長を、よく思ってないと聞いていたが？」

「そういう子も、いますけど……」

「とりあえず、正室と側室で手一杯なので、そういうのは期待する
な」

「わかりました」

がっかり顔のメイドに仕事を頼み、小屋から出てくると、リリース
がやって来た。

「リリース、アネモネになにを言ったんだ？ なんだか怖いんだけど」

「別に――ただ、なにかある度にむくれた顔をするのは、子供っぽ
いから止めたほうがよいと、申しただけじゃ」

それで、あの顔か。

怒っているなら怒ってもらったほうが、解りやすくいいんだが
なあ。

地雷を踏みそうで怖いじゃないか。

それに彼女は、実の親と死に別れて、育ての親からも愛情を受け
ずに育っているし、多少なりとも愛情に飢えていても仕方ないと思
うんだが……。

その後、メイドたちと一緒に畑仕事をする。

彼女たちが、畑をもうちょっと広げたいというので、アネモネを呼ぶ。

「アネモネ、ゴーレムを使って畑を耕せるか試してみたいんだけど、いいかい？」

「うん」

畑の予定地に、アイテムBOXから出したゴーレムのコアを置く。

「むー！」

アネモネの魔法に呼応するように、コアの周りに青い光と土が集まり始める。

山にしたり、ひっくり返したりすることで、天地返しもできるようだ。

こりや便利だけど、アネモネクラスの大魔導師がそうそういるわけじゃない。

普通に使える技術じゃないな。

「すごいおう！ ゴーレムにこんな使い方があったとは……」

リリスが驚くが――王国のゴーレム技術ってのは、より人型に近づけて、人に近い動きができるようにと進歩したらしいからな。

こんな使い方は想定外なのだろうが、帝国のアキラやレイランさんは、ゴーレム技術の応用をしていた。

やはり帝国の魔法のほうが、柔軟性もあり技術も上なのではあるまいか。

「「「すごい！」」」

メイドたちの声に、アネモネも得意顔だ。

「アネモネ、ありがとうな」

彼女の頭をなでてやると、俺に抱きついてきた。

「ちゅー」

「はいはい」

彼女を抱き上げて、軽く口づけをする。

これが日課になってしまつて、ちょっとマズいような気もするが……。

「アネモネ、なにかある度に報酬を求めるのは、子供っぽくはないのかえ？」

「う？ ううー」

俺から離れたアネモネが、リリスの言葉に困った様子で、ウロウロしている。

自分もそうだと思つたに違いない。

「いいんだよアネモネ。君は凄いことをしているんだから」

「うう……」

頭をなでられるのも、子供っぽいと思つたのだろうが、実際にまだ子供なのだ。

本当のことを言うと言怒るから言わないが——難しい年頃だ。

「それじゃ妾もじゃ！」

「はいはい」

アネモネを子供、子供とバカにする、リリスも子供っぽい。リリスも抱き寄せると、ちゅーをする。

「ずるーい！ リリスはなにもやってないじゃない！」

「リリスは、一応正室だし」

「一応とはなんじゃ！」

「ははは、ごめんよ」

それなりに歳が近いせいか、張り合う2人であるが——元世界で言うと、小学6年と中学3年。

この辺の年齢は数年で大きく変わるので対応が難しい——要取り扱い注意だ。

お姉さんたちの意見を取り入れつつ、慎重に接しないと。

その後ろでメイドたちが集まり、ひそひそ話をしている。

「ご主人さまって、小さい子が好きなのかしら？」「え〜？」

「だってさあ——」

聞こえてしまったので、否定する。

「俺は、そういう趣味じゃないぞ。プリムラだって、アマランサスだって、カナンだっているじゃないか」

「それは、そうですねど……」

「くだらないこと言っていないで、仕事仕事！」

「「は〜い！」」

まったく人聞きの悪い。こういう噂は、あっという間に広まるからなあ。

どこぞの貴族が子供を連れてきて、「側室に〜！」とかいう話きたら困るじゃないか。

リリスの話によると、女の子が14〜15歳になると、もう嫁入りの話になるという。

カナンが、貴族の結婚に幸せなどあるはずがないと言っていたが……。

畑仕事をしながら、ふとメイドの1人に目が止まる。

メイドたちは沢山いて、名前と顔は一致しないのだが、この子は見たことがない。

金髪の長い髪を編み込んでまとめているが、なんだかモタモタしてて、あまり仕事し慣れてない様子が窺える。

「君は新しく入った子かい？」

俺の言葉に振り向くと、細めの青い目がきらめく――16→17歳ぐらいか。

どうも、メイドにしては気品がありすぎるようだし、どこか見たような気が……。

「はい……」

「名前は？」

「メネシアです……」

「マイレン、この子は現地採用かい？」

メイド服にメガネ姿のマイレンが、俺の前にやって来た。

「はぁ――あのアマランサス様が連れてこられて……」

「アマランサスが？ ふむむ」

彼女の顔をじっと見ていると、後ろからいきなり抱きつかれる。

「聖騎士様、いかがなさいました？」

「うわ！ アマランサス、気配を消して近づくなよ」

ここまで接近されたことを気づかないとなると――彼女が武器を持っていたら、真っ二つになるってことだからな。

「その者は私が連れてきたのです」

「ふーん、彼女――お前に似てないか？」

「……………聖騎士様、こちらへ」

「なんだなんだ？」

困ったような顔をした、アマランサスに連れられて、少々離れた場所に行く。

「申し訳ございません。聖騎士様になんの相談もなくいきなりアマランサスが頭を下げた。」

「メイドを雇うぐらいは、別に構わんが……」

「あの娘の名前は、メネシア・ラン・フォゲットミーノットと申します」

「貴族じゃないか？　なんでメイドに？」

「名前は捨てさせましたので——それに、もう貴族ではございません」

「貴族じゃない……お取り潰しかなにかか？」

「はい」

アマランサスがじつと俺の顔を見てくる。

「俺がどうかしたのか？」

「これには、聖騎士様が関わっているのですが……」

「俺？　なにかやったっけ？」

「妾の寝室にあった、青い壺……」

そういえば、あったな。呪いがかかったとかいう青い壺。

「王妃の暗殺未遂ってことで、男子は処刑——女子は放逐って話じゃなかったか？」

「そのとおりでございます」

「それじゃ、その貴族の娘か……王族を殺そうとした家の娘をなぜ？」

アマランサスの話によれば——王家の血を引くってことで担ぎ上げられたが、彼女はなにも知らなかったらしい。

「それに、小さい頃から知っているメネシアが不憫で——」

「まあ、アマランサスがいいなら、いいよ。俺は別に困らんし」

「でも、よろしいのでございますか？」

貴族の娘が野に放り出されても、生活能力はゼロだ。

商人に囲われるか、高級娼婦になるぐらいしかない。

あれだけ美人なら、引く手数多だろうが……。

貴族が引き取ったりすれば、反王家派として疑われるってことだ。まあ俺も疑われるってことだろうが、ここには元王族が2人もいるし。

だいたい、暗殺されそうになった本人がいいっていうなら、問題ないだろ。

「もう一度言うけど、アマランサスが望むならそれでいいよ。それに俺が留守にしていたからな」

「ありがとうございます」

アマランサスが頭を下げた。

彼女は俺が気づかないと思ったのだろうか、元絵描きの俺は顔の造作などに敏感だ。

そのくせ人付き合いには興味がないので、人の顔を覚えるのは苦手という矛盾。

彼女もそう感じていたので、俺に黙っていたのかもしれない。

いや、自分の興味があるものに関しては凄い執着があるんだ。

興味がないものに関しては、まったくどうでもいいから、貴族の顔などまったく覚えていないだけなのだが。

「しかし、彼女は大丈夫なのか？」

「貴族ではなくなったので、自分でなんとかせねば、生きていけませぬ」

「そりゃそうだが……」

やる気はあるようだし、娼婦になるよりはましだろうとは思う。

土まみれになって畑仕事をしている、メネシアをじっと見つめる。アマランサスの親戚かあ、それじゃ美人だよな——もう少し大人

になれば、もっと美しく……。

美形の親戚は、やっぱり美形揃いだなあ。まったく俺みたいな十人並みには羨ましい限り。

「聖騎士様、なにか？」

「ああ、アマランサスにも、ああいう時代があったんだと——な」
「もう！ 当たり前である！」

俺の言葉に、アマランサスが豹変する。

「そのとき、会いたかったなあ」

「聖騎士さまは、意地悪じゃな！ じゃが、そのとき出会ってれば、妾が正室に——」

アマランサスが俺の身体に手を回してくる。

「そうだな」

「ああ——若返ることができれば……そうじゃ！ よいことを思いついたぞえ？」

アマランサスがニヤリと笑う。

「よいことって——それ絶対に悪巧みだろ？」

「帝国には、若返りの神器があるそうじゃ！」

帝国皇帝は、ある歳になると神器によって若返り、国を治める。最初に聞いたときは、なにかの冗談かと思ったのだが、アキラによると本当らしい。

その神器っていうのは本当に存在しているってことだ。

「止める！ お前が言うとお洒落にならん！」

「聖騎士様との目眩く春が、妾にも……」
「聞いちゃいねえ。」

恐ろしい——このレベルの人間は、冗談が本当になるからな。

気をつけないと。

154話 親子水入らず

巨大な湖を一周する測量旅行を終えて俺たちは、無事にサクラに帰ってきた。

辺りは開発のための人が増えて、賑やかさを増し、村が大きくなる予感を感じさせる。

そのためにも、早く産業を定着させないとダメだが——とりあえずは建築ラッシュでの公共事業で仕事はまかなえている。

湖で行う漁業も重要な産業の一つになると思われるが、巨大なクラークンと呼ばれる化け物がいることが解った。

漁業をするためには、こいつをなんとかする必要がある。

先は長く果てしないが、一つ一つ問題を潰していかなければならぬ。

クラークンの攻撃は、長い脚を使って水中に獲物を引き込むことだ。

水中ではアネモネの爆裂魔法エクスプロージョンなども使えない。

実験してみたが、水面では使えるが、水中への魔法の発動はできないようだ。

水中攻撃と言えば——やはり爆雷だろう。

戦争映画などで観た俺の記憶では、ドラム缶みたいな爆弾が海へ飛んでいって潜水艦などを破壊していた。

さっそくシャングリ・ラを検索したのだが、普通の200Lのドラム缶は巨大すぎる。

あんなに大きくはなかったはずだ。

シャングリ・ラで小型のドラム缶を検索してみると——60Lの

小型のものが売っている、1万円だ。

直径40cm高さ55cmぐらい——いい感じの大きさだ。

こいつに爆薬を詰めて、爆雷にすればいい。

爆雷に詰めるのはアンホ爆薬だが、こいつはシャングリ・ラで売っている肥料の硝安で簡単に作れる。

そう、簡単に作れるのだが、爆発させるのが難しい。

現在は、アネモネの使う爆裂魔法^{エクスプロージョン}（小）を使って起爆させているが、爆雷を水中に落とすとなると、それもできない。

水中にいる敵に、水上で爆発させても意味がないのだ。

なんとか魔法を使わずに、水中でアンホ爆薬を起爆させる方法を考えなくては……。

俺は、小屋の周りをウロウロと歩き回る。

これは俺の癖だが、こうすると考えがまとまるのだ。

ひたすら歩き回っていると、獣人たちの話し声が聞こえる。

「おい、旦那がウロウロと熊みたいに歩いてるぜ」

「なんか、怖いことを考えてるにゃ」

「ああ、そうだな」

まあ、武器開発について考えているから、そりゃ怖いことかもしれないが、村を守るのに必要なことだからな。

シャングリ・ラで、爆薬や爆発に關しての電子書籍を読み漁る。

あまり高度な薬品は作れない。シャングリ・ラで購入できるもので作るという縛りがあるのだ。

たとえば、俺がバイオディーゼル燃料を精製しているときに出てくる、グリセリン。

こいつをニトロ化すれば、ニトログリセリンになる。いわゆるダイナマイトだ。

グリセリンをニトロ化するのには、濃硝酸と濃硫酸が必要になるが――。

シャングリ・ラには、なにに使うかわからん希硝酸と希硫酸が500ml、1200円ぐらいで普通に売っている。

これを濃縮すればいい。それには、バイオディーゼル燃料を精製するために使っている、魔道具が使える。

あれは、対象液体から、特定の液体を抜くことができる魔道具。希硫酸から水を抜けば――そこに残るのは濃硫酸ということになる。

「くくく――道は見えたな」

「おい、クロ助やべえよ！ 旦那がヤバい笑いをしてるぞ？」

「絶対に怖いことを思いついた顔だにゃ」

獣人たちが騒いでいるが、まあ放置する。

これはサクラを守るために行われる正義の行使なのだ。

自分で正義とか言ってるやつにろくなやつがないことは、棚に上げといてだ。

そこにアキラがプ○ドでやって来た。

トラックじゃないので、遊びに来たのだろう。荷物があっても、彼もアイテムBOX持ちだからな。

「ケンイチ、オッス！」

「オッスオッス！ コーヒー飲むか？」

俺はアイテムBOXから、ブラック缶コーヒーを取り出した。

「おお！ もらうぜ！」

2人で、一息ついて缶コーヒーを飲む。

村には沢山の作業員が働いており、トンテンカンと家を建築する音が響く。

水力による製材所も完成したので、巨大な丸のこで製材も始まった。

これで建築材料も生産できるようになったので、家の建築がはかどるだろう。

「ケンイチは、なにをしていたんだ？」

「前に話したろ？ 湖にいるクラークンを倒すために、爆雷を作る」

「ああ言ってたな……」

彼に、俺が使っているアンホ爆薬を見せる。

「肥料から爆薬が作れるって聞いたことがあるけど、ピンク色のこれがそうか？」

「ああ、これは作るの簡単なんだが、起爆させるのが難しい」

「いままではどうやっていたんだ？」

「アネモネの小魔法を使って起爆させてた」

「爆発の種にするなら、小でもいいってわけか」

「そうなんだ」

アンホ爆薬を見たアキラが、不安そうな顔をしている。

「これって、戦に使われそうだが……」

「他に教えたことはないよ。もちろん侵略を受けたりしたら、防御のためには使うけどな」

「しかし、ケンイチは貴族になったんだ。これを使えって言われるかもしれないぞ？」

「それは時と場合によるな」

まったく無視ってわけには、いかないだろうしな。

さて、爆雷の目処はたったが、沖に出る船はどうしようか。

大工に船って作れるのかね？ サンタンカの船はどこで作ったのだろうか？

あの村に船があるってことは、船が作れる大工がいるってことになるのだが……。

シャングリ・ラでボートを探してみる。豪華クルーザーとは言わないから、使えそうな船はないだろうか？

まさか、ゴムボートで戦闘をするわけにいくまい。

「おっ！」

前に検索したときにはなかった、中古の30フィート（約9m）の漁船が売りに出ている。

運転席がついていないオープン型の釣り船で中古の船外機までついている。

色は白でFRP製、値段は30万円——こりやお買い得だ。

2艘売りに出ているので、買ってみて使えるようなら、もう1艘も買おう。

シャングリ・ラの商品は結構流動的で、新しいものが追加されたり、品物が廃盤になったりすることがある。

俺が、ダリアの森で買ったディーゼル発電機は、すでに廃盤になっており売っていないし、組み立て式の小屋も、新製品が追加されていたりする。

「アキラ」

「おっ？ どうした？」

俺の悪巧みに、アキラが気づいたようだ。

「船の進水式をやろうぜ」

「船？ あるのか？」

「ああ」

アキラも乗り気のようにだ。目が輝いている。

「よっしゃ！ レッツラゴー！」

「ははは！ 船は任せろ！」

2人一緒に湖の岸に向けて走り出した。

「なんだ？ 船に乗ったことがあるのか？」

「俺、船舶免許持ってるし」

アキラが、予想外の返答をよこした。

「ええ？ マジで？」

「マジマジ——広島まで行って、免許取ってきたんだぜ、ははは」

「なんで、広島？」

「広島に船舶免許の試験場があるんだよ」

「マジで？」

「マジマジ——それで、もみマン買って帰ってきた」

もみマン——もみじ鰻頭だ。

俺たちのあとを、獣人たちもついてきた。

湖畔に到着すると、水辺に買った漁船を出す。

「よし、召喚！」

白いボートが、水面に波を立てて落ちてきた。

お尻には黒くて大きい船外機が搭載されて、水面からスクリューを持ち上げられて斜めになっている。

さすがに使い込まれた漁船らしく、傷だらけでボロボロだ。

まあ、こんなのは使えればいいから、傷なんてどうでもいいけどな。

こいつを出品した人も、まさか異世界で使われるとは思わないだろう。

「おーっ！ 結構ボロい漁船だなあ。30フィート船か」

落ちてきた船を見て、アキラが声を上げた。

メートルだと9mちょいなので、アイテムBOXにも入る。

「結構デカイ船外機がついているが、スピードはどのくらい出るんだ？」

「これは80馬力ぐらいだと思うが——25〜30ノットぐらいじゃね？」

30ノットだと時速55kmらしい。湖の横断も1時間でできる速さだ。

「結構スピードでるなあ」

「けど、なんでボロボロなんだ？ 魔法で作るなら新品でもいいはずだが……」

アキラが、俺の使っているチートに疑問を持っている——まあ当然だ。

「新品だと、対価で金を沢山消費するんだ。中古なら安い」

「ああ、そういう制約もあるのか？ それじゃ、トラックやラ○クルが古いのも？」

「そう、ボロボロだと対価が安い」

アキラには、シャングリ・ラの説明をしていないからな。

彼だけではない、家族の誰にもシャングリ・ラの説明はしていない。

多分、説明をしても解らないだろうし。

「よし、早速動かしてみようぜ。船外機も中古だけど、動かないなら新品が必要になるかもしれないし」

「新品の船外機は高いぞ？」

アキラが、黒い船外機をペシペシと叩いている。

「そうだろうな」

アキラと一緒に船に乗り込むと、獣人たちもやってきた。

「旦那！ その船を動かすのかい？ 俺たちも乗せてくれよ」 「ウチもにゃ」

「おお、いいぞ」

「にゃー！」

4人で船に乗り込むが、この船は大きいので、4人は余裕だ。船外機はアキラに任せる。免許持っているらしいし。

「船外機は動くかな？ これって2スト、4ストどっちだ？」

「こいつは古い船外機だから、2ストだな」

船の後部に赤い鉄製の燃料タンクがある――25Lと書いてある。シヤングリ・ラから、高い混合燃料を買う。

どのみち4ストでも、純ガソリンはシヤングリ・ラでは売っていないので、高くつく。

「最近4ストが多いんだろ？」

「そうだな、4ストでインジェクション、スーパーチャージャーつきとか、そういうのだな」

「へえ、インジェクションで過給器までついているのか」
アキラがタンクを覗いている。

「ガソリンが少々入っているけど、捨てたほうがいいだろうな」
腐っているガソリンは、エンジントラブルの元だ。

「そうだな、タンクの中は錆びてないか？」

「大丈夫そうだ」

金属製のボウルを出して、ガソリンを空ける。こいつはゴミ箱に捨ててしまおう。

タンクを空にしてから、混合燃料を10Lほど入れる。
動くかどうかかわからなので、最初はこんなもんでいいだろう。

「よっしゃ！　いつてみるか！」

ゴムボートにつけた、2馬力の小さな船外機は、紐で引っ張るリコイルスターターだったが、こいつはエンジンスターターが装備されている。

アキラが、スタートボタンを押したのだが、スターターが回らない。

「ケンイチ、こりゃバッテリーが死んでるぞ？」

「マジか。バッテリー容量どのくらいだ？」

「多分、100Aだな」

シャングリ・ラでバッテリーを探す。12Vなので、車と同じものが使える――1万3000円だ。

獣人たちに避けてもらって、購入ボタンを押す。

「ポチツとな」

黒いバッテリーが落ちてきたので、そいつを船外機と接続した。

「おーし！　スイッチオン！」

アキラがボタンを押すと、燃料ポンプが動く音がしてから、エンジンが目覚めた。

「おお！　動いたな！」

「はは、まだ使えるぞ。この手の船外機は、使い倒すのが普通だから、丈夫なんだよ」

アキラが舵を握ると、船はゆっくりと水面を走り始めた。
それでも、ゴムボートよりは全然速い。

「すげえ！ 水の上をこんなに速く進めるなんて！」 「にゃー！」

「こんなもんじゃないぞ、もっと速度が出る！ アキラ！」

「よっしゃ！ いってみるか？」

彼がスロットルを開けると、船は水面をジャンプするように走り始めた。

湖面は波がないので、海よりはスピードが出しやすいだろう。

「おお！ すげー！」 「にゃー！」

獣人たちは、船の脇に掴まって喜んでいる。

車と違い目線が低いし、屋根がないのでオープンカーのようで、スピード感が凄い。

湖面を白い波を立てながら、切り裂くように進む。

この世界に、水面をこんなスピードで進むものは存在しないだろう。

いや、海に行けば、もっと速い動物がいるかな？

たとえば——トビウオ。

「アキラ、トビウオってどのぐらいのスピード出るんだ？」

「船舶免許の試験場に漁師の息子がいて、時速60kmとか聞いたけどなあ」

「それじゃ、これより速いのか」

「速度が速いなら、カジキだぞ。あれは100kmぐらい出るし」

「あゝ、カジキなあ。マグロも速くなかったっけ」

船の速度が速いので、あっという間に岸が見えなくなる。

「アキラ、あまり沖に行くなよ。今、クラークエンに襲われたら、対処できない」

「あいよ」

ぐるりと回って、岸に帰ってきた。

使えるのが解ったので、シャングリ・ラでもう1艘同じ船を買っ

て整備を行う。

エンジンも始動できたし、無事に使えるようだ。
クラーケンを退治すれば、湖を1時間で横断して、エルフの集落にも通うことも可能になるだろう。

もちろん、彼らが望めばの話だが。

岸に戻ってきて――アキラと、クラーケン退治の話に花が咲く。
彼も、クラーケン退治に乗り気のようにだ。

「そりゃ、ドラゴンスレイヤーに参加してもらうのは、心強いけどなあ。でも、いいのか？」

「ははは、いいってことよ」

「危ないことは、うんざりなんじゃ……？」

「あの皇帝の命令で死地に向かうのと、自分の趣味でやるのは全く違うからな」

「自分で冒険に出るのはいいが、会社の命令でアマゾンのジャングルに突っ込まされるのは勘弁ってことか？」

「あはは、そゆこと」

彼が参加してくれるなら、マジで心強い。なにせ実戦の経験が違
うからな。

「俺もやるぜ！」「うちもにゃー！」

「ニヤメナは、白い脚でパニックになったのに……」

「そうだにゃー」

「ううー！だからやるんだよ、旦那！ 汚名挽回だ！」

「汚名を挽回してどうするにゃ？ それを言うなら、汚名返上にや
？」

「うるせえ！」

ミヤレーのツツコミに、ニヤメナが激怒して、俺の周りをぐるぐ
ると回り始めた。

「こらこら、喧嘩するんじゃない」

獣人たちを鎮めてアキラと話していると、新しくできた道を1台の馬車がやって来た。

赤い馬車で、金色の細工が施されている、かなり豪華な馬車だ。アストランティアの子爵の馬車より豪華ってことは、さらに上の位階の貴族だ。

「ケンイチ、貴族か？」

「らしいな。なぜ、こんな所に……？」

「革命のお仲間にお誘いが来たんじゃない？」

「こんな海の物とも山の物ともつかない、できたての貴族にか？」
まあ、冗談はそのぐらいにして、相手が貴族となると出迎えないわけにはいかない。

外にいたユリウスと一緒に、馬車の所に行く。

馬車から出てきたのは、黒い服を着たロマンスグレーのナイスガイ。立派な口髭を蓄えて、背も高い。

見るからに位階が高い貴族に見えるし、おそらくは王都貴族ではないのだろうか？

それがなぜ、こんな場所に——と思っていると、一緒に降りてきた見覚えのある女性。

黒いロングワンピースを着ていて、手を突っ込みたくなる胸の谷間と、スリットから覗く細く長い脚。

茶色の巻き毛が腰まで伸びている——王都の魔導師、メリッサだ。彼女と一緒に来たということは、この貴族は彼女の実家、ナスタチウム侯爵か。

ユリウスに確認する。

「ユリウス、彼はナスタチウム侯爵か？」

「ケンイチ様、そのとおりでございます」

やっぱりそうか――しかし、なぜ？　と思っていたらもう1人、暗い色のローブを被った老婆が降りてきた。

ありゃアストランティアの道具屋の、スノーフレイク婆さんだが、とりあえず貴族の仕事しよう。

「ナスタチウム侯爵。こんな辺鄙な所へ、よくぞいらっしゃいました」

「本当に辺鄙ね。まだ屋敷もないじゃない」

メリッサが、ぐると辺りを見渡して、そう言う。

「そうなんだよ。とりあえず、ここに住む住民たちの住居の建築を優先しているからな」

「あんたは！　散々世話してやったのに、貴族になったって挨拶にも来ないで！」

婆さんが怒るのだが、世話してもらったっけ？

ダリアの爺さんには世話になったがなあ……。

「忙しくてな。成り上がったばかりの素人貴族なので、やることがいっぱいなんだよ」

「ふん！」

「それで、婆さんはなんの用で来た――」

そう俺も言おうとして思い出した。このナスタチウム侯爵は、この婆さんが若いときに連れ去られた息子なのだ。

「ああ、解った！　婆さんと侯爵と一緒に来たってことは、ナスタチウム侯爵家と仲直りできたってことか？」

「まったく、余計なことをしてくれたね！　墓の中まで持っていくつもりだったのに！」

「ちよっと、お婆ちゃん！」

「この度は、辺境伯にはご尽力いただき、誠にありがとうございました」

侯爵が頭を下げてくる。

「いやあ——私は、婆さんから聞いた話を、そのままメリッサに話したけなので……」

「まさかあんたが、王都まで行って孫に会うとは思わなかったよ！」
「俺だって、そうだよ……まさか、こんなことになるなんて」

立ち話もなんなので、家の前までやって来ると、アイテムBOXからテーブルを出した。

「申し訳ございませんが、屋敷がまだできていけませんので、人をもてなすのも外になっているのです」

「これが、噂のアイテムBOXですか……なにやら、他では絶対に手に入らないものも入っているという……」

「ははは、まあその通りです」

「メリッサから聞いたけど、あんた真珠を持っているんだって？」

「ああ、持っているけど、真珠は売れないぞ？　一応、王族にだけ卸すってことで、話がついているんだから」

「なんだ、そういうことかい」

「その代わり、マロウ商会の王都進出に、便宜を図ってもらっているからな」

「上手くやったねえ。あんたが、こんなにやり手だとは思わなかったよ」

婆さんはふてくされているが、真珠は売れないな。

「だが、婆さんが死ぬ前に、親子水入らずができてよかったじゃないか」

「余計なお世話だよ！」

「いいのよケンイチ。お婆ちゃんは、とても喜んで泣いていたんだ

から」

「メリッサ！ 余計なことを言うんじゃないよ！」

そこに、リリスがやって来た。騒々しいので、様子を見にきたのだろう。

「誰かと思えば、メリッサとナスタチウム侯爵ではないか。息災かえ？」

「お、王女殿下！？」

メリッサと侯爵が、椅子から立ち上がり平伏しようとして止められた。

「ああ、よいよい！ 妾は、すでに王族ではないゆえ」

「ええ？ 王女殿下、それはいったい？」

メリッサの疑問ももつともだし、この件に関しては、箝口令が敷かれているようだ。

それでも、イベリスにいた貴族たちにはリリスの紹介をしてしまったし、徐々に噂も広まっていくものと思われる。

「妾は、ここにいるケンイチの、正室になったのじゃ」

「ええ？ 王女殿下が、辺境伯の正室とは……」

まあ、普通なら正統直系の王族が辺境伯の正室になるなんて、考えられない話のようだからな。

話していないで、なにか食べ物を出そう。

飲み物も淹れている時間がないので、アイテムBOXからティーセットを出すと、シャングリ・ラで買った、ミルクティーを入れる。

オヤツもいるだろう——なにがいいだろうか？ 少々迷い、3000円のいちごタルトを購入。

前も買った記憶があるが、あれはアキラに食わせたんだっけ？
マイレンを呼ぶ。

「お呼びでしょうか、ご主人様」

「このお菓子を切り分けて、皿で持ってきてくれ」

「承知いたしました」

マイレンの目が潤んで、喉を鳴らしている――多分、自分でも食べたいのだろう。

それは解るが、仕事が優先だ。

見えない場所に彼女が引っ込むと、すぐに小分けにしたタルトが、皿に載せられてやってきた。

目の前に置かれた、艶やかで真っ赤なお菓子に、侯爵たちが目を輝かせている。

「こ、これは見事な菓子ですな！」

「王宮から、料理人も引き抜きましたから、この領での料理も素晴らしいものになるはずです」

「ええ？　王宮の料理人ってもしかして、サンバクさん？」

「そうそう、彼が是非とも、ここで料理の研究をしたいと言ってな」

「ケンイチの側にいれば、このような見たこともない見事な菓子や、料理が食えるのじゃ。料理人として、避けては通れぬであろう」

リリスが、タルトを口に放り込み、ニコニコしている。

「ほう！　これはなんと甘くて美味しい！」

「こりゃ、たまげたよ！　こんな美味しい菓子が、この世にあるなんて！」

侯爵と婆さんが、タルトを食べて感激しているが、メリッサは俺と旅行をして、この手は経験済みだ。

「美味そうなものを食べておるのう……妾にはないのかえ？」

そう言って現れたのは、扇子を開いたアマランサス。

タルトには驚いていなかったメリッサであったが、アマランサスを見て仰天した。

「ええ?! 王妃様!?!」

「ええ?! アマランサス王妃?!」

当然、侯爵もアマランサスを知っていたようだ。

「久しぶりじゃのう、ナスタチウム侯爵」

「な、なぜ、このような場所に王妃様が……」

「このような場所とは、酷いのう……」

「も、申し訳ございません!」

「よいよい、妾はすでに王族ではなく、聖騎士様の奴隷じゃからの」

「ケンイチ! あなた、王妃様を手籠めにして!」

「人聞きの悪いことを言うなよ。正式に国王陛下と離縁してから、俺のところに来たんだぞ?」

アマランサスに、俺の分のタルトをやる。

「それがなんで、王妃様が奴隷になるのよ!」

「知らんよ。アマランサスが、魔道具で自らを奴隷化してしまったんだ。隷属を解こうとしても、彼女が許可してくれない」

「そのとおりじゃ。妾は残りの人生を聖騎士様の奴隷として生きることに決めたのじゃ」

「なぜ、そのような……」

「これは、妾の心のホゾゆえ、人には話せぬの」

その話を聞いているのか、いないのか、リリースが声を上げた。

「ケンイチ、この菓子をもうちと、たもれ」

「はいはい」

シャングリ・ラから、もう1ホール買って、リリースの前に置く。切り分けるのが面倒なので、そのまま食べてもらう。

「もう、ここで切り分けよう。おかわりが欲しいひと」

「はい！」「あたしにもおくれよ」

メリッサと婆さんも手を挙げた。

やはり女性だな。甘いものには目がないようだ。

メリッサは俺の話を信じていないようだが、事実なのだから、しようがない。

155話 猫耳

サクラにナスタチウム侯爵がやって来た。

ナスタチウム侯爵家は、王都でいろいろとあった大魔導師メリツサの実家だ。

それだけではない――アストランティアで世話になった、道具屋の婆さんの息子と孫だ。

この婆さんは若い頃、王都の学校へ通っていたそうなのだが、そこで貴族と恋に落ちた。

そこでハッピーエンドになればよかったのだが、子供が生まれると身分の違いが大きな問題となり、離縁を迫られる。

最終的には手切れ金を渡されたあげく、赤ん坊を取り上げられてしまった。

酷い話だが、ありそうな話でもある。

「それじゃ、王都に戻ったメリツサは、当時の関係者を尋ね歩いたのか？」

「ええ、父を祖母から取り上げた当時のナスタチウム侯爵家の関係者は、ほとんどが鬼籍に入ってしまったので、皆が話してくれたわ」

「婆さん、学校では有名人だったらしいし」

「ほほほ、まあねえ」

貴族の目に止まるなんて、相当な美人だったろうし、ラブロマンスの果てに子供までできたとなれば、皆も覚えているに違いない。

今の婆さんを見ると少々信じられんが、目の前にいる孫のメリツサが、婆さんの若い頃に似ていると言われれば、納得もできる。

「なんだい、その目は？ なにか失礼なことを考えているだろう？」

「そんなことはないが、メリッサを見て、婆さんの言っていることが本だったんだなあ……と」

息子のナスタチウム侯爵もナイスガイだしな。若い頃はさぞかしイケメンで、モテたに違いない。

王家もそうだが、美形の親戚は美形揃いで、まったく羨ましい限りだ。

「逆に言えば——メリッサを見るまでは、信じていなかったということだろ？」

「まあねえ……ハッキリ言って、年寄りの戯言かと……」

「まったく年寄りを大事にしないやつは、地獄に落ちるよ！ 散々、世話をしてやったのに」

「そうそう、婆さん。俺が買った魔道具の作者に会ったんだが、金貨5枚はポッタクリだと言っていたぞ？」

「うっ！ ……安く仕入れたものを、高く売るのは商売の基本だろ？」

横を向いてふてくされている婆さんだが——まあ、そのとおりだ。ぼったくられた俺が悪いが、あの魔道具はそれだけの働きをしてくれたから、文句はない。

「だいたい、婆さんと侯爵家の話は、アマランサスも知っていたし」「そうなのでございますか？」

その話に、メリッサも驚いたようだ。

「うむ、先代からよく聞かされておったからの」

「先代って、あいつは死んだんだろ？」

婆さんが、ボソッとつぶやいた。

「婆さん、先代の王妃とも知り合いだったのか？」

「まあ、お互い知ってはいたけど、さすがに相手が王族じゃねえ」

婆さんの話っぷりからすると、先代王妃は相当性格が悪かったらしい。

「今の王妃様は、先代のアレを引き継いでいなくてよかったねえ」

「おい、婆さん。命知らずだな」

アマランサスも苦笑いしているので、咎めるつもりはないようだ。

「ほほほ、なにをいまさら。この歳ならもう怖いものなんてないよ。もう会えることもないと思っていた子供にも会えたしね」

「母上、そのようなことは、おっしゃらないでください。ナスタチウム侯爵家がやったことは、決して許されることではありません。これからは家族で――」

侯爵が椅子から立ち上がると、婆さんの傍にやって来た。

「よしておくれよ。あたしゃ母親らしいことなんてなにもしてないんだ。あんたに、お乳だってやったのは、ほんの数ヶ月さ」

「それでも、私の母上なのです」

「お婆ちゃん！ それは、さんざん話し合ったじゃない」
メリッサも婆さんに寄り添う。

「ううう……」

婆さんが、侯爵とメリッサに抱きかかえられて涙を流し始めた。彼女も、自分の息子を忘れることなど、いつときもなかっただろう。

「それで婆さん、王都に行くのかい？」

「あたしゃ、アストランティアに残るよ。自分の店があるし、あれが生きがいなんだよ」

年寄りってのは、生活環境が変化するのを極端に嫌がるからな。環境の変化がストレスになるんだろう。

「今更、貴族の暮らしをするのも大変そうだしなあ」

「その通りだよ」

「それじゃ私が一緒にいてあげるから！」

確かに年寄りの一人暮らしは、中々大変だろう。

今は元気かもしれないが、徐々に体は動かなくなってくるしな。

この世界には、年金もないし公的な介護制度もない。

「うん、それがいいよ婆さん。死ぬまで面倒みてもらったほうがいい」

「あたしが100まで生きたら、孫まで婆さんになっちまうじゃないか！」

「まあ――100歳と60歳とかか？　ありそうで困るが、身内が近くにいたほうがいいだろうさ」

「余計なお世話だよ！」

「ダメメ！　もう決めたから！」

婆さんが強情だとすれば、その孫も強情なのは、想像に難しくない。

「侯爵はよろしいので？」

「うーん……」

侯爵としては、母親も大事だが娘が手元から離れるのは少々寂しいのだろう。

「侯爵家の世継ぎは？」

「それは、メリッサの下に弟が2人いますので、心配いりません」

「なんだいそれは！　それは聞いていないよ！　なんで連れてきてくれないのさ」

婆さんが騒ぎ出した。可愛い男の子の孫を見たかったのだろう。

「孫が見たかったら、屋敷へどうぞ。母上」
侯爵の目がキラリと光る。

「その手には乗らないよ」
中々、婆さんも強情だ。

そのあと、侯爵たちは、アストランティアに帰ることになった。

「本当なら、サクラに泊まっていただいて、おもてなししたいところなのですが、なにぶんこのありさまでして……」

「新しい領の立ち上げなど、さぞかし大変でしょう。我が侯爵家で、なにかお手伝いできることがありましたら」

「いえ、そんなんでもない」

「なにをおっしゃいます！ 貴殿はナスタチウム侯爵家の恩人ですぞ」

「私は、婆さんの話をメリッサにただけなので……」

しばらく押し問答をしたあと、侯爵たちが馬車に乗り込んだが――

婆さんが1人で走ってきた。

「婆さん、無理して走らんでも――危ないぞ」

「余計なお世話だよ！」

そう言った婆さんだが、俺の手を掴んだ。

「ありがとうよ！ この歳になって、別れた息子に会えるなんて夢にも思っていなかった」

婆さんが俺の手を握りしめて、また涙を流す。

その手は温かく――元世界に置いてきてしまった、俺の母親を思い出させた。

「まあ、良かったじゃないか」

「この恩は、かならず返させてもらうよ」

「そんな、気にするなって」

婆さんは、再び走って馬車に乗り込んだ。

元気だねえ。あれならマジで100まで生きるかもしれん。

「これで、ケンイチの手駒になる大魔導師が1人増えたの」

俺がテーブルに戻ると、リリスがそんなことを言う。

彼女1人で、ホールのタルトを半分以上食べてしまっていた。

「そんな言い方はよせよ、リリス。俺に下心はないぞ？」

「リリスの言うとおりじゃな。使える手駒は多いほうがいい」

アマランサスが扇子をパタパタして、考えごとをしている。

「アマランサスまで——と言いたいところだが、政まつをする人間なら、
そういうふうを考えるほうが普通なのか」

「まったくもって悲しい性じゃが、そうしないと水は眠っても敵は
眠らぬ世界では、生きてゆけぬからの」

「なにはともあれ、婆さん親子が仲直りできてよかった」

客が帰ったので、ユリウスを戻してマイレンを呼ぶ。

「お呼びでしょうか、ご主人さま」

俺は、シャングリ・ラから、タルトを購入して、彼女の前に差し
出した。

真っ赤ないちごのタルトが、目の前に現れる。

「ほら食べたかったんだろう？ 目が輝いてたからな、ははは」

「も、申し訳ございません！ メイドとして、あるまじき失態です」

「まあ気にするな。女なら、甘いものには目がないだろうからな」

恐縮するマイレンに、タルトを渡す。

いつも頑張ってもらっているからな、このぐらいはいいだろう。
わらわらとメイドたちが集まってきて、キャッキャウフフして、
タルトを自分たちの宿舎に持っていった。

仕事の休憩時間に、交代で食べるらしい。

「随分とメイドたちに、甘いとう」

「リリスも言ってたじゃないか。メイドの働きが、領を左右するこ
ともあると」

「そうじゃが——メイドたちは、領主の目をちよろまかし、陰で贅
沢するのが醍醐味だというのに、面と向かって贅沢を許したのであ
れば、あやつらもやりにくからうて」

「締めるところは、リリスやアマランサスに任せるし」

「なるほどのう——妾たちを悪者にしたあと、そなたがメイドたち
を甘やかせて、奴らを操る魂胆かの？」

「多少、悪いほうが領主っぽいだろう？」

「やむを得ん——ところで……」

リリスが、ひそひそ話をする。

「なんだい？ なにかおねだりかい？」

「違う！ 母が、そなたに黙ってメイドを入れたそうじゃの」

「ああ、元貴族で、フォゲットミーノットとかいう」

「そなた、それでいいのかえ？」

「なにか問題でも？」

「王族の暗殺未遂に関わった一族を、領内に入れることじゃ」
リリスの顔が厳しくなったので、なんとなく、その意味は察した。

「暗殺されそうになったアマランサスがいいって言っているし、い
いじゃないか」

「ふう……呆れたのう……」

リリスはひそひそ話から、身体を起こすと、普通に座り直した。

「アマランサスやリリスの親戚じゃないか。それにアマランサスには奴隷契約もあるし、俺に不利になることをするはずがない」

「あれもこれもと、猫の子のように拾っておったら、領内が女だらけになるぞえ？」

「美人が集まれば、それを目当てに、男どもも集まってこないかね？」

「そんなわけがあるまい！」

「冗談だよ。貴族は捨てたみたいだし、メネシアはいい子そうじゃないか」

「そなたまさか……」

リリスの顔色が変わる。

「違う違う、そういう意味じゃなくて」

いくらなんでも、これ以上手を出すつもりはない。体が保たんし。聖騎士の力を使いまくって、やりまくる手もあるが——そんなことのために、聖騎士の力があるわけでもあるまい。

なにかきつと重要な目的が——たとえば、魔王を倒すとかな。

「リリス、魔王っているのか？」

「はあ？ 窓から槍じゃの！ なんじゃそれは？ 聞いたこともないぞえ？」

窓から槍ってのは、藪から棒の意味らしい。

「それじゃ悪魔は？」

「それは、そなたのことかえ？」

リリスは、俺がメイドに手を出すつもりじゃないかと疑って、機嫌が悪いようだ。

そこにアキラがやって来た。

「ケンイチ、客は帰ったか？」

「ああ、アキラもタルトを食うか？」

「お！ オヤツか、いいねえ」

リリスとアマランサスは食べたので、アネモネと獣人たちも呼ぶ。

「わーい！ 果物のお菓子だ！」

アネモネが真っ赤ないちごのタルトをかぶりつくように見ている。皆にタルトを切り分けて、一緒に食べるが、獣人たちは立ち食いだ。

「おおっ！ なんじゃこりゃ、うめー」 「甘くて美味くて甘くて美味しいにゃー」

「ウチのミャアと同じ感想だな、はは」

アキラの連れの獣人も、タルトを食べてそんな感想を言っていたな。

「美味しい！」

「よかった」

アネモネの頭をなでてやるが――これもちよっと子供っぽいかな？

「アネモネ、頭をなでるのも子供っぽいと思うんだが、どうしようか？」

「う？ ううー？」

彼女がタルトを食べながら、悩んでいる。

なでてほしいのだろうが、子供っぽいと言われると、嫌なのだろう。

それに大人なら頭をなでたりしないからな。

「貴族が、なんの用事だったんだ？」

タルトを食べているアキラに、婆さんと侯爵の関係を説明した。

「ああ——身分の違いってやつか。よくある話だな」

「そうなんだよなあ。元を正せば、皆が原人や猿だったのにな。それが貴族だなんだと——」

「ははは、そのとおりだな」

俺たちの話を聞いていたリリスが口を開いた。

「ケンイチ、猿とはなんなのじゃ？」

彼女のその言葉を聞いて、俺はハツとなり、アキラのほうをチラ見する。

彼も気がついたようだ。

リリスは、この世界でも先進的な考え方をしているのだが、進化論はマズい。

人間は神様が作ったものというのが、一般的に浸透しているからだ。

ここで、人間は猿のような原人から進化したと言っても、信じてもらえないだろう。

「あゝ、この国に初めて入植したときは原野で、人々もなにも持っておらず、猿みたいな生活をしてたって話だよ」

「うむ——この地でも、ケンイチのアイテムBOXがなければ、もっと原始的な生活を営まねばならぬだろうしの……」

上手く誤魔化した。実際、1人の奴隷によって、この地に国ができたって話だしな。

話題を変えなくては……。

「そういえば、アマランサス。カナンが帰ってこないが……」

「おそらく、アストランティアで、ドレスの製作に夢中になっておるのだろう」

「彼女は、そういう方面に才能があったのか……」

もしかして彼女が、この世界のファッションリーダーとして、服飾を根底から覆すかもしれない。

「どこに泊まっているんだ？」

「子爵の屋敷ではないかえ？」

「離縁した所に押しかけているのか？」

「なにか吹っ切れた様子もうかがえるし、もうそんなことはどうでもよいのであろう」

面白くて、自分が熱中できることを見つけたので、子爵やら子爵の新しい正室のことなど、どうでもよくなったのか。

「自分の好きなことに熱中できるってのは、いいことだよ」

「そうだなあ……」

「そうだアキラ。お前に渡すものがあつたな」

俺はシャングリ・ラからブラジャーを買う。

彼の相方、レイランさん用だ。彼女はあの大きな胸で難儀しているらしいからな。

シャングリ・ラで検索して、一番大きいIカップ用を買う。

色は、夜鳥のレイランにふさわしい黒。メーカーは無難な日本製だな。

購入ボタンを押すと、目の前のテーブルに黒いブラが落ちてくる。

「ほら、コレの話を以前していたろ？」

「おおっ！ こんなものまで、手に入るのか！」

「一番大きなもののハズだが、サイズが合わないと思うから、仕立て屋に見せて、サイズ直しをしてもらうか。似たようなものを作ってもらえばいい」

「なるほど！ こりゃいいな！ 多分、センスは喜ぶぜ！」

アキラが、ブラを自分の胸に当てて大喜びをしている。

「ウチはエックス会社のボンボンや、歳は33歳、グリーンピースがYの仕事やで〜」

そういう下ネタの絵描き歌があったのだ。

「オッサンネタは止めろって。ウチの地元は干しぶどうだった気がするが」

「はは、ケンイチも知っているのか。ローカルネタだと思ってたわ」
獣人たちが、黒いブラをじっと見ている。

「旦那こりゃなんだい？」

「女の胸を入れて、動かないようにする——下着だな」
「へえ〜！」 「にゃー」

「獣人たちは、あまり大きいのがいないし、筋肉で支えられているから、要らないかもしれないが……」

「ほう、女用の鎧と似たような作りじゃの」
アマランサスが、興味深そうに眺めている。

「ああ、なるほど——女用の鎧って胸を支える作りになっているのか」

「夜烏のレイラン様用かよ」 「確かににゃーあの胸は落ちそうだったにゃ」

獣人たちが、黒いブラを指先でつついている。

「そうなんだよ。走ると胸が揺れて痛いって言うし、センセも困ってたんだ。ケンイチ、ありがたくもらっておくぜ！」

「おう、もしかしてアストランティアで、胸の大きい女性用に流行るかもしれない」

かなり高いものになると思うから、平民には買えそうにないが、簡易タイプなら一般にも普及するかもしれない。

「アキラ、ディーゼル燃料ができあがってるぞ？　少し持っていくか？」

「そうだな」

「代わりにまた、マヨネーズの油をくれ」

「オッケー！」

彼に、ディーゼル燃料を渡して、また油をもらう。

ほぼ無限に出てくるマヨネーズは、油田と同じだ。

アキラは、渡した燃料をアイテムBOXに入れアストランティアに戻ったので、俺の仕事をする。

引き続きメイドたちには燃料の精製をさせるが、2台ある魔道具のうちの1台を俺が実験のためにつかう。

爆発物を精製するために、シャングリ・ラで購入した電子書籍を漁り、いい情報を得た。

危険な実験なので、村から遠く離れた場所に、コンテナハウスで実験室を作った。

アネモネのわがままも、今回は聞けない。
そのぐらい危険なのだ。

まずはシャングリ・ラから、希硫酸を買う。

なにに使うのか不明だが、シャングリ・ラにはこれが売っている。こいつを魔道具に通して水を抜けば、簡単に濃硫酸になる。

シャングリ・ラには、理科実験用のビーカーも売っているので、それに入れた。

次に購入するのは、キャンプなどで使う着火剤。

最初は、グリセリンを使おうと思っていたのだが、もっといいものがあると電子書籍から判明した。

こんな普通に売っているものを、濃硫酸と組み合わせ、ゴニョゴニョすると――なんとRDXとかヘキソゲン爆薬とか呼ばれる

ものができる。

有名なコンポジットC-4——プラスチック爆弾の主成分になるものだ。

ちよつとずつ合成を繰り返し、毒性もあるらしいので、完成したらずぐにアイテムBOXに収納する。

アイテムBOXの中なら劣化もしないし、どんなに動いても安全だ。

ただ抽出した白い結晶は、このままだと威力が低いので、圧縮を行う必要がある。

熱中しすぎて、気がつくあたりは夕焼けになっていて、慌ててサクラに戻った。

戻ると、すでに飯の準備はできていて、俺がいなくても、しっかりと回るシステムができあがっている。

自分で飯を作るのも楽しいが、人の作ったものも嬉しい。

疲れて帰ったときなど、飯の用意をするのは大変なのだが、黙って食事が出てくるのは大変ありがたい。

メイドたちの作る料理は美味しいな。

「にゃー」

飯を食っていると、ベルが狩りから戻ってきた。

なにかの小動物を咥えている。大型のネズミか、モグラか？

「よしよし」

獲物を受け取ると、黒い毛皮をなでてやり、ネコ缶をあげる。

久々に存分に狩りもできて、彼女も満足そうだ。

美味しい飯を堪能したあと——夜はツリーハウスの上で、裸のアマ

ランススと一緒にだ。

俺の上に彼女が寝転がっている。

「リリースが、貴族の子をメイドにしたのを、えらく心配しててな」
「それに関しては、聖騎士さまに事前に許可を求めず、誠に申し訳ございません」

「ああ、それはいいんだ。お前のことは信用しているし」

「信用もなにも、奴隷契約結んでいる妾に、聖騎士さまが不利になることをできるはずがなろう……」

「おれもそう言ったんだけどねえ」

「しょうがないにゃー」

「ぷっ！　なんだよそれ、はは」

突然のアマランススのニャー言葉に俺は噴き出した。

「聖騎士さまは、獣人が好きなのにゃー」

「はは、やめろって、別に特別好きなわけでもないから。ただ、毛皮の手ざわりは癖になるけど」

「にゃー」

にゃーにゃーいいながら、アマランススが俺の体をなで回す。

「あ、そうだ！」

俺はシャングリ・ラで、あるものを検索した。

「ほらアマランスス、これをつけれ」

俺が買ったのは、黒い猫耳のカチューシャ——1000円。

まあ、玩具みたいなもんだな。

「にゃ？」

「よし、ついでに尻尾もつけてみるか」

「ひにゃー！」

こうして夜が更けていく。

これじゃ、ただのオッサンだが——だってオッサンなので仕方ない。

—— — — — — ◆ ◆ — — — — —

——朝起きて、アマランサスと一緒に、皆の所に戻ったのだが——。

彼女が猫耳をしたままだ。さすがに尻尾は外したが。

「アマランサス……」

「にゃ？」

だめだこりゃ。

俺たちが戻ると飯の準備ができていたが、アマランサスの猫耳を見て、アネモネがピョンピョン飛び跳ねている。

「私もー私もー」

猫耳が俺の仕業とバレている。そりゃバレるわな。

アネモネにも、シャングリ・ラから猫耳を買ってやる。

「わーい！ 耳が増えたあ！」

「ケンイチ、妾もじゃ！」

「ええ？ リリスもかい？」

リリスには白い耳を買ってやった。

「似合うかえ？」

「ああ、似合う似合う」

こうなったら、皆にやらせよう。

メイドたち全員に猫耳を買ってやり、装着させる。

俺は領主なので、拒否はさせない。

かくして猫耳メイド服がずらりと並んだ——実に壮観である。
領主になってよかった、報われた一瞬。思わず、涙ぐむ。

周りで働いている、労働者や獣人たちが、何かとこちらを見て
いる。

俺が感激していると、ミャレーとニャメナが起きてきた。

「旦那——おはよう……ぎゃあ！」 「ふぎゃー！ なんにゃー！」
皆の猫耳を見て、獣人たちが毛を逆立てている。
尻尾もいつもの倍の太さだ。

「ああ、耳は作り物だよ」

「ふう……驚かせないでくれよ。てつきり旦那が、怪しげな魔法で
も使ったのかと思ったぜ」

「にゃー」

獣人たちがホッとした表情をしている。

「そんなわけないだろ」

彼女たちは、俺をそういう目で見ているのか。

まあ解剖学の話とかしているからなあ。

怪しげなマッドサイエンティストに見えるか。

皆、猫耳のまま、朝食になった。

なんだこれ。

156話 コンポジションC-4

サクラに貴族が尋ねてきた。ナスタチウム侯爵——王都で一悶着あった大魔導師メリッサの実家である。

この貴族の当主が、アストランティアにいる道具屋の婆さんの息子なのだ。

赤ん坊のときに、手切れ金を渡されて離れ離れになってしまっていたが、それがやっと再会できたというわけだ。

よかったよかった——と、人の世話を焼いている場合ではない。俺は俺の仕事をしなくては。

当面の俺の仕事は、湖にいるクラーケンと呼ばれる化け物退治。

こいつがいると、湖をハマダ領の経済に組み込むのに支障がでる。それをなんとかしなくてはならない。

そのために、俺は兵器の製作に余念がない。

兵器といっても、俺が作るものは、基本的にはシャングリ・ラがないと作れないものばかり。

ここで便所を使って硝石を取る方法や硝石丘法などを教えてしまつたら、この世界に火薬の製造法が広まってしまう。

そうなれば、とんでもないことになるのは目に見えるので、あくまで俺が使う特殊魔法としての爆薬の製造だ。

ここらへんは、アキラとも話をしてみたが——彼の意見も俺と同じようなものだった。

「アキラは、黒色火薬とかは作らなかったのか？」

「あゝ、もう本当に切羽詰って願ったことはあったけど、作り方を知らなかったんだよ」

「俺の在庫を渡しておくか？ 多少なら作りおきもある」

「少しもらっておくかな？ センセになにかあったとき、魔法が使えないと困ることもあるし」

センセというのは、アキラ最愛の人——帝国の魔女こと夜烏のレイランさんだ。

アキラにタイマー式のパイプ爆弾を渡す。

俺がシャングリ・ラから買った単管パイプに黒色火薬を詰めたものだ。

「使い方は簡単。このタイマーをセットしてゼロになると起爆する」
「へえゝって、これキッチンタイマーじゃね？ それに、このパイプって単管だろ？」

「そうだよ。とりあえず作れるものを使って、さらに新しいものを生み出す」

彼にシャングリ・ラのことは話していない。

「いきなり爆弾とか作れないんだ？」

「作れない。普通に元世界のスーパーやら、ホームセンターで売っているものしか作れない」

「それでも便利な能力だよなあ。俺のマヨネーズ能力とは大違いだぜ」

アキラはそう言うが、まったくチートがゼロの状況じゃ、この世界じゃ大変だろう。

いや普通に生活するだけなら困らないのかも……とはいえ、マヨネーズが出てくるチートというのは酷い。

苦労した彼には悪いが、それを労うためにビールを出す。

「アキラ、ビールを飲むか？」

「いいねえ」

「今日は、ヨントリーモルツでいってみるか？」
彼の前に金色の缶を置く。

「おおっ！ サンキュー！ ——とはいえ、マヨネーズ能力でもなけりゃ、この世界でとづくに終わってたしなあ」

「そりゃ、俺だってそうだ。能力がなけりゃ、タダのオッサンだからな」

「俺なんて、ブラック勤めの底辺だったからな」
アキラが、缶ビールをグビっといった。

「俺だって、しがない自営だし」
「帝国ですったもんだあったが、ここに亡命してやっと落ち着けているよ」

「それはよかった」
「ケンイチは飲まないのか？」

「俺は飲まない人だからな。どうも体質的に合わなくてな」

「あゝそれは気の毒だが――酒なくて、なんの己が桜かな――人生の半分を損しているねえ」

「俺に言わせれば、アルコールで脳細胞を死滅させているほうが、どうかしていると思うが？」

「へへへ」

お互い大人なので、これ以上は突っ込まない。

彼も口は少々悪いが、苦労人だ。引くべきところは、わきまえており、俺と喧嘩したって一銭の得にもならないことは知っている。
アキラにビールを飲ませ、俺は微糖の缶コーヒーを飲むことにした。

どうも微糖に慣れてしまうと、普通の砂糖入りコーヒーが飲めなくなってしまった。

コーヒーを一口飲むと、テーブルに缶を置く。

「さっきの話に戻るが――ケンイチも火薬の製法を広めるつもりはないんだろ？」

「ないない。俺の家族を守るために、やむを得ず作って使っているだけだ」

実際に――レッサードラゴン、ワイバーン、クラーケンと強力な敵から、家族を救ってくれたからな。

「まあなあ――ダイナマイトを作ったノーベルさんも、戦争にダイナマイトが使われて、苦しんだみたいだし……」

「原爆を作った科学者の話もあったなあ」

「そんなのは、まっぴらごめんだぜ。この世界で平和に生きれりゃ、もうそれでいいんだ。帝国の裏側のドロドロを見ちまったからなあ……きたねえ政治のやり取りは、もうマジで勘弁」

「苦勞したんだな」

「おうよ！俺はなあ、酒が飲めて、女とやりゃそれでいいんだよ」

「まあ、そうだな――けど、ウチの女たちには手を出すなよ」

「へへへ、解ってる。なにより、センセにバレないように上手くやらんとなあ……」

アキラのグビグビが早いので、もう一本出してやる。

この世界には禁忌ともいえる爆薬だが、湖に住む化け物を退治するためにもどうしても必要だ。

ファンタジーの世界らしく魔法でどうにかということも考えたのだが……。

水中では魔法が展開できないらしい。

ゴーレム魔法を使った水の操作も水面だけで、その力は水中には及ばない。

彼は、火薬の製法を知らなかったので、作りたくても作れなかったようだ。

俺も知識として硝石丘法やらを知っているが、実際に試したことはない。

そんなことをしなくても、シャングリ・ラから手に入れられるもので火薬の製造が可能だからだ。

たとえば――切り株除去などに使う薬品。

こいつも黒色火薬の原料として使用できるし、実に多種多様なアプローチがある。

元世界ならこんな研究は、あつという間に警察や公安にマークされて、デキッコナイスだが、ここには面倒な法律などは一切ない。

それは裏返せば、全てが自己責任の世界。

シャングリ・ラで読んだ電子書籍には、黒色火薬は古くなると爆薬化するものもあり大変危険だと書いてあるが――。

俺にはアイテムBOXがある。

ここに入れておけば、危険な爆薬も猛毒も、安全に保管できる。

まったく異世界様様ってやつだ。

俺は持っている能力をフルに使って、爆雷の製造の研究を続けた。

――――◇◇――――

最初はバイオディーゼル燃料を作るときにでるグリセリンを使って、ニトログリセリンを作るつもりだったが、シャングリ・ラの電子書籍を漁っていて、いいものを見つけた。

それは、キャンプなどで使う着火材を原料に濃硫酸で処理した、トリメチレントリニトロアミン――RDXやヘキソーゲン爆薬と呼ばれている代物。

有名なコンポジションC-4――俗にいうプラスチック爆弾の原

料となるものである。

こいつを使って、より安価で簡単に作れるアンホ爆薬を起爆するつもりなのだが、こいつには毒性がある。

保管には、アイテムBOXを使い厳重に管理する必要がある。

試行錯誤の結果、トリメチレントリニトロアミンの合成には成功したが、このままでは威力が低いらしい。

威力をあげるためには、こいつを圧縮する必要があるという。

口で言うのは簡単だが、いったいどうすりゃいいのか。

ウランの圧縮には遠心分離器のようなものを使うとニュースで見したが、シャングリ・ラで売っているような商品で、そんな真似は不可能だろう。

これがだめなら、爆薬をニトログリセリンに路線変更をする必要がある。

——研究のあと、辺りが薄暗くなり皆で夕食。

屋敷が完成していないので、相変わらずの野外での食事。

これで慣れてしまったので、別に気にならないし、家族からも不満はまったく出ていない。

元世界のように雨が多いと困りものなのだが、この国は雨が少ない——というか、日本が降りすぎなんだよな。

テーブルの上にはLEDランプが置かれて、それを家族で囲む。

後ろには、メイドたちが交代で控えており、なにかあればすぐに対応してくれる。

まさに至れり尽くせり——プロの仕事だ。

そりゃ元々は王家のメイドなのだから、この世界でもトップレベルのメイド——ということになるだろう。

もう家で俺が料理をすることもなく、メイドたちが俺の味付けを覚えてくれて、寸分違わず同じ料理を出してくれる。

俺の手料理を食べられなくなって、アネモネは不満のようだが、

味については問題がないようだ。

俺や、遊びにやってきたアキラが食べても、十二分に日本の味を再現している。

プリムラは、なるべく帰ってくるようにしているようだが、仕事
が忙しくアストランティアに泊まることも多い。

一緒にアストランティアに行ってるカナンは、糸が切れた風のよ
うに、帰ってこない。

よほどドレス作りが楽しいのか。いや楽しいことをできるのが一
番いい。

プリムラの話では、カナンが作り出した新しい服やドレスは、マ
ロウ商会を通じて国内に売り出される予定だと言う。

「プリムラ、カナンが作った服を見たかい？」

「はい、とても素晴らしいできでした——」

プリムラが言葉を濁す。

「なにか問題があるのかい？」

「脚が出ている服が受け入れられるのかが、疑問です」

「あゝなるほどなあ」

この世界の女性は基本がロングワンピースで、脚を隠すってのが、
たしなみになっているからなあ。

でも、スカートが短くなるってことは、中身が見えてしまう可能
性もあがるってことで、そうなる——下着の需要が高まるのでは
ないだろうか？

アキラの相方、夜鳥のレイランさん用にブラジャーを渡したのを、
プリムラは知っている。

合わせて下着も革新的なオシャレとして、マロウ商会経由で広
がる可能性がある。

多分、高額なものになるだろうから、最初は貴族やら大店の商人

やらが、顧客になるだろうが。

マロウ商会といえば、もう一つニュースがある。

「プリムラ、伝書鳥の実験が上手くいったんだって？」

この世界に鳩はいないので、別の鳥を使っている。

「はい」

「たとえば、10羽放して、どのぐらい戻ってくる感じ？」

「5割ほどですか」

「それじゃ3羽放せば、ほぼ確実に連絡が伝わると」

「はい」

彼女の話では、王都まで500km弱を7〜8時間ほどで結ぶらしい。時速70kmほど出る計算だ。

ダリアから王都は森の中を通り、道もカーブしているのだが、空を飛ぶ鳥ならそんなことは関係ない。

一直線に王都まで一飛できるってわけだ。

「よく、そんな鳥を見つけたなあ」

「ケインイチの話を聞いてから、ずっと鳥を探し回っていましたが」

「伝書鳩の話をしたのは結構前だったと思ったけど、ずっと探していたのか」

「ええ、ケインイチの話が本当なら、他の商人たちより優位に立つことになりますから」

「そりゃそうだな」

今、そういう都市間の連絡は、獣人たちによる飛脚が使われている。

彼らの巡航速度は時速30kmほど、都市間を結ぶリレー方式の飛脚でも、ダリアから王都まで丸1日はかかる。

おまけに高額だ。

それが鳥1羽でひっくり返るのだから、これは大きな変革といえる。

確実性は、飛脚にアドバンテージがあるので、使い分ければいい。時間がかかっても確実を要するものには、飛脚を使うとかな。

俺が使うだけなら無線機を使えばいいのだが――俺がいなくなれば、使えなくなってしまふ。

俺はもう貴族であり、民を抱えた領主だ。

この世界の住民が使えるもので、役に立つものを考え出して供給しなければ、恒久的な領の繁栄に結びつかない。

俺が死んだあと、子供たちに継がせることができる領にしくはない。

――という具合に、皆が確実に結果を出しているのに、俺の爆雷は進捗状況がよろしくない。

「うーん……」

皆と飯を食いながら、ずっとそのことを考えていたのだが、変な声が思わず口から出てしまった。

食卓に並んでいるのは、ドラゴンのカレー。

ちなみに、管虫やクラーケンの肉はまったく人気がない。

リリースやアマランサスは平気なのだが、ほかの子たちが気味悪がって、手をつけないのだ。

「どうしたのじゃ？ 変な声を出して？」

真っ先に反応したのは、俺の隣に座っていたリリースだ。

「ちょっと、錬金術の研究が行き詰まっていますな」

「聖騎士様、なにが問題なのか話していただいては？」

アマランサスの言うとおりでだが、果たして彼女たちに話してヒントになるものが得られるだろうか？

「うーん、あるものをな——圧縮したいんだよ。ぎゅーっとな」

「圧縮……」

リリスとアマランサスが、顔を見合わせてる。

なにを言われているか、ちんぷんかんぷんなのかもしれない。

「「……」」

「できるよ」

皆の沈黙を破り、カレーを頬張りながら声をあげたのは——俺の正面に座っていたアネモネだ。

「アネモネ、そういう魔法があるのかい？」

「それ専用の魔法はないけど、ゴーレムの魔法でできると思う」

「本当かい？」

「今試してみる？」

「今？ コアは？ どんなのが必要だい？」

「小さくて狭い範囲なら、コアはいらないと思う」

彼女はそう言うと、カレーに入っていた芋をスプーンで掬いあげた。

「むー！」

アネモネの精神統一とともに、芋の周りに青い光が集まってくる
と、変化が表れた。

スプーンの上の芋が、2周りほど小さくなったのだ。

「おおっ！ こりゃ凄い！ これは使えそうだぞ！」

「えへへ」

彼女の頭をなでてやりたいが、テーブルを挟んでいるので、あと
でしてあげよう。

道筋が見えたと喜ぶ俺だが、爆薬作りをアネモネに手伝わせてい

いものなのだろうか？

非常に悩むが――ここは異世界だし、家族を守るためには少々危ない橋を渡る必要がある。

そのためには、彼女たちの協力が不可欠だ。

俺1人では、できることに限界があるからな。

この前の測量旅行でも、それを痛感したはずだ。

――――◇◇――――

――カレーを食べた次の日。

俺のコンテナハウスに作った実験室に、アネモネを入れた。

部屋の中にはテーブルと、液体を分ける魔導具。

テーブルの上には、各種試験管やらビーカーが並ぶ。その光景にアネモネが目を輝かせている。

元々、こういうものが好きなのかもしれない。

彼女の母親も高名な魔導師だったらしいし、この世界でいう錬金術に興味を持ってもおかしくない。

誰も入れていない部屋に、自分だけ招かれてアネモネは嬉しそうだ。

「これは、なにを作っているの？」

「魔力を使わなくても爆発する薬だよ」
エクスプロージョン

「爆裂魔法とかじゃなくて？」

「そう、今までは、アネモネの魔法を使って起爆させていたけど、これを使えば魔力を持っていない人でも、爆裂魔法と同じ力を持つことができる」
エクスプロージョン

「ふわああ」

アネモネの目が輝く。

マッドサイエンティスト的な才能もあるのかもしれない。

「広まったらとんでもないことになるから、絶対に人に言っちゃダメだよ？」

「ケンイチと私の秘密？」

「そう、2人の秘密だ」

「リスも知らない？」

「知らない。彼女はこれを魔法だと思っているからな」

それを聞いたアネモネはニコニコ顔だ。

俺と2人で秘密を共有できて嬉しいのだろう。

それに秘密を教えたってことは、信頼をおいている証ってことになるしな。

それはさておき——肝心の実験だ。

これが上手くいかなければ、路線変更をする必要に迫られる。

俺は、アイテムBOXから、合成した白い結晶を取り出した。

「これだ。こいつを圧縮してもらいたい」

カレーの芋も圧縮できたのだから、大丈夫だと思うが……はたして。

「わかった——むー！」

彼女の魔法とともに、青い光が白い結晶を圧縮していく。

数十秒で結晶は、直径1cmほどの白い玉となった。

「おおっ！ やった！」

「上手くできた？」

「上等だよ！」

アネモネの頭をなでると、彼女が手を差し出してくる。

「ぎゅっとして」

彼女を抱き寄せて、頬摺りをする。

「もう、アネモネは甘えたさんだなあ」

「甘えてないもん。上手くできたから、ご褒美だもん」

「そうだよなあ」

意地を張っていても、まだまだ子供で甘えたい盛りだ。

けど、そろそろ反抗期に入りそうなんだがなあ。

本当の親じゃないからなあ——そういうのはないのだろうか？
うーん。

「なにか、私の悪口考えてる？」

「そんなことはないよ。アネモネはいい子だなあ——と思ってさ」

「嘘！」

「嘘じゃありません。俺のやることを手伝ってくれるし、みんな
だって助けてくれただろ？」

「……」

アネモネを抱き寄せるが、難しい年頃だ。

子供なんていなかったのに、いきなり子持ちになったので、正直
どうしていいか解らん。

一番近い立場なのは、マロウさんかなあ。でもプリムラは反抗期
とか、なさそうだった感じだし……。

今度聞いてみよう。

なにはともあれ、爆薬の結晶の圧縮ができたので、早速起爆実験
だ。

圧縮の方法が見つからなくて、先に起爆装置などを作っていたの
で、こちらは準備万端。

いつでも、どんとこいだ。

集落から遠く離れた湖の砂浜に、爆薬を埋めて起爆装置を取り付
ける。

とりあえず長いコードを引っ張って有線起爆だ。

シャングリ・ラで買った10m——1100円の家庭用の延長コードを流用して、5本連結する。

こいつにバッテリーをつないで起爆するわけだ。

起爆は電気雷管だが、こいつはシャングリ・ラには売ってないので、自作した。

黒色火薬をアネモネの魔法で目一杯乾燥圧縮したものに、白金の電極を刺してある。

こいつで爆轟を起こしRDXを起爆するわけだ。

異世界でこんなものを作るなんて思ってもみなかったが、なせばなる。

シャングリ・ラには、その手の電子書籍も揃っているしな。

準備をしていると、アキラがプ○ドで様子を見に来た。彼なら見せても問題ないだろう。

「オッス！　これが新しい爆薬か？」

「オッスオッス！　これは、トリメチレントリニトロアミンだ」

「鳥？　なんだ？」

「FPSとかに出てくるだろ？　C-4ってやつだ」

「C-4って——プラスチック爆弾ってやつか？」

「その元な。化学実験で作った」

「ケンイチ——恐ろしい子！」

彼もゲームやアニメネタは多少は知っている。最近の新しいものを知らないのはお互いさまだ。

「フヒヒサーセン！」

冗談を言いつつ結晶を砂浜に埋めて、起爆装置を接続する。

ヘキソゲン爆薬は、ショックを与えても爆発しないし、火を点けたりしても普通に燃えるだけ。

アキラのアイテムBOXに車を収納させて、皆で地面に伏せる。
目の前には、ポリカーボネートの盾を置く。

「この透明なプラ盾も、魔法で作ったのか？ 機動隊とかが持つて
るやつだろ？」

「そう、こいつは重宝してるぜ？ 持っていくか？」

「後で2枚ほどくれ」

「はいよ」

準備完了。

「ほんじゃいくぞ」

「おう」

オッサン2人と、少女が伏せている姿は、傍からみたらシニール
に違いない。

「起爆！」

俺はスイッチを入れた。

50m先の砂浜が小爆発を起こし、砂煙を上げて大音響が轟く。

「おおっ！ すげえ！ エクスプロージョン 爆裂魔法とは、やっぱり違うな。魔法は

ぼわ〜ん！ って感じだけど、これは、ボヒューン！ って感じ」

アキラの感想が、テキトーだけど的確だ。

「上手くいったーよし！ 次だな」

こいつを使ってアンホ爆薬を起爆できないと、他の方法を考える
しかなくなる。

いつも使っている圧力鍋爆弾に、今回作った結晶を埋め込んで、
起爆装置をセットする。

雷管が爆発し、次にRDXが爆発して、最後にアンホ爆薬が爆発
する三段スライド爆発だ。

アイテムBOXからユ○ボを取り出して、鍋を砂浜に埋めた。

「これが本番か？」

アキラが、ユ○ボの運転席に掴まり、一緒にぐるぐると回っている。

「そうだな、これで上手くいけば、魔法を使わなくても起爆できるようになる」

「地雷にも使えるな」

「使いたくはないがな」

ユ○ボを収納したのだが、俺とアキラの会話をアネモネが聞いていた。

「……私は、いらなくなっちゃう？」

一緒にいるアネモネが、悲しそうな顔をする。

「そんなことないさ。戦闘中の即応性なら、魔法での起爆のほうがより実戦的だ。これから頼むよ」

アネモネの頭をなでる。

「うん」

準備完了したので、こんどはポリカボネートの盾を2枚にして、地面に伏せる。

「おお！　なんかどきどきわくわくだな」

「爆発は男のロマンだからな」

「ああ、ケーキに入ってるやつやろ！　そりゃ、マロンや！」

アキラの1人ボケ1人ツッコミが炸裂する。

「そんなことよりいいか」

「いいぜ」

「大丈夫」

アネモネが耳を塞ぐ。

「よし、起爆！」

スイッチを入れると砂浜が盛り上がり、黒い湿った砂が、爆音とともに辺り一面に飛び散る。

降ってきた砂や小石が、バラバラとポリカーボネートの盾に当たって音を出す。

爆発で開いた大穴に、湖の水が勢いよく流れ込み、コーヒー牛乳色に染まった。

「おおっ！ やったな。これで実戦に投入できるのか？」

「爆弾としては使えるのは解ったが、これを水中用の爆雷に改造して――兵器として使うために、色々と前もって調べることもある」

「なにを調べるんだ？」

「そうだな――沈降速度を測る実験が必要だが、それはドラム缶に砂を入れて同じ重さのものを作って沈めれば解る――かな？」

「おっしや、さっそくそれをやろうぜ」

「うーん、そうだな」

アイテムBOXから、爆雷に使用する予定の小型のドラム缶を出して、砂を詰める。

こいつを湖に沈めればいい。

俺たちは、湖に先日買った漁船を浮かべて爆雷の沈降実験をすることにした。

156話 コンポジションC-4 (後書き)

月刊Gファンタジーに連載中の アラフォー男の異世界通販生活
コミックス 第1巻が10月26日に発売になります

<https://syosetu.com/syuppan/view/bookid/3671/>

157話 カニ

シャングリ・ラで売っている商品から、ヘキソーゲン爆薬を製造して、起爆の実験に成功。

続いて、それを使ってアンホ爆薬の起爆にも成功した。

これで、エクスプロージョン爆裂魔法なしでアンホ爆薬を起爆できることになり、爆雷の実戦投入へと一歩近づいた。

完成した爆薬をドラム缶に詰めれば爆雷になるのだが――実戦投入するには、まだ調べることがある。

爆雷を水中に入れたときに、沈降速度がどのぐらいなのか調べる必要があるのだ。

これをしてないと、敵がいる目的の深度で爆雷を起爆させることができない。

アイテムBOXから、この前買ったFRPの漁船を出して湖に浮かべた。

膝まで浸かりながら、湖に脚立を出して船に乗り込むが、こいつを作戦に投入するなら、栈橋を作る必要があるな。

「私も乗る!」

「アネモネ、すぐに戻ってくるぞ?」

「いいの!」

さて、湖の水深を測ったり、水中の敵を見つけるためには――魚群探知機だな。

シャングリ・ラで検索をかけると、色々と売っている。

金はあるし、画面のみやささから、8インチの画面搭載モデルを購入してみる。

値段は13万円と結構高額だが、この先も使うのか？　――と言われると少々微妙。

まあ使わなかったら、下取りに出してもいいだろう。

「ポチッとな」

大きな液晶画面の魚群探知機が落ちてきたので、早速スイッチを入れる。

「どうやらGPS搭載モデルらしいが、当然異世界に人工衛星などないので、マップは出ない。」

水中にセンサーを入れると、原色に彩られた水中が表示された。

「お？　魚探か？」

アキラがカラフルな液晶画面を覗き込む。

「ふふふ――そう！　こいつでクラークンを探す」

「おおっ！　こりゃもう、やるっきゃないぜ」

「アキラ、ちょっとゆっくりと進んでくれ。水深10m地点を探す」

「はいよ」

水深10mの場所へ来たら、アイテムBOXからドラム缶を、直接湖の上へ出すわけだ。

これなら重い爆雷を運ぶ必要はない。

画面に水深も表示されてるので、場所の選定は簡単だ。

もちろん、魚影も白くしっかりと表示されている。

水深10m地点に到着したので、アキラには水中メガネでドラム缶の着底を見してもらう。

「アキラ、底は見えるか？」

「まあ、暗いけど水は綺麗だから大丈夫だ。おっ！　ケンイチ！　カニがいるぞ！」

「ええ？　淡水だから、モクズガニか？」

「どうもそれっぽいな」

「上海蟹ってやつと一緒なんだろう？ それじゃ、これが終わったら、カニ釣りでもするか？」

「いいねえ！」

「カニってなあに？」

俺たちの会話を聞いたアネモネが首を傾げている。

そうか、カニを見たことがないのか。川にもいると思うんだがなあ……。

「アキラ、川にカニっていないのか？」

「さあ？ 俺は見たことがなかったなあ」

「それじゃ、ここの固有種なのか？」

「そうなら、カニも特産になるかもな」

「そりゃいいな」

「私にも見せて」

「ほい」

アキラから水中メガネを渡されたアネモネが、湖底を覗く。

「地面に虫みたいのがいるけど、あれ？」

地面っていうか、湖底な。

「まあ、虫って言われればそうかなあ。同じ汎甲殻類だし」

俺の言葉に、アネモネが覗くのを止めた。

「あれを食べるの？」

「食えるかどうか、食ってみないと。毒のある蟹っていたっけ？」

「スベスベマンジュウガニとか？」

アキラから聞いたことがある固有名詞を含む返答が返ってきた。

「ああ、それは聞いたことがあるな。なにやら太った蟹だろう？」

「けど下にいるのは、見た分にはモクズガニだぞ？」
食える蟹なら産業になるな。なんだ、色々といいものがあるじゃないか。

まあ、それよりも――爆雷の実験だ。

ここに模擬爆雷を落として、着底するまでの時間を測る。そうすれば、爆雷の沈降速度が解るって寸法だ。

俺はシャングリ・ラから買ったストップウォッチを構えた。

「アキラいいか？」

「おお、いつでも来い！」

「よし、爆雷投下！」

アイテムBOXから、爆雷を出して湖へ落とすと同時に、ストップウォッチを押す。

「おお、ドラム缶が潜っていくぞ！　かなり重いはずだが、すごいゆっくりだな……………もうちょい、今！」

「ほい！」

ストップウォッチを止めると、タイムは5秒。

水圧でドラム缶が潰れるかと思ったのだが、中身が詰まっているので、大丈夫のようだ。

そもそも、中身に空気が入っていたら沈まないしな。

「うーん――ということとは、毎秒2 m沈降するのか」

「本物の爆雷もこんなに遅いのか？　潜水艦に逃げられちゃう」

「本物は、涙滴型になっていて、沈降速度はもっと速いらしい」

「へえーそりゃ、そうだよな」

実験は上手くいってるな。

これで実戦で使うのと同じ、ドラム缶爆雷を作って起爆に成功す

れば、すべての準備が整うわけだ。

さて、盛り上がってきたぜ。

化け物退治でワクワクしちゃうイカンと思うんだがなあ。

家族を危険に巻き込むわけだし……。

実験が終わったので、早速カニ釣りをする。

釣り竿をアイテムBOXから出したのだが……アキラから、物言いがついた。

「釣るより、籠を仕掛けたほうがよくねえか？」

「ああ、ベーリング海のカニ漁みたいな？」

「そうそう、そのほうが大量に取れそうだぞ？」

「そうだな」

アキラの助言に従い、シャングリ・ラで魚用の籠を探す。

探すと色々と売っているようだが、軒並み評価が低い。

どうやら彼の国製らしく、ものが良くないようで、すぐ壊れるらしい。

とりあえずやってみるだけなので、使い捨てでいいだろう。

1500円で購入。

「ポチッとな」

船の上に、針金の枠に緑色の網が張られた籠が落ちてきた。

穴が8箇所に開いており、ここから魚やカニが入る仕様らしい。

「へえーガキの頃に、もっと簡単なの作って魚獲りしたぜ」

アキラが籠をぐるぐると回している。

「俺は竹竿の先につけた網だったな。石やらブロックにつけて、反対側から棒で突く」

「魚が逃げた先に網があるって寸法か」

「そうだな。大人は、鉄筋と金属ネットで籠を作ってたが」

「それって違法じゃ……」

「今はダメだろうな」

早速、試してみることにした。

「餌はなんにする？」

籠を見ているアキラからの質問に答える。

「昔はイカのゲソとか使ったけど、ちょうどアイテムBOXの中にクラークンの脚を切ったものがあるから、それでいいんじゃない？」

「タコとかイカとか定番だな。ザリガニも釣れるしな」

「俺は、網で魚を獲ってから、それをブツ切りにして、カニ釣りをした」

「やるなあ」

まあ懐かしいね。異世界でカニ獲りをするとは思わなかったが。アイテムBOXからクラークンの脚をブロック状にカットしたものを出して、テキトーにブツ切りに。

籠の中に放り込もうとしたのだが――。

「おい、ケンイチ。これ、穴が開いてないぞ？」

「ええ？」

見れば、アキラの言うとおりに、穴が開いてない。

網は筒状になっているのだが、その先が閉じてしまっているのだ。使うやつがテキトーに穴を開けて使え――ってことなのか？ さすがアキラの国製だな。

まあ安いからこんなもんだろうけど。

本格的に使うなら、もっといい材料で自作すればいい。

「テキトーに切って穴を開けよう」

「すぐにバラバラになりそうだな」

「まあ、一回使えりゃいいよ」

籠を吊るすために、峠で崖を降りるときに使った登山用のロープを取り出したが、こいつは20m以上ある。

ちよつと長すぎだし、カットするのももったいない。

アイテムBOXに収納して、シャングリ・ラで安いナイロンロープを買う。

ドラムに巻いてある50mの緑色のロープが800円で売っている。

これなら、カットしてもいいだろう。

「アキラ、籠にこのロープを結んで底に下ろしてくれ。テキトーな場所でカットしよう」

「オッケー！」

アキラが、クラークンの脚が入った籠を湖に下ろし始めた。

「あの網の中に虫が入るの？」

「そう、多分うじゃうじゃ入ると思うな」

「ああ、多分入るな」

最後にオレンジ色のプラスチックブイを2000円で購入して、カットしたロープの端に結びつける。

ブイの大きさは直径30cmだ。こんなものまで売っているんだな。

「はは、このブイって海岸に行けば、結構落ちているよな」

アキラが、湖面に浮かんでいるブイを指で突いている。

「ああ、落ちているといえば、真っ黒な漁船の油が落ちてて、それを踏むとベツタリ……」

「俺は、金属探知機を使って砂浜で宝探ししたことがあるぜ？」

アキラも結構アクティブに色々やっているなあ。

まあ、彼は世界旅行とかもしているようだし。

「なにか見つけたか？」

「コインとか指輪とか」

「指輪？」

「別れた男の指輪を海に捨てたりする場面があるじゃん。それを真似して捨ててるんじゃない？」

「質屋にでも売ればいいのに」

「海に来たついでに、勢いでやったとか……ははは」

「売れないような安物だったのか？」

「いや、18金で石もエメラルドの本物だったぞ？」

「いやはや、勿体ないことをするやつもいるもんだ。」

カニの仕掛けは済んだ。明日まで待とう。

「アキラ、今日は泊まっていくか？」

「おう、そのつもりだ」

「レイランさんは、なにも言わないのか？ 浮気を疑ったり」

「ははは、それはいつもの話だからな、今更だな」

アネモネとアキラは、サクラに戻り、俺は研究室で爆雷の製造を行う。

とりあえず——4発ぐらいあればいいか。

時限装置で、爆発深度を調整するようにしよう。

その日の夕方は普通の飯を食って、アキラと話して——夜はアネモネと寝た。

寝たといっても、今の彼女となにかするつもりもない。

普通に寝ただけだが、ベッドの上で彼女の愚痴を聞く。

アネモネの不満は——人が沢山増えて、俺と2人きりの時間が少なくなったことらしい。

まあねえ。でも、俺1人じゃ領の運営なんてできないしなあ……。

—————◆◆———

——カニ籠をしかけた次の日。

普通に朝飯を食うと、昨日仕掛けたカニ籠の所へ行く。

アキラも期待しているようだ。日本人だから、カニの旨さは知っているからな。

彼のプ○ドに乗せてもらったのだが、そのあとを獣人たちがついて来た。

なにか面白いことをやるんじゃないかと思っているようだ。

この世界の住民はカニを食べないみたいだから、果たして面白いかは疑問だ。

皆で昨日の場所に到着した。

俺の研究室に使っているコンテナハウスが置いてあるから、すぐに解る。

こんな所まで来るやつもないと思うが、一応扉には鍵がかけられている。

ガラス窓を割られたら、盗まれるだろうが、中にあるのは価値の解らん特殊なものばかりだ。

肝心なものは全部アイテムBOXの中に入れてあるし、盗られたとしてもダメージはない。

「アキラ、まずは栈橋をつくろうか」

「そうだな、船に乗る度に水に浸かるのもな」

アネモネの魔法で乾燥はできるが、可能ならば濡れないほうがいい。

少々考えたのだが、建築現場などで使う単管で足場を組んで栈橋にすることにした。

家の裏にある崖に登る際に足場を作った、あれである。

単管組みは、以前獣人たちにもやらせたので、一緒に手伝ってもらうことにした。

「はは、まさか異世界で単管を組むとは思わなかったぜ」
アキラも器用にレンチを扱っている。

「この鉄の管は色々と使えて便利だにゃー」 「そうだけど、こんな
の旦那だから用意できるんだぜ？」

「水に入れたら錆びそうだがな」

「その時は新しいのを作ればいいさ。木で作っても腐って落ちるかな」

アキラがレンチを振っている。

「そりゃそうだな」

「でも、淡水だから、海よりはマシだと思うぜ？」

俺たちの作業を、アネモネはじっと見ている。

ちよっと力仕事なので、子供には無理だろう。最後のナットを締めるのだけ、ちよっと手伝ってもらった。

一応、出来上がったら、水に浸かる単管に防錆用のシリコン塗料を塗る。

一旦完成したものを、アイテムBOXに収納して、水際に出す。

こうすれば、重たいものを一々運ばなくて済む。

最後に渡り板の高さを調整すれば完成だ。

「にゃー！ 立派な栈橋が出来たにゃー！」 「鉄の栈橋とは豪勢だな。でも盗まれそうだけど……」

ニャメナが腕を組んで心配している。

「やっぱり、その心配はあるか」

「ああ、だってまるごと鉄だぜ？」

「しかも鋼鉄だからな。これで剣が打てる」

「だろ？」

「まあ、そんなに心配するなら、大工に栈橋を作ってもらおう」

「絶対にそのほうがいいって、旦那！」

ニヤメナは基本心配性だが、彼女の言い分にも一理ある。

出来上がった栈橋を使い、アイテムBOXから出した船に乗り込む。

「旦那、何を獲るんだい？」 「魚にゃ？」

「カニだよ」

「カニ？ クロ助、カニってなんだ？」 「知らないにゃ」

意外と物知りのニヤメナもカニを知らないのか。

やっぱり、他じゃ見かけない生物なのか。アキラも帝国じゃ、見たことがないと言っていたしなあ

皆で船に乗って、オレンジ色のブイの所へ行く。

船の運転はアキラに任せた。

船が進んできた波に煽られて、ブイがぷかぷかと上下している。

「これだこれだ――さて、中身は入っているかな？」

「底に結構いたからな、沢山入っているんじゃないかね？」

ブイを引き寄せ、緑色のロープを獣人たちに引き上げてもらう。

「なにが入ってるにゃ」 「楽しみだな」

いやあ、獣人たちが楽しみにしているようなものじゃないと思うぞ？

「おおっ、見えてきた」

緑の網が張られた籠の中に、黒いワシワシヤが沢山うごめいている。

多分30匹ぐらいだろうか。

子供の頃に地元でサワガニと呼んでいたが、サワガニとモクズガニは違う種類らしい。

これは、サワガニじゃなくてモクズガニだな。

「ふぎゃー!」「虫じゃねえか!」

獣人たちの毛が逆立つ。驚くだろうとは思っていたが、こんなに嫌がるとは思ってなかったな。

「虫じゃないが——なんと説明したらいいか……見たことはないのか?」

「ええ? いやまあ——この辺で見たことはあるけど……」

ミヤレーは知らないようだが、ニヤメナは一応知っているらしい。

「はは、説明が難しいな」

アキラのいた帝国でも、カニは見かけなかったらしいが、やはりここらへんの固有種なのか?

「帝国で、川エビの類もいなかったのか?」

「いねえなあ。デカイヤゴならいたが……」

「ヤゴは虫だしなあ。ヤゴとシヤコのどこが違うと言われたら、少々説明が難しい」

「そのとおりだな」

「旦那! まさか、その虫を食うつもりじゃ……」 「ふぎゃー!」
獣人たちが、少々パニックになっている。

どうやら、ここらへんの住民の認識では、カニは虫のようだ。

俺たちもフナムシは食わないから、それと似たような感じなのだろうか。

「そのまさかだ。美味いぞ——多分」

「ふぎゃー！」

「アキラも楽しみにしてたしな」

「おう！ こりや間違いない、モクズガニだしな」

川にはいないが、海に行けばエビやカニがいるのだろうか？

国中の珍味を食べまくっている、王族の2人なら知っているかもしれない。

「別にお前達に食えって言わないから、心配するな」

「食えって言われても食わないよ！」

「私は食べてみる！」

「おお、アネモネは挑戦するか」

「多分、リリスは食べると思うし」

「ああ、彼女は食べるな。美味しいものなら、なんでも食うしな——
って別に対抗する必要はないんだぞ？」

「いいの！」

好きにさせてあげよう。

騒いでいる獣人たちを尻目に岸へ向かう。

「さて、これって泥抜きする必要があるだろ？」

川や沼の底に住んでいる水棲動物は、泥臭いのが多い。

綺麗な水に一晩浸けて、泥抜きをする。

「そうだな——でもケンイチ。先に1匹食ってみねえか？ 毒の有
無もそうだが、不味くて食えん代物だったら、泥抜きしてもしゃー
ないし」

「それもそうだな。全部煮てから食って、おえーっ！ ってことにな
ったら、無益な殺生か……」

「そゆこと」

とりあえず、小さな鍋をアイテムBOXから出して、2匹を煮てみることにした。

鍋に、ペットボトルの水を注ぐと、カニを入れる。

脱走しようとするので、蓋をした。

アイテムBOXから出した、カセットコンロにかけるが、加熱はアネモネにやってもらう。

「アネモネ、鍋を温めてくれないか？」

「うん、ウォーム温め！」

すぐに鍋がクツクツと蓋を動かし始めた。

「はい、カニさんは、ご臨終です」

アキラが鍋に向かって手を合わせる。

「そう言われると、生きたまま煮ているから、ちょっと残酷だな」

「そんなこと言ってたら、食肉工場とかもっとあれだし」

アキラが、蓋を取って中身を覗いている。

「丸ノコで、鶏の頭を落したりするんだよね？」

「そうそう」

和気あいあいのオッサン2人の後ろで、獣人たちがおそろおそろ、こちらの様子をうかがっている。

「そんなに気持ち悪いなら見ることないだろう？」

「旦那たちが本当に、その虫を食うのか、見たいじゃん」「にゃ」

猫に似ているので、好奇心は旺盛らしい。猫と言ったら怒るので、言わないが。

「そろそろいいだろう」

アキラが蓋を開けると、熱湯の中でカニが真っ赤になっていた。

「あゝなんで、真っ赤になるの？」

「アネモネもお風呂に入ると赤くなるぞ？」

「それと一緒に？」

「まあ、似たようなものだ」

ちよつと違うと思うが、俺もなんで赤くなるのか知らんし。

「あつあつ！」

手づかみしたアキラが、カニをまな板の上に放り投げた。
どうやら、すごく熱いらしい。

「これ、どうやって食うんだ？ 子供の頃、モクズガニを釣ったはいいが、食うのは親父かウチの犬だったし」
正直、食ったことがない。

「犬にカニを食わせるとか、なんて贅沢な」

「あの当時、ドッグフードなんてなかったしなあ……」
熱い熱い言いながら、アキラはカニの脚を全部取って、ふんどしを外した。

ふんどしってのは、カニの腹にある三角形の部分だ。
そして、バカッとカニの甲羅を開けた。

「おおっ！ ミソが沢山入っているぜえ、こいつは期待できるんじゃないか？」

アキラがカニの甲羅に入っているウグイス色のなにかを、しげしげと見つめていたのだが――。

パクリと口にいれて、ジュルジュルとそれを吸い始めた。

「ぎゃあ！ 本当に食ってる！」 「ふぎゃあ！」
後ろにいる獣人たちがうるさいが、アキラは黙々とミソをすすっ

ている。

「いきなりいって、大丈夫か？」

「ちよっと、泥臭いが——大丈夫だ！　こりゃうめえ！　濃厚だぞ！」

「ビール飲むか？」

「いいねえ！」

「それじゃ、エ〇スを」

「おほほ！」

黄金色のビールを見た、アキラが小躍りをしている。

俺も食べてみる。

なるほど、濃厚な内臓の味だ。少々苦味と泥臭さはあるが、十分に食える。

「泥を抜けば、もっと美味しいな」

俺の言葉にアキラが反応した。

「そのとおりだな。残りは泥抜きしようぜ」

「ケンイチ、私も食べてみる」

アネモネが俺の袖を引っ張った。

「それじゃ、内臓は危ないかもしれないから、脚だな」

内臓には毒がある可能性が否定できないからな。

俺とアキラには祝福があるから、多少の毒は平気だろうが。

ハサミを出して、脚の両端を切ってやる。

カニが小さいので、あまり食うところがないが、ストローみたいに吸えば、チュルンと口の中に入ってくる。

「甘くて、美味しい！」

「よかった」

その間も、アキラは黙々とカニを食っている。

「カニを食っていると、無口になっていけねえ」

「はは、そのとおりだな」

食えるのが解ったので、泥抜きをする。

押入れなどに入れる透明なプラケースに、水とカニを入れる。

アイテムBOXに、滝の水が汲んであったので、それをプラケースに注いだ。

「餌もいるだろうな」

アキラが、プラケースの中でうごめいているカニを眺めていると、森から黒い影がやってきた――ベルだ。

「ベル、パトロールか？」

「にゃー」

ベルがケース内で動いているカニを気にしている。

「ああ、カニはダメだぞ？ 生で食うとヤバイはずだ」

「寄生虫がいるんだろ？ 肺に穴が空くらしい……」

ベルが咥えるとまずいので、餌を入れて蓋を閉めることにする。

「餌がなくなって死んだらヤバそうだな」

「でも、共食いするんじゃない？」

「ああ、ザリガニを釣って、そのザリガニの身を使ってザリガニ釣りをするのを見たことがあるな」

餌はクラークンの脚をやろう。沢山あるからな。

「旦那、その白いのって……」

「あの化け物の脚だ」

「うえー、そいつら、あれを食うのかよ」

「こいつら湖底の掃除屋だから、なんでも食うぞ。ニャメナが溺れて沈んだら、こいつらが集まってきて、食われる」

「そうそう、水死体を上げたら腹からこいつらが、ドバー！」

アキラが、腹からなにかが飛び出るアクションをする。

「ぎゃー！」

俺とアキラのからかいに、ニャメナの尻尾が極太になっている――すぐく触りたいって言ったら、怒られるだろうか。

「カニかぁ――こりゃ、楽しみが増えたなあ」

アキラが湖の沖を眺めて微笑む。

「カニを食いたくなったら、釣ればいくらでも食えるわけだからな」

「はぁ、帝国での苦労はいつたいなんだったのか……」

「まあまあ――これから楽しめばいいじゃん」

「そうだな……」

水に浸けたカニは蓋をして、俺の実験室に一日置く。

カニでちよつと横道に逸れたが、皆はサクラに戻り――俺は爆雷の製造を続けることにした。

ついでに爆破実験も行い、爆破にも成功した。

準備万端整いつつある。

157話 カニ（後書き）

月刊Gファンタジーに連載中の アラフォー男の異世界通販生活
コミックス 第1巻が発売中！

[https://syosetu.com/syuppan/vi
ew/bookid/3671/](https://syosetu.com/syuppan/vi
ew/bookid/3671/)

158話 四

アキラと一緒にカニ漁をした次の日、泥拔きが終わったので俺たちはカニを煮ることにした。

これが晩飯になるのだが――この世界にはカニを食べる文化がないらしく、皆が気持ち悪がるので、メイドたちに普通の食事を用意してもらった。

カニは、サクラから離れた俺の爆雷研究室に置いてあるが、運ぶ際に生き物はアイテムBOXには入らない。

そこで大型の寸胴にカニをいれて、アネモネの魔法で加熱してもらう。

水がお湯に変わり、カニが死ねばアイテムBOXに入れられるようになる。

しかも熱いままだ。少々、可哀想だが美味しく食べるための殺生なので、致し方ない。

アキラはサクラに泊まったのだが、朝飯を食ってアストランティアに仕事に行くと、夕方には戻ってきた。

もうサクラを自宅にする勢いだ。

プリムラも帰ってきたので護衛のニヤレサも一緒に、ニヤメナたちとテーブルを囲んでいる。

「あの旦那たちは、なにを食おうってんだい？」
ニヤレサが、訝しげな顔でこちらを見ている。

「信じられるか？ 虫を食うんだぜ？」

「虫？ おえーっ！」

メイドが作った普通の食事を摂っている獣人たちだが、そんなこ

とを言っているのが聞こえてくる。

俺とアキラで、カニの入った寸胴をサクラに持ってきて、焚き火にかけて仕上げをすることに。

ちよつと鍋が大きすぎて、コンロじゃ火力不足。
轟々と燃え盛る炎の力を借りることにした。

「ほう、カニかえ？」

リリスが、寸胴の中のカニを覗き込んでいる。

「リリスはカニを食ったことがあるのか？」

「うむ、一度だけな。アイテムBOX持ちの商人が、城へ持ち込んだのじゃ」

「やつぱり、なまものだからなあ。アイテムBOXがないと無理か」

「初めて食べたが、中々美味じゃったぞ？」

「どんなカニだった？」

「海でとれたものだと話しておったな。赤茶色で、1カンはあったろうか……」

1カンってのは、この国の単位で1.8m相当だ。

「デカいな……」

俺とリリスの会話を聞いていたアキラが入ってきた。

「それってタラバじゃね？」

「デカいのはタラバだよなあ。海にはカニがいるんだな」
まったく別の種類のカニの可能性もあるけどな。

デカイ亀や、デカイトンボ、デカイハチ、デカイイカがいる世界だ。

デカくて化け物みたいなカニがいてもおかしくない。

「この世界には冷蔵技術や缶詰がないからな。容量の大きいアイテムBOX持ちは稀だし」

あまり語られないが、財布ぐらいのアイテムBOX持ちは、それなりにいるとも言われている。

アイテムBOXが小さいと、自分がアイテムBOX持ちだと気づかない人も多いらしい。

まあ、たしかにコイン一個とか小石一つ入るアイテムBOXじゃ、自分でも解らないかもしれないな。

「プリムラ、この生き物は、知っているかい？」

「はい、海辺の街で見ました。もっと大きいものでしたが、父と一緒に食べました。美味しかったですよ」

「へえ、さすがマロウ商会、どこにでも行ってるなあ」

いい商品を探すためなら、たとえ火の中水の中。

そのぐらいのバイタリテイがなくちゃ、一流の商人にはなれんということか。

カニが煮えて真っ赤になったので、お湯から上げると、アキラが食い始めた。

「アキラ、今日は日本酒でいってみるか？」

「おお？ そうきたか？ 肝酒だな」

「テキトーな大吟醸でいいか？」

「はは、なんでもいいよ。贅沢はいわんし。飲めるだけで万々歳だ」
シャングリ・ラで大吟醸を探す。最初のページに出てきた5800円の酒にした——結構高いな。

「ポチッとな」

緑色の瓶が落ちてきた。

「ほい、アキラ」

「おい、これってメチャ高いやつじゃないのか？ 普通の安い一升瓶とかでいいんだが……」

「まあ、いいじゃないか。たまに飲む酒だし、贅沢しても」

「そんじゃ、ありがたくゴチになるぜ」

アキラは、酒のキャップを開けると、カニの甲羅に注いだ。

「ジュルル……やべえ……こりゃ、美味すぎるぜ……」

甲羅を持って酒を啜ったアキラがつぶやく。

「高い日本酒はワインみたいだよな」

「でも、ワインでこんなことして飲めないぜ？」

「まあ、ワインで肝酒とか骨酒とか聞いたことがないなあ」

「ああ、骨酒って手もあったかあ……小魚焼いて、酒に突っ込んだら美味そうだな」

日本酒の原料は米だ。米の飯に合う料理なら、なんでも合う。ワインじゃこうはいかない。

「俺は酒を飲まない人だからなあ」

そうは言っても、まったく飲まないわけじゃない。

付き合いで一口、二口ぐらいは、口をつけることもある。

体質的に合わないのか、すぐに具合が悪くなるので、それ以上飲まないだけだ。

「アマランサスも飲んでみるか？」

「ふむ、このようなものを飲むのは初めてじゃ」

「ワインじゃ肝酒はできないからな」

「それにこの世界には、赤しかないし」

アキラの言うとおりだ。この世界には赤ワインしかない。

まあ、魚介類を食べることが減多にないから、赤ワインだけでも

困らないと思うが。

アキラにカニの甲羅を開けてもらったアマランサスが、そこに注がれた日本酒を口にする。

「……ほう、なんという深い味わい……そして、この香り——これは果実酒かえ？」

日本酒を飲むアマランサスの顔が、なんとも色っぽい。さすが大人の女だ。

「いや、これは穀物から作った酒だよ」

「なんと、穀物——麦かえ？」

「米っていうんだが、ここにはないからな」

アキラとアマランサスが、日本酒を飲んでいると、ニャメナが揉み手をしながらやってきた。

「旦那あ……そのいい匂いのするやつを……」

「ああ、解った——これだな」

俺が、カニを差し出した。

「ぎゃあ！」

真っ赤になったカニを見たニャメナの毛が逆立つ。

「ははは、冗談だよ。酒だろ？」

シャングリ・ラから同じ大吟醸を買う。

「旦那、こんな高そうなのじゃなくてもいいのに……」

「でも、このいい匂いがするのを飲みたかったんだろ？」

「そ、そうだけどさ……」

獣人たちの鼻は敏感だな。あんな離れた所から、吟醸香を嗅ぎ取ったのか。

だいじそうに、緑色の瓶を受け取ると、自分たちのテーブルで酒を飲み始めたのだが――ニヤメナとニヤレサが揉めている。

「なんで、お前に飲ませなきゃいけないんだよ！」

「このケチトラが、ちよつとぐらいいいじゃんか。そんない匂いがする酒を独り占めなんてズルいぞ！」

「こらこら、揉めるな。ニヤメナ、一杯ぐらい飲ませてやれ」

「やった！」

喜ぶニヤレサに、ニヤメナは渋い顔だ。

「ちえ――旦那は女に甘いんだから……」

「にやはは。女に甘いから、トラ公もおこぼれにありつけるにや」
まあ、ミヤレーの言うとおりだな。

彼女たちは、普通の陶器のカップに酒をドボドボと注いで飲み始めた。

巷の住民で、酒によって器を替える――なんて洒落たことをするやつはいない。

「にやにやにや――にゃんだこれ！」

「ああ、美味い！ 美味すぎて死ぬ！」

ニヤメナとニヤレサが、カップを持ったまま固まっている。

「大げさだな」

その声を聞いて、アマランサスがつぶやく。

「聖騎士様――この酒なら、王室の宝物庫に入ってもおかしくない代物ですよ」

「はぐはぐ……酒にうるさい、母上がそう言うのじゃから、相当な代物じゃの」

静かだと思っていたら、リリスとアネモネとプリムラが、黙って

カニを食い続けていた。

皆が食っているの、俺はメイドたちの用意した普通の料理を食べている。

「酒だけで、こんな魂を撫でられるような味がするのかよ……」

「こりゃ、ヤバイ代物だよ」

「うむ——魂を撫でられるか——獣人も中々詩人じゃの」

アマランサスが酒を飲みながら、感心している。

話を聞いたプリムラの商売人魂を刺激したようだ。

「ケンイチ、そんなにいい酒なら、貴族に売り出せば……」

「俺が魔法で出すものだからなあ——この領の産業にならないし。醸造所を建てて酒を作るならいいんだが」

醸造所の話、アキラが反応した。

「前にも話にでたが、酒造りか——いいね。こんな上等なものは無理だとは思うが、リキュールぐらいはなんとかなりそうだ」

「ここにドワーフたちでも、やって来れば、話に乗ってくれそうだがなあ」

「ケンイチは、そういう話もしてたな？」

「本当にドワーフたちが来るかは解らんよ。彼らにも生活があるし。でも俺が持っているものに興味はありそうだった」

「まあ、見たこともない金属がゴロゴロしていたら、そりゃドワーフは気になるだろう。奴らは、金属オタクだからな、はは」

金属オタクってのは少々言葉が悪いが、そんな感じだったな。

獲ったカニは全て食い尽くされてしまった。

俺の家族が、徐々にゲテモノ食いに汚染されているようで、少々気の毒な感じもするのだが、美味しいものは美味しいので仕方ない。

そういう食文化がないだけで、カニ食もそのうち広まるのではな

いかと、俺は見ている。

そうなれば、カニ漁もこの領の立派な産業となるだろう。

――――◇◇――――

――カニを食ってから1週間後。

爆雷が4発完成して、クラークン討伐作戦が開始された。

――とは言っても、まずはやつの寝床を見つけてはならない。イカってのは夜行性の印象が強く、俺たちが襲われたのも夜だ。

昼間は湖の底で寝ていて、夜な夜な湖畔に水を飲みに来ってくる獲物を捕らえていた可能性が高い。

湖の底にいるなら魚探で見つけられるが、洞窟みたいな場所があるってそこに隠れているようだとか厄介だな。

戦いの前に、俺とアキラとで船に乗って、クラークンの寝床探しが始まった。

探索範囲は以前俺たちが襲われた地点の沖――そこを中心にして探索する。

探索に関して、元世界の住民であるアキラの存在は大きい。

一々、説明をしなくても話を通じるし、常に阿吽の呼吸だ。

船に装備した船外機も扱えるし、魚探などの元世界の備品も扱える。

2人ともアイテムBOX持ちで、祝福持ちときてる。

この世界のチート持ちが2人揃い、アキラは帝国でドラゴンを仕留めたドラゴンスレイヤー。

1国の軍隊にも匹敵する戦力だ。

一応、突発的な戦闘に備えて、準備は万端。

俺の船には、アネモネとアマランサス。

アキラの船には、ウチの獣人たちと、アストランティアから応援にやって来た、獣人のミャアが乗っている。

ミャアはアキラの連れで、帝国からやってきた獣人だ。

獣人たちは、クラーケンが苦手のようなのでちょっと心配だが、彼女たちは雪辱戦に燃えている。

「アキラ、そっちはどうだ？」

『反応なくし』

彼には連絡用にトランシーバーを渡してある。

なにせ、この湖は広い。直径40kmもある巨大湖なので、対岸も見えない。

船同士の間を空けて魚探によるスキャンを行っているが、スキャンが終わった所にはブイを投げて、印をつけている。

長期的には風などで流されてしまいうだろうが、湖には流れはないので、一応の目印にはなる。

もっと沢山の船を使って、ローラー作戦を展開すればいいのだが――これらの道具は、俺が作った魔道具ってことにしてある。

この世界の住民に科学の力を使わせるわけにはいかないからな。

果たして、これでクラーケンを見つけられるのか？

いよいよとなれば、奴が活動すると思われる夜に、明かりや囃を使っておびき出す作戦も考えてる。

――とはいえ、夜間の戦闘が、俺たちに不利なのは紛れもない事実。

なるべく危険は避けたい。

船が微速前進でスキャンを続けているが、やることのないアネモネとアマランサスは暇そうだ。

日焼けしないように日傘の影、アネモネはタブレットに入ってい

る書籍を読み、アマランサスは日がな一日湖面を見続けている。

「すまんアマランサス、つき合わせてしまっ」

「いいえ、これは妾にしかできない仕事でしょうから」

「確かに、ウチの家族では、一番戦闘力が高いからな。期待しているぞ？」

「ふふふ」

50mほど離れているアキラの船を見ると――釣り竿が見える。暇な獣人たちが釣りをしているのだ。

船はゆっくりと進んでいるので、ルアーを引かなくてもいい。

「アキラ、魚は釣れてるのか？」

『ああ、結構釣れているぞ？』

釣った魚は彼のアイテムBOXに入れているらしい。

あたりもなく昼になったので、2艘の船をくつつけて昼飯を食う。獣人たちは、メイドが作ってくれた弁当を――俺とアキラは、シヤングリ・ラで買ったカップ麺とおにぎりを食う。

アネモネとアマランサスも、同じものがいいと言うので、用意した。

お湯と、おにぎりはアネモネの魔法で温めてもらう。

「ほう――このような食べものは初めて食べたが、なんというか――庶民の味じゃの」

麺をすすれないアマランサスが、食いにくそうにハグハグしている。

箸も使えないので、フォークでくるくる巻く食いを教えてやった。

「まあ、ここらへんの庶民の味ではないけどな」

「俺たちは、なぜかこの粗末なものがご馳走なんだよなあ」
アキラの言うとおりで。なぜか無性に食べたくなる。

「本当にそうだな、はは」

「うわあ……また旦那たちが、虫みたいの喰ってる……」 「うにゃー」

「ウチのアキラも、あの手の虫みたいのが、大好きなのにゃ」
アキラの連れのミヤアが、そんなことを言っている。

「アキラ、帝国で麺類とかあったのか？」

「いや、なかったので、小麦粉で自分で作った」

「自作か——執念だねえ」

「小麦粉使って粉もの屋やってたからな。ついであつてやつよ」

「麺類に対する、帝国民の反応は？」

「まあ、ミヤアみたいな反応だよ。どうしても、あの細長いのが、管虫に見えてダメらしい、はは」

「虫醤もあるって話だったのになあ。そういう文化は発達しなかったのか……」

「まあ、管虫食ってたのも俺だけだったし」

アキラの話では、小さい管虫は柔らかく、シャキシヤキして美味いらしい。

飯を食い終わったので、引き続き探索を続行するが、当たりはなし。

俺たちが使っているこの高性能な魚探は、垂直方向だけではなく、水平方向の画像も出すことができる。

これに加えてGPSも使えば、どこまで探索したかなんてことも解るんだが。

この世界に人工衛星なんてないし……なにせこの湖は広いからなあ。

少々気が遠くなりそうな作業だが、探索を続けて解ったことがある。

この湖の水深は深いところでも、50mほどで湖底面は平ら、あまり凸凹していない。

当たりもなく一日が終わり、30分ほどかけてサクラに戻ってきた。

「ふう……そう簡単にはいかないか……」

「ははは、こりゃ大変だな」

「アキラ、こんなことに巻き込んで悪いが、1週間だけ探索に付き合ってくれ」

「あいよく。まあ、なんとかなるさ」

1週間で無理なら、他の手を考えなくてはならない。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

——探索を始めて1週間、来る日も来る日も船を走らせて、魚探を使う日々。

なにも反応がなく、さすがに作戦の立て方が間違っていたのではと思い始めた。

皆は文句も言わず俺に付き合ってくれているが……。

7日目も空振りに終わり、夕飯を食ったあと——キラキラと湖面に月が映る、暗くなった浜で落ち込む。

俺の横にはLEDライト——目の前には、1週間使った2艘の漁船が湖面にたゆたっている。

毎日使うので、木造の立派な栈橋も大工たちに作ってもらったのだが——そこに、ビール片手のアキラがやって来て、声をかけてくれた。

「はは、随分と黄昏れているじゃないか」

「そりゃ落ち込むぞ。1週間を棒に振ったんだからな」

「まあ、勝負は時の運。しゃーない、切り替えていけ。グビグビ、ぶはーっ！」

「悪いな、アキラにも手伝わせたのに……」

「気にするなって、ビールが飲み放題でチャラになってるからよ、ははは」

彼にも仕事があるので、途中で抜けて運送の仕事をしたりしていた。

「ふう……」

その場に座り込み、落ちていた棒を拾うと、砂浜にイカの絵を描く。

「それでどうする？」

「……俺自身を囿にして、やつの居場所を突き止める」

「どうやって？」

「船の脇に光ものをくくりつけて、湖の上を走る。イカ漁とおんなじだ」

「デコトラみたいな感じでか？」

「そう！」

早速シャングリ・ラで検索する。

LEDライト大型で検索すると、集魚灯というワードが出てきたので、改めて集魚灯で再検索する。

210Wの大型集魚灯が1万円で売っているな。

12Vで船で使っている100Aのバッテリーにそのまま繋がられる。

普通のLEDライトだと防水されていないので、ショートして壊れてしまうが、これなら水に入れても大丈夫だ。

早速、購入する。

「ポチツとな」

細長い円筒形のLEDライトが落ちてきた。

尻から赤黒のコードが伸び、その先がワニ口クリップになっており、バッテリーの端子に繋がられるようになっていた。

「それが、ライトか？」

「集魚灯だ」

悔しいので、すぐに動作試験をする。

明かりを持って船に乗り込むと、集魚灯をバッテリーに接続する。スイッチはないので、繋ぐと即座に光り出した。

「うおっ！ 眩しい！」

辺りを昼に変える目も眩むようなまばゆい白い光。

「こりゃ、すげえな！ 目が潰れるぜ！」

アキラも、掌で影を作っている。

「こいつを水に入れて、曳航してクラークンをおびき寄せる！」

「それで、いつやる？」

「今、これからだ！」

「ええ？ 俺、ビール飲んでるけど……」

「俺1人でやるから、構わん。奴がいる場所を特定するだけで、別に戦うわけじゃないからな」

「よし！ 俺も付き合うか！」

「おいおい、飲酒運転だぞ？」

「うへへ！ ここは異世界だから無問題！」

最後のビールを飲み干すと、空き缶を俺によこす。

この世界でアルミは魔法の触媒になるので、空き缶の放置はでき

ないのだ。

追加して6個の集魚灯を購入——同時にバッテリーを6個追加購入する。

シャングリ・ラの評価を見ると、バッテリー1個で5〜6時間の連続点灯が可能らしい。

長時間点灯させるためには、集魚灯1個につき、バッテリーが1個必要になる。

それとヤツの居場所をマークするブイが必要だ。

直径30cmのオレンジ色プラブイを10個ほど購入してまとめ、ナイロンロープを60mほど繋ぐ。

終端は、コンクリブロックにしよう。

こいつを水中に放り込めば湖底まで50mなので、マーキングとして使えるだろう。

俺が準備をしていると、アネモネと獣人たちがやってきた。

「戻ってこないと思ったら、なにをやってるの!」

「ああ、アネモネは戻って寝ていなさい」

「私も行くに決まってるでしょ!」

「暗くて危ないから」

「絶対に行くから!」

アネモネが言うことを聞いてくれない。

「へへへ、暗闇っていえば——俺たちの出番だよな」「そうだにや」

「お前らもいくのか? 大丈夫か? あれが出てくるぞ?」

「もう、覚悟は決まっているから、大丈夫だよ旦那!」「にゃー!」
暗闇から、光る目が走ってくる。アキラの連れのミャアだ。

黒い毛皮なので、本当に見えない。

「ウチも行くにゃ！」

「おおっ！ ミャア！ お前も来い！」

「にゃー！」

そこに暗闇からもう2つの光る目——ベルもやってきた。

「にゃー」

「さすがに、お母さんは留守番な」

「にゃー」

彼女は船に乗るとは言わないようで、安心した。

「さて、ケンイチ。ここに戻ってくるために、灯台がいるぞ？」

「あ、そうか。真っ暗だからな。ここには街の明かりもないし……」
灯台代わりに栈橋の上にLEDライトを置いた。

場所が解らなくなっても、東へ進んで岸に当たるまで進めばいい。
皆が船に乗り込むと、アキラがエンジンを始動させた。

船の操舵はアキラだ。酔っぱらい運転だが——。

「ビール1本だし、へーきへーき！ ははは！ それに、その気になれば、アルコールも分解できるからな」

「なんだそりゃ？ あ、もしかして祝福の力で？」

「そう！」

「——ということは、俺も酒が飲めるようになっていたのか？」

「多分、大丈夫だと思うが……」

「そうか——でも、基本的にあまり酒が好きじゃないんだよねあ。
酔っ払って騒ぐのも苦手だし……」

「そりゃ、しょうがないな」

俺たちが出発しようとする、LEDランプを持ったマイレンが
様子を見にやってきた。

皆が戻ってこない、確認をしに来たのだろう。

「ご主人様！」

「マイレン！ ちょっと出かけてくる！ お前たちは、先に休んでいろ！」

「あ、あの！ ご主人様！」

メイドを岸に残して、けたたましい船外機の音とともに、船は発進した。

アマランサスを置いてきてしまったが、帰ったら怒るだろうなあ。まあ仕方ない。

明かりはまだ点けていないが、点灯するのは現場に着いてからでいいだろう。

「ひょー！ 真っ暗でまったく見えねえ！」

操舵しているアキラが叫ぶが――湖面に月の明かりが反射しているので、なんとなく見える。

「大丈夫にゃ！ アキラ！ ちゃんと見えてるにゃ」

舳先にミヤアが立ち、アキラの目となって、進む方向を定めている。

「旦那が暗い顔をしてたんで、絶対になにかやと思ってたから、酒も飲まずにいてよかったぜ」

「そうだにゃー」

俺の行動はバレバレか。まあ、いつも一緒にいるし、死線も一緒にくぐり抜けたからな。

「それで？ この暗闇の中でなにをするんだい？」

「明かりを点けてやつをおびき寄せて、場所を特定する」

「それじゃ、今日は戦わないのかい？」

「そうだ！ 戦闘は、戦力を揃えてからやる」

俺たちを乗せた船は、暗闇の中を突き進んだ。

159話 仲間を集める

苦心の末、爆雷が完成したので、「クラーケン退治だ!」と張り切って、やつの居場所を突き止めるべく、探索を開始したのだが――。

なんの成果もなく、1週間を棒に振って、空振り三振バッテリーアウト。

皆に手伝ってもらったのに、さすがに俺は落ち込んだ。

切羽詰まった俺は、夜に集魚灯を船で牽引して、クラーケンをおびき寄せる作戦に出た。

元世界のイカ漁と同じことをやろうと考えたわけだ。

当然、自分の不始末は自分で――と思ったのだが、アキラが手伝ってくれるという。

まったくもってありがたいことだ。

出発の準備をしていると、アネモネと獣人たちにも見つかったしまった。

彼女たちを巻き込むのは不本意ながら、アネモネの魔法はいざというときに役に立つし、獣人たちの夜目はこの暗闇では有効だ。

アマランサスを置いてきてしまったので、あとで愚痴を言われるかもしれないが、こういうのはノリと勢いだ。

俺たちは、オレンジ色のライフジャケットを着込み、暗闇の中をボートを走らせる。

一応、獣人たちにもライフジャケットを着させた。

この真っ暗な中で、水に落ちたら、救助に時間がかかる可能性がある。

真っ暗な中、シャングリ・ラで購入したLEDライトで前方を照らしているが、明るいのは正面のほんの一部だけ。

ここ1週間でも、流木などは見かけなかったので、暗闇でボートを走らせても問題はないはずだが……。

見張りをしている獣人たちに声をかける。

「ここで流木などは見ていないが、ちょっとでも怪しい影を見たらすぐに言ってくれ」

「わかったにゃ」

返事をしたのはミャアだ。毛皮が黒いので、闇に溶けていて解らない。

振り向くとエメラルド色に光る目だけが見える。

船外機のスロットル開度と、進む時間でおおよその距離はわかる。しばらく進むと、この1週間で置いたオレンジ色のブイが見えてきた。

ここら辺は搜索したってことだ。

「アキラ、もう少し戻って、湖の中央寄りで作戦を実行してみよう」
「オーケー！」

反転して10分ほど戻り、準備をする。

「ケンイチ、何をするにゃ？」

「この明かりを水に沈めて、やつをおびき寄せる。水にいる生き物ってのは、明かりに集まってくるんだ」

「へえー。でも旦那、その明かりってのは、水に入れても消えないのか？」

「洞窟で水に明かりが沈んでも平気だったろ？ あれと同じ明かりだから、大丈夫だ」

「凄いにゃ！ アキラも、この魔道具を作れないにゃ？」

「そいつが、どういうものかは知っているが、俺にゃ作れない。俺が作れるのはマヨネーズだけだし、ははは」

集魚灯をバッテリーに接続すると真っ白な眩ゆい光を放ち始めた。

「ふぎゃ！ 目が潰れるにゃ！」

ミャアが目と耳を閉じる。獣人たちの目は瞳孔が全開になっているからな。

眩しいので、すぐに水中に放り込む。コードの長さは5mほどだが、全部で集魚灯は6つ。

それを6回繰り返す。

「本当に水の中で光っているぜ！」

「ニャメナ、この光に魚が集まってくるんだよ」

「へえ」

「あ！ もう集まってきたよ」

チラチラと見える魚影を見て、アネモネが喜んでいる。

「じゃあ、夜に明かりを点けて、集まってきた魚を網で掬うのもありってことか？」

「そういう漁法もあるぞ」

「へえにゃ」

ミャレーが水に沈んだ明かりに集まってくる魚を目で追っている。

「ミャレー、水に飛び込むなよ」

「大丈夫にゃ、多分」

なんか尻尾がピクピク動いていて、怪しい。

獣人たちが動くものに飛びかかるのは、本能的なものらしいからな。

「アネモネ、眠くないか？　これから、しばらく時間がかかるぞ？」
「大丈夫！」

彼女が暇なときに読んでいるタブレットは、バックライトがあるから、暗闇でも平気だ。

準備は整ったので、アイテムBOXから方位磁針を取り出す。

「おーしアキラ、北へ向けて微速前進——向こうだ」

「微速前進、よくそろー」

俺が指差した方向に、船がゆっくりと進み出した。

あまり速く進むと、コードが切れたりするかもしれない。

「アキラたちが話しているのは、何語にゃ？」

「さあにゃ？　ケンイチたちは、たまにわけのわからない言葉を話すにゃ」

そのまま船はゆっくりと進み、3時間ほどたった。

「ふう……これでもダメか？」

「まあ、1日じゃ結果は出ないと思うぜ？」

アキラの言うとおりだが……。

なにもかも、この湖が海みたいに大きすぎるのが原因だ。

あまり深夜まで、アキラや家族を連れ回すわけにもいくまい。

夜間の行動をするなら、もう少し準備も必要かもしれないな。

そう考えていると——突然、獣人たちが3人共耳を立てて、飛び上がった。

「なにかくるにゃ！」

「やべえ！」

獣人たちの毛が逆立ち、ただ事でないなにかが起きようとしているのが解る。

「アキラ！ 突っ走る準備をしてくれ！」

「おゝし！ 任せろ！ 行くぞ〜！」

アキラが、スロットルバーを握ると、気合を入れる。

皆で、明かりが灯る水中を眺めていると、黒い水中が突然白っぽく染まる。

何か巨大なものが、水中の奥底から上がってくるのだ。

「アキラ！ ダッシュユ！」

「おう！」

勢いよく船が走り出すと、掴まっていなかったアネモネが転がる。

「いた〜い！」

俺たちがいた場所に、白く透明なものが水中から這い出てきた。

「にやにやにや！」

「きたにや！」 「ぎゃあ！」

獣人たちが全身の毛を逆立て、尻尾の太さが倍以上になる。

俺はアイテムBOXから、重りのついた連結ブイを出して放り込んだ。

この場所をマーキングするためだ。

囀の役目は済んだので、急いで集魚灯を引っ張り上げて、バッテリーから外す。

その作業をしていると、船の脇の水中からイボイボがついた巨大な脚が出てきた。

「うひょ〜！ こいつはマジでデカイぜ！」

舵を握るアキラが叫ぶ。

ライトの明かりに浮かび上がる巨大な脚を縫うように走ると――

アネモネが指差す。

「ケンイチあれ！」

沢山の水中から伸びる脚——そのうちの1本が途中から消えている。

こいつは間違いなく、俺たちを襲ったやつだ。

「——ということは、クラーケンはこの1匹だけって可能性が高いな」

「むー！ エクスプロージョン 爆裂魔法！」

アネモネの魔法で青い光が集まり、水面でオレンジ色の爆煙が上がる。

水上で広がる光だが、小波が起きる程度で威力は水中へ届いていない。

やはり、水中で爆発させる必要があるようだ。

「ケンイチ！ ここでやるのか？！」

「いや、今日はマークだけだ。この暗闇じゃ戦闘は危険だ」
急いで現場から離れる。

水中の明かりが消えたので目標を失い、クラーケンの脚はその場でウロウロしているようだ。

クラーケンの移動速度はどのくらいなんだろうか？

「まあ、こんなデカブツが、マジでいるって解っただけでも収穫だな」

「明日から、さっき落としたブイの周りを探索すればいい」
多少は移動すると思うが、闇雲に探すよりはマシだろう。
それでダメなら、夜間戦闘も視野に入れないとな。

「俺たちが、獣人並に目がよけりゃなあ、夜間戦闘もありなんだろう

うけど」

「軍隊が持っている照明弾があればな。ケンイチ、照明弾は作れないのか？」

アキラの言葉にハツとなり——一応、シャングリ・ラを検索してみる——当然、ない。

「さすがに照明弾は作れんなあ」

「光よ！^{ライト}の魔法じゃ、ちよつと範囲が狭いし」

「あの魔法なら、LEDライトのほうが明るい」

「そうだあ」

マグネシウムのペレットは売っているので、こいつを燃やせば——あるいは……。

いや、危険を冒してまで夜間戦闘はするべきではない。

急いては事を仕損じる——敵を確認できたのだから、徐々に包囲網を狭めていけばいい。

クラークンから離れたが、追ってくる節はない。

「アキラ、東の方角だ」

「オツケー！ ふああああ！ そろそろ眠いぜ。この世界は夜ふかしてできないから、すっかりと朝型になっちまった」

「まあ俺もだよ。いつもなら、寝ている時間だ」

隣にいるアネモネも、俺に掴まったまま眠たそうにしている。

「アネモネ、ありがとうな」

「うん」

「皆も、手伝ってくれて、ありがとうな」

「なんだい旦那。今更だよ」

「そうにや、ケンイチは領主なんだから、もっと人をこき使ってもいいぐらいにや」

「金で雇った人間ならともかく。家族なんだから、そうはいかんよ」
船が30分ほど進むと、獣人たちが反応した。

「岸が見えるにゃ！」

「さて、ここから多分、南だな」

「旦那、あっちから滝の音がするぜ」

ニャメナが指差したのも南だ——間違いない。

そのまま5分ほど進むと、栈橋に置いてきた、LEDの明かりが見える。

「誰かいるよ！」

アネモネの言葉どおりに、白い服を着た女が立っていたのだが——
あのシルエットは……。

船がゆっくりと近づく。

「やっぱり、アマランサスカ」

「せ、聖騎士様！ 酷いであろう！ 妾を置いていくなんて！」

「ごめんごめん、ノリと勢いで、出発してしまったからな」

船が栈橋に着くと、アマランサスが俺に飛びついてきた。

思わず、バランスが崩れる。

「あぶないな！」

まあ、ここは水深数十cmだから、落ちてもどうってことはないけどな。

「今回の戦闘は、私を参加させてくれると約束してくださったのに！」

「戦闘じゃなくて、あいつに会いに行っただけだからな」

「そんな屁理屈を！」

アマランサスは待っていたようだが、リリスは寝ているようだ。

彼女も大物だな。まあ戦闘の役に立たないことを理解しているからだろうと思うが。

「でも、その甲斐はあった。明日から忙しくなるぞ！ 婆さんの所にいる、メリッサや、レイランさんにも応援を頼まにゃならん」

「センセのほうは、俺から話すよ。多分、問題ないと思うが……」

「よろしく頼む」

「任せろ」

「アマランサスに、大魔導師クラスが3人、それと祝福持ちが2人か——敵が湖の中だから普通の騎士団はまったく役に立たない……」

「それでも、1国の軍隊に匹敵する戦力だの」

アマランサスの言うとおりだ。

「これだけの戦力を集めたら、王家からなにか言われなかな？ 謀反の疑いあり——とか？」

「そんな話が円卓の議題に上がる前に、決着がつくじやろ？ それに聖騎士様は辺境伯なのじゃぞ？ 異種族との交渉、大型の魔物との交戦の裁量も認められておる」

「そうらしいけどなあ……ふう」

やれやれ、政治家ってのは大変だ。

やることがいっぱい、明日から忙しくなりそうだ。

「「「ふあああ」」」

皆であくびをする。

とりあえず寝るとするか。

皆で寢床へ戻った。

——
——
——
◇◇
◇◇
——
——
——

——次の日の朝。皆で食事を取るが、カナンとプリムラはアスト

ランティアだ。

カニは全部食べてしまったので、今日は普通の食事だ。

メイドが食事を作ってくれるのはありがたいが、気まぐれでジャンクフードなどを食べなくなるのが少々辛い。

普通の生活に飽きたら、2〜3日留守にして、森にこもるのもいい。

少しぐらい俺がいなくても領の経営が回ることは確認済みだしな。一緒に朝飯を食っているユリウスに、今日の予定を伝える。

「ユリウス、今日はアストラランティアに行って、戦力調達の交渉をしてくる」

「承知いたしました」

「やれやれ、領内に化け物がおるとなると、退治せねばならぬからのう」

リリスの言うとおりだ。

「俺たちが、浜から引きずり込まれそうになったように、領民に犠牲者が出る可能性があるからな」

「戦闘に領民は参加させるのかえ？」

「いや、参加はさせない」

あの化け物相手に、村の住民では可哀想だ。

「承知したが――領民にも無理をさせるのが、領主なのだえ？」

「そりゃそうだが、俺の仲間内で対処できるのなら、領民を巻き込みたくない」

「いやはや……」

呆れたようにリリスが、スープを啜る。

王家の人間からすると、有無を言わず領主に従わせるのが、政まつりごとだと言いたいのだろう。

相手は巨大な化け物だし、水上戦闘に素人を参加させてもなあ。

サントンカには船もあるが、大切な商売道具だし、彼らの船は手漕ぎだ。

俺が使っている船外機付きの船と一緒に作戦行動できるとも思えん。

あのデカイ脚を避けるにはスピードがいるだろう。

「でもまあ――お姫様。俺とケンイチが敵わない相手なら、王国の騎士団だって無理だぜ？」

「アキラ殿の言うとおりじゃ。そもそも騎士団は、船の上で戦うものではないからの」

「魔法と爆雷がダメだったら、どうする？ 大砲でも作るか？」

「それもありだろうな。魔法が効かなくても炸裂弾なら効果はあるだろう」

「さすがに、大砲や軍艦はケンイチの魔法でも作れないんだろ？」

「ああ、無理無理。砲身はドワーフたちが来れば作れるはずだが……いきなり武器を作らせるのは……」

「剣だって武器だろ？」

「そりゃそうだが……」

せっかく新天地に来てくれたのに、いきなり兵器開発ってのは……。

「聖騎士様がおっしゃる大砲というのは、地面が爆発するのとは違うものなのじゃな？」

「爆発って――アマランサス、見たのか？」

「はい。あれを地面に埋めて、敵軍が通りかかったときに爆発させるのじゃろ？ あれなら一気に数百人は屠^{ほふ}れる。しかも魔法を使わない……」

アマランサスが扇子を出すとパツと開いて、口元を隠している。

「母上がおっしゃるのが本当なら、強力な兵器じゃの！」

「「ふふふ……」」

王族親子が怪しい笑みを浮かべている。

「さてさて、戦には使わないぞ？」

「聖騎士様のおっしゃることも解りますが、ここに敵が攻め込んできたなら、そのようなことを申してはおられませぬ」

「そ、そりゃそうだけど……」

「敵を退ける手段は、多ければ多いほどいい」

「その通りじゃ！」

「聖騎士様がおっしゃる大砲というのも、さぞかし強力な兵器なのでしょうなあ、ふふふ」

アマランサスには奴隷契約があるため、俺の不利になることは絶対にしないはずだが、躊躇なく強力な兵器を使うことが領の利益につながる、信じて疑わないのだろう。

「旦那とお姫様たちが、またなにやら怖い話をしているぜ？」

「ウチらにはどうしようもないから、諦めるにゃ」

ちよつと離れた場所に座っている獣人たちが、ぶつぶつ言っている。

「まあケンイチ、その時はその時だ」

「それしか手がないならそうだが……」

不本意ながら、アキラの言うとおりで有事には備えなくてはならない。

なにが起こるか解らんし、俺も火薬や圧力鍋爆弾を作って、数々のピンチを切り抜けてきた。

兵器開発はしておくべきだろうなあ——やっぱり。

食事が終わると、アキラのプ〇ドに乗って、アストランティアへ向かう。

アネモネも一緒だが、どこにでもついてきたがるので困りもの。
まあ、貴族が護衛の魔導師を連れていることも多いので、彼女が
俺の護衛といえ、その通りだろう。

これだけの大魔導師は、この国にもそうそういないのだから。

俺が切り開いた真っ直ぐな道を、アキラが運転する車で走る。俺
が助手席、アネモネは後ろだ。

道にはすでに轍ができており、タイヤや車輪が通過するところが
凹んでいる。

切り開いた森の中は意外と高低差があって、低い所は埋めたのだ
が、その部分が沈下してしまっている。

「ああ、道路が沈下しているな。後で土を盛ろう」

「このぐらいいは大丈夫じゃね？」

「車なら平気だが、馬車だとちょっとした凹みで動けなくなるこ
とがあるし」

そういう場所に来たら、スピードを上げて一気に駆け抜けるなど
の、御者の腕の見せどころなのだが――なるべく平坦のほうがいい
だろう。

「そうだなあ。車輪も細いからすぐに埋まるしな」

車輪を太くすると、抵抗が大きくなって馬の疲労度が上がってし
まう。

今の車輪の太さってのは、色々な条件を踏まえて最適化された結
果だ。

そのまま道を走り、アストランティアとダリアを繋げている街道
と合流する。

「ここには信号がないから、注意しないと」

ハンドルを握りながら左右を見ているアキラの言葉にアネモネが

反応した。

「シンゴウってなに？」

「えー、どっちが優先か教えてくれる看板のようなものかな？」

「この交通量じゃいらねえよな」

「まあそうだな」

「ふーん」

車はアストランティアの街の中に入るが、街の住民は車を見慣れているのか、注目もされない。

「皆、車に慣れたようだな」

「まあ、毎日走っているからなあ。一応、マロウ商会に世話になっているってことにしてる」

「そうしないと、商人にものを運んでくれとか頼まれるだろう？」

「はは、その通り。この世界の商人は、グイグイくるからなあ。日本人みたいに、空気を読むとかないし」

「女も結構、グイグイだしなあ」

「はは、そうだな。センスもそうだったし」

「とにかく、この世界の女は行動力がありすぎる」

俺たちの会話に後ろから声がする。

「ねえ、空気を読むってなあに？」

それに対応する、こちらの言葉はないようだ。

「えーとな、雰囲気を察する——みたいな」

「へー」

「アネモネちゃん、皆で楽しく酒を飲んでいると、いきなりつまんねえことを言うやつがいるだろ？　そういうのを空気が読めないって言うんだよ」

ハンドルを持っているアキラがつぶやく。

「うーん——配慮がない、みたいな？」

「それに近いかな」

「日本語にゃ、空気を読むが沢山でてくるがなあ」

「世界で一番、空気を読む民族だよな」

「ははは、そうだな」

車を走らせ、婆さんが営む——スノーフレイク道具店へ。

「おお、ここだ。サンキュー！」

「それじゃ俺は、例の話をセンセに話しておくぜ。まあ大丈夫だと思うが」

アキラがプ○ドの窓から顔を出して答える。

「アキラはいいのか？」

「俺はもちろんオッケーよ！ 今後も世話になるしな」

「ドラゴンスレイヤーと一緒になら心強いよ」

「そっちも聖騎士様なんだろう？」

「祝福をもらったただけだからな、それを言うとアキラだって、この国だと聖騎士ってことになる」

「うーん、そうか。そういうことになるのか」

「ありがとうな」

「おう！」

アキラと別れて、道具店の中に入る。

相変わらず薄暗くて、わけの解らんものが沢山並んでいる。

初めてここを訪れてから、こんな大事になるとは……。

「私は、中を見てる」

「解った——おーい、婆さんいるのかい？」

「はいよ」

暗闇の中から、ダーク色なローブを被った婆さんが現れた。

「おや、あんたかい。なにか買いに来たのかい？」

「いいや、頼みごとだ」

「あんた、頼みごとするのに、手ぶらなのかい？」

「ちゃんとアイテムBOXに入っているよ」

――と言いつつ、ショッピング・ラでお土産を検索する。

ケーキを喜んでいたので、ケーキでいいだろう。2000円のロールケーキを購入する。

「ポチツとな」

目の前のカウンターにクリーム色のロールケーキが落ちてきた。

「甘いお菓子だ。婆さんも好きだろ？」

ケーキを見た、婆さんの目の色が変わる。

「ちょっと待ってな！ 切って、飲み物も持ってくるから！
えらい変わりようだな。」

「ケンイチ……」

そこにアネモネがやってきた。

「嬢ちゃんも来てたのかい」

「こんにちは！」

「それじゃ、一緒に食べようかね」

「うん！」

「悪いな……」

「いいってことさ！」

ニコニコ顔の婆さんはケーキを持って奥へ行ってしまった。

「なにか面白そうなのはあったか？」

「この本を買って？」
アネモネが、青い表紙の大きな事典のような本を両手で持っている。

「おお、解った――後でな」
「うん」

アネモネと話をしていると、婆さんが戻ってきた。
トレーの上に、切ったロールケーキと、カップに入った飲み物が載っている。

俺はブラックコーヒーが飲みたいところだが――さっきの話じゃないが、ここは空気を読もう。

「メリッサ！ こっちへおいで、オヤツがあるよ」
「え？ オヤツ？ どこどこ？！」

バタバタという足音と共に、暗い紫色のワンピースを着た、メリッサがやってきた。

歩く度に、白い太ももがチラチラと見えている。

「ああ、ケンイチが来てたのね？」

「こんにちは」

「アネモネ、こんにちは」

「ほら、美味しいお菓子を持ってきてくれたから、一緒に食べようじゃないか」

「やったあ！」

「なにやら辺境伯様は、お前に頼みがあるようだよ」

「頼みつつのは、魔物退治だ」

「ふーん、魔物ねえ……」

俺は、湖に住み着いているクラーケンの説明をした。

「ちよいとお待ちよ。まさか、そんな危険な仕事をお菓子で頼もう

ってんじゃないだろうね？」

「お婆ちゃん、ケンイチにお世話になったんだから、ここは恩を返す場面でしょ？」

「いいや、命がけとなると話は別だ。可愛い孫の命がかかってるんだからさ！」

「もちろん、それ相応の対価を払うよ」

俺は、アイテムBOXからプラチナ硬貨を取り出した。

「銀貨？ そんなもので――」

「婆さん、これは白金貨だ」

「な、なんだって!？」

婆さんが、俺の手から硬貨を奪い取った。

「これが白金貨の本物だったのかい？」

「ちょっと魔力を流してみれば解る」

俺の言うとおりに、婆さんが硬貨に魔力を流し始めると、丸く輝く板がほのかに光り出した。

「おおおーほ、本物！ あたしゃ、この歳まで生きて白金貨なんて初めて見たよ！」

「綺麗……」

婆さんとメリッサが、プラチナ硬貨を覗き込んでいる。

この店は暗いので、プラチナの輝きがよく見えるのだ。

「それを対価にやる」

「よっしゃ！ それじゃ、あたしも参加しようじゃないか」

突然、婆さんがとんでもないことを言い出した。

「ええ？ 本気かよ、年寄りの冷水だぜ？」

「バカをお言いじゃないよ。それに、ダリアの爺にも、野盗退治に

参加させたそうじゃないか」

「あのときは、人数不足でな」

野盗退治も大変だったが、相手の人数が多かっただけで、相手は人間だ。

今回の相手は、巨大な化け物——難易度が違う。

「当然、あたしの対価も白金貨で払ってもらうかねえ、ひひひ」

「ごめんなさい、ケンイチ。お婆ちゃん、言い出したら聞かなくて」
これも、さっきの話になるが、この世界の女性は強くて、行動力の塊だ。

白金貨に目が眩んだようにも見えるが。

「まあいいよ、メリッサ。王立学校を揺るがしたという、スノーフレークお姉さまの実力を拝見といこうじゃないか」

「はん！ まだまだ若いもんには負けないよ！」

「悪いが、さっき説明したように相手は強敵だ。死んでも怪我しても自己責任だぜ。もちろん骨は拾ってやるが」

「任せておきなよ！ ひひひ」

アネモネと顔を見合わせ、少々呆れる。

予想外に魔導師が1人増えた。大幅な戦力アップだ。

これで、レイランさんが参加してくれれば、鬼に金棒だろう。

160話 昨日の敵は今日の友

俺はアキラと一緒に夜の湖に繰り出し、明るく輝く集魚灯を船で引っ張り回して、クラーケンのやつをおびき寄せた。

俺の策略どおりに化け物は姿を現し、まちがいなくクラーケンがいることが確かめられた。

出現した化け物は、脚が1本欠損しており、俺たちが遭遇した個体に間違いない。

エンカウントした場所に目印のブイを放り投げると、俺たちはすぐさま帰宅した。

これで敵の、おおよその位置が判明したことになる。

マーキングは完了したが、クラーケンが大幅に動いてしまえば、また一からやり直しなのだが……。

全ては、この湖が大きすぎるのが原因だ。

やつがじつとしてくれることを願うしかない。

捕捉できなければ、夜に集魚灯を引っ張りつつ、迎撃するという夜間戦闘を強いられるだろう。

できれば、それは避けたいのだが……。

俺は、アストランティアへ行き、道具屋の婆さんの孫であるメリッサに応援を頼んだ。

彼女は王国でも有数の魔導師であり、実戦経験も豊富だ。

貴重な戦力を確保できたと思ったのだが、道具屋の婆さんも戦闘に参加すると言い出した。

そりゃ、かつては有名な魔導師だったらしいが、年寄りの冷水だぜ。

俺はサクラに戻ると、早速クラーケン討伐の準備をはじめた。少々、長期戦になることも予想して、前線基地を設置。

シャングリ・ラから購入したコンテナハウスを5基並べて、参加者に自由に使ってもらう。

もちろん物資もこちら持ちだが、参加者はそれほど多くない。

俺側から、俺、アネモネ、アマランサス、ミャレー、ニャメナ。

アキラ側から、アキラ、レイランさん、獣人のミャア。

あとは、婆さんとメリッサだ。

看板も立てた。

「対クラーケン討伐作戦本部」

無論、日本語であり、板に墨で書いた。書道初段の俺の筆が火を吹くぜ。

なんか、こういうのを立てるとフラグも立ってしまうような気がするが……。

「たいくラーけん、とうばつさくせんほんぶ」

声に出して看板を読んだのは、アネモネだ。

「え？ もう、こんな難しい漢字まで覚えているのか？」

「うん、ケンイチのことは、なんでも知りたいから」

「いやいや、無理をして知らなくてもいいんだぞ？」

「そんなことはないよ」

やべえな。あまり危ない日本の本は読ませられないな。

「ん」

アネモネが俺に抱きついてきたので、頭をなでてやる。

魔法は凄いし頭は超いいし、やっぱり歴史に名を残す子なんだろうな。

そこにリリスがやってきた。

「あ！ アネモネ！ また妾のおらぬところで！」
「っくん！」

アネモネが、リリスの言葉に横を向く。

「離れるがよい！」

「や！」

「それでは、妾も抱きつくぞえ！」
リリスも一緒に俺に抱きついてくる。

「待て待て、受け入れ準備ができないじゃないか」
「貴族らしく、ふんぞり返って、部下をこき使えばよいであろう」
「こんなものの整備とか、俺にしかできないし。やって来る相手は、この国でも有数の魔導師だ。礼は尽くさんとな」
「うむ」

辺りを見回すと、誰もいないのだが――。

「マイレン！」

「お呼びでしょうか？」

すぐにメイド長のマイレンが姿を見せる。

「討伐に参加する魔導師の面々が来るから、世話を頼む。人数を見て料理もな。いつものウチの食事でもいいぞ」

「かしこまりました」

「いつもの食事だが、王族が食しても不満がないものじゃからのう」
「王族のお墨付きがもらえてよかったよ」

「私は、ケンイチの料理が食べたいのに……」

「アネモネ、これだけ人数が増えたら無理だよ」

「むー」

そこに、アストランティアへと続く道から、馬車がやってきた。荷馬車ではなくて、黒いボディで1頭だてのオープン型の馬車だ。

「ケンイチ！」

馬車の上から手を振る女性がいる。

やってきたのは、魔導師のメリッサとその祖母——道具屋の婆さんだ。

2人とも、黒いワンピースとローブという、いつもの格好だが、大きな鞆を持っている。

魔導師はこういう格好をするのが、決まりなのだろうか？

そりゃ、見れば魔導師だって解るが……。

「おお、メリッサよく来てくれたな」

「これは王女殿下にはご機嫌麗しく……」

「よいよい、妾はもう王族ではないゆえ」

「2人共、まだ屋敷ができていないから、あの黒い部屋を使ってくれ」

2人をコンテナハウスに案内する。

「ほ、こいつは鉄の箱かい？」

「頑丈だが、日が照ると暑いのが、少々欠点だな……そのときは、なにか考えよう」

「暑かったら、魔法で冷やせばいいし」

まあ、みんな魔導師だからな。

メリッサの話では、馬車をレンタルしてここまでやって来たと言う。

「なんだ、連絡くれれば迎えに行ったのに」

「あまり世話になると、今後の儲けに支障が出るからねえ」

婆さんが俺の顔を見て、ニヤニヤしている。

貴族になったし、白金貨なんて持っているから、もっと金目のも
のを持っていると踏んだに違いない。

まったく、がめつい婆さんだ。

「お婆ちゃん、またそんなこと言って」

「そんなに金を儲けたって、あの世には持っていけねえんだぜ？」

「ひひひ、余計なお世話だよ。まったく、こんなものまで持っているなんてさ……」

婆さんがコンテナハウスの壁をペチペチと叩き、メリツサが中を
覗いている。

「ふうん、中は綺麗ね」

「最低限のベッドと戸棚だけ置いてある。欲しいものがあれば言っ
てくれ」

「はいよう」

婆さんが、コンテナハウスの中に入って、荷物を置いた。

「常にメイドが待機しているから、何かあれば彼女たちに」

「解ったわ」

婆さんたちと話していると、次の1陣がやってきた。

アキラの運転するプ○ドだ。

「ケンイチ！」

「おゝオッス！」

「オッスオッス！」

車から降りてきたのは、アキラとレイランさん、そして獣人のミ
ヤアだが、もう1人いる。

銀色のアーマーに身を包んだ、金髪の女騎士の――えくと……。

「クレメンティーナさんだっけ？」

「クレメンティーナでいい。辺境伯殿」

そう言うと、彼女が俺に礼をした。実に貴族らしい振る舞いだ。

「ケンイチ、すまん。こいつがどうしても来たいって言うことを聞かなくてさ」

「何を言う！ 我々が異国の地で、なに不十分なく——いや過分に暮らせているのも、全て辺境伯殿のおかげではないか！」

「順調に暮らせているようでよかったよ」

「そこでだ！ 魔物退治という機会が巡ってきたのは、まさに天啓！ ここで義を返さねば、貴族の名が廃る！」

「あゝケンイチ。こいつは無視でいいから。こいつは俗に言う、無能な働き者だから、ミソツカスで」

「貴様〜！ 言うに事欠いて、この私を無能とは！？」

クレメンティーナが、アキラに掴みかかった。

「だってお前、いっつも戦闘の脚を引っ張るじゃねえか。マジで困るんだけど」

「う……ううううっ」

クレメンティーナが、アキラの胸ぐらを掴んだまま泣きはじめた。

「まあまあアキラ、ちょっと待て。クレメンティーナ、今回は船に乗って水上での戦闘だ。騎士の出番はないぞ？」

「その通りだな。ことわざにもあるだろ？ 『騎士を川に入れるマヌケ』ってな。大体だな、クレメンティーナ、お前は泳げないだろうが」

どうやら、隣の帝国のことわざらしい。

「それに、その鎧で水に落ちたらあつという間に沈んでしまう」

「アーマーを着たまま泳ぐ連中もいるようだけどな」

「ああ、日本の古流でも、甲冑を着て泳ぐのがあったな」

俺たちの会話を聞いていたクレメンティーナが、ボソリと返事をした。

「……それでは、ライトアーマーにする……」

「まったく……困ったもんだな、俺のチ○ポに負けた女騎士様は」
「うう……」

彼女に、なにかこだわりがあるのかとも思ったのだが――どうやら仲間外れにされるのが、嫌なだけみたいだな。

「アキラ、ライトアーマーなら、ライフジャケットがあるから大丈夫だ」

「そんなものがあるのか。それならまあ………しょうがねえなあ。センセ！」

「アキラに任せますよ」

アキラにセンセと呼ばれている、夜鳥のレイラン――艶やかな黒い髪と烏色のドレスに凶器とも言える爆乳。

「レイランさん。この度は依頼を受けていただきありがとうございます」
「ます」

「いいえ、辺境伯様には、素晴らしい贈り物をいただいたので、その恩に報いねばなりません」

「贈り物……って？」

「ケンイチ、これだよこれ！」

アキラが、胸の前で、ボインボインのポーズをしている。

「ああ、それでは、直しが上手くいったんですか？」

そういえば、レイランさんの爆乳がいつもより上向きになっている。

「これで走っても、回っても大丈夫になりました」

彼女がポンポンと、その場でジャンプしているのだが、巨大な胸がブルブルと一緒に跳ねている。

すげえ大迫力だ。思わず見入ってしまう。

そこにメリッサがやってきた。

「ちょっと！ その女は誰？！ 魔導師よね？！」

「ああ、紹介する。彼女は王国の魔導師メリッサだ」

「メリッサ・ラナ・ナスタチウムよ。見知りおきなさい」

彼女は、右手を顎の所へ持つてくるポーズを決めている。

「よろしくお願いいたします、メリッサ様」

レイランさんが深く頭を下げる。彼女は大魔導師とはいえ平民――相手は貴族なので、これが礼儀なのだ。

「メリッサ、こちらの女性が、帝国の魔女――夜烏のレイランだ」

「……は？」

メリッサの動きが止まる。

「お前は知らないのか？ 夜烏のレイランの名前は、ウチの獣人でも知ってたぞ？」

「し、知ってるわよ！ 帝国魔導界の重鎮じゃない！ なんてそんなやつが、ここにいるのよ！」

「俺がソバナで亡命させたんだよ」

俺の一言に、メリッサが仰天した。

「なっ！ なんてそんなことになっているの！？」

「まあ、話すと長くなるんだが――もう1人紹介する、帝国魔導師のアキラだ」

「知っているわ、最近あなたとつるんでいる、オッサンでしょ？
って帝国魔導師なの？！」

「そして、帝国の竜殺しでもある」

「……は？」

再び、メリッサの動きが止まる。

「帝国の竜殺しって知らないか？　ウチの獣人でも知っていたがなあ」

「知っているに決まっているじゃない！　なんでそんなやつが、ここにいるのよ！」

「峠で、そういう話が出てたじゃん。それで俺たちはソバナに行くって別れたろ？」

「確かに、そんな話は聞いたけど……本当に帝国の竜殺しなの？」

「メリッサ、間違いないぞえ」

そこにリリスがやってきた。

「ケンイチが帝国側に潜入、竜殺しに接触して亡命の手引をしたのじゃ」

「本当にそんなことをしてたの？」

「ああ、アキラと俺が同郷だと解ったんでな」

「平民から、いきなり辺境伯になったのじゃぞ？　普通の手柄では、こうはいかぬ」

メリッサが、すこし考えてから意を決し、リリスのほうを向く。

「……あの、失礼を承知で申しますが、陛下は乱心なされたのかと——貴族の間では噂になっておりまして……」

「まあ、言っても信じてもらえぬかもしれぬからの、ははは。じゃが、ケンイチのやった偉業からすると当然の褒美でもある」

俺は、直前にアマランサスとも揉めていたからな。

十分な褒美を渡さない——俺が帝国に寝返りかねないと、王家もそう思ったのだろう。

「ひひひ、この歳でまさか帝国の大魔導師と共闘することになるとはねえ」

「婆さんの的には、問題ないか？」

「問題もなにも、命がけの仕事になるんだから、強力な助っ人はありがたいだろう？ 白金貨のためさ」

この世界の白金貨の価値は命がけの仕事の報酬に匹敵するらしい。

「まさか、私が別れてから、こんなことになっていたなんて……」

「ははは、事実は物語より奇なりじゃ！」

リリスが腰に手を当てて、笑っている。

「彼らと共闘するんだ、仲良く頼むよ」

「うう……」

メリッサが、レイランさんの胸をチラ見している。

「レイランさんは、アキラの内縁だから、色々と心配するなって」

「あ……そうなの」

なんの心配をしているのか解らんが、メリッサはホッとした顔をしている。

そのあと、家の前でブリーフィングを行い、俺が持っている情報を彼らに伝えた。

野外のテーブルに、参加するメンバー——魔導師たちがついて
いるが、アキラの女騎士は後ろに控えている。

獣人たちは参加していない。彼女たちに難しい作戦内容は覚えられないからだ。

それに、相手がクラーケンだと二の足を踏むかもしれないし、強制はできない。

テーブルの上には、お菓子と飲み物が並ぶ。

俺とアキラは、ブラックコーヒー。その他は紅茶を飲んでいる。

「その数十エーター（数十m）になる巨大な魔物を仕留めようと言うのですね」

レイランさんの言うエーターは、帝国の単位でメートルに近い。

「その通りじゃ！」

「もぐもぐ——美味しい！」

レイランさんは静かに紅茶をのみ、リリスとアネモネはお菓子を頬張っている。

リリスとアネモネは、まだ花より団子って感じだな。

「レイランさんは、アキラからおおよそは聞いたと思いますが……」
アキラもクラークンを目撃したからな。

「ええ」

「イカという生物については……？」

「海に、そのような生物がいると、本の知識はありますが……」

「ケンイチ、海でもタコとかイカは食わないみたいだぜ？」

「そうなのか……美味しいのに」

「なあ？」

俺とアキラが顔を見合わせているが、メリッサが両手で自分の身体を抱えて、身震いしている。

「そんな魔物を食べるなんて、冗談はよして！」

「レッサードラゴンも、ワイバーンも美味かったじゃないか」

「トカゲとかは食べるけど、そんな得体のしれないものや、虫の類を食べるなんて」

どうやら、メリッサはこの手の食い物はダメのようだ。

——というよりは、なんでも食べる王族の連中が変わり者であっ

て、これがこの世界の住民のデフォルトなのかもしれない。

「ひひひ、こりゃ意外と大物のようだね」

俺たちの話を聞いていた婆さんが、ローブを被ったままニヤニヤしている。

「婆さん嬉しそうだが、なにかあるのか？」

「魔物が大きいと、魔石も大きいんじゃないかと思ってね」

その話を聞いて、俺はアイテムBOXに入れっぱなしの魔石を思い出した。

レッサードラゴンとワイバーンを解体したときに出た、大型の魔石だ。

「婆さん、デカイ魔石ならあるぞ」

俺はアイテムBOXから、魔石を取り出した。

黒くて、ソフトボール大の石だが、中にキラキラと金色のインクルージョンが含まれている。

「こ、こりゃ、見事な魔石じゃないか?!」

「俺が倒したレッサードラゴンとワイバーンのものだよ」

「なんだって?! お前さん、そんな化け物も討伐したのかい?!」
「その一つは私のものなんですけどお」

メリッサが、テーブルに肘をついて、むくれている。

お城で、俺に負けたことを思い出したのだろう。

「どういうことだい？」

「あれ? メリッサ、婆さんに話してなかったのか？」

「そんな格好悪いこと、お婆ちゃんに話せるわけないでしょ!」
婆さんにお城で遭ったできごとを説明する。

「そんなことがあったのかい……」

「まあ、王族に命令されて戦っただけだから、勘弁してくれよな」

「それにしても――相変わらず、下々に無茶させて楽しんでいるんだねえ」

「婆さんのときも、色々あったのか？」

「まあね、あたしは平民だから、色々嫌がらせを受けたもんさ」
貴族のメリッサは婆さんの言葉に少々気まずそうだ。

彼女は、アマランサスの言葉に乗って、俺と戦闘したりしたからな。

「これだけ立派な魔石なら、戦闘にも使えるよ」

魔石は魔力を蓄える電池として使える。

この力を使って、ランプやコンロなどの魔道具が動いているのだ。
魔石にアキラが手を伸ばす。

「ケンイチ、ちょっと魔石を貸してくれ」

「いいぜ」

アキラが魔石を両手に取り、集中しはじめると、丸い石に変化が現れる。

黒い石の内部が赤、黄色と変化して、最後は青い光になった。

「ケンイチ、これで満タンだ」

「へえ」

「俺の魔力は、センセに渡すことはできないが、こうして魔石を仲介させることで、俺の魔力をセンセに使ってもらえる」

「なるほど、俺でもできるのかな？」

「多分できるぞ？ やってみろ」

アキラに勧められて、俺も魔石を手を持ち、パワーを送り込んでみる。

祝福を受けて回復ヒールが使えるんだ。

怪我をした所を治療する感覚で、力を込めればいいんだろう。

試してみると、魔石の中に徐々に変化が現れ、最後はアキラが見せてくれたように、青い光が灯る魔石になった。

「ほう、これは見事なものだねえ！」

婆さんが2つの魔石を手にとって見ている。

「それじゃ——これを使えば、俺の魔力をアネモネにも使ってもらえるってことか」

「その通りだ」

「ほら、一つはお嬢ちゃんのものだよ」

婆さんが魔石の一つをアネモネに手渡した。

「綺麗……」

アネモネが魔石の中に見入っている。

「アネモネ、妾にも見せてたもれ」

「はい」

リリスが、アネモネから渡された魔石を覗き込んでいる。

「ほう……なんという美しさ。貴族で魔石を集めている連中がいるのもうなずける」

「それじゃ高い値段がつくんだな？」

「そのとおりじゃ」

「じゃが、王女殿下。それだけの魔石に魔力を充填できるとなると、魔導師の数が限られておりまする」

婆さんが、リリスに魔石の流通量の説明をしている。

「そうじゃろうのう……」

婆さんも魔石をジッと見つめているので、もしかしてかなり高い

のか？

「婆さん、その魔石って高いのか？」

「そうだねえ。この大きさなら1個金貨200枚（4000万円）はくだらないね」

「え？ そんなに高いのか？」

「ケンイチ、そりゃそうだよ。レッサードラゴンやワイバーンだつて、滅多に討伐なんてできないからな」

アキラは魔石の価値を知っているらしい。

「そういえば、アキラはドラゴンを倒して――魔石は？」

「言っただろ？ あのクソ女に全部取り上げられたってクソ女ってのは帝国皇帝のことだ。」

「命がけで戦って、全部取られたら……そりゃ、やってらんねーなあ」

「その通り！ もう、やなことを思い出しちゃった……ケンイチ、ビール！」

「ほい」

アキラにビールの缶を渡すと、缶を開けて早速飲みはじめた。

「かりっ！ このために人生やっているって感じだぜ！」

まるでオッサンだが、オッサンだから仕方ない。

「なんだい？ その金属の筒は？」

「婆さん、飲み物――エールだよ」

「なんだいそりゃ、そんないいもの、私にもおくれよ！」

まあ、今日は打ち合わせだけだから、いいけどさ。

俺の諦めをよそに、ビールを飲んだ婆さんが叫び声を上げた。

「こりゃ、美味すぎるよ！　こんないいものを隠してたのかい？！」
「別に隠していたわけじゃないよ」
婆さんが、ビールの缶をマジマジと見ている。

「婆さん、その金属は魔法の触媒に使えるから、あとで回収させてもらうからな」

「触媒？」

「ああ……」

俺の言葉を聞いて、婆さんは光よ！^{ライト}の魔法を使ったようだ。
テーブルの上に眩い光の玉が出現した。

「こりゃたまげた！　こんなものがあるなんて……」

「ダリアの爺さんには教えたぞ」

「あの爺——一言も言わなかったよ」

ブツブツ文句を言う婆さんだが——まあ爺さんとは知り合いだが、ライバル関係でもあるからな。

なにかの拍子で敵になることも考えられるし……。

「ちょっと！　私にも、こんな金属があるなんて話してなかったじゃない！」

メリッサがテーブルに手をついて立ち上がった。

「悪いが——メリッサとは、敵対する可能性があったからな。実際、俺の家族を危険に晒したことに關しては、少々のだかまりが俺の心には残っているんだぞ？」

「あれに關しては、悪かったと思っているわよ……」

「——とはいえ、戦闘時には、その金属は渡すから、有効活用してくれ」

「解ったわ……そちらの帝国側は？」

「彼らは、俺とは別經由でこの金属のことを知っていた」

「ええ、辺境伯様のおっしゃるとおりです」

レイランさんが、紅茶を飲みながら静かに答えた。

「ぐぬぬ……」

相手が帝国の有名魔導師だから、ライバル視したくなるのは解るが、仲良く頼むぜ……。

皆で打ち合わせをしていると、紋章官のユリウスとアマランサスがやってきた。

メリッサが席を立とうとしたのだが、アマランサスが止めた。

「ケンイチ様、王家からの書簡でございます」

ユリウスが手渡してくれた丸めた紙には、赤い蠟印が押してある。蠟印には尻尾の長い羽の広げた鳥が描かれている。

「王家の蠟印ってことは、俺以外が開いちやダメなんだよな？」
「もちろんでございます」

俺は丸めた紙を開いた。

161話 作戦前夜

家の前で、クラークン退治の作戦会議中。

作戦会議と言っても、戦闘で難しいことをするわけじゃない。

魔導師たちが船に乗って、クラークンをおびき出して、戦闘したあと――最後は俺の爆雷でとどめを刺す。

そのために爆雷は作ったが、俺が止めを刺すことに、こだわっているわけではない。

安全に仕留められれば、それに越したことはないし、これだけの魔導師が集まっているんだ、魔法で片がつくかもしれない。

作戦会議の途中、紋章官のユリウスが手紙を持ってきてくれた。

どうやら、王家からの手紙のようだ。

俺は蠟印で丸まった手紙を開いて読もうとしたのだが――。

「砂糖の――えーと……アネモネ読んでくれ」

「うん！」

言葉は普通に通じるのだが、読み書きは少々苦手だ。

簡単な読み書きなのだが、オッサンになると新しいことが中々会得しにくくなる。

『砂糖の販売について、許可するのはやぶさかでないが――その製造法を知らせよ。円卓会議アルストロメリア』

俺は失念していたのだが、この国で砂糖と塩を売るためには、国の許可がいるのだ。

その手続きをユリウスがやってくれたらしい。彼は優秀だ。

「アルストロメリア様から、手紙が来るってことは、あの方が摂政をしているのだろうか？」

「おそらくは……」

「それではユリウス、俺の言葉を書き留めてくれ」

彼が胸のポケットから、俺が渡していたメモ帳とボールペンを取り出した。

「ケンイチ様。お願いいたします」

「えーと—— 一緒にお送りする植物を育てて、茎の汁を絞ることで砂糖になります。なお、植物の育成には大量の水が必要になるので、普通の畑では育ちません——こんな感じか。前後にそれらしい挨拶などをつけて、サトウキビの苗と一緒に王都へ送ってくれ」

「かしこまりました」

「枯れないだろうか？」

「獣人の飛脚を使えば、数日でしょうから。土がついていれば問題ないかと……」

「解った——それでは、よろしく頼む」

「ははっ！」

ユリウスが一礼して仕事へ戻ったが、アマランサスが立ったままなので、椅子を引いてやった。

彼女が一礼して、椅子に座る。

「アマランサス、王都でサトウキビの生産を試みるだろうか？」

「王都でも砂糖は欲しいでしょうから、十分に考えられると……」

「しかし、水がいるからなあ。川の水じゃ少々——うーん、そういうえば、ソバナの近くに湖があったな。あそこなら栽培可能だろ」

「その場合、レインリリー公爵家の重要性が、さらに増すことになりますわえ」

「帝国も欲しがるだろうしなあ」

「王家としても、公爵家が力をつけすぎるのを、警戒すると思われ

ますが」

「それなら辺境伯領の専売にしたほうが、アルストロメリア様も安心安全だな」

「はい」

アルストロメリア様の名前を出す度に、アマランサスが俺を睨むのだが……。

「ケンイチ、砂糖は王国でも専売なのか？」

「ああ、帝国もそうなのか？」

「まあな」

「砂糖が簡単に入手できるようになる——というのは素晴らしいことですね」

レイランさんが上を向いて妄想している。

おそらくは、砂糖が手に入ること、色々なお菓子文化が発達することを夢見ているのだろう。

ユリウスが追加の連絡を伝えてくる。

「それから、ケンイチ様。ノースポール男爵様から、近々お伺いしたいと連絡がございました」

ユリウスが確認したということは、公式な書簡ではなかったのだろう。

普通に連絡ってやつだ。

「おお、懐かしい。彼と別れたあとに、こんなことになるなんて——承知したと、返信をしてやってくれ」

返信しても、もうこちらに向かっているかもしれないが……。

その向かい——俺とアマランサスの話を聞いていたメリッサが頭を抱えている。

「ちょっと待って——ここで砂糖の生産ですって？」

「ああ、もうすぐ始まるぞ？」

「なんでそんなことになっているのよ！」

「なんでって言われても困るなあ……。」

「なんでって、ここの基幹産業にするつもりなんだよ。砂糖があれば酒も作れるしな。サトウキビから作る酒は——ラムだっけ？」

「そうだな。ラムにするのは蒸留器が必要になるが……。」

アキラがラムの説明をしてくれた。

「その他の産業を興すためにも、クラーケン退治が必要だ。岸边で作業する住民が狙われたりしたらまずい」

「そうだな、岸に獲物が沢山いると解れば、やってくるかもしれない」

「街に明かりも増えるし、その明かりを辿ってくる可能性もある」
アキラと話していると、メイド長のマイレンがやってきた。

「ご主人様、夕飯のメニューはいかがでしたしょう」

「そうだな、人数が多いからカレーにしよう。一番無難だろう」

「やった！ カレーだ！」

カレーと聞いたアネモネは嬉しそうだが、リリースが俺のほうを見て、ニヤついている。

「リリース、どうした？」

「いや——領主らしくなってきたのう……と思うてな」

「はは——まあ、それなりにな」

作戦会議は終了。とりあえず伝える情報は、全て協力してくれる魔導師たちに伝えた。

——とはいえレイランさんたちは、アキラから話がいつているし、メリッサと婆さんだけなんだけどな。

あとはクラーケンとのガチンコ勝負だな。

そのあと、サトウキビ畑を見回って、順調な生育を確認。

定期的に成長促進の魔法を使ってもらっているので、成長が早い。こんなことが可能なのも、さすが異世界だが——いくら魔法を使っても水と肥料は供給されない。

カラカラの痩せた土地で魔法を使っても、成長促進できないのだ。そのため、定期的に水と肥料を与える必要があるのは、普通の畑と全く一緒。

要は、魔法を使って成長を早送りしているだけってことで、成長促進させるためには大量の水と肥料が必要となる。

俺がいる間は、シャングリ・ラから化学肥料を購入できるが——俺になにかあれば、それがストップしてしまう。

村でも堆肥作りを指導して、肥料の一定供給はできそうであるが——。

魔法で肥料成分を作ることはできないだろうか？

「うーん」

考え込みながら——ぐると村を巡回して家に帰ってくると、背中から声をかけられた。

「旦那！」

振り向くと、なにやら懐かしい顔。

ソバナに向かう峠で世話になった獣人3人組だ。

皆が革の鎧と、剣を装備しており、獣人らしく動きやすい格好だ。

「よおっ！ お前らか。こんな所までやって来たのか？」

「アストランティアの近くで、新しい領ができたって聞いてやってきたんだ。旦那はアストランティアに帰るって言ってただろ？」

そう話すのは、3人組のリーダー格のミケ子だ。

「それだけの情報で来たのか？」

「いいや——森猫様と一緒に暮らしていて、獣人のメカケを囲っているって聞けば、旦那だと思ったよ。ははは」

「そうそう」「そうなんですよねえ」

背が小さい黒いチビ子と、サビ柄の太子がうなずいている。

ミケ子が俺に、身体を擦り寄せてきた。

「ねえねえ旦那。獣人のメカケがいるなら、あと3人ぐらいいいじゃない？」「そうそう」「よろしくお願いします」

「待て待て、増やすなって言われてるからな」

そこにミヤレーとニヤメナがやってきた。

「聞き覚えのねえ声が聞こえると思ったら、てめえらか。こんな所まで追っかけてきやがって！」

「ふぎゃー！」

「妙なおいを旦那につけるんじゃないか！」

2人が3人組を押し分けると、俺に抱きついてスリスリしている。

「なんだよ、ちょっとくらい分けてくれてもいいじゃないか！」

「こっちの毛皮をなでもらう時間が減るだろ?!」

「そのとおりじゃ。この毛皮のツヤツヤがなくなるにゃ！」

「そうだぞ、旦那になでもらうと、気持ちいいんだ……」

ニヤメナが、俺に抱きついてうっとりとした表情を浮かべる。

「トラ公なんて、気持ちよすぎて、小便を漏らすにゃ」

「クロ助！ それは今言うところじゃねえだろ！」

「ふぎゃー！　羨ましい！」
ミケ子が、齒を剥き出す。

「お前らは、ガサツでズボラな男どもに突っ込まれていればいいにや」

獣人の男ってのは、女をなでたり可愛がったりしないらしい。

「「ぐぬぬ……」」

睨み合ってる獣人たちの間に割って入る。

「こらこら、喧嘩するな。スマンが魔物討伐の準備で忙しくて、お前たちに構っていられない」

俺の言葉を聞いた3人組の目が光る。

「魔物討伐?!」 「そりゃ、聞き逃すわけにいかねえな」 「そうだよねえ」

「あゝ無理無理、お前らじゃ腰抜かして動けなくなるだけだからな」
ニヤメナの言葉に、ミヤレーのツツコミが入る。

「トラ公は、自分の失敗を柵に上げてるにや」
「うるせえ！」

「湖の上での戦いになるんだよ。獣人たちの出番はちよつとないんじゃないかなあ——と思ってな」

一応、3人組の説得を試みるのだが、ミケ子が食い下がる。

「そんなのやってみないと解らないじゃないか！」

「船も、俺たちの分しかないしな」

「そうだにゃ！　引っ込んでろにゃ！」

「「ぐぬぬ……」」

「こら、煽るんじゃない」

実際、あんな巨体だと剣も役に立たないだろうし、ボウガンなども効き目が薄いだろう。

3人組には諦めてもらうしかないが、彼女たちはここに移住を希望しているようだ。

そうになると、面倒をみてやらないとだめだな。

現状、住宅がまったく足りていないので、コンテナハウスを一個貸してやった。

3人で使うようだ。

「旦那、この箱を借りていいのかい？」

「ああ、家がまったく足りてないからな。もう少しすれば公営の住宅が建つはずだ」

「そこを借りられるのかい？」

「そうだ、安い金額でな——だが、領の持ち物だから、悪事に使ったりするとすぐに追い出されるぞ？」

「そんなことするはずがねえだろ！？」「そうですよ」

黒いチビ子と、太子が毛を逆立てている。

「はは、悪い悪い。仕事が欲しいなら、毎朝俺の家の前に来れば人手を募集している部署が発表される。その仕事をやれば、日銭がもらえるからな」

「おおっ！」「やったぜ！」「嬉しいです」

「この村には、お仕事紹介ギルドがないからな。もう少し大きくなれば、できるかもしれないが……」

「まあ、旦那の腕の見せ所だな！」

ミケ子が笑っているが、そのとおりだ。

領の経営を破綻させてしまうと、こうやって集まってきた領民を路頭に迷わせてしまう。

ちよっと反則だが、俺のチートもあるしな。

領の経営を軌道に載せるためには、それもありだろう。

夕方になったので、皆で飯を食う。今日はカレーだが、面子が多いのでテーブルを複数くっつけている。

メリッサと婆さん、アキラの家族が同じテーブルについている。アキラとアマランサスは酒を飲んでいるが、彼は――祝福を使って酒を分解できると言っていた。

まあ毒も効かないって話だしな。

彼ができるってことは、俺にもできる可能性があるので、試しにやってみた。

少しワインを飲み、ほろ酔いになったところで酒の分解を試みる――できた！

できたからといって酒を飲もうとは思わないが、付き合い酒がしやすくなったのは確かだろう。

ここである考えが浮かんだ。

俺の近くで酒を飲む、ウワバミだというアマランサス。

高い戦闘能力を持っている彼女も祝福と似たような力を持っているのではないだろうか？

リリスの能力が、対象者に祝福を与える力なら、その祝福を内包している王族がいてもおかしくない。

祝福があるなら、酒も分解できるだろうしな。

「こりゃ美味しいねえ！ 香辛料料理かい？！」

この中では、婆さんだけがカレー初体験だ。

アキラは、俺からカレーをもらい、彼の家族と一緒に食べているからな。

「この領は、香辛料の規制がないからな。食いたい放題だぞ？」

「アストランティアでも、ソガラムのやつがいなくなって、いやら

しい商人がいなくなったからねえ」

「ケンイチのおかげだよねえ」

アネモネがカレーを頬張りながら言う。

「ケンイチ——そなた、アストランティアでも色々やっておったのかえ？」

「まあ、その悪徳商人がプリムラを脅してきたもんだからさ」

「ケンイチを脅すなど、命知らずも甚だしいの」

「そのときは貴族に知り合いもいなかったし、なるべく穏便にしよう」と結構気を使ったんだぜ？」

「いまなら、まるごと吹き飛ばしてしまえばいいにゃー！」

「ウチのアキラなら、油を撒いて火を点けるにゃー！」

ミヤレーとミヤアがそんなことを言っている。

ちよつと離れた場所で、獣人たちがカレーを食べながら、聞き耳を立てていたのだろう。

「おれはなあ——一応、平和主義者なんだよ？」

「そなたが言うのと冗談にしか聞こえんが……」

リリスがつぶやく。

「あ！俺も俺も！」

アキラの言葉に、カレーを食べていたクレメンティーナが反応した。

「お前のどこが、平和主義者なんだ！」

「フヒヒ、サーセン！」

「そんなことはないぜ、お姫様。旦那はありえないってぐらい優しいし——まあ、たまに凄い怖いことを言い出すから、逆に怖いんだけだよ」

ニヤメナからすると、俺が人間の身体の構造を知っていることが、

すごく怖いらしい。

「そりゃ、考え方——教義の違いみたいなものだからな。なあ、アキラ？」

「ははは、なんだ俺もそのグループの中に入るのか？」

「獣人たちは、俺が人間の構造を知っているのが怖いって言うんだよ」

「確かに俺も、ウチのミャアに、それは言われたことがあるな。獣人なんて見たことがなかったから興味があるし。人間とどれだけ違うんだろう——とかな？」

アキラは戦場で死んだ獣人たちの身体を調べたそうだ。彼らの頭蓋は、耳の部分が大きくえぐれていると言う。

「そのえぐれた部分に、デカイ蝸牛器官が入っているんだろ？」

「そうだ、だから耳がいいんだ」

アキラが、スプーンを立てると頭に当てて、耳を模している。

「その反面、脳の容量が小さくなるだろうからな」

「ケインイチ——獣人たちが文字を覚えられないのも、そのせいだと思っ

「俺も考えたことがある。多分、そのせいだとは思っが——単に知能が低いというよりは、文字とかを認識する部分が、まるごと抜けているような感じだと……」

「文字を認識できないから、計算もできない……」

「そんな感じだと思う。元世界にもそういう病気があったろ？」

「失読症だっけ？」

アキラと会話をして、獣人の身体についての情報をやり取りしていると——ふと気がつく。

周りがドン引きしていた。

「ああ、スマンスマン、飯のときにする話じゃなかったな」

「皆様、ウチの者が、申し訳ございません」

レイランさんも頭を下げて、アキラを睨みつけた。

「フヒヒ、サーセン」

「まったくアキラは、周りに配慮しろ」

クレメンティーナの言葉は、俺たちが使う空気を読め——と同義であろう。

謝る俺とアキラに、リリスが訝しげな顔をしている。

「そなたたちの話を聞いていると、頭のどこの場所で、なにを司っているのか、知っているような素振りだが……？」

「詳しくってわけじゃないが——頭の中に脳みそが入っているだろ？ 文字を認識したり手足を動かしたりって、脳みそが司る場所が予め決まっている」

「ほう？」

「それだけじゃない。人が無意識にしている、呼吸や心臓の鼓動の調節なども司る場所がある」

「なるほどのう……」

黙ってカレーを食べていた婆さんが反応した。

「お前さん、只者じゃないと思っていたけど……ここまでとはねえ」
「身体の構造を知っていれば、病気や怪我の治療にも役に立つからな」

「そうそう、病気ってやつには原因がつきものだからな」
アキラの言うとおりだ。

「逆に人体を効果的に破壊することも可能になる。武術と医学ってのは常に表裏一体だ」

「柔道とか柔術家が接骨院とかやってるよなあ」

「そうだな」

「たとえば？　どんなことが可能になるの？」
話を聞いていたメリッサからの質問に答える。

「俺たちの周りにある空気。これは複数の気体の混合物だ。その組成をいじること、生き物を窒息させることができる」

「そんな面倒なことをするなら、酸素と血中ヘモグロビンとの結びつきを邪魔したほうが簡単かもな」

「おお、その手もあるな。さすがアキラ」

「アキラもそういう知識を持っているのですか？」

「まあね、センス。知りたいなら教えてあげるよ」

「……」

メリッサが固まっているが、アネモネが声を上げた。

「息を止めるなら、もっといい方法があるよ！」

「なんだい？　アネモネ」

「ゴーレム魔法で水を操作して、敵の口に入れればいい」

「おおっ！　溺死か！　そういう手もあるな！　さすがアネモネ」

「えへ」

「俺のマヨネーズと一緒にだな。ははは」

アキラは、マヨネーズでドラゴンを窒息させたそうだからな。

「ちょっと待って、ゴーレム魔法で水を操作って？」

メリッサの言葉に、アネモネがテーブルの上に水を撒いて、魔法で動かしてみせた。

それを見た婆さんが驚く。

「なるほどねえ。ゴーレム魔法にこんな使い方があったなんて」

「婆さん——これは帝国じゃ普通に使われる技術だぞ？」

「王国じゃ、ゴーレム魔法ってのは、人型を動かす魔法って固定観

念ができちまつてるからねえ」

「水を操って、水面の上で船を動かす実験にも成功したぞ？」

「なるる！　そういう手もあったか！」

アキラが手を叩いた。

「かなりのスピードを出せる——アキラたちは試したことはなかったか？」

「さすがに船はなかったな」

「アキラ——船を動かすだけじゃなくて、ゴーレムを使って、モーターが作れるかもしれない」

俺の言葉に、彼がアイテムBOXから、なにかを取り出した。

「じゃーん！　実は、もう作っているのですた！」

彼が取り出したは、元世界のと少々形が違うが、電動マッサージ器。

ボディは木製だ。一体、なにに使うのかは知らないが——ゲフンゲフン。

それを見た、レイランさんとクレメンティーナが真っ赤になっている。

「それ、わざわざ作ったのか？」

「へへへ、苦労したぜえ」

「あ、アキラ！　早く、それをしまいなさい！」

真っ赤になったレイランさんが、必死にアキラにしまうように言っている。

「おお！　ケンイチが使ったものに、よく似ておるのう！」
見覚えのある形に、リリースが反応した。

「まあ、同じようなものだよ」

「なんだ、ケンイチも作ったのか。まあオッサンなら、しゃーないな――フヒヒ」

「まあな。それって回転子がゴーレムになっているのか？」

「そうだ。電池は魔石な」

「俺の思ったとおりだな。構造は簡単そうだが、魔石からの動力伝達回路が解らないから、カールドンさんに聞くしかないな」

俺とアキラの会話にリリスが割って入ってきた。

「それで、なにが作れるのかえ？」

「リリスのドライジーネが魔道具で動いていたじゃないか。あれの大きなものを馬車につければ……」

「ケンイチの乗っている鉄の召喚獣のような乗り物が、我らにも作れると？」

「まあ、上手くいけばな」

「でもなケンイチ。馬車を動かすほどの魔力を蓄えた魔石となると、相当でかい石じゃないと」

「チャージするのも大魔導師クラスじゃないとか……やっぱり、あまり普及しそうにないか……」

乗り物じゃなくても、利用できる場所はある。

たとえば、サクラで稼働している製材所。あそこで動いている大型の丸のこは水力で動いているが、魔石とモーターを使えば、水のない場所でも稼働できる。

「……」

俺たちの話を黙って聞いていたメリツサに、アマランサスが言葉をかけた。

「世の中、知らないことばかりじゃのう、メリツサ？」

「はい……アマランサス様」

皆で楽しく食事をしていると、俺の足下にベルがやってきた。

「にゃー」

「ベル、今日は遅かったな」

俺の脚に身体を擦り付ける彼女に、アイテムBOXから出したネコ缶を開けた。

「にゃー」

俺は、椅子から降りるとしゃがんで、ネコ缶を食べている彼女の背中をなでる。

「そうだー今日はお母さんと寝るか」

「にゃー」

「そうかそうか」

「私も一緒に寝るー!」

カレーを食べ終わったアネモネが、俺の所にやってきて抱きついた。

「たまには、お母さんと2人きりにしてくれよ」

「にゃー」

ベルが、アネモネの周りを回ってすりすりしている。

「うー解った……」

珍しく、1発でアネモネが引き下がったな。

食事が終わり、明日からクラーケン討伐作戦を開始することを皆に伝えて、解散となった。

「よっしゃ、ベル行こうぜ!」

「にゃー」

暗い道を彼女と一緒に歩き、ツリーハウスを目指す。

ツリーハウスの下に到着すると、ベルはまっさきに階段を登った。部屋の中はメイドたちによって、いつも綺麗に掃除されており、一分のスキもない。

ここは、元王族の2人も使うので、それなりのメンテナンスが求められているのだ。

「ふ〜」

ベッドの上に身を投げ出して、大の字になった。

「にゃー」

「いや〜領主ってのは色々大変だな」

「にゃー」

俺の隣に香箱座りしているベルの身体にブラシをかけてやる。

彼女と2人きりだが、当然なにかするわけではない。

ブラシをかけ終わり、ベッドの上にブラシを放り投げると、横になった。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

——白い霧の中。

あれ？ 俺はどうしたわけ？ ぼんやりとした頭で考えても解らない。

1m先も見えないホワイトアウトだが、足下の感触や音から原っぱだと解る。

そのまましばらく進むと、少し霧が晴れて大きな木が見えてきた。太い幹に、沢山茂った緑の葉。うねうねと地面を這う根っここの所に誰か人がいる。

よく見えないが、白いワンピースを着ているようだ。

さらに近づくと、少々浅黒い肌に黒く長い艶やかな髪をした女性が出た。

揃えられた前髪に、つり上がった大きなエメラルドの目と優しく微笑む口元。

「やあベル」

耳も尻尾もないのだが――なぜかしらないが、俺はその女性がベルだと思った。

微笑む彼女が、俺に手招きをして太ももを指差す。

俺は招かれるまま、彼女の柔らかい太ももを枕にして寝転がった。

「いつもすまないな」

「それは言わない約束でしょ？　それに、私のこの命はあなたのもの……」

少しハスキーだが、優しい声が俺の耳に届く。

俺はそのまま目を閉じると、身体をなで回す彼女の掌の温かみを感じながら眠りについた。

162話 助っ人

サクラに大魔導師たちが集結、作戦の打ち合わせをした――翌朝。俺は、ツリーハウスの部屋で目を覚ました。目の前には、俺の顔を覗き込むベル。

「にゃー」

「おはようベル。お前って美人だったんだな」

「にゃー」

窓から入ってくる朝日にきらめくビロードのような彼女の毛皮をなでると、ゴロゴロと大きな音を立てる。

チーターとか、山猫とか、ジャガーとか、サーバルとか大型のネコ科の動物を飼うのが夢ではあったが、異世界でその願いがかなうなんて。

――と言いたところだが、彼女はただの猫ではない。

かなりの高い知能と戦闘能力を持つ、人智の及ばぬ生物に見える。ゴロゴロしている姿は猫んだけどねえ。

「さあ、ベル。朝ごはんにしよう。皆が待ってる」

「にゃー」

彼女と一緒にツリーハウスを出て階段を降りると、皆の所へ向かう。

村では家の前にテーブルが設置されて、すでに食事の用意が整っていた。

テーブルには、メリッサと婆さんが座っており、こちらに手を振っている。

「随分とのんびりな領主さまだねえ」

「婆さん、腹が減ったのなら、先に食べてもいいぞ？」

「さすがに王族より先には食べられないねえ、ほほほ」

俺の所にマイレンがやってきた。

「悪い、寝坊したかな？」

「大丈夫です。まだリリス様とアマランサス様がいらしてません」

「にゃー」

先に、ベルにネコ缶をやる。

そこにアキラたちがやってきた。

「オッス！ ケンイチ」

「オッスオッス！」

「今日からやるのか」

「ああ、今日からだ。しばらく地獄の一丁目まで付き合ってもら
ぜ」

「任せろ」

「地獄って住所があるの？」

そう言ってやってきたのは、目を擦っているアネモネだ。

メイドたちが食事の準備をしてくれるので、彼女のパン焼き器も
出番がない。

——とはいえ、同じパン焼き機をメイドたちも使っているので、
味は同じだ。

人数が増えたので、そろそろパン焼窯が欲しいところだな。

「おはようアネモネ——地獄の住所ってのは、たとえばよ」

「ふーん」

俺とアキラが缶コーヒーを飲んでいると、リリスとアマランサス
も起きてきた。

ちなみに、コーヒーの黒い色合いは評判が悪く、飲み物に見えな

いらしい。

皆が揃ったので、朝食になる。

メニニューはベーコンエッグに、スープとパン。食べたい人には、グラノーラがある。

食卓にのぼったベーコンはメイドたちのお手製だ。シャングリ・ラで買った本でベーコンの作り方を教えてあげたら、自分たちで作りはじめた。

お城の料理人サンバクさんのような超人的な感覚はないが、彼女たちの料理の腕も中々のものだ。

「ケンイチ、今日からやるのかえ？」

「ああ、リリス。とりあえず――1週間ほどだな」

「ぐぬぬ……妾も一緒に行きたいところだが……」

「だめだめ、戦闘ができないんじゃない――それにかなり危険だ」

「それは解っておる！」

「こればかりは、わがまま言われても、連れていけないな」

「……」

自分でも無理だと解っているのに、これ以上はリリスもなにも言わなかった。

「戦闘などに行って脚を引つ張らずとも、リリスには沢山の仕事が残っているぞえ？」

アマランサスが行政官の仕事をしているが、彼女が留守のときはリリスが代行ということになっている。

領主が不在のときは、領主夫人が代行することも多いとはいえ、普通は政には素人で、役人の言いなりになってしまふことが多いらしい。

ユーパトリウム子爵夫人だったカナンのように、商人のいいように利用されてしまったのかな。

サクラには、紋章官のユリウスもいるので、彼にやってもらう手もあるが……。

まあ、リリースにも政をまつりごとやってももらわないとな。その能力はあるし、俺よりは政治に詳しい。

元世界の政治の知識がある俺だが、この世界ではあまり役には立たないし。

「大丈夫、リリース！ ケンイチは、私に任せて！」

「アネモネも、たくましくなったなあ……」

「ケンイチと一緒になら、どこでも行くんだから」

嬉しいのだが――子どもにあまり危険なことはさせたくない――なんてことを言ったら、怒るだろうしなあ。

やはり、大人として扱って、彼女の才能を伸ばすべきなのか。

食事が終わって、出発の準備をする。

俺もアキラもレザーアーマーを着て、その上からオレンジ色のライフジャケットを羽織る。

獣人たちも鎧を装備した。いつぞやソバナのドワーフの店で買ったものだ。

ライフジャケットも装着させようとしたのだが――やはり動きにくいと言って、着てくれない。

彼女たちは、泳ぎが上手いので平気だとは思うが……。

アキラの家族、クレメンティーナにも革の鎧に着替えさせ、ライフジャケットを装備させる。

「クレメンティーナ、中々似合うじゃないか」

アキラが女騎士の周りをグルグルと回って品定めをしている。

「どうも、心もとない気が……」

彼女は、体中あちこちを触って、気にしているようだ。

「どうせ、役に立たないんだから、なにを装備しても同じだ、同じ！」

「うう……」

アキラの話では、彼女はあまり戦闘の役に立たないようなのだが……。

剣技などは優秀で、練習ではなんの問題もない。

アキラに言わせると——戦闘のセンスが絶望的にならないらしい。

「まあ——突然、あらぬところで戦闘を仕掛けたりとか、突拍子もないことをやるから困るんだよ」

「こ、今回は、アキラの指示に従う……」

「本当だな！」

「はい……」

今回の戦闘に参加するということで、アキラと彼女はかなり長い話し合いをしたらしい。

どういふ話し合いだったかは、不明なのだが——そこらへんは、詮索しないでおこう。

噂を聞きつけた獣人たちが、戦闘への参加を希望するのだが、なにせ船がない。

いや、プラ製の釣り船ならシャングリ・ラにはあるのだが、船外機付きの俺たちと一緒に行動できないのだ。

なにせ、戦闘地点は陸より数十km先の湖のほぼ中心。

いくら獣人たちのパワーやスタミナがあるといっても、手漕ぎについてこれないだろう。

それに、あの化け物相手に、剣や斧を振り回す獣人のパワーが通用しそうにないのだ。

「ねえ旦那！ あたいたちも連れていっておくれよ！」 「そうだよ！」 「よろしくおねがいします」

俺に食らいついているのは、獣人の3人組だ。

「今回の戦闘は、主に魔法戦なんだよ。水の上じゃ剣も斧も役に立たないしな」

「そうだけどさあ」

「なんでそんなに、こだわる？」

「だって、あいつらにデカイ顔をされるのは嫌じゃないか」

あいつらってのは、ミャレーとニャメナのことだ。

「それに船もないんだよ。魔道具が装備された俺たちの船は、水面を凄く速さで進む。普通の船じゃついてこれないんだ」

「うう……」

「悪いが、今回は諦めろ。陸の上での戦闘があれば、力を借りるから」

「にゃー」

俺の所にベルがやってきた。

「ちえっ……」

3人組はブツブツ言っていたが、森猫の手前なんとか引き下がったようだ。

こちらとしても無い袖は振れないし、地上の戦闘なら戦士の数と獣人たちのパワーが頼りになるんだがな。

「よしよし、お母さんありがとうな」

「にゃー」

「チュール、食うか？」

「にゃー」

ベルが、俺の手からチュ○ルをペロペロしていると、さっきの3人組が戻ってきた。

「なんかいい匂いがするじゃないか!」「クンカクンカ」「美味しそう……」

その3人組が、俺とベルのチュ○ルに気がついたようだ。

「なんだい!? そのいい匂いがするものは!?!」

結構離れていたんだが、これはそんなに匂いがするのか?

くんくん――匂いを嗅いでみると、魚粉みたいな匂いはするが……。

「うーん……それじゃ戦いに参加させられないから、これをやるよ」
3人組は、俺から棒状の袋をもらうと、ちぎって舐めはじめた。

「ペロペロ……」「ペロペロ……」「ペロペロ……」
3人共、一心不乱に舐めている。すごいシュールな光景だが、猫らしくもある。

ベルの毛皮をなでながら、その光景を見てると――アストランティアへ続く道に、自転車らしきものが見える。

一生懸命に自転車を漕ぐ女性らしき影――プリムラだ。

「おい、プリムラ」

俺のすぐ近くまで彼女がやってくると、自転車を乗り捨てて、俺に抱きついてきた。

「ハアハアハア……」

息を切らしながら、俺を固く抱きしめる。

「プリムラ、落ち着きなさいって」

「ハアハア……アンネローゼさんから聞いて……今日、魔物退治に行く」と

「数日中に魔物退治に行くと、言ってあったじゃないか」

そう、別に秘密にしていたわけじゃない。事前に彼女にも話してある。

「でも、出発するなら、お見送りしないと……」

「君は心配しているのかもしれないけど、大丈夫だって。見りゃ解るが、凄い戦力だぞ？」

「解っています。アマランサス様も、1国の軍隊に匹敵する力だと」

「そうそう、だから心配ないない」

彼女が俺の目を見て、目を閉じてくる。

軽く口づけを交わすと、胸に押し付けられた彼女の豊かな膨らみが気になる。

レイランさんほどではないが、立派なものだ。

思考がオッサンだが、オッサンだから仕方ない。

「なに、胸を揉もうとしてるの!？」

下から声がして、そちらを向くとアネモネが2人の間に割って入ってきた。

「え？　そ、そんなことしようとしてないよ？」

「うそ！　そんなに胸に触りたいなら、私の触ればいいのに!」

そんな子ども触ってどうするんだよ——とは絶対に言えない。

情けないオッサンだが、アネモネの追及にしどろもどろになっていると、馬車がやってきた。

立派な馬車ではなく、普通のオープンタイプの黒い馬車。

同じ毛色の黒い馬が牽いているが、手綱を持っている男性に見覚えが……。

深い青の詰め襟のような上下を着た、金髪の男性。

「ケンイチ殿！」

男性が馬車を降りて、こちらに走ってきた。

「ノースポール男爵——！」

思わず様をつけそうになってしまったのだが、俺のほうが位階がかなり上なのだ。

「これは失礼を！ ケンイチ様とお呼びすべきでしょうか？」

男爵が畏まる。前はくだけた印象だったのだが、俺も貴族になったので、少々堅い。

「いやいや、戦友なのですから、ケンイチでもいいですよ」

「とんでもない——それではケンイチ殿と」

「ええ」

「承知いたしました。それにしても——シャガの討伐のあと、こんなことになっていようとは。いきなりケンイチ殿から、貴族になったという連絡をいただいて、最初は冗談かと……」

「ははは、まあ本当に色々とありましてね」

男爵に、ここから送り出した家族のことを聞く。

「クロトンの家族は、元気にやっておりますよ」

「マリーは元気ですか？」

アネモネが、仲がよかったクロトンの娘のことを尋ねる。

「ああ、クロトンの娘ですね。元気ですよ」

「よかった！」

「お久しぶりでございます、ノースポール男爵様」

「おお、プリムラさんもお元気そうでなにより。マロウ商会を訪ねたら、あなたが行方不明と聞かされて驚きましたよ」

「心配おかけして、申し訳ございません」

プリムラが頭を下げる。

彼女と男爵との婚姻の話もあり、彼女がそれをすっぱかしてしまつたのだが、男爵がそれを気にしている様子もなくて安心した。

「申し訳ない、クロトンの家族を押し付けてしまったようで……」

「滅相もございません。領民を募集しておりましたし、クロトンは中々有能で、男爵領の役人をしてもらっています。貧乏貴族領は常に人手不足なので、有能な人材は喉から手がでるほど欲しいですよ」
よかつたな。家族で元気でやっているようだ。

ホッとしながら、ユリウスを呼ぶ。

「お呼びでしょうか、ケンイチ様」

「男爵、悪いが——これから魔物討伐なので、お相手できない。夕方には戻ってくるので、お話があるなら、ここでお待ちになつていただきます」

「なんですと！ 魔物退治！ それでは、私にも参加させていただきたい！」

「ええ？ 男爵、魔物というのは湖にいる巨大生物でして、騎士の出番は——」

「なにをおっしゃる！ ここで義を果たさねば、騎士としての沽券に関わる！」

いやいや、真面目な人間はこういうときに困る。

「だが、その格好では……」

「心配ご無用！ こんなこともあろうかと、装備はちゃんと持ってきてあります！」

「しかし、重いプレートアーマーでは、湖に落ちたときに、溺れる可能性が……」

「軽装の装備もありますぞ！ 騎士として備えは怠りませぬ。はは

は、私の愛剣ウルフファングもこのとおり」

見れば、装備一式が、馬車に積んである。

男爵は供もつけずに、自分で手綱を握ってここまでやってきたのだ。

従者にする人材もないだろう。

彼は愛剣を高く掲げると、俺に微笑む。いや、微笑まれても困るのだが……この男爵は根っからの戦闘狂だ。

戦いとなると首を突っ込みたくて、仕方ない性格らしい。

「うゝん」

「ケンイチ殿！ 何卒、戦友として一緒に戦わせてくださいませ！」
オッサンは、戦友とか言われると非常に弱い！

「なんだよ旦那あ！ その貴族様が行くなら、あたいらもいいだろう？！」

騒いでいるのは、獣人3人組だ。戦いとなると首を突っ込みたくなるのは、騎士だけではないらしい。

「お前ら、まだいたのか……うゝん」
困った。

「ケンイチ殿！」

「男爵、貴殿になにかあれば、男爵領の運営が行き詰まりますよ？」

「そのときは、そのときで。戦闘で命を落とすのは、貴族の誉」

「いやいや……そういう場合は、どうなるんだ？ ユリウス」

「領主代行を立てて、国の沙汰を待ちます。その後、受け入れてくれる貴族領があれば併合されたり——」

「赤字の領だと、見捨てられたり？」

「ありますねえ」

「そのときはケンイチ殿に、領を託します」

「えええ？」

——とはいえ、クロトン親子を押し付けて、逆に俺が押し付けられたらNO！　とは言えない。

「解った、何があっても恨みっこなしだぞ？」

「旦那、勝手に戦闘に押しかけて、文句言うやつは獣人たちにはいないよ」「ミケの言うとおり！」「そのとおりです」

結局、獣人3人組と、男爵を戦闘に参加させることになってしまった。

「マイレン！」

どこからともなく、マイレンがすっと現れた。

「こちらは、ノースポール男爵だ。ここに、しばらく滞在することになる」

「よろしく頼む」

「承知いたしました」

マイレンがペコリと頭を下げた。

「プリムラ、それでは行ってくるよ」

「お氣をつけて」

「カナンはどうしてる？」

「一応、今回のお話はしましたが、気にはしておられないようでした」

「まあ、プリムラが心配しすぎだ」

「そうでしょうか？」

彼女がまた俺に抱きついて、大きな胸を押し付けてくる。

「プリムラ、くつつきすぎい」

アネモネが、2人の間に割って入る。

「ははは、これでは私が袖にされるのも、仕方ありませんなあ」
プリムラに別れを告げて、獣人3人組と男爵に準備をさせる。

「俺は栈橋にいるから、準備ができたなら、そこまで来てくれ」

「承知した」

「解ったぜ旦那！」「腕が鳴るぜ！ わざわざソバナから来た甲斐があったってもんだ」「そうだよねぇ」

戦闘でどうなるかも解らんのに、そんな楽観的でいいのか？
少々心配だが、言うことは言ったし、全て彼らの自己責任だ。

栈橋の近くで準備しているアキラたちの所へ行く。

「ケンイチ、遅かったな。トラブルか？」

「いや、援軍だ。獣人が3人と、男爵——騎士が1人参加してくれることになった」

「貴族？——知り合いか？」

「ミヤレーは知ってるよな？ シャガ討伐で一緒に戦った騎士だ」
「知ってるにゃ！ 剣に向かってブツブツ言ってる危ない騎士にゃ！」

「おいおい、本人の前で言うなよ……？」

参加する獣人の正体にニヤメナが気づいたようだ。

「旦那！ 獣人が3人って、あの3人組かい？」

「ああ、断りきれなかった」

「いいのかい？」

「彼女たちも了承済みだ」

ニヤメナも仕方ないって顔をしている。戦いとなれば参加したくなる獣人の性ってやつを、彼女なりに理解できるのだろう。

さて、人数が増えたが、俺たちの船は定員でいっぱいだ。

乗せられないこともないが、船の上で身動きがとれなくなる。

シャングリ・ラで、前に買った中古の漁船と同じものを探してみ
るが――ない。

たまたま出品されていたものなのだろう。

それならば――市販のフィッシングボートを探す。

FRP製で16フィート（約5m）のボートが売っている――4
0万円だ。

高価だが、水面で安定するように脇にフロートがついている。

3人乗りだし、これならいいだろう。

「ポチッとな」

白いボートが2艘落ちてきた。

「お、新しい船か」

「討伐が終わったら、不必要になるが貸し出せばいい」

「これを作るのに、どのぐらいの対価が必要になるんだ？」

「1艘金貨2枚だから、2艘で4枚だな」

「結構高いな……」

「だが、この世界で金貨4枚出しても、これと同じものは作れない
からな」

「そりゃそうだ！」

このボートには動力がないので、俺たちの船にロープで結んで牽
引しよう。

直線なら平気だろうが、急な方向転換をすると、遠心力で飛んで
しまうかもしれない。

気をつけないとな。

アイテムBOXからナイロンロープを取り出し船を繋いでいると、
男爵と獣人たちがやってきた。

「ケンイチ殿、その船で行くのですね？」

「そうだ。この湖は巨大だな。幅が数十リーグもあるから、俺の魔道具で動くようにしてある」

「魔道具——貴殿は、やはり凄い！」

彼に面子を紹介するが、その豪華さに驚いている。

「高名なナスタウム侯爵家のご令嬢とご一緒できるとは！」

「ほほほ、脚を引っ張らないように」

つづいて帝国から亡命させた面子も紹介する。

「そちらの女性は帝国の大魔導師、夜烏のレイランさんだ」

「なんと！ ご高名は聞き及んでおりますぞ？」

「ありがとうございます。男爵様」

普通の男なら、レイランさんの巨大な胸に釘付けになるところだが、彼は武器以外に興味はないようだ。

変わっているといえは変わっているが、実直なのは間違いない。

「そちらの男性は、男爵も話していた、帝国皇帝の懐刀だ」

「な、なんですと！ それでは、独自魔法ユニークを使うという大魔導師：

…」

「ははは、そういうことになるな。俺はアキラだ。よろしく、男爵様」

「ちょっとアキラ！ 申し訳ございません、男爵様」

アキラの不躰にレイランさんが、頭を下げる。

「構いません。これから戦場へ行くというのに、身分がどうのと言ってる場合ではありませんからな」

「ケンイチ、中々話の解る男爵様だな。ああ、そっちの女は、みそっカスなので、無視していいから」

アキラが、クレメンティーナを指差した。

「うるさい！ アキラはいつも！」

いつものごとく、アキラの家族は騒々しい。

「はは——男爵、アネモネは知っているな」

「……ああ、シャガのアジトから助けた子どもですね？」

「子どもじゃないから！」

「彼女は、今や辺境伯領の大魔導師なんだよ。これだけの大魔導師は、王国でも中々いないぞ？」

会話に獣人3人組が入ってきた。

「その子は、巨大なゴーレムを作って、ワイバーンを叩き落としたりしたんだよ？」 「そうそう」 「そのとおりなんです」

アネモネの変貌ぶりと活躍っぷりに、男爵も驚いた。

「なんと……それは失礼した、大魔導師殿」

「ふん！」

子どもと言われて、アネモネは機嫌が悪そうだ。

最後にアマランススを紹介する。

「この行政官をしている、戦奴のアマランススだ」

「ちょっと、ケンイチ！」

割り込んでくるメリッサを制する。

「戦奴？ むう、一見して只者ではない——しかし、はて……アマランスス……」

どこかで聞き覚えがある名前に、男爵が首を傾げている。

さすがに、男爵になったばかりの身分では、謁見もしていないのだろう。

「戦奴が行政官なんて変だと思うかもしれないが、ここも人手不足だね」

「ふふ、よしなに」

アマランサスは、あまり意に介していない様子。

獣人3人組と男爵に、クロスボウを渡した。

「水の上じゃ剣は役に立たないかもしれないから、これを渡しておく」

「おお！ シャガ戦で使っていたものですな！」

「すごい！ こんなすげえ弩弓は初めてみたぜ！」 「なんじゃこり

ゃ！」 「素晴らしいです」

獣人たちに使い方を教える。

コンパウンド式になっていて、一見複雑そうに思えるが、やっていることは、この世界にある弩弓とまったく同じだ。

そこにリリスがメイドたちを連れて見送りにやってきた。

メイドから昼ごはんの弁当をもらって、アイテムBOXに入れる。

「ケンイチ、出発するのcae？」

「ああ、行ってくるよ。男爵、彼女は正室のリリスだ」

「これは、ご挨拶が遅れました。アラン・ウェ・ノースポール男爵です。以後お見知りおきを——辺境伯夫人様」

男爵が、膝をついて礼をした。

「うむ、よしなにの」

皆で船に乗り込み、出発をする。

男爵と獣人3人組は、ロープで繋がれた船に乗り込んだ。

「アキラ、最初はゆっくりとな」

「任せろ」

「ちよっと、ケンイチ。これで本当に漕がなくても、湖の上を進むの？」

「大丈夫だよ、メリッサ。心配するな」

リリスとメイドたちに手を振る。

「行ってくるよ」

「「「いってらっしゃいませ、ご主人様！」」」

マイレンを筆頭に、メイドたちが並んで、頭を下げる。

「はは……」

ちよっと恥ずかしい。

この恥ずかしい光景を、アキラが羨ましそうな顔で見ている。

「いいなあ、メイド。センセ！　ウチにもメイドを入れようぜ」

「入れてどうしようと言うのですか？」

レイランさんが、じろりとアキラを睨む。

「もちろん、家事手伝いをさせるんだよ。センセもアンネローゼも、そのチ○ポに負けた女騎士も、てんでなにもできねえじゃん」

「私は負けてない！」

アキラと一緒にいる女性陣は、家事が苦手のようだ。

今まではその日暮らしだった彼らだが、落ち着いて生活の拠点を定めるとなると、家事手伝いが必要になるだろう。

そんな俺達を乗せた船は、エンジン音を響かせ、湖の上を走りはじめた。

163話 湖の上で

予想外の戦力の増強もあって、俺たちはクラーケン退治に出発した。

船2艘に分乗して、俺のボートにはアネモネとミヤレーとニャメナ。

一緒にアマランサスが乗っている。船の後ろにはロープで小さなボートを牽引しているのだが、そこには獣人3人組が乗り込んでいる。

「にやあああ！ 水の上をこんな速さで走るなんてえ！」 「ぎやああ！」 「わあああ！」

後ろで3人組が騒いでいる。彼らにもライフジャケットを着せようとしたが、無理だった。

獣人ってのは、窮屈が嫌らしい。

「おい！ しっかり掴まってろよ！ 戦闘中に落ちても助けねえぜ！」

後ろを向いて、ニャメナが3人組をからかっている。

「てやんでえ！ これしきのことではこたれていられるかってんだ！」 「そうだけど、ぎやああ！」 「ちよっと、心が折れそうですう！」

「わはは！」

3人組を見て、ニャメナが笑っている。

「ニャメナ、あんまりからかうと可哀想だろう？」

「こういうやつが、いざというときにドツボにはまるにゃ」

ミャレーは冷静というか、一步引いて考える――慎重派だ。

「うるせえ、わかってるよ」

俺たちのボートに並走しているアキラが操縦するボートには――。

アキラとレイランさん。獣人のミャア、女騎士――そして、メリツサと婆さんが乗っている。

彼らのボートの後ろにも、ロープで牽引された小さなボート。

そこには、ノースポール男爵が、必死にしがみついている。

いきなり、こんな乗り物に乘せられて大変だとは思うが――本人たっの希望なのだから、仕方ない。

一応、俺は止めたからな。

今回、参加してくれた婆さんとメリツサには、魔法の触媒となるアルミのアクセサリーを渡してある。

アクセサリーといっても、元々は自転車のパーツらしいのだが、穴が開いているので、そこに紐を通してネックレス代わりにした。

アルミの触媒作用はかなり強力で危険を伴う――まあ婆さんとメリツサなら大丈夫だろう。

アキラとレイランさんには以前に渡してあるし、アネモネは自分のものを持っている。

王国と帝国の魔導師が一緒に乗るといふ呉越同舟の中、ボートは船外機の音を響かせて、クラークンと遭遇した場所へと向かう。

目印は、俺が投下したオレンジ色のブイだ。

暗かったので正確な位置は解らないが、船のスピードと進む時間でアバウトな位置は解る。

獣人たちに双眼鏡を渡して、探してもらう。

GPSがあれば、搜索位置のマークも簡単なのだが、ないものね

だりをして仕方ない。

あるもので対処しなくては。

「あつたにゃ！」

ミヤレーが、ブイを見つけてくれたようだ。

アキラにトランシーバーで連絡を入れる。

「アキラ、発見したぞ」

『了解！』

アキラと2人で、魚群探知機を出して周囲の索敵を開始する。

夜に遭遇した次の日に討伐作戦を行えばよかったのだが、他の魔導師たちに応援を頼む前に、いきあたりばったりで集魚灯を使ってしまった。

反省すべきだが――なに、発見できればいいのだ。

アキラの船と2艘、微速で進みながら魚群探知機で湖底をサーチ。画面にカラフルな色に着色された湖面の様子が映し出されている。後ろの獣人3人組から、声が聞こえてくる。

「旦那！ 今は、なにをやってるんだい？」

「魔道具を使って、湖の底にいる化け物を探している」

「その変な箱で、湖の底が解るのかい？」

「ああ」

「――へえええ！」

感心している彼女たちだが、敵が出てこないことには、暇だろう。釣り竿を貸してやる。

「化け物が見つかるまで、あたいらは、釣りをしていればいいってことか」「楽な仕事だな」「そうですよねえ」

3人組の様子を、ウチの獣人たちが横目で見ている。

「あいつらあんなことを言ってるにゃ」

「あの化け物を見て、腰を抜かさなきゃいいけど」

「そうにゃ、どっかのトラ公みたいになにゃ」

「それは忘れろ！」

100mほど離れているアキラの船にも釣り竿らしきものが見える。

おそらくアキラのアイテムBOXから出したものだろう。

こんな湖の上では、他にやることはない。

アマランサスとアネモネは、以前に搜索したときと同じように、日傘の下――。

元王妃の剣士は水面をじっと見つめ――大魔導師はタブレットの書籍を読んでいる。

「アマランサス。また何日か、見つからないかもしれないぞ？」

「これだけ巨大な湖ゆえ、致し方ないところじゃ。相手の魔物もこちらの都合など、考えてはくれぬじゃろ」

アマランサスは、扇子を出すと、パタパタと仰いでいる。

こっちの獣人たちは釣りをしているが、向こうにいる男爵はどうしているのだろうか？

果てしなく続く鏡のような水面には、なにも変化はない。

夜戦という最悪の展開が頭に浮かぶが、それを振り払うように、作業を続ける。

そのまま当たりがなく、昼になった。

「アキラ、昼飯にしようぜ」

『オッケー！』

アキラの船がやって来ると、2艘並べて飯にする。

後ろで牽引していた、獣人3人組と、男爵のボートも引っ張りよ

せた。

メニューは、船の上でも食べやすいように、サンドイッチと唐揚げだ。

足りないやつには、エナジーバーを食ってもらう。

「おおっ！ うめえ！ パンに肉とか挟んであるのか？」 「へえっ！」「美味しいね！」

3人組にもサンドイッチは好評だ。

彼女たちに、エナジーバーを数本投げる。

「小腹が空いたら、それでも食べろ」

「これは？」

「甘いお菓子だ」

お菓子ではないのだが、この世界の住民からみれば、お菓子のよ
うなものだろう。

小腹が空いたらって言ったのに、受けとった彼女たちは、早速エ
ナジーバーのパッケージを千切り始めた。

「うめーっ！」「甘いぜ！」「美味しい！」

「ゴミは捨てないで、集めておいてくれよ。あとで回収するからな」

「あいよー」

アキラたちにもエナジーバーを渡す。

彼はアイテムBOXを持っているので、余ったらそこに入れば
いい。

サンドイッチを頬張っていた婆さんが、話しかけてきた。

「そのアキラに聞いたんだけど、その箱で湖底の様子を見ている
んだって？」

「ああ、底になにかいれば解る仕掛けだ」

「そんな魔道具なんて聞いたことがないよ。他の貴族に知られたら大騒ぎになりそうだけど」

「一応、国王陛下から天下御免の書状をもらっているから、他の貴族たちは手をだせないぞ」

話を聞いていた男爵が会話に入ってきた。

「ケンイチ殿。天下御免とは——貴殿はいったいなにをやったのですか？」

「はは、まあ色々とな。それに辺境伯領にはリリスとアマランサスがいる。迂闊なことはできないはずだ」

「そりゃ、こんな所に王族がいるなんて、だれも思わないだろうし……」

それを聞いた男爵が、飲んでいたワインを嘔き出した。

「王族?! もしや、アマランサスとリリスというのは……」

彼も、彼女たちの正体に気がついたようだ。

その解説を、サンドイッチを頬張るメリッサが、呆れたようにしてくれる。

「そうよ。ここにおわすのは、王妃——元王妃様のアマランサス様と、お見送りをしてくださったのは、元王女のリリス様なの」

それを聞いた、男爵がボートの上で膝をついた。

「なな——なんですって! これは知らぬこととはいえ、申し訳ございません。このノースポール男爵、汗顔の至り!」

「よいよい——妾はすでに王族ではなく、タダの奴隷じゃ」

「な、なぜ、王妃様がこのような場所に——まして奴隷などに……」
「そこにいる、非道な男に聞いてみたら?」

メリッサが、唐揚げを食べている俺を指差した。

「別に俺が強制しているわけじゃないぞ？」

「あなたが強制してなくて、誰が王妃様を奴隷にしたのよ！」

「アマランサスが、自ら進んで俺の奴隷になったんだ」

「そ、そんなこと！」

「そのとおりじゃ、メリッサ。聖騎士様は、なにも間違ったことを申してはおらぬ」

俺を聖騎士と言ったアマランサスに、男爵が首をかしげる。

「ケンイチ殿——聖騎士というのは？」

「よくわからんのだが、この国を救う力を持つ者が授かる称号らしい」

聖騎士がこの国を建国したってのは、伏せておいたほうがいいだろう。

「王国にそんな称号が——」

「王族しか知らないみたいだし」

「そのとおり、門外不出じゃ」

「俺は、リリスから祝福を受けて聖騎士になったんだけど、帝国皇帝から同じように祝福を受けた男がそこにいる」

俺は、アキラを指差した。

「フヒヒ、サーセン」

アキラが笑いながら、頭をかいている。

「なんと、帝国にも——知らないことばかりです」

「まあ、あまり口外しないように……」

俺の言葉に男爵が頭を下げた。

「もちろんでございます！」

「まさか、家を買う物に來た男が、こんな凄い人だったなんて、思

いも寄らなかつたよ」

婆さんが笑っているが、俺だってこんなことになるとは、自分でも思わなかった。

多分、俺と同じようにこの世界に転移してきた、アキラもそうだろう。

「ああそうだ、アネモネ。ゴーレム魔法で水を動かす魔法を、皆に見せてやってくれ」

「解った」

水に、アイテムBOXから出した巨大なコアを放り込む。

「むー！」

アネモネの魔法によって、コアが水中に沈むと、俺たちのボートの下に潜り込む。

2艘の船と牽引していたボートを丸ごと動かし、結構なスピードで移動を始めた。

船の下にある水ごと動いているので、俺たちは止まったままでも、揺れもしない。

すごく奇妙な感覚だ。

「こりゃ、たまげた。本当にこんなことができるなんて」

婆さんがアネモネの魔法に驚いた。

「アネモネ、もういいよ。ありがとう」

「ふう……」

「……」

この光景を見て、メリッサが難しい顔をしている。

自分ができない魔法をアネモネが軽くやってのけたので、心中複雑だろう。

「なんと——アネモネ殿は、本当に大魔道師になられたのですね」
男爵も驚く、アネモネの実力。

「これだけの實力を持っている魔導師は、王国にも帝国にもそうそういないだろう？ どうだい、アキラ？」

「確かに——だが、帝国の魔導師は実戦経験が豊富だし、応用も利く」

「それは、俺も感じたな。固定観念に引っ張られることなく、魔導を追究しているように見えるし」

「そのとおりだ。結構、危ない実験とかも、公認でやられているしな」

「物騒な話だな。どんな実験なんだ？」

「ホームクルスとか、アンデッド——それから反魂だな」

アキラの言葉で語られる帝国魔導の実情に、メリッサが驚く。

「なんですって？ そんな危険な研究が、帝国では禁忌ではないの？」

「まあな。反対している魔導師もいるが——たとえば、ウチのセンセとか。でもなあ皇帝が止めないから、実質野放しだぞ？」

「なんてこと……」

話を聞いていたアマランサスの目が輝き、扇子で口を隠す。

「なるほどのう。しかし、帝国が外法を使ってくるのであれば、こちらも聖騎士様が作り出した兵器を思う存分使うことができるというもの、ほほほ」

「ふう——そうならないことを願うしかないよ」

俺たちの話を聞いていた男爵が居心地悪そうだ。

本来なら、国のトップレベルの会議で語られるような内容だからだろう。

飯も食い終わったので、話は終了。

戦場だというのに和やかだ。なにせ敵がないからな。

昼食のあとも、湖底の探索作業を続行したが、当たりがないまま夕方になり一旦打ち切り。

俺たちは、サクラに戻ることにした。

暗くなる湖面を1時間ほどかけて、サクラに到着。
皆の出迎えを受けた。

「「おかえりなさいませ、ご主人様！」」

「お弁当、美味しかったよ。ありがとう」

メイドたちに礼を言う。

「どうじゃ？ その様子では空振りだったようじゃが？」
リリースの間に返事をしようとしたところ、走ってきたプリムラに抱きつかれた。

「ただいまプリムラ。今日は、なにもいなかったよ」
抱きつく彼女の頭をなでる。

「リリース、初日は空振りだよ」

「にゃー！」

俺の足下にやってきたベルの身体をなでる。

「今日はなにもなかったよ、お母さん」
船から降りたアキラたちもやってきた。

「ふあああ！ 飯だ！ 飯！ 腹減った！」

「すまんなアキラ。またしばらく付き合ってもらうことになりそう

だぞ？」

「まあ、相手は神出鬼没の魔物だ。しゃーない。どこかの洞窟にいる！——とか確定的なら、やりやすいんだがなあ」

婆さんも腰に手を当てて、伸びをしている。

「やれやれ——なかなか上手くないもんだねえ」

「婆さんとメリッサも、お疲れさん。悪いがこんな感じで、しばらく付き合ってもらうぜ？」

「ひひひ、まあ白金貨のためさ。仕方ないね。それにしても、この湖がこんな大きいなんてねえ」

「婆さん、ここに来たことがなかったのか？」

「もちろんあるさ。けど、対岸に行ったこともなかったし、沖に出たこともなかったしねえ」

アストランティアの住民でも、対岸まで行ったことがある人間は少ないという。

「だって旦那。アストランティアの酒場でそんな話を聞いたこともないしね」

「ニヤメナも聞いたことがないのか」

こういう世界での酒場ってのは、貴重な情報収集の場だ。

珍しい場所へ行ったのなら、必ず自慢話がどこからか聞こえてくる。

事情通のニヤメナが聞いたことがないってのは、誰も行ったことがないってことだ。

3人組と、男爵にも声をかける。

「どうだ？　しばらくこんな感じかもしれないぞ？」

「まあね——狩りなら、敵を待つのも狩りのうちさ」「そういうこと」「こういうのは、こんくらべですよねえ」

「ケンイチ殿——相手は魔物だ。一筋縄でいかないのは覚悟の上」
皆、それなりに歴戦なので解っているらしく、不満はないようだ。

「相手が水の中では、どうにもならぬのう」

「本当にそう！」

アマランサスとアネモネに抱きつかれて、皆と一緒に食卓に向かう。

すでにメイドたちによって、料理ができており、席について食うだけだ。

そこに、アストランティアから、カナンが馬車でやってきた。
黒く小さな、1頭立ての馬車だ。

「おお！ カナン、久しぶりだな」

走ってくると、カナンが俺に抱きついた。

「魔物退治だと聞いたが？」

「皆に手伝ってもらったのに、今日は空振りさ、ははは」

カナンに、討伐部隊の面々を紹介すると、婆さんが驚く。

「ちよいと、お前さん！ この方は子爵夫人だろ？」

「婆さんはカナンを知っているのか。ああ、子爵と離縁して、俺の側室になっているんだよ」

「呆れた！ あなたが、そんなタラシだとは思わなかったわ！」

メリッサが手をバタバタさせて叫ぶ、そこにリリスがやってきた。

「メリッサ、なにを今更。妾を王族から引き抜いて、母を陛下と離縁させたのだぞ？」

「もう、信じられない！」

「そう改めて聞くと、自分でも酷いと思うが——でも、アマランサスとカナンは、ほとんど押しかけだし……俺が悪いのか？」

「悪いに決まっているじゃない！」

「みんな俺が悪いって歌があったなあ……」

アキラの言葉に、俺の脳裏にも、そのフレーズが浮かぶ。

「ああ、あったあった」

抱きついていたカナンが、俺の顔を覗き込む。

「随分と疲れているようだな！ 私が癒やしてやるぞ？」

祝福があるので、肉体的な疲れは感じないが、精神的なダメージはあるのかもしれない。

なにせ沢山の人々を参加させて、デカイ作戦を展開中だ。

そのプレッシャーもある。

なにせ、おれは普通のオッサンだからな。

「そういうカナンこそ、ちょっとやつれていないか？」

「……あの最近、夜ふかしが多くて……」

「なにか問題ごとかい？」

「いいや違う！ 仕事が楽しくて仕方ないのだ！ もう私は、なんという無駄な人生を過ごしてきたのだろうと、改めて思う」

どうやら、服飾の仕事が上手くいつているらしい。

プリムラのほうを見ると、軽くうなずいている。

「自分の好きなことに打ち込めるってことは、とても素晴らしいことだよ」

「ああ！ もう10年——いや20年！ ケンイチと会うのが早ければ！」

「はは、アマランサスと同じことを言ってるな」

俺の横にいつの間にか、アマランサスがやってきた

「そこでだ、カナンよ！ 耳寄りの情報じゃ。帝国には若返りの神

器があるという——」

「なるほど！ アマランサス様！」

「おいおい！ 止めろって！ お前たちが言うど洒落にならないんだよ」

「聖騎士様は、我ら女子の夢を叶えてはくれぬのかえ？」

「できることと、できないことがある。大体、若返りの神器って本当なのか？ アキラ？」

「残念ながら、マジだ」

「はああ……絶対に無理だからな」

「そんなあ——聖騎士様ああ」

カナンと一緒に、アマランサスも俺に抱きついてきた。

「甘えても、ダメなものはダメ」

「「ぷー！」」

お姉さんたちの行動に、アネモネも呆れている。

そのあと、皆で揃って食事だ。

今日のメニューは、ビーフシチュー。

討伐に参加した皆が、舌鼓を打っている。

「あゝあ、あたしも護衛の仕事がなけりや、討伐に参加するのになあ。旦那もこんな奴らを雇うぐらいなら、あたいを雇ってくれりやいいのに」

そんなことを言っているのは、プリムラの護衛——シヤム柄のニヤレサだ。

「おうおう！ 言いたいこと言ってくれるじゃねえか」「やんのか、コラ？」「そうですよゝ怒っちゃいますよ？」

俺たちからちよつと離れた場所で、一緒にビーフシチューを食べっている獣人たちがにらみ合う。

「こら、喧嘩するなら、討伐から外すぞ？」

「ニャレサ、騒ぎはダメですよ？」

俺とプリムラの言葉に、獣人たちが揃って、明後日の方向を向いた。

飯を食いながら、今日の反省会と、明日からの打ち合わせをする。反省会と言っても、なにも反省するところがない。

いよいよになったら、夜間戦闘も考慮していることを、皆に告げる。

皆も納得しているようだ。

「にゃー」

俺の足下でネコ缶を食べている、ベルが俺を見上げる。

「お母さんにも手伝ってもらえればいいけど、水の上だからなあ」

「にゃー」

ベルが俺を見つめる。

食事が終わると、カナンが俺に抱きついてきた。

「久しぶりに帰ってきたのだ！ 私の順番が溜まっておるだろ？」

「そうだな」

俺とカナンの間に、アネモネが割って入ろうとしている。

「ケンイチは疲れているから、休ませてあげたら？！」

「はは、大丈夫だよ、アネモネ」

「むー！」

その光景を見たアキラが笑っている。

「ケンイチ、側室が多いと大変だな」

「まあな。でも、アキラの所も大変そうに見えるけど」

「ははは！ まあ、お互い祝福持ちだ。このぐらいでへばることはねえ」

「そうだな」

肉体的な疲れは、祝福のせいに残らない。

アラフォーになって、疲れが一日遅れで出るようになったりしたが、当然そんなこともなくなった。

自然回復が働くと腹が減るが、そのときには、カロリーバーでも食べばいい。

片付けはメイドたちに任して、俺たちはツリーハウスへ行く。

裸になったカナンとベッドの上で、無制限1本勝負。

久しぶりのせいかな、彼女の当たりが激しい。

「自分の好きな仕事をして疲れたら、ケンイチの下へやってきて癒やしてもらえばいいのだ……」

「俺は皆から癒やしてもらっているからな。俺が癒やしになるなら、いつでもいいぞ」

「ケンイチ！」

裸のカナンが、俺に抱きつく。

2人だけの夜がふけていく。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

——カナンと一緒にベッドで、次の日の朝。

「おい、カナン。朝だぞ」

「うーん……」

朝日に浮かび上がる美しい裸——しばらく見とれていても、カナンが起きない。

置いていくと怒るので、服を着させて、無理やり連れていく。
彼女は俺にベツタリだ。

「皆、おはよう」

「「おはようございます。ご主人様!」「」
メイドたちから、元気のいい挨拶が返ってくる。

「もう! ケンイチ! くつつきすぎ!」

「はは、アネモネも、おはよう」

アネモネがカナンを俺から引き剥がそうとしているが、彼女はひ
つしとくつついて離れない。

皆で揃って朝食を摂ったあと、再び湖へ繰り出す。

昨日と違うのは、一緒にベルが乗っていることだ。

彼女に、「私も連れていけ」——と言われている気がしてならな
い。

実際に、彼女が黙って俺の船に乗り込んできた。

湖の上を船で進み、現場に到着——鏡のような水面に俺たちの白
い乗り物だけが浮かぶ。

アキラとトランシーバーで連絡を取る。

「アキラ、そっちはどうだ?」

『反応なし』

「ふう……まいったなあ……」

「まあまあ旦那! 気楽に行こうぜ!」 「そうだにや」

「そうは言うがな……」

慰めてくれる獣人たちには悪いが、半ばあきらめの感情と、作戦
失敗のプレッシャーが俺を襲い——それを振り払うように、魚群探
知機の画面を覗き込む。

「にゃー」

「なんだベル？」

「にゃー」

「……わかった」

彼女が見つめる方向へ、ボートを走らせる。

「アキラ、森猫が気配を感じているようなので、そちらへ向かう」
『オッケー！ 動物の勘ってのは、鋭いからな。俺も向かうぜ！』
ベルの指示を受け、やってきた場所で探索を開始。

しばらくは、いつもと同じ画面だったのだが、今までと違う模様が写り始めた——大きい……。

平らな湖底に、這うように存在する巨大な物体。

「これは……？！」

「にゃー！」

俺の視線は、画面に釘付けになった。

164話 戦闘開始!

戦力を集めてクラークン退治に出撃。

1日目は、空振りに終わったが、2日目はベルを乗せて、湖に出た。

「にゃー」

ベルの見つめる方向へ船を走らせる。

森猫の意見を聞く——という荒唐無稽にアキラも乗ってくれた。湖の上には相変わらず、なにも見えず、鏡のような水面が広がるが——。

魚群探知機の画面を見つめる俺の目には、異形の物体が映し出されていった。

掌を広げたように伸びる太い木の根のようななにか。

山のような胴体も、カラフルなCGとなって画面に映し出されている。

「アキラ! いたぞ?!」

『おう! こっちにも映ってる! こりやでかいぜ! 30mぐらいあるんじゃないか?』

胴体の長さは十数mなのだが、四方に伸びている脚が数倍長い。そのために、少々離れた場所にいるアキラの魚群探知機にも映っているようだ。

『こ、これが、湖底にいる化け物を映し出しているって言うの?!』『こりやたまげた!』

トランシーバーから、メリッサと婆さんの声が聞こえる。

「旦那！ こいつがそうかい？」

「どのぐらいでかいにゃ？」

ミャレーとニャメナが、魚群探知機の画面を覗き込んでいる。

「ええと、サクラにある崖の3倍ぐらいだ」

少々アバウトだが、キリがいいほうが解りやすいだろう。

「そ、そんなにでかいのかい？」

「この前は脚しか見えなかったにゃ！」

トランシーバーから、アキラの声が聞こえる。

『ケンイチ、やるのか?!』

「もちろん！ あたりきしゃりきの、あたぼうってやつよ！」

画面に映っている化け物は全く動いていない。

おそらく夜行性なので、眠っているのかもしれない。

俺たちの船を、アキラの船に寄せる。

「まずは、俺の爆雷で先制攻撃をする。ロープで牽引しているボートを切り離したほうがいい」

俺たちの船は、男爵と獣人3人組を乗せた小舟を牽引している。

「そうだな。後ろにくっついていけると、高機動ができねえ。男爵様！ 船を切り離すぞ?! 悪いが、この先は何があっても、自己責任で頼むぜ！」

「もちろん、承知している！」

「3人組も、あとは自分で漕いでくれよな」

俺の問いかけに、3人組は剣を掲げている。

「もちろん、任せろ！ 旦那！」 「やってやるぜ！」 「やりますよ」

「まずは、俺の魔法を使って水中へ攻撃を仕掛ける。ちょっと離れていてくれ」

「あいよう！」

俺の家族にも確認を取る。

「アネモネとアマランサスも、準備はいいか？」

「もちろん！」 「いつでもきやれ」

アマランサスは、自分のアイテムBOXから長剣を取り出した。金色のガードがついた、美しい剣を掲げる。

アキラのボート、男爵と3人組が乗った小舟が避難したあと、爆雷を落とす場所を選定する。

脚を攻撃しても仕方ない。狙うのは胴体――目があるあたりだろう。

胴体の先っぽのほうは内臓だしな。

刺身を作るために、イカを捌いたときのことを思い出す。

湖底までは50m――爆雷は毎秒2m沈降するから、底まで25秒かかる。

アイテムBOXから爆雷を2つ取り出すと、26秒にセットして起動。

すぐさま、アイテムBOXへ収納した。

収納している間は時間がほぼ停止しており、再びアイテムBOXから出せば、タイマーが動き出す。

「よし！ いくか」

起爆実験はしたが、50mの水深で本当に爆発するかも不明。なんといっても手作り兵器だからな。

少々離れた場所にいるアキラに合図を送る。

「アキラ、いくぞ！ 間違っ、水中に落ちたりするなよ」

水中の衝撃波は、あまり減衰することなく、広範囲に拡散する。

『大丈夫だ！ よっしゃ！ こい！』

「投下！！」

アイテムBOXから、湖の上に爆薬を2つ出すと、小さな水柱を上げて水中に没した。

爆発するまで25秒。急いでその地点から離れる。

50mほど離れた地点で、船を旋回させて、投下地点を見る。

——その時、湖面に白い泡が広がり、湖底が白く濁り始めた。ボートの外板にも振動が伝わってくる。

『爆発したみたいだな！』

「ああ、だが水柱が上がらん」

『船舶免許を取りに行ったときに、海上自衛隊のやつがいたが、映画の爆雷シーンで派手な水柱があがるのは演出らしいぞ？』

「そうなのか」

あれは、せいぜい5m〜10mほどの浅瀬で爆雷を起爆させているらしい。

「問題は、これで効き目があるかだが……」

水が濁っている、どうなっているか確認できないのだ。

水面にたくさんの魚が浮かんできた。

魚群探知機で調べようとすると、ベルが声を上げた。

「にゃー！」

俺は、ベルの声に反応した。

こちらじゃない、アキラの船だ。

「アキラ！ 避けるお！！」

『おっ！！』

返答する間もなくアキラが舵を取った瞬間——水中から飛び出た巨大な物体が水面を切り裂いた。

バシャバシャと滝のように水を落下させながら、透明でしなやかな管が高く掲げられる。

日の下で見たのは初めてだが、透明な管に光が乱反射して、それは幻想的な光景に見えた。

「ぎゃあああ！」 「うぎゃ！」 「にゃあああ！」

ちよつと離れた場所にいた3人組から悲鳴が上がり、全身の毛を逆立てて、尻尾の太さも倍以上になっている。

「アキラ！」

空中高く振り上げられた巨大な透明な脚が、アキラたちが乗っている船に向かって振り下ろされた。

確実にヒット！——と思われた腕が、船の上の空中で止まっている。

なにか透明な板で攻撃を遮っているようだ。

「プロテクション
聖なる盾だよ！」

アネモネが叫んだとおり、婆さんかメリッサが防御魔法を使ったのだろう。

普通の盾ならば、慣性の法則でそのまま押しつぶされて終了だろうが、魔法の盾は空間に固定されていて、見えない壁のように敵に立ち塞がる。

「にゃー！」

ベルの声が響く。

「今度はこっちか!？」

船の舵を切って斜めに移動すると、俺たちのすぐ横の水面が盛り上がる。

巨大な脚が水を切って持ち上げられ、透明な管には巨大なタライにギザギザがついたような吸盤が無数に並んでいるのが見える。

「ふぎゃああ！」

叫んだ3人組のミケ子が、ボウガンを発射したのだが、吸盤に当たって弾かれた。

吸盤の部分は非常に硬いのだ。他の獣人たちもボウガンを撃ったのだが、透明な脚に矢が刺さってもダメージが入っているようには見えない。

振り上げられた脚がそのまま水面に叩きつけられると、高い水柱が3人組が乗ったボートを襲い、水面に浮かぶ木の葉のようにくるくると回す。

「「「ぎゃああ!」「」」

俺たちの船も、グラグラと立っていられないぐらいに揺れ、縁に必死に掴まった。

その時、隣から閃光と爆発音が響き、水面を伝った爆風が、こちらまでやってきた。

アキラの船で、誰かが爆裂魔法エクスプロージョンを使ったようだが、敵にダメージがあるように見えない。

向こうの船も健在、助太刀したいところだが、こちらはこちらで手一杯。

「くっそ! 爆雷もまったく効いてないようだが!」

いままでの苦労はなんだったんだ——と悩み、ボートの縁に掴ま

る俺に、アネモネが叫んだ。

「ケンイチ、ゴーレムのコアを出して！」

アネモネの言うとおり、アイテムBOXからゴーレムのコアを水面へ直接出す。

「むー！」

彼女の唱える魔法によって、青い光とともに水面が持ち上がり、敵の脚が釘付けになっている。

水をゴーレム化して、スライムの中に閉じ込めるように敵の脚を押さえ込んだようだ。

「でかしたぞえ！ アネモネ！」

剣を構えたアマランサスが、刃を光らせながら、水面に出ている敵の脚へ飛んでいく。

透明な吸盤をはしごのように登り、化け物の脚の頂上に立つと、その場で前方1回転。

回転する勢いで、透明な土管のような脚を一刀切断した。

「おおっ！ す、すげえ！」

こんな女と戦って、俺もよく生きてたな。

我ながらの無茶振りに後悔しつつ——とりあえず彼女が味方であった。

アマランサスによって切断された敵の脚は、数秒水面で暴れていたのだが、すぐに白く変色して、湖面を漂い始めた。

「こいつは、逃げ回るのに邪魔だ！」

俺は、アイテムBOXに切断された脚を収納すると、そのままアキラの船のほうへ近づく。

「アキラ！ 大丈夫か？！」

「そのコア借りますよ！」

その声は、黒いワンピースに黒い髪——レイランさんだ。

「むう！」

彼女の魔法で、青い光をまとった水がスライムのようになり、透明なクラーケンの脚を持ち上げた。

「えっ？！ ゴーレムの所持者の書き換えをそんな一瞬で？！」

「ひゃーこりゃ、たいしたもんだよ」

レイランさんの近くにいたメリッサと婆さんが驚く。

ゴーレムのコアを使うときには、使う術者に合わせて、イニシャルイズする必要があるのだが、彼女はそれを一瞬でやってのけたのだ。

「むう！ なんとという卓越した魔法なのじゃ！」

王国でお抱えの魔導師を多数見ているアマランサスでも、見たことがない光景らしい。

「私に任せろ！」

叫んだのは、剣を構えたクレメンティーナだ。

アキラの操縦で横に回り込んだ船からジャンプすると、白い刃を振り上げて巨大な脚に切りかかった。

「ぬおおおっ！」

渾身の力を振り絞ったが、アマランサスのように、一刀両断とはいかず——浅い。

「助太刀いたす！」

いつの間にかアキラの船の反対側に回り込んでいた男爵が叫んだ。

「ぬうう！ 吼えろ！ 我がウルフファング！ 今こそ、そのときだ！」

ボートを踏み切った男爵が、長剣を振りかざして一閃。

敵の肉深くまで刃が食い込んだが、両断まではいかない。

男爵は、暴れる脚に弾かれて飛ばされたが、運良く自分のボートに転がり、水面に落ちそうになっているのを、なんとか堪えている。

「止めは任せるにゃ！」

黒い毛皮が宙に舞う。船の縁を蹴った獣人のミャアが剣を振ると、敵の脚は見事に切り離された。

「にゃー！」

再び、ベルが叫ぶ。

「今度は俺たちか！」

不思議なことに、ベルが言っていることがわかるような気がする。あの夢を見たせいだろうか？ 船の舵を切ると、巨大な脚が水しぶきを上げて持ち上がり、俺たちの前に立ち塞がった。

獣人たちが、船の上で剣を構える。

「アネ嬢！ もう一回あいつを押さえ込んでくれ！ 今度は俺たちがいく！」

「いっくにゃー！」

「コアの書き換えに時間がかかるよ！」

「大丈夫だ、アネモネ！ こんなこともあるのかと！」

俺は追加のコアをアイテムBOXから取り出して、湖に直接落とした。

「やった！ でも、ちょっと時間がある！ 逃げ回って」

「任せろ！」

船を操り、クラーケンの脚の間を逃げ回るうちに、コアのイニシヤライズが完了したようだ。

アネモネが再びゴーレム魔法を使う。

「むー！」

青い光が水面に次々と吸い込まれていく。

彼女の魔法で水が盛り上がり、巨大な手のようになってクラーケンの脚を掴んだ。

「うひょー！　すげえ！」　「トラ公！　感心しないでいくにゃ！」

「解ってるよ！」

アネモネが魔法をコントロールして、クラーケンの脚を切断しやすい位置まで運んでくれる。

徐々にこの魔法のコントロールの勝手が解ってきたようだ。

「おりゃああ！」

船の縁を蹴り、クラーケンの脚についている吸盤を踏み台にして、ニヤメナが敵に一太刀を浴びせる。

「いくにゃ！」

続いて、ミヤレーが飛び上がり、ニヤメナと同じ位置に切れ込みを入れたが――浅い。

獣人たちは速さを武器にしているので、あまり長い剣は装備していないのだ。

「どけどけえ！　お前らばかりに、いい恰好させてたまるかってんだ！」　「どりゃああ！」　「いっきまゝす！」

全身の毛を逆立てて、船を踏み切った獣人3人組が、ナントカストリームアタックのように、3連続攻撃を仕掛け――クラーケンの

脚は見事に切断された。

この攻撃に――本体に繋がっている脚は、全て水中へ素早く引っ込み、白く変色した残骸だけが水面に残されている。

邪魔になる脚を、俺はアイテムBOXへ収納した。

「こんな脚をいくら切っても――胴体に魔法を撃ち込まないと!」

「落ち着きなメリッサ!」

「でも、お婆ちゃん!」

「私に任せて!」

2人を制したのは、アネモネだ。

「むー!」

再びゴーレムのコアを使って、なにか魔法を使うようだ。

水面に浮かんでいるゴーレムのコアに、青い光が集まってくと、それに呼応するようにアネモネの身体も薄っすらと輝き始めた。

こんな状態は見たことがなかったので、かなりの魔力をつぎ込んでいるに違いない。

これで一体なにを――と思っていると、目の前の湖が左右に割れ始める。

水が割れて壁のようになった所から、泳いできた魚が次々と落下していく。

「おおっ! こりやまるで、モーゼの海割だぜ!」

聞こえてきたのは、アキラの言葉だが――この世界で、モーゼなんて単語を知っているのは、俺と彼だけだ。

その先に透明で巨大な三角形が見え始めた。

「あれが、クラーケンの本体か?!」

俺が叫ぶと同時に、アキラの船から閃光が走る。

『『光弾よ！ 我が敵を撃て！』』
マジックミサイル

レイランさんとメリッサが、ほぼ同時に唱えた魔法が、空中に浮かぶ無数の光の槍を召喚した。

2人同時にチャンスだと判断して、同じ魔法を使ったに違いない。次の瞬間、高速の光の槍が、クラーケンの胴体に無数の穴を開けた。

「*＆＆（*！」

化け物がなにか叫んだはずだが、人の言葉では言い表せないような断末魔か。

次の瞬間、敵がなにかを嘔き出し、辺りが突然真っ黒になった。

「な、なんだあ！？」

「ふぎゃー！」

誰かの叫び声が聞こえるが――。

「こ、こりゃ、イカスミか？！」

元世界のイカも、敵から逃走するときに、スミを吐く。

「ケ、ケンイチ！ 身体がしびれる……！」

アネモネの声が聞こえる。

この黒いスミは、なんらかの毒が含まれているのかもしれないが――祝福の力がある俺には、効果がないようだ。

「旦那……大丈夫だよ」「ふにゃー」

アネモネや獣人たちを見る限り、そんなに深刻な様子ではないようだ。

少々しびれるぐらいらしい。

「アマランサスは？」

「大丈夫だわえ」

やはり、アマランサスは聖騎士と似たような力を持っているのかもしれない。

俺たちから離れた場所にいる、獣人3人組も、ボートの上でひっくり返っている。

「アキラ！」

「大丈夫だ！ こっちより、クラーケンに止めを刺したほうがいい！」

アキラのボートでも、メリッサやレイランさんたちが、ひっくり返っている。

婆さんや男爵、ミヤアも同様だ。

「解った！」

全身を黒く染めたまま、船外機のエンジンをふかすと、クラーケンがいた場所へ向かう。

そこで魚群探知機のセンサーを下ろした。

「結構、致命傷だったはずだ。遠くには逃げていないはず……」

そのまま魚群探知機で調べつつ、逃走したと思われる方向へ100mほど進むと、センサーに反応があった。

画面に映し出される巨体は、脚が何本か欠損している――アイツだ。

これで逃げられていると思っているのだろうか？

ここが年貢の納め時ってやつだ。イカには年貢はないけどな。

「深度は40m――セット時間は20秒！ 投下！」

俺は、セットした2発の爆雷を、即座にクラーケンの上に投下した。

すぐに、その場所を離れて、成り行きを見守る。

しばらくして水の中に白い花が咲き、周囲の水が白く濁る。
もう爆雷は品切れだ。これで水中への攻撃手段は尽きてしまった。
これで仕留められないとなると、再度爆雷を作って、戦いを挑まねばならない。

いや——レイランさんとメリッサの魔法が命中した時点で、かなりの深手だったはずだ。

多分、助からないのでは……。

そう考えながら、水面をじっと見つめていると、白いものが浮かび上がってきた。

水面にプカプカと浮かぶ、巨大な物体。

透明だった、クラークンの脚を切り離すと白く変色したので、これは胴体が死んだ——ということなのでは。

近くに寄って突いてみる。

「死んだみたいだな……」

「ケンイチ！」

同じ場所に、アキラの船もやってきた。

「アキラ、大丈夫か?！」

「はは、なんとかな。俺の出番はまったくなくなしだったが」

謙遜する彼だが、船の操舵などは元世界の住民だからできる芸当だ。

「敵が片付いたみたいだから、スミをなんとかしないと!」

「まったく、イカスミかあ——そりゃ、イカだからなあ」

アキラがボヤクが——どうすりゃいいかな?

まずは、洗濯の魔法を使えるアネモネか。

アネモネの頭に手を乗せて、聖騎士の回復ヒールを使う。

「ふああああ！」

彼女の顔も真っ黒なので、どういう顔をしているのかよく解らん。

「アネモネ、痺れはとれたか？」

「ふあい！」

アイテムBOXからタオルを出すと、とりあえず彼女の顔を拭いてやる。

「それじゃ、洗濯の魔法で皆を綺麗にしてやってくれ」

顔を赤くしたアネモネが、魔法を使うと周囲に青い光が広がる。

「洗^{クリン}浄！」

魔法によって、真っ黒だった船と仲間が、元の色を取り戻す。

船の底に溜まっていたスミも、透明な液体に変わる。

これって毒素も分解されるのだろうか？

においもなくなるので、猛毒ではなければ分解されているような気はする。

こんなの魔法じゃなきゃ、絶対に無理だ。

シャングリ・ラに売っているどんな洗浄液でも、こんなに綺麗にはならないだろう。

透明になったスミだが、気持ち悪いので外へ出すことにした。

シャングリ・ラを検索して、充電式の掃除機を買う。水も吸えるやつだ。

スイッチを入れると、音で獣人たちが飛び上がるが、ドンドン水が吸える。

タンクがいっぱいになったら、蓋を開けて外に捨てる。

「それ、私がやる！」

「それじゃ、アネモネに頼んだ。俺は皆の治療をするから」
「うん！」

彼女に掃除機の使い方を教えて、水を吸い出してもらうことにした。

俺は、船の隅で丸くなって固まっていた、ベルを治療する。

「お母さん、大丈夫か？」

「にゃー」

「ふう……ありがとうな」

彼女の言っていることが解ったような気がしたので、クラーケンの攻撃を避けることができた。

すぐに彼女も回復して、俺のほほを舐める。

「ちょっと、ベル！ 舐めるのは痛いので勘弁してくれ！」

猫の舌はザラザラで、紙やすりのようだ。本当に皮が剥けるぐらいザラザラ。

ベルのあとは、ひっくり返っていた獣人たちも抱き寄せて、聖騎士の力を使う。

「あーっ、ダメだよ旦那あ！ こんな所で！」 「はにゃー！」

「身体を治すためにやってるんだよ」

効き目があったようで、すぐに獣人たちも動けるようになった。

「はうー全く酷い目にあったぜ」 「うにゃー」

「でも、あんなデカい化け物を倒せたのも皆のおかげだ」

「聖騎士様ー！ 妾もじゃ！」

「アマランサス、お前は痺れてなかったじゃないか」

そう言った俺に構いもせずアマランサスが抱きついてきたので、

力を使う。

「あっ！ あゝっ！」

甘い声を上げるアマランサスが凄い力で抱きついて離れない。

そのまま船外機を操って、3人組の所へ行く。

毛皮が真っ黒になった3人組が、ボートの中でひっくり返っていた。

「おい、大丈夫か？」

「しびびび……」 「にやにやにや……」 「ただなあ……」

「あまり大丈夫じゃないみたいだな」

ボートに、洗濯の魔法をかけてもらう。

「アネモネ、頼む」

「むー！ 洗浄^{クリン}！」

アネモネの魔法で、黒い汚れは綺麗になった。

彼女たちのボートに乗り移ると、抱き寄せて回復^{ヒール}を使う。

「頑張ってくれて、ありがとうな」

「うにやあああ！」 「にやー！」 「ふにやあああ」

それを見た、ミャレーとニャメナからクレームだ。

「ちょっと旦那！ そりや奉仕^{サービス}しすぎだろ！」 「そうにや！」

「ひゃー、旦那に抱かれたら、獣人の男の相手なんて馬鹿らしくてやってらんねえ」 「いや全く」 「もう責任取ってもらうしか……」

「おっと、女は増やすなって言われてるからな」

3人組はブーブー言っているが、きりが無い。

こちらは済んだので、アキラたちの所へ向かう。

「アキラ！ そっちはどうだ？」

「洗浄して、麻痺の治療が終わったところだ」

あちらは、祝福の力ではなくて、普通に回復^{ヒール}の魔法を使っただけらしい。

向こうは魔導師が3人もいるからな。

「まったく生きた心地がなかったよ」

「だから、年寄りの冷や水だと言ったじゃないか」

「白金貨のためなら、多少の無理も承知さ」

「ケンイチ、このデカブツはどうする？」

アキラが水面を漂っている、白い^{むくろ}軀を指差す。

「一応、食べるしな。アイテムBOXに入れて保存しておくつもりだ」

胴体を解体すれば、魔石があるかもしれないしな。

「胴体の内臓^{ゴロ}で、塩辛を作れないかな？」

「うーん、ミサイルみたいな魔法が命中してたぞ？ バラバラじゃないか？」

「ありゃー——そういえば、マジックミサイルが命中してたな……」
男爵にも声をかける。

「誠に役に立たず、不甲斐ないことに……」

「そんなことはない。敵の脚を一本両断したじゃないか」

「いや、腰が引けてしまって、剣筋が浅かった……」

落ち込んでいるのは男爵だけではない。

メリッサも落ち込んでいる。

「メリッサは、なんで暗いんだ？ こんな大物仕留めたんだぞ？」

「こ、こんな実力で、王国の大魔導師を名乗っていたなんて、自分

の不甲斐なさに呆れたわ……」

「王都の魔導師って、外部との交流がなさそうだし。地方にも結構
凄い魔導師がいるって解っただろ？」

「まあまあメリッサ。まだ若いんだから、私みたいなババアに比べ
たら、先があるさ」

「……ううう」

メリッサが、アネモネをチラ見している。

小さいアネモネに完全に負けた感じだったからな。

自分が使えないような魔法を使って、血路を開いたのもアネモネ
だし。

これが、メリッサの糧になってくれることを願うしかない。

さて、魔物討伐はこれで終わりではない。

面倒な後処理の時間だ……。

俺は、水面に漂う巨大な軀むくろにため息をついた。

165話 たゆたう

俺は沢山の人々の協力を得て、巨大な湖に生息するクラークンを退治した。

白金貨に誘われた婆さんなどもいたが、これだけ沢山の人が集まってくれるのは、大変にありがたいことだ。

いくら貴族になったとはいえ、俺だけでは決して領の運営はできない。

優秀な人材の手助けが必要だ。

その領の運営の障害になると思われるクラークンを排除して、ハマダ辺境伯領はその歴史に新しい1歩を記したとも言える。

ちよつと恰好いいことを言っているようだが、目の前に背けることができない問題がある。

「はあ……」

俺は湖に漂う、巨大な白い軀むくろにため息をついた。

生きているときは透明だったクラークンが、死ぬと同時に真っ白になってしまったものだ。

別に白くなるのは問題じゃない。問題なのはその大きさ。

脚までいれると30m近い大きさがある。これではアイテムBOXにも入らない。

俺が途方に暮れていると、アキラの船がやってきた。

「おい、ケンイチ！ これ、どうする？」

「うーん、このデカイ湖にこれが漂ってても、問題ないと思うが……」

琵琶湖と同じぐらいの大きさの湖に、30 mの魔物が漂い腐敗しても、影響はないだろう。

魚たちや、湖底にいるカニたちの餌になるに違いない。

「これだけ大物だと、デカイ魔石があるかもしれないぜ?」

「そうだなあ——それに、これは食えるしな」

アキラの言葉どおりに魔石があるかもしれないが、胴体には魔法を食らって大穴が開いている。

「穴から魔石が落ちたりしてないかな?」

「いや、魔石が抜け落ちた瞬間に死ぬはずだからな。魔法を食らったときには、生きていたはずだ」

魔物に止めを刺したのは、俺の爆雷が起こした水中衝撃波ということになる。

「ああ、なるほど。そういうことか」

——ということは、魔石のある位置さえ解れば、一撃で魔物を倒すことができるってことか……。

「魔石の位置ってのは結構ばらつきがあるんで、それを抜くのは大変だぞ?」

アキラが、俺の考えを見透かしたように言う。

「なにとても簡単にはいかないな」

「そゆこと、ははは——それで? どうする?」

「10 m以下にぶった切れば、アイテムBOXに収納できるから、切ろう」

「運んで、岸でバラすのか?」

「そうだな。前に言ったみたいに塩辛ができるかもしれないぞ?」

「お? いいねえ」

早速、行動に移す。

見たところ、脚が20mで胴体は10mって感じだ。

まずは、脚を10mずつにカットすれば、胴体もアイテムBOXに収まるんじゃないだろうか？

「アネモネ、ゴーレム魔法はまだ使えるかい？」

「そんなに魔法を使ってないから大丈夫！ ケンイチから、もらった魔石もあるし」

巨大なゴーレムを作っても1時間ぐらいは動かせるからな。

それを考えれば、今回は魔力をそんなに消費してないといえる。

「この化け物の脚を切りたいから、持ち上げてくれるかい？」

「うん！」

戦闘でカットしたクラークンの脚の根元に近づくと、アネモネの魔法が発動する。

水が持ち上がり、巨大な白い脚が宙に浮く。

水がまるで生き物のようにうごめく姿は、信じられない光景。

まさにファンタジー。

「アマランサス、切ってくれ」

「はい、聖騎士様」

彼女は、クラークンの脚に飛び乗ると、その場で前方一回転して脚を両断。

再び、俺の隣に戻ってきた。

「やっぱり、すげえ！」 「凄いにゃ！」

アマランサスの剣技を見ていた獣人たちから驚きの声上がる。

戦闘力が高いと思われる獣人たちから見ても、アマランサスの剣技は凄いらしい。

とりあえず、切った脚をアイテムBOXに収納を試みる――ダメ

だ。

10 m以上あるらしい。こりゃ大変だ。

地上なら人海戦術が使えるんだが、ここは湖の上。

それに、やるなら今やらないと、明日には腐敗してしまう。

「悪いが、この脚をさらに半分にしないと、アイテムBOXに入らない」

「旦那、次は俺たちにやらせてくれよ!」 「こっちもいいところを見せないとにゃ!」

「あたいたちも手伝うよ」 「全くいいところなしだったからな」 「そうですよねえ」

脚のカットに、3人組も参加するようだ。

「尻尾を膨らませて、ビビってたくせに、大丈夫かよ」 「そうだよ」

「馬鹿にするなよ?」 「こんなの慣れちまえば、どうってことねえし」 「そうですよねえ」

獣人たちが5人がかりで、脚を切ろうとするが、やはり簡単には切れない。

それだけアマランサスの剣技が、ずば抜けているということだろう。

俺だって、彼女がどうやって、あんなことをしているのかも解らない。

元世界だって、こんなことをできる達人はいなかったはずだ。

この世界にある、魔法と同じ類の、特殊能力なのかもしれない。

もしくは——前に考えたとおりに、彼女が祝福の力を内包している人物なのか……。

そのまま皆で力を合わせて3本の脚を処分した。

「おい、ケンイチ。こっちもやるから、アネモネちゃんを休ませたほうがいいぞ」

「大丈夫だけど……」

「アネモネ、向こうにも花を持たせてやらないと——これで通じるかな？」

「聖騎士様がおっしゃるのは、手柄を譲る——そのような意味であろ？」

「そうそう——まあ、疲れたろう。休んでチョコでも食べなさい」

「うん！」

「聖騎士様……」

見れば、アマランサスも食べたそうな顔をしている。

「解っているよ、みんなに配るからさ」

疲れたときには、甘いものが一番だ。

俺やアキラのナチュラル回復ヒールを使ってもいいんだけど。

「あまりいい！ 美味しい！」

「ほんとに美味しいのう！」

アネモネもアマランサスもチョコの虜だ。

ミヤレーとニヤメナもチョコを頬張り、3人組にもおすそ分けをしようとしたのだが——。

「旦那、できれば——あの美味いやつで……」 「うん」 「美味しかったです」

彼女たちが言っているのは、チュールのようだ。

まあ、シャングリ・ラで買えば、高級チョコよりチュールのほうが安いからいいのだが。

「ほら、これか？」

「うひょー！」 「これこれ！」 「ありがとうございます！」

3人組はチュ〇ルに飛びつくと、封を切って一心不乱に舐め始めた。

「「「ペロペロペロペロペロ——」」」
なんか凄いシュールな光景だ。

「にゃー」

「なんだお母さんも食べたいのか？」

「にゃー」

ベルにもチュ〇ルをやると、ペロペロしている。
そんなに美味しいのか？

俺の船のメンバーで、チョコを食べ始めると——アキラの船で、大型のコアを使ったゴーレム魔法が発動し始めた。

魔法を使っているのは、レイランさんだろう。
湖面が盛り上がり、持ち上がったクラークンの脚を、ボートで挟み打ちにして騎士たちが切ろうとしている。

見れば——クレメンティーナと男爵が同じぐらいの剣技レベルだな。

男爵も実戦経験が豊富だけあって、かなり強いと思われる。

シャガ戦でも、バタバタと野盗を切り倒していたからな。

2艘の船で交互に脚を切って、残りは少ない。

「アキラ、それを切ったら、あと3本だと思うわ。残りは、そちらに任せてもいいかな？」

「オツケー！ クレメンティーナも据えもの切りなら得意だからな、ははは」

「うるさい！」

「けど、クレメンティーナも今回は活躍してたじゃないか」

「まあ珍しくな。帰ったら、ご褒美をやらないとダメだなあ……」

「……」

クレメンティーナの動きが止まり、顔が赤くなる。

「べ、べつに、そのようなものを期待して、今回の戦いに臨んだのではない！」

「はいはい」

ご褒美とは一体なんなのか——まあ突っ込まないでおこう。

「ウチも手伝うにゃ！ まったく、ウチはいいところなしだったにゃ」

アキラの船にいた獣人のミャアが、脚切りに参加しはじめた。

「まあな——水の上だし、獣人たちの機動力を活かせないのはしやないな」

戦闘が上手いことだったので、アキラも機嫌がよさそうだ。

俺とアキラの会話を聞いていた、獣人たちが話し込んでいる。

「クロさんよ、旦那たちが言ってる、桶とか産休とか、ありやなんなんだい？」

「ケンイチたちが使っている異国の言葉だにゃ。桶は解った！ 産休はありがたい——って意味だにゃ」

「へえ、クロさん、中々やるねえ」

「まかせるにゃ」

3人組におだてられて、ミャレーは鼻高々。

獣人たちの会話に少々笑いながら、アキラたちの船の舳先に、婆さんが座り込んでるので話しかける。

「婆さんどうした？ 腰が抜けたか？」

「まったくねえ——話と、実物じゃ大違いだね」

「だから言っただろう。年寄りの冷水だって」

「ふん！ 寿命が半年は縮まったね」

「たった半年かよ」

婆さんと、一緒にいるメリッサにも、チョコをやる。

「ありがたい。甘いお菓子かい」

「美味しい……」

貴族の令嬢であるメリッサも、チョコの美味さの虜になった。

「このお菓子の原料となる木も植えたので、この領で作れるようになると思うぞ」

「こんな洗練されたものを、ここで本当に作れるの？」

「お城の料理人のサンバクさんもこの領に来るから、多分可能だろう」

「前に聞いたけど、本当にサンバクを引き抜いたの？」

追加のチョコを頬張りながら、メリッサが驚く。

「ああ、彼の希望でもあるし」

「呆れた！ けど、このお菓子は蠱惑的に美味しいわ。絶対に貴族に売れると思う」

「リスやアマランサスも好きだからな。貴族というか、女性なら絶対に惹かれる味だと思う」

その話を聞いた婆さんが笑い始めた。

「ひゃひゃひゃ、お前さん。それだけ両手に花なのに、さらに花を増やそうというのかい？」

「いやいや、あくまで商売の話だよ」

「どうだい、ついでにあたしも囲ってみては？」

「お婆ちゃん！」

婆さんの冗談にメリッサが慌てる。

婆さんはずっと、こんな感じなのだが、メリッサは慣れていない

のだろう。

「ははは、これ以上増やすなって言われてるからな」

「そりゃ残念だねえ」

機嫌がいい婆さんだが、その孫は少々元気がない。

「どうしたメリッサ？ 王国の歴史に残るような大物を討伐したのに、元気がないじゃないか？」

「ひゃひゃひゃ、もしかしたら物語になってしまいかもねえ」

「討伐ですって？ 大口叩いたのに、私はなにもしてないじゃない」

「クラーケンの胴体に大穴を空けたじゃないか」

「私と同じ魔法だったわ……」

レイランさんが、彼女と同じ魔法を使った件だろう。

「戦闘の経験から、一番効果的な魔法を選択して使ったんだろ？ 別に問題ないと思うが？」

「私より詠唱を始めるのが遅かったのに、展開は早かった……それに、コアの所持者の変更をあんな一瞬でやってのけるなんて」

そこら辺は実戦経験の豊富さが、アドバンテージになっているのかもしれない。

「多分な——なにか裏技があるんだよ」

アキラたちは、帝国皇帝に命じられて、修羅場巡りをしてたみたいだしな。

体育座りになったメリッサが、魔法を使うレイランさんを見ている。

「ゴーレム魔法が気になるか？ 君だってゴーレム魔法は使えるんだ、手伝って見たらどうだ？」

「こ、こんな使いかたしたことがないし、コアの書き換えには時間

がかかるし……魔法を失敗して迷惑かけたら、恥の上塗りじゃない……」

コツでも教えてもらえば——と言いたところだが、彼女も王国の大魔導師だ。

帝国の魔導師に教えを請うなんて、プライドが許さないのだろう。そんなものを捨てたほうが、早く上達するんだけどねえ。まあ、それは言わないでおこう。

「ひゃひゃひゃ、本当に人間ってのは死ぬまで勉強だね」

「それは俺もそう思う。この歳になって、政を学ぶとは思わなかったし」

「お前さんは、それなりに知識があったように、思えるけど？」

「そりゃ多少はな」

アキラの船を離れて、近くを漂っていた男爵のボートへ向かう。疲れて一休み中らしい。

「男爵、大丈夫ですか？」

「はあ、大丈夫ですが——まったくお役に立てませんで……」

「魔物の脚を1本切り落としたではありませんか？」

「あれで、切ったことになるかと言われれば……」

男爵はがっくりと肩を落としている。

「水の上で騎士を戦わせること自体が間違っているのですから、気にしなくてもいいのでは？ 責任があるとすれば、戦いに参加するのを許可した私にあると思いますよ」

「そのようなことはありません！ 私が強引に、無理を言って参加させていただいたのですから」

「なにはともあれ、魔物は退治できました。ありがとうございます」
「……」

男爵が、アマランサスをじっと見つめている。

「彼女を射止めるのはかなり難しいと思いますけど」

「ま、まさか！ そのようなことはありません——が」

「なにか、気になることでも？」

「私も、あの高みに近づけるのでしょうか？」

男爵が言っているのは、アマランサスの人間離れした、超人的な剣技のことだ。

「さあ……私が思うに——あれは、独自魔法ユニークのようなものだ」と

「それでは、持って生まれたもの……」

「でも、彼女の身体を見れば、相当な修練を積んだように思えます」

「それは私も感じました……なるほど……諦めたらそこで終了でございませうな」

「そういうことになりますか」

男爵がニヤリと笑う。彼の今までの行動を見ても、くじけるようなタイプには見えない。

落ち込みながらも、前に進むタイプだろう。

皆の協力もあって、足の収納作業が終了。

今度は、アイテムBOXへクラークンの胴体部分の収納を試みる。

「ケンイチ、大丈夫か？」

「解らん。よし！ 収納！」

入らない——。

「くそっ！ ダメだ。若干サイズがデカいらしい」

「それじゃ、胴体の先っぽ——尖っているところを切るか？」

「そうだな。アネモネ、頼めるか？」

「任して！」

またアネモネの魔法で持ち上げてもらい、アマランサスに切っ

もらう。

あの太い脚が切れるんだ。尖っている先っぽを切るなど、造作もないだろう。

「むー！」

アネモネの魔法で、クラーケンの胴体が持ち上がる。

「「「おおっ！」」」

それを見た獣人たちから、声援があがった。

「アマランサス！」

「承知した」

船からクラーケンに飛び移った彼女が、ジャンプして前方に2回転すると巨大な白い胴体が輪切りになった。

落ちたイカの先っぽが、湖の中へ落ちて水柱を立てる。

切り落とした部分には内臓が入っていないらしい。

イカの耳の部分には内臓はなかったとはいええ、これを刺身にしたら、何人分あるんだろうな。

食えば美味しいし、村の住民でもタダなら食うやつがいるかもしれない。

「「「すげー！！」」」

アマランサスの神業を見た獣人たちの目が輝く。

獣人たちは、絶対的な強さに憧れを抱くようだ。

戻ってきたアマランサスに礼を言う。

「ありがとう、アマランサス」

「はい」

彼女は俺の言葉にニコニコしている。初めて会ったときの、あの凄まじいプレッシャーはどこにいったのやら。

「よし、これだけコンパクトになれば、アイテムBOXに入るだろう」

俺は、意を決して叫んだ。

「収納！」

目の前に漂っていた、巨大なイカの軀がアイテムBOXに収納された。

さすがに、これだけデカイものが入ると、中がどうなっているか気になる。

——とは言っても、今までも巨大なコ○ツさんやら、ホイールローダーやら、ダンプまで収納してたじゃないか。
なにをいまさら。

「「「おおっ！！」」」

その光景を見た、皆から驚きの声上がる。

「相変わらず、すげえ収納能力だな」
俺の隣に来たのはアキラだ。

「これだけでも、十分にチートなんだけどな」

「それに比べて、俺のマヨネーズときたら」

「まあまあ、艱難辛苦の果てに、アキラもアイテムBOXを使えるようになったんだろ？」

「ケインチのほどデカくはないけどな。けど、あるとなしじゃ大違いだからな」

「確かに、アマランサスみたいに、剣や金を入れられるだけでも利用価値は大きい」

「そゆこと」

アイテムBOXに収納できたということは、そのままステータス

画面のゴミ箱へ捨てることもできるってわけだ。

「さて――帰るか！ 皆が待ってるし！」

「まてまてケンイチ！ こういう勝ち戦の場合は、勝どきを上げるんだ」

「エイエイオー！ か？」

「この世界だとウラーウラーウラー！ だな」

「それって帝国式じゃなくて？」

一応、アマランサスにも確認を取る。

「王国でも、ウラーウラーウラー！ でございますよ、聖騎士様」

「そうか――しかし、少々恥ずかしいなあ」

「なにを言ってるんだ、辺境伯様よ。これもお貴族様の立派なお仕事ですよ」

ちよつとアキラが、嫌味っぽく言う。

しょうがない。これも仕事だ。

ちよつと練習をする。ウをハッキリと言わず、ラーラーラー！ に近い発音だ。

「よし！ それじゃ勝どきを上げる！ ウラーウラーウラー！」

「「ウラーウラーウラー！」」

ワー！ と皆から歓声が上がる。

魔物相手だからいいけど、本当の戦はやりたくねえなあ……。

船に3人組と男爵のボートを括り付けると、俺たちはサクラを目指した。

急ぐ必要はないし、後ろにボートを牽引しているので、2時間ぐらいかけてサクラに到着。

栈橋につけると、リリスとメイドたちが出迎えてくれた。

俺が渡してある双眼鏡を使って、湖をチェックしていたらしい。

「ケンイチ、今日は早かったのう！」

「「おかえりなさいませ、ご主人様！」」

マイレン筆頭に、メイドたちが一斉に頭を下げる。

「皆、ただいま。リリース、やっと魔物を討伐できたよ」

「ほう！ あの化け物を、やりおったか」

「「おめでとうございます、ご主人様！！」」

「はは、皆のおかげさ」

そこにアキラたちがやってきた。

「ケンイチ、早速バラすのか？」

「その前に腹が減らないか？ 昼飯が、まだだったろ？」

「そういえばそうだな。さっきチョコ食ったから、なんとなく保っていたが」

「軽く飯にしようぜ？」

「そうだな」

アイテムBOXからテーブルを出して、岸で食事にすることにした。

メニューは、メイドたちが作ってくれた、弁当だ。

スモークサーモンと野菜のサンドイッチとスープと、お茶。

スモークサーモンは、サンタンカからの差し入れだ。

「これが街で噂になっている魚の干物かい？ 生みたいな感触だねえ」

婆さんがサンドイッチに挟まっているスモークサーモンをジッと見ている。

「干物と生の間みたいな感じだな。美味いんだが、日持ちはしな

い」

「確かにねえ——でも、美味いよ」

「これも、この領の重要な産業になるはずだ。実際サンタンカでは、こいつの生産をするために、人が増えたし、村も大きくなった」

「そりゃ、仕事があれば人が増えるのは当然さ。アストランティアじゃ、もうずっと前から頭打ちになっているし……」

「おお、これは美味い！ 酒にも合いそうだ」

男爵もスモークサーモンが気に入ったようだ。

「男爵。美味いだろ？ どうだ、少し飲むか？」

「いや、まだ日が高いですし……」

「祝酒だ。ほんの少しだけ」

「そ、それではいただきます……」

彼も、酒は好きそうだからな。

小さなショットグラスにウイスキーを注いでやる。

「ケンイチ、俺にもくれ」

「オッケー」

俺とアキラの会話を聞いていた獣人たちが、ひそひそ話をしていく。

「桶だ、桶！」 「解ったって意味だよな！」 「クロちゃんの言うとおりです」

クロちゃんってのは、ミャレーのことらしい。

飯を食いながら、マイレンを呼ぶ。

「お呼びでございますか？ ご主人様」

「化け物を解体する。手の空いている奴を集めてくれ」

「承知いたしました」

マイレンが下がると、早速仕事に移った。

「クラーケンが欲しいやつには、タダでやるつもりだけど、食うやつはいると思うか？」

「さあなあ……」

答えるアキラも半信半疑だ。

「確かに珍味じゃが、味は悪くないと思ったが……」

「そうじゃな」

王族の2人が食べて、味は悪くないというのだから、食える味だとは思うのだが……。

実際、ワームを食うよりは、抵抗がないと思う。

「肉なら売れるけど、イカじゃなあ……食う文化がないからな」
俺のつぶやきにアキラが反応した。

「普通に焼いて食っても美味しいと思うが。それに酒によく合うしな、ははは」

飯を食い終わると、人が集まってきた。

20人ぐらいだろうか。

大工の親方のドラクラもいる。

「なんだ、親方。野次馬か？」

「へへ、領主様が仕留めたっていう、化け物を見てみませんか。話のとおりの大物なら、しばらく酒の肴に困らねえ」

親方が顎に手をやり、ヒゲをジョリジョリしながら、ニヤニヤしている。

この世界は娯楽がないので、野次馬には沢山の人が集まってくる。ここにやって来た連中は、ほとんどがそれだろう。

まあ、無理に手伝わすわけにもいかなないので、見ていただけの野次馬も仕方ないが、金を払うといえばやるだろう。

領主なら、無理やり手伝わせる！——ってリリースは言うだろうけど。

「よし！　そろそろやるか」

「そうだな」

獣人たちがはしゃぎ回り、周りにアピールしている。

「ウチらが仕留めた魔物を見て、腰を抜かすにや！」

俺は栈橋からちょっと離れた場所に移動。

アイテムBOXに入っていた、クラークンの死骸を岸の砂地に出すと——周りから一斉に歓声があがった。

166話 解体作業

琵琶湖ほどもある大きな湖で、これまた巨大なクラーケンを仕留めた。

イカってのは海の生き物で、淡水にはいないのだが――そこは異世界、常識はずれの生き物もいるってことだ。

あまりに巨大過ぎて、アイテムBOXに入らないため、何箇所かで切断して収納した。

そのまま岸に戻り、待機組の出迎えを受け――軽く食事をしたあと、解体に移る。

俺がアイテムBOXから、クラーケンの軀むくろをだすと、集まってきた野次馬が湧いた。

「「「うおおおっ！」」」

「「「うぎゃああ！」」」

歓声に混じり、なぜか悲鳴も聞こえている。

見れば、尻尾を太くしている作業員の獣人たちだ。

デカイ図体をした獣人の男どもが、尻尾を太くしている。

どうも獣人たちから見ると、この生物は気持ち悪い生き物に見えるらしい。

「ああっ、何回見ても気持ち悪い！」

ニヤメナは何度も見ているはずなのだが、それでも慣れないようだ。

「よし！ バラすぞ。手伝ったやつには給金を弾む！」

俺の言葉に、男たちがクラーケンに群がり始めた。
とりあえず、バラバラにすればなんでもいい。
シャングリ・ラでイカの図鑑の電子書籍を買う。

「ふーん、なるほど……」

イカの塩辛で使う内臓の部分は、中腸腺というものらしい。
図鑑には、肝臓と膵臓の機能を併せ持つ——みたいなことが書いてあるな。

俺が図鑑を見ている間にも、作業員がクラーケンに群がり切り開いていく。

これだけ人がいるんだ、俺は参加しなくてもいいだろう。

一応、領主なので、現場監督ってことにする。
いい加減、人を使うことも覚えねば。

「おーい、内臓は傷つけないでくれよう！」

「「へーい！」」

——とはいえ、胴体には穴が開いているので、無駄な指示かもしれないが。

「クロ助、俺たちもいくか？」「にゃ！」

クラーケンに登るミャレーとニャメナに、3人組も続いた。

「負けてらんねえぜ」「そうだな」「そうです」

「おーい、戦ったあとなんだから、無理しなくてもいいぞ？」

「旦那！ あんなの戦ったうちに入らねえよ。ほとんど魔法で片がついちまったじゃねえか」「そうそう」「もうちょっとお役に立たないと、申し訳ないです」

彼女たちも十分に働いてくれたと思っているけどな。

解体の様子をリリースが眺めている。

「これが全体像か……こんな巨大なもの」

「水の中は浮力があるからな。巨大な生物でも暮らしやすい。こんな陸に上がったら、自重で動けなくなってしまう」

「なるほどのう。そなたは博識じゃのう」

リリスと話していると、ユリウスが姿を見せた。

「ケンイチ様。サンタンカの村長にも、これを見せたほうがよろしいのでは？」

「そうだな！」

「きつとケンイチ様のお力に、畏敬の念を抱くものと思われます」

「そこまでは気にしていないが、彼らが安心して沖まで漁に出られるようになったな」

そこにアキラがやって来た。

「ケンイチ、どうした？ なにかトラブルか？」

「いや、隣村のサンタンカの村長にも、こいつを見せたほうがいいんじゃないかという話になってな」

「そうだな！ 化け物が退治されたとなれば、住民も喜ぶだろう？」

「村の住民にも行方不明者が出ていたようだし」

「よっしゃ！ 俺が、船で迎えに行つてやるよ。向こうに栈橋はあるんだろ？」

「ああ、漁をやっている村だから、大丈夫だ」

「30分もあれば、戻つてこられるだろ」

早速、アキラは船に乗り込むと、船外機を始動させた。

「ケンイチ！ ちょっと行つてくらあ！」

「頼んだ！」

アキラは船外機を全開にすると、舳先を上げて白い波を切るように、水面を滑り出した。

「「「おおお！ 水の上をすげえ速さだ！」」」
クラーケンを見物していた野次馬たちが、船外機を取り付けた船のスピードに仰天している。

今は、アキラ1人しか乗っていないからな。船が軽いので、かなりのスピードが出るわけだ。

アキラを見送ったあと、解体現場に目を移す。

解体には、自前の剣を持ち込んでいる者が多いが、すぐに切れなくなるようだ。

いつでも彼らが剣やナイフを研げるように、シャングリ・ラで購入した砥石を置く。

セラミック砥石なので、この世界にはないものだろう。

中研ぎと、仕上げの石を並べている。

俺の設置した砥石を使っている作業員たちが驚いた。

「なんじゃこの砥石は？！ まるで鋼が木剣のように削れちゃう」
思うに――彼らの剣は、材質がよろしくないのだろう。

柔らかいので、すぐに研げるが、すぐに切れ味が落ちる。

そこに、大工の親方もやってきた。

「あの領主様。この砥石を俺たちにも使わせてもらいたいんですがねえ」

「ああ、大工道具を研ぐのか？ もちろんいいぞ。世話になっているからな。いい家を作ってくれよ」

「ありがてえ！」

親方に、シャングリ・ラで購入した砥石を渡すと、見物を止めて仕事に戻るようだ。

早速、砥石を使ってみたいのだろう。

皆で解体を眺めていると、湖から船外機の音が響いてきた――アキラが帰ってきたのだ。

栈橋に船をつけたアキラが手を振っている。

「おい！ ケンイチ！ 爺さんを連れてきたぜ！」

「ひえええ！」

村長は船に掴まったまま、腰を抜かしている。

どうやらアキラがスピードを出しすぎたようだ。

「村長！ よく来てくれた！」

ヒーヒー言っている爺さんを船から下ろすと、獣人たちに担いでもらい、魔物の解体現場に連れていく。

「村長、見ろ！ あれが、この湖に巢食っていた巨大な化け物だ」

「ひえええ！」

巨大なクラーケンの死骸を見た村長が、再び腰を抜かして尻もちをついた。

「おい、村長！」

腰を抜かしただけではなく、胸を押さえて苦しみ始めた。

「うぐぐ……」

「おっと！ 驚かし過ぎたか？」

こういうときは――そうだ！ ○心だろ、救○！ TVのCMで

見たことある薬を思い出した。

シャングリ・ラで検索すると、その薬が売っていたので、早速購入。

「ポチツとな」

落ちてきた黒いゴマ粒みたいな薬を村長に飲ませて、聖騎士の回^ル

復も使う。

「はああ……」

「村長落ち着いたか？」

その場で座り込み、ぼくっとしている村長に話しかける。

「はい……………へへっ！」

突然、正気に戻った村長が、飛び上がって土下座した。

「村長、そんなに畏まる必要はないぞ？」

「いいえ！　こんな凄い魔物を退治できる領主様だとはつゆ知らず、ご無礼のほどお許しを！」

ああ、新しい領ができて、組み込まれたことを、あまりよくは思っていないかったようだ。

「まあ、俺もつい最近までは、平民だったからな。あまり気にしなくてもいい」

「へへっ！」

「村長、こいつは食えるみたいだが、肉を持っていくか？」

「……あわわわ……」

魔物の肉なんて食いたくないし、でも領主の申し出を受けないとマズい——ってことで、あわわしているようだ。

「まあ、無理にとは言わんよ」

「へへっ」

やっぱり、魔物の肉ってのは人気がないようだ。

牙熊や狼は平気だったのだが、やっぱり得体のしれない「イカ」ってのが、まずいんだろうなあ。

元世界でもイカやタコを食うのは日本とか、一部の外国だけだったし……。

「さて、村長を連れてきてしまったけど、帰りはどうしようか……」
「ケンイチ——あとで村の船が迎えにくると言っていたぞ？」

「そうか。それじゃ村長。ここで、解体を見ていてくれ」

「へへっ」

村長はすっかり、恐縮してしまっている。

一仕事終えたアキラは、解体現場で使っている砥石に目をつけたようだ。

「ケンイチ、俺も砥石使っていいか？」

「おう、いいぞ」

俺から許可をもらったアキラは何かをするようだ。

「おし、クレメンティーナ。お前の剣を寄越せ」

「うむ……」

クレメンティーナが、自分の持っている剣をアキラに手渡した。

長身で金のガードがついて、きらびやかではないが、上等な剣なのがひと目で解る。

「こいつは、貴族だからな。自分で剣を研いだこともねえんだぞ？」

「研ぎ方を教えたら？」

「ダメダメ、最初は教えたんだが、不器用がアーマー着ているような女だしな」

「う、うるさい！」

アキラが剣を研ぎ始めると、すぐに声を上げた。

「おっ！ これは、セラミック砥石だな。高いやつだろ？」

「まあな。普通のよりは対価が高いな」

ここじゃ剣は実戦に使うものだから、鏡面仕上げなんて必要ない。元世界の日本刀も、観賞用の研ぎと試し切りをする研ぎは違う。

それに、この世界の剣は切るといふよりは、刺したり殴るほうが多いような……。

相手の剣やアーマーに向けて、力まかせに叩きつける戦いかただ。そんな使いかたをする剣に、上等な鋼を使ったり新聞紙が切れるような研ぎにしても仕方ない。

——と、普通の住民はそう考えているように思える。

それゆえ、クラーケンのような柔らかい獲物を切るのに、苦勞しているのだろう。

アキラは、クレメンティーナの剣を研ぎ始めたが、婆さんとメリッサ、レイランさんは疲れたらしい。

先に戻るようだ。

「あたしたちは、先に休ませてもらうよ」

「解った、あとは任せろ。なにかあれば、ウチのメイドたちに言ってくれ」

「はいよ」

「メリッサも、レイランさんもお疲れ様」

「……」

メリッサからの返事がない。

「この度は、ご領主様の御恩に報いることができて、ホッとしております」

レイランさんが礼をすると、胸がとんでもないことになるので、いかん。

「本当に助かったよ。ありがとう」

こんなことあるし、なにがあるかわからんな。恩を売っておくに越したことはないってことだ。

「アキラー、ウチも戻るにゃ！」

「おう！　これだけ人がいりゃ、問題ないだろ」

「全然いいところ見せられなかったので、ふて寝するにゃ！」

「まあ、慣れない水の上だし、しゃーない。切り替えていけ」

ウチの獣人たちは解体をしているが、ミャアは休むようだ。

解体作業の頭数は揃っているので問題ないだろう。

「そういえば、ベルは――狩りにでも行ったかな？」

黒い姿を求めて辺りを探すと、作業が見える場所で丸くなり、日向ぼっこをしていた。

魔導師たちは、部屋に戻り始めたが、アマランスとアネモネは俺にピッタリとくっついたままだ。

「アマランス、お前の剣も研いでもらったら、どうだ？」

「板前のバイトして、毎日包丁研いでたんで、研ぎには自信があるぜ」

アネモネが、アキラの研ぎをしゃがんで見つめている。

興味があるのだろう。

「なんでもやっているなあ」

「いろんなバイトしながら、日本一周と世界一周をしたからな。フヒヒ」

アキラの研ぎの様子をしばらく見ていたアマランスだが、自分のアイテムBOXから剣を取り出した。

輝く細身の剣身に、金色のガード。この剣も実戦本位なのか、過剰な装飾は一切ない。

「それでは頼もう」

剣を受け取ったアキラは、砥石の前に座ったまま、刃の様子を見

ている。

「こりや上等な鋼と研ぎだなあ——ケンイチ、もっと上の番種の砥石はあるか？」

「ああ」

超仕上げとか、鏡面仕上げ用の砥石は高価で、値段が跳ね上がるが——。

アマランススのような達人の剣なら、多少のメンテナンス代がかっても仕方ない。

シャングリ・ラから追加購入してアキラに渡す。

ドワーフたちがやってくれば、彼らにアマランススの剣のメンテを頼んでもいいだろう。

「ほへ〜カミソリみたいな切れ味だな。このぐらいの達人になると、剣と剣が当たったり、アーマーを叩いたりしなくなるからな」

「人体の柔らかい部分だけ狙うように作られた剣ってことか？」

「まあ、そうだろうな」

確かにアマランススぐらいの達人なら、そういう使いかたもできるだろう。

俺たちは武器のメンテナンスを始めたが、なにを思ったか男爵が、クラーケンに向かっていく。

「男爵、なにをするんだ？」

「せっかく、剣の練習台があって、好きなだけ切れるのです！　こんな機会はめったにない」

男爵はクラーケンの身体を、巻藁代わりにするようだ。

「やあああ！」

剣を上段に構え、振り下ろすと、刃が通った所に大きな亀裂が入る。

「「おおっ！」」

男爵の剣の切れ味に周りにいた見物客からも歓声があがった。
男爵が3度ほど、クラーケンを切りつけるのを眺めていると――
化け物の上に乗っていた、作業員から声がする。

「領主様！ 腹が割けましたぜ！」

「解った！ アキラ！ 中を見ようぜ！」

「おおっ！ すぐにいく！」

2人でクラーケンに登り、割かれた腹を見ようとすると――。

「ケンイチ！ 私も見たい！」

「ケンイチ！ 妾もじゃ！」

アネモネとリリースが、手をあげた。

「リリース、服が汚れるぞ？」

「そんなものは、魔法ですぐに綺麗になるわえ」

どうしても見たいというので、女の子2人、アキラと俺、4人一緒にクラーケンに登る。

「おおっ！ これがクラーケンの中身か」

アキラが、切り開かれた魔物の内臓を見て感想を述べる。

俺たちは脚側から見て、アマランサスが切落した先っぽが向こうだ。

普通の内骨格動物とは違い、実に単純な造りだが、所々に魔法で開けられた穴が開いている。

「こんな魔法があるんじゃ、装甲とか役にたちそうにないな」

「ん？ マジックミサイルのことか？」

「ああ」

「連射はできないが、威力は凄いぞ。ただ、魔法に耐性を持っている相手だと、かなり威力が減衰するが」

「魔物ってのは、魔法に強いのか……」

「そうだな——だから、ケンイチの爆弾ってのは、かなり有効だと思うぜ」

2人で話しつつ、クラークンの内臓を隅々まで観察する。

「アキラは板前のバイトしてたって言ってたけど、イカも捌いたのか？」

「ああ、デカいだけで、こいつはほぼ一緒だな。真ん中のデカいのが肝臓っていうか、中腸腺ってやつだな」

破損している器官が多いが、中腸腺は無事のようなのだ。

「これが、イカのごろってやつだろ？」

「そうそう、こいつを塩辛にするわけよ」

シャングリ・ラの電子書籍で確認する。

向かって右側が消化器系、真ん中が中腸腺。そして左側が神経系だ。

俺はアイテムBOXから、カメラを出して撮影をした。

「あの先っぽにあるのは」

「ありゃ、精巣だと思うぞ？」

なんと、頭のとっぺんに精巣があるのか——って違うよな。

イカの頭ってどこになるんだ？

図鑑を見ると、目のあるところが頭になるらしい。つまり頭から脚が出ている。

それで頭足類っていうのか……。

「そういえば——イカって骨があったな。こいつにもあるのかな？」
「骨っていうか、貝殻な。こいつだと左側にあると思うぜ」

イカを捌いていたというアキラは構造に詳しい。一緒にクラーケンの左側へ行き、そこを切り開いてもらうと、5 mほどの透明な板が出現した。

「やっぱりあるのか」

「まあ、デカいだけでイカだからなあ」

一緒についてきたリリスが驚く。

「これは?! 骨かえ?」

「リリス、これは貝殻らしい」

「貝殻? 貝殻というと、海にいる貝の貝殻かえ?」

リリスが両手を合わせて、貝の真似をする。

「そうそう、イカってのは、貝の親戚だからな」

「……………はあ? なんじゃと?! 妾が知らぬと思って、デタラメを申しているのではあるまいな?」

「そんなわけないだろ? なあ、アキラ?」

「お姫様、ケンイチの言うとおり。こいつは貝の親戚で、透明な板は貝殻の名残ってわけよ」

「すごい!」

アネモネの目がキラキラと輝く。

「旦那は、なんでも知っているぜ!」 「そうだなや」
解体作業をしていた獣人たちが、驚いている。

「ニヤメナ、こういう知識を得るために、獲物をバラす必要があるんだよ」

「う! そりゃそうだけどさ。人までバラさなくていいじゃん——いいじゃん」

「ニヤメナの頼みでも、それは聞けないな」

「うう……」
彼女が尻尾をブンブンして、明らかにテンションが下がっている。

「面白いよな、アネモネ」

「うん！ この板って、なにかに使えるの？」

「あゝ、乾燥させて粉にすると、磨き粉や止血剤として使える」

「薬になるの？」

「ああ、それから加工しやすく高温に耐えるから、鋳物の型として使える」

「へえゝなるほどなあ、そいつは知らなかったなあ」

アキラも感心する俺の知識だが、電子書籍を見てのカンニングだ。

「すごい！」

「全く、知らないことばかりじゃ。さすが賢者だのう」

「鋳物の型に使えるから、ドワーフや、カールドンが喜ぶかもしれない。取っておこう」

俺は、巨大で透明なクラークンの貝殻を、アイテムBOXに収納した。

「ケンイチ、この中腸腺ゴロをもらっていいか？」

アキラが、クラークンの内臓の真ん中に鎮座する、巨大な器官を指差した。

「いいぞ。こんなの誰も使わないだろう」

「アキラ殿は、そんなものをどうするのじゃ？」

「お姫様、もちろん食うんですよ」

「食えるのかえ？」

「まあ、できあがったら食ってみてください、フヒヒ」

アキラはニヤニヤしながら、それを自分のアイテムBOXに入れ

た。あとで加工をするのだろう。

「まったくのう——そなたたちの食に対する、貪欲さはなんなのじゃ？」

「なについて言われてもなあ。王侯貴族だって、美味しいものを追求してゲテモノ食いに走るのはいるのだろうか？」

「妾とて、献上されたものを食しているだけで、わざわざゲテモノを漁っているわけではないぞ？」

「そりゃ、俺たちだってそうだし」

「本当かのう……」

リリースが、じくっとこちらを見ている。

「このクラーケンだって、食べられるのに！ 捨てるのはもったいない！」

「アネモネの言うとおり！ せっかくの獲物だ。有効的に活用しなくては。イカ料理ってなにがあったっけ？」

「焼いても美味しいし、煮ても美味しいぞ？ あとはイカ飯か」

「おお、イカ飯いいな。刺し身もいけそうだけど？」

「イカって、寄生虫がいるぞ？」

そうか、寄生虫なあ。

俺の脳裏に、白くて細いウネウネしたものが思い浮かぶが………
…あることをひらめいた。

「アキラ、アイテムBOXに虫って入れたことがあるか？」

「あるぜ。小さい虫は生きてても収納できるけど、出すと死んでる」

「——ということは、アイテムBOXに食材を収納した時点で、寄生虫も死んでないか？」

俺の言ったことに、アキラも気がついたようだ。

「あ……確かに！」

「こりゃ、禁断のマスや川魚の刺し身も可能ってことじゃないか？」

「おおお……アイテムBOXすげええ」

アキラは小躍りするが——刺し身で食えるのは魚の種類による。

ウグイなどは小骨が多くて食えたもんじゃないけどな。

この湖にいるマスは美味しいので、刺し身も美味しいはずだ。

「あと、イカの身を薄く削って、イカの燻製も作れるかもな」

「おお！ イカクンか！ ビールにピッタリだぜ！ はは、夢が広がるな」

俺たちの会話を聞いていたリリスが呆れている。

「本当に、そなたたちは——魔物を倒して食の夢が広がるとか、聞いたこともない」

「まあ、誰も食わないなら、俺とアキラで消費するから別にいいけどな」

「別に食わぬとは申しておらぬだろ！ そなたたちが食べるものなら、絶対に美味いに決まっておる！」

「たまにマズいものも食わしているだろ？」

俺の食わせたマズいものを、リリスが思い出したようで、口をモゴモゴさせている。

「マズいって、なにをお姫様に食わせたんだ？」

「サ○ミアツキだ」

「ぶ！ お姫様に、なんてものを食わせてるんだ。そこは基本のベ○マイトだろ」

「マ○マイトもあるな」

くさやに鮎ずしなんて、定番もある。

「うーん——ケンイチ、臭いといえば納豆は作れないのか？」

「作れるぞ」

アキラが腕を組み、目をつぶって日本のことを思い出しているようだ。

「あゝ、納豆も食いてえなあ……」

「納豆巻きでも作るか？」

俺の言葉に、アキラがひらめいたようだ。

「それじゃ、イカもあることだし、寿司でも作るか?!」

「おおっ！ 寿司かあ！ いいなあ！ でも、寿司なんて作ったことがないぞ？」

「ははは、まっかつせつなっさっい！」

「握れるのか？」

「おうよ！」

話を聞いていたアネモネが俺の袖を引っ張る。

「ケンイチ、なにか美味しいものが食べられるの？」

「あゝ、俺とアキラには美味しいんだが、他の人にはどうかなあ」

「ケンイチの食べるものは、みんな美味しいけど……」

アネモネはそう言うが、生食はどうかね？ この世界で今まで暮らしてきたが、生食は聞いたことがない。

俺が悩んでいると、内臓を切り開いていた作業員が走ってきた。

「領主様！」

彼が何かを見つけたようだ。

167話 異世界寿司

湖を寢床にしていた巨大な魔物――クラーケンを仕留めた俺は、その巨体をバラバラにしてアイテムBOXに収納。

岸まで戻ってくると、人を集めて解体を始めた。

クラーケンの腹が開かれると、上に登ってその様子を眺める。すると作業員が何かを見つけたようで、走ってきた。

「ご領主さま！」

「ん？ なにかあったのか？」

「これが！」

イカのヌメヌメした体液に濡れた黒いTシャツと、枯れ草色のズボンの若い男が差し出したのは、黒い石。

大きさはソフトボール大だ。

「もしかして魔石か？」

それを受け取り、魔力を送り込んでみると、中が光りだした。

魔石に間違いない。

「ありがとうございます。こいつは、ご祝儀だ」

俺は、アイテムBOXから金貨を一枚取り出して、男に手渡した。

「金貨！？ いいんですかい?!」

「ああ、もちろん」

「いやっほう！ これでしばらく遊べるぜえ！」

貯金とかしないのか？ まあ、この世界はこういう連中が多い。

下の地面を見ると、アマランサスとユリウスが何か話していて、その隣に白いヒゲの生えた小柄な老人。

黒いズボン、白いシャツに黒いベストを着て、肩紐がついた大きな板を持っている。

元世界の学校で使ったことがある画板に見えるが――。

「ユリウス、その老人は？」

「ケンイチ様、画家でございます」

「画家？ なにをするんだ？ 絵を描くのか？」

「ケンイチ様の偉業を、本にするためです」

「本？ 画家なんてどこから連れてきたんだ？」

「ケンイチ様なら、数日中に魔物を仕留めるだろうと、待機させておりました」

用意周到だな。そんなことまで考えていなかったよ。

リリスの話では、王侯貴族でこのような行事は普通に行われているようだ。

「この光景をじゃな、挿絵にして――面白おかしく文章をつけて、本にするわけじゃ」

「面白そうだな」

「それに、その本は城に対しての報告書としても、使われるぞえ？」
ユリウスの隣にいるアマランサスが教えてくれる。

元王族のリリスとアマランサスが言うのだから、間違いないだろう。

面白い本は写本をされて、他の貴族へと――この世界に広がっていくわけだ。

アストランティアで研究されているガリ版印刷が始まれば、本ももっと出回るかもしれない。

俺はクラーケンから降りて、画家の絵を見せてもらう。

さすが本職だ、正統派な絵画で上手い。俺も本業はイラストレーターだが、画家ではないからな。

彼に、作画の手助けになるような資料を描いてやろうと、アイテムBOXからスケッチブックを取り出した。

本にするためには、クラークンの全体像も必要だろう。

「ほら、クラークンの全体像はこんな形になっていた」

「ほう！ 領主様も、中々達者でございますなあ」

「全長は20カンほど。2／3は脚で、全部で10本だな。脚は目の下から出ていた」

「なんと！ 奇妙奇天烈摩訶不思議！」

ユリウスが不思議そうに、俺の描いた絵を覗き込んでいる。

「ケンイチ様、この魔物の口はどこにあるのでしょうか？」

クラークンを下から見た図を描く。

「脚が円形に生えていて、その中心だ。脚で捕まえた獲物を、そのまま口に運べるような造りになっている」

「なるほど……理にかなっている……」

「すごいですぞ！ 画家を営み40余年！ こんなものを描ける機会に巡り会えるとは！」

そりゃ、こんな題材は、画家魂を刺激するかもなあ。

この画家は、普通のイカも見たことがなかったらしい。

「傑作に描いてくれよ」

「もちろんでございます！」

「ほほほ、文章や戦闘の光景などは、妾が監修してやろう」

「ありがとうございます」

画家がペコリと、アマランサスに頭を下げた。

彼女は首に奴隷紋があるのだが、誰も気にしていない。

「アマランサスが一番活躍したからな」

「何をおっしゃるのかえ。この物語の主人公は、聖騎士様でございますわえ。そして他の貴族に対し、辺境伯領にハマダ辺境伯あり！

——と知らしめなければまいりませんわえ」

アマランサスが凄いいニコニコしている。

多分、すごい脚色されて、大パノラマの大海戦が描かれると思うが、それもまたよし。

作業をしていると、サンタンカから迎えの船がやってきた。

「村長——マロウ商会経由で色々と新しい商売やらを任すから、よろしくな」

「へへっ！」

村長が深々と礼をする。

最初に会ったときから、えらい変わりようだな。

その後、クラーケンの胴体は短冊状に切られて、俺のアイテムBOXに収納された。

要らない内臓は、ゴミ箱の中へ投入。

このゴミ箱は、毒物や危険物があってもポイ捨てできて非常に便利だ。

投入したものがどこに行くのかは解らないが……。

解体していた男たちが、撤収作業に入る。

引き上げる者には、給金を渡す——小四角銀貨2枚（1万円）だ。大体、こういう作業では、小四角銀貨1枚（5000円）ぐらいが相場——半日の作業で1万なら上等な部類らしい。

ついでに——欲しかったら、クラーケンの肉もやると冗談混じりに言ってみたのだが、全員が即座に辞退した。

やっぱり、クラーケンの肉は人気がない。まあ無理に勧めちゃ可

哀想だし、止めておく。

「おゝい、3人組ゝ！」

獣人3人組を呼ぶと、アイテムBOXから出した金貨を2枚ずつやる。

「金貨?! もらっていいのかい?」「うひゃ!」「いいんですかゝ?」

「命がけで戦ってもらったのに、少ない気がするけど」
そこにウチの獣人たちもやってきた。

「旦那! 上等だよ、そいつらなにもやってねえじゃん」「そうだにゃ」

「うるへい!」「喧嘩売ってんのか?」「そうですよ」
獣人たちが、にらみあう。

「喧嘩するなつての! ミヤレーとニヤメナの方は、俺のアイテムBOXに入れておくぞ」

「もう、旦那そんなの要らないよ」

「そうだにゃ」

「美味しい飯を食って、美味しい酒を飲んで、装備ももらって、住む所ももらって、金なんて要らないじゃん」

「珍しくトラ公の言うとおりだにゃ」

「それでも、一応な」

彼女たちの言うとおり、俺のアイテムBOXにある獣人フォルダの中には金が貯まる一方だ。

使い所がないのだから仕方ないが、これもけじめってやつだ。

夕方になり空が茜色に染まる頃、皆が引き上げようとするところ――。
アマランサスの前に、いままで剣を振り続け汗だくになった男爵

が跪いた。

「アマランサス様、これをお受けください」

そう言って男爵は、自分の剣を横にして両手で差し出した。

「これがどういうことになるか解っているのかえ？」

「はい」

男爵がアマランサス個人に忠誠を誓うということだ。

もしも王国と仲違いしても、男爵はアマランサスに従うということになる。

「妾に忠誠を誓うということは、聖騎士様の庇護に加わるということじゃぞ？」

「承知しております」

「妾たちが、王国と剣を交えることになっても、ついてくると申すのかえ？」

「もちろんでございます」

アマランサスは男爵の長剣を取り、軽々と持ち上げると、彼の肩に当てた。

家柄やらしがらみではなく、純粋にアマランサスの剣技と実力に忠誠を誓ったのだろう。

「これからは、聖騎士様のために働くように」

「ははっ！」

いいのかなあ？ でも止めろとも言えんし。

男爵の領民はどうするのだろう。なにかあったら、俺が面倒みることになりそうだけど……。

「——というわけで、男爵。これをやる」

俺はアイテムBOXから、1／2オンスの白金貨を取り出すと与

えた。

「こ、これは？」

「それは白金貨だよ」

「白金貨！？　噂で聞いたことはありますが……こんなものを賜るほどの働きはしておりませんが……」

「いや、懇意にしてもらう貴族たちには、渡しているものだから。金に困ったら売ってもいい。ちなみに本物だぞ？」

男爵の手から白金貨を取ると、力を込める。魔力が通ったコインは、うっすらと光り輝き始めた。

辺りが暗くなっているので、その光がよく見える。

「おおっ！　これは真に……」

「これから、よろしく。男爵殿」

「ははっ！　このアラン・ウェ・ノースポール男爵、命に代えましても！」

いやいや、そんな仰々しくしなくてもいいんだけどなあ……。良くも悪くも一直線すぎる。

そこにアキラがやってきた。

「よっしゃ、ケンイチ！　さっき言ってた寿司を作ろうぜ！　異世界寿司だ」

「やるか？！　そうとなったら、早速準備だ！」

「へい！　合点承知の助でい！」

「にゃー」

ベルも俺の下へやってきた。一緒に戻るらしい。

俺たちは、飯の準備がされている家の前にダッシュで向うと準備を始めた。

メイド長のマイレンに、事情を説明する。

「マイレン——俺とアキラは、あの魔物を食うから食事はいらないぞ。他の皆は普通の料理を食べてくれ」

「か、かしこまりました……」

マイレンが一瞬、ぎょつとした表情をしたのを俺は見逃さなかった。

「アキラ、誰も食わないぜ？」

その光景を見たアキラが笑っている。

「ははは、しゃーない。ウチの家族もいつもこんなもんだ。俺たちだけで消費しようや」

どうやら、ウチの王族たちと違って、アキラの家族はゲテモノには手をつけないようだ。

「そうだな——しかし、寿司なんて作ったことがない」

「大丈夫だよ、俺に任せろ」

「私も食べるよ！」

アネモネが手をあげた。

「無理しなくてもいいんだぞ？」

「大丈夫！」

「妾も食べるが——手伝えず観てるだけだかのう……」

「ほほほ、リリース。聖騎士様が、どんな料理をお作りになるか想像もできぬゆえ、手伝うなど不可能」

アマランサスの言うとおりで、生食は平気なのだろうか？

それが心配だな。

皆が気持ち悪がるといけないので、ちょっと離れた場所で寿司の準備を始めた。

寿司を握った経験があるという、アキラの主導でことが進む。

「よっしゃ！　まず、米だな！　それから米酢、砂糖、塩、昆布！
昆布がなけりゃ、昆布だしでもいい」

アキラの言うものは全部、シャングリ・ラにあるが——今からご飯を炊いてもらえない。

「アキラ、パックご飯でいいか？」

俺は、アイテムBOXから、パックご飯を取り出した。

「上等上等！」

大量にパックご飯を購入して、アネモネの魔法で加熱してもらう。

「むー！　ウォーム温め！」

ご飯を温めている間に、必要なものをシャングリ・ラで物色する。
そうだ、寿司桶としゃもじもいるな——購入っと。

直径30cmの寿司桶が落ちてくると、アキラが驚いた。

「おっ！　こんなものまで作れるのか。本格的だな、ははは」

寿司桶なんて買ったことがなかったが、5000円ぐらいした。
だが、寿司が食えるとなれば、無駄にはならないはずだ。

この世界にも寿司に使えるネタが、色々あると思うし。

アネモネが温めてくれたパックのご飯を寿司桶に入れると、アキラがご飯を切り始めた。

「あーなんか見たことがある動きだな」

次に合わせ酢を入れてかき混ぜて、冷ませば酢飯は完成らしい。

「結構、簡単だな」

「まあな。本当は昆布を入れて飯を炊いたりするんだが、昆布だしで代用したぜ」

「さて――次は、ネタか。マスを三枚におろすのはできるから、最後に切るのはアキラがやってくれ」

「オッケー！」

アキラと一緒にマスを三枚におろしたあと、彼が切り身にして、皿に並べていく。

薄ピンク色の身が綺麗だが、元世界のマスほど赤くない。

「綺麗だね！」

「これは見事じゃな。ケンイチもそうだが、アキラ殿も料理が達者じゃのう」

「へへへ、ウチの女たちが、全く料理がダメなんでねえ」

アキラが少々離れた場所で、食事をしている家族をチラ見する。

「そ、それは、妾たちも同様じゃが……」

「リリースはパンを焼けるようになったから、他の料理もできるようになると思うが……」

「――だと、いいがのう……」

「俺としては――不得手のものをあえてやるよりは、政^{まつりごと}などで手伝ってもらったほうがありがたいが……」

「妾とて、好きな男に手料理を食べさせたいこともある！」

リリースは怒って後ろを向いてしまった。

「ごめんよく、リリース」

彼女を後ろから抱きしめると、少々強引に前を向かせて口づけをする。

「あゝ、ずるい！ 私もゝ！」

「聖騎士様ゝ妾もゝ」

アネモネとアマランサスにも抱きつかれる。

「ケンイチ、そんな若い奥さんの尻に敷かれて大丈夫か？」

「大丈夫だ問題ない。アキラだって、レイランさんに頭が上がってないだろ？」

「フヒヒサーセン！　だって、センセ怒ると、マジで怖いんだぜ？」
くだらない話をしている間に、マスの下ごしらえができたが、寿司ネタが一種類じゃ寂しい。

アイテムBOXから、クラーケンの脚のブロックを出して、切り身にする。

「アキラ、こいつも頼むぜ」

「オッケー！」

あとは——寿司といえば、マグロか……。

シャングリ・ラを検索すると、刺身用のマグロのブロックが5000円ぐらいで売っているな。

インドマグロらしいが、食えりゃ問題ない。

「ポチッとな」

目の前のテーブルに、マグロのブロックが落ちてきた。

「おわっ！　こりゃ、マグロか？」

「寿司といえば、マグロがないと寂しいだろ？　あとは、海苔か？」

「海苔もあるのか？」

「あるぞ」

正方形で束になった海苔が、100枚で3000円——購入すると、落ちてきた。

「やった！　海苔もあるじゃん。ケンイチ、アレがいるぞ？」

「アレってなんだよ」

「アレだよアレ」

オッサンになると、突然単語が出なくなって、アレとかコレとかいう会話が多くなる。

「海苔巻を巻くやつ」

「アレかぁ——あれってなんだっけ？ スダレ？」

「思い出した、巻き簾^スだ」

シャングリ・ラで検索すると、色々と売っているが、ポリプロピレンのスダレが3000円ぐらいだな。

購入してみる。

「アキラ、これだと、ご飯がくっつかないらしい」

「おお、なんでもいいぞ！ 具^スだくさんの太巻きを作ろうぜ」

「いいねえ」

リリースは、海苔が気になるようだ。

「ケンイチ、この黒い紙はどうするのじゃ？」

「これは、海藻を乾燥させたものだよ。もちろん食べる」

「この黒いのか？」

「ああ」

どうも、色合いがよろしくないらしい。

黒いものつてのは、食欲が湧かないようだ。

海苔と寿司といえば——軍艦だな。そのネタをシャングリ・ラで探す。

「あった！」

軍艦といえはイクラの醤油漬け——500gで3500円だ。もちろん購入する。

現れたイクラにアキラが驚く。

「イクラまであるのかよ！ マジか」

「ケンイチ！ この赤い玉は？ 宝石かえ？」

「キラキラして綺麗！」

アネモネが、パックに入ったイクラを覗き込んでいる。

「これは、魚の卵だよ」

「魚？ 魚の卵まで食うのかえ？」

「これって、美味しい？」

「美味しいぞ？ アキラ、この湖にいるマスからも、マス子が取れるかもしれない」

「そうだな——でも、繁殖期とか研究しないとダメだな」

そう——北海道でも鮭が登ってくる季節は決まっていた。

この世界でそれがいつなのか、まったく解らない。

「なんと、王侯貴族も裸足で逃げ出すほどの、珍味三昧じゃのう……」

アマランサスが、扇でパタパタと仰ぎながら、感心している。

さすがに王族でも、魚の卵などは食べたことがなかったようだ。

「あと、ケンイチ！ わさびを忘れてたな！」

「そうだ、わさびな」

シャングリ・ラを探すと、1パック2000円の高級おろし本わ

さびが売っている。

こいつでいいか。

「ポチツとな」

「おおっ！ わさびゲット！ しかも結構いいやつははは」

俺とアマランサスが話している間にも、アキラは下ごしらえを終えて寿司を握り始めた。

左手で、すし飯を取ると、右手でネタとわさびを乗せて形を整える。

俺からみると、まるで職人のように見える。

「なんだか、玄人はだしに見えるんだが……」

「ウヒヒ、スーパ一の寿司より美味しいのは保証するぜ！ 味見していいぜ！」

「ちょっと待つがよい！ 穀物に、生の魚を乗せて食すのかえ？」
ゲテモノ料理を食い慣れている王族にも初体験のようだ。

「ああ、こういう料理なんだが……」

「こんなものは、見たことも聞いたこともないわえ」
基本的に生食自体がないらしい。

困惑している王族たちを放置、10貫ほど並んだところで、食ってみることに……。

「それじゃ、マスからいってみるか」

小皿に昆布醤油を垂らして、寿司につけると口へ放り込む。

「なんと！ 本当に！」

リリスは、魚を生で食うのが信じられないようだ。
甘酸っぱい酢飯と、醤油の旨味、そしてマスの身の甘み――。

「う、美味しい！ こりゃ美味しいぞ！」

「マジか！ それじゃ俺も一つ」
アキラが、自分で握ったマス寿司を口に放り込んだ。

「おおっ！ こりゃ、うめえ！ サーモンより美味しいな！ ふへへ、
我ながら上出来だぜ！」

アキラが次々と寿司を握り、赤、白、ピンクの寿司が並ぶ。

クラークの寿司は、普通のイカと変わらない。イカと言われても解らない味だ。

マグロはマグロだが、安物の赤身とは全然違う。

「このマグロは中トロだな。舌の上でとろけるようだぜ——美味しい！」

アキラの言うとおり、伝説の回らない寿司でこんな食ったら、目が飛び出るぐらい金を取られるな。

「アキラ、どのぐらい寿司の修行したんだ？」

「んーと、3ヶ月ぐらいだったか……」

「それで、こんなに握れるようになるのか？」

「ああ、見様見真似で握ってたら、本職の職人が激怒しやがって、それで辞めた、へへへ」

なんとまあ……基本貧乏人の俺には、これでもかなり上等な寿司だが。

「ケンイチ、私も食べたい」

「平気か？ マスの安全性がちょっと心配だから、マグロの方がいいだろう」

「そうだな、わさびも抜くか？」

「最初はそのほうがいいかも……」

アキラが握ったわさび抜きマグロ。

アネモネが手づかみで、それを掴み、醤油につけると口に放り込んだ。

「……」

彼女が、もしかしたらと咀嚼している。

「……どうだ？ 食べそうか？」

「にへへ……」

寿司を頬張った、アネモネがニコニコしている。
美味しいようだ。彼女は米も食い慣れているし、醤油も平気だからな。

「おっしゃ！　せっかく海苔とイクラもあるんだ。海苔巻と軍艦も
いってみるか」

アキラは手慣れた手付きで巻き簾スに海苔と酢飯を置いていく。
細く切ったネタを入れると、くるくると巻き始めた。

「なんと、これはまた面妖な……」

リリースが黒い筒を覗き込む。

でき上がった太巻きを包丁で切ると完成だ。

皿に綺麗に並んだそれもまた、市販のものと遜色ないできで、お
見事としか言いようがない。

一つ摘んで口に入れると、口内にあふれる潮の香り——まさしく
日本の味。

太巻きを味わっていると、イクラの軍艦もできてきた。

イクラも美味しいけど、何個も食うものじゃない。1つあれば十分
だ。

「はあ——アキラ、こりゃ美味しいよ。こんな懐かしい味を味わえる
なんて」

「ははは、俺もそうだよ。まさか寿司を食べるなんて思ってもみな
かったよ」

アキラが納豆巻きも食べたいようなので、納豆を買おうとしたが、
単体では売ってない。

スチロールの器に入った納豆が100個パックで3000円だ。
通常では、こんなに食いきれないが、アイテムBOXに入れてお

けばいい。

便利だが、アイテムBOXに入れた瞬間に、納豆菌は死んでしま
うのだろうか？

牛乳やチーズなどに含まれている乳酸菌は？

菌も死ぬなら、アイテムBOXで滅菌もできることになるが……
アイテムBOXに入れているパン酵母は使えている。

——ということは、菌まではセーフ？

いずれ、検証しなくては。

「ポチッとな」

白い納豆のパックが100個落ちてきた。

「なんだ?!」

山積みになった納豆パックにアキラが驚く。

「悪い、100個単位でしか作れなくてな」

「マジかよ、ははは」

「まあ、アイテムBOXに入れておけば、いつでも食えるし」

「そうだな」

「しかし、アイテムBOXで寄生虫も死ぬなら、魔物の刺し身も食
えるなあ」

「豚とか羊とか、熊とかやべえけど、禁断の刺し身が味わえるって
ことだよな」

俺とアキラの会話に、リリスが怪訝な顔をしている。

「ちょっと待つがよい！ 刺し身というのは、なんなのじゃ。不吉
な予感しかせぬが……」

「刺し身ってのは、肉を生で食う料理だよ」

「やはり！ それは、少々考えさせてもらおうわえ」

「別に無理に食べるとは言わないよ」

俺たちの話を黙って聞いていたアマランサスが、マスの寿司を摘むと、口に放り込んだ。

「ふむ……これは未知なる味じゃ。この国のどんな料理にも当てはまらぬ。サンバクも、さぞかし驚くことだろうのう」

「母上——」

リリスはなにか言おうとしたのだが、意を決して寿司を食べてみるようだ。

目をつぶって、摘んだ寿司を口に入れる。

「……むぐむぐ……う、美味い！　なんと！　こんな料理は食したことがない！」

続いて、アマランサスが軍艦を食べた。

「ほう、これはまた初めての味じゃ。海藻に、魚の卵がこのような豊かな味になるとは……」

「ケンイチ！　この赤いつぶつぶも美味しい！」

アネモネも軍艦が気に入ったようだが——アキラが準備を始めた料理に皆が鼻を押さえた。

「くさい！　なに?!」

「ははは、さすがに、これは食えないだろう」

アキラが、巻き簾^スに置いた酢飯に、納豆を載せていく。

「な、なんだそれは!?　豆が腐って糸を引いているではないか?!」

「まあ、そうなんだけど……」

巻いた海苔巻をアキラがカットして、納豆巻の完成だ。一つ頬張る。

「おっ！ 本当に納豆巻だ！ うめえ！」

「ははは、いやあ、涙が出るぜ。ケンイチ！ ビールをくれ！」

「ほい！ エ〇スでいいか！」

「ずっとこどっこいべらぼうめ！ あたりきしやりきのあたぼうよ！」

ゲテモノ食いの彼女たちも、さすがに納豆は無理だったようだ。

俺たちの大騒ぎに、ちよつと離れた場所で食事をしている連中は、ドン引きしていた。

肉の生食なんて、とんでもない野蛮な行為に見えるらしい。

文化の違いは致し方ないとはいえ、刺し身が食えるようになったのは、大発見だな。

「ケンイチ！」

声がする方向を見ると、自転車に乗ったプリムラだ。

「プリムラ、大物を仕留めたぞ！」

「ケンイチ！」

プリムラが走ってくると、俺に抱きついた。

「ははは、なにも心配いらないよ。魔物の肉が大量に手に入ったから、なにか売れるものを作ろうぜ？」

「はい……」

こりゃ、今日の夜はプリムラとベッドだなあ……。

168話 イカクン

巨大なクラークンを倒した俺は、湖の上でそいつを切り刻み、アイテムBOXに収納。

岸へ戻ってくると、それを解体した。

解体途中で、アイテムBOXに生肉を入れると寄生虫が死ぬことに気が付き、アキラと一緒に寿司を作ることにした。

板前のバイトの経験もあるというアキラの握りはなかなか見事なもので、俺の舌では本職と見分けがつかないレベル。

彼と一緒に、久々の日本の味を堪能した。

生食文化がない、こちらの世界の人間たちには、思い切りドン引きされたが。

道具屋の婆さんとメリッサは、アストランティアに帰って、魔導の研究をするようだ。

ウチのアネモネとレイランさんの魔法を見て、思うところがあったのだろう。

討伐を手伝ってくれたノースポール男爵も帰路についた。

本人は不本意な結果だったようだが、俺から見れば十分に働いてくれたと思う。

彼は、アマランサスに忠誠を誓ったので、俺の味方——ということになる。

ただ、男爵になにかあれば、男爵領の住民たちの面倒も俺がみなくってはならない。

また俺の双肩が重くなった気がする……。

婆さんとメリッサが帰ったあと——レイランさんとアネモネの魔法の技術交流が行われた。

集落から離れ、森に近い場所で、あれこれと魔法のレクチャーが行われている。

小さいながらも、アネモネの持つ魔力の大きさと魔法の威力にレイランさんも、かなり驚いたようだ。

その光景を見守っている俺の後ろには、アマランサスがいる。

彼女は俺の護衛ということになっているので、いつも一緒なのが——。

元王妃が、俺の護衛というのは妙な気分だ。

「ケンイチ！ 見て見て！」

アネモネがレイランさんの所から走ってきた。

「おっ？ アネモネ、どうした？」

アネモネが魔法を使うようだ。彼女の周りに青い光が集まってくる。

『むー！ 光弾よ！ 我が敵を撃て！』
マジックミサイル

彼女の周りに複数の光の槍が顕現。

大木に向かって一斉に発射されると、地を這うように進み大木を根元からなぎ払った。

メキメキと大きな音と地響きを立てて、大木が倒れる。

「すごいな、アネモネ！ もう、マジックミサイルを覚えたのか」
そこにレイランさんがやってきて、ため息をついた。

「そう簡単に覚えられる魔法ではないのですが……」

「まあ、アネモネは魔法の天才だからなあ」
彼女を抱き寄せて、頭をなでなでする。

「えへ……」

ついでに、レイランさんから、ゴーレムのコアについて聞く。
水の上で簡単にイニシャライズをやってしまったことだ。

「あれは、ゴーレム魔法の欠陥なのです」

「欠陥？」

彼女によれば――デフォルトのゴーレム魔法にはバグがあり、そこを突いて簡単にコアを乗っ取ることができるらしい。

「ええ？ マジか――そりゃ大きな欠陥だな」

つまり、バグを使ってシステムの乗っ取りをしたわけだな。

「アマランサス」

「なんでございましょう？ 聖騎士様」

「このことを、王都に手紙を送って注意喚起したほうがいいかな？」

「なぜかえ？」

アマランサスは予想外に冷たい返事をした。

「なぜって？」

俺は、アマランサスの言葉に疑問を覚えたのだが、彼女が俺に顔を近づけてきた。

「これは、我が領の大きな利点になる情報。それを易々と敵に渡すのかえ？」

「敵ってな……王家を敵扱いするのか？」

「妾と聖騎士様の道を拒む者はすべて敵」

さらに彼女が顔を近づけてきた。

「アマランサス、近い！ 近い！」

彼女が俺に抱きつき、身体をくねらせる。

「アルストロメリアは、やり手じゃぞ？ 決め手は多い方がよい――はっ！ もしや、聖騎士様はやはり、若い女の方が……」

「そんなことはないけどな」
パワーがすごいので、抱きつかれて針金で巻かれたようになる。

「もう！ 近づきすぎ！」

アネモネが間に割って入ろうとしても、隙間も開かない。

「仕方ない」

アマランサスの背中から尻にかけてなで回す。

「はうんっ！ はあっ！」

彼女が身体をプルプルと震わせて、拘束が緩んだ。

「もう！ ずるゝい！ 私も！」

「はいはい」

アネモネを抱き寄せて、頭をなでる。

「ふわあああ……」

2人に抱きつかれる俺を見て、レイランさんがもぞもぞし始めた。

「ケンイチ様！ 失礼いたします！」

彼女が一礼すると鳥色のワンピースの裾をひらひらさせて、集落のほうへ向かう。

多分、アキラの所へ向かったのだろう。

レイランさんが、大きな胸を揺らしながら走れるようになったのも、俺が渡したブラジャーを元にして、彼女の身体にフィットする一品を作るのに成功したからだ。

さて大きな問題は片付いたが、まだまだ片付けなくてはならない問題が山積みだ。

とりあえず大量にあるクラークンの肉の使いみちを考えなくてはいけない。

これだけの肉を俺とアキラだけで消費するのは不可能だろう。

全部使い切ったあと、イカが食いたくなったら、シャングリ・ラで買う手もある。

シャングリ・ラには、冷凍のイカも売っていたからな。

アキラとクラークンの加工について話し合ったが、イカクン（イカの燻製）がいいんじゃないかということになった。

原型を留めてないし、なにより美味しい。

——まずは試作を行う。

アイテムBOXからクラークンのブロックを切り出して、すぐにしまう。

クラークンは生なので、外に出したままだと、すぐに傷んでしまう。

次に切り出した白い肉のブロックをアネモネの魔法で加熱してもらう。

テーブルの上——デカイタライに入れた白い塊の周りを青い光がまわりつく。

「むー！
ウオーム
温め！」

タンパク質が変質すればいいので、100度まで加熱する必要もない。

魔法の温めは電子レンジと同じで、中まで均等に加熱できるのが特徴だ。

「さすが魔法だよな。こんな塊を鍋で煮たりしたら大変だ」
アキラが、アネモネの魔法に感心している。

「けど、一般で作るとなると、そうしてもらわなければならないな。
魔導師を雇う金と、かかる手間暇がバ―ター^{物々交換}になるが」

試作に立ち会っているのは、俺とアキラとアネモネだけ。

他のやつらは気持ち悪がって、近寄ってこない。

まあ、そのうち好奇心の強い王族の2人がやってくるだろう。

できたものの味も、気になるだろうしな。

白い塊に火が通ったら、スライサーを買う。

スライサー――なんか恰好良さげな名前だが、要は裁断機だ。
機械には電動で回転する丸のこがついている。肉屋の店先で見た
ことがあるのが、シャングリ・ラで売っていた。

値段はプロ用なのか、少々お高めの4万5000円。

「スライサーか？」

「そうだ。さすがのアキラも使ったことはないか？」

「いや、スーパーのバイトで電動の使ったことあったし」

「やっぱり、スライサーも使ったことがあるのか」

電動なので、モバイルバッテリーを出して、機械に接続。

彼が経験者らしいので、使い方を教えてもらう。

「モバイルバッテリーか？ 発電機もあったよな？」

ここに遊びにきた彼に、発電機も見せていた。

「発電機もあるけど、ガソリンが高いんだ」

「そうか、ガソリンか……」

「軽油もないから、植物油から俺が合成してバイオディーゼル燃料

を作ってるし」

「そんなの俺じゃ考えもつかないし……太陽電池もあるよな？」

「バッテリーと太陽電池持っていくか？」

「うーん、別に要らないかねえ。明かりは魔法でなんとかなるし、TV放送があるわけじゃねえし……」

シャングリ・ラにはDVDやブルーレイの新作が上がっているとは言わない。

それはさておき試作だ。

金具で肉を押さえて回転刃めがけてスライドさせると――クラークンの白い肉が、正方形の薄いハムのように切れた。

「おお、いけるぞ」

「ケンイチ！ 私にもやらせて！」

「いいぞ、回っている部分は刃物だから、十分に気をつけてな」
「うん！」

カッツは、アネモネに任せるとしよう。

「スモークのときに吊るすなら、幅広より長方形のほうがいいんじゃないね？」

「そうだな」

アキラに包丁を渡して、2人で白い正方形を半分に切る。

スライスし終わったので、タレに浸ける――醤油と味醂、鷹の爪、昆布だしを少々。

「おっ！ この味醂は高いやつだな？」

アキラが言うとおりに、シャングリ・ラで購入した味醂の色は黒く、瓶には長期熟成と書いたラベルが貼ってある。

「せっかくだ、贅沢しようぜ」

——薄くスライスした切り身をタレに揉み込むと、すぐに引き上げて燻蒸器にセットした。

薄い肉が「珠のれん」のようにぶら下がる。

「昔、台所の入口とかに、珠が繋がったのれんとかなかったか？」
俺の質問にアキラが反応した。

「ああ——あったなあ、今でもあるのかね？」

「ウチの婆さんとか自作してたぞ？」

「木製か？」

「いや——新聞のチラシとかを細長く切ってな。それを巻いて珠型にしたものに、ニスを塗って紐を通してた」

「はあ、そりゃまた器用だな」

変なことを思い出してしまった。

ウチの一族は、なんでも作る作家揃いなのだが、こういうことをすると、「貧乏くさい！」といって、嫌う人間がいるのも事実。

自作すれば、世界で無二のものが目の前に現れるのに、なぜそれが貧乏くさいのか。

薄い肉を吊るしたあと、燻蒸器の底にチップを置いて火を点けると、もうもうと煙が上がる。

「おほ——いい匂いだぜ。こりゃリンゴか？」

「いや、リンカーという、多分バラ科の木のチップだ」

「ああ、リンカーか。そりゃ、サクラやリンゴみたいな匂いがするよなあ」

アキラはしばし、煙が出ている燻蒸器を見つめて、何かを考えている。

「どうした？」

「いやあ、燻製はしてなかったなあ——と思ってな。リンカーなん

て結構生えてるのに……」

「ウチでも植えたぞ。実験的に摘花して、実を大きくしてみるつもりだ」

「青森でリンゴの摘花のバイトしたぞ。確かに——なる実を少なくともすれば、大きく甘くなるかもな」

「だろ？」

「ケンイチ、味醂を飲んでいいか？」

飲兵衛のアキラが、味醂の瓶を掲げて、舌なめずりをしている。

「いいけど——まあ、味醂を飲む人もいるよな」

「高級な味醂は、酒としても結構美味いぞ？」

「どうやって飲む？ ストレートか？ ソーダ割りか？」

「お！ ソーダ割り、いいねえ」

アキラのリクエストで、シャングリ・ラでソーダを買う。

「へへへ」

グラスに黒い味醂を注ぐと、ソーダで割り、アキラはぐいっと飲んだ。

「どうだ？」

「……ケンイチ、悪い！ レモンはないか？」

「あるぞ」

シャングリ・ラでも売っているが、バラ売りではない。3kgで2500円だ。

購入ボタンを押すと、箱でレモンが落ちてきたが、山盛りの黄色の果実のアキラが驚く。

「そんなにか？」

「まとめてしか作れないんだよ」

「そういう仕組みなら、しゃーないな」

アキラが、レモンを包丁でカットして、薄切りに――それをグラスの中の味醂にちよつと絞ると、皮ごと浸けた。

「うーん！ トレビアーン！ やべえなこれ、美味しいぞ」

「なにこれ？ 木の実？」

アネモネがレモンに興味津々だ。

「ちよつと食べてみるか？」

「うん！」

薄切りにしたレモンをアネモネに渡す。

「す！ すっぱーい！！」

レモンを少しかじったアネモネが、口をとがらせたまま固まっている。

「ははは」

「でも、酸味を抜くと、レモンって糖分高いんだよな」

「ああ、玉ねぎもそうだぞ。辛味を抜くと、かなり糖分が高い」

俺たちがスモークしていると、リリスとアマランサスがやってきた。

「魔物料理なんて、気持ち悪いんじゃないのか？」

「そんなことはないわえ。ドラゴンも食べたというのに。それに、そなたたちが作るものは、絶対に美味に違いない」

俺の嫌味に少々怒るリリスだが、その横でアマランサスは調味料に興味を示している。

「聖騎士様、この黒い液体は？」

「それは醤油だな。豆を発酵させて作った、豆醬だ」

「こちらの黒い液体は？」

「それは味醂——ええと、穀物で作った酒から作った甘い調味料だ」
「甘いのか?」

レモンの酸っぱさにやられたアネモネが、甘いという単語に飛びついた。

「味醂を飲むやつは、ここにいるけどなあ」
アネモネに少し舐めさせてみる。

「本当に甘い」

「お酒だから、これ以上はダメな」

「妾なら、よいじゃろ?」

「それじゃ、アキラと同じにして飲んでみるか?」

アキラが作ったカクテルと同じレシピで、アマランサスにも作ってやる。

「ほう! これは美味じゃのう! それにしても、酒を甘くして調味料に使うとは、なんという知恵」

「うんうん、さすがケンイチは賢者じゃのう。ところで——」

「なんだ、リリース?」

「その黄色いのは果実かの?」

そのリリースの言葉に、アネモネが包丁を持ち、レモンを厚切りにすると彼女に差し出した。

「はい!」

「おお、アネモネ——気が利くのう! あむ!」
一口かじったリリースが、口を突き出したまま固まって震える。

「梅干し食べて、スッパナントかって昔あったよなあ」

「ああ、あったあった」

「酸っぱいの! ななな、なんじゃこれは?!」

「なにつて、果実だよ。いろんなものに使える。お菓子や飲み物にも使えるぞ?」

シャングリ・ラでレモン絞り器を買って、黄色い果実の汁をたっぷり絞る。

それを砂糖と一緒にグラスに入れて、炭酸水で割る。

「ほい」

俺が差し出したレモンジュースを、リリースが警戒している。

「また、酸っぱいのであろ?」

「酸っぱいけど、美味いぞ?」

俺が毒味で一口飲んで見せるとリリースも、グラスに口をつけた。

「うう……美味しい! これは、美味しいな! なんとという爽やかな味じゃ!」

レモンジュースを一口飲んだリリースが叫んだ。

「まあ、そういうのに使える」

「それに、はちみつを入れたら、レモネードだよな」

「そうそう」

「ずるゝい! ケンイチ! 私も飲む!」

「ほいほい」

アネモネにも同じものを作ってやった。

「甘酸っぱくて美味しい!」

「この美味さも、砂糖があればこそじゃな。あの砂糖ができる草も大きくなってきたことだし、そろそろ始めるのかえ?」

「そうだな。懸案だった、湖の魔物も退治できたしな。湖畔の安全も確保できただろう」

喜ぶアネモネとリリースをアキラが眺めている。

「ケンイチ、レモンやミカンの木は作れないのか？」

「ああ、ここなら、レモンやミカンもなるかもなあ。試しに植えてみるか？」

とりあえず植えてみて、順調に育つようなら、人に丸投げしてもいい。

なんでも自分でやらないで、人を使うことを覚えないうな。

シャングリ・ラを検索すると、いろんな種類のレモンやミカンが売っていた。

農家の移民がやってきたら、苗を預けるのもいい。

「この世界で柑橘類は見たことがなかったから売れると思うぜ」「そうだな」

俺たちがレモンで遊んでいる間に、スモークが完了した。燻蒸器の蓋を開けると、スモークのいい香りが噴き出す。

「どれどれ、早速試食してみるか。ほい、アキラ」

「サンキュー！」

オッサン2人で、イカクンを口に入れて咀嚼する。

「おっ！ こりゃ美味しいぞ！ 市販のより美味しいな！」

噛むと旨味が口の中に広がり、鼻孔からスモークの香りが抜ける。

「こりゃ、めっちゃ美味いって！ ケンイチ、ビール！」

「ほい！ 極度に乾燥しなさい！」

「サンキュー！ グビグビ！ ははは！」

「ケンイチ！ 私も食べる」

「ほい、アネモネ」

大きなイカクンのシートをもらったアネモネは、それを千切って口に放り込んだ。

「美味しい！」

「美味いよな？」

「うん！」

「リリスとアマランサスも食べてみるか？」

アマランサスには、ビールと一緒にイカクンを渡した。

「ほう！ これは珍味じゃ。以前に食した単純に焼いたものより、こちらのほうが美味い」

リリスがイカクンを持ったまま叫び、アマランサスは肴にしてビールを飲んでいる。

「なんと、これは酒の肴にピッタリじゃな！」

「珍味って——元世界でも珍味って名前だったがなあ」

「そうだな——ケンイチの所に珍味売りって来なかった？」

アキラが懐かしいことを言い出した。

「ああ、来たなあ。歌を歌ってくれるバージョンもあったようだよ？」

「歌？ どんな歌なんだ？」

「私たちの丹精込めて作った珍味を買ってくれてありがとうございます
ますくみたいな」

「そんなのがあるのか？」

「年寄りなどは、一生懸命歌ってくれたとかいって、感激しちゃうらしい」

「孤独な年寄りってのは、人とのつながりに飢えているからなあ……」

なんか、異世界で悲しいネタになってしまったな。

とにかく、この世界の住民にも美味いらしい。

「他のやつにも食わしてみるか——おいしい！ ミャレーかニャメナはいないか?!」

大声で叫んでみると……ニャメナがやって来た。

「なんだい旦那？」

「新作の美味しいものができたぞ？ 食ってみないか？」

「……それって、あの魔物の肉だろ？」

「よく解ったな。ほら、美味しいぞ？ エールと一緒に食ってみろ」
イカクンと、極度に乾燥しなさいをニャメナに差し出した。

俺とアキラがムシヤムシヤ食ってみせるのだが——耳を伏せて、尻尾をブンブン——かなり警戒している。

「まあ、無理に食わせるのも悪いが……」

「あ！ そうだ、ケンイチ！ ネコにイカとかタコ食わすと、腰が抜けるんじゃないかったか？」

「そういえば——そんな話を聞いたことがあったような……」

俺たちの話を聞いたニャメナが、毛を逆立てた。

「俺たちはネコじゃねえ！」

大声を出したニャメナが、イカクンを口に放り込んで、ビールをグイっと飲んだ。

そのまま、しばらく咀嚼していたのだが——。

「……あれ？ 美味しいような……」

「もうちょっと食ってみるか？」

追加のイカクンをニャメナに渡すと、彼女はそれを口に入れた。

「旦那、これってあれだよな？」

「そうだよ。美味しいだろ？」

「美味しい！ こりゃ、酒の肴にピッタリじゃねえか！」

飲兵衛の定義は、どこの世界でも共通のようだ。

「ニヤメナ、プリムラは来てたか？」

「さっき見かけたから、来てたと思うぜ？」

「呼んできてくれるか？」

彼女にイカクンを追加で渡す。

「はいよ〜へへへ」

少しするとプリムラがやって来た。

護衛のシャム柄のニヤレサも一緒だ。

「ニヤメナの話によると、美味しいものができたとか？」

「ああ、まずは食べてみてよ」

「へへへ、旦那あ。あたいにも食べさせておくれよ」

「魔物の肉だけどいいのか？ 最初、獣人たちは見向きもしなかったんだぞ？」

「だって、トラ公が美味いって言ってるしさあ」

プリムラとニヤレサにイカクンを渡すと、2人でクンカクンカしている。

「においはいいですねえ」

「食うぜ！」

まずは、ニヤレサが口に放りこんだ。

「お！ 美味いぜこれ！ 本当に魔物の肉なのかい？」

「ああ、本当だぞ？」

ニヤレサにもビールをやる。

「あんな化け物がこんなに美味しくなるなんて……」
プリムラには、解体中の写真を見せている。

「とにかく、この肉が大量にあるんだ。なんとか金にしないと勿体ないだろ？俺とアキラで食ったら、何十年かかるか解らん」

「ははは、そりゃそうだな。いくら美味くても毎日食ってらんねえし」

「かっつ！こいつは、酒の肴にバッチリだぜ！」

ビールを飲んだニヤレサが、缶を掲げて目をつぶっている。

「飲兵衛は皆同じことを言っているな」

「——という事は、酒飲みに売れるということですね」

俺の言葉に反応して、プリムラの目がキラリと光る。

「そういうことだ、プリムラ」

「でも、魔物の肉ということで警戒されないでしょうか？」

「まあ、そうだな。ニヤメナに食わせるのも苦労したしな」

「ケンイチ、まずはタダで試食させればいいんだ。タダなら食うやつがいるだろ」

アキラも、ビールを飲みながらムシヤムシヤとイカクンを食べている。

「まあ、一度食ってもらえば、美味しいのは解ってもらえるか……そうするか、プリムラ」

「はい、それはいい考えだと思いますが、これを作る手間はもうどうでしょう？」

「スモークサーモンを作るより簡単だ」

「それでは——」

サンプルを渡そうとしたが、アネモネとリリスによって、食われてしまっていた。

「ふう、まったく美味じゃ——これは、おやつにも最適じゃのう」

「ケンイチ、お姫様1人で、あのクラーケンを全部食い尽くすんじゃない……」

「ありえる……」

「そんなことは、ありえんじゃろ！」

追加の試作をしたあと——早速、プリムラはサントンカに向かい、スモークサーモンと同じラインで、イカクンを製造する交渉を村長とするようだ。

サントンカでの人手が足りないのなら雇えばいい。仕事があるなら人はやってくるのだ。

実際、サントンカの人口はすでに倍になっているが、特に女性が多い。

燻製づくりは、女性向きの仕事なのだ。

それに人が増えれば、それを当てに、商店や飲み屋を営む者も出てくるし、村がドンドン大きくなる。

このイカクンは、ここでしか作れないから、コピーされる心配もないが、原料がなくなったら終了だな。

シャングリ・ラでイカを買うか、海まで行ってイカを獲れば続けられるが……。

それまでに、なにか別の商売を考えないとな。

「まるでシミュレーションゲームをやっているみたいだな」

アキラのつぶやきとおりにゲームのようだが、これは現実。

失敗をすれば、路頭に迷う人々も出るのだ。

169話 サンバクが来た

アキラと一緒に異世界寿司を作って舌鼓を打ち、クラークンの肉を使ってイカクンを試作してみた。

元世界のイカクンと全く同じで、しかも美味しい。

これなら売れるということで、サンタンカの村で生産が始まり、限定品として売りに出されたが、殊の外好評であるらしい。

スモークサーモンよりは日持ちもするので、少々遠くの街まで輸出できる。

それによって、我がハマダ領の名前も徐々に広がりつつあるようだ。

領の名前が広がるにつれ、住民の数も増えてきたが、相変わらずの住宅不足。

急ピッチで森が切り開かれて、住宅の建設が行われている。

俺が苦勞して作ったツリーハウスも撤去されてしまい、足場に使っていた大木も切り倒されてしまった。

その場所は住宅地になり、新しい住民たちの棲家となる。

行き場を失ったツリーハウスは、しばらく開発する予定のない崖の上に移転した。

崖の上を本格的に開発するためには、階段が必要になるだろう。

俺が作った単管の足場をいつまでも使うわけにはいかないだろうしな。

崖に階段か――岩を削って作るか、それともコンクリで階段を作るか。

いずれにせよ、まだ先の話になる。

サクラを訪れるのは、新たな住民や商人たちだけではない。

ハマダ領の評判を聞きつけた、貴族たちもやってくるようになったが、屋敷がない俺の領地を見て唾然。

それでも、味方になってくれると宣言してくれた貴族には、生産が始まった砂糖と1／10オンス白金貨を渡した。

最初は、貧乏領だとバカにしていた貴族たちは、白金貨と砂糖を見て豹変。

見事に掌を返しまくった。まったく現金キャッシュなやつらばかりだ。

金に集まるゴキの如き、こんな奴らはどうでもいいのだが、枯れ木も山の賑わい——役に立つこともあるだろうから、根回しは欠かせない。

政まつりごとの素人の俺は、素直にリリスとアマランサスの助言に従う。

噂が噂を呼び、訪れる貴族や商人たちも増えてきた。

それを見たリリスやアマランサスも苦笑いしている。

「ほんにのう——城にも、陳情や媚を売りにくる貴族や商人は多かったが、ハマダ領もそんな感じになりそうじゃのう……」

「リリスの言うとおりだわえ」

アマランサスは扇子で口を隠して、いつものポーズだ。

俺としては、白金貨が広まってくれて、正式に流通してもらったほうがありがたい。

なにせ、白金貨1枚で金貨100枚分の価値があるのに、シャングリ・ラでの購入価格はほとんど変わらない。

金貨で白金貨を買って、金貨100枚と交換して、また金貨で白金貨金貨買——。

まさに錬金術。これで金に困ることはなくなるってわけだ。

この世界に来たときに、シャングリ・ラとの価格差を利用して、

金貨と銀貨を交換しようと試みたことがあったが、怪しまれて失敗した。

あ那时的俺は、ただの怪しいオッサンだったが、今は貴族だ。大手を振って鍊金術が行使できる——といえ、あまり派手にやっでは、経済が混乱する可能性もあるし、王家や有力貴族に睨まれることになるだろう。

リリースやアマランススは気にすることはない——と言っているのだが、争いはなるべく避けたい。

この白金貨——つまりプラチナだが、意外な経済効果を生み出している。

俺のところにやってくる貴族たちは、領地を持たない貴族が多い。偉そうにはいるが、家計は火の車。

手に入れた白金貨を早々に売ってしまい、手に入れた金貨であれこれ買い物をしたり、借金の返済をし始めた。

それによって、停滞していた王国の経済が回り始めたのだ。

——そんなある日、荷物を満載した2台の荷馬車がやってきた。2頭立てなので、馬が4頭——鹿毛と芦毛の馬が2頭ずつだ。

その馬車から降りてきたのは、金色の髪とカイゼル髭を生やした紳士。

いつも着ていた白い服ではなく、地味な紺色の服であったが——お城の料理長サンバクだ。

「サンバク——さん」

俺は貴族になったので、呼び捨てでいいのだが、どうも慣れない。

「辺境伯さま！ サンバクでよろしいですよぞ」

「それでは、俺もケンイチで」

「よろしくお願いいたします。ケンイチ様」

そこにリリースがやってきた。

「サンバクではないか。本当にやってきたのだな？」

「お久しぶりでございます、姫様。もちろんでございますぞ。伊達や酔狂で、このようなことはできません」

直立不動になって、サンバクが答えた。

「妾はもう、姫ではないが」

「これは失礼いたしました。ハマダ辺境伯夫人」

「リリースでよい——ところで、そなた——夫人はどうした？ 見当たらずが……」

彼女の言葉を聞いたサンバクの顔が曇る。

「離縁いたしました」

「なんと！」

サンバクの話聞いたリリースが驚いて、彼の顔を覗き込む。

「なにもない辺境で、料理の真理を追求をしたいと申したら、猛反対されました」

「さもありなん。まあ、夫人の意見も理解できる」

「王都から動きたくないと思ったので、私の資産のすべてを渡して離縁いたしました」

「それで、あの馬車の荷物が、今のそなたのすべてか？」

「そのとおりでございます」

「サンバクは、それでよかったのかい？」

一応、彼の決意を聞いてみた。

「もちろんでございます。ケンイチ様の知識の海の中にある、いまだかつて見ぬ料理を食べぬうちは——このサンバク、死んでも死にきれません」

いままで積み上げたすべてを捨てて、新しい料理の追究にやって来たということなのだろう。

「それでは、そんなサンバクにこれを」

俺は、アイテムBOXから、スモークサーモンを取り出した。

「こ、これは——最近、辺境で噂になっているという魚の燻製ですか？」

「そう。まあ食べてみてよ」

ナイフで切って、彼に食べてもらう。

サンバクは、切り身の断面をまじまじと見ている。

さすがに料理人だ。色々と気になるのだろう。

「これは生でございますか？」

「そうだなあ——生と干物の中間といった感じかな？」

俺の言葉を聞いたサンバクは、スモークサーモンを指で摘んで口に入れた。

「む！なるほど——これは素晴らしい。柔らかな魚の身と旨味——そして燻蒸の香りが、音楽を奏でているようだ」

「これは、気に入ったようだな？」

「まさに、かつて食したことがない味でございます」

「それじゃ、そこにこの酒を」

俺は、日本酒の大吟醸をグラスに注いでやった。

サンバクは、透明な液体とグラスを確認すると、匂いを嗅いでいる。

「これは——まるで果実のような香りが……果実酒でございますか？」

「いや、穀物から作った酒だ」

「穀物……これが？」

サンバクが一口飲む。

「なんと——酒で魂が震えるとは、信じられん……」

彼は、ジッと目を閉じて上を向き、大吟醸の余韻を楽しんでいる。

「それじゃ次——」

次は、同じ燻製でも、イカクン——クラークンの燻製だ。

「これも燻製でございますな」

「サンバク——それは、妾も大好物じゃぞ？ おやつにちょうどいい」

「ほう、姫様——リリース様も好物とは……」

サンバクがイカクンを摘むと、口に放りこんだ。

これは、まじまじとは見ずに、いきなり口に入れた感じ。

「むう……これは獣でもなく、魚でもなく。イカかタコ？」

さすが、一流の料理人だ。イカとタコを食べたことがあるらしい。ゲテモノと決めつけずに美食を追求する、その姿勢は素晴らしい。

「これは、クラークンというイカの魔物の肉だよ」

「なんと、これが噂の魔物の肉！」

「サンバクは、イカとタコを食べたことがあるんだな？」

「はい、若い頃に海辺の村で食べました。ハッキリ言って、美味しいものではなかったのですが……」

彼の話からするとタコみたいだな。渋い表情を見ると、かなり不味かったらしい。

「タコは、煮るのが難しいみたいなので、大雑把な調理だったのだろ」

俺とサンバクを見ていたりリスが、リクエストを出してきた。

「ケンイチ、サンバクに海苔巻を食べさせてやってくれ」

「解った——果たして、どうかな？」

彼が、俺が出した太巻きをまじまじと見て、においを嗅ぐ。

「この黒いのは、海藻でございますな」

「海藻も食べたことがあるのか？」

「ええ」

この世界でも、海辺では海藻を食べたりするんだな。

少々驚きだが、海藻を消化できる遺伝子は、日本人だけみたいな話もあったような……。

——そんなことを考えていると、彼が太巻きを口に丸ごと入れた。

「甘酸っぱい穀物と、シャキシャキの野菜、香草——そして中心には、魚？ 回りには海の香りの海藻が取り囲んでいる」

「どうじゃ？ サンバク、最近の妾のお気に入りの料理じゃぞ？」

そう——最近、リスは海苔巻やおにぎりを食べているのだ。

「これは、見事なものでございますな。完成されたものが凝縮され渾然一体となっている。もしかして——魚は生でございますか？」

「ああ、生食は本当はダメなのだが、アイテムBOXを使った裏技を開発した」

「裏技……」

アイテムBOXに入れると、寄生虫は死ぬ。

アキラと一緒に魚についていたアニサキスのような寄生虫を掴まえて、アイテムBOXに収納。

寄生虫が死ぬのを彼と一緒に確認した。同じように有精卵を入れると中で死んでしまい、外に出すとすぐに腐り始める。

——ということは、寄生虫の卵も死ぬということだ。

「アイテムBOXがないと食えない料理ってことになる」

「なんと、アイテムBOXにそのような使い方が……」

「これを使えば、魔物や獣の生食もできるようになるぞ?」

「し、信じられません……」

「やっぱり料理人だな。生食を頭から否定しない」

この世界で生食は禁忌のはずなのだが、サンバクは真剣な眼差しで俺を見ている。

「肉としても素材の良さを究極的に求めようとすると、生食にたどり着くのではないかと、常々思っていました」

「でも、生食は危険だから……」

「そのとおりです。腹痛を起こし七転八倒したり、酷くなると気が狂い、奇行に走る者など……」

奇行ってのは、寄生虫が脳みそに入っただろうか?

元世界でも、そういう事例をネットニュースで見たことがある。

「奇行の原因は、なんだと言われている?」

「原因は不明ですが、禁忌を犯したため神の怒りに触れたのではないかと……」

やっぱり、この世界には生肉には寄生虫がいるっていう概念がないようだ。

「原因については、俺に心当たりがある」

「なんでございましょう?」

「虫だ」

「む、虫でございますか?!」

俺の言葉が予想外だったのか、サンバクが仰天する。

「野菜でも肉でも、生のものには、目に見えないような虫がついて

いる。便の中に虫が混じっているのを見たことがないか？」

「あ、あります」

「それが、腹の変な場所に入ると腹痛——頭に入ると奇行という感じになる」

「あ、頭にも入るのでございますか？」

「ああ、虫に脳を食われていた死体を見たことがある」

「う！」

黙って話を聞いていたリリースが口を押さえた。

「……生食が禁忌とされるのは、そのような原因があるのじゃな？」

「まあ、そういうことになるかな」

「しかし、アイテムBOXに入れることで、そのような危険な虫の類をすべて排除できると——」

「そのとおりだが——いままで禁忌だったものを、即座に受け入れるのは難しいだろうから、おすすめはしないよ。食べると言っても、ウチの家族の一部しかいないし」

「いやはや、このような料理が、この世界にあるとは……」

この世界じゃないんだけどな——まあ言わぬが花ってやつだが。

せっかくサンバクが来てくれたというのに、止めどなく話し込んでしまった。

彼の荷物を降ろさなくてはならないが、彼が使う家もないのだ。しかたなく、いつものコンテナを2つ出して、彼に使ってもらおう。

「申し訳ないが、家がないんだ。俺の屋敷すら、まだ建っていない状況だからな」

「民の棲家を優先しているのでございましょう？」

「まあ、そんなところだ」

「この鉄の箱があれば、十分に使えますので」

コンテナに入り切らなく、あまり使用頻度が高くない荷物は、俺

のアイテムBOXに退避させた。

やれやれ——住民が増えても、まったく住宅が追いつかないじゃないか。

元世界のように、機械があるわけじゃない。皆が手作りなので仕方ない。

俺の機械を出すと、作業員の仕事を取ってしまうので使えないが、棟上げなどの作業が大変な工事は手伝っている。

そうした方が効率がいい。

サクラにやって来たサンバクは、次の日からメイドに混じって厨房に立ち、料理を始めた。

サンバクとメイドたちは、お城にいたときから、王族のための料理を作っており、気心の知れた仲だ。

最強タッグと言えよう。

「サンバク、料理をするなら色々面白い材料があるぞ」

俺はアイテムBOXにしまっている材料を出してみせた。輪切りにした巨大なワーム、巨大なハチと幼虫、そして卵。

「——きゃあああ！」

俺の出した食材を見たメイドたちから、悲鳴が上がった。

「おおっ！ これは、見たことがないものばかりだ！」

「サンバク、ワームを食べたことは？」

「虫醬などに、使われていると聞いたことがあります——」

「さすがに、虫醬をお城で使うことは、ないだろうしなあ」

「うゝぬ……」

サンバクは、早速料理を考えているようだ。

俺が食材を渡して、夕方に出てきた料理が——ラビオリに似た具

が入っているスープ。

香辛料や調味料で味付けしたハチの幼虫のドロドロを固めて、小麦粉のシートで包んだものだ。

空がオレンジ色に染まる頃、皆でテーブルを並べて、食事をする。ウチの家族とアキラも一緒だが、カナンは相変わらず仕事で、アストランティアにいる。

今日は、プリムラが一緒だ。

サンバクが作ってくれた料理を食べる。

ラビオリに似たものをスプーンで掬い口に入れて噛むと、卵の白身に似た感触のものが、溢れ出す。

「うん、これは美味しい」

「ほう、まことじゃのう。このまま王宮の料理で出てもいいぐらいじゃ」

リリスがお姫様らしく、背筋を伸ばして料理を味わっている。

やはり昔からの知り合いがいますと、お城の作法を思い出してしまうのだろうか？

「リリスの言うとおりだわえ」

「ありがとうございます」

「美味しいね！」

アネモネも、ラビオリをパクパクと食べている。

これなら、ハチの幼虫料理と言われても解らないだろう。

「アネモネの言うとおりじゃが、サンバク——これだけ山盛りにてきぬのかえ？」

リリスは、ラビオリだけを山盛りにして食べたいようだ。

「ははは、姫様——それはできません」

「むう……」

俺ならリリスのわがままを聞いてしまうのだが、彼は厳しい。

「ケンイチ様。このパンも素晴らしいものでございますな」

「ああ、そうだ！ サンバクが来たのだから、料理窯の製作を急がせよう」

建物は無理でも窯は作れるだろう。

屋敷ができれば、バラして移設すればいい。

———というか、窯として固まっていれば、アイテムBOXに入るよな？

「ありがとうございます」

「うめえな！ こりやすげえ。さすがプロの料理人だな」

一緒に飯を食っているアキラ也大絶賛だ。

「俺たちのは素人料理だから———といっても、アキラは料理屋で働いたことがあるじゃん」

「ははは———まあ、門前の小僧習わぬ経を読むってやつよな」

「サンバク、こちらは俺が懇意にしている帝国の大魔法師、アキラだ。お城で会ったよな」

「よろしく！」

アキラが俺がやったビールを掲げている。

「よろしくお願いいたします」

「ああ、帝国の竜殺しの話はしたっけ？」

「はい———お城でも、あちこちで話題に上がっておりますが、帝国皇帝の懐刀だったという———」

「まあ、そうだったんだけど———職場での扱いが非常に悪くてねえ。足抜けした。ははは」

「なんと……」

アキラを紹介すると、どんな人でも驚く。

帝国の竜殺しといえば、そのぐらい有名人なのだ。

ちよつと離れた場所で料理を食べている獣人たちが、話しかけてきた。

「なあ旦那。こんな偉い料理人の料理を、俺たちが食べていいのかよ？」

「そりゃ、家族なんだからいいんだよ」

「でもさあ……」 「トラ公は心配性にゃ。ケンイチのことだから、色々と考えているんだにゃ」

「まあ、ミャレーの言うとおりだよ。領主が獣人たちを愛人にしてある——というのは、実は大きな意味がある」

「そ、そうなのかい？」

ニャメナが、少々訝しげな顔をしている。

「領主様が、単にそういう趣味ってだけじゃないかい？」

茶化しているのは、プリムラの護衛のニャレサだが、そこにベルがやってきた。

「にゃー」

彼女に、サンバクが作ってくれた特製のラビオリとネコ缶をやる。ラビオリは香辛料と調味料を抜いたものだが、美味しそうにネコ缶と一緒に食べている。

「よしよし、美味しいよな」

食べている彼女の背中をなでてやる。

「にゃー」

「こうやって領主が、獣人と一緒に食事や寝床を一緒にすることで、お前たちに対する偏見や差別がないと、住民たちに訴えることがで

きるだろ？」

「そうかあ」「そうだにゃ」

「獣人たちが、つらい目に遭ったとしても、領主がちゃんと対応してくれるにちがいない——と考えて集まってくるわけだ。実際、あの3人組だって、俺が獣人好きだと解っていたから、ここまでやって来たわけだし」

俺の話を茶化していたニヤレサだが、椅子から降りると地面に手をついた。

「旦那！ いや、領主様！ 領主様が、そこまで獣人のことを考えてくれているなんて、あたいは知らなくて……」

「まあ、解ってくれればいいよ」

「そうだにゃ、シャムは大変失礼なことをしたにゃ」

「こら、ミヤレー。あまりいじめてやるな」

「だいたいニヤレサ。旦那の傍には森猫も一緒にいるんだぞ？ 普通の只人じゃ考えられないだろ？」

只人というのは、エルフやドワーフ、そして獣人以外の普通の人間っていう意味だ。

「た、確かに——森猫様が只人と一緒にいるなんて聞いたこともないな……」

森猫に様をつけてないのは、ミヤレーとニヤメナだけだ。

ミヤレーは最初から様つけをしてなかった気がするが、元々揉んだり信心深いタイプではないらしい。

獣人たちは理解してくれたようなので、プリムラにサンタンカでのイカクン製造ラインの進捗状況を聞く。

「順調です。魚と違い骨を抜く作業がないので、作業をしている女たちは楽だと言っていました」

製造ラインを埋めているのは、女性たちだ。骨を抜く作業は細かいので、大雑把な男にゃ無理だ。

この世界の女性の仕事は、あまり多くない。稼げると解れば、サンタンカに移住する女性も多いだろう。

「村でのイカクンの評判は？」

「魔物の肉だと聞いて最初は驚いていましたが――やはり、食べてみると美味しいのが解ったようでした」

「そうだろうのう、あれが魔物の肉と言われても、信じられぬだろう」

リリスの言うとおりだな。まったく魔物の原型を留めてないし、肉っぽくないところも幸いしているのかもしれない。

イカクンと一緒に、カリカリに乾燥させた、スルメも売りに出された。

果たしてこれがスルメといえるかは不明だが、日持ちするので保存食として人気だ。

イカクンとスルメは、アストランティアやその他の都市でも、売上は順調。

最初から、限定品として売り出しているのも利いているのだろう。実際、クラーケンの肉は限られた量しかないので、限定品には違いない。

食事が終わると、メイドたちの後片付けを眺める。

みんなやってくれるので、俺のやる事がなくなってしまった。なんでも自分でやってきた人間なので、手持ち無沙汰だが、こういうのにも慣れないとな。

ふと見れば、獣人の男たちが、暗い湖のほうへ走っていく。背負子に男を背負っている獣人もいる。

なんだろうか？

「ニャメナ、獣人が湖の方へ走っていくんだが、なにかあるのか？」

「ああ、旦那。ありゃ、サンタンカに女を買いに行くんだよ」

「女……？」

彼女の話では、サンタンカの燻製製造ラインに入っている女性たちが、夜にも稼ぐために自分を売っているようだ。

稼げるときに、可能な限り稼ごうというのだろうが、この世界では普通にあることなので、咎めることもできない。

世界で一番古い商売っていうぐらいだからな。

サンタンカまでは5〜6kmほどあるが、獣人たちの脚ならたいしたことはない。

背中に乗っている男たちは、獣人の背中をタクシー代わりに使っているのだろう。

儲かると解れば馬車をどこから持ってきて、バス業を営む者が出てくるかもしれない。

そう考えると――そのうちサクラにも花街ができて、娼館が建ち並ぶのか。

行きはしないが、街が育つのは楽しみでもある。

170話 魔道具モーター

王宮の料理人だったサンバクが来てくれたおかげで、俺たちはこの世界での最高の料理を食べるようになった。

もちろん、日本料理も彼の手にかかれば、完全に再現されている。この世界にない調味料は、俺がシャングリ・ラから購入して渡せばいいのだ。

たとえば、昆布だしなどは——海岸沿いに行けば昆布に似た海藻も生えているらしいのだが、ここまでの輸送に手間暇がかかってしまう。

シャングリ・ラで数千円で買えるものを、数十万の運賃を払って手に入れる行為は、いわゆる無駄遣いではあるが、この世界の経済を回す——という観点から見れば多少の意味はある。

——とはいえ、やはり無駄遣いはしたくない。

食卓に並ぶ料理は、素人料理より数段優れ洗練されたものなのだが、アネモネとリリスは俺が作った料理を食べたいようだ。

俺としては嬉しいが、プロの料理人が離婚までして、わざわざこの領へ来てくれたのだ。

彼に任せるしかないだろう。

それに彼は、この領に集まってきている獣人たちにも偏見がない。俺の考えに賛同して集まってきている人たちは、基本的に偏見が少ない人物が多いようだ。

まあ、これからどうなるか解らないが、獣人が多い街に獣人嫌いが来ることはないだろうと思う。

——サンバクが来てから、しばらくたったある日。

昼過ぎに人が訪ねてきたというので、迎えに行くと——3台の荷馬車が荷物を満載して停車していた。

黒や鹿毛の馬が6頭、大きな荷馬車を牽いている。

「辺境伯様！」

馬車を降りてやって来たのは、黒い上下の服に黒いマントという、魔導師っぽい長身の男。

ちらりと見えた腰のベルトには、短剣が見えた。

長めの黒い髪を後ろでまとめている——王宮で魔道具の開発をしていたカールドンという魔導師だ。

「カールドン——さんは、要らないのか」

これだけは、どうも慣れない。

「はは、いりませんよ。辺境伯様」

「まさか、サンバクに続き、カールドンまで来てしまうとは……」

「申しましたでしょう？ 先進の技術を学ぶためには、辺境伯様のところしかありえないと」

そこに白いワンピースのリリスがやって来た。

「ほう、カールドンではないか」

「これは、お久しぶりでございます。王女殿下にはご機嫌麗しく」

「もう王女ではないゆえ、リリスと呼ぶがよい」

「ははっ」

「まったくサンバクといい、そなたといい物好きよのう」

「なにをおっしゃいますか。辺境伯様の下でしか、学べぬことがあるのでは、当然の帰結でございます」

「サンバクと同じことを申すの」

リリスの言葉を聞いたカールドンは、懷から手紙を取り出した。

「アルストロメリア様から、辺境伯様へ手紙を預かって参りました」
「ええ？ なにかな？」

「あまり、いい話ではあるまい」
赤い封蝋を切って、中の手紙を読む。

「えーと、『サンバクを返すがよい。アルストロメリア』これだけか？」

「ははは、サンバクがいなくなったことが、よほど堪えたと見える」
「それでございますが——お城では、料理が不味くなったと混乱しております」

「サンバクの話では、弟子は育っているって話だったがなあ」
手紙をもらったのだから、返信しなくてはならない。

「おーい！ 誰がいるか？」

「お呼びでございますか？ ご主人様」

俺の呼びかけに答えたのは、マイレンだ。

「ユリウスはいるか？」

「ユリウス様は、打ち合わせのために、アストランティアへ向かわれました」

「そうか——それでは、マイレンが書き留めてくれ」

「かしこまりました」

「『サンバクは奥方と離縁を済ませ、すべての資産も手放してこの地へ参っており、説得は難しい』この文章でお城のアルストロメリア様へ手紙を送ってくれ」

「承知いたしました」

「アルストロメリア様が、地団駄を踏む姿を見たいが……」

「リリース、悪趣味じゃないか？」

「なにを申す。妾がいじめられたことに比べたら些細なことよ」

リリスが腕を組んで憤慨している。

いじめといっても陰湿なものではなく、いたずらのようなものらしい。

親戚のお姉さんが、かわいい女の子をいじめて遊んだのだろう。

「サンバクもカールドンも、辺境伯領に来てくれたのは嬉しいんだが、屋敷がないんだよ」

「なにもない辺境に街を作るのでございますから、それは承知しておりますよ」

「とりあえず、俺が魔法で作った鉄の箱に、皆で住んでもらっていい」

彼を、コンテナハウスが並ぶ居住区へ案内するが――一応、身分で分けてある。

黒い鉄製のコンテナハウスが一定間隔で並ぶ。

こういうものはきちんとは並べたくなる性分だが、これを殺風景と感じる人もいるだろう。

「ほう！ これは面白い。皆同じ形をしておりますね」

カールドンが、コンテナハウスの外側をペシペシと叩く。

薄い鉄板なのだが、折り曲げ加工してあるので、強度が上がっている。

「同じ形をしていれば、大量に作るのも簡単なんだ」

「理にかなっておりません。住むために強度も十分でございます」

「ああ、それは保証するよ」

彼が中を確かめている。

「私といたしましては、家がなくてもこの箱でも十分でございますが」

「まあ、どうしても住みたいというなら、止めはしないが」

カールドンにコンテナハウスを3つ貸与する。寝室の他に研究室もいるだろうしな。

本当にコレに住むというなら、穴を開けて繋げる手もある。人を集めてもらい、カールドンの荷物をコンテナハウスに入れる。

引っ越し作業をしているとサンバクがやってきた。

「おおっ！ これはホルト子爵様！」

カールドンは貴族だが、領地は持っていない。カールドン・カルテン・ホルトが彼の名だ。

サンバクも貴族だが、平民出身であり一代限りの騎士爵。

先代王妃が、旅先でサンバクを捕まえて王宮にスカウトらしいのだが、詳細は不明。

本貴族のカールドンのほうが、かなり身分が高い。

「はっは、カールドンでいいよ。サンバク殿も、お元氣そうでなにより」

「カールドン様。この辺境は未知の知識が溢れておりますぞ？」

「私もそう思ったから、ここまでやってきた」

このようにドンドン人が増えるサクラだが、深刻な住宅不足だ。

石工も移住してきて、壁から石を切り出す作業を始めたが、土台や水回りに使うだけで、石造りの家はまだまだ先だ。

俺の屋敷も土台は石だが、木造の予定で進んでいる。

木は沢山生えているし乾燥は魔法でできるのだが、製材所は一箇所しかないのです、加工できる材木も限られている。

そこで製材所を新たに建築しようとしたのだが、製材に使うデカイ丸鋸は、水力で動いているために、川の近くでないと使えない。

川に新しい製材所を作るより、切り出す森の近くに建築したほうが運ぶ手間がかからない。

アイテムBOXを使えば簡単なのだが、俺がなんでもやってしまつては、公共事業にならないしな。
それで、いい考えが浮かんだ。

「カールドン、早速だが仕事がある」

「ケンイチ様、なんなりとお申し付けくださいませ」

「実は、製材所の巨大な丸鋸を動かす動力としてゴーレムを考えている」

「ほう！ さすがケンイチ様。そこに気が付かれましたか」

「王女が乗っていたドライジーネを魔道具で動かしていたが、あれも中身はゴーレムなんだろう？」

「お察しのとおりでございます」

つまり、ゴーレムのコアに回れという命令を与えて回し続けているのだ。

ゴーレムでモーターができれば、色々と利用方法がある。

洗濯機を作ったりとか、自動ドアを作ったりとかな。

自動ドアはあるようなので、俺が考えたようにゴーレムを利用しているのだろうと思われる。

「ゴーレムのコアを回しているのは解るんだが、それだと魔導師がいるだろう？ 魔道具にするためには、魔石から魔力を取るようにしたいんだが、その方法が解らん」

「それには、特殊な方法が必要になります」

やっぱり、簡単にはいかないようで、それなりのノウハウが必要になるようだ。

「それを教えてもらうわけには？」

「こんなことでよろしければ、もちろんでございます」

「よかった」

これで、糸口が見えたが――問題もある。

工作機械のエネルギー源になるような大きな魔石に、魔力を注ぎ込める人間が、そうそういないことだ。

小さな魔石への充填なら、そこらへんにいる魔導師でもできるのだが――。

メイドを呼び、アネモネを呼んでもらう。

「ケンイチ、なあに？」

「ちよつと魔法の実験だ。アネモネ、手伝ってくれないか？」

「いいよ」

彼女とカールドンは、お城で面識がある。

俺はアイテムBOXから、試作した小さなゴーレムのコアを取り出した。

材質は木でできた十字架だが、傘のように先端が垂れ下がっており、やじろべえのようにバランスを保って、支柱の上に留まっている。

回すことを前提にしているので、バランス取りもした。

ゴーレムのコアでモーターを作る想定をしていたので、試作はしていたのだが、魔力の供給元を魔石にする方法が解らず詰んでいた。メリッサやレイランさんも、ゴーレムは扱えるのだが、魔道具は詳しくないらしい。

そこで、魔道具の専門家であるカールドンの出番だ。

「さすが辺境伯様。このようなことを想定して、辺境伯という地位をお求めになったのでございましょう？」

「ん？ なんのことだ？」

「ゴーレムを起動するのは国の許可が必要ですが、辺境伯であればその権利が認められてると――」

「あゝ、そのことか。まあな、ふふふ」

したり顔で笑ってみせるが――大嘘である。まったくそんなことは考えていなかった。

「でもな、このようなゴーレムの使用方法は魔道具扱いで、王国が想定しているゴーレムではないとアマランサスも言っていたが……」
「確かにそうでございますが、開発などで汎用のゴーレムもお使いになるでしょう？」

「そうだな」

アネモネのゴーレムがあれば、崖の上に荷物を上げたりとか、クレーンがなければ大変な家の棟上げなんかも、簡単にできる。

利用価値が大きいゴーレムであるが、辺境伯であれば、その使用の権限が認められてるのだ。

これは大きい。辺境伯が多大な権力を持っていると言われるのは、伊達ではない。

「それはさておき、アネモネ。こいつを回してみてくれ」

「うん」

彼女が魔法を使うと、青い光が十字の傘を回し始めた。

「ここから、魔石で動かすにはどうする？ 特殊な方法を使うと言ったが？」

「実は、ゴーレム魔法に変更が必要なのでございます」

「変更？」

「通常、ゴーレムを起動するたびに魔法を流しこみますが、それをコアに直接書き込みます」

「それじゃ、ゴーレムの用途が固定されるわけだな」

「はい」

ゴーレム魔法はコアを通じて、色々と複雑なことができるが、コアに直接書き込んでしまうと、単純なことしかできない。

移動し続けるとか、回り続けるとか、カックンカックンするとか――。

遺跡などにあるという自動ドアってのは、これと同じ技術なのか

も。

「そうやって変更すると——近くにある魔力源を探して、コアが動くようになるのか？」

「そのとおりでございます」

実際に、彼に魔法を書き換えて、実践してもらった。

「これで動くのか？」

「はい」

試してみるため、俺はアイテムBOXから、魔石を取り出した。クラークンから取り出した、ソフトボール大の魔石。すでに充填済みで、中が青く光っている。

「これは、見事な魔石」

「この湖にいた巨大な魔物を討伐して、取り出したんだ」

「魔物でございますか？」

「これだよ」

俺はアイテムBOXから、画家が描いたスケッチを取り出した。写真も撮ってあるのだが、彼にカメラを見せるのはまずい。質問攻めにあってしまうし、答えられない。

「なんと！　こんな巨大な魔物が、湖に！」

「水上での戦闘は困難を極めたが、なんとか討伐できた」

「すばらしい！　お見事でございます！」

話をしながら、コアに魔石を近づける——と、ものすごい速さで、コアが回転し始めた。

「コアに対して、魔石が強力過ぎますな」

「おもしれえ」

魔石を離すと回転が落ちて、近づけると回転が増す。

「ケンイチ、私にもやらせて！」

「ほい」

アネモネが魔石を近づけたり離したりして、遊んでいる。

「これの巨大なものを作って、製材所の丸鋸を動かしたいんだよ」

「ははあ、なるほど」

「カールドンに作ってもらいたいんだが」

「かしこまりました！ 私におまかせくださいませ」

「引き受けてくれたお礼に、いいものを見せてやる」

俺は、アイテムBOXから、別の小さいゴーレムコアを取り出して、地面に置いた。

「こいつをちょっと動かしてみてくれ」

「私は、魔道具が専門でして、いわゆる普通のゴーレム魔法は得意ではないのですが……」

この場合のゴーレム魔法というのは、王国で普通に使われている、人形を作って動かす——というものだ。

「まあ、頼むよ。面白いものを見せてやるからさ」

「はあ——むん！」

彼の精神統一と共に、青い光が地面の土をコアの回りに集めはじめた。

すぐに人形になったのだが、動き出しそうに動かない。

カールドンには、これが精一杯なのだろう。

「アネモネ、あのコアを奪ってみてくれ」

「うん！ ——むん！」

すぐに土の人形が、てくてくと歩き始めて、腕をグルグルと回す。

「ロケットパンチ！」

ゴーレムの腕が千切れて、前方へ発射された。

「け、ケンイチさま！　これはいったい！？　ゴーレムが乗っ取られた？」

突然のできごとに、カールドンは目を白黒させている。

「王国で使われてる汎用のゴーレム魔法には欠陥があるらしく、裏技ですぐに乗っ取ることができらしい」

「な、なんですと?!」

「おっと、カールドン。この情報は、ハマダ領だけの秘密にしてくれ」

「し、しかし……」

彼は根が真面目なのだろうが――アマランサスが言ったとおり、この情報は領のカードの一つに使える可能性がある。

「約束してくれば、その方法も教える」

「……………承知いたしました」

彼は、下を向き目をつぶって、了承してくれた。
悪いが、これも領のためだ。

「ケンイチ、ちょっと悪い顔してる」

「え？　そう？」

「アマランサスに影響受けているんじゃないの？」

「そんなことは、ないと思うけどなあ……」

とりあえずアネモネを抱っこして誤魔化すが、政まつりごとについて海千山千のアマランサスの言葉は、至言だ。

取り入れざるを得ない。

アネモネに頼み――ゴーレム魔法の欠陥と、レイランさんが改良した魔法を、カールドンに教える。

「まさかゴーレム魔法に、このような欠陥があるうとは……」

「君に頼む魔道具は、修正した魔法を使ってくれ」

「承知いたしました。部屋の片付けをいたしましたら、すぐに製作を始めさせていただきます」

「よろしく頼むよ」

これで製材所のほうはなんとかかなりそうだな。

1ヶ月ほどして、改良型のゴーレム魔法で動く、巨大な丸鋸モーターが完成した。

サクラから少々離れた場所に、丸鋸だけが設置されている。

これを収める工場などは、あとから建築される予定だ。

早速行われた試験の結果は良好。トルクも十分で、太い丸太が茶色のおがくずを噴き出しながら真っ二つにされていく。

「おおーっ、すげえな」

異世界モーターの視察にアキラもやって来ていた。

「さすがのアキラも製材所でのバイトはしたことがないだろう？」

「それはなかったかな……」

「なんだか、資格マニアみたいだけど、あとなにを持っているんだ？」

「別にマニアじゃないぞ？ 仕事に必要なだから、取っただけ」

彼が持っているのは、宅建、簿記、普通車&バイク&大型免許、大型特殊免許、クレーン、玉掛、フォークリフト、船舶免許、ボイラー、危険物——らしい。

これで資格マニアじゃないと言い張るのは無理があるんじゃないかなろうか？

これに板前もやってたって話だし。

「あ、調理師も持ってたな。持っていると、飲食店とかのバイトがすぐに決まって便利だったぞ」

「そんなに持ってるのか？ 試験が大変だったろう？」

「プーで時間はあったからなあ。金にも困ってなかったし、並行して色々勉強してた。自慢じゃないが、暗記は得意なんだ、ははは」
両親が亡くなって入った保険金で暮らしていたので、時間はあったらしい。

退屈しのぎで資格を取っていたが――あまりに暇で旅を始めたのが、放浪生活のきっかけのようだ。

「へえーあと、ボイラーってどんな仕事したんだ？」

「ああ、山奥の宿泊施設みたいな所の全館暖房の管理人だったな」
「ホテルか？」

「いや、なにか会社の研修施設だとか言ってたが、あまりに暇でよく3ヶ月ぐらいで辞めたな――ははは」

マジでなにもなくて、ずっとTVを観てたらしい。

「危険物ってのは？」

「ああ、ガスタのバイトとかで使ったな」

「あれって、危険物がいるのか？」

「丙種危険物は簡単だぞ？ 灯油とガソリンとどっちが燃えやすい？
みたいな問題ばっかだし」

「ガスタはどのぐらいやったんだ？」

「んー確か2ヶ月だな。客のDONと喧嘩してな、フヒヒサーセン」
どうも、基本的にダメな感じがするのだが、気のせいだろうか？
そんな無駄話の間にも順調に木が真っ二つにされていく。

「こんなデカイモーターが作れるなら、車も作れそうだが……」

「電池になる魔石が問題だ。これに使っている魔石でも屋敷が建つぐらい高価だし、大魔導師クラスじゃないと、充填できない」

ここには、アネモネと俺がいるからな。アキラに頼んでもできそうだし。

「そうだな、1〜2台だけ装甲板を貼った戦車を作るとか」

「そういう手はあるな」

「ケンイチ様！ 戦車とは！？」

俺たちの話に聞き耳を立てていた、カールドンが掴みかかってきた。

「あうう……ちょっと図を描いて説明する」

アイテムBOXから、スケッチブックを取り出して、絵を描く。

大砲などは、この世界では作れないから、箱型に装甲板を貼って、窓から弩弓で撃つタイプを描いてみた。

正面には、ドーザーブレードを装着して敵を排除する。

「こうやって敵中に突き進んで、敵を蹴散らすわけだな」

「ほうほう！ これは素晴らしい」

カールドンが、穴を開くようにスケッチブックを覗き込む。

「さすがケンイチ、絵はプロだな。でも、魔法は鉄の装甲だと弾けないぞ？」

「ドラゴンや、レッサーのウロコを貼るとか、魔物の皮を貼るとか」

「ハイブリッド装甲だな、めっちゃ金がかかりそう……」

「まあな。戦争には金がかかるんだよ。戦車だって1台10億とか聞いたことがあるし、ここで作ったら——えーと、金貨5000枚か？」

「そう考えると、そうだなあ」

とりあえず、実験は上手くいっている。

極太の太木を真っ二つにしてもなんの問題もない。

これから、しばらく使ってみて、耐久性などの問題を洗い出して

いけばいい。

こいつの電池は、湖で倒したクラーケンの魔石だが、その管理は大工の親方に任せてある。

「ドラクラ、魔石の管理を頼んだぞ？」

「承知しやした――が、こんな高価なものの管理を仰せつかるとは……」

「お前が持っているのが一番いいだろ？　一々、俺の所に取りに来るのは面倒だろうし、長期に渡って留守のこともある」
後ろから、大工が割り込んできた。

「親方、その魔石ってどのぐらいの価値があるんでやんすか？」

「どのぐらいって言われるとなあ」

大工なら魔石は専門外だろう。代わりに俺が答える。

「そいつで、貴族のデカイ屋敷が一つ買えるぐらいだ」

「ひよええ！」

「そいつを売ろうとしても、その大きさの魔石は滅多にないから、出どころがすぐにバレるぞ？」

「め、滅相もねえ……」

面白がって、アキラも会話に加わってきた。

「そいつには、呪いの魔法がかけられている。もし盗んだりすれば、不思議な力で死ぬことになる」

アキラは、親指を立てて、首の前で横に走らせた。

「ひゃあ！」

その場にいた職人たちが、一步後ろに下がる。

まあ、大嘘だが、抑止力にはなるだろうな。

アキラと2人、ちよつと離れた場所に行く。

「ケンイチ、さっきの戦車の続きだけど、火薬の生産とかするの？」

「そのつもりはないけどなあ。肥料として、空気中の窒素の固定はしたいんだよな」

肥料に使う硝酸態窒素がイコール火薬、爆薬の原料なのだ。

農協とかで普通に売っている、硝安や硫安がそれ。

俺は、シャングリ・ラで買った硝安を爆薬へと転用しているわけだ。

「農作物の生産を上げるのには、確かに肥料は必要だな」

「俺がいる間は、チートで化学肥料もどきが作れるんだが、俺がいなくなったら、それが途切れてしまう」

「それで、この世界の技術で生産しようってことか？」

「まあ、そうなんだが——魔法を使ってなんとかできないかな？」

「魔法……か？ 元世界でアンモニアを作るのに、ハーバーボッシュ法とか使うが、そいつを魔法で再現するのか？」

「うーん、どうやってやるのか、考えもつかないが……」

ハマダ領の農業生産の向上のため——とりあえず、シャングリ・ラで買った化学肥料を使い、いずれは魔法による硝酸態窒素の製造を目標にすることにした。

使い方を間違うと危険な物質だが、火薬爆薬の原料になることを教えなければいい。

そのうち誰かが気づくかもしれないが、そのときには、錬金術の発達で硝酸態窒素の正体が明らかになっているだろう。

そう考えると——硝酸態窒素と硫黄と炭素で火薬になるって、最初に発見したやつは凄いと思う。

化学なんてない時代にそれをやったのだからな。

171話 肥料は難しい

サクラに新しい住民が次々と増えている。

王都からも料理人のサンバクと、魔道具の専門家カールドンがやってきた。

こんな僻地にやってきて後悔しないのかと心配になるのだが、彼らは毎日楽しそうだ。

カールドンの協力で、ゴーレムのコアを使った巨大なモーターを製作。

それを使って、第2製材所の大型丸鋸を駆動させている。

製材所の生産力は上昇したが、まだまだ住居不足だ。

家のない住民たちは、自分達が荷物とともに乗ってきた馬車をベースにして棲家を作ったりして、開拓に勤しんでいる。

開拓すれば、自分の土地になるのだ。

ここは頑張りどころだろう。

農具を持参していない住民たちにも、農具を貸し出しているが、今のところ貸料は徴収していない。

この世界では農具も一品ものなので、買うと高い。これが農民にとって大きな負担となっている。

そりゃ、使っている鋼の量は短剣などと変わらないのだから、武器と同じ値段なのも仕方ない。

通常は、農民をまとめている庄屋などからレンタルしており、それが農民たちの暮らしを圧迫しているのだ。

その分を肩代わりしてやれば、農民たちの生活もかなり楽になり――これも一種の公共事業といえる。

今のところ税金も徴収しておらず、金を取るよりも、早く住民た

ちに定着してもらうことが先決だ。

逆に儲かっているサンタンカからは、税金を取り始めている。

まあ——持っている者からは取る。これも仕方ないな。

農業も始まったということで、俺には少々仕事ができる。

魔法を使って大気中の窒素を固定して、肥料に使うための硝酸態窒素を作ることだ。

口で言うのは簡単だが、当然こんなことは誰もやったことがない。アキラと話をすると——元世界では、ハーバーボッシュ法という方法でアンモニアを生み出しているようだ。

シャングリ・ラでハーバーボッシュ法が書いてある化学の本を読む。

触媒の上で、水素と窒素を超高温超臨界流体状態で反応させる——とか書いてある。

「こんなのデキッコナイス」

俺は明かりのついたベッドの上でつぶやいた。

「なあに？」

俺の隣には、アネモネがいる——ここは崖の上のコンテナハウスで、ベッドの下にはベルが丸まっている。

住民が増えて、ツリーハウスの場所もなくなってしまったので、崖の上に移したのだ。

ここはしばらく開発する予定がない。バッテリーの充電に使っていた太陽電池パネルも崖の上に移設した。

ここなら邪魔にならないからな。

「魔法を使って肥料を作ろうと思ってな」

「肥料？」

アネモネが俺の腹の上に乗ってきて、胸に顔をうずめた。

「ああ、それを畑に撒けば、作物が沢山採れるようになる」

「そうすれば、みんなが美味しいご飯を食べられるようになる？」

「そうだな。作物が沢山とれば、税金を払っても金は残るから、飢えることはなくなるな」

「そうなるといいね」

「そのために、アネモネの魔法が使えるかもしれない。そのときは手伝ってくれるか？」

「うん、いいよ」

彼女が俺の身体をスリスリしているので、くすぐったい。

「ケンイチーーみんなと同じこと、私にしてもいいよ？」

「え？ ダメダメ、リリースと同じ歳になるまで、我慢しなさい」

「ぷー！」

「ふくれてもダメ」

「ずるーい！」

「ずるくないよ」

それにしても、ハーバーボッシュ法は、どう考えても無理だな。なにか他の方法を考えねばならない。

そのあと、1週間ほどシャングリ・ラの電子書籍を読み漁り、他の方法でも合成ができるのを見つけた。

電弧法だ。

簡単にいえば、空気を電弧アークの中に通すと酸化窒素が生まれるので、そいつを水に溶かせば、硝酸になるらしい。

ドラム缶の中に少量の水を入れ、魔法で放電を起こしたのち、ゴーレム魔法で攪拌すれば、似たようなことを可能だろうが――硝酸から肥料に使う硝酸カリウムにするのが大変だ。

実験室レベルなら可能だろうが、大量生産となると見当もつかない。

い。

「うーん」

ベッドの上で電子書籍を読みながら、俺は唸った。

魔道具の製作に詳しいカールドンに、化学の知識を教えて共同作業を行うか……。

液体を分ける魔道具があるぐらいだ。気体を分けることも可能じゃないだろうか？

魔道具もありだとは思うが——空气中から窒素を取り出しても、土壌に取り込む方法が必要になるな……。

アンモニアを取り出す方法は思いついた。

住民の小便から、液体を分ける魔道具でアンモニアだけ取り出せばいいのだ。

それは解ったが、アンモニアから肥料はどうやって作る？

どのみち化学合成を色々するとすると——危険な毒物も沢山出る。

その場合も俺のアイテムBOXがあれば、心配はいらない。

どんな猛毒物質でもゴミ箱に入れたら、どこかに消えてなくなるのだ。

これとシャングリ・ラなしで、魔法を使った肥料の化学合成……。

「だめだ……諦めよう……まったくいい方法が思い浮かばない」

とりあえず、俺がシャングリ・ラで購入した、化学肥料を農民に提供することにした。

あまり撒かれても意味がないので、決まった用量も守らせる。

多く手に入れると、余分をよそに売ったりする可能性もあるしな。

「何を諦めるのじゃ？」

隣に裸のリリスがいたのだが、俺の胸の上に乗ってきた。

彼女の小さな胸が俺の肌に触れる。ここは崖の上にあるコンテナハウスのベッドの上。

「俺の独自魔法^{ユニーク}じゃなくて、普通の魔法で肥料を作れるか、考えていたんだが――」

「ダメなのかえ？」

「今のところは、ちょっと無理だな」

「今のところ――ということは、その可能性もあるということじゃない？」

「まあ、そうだな」

俺とリリスの会話に変な声が挟まってきた。

「ああ、ご主人様、お許しを」

裸のマイレンが、床にいるのだ。

なぜカリリスと一緒にのときはマイレンもいる。

「マイレン――まだやってたのか？ ああ、許す許す」

俺の投げやりな言葉に、やる気をなくした裸のマイレンがすつくと立ち上がった。

彼女の太ももには、俺が買ってやった黒いストッキングとガーターベルト。

ふふふ――やはり、メイド長には黒がよく似合う……さすが、いい仕事だ俺。

彼女のメガネがキラリと光る。

「もう、ご主人様はもっと貴族らしくしてもらわないと困ります！」

「貴族らしくって言われてもなあ」

「もっと、メイドをこき使って、口汚く罵ってですねえ――」

「そんなことをしたら可哀想だろ？」

「そうです。可哀想だからこそ、お菓子をくすねたり、いいワインを盗み飲んだりと——気兼ねなくできるのです」

「俺の下じゃ、それができないって言うのか？」

「そのとおりです！」

メガネの素っ裸で、そんなことを力説されてもなあ。

「美味しいお菓子も食べさせてあげてるし、いいワインも飲ませてやってるじゃないか」

「それじゃ、貴族様に対する僅かな復讐心を満たす背徳感がないのですよ」

「ないとうなるんだ？」

「それこそが、メイドをメイドたらしめる充実感というか、幸福感というか——」

マイレンがメイド論を力説するのだが、よくわからん。

「屋敷ができれば倉庫もできるから、ワインをちよろまかしたりできようになるだろ？　それまで待て」

「ああん！　そうじゃありません。姫様からも、なにかおっしゃってくださいませ」

「ははは、マイレン。ケンイチには無理ゆえ、諦めるがよい」

「お菓子をつまみ食いたり、ワインを盗み飲みするぐらいならいいが、売っぱらって小銭を稼いだり、公金を使い込んだり中抜きしたりするなよ。分前が欲しいなら、事前に言えば考慮する」

「まあ、それは少々まずいの」

リリスが話を聞きながら、俺の身体をなで回す。

「もし、やったりすれば、黙って即時解雇だからな」

「責めたりはせぬのかえ？」

「しないで、そのまま放り出す」

「し、承知いたしました……」

しょんぼりしたマイレンが、下を向く。

「おう、怖い。そなた女子には優しいのではなかったのかえ？」
おなご

「皆が一生懸命頑張ってくれてと思うから優しくできるけど——誠意のない人間は嫌いだし、嫌いなやつは許さん」

「マイレン——ケンイチは普通の貴族と違うのじゃ。そこを踏まえ
て仕えるがよい」

「かしこまりました……」

元世界と、この世界の道德が少々違うのかもしれないが、十分に
通用すると思っている。

貴族だから、変な道德があるわけでもない。

貴族でも、まともな人間はまともなのだ。

——
——
——
◇◇
◇◇
——
——
——

——天気の良いある日。

入植した農民を集めて、説明会をする。

ボロボロで粗末な服を着た農民たちが並んでいる。

他の領でやっていけなくなって、着の身着のままここにやって来
た農民が多い。

厳しい領では貧しい農民からも税を取るので、にっちもさっちも
行かなくなつて、欠落^{かけおち}してしまう。

この世界には戸籍がないので欠落しても罪にはならないが、農民
がいなくなれば、領の経営はさらに厳しくなるので本末転倒だ。

「これが、俺が魔法で作った肥料だ」

皆の目の前にあるのは、シャングリ・ラで買った化学肥料だ——
ビニル袋に入っていて10kgで1400円。

「「「おおお……」」」

「これを少しずつ、畑に撒くことで、収量の増大が見込める」

「ほ、本当でございますか？」

「ああ、もちろん」

使い方を説明する。

「作物の横に穴を掘って一つまみいれて、土をかぶせて水をまく。作物を植える前に、土に混ぜ込んでもいい。簡単だろ？」

「そ、それでお代のほうは……」

「それは要らん」

「しかし、領主様——農具も貸していただいて、住む所も提供していただいておりますのに……」

着の身着のままの農民たちは当然、馬車も持ってなければ住む所もない。

その者たちにはコンテナハウスを貸してやっている。一番簡単で安い。

シャングリ・ラがどこにつながっているか解らないが、コンテナハウスメーカーは大儲けだな。

農民たちに余裕ができれば、家も建てられるだろう。

シャングリ・ラにチャージするときは、なるべくものでチャージをしている。

金貨を入れてしまうと、いずれ流通する金貨が不足してしまうのは今までどおり。

それは避けなくてはならない。

「心配するな。お前達が豊かになったら、税を取る予定だから。はやく豊かになってくれ」

「「「おお……」」」

ビニル袋を開けるのが面倒なので、そのまま渡す。

「撒きすぎるなよ。過ぎたるは及ばざるが如し」

袋は袋で使いみちがあるだろう。ビニル袋は腐らないし丈夫だ。農民たちは化学肥料の袋を担いで帰っていくが、広範囲を開拓して肥料が足りない農民には追加を認めている。

さらに収量を増やす試みとして、農民たちを集めての簡単な座学も行なっている。

農業に関する簡単な知識——たとえば連作障害について、知らない農民もいるのだ。

そんな状態で作物を作っても、収量が上がらないのは当然。

定期的に休耕地を作って、レンゲを植えることを推奨した。

レンゲの種も、1L1800円ぐらいでシャングリ・ラに売っているが、買うのは最初だけでいくらでも増えるだろう。

レンゲなどを緑肥作物というようだが、利用にはデメリットもあるらしい。

元世界との土壌の違いも不明だし、作付けされた作物の様子を見ながら、色々と試すことになりそうだ。

そのために——なんと、シャングリ・ラには土壌を検査するキットも売っている。

マジでなんでも売っているな。データを集めて、元世界との土壌との違いを見極める必要がある。

農業とは学問だからな。

「ほう！ 中々綺麗な花畑じゃのう」

リリスが、試験的に植えたレンゲの花が揺れる、ピンク色の花畑を眺めている。

「そうだな」

「これはなんの役に立つのじゃ？」

レンゲはマメ科の植物で、空気中の窒素を根粒菌の助けを借りて、土壌に取り込むことができる。

「この草は、土地に栄養を蓄えることができるんだ。こいつを地面に鋤き込んで、作物を植えればよく育つ」

「ほう！　なるほどのう！」

「これを使って、痩せた土地でも農地にすることができるとだ」

「さすが賢者じゃのう」

「それに、この花は食べることもできるしな」

「そうなのか？」

花を摘んで口にいれてみると、少々甘くて豆っぽい味がする。

まあ、マメ科の植物なので当然だ。

似たような植物でクローバーがあるが、クローバーは少々毒があるので食えない。

熱を加えれば少量を食えないこともないが、牛でさえ沢山食うと病気になるぐらいだ。

それなら、レンゲのほうが使えろ。

リリスのリクエストで、レンゲの料理を作る。

一番簡単なのは天ぷらだが、さすがのサンバクも天ぷらは知らないで、俺が手本を見せる。

卵を入れて水で溶いた小麦粉にレンゲの花を通して、油で揚げる。簡単だが、奥が深いのも天ぷらだ。

「ほう！　これは単純な料理法だが、素材の良さを生かしている……」

サンバクがレンゲの天ぷらを食べて唸っている。

「今日は花を使ったが、本当は野菜や魚などを使う料理なんだけだな」

「それでは、他のものも作りましょう」

「そうだな」

サンバクとメイドに手伝ってもらい、野菜やマス、クラーケンの天ぷらも作る。

クラーケンの肉は、みんなが食べるようになったので、出しても心配いらない。

晩飯の食卓に、天ぷらとスープ、その他の料理が並んだ。

食卓には俺の家族のほか、アキラがいる。

カールドンは一緒に食事はない。

いつも研究に没頭しているので、必要を感じたら、余り物を食べているようだ。

一緒に食べなくなったら、いつでも食卓についていいと言っているのだが、いまのところ同席することはない。

話を聞いても食事はエネルギーの補給として考えているようで、あまりこだわりはないようだ。

——といいつつ、美味しいものをたべさせると、「美味しい」と言っているのは味は解るらしいのだが、自身の研究より食事の優先順位が低いのだろう。

「おおーっ、今日は天ぷらか？」

アキラが、天ぷらを見て嬉しそうだ。

「そうだ、リリスのリクエストでレンゲの花の天ぷらを作ってみたぞ」

「へえー、ニセアカシアの花の天ぷらは食ったが、レンゲは食べたことがないな」

「ニセアカシアも豆科だから、同じ感じだと思う」

アキラは帝国で唐揚げを売っていたようだが、天ぷらはつくらなかったらしい。

「うん！ 美味しい！ 花も食べられるんだね？」

アネモネがレンゲの天ぷらを頬張って笑みを浮かべている。

「なんでも食えるわけじゃないからな。毒の草木も多いし」

「解ってる。食べられるなら、ケンイチが食べているはずだし」

「はは、そりゃそうだ」

アキラが天ぷらを食べながら、笑う。

「こっちはマスを天ぷらにしてみたぞ？」

「マスの天ぷらは初めてだが、こりゃ身が甘くて美味しいな！ 鮭とかマスも天ぷらにしたら、美味かったんだな。俺も釣りをしたら作ってみよう」

アキラはビールを飲みながら、天ぷらに舌鼓を打つ。

「これは美味しいの！ エールによく合う」

「サクサクしてて、とても美味しいです。花が食べられるなんて……」

アマランサスとプリムラにも評価は上々だ。

ちよつと離れた所で、同じものを食べていたニャメナが叫んだ。

「旦那！ これって、あのクラーケンなのかい？」

イカの天ぷらが美味いんだから、当然クラーケンも美味しい。

「花を食うなんて初めてだにゃ！」

ミヤレーはレンゲの天ぷらをパクついている。

「そうだニャメナ。美味しいだろ？」

「美味しいけど――旦那にかかると、どんな魔物の肉も美味くなっちゃう……」 「そうだにゃ」

「いまのところ魔物も食えているが、そのうち毒があって食えないものとかもあるかもしれないし」

「それでもさ、フグの卵巣みたいに、糠や酒粕に漬けると毒が抜けるとか……あるだろ？」

アキラの言うとおり、元世界にそういう話があったが……。

「そこまでしなくても、食うものが沢山あるじゃん」

「まあ、そうだが珍味としてな、ははは」

「そなたたちの話を聞いておると、毒のあるものをわざわざ、食べるようにするかえ？」

「そういう話もあるんだよ。アキラは食ったことがあるのか？」

「まああるけど……ははは。俺の口には合わなかったな」

シャングリ・ラを検索すると、話に出たそれが売っているが——珍味中の珍味だな。

これは止めておこう。

プリムラの話では、イカクンとスルメの売上は上々のようだ。

この分だと意外と早く、アイテムBOXに入っているクラーケンはなくなってしまうかもな。

クラーケンが養殖できればいいが——いや、無理か。

ワームなら沢山いるんだがなあ……。

サンバクに美味しいワーム料理を考案してもらっているのだが、なかなか苦戦しているらしい。

普通に捌いて焼いて食うのが一番マシ——もしくは、エルフの連中がやっていたような干物がいいらしい。

またアキラが言っていたように若いワームを捌いて炒めものなどに使うのもいいようだ。

どこにでも沢山いるし栄養もあるので、金がない連中などには、湖の砂地で採れるワーム料理を推奨している。

最初は気持ち悪がっているが、しっかりと泥抜きなどをして食べてみれば、それなりに美味い。

もはや、サクラでの定番料理になりつつある。

少々気持ち悪くても、飢えるよりはマシだろう。

「ケンイチは、食い物のことになると、意外と厳しいの」
リリースが、天ぷらを頬張る。

「まさか、この領にやってきて得体の知れないものを食わされる羽目になると思ってなかった連中も多いんじゃないかね？」

「そうは言うがな、ニヤメナ。食えるものがあるのに、飢えることはいだらう。別に食えない不味いものを無理やり食えとは言っていないんだ」

「そりゃそうだけどさあ……」

「本当に飢饉になったら、草の根っこまで掘り返して食う羽目になるんだぞ？」

「私はいつもお腹が空いていたから、いつも食べるものを探してた……」

俺の言葉にアネモネがつぶやく。

彼女は、家で満足に食事がもらえなかったため、森の中で食べられるものを探してさまよっていたのだ。

「沼地にワームがいて、泥抜きすれば食えるって解ってたなら、焼いて食べてただろ？」

「絶対に食べてた……」

「トラ公は贅沢で舌が肥えたにゃ」

「馬鹿、そんなじゃねえよ」

最初は頭を抱えていたクラークンの在庫は順調に減りつつある。なんとかなるもんだ。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

——天ぷらから数日後。

湖畔に植えていたサトウキビが立派に成長したので、刈り取り作業と砂糖の精製を行うことにした。

人手を集めてサトウキビ刈りを行うが——その中に新しい人物が加わっている。

マロウ商会から派遣されてきたニゲラという若い男だ。

長身で茶色の髪をオールバックにしており、グレーのシャツを腕まくりして長い鎌を振るっている。

この長い鎌はシャングリ・ラには売っていないので、こちらの世界製だ。

彼は、マロウさんが直々に採用したというので、期待しているのだろう。

ニゲラを作業に参加させて、砂糖の作り方を覚えてもらう——と言っても、なにも難しいことはない。

刈ったサトウキビを潰して刻んで、大きい鍋で煮る。

煮だしたら魔法で乾燥させるのが、元世界と違うところだ。

作業の様子を見守っている男がいる——マロウ商会の主、マロウだ。

「この草から砂糖ができるのでございますか？」

「そうだ」

今までは、彼のことをお義父さんと呼んでいたのだが、それを止められてしまった。

貴族になった俺が、商人に敬語を使うなどありえないと言うのだ。2人きりのときには、義父と呼ばせてもらうが、公式にはマロウ——呼び捨てになってしまう。

彼の横にはプリムラもいて、作業を見守っているが——なんとも慣れない。

それはさておき、乾燥の魔法はアネモネに頼む。

「むー！ 乾燥！」
ドライ

白い霧とともに、鍋の水分がドンドンなくなる。

ここがこの世界ならではだろう。魔法を使えば大幅に作業を短縮することができるわけで、鍋の底に残ったのは焦げ茶色の塊。

「おお、黒砂糖の完成だな」

アキラが鍋の底を眺めている。彼は元世界で、サトウキビの刈り取り作業を手伝ったらしいので、黒砂糖も知っているはずだ。

「普通に売る分にはこれで十分だろう？」

なにせ、甘いつてだけで十分に価値がある。

それに、黒砂糖のほうがミネラルも豊富に含んで栄養もあるしな。昔のように砂糖を滋養強壮の薬とか栄養剤と考えれば、黒砂糖のほうがかなり優秀だ。

「どれどれ……」

リリスが、鍋の底に手を伸ばして、欠片を拾い上げると、口に入れた。

「うむ！ 甘い！」

「私も食べる！」

アネモネも一緒になって、黒砂糖を舐めて微笑んでいる。

「ほ、本当に砂糖でございますな！」

「言ったとおりだろう？」

黒砂糖を舐めたマロウも驚いている。

「こ、これをマロウ商会で扱えるとは……」

砂糖と塩の販売は国の許可がいるが、すでに取ってある。

「まあ、よろしく頼む」

「ははっ」

マロウが頭を垂れる。

この世界にやってきてから、彼には散々世話になっているのに、呼び捨てとはなんとも心苦しいが、商会も順調のようだし十分に恩は返しているだろう。

「じゃが聖騎士様——聖騎士様のお使いになっておる砂糖は純白だの」

アマランサスも黒砂糖を口に入れた。

「白い砂糖は高級品として売ろうと考えている」

「ケンイチ、黒砂糖から糖蜜を脱いたりするのは、遠心分離機が必要だぞ？」

「ああ、解っている」

アキラの言うとおりで、白糖の製造法をシャングリ・ラで売っている本で少々調べてみた。

カールドンが作ったゴーレムモーターで遠心分離機も作れないこともないが……。

「実はいい方法がある」

俺はアイテムBOXから、液体を分ける魔道具を取り出した。

こいつはいつも油の合成に使っているので、油臭い。

「アネモネ、ちょっと魔法で洗淨してくれ」

「いいよ——洗淨^{クリーン}！」

綺麗になったら、魔道具の上部に黒砂糖をお湯で溶かしたものを注ぐ。

次に中間の容れ物には、白糖を溶かした水を入れる。

こいつは上に入れた液体から中間の容れ物の成分を分離できる魔道具。

こうすれば、黒砂糖の溶液から、白糖が溶けた水が分離されるわけだ。

分離された砂糖水を蒸発させれば、白い結晶だけが残る。

アネモネの魔法によって、容れ物の底に白い結晶が現れた。

これなら、カールドンに魔道具を追加で製作してもらえば、俺がいなくても砂糖作りが可能だ。

「「「おおおっ！」」」

「す、すばらしいですぞ、辺境伯様！」

「マロウには散々世話になったからな」

「いえいえ、滅相もございません！ マロウ商会がここまで大きくなったのは、すべて辺境伯様のおかげでございます！」

マロウと一緒にいるプリムラも微笑んでいるが、俺は良い夫なのだろうか？

この世界では、一夫多妻が認められているとはいえ、少々モヤモヤが残る。

刈り取ったサトウキビの株からは脇芽が伸び、すぐに次の刈り取りができるようになる。

順調に、サトウキビ畑は湖畔に広がり始めた。

172話 ドワーフたち

お城にいたサンバクとカールドンがサクラにやって来て、ますます人が増えた。

カールドンにゴーレムを使ったモーターの作りかたを教えてもらい――それによって、製材所の巨大な丸鋸がどこでも使えるようになった。

モーターがあれば、自動車やバイク、ポンプなど応用が広がるが、電池に使う魔石が問題だ。

それらに使えるような巨大な魔石は滅多に手に入らず、値段も高い。

俺が持っている大きな魔石は、レッサードラゴン、ワイバーン、そしてクラーケンの3つ。

本格的に解体はしていないが、もしかして巨大ワームの中にも魔石があるかもしれない。

サクラに石工も入り、崖から石の切り出しも始まった。

家の土台やら、流しやら、水路やら、色々と使いみちがある。

シャングリ・ラからセメントを購入してもいいのだが、街づくりに関しては、なるべくこちらの世界のもので賄うことにしている。

そうしないと経済が回らないからだが、運搬など時間がかかるものに関しては、開発のスピードアップのため、俺が手伝う。

石の切り出しには、俺が作った単管パイプの足場が利用されていて好評だ。

切り出しのついでに、崖の上に登るための階段を掘ってもらうことにした。

階段を作れば、上の開発もできる。

屋敷を崖の上に作る話も出ているのであるが、それも面白いと思う。

崖の上にも川が流れていて水もあるしな。

引っ越しや荷物運びは、俺のアイテムBOXでどうとでもなる。

自分の屋敷のためだ、いくらでも手伝うし、俺もついに一国一城の主か——などと思うと、胸が熱い。

崖の上を見ながら悦に入っていると、沢山の馬車がサクラに入ってきた。

大型の馬車で荷物を満載している。10台ほどが連なり、まるでコンボイだ。

馬車から降りてきたのは、もじゃもじゃの髭を蓄えた、小柄だが浅黒い肌をした、ごつい男たち。

裾の長いノースリーブの服に、デカイベルト。深緑色のズボンにブーツを履き、鉄製のヘルメットを被っている者もいる。

女性もいるようだが、皆小柄でガッチリとした体格だ。

彼らはドワーフたち——本当に来てくれたのか。

「おーい！」

俺は、彼らの下へ走っていった。

「おお！ 旦那、来やしたぜ！」

鋭い眼光と長いモジャ髭、女のウエストほどもある、太い腕。

ソバナの街で鍛冶屋をやっていたドワーフの親方だ。

俺は、彼から重機に装備している巨大な剣を購入した。

「皆、よく来てくれた。俺がハマダ辺境伯だ」

「いやあ、旦那が湖の所に村を作るって話を聞いていたが、まさか貴族様になって領まで立ち上げるとは……」

「まさか、皆で来てくれるとは思わなかった」

「ソバナの貴族連中には、ちょっとうんざりしていたんで、ここらで心機一転やり直そうかという話になりましたね」

「それにしても、思い切ったことをしたなあ」

「なあに。たまに河岸^{かし}を変えて商売をするんです。ソバナの街は中々よかったが、良い鉄が手に入らなくて困った」

「それなら大丈夫だ。俺のアイテムBOXの中に鉄はタップリと入っているからな」

ナイフ用の鋼材は高性能だが、農具や普通の剣にそんなものはいらない。

この前ドワーフに渡した、ドーザーブレードなどの、鋼鉄の廃材などで十分だ。

なにせ元世界の鋼材は品質が最高。

そのまま打ち伸ばしても、道具や剣として十分に使えるからな。

「旦那——いや、領主様からもらった鋼材も、いまだに正体がつかめねえ」

「あれには、クロムっていう金属が含まれている」

「クロム……？」

「それが見つからないと、再現は難しいだろうな」

「うゝむ」

ドワーフたちが、腕を組んで考え込んでいる。

なんで、こんな場所で鋼材談義をしているんだ。

「それにしても、俺の言うことを信じて本当にやってくるとは……ソバナでは、どんな風に噂が伝わっているんだ？」

「獣人好きの貴族が辺境伯領を作って、湖にいた巨大な魔物を倒した……とか」

「魔物を倒したことも、すでに伝わっているのか」

人の噂は千里走るって言うけど、本当なんだなあ。

元世界でも、口裂け女の怪談が日本中に広まったりな。

日本の端から端って3000kmぐらいあるからな。口コミだけでそこまで広がるのは、まったくもって凄い。

「獣人好きって聞いて、旦那——いや領主様だと思いましたぜ」

「まあ、事実だからなしようないが……はは」

ドワーフたちが、ニヤニヤしているが、苦笑いするしかない。

あ、そういえば……ファンタジーだと、エルフとドワーフって仲が悪いよなあ。

一応、聞いてみるか？

「ドワーフのことをよく知らないんだが、エルフと仲が悪いとかあるのか？」

「まあ、よくはありませんぜ？」

「やっぱり、悪いのか……」

「あの図々しい連中を好きな連中もいないとは思いますが」

「ああ、まあ……ちよつとな」

図々しいというか、遠慮しないところはある。

彼らはすべての持ち物が共有財産ということで、人種的文化的な特徴なのだろう。

「領主様はエルフを知ってるんで？」

「この巨大な湖の反対側に、エルフの集落がある」

「やれやれ……」

ドワーフたちが、頭をかいている。

「まあ、交易のために、数人が来ることはあるかもしれない。もめないように頼むよ」

「相手の出方次第ですぜ？」

「ソバナにもエルフはいたのか？」

「貴族の屋敷に出入りしてたのは見たことがありますぜ」
「やっぱりエルフもいたんだ――へえ。」

話はそのぐらいいにして、ドワーフの店の場所を決める。
家族と一族が住むので、広い場所が必要だ。
彼らと一緒に荷物を下ろす場所を選定する。

ドワーフたちが選んだのは、集落からちょっと離れた崖の近く。

「こんな外れでいいのか？」

「年がら年中、鉄を打つんで、ちよつと離れた場所のほうがいい。
ソバナは街の中だったがな」

「この崖には、結構色々な鉱物が出るんだ」
「ほう？」

アイテムBOXから、俺が掘った薔薇輝石と、水晶を見せてやる。

「こりゃ大したもんだな」

「ここから、離れた場所に洞窟がある。その中はまだ調べてないが
色々あるかもしれない。後で場所を教えるよ」

蜘蛛を倒した後は放置したままだ。

「ありがてえ」

ここは川から離れているから井戸が必要だろう。

「井戸が必要なら掘るのを手伝ってやるぞ？ 湖の近くだから、少

し掘れば水は出るだろう」

「ありがてえ」

「どこにする？」

「え？ あゝ、あそこらへんか？」

「よし、すぐに掘ってやるよ」

「」「え？」「」

俺は、ドワーフが指した場所へ行くと、アイテムBOXから重機を出した。

「コ〇ツさん、召喚！」

地響きを立てて、黄色の鉄の巨人が落ちてきた。

「「「おおおっ！」「」」

最近、コ〇ツさんが活躍していなかったからな。

動かしていないが、アイテムBOXの中なら錆びることもないし、下手をすると以前のエンジンの温かみが残っていたりする。

俺は、コ〇ツさんに乗り込むと、エンジンを始動して、ドワーフが指した地点を掘り始めた。

バックホーでも、深さ5mぐらいは普通に掘れるし、そのぐらい掘れば水は出るだろう。

さすが文明の利器——5分ほどで5mほどの穴が開いた。底には水面が見える。これなら井戸として使えるだろう。

「すげえ！　これが、鉄の召喚獣か……」

俺はシャングリ・ラから、太さ10cmほどの塩ビ管を購入した。こいつを立ててから埋め戻し、その上にガチャポンプを接続する。物作りが得意な彼らだ、アダプターなどは自作できるだろう。

この世界でもガチャポンプが普及し始めており、これで十分に使用できると思われる。

「この灰色の管を立てて、埋め戻せばいい」

「こ、これは？　軽い！」

ドワーフたちが塩ビ管に群がり、覗き込んだりしている。

「俺が魔法で作った管だ。水に強いし、数十年は腐らない」

「こいつはすげえ……こんな貴重なものを、いいんですかい？」

「ああ、早く生活の拠点を整備して、鉄を打ちたいだろ？」

「まあ、そうですが……まさか領主様にこんなことまでしてもらえ
るとは、思ってみませんでしたぜ」

「農具やらを待っている農民がいるんだ。早く配ってやりたい。色
々と作ってもらいたいものもあるしな」

「わかりやした」

「この管の上には、こいつをつける」

シャングリ・ラからガチャポンプを購入して、ドワーフたちに見
せた。

「こりゃ、ガチャポンプですな。同じものを作りましたぜ」

「ええ？ そうなのか」

「帝国のやつらが作れて、俺たちに作れねえ道理はねえ」

「まあそうだろうな」

それなら使い方や設置などは心配いらないな。

ドワーフたちに手伝ってもらい、採取口にシャングリ・ラで買っ
たコンクリブロックを積む。

土砂が流れ込むのを防ぐためだ。

「こ、こりゃ石？」

「いや——石灰に色々と混ぜて固めたものだ。製造法は教えられな
いが、粉が欲しいなら譲ってもいいぞ？」

彼らに、シャングリ・ラで購入した、セメントを見せてやる。

この世界にも漆喰や、コンクリートに近いものがあって利用され
ているが、製造は極秘で表に出てくることはない。

「まったく、たまげることばかりだぜ……」

「ここに来てよかっただろ？」

「はは……」

ドワーフたちは、顔を見合わせて呆れたような笑いを浮かべる。

最後に塩ビ管を立てて穴を重機で埋め戻す。

もちろん塩ビ管1本では長さがたりないので、途中でジョイントを使って繋いである。

埋め戻しが完了したら、重機のカタピラで押し固めて完了だ。

地面から灰色の塩ビ管が飛び出ているので、ここに土台を作って井戸を作るだけだ。

「し、信じられねえ。井戸がこんな簡単に……1日もかからずに……」

「あとは、お前たちが持っているガチャポンプを、ここにつなげばいい」

ドワーフたちと今後の打ち合わせをしていると、リリスが自転車に乗ってやってきた。

この世界のドライジーネではなく、俺がシャングリ・ラで購入したマウンテンバイクだ。

アマランサスが一緒だが、彼女は走ってきた。

王族というと、あまり運動しない——なんてイメージがあるのだが、彼女は剣の達人で他の運動能力も高い。

さすがに、獣人たちにはスタミナでは劣るのだが、パワーと瞬発力はひけをとらない。

「ケンイチ——そなた、ドワーフとも知り合いだったのかえ？」

彼女はひらりと自転車から降りると俺の所にやって来た。

「ああ、ソバナで知り合ってたな」

「ほう」

リリスを紹介しようとしたのだが、ドワーフたちの様子がおかしい。

「領主様、その乗り物を見せてもらっても……」

「ああ、これか？　ドライジーネだが……」
ドワーフたちが、一斉に自転車に群がった。

「なんじゃこりゃ」 「この管の正確無比なこと……寸分の狂いもねえ」

「つなぎ目が見えん。どうやって繋いだんだ？」 「この鉄の鎖はなんだ？　おそろしいほど精密な作りだぞ？」

しまった――この世界の住民にも自転車は見慣れたものかと思っていたのだが、ものづくりの達人である、彼らからみればこの自転車が、オーバーテクノロジーで作られたものだとはバレてしまったようだ。

「俺が魔法や魔道具を使って作ったものなので、詳細は教えられない」

「なんと……」
ドワーフたちは残念そうだが、正直説明しろと言われても説明できない。

「それよりも――紹介するよ。正室のリリスだ」

「見知りおくがよい」

「ははっ」

ドワーフたちは一斉に膝をつく。

「こちらは俺の護衛だ。気にしなくてもいい」

ドワーフたちは、アマランサスのことをチラリと見ると、ボソボソとなにか話している。

首にある奴隷紋のことだろうか。

「どうした？」

「これは失礼をいたしました。その者は闘奴らしいですが、武器は

？ なければウチにいいのがありませんぜ？」

「ああ、彼女はアイテムBOX持ちでな」

アマランサスが、自分の剣を出してみせた。

「む！ その剣は――」

「これがどうかしたのか？」

「いいえ……もし可能であれば、見せていただくことは……」

「いいかい？」

アマランサスに確認を取ると、いいということだったので、彼女の手からドワーフへ剣が渡った。

もらった剣を引き抜き、日に掲げ刃を確かめる、ドワーフ。

「これは、間違いねえ」

「知っているのか、らい……じゃなかった、知っている剣なのか？」

「ええ、こいつは――俺が打った剣ですぜ」

「え？ そうなのか？」

「先代のソバナの公爵に頼まれて打った剣が、なぜ鬨奴の手に……」
ありゃーそういうことか。レインリリー公爵家から、贈り物かなにかで、王家に渡ったものなのだろう。

こりゃ作った本人が目の前にいるなら、説明しないとダメだろうなあ……。

「あゝ、なんというか……他言無用で頼む」

「はい、もちろんでございます」

「この女はな、元王族なんだよ」

俺はアマランサスを指した。

「は？」

ドワーフたちが固まる。

当然だろう、こんな辺境に、王族――しかも元王妃がいるなんて。

冗談にしても質が悪い。

「正確に言うとは元王妃で、国王陛下と離縁して俺の所にいるという……」

「嘘とか冗談ではねえ……でございますよね？」

慌てて、ドワーフが剣を返してくる。

「こんな冗談なんて言ったら、不敬で首が飛ぶだろ」

「まあ、たしかに……しかし、なぜに王妃様に奴隷紋が……」

「それもまた、説明すると長くなってしまっただけ。まあ聞かないでくれ」

アマランサスが、剣を自分のアイテムBOXにしまった。

黙って話を聞いていたリリスが口を開く。

「ドワーフの民よ、ケンイチの言ってることは、皆事実じゃぞ？」

妾も元王族じゃ」

「リリスは、元王女な」

「は？」

再びドワーフたちが固まると、すぐに頭を下げた。

「知らぬこととはいえ、ご無礼をいたしました」

「よいよい、今は辺境伯夫人ゆえ。普通の貴族扱いでよいわえ」

「驚き過ぎて、心臓に悪いぜ……」

「面白いだろ？」

「こんなの人に言っても信じてもらえねえ」

「まあ、集落でも事情を知っている人間もいるんだが、口には出さないように頼む」

「承知いたしました」

話が終わると、アマランサスが俺に飛びつく。

「妾は、聖騎士様の奴隷なのじゃ！」

「領主様——もしかして、王妃様を寝取ったんじゃ……」

「いやいや待て待て。それは違うから止めてくれ。わけがあつて離縁が先だからな」

「はぁ……」

彼らが、この先にある洞窟を見てみたいと言う。

時間もあるので、リリスの自転車をアイテムBOX収納すると——代わりにラ○クルを出した。

湖の上ばかりにいたので、久々のラ○クルだ。

「——「おおおっ！ これも鉄の召喚獣か？」」

「まあそんなところだ。乗ってくれ」

車のドアを開けた。

「妾も行くぞえ！」

「妾もじゃ！」

リリスとアマランスが同時に手を挙げる。

「すぐそこだぞ？」

「よいのじゃ！」

「妾は聖騎士様の護衛ゆえ」

「解った解った」

リリスは助手席、アマランスは俺の後ろの座席に乗り込んだ。人数が増えてしまったので、ドワーフからは代表を2人だけ乗せた。

「なんじゃこりゃ、こんな精密なものをどうやって作ったんだ？」
ドワーフが、車の室内を見回し、あちこち触りまくって驚嘆している。

「ははは……」

苦笑いしながらエンジンを始動すると、ドワーフが飛び上がった。

「唸ってるぞ?!」「なんじゃ!」

「噛みつきはしないから大丈夫だよ。俺の言うことしかきかないから」

俺と王族2人、ドワーフを2人乗せて、ラ○クルは森の中を崖伝いに走り始めた。

崖沿いは余り木が生えていないので、なんとか行ける。

茂みなどは、そのまま突破だ。

「乗り物が馬もなしに進んでおる!」「たまげた!」

「それに、こんな森の中を進んでいるのに、この乗り心地!」「馬車では進むことすら難しいぞ?」

さすがドワーフ——ラ○クルを品定めしまくりだ。

「見ろ! あの丸い輪っかで、進む方角を決めているようだぞ?」

「なるほどなあ」

室内にドワーフのデカイ声が響きまくる。

そんなにデカイ声を出さなくてもいいのに——と思うのだが、いつも騒がしい鍛冶工房にいるので、自然と大声になるようだ。

それにしてもヤバい。車の操作方法などが、解明されまくっている。

これが召喚獣じゃなくて、内燃機関で動いているってバレるんじゃないか?

俺の家族の中でも、アネモネが車の運転の仕方をいつのまにか覚えてしまったようで、運転ができる。

オートマだから、セレクターを入れて、アクセルで進みブレーキで止まる——ハンドルを回せば進む方向を決められる。

異世界だから、小難しい交通法規もない。

アネモネぐらい賢ければ、操作を覚えられてしまっただけだ。

それはさておき、森の中を30分ほど進み、ラ○クルは件の場所に到着した。

以前、俺が巨大な洞窟蜘蛛を退治した、ダンジョンだ。

ダンジョンと言っても、中は一直線で迷路のようにはなっていない。獣人たちの話では、迷路になっているマジダンジョンもあるようなので、それに期待だ。

「ここが洞窟だ」

皆をラ○クルから降ろすと、洞窟へと案内をする。

アイテムBOXからLEDランタンを出して、皆に手渡した。

「これは魔法で光るランタンだ。こうやって上に引っ張ると点灯する」

円筒形のランタンを上下に引っ張るとスイッチが入り、LEDが点灯する仕掛けだ。

「おお！ 眩しい！」 「こりゃ凄い！」

「特殊な魔導具なので、俺にしか充填できないのが、玉に瑕だがな」

「これでどのぐらいの時間光ってるんで？」

「そうだな、丸1日ぐらいは……」

「おお……」

皆を洞窟の中に案内するが――リリスたちはどうしよう。

「リリス、一緒に行くのか？」

「もちろんだわえ！」 「妾もじゃ！」

俺が先頭になって、列をなしてあるく。

「この奥に巨大な洞窟蜘蛛がいたんだが、俺が退治した」

「あの洞窟蜘蛛は、ここで仕留めたのかえ？」

リリスが暗い洞窟にビビって、俺にひつついている。

「そうだ。あんなデカブツが奥にいるなんて思わなくてな。新しい魔物が住み着いてなけりゃいいんだが……」

まあ、ドワーフたちもいるし、アマランサスもいる。狼や熊ぐらいなら、なんとかなるだろう。

しばらく進み、俺が水晶を掘り出した地点にやってきた。

「ここでデカイ水晶を掘り出したな。まだ鉱脈が残っているかもしれない」

「こりゃ、中々いい洞窟ですぜ」「まったく心なしか、ドワーフたちの機嫌がいい。」

「どうした、なんかウキウキしてないか？」

「ガハハ、いやぁお恥ずかしい。ドワーフってのは、こういう洞窟に入ると興奮してしまつてな」「そのとおり」

「化け物がいそうで怖いとか、暗くて恐ろしいとかは？」

「そんな感情は全然ない」「むしろ安らぎを感じる」
そういえばドワーフは穴やダンジョンを掘っているなんて話があったなあ。

途中の段差をアルミハシゴで降りて、俺が蜘蛛を退治した、広い空間へ出た。

「「おおおっ！」」

ドワーフたちが辺りを見回している。

ここは、天井に少々穴が開いているので、うっすらと光が入ってきている。

「ここに蜘蛛がいたのかえ？」

リリースも広間を見回している。

「そうそう。オスの蜘蛛がせっせと餌を運んでいたのに、メスに蹴られて死んでしまったんだ」

「それは、魔物とはいえ不憫だのう」

喜んでいたドワーフたちだが、なにやら話し合いを始めた。

「どうした？」

「領主様！　ここを、俺たちに使わせてくれねえか？」

「ここをか？　まあ別に使う当てもないから構わんが……なにに使うんだ？」

「ここに皆で住むんだ」

「えゝ？　ここにか？」

ドワーフは本来、こういう場所に棲家を作るらしい。

この場にやって来て――その本能の赴くまま、血がうずいて仕方ないようだ。

彼らの話では、今日井戸を掘った場所に鍛冶場を作って、ここに居住区を作りたいという。

俺としても断る理由はない。

久々にここに来たので、ぐるぐると回ってみることに……。

「そういえばここに、雌蜘蛛がいたんだっけなあ」

壁にちよつと凹んだ場所があるが、蜘蛛はここに糸で壁を作って卵を産んでいた。

LEDランタンでその場所を照らすと、なにかが動いた。

「なんだ？」

「グアアアア！」

なにか巨大な毛むくじやらが、雄叫びを上げていきなり立ち上がった。

「聖騎士様！」「ケンイチ！」

離れた場所からアマランサスとリリスの声が聞こえる。

「うわああ！　く、熊か？」

暗いし真っ黒なので、正体が解らん。

LEDランタンに照らされて、立ち上がったそのポーズは、熊のそれとよく似ていた。

多分、以前出会った牙熊であろう。

「こ、コ○ツさんを……」

いきなり遭遇したので、あたふたしてアイテムBOXがうまく開けない。

「聖騎士様！」

凄いスピードでやって来たアマランサスが、俺と熊との間に入っ

「アマランサス！　内側から外へ払う腕に気をつけろ！」

「はい！」

熊は立ち上がるのを止め四脚に戻すと前に突進——右前脚を内側に入れて、アマランサスを外へと弾き飛ばす攻撃に出た。

俺の言葉を受けて、アマランサスは右へと飛ぶと、水平に熊の右前脚を半分に切り裂く。

「グアアアア！」

腕を切り裂かれた牙熊が再び立ち上がった。

「チャンス！ 戦闘獣コ○ツさん召喚！」

俺がアイテムBOXから出したのは、アームに大剣を装備した、コ○ツさんの戦闘バージョン。

アマランサスが黒い毛むくじやらを牽制している間に、重機に乗り込みエンジンを始動させた。

「行くぜえ！ アマランサス！ 下がれ！」

咆哮を上げた重機が、大剣を掲げて牙熊の前に立ち塞がると、毛皮の動きが止まった。

自分より遥かに強大ななにかの出現に覚悟を決めたのかもしれない。

「コ○ツ大切断！ それは大地を割る史上最強の男の一撃！」

高く振りかざしたアダマンタイトの大剣を獣の脳天へ振り下ろした。

攻撃を受けた牙熊は、紙のように真っ二つに裂け、勢い余った大剣が地面に激突して火花を散らす。

半分になった黒い毛皮が、その場に崩れ落ちると――ホールの中に、コ○ツさんのエンジン音だけが響く。

「ふう……焦ったわあ。いきなりだもんなあ」

エンジンを止めて、重機から降りるとアマランサスが抱きついてきた。

「聖騎士様！」

「ありがとう、アマランサス。助かったよ」

「ケンイチ！」

リリースも走ってきて、俺に飛びついた。

ドワーフたちもドタドタと走ってくると、コ○ツさんを見上げて

いる。

「俺が売った剣を、本当に持たせたんですかい？」

「ああ、こいつは役にたっているぞ。いいものを売ってもらって本当に感謝している」

「滅相もねえ。若気の至りでこんなものを作っちゃったのに……」

「これなら、ドラゴンとも戦えるかもな」

「開いた口が塞がらねえ……領主様が、こんな化け物を作っちゃうとは……」

闖入者とコ○ツさんに驚いた様子のドワーフたちであったが、ここに住みたいという意向は変わらないようだ。

ぐちゃぐちゃになってしまった熊は、もう駄目だな。

肉も毛皮も使えないが、とりあえずアイテムBOXに収納した。

「ここは自由に使っているぞ。ただ、鉱山にするつもりなら、税金を少々払ってもらうことになる」

「承知いたしました」

早速戻って、仲間たちと協議をするらしい。

人間だけじゃなく、種族によって様々な文化があるから、まったく予想もつかないな。

173話 ドワーフの一品

お城からやってきた料理人のサンバク、魔道具の専門家カールドンのほか、ソバナの街からドワーフたちもやってきた。

まったく物好きな連中ばかりだが――いや、領の発展に尽くしてくれるために、遙々やって来てくれたんだ、そんなことを言ったら罰が当たるな。

ドワーフたちは、俺が以前洞窟蜘蛛を退治した洞窟に住みたいと言いだした。

蜘蛛がいた巨大なホールをドワーフの村にするつもりらしい。

元々ドワーフたちは、ああいった洞窟に住んでいるのが普通らしく、とても落ち着くようだ。

彼らの工事を見学しに行くと――人間の職人では考えられないような建築が行われていた。

彼らは鍛冶だけではなく、大工や石工、土木工事でも、一流の職人たちなのだ。

寿命もかなり長いようなので、様々な技術鍛錬に多くの時間を割ける賜物なのだろう。

彼らは、ホールに足場を組み、洞窟の天井に開いている穴から出ると、台地上に生えている木を伐採。

それらを洞窟内に運び込んで、住居の建築を始めた。

その様子をアキラと見学している。今日は彼と2人きり。

洞窟内は魔法の照明で照らされて、足場を明るくしている。

ドワーフたちも魔法を使えるようだ。

「はあゝこりやすげえな。重機もなしでこんなことができるのかよ」
ドワーフの作業風景を見たアキラも、驚いている。

「滑車を複数組み合わせ、クレーンみたいにして使っているらしいぞ」

「なるほどなくでも、大昔の城やデカイ屋敷なんかも全部人力で作ったんだから、できねえことはないよな」

「それに、この世界には魔法もあるしな」

「俺もそういう魔法が使えるいいのに、マヨネーズだし……」

「けど、アイテムBOXも使えるようになったし、祝福を受けて回復ヘルも使えるようになったろ」

「そうだけどさ……」

彼は、この世界にやって来て相当苦勞したらしく、天上世界にいるかもしれない神様に向かって、いつも恨み節をつぶやいている。

「いつも言ってるけど、あんな爆乳の奥さんもできたじゃないか」

「まあな——日本じゃ、あんな極上の女には巡り会えねえし」

アキラは世界中を貧乏旅行したらしいのだが、その先で浮いた話はなかったのだろうか？

そこらへんを聞いてみる。

「え？ えゝ？ ゴニョゴニョ……」

「やっぱりあるのか」

「そりゃ、据え膳食わぬは男のナントカってやつで、センセには内緒だぞ？」

「それはいいが、世界の片隅でアキラの息子か娘が、お前を待っているかもしれないのか」

「あゝないとは言いい切れないが、それはちょっと考えたくねえなあ。こんな親父で、誠に申し訳ない……」

「帰りたいといっても、帰れないしな」

「いやあ——帰ろうとも思わないぜ、ははは。ちよつと里心ついたときもあつたが、ケンイチと一緒にいれば日本のものが食えるし。なんの不自由もねえ」

そこにドワーフの親方——ドーカンがやってきた。

他にはワーカンとかツーカーンとか、そういう名前が多い。

女性は、くクルって名前が多いようだ。

「領主様」

「おお親方、作業は順調みたいだな」

彼の話では、他の都市にも連絡を入れて、ここの住人を募集するようだ。

「ええ、ちよつと掘ってみたんですが、鉄鉱石もありそうですね」

「鉄か——でも、製鉄となると簡単には……」

「いい鉄鉱石が出るようでしたら、ここの天井までぶち抜いて高炉を作るつもりですが」

「「高炉？」」

俺とアキラの声が重なった。

そんなものまで作れるのか。

「ここは、天井に穴があいてますからねえ。火を使えるんで丁度いい」

「ケンイチ、高炉なら燃料は石炭じゃね？」

「製鉄なら石炭というよりはコークスだろ？」

「ああ、コークスか……」

「領主様？ そりゃ？」

「燃える石なんだが、見たことがないか？」

「石が燃える？ いや、そんなものは……」

鉱物に詳しい、ドワーフでも見たことがないということは、この世界に石炭はないのかもしれない。

シャングリ・ラで検索するとコークスが売っている——5kgで1500円ぐらいだ。

値段がよくわからないが、安いのかな？

「ポチツとな」

空中から、ダンボールに入ったコークスが落ちてきたので、蓋を開ける。

「ほら、これが燃える石だ」

「す、炭じゃねえ——本当に石ですが、これが燃えるんで？」

ドーカンが手にコークスを持って、こねくり回している。

「ああ」

ドワーフの周りに、青い光がまとわりつく——魔法だ。

青い光が集中すると、コークスが真っ赤になって燃え始めた。

「うわ！ 本当に燃えたぜ！」

「なんだなんだ？」 「どうした？」

騒ぎに、他のドワーフたちも集まってきて、コークスを燃やし始めた。

「こりゃすげえ！ とんでもねえ火力だ！」

「こいつを燃料にすれば、もっと簡単に鉄が作れるぜ！」

「だが、あんまり俺が作るものを当てにすると、俺がいなくなったときに大変になるぞ」

「なあに、そのときは、普段どおりに炭と魔法でやる」

「魔法を使うのか？」

「ああ、炭を燃やして、魔法を使って温度の底上げをするんだ」

炭だけだと、鉄が溶けるまで温度を上げられないらしいが、コークスなら魔法なしでも温度を上げられるわけだ。

「それで領主様、こいつをどれだけいただけるんで？」

「あゝそれなんだが、俺が魔法でこれを作るためには対価がいる」
「対価とおっしゃいますと？」

「金が一番簡単なんだが、魔法の糧として使ってしまうと、領から貨幣が消えてしまう」

「うん？　——とおっしゃいますと？」

ドワーフたちはピンとこないようだ。

「ケンイチが言いたいのはだな——普通は金が回り回って市場が動くんだけど、魔法の対価として金を消耗してしまうと、それがなくなってしまうんだよ」

「それじゃ、どうすれば？」

「うゝん……そうだ。ドワーフの作る一品なら、価値があるかもしれない」

「ああ、そいつを金の代わりに使うんだな？」

「そうだ」

ドワーフたちに、ナイフを1本用意してもらった。

見た目にも見事なもので、俺も1本欲しいぐらいの一品だ。

「こんなのでよろしいので？」

「ああ」

アイテムBOXに入れると、久々に【査定】をつかう。

【査定結果】 【ナイフ 買い取り価格20万円】

「ええ?!」

驚いた俺の声に、ドワーフたちが反応した。

「どうしました？」

「大丈夫だ、魔法の対価として十分に使える」
アキラが俺の所にやってきてヒソヒソ話をする。

「ちなみにどのぐらいの対価として使えるんだ？」

「日本円でおよそ20万円」

「おお！ それじゃ、長剣なら数百万って感じか？」

「そうだな、金貨と同じぐらいの価値がある」

「そりゃドワーフが作ったものだからなあ……」

これなら金要らずだ。彼らにシャングリ・ラで購入した物資を渡しても、それ以上のものを作ってもらえる。

「ドーカン、この短剣と引き換えに、さっきの燃える石が一山作れる。どうする？」

「できるだけ欲しいんですが」

「解った」

シャングリ・ラを開き、20万円でコークスを買えるだけ買う。
全部で665kg――110箱だ。

本当は133箱のはずだが、在庫切れかそれ以上買えなかった。

「ポチツとな」

空中から、5kg詰めのコークスが110箱、滝のように落ちてきた。

まあ、壊れもんじゃないから、安心だな。

「おおっ！ 宝の山だあ！」 「うおお！」

ドワーフたちが、玩具を与えられた子供のようにはしゃぎ回っている。

そのうち、コークスの山の周りで輪になって踊り始めた。

『オーエオーエオーエオーエ――』

まるでフォークダンスのようだ。

こういう場面には酒だろうが――安くて強くて美味しい酒か。

まさか、ドワーフたちに大〇郎を飲ませるわけにはいくまい。

獣人たちには飲ませたけどな。

「ポチツとな」

ナイフの対価として余った分で、ラムを20本ほど購入すると、地面にマットを置いた。

ガチャガチャと音を立てて、ラムの瓶が沢山落ちてきた。

「なんだ？ 酒か？」

「ああ、いいことがあった日には酒だろう」

「バ〇ルデイじゃん。俺も飲んでいいか？」

「ああ――ほら、ドワーフたち、酒だぞ」

「――「おおおっ！ 酒だ酒だ！」「」」

もじゃもじゃ髭の男たちが、酒に群がった。

「なんじゃこりゃ！」「こりゃ美味くて、強い酒じゃ！」「俺たちの火酒より強い！」

酒を飲んでワイワイしていると、ドワーフの女たちもやって来た。こりゃ酒が足りない。追加で20本ほど購入した。

「ドワーフたちが作っているナイフや短剣を対価にして、俺の魔法でこういう酒も作れる」

「――「うおお！」「」」「こりゃ、天国だ！」「こんな美味しい酒に化けるなら、ナイフなんていくらでも作ってやるぜ！」

「よう！ ドワーフたち。この領には、この酒の原料があるから、同じものが作れるぞ。ラムって言うんだけどな」

アキラの説明に、ドワーフたちが沸き立つ。

「なに?! この酒が、魔法じゃなくても作れるのか?」

「ああ、そのためにデカイ窯がいるんだが……」

アキラが俺からもらったスケッチブックに蒸留釜を描いて説明する。

似たようなことは俺がいつも使っている液体を分ける魔道具で可能だが……。

たとえば、エチルアルコールだけを抜き出すとか——出来上がった酒から水だけを抜けば、どんどん濃縮も可能。

でも、それって酒になるかな?

「ガハハ! そんな窯なんて、俺たちに任せろ!」 「そのとおり」
「余裕だ余裕!」

ドワーフたちが男も女も一緒になって、酒瓶を持ったまま、コークスの山を囲んでまた踊りだした。
小柄なドワーフたちが手を上げてクルクルと回り踊るその様は、なんともコミカルだ。

『オーエオーエオーエオーエー』

彼らの作るものが、高額で査定されるのが解ったってのは収穫だな。

さて、酒の飲めない俺は、そろそろ退散するか。

アキラは、しばらくドワーフたちに付き合うようだ。

どうみても、彼らに飲み比べでは敵わないような気がするが……。毛むくじやらの男たちとラムを酌み交わすアキラを見てそう思ったのだが——祝福を使えばアルコールも分解できる。

彼のアイテムBOXには、俺が貸している車やバイクも入っているから——まあ大丈夫か……。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

——ドワーフたちの洞窟を訪れた次の日。

朝飯を皆と一緒に普通に食う。メニューはスープとベーコンエッグ。

こんな普通のメニューでも、サンバクは完璧に作ってくれる。

ベーコンはメイドたちのお手製だったが、彼が製法を改良して、さらに美味しくなってリニューアル。

美味しくなってリニューアルといっても、小さくなったり容量が減ったりはしない。

美味しさも満足度もアップしている、本当のリニューアル。

さすが、宮廷の料理人だ。当の本人もベーコンを食べて、かなり気に入ったらしい。

ドワーフたちと一緒に飲んでいたアキラは、朝帰りだった。

一緒にずっと飲んでいたらしい。

「そんなに酒はなかっただろう？」

「ははは、ラムはすぐになくなって、ドワーフたちの火酒を飲んだ」

「火酒って、どんな酒なんだ？」

「まあ焼酎だな」

「それなら、ラムじゃなくて、大○郎を大量に出せばよかったか……」

「ははは、それでもよかったかもな」

そこにニャメナがやってきた。

「なんだ、アキラの旦那。飲み会だったのかい？ 俺も誘ってくれよ」

「ははは、ケンイチと一緒に話していたら、なんか盛り上がっちゃってな」

「ニヤメナも、仲間と飲みに行ってもいいんだぞ？」

「ええ？ 獣人の男たちとかい？ 危なくて、飲んでらんねえ」

「そうだにゃ」「あいつら、女とやることしか考えてないしね」

ニヤメナと一緒に朝食を食べている、ミャレーとニャレサがつぶやく。

「それにもう、俺の毛皮には旦那以外には指一本触れさせねえ！」

「そうだにゃ！」

獣人たちは、なにやらワイワイと盛り上がっているのだが、不機嫌な女もいる。

「聖騎士様は妾を置いていってしまおうし……」

「ああ、アマランサス、ごめんよ。視察して、すぐに帰ってくるつもりだったからさ」

置いていかれたアマランサスが、ベーコンを突きながらむくれている。

彼女と一緒に行ったら、ドワーフの酒まで飲み尽くしてしまうだろう。

一緒に朝食を摂っていたプリムラが手をあげた。

「ケンイチ、ちょっと仕事の話をしてもよろしいですか？」

「ああ、もちろん」

「サントンカで、加工用のクラーケンを待っています」

「わかった、食事のあとで船で行ってこよう」

クラーケンは生ものなので、俺がその都度サントンカまで行って、アイテムBOXから出しているのだ。

人に任せると運んでいる最中に傷んでしまう。

「ありがとうございます」

「それから、船に乗るついでだ。エルフの村へちょっと顔を出して

くるか。船でどのぐらいの時間がかかるのか調べておきたいし……」
湖に巢食っていたクラーケンを退治したので、そこを横断して一
直線にエルフの村へ向かうことができる。

「私も行く!」「当然、聖騎士様の護衛である妾も」
アネモネとアマランサスが手をあげた。

「それでは、妾もじゃ!」
リリスも一緒に手をあげたのだが、ちょっと困るな。

「アマランサスかりリスか、どちらかは残ってくれよ」

「それでは、聖騎士様を選んでたもれ」

「え? 俺か? うゝん、それじゃアマランサスは残ってくれ。危険はないと思うし、戦力は必要ないだろう」

「承知しましたわえ」

「もっと危険地帯に行くときは、アマランサスに頼むから」

「賢明な判断だと思えますわえ」

やけにあっさりと引き下がったな。

短期の同伴はリリスに譲り、長期狙いなのか?

確かに、未開の地などの探査となると、アマランサスの戦力が必要になる。

「ケンイチ、俺も行くぜ? ここのエルフたちに会ってみたい」
船舶免許を持っているアキラも手をあげた。

「それは構わないが、こっちで遊びまくって、レイランさんになにか言われないか?」

「大丈夫、大丈夫。センセ的には、ここのほうが安心できるんだってよ」

「そうなのか?」

「ここには、女子ネットワークがあるらしくて、俺がやっていることは全部センセに筒抜けらしいし……」

アキラがプリムラのほうを見ると、彼女がニコリと微笑んだ。

「ネットワークってなにや？」

聞き慣れない単語に、ミヤレーが耳を動かしている。

「ミヤレー、蜘蛛の巣のことだよ」

「にやるほどにや！ ネットワークにや！ アキラが、絡め取られるわけにや！」

「そうならないようにしねえとな。センセは、マジで洒落にならないからなあ……」

アキラは腕を組んでウンウン唸っているが、ラブラブにしか見えん。

「ラブラブだなあ」

「いえいえ、お代官様には敵いません」

「ふふふ、お主も悪よのう……」

アキラとくだらん冗談を言い合っているうちに食事は終わった。

メイドたちが後片付けを始めたのだが、こういうことをやらなくてもいいようになったのはありがたい。

その分、金がかかっているとはいえ、領の事業も順調に軌道に乗りつつある。

サンタンカでのスモークサーモンや、イカクンの生産も順調だし。

その原料をサンタンカに届けるために船を出す。

俺たちがクラーケン退治で使った船外機付きの元漁船。

地面を走るより早く到着できるので、重宝している。

船だと一直線に向かえるからな。

栈橋に到着すると、ベルがやって来た。

「にゃー」

「夕方には帰ってくるから、お母さんは狩りに行ってでもいいぞ？」
「にゃー」

彼女は、俺の脚にスリスリすると、森の中へ消えていった。

まあ今回は、危険はないだろ。

船に皆で乗り込むと、船の操縦はアキラに任せた。

乗組員は俺とアネモネとリリス、そして獣人たち、ニヤメナとミヤレーだ。

ちょっとした小競り合いでも、獣人たちのスピードとパワーは頼りになる。

鏡のような湖の水面を船が進むと、5分ほどでサントンカが見えてきた。

船を栈橋につける。

「煙製工場に肉を置いてくるだけだから、すぐに戻ってくる。ここです待っててもいいぞ」

「はいよー」「オツケーにゃー！」

ミヤレーはすぐに、俺とアキラが使っている言葉を覚えてしまう。そのうち、ネットワークとかも使い出すぞ。

栈橋を進み、村の中を挨拶しつつ、集落の外れへ向かう。

ちよつと大きめで倉庫のような木造の建物が見えてきた。

黒い防腐剤を塗った鎧張りの壁が目立つ。

簡易な作りの木製の扉を開けて中に入ると――中は薄暗く木製の長いテーブルが真ん中にあり、丸椅子が沢山置かれている。

奥には燻蒸器も並んでいるが、暗くてよく見えない。窓から陽の光が入ると肉が傷むので、窓がないのだ。

換気は、下方から吸って天井の排気口へ抜ける。

そこに、作業員の女たちが暇そうに座っていた。材料がなくなったので、作業が止まっていたのだろう。ちなみに、ここの作業員に獣人はいない。毛が舞ってしまうからだ。

「こんちわ」

ぐるりと見回したのだが、ここの責任者がいない。ちよつと小太りの髭の生えたオッサンなのだが。

「あ！ 領主様！」

俺に気がついた女たちに囲まれた。

「燻製の材料を持ってきたぞ」

「よかった！」 「男たちが漁から帰ってくるまで、仕事がなくなつててさあ」

テーブルの上に、クラークンの脚を出して、必要な分だけ切ってもらう。

取りすぎても傷んでしまうからな。

皆で作業をしていると、エプロンをしている若い女の1人に抱きつかれた。

「きゃー！ 領主様に抱きついちゃった！」

「えー！？ ズルい！ あたいも！」 「それじゃ、あたしだって！」

「負けるかあ！」

「「「きゃあああああ！」」」

女達に抱きつかれて、おしくらまんじゅう状態になる。

「おいこら！ やめろって！」

「「「きゃあああああ！」」」

無理をして、扉の方に動こうとしたのだが、雪崩れて扉に激突。そのまま突き破って、外に転げ出てしまった。

「「きゃあああ！」」

「おい！ 潰れるうう！　なんかでちゃううう！」

アホなことを叫びつつ、多数の女たちの下敷きになっていると、怒鳴る声が聞こえてきた。

「こらああああ！」「ふぎやああ！」

ニヤメナとミャレーの声だ。

耳の良い彼女たちは、異常事態を察知して、ここまで走ってきたのだろう。

それを聞いた女たちが、Gのごときダッシュで作業場の中に戻った。

「ふうう！　油断もスキもあったもんじゃねえ」「ケンイチ、ちょっとでも護衛は必要だにや？」

獣人たちが、作業場から顔を出す女たちを威嚇している。

「ははは、まいったね」

「領主様〜！」

そこに責任者の男が走ってきた。

「クラーケンの肉を持ってきたぞ。切り分けて、女たちが作業に入っている」

「申し訳ございません。領主様自ら——」

「まあ、材料は俺のアイテムBOXの中に入ってるから仕方ない」

「それより、なにかあったのですか？」

男がじろりと見ると、壊れた扉から様子を窺っていた女たちが、顔を引っ込めた。

「なあに俺がつまずいて、扉を壊してしまつてな。これで勘弁してくれ」

シャングリ・ラで買いだめしておいた瓶のワインをやる。

6本で4500円ぐらいなので、1本750円だ。

「これは！ ははっ！ ありがとうございます」

男が両手で受け取り、礼をした。

「それじゃ、よろしく頼む」

「ははっ！」

栈橋に戻って船に乗る。

女たちになにも言わない俺に、獣人たちは不満顔だ。

「どうしたのじゃ？ 随分とボロボロになったの？」

「ははは」

アネモネに洗濯の魔法をかけてもらう。

「旦那は、女に甘すぎるぜ」「そうだにゃー」

「まあ、彼女たちも悪気があってやったわけじゃないし」

「ケンイチ、どうした？ なにかあったのか？」

「はは、作業場の女たちにもみくちやにされた。おしくらまんじゅうだ」

「おしくらまんじゅうなんて、てっきり見なくなったが、この世界であつたか」

俺とアキラの会話を聞いていたアネモネが、首を傾げている。

「おしくらまんじゅうってなあに？」

「子どもたちが集まって、押し合いへし合いする遊びだよ」

「へえ」

「組み合って、背中ついたほうが負けとかそういう遊びじゃねえのかよ」「そうにゃ」

「違う違う、ただ押し合いをするだけ」

「変なの」

この世界には、おしくらまんじゅうはないようだな。

「ケンイチー―注意せねば、女に甘いという噂が立つと、それを逆手に取って暗殺などに使う輩が出てくるぞえ？」

「やっぱり、常に護衛はつけたほうがいいのかな？」

「当然じゃな」

リリスは王族だったので、テロには敏感だ。

俺も領主になったんだ、注意したほうがいいのかな？

まあ、祝福があるから、簡単には死なくなっているようだが：

…。

皆で船に乗ると、アキラの操縦でエルフの村に繋がる川へ向かう。

「ケンイチ、どこらへんなんだ？」

「サクラの丁度対岸辺りに外へ流れ出る川がある。流れは緩やかだし水深も1mぐらいあったので、船外機も大丈夫だと思う」

「オッケー！」

1時間ほど船を進め、川の入りにやって来た。

「ここか、まるで運河だな」

アキラが川の手を見て、ゆっくりと進入を開始した。

「ここから、デカイアニス川って所まで繋がっているらしいから、上手くいけば海まで出られるかもな」

「へえ、マジで運河として使えるじゃん」

「でもなあ、アキラの旦那。魔物がウヨウヨいるんだぜ？」「そうにゃ、スライムもいっぱいいるにゃ」

「そいつは厄介だなあ。湿地なのか？」

「そうらしい。アキラはスライムに出会ったことがあるのか？」

「ああ、スライムっちゃ雑魚のイメージがあるが、とんでもないぜ。マヨネーズも効かねえし」

生物の呼吸を止め、窒息させるアキラのマヨ攻撃だが、スライムに通用しない。

会話しつつ、運河のような川を進む。

このままエルフの村まで30分ぐらいかな？

174話 スライム

サクラにドワーフたちがやって来た。

鍛冶場の準備を始めたのだが、俺が以前巨大な蜘蛛を倒した洞窟に興味があるという。

そこに案内をすると、大変気に入ったらしく、棲家として利用したいと言い出した。

俺としても断る理由がないのでそれを認めると、すぐさま彼らは、洞窟内に住居の建設を開始。

他の街からもドワーフたちを集めるといふ。

洞窟はドワーフたちに任せて、俺はサンタンカにクラークンの肉を届けることになった。

生ものなので、俺のアイテムBOXから直接渡しているのだ。

サンタンカでの燻製の製造も順調に進んでおり、村も大きくなっている。

産業があつて仕事があれば人は集まるのだ。

クラークンの肉の配達が終わった俺たちは、湖の対岸にあるエルフの村を訪れてみようということになった。

同行しているアキラも、こここのエルフたちに会ってみたいようだ。彼は帝国でエルフとも付き合っており、彼らの文化や暮らしをよく知っている。

俺たちを乗せた船は、エルフの村へ続く運河のような川へと進入した。

「こんないい運河が海まで続いているってのに、利用できないのは勿体ないよなあ」

アキラの言うとおり、この川の先は、アニス川という大河に繋がっており、アニス川は海にも王都にも繋がっている。

船が利用できれば、大幅な輸送力アップに繋がるのだが……。

「でもさあ、アキラの旦那。湿地帯には尋常じゃないぐらいの魔物がウヨウヨいるんだぜ？」

王都の近くを通ったアニス川は、大湿地帯に流れ込み、大蛇のようになうねうねと平地を進み海へ流れ込む。

ほとんどが湿地帯で、多数の魔物がいるという未開拓地——人も全く住んでいない。

森の中に住むというエルフさえも近づかない危険地帯だ。

魔物の中でも危険なのは、大量に生息しているというスライム。

元世界のゲームの中では雑魚扱いのスライムだが、ここでは強敵で人々に恐れられ——ほとんど水と変わらない姿で忍び寄り、いきなり捕食されるという畏怖の対象とされる。

森の中、木陰の間を縫うように流れる水路——その上をゆっくりと進む船の上で、スライム談義が続く。

「アキラ、スライムの攻撃ってのはどんな感じなんだ？ 強酸で溶かされるとか？」

「いや、そんな強酸だったら、自分たちが溶けるだろ？」

「まあ、そうか」

「まずは捕まえると、刺胞を打ち込む。こいつが痛くて痺れる」

「でさあ——取り込んで窒息させてから、ゆっくりと消化されるんだよ」

ニャメナが説明してくれた。

なにそれ、怖い。

「魔法は効かないの？」

「アネモネちゃん、これがあまり効かないんだよなあ」

「RPGの攻略法だと、コアを狙え！——とか、あるだろ？」

「コアはないな」

魔石もあるが、それがない個体でも同じように動くので、魔石を攻撃する意味はないらしい。

「アキラ殿。燃やすのはどうじゃ」

リリスは、アキラが油を出せるのを知っている。

「試したことがあるんだが、水分が多いから燃えないし、大した痛みも与えられない」

「水分を蒸発させるぐらいの大火力があれば……」

「それなら、死ぬ可能性があるが——」

爆裂魔法で吹き飛ばしても、バラバラになるだけで、再度集合して元通りになるという。

「それじゃ、電撃は？」

俺の質問に、アキラが船外機を操りながら、唸っている。

「それが唯一有効だと思うんだが、水分がほとんどだからな」

「試したことは？」

「あゝ、スライムがいるのって水辺じゃん。そこに電気を流したら……」

「ああ、なるほどなあ」

俺とアキラの会話にリリスが首を傾げている。

「水がどうしたのじゃ？」

「電撃とか雷ってのは、水を走るんだよ。水辺で電撃の魔法なんて

使ったら、脚を浸けている全員が感電——つまり雷に打たれる」

「なんと——」

「ゴム長靴を履けば平気だな」

「はは、そんなものがあれば、俺も苦労はしなかったな」

シヤングリ・ラで、防水の胴長長靴を検索してみる——8000円ぐらいで売っているな。

これなら電気を通さないだろう。

「でも、長靴があっても、アネモネは電撃の魔法を覚えていないからなあ」

「電撃の魔法ならセンセが使えるが——あまりゲームやアニメのようには便利な魔法じゃないぞ？」

「そうなのか？」

アキラの話では、コントロールが難しいらしく、アーク放電がどこへ飛んでいくか解らないらしい。

なるほど、そう言われればそんな感じがするな。

雷がどこへ落ちるか解らないのと一緒にだな。

「とりあえず、一番近い地面からの突起に落ちたり、金属部分に落雷したりする」

「そう聞くと、あまり役に立たないような……」

「すごい至近なら使えるぞ」

「それなら、最初から水を撒いて感電させる、広範囲魔法としたほうが役に立ちそう」

「まあ味方が全員、ゴム長靴を履いているのが条件だけだな、ははは」

アキラの戦闘データはすごい役に立つ。伊達に死線をぐぐり抜けてないな。

船はそのまま水路を進み、エルフの村の近くまでやってきた。

「ん？ お出迎えがないな？」

俺のつぶやきにアキラが反応した。

「エルフは結構境界や侵入者に敏感だからな」

「初めて会ったときは攻撃されたぞ？」

「はは、ありがちな。知り合いになると、めちゃ図々しいんだがな」

エルフたちの出迎えがないまま、船は彼らの集落がある池の畔までやってきた。

「ケンイチ、全然見当たらないぜ？」

船の上から見渡すが――彼らの家などは以前と同じままだが、エルフたちの姿は見えずゴーストタウンのよう。

どこかにでかけているとしても、1人もいないというのは変だ。

「もしかして、引っ越したかな？」

栈橋がないので、先に獣人たちに降りてもらい船を押ししてもらおう。舳先を陸に少々上げたので、これなら流れていたりはしないだろう。

アイテムBOXから脚立を出すと、船の舳先から地面に降りた。

「ミヤレーとニヤメナ、少し濡れてしまったな。今、乾燥する魔道具を出してやる」

「いいよ旦那。このぐらいすぐに乾くからさ」「そうだにゃ」

「そうはいっても……」

俺がアイテムBOXのステータス画面を見ると、突然ニヤメナが叫んだ。

「旦那！ あぶねえ！」

突然、ニャメナに抱えられて、ジャンプした。

「ふぎゃ！」

ミャレーも、アネモネとリリスを抱えてジャンプ。
釣られたアキラもジャンプした。

「なんだ！　なんだ！」

「なにごとかえ？！」

見れば――池の淵から、なにか透明なものが上がってきている。

「おい、ケンイチ！　スライムだ！！！」

「これがか？！　結構、動きが速いぞ！」

本当に水が坂を流れるような速さで、透明なものが迫ってくる。

「むー！　光弾よ！　我が敵を撃て！」
マジックミサイル

ニャメナに抱えられたアネモネが、マジックミサイルの魔法を放った。

空中に現れた光の槍が、透明なスライムに命中するが――。

穴が開いて飛び散ったと思いきや、すぐに合体して、なにごともしなかったように再びこちらに向かってきた。

獣人のスピードなら、逃げ切れるかもしれないが――ニャメナとミャレーも人を抱えている。

俺はとっさに、アイテムBOXからコンテナハウスを取り出した。
目の前に黒いコンテナが、地響きとともに落ちてくる。

「皆！　とりあえず、あの中へ！」

「うおお！」　「にゃあああ！」

皆でコンテナハウスに入ると、アルミサッシの扉を閉め、ノブについている鍵を回した。

「はあはあ……」

「こ、これがスライムかえ」

「初めて見たあ」

リリスとアネモネが青くなっているが、あれじゃ水の中にいたら本当に解らんな。

ズリズリとコンテナハウスにへばりついて、這いずり回る音がする。

ガラス窓にも、透明ななにかが覆う。

「さすがに鉄板を溶かしたり、穴を開けたりはできないだろう」

「多分な」

サッシの隙間から流れ込んでくる——みたいなこともできないらしい。

「本当に透明なんだな……」

「水辺だとマジで解らんからな」

「ミヤレーとニヤメナ、スマン。先に水の中に入ってもらったおまえたちが犠牲になるかもしれないよ。もっと注意すべきだった」

「多分、ウチらが水に入ったんで、よってきたにゃ」「ああ、多分な」

いつもおちやらけているアキラが、マジ顔だ。

「さて、ケンイチ——どうする？」

「まいったな」

まさかスライムがいるとはな。

このせいでエルフたちも、ここから避難したのだろう。

「魔法は効かない——アキラの油で燃やすのもダメときたか……」
「そのとおりだ」

爆裂魔法で吹き飛ばしても、すぐに集まってきて元通り——となると、船に乗って逃げるのも危ない。

船に乗っているときに襲われてなくて、よかったな。

水の上じゃ逃げ場がなかった。そう考えると——これは、たしかに危ないな。

アニス川を運河として利用できないわけだ。

「有効なのは電撃か……皆、ちょっと部屋の隅に行ってくれ」

俺はシャングリ・ラからトラック用のバッテリーを5個購入した。1個1万3000円ほど。

ついでに、バッテリーを接続するためのバッテリー渡り線を4本購入。全部で8000円だ。

「ポチッとな」

車のバッテリーとは違う、黒白の細長いバッテリーが空中から落ちてきて、床を太鼓のように鳴らした。

「ケンイチ、バッテリーを使うのか？」

「ああ、こいつを直列に繋がれば、溶接ができるぐらいの直流パワーがある」

これをプラ製の洋服ケースの中に入れて、バッテリー渡り線で直列につなぐ。

つなぎ方は、小学校の授業でやった乾電池と同じだ。パワーが段違いだけだな。

溶接用のケーブルをバッテリーに繋げるように改造して、銀色で細長い溶接棒を固定する。

別に溶接するつもりはないが、他にいいものがなかった。

普通の溶接機は、マイナスにアース線を繋ぐが、こいつはマイナスにも溶接棒が固定されている。

「これでアークが出るのか？」

「ちょっとやってみるか？」

溶接棒同士をちゃんと接触させると、青白いスパークが発生した。

「うおっ！ 魔法だ！」 「魔法だにゃ！」

「すごい！」 「すごいもう！」

リリースとアネモネも、アークの明るさに目をしばしばさせている。直接見ると目玉が焼けるほどの威力だ。

「奴らの身体のひとつが水なら、電気を通すだろ？」

「よっしゃ、やってみようぜ」

アキラはマイナス側、俺はプラス側を持って準備。

用意ができたので、2人で窓に張り付く。

「ニャメナ、窓を少し開けてくれ」

「わ、解った……」

窓には透明なスライムが、まだ張り付いていて、ニユルニユルと動き回っている。

屈折率の違いで、景色が歪むので、かろうじてなにかいるってことが解るのだが――敵は箱の中に人がいるのが解るのだろうか？

ニャメナがガラス窓をそっと2cmほど開けたので、そこにアキラと2人で溶接棒を突っ込む。

スパークこそ出なかったが、スライムが飛び上がって、コンテナハウスから剥がれた。

「ははは、スライムってジャンプするのかよ。初めて見たよ」

ジャンプしたスライムを見たアキラが笑っている。

「結構、飛んだな？」

「ああ、びっくりだ」

スライムとの戦闘の経験も豊富なアキラも初めて見たという、スライムのジャンプだが、電気ショックがこの透明な魔物に有効だと解った。

「けど、死んだようには見えなかったな」

アキラが、窓から外を見ている。

「動きを止めてから、長時間流せば死ぬんじゃない？」

「そりゃそうだが……どうやって動きを止める？」

「うーん」

しばし考える。そういえば、ナメクジに塩をかけると、動きが止まるよな……。

「アキラ、ナメクジに塩作戦はどうだ？」

「塩をぶっかけるのか？」

「いや、塩よりなにか……」

シャングリ・ラを検索する。水を吸うといえば——シリカゲルか。いや、もっと良さげなものが、目に止まった——猫砂だ。

ペット用品のコーナーに、顆粒状の猫砂が売っている。

木製ペレットやら、紙製など色々あるが、シリカゲルが主成分のものを買う。

こいつなら大量に買っても安い。塩よりは水分を吸うのに違いがない。

10Lで6袋を1万円で購入。

「ポチツとな」

ドサドサと猫砂が落ちてきた。パッケージデザインなどはされておらず、白い顆粒だけが入っている。

「なんだ？ 砂か？」

「いや、シリカゲル入りの猫砂だよ」

「猫砂かよ。効くかな？」

「それじゃ、ナメクジ退治と同じように、一緒に塩も追加してみるか」

追加で塩を20kg 2000円で購入して、猫砂に混ぜる。

これなら効くだろうが、そのためには外に出なくてはならない。

スライムは刺胞を打ち込んでくるので、そいつをガードするために必要な胴長を買う。

全身黒いゴムでできているスーツ型だ。これなら電気も通さないだろう――1着1万円。

追加で、ブラスト加工などをするときに使う、ゴムのマスクガードも買う。

顔の部分がガラスになっており、肩まですっぽりと覆ってくれる頭巾のようになっていいる。

この組み合わせなら、スライムの攻撃も防げるに違いない。

「胴長にゴム頭巾か。確かにこれなら、スライムに刺されても平気かな？」

「ゴム製だから、電気を使っても平気だろ？」

「そうだな」

俺とアキラとで服を脱ぐと、下着姿で黒い胴長を着込む。

「うひゃーこりゃ暑いぜーサウナかよ。汗だくなるな」

「スライムに刺されるよりはマシだろ？」

「ふう、マジで大事になったぜ、こりゃ……」

アキラが愚痴っているが、あのスライムを排除しないと、帰ることもできない。

「旦那、俺たちも手伝うよ！」 「そうだにゃ！」

「いや、砂を撒くだけだからな、俺たちだけで大丈夫だ。それに俺たちはスライムに刺されても、回復^{ヒール}が使えるからな」

「まあ、ケンイチの言うとおりで。ここから見物してな」

「ううう……」

ニヤメナがしつぽをブンブンしている。

苛ついているのだが、仕方ない。

「うー！ 私の魔法が役に立たない……」

スライムを乾燥させればいい——ということで、彼女が乾燥の魔法を使ったのだが、すぐに察知して逃げられてしまった。

魔法が発動して、乾燥が始まるまでタイムラグがあるので、それに気づかれてしまうようだ。

それに乾燥が始まっても、しばらくじっとしてもらわないと、乾燥が完了しない。

スライム自体にも魔法に耐性があり、効果が薄いと解った。

「そうむくれるなアネモネ。こういうときだってある」

「そうだぞ、アネモネちゃん。ウチのセンスだって、スライムは苦手なんだからさ」

「ケンイチ、気をつけるのじゃぞ！」

「大丈夫だ、リリース」

リリースを抱き寄せるが、ゴムの胴長の上からなので、いまいち。

「私も！」

アネモネも一緒に抱き寄せる。

「領主様はモテモテだな」

「ははは——さて、行ってみるか？」

「おう！」

バッテリーセットをアイテムBOXに入れると、プラ箱に入った

猫砂だけ持って、素早く外にでる。

「まずは、バラ撒こう！ 猫砂の上を通れば、水分を吸われるはずだ」

「おりやりやりや！」

俺とアキラが両手を使い、派手なアクションで周りに白い顆粒の猫砂をバラ撒き始める。

2人の動きに反応して、すぐにスライムも集まってきた。

まるで透明な水たまりが地を這ってくるようだが、猫砂の上を通過すると、すぐに粘膜を出して白くなり縮み始めた。

猫砂が効いているのか、それとも一緒に混ざっている塩が効いているのか、またはその両方か。

「お！ アキラ！ 効いてるぞ！」

「マジだ！ おりや！ 追加で喰らいやがれ！」

アキラが、バサバサと猫砂を上からぶっかける。

猫砂が効くようなので、同じものをシャングリ・ラから追加購入して、プラ箱へ補充した。

ついでに塩も追加する。

「おりやりやりや！」

動きが止まったスライムに、アキラが猫砂をかけまくと——透明だったスライムは、縮み上がり餅のように。

俺は、アイテムBOXから、バッテリーセットを取り出すと、高く電極を掲げた。

「ダブルケンイチコレダー！ それは、失われた世界からもたらされた、神代の雷撃！」

銀色の電極をブスリとスライムに差し込むと、5秒ほどで煙が上がり始める。

「はは！ 効いてる効いてる！」

「煙が出たら、もう死んでると思うけど、なんか——いいにおいじゃね？」

「そうだな、なんかお菓子っぽい……甘い香りが……」

電極を抜くと、隣のスライムに差し込む。

次から次へと電極を差し込んで、止めをさすこと——10匹。

「くそ、こんなにいやがったのか……」

それはすでに透明ではなくて、猫砂と電撃で白く濁った状態。

アキラが、動かなくなったスライムを踏むと、魔物の身体に胴長の足型が残る。

「アチアチ」

思わず俺は、ゴムの頭巾を脱いだ。

ひんやりとした風が涼しいが、実際は気温が下がっているわけでもないの、そう感じるだけだ。

「マジでサウナだぜ！」

アキラも釣られて脱いだのだが、すでに汗だくで、玉のような汗が額を流れている。

「でも、スライム退治はできたぞ」

「この世界でこんな猫砂は手に入らないが、塩なら使えるかもな。でも、こんな胴長はないぜ？」

「似たようなものはないのか？」

「そうだな、厚めの革で全身を覆えば使えるかもな……」

2人で、シャングリ・ラで買った経口補水液をがぶ飲みすると、作戦を続行。

陸に上がってきた分は退治できたが、水の中にはまだいるかもし

れない。

再び、アキラと一緒にゴム頭巾をかぶると、水場へ向かいバシャバシャと暴れ始めた。

「来るかな？」

なんて言っていると、俺の身体を透明なものが這い上がってきた。

「ケンイチ！」

そのまま、魔物を引きずり陸に上げると、アキラが猫砂をぶっつけた。

水面を叩く振動につられてか、次々と透明な魔物が集まってきたので陸まで誘導。

2人で猫砂をかけ、ケンイチコレダーで止めを刺した。

全部で、4匹の餅が転がっている。

「これで全部だろうか？」

「まあ、相当バシャバシャやったから、これで全部じゃね？」

スライムは退治できるのは解ったが、この世界で塩は貴重品で結構高い。

販売に国の許可がいるような品物を地面に撒くなんて、チートを使っている俺だからできる戦法だ。

「アチアチアチアチ！」

アキラと2人でゴム胴長を脱いで、放り投げると、スポーツドリンクをがぶ飲みする。

「ケンイチ！ もう大丈夫？」

コンテナハウスの窓からアネモネが顔を出して叫んでいる。

「ああ、大丈夫だ！」

アキラと一緒に座り込んでスポーツドリンクを飲んでいる所に、コンテナハウスから出てきた皆がやってきた。

「こ、これがスライムかえ……」

リリスが、拾った棒でスライムをツンツンしている。

アネモネが、俺のところにやってきて抱きついた。

「アネモネ、汗臭いから。抱きつかないほうがいいぞ」

「そんなことはないよ」

獣人たちは、スライムが恐ろしいのか、ちょっと遠巻きに見ている。

「こいつらを倒したのは初めて見たぜ……」 「そうだにゃ」

「まあ、塩だけでも倒せるかもしれないが、魔法で塩を作れる俺じゃないとできないよな」

「なんで、塩や砂で動きが止まったの？」

アネモネの質問に答えるのは難しい。本当は浸透圧の関係なのだが……どうやって説明するか。

「うーん、塩に水分を吸われたからだよ」

一応、そう説明しておく。

「へ」

「あー！ ケンイチ！ 俺、ちょっと水浴びしてくるわ！」

暑さに我慢できなくなったのか、アキラが下着姿で、池に走り出した。

「なんだよ我慢してたのに。俺も行くぞ」

2人で水際に行くと、バケツを使って思う存分に水浴びをする。一応、交互に水浴びをして、スライムの接近に注意したが、襲っ

てこない。

すべて退治したようだ。

身体も冷えたので、皆の所に戻ると固まっているスライムを調べる。

「ふうん、これって食えないかな？」

「だ、旦那！」

俺の不意の一言に、ニャメナが俺に掴みかかってきた。

その顔は――獣人たちは涙を流さないもので、よくわからないのだが、もしかして泣いているのかもしれない。

「なんだニャメナ。もしかして泣いてるのか？ 泣くことはないだろう？ 別にお前に食わせようとは思ってないぞ？」

「もう、勘弁してくれよ」

「気持ちは解るが、解るわけにはいかないな。これは、俺のライフワークでもあるし」

とりあえず、倒したスライムはアイテムBOXに収納した。

刺胞があるらしいので、そこは食えないだろうから、解体して調べてみないことには……。

俺のライフワークに理解を示さない家族がドン引きしている。

「食うのは別として、解体して構造などを調べてみないとダメだろう」

「ケンイチの言うとおり、もしかして弱点が見つかるかもしれないしな」

「そうそう、それが見つかれば、もっと簡単に倒せるかもしれない。スライムに効く毒も開発できるかもしれない」

スライムが駆除できれば、川を運河としても利用できる可能性が

出てくる。

「なるほどのう……ケンイチがいつも言う——敵を知り己を知れば百戦百勝じゃな？」

「そのとおり」

「もしかして、魔法も使える？」

アネモネが俺に抱きついて離れない。

「そうだな、その可能性もある」

「ううう……」

ニヤメナがしっぽを垂れて、耳を塞ぐ——完全にテンションだだ下がりである。

「トラ公は、ケンイチのこと諦めて、あとはウチに任せるにゃ」

ミヤレーも俺に抱きついてくると、クンカクンカしている。

彼女は俺のやることに批判的ではないのだが、どちらかといえば諦めているといった印象。

寝床も提供してくれて、美味しいものを食わせてくれるので、多少変なところは妥協してもいいにゃ——といった感じだ。

「そうはいくか！」

ニヤメナも俺に抱きついてクンカクンカし始めた。

俺の汗のにおいが好きなのか？

「むりすることにはいにゃ」

「うるせえ！」

完全にニヤメナに嫌われてしまったのかと思ったが、そうでもないらしい。

「あはは！ ちょっと待て！ 2人とも、脇に鼻を突っ込むなって

！　くすぐったい！」

獣人たちが俺に抱きついて、脇をクンカクンカしてくるのだ。
しばらく悶えたあと、一息ついて俺は腰をあげた。

「さて――エルフたちを探しに行くか？」

「そうだな、どこかに避難しているんじゃない？」

「多分、あそこだろう」

俺には心当たりがある。

ここに来たときに泊まった、エルフたちが作ったツリーハウスだ。

皆でそこに避難しているのではなからうか。

俺たちは、ツリーハウスへ行ってみることにした。

175話 エルフはスライムが苦手

湖に出たついでにエルフの集落へ向かったのだが、そこはもぬけの殻。

エルフの姿はまったく見えなくなっていたので、不思議に思っていると透明な魔物の襲撃を受けた。

アキラによると、こいつらはスライム。

元世界のゲームでは雑魚扱いのスライムだが——切っても死なない、燃やしてもあまりダメージもない、魔法もあまり効かない——と、ここでは結構な強敵。

俺がシャングリ・ラから購入したバッテリーを使って電気ショックでダメージを与えられることが解ったので、電撃作戦を実行に移した。

シリカゲルを含んだ猫砂と塩でスライムの動きを止め、電気ショックで止めを刺す。

こいつを使って14匹のスライムを仕留めた。

周りの安全をチェックしたあと、エルフたちを探すことにした。

「アキラ、あっちだ」

「なにか当てがあるのか？」

「以前に来たときに、エルフたちがツリーハウスを作っていた。そこに避難しているんじゃないだろうか？」

完全に村を放棄するつもりなら、もういないかもしれないが、長年ここに住んできたのだ——そう簡単には見捨てないと思う。

皆を連れて、以前に行ったツリーハウスに向かう。

「確か、こっちのほうだと思いがなあ……」

「旦那、間違っただけ。確かにエルフのにおいがする」「そうだな」

「エルフのにおいは俺でも解るが、普通の――只人ってやつも、においはするの？」

「もちろんだぜ」「そうにや」

「まあ、俺と森猫のにおいを辿って、ミヤレーがここまで追いかけてきたしなあ」

「むふー、絶対に逃さないにや」

ミヤレーが傲慢の鼻をひくひくさせている。

「そうか、ケンイチが逃げたら、獣人たちに追わせればいいのじゃない」

「なんで、俺が逃げるんだ。領主になっちゃって、正室までいるんだ。もう逃げられないだろ」

「ははは、俺もミヤアから同じことを言われてるしな」

アキラが笑っているが、彼の下にも獣人の女性がいるので、状況は同じ。

「ケンイチ、多分――洗濯の魔法を使って、においを消せると思う」「ああ、なるほどなあ。こんど実験してみようか？」

「うん」

俺とアネモネの会話にリリスが声を荒らげる。

「まさか、本当に逃げる準備をするのではあるまいな？」

「そんなわけないだろ。敵に獣人がいることもあるし、そういう敵に追われたときのことなんて考えなくてはいけないだろ？」

「そうだなあ。なにしろ貴族ってのは狙われやすいしな」

魔法を使ってにおいを消す方法に、アキラも興味があるようだ。

「アキラも獣人に追われたことがあるのか？」

「いや、追撃戦が多かったが、においが消せれば利用できることがある」

「たとえば？」

「通常、追うときは風下からってのがセオリーだが、それを逆手に取ることもできるだろうなあ」

においを消すことができれば、色々と利用できそうだな。

「なにもしてなくても、悪巧みで嵌められることもありえるんだし。リリースも王侯貴族でそういう話を聞くだろ？」

「ううむ……」

話をしながら、丸太でできたツリーハウスに到着したので、声をかけてみる。

「おーい！ 誰かいるか？！ っているんだろ？！」

本当に、ここに全員入っているのかな？

避難にも使えるように、かなり丈夫に作ってあると言っていたけど。

少々心配になったのだが、小屋の中から聞こえてくる声が大きくなると、ドアが開いた。

「え？！ 誰？！」

出てきたのは、前に来たときに俺に絡んでいた、ボブヘアのエルフだ。

族長を除けば、下っ端エルフのまとめ役のような存在らしい。

「おーい、俺だ！ 湖の向こうで領主してるケンイチだ」

「え？！ ちょっと危ないよ！ スライムがいるんだって！」

「大丈夫、池にいたスライムは全部退治したから」

「ええ？！ 本当に？！」

俺はアイテムBOXから、餅のようになったスライムを1匹だし

た。

「ほら、これがスライムだ」

「ええ？ なになに」「どうしたの？」「だれ？」

エルフたちは、ドアから一斉に金髪の頭を出した。

「本当に大丈夫なの？」

「ああ、全部で14匹だったぞ。池でも調べたが、もういないようだった」

「1匹2匹残っても対処できるから心配いらねえよ」

アキラも翻訳の指輪を持っているので、彼らと話ができる。

「誰？」

「俺の領にいる魔導師だ。ドラゴンも倒したツワモノだぞ」

「ドラゴン?! 本当に?!」

「本当だ」

俺たちに説得されて、金色の飾りをつけた緑色のチャイナドレスのような服を着たエルフたちが、次々とツリーハウスから降りてきた。

降りてきたはいいが――まだビビって周りをキョロキョロしている。

本当に全員が、あの小屋の中に入っていたらしい。

「エルフってのは、結構強いんじゃないのか？」

「普通の魔物ならともかく、スライムって大変なんだからあ！」

「そうそう、弓も効かないし、魔法も効かないしい！」

「皆である狭い小屋の中に入っていたのか？」

「そうだよ」

男も女も一緒だが――今回、男たちはあまり役に立たなかったのか、肩身が狭そうだ。

「食い物はどうしてたんだ？」

「エルフは精霊がいれば、そんなに食べなくても平気だし」

「それにこれがあるから」

エルフたちが、小屋から出して見せてくれたのは、バナナ。

「おお、俺が渡した果物の栽培に成功したのか？」

「ええ、簡単だったわ」

「株分けすれば、ドンドン増えるし、凄く便利だよねえ」

「バナナは栄養満点だしな。青いバナナは料理にも使えるし」

1本もらって食べてみる。完熟バナナなので、凄く甘い。

皆にも食べさせる。

「あま〜い！」 「これは美味しいの！ 前にもらったものより甘い！」

「おお！ こりやうめえ！」 「甘いにゃ〜！」

獣人たちも、バナナをがつついている。

シャングリ・ラに売っているのは、青いバナナを摘み取ったものだからな。

ここに生えているのは、摘みたての完熟バナナだし。

「ははは、こんな場所でバナナとはな。ケンイチがやったのか？」

「ああ、カカオの実と一緒に渡したんだ」

「カカオ？ エルフはカカオに似た実を飲み物にして飲むのは知ってるが……」

「ここらへんに生えてたカカオの木が病気でやられたらしい」

「へえ〜そういうこともあるのか」

そう、このバナナと一緒にカカオの実も渡した。

カカオは、チェチェと呼ばれていて、エルフたちの生活にはなくてはならないものなのだ。

「チェチェの栽培は上手くいってるのか？」

「上手くいってるよ。まさか、チェチェを自分たちで育てるなんて思ってもみなかったけどね」

「自分たちで栽培すれば、欲しいときに手に入るし、予定も立てられるだろ？」

「そうなんだけど——まさか、チェチェの木がなくなる日があるなんてね」

「種類による違いは？」

「ちょっと粉が黒っぽい以外は、全然変わらないよ」

「それは良かった」

外来種を持ち込んでしまったことで、ここに生えている在来種と混じってしまう可能性があるが……。

考え込んでいると、アキラが声をかけてきた。

俺が難しい顔をしていたかららしい。

「どうした？」

「種類の違う元世界の作物を持ち込んで遺伝子汚染してしまうのではなからうか？」

「ははは、大丈夫だよ。神様のくれた力で持ち込んだんだ。なにがあっても、全部神様の責任さ」

アキラは、俺たちが持っている力は、神様がくれたものと言うのだが——もしそうなら、彼の言うとおりだ。

遺伝子汚染が禁則事項だというのであれば、持ち込めないようにするべきなのだ。

禁止されていないってことは、想定範囲なのだろう。
少々荒っぽい解釈ではあるが。

ビビっているエルフたちと一緒に村に戻る。

「本当に大丈夫なお？」

「心配なら、2、3日滞在して、様子を見てやるよ」

「そうだな。退治の仕方はもう解ったし、簡単にできるからな」

「本当！　ありがとう！」

俺とアキラが、エルフたちに抱きつかれる。

「むー！」

「アキラ殿はともかく、ケンイチには妾とアネモネがおるではないか！」

アネモネとリリスのご機嫌が急に斜めになる。

それにエルフたちが気づいたようだ。

「あ、そうそう。領主様は小さい子が好きだったんだよねえ」

「おい、誤解を招くようなことを言うなよ」

「アキラ殿も、あまり羽目はずすようなら、レイラン殿に言いつけるぞえ？」

「ちよっと待ってくれ！　お姫様、そりゃないぜえ」

「我々には、協定があるからの！」

「わかったにゃ！　それがネットワークにゃ！」

またミヤレーが、元世界語を覚えてしまった。

騒いでいる俺たちの所に、和服の羽織のようなものを着たエルフの族長がやってきた。

確か、メーサラだったか……。

「チエチエやバナナのみならず、スライム退治までしてもらえると
は、ケンイチ殿に幾千万の感謝を」

抑揚のない淡々とした声が響く。

「まあ——ここも一応領地になっているし、領主としては当然の義務を果たただけだな」

族長と話している俺に、リリスが満足そうにつぶやく。

「ほう、ケンイチも徐々に為政者らしくなってきたのう」

「リリスとアマランサスの見様見真似だけだな」

「けどよう……本当にスライムはいなくなったのか？」

女たちの後ろをついてきた、男のエルフたちがビビりまくっている。

「そんなに心配なら、池の周りを回ってくればいい。スライムがやってきたら、俺たちが退治してやるよ」

「ほ、本当か？」

「もちろん。逃げてくるだけなら、できるだろう？」

30人ほどのエルフたちが族長を中心に円陣を組む。

池の周りで騒ぎたてて、スライムをおびき寄せる作戦らしい。

さすがに、これだけの人数でおびき出して出てこなければ、全滅させたと信じてもらえるだろう。

「残っていたら、本当に退治してくれるんだよな？」

「なんだ——エルフは、女より男のほうがビビりだな」

俺の嫌味に男のエルフたちは心外そうだ。

「スライムってのはなあ、マジでヤバいんだぞ？」

「大丈夫だっての。心配するな」

こいつら全員数百歳で、俺たちよりめっちゃ年上のはずなんだが——全然そんな感じがしないのは、なぜなんだぜ。

エルフたちが池に向かうと、俺たちが乗ってきた船を見つけた。

「これって、あんたらの船なのか？」

「ああ、それに乗ってやってきたんだ」

「すげー！」

「後ろに魔道具がついているから。漕がなくても進むぞ？」

「すげー！」

まるで、スーパーカーを見る子どものような、キラキラした目で船を眺めている。

そのあと、30人のエルフたちが、池をぐるりと取り囲み、スライムのおびき出しを始めた。

——といっても、ビビりまくりで腰が引けまくり。

その光景に笑っちゃ悪いが——ウチのアネモネのほうが、よほど腹が据わってる。

アキラと一緒に、プラケースに入った猫砂と塩の準備をして待つ。しばらくすると、池の反対側が騒がしくなった。

「まだ、残っていたか？」

「らしいな」

エルフの男たちが、こちらへ走ってきた。

「「「うわあああ！ 来たぞお！」」」

「よし、そのままこっちへ来い！」

アキラと一緒に、猫砂と塩を横に線を引くように撒く。

ここをスライムが通れば、動けなくなるトラップだ。

猫砂で書かれた白い線の上をエルフの男がジャンプすると、そのあとを透明な水たまりがついてくる。

どうやら2匹のようだが、トラップに引っかかると、白い粘膜を出して縮み始めた。

「おっしゃ！ 追加で喰らいやがれ！」

アキラが猫砂をぶっかけると、みるみる白く濁って固まっていく。それを見た俺は、シャングリ・ラから鉄筋を購入した。建築現場

などでコンクリートを打つときに使われている鉄の棒だ。

「おりゃ！」

その鉄筋を、スライムに突き刺す。

完全に動きの止まった2匹のスライムにエルフたちが集まってきた。

「おい、エルフで電撃の魔法を使えるやつはいないのか？」

「ええ？ 私が使えるけど……」

手を上げたのは、おかっぱヘアのエルフ。

「電撃の魔法は、制御が難しいって聞いたけど、この鉄の棒に雷を落とすのは簡単だろ？」

「そりゃ、これだけ近ければ……」

「止めを刺してくれ」

「それで、こいつら死ぬの？」

「ああ、地面も乾いているから平気だろ」

かろうじて濡れているのは、スライムが這ってきた場所だけだ。

「それじゃ、やるよ——『青き雷よ、我敵を切り裂く剣となりて宙を走れ——電撃！』」
ライトニング

破裂音とともに青い閃光が鉄筋のてっぺんに落雷——本当に雷だ。強烈な電撃を受けたスライムは、数秒で白い煙を上げ始めた。

前のときと同じように、お菓子っぽい甘い香りが、辺りに漂う。

「この香りだけ嗅ぐと、美味しそうに思えるが……」

「うそ?! 只人ってスライムを食べるの？」

俺のつぶやきに、エルフたちが反応する。

「いや、食わんが——食ってみようかと、思ってたな」

「いやだあ！」

彼らの反応からすると、エルフもスライムは食わないみたいだな。もう1匹残っているが、こいつは実験材料にした。

この状態で切っても死なず、切り取ったものを水に漬けても蘇生する。

動けない状態で、アネモネの乾燥魔法を使うとカラカラにできるが——しばらくはそのままでも生きており、水を与えると復活する。かなり生命力は強い。カラカラの状態で火を点けるとよく燃えたので、燃料として使えるかも。

動けない状態なら凍らせる事もできるが、不凍成分が多いらしく完全には凍らないし、溶けると動き出す。

生命力が強靱すぎる。

「もう、残っていないだろ？ 心配ならまだやるが？」

「「うーん」」

エルフは、よほどスライムが嫌いのようだ。

「だって！ 1匹見たら、凄い勢いで増えるんだから！」

「まあ、切ったり爆破したりすると、分裂するみたいだしな」

「そうなんだよ！ 刺されると痛いしさあ！」

「ケンイチ殿、誠に申し訳ないが、彼らの不安を取り払ってほくれまいか」

族長に頭を下げられてしまっちゃ——仕方ねえ。

とことんエルフたちに付き合うことに。

「アキラ、俺たちは飯を食おうぜ？」

「いいねえ。なにを食う？」

「俺的にはカップ麺を食いたいのだが……」

「いいじゃん！ 俺も久々に食いたいぜ」

「それじゃカップ麺とおにぎりで、それからシ〇ウエ〇センだな」
「シ〇ウエ〇センとか作れるのかよ」

「大丈夫だ、問題ない」

俺とアキラはカップ麺の用意をするが、普通の食事――パンとスープも用意した。

後は、サンタンカで作っているスモークサーモン。
リリスや獣人たちの大好物だ。

「アキラ、コンロとフライパンを出すから、ウインナーを焼いてくれ」

彼にシャングリ・ラから購入した業務用のシ〇ウエ〇センを渡した。

1kg入りで3000円だが、ウインナーは獣人たちでも食べられるだろう。

「任せろ」

鍋に入った水と、シャングリ・ラで買ったおにぎりをアネモネにあたためてもらう。

「ケンイチ、私もそれを食べる」

アネモネはカップ麺を食べたことがあるからな。

「よっしゃ」

「リリスはどうする？」

「妾もそれを」

「それじゃ追加だな」

リリスも、カップ麺を食べるらしい。

追加で購入して、準備をしているとエルフたちが集まってきた。

「なにになに？ なにを食べるの？」 「なにこれ？ 乾燥させた管虫

？」「いや、この細さは、紐虫だろ？」

「違う違う、小麦粉を練って細長くして乾燥させたものだ」

「へえ」

エルフたちが、皆でカップ麺を覗き込んで興味津々だ。

「食いたいのなら、食わせてもいいが……おたくの族長から、只人の文化に染めるなって苦情がくるからなあ」

「「メーサラ」！」

エルフたちが、族長の所へ団体交渉をしに行く。

さすがに数十人に囲まれては、「うん」と言うしかないだろう。族長が俺の所にやってきた。

「申し訳ないが、食料をわけてくれないだろうか？ 金はないが、なにか対価を用意する」

「ああ、構わんよ。災害時に領主が行う炊き出しみたいなものだからな」

「ケンイチ殿に、幾千万の感謝を」

早速、人数分のカップ麺をシャングリ・ラで購入した。

購入ボタンを押すと、空中からガラガラとカップ麺が落ちてくる。

「これって魔法なの？」

おかつぱのエルフが、落ちてきたカップ麺を手取る。

他のエルフたちは、日にかざしたりしているが、なにか意味があるのだろうか？

「まあな」

不思議そうに元世界の食い物を見ている彼らに、食い方を教える。

「そのまま火にかけたりするなよ。燃えちゃうからな」

お湯が沢山必要なので、アイテムBOXから出した寸胴に水を入

れないと。

「水が必要な？ 汲んでくるよ」

彼らは、池の水を使うらしい。

「池の水を飲んで大丈夫なのか？」

「浄化すれば大丈夫だよ」

どうやら魔法を使うらしい。

エルフたちが水を汲んできた寸胴に浄化魔法をかけてもらったあと、彼らにお湯も沸かしてもらった。

金髪の森の住民たちは全員魔法が使えるので、だれでもお湯ぐらいは沸かせる。

こっちは、おにぎりを温めよう。海苔が食えるか解らないので、海苔なしのおにぎりしてみた。

彼らも肉は駄目でも、おにぎりは食えるだろう。

「お湯が沸いたら、こうやって容れ物にお湯を注ぐんだ」

「すぐに食べられるの？」

「いや、180数えてくれ」

「解った」

エルフたちは、お湯が入ったカップめんを地面に置くと、円陣を組んでしゃがみ、じっと見ている。

背のデカイ子どもが並んで待っているようで、なんというか——可愛い。

3分たった。

「食べていいぞ」

彼らにプラ製のフォークを渡した。

「本当?!」

「ああ」

エルフたちは俺の真似をして蓋を開けると、すぐに食べ始めた。

「美味しい！ 只人の村には、こんな食べ物があるの？」

「いや、こいつは俺の魔法で作ったものだから、俺の所でしか食べない」

「つまり、ケンイチと一緒にいれば食べられるのね？」

「まあ、そういうことになるかな？」

エルフたちはおにぎりも頬張っている。

中身は、ねぎ味噌なので彼らでも大丈夫だろう。

「はふはふ、美味しい！」

得体のしれない食べ物喜んでいる村民たちに、エルフの族長は渋い顔をしている。

本当は、異文化の食事を摂らせたくないのだろう。

「うめー！」「美味いにゃ！」

獣人たちは、シ〇ウエ〇センを食べて上機嫌だ。

「旦那あ……」

ニヤメナがクイクイと飲む真似をしている。酒の催促だろう。

「駄目だぞ、こんな昼間から。アキラだって飲んでないんだ」

「ははは。まあ、こんな昼間から飲んじゃ——ただの駄目親父だからなあ」

「ちえ！」

「リリースはどうだ？ 細い長い食いの味は？」

「うむ！ これは美味い！ おかわりじゃ！」

「ええ？ もう食べたのかい？」

「うむ！」

飯で腹いっぱいになったエルフたちは、再び池の周りでスライムのおびき寄せをしているが――夕方までやったのに、もうスライムは出てこなかった。

「これで、安全だろ？」

「いや！ 明日、もう1日やる！」

どんだけスライム嫌いなんだ。まあ、いいけどな。

暗くなってきたので、俺たちはコンテナハウスを出して、中で食事を摂ることにした。

「ケンイチ、俺はテントでいいぞ？」

「大丈夫か？」

「テントの周りに猫砂撒けばいいだろ？」

「なるほど、そういう手もあるか……」

まあ、彼が大丈夫だということで、アイテムBOXからテントと寝袋を出してやった。

「飯はどうする？」

「俺のアイテムBOXに入っているものを食うよ」

「そうか」

コンテナハウスに入ろうとすると、エルフの女たちに抱きつかれた。

「今日の夜はどうするうー？」

鼻孔まで草のようなにおいが漂ってくる。

「どうするって、どうもしないよ。うちの正室からのお許しがでないし」

「俺も浮気したら、街にいる連れ合いにバラすって言われているしな、はは」

アキラは、エルフのお誘いに未練があるようだ。
もしかしたら、リリスが寝たあとに、夜這いに向かうかもしれない。

「女とやるのが駄目なら——それじゃ俺たちとやろうぜ？」

「はあ？」

手をあげたのは、エルフの男たちだ。

そりゃキラキラ金髪ヘアのイケメンばかりで、一見美女にも見えないこともないのだが……。

「やるってなにをやるんだよ」

「なにつてナニに決まってるだろ？ 只人は違うのか？」

「ええ?!」

アキラの話では、エルフつてのは男でも女でもいけるらしい。

「ああ、そういう……つて——アキラ。お前、エルフの男とやったことがあるのか？」

「フヒヒ、サーセン」

アキラが下を向いて頭を掻く。

「マジかよ。いや、それはちょっと……」

「そういう話ならば、妾も興味があるのう。妾の前で見せてくれるなら——ケンイチ、エルフたちとしてもいいぞえ？」

リリスが、興味津々キラキラと目を輝かせている。いや、王都ではやっている薄い本じゃないんだからさ。

「してもいいぞえ——つて、じよ、冗談ヨシ子さん」

顔を赤くして、アネモネも手をあげた。

「わ、私もちょっと見たいかも……」

「ブルータス——じゃあねえ、アネモネ——お前もか」

いや、好奇心は旺盛な俺だが、それはお断りした。

だが、アキラは皆が寝静まったころ、エルフの所へ向かったようである。

相手が男か女かは、不明だが。

176話 エルフの大使

エルフの村を訪れたのだが、スライムに襲われていて、村はもぬけの殻。

透明な魔物を退治して、エルフたちを探すと、木の上に作られたツリーハウスに避難をしていた。

丸太で作られた頑丈なツリーハウスは、避難場所としても利用できるように作られていると、以前にエルフたちから聞いていたので、そのとおりだったわけだ。

エルフたちがスライムを怖がっているので、予定を変更して、彼らと協力して残敵の掃討をすることになった。

食事を提供したりしていると、彼らがお礼をしてくれるという。

この場合のお礼というと、ナニをナニすることだが、リリースとアネモネがいるのに、そんなことができるはずがない。

ちなみに獣人たちは、基本的に一夫多妻制なので、この手のことには寛容だ。

力を持っているオスが、多数のメスを従える——という家族構成になっているというし。

以上のことから、人間の女に関してはなににも言わないミヤレーとニヤメナであるが、相手が獣人の女だとそうはいかない。

種族が同じだと、見る目も厳しくなるのだろう。

夜になると、俺達はそのままコンテナハウスで寝たのだが、外のテントで寝ていたアキラは、夜中に抜け出してエルフたちの所へ向かったようだ。

——エルフの村で次の朝。

朝食の準備をしていると、何食わぬ顔でアキラがやってきた。

「オッス！」

「オッスオッス！」

朝は皆のリクエストで、グラノーラにした。

サクラにサンバクがきて、料理を作ってくれるおかげで、朝からいわゆる普通の食事が出てくるようになった。

彼には大変感謝しているのだが、逆にジャンクな朝食を食べたいと思っても、食べられなくなってしまったのだ。

それは俺だけかと思っていたのだが、皆もそうだったらしい。

それならばサンバクに相談をして、週に1度ぐらいはジャンクな食事の日を作ってもいいかもしれない。

そういう日があれば、サンバクも休めるだろう。

黙ってグラノーラを食べるアキラだが、なにも言わないし——俺もなにも言わない。

彼がエルフの所へ行ったのは確かだし、耳のいい獣人たちも気がついているだろうが、彼女たちもなにも言わない。

リリスとアネモネは寝ていたが、気がついていただろうか？

それは解らないし——もし知らなかったとすれば、俺が口に出すとやぶ蛇になってしまう。

まして男と女、どちらを相手にしたかなんて聞けるはずがない。

沈黙は金。

だまってグラノーラを食べていると、エルフたちが集まってきた。グラノーラのおねだりだ。

以前、ここに泊まったときに、グラノーラを食わせたので、それを覚えていたのだろう。

彼らは牛乳が駄目らしいので、以前と同じように調整豆乳を使っ

た。

「美味しい！」「美味いぜ！」

エルフの男も女もグラノーラを頬ばっているのだが、アキラを見ているエルフの男たちの視線が明らかに違う。

それを見て、俺は察した。

まあ察しただけで、なにも言わないが。

「ケンイチ〜！」

おかつぱの女のエルフが俺に抱きついてきた。なんだかんだで、このエルフが一番接触が多い。

彼女の名前は、セテラ。

「なんだい？ おかわりか？」

「それもあるんだけどお。昨日の夕方、皆で話し合いをしてね。あなたの方の村に1人エルフの代表を送る話が出たんだあ」

「代表——大使だな。でも、村にはなにもないんだぞ？ 俺の屋敷すらない状態なんだが」

「別に住むところはあるんでしょ？」

「家の代わりに、あの鉄の箱を作って貸している」

俺はコンテナハウスを指差した。

「鉄の家なんて、私たちが作る家より立派だし」

「けど、大使の話なんて機密じゃないのか？」

「機密でもなんでもないし、そんなたいしたものじゃないんだけどねえ」

彼女の皿にグラノーラを盛ってやる。

豆乳をかけると、彼女はそれを食べ始めた。

「ケンイチ、エルフはなんて言っておるのじゃ？」

「サクラにエルフの大使を置きたいと言ってる」

「旦那、正式にエルフと辺境伯領が付き合うことになるのかい？」

「エルフがにゃ〜」

獣人たちを含め、普通の人間が抱くエルフの印象は排他的で付き合いが悪い。

そんなエルフが、人間とともに付き合うかどうか、信用されていないのだ。

「まあ、そういうことになるかな。こちらとしても断る理由はないし」

「本格的に交易を考えるのなら、それもあるだろうな」

黙っていたアキラが口を開いた。

「アキラの言うとおりだけど——それにしても、君たちの族長はそういうのには反対じゃなかったのか？」

「だからねえ、族長は反対している。これだけ助けてもらって、讓歩しないのはエルフの沽券に関わるんじゃないのか——と言っただけどねえ」

「もしそうなれば——ここで生産する、カカオやバナナの輸入ができるようになるな」

「そうねえ。それにスライムの倒し方も教えてもらったのにさあ」

「ああ、あの魔法で作った砂をあげるから、ここに備蓄しておけばいい」

「ありがとう〜本当にねえ、ウチの族長の頭の堅さには、困っちゃうよお」

「それだけ、真面目にエルフの文化を守ろうとしているんだろ？」

「そうなんだけどねえ」

セテラが抱きついてきて俺に頬ずりをしてくるのだが、それを見ていたリリスとアネモネが不機嫌になってきた。

「ちょっと離れてくれないか？ 正室と、うちの魔導師の機嫌が悪くなってきた」

「ええーいいじゃん」

「それからもう一つ——大使の件は別としても、湖にいた巨大な魔物も退治済みなんで、あそこを横断しても平気だぞ？」

彼女に、画家が描いたクラーケンの絵を見せてやる。

これはコピーだが、オリジナルの絵を写真で撮って、カラープリンターで打ち出したものだ。

「こんな大きい魔物がいたんだ！」

「ああ、手持ちの魔導師を全部投入してな、倒すのに苦労したぜ」
つぶやいたアキラの言葉にセテラが反応した。

「あんた、竜殺しなんだってえ。男たちから聞いたよ」

「はは、まあな」

「たまに遠出したやつが、行方不明になることがあったんだよねえ。そいつに食われてたかもしれないってわけかあ」

「そうかもな。湖の畔にある近隣の村でも、犠牲者がいたらしい」

「それじゃ、あなた方が同胞の仇を取ってくれたってわけね」

「今回、俺は協力しただけ、止めを刺したのはケンイチだ」

「解った……」

俺たちの話を聞いたセテラが、族長のところに行った。

しばらくして、俺たちの朝食が終わる頃、エルフの族長がやってきた。

「話は聞かせてもらった、行方不明になっていた我が同胞の仇を討ってくれたと」

「その行方不明者が、湖の巨大な魔物にやられたと確定じゃないんだけどな」

「いや、エルフが仲間になんの連絡もなしに、失踪することはない。なんらかの不測の事態に巻き込まれたのだろう」

「まあ俺たちは、領民の生活を護るために魔物を退治した。領主として当然の義務を果たしただけで、気にすることはない」

「しかし、これだけの恩を受けて、なにも返さないとするとエルフに対する衆口は地に落ちるだろう」

今まで頑なだったがエルフの族長も折れて、礼をしたいようなのだが、向こうから対価を切り出さない。

まったくの異種族、異文化なので、なにを礼に差し出せばいいのか解らないのかもしれない。

もしくは――向こうから礼の対価を差し出すのは、無礼に当たるとか……。

「うーん、エルフの作法がわからないのだが、こちらから対価を要求してもいいのだろうか？」

「もちろんだ」

こころなしか、族長がホツとした表情をしたように見えた。

「それでは、交易の件を考えてくれ。ここで生産するチエチエや、バナナなどだな。もちろん魔道具の類いでもいいのだが……」

「それでよろしいのか？」

「ああ、さっきも言ったとおりに、領主として当然のことをしたまでだからな」

「我々は商売のために栽培しているわけではないので、数多くは出せないが」

「もちろん、栽培して余ったぶんでもいいよ。税や年貢ではないのだから」

「それなら可能だ」

「現金収入があれば、領から塩や小麦粉も購入しやすくなるだろう。うちの領の御用達である、マロウ商会に頼めばいい」

そこに、セテラがやってきた。

「決まったあ？」

「ああ、決まったぞ。交易を始めることになった」

「やったあ！ それじゃ、大使は私ね！」

「おいおい！ セテラ、勝手に決めるなよ！」 「そうよ！」
話を聞きつけた、他のエルフたちから不満の声が上がる。

「私が行かなきゃ、誰が行くのよお！」

「俺が行くのに決まってるだろ？」 「いいえ、私よ！」

喧々囂々だったエルフたちだが、そのうち円陣を組んでなにかをし始めた。

円の中が光で溢れている。

「おいおい、なにをやっているんだ？」

「じゃんけんだよ」

アキラの言葉に耳を疑う。

「じゃんけん？」

「エルフってのは目がいいのと頭の回転が速いから、絶対に勝てるロボットの究極後出しじゃんけんみたいなことができるんだよ」

「ああ、相手の手を見てから、瞬時に手を切り替えるみたいな」

「そう」

「けど、皆がその能力を使えるなら、イーブンのはずだろ？」

「その能力にも個人差があるわけで、1000年以上のすったもんだのあげく、ああやって精霊を使う方法にたどり着いたらしい」

アキラの話が本当だとすると、エルフにじゃんけん勝負を挑むのは、愚かな行為だということが解る。

「でも、円陣の中に族長まで入っているのは、なぜなんだ？」

他のエルフたちと一緒に族長もじゃんけんらしきものに参加している。

「さあ……？　なんだかんだ言っても、族長もサクラに行ってみたかったんじゃない？」

「しかめっ面で、エルフのために〜とか言ってたけど、無理をしたのかな？」

「そうかもな」

アキラと話をしていると、結果が出たようだ。

「やったあ！」

1人のエルフの女が手を上げた。

「セテラ、インチキしたろ？！」

「ええ？　精霊の選んだ結果にケチをつけるの？　精霊が言うこと聞いてくれなくなっちゃうよお？」

「うう……」

結局は、最初の提案どおりに、セテラというおかつぱ頭のエルフに決まったらしい。

背が高くスレンダーで胸は大きくない———というか、エルフは皆そうだが。

女性にもサラシを巻いたら、男とまったく区別がつかないと思う。

セテラが俺に抱きついていると、族長のメーサラがやってきた。

「残念無念———辺境伯殿が求めるなら、この身を捧げるのもやぶさかではなかったのですが」

「はあ？　なんでそういう話になっているんだ？」

その訳を、セテラが説明してくれた。

「だってえ——只人の貴族は、エルフの男を求めると、本に書いてあったんだけどお」

そりゃ、薄い本のネタじゃねえか。

「いやいや、ないない！ いや、もしかしてあるのかもしれないが、俺はない」

一応、リリースに聞いてみる。

「あるぞえ。貴族が男のエルフを雇っている場合は、間違いなくそれじゃ」

「ええ？ そうなの？」

「うむ！」

どうやら、そういうものらしい。

ソバナで、貴族の屋敷にエルフが出入りしているなんて話を聞いたが、そういう感じなのか？

それじゃ、サクラに男のエルフが来ていたら、100%それだと思われてたってわけか。

「やれやれ、旦那のところに、また女が増えるのか」「そうだにゃ。よりによってエルフとはにゃ」

「このエルフは大使だぞ？ 別に俺の所に迎え入れるわけじゃないからな」

「どうかねえ」「そうだにゃ」

獣人たちは信用してないようだが、増やすなって言われているし——だいたい寿命が違う。

俺たちはあつという間に歳を食って死んでしまうだろう。

エルフにとっては、つかの間の遊びみたいなもんだ。

「ははは、エルフと付き合うには、ちょっと慣れが必要だがな」

「あんまり慣れたくはないな。それに、仕事以外で付き合うつもり

はないぞ？」

「というわけで、よろしくう！」

「なにがというわけなんだ」

抱きついて離れないセテラと俺の間に、アネモネが割って入った。

「むー！ くつつきすぎい！」

「……むふー可愛い！」

「ぎゃああ！」

セテラが俺から離れると、アネモネを抱き上げて、なで回し頼ずりを始めた。

彼女から見たら、アネモネは赤ちゃんぐらに見えるのかもしれない。

予想外の攻撃を受けたアネモネが、パニックになって俺の後ろに隠れた。

「エルフは、君のことを可愛いつて言ってるんだよ」

「違う！ 絶対に、なにか変！ 見て！」

アネモネが腕を捲ると、鳥肌が立っている。

「じゃあ、こっちの子でもいいよ」

「ぎゃあ！ なんじゃ！ いったい妾に、なにをするつもりじゃ！」
セテラがリリスを追い回すのを見て、察した。

「セテラ。うちの女性陣には手を出さないでくれよ？」

「ええ？ だめえ？」

エルフの動きがピタリと止まった。

「駄目だ。相手が男なら了承があればいいが」

「私、女の子が好きなんだけどお」

なんとまあ、エルフってのは困りものだな。

異種族で文化も違うから仕方ないのかもしれないが。

「それじゃ、俺に抱きつくこともないだろ？」

「ケンイチはさ、抱きつくとなんか気持ちいい……」

祝福を受けて、魔力が使えるようになったので、そのせいか？

「じゃあ、そっちのアキラでもいいだろ？」

「おい、ケンイチ。俺にふるな！」

セテラがサクラに来ることに決まったのだが、スライム対策のために、もう1日ここに滞在することになった。

それと、スライム退治のためとはいえ、辺りに塩を撒いてしまったので塩害が心配だ。

アイテムBOXからユ○ボを取り出して、表土を排土板で削り取ることにした。

「「「おおおっ」」」

唸りを上げる緑色の鉄の魔獣に、エルフたちが群がってくる――特に男ども。

「「「すげえ」」」

興味津々で作業半径に入ってくるので、危なくてしょうがない。いつも黄色いコ○ツさんの陰に隠れていたが、こいつも使っちゃらないとな。

削った表土は、エルフたちに手伝ってもらいプラケースに入れ――のちに、アイテムBOXに収納。

土だけゴミ箱へシュートすれば、作業完了。

丸一日、池の周りでスライムを監視していたのだが、透明な魔物は現れず、今回の襲撃は終息したということになった。

エルフの皆を集めて終息宣言を行なった。

並んでいるエルフたちを前にすると、学校の先生みたいだな。

「ケンイチ、まるで修学旅行か遠足の集まりみたいだな」

「俺もそう思ってたところだ——家に着くまでが遠足です！　みたいな」

「「ははは」」

それはさておき、エルフたちに挨拶を済ませる。

「それでは、俺たちは明日の朝一で、サクラに帰りますので」

「一緒に私もねえ」

セテラが俺に抱きついてくるので、アネモネとリリスがぐぬぬ状態になっているのだが、エルフが怖いために、近づけないでいる。

怒ろうと近づくと、襲われる——これは強敵だ。

暗くなってきたので、普通に夕飯を食う。

アネモネとリリス、獣人たちは、インスタントカレーを。

俺たちは、カップ麺とおにぎり、そして唐揚げ。

エルフたちは、自分たちの食事を摂っている。

散々世話になって、食事までたかるのはマズいと思うぐらいの、文化はあるようだ。

ただし、セテラをのぞく。

彼女はこっちで、俺たちと一緒に飯を食っている。

「なんで、エルフの仲間たちと一緒に食わないんだ？」

「えー？　だってもう、私はこっちの組だし」

「ケンイチ、唐揚げを妾にもたもれ」

カレーを食べていたリリスだが、唐揚げも気になるようだ。

「唐揚げカレーも美味しいよなあ」
カレー組にも唐揚げを分けてやる。

「あの茶色の料理はなに?! なんかありえない色をしているけど?!」

「香辛料料理だよ。獣の肉が入っているの、エルフにはどうかな?」

「こっちは?」
セテラが唐揚げを摘んでいる。

「鳥肉を小麦粉でくるんで、油で揚げたものだ。鳥肉なら食えるんだろ?」

俺の話を聞いたセテラが、唐揚げを口に放り込んだ。

「うん、美味しい!」

「グビグビ――」

アキラは、黙って缶ビールを飲んでいたのだが――。

「ねえ、アキラ。ウチの男どもはどうだった?」

「ブボッ!」

彼が飲みかけのビールを嘔き出した。

俺たちが暗黙の了解で黙っていたのに、あっさりと踏み込みやがった。

エルフ恐るべし。

「ゴホッ! ゴホッ! 酒を飲みに行ってたんだよ」

アキラが鼻からビールを流しながら、言い訳を始めた。

「うそうそ! 男どもから聞いたもん。帝国の竜殺しだってね」

「アキラ、俺も理解はあるから大丈夫だぞ。でも残念ながら、俺は

相手にはなれんが」

「違うんだって！」

俺たちの話を聞いていたりリスとアネモネが混ざってきた。彼女たちは、セテラの話していることが解らないようだが、アキラのうろたえぶりを見て、直感したらしい。

「なんの話じゃ！ なにか楽しそうな話の予感がするぞえ？」

「なになに？ 私も聞きたい！」

「アネモネにはちよつと早い……」

「早くないしゅ！」

「あゝあれだろ？」 「まあ、只人の男ってのは色んなのがいるにゃ」 獣人たちも察しているようだが、あまり関心がないらしい。

「ゴニヨゴニヨ——ノーコメント」

アキラは、再びビールを飲み始めた。

今までそんな節を見せていなかったのも、多分エルフ限定の趣味なのだろう——と思われる。

飯を食い終わったので、コンテナハウスに入る。

辺りはすでに暗くなりつつあるが、部屋の中にはLEDランタンの光が溢れ、訪れた食後の安らぎの時間。

今日のアキラは、ひと目をはばからずエルフたちの所へ向かったようだ。

今の時間なので、本当に酒を飲むつもりだけなのかもしれないが……。

まあ、それはいいのだが、コンテナハウスの中にセテラがいる。

「お前も一緒に寝るのかよ」

「酷い！ 私だけ、外で寝かせるのお？」

「別にもう1個、この鉄の部屋を出すけど？」

「そんなの要らないしいゝ一緒に寝ればいいじゃん」

セテラがアネモネににじり寄ろうとしている。

可愛いネコを見つけた、ネコ好きのような動きだ。

「いやあゝ！」

アネモネがエルフの手から逃げて、俺の後ろに隠れた。

「じゃあ、ケンイチと一緒に寝るう」

「なんで一緒に寝る必要があるんだよ。君は、大使としてサクラに
来るんだよね？」

「ええ、もちろん。大使って、そういうことするでしょ？」

「するのか？　しないだろ？」

「ええ？　しないの？　それじゃ、その子たちは？」

「彼女たちとするとときも、ちゃんと別の部屋で1人ずつする。アネ
モネは小さいので、まだしないが」

「只人って子ども好きなのに、珍しいねえ」

「意図的な誤解は止めてくれよ……それは、間違った認識だぞ？」
セテラがここに泊まるのは、すでに譲れない問題らしい。

「しょうがない、ベッドをもう一つだすか」
シングルベッドが一つあればいいだろう。

「ちょっと、こっちのベッドに載ってくれ」
「なにをするのお？」

「ベッドをもう一つだすから」
アイテムBOXからシングルベッドを取り出して、俺たちが載っ
ているベッドの横に並べた。

「アイテムBOXって便利ねえ」

「まあな」

「じゃあ、こっちでケンイチと一緒に寝るのねえ」

彼女の長い手に掴まれて、ベッドへ引きずられる。

殊の外、力が強い。普通の人間でなく、エルフという別の生物なのだと、改めて実感する。

「ちょっと待ちねえ、アネモネとリリスはいいのか？」

「よくはない。だが、そなたには悪いのだが――妾に矛先が向くのは、ちょっと……」

「私も……」

俺が拒否るとなると、アネモネかりリスが蟻地獄に引きずり込まれるわけだからな。

「俺は生贄か」

獣人たちは、黙って我関せずを貫いている。

触らぬ神に祟りなしって感じだろうか。

「んふ」

「まあ、それで丸く収まるなら仕方ないが――やらないぞ？」

「ええ？　しないの？」

「しない」

「ええっ？」

同じやりとりを繰り返したあと、彼女がチャイナドレスのような服を脱ぎ始めた。

あまりにスポンと、堂々と脱いだので、止める暇がなかった。アキラから、エルフは性に関してかなりオープンだと聞いていたのだが、オープン過ぎるだろ。

「寝間着を用意するか？」

「要らない」

エルフってのは、寝るときは素っ裸らしい。

白い陶器のような肌に、LEDの光にきらめく金髪。

見とれていると、毛布の蟻地獄の中に引きずり込まれた。

「ぐぬぬ……」

リリスはぐぬぬしているのだが、止めると今度はリリスが引きずり込まれることになるので、言えないらしい。

まあ、やらないのなら——ということで、妥協をしているのだらう。

それはいいのだが、このエルフをサクラに連れて行って問題にならないだろうか？

あまり問題になるようなら、丁重にお帰り願うしかなくなるのだが……。

177話 ダリヤからの客

エルフの村を訪れたら、スライムに襲われて戦闘になった。

避難していたエルフたちから依頼され、現地に2泊してスライムを完全に殲滅。

お礼に、エルフと交易をすることになった。

交易額は微々たるものだろうが、文化的な交流をはかるのが目的だ。

彼らは全員が優れた魔導師でもあり、魔法での交流も可能かもしれない。

エルフの魔法が、人間でも使えるのかは少々不明だが。

エルフが使う精霊というものは、人間には扱えないようだし。

――朝、草の香りに包まれて目が覚めた。

俺の隣に寝ているのは、金髪のエルフ。毛布に包まれたきらめく白い肌と長い耳。

まるで人間ではないのだが、そう人間ではない。彼女はエルフだ。

ベッドの上であぐらをかいていると、寝ぼけ眼のリリスが這ってきて、俺の膝に頭を乗せた。

獣人たちのベッドを見ると、すでにいない。

朝の運動がてら散歩に行っているのに違いない。

スライム退治では、彼女たちの出番が少なかったので、フラストレーションが溜まっているのだろう。

「ううん……」

リリスの柔らかい金髪をなでていると、後ろから白い腕が伸びて

きて、羽交い締めにされた。

「結局、しないんだからあ」

「この子たちもいるんだぞ？　するはずないだろ？」

「少しぐらいいいじゃない。只人とするのは久しぶりだし」

女性に歳を聞いちゃいかんと思うのだが、いったい何歳なんだろうか？

非常に気になるが、聞けない。

エルフとすったもんだしていると、リリスの目が覚めたようだ。

「エルフよ、いい加減にするがよい」

「怒ったあ？　可愛い！」

セテラは俺から手を離すと、リリスに抱きついた。

「ぎゃああ！　離せ！　離すがよい！」

エルフに抱きつかれたリリスが、バタバタと暴れている。

男の俺でも、振りほどけないぐらいの力なので、女の子がここから抜け出すのは不可能だろう。

「もう可愛い！　エルフって小さい子がないからさあ」

「ぎゃああ！」

「ああ、なるほどなあ」

彼女の話だと数百年に1人ゝ2人、生まれるかな？　――といった感じらしい。

「ケンイチ！　見ていないで、助けるがよい！」

「もう、はいはい。お姫様は俺のものだから、返してねえ」

「んもう、ケチい！」

解放されたリリスが、俺の陰に隠れた。

「ううん……」

騒ぎが、うるさかったのか、アネモネも起きてきた。

「ケンイチ……」

俺に抱きついてきたアネモネを、セテラが狙っている。

「女の子たちが、嫌がっているんだが止めてくれ」

「んもう！ そんなに嫌うことないじゃない」

「サクラやサントナカに行けば、子どもがいるけど、本人や家族が嫌がっていたら止めてくれよな」

「解ってるよお。そこまで礼儀知らずじゃないし。それでも、一応只人の街で暮らしたこともあるんだからね」

「そうなのか？」

「ええ」

それでも、数百年前の話らしいが。

この世界じゃ数百年たっても、あまり変化がないらしい。

魔法なんて便利なものがあるせいで、テクノロジーが進歩しないせいだが、巨大ロボットのようなゴーレムもあるし、別の意味では元世界より進歩しているとも言える。

それはよしとして、エルフが素っ裸なのが気になる。

2人きりならいいが、家族の目もあるからな。

「そろそろ服を着てくれよ」

「んゝ、私が着る前に、ちょっと触ってみるう？」

「いや、マズいだろ？」

「そんな遠慮することないのにい」

セテラが俺の手を掴むと、自分の胸に当てた。

柔らかいものが手に当たると、そりゃもんでしまうのが、男の性。

「ああん」

なにを考えたのか、セテラがそのまま大股を開き、俺の手を自分の股間に持っていこうとしている。

当然、彼女のゴニョゴニョは、丸見えである。

「止めろ！　なに考えてんだ！」

そこに散歩から戻った獣人たちが入ってきた。

「旦那、鳥獲ってきたぜ！　これで唐揚げ作ってくれ——ぎゃああ！　朝っぱらからなにやってんだ！？」　「ウチも混ぜるにゃ！」

「そうじゃねえよ！　クロ助！」

エルフに服を着せたが——少々、性道德が俺たちとは異なっているようだ。

それとも俺たちをからかっているのか。

見た目は若いが——中身は数百歳のBBAだからなあ……。

外で朝飯を食う。

ニヤメナが唐揚げと言っていたが、朝から唐揚げを作っている時間がない。

サクラに帰ってから、サンバクに作ってもらおう。

手っ取り早く、シャングリ・ラで買ったパンと、グラノーラで済ませてしまう。

テーブルにはアキラもいる。

昨日は、堂々とエルフの所へ行ったみたいだ、どうだったのだろうか？

武士の情け——聞くつもりもないが。

「ねえねえアキラ。昨日も男どもの所に行ったみたいだけど、そんなに気に入った男がいたのお？」

「酒飲んだだけだって言ってるだろ」

アネモネとリリスの耳がピクピク動いている気がする。

「ふうん、そういうことにしてあげるけどお。それにしても帝国の竜殺しは、エルフとも遊び慣れているのねえ」

「一緒に戦っていた仲間にエルフがいたらしい」

「ああ、それでねえ」

「ゲフンゲフン」

あまりつつこんじゃ、アキラが可哀想だ。

飯が終わったので、エルフの族長の家へ挨拶に行く。俺一人だ。少々行儀が悪いと思うが、玄関代わりになっているゴザらしきものを捲って、そこから挨拶した。

「族長、我々はサクラに戻る」

「ケンイチ殿には大変に世話になった。幾千万の感謝を」

「交易の件は、緩く考えてくれ。余ったものを売るぐらいの感覚でいい」

「承知した」

戻ろうとするとエルフの男たちに囲まれた。

「帰っちゃうのか？」

「ああ」

「スライムを退治してくれて、助かったよ」

「まあ、気にするな」

小柄なエルフが前に出てきた。金髪が短くて、ちょっと可愛い系だ。

「それからさ……」

「なんだ？」

「あ、アキラによろしく言っておいてくれよ」
なぜ、顔を赤くする。

「解ったが——いつでも遊びに来てもいいんだぞ？　湖にいた魔物を退治したから、横断しても大丈夫だ」

「その話も聞いたよ。あんたら、凄いな」

「ああ、アキラなんてドラゴンを倒してるな」

「ケンイチも、ワイバーンとレッサーを倒したって聞いたぞ？」

「それは、本当だ」

「「へええ！」」

「ケンイチの話も聞きたかったぜ！」

なるほど……彼らの話からすると、アキラから武勇伝を聞いたようだな。

それなら、俺たちが思っているようなことはなかったのだろうか？
ただの勘違いか？

エルフの男たちとも、別れの挨拶をすませた。

凄く排他的と聞いてたエルフたちだが、知り合ってしまったえば、ごくフレンドリー——悪く言えば少々図々しい、もしくは厚かましいが、嫌な感じはしない。

皆の所へ戻った。

「よし、帰るぞ」

「おー！」

アネモネが手をあげた。

「オッケー！」

船の操舵は、来たときと同じにアキラに任せる。

「結構、長居をしちまったなあ」「そうだにゃー」

「相手がスライムじゃ、全然活躍できねえしよお」「まあ、そういうこともあるにゃ」

「ふう——皆が心配しているかもしれない」

「大丈夫である？」

リリスは気にしてない様子だが、アマランサスやプリムラがなん
て言うか……。

「へえへえへえ」

セテラが、船をぐるぐると見回して、ケリを入れたりしている。
エルフの男たちも、同じことをしていたな。

「なにかおもしろいのか？」

「コレって木じゃないし、鉄でもないし……」

「魔法で作った人工の樹脂だな」

「へえへ、ケンイチって凄いだあ——その後ろについているのは
？」

「これは、前に進むための力を生み出す、魔道具だな」

「へえへ！」

らちが明かないので、エルフを船に乗せる。

アキラが船外機を始動させて船を後進させると、獣人たちに舳先
を押してもらう。

「よし！」

船が水に浮いたら、獣人たちに担いでもらって、アネモネとリリ
スを船に乗せた。

俺が乗って、最後に獣人たちが飛び乗る。

「アキラ頼むぜ」

「任せろ！」

アキラが池でぐると旋回すると、遠くにエルフたちがいるので、
手を振る。

「向こうも手を振ってくれてるよ」

アネモネも手を振る。

「アキラは挨拶しなくてよかったのか？」

「まあ、ここならいつでも会えるし」

「まあな」

水の上の船が走りだした。

来るときは、川底の様子を見ながらゆっくりだったが、進路の
したいの把握はできている。

スピードアップして、サクラへ帰る。

「凄い！ 漕がないのに、船が進んでいる！」

セテラが、水の上を進む船にはしゃいでいる。かなり楽しいらしい。

「これが、魔道具の力だ」

「へえ、ケンイチ只人なのに凄いじゃん！」

「何百年生きているか解らないが、こんなの見たことがないだろ？」

「ケンイチ、エルフに歳のことは言わないほうがいいぞ？ 皆BB

Aのくせに、歳を聞かれるのを嫌がるからな」

船外機を操っているアキラが、エルフの歳のことを笑いながら教
えてくれる。

「BB Aって言うな！」

「ははは！」

「速さに感心しているみたいだが、この船の速度はこんなもんじゃ
ないぞ？」

10分ほど船が進んだあと、広い湖に出ると、船外機が唸りを上
げた。

なめらかな湖面を時速40kmほどで進む。

「すごい！ なにこれ！ 信じられない！」
舳先に座っているエルフの金髪が、風になびいてキラキラときらめく。

「うひょー！ 相変わらず速えええな！」 「凄いにゃ！ 凄いのに、自分で走らなくていいのは、凄いにゃ！」

獣人たちが、船の速さにはしゃいでいるのだが、船から落ちないか心配だ。

「危ないぞ？ 落ちるぞ！」

アネモネとリリースも船の速さを楽しんでいるようだ。

「獣人たちでなくても——この速さは怖くもあり、楽しくもあるの」「うん、ケンイチの鉄の召喚獣も凄いけど。これも凄い」

湖面のスピードを1時間ほど楽しんだあと、サクラの栈橋に到着した。

栈橋の前にはメイドたちが並んでいる。

俺が出かけると、交代で湖面を双眼鏡で覗いているのだ。

「「おかえりなさいませ、御主人様」」

「はい、ただいま。悪いな、予定外に外泊が延びてしまっ」

「聖騎士様！」

アマランサスが走ってくると、俺に飛びついた。

「悪い、アマランサス。心配してたろ？ エルフの村で色々あったな」

「ち、ちょっと心配してえええ！」

アマランサスが、会話の途中でいきなり飛び上がった。

セテラが、アマランサスの脇腹を両手でナデナデしている。

いくら、油断してたとはいえ、アマランサスの背後を取るとは…

…うゝむ、只者ではない。

「ねえねえ、この子もケンイチのものなの？」

「この子って――まあ、エルフから見れば、そうかもな」

「奴隷？」

セテラが、アマランサスの奴隷紋をじっと見つめている。

「本当は違うんだけど、自ら奴隷紋を刻んでるんだよ」

「エルフよ！ エルフ！」 「初めて見た！」 「御主人様が、エルフを連れてきた！」 「さすが御主人様」

メイドたちのボソボソ声が聞こえる。なにが、さすがなのか。

「おほん！」

メイド長のマイレンが咳払いをすると、メイドたちは静かになり、一列に整列している。

「マイレン、このエルフは、サクラに赴任することになった大使だ。失礼のないように」

「承知いたしました」

メイドたちに遅れて、紋章官のユリウスがやってきた。

「ケンイチ様」

「予定外にサクラを空けてしまって悪いな。なにか問題はあったか？」

「いいえ。私のほうはなにも。しかし、メイドたちの所に人が尋ねてきているようでした」

「マイレン」

「ここ数日――ケンイチ様に会わせると、平民の娘が尋ねて参りまして……」

「娘？」

誰だ？ 考えていると、俺を呼ぶ声が聞こえてきた。

「ケンイチ〜！」

声のする方向を向くと、エンジ色のワンピースを着た黒髪の女の子が走ってくる。

メイドたちが、俺と女の子の間に入って彼女を遮った。

「あん！ ちょっとどいてよ！ 私はケンイチに用があるんだから！」

「約束のない方を御主人様に会わせるわけにはまいりません」

見覚えのある、その女の子の姿は——ダリアの宿屋にいたアザレアだ。

「メイドたち通してやれ。知り合いだ」

「し、しかし——」

「いいから」

メイドたちの脇を通って、アザレアが抜ける。

「ふんだ！ ケンイチ！ 本当にケンイチなの！？」

「まあな」

「すごい！ ケンイチって人が、隣に新しい領を作ったって聞いてえ——話をどう聞いても私の所に泊まったケンイチにしか思えなかったもん！」

「ははは、まあ色々あってな。それで、なにか用なのか？」

「あん、それなんだけど——ケンイチ、私を愛人にしてくれるって話を覚えてるう？」

「いや、全然記憶にないな」

「あ〜ん！ 酷い！ 私のことは、遊びだったのね！」

また始まった。

皆の視線が俺に突き刺さるが——どう見てもアザレアのは、嘘泣

きである。

「それで？　あまり冗談に付き合っている暇はないんだが？」

「なんだ……もうちょっと困った顔をするかと思ったのに……」

「用件は？」

「湖の畔で、女の労働者を募集しててえ、お金も稼げるって聞いたからあ、わざわざダリアからやってきたんだけどお」

「君のお母さんは？」

「大丈夫！　お金を稼いだら、ダリアに帰るし！　だからあ、ケンイチから口利きをしてくれないかなあって」

相変わらずのしっかり者である。この世界では、このぐらい図々しくないと生きていけない。

それに女の仕事が少ないのだ。特に稼げる仕事ってのは、本当に少ない。

「解った、取引のあるマロウ商会に口利きをしてやるよ」

「ここにも、マロウ商会があるの？」

「ああ、この領の御用商会だし」

「やったあ！　さすがケンイチ、大好きよ！」

アザレアに抱きつかれると、また皆から冷たい視線が突き刺さる。なんだかんだで、この世界にやって来て、初めて肌を合わせた女性であるし、言葉を教えてもらったりしたからな。

このぐらいしても、バチは当たらない。

「ふうん、ケンイチはこういうのも好みなお？」

「ひゃあ！！」

アザレアが飛び上がった。

後ろからセテラが、彼女の身体をなで回していたのだ。

「こらこら、勝手に女の子に触るんじゃない」

「じゃあ、こっちのメイドは？」

「メイドも駄目」

「もう！ それじゃ、ケンイチにするう」

エルフが俺の身体をなで回し、頬ずりをしてくる。

まあ、女の子に手を出されるよりはマシか。

「いい加減に、聖騎士様から離れ——ひゃああ！」

怒って近づいてきたアマランサスの手を取ると、セテラが蛇のよう
に絡みつき、首を舐め回している。

アマランサスをいとも簡単に手玉に取るとは——本人に悪気がない
から、逃げづらいのかもしれないが。

「はああ——この子いいわあ。ケンイチと同じ感じがするう」

「密着すると、癒やされるような感じが？」

「そうそう」

やっぱり、アマランサスの力と祝福にはなにか因果関係があるの
かもしれない。

「ケンイチ！ アレってエルフ？」

アザレアがセテラを指差している。

「そうだよ」

「エルフとも知り合いなの？」

「まあな」

「すごい！」

とりあえず、アマランサスにひつついているエルフを剥がす。

「嫌がっているから、やめなさいって」

「それじゃ、やっぱりケンイチにするう」

俺はエルフに抱きつかれたまま、ユリウスに仕事を頼んだ。

「この子が、サンタンカの燻製工房で働きたいらしい。マロウ商会に紹介してやってくれ。働き者なのは間違いないから」

「承知いたしました——さあ、こちらへどうぞ」

「ええ？　なんか凄いイケメンキター！」

ユリウスを見たアザレアがはしゃいでいる。彼はメイドたちにも人気が高い。

「彼は紋章官で、貴族だぞ？　無理なお願いはするな」

「解ってるわよ！」

アザレアは喜びながら、ユリウスについていった。

そりゃ、オッサンよりイケメンのほうがいいよな。

「そなたは色々な女子おなごに手を出しておるのう……」

リリスが白い視線で俺を見つめる。

「俺が泊まった宿屋の娘だよ」

「それにしちゃ、親密そうだったじゃん」

アキラが俺をからかってくるのだが、色々世話になったのは本当だからな。

「初めての街で、言葉やら文化やら教えてもらったからな。それなりに恩義がある。アキラだって、初めて訪れた街の宿屋の娘とか覚えてるだろ」

「ああ、覚えている。彼女はちょっといい子過ぎてなあ。手を出せなかった」

アキラが腕を組んでウンウンうなずいている。

「そうそう——いい子すぎると、手を出しづらいよなあ」

「」「じゅっ」」

オッサンたちの会話を、女性陣がじゅっつと冷たい視線で見つめている。

「おほん！ さあ仕事だ」

まずは、俺に抱きついていているエルフの家を作らないと駄目だな。セテラをひつつけたまま、家の所に行く。

一応、ここが官庁街通りってことになるから、ここに置くのがベストってことになる。

森を見ていると、黒い四脚が走ってくる――ベルだ。

「にゃーん」

「無事に帰ってきたよ」

彼女の黒い毛皮をなでながら、エルフの家を置く場所を考える。

「ここに領の中枢が集まってるから、ここにセテラの家を置くのが、いいと思うんだが」

「まあ、どこでもいいよ」

「ちよっと離れた森の中でもいいぞ。ドワーフたちはそうしてる」

「ゲ！ ドワーフがいるの？」

「ああ――エルフと仲が悪いんだってな」

そこに丁度タイミングよくというか、タイミング悪く、ドワーフの親方ドーカンがやってきた。

「領主様――！ ゲ！ エルフ！」

「ギャア！ 本当にドワーフが！？」

エルフとドワーフがお互い牽制しあって固まる。

「おいおい、喧嘩は止めてくれよ」

「領主様も趣味が悪いぜ、よりによって、エルフのメカケとか……」

「いやいや、違う違う。エルフと交易するから、このエルフは大使だよ」

「かゝ！ あの慇懃無礼で、高慢ちきなエルフがよく承諾しやしたね」

「余計なお世話だ！ この髭面が！ ドワーフには関係ないだろうお！」

「なんだと?!」

エルフとドワーフが罵りあっているが――俺は通訳の指輪があるので聞こえているが、彼らは何語で話しているのだろうか？

「ヤメレ！ 2人とも食っちゃまうぞ！」

とりあえず、ドワーフは待たせて、エルフの家を決める。

――といっても、余っている家はないので、いつものコンテナハウスだが。

俺の家の近くに、黒いコンテナハウスを出す。

「村の住民でも余っている家はないんだ、この鉄の箱で我慢してくれ」

「こんな立派なものなら、私はいいけどお」

「一応、ベッドなどは用意するが、欲しいものがあれば言ってくれ。善処する」

「解ったあ」

「ああ、それから。俺たちは、自分のものと他人のものを区別しているから、人の家に入ったり、人のものを使ったりしないでくれよ」
「大丈夫だってえ。私は、只人の街で暮らしたこともあるって言うたでしょ？」

彼女の言うことが本当なら、大使としては適任ってことになるな。

「俺たちが使っている共通語ってのも話せるのか？」

「ええ、それなりにね」

それじゃ、さっきドワーフと話していたのは、共通語なのか？
とりあえず、彼女はコンテナハウスを気に入ったようだ。

「女の子に手を出さないでくれよ」

「男はいいの？」

「相手の了承があればいい」

「うーん、でも女の子のほうがいいなあ。特に小さい子」

「ダメダメ、問題起こしたら、エルフの村へ強制送還するからな」
「えー？」

まあ、人間の街で暮らしていたという彼女の言葉を信用しよう。

エルフはひとまずおいて、ドワーフたちの所へ行く。

「ドーカン、スマンな。待たせてしまって」

「あのエルフは、本当にここで暮らすんですかい？」

「ああ、一応大使だからな」

「なんてこったい……」

「それで？ 用件は？」

「酒の醸造のこと——」

早速、彼らは酒を作りたいらしい。

「それじゃ、アキラを呼ぼう。おーい、誰かいるか？」

すぐにメイドの1人がやってきた。

必ず1人は、俺のそばにっているらしい。

「はい、なにか御用でしょうか？ 御主人様」

「アキラを探して呼んできてくれ」

「かしこまりました」

数分でアキラがやってきた。

「オッス！ ドーカン！」

「これは、アキラ殿！」

「ドワーフたちが、酒造りを始めたらしい」

「お？ やるのか？ 面白そうだ。やろうぜやろうぜ！」

「アキラに任せていいか？」

「おう、任せろ！ ケンイチは飲まない人みたいだしな、ははは」

「まあな」

シャングリ・ラを検索して、アランビックという銅製の蒸留器を購入してみた。

20Lタイプで、8万円だ。

もう一つ、大陸製のステンレス蒸留器も購入した。

こちらは、70L蒸留できて、8万円。評価をみると――造りがよくないと評判はイマイチだが、要は使えればいい。

どちらも、酒が入る容器から細い管が上方に伸びていて、それを水で冷やす構造になっている。

この細い管に、アルコールが溜まるわけだ。

温度を計るための温度計も装備されている。

これがないと蒸留できない。

あまり高度な蒸留器を買ってもドワーフたちがコピーできないと意味がないのだが、基本的にやっていることは同じ。

理屈が解れば、似たようなものを作るだろう。

「ポチツとな」

ガラガラと蒸留器が落ちてきた。

「おおっ！ 蒸留器か！」

「こいつを参考にして、試作してみればいい」

「実物があるなら、はかどるぜえ」

ドーカンが、まじまじと蒸留器を眺めている。

「これは銅製だと解りますが、こっちの見事な作りの銀色のものは？」

「これは、この前に話したニッケルとクロムという金属が混じったものだ。サビに強く、耐久性に優れている」

「なるほど、水や酒を扱うなら、鉄で作っちゃすぐに錆びちまうってわけか……」

「そのとおり」

アキラが蒸留の基本について、ドーカンに説明を始めた。

「水を加熱すれば、沸騰するのは解るな？」

「ああ、もちろん」

「だが、酒に含まれている酒精アルコールってのは、水より低い温度で沸騰して湯気になる」

「うん？　つまり？」

「水が沸騰する温度まで上げずに、酒精が沸騰する温度に保てば――」

「酒精だけが湯気になる？」

「そうだ！　その酒精の湯気をこの細い管で集めて、酒を濃縮するわけだ」

「すげえ！　さすが、大魔導師だぜ」

「ふはは、まあなあ」

蒸留器を眺めていたドーカンだが、早速疑問があるようだ。

「つまり、温度管理が重要になる話だと思うんですが、それはどうやるんで？」

「それは、この細い管だな」

「これはガラス管ですかい？」

「中に、水銀などが入っていて、温度を計れるカラクリだ」

「なんですって!!」

どこからか、声が聞こえてきたが、ドワーフの声ではない。

「今、温度が計れると?！」

やって来たのは、カールドンだ。

「ああ、ガラス管の中に水銀が入っていて、温度が計れるんだ」

「なんと! ガラス管の中に水銀?! 水銀にこのような使い方があるとは——なんとという僥倖!」

彼は両手を開いて、天を仰いでいる。

「いや領主様——こっちも驚きましたぜ」

カールドンも蒸留器を舐め回すように隅々まで観察している。

ついでに、酒造りと蒸留の仕方の本を5冊ほど購入して、アキラに手渡した。

「おおっ! 本もあるのか! これだけあれば、なんとかなるだろう。虚仮の一念でやってやるぜえ!」

アキラが早速、本をペラペラと捲っている。

「頼むよ」

「ははは、なんか趣味がないとな。戦闘も面白いが、殺伐としてくるし」

「魔法も平和利用できるに越したことはない」

「そのとおりだな」

酒造りは、ドワーフとアキラに任せることにした。

俺は飲まない人だが、まったく飲まないわけでもない。

どんな酒ができるか楽しみだ。

178話 移築

アキラとドワーフたちは、早速サトウキビの絞りカスでラムの醸造の研究を行なっている。

ドワーフたちは、火酒というリキュールを造っているので、醸造の技術と知識はある。

ないのは、蒸留に関するものだけだ。

魔法があれば、蒸留器を一定温度に保つのは容易いようで、すぐに蒸留のコツを掴んだようだ。

蒸留ができたといっても、アルコールの度数が上がるだけで、イコール美味しい酒というわけではない。

美味しい酒を作るのには、長年の経験と勘が必要になるのだが、長寿の彼らにはそれがたっぷりとある。

すぐにできなくても、いずれは可能になるだろう。

「ははは！」「ガハハハ！」

アキラとドワーフのドーカンが、ステンレス製のカップで、できたの酒を飲んでいる。

場所は、ドワーフたちが住処に選んだ、洞窟のホールだ。

まず目に飛び込んでくるのは、建設中の高炉。

高炉の建設には耐火レンガなどが必要になると思うのだが、ドワーフたちは自分たちでそれを造っているようだ。

これも彼らが持っている秘伝の一つなのだろう。

そして、洞窟の隅に建設された丸太造りの醸造所。

ログハウス風の建物の中に、巨大な桶のような発酵槽が鎮座している。

俺がシャングリ・ラで購入した、銅製のアランビックと、ステンレス製の蒸留器が並び――彼らがコピーした銅製の蒸留器も一緒にある。

中には酒のにおいが立ち込めていて、飲まない人の俺は、ここにいるだけで酔っ払いそうだ。

「アキラ、味はどうなんだ？」

「はは、なんというか、強いアルコールだな」

「酔っ払うには最高？」

「まあ、そんな感じ」

ドーカンやドワーフたちが、カップで酒をあおっている。

「ガハハ！ まったく強くていい酒だ！」 「こういう錬金術で酒精が強くなるとは、たまげたな」 「まったくだ！」

彼らによると、この手の化学も錬金術になるらしい。

「ドーカン、新しい蒸留器は、全部銅製なのか？」

「たしかに銅製だが、内側には錫が張^{スズ}ってある」

「へえ……日本にある銅製の鍋なんかと同じだな」

彼らに技術を開発してもらい、領に卸してもらう。

もちろん、機材なども作ってもらうのが前提だ。

美味しい酒はともかく、ただ酔えればいいって酒なら、すぐにでもできそう。

この世界の巷で出回っている酒は、酷いものが多い。

とりあえず一般庶民は、安くて酔えればなんでもいいのだ。

領の経営を考えるならば、あまり安いものを作っても仕方ない。

ある程度、高く売れるものを作らねば……。

彼らに追加で渡すものがあったので、アイテムBOXから取り出す。

「ドワーフたちにお土産を持ってきた」

俺が取り出したのは、シャングリ・ラで購入した、小型旋盤とフライス盤。

工業用のバカでかい代物ではないが、個人で使う分には十分に使える。

「こ、これは旋盤だな？」 「しかし、こんな精密な旋盤は見たことがねえぞ？」

ドワーフたちは、旋盤とフライス盤を食い入るように見ている。

「ああ、旋盤はドワーフたちも知っているのか」

「もちろんだぜ。木工でも使うしな」

こんなに高度なものではなくて、もっと原始的なものらしいが。

旋盤は知っていたが、フライス盤は初めて見たらしい。

アイテムBOXから発電機を出してつなぎ、デモンストレーションを行う。

鉄がみるみる削れると、ドワーフたちから驚きの声上がる。

「本当は、旋盤を動かすために、このような別の魔道具がいるのだが、それなしで動くように改造すれば、ドワーフたちでもこいつが使える」

「ははあ、なるほど。要は、人力でも水車でも、なんでもいいから動くようにすれば、このすげえ旋盤が使えるってわけだ」

「そういうことになる」

「しかし、こんなすげえものをもらって、俺たちには対価が……」

「そうですね。あんなすげえ蒸留釜までもらっちゃってるのに……」

「ドワーフたちが、いい酒造りに成功すれば、その技術と知識を領に卸してもらうんだから。それが対価になる」

「本当に、それだけでいいんですかい？」

「ああ、もちろん。それが、この領のためになるんだ」

カールドンが俺の知識を利用したものを作ったりしているから、もっと高度な加工技術が必要になってきている。

そのためにも、工作技術の底上げは必要だ。

「レベルの高いドワーフたちのレベルを更にあげようって腹だな」
アキラの言葉に俺はうなずいた。

「この世界に、彼らほどの技術と知識をもった種族は、他にいないからな」

「そうだな。ゼロから職人を育てるのも大変だ」

ドワーフたちにアルミも渡す。

この世界でのアルミは、魔法の触媒に使えるので、かなり効率をあげることができるだろう。

「領主様、この金属は？」 「こんなの見たことがねえ」 「ああ」

「こいつは、魔法の触媒に使える。大変危険なので、限られた人物にしか渡してないが、おまえたちなら大丈夫だろう」

「触媒ですかい？」

ドーカンが魔法を使うと、まばゆい光が溢れる。

「なんじゃこりゃ！」 「魔法の触媒！？」 「こりゃたまげた！」

「悪用しないでくれよ」

「とんでもねえ、領主様が俺たちを信用してくださって、こんなすげえもんをくれたっていうのに、そいつを悪事に使ったとあっちゃ、ドワーフの名折れ」

「まあ、管理をよろしく頼むよ」

「任しといてくれ」

とりあえず、ドワーフたちの住処での仕事は終わった。
次だ。

俺はラ○クルに乗ると――仕事でアストランティアへ向かった。近くにいたニヤメナだけを車に乗せて、彼女に護衛をもらう。他に同行者はいない。

話をする、ついて来たがる子ばかりなのだが、毎回ぞろぞろと引き連れて歩いていられないしな。

俺のアストランティアでの仕事――サクラでの住宅不足を解消するために、裏ワザを使う。

その方法は簡単。10m×10mの普通の住宅なら、俺のアイテムBOXへ入れられるので、そいつを使って建物を移築するのだ。デカイ容量のアイテムBOXを持つ俺だからこそできる、チートだ。

建物の選定や、買収の交渉はマロウ商会にまかせてある。

なんでもかんでも俺がやっていては、仕事が進まない。

マロウ商会という優秀なサポートがいるのだから、これを使わない手はない。

多少ボロい住宅でも、大工にリフォームしてもらえばいい。

ゼロから新築するよりは格段に早い。

マロウ商会にラ○クルで向かうと、プリムラが移築する建物に案内してくれた。

プリムラの護衛であるニヤレサも一緒だ。

同様の買付は隣街のダリアでも行われており、これによって30軒ほどの住宅が移築できることになる。

このため、ダリアにも行ってこなければならなくなった。

仕事でダリアまで脚を延ばしたなら、その地を治めている、アスクレピオス伯爵にも挨拶せねばなるまい。

ふう――まるで政治家だなんて、すでに政治家なんだけどな。

街の中を車で進むと、前よりスカートの短い女性が目立つ。

この世界のデフォルトは足首が隠れるぐらいのロングスカートなのだが、脛やふくらはぎが露出している。

「あの短いスカートは、カナンが流行らせているものなのか」

「そうです。抵抗がある人もいらっしやるのですが、着実に増えてきてますね」

「やっぱり影響力はあるかい？」

「はい、足下が露出するということは、靴にも気を使うことになりますから、靴の種類も増えるでしょう。実際にそういう問い合わせもいただいております」

これがアストランティアで終わるのか、それとも他の都市にも波及するのかは、見てのお楽しみ——と言いたところだが、すでに他の都市にも輸出して好評らしい。

そうになると、王侯貴族のご婦人たちの生脚を見られる日もそう遠くはないってことか……。

俺がラ○クルでやってきたのは、古い民家。

4人で車を降りて、家の前に立つ。

「ここか……」

「はい」

「ボロボロだぜ？」

ニヤメナの言うとおり、ボロボロの漆喰の壁と穴の開いた屋根。扉は壊れており、中には何もない。

当然、住むのには修理が必要だ。

「ケンイチのやることに、間違いはないだろ？」

「ああ？ ニヤレサー——お前、随分と旦那の肩を持つようになった

な」

「べ、べつに……」

俺の護衛がニャメナなら、プリムラの護衛にはニャレサがついて
いる。

お互い辺境伯領の重鎮だからな。これじゃ少ないぐらいの護衛だ
が、あまり大人数だと逆に目立ってしまう。

それに、よくも悪くもアストランティアには、俺やアキラの噂が
広まってしまっている。

それを知った上で、辺境伯に喧嘩を売るなんてのは、相当な愚か
者だ。

「よし、それじゃいくか——収納！」

普通の住宅もアイテムBOXに収納可能か？ ——その実験は事
前に済ませてある。

家がアイテムBOXに収納されると、周りにいた住民から驚きの
声上がる。

突然、目の前にあった家がなくなるんだ、無関係の人間だって驚
いて集まってくるだろう。

俺たちが買ったのは、上モノの建物だけで、土地は買ってない。

——とはいえ、一応の土地の所有権はあるものの、元々はここを
治める子爵の土地。

俺の辺境伯領も、全ての土地は俺のもので、住民たちに土地を貸
していることになっている。

さらに、この国の土地は、全て国王が治める王家の土地ってこと
になっているから、民間の持ち物でも国から返せ！ ——と言われ
れば、返却しなくてはならない。

もつとも、そんなことは滅多にないのだが。

「よしプリムラ、次に行こう」

「はい」

「旦那！ 旦那のアイテムBOXに、家は何個入るんだい？」
ニヤメナの疑問ももつともだが――。

「さあな。俺にも解らん。いままで上限にぶち当たったことがないからな」

「はあ――まったく、とんでもねえ人だぜ……」

「これって、下手したら、街をまるごと移動したりできるんじゃない？」

「ニヤレサの言うとおりかもしれないが、あまり大きな家は入らないからな」

たとえば、日本にあった2階建て1戸建て住宅でも一辺が10m以下だったはずだから、普通の住宅なら十分に収納できる。

「さて、次に行こうぜ？」

「旦那、あと何軒あるのさ？」

「あと9つですよ」

プリムラが、ニヤレサの前に両手を出した――指が5本と4本。

「そんなにかい？」

「ははは、まあ途中でアイテムBOXに入らなくなるかもしれないけどな」

「旦那のアイテムBOXが一杯になるところを見られるかもしれないってわけか」

「そうだな、ニヤメナ」

俺の杞憂、獣人たちの期待を裏切り10軒の住宅は、全てアイテムBOXの中に入った。

「すげえ！ 旦那、すごすぎるぜ！」

「ははは、惚れ直したか？」

「そ、そんなことはないぜ！ ずっと俺は惚れてるし……」

ニヤメナが、頭を俺の身体にスリスリしてくる。

「俺はゲテモノばかり食うから、嫌われたと思ってたよ」

「う……あ、あれは正直止めてほしいんだけど……」

ニヤメナが耳を伏せる。

「ははは、だが断る！」

「にやうーん」

なぜかニヤレサも、俺に頭を擦り付けている。

「おい！ ニヤレサ！　なんで旦那に、におい付けしてるんだよ！」

「いいじゃないか！　少しぐらい！」

「よくねえ！」

「あゝ、これ以上増やすなって言われてるからなあ……」

「その割には、いつの間にかエルフとか増えてますけど……」

後ろからプリムラの声が聞こえるのだが、怖くて振り向けない。

「彼女は、エルフ村の大使で、愛人候補とかじゃないよ」

「本当ですか？」

「ああ、ほんとう」

「でも旦那、向こうはやる気満々だったぜ？」

「なんか、エルフってみんなあんな感じみたいなんだよなあ。それに、あのエルフは女の子のほうが好きみたいだし」

「ああ、それは間違いなさそうだったぜ、お嬢」

「あやしい……」

黒いプレッシャーを押し付けてくる、プリムラが怖い。

住宅の収納が済んだので、俺は次の場所へ向かう。

その場所とは、カナンのアトリエだ。

最近、サクラにまったく顔を出さないので、心配で見に来た。

以前は、子爵の屋敷に間借りしていたのだが、そこから独立をしてアトリエを構えたのだ。

この地を治めていたユーパトリウム子爵も事実上引退して、領の経営は辺境伯領が担っている。

子爵は、再婚した夫人と仲良く小さな屋敷で暮らし、小説を書いているらしい。

とても仲良く睦まじい夫婦と聞く。

すでに、ガリ版によって印刷された本も出版されており好評だ。

プリムラに案内されて到着したのは、赤い屋根が目立つ石造りの2階建て。普通の家よりちょっと大きめだな。

商人で裕福な家庭が借りてたものらしい。

もちろん仲介はマロウ商会で行なったものだ。

「中々立派な家だな」

サクラにこういう家が建つのはいつになるやら……。

ここで、プリムラとニャレサを車から降ろす。

「ここから、マロウ商会まではすぐですので、歩いて帰ります」

「悪いなプリムラ」

「仕事もありますので」

「ニャレサ、プリムラを頼むぞ」

「まかせな」

プリムラとニャレサの後ろ姿を見送る。

「ニャメナ、ちょっと時間がかかるかもしれないが、待っていてくれるか？」

「解ったぜ旦那！」

ニャメナをラ○クルに残して、ドアのノッカーを鳴らす。

すぐに中から返事が聞こえたが、カナンの声ではない。

「はーい、どなた？」

顔を出したのは、胸を強調したワンピースを着た、赤髪の女性。ちよつと長めの髪を後ろで1本に編んでいる。

スカートは短く、膝の下まで出ている流行りもの。

「カナンはいるかな？ ケンイチが来たと伝えてくれ」

「はあ？ あんた誰？ カナン様になんの用？」

「ケンイチだ、彼女に伝えてくれれば解る」

「はあー最近、多いのよねえ。こういう輩が……」

「身辺警護に問題があるなら、マロウ商会に言つて、護衛を雇ってもらえ」

「確かに、そういう話があるんだけど？ マロウ商会の関係者？」

押し問答をしていると、奥から聞き覚えがある声が聞こえてきた。ドアの向こうは、狭いが2階まで吹き抜けになっており、赤い絨毯が敷かれた奥に階段がある。

左右に扉があるので、最低でも1階に2部屋、2階にも2部屋で、合計で4つの部屋があるのだろう。

「アセロラ、誰か来たのか？」

「おーい、俺だ！ カナン！ ケンイチだ！」

「え！？ ケンイチ！」

バタバタと走ってくる音が聞こえてきて、ボサボサの金髪を後ろでまとめたカナンが出てきた。

「よ！ 全然顔を出さないから、様子を見に来たぞ？」

「きゃー！ こんな格好なのに！ 来るなら言ってくれ！」

カナンのきゃー！ は初めて聞いたような気がする……。

「別にいいだろ？ 働く女性は素晴らしいな」

「うう……」

俺とカナンの会話を聞いていた女性が、固まっている。

「あの――カナン様？　この方は……？」

「その方は、私のご主人様――ハマダ辺境伯様だ」

「えっ！？　これはご無礼をいたしました！」

女性が両手を前に揃えてお辞儀をした。

彼女は、カナンが雇っている女性なのだろう。カナンが礼儀には厳しくしていることがうかがえる。

「はは、まあどうみても貴族には見えないからな。気にすることは
ない」

「ありがとうございます」

アトリエに上がると、カナンが抱きついてきた。

「そんなにによれよれになっているなら、帰ってくればいいのに」

「もう忙しくてな」

「よしよし」

カナンの腰を抱き、金色の頭を撫でる。

「はわわわあああ」

なんだか、カナンが凄い声をあげて、身体をプルプルさせている。
彼女の上げる声に、他の部屋からぞろぞろと人が出てきた。
おそらく、このアトリエに雇われている従業員たちだろう。
女性が多いようだが、男性もいる。

「もう、疲れているんじゃないのか？」

よく見ると、目の下にクマができている。

「はわわっ！　アセロラ！」

「はいっ！ カナン様！」

「ちよっと野暮用ができたから、1時間だけ時間をくれ！」

「え？！ あ、あのく？」

「はい！ ケンイチ！ 二階へ！」

「ホイホイ！」

カナンをお姫様抱っこして、階段を上がると彼女の私室へ。

ベッドと鏡台、机などが並んでおり、洋服の材料が所狭しと並んでいる。

「すまん！ 散らかってて！ でも、もう我慢出来ない！」

彼女がそう言うと言の首に手を回し、口に吸い付いてくる。

そのままベッドへ倒れ込むと――くんずほぐれつ、1時間のゴニョゴニョ。

凄い大声だったから、多分下にも筒抜けだったろう。

事後、彼女と一緒に階段を降りる。

「おい、大丈夫か？ フラフラだけど？」

「大丈夫ー！ これで元気100倍だ！」

そう言うカナンだが、目の下のクマは取れ、ほっぺたは赤みを増している。

かなり血色は良くなった。

下まで降りると、顔を赤くした従業員たちが、ずらりと集まっている。

いったい、なにごとがあったのかと、心配だったのだろう。

「あの――カナン様。大丈夫なのですか？」

「ああ、大丈夫だ！ このとおり！ ご主人様から、元気を分けてもらったからな！」

「確かに、すぐく血色がよろしくなったみたいですが……」

「もう、魔法みたいに効くからな」

「まあ、これも一種の魔法なんだよ」

従業員たちが顔を見合わせている。

「あの……私たちにもお溢れを、いただくことは……?」

顔を真っ赤にした女性陣が、興味津々といった顔をしている。

中々の美人揃いだ。

「ははは、興味があるのか?」

「駄目に決まっているだろ! ケンイチ!」

「解ってるよ」

「えーっ! ズルいですよ、カナンさま! 辺境伯様が、こんな力を持っているなんて、聞かされていませんでしたし……」

「そりゃ、こんな力がバレたら、女たちが群がるに決まっているだろ!」

「「「えーっ?」」」

女性陣は残念そうな顔をして、一斉に不満を述べるが、さすがにこれは無理だな。

サクラの女性ネットワークは強力だ。すぐにサクラにも情報が流れてしまう。

カナンが、できあがっている作品群を見せてくれるそうなのだが、一旦外に出てニヤメナに伝えなくては……。

「おーい、ニヤメナ。悪い、あと1時間ぐらい」

車の中でシートを倒した彼女がくつろいでいた。

「はいよ。真っ昼間から、旦那も大変だねえ」

耳のいい獣人には、昼の情事が全部筒抜けだったらしい。

こりゃ、しばらく駄目だな——と悟った彼女は、どこからか食い物を買ってきていた。

「悪いな。ほら、エールをやる」

「やったあ！ 旦那、話が解るう！ ちょうど飲みたかったところだぜ！」

ニヤメナに待っててもらい、カナンのアトリエに戻って、作品を見せてもらう。

色とりどりのドレスに、元世界のようなスーツもある。
どれもスカートは短めだ。

「街でも裾が短いものが流行りだしているな」

「そうなんですよ！ すごく好評なんです！」

「でも、爺や婆たちには不評だけだな」
数少ない男性スタッフが不満を述べる。

「まあ、どこの国でも年寄ってのは新しいものを否定して、伝統とやらに固執するもんだ」

「そうなんですよねえ」

皆が、俺の言葉にうなづくのだが、俺とてこの世界について詳しいわけではない。

それでも、彼らの共感を得られるってことは、俺の言葉が間違っていないことだ。

「ほら、これをやる」

俺はシャングリ・ラから購入した、ファッション雑誌をカナンに手渡した。全部古本なので安い。

「新しい本ですね！」

「すごい！」

スタッフが全員で本に群がる。

「きゃー！」

女性スタッフが悲鳴を上げる。

下着やら、裸の女性の写真があるからだ。

つい最近まで、女性がくるぶしを出すのも無作法といわれていた世界なのだから、それは当然だ。

「カナン、こういう下着はつくらないのか？」

「試作はしているが、少々難しい……」

「けど、魔導師のレイランさんのような方には、絶対に必要ですよね！」

「レイランもここに来るのか？」

「はい！」

やっぱり、女性ネットワークがしっかりとでき上がっている。俺もアキラも迂闊には動けん。

カナンが元気なのも解ったし、俺は帰ることにした。

「それじゃ、カナン。楽しいからといって無理はするなよ」

「心得た」

「その割には、青い顔してフラフラだったじゃないか」

「ちよっと寝不足で……」

「それが無理っていうんだ」

彼女を抱き寄せて、口づけをする。

「んん……」

「はわぁ、こんなカナン様を初めて見たぁ」「そうそう」

「あのゝカナン様？ やっぱり、お溢れをもらうわけには……」

女性陣が集まってきて、興味津々な顔をしている。

「駄目だ」

「あゝん！」

カナンに別れの挨拶をして、車に乗り込んだ。

「ニヤメナ、悪かったな」

「なあに、いいってことよ」

エンジンをかけると、玄関の扉が開きアトリエのスタッフがでてきた。

「これが、馬なしで動く鉄の魔獣?!」

皆が唸りを上げる俺の車に驚いている。

「それじゃ、カナン」

手を振って挨拶すると、彼女も手を振ってくれた。

後は、サクラに戻って、アストランティアでアイテムBOXに収納した家を設置するだけだ。

サクラへ戻ると、ユリウスと一緒に家族持ちの農民たちを優先に住宅を設置する。

色んな産業を開発しているとはいえ、基幹になるのはやはり農業だ。

ユリウスには、住民の管理もお願いしている。

この世界には戸籍がないとはいえ、俺の領では、どんな住民がいるか把握しておきたい。

「ありがとうございます！ 領主様みずから、このようなことをしてくださるとは！」

俺の出した住宅の前で、住民がペコペコと頭を下げている。

「ボロい家ですまん。すぐに大工をよこして、修理をさせるから」「いえいえ、とんでもねえ！ 修理なら自分たちでしますから！」

「そうか、それでは任せた」

「ははっ！」

できるという住民には、やってもらわないとな。なにせ人手不足だからな。

すでにコンテナハウスを貸してあるので、修理しながらでも暮らせるだろう。

独身の農民には少々気の毒だが、彼らにもコンテナハウスを貸してあるから、雨風はしのげる。

——といってもこの世界は、雨があまり降らないが。

住宅を10戸設置完了して、ダリアで追加の20戸を持ってきたとしても、あと50は足りない。

他の都市にも、マロウ商会の手を伸ばしてもらわないとな。

179話 ガラスの城

ドワーフたちが住み始めた洞窟で、ラムの生産の研究がされている。

味はいまいちのようだが、強い酒が好きな者にとっては、この世界にこれ以上強いものは存在していない。

サクラ以外では生産できないそれは、十分な付加価値がある。

現状、サトウキビの生産はわずかなのでラムの生産も少量で、ドワーフたちで自家消費されている。

サトウキビの作付面積がアップすれば、ドワーフたちも飲みきれないだけの酒が醸造されることになるだろう。

ドワーフたちが酒造りに熱中しているため、高炉の建設は途中で止まっている。

工事は止まったままだが、鉄鉱石やその他の鉱物資源などは崖に沿って調査が行われており、試掘もされているようだ。

彼らはチームを組んで、数十kmに渡って露出している崖を調査している。

崖はアニス川が流れている湿地帯まで繋がっており、それ以上は調査できないらしい。

鉱物資源が見つかり鉱山ができれば、領に産業もできるわけだし、彼らに協力は惜しまないつもりだ。

ドワーフたちに調査を任せ、俺はなにをやっているのかといえど――アキラと一緒に趣味に走って色々やっている。

アキラと2人で崖の上にコンテナハウスを置き秘密の研究所として、あれこれとバカなことをやって遊んでいるのだ。

最初にやり始めたのは、スライムの研究。
下でやると獣人たちがうるさいので、ここは丁度いい。

コンテナハウスの中にはベッドがあるのだが、そこには俺の行動に理解があるアネモネが寝転がってタブレットを読んでいる。

鉄の箱の前では俺とアキラが、スライムを切った張ったして、あーでもないこーでもない—— 一緒についてきたベルは、崖の上を探検している。

「切っても死なないってことは群体なんだろう？」

俺は、包丁でスライムをカットし始めた。

解剖して構造を調べるためだが、なにか弱点をつかめるかもしれない。

「そうだな——多分、そうだと思う。バラバラになってもすぐに集まって、身体を作り出すからな」

アキラは帝国でスライムと戦った経験があるので、知識が豊富だ。

スライムはバラバラになるが、ある一定の大きさよりは小さくならない。

それより更に小さいのは、幼生らしいが——成体は大人になるまで、幼生を身体に取り込んで生育に必要なための栄養を渡しているらしい。

「つまり幼生は成体に寄生しているわけか……」

「ああ」

「でも細かく分裂している間に、燃やしたりすれば、ダメージは通りそうだな」

「合体しないうちに、上手くまとめて燃やせばいいけどな」

「うーん」

スライムは透明だったが、死んでいる今は青緑っぽい色をしている。

こう見ると玩具のスライムっぽいのが、こいつはれっきとした生き物。

この世界に、はびこり繁殖を繰り返しているが、そのためには水が淀んだ湿地が必要らしい。

流れが速い川にはいないという。

「これは俺の推測なんだが――」

アキラがスライムの生態に対する見解を示す。

「やつらは温度に敏感らしい」

「水温か？」

彼によれば――水の冷たい場所にはおらず、水が淀んでいて水温が高い場所が好みらしい。

水温の低い場所では、極端にスピードが落ちるという。

王都を過ぎたアニス川は、平地に入ると大蛇のようになうねと大地を這い回り、大湿地を作り出している。

まさに、そこがスライムの生育に適した場所ってことになるわけだ。

エルフの村を襲ったスライムたちは、湿地帯から紛れ込んできたものと思われる。

湿地帯に比べて湖や川の水温が低いので、あれ以上はスライムが遡上してくる心配はないというのが、アキラの考えだ。

スライムが低温に弱いというなら、穴に冷たい水を入れたトラップも作れるかもしれない。

リフリジレーション

動いているスライムに冷却の魔法をかけるのは難しい。魔法は発動するまでにタイムラグがあり、一旦発動すると場所を移動できないからだ。

冷却や乾燥の魔法などは、止まっている目標にしか使えない。

このように制御の難しい魔法だが――事前に冷たい水や氷を用意したり、パサパサに乾燥させた土などをトラップに利用することは可能だろう。

攻撃に転用するならゴーレム魔法を使えばいいが、事前に準備が必須ですぐには使えない。

アキラと一緒に、餅のようになっていいるスライムを解剖する。

群体のはずなのに、分化して組織ができ上がっているのだ。

縁には獲物の動きを止めるための毒を持った刺胞ができて、内側には獲物を消化する器官ができる。

消化吸収された栄養は他の組織を構成している個体にも送られて、共存共栄。

群生なのに、まるで一つの生き物のように行動する。

「最初はただ集まっただけなんだが、しばらくすると、それぞれの組織へ分化が進むんだ」

「群体なのに組織ができるのも凄いな」

「俺たちの身体でたとえると――手や脚や目玉などが、それぞれ別の生き物で構成された集合体のようなもんだ」

「手や脚を切っても、別の個体がくつついて、すぐに元通りになると――」

「そうだな、そんな感じ」

想像すると、気色悪さに俺の肌が粟立つ。

「そう考えると、かなりキモいな。スライムが嫌われるのが解る気がする……」

とくにエルフたちは嫌っているな。

サクラにやってきたエルフのセテラも、ここには近づかない。

「ははは、だろ？」

なにはともあれ、食ってみることにする。アイテムBOXから料理器具を出して準備。

小刻みにしたものをフライパンの上に載せて、水を入れる。

「とりあえず煮てみよう」

「毒があったら、お湯に溶け出すって寸法だな」

「そうだ」

煮こぼしたほうがいいだろうが、まあ少量なので平気だろう。

一口で人が死ぬような猛毒だったら終了だろうが、俺たちには祝福がある。

そう簡単には死なないはずだ――多分。

熱を通すと身体を構成しているタンパク質が変質したのだろうか、少々固くなった。

煮えたので、アキラと一緒に少量口に入れてみる。

「歯ごたえある、グミみたいだな。嫌なおいもしない」

俺の感想にアキラがうなずいている。

「味はしないな――クラゲに近いんじゃない？」

「そうだな、クラゲだと思えば、そんなに違和感はない……甘くしても合いそうな感じ」

今度は、欠片をコンロで焼いてみる。

なんだか甘そうなおいが漂うが、電撃ショックをしたときにも、こんなにおいがしていた。

「やっぱり、焼いたりすると甘そうなおいがするな」

「実際は甘くないけどな。香料のバニラも甘そうなおいがするけど、口に入れたらウェツてなるが」

焼いてから、アルコールなどに漬ければ、香料が取れるかもしれ

ない。

面白そうなので、それをやってみる。

スライムを大量に刻み、網で焼いていると、鼻をひくひくさせながらミヤレーがやってきた。

「なんのにおいじゃ？」

「ミヤレー、スライムをいじるから来るなと言ったのに」

「あんなのを聞くのはトラ公だけにゃ。そんなことを気にしてたら、ケンイチと付き合えないにゃ」

ミヤレーがスライムを覗き込む。

「ほら、甘いにおいがするだろ？ これを取れないかと思ってな？」

「においを取るにゃ？」

「ああ、香水とかもそうやって作るんだぞ？」

「にゃー、さすがケンイチは賢者だにゃー」

ミヤレーのアゴの辺りをなでてやると、ゴロゴロという大きな音が聞こえてくる。

彼女は目を細めていて、気持ちよさそうだ。

シャングリ・ラからエタノールを買って、焼いたスライムを漬ける。

においの元が、アルコールに溶け出す成分なら、これで回収できる。

アイテムBOXに入れると時間が止まってしまうので、しばらくこのまま浸け込んでおく。

「ケンイチ、それを蒸留するのか？」

「いや、液体を分ける魔道具があるから、それで成分が取り出せるんじゃないだろうか？」

まあ上手くいかなかったら、蒸留だな。

「ケンイチ、スライムをバラして、なにか解るにゃ？」

「そうだな色々と解ったぞ。バラバラになっても死なない構造とかな」

「しかし、もっと簡単に仕留められないもんかねえ」

アキラの言うことももっともだ。

水際だと、水と同化してて本当に解らないからな。

「戦わずというところ——毒か？」

「毒ねえ——帝国でもスライムに毒をかけたとかそんな話は聞いたことがねえなあ……」

「そのためにも、生きたサンプルが欲しいなあ」

「それじゃ——行くか?!」

俺のつぶやきにアキラが反応した。

「行くって、スライムのところにか？」

「生きているのを捕まえるとなれば、それっきゃないだろ？」

「スライムが大量にいる場所へ向かうとなると——それなりの準備が必要だぞ？」

「どうする？ 戦艦でも作るのか？」

「鉄で船を作れば最高だが、そんな時間も建造する技術もない」

「ケンイチの魔法で作れるもので、それっぽいのを作れないか？」

「うーん。こんなことになるなら、スライムを生かしておけばよかったか……」

「まあ、あの場合は余裕もなかったし、後からあーすればよかった、こーすればよかったってのは、よくあることだ。しゃーない」

彼の言うとおりだ——シャングリ・ラを検索してみる。

コンテナハウスがそのまま船に乗れば一番簡単なんだが……。

俺の目にアルミサッシが止まった。

木枠を組んで、アルミサッシで周囲を囲んでみるか……それなら

視界もいいしな。

スライムの消化液で、アルミやガラスが溶けないのは、経験済みだ。

アイテムBOXからスケッチブックを出して、アキラに計画案を見せる。

「アルミサッシか……確かに、これなら作れそうだな」

「ただ、ほぼガラスの温室なので、暑いと思うが……」

「まあ、なにごとにもなってみなくちゃ解らんし」

アキラの言うとおりだな。

駄目なら改良点を見つけて、根本的に間違っているのであれば、他の方法を考えればいい。

「ケンイチ、また行くにゃ?!」

「今回は、俺とアキラとで行く。ちょっと危なそうだからな」

「そうだにゃ……」

「相手がスライムじゃ、獣人たちは分が悪いだろ?」

「にゃー」

ミャレーの尻尾が垂れ下がり、テンションが落ちる。

「まあ、他に出かけるときには、頼むよ」

俺たちの話を聞いていたのだろう。

コンテナハウスから、アネモネが出てきた。

「冒険でしょ?! 私も行く!」

「いや、今回は危ないから、君はサクラで待ってなさい」

「いや! 絶対に行くから!」

「まあ、ケンイチ待て待て。魔導師は1人いたほうが便利だぞ?」

「しかし、今回は危険が危ないぞ?」

「頭痛が痛くなるかもしれん」

「骨折して骨が折れる場合もある」

俺とアキラのくだらない冗談にも、アネモネは誤魔化されない。

「冒険は危ないのが当たり前だし！　ぜったいに行くから！」

今回は、船にガラスの温室を載せるようなもんだからな。

かなり狭くなるだろうし、重量もマシマシだ。3人乗るので精一杯だろう。

「アキラ、酒造りのほうは？」

「ドワーフたちに、教えることは教えちゃったからな。酒造りに関しちゃ、奴らのほうが云百年先輩だし」

「そうなんだよなあ。ドワーフとかエルフとか、俺たちの想像を遥かに超えているよな」

「何百年も生きるってどういう感じなんだろうなあ？」

「祝福で寿命が延びるとかないのか？」

「解らん」

「王国でも、過去に祝福を受けた者は、幸せに暮らしました——とさ！　って感じでしか伝わってないみたいだし」

「時間がたってみないと、誰も解らんか……」

早速、コンテナハウスを収納して、アキラと2人で崖下に降りる。俺が作った単管の足場は、石工たちが使っている。

作業をしている石工たちに声をかける。

「調子はどうだ？」

「これは領主様！　この櫓やぐらがあるおかげで、石のいいところを切り出せますので、作業がはかどっております」

「移動したいときは、言ってくれ。仕事の合間に動かしてやるから」
「ありがとうございます。領主様自ら、お手をかしていただけるとは、他領では考えられぬことで……」

他の領だと、役人がふんぞり返って、あれこれできもしない指図をしてくだけらしい。

それですめばいいが、賄賂まで要求してくるのだから、始末に負えない。

領のために働いている者の足を引っ張ってどうしようというのか。ここでは、そんなことがないようにしないとな。人の振り見て我が振り直せてやつだ。

アキラと湖の畔に到着すると、早速工作を始める。

アネモネとミャレーも一緒についてきたので、湖畔にコンテナハウスを出す。

「このコンテナは便利だよなあ」

アキラがコンテナハウスを眺めている。

「そうなんだ。前は自分で作った小屋を使っていたんだけどな」

スライムを食った影響は、今のところなにもない。

アキラにも確認してみたが、大丈夫。明日、もう少し量を増やして食べてみるつもりだ。

相手は未知の食材だ、慌てるとろくなことないからな。

たとえばキノコの類だと、大丈夫だと思ってもアルコールと一緒にだと当たったりとか——そういうことがあるので、注意するに越したことはない。

「しかし、ケンイチは遊んでいいのか？」

「いやあ——これも立派な仕事だし。大湿地がどんなことになっているのか、調べる必要があるし」

スライムを駆除できれば、運河としても航路が開けるかもしれない。

そうなればハマダ領への利益も大きい。

「はは、そういうことにしておいてやるよ」

「してくれなくても、これは仕事だぞ？」

アキラと一緒に船の寸法を計ると、地面に降りてシャングリ・ラから買ったサッシを出す。

「このアルミサッシで、船を囲むのか？」

「そうだ。ガラスなら見晴らしもいいし、いい考えだろ？」

船の大きさと合わせて、サッシの寸法も測ると、設計図を描く。そこにエルフのセテラがやってきた。

「スライムをいじってたんじゃなかったの？」

「そのスライムを捕まえるために、湿原へ突撃しようかと思ってな」「ええーっ？」

露骨に嫌な顔をしたエルフに、頭がおかしいと面と向かって言われる。

「ははは、ひでえな」

アキラが笑っているが、まったくだ。

エルフは呆れて、自分の部屋に戻ってしまった。

作業の続きを開始して木材で枠組みを作る。木材もシャングリ・ラで購入したもの。

規格が統一されているので、計算がしやすい。

とりあえず地面の上で作業をするが――土の上で工作が完了してからアイテムBOXに入れ、それを船の上に出せばいいのだ。

本来なら多数の作業員が必要な作業も、俺とアキラ2人で作業が可能。

これぞアイテムBOXのチートパワー。

木枠の固定には、シャングリ・ラで購入した金具を使いネジ留めする。

高い所の作業にはアルミの脚立を出した。

この金具——本来は小屋などを作るときに使用するものらしい。

この木枠にアルミサッシを固定するわけだ。

作っているものが完成すれば、見た目は完全にガラスの温室だろう。

絶対に中は灼熱になるはずだが、サッシは開けることができるので換気は可能。

——とはいっても、こういうのは机上であれこれ言っても仕方ない。

まずは実際に運用してみて、改善点を見つけないことには、全く物事が進まない。

アキラも工作機械は使えるので、作業は問題なし。

こんなことに大工を巻き込んで彼らに申し訳ないので、この仕事は頼まない。

大工たちには、住民たちの家を作ってもらわないとな。

俺たちが変なことをやりはじめたのを、住民たちにジロジロと見られていたのだが——その噂があつという間にサクラ中に伝わる。

みんな噂好きなので、そういう話にすぐに飛びつくのだ。

それを聞いた大工の親方が飛んできた。

「領主様！ そのような仕事、我々がやりますのに！」

「いやいや、お前たちには住民の家を作ってもらわないとな。こいつは俺とアキラの趣味みたいなもんなので、お前たちが心配する必要はない」

「ケンイチ、今趣味って言ったぞ」

「たとえばよ、もののたとえ。これが領主の仕事だっていうのは、

譲るつもりはないぞ？」

「ははは、解ってる」

「領主様の仕事であれば、なおさら——」
大工の話を途中で遮る。

「いや、大工たちは住民の住宅の建設に、全力を投入してくれ」

「し、承知いたしました」

親方が作業に戻っていった。ちよつとがっかりしていたようだが、こんなことにつき合わせちゃ悪いし。

あとで酒でも持っていてやろう。

そんな話をしている間に木枠は完成した。

電動工具があれば、こんなものはチョチョイのパツパよ。

「それで？ ケンイチ、これにどうやってアルミサッシを固定するんだ」

「ふふふ、実はそれはすでに考えてある」

俺はシャングリ・ラで買ったものを、アキラに見せた。

「ダクトテープ！（大山〇ぶ代の声で）」

「アメリカ人かよ！」

日本で普通に売っているガムテープとは違う、この灰色のテープは超強力だ。

アメリカ人は、なんの修理でもこのダクトテープを使う。

それはもはや一種の宗教と言ってもいいぐらい。

「ふふふ、ツッコミサンキュー。でもウケ狙いじゃなくてマジだぞ」
「まあ今回だけ使えればいいと割り切れば、これでもなんとかなるか……」

「ダクトテープはアメリカ、割り切りのよさはロシアを真似してみ

ました」

「いいところ取りと言いたいんだろうが、本当に上手くいくか？」

「まあ駄目だったら、すぐに帰ってくればいい。別な手を考えて、ちゃんとしたものを作るとなると時間もかかる」

「こんなアホなことに、手間暇をかけるのも無駄ってもんか……」

「アホって言うなよ」

試しにサッシをダクトテープで固定してみたが、かなりの強度がある。

揺らしても引っ張っても大丈夫だ。むしろ木枠が壊れるぐらい。

「木枠の強度が足りねえんじゃないか？」

アキラが木枠をペシペシと叩いている。

「ぐるとサッシが囲めば、それ自体もフレームになるから大丈夫だと思う」

「かなり重量があるから、喫水が下がりそうだな……重心が高くなると転覆の可能性もある」

アキラが腕を組み、サッシと船を見比べて、唸る。

彼は船舶免許を持っているので色々と船に詳しい。

「まあ俺とアキラとアネモネで、中はいっぱいだろうな。でも川だから波もないし」

「スライムと格闘するんだろ？ 天井にスライムが沢山乗ったりすれば、ひっくり返るかもしれん」

スライムは水分が多いので、意外と重い。

「天井はサッシで三角形の屋根にするつもりだから……」

「それなら、簡単には乗られないか」

あとはスライムを入れる冷凍庫を設置しなければ。

今回は生け捕りが目的なので、アイテムBOXには入れられない。

木梓はすぐに完成したのだが、サッシの取付には少々時間がかかり、1日では終わらなかった。

それに船外機の所は、実際に温室を船に載せてから、それに合わせて工作をする必要がある。

夕方になり暗くなってしまったので作業は中断。夕飯を食うことにした。

以前は、飯の準備やらで忙しかったのだが、サンバクとメイドたちがいってくれるおかげで、俺の時間も増えた。

俺の飯が食いたらしいアネモネには不評なのだが、サンバクの料理は美味しいという。

家に向かう途中でアネモネと話しながら、住民たちにも挨拶をする。

皆の顔が明るく、子どもたちははしゃぎまわっている。とりあえず領の経営が上手くいっている証拠だ。

「サンバクの料理だって、美味しいんだからいいだろ？」

「私は、ケンイチの料理が食べたいの！」

「彼の料理は、多分俺のより美味いぞ？」

「違うー！」

まあ味はともかく——俺に作ってもらって、自分でもパンを焼いたりしたいのだろう。

彼女の気持ちも解らんでもない。

家の前で、皆でテーブルに集まり、飯を食う。

今日はプリムラがないので、彼女の護衛であるニャレサもない。

空の下での食事にもすっかりと慣れてしまったので、これが普通になってしまっている。

今更、屋敷で食事なんて——と思ってしまおうのだが、客も訪れるからな。

それなりの施設は必要なのは解る。

今日は、鳥肉のスープと、焼き物。

エルフは食事の作法やら食習慣が違うので、自室で食事を取っている。

今日は鳥肉料理なので彼女も俺たちと同じメニューを食べているが、肉料理のときは自分で食事を用意してもらう。

鳥肉は、ベルや獣人たちが獲ってきた獲物。見たこともない食材にサンバクも試行錯誤しているのが解る。

でも美味しい。俺が提供している元世界の調味料も巧みに使いこなす。

さすがだ。

テーブルの下にいるベルにも焼き鳥をあげる。

「アキラ、身体に変化ないな？」

「ああ、平気だな」

彼は、俺が渡したビールを喉を鳴らして飲んでいる。

「なんじゃ？ ケンイチ、またそなたらは悪巧みかえ？」

「リリース、聞かないほうがいいぞ」

「ケンイチたちは、スライムを食ってたにゃ」

ミャレーの言葉に、ニャメナが反応した。

「止めろクロ助！ 飯を食っているときに！」

ニャメナは拒否反応を示しているが、他の家族は——ああまたか——みたいな顔をしている。

「ケンイチ様——それは、どのような味なのでございますか？」

俺の話に興味を示したサンバクがやってきた。

「菌ごたえがよく、味もなく癖もない。味付けしだいで、どんな料理にも合いそうだったな」

「ほう——」

彼がアゴに手をやり、なにか考え始めた。多分、料理の献立を考えているのだろう。

偏見などには拘らず美味しいものを追求する。本物の料理人だ。

そうでなければ、こんな辺境で魔物の肉を調理するなんて仕事にはつかない。

「多分、甘くすれば、デザートにもなるかもしれない」

「なんと、あのような魔物に無限の可能性が……」

「料理や食材ってのは奥が深いよな」

「まことに……」

「まだ解らんぞ。遅効性の毒かもしれんし。しばらくは、実験をアキラと続けるつもりだ」

元世界で、食うと死んでしまうフグを食べるようにした先人に比べたら、どうってことはない。

寄生虫の心配もあるが、アイテムBOXにいれば、生きとし生けるものすべてが死ぬ。

究極の殺菌だ。

「あの——聖騎士さま？」

アマランサスがちょっと上目づかいで俺を見てくる。

次の俺たちの冒険に、彼女も参加したいのだろう。

「悪い、アマランサス。船に載せるガラスの鎧が重すぎてな。今回は3人しか乗れない」

「そうでございますか……」

アマランサスが、俺の言葉にしょんぼりしている。

彼女の剣技は素晴らしいが、スライムには通用しないからな。魔法を使えるアネモネのほうが戦力になるだろう。

それには船に載せるガラスの城を早く完成させないとな。

大湿地というスライムの楽園が、どんな感じの世界なのか今から楽しみだ。

いや、化け物の里が楽しみだなって、俺も相当にこの世界に毒されてきているな。

俺は心の中で苦笑いをした。

180話 出撃

スライムが溢れるという湿地帯を目指し、俺はアキラと一緒に船を改造した。

スライムを避けるために、船をシャングリ・ラから購入したアルミサッシで囲ったのだ。

その姿は、まるでガラスでできた温室。

木枠を組み、アルミサッシはダクトテープで留めるという安普請だが、強度的には必要にして十分。

1回の試航海ならこれで問題ないだろう。

なにも決死の航海じゃないんだ、スライムを捕まえるだけだし、危なくなったら逃げて帰ってくればいい。

俺が作った簡単な防御手段を用いた船だが――これ以上本格的な戦艦となると、鉄を使った造船ということになる。

それは男の浪漫を誘うとはいえ、この世界にはそんな技術は存在していない。

いくら鉄製品の工作に長けているドワーフたちがいっても、それは難しいだろう。

完成した温室を船に載せる。

本来なら移動には多数の人手が必要になるが――俺にはアイテムBOXがある。

一旦アイテムBOXに入れて、船の上に出せば簡単。

最近は、どこにもものが出るのか解るようになったので、結構正確な位置決めができるようになった。

残った工作で難しいのは、船から出ている船外機の周りだ。

アキラが握る船外機のレバー部分だけをサッシの隙間から温室の中に入れて、操れるようにした。

隙間部分は分厚いゴムシートをすだれ状に切ったもので覆って塞いでいる。

アキラに試してもらったが、少々動かしにくくなるだけで、問題ないようだ。

ここが温室の弱点ってことになるが——ここを的確に狙ってくるような知能がスライムにあるとは思えない。

船が完成したので、試運転を行う。

かなり船が重くなったので、加速は随分とのんびりになった。

これじゃ、やはりあまり人は乗せられない。

操舵を担当したアキラによれば——。

「重心が高くなったんで、急な操作をすると転覆するかもしれないな」

「高機動が必要な戦闘時や逃げる時には、温室をアイテムBOXに収納すればいい」

時速30〜40kmで水上を走れば、スライムも追いつけないだろう。

また設置するときには、岸につける必要があるが。

「ああ、そりゃそうだな。普通じゃそんなことを考えられねえからな」

弱点はあれど機能的には問題ない。アキラと出発の準備をしていると、エルフがやってきた。

「そんなものを作って本当に行くつもりなのお？」

「もちろんだよ。伊達や酔狂でこんなものを作ったりはしないぞ？」

「ええ？ 只人って信じられないことをするのね？」

「別に只人の専売特許って言葉は通じないか——スライムを退治したり退ける方法があれば、川を運河代わりに使えるからさ」

「運河なんて——それが、そんな命がけの危ないことをする対価になると思うの？」

「もちろんだよ。もし使えば大量の輸送が可能になるからな」

「只人のやることは、よく解らないわあ」

まあ種族の違い、文化の違いがあるから如何ともし難い。

「まあ、明日からちょっと留守にするからな」

「それじゃ、アネモネが持っている文字の出る板を貸してえ」
板ってのは、タブレットのことだ。

「あれは特殊な魔力を使っているから、俺がいないと1日しか使えないぞ？」

「ええ？ そうなの？ なんとかならない？」

「うーん」

悩んだ俺だが——エルフはかなり知能が高い。アネモネが使っているタブレットを見て、興味を持つと一発で使い方を覚えた。

崖の上に太陽電池パネルがあるが、そこにモバイルバッテリーが繋がっている。

その使い方を教えてみるか——。

どのみち、出発は明日の朝一だ。

「アキラ、船の把握は大体できた。今日はこれで上がろうぜ」

「オッケー！」

「セテラ、ちょっと来てくれ」

「うん」

彼女を崖の上にある太陽電池パネルの設置場所に連れていく。

崖の上に向かうため単管の足場を登っていくと、作業をしている石工たちが、セテラに見とれている。

「おい、エルフだぜ」

「マジエルフなんて初めて見た」

「領主様の所にいるらしい」

「それじゃ領主様は、エルフとも——いやあ、あやかりてえなあ」

「けど、エルフの女ってのは皆BBAなんだろう？」

その話を長い耳で聞いていたのか、セテラがカンカンと渡り板を鳴らして、石工の所へ向かった。

「なあに？ 坊やたち、私に興味があるの？」

「いえ、あの——言葉が……」

エルフが只人の言葉が解らないと踏んでいた彼らの顔から血の気がなくなる。

「私は、只人の言葉は少し喋れるから」

ニコニコ顔で笑っているセテラに、石工たちは恐れおののいたのか、彼女に謝罪した。

「申し訳ございません、エルフ様……」

「よろしい」

戻ってきたセテラに小言を言う。

「余り、いじめてやるな」

「BBAって悪口を言われたのは私だからあ！」

「すまん。他の連中にも注意しておくから」

「本当ね！」

「ああ、本当だ」

何百年も生きているから、歳のことなんてどうでもいいような気もするのだが、BBAと言われるのは嫌らしい。

セテラを太陽電池パネルの所に案内した。

「これは、なあに？」

「これは、日の光を特殊な魔力に変換する板だ。そして、この魔導具に蓄積される」

「へえ、これってケンイチが作ったの？」

「まあな」

彼女にモバイルバッテリーへのタブレットのつなぎ方を教える。

「この線の先を、この穴に挿すと、魔力の充填が始まるわけだ」

「へえ、へえ」

「この赤い棒が徐々に伸びてくるから、いっぱいになったら使える」
「解ったあ、ありがとう」

彼女がタブレットにUSBケーブルを抜いたり刺したりしている。
物珍しいのだろう。

「只人の文字も読めるのか？」

「まあね」

何百年も生きているなら、学ぶ時間はいくらでもあるか……。

とはいえ、タブレットに使われているのは日本語だが、それもアネモネから教えてもらっているらしい。

ユリウスに予定を告げるために崖下に下りようとすると、セテラに抱きつかれた。

「おい、ちょっと」

「うふふ……はあ、やっぱりケンイチに抱きつくとか気持ちいい」

「俺を抱き枕代わりにするな」

「なあにそれ？」

エルフには抱き枕はなかったか。

「なんでもない」

「ねえ？　ここでする？」

セテラがエルフドレスの裾を持ち上げて、白くて細い脚を見せつけてくる。

「しないぞ」

「ええーっ？　なんで、そんな堅いのお？　只人の領主ってのは、

女好きでえー」

「女が好きなのは否定しないが、これ以上は増やすなって言われているからな」

「別にその中に入ろうなんて思っていないけどお」

「ただ、遊びでして、気持ちよくなりたいだけなのか？」

「そう」

実に魅力的な提案だし、エルフの身体がいったいどういうものなのかも気になる。

「うーん、だが断る！」

「ええー？　なんでえ？　ほらほら、只人ってエルフ好きでしょ？」

彼女が裾を捲り、股間まで見せてくるのだが――眩しい。

「まあ、好きだけど――断る！」

「ええー？」

何回繰り返してもキリがないので、崖の下に下りると、ユリウスに予定を告げる。

俺にフラれたセテラは、しょんぼりと自分の部屋に戻ったようだ。まさかフラれるとは思っていなかったらしい。

少々自意識過剰気味だが、エルフってのは只人より優れているという自負があるらしい。

「ユリウス、明日からしばらく留守にする」

「どのぐらいで、お戻りですか？」
ユリウスが心配そうな顔をする。

「明日中には戻って——いや、どのぐらいだろう。正直、初めて行く場所なので、どのぐらいの時間がかかるか解らん」

アニス川と大湿地を確認して、スライムを捕まえるだけだからな。そんなにはかからんと思うが。

「なるべく早くのお戻りを——」

「解った、善処する」

彼は役人なのだ。領主がサクラにいて、ふんぞり返っていてもらったほうが助かるのだろう。

まあ、ここにはリリースもいるし、政治のプロのアマランサスもいる。

領の経営には、マロウ商会がついているし、俺みたいな素人がいなくてもなんの心配もない。

時間が余ったので、昨日アルコールに浸けた焼きスライムから、においを取り出してみることに。

ちよっとにおいを嗅いでみる——バニラとも違う、甘いにおいがある。

それに水を足して、アルコールだけ抜けば、凝縮したにおいがついた水だけが残るはず——。

詳しい香水の作り方は解らないが、今回は興味本位で、においを取り出してみるだけだからな。

アイテムBOXから液体を分離する魔道具を取り出してセット。こいつは便利で使いみちが色々あるので、カールドンに追加で発注をしてある。

大本は、彼の爺さんが作ったものだが、彼も同じものを作れるら

しい。

暇をみて作ってくれるそうなので、期待している。

魔道具を動かし、左側のスロープから流れる水を指で掬うと、クンカクンカ。

「おお、凄い甘そうなおいがする」

とりあえず抽出には成功したようだ。

これがなにかに使えるかは別の話。これから、毒性などを調べなくてはならない。

某キノコの毒のように、旨味成分なのに毒——みたいなものもあるからな。

この手のものに興味ありそうなのは——サンバクのところに行くと、彼に見せてみることに。

彼は、カマドで料理の試作をしていた。石工が来たことで、立派な石窯もできてパンも焼けるようになった。

すでに頂点を極めた料理人とも言える彼だが、このように日々新しい食材に挑戦して、研鑽を繰り返している。

「サンバク、このにおいを嗅いでみてくれ」

「はい……む！　これは素晴らしく甘そうなおいですな」

「上手くいけばお菓子などに使えるような香料になるだろ？」

「はい——しかし、これは何のにおいですか？　まったく記憶にありませんが……」

「これはスライムのにおいだよ」

「は？」

サンバクが俺の言葉に固まる。

「スライムを焼くとな、甘い香りがするんだ。それを特殊な方法で

抽出したものだ」

「な、なんと！ スライムですと？！」

「ああ、なかなか意表をつく、素敵な香りだろ？」

「いや、まったく——ケンイチ様には驚かされてばかりでござい
ます」

「いやいや、俺だってサンバクの作る料理には驚いているよ」

「それで、この香料はすぐに使えるのでございますか？」

「いや——俺とアキラとで、毒性の試験をしてからだな」

スライムの肉と一緒に、遅効性の毒だったりすると困るし。

サンバクはこの甘い香料に興味津々。彼ならきつと素晴らしいお菓子などに昇華してくれるだろう。

スライムといえど——アキラと一緒にそれを食べたが、まったく
身体に異常はない。

このまま食べる量を増やしてみることしよう。

——そして夕方。

皆で夕飯を食べて、明日の予定を告げる。

今日の料理は、サンバクが作ったカレー。

この世界の高価な香辛料ではなくて、俺がシャングリ・ラで買っ
たものを使って作ってもらった。

スパイスから作っているので、すごく鮮烈な香りがする。

いつも食べているカレーとは一味違う。

まあ、家庭料理のカレーは、あれはあれでホッとする味なんだけ
どね。

「明日、ちょっとでかけるからな」

アキラを除く女性陣たちが、顔を見合わせている。
代表としてリリースが口を開いた。

「どのぐらいで帰ってくるつもりじゃ？」

「まあ、なにもなかったら明日中には帰ってくる」

「それで——最終的には海まで向かうのかえ？」

アマランサスがカレーを食べながら、しょんぼりしている。

連れていてくれないので、すねているらしい。

「それも考えてはいるが、明日は目的を果たしたらすぐに帰ってくるつもりだ」

一緒に飯を食っているアキラが質問してきた。

「けど、ケンイチ。運河といっても、あの水路じゃ小さいボートしか通れないぜ？」

「アニス川を運河として使えるようなら、将来的には川に港を作って、大型船も建造するつもりだが」

「そりゃまた大掛かりな公共事業になるなあ……」

「領の発展のためには、次々と民の仕事を絶やさないようにしないとな」

本当に実現できるかどうかは別の話だが。

「その前にスライムどもは、どうするのじゃ？」

リリスが不安そうな顔をしているが、当然だろう。

「そのためにも、生きているスライムを捕まえて、研究してみる必要がある」

ちよつと離れた場所から獣人たちの嘆きが聞こえる。

「はあ、俺たちにゃ、理解できねえよ」「なんか凄いことになってるにゃー」

本当にできるかどうかは解らんが、一応可能性は調べておかないとな。

スライムを駆除できる方法があるなら、その方法も研究して損はないし。

今後、領が広がれば、湿地帯の方向へも生活圏が伸びるかもしれない。

その時になって慌てるより、いまから研究しておいたほうがいいだろう。

まあダリアに行って住宅を持ってきたり、彼の街周辺を治めている、アスクレピオス伯爵に会うって仕事もあるのだが。

とりあえず勢いで決まってしまったが、やる気が充実している間に片付けてしまったほうがいい。

好きで仕事をやるのと、後になって切羽詰まって嫌々やるのとでは、気持ちのテンションに大きな違いがあるし。

飯を食い終わって、明日に備えて早めに休む。

今日のお相手は——冒険に参加できずにむくれている、ミヤレーとニャメナにした。

崖の上のコンテナハウス。その中のベッドの上に毛皮の彼女たちが寝転がっている。

「ごめんな〜一緒につれていけなくて」

彼女たちの艶やかな毛皮にブラシをかけてやる。

いつもブラシをかけてやっているの、ピカピカだ。

「ふにゃ〜ん。悔しいけど、相手がスライムじゃ俺たちはなんにもできねえ……しいい！」

尻尾の付け根の所を入念にマッサージすると、尻尾をピンと伸ばしたニャメナが、ふるふると震えている。

「ケンイチ、そういう気持ちいいなで方をする、またトラ公が漏

らすにゃ」

「いいよ、漏らしても」

「ああゝ旦那あダメダメえ」

「にゃーウチはゝケンイチにスリスリするにゃー」

ミヤレーが俺に身体を擦り付けて、喉をゴロゴロと鳴らしている。
今度は船の上だし、剣も打撃も効かないスライム相手じゃ仕方ない。

「違う場所に行くときは、連れて行ってやるからな」

「楽しみだにゃー」

「あゝっ！」

彼女たちの毛皮に埋もれて、夜はふける。

―――――◇◇――――

――スライムを求めて、湿地帯へ向かう朝。

今日は皆でグラノーラを食べている。

エルフの村で考えていた、週に一度ほどジャンク食の日を作って、サンバクを休ませてあげようという計画だ。

彼は休みなどは要らないと言っていたのだが、領主命令で従わせた。

本当はジャンク食を食べたいだけ――なんて言ったら、彼が落ち込んでしまうかもしれない。

この手軽に食事ができて美味しいグラノーラは、メイドたちにも好評なのだ。

メイドたちが朝食に食べていたそれをサンバクも食べてみたらしく、彼の評判もいい。

まあ、さすがにグラノーラを自作するとは言わないだろうが――言うかな？

食事が終わったので、棧橋で出発の準備をアキラとしていると――
背の高い三毛子、黒いチビ子、サビ柄太子の獣人3人組がやってきた。

「旦那、また出かけるのかい？」
彼女たちには、サクラ周辺の警備をしてもらっている。

「ああ、アニス川へ視察だ」

「そういうのは、部下にやらせるんじゃないのかい？」 「普通はそうだな」 「そうですよ」

「俺は自分でやるんだよ。この目で見ないと、正確な判断がくだせないだろう？」

「旦那は、貴族だっというのに変わってるねえ」 「全くだ」 「私もそう思いますけど、そんなことを言うのは駄目ですよ？」

「まあ、変わっていると言われるのは慣れているからな」
そこに、森のほうからベルがやってきた。

「ベル、留守番頼むぜ？」

「にゃー」
彼女が棧橋に座っている。

「にゃー」

「え？　もしかして、一緒に行くのかい？」
「にゃー」

まあ、森猫1匹ぐらいの余裕はあると思うが……。
3人組は仕事に戻ったので、アキラと準備を続ける。

「アキラ、レイランさんには連絡したのか？」
「ああ、大丈夫だ」

レイランさんは、マロウ商会の援助を受けて、アストランティアに店を構えた。

おおっぴらには営業していない、魔導を扱う完全な趣味の店らしいが。

商人の元女房であるアンネローゼはマロウ商会で働き、獣人のミヤアと女騎士のクレメンティーナは、マロウ商会の護衛の仕事をしている。

「遊んでばかりで、レイランさんはなににも言わないのか？」

「ケンイチは仕事だって言ってただろ？」

「そうそう、仕事だよ。もちろん」

「それに、逆だよ逆！」

「逆？」

「そう！ 散々お世話になったのだから、しっかりと付き合って恩を返してきなさい！ って言われている」

「それじゃ公認のわけだ」

「ははは、まあな。俺のセンスからしてみれば、ここにいれば俺が女遊びもしないから安心なんだろう？」

アキラが、大口を開けてゲラゲラ笑っていたのだが、俺の一言で勢いがなくなった。

「エルフ遊びはするのにか？」

「まあ、それはなんだ……ゴニョゴニョ」

「俺はなににも言わないから安心しろ」

「——といってもな、エルフ限定なんだけどなあ」

「そうなのか？ 奴らは男でも美人だからなあ」

「そうなんだよ……」

アキラがしみじみ言う。どうやら、アキラのこの趣味はエルフ限定のものらしい。

「アキラは、元世界でも世界中を旅していたって話じゃん？ それでゴニョゴニョの結果、目覚めてしまったのかと思ったよ」

「ああ、たしかになあ中東あたりはマジで多いぜ？」

「そうなのか？ アキラも中東にいたときは、髭を生やしていたのか？」

「もちろん。そうしないと男だと認めてもらえないからな。ははは」
レイランさんには、森の中にエルフがいたことを話していないらしい。

「ここにエルフが来ているし、いずれはバレルだろうけどな」
準備が終わると、リリスとアマランサスがメイドたちを引き連れてやってきた。

「ケンイチいくのかえ？」

「ああ——まあ、スライムを捕まえたなら、すぐに帰ってくるよ」

「まったくのう、酔狂が過ぎるぞえ？」

「そんなことはないぞ？ これにハマダ領の命運がかかっているかもしれないし」

「そんなものかの」

「聖騎士様あ」

アマランサスは泣きそうな顔をしているので抱き寄せる。

「別に今生の別れじゃないんだぞ？」

「しかし……」

「ケンイチ様、お昼のお弁当を作りました」

「ありがとう」

マイレンから弁当をもらった。もちろん、アキラとアネモネの分もあるので、アイテムBOXに入れる。

「ケンイチ！」

遅れて、青いローブを着て肩に鞆をかけたアネモネがやって来た。

「遅かったな」

「セテラに捕まってた」

「変なことされなかったか？」

「大丈夫！ あの人、いい人だよ」
人じゃなくて、エルフだけだな。

「本当か？」

「うん！ 言葉を教える代わりに、魔法も教えてもらっているし」
ああ、そうなのか。ちゃんとギブアンドテイクしているわけね。
中々、強かなアネモネの成長ぷりに親代わりの俺としても心強い。
彼女は棧橋の所にいるベルに気がついた。

「あれ？ ベルも行くの？」

「ああ、なんだかお母さんも行きたいようなんだよ。連れていって
もいいだろ？」

「うん」

「にゃー」

船の上に載せられたサッシを開けて中に入る。

アルミサッシの枠は固定されているが、中は動くようになってい
る。

天井は三角屋根になっているが、上もスライドして開く——とはい
え中はすでに暑い。

見た目は、そのまんま温室だからな。

「あちー！」

「あつーい！」

思わず、天井と横のサッシを開ける。

「ケンイチ、これ大丈夫か？ 俺たち茹だらないだろうな？」

「上と横を開ければ大丈夫だろう？ アネモネの冷却リフリジレーションの魔法もあるし」

「うん！ 多分、大丈夫！」

温室から顔を出して、岸にいる家族に別れを告げる。

「それじゃ行ってくるぞー！」

「気をつけるのじゃぞ！」

「「「いってらっしゃいませ、ご主人様！」」」

ちよっと離れた場所で、ミャレーとニャメナも手を振っている。

アキラが船外機を始動させると、船はいつもより重そうにゆっくりと桟橋を離れた。

「いつもの半分のスピードって感じか？」

「そんな感じだな」

アキラが、操舵の感触を確かめている。

あまり急な操舵は無理らしい。

「それじゃ、エルフの村まで普通に行って、あそこで温室をセットすればよかったか……？」

「ははは、そうかもな。まあ後のカーニバルってやつよ」

「今更ジタバタしても仕方ない。このままゆっくりと行くとするか」
「そうだな」

「にゃー」

暑いのは上だけで、ベルが寝ている船底は涼しいのか？

船底を触るとひんやりと冷たい。

ガラスの温室を載せた珍妙な船は、広大な湖の上をゆっくりと進み始めた。

181話 大湿地帯

色々と仕事があるのだが――忙しいと他のことをやってしまう症候群というか、なんというか。

――とはいえ、これも立派な領の仕事。

スライムを生きたまま捕獲して、実験材料にするために、俺は再び船に乗り川へ向かった。

湖から繋がる川を運河代わりにして、その先にあるアニス川を見えるためだ。

スライムの捕獲の他に、アニス川と大湿地帯の様子を視察するのも、今回の仕事。

リリースやユリウスからも、なんとも言われなかったので、正当な領主の仕事として認めてくれているのだろう。

船を改造して、アルミサッシで作った温室を載せており、珍妙な格好になってしまったが――こいつはスライム避け。

とにかくスライムの量が多いらしいので、防御のためにこういう形になった。

船はアキラの操舵で川を進み、乗組員は俺とアキラ、そしてアネモネとベル。

今回、なぜかベルがついていきたいと言い出したので一緒だ。

危ない所へ行くのが解ったので、彼女なりの助っ人のつもりだろうか？

ちよっと過保護な気がするのだが。

船はなにごともなく、エルフの村にある池に到着した。

今回は船を押してくれる獣人たちがいないので、接岸はしないつもりだ。

岸の近くまでいくとサッシを開けて、そこにいたエルフに挨拶をした。

髪の長い男のエルフ——皆と同じように耳が長く金髪だ。

「やあ！」

「領主様、また来たのかい？」

「いや、川へ抜けるつもりなのでタダの挨拶さ。領主がここを通つたと、皆に伝えておいてくれ」

「ええ？ 川へ？ 正気かい？」

「ほら、ガラスで作ったスライム避けもあるからな」

「全く、只人のやることは理解できないぜ」

アキラも一緒に顔を出した。

「ウサラに、よろしく言っておいてくれよ」

「おう、帝国の竜殺しの話をまた聞かせてくれよな！」

「ははは、今度来たときにな」

アキラが船外機を逆転させると、船を後進させ岸から離れた。

「アキラ、ウサラって？」

アネモネが、アキラの交友関係に興味津々だ。

「髪の短い、小柄なエルフがいたろ？」

「そういえばいたなあ」

ふくん、へーそうか。

まあ、野暮なツツコミは止めておこう。

船はエルフの村を離れると再び川へ。

この川がゆっくりと主流のアニス川へ流れ込んでいるらしいが、

ほぼ高低差がないので流れは、本当にゆっくりだ。

この辺りまでスライムが来ているはずなのだが――湖の水が冷たいため、これ以上は遡上してこないだろうという結論に達している。鬱蒼とした森の中を船はゆっくりと進む。

1時間ほど進み、アニス川との合流地点へやってきた。

日本の川のように直線的な水の流れの横に合流する感じではなく、大きく蛇行するコーナー部分に出てきたようだ。

「おおーっ！ 結構広い川だな」

アキラが川を見渡しているが周りにはなにもなく、ひたすら平地が広がっている。

大きな木は見えず見渡す限りの草むらに見えるのだが、すべて湿地なのだろう。

「これなら大型帆船も通れるんじゃない？」

彼の言うとおりだが、大型と言っても小舟に比べて大型というだけで、元世界の100mもある船は望むべくもない。

せいぜい数十メートル級の帆船だろう。

それさえ作れる人間がいるかどうか……。

この王国も南の果ては海岸があるらしいので船もあるだろうが、大型船など建造されているのだろうか？

あとでアマランスに聞いてみよう。

「ちょっとアキラ、岸の近くに寄せてくれ」

「はいより、なにするんだ？」

「マーキングだ。帰る場所が解らなくなると困るからな」

「そうだな」

アイテムBOXから、以前に買ったピンク色のスプレー缶を取り出して、湿地に生えている大きな草にマーキングする。

細くて長い草がピンク色に染まった。

「さて、ちょっと進んでみるか、微速前進！」

「はいよ、微速前進ヨーソロー」

船はゆっくりと進み出した。

いざというときのために開いていたサッシは全部閉めたのだが、やはり暑い。

「暑いね！ 冷やしてあげる。むー！

リフリジレーション
冷却！」

「あ……」

あることに気がついて、口を開こうとしたのだが――。

青い光が温室の中に充満すると、ひんやりと涼しくなる。

いや、凄く涼しいというか寒い。

「おー！ すげえ涼しい！」

アキラも喜んでいたのだが――そのうち身体が冷えてきた。

「ちょっと冷えすぎだろ。やっぱりあれだ！」

俺はガラスの城を形づくっている、アルミサッシを指差した。

この世界ではアルミが魔法の触媒として働いてしまう。

慌てて窓を全開にして冷気を逃す。

アネモネには弱目に魔法を使ってももらわないと……。

魔法が効きすぎてビックリしたのだが、その魔法について少々疑問がある。

「ケンイチどうした？」

「いや――動いているものに冷却の魔法が使えないだろ？ 船が動いているから駄目かな？ ――と思ったんだが」

「よくわからんが慣性の法則じゃね？ 走っている電車の中で、ボールを落とすと真下に落ちるってやつ」

「まあ、厳密に言えば惑星だって公転して動いているし、太陽系も

動いているからなあ」

「ははは、まあな。それを考えると、過去に戻れるなんてのは、嘘っぱちのような気がするよな」

「時間だけ過去の地球に戻っても、その位置には地球も太陽もないってことになるからな。」

「むー！ 難しくて解らない！」

「果たして、こんなこと（地動説）を教えていいものだろうか？」

「まあ、人に話したり広めたりしなけりや、異端ってことにはならんだろ」

そんな話をしている間にも船は進み、真っ直ぐに進んでいたかと思うと、いきなり180度ターン。

そして、しばらく進むと、また180度——いや270度ぐらい回ってね？

「ははは、こりやすげえな——大蛇かよ」

アキラが、川の蛇行を見て笑う。

「日本にこんな蛇行する川なんてなかったからな」

「そりゃ日本は山から湧き出てあつという間に海だからな」

「勢いがありすぎて、曲がる暇がないってことか」

「そうだろうなあ」

それでも蛇行はするんだが、ここまですごいのは見たことがない。PCでグ○グ○アースを見ていたときに、オロシアの平地で凄い蛇行を見たことがあったが、それと同じぐらい凄い。

今のところ、スライムが襲ってくる様子はない。

川の様子を見るために、正面のサッシから外へ出ると舳先に行く。アイテムBOXから、クワッドコプターのドローンを出したが、このドローンは結構活躍しているな。

便利この上なし。

「よし！ ア○ロ行きまゝす！」

ドローンを真上100mまで上昇させると、コントローラーに映し出される、異世界の光景。

こいつのコントローラーには液晶がついていて、上空にいるドローンのカメラからの映像を見ることが出来るすぐれもの。

この動画を保存することもできるので、一応資料として保存しておこう。

「ケンイチ、どんな感じなんだ？」

「ひたすら川の蛇行と三日月湖と湿地帯」

アキラにコントローラーの映像を見せる。

蛇のような蛇行と三日月湖と様々な大きさの池が映し出される。

「なんじゃこりゃ、いったいどこまで続いているんだ？」

「多分、海まで……だろ？」

「これを帆船で抜けるのは、かなりしんどいんじゃないか？」

「うねうねしているからなあ……」

走って方向転換、走って方向転換しなければならない。

確かに大量輸送はできるだろうが——いったいどのぐらいの時間がかかるのか見当もつかない。

「直線なら楽勝なのになあ」

「そうだな」

「私にも見せて！」

アネモネがサッシの中から出てこようとしたので止める。

「危ないから中に入ってなさい。あとで見せてあげるから」

「うん……」

アネモネがおとなしく温室の中に戻ったので——アキラと画像を見ていると、ベルがサッシから顔を出して警戒音を発した。

「シャー！」

「え?!」「やばっ！」

船の縁から透明な物体が這い上がってきていた。

「スライムだ！」

俺とアキラが慌ててサッシの中に逃げ込む。

透明な魔物は、そのまま船へと這い上がり、サッシにもへばりつく。

俺たちが温室の中から出てきていたので、獲物として察知されてしまったのだろう。

そのままスライムたちは温室の天井まで覆い尽くした。

屋根を三角形にすれば、登らないかと思ったのだが少々甘かったな。

「おおい、すげえ量だな」

アキラが天井のスライムを見上げている。

「スライムだらけって聞いてたけど……この一面に、どれだけのスライムがいるんだろ？」

「こんなの駆除するなんて無理じゃね？」

「そんな気がしてきた……」

駆除ができなくても、近づけないようにできればいいんだが……。

「アネモネ、天井にへばりついているやつなら、動きが止まっているから、魔法が効くんじゃね？」

リフリジレーション

彼女に冷却の魔法を使ってもらうことにした。

魔法が起動すると位置を動かせないので動いているものは使えな

いが、今なら効くだろ。

魔法はガラス越しでも発動する。

「むー！
リフリジレーション
冷却！」

ガラスの外に青い光が集まり始めると――ガラスの城に取り付いてたスライムたちが一斉に飛び上がった。

全面アルミなので、魔法がブーストされたのだろう。

「「すげー！」」

俺とアキラの声がダブる。

飛んだスライムが、ボチャンボチャンと音を立てて川に逃げている。

それに身体を広げて、少し滑空するような仕草も見せる。

「なんか、ムササビみたいに滑空してないか？」

それにアキラも気づいたようだ。

「そんな感じに見えるな」

「もしかしたら――木のある所なら上から滑空して襲ってくることも考えられね？」

「ありえる――のか？ アキラも今まで見たことは？」

「ないな」

スライム恐るべし。その場に適応して進化しているのか？

すぐく魔法に敏感だが、1匹どんくさいやつがいて舐先で逃げ遅れている。

動きが鈍い。

「アネモネ、あいつを凍らせてくれ」

「解った――むー！」

彼女が魔法の準備をしていると――逃げ遅れたスライムに他のス

ライムが群がり始めた。

「なんだ?! うえ? もしかして共食いか?」

アキラの言葉に俺も目を疑ったが、それっぽく見える。

「なんか、そんな感じに見えるが……」

動きが悪かった個体は何らかの原因——老化や病気などで弱った個体だったのだろう。

リフジレイション
「冷却!」

魔法が発動すると、再びスライムが逃げ始めた。

凄く動きが速くてキモい。おまけに逃げ遅れた個体まで持っていかれてしまったようだ。

「こりゃ中々大変だな」

そのあともスライムが群がる。

魔法を使おうとすると逃げる——この繰り返し。

「ケンイチ、どうする? これじゃ埒が明かないぜ?」

「そうだな——でも、魔法に凄い敏感なのは解ったな」

射出系や、爆烈系なら逃げられないが、バラバラになるだけで死なないし……。

「そうだ!」

いいことを思いついた。

俺はシャングリ・ラから、1mの細い角材を購入した——太さは親指ぐらい。

20本セットで2500円。船の上に角材が落ちてくる。

「ケンイチ、何をするんだ?」

「アキラ、この角材を10cmぐらいに切ってくれ」
アイテムBOXから、鋸を出してアキラに渡す。

「オッケー！　だが、いったいどうするんだ？」

「まあ、細工は流々ってやつよ」

アキラに切ってもらった角材を1mの角材に結び付け、十字に紐で固定していくと――9個の十字架が並んだ。

「アネモネ、こいつをゴーレムのコアに見立てて、魔力を流せないか？」

「なにもしなくてもいいの？」

「ああ、ゴーレムモーターは、回る命令を書き込んだけど、なにもしなくてもいいって命令を書き込んでくれ」

「うーん、多分できると思うけど」

もちろん、こんなことは初めてやるので、アネモネも不安そうな顔をしている。

「頼む。失敗しても大丈夫だからさ」

「解った――むー！」

俺とアキラが作った長いコアに、青い光が染み込んでいく。

「……多分、できたと思う」

「やったぜ！　これがコアになったってことは、俺がアイテムBOXから魔石を取り出すと――」

当然、コアが魔石の魔力を使って、なにもしない――という命令を実行する。

「おら！　どうだ？！」

俺は長いコアを持ちあげて、ガラスにへばりついているスライムに近づけた。

その瞬間——透明な魔物たちがバラバラと飛び上がり、川の中へ逃げていく。

「お！ やったぞ成功だ！ こいつでスライム避けになる！」

「マジかよ！ それじゃ、もっと作って船の周りに取り付ければ、スライムは寄ってこなくなるってことか？」

「そうだ！」

「よっしゃ！ それじゃ、もっと作ろうぜ！」

船の大きさは30フィート、約9m——1mの長さのコアで両舷側を埋めようとすると18本も必要になる。

それは大変なので、1m間隔で片舷で5本——合計で10本のコアを作ることにした。

アキラも、のこぎりで切るのは大変そうなので、アイテムBOXから切断機を出したが、工作機械を動かすためには発電機がいる。電力を沢山食うのでモバイルバッテリーは無理だ。

素早く外へ出ると、発電機を設置してエンジンを始動させた。

温室の中へ戻ると、今度は発電機があつという間にスライムまみれになって窒息した。

当然エンジンが止まる。

「あゝ！ クソ！」

鬱陶しいスライムに、少々いらつく。

「発電機を獲物と勘違いしたのか？」

「虻も馬や牛の体温と二酸化炭素に寄ってくるからなあ」

これでは作業にならない。発電機の近くにさっき作ったゴーレムコアを置くと、蜘蛛の子を散らすようにスライムがいなくなった。

「なんか、スライムというよりは、虫みたいだな」

俺の言葉にアキラも同意する。

「あゝ、俺もそんな感じがしてきたぜ」

彼も帝国でスライムと戦ってきたのだが、ここまで詳しい生態は知らなかったようだ。

発電機が使えるようになったので、1mの十字架の列を10本作った。

切断機があれば、角材のカットなどすぐにできる。

後は紐で結ぶだけ――それならアネモネにも手伝ってもらえる。

「もうちょっと人手があればなあ」

「でも、この温室がなけりゃ、こりゃやばかったぜ？」

「そうだな。まさか、こんなにスライムまみれだとは思ってなかったし……」

コアができあがり、アネモネに命令を書き込んでもらわなければならないが数が多い。

「アネモネ、大丈夫か？」

「うん、ゴーレムを起動するわけじゃないし、コアに命令を書き込むだけだから」

命令さえ書き込まれれば、あとは俺が出した魔石からの魔力を使ってコアが起動する。

「さて、できあがったが、どうやって固定するか……」

「またダクトテープか？」

「いや……」

シャングリ・ラから、両面テープで固定するフックを購入。それを船の縁に固定して、フックでぶら下げる仕様にした。これなら取り外しも簡単にできる。

コアを持って外に出ると一斉にスライムがいなくなる。

「こりゃいいな。虫コナ〇ズより効き目があるぜ」

アキラがコアを舷側に吊るしながら笑っているが、彼の言うとお
り凄い効き目だ。

「魔石の虫除けも結構凄いいけどな」

「ああ、けど魔石じゃスライムには効かないんだよなあ」

「魔物避けの結界は？」

「それは効果があるが――せいぜい数時間ってところだし」

彼の話は、全て実戦経験に裏打ちされているので説得力がある。

「このコアを使ったスライム避けが、どのくらい持つかだな」

「多分、普通に結界の魔法を使うよりは、長持ちすると思う……」

アネモネがサッシの間から顔を出している。

魔導師のアネモネの勘だと、そうらしい。

「もしかして新しい魔物避けを発明しちゃったのかね？」

「そうかもな、ははは」

会話しつつコアを使ったスライム避けの設置を完了した。

船の舷側にハシゴのような十字架が並ぶ。

コアの間隔が空いているので、そこから侵入されるかと思ったが、
問題ないらしい。

「さて、スッキリとしたところで、いきの良いスライムを捕まえる
か」

アイテムBOXからプラ製の衣装ケースを出して、水を入れる。

「アネモネ、こいつを冷やしてくれ」

「解った！ むー！
リフリジレーション 冷却！」

青い光が水に染み込むと、すぐにキンキンに冷える。

「あとは——冷凍庫だな！」

シャングリ・ラから大型の冷凍庫を買う——3万5000円。

俺の実家があった北海道は、1〜2週間の食べ物をもとめ買いをする。

そのために冷蔵庫とは別に冷凍庫を持っている家が多い。

たとえば取れすぎた野菜を調理してから冷凍して保存したりする。昔はこの手の製品は日本製だったのだが、白物家電を作っていた会社が大陸に買われたせいで、今はアチラ製が多い。

「ポチツとな」

落ちてきた白い冷凍庫にアキラが驚く。

「おお！ 冷凍庫か？ それで冷やして運ぶのか？」

「冷えてもすぐには死なないんだろ？」

「ああ、ものすごくしぶといからな」

冷凍庫を発電機に繋ぐとすぐに動き出したが、冷えるのに少々時間がかかるだろう。

「そうだアネモネ。この中を冷やしてくれ」

「うん、冷却！」
リフリシレイション

これで、冷凍する時間を短縮できるだろう。

準備完了——あとはタモだな。

シャングリ・ラで、カーボン製の大型のタモを買う——5500円也。

伸縮できる構造になっていて軽い。

「それでスライムを掬うのか？」

「船に這い上がってこないが、水の中にはいるんじゃない？」

俺は船の縁に足をかけて、水中にタモを下ろした。

アキラに船をゆつくりと進めてもらおうと——すぐにガツツリとした手応えが来た。

「お、重いー!!」

タモが曲がり、今にも壊れそう。

「ケンイチ！ 手伝うぜ！」

アキラが船外機の所から飛んできて、2人でタモを掴む。

身体のひとつが水ってことは、水と同じ重さってことだ。

座布団より少々大きいスライムの重量は30kgぐらいある。

タモからはみ出ている透明な魔物を、逃さないようにそのまま引き上げて、衣装ケースの中へ投げ入れた。

中にはキンキンに冷えた水が入っており、すぐに動きが遅くなる。そのまま衣装ケースの蓋を閉めてアネモネに魔法を頼む。

「アネモネ頼む！」

「むー！リフリジレーション 冷却！」

中で、ゆつくりとニルニルと動いていたスライムは、すぐに動きを止めた。

「よっしゃ！」

再びタモでスライムを掬うと、冷凍庫の中へ突っ込んで蓋を閉める。

「これで逃げられないだろう」

「はあはあ——多分な」

オッサンたちが肩で息をしているが——2人とも祝福持ちなので、疲れることはないが腹が減る。

「ケンイチ、こんなに水中にいるなら、電撃魔法か電気ショックを

かければ一網打尽に……」

そういう漁法もあるけどな。

「水に浸かって電気を使うのは怖いぞ？」

「ゴム長を装備しないと駄目か……」

「それじゃ水中衝撃波はどうだ？ 爆雷の在庫はなくなってしまったがタイマー爆弾ならある」

俺はアイテムBOXから、タイマー爆弾を取り出した。

シャングリ・ラから安いプラケースを購入。タイマー爆弾をセツトしてから、重りを入れてダクトテープでぐるぐる巻にした。

「おい、ケンイチ！ 爆発しないだろうな？」

「大丈夫だ、まだ1分ある。おりゃー！」

灰色に巻かれたプラケースを水中に放り込むと、アキラが船外機で後進をかける。

「あと、10秒！ 3、2、」

秒読みしている途中で爆発して水柱が上がる。

クラークン戦に使った本格的な爆雷と違う。

こいつの威力はそれほどじゃないが、水面に白く濁った透明な物が沢山浮かんできた。

「うえ！ こいつら全部スライムかよ！」

アキラが叫び声を上げたのだが、すぐにバシャバシャと他のなにかが集まってきた。

「アキラ——これ……もしかして共食いしているのか？」

「みたいだな」

水中衝撃波で動かなくなった個体を、他の個体が捕食し始めたらしい。

「うえゝ最悪だな」

気分は本当に最悪だ。

オッサン2人でげんなりして中に戻ろうとすると、ベルが再び温室から顔を出して牙を剥いた。

「シャー!!」

「「えっ!?!」」

オッサン2人が後ろを向くと――突然水面が持ち上がり、現れたのは巨大な赤茶色の土管。

丸く開いた赤い口の中には、ギザギザの歯が幾重にも重なって見える。

巨大な魔物が起こした波で船が大きく揺れて、足場がおぼつかなくなる。

「管虫だ!!」

アキラが叫ぶ。

口の中にスライムが見えるので、大量に浮かんだスライムを目当てに、やってきたのかもしれない。

「こんなところにもいるのか!」

2人で戦闘態勢に入ろうとすると、管虫の口に青い光が集まり始めた。

「むー! エクスプロージョン 爆裂魔法!」

実体化した爆炎が、管虫の頭を吹き飛ばすと同時に、辺りに破片を撒き散らしながら爆風を引き起こす。

オッサン2人がひっくり返り、突風に煽られたガラスの温室がバタバタと倒れ始めた。

ワームの巨体が倒れた衝撃で水面に大きなうねりが起きて、船が

縦に揺られる。

「アネモネ！ ベル！」

彼女は魔法を使うためにサッシから出ていたので、倒れた温室に巻き込まれることはなかった。

ベルも持ち前の素早さで倒れる温室から素早く脱出に成功。

俺たちの所にやってきた。

「にゃー」

「びっくりしたなあもう！」

ホッと胸をなでおろす俺だが、アネモネがしょんぼりしている。

「壊しちゃってごめんなさい……」

サッシのアルミのせいで、出力の調節が上手くできなかったんだろう。

「今のは、しゃーない——なあケンイチ」

「ああ、それよりアネモネとベルが温室の下敷きにならなくてよかったよ」

壊れてしまったのは仕方ない。大体、木枠にダクトテープで固定しただけだったからな。

俺はガラクタになってしまった温室をアイテムBOXに収納した。ついでに船の側面に固定したスライム避けを確認してみるが、損傷はない。

「こりゃ早々に引き上げたほうが良さそうだな」

俺もアキラの意見に賛成だ。

「その前にアキラ——酷い有様だぞ？」

「ケンイチだって」

2人は、飛び散った管虫の体液やらを浴びてしまったのだ。服や顔が緑色に染まり、生臭いにおいで鼻が曲がる。

「アネモネ、洗濯の魔法をかけてくれ」

「わかった」

「あ、でも魔法は大丈夫か？ コアを作ったり爆裂魔法エクスプロージョンを使ったりしたが……」

「大丈夫。ケンイチの出してくれた魔石から、魔力をもらっているから」

「ああ、そうなのか」

事態に合わせた臨機応変な対応、彼女は確実に進歩している。

「若いのはいいなあ。すぐに対応してどんどん上達するからなあ」

「歳をくうと、新しいことに慣れなくてなあ。頭も固くなるし、いやもうほんとうにまいっちんぐ」

オッサン2人で愚痴をこぼしても仕方ない。

青い光に包まれたオッサンたちは、すぐに綺麗になった。

さて綺麗になったところで、あとは――。

「アキラ、管虫の所に船を近づけてくれ」

「オッケー！」

アキラがエンジンを始動すると、ゆっくりと赤く長い巨体に近づく。

スライムはすべて逃げたらしい。爆弾で浮かんでいたスライムもすべてなくなっている――素早すぎる。

いったいどうやって水中を移動しているのやら……。

「この前倒した管虫ぐらいの大きさがあるな――アイテムBOXに入るかな？ 収納！」

俺の杞憂をよそに、管虫の死体がアイテムBOXに吸い込まれた。

「おおっ！ こいつにも魔石があるんじゃない？」

「そうだな。前に倒した管虫もまだ解体してないんだよ。人を雇って解体させてみるか……」

魔石は、ゴーレムコアとの組み合わせで、色々と使えることが解ったからな。

所持している数が多いに越したことはない。

「そうそう、ドローンも落としてしまったんだよね。そこら辺に落ちてないか？」

「少し進んでみるか？」

「頼む」

そのまま50mほど進んだ所で、草の陰に水没しているのを見つけた。

「ありゃー壊れちゃったかな？」

「まあ、緊急事態だったから、しゃーない」

「そうだな」

画像などはコントローラーのほうに残っているから、問題ない。壊れてしまったのなら、こいつはゴミ箱へ入れて新しいのを買う。

俺たちは、やってきた川を再び遡ると、エルフの村を過ぎて湖へ出た。

そこでやっと一息ついた。

「腹減ったな。アキラ、飯を食うか？」

「いいねえ。スライムと管虫騒ぎで食いそびれたな」

「まったく、どうしてあんなった」

アイテムBOXから、朝にもらった弁当を出した。

「サンドイッチに唐揚げだ。」

「アキラ、缶コーヒーでいいか？」

「悪いがビールをくれ」

「はいよ」

まあ、酔っ払っても、祝福の力ですぐに分解できるからな。

それに温室がなくなってしまったので、スピードが出せる。

あと45分もあれば、サクラに到着するだろう。

個人的には、もうちょっと川を下って様子を調べたかったな。

予定外に早く戻ることになってしまったが、冷凍庫の中にはスライムが入っているし予定は達成できた。

結果は上々だ。

182話 第一次五カ年計画

俺は船に改造を施し、この国を縦断しているアニス川へ向かった。主な目的は研究のための材料――生きたスライムの捕獲だが、実際にアニス川が流れている大湿地帯をこの目で確かめるといいうのもあった。

実際に大湿地帯を目にすると、大河がうねうねとひたすら蛇行している景色。

これを運河として利用するとなると――帆船で遡上するのは、かなり難しいと感じた。

この世界の既存のテクノロジーでは難しいが、ゴーレムのコアを使ったモーター推進ならどうだろうか？

コアモーターは魔法で動いているせいか、トルクが凄い。

製材所のデカイノコギリを動かせるだけのパワーがあるなら、船のスクリューだって回せるはずだ。

普段は帆で走行して、難所ではコアモーターを使う。

これならなんとかかなりそうな感じではあるが、まずは小型の実験船など造り、試験を繰り返さなければいけないだろう。

俺とアキラはサクラに帰ってくると、捕獲してきたスライムを使い、崖の上に研究施設を作り実験を始めた。

施設といっても、いつものようにコンテナハウスを置いただけの簡単なものだ。

そのコンテナハウスの中では、今日もアネモネが読書をしている。スライムの実験をすると伝えているので、気持ち悪がって誰も近づかない。

まずは冷凍にして運んできたスライムをカット——小分けにして、プラ製の透明な虫かごに入れる。

この個体は、1円玉ぐらいの大きさの魔石を持っていた。生きている時間が長くなると魔石も大きくなるらしい。

それにしても——まさか異世界でスライムを飼うことになるとは……。

とりあえず雑食でなんでも食うらしいので飼育は簡単。

基本は肉食だが、タンパク質が好きらしい。それなら大豆も食うかもな。

冷凍した状態でも生きているらしいので、解凍をするとそのまま動き出すという。

なんとという生命力。

今回、生きている魔物を運んできたが——この場合、俺のアイテムBOXが使用できないので少々面倒だ。

生き物はアイテムBOXには入らないので、この便利さに慣れていると、普通のことが大変だったりするのを改めて実感した。

草と水で浸した透明な虫かごに、細切れスライムを入れ、じつと観察する。

「アキラ、これって本当に生きているのか？」

「多分……」

そのまま観察を続けていると、溶けたスライムがそのまま動き始めた。

透明なケースの中を透明ななにかが這い回っている。

「すげー！ 面白え！」

まるで、初めてクワガタなどを採って喜んでいるガキだ——自分でそう思う。

傍から見たら、俺の目はキラキラしているのに違いない。大きな個体で分化した状態から切り出したので、他の器官などに分化している部分は、動き出すのに少々時間がかかるようだ。

見てばかりはいられない。

飼っていると情が移ってしまうのだが、こいつは魔物だ。

駆除に使う毒物などの実験を繰り返す。

油類は変化なし。高濃度のアルコールは効き目があるが、この世界では手に入り難い。

俺がシャングリ・ラで購入して散布するとしても大量に必要なだろう。

塩よりも害が少ないという利点もあるが……。

毒物も試してみる。

殺鼠剤や、エチレングリコールなども変化なし。

試しにG駆除剤を試してみると効果があつた。

こいつの成分はピレスロイド——除虫菊に含まれている成分だ。

それなら除虫菊を植えて駆除に使えばいい。

除虫菊の種も苗もシャングリ・ラに売っているし、キク科の植物はいくらでも増えるため費用が安い。

この世界の生態系を崩す可能性があるが——以前、アキラと話したとおり、シャングリ・ラなんて能力を俺に使わせている神様の責任だ。

除虫菊のいいところはもう一つある。スライムは共食いをするため、駆除剤で死んだスライムを食わせると、そいつも死ぬことが判明した。

それを使えば連鎖的に駆除ができる。

スライムの生態は解ったので、小さな1匹だけ残して処分。
ペットとして飼うことにした。

閉じ込めて餌をあまりやらなければ増えることもない。

なんでも食うし飼育は簡単だ。

虫などを入れると、かなりのスピードで触手を伸ばして捕らえる。
見ているだけでも楽しい。

そんな俺を見て、アネモネ以外の女たちはドン引きしている。

魔物を飼うなんて精神構造が解らないと言う。

あくまで研究のためなのだが……理解されないようだ。

研究といえば――スライムの試食は続いている、多めに食べても
問題ない。

食えるのは解ったが、家族の理解を得られていないので、食事に
出すのは難しそうだ。

俺とアキラのツマミにしかないだろう。

サンバクは食材として興味を示していたが、スライムから作った
香料だけを使ってもらうことにした。

お菓子や飲み物などに使えるだろう。

心の安らぎのためにスライムを愛でていると、ドン引きされるの
で、崖の上の施設で眺めている。

俺の趣味を理解してくれるのは、同じ世界からやってきたアキラ
だけ。

テーブルと椅子を出し彼にビールを奢ると、俺の趣味に付き合っ
てもらう。

「帝国で、虫とか飼っているやつはいなかったのか？」

「は、いない。この世界で虫ってのはすべて害虫扱いさ」
「益虫もいるの？」

「そういう研究はまったくされていないからな」

殺虫剤の類いもほとんどなく、あるのは虫よけの魔石だけ。
便利な魔法があるので科学が発達しないってわけだ。

「俺が、トンボやら甲虫を捕まえただけで、ドン引きするからな」
アキラがビールを飲みながら笑っている。

アイテムBOXには生き物は入らないが、珍しい甲虫のサンプル
なら、シャングリ・ラで買取ができないだろうか？

そんなことをするぐらいなら、ドワーフの作ったナイフを買取し
てもらったほうが金になるのだから。

虫を飼う人間はいないが——魔物を飼う例はわずかながら存在す
る。

召喚獣として使役するためだ。

「それでも、スライムはいないからなあ」

「なにか原因があるのか？」

「他の魔物と違って、まったく懐かないらしい」

「ああ、なるほどなあ」

虫が懐かないのと一緒にだが——行動を見ていると虫よりは高度な
知能を持っているように見える。

——アニス川から帰ってきて、スライムの飼育を楽しんでいたあ
る日。

ダリアから黒い馬車に乗ってマロウがやってきた。

マロウ商会の関係者や代理人は毎日、ハマダ領を訪れているのだ
が、マロウがやって来るのは久しぶりだ。

「マロウさん——いや、マロウ久しぶり。あゝ慣れないなあ」

「はは、お久しぶりでございます、ケンイチ様。ご壮健で、なによ

りでございます」

世話になりまくって、プリムラのお父さんだと言うのに呼び捨て——慣れないが、俺は貴族なので仕方ない。

常に他人の目があるのだ。

俺と対等に会話をしては——俺が許しても、他の人から見ればマロウ商会が不敬をしているようにしか見えない。

そうなるマロウ商会の評判に関わる。

小さな家の前に置いたテーブルで、彼と世間話や仕事の話をする。テーブルの上には飲み物。俺はコーヒーだが、マロウはオレンジジュースにした。

屋敷もなく、こんな場所で打ち合わせをするなんて、この領ぐらいのものだ。

これだから辺境伯は変人だと言われているらしい。

話していると、マロウは血色もいいし元気そうだ。健康が一番だからな。

せっかく商売が上手くいっているのに、病気をしてしまったては元も子もない。

「そうそう、鳥を使った通信は順調か？」

プリムラに伝書鳩の話をしたら、すぐに使える鳥種を探して実用化したらしい。

自転車もすぐに実用化してしまったし、マロウ商会の商品開発力はすごいものがある。

「はい！ 獣人の特急飛脚より速いので、都市間の連絡に重宝しております。これもケンイチ様のお陰でございます」

確実性が少々心配だが、大事な書類などは少々遅くても飛脚を使えばいい。

たとえば道が通行止めになって、応援を求めたいときなどは重宝するだろう。

実際、街道に架かった橋が落ちて、通行止めになって困ったりしたからな。

「王都への街道で落ちていた橋の復旧は？」

「いまだ仮橋のようですが、通行はできるようです。ケンイチ様のお力があればすぐに復旧できるのにと——商人たちも話しております」

「他の領にまで行って、俺がデカイ顔をできないからな。他の貴族の面子を潰してしまう」

「貴族の面子より、民の心配をしてほしいものです。おっと今の発言は聞かなかったことに……」

「解っている。俺もそう思っているからな」

そうそう、ダリアにも行かないとな。

住宅の建物をゲットする仕事があるし、ダリア近辺を治めている、アスクレピオス伯爵にも挨拶をしないと。

「アスクレピオス伯爵は、ハマダ領のことをなにか言っていたか？」

「王族の酔狂にも困ったものだ……あの、申し訳ございません」

「いやいや、ははは——まあ、そのとおりだし」

突然なにもない所に辺境伯領などができて、王族であるリリスが嫁いでるのだから、そう言われても仕方ない。

すでにリリスが辺境伯領に嫁いでることは、知れ渡っているようだ。

娯楽がなく噂好きな民が、こんな面白そうな話を放っておくはずがない。

俺が考えている事業——川を運河に使っての輸送事業のことをマロウに話しておく。

そこにアキラがやって来た。アキラにもコーヒを出す。
彼はビールを飲みたいところだろうが、さすがに客の前では駄目だ。

「おお、マロウさん。久しぶり」

「これはアキラ様。いつもお世話になっております」

マロウがペコリとお辞儀をした。

彼の家族は、マロウの商会の護衛をしていたり、彼自身も俺から借りたトラックなどで輸送の仕事をしている。

今はそれでもいいが、いずれは俺の能力を使わない方法に転換していかないと駄目だ。

トラックも壊れたら修理ができないし、もしできたとしても、俺になにかあればそこでおしまいになってしまう。

そのためにも新しい輸送力が必要だ。

「なんですと？ アニス川を運河に？！」

「そうなんだ。このデカイ湖の反対側に、アニス川に抜ける水路があるんだ」

「そこを通れば、アニス川に抜けられると？」

「アキラと2人で、現地まで行って確認してきた」

「そうなんだ、スライムが山のようにいてな、大変だったぜ！」

スライムと聞いて、マロウの顔色が変わった。

「確かにアニス川が流れている大湿地は、スライムの住処だと聞いております」

「そこで怪我の功名と言うべきか——新しいスライム避けを開発した」

「スライム避けでございますか？ 魔石などの結界はスライムには効果がないと聞いたことがありますか……」

「違う、魔石じゃない。これだ——」

俺は、アイテムBOXからゴーレムのコアを取り出した。
船で使ったハシゴのように繋がっているものではなくて、十字架
の単体。

普通のコアで、アネモネに作ってもらった。

「こ、これは？」

「これは、ゴーレムのコアなんだが、これを使ってスライム避けを
作ることに成功したんだ」

「ほう！ それは是非この目で拝見したいのですが……」

「それには、生きたスライムが必要になる」

「さすがに、それは無理でございましょう」

俺はマロウに少し待ってもらい、崖の上の研究所から飼っていた
スライムを持ってきた。

彼に、透明な虫かごに入れたスライムを見せる。

「こ、これはスライムでございしますか？」

「そうだ研究用に飼っているものだな」

マロウも興味深そうに透明な箱の中で動き回るスライムを眺めて
いる。

「そして、ここに取り出した魔石とゴーレムのコア」

コアをスライムに近づけると、反対側へ飛ぶように逃げた。

逃げたほうへコアを持っていくと、また反対側へ――。

「た、確かに、スライムが逃げておりますな！」

「こいつを船の舷側に貼り付ければ、スライムを防ぐことができる。
実際に試して、この効果が確認できた。なあアキラ？」

「ああ、間違いねえ。まったく寄ってこなくなる。まあ他の魔物に
は効き目がねえから、油断はできねえけどな」

「なるほど……しかし、川を遡上するとなると帆船では……」

「そこも考えてある」

俺はアイテムBOXから船の模型を取り出した。

ゴーレムのコアを使ったモーターが取り付けられているスクリュー推進船だ。

「これは……」

「こいつは魔法で動く船の模型だ。俺の使っている船は俺やアキラしか動かせないが、こいつなら普通の人間にも魔石があれば動かせる」

俺は、川からプラケースに水を汲んで持ってきて、そこに船を浮かべた。

「ここに魔石を入れる――」

模型を持ち上げて、小さな豆粒のような魔石を船にセットすると、スクリューが回りだした。

それを水に入れると、小さな船が水面を走り出す。

「おおおっ！ こ、これ売れませんか?!」

どうやらマロウは、船の玩具としてこれを買りたいらしい。

「ええ？ 通常、ゴーレムを使うためには王族の許可がいるから、売るのはマズいと思うがなあ。俺は辺境伯なのでゴーレムの使用について認められているが……」

「そ、それはそうでございますね……これもゴーレムでした」

彼もゴーレムの使用には、国の許可があると知っていたようだ。

「しかし、通常許可がいるのは、人型のゴーレムのことで、このような格好でゴーレムを使うことは想定していないはず。お城にお伺いを立ててみるか……」

「是非、お願いいたします」

マロウがテーブルに両手をついて、頭を下げた。
こいつはデカイ商売になると踏んだのだろう。

「これ——コアモーターって言うんだが、こいつが使えるようになれば、ドライジーネも馬車も動かすことができるようになるぞ?」

「ほ、本当でございますか?!」

「だが、このような玩具ならいいが——大きなものを動かそうとすると、大きな魔石が必要になる」

「た、確かに、そのような魔石となると中々手に入りませんなあ……」

「けど玩具は売れるかもな」

作ろうと思えばポンプも作れるだろうが、魔石の問題は如何とし難い。

「人工で魔石が作れば、世の中がひっくり返るんだがなあ——アキラ、帝国でそんな研究とかしてなかったのか?」

「はあ? 聞いたことがないぜ? 魔石って、魔法を使うときの補助——そんな感覚しかなかったからな」

魔法先進国の帝国でも作ってなかったってことは、無理なのか……。

メイドを呼び、ユリウスを呼んでもらう。

その間、しばし考えていたのだが——いいことを思いついた。

「そうだ——スライムを養殖したらどうかかな?」

「はあ?」

アキラが、何を言い出すんだ? みたいな顔をしている。

「スライムならいくらでも増えるだろう? 箱に入れたスライムを大きく育てて、魔石を取る」

「できないことはないと思うが……」

「どのぐらい育てたら魔石が大きくなるか——などの検証が必要になるだろうけどな」

「まさか魔物を養殖するなどという話が出るとは……」

俺の提案を聞いたマロウが腕を組んで唸っている。

「しかし、上手くいけば魔石が安定して取れるようになるぞ。箱から出さなければ、他の魔物と違って危険は少ないし」

「ううむ……」

そこにユリウスがやってきた。

「ケンイチ様、お呼びでございますか？」

「ああ、お城に手紙を書いてくれ」

「承知いたしました」

内容は、人型ゴーレムの起動には国の許可がいるのだが、ゴーレムコアを利用するだけでも、許可が必要になるのか？——という内容だ。

一緒に、カールドンが作った扇風機の模型を送ることにした。

ゴーレムコアを使うことで、このようなものが作れるようになった——という説明つきだ。

早速、送る手続きを行なってもらう。

「それではユリウス、王都まで送ってくれ」

「かしこまりました」

俺とユリウスが手続きをしている間も、マロウは船の模型を睨んでいた。

「ううむ……ケンイチ様。もしかしたら——このコアモーターとやらと魔石の組み合わせで、我々の生活が一変するのでは？」

さすが儲け話に鼻が利くマロウ、その可能性に気がついたようだ。

「上手くいけばな。そのためには魔石の安定供給が必要になる。魔石がほしいからといって、毎回魔物と対峙しては、コストもかかるし、命がいくつあっても足りない」

「おそらく――魔石の使いみちが増えれば、値段が高騰するものと思われますな……」

「そうだ。買い占めて値段を釣り上げるやつらも出てくる。魔石ギルドなんてものもできるかも」

「香辛料を独占していた連中と同じですな」

各都市にあったスパイスシンジケートは、アストランティアのシンジケートが壊滅して、自由売買が始まった途端に崩壊した。

少々時間がかかって、アストランティアでスパイスを買った方が安いのが当然だ。

俺という貴族の後ろ盾を得たマロウ商会でもスパイスを売り始めたので、シンジケートが持っている在庫も早めに処分しなければ、どんどん損失が広がる。

すでに、それで倒産した商人もいるらしい。

もしかしたら俺も恨まれているかもしれないから、注意したほうがいいかもな。

危険なのは確かだが、今の俺は貴族だ。上流階級にガチで喧嘩を売る商人がいるとも思えないが……。

基本、貴族の敵は貴族。商人と貴族が敵対することはないが、双方がグルになって荒稼ぎをしていたやつらなどが、倒産に巻き込まれたりしていれば、俺を恨んでいることもありえる。

テーブルにリリースがやってきた。

「マロウか、元気なようじゃな」

「これはこれは、王女殿下！ ご挨拶にも伺わずに申し訳ございません……」

「よいよい。そういうのは王宮だけでうんざりじゃ」

やってきたのはリリスだけではない。

「なあに？　この子、商人？」

リリスと一緒にやってきたのは、セテラ。

それにしても、この子って——まあエルフから見れば、マロウでも十分に若いんだろうけど。

リリスとセテラもテーブルについたので、飲み物とお茶菓子を出す。

「エルフ！？　プリムラから、辺境伯領にエルフ様が来ていると聞いておりましたが……」

「彼らと交流と交易の話が進んでいてな」

「それでは、エルフの由来の商品もマロウ商会で扱えると……」

「いや、彼らは必要最低限のものしか生産しないので、取引は微々たるものだと思う」

「そうですか……それは残念でございます」

「さっき話したアニス川に繋がる水路の途中にエルフの村があるんだ」

「ほう——気難しいエルフを説得なさるとは、さすがケンイチ様でございます」

俺たちの話を聞いていたセテラだが、少々異論があるようだ。

「私たちって、そんなに排他的かなあ」

「俺が初めて出会ったときに攻撃されたが？」

「ええ？　そうなの？　男たちでしょ？　あいつらビビリだからあ

セテラはそう言うのだが——エルフは排他的というのが、一般の総意のように思える。

「それで、例の灰から竜が出てくるような話をマロウ商会に話していたのかえ？」

「リリス——一応、実現できる見通しはたっていると思っているんだが……」

「恐れ多くも王女殿下、辺境伯様の言うとおりでございます。聞いた限り幾多の困難も予想されますが、実現は可能だろうと……」

「王国一の大店が言うのだ、そうなのだろうのう……」

リリスはお茶菓子を口に放り込んでいる。あまり信じていないようだ。

俺は、アイテムBOXからスケッチブックを取り出して、大雑把な開発計画書を皆に見せた。

開発計画書とは名ばかりで、ただの落書きだが。

「湖に繋がる水路では、小型船しか通れないが——いずれはアニス川まで森をぶち抜いて道路を敷設、川の近くに港を作ればいいと思うている」

「ケンイチ様！　ここまで大型船が遡上できるのであれば、王都の近くまで行けるのでは？」

「俺もそれを考えているのだが……」

「す、素晴らしい！　私も燃えてまいりましたぞ！」

いかん……ちょっと火をつけすぎた。

彼は、商売魂に火がついてしまうと、たとえ火の中水の中、どこへでも行ってしまう。

戦場でも、魔物がいる森でも、呐喊してしまう——そんな男だ。こんなことになってプリムラに怒られてしまうな。

「ふうん、話を聞くだけで、正気の沙汰とは思えないけどお……」
エルフには評判はよろしくない。

1000年同じ暮らしをしていて変化を嫌う彼らには理解できないのかもしれない。

マロウも乗り気なので、資金を出してくれることになった。

「本気か？」

「マロウ商会金儲けの秘訣——『誰もいない道にこそ、宝が転がっている』」

「そりゃそうだが……」

彼の決意は固い。

それにはまず、こちらの技術で小型船を作って実際に運用できるのか調べなくてはならない。

コアモーターや、スライム避けのコア結界の耐久性や、動作時間なども重要になるだろう。

運河計画は——少しずつだが実現へ向けて動き出した。

「アキラ、アニス川に繋がる水路だが、どのぐらいの大きさの船なら通れそうだと思う？」

「そうだな——あの水路はそんなに蛇行はしてなかったんで、長さは60フィート——20mぐらいまでいけると思うが、幅がなあ」

「幅は、いつも使っている船からちよいプラって感じで、長さが20mぐらいか……」

「まあ、そんなところだな」

そんな喫水の深い本格的な船を作れる大工はここらへんにはいない。

それに河口から出た船は帆を張り海も走る——つまり帆船。

船を作るなら船大工が必要。

「ケンイチ様、船の建造はオダマキに行くしかありません」
マロウが初めて聞く地名を口にする。

「オダマキ？ 初めて聞くな——都市の名前か？」

「王国の一番南に位置する海岸沿いの都市です」
マロウの話では、人口15万人ほどの街。

治めているのは男爵らしいが、長年陸爵を断っている変わり者らしい。

南の果てらしく王国とは最も縁がなく、海沿いに船を利用して独自に帝国との貿易をしているという。

そのために王国の援助がなくても、まったく困らないようで、一つの小国といってもいい。

造船技術が一番進んでいるのもその都市らしい。

「へえ、そんな都市があるのか——行ってみたいな……」

「お！ ケンイチ、行くのか？」

アキラがすっかりと乗り気だ。

彼は元世界でも全世界を渡り歩いた男。

とりあえず面白そうな場所があれば行ってみる男だ。

「船の建造を頼んでみたいし……それならコアモーターの専門家のカールドンも連れていくか……」

俺たちは遠征の計画を練ることにした。

183話 南へ向けて

湿地帯を流れるアニス川を運河に使う計画を、ハマダ領にやってきたマロウに話したところ、メチャ乗り気だ。

ぜひとも挑戦してみたいと言う。

彼は商売になると思えば、危険な場所でも呐喊してしまう男だが、無謀なだけではない。

商売に鼻が利く本物の商人。俺からの話を聞いて、とてつもない儲けになると踏んだのだろう。

まあ川を運河に利用できれば、海運を独り占めできるからな。

他の商人が真似したくても、俺が考えたスライム避けや、ゴーレムのコアを使ったモーターなどがないと実現不可能だ。

マロウがアストランティアの支店に行くと、すぐにプリムラがサクラにやってきた。

船の話を彼から聞いたのだろう。

家の前のテーブルに座り、彼女と話す。

「プリムラごめんよ。このままだと、お義父さんを危険なところに行かせてしまうよ」

「いいえ——こうなると絶対に父は話を聞きませんので、なにを言っても無駄です」

「本当に親子だなあ……」

「うふふ——それと南のオダマキに行く話があるようですね」

「ああ、ちよつと大きくて本格的な船を作るとなると、オダマキじゃないと作れないと聞いた」

「そうですねえ。海も進むことになりますし、荷物を積めるように

もしないといけませんから、本格的な商業船が必要になりますね」

「だが、いきなり大型船は作れない。まずは小型船での試験だな」

プリムラの話では、オダマキへの遠征には彼女も同行するようだ。

「戦闘などは、まったく役に立ちませんが、商売となれば私の出番ですよ」

「よろしく頼むよ」

「はい！ 任せてください」

活躍のチャンスがきたプリムラは、フンスと気合を入れている。

探索や戦闘では彼女の出番はないからなあ。

リリースのように、そんなこともお構いなしについてくるほど神経も図太くないし、心臓に毛が生えてもいない。

「ついでに、ダリアでの仕事も片付けようと思うんだが、住宅の確保はできる？」

「はい、先日新たに5軒の住宅を確保して、合計で25軒ですね」

「25か——さすがに、アイテムBOXに入るかな？」

「アストランティアの10軒は入りましたよね？」

「まあ入らなかったら、何回か往復すればいい。俺の召喚獣なら日帰りもできるし」

彼女にスライムの養殖についても話す。

「魔物の養殖ですか？」

「ああ、魔石を確保するためにな。スライムならなんでも食うし、いくらでも増える。他の魔物より飼いやすいだろう」

「普通は、魔物を飼ったりはしないのですが……」

「これから魔石は、かなり重要な物資となる可能性が高い。常識に囚われていては駄目だ。お義父さんは興味津々だったぞ？」

「魔道具が今以上に普及すれば、魔石の需要も伸びるというわけですね」

この世界に石炭はないが、もしかしたら魔石で産業革命を起こせるかもしれない。

「そうだ。森の中で戦闘をして魔石を集めるより、スライムを飼ったほうが安全だろう？」

「安全だとは思いませんが……」

たとえば――スライム避けのコアを使った柵を作り、それで囲んだりすれば、スライムを内側から逃がすことはない。

男性と女性の違いもあるのだろうが、スライムが生理的に嫌なのかもしれない。

Gが金になるからといって、あの黒いのを飼う女性はいないだろうしなあ。

プリムラと話していると、リリスとセテラがやってきた。

「はい」

セテラが手を振っている。

「これは、リリス様とセテラ様」

「ああ、様とかいらないからあ」

エルフには様つけする者が多い。ものすごく年上なのが間違いないからなのだが。

当のエルフたちは、年上扱いされるのが嫌なようだ。

俺はエルフ語も解る指輪を付けているのだが、セテラがここで話しているのは共通語といわれる、普通の人間――只人が話しているもの。

もともと少し喋れたようなのだが、アネモネと一緒に勉強をしているようだ。

「また商売の話かえ？」

リリスが席についたので、ケーキと飲み物を出す。

「そうだ、船を作りにも南に行く話をしたろ？」

「貴族が船を持つなどと、聞いたことがない——ムグムグ」

リリスが早速ケーキをパクつき始めた。

エルフはこの手のクリームの類いは食べない。

興味はありそうなのだが、彼らの教義があるのだろう。

セテラには烏龍茶を出した。

「ん？ 凄く美味しいお茶だねえ！」

烏龍茶はエルフの口にも合うようだ。

「王侯貴族が船を持ってもおかしくないと思うがな。武装すれば強力な兵器になるし」

何気に話した言葉に、どこからか反応があった。

「兵器ですと！」

走ってやって来たのはカールドンだ。

彼は魔道具の専門家だが、武器ヲタでもあることがサクラに来て判明した。

俺がシャングリ・ラで購入した、コンパウンド式のボウガンを見て感激。

俺にあれこれと質問してきたのだ。

「地獄耳だな……」

「ケンイチ様がおっしゃる兵器ならば、この世にあらざるような革新的なものでございましょう？」

俺はアイテムBOXからスケッチブックを取り出すと戦列艦を描いた。

この世界には大砲がないので、ズラリと巨大な弩砲を搭載してい

る。

「おおお！ これは！」

「複合式の弩砲の巻き上げにコアモーターを使えば、素早く装填できる」

「なんとすばらしい！」

「移動にも、コアモーターが使える」

俺は、アイテムBOXから模型の船と、水が入ったプラケースを出す。と浮かべてみせた。

マロウに見せたものと同じものだ。

「おおお！ 羽根車に風が当たると風車になるし、逆に羽根車をコアで動かせば、風を起こせる」

彼はコアモーターを使って扇風機をすでに作っている。

「風の流れを起こせるってことは――」

「水の流れも起こすことができる！ なんていう僥倖！」

カールドンが空を仰いで両手を広げた。

彼はこのポーズが好きなようだ。

「こいつを使って、アニス川を遡ろうと思ってな」

「な、なんと！ 私は、ワクワクが止まらないのですが！？」

彼の目が子どものようにキラキラしている。

「あれ？ それじゃ一緒に船を作り、南の港まで行く？」

「もちろんでございます！」

カールドンをどうやって連れていかうかと悩んでいたのだが、杞憂だったみたいだな。

「そんな戦う船を作ってどうするの？」

セテラがちびちびと烏龍茶を飲みながら質問をしてきた。

「帝都にも川があれば遡って攻撃ができるし、海から沿岸の都市を攻撃できる」

「ええ？ ケンイチって実は剣呑な只人？」

「まあ、あくまで一例だ。今回、作るのは商船だし」

「あやしい……」

だが、アニス川に港を作ることができれば、ハマダ領は海軍力も持つことができる。

「帝国の帝都に川って流れているのか？」

「はい、流れていますよ。ドーラという大河です」

カールドンが帝国の地理を説明してくれた。

「それなら船が使えるな。たとえば帝国が王国に攻めてきたとする
だろ？ まずやつらは、ベロニカ峠を越えてくる」

「そうじゃろうのう」

「峠を崩して足止めしている間に、俺が船を使ってドーラ川を遡り
帝都を急襲すれば、帝国軍は撤退せざるを得ないだろう？」

「そ、そのような戦など聞いたこともない！」

「いいえ、リリス様。ケンイチ様のおっしゃることは、実に理にか
なっております」

カールドンの言葉に、リリスが腕を組んで考え込む。

「むう……そのような恐ろしいことを考えていようとは……」

「誤解だよ誤解。まずは商業に使うことが前提だからな」

平和目的が第一だが、せっかく作ったものなら他にも利用すべき
だ。

残念ながら、この世界に綺麗事は通用しないし、幾度となく戦も
起こっている。

俺も領主になったのなら、この地と民を守らなくてはならない。

それに戦うのは戦争だけではない。

俺とカールドンの専門的な会話を黙って聞いていたプリムラに、海のことを聞く。

「プリムラ、海賊ってのはいないのか？」

「いますよ」

「それなら武器の準備もしないと駄目だな。商隊に護衛が必要なように、商船にも武器がいる」

「コアモーターを装備している船なら、帆船に後れをとることはないと思いますが」

まあ、カールドンの言うとおりだな。

帆船なら風まかせだが、モーター推進なら好きなポジションを取れるってわけだ。

皆と話しているとベルがやってきた。

「にゃー」

「よしよし、お母さんチュール食べるかい？」

「にゃー」

ベルがチューブのお菓子を、ペロペロしている。

「なんでお母さんの？」

セテラが烏龍茶を飲みながら苦笑いをしている。

「まあなんとなく、ははは。彼女も否定しないし」

「にゃー」

「妾も行くぞえ！」

「護衛にはアマランサスを連れていくから、リリスは今回留守番を

頼む」

「むう……」

リリスは不満のようだが、次はアマランサスを連れていくって約束だからな。

それに護衛ならアマランサスの方が適任だし、リリスとアマランサスのどちらかが、領主代行として残っていないと困ってしまう。

そのままダリアー——オダマキへの遠征のための準備が、つつがなく進んでいった。

—————◆◆———

——ダリアへの出発当日。

朝飯を食べたら、出発の準備をする。

ダリア近辺での仕事は色々があるが、それを済ませたあとは、そのまま南のオダマキへ向かう。

サンタンカの加工場では、俺のアイテムBOXに入っているクラークンを使ってイカクンを作っている。

俺がしばらく留守にすると、イカクンの原料を補給できないので、スモークサーモンの加工へ注力してもらう。

家の前から出発するため皆を集めて注意事項などを伝える。

最初の予定どおり、リリスには留守番をしてもらい、代わりにアマランサスを連れていく。

一緒に行けることになったアマランサスはニコニコ顔。

護衛としてはミヤレーとニヤメナも、いつものように欠かせない。彼女たちの鼻と耳——索敵能力、追跡能力は、俺たち只人には真似できないものだから当然の選択。

ハマダ領の大魔導師アネモネと魔道具の専門家カールドン、マロ

ウ商会からマロウとプリムラ、同商会の番頭も同行する。

「それでは、1週間から2週間ほど留守にするから、領を頼む」

「む——任せてたもれ」

並んでいるメイドの前でむくれているリリスは、1人だけ留守番なのが、やっぱり不満のようだ。

その横には紋章官のユリウスもいる。

彼は貴族の仕事の全般に通じており、とても優秀だ。

「ケンイチ様、留守はお任せ下さい」

まあ、彼もいるので、領の業務のほうは大丈夫だろう。

この領の近くに山賊がいるって話も聞いたこともないしな。

領のパトロールには獣人3人組がいるし、エルフのセテラもいる。

「いってらっしゃい。領主ってのは大変だねえ」

セテラが、ニコニコと笑っている。

「君も行きたいとか言い出すのかと思った」

「ええ？ 海なんて嫌だよ。臭いし、あんな所に行くエルフなんていないってえ」

そうなのか。

「臭いって知っているってことは、一度は行ったことがあるんだろ？」

「まあね。近くまでだけど、あれは我慢できなかったよお」

確かに森の中に住むのが基本のエルフに、海辺は似合わない気がするが……。

「聖騎士様は、海に行ったことがあるのかえ？」

アマランサスが俺とエルフとの会話に入ってきた。

「まあな。海で泳いだこともあるし、釣りをしたこともあるぞ」
俺の言葉に、セテラは嫌そうな顔をして舌を出している。

今回はリリースが行かないので、メイドも連れていかない。

アマランサスがいるのだが、彼女は奴隷の身分なのでメイドの世話などを自ら拒否している。

なぜに、わざわざ不自由な選択をするのかは意味不明だが、奴隷紋を外すつもりはないようだ。

一緒にいけなくて悔しがつているのは、リリースだけではない。

「くくく、私が一緒にできないとは……」

無念の表情をしているのは料理人のサンバクだ。

「まあ、休暇が与えられたと思ってくれればいいよ」

「いいえ、普段作れないような料理の試作をする、いい機会に恵まれたと思うことにいたします」

「おいおい、メイドたちを試食の実験台にするんじゃないよ？」

「なにをおっしゃいます。これもメイドの仕事のうちでございましょう」

彼の言葉を聞いたメイド長のマイレンが困った顔をしている。

「あの——サンバク様？ スライム料理は……」

「ほら、メイドたちも嫌がっている」

彼に近寄ると、ひそひそ話をする。

「まずは、甘いものから攻めたらどうだ？」

「なるほど……」

俺はアイテムBOXから、グミを取り出し口にした。

クニクニした噛みごたえ——元世界にあったグミによく似ている。

これもサンバクと一緒に作ったものだ。当然、原料はスライム。あの透明な魔物は塩漬けにすると、日持ちすることも解った。

「ケンイチ、私にもちようだい！」

よそ行きの青いローブを着ているアネモネが、俺からもらったグミを口に入れ美味しそうに微笑む。それを見たりリスが声を上げた。

「ケンイチ！ 妾にもそれをたもれ！」

「いいのか？ 原料はアレだぞ？」

「構わぬ！」

俺からもらったグミを、彼女はしばらく見ていたのだが、覚悟を決めたように口に放り込んだ。

「ぬぬぬ……ほう！ 食べたこともないような食感。これは癖になるし、美味しい！」

「サンバク、リリースにもこれを作ってやってくれ」

「承知いたしました」

そこにアキラがSUV車のプ○ドに乗ってやって来た。

今回は、彼のプ○ドと俺のラ○クルの2台で行く。

「おいケンイチ！」

「オッス！ アキラ」

「オッスオッス！」

「行く前に、バイオディーゼル燃料を満タンにしようぜ」

「オッケー！」

アキラの言葉に、ミャレーが反応した。

「オッケーにゃ！」

「ふう〜旦那といると退屈しないで済むぜ〜。こんどは海かよ。王

国中を制覇できるな」

ミヤレーとニヤメナは、車に乗り込む前に準備体操をしている。

「別に断ってもいいんだぞ？」

「へっへ、冗談！」「にゃ！」

「まったくアストラランティアのボロ屋の隙間で寝泊まりしてたときとは、大違いだぜ」

「そうだにゃー！ 初めて会ったトラ公はボロボロだったにゃー」

「うるせい！ あのときの俺とは違うんだ！ 見ろ！ このピカピカの毛皮を！」

ニヤメナの虎柄の毛皮は、陽の光に輝いている。

「よろしく頼むよ」

「旦那、任せなつて！」「うにゃ！」

獣人たちは、海に行くのに抵抗はないようだ。

ニヤメナはダリアまでは行ったことがあるらしいが、その先は知らないと言う。

車両のメンバー分けは――俺の車に、アネモネとアマランサス、そしてプリムラ。

3列シートの後ろには、獣人たちの2人。

アキラの車にはカールドンが乗っているが、マロウと商会の番頭も乗る予定だ。

港町のオダマキに支店を出すつもりらしい。

船を建造して取引をするなら、支店が必要になるからな。

そこに森から黒い影がやってきた。

「にゃー」

俺の脚にベルが身体を擦り付けてくる。

「おい、お母さんも行くのか？」

「にゃー」

「マジか」

それじゃ、アネモネと一緒に乗ってもらおうとするか。

道案内をもらうプリムラには、助手席に乗ってもらう。

車のタンクも満タンになったので出発する。

皆で車に乗り込むとエンジンを始動。

列になって見送りしてくれているリリースとメイドたちに、手を振る。

「それじゃ行ってくるぞ」

「「「いってらっしゃいませ、ご主人様！」」」

A TセレクタをDに入れて、車で走り出した。俺の車の後ろにはアキラのプ○ドがついてくる。

車には以前取り付けた無線機があるので、向こうと会話ができる。

以前なら街道へ向かうには、サンタンカの近くまで行ってからぐるりと迂回するルートであったが、今は直線道路ができている。

ゆっくり走っても、10分もすればアストランティア近くに出るわけだ。

街道に到着したら、右に進路を取り森の中へと進む。

ダリアからバイクに乗って逃げてきたときには、オドメーターで100 kmぐらいだったはず。

『ケンイチ、どのぐらいの距離があるんだ？』

アキラからコールが入った。

「ざっと100 km」

『それなら50 kmで走っても2時間ってところだな』

背の高い木々が立ち並ぶ木漏れ日の中を走ると、ダリアから逃げ

てきたときのことを思い出す。

『アキラ殿！ それはそれは！？』

『この魔導具で向こうの乗り物と話ができるんだ』

『なんと！ 素晴らしい！』

なんかアキラと一緒に乗っているカールドンが盛り上がっている。

「まさか、貴族になってダリアに戻ることになるとは……」

「森の中から、私を置いて逃げてしまいましたからね」

「ごめんよ、プリムラー——まだ怒っているのかい？」

「別に怒っていませんけど！」

俺とプリムラの会話に、後ろからアマランサスの声が聞こえてくる。

「なんじや聖騎士様は、プリムラを置いて逃げてしまったのかえ？」

「俺が独自魔法ユニークを使えるってことがバレたら、貴族が探し始めたからさあ。マロウ商会にも迷惑がかかると思ってな」

「そうなの——商人が貴族に黙って、そんな魔導師を囲っていたと解れば、吊し上げを食らうのもあり得る話じゃな」

「だろ？」

「そ、そんなことはありません！ そ、それに私にだって自負があったんです……ケンイチは私を選んでくれるだろうと……」

プリムラの言葉に、後ろから突っ込みが入った。

「ケンイチは私を選んでくれたんだよね」

「くっ！ それを、こんな子どもに……」

「子どもじゃないから！」

「これ、喧嘩するんじゃないよ。アネモネはまだ魔法が使えるって解らなかったし、放置するわけにいかないだろう」

「そうだとしても……」

「一言相談があっても、よかったのでは——とプリムラは言いたいのじゃろ？」

「そうです！」

「ごめんよ、悪かったよ」

もうとつくに許してくれていると思ったのに、未だに尾を引いているらしい。

「ウチは、自前の鼻でケンイチを追ったにゃー！」

「そうだったな。まずはミャレーに捕まったんだ」

「へっへ、俺たち獣人からは逃げられねえ」

車は、道行く馬車を避けて街道を進むので、あまりスピードは出せない。

1時間ほどで、森の中の宿泊場所が見えてきた。

通常は、ここで1泊するのだが、そのまま通過してしまう。

あと1時間で到着するのだ。

『ケンイチ、この道って真っすぐなのか？』

「いや、微妙にカーブしている。それで森をショートカットしようとして、迷子になるやつがいる」

『ありがちなあ』

『この鉄の召喚獣の速さ！ なんとということでしょう！』

アキラとの無線にカールドンの声が混じって聞こえてくる。

苦笑いしていると森が切れてきた——懐かしい。

そんなに時間はたっていないはずなのにな。

俺は無線機のマイクを取った。

「最初は、ここらへんの森の中に住んでたんだよ」

『へえ、なんでまた』

「アイテムBOXとか、魔法を使っているのを知られなくなかったんだ。それに森の中でスローライフってのが、憧れだったし」

『まあ、たしかにスローライフといえば、スローライフだがなあ
俺とアキラの会話に聞き耳を立てていたミヤレーが叫んだ。』

「スローライフってなんにゃ？」

「まあ、そうだなあ——のんびりと暮らすことかな？」

この世界じゃ理解されないだろう。普通の人々は生活するので精一杯なので、あえてスローライフなんてする余裕がない。

森が切れると、ダリアの城壁が見えてきた。

「ふう——森をたった数時間で……」

プリムラが呆れるのも無理もない。アストランティアー——ダリア間は馬車だと2日かかる距離なのだ。

そのまま道を進むと、小さな川と石橋を渡る。

ここの河原で、獣人たちと飲み食いしたなあ……思い出が蘇る。

「ミヤレー、一緒に戦ってくれた獣人たちは元気にしてるだろうか？」

「知らないにゃ！ 多分、もらった褒賞金も全部使って、今頃オケラになってるにゃ」

「えー？ そうか？ だって結構な金額があっただぞ？」

「それでも、オケラになるのが奴らだにゃ」

ミヤレーは一緒にいるんでいたが、彼らにあまりいい感情は持っていないようだ。

まあ、彼らが酔っ払って川に流されたのを、助けたりしてたからなあ。

分厚い城壁をすぎ街の中に入ると、一斉に人々の視線が集まる。

馬のいない鉄の車が、ひとりでに動いているんだ。

そりゃ注目の的だろう。どこの都市でもそうだった。

以前のダリアと違うのは、ドライジーネと呼ばれる自転車結構走り回っているところだ。

足蹴り式ではなくて、車輪にペダルがついているタイプも見える。あれは新型だ。

『おー、結構にぎやかな都市だな。ケンイチ、まずはどこに行く？』
「とりあえず市場だな。せっかくここまで来たんだ、知り合いに挨拶していく」

『オッケー！』

市場の近くまで行くと皆を車から降ろして、俺の手荷物を1つ掴む。

最後に鉄の召喚獣をアイテムBOXに収納した。

「アキラのも、こっちで収納するか？」

「大丈夫だ。スペースは空けてきた」

プ○ドがアキラのアイテムBOXの中に吸い込まれると、周りからどよめきが始まる。

「今のはアイテムBOXか？」 「おい、アイテムBOXだぜ？」 「アイテムBOX持ちが2人もいるのか？」

この世界でアイテムBOX持ちは珍しいのに、大容量持ちが2人もいるんだからな。

そりゃ、ざわつくだろう。

このメンバーでは、アマランスもアイテムBOXを持っているから、3人だけだな。

いや、ここにマロウも加われば――4人か。

「アストランティアとダリアの間は、60〜70リーグは離れていないはず！ それを数時間で！」

カールドンが車の速さに感激している。よそ行きの彼の服装は黒い上下に黒いマントという怪しげな恰好。

俺からみると、マッドサイエンティストという言葉がぴったりだ。

「馬車にコアモーターを取り付ければ、同じことができるようになるぞ？」

「しかし、こんな速さは到底……」

「それには秘密がある」

「秘密とは！？」

カールドンが俺にかぶりついてきたので、アイテムBOXからスケッチブックを取り出して図を描いた。

「歯車を何種類か用意して、次々と切り替えていく……」

俺が描いたのは、トランスミッションの原理だ。

簡単な図だが、彼なら理解できるだろう。

「ほおおお！ これは！ なんと天啓！」

彼が天を仰ぐ。

「はっ！ 解りました！」

「な、なにがだ？」

「アキラ殿が、手で動かしていた棒で動きます！」

「ああ」

アキラの乗っているポッドはMTなので、操作が必要だ。

「あれで歯車を動かしているのでございましょう?!」

「まあ、そうだ」

あまり詳しく言うと、車が召喚獣じゃないとバレてしまう——っというか、カールドンにはもうバレているのかもしれない。

彼ほどの知識と能力がある者が見れば、車が完全なメカニズムの

結晶だと解るだろう。

「試作してみたいから、サクラに戻るとか言い出さないでくれよ」
「もちろんでございます！ ケンイチ様についていけば、さらなる秘術の高みに……うひひ」

ちよっとカールドンが怖いのだが。

皆で市場の中を手荷物を持って歩くと、早速声をかけられる。
俺と一緒に森猫のベルがいるから、売ってくれとせがまれるのだ。
もちろん、お母さんを売るはずがない。

俺がいたときと同じように、様々な色をした屋根がかかる露店が並ぶ。

「聖騎士様は、ここで商売をしていたのかえ？」
アマランサスが市場を見回しているが、彼女の美しさはここでも注目の的だ。

視線が痛いが、彼女はまったく気にしていない様子。

「そうだ。最初はそれなりに苦労した——かな？」
チートを使ったあれを苦労と言ったら、普通の商人に怒られてしまふな。

前と変わらない光景だが、売っているものが少々違う。
香辛料が並んでいるのだ。

「へえ、ダリアでも、香辛料が普通に買えるようになったんだな」
「いい匂いだにゃ！」

「でも、旦那が頑張ってくれたお陰だぜ」
「そうだにゃー」

市場にいる獣人たちは、ベルの姿を見ると膝をつく。

この光景もどこの都市でも同じだ。

さて、こちらへんだったと思うが——俺の異世界生活出発の地点。俺が探していた女は、ぽつんと小さな露店を広げて前と同じ場所にいた。

以前会った時と同じように、カラフルなパッチワークの布を身にまとい、小さなアクセサリをジャラジャラと沢山つけている。

「おい、アマナ！」

「え！？　ちょ、ちよつと旦那じゃないか！」

俺の顔を見た彼女は驚いた顔をして、立ち上がった。

「元氣そうだな」

苦楽を共にした戦友との感動の再会ってやつだ。

184話 ダリアの街中

俺は王国を流れる大河――アニス川を運河にする計画のため、海へ行くことになった。

そんなことが本当にできるかどうかは解らないが、男のロマン砲にマロウ商会も乗った。

マロウの商売に対する嗅覚は信用できるので、実際に運河の運用が可能ならば、ハマダ領の大きな武器となるだろう。

そのためには本格的な船の建造が必須。

王国で本格的な船を建造できるのは、南の港町――オダマキだけだという。

俺たちは2台の車に分乗して、海を目指す。

ついでに、その途中にあるダリアにも、仕事が溜まっていたので寄ることにする。

せっかくダリアまで来たんだ、昔の知り合いに会っていききたい。

俺は、皆と一緒に市場を訪れたが、後ろを見ればアキラとカールドンがいない。

市場を物色しているようだ。

「おい、アマナ！」

俺は市場で知り合いを見つけて声をかけた。

この異世界に放り出されたあと、市場で露店を出した際、隣にいた女店主に色々と教えてもらったのだ。

彼女には、のちのシャガ討伐の際にも手伝ってもらった。

相変わらず、様々な色の布をパッチワークのようにつなげた派手

な恰好をして、ジャラジャラとアクセサリを沢山付けている。

これも全部売り物なのだが、彼女はアイテムBOXをもっていないので、こういう展示と売りかたをしている。

「え!？　ちょ、ちょっと旦那じゃないか!」

俺の顔を見た彼女は驚いた顔をして、立ち上がった。

「元氣そうだな」

「元氣そうじゃありませんよ!　いきなりどっかへ行っちゃまうなんてさ!」

「まあ、それについては、悪いと思っているよ。皆に迷惑がかかりそうだったんでな」

「まったく水臭いねえ!」

「すまん……」

怒っていたアマナだが、俺の陰に隠れているアネモネを見つけて目を細めた。

「おやまあアネモネ!　元氣だったかい」

「うん……」

ちよっと恥ずかしいのだろうか、青いローブを着たアネモネは前に出てこない。

アマナは、アネモネを養子にもらおうとしたことがあったのだ。

アネモネは結局俺と一緒にいることを選んでしまったので、彼女もちょっと後ろめたい気持ちがあるのかもしれない。

「アネモネは元氣どころか、あのあとにな——魔法の才能に目覚めて、今やハマダ領の大魔導師様だぞ?」

「本当かい?」

「うん、本当……」

「本当にゃー!　アネモネぐらい凄い大魔導師は王都にもいないに

や！」

ミヤレーのデカイ声に市場にいる連中の視線が一斉にこちらに向くと、アネモネがローブをかぶって照れている。

「そりゃ、頑張ったねえ——って旦那！　旦那が貴族になったって話は本当だったんだね！」

「まあ……」

「マロウのお嬢さんから話は聞いていたけど、この目で見るまでは信じられなかったけどねえ……」

「どうしてこうなったか、俺自身も信じられないよ」
そこにプリムラがやってきた。

「本当に——私がケンイチのことを子爵夫人に漏らしてしまったばかりに……」

「マロウのお嬢さんもお元気そうで」

プリムラは、ダリアを訪れた際にアマナと会っていたようだ。

「お城に呼び出されたと思ったら、あっという間に——」

「お城まで行ったのかい？」

「そりゃ貴族になるためには、国王陛下から拝命する必要があるしな」

「こりゃたまげたねえ。あっという間に雲の上のお人だよ」

「そんなつもりはないんだが……」

「旦那が気にしなくても、こっちが気にするよ。でも元気ならよかったねえ」

俺とアマナが話していると、なにごとかと人が集まってきた。

綺麗どころをひき連れているせいで、市場中から注目も浴びているし。

そろそろ退散するか……。

「それじゃなアマナ、ハマダ領に遊びに来てくれよな。アストランティアの隣だからさ」

「ちよいと待っておくれよ！」

アマナが叫ぶと荷物をまとめ始めた。

「なんだ、今日の商売はおしまいか？」

「おもしろそうだから、旦那についていこうかと思ってねえ」

「おいおい……冗談だろ？」

「冗談で荷物は片付けないだろ？」

「その荷物はどうするんだよ」

「知り合いにでも預けりゃいいさ」

しかたなく、俺のアイテムBOXに入れてやる。

「さすが旦那！　そうこなくっちゃ！　ふひひ、これでしばらく美味いものにありつけるねえ」

「やれやれ……」

毎日毎日、似たような生活をしているので、非日常的な変化が欲しいのだろう。

彼女の荷物はそんなに多くはない。ダンボールでいえば2つほどだ。

こいつを小さな台車で運んで、毎日店を出しているわけだ。

「ケンイチ、随分とにぎやかな市場だな」

辺りを散策したアキラが俺たちと合流したが、カールドンは一緒にではないらしい。

「外の森で目を覚まして、ここで商売して金を稼いでいたんだ」

「そういえば、俺も目覚めたら森の中だったなあ。なにか意味があるんだろうか？」

「人のいない場所に出すって決まりかなにかがあるんじゃない？」

「俺たちみたいのが、他にもいるのかね？」

「さあな」

俺がアキラの存在に気づいたのは、帝国からの噂だ。

マヨネーズやら、複式簿記やら、ガチャポンプやら——そんなものを知っているのは元世界の人間しかない。

俺たちの他にも元世界からの訪問者がいる可能性はあるだろうが、他の国からは怪しいアイテムの噂は聞こえてこない。

市場を散策しつつ、人のいない場所まで歩くことにする。

ここじゃ車を出せないからな。

「アキラ、住むのはアストランティアじゃなくて、ダリアでもいいんだぞ？」

「ケンイチの近くに住んでいないと、色々ともらえないじゃん」

「まあ、俺としても——思い立ったが吉日にアキラに色々と手伝わってもらえなくなるのは、ちょっと困る」

「だろ？ ははは」

俺とアキラの会話にアマナが入ってきた。

「旦那、こちらの旦那は？」

「元帝国魔導師のアキラだ。かなりの実力者だぞ」

「アキラだ、よろしくな」

「へえ、帝国の魔導師様ねえ……」

感心しているアマナをよそに、後ろのアマランスに話しかけた。

「アマランスはダリアには来たことがあるのか？」

「何度かあるわえ。一応、我が国がどうなっておるか、自分の目で確かめないとな」

「ちなみに、その視察に国王陛下は？」

「いや、妾だけじゃ」

やっぱりまともに国政をやったのは、アマランサスだけなのか。アマランサスもリリスには近場の視察はさせていたらしいし、後継者として育てるつもりだったに違いない。

他の王族——円卓会議の連中も、地方の視察なんてやったことないらしい。

もっとも、アマランサスなら途中で襲われても、単独で切り抜けることも可能だろうが、他の王族じゃむりだろうな。

そこに毛むくじらの獣人たちがやって来た。身体の高い男の獣人が3人。

「おおっ！ ほら、やっぱりいただろ?!」 「マジかよ」 「おお？ いい女も一緒だぜ？」

俺の目の前に現れたのは、シャガの討伐でミヤレーと一緒に戦ってくれた獣人たちだ。

リーダー格の虎柄は、ニャケロだったかな？
いい女ってのは、ニャメナのことだろう。

「おお！ お前たちか。元気でやってたか？」

「へへへ、まあ——旦那も元気そうで」

ミヤレーが俺の後ろに隠れて、舌を出している。

「ミヤレー、突然いなくなったと思ったら、旦那の所に行ってたのかよ」

「べえくにゃ！」

「ミヤレーが言うのには——お前たちは、そろそろ金を使い果たした頃だって……そんなことないよな？」

「「……」」

獣人たちが一斉に黙る。

「おいおいマジかよ。褒賞金はかなりの金額だったはずだろ？」

「うへへ……」

獣人たちが苦笑いしているが、彼らは金の勘定ができないので、文字通り湯水の如く無駄遣いをしてしまったのだろう。

ミヤレーはギルドに預けた金には一切手をつけていないし、俺のアイテムBOXの中にあるミヤレーフォルダには金が増え続けている。

彼女曰くに、獣人で一番金持ちだと言うのだが、使うつもりもないらしい。

「悪いが、仕事があるので一緒に遊べんが、これで飯を食って酒でも飲んでくれ」

アイテムBOXから出した銀貨2枚（10万円）を彼らに渡す。

「さすが旦那！ 話が解るぜえ！」

俺から銀貨をもらった獣人たちが小躍りしている。

「ケンイチ、こんな奴ら甘やかしたら駄目だにゃ」

「まあまあ、シヤガのときに色々と手伝ってくれたしな」

「それは、褒賞金でチャラになってるにゃ」

男の1人がニヤメナに色目を使っているが、当然彼女は見向きもしない。

獣人たちは、ベルに頭を下げると――人混みの中に消えていった。

「まあ元気そうよかったよ」

「ああいう奴らは、心配するだけバカを見るにゃ」

ミヤレーは彼らに当たりが厳しい。

話をきけば、それだけ振り回されて尻を拭かされたらしいので、仕方ないような気もする。

ミヤレー、ニヤメナと話をしながら歩いているのだが、彼女たち

が時折人混みの中に鋭い視線を送っている。

「どうした？ 怪しいやつでもいるのか？」

「違うよ旦那。獣人の女だ。隙あらば寄ってこようとしやがって！」
「やっぱり、ケンイチの身体からなにか出てるんじゃないのか？」
そんなことを言いながら、ミヤレーが俺の身体をクンカクンカしている。

脇の下とかに鼻を突っ込まれると、くすぐったい。

「あはは！ ちょっと止めてくれ！ そんなわけないと思うがなあ……」

最初は祝福のせいかと思っていたのだが、ダリアにいたときから獣人たちには懷かれていたし。

「多分、聖騎士様は獣人に偏見がないのが、雰囲気で伝わるのじゃろ」

アマランサスはそう言うのだが、本当の原因は不明のまま。

そろそろ車に戻らないといけないのだが、カールドンが見当たらない。

「旦那、あそこだよ」

ニヤメナが指差す方向に黒いマントを着たカールドンがいた。

市場の露店でなにかを買っているらしい。

掘り出し物でも見つけたのだろうか？

人混みから出ると、アイテムBOXから車を出して皆で乗り込む。

「旦那、なんだいこりゃ?!」

アマナが俺とアキラが出したSUV車に驚いている。

「シャガのときに、みんなで乗っただろう？ あれの小さいやつだ」
「へえ……」

彼女が、車のボディをペチペチ叩いている。
俺のラ○クルは人がいっぱいなので、アマナはアキラの車に乗ってもらったことにした。

アマナが車に乗ったのを確認すると出発する。次に向かったのは道具屋の爺さんの所だ。

彼は以前俺の住処にやってきたが、色々世話になったのだから挨拶せねばなるまい。

それに彼は、俺が登録したギルドマスターの師匠らしいし。

コネは大切だ。

店の前に到着して車から降りると皆に伝える。

「すぐに終わるから、ちょっと待っててくれ」

「オッケー」

アキラの返事にミヤレーがオウム返しをする。

「オッケーにゃ！」

皆を車に残したまま——木造の店先に家具やら道具が溢れている店にやってきた。

そんなに時間はたっていないのに——懐かしい。

店が開いているってことは爺さんはいるんだろ。

「ちわーじいさんいるかい？」

「はい！」

爺さんの声を期待したのに、出てきたのはワンピースの若い女。

茶色の長い髪の毛をポニーテールにしている。

眉が太くて個性的な美人だが、胸がデカイ。

ん？ どこかで見たような……。

「あれ？ もしかして——爺さん、死んだのか？」

そんな話は聞いていなかったが……。

あの爺さんはマロウとも付き合があるから、そんなことになれば俺の耳にも入ってくるはずだ。

「え？ あゝ！？ 旦那！？」

「え？ 知り合いだったか？」

「森の中で一緒に暮らしてたでしょ！」

「あゝ」

俺は手を叩いた。シャガから助けた女たちと一緒に森の中で、雀の学校をしていたのだ。

その中の1人らしい。

「パルドおー！ お客さんだよー！」

「パルド？」

俺は、女の言葉に頭をひねった。

「なんじゃ、お前が相手せんか」

「でも、ケンイチの旦那だよ」

「なんじゃと?!」

「おーい！ 爺さん！ 生きてるのか？」

「その声は……」

店の奥から爺さんが出てきた。相変わらず暗いグリーンのローブに白い髭を生やしている。

女性が呼んで爺さんが出てきたってことは、彼の名前はパルドってことになる。

ここに通っていたが、名前は知らなかったな。

「久しぶり。爺さんが死んで、店主が代わったかと思って焦ったよ」
「おお、辺境伯様ではございませんか。辺境伯様にはご機嫌麗しく――」

爺さんが胸に手を当てて、深くお辞儀をした。

「止めてくれ、嫌味かよ」

「ははは、まあ人目もあるしの。なにか用事かの？」

「いや、ダリアまで来たので、顔を見に寄っただけだ。それより――あの女？」

「ぬっふっふっ――もちろん、コレじゃ」

爺さんが小指を立てる。

「なんじゃとて？　おいおい、仕事を探す面倒を見てくれとは頼んだが、手をだせとは言ってないぞ？」

「なにを言うか、純粹に愛じゃぞ！　愛に歳は関係ないじゃろ」

俺の前で、爺さんと巨乳の女がベタベタし始めた。

「ああ、解った解った――まあ元気そうでなりよりだな。それじゃな爺さん」

「もう帰るのか？！」

「顔を見に寄っただけだからな」

「なにか買っていにかんかい」

買うってなあ――ほとんどのものは、シャングリ・ラで買ったほうが安いし、ものがいいからな。

「それじゃ、魔道具か魔導書」

「ぐぬぬ……ない」

「でもまあ、俺も手土産も持たずに来てしまったからなあ」

シャングリ・ラを検索して、果物の詰め合わせを買う――色々入って4000円だが少々高い気もする。

こういう詰め合わせものは基本贈り物だからな、高くても普通のだろう。

「ポチツとな」

白い箱に入った果物の詰め合わせが落ちてきた。

「ほい爺さん。土産だ。その人と食べてくれ」

「おお、こりゃ見たこともない果物ばかりじゃぞ。異国ものか？」

「そうそう」

「美味しそう」

女性も目を輝かせて、箱の中を覗き込んでいる。

箱の中にはみかんといちごが入っている。

爺さんにはミカンを食わせた記憶があるが、市場では見たことがないので、この世界にはないのだろう。

りんごや梨に近い果物はあるのだが。

女とイチチャイチャしている爺さんに別れを告げると、次の目的地に向かう。

爺さんが元気そうでよかったが、いい歳してよくやるぜ——アストランティアの婆さんにも教えてやらないと。

俺たちは車でマロウ商会の本店に到着した。

王都にも支店ができているそうだが、あくまでも支店で、ダリアにあるここが本店ということになる。

マロウも、ここから動くつもりはないらしい。

ここで生まれ育ったので思い入れがあるのだろう。

それに今後を考えると、王都よりサクラ——アストランティア——ダリヤのほうが発展するような気がするしな。

石造りで2階建ての建物の前に到着すると、プリムラが降りて店の中に入っていく。

店に訪れる客は多く、繁盛しているようだ。

新品のドライジーネが少々高い位置に掲げられて陳列されており、子どもたちが群がっている。

子どもが乗るのにかなり高価な代物だ。

俺が子どもの頃に流行ったスーパーカーに近いのかもしれない。そういえば、スーパーカーみたいな機能満載な自転車も流行ったな。

ここでマロウ商会の店員を乗せて、ダリアでゲットする廃屋に案内してもらったんだが――。

プリムラを待っていると、子どもたちに車を囲まれた。

「すげー！ 鉄の荷車？」 「なにこれ？！」

窓を開けて、子どもたちに挨拶をする。

「こいつは、俺の魔法で動く召喚獣だよ」

「召喚獣？ おっちゃん魔導師なの？！」

窓から顔を出した俺のところに、子どもたちが集まってきた。

「すげー！ 森猫だ！」 「森猫も連れている！」 「黒くて大きい！」

車と一緒にベルも人気だ。

男の子が多いが、男の子に連れられた小さな女の子もいる。

兄妹なのだろう。粗末な服とズボンの子どもたちばかりだが、結構小綺麗な恰好の子どももいる。

子どもたちは貧富の差に関係なく友達になれるのだが、いつの間にか接触がなくなり階層に分かれるのは悲しいよな。

「まあ、そうだな」

デモンストレーションで、ちょっと車を動かしてみせる。

「「「すげー!!!」」」

「大盗賊シャガの討伐で、魔法で動く召喚獣を使って兵隊を運んだって話を聞いた!」

「それは俺たちだな」

「ええ?! 本当?! おっちゃんが、シャガをやったの?」

「そうにゃ! ウチらが、シャガをやったのにゃ!」

後ろからミャレーの声が聞こえてくる。

「それで、ここ——マロウ商会のお嬢さんを助け出したんだ」

「聞いた聞いた! 本当におっちゃんなんだ!」 「「「すげー!!!」」」

「俺はシャガを討伐したんだが、後ろの召喚獣に乗っているオッサンは、帝国の竜殺しだぞ」

「ええ?! ドラゴン?!」 「ドラゴンを倒したおっちゃん?」 「

本当?!」

「ああ」

子どもたちが一斉に後ろにいるアキラの車に群がった。

「こらあ! ケンイチ、こっちに話を振るなよ!」

プ〇ドの窓から上半身を出して、アキラが怒っている。

「すまんすまん」

車を子どもに囲まれていると、プリムラが店員を連れて戻ってきた。

若くて短い金髪の男だ。

茶色のズボンに白いシャツを着ているのだが——さすが大店のマロウ商会に勤めているだけあって、いいものを着ている。

「へ、辺境伯様にはご機嫌麗しく——」

男が、直立不動から礼をした。

「ああ、いいからいいから」
毎回これじゃ、リリースやアマランサスが、堅苦しい挨拶を嫌がる
気持ちが解るような気がする。

「ケンイチ、これは？」
プリムラが車に群がる子どもたちに呆れている。

「鉄の召喚獣が珍しくて、集まってきてしまってたな」
やむを得ず、シャングリ・ラから袋に入った飴を買った。
それを子どもたちに一粒ずつあげることにしたのだが、肝心の子
どもたちが渋っている。

「どうした？ 甘いお菓子だぞ？」
口に入れてみせた。

「ケンイチ私にも！」
窓からアネモネが手を出してきたのであげる。

「聖騎士様！ 妾にも」

「旦那、俺にも！」 「ウチにもにゃー！」

「ほら、みんな食べてるぞ？」

「知らない人からものをもらっちゃいけないって言われてる……」
「うん」

子どもたちが顔を見合わせている。
なるほど、俺が子どもの頃にもそんなことを言われてたなあ。
俺はプリムラを指差した。

「知らない人じゃなければいいんだろ？ この綺麗な人はマロウ商
会のお嬢様だ。みんな知ってる有名人だから、知らない人じゃない

だろ？」

「ケンイチ、それじゃ私からお菓子をあげばいいんですね」

「誰からお菓子をもらった——と聞かれたら『マロウ商会のお嬢様からもらった』って言えばいいから」

俺の屁理屈に納得したのか、飴をもらった子どもたちが散り始めた。

「「わああ」」

どこの世界でも子どもは元気だ。

日本では子どもがすっかりと少なくなってしまったが、この世界には沢山いる。

子どもたちがいなくなったので、アキラの車へ行く。

「アキラ、これから街中を回るから、マロウ商会で待っててもいいぞ？」

「どうせすることもないし、一緒に行くぜ？」

「カールドンは？」

「私も構いませんよ。これは乗り心地もよいですし、全然疲れません」

「旦那、こりゃ凄いね！ 前に乗ったあれより、断然乗り心地がいいよ」

アマナも絶賛だが——まあ、この世界の馬車に比べたら月とスッポンなのは確かだな。

俺の車に乗っている連中にも確認したが、皆が不動産巡りについてくるという。

もしかして観光がてらなのかもしれないが、話は決まった。

マロウ商会の案内人はアキラの車に乗るので、彼の車に先導してもらい不動産を集めに行く。

誰も住んでいない廃墟をゲットして、サクラに移築するためだ。

事前にプリムラに聞いた情報では、25軒の物件があるという。

俺たちでは絶対に解らない路地を進み、1軒目の建物に到着した。古い石造りの建物だ。さすがにダリアのほうが大きな都市なので、いい物件がある。

「ケンイチ、これならサクラの役所に十分に使えるんじゃないかね？」

「そうだな。意外といい。とりあえずゲット！」

建物をアイテムBOXに収納した。

「す、すごい——建物がまるごと入るアイテムBOXなんて」

マロウ商会からやってきた店員が驚いている。

「それは、私の御主人様なのですから、当然です」

プリムラがドヤ顔をしている。

あまり俺のことを自慢したりしない彼女だが、自分の店に勤めている身内には自慢したいのだろう。

「このぐらいの大きさの建物なら、10軒まで入るのは確認したが、その先は未知数だ」

「10軒もはいるのですか？」

「ああ、可能ならば、今日中に25軒全部回りたいのだが。場所の把握はできるのかい？」

「も、もちろんです！」

店員に案内してもらい、ダリアの街中を走り回る。

色々なタイプの家があり、十分に使えるものばかりだ。

15軒ほど回ったところで、昼になった。

家をアイテムBOXに収納すると空き地ができる。

そこで皆で昼食を摂ることにした。

185話 カレーの魔力

俺は久々にダリアに戻ってきた。

世話になったアマナに会い、シャガ戦と一緒に戦ってくれた獣人たちとも再会を果たした。

道具屋の爺さんにも会ったが、彼は俺の領も訪れてくれていたので、久々という感じではないが。

そのあとは、マロウ商会から店員を乗せて不動産巡りを行う。

廃屋を買い取ってサクラに移築をするためだ。

マロウ商会に下調べしてもらった家を15軒ほどアイテムBOXに収納したところで昼になった。

収納して家がなくなっただけでできた空き地で、昼飯を食べることに。皆で集まる。

「昼飯にするか——この分だと今日中には全部回れるな」

「ケンイチ、今日はどこに泊まるんだ？」

「マロウの屋敷の敷地にコンテナハウスを出そうかと——」

「もちろん、屋敷に部屋もご用意してありますから、そちらに泊まられてもよろしいですよ」

「あゝ、俺はテントでいいや」

アキラがそっと手を挙げた。

「私はケンイチと一緒に！」

「妾も聖騎士様と一緒にじゃ！」

アネモネにアマランサスが同意した。

「俺も外でいいぜ」 「うちもにや」

「にゃー！」

獣人たちとベルも外がいいようだ。

「当然、私もです！」

「プリムラの実家に来たのに、外に泊まってもいいものなのか……」

「父はそんなこと気にしませんわ。それに——いつも私たちが食べているものより素晴らしいものをマロウ商会で用意できるかと言われれば……できませんし……」

「お義父さんが気にしないのであればいいんだが」
一応、アマナにも確認する。

「アマナ、本当についてくるのか？　泊まりはテント——じゃない
1人用の天幕になるぞ？」

「それでいいですよ。まさか旦那の毛布に潜り込むわけにもいかな
いでしょう？　ふひひ」

それは勘弁してくれ。まあ、1人でキャンプするのは慣れている
ようだし、大丈夫か。

今日の夕方以降の予定が決まったところで昼飯にする。

食事を用意するために、空き地にテーブルを出した。

食事は、サンバクとメイドたちが作ってくれたお弁当だ。

これがなくなったら、俺たちが食事を用意しないといけない。

——とはいえ、アネモネとプリムラもいるので、食事の心配はし
ていない。

インスタントものでも十分に食えるしな。

いざとなれば異世界でも大正義のカレーがある。

「アマナ、彼女を紹介しておくよ。アマランサスだ」
「よしなに」

「よろしくねって――彼女、奴隷かい？」

「本当は違うんだがなあ。彼女を奴隷としては扱わないでくれよ」

「解っているよ。旦那がそう言うってことは、普通の奴隷じゃないんだろ？」

「まあな」

もちろん、アマナには本当のことは言えない。

弁当のサンドイッチなどを摘んでいたのだが、アネモネに服を引っ張られた。

「ケンイチ、さっきの果物を食べてみたい」

「ああ、あれか……」

贈り物で買うと高くつくので、個別にデ○ポンといちごを買う。目新しい果物は、こちらへんだろう。りんごや梨っぽい果物はこの世界にもあるからな。

デ○ポンを買ったのは個人的な好みだ。

「これ、どうやって食べるの？」

「こうやって、手で皮が剥けるから……」

「ふぎゃー！」「うわああ！」

デ○ポンの皮を剥くと、突然獣人たちが騒ぎ始め、ベルも一緒に空き地の隅っこに避難してしまった。

「な、なんのにおいにゃ？！」「あゝ鼻が曲がる！」

「そうなのですか？　すごい爽やかなにおいに感じますけど……」

「そうですよねえ」

プリムラとアマナが、剥いたデ○ポンを口に放り込んだ。
「うん、いいにおい！」「そうじゃの、妾はこのような香りの香水が欲しいと思うたが……」

獣人たちが騒いでいるが、アネモネとアマランサスは同意見のようだ。

「ああ……ケンイチ、猫って柑橘類のにおいが苦手じゃなかったっけ？」

「そういえば——でも、ベルは解るが獣人たちまで……」

「甘酸っぱくて美味しいですわ！」 「美味しい！」

プリムラとアネモネが声を上げた。

「これは美味しいねえ！ こんな果実は初めてだよ！」

「ほう！ これは王宮に献上しても喜ばれるの！」

アマランサスとアマナが一緒にデ○ポンを食べて微笑む。

デ○ポンは好評だが作るのは少々難しいしなあ……。

ミカンの木は植えたが実をつけるのは、かなり先になるし。

「こっちの赤いのも凄く美味しい！」

アネモネが口に含んだのはいちごだ。

「こちらは、酸味がなくて凄く上品な味わいですわ」

「ううむ……芳醇じゃの」

「こんなの巷で食べたらいくらになるか……」

商人のアマナは値段が気になるようだ。

「あまり値段を気にすると、楽しめないだろう？」

「そうは言いましてもねえ、商売人の性みみたいなもので——ねえ、マロウのお嬢さま」

「プリムラでいいですよ」

皆に好評なので、サクラでいちごも栽培してみるのも一興だとは思うが。

「みかんは作ったことないけど、いちごは畑で作ったなあ」

「買うと高いしな」

アキラもいちごを食べて、元世界を思い出しているようだ。

「そうなんだけど、作ってみたがあまり甘くならなくてな、ははは」
「なにが原因なんだ？」

「解らん——日照時間とかかな？ 作るのは簡単なんだけどな」

「そうなのか？」

「ああ、どんどん増えるし」

簡単に増えるのだが、実が次第に小さくなってしまう。

そうなたら先端を切って地面に刺すと、そこからまた生えて大きい実になるようになる。

皆で喜んで果物を食べていたのだが、獣人たちとベルは、しばらく近くには寄ってこなくなってしまった。

デ○ポンのにおいが、そんなに嫌か。

昼飯のあと——夕方までに全部で25軒の家を巡り、アイテムB OXに全部収納した。

俺たちは車に乗っているのだからこのようなことができるが、通常は無理。

歩き回るだけで数日かかってしまう。

夕方になった俺たちは、マロウ邸を訪れて庭先を借りることにした。

立派な石造りの2階建ての建物と、塀に囲まれた大きな庭。
その庭の外れにコンテナハウスを出す。

「あの——ケンイチ。屋敷の部屋も使えますよ？」
プリムラがマロウ商会のメイドを連れてやってきた。

メイド服を着ている彼女は、俺が露店をやっていたときに洗濯バサミを沢山買ってってくれた女性だ。

長い髪を編んで、ドーナツみたいに輪っかにしているのが特徴。

俺が思い出していると、彼女がペコリとお辞儀をした。

屋敷の主人のマロウはでかけているらしいが、数日後に戻ってくる予定。

そのときに、一緒にこの地を治めているアスクレピオス伯爵の下を訪問する。

伯爵と懇意にしているマロウ商会を通じてアポは取ってあるのだ。

「おもてなしを無下にし、お義父さんの顔を潰して悪いとは思うんだが――俺は外でいいよ」

ずっと外で暮らしているので、それが普通になってしまいい家にいる気にならない。

こんなことで、サクラに屋敷が建ったらどうしようか。

来客専用にして俺だけ外で暮らそうかな？

「そんなことはありません」

「おい――屋敷の部屋に泊まりたい人は、お呼ばれしてもいいぞ」

「私も外でいい」

「聖騎士様の奴隷である妾も、当然外じゃな」

アネモネとアマランサスも、やっぱり外がいいようだ。

「アネモネ、多分お風呂もあるぞ？」

「風呂なら、外でケンイチと一緒に入るし！」

「無論、妾もじゃ」

「そんなずるい！ 私だって一緒に入りますから！」

プリムラが顔を赤くして抗議している。

「そりゃ、あたしも入っていいんですかね？」

アマナが小さく手を挙げた。

「入りたいならいいぞ、俺と一緒に入るのは勘弁してほしいが」
「もちろんですよ。いやですよ」

実家の庭で裸になって風呂に入っているものなのだろうか？

「この屋敷はプリムラの知り合いばかりだし、お義父さんのいる屋敷で……大丈夫かい？」

「そ、それはそうですが……」

「にゃー」

ベルがやってきて俺の脚に身体を擦り付ける。

彼女も外だと言いたいのだろう。

デ○ポンのおいが取れなかったので、アネモネに洗^{クリン}浄の魔法を使ってもらった。

「俺たちが商人の屋敷なんかに入るわけにゃいかねえし」「そうだにゃー」

獣人たちの言葉にプリムラが異議を唱えた。

「そんなことはありませんよ。2人にも部屋を用意しますけど……」

「いや、いいよお嬢。立派な部屋なんて落ち着かねえし」「そうだにゃー毛だらけになるしにゃ」

「結構毛だらけ猫灰だらけ、おケツの周りは――」

またアキラが下品なネタを披露しようとしている。

「アキラアキラ」

「おっと――フヒヒサーセン！俺も外でいいよ」

「アキラはまたテントでいいのか？コンテナハウスもあるが」

「はは、俺1人だからな。そのコンテナハウスはマロウ商会さんの客人に使ったほうがいい」

そうなのだ――マロウ商会からマロウと番頭が1人同行することになっている。

アニス川が運河として使えると解れば、オダマキとの取引も始まるだろう。

そうなれば、オダマキにもマロウ商会の支店が必要になると踏んで、支店を出す場所の当たりをつけに行くのだ。

オダマキにはマロウの知り合いもいるそうなので、彼のコネに期待している。

「商売や事業をやるとなると、コネが大事だよな」

「それと根回しな」

アキラと苦笑いをする。

根回しなんて言葉を聞くと、日本の悪しき慣習のように思えるが、外国でも普通に行われている。

外国にはロビー活動なんて言葉もあるし。

世界各地を渡り歩いてきたアキラも、それを見てきたらしい。

この王国の政治の中心にいたアマランサスに聞いても、政治はコネと根回しだと言う。

「まったくのう、気に入らんやつは全員切り刻んだほうが、早く決まるのだから」

アマランサスが恐ろしいことを言い出す。

「そんな恐怖政治をしていたら、国が崩壊してしまうだろう」

「それでよくなったって国の話は聞かねえしな」

俺たちがいた元世界でも、そんな国が長続きた例がない。

「そのとおりじゃ……」

悔しそうな顔をしているアマランサスを見ると、アキラがつぶやく。

「駄目なやつでも、使いみちを考えて使うってのがプロの仕事らしいぞ？　俺はできねえが」

「俺も自信がないから、リリースとアマランサスに任せるが……」

「たってるチ○ポは親のチ○ポでも使えって言葉もある」
まてまて、アキラ。

「おいおい、女が多いから頼むぜ」

「フヒヒ、サーセン！」

彼の相方レイランさんは、この手のネタが大嫌いらしく、いつも怒られているらしいのだが。

「実力や優秀さだけで優劣が決まれば簡単だが、そうもいかないのが、この世の常ってことか」

「まあそういうこったな、なんでこんなやつが！　ってのはよくある話だし、ははは」

さて、バカ話はこのぐらいにして、もう1つコンテナハウスを出さなくてはならない。

少々離れた場所にアイテムBOXに収納していたコンテナハウスを出した。

こいつは――。

「おおっ！　本当に素晴らしい！　旅に家が持ち運びできるなんて！」

喜んでるのはカールドンだ。

彼が普段使っているコンテナハウスをアイテムBOXに入れて持ってきたのだ。

彼は3つコンテナハウスを使っているが、一応全部入っている。やろうと思えば、いつもと同じ研究開発が出先でも可能なのだ。ただ、アイテムBOXには弱点もある。

生き物が入らない点だ。

それが、この旅行で俺が持ち歩いている小さな手荷物。外から見えないように布で目隠ししているが——実はスライム。スライムを飼い始めたのはいいが、アイテムBOXには入れられない。

留守の間、メイドたちに世話をしてもらおうと思ったのだが、すごい顔をされてしまった。

無論、命令をすればやってくれるとは思うのだが、強制するのも可哀想だ。

元世界で言うところの女の子に「留守の間、飼っているGに餌をあげておいて」と言うのに等しい。

そんなの嫌に決まっているから、俺の手荷物として旅行に同行させているわけだ。

皆が気持ち悪いと言うので、なるべく見えない所に置いてある。魔物だからって、そんなに嫌うことはないのにな——不憫な。

個人的にはGよりは可愛いと思っているのだが……。まったく理解してもらえない。

「さて、夕飯だがなにを食う？」

「カレー！」

「カレーにゃ！」

アネモネとミャレーからカレーのリクエストが出たが……。

「他になにか案を出さないとカレーになっちまうぞ」

「妾もカレーでよい」

「旦那、カレーでいいよ」

「ははは——ケインイチ、カレーは安牌なんだよ」

「まあ、俺も好きだからいいけどさ」

「旦那の香辛料料理だね？」

アマナにも食わせたっけ？ 獣人たちと、カレー風味野菜炒めは食べたが、本物のカレーは食わせてなかったような……。

「まあな」

プリムラとマロウ商会のメイドもいるので、料理を手伝ってもらう。

とりあえず、なんのスープでもいいので作って、カレールーをぶち込めばカレーに早変わり。

日本が産んだ大発明。

アネモネには、パンも焼いてもらう。

久々のアネモネのパンだ。サクラには立派な石窯もできてしまったので、そこでパンを一気に焼いている。

どんな料理でも、大量に作ったほうがばらつきが少ない。

俺はカツカレーを食いたくなかったので、シャングリ・ラから冷凍のカツを買った。

それをアネモネの魔法で温めてもらう。

「ウォーム温め！」

彼女の魔法で、すぐにホカホカになり食えるようになる。

ご飯が食いたい人には、パックご飯を温めた。

皆でカレーを食べる。

最近サンバクに作ってもらうことが多いのだが、久々にプリムラとアネモネが作ってくれた食事を摂ることができた。

「このカツはうめー！」 「カレーも美味いにゃー！」

獣人たちはちよつと離れた場所で、パンとカレーを食べている。

アキラも俺たちと一緒にだが、カールドンは自分のコンテナの前で1人で食べている。

どうも食事は1人で食べるのが好きで、周りに合わせるのが苦手なタイプのようなのだ。

マイペースでゆっくりと食べたいのだろうが、食事をエネルギー補給とか刹那的に考えているタイプでもない。

「こ、こりゃ美味しいねえ。ダリアでも香辛料が安くなって使えるようになったけど、こんな美味しいのは食べられないよ!」

アマナがカレーをパンにつけて食べているが、米は無理なようだ。

「香辛料が買えるようになって、獣人たちも喜んでいるだろう」

「香辛料の商人組をつぶしてくれたのも旦那なんだろう?」

「アストランティアの悪徳商人を潰したら、香辛料の組合も潰れてな」
シンジケート

「そりゃ、少々時間がかかっても、アストランティアで香辛料を買ったほうが安いからねえ」

アマナの話を聞いたプリムラがつぶやく。

「でも、買い占めて値段を釣り上げるより、みんなが買えるような値段になった今のほうが、結果的に儲かってますけど……」

まあ、そこそこの値段で沢山売ったほうが儲かるってわけだ。

「プハーツ!」

アキラがカレーでビールを飲み、一緒にアマランサスとニャメナも飲んでいる。

いつもと同じ顔ぶれでの食事だが、アマナの他にもいつもと違う顔がいる。

マロウの商会のメイドだ。

「あの、お嬢様……」

メイドがカレーの皿を持ったまま固まっている。

「美味しいでしょう。これはカレーですよ」

「カレー……」

「どうしたのですか？」

「お嬢様、私も辺境伯領へ行ってもいいですか？」

「ええ？ あなたがいなくなったら、お父様が困るでしょう？」

「お嬢様、私のわがままで申し訳ございませんが——私はこのカレーに人生をかけることにいたしました」

「はい？」

メイドの目は真剣そのものだ。

「ケンイチ——」

「まあ、来るのは構わないが——ウチのメイドたちは王家に仕えていた生え抜きばかりだからなあ……」

「大丈夫……カレーのために負けません」

なぜだか、カレーを食べるメイドが燃えている。

彼女は——ええと、マーガレットだと思ったが……。

「ケンイチ、そんなことを言っ——マロウ商会の人材を引き抜くと、お父様に恨まれますよ」

「お嬢様、これは私のわがままなので辺境伯様は関係ございません」

「ああ……」

プリムラが頭を抱えている。

彼女の話では、マロウの亡き妻のお茶の味を引き継ぐのがこのメイドらしい。

マロウは、そのお茶を飲むのを楽しみにしているようだ。

「そりゃ、まずいな……」

「そうですよ」

「それじゃ、ここに定期的にカレールーを送るから、それで手をつてくれ」

俺はチョコ型のカレールーをメイドに見せた。

「コレがカレーの元ですか？」

「そうだ。料理を見ていたと思うが、スープを作ってこいつを入れれば、今食べているものになる」

「……これがいつでも食べられるわけですね」

メイドの目が光る。

「そうだ」

「わかりました」

「ほっ……」

プリムラが胸をなでおろした。

この世界の香辛料でもカレーが作れることはサンバクが証明してみせた。

それを見たプリムラが商品化してマロウ商会から売り出そうとしている——という話は聞いたことがあるが、あれはサンバクの神業がなし得た成果だ。

そう簡単にレシピは作れない。

「カレーの魔力に取り憑かれたやつが、また出たにゃ」「こいつの旨さにゃ、抗えないものがあるからなあ」

「やれやれ困ったものじやのう。屋敷もできておらんのに、聖騎士さまはメイドだけ増やすおつもりかえ？」

アマランサスがカレーを食べながら呆れている。

「領の業務の手伝いもあるから、いくら多くても困らないけどな」

「それはそうじゃが——またリリスに嫌な顔をさせるぞえ？」

「彼女の目当ては、俺じゃなくてカレーだから」

アマランサスが嫌味を言うが、とりあえず危機は回避されそうなので、一安心。

メイド――マーガレットは、「わかりました」と言ったが、なにを解ったのかは、明言を避けている。

飯を食い終わったので、寢床の準備をする。

アキラと獣人たち、そしてアマナはテントでいいと言うので、1人用と2人用のテントを張った。

「おい、ケンイチ。俺は初めての街なんで、ちょっと遊んできていいか？」

「おお、いいぞ。好きにしてくれ」

「アキラ！　ここはウチの地元だにゃ！　知りたい所があれば、ウチに任せるにゃ！」

「おう、それじゃ任しちまおうかなあ」

「それじゃ、俺も行くとするかな？　ダリアは久しぶりだし」

アキラとミヤレー、そしてニヤメナが街へ繰り出すようだ。

俺はゆっくりしたいのでパス。それに騒々しい所はあまり好きじゃない。

酒も飲まないし女ともやらないのに、夜の街に繰り出して楽しいことはないからな。

獣人たちに銀貨を2枚ずつやる。

俺からの小遣いではない。俺のアイテムBOXのフォルダに入っている、彼女たちの所持金だ。

滅多に使わないので、金は増える一方。

「もうちょっと持っていくか？」

「いいよ旦那。そんなに使うこともないだろう？」　「そうだにゃ」

「欲しい武器やら、防具があったら？」

「そんなの旦那から買ってもらったり、サクラでドワーフに作ってもらったほうが、ネズミの糞と竜の鱗ってやつよ」

どうやら、月とスッポンみたいな意味らしい。

「それじゃ、ケンイチ。ちょっと遊んでくらあ」

「はいよ」

アキラは世界中を巡り歩いた男だ。心配はいらないだろう。腕も立つしな。なんといっても帝国の竜殺しだ。

アキラと獣人たちは、暗くなった街へ消えていった。

「アマナも飲むか？」

彼女にシャングリ・ラで買ったグラッパをやる。ぶどう酒の絞りカスで作った安いブランデーだ。

「こりゃありがたい！」

「強い酒なんで、水で割って飲んだほうがいいぞ」

彼女に水も渡す。魔法で浄化したものなので、普通に飲んでも平気だ。

俺はのんびりと、コンテナハウスの中で過ごす。

今日は、アネモネとプリムラ、そしてアマランサスが一緒だ。

ゴニョゴニョしたりはしないが、皆が寝間着に着替え、並べたベツドの上。

「アネモネ、魔法を――」

「洗^{クリーン}浄！」

青い光が舞って、皆の身体が服ごと綺麗になる。

魔法は便利だが、やはり風呂には入りたくなるな。

ここは街の中なので、塀に囲まれているとはいえ、裸になるのは抵抗がある。

コンテナハウスをもう1個出して、そこを風呂場にすればいいのだが。

床にはベルが丸くなっていて、大きなあくび。

アイテムBOXからブラシを取り出し、床に降りると――ベルにブラシをかけてやる。

ゴロゴロと大きな音が彼女から聞こえる。

スライムには餌をやり、外にぶら下げである。

「ケンイチー！」

ベルにブラシをかけていると、アネモネが背中に抱きついてきた。

「こら、今お母さんにブラシをかけているところだから」

「んふー」

「アネモネ、私は久しぶりにケンイチと旅行なのですから、こちらが優先ですよ」

「そんなの関係ない」

「あります！」

「ぐぬぬ」

「ほらほら、喧嘩しない」

今回はプリムラに一理あるので、彼女を抱いてベッドに寝る。

「ひゃん」

「むー！」

アネモネが不機嫌だが、これは仕方ない――順番だ。

「にゃーん」

ベルがベッドの上に加ってきて、俺の顔に頭を擦り付けてくる。

「よしよし、そろそろ寝るか……」

アキラたちは帰ってこないが、俺たちは寝ることにした。

186話 クロトン親子

俺たちはダリアにやってきた。

懐かしい人々と再会し、そのあと街中の不動産を巡り、サクラに移築する家をアイテムBOXに入れた。

マロウとは数日あとに合流して、この地を治めているアスクレピオス伯爵に会う予定だ。

――マロウの屋敷の庭を借りて泊まった次の日の朝。

コンテナハウスの外に出ると、テントの様子を見る。

アキラが寝ているので、夜遅くに帰ってきたに違いない。

そこにニヤメナが起きてきた。

「ニヤメナ、おはよう」

「旦那、おはよう」

遊んできたので、寝不足かと思ったのだが、そうでもないらしい。

「ふう、旦那の所で飲み食いしていると、外のものが不味くて仕方ねえ。金を払うのが馬鹿らしいよ」

「なんだ、それじゃすぐに帰ってきたのか？」

「ああ、古い知り合いにちょっと会ってね。そいつとちょっと飲んだだけさ」

ニヤメナが、シャツの中に手を入れて、大きなあくびをしている。

「それじゃ、ミャレーとは別行動だったのか？」

「ああ、クロ助はアキラの旦那を案内したあと、ダチの所へ行ったみたいだったよ」

ここは、ミヤレーのホームだったからな。知り合いも沢山いるだろう。

そこにミヤレーが起きてきた。

「ふにゃ」

「ミヤレー、昨日は知り合いに会ってどうだった？」

「ひどい目にあったにゃ」

「ひどい目？」

「にゃ」

彼女の話では全員が借金を抱えており、ミヤレーにたかりにきたと言う。

「貴族様の愛人になっているから、金を持ってると思われたんだろ？」

「どうやら、ニヤメナの言うとおり、あっという間に噂が広まってしまったようだ。」

「そうにゃ」

ニヤメナのからかいに、ミヤレーが短く答えた。

実際に彼女は金を持っているが、全部がギルドの金庫と俺のアイテムBOXの中だ。

「へへ、そんなに金を稼ぎたきや、旦那のところにくればいいって言ってやれよ」

「そう言ったにゃ」

「ええ？ それじゃ獣人たちが領に増えるかもしれないのか。まあ公共事業は続けるつもりだから、しばらく仕事はあると思うが……」
しかしギルドに借金をしているなら、どこの街でも返済は可能だが、相手が商人だとそうはいかない。

借金を返してから動かないと、逃げたと思われて指名手配され――

―捕まると奴隷落ちしてしまう。

それを防ぐためには、借金の付け替えが必要だ。

「話は聞かせていただきました」

やってきたのは白いワンピースの寝間着を着たプリムラだ。

「話は――って、どうするんだい？ プリムラ」

「ハマダ領の領民になることを条件に、マロウ商会で借金の付け替えを行いましょう」

「それでマロウ商会にメリット――じゃない、利点があるのかい？」
「作業員を集める苦勞が減りますし、事業が順調に進めば結果的には、うちの利益になりますから」

どんな公共事業でも人員の確保ってのは重要だ。

作業員が沢山集まれば、そいつらの生活必需品や食料などもマロウ商会が手配することになるから、かなりの稼ぎになる。

もちろん事業が成功すれば、金も入ってくるしな。

すでにハマダ領とマロウ商会は官民一体の一心団体。

マロウ商会が実の娘を辺境伯の側室に入れているとなれば、商会と辺境伯は親戚同士。

他の商人たちは口を出せない。

元世界では官民癒着だの言われるところだが、この世界では普通だしな。

むしろ貴族の側室に自分の娘を押し込んだマロウの手腕が評価されるだろう。

実際の成り行きは、まったく違うが。

「マロウ商会金儲けの秘訣。損して得取れ」

「その通りですわ」

プリムラが寝間着のまま抱きついてくる。

「けど、金の回収やらはどうするんだ？ 逃げられたら大変だぞ？」
「ギルドを巻き込んでやりますので、大丈夫ですよ」
ギルドに返済するようにすれば、どこでも返済できるし、借金を踏み倒すとギルドが使えなくなるというかなりのデメリットが生じる。

「なんだ、その話し方だと、すでにギルドと話がついているような感じだが……」

「実はダリアの冒険者ギルドの支部をサクラに作ろうという話になっていまして……」

「俺のところには、その話は来てないが……」

「まだ、内密な段階です」

プリムラを抱き寄せて、大きな胸を揉む。

「なんで、アストランティアの支部じゃなくて、ダリアの支部なんだ？」

「それは……ああつ……だ、ダリアの支部のほうがマロウ商会の縁故が使えるので……うふふ」

「うちの奥さん、結構悪い商人かもしれないなあ」

「あらあ、その言葉はとても心外ですわ」

プリムラと口づけをしていると、コンテナハウスからアネモネが出てきた。

「あー！ もー！ プリムラは、ずっとケンイチと寝てたのに！」

「私はサクラからずっと離れていたもので、このぐらいは当然です」

「むー！」

「ほら、喧嘩しない。朝飯の準備をしよう」

「「ぐぬぬ……」」

アネモネとプリムラが睨み合っていると、ベルがコンテナハウス

から出てきた。

「にゃーん」

「よしよし——おはよう、お母さん」
彼女の黒い毛皮をなでてやる。

「にゃー」

一緒にスリスリをしてきたのはミャレーだ。

「なんだ、お前もか。よしよし」

ミャレーもなでてやっていたのだが……。

「なうーん……」

変な声で抱きついてきたのは、ニャメナだ。

「お前どこから声を出してるんだ？」

ニャメナも抱き寄せて、尻尾の根本をモミモミする。

「ケンイチ、そういうことすると、またトラ公が小便漏らすにや」

「にゃ、にゃー！」

ニャメナの股間から少々なにかが漏れる。

「ほら！ やったにゃ！」

「なうーん……」

ニャメナを抱き寄せて、ナデナデしてやる。

「もー！ ケンイチ、朝からあ！」

「ははは、ごめんよ、アネモネ」

アマランサスも起きてきて、結構ワイワイしているのだが、アキラのテントは閉まったままだ。

別に急ぐ予定はないので、そのまま寝かせといてやるか。

「にゃーん」

お母さんには猫缶をやろう。

そのうち、アマナもテントからはいでてきた。

「お、アマナ、おはようさん」

「おはようございます、旦那。話をちょっと聞かせてもらったけど、本当に大商人と貴族様の会話だねえ」

さすが商人だ、聞き耳を立てていたらしい。

「解っていると思うが、他言無用だぞ」

「解ってますよ。でも、悪いことをして民を苦しめるのは止めてくださいよ」

「もちろん、そんなことはしないよ」

今日の予定は――ノースポール男爵領へ赴き視察をする。

朝飯の準備をしながら、皆と話す。

「ケンイチ、今日はマリーの所へ行くの？」

「ああ、ノースポール男爵領に行くぞ。クロトンのやつは真面目に働いているだろうな」

「男爵領に問題があると聞いていけませんので、大丈夫だと思いますよ」

プリムラの話のとおり、ノースポール男爵領にもマロウ商会が手を伸ばしている。

手を伸ばすなんていうと、悪く聞こえるのだが――普通は貧乏貴族領なんかを懇意にしてくれる商人はいない。

せいぜい巡回してくる物売りぐらいのものだが、マロウ商会は積極的に男爵領に投資をしているのだ。

俺から買った農作物の種などの作付けも行なっている。

本当はビートなどを作らせればいいのだが、砂糖大根とか言われるこの植物は他の土地でも栽培できてしまう。

反面サトウキビは、栽培場所が特殊な作物のため、サクラ以外の土地での栽培は難しい。

他の貴族や商人は全部敵。便利な作物をバラ撒いて、そいつらに塩を送ってやる必要はない。

この国の貴族として王国の繁栄を願うなら、ビートを放出すべきだとは思うのだが――。

あいにく俺に王国への忠誠心はない。自分の領を守るのに精一杯だ。

一応、サトウキビのサンプルは王家には献上したし、義務は果たしていると思う。

これ以上の献身かつ過剰な義務は必要ないだろう。

アイテムBOXから出したテーブルを並べて、皆で食事を摂っているとアキラが起きてきた。

朝は簡単にグラノーラにした。

足りない人はパンを食ってもらう。

「おはようさん！」

「オッス！ グラノーラ食うか？」

「ああ……」

Tシャツで起きてきたアキラだが、頭がボサボサだ。

祝福で疲れ知らずかもしれないが、寝癖は直らない。

「昨日は遅かったのか？」

「ふう……ちょっと遊び過ぎたな、ははは」

「レイランさんから離れるほどに少年の心が爆発するんじゃないだろうな？」

「いやあ——ケンイチの言うとおり、少年の心は忘れないようにしたいねえ……」

「あまり愁嘆場は見たくないぜ……?」

「へへへ、大丈夫! いつものことだからな」

駄目だこりゃ。

少々諦め気味な俺だが、彼とレイランの問題で部外者が口を出すわけにはいかない。

最後に起きてきたのはカールドンだ。

「ははは、寝坊だな」

「申し訳ございません。ケンイチ様からの知識を整理して書き留めていましたら、いつの間にか……」

「旅は長いんだ。無理をすると後が続かないぞ?」

「はい、気をつけます」

彼も大急ぎで食事を摂り始めた。

食欲がないようなら、市販の栄養補助食品を食べればいい。

あれとバナナでも食っていれば、十分な栄養が摂れる。

かくいう俺も、インフルエンザに罹って動けなくなり、栄養補助食品とトマトジュースだけで3日ほど寝込んだことがあった。

それでも平気だったし、飯が食えない状態だったので、あのときはマジで助かった。

まあ、それはどうでもいいか。

さて、飯を食ったので、ノースポール男爵領に視察に行ってみますか……。

食事のあとを片付けて、テントやコンテナハウスをアイテムBOXに収納する。

一緒にカールドンのコンテナもだ。

「ほえ、相変わらず旦那のアイテムBOXは凄いねえ」

アマナが感心している。

「あそこのアキラもアイテムBOX持ちだぞ？」

「ええ？ そうなのかい？」

アマナが驚いていると、アキラのアイテムBOXからプロドが出てきた。

「こりゃ、たまげた！」

アマランサスのアイテムBOXの件は、黙っておこう。

彼女もアイテムBOXを持っていると、人に話したりしないしな。

出発の準備ができたので、皆で車に乗り込む。

徐々に同行する人が増えるのだが、乗り切れなくなったら、また
マイクロバス
コ○スターを出すか。

海までの道は平坦だし、街道も整備されているようだ。

マイクロバスでも問題ないだろう。

車が走り出すとマロウ邸を出て大通りを進み、南の門を目指す。

南門の一角に、貴族が多く住んでいる地区があり、そこにアスク
レピオス伯爵も住んでいると言う。

「数日後には、あそこに行かないと駄目か」

「仕事ですから諦めてください。以前、言いましたが、アスクレピ
オス伯爵は、そんなに悪い方ではありませんよ」

プリムラがそう言うのだから、間違いないだろう。

まあ、これも仕事だし——いろんな貴族とも会って経験値も積ん
だんだ。

上手くこなせるだろう。

ダリアの南の門を出て、俺たちは街の外に出た。
いつぞやのシャガの件以来だ。

目指す男爵領は、このまま南に向かい、しばらくすすんで東へ進路を取るらしい。

シャガの騒ぎがあった場所は反対の方角だな。

途中、アキラのプ○ドが先行した。

彼の車と一緒に乗っている、マロウ商会の番頭が地理に詳しいので、案内してもらうことに。

途中何箇所か集落を過ぎて、小さな森をすぎると目当ての男爵領が見えてきた。

ダリアから車のオドメーターで100kmぐらいで、ゆっくりと走って2時間ほどで到着。

それでも馬車よりは、かなり早い。

小さな森と畑がモザイク状になっているのだが、森を切り開き、開墾しながら領地を広げているのだろう。

その点は、俺のハマダ領と同じだ。

俺は、重機などをつかってインチキをしているが、なにかも人力で開墾するってのは、さぞかし大変だと思われる。

小麦や緑の色の野菜の葉っぱが生い茂る畑の中を通り集落にやってきたが、家が密集しているわけではない。

それぞれ自分の畑の場所に家を構えているので、分散している。

俺が住んでいた田舎でも見た光景だ。

そのうち1軒の家が見えてきた。周りの家よりちよつと大きめで新築だと思われる。

外壁は板張りで防腐剤が塗られていて黒い。

門もないので、そのまま玄関の前に2台の車を止めると、皆で車から降りた。

「辺境伯様、ここで少々お待ちを」
「解った」

マロウ商会の番頭の言うとおりで、ここで待つ。男が家の中に入っていた。

おそらく、ここが領主の屋敷なのだろう。
見るからに普通の家で、扉も普通だ。

「へえ、地方の領主の屋敷ってこんな感じなのか」
「そうですね。庄屋などの屋敷に間借りしている方もいらっしゃるんですよ」

プリムラの話によると――屋敷を作る余裕もないので、間借りするのだという。

ここを治めている男爵は、シャガの討伐で褒賞金をゲットしているので、それを使って屋敷を建てたのだろう。

ここは、マロウ商会からの資金提供も受けているらしいし。

「貴族といえども、なかなか大変だなあ……」
そんなことをつぶやく俺の領地には屋敷すらないが。

「聖騎士様――自領に屋敷もないのに快適な生活ができる時点で、まともではないのですえ」

「まあな。その上、旅行をしながらでも普段と同じ生活ができるしな、ははは」

笑う俺に、アマランサスが呆れている。

「ケンイチ、ここに来るのだって、本来なら馬車でまる一日かかるんですよ」

「俺のこれなら、日帰りできるしな」
プリムラと話していると、アマナがやってきた。

「旦那、今回はどこまで行くんだい？」
「海岸のオダマキだ」

「へえ、あんな所まで行くのかい？」

「ああ」

アマナも行ったことがないらしいが――そういえば……。

「ウルップってどこにあるんだ？」

ウルップはアネモネの故郷――と言っても、母親が行き倒れた地点ってただだが。

「オダマキよりは遠くありませんよ。方向も違いますし」

「アニス川の河口近くか？」

「そこまでは行きません」

まあ、聞いただけで行く予定はない。

育ての親に売られてしまったアネモネも行きたくはないだろうしな。

男爵を待っていると、車の周りでおかしな行動をしている男がいる――カールドンだ。

車の底を覗き込んだりしてメモを取っている。

サスペンションなどを調べているようだ。

カールドンの行動を見ていると――建物からマロウ商会の番頭と初老の女性が出てきた。

白髪頭を後ろの高い位置でまとめて、ロングスカートのメイド服を着ている。

「これは、辺境伯様にはご機嫌麗しく……」

「ああ、構わないよ」

毎回これか……。

「あの――男爵様は、畑のほうへ行っておりまして――あの呼んで

まいますので、しばらくお待ちを」

マロウ商会の話だと、アポは取っていたはずなんだが……。なにかトラブルだろうか？

メイドと話していると、アキラがやってきた。

「場所は遠いのかい？」

「そ、そんなには……」

「ケンイチ、俺の車で迎えに行つてやるよ」

「そうか、ありがたい。ついでに、クロトンつてやつの家に行つて、マリーって女の子を連れてきてくれないか？」

「オッケー！」

「それじゃ、私も行く！」

アネモネが手をあげた。早くマリーに会いたいのかもしれない。

やっとできた同世代の友達だったのに離れ離れになってしまったからなあ。

「おお、いいぞ」

「それじゃ、アネモネちゃんも一緒か」

アキラがドアを開けて、初老のメイドを乗せようとする。

「あ、あのこれに乗るのでございますか？」

「ああ、心配いらぬ。馬なしで動く馬車みたいなもんだから」

「馬なしで……ああっ！」

面倒になったのか、アキラがメイドを車に押し込めた。

おいおい……。

「それじゃ行つてくるぜえ！」

「よろしく頼む」

「あの！ これって大丈夫なんでしょうか？！」
車の中でメイドが叫んでいる。

「大丈夫大丈夫」

構わずアキラが車を発進させた。

「ケンイチ！　ウチらは暇だにゃ。近くの森に狩りに行っていいかにゃ？」

「おお、いいぞ。多分2～3時間ぐらいはいるはずだ」

「解ったにゃ」

当然、一緒にニヤメナも行くようだ。

アイテムBOXから、彼女たちの弓やボウガンなどを出してやる。

「にゃー」

「お母さんも行くのか？　行ってらっしゃい」

俺から道具を受け取ると走り出した獣人たちの後ろを、ベルがついていく。

森までそんなに距離はなかったので、彼女たちの脚なら問題ないだろう。

アキラが男爵たちを連れてくるまで時間がかかる。

アイテムBOXからテーブルを出して、お茶にする。

女性陣には紅茶、俺はコーヒーにした。

お茶菓子は、ウエハスをチョコで包んだもの。

プリムラとアマランサス、そしてアマナがテーブルでお茶をしている。

「こ、こりゃ美味しいねえ！　こんなの街で食ったらいくら取られるか……」

「金の話は止めろって」

「でも、商人としちゃ気になるじゃないか？　ねえプリムラお嬢さんよ」

「ふふ、そうですね。口には出しませんが、売ったらいくらで儲けがどのくらい——とすぐに考えてしまいます」

「やっぱり、商人ならそうだよねえ……」

そんな商人たちの話を黙って聞いてお茶を飲む、アマランサス。その姿は気品にあふれて、一見して只者ではない。

「アマランサスさんだっけ？ あんた、元お貴族様だろ？」

「ふふ、そう見えるかえ？」

「そりゃ、どう見たって平民には見えっこないし……」

「中々の観察眼じゃのう。じゃが妾は聖騎士様の奴隷じゃ」

自分のことを妾なんて言う奴隷がいるかよ——ってツツコミが入りそうだ。

アマランサスの口から出た単語に、アマナが訝しげな顔をしている。

「旦那、聖騎士って？ 普通の騎士とは違うのかい？」

「違うらしいな——王家から、そういう位をもらったんだよ。誰も知らない位だけだな」

「はあ……なんだか、すごいことになっちまったんだねえ」

アマナが呆れて紅茶を飲むのだが、説明しても信じてもらえないだろう。

その前に話せないけどな。

「ははは、本当にな」

苦笑いするしかないが、波乱万丈すぎるだろ、俺の人生。30分ほどすると、アキラの車が戻ってきた。

一緒に男爵も乗っているようだ。

他に男が1人乗っているように見える。

「ケンイチ、連れてきたぜ」

「サンキュー」

「ひええ！ あの距離を一瞬でえ！」

一緒に乗っていたメイドが目回している。

ちよつと刺激が強すぎたのかもしれない。

アキラがドアを開けてやると、降りてきたのは黒っぽいズボンに麻のシャツを着ている見覚えのある男。

ちよつと長くて黒い髪の毛を、後ろで束ねている。

「久しぶりだな。どうだ調子は？」

「ははっ、辺境伯様には多大な御恩を賜りまして……」

彼は――この男爵領が領民を募集しているというので紹介してやった男だ。

名前はクロトン――マリーの父親だ。

彼は、俺が辺境伯になったのを知っているらしい。

ここで男爵領の仕事もしているからな。話を聞いたのだろう。

この男は、アストランティアで役人をしていたのに、悪い奴らとつるんでいたせいで、街にいられなくなってしまったのだ。

それで俺が、ここを紹介してやって、引っ越してきて今に至る。

「ああ、いいからいいから――ケンイチでいいよ」

「しかし……」

あゝ面倒だな。

「ケンイチ様！」

そこに響く甲高い声。見れば麻のワンピースを着た彼の娘のマリーだ。

前に会ったときと同じように、栗色のウェーブヘアをツインテールにしている。

「ケンイチ、マリーも連れてきたよ」

「ケンイチ様には、いつもお世話になっております」

マリーがペコリとお辞儀をした。

クロトンも元役人だからな、礼儀作法にはうるさいのだろう。

「よく来たな。前より背が伸びたんじゃね？ まあまあ、テーブルについて、お菓子を食べてくれ」

彼女たちには、カップにミルクを入れてあげた。

「あれまあ、こりやまた可愛い女の子だねえ」

「マリーです！」

「マリーかい？ 私はアマナ、よろしくねえ」

「はい！」

アマナが、またかいがいしく女の子の世話を焼き始めた。

彼女は自分の娘を亡くしているので、この世代の女の子を見ると
ついつい世話を焼いてしまうらしい。

アキラと一緒に男爵もやってきた。

畑仕事だと言っていたのに、アーマーを装備して剣を持っている。
彼の愛剣――ウルフファングだ。

「ケンイチ様、アマランサス様、申し訳ございません。お迎えにも
上らず」

男爵が俺の前に膝をついた。

「まあ、構わないよ。こちらも押しかけてしまったし」

「マロウ商会さんにも、いつもお世話になっております」

「商会としては商売でやっておりますので」

男爵の言葉に、商会の代表としてプリムラが答えた。

だが男爵が完全武装して忙しそうにしているのは――気になる。

「男爵、なにか問題が起きているのか？」

「はあ……」

男爵の歯切れが悪い。

自分の領のことなので、他領の世話になりたくないのだろうか？
そこに、さっき出かけたばかりのミヤレーたちが帰ってきた。
ベルも一緒だ。

「ケンイチー！」

「あれ？ ミヤレーもニヤメナも、もう帰ってきたのか？」

「森の中は黒狼だらけにゃ！」

「ええ？ 黒狼か……」

「旦那、あれじゃ危なくて狩りなんてできっこないぜ」

「畑にも出てくるにゃ！」

「ははあ……」

俺は、男爵の恰好に納得した。

「ケンイチ、こりゃ黒狼退治か？」

アキラが俺のほうを見て、ニヤニヤしている。

「し、しかし、他領の方々にご迷惑をおかけするなど……それに我が領は予算不足で……」

男爵の歯切れが悪い理由は解った。

黒狼退治を頼んだりすると、金がかかるからだ。

——とはいえ、農民ばかりのこの領で戦闘できるのは男爵ぐらいなもんだろう。

「まあ、協力するかしないかの判断はあとですとして、とりあえず話してごらんよ」

俺の催促に男爵が、やっと重い口を開くと——黒狼だけではなく、

ゴブリンもいるらしい。
こりゃ大変だ。

187話 黒狼とゴブリン

ダリアで、サクラに移築する建物をゲットしたが、一緒に南のオ
ダマキに行く予定のマロウは留守のまま。

合流するのにはまだ数日の余裕がある。

その余裕を使って、ダリアから100kmほど離れた場所にあるノ
ースポール男爵領を訪れた。

シャガの討伐で一緒に戦ってくれた騎士爵が、手柄を立てたこと
で陞爵して男爵となったのだ。

ここには俺が紹介してやったクロトン一家も住んでいる。

男爵の屋敷を訪れたのだが、当の男爵がいない。

アキラに車で迎えに行ってもらうと、男爵とクロトン、そしてク
ロトンの娘のマリーがやってきた。

マリーはアネモネの同世代の友人であり、再会をとても喜んでい
るのだが、その横で男爵の顔色が優れない。

話を聞いてみると――森に黒狼とゴブリンがいるらしい。

この村では戦闘ができるのは男爵だけ。

彼の戦闘力はそれなりに高いが、1人で黒狼とゴブリンの群れと
対峙するのは不可能だろう。

領主として、その対応で追われていたようだ。

人の上に立つってのは大変だなあ――って他人ごとみたいだけど、
俺もそうなんだけどね。

彼はサクラでのクラーケン退治にも参加してくれたし、恩は返す
べきだろう。

「よし解った！ 男爵は我が領のクラーケン退治にも馳せ参じてくれた。まさに恩を返すべき機会を与えてくれた神に感謝せねばなるまい。私も義を以って男爵領に助太刀いたす！」

「お！ ケンイチやるのか？」

アキラは、すでにやる気満々だ。

「ああ、やるぞ。ここでやらにゃ、男が廃るってもんだろ」

「俺も水の上の戦闘ばかりで、まったくいいところを見せられなかったからなあ。ちよいとすごいオッサンだってところを見せてやらんなあ、へへへ」

「やるにゃー！」 「おう！」

獣人たちも乗り気だ。

チラリとアマランサスを見ると、彼女は黙ってうなずいた。

「私もやるぞー！ マリーを守ってあげなくちゃ！」

アネモネがフンスと気合を入れる。

「ええ？ アネモネも戦うの？ 相手は魔物だよ、危ないよ」

マリーはアネモネの心配をしているようだ。

「大丈夫！ 黒狼なんて何十匹も倒したんだから！」

「でもアネモネ、森の中で炎の玉の魔法とか爆裂魔法は駄目だぞ。
エクスプロージョン

火事になったら大変だ」

用水路の工事現場には作業員が沢山いて消火ができたし、近くに民家はなかったが、ここは違う。

「うん、大丈夫だよ！ マジックミサイル 光弾の魔法もあるし」

そこにアマナがやってきた。

「ちよいと旦那！ アネモネは本当に大丈夫なんだろうね？」

「問題ない。こんな戦闘経験が多い大魔導師なんて、王都にもいないぞ」

俺の言葉にアネモネがドヤァーという顔をしている。

「心配だねえ……」

心配するアマナをよそに、アネモネとマリーは手を握っている。

「アネモネ、気をつけてね」

「任せて！」

アネモネも、随分とたくましくなったものだ。

「しかし——我が領にはお礼できる金品が……」

男爵は、まだ渋っている。

「男爵、義を以って参戦するって言うてるんだから、そんなのはいらないんだよ。そうだなあ、仕留めた黒狼はもうとするか」

「それでよろしければ……」

「アイテムBOXがあれば保存もできるし。ウチは人数が多いから、肉はいくらあっても困らない」

そこにベルがやってきた。

「にゃー」

「そうか、お母さんも参戦するか」

「にゃー」

彼女が俺の身体にスリスリをする。

「プリムラ、悪いが男爵領に一泊することになるぞ」

「解りました。マロウ商会としても、投資をしている男爵領の魔物退治は必須だと思います。この領の被害が甚大になれば、投資したものが無駄になってしまいますから」

「ほら、男爵。出資元のマロウ商会もああ言ってるし」

「承知いたしました。それでは皆様、よろしくお願いいたします」
男爵が膝をついて礼をした。少々、真面目すぎるのが彼の欠点だな。

早速行動に移す。

獣人たちも森の中で見たと言うし、少しでも数を減らしたほうがいいだろう。

攻撃の準備をするために、アイテムBOXから道具を出す。
獣人たちの防具や武器などだ。

「お前たちに買ってやった装備の出番が多いな」
防具はドワーフの店で買ったもの。

「そりゃ旦那。どんないい道具でも、使わないと意味がねえ」
「そうだにゃ」

彼女たちに、コンパウンドボウやボウガンを渡す。

森の中は薄暗いが、獣人たちの目なら昼間も同然だ。
そこにカールドンがやってきた。

「あの――辺境伯様。私は戦闘は苦手です――戦闘経験もありませんので、役に立たないと思うのですが……」

「ああ、ここで待っていて構わんぞ。騎士を川で戦わせるような真似はしないよ。そうだ――時間がかかるかもしれないから、お前の部屋も出しておこうか」

アイテムBOXからカールドンの部屋を出した。

彼の頭脳は、様々な魔道具やらアイテムを作り出す才能だ。

戦いが苦手なものに参加させずとも、戦力は十分にある。

彼には研究をしてもらっていたほうが領のためにもなるしな。

餅は餅屋って言葉もあるし、この世界にも、商売は商人に聞け――

—とか、武器は武器屋に聞け——といった言葉がある。

「ご理解いただき、ありがとうございます」

カールドンが頭を下げた。

アキラは、自分のアイテムBOXから帝国魔導師の制服である、黒い服とマントを取り出すと——車の陰で着替え始めた。

「アキラ、その服はなにか特殊なのか？」

「ああ、魔法に耐性があるし、剣などでも簡単に切れないようになっている」

「防刃ベストみたいな感じか」

「そうだな。でも、メイスなどで殴られると意味はないけどな」

刃に耐性があるといっても、巨大な剣で殴られるとダメージがいるが、黒狼の牙などは通らないらしいので、今回の戦いに相応しい装備ってことになる。

水上の戦闘じゃまったく意味がないので、使っていなかったらしい。

俺の戦闘力は、コ〇ツさんと爆薬だけなので防具はない。

剣も振れないしな。

多分、帰ってきたら昼だ。

腹が減っていると思うので、残る女たちに食事の準備をしてもらうことにした。

アイテムBOXから道具と食材を出す。

「うーん、肉団子のスープで良いですか？」

プリムラが食材を見て、献立の結論を出したようだ。

「オツケーにゃ！」

「まあ、俺もそれでいいよ」

皆に確認を取ると異論はないらしい。

物足りない者は、あとでなにか追加で食べればいい。

「私も料理を手伝うよ」

「アマナ、頼む」

俺たちの準備を、クロトンと彼の娘、マロウ商会の番頭が心配そうな顔で見ている。

クロトンには村中を回って、魔物退治をすることを告げてもらう。討ち漏らした魔物が農地に出るかもしれない。

皆で準備をしていると、鼻だけ黒いシャム柄の男の獣人が走ってきた。

あいつは——クロトンといつもいた獣人だな。

確か——ニヤニヤスだったような……そうか、あいつもいたか。懐かしい獣人の顔を思い出した俺だが、男爵と彼と2人いても、黒狼の群れを相手にするのは厳しい。

魔導師でもいいが……。

「おおーい！」

「ニヤニヤスだったか？ 元氣そうだな」

「はあはあ……変な鉄の箱が走り回っているって聞いたもんで、もしやと思って飛んできたんだ」

獣人と言えども、全力疾走してきたので息を切らすが——彼はベルを見て、ペコリとお辞儀をした。

「辺境伯様が、ここの魔物退治を引き受けてくれてな」

クロトンが、ニヤニヤスにことの成り行きを説明している。

「なんじゃそりゃ！ そんな面白そうなことに、オイラも混ぜてく

れよ!」

「それは構わんが、余分な装備とかないぞ? 武器はあるが……」
こういうときのために、汎用の装備などがあつたほうがいいかな。

「相手は黒狼とゴ布林だろ? 武器だけあればいいぜ」

そう言うニヤニヤスに、カッタラス刀とポリカーボネートのバツ
クラーを渡す。

「俺がもらったのと同じやつだな。こんなことになるなら、持って
くればよかったぜ」

以前、彼には同じものをプレゼントしていた。

ニヤニヤスが軽々とカッタラス刀を振り回している。

「ついてくるのはいいけど、足を引っ張るんじゃないにや」

「おお、姉ちゃんはまだ旦那のところにいたのかい?」

「むふー、ウチは辺境伯様の愛人だにや」

ミヤレーが両手を腰に当ててドヤ顔をしている。

愛人を誇るってのもよくわからないが……。

「滝の所にいた旦那が貴族様になったって話には聞いちゃいたが、
物好きな貴族様もいたもんだ」

「どういう意味だにや」

そこにニヤメナが入ってきた。

「俺みたいないい女を愛人にするならともかく、クロ助みたいなチ
ンチクリンを愛人にするのは酔狂だって話だろ?」

「チンチクリンなら、トラ公だってドッコイだにや」

「なんだと?!」

「やるきや?!」

「「ぐぬぬ……」」

「そんなことで、言い争っているんじゃない」
とにかく、戦力が1人増えた。

このニヤニヤスって獣人は、一緒にクロトンを助けにいたりしたが十分に戦力になる。

皆の準備が整ったので、2台の車に分乗しミヤレーたちが敵を見かけたという森へ向かう。

もちろんプレートアーマーを着た男爵も同行する。彼はニヤニヤスと一緒にアキラの車に乗り込んだ。

「おいおい！ この鉄の箱は唸っているけど、大丈夫なのか？」
プ〇ドのエンジン音に、ニヤニヤスがビビっている。

「大丈夫だから、さっさと乗れ。俺はアキラな、よろしく」

「オイラは、ニヤニヤスだ」

ニヤニヤスも車に乗り込んだ。

彼の大きな身体だと、大柄なSUV車でも窮屈そう。

車のエンジンをかけると、プリムラに告げる。

「それじゃ行ってくるよ。夕方前には戻ってくるから、料理を作って待っててくれよな」

「解りました」

「旦那、大丈夫なんだろうね？」

「アmanaは心配性だな。大魔導師に剣の達人——竜殺しもいるんだ。1国の軍隊並の戦力だぞ？」

「アキラの旦那がドラゴンを倒したって本当なのかい？」

「街の噂で帝国の竜殺しの話は聞いたことがあったろ？」

「そりゃ、聞いたことがあるけど——それがあの人だなんて信じら

れないよ」

「そんなこと言っても、彼が帝国皇帝の近衛で竜殺しなのは事実だし」

心配性のアマナと話していてもキリがない。

俺は車を発進させて、ミヤレーたちが黒狼を見たという森へ行くことにした。

彼女たちは出かけて30分ぐらいで戻ってきたので、獣人たちの脚の速さから逆算すると5〜6kmといったところだろう。

獣人たちの案内で車を走らせ、そのあとをアキラの車がついてくる。

「あの向こうにゃ！」

「解った」

ミヤレーのナビ通りに走り、森の中へそのまま突入すると、後ろのアキラの車にも連絡を入れた。

「アキラ、このまま車で入るぞ」

四駆をデフロックして、ゆっくりと森の中に進入——小さな草むらなどはそのまま乗り越える。

『オッケー！』

『なんだ?! いったい、誰と話してるんではない?!』

無線機からニヤニヤスの声がする。

『前にいるケンイチだよ』

『辺境伯様はシャガ戦のときも、離れた場所と話すことができる魔道具を使っていたらしい』

この声は男爵だろう。

「ケンイチ、こちらへんにゃ」

森の入り口から200mほど入った所だ。

「解った——アキラ、停止する」

『オッケー!』

辺りを警戒しながら皆で降りると、後ろの車からも人が降りてきた。

男爵とニヤニヤスが車のことを話している。

「あの距離をこんな短時間で……やはり、ケンイチ様の鉄の召喚獣はすごい脚だ」

「男爵様は、こいつに乗ったことがあるんで？」

「ああ、もつと沢山の人を乗せて、野盗の討伐に赴いたのだ」

「へえ、そりゃ野盗の悪党どもも驚いただろうな」

「無論だ」

獣人たちに辺りを警戒させる。

「どうだ、においはするか？」

「ああ、旦那。鼻の曲がるようなにおいがプンプンしやがるぜ」「イヌコロのにおいだけじゃないにゃ」

彼女たちの話だと、おそらくはゴブリンのにおいだと言う。

「それじゃ、一緒にいるってことか？」

「それは解らねえが、においは混じってる」

散開すると、森の奥へ進み始めたのだが、すぐに黒い影が集まってきた。

かなりの数がいる——少なくとも、数十……。

「随分というな……」

「黒狼って雑食だからな。年に2回繁殖期があるし、子どもも多い」

アキラの話では——帝国にも黒狼が沢山いるらしく、魔狼と呼ばれることもあるようだ。

「森の中に軍の駐屯地を作ると、まずやるのが黒狼狩りよ」

「確かに、ここら辺でも多いな。俺が初めて襲われたのも黒狼だったし」

アイテムBOXから、双眼鏡を出して敵を覗く——距離は100mほどか。

「なんだありゃ……？」

大きな黒狼の上に緑色の肌をした子鬼が乗っているのが見え、俺たちを見つけて徐々に集結しつつある。

「ケンイチ、何か見えるか？」

アキラは敵の様子が気になるようだ。

「黒狼の上に、ゴブリンが乗ってる……」

「ああ、そりゃ厄介だな。黒狼と共存状態になったゴブリンは、移動距離が飛躍的に上昇するんだ」

「そりゃまずいな——それじゃ早々にぶちかまそう」

「やるか！」

「まずは先制攻撃を仕掛ける」

俺はアイテムBOXから、圧力鍋爆弾を取り出した。

ゴーレム魔法も一瞬考えたのだが、黒狼は動きが速いので追従できないだろう。

アネモネの爆裂魔法は爆炎が上がり火災が発生するのだが、こいつは純粹な爆風しか生まない。

ついでにポリカーボネートの盾も取り出す。

「こいつを、黒狼の群れの中に投げてくれ——ニャメナ」

「はいよう！」

獣人たちのパワーなら、この鍋を100m近くは余裕で飛ばせる。

「よし、行け！」

「おりやあああ！」

圧力鍋の黒い取手を掴んだニヤメナが、オーバーハンドでそれを投げ飛ばす。

銀色のステンレス製の鍋は、放物線を描き木々の葉っぱを飛び散らせながら、腐葉土の上にバウンドした。

黒狼の群れが一瞬割れたのだが、すぐにまた集結しつつある。

「皆、この透明な盾に隠れろ！」

「旦那、どうなるんで？」

ニヤニヤスが、俺のやったことが理解できずに棒立ちになっている。

「あれが魔法で爆発する」

「ええ?! マジですかい?!」

「ああ」

「ケンイチ様、火災の心配は?!」

「あれは大丈夫だ、男爵」

皆にポリカーボネートの盾を渡すと、それに隠れるように指示をした。

アネモネに双眼鏡を渡す。

「ちょっと見づらいみたいだが、いけそうか？」

「うーん——多分、大丈夫。銀色がはっきりと見えているし」

「よし、あいつが爆発したら、敵は混乱するだろう。そこに突っ込む」

「」「おう!」「」「にゃー!」

「お母さんは俺と一緒に」

「にゃー」

ベルの黒い身体を抱き寄せ、透明な盾を寝かせると、その陰に隠れた。

「いっくよー!」

「「「おう!!」」」

「むー! エクスプロージョン 爆裂魔法! (小)」

魔法によって点火された圧力鍋爆弾は、一瞬にして白い煙と化し、衝撃波と爆風で辺りを吹き飛ばした。

森の中に積み重なった落ち葉が、波のように押し寄せ、大木がなぎ倒される。

黒い狼たちも周囲に吹き飛んだ。

爆心地近くにいた連中は即死しただろう。

落ち葉が舞う中、俺たちは立ち上がった。

「すげえ!」

「よし! 突撃〜!」

「「「おおおっ!」」」

前に突っ込むのは、アキラ、アマランサス、男爵——そしてニャニャス。

突入する前衛たちの後ろから、援護の矢が次々と飛んでいく。

真っ先に黒狼の群れの中に飛び込んだのは、獣人で脚の速いニャニャスだ。

「うおおっ!」

剣技などなく、力任せに黒狼にカトラス刀を叩きつけて、黒い毛皮を次々に切り刻んでいく。

左腕に食いついてきた黒狼を、そのまま高く掲げて地面に叩きつけた。

「ギャイン！」

「死ねえ！」

彼が刀を振り下ろすと、黒狼の首が胴体から離れ、赤い血が噴き出す。

その血しぶきの中、次に戦場に到着したのは、アマランサスだ。くるりくるりと、まるでダンスを踊るように黒狼を両断していく。

「ギャン！」

飛びかかってきた黒い毛皮を下から回すように切り上げる。

槍を持ったゴブリンの攻撃をダンスのステップとターンで躲し、そのまま水平に敵の喉を切り裂いた。

「ギャワ！」

緑の子鬼が腐葉土に頭から突っ込む。

「さ、さすがアマランサス様！」

男爵は、ゴブリンが乗った大きな黒狼の突進を幅広な剣で受け止め、体当たりで敵の体勢を崩し間合いを取った。

「ぬおお！ 吼えろ、我がウルフファング！」

円を描くように振り上げた剣が、黒狼に乗ったゴブリンごと、正中線から真つ二つ。

瞬時に血まみれの屍が2つ、落ち葉にまみれた。

『プロテクション
聖なる盾！』

透明な見えない盾が男爵に飛んできた矢を防ぐ——アネモネの魔法だ。

「アネモネ殿、かたじけない！」

「うひょう！ 男爵様やるね！」 「そうだにゃ！」
ミャレーとニャメナは、後ろから援護のための矢を次々に飛ばしている。

「シャー！」

ベルが黒い疾風となって、黒狼の上に乗ったゴブリンの攻撃を躲し、首に牙を立てた。

そのまま引きずり落として地面に叩きつけると、大きな音とともに子鬼の首が折れる。

「グギャ！」

残った黒い魔物がベルにビビり、攻撃を躊躇していると身体に矢が突き刺さった。

その場に崩れ落ちるとトドメの矢が次々に襲う。

「おおく？ 皆やるなあ。俺もいいところを見せないとな、へへへ」
黒狼の群れの中に飛び込んだアキラが、左腕を獣に噛みつかせた。
一見やられているように見えるのだが、魔物の鋭い牙でも彼の黒い服を突破できないようだ。

「ガウウ！」

「ほい！ マヨネーズ！」

彼の右手の指から出たマヨネーズが、魔物の口の中にとっぷりと注ぎ込まれた。

「ガフツ！ ゲフツ！」

気道を黄色い粘液で塞がれた黒狼が、地面を転げ回る。

「ガウツ！」

「今度はこっちか！ おらよ！ マヨネーズ！」

右手を噛みつかれたアキラが、今度は左手からマヨネーズを出して、獣の気道を塞いだ。

この攻撃は、アキラがソバナで野犬を倒した方法と同じだ。どんな凶悪な生物でも、生きとし生けるものはすべて呼吸をしている。

それをネバネバした粘液で塞がれたら、取り出すことは不可能。かろうじて息ができるようになった場合でも、肺に入ったマヨネーズは腐り、肺水腫を引き起こす。

魔物では治療は不可能だし、人間であってもこの世界の医学では助からない。

彼は、これを使ってドラゴンも仕留めているのである。

窒息して戦闘不能に陥った黒狼が、腐葉土の上に転がる。

簡単には死ねないので魔物たちはのたうち回り、地獄の苦しみを味わうだろう。

「くわーっ、それがアキラの旦那の魔法かあ。えげつねえ」「あんなの絶対に喰らいたくないにゃ」

攻撃方法を知っていれば、口を開けない——などの方法で防げるのだが、初見殺しってやつだな。

彼と初めて対峙した敵が、まさか指から黄色い粘液が無限に出てくるとは思わないだろうし。

「へへへ、マヨ油を撒いて、火を点ければ一番早いんだがなあ」

「森でやったら大変なことになるだろう？」

「一応、マヨで消火もできるぞ？」

「そんなに大量のマヨネーズなんて、処理に困るだろ？」

「はは、まあな」

彼はマヨを使って山火事を消したこともあるらしいが、ここでは火の使用は控えてもらう。

一番後ろにいたアネモネの周りに光が集まってきて、細長い槍となった。

「むー！ 光弾よ！ マジックミサイル 我が敵を討て！」

顕現した6本の光の矢が敵に向かって撃ち出され、暗い森の中を進んでいく。

光が命中すると、魔物たちの身体に大穴が開き次々と崩れ落ちた。

「すげえ、これが大魔導師ってやつか……」

アネモネの魔法を初めて見たニヤニヤスが唸っている。

彼らのすごい戦闘を黙って見ているだけの俺。

こんなにすごい面々が揃っているんじゃ、俺のコ〇ツさんの出番もない。

回り込まれないように周囲を警戒する役目を担当している。

「ギッ！」 「ギギイ！」 「ワォオン！」

ゴブリンと黒狼たちが、森の奥へと引き始めた。

「ミヤレーとニヤメナ、やつらの後をつけてくれないか？ 近くに巣があるかもしれない」

「解ったにゃ！」 「おう！」

「巣を見つければ、一網打尽にできるかもな」
アキラの言うとおりで。

「あまり森の奥に入るようなら、追跡を諦めてもいいぞ。大分数は減らしたし、痛い目にあったと解れば他に移動するかもしれない」

「旦那、それでも可能な限りは全滅させたほうが……」

ニヤメナの言うとおりでが……皆を危険に晒したくないな。

「ふむ、そのとおりじゃな」

「私も、アマランサス様の意見に賛成でございます」
アマランサスと男爵も同意見か……。

「そりゃ、もちろんだが――森の奥だと危険が増すからな……」

「大丈夫にゃ！　これだけの戦力があれば、ドラゴンだって倒せるにゃ」

そりゃここには帝国の竜殺しがいるけどな。侮りは禁物。

「あのく男爵様。その女は奴隷なんじゃ……？」

ニヤニヤスは、男爵がアマランサスに対して敬語を使っているのが気になるようだ。

「ニヤニヤス、この方は我が主となるお方ゆえ、無礼のないようにな」

「え？　それじゃ、男爵様より偉い方ってことですかい？」

「そうだ」

そう言われても、彼にはなにがなんだか解らないだろう。

男爵には、アマランサスの身分を明かさないように言っているし。

アイテムBOXからトランシーバーを出して、ミヤレーに渡す。

「ミヤレー、こいつは前に使ったよな。使い方を覚えているか？」

「にゃ！　遠くからでも話せる魔道具にゃ！」

「そうだ」

「大丈夫にゃ！」

トランシーバーを受け取った彼女が、その場でバック宇宙をして機械を掲げた。

「旦那、オイラも行くぜ」

「ニヤニヤス、頼む」

「おう！」

獣人たちが、魔物を追って森の奥に消えていく。

彼らの鼻からは逃げることは難しいだろう。

一緒にお母さんもついていったから、大丈夫だと思うが……。

『ケンイチ！ 聞こえるかにゃ！』

「あゝ、聞こえるぞ！ 待ち伏せや罠に気をつけろよ」

『解ってるにゃ！』

『クロ助、俺にも貸せ！ 旦那、愛してるぜ！』

『このトラ公は、どさくさ紛れになに言ってるにゃ！』

「ははは」

一抹の不安は残るが……獣人たちに任せよう。

俺は、仕留めた黒狼をアイテムBOXに収納しつつ、獣人たちからの連絡を待つことにした。

188話 赤い煙

俺たちは、サクラとアストランティアの隣街であるダリアを訪問。そのついでに近くにあるという男爵領にお邪魔した。

ここを治めているノースポール男爵は、シャガ討伐や、ハマダ領でのクラーケン討伐で世話になった人物だ。

久々に会った男爵であったが、顔色が優れない。なにか心配ごとのようだ。

俺が心配していると、森に狩りに出かけた獣人たちが戻ってきた。森には沢山の黒狼がいたと言う。

男爵に話を聞くと、黒狼の他にもゴブリンが出没しているらしい。世話になった男爵のため、俺は魔物退治をして一肌脱ぐことにした。

早速、森へ繰り出すと黒狼の群れと遭遇。

こちらは一国の軍隊にも匹敵する戦力——狼やゴブリンなどに、そう簡単には負けるはずがない。

ある程度、敵の戦力を削ぐと、向こうは逃亡を始めたので、そのあとを獣人たちに追跡させる。

彼らの能力を使って魔物の住処を突き止めることにした。

俺からトランシーバーを受け取ったミャレーと他の獣人たちが、魔物のあとを追っていく。

彼らの鼻から逃げることはできないだろう。

かなり臭いのが俺でも解るぐらいだからな。

追跡は獣人たちに任せて、俺たちは一休みすることに。

仕留めた黒狼をアイテムBOXに収納したが、ゴブリンの死体はそのままゴミ箱へ直行。

耳をギルドに持っていけば小遣いになるだろうが、今更小銭を稼いでも仕方ない。

それが終わると、アイテムBOXからテーブルと椅子を出して飲み物を出す。

俺とアキラは立ったまま缶コーヒー、アネモネとアマランサスは座って桃のネクターを飲んでいる。

男爵にはカップにペットボトルの紅茶を注いでやった。

王侯貴族は、器から直接飲むというのは抵抗があるらしい。

まあ確かに、瓶に口を付けたら鍋から水を飲んだりしたら、少々行儀が悪いかもしれないな。

30分ほど皆で休んでいると、ミャレーから連絡が入った。

『ケンイチ、見つけたにゃ！』

「そうか！ 悪いが、こちらに1人戻ってきて案内をしてくれ。俺たちは獣人みたいに鼻が利かないんでな」

『解ったにゃ』

テーブルと椅子を片付けて待っていると、10分ほどでやってきたのはニャメナ。

「よし、いける所まで車で行くか」

「そうだな。俺たちの脚じゃ、獣人たちみたいにならんし」

俺とアキラ、それぞれのアイテムBOXから車を取り出して乗り込む。

アキラの車には、男爵が乗り込んだ。

下は腐葉土で多少凸凹はあるがほぼ平地——問題はないだろう。

「アキラ、行くぞ」

『オッケー!』

デフロックしたSUV車はゆっくりと走り出した。

案内人のニャメナは俺の隣に座って、窓を開けてにおいを嗅いでいる。

「へへっ、いつも後ろに乗っているが——旦那の隣ってのもいい眺めだな」

「ニャメナ、案内を頼むぜ」

「任せてくれ旦那!」

車はゆっくりと進んでいるが、後ろの座席にはアマランサスとアネモネが乗っている。

「聖騎士様、どのようにして攻略するのじゃ?」

「行つて現場を見てみないことには、解らんなあ」

「爆裂魔法で吹き飛ばす?」

俺はアネモネの物騒な提案を否定した。

「入り口だけ壊しても、裏口や抜け穴があるかもしれない」

「そうなんだよ旦那。でも、それを探すためには、かなり広範囲を歩き回らないとね」

後ろの車に連絡を入れる。

「アキラ大丈夫か?」

『問題なし』

『この召喚獣はすごいな。こんな森の中でも平気で走れるのか』
この驚いている声は男爵だな。

『もっと急斜面でも登れるぜ——ケンイチ!』

「お? なんだ?」

『こいつのウインチってないのか?』

「ちよつと魔法で作れるか解らんな……」

『そうか……まあ使わねえと思うが』

確か小屋の中などに取り付けるウインチは、シャングリ・ラで売っていたような気がするので、それを改造して取り付けるか。

もしかしたら、車用のウインチも売っているかもしれない。

いや、ウインチ付きSUV車に乗り換える手もある。

小型のジ○ニーとかな。

木漏れ日の中、柔らかい腐葉土の上を2台のSUV車が走る。

この車も、まさか異世界の森の中を走るとは思ってただろう。

10分ほどで、目的地が見えてきた。ミャレーとニャニヤスが立っているのが見える。

ベルの姿が見当たらないが、周辺を警戒中か？

「あそこか」

「ああ」

俺とアキラは手前で車を止めると、アイテムBOXに収納。歩いて獣人たちに合流した。

「あの召喚獣は、森の中も走れるのかい？」

ニャニヤスが、腐葉土の上を走ってきたSUV車に驚いている。

普通の馬車じゃ、森の中じゃ埋まって走れない。

「ああ——ミャレー、敵の巣はどこだ？」

「この先じゃ。穴の周りにおいているので、そこに逃げ込んだのは間違いないじゃ」

「穴？ 巣穴なのか？」

「そうじゃ、地面に穴が開いているじゃ」

とりあえず行ってみることにした。

ポリカーボネート製の盾を持って、罨や待ち伏せに注意して歩く。矢に毒でも塗られていたらヤバイ。俺やアキラは祝福とやらがあるから、なんとかなるかもしれないが……。

数分歩くと、その場所が見えてきた。

なるほど、地面に穴が開いていて、周りが踏み硬められている。腐葉土が普通の土のようになっていて、穴からは異臭が漂ってくる。

「くせえ！」

アキラが鼻を摘む。

人間の俺やアキラが臭いと感じるのだから、獣人たちには文字通りに鼻が曲がるにৌいだろう。

「聖騎士様、どうするのじゃ？」

「やっぱり魔法で吹き飛ばす？」

「待て待て、他の出口から逃げられるかもしれないと、さっき言っただろう」

「ケンイチ様、この穴の中で戦うのは……」

男爵も俺の所にやってきた。

「それは解っている」

しばし悩む……。

「男爵」

「はっ！」

「村でさらわれたりした住民は？」

「いません」

男爵とクロトンで村中を回って確かめたらしいので、間違いない

だろう。

「うゝん……」

「ケンイチ、これが洞窟なら煙で燻す手もあるが……」
アキラの言葉にひらめいた。

「そうだな！　それがいいかもしれない」

「マジで燻すのか？」

「いや、燻するのが目的じゃなくて、抜け道を探して潰すためだ」

俺はシャングリ・ラを検索して発炎筒を購入した。

車などに装備されているものだが、最近はLEDのものも増えているらしい。

1本3000円のを5本購入——結構高い。

「ポチツとな」

赤い筒が5本落ちてきた。

「ケンイチ様、なにをなさるのですか？」

男爵がアキラと一緒に発炎筒を見ている。

「煙を出そうかと思ってな」

「なるへそ、発炎筒かよ。確かにこれなら煙が出るなあ」

「他にも必要なものがあるな」

再びシャングリ・ラを検索すると、大きな蛇腹のダクトがついた送風機を購入した——1台2万円也。

オレンジ色に塗装された蛇腹のダクトが落ちてくると、獣人たちが飛び上がった。

「うわぁ！」 「ふぎゃ！」 「ひえ！」

「なんだ？　どうした？」

「管虫にゃ?!」

「ああ、違う違う——こいつは魔道具だよ」

「旦那、驚かせないでくれよ」「全くだぜ……」

まあ、確かに土管のように口を開けている様は、管虫によく似ている。

色もオレンジ色で、それっぽいしな。

「ケンイチ、これはなあに？」

アネモネがダクトを指でつついている。

「いつも髪を乾かすのに使っている暖かい風が出てくる魔道具があるだろ？ あれと似たようなものだが、もうちょっと強力」

「こいつを使って、発炎筒の煙を中に押し込むのか」

アキラが発炎筒を手にとって振っている。

「ああ、そうすりゃ、抜け穴があればそこから煙が噴き出すだろ？

煙に色もついているので、見つけやすい」

「よっしゃ！ 早速やろうぜ」

同じ元世界出身者がいるから話が早くていい。

これが地元民ばかりだったら、ものの説明からして厄介で話が進まないだろう。

「よくは解らぬが——妾は聖騎士様に従う」

「まあ、見ていれば解るよ」

アイテムBOXから発電機を取り出して始動させると、送風機につなぐ。

アキラと一緒に発炎筒に火を点けて、穴に次々と放り込む。

発炎筒の蓋を取ると大きなマッチのようになっていて、擦ると火が点く仕組みだ。

赤い炎を上げて、もうもうと煙が湧き上がる。

「すごい！ 煙が沢山！」

「にゃー！ 魔法かにゃ？！」

アネモネとミヤレーが煙に喜んでいる。

そこに送風機のダクトを突っ込み、機械のスイッチを入れた。
ゴウゴウと送風機が唸りを上げて、穴の中に風を送り始める。

「なるほど！ 聖騎士様解ったわえ！」

アマランサスが、いつの間にか取り出していた自分の扇子で手を叩いた。

「獣人たち、他の穴から赤い煙が出てくるから、そこを探してくれ」

「そうか！ 解ったぜ旦那！」

「ウチも解ったにゃ！」

「赤い煙だな！？ おう！」

獣人たちが森の中に散らばっていく。

「このような方法があるとは……」

男爵が腕を組んで唸っている。

「まあ、他のやつには、不可能な芸当だな」

俺も、アイテムBOXとシャングリ・ラがあるからできるわけだ。

こちらの穴から出てくるかもしれないから、警戒は怠らない。

10分ほどしたが、こちらの穴から出てくる気配はない。

ミヤレーはトランシーバーを持ったままなので、連絡を試みる。

「ミヤレー、見つかったか？」

「一箇所見つけたにゃ！ 赤い煙が出てるにゃ！」

「そうか！」

俺は、アイテムBOXからドローンを出して、上空から見てみることにした。

上から見れば、何箇所から煙が出ているか一目瞭然だろう。ドローンを飛ばす。

「うおっ！ 空を！ あれもケンイチ様の召喚獣ですか？」
「そうだ」

アマランサスは、俺が工事の方向を確認したりするときドローンを使っているのを見ている。

「ケンイチ、どんな感じだ？」

「まてまて、今見てみるから」
ドローンを旋回させると、森の様子がコントローラーの画面に映し出された。

「おおっ！ ケンイチ様！ これは空から見た絵がここに写っているのですか？」

男爵が液晶の画面を覗き込む。

「そのとおり」

「私にも見せて！」
アネモネも一緒に覗き込んできた。

「おっ！ 赤い煙が見えるぞ！」
上空から見ると、森の中の3箇所から赤い筋が立ち上っている。一箇所は俺たちがいる場所、もう一箇所はミャレーが見つけた場所だろう。

ミャレーに連絡を取る。

「ミャレー、煙が出ている場所は3箇所だ。お前はそこにいてくれ。

俺がそちらまでいく」

「解ったにゃ！ 場所は解るにゃ？」

「多分、大丈夫だ」

ドローンの画像からおおよその方向は解っている。

「穴から敵が出てくるかもしれないから、気をつけろよ」

「解ったにゃ！」

穴の中は暗いはずだし、煙でかなり視界が悪くなっているだろうから、敵も動かないとは思うが……。

敵が出てきたら、無理をせずに逃げるようにミヤレーに伝えた。

「ちょっと行ってくる。ここを見張っててくれ。多分、ここが一番デカイ穴だと思うし」

「そうだな。まあ、これだけの戦力があれば大丈夫だろう？」

アキラが辺りを見回して戦力を確認している。

「頼む」

ラ○クルを出して乗り込むと、アネモネも乗ってきた。

「私も行く！」

「解った」

車で森の木々の中を縫って走ると、赤い煙が見えてきたが、そこにはニヤメナとニヤニヤスがいた。

「ありゃ、こっちは違ったか」

ミヤレーに連絡を入れる。

「ミヤレー、もう一個の方へ来てしまったみたいだ。こっちにはニヤメナとニヤニヤスがいた。引き続きそっちを見張っててくれ」

「解ったにゃ！」

連絡が終わると車から降りた。

「ニヤメナ、穴から奴らは出てきたか？」

「いや、ここは静かなもんだよ。それにこちら辺には、おいが少ないね。多分、あまり使っていない穴なんじゃ」

「そうかよし！」

「ケンイチ、どうするの？」

アネモネは、俺がなにをするのか解らないようだ。

「まあ、見てろ」

俺はアイテムBOXから、久々に相棒を呼び出した。

「ユ○ボ召喚！」

空中から青いユ○ボが落ちてきて、地面を揺らす。

「おおっ！ こいつは、旦那がアストランティアで使った召喚獣だな？！」

ニヤニヤスは、俺が使ったユ○ボを覚えていたようだ。

「そうだ」

「なんだよ！ 俺と知り合う前に、こんなやつと面白そうなことやってたのかよ！」

「そう言うなニヤメナ。男爵の屋敷に男が来てたろ？ あいつが8○3に捕まってたのを、ニヤニヤスと一緒に助けに行ったんだ、ははは」

「そっちのほうが、ゴ布林退治より面白そうじゃん！」

ユ○ボに乗り込むとエンジンを始動——穴へと近づくと出入口を潰し始めた。

鋼鉄のバケットで地面に開いた穴を崩し、また埋め戻す。

こうすりゃ、この出入口はもう使えない。

その証拠に出てくる煙もなくなった。

「よし！ 次だ！」

ユ○ボを収納すると、代わりに再びドローンを出して飛ばす。

「うおっ！ 空を飛んでる！ なんじゃありゃ!？」

森の上を飛んでいるドローンにニヤニヤスが驚いている。

「あれも、旦那の召喚獣さ」

ドローンで上空から見ると、赤い煙の筋は2本になった。
機械を収納すると、画面で見た方向を指差す。

「もう1箇所は向こうだ。そこには、ミャレーがいる」

「よし旦那、行こうぜ！」

そこに森の中からベルが現れた。

「にゃー」

「お母さん、敵はいたかい？」

彼女を労い、黒い毛皮をなでる。

「にゃー」

「そうか、いないか……」

ベルが来ると、ニヤニヤスは頭を下げている。

俺とアネモネは再び車に乗ると、前の座席にベルも飛び乗った。
獣人たちは走って行くらしいが——確かに、森の中なら獣人たちの脚のほうが速い。

俺も祝福で疲れしらずといえど、脚が速くなったわけじゃないし——車で移動したほうが便利だし速いので、文明の利器を使う。
数分移動すると、煙の出ているのが見えてきた。

俺たちの接近に気づき、穴のある地点からちよつと離れた場所にいるミャレーが手を振っている。

車を止めて降りると、アネモネが後ろをついてきた。

「ミャレー、奴ら出てきたか？」

「いまのところ動きがないけど、地面から音がするにゃ」

「本当か？」

ミャレーの話を聞いて、他の獣人たちも地面に耳を付けている。

「旦那、マジでなんか来るぜ」

「それじゃ急ぐか！ 穴から逃げるやつがいたら、頼む」

「おう！」 「にゃ！」 「任せて！」

「ユ○ボ召喚！」

俺は再び、アイテムBOXからユ○ボを取り出した。

重機に乗るとエンジンを始動させて穴の所へ移動する。

「おりゃ！」

バケットで大きく土を掬うと――ぽっかりと開いた穴から緑色の子鬼がこちらを見上げていた。

「な！？ ユ○ボアタック！」

俺はそのまま掬った土を穴の中に流し込んだ。

「ギャー！」

そのまま子鬼が生き埋めになったかと思ったのだが、寸前で2匹が穴から這い出たようだ。

「ゴブリンが逃げるにゃ」

「させるか！」

ニャメナがボウガンを構えると発射――ゴブリンの肩に命中した。

もう一匹はベルが追う。

「トラ公の下手くそにゃ！」

「うるせえ！」

「むー！ 光弾よ！ マジックミサイル 我が敵を討て！」

アネモネの上に出た一本の光弾が、すぐに発射されて逃げる子鬼の胴体にヒット。

緑色の小人は上下に裂けた。

「うわっ！ エゲツねえ！」

魔法の威力に、ニヤニヤスがつぶやく。

アネモネが人型の魔物にマジックミサイルを使ったのは、今回の戦いが初めてのはずだが躊躇がないな。

これが異世界のメンタルか……魔物はあくまで魔物というカテゴリーなのかもしれない。

もう一匹のゴブリンは、ベルによって簡単に仕留められてしまった。

俺はユ○ボを回転させると別の場所の土を掬い、さらに出入口に盛って重機で踏み固めた。

「これで、簡単には掘れまい」

「旦那、出入口を埋めたけど、どうするんだい？」

ユ○ボを収納しているとニヤメナがやってきた。

「これから皆の所に戻る」

「それじゃ、そこでなにかするんだね？」

「そうだ」

「なにをするの？」

アネモネの質問に答えるのは難しい……。

「まあ、見てもらったほうが早いな。皆のいる場所は解るか？」

「解るにゃ！」

「俺を先導してくれ」

「解ったにゃ！」

やっぱり森だと獣人たちがいれば、色々とはかどる。

において自分たちの通ってきた道も覚えているし、迷うこともない。

戻ってきたベルと、アネモネを車に乗せると、アキラたちが待っている元の場所へ戻ってきた。

「アキラ、奴らは出てきたか？」

「いやーケンイチはなにをしてきたんだ？」

「他の穴を潰してきた」

「旦那が鉄の召喚獣を出して、ドカーっ！」

ニヤニヤスが、腕で重機のマネをして説明している。

「奴らを閉じ込めたわけだな？」

「そうだ」

「それで、つぎは？ まさか穴の中に入るのか？」

「このまま重機で穴を塞げば窒息すると思うんだが――」

「他になにか確実な手が？」

「毒ガス攻撃だ」

「は？ 毒ガスウ？ マジか」

元世界からやってきたアキラは、毒ガスを知っているが、この世界にはそんなものはない。

「聖騎士様、毒ガスとは何なのじゃ？」

「毒の霧だな。吸い込むと苦しんで死ぬ」

「うにゃ?! そんなのがあるにゃ？」

「もう、旦那はこれだから怖いんだよ……」
俺の話を聞いたニヤメナの尻尾が垂れ下がる。

「毒ガスって、そんなものを持っているのか？」

「いや、今から作る」

シヤングリ・ラで洗剤を検索する。

洗剤を買うとボトルに書いてある「混ぜるな危険」をやるわけだ。
なぜ、混ぜるな危険かというと、毒ガスが発生するからなのだが。
業務用カビ取り剤10Lで5600円を4本購入——全部で40L。

業務用トイレ洗剤10Lで3500円を4本購入——こちらも全部で40L。

「ポチツとな」

ドサドサと洗剤が落ちてきたが、それを見たアキラも、俺がなにをやるか解ったようだ。

「ははあ、有名な混ぜるな危険か——ここにも書いてあるな」
アキラが洗剤のボトルに貼ってあるラベルを見ている。

「こいつを穴の中にぶちこむ」

「混ぜてできるのは、なにガスだっけ？」

「確か塩素ガスだな。危険物の試験には出てこなかったのか？」
アキラは危険物の免許を持っていると言っていた。

「俺が取ったのは乙4ってやつで、石油とかガソリンのやつだからな」

「そうなのか」

穴に流し込むための塩ビ管を買う。

直径80mmで2mの管が3500円——こいつを3本連結して

穴へ入れる。

こちらの安全を考えて、なるべく奥へ入れたい。
こんなパイプは使い捨てなので、なんでもいい。

汚染されていると思うので、あとでアイテムBOXのゴミ箱へ直行する。

「ケンイチ、手伝う？」

アネモネがやってきたが、彼女には無理だな。

「危ないから、ちょっと離れてなさい」

「うん……」

ベルも興味深そうにやってきたので、ちょっと離す。
好奇心でおいを嗅いだりしたら危険だ。

皆に離れてもらい、俺とアキラで作業を進行させる。

彼には説明がいらなのがいい。

この世界の住民たちには、なにをやっているのか不明で、頭に「ハテナマーク」が出ているだろうが。

穴に塩ビ管を入れると、カビ取り剤を投入し始めた。

全部で40Lなので結構な量がある。

次にトイレ用洗剤——よく店に売っているサ○ポールってやつだ。
緑色の液体をドバドバと入れると、パイプに残っていたカビ取り
剤と反応して、黄色いガスが少し出てくる。

「黄色いのが出てきたにゃ！」

「黄色いモヤモヤを吸うなよ。喉が焼けただれて死ぬぞ！」

「ぎゃ！」「ひゃあ！」

ミヤレーとニヤメナが慌てて穴から離れた。

「剣呑剣呑」

ニヤニヤスが難しい言葉をつぶやく。

まあ、このぐらいなら平気だろうが、穴の中はこれから阿鼻叫喚地獄になるはず。

「塩素ガスは登ってこないのか？」

「これは空気より重いから、下に流れていく」

「なる。それじゃ、穴攻めにぴったりだ」

入れ終わったので、再び重機を出して穴の入り口を埋めて塞ぐ。

「ふう……これで中にいるのがゴブリンでも黒狼でも全滅だ」

「ひえええ……」

獣人たちが震え上がっているが、神妙な顔をしている2人がいる。いつの間にか出した扇子で口元を隠しているアマランサスと男爵だ。

「アマランサス様、これを地上で使われたら……」

「うむ」

「この毒の霧は色がついているし、地を這うから武器にはちょっと向かないな」

「なるほどのう……」

「それに、風向きが変わると自分に戻ってきてしまうから、使い所は慎重に選択しないといけない」

たとえば狭い谷に押し込めてとか、城の城壁の中に閉じ込めてとか――。

「聖騎士様は、この霧をお使いになったことがあるのかえ？」

「使ったのは今日が初めてだが」

「それにしては、使い方の知識が豊富な気がするのじゃが……」

「それについては話せないな」

俺の言葉を聞いたアマランサスが悲しい顔をする。

「失礼いたしました」

どうしたもんか。奴隷紋がある彼女は俺に不利なことはできないし、本当のことを話してもいいのだろうか？

それはさておき、毒ガス攻撃の本当の効き目は解らないが、穴は完全に閉じてしまった。

ガスの効き目が少しでも、いずれは穴の中で窒息するに違いない。

穴の中を確認することはできないし、これで撤収することにした。

「よし、男爵の屋敷へ戻るぞ」

「うーい！ 腹が減ったぞ」

「多分、帰れば飯が待っている」

「やったぜ！ 一仕事終えたんで、いっぱい飲みたいところだな」

「アキラ、まだ昼だぞ？」

「昼のビールが美味いんじゃないか」

戻りは簡単だ。

腐葉土の上に、車で走ってきた轍わだちができているので、それをたどっていけばいい。

一仕事終えたというのに、ニヤメナが難しい顔をしている。

「どうした、ニヤメナ」

「今日は、また旦那の怖いところを見ちまったぜ……」

「大丈夫にゃ。トラ公が死んだら、ケンイチがバラして隅から隅まで調べてくれるにゃ」

「止める！ クロ助！ 毛が逆立っ！」

そう言うニヤメナの尻尾から尻の毛が逆立って、ふわふわになっている。

「ニヤメナ、そんなことしないから心配するな」

「むー！　あまり活躍できなかった」

「そんなことないぞ、アネモネ。魔法も使ったじゃないか」
「そうだけど！」

「皆無事なら、それに越したことはない」

「そうだぞ、アネモネちゃん」

「うん」

「森の中じゃなかったら、爆裂魔法で一発だろうがなあ」
エクスプロージョン

「ケンイチ、黒狼もゴブリンも森の中にしかないにや」
まあ、皆が無事でよかった。

時間的には昼頃だ。

帰ったらちようど飯の時間だな。

189話 本来の仕事をする

俺は――以前、色々と世話になったノースポール男爵の領を訪れていた。

この領には、黒狼とゴブリンが頻出しているという。

男爵領で戦えるのは男爵と、獣人のニヤニヤスだけ。

明らかに戦力不足だし、男爵になにかあれば領民たちが路頭に迷ってしまう。

それで俺が一肌脱いだ。

男爵は、騎士としてアマランサスに忠誠を誓った、間違いない俺の味方だ。

助けるしかないだろう。

こちらは一国の軍隊にも匹敵する戦力で、相手は黒狼とゴブリン。あっけなく勝負はついて、魔物の巣穴も発見。

穴に閉じ込めてから毒ガス攻撃を加えたのち、重機で穴を埋めた。これで間違いなく全滅させられるだろう。

俺たちは、プリムラやアマナが待つ男爵の屋敷へ戻ることにした。

「旦那！ 大丈夫でしたか？！」

真っ先に出迎えてくれたのは、アマナだ。

彼女は凄く心配しているのだが、シャガ討伐のあとの俺たちの活躍を見てないからな。

「心配いらない。全滅させたぞ？」

「本当ですか？」

「ああ、なあ男爵」

「ケンイチ様のおっしゃる通り、間違いない」

「こんなちっこいのに、エゲツねえ魔法を使う魔導師様もいるしょ」
アネモネが胸を張っているところにカールドンがやってきた。

「ケンイチ様、ご無事でなにより」

「ああ、クラーケンなどに比べたら、余裕があったな」

「さすがでございます」

「アネモネ〜！」

「マリー！」

女の子2人が握手して、ぴょんぴょん飛び跳ねている。

「大丈夫だった？」

「うん！ 平気だよ！ もっと大きな魔物と戦ったこともあるし！」
その2人をアマナが渋い表情で見ている。

「旦那、こんな小さい子に、あまり危ないことは……」

「そんなことを言ってもなアマナ。彼女はもう大人だし、俺たちと同じ扱いをすることになってるんだ」

「その通り！ 私は大人だから！」

アマナは困ったような顔をしているが、アネモネは譲らない。

実際にアネモネの歳だと、この世界では大人として扱われて仕事もしているのだ。

元世界の常識に当てはめると、子どもを戦闘に参加させるなんて——と、俺も思うのだが、郷に入っては郷に従えの言葉どおりに、この世界の道理に従うことにしている。

「腹減ったにゃー！」 「いいにおいがしているぜ！」

料理のにおいをクンカクンカしている獣人たちの所に、プリムラがやってきた。

「皆さん、食事ができてますよ」

「やった！ 早速、食おうぜ。ケンイチ！」

アキラも空腹なように腹を押さえている。

「おう！ ——とその前にアネモネ。皆を綺麗にしてやってくれ」

「うん、皆集まって！」

アネモネの号令で、皆が一箇所に集まった。

「むー！ 洗^{クリン}浄！」

「ひゃー！ アネモネ、本当に魔法が使えるようになったんだね」
アmanaは自分の目で見えるまで、アネモネの魔法を信じていなかったようだ。

魔法が終わったアネモネは、マリーと手を繋いで食事が並ぶテーブルに行った。

「助かったぜえ。犬臭くなってたからな」

アキラが黒い制服の袖をクンカクンカしている。

「そりゃ、わざわざ黒狼に噛ませてからマヨを使ってるからだろ」

「ああするのが一番確実だからな」

「牙で破れたりはいしないのか？」

「大丈夫だ。こいつは見かけよりかなり丈夫なんだ。なにせ皇帝から直接賜ったものだからな。どのぐらいの価値があるか解らねえ、ははは」

アキラは帝国で近衛としてかなりの戦歴を積んでいるのだ。
それから導かれた戦法なのだろう。

「いいのか？ そんなものを持ち逃げして」

「ああいいのいいの、その分ぐらいいは働いたからな」

そこにニヤニヤスがやってきた。

「ちょっと旦那。皇帝ってなんですかい？」

「帝国皇帝だよ。ブリュンヒルドだっけ？」

「そうそう、よく知ってんじゃん」

「このアキラは、帝国皇帝の懐刀だったんだ」

「ええーっ！　なんで、そんな偉い人が、こんな僻地に?!」

ニヤニヤスが驚くのも無理もない。

「僻地は酷いな。それに僻地だったら、俺のハマダ領も負けてないけどな、ははは」

ニヤニヤスがアキラの正体に驚いているが、無駄話はこれぐらいにして飯を食うとしよう。

皆でプリムラのところに行ってテーブルにつく。

サクラでの食事と同様に獣人たちのテーブルはちよつと離れた所にある。

俺たちは気にしないのだが、獣人たちが逆に気にするようだ。

偉い方々と一緒だと、気を使って料理の味が解らないらしい。

まあ下手に気を使って食事をするより、自由に食えたほうがいいよな。

人数が増えて足りない分の椅子は、男爵のメイドが用意してくれた。

メニューは、プリムラが言った通り肉団子のスープ。

アイテムBOXの中には色々と肉があるからな。はやく消費しないと、どんどん溜まる。

どうしても消費できないようであれば、村の住民にくぼるのもいい。

この世界で肉の大量生産などはされていないので、その値段は高

い。

肉っただけでありがたがる住民たちは多い。

それでも――さすがに管虫の肉を食わせるわけにはいかないだろうが……。

熱い肉団子を頬張る。

ハフハフ――スープが染みていて美味い。

「ケンイチ！」

アキラがビールを飲む真似をしている。

まだ昼だが、彼も一仕事してくれたし、これから予定があるわけでもないし――いいか。

アキラと獣人たちにもビールをやる。

「やった旦那、話が解るぜ」

ニヤメナがアルミ缶に手を伸ばして、舌なめずりをしている。

「なんじゃこりゃ？」

ニヤニヤスは缶ビールは初めてだからな。

「こうやって飲むんだよ」

ニヤメナが、ニヤニヤスにビールの飲み方を教えている。

彼が不思議そうな顔をして、ビールに口をつけた。

「おっ！ うめえ！ こりゃエールか」

「うめえだろ」

獣人たちは獣人たちで楽しんでもらえばいい。

俺たちのテーブルに戻る。

「かっ！ うめえ！ やっぱ一仕事終わったあとのビールは格

別だな。どうだい男爵様も」

「さすがに昼間から……」

「いいじゃねえか」

アキラの言葉にも、男爵は「うん」と言わないので、ワインを出した。

ワインなら食事中に飲むのは、この世界でも普通だからな。

「うお！ 美味しい。こんな上等のワインなど……」

「まあ、遠慮なく飲んでくれ」

シャングリ・ラでも、安いワインだからな。

アマランサスにもビールをやる。

いつも俺の隣に座ったりするアネモネも、今日はマリーと一緒に座って食事をしている。

あれこれ話をしているようだが、今までの積もる話があるだろう。その隣にはアマナがいて、また世話を焼いている。

カールドンは相変わらず、自分の部屋で食事を摂っているようだ。本でも読みながら食べているのだろう。

彼のような人間は好きにさせるのが一番効率が上がるのだが、俺もその手の人間なので、彼の気持ちは解る。

テーブルにはマリーの父親のクロトンも一緒に座っているが、随分と居心地が悪そう。

「私も同席してしまってよろしいのですか？」

「ああ、構わんよ。クロトンもここの役人をしているのであれば、男爵と食事をしたりすることがあるだろう？」

「それは、たまにはありますが……さすがに辺境伯様となると」
まあ辺境伯ってことになるのかなり高位の貴族だからな。

普通の貴族より権限も色々と与えられているし。

困惑する彼の顔をみて、思い出したことがあった。

いつぞや、彼から借金のカタとしてもらった金の指輪だ。

古い結婚指輪で2つの指輪が対になっていて、宝の隠し場所が記してあった。

「クロトン、これを」

俺は彼に、金の指輪を返却した。

「え？ この指輪は……」

「実は、その指輪で稼がしてもらったから十分に元は取れた。金も返さなくてもいいぞ」

俺の話を聞いたクロトンは、狐につままれたような顔をしている。

「いや、そんなわけには……」

「はは、いいからいいから」

あの指輪に刻まれた文をたどって見つけたお宝——その中に入っていた爆裂魔法の魔導書^{エクスプロージョン}だけで、十分に元を取っているし。

「この御恩は一生忘れません」

クロトンが頭を下げた。

「相変わらず、旦那は人がよすぎるんだね」

「アマナのお小言も相変わらずだな」

「放つといってくださいよ！」

「そこがケンイチのよいところですよ」

「そうは言いますけどね、お嬢さん。あなたが見張ってないとんでもないことになりますよ」

「それでも聖騎士様に従うのが、妾たちの務め」

アマランサスにピシャリと言われて、アマナは呆れた。

「やれやれ——あたしゃ知りませんよ」

食事が終わると、皆で後片付け。

そのあとは俺の車に男爵を乗せて領の視察に出た。

俺の隣の助手席には男爵が乗っていて、プリムラは後ろだ。

マロウ商会が行なった投資が上手く機能しているか、彼女には確かめる必要があるので同行している。

他の領の話聞くのは、とても参考になる。

なにせ素人領主の上、素人異世界人だからな。

たまたま、なぜか使える能力を使って、成り上がったのに過ぎない。

俺を支えてくれる人々がいなくては、領の経営なんて大それたことは不可能だ。

この世界の主食は麦なので、多くの畑が麦だが、麦以外の農作物も緑の葉っぱを茂らせている。

多くの人々が農作業をしており、馬なしで動く奇妙な乗り物に、その手を止めている。

「うちから提供した、農作物の生育は順調みたいだな」

「はい、見たことがない野菜ばかりですが、味もおいしいと評判です」

シャングリ・ラに売っている種や苗は、F1種が多いので、できた野菜から種を取ると、先祖返りをしてしまう。

そのため古い種類でもいいので固定種の作物を提供したのだが、上手くいっているようだ。

俺が視察をしている間、獣人たちは狩りに行き、アキラは昼寝をすと言った。

アネモネはマリィと遊んでいるようだ。

アマナとアマランサスは——2人で話していた。

あの2人は馬が合うらしい。

領の運営は上手くいっているようで、資金を提供しているマロウ商会の娘、プリムラも喜んでいる。

もちろん領主である男爵もだ。

彼は、一代貴族である騎士爵から陞爵して男爵になったわけだが、領地を任されたということは、この領地を存続させていかなければならない。

そのためには世継ぎが必要だ。

それは俺のハマダ領でも同じなのだが……。

「男爵、お互い領地を任されて、次に考えるのは世継ぎのことだと思うのだが……」

「はぁ……」

「あ、いや——男爵が求婚したプリムラの前でそれを聞くのはまずかったかな？」

「……」

話を聞いていたプリムラは黙っている。

「いいえ、私よりケンイチ様を選んだ、プリムラ嬢の目は確かだったと言うことですよ、ははは」

男爵は暗い顔をして苦笑いをしている。少々やけくそ気味だ。

この感じだと、まだプリムラに未練があるのだろうか？

意外と男ってのは引きずるからなあ。

まして、世間に求婚したと噂が流れてしまったあげく、盛大にフラれてしまったのも、街の噂になっている。

彼の心中を考えると少々バツが悪い……。

「実は村の庄屋の娘と縁談の話が進んでまして」

「ほう、それはめでたい。そのときには参加させていただくよ」

「いいえ、男爵の婚姻に辺境伯様が出ていただくなど……」
婚姻の話が出て、プリムラが後ろから話しかけてきた。

「男爵様、ハマダ辺境伯様とつながりを示すいい機会ですよ」

「今は、本当にただの辺境だがな、ははは」

「すでに、アストランティアを含む、ユーパトリウム子爵領の運営は実質辺境伯様によって行われておりますので」

実際の経理はマロウ商会で、政治的な決定はアマランスがやっているのだが。

「それでは、ハマダ領とユーパトリウム子爵領は……」

「近いうちに合併いたします」

「まあ、身分は気にすることはないよ。アマランスに忠誠を誓った男爵は、もう身内同然なんだからさ」

「承知いたしました」

ぐるりと視察が終わると、午後の3時頃。

男爵の屋敷に戻ると、プリムラたちは料理の準備を始めた。

「辺境伯様、申し訳ございません。本当は我が領がおもてなしをせねばならないのに……」

「財政が厳しいのは知っているから、無理をさせるわけにはいかなからな。こちらが連れてきた人数も多いし」

「あまつさえ、黒狼とゴ布林退治までしてくださったのに……」

「さっきも話したが、もう身内なんだから気にしないでくれ」

「承知いたしました」

それにしても毎日料理をするってのは大変だな。

俺も元世界にいたときは自炊してたが、毎日テキトーな料理だったし、面倒なときはインスタントで済ませていた。

シャングリ・ラがあるのでインスタントも購入可能だが、普通の人たちは毎日苦勞して料理をしているわけだ。

サンバクとメイドたちが来てくれて、随分と楽になったが――。
まあ、その分経費がすごいかかっているんだけどね。

その経費も、高価な砂糖の生産で十分にまかなえるようになってきている。

さて、料理はできつつあるのだが、アキラからリクエストをもらってしまった。

ドラゴンのホルモンだ。

彼の言うとおり、あれも食べなくてはいけない。

普通の肉なら他に配ってもいいが、内臓となると抵抗がある者も多いだろう。

「プリムラ、せっかく料理を作ってくれてありがたいのだが、こっちは勝手にやるので」

「旦那！ 女の作った料理を袖にするなんて、偉くなったものですねえ」

アマナが怒るのだが、一応こっちの事情も説明をする。

「そう嫌味なことを言うなよ。アイテムBOXに入っている食材も消費しないといけないし、他の人が食えないものもある」

「その食えないものってなんですか？」

「魔物の内臓だ」

話を聞いたアマナがすごい顔をする。

「それとも、管虫のほうがいいか？」

俺のゲテモノコレクションに、アマナもお手上げ状態だ。

「……解りましたよ。ゲテモノ趣味のお貴族様ってのはどうなんですかねえ」

「プリムラすまん」

「いいえ、それでは余った分はアイテムBOXに入れてください。
明日の朝に食べましょう」

「解った——どうだ、男爵もこちらで料理は？」

「いや——あの……」

「あはは、冗談だよ。無理に食わせるつもりはないし」

貴族が動物の内臓を食べることなんて、ないらしいからな。

お城で、この世界の食材を数多く食べたリリスとアマランサスも、
内臓は食べてなかったみたいだし。

アキラと2人で包丁を振るいドラゴンの腸を切り刻み下ごしらえ
をする。

「ケンイチ、それを食べるにゃ？」 「旦那、俺にも食わせてくれえ」
ミヤレーとニヤメナが涎を垂らしながらやってきた。
前に食ったのを覚えていたのだろう。

「解った解った」

大きな腸を切っていると、徐々に日が傾き始める。

周りは本当に静かで、のどか——それに静けさにちょっとした哀
愁を感じつつ、アイテムBOXからLEDランタンを出して並べた。

辺りが暗くなるころ、コンロを出してホルモンを焼き始める。

アキラが持っている魔導コンロでも火は通るが——やはり直火の
ほうが美味しい。

肉を焼くともうもうと白い煙が舞い上がる。

外でやると、いくら煙を出してもいいからな——これがありがた
い。

こんなの家の中じゃ不可能だな。

ビールが飲みたいやつにはビールを出した。

「かゝっ！ こりやうめえ！」

アキラがホルモンを食いながら、ビールをあおっている。

「美味しいにゃー！」

「ああ！ うますぎて死ぬう！」

最初は遠巻きに見ていたニヤニヤスも、おいに我慢しきれずに参加してきた。

「なんじゃこりゃ！ 美味しい、美味すぎる！」

「○万石まんじゅう」

俺とアキラの声がハモった。

「ははは」

「はあ——これは、相変わらずたまらぬ美味さじゃのう……」

アマランサスも、以前にこいつを食べて虜になったようだ。

いつもは俺と一緒に飯を食っているアネモネも、今日は向こうのテーブルでマリーと一緒にだ。

「ミヤレー、悪いがこいつを、あそこのカールドンのところへ持っていくてやってくれ」

俺はホルモンが3切れ入った小皿を、ミヤレーに渡した。

「解ったにゃー！」

ゲテモノを食わしちゃ悪いと思うが、彼は常識には囚われないタイプだ。

「にゃー」

俺の足下にベルがやってきたので、タレのついてないホルモンをやると、美味しそうに食べている。

「ホルモンとビール、異世界痛風スペシャルバンザイ！」
異世界のごちそうとビールに、アキラはご機嫌だ。

「聖騎士様、痛風とは？」

アマランサスにとっては、聞き慣れない単語らしい。

「贅沢な食事ばかりしていると、足の先などが酷く痛むようになる」

「貴族の話で聞いたことがあるわえ」

「魔法で治らないのかい？」

「それが効き目がなく、激痛で転げ回るらしい」

魔法も万能ではなく、尿酸は分解しないようだ。

治りが早くなるってだけで、基本的な問題を解決しないことには
いつまでたっても治らない。

食事療法をすとか、運動するとか。

皆でジュウジュウと肉を焼いていると、カールドンが走ってきた。

「ケンイチ様、この肉はなんでございますか？」

「ドラゴンの内臓——腸だ」

「なんと！ このような美味なるものを食べたことがございません
！ 魔物の腸がはらわたこのように美味いとは——なんという僥倖！」

カールドンが、また万歳をしている。

よほど美味かったらしい。

「もっと食いたいなら、好きなだけ持っていけ」

「ありがとうございます！」

カールドンは焼けたホルモンを小皿に山盛りになると、自分のコ
ンテナに帰っていった。

夕飯が終わると皆で後片付け。

それぞれ寢床を出したが、クロトンの娘マリーはここに泊まっていき、アネモネと一緒に寝るという。

「それでは辺境伯様、娘をよろしくお願いいたします」

「ああ、明日ダリアに帰るときに家まで送っていつてやるから。奥さんによろしくな」

クロトンとニャニヤスにワインの瓶を持たせて、彼らは一緒に家に帰っていった。

1つ余分にコンテナハウスをちよつと離れた場所に出す。
こいつはゴニョゴニョ用だ。

「あのケンイチ——今日は」

俺の所にプリムラがやってきた。

「あゝ、今日はアマランサスに話があつてなあ……」

「……そう……ですか」

彼女の凄くしょんぼりとした顔を見て、激しい罪悪感に襲われた。

「あゝほら、まさか3人でするわけにもいかないだろうし」

「……あの、3人でもいいですけど……」

「はあ？ いや、アマランサスがなんというか……」

「妾はなにも申しませんぞえ？ 聖騎士様のすることに、なにも否定はできませんし……」

「そうだけどさあ……」

結局——本当に3人でゴニョゴニョする羽目になってしまった。

3人が裸で、大きなダブルベッドに寝ているが、2人は大きな耳を付けている。

「にゃーん」

「おい、アマランサス、止めろ。プリムラに誤解されるだろう？」

「聖騎士様は、こういうのが好きなのである？」

「そりゃ、好きだけどね。」

「まさか、アマランサス様とこんなことをしているなんて」

俺とアマランサスの行為に、プリムラがショックを受けている。

「にゃーん……」

それでもプリムラが、顔を真っ赤にして俺に抱きついてきた。

「プリムラ、無理をしなくてもいいから」

「いいえ、無理をしますから」

「いやいや、そうじゃないんだ。」

2人にはもっと大事な話があったはず――。

「ちょっと2人とも聞いてくれ。プリムラにも話してもいいだろう」

「話……？」

「俺とアキラは……実はこの大陸の人間じゃない」

「やはりそうかえ――薄々そう思っておったが……」

「遠くの国から飛ばされてきたんだが――そういう話は聞いたことがないか？」

ファンタジーには転移の魔法などがあることが多いが……。

「ありませぬ……が、初代国王は、どこから来たのか解っておりませぬ」

ああ、奴隷だったという初代国王か。

「それじゃ転移の門とか、転移の魔法とかの話は？」

「転移門の話なら王家の秘書の中にあります」

「え？ 本当か？」

「はい、失われた魔法だと……」

王家の書庫からはすべての本をコピーしてきたが、抜けているものもあるようだ。

あそこにあるのが全部ってわけでもないのだろう。

閲覧自体が不可って本もあるだろうし。

たとえば禁止されている魔法が書かれた魔導書とか……。

アマランサスと難しい話をしていると、プリムラがしょんぼりしている。

「ごめんなさい、ケンイチ。そのような大事な話をアマランサス様とお話するのに、割り込んでしまっ……」

「アマランサスには奴隷紋があるから、秘密を漏らさないのは確かだけど、プリムラも大丈夫だと思ったからさ」

「もちろんです」

「なるほどのう……聖騎士様の卓越した知識は、他の国のものだ」と

「そういうことだ。俺が秘術を公開してそれが戦に使われたりすれば、戦死者は10倍から100倍にも跳ね上がるだろう」

「なんと……」

「まあまあ、俺の秘密の話は済んだから、もう1回やろうぜ」

「……はい」

裸の3人が重なり、夜はふける。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

——男爵領で魔物退治をした次の日。

皆で朝食を摂るが、昨日ホルモンを食べた連中は、夕飯の残りだ。作ってすぐにアイテムBOXに入れたのでまだ温かいが——たとえば一晩寝かせたカレーを味わえないのはちょっと寂しい。

まあ、外に放置すればいいのだが……。

アネモネとマリーも積もる思い出話ができたようだ。

食事のあと皆で車に乗り、男爵に別れを告げる。

アネモネの隣にはマリーを乗せて、彼女の家に向かう。

彼女を家に送ったあと、クロトンと彼の女房に挨拶をして、俺たちは進路をダリアに取った。

「レッツラゴーにゃ！」

「ミヤレー、そんな言葉も覚えたのか？」

「オッケーにゃ！」

その使いかたは違うけどな。

ちょっとしたトラブルはあったが――俺たちは青空の下、車を走らせてダリアに戻ることにした。

190話 伯爵邸

ダリアまできたついでに、懇意にしているノースポール男爵が治めている領を訪れたのだが、魔物が出沒しているという。

男爵の話によれば、出沒しているのは黒狼とゴブリン。

男爵領にはマロウ商会が投資しているし、男爵はアマランススに忠誠を誓っている、いわば身内。

その話を聞いた俺たちは、魔物退治をすることにした。

1国の軍隊にも匹敵する戦力が揃っているのに、黒狼とゴブリンに負けるはずもなく、軽く撃破した。

魔物を退治したあと、夕方の食事で盛り上がる。

アネモネも友達のマリーとお泊りしてキャツキャウフフして嬉しそうだったし、よかったよかった。

俺たちは再びダリアに戻ることにした。

朝一で男爵に別れを告げ、マリーを家まで送っていくと、ダリアに向けて出発した。

マロウ商会を留守にしていたマロウも家に戻っているころだろう。車で安全運転ののち、2時間ほどでダリアに戻ってきた。

直接マロウ邸に乗り入れると、車から降りたプリムラが、屋敷の中に入っていく。

皆が降りたのを確認したあと、ペットのスライムを降ろし、車をアイテムボックスに入れた。

このまま入れようとするエラーが出て収納できない。

たとえば車に小型の虫などがいてもそのまま収納できるのだが、

死んでしまう。

虫でも、大型のキラーホーネットなどは収納できなかったの、
大きさによる判定があるようだ。

俺たちが外で待っていると、マロウが慌てて走ってきた。

「やあ、マロウ」

「ケンイチ様！ マーガレットを引き抜いてもらっては困ります！」
なにかと思えば、その話か。

マロウがマーガレットから話を切り出されたのだろうか？

「いやいや、俺が引き抜く気はないのだが、彼女が辺境伯領を訪れ
たいと言いつ出したんだよ。なあプリムラ」

「はい——お父様、そのとおりなのです」

彼女がカレーを食べて心変わりした経緯を説明した。

「なんと……しかしカレーとは……」

マロウ商会にもカレーを送ったことがあるので、マロウも食べた
ことはあるのだが、さすがにメイドのマーガレットまでには行き渡
らなかつたらしい。

今回、俺がマロウ邸にやってきて、初めてマーガレットがカレー
を口にしたわけだ。

「こちらにカレーを送るということで、マーガレットも納得したと
思っただが……」

「はい、私もそう思っていました」

「とりあえず俺が引き抜くつもりはないとだけ、予め言っておく」
「承知いたしました」

マロウも解ってくれたようだ。

まあ娘のプリムラもその場にいたからな。

「仕事が終わったあとにでも、プリムラも一緒に説得にあたってくれ」

「はい、そのほうがよいでしょう」

やれやれ、そんなにカレーが気に入ったのか。

この世界の香辛料でもカレーが作れるとはいえ、貴重で目が飛び出るような値段の香辛料を使わないと作れないからな。

それはさておき、仕事だ。

マロウ邸の庭にコンテナハウスを出して皆には休んでもらい――俺はマロウと一緒に、ここを治めているアスクレピオス伯爵の下に向かう。

さて、お貴族様の所に行くとなると――いつものこの恰好じゃま
ずいな。

着替えをするために新しいコンテナハウスを出し、中に入るとシ
ヤングリ・ラを検索してコスプレ衣装を探す。

黒い神父のような服があったので、こいつにしてみるか。

それに黒いマントを羽織ってみよう。

アイテムBOXから長鏡を出して、壁に立てかける。

「なんだか中二病のコスプレだな」

あとは、小物で革のベルトとナイフ。

豪華さを演出するため、金メッキのネックレスと指輪もしてみよ
う。

うーん、成金っぽい。

外に出るとアネモネがいたので、感想を聞く。

「うーん、貴族みたい」

「みたいじゃなくて、貴族なんだけどなあ、ははは」

そこにアキラがやってきた。

「おっ！ ケンイチ、コスプレだな、ははは」

「そういうアキラの帝国服だって、コスプレみたいだったぞ」

「まあな、ははは——おっ！ ケンイチ、アゴになんかついているぞ」

「え？ マジか」

俺は、アキラの言葉を真に受けて、アゴをなでた。

「うーん、マ○ダム」

「なんだよ、オッサンしか解らんネタは止めろよ、あはは」

2人ともオッサンだから通じるネタだが、日本全国でこのネタが通じるのもすごい。

コスプレはしてみたが——アキラの服と並べたら、作りが違うのは一目瞭然だ。

あちらは帝国皇帝から賜った超高級品、こちらはコスプレ用の安物だからな。

俺もいい布で、それっぽいのを作ったほうがいいのだろうか。

今度、アストランティアのカナンに相談してみよう。

一応、アマランサスにも見てもらうが、遠目では解らないから問題ないらしい。

伯爵の下に行くとなると、贈り物が必要になるだろう。

他の貴族たちにも、訪問したり、訪問を受けたりした場合は、白金貨の贈り物をしている。

シャングリ・ラでは、白金貨と金貨はほぼ同じ値段なのに、この世界では100倍の価値がある。

非常にコストパフォーマンスがいい。

金貨を白金貨と交換すれば、あっという間に大金持ちに——ということを考えてしまうが、実際は大量に供給すれば価値が下がって

しまし、市場も混乱するだろう。

通貨の発行というのは国がやっていることなので、それを辺境伯領が崩してしまうのはマズい。

この国を傾けるつもりであれば、それも1つの手なのだが。

白金貨を裸で贈り物にはできないので、シャングリ・ラから宝石箱を購入。

漆器だが、鳳凰の模様が書いてある綺麗な箱を見つけた。

こういうものは、この世界にはないだろう。

ちようにいい——お値段も手頃な3500円。

その中に白金貨を2枚入れた。

他の伯爵にも2枚渡しているので、揃えたほうがいいだろう。

これだけでも金貨200枚以上——日本円で4000万円の価値だ。

「……」

アネモネが、俺が持っている漆器の箱を見ている。

「どうした？　これが欲しいのか？」

「うん」

シャングリ・ラからもう1個同じものを買う。

安いからな。

「ほい、宝物でも入れるのかい？」

「ケンイチ、ありがとう！」

アネモネの目がキラキラと光る。

そこにいつもより上等な服を着た、マロウがやってきた。

「ケンイチ様、それが白金貨ですか」

「そうだ。珍しくて価値があるものっていえば、これが一番だろう。」

領主になれば、いいものはほとんど揃えているだろうし」

真珠でもいいのだが、お城から王族以外には卸すなと釘を刺されているからな。

「にゃー」

コスプレをしている所にベルがやってきた。

「お母さんは、伯爵の所には連れていけないからな。ここで待って
ておくれ」

「にゃー」

「え？ 似合ってる？ やめてくれよ、ははは」

森猫と話す俺は、傍からみたら危ない男にみえるだろうか？
でも、エルフや獣人たちは、森猫と意思疎通をしているようだし
な。

準備もできたので、車に乗って伯爵邸に向かう。

メンバーは、俺と助手席にはプリムラ、後部座席にマロウとアマ
ランサス。

マロウとプリムラは、伯爵に面識がある。

特にプリムラは、伯爵の娘とも交流があるようだ。

アマランサスを連れてきたが、奴隷の身分である彼女を入れても
らえるかは微妙だがな。

駄目だと言われたら、贈り物だけ置いて帰ってこよう。

プリムラの案内で大通りを走り、ダリアの南にある貴族街に向か
う。

伯爵邸はその一角にある。

大通りを右に曲がると、徐々に立派な石造りの屋敷が増えてきた。
無役の貴族やら、小役人もここに住んでおり、奥に行くほど上級
貴族だ。

アストランティアより大きな街なので、必然的により金持ちが多い。

ここを治めているのが伯爵なので、伯爵より上級の貴族はいないと思われるが……。

伯爵邸の前までやってきた。

金属製の大きな柵に囲まれた、白い屋敷である。

柵の向こうには大きな庭も見えるが、ソバナのレインリリー公爵邸よりは落ちるか。

門の前で車を止めると一旦降り——金属製のアーマーを着た兵士が2人、警備をしていたので話しかける。

「ケンイチ・ハマダ辺境伯だ。アスクレピオス伯爵にお目通り願いたい」

警備の兵士がブルブルと唸りを上げているラ○クルにビビっている。

「こ、これは辺境伯様！ あ、あの、この乗り物は？ 馬無しで動いておりますが」

「魔法で動く俺の召喚獣だ。噂で聞いたことがないか？」

「シャガを討伐したときに、戦士たちを巨大な馬なしの馬車で運んだという……」

「そうそう、それが俺だ」

「え?! シャガを討伐したあと、姿をくらましたという英雄ですか？」

「英雄ってほどじゃないがなあ。他の人が頑張ってくれたお陰だしまあ、それより伯爵に取り次いでくれ。マロウ商会も一緒だな」

「は、はい！」

まあ、一応アポは取ってあるんだが。

この世界には時計もないし、何日も馬で移動するため、トラブル

で数日遅れるなんてざら。

今日会えないのであれば、オダマキからの帰りでもいいのだが…

俺は車に乗り込み、門番を待つことにした。

兵士たちも、俺を辺境伯だと疑っていないようだ。

やっぱり人間ってのは見た目が重要ってことだよなあ。

人間、中身が大事ななんて言うけど、やっぱりほとんどが外見で決まる。

悲しいけど、これって現実なのよね。

そんなことを考えていると門番の兵士と黒い服を着た初老の紳士がやってきた。

多分、男は伯爵の執事だろう。

なぜか執事という職業は、グレーの頭をしてひげを生やしている男が多い。

俺のイメージもそうだし、この世界の貴族のイメージもそうなのだろう。

変なところで共通点が多いものだ。

いや、同じ人類なら考え方や思考も似てくるのだろうか？

この世界の文化だって、元世界の知識で理解できるほど近いものだし。

「どうぞ、中へお進みください、辺境伯様！」

紳士に案内されるまま、車を奥にゆっくりと進める。

アクセルは踏まずクリープ現象だけで移動だが、人が歩くより速い。

紳士は息を切らしながらついてきた。

玄関の前に到着。屋根がついた小さな階段の奥に大きな両開きの扉がある。

皆で車から降りると、俺の鉄の召喚獣をアイテムBOXに収納した。

それを見た紳士が驚く。

「アイテムBOXだよ」

「う、噂には聞いておりましたが……」

「押しかけてきて礼儀知らずなことを言うようで申し訳ないのだが――護衛として奴隷の彼女を同行できるよう、伯爵にお取次ぎ願いたい」

俺がアマランサスを指差すと、執事はチラリと彼女のほうを見た。首にある奴隷紋を確認したのだろう。

「承知いたしました。とりあえず、こちらでお待ちを……」

玄関を入るとそこは吹き抜けのホールで、シャンデリアがぶら下がっている。

両脇には2階へ上がる階段。貴族の屋敷はこういう造りが多いな。俺たちは、ホールのすぐ近くにある一階の客間に案内された。

小さな石造りの部屋に赤い絨毯が敷いてあり、小さな正方形のテーブルと、赤いソファが置いてある。

調度品も豪華で、ガラスの窓からは日の光が入っているが、白いカーテンで遮られている。

「さて――なんて言われるかな？」

「妾のことなど、気にすることはありませんのに」

「まあ護衛だからな。何かあったら、俺だけでマロウやプリムラを守れないし」

俺の話を聞いていたプリムラが反論する。

「アスクレピオス伯爵は、そのような方ではありませんけど……」

「俺が会うのは初めてだからな。まあ駄目だと言われたら、贈り物

だけ置いて帰るから」

こんな条件を出すのは礼儀知らずなのは解っているが――奴隷っただけで差別するような貴族であれば、どのみち俺とは考え方が合わないし。

「マロウ、伯爵に紹介してもらったお前の顔を潰すようなことになったら、申し訳ないな」

「なにをおっしゃいます。おそらく大丈夫でしょう……」

美人のメイドさんが、お茶を持ってきたので、それを飲みつつ待つ。

お茶といっても葉草茶で、元世界のようなお茶ではない。

ちよっとシャングリ・ラを検索すると、お茶の木――チャノキの苗が普通に売っている。

この国は温暖なので、普通に育つのではないだろうか？

普通に出されたお茶を飲んでいるが――こういう場合、貴族だと毒の心配もしなくちゃいけないのかなあ……毒見を用意したほうがいいのか？

ここの伯爵はマロウも知り合いだから、ここで毒を盛る意味はないだろうけど、いつの間にか敵対していたり密かに野心を燃やしている貴族もいるだろうし……。

まあアキラの話では、祝福があるならそう簡単には死なないそうだが。

ああ、こんなことを考える自体が嫌だなあ。

ゆっくりと森の中でスローライフがどうしてこうなった。

少々落ち込んでいると、執事がやってきた。

伯爵が会うと言う。

客間から出るとホールを通り、手すりのついた階段を上がって2

階へ行く。

俺が先頭で後ろはアマランサス、その後ろがマロウとプリムラだ。ホールは石材だが階段と廊下は木製。

王宮に比べたらそりゃ質素かもしれないが、見事な造りだな。

歩きながらキョロキョロと見回す。少々みっともないが、屋敷を建てる際の参考にしたい。

写真を撮ればいいんだが……。

こんな屋敷を建てられるのは一体いつになることやら。

魔法で地面から生えてくるとかじゃないからなあ……。

2階に上がると、吹き抜けから長い廊下があり、一室に案内された。

執事が黒い扉をノックをする。

「辺境伯様がお越しになりました」

「入ってもらえ」

扉を開けてもらい、中に入る。

中にいたのは、正面の机に座っていた御仁と、その家族。

正面に座っている白い頭をオールバックにしているのが伯爵だろう。

金糸の刺繍を施された緑色の服を着ている。

いかにも墮落した貴族って感じの丸いブヨブヨの身体ではなく、ゴツくて四角い顔に口ひげを生やした武人といった佇まい。

歳は50歳ぐらいか。

彼の右側にいるのが、正室だろう。

高くアップにした金色の髪と胸の開いた白いロングドレスを着た美人。

歳は40には届いていないように見える——意外と若い。

その横には男女の子どもがいるが、伯爵の子どもだろう。紺色の服と半ズボンを穿いた短い金髪の男の子と、フリルのついたピンク色のワンピースを着た女の子。

お姫様は長い金髪の髪をツインテールにしている。

男の子は12歳ぐらい、女の子は10歳ぐらいか。

正室も子どもたちも全員金髪なので、伯爵の白い髪ももともとは金髪なのかもしれない。

部屋の真ん中には、花が生けられた白い花瓶が載った四角いテーブルと、赤いソファ。

「初めてお目にかかる。ケンイチ・ハマダ辺境伯だ。護衛の奴隷を同席させるなどと、無理を申して申し訳ない」

右手を曲げて腹に当てて礼をする。これで相手が目上だと、膝を折らねばならない。

一応、ユリウスと一緒に、礼儀作法のお勉強もしている。

面倒だが、社会人としてやらねばならぬこともあるのだ。

それは元世界でもこの世界でも同じ。

辺境伯は、この世界では侯爵クラスらしいので、伯爵相手であれば敬語は不要。

何事も初めての経験なので、ビビりまくっているのは内緒だ。

「おおっ！ よくぞお越しかったです、辺境伯様。どうぞお座りください」

伯爵は手を出して、笑みを浮かべた。

その表情を見て俺の緊張も緩む。奴隷を同席することに関しても、なんとも思っていないようだ。

アマランサスとマロウ商会の2人を後ろに立たせて、俺はソファに座る。

本当は王妃なのに、俺の後ろに立つなんて考えられないのだが、

彼女が奴隷を止めないのだから仕方ない。

マロウ商会の2人もそうだ。

プリムラは俺の側室で、マロウは俺の義理の父なのだが、身分の違いはいかんともしがたい。

俺の正面に座った伯爵から彼の家族の紹介を受ける。

「皆様よろしく」

トコトコと女の子がやってきたと思ったら、俺を素通りして、後ろに立っているアマランサスの所にいった。

「あの――アマランサス様？　なぜ、後ろに立っておられるのですか？」

「大きくなったの、公子。妾は奴隷の身分なので、聖騎士様と一緒に座ることはできぬ」

どうやら、アマランサスと彼女は面識あるようだ。

領主クラスなら、登城することもあるから当然といえる。

「聖騎士様？」

アマランサスの言葉を聞いて女の子が首を傾けたが、無邪気な彼女の行動が、部屋の空気を一変させた。

まさか一発でアマランサスの正体がバレるとは思ってなかったの
で、俺も焦った。

「な、なんですと！？」

「まさか、アマランサス王妃？！」

伯爵と正室が飛び上がった。俺の後ろに立っている女性と、自分の記憶とを照合した結果、その結論を出したのだろう。

目の前に王妃がいるんだから、驚くのも無理もない。

「妾はすでに王妃ではない。娘のリリス共々王族籍を抜けており、

辺境伯様の庇護の下で暮らしている」

「お、王女殿下まで……？」

「……そのような噂がちらほらと聞こえてきて、悪趣味な噂だと一蹴していたのですが……」

「ああ、私から弁解させてくれ。私がアマランサスに奴隷を強制しているわけではない」

「それでは、なぜそのような」

伯爵の問いにアマランサスが静かに答えた。

「それは妾の心のホゾゆえ、人には答えられぬ」

彼女の答えを聞いた伯爵家の面々が黙ってしまった。

アマランサスの話の切れ端を集めると「ずっとこうだったらしいのだが。」

「まあ、それはさておき——伯爵には贈り物をさせていただく」
俺はアイテムBOXから漆器の箱を出すと、テーブルの上——伯爵の前に置いた。

「こ、これは？」

「白金貨だ」

「こ、これが?!」

伯爵家の全員が箱の中身を覗き込んでいたので、彼から白金貨を一枚借りると魔力を流す。

彼らの目の前で、銀色のコインが薄っすらと光り出す。

当たり前なのだが、このデモンストレーションをすると、どんなやつでも一発で信じる。

「なんと、本物……」

「もちろんだが、白金貨は懇意にしている貴族全員に贈っているものなので、他意はない」

白金貨を見ている伯爵の家族から女の子が抜け出すと、後ろに立っているプリムラのところにいった。

「プリムラ、今日はなにか面白いものはないの？」

「申し訳ございません、エリカ様。今日は辺境伯様のお付添なので……」

プリムラが困った顔をしている。

「なんだ、つまらない」

「これ！ エリカ！ 辺境伯様の前で、はしたない！」

伯爵が女の子を咎めるが、そんなことはお構いなしだ。

中々のお転婆のよう。

そんな娘のことなど気にもしない正室から、伯爵が突かれている。

「伯爵、なにか？」

「はあ、誠に申し上げにくいのですが……辺境伯様は真珠を持っておられるとか……」

ははあ——お城での一件が、ダリアまでやってきたってことね。

その真珠を正室が欲しがっているのだろう。

「それは事実なのだが……王族のアルストロメリア様から、王家以外に真珠を卸すな！——と釘を刺されてましてな」

それを聞いた伯爵ががっかりと肩を落とした。

「そこをなんとか……」

——と伯爵は言いかけたのだが——ハツとなにかに気づいて、アマランサスのほうを見た。

王家の意向に逆らう行為を王族の前でしてしまったと思ったのだろう。

「ああ、先程も申し上げたように、アマランサスは王族から抜けておりますので」

俺の言葉を聞いた伯爵と正室は、ホッとした表情を見せた。

「しかし参りましたねえ。今後のお付き合いのこともあるし——伯爵の意向には応えたいのだが……」

奥さんに弱いご主人のようで、俺の言葉にかなり凹んでいる。

その姿を見て、悪い人物には見えないように見えるのだが……。

「うーん、それではこうしよう。沢山の真珠を卸してしまえば出どころがバレるので、一粒もので我慢してもらうというのは」

伯爵と正室がなにやら、ヒソヒソ話をしている。

「承知いたしました」

話は決まった。

俺はシャングリ・ラで検索して、18万円ぐらいの真珠1つ玉の18金のネックレスを購入した。

天然ものの大玉なので、もちろん高価——白い真珠ではなく、黒っぽい色をしている。

「これなどは？」

「わあああ！」

真珠を見た瞬間、目をキラキラさせて正室が飛びついた。

「一粒であれば、昔から家に伝わる家宝だとして言い訳も通じるだろう」

「辺境伯様に感謝いたします……それで、この代金は……？」

伯爵が恐る恐る俺の顔をうかがっている。

「ああ、隣領としてお世話になることもあるだろうし、お近づきの

印として贈らせていただく」

「なんと——ありがとうございます！」

伯爵はホッとした表情をしているが側室はいないのだろうか？

正室だけに贈って、側室には贈らないとなると揉めそうだが……。

「重ねて、出どころは内密に願います」

「もちろんでございます」

代金を取るつもりは最初からなかったが、代わりを思いついた。

「代金の代わりと言ってはなんだが——少々頼みたいことがある」

「なんでしょうか？」

「この屋敷を案内してほしい」

「屋敷を？」

この屋敷の趣味が俺の好みなので、サクラの屋敷を作る際に参考にしたい。

その旨を伯爵に伝える。

「承知いたしました。それでは執事に案内させますので」

「感謝する」

執事がやってきて屋敷の中を案内してもらったことになったが、マロウはプリムラと一緒に、部屋に残るようだ。

「ケンイチ様、私どもは伯爵様とお話がございますので……」

「ああ、解った。俺は屋敷を見学させてもらおうとするよ」

商売の話でもするのだろう。

俺は、執事と一緒に伯爵の屋敷を見て回ることにした。

191話 獣人の男の子

俺は男爵領からダリアに戻り、この地を治めているアスクレピオス伯爵と会った。

貴族なんて聞くと、デブで民から税を搾り取り、贅沢の限りを尽くす——なんてテンプレな人物像が浮かんでくるが——。

ダリアにいる伯爵は、俺の期待をいい意味で裏切る紳士だった。

伯爵との面会は無事に終了したが、マロウ商会は伯爵との話し合いがあるようだ。

おそらくは商売のことだろう。

俺はやることなくったので、伯爵の屋敷を見て回ることにした。

この屋敷は派手すぎず上品で、俺の好みの造りをしている。

サクラの屋敷を建てる際の参考にしたいと思う。

執事に案内されて屋敷の見学をしていると、俺の後ろにはアマラシナスがついてくる。

アイテムBOXから一眼レフカメラを出して屋敷内を撮影をするが、フラッシュを焚かなくてもISO感度を上げれば十分に写るので、最新のカメラはすごい。

カメラを使っている俺を執事が訝しげな表情で見ている。

「そ、それは……？」

「これは魔道具なので、気にしないでくれ」

屋敷の中をくまなく案内してもらって写真を撮っていたのだが、いつのまにか足音が増えていたのに気がついた。

下を見ればツインテールの女の子。

カメラのファインダーばかり覗き込んでいたので、解らなかった。

「エリカちゃんだっけ？ ご両親と一緒にいないかいいのかい？」

「だってつまらないんだもん」

彼女がじくっと俺の顔を見上げてくる。

「なんだい？」

俺は彼女と視線を合わせるために、しゃがみこんだ。

「辺境伯様——私も真珠が欲しい……」

「ははは、よしよし」

彼女の頭をなでながら、俺はシャングリ・ラを開いた。

あまり高価なものは必要ないだろうし、イヤリングがいかもし
れない。

銀とカットガラス、真珠の一粒玉のイヤリングがセットで150
0円だ——安い。

購入ボタンを押すと、白いイヤリングが落ちてきた。

「これでいいかい？」

俺は彼女の耳にイヤリングをつけてあげると、アイテムBOXか
ら取り出した鏡を見せる。

「ほら、凄く似合ってる」

「辺境伯様ありがとう」

彼女に抱きつかれて、頬にキスをされた。

なんか、すごい照れるが、彼女が俺をじっと見つめている。

「なんだい？」

俺の言葉にも、ツインテールの女の子は廊下を駆けていった。

そのまま柱の陰に隠れると、頭だけ出してまたこちらをじゅっと見ている。

なんだ？ その仕草は可愛いが、なにかあるのだろうか？

気がつくのと、アマランサスが怖い顔で睨んでおり、片目をつぶった執事に咳払いをされた。

多分、傍から見るとニヤケ顔だったに違いない。

「いいだろ？ 小さな女の子に贈り物ぐらい……」

「小さくても女なのですわえ」

「はは……」

アマランサスの顔が怖いので、とりあえず笑ってごまかす。

カメラに伯爵邸のデータを蓄えて、1階の客間で待っているとマロウと伯爵がやってきた。

「辺境伯様、申し訳ございません！ エリカにも真珠をいただいてしまっ」

「ははは、可愛い子におねだりされると、ついついな……まあ、気にしないでくれ」

「そうはおっしゃられましても」

「辺境伯領、ユーパトリウム領、アスクレピオス領、そしてマロウ商会。互いに友好が結べるのであれば、真珠の1つや2つ――」

「ありがとうございます……」

隣と仲が悪いというのは面倒なものだからな。

だが隣の仲が悪いというのは結構あることだし。

ここら一帯の仲がいいほうが、マロウ商会も商売がやりやすくなるだろう。

友好的な伯爵だが、俺がダリアにいたときに探していたというのは本当だろうか？

そこら辺を聞いてみた。

「それは間違いございません。鉄の召喚獣を操る魔導師で、巨大なアイテムBOX持ちと聞けば、どんな貴族でも欲しがるでしょう」

「もちろん王族もな」

俺の後ろでアマランサスがボソリとつぶやいた。

シャガを討伐した俺を逃したことに關しては、彼は後悔しているようだ。

俺も、ここで伯爵に囲われては、今の地位まで昇り詰めることはできなかっただろう。

「まあ――伯爵には悪かったが、ダリアから逃げて正解だったな」
街の皆や、プリムラには悪いことをしちまったがなあ。

「伯爵にしてみれば、逃がした魚は大きかったというわけだ」

アマランサスの言葉に伯爵が額の汗を拭っている。

凶星なのだろう。

「マロウ商会から私の話はなかったのか？」

「それを聞いたのは、かなり後になってからでして」

「なぜ、黙っていたと怒らなかったのか？」

「商人が取引先の情報を漏らさないのは普通ですから、やむを得ません」

この話を聞いても、この伯爵は権力を振り回したりせず、筋を通す人物のようだ。

このダリアでマロウ商会の占めている部分は多い。

關係にヒビが入って困るのは伯爵領のほうだろう。

マロウ商会としても、自分の娘が嫁いでいるんだ、俺を売るようなことをするはずがない。

マロウは心配いらないが――商人といえば、金のためならば親兄弟どころか国を売るような輩もいるのも事実。

色々あったが、ダリアでの用事はすべて完了だな。
さて、南のオダマキに向けて出発するか。

なんかアマランサスだけじゃなくて、プリムラも怖い顔している
……。

なんだよ、オッサンをそんなに見つめないでくれ。

伯爵に別れの挨拶をすると玄関にやってきた。

アイテムBOXから車を出す。

「おおっ！ それが鉄の召喚獣なのですか！」

本当はアイテムBOXから出したものののだが、今でもこいつは鉄の召喚獣のまま。

真実を知っているのは同郷のアキラだけ。

いや、アキラにもシャングリ・ラのことは言っていないし、ずっと心に秘めたままだ。

多分これだけは誰にも真実を明かさずに墓まで持っていくと思う。

俺は伯爵への召喚獣の説明もそこそこに、車に乗り込もうとしたのだが、小さな力に裾を掴まれた。

振り向けば、きらめく金髪のツインテールをした女の子。

伯爵の娘、エリカだ。

彼女が不安そうな顔をして、こちらを見上げている。

おねだりではないな——小さな子がこんな顔をするなんて、ただごとではないはずだ。

俺が彼女に贈り物をしたことで、友好的な人物として彼女に認識されてしまったようだ。

しゃがみ込むと、彼女と視線の高さを合わせ話しかけた。

「どうした、エリカちゃん」

「……」

彼女がなかなか言い出さない。

なにか面倒事のようなのだが、車の影になっているので、伯爵がいる玄関からは見えない。

車に乗り込もうとしているマロウとプリムラもやってきた。

「まあ、とりあえず言ってごらん？」

「……お友達を助けてほしいの……」

「お友達……」

相手が貴族の子なら、助けなどは必要ないだろう。

それ以外のお友達がいるってことだ。

出発が遅れそうなので皆をチラ見すると――プリムラとアマランサスが、「それ見たことか」みたいな顔をしている。

そんなこと言ってもな、こんな小さい女の子からのお願いは断れないでしょ。

「うーん、その子はどこにいるんだい？」

「あのね――」

彼女の話では、貴族街ではないらしい。

この街に詳しくない俺に○○地区みたいな話をされてもまったく解らん。

この街が庭のミヤレーに聞けば解るだろうが……彼女の話では病気の子どもがいるらしい。

「マロウは、その場所が解るか？」

「はい、生まれ育った街ですの」

「そうか――それにしても子どもか……その子の親は？」

彼女が首を振る。

孤児か――そんな子供と貴族の彼女が、どうやってボーイ・ミーツ・ガールしたかは問うまい。

彼女と話す。

「エリカちゃん、その子の所に案内してもらおうとしても、伯爵の許可がないと無理だよ？」

「……」

親の許可なく小さい女の子を連れ回すわけにもいくまい。

元世界に限らず、この世界でも完全にアウトだ。

やむを得ず、彼女を連れて伯爵がいる玄関まで行く。

「伯爵」

「どうしました——エリカ！ 辺境伯様に、ご迷惑をかけては駄目だよ」

「……」

エリカは、俺の後ろに隠れてしまった。

「伯爵、彼女には助けてもらいたい友達がいるようだ」

「友達ですと？」

「ああ——多分、貴族の子どもではなくて、孤児なのだろう」

「そ、そんな子どもと……いったいどこで……」

そこにアマランサスがやってきた。

「閣下、公子は屋敷を抜け出すことがあったのではないかえ？」

「あ、アマランサス様に閣下などと……」

「妾の身分は奴隷ゆえ、当然じゃな」

全然奴隷の態度じゃないけどな。

伯爵の話では、エリカは度々屋敷を抜け出して街へ遊びに行くやんちゃ娘のようだ。

家人が探すのに苦労して、ギルドに搜索を頼むこともあるらしい。

「それじゃ——そのときに、その友達と知り合ったんだね？」

「……うん」

彼女は、俺の後ろに隠れたままだ。

「うーん、困ったな……伯爵、彼女の願いを聞いてやってもらえないだろうか」

「辺境伯様……」

「ああ、もちろん、彼女の身柄はウチの護衛たちが万全をもって保証する。自画自賛になるが、一国の軍隊にも匹敵する戦力だと自負しているから安心していい」

「その点は妾も保証するぞえ。すでに王族ではない妾の言葉など取るに足らん戯言に聞こえるかもしれぬがな」

「アマランサス様まで……ふう……」

伯爵は悩んでいるが当然だ。可愛い娘と一緒に見ず知らずの男が同行するのだから。

俺が辺境伯だという身分を差し引いても、娘をもつ父の苦悩が変わるはずがない。

悩む伯爵だが、俺と一緒にアマランサスがいるというのも、無視できないだろう。

すでに王族でなくなった彼女ではあるが、その影響力は未だ絶大に思える。

「プリムラがいなくなったマロウも、こんな感じで悩んでいたんだろうな」

「……ははは」

黙って話を聞いていたマロウは、悟りを開いたような顔をして笑っている。

しばらく考え込んでいた伯爵が決断した。

「承知いたしました」

「ありがとう伯爵。やったな、エリカちゃん」

「うん！」

彼女の話では、最後に彼と会ったのは3日前だと言う。

薬と食料を持ってくると別れたが、屋敷の監視が厳しくなって抜け出せずにいたらしい。

とりあえず彼女を車に乗せて、その場所に行ってみることにした。
俺の隣にプリムラ、その後ろの座席にエリカが乗っている。

マロウは俺の後ろ、アマランサスはいつも獣人たちが乗っている
3列目シートに乗った。

「すごい！ 馬なしで動いてる！ これって魔法！？」

「そう魔法な」

「走っていても、全然揺れないね！」

まあ馬車は揺れが酷いからな。

伯爵邸の門を出ると、貴族街を抜ける。

場所は、貴族街のちょうど反対側——あまり上品ではない地域のようだ。

まったく怖いもの知らずのお嬢さんだな。

屋敷を抜け出して、路上で1泊することもあったらしい。

「偶然だなあ、俺もそういうお嬢さんを知っているのだが……」
横目でプリムラをチラ見する。

「誰のことでしょうか？」

「さあな」

「プリムラは辺境伯様の側室なのよね？」

「そうですよ」

「いいなあ、私も側室になっていい？」

「ちよっとまったあ！」

俺は焦ってちょっと待ったコールを出した。

ちよっとお出かけって話なのに、いつの間にか側室なんて話になったら、どんな騒ぎになるか。

「ちよっとエリカちゃん、そういう話はしないでな」

「えー、なんでえ？」

彼女はまだまだ子どもだ。子どもが言った笑い話で済むだろうが、済まなかったら困る。

「プリムラ、エリカちゃんの言った場所って解るか？」

「はい」

マロウ親子はここで育って商売をしていたからなあ。

街の事情には詳しいだろう。

車はプリムラのナビで街を進む。

珍妙な鉄でできた馬なしの車に乗る俺たちには、相変わらず視線が突き刺さる。

「マロウ、すまん。寄り道をしてしまっ」

「いいえ、構いません。マロウ商会にとってはエリカ様も、重要なお客様ですから」

そりゃそうか。彼女はVIPだからな。もう少し大人になれば自分で買い物もするだろう。

「それよりもだ——その病気の子どもと約束して3日だろ？ 大丈夫かな？」

「解らない」

「どんな病気なんだ？」

「咳が酷くて……苦しそうだった」

「熱は？」

「毛が生えているから触っても解らなかった……」

「毛？」

どうも俺は勘違いをしていたようだ。

「公子、それは獣人ではないのかえ？」

後ろから、アマランサスの声が聞こえた。

「うん」

あちゃー、それじゃ父親に言い出せないわけだわ。

貴族の子どもと獣人の子ども——まるで接点がないように思えたが……実際に彼女たちは会っている。

「そりゃ貴族に獣人の子どもを助けてといっても、うんとは言わないだろうなあ」

「ケンイチも貴族なのですよ？」

「ははは、まあそうだけどな。それで、なんで俺に頼んだんだい？ エリカちゃん」

「辺境伯様は、獣人の女を愛人に行っているって聞いたから……それに、私に優しくしてくれたし……」

隣のプリムラが、俺をじっと見ている。

「は！ 俺って超有名人じゃん！ ははは」

まあ、獣人が好きな貴族の俺なら、獣人の子どもを助けてくれると思っただろう。

中々、賢い子だな。

「そこは笑うところなのですか？」

俺の笑い顔を見て、プリムラが苦笑いしている。

「獣人好きの貴族ってのが知れ渡っているなら、サクラに獣人たち

が増えるかもしれないなあ」

「もう……」

プリムラが呆れているが、獣人たちのあの毛並みを諦めるわけにはいかない。

獣人の女の腹に埋もれて寝るのは、どんな高級品も敵わない至高の毛布なのだ。

「ウチの獣人たちのことを、公子たちに話したのはプリムラじゃないのか？」

「はい、そうです。ハマダ領では、獣人たちと仲良く暮らしていると……」

「それは間違いないからな」

「はわわ、それじゃニャンコロを助けてくれるのね」

ニャンコロ、それが獣人の子どもの名前のようだ。

子どものときは可愛いが、大人になったらどうするんだろうか――と考えるのは俺が只人だからかな？

エリカはよほど嬉しいのか、プリムラの後ろでぴょんぴょんと飛び跳ねている。

車にはサスペンションがついているので、跳ねると車体が揺れる。

「こらこら、跳ねるんじゃない！ 酔うから止めなさい！」

ゆさゆさと揺られながら、エリカに案内された場所にきた。

車を止める――助手席から降りたプリムラが後のドアを開けると、エリカが飛び出た。

「ちょっとエリカちゃん、待ちなつて！」

彼女は俺の制止を聞かず、細い路地へと入っていく。

路地は狭く、車は通れない。

とりあえず皆を降ろすと車を収納、徒歩で彼女のあとを追った。マロウの話では、ここはあまりお上品な場所ではないという。

貴族の娘である彼女が、こんな場所まで1人でやってきたのだろうか？

路地を200mほど進み、彼女は家と家の隙間に入ってしまった。

「おいおいマジか——入れるかな？」

アマランサスには、プリムラとマロウの護衛をしてもらい、俺も隙間に入る。

いつもと違い、コスプレのような恰好をしているので引かかる。孤児が、こんな隙間を使って寝床を作っているのだろう。

子どもじゃなくても、保証人がいないと部屋を借りたりするのは難しいという。

ニャメナも天井裏の隙間みたいな場所に住んでいたらしいし。

家の壁に身体を擦って10mほど進むと、エリカの姿が見えてきた。

エリカはしゃがんで、板を合わせた三角形の中に頭を入れており、お尻だけ見えている。

簡易のテントのようなものらしい。

辺りに充満するアンモニアのにおいが鼻をつく。

寝込んでいるために、トイレにも行けないのかもしれない。

なんの病気かは知らないが、これじゃ余計に悪化するだろう。

「ニャンコロ！ 戻ってきたよ！」

「エ……リカ……ゲホッ！ ゲホッ！」

多分、男の子の声——どうやら酷い咳があるらしい。

「エリカちゃん、どいておくれ。とりあえず、ここから出さないと駄目だ」

「うん」

エリカに外に出てもらい、暗がりの中に見える毛皮を引っ張り出

す。

それは真っ黒で手足の先が白い、獣人の男の子だった。彼を抱き上げると、カニ歩きで家と家の隙間を戻る。

獣人は毛皮を着ているので解りにくいだが、軽くて痩せているな。栄養状態もよくないみたいだし、しばらく身体も洗ってないのだろう。

少々臭うが仕方ない。

マロウ邸に戻ったら、アネモネの魔法で綺麗にしておおう。

狭い隙間から皆の所に戻ると、粗末な服を着た頭のはげたデカイ男がひっくり返っていた。

「ん？　なんだこいつは？」

「妾たちに無礼を働いたのでな」

「ああ」

納得――美女2人に商人風のオッサンだから、楽勝とか思ったのだろう。

こんなやつに構っていられん。

「ケンイチ、その子が病人ですか？」

「ああ、とりあえずマロウ邸に運ぶ。いいか？　マロウ」

「もちろん構いません」

「感染する病の可能性もあるので、マロウ商会の者は近づかないように」

「承知いたしました」

男の子をお姫様抱っこで、通りまで戻る。

アイテムBOXから車を出したが、俺は固まった。

この男の子が伝染病だったりすれば、皆で車に乗ると伝染るかもしれないな。

俺と男の子だけを車に乗せるとしても、ここはそれなりに物騒な

地区だ。

皆を残していたり、歩いてもらってわけにもいかない。

「聖騎士様、どうしたのじゃ」

「ああ——この子が感染する病気だと、皆に危険性が……」

「屋敷に戻ったら、すぐにアネモネに回復の魔法ヒールをかけてもらいましょう」

そうすれば病気の予防になるという。

魔法によって、免疫力のアップにもつながるのだろう。

プリムラの提案に皆も同意してくれたが——とはいえ密閉空間はよろしくないのです、車の窓を全開にした。

これで密閉空間ではなくなる。多少はマシになるだろう。

男の子は3列目シートで、アマランサスと一緒に乗ってもらおう。

エリカが後ろを向いて、激しく咳をする男の子を覗き込んでいる。

「よし、行くぞ」

「はい」

「うん！」

窓を全開にした車が街の中を進み始めた。

「プリムラ、咳が出る流行り病ってのは、多いのか？」

「10年に一回ほどでしょうか。大流行すると、魔導師の数がまったく足りないのです大量の犠牲者がでます」

いくら魔法がある世界といえども、大量に患者が発生すると処理しきれなくなる。

金を持っている貴族や商人が優先になり、一般市民は後回しのことだろう。

病院もない世界だし難しい問題だな。

マロウの妻、プリムラの母もその流行り病で亡くなったらしい。流行り病ってのは症状を聞くと、インフルエンザっぽいけどな。

「それじゃないといいが……」

「ケンイチ、流行り病は獣人には感染しません」

「え？ そうなのか？」

「はい」

プリムラが不思議そうな顔をしている。

賢者とか言われてる俺が、そんなことを知らない——と思っていたるのだろう。

だって、この世界の常識には疎いんだから仕方ない。

そういえば、獣人だけにかかる病気ってのもあると聞いたような……。

「辺境伯様、ニャンコロは治りそう？」

ルームミラーに心配そうなエリカの顔が映る。

「うーん、解らんな。そもそも、どんな病気なのかも解らないし」
プリムラと流行り病について話しているとマロウ邸に到着した。
庭に車を入れるとミャレーが走ってくる。

「ケンイチにゃー！」

「ミャレー！ 病人がいる。感染するかもしれないので、離れていてくれ」

「にゃー！？」

ミャレーには離れていてもらい、新しいコンテナハウスを出して
隔離病棟にする。

マロウは仕事に戻るが口止めをさせてもらった。
まだどういう病気が解らんからな。

「獣人の子どもにゃー！？ 親はなにしてるにゃー！？」

「親はいないらしい。孤児だ」

「にゃ!! この子が住んでいる街の長は何をしてるにゃ!?!」
珍しくミャレーが毛を逆立てて激怒している。

「街の長が関係あるのか?」

そこにニャメナがやってきた。

「旦那——獣人ってのは、孤児がいたら地域で面倒をみる決まりになっっているのさ」

「そうなのか」

「この子がいた所ってのはどこにゃ!?!」

「あの、ガレー地区ですけど……」

プリムラの言葉にミャレーが尻尾を立てた。

「ニャルニャルサにゃ! あのBBA! ちょっと、ねじ込んでくるにゃ!」

そう言うと、ミャレーが門から飛び出して行ってしまった。

どうやら、ミャレーはその長っていうやつと知り合いらしい。

ここは彼女のホームタウンだから、知り合いでも不思議じゃない。

「そんな大きな問題なのか?」

「ああ、旦那。獣人たちにとっては大問題だよ」

「ケンイチ」

「アネモネ、とりあえず、この子に洗^{クリン}浄の魔法を、あと召喚獣の中毒を消毒したい。魔法で温めてくれ」

「解った!」

男の子に魔法がかけられると、毛皮の汚れが落ちて綺麗になった。

「それから、乗ってきた全員に回復^{ヒール}の魔法を」
「任せて!」

アネモネが車に乗ってきた皆を並べて魔法を使うと、青い光が舞う。

「すごい！ 魔法が使えるんだ！ 私はエリカ！ あなたは」

「私はアネモネだよ、よろしくね」

「うん！」

エリカはアネモネに任せよう。

そこにアマナがやってきた。

「どうしたんだい、こんな小さな子が！」

「病気かもしれないから近づくな」

「可哀想に……」

寄ってきたアマナを離すと――俺はコンテナハウスにベッドを出して、男の子を寝かせた。

男の子は相変わらず激しく咳き込んでいる。

彼の身体に手をかざして祝福の力を使う――胸のあたりに反応がある。

肺炎を起こしているかもしれない。

コンテナハウスにアキラが入ってきた。

彼も祝福持ちなので、病気には感染しない。

「病人だって？」

「ああ、肺と喉に反応があるな」

アキラも咳き込んでいる男の子を診ている。

「獣人たちってのは、この手の病気には罹患しないはずだがなあ」

「ああ、それは聞いた」

シャングリ・ラで購入した体温計で計ると熱もあるのだが、炎症を起こしているせいだろう。

そもそも獣人の平熱がどのぐらいなのか解らんが、熱が高いのは

確かだ。

男の子の胸に手を当てて祝福の力を使うと、彼の表情が和らいだ。顔色はどうだろうか？ 獣人の子どものでそれは解らないが、確かによくはなっている。

「うーん？」

「アキラ、どうした？」

「まさかと思うが——おい坊主、話せるか？」

彼には、なにか心当たりがあるようだ。

「……うん」

「お前——そうなる前に、変わった場所に行ったりしなかったか？ 森の中とか」

「うん……森の中に行った……」

「森の中に、なになかったか？」

「……沢山の花が咲いていた……」

「花って、背が高くて赤い大輪の花か？」

「うん……」

アキラの表情が険しくなる。

「おいケンイチ——こりゃ、やべーやつかも」

「なんだった？」

どうやら緊急事態のようだ。

192話　きれいな花には毒がある

マロウ商会の手引で、ダリア周辺を治めているアスクレピオス伯爵と会談。

俺のイメージしている貴族とはいいい意味で遠い人物。

非常に好漢であり、彼の家族も温和で睦まじく礼儀正しい――その姿は俺を安心させてくれた。

伯爵に贈り物をして、屋敷を見学させていただく。

建物の造りも趣味がいいので、俺の屋敷を建てる際の参考にするつもりだ。

無事に会談も終わり帰るつもりだったのだが――小さな女の子に裾を掴まれた。

彼女は伯爵の娘であり、名前はエリカ。

エリカの話では、友達が病気なので助けてほしいと言う。

彼女の頼みを承諾して伯爵に許可を取り、街の一角へ向かうと――そこには病気らしい獣人の子どもが横たわっていた。

どこで彼とエリカが知り合ったのか不明だが、治療のために男の子を抱えてマロウ邸へ向かう。

到着すると、アイテムBOXからコンテナハウスを出して治療室を作り、治療を開始。

俺の祝福の力で病状はよくなったように見えたのだが、そこにアキラが入ってきた。

男の子に色々と質問をしていたアキラであったが――ある結論に達して、急に顔が曇り始める。

「おいケンイチ――こりゃ、やべーやつかも」

「なんだ？ どうした？」

「もしかして、花かもしれねえ」

「花？」

「ああ、ひまわりぐらいに背が高くて、大輪できれいな赤い花が咲くんだった」

「それが問題なのか？」

「そいつがなあ——上から下まで全部毒なんだよ。もちろん、それから飛ぶ花粉もな」

話が見えてきた。

「それじゃ、その子は花粉でやられたかも——って話なのか？」

「症状を見ている分には、そう見えるな。獣人ってのは風邪やインフルの類には——さっき言ったか」

「それじゃ、この子を早く治療して、その場所に案内してもらわないと駄目だな」

「そうだな。なるべく早いほうがいい」

とりあえず、ほとんど食事を摂っていない男の子に栄養をつけさせないといけない。

シャングリ・ラでドリンクタイプの栄養食を買ってカップに注いでやった。

1回目の治療で、彼の状態はかなりよくなったように見える。

「飲み物なら飲めるか」

「うん……」

彼がカップに口をつけた。

「甘くて美味しい……」

飲んでいるな。

これを飲ませたら、消炎剤も飲ませよう。
シャングリ・ラで検索して市販薬を買う。

もっと強力な薬が売っていればいいのだが、通販で購入できるのはドラッグストアなどで売っているような市販薬だけ。

俺が買ったオレンジ色の箱が落ちてきた。

「小児用か？」

「普通のは強すぎるだろ？」

「まあな」

俺も力を使って腹がへったので、カロリーバーを食う。

「ケンイチ、次は俺が治療をしてやるから、俺にもくれ」

「はいよ」

彼にもカロリーバーを渡す。

その間に子どもの食事が終わったので、薬を飲ませた。

「そりゃ！」

子どもを寝かせると、今度はアキラが祝福の力を使った。

こいつの力は、巷で使われている回復^{ヒール}の上位だと思われる。

「普通の魔法が回復^{ヒール}だとすれば、こちらは超回復^{ハイヒール}って感じだろうか」

「まあ、そうだな」

「魔法で、回復^{ヒール}の上級魔法ってあるのか？」

「ない！」

彼が端的に答えた。

王国より魔法文化が進み、そこで大魔導師をしていたレイランさんを相方になっているアキラが、そう言うのだから間違いないのだろう。

「それじゃ、HPが1でも復活したり、なくなった手足が生えたり——」

「ないな——そんなのあったら俺が欲しいわ」

しゃべりながら男の子の治療は完了した。

ベッドの縁に腰をかけたアキラが、カロリーバーをむしゃむしゃ食べ始めた。

それを男の子がじっと見ている。

「なんだ、調子がよくなったので、腹が減ったのか？」

「……うん……」

「はは、正直だな。少し食ってみるか？」

「空きっ腹に、大丈夫か？」

「獣人ってのは丈夫だからな」

アキラがカロリーバーを一口分、ちぎって子どもにあげた。

「まだ、さっきのが飲めるようなら、飲んでみるか？」

「うん」

カップに違う味の栄養食を注いでやる。

「この力は、使うほうも腹が減るが、治るほうも腹が減るからな」

「そうなのか？ 術者も対象者も、体内のエネルギーを治療に使うみたいな感じか……」

「多分、そんな感じだろう」

「だが、慌てて連発はできないよな」

「まあ、少し間を空けたほうがいいだろうなあ」

少し元気になった男の子から、続けて話を聞く。

アキラが聞く限りには、その赤い花の特徴に一致するらしく、すでに開花していたらしい。

「それじゃ、その花の花粉でやられたのか」

「まあ、即死するような猛毒じゃないんだが……ここは医療が発達してないからな」

「そうだな」

あるのは魔法だけ。

「あの……」

「なんだ？」

アキラと男の子の話を聞いていると、エリカに花の苗をプレゼントしたらしい。

「そりゃ早く処分しないと」

「まあ、すぐに咲くってわけじゃないけど、地下茎でも増えるので根が残っているとマズい」

「それじゃエリカちゃんに話を聞いて、その苗を確認すれば、赤い毒花かどうか確認できるってわけだな」

「そのとおりだ」

男の子から、使っていた街の門を聞く――北門だ。

北門というと、俺がダリアでいつも使っていた門。

俺が住んでいた場所の近くにそんな恐ろしい花が咲いていたのだろうか？

早速、行動するためプリムラを呼ぶと彼女に事情を話し、かん口令を敷いてもらう。

「解りました、ケンイチ」

「子どもを見てくれ。流行り病じゃないから心配しなくてもいい。大分よくなった」

「よかったですね」

「旦那！ 流行り病じゃないなら、私にも面倒見させておくれよ、子どもが可哀想じゃないか」

俺の所に飛んできたのはアマナだ。

もちろん彼女にも面倒をみてもらおう。伝染病じゃないから感染の心配もないしな。

俺たちの所に、エリカもやってきた。

「ニャンコロ、よくなったの?!」

「ああ、だが、もっと厄介なことになりそうだぞ?」

「厄介?」

エリカが首をかしげる。

「君は、彼から花の苗をもらっただろ?」

「うん! 赤い綺麗な花が咲くって!」

「それが毒の花かもしれない」

「え?!」

彼女が目を見開き、顔が不安でいっぱいになっている。

「それを、どこかに植えたりしたのかい?」

「お屋敷の庭に植えた……」

俺は、アキラの顔を見た。

「これは早速確認して、伯爵にも相談しないと」

「だな!」

「聖騎士様、なにごとかえ?」

俺がアイテムBOXから車を出すとアマランサスがやってきた。

「アマランサス、帝国の赤い花——っていうのは知っているか?」

「赤い花というと——あれかえ? 毒の花で、街が放棄されることもあるという」

やっぱり有名なのか。

「アキラ、街がなくなることもあるのか?」

「ああ、それでなくなった街もマジである」

「ヤバいじゃん!」

「ヤバイぞ？」

俺はちよっと甘く見ていた。

森に入るのが禁止になるぐらいかな？　——なんて思っていたら、

それどころではなくなった。

「それでは伯爵の所に参るのかえ？」

「そうだ、彼にも協力をあおがないと」

「それでは妾も一緒に行ったほうがいいじゃろ」

アマランサスも車に乗り込んだ。

「私も——」

やってきたアネモネを制止する。

「すぐに戻ってくるからな」

「……解った」

皆の騒ぎに、コンテナハウスの研究室にいたカールドンもやってきた。

「皆さん慌ててますが、なにごとですか？」

彼にも赤い花の話聞く。

「ああ、聞いたことがありますよ。都市が全滅することもあるとか、
なんとか」

カールドンの話に、ちよっとアキラが意見を述べた。

「全滅というのは、ちよっと語弊があるな——広がり過ぎると駆除
のために近づけなくなってしまうから、駆除できなくなってしまう
わけなんだが」

「結果、都市を放棄する羽目になると——」
「まあな」

アキラは、その赤い花を駆除したことがあるそうだが……。

「そんな花をどうやって駆除したんだ？」

「ふはは、俺は無限に近く油を出せるからな。それでひたすら燃やし尽くした」

「ああ、そういうことか」

この世界の油は高価だ。

普通ならそんな方法は使えないのだが、そこはチート持ちのアキラだから可能な戦法だろう。

「それじゃ、今回もそれで頼むよ」

「お任せしろ！　いつも世話になってばかりで、全然いいところも見せてないし、恩返ししてないからな、ははは」

「やれやれ、今回も私はお役に立てそうにありませんね」

「カールドンは魔道具の研究で役立ってくれればいいよ」

「ありがとうございます」

「ニャメナ、子どもについててやってくれ。同じ種族がいたほうが落ち着くだろう？」

「解ったよ旦那」

ミャレーは子どもが住んでいた地区の獣人たちの長に、クレームを入れに行ったまま戻ってこない。

車の助手席にはアキラが乗り込んだが、一度行っただけで伯爵邸の場所は覚えている。

後ろの座席にはエリカも乗り込んだ。

「よっしゃ！　行くぞ！」

「おう！」

車はマロウ邸を出て大通りを進むと、そのまま貴族街へ直行。伯爵邸に戻ってきた。大きな金属製の扉の前には門番がいる。

「門を開けて！」

エリカが窓を開けて、門番と話をする。

「これは、お嬢様！」

この屋敷の者がいれば話が早い。

門がすぐに開かれたので、そのまま車で乗り入れた。

「エリカちゃん、その花を植えたのはどこだい？」

「あそこ！」

彼女は右手の花壇を指差す。

その近くまで車で行くと、皆を車から降ろし花壇の所に行った。すぐに移動するので、車はこのままでいいだろう。

花壇は手入れが行き届いており、様々な美しい花が咲いている。

「エリカちゃん、どこだい？」

「ここ！」

エリカが走って花壇の隅を指差した。

少々ギザギザした緑の葉っぱが列をなしてならび、太い茎がピンと伸びている。

高さは30cmぐらいだな。

「アキラ、どうだい？」

彼が葉っぱを見ながら、難しい顔をしている。

「……まちがいない。赤い花だ」

「エリカちゃん、伯爵を呼んできておくれ。火急だと言ってな」
「解った！」

エリカがパタパタと走って屋敷の中に消えていくと、女性の声が聞こえるが――この屋敷のメイドだろうか？

「繁殖力は強いのか？」

「ああ、種も沢山できるし、地下茎でも増えるからな」

「竹とか、笹みたいな感じか？」

「そこまではひどくない。地中に芋ができてな。芋の欠片からでも芽がでるから、意外としつこいぞ」

普通の雑草でも根絶するとなると結構な手間がかかる。

元世界の植物で思い出したのは、カラスビシャクだ。

引っっこ抜いても、根が残っているとまた生えてくる。

「もちろん、芋も毒なんだろう？」

「芋は猛毒な。間違って食うと死ぬぞ」

「そんなに」

「あまり研究するやつもない植物だが、おそらく空気中の魔素を取り込む、一種の魔植物なんじゃないかと思ってる」

この世界の魔物も、空気中の魔素を取り込んで魔石にしているらしい。

魔石が大きくなれば魔力も沢山使えるようになるので、より強力な魔物になる。

「それじゃ、芋に魔力が溜まっているんじゃないのか？」

「もちろん溜まっちゃいるが……」

「花が咲く前に蕾をとれば、芋を大きくすることができる」

「でも猛毒だぞ？ 利用価値がない」

うーん、なにか利用ができないだろうか。

猛毒芋の利用方法を考えていると、伯爵が慌ててやってきた。

「辺境伯様、アマランサス様、火急の用事とは？」

「伯爵！ 先に彼を紹介させてくれ、帝国の大魔導師、アキラだ」

「ご紹介にあずかりました、アキラでございます。火急な用のため、私服にて失礼」

彼が膝を折って礼をした。

「帝国の魔導師がなぜここに？」

「まあ、それはおいおい説明するが——伯爵は、帝国に生えるという赤い花の話をご存知か？」

「赤い花——あの毒花で、都市を放棄することもあるという？」

「それだ」

話を聞き、俺たちの表情を見た伯爵も気がついたようだ。

「ま、まさか、その赤い花がある？」

「閣下、これでございます」

アキラが花壇に植えてある、緑の植物を指差した。

「な、なぜここに」

伯爵の娘のエリカが、獣人の子どもと知り合い、彼から譲ってもらったものだと説明をする。

「俺たちが慌てているのが、どういうことかと解っていただけたかと思う」

「そ、それでは、ダリヤ近くの森に、その花が咲いていると?!」

「花畑を見た獣人の子どもは、呼吸器の障害で重病だったが、俺と彼の力で回復しつつある」

「な、なんとということだ……」

伯爵の顔がみるみる青くなる。

「可及的速やかに赤い花を駆除せねばならないのだが、ここは伯爵領だ。俺たち部外者が勝手にあれこれするわけにもいかないの、許可をもらわねばならない」

「こちらからお願いたします! アマランサス様、申し訳ございません! 王家から賜った土地でこのような不祥事を……」

「閣下、妾はすでに王族ではない。そのような謝罪は不要じゃ。それに、これは災害じゃからの、やむを得ん」

「ありがとうございます……それで駆除はどのように……」

「そこで伯爵、彼の出番だ。アキラは帝国で赤い花を駆除したことがある人物でな」

その駆除の場に、即位する前の皇帝がいたらしい。

「それは、心強い！」

「皇帝ブリュンヒルド様から、過大な褒めの言葉をいただきましたまし
た」

すましているアキラに思わず笑いを堪えてしまいが、これが普通
なのだ。

かくいう俺も、いかにも貴族な言葉で話しているけどな。

「おお……」

伯爵にアキラの生い立ちを説明するとやはり驚く。

王国でも、帝国の竜殺しってのは、そのぐらい有名なのだ。

もう、子どもでも知っているレベル。

まあアキラの話は置いて、話は決まった。

「伯爵、忙しいとは思うが、貴殿には事の顛末を見届けてもらう必要
がある」

「無論でございます」

「保護している子どもが回復次第、現地へ向かう予定だ」

伯爵に北門から出た森だと説明をする。

「北門だと、街道が通っておりますな」

「閣下——帝国でも街道沿いに赤い花が咲き、それによって通商が
分断されてしまいました」

アキラの言葉に伯爵もうなる。

「ここでも、その可能性は十分にございますな」

「ダリアには被害は少ないと思うが、南からの物資に頼っている、アストランティア以北の街が被害を受けるだろうな。もちろん王都も」

「一大事でございます！　それで——子どもは、どのぐらいで回復するのでしょうか？」

「多分、明日の朝には……」

「そんなに早くでございますか？」

「ウチには優秀な魔導師が揃っているからな」

「それでは、明日にも出かける準備をいたしましょう。それで手勢はいかほど用意すれば……」

俺とアキラで顔を見合わせる。

毒花がすでに咲いている場所に、俺とアキラ以外が近づけるとも思えない。

「いや、伯爵——駆除は俺の手勢だけでやる。おそらく俺たち以外は現場には近づけないだろう」

「そうは申されても、見ていただけというわけには……」

「なるべく被害者を出したくない。それに少人数なら、毒を防ぐ手立でもある」

「ケンイチ、そんなのがあるのか？」

「ほら、スライムのときに使ったようなやつがあればなんとかなるだろう？」

「ああ、あれか。要は花粉を防げればいいんだからな」
相手がアキラだと話が早くて助かる。

「悪いが、伯爵だけ諦めて付き合ってくれ。貴殿の身体には健康被害は出さないようにするゆえ」

「……もちろんでございます。止められても、この身だけは参加さ

せていただきますので」

伯爵がまともな貴族でよかったが、現地でどのぐらい花が広がっているか、まだ不明だからな。

「しかし伯爵。とりあえず現地を見てからだ。手に負えないぐらい広がっていると、手勢が必要になる可能性もある」

「そ、そうでございますな」

「そのときは——どうしようかなあ」

「まあ、ケセラセラってやつよ」

「伯爵、聖騎士様に任せておけば間違いない」

アマランサスはまったく心配していないようだ。

「あの——アマランサス様、聖騎士様というのは……」

「はは、王族の方々は、俺を聖騎士だと言うんだよ」

「はあ……」

単語だけ聞いてもわからんだろうが、詳しく説明もできない。

話が決まってよかったとはいえ心配もある。

「うーん、森から煙がもうもうと上がったら、騒ぎにならないだろうか？」

「た、確かに」

「あの——駆除というのは、火を放つのでございますか？」

「閣下、あの花の駆除は燃やすのが一番いい。刈り取っても処分に困るし。実際、帝国でも燃やして駆除しております」

アキラの言葉に伯爵の顔は暗い。

「伯爵、延焼しないように配慮するから大丈夫だ。ゴーレムや召喚獣を使って木を倒せばいい」

「し、しかしゴーレムの起動には、国の許可が……」

「私が辺境伯だから、大丈夫だ」

俺の言うことを伯爵も理解したらしい。

辺境伯ってのは、そういう権限も持っているのだ。

「た、たしかに――」

「一応、王族もいるし」

「聖騎士様、妾はすでに王族ではないぞえ？」

「でも、話はつくだろう？」

アキラが、火を付ける言い訳の案を出してくれた。

「なにか、魔物でも退治することにするか？」

「火を使って倒す魔物な――キラーホーネットにでもするか？」

「そ、それはいいですな。キラーホーネットの巣を焼くために火を放つが、延焼しないように最善を尽くしていると、役人に告知させましょう」

「そのぐらいなら混乱にはならない――はず」

「はあ……まさか、こんなことになるうとは……」

伯爵としては胃が痛いところだろう。

話が済んだので、毒花の苗を引っこ抜きアイテムBOXのゴミ箱へ入れる。

念の為、周りの土もシャベルで掘り起こしてバケツに入れ、ゴミ箱へポイ。

これでここは問題ないだろう。

問題は多少ありそうだが、なんとかなりそうだ。

伯爵も理解を示してくれたし――万が一ごねられでもしたら、そのまま放置したくなるところだが――。

ダリアの森で毒花が広がったら、アストランティアにも辺境伯領にも絶対に影響が出る。

これは俺たちの問題でもあるのだ。

お友達が心配だろうが、エリカには屋敷で待っててもらうことになった。

子どもには危ない真似はさせられん。

伯爵も、気が気じゃなくなるだろうしな。

領主とも話がついたので、俺たちはマロウ邸に戻ることにしたが――もうひとり応援を頼んでおくか。

「アキラ、寄り道をしていいか？」

「おう、いいぞ」

「助っ人を頼みに行く」

「あの道具屋の爺さんのところか？」

「そうだ」

車を走らせ大通りを進む。

人混みを車でかき分け、爺さんの道具屋にやってきた。

車を降りて、そのまま店の中に入る。

「おーい、爺さんいるかい?!」

「はーい!」

出てきたのは茶色の髪をポニーテールにしている、爺さんの彼女。

「あ、旦那――って、貴族様だっけ。なにか買いにきたの?」

「爺さんに火急の用だ」

「パルドゥ!」

彼女が奥に走っていくと、しばらくして眠たそうな顔をしている

爺さんがやってきた。

どうやら昼寝をしていたらしい。

「なんじゃ、辺境伯様じゃありませんか」

「のんびりしている場合じゃないぞ、爺さん——帝国で咲く赤い花
って知っているか？」

「赤い花……ああ、もちろん知っておるぞ。悪いが、そんなものは
扱っておらん」

「そうじゃない、そいつがダリア近くの森で確認されたんだ」

「ふーん、そいつは大変じゃの……ふわあああ」

爺さんが大きなあくびをした。

「おい、爺さん……俺の話を——」

寝ぼけているのか、曖昧な返事をしていた爺さんが突然目を開い
た。

「なんじゃと！」

半分寝ぼけて聞いてた彼も、ことの重大さを理解したらしい。

「理解したか？」

「こりゃ一大事じゃ！ 領主様にご報告を——」

「それは俺がしてきた、駆除する話もつけてきた」

「ほう——仕事が早いもう」

「それで爺さんにも参加してもらいたい」

「うむ、承知した。店を捨てたくはないからの、ほほほ」

そこに彼女がやってきた。

「パルドー！ なにか危ないことをしに行くの？」

「大丈夫じゃよ、心配するでない。よしよし……」

爺さんが、ポニーテールの巨乳に挟まれて、鼻の下を伸ばしてい
る。

ラブラブバカップル状態になっている爺さんには構ってられん。

「大丈夫だろうな？ 多分、明日の朝一で迎えにくるぞ？」

「大丈夫じゃ、ドーンと来い」

「伯爵も一緒だからな」

「領主様も慌てておったろ？」

「そりゃ当然——爺さん、人には話すなよ。騒ぎになると困るからな」

「無論じゃ。余計な騒ぎで余計なけが人が出るだけじゃからの」

「さすが、年の功」

「歳は余計じゃ」

爺さんとも話はついた。

「ケンイチ、オッケーだったか？」

「大丈夫だ。これで魔導師を1人確保できた」

ギルドで魔導師を集めることもできるが、あまり騒ぎにしたくない。

大々的に募集したら、パニックになるかもしれない。

車でマロウ邸に戻ってくると、ミヤレーが戻っており、そこに獣人が1人増えていた。

ゴツくて体格のいい女の獣人だ。虎柄だが、ニャメナの金色系とは違いグレー系だ。

「ミヤレー、戻ったのか。その女性は何？」

「はい、あたしはガレー地区の獣人の長をしています、ニャルニャルサといいますです」

俺が貴族だということで、無理に敬語を使おうとして苦労している。

「俺は気にしないので、普通に話していいぞ。ウチの獣人たちにもそうしてもらっている」

「はあ、さいですか。ありがとうございます！ いや、もうしわけ

ねえ！ 子どもを死なせかけるなんて獣人の恥だ」

「子どもがいるってのは把握していなかったのか？」

「はい」

そこにミャレーとベルがやってきた。

「おそらく、外から流れてきたやつの子どもじゃないきゃーって
いう話みたいじゃ」

「へへっ！ 森猫様までいるなんて！ この度は面目もねえっす
！」

長が頭を下げまくる。

「にゃー」

「へへっ！ もちろんです！」

ニヤルニヤルサが、座っているベルからお小言をもらっているよ
うだ。

ペコペコしている。

子どもから話を聞いていた、ニヤメナを呼ぶ。

「旦那、母親と一緒にダリアに流れてきて、途中で親が死んじゃっ
たらしい」

「そうか、可哀想にな」

「貴族様！ 森猫様も！ これからは、ガレー地区の獣人たちが、
あの子の面倒をみますので」

「それなら安心した——よろしくな。今、治療中なので、身体の具
合がよくなったら送り届けるから、皆で優しくしてやってくれ」
「解りました！」

ニヤルニヤルサという獣人は自分の在所に帰っていった。

外の人間がいなくなったところで、うちの獣人たちにも赤い花の
話をする。

「赤い花にゃ？」

「そうだ、毒の花粉が飛ぶと、あの子どもみたいな症状になる」
「それで旦那、どうするんだい？」

「伯爵の立ち会いの下、そいつを駆除する」

「駆除って、刈るわけじゃないんだろ？」

「アキラの話では、燃やすのが一番いいらしい。彼の魔法で作った油を撒いて火を点ける」

「解ったぜ。俺らも手伝わなきゃな」「にゃ！」

「ちよっと危ないんだが——まあ現地を見てから、決めようか」

とりあえずどうなっているか——そこに行ってみないことにはな。

193話 ロードキル

ダリア近くの森に、赤い花が咲いているという。

その花を知っているアキラによると、大輪で綺麗な花らしい。

きれいな花には棘があるの言葉どおりに、こいつの棘は上から下まで全部毒で、花粉にも毒があるという。

その花粉によって都市がまるごと廃棄されることもあるという厄介な代物だ。

帝国にしか咲いておらず、王国では噂に聞く程度だったが――。なぜかダリアの森の中に咲いていたところに、獣人の子どもが遭遇して花粉にやられた。

獣人の子どもを助けたことで、今回の毒花が発覚した。

まさに瓢箪から駒。

この世界では似たような意味で、「灰からドラゴンが出る」という言葉が使われている。

領主である伯爵との話もついたし、あとは子どもの回復を待つだけだな。

とりあえず花のある場所は彼しか知らない。

まあ、大体の場所が解れば、俺がドローンを飛ばしてその場所を見つけられると思う。

獣人たちに担いでもらえば、子どもが歩く必要もないし、あの森なら車でも入れる。

――子どもが担ぎこまれた次の日。

子どもの症状をみるとすっかりといいようだが、やせ細った身体

が魔法で戻るわけでもない。

これから栄養のあるものを食べて、徐々に身体を戻していかなければならない。

ものが食えるようなので、コンテナハウスの中で養生させ、牛乳をかけたグラノーラを食わせた。

ミャレーとニャメナも彼と一緒に朝食を食べている。

彼女たちは、毛布を持ち込んで夜もここで寝たようだ。

「言ってくれば、ベッドを出してやったのに……」

「そんなの、大丈夫にゃ」

「おいひい……!」

子どもが、グラノーラを食べて目を輝かせている。

「美味しいよにゃ!」

やはり同族がいると安心するようだ。

もともと獣人たちってのは、大家族で生活をするらしいからな。食べ終わった子どもにミャレーが抱きつくと、身体をなで回す。

まあスキンシップってやつだ。

「可愛いにゃ!」

彼女が子どもの耳を甘噛みしている。

黒い毛皮に白い手袋が本当に可愛い。

「そうだな……サクラには、まだ獣人の子どもはいないな」

サクラにも彼らが増えれば、この街のように獣人たちの生活共同体ができるに違いない。

ニャメナも子どもをかわいがっているので、基本的に獣人たちは子どもが好きらしい。

「にゃー! 子どもの頃はこんなに可愛いのに、なんでデカくなる

と、あんなクソになるにゃ？」

「クソとは酷いな……」

「クソはクソにゃ！」

ミャレーが言っているのは、成人した男の獣人のことだ。

獣人は女性のほうが早熟で、子供の頃はスピードもパワーも上。

そのうち男が第二次性徴期に入ると、体つきが変わり力も強くなる。

そこで、よくいる獣人の男のようになるらしい。

「ニャンコロ、身体は大丈夫か？ 彼女たちから聞いたと思うが、君が見つけた赤い花を駆除しなくてはならない」

「うん、大丈夫だよ」

「心配いらなにゃ、移動はウチがおんぶしてあげるにゃ！」

「ありがとう、お姉ちゃん……」

「にゃー！！」

ミャレーが、また男の子に抱きついた。

「にゃー」

コンテナハウスの外でベルの声がするので、アルミの扉を開けてやる。

隙間を少し開けただけで、黒い毛皮がスルリと入ってきた。

「にゃー」

彼女は一回鳴くと、男の子のベッドに飛び乗り彼の顔を舐めた。ベルを見た彼はすごく驚いたようだ。

まさか、ここに森猫がいるとは思わなかっただろう。

「ありがとう、森猫様」

「随分とモテモテだな」

俺は男の子にそういう感想をもったのだが、少々事情が違うらし

い。

「街の中で森猫様に会えるなんて……」

「にゃー」

ベルは、男の子が森の奥に入った理由を尋ねたようだ。
かなり深部まで行ったらしい。

「森猫様に会いたくて」

「ここで会えたわけだけど、会ってどうする？」

「……お母さんを生き返らせてください……」

「にゃー」

彼女の返答を聞いた男の子がっくりと肩を落とす。

「……だめ？」

「にゃー」

そりゃ死人を生き返らせるなんて不可能だし、死体すらない。

いや、死体のまま起き上がったらアンデッドだけどな。

俺が以前襲われたスケルトンのように駆除対象になってしまう。
落ち込んでしまった彼を、獣人たちが励ます。

「心配いらなにゃ！ あそこの地区をまとめてるニャルニャルサ
には、話をつけたにゃ！ 皆お前の力になってくれるにゃ！」

「このクロ助の言うとおりだ」

「そうだ、獣人たちの長も約束してくれた。もう1人じゃなくなる
ぞ」

「にゃー」

ベルが、男の子の肩に前脚をのせた。

「……うん、解った……」

彼も前向きに暮らしていくことを決めたようだ。

「ちょっと早いけど、独り立ちしてもいい歳だにゃ！」

「俺もこのぐらいには働いていたぜ」

まあ、ミヤレーとニヤメナの言うとおり、いずれは1人で生きていかなきゃいかんけどなあ。

少々心配だが、獣人たちの仲間が沢山いるんだ。

なんとかなるだろう。

子どもの調子はいいようなので、森に案内してもらおう。

「ケンイチ、気をつけてください」「旦那、危ないことばかりするんだねえ」

プリムラとアマナが心配そうな顔をしている。彼女たちは留守番だ。

「はは、ここは他領とはいえ、それが貴族の仕事だからな。それに、ダリアの街には世話になったし、マロウ商会の本店もある」

そういえば、マロウの姿が見えない。

キヨロキヨロと彼の姿を探している俺に、プリムラが答えた。

「あの……父は、南への出発がもう少し延びそうだというので、他の商売を……」

じっとしてられない人のようだ。

やはり、ものごとで成功する人ってのはバイタリティが凄い。

まあ構わないさ。

俺とアキラの車を出して、皆で乗り込む。

俺の車には伯爵が乗り込むので、獣人たちはまとめてアキラの車に乗ってもらった。

ベルも向こうだ。彼女が一緒なら男の子も安心するだろう。

「アネモネ、こちらには伯爵と爺さんも乗るんだ。アキラの車に乗ってくれないか？」

伯爵側から、追加のメンバーを申し込まれるかもしれないし。

「うー……解った……」

「ありがとうな」

彼女の頭をなでる。

アマランサスは俺の護衛だと言い張るだろうから、絶対に譲らَنと思う。

俺の車にはアマランサスを乗せて、出発することにした。

「アキラ、先に北の門の所で待っててくれ。俺は伯爵と爺さんを拾ってくる」

『オッケー！』『オッケーにゃ！』

『オッケー！』

聞き覚えのない声が聞こえてきた。誰の声だと思ったら、男の子の声だ。

大きな声を出せるぐらいに元気になったみたいでよかった。

俺は車を発進させると、マロウ邸を出て大通りへ。

「聖騎士様、どうなりますかえ？」

後ろからアマランサスの声が聞こえてくる。

ルームミラーでチラリと見るが、不安そうな顔ではない。

「さてな、とりあえず行ってみないことには解らん」

貴族街に入ると、伯爵邸に到着した。

時計がないので、元世界のように〇〇時にきっかり——というわけにはいかない。

少々もやもやするが、元世界の分刻みで行動する生活に毒され過ぎだな。

スローライフとか言ってるのに、根がスローライフになっていない。

少し落ち込みながら、アーマーを着ている門番に挨拶した。

「ハマダ辺境伯だ。伯爵と約束がある」

「ははっ！ お通りください！」

そのまま庭を進み、玄関の前までやってきたのだが、伯爵と彼の娘が揉めている。

伯爵は、白いシャツに茶色の乗馬ズボンのような服装をしている。胸には革のアーマー、足下にはブーツを履き、腰に剣を差す。戦闘をするわけじゃないが、森の中にはそれなりの危険があるからな。

玄関には、青いドレスを着た伯爵夫人の姿も見える。

「伯爵！ 迎えにきたぞ」

「おお、辺境伯様！」

「私も行くー！」

「エリカ、屋敷で待ってなさい！ 遊びに行くのではないのだぞ？

！ お母さんも心配するだろう」

「そうですよ、エリカ。お父様の言うことをお聞きなさい」

「いやー！」

どうやら、娘のエリカも行くと言っているようだ。

金髪のツインテールの女の子が、伯爵の脚にしがみついている。車を降りて彼女の所に行く。

「エリカちゃん。とても危ない所だから屋敷で待ってようね。ニヤンコロは元気になったから」

「ホント！？」

彼女が伯爵の脚から離れた。

どうやらニャンコロの容態が気になっていたようだ。

「ああ、騒ぎが収まってから、彼に会いに行けばいい。街の獣人たちも、彼の面倒をみてくれることになったから」

「うーん、解った！」

「いい子だね」

彼女の頭をなでると、彼女は伯爵から離れて夫人の所に行った。

「申し訳ございません。お見苦しいところを……」

「問題ない。これに乗ってくれ」

俺がラ○クルの助手席のドアを開けた。

アマランサスが後ろから降りて、3列目のシートに移った。

「あの、彼を護衛に連れていきたいのですが」

玄関の奥から出てきた男を伯爵が紹介した。

アマランサスがシートを移ったのは、この男の影を見たからだろう。

長い剣に、ライトアーマーを装備した短い金髪の男。

高そうな装備なので、この男も貴族だと思われる。

伯爵も自分の知り合いがいないと不安——と見た。

気持ちは解る。

伯爵と騎士が、恐る恐る車の座席に乗り込んだ。

助手席に伯爵——その後ろの席に騎士が座る。

「こ、これが噂に聞く、召喚獣の中でございますか」

「唸ったりしているが、俺の言うことしか聞かないからな、大丈夫だ。噛み付いたりしない、ははは」

「座席もかなり上等でございますね、辺境伯様」

後ろの騎士から声が聞こえる。

「ケンイチでいいぞ」

「私は、パキラ・ラ・パールハートと申します」

「よろしく」

ルームミラーで見ると、剣を立てて座席に座っている。
それなりに腕に覚えもあるようだが、実戦はどうか？

そんなことより発進だ。

アキラが門のところで待っている。

車を発進させると伯爵が驚く。

「うおっ！　なんとという速さ！」

「その気になれば、休むこともなく王都まで1日で到着できるからな」

「なんと！」

「まあ街の中を通ったりして、速度は落ちるから実際には無理だが……」

「それでも信じられない速さでございます。獣人の全力疾走ぐらいの速さですか？」

「そのぐらいだな」

もっと出せるのだが、そこは隠しておいたほうがいいだろう。

伯爵と話していると、爺さんの店に到着した。

「伯爵、ちょっと待っててくれ。助っ人を乗せる」

「はい——ここは……」

車から降りると爺さんの店に入る。

「おーい！　爺さん、迎えに来たぜ」

「おおっ！　待っておったぞ、辺境伯様よ」

爺さんが深緑色のローブと杖を持って出てきた。

「すでに伯爵も拾ってきた」

「これは伯爵様、お元気そうでなにより」

「これはパルド殿！ 助っ人というのは、パルド殿でございましたか」

「まあ、辺境伯様とちよつとした知り合いでな。例のシャガ討伐で一緒じゃったり、ほほほ」

「皆が辺境伯様と知り合いなのに、私だけのけものにされていたわけですな……」

「そう、ひねくれるものではないですぞ。まあ、貴族というのは嫌われているからのお、ほほほ」

爺さんの言葉に、伯爵が本気で落ち込んでいる。

車から降りると、後ろのドアを開けて爺さんに乗せた。

「ほう！ 以前乗ったものより、かなり上等じゃの——それに後ろには美女も乗っておる」

爺さんが3列目シートに乗っているアマランサスを、なめるように見ている。

「パルド殿、その方は——」

アマランサスの正体を言おうとした伯爵を止める。

「ご内密に」

「……解りました」

街の中を車で走り北門に近づいてくると、銀色のアーマーに身を包んだ兵士たちが並んでいる。

10人の小隊が、3つほど並ぶ。

「森で魔物退治をするということにして、警戒させるように伝えま

した」

「いいですね」

通りを進み、北門を抜けるとアキラの車が待っていた。
無線を使って彼と連絡を取る。

「アキラ待たせたな」

『おう、伯爵様は拾えたかい？』

「ああ、バッチリだ」

無線機から流れてくるアキラの声に、伯爵が慌てている。

「いったいどこから……」

「向こうの召喚獣と、魔道具を使って話している。爺さんは知っているよな」

「おお、シャガ戦でも偵察で使っておったの。あれかい」

「そうだ」

道案内役の子どもは、アキラの車に乗っているので、彼の車を先
行させる。

ダリアの北門の向こうには巨大な森が広がり、壁のように立ち塞
がり、行く手を阻む。

その森を左右に分断するように街道が走っている。

向かって右が俺が住んでいた森だ。

俺は無線機のマイクを取った。

「アキラ、街道を挟んで右左どっちの森だ？」

『左側らしい』

「オッケー」

アキラの車が街道を10 kmほど進むと、左の森に入り始めた。
俺もデフロックをして、森に突入する。

「辺境伯様！ このまま森の中に入るのでございますか？！」

「大丈夫だ」

伯爵が驚いて、シートからずり落ちそうになっている。
2台の車が巨木の間を縫い、根っこを乗り越えて走っていく。

「ひい！」

「辺境伯様、大丈夫じゃろうな？」

「大丈夫だよ爺さん、心配すんなって」

——と言いつつ、すでに10 kmは森の奥に入っている。

子ども1人でよくこんな森の奥までやってきたなあ。

森猫にあって、なんとかしてもらいたい一心だったに違いない。
それからさらに10 kmほど進むと、黒い影が見えてきた。

「黒狼だな」

どうやら数十頭はいるらしい。

「ま、魔物ですか?!」

「そうだよ伯爵」

「辺境伯様、どうなさるんで？」

後ろから爺さんの声がするが、幸いここは十分に広い場所がある
——こりゃ1択だな。

「アキラ、ここは木の間隔も広くてスペースがある。ロードキルして蹴散らそう」

『オッケー！ ヒャッハー！』

『これに乗ったまま戦うにゃ?! ケンイチ、弓を貸してにゃ!』

『俺のボウガンも!』

どうやら、車の窓から狙い撃つつもりらしい。

アキラの車に横付けして、彼女たちに武器を渡す。

「辺境伯様、私も出て戦闘を！」

パキラという騎士が外に出たがっているのだが……。

「いや、この鉄の召喚獣で蹴散らす。これには奴らの牙も通じないからな」

今回は魔物の殲滅が仕事じゃない。

赤い毒花の駆除が目的なのだから、魔物は蹴散らせばいい。

まずはアキラの車が加速して、黒狼の群れの中に突っ込んだ。

向こうのプ○ドには、カンガルーパーが装備されているので、衝突に強い。

大きな音がして、次々と黒狼が撥ね飛ばされる。

前の車が左折したのをみて、大きく割れた群れの右側に車を突っ込んだ。

「ギャン！」「キャイン！」

叫び声を上げて、黒い毛皮が飛ばされて、下敷きになった。

ジャンプした黒狼が、ボンネットに飛ばされて、フロントガラスに当たり血まみれになる。

「ひいい！」

目の前が真っ赤になり、伯爵が腰を抜かす。

群れを突っ切ったところで、俺はウォッシュヤーとワイパーを使いながらハンドルを右に切った。

目の前で黒い棒が左右に動く。

「うわああ！」

ターンと同時に身体を振られて、伯爵が大声を上げる。

「ぬおお！」

後ろでも、ひっくり返っている声がするが、今は非常事態。

ワイパーで前が見えるようになったが、ガラスは大丈夫だ。
アキラの車からは射撃も始まり、矢と白い光が放たれた。
白いのはアネモネの魔法だろう。

「魔法矢は、あの嬢ちゃんが撃ってるのかの？」

「そうだよ爺さん」

「まったく恐ろしい才能じゃのう……」

「爺さんも撃ってもいいぞ？」

「いやいや、若いやつに任せるよ。ワシがあんなに撃ちまくったら
すぐに息切れしてしまう」

黒い獣の群れを蹂躪し、ドリフトで車の尻を振って撥ね飛ばす――
すぐに敵は、文字通り尻尾を巻いて逃げ始めた。

『やったにゃ！』

「今回は黒狼退治じゃないから、追っかけなくてもいいぞ」

『オッケーにゃ！』

『すごい！』

無線の向こうで叫んでいるのは、ニャンコロだな。

どうやら簡単に黒狼を蹴散らしたので、感激したらしい。

「なんと、あのような巨大な黒狼の群れを一瞬で蹴散らすとは……」
後ろでひっくり返っているパキラが、目を白黒させている。

「ちょっと乱暴で済まなかった。戦闘だからな、勘弁してくれ」

「我が領の軍だけでやってきたら、今の戦闘だけで多大な被害を……」

「まあ、無事ではすまんじやろうのう……」

一番後ろを確認する。

「アマランサス、大丈夫か？」

「問題ないわえ、聖騎士様」

「ほ、奴隷なのに、王妃様と同じ名前とは豪気じゃのう」
爺さんが、彼女の首にある奴隷紋を眺めながら言う。

「爺さん、彼女は大切な俺の護衛なので、粗末に扱ってくれるなよ」
「ほほほ、解っておるわい。おまえさんほどの人間が、護衛だと言うのだから、只者ではないのじゃろうて」

爺さんがアマランススの胸の辺りを見て、白いひげをなでている。
本来なら不敬で首が飛びそうだけど、爺さんはそんな事とはつゆ知らず、ニヤニヤしている。

爺さんなのに、よくやるぜ。

アキラのほうを見ると、彼が外に出て車の前部を確かめている。

「アキラ大丈夫か？」

『ははは、全然問題ないが、車を少し凹ませてしまったぜ、悪い悪い』

「多少、傷ついたって走ればいいだろ？」

あっちのプ〇ドは、アキラに貸したままなので彼に任せている。
最悪ぶっ壊して、廃車確定しても仕方ない。

彼に手伝ってもらっていることを考えれば、車1台ぐらいどうってことないしな。

『ははは、無問題！　しかし、あとで洗車しないと錆びるな』

「全部片付いてからな」

『オッケー！』

『オッケーにゃ！』

とりあえず車は大丈夫のようだ。

だてに中東の砂漠で戦争に使われてねえ。

車を走らせて、黒狼をアイテムBOXに回収する。

肉も食えるし毛皮も使えるからな。

『ケンイチ、俺のアイテムBOXにも入れるからな』

「容量は大丈夫か？」

『まあ大丈夫だ』

その会話を聞いた爺さんが驚く。

「向こうの魔導師も、アイテムBOXを持っているのか？」

「ああ、あいつは元帝国の魔導師だよ」

「なんじゃと、ううむ——お前さんの交友関係はどうなっとるんじや……」

「爺さんを含めてな、ははは」

この爺さんだって、ギルドマスターの師匠だっていうんだから、結構な猛者だ。

黒狼の軀^{むくろ}を回収し終わると、アキラの車がまた先に進み始めた。獣人の男の子が窓から身体を乗り出して、箱乗りをしている。

「おい、あぶないぞ？」

『森のにおいを嗅いで、方向を確認しているらしい』

『森の中も場所で全然においが違うにゃ！』

獣人たちは、森の大まかなにおいを把握して、ここのマップを頭の中で作っているらしい。

そのまま、しばらく進むと男の子が突然引っ込んだ。

『ケンイチ！ 聞こえるか？』

「ああ、どうした？ そろそろか？」

『いや、クマのにおいがするらしい』

『旦那、マジでにおいがするぜ！』 『にゃ！』

「おいおい、今度は熊かよ……」

それぐらい森の奥地に来てるってことだろうが……。
車を低速でソロリソロリと走らせる。

アキラたちの車にも全周警戒をもらっていると、後ろの座席から声がした。

「聖騎士様、右の前の方向」

アマランサスがなにかを見つけたようだ。

車を停止させて、アイテムBOXから双眼鏡を出した。

あいにく俺は、あまり目がよくない。

この世界にやってきて、遠くばかり見ているので、かなり視力も回復したように思えるのだが……。

「アキラ、ストップ」

『どうした？』

「2時の方向に黒くてデカいのがいる」

『マジか』

「刺激しないように離れつつ、ゆっくりと行こう」

『オッケー』

ソロリソロリと走って、徐々に離れていたのだが、向こうが気がついたようだ。

こっちに向かってきている。

「アキラ、こっちに来るぞ！」

『ぎゃー！ 来たにゃ！』

まるで山みtainな毛むくじゃらが、こっちに猛スピードで向かってくる。

「外に出るなよ！ アキラ、鼻先を向けろ！」

『了解！』

両車右ターンをして、正面を向き合うと、熊は止まって立ち上が

った。

白く鋭い爪を上に向けて万歳すると、こちらを威嚇している。

「グワァァ！」

「クソ、デケェ！」

『ふぎゃー！』

『うるせええ！』

無線から、獣人たちの叫び声とアキラの怒鳴り声が聞こえる。

獣人たちは自分より強いやつには立ち向かわない。

その本能から叫び声を上げているのだ。

敵は万歳していると5mほどありそうだ。

以前サクラでエンカウントした、牙熊ってやつだろう。

立って威嚇してくる巨大な黒い毛の壁の口にデカイ牙が見える。

さすがに、こいつに衝突されたら車も壊れる。

向こうも数トンの重量があるから、運動エネルギー的に対等だ。

「アキラ！ ゆっくりとバック！」

『了解！』

俺とアキラの車は、立ち上がる巨大な黒熊からゆっくりと後ずさりを始めた。

194話 赤い花畑

ダリア近くの森の中に赤い毒の花が咲いているという。

帝国では度々繁殖して毒を撒き散らし、都市を廃墟にさせてしまうこともあるらしい。

ダリアの森の中で繁殖してしまえば、森の中を通っている街道も不通になってしまうだろう。

そうなれば、王国の通商にもダメージを与え、我がハマダ領にも確実に影響が出る。

これはダリアがあるアスクレピオス伯爵領だけの問題ではない。

俺たちは早速、毒花の花畑を知っているという獣人の子どもを案内人に、森の中に突入した。

当然、この地を治めている伯爵も同行しているのだが、森の深部は魔物だらけ。

黒狼の群れは簡単に撃退したが、今度は巨大な牙熊が待ち受けていた。

巨大な黒い魔物が俺たちに向けて突進してきて、威嚇のために立ち上がり、白く鋭い牙を剥き出している。

俺とアキラは車に乗ったまま、魔物と対峙。

2台の車は、フロントを熊に向けたまま、ゆっくりとバックを開始した。

こういう獣は、逃げると追ってくる習性がある。

「アキラ！ ゆっくりとバックだ」

『おう！』

相手は巨大だ、無理に戦う必要もない。

相手の体重も数トンの巨躯——衝突すれば、こちらのダメージも計り知れない。

「辺境伯様……」

俺の隣に座っている伯爵が、椅子からずり落ちそうになり、目の前の巨大な魔物に青くなっている。

「大丈夫かの？」

後ろから聞こえてきた爺さんの声は落ち着いている。

さすが歴戦だ。

チラリとルームミラーをみれば——同行している騎士は剣の鞘をフロアに立てたまま固まっている。

「心配いらん」

最初から戦うつもりなら準備もしたのだが、まさか向こうから仕掛けてくるとは思わない。

いまさら、この状態で車から降りるとなると、リスクが大きすぎる。

2台の車がジリジリとバックすると、熊が立つのを止めて4脚に戻った。

その時、アキラの車から青い光が舞う。

『光弾よ！
マジックミサイル
我が敵を討て！』

「ちょー！」

アネモネの魔法だろう。予想もしなかった魔法攻撃に俺は焦った。空中に顕現した白い矢が魔物の黒い毛皮に突き刺さる。

確かに命中はしたのだが、牙熊はそのまま俺の車に向けて突進を開始した。

「勘弁！」

俺はアクセルを強く踏むと、ハンドルを右に切って、巨大な魔物の突進を躲した。

車はバックのほうで、くるくると小回りが利く。

その間に、アキラの車は離れてしまったので、敵は俺の車に狙いを絞ったようだ。

再びの魔物の突進をまたバックで躲す。

まるで闘牛だ——オーレ！

「うわああ！」

叫び声を上げる伯爵がやかましい。

「聖騎士様！ 妾を降ろしてたもれ！」

「女を1人降ろして戦わせるなんて、そんな恰好悪いことができませんかっての！」

「そんなことを申しておる場合ではないわえ！」

「いいから、黙って座ってろ！」

熊が俺を追い回して、アキラの車のことを完全に忘れている。

そのアキラの車が熊の背後から忍びより、ケツをつついた。

向こうの車はカンガルーパーンパーが装着されているので、このぐらいの衝突でも壊れない。

「グワアアア！」

不意打ちを食らった熊は、立ち上がりアキラの車に威嚇を繰り返している。

「チャンス！」

俺はアイテムBOXから、トリモチ付きのタイマー爆弾を取り出した。

この手の兵器は消耗する度に作って、ストック済み。

最初は黒色火薬を使った爆弾だったが、今はC－4――プラスチック爆弾ベースで、威力が段違いになっている。

「セットカウントは30秒！　これが最後の決め手だよ、ゲ○ル君」
窓を開けると、トリモチ爆弾を持って熊の背中に突撃。
窓からそれを放り投げた。

魔物の黒い背中に爆弾がピタリと貼り付く。
あの体型で背中についたら、取れないだろう。

「アキラ！　熊に爆弾をつけた！　退避！」
『オッケー！』

その場から逃走した2台の車だが、牙熊はアキラの車を追っかけている。

ケツを突かれたのがムカついたのだろうが――しばらくすると、小爆発が起きて黒い魔物が転がった。
動かなくなった熊は、破裂した爆弾によって背中がえぐれているように見える。

『ケンイチ！　やったか？！』

「アキラ、フラグを立てるなよ」

『おっ！　やべえ！　フヒヒ、サーセン！』

彼も口に出してから、自分でもヤバいと思ったのだろう。

車に乗ったまま、ゆっくりと黒い小山に近づく。

「アネモネの魔法が効かないなんてなあ」

「いくら牙熊の皮が魔法を通しにくいといっても、普通なら、あの魔法矢は貫通するじゃろ」

後ろから爺さんの声が聞こえる。

「貫通しなかったのには、なにか原因があるのかい」

「考えられるのは、あの魔物が持っている魔石が大きかった——じやな」

「魔石がデカかったから、魔法に対する耐性も上がったと？」

「そうじやな」

「それなら回収してばらしてみないとな」

俺は、熊の近くまで行くと窓から手を出して回収を試みた。

もちろん、アイテムBOXに収納するのだ。

「収納」

俺の思いとは裏腹に反応がない。

アイテムBOXに収納されないってことは、こいつはまだ生きて
いるのだ。

「駄目だ、まだこいつには息があるぞ」

「そ、それでは、それがしが降りて、止めを刺してきましょう」

後ろに乗っていた騎士が、少々ビビりながら答えた。

ここらへんで伯爵にもいいところを見せたいのだろう。

少々心配だが、彼の気持ちも解る。

ドアの開け方を教えて、パキラという騎士を降ろした。

少し離れた場所で、それを見守る。

「可哀想だとは思うが、これも戦いの作法なれば覚悟！」

魔物にそんなことを言っても仕方ないと思うが、それは言うまい。
彼は剣を抜くと銀色の刃を高く掲げた——その瞬間。

「グワァァッ！」

突然、熊が立ち上がった。

最後の力を使って反撃を試みたのだろう。

目の前に立ちふさがった黒い壁のあまりの迫力に、騎士はその場で固まってしまった。

「ヤバイ！」

俺が車を動かそうとすると、白い影が熊の下へ向かう。

騎士に向けた魔物の爪による攻撃を下から切り落とすと、そのままこちらに背中を向け、熊の上に仁王立ちになった。

魔物の上に立ったのは、剣を持ったアマランサスだ。

ガウチョパンツとかいわれる幅広でスカートのようなズボンに、彼女の美しいお尻のラインがくっきりと現れている。

少々歳は取りつつあるが、彼女の気高い美しさは健在。

まさに王者の風格だ。

すぐさま、その場でジャンプして前方に一回転すると、振り出された刃で牙熊の頭が真つ二つ。

脳みそを噴き出し、スイカのように頭が割れてしまっただけは、魔物も息絶えるしかない。

黒い毛むくじゃらは、その場に崩れ落ちてただの小山になった。

「はーっ！ はーっ！」

腰を抜かした騎士が、尻もちをついて顔を青くしている。

「アマランサス！ 大丈夫か？」

「問題ないわえ」

「ありがとな」

アマランサスを軽く抱き寄せたのだが、彼女が騎士に向かって言った。

「そのような腕では、主を守ることは叶わぬ」

「……」

彼は剣を置くと、腐葉土に手をついた。

「是非、私に剣の道を！」

「ふはは、奴隷の私に剣を習おうと言うのかえ？」

「う……」

勢いで手をついてしまった彼だが、冷静に考えれば少々マズいだろう。

彼には伯爵という主もいるしな。

「伯爵が主人である貴殿に、それはちよつとむずかしいな」

「は……」

俺にそう言われて――彼もそうだと思ったのだろう。

そこに爺さんと伯爵が、車から降りてやってきた。

「見事な牙熊だのう」

「爺さん、これはやらんぞ。魔石がデカいつてなら使いみちがあるしな」

「解っておるわい」

黒い小山を見ながら、伯爵が青くなっている。

「ふう……魔物がこれほど恐ろしいとは……」

「軍でここまでのこのことやってきたら、大損害じゃのう」
爺さんが黒い毛皮を突きながら、白いひげをなでている。

「まことに」

アキラの車が戻ってきた。

「おい、ケンイチ！ 無事か！」

「ああ、大丈夫だ」

アネモネが降りてきたので、注意をする。

「アネモネ、勝手に魔法を使っちゃ駄目だ」

「ごめんなさい……」

「君が大人扱いしてもらいたって気持ちは解るが、大人になれば、それに見合うだけの責任も問われることになる——責任って解るかい？」

「うん……」

「まあまあ、アネモネちゃん。たまに失敗はあるさ」

アキラが彼女を慰めていると獣人たちもやってきた。

「そうだにゃー！　けど、あの魔法で仕留められないなんてにゃー」

「爺さんの話だと、中の魔石が大きいんじゃないかという話だ」

「なるほどねえ。アネ嬢、気にすることはないぜ。普通なら、あの魔法で真っ二つになってるんだからさ」

「うん……」

彼女も反省しているようなので、これ以上はなにも言わんが、悔りつつのは危険だ。

魔物の軀むくろをアイテムBOXに収納した。

「おお……こんな巨大な魔物まで……」

伯爵がアイテムBOXに驚く。

「これさえあれば、軍の兵站も……」

「伯爵、そういうことには協力しないぞ？　王家からの要請なら一考するけどな」

「ほほほ、辺境伯様は逃げて正解じゃな」

「爺さんが言うように、どう考えても——そういう用途にしか使われないのが、目に見えるからな」

俺の言葉に、伯爵が渋い顔をしている。

「その通りでございますが……」

そこにアキラが入ってきた。

「フヒヒ、アイテムBOXを使うのは、平和と正義のためって言わないのか？」

「そんなことを口に出して言うやつに、ロクなやつがないし」

「まあな、はは。でも、たまには錦の旗として役に立つ」

「そんな旗を持つのは勘弁してもらいたいね」

「はは、俺もだ」

ちよつと寄り道をしてしまったが、こんなのが今回の目的でない。

再び、皆で車に乗り込むと、森の中をひたすら進む。

すでに、街から30km以上は森の深部に入っている。

こんなに森の奥に入るのはめったにないだろう。

アキラの車から連絡が入った。

『ケンイチ、そろそろらしいぞ？』

「そうか、一旦停止してくれ」

『オッケー！』

車を停止させると、皆を降ろして準備をする。

シャングリ・ラを検索して、使い捨ての化学防護服を10着購入する。

1着3000円で、全部で3万円だ。

「ポチツとな」

黄色い防護服が沢山落ちてきた。

「おおっ！ 辺境伯様これは？」

「伯爵——こいつで身体を覆って、毒の花粉に触れないようにする」

「これはお城の地下で使ったやつだね」

「ネズミ退治で使った、中が暑いやつにゃ！」 「ああ、あれかあ」

「毒を吸い込むよりいいだろ？」

「なるほど、化学防護服か……こんなものまで作れるのか」

「まあな」

アキラが、ペラペラのスーツを手を取っている。

ペラペラで使い捨てだが使えればいい。

皆に黄色いペラペラを着てもらう。

顔は透明なプラで覆われていて、ガスマスクまでついている。

相手は花粉だ。毒ガスよりは粒が大きいはずだから、これで簡単に防げるだろう。

「これは珍妙な……」

「伯爵、毒を防ぐためだ、我慢してくれ」

「もちろん承知しております」

「お前さん、こんなものまでもっておるとはのう」

「持っているというか、こいつは魔法を使って作ったものだからな」

「このような魔法がこの世界にあるとはのう」

「だから、独自魔法ユニークっていうんだろ？」

「確かにそうじゃが……」

爺さんが自分のひげをなでようとしたが、ガスマスクをつけているので、空振りしている。

アネモネと獣人の子どもは、サイズが合わないので、折り返してガムテープで固定。

子ども用の化学防護服なんて売ってないので仕方ない。

そこに、ベルがやってきた。

「にゃー」

「しまった、ベルの服はどうしよう……」

悩む俺だが、ベルから答えが返ってきた。

「にゃー」

「え？ 必要ないって？ でも、毒の花粉だぞ？」

「にゃー」

「大丈夫なのか？」

「辺境伯様、その森猫は？」

騎士がベルを恐る恐る見ている。

彼にとっては、彼女も魔物なのかもしれない。

「彼女も俺の家族だ。ここの出身だから、この森にも詳しいぞ」

「辺境伯様が以前、助けようとしていたのは、その森猫なのですか
い？」

爺さんの回復の魔法で彼女を助けてもらおうとしたのだが、あっ
さりと拒否されてしまったのだ。

動物に魔法を使うなんてありえないってことだったな。

まあ、この世界には獣医もないし、そういう文化なのだ。

ベルに何度確認しても大丈夫だというので、仕方ない。

そのまま皆を車に乗せて出発した。

「ふう……この中は蒸しますな」

「脱がないでくれよ。暑いだけで死にはしないからな」

「もちろんです」

森の深部は鬱蒼としていて薄暗いのだが、徐々に空が明るくなっ
てきている。

上を見ると、木が枯れ始めて空が見えてきている。

『ケンイチ、ストップ！』

「どうした？」

『だれか倒れてる——みたいに見える』

「なに？」

乗っている皆に待つように伝え、車を降りてアキラの所に行く。
確かにライトアーマーを着た男らしき人影が、大木に座り込んでいる。

「おい、生きてるか？」

「そうは見えんな」

男には沢山の虫が集まっている。

防護服を着ていると触って確かめたりができないが——虫がたかっているということは……。

「アイテムBOXに入れてみれば解る。生きていれば入らないからな」

「そうだな」

「収納」

すると男が収納された——ということは、これは死体だったということだ。

「ミヤレー！　こんな場所まで来ることがあるのか？」

「人によるにゃ。多分、自信があつたんじやにゃいかなあ？」

「そうか」

「「なんまんだぶなんまんだぶ」」

俺とアキラで手を合わせたあと——車に戻る。

「辺境伯様」

伯爵が心配そうだ。

「死体だ、もしかして花の毒でやられたのかもしれない」

「そうですか、気の毒なことです」

「服を脱ぐとああなるからな」

「解っております」

即死するような毒じゃないが、肺をやられたら動けなくなってしまうからな。

アキラの車に連絡を入れる。

「ニャンコロを出してくれ」

『ニャンコロ、呼んでいるにゃ』

『なあに？』

「お前はよく平気だったな。花が沢山咲いていたんじゃないのか？」

『薔は沢山あったけど、まだ、そんなに咲いてなかった……』

そのせいで急激な症状が出なかったのか。

あの男は、その後ここにやってきたんだな。

運が悪かったか。

『そのときに燃やせば、よかったんだがなあ』

アキラの愚痴が聞こえてくるが、なかなかそうタイミングよくはいかないだろう。

それから5 kmほど進むと、完全に森が枯れている。

「すげえ枯れてるなあ」

『こうやって、葉や根っここからも毒を出して、周りを枯らして版図を拡大するんだ』

「すげー凶悪」

『まじで凄いぞ』

完全に木がなくなっている場所になると、明るい日差しの中に背の高いヒマワリ畑のような場所が見えてきた。

『ケンイチ、見えてきたぞ』

「あれか——伯爵、あれらしい」

「なんと！ 本当に赤い花が……あ、あの、この服を着ていれば本当に大丈夫なのでしょうか？」

「ああ、大丈夫なはずだが、気分が悪くなったら早めに言ってくれ、対処する」

「承知いたしました」

「後ろの皆も、体調には気をつけてな」

防護服の中は暑いから、熱中症にも気をつけないとな。

火をつけるので、ちょっと離れた場所に車を停めると、花畑に向かった。

背の高い植物が、晴天の青空の下、赤くて見事な大輪の花を咲かせている。

「すげー綺麗だけどな」

俺の言葉に、アキラがつぶやいた。

「きれいな花には毒がある」

「棘じゃなかったか？」

「はは、そうか」

「こ、これが全部毒花とは……」

伯爵が花畑を見て愕然としているが、その隣で爺さんも唸っている。

「これがそうか。長年生きてきたが、噂にきいたこの花を見たのは初めてじゃな」

爺さんの歳まで生きても見ることがないってことは、王国ではやはり珍しい植物ってことらしい。

俺の足下にはベルがいる。

彼女にはなにも対策をしていないのだが、平気なのだろうか？

「お母さん、本当に大丈夫なのか？」

「にゃー」

「本当か？」

「にゃー」

彼女が、防護服を着た俺の脚にスリスリしてくる。

彼女が大丈夫だというのだから、大丈夫なのだろう。

実際に平気な顔をしている。

この花粉は動物には効かないのだろうか？

それとも、彼女の持つなにか特別な力か？

さて、作戦を練る――まずは現状確認だ。

アイテムBOXから、ドローンを出して飛ばす。

「おおっ！ 空を飛んでる！」

「なんと！」

伯爵と騎士が驚く。

上空から撮影された映像を見ると、直径100mぐらいの範囲で円形に広がっているな。

周りの草や木を枯らしながらここまで勢力を拡大したのだろう。

元世界でもセイタカアワダチソウなどは、毒を出して他の植物を枯らすと学校で習ったな。

「なんと、空を飛ぶ召喚獣とは……」

爺さんも空を見上げ、唸っている。

「アキラ、範囲は直径100mほどだな」

「そんなには広がっていないか……」

もともと鳥などが運んだ数粒の種などが発芽して、ここまで勢力を広げたのだろう。

深い森の中だったので、広がるのに時間がかかったに違いない。

「アキラ、どういふ感じで進めるんだ？」

「そうだな、まず必要なのは、延焼しないように周りの木を切り倒

す——だな」

「そ、それでは、手勢が必要なのでは?!」

伯爵が、アキラから聞いた作戦に異議を唱える。

「まあ、普通ならそうですね。でも、ここにはケンイチ——いや、辺境伯様がいらっしやいますので」

「ケンイチ! ウチらも手伝うにゃ!」

「それを着て、激しい運動は無理だ。熱でやられるぞ」

獣人たちは毛皮を着ていて汗もかかないので、暑さに弱い。

こんな化学防護服を着て斧を振ったりしたら、熱中症間違いなしだ。

「辺境伯様、いったいどうするおつもりで?」

「大丈夫だ伯爵——コ○ツさん、戦闘バージョン召喚!」

久しぶりに呼び出した俺の相棒が、腐葉土に落ちてきて地面を揺らす。

アダマンタイトの大剣を装備した、黄色い重機だ。

「おおっ! 巨大な鉄の召喚獣!」

「シャガのときに使ったものより、随分と巨大じゃな?」

シャガのときは、小型のユ○ボだったからな。

「ケンイチ! それで木を切るにゃ?」

「ああ、お前たちに木を切らせるより、これで切ったほうが早いだろう?」

「まあ、旦那の言うとおりだねえ」

獣人たちが木を切る間に、こいつなら10本以上木を倒せる。

いや、もつといけるか?

「アネモネ! ゴーレムを出して木を倒してくれ」

「解った！」

アイテムBOXから巨大なゴーレムのコアを出す。

「ゴーレムじゃと？ 辺境伯様、そんなものを使う許可を取ったのですかな？」

「爺さん、俺はその辺境伯だぜ？ 辺境伯にはゴーレムを運用する許可が、王家から与えられてる」

「そ、そうなのか？」

爺さんも魔導師なので、ゴーレムの稼働に国の許可がいると知っていたようだが、辺境伯が持っている権限までは知らなかったようだ。

「むー！」

アネモネの精神統一とともに、腐葉土がコアの周りに集まり、うず高くなっていく。

それが一本に伸びて、葉っぱが少なくなり枯れかけている巨木の天辺を押し始めた。

こうすると、テコの原理で大木でも簡単に根元から倒すことができる。

枝がこすれる音を出しながら、大木が根元からえぐれるように倒れた。

地面を地響きが伝わり、俺たちの足下を揺らす。

「おおおっ！」

「なんじゃと！？ これがゴーレムじゃと？」

アネモネの人型じゃないゴーレムを見て、爺さんが驚嘆している。王国のゴーレム魔法ってのは、どれだけ人型に近づけて人と近い動きができる——ってことに注力されてきたからな。

既存の魔導師からは、こんな方法は邪道だと言われるだろうが、邪道でもなんでも使えればいい。

「爺さん、ゴーレムをある目的に使うなら、別に人型である必要はないってことだよ」

「そ、そう言われれば、そうじゃが」

「これが、帝国から入ってきた、最新の魔法使用法だぞ？」

「なんと……」

爺さんは、ショックを受けている。

古い伝統的な手法をなぞるだけで、新しい考えで自分の魔法を作り出せなかった後悔だろう。

俺には、この世界の常識に囚われない元世界の考え方があつたし、アネモネは若い。

それに彼女は、魔法の師匠に習ってはいないので、伝統に囚われず柔軟な発想ができるわけだ。

若いメリッサも、ゴーレムは人型——っていう固定観念から離れることができなかったわけだし。

まあ、別に伝統に沿うのが悪いとは言わないがね。

さてさて、後はこの塊を燃やすだけなのだが——俺はアネモネのゴーレムを見て、いいアイデアを思いついた。そいつを試してみるか。

195話 グリーンボール

帝国からやってきたと思われる毒の花が森の中に繁殖しているらしい。

森の中に広がってしまうと、街道も不通になってしまいうし、駆除が難しくなる。

帝国では、毒の花で放棄された都市もあるほどだという。

その花を見た獣人の子どもの案内によって、俺たちは花園へやってきた。

赤くて大輪の美しい花なのだが、これが全部毒。

この花に詳しいアキラによれば、燃やすのが一般的な駆除方法らしいのだが――。

俺は、アネモネのゴーレムを見て、いいアイディアを思いついた。アキラにそれを提案してみる。

「アキラ、ゴーレムのコアを使って花を集めたらいいんじゃない？」
土を集めてゴーレムを作れるのなら、花を集めてゴーレムも作れるはずだ。

「そうだな！ 毒花のゴーレムか。そいつをひとかたまりにして、火を点ける」

「この花畑の中心に集めて火を点ければ、周りの木を切らなくても済む」

「んん、そうすりゃ時間の節約にもなるな」

「よし！ やろうぜ！」

俺はアネモネを呼んだ。

「なあに？」

俺がアネモネを呼ぶと、ゴーレムが土に還って崩れ落ちた。落ち葉が辺りに舞う。

「コアを使って、土の代わりにこの花を集められるか？」

「うーん——多分、できると思うけど……」

「試しにやってみてくれ」

「解った」

彼女が魔法を使って腐葉土に埋もれたコアを花畑まで移動させる。背の高い花の近くまで行って魔法を使うと、コアの周りに花が集まり始めた。

植物の上部だけではなく、土に埋もれている芋まで掘り起こされて塊になっていく。

これなら何回かやれば、文字通り根こそぎ駆除することが可能だろう。

「な、なんと！」「凄い！」

伯爵と騎士が目丸くしている。

「ご、ゴーレムにこのような使い方があったとは……」

「爺さん、こいつを使って水を移動させたりもできるんだぜ」

「な、なに……？」

「その移動する水に船を乗せれば、水の上を高速で移動もできるんだ」

「なんじゃと？ 船じゃと？ なるほどのう、こいつはたまげた……」

……

アネモネは次々と毒花をコアに絡め取り、塊にしていく。

塊になったら、コ○ツさんに装備された大剣で両断してコアを取り出す。

「おおっ！ 鉄の魔獣がこのような大剣を軽々と！」
見物しているお客さんたちが驚きの声を上げた。

北海道の地元で見た、牧草を丸めてサイレージにするのに似ているな。

あれは円筒形だったが、アネモネのはボール型だ。
根こそぎ刈られた毒花畑に足を踏み入れると、白い芋が残っている。

「おい、白い芋を拾って、この箱に入れてくれ」
獣人たちに、アイテムBOXから出したプラ箱を渡す。

「解ったにゃ！」「それなら俺たちにもできるぜ！」
一杯になったら俺のアイテムBOXに入れればいい。

「聖騎士様、それは毒芋だと申ししていたようじゃが……」
アマランサスは、俺とアキラの会話を聞いていたようだ。

「試しに、俺が飼っているスライムに食わせてみようかと」
それを聞いたアキラが手を打つ。

「ああ、スライムが食って平気なら、燃やさなくてもいいから駆除が簡単になるかもな」

「そうだろ？ 毒をもって毒を制すってやつよ」
後ろを見ると、獣人の子どもがペタンと地面に座っている。
彼の隣にはベルがついているので、様子を見に行く。

「大丈夫か？ 無理はするな」
「うん」

病み上がりの彼に椅子を出してやった。

「にゃー」

「お母さん、頼むな」

彼はベルに任せた。

作業は順調に進み、アネモネのゴーレムによって花畑の中心に草と芋の巨大な緑色のボールが6つならんだ。

「あのような大剣を鉄の魔獣が軽々と振り回すとは……」

爺さんがコ○ツさんに感心している。

「作ったドワーフによると、刃はアダマンタイトなのでドラゴンでも切れるそうだが」

「なんじゃと！ アダマンタイトじゃと?!」

「ああ、そのドワーフにしか作れないと自慢していたぞ？」

「これが本当にアダマンタイトなら、ドラゴンの鱗も切れるじゃろうが……」

爺さんはイマイチ信じていないようだ。

花畑に並ぶ6つの巨大な緑のボール。

あとは燃やすだけなのだが——俺はその塊を見て、いいことを思いついた。

「アキラ、こんだけ塊になっているなら、アイテムBOXに入らないか？」

牧草をまとめたサイレージの塊も1ロールとカウントされるはずだ。

「へ？ そうか……入るかもな。やってみるか？」

「おう、よし——収納！」

緑色の草の塊がアイテムBOXに吸い込まれた。

「おお！ やった！ これなら燃やして危険な思いをしなくて済むぞ」

「ケンイチ、その処理はどうするんだ？ アイテムBOXの中にあるっていう穴に捨てるのか？」

「さっき言ったが、スライムに食わせるのを考えているが……」

「でも、アイテムBOXに入れた毒の花のボールを出すと、また花粉が四散するぞ？」

「う……そうか。そうだよなあ……」

スギ花粉みたいなのが、飛び散るわけだ。

スギ花粉ならアレルギーで済むが、こっちはマジで毒。

「それじゃ、草のボールはそのままゴミ箱に捨てるしかないな」

「俺も、そのほうがいいと思う」

「だが、芋は平気だろ？ ちょっと実験したいことがあるから試させてくれ」

「スライムか？ 花を燃やすと毒ガスが出るから、燃やさないで済むならそれにこしたことはないんだよ」

「まあ、より安全なほうがいいだろ？」

「本当にこいつは始末に悪いんだ」

全草毒だし花粉も毒。燃やすと毒ガス発生と、最悪な兵器みたいなやつだ。

実際に敵国に故意にバラ撒けば、国力を削ぐことも可能だろう。

「アキラ——こいつを兵器として使われたことはなかったのか？」

「ん？ 帝国でも研究はされていたみたいだが、なにせ制御が利かないからな。下手したら自国にダメージが来るし……」

やっぱり研究はしているのか。

「切羽詰まった国が、一発逆転を狙ってヤケクソで使ったりは」

「こいつは即効性に欠けるからなあ」

広がるのに何年かかるし、広がる方向もコントロールできないとなると、ちょっとな。

「燃やすときに、今回みたいな防護服がなかったらどうするんだ？」

「ひたすら風上に回って、煙を吸わないようにするしかないな」

彼も実際そうやって駆除をしてきたらしいが、突然風向きが変わったりして危険らしい。

まずは、多数の人手を使って森を切り倒してから、作業が始まるという。

「それが、こんな数人の作業でできちゃうんだから、アネモネちゃんはずげえよな」

「えへへ」

アネモネが防護服の透明なシールドの向こうで照れ笑いしている。

「あゝあ、今回も俺のいいところを見せられなかったぜ」

「いやいや、簡単に片付いてよかった——と言わなきゃだろ？」

「そうだな」

「なんと、帝国を苦しめている毒の花の駆除がいとも簡単に……」

「まったく、伯爵様のおっしゃるとおりで……」

伯爵と騎士が俺たちの作業を見て驚いているが、まあ当然だな。

「これが、聖騎士様のお力よのお」

アマランサスが扇子を出したが、防護服を着ているので、いつものポーズもしまらない。

彼女の言葉を聞いた伯爵が俺のほうをチラ見している。

おそらく、俺の正体を探っているのだろうが、俺が異世界人なんてお釈迦様でもきがつかめ——って、ここに俺とアキラを送り込

んだのが神様なら知ってるかもな。

「伯爵様、このパキラお役に立てませんで申し訳ございません」

「気にするでない」

伯爵が騎士をなだめている。

「伯爵の護衛なのだから、伯爵が無事というだけで十分な仕事をしていると思うが」

「辺境伯爵のおっしゃるとおりでございますな」

デカイ草の塊は片付けてしまったので、俺はアネモネとコアを使ってゴミ漁りをする。

再度、コアを使って毒花の欠片を集めるのだ。

集まった欠片はプラケースに入れて、アイテムBOXのゴミ箱へ投入する。

これを数回繰り返せば、確実性は上がるだろう。

「さてと——ここでさらに止めを刺したいところだが……なにかいいものはないかな？」

そのために、シャングリ・ラを検索——いいものを見つけた。

除草剤だ。根こそぎ枯らすという遅効性で顆粒タイプのもの。

元世界で使ったことがあるが、笹などにも使えるから、毒花の根にも効果があるに違いない。

この手を、最初から思いつかなかったのだが、除草剤が効くには少々時間がかかる。

可及的速やかになってわけにはいかなかったので、今回の作戦はこれでよかったはずだ。

今回は時間がなかったが、ハマダ領で花が見つかったときには除草剤攻撃が使えるだろう。

俺が紙の箱に入った除草剤を撒き始めると、獣人たちから悲鳴が上った。

「くっ、くさいにゃ!」 「なんだ、このにおいはあ!」

確かに、こいつは薬くさい。鼻が敏感な彼女たちには堪えるだろう。

防護服を着たまま、バタバタと逃げ回ってる。

防護服で毒は防げるが、においは防げない。

「ああ、こいつは植物を枯らす毒なんだ。俺たちでやるから獣人たちは離れていろ」

アネモネとアキラにも手伝ってもらう。

「ケンイチ、こんなのがあんなら、グ○ホサートなんかもあるのか?」

「ああ、あるぞ。数週間の時間が取れるなら、除草剤攻撃でもいいと思うんだが」

「確かに即効性には欠けるな」

伯爵と騎士がやってきて、俺たちの作業を見ているが、彼らも臭そうだ。

「辺境伯様、毒を使って毒花を枯らすのでございますか?」

「こいつは1年ぐらい効き続けるから、効果があると思う」

「なんと……」

多分、これで万全だとは思うが――。

「伯爵、今日の作業の後も、定期的にここを監視する必要があります」

「そうですね……」

「公子経由で、あの獣人の子どもに頼めばいい」

「承知いたしました。では、そのようにいたします」

こんな森の奥なんて獣人たちじゃないと、遭難間違いなしだ。
それに移動に時間もかかるしな。

獣人の脚なら日帰りも可能だろうし、魔物と遭遇しても逃げる
ことができる。

只人ではそうもいかんし——伯爵も、騎士団などを送って犠牲は
出したくないだろう。

帝国からやってきた毒の花に緊張してやってきたのだが、俺とア
ネモネとのタッグであっさりと片付いてしまった。

「やれやれ、今回のことで、わしが浅学だと思い知ったわい」

「爺さん、やっぱり帝国の魔法は進んでいるぞ？」

「そのようじゃな」

彼もそれは解っているだろうが、歳をとってから、新しいことを
覚えるってのは中々大変だ。

俺の歳でも苦勞するぐらいだし。

アネモネぐらい若いと、どんなことでもどんどん吸収できるんだ
ろうけどな。

作戦は終了したので、引き上げることにして、コ〇ツさんを収納
した。

アネモネに魔法で洗淨を頼むため、皆を集めた。

「むー！ 洗淨！^{クリーン}」

黄色い防護服を魔法の青い光が包む。

「アキラ、これで花粉が落ちたと思うか？」

「多分、大丈夫だろ？ 帝国でも、この方法だし」
俺の足下にはベルがいる。

「お母さんも平気か？」

「にゃー」

大丈夫らしい。

「アネモネ、魔法はまだ大丈夫か？」

「うん！」

「車も魔法で洗ってくれ。黒狼の血と脂でぐちゃぐちゃだし」

「これ、放置すると腐るし錆びるし、大変なんだよなあ」

「どうやら、アキラにも元世界でのロードキルの経験があるらしい。2台の車が並べられて、アネモネの魔法で綺麗になった。」

「これで、普通に洗ったら大変だぜ？」

「そうだな」

魔法万々歳だ。

作業は終了——皆で車に乗り込むと10kmほど移動して、防護服を脱いだ。

「にゃー！ 暑いにゃー！」 「死ぬう！」

やっぱり毛皮を着ている獣人たちに、この防護服はつらそうだ。

「気分が悪くなったら、すぐに言えよ」

「解ってるにゃ」

アネモネの魔法で綺麗になっているとはいえ、油断はできない。

皆が汗だくなので、再び皆を集めて魔法を使う。

本当は水浴びをしたいところなのだが、森の中じゃそうもいかない。

今度は魔法を爺さんが使ってくれた。

「洗^{クリーン}浄！」

「ありがとう爺さん」

「この老いぼれには、まったくいいところなしじゃからな。このぐらいはさせてもらわんと」

皆で防護服を脱ぐと、全部アイテムBOXのゴミ箱へ投入。

この手の防護服は最初から使い捨てなので、これでいい。

皆が暑さで消耗しているようなので、シャングリ・ラで経口補水液を購入する。

500mlのペットボトル24本で、4000円。

蓋を開けて皆に配る。

「ポ〇リでいいのに」

「まあ、熱中症になるとまずいからな」

「む、これは——甘いというか塩味というか……」

伯爵と爺さんは、初めて飲む味に少々戸惑っている。

「ケンイチ暑いにゃー！」 「旦那助けてくれ！」

どうやら獣人たちには、これだけじゃ足りないらしい、ぐったりとして舌を出している。

アイテムBOXの中に水が入っているので、出してやることにした。

収納から出したプラケースの中に水が並々と入っている。

この状態でアイテムBOXに入れても、水が溢れたりすることはない。

「アネモネ、この水を冷やしてやってくれ」

「解った——むー！ リフリジレーション 冷却！」

アネモネの冷却魔法を見た爺さんが白いひげをなでている。

「ほう！ リフリジレーション 冷却の魔法は難しいのじゃがのう。いとも簡単にやってのけるの」

「そうなのか？ そうは聞いていたが——彼女が普通に使っている
ので、あまり気にしたことがなかったな」

獣人たちは、服を脱ぐと魔法で冷えた水をバケツで掬い、頭から
ザバザバとかけ始めた。

ミヤレーが、ニャンコロにも頭からぶっかけている。

「おいおい！」

ふさふさの毛皮がペションとなって、獣人たちの身体のラインが
浮き出る。

普段は毛皮を着ているから裸という感じはしないのだが、こう見
るとやっぱり裸だ。

「うにゃー！」 「あゝ生き返るぜえ！」

「つめたーい！」

裸になったニャンコロは真っ黒な身体に手足が白い手袋と靴下で
可愛い。

「ほう、愛らしいのう……」

「アマランサスもそう思うか？」

「ええ」

獣人たちの濡れた毛皮を乾かさないと駄目だな。

「お前達、毛皮を乾かす魔道具を出すから待ってろ」

「このまま走って乾かすからいらないにゃ！」

車も森の中なので、スピードは出せない。

せいぜい毎時10〜20kmぐらいだ。

森の中なら、獣人たちの脚で走ったほうがかなり速い。

ちなみに、元世界の地元にいたヒグマも、山の中で凄いスピード
を出す。

追っかけられたら人間の脚では逃げ切れない。

木登りも上手いな。

「伯爵、すまん。不躰で」

「構いませんよ。ここが戦場だとすれば、作法がどうのと言っておられません」

貴族らしからぬ話の解る御仁だ。

地方に行くほど、まともな貴族が多いような気がするのだが、気のせいだろうか？

王都に近いほど選民意識が強くなるのかもしれない。

車に乗り込む前に、ドアを全開にしてまるごと魔法で洗浄してもらおう。

もちろんアキラのプ〇ドもだ。

車の中にも花粉が残っているかもしれないからな。洗浄は念入りに行う。

アネモネに魔法を頼むと、車の中まで綺麗になった。

「ありがとう、アネモネ」

「えへへ」

彼女の頭をなでてやると喜んでいる。

「魔法って便利だよなあ。車の中の掃除なんて普通は大変だし」

俺の言葉にアキラも同調する。

「そうだよな。水もあまり使えねえしな」

俺もど田舎で中古の車を持っていたが、洗車も掃除もあまりしたことがない。

完全に道具として割り切っているからだ。

どうせ汚れるし。

まあ、俺が独身だったせいもあるんだろうなあ。

洗浄が終わったので皆を乗せると、森の中を帰路につく。

濡れた毛皮を乾かすため、裸の獣人たちがアキラの車と並走している。

ニャンコロは、ミヤレーが肩車して万歳——なんだか楽しそう。やっぱり獣人たちには、こういう森の中のほうが性に合っているのだろうか。

生き生きとしているような気がする。

そのまま10kmほど走ったところで、獣人たちは再びアキラの車に乗り込んだ。

——2時間ほどして、街道に到着。

朝一で出発して、すでに午後2時頃を過ぎ、飯も食わずに移動してきた。

森の中は危険が多すぎるため食事どころではない。

俺たちだけならどうとでもなるが、伯爵が一緒なので、危険に巻き込むわけにはいかない。

俺が住んでいた場所のような街に近い森ならともかく、深部での無理は禁物。

街道に出れば車のスピードも上げられるのだ。

まずは安全な場所に到着するのが先決だろう。

2台の車は街の北門に到着した。

北門にはまだ銀色の鎧を着た軍がスタンバっているが、伯爵が責任者の男を見つけたようだ。

彼は車を降りるとその男の所に行き、なにやら話し込んでいる。

伯爵が車に戻ってくると、軍が撤収の準備を始めた。

「何ごともなく収まり、まったく一安心でございますな」

ルームミラーで後ろを見ると、戻ってきた伯爵が安堵した表情を見せている。

「早めに見つかってよかった。あの子どもには可哀想だが、怪我の功名ってやつだ」

「そのとおりでございますな」

「しかし、これからだが――このまま黙っているべきか、それともギルドなどに赤い花の注意を促すべきか……」

俺の言葉に爺さんが反応した。

「そうじゃのう、赤い花を見たら報告するようにしたほうがよくないかの？」

爺さんの提案に、伯爵が考え込んでいる。

「そうだな……どこに残っていて手遅れになるとまずい。ここはパルド殿の案に乗るということで」

「それでは、わしのほうから、ギルドマスターに話を通しておこう」

「よろしく頼む」

「まかせてもらおう」

ダリアだけじゃなくて、他領でも注意が必要だろう。

「それじゃ、ハマダ領の住民や、アストランティアのギルドには、俺から注意を促しておくよ」

「よろしく願いいたします」

「それから、森のことといえば、エルフにも話を通したほうがいいだろうな」

俺の口から出たエルフという単語に、伯爵が驚く。

「辺境伯様は、エルフとも交流があるのでございますか？」

「ああ、俺の所にエルフの大使も滞在している」

「なんと」

「彼らに頼めば、森の超広範囲の探索も可能だろう。うってつけだ」
森に住む彼らにとっても、赤い花は問題になるはずだ。
無線機のマイクを取った。

「アキラ」

『なんだ？』

「帝国でも赤い花が出たら、森に住んでいるエルフたちも困るんだろ？」

『もちのろん。エルフと共同で駆除したこともあるぜ』

「やっぱり」

それじゃ、エルフたちにも連絡は必須だな。

長寿の彼らなら、当然赤い花のことは知っているのだろうし。

そのまま車2台で市場の近くまでやってくると、爺さんの店で彼を降ろす。

「それじゃ爺さん、ギルドに連絡頼むぜ」

「任せてもらおう」

「今日の給料は、伯爵からもらってくれ」

「そんなもん、いらんわい！ なにもしとらんじゃろ」

「一応、魔法を使ってたろ？」

「街の魔導師でも使える魔法では、金は取れんわい」

車から降りた爺さんは、すぐに店から出てきた巨乳の女とイチヤイチヤし始めた。

「よくやるぜ」

呆れて車を発進させると、大通りを進みギルドに向かう。

森の中で見つけた死体の身元を確認するためだ。

彼がギルド証の石を持っていたので、すぐに身元が割れた。

その後はギルドにまかせてマロウ邸に戻ってくると――車の窓を

開けてアキラと話をする。

「アキラ、俺は伯爵を送ってくる」

「オッケー」

「オッケーにゃ！」

ニャンコロはミャレーに抱っこされている。

大分、回復したようだ。

彼女が、こんなに子ども好きだとは思わなかった。

マロウ邸を離れて、車で貴族街までやってくると伯爵邸の門前に到着。

当然、伯爵が乗っているので顔パスだ。

屋敷の玄関に到着すると、伯爵と騎士を降ろす。

大した活躍もできなかった騎士は、暗い表情だが仕方ない。

毒花は無事に駆除できたし、犠牲者やけが人が出なかっただけでも上々だ。

車を降りて伯爵に別れの挨拶をすると、護衛のアマランサスも一緒に降りて、俺の後ろに立っている。

「今回は大事にならなくてよかった」

「これも辺境伯様のおかげでございます。このご恩は、必ずなんらかの形でお支払いいたしますので……」

「いや、森であの花が繁殖すれば、ハマダ領や子爵領にも影響が出るゆえ、協力は当然だ」

「し、しかし……無理を申して真珠を譲っていたのに、あまつさえ毒花の駆除までしていただいて、なにも礼をしないとなると貴族としても面子が……」

「そうは言ってもなあ……ハマダ領や子爵領での問題ごとでお世話になることもあるだろうし、お互いさまってことで」

「しかし辺境伯様——」
そこにエリカがやってきた。

「辺境伯様！ ニャンコロは治った？」

「ああ、治ったよ。もう元気だし、獣人たちの長が面倒を見てくれると約束してくれたので、もう大丈夫だ」

「よかった！」

「彼には、伯爵から仕事を頼むので、エリカちゃんが仲介してやっておくれ」

「うん！ それじゃ、ニャンコロの所に泊まってもいいの？」

「いや——それはまずいんじゃない？」

「ニャンコロとねえ——いっしょに寝ると、ふわふわですごく気持ちいいの！」

彼女がすごく嬉しそうに話した、その言葉に——伯爵が青くなつて倒れそうになっている。

相手が子どもとはいえ、伯爵令嬢が男と一緒に寝たとなれば貞操を疑われる。

これは非常にマズい。

彼女は屋敷を抜け出して、外で一泊することもあったという話だったから、そのときニャンコロと知り合ったのかもしれない。

これがエリカとニャンコロのボーイ・ミーツ・ガールか。

彼も、まさかエリカが伯爵令嬢だと思ってもみなかったのだろう。

「伯爵、冷静に。あの子どもや獣人たちの協力がないと、森の監視ができない」

「わ、わかっておりますが……」

「あの子どもは、ガレー地区の獣人の長、ニヤルニヤルサという女が面倒を見ることになった」

「し、承知いたしました」

愛娘の突然の言葉に彼はかなり動揺している。

エリカのことは、家庭の問題なので部外者は口出しできない。

アマランサスと伯爵がなにか話したあと——俺たちはマロウ邸に戻ることにした。

最後にアマランサスと伯爵がなにを話していたか気になる。
車の中で聞いてみた。

「伯爵と、なにを話したんだい？ アマランサス」

「僭越だと思うのだがえ、ふふ——聖騎士様が、あまりにお人がよすぎるのでな」

彼女は苦笑いして答えたのだが、嬉しそうにも見える。

「まあ、よく言われるよ」

なんとなく察したので、それ以上は聞かなかった。

いつまでも政の難^{まつりごと}しいことは全部彼女とリリスに丸投げ——ってわけにはいかないのだが、この世界の常識は不明なことが多すぎる。
俺は素人貴族で、もともとは普通のオッサンだしな。

森での今後の経過を見守る必要があるが、問題なく処理できたので今回の作戦は上々だろう。

196話 オダマキへ

帝国で咲くという毒の花。

それが、ダリア近くの森の中に咲いているということで、俺たちは駆除に向かった。

アキラによれば、いつもは燃やして駆除をしているというのだが――。

俺とアネモネのタッグで、簡単に駆除することができた。

アネモネのゴーレム魔法で毒の花を一箇所に集めて、俺のアイテムBOXの中に入れたのだ。

アイテムBOXの中にあるゴミ箱に投入すれば、駆除完了。

俺だからできるチート行為だが、燃やせば毒ガスが出るというのだから、危険が少ないのに越したことはない。

街に戻り、伯爵を屋敷まで送ったあと、俺たちはマロウ邸に戻ってきた。

到着すると日は傾き夕方近い。

昼飯も食わないで作業をしていたので腹ペコだ。

車から降りると、プリムラが作る料理のいいにおいが漂っていた。その香りからすると、料理はカレーらしい。

アマナとマロウ邸のメイドのマーガレットも料理を手伝っており、先に帰っていたアネモネはパンを焼いていた。

「ただいま」

「ケンイチ、おかえりなさい。すぐに料理ができますよ」

「旦那、なんの仕事か解らないけど、上手くいったのかい？」
アマナが心配そうな顔をしている。

「ああ、大丈夫だよ」

まさか、この街まで危険にさらされていたなんて彼女は知る由もないが、俺たちの雰囲気では危険な仕事だと察していたのだろう。

「アキラ、先に飲むか？」

「お？ いいねえ。駆けつけ3杯！ 仕事のあとのビールは格別」

「ダリアで伯爵に会うだけだったはずなのに、なんでこんなことに」

「まあ、お貴族様だから、これも仕事のうちってやつよ。仕方ねえな、ははは」

アキラは俺から渡されたビールを一気に半分ぐらい飲んだ。

「ぶはーっ！ たまんねえ！」

ニヤメナとアマランサスにもビールを渡した。

「うめえぜ！」

「ふうう、仕事のあとのこれは格別じゃのう……」

「アマランサス、アキラと同じことを言ってるぞ」

「む……」

アマランサスがちょっと嫌そうな顔をする。

おっさんくさいと、遠回しに言われたと思ったのだろう。

彼女を抱き寄せると、軽くビール味の口づけをする。

ニャンコロは元気そうで、ミヤレーに抱きつかれ、なでられまくって好きなようにされている。

彼を取られたアマナが寂しそうにしているので、アネモネが声をかけた。

「アマナ、一緒に食事を食べよ？」

「おお、そうかい。それじゃ一緒に食べようかねえ」

ミヤレーに捕まり、体中をスリスリされているニャンコロの所に行く。

そんなに好きか。

「ニャンコロ、身体は大丈夫か？」

「うん、大丈夫だよ」

「これからは君が一人前になるまで、ガレー地区の長が面倒見られるからな」

「なにも心配いらなにゃー！」

「うん」

「あううゝ可愛いにゃゝ」

ミヤレーが、ニャンコロに頬ずりして、耳を甘噛みしている。

「ミヤレー、おもちゃにしちゃ可哀想だろ？ ほどほどにしなさいよ」

「うにゃー！」

そうは言ったものの、ニャンコロも嫌がっていないようなので好きにさせよう。

料理ができるまで俺にはやることがある。

コンテナハウスにぶら下げてある、スライムが入ったプラの虫かごだ。

中には透明なスライムがうねうねと動いている。

アネモネに頼んで冷却の魔法をかけてもらいたいところだが、彼女は料理中だ。

そこで、シャングリ・ラから冷却スプレーを購入してみた。

こいつをスライムに吹きかけると、すぐに表面が白く凍りつく。冷えると動きがかなり鈍くなったので、ゴム手をつけてスライムを掴み、ナイフで半分に切る。

透明な虫かごをもう1つシャングリ・ラから購入して、その中に

半身を入れた。

次に、アイテムBOXから、今日採取した毒花の芋を取り出して虫かごの中に投入。

これで様子を見てみる。

「おっ？ ケンイチ、早速実験か？」

ビール缶を持ったアキラがやってきた。

「毒花の芋でスライムが死ねば、芋でスライムの駆除ができるし、死ななければ毒花の駆除にスライムが使える」

「森で言ってた毒をもって毒を制すだな」

「まあ、そういうことだ」

食事の準備ができたので、皆で集まってカレーを食う。

ニャンコロも美味しいと喜んでいた。

カールドンの所にもカレーを持っていってやる。

「ケンイチ様、その様子では上手く駆除できたようですね」

「まあな。色々といい方法が見つかったよ」

「ほう」

彼にゴーレムのコアの利用法を話した。

「なるほど、そのような使い方が……」

「畑を耕すのにも使えるし、もっと色々な使い方が増えて、コアが使われるのが普通になるかもしれないぞ」

「なんと……いままでは、あまり見向きもされていなかった技術です……」

カールドンが立ったままカレーを食い始めた。

「う、うまい……」

「カールドンだって歴史に名前が残るかもしれないぞ」

「はは、私は面白い研究ができればそれでいいのです」
「その研究がより面白くなるように、俺も協力するぞ」
「ありがとうございます」

そして夜——ニャンコロはミヤレーと一緒に寝るようだ。
彼もなついているようだし、問題ないだろうが——。

「ニヤメナ、大丈夫だろうな？ ほら——その……」
俺の言葉にニヤメナが怪訝な顔をする。

「はあ？ 只人じゃあるまいし、大丈夫だよ旦那！ 獣人たちの社
会で、子どもなんかに手をだしたら、大変なことになるし」
マジで磔になるらしい——剣呑剣呑。

——
——
——
◇◇
◇◇
——
——
——

——赤い花を駆除した次の日。

俺は朝早くに起きると、真っ先にスライムの所に行って様子を確認した。

毒芋を入れた透明な虫かごの中で、スライムは変わりなく生きており、毒芋も綺麗に平らげられてなくなっている。

——ということは、毒芋も効かなかったってことだが、スライムに変化が現れた。

透明なウネウネの中に小指の先ぐらいの黒い粒が見える。

俺はゴム手をつけると——アイテムBOXから出した冷却スプレ
ーをスライムに吹きかけて、その黒いものを取り出した。

「ふゝむ」

黒い石——これは……。

摘んだ石に、俺が力を送り込むと中が青く光る。

こいつは魔石だ。

まるで真珠を作るアコヤ貝のように、スライムで魔石ができた。びっくりたまげた門左衛門とかいうネタがあつたが……そうではない。

スライムの前で悩んでいるとアキラが起きてきた。

「うつす！ ケンイチどうした？ スライムはくたばったか？」
彼になら話しても大丈夫だろう。

「普通に平気だったし、コレができてた……」
俺は、アキラに黒い小さな玉を見せた。

「ああん？ これって——魔石か？」
「そうだ」

「うーん、確かに毒花の芋は空中の魔素を取り込むから、そいつを食わせれば魔石ができるっちゅーのは、理屈にはかかっていと思うが……」

「こんな話を帝国で聞いたことは？」
「ないない、初めて聞いたぜ。だいたい、スライムと赤い花の生息域がまったく違うからな」

スライムが繁殖しているのは水のある所、赤い花は森の中に生えて芋をなすために湿地には向かない。

普通の芋も水分が多い場所では腐ってしまうし。

「でも、スライムと毒花を養殖すれば、魔石を量産できるってことが解った」

「ええー？ ケンイチ、本当にやるつもりか？」
アキラの口ぶりからすると乗り気ではないようだ。

彼が乗り気ではなくても、これはハマダ領の大きな産業になる。スライムを駆除する方向ではなく、捕まえて養殖するのだ。湿地帯にいればスライムなんていくらでもいる。

「ああ、カールドンの作ったコアモーターが普及すれば、この世界での魔石の需要は爆発的に増える。こりゃ、お義父さんにも話して、金を出してもらわにゃ……」

「そういうのはケンイチに任せた」

「金になるぞ？」

「いやいや、俺はスライムも赤い花もうんざりだよ」

彼は帝国で、この2つに相当苦しめられたらしい。

皆で朝飯を食べ、片付けをしたあとプリムラを呼ぶ。

彼女にもスライムでの魔石生産について話すため、庭の隅で彼女とひそひそ話をする。

「え?!」

プリムラも俺の話に驚いたようだ。

そりゃ魔石を人工的に生産するなんてな。

「今のところ一個できたただけだけど、これから追試を何回かして、本当にできるかを調べる」

「これって、もしかして凄いことなのでは……」

「そりゃ成功したら凄いぞ」

「あの……父に話してきます!」

「他の人には漏らさないようにな」

「もちろんです!」

しばらく待っていると、マロウが慌てて走ってきた。

「ケンイチ様! ハアハア……それは本当でございますか?」

「とりあえず、実験で1個だけできたのは間違いない。スライムを持ってきているから、旅の間に追試を繰り返すから」

「もし本当なら、あのコアモーターという魔道具との組み合わせで、世界がひっくり返るのでは……？」

「上手くいけばな。それには、スライムと赤い花の養殖が本当にできるかどうかの実証もしないとだめだし」

「うむむ……運河と合わせて、辺境伯領が世界の中心になるのでは……」

「そんな大げさな、ははは」

そこに耳のいいミヤレーがやってきた。

「ケンイチ、スライムがどうかしたのきゃ？」

まだ極秘事項なので、人に話すのはまだ早い。

「いや、スライムを食うか？」

「うぎゃ！ そんなもの食わないにゃ！」

彼女が毛を逆立てる。

「ミヤレー、ニャンコロをガレー地区まで送って行ってやってくれ」
「解ったにゃ！」

あそこに車でまた行くよりは、彼女に担いでいってもらったほうが早い。

それに獣人は獣人同士のほうが話も通じるだろう。

ミヤレーはニャンコロを肩車すると、マロウ邸の門から飛び出ていった。

「旦那ー！ あいつを置いて、俺たちだけで出発しようぜ」
ニヤメナがそんな意地悪なことを言ってくる。

「そうはいかないだろ」

まあ置いていっても、獣人の能力があれば追いかけてはこれるだろうが。

まさか、そんなことをするはずがない。

ダリアでの用事はすべて済んだので、出発の準備をしながらミヤレーが帰ってくるのを待つ。

庭に出していたコンテナハウスも全部収納した。

カールドンが朝食のパンを齧って、カップでスープを飲んでいる。

「研究はすすんだか、カールドン」

「ええ、ケンイチ様。たまに環境を変えろというのもありですねえ」

「それは言える」

ミヤレーが帰ってくる間に、再びスライムに芋をやってみようと思うのだが、今回は実験だ。

データをしっかりと取らなければならない。

ゴム手をつけると――アイテムBOXから天秤ばかりを出し、芋の重さを計る。

芋に溜まっている魔素の量も関係してくるから、あまり意味がないかもしれないがな。

たとえば高濃度の魔素が湧く場所があれば、そこで赤い花を育てれば濃い芋ができるかもしれない。

「ケンイチ様、それが例の花の芋でございますか？」

「そうだ。こんなものが役に立つかもしれないなんてな」

彼にも、スライムと魔石のことを話す。

「なんと！ そのようなことが――のけものにされているものだからこそ、研究が遅れていたのでは？」

「アキラの話によると、帝国でも全く研究が行われていなかったらしい」

「そうでしょう」

スライムに芋をやっていると、ミャレーが帰ってきた。

「ニャンコロは、受け入れられそうか？」

「もちろんにゃ！」

「でも、次に会うときには、可愛くなくなってるにゃー」

ミャレーが本気でそんなことを言っている。

屋敷からマロウがやってきたので車の準備をしているのだが、マロウ商会のメイドであるマーガレットも一緒だ。

「私も参ります。旦那様のお茶を入れるためには必要でしょう」

「それは構わないが、乗れるかな？」

俺の車の助手席にはプリムラ。後ろの座席にはアネモネとベルとアマランサス。

3列目シートには、獣人たち。

アキラの車にはマロウとマロウ商会の番頭——そしてアマナとカールドン。

3列目シートにマーガレットが乗った。

「なんとか乗れたか」

運転席に座ると、アキラから連絡が入る。

『ケンイチ、こっちはいいぞ』

「そうか、こっちもオツケだー」

「オツケーにゃ！」

「にゃー」

「お母さんもオツケーか。それでは出発！」

『はいよ』

サクラに移築する建物を集める仕事と、伯爵に会うだけだったはずなのに、色々とありすぎたダリアから出発した。

車は縦列になって大通りを進み、南門から街の外に出た。

シャガの根城になっていた古城跡、そこから助け出した女たちを村まで送っていったが、その先はまったく未知の土地。

マロウ商会の面々は、目的地のオダマキには行ったことがあるらしいので、彼らに道先案内人になってもらう。

ダリヤの近辺に広がる穀倉地帯を抜けると、しばらくは荒野。

ここらへんには水源がないためらしい。

それでもかつてはここらへんでも畑作が行われていたようなのだが、水源が枯渴したため、皆北へ北へと移動したようだ。

もともとは海辺に植民したというが、アニス川周辺はスライムだらけ、そこでそれを避けて北上、最後にたどり着いたのが王都周辺らしい。

王都のすぐ近くにもアニス川が流れているが、あそこにはスライムはいないからな。

王都の北は山脈、その向こうは砂漠なので、それ以上北には行けない。

やはり水と土地があつて……開拓に適した土地ということになればアニス川周辺ということになるのだろう。

ただし、スライムを駆除することができれば……だが。

ダリアから王国最南端のオダマキまで、約500リーグ――800 kmだ。

道路が舗装されていれば、1日で800 kmぐらゐは余裕ではあるが、さすがに1泊は必要だろう。

「プリムラ、ここらへんは治めている貴族はいないのかい？」

「多分、いないと思いますよ」

見るからに荒地だからなあ。

デカイ領地を持っているアスケピオス伯爵みたいのが親貴族だとすれば――シャガ討伐の功績から陞爵したノースポール男爵は子貴族ってことになる。

位階こそ、辺境伯の俺のほうが高いが、伯爵がこらへん一帯を治めている大貴族なのは間違いない。

ノースポール男爵は寄子貴族ってことになるので、本当は俺が彼の領地に援助するのは少々マズい。

本来なら、男爵領になにかあったら助けるのは伯爵なのだ。

――とはいえ、デカイ貴族なら寄子も多いので、後手後手になってしまうことも多い。

今回のような魔物退治は、たまたま遊びに行ったら魔物に襲われたので退治しました――という感じになる。

あまり表立って援助はできないが、あとはマロウ商会経由でやればいいだろう。

商人が貴族を援助するのは普通だからな。

街道には人や荷馬車が多いので、注意して走る。

事故ったら大変だ。こちらは大丈夫でも、馬車などはバラバラになっってしまうだろう。

しばらく走っていると、脱輪している馬車が見えてきた。

道からはみ出て片輪が落ちてしまっている。

一旦停止して、後ろのアキラに連絡を取った。

「アキラ、ちょっと一旦停止する」

『あいよ』

「花摘みや、雉撃ちしたいやつは、いまのうちにしとけ」

「雉撃ちってなんにゃー！」

後ろから声が聞こえてくるが、アキラには通じるだろ。

まあ、この世界には鉄砲がないから通じないか。
でも花摘みって言葉はあるんだが。

『オッケー!』

「ケンイチ、気をつけてください」
旅に詳しいプリムラから注意するように言われる。

エンジンを停止して降りると、皆がバラバラと降り始めた。
女性陣は固まって行動しているが、まず獣人たちが周囲を警戒する。

こういうのが罠のときがあるのだ。人助けをするために、馬車が止まったところを襲ってきたりと――元世界でもそういうのがあったと思う。

ベルもアネモネと一緒に車を降りたのだが、様子が変わった。
周囲のにおいをすごく気にしているのだが――敵だろうか？

心配していたのだが、周囲を確認したミャレーとニャメナが草むらから手を振っている。

大丈夫そうだ。それを確認してから脱輪している馬車の所に行く。

「手伝おうか？」

「は、はい……」

馬車の近くにいたのは若い男。

茶色の短い髪に、麻のズボンに緑色のベストを着て、首飾りを多く付けている。

肌は日に焼けていて浅黒い。商人らしい恰好だ。

「馬を外してくれれば、簡単に上げられるが……」

「わ、解りました」

男は汗だくになっていたので、孤軍奮闘していたのだろう。

かなり疲れた様子で、他に手がないと悟ったのか、俺の申し出を受け入れた。

そこにマロウたちがやってきた。

「ダリアの商人ですな。顔を見たことがある」
マロウと番頭もうなずいている。

「そうなのか」

一流の商人の彼は、顔を覚える能力が凄い。
プリムラもそうだが、一度会った人の顔はほとんど覚えているという。

逆に俺はすぐに忘れる。自分で言うのもなんだが、人に興味がないのが問題だ。

興味がないので覚えていられないのだ。

若い商人が馬を外しているのだが、もたついているのでマロウと番頭が手伝う。

馬車と馬を繋いでいる大きな木製のピンを外す。2人とも中々手慣れている。

「マロウも昔は自分でやっていたのか？」

「もちろんです。親の財産を引き継いだのでなければ、皆が露店から始めるわけですから」

まあ、俺もそうだったな。

「千里——いや、1000リーグの道のりもまず一步からってな」
「その通り、その一步を歩みださない人間には、絶対に成功は訪れません」

俺たちの会話から、若い商人がマロウの正体に気がついたようだ。

「あの！ マロウ商会さんですか？」

「その通りですよ」

「あの！ 俺も、マロウ商会のような大店になることを目指しています！」

「ほほ、期待してますよ」

「はい！」

ピンが外れたので馬をどかしてもらおう。

馬車を動かすだけなら簡単。

こいつをアイテムBOXにに入れて、道の上に出せばいいわけだ。
カールドンもやってきた。

「ケンイチ様、手伝いましょうか？」

「いや大丈夫だ、収納」

簡単なはずだったのだが、馬車が収納されない。

なんのことだか解らない若い商人がきょとんとしている。

そこに、ベルがやってきて、馬車のおいを懸命に嗅いでいる。

「え？！ 森猫？！」

彼女を見た商人が驚いた。

「ああ、彼女は俺の家族だ」

「しゃー！」

馬車のおいを嗅いでいた彼女が、突然牙をむき出した。

「え？ こんなやつを助けるなって？ そうもいかんだろ？」

「しゃー！」

「ええ？」

彼女がこんなに怒るのは……。

アイテムBOXに入らないってことは、その原因があるのだ。

「もしかして馬車に、なにか生き物が積んであるのか？」

「あ！ はい！」

商人が馬車に乗り込むと、大きな木の箱を降ろしてきた。

閉じた木の箱だが、穴が空いていて、ガタガタと動いている。

どうやら生き物のようで、こいつが収納を邪魔していたのだろう。

「しゃー！」

「え？ 中身は森猫だって？」

どうやら箱に入っているのは森猫らしい。

「は、はい——森猫ですが」

「しゃー！」

「森猫を粗末にするやつを助けるなど、彼女が怒っているのだが……」

「し、しかし、これは売り物ですし……」

まあ、彼の言葉も一理ある。

普通の人間にとっては、森猫も森の中の生き物に過ぎないのだ。

森猫の売買は違法でもなんでもない。

そこに、アキラと獣人たちもやってきた。

「おお？ なんだなんだ？」

「その中身、森猫にゃ？」

獣人たちもおいで解ったらしい。

「ああ、そうらしい」

「旦那、そんな商人は助けることはねえよ」

ニヤメナも怒っているようだ。

「お前たちまで」

まあ、獣人たちにとっては、森猫は神様みたいなもんだし。

そりゃ怒るのも無理もないが、解決するのは簡単だ。

「それじゃ、そいつが商品だっていうなら、俺が買い取るよ。それならいいだろ？」

「そ、それはそうですが……」

俺には相場が解らん。マロウと相談して値段を出した。

「金貨10枚——（200万円）出す。それと君の馬車をそこから救出してやる。悪い取引ではないだろ？」

「はい……承知いたしました。金貨10枚でお譲りいたします」

「はい」

俺はアイテムBOXから金貨を10枚出すと、商人に渡した。

シャングリ・ラからボールのようなものを購入して、ニヤメナに渡す。

「アイテムBOX?!」

俺がなにもない所からものを出したので、その存在にやっと気がついたららしい。

「そうだよ。ニヤメナ、そいつで箱を開けてやってくれ」

「はいよ」

「あの……あなたも商人なのですか？」

「いや、俺は貴族だよ」

それを聞いた商人が顔を青くして、ペコペコしだした。

「知らぬこととはいえ、ご無礼のほど申し訳ございません！」

「ははは、まあ貴族らしい恰好をしてないからな」

話している間に木箱が開いた。

開けた途端、逃げるかな? ——と思ったのだが、ちょっと衰弱しているようで、そんな元気はなさそうだった。

中を覗くと、暗い箱の底に黒い毛皮の森猫の子どもがいる。

大きさは、ちょっと大きな家猫並だが足が太い。

森猫の特徴である、大きな三角形の耳もベルと同じだ。

心配そうに箱の周りをウロウロしていたベルだが、顔を突っ込んでペロペロと黒い毛皮を舐め始めた。

可愛いな！

197話 旅の仲間が増えた

ダリアでの用事を済ませて、俺達は当初の目的地である南の港町であるオダマキに向かった。

途中、脱輪している馬車を発見。

気まぐれでそいつを助けることにしたのだが――ベルの様子が少々おかしい。

彼女の話によれば、馬車の中に森猫がいると言う。

それを運んでいたのは若い商人だが、森猫の取引は違法でもなんでもない、彼を責めるわけにはいかない。

それ相応の金貨を支払うことで、森猫を引き取ることにした。

木箱を開けて出てきたのは黒い毛皮の子猫。

ちょっと大きな家猫ぐらいの大きさだが、脚の太さが大きな身体に成長することを予感させる。

頭の上の大きな三角形の耳も森猫らしい。

ベルが子猫をペロペロしているところにカールドンがやってきた。

「ほう！　これが森猫の幼体ですか！　初めて見ました！」

カールドンがメモ帳を出して、なにやら書き込み始めた。

このメモ帳は俺がプレゼントしたもので、彼もメモを取るのに愛用している。

アキラも箱の中を覗き込む。

「男の子か女の子――どっちだ」

「にゃー」

ベルによると男の子らしい。

「へえ、森猫の子どもなあ。ケンイチの彼女ぐらいの大きさになるには、どのぐらいの年月がかかるのかね？」

アキラがなんだかニヤニヤしているが。

「ベルは、森猫の中でもかなり大きいということだったが……」

「だろうなあ。話に聞いた森猫は、もうひと回り小さいイメージだったし」

おっと、森猫が可愛いので仕事を忘れていた。馬車を助けてやらないとな。

生き物が載っていたことで馬車をアイテムBOXに収納できなかったが、これで問題は解決したはず。

「よし、それじゃあとは――収納！」

アイテムBOXに馬車が吸い込まれたので、道の上に出せば救出作業は完了だ。

道の上に馬車を置くと、商人が馬をつなぎ始めた。

「馬車も入るような大きなアイテムBOXとは……」

「それじゃ、あとの作業は自分でやってくれよな」

「はい……ありがとうございます」

商人が頭を下げたので、これで仕事は終了だ。

「こっちもなんとかなるかな？」

森猫が入っている箱に手を入れて俺の祝福の力を使ったが、あまり変わらないようだ。

身体が衰弱していると、効き目がないのかもしれない。

たとえば死にかけの人間にこの力を使っても、生き返ることはない。

アネモネとプリムラもお花摘みから戻ってきた。
アマナとアマランサスも一緒だ。

「なあに?! それって森猫の子ども?」
アネモネが子猫を見て叫んだ。

「かわいい!」
意外、プリムラが目をきらめかせている。

「ほう、森猫の子どもかい? これは可愛いねえ……」
「うむ」

アマナとアマランサスも、箱の上でぐったりしている黒くて小さな森猫を見ている。

ベルが懸命に舐めているのだが……。

「どうだろう……元気になるかな?」
俺はアイテムBOXから水とチュールを取り出した。

「アネモネ、こいつをやってみてくれ」
「うん!」

アネモネが森猫にチュールを差し出す。
彼は2〜3回においを嗅いでいたのだが、すぐにペロペロし始めた。

皿に入れてやった水も飲んでいる。

「かわいい! でも……痩せてる……」
チュールをやりながら、アネモネが黒い毛皮をなでる。
毛皮を見ただけでは解らないが、触ると痩せているのが解るらしい。

そういえば毛艶もよろしくない。こりゃ、元気になるまで面倒を

みないとだめだろうなあ。

「おとなしいなあ。ベルと最初に会ったときには、凄い怒っていたが」

「にゃー」

「え？ 怒ったのは一回だけだった？」

まあ、すぐにぐったりしてしまったので、俺のなすがままだった
が。

「にゃー」

「私の身体をなで回したくせに……って、そんなに撫で回してない
だろ？ 男か女か確認したただけだ」

「「じゅっ」」

女たちの視線が突き刺さる。

あの場合はしょうがないだろ。

「森猫を助けた旦那のことをモノ好きだと言ったけど、結果的には
正しかったのかねえ」

アマナが子猫の黒い毛皮をなでている。

「情けは人の為ならずってな」

「その聖騎士様のお慈悲を支え寄り添うのが我らが務め」

皆で子猫を囲んでいたのだが、いつの間にかその後ろにマーガレ
ットがいて、じっと子猫を見つめていた。

皆で森猫を見ながらワイワイしていると、後ろから声がしたので
振り向いた。

「あ、あの旦那あ……」

「なんだ？」

見れば、ニヤメナとミャレーがよだれを垂らしている。

「お前らもか、はい」

「やったにゃー！」

獣人たちと森猫にもチュールをやると、皆でペロペロし始めた。彼が回復してもここらへんで放すわけにもいかないな。

多分、ダリア近辺の森で捕まえられた森猫だろうから、そこまで運んでやったほうがいいだろう。

旅の仲間が1匹増えそうだ。

森猫を見ていたマーガレットが、満足したのかマロウの所にやってきた。

「旦那様、一休みしたついでに、お茶でもいかがでしょうか？」

「おお、それはいい！　ちょうど喉が乾いていたところだ」

マロウが嬉しそうに返事をした。

よくできるメイドであるマーガレットを手放したくないというのは、納得できるところだ。

彼女の荷物をアイテムBOXから出す。

皆の荷物が俺の収納の中で、どんなに沢山の荷物を抱えても、手ぶらで旅行や仕事に行ける。

それどころか、この中には家まで入っているのだ。

マーガレットの荷物は、小さなコンテナに詰められていて――彼女は、その中からお茶のセットを取り出した。

準備をするためにはテーブルが必要なので、一緒に用意した。

小さな魔導コンロと、ヤカンに入った水。そしてティーセット。

お茶の葉は、俺が譲ったアールグレイだ。

マーガレットが淹れるお茶タイムは、マロウにとってとても大切

な時間らしい。

それを邪魔しちゃいかったので、俺とアキラは缶コーヒーを飲んでいる。

その他の女性陣は、オレンジジュースやミルクを飲む。

アキラはビールを飲みたそうなのだが、いくら祝福で分解できる
といえ、明るいうちからは駄目に決まっているだろ。

マーガレットがお茶を淹れると、辺りにアールグレイの香りが漂う。

お茶を飲んでいるマロウは目を細めて幸せそうだ。

それを横目で見ながら、プリムラを呼んでひそひそ話をする。

「プリムラ、そんなにマーガレットが大事なら、一緒になればいいんじゃないのか？」

「え？ 誰と誰がですか？」

「え？ お義父さんとマーガレット……」

「あはは、ありませんよ。2人とも、そんなことは考えてないと思いますけど」

プリムラが笑っているので、2人はそういう関係ではないらしい。
あくまで優秀な従業員と雇い主という立場。

どうやら俺の勘違いのようだ。

「ケンイチさま。このお茶を生産できればいいのですが……」

「チャノキ自体はあるんだが、摘み取ったあとに醗酵させたりするので、それを習得するのに時間がかかりそうだ」

「この見事なお茶には、それだけの手間暇がかかっているということなのですね？」

「そうだな」

緑茶も紅茶も、元は同じ葉っぱだと聞いたから、生産自体はでき
ると思うのだが。

マロウが若い商人を呼んで、お茶を御馳走している。

「こ、これは凄いです！　これがお茶ですか？」

この世界のお茶ってのは普通、薬草茶だからな。

シャングリ・ラでチャノキの苗を購入してみる――1本500円と安い。

「これが、チャノキだ」

「この光沢のある葉っぱがそうなのですか？」

「いや、先端に伸びてくる若芽を摘むんだ」

「それでは、常時採れるというものではないのですね」

「そういうことになるかな」

なにせ、俺がいた北海道にチャノキなんてなかったからな。

温暖な地方の植物だと思うので、ここらへんでも育つだろう。

「これは、是非とも生産に挑戦してみなくては……」

「やることがありすぎて、大変だな」

「もう、休む暇ありませんよ。私の身体が朽ち果てる前に、なんとかできればいいのですが」

「あまり無理をしないほうが……」

「もう、ケンイチが次から次へと面白そうなものを出すので、お父様が張り切ってしまうのです」

俺がシャングリ・ラから出すアイテムに、プリムラが怒っている。

「ええ？　　そうかい、それじゃもう出すのはやめよう」

「そ、そんな殺生な……」

マロウが慌てている。

マロウ商会で売れているアイテムやドライジーネも、俺のネタが元なのだ。

それが全部なくなったとしたら、マロウ商会も困るだろうが、こ

の男がそれぐらいで折れるとも思えん。

「まあ冗談だけどな」

俺たちの会話を聞いていた若い商人が肩を落としている。

「俺が、こんな凄い商品を扱えるようになるには、いつになるのか……」

つぶやいた商人にマロウが声をかけた。

「若い商人は、まずは誠実な取引を心がけなさい」

「マロウ商会、金儲けの秘訣だな」

「そのとおりです。悪いことをすれば簡単に儲けることはできませんが、それは博打と一緒にです」

「プリムラムも、商売で博打をするのは駄目だと言っていたなあ」

「無論です。商売で確実に儲けを出すことも非常に難しいのに、博打で儲け続けるなんてのは、不可能というものです」

「インチキやイカサマじゃなければな」

王都に行く途中で車に乗せてやった若い商人も、賭けをして峠で死んだしな。

一か八か、賭けたくなるのは解るが、地道にでも確実にプラスにするべき——というのが、マロウ商会金儲けの秘訣なのだろう。

「そのとおり」

「解りました、肝に銘じます」

若い商人がお茶を飲み干すと、自分の馬車で出発をした。

先に発っても、すぐに俺たちの車が追い越すだろう。

お茶会が終わったので、道具を片付けて俺のアイテムBOXに入れた。

拾った森猫の様子を見る。

「どうだ？」

「ちよっと元気になったよ！」

「そうか」

アネモネの言うとおりに、かなりよくなったように見えるな。
目に生気が戻っている。

つまり箱に閉じ込められていたので、空腹と脱水症状だったのか
もしれない。

祝福の力を使っても、身体の水分が増えるわけじゃないしな。

「それじゃ、もう少し食事をあげようか」

俺はシャングリ・ラから猫缶を購入した。

前は獣人たちが喜んで食べていたが、いまはすっかりとカレーの
虜になってしまっている。

猫缶を皿に開けて箱の中に入れてやると、ハグハグと食いついて
いる。

やっぱり腹が減っていたようだ。

「飯が食えるなら平気だな」

「にゃー」

「名前？ こいつのか？ そうだなあ——黒いからシャドウにして
みるか」

「それは、ちよっと中二臭くね？」

アキラに不評だ。

「ええ？ それじゃ影丸」

俺の提案にも、皆の反応がよろしくない。

俺は名付けが下手なんだよなあ。

「それじゃ、クロとかラッキーとか」

「犬かよ！」

「それじゃ、カゲ」

「そっちのほうがマシだぞ」

「マジか——それじゃ、お前はカゲってことで」

「みゃー」

顔を上げて森猫が返事をする、彼が起き上がった。

「なんだ、いい子だな」

喉をなでるとゴロゴロ言っている、怒ったり敵対するようなことはないようだ。

俺が助けてやったと理解しているのだろうか？

それとも、ベルが通訳してくれたのかな？

助けた子猫——カゲが動けるようになったので、車に乗せた。

ベルと一緒に俺のラ○クルの後ろの座席だ。

彼の身体はまだ小さいので、入り込めるスペースがある——と思つたら、アームレストの所で香箱座りになっている。

「そこがいいのか？」

「みゃー」

彼は大きな耳をクルクルと動かしている。

慣れない場所なので少々緊張しているらしく、狭い所のほうが落ち着くらしい。

皆が乗り込んだのを確認して、後ろの車に連絡を取る。

「アキラ、行くぞ」

『オッケー』

『オッケーにゃ！』

車は新しい仲間を増やして、再び街道を走り出した。

そのまま1時間ほど進み、あまり代わり映えしない風景が窓の外を流れていく。

途中で仲間になったカゲの調子はいいようだ。

車から降りると俺の脚にまとわりついて、スリスリしている。

こうやってみると、本当に猫のようだが、違いは大きな耳と野性味溢れる太い脚。

それに猫と違い力強い。

いずれはベルぐらいでかくなるんだろうか？

いや、オスだからもつとデカくなるのか？

車で走っていると、さっきの若い商人の馬車を追い越した。

「にゃー！」

ミヤレーとアネモネが手を振っている。

車が走り続けていても、アームレストの上でカゲはじっとしていたのだが、そのうち俺の所にやってきた。

ハンドルを握っているその下に潜り込んで、俺の股の所で丸くなったのだ。

「ええ？　そこに入るかあ？」

「ゴロゴロ」

「いや、ゴロゴロじゃねえし」

まるで、パソコンのキーボードを打っていると邪魔してくる猫だ。シートの間からベルが顔を出す。

「にゃー」

「私もやりたいって……無理に決まっているだろ」

なんで子どもと張り合ってるんだ。

俺とベルとの会話に、プリムラが驚いている。

「ケンイチ、森猫の話していることが解るのですか？」

「んゝ、はっきりと解るわけじゃないんだが、なんとなくは……實際、エルフや獣人たちは森猫と会話しているからね」

このことから森猫が高い知能を持っているのは間違いないと思う。

「ウチも森猫と話をしてるにゃ！」「お嬢もそのうち話せるようになるんじゃないかね？」

「私も話してみたいですが……」

「私も話したい！」

いつもベルというアネモネも彼女の言葉は解らないらしい。

「にゃー」

「只人だと、森猫と話せる人の数は少ないようだよ」

「そうですか」

「えゝ？ つまんない」

エルフからもらった翻訳の指輪がなくても、ベルが間に入ってくれば、通訳をしてもらえるかもな。

ハンドルの下にいる森猫の毛皮をなでる。

ベルはうつすらと模様があるのだが、彼は真っ黒に見えるな。

アネモネも言っていたが、毛皮の下は肋アバラが浮いているし、毛並みもよくない。

「よしよし、沢山食べて、ブラシも毎日してやるからな」

「みゃー」

そこにベルが割って入る。

「にゃー」

「お母さん、いい歳して張り合うんじゃないよ」

「しゃー！」

牙を剥き出して左パンチで殴られた。

そんなに怒ることはないだろ。
彼女が怒るってことは、いい歳なのは間違いないらしい。

「今のは聖騎士様が悪いのう」
「ははは、ごめんよ」

そのまま車は2時間ほど走り、昼になって一旦停止。
昼飯を摂ることにした。
道端にテーブルと椅子を出すと、マロウたちと女性陣は座って食事を摂っている。

俺とアキラ、獣人たちは座らないで立ち食いだ。
お行儀悪いが、道端で食事をするのに行儀など関係ない。
ベルは腹が減ってないのか、周辺のパトロールに行ったと思ったら、すぐに鳥を咥えて持ってきた。
茶色の鳩ぐらいの鳥が、まだパタパタしている。

「おお、ベルありがとう」
子猫がいるので、いいところを見せたいのかもしれない。
その子猫は、ずっと俺の近くにいます。
俺が助けたってのを解っているのかもしれないが、おとなしくていい子だ。

まあ、文字どおり猫をかぶっているだけかもしれないが。
俺の脚にスリスリしているカゲを、アネモネがなでている。

「可愛いよな」

「うん！ 可愛い！」

カゲをなでているアネモネはニコニコ顔だ。
そこにベルもやってきて、ペロペロ舐めはじめた。

「お母さん、随分と過保護だな」

「自分の子どもを思い出しているのかもしれない」

アマランサスの言葉に、突然アマナが涙を流す。
どうも彼女はこの手の話に弱いらしい。

「お前も苦勞したんだねえ」

「にゃー」

「子どもは産んでないらしいぞ？」

「なんだい！　ぐすっ……相変わらず旦那の召喚獣ってのは凄い速さで走るんだねえ」

ちよつとバツが悪そうなアマナが、鼻を吸り伸びをしている。
車の椅子に座っていると疲れるようだ。

「旦那様、辺境伯様のこの乗り物は本当に凄いですね」

マロウ商会の番頭が、日光に光る車のボディを眺めている。

定期的にアネモネの魔法で洗浄してもらっているので、ピカピカだ。

たまにはワックスもかけてやったほうがいいだろうか？

「凄いのは当然だし、アキラ殿に荷物を運んだりしてもらっているが、これにあまり頼るのはよくない」

マロウの意見に俺も賛成だ。

「そうだ、俺やアキラの魔法に頼って商売を構築してしまうと、俺たちがいなくなった途端、一気に崩壊してしまう」

「それゆえ、どうしても急ぎの荷物などに限らせていただいております」

マロウぐらいの商人なら、そこら辺は理解している。

「そのほうがいい。俺やアキラだって人間だ。いつどうなるか解らんからな」

「旦那、今日1日でどのぐらい進むんだい？」
アマナは、車の速度が気になるようだ。

「途中で一泊して、順調なら明日にはオダマキに着けると思うが」
「ひゃあ！ 馬車や馬でも20日はかかる距離だと思うけどねぇ」
確かにそんなにかかるなら、今日商人から買ったカゲは、あのままだと確実に死んでたな。

「アキラー、燃料はどうだ？」

「んー？ 半分ぐらいだな。余裕だと思うが……」

「まあ、一応入れておこう」

「オッケー」

2人で、アイテムBOXから出したバイオディーゼル燃料を車に入れる。

そこにカールドンがやってきて、じゅつと給油作業を見ている。

彼と油について話をする。

この世界にあるのは植物油と魚油が多い。
どちらも車の燃料には向かないし高価だ。

俺もシャングリ・ラで油を買ったり、アキラに出してもらったりしなければ、とてもディーゼルエンジンを積む車両を運用できない。

人間と車の昼食も終わり、車は再び出発した。

青空の下、そのまま車で3時間ほど進む。

途中に小さな宿場町もあったが、スルー。

プリムラの話では――街道で輸送をしている商人が沢山いるので、街道沿いに店があれば結構儲かるらしい。

野宿するより宿場町に泊まったほうが荷物も安全だしな。

ここらへんを通るのは、実は初めてではない。

野盗のシャガに捕まっていた女たちを送るために、ここらへんま

でやってきたのだ。

「丘を越え行こうよってくらあ」
無線機のマイクを取る。

「アキラ、問題ないか？」

『問題なくし』

さて、そろそろ夕方だ。

タイミングのいいところで、宿泊する場所を確保しないとな。
ふと右手を見ると村が見えるが、なんかデジャヴュが……。

「あれ？　ここってきたことが……」
スピードを落とす。

「はい、シャガから助けていただいた帰りにここまで来ましたよ」
プリムラが覚えていたようだ。

「にゃー！　ここに女を1人送ってきたにゃ！」
ミヤレーも、そのことを覚えていたらしい。

「そうか、その女が覚えているか解らないが、村の隅っこを貸して
もらえるかもしれない」

「ふむ、街道で寝泊まりするよりは、安全かもしれぬ」
後ろからアマランサスの声がする。

「それに、空き家があれば、購入して移築できるし」
「いいかもしれません」

ボロボロの家でも、ゼロから建てるよりはコストが安いからな。
アキラの車に連絡を入れる。

「アキラく右手の村は見えるか？」

『おう！』

「あそこに間借りしてキャンプしようと思うが」

『おお、いいねえ。解ったぜ』

「そんじゃ、右へターン！」

『了解！』

「ケンイチ、ターンは、曲がるだにゃ？」

「ははは、そうだ」

「ターンにゃ！」

「タダのターンだと、ぐるりと引き返す意味になる」

「面白いにゃ！」

こんな言葉を覚えても、俺とアキラにしか通じないだろ。

アネモネにも通じるかな？

右へ曲がった2台のSUV車は、ガタガタの道を進み始めた。

このぐらいの道ならどうってことはない。スタックしてもデフロックで抜け出せるしな。

500mほど進むと、30軒ほどの小さな村が見えてきた。

ここまで女を送りにきたときは、街道で降ろしてしまったのだが。女はひっそりと1人で帰っていった。

帰ってくるところを見られなくなかったのだろう。

野盗に捕まったのを、村の人間たちは知っているだろうしな。

俺たちは、キャンプをする場所の交渉するために、車を村に乗り入れた。

198話 小さな村

ダリアでの用事を片付け、俺たちは南の港町オダマキに向かうことになった。

道の途中、脱輪している馬車を助けると、森猫の子どもをゲット。助けたのはいいが、ここで放すわけにもいかず、旅に同行させることに。

そのまま街道を走り続けたのだが、さすがにオダマキへの道のりは遠く、一日で走破はできない。

途中で一泊しようとする、ちょうど街道の右手に村が見えてきた。

以前、シャガという野盗を討伐したのだが、そのときに囚われていた女たちを解放し、出身の村に送り届けた。

そのうちの1人がこの出身だったような気がする——というわけ、その村に向かいキャンプする場所を貸してもらおう交渉をすることにした。

街道から脇道に逸れて、2台の車が村に向かう。

一応、柵らしきものもあるのだが、朽ちていてボロボロ。

村の様子もゴーストタウンのように見えているのだが、人はいるようだ。

アキラと一緒に車を降りると、村人が何人か集まってきた。

ボロボロの服と穴の開いたズボンを穿いた、爺さんと婆さん。

その後ろには、麻のワンピースを着た中年の女性。

「あの……なんの御用ですか……?」

「この長はいるだろうか？ 旅の者なのだが、端っこでいいので野営する場所を貸していただきたい——と思ってな」

村人が顔を見合わせるが、すぐに長を呼ぶために戻っていった。

「貸してもらえるかな？」

アキラも心配そうだが。

「こういう集落ってのは、よそ者に厳しいからなあ」

「短期のアルバイトみたいな感じだと歓迎されるんだが——実際に引越してくると、なんか疎外されるよな」

「ああ、わかるな。ははは」

アキラの話に苦笑いするしかない。

元世界の俺の集落でも、外から来た人ってのはちよつと疎外されてた。

孫の代になると、よそ者だって知ってる人もいなくなるから溶け込めるって感じだったな。

そういうところは都会のほうがいいのかもしれない。

アキラと2人で10分ほど待つ。他の皆は車の中だ。

駄目だと言われたらすぐに移動しないといけないからな。

少々心配になってくると、村人たちと白髪の爺さんがやってきた。

村人の数はさっきより増えているが、皆ボロボロな格好なのは同じだ。

ここは裕福な村ではないらしい。

水源から離れているし、ここらへんは雨も少ない。

農家をするのは大変だろう。

女性が多く若い男が少ないのだが、出稼ぎに出ているか、村を捨てて稼げる街へ行ったのかもしれない。

余裕のある者、能力のある者から脱出してしまふ。

ここじゃ離農は別に違法じゃないからな。

ここら辺は貴族の治めている土地ではないらしいが、どこかの領ならば——まともな貴族なら援助をしてくれるだろう。

その場合、村を脱走する者がいるなら領主が悪いということになる。

「旅のお人、野営の場所を貸してほしいということだったが」

「この村長かい？」

「ああ」

「別に怪しい者じゃない。俺はケンイチ・ハマダー——貴族だ」
その言葉を聞いた皆が驚く。

「き、貴族様でございますか？ これは大変失礼いたしました」

「そして、あちらにいるのは、マロウ商会だ」

「マロウ商会というと、ダリアの大店の？」

「そうだ」

俺の話を聞いた住民たちがざわつく。

「なに、もてなせとか言っているわけじゃないんだ。村の隅っこのいいから野営する場所を貸してもらえればいい。それにタダとはいわん」

ざっと見たところ、村人は10人つとところか。

俺はアイテムBOXから、ダリアの森で採った黒狼の軀むくろを3体出した。

「こいつをやる。肉が食えるぞ」

「アイテムBOXだ！」「おおっ！」「黒狼だ！ 3匹も！」

「どうだ？ 食えるならもうちょっと出すが」

ダリアの森だけじゃなく、ノースポール男爵領でも黒狼を仕留めたからな。

通貨として使えるなら、どんどん使っていきたい。

黒狼の毛皮を見て――俺たちからちよつと離れた場所で、住民たちが輪になった。

その中に白いブラウスを着ている若い女がいる。

彼女が俺が助けた娘だろう。彼女には悪いが――正直よく覚えていない。

森の中で、雀の学校をしていた女たちは、一緒にしばらく暮らし
ていたので、よく覚えているのだが……。

待っていると結論が出たようだ。

「承知いたしました。なにもおもてなしできませんが……」

「ああ、大丈夫だ。こちらで用意させてもらうので心配いらない。

それより黒狼は3匹でいいか？ もう少し出せるが」

その俺の言葉に、また井戸端会議になってしまったが、すぐに結論が出たようだ。

「それでは、ご無礼を承知でもう一体……」

村長の顔からすると、生活は厳しいらしい。

「解った」

アイテムBOXからもう1匹出した。

「おおおっ！」「肉だ！」

早速、村人は黒狼を解体するらしい。

軀むくろを喜び勇んで運んでいった。

「それから村長。ちよつと頼みがあるのだが」

「なんでございましょう？」

「空き家はないか？ あれば買い取らせてほしいのだが」

「空き家でございますか？」

「ああ、俺の領地では家不足だな。移築できる家を探している」
少々ボロでも、ゼロから建てるよりは早いし、倉庫に使う手だつてある。

屋根の応急処置なら、ブルーシートって手もあるしな。

「領地？ あ、の領主様なので？」

「ああ、ダリアの向こう、アストランティアの隣にハマダ辺境伯領というのができたんだ」

「おお……」

空き家はともかく——キャンプはOKということなので、皆を降ろして食事の準備をしよう。

アイテムBOXから、食事の道具を出して並べると、カールドンのコンテナハウスを出す。

俺たちのコンテナハウスはあとでいいだろう。

「ケンイチ様ありがとうございます」

「カールドン、たまには一緒に飯をどうだ」

「申し訳ございません。他人と食事するのは苦手です……」

「解った、気が向いたら声をかけてくれよな」

「承知いたしました」

まあ、無理強いはよろしくない。

飯の準備は女性陣に任せて——俺はマロウと一緒に、村長と家を見に行った。

アキラにはビールを渡して、飲兵衛たちに配ってもらう。

「ほんじゃ、俺は先に飲ませてもらうぜ」

「今日の運転ありがとうな」

「いいってことよ、ははは」

売ってもいい家は5軒ほどあるらしい。

ボロボロなのもあるが、程度のいい物件もある。

マロウと相談して値段を決めさせてもらう。

程度のいい物件は金貨5枚（100万円）、ボロ屋は金貨2枚（3枚（40万〜60万円）ということになった。

合計で金貨18枚——360万円だ。

少々足下を見てしまったようだが、これも商売だ。

それに使ってない空き家が金になるなら、住民たちもありがたいだろう。

それで終了かと思ったのだが、村長がまだ用事があるようだ。

俺たちが村中を見て回ったので、村人全員が集まってきてしまった。

おそらくは20人ぐらいだと思われるが、皆ボロボロの服で痩せてくれている。

みるからに栄養状態はよくない。

「あの……マロウ商会ということは、物資をお持ちなのでは……」

村長の話では、ものが不足しているらしい。

ここで金貨をゲットしても、店もなにもないからな。

近くの店といえば、街道沿いにある宿場町まで行くか、流しの商人を待つぐらいしかない。

「あいにく……」

——と、言いかけたマロウを止める。

「なにか欲しいものがあるのか？」

「はい、小麦粉と塩を……」

「解った、融通してやろう」

「おお……」

シャングリ・ラで小麦粉を検索する。

この世界で小麦粉といえば全粒粉だ。んゝ25kgで7000円のものがある。

こいつを20袋と、次に塩――。

塩はこの世界では高価だが、シャングリ・ラなら安い。25kgが2500円で買える。

こいつを2袋――小麦粉と塩、どちらも紙の袋に入っている。

「ポチツとな」

空中から、ドサドサと紙の袋が落ちてきて山積みになった。

料金は金貨1枚――この世界の相場に当てはめると、これでも安いらしい。

出血サービスになるが、建物を安く買い叩いてしまったし、サービスってことで。

「おおっ！」

村長が感激して涙を流している。

「ありがとうございます！」

「村の家を売った金で物資を買ったんだから、礼を言わなくてもいい」

「いいえ、これでこの村はしばらく食っていける」

「しばらくって――そのあとはどうする？」

「う……」

村長はそのまま黙ってしまった。

「俺の領でも領民を募集している。希望者がいれば受け入れるぞ」

「アストランティアの近くでございましょう？ とてもではありませんが……」

引っ越しをするための、馬車や馬――そして金もないってことな

のだろう。

着の身着のまま出発したとしても、ハマダ領まで約500km、1日25km歩いたとしても20日かかる。

その間の食料や金なども必要だ。

その日暮らしのカツカツなのに、そんな金など用意できないのだろう。

「希望者がいるなら、俺が連れて行ってやるが」

「はい？」

「俺たちは、オダマキに向かう最中なのだが、その帰りなら——あの乗り物に乗せて連れて行ってやる」

「ほ、本当でございますか？」

「ああ、荷物があるなら、俺のアイテムBOXに入れて持っていてやるぞ」

「おお！」

「その前に言うておくが、俺の領は未開の僻地だ。それなりの苦労はするぞ」

「しかし、ここよりは……」

「そうだな、俺の領で飢えている民はいないし」

「真に、真に……」

「俺がここに戻ってくるまでは、その小麦粉でなんとかするだろうか、それまで待っていてくれれば、帰りに寄らせてもらう。そのときまでに希望者を募っていてくれ」

「かしこまりました」

村人が、500kgの小麦粉に群がった。

「やった！ これでしばらくパンが食える！」

村人たちが、25kgの袋を抱きしめている。

パンを作れるってことは、酵母とかはあるんだろうな。

「あと、病人はいないか？ 治療できるか解らんが、診てやってもいいぞ」

住民たちが顔を見合わせる。

話を聞くと、ちょうど熱を出している男がいるらしい。

夕方で暗くなりつつある中——その男がいる家に行くと、見えてきたのはバラックでできたような粗末な家。

中に入ると家の中は真っ暗なのでLEDランタンを取り出す。

頭のハゲた初老の男がベッドに寝かされ——熱があるのだろう、おでこには濡れた白い布が乗せられていた。

顔をしかめて、苦しそうな表情をしている。

「彼は、どうしたんだ？」

「あの、焚き木拾いをしていて脚に怪我をしてしまい……」

麻のワンピースで、茶色になった前掛けをしている、ちよつと小太りの女性が答えた。

白髪交じりで同じく初老なので、彼の妻なのだろう。

ベッドの毛布をめくると、左のふくらはぎが腫れているようだ。

満足に消毒もできないので化膿している。

けが人の身体に手をかざすが、脚以外に悪い場所はない。

アイテムBOXから消毒用のアルコールを出して、傷口を拭く。

ナイフも取り出して消毒すると、男の脚の下にバスタオルを重ねて敷く。

膿を出すために切開すると、臭くて黄色いドロドロが溢れ出した。ベルの傷を治療するために使った、生理食塩水と抗生物質があったはずだ。

そいつをアイテムBOXから取り出して、傷口の中までしっかりと洗うと、抗生物質のクリームを塗り込んだ。

最後に俺の祝福の力を使うと、男の顔が和らいだ気がする。

魔法と近代医学の複合技だ。

アイテムBOXから消炎剤を取り出す。

その薬とカップに入れた液体の栄養補助食品と一緒に女性に渡した。

「こっちのカップを飲ませてから、薬を飲ませてやってくれ。明日の朝、もう一度診てやる」

「ありがとうございます！　ありがとうございます！」

女性が、薬を握ったままペコペコと頭を下げている。

単純な化膿ならこれで大丈夫だと思うが――破傷風だったりしたら、祝福で治るのだろうか。

ちよつと心配だな。

仕事は済んだので、食事の準備をしている皆の所に戻ることにした。

キャンプのあちこちにLEDランタンが置かれて、そこだけ別世界のように明るい。

アマランサスがアマナと一緒に、アキラからもらったビールを飲んでいた。

「アマランサス、ここの住民で移民を希望している者がいるらしい。帰りに何人か連れて帰ることになるだろう」

「承知した。確かに――この村では先は望めぬだろうて」

「ここら辺じゃ大変だよねえ。この村って、旦那がシャガから助けた女を送ってきた所だろ？」

「アマナも覚えていたのか？」

「そりゃまあ……」

こんな場所じゃ、貴族が治めても赤字になるので治めないらしい。貴族だって経営だからな。不毛の地にいくら金をつっ込んでもリターンが望めない。

元世界のような灌漑技術があれば別だが、この集落のために大事業の投資をしても回収はできないだろう。

マロウも同じく首を振っている。

彼の金儲けに対する嗅覚は特別だ。それが反応しないってことは、望みはない。

商売は慈善事業ではないし、可哀想だからといって、感情論だけで動いては破綻する。

俺とて、タダで助けるわけではない。

善良なる領民と、働き手が欲しいからである。

アマランサスもそう思っているから、俺の考えに同意した。

「悲しいけどこれ、現実なのよね」

ビールを持ったアキラが誰かが言ったセリフをつぶやく。

そのとおりだ。

今日の夕飯は、黒狼のスープと肉野菜炒め、そして串焼き。

獣人たちのメニューは、カレー粉をかけてスパイス風味になっているらしい。

マロウ商会のメイドである、マーガレットもカレー風味にして食べている。

獣人と一緒に彼女もカレーにとりつかれた人間である。

カールドンはいつものように自分のコンテナハウスで食べているようだ。

ベルとカゲにも猫缶をやると、美味しそうに食べている。

飯を食っていると、白いブラウスを着た女性がやってきた。

茶色の巻き髪を後ろで結んでいるが、腰の辺りまで長さがある、

田舎のお嬢さんって感じた。

俺がシャガの所から助けた女性だろう——正面から見たら、なんとなく思い出した。

顔はやつれていて身体も痩せており、見るからに栄養状態はよくない。

「あの……私のことを覚えていらっしやいますか？」

「ああ、シャガの所から助けた女性だろ？ 元気だったか？」

「はい！ あなた様からいただいたお金で、母を看取ることもできました」

ああ、人目があっても村に帰りたいたいというのは、そういう事情もあるのか……。

「苦勞したんだな」

「本当に、ありがとうございます。あの……貴族様になられたとお聞きしましたが……」

「ああ、色々と活躍してな、ははは」

「ワイバーンも倒して、お城のお姫様も助けたにゃ！」

「あの獣人の女性も、助けにきてくれた方ですよ」

「そうだ。一緒にあそこから助けたマロウ商会のお嬢さんも一緒に、彼女も知っているだろう？」

俺はパンを食べているアネモネを指差した。

「はい、シャガに雑用をさせられていた女の子ですよ」

「今じゃ、我が領の立派な魔導師様だ」

「魔法が使えるのですか？」

「ああ、才能があつたらしくてな」

アネモネに光よ！^{ライト} の魔法を使ってもらおう。

「凄い、本当に魔法が……」

「私も側室になったのですよ」

「マロウ商会のお嬢様が、貴族様の側室ですか？ あの……あの方も一緒でしたよね？」

女性がアマナの方を見た。

「はは、彼女は違う。今回の旅に勝手についてきているだけだ」

「なんだか面白そうだしねえ。こうやって美味しい料理と美味しい酒が飲めるんだから、たまらないねえ」

まったく遠慮しないのが、アマナらしい。

そういえば初めて獣人たちと河原で飯を食ったときもついてきて、一緒に飲み食いしてたな。

「シャガのアジトから、ダリヤの街に行った女たちも、皆元気に暮らしているぞ」

「そうなのですか……」

「俺たちと一緒に戦った魔導師の爺さんと暮らしている女もいるし」

「中々やるにゃ！」「はは、そうだよなあ。あの爺さんが死んだら、店がもらえるんだし」

ニヤメナの言うように、あの女性がそこまで考えているとは思わないが……。

傍からはそう見えても不思議じゃないな。

「ウチの領で領民を募集している。興味があるなら帰りにここに寄るから、それまでに考えておくといい」

「はい」

彼女を食事に誘ったのだが、村の皆と黒狼を食べるようだ。

ここの住民たちにとっては久々の肉のようだしな。

飯を食い終わるとコンテナハウスとテントを出した。

その前に皆で固まり、アネモネの魔法を使ってもらう。

「洗^{クリン}浄！」

前は苦勞して風呂に入っていたのだが、アネモネの魔法が使える

ようになったので、魔法に頼ることが多くなった。

非常に便利なのだが、1週間に1度はお湯に浸かりたい。

アキラに聞いても同じ感想なので、やはり日本人の性ってやつだろうか。

——そして暗くなる。

外に明かりはないので真っ暗だが、村には灯りがついている家が多い。

久々のごちそうなので、楽しんでいるのだろう。

寝る前にスライムの世話をしてから寝るとするか。

2つに切ったら2匹に増えてしまったのだが、両方まだ生きている。

毒芋を食わせたら魔石ができたので、そいつを取り出したのだが、それで死ぬことはないらしい。

魔石のない魔物もあるし、魔石があれば能力が底上げされる——黒い石はブースターのような役割らしい。

現在、食わせる毒芋の重量を測って、何gの魔石ができるかのデータを収集しているところだ。

本格的に養殖するとなると、データは大切だからな。

ここら辺が日本人らしいといえば、日本人らしい行動かもしれない。

スライムの世話も終わり——今日は獣人たちと寝ることにした。

ベルとカゲも一緒だ。

皆にブラシをかけてやる。

カゲの毛艶はまったくないが、毎日美味しいものを食って、ブラッシングしてやればピカピカになるに違いない。

「みゃー」

ブラシをかけられて、カゲも気持ちよさそうに目を細めている。

「次はウチにゃ！」

裸のミャレーが抱きついてきたのだが――。

「なうーん」

変な声を出して、ニャメナがスリスリしてきた。どうも少々酔っ払っているらしい。

「よしよし、それじゃニャメナからやってやるか」

「トラ公は甘えたにゃ。しょうがないにゃ」

こういうとき、ミャレーは少々お姉さんっぽい行動をする。

ベッドに仰向けにさせて、黄色い虎柄の毛皮にブラシをかける。

「なーん」

ブラシをかけるたびにニャメナの尻がプルプルと震える。

そのあと、ミャレーにもブラシをかけてやる。

すぐ気持ち良さそうだが――さすがに獣人2人に森猫が2匹。

ベッドの上が毛だらけになる。

いろんな毛が混じっているが、やっぱり黒が多いな。

アイテムBOXから粘着のコロコロを出して毛を集めたあと――
ふわふわの毛皮に包まって寝た。

――――◇◇――――

――村へやってきた次の日の朝。

皆で集まって朝飯を食う。いつものようにグラノーラだ。

朝のメニューはこれが一番簡単で評判がいい。

足りない者には、パンやゆで卵を食べてもらう。

「アキラ、そろそろレイランさんが恋しくなってきたんじゃないか

？」

「ははは、明日にはオダマキに着くんだろ？ 早速、街へ繰り出さぜ！」

女性陣から白い目で見られても、アキラはお構いなしだ。

サクラ女性ネットワークがあるってのに、中々豪気だ。

さすがドラゴンを倒した勇者。

朝食のあと、昨日治療を行った男性の所へ行くと、様子を見に村人が集まってきた。

「おはよーさん。どうだい患者の様子は？」

「すっかり熱が下がったようです！ ありがとうございます！ ありがとうございます！」

涙目になった女性が、礼をして洗ったカップを返してきた。

それを受け取ると男性の身体を確認する。

彼の身体に手をかざすが反応は――ない。順調のようだ。

彼女に固形のカロリーバーと薬を渡す。

「これを食べさせて、薬を2〜3日飲ませてあげるように」

「ありがとうございます！ ありがとうございます！」

家の外に出ると村人たちに囲まれた。

「貴族様の領に行けば、俺たちも病気になったら診てもらえるんだべか？」

「領には魔導師もいるし、領民になった者にはそれなりの対応をするぞ」

「」「おおっ」「」

「開墾や農業についても補助するし、希望者がいれば読み書き計算も教えてやる」

「」「おおっ！」「」

「ここから、あの鉄の乗り物に乗せて連れて行ってやるし、荷物も運んでやる」

「「「おおおっ!」「」」」

彼らに移民を考えておくように伝え、出発の準備をする。
すでに乗り気の者も多いようだ。

しかし、まるごとの村の移築か……。

大容量のアイテムBOXがあるから、できる芸当だな。

ここを治めている貴族がいらないからできるんであって、どこかの領地なら大問題になるところだ。

村長にも挨拶を済ませると、コンテナハウスを収納して皆で車に乗り込む。

村の住民の熱い視線に見送られて、俺たちはオダマキに向けて出発した。

199話 月の秘密

俺たちは海辺の街、オダマキに向かっている。

途中の村でキャンプがてら領民を募集したりして、領主の仕事もしっかりとこなす。

いままで仕事というと、なんでも1人でやってしまっただけで済んだのだが、ここには俺より優秀な人材が沢山いる。

マロウ、プリムラ、リリス、アマランサス――皆、人を使うのが上手い。

組織が大きくなればなるほど、1人では動かせなくなる。人に任せることを覚えねば。

俺とアキラの車は、青い空の下を順調に街道を進む。

異世界といっても、青い空と白い雲は全く同じ。

高い建物がないので空が広く、大気汚染もないので何処まで行っても空気は綺麗。

ダリアから海まではほぼ平地で、アンジュレーシオン起伏もない大地。

もともと、このカダン王国がある山脈に囲まれた平地は、凹凸が少ない。

高くなっている場所といえば、サクラの近くにある大きく平らな台地とストック山という小さな山だけ。

「あゝそういえば……」

「なんででしょう？」

車の助手席に乗っているプリムラが、俺のつぶやきに反応した。

「サクラの隣にある台地の測量もしないといけないな」と思ってな」

「……」

プリムラが黙って悲しそうな顔をする。

測量に行くと、魔物に襲われるとでも思っているのだろう。

まあ本当に襲われているんだけどな。

危険なことは重々承知だが、これも仕事だ。

自分の領地のことは知っておかなければならないだろう。

「そんなに心配することはないよ」

「でも……」

「台地の上には魔物はいない。隔絶された世界なので、せいぜい鳥ぐらいのもんだ」

「でも、ワイバーンなら飛んでこられるよね！」

会話にアネモネが入ってきた。

「確かにそうだが、ワイバーンって山みたいな所に住んでいるんじゃないかったか？」

「それじゃ、本物のドラゴンにゃ！」

車の一番後ろから、物騒な意見が飛び出す。

「止めてくれよ。そりゃウチには竜殺しのアキラがいるけど、そうそう上手くいくとは限らないし」

アキラの話によると、ドラゴンの口に飛び込んだって話だったが――4階建ての建物からダイブしたって話だし、ここら辺でそんな建物は無い。

いや、アネモネのゴーレム魔法で持ち上げて、アキラをドラゴンに放り込むって手があるか……。

でも、そんなことを彼に頼めるか？

「大丈夫！ 旦那ならドラゴンだって一捻りだって！」

「ニャメナ、お前なく勝負はときの運ってな。達人だって油断すれ

ばゴブリンに負けることだってあるんだぞ？」

「聖騎士様の言うとおりじゃな。古今東西、相手を侮った挙げ句、敗北した話は尽きない」

俺もアマランサスの意見に賛成だ。

「危ないことは止めてくださいね」

プリムラが心配そうな顔をしているが、マジでそんなのが現れたら領主としての務めを果たさにならん。

そういう場面に遭遇しないように願うしかないが。

車は順調に進み、水平線が真っ赤に染まる頃に海の近くまでやってきた。

見事な夕日が俺たちを出迎えてくれた——久々の海。この世界で初めての海。

これから左折して海岸沿いをオダマキまで進むという。

窓を開けると潮の香りが漂ってくる。

俺が元世界で住んでいた地元は、海のすぐ近くまで行かないとあまり臭くはなかったのだが、場所によっては凄い臭い海岸もある。

ハザードを出して一旦停止すると、次々と馬車が追い越していく。どの馬車も馬なしで走る車に興味津々だ。

ここから街まではすぐなので、今日中に到着したいのだろう。

後続車に連絡を取る。

「おい、アキラ」

『どうした？』

「このまま行けばオダマキまですぐだと思うが、いくらマロウの知り合いとはいえ、夕方の飯時にお邪魔するのは失礼だろう」

『そうだな。それじゃ海岸で一泊するか？』

無線にマロウが出た。

『旧知の仲なので問題ないと思いますが』

「マロウとプリムラだけなら問題ないと思うが、大人数だからなあ。海岸で1泊して、明日のお日様が高くなってからお邪魔しよう」

『ケンイチ様がそうおっしゃるなら……』

「決まったな」

通信を終了して、3列目シートの獣人たちに確認する。

「結構、潮のにおいがするが、獣人たちのには大丈夫なのか？」

「嫌なにおいではないにゃ」「大丈夫だよ旦那。魚のにおいみたいなもんだ」

大丈夫らしい。

「港町には獣人が沢山いるにゃ」

「そうなのか？」

「網を引くのは力仕事だからにゃ」

「ああ、なるほど」

適当な場所を選んで、道から砂浜に降りると、ラ○クルをデフロックして砂浜を進む。

街を走るナンチャッテSUVには真似ができない芸当だ。

だてに砂漠の国でベストセラーになってない。

まあ、本格的にスタックしても、アイテムBOXに入れてから、再び出せば簡単に抜け出せるし。

後ろに連絡を入れる。

「アキラー大丈夫か？」

『はは、モーマンタイ!』

「にゃ? 新しい言葉にゃ?!」

アキラが喋るいい加減な言葉を、ミヤレーが面白がって覚えてし

まう。

俺はなるべく、皆がいるところでは元世界の言葉を使わないようにしているのに。

海辺に生える草が高く茎を伸ばして白い花を咲かせ、それが砂地に交互に重なっている。

500mほど海に向かって進むと、海岸が見えてきた。

左右見る限りずっと海岸で、マロウの話ではその向こうに街があるらしい。

ここから10kmほどなので街は見えないようだ。

右にむかえば、アニス川の河口があるという。

オダマキの街から河口までおよそ20kmぐらいか。

皆を車から降ろすと、早速テーブルやら料理の道具を出す。

車は出しっぱなしでいいだろう。

一緒にコンテナハウスも並べるが、カールドンのコンテナはちょっと離れた場所に。

サクラで待っているリリスのために動画を撮ってやろうか。

カメラで景色を写していると、アキラがやってきた。

「ケンイチ、海釣りはできねえか？」

「釣りか。俺は海釣りやったことないぞ？」

こういう場合は、シャングリ・ラを検索する。

以前、アネモネと釣りをしたが、あれは溪流釣り用だ。

ご丁寧に、竿と仕掛けなどがセットになった、海釣りセットというのが5000円で売っている。

遊び用だと思うが、俺にはさっぱりわからん。

これでいいだろう。ついでにメタルジグや、仕掛けなども何種類か買う。

「ポチっとな」

ドサドサと釣り竿と仕掛けが落ちてきた。

「これでなんとかしてくれ」

「はは、玩具みたいな竿だな」

アキラが袋から出した竿を見ているが、派手な色に塗られていて、レジャー用の使い捨てみたいなものだ。

行楽地に行ったらこいつで釣りをして、帰るときにポイって感じなのだろう。

「もうちょつといいのにするか？」

「いや、遊びならこれで十分。どうせ、ここでしか使わないだろう？」

「まあな」

「弘法は筆を選ばずってな」

彼は自信があるようで、玩具を組み合わせて釣果を狙うらしい。川釣りは多少やったことがあるのだが、海釣りはまったくわからないん。

頭につけるLEDヘッドライトを彼に一つ渡して、あとは任せた。

大分日が落ちてきて薄暗くなってきたのだが、夜目が利く獣人たちがカゲと一緒に走り回っている。

光が反射すると、彼女たちの目が光るので怖い。

獲物がいるようには見えないので、なにをやっているのだろうか――—と思ったが、なにやら黒いものがひらひら飛んでいるような……。

後ろから声をかけられた。

「何をやっているのでしょうか？」

「カールドンか。なにか獲っているみたいに見えるが……」

「ケンイチ！ ケンイチ！ にゃー！」

ミャレーがなにかを持ってやってきた。

両手で黒いものを広げているが、カゲも口に同じものを咥えている。

「な？　なんだ？　コウモリ？」

元世界のコウモリに比べて尻尾が長い。

「これは面白い！」

カールドンが俺から灯りを借りると、コウモリをスケッチし始めた。

「そうにゃ！　これも食おうにゃ！」

「まあ、食えると思うが――ミヤレーは食ったことがあるのか？」

「あるにゃ！　洞窟にいたりするにゃ」

湖の洞窟にはいなかったが、コウモリがいることもあるらしい。

ミヤレーがさばいてくれるそうなので、彼女に任せた。

カゲが獲物をくれるというのでもらう。

「よしよし、ありがとうな」

「みゃー」

頭をなでてやるとゴロゴロいっている。

カゲをなでてやっている、暗闇からLEDライトの光がやってきた。

「ケンイチ！　ケンイチ！　これこれ！」

今度はアキラだ。

彼がなにか岩のようなものをテグスにぶら下げている。

ゴツゴツしてて丸く、茶色と赤が混じり、どう見ても生き物には見えない。

「なんだそれ?!」

「はは、多分——オコゼだろう」

「オコゼか？」

「これもまた面白い！」

得体のしれない生物の登場に、カールドンは目を輝かせている。そう言われれば、そう見えないこともない。

彼のためにテーブルと、LEDランタンを出した。

「なんだって、そんなゲテモノばかり持ってくるんだい！」

コウモリに続き、アキラが持ってきたオコゼにアマナが叫んだ。

「別にアマナに食えとは言わないよ。そっちはそっちで、プリムラとアマナの料理を食べればいいだろう？」

「まったく物好き……」

「旅の果てでしか食えないものを食うのも、旅行の醍醐味だぞ？」

「ははは、それな！」

元世界でも世界中を巡ったアキラが笑っている。

マロウたちも笑っているのだが、オコゼを食べる勇氣はないようだ。

別に勇氣が必要なものでもないと思うが、元世界のオコゼと似たようなものなのか判別できないので、危険がないと解るまで食わせるわけにもいかないけどな。

テーブルの上で動いている岩のような魚に、アマランサスがやってきて興味深そうに覗き込んでいる。

「ほほう、本当に生きているのう。どう見ても岩のようにしか見えぬが——このような魚が海におるとは……」

「アマランサス、危ないぞ。この手の魚はヒレに毒を持っているからな」

「ほう……」

「そうそう」

アキラが自分のアイテムBOXから出した包丁で、オコゼの背びれを持ち上げると、トゲトゲからピュー！　　と透明な液体を発射した。

「おおー！」

さすがのアマランサスも驚いたようである。

毒液は1mぐらい噴き上がり――アキラが背びれを持ち上げると、次々に液体が発射される。

「これは、凄い！」

見物していたカールドンも目を丸くする。

「これって結構猛毒なんだよ。こんなのが目に入ったら失明して目が見えなくなるだろ」

アキラのネタに俺も乗る。

「食っても大丈夫なんだろうな？　腹痛で腹が痛くなったりしないか？」

「俺たちには祝福があるから、下痢して下りのスペシャリストになるぐらいだろ」

「「ははは」」

アホなことをやっている場合ではない。

アキラは本気で食べるつもりだ。

「ケンイチ、ハサミをくれ」

「はいよ」

アキラにアイテムBOXから出したハサミを渡すと、オコゼのヒレをジヨキジヨキと切り始めた。

「鱗とか剥ぐのか？」

「いや、こいつは皮が厚いからな」

彼は、魚の皮をリンゴのように剥ぐ。

岩のような皮を剥くと、中には真っ白な身が詰まっていた。

「おおっ、美味そう」

「内臓に毒があるかもしれないから、傷つけないようにしないとな」
アキラが魚の腹を割ると緑色の内臓がこぼれ落ちる。

においては――少々臭い。

「ケンイチ様。この様子を写してもよろしいですか？」

「ああ」

魚といえど内臓はキモいのだが、カールドンは懸命にスケッチをしている。

チラ見させてもらったが、彼は絵も上手いようだ。

発明が多いので、クリエイティブな才能があるのだろう。

かの、天才レオナルド・ダ・ヴィンチも、色々な発明をしたが絵も天才的だったし。

クリーム色の魚の臓器をアキラがつまみ上げた。

「これは肝だろ」

「食うのか？」

「はは、食ってみないとな」

チャレンジャーだ。

包丁を入れて頭を落とすと、綺麗に輝くような白い身が3枚に下ろされた――さすがの包丁捌き。

「見事じゃのう」「見事ですなえ」

彼の包丁さばきに、アマランサスとカールドンが感心している。

アキラは一部を包丁で切り落とすと、口に入れた。

「ん、ちよつと歯ごたえありすぎるな。ケンイチ、ふぐ引を出してくれ」

「ああ、ちよつと待ってくれ」

ふぐ引きつてのは、ふぐ用のペラペラの薄い包丁だ。

包丁がしなるぐらいに刃が薄い。

以前、買ったものがあるので、アイテムBOXから取り出した。

「おお！ これこれ！」

アキラは包丁を確かめると、オコゼの身をふぐ刺しのように薄く切って、皿に並べ始めた。

その様子をアマランサスが食い入るように見ている。

「ほう、見事じゃのう！ なぜ、そのように薄く切るのじゃ？」

「身にすぐ弾力があるから、薄くしないと歯ごたえがありすぎるんだよ。逆に柔らかい魚は、身を厚く切る」

俺の説明に、アマランサスが唸っている。

「素材に合わせて、切り方や道具を変えるのかえ？」

「そうだ」

「これは興味深い……旅先でしか知ることができないことばかりですねぇ」

「カールドン、俺の故郷には、『百聞は一見にしかず』という言葉があるし」

「まさに、そのとおりでございます」

並べ終わったら、アキラが皿を差し出してきた。

「食ってみるかい？」

彼の用意した小皿に醤油を入れて、一枚食べる――本当に身がつんでいて歯ごたえがある。

身体に変化はないし、毒はないようだ。

「唐揚げも美味そうだな」

「そうだな、残りは唐揚げにするか」

アマランサスとカールドンも刺し身に挑戦してみても美味いと喜んでいいる。

俺たちは、ほどほどにしてプリムラたちが作る料理を食べないと、彼女たちが飯を作ってくれなくなってしまう。

それはまずい。

カールドンはアキラから刺し身を少しもらって、自分のコンテナに戻った。

あとで唐揚げも食べてみたいという。

「それじゃ、俺はこっちで1人でやってるぜ」

「解った」

アキラに6本セットの缶ビールを渡す。

彼は自前のアイテムBOXを持っているからな。

「お！　ありがてえ」

アキラの所から、皆の所に戻ってくると料理ができあがっていた。

「できたにゃー！」

ミヤレーはコウモリの姿焼きを持ってきたのだが――せっかく作ってもらったので食ってみなきゃならんでしょ。

少々不気味だが、香辛料がかかっているので臭みは気にならないし、結構美味しい。

鳥みたいだが、鳥ではなく間違いなく動物の肉。

風味はうさぎに似ているので、味噌焼きが合うかもしれない。

見た目はコウモリなのだが、本当に元世界のようなコウモリなのかは不明。

それにコウモリって伝染病とかを媒介するんじゃないか？
少々心配だが、焼いてあるので平気だろう——多分。

一緒に料理を食べているマロウと番頭に、料理の感想を聞いてみる。

「一緒に旅をして、プリムラの料理を食べた感想は？」

「どの料理も美味くて驚きました。娘がこんなに料理上手だとは」

「お嬢様の手料理を食べるなど、店の皆に自慢ができますよ」

普通は、大店のお嬢さんが料理なんてしないらしいからな。

「マーガレットはどうだ？」

「正直、驚きました。私も負けてはいられません、モグモグ」

どうやら彼女は、食に関して関心があるようだ。

それじゃ——ということで、アキラのオコゼの刺し身と、できあがったばかりの唐揚げを持ってきた。

それを見たマロウたちは、顔をしかめている。

やっぱり生食っていうのは抵抗があるらしいが、マーガレットは気にせずに刺し身を口に入れた。

「うわっ」

マロウと番頭が声を上げた。

彼女が食べるとは思わなかったのだろう。

「た、食べたことがない味です！　これが生の魚……」

「もちろん、なんでも食えるわけじゃないし。こういう具合に調理するには、技が必要だ」

「解ります。魚の身をこんなに薄く……」

「こちらの唐揚げは？」

「魚を油で揚げたものですか？」

ついでに、俺も一つつまむ——これは美味い。
身が詰まっっていて、口の中に入れるとホロホロと崩れる鶏肉のよう。

「これも、おいひいれす！」

マーガレットが、オコゼの唐揚げを頬張ったまま感激している。それを見ていると袖を引っ張られた。

「ケンイチ！ 私も食べる」

「おっ！ アネモネもか、あゝん」

「あゝん」

オコゼの唐揚げをアネモネの口に入れた。

「美味しい！」

プリムラが睨んでいるので、彼女の口にも唐揚げを入れてやる。

「美味しい……」

「サクラには王宮からやってきた料理人もいるから、王国中の珍しい料理が……」

「ケンイチ様！ 困ります！」

マロウからそう言われて、俺も気がついた。

商会からマーガレットを引き抜かれると、マロウも困ると言っていたからな。

「まあなんだ、気が向いたら、サクラに訪れるといい」

「はい、是非とも」

「……」

マロウがじゅつと俺を見つめている。

故意じゃないんだ。そちらでも引き止め工作をしてくれよ。

「あたしももらっていいかい？」

唐揚げに手を伸ばしてきたのは、アマナだ。

「いいぞ」

「ほっ！　こりゃ、たしかに美味いねえ！　エールとよく合うじゃないか」

「黒狼の肉も油で揚げれば美味いと思うぞ」

「それじゃ、明日やってみようかね」

元世界じゃ、豚こまの唐揚げをよく作ってた。

とんかつが美味いんだから、唐揚げだって美味しいのだ。

「それじゃ、コウモリも唐揚げするにゃ」　「鳥の唐揚げがエールに合うなら、コウモリの唐揚げもエールに合うだろ？」

ミヤレーもニヤメナも、コウモリを唐揚げにする気満々だ。

いや今日食べた感じだと、コウモリの唐揚げも美味しいと思うが……。

まあ何ごともチャレンジだな。

飯も食い終ると辺りは真っ暗。

水平線だけが薄っすらと紫色になって、かろうじて解る海と空の境界線。

暗い中、波が打ち寄せる音だけが聞こえる。

車の屋根に置いてあるスライムの世話をしていると、波打ち際が光っているように見えるのだが――。

「ん？」

波打ち際まで行ってみると、波が打ち寄せる度に青い光を放っている。

「夜光虫か？」

「ケンイチ、どうした？」

後ろから、ビール缶を持ったアキラがやってきた。

「夜光虫だぞ。面白い」

「マジで？ おおっ！」

彼が波の中に入ると青い光が渦巻く。

「結構綺麗だが、カメラで映るかな？」

アイテムBOXからカメラを出して、ISOを最大限まで上げて撮影してみた。

その場で確認すると青い光が写っている。最近のカメラの性能は素晴らしい。

真夜中でも街頭の灯りがあれば、普通に写ってしまうからな。

「月が綺麗で夜光虫までいるってのに、オッサン2人とは締まらねえな、ははは」

アキラがビールを一口あおった。

「港町で羽目を外すのもいいが、程々にな」

「フヒヒ、男にはやらねばならぬときがある——ってな」

「気持ち解るが……」

「なんにゃ！ 光ってるにゃ！」 「おおっ！ すげーっ！」

獣人たちも夜光虫に気がついたようだ。

波打ち際ではしゃぎまわっている。

その騒ぎにつられて、他の皆も集まってきて夜光虫で遊んでいる。

アキラが言うように暗い海の上には白い月が出ている。

月はまあ——普通だと思うが、元世界の月とは模様が違うので、ここは地球ではないのだろうと改めて思う。

それにしても、まんまるな月がよく見える。

俺はそれを見ていいことを思いついた。

シャングリ・ラを検索して、天体望遠鏡を探す。

安いのもあるのだが、玩具みたいなものだ。

光学系のものは多少高くてもそれなりのメーカー製を買わないと後悔するし、経緯台や三脚も良いものが必要だ。

それがないとぐらぐらしてとてもじゃないが、見られたものではない。

経緯台と頑丈そうな三脚付き——4万2000円のをチョイスした。

口径は80mm、とりあえずなら十分な性能だといえる。

「ポチッとな」

白い天体望遠鏡が落ちてきたので、早速セッティングした。

「なんだ、ケンイチ？ 天体望遠鏡か？」

「ああ、月を見てみようかと思ってな」

「なるへそ」

小さい照準用のスコープがあるので、そいつで大まかな位置決めをしてから望遠鏡を覗く。

焦点をあわせると、白い月の表面が見えてきた。

月は動いている——というかこちらが自転しているので、どんどん位置がずれる。

経緯台のダイヤルを回しながら、接眼レンズを高倍率に変えてみた。

「おおっ ん？」

「ケンイチどうした？」

「暗い所にチラチラと灯りのようなものが見える」

「マジで？」

「俺の目の錯覚かもしれんから、アキラも見てくれ」

「よっしゃ！」

アキラに、望遠鏡の接眼レンズを渡す。

「どうだ？」

「ああ、見える見える。マジで灯りみたいのがチラチラしてる」
2人で顔を見合わせる。

「ねえ、ケンイチ、見せて！ 見せて！」

アネモネが見やすいように、台を置いてあげた。

「すごい！ 月ってこんななの？」

「なにや！ ななにや！ 面白いのきや？！」 「俺も見ろぜ！」

皆が集まってきて、交代で天体望遠鏡を覗き込んでいる。

それを横目で見るように、俺とアキラは暗闇にやってきて、ひそひそ話。

「あれって、月に人がいるのか？」

「そうかもな。俺たちをこの世界に呼んだ連中か……」

アキラがビールを飲んだ。

「だがさすがに、俺の作れるものを組み合わせても、月までは行けん……それに、元の世界に帰りたいか、アキラ？」

「ん〜？ 全然。ケンイチと一緒にいりゃ、元の世界のものもそれなりに手に入るし。ぶっちゃけ外国をまわると、この世界とさほど変わらないような所がわんさかあるし……」

「俺もド田舎で畑仕事とかだろ？ TVなんて観てなかったし、ネットがないのは少々寂しいが……」

「ケンイチ、パソコンは出せないのか？ アネモネちゃんはタブレット使ってるようだが……」

「出せる」

彼にノートPCを見せた。

「複数出せるなら、それでネットができるが」

「WIFIの飛ぶ距離だろ？」

「超ローカルネットだな、ははは。まあ、ジタバタしてもしゃないし。この世界を楽しもうぜ、ケンイチ」

「そうだよなあ……」

シャングリ・ラにある知識を全部この世界に解放して、200年ぐらい経てば月まで行けるようになるかもしれない。

それに相手が天空の城だっていうなら、空を飛ぶぐらいはなんとかなると思うが……。

月に行く前にテクノロジーを使った大戦争になるほうが早いと思うし……月の灯りが人が住む証と決まったわけではない。

この世界の特有の天体現象である可能性も否定できないし。

暗闇の中で皆で楽しんだあと、それぞれのコンテナハウスに向かう。

獣人たち、アマナ、そしてアキラはいつものようにテントだ。

俺のコンテナハウスには、アネモネとベルと、カゲ。

彼女は俺のシャツの中に頭を突っ込んでいる。

「これ、止めなさいって」

「いーやー！」

本人は大人だと言うのだが、やっていることは子どもだ。

「にゃー」

「なあ、お母さんもそう思うだろ？」

彼女が俺の顔にスリスリしてきた。

ここがどんな世界なのかは不明だが、
とりあえずできることをや
って暮らしていくしかない。

200話 白い家々

オダマキの一步手前までやってきた。

すでに夕方になっていたので、目的地であるマロウの知り合いの所に行くのは一泊してからということになった。

アキラが釣った海の幸に舌鼓を打ち、地方情緒を満喫していたのだが、思いつきで天体望遠鏡をシャングリ・ラで購入して、月を覗いてみた。

宇宙に浮かぶ^{そら}白い衛星に光る人の営みらしきもの。

それが本当に文明の光なのか、今の俺には確かめる術がない。

とりあえずジタバタしても、相手が月にいるのではなにもできないので、今の生活を続けていくしかない。

それに、今の暮らしに不満があるわけでもないしな。

元世界のど田舎で暮らしているのと対して変わらない——シャングリ・ラもあるしな。

金もあるし、守るべき家族もある。

元世界の俺にはなかったものだ。

同じ境遇にあるアキラは、帝国で相当苦労したようだがな。

——海岸で一泊した次の日。

波の音で目が覚めた。

起きると俺の腹の上にはカゲとアネモネ。

目を開けると、ベッドの上でベルが俺の顔にスリスリをしてくる。

「おはよう、お母さん」

「にゃー」

ベルの声でカゲも起きたようだ。

「みゃー」

彼も俺の顔にスリスリしてくる。

「ん……」

最後にアネモネが目をこすりながら目を覚ました。

「おはよう」

「……ん」

彼女は、まだ俺の腹の上でもぞもぞしている。

「ほら、朝飯の準備をしないとな」

俺がコンテナハウスから出ると、すでに食事の準備が始まっていた。

車も道具も全部出しっぱなしだったからな。

街道沿いじゃ盗まれる可能性もあるが、こんな誰もいない海岸じゃその心配もない。

それに誰かやってきても、獣人たちやベルがいればすぐに気づく。女性陣が食事の準備をしている間に、車の屋根に乗っているスライムを確認。

やはり毒芋を食わせた個体には、黒い魔石ができている。

「間違いないか……」

できるのは間違いないようなので、今度は大きくなる過程を観察してみよう。

そこにアキラがやってきた。

「オッス！」

「オッスオッス！」

「ケンイチ、昨日のアレはどう思う？」

「昨日って――月の話か？」

「そうだ」

「今のところはどうしようもないだろう？ 俺たちの知識を全部解放して、月を目指すか？」

「100年ぐらいあれば可能だと思うが……」

「その前に、近代兵器を使った世界大戦になるぞ？ 生き延びることができると思うか？」

「だよなあ……皇帝の下で露払いさせられただけで死にそうになってたのに、戦争か……はあ……」

がっくりと肩を落とす彼も理解しているはずだ。

この世界が自然に技術開発してそういう事態になるのは自然の摂理、いわゆる歴史の成り行きだが、俺たちがその引き金を引くとなると、少々話が違う。

民間人を巻き込んで何百万人という人たちが、戦いに巻き込まれるのだ。

「そんなに元世界に帰りたいのか？」

「いや全然」

彼はあっけらかんと答えた。

「それじゃ、アキラが言ったとおりに今の生活を楽しもうぜ。俺の力があれば元世界とそんなに変わらないだろう？」

「ははは、そのとおりだな」

皆でワイワイガヤガヤと朝食が終わると、荷物をアイテムBOXに収納した。

後片付けが終わり全員で車に乗り込むと、アキラから連絡だ。

『ケンイチ！ このまま海岸沿いを走ればいいんじゃない？』

「ええ？」

『マロウさんに聞いたが、海岸はこのまま街までつながっているそうだぞ』

「それなら海岸を走ったほうが早いかな……それじゃ行くか」

『ビヤッハー！』

アキラが車を発進させると、どんどんスピードを上げていく。

「アキラ、底引きをしている漁師とかいるかもしれないし、流木が埋まっているかもしれないぞ」

『オーケーオーケー！』『ぎゃああ！』『ひいいいつ』

無線から叫び声が聞こえてくるのだが、大丈夫なのだろうか。

少し離れて彼の車の後をついていく。

濡れて締まった波打ち際を時速80kmほどのスピードで走行する。

波は穏やかで見通しはとてもよく、障害物はなさそうに見える。

「あ、あの！ ケンイチ！ 凄い速さなのですが！ 大丈夫なのですか？！」

助手席に座っているプリムラが顔を青くしている。

「まあ、大丈夫だと思う」

「にゃー！ 凄いにゃー！」 「おおっ！ いけいけえ！」

3列目シートに座っている獣人たちは大喜びである。

「おおお！ 凄い速さじゃ！」

「わーい！」

アマランサスとアネモネは平気らしい。

そのまま車を進めると、10分前からずに街が見えてきた。

湾のようになっていて、白い家が沢山見える。

奥に岬が突き出ているが、その上にも白い家が建っているのが見

える。

「プリムラ、白い家が多いのは、なぜなんだい？」

「近くで石灰が採れるので、それを利用しているためです」
逆に森が近くにないので木材は高いという。

「それじゃ、アニス川を運河にできれば、森の木々をオダマキに運ぶこともできるかもな」

「はい、父もそれを考えていました」
さすが大店の商人だな。

車が街に近づくとながら人が多くなってきた。
底引きをしている漁師や、浜辺で大きな棒のようなものを立てている者もいる。

「プリムラ、あれはなにをやっているんだい？」

「多分、貝採りです」

「貝か……」

棒の先は大きな熊手のようになっており、それで浜辺を掘り起こして貝を採っているらしい。

網を引いている者には獣人も多い。パワーが必要なので彼らはぴったりだろう。

いるのは猫人族だけではなく犬人もいるようで、一緒に働いている。

ソバナでもそうだったが、両種族が沢山いるとそれなりに共存していく必要があるのだろう。

いがみ合っている仕事はなくなるだけだな。

鉄の乗り物を見て驚く人々の間を縫うように走っていくと、街の中に防潮堤と石の栈橋が見えてきた。

ここで行き止まりだ。

「到着っ」と

停止すると皆で車から降りる。

「ははは！ 久々にぶっ飛ばしたぜ！」
車から降りたアキラが上機嫌だ。

「ここに高速はないからな」

「それどころか、舗装もないだろ？」

「石畳はあるけどな」

「ヨーロッパも石畳が多かったな。走るとガタガタするから、バイクやスクーターのタイヤも大きかった」

日本のスクーターのような小口径のタイヤではないらしい。

「そうなのか？」

「ああ、電装などはちょっとアレな車が多かったりするが、足回りはしっかりしているってわけさ」

「北海道にも一応高速はあったが、あまり走ったことはなかったな」
北海道だと、下道でも時間的にあまり変わらないことが多いからな。

「本州の高速は？」

「首都高、東名、中央、色々と走ったが、首都高はわけがわからん。変な場所で降りてしまって、また上るのにすげえ苦労したり」

「まあ慣れだよ慣れ、ははは」

車からスライムの入った箱を降ろす。

普通ならここから戻って車の登り口を探さなければならないが、アイテムBOXがある俺には心配無用だ。

石の栈橋にある階段を上ると、こいつも石灰のコンクリートのよ
うなもので作られている。

石灰は漆喰などにも使われるし、街で使われているコンクリート
にも使われているようだ。

王国の他の都市でも、コンクリートや漆喰などが使われていたの
で、すべてここから輸出されたものなのか？

石灰は腐らないし運ぶのにも有利——各地方での需要が望めるの
で産業の大きな強みになる。

王都から一番遠くて王家の威光が届かなくても、余裕でやってい
けるのは当然だ。

海で漁をすれば、食うにも困らないしな。

「プリムラ、石灰ってここしか出ないのか？」

「いいえ、帝国側でも産出する所があるので、ソバナなどは帝国か
ら買ってますよ」

「なるほどなあ」

栈橋の上にとると、アイテムBOXからカメラを取り出して写真
を撮った。

美しい青い海の写真、そして街全体が坂になっており白い家々が
並ぶ街の写真。

家はサイコロのように四角くて、屋根は平ら。

道はすべて石畳で舗装されているようで、家の壁の白さにマッチ
している。

海と街並みを一緒に被写体に入れることができればいいんだが……

「家が白くて綺麗だね！」

アネモネが初めて見る景色を喜んでいる。

「そうだな、いい景色だ」

「エーゲ海みたいな感じだな」
世界を回ったアキラの感想だ。

「エーゲ海って聞くけど、国で言うところになるんだ？」

「映画とかで有名なあの景色は、ギリシアだと思うぞ」

「ああ、あそこはギリシアなのか」

どうも外国のことはピンと来ない。

大体の国の場所は知っていても、どんな国だって聞かれると、ハテナマークが出てしまう。

アキラと話していると、街の獣人たちが集まってきてペコペコしている。

ベルとカゲがいるからだ。

「ああ、そうだ。森猫といえば、ここのギルドに行かないと駄目かもな」

「ギルド？ なにをするんだ？」

アキラが不思議そうに答えた。

「カゲを街中で連れ回すために鑑札がいるだろう？」

「ふ——聖騎士様、貴族にそんなものは必要ありません」

アマランサスが扇子を口に当てて笑っている。

「え？ そうなのか？」

「ケンイチ様は、ご自分が特権階級だともう少し自覚したほうがよろしいですよ？」

マロウからも笑われてしまった。

「そんなことだから、サンタンカの女たちにも、からかわれるのです」

プリムラが言っているのは、干物やスモークサーモンなどを作っ

ている加工場に勤めている女性たちのことだ。

俺が水産加工場に訪れたりすると、女たちが集まってきて、もみくちやにされたりする。

普通の貴族なら、近づくことすらできない。

マロウとプリムラにそんなことを言われてしまったが——俺は新米貴族だしな。

でも、なにかやるのにギルドが必要なのは楽だな。

顔パスでなんでもできるってことだろ？

大店の商人に特権階級と言われると、改めてそうなのかと思ってしまうが、だから嫌われることも多いってことだ。

なんでも顔パスされて上から目線で命令されたんじゃ、平民から嫌われて当然ともいえる。

その分テロの対象にも選ばれやすいってことだし。

「旦那は全然貴族様らしくないからねえ」

アマナの言うとおりだが、まだ貴族になりたてだからな。

「リスも人を顎でこき使ってこそ貴族みたいなことを言っていたが、別に貴族らしい貴族になるつもりもないぞ」

「ケンイチは変わってるにゃ！」

「まあ、そこが旦那らしいけどねえ。でもクロ助——旦那が貴族様らしい貴族様になったら、俺たちなんてお払い箱だぞ」

「それは困るにゃ。ブラシをかけてもらえなくなるにゃ」

「そこかよ！」

ニヤメナがツツコミを入れた。

「それじゃ、トラ公はブラシでなでももらえなくなってもいいのきや？」

「そりゃ——困るに決まってるだろ！」

「にゃー」「みゅー」

ベルとカゲがやってきて、俺の周りをぐるぐる。身体をこすりつけ始めた。

「なーん」

それに釣られたのか、ニヤメナまで変な声を出して、俺に身体を擦り付け始めた。

顎の所をなでてやると、ゴロゴロと大きな音をたてる。

「トラ公までなにやってるにゃ！」

ミャレーが、俺とニヤメナの間に入ろうとしたのだが、突然動きが止まった。

「はっ!」「にゃ!」

ニヤメナだけではなくミャレーも俺から離れ、尻尾を太くして身構えている。

集まってきた人々や獣人たちを尖い視線で睥む。

「どうした? 敵か?」

「獣人の女にゃ!」

「くそ、いつの間にか囲まれたぜ。ちょっと油断すると集まってきやがって……」

よく見ると、人混みの中に目が光っているような気がする。

「やっぱり、ケンイチの身体から、なにか変なにおいが出てるんじゃないのきゃ?」

「ケンイチ、獣人たちにモテモテだな」

アキラがからかうのだが、そんなことはないと思うがなあ……。

人も集まってきてしまったし、マロウの知り合いという商人の所に行かなくては。

それから観光しても遅くはない。

「それじゃマロウ、その知り合いという商人の所へ行こうか？ 遠いのか？」

「ここからなら、歩いても行けると思いますが……」

「そうか」

どのみち人が集まってきてしまったので、車を出すスペースがない。

こんな所で車を出したら、下敷きになってしまう。

「はいはい、ちょっとごめんなすって！」

「通すにゃ！」 「おい、邪魔だ！ 見せもんじゃねえぞ」

人混みを抜け出たのだが、獣人たちは警戒を解いていない。まだ狙われているようだ。

「旦那、召喚獣を出してくれ。あれに乗ってさっさとずらかろうぜ」
「そうか？ それじゃ召喚！」

アキラも車を出したので、皆で乗り込む。

周りの人間がざわついているが――まあいつものことだ。乗り込んでから、アキラの車に連絡を入れる。

「アキラ、そっちが先行してくれ」

『はいよ』

向こうに乗っているマロウに案内してもらう。

俺たちは車を発進させた。

歩いて行ける距離ってことは、車だと数分だと思いがな。それで獣人たちから逃げられるとも思えんが……。

白い建物が並ぶ少々細い道を車で走り出した。
プリムラの話では、街の中のどこもこんな感じらしく、大通りと

いうのではないようだ。

それに街中はずっと坂になっているので、馬車などは少々つらいかもしれない。

電動アシスト自転車が欲しいところだ。

「運送のために獣人の力が必要になっているのです」

「この街では獣人が重宝されているのか……」

「はい、それゆえ待遇もいいですよ」

「けどよお旦那！　ここで働くためにゃ、犬ころと仲良くしなくちやならねえ」「そうにゃ」

「ソバナもそうだったが――それが嫌なやつは、こういう所には来ないんだろ？」

「そのとおりにゃ」「だから俺たちは無理だねえ」

金より信条を取っているってわけだ。

獣人たちと話しているうちに、小高い場所にある商人の邸宅へ到着した。

白い門の向こうに、白い壁に覆われた2階建ての大きな建物が建つ。

屋根も平らで四角形なので、元世界の住宅のようにも見えるな。

敷地は木製の柵に囲まれており、整備された庭もある。

ここの庭を借りればキャンプもできるな。

アキラたちの車がそのまま進入したので、そのまま後ろについていく。

車が止まると、マロウが降りて茶色の木でできた玄関に向かった。ここの主人が留守だったら、どこかで時間を潰さないとだめになる。

俺たちは、このまま待つとしよう。

車の中で待ちながら、プリムラと話す。

「上に来るほど、金持ちが多いような……」

「そうですよ。物を運び上げるのにもお金がかかりますし」

「それじゃ、あの岬の上にいる連中もか？」

丘の上には崖があり、さらに一段高い岬が海まで伸びている。

「はい、上には貴族などが住んでいます」

「この領主の男爵もか？」

「はい、ハナミズキ男爵様ですね」

「上に行く道も整備されているのか……」

「道というか、階段しかありませんが……」

「階段？」

上に上るには階段で行くしかないらしい。

馬や馬車などは、岬の下に各貴族の厩があつて、そこから乗り込むようだ。

「そんな面倒なことを……だが、戦に対する防御のことを考えると理にかなっているかな……」

「ここでは、崖の上に住むのが特権階級の証なので」

プリムラが困ったような顔で俺に答えてくれた。

階段を上ることができるポニーのような小さな馬もいるらしいのだが、運搬のためにそれを飼うよりは獣人たちに頼んだほうが早いという判断のようだ。

小さな馬は、主にタクシー代わりに使われている。

待っていると玄関からマロウが背の高い男と出てきた。

マロウが呼んでいるので、そこに行く。

「初めてだな。ケンイチ・ハマダ辺境伯だ」

「これはこれは、辺境伯様。ようこそ、このような場所にお越しくださいました」

歳は50歳ぐらい。浅黒い肌をした黒い髪の高背の男が膝をつく。

金糸の刺繍をした青い服を着て木の杖をついている。
どうやら脚が悪いらしい。

物腰は柔らかいのだが視線は鋭い。

「ああ、堅苦しい挨拶はいらないよ」

男の名前はシュロ。この街に住む大店だ。

彼と話そうとしたのだが、女の子の声で遮られた。

「プリムラお姉さま！」

「まあ、キキョウ。大きくなって」

薄青のロングワンピースを着た黒髪の女の子が、プリムラに抱きついた。

浅黒い肌に黒い髪をポニーテールにしている、健康そうな女の子。
腰には白いリボンをしており、歳は――高校生ぐらいか。

「お姉様こそ、あの――お姉様、興入れされたとか……」

「はい、そこにいらっしゃるのが、私のご主人様ですよ」

「ケンイチだ、よろしく」

「キキョウです。辺境伯様に拝謁できる、このような機会に巡り会え、光栄にございます」

女の子がスカートを持ち上げて、ペコリとお辞儀をした。
大店の娘らしく、しっかりと礼儀作法を踏まえている。

「キキョウ、貴族様の前で……」

「ああ構わん」

「申し訳ございません」

「――それで悪いのだが、早速だが頼みがある」

「なんでございましょう」

頼みと言われて、ちょっと男は警戒したように見える。
彼の娘を見て頼みと言われたので、娘を求められるとも思ったのかもしれない。

「俺たちが宿泊するために、庭の隅を貸してほしいのだ」
「は？ お部屋もご用意いたしますが……」
俺の予想もしない頼みに、商人が慌てている。

「そちらの面子を潰して悪いが、勝手にやるので心配いらない——
んゝそうだ、風呂はあるかな？」

「塩水風呂でよろしければご用意できますが」
「俺の家族で入りたいものがあれば、いれてやってほしい……まあ、ただとは言わん。今、なにか欲しいものがあるか？俺のアイテムBOXの中に入っているもので、それがあれば出してやる」

「辺境伯様はアイテムBOXをお持ちなのですね。マロウの手紙によく書かれていた商人が、貴族にまでおなりになるとは……」
マロウは彼に、手紙で俺のことを書いていたらしい。

「ははは、まあ——紆余曲折の果てにな」
「欲しいものでございますか……？」
俺の突然の言葉にシュロが困っている。

「ん——それでは、蜂蜜をいただけますか？！」
困っている父親に代わり、娘が元気に答えた。
海辺の街なら、蜂蜜は貴重品なのだろう。

「よし、それで決まりか」
シャングリ・ラで蜂蜜を探す。
瓶に入っている3kgの蜂蜜が3500円で売っている。
プラ容器よりは瓶のほうがいいだろう。

「ポチツとな」

琥珀色のドロドロがたっぷりつまった広口の瓶が落ちてきたので受け止めた。

「ほい、これが宿泊の代金だ」

「わああ！　こんなに沢山の蜂蜜があ！　綺麗！」

女の子が蜂蜜が入った瓶を日にかざして、小躍りしている。

「え？　あ、よ、よろしいのでございますか？　こんな貴重なものを」

どうやら金貨1枚ぐらいの価値があるものらしい。

「俺のことはケンイチでいいよ。料金が余るようなら、新鮮な海の幸でも差し入れてくれ。昼飯にするから」

「かしこまりました。お安い御用でございます」

シュロの話では、獣人や森猫も問題ないらしい。

この街は獣人も多いから偏見もないようだ。

屋敷の主の許しも出たので、スライムの箱を持って2台の車を収納。

庭の花畑の隅にコンテナハウスを出してキャンプ地を作ることにした。

まあ、彼には悪いと思ってるんだけどねえ。

やっぱり自分の部屋が快適だし。

プリムラを含めたマロウ商会の面々は、屋敷に泊まるらしい。積もる話もあるだろうしな。

あの女の子もプリムラと知り合いらしいし。

多分一緒に寝たりして、キャッキャウフフをするんだろう。

「屋敷に泊まりたい人がいれば頼んでやるぞ」

「ここでもいいにゃ」

「アマナは？ たまには上等な部屋に泊まってみたいだろ？」

「あたしゃ、1人で天幕テントに泊まるのがお似合いだよ。普段と違う景色を眺めながら、旦那からもらった美味しい酒をちびちび飲むのが旅の醍醐味ってやつさ」

「アキラは？」

「屋敷に泊まったら、街に繰り出せないじゃないか、フヒヒ」

「解った解った。可愛い男の子がいるかもしれないしな」

「そうそう——って違う！ ケンイチ、誤解するなよ？」

「5階は家具売り場でございます」

「そういえば、最近エレベーターガールっていないよな——そうじゃねえ！」

そこにシュロがやってきた。

「こ、こんな巨大な鉄の箱がアイテムBOXの中に入っているとは……」

「悪いが、普段から使っている部屋のほうが具合がいいんでな」

「マロウから聞かされていたのは、嘘や誇張ではなかったということになりますな」

「マロウと古い付き合いなら、彼がそういう男ではないと知っているだろう」

「誠に、そのとおりでございますが……にわかには信じがたい話が多くございまして」

まあ、そうだろうなあ。

キャンプ地を設置して、しばらくするとシュロから新鮮な海の幸が差し入れされた。

大きな木箱に入った大小の魚や大きな貝、カニなどがある。

「おおっ！　こりやすげえ！」
喜んだのはアキラだ。

「この地の人差し入れてくれたってことは、食っても問題ないものばかりだからな」

毒の心配はないってことだ。

「そのとおりだな。こいつは腕が鳴るぜ」

「あ、そうだ、シュロ。ここに海藻の乾物とかはないか？」

「ございますが――そのようなものをお求めになるとは、辺境伯様はお目が高い」

海藻があるなら出汁に使えそうだな。

元日本人の俺とアキラにとっては、実に楽しみだ。

201話 カゲの力

南の港町、オダマキにやって来た。

綺麗な海に石灰でできた白い建物が並ぶ、まるでエーゲ海を思わせるような美しい街だ。

多数の獣人たちが働いており、猫人と犬人が共存している。

俺たちはマロウの知り合いであるシュロという商人の下を訪れて、キャンプのための敷地を貸してもらった。

場所を貸してくれたお礼に蜂蜜をあげたのだが、代金が釣り合わないということで、鮮魚の差し入れをもらった。

俺がアイテムBOXから出したテーブルの上には、大きな木箱。

その中には沢山の魚や貝、カニなどが山盛りになっている。

新鮮な海の幸をもらったんだ——早速、昼飯で食うことにした。

アキラのアイテムBOXからは、まな板や包丁が出てくる。

「アキラ、どれにする？」

「このデカイのからいってみるか！」

彼が取ったのは、1mほどある大きな流線型の魚。

身体が赤くて、真ん中に銀色の線が入っている。

元世界だとマグロやカツオに近いのだろうか。

「ここじゃ、貝やカニも食うんだな」

「海藻も食うみたいだしな」

「生食もするのか？」

「わからん……」

アキラが自分のアイテムBOXから出した包丁で、鱗を剥ぐと魚

の頭を落とした。

鱗は背中の部分にしかないようだ。

大きな魚をくるくると回転させながら、5枚におろしていく。

取り出した内臓などはスライムに食わせるが、なんでも食うからごみ処理にピッタリだ。

こいつを使って、ごみ処理や汚物処理器も面白いかもしれないが、この世界のスライムは結構凶悪だからなあ。

「相変わらず、見事な刃物捌きじやのう」

「フヒヒ、あざーす！」

切ることに关してはアマランサスも凄いので、アキラの腕に感心するのだろう。

「とりあえず食ってみるか」

彼が小皿と醤油を用意した。

生食をするので、一旦アイテムBOXに収納。

こうすることによって滅菌ができる。

「ケンイチもやってみろ」

「おう」

切ったばかりの切り身を指で掴むと醤油をつけて口に放り込む。

「おおーっ。こりやうめえ」

アキラが舌なめずりをする。

「脂がのってるな——マグロというか、カツオというか……」

「血の匂いはしないな」

「アキラ、俺も切っていいか。生で食えないやつには、焼いて食ってもらおうかと」

「タタキみたいに焼いても美味いかもな」

アキラからもらった柵を厚めに切る。

ベルとカゲにも切り身をあげると、ハグハグと美味しそうに食べている。

切り身を大皿に盛り付けて、女性陣の所に持っていく。

「俺とアキラみたいに生では食えないだろうが、焼いて食ってみろ」
生食はしないが、この世界でも焼いた魚は食うから大丈夫だろう。
カセットコンロと網を用意して、その上で魚の切り身を焼いてやる。

半生が美味しいと思うが、食いかたは彼女たちに任せよう。

獣人たちは最初、カセットコンロの臭いが苦手だったのだが、最近は慣れたようだ。

気にせずに食べている。

焼いた切り身にアマナがフォークを突き刺した。

醤油やポン酢も苦手なので、塩コショウなどで食うようだ。

「……ほ！　こりゃ美味しいよ！　獣の肉より美味いかも！」

俺はアキラからマヨネーズをもらった。

当然、こいつは彼の指から出たものだ。

「マヨネーズも美味しいと思うぞ」

シーチキンがマヨと合うなら、この魚とも合うはず。

「うみゃー！　こりゃ、うみゃーよ！」　「こいつはいけるぜ！　旦那、エール！」

「昼からか？　まあ、このあとに予定がないからいいけどな」

「旦那！　こっちにもおくれよ！」

アマナとアキラにもビールをやる。

マロウについできたマーガレットも、焼いた切り身を食べて舌鼓

をうつ。

「魚がこんなに美味しいなんて……ダリアでも食べられるようにはならないのでしょうか？」

「んー、マロウのアイテムBOXに入れてもらえば、マロウ邸で食べることができると思うが」

「旦那様に、そんなことを頼むなんてできません」

「マロウ商会に残る取引材料として、使ってみては？」

「魚とカレーでは、カレーを取りますが」

「ええ？」

マジですか。

アネモネとアマランサスは、俺と同じように生で食べている。

「美味しい！」

「これはいけるのう……」

「2人とも、俺の食事に無理して合わせる必要はないんだぞ」

「そんなことないよ。ケンイチが食べるものは、みんな美味しいから」

「そのとおりじゃな。いままで食したことがないようなものを食べられる喜びに、心が躍るわえ」

「まあ、喜んでもらえてるなら、いいんだが……」

焼いた魚をカールドンの所へ持って行ってやると、彼はマヨネーズをつけて食べ始めた。

「ほう、これは美味……研究に明け暮れて、食事などには気を使っ
てきませんでしたか……」

「お城の半地下に閉じこもって、毎日似たようなものを食っていたんだろ？」

「はは、お恥ずかしい」

そういう俺も、仕事で忙しかったときは、毎日コンビニやスーパ

ーの弁当だった。

人のことは言えんが、食生活が豊かってことはとても大事なことなんだと実感する。

カールドンと、ここで作る船について話していると、シュロが木箱を抱えてやってきた。

「辺境伯様、お食事中申し訳ございません」

「いや、早速もらった魚をありがたく食べているよ。素晴らしい魚で申し分ない」

「お褒めいただきありがとうございます。これもお持ちいたしました」

彼が持ってきたのは、乾燥昆布っぽい。

カチカチに乾燥していて、表面に白い粉が浮いている。

「アキラ」

「おおっ！ こりゃ、いい昆布だ！ 美味そう！」

「帝国で昆布は？」

「あるはずねえ」

「あの、帝国のご出身ですか？ 海岸沿いのヘレズーレタップシュタットには、輸出されてますよ」

「マジか！？ ミダルには入ってきてなかったがなあ……」

ミダルというのは、アキラが住んでいたという都市だ。

「帝国の商業都市のご出身なんですね」

「あそこなら大抵のものが入ってきていたと思ったんだが……」

「多分、需要がなかったのでしょうか」

「ははは、まあな」

そこに、獣人たちがやってきた。

ベルとカゲもやってきて、昆布をクンカクンカしている。

「それはなんにゃ？」 「草かい旦那？」

「海に生える草を乾燥させたものだよ」

「ケンイチはなんでも知ってるにゃ」 「へえ。だんな、なんに使
うんだい？」

「これでスープを作ったり、水で戻してそのまま食べたり……」

「でも、ケンイチ。海藻を消化するってのは、特定の遺伝子がない
とできないとかなんとか……」

「ああ、聞いたことがあるなあ」

昆布やワカメを消化できないと、そのまま下から出てくるのだろ
うか？

「ちょっと試してみるか？」

「なんだ？」

「ケンイチ、普通のお茶を用意してくれ」

「煎茶とかでいいのか？」

「ああ、アネモネちゃん。魔法でお湯を沸かしてくれないか」

「いいよ」

アキラが、用意したカップにハサミで切った昆布を入れていく。

「ああ、昆布茶か」

「そうそう」

昆布茶なんて、缶に入った粉末しか飲んだことがないが。

人数が多いので、ヤカンにお茶っ葉を入れて、アネモネが魔法で
沸かしてくれたお湯を注ぐ。

お茶が出たら、カップに淹れれば完成だ。

辺りに香ばしいいい匂いが漂う。

「おおっ！ こんな飲みものがあるとは！」

昆布茶を飲んだ、シュロが声を上げた。

昆布はあるのに、お茶に入れて飲んだことはなかったようだ。

「美味しい！」

「これは美味しいのう」

アネモネとアマランサスが、昆布茶を飲んで感心している。

「旦那、あたしにも飲ませておくれよ」

「アマナー——得体のしれない不気味なものだって言わないのか？」

「これはお茶だろ？ 魚を生で食うよりはマシってもんだよ」

アマナの話を聞いたシュロが驚いて、カップを置いた。

「え？ 辺境伯様は、魚を生で食べるのですか？」

「あはは、まあな。彼と一緒に」

俺はアキラを指差した。

「なんと——この街でも魚を生で食べるのは、ほんの一握りの通でして……」

「貴殿はどうなんだい？」

アキラが刺し身を差し出した。

「私も実は愛好家でして」

「おお！」

彼に魚を食べさせてみる。

醤油とマヨネーズを合わせたものだ。

ちよつと醤油の匂いを嗅がせてみたが大丈夫な模様。

「ここにも、これと似たような魚醤がありますので」

魚醤や虫醤があるのに、豆醤がない。

まあ醤油や味噌は作るのが難しいからなあ。

「この黄色いものは……」

「マヨネーズだ。帝国で流行っているんだぞ」

「マヨですか。まさか生の魚につけて食べることになるとは……」

シュロは、ちよつとビビったようだが、黄色いどろりをつけた魚の刺し身を口に入れた。

「どうだ？」

「こ、これは、なんという豊かな味……」

刺し身を食べたシュロが固まっている。

「いけるだろ？」

ツナマヨが美味いんだから、カツオやマグロみたいな魚にマヨネーズが合うのはあたり前田のクラッカー。

「辺境伯様は、いつもこのような食べ方を？」

「私の領地には湖があるので、そこで獲れた魚を食べるときは、その黒い醬だけで食べてる」

「これも美味しいものですな。魚醬より匂いが柔らかい」

まあ、醬油もそれなりに匂いがあるが、魚醬よりはなあ……。。

「ちなみに、帝国でマヨを作ったのは、そののアキラだ」

「フヒヒ」

「そうなのですか？」

「ああ、小麦粉を焼いて食べる料理があると思うが、それにつけるように作ったんだ」

まあ嘘である。彼のマヨは、彼の指から出るのだ。

「それから王国にも入ってきている、複式簿記を作ったのも彼だ」

「えええ?! うちにも導入されましたが、帝国の商業大臣が発明したものだと言いましたが……」

「ああ、そいつに教えたのが俺なんだよ、ははは」

「なんと……」

「ミダルの商業ギルドで只の地区長だったやつが、商業大臣までなったんだ。大出世ってやつよ。だから、やつは俺には頭が上がるんのよ」

「そりゃ、そうだろうな」

「フヒヒ、だから散々利用してやったぜ」

アキラが悪い顔をしている。

「可哀想に」

「てやんでい！ やつも、そのぐらいいい思いをしているからな。

俺が死地に行ってる間に、帝都にデカイ邸宅を建てやがって……20歳も年下の貴族の娘も嫁にもらったんだぞ？」

「それは、アキラにこき使われてもしゃーない」

「ははは、そのとおりだろ！」

アキラとアホな話をしていると、堀の外がワイワイと騒がしい。

見れば、獣人たちが集まってきている。

屋敷の周りを木の堀が囲んでいるが、背が低いので獣人たちなら飛び越えることも可能だろう。

そういえば、ソバナでもこんなことがあったな。

あそこでは、ベルに集まってきていたのだが——今回も森猫絡みだろうか？

あまり騒ぐと、ここの主であるシュロに迷惑がかかるので、ベルとカゲを連れて獣人の所まで行く。

様々な毛皮の色の獣人たちが集まって、実にカラフルだ。

当然だが1人1人、全部ガラが違う。

俺と森猫の黒い毛皮を見て、外に集まっている獣人たちがざわめく。

「おおつ、森猫様だ」「本当だ」「2人もいるぞ」

2人？ 森猫が複数いたことがなかったので不明だったが、獣人たちはそう数えているのだろうか？

彼らにとつて、森猫も同じ人なのかも。

柵の前でベルとカゲが凜と座っている。

「お前ら、中に入ってきてちゃ駄目だぞ」

「ここは、大店の商人シユロの屋敷じゃねえですかい」「こんな所に忍び込んだら、この街で仕事ができなくなっちまう」「そうそう」ちゃんと礼儀はわきまえているようだな。

「森猫を拝みたいなら拝んでもいいけど。あまり騒いで近所の迷惑にならないようにな」

「「へへっ！」「」」

獣人たちが頭を下げて拝み始めたが、そうでない連中もいる。

「ねえねえ旦那あ！」

「なんだ？ お前たちはいいのか？」

「その森猫様も、旦那が主なんだろう？」

「主ってわけじゃないが——まあ家族だし、そうとも言えるな」

「その家族にさあ……あたいたちもどうだい？」

獣人の女たちが、様々な色の毛皮を着て色っぽいポーズで俺を誘っている。

どこの獣人たちもそうだが、基本は薄着だな。

女たちはミニスカだが、毛皮を着ているせいか生脚には見えない。

「ふん」

黒っぽい虎柄の女の所にいくと、顎をなでてやる。

ゴロゴロと俺にも聞こえるような大きな音を立てて、喉を鳴らす。

「なうゝん」

その声を聞いた男の獣人たちが、一斉にこちらを向いた。
多分、そういうときの声なのだろう。

「おいおい、変な声を出すなよ」

「おかしいよ、ただなでられただけなのにさあ……」
今度は女のほうから、俺の手に頭を擦り付けてきた。

「ちよっと、あたいにも触らせておくれよ！」 「私のほうが先だつて！」

少々揉めそうになっていると、大声が聞こえてきた。

「ふぎゃー！ なにやってるにゃ！」 「くそ！ ちよっと目を離すと、すぐこれだ！」

慌てて、ミヤレーとニヤメナがやってきて、塀から俺の身体を離した。

「ちよっとズルいじゃないのさ！ 旦那を独り占めでさ！」 「こっちにも分けておくれよ！」

「誰が分けるかにゃ、バーカ！」 「旦那は俺たちのもんだ！ どうだ？ この毛皮は？ ピカピカだろ？」

「そうにゃ、トラ公が言ってるように、ピカピカにゃ！」

2人が、塀の外にいる獣人たちに艶やかな毛皮を見せびらかしている。

獣人たちってのは、毛皮の美しさを競うらしい。

ミヤレーとニヤメナには、シャングリ・ラで買ったペット用のシヤンプーを渡してあるし、毎日ブラッシングも欠かさない。

「ぎゃー！」 「きいー！」

外にいる女たちは、悔しそうにして阿鼻叫喚だ。

「でも、本当にニャメナの毛皮は綺麗になったよな。俺と初めて会ったときは、ボロボロだったのに……」

「旦那あ、気にしてるんだから、そういうことを言わないでくれよ……」

「ああ、悪い悪い」

只人の女性に、太ったとか痩せたとか、言ってしまうような感じが
らしい。

「悪いが、これ以上家族を増やすなって言われてるからな」

「「えっ?」」「」

獣人たちから残念そうな声が上がる。

「ほんじゃな。あまり騒がないでくれよ。ベルも適当なところで引き上げてな」

「にゃー」「みゃー」

ちよつと騒然となっていたが、獣人たちが再び森猫を拝み始めた。
問題ないようなので皆の所に戻ると、ミャレーとニャメナが俺の
身体にスリスリしている。

匂いを上書きするためだろう。

「旦那ってば、変な女の匂いをつけてよ!」

「悪いな、ははは」

皆の所に戻ると、シュロが心配そうな顔をしていた。

「なんですかな?」

「獣人たちが、森猫を拝みに集まったようだ」

「ほう、森猫は猫人たちにとっては、神様みたいなものだと聞いて
おりましたが……」

「そうらしい」

俺は、アイテムBOXから、陶器の瓶に入ったシャンプーとリンスを取り出した。

これらは、マロウ商会に卸しているもので、貴族などに高級品として販売している。

「これは、魚介類のお礼だ。女性の髪を洗うための洗剤だな。貴族などには喜ばれている代物なので、奥方や娘に贈り物とすればいいだろう」

「このような貴重なものを……」

「これから色々世話になるしな」

「ありがとうございます」

「使い方はプリムラに聞けばいい。彼女が全部知っている」

「承知いたしました」

シュロがリンスとシャンプーの入った瓶を掲げて、頭を下げた。これからこの商人に、船大工などを紹介してもらう手はずになっているのだ。

この街にやってきて、いきなり船を作ってくれと言っても、誰も引き受けてくれないだろう。

有名なマロウ商会ですら、警戒されるかもしれない。

外からやってきた新規の客ってのは、どんな客か解らないからな。そこで、この街の大店であるシュロが間に入ってくれば、スムーズに物事が運ぶってわけだ。

当然、シュロは仲介料を取るのだが、それはスムーズな取引のため必要経費。

こんな遙々やってきて、トラブルになるのはごめんだ。

飯が終わったので、何もやることはないし観光に出かけることにした。

アキラは遊べる場所を探すらしい。

「ほんじゃなく。俺が帰ってこなかったら、飯を食っちゃっていいからな」

「オッケー！」

彼に海鮮類を捌いてもらって、海鮮鍋にでもしようと思ったのだが、やむを得ない。

なにか他のものを食べることにしよう。

青い空と高い太陽の下、坂になっている路地を歩くと少々汗ばむ。俺の隣にはアネモネ、後ろにはアマナとアマランス。

獣人たちは、まだ周囲を警戒中。

その他はキャンプ地で留守番をしている。

白い建物の壁が光を反射しているので、横からも日に焼けそうだしさすがに800kmぐらい南下すると気候も違うらしい。

温帯から熱帯になった感じかな。

東京から小笠原諸島まで1000kmぐらいだったはずだから、そのぐらい気候が変わってもおかしくない。

昼過ぎたので、太陽の位置も高く真上からさしている感じ。

「暑いね！」

アネモネの青いローブを脱がして、アイテムBOXから以前買った麦わらを出す。

ついでに、日焼け止めのクリームも出して塗ってやる。

この世界の女性は手足を出さないなので、あまり塗らなくてもいいようだ。

「ほら、アマランスとアマナにも」

2人に麦わら帽子を差し出す。

「おお、どうじゃ？」

「似合ってるぞ」

「旦那、あたしにゃ言ってくれないのかい？」
アマナがふてくされている。

「その帽子は露店で使ってもいいかもな」
「そうだねえ」

文句を言いつつも、気に入ってるようだ。

「南に行くと、太陽がほぼ真上からさすようになるから気温が上がるんだ。当然それによって気候も変わる」

「へえ〜面白い！」

一緒についてきている、獣人たちにも麦わら帽子をかぶせてやる。

「ミヤレーとニヤメナは暑くないのか？」

「暑いにゃ」「でも、気を抜くと――」

ニヤメナが周りに眼光を飛ばしている。

獣人の女たちが、まだ俺たちの周りを囲んでいるらしい。

見えないようにについてきているようだ。

俺たちは獲物か。

一緒にいるベルたちも黒い毛皮なので暑そうだ。

犬猫用の麦わら帽子をシャングリ・ラで検索してみるが――これはアクセサリーだな。

小さな帽子を頭だけに載せても仕方ない。

身体全部を覆うようなものじゃないと。

そのまま30分ほどブラブラしてみたのだが、元世界の観光地みたいに観光客用の施設があるわけでもない。

女性が喜びそうな小洒落た店があるわけでもなし、景色が綺麗だといっても、すぐに飽きてしまった。

アキラがムフフな店を探しに行ったのは、正解なのかもしれない。さすが世界中を旅した男だ。旅の楽しみ方を踏まえている。

仕方なく戻ろうとしたのだが――。

「ふぎゃー！」

叫び声が聞こえてきた。

「これは獣人の女の声だな。ちょっと行ってみるか」

「旦那も物好きだねえ」「にゃ」

「女が可哀想じゃないか」

さつき俺たちを囲んでいた女たちかもしれないしな。

声が聞こえた方向に、白い壁に囲まれた路地に入っていくと、背の高い毛皮を着た集団がいた。

猫人ではなく、大人の男たちだ。

猫人の男はムキムキが多いのだが、ここにいる大人の男たちはスラリとしてて、まるでアフガンハウンドのような雰囲気。

中々、恰好がいいのだが。

その男たちに、三毛の猫人の女が足を持たれて宙吊りになっている。

女たちが牙を剥き出して必死に牽制しているのだが、まったく応えてないようだ。

「へっへ！ いいケツじゃねえか。俺らが可愛がってやるぜえ」

「フシャー！」

足を掴まれた女が毛を逆立てて牽制している。

「おい！ その女を離してやれ！」

「ああ？ 只人のオッサンがなんの用だぁ？！」

女たちが、一斉に俺の後ろに隠れたので、気になることを尋ねた。

「どうでもいいんだが、種族が違うのにやるのか？」

「あいつら、穴があればなんでもいいんだよ！」

そう言われると、獣人たちとゴニョゴニョしている俺も耳が痛い
な。

さてさて、どうするか——この狭い路地だとユ○ボは出せないし
な……。

家を壊してしまったりすると、大騒ぎになってしまうし。

「アネモネ、アマランサス、手を出すなよ」

戦闘力がある2人を止める。死者が出たりするとマズい。

俺はアイテムBOXから爆竹を1個取り出し、ターボライターで
火を点けて放り投げた。

それがなんであるか理解している俺の家族は、一斉に耳を塞いだ。

つんざく爆裂音が白い壁に反響し、耳を塞いでいなかった連中は、
びっくりしてそのまま固まっている。

犬人たちも驚き、掴んでいた女の脚を離れた。

落下した女はくると回転して着地すると、すばやく俺の後ろに
隠れる。

「くそ！ 魔法か？！」 「あゝ、耳が聞こえねえ！」

犬人たちは、ちょっとパニックになっているようだ。

「おとなしく下がらないと、もっと凄いのが炸裂するぞ？」

「魔導師がなんだってんだ！」 「相手は女ばかりだぜ！」 「次の魔
法の前にやっちまえ！」

引き下がらない敵に俺が構えようとする——小さい黒い毛皮が前に歩み出た。

「カゲ？」

「みゃー」

「ああ？　なんだ、このちっこいのは？！」　「こりゃ森猫だぜ！？」
「捕まえて売りや大金持ち——」

彼らが、そんなことを言った瞬間、毛皮の男たちがまとめてひっくり返った。

倒れたのではなく、文字通り綺麗にひっくり返った。

1人バックドロップというか、1人飯綱落としというか、まさにそんな感じで地面に這いつくばっている。

「ケンイチの魔法にゃ？」

「いや、多分カゲがやったんだと思うが」

ひっくり返って動かなくなった者が多いのだが、リーダー格を含めて3人ほどが再び立ち上がった。

「くそ！　なんじゃこりゃ！？」

そう男が言った瞬間、再び逆さまにひっくり返った。

下は固い石畳。かなりのダメージだと思われる。

最後にリーダー格の男だけが残った。

さすがにしぶといが、立ち上がった瞬間——またひっくり返った。

「みゃー」

カゲの言葉に、石畳にひっくり返った犬人がぐったりとしている。

「ゆ、ゆるしてくれ！　もう、猫人には手はださねえ……」

彼らの所にいくと、祝福の力を使う。

「治療してやるから、動けるようになったら仲間を連れて帰れ」
「解った……」

後ろでは獣人の女たちが飛び跳ねている。

「やったにゃ！」

「カゲ、すごい！」

アネモネがカゲに駆け寄って背中をなでている。

「みゃー」

「旦那、森猫って魔法を使うのかい？」

アマナが驚いているが、ベルもテレパシーのようなものを使うし、特殊能力を持っているのかも。

「カゲが持っている個人的な力だろうな」

獣人の女たちに囲まれた。

「旦那は命の恩人だよお！」

「大げさな」

「ほんとさ！ アイツラに捕まったら何をされるか！」

「それじゃ、もうちょつと懲らしめたほうがよかったか。でも、騒ぎになると面倒だしな」

世話になっているシュロに迷惑がかかるとマズい。

「お礼にあたいたちを好きにしていいいからさあ」

「そうか？」

彼女たちの色とりどりの毛皮をなでる。

「なおいん」「なうーん」「ゴロゴロ」

毛玉のおしくらまんじゅうだが、その光景を見てニヤメナが激怒している。

「てめえら、旦那から離れろ！　旦那もなんでそんなやつらなでてるんだよお！」

「解った解った、泣くことはないだろ」

女たちを離すと、俺たちはシュロの屋敷に戻ることにした。

ひよんなことから、カゲの意外な力を発見できたな。

202話 造船所

南の海岸沿いにある港町、オダマキにやってきている。

まったりと観光旅行でも、と思ったのだが――この世界には、作られた観光地などという俗物的なものはない。

青い空と海、そして白い壁の家が並ぶ坂道の街。

それだけで十分に美しいのだが、すぐに飽きてしまった。

帰ろうとすると、獣人の女の叫び声が聞こえる。

放置するわけにもいかず、大人の男たちから猫人の女を助けたのだが、主役は森猫のカゲ。

不思議な力を使って、男たちをひっくり返すとコテンパン（死語）にってしまった。

ひょんなことから、カゲの謎の力を知ってしまったわけだ。

魔法のようには見えないので、なにか特殊能力だろうか？

助けた獣人の女たちが、わらわらとついてきたので、それをミャレーとニヤメナが懸命に牽制している。

「てめえらついてくるな！」「そうだにゃ！」

「なんだよお！」「旦那にお礼させてくれてもいいじゃないのさく！」

「うるせえ！ 旦那は俺たち2人で間に合ってるっての！」「そうだにゃ！」

2人が懸命に俺にゴシゴシと身体を擦り付けて、他の女の匂いを消そうとしている。

「でもケンイチ。あの犬人たちは、あのまま帰して大丈夫？」
アネモネは、女たちに対する仕返しを心配しているようだ。

「聖騎士様は、自分が貴族だというのを忘れていなさるようじゃな」
「アマランサス、そうは言うけどな、よその貴族が街にやってきて騒ぎを起こしたら、地元の貴族や領主がいい顔をしないだろ？」

「それもそうじゃ……」
サクラによその貴族がやってきて好き勝手したら、俺だって怒るしな。

「少々冷たいようだが、この街のことはこの街で解決してもらわないと。つまり、この街の領主の仕事だ」

「確かにのう」
それにしても、カゲが使った力がなんなのか気になる。

「なあ、お母さん」
「にゃー」
俺の問いかけに、ベルがこちらを見上げる。

「カゲの力ってのは、魔法なのか？」
ベルがカゲとなにか話しているように見えるが、言葉や鳴き声は聞こえない。

「にゃー」
「え？ 影をひっくり返した？」
「にゃー」
小さな絨毯の上に立っている人に対して、それを引っ張るような感じらしい。

それなら倒れるのも解るが——— いったいどういう仕組みなのか解

らん。

解らんといえば、俺の祝福の力だって解らんし、魔法だって解らん。

もちろん、俺のシャングリ・ラとアイテムBOXだって。

アキラのマヨネーズだってワケワカメだろう。

指からマヨネーズだよ？

そういうものだど理解するしかないな。

考えたら負けのような気がする。

キャンプ地に戻り獣人の女たちを帰していると――日が傾き始めた。

飯の用意をしなくては。

今日は、プリムラがいない。シュロの屋敷で歓待されているからだ。

俺にも同様のおもてなしを――とシュロは考えていたようだが、俺は断った。

礼儀に反しているのは解るが、性に合わないからだ。

その代わり彼には礼をたっぷりと支払っているし、これから付き合いが始まれば、大きな商いがついてくる。

俺が変な人間なのは、付き合いの長いマロウとプリムラが説明してくれるだろう。

さて、飯だ。

シュロから海産物をもらったので使いたいのだが、アキラが遊びに行ってしまうって今日は戻る気配がない。

やむを得ず、俺が捌く。

彼ほどの腕ではないが、魚を3枚におろすことぐらいはできる。

皆に食べやすいように、つみれにして、スープに入れようと思う。つみれ汁だ。

2枚貝もあるので、こいつもスープの具に入れてみるか。
日本人だと、なんでもかんでも生で食うことを考えてしまうが、
ここでは一般的ではない。

俺が魚を捌いているうちに、アマナにスープを作ってもらおう。
彼女はベテランなので料理は上手い。

アネモネはパン焼きだ。
残ったアマランサスには、すり鉢とすりこぎで、魚のつみれを作
ってもらおう。

すり鉢の中に調味料などを入れると、アマランサスのパワーの出
番だ。

「こうやって、円を描くようにすればいいのかえ？」

「ああ、それでいい。すまんな、料理をさせて」

「妾は奴隷なので当然じゃ」

アマランサスも楽しそうにすりこ木を回しているので問題はない
か。

そこにアマナがやってきて、俺に耳打ちをする。

「ちよいと旦那、アマランサスさんって、元貴族なんじゃ……？」

「奴隷に、さん——とかいらないから」

「でもねえ、普通の人じゃないよ？」

「たといえ元貴族でも今は奴隷だから。でも、粗末には扱わないでく
れよな」

「解ってるけどさ」

パン焼き器を火にかけて魔法でアシストすると、一段落ついたの
か、アネモネが様子を見にきた。

「その団子は、川で食べたのだね！」

アネモネとダリアから逃げたときに、川で釣ったマスをつみれに

したのだ。

「あの時は川魚だったけど、今日は海の魚だ」

「違いってあるの？」

「ないな。あの湖にいる魚の種類だって、海まで下るやつもいるし」
「そうなんだ！」

「川や湖で卵を産んで、川を下り海で大きくなって、また上ってくる魚もいる。遡上っていうんだが」

「聖騎士様は博学じゃのう」

「本当だねえ」

アマナとアマランサスが感心しているが、つみれはこれで終わりでない。

スプーンで掬い団子状にして、スープの中に投入していく。

料理が完成したので皆で食べ始めた。

2枚貝の貝柱からいい出汁が出ているし、つみれもいいできた。魚介類のスープなんて、ダリアでも食えないごちそうだ。

俺がシャングリ・ラで買えば食えるだろうが、普通の一般人では貴族でも難しい。

アイテムBOXを持っている商人でも抱えていれば別だが。

ベルとカゲには猫缶とつみれをあげると、美味しそうに食べている。

料理で出たゴミはスライムにやる。

あまりゴミをやりすぎると大きくなってしまいうので、ほどほどにしないと駄目だな。

ある程度まで大きくなると分裂して次々に増える。

そう考えると、餌だらけである湿地帯で無限に増殖してもおかしくないような気がするのだが、実際はそうなってはいない。

なにか増殖を止める因子があるのだろうか？

考えていると、カールドンのことを忘れていた。

彼に料理を持っていつてやる。

辺りは暗くなりつつあるが、彼の使っているコンテナハウスに向かうと、窓から明かりが漏れている。

おれが貸してやっているLEDランタンの光だ。

お城の半地下で研究をしていたときも、ローソクの光を使ったり、自分で光ライトよ！の魔法を使ったりして、明かりを確保していたようだが、俺が貸してやった明かりで夜なべができるようになったと、彼も喜んでいる。

「おい、カールドン。飯だぞ」

アルミ製のドアをノックすると、中でバタバタと音がする。

このコンテナハウスのドアも窓枠もアルミ製なので、中で魔法の実験をすると上手くいかないらしい。

「これは、ケンイチ様に料理を運んでいただけるとは、恐縮でございます」

「どうだい、研究は進んでいるかい？」

「はい！ これをご覧ください！」

彼が見せてくれたのは、船の動力であるコアモーターの設計図。

ここで設計しても、現物合わせで少々変更する可能性があるのは彼も解っている。

「これで大きな船が動くのが楽しみだな」

「はい！ まさか私がこんな大きな事業に手をお貸しできるようにするとは」

「これが一般に使われるようになれば、君の名前は歴史に残るぞ？」

「いいえ、歴史に名前が残るのはケンイチ様だと思いますが……」

「俺は領が発展して、民が幸せになればそれでいいんだ」

「そのとおりでございますな」
船を建造するといっても、いきなり大型船を建造するわけではない。

未だにアニス川をすべて走破したものはいないのだ。
俺の持っている中古漁船では小型すぎるので、もう少し大きな帆船を建造する。

まずは、それを使ってすべての流域を調べてから、どのぐらいの船なら通ることができるかを見極めなくてはならない。

暗くなってもアキラは帰ってこないで寝ることにした。

今夜、ベッドで一緒なのはアマランサスだが、今日はプリムラがない。

彼女は、シュロ邸に泊まっている。

「なーん」

変な声を出しているのは、耳と尻尾をつけたアマランサスだ。

「別にそんな恰好をしなくてもいいんだぞ？」

「でも聖騎士様は、このような恰好がお好きじゃろ？」

「まあ、好きなんだけど」

そして夜はふける。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

——オダマキにやってきた次の朝。

朝食を食べていると、アキラが帰ってきた。

「オッス！」

「オッスオッス！」

「いい子はいたか？」

「フヒヒ……まあな」

女性陣の白い視線もなんのその。

さすが勇者だ——とはいえ、ここにはアキラの家族はいないからな。

彼の家族がここにいたら、さすがに無茶はできないだろう。

「枕探しにあったとか、そういう面白い話は？」

「ないな。そういうのは元世界にいたときに散々経験済みで、経験値を積みまくっているし」

「やっぱり、日本以外だと治安は悪いのか？」

「まあな。警察が一番信用できねえし」

それは、こちら辺でも一緒だ。

役人は袖の下一つでどうとでもなってしまう。

サクラはそうならないようにしないとな。

飯を食い終わったら、マロウとプリムラがやって来た。

ここの主であるシュロも一緒だが、プリムラが寝不足のような顔をしている。

「おはようプリムラ、どうした？ 寝不足か？」

「はあ——キキョウに旅の話を色々聞かれてしまって」

「はは、話すことがいっぱいあったろ？ 魔物を退治したり、お城で陛下に謁見するとか普通じゃありえないからな」

「はい、それで興味を持たれてしまって……」

プリムラがそんなことを言っていると、黒髪のポニーテールの女の子が走ってきた。

「ケンイチ様！ ドラゴンを倒して、国王陛下に謁見したというのは本当ですか？」

「ええーっと、陛下に謁見したほうが先だったんだが……」

「すごい！」

「これ！ キキョウ！ 辺境伯様に失礼だろ！」
娘の無礼に父親のシュロが彼女を咎めた。

「ああ、構わん。俺が倒したのはレッサーとワイバーンだが。あそこにいる男は、本物のドラゴンを倒したんだぞ」

「ええ？ 本当？！」

「おい、ケンイチ。こっちに振るな」

「え？ 本物のドラゴンを倒したと言われるのは帝国の竜殺しなのでは……」

今度は、シュロが食いついた。

アキラに根掘り葉掘り聞いている。

「相手が女ならいくらでも聞かせてやるが、オッサン相手じゃ英雄譚を話しても面白くもなんともない」

アキラは、いつものアキラだ。

「これは、やはり当屋敷でおもてなしするべきなのでは……」
シュロが真剣な顔をして悩んでいる。

「俺は、この街におもてなししてもらって満足だから、ははは」

「まあそれより、船大工への案内を頼むよ」

「かしこまりました」

シュロが頭を下げた。

これで本来の仕事に入れる。

船大工の所に行くメンバーは、俺とアキラ——2台の車を出す。
アキラの車には、マロウとシュロ、カールドンだ。
俺の車にはプリムラとアマランサス。

アイテムBOXから、ラ○クルを出すとシュロがまじまじと見ている。

「こ、これが、マロウの手紙に書いていた、鉄の召喚獣でございますな」

「ほほほ、そうだシュロ。屋敷で話したが――私たちがダリアを出発してきたのは3日前、一昨日には海岸に到着していた」

マロウがドヤ顔をしている。

「な、なんと、このようなものがあるとは……」

「色々とはあるだろうが、とりあえず乗ってくれ」

ドアの開け方などを教えてやるが、馬車にも取手やロックはついてるので、そんなに違和感はないと思う。

歩いてでも行けると思うが、この街は坂だらけ。

広い通りを行けば車でもなんとか進めるし、少し遠まわりになっても、こっちのほうが楽だ。

案内してくれるシュロは脚が悪いしな。

俺の所に、カールドンがやってきた。

「ケンイチ様！ 私の部屋を持っていくってくれませんか？ あの中には研究の資料などが詰まっておりますので」

「ああ、いいよ」

「ありがとうございます」

カールドンのコンテナハウスに行ってアイテムBOXに収納していると、アネモネがやってきた。

「私も行くー！」

「面白くはないと思うがなあ。ここで待ってたほうが……」

「いーやー！」

「解った解った」

アマランサスがいれば、護衛は十分だと思われるので、獣人たちはアマナと留守番をしてもらう。

「あの……私も乗せてもらうことはできないでしょうか？」

俺の所に、シュロの娘——キキヨウがやってきた。

「こんなのに乗ってみたいのかい？」

「はい、このようなものに乗れる機会は、もう一生ないでしょうし……」

「まあ構わんよ」

「やったあ！」

凄い元気なお嬢さんだな。

元気ハツラツって感じた。

悪いが彼女には3列目のシートに乗ってもらった。

「ベルとカゲも留守番頼むな」

「にゃー」

「みゃー」

皆で車に乗り込んで、無線機のマイクを取る。

「アキラ、シュロに案内してもらうから、そちらが先行してくれ。車の通れるなるべく広い通りをよろしく」

『オッケー！』

『この声は？』

『向こうと魔導具で話しているんだよ』

『こ、これを手に入れるわけには』

『ははは、ちよつと無理だなあ』

『シュロ、昨日話した鳥を使った通信で我慢しなさい。それも辺境伯様から教えていただいたものですよ』

『うう……』

無線機の向こうから聞こえてくるのは、マロウとシュロらしい。さすがに電源も無いし、この無線機で話せるのは数kmって感じだろうから、都市間の通信には使えない。

改造して出力を上げられれば……でも、いつも言っているように、俺のアイテムに頼った商売はよくない。

俺がいなくなったり死んだりすれば、あっという間に詰む。

マロウは、そこらへんをよく解っているので、無線機をくれとは言わない。

自分が再現できないものは、あまり欲しがらないのだ。

アキラの車が走り出したので、そのあとをついていく。

白い壁が並び、坂道が多い港町を広い通りを探しながら走る。

「すごいすねえ！ さっきの離れた所と話せる魔道具も凄いです
が、この乗り物も全然揺れないです！」

3列目シートに乗っているキキョウが、窓の外を見てはしゃいでいる。

「石畳の上じゃ、馬車は大変だろう」

「はい、街を出るまで馬で行って、途中で馬車に乗り換えたりするんですよ」

車はぐるっと迂回してしまったが、10分ほどで海岸の近くの大きな建物に到着した。

普通の家、6軒分ぐらいはあり、窓は少なく白い壁だけが目立つ。作った船を海に浮かべないと駄目なので、海岸沿いに建物があるわけだ。

先に止まったアキラの車から男たちが降りてきたが、何やらシュロが興奮している。

俺たちも降りよう。

「これは凄い！ 全然揺れないし、まるで鏡の上を走っているようになめらか。座席も柔らかい！」

ほぼ、キキヨウと同じ感想だな。

それに彼は足が悪い。車があれば簡単に移動できるので、その便利さに感動しているのだろう。

「シュロ、仕事のほうを頼む」

「こ、これは、年甲斐もなく取り乱しました」

「お父さん、凄いよねえ。こんなのに乗れたなんて、街の商人たちにも自慢ができるよ」

「いや、まったく——いいや、信じてもらえないかもしれん」

シュロは興奮冷めやらぬ様子で、建物の中に入っていた。

「キキヨウちゃん。ここが船大工の所か？」

アキラがキキヨウに色々と聞き始めた。

「はい、凄い怖い人なんですけど……」

「まあ、職人つてのはそんなもんだ。自分の気に入らん仕事は受けなかったり」

「しまいにゃ金の問題じゃねえ！ とか言い出すよな」
アキラの言うとおりだ。

「でも、真面目なのは確かだろ。一線でいいものを作り続けているのに、不真面目なやつには務まらんからな」

「違いねえ」

外でアキラと2人缶コーヒーを飲みながら待つ。

他の皆にはペットボトルでアップルジュースを買って、カップで飲ませてみた。

「おいひい……」

アップルジュースを飲んだキキヨウが感激している。

「よかった」

「そのアイテムBOXの中には、いろんなものが入っているんですね」

「ははは、家まで入っているからな」

「そうなんですか？ 人を入れたりとかは？」

「残念ながら、生きている人は入らない。死体なら入るけどな」

「え？ 死体って入れたことがあるんですか？」

「キキヨウ、ダリア周辺を襲っていた野盗のシャガをケンイチが討伐して、私を助け出してくれた話をしましたでしょう？」

やはり、プリムラはシュロ邸に泊まって、この娘にあれこれ武勇伝を聞かれたようだ。

「ああ、そのときの……」

「そうなんだ。あとは、討伐した魔物の死体とかも沢山入っている」

「売らないのですか？ うちでも引き取りますよ？ ここら辺は毛皮が高いです」

ここら辺は獣が少ないみたいだな。

確かにそれなら、森猫を持ち込めば高値で売れたかもしれない。

街道でカゲを運んでいた、あの若い商人の目は確かだったわけだ。

「はは、さすが商人の娘だな。最初は売ったりしていたんだが、食べるが多いし、物々交換で消費したりするので売らなくなったね」

「はわゝそうなんですわ」

キキヨウがカップを両手で持って、目をきらめかせている。
なんかキラキラしてて眩しい。

「むー——ケンイチ、デレデレしすぎ」

「え？ そんなことないだろ？ 女の子には優しくしないとな」

「むー」

むくれているアネモネの頭をなでる。

「前にも言ったが、女の子に優しい俺じゃないと、アネモネもプリムラも助けなかったんだぞ？」

「それはそうじゃの。聖騎士様の言うとおりじゃ」

「ははは、これ以上増やさないと心配するなって」

「フヒヒ、これ以上増えると、ケンイチもちよつとつらいよなあ」
アキラがコーヒー缶片手にからかつてくるが、反論できない。

「今だって大変だぞ」

アネモネをなだめていると、工房のドアが開いてシュロが手招きをしている。

やっと話がついたようだ。

事前に連絡もいつているはずなのだが……。

女性陣には外で待ってもらおう。

作業現場なので危険もあるだろう。

工房の中に入ると中は薄暗く、建造中の船がなん隻か見える。

側面の板が貼っていない船は、まるで動物の肋骨のようで、巨大な竜が横たわっているかのようにも見える。

そういえば、船の背骨は竜骨っていうぐらいだな。

その向こうは、石畳が下り坂になっていて、そのまま海に没しているようだ。

完成した船をそのまま海に浮かべるためだろう。

元世界の造船所もこんな形になっていたと思う。

「おおっ！ 素晴らしい！」

カールドンがメモ帳を出して、なにやら書き出した。船の構造などが手に取るように解るので、これはいい機会なのだろう。

俺たちを待っていたのは、背が低くごつい体型をしたスキンヘッドの親方。

浅黒い肌で、少々残っている髪の毛は白い。

オーバーオールのような作業着に、太く黒いベルトをして、工具を差している。

「ケンイチ・ハマダ辺境伯だ、よろしく」

「あんたかい、船を作りたいとかいう、酔狂な貴族は？」

「まあな。でも実際に金を出して運営するのは、そこにいるマロウ商会だからな」

「内陸の商人が船なんて持ってどうする？」

「話してないのか？」

マロウをちらりと見たが、彼は俺に説明をさせたかったようだ。親方に、海からアニス川をさかのぼって、運河に使う計画を説明した。

「正気か？」

俺が貴族だと解っても、随分と粗い口調だ。

敬語なんて使うつもりもないし、気に入らん仕事は受けない。

圧倒的な意志を感じる。

「もちろん」

「アニス川の周辺は魔物の巣だと言うが……」

「新しい魔物よけを開発した」

「魔物よけだと？」

「本当だよ。商人も巻き込んでいるんだ、伊達や酔狂でやるわけじゃない」

「むう……」

親方は腕を組んでいる。

「運河として使えるようになれば、森の材木をここまで持ってくることもできるようになるぞ」

「そいつは嬉しいねえ。船を作るのに何が大変って、材木の確保だからよ」

「ああ、丸太ならアイテムBOXに入っているから、出してやろうか？ 船に使える木の種類なのは解らんが……」

「アイテムBOXだと？」

「ちよつとどいてくれ」

船がないドックの所に丸太を出す。アイテムBOXに入るように、全て10mにそろえてある。

「おい！ 作業している奴ら、注意しろ！」

親方が作業員に声をかけると、地面を揺らして丸太が落ちてきた。少々坂になっているので、転がるかと思ったのだが、払っていない枝が引っかかって止まったようだ。

「こりゃ、たまげた……マジで丸太だぜ」

「アイテムBOXに入れただけなので乾燥などはしてないが……使えそうか？」

「ああ使える。こりゃすげえ」

開拓するのに伐採はどうしてもするからな。

伐採だけして放置することもある内陸と、木が欲しいのに近くにない海辺。

それらが融通できるようになるのだから、そこに商機がある。マロウもそれを考えているのだ。

「俺たちの船を作るんなら材料にしてくれ」

普通なら木材の乾燥に凄い年月がかかったりするのだが、ここには魔法がある。

魔法で乾燥させれば数時間で使えるようになるので、ここら辺は元世界より進んでいると思う。

親方や船大工たちが唸っているが、もうひと押しだろうか。
早々に「うん」と言わせたいところだ。

203話 船大工のヒオウギ

俺たちは南にある港町、オダマキにいる。

ここの大店であるシュロの紹介で、船大工の所にやってきて話をしている段階だ。

俺が貴族だと伝わっているとは思うが、こういう職人は、相手が貴族だろうが誰だろうが、気に入らん仕事は受けない。

それにこの工房は、いわゆる独占企業なのだろう。

ここしか頼める場所がないので、いくら強気に出ても問題ないというわけだ。

それで腕が悪かったら頼まないとこだが、シュロの話では腕もいいらしい。

それにしても目の前にいる親方——背はちょっと低いが色黒で、髭が白い。

スキンヘッドだが、ちょっと残っている髪の毛も白い。

腕はごついし——まるでドワーフのような……。

「親方、ちょっとつまらんことを聞くが——ドワーフじゃないよな？」

「わっははは、よく言われるが、俺はドワーフじゃねえ」

「そうか、すまん。あまりに印象が似てるもんでな」

「お貴族様は、ドワーフに会ったことがあるのかい？」

「俺の領に住んでいるし」

「ドワーフが？」

彼らが天然の洞窟の中に住み着いていることを彼に話した。

「奴らの打つ鉄器はできがいいってのは本当なのか？」

「見てみるかい」

どんなことでもいい、彼と話せて親交を深められればいいのだ。俺はアイテムBOXから、ドワーフが打った短剣を取り出した。キラリと刃が光を反射する。

こいつをアイテムBOXの買取に入れれば、普通じゃ考えられないような付加価値を生む、打ち出の小槌だ。

「ほう、こりゃ確かにすげえ……お貴族様と付き合えば、こういう刃物を作ってもらえるのか？」

俺はその言葉にピンときた。

「なにか欲しいものがあるのか？」

「ああ、道具が足りねえ」

俺はシャングリラで、大工道具を検索した。

何が欲しいか解らんが、とりあえずのこぎりかなと鉋かなを買ってみた。

のこぎりは、昔ながらの両刃のものはあまりなくなって、片刃でしかも交換式なんだな。

切れなくなったら捨てて、昔のように鋸を研いだりすることもないらしい。

鉋は安いものもあるが、1万円ぐらいの鍛造の物を購入してみた。1挺10万円もする高級品もあるが、はつきり違って違いが解らん。

「こういうものならある」

親方にのこぎりと鉋を見せた。

「なんじゃこりゃ、のこぎりか？　こんな薄いペラペラー――」
親方が鋸をビヨンビヨンさせていたが、やにわに角材を切り始めた。

まあ、新品なのでよく切れる。

「異国のものだが、よく切れるだろう？」

「はあ——なるほど異国の大工道具か……だが仕組みは俺たちが使っているものほとんど変わらねえ」

「それでよければ、やる」

次に親方は鉋も試してみようだ。

この世界にあるものとどう違うのかは不明だが、彼は鉋を後ろから見て刃の出方を調節している。

準備ができると——彼は角材に鉋を当てて引いた。

薄い紙のような木くずが宙を舞う。

「凄い！」

商人たちが職人技に息を呑んだ。

「おほっ！　　すげえな」

アキラも驚いている。

「どのぐらいだ？」

彼の言葉の意味を汲むのが難しいが——おそらく数のことだろう。

「そちらの望む数を揃えよう」

「……」

しばらく親方は腕を組んでいた。

目の前にいる変な貴族が、どのぐらいのものか値踏みしているのだろう。

「それじゃ、のこぎりが10本、鉋が5挺」

「解った」

この世界だと道具なんて全部手作りだろうから、1本金貨1枚と

かするんだろう。

金を出して手に入るなら、まだいい。

作る人がいなければ、どんなに金を積んでもいいものは手に入らない。

俺はシャングリラから、彼のいう数の道具を揃えた。

「これでいいか？」

彼は落ちてきた大工道具をじっと見ている。

「あんた何者だ？」

「ただの貴族だが」

「ただの貴族が、こんなものを持っているのか？」
彼の視線は疑いのそれだ。

「俺は、^{ユニーク}独自魔法使いだ——とだけ言っておこう」

「ははあ——なるほどなあ。それで貴族っぽくない男が貴族になったのか」

「ははは、そういうことだ」

ズケズケと色々と言ってくるが、実直で嫌味は感じない。

「それで？　どういう船が作りたい？」

どうやら、変わった貴族が作りたいという船に興味を持ってくれたようだ。

彼に説明するのが難しいが——俺は、開いているスペースを借りると、アイテムBOXに入っていた船を取り出した。

いつも湖の栈橋にあるのだが、サンプル用にアイテムBOXに入れておいたのだ。

船外機がついたボートが大きな音をたてて、石畳の上に落ちてきた。

「なんじゃこりゃ！」

親方が落ちてきたボートに大声を上げて驚く。

「俺の領には大きな湖があるんだが、そこで使っている船だ」

「うゝむ……木じゃねえな」

彼が、FRPの船体をペタペタと触っている。

「俺が魔法で作り出した素材だ」

「こんなもんが作れるなら、あんたが船を作りゃいいじゃねえか？」

「あいにく、これ以上大きな船が作れなくてな。それに魔法のための材料も尽きてしまった」

もちろん嘘で、シャングリ・ラに売ってないだけ。

それに、これ以上デカイものはアイテムBOXに入らないし、俺たちが欲しいのは、漁船じゃなくて帆船だ。

「ふゝむ、俺たちが作る船と構造的には変わらねえ」

「古今東西、機能を突き詰めると似たようなものになるんだよ」

「このケツについているのは？」

「それは魔法で動く魔道具だ。そいつで風がなくても進むことができる」

「魔法で勝手に進むのか？」

「ああ、だが扱いが難しいので、もっと簡単に誰でも扱えるものを、あの男が作った」

俺はカールドンを指差すと、彼が軽く会釈をした。

それを見せるために、アイテムBOXから水の入ったプラケースを出す。

そこに船の模型を浮かべた。以前、マロウに見せたものと同じものだ。

魔石とコアモーターの組み合わせで、誰でも簡単に動力が取り出

せる。

問題としては魔石の確保があるが、それもスライムで光明が見え始めた。

船に魔石を入れて水に浮かべると、模型が水面を走り出す。

「魔石で動くのか?!」

「そうだ。これなら魔石さえあれば、誰でも扱えるってわけだ」
それを見たシュロが叫んだ。

「な、なんだと、マ、マロウ！ 昨日、あの話は出ていなかったぞ？」

マロウが、シュロの肩を掴んでニヤリと笑う。

いくら親しい間柄でも、切り札は最後まで見せない——そんな感じだろう。

性格が悪いというなかれ、お人好しでは世の中は渡っていけない。
俺も、お人好しだと散々言われているのだが、自分では厳しいつもりなのだが。

とりあえず俺の船をアイテムBOXに収納した。

「こんなデカイものが入るアイテムBOXとは……あんたがものを運べばいいじゃねえか」

「それもいいが、それに頼って俺が突然死んだらどうする？ 領民がいきなり路頭に迷うだろ」

「うぐ……そうだな」

「注文としては、さっきの船の2倍ほどの大きさの帆船だ。風のあ
る場所では帆で進み、風になったら魔道具で進む」

「うゝむ。それでアニス川を遡ろうってのかい？」

「そうだ」

「さっき、魔物避けって言ってたが……」

「正確にはスライム避けだな」
俺とアキラで、アニス川まで行って効果を試したことを説明してやった。

「あんたが、直々に行ったのかい？」

「魔法の効果やらは、直に見ないと解らないだろ？ それに俺のアイテムBOXがあれば、実験道具や宿泊の装備を運べるしな」

「解った——仕事を受けるぜ。俺は船大工のヒオウギだ。よろしくな」

「俺のことはケンイチでいい」

「それじゃよろしく、ケンイチ様よ」

一応、様は付けてくれるらしいが、彼がなにか考え込んでいる。

「どうした？」

「ああ？ アストランティアの近くに新しい領ができたって……」

「そこが俺の領だ」

「妙な魔法を使って、ワイバーンやらを倒して、陛下から領地をもらったという——」

「それが俺だ」

「ははあ、なるほどなあ。吟遊詩人のつまらん作り話かと思っていたら……本当にいやがるとは……」

彼の話には俺はピンときた。

「もしかして、女の吟遊詩人が歌ってたのか？」

「まあな」

あまりに荒唐無稽な話なので、この親方は信じていなかったようだ。

「ほんじゃ、仕事を受けてくれるっていうんで、お礼に酒をやる」
シャングリ・ラからブランデーのV S O Pを購入した——400

0円ぐらいだな。

ヒオウギは、俺が出した黒い瓶のブランデーを受け取ったのだが、栓の抜き方が解らないようだ。

「持ってひねるんだよ」

彼が蓋をひねると、ブランデーの栓が開いた。

それを鼻の所に持っていくとクンカクンカしている。

「こりゃ、たまらん匂いだぜえ」

「すごく強い酒だから注意してな。ドワーフに飲ませたら、彼らの火酒より強いと言っていた」

「ふん……」

鼻を鳴らしたヒオウギが、そのままブランデーをラッパ飲みした。

「プハッ！ これは、すげえ強い酒だな！」

流石に彼も驚いたのか、目を丸くした。

「だから言っただろ」

「なんだよ、こんないい酒があるなら最初から出しやがれ」
彼がジロリと俺を睨む。

「酒を出したら、すぐに受けてくれたのかい？」

「そりゃ気分によるな」

結局、酒は関係ないようだが、ヒオウギの酒を見てシュロがソワソワしている。

「ケンイチ様！ 恐れ多くも、私にもその酒を——」

「ああ、解った。お前には世話になっているから、帰ったら渡すよ」

「ありがとうございます！」

「わはは、シュロのやつも酒には目がないからな」

「ケンイチ様、この酒は市場には……？」

「これは出していない。贈り物に使っているだけだが、ドワーフたちが俺が教えた方法で酒を作っているの、それが市場に出回る可能性はある」

「はは、奴らが飲んで余った分だろうけどな」

アキラが笑う。

「まあ、その通りだよ。大量に作っても、マジで飲んじまうからなあ……」

ヒオウギと話していると、職人たちも集まってきたワイワイとやっていたのだが、そこにカールドンがやってきた。

「ケンイチ様。私の部屋をここに出していただけますか？」

「解った」

アイテムBOXから、カールドンの部屋を出してやる。

「「「おおっ！　こんなデカイものまで？」」「」」

「なんじゃこりゃ、鉄の箱？」

ヒオウギが、コンテナをベシベシと叩いている。

「彼の部屋として利用しているものだよ。領にある彼の部屋をそのまま持ってきたんだ」

「こいつはたまげた……」

「ケンイチ様、私はここに泊まります」

俺はカールドンの言葉に耳を疑った。

「えっ?!」

「ここにいる職人たちと、設計の打合せをしたいのです」

「確かに、それはそうだなあ。カールドンがやってくれば一番確実だ」

「おれも、さっきのコアナントカに興味がある。あんなのが船にくとなれば、天地がひっくり返る可能性がある」

「構造はお教えいたしますよ。簡単ですから」

彼の言うとおり構造は簡単だが、コアを作るときに魔法が必要なので、魔導師しか作れない。

「そりゃ、おもしれえ」

ヒオウギも断然乗り気だ。

頑固な職人だが、頭は堅くなく新しい技術にも貪欲らしい。

素晴らしいねえ。これは見習わないと。

爺になっても、どんどん新しいことに挑戦したいところだな。

俺たちはカールドンとマロウたちを残し、船大工の工房を後にすることにした。

「待たせたな」

車の所に女たちが待っていた。

「船は作れそう？」

「大丈夫だよ、アネモネ」

「カールドンがおらぬようじゃが」

アマランサスが、カールドンを探している。

「彼は残って、船大工たちと船の設計を検討するようだ」

「ほう」

そこにキキョウがやってきた。

「この親方は相当な難物なのですが、初めての人から仕事を受けるなんて」

「ははは、まあ、うちの領にもドワーフたちという難物がいるか

らな」

「そうじゃのう」

アマランサスが、自分の扇子でパタパタしている。

「え？ ケンイチ様の領にドワーフたちがいるんですか？」

「ドワーフだけじゃなくて、エルフもいるぞ」

「ええっ？！ エルフがいるんですか？」

「ああ、いるぞ——そうだ」

俺は、アイテムBOXからタブレットを取り出した。

エルフたちの写真がその中に入れてある。

「ほら、これがエルフだ」

「すごい！ これって絵ですか？ まるで生きてるみたい！」

キキヨウは、画像の美しさに感激している。

「エルフを見るのは初めてかい？」

「はい！ すごく細いですねえ。私なんて太ってるから」

女の子だと、そういうのが気になるお年頃か。

「そんなことはないと思うけどな。エルフは俺たちと違うから、彼らと比べるのは間違ってるぞ」

「でも……」

「ほら、エルフの男たちもいる」

「ふわぁ！ まるで女の人みたい……」

「この男の子が、彼と仲がいい」

俺はアキラを陰で指差した。

「え？ 本当ですか？」

キキヨウがひそひそ話をしている。

「本当」

「ケンイチ！ くつつきすぎ！」

アネモネが、俺とキキヨウを分ける。

金を出す商人たちも居残って打合せをするようだが、シュロは娘のキキヨウを呼んでなにやら話している。

どうやら、後で迎えを寄越すように彼女に伝えたようだ。

それじゃ俺は、明日になったらカールドンとコンテナハウスを回収すればいいんだな。

カールドンは明日の昼ごろの迎えを希望しているので、そのときにくればいい。

車に乗ったアキラから連絡が入る。

『ケンイチ、俺の車は空になったから、遊びに行っていいいか？』

「おお、いいぞ。また可愛い子を探しに行くのか？」

『はは、釣りだよ釣り』

なるほど、可愛い子を釣り上げるわけだな。

「オッケー！」

アキラの車は海に向かったようなので、本当に釣りをするようだ。

俺たちの車だけでシュロの屋敷に戻ると、獣人たちがいない。

アマナの話では、暇なので遊びに行ったらしい。

ベルとカゲが日陰で寝転がり、大きな口を開けてあくびをしている。

「旦那、仕事は上手くいったのかい？」

残ったアマナが暇そうにしている。

「ああ、大丈夫だ」

「ケンイチ様、そろそろお昼です」

コンテナハウスから、マーガレットが出てきた。

「それじゃ昼飯でも食うか。どうだ、キキョウも一緒に」

「ええ？ いいんですか？」

「いいけど、ゲテモノを出されて泣くなよ」

「大丈夫です！」

「プリムラとアマナ、手伝ってくれ。アネモネはパン焼きな」

「うん」

海岸で、黒狼とコウモリの唐揚げを作るって話だったが、シュロに差し入れてもらった海鮮が嬉しすぎてすっかりと忘れていた。

予定に戻って唐揚げにしよう。

獣人たちも食べたいだろうから、ちょっと多めに作るか。

皆で協力して、唐揚げを山のように作って食べた。

黒狼とコウモリの唐揚げも中々の美味だったな。

食事のあとはやることもないので、デッキチェアを出して庭でのんびり。

とりあえず、船を作るという仕事は上手くいきそうだ。

船の建造が終わったら、また来なくてはならないだろうけどな。

プリムラの話では——この主であるシュロは、マロウ商会で導入された伝書鳥に非常に興味を持っていたらしい。

すぐに取り入れたいと言っていたので、伝書鳥が導入されれば連絡はスピーディーに行われるに違いない。

——夕方。

マロウとシュロが馬車で帰ってきた。

馬車といっても、巷にあるような箱型の馬車ではなくて、オープンタイプの軽量化されたものだ。

軽くしないと坂道を登れないのだろう。

彼らの表情を窺うと、計画は順調に進んでいるようだ。
シュロに約束の酒を渡す。

「おおっ！　ありがとうございます！」

彼が、酒瓶を掲げて小躍りしてる。

彼らと今後の計画の打合せをしていると、アキラが戻ってきた。

「おい太公望、なにか釣れたか？」

「ウヒヒ、これこれ！」

彼が自分のアイテムBOXから、黒くて平たい魚を出した。

「え？　ヒラメかカレイか？」

「どっちでもないような」

どちらかといえば、アンコウのような魚がさらに平らになったような印象だ。

「これはソコオチバですね。美味しいですよ」

キキヨウが、魚の名前を教えてくれた。

ここで、あることに気がついた。

俺のアイテムBOXは、ものを入れるとアイテム名が表示されるのだが、アキラはステータスウィンドウが開けないため、それが解らないらしい。

アイテムBOXを持っている人は他にもいるのだが、アイテム名が解るってのは俺だけのチートなのか。

アキラと魚を見ていると、獣人たちも戻ってきた。

「おい、唐揚げを沢山作ったから食べてみる。美味しいぞ」

「やったにゃ!」「やったあ! 旦那、エール!」

「ケンイチ、俺もビール」

「この前、6本渡さなかったっけ?」

「ぜんぶ飲んじまったわ、ははは」

「あいよ」

アキラと獣人たちにビールを渡した。

食事は、アキラの釣ってきた魚を捌いて食ってみたのだが、ふにふにした柔らかい肉で刺し身では食えず。

鍋にしたら、いい出汁が出てうまかった。

——飯も食い終わって夜になる。

スライムの世話をすると、コンテナハウスのベッドに潜り込む。

今日、ダブルベッドの上で一緒なのは、プリムラだ。

「船を作ってもらえそうでよかったよ」

「はい!」

「それにしても上手くいくだろうか?」

「新しいことをするのに困難はつきものです。それを恐れていては、新しい道は開けません」

「そうだけどなあ。失敗したら損害がデカイような」

「それは、新しい商売に乗ったマロウ商会の責任ですから、ケンイチの責任ではありませんよ」

「そう言われてもなあ」

やはり気になるよな。

俺の道楽に沢山の人を巻き込んでしまったようで、気が引ける。

「それはいいとして——プリムラ」

「なんでしょう?」

彼女が俺の胸に顔を埋めている。

「君まで耳や尻尾をつけることはないんだが……」
そう、アマランサスの真似をしているのか、プリムラも耳と尻尾をつけているのだ。

「だって、ケンイチはこういうのが好きなのでしょ？」

「まあ——大好きなんだけどね」

そうして夜はふける。

————◆◆————

——船を建造するのが決定した次の日。
皆で朝食を摂る。

この街にやってきた最大の目的である、船の建造を頼むという仕事はクリアした。

現在、カールドンが船大工に泊まり込みで、設計についての打合せを行なっている。

昼になったら回収に向かわねば……。

残るは——この地方の領主であるハナミズキ男爵に会うという仕事が残っているが、当然いきなりアポ無しで行っても会ってくれないと思うし、少々礼儀知らずだ。

まあ面会が叶わなければ、男爵と顔見知りであるシュロに贈り物だけ預けて、帰路についてもいい。

シュロのツテを使って、男爵に面会を申し込んでいる最中なので、そのうち結果が出るだろう。

それまでは少々暇なので、屋敷の庭でまったりとする。

それにしても日差しが強い。

ベルとカゲは日陰で寝転がっている。

黒い毛皮は暑そう……。同じく毛皮を着ている獣人たちも暑いだろうな。

うちの女性陣も麦わら帽子や日傘を差したり、希望者には日焼け止めを渡す。

アマナはテントの中に潜り込んで日除けをしているようだ。

やることもないので、アイテムBOXからドローンを出して飛ばしてみた。

青い海と白い壁が並ぶ街の様子がよく分かる。

この映像を使えば、地図も作れそうだな。

「面白ーい！」

「街の様子がよく解りますね」

「ふむ、こんなものを王都で飛ばしたら、すぐに拘束されて牢獄行きじゃの」

アマランサスが物騒なことを言う。

プリムラも言っていたが、王都の地図ってのは軍事機密扱いらしいし。

遊んでいると昼になったので、車を出してカールドンを迎えに行く。

工房に到着すると白い壁についているドアを開けて挨拶をした。

「ちわー、カールドン迎えにきたぞ」

「おおっ！ お貴族様！ いいところに来てくれた！ こいつを連れて帰ってくれ」

どうしたのか、船大工の親方から泣きが入った。

「いえいえ、まだ聞きたいことが沢山あるのです。ケンイチ様、あと2日ぐらいお願いいたします」

「勘弁してくれえ！」

どうやら、カールドンのしつこさに、親方が音を上げたようだ。

彼の研究も大事だが、親方にへそを曲げられても困る。

親方にわびの酒を渡すと、カールドンとコンテナハウスを引き取った。

やれやれ。

親方のヒオウギも、カールドンに悪気がないことは理解しているので、あまり邪険にもできないのだろう。

いわゆる似た者同士だと思われるし。

カールドン車を車に乗せた。

「まあ、まだ機会はある。今回は諦めてくれ」

「そうですねえ。ちよつとがつつき過ぎましたか。でも、コアモーター技術には、大変興味を示していただけましたよ」

「それはよかった。船の推進機関の革命になるかもしれないからな」

「その通りです。そして海だけではありません。馬車に取り付けられれば、このケンイチ様の召喚獣とも互角に戦えるようなものを作ることが可能になるでしょう」

「そうだな」

技術ってのは発明は大変だが、なされると進歩は早い。

コアモーター技術が、この大陸の定番になる日も近いかもしれない。

——そして、2、3日シュロの屋敷に滞在したのだが、男爵と面会できるとの連絡を受けた。

よし——男爵に会ったら、今回の仕事は終了だな。

204話 領主の嫉妬

船の建造をするためにオダマキという港町にやってきていたが、それにもめどがついた。

カールドンが船大工の所に泊まり込み、設計の打ち合わせをしてくれたお陰だ。

彼は、まだ聞きたいことがたくさんあったようだが、船大工の親方に泣きつかれてしまう。

カールドンが根掘り葉掘り聞いたせいだろう。

なにはともあれ、俺がこの街にやってきた大きな仕事のとりあえずの目処はついた。

残る仕事はこの街の領主との面会だけだ。

現在、この街の本店であるシュロの仲介で、返答を待っているところだ。

前々から話を通してあったとはいえ、領主も忙しい身分ゆえ、すぐには返答はこないだろう。

シュロの屋敷に滞在して4日ほどたった、ある日――。

返答を持ってシュロが俺の所にやってきた。

「領主のハナミズキ男爵が会ってくれると？」

「はい、ケンイチ様の船の話にも、大変興味を持っておいででした」別に船の話は秘密でもない。

船大工たちにも、コアモーターを見せてしまったのだから、すぐにこの街の連中にも噂が広がってしまうだろう。

作りは単純なものだが、魔導具なので簡単には真似ができない。

元々はゴーレム魔法なので、魔法としてもかなり高等な部類に入るため、街の魔導師たちに作るのは無理がある。

幼いのに天才的な能力を発揮して、そんな魔導具を簡単に作れてしまう、アネモネが規格外なのだ。

さすがに領主の所に行くのに、皆でわいわいと押し掛けるわけにはいかない。

それに、この街の貴族街は崖の上だ。

そこに行くためには崖に設置された階段を上っていかなければならないため、いつもの車は使えない。

オフロードバイクなら階段も上れると思うが、街の人々も使っている階段で爆走しては、迷惑がかかるだろう。

いくら貴族になったとはいえ、あまり好き勝手な行為は慎まねばならない。

連れていくのは護衛のアマランススだけだ。

現在奴隷の身分である彼女を同行させることも、領主に許可を取ってある。

俺も貴族になったというのに、貴族というものに偏見があるようで、それを改めなければならぬと思ってる。

貴族イコール酷いものだという、元世界の刷り込みがあるようだ。マロウやプリムラから話を聞くと、そういう貴族もいるらしいのだが――シャガと結託して、プリムラをさらった貴族もいたしな。

ここの領主はそういう輩とは一線を画する人物らしい。

街を見ても繁栄しているし、政も上手く^{まっりして}いっており住民たちにも不満があるようには見えない。

能力のない形だけの貴族ではこうはいかないだろう。

位階は男爵なのだが、陞爵を何回も断っている変わり者らしいし。

「私も行くー！」

だだをこねているのはアネモネだ。

「はいはい、ダメダメ。大人しく待ってなさい」
「ぶー」

護衛の魔導師として彼女を連れていくことも可能だし、ゴーレムを使えば崖の階段も楽にあがることができるかもしれない。
車が使えらるなら、連れていってもいいのだがなあ。

まあ、アネモネには大人しく待っているように伝える。
頬を膨らませているが、彼女には了承してもらった。

難しい年頃だな。

女の姉妹もいなかったし、そういう経験もないので扱いが少々難しい。

一応、プリムラやアマナの意見を参考にして、アネモネの対応をしている。

アマランサスは特殊すぎて参考にならない。

いい服に着替えると、車で貴族街に向けて出発する。

崖の階段は車で走れないが、崖に行くまでは車が使えらる。

そこまで行ったら、アイテムBOXに車を入れればいいのだ。

一緒に商人のシュロと、娘のキキョウが同行する。

今日はアマランサスが助手席だ。

「ほんじゃ行ってくるよ」

「いってらっしゃいませ」

プリムラとマーガレットにお見送りされた。

ミヤレーとニヤメナたちは――ベルやカゲ目的で集まった獣人たちとなにやらもめている。

彼女たちが気になるが、時間が決まっているので俺は領主の所にいかなくてはならない。

獣人たちの仲裁は、アキラに頼んだ。

「アキラ悪い。頼んだ」

「オッケー。まあ、いつものあれだろ？」

「まあな。頼む」

獣人たちは、強いリーダーの下に群れたがる習性がある。

森猫を飼っていて、複数の獣人の愛人を抱えているなら、自分たちも——と考えるのは普通のことなのだ。

シュロ邸を出ると、青い空と白い雲の下、狭い通りを進む。

坂道には白い壁が連なり、この街の景色を彩る。

ちよつと横を見ると、アマランサスがニコニコしている。

「アマランサス、嬉しそうだな」

「それはそうじゃ！　ずっと聖騎士様の隣に座りたいと思うておったわえ」

「それなら奴隷じゃなくて、正室を主張すればいいだろ？　お前なら可能なはずだ」

「そ、それは……」

「まあ、なにか理由があるんだろうが」

「理由などないわえ。妾がそうしたいだけじゃ」

この会話は後ろにも聞こえていると思うのだが、シュロ親子にはなんのことだか解らないだろう。

アマランサスを助手席に寄せ、しばらく走ると切り立った崖が見えてきた。

崖を削り出し、白い壁と同じ材料で固めた斜めのジグザグが頂上まで続いている。

幅は1m半弱。なるほど、これじゃ小さな馬しか上れないな。荷物を担いで上っている獣人たちの姿も多い。

皆と一緒に車から降りると、鉄の召喚獣をアイテムBOXに収納した。

階段の下には、貴族たちの厩や車庫が並んでいる。

ここまで降りてきて、馬車に乗り換えるようだ。

「へえ、こりゃ凄いな。天然の要塞だ」

戦の防御のため——と考えればこういう地形に貴族街を作るのは理にかなっている。

元世界の城郭も丘の上などに作られたものが多々あった。

崖の高さは15mほどで、サクラにある崖より高い。

周りには白い鳥がたくさん飛んでおり、崖に巣を作って繁殖しているようだ。

「要塞——まさに、そのとおりじゃのう」

「サクラにある崖もこんな感じにして、上に貴族街を作ればいいかもしれない」

「ケンイチ様の領地も、このようになっているので？」

シュロがサクラのことを聞いてくる。

「ああ、すぐとなり高い台地があるんだが、かなり広い。アストランティアから見える台地の話は聞いたことがないか？」

「平らな山がずっと続いていると……」

「それだ」

「段差で身分を分けてある街というのは、帝国にもあるですよ」
キキヨウが帝国のことを教えてくれる。

棲み分けがしやすいのだろうが、でもこの階段を見ると移動が大変そうだな。

一緒についてきたシュロは脚が悪い。

階段の下にいた馬子に金を払い、階段を上ることができる小さな馬に乗せてもらうらしい。

ポニーのような馬がたくさんおり、人や荷物を運び階段を行き来している。

獣人たちに背負ってもらうのもありだろうが、そういうのに抵抗がある人もいるのだろう。

俺は平気だし、ここでは獣人たちが重宝されているとはいえ、彼らを下に見ている連中はそれなりにいる。

「帝国と貿易をしているから、帝国の情報も入ってくるのか」

「はい」

「俺の考えている船が成功して、もっと大型のものが作られるようになれば、貿易ももつとはかどるようになるぞ」

先頭を馬に乗ったシュロが歩き、そのあとを俺たちがついていく。

「なにせ、風を待たなくてもいいわけですからな」

シュロ親子が、海の航路について説明してくれる。

「月によって、風になることが多いですよ」

逆に嵐が来ると出港できなかったり、座礁の可能性がある。

沖には出ずに、ずっと海岸沿いを使って貿易をしているので、遭難することは少ないようだ。

「少ないけど遭難するってのは、なにが原因なんだ？」

「海獣です」

「海獣？ たとえば？」

「やっぱり、一番の脅威はシーサーペントじゃないでしょうか」

シーサーペント——海竜ってやつらしい。

空飛ぶドラゴンがいるなら、海にもドラゴンがいるってことか。

確かに、そりゃヤバイ。

階段の途中、背負子を背負ったムキムキの男の獣人たちとすれ違う。

半ズボンに簡単な革のベストを着ているが、彼らはこんな恰好が多い。

「おっ!？」

すれ違った瞬間、獣人たちが声を上げて、振り返った。

「なんだ？」

俺も上る脚を止めると振り返ったのだが、獣人たちが寄ってきて、交互に俺の身体をクンカクンカしている。

「これは森猫様の匂いか？」

森猫の匂いってのは特徴的なのだろうか？

「ああ、うちには森猫がいるからな」

「それにいい女の匂いもする」

「まあ、いい女もいるが」

「旦那の所に遊びに行ってもいいか？」

「はは、そりゃ困るなあ。いまでも獣人たちが押しかけてきて、困っているからなあ」

泊まっている所が、大店の商人であるシュロの所であると告げると、彼らは引き下がった。

「えっ!？ そんな偉いところに世話になっているとか……」

「俺は貴族だからな」

「こりゃ、おみそれいたしやした」

多少、見た目を良くしても、獣人の女の匂いをさせている男が貴

族には見えなかった——ということなのだろう。

それに荷物を運んだりしている獣人たちで、シュロの名前を知らない者はいない。

トラブルでも起こしたら、仕事がなくなってしまうからだ。

獣人たちに別れを告げると、再び階段を登り始めた。

しかし、森猫の匂いってやっぱりするんだな。

風呂に入ったり魔法で綺麗にする度に、ベルや獣人たちがスリスリするからな。

しかし、長い階段だ。

俺は祝福があるから、疲れると自動回復ヒールが働く——ただし腹が減る。

アイテムBOXから、カロリーバーを取り出してかじる。

「アマランサスは平気か？」

「問題ないわえ」

彼女はすぐ鍛えてあるからな。

それに以前にも考えたことがあるが、彼女にも祝福の力があるのではないかと考えている。

リリスは他の人に祝福を与える能力だが、アマランサスは祝福の力を自らに内包しているのではないだろうか？

「キキョウは？」

「平気です！ この街の住民は、生まれたときから坂道とともに生きてますから」

多分、足腰はかなり強いと思う。

10分ほどかけて階段を上った。

結構キツイが、毎日これをやっていたら相当体力がつくと思われる。

俺も毎日サクラの崖を上るべきか？

崖を上ったので再び車を出す。

100mほど離れた場所に城壁と門が見えるのだが、シュロの脚が悪いので、車に乗せたほうがいいだろう。

「ケンイチさまの鉄の召喚獣は便利この上ないですな」

「出したり引っ込めたり自由自在だからな」

「この街にもそのようなものがあればよいのですが……」

「魔導師なら許可があればゴーレムも使えるが」

「そのような魔法を使える大魔導師が、ここには滅多に来ませんし、建築にゴーレムを使いたいといっても、国の許可を取るのに何ヶ月もかかります」

「俺は辺境伯だからゴーレムは使えるぞ？」

「そうなのでございますか？」

俺の話を聞いたシュロが驚く。

ゴーレムの起動に国の許可が必要なのは皆知っているのだが、辺境伯がその権限を持っているのはあまり知られていないようだ。

「俺の所に小さな大魔導師がいるだろ？ 彼女は王都の大魔導師に

も匹敵する能力の持ち主だ」

「なんと、あの子どもが……」

「彼女は——子どもって言われるとすぐ怒るので、言わないように」

「う……承知いたしました」

「それに魔導具で船が進む仕掛けを見ただろ？ あれを馬車に使えば、馬なしで動かすこともできるようになる」

「本当でございますか？」

「ああ」

コアモーターのトルクがどのくらいか解らないが、変速ギアを開

発できれば、坂道も登れるはずだ。

それとも自転車の電動アシストのように、普通の馬車にコアモーターを使うか。

皆で車に乗り込むと、貴族街を目指す。

100mほどですぐに石で作られた門に到着する。他の地方と違うのは、石と石の間が白い目地で覆われているところか。

その城壁で囲まれた中に街があるらしい。

衛兵がいるので止められて、革でできたアーマーを着た兵士に覗き込まれる。

ヘルメットはかぶっていないが、手に槍を持ち腰には剣を差す。装備をつけていると暑そうだが、大丈夫なのだろうか？

「商人のシュロか？ この鉄の乗り物は？」

シュロは有名人で、ここにも出入りしているのだろう。門番にも顔を覚えられているようだ。

「これは辺境伯様の魔法で作られた、鉄の召喚獣でございます」

「召喚獣？」

「ケンイチ・ハマダ辺境伯だ。ここを治めるハナミズキ男爵に会いに来た」

俺の言葉を聞いた衛兵が直立不動になった。

「これは辺境伯様！ 連絡を受けております！」

こんな門番の所まで命令がちゃんときているのか。

この領地はキチンと成り立ってるなあ。

俺の力で、ここまでできるのだろうか？

どう考えても、リリスとアマランサスの手助けが必要だな。

さすが貴族街だ。庭付きの立派な屋敷が並んでおり、壁は白く屋根が赤い美しい建物が並ぶ。

下の街は四角く平らな屋根の家が多かったのだが、貴族街の建物には屋根がある。

広さはそれほど広くなく、大小合わせて30棟ぐらいだろうか。

「大分、他の地方とは趣が違うなあ」

シュロに聞くと――石で組んでから、上に化粧の白いコンクリートを塗っているらしい。

「そうじゃのう」

「赤い屋根は、どういう塗料を使ってるのか解るかい？」

赤い屋根が気になるので、後ろのシュロに聞いてみたが、キキヨウが答えてくれた。

「ケンイチ様、海から出る赤い石を砕いて混ぜているんです」
赤ってサンゴかな？

「それって貴重なものじゃ……」

「海に潜れば沢山あるのですが、加工が大変なので貴族様しか使っていませんね」

「まあ、普通の家なら装飾より、実用性が第一だし……」

街の中心にある、白い塀に囲まれている領主邸に到着した。

他の屋敷と同じく白い壁と赤い屋根が美しい。

門番に挨拶する。外の城壁の門番と同じように、革のアーマーを着込んでいる。

「ケンイチ・ハマダ辺境伯だ。ハナミズキ男爵に会いにきた」

「ようこそお越しくださいましたハマダ辺境伯様。領主様がお待ちでございます」

「ありがとうございます」

そのまま庭を車で進み、屋根のある屋敷の玄関に到着した。

黒塗りの扉が俺たちを出迎えてくれたが、まだ開かない。

車から出て、庭全体を見渡す。

普通の屋敷には花畑がある庭があるのだが、ここには何もない。
道の白い石畳の他には芝生のような緑が広がっている。

これはこれで綺麗だが。

芝生の青さに感動していると、木の扉が開いた。

出てきたのは、浅黒い肌をした黒いロングのメイド服を着た若い女性。

黒い髪の毛を上でまとめて、メガネをかけている。

男爵に会いにきたことを伝えた。

「どうぞこちらへ」

一階に入ると玄関ホールで両脇に階段がある。

色々と他の地方とは違い特色のある場所であるが、この作りは共通のようだ。

白いと言っても大理石ではないので、超豪華ってわけでもないとはいえ、やはり美しい。

床には赤い絨毯が敷かれており、紅白の対比も、日本人としてはなにやらおめでたい気分になれる。

ホール左側の客間に案内された。

ここも白い壁の部屋に赤い絨毯が敷かれている。

低い四角いテーブルとソファ、使われている材料は違うが、様式は似ているのか。

ここでは木材が貴重ということなので、家具などは内陸のほうが質がいいように見える。

ソファに座ると、メイドが白い器に入った飲み物を持ってきてくれた。

一口飲む――ミントのような口の中がスースー系の冷たいお茶だ。
シュロ親子と3人でお茶を飲むが、アマランサスは俺の後ろに立
っている。

メイドもひと目で彼女が奴隷だと解ったので、アマランサスの分
のお茶はない。

「少し飲むか？」

「……」

黙っているので、カップを彼女の口元に近づけて飲ませてやる。

「結構美味いよな」

「聖騎士様、奴隷にこのようなことをすると、品位を疑われますわ
え？」

「ははは、別に構わんよ」

貴族の品位なんて、俺にとってはどうでもいいことだ。

ミントか――ミントが欲しければ、シャングリ・ラでミントの苗
を買えばいいのだが、ミントは生物兵器とか言われるぐらいに爆発
的に増えるからな。

迂闊に植えることができない。

それをいったら、俺がスライム駆除で使おうとしている除虫菊も
ヤバそうではある。

お茶を飲みながら白い壁の部屋を見渡す。

「ここで使われる石灰の鉱山ってのはどこにあるんだ？」

「この貴族街から、数リーグ（5〜6 km）離れた場所にございま
す」

「この高台にあるのか」

「いいえ――高台を下ると崖があり、そこに洞窟があります」

街側は崖だが、反対側はなだらかな坂らしい。

「そこが鉾山になっているわけか」

「はい」

鉾山は海に繋がっており、石灰を運んでそのまま海に下り、船を使ってオダマキの街に持ち込んだり帝国へ輸出しているらしい。

話しながらお茶を飲んでいると扉が開いた。

入ってきたのは、金糸の黒い服に黒いマントをした30歳ぐらいの黒髪の男。

パット見、眉毛も濃く――気性の激しい熱血漢のように見える。

この街は、黒い髪の住民が多いな。

俺たちは、ソファアールから立った。

「ようこそおいでくださいました、辺境伯様」

「初めてお目にかかる。ケンイチ・ハマダ辺境伯だ。南でも評判のオダマキ領主に会えて、光栄だ」

男爵は、シュロ親子をチラリと見た。

彼らは知り合いなので、挨拶の必要はないのだろうが、男爵の目が俺の後ろにいるアマランサスに止まった。

「彼女は、俺の護衛の奴隷だ。事前に許可を取ってあったと思うが……」

「アマランサス様?!」

「久しいの、男爵」

「なぜ、アマランサス様が辺境伯様の後ろに?!」

「なぜ? 妾の身分が、今これだからに決まっておるわえ」

彼女は、自分の首にある奴隷紋を指差した。

それを見た男爵の明らかに敵意のある視線が俺に向けられた。

「別に私が強制しているわけでないんだが……」

「そのとおりじゃ。これは妾の意思である」

男爵が今にも切りつけそうな顔で俺を睨みつける。

剣は差していないので切られる心配はないだろうし、おそらく装備していたとしても――彼の剣よりアマランサスのほうが早いだろう。

2人の間に走る緊張に、シュロ親子があたふたして、なんとかとりなそうと口を開いたのだが――。

「あの……男爵様」

それを遮るように男爵が声を上げた。

「お引取り願おう」

「なれば仕方ない。贈り物だけでも……」

「……」

俺の言葉に男爵が「うん」と言わない。

これは無理だと悟り、キャンプ地に帰ることにした。

男爵は見送りもせず、早々に立ち去ってしまい、メイドだけが俺たちを見送ってくれるようだ。

玄関にラ○クルを出すと皆で乗り込む。

座席に腰掛けると、ため息をついた。

「ふう……」

「……」

アマランサスがじっと俺を見ている。

「男爵は、君になにか特別な感情があったのかもしれないな」

「言葉を交わしたのは数回だったが……」

数回でも1回でも、一目惚れという言葉もあるしな。

「成り上がりの俺に負の感情を持っているとか？」

「たとえばそうだとしても、陛下から辺境伯という位階を賜ったのだから。それに不満を申すのであれば、すなわち陛下への不忠」

「あの――辺境伯様、いったいこれは？」

「男爵とアマランサスが知り合いだったのだが、俺が彼女を奴隷にしているのが、気に入らなかったのだろう」

「なんと……」

そりゃ領主だからお城には行ってるし、アマランサスを知っているもおかしくはないと思うが、一発で解するというのは、やはり……。

「それってつまり、男爵様の嫉妬ってことですか？」

キキョウが核心を突く。

「まあ――そうなるかな？」

「男爵様とお知り合いって――その人は……？」

キキョウがアマランサスをじっと見つめている。

「男爵の機嫌のいいときにでも聞けばいい。だが、他言しないようにな」

「はい」

「しかし、男爵様の助力が得られないとなると、色々と面倒事が……」

シュロは商売の心配をしているようだ。

せっかくデカイ山を掘り当てたと思っていたら、いきなり落盤事故に遭ったようなものだからな。

「船を作るのを邪魔されるとか？」

「いえ、それはヒオウギが許さないでしょう」

あの親方は、相手が貴族だろうがお構いなしだからな。

「シュロの商會を巻き込んでしまつて、すまん。まさかこんなことになるとは……」

「男爵様も乗り気だったので……これでは……」

再び、崖の階段を3人で降り、足の悪いシュロは小さな馬に乗っている。

まさかの展開に、予定より時間が余つてしまったな。

せつかく出かけてきたんだ、なにか——そうだ。

「屋根に使っているという赤い石を見られるところはないか？」

「それなら、知り合いの商人が扱っておりますが……」

「そこに連れていってくれ」

「かしこまりました」

崖の階段を降りると再び車を出し、皆で乗り込む。

シュロの案内で、海岸沿いにある白い壁の倉庫にやってきた。

この白い建物が、倉庫兼店舗になっているようだ。

最初にシュロが倉庫に入つて交渉をしてくれる。

いきなり見ず知らずの者が行つても見せてくれないかもしれない。

まあ貴族の強権を使えばいいのだが——そんなことはあまりしたくない。

シュロが出てきた——オーケーのようだ。

彼と一緒に倉庫の中に入ると、中は真つ暗。

小さな窓から明かりは入ってきているので、目が慣れていないだけだろう。

倉庫の中には、なにか石のようなものが山積みになっている。

小山は4つ。

「あんたかい？　こんなものを見たいって言う物好きは？」

暗くて解らんが、日に焼けた上半身裸の男が出迎えてくれた。
黒くて短い頭には、はちまきらしきものをしている。

「ああ、内陸から来たから珍しくてな」

「は、ここじゃちょっと潜ればいくらでも採れるけどね」

「赤い馬車を見たことがあるのだが、こういうものが使われてるの
だろうか？」

「そうですね。これを入れた塗料は色褪せることがないので、野外
に置くものに重宝されておりますよ」

こういう輸出品もあるわけだが、塗料などは贅沢品なのであまり
売れないらしい。

手に取ってみる――平たい赤い石が積み重なって、崩れかけた達
磨落としのように伸びている。

「うゝん」

こいつは金にならないだろうか？

205話 これってサンゴ？

オダマキで船を作るのが決定したあと、最後の仕事であるこの地方の領主に会った。

初めてあった領主——ハナミズキ男爵は、好意的に見えたのだが……。

俺の後ろに立っているアマランサスを見て、態度を硬化させてしまった。

贈り物も拒否されてしまったので、領主邸を早々に立ち去ることになったのだが——。

カダン王家に絶対的な忠誠を誓っていて、王族を奴隷にしている俺を許せなかったとも考えられるが——。

ここの領主は長年の陸爵を断っており、王家ともっとも疎遠と言われているので、それはないだろう。

おそらくアマランサスに、なにか個人的で特別な感情があったに違いない。

それなら俺を許せないのも解る——とはいうものの、別に俺が彼女に奴隷を強制しているわけじゃないんだがなあ……。

アマランサスに止めてくれといっても聞いてくれないし。

領主邸を離れたあと俺は、貴族街の屋根の塗装に使われている赤い塗料の元を見に行った。

その物質の正体が気になるのだ。

聞いたところ、サンゴのようにも思えるし、もしそうならば金になる。

この世界では価値がなくても、アイテムBOXの買取で値段がつくかもしれない。

うまくいけば錬金術だ。

海岸沿いにある白い倉庫にそれは積まれていて、4つの小山を作っていた。

平たい赤い石が崩れかけの達磨落としのように、つながって伸びる物体。

色は本当に真っ赤——真紅だ。

確かに、こいつを砕いて塗料にすれば、綺麗な赤になるに違いない。

「これが海の中にあるのかい？」

「ああ、少し潜ればいくらでもあるよ」

店主の言葉を聞いた、俺の胸は高鳴る。

その中から1つを拾い上げた。

硬くて、ゴツゴツした手触り——本当に石みたいだな。

俺の様子を、隣にいるシュロが見ているが、不思議そうな顔をしている。

こんなものに興味があるなんて、変なオッサンだと思っているに違いない。

「これって1個、いくらだ？」

「銅貨1枚（1000円）」

安いな。

原料としては安いが、加工の手間がかかるので、でき上がった塗料などは高い。

男に銅貨を1枚払うと、アイテムBOXに入れシャングリ・ラの買取に突っ込んだ。

【査定結果】 【サンゴ原木 買い取り値段300,000円】

「ええ？ いちじゅう——30万円か？」

俺が上げた声に、店主の男とシュロが変な顔をしている。

こいつは文字通り金の生る木だ。元世界のものとは種類が違うが、サンゴらしい。

海の中には沢山あるので、この地方では価値がないものなのだろう。

1000円が30万円だから、300倍だぞ？

「これを加工して装飾品を作ったりしないのか？」

シュロに加工品のことを尋ねてみた。

「ええ？ 加工が大変ですし、そこら辺に転がっているものを磨いても、誰も買いませんよ」

道端の石を加工するようなものだからな。そりゃそうか。

「ここにあるのを全部くれ」

「ええっ?!」

店主が驚いたのだが、こんなものを大量に買うとは思っていなかったのだろう。

「俺は貴族で、地元で屋敷を建てるんだよ。ここの貴族たちみたいに屋根を赤く塗ってみたい」

もちろん大嘘だ。

「え?! 貴族様なのですか?! これはご無礼をいたしました！」

店主が急にペコペコし始めた。

まさか、こんなオッサンが貴族だと思わなかったに違いない。

ちよっと金持ちの商人ぐらいだと思っていたのだろう。

「ああ、構わん」

値段を聞く――1山銀貨2枚（10万円）らしい。

1個1000円で1山10万円なら、100個以上ないと割にあわないが、100個はあるように見える。

山が4つで金貨2枚（40万円）――それが、300倍になるのだから1億2000万円だ。

まさに鍊金術。

金に困ったらここに来て、このサンゴを買えばいい。

海に潜ればいくらでもあるっていうのだから、ドワーフたちにナイフを作ってもらより簡単だ。

店主に金貨2枚を渡す。

そこら辺に転がっているものが、金貨2枚になったのだから店主はホクホク顔だ。

俺は早速ゲットしたものをアイテムBOXに入れようとした――が入らない。

サンゴがただ積んであるだけなので、塊として認識されておらず、1個ずつしか入れられない。

「あちゃ……」

「ケンイチ様、どうかなされましたか？」

シュロが心配そうな顔をしているのだが、大したことはない。

「ああ、この山がアイテムBOXに入れられなくなてな、はは」

俺はシャングリ・ラを検索して、プラ製のパレットを買った。物を載せて、フォークリフトなどで持ち上げるあれだ。

皆の荷物をまとめる際などにも使っている。

パレットの大きさは約1m×1mで3500円。

そいつを10個買ったので、3万5000円だ。

得体のしれないものが、ガシャガシャと落ちてきたので、2人が

驚いている。

「店主、ちょっと仕事をしてもらえないか？」

「仕事ですかい？」

「俺はアイテムBOXを持っているのだが、この山をアイテムBOXに入れられないんだよ」

そこで、パレットの上にサンゴを5個ほど積んでみせた。

「こうやって、板の上にこの赤い石が載っていれば――」

パレットをアイテムBOXに収納すると、一緒にサンゴも取り込まれた。

「おおっ！　なるほど！　この板の上に赤い石の山を載せるって話ですね」

「ああ、銀貨1枚やるので、明日までにできるか？」

「いやあ――それだけでもらえるなら、お安い御用ですぜ。暇な奴らに声をかけて一杯おごるからって言えばいい」

「それじゃ頼むよ」

彼に銀貨1枚を渡した。

明日、またここに来ればいい。

場所は解ったから、シュロの案内がなくても大丈夫だ。

シュロと2人で倉庫の外に出ると、アマランサスとキキョウが待っていた。

「聖騎士様、面白いものがありましたかえ？」

「ああ、さすが場所が違うと面白いものが見れるな」

「ケンイチ様は屋敷を建てられるのですかな？」

シュロは、さっきの話を聞いていたからな。

「ああ、用意しようとは思っているのだが、民の住宅事情が逼迫していてな。そちらが最優先になっている」

「それでは、ケンイチ様はどこに住んでおられるのですか？」

「庭に、黒い鉄の箱があっただろ？ あれを並べて皆で暮らしている」

「なんと……」

「まあ、住めば都ってやつだよ」

「聖騎士様が魔法で作り出した部屋は、並の家より快適じゃぞ？」
気密性もしっかりしているしな。雨漏りはしないし。

ただ、直射日光が当たると暑いのが欠点だが、ゴザやシートでも屋根に被せれば大分違う。

「だが、明日ここに荷物を取りにきたら仕事は終わりだな。辺境伯領に帰らねば――」

「もう少し、ゆっくりしていけばよろしいのに……」

キキョウがつぶやくが、あまり領を留守にもできない。

「確かに、美しい景色と美味しい食べ物――名残惜しくはある」

そんなことをしていると留守をしてくれているリリスの機嫌が、限界突破してしまうかもしれない。

皆を車に乗せると、シュロの屋敷に戻った。

屋敷に戻ると、堀の外に獣人たちが増えていた。

騒ぎにならないといいんだが……。

「おーい、森猫を拝むのはいいけど、騒ぎにするなよ」

「あ、ケンイチにゃ！」 「旦那、こいつらに説明してやってくれよ」

「なにを説明するんだ？」

「俺たちが普通の獣人とは、ちよいと違うってことをさ」 「そうに

や」

「違うってことはないと思うが——まあ、貴族の愛人になった獣人
つてのは、あまりいないんじゃないのか？」

「ほらな！ お前らとは違うんだよ！ 帰れ帰れ！」 「そうにゃ！」
ニヤメナが相手にしているのは、主に獣人の女たちのようだ。

「ぎぎぎ——」 「ちくしょう！」 「少しくらいわけてくれてもいい
じゃんか！」

「分けたら減るだろ！ 旦那あ——ブラシをかけておくれよお」
ニヤメナが普段見せないような色っぽい顔をして俺に抱きついて
くると、腕を首に回してきた。

「ええ？ ここでか？」

「な～ん→」

ニヤメナが語尾の上がった聞いたこともないような変な声を出す。

「ふぎやー！ トラ公止めるにゃ！ その変な声はどこから出して
るにゃ！」

ミヤレーの毛が逆立ち、尻尾が太くなる。

よほど気持ち悪いらしい。

「な～ん→」

「ふぎやー！ 止めるにゃー！」

「解った解った」

ニヤメナの変な声は、ブラシをかけないと収まりそうにないので、
アイテムBOXからブラシを出す。

それはいいのだが、公衆の面前でブラシかけとかやっていいもの
なのか？

いつも人のいない場所でやっていたのだが……。
ニヤメナを後ろから抱いて腹をブラシしてやる。

ブラシが毛皮をなでるとニャメナが甘い声を上げた。

「なおおん」

その次は正面から抱いて、背中から尻尾をブラシ。

「なおおおん」

「ぎゃあああ！」 「くやしいいいい！」 「見せつけやがってえええ！」

塀の外の女たちは阿鼻叫喚——男たちは、美女の色っぽい仕草に今にも塀を乗り越えそうだ。

「ぎゃはは、バーカ！」

「あまり煽るなよ」

「なくん、旦那あ」

そこにベルがやってきた。

「にゃー」

「ほら、ベルもいい加減にしろって言ってるぞ」

「解ったよ」

ニャメナが俺から離れた。

ベルが塀の外にいる獣人たちの所に行くと、なにかを話している。それが終わると、獣人たちがぞろぞろと帰り支度を始めた。

「お母さん、いつもすまないねえ」

「にゃー」

騒ぎが収まったので、皆の所に戻るとアキラがやってきた。

「すまん。獣人たちが中々引き下がらなくてな」

「解ってる、ニャメナたちが煽りすぎだ」

「ちえ！」

珍しくニャメナが不満気な顔を見せる。

「ケンイチ！」「領主様はいかがでしたか？」

留守番していたアネモネとプリムラがやってきた。

アマナはテントの中で昼寝をしているらしい。

「それがなあプリムラ。話をする前に追いつ返されてしまったよ」

「え？ なにがあったのですか？」

彼女の表情が曇る。

ここの領主に不興を買ったとなると、マロウ商会としても商売がやりにくくなるかもしれない。

「詳しくは解らんが、どうやらここの男爵はアマランサスになにか特別な思いを抱いていたらしい」

「アマランサス様が奴隷の身分になっているのに激怒したと？」

「激怒ってわけじゃないが、怒っていたな」

「だから、アマランサスじゃなくて、私を護衛に連れていけばよかったのに」

アネモネはそう言うが、結果論だ。

ダリアの伯爵も、アマランサスを見て驚きこそすれ、怒ることはなかったからな。

俺が無理やり奴隷にしているわけでもないし。

ここの男爵がアマランサスになんらかの感情を持っていたのが想定外ってやつだ。

「まあ過ぎてしまったことは仕方ない。船の建造は決まったし、明日1日滞在して明後日の朝に発つつもりだが――マロウ商会のほうはどうだ？」

マロウと番頭は俺たちとは別行動だったが、積極的に物件を探していたようだ。

「支店に使える物件は何軒か当たりをつけましたので、番頭が残って手続きを始めます」

「彼だけがここに残るのかい？」

ちよつと可哀想だと思ったら違うらしい。

「はい、そのまま支店長になりますので」

「そいつは出世というか、栄転だな」

「はい」

彼は若い頃に見習いとしてマロウ商会に入ってくると、読み書きそろばんを覚えて、番頭から支店長まで昇りつめた。

結果を出せば出世して支店長にもなれる——そうなれば他の店員たちの励みにもなるってわけだ。

昼になったので飯を食う。

アイテムBOXから取り出した魚をアキラに捌いてもらい、カニをデカイ寸胴で茹でる。

カニの形はあまり変わらないようで、茹でると赤くなるのも一緒だ。

皆はカニをそのまま食っているが、女性陣の中でも獣人の2人は手をつけてない。

獣人たちは、食い物に関しては結構保守的だな。

俺はカニチャーハンを食いたくなったので、パックのご飯をシャングリ・ラから買った。

中華といえば中華鍋だろ。

ダリアに住んでいたときに買った中華鍋を取り出し、飯を炒める。

「おっ！ カニチャーハンか！ 俺も食いてえ」

「え？ アキラもか？」

「それって美味しい？」

「アネモネちゃん。美味しいぞお」

「それじゃ、私も食べる」

マジか——それじゃカニが足りないじゃん。

急遽シヤングリ・ラから、カニ缶を購入した。

街の市場に行けばカニを売っているのに、わざわざシヤングリ・ラで買うなんて——と思うが、今から市場に行って買っていられない。

アキラとアネモネに1個1200円のカニ缶と缶切りを渡した。
外国からの輸入物らしく、プルトップではない。

「缶切りが必要な缶詰って久々に見たぜ」

アキラがカニ缶を眺めている。

「早く開けてくれ」

「おっと！ そうだな」

2人にカニ缶を開けてもらい、チャーハンに投入。

辺りに炒めものの香ばしい匂いが漂うと、獣人たちが覗きにやってきた。

「なんだか、いい匂いがするにゃー」 「本当だぜ」

「お前ら、カニの姿が不気味だと言ってたろ？」

「バラして肉になったら、わからなくなったにゃ」 「そうそう」

チャーハンを食いたいらしいので、ちょっと待ってもらおう。

そんなに沢山は一気に作れん。

アキラにもう1缶、カニ缶を開けてもらおう。

「おし、できたぞ。とりあえず食ってくれ」

すぐに俺と獣人たちの分を作り始めた。

「おおっ！ カニチャーハンなんて久々だぜ」

「せっかく生のカニがあったのに、缶詰になってしまったがな」

「いや、これでも十分に美味しい」

「美味しい！」

アネモネも喜んでチャーハンを食べている。

「これは素晴らしいですわ」

「こ、これは美味しい！ 宮廷で出ても評判になるぐらいの旨さじゃないの！」

プリムラとアマランサスも満足そうだが、そこにマーガレットがやってきた。

「あのお……」

いつもすまし顔の彼女が、涎を垂らしている。

「解った解った、お前の分もか」

「ちよいと旦那あ！ あたしが寝てるうちに美味そうな飯を食うなんて酷いじゃないか」

匂いにつられて、昼寝をしていたアマナも起きてきたようだ。

やれやれ——さらにシャングリ・ラからパック飯を買って、チャーハンに投入した。

「……」

チャーハンを口にいったマーガレットが、そのまま固まって放心している。

「おい、マーガレット、どうした？」

「おいひいです……魂が抜けてました」

「そんなに？」

カニチャーハンをマーガレットが食べ始めた。

獣人たちはそのチャーハンに、赤い缶のカレー粉をぶっかけている。

俺からもらったカレー粉の缶を宝物のように持ち歩き、どんな料理にも振りかけて食べているのだ。

まあ、カレーチャーハンというものもあつたから、かけてもいいと思うが……。

「うみゃー！ うみゃーで！」 「これは、マジで美味いぜ！」

獣人たちはあまりご飯を食べないのだが、これは気に入ったらしい。

昼飯が終わると、そのままだったり。

ここに来てからは、夕方になるとちよつと涼しくなっていたので、そういう気候かと思っていたのだが――今日は、夕方になっても気温が下がらない。

そのうちマロウたちも戻ってきたのだが、汗だくになっている。

彼らはシュロ邸で寝泊まりしていて、俺たちとは別行動だ。

遊びにきたキキョウによれば、たまにこういう日もあると言う。

晩飯は、海の幸をメインにした寄せ鍋にしようとしたのだが――暑いので断念。

辛くて冷たいスープを中心にした料理にした。

スープは温かいものという固定観念がある世界だが、この暑さではさすがに無理だったようだ。

皆が暑さでぐったりしている中、毛皮を着ている獣人達が少々つらそうなので、水浴びをさせてやった。

獣人たちが裸になると、頭からザバザバと水をかぶり始めた。

モバイルバッテリーにつないだ扇風機で風を送ると――庭であぐ

らをかいた獣人2人が、口を開けて舌を出し風に当たっている。
彼らは汗をかかないが、長い舌には沢山の血管が集まり、そこで血液の温度を下げるができる。

「ふにゃー、天国だにゃー」「ああ、全くだぜ」

「そういう涼みかたをすると、かえって暑さが増すと思うが……」
その光景を見ていたアキラがつぶやいた。

「フヒヒ、毛を刈って、普通に服を着ればいいんだよ」

「にゃんて恐ろしいことを言うにゃ!」「そんなことになったら恥ずかしくて外を歩けねえ……」

俺も、プードルみたいなカットにしたらいいんじゃないかとちらりと思ったが、どうやらそれは論外らしい。

「あ、あの! それって魔道具でしょうか?」

キキヨウは扇風機が気になるようだ。

「そうだな。似たようなものを王家にも献上したから、そのうち巷にも出回るかもな」

「作るのが難しいのですか?」

「難しいというよりは、そいつはゴーレム魔法の応用なんだ」

「ゴーレムだと、国の許可が必要になりますね」

「そうなんだ。でも、ゴーレムコアだけの運用なら、許可をもらわずに使用できるようにお伺いを立てている最中ってわけさ」

アイテムBOXから小さなテーブルと小型のゴーレムコアを出して、魔石を近づける。

「あっ! 回り始めました!」

テーブルの上にコアがくるくると回る、不思議な光景。

非科学的だが、詳細を調べて理論を構築すれば、これも科学なの

かもしれない。

「こいつを台などに固定して羽をつければ、風を送るこいつになるってわけさ」

俺は、回っている扇風機を指差した。

「凄いですう！——でも、魔石が必要になりますね」

さすが商人の娘。目のつけどころがシャープだ。

現時点では魔石を手に入れるには、魔物を倒すしかない。

とても危険な仕事で、魔物を倒したとしても魔石があるとは限らない、割に合わない商売だ。

「こういうものが作れるようになると、魔石の消費がはね上がるからな」

「そうになると、魔石の値段も上がりますね」

キキヨウがなにか考えている。

「それも、なんとか解決できそうなんだが、マロウやプリムラからは聞いてないか？」

「いいえ……」

さすがに、仲がいいと言っても、そこまで教えないか。

「それじゃ俺の口からも言えんな」

「……私も辺境伯領に入れば、教えていただけるのでしょうか？」

「はあ？　なんでそうなる？」

キキヨウが迫ってくるので後退りをする。

「これって、もしかしたら凄いことなのでは？　世界がひっくり返るような……」

さすが大店の商人の娘だ。コアモーターが普及すれば、どうい

ことになるか理解したらしい。

「ちょっと待ちなさいって」

後ろに下がろうとしたら人にぶつかった。

「ケンイチ、まさか彼女に手を出したりしないでしょうね？」

俺の後ろにいたのはプリムラだ。

彼女の身体から溢れでる黒いものが見えたようで、ビビる。

「おわっ！ 大丈夫だよ。心配するなって」

「プリムラお姉さま！ 私にも教えてください！」

「これは商売の秘密ですので、キキョウでも駄目」

「そんな」

こんなところで企業秘密を漏らしたら、背信行為だからな。

彼女もバリバリの一流商人だ。情けなどで信条が揺らぐことはあるまい。

押しても引いても駄目なことが解って、キキョウも引き下がった。父親のシュロを通じて、マロウと交渉が行われるかもしれないが、それは商人同士の問題だ。

俺は、技術を開発するだけで、流通や商売はマロウに完全に任せてしまっているからな。

最後にでき上がった料理をカールドンの所に持っていく。

「おおっ！ こいつは美味しい！」

「カールドンも、結構いろんなものを食べるよな」

「常識などで括ってしまっっては、見出せないことが多々ありますので」

彼は、ゴーレムⅡ人形という概念を打ち破って、コアモーターを作ったのだから、その言葉には含蓄がある。

「扇風機は、商人にも評判がいいぞ」

「ここは気温が高めですからな。需要が望めるでしょう」
彼がカニチャーハンを頬張っている。

「別にコアモーターじゃなくても手回しで作ればいいのに」

「その扇風機ですが、ケンイチ様！」

「うん？　なんだ？」

「扇風機の羽の向きを逆にして横倒しにすれば、ケンイチ様の空飛ぶ召喚獣のように、空を飛べるのでは？」

そこに気づくとは、やはり天才か。

「重量と出力の兼ね合いになると思うが、飛べると思うぞ」

「やはり！」

カールドンが勢いよく飯を食い始めた。

彼なら、俺の使っている技術の秘密を全部解いてしまうかもしれないなあ……。

—————◆◆———

——それから1日滞在して、サクラに帰る日がやってきた。

堀の所には、朝から獣人たちが来てワイワイしているのを、朝飯を食いながら眺める。

ベルとカゲは、お祭りの神輿みたいなもんか。

朝飯のあと、コンテナハウスなどを収納して出発の準備をしていたのだが、街が騒々しい。

「ケンイチ、街がなんかおかしくないか？」

アキラも感じてるらしい。

「旦那、なんか騒ぎみたいだぜ」「あちこちから大声が聞こえるにや」

獣人たちが耳をくるくる回している。

出発しようと思ったが状況がつかめない。少し様子をみたほうがいいか……。

マロウ親子を呼ぶ。

「マロウ、ちょっと待っててくれ。街の様子がおかしい」

「そうですね。なにかあったのでしょうか？」

「帝国軍が攻めてきた？」

アネモネが物騒なことを言う。

「それはないと思うがのう」

「そうだなあ、ブリュンヒルドは冷淡ではあるが、野心があるタイプではないし」

アキラがアマランススの意見に同意する。彼は帝国皇帝を個人的に知っているからな。

彼女は実の母親である前皇帝を殺害したが、暗殺されそうになったので、殺られる前に殺ただけだと言うし。

本人は皇帝の椅子には、あまり執着していなかったらしい。

しばらく様子を見てみると、シュロ邸に人がなだれ込んできた。

応対したシュロとワイワイと大騒ぎになっている。

そのうちシュロが青い顔をして俺の所にやってきた。

「どうしたんだ？ なにかあったか？」

「石灰の鉱山から、魔物が溢れたそうで……」

「ええ?!」

鉱山の一部がダンジョンとつながってしまい、魔物が溢れてしま

ったようだ。

こりや、手伝いに向かったほうがいいだろうか？

206話 鉾山に向かう

南の港町オダマキにやってきている。

船の建造にも目処がついたのだが、この地方の領主を訪ねると、すぐに追いつ返されてしまった。

どうやら、この領主――ハナミズキ男爵は、アマランサスになにか特別な感情を持っていたようである。

そりゃ、自分の想い人が奴隷になっていたりしたら、相手の男を許せないかもしれない。

はつきりと彼に聞いたわけではないが、おおよそんな感じだと直感したのだが――。

男爵とのことは残念だったが、仕事はこなしした。

あとは帰るだけだったのだが――街が突然騒がしくなった。

俺が世話になっているシュロの屋敷にも多数の人々がやってきて、大騒ぎをしている。

シュロが俺の所にやってきた。

「石灰の鉾山がダンジョンと繋がったらしく、そこから魔物が溢れてきたと……」

「ええ?! そりゃ大変だ!」

「ケンイチ、どうする?」

アキラが俺の所にやってきた。

「まさか、見て見ぬ振りで帰るわけにもいくまい」

「そうだよなあ」

マロウとプリムラを呼んだ。

「悪いが、聞いての通りだ。ちょっと様子を見てくる」

「はい、お気をつけて」

プリムラが心配そうな顔をしている。

「鉱山から魔物つてのはよくあるのか？」

マロウに話を聞く。俺はこの世界の常識に疎いからな。

「そうでございますねえ。運悪くダンジョンにつながるということはたまにあるようですよ」

「アキラ、帝国ではどうだ？」

「ああ、たまにあるぜ。スタンピードで近くの街が減んだり」

「ええ？ そんなにワラワラ出てくるのか？」

「そういう奴らには、デカイ中ボスみたいのがいるんだよ。そいつを仕留めればいい」

中ボスなんてゲームみたいだが、アキラが言うんだ、本当にいるのだろう。

中ボスがいるなら、もしかして大ボスもいるのか？
考えたくもないが……。

「それじゃ、オダマキもヤバいんじゃない――」

「あわわ………いったいどうすれば………」

シュロが悪い脚でウロウロしている。

「アキラ、悪いが頼まれてくれるか？」

「はは！ まっかつせつなっさっい！」

「ウチらも行くにゃー！」 「おうよ！」

戦闘といえど獣人たちも欠かせない。彼女たちも参加するようだ。

「行くに決まってるでしょ！」

「当然、妾もじゃな」

アネモネは鼻息を荒くしている。

アマランサスは俺の護衛ということになっているので、当然ついてくるだろう。

「みゃー」「にゃー」

カゲとベルも行くらしい。

マロウ親子とアマナは留守番だな。

「旦那、大丈夫かい？　なんか旦那の行く所、騒ぎばかりなんだけど」

「大丈夫だアマナ。心配するなって」

皆と打ち合わせをしていると、カールドンがコンテナハウスから出てきた。

「ケンイチ様。なんの騒ぎですか？」

「石灰の鉱山がダンジョンと繋がって、魔物が出てきたらしい」

「はあ、そりゃ運が悪いですねえ。ここの重要な産業の一つなのに……」

「要は、穴を塞げばいいんだろ？」

「それはそうですが――魔物を掃討する国軍を投入するまで、ここが保ちますかね？」

「ええ？　国軍まで入れる必要があるのか？」

「規模によりますが、地方の騎士団では荷が重いと思いますが……」

このオダマキは、王都から一番遠い領だ。

一番脚の速い獣人の飛脚を使って、王都まで1週間。

国軍がここに到着するのに、早くて1ヶ月半はかかる。

そして、往復で3ヶ月も王都の防衛が薄くなると、果たして王家が要請に応えてくれるだろうか？

王国内で一番王家と疎遠と言われてる、この領のために。

「それは、ちと難しいじゃろうのう。普段から地方自治を豪語している男爵相手じゃ」

「そんなに自治に自信があるのなら、自分たちでやれと？」

「まあ、そうじゃのう」

アマランサスが扇子でパタパタしている。

元王家の本人がここにいるのだから、そのとおりなのだろう。

あまり王家からも良くは思われていないようだ。

「強力な大魔導師でもいれば別でしょうけど、ここら辺でそんな噂は聞きませんし」

有名な大魔導師ってのは、大体居場所が把握されている。

大魔導師級なのに有名じゃない例ってのは、ウチのアネモネぐらいのもんだろう。

俺も変な魔法を使う魔導師ってくりになっているらしいが。

「男爵本人も王家のことはよく思っていないが、アマランサス個人には特別な感情があるようだな」

「らしいのう……」

「あの——そうなのでございますか？」

「らしいんだよ、困ったことに」

「はあ……」

「そうだとしても、貴族と王家のいざこざに民は関係ないだろ？」

街の皆が可哀想だ」

「そうなのう——国軍は無理でも地方の騎士団を集めて、討伐する命令は出すかものう」

それなら軍の展開は早いし、王都の防衛も薄くなることもない。

「それだと、タダってわけにもいかないだろ？」

「貴族たちから戦費やらを請求されるかも。払えなくば領地の割譲や、石灰鉱山の所有権の譲渡などを求められるかもしれない」
こういうときのためにも、仲のいいお友達ってのは必要なんだよなあ。

「それだけで済みますかね？」

カールドンが腕を組んで唸っている。

「――というと？」

「民に多大な犠牲者が出れば、不始末を責められて王家から領地を取り上げられる可能性も……」

「妾はやらぬが――アルストロメリアなら、やるかも……」

「貴族や王家のいざごさは放置して、なにがどうなっているのか確認をしなくてはな」

俺の言葉にカールドンが異を唱える。

「地元の貴族がいい顔しないのでは？」

「貴族のメンツなど知らん。街の皆が可哀想だ。皆！ 戦闘の準備しろ！」

「うにゃー！」 「俺はやるぜ！ 俺はやるぜ！」

獣人たちの装備をアイテムBOXから出してやる。

何が出たのか解らんから、フル装備だ。

アキラも、帝国の黒い制服に着替え、アネモネも青いローブを羽織った。

「ケンイチ、どうやって向かう？」

「崖の上からも行けるが――鉱山から海岸まで道があって、港から石灰を運んでいるらしい」

「――ということは、海で行けるってことだな」

「そっちのほうが早い気がする」

貴族街に上る道は、車が使えないしな。

さて誰かに道案内を頼みたいが、シュロは脚が悪いしな。

娘のキキヨウは女の子だ。

俺は、ベルと一緒に柵の所に集まっている獣人たちの所にいくと、彼らに声をかけた。

獣人たちは平均して戦闘力が高いし、逃げ足も速い。

「鉱山から魔物が出たって話なんだが、海から鉱山へ向かう道順を案内してくれるやつはいないか？」

俺の言葉に、獣人たちが顔を見合わせている。

「あたいが行くよ！」

手をあげたのは、俺が犬人から助けてやった三毛の女だ。

つり上がった目に三毛の毛皮、短いノースリーブと、半ズボンを穿いてへそを出している。

髪の毛は短いが、よく見れば頭も3色だ。

右耳が少し欠けているように見える。

「化け物が出ているって話なんだが、大丈夫か？」

「助けてもらったんだから恩返しはしないとね！ 森猫様にもいいところ見せないとダメだし」

俺の足下からベルが出てきた。

「にゃー」

「うへへ、それほどでもお——」

俺には聞こえなかったが——女が照れてくねくねしているので、ベルがなにか言ったらしい。

「みゅー」

デレている三毛の後ろから、小さな三毛が恐る恐る顔を出している。

三毛の女の子だ――5歳ぐらいだろうか。耳をピコピコさせてふわふわの毛皮に覆われている。

「なんだお前、子持ちだったのか」

「ふにゃー！　かわいいにゃ！」

子どもが好きなミャレーが目をキラキラさせている。

「おい、子持ちはマズいだろ。お前になにかあったらどうする？」

「大丈夫さ！　それに恩は返さないと獣人の流儀に反するじゃないか！」

三毛が譲らないのでアマナを呼ぶ。

「なんだい旦那」

「ちよつと、子どもの面倒を見てやってくれ」

「あれまー、こりゃかわいいねえ」

アマナも三毛の女の子を見て、完全にデレている。

確かに恐ろしいほどの破壊力だ。

俺ももふもふしたいところだが、今はそんな場合じゃない。

子どもの面倒はアマナに任せて大丈夫だろう。

「うし！　それじゃ行ってみるか？」

「――「おうっ！」「」」

俺とアキラの車を出して、アーマーなどの装備をつけた皆で乗り込む。

俺が飼っているスライムはカールドンに預ける。

案内をもらう三毛の女は、森猫たちとアキラの車に乗ってもらうことにした。

「も、森猫様と乗れるのは嬉しいんだけど、この鉄の箱って噛みつかないだろうね」

「大丈夫だから、さっさと乗れ」

「ふぎゃー！」

女がアキラに押し込められた。

彼は獣人の扱いが雑だ。家族に獣人のミャアがいるので、嫌いではないはずなのだが……。

車に乗るとアキラの所に連絡を入れる。

「アキラ、そっちで先行頼む」

『オッケー！』

『オッケーにゃ！』

『なんだい？ 声が聞こえるけど?!』

『気にするな』

無線機の声に三毛の女が驚いているようだ。

車の窓を開けてシュロと話をする。

「俺たちは、海から鉦山へ向かってみる」

「よろしくお願いいたします」

「地元の貴族たちはいいい顔をしないかもしれないけどな」

「そんなことを言っている場合ではありませんし」

「そのとおりだ」

貴族たちも同じ考えならいいんだけどな。

窓を閉めると、2台の車が出発した。

「おおっ！ 馬なしで動いている！」 「魔法か?!」

シュロのところに集まっている商人仲間が、車を見てワイワイと騒いでいるが、相手にはしていられない。

車は広い通りを下り、海岸にやって来た。

目指すは――俺たちが海岸沿いを走ってきたときにぶち当たった
栈橋だ。

白い石でできた栈橋が、真っ直ぐに海の中まで延びている。
皆で車から降りると、鉄の箱をアイテムBOXに収納。
栈橋を歩いていく。

「旦那たち、これからどうするのさ？ 船を借りるのかい？」
三毛の女が船の心配をしているのだが、事情を知っているウチの
獣人たちは「やれやれ」といった顔をしている。

「大丈夫だ。船もアイテムBOXに入っているからな」

「ええ？ 船まで持っているのかい？！」
栈橋の先まで行くと、船の停泊していない所を探して俺の船を出
した。

空中から、30フィートの漁船が落ちてくる。

この街で、こいつの2倍の大きさがある船を建造するのだが、そ
の大きさとアイテムBOXには入れることが不可能だ。

誰かに管理を任せるしかない――それがマロウ商会ってわけだ。

「本当に船が……」

「ケンイチのアイテムBOXにはなんでも入っているにゃ」「ちな
みに俺たちの全財産も入ってる」

なぜか、ミヤレーとニヤメナがドヤ顔をしている。

いや、そんなことをしている場合ではない。皆で船に乗り込む。

乗員数的には大丈夫だろう。

最初に獣人たちに乗ってもらい、補助してもらおう。

ミヤレーの手に掴まって、アネモネが乗り込んだ。

「ケンイチ、この船は海でも平気なの？」

アネモネが波に揺られている船の上で、ちょっと心配そうな顔を

している。

ここにいるほとんどが、海での航海は初めてだろう。

「こいつは、元々海用の船だから平気だ」

「そうなんだ」

「おほっ！ 久々の海だぜ！」

アキラがジャンプして乗り込んできた。

彼は久々の海に張り切っているが……。

「アキラ、海での運転は大丈夫だよな？」

「はは、無問題！」

ベルとカゲが乗り込んできて、最後に飛んできたアマランサスがふわりと船に脚をついた。

「あゝもう、なんかベタベタするにゃ」「毛皮まで塩辛くなっちゃまいそうだぜ」

ニヤメナの言葉に三毛の女が反応する。

「海で仕事するとき、毛皮が真っ白になって塩まみれになるんだぜ」「毛皮が傷むにゃ」

ピカピカの毛皮が自慢のウチの獣人たちは、海辺が苦手のような。な。

「妾の髪の毛もベタベタになりそうじゃ」

「後で風呂にでも入るか」

「そうじゃのう」

「私も入る！」

「そのためにも、さっさと片付けねえとな！ よっしゃ！ エンジン始動！」

アキラの掛け声で船の船外機が動き出した。

「ちょっと！ 船が唸ってるけど、大丈夫かい？！」
三毛の女がエンジンの咆哮にビビりまくっている。

「大丈夫にゃ」「心配するなって！」
出港の準備ができたので皆に注意を促す。

「よし、海は波があるからな。皆、シツカリと掴まれよ」
アキラが船外機の出力を上げると、船がゆっくりと棧橋を離れ始めた。

船は海岸に沿って並行に走るが、すぐに貴族街が乗っている岩盤の崖が見えてくる。

崖は岬のように海に突き出ているので、そいつを迂回するようにぐるりと回り込まなければならぬ。

「揺れるぞ！」

「アキラ、お手柔らかにな」

「ははは、落ちない程度に行くぜ！」
そういうと船は波間に飛び出した。

「おおおおっ！」

「ひゃあああっ！」

三毛の女が叫び声をあげた。

船は波の頂点から頂点へとジャンプするように進む。

「うにゃー！」「湖のときは、鏡の上を滑るようだったが、こいつは空を飛んでるぜ」

船が進むと波しぶきがかかる。

「塩だらけになるー！ しよっぱーい！」

「ははは、しゃーない。我慢してくれよアネモネちゃん」
別に操縦しているアキラのせいではない。
海だから仕方ないのだ。

「ウチは、2度と乗らないにゃ!」 「俺もだよ!」

獣人たちには不評だが、こいつはこの世界の他の船と違うからな。

「普通の船は、こんなに波しぶきはかからないと思うぞ」

三毛の話では、鉦山がある海岸までは6〜7リーグ（10kmほど）で、距離は船で商人から聞いたらしいので間違いないようだ。

船が時速30kmで進んでいるとすれば、20分で着く。

左手に延々と切り立った崖が見える。

崖はこのまま鉦山のある所まで続き、途切れて低くなっている場所
所に浜と港があるらしい。

「ケンイチ! なにかいる!」

アネモネが右手を指差した。

なにかヒレのようなものが見えている。

「なんだ? サメか?!」

「ああ、アレは大丈夫だよ。おとなしい海獣だ」

三毛が正体を知っているらしいが——おとなしいといっても、たまに遊びでぶつかってきて船をひっくり返すこともあるらしい。

「イルカみたいなものか?」

俺のつぶやきも、アキラにしか通用しない。

「ああ、そんな感じかもな。イルカはあんまり美味くねえし」

「いや、食うなよ」

「フヒヒ、サーセン。でも、とりあえず食ってみないと」

「まあ気持ちは解る」

「ケンイチ、イルカってなあに？」

アネモネはイルカという単語が気になるようだ。

「海にいる生き物で、とても頭がいい。この辺にはいないと思うが……」

「へえ」

右手に並走する生き物にヒヤヒヤしながら海を進むと、崖の切れ目に海岸が見えてきた。

「あそこだよ！」

「港が見えるな。人が集まっているようだが……」

「船で逃げようとしているんだろ？」

アキラの言うとおりだろうが、船が少なくてパニックになっているように見える。

この世界には何百人と乗れる巨大な船はない。
せいぜい数十人つてところだ。

「アキラ、栈橋は無理っぽい。砂浜にそのまま乗り上げてくれ」

「オッケー！」

「オッケーにゃ！」

アキラの操船で船で砂浜に対して直角に突っ込んで、乗り上げた。

「よし！ 皆降りろ！」

「にゃー！」 「やるぜえ！」

獣人たちは、前方宙返りをしながら船から飛び降りた。

三毛の女も一緒だ。

「わーい！」

アネモネとアマランサスに続いて、森猫たちも飛び降りた。

最後に船長のアキラが降りたので、俺は船をアイテムBOXに収納した。

岸から陸地のほうを見ると、途中から砂浜は切れて上り坂の草むらがずっと続いている。

その真ん中に道が開けているが、この道が鉱山まで続いており、採掘した石灰岩を運び出しているのだろう。

「はぁ、結構な上り坂だな」

「そうだな」

俺とアキラが話していると、そこにちょっと太った商人らしき男がやってきた。

緑色の服と帽子を被っていて、ちょび髭を生やしている。

「その船で私を運んではくれまいか?! その船……ないぞ?! 船は?!」

「ああ、俺のアイテムBOXに入れたんだよ」

「アイテムBOX? それはどうでもいい、私を乗せて街まで行ってくれ! 金なら出す!」

「いやいや、俺たちは状況を把握するために来たんだ。領主のハナミズキ男爵がどこにいるか解らないか?」

「領主様なら、上の方で魔物と対峙しておられる」

「そうか、それじゃそういうことで」

「待て! 待ってくれえ!」

俺たちが行こうとすると、背中にリュートのような楽器を背負った女が走ってきた。

黒く長い編み込んだ髪と、浅黒い肌。へそが出た赤くて短い服とズボンを穿いている。

「辺境伯様!」

「あゝ、えゝと。吟遊詩人の――」

「はい、いつぞやは大変お世話になりました」
女はペコリとお辞儀をした。

「え?! 貴族様!?!」

「はい! この方は、ケンイチ・ハマダ辺境伯様ですよ」

「へ、辺境伯様?! これは、ご無礼をいたしました!」

さっきまで威張っていた商人は、砂浜に這いつくばった。

「ああ、いいからいいから。それどころじゃないみたいだし」

「辺境伯様は、やっぱり魔物を退治をしにいらしたのですか?」

「うゝん、とりあえず様子見だな。俺は他所様だし、地元の貴族たちのメンツを潰しちゃうまいだろうし」

「そ、そんなことを言っている場合じゃないと思いますが」
皆に同じことを言われるが、俺もそう思う。

「でも、拒否されれば、俺たちは引き下がるしかない」

「辺境伯様が魔物退治を?」

商人は俺たちが歴戦だということを知らないからな。

「私が歌で歌っていたでしょ? ドラゴンを倒して王女殿下をお救いしたと」

まあ、ワイバーンもドラゴン的一种なので、間違いではない。

「ええっ!? あれは事実なのか?」

「当たり前じゃない」

吟遊詩人の女は商人のセリフに憤慨している。

「お前はなぜここに?」

「鉦山の慰安に呼ばれていたんです。それなのに魔物が出てきてし

まっ……」

「魔物って、どんなのか解るか？」

「チラリとしか見なかったのですが、骨の化け物みたいでした」

「骨――スケルトンか」

「ありゃー！」

魔物の種類を聞いたアキラが頭を抱えた。

「アキラのマヨネーズが一番効きそうにない魔物だな」

「そうなんだよ。あいつら火も効かねえし」

「まったく効かないのか？」

「そりゃ、骨が灰になるぐらいの火力があればべつだが――そんなのデキッコナイスだろ？」

「ああ」

そこにニヤメナが入ってきた。

「旦那たちがよく言っているデキッコナイスっていうのは？」

「俺たちの地元にいた偉人だ」

「そうそう」

「へえ」

もちろん大嘘である。

「騎士団の中に神官でもいればいいが……」

「アキラ、神官って帝国ではいたのか？」

「あまりいねえなあ。この世界は、宗教はあまり強くねえからな」

「街で、教会とかも見たことがないし……」

「そうなんだよ」

ここであれこれ話していても仕方ない。

なにはともあれ、現場に行ってみることにした。

「ここ、車で登れるかな？」

「大丈夫だろ」

アキラと一緒に車を出して、皆で乗り込んだ。

「あの！ 私も行きます！」

叫んだのは吟遊詩人だ。

「お前、逃げてきたのに、現場に戻るっていうのか？」

「辺境伯様の実際の活躍を目のあたりにできるなんて、またとない機会ですし！」

「言っておくが、危なくなっても助けてはやれんぞ？」

「心得てます！」

覚悟は完了しているようなので、アキラの車に乗ってもらう。

2台の車に分乗が完了すると、草むらの中にできた坂道の一本道を上り始めた。

海岸に集まっている人々が、坂を上っていく鉄の箱に大騒ぎをしている。

車は、坂道を物ともせず、ぐんぐんと上がっていく。

「すごいや！」 「こんな坂も上れるんだな！」

「すごい！ 急な坂道も上れる！」

助手席に乗っているアネモネがはしゃいでいる。

「これはすごいもの……」

アマランサスも感心しているが、こんな急斜面初めて——いや、地元の港町で上ったような……でも、あそこは舗装されていたしな。

「俺も初めて上ったよ」

TVの番組や、動画サイトですごい坂道を上る動画を見たことがあったが、自分でやる羽目になるとは……。

ラ○クルの頑張りも、崖のような急斜面が出てきて上れなくなつた。

道がジグザグのカミナリのようになっているのだ。

斜面は上れるのだが、コーナーで車が転回できない。
切り替えしても無理。

「ケンイチ、どうする？」

「しょうがねえ、一旦降りてくれ」

車から降りると、すぐに後ろにアキラの車がやってきた。
彼が窓を開けて叫ぶ。

「ケンイチ、どうすんだ？」

「一旦アイテムBOXに入れて、反対に向けて出す」
「なーる！」

車を方向転換させて再び出す。

バックカメラもあるし、バックでも上れないこともないと思うが――。

こんな坂道を後ろ向きで上りたくない。

アイテムBOXに入れたり出したりを2回繰り返すと、坂の上に出た。

アキラたちも、俺の真似をして上ってくると2人でガッツポーズ。
そこからはゆるい坂が続き、10分ほどで鉱山の入口が見えてきた。

「ケンイチ！ あそこ！」

助手席のアネモネが叫んだ。

鉱山の入口の前で、多数の兵士たちが沢山の白いなにかと戦っている。

甲冑を着た兵士たちも多いのだが、獣人達も多いようだ。

「あれは、おそらくギルドを通じて金で雇った傭兵だろうのう」

「それにしても人が多いな」

スケルトンらしき敵も多いが、兵士も多い——数百人はいるように見える。

「ここを突破されたら、貴族街へ一直線。貴族たちは全戦力を投入したのじゃろ」

ここで食い止めねば、真っ先に貴族街が破壊されてしまう。

逃げでもしたら全財産を失う。そりゃ貴族たちも必死になるはずだ。

とにかく戦える男は全員やってきたって感じだな。

その中で指揮をしている領主を見つけると——俺は彼の所に向かった。

207話 ゾンビアタック

南の港町、オダマキでの仕事を終え帰路につく予定だったのだが、街が騒がしい。

話を聞けば、この地方での重要産業である石灰の鉱山から魔物が溢れ出たという。

さすがに無視してこのまま帰るわけにも行かず、俺たちは石灰鉱山へ向かうことにした。

海を渡れば早いと思い、アイテムBOXから出した船で鉱山を目指す。

鉱山に到着すると、崖に開いた鉱山の入り口が見え、その前で沢山の者たちが戦っていた。

甲冑を着た騎士や、雇われたと思われる獣人達。

戦っている敵は、剣を持った白い骨――スケルトンだ。

敵がスケルトンと解って、歴戦の勇士のアキラは少々渋い顔をしている。

彼の必殺技である、マヨネーズが使えないからだ。

マヨから作る油を使った火攻めも使えない。

俺たちは車を降りると、アイテムBOXに収納。

軍を指揮している領主――ハナミズキ男爵の所に向かった。

「男爵！ ハマダ辺境伯、義を以って助太刀いたす！」

俺の突然の出現に彼はかなり驚いた様子だったが、周りに聞こえるような大声で叫んだ。

「手出し無用！ 外様には関係のないことゆえ！」

「おいおい、そんなこと言ってる場合か？！」

多分断るんじゃないかな〜と思っていたのだが、本当に断られるとは思わなかった。

「我らだけで片付けられる。辺境伯様は黙って見ておられるがよい」
2人のやり取りに吟遊詩人が声を上げた。

「あの男爵様！ 恐れながら申し上げます！ この辺境伯様は、ドラゴンを倒して王女殿下をお救いになられた方なんですよ！」

「なに？！」 「そのようなことが」 「確かに街の噂では……本当か？」

彼女が叫んだ言葉に、貴族たちが動揺している。

吟遊詩人の歌の噂を街で聞いたのだろう。

「我々が、吟遊詩人の戯言を信じるとでも思うのか？」

「そ、そんな……」

男爵の言葉に、周りの貴族や獣人たち、そして傭兵たちも笑い始めた。

やはり嘘か——そう思ったに違いない。

「それに、そのような勇者様にお手を煩わせるほどのことでもない。ゆるりと見物でも、なさるがよい！」

男爵がチラリとアマランサスのほうを見た。

このぐらいの敵はさっさと片付けて、彼女にいいところを見せたいのかもしれない。

さっきも言ったが、そんなことを言っている場合ではないと思うのだが……。

「おい、ケンイチどうする？」

アキラがやってきたが――。

「まさか無理やり参加するわけにもいかんだろう。しばらく見学だな」

「つまらぬ意地を張って、犠牲者を増やしてどうするつもりなのかえ」

「アマランスにいいところを見せたいんだろ」

「呆れたのう――そのようなことで、妾が心を動かすと思われておるほうが心外じゃ」

「いいじゃん旦那、見てようぜ。やつら意外とやるかもしれねえし」

「そうだにゃ。手出したら手柄を取られたと怒り出すかもしれないにゃー」

「いいの？ ケンイチ……」

アネモネは心配そうな顔をしている。

「まあ、手出し無用って言うんだから、様子を見ていよう」

「うん」

彼女の心配はもつともだが、少々離れた場所で見ていることにした。

幸い死人が出ているようには見えない。

俺とアキラで、戦いに備えてエナジードリンクを飲む。

「どうなるかなあ」

「さあな――さっきから見ているが、あまり数が減ってないように見えるがな、ははは」

アキラの言うとおり、戦っている人数は多いし、かなり倒しているように見えるのだが、数が減っていない。

半端に倒しても、バラバラになった骨がすぐにくっついて起き上がってくるのだ。

「アンデッドだから、死を恐れないしな」

「最初から死んでるっちゅーの！ ははは」

アキラのツツコミのとおりだ。

ゲームでゾンビアタックつてのがあったが、まさにそれ。

やられてもやられても突っ込んでくる。

男爵側が優勢に見えるが、そのうち徐々に息切れをしてくるのではないだろうか？

それに、やられた分が、鉱山から追加されているようにも見える。それで減ったように見えないのだ。

こういう戦いでは、貴族たちは戦闘に参加せずに後ろで見学——そんなイメージがあるのだが、ここでは皆が戦いに加わっている。

「そりゃ、ここを突破されれば、まずは貴族街が蹂躪されちゃうかな。やつらも必死だろう」

アキラがエナジードリンクを飲みながらつぶやく。

「そうすると全財産がなくなるにや」「旦那みたいに、全財産がアイテムBOXに入っているなら、いつでも逃げられるけどな。あはは」

獣人達が笑っているが、そのとおりだ。

大体金目のものは、すべてアイテムBOXに入っているが——サクラに屋敷などが建てば、俺もそれなりに失う財産が増えるかもしれない。

サクラに建てる屋敷のことを考えていると、俺のところに吟遊詩人がやってきた。

「あの、辺境伯様——見てていいんですか？」

「手柄を取られたと言われたくないしな。やつらも危なくなれば援助を要請してくるだろ？ 財産や命は失いたくないだろうし」

すごくもどかしいが、手を出すなど言われたんじゃ仕方ないじゃないか。

人でなしと言われるかもしれないが、ありがた迷惑って言葉もある。

しばらく黙って見ていたのだが、乱戦の中から3体ほどのスケルトンが俺たちの所にもやってくる。

そいつらは暇そうにしている獣人達にまかせた。

「うにゃー!」「おりゃー!」

獣人達が剣を振り回す。以前にも戦ったが、1個体はあまり強くない。

剣が当たるとすぐにバラバラになるのだが、しっかりと碎かないと骨が集まって元の形に戻ってしまう。

骨は結構硬く、碎くのは文字通り骨だし、下が地面だとショックを吸収してしまい上手く碎けないようだ。

俺はシャングリ・ラを検索して、5000円の鉄床と、3000円の両手持ちの大型ハンマーを購入した。

「こいつの上で叩いてみる」

獣人達が鉄床の上に骨を乗せてハンマーで叩き始めた。

粉碎された骨はさすがに復活しないようで、碎いた骨の中から石が出ると、スケルトンは動きを止めた。

出た石は魔石のようだ――ああ、こういう仕組みだったのか。

それじゃ、前に倒したスケルトンから魔石を回収し忘れたな。

過去の行動に俺は少々後悔した。

魔石が出るのは解ったが存在している場所はまちまちのようで、どの骨に入っているかは解らない。

こいつは厄介だ。

たとえば頭蓋に入っていると解れば、頭を碎けば終了なのだが。

「うにゃー！　こんな鉄床なんて、普通は持って歩かないにゃ」

「あはは、旦那だからできる芸当だよな」

「なんで、あの旦那はこんなのも持ってるの？！」

三毛も加わり、獣人達が笑いながら骨を砕く。

小気味よい音を立てて、骨が砕かれるのを見て――ふと、考える。
ダンジョンからスケルトンを吐き出す量を調整できれば、カルシウム鉱山として使えないだろうか？

それに魔物は剣を持っているから、鋼の鉱山としても使えるぞ。

アホなことを考えつつも、スケルトンの復活を遅らせる方法は解った。

背骨を1個砕けばいいのだ。

そうすると、上半身と下半身が合体できない。

上半身だけでは剣を振れないし、下半身だけでは、なにも怖くない。

スケルトンが消滅したあと残った剣も拾ってみたが――こりやなまくらだ。

ロクに切れないが、こいつで殴られたらそれなりのダメージは入ると思う。

数で押し寄せたら危険なことに変わりはない。

まあ、鉄の材料にはなると思う。

「にゃー」

黒い毛皮のベルとカゲが俺の所にやってきてスリスリしている。
ベルはやつらの心配をしているようだ。

「そう言うなお母さん。一応、やつらにもメンツはあるんだし」
「にゃー」

彼女は、人間のやることに呆れている様子。

俺もアホらしいとは思うが……。

たまにやってくるスケルトンを捌きつつ、戦闘を見守る。
戦っている中には魔導師もいるようで、ファイヤーボールの魔法を使う者がいた。

それが草むらに引火してモウモウと白い煙を上げている。
スケルトンは炎や煙を物ともしないが、人間はつらいだろう。

「魔導師、炎の魔法は使うな！　けが人の介護に当たれ！」
男爵が指揮をして、戦力差で押していた男爵軍だったが、疲れが見え始めたのか徐々に後退を始めた。

そりゃ、スケルトンはアンデッド、最初から死んでるんだから疲れ知らず。

カタカタと動き続け、このまま昼夜進撃とかもできるのだろう。
対する人間は疲れる、腹が減る、眠たくなる——ジリ貧で苦しくなるのは目に見えている。

「だ、男爵様！　もはや援軍を受け入れては？！」
指揮をしている領主の所に貴族たちが集まり始めた。
明らかな劣勢になったので、作戦の変更を求めているのだ。

「成り上がりの、あのような奴らに何ができると言うのだ！」
俺の耳に、男爵の言葉が聞こえる。

最初は好意的に見えたのだが、やはり心の奥ではそう思っていたのか。

まあ、そう思われてても仕方ないといえば、仕方ない。
成り上がりは事実だし。

「し、しかし、このままでは！」

「ええい！　アマランサス様が見ておられるのだぞ！」

男爵が発した予想外の言葉に貴族たちが慌てふためく。

「ええ?!」「アマランサス様?」「王妃様が?!」

貴族たちの目が、一斉にアマランサスの方を向くが――いや、今はそれどころじゃないと思うがなあ。

すでに前線が崩れ始めて、1人2人と逃げ出す。

「う、うわあああ!」「助けてくれえ!」

まるで決壊したダムのように、前線が一気に崩れた。

「こら! 逃げるな! 戦え!」

男爵の言葉も、逃げる兵士たちには届かない。

「アマランサス! 上位貴族の権限を使って、強引に介入できるんだよな?」

「もちろんだわえ。なぜ聖騎士様が、それをなさらぬのか疑問に思っておりますが」

「そりゃ俺は優しいからな。手を出すと言われてたら出さないよ」

「ほんに、聖騎士さまはお優しいわえ」

扇子で顔を隠している、アマランサスの目がいやらしく笑っている。

「アネモネ、奥の人のいない場所に爆裂魔法だ」
エクスプロージョン

「解った! むー! 爆裂魔法!」

スケルトン軍団の真ん中に青い光が集まると、赤い爆炎に姿を変えた。

巨大なきのこ雲が天を突き、魔法によって引き起こされた衝撃波が白い骨の敵を薙ぎ払う。

もちろん、こいつでスケルトンが死なないのは解っている。

ただの時間稼ぎだ。

「「「おおおっ！」」」

「このような魔法を使う高位の魔導師が！」

俺も久々の相棒を呼び出した。

「コ○ツ、戦闘バージョン召喚！」

黄色い車体のアームの先にアダマタイトの巨大な剣を装着した、鉄の戦闘魔獣が地を揺るがして落ちてきた。

「「「おおおっ！」」」

「あれはいったい！？」「鉄の魔獣?!」

貴族たちが突然現れた鉄の塊に慌てふためく。

俺はコ○ツさんに脚をかけると、男爵に告げた。

「ケンイチ・ハマダ辺境伯の名において、この戦闘に強制介入する。お前のためではない。あくまでも陛下の臣民のためだ。男爵、異存はあるまいな！」

「……」

男爵がこちらを睨んでいるが、もはやそんなことを言っている場合ではない。

チラリとアマランサスのほうを見ると、彼女が黙ってうなずいた。

俺は運転席に乗り込むと、エンジンを始動——黄色い鉄の魔獣が目を覚まし、咆哮を上げる。

座席にカゲも乗り込んできて膝の上に乗った。

「おい、そこに乗るのか？」

「みゃー」

「おっしゃ！　いくぞー！　コ○ツ大回転！　それは、闇から生まれた黒き不死者を輪廻に返す白き一撃！」

巨大な剣でスケルトンの軍団を薙ぎ払い、鋼鉄のカタピラでバキバキと踏み潰す。

さすがに重機の重量で踏みつけられれば、バラバラになって復活することはない。

「みゃー！」

カゲの声に合わせて、スケルトンがヒックリ返る。

彼の特殊能力、影車輪だ。

こういう理屈かは解らないが、敵をひっくり返すことができる。

地面に影がないとできないという欠点はあるのだが、これは使える力だ。

ヒックリ返った骨を重機を使って粉碎していく。

「「「おおおっ！」「」」

「こ、これは？！」

「これが辺境伯様の魔法ですよ！」

吟遊詩人が興奮した声を上げて、はしゃいでいる。

巨大な重機のパワーに貴族たちも驚き、逃げ始めた兵士や傭兵たちも戻りつつある。

崩れた群れも支えになる柱が生まれれば、再びそれを中心にして人々が集まり始めるのだ。

「にゃー！」 「おっしやあ！」 「おりゃ！」

獣人たちは、俺が渡した巨大なハンマーを使って骨を碎き、一緒に連れてきた三毛も奮闘している。

細身の剣が一閃、アマランサスが振った剣がスケルトンの胸骨を抜き砕いた。

これでもうスケルトンは元に戻れず、上下に分かれたまま。

それを獣人たちがハンマーで叩き潰し、そこに同じ得物を持ったアキラも参戦した。

「にゃー」

ベルが体当たりしてバラバラになったスケルトンを、アキラがハンマーを振り下ろして砕いた。

「スマン、ケンイチ！　今回、俺は役に立たねえわ！　フヒヒサーセン！」

「まあ気にするな。相手がアンデッドじゃ、しゃーない。車でロードキルしても復活するだろうし」

「まったく厄介な相手だぜ」

相手が普通の生き物なら、彼のマヨネーズは無類の強さを発揮するのだが、相手は最初から死んでいる。

死んでいるやつに窒息攻撃は効かない。

俺たちの会話の横で、青い光が再び集まり始めた。

「むー！　光弾よ！　我が敵を討て！」

マジックミサイル

アネモネの周りに顕現した4本の白い光の矢が、次々と発射されてスケルトンを貫通していく。

マジックミサイルが通ったあとが、1列にバラバラになったのだが、またすぐにくつつき始めた。

「むー！」

効果的な攻撃を与えられないアネモネがイラついている。

相手が魔物だということで、魔法の効きもあまりよろしくないらしい。

カゲがひっくり返しても意外と早く起き上がり、重機で踏み潰そうとしても逃げてしまう。

アンデッドのくせに、チョコザイである。

かなり踏み潰したりバラバラにしたのに、湧いてくる魔物に追いつかない。

「なにかいい方法はないのか？ 相手がアンデッドだしなあ……ア
ンデッドか、アンデッドってことは、死んでるんだろ？ ——もし
かして！」

俺はあることを閃いて重機から飛び降りた。

「カゲ！」

「みゃ」

カゲも一緒に降りてきて、俺の足下につく。

「奴らを、ひっくり返してくれ」

「みゃ！」

彼の声で、目の前に迫っていたスケルトンが一斉にひっくり返っ
た。

「よし！ 収納！」

俺が試したのは、スケルトンのアイテムBOXへの収納。

こいつらは死んでいる——つまり物だ。それならアイテムBOX
に収納されるはず。

俺の考えどおりに、スケルトンが目の前から消えた。

アイテムBOXの画面を見る——【骨格標本×1】

「骨格標本扱いかよ！」

思わず画面にツツコミを入れてしまった。

「ケンイチ！ なにをやったんだ？！」

俺の行動にアキラが驚いている。

「スケルトンを、アイテムBOXに入れたんだよ」

「あ？ あー！ なるほどなあ！ そいつは盲点だったぜ！ 収納！」

アキラのアイテムBOXにもスケルトンが収納された。

「アキラ、あまり入れると、車が入らなくなるぞ」

「そうだ！ やべえ！ それじゃ、アイテムBOXはケンイチに任せるわ！」

「よし！ どんとこいや！ 収納！ 収納！ 収納！」

カゲが特殊能力——影車輪でひっくり返して、俺がアイテムBOXに収納する。

そのコンビネーションで、どんどんスケルトンはその数を減らしていった。

「「「な、なんと、これは！？」」」

「こんなことが……」

貴族たちがあっけに取られて、いいところを持っていかれた男爵が、苦虫を嚙んだような顔をしている。

そこにアマランサスが行く。

「閣下、妾が聖騎士様の下にいる理由が解ったかえ？」

「くっ……」

彼女の言葉に男爵が膝をついた。

まあ彼のことはどうでもいい——それよりもだ。

「あとは、ダンジョンの中にいるのを仕留めないと駄目なんだろう？」

「そうしないと、どんどん湧いてきちまうからな」

アキラの話では、こういったダンジョンの中にはボスみたいのがいるらしい。

サクラの近くの洞窟に、巨大な蜘蛛が住み着いたことがあったが——あれは自然の洞窟に魔物が住み着いただけで、こういうのが本

物のダンジョンのようだ。

俺は、外に出ていたスケルトンをすべて収納した。

「おおい！　これから俺たちは中に進入する。誰か案内をしてくれ！」

傭兵たちが顔を見合わす。

当然、貴族たちがそんな仕事をするわけがないし。

「それじゃ、私が」

1人の犬人が手をあげた。

マズルが長く深い藍色の毛皮を着た、グレイハウンドのような細身の男。

革のベストとズボンを穿いていて、まるでモデルのよう。

元世界でも、モデルとして活躍できたかもしれないぐらいにスマート。

彼の案内で坑道内に足を踏み入れたのだが、俺たちと一緒に吟遊詩人がついてくる。

「おい、危険なんだぞ?!」

「こ、こんな英雄様の活躍が目の前で見られるなんて、またとない機会じゃないですか!」

「言っておくが、危なくなっても助けんからな」

「承知しております!」

吟遊詩人が、ふんす!　——と鼻を鳴らしている。

彼女は放置して、案内してくれている犬人と歩きながら話す。

「洞窟の中で発掘作業をしているのは、獣人たちが多いのか?」
「はい」

道の案内をする犬人に、うちの猫人の女たちが警戒している。

「大丈夫にゃ？」「犬人は信用ならねえ」「そうだよねえ」

実際、三毛は犬人にやられそうになってたからな。

彼女たちの見立てはともかく、この男は紳士のように見える。

暗くなってきたので、頭につけるLEDヘッドライトを皆に渡す。漫画やアニメのダンジョンというと、妙に明るくなぜか視界が開けているのだが、ここは明かりがまったくない真っ暗な世界。

坑道で働く人々は、魚油のランプを持って入るという。

獣人たちは、そのままで見えるのでヘッドライトは要らないだろう。

俺たちが出す光で十分に見えるはずだ。

暗くなってくると同時に気温が下がり始めて、ひんやりと空気が冷たくなってくる。

オダマキの外は汗ばむぐらいの常夏だったが、ここは天然のクーラーが利いているよう。

「涼しいにゃー！」「そうだな、クロ助」

特に獣人たちは暑さに弱いので、涼しい所は嬉しいだろう。

「貴族さま、それは魔道具でございますか？」

犬人の男がLEDライトを眩しそうにしているが、光が当たると目が光る。

「ああ、そうだ」

「さすが、貴族さまはすごいものを持っておられるのですね」

猫人の男たちのガサツさから見ると、この犬人はかなり紳士に見える。

猫人には、このタイプはいなかったな。

「猫人族が夜目が利くのは知っているが、犬人族も夜目は利くのだ

ろ？」

「はい、このぐらいの光があれば十分に見えます……なにか来ました」

彼の言うとおり、LEDライトの光に照らされた暗闇の中から、カタカタとスケルトンが姿を現す。

暗い場所で出会うと、それなりにホラーだ。

彼らの言うとおり、この奥で坑道がダンジョンと繋がっており、そこから魔物が湧いてきているらしい。

「ははは、学校の怪談で、理科室の骨格標本が動くってネタがあったが、それを彷彿させるな」

アキラがハンマーを振り下ろしながら、ヤケクソ気味に笑う。

ここは石灰岩なので、土の地面よりは衝撃が伝わりやすく、簡単に骨が碎ける。

「人体模型ってのもあったろ？」

「あったあった！」

昔の学校の怪談話をしながら、動く骨を叩き潰すとアイテムBOXに収納した。

「アイテムBOXですか？　すごいものですね。まさか魔物をアイテムBOXにいれるなんて」

一緒にいる犬人が驚いているが、中に生き物は入らない。

アンデッドは最初から死んでいるから収納できるだけだ。

それに気がついただけでも僥倖。

経験値が一杯になって、レベルアップしたようなものだ。

「まあな。俺も、アンデッドをアイテムBOXに入れられるなんて思わなかったよ」

彼と話していると、ミャレーが俺に抱きついてきた。

「ケンイチ！ 犬コロと仲良くなんてするんじゃないにゃ！」

「案内してもらってるんだから、そんなこと言うなよ。彼は中々紳士だぞ？」

「べえーにゃ！」

ミヤレーが舌を出すと、他の女たちが同調した。

「そうだよ、旦那！」 「あたいがやられそうになったの、忘れてるんじゃない？」

「やれやれ、これだから猫どもは……」

犬人が首を振る――紳士っぽいのだが、やはり節々に仲の悪さが窺える。

しばらくそのまま進み、暗い坑道の奥に開いた黒い穴が見えてきた。

ぽっかりと開いた穴から、再びスケルトンが姿を現す。

「うにゃー！」 「どっせい！」 「おりゃ！」

獣人たちが叩いてバラバラになった骨を、次々とアイテムBOXに収納する。

臨時で参加している三毛も中々戦闘力が高い。

収納した骨の中に魔石が含まれているものがあると、残された骨は直ちに活動を停止。

ただの骨にもどる。

ここから、スケルトンがやってくるのは間違いがないようだ。一緒にいつてきている吟遊詩人に確認する。

「おい、ここで戻ったほうがいいんじゃないのか？ えーと、名前

忘れた」

「ひどーい！ ポポーですよお！」

「ああ、そんな名前だったな。悪い悪い」

「もう！」

たんぽぽのポポだな。

それで覚えよう。

俺たちは武器を構えると、穴の中に踊り込んだ。

208話 ボスがあらわれた ▼ たたかう

南の港町オダマキで、仕事を終えて帰ろうとすると、鉱山から魔物が溢れたという。

無視して帰るわけもいかず、俺たちは鉱山に向かった。

この街の鉱山は石灰鉱山で、王国の各地にとどまらず海を伝って帝国にも輸出されている重要産業である。

海から回り込み鉱山に向かった俺たちを出迎えたのは、大量の動く骨――スケルトン。

慌てて助太刀に入るも、領主の男爵から拒否されてしまう。

そのまま黙って見ていたのだが、徐々に魔物に押され始めて、けが人も出始めたので辺境伯の身分を使って強制介入をした。

戦闘の中、俺はスケルトン相手にアイテムBOXに収納する裏ワザを発見。

そのほとんどを、アイテムBOXに閉じ込めることに成功したが、アキラの話ではこういうダンジョンには中ボスっぽいのがいるらしく、そいつを倒さないと魔物が無限湧きするらしい。

俺たちは鉱山の中を進み、ダンジョンの入り口らしきものを見つけ――その中に躍り込んだ。

俺たちを待ち構えていたのは、またしても骨。

カタカタと音を鳴らしながら、こちらに向かってきた。

「ひゃあああ！」

吟遊詩人のポポーが悲鳴を上げた。

「アネモネ、ここで火は使うなよ！」

「うん」

「そういえばなあ、洞窟でマヨ油に火を点けてなく、煙突効果で死にそうになったことがあったなあ、ははは」

「ここで使ったら、マジでそうなるだろ。カゲ！ ひっくり返せないか？」

「みゃ」

カゲが力を使ったようだが、迫ってくるスケルトンに変化はない。

「どうした？！」

「にゃー」

暗闇に溶け込んでいるベルの声が聞こえる。

カゲの能力は敵に影がないと使えない。頭につけているLEDライトだけでは、光量が足りないようだ。

それならば――。

「アネモネ！ 天井に光よ！^{ライト} の魔法を！」

「解った！ むー！ 光よ！^{ライト}」

彼女が魔法を使うと、天井に光の玉が現れて周囲を明るく照らす。暗闇で瞳孔が開いていたので、かなり眩しい。

「みゃ！」

カゲの声で、10体ほどのスケルトンが一斉にひっくり返った。

「おっしゃ！ 収納！ 収納！ 収納！」

ひっくり返った骨を次々とアイテムBOXに収納する。

「旦那！ あとは任せろ！」 「うにゃー！」 「おりゃ！」

ひっくり返っていないスケルトンもいるので、獣人たちに任せた。

「おい！ 剣だ！」

アイテムBOXから取り出したカトラス刀を犬人に渡す。

「おまかせを！」

カトラスを振りかぶった彼が、スケルトンの脳天めがけて刃を振り降ろした。

刃が正中線を通り、スケルトンが首の辺りまで真っ二つに。

「ほう！ なかなかやるのう」

それを見たアマランサスが、自分の剣でスケルトンを斬りつけると、頭から骨盤まで真っ二つ。

骨はそのまま崩れ落ちた。

さすがに、正中線から真っ二つにされると、上半身も下半身も復活できなくなるらしい。

ここにいるスケルトンは片付いたようなので、周囲を警戒する。

「お見事！」

アマランサスの剣捌きを見た犬人が、叫んだ。

「ほほほ、奴隷に称賛を送るのかえ？」

「首に奴隷紋が刻まれているとはいえ、元はさぞかし名のある剣士様なのでは……？」

「ほほほ、それはどうじゃろうのう」

「お前もなかなかやるじゃないか。いい男だし腕も立つ。女にモテるんじゃないのか？」

「いや、それほどでも」

カトラスを構え、尻尾をパタパタと振る犬人がポーズを決めると――その姿は映画スターのようだ。

「ケンイチ！ そんなやつを褒めるんじゃないにゃ！」 「そうだよ旦那！」 「お貴族様は、犬コロの味方なのかい！」

ミャレーとニャメナ、そして三毛も尻尾を振っているが、猫人と犬人とは尻尾を振る意味が違う。

猫人の尻尾ブンブンはイライラしているポーズだ。

「腕の立つのは事実だからな」

「にやにやにや！」

ミャレーの尻尾の動きが激しくなるが、腕が立つなら戦力になっ
てもらう。

「まあまあ非常事態だ。敵を倒すまで一時休戦といこうぜ」

アキラの言葉に獣人たちも納得したようだ。

ここで仲違いしても仕方ないしな。

皆で確認すると、石灰岩の洞窟を更に奥に進む。

ここは坑道ではないので、この先がどうなっているか誰も知らない。
い。

途中、地下水が溜まって浅い池のようになっている場所もある。

腰ぐらいの深さだが水は冷たく、それが奥まで続く。ちよつと手を
浸けただけでビリビリするぐらいに冷たい。

まるで氷に手を浸けているようだ。

「こんなところを潜ってスケルトンがやってくるのか」

「奴らは骨だから、冷たいとか感じねえだろうし」

「そうだな」

「しかし、こんな真っ暗で地図もないのに、よく魔物たちは出口が
解るな」

「あれじゃね？ 蟻みたいなフェロモンを出していて後を辿って
く——みたいな」

先発隊が残したフェロモンを辿って後続が続くのか。

アキラの面白い考えだが——スケルトンの動きを見ると、た

しかに蟻みたいな動きをしている。

骨だし、においも感じ取れないはずだから、本当にフェロモンってことはないだろうが。

冷たい水に、どうしようか悩んでいると、犬人がやってきた。

「貴族様、どうしますか？」

「俺のことはケンイチでいい——今、船を出す」

「船でございますか？」

俺はアイテムBOXから、ゴムボートを出した。

こいつの世話になりまくりだな。

多分、これからも出番が多いと思うが、よろしく頼むぜ。

ゴムボートをねぎらうと、冷たい水の中に放る。

「湖で使った、柔らかい船にゃ」

「船ですか？」

一緒についてきているポポーが驚く。

「冷たい水に濡れると、暖を取ったり毛皮を乾かしたりして時間が取られるからな。濡れないに越したことはないだろう」

ゴムボートを2台出して、地下の池を渡り始めた。

俺たちのボートには、アマランサスとアネモネ、ポポーも一緒。漕ぎ手は犬人がしてくれている。

先に行くボートには獣人たちとアキラ、森猫たちも一緒だ。

犬人と猫人の仲が悪いので、気を使わねばならない。

池は暗く奥まで続いており、ライトで照らしたところ全長は100mほどあるように見える。

「うひょー！ 冷てえ！」

アキラが手をつっ込んでいるのか、声が聞こえる。

「こんなダンジョンで船に乗れるなんてえ」

ポポーが洞窟内を見回している。

「ここを甲冑を着た騎士などが渡ったら、寒さで動けなくなるのではないかえ？」

「そうだろうな。そう考えるとダンジョンが作り出した防衛機構なのかも」

「ふむ、渡っている最中に攻撃でも受けたら全滅するかもしれぬ」

「この柔らかい船はすごいものですね、ケンイチ様」

犬人がオールで漕ぎながらゴムボートに感心している。

「俺が魔法で作り出したものだ」

「慰安にきていた吟遊詩人が歌う歌を誰も信じていませんでしたが、すべて本当なのでございますね」

「私は嘘なんて歌ってないのに！」

街の噂にポポーが憤慨している。

「俺は歌を聞いていないので、どれだけ誇張されているか解らんが、それに近いことはやった。ワイバーンを倒して、王女殿下を救ったのは事実だぞ」

「誇張なんてしていませんよ！」

「ははあ——おみそれいたしました」

2艘のゴムボートは黒い水面を進むが、獣人たちのボートの進みが速い。

ライトで下を照らすと、石灰岩の白い底が反射して見える。

「ふぎゃー！」

突然、ミャレーの声が洞窟の中に反響する。

「どうした！」

「旦那、スケルトンだ!」「あわわあ!」
ニヤメナと三毛の声が聞こえてくる。

「今、行く! 無理に戦うな!」

「うわあ!」

今度はアキラの声だ。

慌てて駆けつけると、半分沈没しかけたゴムボートが見えてきた。
胸の辺りまで水に浸かったスケルトンが、剣を振っている。

魔物が振る剣がゴムボートを傷つけたのだろう。

ボートの空気室は複数に分かれており、一気には抜けない構造になっている。

しかし、ボートの上では上手く戦えないし、カゲの力も使えない。

「くそ、どうすりゃ」

「ケンイチ! ゴーレムのコアを出して!」

アネモネがなにかを思いついたようだ。

「解った!」

アイテムBOXから、ゴーレムのコアを出して水に浮かべた。

「むー!」

空中に現れた青い光の粒子が水に溶け込むと、コアが水面を走り出す。

それが水面を滑ってスケルトンの所まで行くと、骨を包み込み奥に押し戻し始めた。

「やった! アネモネ、そのまま奥に押し戻してくれ!」

「うん!」

押し寄せる水によってスケルトンが塊となり、暗闇の中に押し戻されていく。

その隙に、俺は新しいゴムボートをシャングリ・ラから購入して、水面に浮かべた。

「ななな！ なんですか、アレ！」

ポポーが、俺にアネモネの魔法について質問をしてくる。

「彼女のゴーレム魔法だよ」

「ゴーレムって人型で……」

ポポーが身振り手振りを使って、人形の真似をしている。

「まあ、そういう魔法の新しい使い方だ」

新しいボートに皆を乗り換えさせる。

「皆、こっちに移れ！」

「ケンイチ、すまねえ！」

破れてしまったボートはアイテムBOXに収納した。

「うにゃー！ 冷たいにゃ！」

「はつくしよい！」

腰まで濡らしたニヤメナが大きなくしゃみをする、洞窟内に反響する。

そのまま、俺たちのボートが先行すると対岸が見えてきた。

そこにアネモネのゴーレム魔法によって押し流されたスケルトンが、ひっくり返って屍かばねを晒す。

いや、最初から死んでいるか。

「アネモネ、時間稼ぎに光弾を撃ってくれ！」

「うん！ むー！ 光弾よ！ 我が敵を討て！」
マジックミサイル

彼女の周りに現れた数本の光の矢が次々と発射されると、石灰の上転がっていた骨は辺りに四散した。

「チャンス！ 皆で上陸しろ！」

「よっしゃ！」

岸に這い上がると、バラバラになったスケルトンが集まり始めていた。

「くそ！ 収納！ 収納！」

骨をアイテムBOXに入れていくのだが、俺はあることに気がついた。

骨が集まっていくときに、ある骨を中心にして形が作られていくのだ。

試しに、そいつを真っ先に収納してみると――集まりかけていた骨がバラバラに崩れた。

こいつらの動力になっているのは魔石らしいが、そいつがどの骨にあるのか解らなかった。

「骨が集まっていく中心に魔石が入った骨があるっぽいぞ！」

「ああ！ そうにゃ！？」

「なるほどな！ そういえば、合体する中心になる骨があるみたいに見えるな」

アキラもそれに気がついたようだ。

「そいつを壊せばいいってことか！」 「そうと解かりゃこっちのもんだよ！」

ニヤメナと三毛が、その骨らしきものを見つけてハンマーを叩きつけた。

中から黒い石が転がり、集まっていた骨がくつつくの止めるとタダの白い骨に戻る。

「なんか、ゴーレムみたい！」

そういえば、アネモネが使うゴーレム魔法に似ている。

「多分、魔法の質としては似たようなものなのだろうな」
魔石がエネルギー源で、魔石が入っている骨がコアになるのだろう。

仕組みが解ったら、俺はそのコアになっている骨を見つけてアイテムBOXに入れればいいってわけだ。

「収納！」

全部のスケルトンがタダの骨に戻り、水場での戦闘が終了した。

「ヘックション！」

ずぶ濡れになったアキラがでかいくしゃみをする。

「災難だな」

「いやあ、すまねえケンイチ。今回、俺はマジでやくたたずだ」

「まあ気にするな」

彼が鼻をすすっているが、このまま進むのは少々マズい。
服を乾かすぐらいはしたほうがいいだろう。

俺は犬人に周囲の警戒を頼んだ。

「スケルトンが近づくと言がするから、解るだろう？」

「おまかせください」

「礼にこれをやる」

俺はシャングリ・ラから、犬用のチュールを買ってみた。

彼らを犬扱いするわけではないのだが、ミヤレーやニャメナが猫用チュールが好きなように、犬人には犬用チュールがいいのではないだろうか？

——そう思っただけだ。

「これは？」

「食い物だ、こうやってなめる」

スティックの封を切って彼に渡すと、少し匂いを嗅いでから舐め始めた。

「こ、これは美味しいですな！　なんという美味！」

目をキラキラさせて、犬人が尻尾をブンブンと振っている。

「口に合ってよかった。もう一本やる」

「ありがとうございます！」

犬人が尻尾を振りながら、辺りを警戒し始めた。

「ケンイチ、ウチにもにゃー！」　「旦那俺にも！」

「あ、こらこら、こいつは犬人用だから！」

「そんなわけがないにゃー！」

俺からミャレーがチュ○ルを奪い、ニャメナもそいつを舐めたのだが――そのまま無表情で固まっている。

「だから犬人用だと言っただろ。お前らは、こっち」

俺はいつも、彼女たちと森猫が食べているチュ○ルを取り出して猫人たちに手渡した。

「これにゃー！　ペロペロペロペロ」　「ペロペロペロペロ」

「それって美味しいのかい？」

質問してくる三毛にニャメナが黙ってチュ○ルを差し出した。それを啜えた三毛も、一心不乱に舐め始める。

俺はその間に、アイテムBOXからジェットヒーターを取り出して用意した。

モバイルバッテリーにつないで点火すると、轟々と温かい空気が

噴出する。

「アキラ、服を脱いでアネモネに乾燥してもらったほうがいいぞ」

「おお、アネモネちゃん、頼むわ」

「うん」

裸になりバスタオルを腰に巻いたアキラの黒い服を魔法で乾かす。

「乾燥！^{ドライ}」

乾燥の魔法は服を着たままでは使えない。

人体の水分まで抜いてしまう可能性があるからだ。

この魔法は、使い方次第では攻撃にも使えることになる。

この魔法によって、すぐに乾くと思ったのだが、魔法の青い粒子が服に染み込まない。

触っても濡れたままだ。

「アキラ、魔法が効かないぞ？」

「ああ、魔法を弾く素材だから———そういえば魔法で乾燥させたことがなかったな、ははは」

アキラが笑いながら、自分で服を持ってジェットヒーターで乾かしている。

獣人たちも服を脱ぐと毛皮を乾かし始めた。

毛皮のせいで裸には見えないが、尻をこちらに向けると、うねうねと動く尻尾の下にゴニョゴニョが丸見えである。

「温かい風が———辺境伯様、これって魔道具ですか？」

ポポーがジェットヒーターに手をかざしている。

「そうだ」

「皆で風呂にはいったときは、これで乾かすにゃー！」

獣人の女3人が温風の前でダンスを踊る。

「こりゃいいねえ！ 家にもこういうのがあればねえ」
三毛もジェットヒーターが気に入ったようだ。

獣人たちは、毛皮を乾かすのが大変みたいだからな。

「皆って……あの」

ポポーが顔を赤くしている。

「当然だろ？」

濡れた身体と服を乾かし終わったので、再び奥に向けて進み始めた。

幸い、1本道なので迷う心配がないのが救いだ。

そのまま10分ほど進むと、少々広い場所に出た。

天井も結構高い。

「ここってボス部屋っぽいが」

「そんな感じがするよな」

俺とアキラは、元世界の共通の認識を持っている。

彼は、いわゆるボス戦をしたことがあるらしいので、ここがそれっぽいと直感したようだ。

「旦那！ 奥になにかいるぜ！」

暗くて解らんが、獣人達は奥になにかがいるのを感じているらしい。

臨戦態勢のまま待っていると、奥から白くて巨大なものが、ガタガタと音を立ててやってきた。

現れたのは、洞窟の天井まで届くような巨大な骨。

俺たちの目の前には、大きな頭蓋だけが目立って見える。

図体はデカいが、骨だけなので重量はあまりないのだろう。

地面の震動などは感じない。

「なんの骨だ!？」

「こりゃ、ドラゴンかなにかじゃねえか?!」

「おそろくレッサードラゴンじゃの」

アマランサスのいうとおり、ドラゴンにしては小さいし、羽も生えておらずデカイトカゲのよう。

お城で倒したレッサードラゴンに似ているような気がする。

「ドラゴンゾンビってやつか？」

アキラの言葉に俺も乗った。

「そうだな!　それが近いかもしれん」

「ケンイチ!　こ、こんなのとどうやって戦うにや?!」 「旦那あ

!」 「ぎゃああ!」

歴戦であるウチの獣人達は冷静だが、初めての太物に三毛がパニックっている。

「きゃあああ!」

ポポーの悲鳴も響く。

「うわあああ!　き、貴族様!　いったいどうするんで?!」

冷静に見えた犬人もさすがにビビっているようだ。

「皆!　下がれ!　アネモネ、時間稼ぎの光弾を!」

「うん!　光弾よ!　我が敵を討て!」

撃ち出された光の矢が、ドラゴンゾンビの太ももに命中して、丸太のような骨が外れて転がった。

脚をなくした巨大な骨の化け物がバランスを崩して、地面に倒れ込む。

「コ〇ツさん、戦闘バージョン召喚！」

コ〇ツさんを出せるギリギリの高さに見えたが、ここで出してみた。

多分、目一杯アームを振り上げたら激突すると思われる。

運転席に乗り込みエンジンを始動させると、相棒が目を覚まして黒い息吹と咆哮を上げた。

「コ〇ツ大切断！ それは大地を割る、怒りの一撃」

アームの先に取り付けたアダマタイトの刃が、巨大なドラゴンゾビの頭蓋に向かって振り下ろされた。

こいつはアダマタイトってファンタジー物質だ。

ドラゴンの鱗だって切れるとか言われたんだ、このまま骨なんて真つ二つに———と思ったのだが、そうはいかなかった。

硬く乾燥した骨に、刃が弾かれてしまったのだ。

緑色の火花が暗闇に散る。

「げっ！」

俺の攻撃が失敗すれば、今度は向こうのターン。

そう決まっているわけじゃないが、こっちが隙を見せれば戦いの女神が向こうに微笑む。

白く巨大な頭蓋が、アネモネの魔法で飛んだ太ももを修復すると、ギザギザの歯をむき出してこちらに突進してきた。

「聖騎士様あー！！」

洞窟の中にアマランサスの声が響く。

彼女の戦闘能力でも、この巨大なゾンビには敵わないだろう。

敵は骨しかないので当然声帯もなく、大きな口を開けているが咆哮も聞こえない。

静かなる敵の攻撃に、確実な死の予感が俺に迫る。

「ちょ、ちよっと……！」

俺は脱出する間もなく、コ〇ツさんの運転席で硬直した。
迫りくる白い山がゆつくりとスローモーションのように見える。
皆との楽しい思い出が浮かんで消える――こりゃ走馬灯か？
いやいや、俺はこんな所で殺られるわけにはいかないだろ！

ハイプロテクション
「至高の障壁！」

山のような頭蓋の突進が、突如現れた見えない壁に阻まれた。
乾いた石が擦れ合うような、骨と骨がぶつかり軋む音が洞窟の中に響く。

攻撃を止められた敵が、怒りに満ちた大きな口を開いて黒い霧を吐き出した。

周囲が悪意に染まるように黒くなっていく。
それはアネモネの防御魔法をも侵食しているように見える。

「なんだ？！ 毒？！」

慌ててアイテムBOXから防護服を取り出そうとしたのだが、そこに黒い影が立ちふさがった。

「フシャア！」

洞窟内に響くベルの叫び声で、黒い霧が渦を巻き始めた。
彼女を中心にして、漆黒がかき消されるように中和されていく。

「はあはあ……とりあえず助かったか」

アネモネの最上級の防御魔法で突進は止まったが、防御するだけでは敵は倒せない。

ここで撤退する手もあるだろうが、ここでボスを叩かないと再びスケルトンが溢れて出てきてしまう。

なにか、いい手を考えろ——そうだ！

俺は運転席から飛び降りてアキラに叫んだ。

「アキラ！ 車を出してヘッドライトで照らしてくれ」

「わ、解った！」

アキラがアイテムBOXから車を出したので、俺もアイテムBOXからラ○クルを出した。

エンジンをかけなくても、ヘッドライトは点灯できるからな。

2台のSUV車から放たれたまばゆい光が、ドラゴンゾンビの白い骨を浮き上がらせる。

「カゲ！ これでやつをひっくり返せないか！？」

「みゃ！」

アネモネの防御壁が消えると、黒い影がドラゴンゾンビの足下に走る。

「みゃ！」

カゲの声とともに白い山が宙を舞う。

物理法則も無視した彼の能力に、骨の化け物がひっくり返るとバラバラになった。

白い石灰岩の地面に打ちつけられて、丸太のような骨が木琴のような乾いた音を出して転げ回る。

俺もそこに飛び込み、狙いを定めて叫んだ。

「収納！」

俺が狙ったのは、アダマントタイトの刃を跳ね除けた硬く白い頭蓋。それがアイテムBOXに吸い込まれると、骨でできた小山は活動を止めて沈黙した。

もうピクリとも動かない。

「やったか?!」

その言葉を叫んだアキラが慌てて口を塞ぐ。

口に出した単語がフラグだと知っているからだ。

それを聞いた俺にも緊張が走るが――なにも起きない。

どうやら、このボスを撃破したようだ。

収納した頭蓋にこの骨の山を動かしていた魔石が入っていたのだろう。

それがなくなったので、活動を停止したってわけだ。

「ふう……」

額の汗を拭い深呼吸をした俺に、アマランサスが抱きついてきた。

「聖騎士様 あ!」

「よしよし、もう大丈夫だ」

「ケンイチにゃー!」 「旦那 あ!」 「うにゃあああ!」

獣人たちにも抱きつかれて、もみくちゃにされた。

「ちょっと待てえ! なんでお前も旦那に抱きつくんだよ!」
ニヤメナと三毛が言い争いを始める。

「いいじゃないか!」

「よくねえ!」

俺に抱きついたまま行われる獣人たちの言い争いを止めた。

「こらこら喧嘩するな」

「やれやれ、これだから猫どもは……」

犬人も無事のようにだ。

俺は獣人たちを引き離すとアネモネの所に行った。

魔法を使い過ぎたのか、座り込んでぐったりとしている。

そりゃ、あんなデカイ魔法を連発したんじゃない。

「アネモネ、ごめんよ！　俺が不甲斐ないばかりに！　ありがとう助かったよ！　もう、チューしちゃうぞ！」

彼女を抱き上げ、抱きしめてキスをする。

「えへへ」

照れているアネモネのその横で、アキラが落ち込んでいる。
今回彼は、まったくいいところなしだったからな。

「にゃー」「みゃ」

「お母さんと、カゲもありがとうな！」

俺は森猫たちの首に抱きついた。

倒した敵をチラ見するが、車のヘッドライトに照らされた巨大な骨の塊は沈黙したまま――俺たちは、間違いなくボスの討伐に成功したようだ。

209話 おおっと！

南の港町にある石灰鉱山から魔物が溢れたというので、勝手に押し掛けて戦闘に参加した。

地元の貴族たちのメンツが潰れるとか、そんなことは関係ない。ここから魔物が溢れたら、港町の皆が困るじゃないか。

敵は多数のスケルトンだが、アイテムBOXに入れるという裏技を使って退治した。

退治したといっても、アイテムBOXに入れただけなので、活動を停止したわけではない。

アイテムBOXから出せば、また動き出す。

生き物じゃないのでアイテムBOXに入れられるし、入れても死なないのだ。

アネモネの感想だと、これらはゴーレムに近いものだという。

なるほどーゴーレムやロボットの類だとすれば、アイテムBOXから出せばまた動き出すのもうなずける。

雑魚のスケルトンを片付け、ダンジョンの奥で待っていたのは、巨大なドラゴンのスケルトン。

カゲの力を使って、白い山のような敵をひっくり返した。

大きな頭蓋を俺のアイテムBOXに収納すると、敵は活動を停止。俺たちは戦いに勝利した。

今回活躍してくれたのは、大きな魔法を使いまくってくれたアネモネだ。

彼女を抱き上げてキスをする。

ドラゴンの頭蓋を収納して動きが止まったということは、中に魔石があるに違いない。

外に出てから、そいつを取り出す必要がある。

それは山のように収納されているスケルトンも同じだ。

処理をするだけなら、ステータス画面のゴミ箱に投入すれば簡単なのだが、せっかく貴重な魔石が手に入るのに捨てるのはもったいない。

どこかで魔石を取り出す作業をする必要があるのだが――それは
おいおい考えるところとして、俺は点呼を取った。

「皆、大丈夫か？」

皆に確認するが大丈夫だ。

「獣人たち、アネモネを背負ってやってくれ」

「大丈夫だよ？」

アネモネはそう言っているが、フラフラだ。

顔は青ざめて、連発した大魔法でかなり消耗しているのは、目に
見えて明らか。

「ニャメナ」

「そうだよアネ嬢。黙っておぶられな！」

ニャメナが強引にアネモネを背中に乗せた。

彼女はちよつと不満そうだが、彼女のためでもある。

アネモネの頭をなでて、ナチュラル回復ヒールを使う。

「ふわああ」

青かった彼女の顔に、赤みが増してくる。
これで大丈夫だろう。

「こいつも収納しておくか。なにかに使えるかもしれん」
主がいなくなって動かなくなった巨大な骨格をアイテムBOXに
収納する。

「帝国にも骨を加工する職業もあるし、使えると思うぞ？」
アキラが骨の加工について教えてくれる。

「骨をなにに使うんだ？」

「よくあるのは、ボタンとかだな」

「ああ、なるほど……」

この世界には、プラスチックなどはない。

ボタンといえば木などが多く、高級なものは貝殻とかなる。
これだけ巨大なら様々なものの原料になるだろう。

「そうだ——」

試しにスケルトンをシャングリ・ラの査定に突っ込んでみた。

【査定結果 骨格標本 買取価格10万円】

買い取るんかい！ しかし、スケルトンの中には魔石が入っている
ので、これでは売れない。

魔石はシャングリ・ラに売ってないものだからな。

「この骨の化け物は奥から来たな。そこになにかあるのかもしれない」
い

「宝箱とかな」

「そういうのがあるのか？」

「ある」

アキラによるとあるらしい。

そういえば、サクラの上でスケルトン退治をしたときに、祠の中
に色々アイテムが入ってたなあ。

ああいう感じか？

なんのために、こんな仕組みになっているのか、不思議ではあるが……。

昔いた大魔導師やらが、遊びや嫌がらせのために、仕掛けた罠なのだろうか？

ちょっとはた迷惑すぎるが……。

先人たちの行いに、少々ぶつぶつと愚痴を言いながら、洞窟の奥に進む。

頭につけたLEDライトの光に、なにかが反射しているようでキラと光っているのが見えた。

「ケンイチ危ない！」

アキラが俺にぶつかってきたが、なにも危なくない。彼が、ふざけているのだ。

「アキラ、止めろって」

「フヒヒ、サーセン！」

「アキラは、活躍できなかったから拗ねてるんだよ」

ニヤメナに背負われているアネモネがそんなことを言う。

まあ確かに、今回の戦闘ではアキラはいいところなしかった。

「うおお！ アネモネちゃん！ 俺のことを解ってくれるのはアネモネちゃんだけや！」

アキラがアネモネの手を握ると、彼女が困った顔をしている。

「そういうことをしていると、レイランさんに色々と言っちゃうぞ」

「ははは、それは勘弁！」

「意外とアキラは、面倒なやつだったにや」

「面倒なやつ言うなや！」

アキラのツツコミが入るが、ミャレーの率直な感想だろう。本当にそういうやつはいるからな。

まあ、アキラのことはいいとして、キラキラがなにか確かめないと。

「辺境伯様、なんででしょう？ また敵ですか？」

ポポーが心配そうに奥を見ているが、中ボスは倒したし問題ないはずだが……。

「おーい、なにか音とか気配はするか？」

「いいえ、特になにも……」

ウチの獣人たちや、一緒についてきている犬人も耳を回しているが、特に気配はないらしい。

——とはいえ、罾があるかもしれないので、アイテムBOXからユ○ボを出した。

運転席に乗り込むと、辺りをバケットで突く。

罾があるなら、これで反応するはずだ。

ユ○ボの上部にはライトがついているので、そいつを点灯させた。光の中に浮かび上がったのは箱。

「た、宝箱？」

そう、それはもう、絵に描いたような宝箱。

ゲームの中に出てくるような、その形をしていた。

ユ○ボで近づいて周りを突いてみる。
なんともない。

「ケンイチ、ミミックのときもあるから気をつけろよ」

「ミミックか——聞いたことがあるが、ここのはどんなのだ？」

「箱に入ってるカニとかサソリみたいなやつだな。毒持ちだ」

「へえ？　そういうのもいるのか？」

ヤドカリみたいな感じか？

戦闘で活躍できなくても、彼は実戦経験豊富なので、こういう情報
報は重宝する。

ユ○ボのバケツで箱を転がす。

生き物なら、これで出てくるだろうが、なにも出てこない。

「よしケンイチ！　俺に任せろ！」

どうやら、アキラが開けてくれるようだ。

俺も重機を降りて加勢する。

「開けられるのか？」

「こんなの簡単な鍵だ。俺のパーティーにいたシーフに、鍵の仕組みを教えたのも俺だし」

アイテムBOXから、使えそうな道具を出し彼に渡す。

彼は太い針金をペンチで曲げ、それを使って箱を開け始めた。

アキラの横で、ベルとカゲが箱をクンカクンカしている。

開始して5分ほどで箱が開いた。

「やったぜ！」

「すごいじゃ！」　「アキラの旦那やるぜ！」

活躍できたので、アキラの機嫌も直ったらしい。

得意げに彼が箱から取り出したのは木の杖。

上部には、緑色の石が嵌っている。

でも、なにか不自然だ。

「ちょっと待て、この宝箱から、こんな長いものが出てくるのは不自然だろ？」

箱は普通の箱なのに、出てきたのは1m半ほどある長い杖。

「一種の魔法の箱だろ。アイテムBOXと似たようなもんだ」
アキラに言われて中を覗く――外の見た目と中身の広さが釣り合
ってない。

「こいつを解析できれば、部屋の中を魔法で拡張できるかもしれな
い」

「そうだな。ダンジョンなんかも、そういう魔法で広げられてるん
だぞ」

「そうなのか」

ダンジョンが見た目より広いつてのは、そういうことらしい。

ドラ○もののポケットか、空間拡張ってやつだよな。

SFなんかには出てくるが……本当にこんなことができるとは……
…。

発達した科学は魔法と変わりないっていうが、これは科学なのか？
この箱をカールドンのお土産にしたら、喜ぶに違いない。

「しかし、この杖は――？」

彼から杖をもらう。

こんな所にあるってことは、なんらかの魔導的アイテムだろう――
―と思う。

振ったり掲げたり、LEDライトの光を先端につけている緑色の
石に当てたりしていたのだが、あることを思い出した。

そういえば――俺のアイテムBOXは、アイテムを入れると名前
が表示されるよな。

「よし」

アイテムBOXに杖を入れてみると――名前が、【豊穰の杖】と
表示された。

「アキラ、豊穰の杖って知っているか？」

「お？ 帝国の公爵が持っていたぞ？ 使っているのは見たことがなかったが、1度使うと1年は豊作が約束されるとかいいうアイテムだったはず」

「へえ、魔法で空気中の窒素を固定するとかかな？」

「ああ、そういうのかもしれないねえな。原理は不明だが……」

いくら魔法でも、無からなにかを生み出すことはできない。

カリウムまで生み出すことができるなら、火薬を作りたい放題になるが……。

窒素だけでも固定できれば、蓮華やクローバーなどを植えなくても済むようになる。

もしかしたら連作障害もキャンセルできるのかも。
調べてみる必要がある。

今は化学肥料を使っているが、こいつがあれば俺がいなくなっても、肥料に困ることはなくなるな。

その前に、こいつを使える人間がいるかどうかって話になるが。そんなすごい魔法を使うなら、使う魔力の量も膨大なはずだ。すくなくとも、アネモネクラスは必要じゃないだろうか。

「これって俺がもらっていいんだよね？」

一応、アマランサスに確認を取る。

「それはもちろん、聖騎士様がお倒しになられたのですから、聖騎士様のものですわえ」

「よっしゃ！ やっぱ報酬があると、やる気が違うな！」

「まあ、なにもない時のほうが多いけどな」
アキラの話では、自然に発生したタイプのダンジョンには、こういうアイテムの類はないらしい。

——ということとは、ここは作られた人工的なダンジョンってこと

になる。

「辺境伯様！　すごいですう！」

ポポーが喜んでいるのだが、釘を刺す。

「この杖のことは歌うなよ？」

「えー？　なんでですかあ？」

「宝物があると解れば、襲ってくるやつらが出るかもしれん」

「そうですねえ」

「魔物退治の話は、どんだけ歌ってもいいからさ」

「解りました」

金は持っていない——というのに限る。

金があると解ると、ろくでもない連中がGのように集まってくるからな。

サクラにそんな連中がやってきても、即座に追い出してしまおうが。厄介なのは一見善人に見えるタイプだ。

もう、なにもないか、周囲を探索させる。

魔物の湧き出しも止まったようだ。

「ケンイチ！　こっちになにかあるにゃ！」

ミヤレーがなにか見つけたらしい。

その場所に行くと地面になにか模様が描かれており、一面を覆っている。

かなり大きくて、直径5mほど。

すぐに、ベルとカゲが走っていき模様の匂いを嗅ぐ。

「魔法陣だな、こりゃ。センセがいれば解るんだが……」

センセってのは、アキラの最愛の人——魔導師のレイランさんだ。

「どうやって使うんだ？」

「描かれた魔法陣に魔力を流すと発動する」

「非接触型の電子マネーみたいなもんか？」

「そうだな。魔力コンロも、鉄の板に描かれたこいつで動いてるんだぞ」

なるほど魔石からの魔力で回路が動いて、ものが温まるのか――一種の電子回路みたいなものなのかもしれない。

「しかし、こんな大きい魔法陣じゃ、流す魔力も半端じゃないぞ？
いったい、なんに使うもんなのか……」

アキラが考え込んでいるが、俺でも動かせるだろうか？

通常の魔法は使えないが、聖騎士になったということと魔力はある。

ナチュラルヒールみたいなものも使えるしな。

しゃがみ込むと魔法陣に触れ、力を流してみる。

病気やけが人に触れるときのように。

俺の期待どおりに、魔法陣を構成している線がうつすらと光り始めたが――なにも起きない。

もう少し力を入れてみる。

光が明るくなるが、なにも起きない。

まだ足りないのか？

それじゃ、フルパワーだ！

魔法陣の線が、暗闇に光る蛍光灯のようになったとき、周りに光が満ち溢れた。

「おい、ケンイチ大丈夫なのか?!」

「解らんが、もう止められん！」

アキラの声に後悔したときには、もう手遅れになっていた。

注がれた魔力によって、魔法陣が発動してしまったのだ。
光の粒子が徐々に増えていき、天に上るように流れていく。

辺りが真っ白になったと思った途端——俺たちは青空の下にいた。
真上には白い雲が流れており、鳥の声が耳に届く。

正確には、上に屋根らしきものがあり、その隙間から空が見える。
俺は直感的になにが起きたか理解して、自分のやった不用意な行為に血の気が引いた。

これは、他の場所に飛ばされたのだ。
とりあえず問題はないようだが、生存不可能な場所に皆を追いやる危険性もあった。

周りは背の低い薄い森で、木々の隙間の遙か彼方には山脈が白く連なる。

自分のやった愚かな行為に少々フラつきながら——足下を確かめて踏み鳴らす。

円形に作られた石畳の上に、洞窟の中にあったと同じ巨大な魔法陣が彫られていた。

「おおい、皆いるか?!」
慌てて確認してみると、皆がお互いをキョロキョロと確認していた。

「なにゃー!」「旦那、なんだよこりゃ?!」
ニヤメナに背負われている、アネモネも無事だ。

「スマン皆! 俺の不注意だ。もっと確認してから行動を起こせばよかった」

俺は皆に向かって頭を下げた。

「ケンイチのやることなら大丈夫にゃ」「そうだよ旦那」
彼女たちはそう言ってくれるが、ここが水没した海の底だったり、土砂で埋まった脱出不可能な場所だったりすれば、いきなり詰んだ可能性があったのだ。

「スマン——」

「まあ、ケンイチ。気にするなって」

アキラもそう言ってくれるが……。

「なんだなんだ？　ここは？」

一緒についてきた三毛が、キョロキョロと辺りを見回す。
ベルとカゲは、周りをクンカクンカしまくっている。

「妾たちは、ダンジョンの中にいたはずだが……」

「まさか、また別の世界に飛ばされたとか？」

アキラが不吉なことを言うので、アイテムBOXを開いてみる。

「アイテムBOXは開けるな。中身もちゃんとある」

「へ、辺境伯様！」「貴族様、いったいこりゃ……」

ポポーと犬人も無事だ。

屋根の下らしき場所から出ると、そこは円錐状の屋根がかかった古い石造りの建物だった。

頭につけていた、LEDヘッドライトを外す。

「はあ、なんじゃこりゃ——」

皆で周りをウロウロしていたのだが、ニャメナがあることに気がついて叫んだ。

「旦那！　多分ここはアキメネスの近くだぜ！」

アキメネスは、アストランティアの隣街だ。

「え?! 間違いないか？」

「ああ、ここから見える山の形が似てる。それに反対側にも山が見えるし。ほら、旦那が水路を掘ったじゃないか」

ニヤメナが反対側の山脈を指す。

「ああ、あの辺りか……」

「い、いったいどういうことだよ！」

想像もできないできごとに、三毛がパニックっている。

「それじゃ——もしかして、サクラの隣にある台地の上か？」

森にしては木が小さいし薄い。

台地の上は腐葉土が少ないので、木が大きく育たないのだ。

「ああ、そうかもな」

アキラがうなずいているところに、アマランサスが叫んだ。

「聖騎士様！ これは古に失われたといわれている、転移魔法でございますえ！」

アマランサスの話では、お城の書庫にある禁書の中に、それが記されているらしい。

書庫の本は全部コピったのだが、やはり隠されているものがあるようだ。

「転移魔法?! テレポートってやつか……? アキラ、帝国にこんな魔法があったか？」

「ないない! センセの話では昔にあったとか、古文書に書いてあるとか聞いたことがあったが……」

「あの魔法陣からこの魔法陣に飛べるってことなんだろう？」

俺は円錐の建物を指差した。

「た、多分な……」

「えええええ！ これって、すごいんですけどお！」

「ポポー、こいつも喋るなよ」

「うっ！ 駄目ですかあ？」

「そんな上目遣いで見ても駄目に決まってるだろ」

そう言ったところで、目の前が真っ黒になり、その場にしゃがんで手をついた。

「ケンイチ、どうした?!」

アキラとベルが駆け寄ってきた。

「腹減った――」

「ああ、力の使いすぎだろ。あんなデカイ魔法陣を動かしたんだ、相当消耗したと思うぜ」

とりあえずシャングリ・ラからエナジーバーと、栄養補助食品を買って食いまくる。

回復しないと元の場所に戻れない。

アネモネがニヤメナの背中から降りて、俺の膝の上に座った。

俺ばっかり食ってても悪いので、皆にも分ける。

「おおっ！ これも甘くて美味しい！」 「本当ですねぇ」

犬人とポポーが、エナジーバーをムシャムシャと食べている。

三毛にも同じものを渡した。

「うまいよ！ 貴族様！ 子どもにも持っていてもいいかい?!」

「もちろんだよ」

甘い食べ物なら三毛の子どもも喜ぶだろう。

「ほい、アキラには特別に冷えたビール」

「おほ！ こいつはかつちねえ！」

彼は、アルコールをすぐに分解することができるからな。

ミャレーとニヤメナもエナジーバーを食べているので、ベルとカゲには、チュールをやった。

「アマランサスはチョコがいいか？」

「あうう……」

食べたそうなのだが、手を出さないでいる。

「どうした？ ここに座って」

俺の隣に座るように促すと、アイテムBOXから取り出したチョコを割って、口に入れてやった。

「おいひい……」

「ケンイチ！ 私にも！」

「ほいほい」

アネモネにもチョコを食べさせてやる。

「ケンイチ！ このまま、サクラに帰ってもいいんじゃないのきゃ？」

「プリムラとかアマナを置いたままだろ。それに途中の村で住民を拾っていく約束だし」

「クロ助！ お嬢を置いていったなんてバレたら大変だぞ。怒らせたら怖いんだからな」

「そうだな」

それに意外と根に持つタイプだしな。

まあ、俺が全部悪いんだが……。

「戻るか？」

アキラが心配そうだが、それはやってみないと解らん。

「魔法陣が使い捨てだったら、もう一度オダマキに向かうしかないだろ」

そうなんだよ。これで飛ばされたのが近くだったからよかったものの、魔法陣が使い捨てで転移先が地の果てだったりしたら、ヤバかった。

結果的にセーフだったとはいえ、やはり俺のやったことは迂闊すぎた。

「聖騎士様、マロウ商会には、鳥を使って連絡ができる手段がある
と――」

「ああ――でも、オダマキとの間で可能だろうか？　まだ準備段階じゃないか？」

マロウ商会のオダマキ支店はこれから作る予定だからな。

「これで魔法陣が何回も使えるなら、オダマキまでひとつ飛びできるってことになる」

「聖騎士様、これは革命的ですよえ」

アマランサスは感激しているが、使えたらの話だ。

「多分、俺と同じ祝福を受けたアキラにも使えると思うが――アネモネはどうかな？」

「試してみる！」

「それはいいが、今日は駄目だぞ。大きい魔法をたくさん使ったからな」

「……解った」

駄々をこねずに、引き下がってくれてよかった。

さっきナチュラル回復ヒールを使ったが、大事を取ったほうがいいだろう。

子どもを酷使なんてできないし。
子どもって言ったら怒るけどな。

飯を食ってかなり落ち着いてきた。

腹が一杯になれば、どんどん自動で回復^{ヒール}がかかるからな。

「さて、戻ってみるか？」

「オツケーにゃ！」

「その前に、ここの周囲を確認しておくか……」
アイテムBOXから、ドローンを出して飛ばした。

「ふえ！ 空を飛んでいる！」 「なんだありゃ！」

「あれも、ケンイチの召喚獣にゃ」

驚くポポーと三毛に、ミャレーが得意げに説明をしている。

「これは驚いた……」

犬人も上空を見つめている。

それを横目に俺はドローンを最大高度まで上げた。

こいつの上昇限界は約100mだが、モニタに映し出された中には、低木しか映っていない。

——ということは、半径4〜5km以内には、なにもないってことだ。

サクラの近くにある、あの台地の上はかなり広いつてことになるな。

「いや……」

俺はモニタの中に川を見つけた。

この川は、サクラの滝に繋がっている川だろう。

こんな台地の上をどこから流れてくるのだろうか、まったくの不

明だが、この川を下ればサクラにたどり着くことができるってわけだ。

逆にいえば、川を遡ってくれば、魔法陣があるこの建物にやって来ることも可能ってことだな。

そのうち、この台地も詳しく調べねばなるまいが、今はオダマキに帰ることが先決。

皆で揃って円錐状の建物の下に行くと、大きな魔法陣の上に乗った。

「皆、乗ったか？」

「おう！」 「にゃ！」

一応、全員いるか確認する。

「ここから、サクラに戻りたいやつがいるなら、もどってもいいが……」

「旦那！ 今更、それはないぜ」 「そうにゃ」

「ほんじゃいってみるか」

「おおっと！ テレポーター」

アキラのふざけた声を聞きながら魔法陣に力を込めると、線が光り始めた。

これって、まだ魔法陣が生きているってことだろ。

行けそうだ———そう思った瞬間。

俺たちは光に包まれた。

光の粒子に包まれて、身体が軽くなったと思ったら、いきなり真っ暗になった。

「うわ！ 真っ暗！」

「にゃー！」 「うわ！」

明かりがないので、真の暗闇だ。
自分の手や脚さえ見えない。

「いしのなかにいる」

「この声はアキラだな。止めてくれ洒落にならん」

「フヒヒ、サーセン！」

「にゃー」「みゃー」

ベルとカゲの声もするが、真っ暗でなにもみえない。

慌てて、アイテムBOXからLEDライトを取り出して点灯させた。

足下を照らすと、魔法陣が見える。

元のダンジョンに戻ってきたらしい。

他の者もヘッドライトを点けはじめた。

「成功したみたいだな」

「すごい！」

「聖騎士様！これは快挙ですわえ！」

「でも、しばらくは人に話せないな。それに使える者も限られるし」

「このような聖騎士様の偉業が自慢できぬとは……」

アマランサスは不満そうだが仕方ない。

ただ、オダマキに簡単に来られるようになったのは素晴らしい。

船が完成したらすぐに見学にやって来れるな。

海鮮などが簡単に手に入れられるし、金がなくなったらあのサンゴを取りにやってくればいい。

「にゃー」

「お母さん、これってすごいよな」

「にゃー」

「みゃー」

カゲの言葉は解らんが、彼もすごいと言っているだろう。

皆の無事を確認すると、俺は再び飯を食う。

とりあえず腹が減って仕方ない。

満腹になって回復すると、ダンジョンを戻り始めた。

ここまでほぼ1本道だったので、迷うことはない。

一応、途中に目印も設置した。

これで大丈夫だろう。

途中の池も渡る。

「ここには橋を架けたいな」

「ここにか？　なかなか大変そうだぞ」

ゴムボートに乗りながらアキラと話す。

「ドラム缶をたくさん浮かべて、板を渡して浮き橋を作ればいい」

「おおくなるほどな」

「まったく、貴族様のお力の凄さに感服いたしました」

神妙な顔をしているのは犬だ。

「今日のことは人には話さないでくれよ。これは口止め料だ」

彼に銀貨2枚を見せたが、受け取ろうとしない。

「僭越ながら——今日の働きに対する、褒美をいただきたく……」

「お前はよくやってくれたからな。銀貨2枚じゃ足りないってことかい？」

「生意気にゃ！」

騒ぐミヤレーを止める。

「いいえ、お話を聞いていると、貴族様は領地を持っておられるよううで」

「ああ、ハマダ辺境伯領だ」

「その領民にしていたきたく」

「それは構わないが、うちの領は猫人が多いんだぞ？」

「構いません」

それを聞いた、別のボートから声がする。

「そんなやつ、信用ならないにゃー！」

「やれやれ、大人の忠誠心を知らぬとは、これだから猫どもは……」
犬ってのは主人に忠実な印象があるが、大人もそうなのだろうか。

「なんでー！ それでいいなら、あたいだって領民になるよ！」

「待て待て」

俺の制止も三毛は聞かない。

「子供連れじゃだめなのかい！」

「そんなことはないけどな。旦那はどうするんだよ」

「いないよ、そんなの」

「ええ？ まあ領民は募集しているし、断る理由もないけどな」

「やったー！ 決まったあ！」

「言っておくけど、愛人枠は無理だにゃ！」 「俺たちで埋まってるからな」

「ガキがいるのに、そんなことは言わないよ」

三毛は意外と物分りがいいようだ。

犬人も本当に大丈夫かな？

まあ、この超常現象を体験したこのメンバーの全員を手元に置けば、秘密が漏れる心配はなくなるけどな。

俺たちは、ダンジョンから這い出た。

ちよっと混乱するが、さっきまで本当にサクラの近くにいたのだ。
こんなの元世界でも無理なんだが。

科学でも説明できないテレポートってやつを体験してしまった。
これって人類初だよな。

いや、この世界に転移してきたのがテレポートなら、初でもない
のか……。

俺は、外で待っていた貴族たちの所に向かった。

210話 落下

南の港町、オダマキの重要産業でもある石灰の鉱山。そこがダンジョンと繋がリスケルトンが溢れだした。

急遽駆けつけた俺は、スケルトンをアイテムBOXに入れるという裏ワザで討伐。

さらにダンジョンの奥に進み、中ボスらしいドラゴンのゾンビを撃破した。

アイテムを拾って喜んでいた俺たちの前に巨大な魔法陣が出現。

俺の力を使って魔法陣を起動することができたのだが、信じられない現象が俺たちを襲う。

光に包まれたあと、一瞬でサクラの隣にある台地の上まで飛ばされたのだ。

元世界の科学でも不可能だった魔法という超技術。

俺たちは、サクラとオダマキとの間を一瞬で移動できる方法を手に入れた。

いくらサクラの近くに飛んできたからといって、そのまま帰宅するわけにもいかず、俺たちは再びオダマキに舞い戻った。

鉱山の出口に近づくに徐々に気温が上がり、まばゆい太陽の光が俺たちを出迎えてくれる。

あまりの気温差に、身体の調子が悪くなりそうだ。

あの魔法陣が寒冷地と繋がっていたら、どうなってたんだろうな。それどころか、溶岩地帯とか海の底とか——今考えると、いきなり魔法陣を使ったのはかなり軽率だった。

反省もしてみるが、使ってみないと解らないこともあるしなあ…

…。

鉦山から出ると、貴族たちと傭兵たちが集まり食事を摂っていた。貴族というと、戦の後ろでふんぞり返って高級な飯を食っている――そんなイメージがあるのだが、ここの貴族たちは地面に座り、戦友たちと分け隔てなく食事をしている。

どうやら街から商人たちがやってきて、物資を運んできたらしい。その中にはシュロもいて、俺の姿を見ると叫んだ。

「辺境伯さま！」

「足が悪いのに、こんな所までやってきて大丈夫なのか？」

「商売するのに、そんなのは言い訳になりませんので」

「それより、ハナミズキ男爵はどこだ？」

「あ、あちらに……」

彼の案内で、男爵の所に案内してもらう。

地元の親しい貴族たちに囲まれて、食事を摂っていた。

おそらくは、親戚とかそういう仲なのだろう。

皆の雰囲気似ている。

「男爵、ダンジョンの主を討伐した」

「「「おおっ！」」「「なんと！」」

周りにいた貴族たちからは驚きの声上がるが、男爵は黙ったままで渋い顔。

「その主というのはこいつだ」

俺は、アイテムBOXに収納していた、ドラゴンゾンビの頭蓋を出した。

「「「うわぁ！」」「」

その場にいた面々が、白い骨でできた小山に腰を抜かす。

足の悪いシュロは、その場でコケてしまったので、手を貸してやる。

「も、申し訳ございません、辺境伯様。し、しかし、これが……?」
俺の手に掴まった、シュロの手が震えている。

「このドラゴンゾンビか、ドラゴンスケルトンか解らんものが、ダンジョンの主だったのだが――実はまだこいつは生きている」
「ひっ!？」

近くに自分の身体になる骨がないので集まらないが、中に入っている魔石はまだ生きているからな。

その証拠に、口がガタガタと動いている。

俺は、魔物の動力源となっている魔石を取り出すために、コ〇ツさんを召喚した。

アダマンタイトの刃がついた、戦闘バージョンだ。

黄色い巨大な重機が、地面を揺るがして落下してきたので、そいつに乗り込むとエンジンを始動させた。

「「「おおっ! 鉄の魔獣が吠えたぞ!」」」

ダンジョンの中で切ろうとして頭蓋に弾かれてしまったのだが、今度は高く振り上げてから、突き刺してみることにした。

洞窟の中では高さの制限があったので、これができなかったのだ。重機の黄色いアームを限界まで振り上げると、アダマンタイトの刃を立てた。

「いけっ!」

俺の操作によって、巨大な剣の切っ先が白い頭蓋へ落下。
小気味よい音とともに、白い山が真っ二つになった。

「「やった！ お見事！」」
貴族や傭兵たちが盛り上がっているので、男爵は面白くないようである。

アームを操作して、巨大な剣で頭蓋の割れ目を広げると重機から降りた。

まだ微妙に動いているので不気味だが――割れ目の中を覗く。
中は真っ暗。

「ケンイチ大丈夫か？」

「大丈夫にゃ？」 「旦那！」

「聖騎士様！」

皆が寄ってきたが、とりあえず中の魔石を取り出さないと……。
アイテムBOXから、LEDライトを取り出して中を照らす。

頭蓋の中は、白く干からびたような線が走っており、なにか干物のようななおいがする。

その中心に、その干物に絡まった黒い魔石があった。

ソフトボールより2周りほど大きい。

そいつを掴むと、そとに出た。

「やったぞ！ これで完全勝利だ！」

魔石に力をこめると、中が青く光りだしたので、そいつを高く掲げた。

「ちゃららら〜！」

アキラが口で効果音を入れてくれた。

「そ、それではもう、この鉱山は安全ということなのですか？」

「ああ、主を倒したから平気だ」

「ああん！ 聖騎士様あ〜！」

変な声を出して抱きついてきたのは、アマランサスだ。

顔を赤くしているので、興奮しているらしい。

「国軍を投入しても仕留めるのが難しいと思われる、あのような魔物をお一人で仕留めてしまわれるとは——んふふ」

太ももを上げて俺の身体にスリスリしてくると、唇を重ねにくる。その様子を見て立ち上がった男爵が爆発しそうだ。

「こらアマランス。人前で止めなさいって」

「2人ともくつつきすぎー！」

俺とアマランスの間に、アネモネが割って入ろうとしている。

アネモネに構わず、アマランスの矛先が男爵に向かった。

「どうじゃえ？ 領主閣下。妾が奴隷になった意味が解ったかえ？」

「もう、挑発するんじゃないよ」

「んふふ」

アマランスは、俺の話聞きそうにない。

パワーも彼女のほうが上なので、力づくで剥がすのも無理。

奴隷契約があるので命令すれば聞くだろうが、ここで彼女が反発してゴロゴロ地面に転がりでもすれば、火に油を注ぐことになりかねない。

「け……」

ブルブルと震える男爵が口を開いた。

「け？」

「決闘だ！ 貴殿に決闘を申し込む！」

予想外の男爵の行動に俺は呆れた。

「なんでそうなるの！？」

「うるさい！ 剣を取れ！」

「俺の剣というと、アダマンタイトのあれになるけど、いいのかい？」

俺はコ○ツさんに装備されたアダマンタイトの剣を指差した。

「アダマンタイト？」 「アダマンタイトだって？」

俺の剣の正体を聞いた野次馬がざわつき始めた。

「あんな魔獣などを使わず、尋常に勝負しろ！」

「尋常ってねえ——それじゃ、俺はアマランススを出すわ」

「なにい!？」

「だって、彼女は俺の護衛だからな、当然だな」

「そのとおりだわえ」

「ぐぬぬ……」

男爵は今にも爆発しそうだが、こんな無理難題にまともに相手をするつもりもない。

「彼女に勝てば、好きにできるんだぞ？」

「承知した! 出した言葉は飲み込めんど! アマランスス様、申し訳ございませんが貴女に勝たせてもらい、この悪夢から解放させていただく!」

「ふむ——それでは、いつでも来やれ」

男爵が自分の剣を抜いて、構えた。

「剣は? どうなさいます?」

「心配いらぬ」

「いざ、参る!」

男爵がそう言った瞬間——目にも留まらぬスピードでアマランススが間合いを詰めた。

彼女の手には、いつの間にか剣が握られていて、一步も動けなかった男爵の首元に切っ先が突きつけられていた。

「う！　ぐ！」

顎を上げた男爵が冷や汗を流して、その場で固まる。

「「おおっ！」」

目にも留まらぬアマランサスの早業に、周りから驚嘆の声が上がる。

「勝負ありだな、男爵」

アマランサスが剣を引くと、彼が尻もちをついた。

そのまま固まっていたのだが、諦めがついたように座り直すと膝をついた。

「数々のご無礼をお許しください、辺境伯様」

「いや、貴殿の誤解が解けてよかった。それよりも――」
話すことがある。

ちようど証人になる貴族たちもいることだし、ここで言ってもいいか……。

「それで、今回の討伐での戦費と礼金についてだが」

「う……」

頭に上った血が冷めたのだろうか？　彼は現実に取り戻されたようだ。

「なんじゃ領主閣下。自領の兵では押さえきれず、国軍の到着を待てば壊滅的な被害が出たのは確実じゃったろう。それを、わずかな兵だけで成し遂げた聖騎士様に礼金を出し渋るというのかえ？」

「あ、アマランサス様、その聖騎士というのは……」

彼女の代わりに俺が説明をする。

「聖騎士ってのは、王族による祝福で選ばれた者だ。それゆえ俺は、成り上がりで辺境伯という地位を得た。既存の貴族からすれば、目の上のたんこぶみたいなものだろうが――まあ、よろしく頼む」
「ははっ」

まあ、男爵もこれ以上は、こじらせるつもりもないだろうし、俺も無理難題をふっかけるつもりもない。

「俺が望むのは、あのダンジョンだ」
俺は出てきた穴を指差した。

「鉱山の経営権をよこせと?!」
「いやいや、勘違いしないでくれ。俺が欲しいのは新しくできたダンジョンだけだ。鉱山に興味はない」

「ほっ……」

男爵が胸をなでおろす。

この領の重要な産業である鉱山を取られたら相当痛いだろうし。

「聖騎士様、鉱山ぐらい望んでも問題ありませぬわえ？」

「そんなことをしたら、オダマキの街に影響が出るだろ。ここの領民に恨まれたくないし」

「ここの防衛に失敗すれば、魔物がオダマキに流れ込み、街の壊滅は不可避でしたわえ？ それを犠牲者もなく収めたのですから、鉱山どころか領地の割譲を望んでよろしいのでは？」

「あ、アマランサス様、何卒……」

彼女の言葉に男爵が青くなっている。

「妾ではなく、聖騎士様に申し上げたらどうじゃ」
「そんな無茶な要求をしても拒否されたら、どうしようもないだろ」
「当然の報酬も払わん領主という話が広まれば、次になにかあったときに、どこの諸侯も手を差し伸べますまい。もし、そんなことに

なれば、次にどこと手を組むとお思いですかえ？」

「はいはい！　ここから近いのは帝国だね」
手を挙げてアネモネが答えた。

「おいおい、話が飛びすぎだろう」

男爵のほうをチラ見すると――否定できない顔をしている。

ここは、王都より帝国のほうが近い。なんらかの関係を持っているのかもしれない。

この領地は領民を大事にしているのは、街の様子を見ても一目瞭然。

領民を助けるために手段を選ばない――ということになれば、帝国と組むことも十分に考えられる。

「やむを得ぬとはいえ、それは王国に対する裏切り――そんなことになったら城が黙っておるはずがない」

「王都の軍は送れないと思うが……」

王都は、帝国と共和国の2つに挟まれていて、その防衛に当たっているからな。

「そうなる――近隣の諸侯にハナミズキ領討伐の命令が下るでしょう――そうになると、筆頭になるのは」

アマランサスが、どこからか出した扇子で俺を指した。

「俺か？」

「当然ですわえ。王国を守る聖騎士で、崩落した峠の神速での開通や、ドラゴンやワイバーン、数々の魔物を仕留めた英雄が先頭に立つのは必定」

「そうなりゃ、ここも辺境伯領になるなあ」
アキラが悪ノリすると、獣人たちも続いた。

「ケンイチの所には、帝国の竜殺しもいるにゃ!」 「帝国の夜鳥のレイランもいるぜ」

その名前を聞いた野次馬たちがざわめく。

「帝国の竜殺しと夜鳥のレイランといえば、帝国の皇帝の懐刀。なぜ辺境伯に――」

「ケンイチが、帝国から引き抜いたにゃ」

「なんと……」

「平民から、いきなり辺境伯になったのだえ? 尋常ではないことが解るじやろ?」

「あの――辺境伯領には、エルフもいると聞きましたし……」

ポポーが手を挙げてつぶやいた。

「エルフ!?」 「辺境伯領はエルフとも繋がっているのか?!」 「あの偏屈な連中をどうやって……」

確かに偏屈っちゃー偏屈だが、ポポーのセリフに、ハナミズキの貴族たちが動揺しているようにみえる。

「ああ、エルフたちは海の匂いが嫌いらしいから、ここまでは来ないぞ、あはは」

いまさら、そんなことを言っても、周りのざわつきは収まらない。

「ハマダ領と男爵領、統治にはさきほどのものが使えますわえ……」

扇子で顔を隠し小言で話すアマランサスの目が笑っている。

さきほどのものというのは転移の魔法陣だ。

確かに、あの転移門があれば、サクラとオダマキは隣も同然だ。それも可能だろう。

「いやいや、お前ら――男爵をあまり脅かすなよ。男爵! 俺は、

新しくできたダンジョンの所有権だけでいいからな」

「……承知いたしました」

真っ白になって放心状態になっている男爵から許可をもらい——
鉱山とダンジョンが繋がった穴には、鍵のついた扉が設置されることになった。

「聖騎士様は甘いわえ！　ここを押さえれば、南部連合として多大な力を持つことができるというのに……」

「そんな力を持ってどうするんだよ」

「それは当然、聖騎士様とお妾の国お——」

アマランサスが顔を赤くして、もじもじしている。

それなら奴隷になるより、正室を主張したほうがいいと思うのだが、彼女がなにを考えているのか解らん。

「アマランサス、暴走しすぎだぞ」

「……」

男爵は、もうなにも言うつもりはないようだ。

俺の力が解ったので、君子危うきに近寄らず——ってやつだろ。

ダンジョンの鉄の扉の設置は、シュロに頼む。

「頼むぞ、シュロ」

「かしこまりました。ただちに設置いたします」

「運搬が大変なようなら俺が運んでやる。それなら設置もすぐに終わるだろう。俺も早く辺境伯領に帰りたいしな」

「承知いたしました。では、早速手配いたします」

振り向いて皆に告げる——まだやることがあるのだ。

「それじゃ扉ができるまで、スケルトン退治でもするか？」

「にゃ？」「旦那、どういうことだい？」「なんのことだい？」

獣人たちは、俺の言っていることが理解できていないようだ。

「何を言ってるんだ。スケルトンは俺のアイテムBOXに入っているだけなんだぞ？ アイテムBOXから出したら、また動き出す」「そうきや！」「ああ！なるほどな！俺はすっかり倒してた気分になってたぜ！」「あたいもすっかり倒した気分だったよ」

「はっ、これだから猫どもは……」

「うるせー！犬コロに言われたくねえよ！」「そうだにゃ！」

「こら、喧嘩すんな。魔石を出してバラバラにして収納した分は死んでると思うが。その他はまだ、生きてるんだ——って最初から死んでるんだけどな」

そこにアキラがやってきた。

「ケンイチのアイテムBOXにはゴミ箱みたいなものがあるって話だったが——そこに入れるってのは？」

「もちろん、それが一番簡単だが、魔石がもったいないだろ？」

「そりゃそうか——それで、どうやってやる？」

「うーん」

俺はしばらく考えた。

1体1体出して、タコ殴りにするのがデフォルトだろうが、なにかいい方法はないか……。

「そうだ、上陸した海岸に崖があったろ？」

「あったな……」

「俺が崖の上からスケルトンを落つことすから、皆が下で待ち受けるってのは？」

俺は海がある方向を指差した。

「落下ダメージでバラバラになって、すぐに死ぬかもしれないな」

「それが狙いだ。アネモネ、君は休んでいいぞ」
もう、魔法の出番はないだろう。

「うん」

「男爵、あとの処理は俺たちでやるので、解散して構わんよ」

「しょ、承知いたしました……」

男爵が、貴族や傭兵たちに撤収の命令を出した。

ぞろぞろと隊列をなして、兵がオダマキに向けて帰っていく。

それを見ながら、俺たちは仕上げの準備をした。

アキラに、アイテムBOXから出したトランシーバーを渡した。

崖の上と下で作業の連携をしなくてはならないが、車の無線では少々無理がある。

俺とアキラの車を出して分乗する。

アネモネとアマランサス、吟遊詩人のポポー、森猫たちはこちらだ。

スケルトンをぶっ叩くのは、体力が余っている獣人たちに任せる。海岸にも逃げる準備をしていた獣人たちがいたので、戦力が足りなかったら、そいつらを雇ってもいい。

「俺たちは崖の上に行く」

「ほんじゃ、俺たちは崖の下に行ってるぜ」

アキラの車に獣人たちが乗り込んだ。

「俺がたどり着けなかったら、作戦変更な」

「オッケー」

「オッケーにゃ！」

そういったものの、海に向かっていている崖のほうには道があるのだ。近くにいた商人に話を聞いてみると、崖の端には見張り台があるらしい。

アキラの車と2台に分かれると、俺は崖の上を走り出した。崖の上に道があるといっても人1人が歩けるような細い道が、背の低い草むらの中に続いているだけ。

海風のせいか塩分のせいか、延々と背の低い草むらが続く。

ラ〇クルで草を乗り越えていくが、このぐらいは余裕だ。

時速10kmほどで20分ほど進むと、石灰でできた見張り台が見えてきた。

あそこが端だろう。

到着したのだが、見張り台には誰もいなかった。

魔物が出たと言われたので、逃げたのかもしれない。

トランシーバーを使う。

「アキラー、聞こえるか？」

『おっ！ 聞こえるぞ！』

「今、崖の端っこに到着した。これから草を刈って足場を作る」
この草を刈らないと、どこが崖の端なのかまったく解らん。

『オッケー』

『オッケーにゃ！』

下と連絡がついたので、アイテムBOXから草刈り機を出して草を刈る。

「君たちは、休んでいいぞ」

「うん」

「アネモネは疲れたろう」

「大丈夫」

まずはラ〇クルの周りの草を刈って、テーブルとデッキチェアを出してやった。

「そこで休んでくれよな」

「私はなにもなくていいんですか？」

「吟遊詩人は音楽でも弾いてやってくれ」

ベルとカゲは、周囲のパトロールを始めた。

「お母さんたちは、崖から落ちないでくれよ」

「にゃー」「みゃー」

パトロールは彼女たちに任せて、俺は2ストエンジンの甲高い音を立てて草を刈り始めた。

広範囲を刈る必要はない。俺が歩き回るだけのスペースがあればいい。

崖に向かって草を刈ると端が見えてきた。

あまりギリギリまで行くと、崩れるかもしれないので慎重に進む。草がなくなったら、単管の足場を組むときに使う鋼板製の踏み板を、シャングリ・ラで購入した。

そいつを崖の外に伸ばして、反対側をラ〇クルで踏む。

車で重しを載せれば、踏み板に乗っても崖から落ちる心配はない。

おそるおそる、鉄の板に乗って端まで行くと下を覗く。

アキラたちらしき人や、逃げるために集まっているたくさんの人々が見える。

船も見えるが、相変わらず1隻しかないので混雑しているようだ。もう討伐は終わったんで、逃げる必要はないと思うが……。

下まで20mぐらいか……まあ、落ちたらヤバイな。

波による浸食のせいだろうか、崖はオーバーハングになっており、上に行くほど崖が飛び出している。

ここから落としても崖の途中でぶつかるとはないだろう。

「アキラ、足場ができたぞ」

『こつちもオツケーだ。多分、ケンイチらしきものが見えている――あ、手を振ったな』

「ははは、そのとおり」

やはり、下にいるのはアキラたちで間違いないようだ。

「もう魔物は討伐したと下にいる連中に伝えてやってくれよ」

『さっき言ったぞ。信じてないようだが、ははは』

まあ、とりあえず逃げたいのだろう。気持ちは解る。

さて準備は整ったので、あとは下に落とすだけだが……どこに落ちるだろうか。

まずは、なにか落として確認を――と思っていると、いいアイデアが閃いた。

防犯に使うカラーボールだ。ぶつけると色がつくやつ。

シャングリ・ラを検索すると、2個2000円で売っている。

「アキラ、まずカラーボールを落とすので、そいつで位置を確認してくれ」

『カラーボール？』

「コンビニとかで、強盗に投げるのがあるだろ？」

『ああ、あれかあ』

シャングリ・ラでカラーボールを買い、蛍光オレンジのボールを、足場から下に落とした。

『おおっ！ 落ちてきた！ オレンジ色になったぞ！ ケンイチ、ちよつとまっててくれ』

「どうした？」

『ここに岩を置けば威力が倍増するだろ？』

「そうだな」

どうやら、アキラは自分のアイテムBOXを使って、岩を下に設

置するようだ。

そりゃ砂地に落ちるよりは、岩場に落ちたほうが落下ダメージが入る。

しばらく待っていると、彼から連絡が入った。

『ケンイチ、準備完了だぞ!』

「それじゃ、第一弾落とすぞ」

『オッケー!』

『オッケーにゃ!』

「投下!」

アイテムBOXからスケルトンを空中に出すと、哀れな魔物がジタバタしながら下に落下していく。

下を見ると、激突したようだが……。

「アキラ、どうだ?」

『ははははは!』

下から爆笑する声が聞こえてきた。

『にやはははは!』『こりゃ、ひでえ! はははは』『こんな魔物の倒し方ってあるのかい!?!』

皆、爆笑している。

「どうなってんだ?」

『ケンイチ、一発でバラバラになったぞ?! ははははは!』

「それじゃ、落下ダメージだけでやったのか?」

『そうらしい』

「ほんじゃ、2連発でいってみるか?」

『よし来い!』

アイテムBOXからスケルトンを2体出すと、下に落下していく。

『ケンイチ、1体は粉碎、もう1体は瀕死って感じだな。どのみち戦う必要はないみたいだぜ』

「なんだ、それじゃ連続投下するぞ」

『オッケー』

『オッケーにゃ!』

なにせ、アイテムBOXの中にはスケルトンが150体以上入っている。

効率よく処分しなければならない。

次々と落としているが、下では問題なく処分できているらしい。

獣人たちは、転がった魔石を拾っているようだ。

『ケンイチ、男爵がやってきた』

「なにか言ってるか？」

『魔物の倒し方に呆れているぞ、ははは』

どんな倒しかただろうが、倒せばいいんだ。

男爵が避難しようとしている人々に事情の説明を始めたようだ。

これで慌てて逃げようとする者も、いなくなるだろう。

そのまま鉱山に戻り、仕事を再開する者も出るはずだ。

崖の上からスケルトンを落とす単純作業が終わる頃、日が傾き始めた。

作業が終わったので、女たちを車に乗せると、来た道に戻って坂を下り、アキラたちと合流した。

このまま砂浜で一泊する。

コンテナハウスは、シュロの屋敷に置いたままなのでテントを出した。

魔物退治も済んだし、後処理を済ませればサクラに帰れそうだなあ。

海で釣った魚で夕飯を食う。

メニューは、魚介類のスープだ。

「ははは、あんなスケルトンの倒し方があるとはなあ」
ビールを飲んでいるアキラは上機嫌だ。

「アンデッドがアイテムBOXに入るとは思わなかったからな」
「でも、旦那のデカイアイテムBOXがあるからこそ、できる芸当だぜ」

「トラ公の言うとおりにゃ」

「いやはや、貴族様の奇想天外な魔物退治に脱帽いたしました。このエールも、この世のものとは思えないぐらいの旨さ」
神妙な顔をしているのは、ビールを飲んでいる犬人だ。

「お前、本当に俺の領についてくるつもりか？」

「もちろんです」

決意は固いらしい。

話している間も、アマランサスは俺にべったり。

アネモネが引き離そうとしているが離れない。

だが、今日の活躍はアネモネということで、彼女と一緒に寝ることにした。

ベッドにはベルとカゲも一緒。

とてももふもふ、もふもふなのだが——気温の高いこの南の街では、少々暑い。

ベルとカゲも、すぐに床でぐったりとなってしまった。

仕方なくシャングリ・ラから、扇風機を買って、モバイルバッテリーに接続。

一緒にアネモネには冷却の魔法リフリジレーションを使ってもらった。
彼女も暑かったらしい。

「それなら、くつつかなければいいだろ」

「や！」

シャングリ・ラにはクーラーも売っているが、あれは電気を食うからな。

夜中にエンジン発電機はやかましいし……。

だが、魔法と扇風機の併用でかなり涼しくなった。
これぞ異世界式だ。

210話 落下（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。

お時間があれば、ポイント評価をしていただけると励みになり、作者のモチベーションアップになります。

よろしく願いいたします。

211話 のんびりと

南の港町オダマキの鉱山から溢れた魔物を退治した。

ダンジョンの奥にあったのは、テレポートできる魔法陣。

ゲームやアニメに出てくるテレポートなんて、夢物語かと思っていたが、魔法で実現できてしまっている。

これじゃ、俺たちがいた世界より進んでいるんじゃないのか。

アイテムBOXなんてものもあるしな。

アイテムBOXもテレポートも、元世界にあつたら世界が変わってしまうだろう。

船もトラックも飛行機も列車も全部なくなってしまう。

その能力を持っている者は莫大な富を得られるに違いない。

それとも、失業失職を恐れた者たちから命を狙われるか――。

そのアイテムBOXに入っていたスケルトンも、崖から落つことすという裏ワザで簡単に退治できた。

現在アイテムBOXには生き物は入らないが――もしも生き物が入る仕様であったなら、どんな敵の大群でも簡単に全滅させることができるってことだ。

考えるだけで恐ろしい。

とても平和的で人々の生活の役にたちそうな機能が、あつという間に虐殺のルーチンと化してしまう。

魔法だってそうだ。

簡単なお湯を沸かす魔法や乾燥の魔法でも、攻撃に使えるしな。

スケルトンを崖から落として退治したあと、俺たちは浜辺に1泊――次の日には、オダマキの街に帰ることになった。

魔物が退治されたと聞いて、逃げようとしていた鉱夫や商人たちも、鉱山へ戻ろうとする者が増えた。

逃げてても金にならないからな。

吟遊詩人のポポーも、慰安の仕事が残っているので、鉱山に戻るらしい。

「それじゃなポポー。あの魔法陣のことは秘密にしてくれよ」

「あんなの歌っても誰も信じてくれませんよ」

「まあ、そうかもな」

朝飯を食べたあと、アイテムBOXから出した船に皆で乗り込み、アキラの操船で海を進む。

やって来たときとの違いは、途中で一緒になった犬人がいることだ。

深い藍色の毛皮を着たグレイハウンドのような犬人が波しぶきを被り、毛皮を濡らす。

毛は短く絨毯のような手触りで、毛の下の筋肉がよく解る。

猫人たちとは、ちょっと離れて乗っているのだが、それでもミヤレーたちはしっぽをブンブンしている。

「そういえば、名前を聞いてなかったな」

「ワルターでございます」

「俺はケンイチでいい」

帝国風の名前だと思ったのだが、犬人は帝国風の名前を名乗ることが多いらしい。

名前にそんなにパターンがあるわけではなく、同じ名前の犬人が結構いるという。

ペーターとかハンスとかエーリツヒとかそんな感じか。

「ケンイチ、本当にそいつを連れていくにゃ？」

「領民を募集しているんだから、もちろんだ。差別とかは駄目だぞ」

「私なら大丈夫ですよ。慣れていますから」

彼の言葉の意味は——仲良くするつもりはないが、暮らすのは大丈夫だと言いたいのだろう。

犬猿の仲ならぬ、犬猫の仲なのだから、俺も無理強いするつもりはない。

話している間に、船は波間をジャンプしながら港に到着した。

「ケンイチ様の船はすごいものですな！　わずかな時間で港まで到着とは」

犬人は船の速さに驚いたようだ。

「街道を走る鉄の召喚獣もすごい速さにやぶつきらぼうに、ミャレーが答える。

「へえ、そいつは楽しみだ」

栈橋に到着すると、皆を降ろし、船をアイテムBOXに収納した。サクラから船を持ってきていてよかった。

「海に船で出て、釣りでもしようかと思ってたんだがなあ。それどころじゃなくなったな、ははは」

「ケンイチ、あれがあればいつでも海には来られるようになったじやん」

アキラの言うとおりだ。

「そうだな。新鮮な海の幸も食い放題だな」

シャングリ・ラでも購入できるとはいえ、やはり採れたてにはかなわない。

それにサンゴも発見したしな。

あれは強力な資金源になること間違いなしだ。

アイテムBOXから車を2台出すと、ワルターが驚いている。

「こ、この鉄の箱がそうなのですか？」

「魔法で馬もなしに動くにゃ」

「なんと……」

彼は近づく、車のおいを嗅いでいる。

鉄だからにおいはしなと思うが――まあ、排気ガスのおいにするかな。

猫人たちとベルたちを乗せるので、ワルターにはアキラの車に乗ってもらった。

車の中は色とりどりの毛皮でギュウギュウ。毛が沢山舞うので、鼻がムズムズする。

皆を乗せて、車はシュロの屋敷に到着した。

そこには、プリムラたちが待っているが、先にシュロが戻っているはず。

なにがあったかは、現場から戻ってきた彼から聞いたかもしれない。

俺たちは崖からスケルトンを落つこととして、半日潰してしまったからな。

屋敷の庭に車を入れると皆を降ろして、鉄の箱をアイテムBOXに収納。

プリムラと抱き合う。

「お疲れ様でした」

「心配かけたな」

「いいえ、ケンイチなら大丈夫だと思ってました」

「また、帰るのが2〜3日延びそうだよ」

「洞窟の中が辺境伯領の管轄になったと聞きましたが……」

「そうなんだよ。入り口に扉をつけるから、その運搬と確認をしなくちゃならない」

「解りました」

「帰りが遅くなると、リリスが怒るだろうなあ……」

「でも、辺境伯の仕事ですから」

プリムラの言うとおりなのだが、こういう場合は理屈じゃないんだよねえ。

俺は、心の中で苦笑いをした。

「まー！」

アマナに面倒を見てもらっていた、三毛の子どもが母親の下に走る。

「寂しかったかい？」

三毛に抱きつき、彼女に抱えられた子どもが首を振ると、そこにアマナがやってきた。

「悪いな、面倒見てもらって」

「手間のかからないいい子でしたよ。それよりも旦那！　またおっかない化け物を倒したんだって？」

「まあな」

「本当ねえ。あたしだったら、怖くてすくんじまうけどねえ」
子どもを抱いている三毛の所にいく。

「お前、辺境伯領に行くって子どもには聞かなくて、いいのか？」

「そんなの大丈夫さ！　ミツケ、この人が新しいお父さんだよ」

「ぱー！」

「おいおい、洒落にならんから止めろって」

そんな話をしていると、ミャレーたちが飛んできた。

「お前、なにを言ってるにゃ！」「愛人粹はもうねえって言つたら！」

「言つたもん勝ちさ！」

「俺は怒らんが、貴族相手にそういう冗談は通じないやつもいるから、気をつけろ」

ミツケという、三毛の娘を抱かせてもらう。

子どもも三毛なのだが、ふわふわのもふもふで本当にかわいい。

「こ、子どもが可愛いのは認めるけどにゃ！ お前を認めたわけじゃないにゃ！」

「かわいいな。でも家族を増やすのは駄目って言われてるからな」

「ちえ——いいよ、それでも旦那の領に行くからさ」

「ここの家とかは？」

「借り部屋だし」

そういう彼女の名前はミーケだと言う。

そのままやんけ。

「三毛のやつはそういう名前が多いにゃ」

「そうなんだよ、旦那。適当なやつが多いんだ」

「適当って言うなよ！」

「なにも考えなしに、ケンイチの領に来るやつは適当じゃないのきや？」

「考えてるに決まっているだろ？ 旦那の所に行けば、食いつぱぐれないって直感だよ」

「それって考えじゃねえ！」

ニヤメナのツツコミが入る。

まあ、獣人達が深く考えて行動していることがあるのか？ ——と聞かれると少々微妙だと思うが。

獣人の相手は獣人たちに任せて、プリムラを連れてカールドンの

所に行く。

「カールドン！」

「ケンイチ様。話は聞きました、ご征伐おめでとうございます」
彼が頭を下げる。

「皆で協力して倒したんだから、俺の手柄じゃないけどな」

「それでも、世間ではケンイチ様のお手柄ということになりますよ」

「それは仕方ないな。いちいち否定して回るわけにもいかないし――
―それよりお土産だ」

俺は、ダンジョンの中で拾った、宝箱を彼に手渡した。

杖が入っていた、見かけより中が広いという魔法の箱だ。

「こ、これは!？」

「見かけより、中が広いだろ？」

「な、なんと！　こんな面妖なことが」

「この魔法を実現できれば、この鉄の箱の中を、見た目をそのまま
で拡張できることになる」

「素晴らしすぎます！」

「これを、お前にやるので研究してくれ」

「これを頂いてもよろしいので？」

「まあ、壊してもいいぞ。研究のためなら、そういうのも仕方ない
からな」

「もちろん、なるべくは破壊しないようにいたしますが……」

構造を調べる、イコール分解だからな。

俺もガキの頃、どうやって時計が動いているのか知りたくなくて、
バラしてみたら戻せなくなったことがあったし。

カールドンなら、こいつの能力を実現できるかもしれない。

「魔法のとかかりでも、つかめれば上等だ。それにな――」

「まだ、なにか？」
プリムラも呼ぶ。

「ダンジョンの奥に、転移の魔法陣があつてな」
「て、転移の魔法？」

「聞いたことがあるか？ 王家の秘書には記されているらしいが」
「魔導師がよく話す、与太話に出てくるのですよ」

「それが本当にあつたんだ。実際に俺が使った」
「動いたのですか？」

「ああ、相当魔力を突っ込まないと起動しないようだったが」

「さもありなん……しかし、こんな魔法の箱の他にも、転移の魔法陣とは……」

よく解っていないプリムラを呼ぶ。

「プリムラ、その魔法陣を動かせば、一瞬で別の所に行けるんだ」
「……一瞬で?!」

彼女も、ことの重大性に気がついたらしい。

「その別の場所っていうのが――」
「はい」

「サクラのあの崖の上だ」

「……ええ?! 本当なんですか?!」

「ああ、皆も一緒に行つて確かめてきた」

「そ、それでは、馬車もいらずに、本当に一瞬でサクラからオダマキまで？」

「そういうことになる」

「素晴らしいですわ!」

「でも、商売に使うってわけにはいかないぞ? 俺の力を大量に消費するからな」

「そ、そうですよね……」

俺の話を聞いたプリムラが残念そうだ。

たぶん商売に使えると喜んだにちがいない。

そりゃ、サクラ、アストランティア、ダリア、そしてオダマキの支店が、繋がったようなものだからな。

運送費もロハ（死語）で運べると思ったに違いない。

「だが仕事をしたり、大事な買い物などには使える」

「船の建造状況を確認したりでございますね」

「そうだカールドン。いちいち何日もかけて街道を走る必要がなくなるわけだ」

「すばらしい！　なんと太古に失われたと言われていたものが残っていたとは……」

「今まで見つかっていなかったのか？」

「はい——いや、帝国などが見つけていても隠蔽している可能性が……」

「アキラの話では、見たことがなかったということだったがなあ……」

「帝国皇帝が極秘に握っている情報ならば、側近にも明かしていないかもしれません」

「そうだな——転移魔法陣は使えるみたいだが、普通に商売に使うためには、やっぱり船が必要になるだろう」

いつも言っているが俺の能力をあてにした商売やシステムを構築してしまおうと、俺になにかあったときに一瞬で詰んでしまう。

魔法陣の起動はアキラに頼めば可能だと思うが、非常時以外にそんなことは頼めない。

あの魔法陣を動かすのは相当きつく、カロリーを大量に消費する。俺はいつでもシャングリ・ラから大量に食料を購入できるが、彼はその機能を持ってないし。

カールドンに研究用の魔法の箱を渡し、彼からは世話を頼んでい

たスライムを受け取った。

「元気にしてたか」

まあ飼育に手間もかからないし、なんでも食うしな。
放置してもまず死ぬこともない。

箱の中のスライムを眺めていると、ワルターがやってきた。

「ケンイチ様、それはなんでございますか？」

「これはスライムだよ。研究のために飼っている」

「魔物を飼うとは……」

「まあ、この箱に入っている間は危険はないから、心配するな」

彼に関しては、森猫たちが警戒していないから大丈夫だとは思
うが、100%信用するのにはまだ早い。

転移門や俺の持っているアイテムを見て、金になりそうだと思っ
て移住を希望したのかもしれんし。

現在、この屋敷の主であるシュロに、ダンジョンの入り口に取り
付ける鉄の扉を作ってもらっている。

鍵付きのやつをだ。

それができないうちは帰路につけない。

まあ開けておいても、誰も怖がって入らないとは思うが……。

鉱山で働いている者たちも、穴がふさがっていたほうが安心でき
るだろうし。

鉄板をプラズマカッターで切り出して、俺が作ってもいいんだが
な。

シャングリ・ラでセメントも売っているし、アネモネの魔法で養
生してもらえれば、すぐにコンクリも固まる。

まあ、シュロに頼んでしまったし、のんびりと待つとしよう。

早く帰らないと、リリースが首を長くして待っているだろうが、領の発展を左右する重要なものだからな。

俺は、パラソルとデッキチェアを出してのんびりすることにした。アキラは釣りに行くようだ。

美味しい海の幸が食い放題ってのは、中々いい。ただ、もう少し涼しければいいのだが。

————◆◆————

扉ができるのを待っている間、皆でバカンスを楽しむ。

夜はシュロの差し入れや、アキラの釣ってきた魚に舌鼓を打つ。

——その間に、この地方の商人や貴族たちの訪問を受けた。

商人は、シュロかマロウ商会を通してくれ——で終了だが、貴族はそうもいかない。

シュロが貴族の来訪を断れるわけもなく、屋敷の庭で会見となった。

やって来たのは3人の貴族。

金糸の刺繍を施された青や緑の服を着て、腰のベルトには短剣を差している。

歳は30〜50歳ぐらいでバラバラ。

若いやつも白髪が多いのだが、苦労しているのだろうか。

アイテムBOXからテーブルを出して、飲み物としてりんごジュースを並べた。

夜なら酒でもよかっただろう。

「突然、押しかけてまして申し訳ございません。礼儀がなっておりますのは、重々承知の上ですが——」

「ダンジョンを塞ぐ鉄の扉ができるまでは暇なので、構わんよ」

彼らの話では——辺境伯領と友好関係を結びたい一派がここにやって来たようだ。

上手く運営されているこの男爵領といっても、一枚岩ではない。男爵から、疎遠にされている者もいるのだろう。

それなら辺境伯にいい顔をしておいたほうが、おこぼれをもらえると考えたのかもしれない。

「1つ聞きたいのだが、ここにはどんな噂が伝わってきていたのか、教えていただきたい」

「……はあ、その……」

領主が魔法を使えるとかドラゴンを倒したとかいう話は——聞いたが眉唾だと思っていたらしい。

それが本当に鉄の魔獣を使ったり、魔物を倒したりしたので、気が変わったのだろう。

他にも、辺境伯領に興味を示している貴族はいるようだが、領主の手前——ここには来れなかったようだ。

「リスとアマランススの話は？」

「噂には聞いておりましたが、まさか本当にお城を出ているとは……」

貴族たちは、俺の近くにいるアマランススをチラ見している。

「一応言っておくが——リスとアマランスス、2人とも俺が陛下から強奪した——とかじゃないからな。正式に離縁して、王籍も抜いて俺の所にいるわけだ」

やったのも離縁したあとだし。

「「「はあ……」」」

貴族たちは、前代未聞の話に信用していないような顔だが。

まあ、地方の貴族にどうやって話が届いているかという参考には

なった。

仲良くしようぜ——という申込みに、こちらとしても断る理由もないので、彼らには贈り物をした。

いつも貴族たちに贈っている1／2オンスの白金貨だ。

位階を聞けば子爵もいるのだが、少々少なめにした。

領主は男爵だが、本当は伯爵クラスはあるとみて間違いない。

「こ、これは白金貨？」

「本物だぞ」

俺は白金貨を取って魔力を流すといういつものパフォーマンズをする。

うっすらと光る白金貨に、貴族たちが目を丸くするのも、いつもの光景だ。

そこにアマランサスがやってきた。

「魔法を使い、鉄の魔獣を操り、アイテムBOXから伝説の白金貨を出す——そのようなお方だからこそ、妾は王家まで捨てて一緒にいるというのに」

「あまりに荒唐無稽で作り話みたいだから、信じられないんだと思うよ」

「しかし、それを実際に目の前にしたら、軍門に下るしかなくのうてもうたわえ」

アマランサスが扇子を出して口を隠した。

元王族の本人から話を聞いて、さすがに貴族たちも話を信じただろう。

まあ、信じなくてもいいんだけどさ。

貴族たちは、りんごジュースを飲み干すと帰っていった。

——それから2日ほどたち、鉄の扉ができたとシュロがやってきた。

皆を待たせ、車を出すとシュロを乗せて職人の所へ。

「暇だから俺も行くぜ」

アキラも一緒に行ってくれるらしい。

街の中を車で走り、大きな煙突からモウモウと黒い煙が流れている工房に着いた。

白い壁の工房から若い職人が出迎えてくれる。

煤と日に焼けた、黒い肌と短いくせっ毛。

つなぎのような革の作業着を着ている。

中に入ると工房の天井は高く、正面には轟々と火が燃えている炉。土間の上にはつなぎを着た職人が多数いる。

皆、若い職人のようだ。

「ここが、シュロが目にかけている工房なのか？」

「はい、若いやつらばかりですが、いい仕事をしますよ」

職人に見せてもらったのは、鉄枠がついた分厚い黒い鉄の板。

扉にも枠がついており、リベット留めで扉の厚みを増す。

溶接がないので、こういう方式しかないのだろう。

こいつが扉だ。左側に鍵穴が開いており、そこに鍵を差して回すとガチャガチャとピンが出し入れされる。

ロックの仕方は元世界のものとは変わらないようだが、シリンダー錠とかに比べたら単純な造りだ。

構造を知っていれば、簡単に解けてしまうが、この世界の鍵は一品もので構造に規格はない。

みんな構造がバラバラだが、何種類か方式があると、アキラも言っていた。

「取り付けは、私どもに任せて下さいませ」

「解った」

俺は運ぶだけでいいらしい。

まあ、すぐに転移門を使うつもりもないから、鍵さえもらったら任せても問題ないか。

鉄の扉をアイテムBOXに収納する。

「「「おおっ！」「」」

「アイテムBOXがあれば、この重たい扉を現場まで運ばなくて済むので、大幅に工期が短縮できます」

「いやあ、こいつをどうやって鉱山まで運ぼうかと、皆で悩んでいたんですよ」

ここにはクレーンもなく、全部手作業だ。

普通に考えれば、海から船に乗せて運ぶってことになるだろうが――石灰岩なら小分けにできるだろうが、こいつは鉄の塊だ。

多数の獣人たちを雇って運んでもらう――とかしかないだろうな。

「俺がアイテムBOXを持っていると聞いていただろ？」

「こんなに重いものが本当に入るのか、半信半疑だったもので……」

「とりあえず、親方だけ現場につれていくから、あとはやってくれ」

「解りやした！」

扉の脇を固めるセメントのような粉や道具を、一緒にアイテムBOXに入れた。

若いくせつ毛の親方だけを車に乗せると、貴族街に上るための崖を指す。

「ほええ！ 魔法で動く乗り物！ すげえ！ はええええ！」

後ろの座席で、若い親方が大喜びをしている。

「ケンイチ様、無作法で申し訳ございません」

「はは、大丈夫だよ」

崖に到着すると車を収納して崖を上り、再びアイテムBOXから出した車で貴族街を通過する。

普通なら貴族街を通り抜けできないが、俺は貴族だし、シュロはこの街の顔役だ。

1時間ほどで鉱山の入口まで到着した。

「すげえ速さですね、これ！」

「これ、辺境伯様に無礼ですよ」

「あ！ サーセン！」

まあ、街の職人に作法とか礼儀とかいっても仕方ない。

そういう教育すら受けていないのだから。

仕方ないとはいえるが、公共事業などのもっとデカイ仕事を受けるとなると、貴族やらの謁見も多くなるし、そうなると礼儀作法も必要になる。

そこらへんは、彼に肩入れしているシュロの仕事になるだろうな。

鉱山の入り口にいた、警備の兵に許可を取って中に入る。

兵は先の戦闘にも参加していたので、俺の戦いを見ていたようだ。ダンジョンの入り口に扉を取り付ける許可は、すでにシュロが取っている問題ない。

アイテムBOXからLEDライトを出して、シュロと親方に渡す。

「これは魔道具ですか？ すげー！」

喜ぶ親方と話しながら一緒に歩いていると、鉱山の中で働いている鉱夫たちとすれ違う。

もう、鉱山も稼働しているようだが、ダンジョンの入り口を塞がないと落ち着かないだろう。

シュロとそんな話をしていると、ダンジョンの入り口が見えてきた。

「ここだ」

「へえ！　ここがダンジョンの入り口ですか！？」

アイテムBOXから運んできた鉄の扉を出した。

デカい音が坑内に響くと鉦夫たちが集まってきたので、工事の説明をする。

「そこを早く塞いでくたせえよ」　「気味が悪くてしかたねえ」

デカい図体でビビっている獣人たちの光る目が並んでいる。

「数日で塞がると思うが」

「一番大変な鉄の扉の運搬が済んでしまいましたからねえ」

親方は早速仕事を始めた。

アイテムBOXから、セメントやら工具なども出す。

寸法などを測って、使う材料の量などを計算するのだろう。

俺がシャングリ・ラで材料を購入して、作ってしまったほうが早いのだろうか――。

領主になったんだ、人を使って経済を回すことを覚えなくてはならない。

シュロも打ち合わせのために、ここに残るらしいので、俺は引き上げることにした。

「シュロ、足が悪いのに大丈夫か？」

「前も申しましたが、商売するのに足が悪いのを言い訳にできませんよ」

そうは言うが気になる――が、彼が大丈夫だという。

「そういえば、代金はいくらになる？」

「いいえ、オダマキを守っていただいたのに、代金など――」

扉が100万、工賃が100万、商人の取り分が100万ってところか――つまり金貨15枚。

「まあ、そう言うな。ただより高いものはないからな
俺はシュロに金貨15枚を渡した。」

「ありがとうございます」

支払いを済ませた俺は、鉱山の外に出た。

「辺境伯様！」

俺の姿を見て、青空の下を走ってきたのはポポーだ。

「俺は辺境伯領に帰るよ」

「そうですかあ、残念です」

彼女が背負っている楽器を見て、いいことを思いついた。
シャングリ・ラで3万円ぐらいのギターを買う。

ギターは全然知らないが、日本のヤ○ハ製だ。

「異国の楽器だが、興味はないか？」

「ほえ！ 異国のものですか！」

原理は彼女が弾いているものと同じ。

箱に弦が張っており、弾くと鳴る。

すぐに彼女は音を鳴らし始めた。

「いい音ですう！」

彼女なら、すぐにマスターできるだろう。

「興味があるのなら、お前にやる」

「本当ですかあ！」

「ああ」

彼女にギターと換えの弦を20本ほど手渡した。

この世界に、鉄の弦とかナイロン弦とかないからな。

まあ、代用品はあると思うが……。

ポポーにギターを渡し、俺はシュロの屋敷に戻った。
さて、全て終わったし、明日の朝一でサクラに向けて出発だな。

212話 お引越し

南の港町であるオダマキで船の注文をして、スケルトンを倒し、転移の魔法陣まで見つけた。

中々のハードスケジュールだ。

鉱山の中にできたダンジョンは辺境伯領の管轄になったので、頑丈な鉄の扉をつけてもらうことになった。

領主である男爵は、スケルトン討伐の代金としてもっと大きな対価を請求されるかと思っていたらしく、すんなりと所有権を俺に渡してきた。

俺としても、金貨よりも転移の魔法陣のほうが重要だ。

これで船が完成したときも、すぐにオダマキまでやって来られるだろう。

サクラから一番遠い街が、隣街になったようなもんだからな。

まるで買物に出かけるように、オダマキを訪れることが可能になるかも――。

その前に、サクラの近くにある台地の上を調べる必要がある。

ニヤメナは、転移門の出口はアキメネス近くだと言っていたが、正確な位置は不明だ。

帰り際、新たな貴族の訪問を受ける。

ここを訪ねた貴族たちが、贈り物に白金貨をもらったと聞いて飛んできたのだろう。

なんとも浅ましいような気がするが、裕福な貴族ばかりではない。実際、アストランティアの貴族も俺からもらった白金貨をすぐに換金して、借金返済に使った者もいるぐらいだ。

一応、自己紹介と社交辞令をしたあと、白金貨を渡してお引取り願う。

「やれやれ……」

「はは、領主様は大変だな」

アキラは笑うが、領主になってしまったからには、仕事をしなくてはならない。

一息つくつと、サクラに帰る準備をする。

テーブルや椅子、コンテナハウスを収納して車の用意。

人数が増えたので、俺はハ〇エースを出した。

ラ〇クルにギチギチに乗るより、余裕があったほうがいいだろう。街道の道は悪くないので、ワンボックス車でも十分だが、途中の街で領民を拾っていかないと駄目だ。

そうになると、ハ〇エースでは乗り切れないので、久々にコ〇スタ^{マイクロバス}の出番かな？

アキラの車には、マロウと新しくサクラに来る犬人、アマナ、メイドのマーガレットそしてカールドンが乗り込む。

カールドンは一応貴族なのに、平民のアマナや獣人と一緒に乗せても平気なのでありがたい。

まあ、彼にとっては研究以外のことは些事なのだろうけど。

そのカールドンは寝不足のような顔をしている。

「カールドン大丈夫か？」

「ケンイチ様、ちょっと徹夜をしてしまいました」

「面白いおもちゃをもらったからって、はしゃぎ過ぎだろう」

「そのとおりでございます——お恥ずかしい。しかし、ワクワクが抑えきれずに、寝ている場合ではございません」

「まあ、俺にも経験があるよ。目を覚ますと、すぐに机に向かった

りしてな」

カールドンが苦笑いをしている。

この感じだと、車の中で寝てしまいかもしれないな。

俺のハ○エースには、アネモネ、プリムラ、アマランサス、そして獣人たち。

森猫たちと、移住する三毛の親子も一緒だ。

ペットのスライムも積み込んだ。

準備ができたので、屋敷の庭でシュロに最後の挨拶——娘のキキヨウもシュロの横に立っている。

「しばらく世話になってしまったな」

「いいえ、魔物からオダマキを救った英雄をお世話できたと、末代まで自慢ができます」

「それなら早く孫を作らんな」

シュロがキキヨウを見ている。

娘のキキヨウも、俺のことをキラキラした瞳で見ているのだが——
—なにか、後ろから黒い視線を感じる。

「おっと、俺は駄目だぞ。正室から、これ以上増やすって言われているからな」

それを聞いた、シュロ親子がっかりした表情を見せた。

話を変えないと——。

「魔物を倒したといってもアイテムBOXに入れるという、あまり格好いい勝ちっぷりじゃないけどな」

「滅相もございません。あのようなことができるのは、王国広しいえども、辺境伯様だけでございましょう」

そこにアキラがやってきた。

「はは、たしかに。帝国にもあんなことをできるやつはいないな。それにしても、アンデッドをアイテムBOXに入れるとはな」

「帝国の竜殺し様もご一緒にお世話できましたこと、シュロ商会の自慢とさせていただきます」

「俺は、おまけみたいなもんだから。それに、今回はまったくいいところなしだったし」

「ちよっと相性が悪かったな」

「まったくだ」

車の用意ができたので出発——シュロ親子に、皆で窓から手を振る。

俺たちは、色々とあったオダマキの街から出た。

青空の下、坂道に連なる白い壁が美しい街並みや、美味しい海の幸ともお別れか。

シャングリ・ラで海鮮を買えるといっても、やはりとれたてにはかなわない。

それに獣ほどじゃないが、獲ってすぐに血抜きをしたほうが美味しいと思う。

シャングリ・ラで売っている魚は、よほどの高級魚でない限り、そのような処置はされていないと思う。

アキラの車を先頭にして街道を走り、なにごともなく進む。

「丘を越え行こうよ」

アネモネが歌を歌う。

俺がいつも歌っているの、覚えてしまったようだ。

「にやにやにや」

ミヤレーも吊られて歌うのだが、歌詞も覚えていないし、あまり上手くない。

「うるせえ、クロ助!」「そうだよ、歌下手だな」「へたあ」

小さい声で下手と言ったのは、三毛の娘のようだ。

子どもにも下手と言われて、珍しくミャレーが落ち込んでいる。

アキラに帝国の領地の話を聞く。

「アキラ、帝国にも貴族が治めていない土地ってのはあるのか?」

『一応、建前ではないことになっているが……行くのに数週間かかる僻地の面倒とか見たくねえだろ?』

「まあ、そうだなあ」

そんな僻地の面倒を見ても、得られるのは僅かな税金と年貢だけ。とてもじゃないが、割りに合わないってことらしい。

『そういう場所が結構あるから、領主になりたいってやつがいれば、すぐになれるぞ』

「でも、僻地じゃ苦勞するだろ?」

『まあな。苦勞するのに、運営に失敗すれば叱責や罰則があるし』
最初から無理ゲーをやって、それで罰金を取られたり、位階を下げられたりしたら目も当てられん。

「それじゃ、そういう場所はどうやって治められてるんだ?」

『ケンイチのような辺境伯ってのがまとめて面倒をみるが――税金は取らないから、面倒も見ないってのが普通だ』

「それは統治しているといえるのか?」

『そうだな。けどな、他国との国境沿いなんかは、僻地でもしっかりと面倒を見ているからな』

「場所によりけりってことか」

『そゆこと』

戦略的、政治的にも重要な地点は、多少赤字でもしっかりとフォ

ローするらしい。

そう考えると、どんな僻地でも国政が行き渡っている日本つてのは、金持ちの国であるといえる。

そのまま車列は進み、その日の夕方には――街道の途中にある集落が見えてきた。

ここには、サクラへの移住を希望している住民がいる。

ボロボロな塀と簡素な門を通り集落の中に入ると、粗末な服を着た住民が集まってきた。

「前にここを訪れたケンイチ・ハマダ边境伯だ。村長を呼んでくれ」俺の姿を見た住民たちが、慌てて村長を呼びに向かった。

「どのぐらい、移住するかな？」
車を降りてアキラがやってきた。

「村人は全部で30人ぐらいだったな？ それじゃ10人から半分ぐらいは……」

「まあ、そんなもんだろうな」
ところが、村長がやってきたので、彼に話を聞くと――。

「え?! 全員?!」

「はい」

なんと、村人の全員が移住希望らしい。

「難しいでしょうか？」

「いや、30人ぐらいならなんとかなるから、大丈夫だ」

「「「おおっ!」」」

マイクロボス

コ○スターを出して、詰めて乗れば30人ぐらいはいけるだろう。
家や荷物は、俺のアイテムBOXに入れるわけだし。

「それじゃ、ここに半日滞在して引っ越しをしないと駄目だな」
「引っ越しの準備はどのようにすればよろしいのでしょうか？」
「んー、心配いらない。各人の家ごと俺のアイテムBOXに収納するから」

「「家ごと?!」」

住民たちから驚きの声上がる。

なんのことはない。家をアイテムBOXに収納すれば、生き物以外はすべて収納されてしまう。

荷造りの心配は要らないと、村長に伝えた。

「そ、そのような夢物語のようなことが……」

「ここで空き家を買ったじゃないか。あれとおんなじだ。家を収納すれば、家具も荷物も全部いっしょに収納される」

「「おおっ!」」

「それじゃ、引っ越しの準備は要らないってことでしょうか？」

住民たちの中から、女性の声が聞こえた。

「そのとおりだ」

「「おおっ!」」

「明日の朝飯が終わったら、家を収納していこう」

俺の説明に住民たちも納得したようだ。

とりあえず、うちの住民になるなら、服ぐらいはプレゼントしようか。

皆が、ボロボロの服ばかりだからな。

とりあえず丈夫で作業にも使えるとなると、ジーンズか。

シャングリ・ラを見ると、スリムなタイプが多いが、ちよつと余裕のあるタイプを穿おう。

住民たちを見ると、ずば抜けて身体がデカいとかそういうタイプもないようだ。

サイズをバラバラに1着3000円のジーンズを30着買う――9万円だ。

女はスカートだが、ズボンも穿けるだろう。

一緒に麻のシャツも買う――こちらも3000円だな。

同じく30着買う。

あとは、女性ものだな。麻のワンピースとスカートを15着ずつ。全部くるぶしが隠れるロングのものをこちらも両方3000円だ。

「ポチツとな」

空中から、ジーンズやシャツ、スカートがドサドサと落ちてきた。

「こ、これは……」

「領民になった祝いで服をやる。大きさが合わないという者がいたら、教えてくれ」

「こんなにたくさん服を……」

「余ったら、村長が預かっていてくれ」

「承知いたしました」

山になっている服に村人が群がり始めた。

シンプルなものばかりだが、ボロボロの服よりはいいだろう。

「村長、俺たちは前と同じように、村の外れで宿泊をするから」

「かしこまりました」

「そうだ、肉を食うか？」

アイテムBOXに入りっぱなしになっている黒狼を取り出す。

とりあえず、たくさん入っているので、消費してもらわんとな。

ギルドに売ってもいいんだが、俺たちだけいいおいをさせて夕飯を食うわけにもいくまい。

「――おお！ 肉だ！ また肉が食えるぞ！」「――」

住民たちが、喜んで黒狼を解体している横で、俺たちは宿泊の準備を始めたのだが――。

ワルターのことを思い出した。

犬人は黒狼を崇めているという話だったはず。

彼のほうをチラ見すると、少し悲しそうな顔でちよつと手を上げた。

黒狼が、獲物や害獣として駆除されているのを知っているのに、なんにも言わないのだろうか――彼には、黒狼との戦闘には参加させられないな。

コンテナハウスを出して食事の用意だ。

部屋を出すと、すぐにカールドンが中に入ってしまった。

彼は研究をしたくて仕方ないようだ。

俺たちの飯の準備を横目に、森猫たちがパトロールに出かけた。

一日中、車に乗りっぱなしだったので、ストレスが溜まったのかもしれない。

夕飯のメニューは、無難にカレーにした。

「はうう――やはり、このカレーは美味」

マロウ商会のマーガレットがカレーを頬張って、恍惚の表情を浮かべているが、本当にサクラに来るつもりだろうか？

「美味いにゃー」「カレーはいつもうめえ！」

猫人たちからちよつと離れた場所で、犬人もカレーを食べている。

「う、美味い！」

初めて食べたカレーにワルターが大声を上げた。

カレーはご飯じゃなくて、パンにつけて食べている。

猫人が香辛料料理が好きなのは知っているが、犬人もカレーは好きかなようだ。

「犬コロに、カレーの旨さが解るとは思わなかったにゃ」「まあ、犬コロも人並ってこったろ？」

ミャレーとニャメナの嫌味を聞いたワルターが「やれやれ」といった顔をしている。

「こ、こりゃ美味しいよ!」「うん!」

三毛のミーケと娘も一緒にカレーを食べて喜んでいる。

「可愛いねえ……」

アマナはカレーを食べているミーケの娘を見てニコニコ顔だ。

「そんなに子どもが好きなら、孤児院でもやればいいだろ」

「はっ、旦那はそう簡単に言いますけどね。これが必要でしょうよ」
アマナが指で丸を作る。

「金なら、俺が援助してやるが」

「本当ですか?!」

「ああ」

サクラにも簡単な学校を作るつもりだしな。

成績優秀者には、王都への留学もさせるつもりだ。

もちろん、卒業したあとは、辺境伯領への就職が条件になる。

商人になりたいやつには、マロウ商会を紹介すればいい。

商会はこれからデカくなるので、優秀な人材はたくさん必要だ。

「旦那は相変わらず――」

「人がいいと言いたいんだろうが、これはあくまで領のための優秀な人材を拾い集めるためだ」

「そういうことにしておきますよ」

彼女にやる気があるようなので、任してもいいだろう。

シャガの所から連れてきた女たちの仕事を世話したりと、面倒見がいいのは解っている。

彼女ならいい先生になってくれるに違いない。

アマナと話していると、アキラがやってきた。

「ケンイチ、ビール！」

「ホイ、エ〇ス」

「おおっ！ サンキュー、マイ・フレンド！」

「運転おつかれさん」

「ああ、もうちょっと道が良ければなあ……」

アキラがビール缶のプルトップを引くと、一口飲んだ。

「まあしゃーない。それよりも——そろそろレイランさんが、恋しくなってきたんじゃないか？」

「ははは、そうだな」

アキラと話しながらカレーを食べていると、森猫たちがパトロールから戻ってきた。

「お母さん、なにかあったかい？」

「にゃー」「みゃー」

なにもなかったらしい。

彼女たちには、猫缶を出してやる。

森猫たちに猫缶をあげていると、マロウがやってきた。

「ケンイチ様、娘から聞きましたぞ」

「あれかい？」

「はい」

あれってというのは、転移門のことだ。
彼なら話しても大丈夫だな。

「魔力をすごい消費するから、簡単には使えないぞ」

「商売に——というのは無理でございますか……」

「俺がオダマキに船を見に行ったりには、使うつもりだけどな」
商売に使えないと知ってマロウは残念そうだ。

過去に、あれをどうやって使っていたかは不明だが、相当の魔力が必要だったろう。

それとも、それを補うためのなにかがあったのだろうか。

たとえば超巨大魔石があれば、それを電池代わりにして駆動することも可能だと思う。

彼にも、孤児院と学校のことを話す。

「いいすな。読み書き計算から商会で教えるとなると、中々に大変ですからな」

学校や孤児院で、ある程度のフルイにかけることができる。

子どもをフルイに——なんて少々可哀想だが、俺も領主になったからには割り切りが必要だ。

全員が平等に——なんて理想がかなえはいいが、実際はそうはいかない。

領のためにも、能力がある人間を優先しなくてはならないのだ。

「ケンイチ——」

マロウとひそひそ話をしていると、プリムラとアマランサスがやってきた。

「その他の場所とつながる門というのは、他にもあるのでしょうか？」

「遠距離の移動に使われていたとすれば、他にもあるのかもしれない

いな」

王家や帝国の古書にも登場するらしいし、メジャーな移動手段だったのかも。

「……」

アマランサスはなににも言わず、俺にべったり。

「どうした？」

「あれを自在に使えるようになれば、妾と聖騎士様との理想の国が我が手の中に」

「あまり物騒なこと考えるんじゃないよ。でも、実際に使えば、かなり強力だろうな」

「その通りですわえ」

そこに俺を呼ぶ声が聞こえてきた。

「ケンイチ様！」

暗闇からやってきたのは、カールドンだ。

「どうした？」

「これを見てくださいませ」

彼が差し出したのは、手作りだと思われる木製の車の模型。

金属製の板バネを使った、本格的なサスペンションを備えている。

おそらく、俺が乗っていたハ〇エースのサスペンションを模倣したものだろう。

以前、彼が車の下に潜り込んだりしていたので、そのときに構造を把握したのかもしれない。

「よくできている……マロウ見てみる」

「はい……これは!？」

「こういう金属の板を使うことで、馬車の乗り心地を改善すること

ができる」

「そのとおりでございます。ケンイチ様の召喚獣の足回りを参考にいたしました」

やっぱりか——あんなチラ見ただけで、構造を把握してしまうとは……。

カールドン、恐ろしい子！

彼なら、あの魔法の箱の原理も解明してしまうかもしれない。

マロウも手で持った車を動かして、ビヨンビヨンと跳ねるサスペンションの動きを確認している。

「それでは、こういう構造を取り入れれば、ケンイチ様の召喚獣のような乗り心地にできると？」

「そうなのですか？」

必死に考え込んでいるマロウとは違い、プリムラにはまいちピンとこないようだ。

こういう玩具は、男のほうが解りやすいのか。

ドライジーネのときもバカウケしていたしなあ……。

「あそこまではいかないと思うが、かなり改善できると思う」

「そうです。ケンイチ様の召喚獣は柔らかい素材を使った車輪を穿いております。あれもかなり乗り心地に貢献していると思われますので……」

「ゴムか——この世界にゴムなんてあるかな？」

「か、カールドン様。これを貸していただけませんか？」

「それは試作品ですから、それでよろしければどうぞ」

「早速、ダリアに戻ったら、ウチの馬車を使って試作してみなくては！」

マロウは馬車の改造をやるつもりだ。

商売になると踏んだのだろう。

馬車の乗り心地に不満を持っている者は多いから、皆が飛びつくに違いないが、この世界には特許がないからな。

すぐにパクられそう……。

アマランサスが俺に抱きついていてのを見て、我慢できなくなったのかアネモネがやって来た。

「もう、アマランサスクっつきすぎ!」

「んふふ……」

アマランサスが本気で抱きついたら、アネモネの力では引き離せない。

アネモネは不満があるようだが、今日はアマランサスの日だ。

彼女も我慢しきれないのだろうが、あの転移門を見てから俺へのべつたりが止まらない。

よほど、なにかの琴線に触れたのか。

飯を食い終わったので、寝室用のコンテナハウスを出す。

今日、一緒に寝るのは、アマランサスとプリムラだ。

今日もベッドの上ではアマランサスが尻尾と耳をつけている。

「プリムラ、一緒に真似することはないんだぞ?」

「私も好きでやっているんだから、いいんです!」

それならいいが……プリムラと話している間も、アマランサスが俺の身体を舐め回している。

「そんなに国を作りたいなら、正室を望めばいいだろう?」

「……」

俺の問いにもアマランサスは黙ったままだ。

「それじゃ、帝国にあるという若返りの神器があったら？」

「……」

黙っているが、目の前にそれがあつたら、彼女は豹変するかもしれない。

これだけの女性が、野心がないとは到底思えないし。

—— — — — — ◆ ◆ ◆ — — — — —

——サクラへの移住希望者がいる村にやって来た次の日。
朝飯を食うと、早速仕事を始めた。

この村の住民たちは、全員移住を希望しているらしい。
そのため、ここにある家を全部アイテムBOXに入れて、サクラに村ごと移築する。

村の住民たちが見ている前で、最初の1軒がアイテムBOXに吸い込まれた。

村の運命を決めるイベントに、全ての村人が総出で見守っている。

「「「おおおっ！！」「」」」

「すごい！」「本当に家が消えた！」

住民たちの荷物は、家の中に入っているので、このままサクラでアイテムBOXから出せば引っ越し完了だ。

荷物を運ぶ普通の引っ越しより簡単。

目の前で起こる信じられないできごとに、ヤンヤの喝采が飛ぶ。

村長によると、家が20軒——住民が30人だと言う。

その中には、俺がシャガから助けた女性も含まれている。

シャガの所からこの村に戻っていた彼女がつぶやく。

「私がシャガ一味に捕まって、良かったのか悪かったのか……」

それを聞いたプリムラもうなずいた。

「私もそうですよ。シャガに捕まり、ケンイチが助けにきてくれなければ、彼の傍にはいられなかったかもしれません」

「そうかにゃ？ プリムラなら、ケンイチを地の果てまで追い詰め
そんな気がするにゃ」「ははは……」

笑うニヤメナをプリムラが睨んだので、獣人たちは口を閉じた。

「それを言うなら、ミヤレーだって、ケンイチを追いかけてたでし
よ？」

「ムフー！ 獲物は絶対に逃さないにゃ！」

「お嬢様は欲しいものは絶対に手に入れる方なので……」

「絶対ということはないでしょう？ マーガレット？」

「いいえ、私が知る限りでは絶対に見逃したことはありませんでし
た」

プリムラとマーガレットの付き合いは長いらしいので、彼女の言
うことは間違いないのだろう。

「ケンイチ、モテモテだな」

アキラが笑っているが、女たちからの視線が怖い。

これ以上増やさないようにしなくては……。

そんなことをしているうちに、住宅の収納が済む。

村には建物が1軒もなくなり、完全な更地になってしまった。

そこに村長が、看板を建てた——村の移転のお知らせである。

もしかして、訪ねてくる人がいるかもしれないからだ。

「村が丸ごと移転って信じてもらえるのかな？ はは」

「そう仰いまして、事実ですから」

あとは、アイテムBOXからコ○スターを出して、皆を乗せる。
ペットのスライムは、後部にトランクがあるので、そこに入れた。
このコ○スターは29人乗りらしいが、通路に補助席を出して詰
めて無理やり乗せる。

アキラにハ○エースを運転してもらい、俺の家族はそちらに乗せ
るつもりだったのだが――俺と一緒にいいというので、無理やり乗
せることになってしまった。

まあ、なんとかなるだろう。

「それじゃ、出発するぞ」

「――「おおっ！」」

「皆、顔が明るいんだが、名残惜しいとかそういうのはないのか？」

「――「いいえ、全然！」」

皆がお互いの顔を見合わせると、声を揃えた。

本当は、皆が引越したかったのに、どうにもできなかったので
住み続けていただけなのだ。

生まれ故郷とか、そういう郷愁みたいなものもないらしい。

ただただ、ここから離れたいだけのようだ。

そのぐらいに、ここでの生活は厳しかったのだろう。

車を発進させる。

「おおっ！ 動き出した！」 「すごい！」 「馬車と違って、全然揺
れないぞ！」 「この椅子も貴族様が座るような椅子だ！」

村人たちには好評である。

俺たちは、更地になってしまった村をあとにした。

213話 バス旅行

平原の中で孤立した村から移民を募集したら、全員が手をあげた。その数30人。その中には、かつて盗賊シャガの下から助けだした女性も含まれている。

不思議な縁があるな。30人の引越しとなると大変だが、俺にはアイテムBOXがある。

村にあった彼らの家を荷物ごと全部アイテムBOXに入れるという、裏技だ。

そのままサクラに行ってから、整地をした土地に家を出せばそのまま村の移転が済んでしまう。

住民は俺が出したマイクロバスに乗せる。多少、定員オーバーだが、なんとかなるだろう。

外国に輸出されたマイクロバスが、天井まで人に乗せて走っているのを見たことがあるし。

まあ――ああいうのは、サスペンションとか強化されているんだろうけど。

ぎゅうぎゅう詰めマイクロバスの住民を乗せて、T社のコ〇スターは街道を走りだした。

道はそんなに悪くないし、SUV車じゃなくても、なんとかなるだろう。

スタックしたら、俺のアイテムBOXに入れて出し直せばいいわけだし。

先頭を切るのは、アキラのハ〇エース。

マロウや一緒になった犬人、アマナ、マーガレット、プリムラが

乗っている。

プリムラもこちらに乗りたそうな顔をしていたが、父親とマーガレットがいるので、ハ〇エースに乗ってもらうことにした。

こちらはぎゅうぎゅう詰めだから少しでも乗客を減らしたいが、犬人と猫人は一緒にできないし、中々気を使う。

ペットのスライムは、後部にあるトランクルームに入っている。

さすがに30人以上乗っていると、車内はにぎやか。

定員が29人乗りなのだが、補助席を出して4人がけの所に5人6人を無理やり座らせ――扉の所には獣人たちが陣取っている。

三毛の娘もそこに座っているが問題ない様子。

荷物は全部俺のアイテムBOXに入っているので、意外とスペースはあるのだが……。

運転席の隣でも補助席を出して、アネモネとアマランサスが座っており、森猫たちもここだ。

猫は狭い所が大好きなので、まったく苦にはしていない。

ハンドルを握っていると、カゲが飛びついてきたりするので、注意が必要だ。

ベルが注意してくれているようなのだが、まだまだやんちゃ盛りって感じなのだろう。

扉がある狭いスペースで団子になっている獣人たちと話す。

「お前達、向こうに乗れば、そんなぎゅうぎゅうにならないのに……」

「犬コロと一緒になら、こっちのほうがいいにゃ」「そうだよ旦那」
まあ、彼女たちがそう言うならいいが。

「それに、この子と一緒に遊んであげられるからいいにゃー！」
ミャレーは、三毛の娘をずっと肩車している。

「ふう……娘と遊んでもらえると助かるよ。子どもの元気に負けて疲れてしまうことがあってさ」

子どもってのは、小型台風だからな。

獣人でも、子どもの相手をするのは疲れるらしい。

「それなら、ウチに任せるにゃ！」

「うん、ミャレーお姉ちゃんと遊ぶ」

「うにゃー！ 可愛いにゃ！ 食べていいかにゃ？！」

ミャレーが子どもを肩から降ろすと、頬ずりしまくっている。

「本当に食うなよ、クロ助」

ニャメナは、あまり子どもが好きではないらしく、少々うんざりとした顔だ。

こんな感じでバスの中はぎゅうぎゅうなのだが――俺やアキラは、元世界の便利な生活に慣れてしまっているので、この世界の住民の感覚とのズレがある。

とにかく彼らからすれば、自分で歩いたり走ったりすることもなく、移動ができるってだけで十分にすごい。

狭いとか乗り心地なんてどうでもいいことらしい。

住民たちが交互に窓にへばりつき、外で変わる景色をずっと眺めている。

「す、すごい速さだ……」 「どんどん景色が変わっていくな」

「ウチらの全力疾走と同じぐらいの速さにゃ」

「へえ、獣人たちってのはこういう景色を見ているのか……」

ミャレーのドヤア顔の解説に、住民たちが聞き入っている。

車は順調に進み、土の道を走りながら、たくさん走っている馬車

を追い越していく。

途中にある宿場町も通り過ぎる。

「もう、宿場町かい!？」 「通り過ぎちゃった……」

「今日中には、ダリアに着くぞ」

「「えええっ!？」」

住民たちは、1日でダリアに到着するその速さに信じられないようだ。

昼になったので昼食を摂るが、人数も多くあまり時間はかけていられないため、シャングリ・ラで購入したインスタントものなどで賄う。

シャングリ・ラで買ったパンと、インスタントのスープ、そして冷凍ものの唐揚げ。

それらを、アネモネの魔法レンジでチンすれば、すぐに食えるようになる。

「これは肉か? 美味しい!」 「スープも美味しい!」 「この世に、こんな柔らかいパンがあるなんて」

唐揚げもインスタントスープも住民たちの評判はいい。

シャガの討伐のときにもインスタントスープを出したが、評判がよかったからな。

この世界の住民たちの舌にも合うらしい。

特に柔らかいパンは年寄りに人気だ。

パンをかじりながら、アマナの所に行く。

「アマナ、色々と世話になったな」

「いやですよ。あたしが勝手についてきただけです。美味しいものをたらふく食わせていただきましたから」

そこにワルターとアキラがやってきたので、猫人たちが警戒しているが、犬人はチラリとも見ない。

「ケンイチ様、今日中にダリアに到着するというのは本当ですか？」

「ああ——多分、余裕で間に合うだろう」

「ダリアで一泊するの？」

「アキラもパンを齧っている。」

「本当はビールを飲みたいところだろうが、まだ運転が残っているからな。」

「いや、門が閉じる前に街を抜けられたら、そのまま森を突っ切るつもりだ」

「まあ、2時間もあれば抜けられるしな」

「……」

「ワルターがなにか考え込んでいる。」

「どうした？」

「もうしわけございません。あまりに信じられなくて……」

「まあ、最初はそうだな。すぐに慣れる」

「ベルとカゲがやってきたので、軽くブラシをかけてやる。それを見た、ワルターが尻尾を振っている。」

「どうしたワルター？ お前もブラシをかけてほしいのか？」

「いえ?! そんな恐れ多い……」

「彼は尻尾をブンブンさせているが、俺としても男のブラシがけはなあ……。そこ三毛の娘が走ってきた。」

「あたしもブラシー！」

「おっ!? よしよし」

「ふわふわの三毛にブラシをかけてやる。」

「あわわ！ ケンイチ様、もうしわけございません！」
親の三毛が飛んできた。

「ああ、構わないよ。ほら、ベルもなにも言わないし」
ベルは自分の手をペロペロして、顔を洗い、毛づくろいをしている。

「ふみゃーだっこ」

子どもがねだるので、彼女を抱き上げる。

だが、なにか黒い視線を感じたので、そちらを向くと――アネモネだ。

「アネモネ、まさかこんな子どもに嫉妬したりはしないかな？」

「うう……」

キャツキャとはしゃぐ子どもに、アネモネが苦い顔をしている。
いつも大人だって言い張っているのに、子どもにヤキモチじゃ恰好悪いだろう。

そこにアマランサスが飛び込んできた。

「聖騎士様あ！ 妾にもブラシをかけてたもれえ」

「編み込んでいる髪を解かないと無理だろ」

「そっちではないわえ……」

アマランサスが抱きついて離れない。

「昼間から、止めなさいっての」

「アマランサス様！ こ、こんな昼間からなにをなさるんですか！」
プリムラからもクレームが入った。

「オダマキで魔物退治してから、ちょっとおかしいぞ？」

「そんなことはありませんわえ……」

「いや、変だ」

俺の言葉にアマランサスが、ちよつと間をおいた。

「聖騎士様、妾は奴隷でございますわえ」

「まあ、そうだなあ。なんで奴隷を望むのか、解らんのだが」

「妾は奴隷ですわえ！」

「解ったっての、なにが言いたい？」

「もっと奴隷のように扱ってくださいませ、ハアハア」

「はあ？ なじったり、足蹴にしたりしろっていうのか？」

「その通りですわえ！ そして、ボロ布のようになって、聖騎士様にすぎるのですわえ、ハアハア」

アマランサスの目が怖い。冗談ではなく、本気でこんなことを言っているのだ。

「アマランサス様！ この場で、そ、そのようなことを！」
プリムラの顔が真っ赤だ。

「アマランサス！ くつつきすぎい！」
アネモネが俺たちの間に割って入ろうとしている。

「どうじゃえ？ 正室や側室には、このようなことはできぬじゃろうて」
ドヤ顔のアマランサスにプリムラが反論した。

「そ、そんなことはありません！ 私だって、やろうと思えば！」
「お嬢様落ち着いてください」

スープを持ち、パンを啜えているマーガレットが真顔でツツコミを入れる。

「マーガレットの言うとおりだぞ。プリムラも落ち着け」

そんな俺たちから、ちょっと距離をおいて――必死にアホなことを言っている自分の娘に、マロウが無表情で固まっている。

娘のこんなやりとりを聞かされる父親の心境はいかなものか。自分の娘が貴族の側室になったということで、親としての心は捨てて、大店の商人として貴族との付き合いを優先しているのだろう。まあ、それは解るんだが、一言注意してくれてもいいんじゃないだろうか、お義父さん。

離れた場所で、俺たちのやりとりを真剣に見ていた住民たちも、ざわついている。

「さすが貴族様だあ」「あんな美人の奴隷を使い捨てか?」「たまげたなあ」

ほらほら、誤解されているだろうが。
興奮しているアマランサスを抱き寄せる。

「ほら、アマランサス、いい子だからやめような」
彼女の頭をなでる。

「妾は奴隷なのじゃ! いい子ではありませんわえ!」

「アマランサスがいい子なのは、俺がわかっているから」

「違うのじゃあ!」

そんなやりとりをしていると、アマランサスが泣き始めた。
情緒不安定だなあ。割って入ろうとしたアネモネも呆れている。

「モテる領主様はつらいな」

アキラが皮肉っているが、ちょっと困った状態だ。

「なんとかしてくれ」

「無理だな。望んでいるんだから、椅子にしてケツにでも敷いてやればいいだろ?」

「そんなことできるかい！」

「それじゃ！ 聖騎士様あ！ 妾をなぶって椅子にするのじゃ！」

「ほら、ダメダメ！ おゝし！ 皆、満腹になったなあ——出発するぞお！」

「「「おおゝっ！」「」」

「聖騎士様あ！」

涙目で騒ぐアマランサスをバスに乗せる。

一応、命令すると素直に従う——というか、従わないと激痛で転げ回るからな。

それにしても、彼女が奴隷にこだわるのが、そんな理由からなんてな。

ハ○エースとバスは、再び街道を走り始めた。

順調に走り続けるが途中で雨になる。

以前に遭遇した、前も見えなくなるような土砂降りではなく、普通に走れるレベル。

「アキラゝ、そのまま走るぞゝ」

『オツケー』

ギッコンバツタン、フロントガラスに揺れる黒いワイパーに、カゲがじゃれついている。

それを見ていた獣人たちも飛びかかりそうだ。

本能のようなもので、自制するのは大変らしい。

見なきゃいいと思うのだが、音や動くものがあると反応してしまうようだ。

「こんな雨の中でも、平気で走っているぞ」「全然、雨も入ってこないし」

村人たちの声が聞こえるが——雨の多い日本で作られた車だからな。雨の対策はバッチリ。

雨は30分ぐらいで止んだが、舗装されていない土の道は泥濘と化する。

馬車の車輪は細いので、すぐスタックしてしまう。

それを横目で見ながら俺たちはゆつくりと追い越していく。

さすがに助けている余裕はない。なにせ数が多すぎるしな。

湿気があるのか、車内が暑くなってきた。

なにせ乗っている人数も多いから——俺は、エアコンのスイッチを入れた。

「おおっ!? 冷たい風が出てくる!」 「魔法ですか?」

「そうそう、魔法だ」

「なんと、魔法で中が涼しくなる乗り物なんて」

「暑いときは、この召喚獣の中で寝ればいいにゃ」

ミヤレーが妙案を思いついたようだ。

「この中ですか?」

「にゃ」

「アネモネの魔法で十分だと思うけどなあ」

シャングリ・ラで窓クーラーを買って取り付けるという手もあるが、発電機がうるさいからな。

なにかカバーを作って被せればいいが……ガソリンも高いし……。

このコ〇スターは、ディーゼルだから、バイオディーゼル燃料が使えるけどな。

馬車を追い越しまくり、俺たちはダリアを目指す。

日が傾く頃、ダリアの塀が見えてきた。

「あれがダリアの街だ」

「本当にダリアだったのですか?!」 「すごい!」 「なんという

速さ！」

住民たちのざわつきを聞きながら、アキラの車に連絡を入れる。

「アキラ、まずはマロウ商会へ」

『オッケー』

閉門には余裕で間に合った。

マロウ商会にマロウとマーガレットをおいても、街を通り抜けられるだろう。

街の通りを進むと、たくさんドライジーネが走っている。

結構、普及しているようだ。

その中に、前輪にペダルがついたものが走っているのを見かけたので無線を取った。

アキラの車に乗っているプリムラに話を聞く。

「プリムラ、新しい型のドライジーネが走っているようだが……」

『アレはボーンシェーカーですわ』

俺が渡した手書きの図面から、あれを開発したらしい。

最初は俺やプリムラが乗っていた自転車オフロードバイクをコピーしようとしたが、それは無理だと悟って、こちらにしたようだ。

少々テクノロジーが遅れているとはいえ、同じ人間だ。

一旦、発明がされると、かなりのスピードで改良され商品化がなされていく。

まさに日進月歩。

コアモーターを使った車などが開発されたら、毎年のように新型車が現れるかもしれない。

その前に、コアモーターには魔石の問題があるがな。

家の外には洗濯物が干されているのが見えるが、木の洗濯バサミが使われている。

アレも俺がマロウ商会に卸して、街で売られているものだ。
やはり便利なものは普及が早い。

そんな街の景色を見ながら、マロウ商会の屋敷に到着した。

バスから降りて、マロウに挨拶をする。

彼と一緒に歩いてきていた商会の番頭は、オダマキに残って支店の準備をしているようだ。

「予定より、遅れて申し訳なかったな」

「いいえ、魔物の襲撃という予想もしなかった事態であれば、仕方ありません」

「アマナの孤児院の件は相談に乗ってやってくれ。俺も金を出すし」
「承知いたしました」

一仕事追えて晴れやかな表情——とか思いきや、彼の顔はどんよりと暗い。

「どうした？ なにか心配ごとか？」

「いいえ——」

そういえば——マーガレットはどうした。

アキラの車を見ると、マーガレットが乗ったままだ。

「おいおい、本当にサクラに来るつもりか？」

「ええ、旦那様とも、話し合いができましたので」

「お前の荷物とかはどうするんだ？ 部屋か家があるんだろ？」

「しばらくしたら、ダリアに戻って身辺整理をいたします」

「ウチには、王家のメイドたちがいるから、なにかとうるさいぞ？」

「私は、お嬢様のメイドなので、関係ありません」

なるほど、そうきたか。

もう決めてしまったようで、雇い主のマロウにも話をつけている
んじゃ、俺の出る幕ではないな。

俺が雇うメイドではなくて、プリムラのメイドであるんだし。

暗い表情のマロウに別れを告げると、車に乗り込んだ。

「俺は、恨まれないだろうな？」

準備が整うと――傷心のマロウに手を振り、俺たちはマロウ邸を出発した。

「アキラ、次はアマナの家だ。俺は知らんから彼女に聞いてくれ」
『市場で降ろせばいいって言ってるぞ？』

「そうか、それじゃ市場だな。でも、時間的に混んでいると思うので、近くまでしか行けないと思うが」

『それでもいいってさ』

市場の近くまで行くと、ハ〇エースからアマナが降りた。

「ほんじゃな。お土産に黒狼でも持っていくか？」

「そんなのもらっても、持っていけないよ」

「獣人を掴まえて、金を払ってギルドまで運んでもらえばいい」

「その手があったね」

「そんじゃ、ほい」

アマナの前に黒狼を出す。

「孤児院の件はマロウ商会在力になってくれるそうだ。金もマロウ商会経由で俺も出す」

「解ったよ。楽しくなってきたじゃないか！」

三毛の娘とアネモネが、窓から手を振る。

アマナの顔も少々寂しそうだが――日がな一日、ぼく々と露店を経営する日々から脱却するわけだ。

とんでもなく忙しくなると思うが、それは彼女が望んでいること。人生の転機ってのは、いつ来るか解らない。

「面倒だから、途中で止めるとか言わないでくれよ」

「旦那じゃあるまいし!」

彼女は俺の性格をよく知っている。

——とはいえ、さすがに領主までなって家族もできたのに、放り投げたりはできない。

守るものができたのだから、可能な限りしがみついて足掻けるだけ足掻く暮らしをしなくてはならないのだ。

車を出す前に皆に確認する。

「このまま森を突っ切って辺境伯領に入る。多分あと2時間ぐらいだな。腹が減ったと思うが我慢してくれ」

「大丈夫でございますよ、昼も食べさせていただきましたから」 「まともに昼飯なんて食べたのは久しぶりだったぜ」

「そうか、辺境伯領についたら飯にしよう。それじゃ出発する」

村人たちと話していると、プリムラがこちらに乗り込んできた。

「おい、プリムラ。こっちは一杯だぞ?」

「もう父もいませんし、こちらに乗ってもいいでしょう?」

プリムラの言葉に無線機を取った。

「アキラー! そっちのスペースが空いただろ? こちらの人を何人か乗せてやってくれ」

『オッケー』

村人たちを6人ほど、ハ〇エースに移す。

これでちょっと座席にも余裕ができる。

アキラの車を先導させて、バスを発進させると——人混みを縫うように進め、街の北門を抜ける。

普通、今の時間は慌てて街に入ってくる馬車ばかりなので、出ていく馬車などは一台もない。

門を抜けると、いよいよ暗くなってきた。

右手の森には、以前俺が住んでいた場所がある。

あのときに、こんな波乱万丈の人生になるとは想像もできなかった。

たまに商売をして、森の中でひっそりと、スローライフをしていればよかったはずなのに……。

俺が右の森を見ているのを、プリムラも気がついたようだ。

「ケンイチ……ごめんなさい。あなたはあの場所でひっそりと暮らしていたかったですよね？」

「ははは、そうだけど。今の生活も結構面白いし」

「でも、私と知り合いにならなければ……」

なんだ、プリムラはまだその話を引きずっているのか。

「そんなことはないぞ。前にもその話はしたが、マロウ商会と知り合いになったから、商人として自立できたんだし」

「私も、プリムラのおかげでケンイチと一緒に暮らせて、魔法も覚えられたし」

アネモネのは、プリムラのおかげというのは、ちょっと違うような。

ちょっと嫌味が入っているのか。

まあ、プリムラがシャガに捕まったせいで、俺がアネモネと知り合えたのは間違いないが。

「私だって……子どもに負けるなんて……」

なんかプリムラがブツブツ言ってる。

「妾もそうじゃな。聖騎士様がダリアでおとなしく暮らしていたら、一緒にはなれなかったのう」

「プリムラはアホだにゃ。さっさとケンイチとやって、マロウ商会

で囲ってればよかったにゃ」

「うぐっ！」

ミャレーの核心をつくツツコミに、プリムラが顔を赤くして言葉に詰まる。

マジで、あそこでやってしまったらダリアに住むか、マロウ商会に婿入りなんてことになったな……。

「ううう……わ、私だって精一杯……ゴニョゴニョ……まさか、ケンイチがあんなに奥手だなんて……」

別に奥手でもないのだが、どうしても元世界の常識が邪魔してしまっただよなあ。

「まあ、俺もお嬢のおかげで旦那と知り合えたんだから、感謝だなあ」

ニヤメナが、頭の後ろで腕を組んで話す。

「ううう……」

「おーい、プリムラをあまりいじめるなよ」

「にやははは」

ミャレーの笑い声を聞きながら、アキラの車に連絡を入れる。

「アキラ——マーガレットを出してくれるか？」

『はいよ……話すときは、このポッチを押してな……はい、なんでしょう？』

「マロウが簡単には辞めさせてくれないと思っていたんだが、どんな話し合いをしたんだ？」

『それは簡単です。私は、マロウ商会の裏も表も知ってますから』

「あゝ、それを盾にしたのか。でも、他の商会だったら命を狙われるような交渉だなあ」

『そのときはケンイチ様を守ってくれと信じてますから』

「まあ、貴族に正面切って喧嘩を売る商人はいないだろうしなあ……」

うちのメイドたちと仲良くやつてもらえばいいが——どういう扱いにしたらいんだろうか。

完全に、プリムラが個人で雇っているメイドってことにしたほうがいいのかな？

無線を終了する。

真っ暗な中をライトを点けて走る。

前には、アキラが運転するハ〇エースの赤いテールランプ。

森の中——ライトの光になにかキラキラ反射しているのが見えるが——生き物の目だ。

危険なやつも危険じゃないやつもいる。

「こんな真っ暗な道を、まるで昼間のように……」 「すごい明るい」
住民たちが、バスのヘッドライトの明かりに驚いている。

「本当は、部屋の中にもあかりを点けられるんだが、中が明るいとかいつの操縦が難しいんだ」

「明かりが点けられるにゃ？」

「試しに点けてみるか？」

車内灯を点けてやる。

「「「おおっ！」」」 「まるで昼間のような明るさだ！」

「こんな風の中が明るいとか、外が見にくくなってしまっただ、明かりを消すぞ」

スイッチを切ると、一瞬で中が真っ暗になる。

「「「きゃあ！」」」

女性の悲鳴が上がった。

順調に車が走っていたのだが、前を走っていたハ〇エースが急ブレーキを踏んだ。

「アキラ、どうした?!」

『悪い、黒狼をロードキルだ! 少し壊れたかもしれねえ』

「動けないのか? ライトが切れたのか?」

『いや……大丈夫だ』

「それなら、そのまま進もう。黒狼なら1頭ってことはないだろうし」

『オッケー!』

「オッケーにゃ! にゃはは! あの犬コロは、今どういう顔をしているのにゃー!」

まあ、ミヤレーの言っていることは少々悪趣味だが、自分たちの乗っている乗り物で神の遣いを轢いたんじゃ……。

「アキラ、ワルターは大丈夫そうか?」

『お? ちょっと待ってくれ………大丈夫だと言ってるぞ』

そうか、それならいいんだが……。

そのまま2台の車は暗い森の中を進み――途中にある宿泊場所も通り過ぎて、辺境伯領に向かう。

突然、明るい光とともに走ってきた2台の化け物に、なにやら騒ぎになっているが、そのまま通りすぎる。

そして1時間ほどのち、サクラに向かう左折道路が見えてきた。

「やった、帰ってきたぞ」

「うにゃー!」

俺の声に、乗っている住民たちもどよめく。

「本当に、辺境伯領に着いたのか?」 「本当?」

まあ、信じられないのは無理もない。

道交法もないのに、アキラと一緒に律儀にウインカーを上げて左折。

俺たちは、真っ暗なサクラに戻ってきた。

214話 暗いサクラで

南の港町オダマキからの帰宅途中――俺たちは移住希望者をマイクロバスに乗せて帰ってきた。

夕方にダリアを過ぎて、真っ暗な森の中を突き進む。

エンジンで動く車があるからできる芸当であって、この世界の常識からはかけ離れているのは確かだ。

ダリアから続く街道を左折して、うねうねした道をしばらく進み川を渡る。

サクラが見えてきた。

「ふう〜やったあ」

家の前の広場に、ハ〇エースとマイクロバスが停車した。

「ここか？」 「着いたのか？」

「は〜い！ 皆、疲れただろう、サクラに到着したぞ」
住民たちが、窓にへばりついて周りを見回している。

「――「おおおっ！」」

ドアを開けると、待ってましたとばかりにベルとカゲが飛び降りて、周囲をクンカクンカ。

そのあと皆を降ろすと――早速、食事の準備だ。

夕方になっても食事も摂らずに爆走してきたからな。

さすがに、今日中に到着したかった。

プリムラとマーガレットが支度を始めた。

アイテムBOXから、テーブルや食材を出すと、住民の女たちに

も手伝ってもらおう。

スピード優先なので、またインスタント中心にしよう。

飯の準備をしていると、カールドンが行ったり来たりとウロウロしている。

早く研究したくて仕方ないようだ。

まずは彼のために、黒いコンテナハウスの研究室を、元の場所に出してやることにした。

アイテムBOXから部屋を出すと、地面を揺らす。

いつもこんな感じで出しているのだが、中の本が崩れたりしないだろうか？

彼からクレームなどが入ったことがないのでわからん。

そっと出したくても、どうしても空中から現れてしまうからな。

「ケンイチ様、ありがとうございます！ もう、ワクワクが止まらないのでございます！」

新しいおもちゃをもらって、待ちきれない子供のようだ。

「あまり根を詰めて、身体を壊すんじゃないぞ？ 飯はどうするんだ？」

「扉の前にも置いてくださいますか？」

「解ったよ」

カールドンの所から戻ってくると村長がやってきた。

「あの、辺境伯様、ここが本当に……？」

どうも、あの村から1日でここまでやってきたのが信じられないようだ。

まあ、馬車で数週間、徒歩なら1ヶ月以上はかかるからな。

「ほら、目の前に月が映っているデカイ湖があるだろ？ 対岸まで

25リーグ(40km)はある」

「た、たしかにアストランティアの近くには大きな湖があるとは聞いたことがありますか……」

「「おおおっ」「」」

住民たちから声上がるが、次のミャレーの言葉に微妙な表情になった。

「あの湖には馬鹿デカイ魔物がいたにゃ！ お城ぐらいの大きさがあつたにゃ！」

「えっ！？ 魔物でございますか？！」

魔物という単語に反応して、村長が心配そうだ。

「ああ、大丈夫。ちゃんと退治したから」

「そのような巨大な魔物が……」

「旦那の言っているのは本当だぞ。俺たちも戦いに参加したんだから」

「トラ公たちは歴戦じゃないか。こりゃ恐れ入ったねえ」「お姉ちゃんたち、すごい！」

「にゃはは」

三毛と娘の言葉に、ミャレーが頭をかいていると、ニャメナが続く。

「ははは、そうだろう。そうじゃなきゃ、獣人で貴族の愛人になんてなれねえ」

そんな理由ではないが、ミャレーとニャメナの方が優れているから、俺も困っているのは間違いない。

「でも、トラ公は——本当はビビってるにゃ」

「当たり前だろ！ でも、命がけにならないと、旦那に相手にももらえねえし……」

「そんな、怖いなら無理にやらなくてもいいんだぞ？」
ニヤメナのピカピカの虎柄をなでると、俺の腕に尻尾を巻き付け
てきた。

「なーん→」

「ぎゃあ！　トラ公、その声は止めるにゃ！」　「キメエええ！　ど
こから出してるんだ！」

ミヤレーと三毛の毛が逆立ち、尻尾が太くなった。
そんなに嫌か。

「ケンイチ様！　あれは湖ですか？　まるで海のような大きさです
な」

猫人たちのギャアギャアを横目で見ながら、ワルターがやって来
た。

「向こう岸が見えないぐらいの大きさだから、海を知らない人間に、
ここを海だと言ったら信じるかもな」

「そうでございますな」

ここでの新しい生活に思いを馳せているのか、彼の尻尾が振られ
ている。

獣人たちのことはさておき――。

「村長、このあたりに来たことは？」

「若い頃に、ダリアには何度か……」

「それじゃ、ダリアを通り過ぎたのは解っただろ？」

「たしかに、そうですが……」

どうにも信じられないようだ。

まあ、信じられなくても、1日中車に乗りっぱなしだ。疲れて腹
も減っただろう。

マイクロバスの所に行くと、後部からスライムの入った箱を取り

出す。

「よし、収納」

バスをアイテムBOXに入れた。

運転手をやってくれたアキラをねぎらう。

「はうゝ、疲れたぜえ」

まあ、彼も祝福持ちなので、飯を食べば回復する。

「アキラ、サンキュー。ほれ、トリビー」

アイテムBOXからビール缶を取り出して、彼に投げてやる。

「おおっ！　ありがてえ」

アキラがビールをキャッチして、プルトップを引くと、ごくごく
と3口ほど飲んだ。

アルコールもエネルギーになるので、これでも回復するかもな。

「ふえゝっ！　一仕事終わったって感じだぜえ！」

「ただ港町に行くつもりが、色々とありすぎだな」

「まったくだ」

「ケンイチ！　トリビーってなんにゃ？」

ミヤレーが俺たちの所にやって来たが、さっきから獣人たちは元
気だな。

まったくいつもと変わらん。

「とりあえず、これを飲むってこと」

俺は、アキラのビールを指差した。

「それじゃ旦那！　俺もトリビー！」

「ニヤメナも頑張ってくれたな」

彼女にもビールを渡した。

「やったあ！」

「あたいにもおくれよ！」

「今日だけだぞ」

三毛にもビールをやると、娘のフワフワの頭をなでる。

「もうすぐ、飯ができるから待ってな」

「うん……」

フワフワで可愛い。このままお持ち帰りしたくなるのをぐっとこらえた。

食事の準備をしていると、俺を呼ぶ声が聞こえる。

「ケンイチー！」

暗闇の中から、背の高い女が走ってきて、キラキラ光る金髪のおっぱへアを揺らしている。

スレンダーなので、走っても他の所は揺れない。

これが、プリムラや爆乳のレイランさんなら、大変なことに。

やって来たのは耳が長いエルフのセテラだ。

耳がいいので、俺たちが帰ってきた音を聞きつけたのだろう。

走ってきて俺に抱きつくと、鼻腔に草の香りが飛び込んでくる。

「やっと帰ってきたのねえ！ もう、暇で暇でえ」

「はは、ただいま。留守中になにかあったか？」

「なにもく〜んくンカクンカ——海くさ〜い！」

「ええ？ においがするか？」

腕をクンカクンカしてみたが、わからん。

洗濯とかはしてないが、アネモネの魔法で綺麗にしてもらっているはずがなあ。

俺に抱きつくエルフを見て、移民たちがどよめいている。

「エルフだ!」「エルフ!?」「本物?!」「あの耳を見ろ」
住民たちはセテラを指差しているが、どうやらエルフを見たのは初めてらしい。

まあ、彼女たちは排他的と言われてるし、見たことがあるやつのはうが珍しい。

俺の身体に長い手足を絡ませているセテラ——その2人の間に、アネモネが割って入ろうとしている。

「もう、くつつきすぎい!」

「なんだよお、ちびっこは寝る時間だぞお」

「子供じゃないから!」

「私から見れば、皆子供さ」

エルフがドヤ顔を見せる。

まあ、こいつは数百歳らしいから、それから見たら子供に見えるかもしれないが。

「それじゃ私は、あなたのことをBBAって呼ぶから」

「BBAって言うな!」

「ぐぬぬ……」

セテラと、アネモネがにらみ合う。

エルフと向き合っても、一步も引かないとは——アネモネも随分とたくましくなったものだ。

いや、元々大魔導師の娘だ。最初からたくましかったのかもしれない。

「こらこら、帰ってきてそうそうに、喧嘩するんじゃない」

「えゝ? 悪口言われたの、私なんだけどお」

「アネモネのこと、子供って言っただろ?」

「だって子供じゃん」

「子供じゃないから！ エルフのBBA！」

「ぐぬぬ……」

エルフとウチの大魔導師をなだめていると、メイド長のマイレンが長い髪を振り乱して走ってきた。

いつものメイド服ではなくて、薄ピンク色でピラピラのついたワンピースの寝間着姿。

寝ていたのか、いつもと違い髪を下ろしている。

「ケンイチ様！ ハアハア……お出迎えもせず、申し訳ございません！」

マイレンは、肩で息をしながら頭を下げた。

「構わん。まさか、こんな夜に帰ってくるとは思わないだろうし」
「本当よねえ。本当に真っ暗な森の中をあれで走ってきたのお？」
セテラが出しっぱなしのハ○エースを指差した。

「そうだよ。あれはどんな魔物よりも速いからな。絶対に襲われることがない」

「ドラゴンや、ワイバーンよりもお？」

「そんなのは、ここらへんにはいないだろ？ ここにいるのは牙熊か黒狼だし」

「ケンイチ様——早速、他のメイドたちも集めます」

マイレンの顔がキリリとしたお仕事モードになった。

「ああ、起きている子たちだけでいいよ。寝てるのを起こしたら可哀想だ——それに人手はあるし」

「ケンイチ様、あの者たちは？」

マイレンは、俺がつれてきた者たちが気になるようだ。

横目でチラ見している。

「サクラへの移民者だ。30人ほどいる。途中で集めてきた」

「呆れたあ——まさか、村をまるごと運んできたんじゃないでしょうねえ」

「まさにその通り」

「……」

エルフが言葉をなくしているが、彼らの荷物や家までもが、俺のアイテムBOXの中に入っていることを説明した。

「呆れて言葉もでないわあ。そんなの聞いたことないんだけどお」

「聖騎士様には、妾たちのような凡俗の常識は通用せぬ」

アマランサスがやってきて、エルフに反論した。

王族が凡俗なわけないだろう。

王族が凡俗なら、普通のオッサンの俺はなんなんだろうが、アマランサスの言葉にセテラが納得している。

「はあ、王族が祝福を与えたってのは、だてじゃないってわけなのねえ」

「そのとおりじゃ」

「まったくケンイチがいると、面白くて退屈しないわあ」

エルフとアマランサスが、うんうんと唸っていると——マイレンが、マーガレットに気がついたようだ。

「あのケンイチ様、あの者は？」

「プリムラの個人的なメイドなんだよ。まあ、仲良くしてやってくれ」

「承知いたしました」

プリムラの個人メイドなので、彼女が出かけたりしても一緒についていく。

側室なら、辺境伯領のメイドを使ってもいいのだが、気心の知れ

たマーガレットのほうがいいだろう。
マイレンと話していると、また俺を呼ぶ声が聞こえる。

「ケンイチ！ 帰ってくるなら、帰ってくると連絡を寄越すがよい！」

薄ピンク色のワンピースの寝間着に、ストールのようなものを肩にかけてやって来たのは、リリスだ。

「リリス、ただいま！ 起きてたか。どんな速い飛脚を使っても、俺の召喚獣のほうが速いし」

「それはそうじゃが……」

彼女を抱き寄せるとキスをする。

「んんっ！ 人前でえ——んっ！」

「えっ！ 私にはそんなこととしてくれなかったのに！」

エルフがブーブー言っているが、彼女は側室でもなんでもない。愛人枠で入ったわけでもないし、正式なエルフの大使だからな。

「君は、エルフの大使だろ？ リリスは正室だ、やって当然」

「そ、そうじゃが……んっ」

もう一度、キスをする。

「もう！ そんなにしなくてもいいのに！」

今度はアネモネがブーブー言っている。

「リリスは留守番してくれてたんだから、このぐらいはしてあげないと」

「そ、そのとおり——そうではない！ まったく、人前で——ゴニョゴニョ」

「ああ、リリスの順番が溜まっているから、たっぷりとしてあげな

いな」

「だから、ケンイチ！　そ、そのようなことは……」

リリスと話していると、アマランサスが絡みついてきた。
俺に抱きつき、口を近づけてくる。

「ああん、聖騎士様あゝ！　それでは、妾とおゝ」

「こら、アマランサス」

「け、ケンイチ、いったい母上はどうしたのじゃ？」

「ちよっと前から、こんな調子なんだよ……」

「リリスは、やらぬのじゃろ？」

「そうとは言っておりません！」

「それでは、一緒にいゝ」

「ええ？　それって倫理的にどうなのよ」

リリスとアマランサスは親戚で、実の親子ではないが……。

少なくともリリスは、アマランサスを母として慕っているので、
その表情は複雑だ。

「城での母上からは全く想像もできんの――それで、ケンイチ。あの者たちは？」

リリスが村人たちを指す。

「ああ、ここへの移住希望者だよ」

「ここまで運んできたのかえ？」

「彼らは引越したかったのに、その資金がなかったんだ。もしかして、こういう村がたくさんあるかも……」

「ケンイチ、まさか他の領から連れてきたのではあるまいな？」

「貴族がない村だと言っていたから大丈夫だ」

「それならいいが、貧困していて可哀想だからといって、他の領民を連れてきてしまうと揉めるぞ？」

「住民たちが逃げ出して、ここまでやってきたと言えど？」

「まあ、それなら……」

別に村を捨てるのは違法ではない。

普通の住民は逃げたくても、金や手段がなくて逃げられないだけなのだ。

「獣人も増えておらぬか？ 見たことがない顔がおるぞえ？」

「ああ、若干いるが。ただの移住だぞ」

「本当じゃろうの？」

「もちろん」

三毛の娘のミッケを呼ぶ。ミーケの娘なのでミッケ、安直すぎる気がするのだが、こういう名前が多いらしい。

「なーに？ ケンイチ様」

「ほら、可愛いだろ？」

フワフワの毛皮を抱き上げる。

「おおおっ！ ここで獣人の子供は初めてじゃの！」

「街なら結構いるけどな」

でも、毛皮がボサボサで可愛くないのだ。

リリスが手を伸ばしてきたので、彼女にも抱いてもらう。

「おおおっ！ なんと愛らしい！」

「お城には獣人は立入禁止だからなあ」

「抱いて寝たら駄目だろうのう……」

「それはまずい」

ミッケを母親の所に返すと、晩飯ができたようだ。皆で食事を摂る。

インスタント中心だが仕方ない。

「妾も食べるぞえ」

「リリース、夕飯は食べたんじゃないのか？」

「食べたが、これも食べるのじゃ」

まあ、いいけどな。

毎回すごい量を食べるのだが、まったく太らないのはすごい。

しかし、俺も10代の頃はメチャ食ってたけど、ガリガリだったし……。

アマランサスや、アルストロメリア様も痩せているので、そういう体質の一族なのかもしれない。

アマランサスは食べるのは普通だが、酒はウワバミだし。

だが、リリースの食事を頼張る顔を見て、帰ってきたことを実感する。

やはり、ここは俺の家なのだ。

皆が食事を摂っているテーブルは4グループ。

俺の家族と、村人たち、猫人たち、そしてちょっと離れた大人のワルターだ。

大人はいまのところ彼1人なのだが、この状況で寂しくないのだろうか？

それは事前に説明してあったのだが、彼の決意は変わらなかった。村長にリリースを紹介する。

「彼女が、正室のリリースだ」

「リリースじゃ、よしなに」

彼女は村長より食うのに忙しいらしい。

「ははっ！」

村長が椅子から降りて、膝をついた。

「俺が留守のときは、彼女かアマランサスが代理を務めている」

「あ、あの……」

村長の言いたいことはわかる。
アマランサスは奴隷なのだ。

「なぜか奴隷になっているが、アマランサスは、このリリスの母親なのだ」

「そ、それでは貴族様のですか？」

本当は王族なのだが、廃籍してしまっているから違うし。

「まあな。奴隷の身分なのだが、領主代行でもあるわけだから失礼なことはしないように。彼女を怒らすと大変なことになる」

「か、かしこまりました」

意味不明かもしれないが、俺だってよくわからんし。

村人たちとワイワイと飯を食っていると、軽装の鎧と剣で武装した3人の獣人たちがやってきた。

ソバナからやってきて、ここに住み着いていた3人組だ。夜の警備の仕事をしている。

三毛子、白い太子、黒いチビ子である。

今回連れてきたミーケも三毛子であるが、模様が全然違う。思わず見比べてしまう。

「ありゃ、随分と騒がしいと思ったら、ケンイチ様が帰ってきてたんですか？」 「なんか、すごい新しい人がいっぱい」 「また人が増えるの？」

「巡回ご苦労さん。新しい移住者だ、仲良くしてやってくれ」

「こんな夜の森の中を走ってきたんですか？」

「まあな」

「さすが、ケンイチ様ですう」

白い太子が感心しているが、チビ子は無謀だと思っているらしく呆れている。

3人組が俺に経緯を聞いているのだが、ちょっと離れた場所にいる犬人を見て声を上げた。

「げっ！ 犬コロまで連れてこなくても！」

「彼も移住希望者だ。差別はいかんぞ」

「わ、解ってますけど……」「ねー」「ケンイチ様の物好きにも呆れる」

チビ子は、相変わらず口が悪い。

猫人たちは文句を言っているが、彼は正式な住民となるわけで、仲良くしてもらわないと困る。

猫人たちを信じよう。

夕飯を食い終わりやっとな落ち着く。

ミーケの娘は、お腹がいっぱいになったのか船を漕いでいる。

村長を呼んだ。

「スマンが、今日はここで泊まりだ。明日飯を食ったら、村の設置を行おう」

「はい——村ができるまでは、外での寝泊まりも覚悟しております」

「そうだな——木を切って地面を均して……多分、1日か2日できると思うが……」

「え?!」

村長が驚く。

「20軒ぐらいだったよな。なんとかかなると思うぞ」

森の中は若干の傾斜はあるが、ほぼ平地。

木を倒して均すのに、そんなに時間はかからないはず。

家を設置したら、あとは開墾だが——それも重機とアネモネの魔法があれば、時間はかからない。

作付面積を広げたいければ、あとは自分たちで開墾すればいい。

開墾しただけ自分たちのものになる。

——と言っても、王国のすべての土地は国王のものだしな。

サクラの広場に以前使った大型のテントを出す。

これなら10人ぐらいは寝られるだろう。

さらに、2つ追加して並べた。

「村長、村人の分け方は任せるよ。足りないなら早めに言ってくれ」

「は、はい」

村は高齢者と女が多い。

働けるような若者は、村の生活に嫌気が差して街へ行ってしまうらしい。

俺が元世界で住んでいた限界集落もそんな感じだったが、どこでも似たようなもんなのだな。

腹も一杯になり長旅で疲れたのか、村人たちはすぐに眠り始めた。俺たちについてきた三毛のミーケ親子は、ミヤレーたちのコンテナハウスの近くに新しいコンテナを出して並べた。

やっぱり、獣人たちはある程度固めたほうがいいらしい。

シャングリ・ラで購入した安いパイプベッドと毛布だけ置いてやる。

同じくサクラにやって来た大人のワルターだが、少し離れた場所がいいということだったので、村の外れにコンテナを置いた。

アイテムBOXで集めてきた家でもいいのだが、彼はこの鉄の箱が気に入ったらしい。

「ケンイチ様に家までもらえるなんて、光栄でございます」

「ベッドの他は、自分で揃えてくれよな」

「もちろんでございます」

サクラは真っ暗——静かになった。

アキラにもテントを貸してやるとすぐに潜り込む。

「アキラ、サンキュー」

「おう！」

明日、朝飯を食ったら、アストランティアにいる愛しのレイランの所に戻るようだ。

「ふう、一段落ついたか……」

ぐるりとサクラを見回し、真っ暗な湖に映る月を見る。

「んっ」

バンザイをして伸びをすると、久々に家に戻った。

俺がダリアの森の中で作った自作の家をこんな具合に使うことになるとはなあ。

新築の屋敷は土台ができて、少々枠組が組み上がってきたようだが、まだまだ時間がかかる。

魔法で、ポンというわけにはいかない。

リスと一緒に寝る順番が溜まっているのだが、今日は皆で寝ることにした。

まだ寝床が決まっていない、マーガレットも一緒だ。

部屋の中にはベッドが並び、寝間着に着替えた皆が座っているが、構造が少々変わっている。

奥に小部屋が追加されたらしい。

どうやら、メイドの宿直室のようだ。

「マーガレット、オッサンと一緒に部屋で寝るのは嫌というのなら、他の部屋を出すか、ウチのメイドの宿舎を貸してやるが……」

「いいえ、ここがかまいません。お嬢様もいらっしゃいますし」

「そうか」

ベッドの上では、リリースがむくれている。

「妾を独りボッチにして、随分と楽しんできたようじゃの！」

「腹いっぱいになって、機嫌が直ったんじゃないのか？」

「そのようなはずがあるまい！」

「まあまあ、色々あったから、話してあげるよ」

俺は――彼女に旅行中のできごとを話し始めた。

215話 開墾を始める

日が暮れて真っ暗になったサクラに帰ってきた。

俺が運転するマイクロバスには、移住希望者が30人ほど乗っている。

見たところ高齢者と女が多く、稼げる若者は皆が街に行ってしまったようだ。

辺境伯領に入植する新しい土地は、森の中。

長年森だった土地は、腐葉土がたくさん積み重なっており、栄養が豊富だが開墾が大変だ。

この村人たちの人手では、普通なら開墾は困難であるのだが、辺境伯領には俺の重機とアネモネの魔法がある。

ちよちよいのぱっぱで住む所と畑を作ってやって、村で暮らせるようにしてやらないとな。

村長は、そんなことができるかと信じていないようだが。

長旅で疲れている村人のために大型のテントを出してやり、寝床を提供した。

俺は仕事を終え、久々の自宅に帰ってきたが、家が少々変わっており、奥にメイドの宿直室が増えたようだ。

いつも外で待機してくれていて気になっていたので、これは良い改善だと思う。

以前は、この家を持って歩くためにアイテムBOXに入れていたので、増築ができなかったが、今はコンテナハウスがある。

一部屋増えた家の中には、ワンピースの寝間着に着替えた女たちがいる。

部屋の隅っこにはベルとカゲが増えた。

今日は、プリムラのメイドであるマーガレットも一緒だが、彼女に聞かれたくない話もある。

一番端のベッドの上で、リリスと一緒に話を始めた。

「本当は2人っきりのほうがよかったが、帰ってきたばかりだからな」

「話というのは、あの新しい森猫のことかえ？」

「彼にも助けられたよ」

彼女に鉱山に現れたダンジョンのことを話す。

「なに！？ ダンジョン？！」

「そうだわえ、リリス」

いつの間にか、アマランサスが俺の後ろにやってきて背後から腕を回してきた。

「母上、旅先で散々ケンイチと楽しんだのでしょう？」

「全然、たりんわえ」

「ケンイチ、母上がこうなったことにも理由があるのか？」

「それは解らんが、ダンジョンから湧き出たスケルトンを退治して、大量の魔石を得た」

「ほう、魔石とな」

「その奥には、レッサードラゴンのスケルトンがいて、結構苦戦した」

「なに？！ レッサードラゴンのスケルトン？ そのようなものが存在するのかえ？」

リリスが驚くが、本当にいたのだから仕方ない。

「妾も、あのような恐ろしいものは、初めてじゃった」

「おっと、アマランサスでも、恐ろしいと思うことがあるのか？」

「それは、ありますわえ。それゆえ恐ろしゅうて、こうやって聖騎士様にすがっておりまする」

そう言って、彼女が俺の首筋にキスをしてくる。

アマランサスの行動にアネモネが我慢できなくなったのか、無理やり割り込んできた。

「くつつきすぎー！」

俺は、割り込むアネモネを捕まえて膝の上に乗せると頭をなでてやる。

「ふわあああ」

アネモネがおとなしくなったところで話を続けたいのだが――。

「ケンイチ、今日は妾の番ではないのかえ？」

「今日は無理だが、明日から十分に相手してあげるよ」

「本当じゃな！」

「ああ、でも昼は村の設営とかがあるから駄目だぞ？」

「あの者たちか――いったいどうするのじゃ？」

「村をまるごと持ってきたので、森を切り開いて村を作る」

「なに?! まさか、アイテムBOXに入れてきたと申すのかえ？」

「まあ、まてまて、村の話はあとにして、ダンジョンの話をしたい」
「うむ」

俺の顔を見て、リリスはベッドの上に座り直した。

「そして、ダンジョンの奥にな――」

リリスを手招きすると、彼女が俺の所に四つん這いでやって来たので、ひそひそ話にする。

「奥に何があったのじゃ？」

「転移の魔法陣だ」

「は？」

リリースがペタンとベッドの上に座る。

「転移の魔法陣だよ。魔法陣から魔法陣へと瞬間移動できるんだ」
「……」

俺の話を聞いたリリースは、そのまま固まってしまった。
脳みそがオーバーフローでもしたんだろうか？

「転移門のことは、アマランサスは知っていたぞ？ リリースは知らなかったのか？」

「知らぬわえ！」

彼女が大声を上げたので、プリムラとマーガレットがこちらを向いた。

大事な話をしているのが解っているので、聞こえぬフリをしている。
プリムラには話したが、マーガレットに話すのは少々ためらわれる。

彼女は、その手の話をマロウ商会との取引に使ってしまった。

秘密を教えると、同じ取引に使われる可能性がある。

しないとは思うのだが――そう俺に思われてしまった彼女が、信頼を取り戻すには多くの時間を費やすことが必要だ。

「本当に、そのようなことができるのかえ？」

「できる。実際に皆と移動をしたからな」

「飛ぶのじゃろ？ どこに飛んだのだえ？」

俺は上を指差した。

「空かえ?!」

「違う違う。サクラの隣に台地があるだろ？ その上だ」

「あそこかえ！」

リリスがベッドの上でぴよんぴよんと跳ねている。

「ニャメナの話では、アキメネスの近くではないかと言っていた」
「ほう！ それでは——そこまで行けば、その転移門を使って、オ
ダマキまで一瞬で飛べる——ということじゃな？」

「そのとおり」

「なんということじゃ……」

「聖騎士様のお力があれば、この国を——うふふふ」

「ケンイチ、母上がおかしいのは、そのせいなのかえ？」

「よくは解らんが、転移門から帰ってきたらこんな感じになってしま
った」

「聖騎士様あゝ」

アマランサスを引き離して、寝ることにした。

「はい、アネモネも自分のベッドに戻って」

「ぷー」

とりあえず大事な話は済んだ。

部屋を暗くすると、一番端のベッドにリリスと一緒に潜り込む。
彼女の柔らかい身体と温もり——まさか、ここで彼女とゴニョゴ
ニョできるはずもない。

おとなしく寝ることにするが、ちよつと不機嫌だったリリスも機
嫌が直ったようで、黙って俺に抱きついていてる。

貴族の仕事で家を空けることもあるだろうから、納得してもらわ
ないとな。

やりたくはないが、戦になれば参加しなくてはならないだろうし。
そんな日が来ないように願うしかない。

2人で毛布をかぶると、アイテムBOXからタブレットを出して、
カメラで取った写真を彼女に見せてやる。

「これがオダマキだ——綺麗な街だったぞ」

「ほう、家の壁が白いのじゃな」

覗き込むリリスの目に画面の光が映っている。

「汗をかくほど暑いけどな。青い空と海、そして白い壁の家々」

「この暗闇の中で光っているのは？」

リリスが指差したのは、暗い海に光る夜光虫らしきもの。

今のカメラは高性能なので、ISOを上げれば暗闇の景色も普通に撮ることができる。

多少ノイズが乗るが、写るだけでも凄い。

「夜の海に光るものがあるんだよ。こうやって光っている」

「ほう！　こうやって他の街の景色が見られる魔法というのは、すごいものじゃの！」

「あと、力仕事が多いため、獣人たちが多かったな」

「なるほどのう……これではまた絵師を呼んで、辺境伯の物語を書かせねばならぬの」

「はは、多分面白い話になると思うぞ」

「楽しみじゃ」

写真を楽しんだ俺たちは、寝ることにした。

—————◆◆———

——サクラに帰ってきた次の日。

朝飯の用意をする。移住希望者は生活の基盤がないので、しばらく援助してやらないと駄目だ。

サクラに帰ってくれば、メイドたちがいるので料理や家事などは任せてしまう。

それに、ここには白い髭の料理人のサンバクもいるしな。

「ケンイチ様！ 昨晚にお戻りになられていたと聞きました。起こしていただければ――」

「ケンイチ様！ サンバク殿の言うとおりです」

早速、サンバクと紋章官ユリウスが慌ててやってきた。

メイドたちから報告を受けたのだろう。

「いや、2人とも寝てたみたいだし、起こすのは悪いだろう？ まさか夜に森の中を走って帰ってくるとは思わないだろうし」

「申し訳ございません」

「はは、2人とも悪くないからさ。ユリウス――リリスからは一応聞いたが、なにか問題は？」

「住民が20人ほど増えた以外、さしたることは――」

「ありゃ、家を結構持ってきたのだが、全然足りないな。まあ、そのうち建築も追いつくだろう」

物理的に間に合わないのは、いかんともしがたい。

とりあえず飯を食うことにするが――人数が多い。簡単にできるものを、サンバクに大量に用意してもらう。

足りない分は、俺がシャングリ・ラから購入して間に合わせることにした。

「村長！」

「は、はい」

「朝食が終わったら、村の場所を選定しに行こう」

「承知いたしました」

「にゃー」「みゃー」

ベルとカゲもやってきて、俺の脚にスリスリをするので猫缶をやる。

飯ができあがり、皆で今後の話をしながら朝食を摂っていると、アキラが起きてきた。

「オッス！」

「オッスオッス！ 飯を食い終わったら、アストランティアに帰るのか？」

「ああ、いい加減顔を見せないと、見限られちゃう」

「はは、レイランさんや、他の人達にもよろしくな」

「伝えるよ」

アキラも加わって話していると、獣人たちが顔を見せた。
もう、朝食を食べ終わってしまったようだ。

「ケンイチ！ 今日は何をするにゃ？」

疲れ知らずのミャレーが、ぴよんぴよん跳ねている。

「彼らの村の場所を決めて、開墾を行う」

俺は村人たちを指差した。

「ウチらも手伝うにゃ！」

「別に他のことをやっていいぞ。俺とアネモネがいれば、多分大丈夫だし」

「好きにしているなら、手伝うにゃー！」

「旦那、俺も行くぜー！」

ニャメナも手伝うようだ。

新しくやってきた三毛のミーケと犬人のワルターは、ここでできる仕事を探す。

日銭を稼ぎ、ものを買い、生活環境を整えていくのだ。

俺も最低限の援助はするが、甘やかしてはやれない。

だが、サクラの住民には、困ったことがあればまず相談するよう
にと言っている。

今は俺が直接聞いているが、村が大きくなれば下部の組織をまと

める役人も必要だ。

そうなると人材の確保が大事になるが――最初に志に燃えている人材を入れても、代を重ねると利権になって決まって腐敗する。

ここではそうならないようにしないとな。

――と、心でそう思っていたとしても、俺が死んだあとは、どうなるかなんて解らない。

とりあえず俺が領主の間は、腐敗を見逃さないようにしなくては。俺も元世界で底辺だったからよく解るが、インチキが横行する世の中になってしまったら、真面目に暮らすなんて馬鹿らしくなる。商売をやるうとしたら、先にできた利権団体によってインチキイカサマばかりだった――そんなことになったら、誰も参入しなくなってしまう。

飯を食い終わったので、村人たちと一緒に湖のほとりへと向かう。SUV車なら湖まで走れるのだが、マイクロバスはちょっと厳しい。

水際は、砂がしまっているので、車で走るのに都合がいいのだ。

「ねえねえ、どこに行くのお？」

金髪を揺らしてやって来たのはエルフだ。

彼女は只人といわれる普通の人間と食べるものが違うので、食事は別だ。

「この住民たちのために、森を開墾するんだよ」

「それって領主の仕事なの？」

「本来は違うのだろうが、俺とアネモネがやれば1日〜2日で終わるからな」

「ええ?!」

セテラが信じていないような顔をしているが、別に信じなくても

いい。

「そんなの信じられないから、私も行くう！」

見物のために、エルフと一緒にいてくるようだ。

まあ、エルフが乗るスペースはあるから大丈夫か。

今回はマイクロバスが大活躍だが、もっと大人数となると厳しいなあ。

シャングリ・ラをチラリとみたが、中古の大型観光バスも売ってるが――。

元世界でよく見かけた路線バスが10mちょいだったはずだ。

あれがギリギリか。

購入はできると思うが、アイテムBOXに入らなかったらどうしよう。

いらぬ心配だとは思うが、手はある。

後部を少し削ればいいのだ。

後ろバンパーの部分が少々なくなったぐらいで、走行性能には影響はでないだろう。

バスはリアエンジンなので、どのぐらい切るかにもよるが。

最初からフロントエンジンのボンネットバスを買うという手もある。

まあ、そのときに考えるしかないか。

バスのことを考えながら、湖のほとりに到着するとバスを出す。

「こ、これが湖？」 「海じゃないのか？」

「お前たちの村を訪れる前にオダマキに行ってきたが、海はくさい塩辛いぞ」

「そうそう、海はくさいよお」

セテラが嫌そうに鼻を摘んでいる。1回海に行って懲りたのだらう。

「さあ、乗ってくれ」

村人たちは慣れているので、順番にバスに乗り込むと補助席を開き始めた。

相変わらずギュウギュウ詰めだが、目的地までは数十分で着く。それまでの辛抱だ。

「これ、乗り物お？」

「エルフ様はそこ」

俺は助手席を指差した。

助手席の補助席もあるので、アネモネをそこに座らせようとしたのだが、エルフの隣は嫌らしい。

ドアから、ベルとカゲも乗り込んできた。

「お母さんも行くのか？」

「にゃー」

「そうか」

「辺境伯様は、そこに座ると決まっているの？」

セテラが運転席を指差した。

「そう、ここに座って、この召喚獣を操るんだ」

「へえ」

ドアを閉めると、水際の硬くなった砂の上を走り出した。

何回も走ってないもないことが解っているので、スピードを出す。

「おおっ！　すごい速さだ！」　「どんどん景色が流れていくぞ！」
今までと違うスピードに村人たちも驚く。

「ちょっと！ 嘘でしょ？！ こんなに速いの？！」
エルフもバスの速さに驚いている。

「相変わらず速いにゃ！」 「まったく、すげー速さだぜ」

「俺の魔法の力だ」

「それにしても、魔法の力を全然感じないけど？」

エルフってのは魔力に敏感らしい。

「こういうものを出す——それ自体が俺の魔法なんだよ」

「そんなのあり？」

そんなことを言われても、こうやって実際にあるんだから仕方ない。

途中で車を停めて座席に立つと、皆に左側の外を見るように促す。水際に、背が高く細長い葉っぱの植物が生い茂っており、鉈や大型のマシエットを持って刈り入れを行っている人や獣人の姿も見える。

「新しい村で普通に麦や芋などを育ててもいいが、湖畔でこれを育ててもいい」

「ケンイチ様——これは？」

村長が、じっと外を見ている。

「これは、サトウキビといって、こいつから砂糖が取れる」

「……えっ！？」

「砂糖だよ、砂糖。なめると甘いやつ」

「ええ？！ 砂糖だって？」 「この草みたいなものから？」 「本当かな？」

「嘘をついても仕方ないだろ？」

「アレを齧ると甘いにゃ！」 「大鍋でグツグツ煮て、そいつを煮詰めると甘い塊ができるんだよ」

身振り手振りサトウキビを説明する獣人たちの演説に、村人たちが聞き入っている。

「それでは本当に砂糖が……」

「まあな。でも砂糖が儲かるからといって、農作物を1本に絞るのはよくない。病気、害虫などで不作になると詰むからな」

「それは心得ております」

村長にもそういう経験があるらしい。

彼らを別の畑につれていく。

こちらも背の高い植物が茂っているが、こっちはトウモロコシだ。元世界のように、糖度を上げるために間引きしたりしないので、たくさん実をつけてしまっているが。

ほとんどが粉に挽かれて使用されているので、これで問題ない。

「村をどうするかは、村人で話し合ってくれ。俺からああしろこうしろとは言わない」

「承知いたしました」

エルフが外のサトウキビを眺めている。

「本当に砂糖が取れるのお？」

「サクラで、鍋で黒いのを煮てなかったか？」

「あれが砂糖になるの？」

「そうだ」

途中、湖に栈橋が見えてきた。俺が魔法や爆発物の実験を行なっている場所だ。

近くに村ができるってことは、実験施設はもっと離れたほうがいいかもな。

車で移動するなら、そんなに時間は変わらないし。

10分ほど走ったので、車を停める。

ここは、サクラから10kmほど離れた場所。

皆で車から降りると、右に見える森に分け入る。

腐葉土の上を村人と列をなして歩く。ベルとカゲはすぐに森の中に入り、パトロールに行ってしまった。

ここらへんは森猫たちの行動半径になっているので、自力でも帰れるだろう。

獣人たちや、エルフも一緒、俺の横にはアネモネがいる。

「むふふ……」

俺の右手をセテラが取ると、左手をアネモネが取った。

「むー！」

「エルフ様は、俺のどこが気に入ったんだ？」

「面白いじゃない。数百年生きてて、こんなにおもしろいのは久しぶりよ」

どうやら長生きをしすぎて、暇なようだ。

「あの、ここらへんに魔物は……？」

森の中だというので村長は心配そうだが、森の中を開墾したほうがいい土地がある。

「結構な数を駆除したし、サクラ周辺に入植が始まったので数を減らしている。大丈夫だよ村長」

「はぁ……」

5分ほど歩くと脚を止めた。

「ここらへんでどうだ？ 地面は平らだし、畑に向いていると思うぞ。水際にさっきのサトウキビを植えるとしても、5分ほど歩けばいい」

サクラから少々遠いのだが、近くに畑を作ると、街が大きくなつたときに退去しなくてはならなくなってしまう。

このぐらい離れていれば、その心配もないだろう。

「ケンイチ様の仰せどおりに」

「そんなに心配するな。1日1回獣人の見回りをよこす。何かあったら、そいつに手紙を渡せばいい」

「手紙でございますか？」

「村長なら、読み書きはできるんだろ？」

「はい」

彼に、シャングリ・ラで購入した、大きめのメモ帳と鉛筆を渡す。鉛筆はインクが要らないし、ナイフがあれば研げる。

「この棒で、こうやって書くと字が書ける。先が丸まったら、刃物で研げばいい」

実際にメモ帳に字を書いてみせると、村人たちが覗き込む。

「おおおっ！」

「これを村長に渡しておく」

一緒にエルフも覗き込んだ。

「それ便利ねえ。私にもちようだい？」

「ほいよ」

エルフに同じものを渡すと、腐葉土の上で小躍りしている。

その姿は本当に森の妖精のよう。

「やったあ！」

遊んでいても仕方ない。

とっとと仕事を始めよう。

「まずは村長の家からだな——よし！　コ○ツさん召喚！」

空中から黄色い重機が落ちてきて、腐葉土を揺らす。

剣がついていない普通バージョンだが、アダマタイトの剣つきも使う予定。

「「「おおおっつ！」」」　「また、鉄の魔獣？！」

地面を揺らす鉄の魔獣に、村人たちが驚嘆の声を上げた。

次に、アイテムBOXからゴーレムのコアを出した。

「アネモネ、あそこらへんの木を3本ほど倒してくれ」

「解った！　むー！」

彼女の魔法に呼応して青い光が集まってくると、コアの中に染み込んでいく。

それが終わると、腐葉土がコアの周りに集まり、巨大なスライムになった。

「「「おおお！」」」　「なんだあれは！」　「すごい！」

「あれは、ゴーレムにゃ！」　「アネ嬢のゴーレムは人型じゃないんだ」

「あれが、ゴーレム？」

村人たちは、獣人たちの説明を聞いて驚いている。

ゴーレムというと人型だと思っているのだろう。

作業をさせるだけなら人型である必要はない。

村人たちが見守る中——高く伸びた腐葉土のスライムが、巨木のてっぺん辺りを押すと、ゆっくりと倒れ始めた。

テコの原理ってやつだ。

根っこをむき出しにして木が倒れると地面を揺らす。

村人から再び歓声が上がった。

「すごい！」　「木がこんなに簡単に！」

この方法だと、根っこから倒れるので、処理が簡単でいい。
チェーンソーや斧で切ると、切り株の処理に多大な時間を消費する。

「俺が簡単に終わるって言ったけど、嘘じゃなかっただろ？」

「は、はい……これなら」

「これがゴーレムう？」

エルフは、アネモネの魔法になにか言いたいようだが、アネモネが反論した。

「ゴーレム技術の応用だよ。エルフは遅れてるね」

「なんだよ、ちびっこやるのかぁ？」

「べえ！」

エルフの挑発に、アネモネが舌を出した。

見たこともない魔法の使いかただと馬鹿にしたようなエルフだったのだが、その有用性に気がついたのだろう。

その場に立ったまま、ブツブツと独り言をつぶやいている。

木を3本倒しスペースができたので、コ〇ツさんで地面を均してカタピラで踏み固めた。

一応、何度か重機を降りて水平を見る。

村人たちも手伝いをしたそうに眺めているが、俺がやったほうが早い。

いや、本当はこれじゃだめなんだよなぁ——と思いつつやってしまふ。

今回は村人を暮らせるようにすることが先決なので、これでいい。

「ほ、本当に、家を置く場所が……」

村長が広く開墾された場所で佇んでいる。

「今、村長の家を出す――」

アイテムBOXから、彼の家を出した。

ちよつと空中から現れるので、家が軋む音が聞こえるが仕方ない。普通は家の移動なんて不可能だし、方法はこれしかないのだ。

多少壊れたとしても、ここに移動できるだけでも凄いことなのだから。

「――ほ、本当に村長の家が！」「――すげー！」

「本当に村ごと持ってきたの？」

エルフは俺の言ったことを冗談かと思っていたようだ。

「だから言っただろ？」

「にゃー！ 解っているけど、凄いにゃー！」 「うひょー！ 家をま
るごとアイテムBOXに入れるなんて旦那しかできねえ」

その様子を見慣れている獣人たちはしゃいでいる。

そう、この世界じゃ俺しかできない。

いや、探せば同じぐらいの容量を持っている者もいるのかもしれないが。

こんなデカイアイテムBOXを持っているとなれば、悪いやつら
や貴族などに目をつけられる。

かつての俺のようにその能力を隠し、密かに暮らしているものも
いるかもしれない。

同郷のアキラもアイテムBOXを持っているが、家が入るほど大
きくはない。

近くに、村長の家の納屋も出す。

その中には農具が入っているので、村人がそこからこぞって農具
を持ち出した。

俺の言うことに半信半疑だった彼らだったが、新しい村の誕生に、

居ても立っても居られないのだろう。

新しい生活の予感に彼らの目はキラキラと輝いていた。

216話 新しい生活

サクラに帰ってきて真っ先に取り掛かったのは、移住を希望した村の村ごとの移植だ。

アネモネのゴーレム魔法と俺の重機で森を切り開き、アイテムBOXに収納した村を設置するという前代未聞の試み。

最初は村の丸ごとの移植に半信半疑だった村人たちも、アイテムBOXから家が出されて並べられていくと――俺の言ってることが本当だと解ったようだ。

ゴーレムで木を倒しては、重機で整地して家を並べていく。

彼らの希望では、前の村と同じ配置にしてほしいということだったので、出したり入れたりを繰り返す。

これが結構大変だ。

村長の家は大きくて特徴があったのだが、他の家は似たようなものなので、どれがどれだか。

切った木は、アダマントイトの大剣を装備したコ〇ツさんを出して、ぶつ切りにしてからアイテムBOXに入れる。

これも大工たちに渡せば家の材料になるってわけだ。

1／3ほど家を並べたところで、昼になった。

「おい、昼もこちらで用意するか？」

一応、村長にたずねてみる。

「いいえ！ もう我々だけで食事の用意はできますので。これ以上、領主様に甘えるわけには参りません」

「湖にはマスもたくさんいるから、食料には困らないと思うぞ」

「そうですか!」

「まあ、釣りの腕が問われるかもしれないが」

俺が渡した小麦粉などは、村長の家の納屋に置いていたようだ。

その納屋はすでに設置済みなので、村人たちはパンを焼いたりはできるようだな。

「早く畑を広くしたいです」

村人の本音だろう。

「ここは腐葉土がたくさんで、栄養たっぷりだ。作物はたくさんできと思うぞ。ここは水も多いしな」

そういえば、村といえば井戸も掘らないとな。

やれやれ、やることがたくさんある。

「本当に村を丸ごと移築するなんてえ」

俺の作業を見ていたエルフが驚いている。

「エルフの話の中でも、こんなのは聞いたことがないだろ?」

「あるはずないでしょ」

それでは、エルフたち1000年以上の歴史の中でも、アイテムBOXに家を入れて移築した話はなかったということだ。

村人たちも、村長の納屋から農具を出して周りを耕し始めたが、使っている農具を見ればボロボロだ。

シャングリ・ラから買った農具をやることにした。

この世界のものとは少々違うが、十分に使えるだろう。

以前、農民に農具をプレゼントしたことがあったが――彼らはとても喜んでいたし、農業のプロの目から見ても十分に使える代物と解ったのだろう。

「村長、農具をやる」

「ええ？」

とりあえず、鍬くわや鋤すきなどを10本ほど。

受け取った村人たちは、農具をまじまじと見ている。

この世界の農具は手作りなので、1本10万円とかする。一生モノだ。

シャングリ・ラに売っているのは大量生産品なので、1本2000円ほどだが品質もいい。

「領主からの下賜だ。お前達が頑張って農地を広げれば、領も潤う。

これは投資なのだから、遠慮なく受取り、皆で大切に使うように」

「ははっ！」

「「ありがとうございます！」」

「あ、そうだ。猫もやろう」

「猫？」

俺は、シャングリ・ラから一輪車を購入した。1万円ぐらいだな。鉄製の船にタイヤが1個ついているものを、俺の地元では猫と呼んでいた。

「ほら、これだ。俺は猫車と呼んでいる。ここに土や農作物を載せてこっやって運ぶ」

猫車のデモンストレーションを行う。

「「おおおっ！」」

タイヤはゴムタイヤだが、ノーパンク仕様なのでパンクの心配はない。

「にゃー！」

真っ先に飛びついたのはミャレーだ。

猫車を押して走り回っている。

「私も乗る！」

船に、アネモネが乗り込んだ。

「みやみやみやみや」

山を越え、谷を走り、凸凹でバウンドさせている。

「きゃああ！」

アネモネが笑いながら地面の凹凸で飛び跳ねている。

笑っているのだが、そんなに面白いのか。

ジェットコースター感覚だろうか？

「面白いねえ」

セテラが興味深そうに猫車を見ている。

「エルフの村にも持っていくか？」

「うーん、面白いけど男どもの玩具になりそうだし……」

エルフたちは、畑作みたいのをしてなかったみたいだな。

毎日、森の中をうろついては食い物を探す——そんな生活か。

知能はかなり高いはずなので、畑作もできるはずだが……。

「ミヤレー、アネモネ！ そいつを彼らに返せ。飯は食わないのか？」

「にゃ？」 「食べる！」

腹が減ったのか、ミヤレーが飛んで戻ってきた。

「何を食う？」

「カレーにゃ！」

ミヤレーが俺の間に間髪容れず答えた。

「カレーでいいのか？」

「いいにゃ！」

おいおい、他の2人の意見は無視か？

そう思っ、アネモネとニャメナも意見も聞いてみたのだが――
カレーでいいという。

簡単でいいけどね――俺はそう思いつつ、アイテムBOXに保存してあるカレーを出す。

カレーは大量に作って、アイテムBOXの中に小分けにしてある。
いつでも手軽に食えて美味い。

独身でオッサンの俺の食事の友も、カレーだったし。

大量に作っては、小分けにして冷凍庫に入れる。

俺が住んでいた北海道は、冬に買い物ができなくなることが多い
ので買いだめする。

そのため大きな冷蔵庫や、冷凍庫が必須なのだ。

そう考えると――ここは雪が降らないし、一年中暖かいのがある
がたい。

俺たちはカレーを食っているが、エルフはカップ麺を食べている。
彼らは獣人たちと違い、香辛料のきつい香りが苦手ようだ。

それに、いつも虫を食べているので、細長い食べ物にも抵抗がな
い。

皆でカレーを食って、再び作業を始める。

獣人たちは、切った木の枝払いをして、エルフには草刈りをして
もらう。

草刈りといっても鎌で刈るのではない。魔法で枯らすのだ。

魔法で成長の促進ができるなら枯らすこともできるらしい。

ただ草を枯らすなら地面を加熱すればいいのだが、そうすると土
中の微生物まで死んでしまい土地が死んでしまう。

草が要らない場所ならそれでもいいが、農地には使えなくなってしまう。

皆が作業を行い、半分ほど家を設置したところで、夕方になってしまった。

「ふう……」

作業が終わりアネモネが深呼吸している。

「お疲れさん。村長、今日の作業は終了だ」

「ありがとうございます」

「ここに泊まるのが心配なら、一旦サクラに戻るか？」

「いいえ！ 半分でも村ができましたので、今日から私たちはここで生活をいたします」

俺たちが作業をしている間に、村人どうして話し合いをしたようだ。

「ここらへんには魔物はいないと思うので大丈夫だと思うが——いっても黒狼ぐらいだな」

狼なら家の中にいれば襲ってはこない——とはいうものの、初めての土地で心細いかも知れないな。

俺は、アイテムBOXからクロスボウを5台取り出した。

「村長、初めての土地で心配だろうから、こいつを預ける」

「こんなに立派な弩弓を……」

「立派だけど、扱いは簡単にゃ」「まあ、俺でも使えるぐらいだし」そうは言っているが、獣人は読み書きができないだけで、頭は悪くない。

クロスボウのデモンストレーションをしてやる。

近代的なコンパウンド式のクロスボウだが――弦を引っ張り矢を
番^{つが}える。

やることは一緒。

村人たちも、俺から説明を受けて藁束に向けて試射をした。

「「「おおっ!」「」」「凄い威力だ」「これは凄い!」

「黒狼ぐらいなら貫通するからな」

「ありがとうございます、ケンイチ様! これで自衛をしてみます」

「あまり無理はしないようにな」

彼らもやる気を出しているので任せよう。

嫌々、ここまで引っ張ってきたわけじゃないからな。

アイテムBOXからラ○クルを出すと、森猫たちを呼ぶ。

「おい! お母さん!」

へんじがない、ただの――ってアキラならいいそうだ。

「あれ? 今度は違う箱なのねえ?」

エルフがSUV車の周りをぐるぐる回っている。

「まあな」

助手席にアネモネ、後ろにはエルフ、そして獣人たちが3列目の
シートに乗り込んだ。

日が傾き森の中は暗くなってきているので、ヘッドライトを点灯
する。

「村長! 明日、また来るので残りの半分と井戸も掘ろう」

「え? 井戸も掘っていただけるのですか?!」

「ああ、俺の鉄の魔獣を使えば、あっという間だ」

「「「おおお!」「」」「お

しばらく待ってみたのだが、森猫はやってこなかったで、そのまま出発することにした。

この距離なら十分に森猫たちの行動半径に入っているので、サクラに戻ってこられるだろう。

歓声を上げる村人たちに別れを告げると、サクラに戻る。

湖畔の砂地を走ると、光る目がたくさん見える。

夜行性の動物が湖の水を飲んだり狩りをしているのだが、危険な動物はいない。

小型の哺乳類ばかりだ。

「これは、あの大きい箱より、乗り心地がいいねえ」

俺の後ろからエルフの声が聞こえてくる。

赤く染まる空と湖面を見ながら、サクラに到着した。

「もう、着いたの?! はやーい!」

セテラの驚く声を聞きながら車を降りると――外ではテーブルが並べられて、食事の準備が整いつつあった。

エルフは食べるものが違うので、作っている料理が食べられそうなら事前にもらい、駄目なときは自分で用意をする。

獣人たちは離れた場所にあるテーブルについて、すぐに食べ始めた。

自分で作らなくても用意されているというのは、本当にありがたい。

メイドたちが並んで俺を出迎えてくれた。

「「「お帰りなさいませ、御主人様」」」

「今、帰ったよ」

料理が並んでいる長いテーブルにつくと、リリースが話を切り出し

た。

「どうじゃ、新しい村の設置は？」

「今日は半分しか終わらなかったよ。明日、残り半分を設置して井戸を掘ろう」

「――しか、とケンイチは申すが、普通は村の移植など不可能なのだえ？」

「ははは、まあな。アネモネが頑張ってくれたからな」
「むふー！」

アネモネが、肉を頬張りながら鼻息を荒くしている。

テーブルにプリムラがないが、しばらく留守にしていたので仕事溜まっているらしい。

アストランティアで、泊まり込んで仕事をしているという。

その付添でメイドのマーガレットも一緒らしい。

マロウ商会は、辺境伯領と隣の子爵領の両方の経理業務を担当しているので大変だ。

通常、各領には専門の経理部門があるのだが、小さな領などは商会に任せているところもある。

それは問題ないのだが、商会の言いなりになったり好き放題されてしまうこともある。

領に経理部門があっても不正や腐敗の温床になったりと、良し悪しだ。

正解というの中々ない。

俺もマロウ商会を信用しているから任せているのだが、これが代替わりしたらどうなるか解らんし。

皆で食事していると、ユリウスがやってきた。

「ケンイチ様」

「留守中に、なにかあったかい？」

「カナン様から連絡がございまして、帰領したのであれば顔を出してほしいと……」

「ああ、解った。暇を見てアストランティアに行ってください」

「お願いいたします」

「それから、王都から連絡がございました」

彼が差し出したのは、赤い封蠟が押された手紙。

これは王家の紋章だ。

中身を読んでいると、アマランサスが心配そうな顔をしている。

「聖騎士様、なんと書いてあるのでございますかえ？」

「うーん、アルストロメリア様からだ。ゴーレムコアだけのコアモーターの使用を認めるという内容だな」

「やったね！」

アネモネが喜んでいるし、コアだけなら許可なしで使えるとなると、色々とはかどることになる。

もっとも、コアにそんな使いかたがある——ということを知っているのは、ほんの一部の魔導師だけなのだが。

この世界には特許がないのでパクリ放題。

マロウ商会から売りに出されたものを真似して、コアモーターを使った商品が作られるかもしれないが、ゴーレム魔法を使えるレベルの魔導師が少ない。

実際、どれだけパクられるか未知数だな。

それに、従来のゴーレム魔法にはコアが簡単に乗っ取られるという欠点もある。

「それから、扇風機をあと10台ぐらい送ってくれと書いてあるな」
お城にお伺いを立てるときに、サンプルで扇風機を送ったのだが、それを気に入ったようだ。

「ユリウス、マロウ商会に扇風機の本体の製作を頼んでくれ。数は

10台な。できあがってくるまでに、こちらでコアモーターは作っておく」

前の試作品も本体は、マロウ商会お抱えの職人によって作られたものだ。

「かしこまりました」

一礼してユリウスが下がる。

「ユリウスの部屋にも一台どうだ？　よく働いてくれるから褒美として」

「もったいないお言葉……」

彼はそれ以上にも言わなかったが、俺の言葉にピクリと反応した。

多分、興味を持っているのだろう。

「それじゃ、マロウ商会には11の製作を頼んでおいてくれ」

「承知いたしました」

手紙は、俺のアイテムBOXの中に入れておく。

屋敷ができれば大金庫を作って、そこに入れたほうがいいだろうか。

まあ屋敷ができるのは、いつになるか解らんが……。

食事が終わったので後片付けをしていると、暗闇から黒い影が2つやってきた。

「にゃー」「みゃー」

「お母さん、呼んでも返事がなかったので、帰ってきちゃったよ」

「にゃー」

彼女の話では、森に魔物がないか広範囲に索敵をしてきたらしい。

あそこに村ができるので、彼女なりの気遣いだろう。
さすが、大人の女。

「そうか、ありがとな」

ベルとカゲに猫缶をやると、黒い毛皮をなでてやる。

空き缶はアイテムBOXに入れて、ゴミ箱へ投棄した。

「おい、リリース。上に行こう」

俺がそう言うのと、待ってましたとばかりにリリースが抱きついてきた。

「久しぶりじゃのう！」

「そんなに久しぶりか？」

「久しぶりに決まっておるじゃろ！」

抱きつく彼女は、嬉しそうに俺の腕に掴まっている。

それを見たアネモネは不機嫌そうだが、これは順番なので仕方ない。

リリースは、ここに残って政まつりごとをしていたのだから、ご褒美もあげなくては。

すでに暗くなったサクラの道を、アイテムBOXから出したLE
Dライトを点けて歩く。

崖の上に登ろうとすると、魔法の光を点けたエルフがやってきた。

「どこに行くのお？ 私も行くう」

「はい、ダメダメ」

「えゝ？ ずるいいゝ」

「ずるくないだろ。そのうち相手にしてやるから」

「ふん……」

エルフは不機嫌そうに暗闇の中に消えていった。

「随分とモテるのう。旅先でも、さぞかし女が寄ってきたのじゃろ？」

「そこらへんは、他の子たちから聞いているだろ？ それ以上はないよ」

「本当かのう……」

「嘘をついたって仕方ない。ちゃんと、これ以上は増やさないという言いつけは守ってるぞ」

「あのエルフは？」

「まだやってないから、セーフじゃない、ノーカンでもない、えーと、大丈夫だろ？」

暗闇の中を、リリスと一緒に足場を上る。

昼間は、石工たちが石を切り出していてにぎやかだが、当然今は誰もいない。

上まで上るとサクラを見下ろす。

大分開けてきて家も増えてきたが、まだまだ住宅不足だ。

早く村を作って、アイテムBOXに入れている家を吐き出さないと。

反対側の崖の上を見ると――崖の上に置いてある離れまで真っ暗な道が続く。

ここにも街灯を点けたいがなあ。

庭に置く、太陽電池式の街灯でも置いてみるか……。

あれなら動力がいらないし。

草むらの中の道を歩き、離れに到着。

中は真っ暗なので、持ってきたライトを梁に引っ掛ける。

ベッドに寝転がると、さっき思いついた街灯を検索してみた。

高さ2mほどの太陽電池式の街灯が1本1万3000円ほどで売っている。

こいつがいいな。

鉄製に見えるが軽量と書いてあるので、それっぽい塗装をしたプラ製なんだろう。

それなら錆びる心配もない。

地面に杭を打ち込んで、そこに固定すればいいし。

——そんなことを考えていると、リリスが白いドレスを脱いで、素っ裸になった。

LEDの光に映し出される凹凸の陰影は、本当に美しい。

彼女が俺の上に乗ってくる。

「この崖の上に、転移する魔法陣があるというのじゃろ？」

「そうだ。崖の上を測量しつつ、その場所も探さないとな」

「やることがたくさんあるのう」

「まったくだ。滝に流れている川も、どこから流れてくるのか確かめないといけないし」

広大な台地の上なのに、どこから流れてくるのか不思議なのだ。

だが、元世界のギアナ高地みたいなテーブル・マウンテンにも滝はあったしな。

台地の上に降る雨とかで十分な水源になるのだろうか？

ギアナ高地は、かなり雨が降る場所らしいのだが、ここらへんはあまり雨が降らないしなあ。

まったく不思議である。

川を遡って確かめてみないと。

そのあと、久しぶりのリリスとの夜を楽しんだ。

— — — — — ◆ ◆ — — — — —

——村の移築を始めた次の日。

リリスと一緒にベッドの上で目覚める。

朝日に輝く、彼女の裸体が美しい。

こんな美しいものを独り占めしていいものなのだろうか？
——そんなことを考えつつ、彼女を起こすのだが起きない。
抱え上げて抱き寄せるも——起きない。

「ううん……むにゃむにゃ……」

普通、こんなことをされたら起きると思うがなあ……。

彼女のお尻を揉みつつ思う。

仕方なく、リリースをまたベッドに寝かせて外に出てみると、まさかと思いつつ呼びかけてみる。

「おい、誰がいる？」

「はい、ここに」

「うわ！」

家の脇から、クロワッサンのようなおさげを巻いた赤髪のメイドが出てきた。

「もしかして、ずっとここで待機してるの？」

「仕事ですから」

なにもないここで待ってるのもなあ。

一応、数時間おきに交代はしているようだが。

それじゃ可哀想だ。

シャングリ・ラから、15万円ほど出して三角屋根の小屋を買う。

一見木造に見えるが、なんちゃって木造の鉄板製だ。

2畳分ぐらいの大きさしかないが、折りたたみの木製椅子を置いて、小さなテーブルも置いた。

小さな窓もついているし、外で待っているよりはいいだろう。

油のランプを取り付けた。

少し離れた場所に小屋を置いたのだが――。

「申し訳ございません。家に近づけていただいてもよろしいでしょ

うか？」

メイドを呼んだ声が聞こえないとマズいということらしい。それじゃ——ということで家のすぐとなりを設置した。

「これでどうだ？」

「メイドのために、このような立派な部屋を——ありがとうございます」

「色々世話になってるからな。小物などで欲しいものがあれば言ってくれ」

「ありがとうございます……」

何を思ったか、メイドがしくしくと泣き始めた。

「なんだ？　なんだ？」

戸惑っているのと家の窓が開く。

裸にシーツを巻いた、リリースが顔を覗かせていた。

「ほう！　朝っぱらからメイドを泣かせておるのかえ？」

「リリース、おはよう。まあ誤解だからな。詳細はこの子から聞いてくれ。先に行ってるからな」

女の着替えには時間がかかる。

これからメイドが持ってきた服に着替えて、身だしなみを整えて——いったい、いつになるか解らん。

先に足場を降りて崖を下り、朝食の準備をしている皆の所に行った。

「おはよう」

「「「おはようございます、御主人様」」」
並んだメイドたちの朝の挨拶を受ける。

「マイレン！」

「はい」

メガネをかけたメイドが一步前に出る。

「上にある部屋の隣に、1人用の小屋を建てた。メイドの待機所として利用してくれ」

「ありがとうございます」

彼女が礼をする。

「にゃー」

ベルがやってくると俺の脚にスリスリをする。

「お母さん、今日も行くのか？」

「にゃー」

魔物がいないのを確認したので、今日は行かないらしい。

「むー！」

突然抱きつかれたので、見ればアネモネだ。

「おはようアネモネ。今日も頼むよ」

「……解った」

「今日も行くにゃー！」 「旦那、手伝うぜ！」

「別に手伝わんでも、狩りに行ってもいいんだぞ？」

「俺たちが手伝えない仕事のときはそうするよ」 「そうだにゃー！」

まあ、獣人たちの好きにさせよう。

俺がオダマキから連れてきた獣人たちは、早速仕事を見つけて働くようだ。

犬人のワルターは、1人で巡回の仕事をするらしい。

いまのところ犬人は彼1人なのだが、心細くはないだろうか。

料理ができあがると、メイドと一緒にリリスが崖から降りてきた。

「ふう——ケンイチの愛が重くてまいるのう」

そんなことを言って、リリスがアネモネのほうをチラ見する。

「うー」

「ふっ」

アネモネの悔しそうな顔を見て、リリスが得意げな顔をしている。

「え？ そんなに重かったなら、昨晚だけでいいか……」

「待つがよい！ 3日は相手にしてくれるはずであろ」

俺の言葉にリリスが慌てた。

「いやぁリリスは、俺の愛が重いらしいし……」

「そんなことはない！ もっと重くてもいいくらいじゃ！」

「そんなじゃ、マイレンも一緒にやるかぁ」

俺の言葉に、マイレンがメイド服を翻してシュバってきた。

「お呼びでございますか？」

「今晚頼む」

「かしこまりました」

キラリ！ ——マイレンのメガネが光った気がする。

さてさて、村の移築を済ませて、アストランティアのカナンの所
に行っこないとな。

217話 村が完成した

30人の移住希望者をマイクロバスに乗せて連れてきた。

サクラから10kmほど離れた森の中に入植させるのだが、そのまま放置ってわけにはいかない。

俺の重機とアネモネの魔法で森を切り開き、アイテムBOXに収納してある彼らの家を出す。

前代未聞の村の丸ごとの移転だ。

朝飯を食い終わると、アイテムBOXからSUV車を出して乗り込む。

村の家屋は半分残っているので、そいつを片付けてしまわないといけない。

アネモネと獣人たちも一緒だ。

昨日はついてきたエルフは、今日は同行しないという。

あまり面白くなかったらしい。

まったく気まぐれで困るが、エルフとはこういう生き物のようだ。

森猫たちも、今日は村には行かないという。

ベルたちが広範囲をパトロールしてくれた結果、魔物の影はなく村の周囲の安全が確かめられた。

定期的にお母さんたちにパトロールを頼めば、魔物の被害を減らせるだろう。

この仕事は獣人たちにも頼んで、その範囲を広げている。

彼らは狩りをしながら警戒の仕事もできて、金ももらえるので好評だ。

俺がオダマキから連れてきた大人のワルターもその仕事についた。

仲間がいない彼にも単独でできる仕事だ。

村に到着すると、早速作業を始める。

村人たちも開墾をしたいと言うので、村長と相談。

シャベルとツルハシを10本ほどずつ与えた。

俺の重機とアネモネの魔法で木を倒し、輪切りにしてアイテムB
OXに入れる。

木がなくなったら重機の排土板で土を均し、カタピラで踏み固め、
水平を確かめてから家をアイテムBOXから出す。

前日に半分の家屋の設置を完了していたが、残り半分も午前中の
うちに設置が完了した。

村の真ん中には広場があり、馬蹄形になるように家屋が並んでい
る。

「やったあ！」「家が並んだぞ」「元の村のまんまだ！」

村人たちから歓声があがる。

そこに村長がやってきた。

「ケンイチ様、ありがとうございます」

「午後は、井戸を掘ってやるからな」

「あの、まさか今日中に井戸ができるとか？」

「まあ、多分な」

「本当でございますか？」

「形にはなるけど、水が濁るので綺麗になるまでは数日使えないぞ
？」

「それはもちろん存じ上げておりますが……」

「どうも村長は信じられないみたいだが——まあ家と一緒に、見せ
てやるのがいいだろう。」

昼になったので皆で飯を食うが、簡単にインスタントにした。獣人たちはいつものカレー。

俺とアネモネは、カップ麺を食べた。

サンバクの料理は素晴らしいが、根っからの貧乏人の俺は、たまにこういうものが食いたくなる。

こういうジャンクな食い物には、離れがたいなにかが存在しているのだ。

それは人間の原始衝動に訴えかけるなにかだと思うが、まるで黒い情熱のように俺を縛っているように思える。

これは、どんな生活をしても変わらないだろう。

某国の大統領になった男も、ハンバーガーが大好きって話だったし。

アネモネがカップ麺を食べながら、俺の膝の上にいる。

「なんで、そこに座るの？」

「えへ、座りたいから」

ラーメンを食べながらアネモネが笑う。

子供っぽいとか言うて怒るから言わないが。

微笑むアネモネの頭をなでてやる。

「ふわああ……」

うちの大魔導師様の頭をなでていると、獣人たちがなにかの接近に気がついたようだ。

「ケンイチ、誰か来るにや」「旦那！」

ちよつと身構えたが、正体はすぐに解った。

「あら、ケンイチ様じゃねえか」

森の中から現れたのは、崖にある洞窟に住んでいるドワーフだっ

た。

太くて背が低く、腕は極太。いかにもドワーフという体つき。洞窟の奥に村を作ったのだが、そこで見た顔だ。

「なんだ、ドワーフだったか。ここに領民が入植するからな。仲良くしてやってくれ」

「それはいいんだが、数日前まではここにはなにもなかったと思ったが……」

「昨日と今日で、村を作ったんだよ」
俺の言葉にドワーフが固まる。

「……ケンイチ様のこったから、冗談ではねえんだよね？」

「その通りだよ」

「昨日と今日で、村を丸ごと移植したにゃ！」「アイテムBOXから村の家を出したんだぜ」

ドワーフが獣人たちの説明に驚いて聞き入っている。

「はあ——言葉もでねえって——むむむ！」

「どうした？」

突然、ドワーフが村人の所に向かうと、手に持っていた鍬を奪い取った。

「むむむ！ こりゃまた見事な鍬だな！ これもケンイチ様が魔法で作ったもんだろ？」

「そうだ」

ドワーフの姿を見た村人たちが集まってきた。

「ど、ドワーフだ」「エルフの他にもドワーフが……」

「ああ、心配することはない。向こうに崖があるんだが、その洞窟に住んでる連中だ」

「こんな上等なものを、ただで村人に与えてどうするんだ」
ドワーフは鍬を掲げて、ぐるぐると回して見ている。
普通の村人が買えるような代物ではないと見ているのだろう。

「そんなことはないだろう。村が豊かになれば、それはすなわち領
が豊かになり——つまり俺が儲かる。先行投資だ」

「そりゃ理屈は解るが……」

「そう思っているから、ドワーフたちにだって、凄いものを色々と
やったる？」

「おう！ あんなすげえものを持っているのは、大陸のドワーフの
中でも俺たちだけだろうな」

「それを使って凄いものをたくさん作ってくればいいんだよ」

「あれがあれば——俺たちの部族は、ドワーフの中でも2段も3段
も階段を上れる」

「他の部族を寄せ付けないほどの技術を身につけることができるっ
てことだろう？」

「その通り！ ははは！ あんな酒だって、ほかの部族はもってね
えしな！」

ものづくりも凄いが、彼らの醸造技術も凄い。

ドワーフたちは、シャングリ・ラに売っている酒に匹敵するよう
な酒を作っているのだ。

サトウキビの絞りカスから酒を作っているので、ラムに近い酒に
なるのだろうか。

上機嫌だったドワーフだが、突然顔が曇る。

「話には聞いていたが、本当にエルフがいるんだな」

「彼女は大使だよ。エルフとも協力関係を築かないと」

「政のためとはいえ、あんな連中と付き合うことになってる領主様
に同情するぜ」

えらい言われようだが、そのぐらいドワーフとエルフは仲がよろ

しくないらしい。

ファンタジーでは、そんな話があったような気がしたが、この世界でもそれが当てはまるようだ。

「別に、エルフと仲良くしろとは言わんよ。喧嘩をしなければいい」

「まあ、向こうもそのつもりだろうし」

洞窟にいるドワーフたちにも、ここに村ができることを伝えてくれるよう頼む。

俺の言葉を持ってドワーフは、仲間の所に帰っていった。

さて、井戸を掘らなくては——村長を呼ぶ。

「村長、井戸はどこに掘ったらいい？」

「できれば村の真ん中に……可能でございましたら——の話でございませう……」

村には広場があり、そこに井戸を掘れば皆が使いやすい。

ここは湖の近くなので、どこを掘っても水は出ると思うが——とありあえず、やってみるか。

村の外れにあった重機を、一旦アイテムBOXに入れて、広場で再び出す。

そのまま移動してもいいのだが、カタピラで地面がガタガタになってしまう。

せっかく地面を均したのに、また整地をしなくてはならない。

黄色い鉄の魔獣に乗り込んでエンジンを始動させる。

黒煙を吐き出して息を吹き返した魔獣。彼の長いアームを伸ばすと、地面を掘り始めた。

掘って掬って、土を移動させると小山を作る。

アネモネのゴーレム魔法でも、穴を掘ることが可能だろうとは思うが、細かいコントロールができない。

表面は腐葉土なので、掘りやすくあっという間に穴が開く。

「「「おおおっ！」「」」「もう、こんなに深い穴が！」「あの鉄の爪の威力は凄い！」

土の下に砂の層が現れると、水が湧き出てきた。

水が湧けばこっちのもんだ。

シャングリ・ラから購入したコンクリブロックで組むと、水の溜り場を作る。

次に、太い塩ビ管を購入して、つないで穴に立てて再び埋め戻す。埋め戻した周りを踏み固めたあと、地面から飛び出した塩ビ管に細い管を挿入。

設置台を置いて、そこにガチャポンプを繋げば――井戸の完成だ。

「村長、完成したぞ」

俺の言葉に、集まっていた村人たちが、訝しげな顔をする。

「こ、これが井戸でございますか？」

「あー！ ここの村人は帝国で流行ってるガチャポンプを知らないのじゃ」「まあ、見たことがないのも当然だと思うぜ」

獣人たちの言うとおりだな。

村人を集めて、使い方を説明する。

「使い始めのときには、呼び水を入れる」

「はい」

ポンプに水を入れて10回ほどポンピングすると、コーヒ―牛乳みたいな水が出てきた。

「「「おおお！？」」「」」

「ケンイチ様！ これは魔法でございますか？」

「違う違う、普通に水を揚げるカラクリだから、女子どもがやって

も同じように使える」

試しに、俺がシャガの所から助けた女を呼んでやらせてみた。

「こうやって、上下に」

「こうですか？」

白いブラウスに青いロングスカートを穿いた女が、おっかなびっくりポンプを動かしている。

当然、誰がやっても水が滔々とうとうと溢れ出てくる。

「凄い！」「俺にもやらせてくれ！」「もう、重い釣瓶を上げなくてもいいのね！」

「そうだ、これを使えば、簡単に揚水できるってわけだ」
代わる代わる、村人たちはガチャポンプを動かしてはしゃいでいる。

まだ水が濁っているが、2〜3日すれば澄んでくるだろう。

「ありがとうございます！」

村長が、俺の前にやってくると深々と礼をした。

「村長、こいつは結構高価なものだから、盗まれないようにな」

「心得ました！」

シャングリ・ラなら2〜3万円で買えるこいつも、この世界では金貨数枚の価値がある。

盗まれることも十分に考えられる。

時間が余ったので、畑の開墾もする。

アネモネのゴーレムで木を倒し、ぶつ切りにするとアイテムBO
Xに入れる。

畑のスペースができたら、ゴーレムを使って天地返しをする。

「アネモネやってくれ」

「解った。むー！」

彼女の魔法で青い光が集まると、コアに腐葉土が集まっていく。栄養豊富な表面の腐葉土を土に混ぜ込むのだ。

ゴーレムのコアを使えば、土をひっくり返すのも簡単にできる。盛り上がってはひっくり返し、まるで生き物のように動く土に、村人が驚いている。

「土が生きているようだ」「なんと、畑もこんな簡単に……」

「畝を作ったりするのは、そちらでやってくれよ」

「村を作って畑を作って、出血大サービスだよ」

ミャレーが妙なことをいい出した。

出どころは多分アキラだ。

「アキラからそんな言葉も習ったのか？」

「にゃー！」

本当にもう、どうでもいい言葉ばかり覚えて。

この世界に定着したらどうする。

少々心配だが、変な言葉を喜んで使っているのは、ミャレーだけだ。

多分、大丈夫だろう。

村長にトウモロコシなどの種と、サトウキビの苗も渡す。

「この絵に描いてある、黄色い実がなるのですか？」

村長が見ているのはトウモロコシの写真が載っている袋だ。

「実というか、そいつは穀物なので、麦みたいなものだと思う
れ」

「こ、これがございますか？」

「ああ、そのまま煮たりしても食えるが、乾燥させて粉にして使ったりもできる」

この世界でもトウモロコシの栽培が始まっているが、実を間引いたりしないので、あまり甘くない。

「こちらの草は？」

村人たちがサトウキビを見ているが、たしかに草にしか見えんな。

「それは湖で見せた、砂糖ができるサトウキビだ。植えるなら水際でないと駄目だな」

「栽培は難しいのでございますか？」

「いや、地下茎でどんどん増えるし、難しくはないと思う。砂糖の作りかたについては、サクラまでやって来て習ってくれ」

「承知いたしました」

「初めての栽培だ。失敗しても怒ったりしないので、色々と試行錯誤してみてください」

「ケンイチ様のご期待に添えるよう、村人一丸となって粉骨砕身いたします」

「よろしく頼む」

そろそろ暗くなりそうなので、サクラに戻ろうとすると――獣人たちの様子が変だ。

「どうした？」

「多分――あの犬コロにゃ」「ああ、おいで解る」

ちょうど風向きが、においを運んでくる方向に吹いている。

森の中から現れたのは――彼女たちが言うようにワルターだった。

「ようワルター、おつかれさん」

「これは、ケンイチ様。村を作っていたのはここでしたか」

「ああ、この近くを通ったら、なにか問題がないか村人に聞いてみてくれ」

「かしこまりました」

彼は、領のパトロールをする仕事をしているので、その成果を聞いてみる。

「魔物はどうだ？」

「獲物は多いですが、魔物は見当たりませんねえ」

「俺が初めて来たときには、牙熊がいたりしたんだが……」

「そうにゃ！　ウチがおびき寄せて、ケンイチが倒したにゃ」

えー？　ミヤレー、それは違ったと思ったぞ？

まあ、そんなツツコミはやめておく。

「ここらへんは黒狼も多いんだが、犬人に神の遣いを倒せとは言わんから、見かけたら報告だけしてくれ」

「はい、申し訳ございません」

やっぱり犬人は、黒狼を手にかけるのは禁忌みたいだな。

「森猫を仕留めるのもやめてくれよ」

「ケンイチ様の森猫の可愛がりようをみれば、そのようなことをできるはずありません」

「今のところ、犬人はお前1人だが、他の犬人がやってきたら伝えてくれ」

「承知いたしました」

犬人から見れば――森猫を飼って、猫人の女を愛人になっている俺は、猫人族びいきに見えるかもしれないが、仕方ない。

村人に別れを告げると、アイテムBOXから車を出した。

「ワルター、お前も乗っていくか？」

俺の言葉にミヤレーとニヤメナが慌てている。

「いいえ、私は自分の脚で参りますので」

「そうか」

車に乗り込むと、ミヤレーとニヤメナがワルターに向かって舌を出す。

「やれやれ……」

それを見たワルターが呆れた顔をしている。

「ミヤレー、喧嘩をするんじゃないぞ？」

「奴らから売ってこない限りは、しないにゃ」

平和に暮らしてもらいたいというのが、領主の願いではあるが――人が多くなれば、それだけトラブルも増える。

みんな仲良くってわけにもいなくなるだろう。

小さな会社でも、皆を100%満足させるってわけにはいかないからな。

ちよつとのこととで仲違いして分裂していく。

元世界での仕事のことを思い出して気が重くなるが、なにかも自分で背負ってしまったのが敗因だ。

ここには優秀な人材が揃っている。

皆の力を借りて、領を運営していかねばならない。

決意を新たにしていると、サクラに到着した。

車から降りると、メイドたちが出迎えてくれる。

「――「おかえりなさいませ、ご主人様」――」

「はい、ただいま」

食事の準備は整っており、並べられたテーブルには美味しそうな料理が並んでいる。

テーブルにつこうとすると、アマランサスが抱きついてきた。

「聖騎士様あ」

「なんだ、アマランサス。暇そうだな」

「聖騎士様との波乱万丈の旅に比べれば、政のなんと退屈なことまつりごと」

「そうは言っても、それが仕事だし」

そこにリリスがやってきた。

「村の移築はどうなったのじゃ？」

「すべて終わったよ。明日から普通の生活が送れるだろう」

「なんと——数日で引っ越しが終わり、村の開墾まで終わってしまったとは……」

「そこが、聖騎士様の凄いところですね……」

そこにアネモネが割り込んできたのだが、アマランサスはびくともしない。

「アマランサス、離れて！」

それどころか俺の首に腕を回して唇を狙ってくる。

「うふふ」

「ほら、アマランサス。飯だぞ」

「……」

彼女が黙って俺から離れた。

奴隷契約がある彼女は、俺に逆らうと転げ回るからな。

今日のテーブルには、プリムラがいた。

「プリムラ、アストランティアでカナンに会ったかい？」

「お会いしましたよ。ケンイチを待っておいででした」

「そうか——村の移築は終わったので、明日アストランティアに行つてこようかなあ」

「私も行く！」

すでにテーブルについて、食事を食べ始めていたアネモネが手を挙げた。

「カナンの所に泊まるかもしれないから、俺1人で行ってくるよ」「むー」

アネモネがむくれているが、カナンに服を作ってもらいたいのだ。いい加減、シャングリ・ラで買った適当なコスプレ服でごまかすわけにはいかないだろう。

まじまじと見られれば、安物だってバレてしまうしな。

要は、しっかりとした材料でコスプレのような服を作ってもらえばいいわけだ。

考えごとをしながら、目の前の黄金色のスープを啜る。

美味い。

肉は黒狼だろうが、臭みもまったく感じられない。

まるで高級レストランの味——というか、作っているのは王宮の料理人なのだから、当たり前前田のクラッカー。

チラリと、作ったサンバクの顔を見れば満足そうな表情。

さすが、プロは違う。

腹も膨れたので、帰ってきた森猫と獣人たちにブラシをかけてから、崖の上の離れに向かった。

寝るのには少々時間があるので、ちょっと工作。

離れに続く道に街灯を置きたい。

輪切りにした丸太を置いて、その上にシャングリ・ラで買った街灯を設置する。

ちよっとブロンズ像のような色合いで金属風に見えるのだが、実はプラ製で軽く片手でらくらくと持ち上げられる。

そいつを丸太の上に設置すれば、起き上がりこぼしのように倒れ

る心配はない。

太陽電池とLEDで光るので面倒な配線もなく、暗くなると勝手に光りだす。

LEDの光には虫が集まらないので、夜の間光らせても平気だ。設置した街灯は充電した状態だったのか、すぐに光りを灯し始めた。

離れまで、一直線にオレンジ色の街灯が並んでいい感じ。

できあがった街灯を眺めていると、LEDランタンを持ったマイレンとリリースがやってきた。

「ほう！ 明かりを灯したのじゃな？」

「こいつは、暗くなると勝手に光るから手がかからない」

「虫が集まっておらなので魔法の光じゃな」

マイレンがそつと手を挙げた。

「あの、恐れ入りますが――自宅の周りにも何本か立てられないでしょうか……」

家やメイドたちの宿舎の周りは、往来が激しい。

いくらか明かりがあつたほうがいいか……。

「こんなに暗くてもいいのか？」

本当に微かに足元が見えるぐらいの明るさだからな。

「真っ暗よりは……」

「そうだな、何本か立てるか」

「ありがとうございます」

大型の太陽電池と、普通の街灯の組み合わせもあるのだが、設置に手間がかかってしまう。

それでも主要な場所には設置してもいいと思うが……。

盗まれたりすることも考えなくてはならないし。

今日建てた街灯モドキは、プラなので安い。

なにかあっても懷が傷まない。

離れに入ると、女性たちが裸になる。

いきなり裸になると情緒もなにもあつたもんじゃないな。

まあ結局、やることは一緒なのだが。

マイレンもメイド服を脱ぐが、髪型とメガネはそのまま。

これは譲れない。

「お許しを〜お許しくださいませ〜」

マイレンとお許しを〜ごっこしながら、リリスと話す。

「カナン殿の所になにか用があるのかえ？」

俺の隣には裸のリリスが座っている。

「ああ、そろそろ正式な貴族用の服を作ってもらおうと思ってね」

「いつもの服でもいいと思うがの」

「ああ〜お許しを〜」

「ええ？ あれか——じっくりと見れば、作りが悪いとバレてしま
うんだが……」

ナイロン素材とかは、この世界にないから、新鮮といえば新鮮だ
といえるかもしれないが。

リリスを抱き寄せて、唇を重ねる。

「リリスも、カナンに服を作ってもらえばいいじゃないか。新進気
鋭で人気らしいぞ？」

「もう、頼んである！」

代金は彼女のポケットマネーで払うようだ。

公私混同はよくないが、ある程度なら公費として認めてもいいと思うが……。

「そういうことをすると、プリムラの追及が厳しいのでな」

「なにか事業を始めて、儲けた金で買うとかしないと……」

「それゆえ考え中じゃ」

「お許し——あゝっ！」

お許しごっこが終わったマイレンが手を挙げた。

「わ、私もカナン様の服が欲しいのですが……」

「カナンの服は人気らしいからなあ、頼んでもいつになるか」

「そ、そこはケンイチ様のお力でえ」

裸のマイレンが俺に胸を押し付けてきた。

リリースが俺のほうをじろりと睨む。

「公私混同はいかんな」

「申し訳ございません……」

俺の言葉に、しょんぼりしているマイレンの頭をなでる。

「ふわあああ……」

まあ、注文するだけ注文してみればいいが、やっぱり上客優先だ
と思うなあ。

俺の服を作る暇もないかもしれない。

とりあえず、明日アストラランティアに行ってみよう。

218話 沢山ある領の仕事

サクラに移民してきた村の設置が終わった。

丸ごとの村の移植なんて初めての試みだが、上手くいったようだ。こんな元世界だって誰もやったことがないだろう。

仕事が終わったので、朝飯を食ったらアストランティアにいるカ
ナンの所に行ってこようと思う。

彼女も会いたがっているようだしな。

皆で朝食を摂り終わった。

わらわらとメイドたちが集まってきて、後片付けをしていく。
手慣れた作業でまるで流れるよう。

「プリムラ、アストランティアに行くが、一緒に乗っていくか？」

「はい」

「旦那！ あたいも！」

手を挙げたのは、プリムラの護衛をしているニャレサというシャ
ム柄の女。

「いいぞ。まさか、お前だけ走らせるわけにもいかんし」

「そんなことないよ！ 貴族に雇われている獣人なんて、馬車にも
乗せてもらえず走ってついていくし」

「それでも平気だと思われているんだろ？」

「そりゃ、平気だけどさあ」

「俺はそんなことは言わんから安心しろ」

「やったあ！ でも、あの犬コロはどうなのよ？」

彼女が言っているのは、ワルターのことだ。

「仲良くやってくれよ」

「奴ら次第だよ」

皆同じことを言うな。

彼は問題ないと思うが、森猫や猫人の愛人を囲っているのが、猫好きだと思われるらしい。

そんなことはない。最初に会ったのがミャレーで、そのまま猫人族との付き合いのほうが多くなってしまっただけで。

そういえばアストランティアで、犬のお面を被り、犬人に風評被害をかぶせてしまったなあ。

あれは反省しているが、非常事態だったし。

俺が出かけるので、アネモネとアマランサスがウロウロしている。彼女たちには悪いが、今日は留守番だ。

おとなしく待っててもらう。

ベルたちは、森に行ったようだ。

「ケンイチ、またアストランティアから、絵師を呼ばんとう！」

「例のあれか……」

領主が偉業をしたら、絵師を連れてきて絵巻物を描いて自慢するのだ。

別に自慢しなくてもいいと思うのだが、それがお城への報告書にもなっているという話なので、作らないわけにもいかない。

オダマキの鉱山から出た山のようなスケルトンを退治したという物語が、おもしろおかしく描かれるのに違いない。

「カナン殿によろしくの！」

リリスは服を作ってもらっているので、彼女には寛容だ。さて、アストランティアに行く前にやることもある。

「プリムラ、急ぐかい？」

「いいえ、なにかお仕事でも？」

「仕事ってほどじゃないんだが、切った丸太を材木置場に置こうと思っただけ」

村を移築するために森を開墾したので、アイテムBOXの中に丸太の在庫が増えてしまった。

テキトーに在庫を減らしていかないとドンドン増えてしまう。

そこにユリウスがやってきた。

「ケンイチ様。領主様がお戻りなら、サントスカの水産加工場に原料を入れてほしいと、連絡が来ておりました」

「そうか解った」

そうそう、イカの燻製——イカクンの原料であるクラークンも、アイテムBOXの中から減らさないで。

いくら加工場に持っていくても、まったく減らない。

なにせ、クラークンがデカすぎるからな。

これがなくなるのは、いったいつになることやら。

まあ、イカクンは売れているから、いいけどな。

プリムラの話では、サントスカは儲かっているので税金を納め始めるという。

「まあ、かなり人も増えているようだしな——あ、そうだ！　ダリアと途中の村で買った家を、アイテムBOXから出すか……」

なにせ30軒以上の家を買ったからな。

これで、サクラの住宅事情も多少はマシになるだろう。

「ケンイチ、全部やっても、午前中にはアストランティアには着けるでしょう。私はそれで構いませんよ」

「ありがたいな。それじゃ全部片付けてから、アストランティアに行くか」

「ユリウス、俺がアイテムBOXに入れてきた住宅を配置する」

「それでは、少々お待ちください」

「ああ」

彼は役所代わりにしている家に、書類を取りに戻ったようだ。住宅を希望している住民の情報が記されているらしい。

数分でユリウスが戻ってきたので、アイテムBOXから車を出す。プリムラと彼を乗せ、ニャレサは3列目シートだ。

「へへ、悪いね。お役人様」

「ケンイチ様がやられていることですから、構いません」

ユリウスも獣人たちには偏見がないように助かる。

まあ、こんな僻地希望で、そんなやつはいないと思うが。

「こんな辺境で、獣人が嫌——なんて言ったら暮らしていけないからな」

「彼らがいないと開拓も進みませんし」

「そのとおりだ」

車でサクラの大工の所に向かう。

集落の中を走り製材所に到着すると、親方のドラクラがいた。

周りから木を加工する音や、のこぎりで木を切る音が聞こえてくる。

他の場所と違うのは、においだ。

色々な木の香りが一面に漂っている。

「ドラクラ、ちょうどよかった。ちょっと仕事に付き合ってくれ。すぐに終わる」

「ケンイチ様、なんの御用で？」

「家を持ってきたから配置する。それを見て直す順番とか決めてく

れ」

「解りやした」

「それから、丸太を持ってきた」

「よっしゃ！」

彼と一緒に材木置き場に行くと、丸太が積まれている。

俺が運んだものばかりなので、ほとんど同じ長さだが、アイテムBOXに入れるために、この長さに揃えるからだ。

そこに丸太を出し積み重ねると――低い木琴のような大きな音が、あたりに響く。

「いつ見てもすげえ！　こんなの森から運んだら何日かかることやら」

森の腐葉土は柔らかいため、普通の馬車では車輪が埋まってしまう使えない。

車輪が太い特殊な馬車やソリを使うらしい。

「ソリか……なるほどなあ」

ここなら、一旦湖に出てからイカダを組んで、サクラまで運んできたほうが早いかな。

丸太の周りに獣人たちが10人ほど集まってきて、掛け声と共に抱え上げた。

水車で回す巨大な丸のこに、セットするためである。

こいつで丸太を縦切りにして、板を作っているわけだ。

俺がやれば早いが、なんでも俺がやってしまっただけ雇用が生まれない。

仕事を作り人を雇い、領の経済を回していかなければ――それが領主の務めってやつだ。

おっと、見とれている場合ではない。

仕事をしないと。

ドラクラを連れてきて、車に乗せた。

「ドラクラ、第2製材所のコアモーターの調子はどうだ？」

「順調でさ！ あんな場所で丸のこを使えるなんて、普通じゃ考えられねえ」

「木を切るのに力不足とかそういう感じは？」

「まったくありませんぜ」

コアモーターのトルクは凄いらな。

回り始めると、人の手では止められないぐらいのパワーがある。

現場に到着すると、住宅を出す場所をユリウスに指示してもらう。俺がここにやって来たときには、一面森だったのに、広範囲に渡って木が伐採されて集落ができています。

崖から湖に向けて、ゆるい斜面になっているので、水はけもいい。

「あゝ、そうだなあ。そろそろ下水の工事もしないとなあ」

「げ、下水ですか？ 恐れ多くもケンイチ様、そんな大規模な工事は、今のサクラでは……」

俺の話を聞いたユリウスが、予算の心配をしている。

普通の都市の下水というのは、石で組んだ地下迷宮みたいなもので、膨大な予算と時間を食う。

数十年から百年単位でやる大事業だ。

「ああ、そういう立派なものじゃないから」

俺が考えているのは、シャングリ・ラで売っている塩ビパイプを地中に埋める下水だ。

実際に、メイドの宿舎などではもう使われているし、集落が小さいうちはこれでなんとかなる。

パイプを埋めるのも重機を使えば簡単だしな。

各家庭から出る生活排水は、現在は地下浸透であるが、汚水の垂れ流しではない。

汚水槽に溜めた排水を、水石という石で浄化してから地面に流している。

この世界の街が綺麗なのは、この石のせいなのだが、食べ残しなどは分解できないので、汚泥などは定期的に掃除する必要がある。

お城のようにゴミをそのままにしていると、ネズミなどの繁殖に繋がる。

トイレはいわゆるポットンであるが、専門の業者がいて、汲み取り肥料などに加工。

これも魔法を使っているので、元世界に比べても迅速な加工が可能なのだ。

引けは取らない。

「まずはここです」

ユリウスの指定の場所にやってきた。

小さなテントが張っており、一家3人が暮らしているようだ。

俺が与えた服を着た若い夫婦と、3歳ぐらいの男の子が1人。

この領の住民になったときに、シャングリ・ラで一番安い服とズボンなどを与えている。

シャングリ・ラでは安物でも、この世界では上等な部類にはいる。なにより普通は古着ばかりで、新品などを買える余裕がある家庭は少ない。

こんな環境でも子供を生んで育てるなんて、元世界では考えられなかった。

そう考えると、俺の住んでいた国は恵まれていたのだ。

「こ、これは領主様！」

テントの主が頭を下げた。その後ろで彼の妻も礼をしている。

「お前達は、住宅のお願いを出していたな」

「は、はい！」

「どんな住宅が与えられるかは、解らんぞ？」

「それでも、この天幕よりは……」

「そうか、解った」

テントを片付けさせてから家を出そうとしたが、地面を整地しなくてはならない。

斜めや凸凹の地面に家に乗せては、家屋が壊れてしまう。

俺はアイテムBOXからユ○ボを出して整地を始めた。

何事かと、集落の住民たちが集まってくる。

「こりゃいかん！ 意外と手間を食うぞ！ これじゃ、アストランティアに向かえない」

そうは言っても、やり始めてしまったものは仕方ない。

車のほうをチラ見すると、プリムラが座って待っている。

急がないと。

地面の整地を完了すると、アイテムBOXから家を出した。
大きな音を立てて、木造の家が落ちてくる。

程度はまあまあだが、屋根が破損しており、壁の修理も必要だろう。

不公平になるといかんので、あまり立派な家は買っていない。

殆どがボロ屋で、空き家ばかりを探してもらった。

「「「おおおっ！」「」」」

集まってきた野次馬から歓声が上がった。

「ほ、本当に家が……」

突然、出現した家に、男が驚嘆している。

「にやにやにや！　なんだいこりゃ！」
一緒についてきたニャレサが叫ぶ。

「なんだって？　アイテムBOXから家を出したんだよ」
「ありえねえー」
ニャレサは放置して家を見る。

「屋根は直さないと駄目だな。大工たちが忙しいので、すぐには修理できないと思うが……」

「構いません！　家をいただけるなら、それぐらいは……」
別に家をプレゼントしたわけではない。

これは借家で、領の持ち物——いわば公営住宅。

その点を念を押す。

勝手に売ったり買ったりもできない。
騒ぎに住民たちが集まってきた。

「領主様……」
皆で集まってきて、言葉には出さないが何をいたいのかは解る。
ここにいるのは、家のない者たちだ。

「順次、家は用意してやるから、おとなしく待っている」
優先順位は、子供のいる家庭と年寄が優先だ。
若い男なんかは、どうにでもなるだろうし。
女などは、数人で固まり共同生活をしているらしい。

——出した家を見つめる。

「うーん」
屋根の穴が気になるな——そうだ。

俺はシャングリ・ラから2000円のブルーシートを買った。
住民たちの前で、そいつを広げる。

「これは、水を通さない布だ。屋根の修理が終わるまで、こいつで
屋根に開いてる穴の部分を覆えばいい」

「ありがとうございます！ これで夜露もしのげます」
夜露ってのは結構濡れるからな。

それに、ブルーシートがあれば、雨が降っても大丈夫だろう。

「ドラクラ、ここは屋根の修理だぞ」

「へい」

彼が、俺からもらったメモ帳と鉛筆を使ってメモを取っている。
大工は、読み書きと計算ができないと仕事にならない。
数値で管理しないと、合うものも合わなくなる。

たとえば、壁に等間隔で補強を入れたい——そんなときは割り算
が必要になるしな。

割り算をするためには、掛け算——つまり九九が必須である。

こんな調子で3軒ほど家を出したが、さすがに他の仕事もしない
といけないので、今日はこれで打ち切った。

製材所に戻るとドラクラを降ろし、俺たちの家の前でユリウスを
降ろす。

「つき合わせて悪いな」

「いいえ、仕事ですから。まだまだ家は残ってますし」

「そうなんだよ。地道にやっていかないと」

「待っております住民が多数おりますから、なるべくならお早めに
お願いいたします」

「解っている。アストランティアから戻ったら、集中的にやろう」
「ありがとうございます」

「ほほほ」

笑い声が聞こえてきたので、振り向くとアマランサスだ。

「さすが聖騎士様じゃのう」

「なにがさすがなんだ？」

「貴族に向かって急かしたりすれば、ヘソを曲げる者も多いというのに」

「俺はそんなことないよ」

「ゆえに、さすがなのじゃ」

苦笑いするユリウスに手を振る。

アマランサスは留守番だ。

俺が車を発進させようとすると、ドアが開いた。

「なんだ?!」

「私も行くう!」

飛び込んだきたのは、エルフのセテラだ。

「おい、危ないだろ。それに街に行くんだぞ? エルフが行っているのか?」

「知ってるよお。街に行ったことだってあるしい」

「プリムラ、いいか?」

「構いません」

エルフは降りそうにないので、そのまま連れていくことにした。

次は、サンタンカの水産加工場である。

途中にある川にかかっている橋を渡ると、水で締めまり硬くなっている湖畔を走る。

「すごい! これでエルフの集落まで行ってよお」

「行けないこともないけどなあ」

湖の測量をしたときは、湖の外周を回る条件つきだったが、最初からエルフの集落に行くなら森の中に入ってしまえばいい。

ただ、湖から川沿いで行ったほうがわかりやすいだろうな。森の中に入ってしまったら、集落の位置が解らないはずだ。

「そんなの私が乗っていれば大丈夫だよお」

なにやら精霊を使って道案内をしてくれるらしい。

さしずめ異世界のカーナビか？

サンタンカにはすぐに到着したので、そのまま加工場に向かう。木でできたちよつと大きめな建物が俺を出迎えてくれる。

この中で女たちがテーブルに座って、スモークサーモンなどの燻製を作っているのだ。

獣人とエルフを車内に残して、プリムラと一緒に加工場に行くと、木製のドアを開ける。

中は暗いが、陽の光が入ると材料が傷むからだ。

「うゝす、元気でやってるか？」

俺の声に、長テーブルについていたたくさんの女たちの視線が一斉にこちらを向いた。

「「「きやあああ！ ケンイチ様あ！」」」

女たちが一斉に席を立つと、俺に襲いかかろうとしたのだが、その動きが止まる。

後ろで、プリムラが怖い視線を送っていたのだ。

この加工場はマロウ商会が仕切っているので、女たちはプリムラに逆らえない。

機嫌を損ねてクビになるのは、惜しい職場なのだ。

それでも気の強い女が、プリムラに一言申す。

誰かと思ったら、ダリアからやってきたアザレアだ。

俺が一番初めに泊まった宿屋の給仕をやっていた女だな。

「いくらマロウ商会のお嬢さんだからといって、ケンイチを独り占めはするんじゃない？」

「ふふふ、私はケンイチの側室ですよ？」

ニツコリと笑うプリムラが怖い。

その迫力にアザレアも、すごすごと引き下がった。

「俺のことはいいから仕事をしろ」

俺は、アイテムBOXからクラーケンの肉を取り出すと、テーブルの上に置く。

そこに場長がやってきた。

この男もマロウ商会から派遣されている。

「これは領主様！ イカクンの注文もたくさん入っていたのですが、原料がなくて作れなかったのですよ」

「すまん、しばらく留守にして」

「いいえ、領主様のお仕事ですから」

場長と話していると、懲りないアザレアがやって来た。

「ねえ、ケンイチ。南の街で魔物退治したって聞いたんだけど……」
アザレアが勤めているこの加工場でも、そういう話が流れてきているようだ。

多分、情報の出どころは獣人たちだろう。

魔法陣の話を漏らされると困るが、魔物退治は別にいい。

「ああ、鉱山からスケルトンが大量に出てな」

「それを、ほとんどケンイチがやつけたの？」

「まあ、そんな感じだなあ。でも、他の連中も頑張ってくれたぞ？」

「うーん、さすが私のケンイチ」

だが、アザレアの行動に他の女たちから物言いがつく。

「ちょっとあんた！ なんなのさ、領主様とそんなに親しそうに！」
「親しそうって、実際に親しいしい」

「まあ、知り合いなのは確かだな」

彼女は、俺がこの世界にやってきて、初めて知り合った女性だし。

「それに、あんたらとは決定的に違うところがあるんだよ」
「なにさ！」

「私は、ケンイチとやったんだもんねえ」

「「ええええっ!?!」」

女たちの悲鳴にも似た叫び声に混じり、後ろからも声が聞こえてきた。

「ケンイチ、本当ですか?!」

俺の隣で、プリムラが怖い顔をしている。

「ダリアに初めて訪れたときに、彼女には色々世話になったんだよ」

「そう！ 愛人にしてくれるって言ったのよね？」

「それは言っていない」

「もう！」

「色々と教えてもらったり、世話になった対価はちゃんと渡したはずだぞ」

「ううう……私のことは遊びだったのねえ……」

「ウソ泣きは止めなさい」

「ちえ！」

こいつは相変わらずだなあ。前からだったが、したたかすぎる。

「しっかりしているのも、したたかなのもいいが、それじゃ男が寄

ってこないだろ？」

「うぐ……」

凶星をつかれたのか、アザレアが沈黙した。

それなりに可愛くてスタイルもいいのに、相手がいないらしい。

あの宿で春を売っていて、付き合っていた男もいたはずなのにだ。

まあ、ここで遊んでいる暇はない。

「それじゃ、作業を頑張ってくれよな」

「「はーい！」」

アザレアも金を稼ぎに来たと言っていたから、そのうちダリアに帰るのだろう。

親もいるらしいしな。

車の所に戻ってくると、プリムラと一緒に乗り込む。

これでやっと、アストランティアに向かえる。

「ふう、やっとアストランティアに向かえるねえ」

後ろに乗っていたニアレサが、俺が考えていたことと同じことを言う。

助手席に乗ったプリムラは黙ったままだ。

「旦那、中からキャーキャー聞こえてきたけど？」

耳のいいニアレサが聞き耳を立てていたようだ。

「ごめんよ、プリムラ。君に会う前の話だ」

「解っているけど……」

「なんだい旦那。また女かい？　どんだけ増やせば気が済むんだい

？　ははは」

後ろからニアレサの笑い声が聞こえてくる。

まあ、プリムラはしばらく機嫌が悪いかもな。

「只人ってのは、そんなことで揉めるのねえ」

セテラが不思議そうにしているが、エルフは性に自由で、誰とでもするって話だからなあ。

俺たちが揉めている意味が解らないのかもしれない。

「貴族様だから、仕方ないねえ」

ニヤレサが言うのは、一般的な貴族のイメージの話だろう。

「その貴族になる前の話だからな」

「それじゃ、宿屋や飲み屋の女とやって、小遣い渡して――ぐらいの話だろ？」

「そのとおりだな」

「そんなんで不機嫌になってちゃ、貴族様の側室なんて務まらねえぜ、お嬢」

「そ、そんなこと……解っているけど……」

「プリムラ、なにか埋め合わせをするよ」

「……」

まあ、あまり弁解をするようなことでもないし。

ニヤレサが言ったことが、すべてなのだ。

プリムラは黙ったまま、車はサンタンカから街道に繋がる曲がりくねった道を走る。

久々にこっちの道を走ったな。

街道からサクラに直通の道路が完成したので、そちらばかり使っているし。

向こうの道のほうが凸凹してないし、まっすぐだ。

俺たちが走る道の左側には川が流れているが、キラキラと水面が光って眩しい。

「この川がどこから流れてくるか、知ってるう？」
後ろからセテラの声が聞こえる。

「森の奥に泉があるとか聞いたが……」

「そうそう、そのあたりにもエルフがいるんだよお」

「へえ？ 別の部族か？」

「うん」

人が入らないような森の中には、いるんだなあ。

でも、エルフがいるんじゃ、森の中を突っ切ろうとしたら捕まる
だろうな。

セテラと話をしているうちに、アストランティアに到着した。

「すごい！ もう着いたの？」

エルフが窓にへばりつくように、街並を見ている。

「いきなりエルフが現れて、皆が驚かないだろうか？」

「別に、只人が驚いたからって、私には関係ないしい」

エルフってのはこういう感じらしい。

「こいつは楽チンでいいや。あいつら、いつもこんなのに乗っ
ていやるのか」

ニヤレサが言うあいつらってのは、ミヤレーとニヤメナのことだ。

さて、まずはマロウ商会の支店だな。

219話 カナンのアトリエ

サクラから離れた場所に移住者たちの村を作った。

村を丸ごと移植という前例のないことをやったが、上手くいった。これで、他の住民が移民したいといっても、受け入れることができるだろう。

まだやり残しの仕事もあるが、アストランティアにいるカナンが会いたいというので、向かうことにした。

彼女にもしばらく会っていないし、俺も頼みたいことがあるのだ。それは俺の服を作ってもらうこと。

今まではシャングリ・ラで買った、コスプレ用の衣装などで誤魔化していたが、そろそろこの世界の正装を揃えてもいい頃。

貴族になったし、なにかの催事に呼ばれることもあるだろう。

カナンがどんな服を作ってくれるか、今から楽しみだ。

俺が運転する車は、プリムラと護衛のニヤレサ、そして余計なおじやま虫であるエルフと一緒に乗っている。

このエルフっていう生き物は、長生きをしているせいで暇なのか、俺にまとわりついている。

彼女曰く、俺といると面白いのだそうだ。

そりゃ、シャングリ・ラなんてものから、この世界では見たことがない未知の商品がわんさかでてくるのだから、面白いに違いない。彼女は面白いのかもしれないが、俺はあまりおもしろくはない。

最初は、本当のエルフに会えたと喜んでいたのだが、俺の思っていたものとはかけ離れていたせいもある。

まあ、俺たちの思い描いていたエルフは想像上の生物で、ここに

いるのは本物。

アキラの話によれば――俺の後ろに乗っているセテラは、よりエルフらしいエルフのようだ。

彼のパーティーにいたエルフは、そんなことはなかったようなので、俺は外れを引いたのか。

「なあに？ ケンイチ、私のこと考えてるう？」

「湖に流れ込んでいる川の上流にもエルフがいるって言ってただろ？」

「うん」

「エルフの部族によって、違いがあるのかな？ と思ってさ」

「えー？ そんなに違いはないと思うけどお……」

「そうか」

「な〜に？ 誰かから、そんなことを聞いたのお？」

「俺の所に遊びに来るアキラって男がいるだろ？」

「ああ、あの変なの」

変って言うなよ。

「あいつも、エルフと付き合ってたらしいんだが……」

「私と違うっていうのお？」

「いや、セテラはエルフらしいエルフだと言ってた」

「それならいいじゃない」

「そうだよ」

彼女はあまり気にしていない様子。

悪口だと思ってるのか、人間のことなんて最初から歯牙にもかけてないのか。

少々理解に苦しむ俺だが、エルフにはエルフの文化と教義がある。種族的にも違うし、只人より長い歴史を持つ彼らに、俺たちがあるこれというほうがおこがましいとも言える。

オッサンが、小学生から人生のあれこれを諭されて、まともに相

手をするだろうか？

彼らから見れば、まさにそんな感じなのかも……。

そんなことを考えている間に、アストランティアの街の中に入った。

「ふくん、以前に来たときよりは、随分とにぎやかになったわねえ」
セテラが車の窓ガラスにへばりついている。

「以前って何年前なんだ？」

「うくん？ 50年ぐらい？」

「50年あったら、原っぱが街になるよ」

「そうなのよねえ。只人ってなんでそんなに生き急いでいるのかねえ」

「なんでって、寿命が短いからに決まってるだろう？」

「そう？」

どうも人間の寿命の感覚は、エルフには解らないらしい。

それにしても、セテラと話している間も、プリムラは黙ったまま。

「プリムラ、そろそろマロウ商会に着くよ。まだ機嫌が悪いのかい？」

「悪くありません」

「なあに？ まだ、なにか怒っているの？ ふくん、只人の女ってのは面倒なのねえ」

「面倒っていうんじゃないよ」

「ねえねえ、そんな面倒なの止めてさあ、私を側室にしなよ」

「そうはいくか。そういうけど、貴族でエルフを側室にしているやつなんているのか？」

「さあねえ、そんなの聞いたことがないねえ」

後ろから、ニヤレサの声が聞こえる。

「だいたい、子どもができないじゃないか」

「そういうのは、正室とやればいいでしょお？ 私が言っているのは側室」

エルフが後ろから手を回してくる。

「ちょっと、危ないから止めなさいっての」

「エルフ様よお。お嬢を怒らせると怖いんで、焚きつけるのは止めてくれねえかなあ」

「別に焚き付けてないしい」

「別に怒ってませんから」

マロウ商会の支店の前まできたので、プリムラとニャレサを降ろす。

大通りに面した石造りの3階建ての建物。

この支店は、プリムラの商売の邪魔をしたソガラムっていう商人の店をそのまま居抜きしたものだ。

一緒に俺も降りると、店に入ろうとしたプリムラを抱きよせる。

「ちょ、ちょっとケンイチ」

「ごめんよ」

「解りましたから！ 人目がありますから！」

真っ赤になったプリムラが、店の中に飛び込んでしまった。

さて、彼女の機嫌を直してもらったための手段を考えつつ、車に乗り込む。

残っているのは後部座席のエルフだけだ。

「そもそも、なんで彼女はそんなに怒ってるの？」

「うーん、彼女に手を出さなかったのに、宿屋の子とやったから——
—だろうなあ」

「ああ、あの子には手を出してなかったのねえ」

「まあね。いいところのお嬢さんだったし」

「それなら、怒っても仕方ないかもねえ」

「エルフ的に見ても、そうか？」

「そうねえ、やるなら全員とやったほうがいいわねえ」

それはどうかと思うが、そうなのか。

なにか手を考えないとなあ。

プリムラをなだめる手を考えているうちに、カナンのアトリエ――
――というか家にやってきた。

赤い屋根が美しい石造りの2階建て。

今思うと――この色は、オダマキの貴族街で各屋敷の屋根を彩っていたものと似ている。

この家は裕福な家庭が所持していたということらしいので、あの赤いサンゴを使った塗料なのかもしれない。

「へえーいい家じゃない」

「家らしい家を持ってないエルフに解るのか？」

「それって、ちょっと馬鹿にしてるう？」

セテラが腕を組んで口を尖らせた。

「いや、スマン。今のは俺が悪かった」

車を玄関につけようとしたのだが、揉めているような人影が見える。

車を近くに停めて、そこに急いだ。

玄関で男と揉めていたのは、ワンピースを着て赤髪を後ろで結んでいる女性。

彼女とは、以前にこのアトリエで会ったな。

対する男は痩せ型で背が高く、金髪で金糸の刺繍をした青い服を着ている。

見るからに貴族だ。

「なんか問題か？」

「あ！ ケンイチ様！」

「誰だ?!」

俺のほうを向いた男は、金髪のボブヘアの裾が開いたような変わった髪型をしている。

「ケンイチ・ハマダ辺境伯だ」

「へ、辺境伯様?!」

俺はいつものシャツとズボン姿なので、貴族には見えないだろうが。

「ここは、私の側室の家なのだが、なに用か？」

「私は、ゴーヤ男爵！ 私に、カナン殿をお譲り願いたい！」

「はあ？」

突然やってきて、何を言っているんだこいつは。

「そんなことができるわけがないだろう。お引取り願おうか」

「引き下がるわけには参らん」

なんだか知らんが、真顔である。

カナンは美人なので、こういう面倒な客に絡まれることもあると話していたが……。

トラブルなら、サクラに連絡をくれればすぐに対処するのに。

うちには、腕の立つのもゴロゴロいるわけだし。

「なにになにい？ どうしたのお？」

ゴーイングマイウェイでセテラがやってきたのだが、その金髪と長い耳を見て、男爵とやらが驚愕の表情のまま固まった。

「え、エルフ?!」

「そうだよおエルフだよお？　あなたは、だあれ？」

さすが数百年生きているだけあって、まったく物怖じしない。

エルフにとって、只人の王侯貴族などどうでもいい存在なのだろう。

エルフと対峙した男爵の顔がみるみる真っ青になり、踵を返すとスタコラサッサ（死語）と逃げ出した。

「まったく、なんじゃありゃ」

俺はアイテムBOXから塩を出すと、その場に撒いた。

「それは何をしているのお？」

俺のやっている塩撒きを、セテラが不思議そうに見ている。

「嫌なやつがいたら、穢を払うために塩で清めているんだよ」

「へえ、面白いねえ。初めて聞いたあ」

まあ、おそらくは仏教が元になっているだろうし……。

そこに絡まれてた赤髪の女性がやってきた。

「ケンイチ様！　ありがとうございます！」

女性が礼をすると、奥からパタパタと走ってくる音が聞こえて、白い扉が開いた。

「ケンイチ！」

俺に飛びついたのは、白いブラウスと細身の緑色のズボンを穿いたカナンだった。

「カナン、揉め事があるなら連絡をしなさいよ」

「申し訳ない。別に大したことはないのだ」

さっきのやつは、子爵夫人だったときからのストーカーらしい。カナンが子爵と離縁したと知って、本格的にアタックしてきたよ

うだ。

離縁しても、辺境伯の側室になったのは知っているはずだろうが、正室は無理でも側室の移動はそれなりにあるらしい。

「そんなの初めて聞いたが」

「まあ、言っていなかったしな……」

カナンと抱き合っていると、周りをセテラがウロウロしている。

「私も抱きついていい？」

「ええ？」

どういふことかと返事に困っていると、エルフがカナンに抱きついた。

そっちかよ。

「ちょっとセテラ」

カナンが、セテラを呼び捨てにしたのだが……。

「あれ？ いつの間に仲良くなっているの？」

「それが――」

俺が留守にしている間に、サクラにやってきたカナンが、セテラと意気投合したらしい。

そのときに、カナンのアトリエに遊びに行く約束をしたという。

約束したのはいいが、自分で歩いていくという選択はなかったよ
うで、誰かが運んでくれるのを待っていたようだ。

それでセテラが、待ってましたとばかりに俺の車に乗り込んだの
か。

ひたすらマイペースだな。

長寿のエルフにとって時間は無限にある。

そのうち遊びに行くという約束が、10年後――みたいな話にな

るのだろうか。

俺は元世界で読んだ漫画のセリフを思い出していた。

遊びに行く——と言ったが、日時の指定まではしていない。どうかそのことを諸君らも思い出していただきたい。つまり……我々（エルフ）がその気になれば遊びに行くのが10年20年後ということも可能だろう……ということ……！

こんな感じか。

「ケンイチ様、本当に助かりました」
赤髪の女性が、改めて礼をする。

「エルフに驚いていたみたいだから、もう来ないんじゃないか？」
「はあ、そうかもしれませぬね」
女のほうもセテラのほうを見て、ビクビクしている。

「そんなにビクつくことはないぞ？」
「はい——でも、エルフに捕まるとなにをされるか解らないという噂が……」

「なんか風評被害だな」
「もう、ちょっといたずらするだけなのに」
街に広がっている噂にエルフが口を尖らせる。

「なんだ、やっぱりしてるのか」
「森の中で迷わせるとか、幻覚を見せるとか、そのぐらいよ？」
「森の中で迷子になったら危ないだろ？」
「そんなの自己責任だし」
エルフがいるって解っているのに、森に入ってくる連中が悪いというこらしい。

カナンと一緒に家の中に入る。

狭いホールの両側に部屋があり、正面には2階に上る階段がある。ホールで抱き合いながら、カナンと話す。

「今日は、カナンに頼みがあつて来たんだ」

「ケンイチから頼みとは」

彼女が話を聞きながら、俺の身体をなでまわす。
なぜか、一緒になってセテラもなでている。

「俺の正装を作ってほしくてな」

「なに！ それは私に任せてほしい！」

「正装なので、あまり革新的なものは困るぞ」
「解っている」

彼女は社交界にも明るく、貴族がどんな格好をしているのかも熟知している。

「それじゃ、頼むよ」

「すぐに2階の部屋で採寸しよう！」

カナンが明るく微笑むので、俺も楽しくなってしまう。

「解った」

話がまとまり、階段を上がり始めたのだが――エルフがついてくる。

「なんでついてくるんだ？ 下で待っていてくれよ」

「えゝ？ なんでえ？」

「これから、カナンと一緒に服を作るための採寸をしながら愛を語らうんだから」

「それって、私も混ざっちゃだめなの？」

「だめだめ」

「なんでえ？ ケチい！」

エルフの突拍子もない言動に、カナンも困惑している。

俺はシャングリ・ラを出すと市販のお菓子の詰め合わせセットを購入した——4000円である。

落ちてきたお菓子の箱をエルフに押し付けた。

「ほら、このお菓子をあげるから下で待ってなさい」

「なにこれ〜？ 変わってるう！」

元世界のカラフルなお菓子のパッケージに、彼女が目をキラキラさせている。

それが気に入ったのかエルフは引き下がったので、今がチャンスだとばかりに、2人で階段を駆け上がった。

2人でカナンの寝室兼仕事部屋に飛び込むと、鍵をかける。

「採寸したい——裸になってくれ」

カナンの言うとおりに、シャツを脱ぐとズボンだけになった。

この世界に合わせてパンツは穿いてないので、ズボンの下はフリチンなのだが。

彼女がペタペタと俺の身体を触りながら、巻き尺で寸法を測っている。

この巻き尺も俺がシャングリ・ラで買ったものだ。

この世界は単位が統一されておらず、場所によってバラバラなので、このアトリエだけで使うなら別に単位がミリとセンチメートルでもいいわけだ。

カナンが俺の身体を測りながら抱きつき、唇を這わすのでくすぐりたい。

そのあとは髪を降ろしたカナンと、2時間ほど真っ昼間から愛の語らい。

ベッドで幸せそうに寝ているカナンの金髪をなでていると、彼女

が飛び起き——裸のまま机に向かうと何かを猛然と描き始めた。

どうやらスイッチが入ったらしい。

前もこんな感じだったような……。

少し苦笑いしてしまったが、仕事の邪魔をしちゃまずい。

俺も絵描きだから解るのだが、描きたいときに描き、ノリが乗ったときに描く。

これが大事なのだ。

真剣にスケッチを描いている彼女の邪魔をしないように、そつとズボンを穿くと廊下に出る。

そこでシャツを着たのだが、下からなにやらギャーギャーと騒ぐ声が聞こえる。

いったいどうしたんだ。

俺は階段を降りて、声のする部屋に向かった。

「おい、なにを揉めているんだ？」

皆が集まっていたのは、作業部屋。

色々な布のサンプルやら、できかけの服などがマネキンにかけられている。

マネキンといっても人型ではなく、支柱の上に頭のない布張りの上半身だけが乗っているタイプである。

俺が図を描いてやったものを元にして、アストランティアの職人が作ったものだ。

シャングリ・ラで買えば早いのだが、多少は経済の足しにしないとな。

部屋では、多くの職人を占める女性たちとエルフが揉めていた。

「あ、ケンイチ様！ このエルフは酷いんですよ！」

「モガモガ……」

エルフが箱を抱えて、口にお菓子を詰め込んでいる。

「どうしたんだ？」

「ケンイチ様から頂いたお菓子を独り占めにしてるんです！」

「皆で食べろと言ったのに……」

「モガモガモガ……！」

数百歳のはずなのに、やっていることは子どもと一緒にだ。

こんなエルフに、アネモネも子どもだとは言われたくないだろう。
やむをえない。

シャングリ・ラを開いて、もう1個お菓子のセットを購入した。

「ほら、おまえたちにもやる」

「やったあ！」 「きやああ！」

お菓子を女性陣が群がった。

「あまりいい！」 「ああ、すごく美味しいんですけど……」

お菓子を食べて泣いている女もいる。

「ごっくん！ 私がもらったんだから、私のものでしょお」

セテラが、口に入れていたお菓子を飲み込んだ。

「一緒に食べるって言っただろ？」

「そうだったけ？」

彼女は舌を出している。

悪意があるのかないのか、エルフラしいエルフとはこういうものなのか。

「エルフってのは、ものは共有財産なんだろ？ 独り占めしていいのか？」

「そうだけど――非常時以外は、食べ物は見つけた者に優先権があ

るから」

何もかも共有じゃ、探するのが馬鹿らしくなるからなのか。

今は非常時じゃないから、独り占めしてもいいってことか？

文化の違いにも困ったもんだと考えていると、上からバタバタと走ってくる音が聞こえる。

「ケンイチ！　こんな服を考えてみたぞ！」

彼女から、スケッチブックに描かれたデザイン案を何枚か見せてもらう。

ちよつと斬新なものもあったのだが、無難なデザインを選んだ。

「もっと、諸侯の度肝を抜くようなもののほうがよろしくないか？」

「いやいや、それでなくても成り上がりとか言われてるんだから、おとなしくしたほうがいい」

「巨大な魔物を倒したり、王族を助けたり、それだけの実績を残したのですから、ケンイチ様がそれに見合った地位につくのは当然ですよ」

スタッフの1人がそんなことを言う。

「オダマキでも、魔物を倒したとか聞きましたが？」

「ええ？　もう、アストラランティアまで噂が流れているのか？」

「はい。マロウ商会の方から聞きました」

ああ、そういうことか。

マロウ商会は主要都市に支店があるから、ドンドン噂が広がるなあ。

人の噂は千里を走るっていうけど、マジだな。

「オダマキの鉱山がダンジョンとつながってな。そこからスケルトンがわんさか」

「ほとんどケンイチ様が倒したと聞きましたが……」

「ええ？ スケルトンってどのぐらいいたの？」
エルフは魔物の数に気がなるようだ。

「150ぐらいかな？」

「それをどうやって1人で倒したのお？」

「えーとな、アイテムBOXに入れた」

「「は？」」

お菓子を食べながら話を聞いていた皆が固まる。

「アイテムBOXってのは、死体なら入るんだよ。スケルトンってのは死んでるだろ？ だからアイテムBOXに入れたんだ」

「そんなの聞いたことがないよお」

エルフがお菓子を食べながら、長い耳をピコピコさせながら聞いている。

「ないと言われても、実際にやったんだから仕方ない。それでな――崖の上に行ったんだよ」

「それで？」

カナンが身を乗り出してきた。

「アイテムBOXから出したスケルトンを、崖の上から落っことしてやつつけた」

「「「ええーっ！？」」」

「そんなのありい？」

別にインチキでもなんでもない。

容量がデカイアイテムBOXを持っているなら、誰でもできることなのだ。

「これで俺は、アンデッド系には無敵ってことになる」
「まあ、それはそうかもしれないけどお」

どうやら、ちぎっては投げちぎっては投げの獅子奮迅の活躍をしたと思ったら、意外な退治法で拍子抜けしたらしい。

どんな方法でも倒せばいいだろ。

「あのーケンイチ様、今日は泊まっていかれるのですか？」

「うーん？ そのつもりで来たが――皆が忙しいようなら、おいとまするが」

「そ、そんなことはありません！」

「そうですよ！ カナン様とご一緒にお過ごしください」

「ははは、カナンは愛されているなあ」

スタッフの言葉に彼女が顔を赤くして照れている。

こういうクリエィティブ系の会社って、会社の方針とかで揉めやすいんだがなあ……。

俺も経験がある。

「それでえ……夜まで時間がありますでしょ？」

女性陣が俺の所にやってきた。

「なんだ？」

「ケンイチ様に触っていただくと、すごい疲れが取れるっていうじゃないですか？」

「ああ。仕事が大変そうだからな。いいぞ」

女性陣の頭をなでてやる。別に身体を触るわけじゃないからいいだろ。

「ふわああああ」「ああああ！」「ひゃああああ！」

1人1人、反応が違うので面白い。

「それって、回復ヒールの魔法なのお？」

俺の治療の様子をエルフがお菓子を食いながら眺めている。

「まあ、それに近いものだと思う。使うと腹が減るが……」
「それも魔法と一緒にねえ」

そのあと、夕方まで仕事を見学した。

当たり前だが、皆が手作業で切ったり縫ったりしている。

それを見た俺は、あることを思いついてシャングリ・ラを開いた。
ワードを打ち込んでサイトを検索する。

それは、足踏みミシン。

結果、本体はアンティークとして売っているのだが、足踏みの機械がない。

みれば手回しに改造できるアタッチメントも売っているようなので、一緒にポチってみた。

製造年は――なんと1920年。100年近く前のアンティークだが、ミシンがないこの世界では十分なオーバーテクノロジーになる。

値段は合計で4万円ほどで、そんなに高くはない。

大きな音を立てて、黒塗りのミシンがテーブルの上に落ちてきたので、皆が飛び上がった。

なにせ鉄の塊だ。20kgぐらいあるのではないだろうか。

「ケインイチ様!？」

「これはなあ……まあ、今使いかたを見せてやるよ」

100年前の機械でも、ミシンの構造は一緒らしい。

針の下に、下糸を入れるボビンがある。

それにくるくると糸を巻き、針にも糸を通す。

これは足踏みではないので、右側のハンドルにクランクを取り付けて手で回せるようにした。

これだと、ハンドルを回す係が必要になり、少々不便だが仕方な

い。

「こうやって布を入れて、取っ手を回すと」
針が上下に動いて、布が縫えていく。

100年前の古い機械だが十分に使えるし、手で縫うよりはかなり速いだろう。

「「……」」

俺の手元を見て、皆が固まっている。

「どうした？　あまり役に立ちそうにないか？」

「「すごい！！」」 「これって魔法ですか？！」 「すごい！」

「魔法じゃないぞ。こういう機械だ」

「これだけで、布が縫えるんですか！」

「単純に縫うだけなら、こういう機械を併用すれば、作業効率を上げられるだろう？」

「ええーっ？！　こんなの見たことがないお」

金髪のエルフが、ミシンを覗き込んでいる。

「さすがのエルフ様も知らないか、はは」

俺の言葉を聞いた、カナンが抱きついてきた。

「ケンイチ……」

「こいつをやるから、カナンの作業がはかどればいいな。使い方は色々と模索してみてください」

「……はい」

彼女たちのリクエストもあったので、シャングリ・ラから中古のファッション雑誌を購入する。

「「きゃああ！ 新しい本よ！」」

落ちてきた本に女性スタッフたちが群がった。
夕方になったので皆で食事を摂る。

カナンと女性陣のリクエストがカレーだったので、インスタントカレーを食べた。

「ケンイチ！ 私は、あの虫^{ワーム}みたいなやつ！」

セテラが言う虫って——カップラーメンのことらしい。

この世界でも正義といえるカレーではあるが、エルフは好きではないようだ。

簡単でいいので、カップ麺にした。

「ええ？！ それって虫ですか？」

ラーメンを啜るエルフに、スタッフがビビりまくっている。

エルフは管虫を食べると言われているので、それだと思ったのだろう。

実際に彼らは管虫を食べるからな。

「違うよ。小麦粉を練って長く伸ばしたものだ」

「「へっっ！」」

気味悪そうにしている彼らだが、セテラが食べるカップ麺に興味深そうに眺めている。

こういう仕事をしているわけだし、好奇心は旺盛なほうに違いない。

そして夜になる。

エルフと一緒に寝たいとうるさいので、カナンの部屋にアイテムBOXから出したベッドを並べた。

別にゴニョゴニョするわけではないから、これでいい。

エルフってのは皆一緒に食事をして、一緒に寝て、財産のすべてを共有する。

彼女は只人の暮らしを理解していると言っていたが、どうしてもエルフっぽい行動が出てしまうようだ。

色々と面倒なエルフだが、文化が違うので仕方ないということに……。

ベッドの上でカナンと一緒に毛布を被り――アイテムBOXから出した小さな灯火の中で未来を語らう。

彼女の目は、子どものようにキラキラと輝いていた。

220話 化粧

アストランティアのカナンのアトリエにやってきている。
なぜかエルフも一緒だ。

ここを訪れた主な目的は、俺の正装を作ってもらうためだが――
カナンをはじめアトリエスタッフの慰安も兼ねている。

仕事は大変そうだが、今の生活にはとても満足しているらしい。
この世界で女性が働くってことは、とても大変なことだが、充実した生活を送れているようだなによりだ。

――朝、起きるとカナンの部屋で飯を食う。

アイテムBOXから出した小さなテーブルと椅子を、ベッドの横に並べた。

メニューは簡単にグラノーラで済みます。

これなら、エルフも一緒に食えるしな。

もっともエルフはミルクが駄目なので、豆乳を使っているが。

「ケンイチ、この食べ物を少し分けてくれないか？」

「ああ、いいぞ」

「私もお！」

「解った」

カナンがグラノーラを欲しがっているので、シャングリ・ラから購入した。

忙しいので、簡単に取れる食事が欲しいのかもしれないな。

セテラにはサクラに帰ってからでいいだろう。

スタッフは通いなのでまだ出勤しておらず、朝のアトリエには俺

たちしかない。

忙しいときに備えて、仮眠部屋もあるようだが、だれか泊まっているのだろうか。

「仮眠部屋に住み着いているような子もいるのだがなあ……」

俺も会社勤めをしていたときには、そんなことがあった。

1週間ぐらい会社に泊まっていた——とかな。

今考えるとブラックだが、仕事が面白いとそれも苦にならないのだ。

例えるなら、学校で学校祭の準備をしているようで楽しい——そんな感じだ。

「皆でワイワイしていると、祭りの準備をしているようで楽しいのだろう」

「そうなのだ!」

仕事は楽しいうちが華なんだよな。

会社が大きくなったり、スタッフが増えたりすると、会社を維持するために働かなくてはいけなくなる。

そうなれば、嫌な仕事やツマラン仕事もこなす必要が出てくるわけだ。

俺は、それが嫌だったから仕事を辞めた。

小さい会社だから、それもできたが——この度の辺境伯領の仕事は途中で投げ出すわけにはいかない。

前のユーパトリウム領主のように、全てを捨ててしまう人もいるのだが。

朝食を食べていると、ドアがノックされた。

「もう、出勤してきたのか?」

「いいや、まだ早いな。多分、泊まった連中がいるのでは?」

席を立つとドアを開けた。

そこにはボサボサで赤髪の女性が、ヨレヨレの寝間着を着て立っていた。

「あのお、朝食を恵んでいただけませんかねえ……えへへ」

「もう、アナナス！　また泊まったのね」

カナンによると、この女性スタッフはアナナスという名前らしい。

「気づいたら遅くなって、帰るのが面倒になって……」

「まあ、暗くなると危ないからな」

「そうなんですよ」

元世界とは違い治安はあまりよくないし、暗い中で出歩いたりしたら、襲われても文句は言えない——そんな世界だ。

特に若くて美人の女性は危ない。

「まあ、今食べているのでよければ、一緒に食べよう」

俺はテーブルの上にあるグラノーラを指差した。

「本当ですか？！　やったあ！」

「お菓子をたくさんあげたのはどうした？」

「皆で分けちゃいましたし、夜にお腹が空いたので食べちゃいました」

「夜に甘いものを食べると太るぞ？」

俺の言葉に女性が固まる。

「本当ですか？！」

「ああ」

元世界では常識だが、この世界で夜食なんて食えるのはごく一部だし、甘いものも限られている。

そういう考えが浸透していないのだろう。

「やっぱり、服飾などを扱っていると、体型とか気になるかい？」
「そりゃ、もちろんですよ！ カナン様みたいにお綺麗ならいいですけど……」

女性が、辺境の華と呼ばれているカナンをチラ見する。

「女性の美しくなりたいたいっていう欲望は果てがないからな」
「ははは、それゆえこういう服が売れるわけだし」

カナンの言うとおりだが、ちよつと気になることがある。
グラノーラを食べながら、黙って俺たちの話を聞いているエルフだ。

「エルフはどうなんだ？」

「んあ？ なにがあ？」

「流行りの服を着たいとか、飾りをつけてお洒落したいとかないのか？」

「そんなことをしてどうするの？ 服なんて、裸を隠せばいいし」

「身も蓋もないな……」

まあ、何百年も生きているなら、そんなことはどうでもよくなっているのかもしれない。

「だってえ、エルフって最初から信じられないほど綺麗じゃないですかあ」

赤毛の言うとおりだ。

「そうだな。只人ならお洒落すれば60から80になるが、エルフだと100から101とかにしかないかもなあ」

「ふーん、只人って無駄なことに金と時間を費やすのね」

「その口調からすると、そういう文化がまったくないのか」
「うん」

セテラの話では、化粧の文化もまるでないらしい。

「でも、目を描いて、口紅を塗れば変わるんじゃないのか？」

「そうだな！ 面白そうだ」

俺の言葉にカナンも乗り気だ。

「なにになに？ 面白そうなこと？」

エルフも長い耳をピコピコ動かして興味ありそうなので、カナンが化粧道具を持ってきた。

彼女が持っているのは、俺がシャングリ・ラで購入して渡したものだ。

化粧品などは、マロウ商会におろしていないので市販されていない。

使っているのは、俺と特別な付き合いがある女たちだけだ。

「じっとしてて」

カナンがセテラを座らせると、化粧を始めた。

肌は陶器のように綺麗だし、ファンデーションも必要ない。目を描いて、口紅をさすだけ。

「おおーこりゃ破壊力抜群だな」

化粧が終わったエルフは、まさにこの世のものとは思えない感じ。まさに人類が追い求めていた理想の姿がそこにある。

「……はあ……」

アナナスはため息を漏らすと、そのまま下を向いてしまった。どう逆立ちしたって、人間である限りこの領域には到達できないと解ってしまったからだ。

「ううむ……解ってはいたが、これは流石に……」

カナンぐらいの美人でも、唸るぐらいの破壊力だ。

「なにになに?! どうなったの!？」

エルフに鏡を見せてやる。

「へえゝ変な顔! こんな感じになるんだ!」

彼女は自分の変わった顔を面白がっている。

まったく感性が違うようだ。

「目がくつきりしたので、かなり離れていても美人が来たと解るな」
「王族などは、離れた場所で会話を交わすことが多いので、化粧は有用だと思うぞ」

「ふゝん、ずっとこのまま落ちないのお？」

どうやら、そのまま顔に張り付いたままだと思っているらしい。

「ええ? いや、寝る前には顔を洗わないと駄目だぞ」

「そうなんだあ」

「まあ、異物を肌に塗るわけだからな。身体によくはないだろう」

「そうだ。昔は白粉に鉛が使われていたようだが、中毒が多発して禁止になった」

前に、プリムラもそんなことを言っていたな。

「これも毒なのお？」

エルフが自分の顔に塗ったものを心配している。

「まあ、それは大丈夫だが、つけっぱなしはよくない」

「なるほどねえ。そうまでして自分をよく見せたいのねえ」

「そういうことになるな」

「はあ……」

さっきからアナナスがため息をついている。

「なんだ、ため息ばかりで鬱陶しい」

「だってさあ……」

いきなり美の頂点を見たので、やる気をなくしてしまったようだ。

「そんなにお洒落したいなら、アトリエに泊まったり、仕事で徹夜なんて止めたほうがいいだろ？」

「そんなの解ってますけど……」

「その分じゃ、男っ気はないんだろうな」

「ふん……男なんて死ねばいいのに……」

彼女は男が嫌いなようだ。過去になにかあったのかもしれない。

「おいおい」

「もちろん、ケンイチ様を除く。あゝ私にもケンイチ様みたいな男が現れないかなあ？」

「最初から他力本願だな。カナンに社交界でも紹介してもらったらどうだ？」

「止めておけ。社交界なんて、ろくな人間がおらん！ 成り上がるために利用するカモを探しているならともかく」

「随分と辛辣だな」

「事実だ」

カナンが吐き捨てた。

「それじゃ、貴族やら社交界を捨ててよかったのか？」

「そうだな。まったく20年近く無駄にしたぞ。私の青春を返してほしいぐらいだ」

「まあねえ。只人はすぐにしわくちゃになって死んじゃうからねえ。時間が惜しいと感じるのかもしれないねえ」

エルフから見ると、生まれてきたと思ったらあっという間に歳を食って、死んでしまうように映るらしい。

俺も子どもの頃は、時間が経過するのが長く感じた。

1年が長くて、早く大人になれないかなあ——などと考えていたものだが……。

いざ大人になってみればどうだ。

光陰矢の如し、まさに光の速度で時間が流れ始めた。

え？ もう1年たったの？ ○○が10年前って、嘘だろ？

こんな風に感じるのが日常茶飯事だ。

エルフの感覚は、こいつがさらに強烈になったものに違いない。

100年前なんて、つい最近でしょ？

こんな感じなのであろうか？

話をカナンに戻した。

「子爵には、あれから会ったか？」

「会ってはいないが、本と手紙がきた」

カナンと別れた子爵は、小説を書いているのだが、それを本にして出版している。

製本に使われているのは、マロウ商会が独占しているガリ版印刷だ。

巷でも、面白いと評判らしい。

「読んでみたか？」

「ああ、面白かった。あの人が、あのようなものを書けるとは思ってもみなかったな……」

「子爵も、カナンが服を作れるとは、思っても見なかっただろうな」

「まったく……あいそぐわぬ男女が、お互いに20年近く無駄に過ごしたわけだ。なんという時間の無駄……」

「まあ、その分取り返せばいいさ」

「そのとおりだ！」

「ああん、ケンイチ様みたいに、女の仕事に理解のある男はいないのかなあ……」

話を聞いていたアナナスがそんなことを言う。

「俺みたいな男は特殊だからな」

俺はこの世界の人間じゃない。

女性が社会進出していた元世界の常識を持っているから、理解があるだけ。

この世界に同様の考えかたが広まるには、どのぐらいの年月が必要になるか想像もつかん。

「只人ってのは、色々苦勞が多いのねえ」

エルフには、只人の浮世がまったく理解できないようだ。

——朝飯を食い終わったので、サクラに帰ることにする。

その頃になると、他のスタッフも出社してきた。

他のスタッフは、ちゃんと家に帰っているようだ。

「おはようさん。ちゃんと家に帰っている従業員もいるんだな」

「おはようございます、ケンイチ様。もちろん——うわっ！」

スタッフたちが驚く。

なにに驚いたのかといえば、化粧をしたエルフだ。

そのぐらいに破壊力がある。

「そんなに変？」

皆に驚かれているので、セテラが怪訝な顔をしている。

「いや、凄すぎてやばいんだよ」

「ちょっと離れたところからでも破壊力が……」

まあ、人間離れしているって、元々人間じゃないし。
まさにこの世にあらざる者だ。

「まあエルフ様は、さておき。皆、ちゃんと通っているんだな」

「ぷー、悪かったですねえ。男つけのない女が職場に泊まり込んで……」

アナナスがむくれているが、そこまでは言っていない。

スタッフは身ぎれいにして服も洒落ている。

こういう仕事をしているので、お洒落に敏感なのかと思ったら宣伝も兼ねているらしい。

売り物のオートクチュールにはミシンは使えないかもしれないが、そういう宣伝用の服ならミシンも利用できるかもな。

あと、試作品とかにも使えると思う。

「綺麗な服を着て街中を歩いていると、声をかけられるんですよ」

「その服はどこで買えるのか？ って聞かれるわけか……」

「そうです」

もちろん、オーダーメイドの服を買えるなんて、金持ちに限られているだろうが。

「それじゃな、カナン」

彼女を抱き寄せて、口づけをする。

「はあ、いいなあ」

アナナスが指を咥えている。

「してほしいなら、私がしてあげるけどお？」

セテラがアナナスに寄っていく。

そういえば、こいつは男より女のほうが好きだったな。

「ええ？ いや、私は……きゃあ！ ケンイチ様あ！」

「ほらほら、嫌がっているから」

「じゃあ、ケンイチとするう」

セテラがアナナスを離すと、俺に抱きついてきた。

「待て待て、人前でそういうことは止めてくれ」

「おほん！ せめて私の見えないところでやってほしいな」

カナンが玄関で腕を組んでいる。

「ほら、カナンも怒ってるし」

「じゃあ、あとでえ……」

俺はアイテムBOXから、ラ○クルを出した。

「ほら、乗って。それじゃな、カナン。無理はするんじゃないぞ？

皆も彼女を支えてやってくれ」

「「はい、ケンイチ様」」

助手席にエルフを押し込めると、俺は車を発進させた。

街の中を走り、アストラランティアの門が出る。

「ねえ」

「こら、危ない」

運転中にセテラが抱きついてくるのだ。

言うことを聞いてくれないので、相手をしてやることに。

それに、化粧をしたセテラの美しさに抗えない。

こんなことってあるのか？

「ちょっと待ってくれ、場所を探す。まさか街道の往来でやるわけにいかんだろ？」

「それでもいいけどお」

「止めてくれ。あっという間に噂が広まって、うちの女性陣の耳に

届くだろうが」

「辺境伯様なんでしょう？　女の言うことなんて、聞く必要ないじゃない」

「女のお前が、それを言うのか？」

彼女と話をしながら場所を探していると、いいことを思いついた。新しい道ではなくても、街道からサンタンカに続く古い道なら誰も通らないぞ。

サンタンカに来る連中も、サクラ経由で訪れるようになった。

古い道は、曲がりくねっていて、道の状態もあまりよろしくない。SUV車なら、それほど気にならないのだが、普通の馬車じゃ大変だ。

街道を進み、サンタンカに向かう旧道に入る。

案の定、まったく往来はない。

曲がりくねった道を進み、湖へと至る中間地点辺りで、脇に逸れた。

外に出ると、アイテムBOXから出したカモフラージュネットをかける。

「おお、これじゃわからんだろ」

「わざわざ、そんなことするのぉ？」

「エルフと違って、只人ってのは色々あるんだよ」

「まったく面倒ねえ」

そんな会話をしつつ車の椅子を倒すと、ゴニョゴニョする。

きらめく金髪と白く輝く肢体、そして森のにおいを堪能した。

色々と終わったあと、後部座席にエルフを寝かせて、俺は再び車を発進させた。

曲がりくねった道を進み、湖が見えたら右に曲がる。しばらく進むとサクラが見えてきた。

「おい、セテラついたぞ」

「うん……」

車が止まっても彼女がぐったりしたまま動かない。

仕方なく、彼女の家の近くまで行くと、お姫様抱っこで車から出す。

そのまま彼女が家代わりに使っている黒いコンテナハウスの中に入ると、ベッドに寝かせた。

部屋に入ると漂う、草のようなにおい。

中を見回しても、なにもない。

俺がやったチェストとベッド以外、閑散とした空間が広がる。

エルフの村にもなにもなかったし、元々こういう生活なのだろうが、いつもどうやって暮らしているのだろうと思ってしまうのは、俺が俗にまみれた只人だからなのか。

「それじゃなセテラ」

立ち去ろうとすると、白い手が伸びてきてつかまれた。

「もう、一回しょ？」

化粧顔のエルフに色っぽく迫られると、抗えないなにか魔力みたいなものがある。

「なにか魔法を使っているわけじゃないよな？」

「そんなの使ってないよお」

「ここじゃダメだ。その前に仕事があるし」

いや、ここじゃなくても駄目だけど。

「もう！」

こんな朝っぱらから何回もできるかっての。

まあ、できるけどな。祝福の力があるから、飯を食べれば何回でも

できるが――俺には、やることがあるのだ。

エルフの魔力を振り切って、コンテナハウスの外に出た。

あれ、男のエルフでも化粧をしたらやばいんじゃないのか。

そう考えると、男のエルフに迫られて理性を保てるか、疑問に思えてきた。

もちろん、そんな趣味はないのだが。

「うお！」

アホなことを考えながら外に出ると、アネモネと森猫たちがいた。

「どうしたの？」

「エルフがちょっと気分が悪いんだと」

「ふうん、あやしい」

「にゃー」「みゃ」

「お母さんまで、そんなことを言うのか？」

「にゃー」

「エルフは止めとけってか。まあ、忠告は聞いておくよ」

俺がベルと話していると、アネモネがなにか言いたそうにしている。

「アネモネ、どうした？」

「あのエルフ、化粧をした」

「見てたのか？」

「私も化粧をしてみたい」

彼女ぐらいの歳なら、化粧に興味を持つのも仕方ない。

ちよっと背伸びしてみたい年頃だろうし。

「うーん、そうだな。大人なら化粧の仕方を覚えたほうがいいかもしれない」

「うん」

俺はメイドを呼んだ。

「おい！ 誰かいなか？」

「ここに」

メイドの1人が物陰から出てきた。

金髪を編み込んで、細い青い目をしたメイド。

アマランサスが連れてきた、メネシアという元貴族の娘だ。

「メネシアか。仕事は慣れたかい？」

「申し訳ございません。まだ……」

「まあ、やる気があるなら、大丈夫だ」

「……」

彼女は黙ったまま、俺からの仕事を待っているようだ。

あまり世間話をするのは得意ではないらしい。

「元貴族なら、化粧はできるだろう？」

「はい、基本的なことは」

「彼女に化粧の仕方を教えてやってくれ」

「かしこまりました」

アネモネのために、化粧のセットをシャングリ・ラで買う。

3000円ぐらいだが、どんなものかいいのかまったくわからん。
説明には初心者用と書いてあるので、これでいいだろう。

これでも、この世界にある化粧品に比べればかなり上等なものだ。

「わあ！」

アネモネが化粧品のセットに目を輝かす。

やっぱり、女の子はこういうのが大好きなのか。

それを見たメネシアも、羨ましそうに見える。

まあ、メイドならそういう表情を出しちゃ駄目だと思うのだが、
そこらへんはまだ未熟なのだろう。

もう1つ同じものを購入して、メネシアに渡した。

「ほら、お前にもやる」

「あ、あの、申し訳ございません」

「いいって、君も同じものを持っていたほうが、アネモネに教えてあげるのがかどるだろう？」

「……はい」

彼女は目を閉じて、化粧のセットをぎゅっと抱きしめた。

彼女は、ここにやってきたときには着の身着のままだったようなので、自分のものをなにも持ち出せなかったはずだ。

「それじゃ、よろしく頼むよ」

「お任せください」

「アネモネ、化粧が上達したら見せてくれよな」

「うん！」

彼女が化粧のセットを掲げて、走り回っている。

「にゃー」

それを見て、ずっと黙っていたベルが俺の足下で鳴いた。

「ええ？ お母さんは無理だろう」

「にゃー」

「そんなことを言われてもね」

毛皮で化粧できるはずがない。

彼女も女性だし、そういうのに興味があるのかもしれないが。

「尻尾にリボンでもつけるかい？」

「にゃー」

「邪魔って、そりゃそうだけどさ」

さて、やることはたくさんある。

まずはユリウスを呼んで手紙を書いてもらう。

「ユリウス、アストランティアにいるゴーヤ男爵って知っているか？」

「はい、存じております」

彼は紋章官なので、王国にいる貴族のことは、ほぼ把握している。

「彼の親は、まだ存命だろうか？」

「先代のゴーヤ男爵ですね——はい」

その親に、「貴殿の息子が、私の側室に手を出して困っている。人の側室に手を出させるな」と書いて送ってもらうことにした。

こいつは、本人に送っても効き目がないだろう。

領主でもいいのだろうが、ユーパトリウム子爵領の領主代行は俺だし。

だいたい貴族なら、辺境伯領主の俺が、子爵領の領主代行をしていると知っているはずなのだが……。

ユリウスには仕事を頼んでしまったし、大工の親方は忙しそうなので、俺1人で住宅の設置を行う。

2人は、時間が空いたときにチェックしてくれるそうなので、大丈夫だろう。

街の中を歩き、テント生活をしている家族のところに行って、住宅の設置を行う。

新しく設置した家の中には、屋根のないものもある。

「屋根はないが、しばらくまってくれ。大工も忙しくて手が回らんのだ」

俺の指差す方向には、屋根の骨組みだけ乗った石造りの家が建っている。

屋根は木だったので、腐って落ちてしまったのだろう。

「領主様、承知いたしております」

乳飲み子を抱えた、若い夫婦が膝を折っている。

夫婦にシャングリ・ラで買ったブルーシートを与える。

上手いこと工夫すれば、雨露は防げるだろう。

「他の場所でも、この青い布を使っている家を見ましたので、なんとか取り付けてみたいと思います」

「頑張ってくれ。都合がつき次第、大工をよこす」

「ははっ」

テンポよく設置できればいいのだが、凸凹の地面だったら重機を出して均さないと家は置けない。

適当に置いて、あとで困ったことになったら住民が可哀想だ。

手は抜けない。

午前中、住宅設置の仕事をして、家に戻ってきた。

「ケンイチ！ 見て見て！」

うっすらと化粧をしたアネモネが、俺の下に駆けてきた。

「おお、化粧を試みたのか」

「うん」

「綺麗になったな」

「本当？！」

「ああ」

元世界でいう、ナチュラルメイクってやつだろう。

子ども——って言ったら彼女は怒るだろうが、ケバくない自然な化粧だ。

「じゃあ、毎日する」

「いやあ、なにか催し物とか行事があるときでいいんじゃないのか？」

「ん」

化粧をしている彼女を抱え上げた。

「ほら、化粧をしているとチュウができないし」

「私はできるよ！」

アネモネが俺のほっぺたにキスをした。

「あゝ！ 口紅がついただろ？」

「うん」

あたふたしていると、その様子を見てアマランサスが飛んできた。

「聖騎士様 あ！」

どこからか、平らなケースに入った紅を出すと小指で掬い、彼女の口元を真っ赤に染めた。

「アマランサス、何をする！」

「んっ！」

彼女が俺に抱きつきキスをする。

これははっきりと、口紅がついたんじゃないかね？

「こら、やめろっての！ 仕事はまだあるんだぞ」

「おおー！」

変な声が聞こえてきたと思ったら、リリースだった。

彼女もアマランサスの紅をもらおうと唇に塗り、俺に抱きついてくる。

「ちょっとまってええ！」

彼女たちを引き剥がして、アイテムBOXから出した鏡を見る。

薄いキスマークが1つに、真っ赤なキスマークが2つ。

「あゝあ」

このままでは仕事ができないので、アルコールで拭いて昼飯にした。

外にテーブルを出して食事をしているのだが、メイドたちの様子がおかしい。

みんな、そわそわしているし、目がギラついている。いつもと違う髪型にしている子もいるようだ。

「なんだ？ みんなどうした？」

アマランサスが黙って自分の紅く塗られた唇を指した。

「……ああ！」

「マイレン」

「はい！」

「あとで皆に化粧品をやるから、あまりそわそわしないように」

「申し訳ございません」

珍しく、彼女が顔を赤くして礼をした。

メネシアが化粧品のセットをもらったので、他のメイドたちも欲しいのだろう。

まさかとは思うが、メネシアがいじめられる可能性もあるので、希望者に化粧品を配ることにした。

希望者を聞いたら——結局、全員だった。

221話 洗濯

アストランティアにある、カナンのアトリエで一泊した。

なぜか邪魔なエルフも一緒だったが、カナンとセテラは仲がいいようだ。

寿命が大きく違う友人というのは、どのくらい付き合えるものなのだろうか。

それはエルフにしか解らないかもしれない。

サクラでやることが山積みなので、淡々と仕事をこなす。

まずは、アイテムBOXに入っている住宅の設置だ。

俺のアイテムBOXから家を出すだけなのだが、設置場所が水平じゃない所が多い。

そのため事前の公共事業として、作業員を使っての地ならしが行われることになった。

ユリウスの指示によって、住宅設置場所の整備が先行して行われ、敷地が確保されていれば俺1人でも設置ができる。

そのあと、大工たちが回って家屋の修理場所を調べていく。

すごく地味な作業だが、少しでも前に進まないと絶対に終わらない。

国は百年の計、千里の道も一歩からというが、1日1歩ずつでも歩いていけば、いずれは目的地に到着する。

逆にその場から動かない者は目的地に絶対に到着できない。

やるしかない——話は簡単だ。

家も増えてきたので、下水を設置する。

すでに俺の家やマロウ商会の店舗、メイドの宿舎などは、塩ビ管

を使った下水に繋がれているのだが、それに他の家もつなげるわけだ。

生活排水は石製の汚水槽に一旦貯められて、水石という石で浄化されたのち、地面に埋めた塩ビ管で湖まで行く。

サクラの地は崖から湖までゆるい傾斜がついているので、そのままで自然に流れる。

大きな都市は、大型の下水を備えている場所もあるのだが、ここで深い下水を作ってしまうと湖面のほうが高くなってしまう。

そんなわけで、ここでは浅くて細い下水が標準になる。

俺が死んで塩ビ管が手に入らなくなっても、石材のU字溝などを使えば問題ないだろう。

大型のコ〇ツさんじゃ小回りが利かないので、小型のユ〇ボを出して溝を掘り、シャングリ・ラで買った塩ビ管を埋めていく。

埋戻しはシャベルを持った作業員が行う。

工事の早さと公共事業を両立させ、彼らの仕事を作るのも領主の大切な仕事だ。

埋戻し作業にたくさん作業員が働いているのだが――その中に、なぜかミャレーとニャメナもいる。

そのせいなのか男たちに落ち着きがなく、作業がはかどっていない。

一応、ミャレーたちに注意してみた。

「おい、お前たちまで作業に加わることはないだろう」

「暇だからいいにゃ」「そうだよ、旦那」

そう言う彼女たちだが、作業員たちから不満の声が上がる。

力仕事なので、筋肉ムキムキマツチョマンの獣人の男たちが多い。

「領主様の愛人が、こんな所で働いて俺たちの仕事を奪うこたあね

えだろ？」

シャベルを肩に乗せたグレーで虎柄の男が不満を述べた。
身体がデカイので、シャベルが小さく見える。まるで玩具だ。

「なんにゃ？ ケツの穴の小さい男だにゃ」

ミヤレーの言葉に男が反応した。

「なんだとお！ それじゃ言ってやらあ！ そんな艶々な毛皮で、
いいにおいさせやがって！ 俺たちの身にもなってみやがれってん
だ！」

「そうだそうだ！」

不満を言った男に同調するやつらが増えた。

「それならウチに手を出して、首を刎ねられればいいにゃ」

「冗談じゃねえや！」

「首が切られるのが嫌なら、チ〇〇でもいいにゃ」

「ざけんなあ！」

騒ぎになりそうなので、さすがに止めることにした。

ミヤレーのやつが煽りすぎだ。

「すまん皆。矛先を収めてくれ」

「領主様、頼みますぜ。こないない女が目の前でウロウロされたん
じゃ、作業に身が入らねえ」

「そうだぜ、さっきなんて危うく勃ちそうになっちまったぜ」

まあなあ。俺も目の前で色っぽい女がウロウロしてたら、そりや
気になる。

「――というわけだ。2人共、狩りにでも行ってくれ」

「しょうがないにゃあ」「旦那の頼みじゃ仕方ねえ」

獣人の女2人は、森に狩りに行くようだ。

「俺っちも、あんない女とやりてえ！」

そう、ピカピカの毛皮を羽織ったミャレーとニャメナは、獸人たちの間では極上の女なのである。

只人にたとえるなら、化粧してドレスで着飾った女——という感じだろうか。

「くそお！ 今日の仕事が終わったら、サントンカに女を買いに行かなきゃ収まらねえ！」

「おう！」 「俺もやるぜ！ 畜生！」

獸人たちは涙を流さないが、股間にテントを張った男たちは泣いているようにも見える。

本当に事故でも起こって襲われたりしたら洒落にならん。

彼女たちにも、自重してもらわないと。

彼らが言っているのは、サントンカにある水産加工場のことだ。

その女子工員の中に身体を売って小銭を稼ぐ者がいるので、彼女たちの世話になろうと言うのだろう。

この世界では普通に行われており、需要と供給で成り立っているので止めろとも言えん。

今日稼いだ日銭を投げ出す男たちと、強かに金を稼ぎホクホク顔でダリアやアストランティアに帰っていく女たち。

そんな女たちの中には、サントンカやサクラで相手を見つけて、定住する者も出始めた。

朝夕にサクラの桟橋から船が出ており、サントンカまで往復している。

船にはカールドン製のコアモーター船外機が取り付けられて実験が始まった。

俺の船に装着していた船外機の真似をして、旅行の間にコンテナ

ハウスの中で作っていたらしい。

船に取り付けられた船外機によってゆっくりと加速、時速10 kmほどで湖面を進む。

遅いといえば遅いのだが、湖畔を歩いて通うよりはいい。

歩けば1時間かかる距離が、黙って座っていれば30分で到着するのだ。

その船で、水産加工場で使う材料などの運搬も行われ始めた。

船外機の成功に気を良くしたカールドンは、馬車にコアモーターを装着しての自動化の実験を行なっている。

板バネを使ったサスペンションを装備した車体の開発は、マロウ商会が受け持っているので、完成すれば装着されて実験が行われるだろう。

彼には頼みたいことがたくさんあるのだが、彼の身は1つだ。できることからやってもらうことにしよう。

彼のどの研究もサクラの糧になることは間違いないのだから。

そのまま塩ビ管の埋没作業は順調に進み、夕方になると男たちはサントankaまでダッシュで向かった。

あのまま飯も食わずにやるつもりだろうか。

彼らの心配をしている場合ではない。俺もやる仕事が色々と山積みになっている。

1つ1つ潰していかなければ……。

下水の工事は3日ほどかかり、全てが完了した。

普通の下水ではこんな短期間で工事を終えることはできない。

塩ビ管の接続なら溶剤を塗って差し込むだけなので、教えれば獣人たちでもできる。

鼻がいい彼らは、溶剤のにおいには泣いていたが、なんとかなっ

た。

俺が重機で掘って、獣人たちが塩ビ管を並べて埋め戻す。

チームワークはバッチリだ。

働きっぷりがいいので、チュールや甘いものでサービスをする。

彼らは酒を欲しがっているのだが、仕事中は駄目に決まっている
だろ。

すべて作業を終えて、ユ○ボをアイテムBOXに収納すると、家
に戻ってきた。

「「おかえりなさいませ、ご主人様」」

「はい、ただいま」

テーブルには素晴らしい料理が並び、俺の家族もテーブルについて
いる。

笑顔が並ぶその中に不機嫌そうな顔がいる――プリムラだ。

俺のことをまだ怒っているらしい。

埋め合わせをするつもりだったが、色々と作業が山積みになって
いたので、後回しになっていた。

時間がたてば機嫌が直るだろうと思っていたのだが、甘かったな。

食事が終わったので、プリムラを誘ってみる。

「プリムラ、上に行かないか？」

俺は崖のほうを指差した。

「……今日は、体調が優れませんので……」

その言葉を聞いたアマランサスが、俺に抱きついてきた。

「ほう！ それでは、今日は妾が聖騎士様を独り占めじゃな？！」

俺に抱きつき頬ずりをするアマランサスに、プリムラの顔が引き

つつているが、答えは翻らないらしい。

そのまま家に戻ってしまつて、取り付く島もない。
それを見たリリスも俺の所にやってきた。

「ふむ？ ケンイチ、なにかあつたのかえ？」

2人に、サントankaであつたことを話したのだが……アマランサスが反応した。

「ほほほ、青いのう。聖騎士様のように競争相手が山程おるところで、そのような駆け引きをしても、掠め取られるだけじゃ」

「母上の言うとおりじゃの」

「君たちは、どうだ？」

「ん？ ケンイチが妾と出会う前にしたことについてかえ？」

「ああ」

「そのようなことで腹を立てておつては、王侯貴族の正室なぞ務まらぬ」

リリスが笑っているが、そうなのだろうなあ。

「旅先で愛人を作つては、隠し子を箱に入るほど作る——それが男じゃからのう」

「言っておくが、隠し子はいないぞ？」

「解っておる」

「いくら遊んでも構わぬが、遊び相手に本気になり妾たちを捨てるというのであれば、怒らざるをえんわえ」

俺はアマランサスの言葉をすぐさま否定した。

「そんなことはしないよ」

「どうだかのう」

リリスは俺の言葉を疑っているようだ。

まあなあ——元世界の知り合いで、省庁に入つて出世街道まっし

ぐらだったやつが、なにもかも捨てて不倫相手と駆け落ちしたこともあったし……。

今のところ説得不可能だと解ったので、プリムラの件はなにか考えなくてはならない。

アマランサスと一緒に崖の上の離れに行く。

ベッドの上に乗ると、裸になってアマランサスが飛び込んできた。

「今日は、聖騎士様を独り占めじゃあ！」

「そんなに独り占めしたいなら、奴隷を止めて、正室でも側室でも主張すればいいだろ？」

「……」

アマランサスが黙って横を向く。

奴隷の身分で主人の命令に嫌だと言うと転げ回るので、黙っているのだ。

アマランサスが俺から離れてベッドの上に座ると――彼女が自分のアイテムBOXから出した耳と尻尾をつける。

容量が少ないのに、そんなものを入れなくてもいいだろうと思うのだが。

「別に耳と尻尾は要らないぞ？」

「なうーん」

俺の言葉を聞こえないふりをして、アマランサスが抱きついた。

このぐらいでは、奴隷紋は反応しないようである。

耳や尻尾のことより、プリムラの説得をどうするかなあ。

彼女には贈り物などよりも――やっぱり、商売になりそうなものだよな。

商売にして儲かりそうなものを考えることにした。

— — — — — ◆ ◆ — — — — —

——アマランサスと遊んだ次の日。
皆でテーブルを囲み朝飯を食う。
プリムラはいるが、朝から不機嫌な様子。
うゝん、困った。

「ケンイチ」

アネモネが俺の所にやってきた。

「ん？ なんだいアネモネ」

「抱っこ」

「はあ？」

俺が困っていると、リリスが割って入ってきた。

「アネモネ、そこは妾に譲るがよい！」

「や！」

「聖騎士様」

俺の首に抱きついてきたのはアマランサスだ。

「にゃー」

俺の足下には、ベルがやって来て黒い毛皮をスリスリしている。

「ちょっと待て、なんなんだ。どうしたんだ？」

そこに獣人たちも飛びかかってきた。

「なににゃー！ 今日、ケンイチに甘えていい日なのきゃ？！」

「旦那！ 俺も俺も！」

「ちょっと待ちなさいっての！」

その様子を見ていたプリムラが、テーブルを叩き勢いよく立つと、

スタスタと家に戻ってしまった。

「ほら！ プリムラの機嫌が余計に悪くなってしまったじゃないか」
「ふーん、私は別に構わないし」

アネモネがツンと横を向いていると、獣人たちと一緒に飯を食っていたニヤレサがやってきた。

「旦那、お嬢の機嫌を直してやってくれよ。怖くて仕方ねえ」

「今日から、プリムラが喜ぶものを作ってみるつもりだ」

「食い物とかにゃ？」 「クロ助、違うだろ？ 宝石とかだよ」

「あの娘が、果たしてそんなもので喜ぶかのう」

「アマランサスの言うとおりだな」

「ふにゃー、プリムラは意外と根に持って、面倒くさい性格してるにゃー」

「ミヤレー、それを本人の前で言うんじゃないぞ？」

彼女はニヤニヤと笑っているが、大丈夫だろうな？

ここにいる女性陣は、プリムラのことを心配していないようだ。

それもそのはず、女性情報網などを持っていても、最終的にはライバル。

脱落するなら、それでもいいと思っているのかもしれない。

真相は怖くて聞けないが……。

飯を食い終わったので、早速仕事を始める。

一応、寝ながらあれこれと脳みそを使っていたのだが、俺の出した結論は——洗濯機。

樽とコアモーターがあればすぐに作れそうであるし、魔法で洗^{クリーン}淨をできるといっても、普通の家庭じゃ魔法を頼んだりはできない。大きな屋敷でも、樽や洗濯板で洗濯しているのだから、洗濯機の需要はあるはずだ。

昔の日本でも、三種の神器なんて言われてたぐらいだしな。ちなみに三種の神器ってのは、テレビ、冷蔵庫、洗濯機だ。

テレビと冷蔵庫の再現は、ちと難しいだろうが、魔法で冷却もできるので冷蔵庫もありそうな気がするのだが見当たらない。

加熱するほうは魔法のコンロなども市販されているのだが、魔法の冷蔵庫は存在していないのだ。

魔法で加熱するより冷却するほうが難しくて、魔法陣などが大きく複雑になるため、採算が取れないらしい。

理由が採算の問題なので、作ろうと思えば作れるようであるが、断熱材などの問題があるために実用化されていないようだ。

日本でも初期の冷蔵庫は木製で、氷を入れて冷やすものだった。

この世界でも魔法で作った氷を使えるなんて、王侯貴族や金持ちだけだ。

まずは、シャングリ・ラで樽を買う――7000円だ。

樽ならこの世界でも手に入るので使えるだろう。

そして、洗濯機の肝である羽。

一応、サイトを覗いてみるが、洗濯機の羽なんて売ってない。

安い洗濯機を買って、その羽を利用する手もあるが――そのために洗濯機を買うのも馬鹿らしい。

お椀型になっていて突起がついていればいいんだろ？

たしか、そんな形だったぞ。

そうはいったものの、電子書籍で本も探してみよう。

洗濯機の歴史なんて本があれば、羽の形状も載っているはずだ。

サイトを検索すると、電子書籍で最強の家電300！ という本があったので、ポチってみる。

本を読むと洗濯槽の中にある羽も載っていたので、こいつを参考にしよう。

アイテムBOXから丸太を出すと、チェーンソーで輪切りにする。

こいつをお椀型に加工するのだが――さて、どうやったら早いかな。

ちよつと悩み、シャングリ・ラを検索すると陶芸用のろくろを買ってみた。

そいつに輪切りを固定して、ぐるぐる回しながらチェーンソーで加工すれば――それっぽい形になった。

お椀型で、4つ長い突起が羽に刻まれた。

「よし、それっぽいぞ」

形は少々いびつだが、回転するものなのでバランス取りをすれば、問題ないだろう。

なにせ試作なのだから、最初はこれでいい。

俺が何やらやり始めたので、メイドや獣人たちが覗きにきているのだが、その中にプリムラの姿がチラチラと見える。

やはり気になると見える。

そりゃ金になりそうだったら、根っからの商人の彼女が見逃すはずがない。

次に角材を加工してのコアの製作。

完成したので、アネモネを呼んでゴーレム魔法でコアモーター化してもらおう。

「アネモネ、コアモーターを作ってくれ」

「うん」

コアモーターを羽に取り付けて、樽の底に軸を取り付ければ完成だ。

試しに魔石を近づけるとくるくる回りだす。

「ケンイチ、これはなあに？」

「これは、洗濯をする魔道具だよ」

「へ」

早速、試験をするために水を入れたのだが――失敗。

羽が木製なので、浮いてきてしまうのだ。

これは、軸受けを工夫して浮かび上がらないようにしなくてはならない。

アイテムBOXから発電機と電動工具を出して加工する。

しばし悩む――。

「そうだ！」

円形の板にコアモーターと羽を取り付けて、抜けないようにする。そいつを樽の底に固定すれば、水を入れても浮かんでこない……はず。

早速、水を少々入れてみたが、大丈夫だ。

魔石を近づけると――回る。

ガタガタもしてない。

とりあえずの試作品だ。耐久試験などをして、耐久性が欲しいところは鉄などで作らなければならないだろう。

大きな問題は、木製の洗濯機の寿命がどのくらいかってことだよなあ。

それが心配の種ではあるが、この洗濯機に必要なのは樽と羽とコアモーターのみ。

そんなに高いものにはならないはずだ。

「おいしい、メイド」

「はい、なんでしょうか？」

マイレンが俺の所にやってきた。

「洗濯物はあるか？ 何枚か持ってきてくれ」

「承知いたしました」

メイドが持ってきたのは、雑巾や布巾、拭き布など。彼女たちが、日常に使っているものだ。

毎日、見えない所で、タライなどを使って洗濯しているに違いない。

できた洗濯機に洗濯物を放り込むと、シャングリ・ラで買った洗濯石鹼を入れる。

これは、この世界にある石鹼でもいいし、かまどの灰でもいい。実際に、洗濯ではかまどの灰が使われていて、灰のアルカリが油汚れを落とすのだ。

魔石を近づけると、洗濯物がぐるぐると回りだした。こいつの欠点は反転ができないことか。

「おもしろい！」

アネモネが洗濯機を覗き込むと、メイドたちも集まってきて、一緒に回る水に見入っている。

「ケンイチ様、これは？」

「これは洗濯する魔道具、洗濯機だ。こうやってぐるぐると回しているだけで、汚れ物が綺麗になる」

「それでは、回したまま放置してもよろしいってことですか？」

「そうだ。その空いた時間で他のことができるだろ？」

「「……」」

メイドたちが黙り込んでいる。

ピンと来なかったのだろうか？

「凄いですわ！ ケンイチ様！」

「本当に、放っておいて綺麗になるんですか?!」

「なるはずだぞ？ 10分ほど回してみよう」

なんだか、途端にきやあきやあ言い出した。

家事をしないアネモネはピンときていないようだが、メイドたちにはその重要性が解るのだろう。

10分たったので、洗濯機を止める。

「洗濯物は石鹸まみれなので、今度は水を捨ててすすぎをする」
水抜き穴を作っていないので、樽を倒して水を捨てる。

とりあえず試作なので、排水をそのまま流してしまっているが、これはマズいな。

ちゃんと水石の入った汚水槽に入るようにしないと。

普通の街も、生活排水は汚水槽から下水に流れるようになってい

る。
「これも見えていればいいんですか？」

「そうだな。すすぎは水を何回か入れ替えたほうがいいだろうが、それがちよつと大変かな？ こいつをガチャポンプの傍に置けば、水を簡単に入れられると思うが……」

すすぎも10分ぐらいして、取り出して絞ってみる。

この洗濯機では脱水はできない。

昔の洗濯機にあったような、ローラー式の脱水機はないだろうか？
ローラーが縦に2本並んでいて、洗濯物をそれに挟んでハンドルを回すと脱水ができるという代物だ。

シャングリ・ラを探すと――アンティークで売っていたのだが、値段が2万5千円……。

少々高いが、サンプルとして見本があったほうがいいだろう。
購入してみた。

ガチャと、ローラー式の脱水機が落ちてくる。

懐かしい。死んだ婆さんの家にこいつがあつて、ガキの頃にいろんなものを潰して遊んだもんだ。

「ケンイチ様！ それは？！」

「これは、洗濯物を絞る機械だ」

俺がローラーに洗った雑巾を挟んで、ハンドルを回すと水が押し出されていく。

「おもしろい！ 私にもやらせてください！」

「いいぞ」

メイドたちが、キャツキャウフフとローラーのハンドルを回し始めた。

「ほら、綺麗になってないか？」

俺は洗った雑巾を広げてみせた。

「わぁ！ 本当に綺麗になってます！」 「放置していれば綺麗になるなんて、まるで魔法ですねえ！」

時間的には手で洗ったほうが早いとは思うのだが、時は金なり。放置して別のことができるってのは大きい。

元世界で俺は、食洗機を使っていたのだが――確かに手で洗えば5分ぐらいで洗えるし、食洗機だと30分以上はかかる。

時間の無駄だと言う人もいるかもしれないが、放置しておけば他のことができるってのは大きいのだ。

俺の説明に、いつの間にかプリムラが近くまでやってきて、覗き込んでいた。

その後ろに、彼女のお付きのメイド――マーガレットもいる。

彼女のところまでいくと、強引に腰を抱いて洗濯機のところまでやってきた。

「どうだいプリムラ、こいつは儲かりそうじゃないか？」

「プリムラ様！ これは女なら絶対欲しいですよ！」 「そうですね！ 洗濯物を放置している間にお掃除ができるんですよ」

「ええ……」

メイドたちの間にも、プリムラは生返事をしている。

「プリムラ、ごめんよ。これで埋め合わせをしてくれよ」

「プリムラ様、お話は聞きましたよ。ケンイチ様と知り合う前の話なんですよ？」 「それで男の方を責めるなんて——ねえ？」

「別に責めてませんけど！」

プリムラがメイドたちの言葉に怒る。

「それじゃ、これは止めにするかあ」

「「「ええええええ！」」」

俺の言葉に、メイドたちが絶叫する。

「ケンイチ様あ！ せめてメイドの宿舎には取り付けてくださーい！」「お願いいたしますう！」

「誰も、コレが駄目だとは言ってますん！」

「それじゃ、やるのかい？ こいつは試作なので、商品化するなら耐久性などを調べないと」

「それは、マロウ商会でやりますから！ 早速、馬車を手配して、ダリアに運びます！」

プリムラを強引に抱き寄せて、口づけした。

「ごめんよ、プリムラ」

「……」

返事をしない彼女に、メイドたちが騒ぎ始めた。

「きゃああ！ ケンイチ様あ！ プリムラ様が駄目なら、私にしてください！」 「ずるーい！ 私にも！」 「私よ！ 私！」

「誰も、駄目とは言ってますん！」

「ははは……」

「わ、私のわがままなのですから、ケンイチが謝る必要はないのです……」

「そんなことはない。全部、俺が悪いんだ」

すべてが、俺が黙ってダリアを去ってしまったことに起因している。

彼女の気持ちにも気づいていたが、それに応えず去ってしまったのだから、俺に非がある。

——とはいえ、言い訳になってしまいが、いいところのお嬢さんには手は出せなかったんだよなあ。

スローライフしたかったし、商会に入って商売する気もなかったしね……。

「うう……」

プリムラは困った表情をしている。

色々と心の中でせめぎ合っているのだろう。

後ろにいたマーガレットが、プリムラの所にやってきた。

「お嬢様、意固地になっているとケンイチ様に嫌われますよ」

「解っています！」

「プリムラ、面倒くさすぎ〜！」

アネモネが、皆が思っていることを口に出してしまった。

「うぐっ！」

アネモネのツツコミにプリムラは言葉を詰まらせる。

顔を赤くした彼女は、そそくさとその場から立ち去ってしまった。

これで大丈夫かなあ……。

ちよっと心配である。

222話 発想の逆転

俺の女性関係で不機嫌なプリムラのために洗濯機を作ってみた。
まだわだかまりはあるようだが、彼女は早速洗濯機をマロウ商会に運んだ。

商会で研究をしながら、生産コストや需要を踏まえて、商売になるか吟味するためである。

実際に使ってみて、改善できるところはしなくてはならないし。
エネルギー源に高価な魔石を使うことも心配な点である。

そのためにも、スライムと毒の花の芋を使った魔石生産工場を作り、安価な魔石とコアモーターの普及をさせたいのだが――実現は少々先になる。

この2つは、かなり危険な代物で、外に漏れたりすれば大変なことになる。

特に毒の花は、都市が壊滅するほどの被害をもたらす。

大々的に毒の花の栽培などをすれば、近隣から非難の声が上がるだろう。

他の領が同じことをすれば、俺だって非難の声明を出す。

サクラやアストランティアが巻き込まれたら、取り返しのつかないことになるわけだし。

色々と勘案して、ひとまず魔石生産は保留だな。

洗濯機を手動式にするという手もあるが――。

メイドたちの反応をみても、放置していれば洗濯が終わっていて、その時間で他のことができる――ということが大事なのだ。

一応、洗濯機と一緒に樽の本体を回すドラム式の洗濯機のイラスト

トも持たせてみた。

この世界で洗濯機が広まるかどうかは、まだ解らない。
うちのメイドの反応を見れば、需要はあると思うのだが……。

そのメイドたちにせがまれて、追加で3台の樽洗濯機を作った。
以前なら、シャングリ・ラから電気洗濯機を買って発電機につないでいたところなのだが、領の未来を考えれば、なるべくこの世界のテクノロジーで再現できるもので運営しなければならない。

大きな木製のテーブルを置いて、そこに3台のローラー式脱水機も取り付けた。

脱水機はシャングリ・ラで購入したもののだが、ローラーをハンドルで回すだけなので、この世界でも実現可能だろう。

洗濯機は洗い場に設置した。

いつもメイドたちが洗濯をしている場所で、ここから出た排水は水石によって浄化されて下水へ流れる。

洗い場には井戸がありガチャポンプが設置されていたが、洗濯機に入れやすいように1mほど高い位置に設置し直し、塩ビ管による分水栓を設けた。

これで洗濯がはかどるだろう。

試作2号機なので、一番下に水抜き栓を追加し改良も加えた。

洗濯機の設置ついでに、周りに街灯も設置。

離と同じように丸太の台座を置いて、その上にプラ製の街灯を立てたものだ。

上部には太陽電池がついており、暗くなると自動的に光る仕組み。まあこれは売りものじゃないので、シャングリ・ラで購入したものでいいだろう。

「「ケンイチ様、ありがとうございます」」

メイドたちが揃って礼をしていると、リリスとエルフがやってきた。

2人で洗濯機を覗き込んでいる。

「これが洗濯をするカラクリかえ？」 「へえ、変なお」

「王族にも、魔法を使うエルフにも縁のない代物だろ？」

「そうなのう……これを売り出そうというのかえ？」

「こいつはコアモーターと魔石を使うからなあ。どちらも潤沢に手に入るとは言い難いし……」

「少し高価でも、王侯貴族や商人の裏方として需要があると思いますよ」

その裏方である、メイド長のマイレンが見解を示してくれた。

「大きいお屋敷では、洗濯物が大量に出ますから、毎日が格闘ですよ」

「それが少しでも楽になるとなれば、買うやつもいるか」

「はい」

「でも、実際に金を出すのはメイドや裏方じゃなくて、偉い人だからなあ」

「現場に疎い偉い人も多いからねえ」

俺の話にエルフが苦笑いしている。

「妾も、ここに来るまでは、洗濯がこんなにおおごとだとは思わなんだ」

「王族が洗濯の現場になんてやってこないし」

「うむ……じゃが、裏方を見ることも大事だと悟ったぞ」
リリスと話していると、ドワーフの親方がやってきた。

「ケンイチ様——げ！ エルフ！」

「ぎゃ！ ドワーフ！」

双方が睨み合って固まる。

「待て待て、喧嘩するなよ」

「「ふん」」

2人同時にそっぽを向いた。

「親方、用があるのかい？」

「お！ そうだ、エルフなんかどうでもいい」

ドワーフは、俺がなにか作っていると聞きつけてやってきたよう
だ。

「これが洗濯をする魔道具か……」

ドワーフが、早速使われている洗濯機を覗き込んでいる。

「下にあるコアモーターと羽で水流を起こしているんだ」

ドワーフたちにはコアモーターの説明はしているので、仕組みは
知っている。

「水流を起こす意味は？」

「洗濯のときに布をこすり合わせるだろう？ 水流を起こすことに
よって、布をすり合わせているのさ」

「ほう、理にかなってるな……」

「すぎのときも、水流ですすぎがしやすい」

「なるほどねえ」

「ドワーフたちも魔法を使えるんだから、洗濯機は必要ないだろ？」

「まあな。しかし、こいつはおもしれえ……」

ドワーフがぐるぐると回る水流を眺めている。

元世界で売っていた新しい洗濯機は、蓋を閉めないと動かないか
らな。

昔の洗濯機は、ぐるぐると回る動きが観察できた。

子どもが落ちたりとか危険だから、閉じるのがデフォルトになったのだろうけど。

そこに物陰からやってきた黒い影。

「にゃー」

俺の所にベルがやってきて、脚にスリスリとしたあと、樽の縁に前脚をかけて中を覗き込んでいる。

「あ！」

そして、ピヨンと樽の上に飛び乗った。

大きな身体が乗ると、バランスを崩して樽がひっくり返るんじゃないかとハラハラしたが、大丈夫のようだ。

ベルが前脚で、中で回る洗濯ものをチョイチョイとやってる。どうにも気になるようだ。

完成した洗濯機はメイドたちに使ってもらい、レポートを出してもらう。

それで改善、改良点があれば報告してもらうことになった。

机上であれこれ考えても仕方ない。

実地に勝るものはないのだ。

大分仕事も片付いたな。

相変わらず住宅の供給は間に合っていないが、新しい仕事を聞きつけた流れの職人たちが集まり始めている。

徐々に生産や建築も追いついていくだろう。

元世界でも、ニュータウンなどを作るときはそうだな。

知り合いの建築関係者も、日本全国を飛び回っていた。

作業が終わり夕方になると、アストランティアからヘッドライトを点けた4トトラックがやってきた。

ドアを開けて降りてきたのは、アキラだ。

一緒に乗ってきた只人や獣人の男たちが飛び降りた。

助手席側から降りてきたのは、マロウ商会の手代で、降りた男たちに荷物を運ぶように指示をだしている。

彼のアイテムBOXには、この車は入らないが、マロウ商会の輸送用に貸し出し中。

彼も運送代をもらって小遣い稼ぎをしている。

「オッス！」

「オッスオッス！ マロウ商会の荷物を運んできたのか？」

「ああ、この前は王都まで行ってきたぜ」

「燃料は大丈夫だったか？」

「もらっていた燃料も無問題、ははは。でも、少し足りなくなってきたな」

「よっしゃ、新しいのを作るか。それじゃマヨを頼む」

「オッケー！」

「オッケーにゃ！」

どこからともなく、声が聞こえる。

ミャレーだな。耳がいいので反応するようだ。

俺のアイテムBOXから出したデカイプラケースに、マヨネーズを出してもらう。

「おっしゃ、マヨパワー！」

アキラの声とともに指から黄色いニルニルが生み出されて、プラケースがいっぱいになる。

このケースは耐油製じゃないが——まあ、すぐに容器に移しかえるし。

駄目になったら買い換えればいいだろう。

ケースはどうでもいいが、いつ見てもマヨパワーは不思議だ。

なにもない所——つまり無から生み出される大量のマヨネーズ。
理屈は解らんが、出てきたのは間違いなく元世界の黄色い調味料。
さすが異世界。

まあ、俺のシャングリ・ラやアイテムBOXだって、こういう理屈かなんて解らんしな。

「分離！」

アキラの声で、マヨが分離して茶色の植物油になった。
俗にいう、サラダ油と似たようなものだろう。

こいつを俺が処理して、バイオディーゼル燃料にしているわけだ。

「にゃー！」

走ってきたのは、ミャレーだ。

「アキラ、これ少しもらっていいかにゃ？」

「いいぜ」

アキラが、ミャレーの持っている皿にマヨを少し出す。

「やったにゃ！」

彼女は、喜んで走っていった。

「食うのかな？」

「そうだろうな」

俺の問いに、アキラが短く答える。

「これ、日持ちはどうなんだ？」

「あまり長持ちはしないな——もって1週間、美味しいのは3日ぐらいだな」

「あのチューブに入っていたマヨは、偉大だったんだな」

「そうだな、ははは」

彼にも洗濯機を見せた。

「そう、これこれ。マロウ商会に持ち込まれて、あれこれやってたぜ」

「商会の反応はどうだった？」

「女は皆が欲しいって反応だったな」

「やっぱり、女性受けはいいか……」

「たまたま一緒にセンスもいたんだが、欲しがっていたしな」

「ええ？ レイランさんなら、魔法があるだろ？」

「基本、家にいるときは研究で忙しいから、そういう家事とかはしたくない人なんだよ。全部、メイドとかに任せているし」

魔法で洗濯することすら、面倒ってことなんだろうか。

「家事をやっているのがメイドなら、洗濯機はあってもいいかもな」「そうだろ？」

そのあと、アネモネの魔法によるコアモーターの改良で、反転動作が可能になった。

しばらく回ったあと、逆転するようになったのだ。

これで洗濯能力も上昇し、いよいよ洗濯機らしくなったのは間違いない。

懸案であったコアモーターの生産も、魔導師の確保でなんとかなるようだ。

生産性の低さは、ゴーレム魔法を使う魔導師が少ないことが原因だったのだが、それは今までのゴーレムの使われ方に問題があった。今までのゴーレムといえば人型で、人と同じような動きをするもの——という既成概念のせいで、難易度がかなり高かった。コアをくるくると回すだけなら、それほど難しくはない。

ゴーレムの起動には国の許可が必要でありハードルも高かったのだが、人型ではないコアモーターなら許可は不要というお墨付きももらった。

マロウ商会によれば、ハードルも下がり金になるならと、開発に協力してくれる魔導師も確保できたらしい。

あとは魔石の問題だけだが、これは今のところ解決方法がないので後回しになる。

――――◇◇――――

――洗濯機の研究が一段落したある日。

疲れたので、ベッドの上で昼寝中。

1人にしてほしいと、他の子たちも追い出して、まったりしていた。

たまにこういうときがあってもいい。

横を見ると――チェストの上に遊びで作ったコアモーターの模型がある。

模型といっても、実物と同じように魔石で動かすことが可能。

元世界のマ○チモーターみたいなもんだな。

俺はそれを手に取り、ベッドの上で眺めていて――あることを思いついた。

コアモーターは、魔石からのエネルギーを得て回転する。

そのエネルギーはどういうものかは不明だが、回転するのは確かなのだ。

その逆をしたらどうなるだろうか？

元世界のモーターは電気で動き、モーターを手で回すと電気が起きた。

つまり発電機だ。

それと同じようなことを起こせるなら、コアモーターを手で回したり、水車で回したりしたら、魔石に魔力を充填できないだろうか？

「おお！ こいつはできたら面白そうだな！」

面白そうなことを発見したら、すぐに実験だ。
俺はすぐメイドを呼んだ。

「お呼びでしょうか、ご主人様」

やって来たのは、薄い金髪を両脇で輪っかにした髪型のメイド。
特徴のある髪型の子は覚えやすい。

あるいは覚えてもらうために、特徴のある髪型にしているのか。

「空の魔石を用意してほしい。小さいやつな」

「ちょうど、空になったものがありますので、持ってきます」

「頼むよ」

空になったものは俺やアネモネが充填をしている。

特に、大型のものは普通の魔導師では充填ができないので、俺がやるしかない。

すぐにメイドが戻ってきたので、彼女から親指先ぐらいの大きさの魔石をもらった。

このぐらいあれば、ランプなどを灯すことができる。

試しに、コアモーターの模型に近づけてみる——動かない。
しっかりと空のようだ。

「あの……ケンイチ様」

「ん？ なんだ？」

「見ていただきたいものが……」

「なんだ？ いいぞ、見せてくれ」

「はい……」

そう言って、彼女がもじもじしながら自分のスカートをたくしあげた。

ほう……ふむふむ、思ったとおりだ。

いや違う——今はそんなことをしている場合ではない。

「おーい！ 誰かいなか？！」

「なんでございましょう、ご主人様」

部屋に入ってきたのはマイレンだったので、スカートを捲っていたメイドが慌てて元に戻した。

「ちょっと仕事があるんで、このメイドを連れていってくれ」

「承知いたしました」

マイレンのメガネが光る。

「ああん！ ケンイチ様」

「メイドが、ご主人さまの仕事の邪魔をするとは、なにごとですか」
メイドがずるずるとマイレンに引きずられて、部屋から出ていった。

メイドはさておき、早速実験だ。

シヤングリ・ラを開いて、材料を確保する。

まずは、実験道具を固定する板だな。

次は、12Vのモーター——こいつは2000円。

モーターの回転を制御するパーツも必要だ。

「ふむふむ——」

モーターコントロールモジュールってのは600円で売っている。こんなものまで売っているのか……。

こういうものは、昔ならナントカの製作とかいう自作系の雑誌に

しか載ってなかったのに。

雑誌の巻末に沢山の自作系のパーツの広告が載っていて、ワクワクしたもんだ。

こいつを買って、あとはモバイルバッテリーに繋がれば、モーターは動かせる。

「ご自分で作業なされば40ポンドの節約になります——ほら、簡単でしょ？」

独り言をつぶやきながら、板にコアモーターと普通の電気モーターを固定して、軸をつなげる。

軸同士をつなげる自在継手はゴムチューブを使う。とりあえず簡単でいい。

配線をつないで、モバイルバッテリーをつなぐとモーターが回り始めた。

コントロールモジュールのツマミを回すと、回転を制御可能——ばっちりだ。

電気モーターが回っているので、当然それに繋がっているコアモーターもグルグルと勢いよく回っている。

そこに、空の魔石を近づけた。

俺の予想が正しければ、これで魔石に魔力が充填される——はず。

装置を眺めていると、ドアがノックされた。

「はいよう、開いてるぞ」

入ってきたのはマイレンだった。

「申し訳ございません、ケンイチ様」

「さっきのことかい。まあ、いいよ」

「それで——私もみてもらいたいものが……」

マイレンがもじもじしているので、そのまま追い出した。

「ああん！ ケンイチ様あ！」

今はそれどころではないのだ。

10分ほど回転させたのち、装置を停止させ魔石を持ち上げた。

これで充填されていたら――俺の勝ちだ！

勝ち負けが関係あるのかって？ あるに決まっている。

電気モーターとコアモーターを切り離して、魔石を近づける……。

コアモーターが動き始めた。

「ファイヤー！ ジャストミート！」

アキラの癖が感染ったな。

「聖騎士様！？」

俺の叫び声に、あわてて飛び込んできたのはアマランスだ。

喜んでいたのもつかの間。

コアモーターはすぐに停止してしまった。

「だめか？」

離したり近づけたりしても、コアモーターは動かない。

つまり魔石が空になってしまったのだ。

だが、一瞬動いたのは間違いない。

追試を何回か繰り返した。

「聖騎士様？」

俺の傍らで、ずっとアマランスが寄り添って見ている。

「悪いな、今は構ってられない」

「構いませぬわえ」

何回やっても、一瞬だけコアモーターが動いて魔石が空になって

しまう。

「うゝむ……」

「聖騎士様——これは？」

彼女にこいつの原理を説明する。

「魔石から魔力でコアが動くよな？」

「はい」

「逆に、コアを動かすことによって、魔石に魔力を充填しようとしている」

「……え?! そのようなことができるのでございますかえ?!」

「できる——はず。実際、一瞬コアが動くのだから、充填はされている」

「それでないと、この動きは説明できないのだが、すぐに止まってしまう。」

「むむむ……」

1人で悩んでいても仕方ない。

ここはプロの意見を聞くべきだろう。

俺は、装置をアイテムBOXに押し込めると、カールドンのコンテナハウスに向かった。

俺のあとを、アマランサスがついてくる。

「おい、カールドン! いるかい!？」

コンテナハウスのドアを叩く。

サッシ窓にはカーテンがかけられて、中は窺い知れない。

このコンテナにはアルミが多数使われているのだが、彼の研究に影響はないのだろうか?

中から気配がして、ドアが開いた。

「これはケンイチ様。アマランサス様も、どうなさいました？」
顔を出したカールドンは、ゆったりとしたポンチヨのような服を着ている。

家にいるときは、こんな恰好なのだろうか？

いや、そんなことはどうでもいい。俺は、アイテムBOXから実験装置を取り出した。

「この実験装置をみてくれ。こいつをどう思う？」

俺は装置を動かしてみせると、彼が興味深そうに覗き込んでいる。とりあえず、バッテリーなどは俺にしか扱えない魔道具だと事前に説明済み。

その俺たちの様子を、ちょっと離れた場所でアマランサスがじっと見ている。

「そして、空だったはずの魔石をコアモーターに近づけると……」

「おおおっ！ これは？！」

彼もその重要性に気がついたようだ。

「ケンイチ様！ これはまさか——コアモーターを動かすことによって、逆に魔石に魔力を充填できると？！」

「そういう動きだと思っただが、すぐに止まってしまうんだ。思うに、少ししか充填できていないのかもしれない」

「むむむむ……」

彼が腕を組んで、穴があきそうなぐらいに装置を凝視している。

「解り——ました！」

「解った？」

「おそらくは——コアモーターによって充填された魔力で、すぐにコアモーターを回してしまっているのでしょう」

彼の話では、コアモーター↓魔石に充填されてすぐに、魔石↓コ

アモーターに魔力が戻ってしまっているということらしい。

「ああ、なるほどなあ。でも、充填できるのは間違いないのか」

「はい——でも、これはすぐに修正できると思います」

「修正できる？ 魔力が逆流しないようにか？」

「はい！ すぐにコアの魔法陣を修正いたしますので、1時間ほどお待ちください」

「すまん、忙しいところ」

「なにをおっしゃいます！ ケンイチ様の下に来てからというもの。毎日、どきどきわくわくが止まりませんよ！ やはり、ここに来たのは間違いではなかった。まさに天啓！」

彼が大空に向けて両手を広げた。

「それはよかったよ。俺も連れてきた甲斐があったというものだな」

「はい！ それではしばらくお待ちを！」

彼が、取り外したコアモーターを持って、コンテナハウスの中に引っ込んだ。

1時間待つしかないな。

俺もすぐに結果を試してみたいし。

コンテナハウスの前に、アイテムBOXからテーブルを出してくつろぐことにした。

「上手くいきそうなのですかえ？」

「まあな」

缶コーヒーを飲む。

アマランサスには、フルーツミックスジュースを出してやった。

「ケンイチ、何をしてるのお？」

アマランサスと一緒にまったりとしている所に、やって来たのは

エルフだ。

揺れる金髪と、細い身体で俺の前でダンスのようにフラフラ腰をくねらせている。

「ウチで使っているコアモーターの改良だ」

「ふん」

エルフが俺の膝に腰を降ろした。

「おい、ちょっと」

「待つがよい！　なぜ、当然のようにそこに座るのじゃ！」

「ええ？　奴隷にそんなこと言われたくないしい」

「ぐぬぬ……」

エルフにとって、只人の王侯貴族など、どうでもいい存在に違いない。

利用するのに便利な存在とすら思っている節がある。

「ケンイチー！」

そこにアネモネがやってきた。

「おお、アネモネ」

「む……」

アネモネが、俺の膝の上に乗っているエルフに厳しい視線を送ると、俺に手を伸ばした。

「ケンイチ、抱っこ」

「はいはい」

エルフを放り投げて、アネモネを膝の上に乗せた。

「ちょっとお！　なんでえ！　大人とか言ってるくせに、そんなちびっこみたいなことしてえ！」

「ちびっこじゃないし！」

「いい歳して、張り合うんじゃないよ」

「歳は関係ないでしょお！」

俺の言葉にエルフが激昂した。

どうやらいいい歳ってのは禁句のようだ。

「しょうがないなあ」

アネモネの頭をナデナデする。

「ふわああ」

「ずっーい！ 私にもその『ふわああ』ってやつをやってよ！」
何を言ってるんだ、このエルフは。

セテラが金髪の頭を差し出してくるので――ピコピコと動いている耳を、両手で掴んだ。

「ひゃあああ！」

突然、エルフが大声を上げてひっくり返る。

「あーどうした？」

「わかんない……」

セテラがその場で伸びてしまったので、アイテムBOXからベッドを出すとそこに寝かせた。

そのあと、ベッドでひっくり返っているエルフを見ながら、アネモネをなでたり、アマランサスをなでたりしていると――カールドンの作業が終わったらしい。

「ケンイチ様！ できました！」

カールドンが、できあがったコアを持ってコンテナハウスから飛び出してきた。

「本当か？ 早速試してみよう」

アイテムBOXから実験装置を取り出して、コアを固定してみる。

「なにになに？」

実験装置を動かして、アネモネに原理を説明する。

「そんなことできるの？」

「一応できたんだが、魔力が逆流してしまうので、コアの魔法陣を書き換えてもらった」

元世界のように、モーターと発電機、どちらでもなるわけではなく――。

モーターはモーターにしか、発電機は発電機としか、コアは使えないってことだ。

アイテムBOXから別のコアを出して、充填し終わったと思われる魔石を近づける――すると。

「動いた！ 凄い！ こんなこともできるんだ！」

回るコアにアネモネがはしゃいでいる。

「やったな、これなら止まらないぞ」

「ケンイチ様！ これは凄いですよ！ 水車や風車に取りつけければ、魔導師がいなくても魔石に充填できるのですから」

「ああ、さらに魔石の生産が可能になれば、世界が変わるな……」

「素晴らしい！ この目で、まさに世界の変革を目の当たりにできるとは！」

「これだけじゃないぞ、カールドン。まだ転移魔法や、空間拡張魔法もある」

「そのとおりです。ああ、一体どれから手をつけていいものやら……」

カールドンが、ウロウロし始めた。

研究したい事柄が多すぎて、絞りきれないのだろう。

「いや、カールドンは、あの魔法の箱に使われている空間拡張の解析を頼む」

「承知いたしました」

「転移魔法は、帝国のレイランさんに頼んでみようかと思っている」

「ほう……確かに、それはいい考えかもしれませんが」

「手柄を独り占めできなくて残念だとは思うが」

「いいえ、流石に全部は手に負えかねますので……」

とりあえず、今日行なったコアの改良を、アネモネにも教えてもらうことになった。

「アネモネ頼むぞ」

「うん、任せて」

これで簡単に魔石に魔力を充填できるようになる。

あとは魔石を生産できるようになれば……。

俺の計画では、それはカールドンの空間拡張魔法の解析の成功にかかっている。

彼に期待したい。

223話 呆れた襲撃

——洗濯機も順調に動いて、メイドの宿舎の前にはシーツなどが沢山並んでいる。

彼女たちの要望を入れて、もう少し大型の洗濯機も作った。

大きな樽と、コアモーターがあれば簡単に大型化できる。

コアモーターに取り付ける洗濯機の羽は、マロウ商会が手配してくれた職人に作ってもらった。

普段は家具などを作っている職人をスカウトしたらしい。

凝った家具などには彫刻を入れることもあるので、洗濯機の羽などはお手のものだろう。

並行して、俺が考案したコアモーターを使ったフライス盤などの加工機の開発もしている。

のこぎりやノミで羽を作るとなると道具を使いこなすための熟練の技が必要になるが、加工機械を使って分担してやれば、大工の高度な技術はなくても羽が作れる。

大量生産となれば、サンタンカの水産加工場のように女子工員なども増えるかもしれない。

女性が働く場所が少ないこの世界で、女性の社会進出のための足がかりを作るのも、重要な仕事の1つだ。

——そんなある日。

俺は崖の上にある離れで、アネモネと一緒にまどろんでいると——暗闇の中、突然メイドに起こされた。

「ケンイチ様！」

「……ん?! マイレンか? 今日は、お前の番じゃないぞ?」

「ち、違います! 賊でございます!」

「賊!?!」

俺は飛び起き、マイレンにドアを開けるように指示。

そこから黒い疾風が2つ飛び出していく——ベルとカゲだ。

アネモネはまだ目をこすっているが、俺も慌ててズボンを穿くと外へと飛び出した。

「ケンイチ様は、避難を!」

俺のあとをついてくるマイレンが叫ぶ。

「何を言っている。数々の魔物を倒した俺が逃げる道理はないだろう?」

崖に上るために設置している足場の所までやってきて、下を覗く。そこで森猫たちも様子を見ていたが、まったく緊張していない。

この感じだと、大した敵ではないのかもしれないな。

円形に燃えている沢山の松明の中に馬に乗った奴らがいて、黒いローブを羽織っているのが見える。

すっかりと囲まれてしまっているので、逃げるにも逃げられなくなっているのだろう。

集まっているのは、多分獣人たちだ。

夜間パトロールしている獣人に見つかって、耳のいい彼らが次々に集まってきたに違いない。

多分、夜に紛れるために黒い装備をしているのだろう。

俺は急いで下に降りると車を出したが、森猫たちはあとをついてこない。

完全に様子見しているようだ。

彼女たちはそれでもいいが、俺は行かなければならない。

崖から現場まで数百メートルしかないとはいえ、全力疾走したんじゃない到着したときにヘトヘトになってしまう。

ここは文明の利器を使う。

ライトを点け、エンジンを始動すると、オレンジ色の松明目掛けで走り出した。

走ると数分だが、車なら10秒ほどだ。

あっという間に、ワイワイと盛り上がる松明の下に到着。

案の定、そこに集まっていたのは獣人たちだった。

「ケンイチ！」 「旦那！ こいつら明らかに怪しいぜ！」

獣人たちの中にはミャレーとニャメナ、いつもパトロールしている3人組もいる。

獣人たちが指差した先には、黒い馬に乗った6人ほどの男たちが取り囲まれていた。

沢山の獣人に囲まれているので、馬は興奮状態になっており、制御が上手くできていない様子。

これじゃ逃げるに逃げられないだろうが、盗賊や野盗にしては馬の装備が立派すぎる。

まるで騎士だ。

「ケンイチ！？ ハマダ領領主、ケンイチ・ハマダ殿か？！」

なんだ？ こいつら——もしかして貴族か？

「そうだが！ お前らは一体何者だ！ こんな夜中になにをしにきた！」

「き、貴殿に決闘を申し込む！」

「はあ？！」

獣人たちが一斉に俺のほうを向く。

もう、勘弁してくれ。

こんな真夜中に何を言い出すんだ。

大方、逃げるに逃げられなくなったので、こんなことを言い出したのだろうが、やはり相手は貴族のようだ。

貴族に恨みとかかってたかな？

まあ、色々と利権を潰したりしているので、恨んでいるやつもいるとは思うが。

「なんじゃ、どうしたのじゃ」

そこに薄ピンク色の寝間着を着た、リリスとアマランサスがやってきた。

アマランサスはすでに細身の剣を装備しており、2人とも眠そうで不機嫌な顔をしている。

その後ろから、ユリウスもやってきた。

「リリス——こんな場所で決闘を申し込まれても、受ける義理はないよな？」

「はあ？ はあ……こんな時間に推参する無礼者に応える必要はないじゃろ。野盗として処分してしまっても、構わぬと思うおうぞえ？」
リリスは大きなため息をついて、心底呆れたように話した。

「だいたい、お前はどこのだれなんだよ」

俺の言葉に男が激昂した。

「おのれ、忘れたとは言わさぬぞ！ アストランティアの貴族、ゴヤ・ゴーヤ男爵だ！」

「ああ！ なんだ、お前か」

「知り合いかえ？」

「カナンに横恋慕しているやつがいるって言っただろ？」

「おう！ あの男かえ？ ははは、人の側室に手を出すなど、そな

たの父親に抗議の書簡を送ったはずじゃが？」

「私ではなく、父上に抗議をするなど卑劣な！」

「卑劣ってな。大方、お前らは闇討ちでもするつもりで、こんな所にやってきたんだろう？　それが逃げられなくなっただんで、決闘とか言い出したくせに、どっちが卑劣なんだ？」

俺の言葉に、囲んでいる獣人たちから嘲笑の声が漏れる。

「こ、このような下賤な獣人どもをけしかけるなど、無礼にもほどがある！」

何を言ってるんだ、こいつは……。

ここまでおかしいやつはいないだろうと思っていると――さらに斜め上に行くやつがいるのは事実だが……。

しかし、アマランサスといいカナンといい、横恋慕してくるやつが多いなあ。

それだけ美人ってことなんだろうが、まあ――俺も2人を寝取っているから人のことは言えんが。

いや、2人とも離婚後に俺の所にやってきたわけだから、決して寝取りではない。

「領主様、こいつら畳んでもいいんですかい？」

獣人たちが殺気立ち始めた。

この馬上のちんちくりんなやつらでは、獣人たちにはまったく敵うまい。

魔導師でもいれば別だが、それらしき者はいないようだ。

「まてまて――相手が無礼者だろうが、獣人が貴族に手をかけたとなると、あとで色々面倒なことになる。ここは俺に任せろ。貴族の相手は貴族だ」

獣人たちの囲いをゆるくしてもらい、スペースを開けさせると、コ○ツさんを召喚した。

地響きとともに現れた黄色い鋼鉄の重機。

「おおっ！ 領主様の召喚獣だ！」 「すごい！」

周りで見ている獣人たちが喜んでいる。

騒ぎにつられて、徐々に只人の住民たちも集まってきた。

俺は、颯爽とコ〇ツさんに乗り込みエンジンを始動させると、黒煙を噴き出し鋼鉄の身体がブルブルと震えだす。

レバーを操作して、長い腕を高く振り上げた。

「おりゃ！」

地響きと大音響を響かせて、鋼鉄のバケットが地面にめり込む。

その音に驚き、貴族たちが乗っていた馬が立ち上がり、主を振り落としてしまう。

男たちが起き上がるところをバケットで軽く弾き飛すと、ゴロゴロとまとめて転がり、そのまま動かなくなってしまった。

「ありゃ、やりすぎたかな？ おおっい、そいつらふん縛ってしまえ」

「「「おおっっ！」」」

「どさくさ紛れに、2、3発入れてもいいぞ。死なない程度にな」

「「「おおっっ！」」」

重機を収納すると、アネモネがやってきた。

「ケンイチ……」

彼女が眠たそうに目をこすっているので抱きかかえる。

「残念、アネモネが活躍する前に片付いてしまったよ」

「うん」

彼女が目をつぶっておれの首に手を回した。

獣人たちに群がられて、あっという間に貴族たちは簀巻きになっ

て並べられる。

顔はボコボコになって痛そうだが、こいつらは要人暗殺のテロリストだ。

彼らに話を聞く。

「そのゴーヤは横恋慕だって解ったが、他の連中はなんなんだ？」

「わ、私たちは……」

男たちの話を聞く。

こいつらは、アストランティアがあるユーパトリウム領の隣——ツンベルギア子爵領の貴族のようだ。

「隣の領の貴族がなんのようだ？」

「貴殿が子飼いにしているマロウ商会が売り出しているチーズのせいで、我々のチーズが売れなくなっているのだ」

「ああ、そっちに影響が出ているのか——でも、商売ってのはそういうものだろう？」

マロウ商会で作っているチーズは、子牛の胃を使ったものではない。俺がシャングリ・ラで買った、合成のレンネットを使っている。

大方、負け犬同士で意見が一致して、それなら——ということになったのだろう。

屋敷もない貧乏領なので、戦力も大したことがないと思ったに違いない。

ここを訪れている貴族も多いのに、彼らから——1国の軍隊にも匹敵する戦力を保持しているハマダ領の話を聞かなかったのだろうか？

この世界にはマスメディアは存在しておらず、巷の情報伝達もっぱらが人の噂。

昔の偉人曰く「人は信じたいものを喜んで信じるのだ」

コンテナハウスを出して、賊を放り込んだ。
ゴーヤ男爵は、ユーパトリウム領主代行の俺が処分できるが、他の領の貴族は処分できない。

ツンベルギア領に送って処分させなければ。

こいつらの処分が甘いようなら、ツンベルギアは敵ということで確定だ。

「ケンイチ、王都に直接訴える手もあるぞえ？」

お城に訴え出て、陛下からツンベルギア子爵へ、子飼いの貴族を処分するように命令してもらおうわけだ。

「いいよ面倒だ。そのまま送り返して相手の出方を見よう」

「ツンベルギアは、ユーパトリウム領を狙っていたという話を聞いたが……」

アマランサスがつぶやく。

カナンから話を聞いたに違いない。

「まあな。どう出ても敵か味方かはつきりするのはいい」
騒ぎは収まったので、コンテナハウスの警備だけ残して解散させた。

「ユリウス、明日はちよつと仕事があるぞ」

「かしこまりました」

「まったくのうー——このような愚か者が貴族におるとは……」
リリスが呆れているが、当然だ。

「どんなに愚かだろうが、親が貴族なら世襲で貴族になれるのだから、そりゃ当然だよ」

「やれやれ……」

「お城にいては、まったく解らぬことばかりじゃのう」

リスもアマランサスも、比較的視察などに出かけたほうらしいのだが、それでもこんな辺境のことまでは把握していない。

「ユリウスならおおよそ把握しているんだろ？」

「そうだとしても私に貴族の世襲に口を挟む権限はありませんし」
「ふう……明日はちよつと忙しくなるな」

俺は、暗い夜道をアネモネを抱いて崖の上の離に戻った。

——
——
——
◇◇
◇◇
——
——
——

——サクラが間抜けな賊に襲われた次の日。

朝食が終わると、アストランティアに獣人の使いが出された。

アキラを呼びに行ってもらったのだ。

1時間ほどでアキラがトラックで来てくれたので、仕事を頼む。
こいつで賊を運ぶのだ。

「オッス、ケンイチ！」

「オッスオッス！」

「なんだか、とんでもない奴らが来たんだって？」

「まあな。とんでもないつゝか、呆れたよ」

「知らんぷりして、ヌッコロしちまえばいいのに……」

「その現場に俺と家族だけなら、それも可能だったが、目撃者が多数いたからなあ」

「そうか——はは、災難だったな」

こんな馬鹿みたいなことに関わる皆が災難だ。

アキラの運転するトラックに賊を乗せて運んでもらい、助手席にはユリウスが乗る。

彼には申し訳ないが、これも仕事だ。

行き先はゴーヤ男爵の屋敷と、ツンベルギアの領主邸。

そこに賊を届けてもらう。

彼らが出発したあと、昼前には先代のゴーヤ男爵が馬車ですっ飛んできた。

俺の前に土下座したのは、金糸の刺繍が入った黒い服を着た頭の剥げた老人。

少ない白い髪の毛がプルプルと震えており、地面に這いつくばったまま固まっている。

もちろん謝罪をするためだろうが、処分はすでに伝えた。

国王陛下に任命された領主代行に男爵家の当主が弓を引いたのだから、これは国家に対する反逆である。

本来なら極刑なのであるが、処刑とかやりたくないなので、男爵家の取り潰しとだけ伝えた。

俺の言葉を聞いてがっくりと肩を落とし、帰路につく先代男爵。

彼とその家族に非があるわけではないが、現当主がやらかしてしまったのでは仕方ない。

極刑なしで一見温情に思えるかもしれない。

しかし代々平々凡々と貴族をやってきた人間が身分を剥奪されて平民になり、なにができるだろうか？

この処分を逆恨みをするようならば、今度は遠慮なく切り捨てることができる。

まあ、この噂が広まって齒向かうやつらが出てこないことを願う。

その日の夕方には、トラックに乗ったアキラとユリウスが戻ってきた。

「ユリウス、どうだった？ 向こうの反応は？」

「領主は留守ということで、抗議書簡と賊だけ置いて参りました」

「ははあ、こりゃとぼけるつもりだな。もしかしたら、向こうの領主も知っていたのかもしれない」

「かもしれませんな」

「まあ、そうなれば、ツンベルギアは敵ってことで間違いない。それなら大手を振って色々とできる」

「あまり派手なことをなさいますと……」

「もちろん、そんなことはしないさ」

派手なことはしなくても、真綿で首を絞めることはできる。

ツンベルギアに卸すマロウ商会の物資を絞るとかな。

俺が持ち込んだ元世界の農作物に関する援助も絞ろうか。

ツンベルギアの実りがいまいちなのに、隣のユーパトリウム領の農地が豊作となれば、こちらに乗り換える農民もでるかもしれない。そうなれば、アキメネスからアストランティアに移り住む者も増えるだろう。

どういう具合に嫌がらせをしてやろうかと考えてニヤニヤしていると――。

「ケンイチも意外と性格悪いにゃ」「おい、馬鹿！ クロ助！」

いつのまにかやってきたミャレーが、俺の顔を見て呆れている。そんなに悪い顔をしていたのだろうか。

「ははは、前にも言ったと思うが、お人好しって言われているけど、俺は全然お人好しじゃないからな」

「うにゃ、ウチは知ってるにゃ」

「なんだ？」

「ケンイチは面倒なのが嫌なのにゃ。お金を損しても、面倒じゃないほうをとるにゃ」

「そうそう、ミャレーは、よく解っているじゃないか」

しょうもないできごとに呆れてしまったが、これでカナンも安心できるだろう。

————◇◇————

サクラを襲ったしょうもない事件を片付けた俺は、次の仕事に取りかかった。

それは——アイテムBOXに入っている「豊穡の杖」というアイテムのチェックだ。

石灰鉱山に現れたダンジョンで討伐したボスモンスターからドロップしたもののだが、こいつの能力を確かめなくてはならない。

アキラの話では、帝国の貴族の中に同様のアイテムを持っている者がいるという。

1度使うと、その年の豊作が約束されるという——文字通りの魔法のアイテムだ。

さすがファンタジーの異世界。

俺の予想では、大気中にある窒素などを土壤に固定する機能が備わっているものと予想している。

マメ科の植物などは、根に共存している根粒菌の力を使って大気中の窒素を固定しているのだが、それと似たような機能を持っているのではないだろうか？

それなら理屈は解る。

いくら魔法のアイテムとはいえ、なにもないところから、なにかを生み出すことはできないのではないか？

「うーん」

目の前に置いた「豊穡の杖」を眺めて、俺は唸っていた。まあ唸っていても話は始まらない。

これがどういうものか確かめないことには、使いみちがないのだ。原理は不明でも闇雲に使ってみる手もあるのだが、使うことではんらかの副作用もあるかもしれないし、慎重にならなくては。

なんのデメリットもなしで豊作が約束されるとは、どうにも嘘くさい。

数年は豊作だったが、それが前借りだったらどうする？

この世界の人間なら魔法のアイテムの力を信じてしまうところだが――俺は、違う世界からやって来た科学社会の人間だ。

いったいどういう仕組みで、どういう効果があるのか――それを知らないことには気持ち悪くて使えない。

信じる者は救われるって言葉もあるが、信じる者は足を掬われるって言葉もあるしな。

俺は前にシャングリ・ラで見かけて、欲しいもののリストに入っているものを思い出した。

土壌の検査キットだ。

作物を育てる土壌に必要なものは、pH、窒素、リン酸、カリウムだ。

この4つの数値が簡易的に解るキットらしいが、今の俺にはお誂え向きだ。

正確な数値は解らなくても、土壌の様子が把握できるのは凄い。

これを使えば、豊穰の杖がどういう機能を持っているのか、確かめられるに違いない。

俺は、土壌検査キットをシャングリ・ラで購入した――6500円だ。

「ポチッとな」

30cmぐらいのダンボールがドサッと落ちてきた。

中を開けてみると、白いプラ瓶の試薬と説明書が入っている。

読んでみる——どうやら採取した土に水をいれて、試薬を塗った紙を浸すことで色が変わるらしい。

その色をチャートに照らし合わせることで、アバウトな数値が解る仕組みのようだ。

「ふむふむ」

なるほど、こいつをつかえば畑の不作の原因が解るってことか。豊穡の杖の機能を調べるだけじゃなくて、普通の畑の不作の原因も調べることもできるわけだ。

この畑には窒素が足りないとか、土壌が酸性すぎるとかが解る。窒素が足りなければ、窒素肥料や窒素を固定する植物を植えればいいし、酸性土壌ならそれを中和する石灰などを撒けばいい。こいつは使える。

「面白そうだ、早速使ってみたい！」

そう思ったのはいいが——サクラの周辺は森を開墾したばかりの土地で、腐葉土が多く肥えている。

肥沃な土地なのが解りきっているここで使っても意味がない。

——となると……サントンカか。

あの村なら開拓してから時間がたっているので、痩せている土地も多いかもしれない。

村長も知り合いであるし、畑の状況も把握しているだろう。

俺は、車を出すとサントンカに向かうことにした。

「私も行くー！」

俺の行動に飛んできたのは、アネモネだ。

「遊びに行くんじゃないぞ」

「うん」

飛んできたのはアネモネだけではない。

「ウチも行くにゃー!」 「おっと、俺をおいていくつもりか?」
獣人たちもやってきた。

「仕事だぞ? 仕事」

「解ってるよ。サンタンカに行くんだろ? あそこにも獣人がいるからな。護衛だよ、旦那」

「そうにゃ! ケンイチの変なおいに、獣人の女が集まってくるにゃ」

「変って言うなよ」

自分の腕をクンカクンカしてみる。

そんなにおいが出ているとも思えないが——ニャメナの言うとおり獣人たちが集まってくるのは確かだ。

「しょうがない」

俺は、アネモネと獣人たちをラ○クルに乗せると、サンタンカに向かうことにした。

皆を乗せて湖の畔を走ると、すぐにサンタンカに到着したので、村長の家を尋ねることに。

「これはこれは領主様。御用でございましたか」

白髪とひげの爺さんが俺を出迎えてくれた。

なんだかんだで、この村長との付き合いもクロトンのこと以来になるな。

「村長、サンタンカに不作になっている、痩せた土地はないか?」

「はあ——ございますが」

「そこに案内をしてくれ。俺の力を使えば、土地を蘇らせることができるかもしれない」

「え? そのようなことが……」

俺の突然の申し出にも、彼は訝しげな表情を浮かべている。

魔法を使うといっても、そんな魔法を聞いたことがないのだろう。帝国には豊穡の杖があったが、この王国にはないみたいだし。

「ケンイチ、凄いにゃ?! そんなことができるにゃ?!」 「マジかよ旦那!」

「本当にできるかどうかは、やってみないと解らない。それを確かめるために痩せた土地で試してみたいんだ」

「承知いたしました」

どうも村長は、俺の話を信用していないような顔だが、領主の話は聞かなくてはならない。

彼は村の隅の土地に案内してくれた。

畑らしいが、疎らな雑草だらけで作物の栽培はされていない。

本当に土地が死んでしまうと、雑草すら生えないからな。

原っぱの草を刈っても、その草が枯れて土地に還っていくので、いつまでも土地は痩せないが、農地は違う。

作物が土地の栄養を吸い上げて、それを人間が収穫してしまう。

ドンドン栄養を吸い尽くされてしまった土地は、最後はなにも生えなくなってしまう。

俗に言う、ぺんぺん草も生えなくなるってやつだな。

ぺんぺん草ってのはナズナのことで、これすら生えなくなると土地として終わる。

「よし、これならよさそうだ」

俺はアイテムBOXから土壤検査キットを出すと、容器に土を入れ精製水を投入して振る。

こうやって土壌の成分を水の中に溶け出させるのだ。

しばらく振った容器の中に、リトマス試験紙のような紙を入れて色を見る。

これでこの土壤がどんな具合なのか解るって寸法だ。

アバウトでも数値で示されるってのはいい。

どこをどう改善すればいいってのが解るってことだからな。

俺は、紙に現れた色を凝視した。

224話 探索のために

俺はサンタンカにやって来た。

オダマキでゲットしてアイテムBOXに入っていた「豊穡の杖」の能力を調べるためだ。

シャングリ・ラで買った、土壌検査キットというのをを使って調べていく。

畑の土を水に溶かして、そこにリトマス試験紙のような紙を突っ込む。

そこに現れる色を見本と照らし合わせることで、成分が把握できるわけだ。

俺は試験紙に現れた色を凝視した。

pHは酸性、窒素リン酸カリウム、全部が最低レベル。

これは間違いなく、絵に描いたような痩せた土地だ。

「うん、これは間違いなく土地が痩せてるな」

「見れば解るにゃ」「そうだよ旦那」

獣人はそう言いながらも、周囲を警戒中。

俺が、なにかやり始めたので、村人たちが集まってきている。

人が集まれば、その中には獣人の女がいるので、彼女たちはそれを警戒しているわけだ。

俺としては、そんなのは気にしていないのだが、獣人たちには気になるらしい。

「ここは、なにを植えても育たなくなってしまうた畑です。本当に

蘇るのでしょうか？」

「まあ、本当にできるかどうかはやってみないと解らん」

豊穰の杖を使うためには魔力がいるらしいのだが、俺の力がそれに使えるかどうか不明だ。

解らないから試してみるのだが、俺の力を使って魔法陣も起動させることができたし、杖も起動できるに違いはない。

俺は、アイテムBOXから豊穰の杖を取り出した。

「よし、いくぞ」

木の杖を両手で持って、荒れた土地に立てる。

これで正解かどうか解らんが、とりあえずやってみないとな。けが人に回復ヒールを使う感じで、杖の中に力を流し込む。

ドンドン力が吸われている感じがするので、間違いなく機能しているらしいが、なにも起きない。

あの転移の魔法陣と同じように、起動するまで力を注ぎ込む。

そのうち腹が減ってくるので、アイテムBOXから取り出したカロリーバーを食いながら、作業を続けた。

「ちょっと待て——まだなのか？」

そう思った瞬間、土地が広範囲に渡って光り始めた。

大氣中に溢れた青い光の粒子が、土の中に染み込んでいく。

身体の中から、なにかがごっそりと持っていかれる感覚に襲われて、俺はその場に倒れ込んだ。

「ケンイチ！」

俺にアネモネが抱きついてきた。

「ケンイチ！」 「旦那！」

獣人たちも心配そうな顔をしているが、杖が起動してなにか起きたのは間違いないようだ。

その結果を確かめたいが、フラフラでなににもできない。

とりあえず、アイテムBOXから取り出した飯を食うことにした。

「ふう——こいつはキツイぜ」

どうやら広範囲に渡って魔法を使うので、大量の魔力を消費するらしい。

こりゃ普通の魔導師では使うのは無理だろう。

もしくは、大魔導師クラスを複数用意するとか。

魔力をチャージした大型の魔石を使うとか。

へたっている場合ではない。

飯を食って復活したので、なにがどうなったのか結果を見てみない。

俺は、再び土壌検査キットを使ってみた。

結果は——。

「pHは変わらず、窒素リン酸カリウム、全部増えてるじゃないか！」

どういうことだ？

窒素は大気中の窒素を取り込んだと考えられるが、リン酸とカリウムはどこからきた？

魔法によって無から生み出されたともいうのだろうか？

頭を抱える俺だが、思えば——アキラのマヨネーズだって、なにもない指先から無限に湧いて出てくる。

それに比べたら、土壌にリン酸やカリウムが増えたことぐらいは許容範囲内か……。

なにか釈然としないものは残るが、杖の効果によって土壌が改善されたのは事実。

「村長、俺の力で土は蘇った」

「ほ、本当でございますか？」

「まあ、信じられないかもしれないが、それを確かめるためにも、ここでなにかを栽培してみてください」

「ははっ！　かしこまりました！」

まだ作物は栽培されていないが、数値的には豊穰の杖が使えることが解った。

「ケンイチ凄い！」

「凄いにゃー！」　「さすが旦那だぜ！」

領の畑で、とりあえず化学肥料を使っていたが、俺になにかあれば使えなくなる。

そのときにはどうしようかと考えていたのだが、この杖があればそれも解決しそうだな。

大量の魔力を消費するこいつを使える魔導師がいればの話だが……。

そのあと、「豊穰の杖」の研究を行い、その使いかたを模索。

以前挫折した電弧法などの併用も考えたりしたのだが、俺は難しく考えすぎていた。

発想の転換——簡単な使いかたが判明したのだ。

その方法とは——狭い土地に連続して使うこと。

広大な土地を一気に肥沃化させようとする膨大な力を消費するのだが、限られた狭い土地であればその限りではない。

たとえばケースに土を入れ、そこに力を使ってもまったく消費せず、しかも連続で使うことができる。

ケースの土にたっぷりと窒素リン酸カリウムを出現させてから、それを畑に撒けばいい。

普通の土を化学肥料化するわけで、これなら普通の魔導師にもできる。

これで俺になにかあっても、農業が行き詰まることはないだろう。その分、豊穡の杖の管理が重要になるので、注意しなくては。使いかたも極秘にしなくてはならないだろうな。

――――◇◇――――

アイテムBOXに溜まっていた住宅を吐き出したが、住宅不足はまだまだ続いている。

そりゃ、なにもない場所を開拓して、ゼロから街を作ろうというのだから仕方ない。

近場で中古住宅は漁り尽くしてしまったし、もうちょっと離れた場所の住宅も探すべきか？

少々悩むところだが、住民たちの移住は進み人口の流入は続いている。

人が増えれば、それを目当てにさらに人が集まってくる。

俺の所には、隣のツンベルギア子爵領の農民からも問い合わせが来ているのだが……。

さすがに表立って他の貴族が支配している土地から、農民を奪うことはできない。

目立たないように、1人また1人と、脱村してもらうしかないな。それでも、バレたら揉め事になるとは思うが……。

この世界で、村を抜けるのは罪ではない。

農民がいなくなるような領地経営をする貴族が悪い、という風潮が強い。

――とはいえ、他の領が絡んでいることがバレるとマズいだろう。リリースやアランサス、ユリウスを含めて対応を協議中だ。

領の経営は問題なく回り、魔法を使ったサトウキビの栽培がすでに収穫を迎えており、順調に輸出を増やしている。

従来より安い値段で砂糖が買えるとあっては、売れないはずがない。

砂糖や塩の販売は専売制になっているのだが、辺境伯の俺はその権利も有している。

つまり、いくら売ってもOKってことだ。

それにここには、サトウキビの栽培に適した水辺の土地が山程ある。

元世界の琵琶湖ぐらいある巨大な湖の畔を全部農地にできるのだ。王国の他の土地で、サトウキビに適した土地を持っているのは、この辺境伯領か——かなり規模は小さくなるが、ソバナがあるレインリリー公爵領か。

サトウキビの噂を聞きつけて、警備の目を掻い潜り何株かが領外に持ち出されたという話もある。

そりゃ是が非でも砂糖の秘密を解き明かしたいところだろうが、ここ以外でサトウキビの栽培をするのは少々難しいと思われる。

砂糖が売れば金が入ってくるわけで、その金を使ってさらなる公共事業を行う。

計画中なのはアニス川を使った運河計画だが、かなり大規模な開発になるので、実現できるかどうか不明だ。

とりあえず船は建造しているし、マロウ商会も乗り気ではあるのだが。

毒の花やスライムの養殖は保留中。

——残るは——崖の上にあるらしい魔法陣の探索と、周辺の測量だ。

崖には滝があるが、その水源がどこなのかも気になるしな。

——そんなある日の夕方。

皆と一緒に飯を食う。

食卓の上にはスープなどの他に、なぜか肉まんが乗っている。

アネモネからのリクエストで、シャングリ・ラから買ったものを出したのだが、それを食べたサンバクが、旨さに感激して同じものを作ってくれたのだ。

一流の料理人が作ったから当然というか、冷凍食品の肉まんより数段格調高い料理に仕上がっている。

格調高い肉まんってのはどうなのよ？　って思うが、美味しいのは間違いない。

その肉まんを頬張りつつ、明日からの予定を話す。

「明日から、崖の上の測量に出かけるから」

当然、数日前からユリウスや家族などには相談済み。

領主がある日突然にいなくなるとかはできないからな。

「私も行くし！」

当然、アネモネはメンバーに入っている。

うちのパーティーの大魔導師様だからな。

「行くにゃー！」「ははは、俺もだぜ！」

ちよっと離れた場所でビールを飲んでいるニヤメナもご機嫌だ。
逆に不機嫌な者もいる。

「「……」」

リリースとアマランサスだ。

「やはり、妾が護衛に……」

「アマランサス、崖の上に魔物はいないから護衛の必要はないよ」

「危険がないなら、妾が行ってもいいじゃろ？」
リリースが乗り出す。

「リリース、万が一ってこともあるし……」

「万が一があるなら、やはり妾が聖騎士さまの護衛に！」

こんな感じで、リリースとアマランサスが堂々巡りをしている。

アマランサスは確かに戦力になるので連れていってもいいのだが

——オダマキへの旅で、リリースを留守番にしまった。

今回もリリースが留守番となると、ちょっと彼女が可哀想だ。

——とはいえ、未知の探検にリリースを連れていくのはちよつとなあ……何があるか解らないし。

安全だと思っていた湖の周りの測量でさえ、結構危険があったし。

「やはり、今回は少数精鋭で行くよ」

「うん！ だってリリースを連れていっても、なにもできないし」

「うぐ！」

アネモネに痛い所を突かれて、リリースが言葉に詰まっている。

「プリムラ、しばらく留守にして、領の財務のほうに問題はないかな？」

「ええ、砂糖の輸出も順調ですし、作付面積も増えてます。水産加工品のほうも順調です」

「それはよかった」

「それに……」

彼女がなにか言おうとして、口をつぐんだ。

「それに？ なにかあるのかい？」

「崖の上なら、女がいらないから安心です……」

「最近が増やしてないじゃないか」

俺の言葉にプリムラが、プイと横を向く。

「プリムラの言うとおりじゃのう」

リリスも肉まんを頬張りながら、そんなことを言う。

「君まで、そんなことを言うのかい？」

リリスもパイと横を向いてしまった。

どうやら、測量につれていけないことが不満らしい。

「にやはは！ 強くて金持っているオスにメスが集まるのは当たり前だにゃ」 「まあなあ、獣人のメスなら間違いないで入れ食いだし。

旦那から絶対に変なおいが出てるぜ」

「そんなわけないだろう」

獣人たちは、俺の身体からフェロモンのようなものが出てると言い張る。

俺はそんなことはないと思うのだが、なぜか獣人に好かれているし、黙っていても獣人たちが寄ってくる。

「聖騎士様あ！ 妾は、そんなことを気にしませんぞえ？ 聖騎士

様が、至高の女を求めるのは当然のこと」

アマランサスが席を立つと、飯を食っている俺に抱きついてきた。

その様子に、料理人のサンバクも驚いている。

多分、王宮にいた頃の彼女とはあまりに違うからなのだろう。

「そんなこと言われても、お前たち以上の至高の女なんているのか？」

「……！ ああん！ 聖騎士様あ！」

アマランサスがベタベタしすぎて、飯が食えない。

「ウチもケンイチに抱きつくにゃー！ ウチらも気にしないにゃー！」

飯の途中なのに獣人たちも俺に抱きついてきた。

「クロ助の言うとおりだけど、獣人の女どもは別だけだな」
獣人たちのライバルは、あくまでも獣人たちのようだ。

「「ぐぬぬ……」」
リリスとプリムラはぐぬぬのままだが——なんとか皆が納得してくれたようだ。

夕飯が終わったので、崖の上の離に行く。
暗くなった崖の上に並ぶオレンジ色のLEDの光。今日はアネモネと、森猫たちが一緒だ。
黒い影が2匹、歩く度に俺に身体をスリスリしてくる。

「お母さんたちも測量に行くのかい？」
「にゃー」
当然、行くらしい。

「にゃー」
彼女も新しい領地を開拓するようだ。
いくらベルでも、俺の足場がないと崖の上には上れないからな。
先頭を歩いているアネモネは嬉しそうで、スキップをしたりして足取りも軽い。

「アネモネ、楽しそうだな」
「うん！　だって、しばらくケンイチを独り占めできるし」
「独り占めって、獣人たちやお母さんもいるんだぞ？」
「うん」
もちろん解っているとは思うが。
離に到着したので明かりを点けた。

アネモネがベッドの上に飛び乗ると、素っ裸になる。

「アネモネ、大人の女性は人前で裸になったりしないんだぞ？」

「ケンイチだからいいの！」

アイテムBOXから、彼女の寝間着を出してやる。

薄ピンク色のワンピースに着替えたアネモネが、俺の胸に飛び込んできた。

「むふー！ 明日から、ケンイチを独り占め！」

俺の胸に顔を埋めて、彼女がそんなことをつぶやく。

「そうだな」

彼女の頭をなでていると、アネモネが怒り出した。

「プリムラが、ケンイチの魔法を貴族に自慢しなければ、こんなことにならなかったのに！」

「そうだな」

「その前に、ケンイチがプリムラを追い返せばよかったのに！」

「そ、そんなのできっこないだろ？」

「ううー」

わざわざ俺を追ってきてくれたのに、追い返すなんてできないに決まっている。

俺だってそこまで非道じゃないし、彼女のことは嫌いじゃない。

——美人だし、スタイルも……ゲフンゲフン。

「ほら、むくれない」

彼女の頭をなでる。

「ふわぁ……もう！ すぐそうやってごまかそうとする！」

顔を赤くしたアネモネが怒っているが、そこが可愛い。

「うん、そうだよ。なでなで……」

「ふああああ……」

そこにベルもベッドの上に乗ってきて大きな身体を俺に擦り付けた。

「なんだ、お母さんもか」

アイテムBOXからブラシを出すと、ピカピカの黒い毛皮をなでる。

「みゃー」

ベッドの下からカゲもやってきた。

「ほい、アネモネは、カゲをブラシしてやってくれ」

「……うん」

ゴロリとベッドに横になったベルは気持ち良さそうにあくびをしている。

「よしよし……あ、そうだ」

俺は、あることを思い出して窓を開けた。

そこにあるのは、俺が設置したメイド用の小さな小屋。

中には、今日の当番のメイドが座っていた。

「ケンイチ様、なにか？」

「いや、なんでもないんだが……俺とリリースとアマランサスのおかげで、メイドはいなくてもいいぞ？」

「これが仕事ですから、そうはいきません」

「そうか」

俺は、アイテムBOXからチョコレートを出して、メイドにやった。

「それでも食べてくれ」

「……あ、ありがとうございます……」

メイドが顔を赤くしているが、差し入れをもらえとは思っていなかったのかもしれない。

「ケンイチ、私も食べる」

「寝る前に食べて、虫歯にならないかな？」

「大丈夫」

この世界の人間は歯が綺麗だ。

土壌にカルシウムが多いのかも知れないし、虫歯になるナントカ菌がないのかも……。

獣人たちは消化の方式がちょっと違うみたいだし、やっぱり別種族なんだろうと思う。

それに、魔法もあるしな。

洗浄を歯に使えば、歯磨きもいらない。

そのあと、崖の上に広がる未知の大地について語り――ベッドの上でアネモネ、森猫たちと一緒に川の字になって寝た。

――――◇◇――――

――アネモネと一緒に寝た次の日の朝。

目を覚ますと、すぐにベルがやってきて、クンカクンカしている。薄目を開けただけでも、俺が起きたって解るみたいだ。

さすが野生動物ってことなのだろうか。

俺の上では、アネモネが寝ている。

こちらは、お母さんと違ってねぼすけだ。

アネモネを腹の上からどかして、身体を起こす。

「おい、アネモネ。朝だぞ」

「……うん」

のっそりと起きたのだが、目を擦りすぐに俺に抱きついてくる。彼女の頭をなでる。

「ほら、起きて」

「うん」

返事はすれど、彼女は俺に抱きついたまま動かない。

彼女の服をアイテムBOXから出して、ベッドの上に置いた。

「……」

アネモネがくっついたまま離れないので、寝間着のまま彼女の靴を履かせ——そのまま服を持つと、彼女を抱いて離れた。

一緒にベルとカゲが出てきて、俺の足下に絡みつくので歩きにくい。

崖に上る足場に近づくと、石を叩く甲高い音が聞こえてきた。

もう石工たちがやって来て作業を始めているのだ。

「領主様、おはようございます」

「おはよう」

「今日は、お姫様も一緒にですかい？」

「ははは、まあな」

下に降りると、すでにテーブルが設置されて料理が並べられていた。

「「「おはようございます。ご主人様」」」

並んだメイドたちから、出迎えを受ける。

「おはよう」

ズラリと並んだメイドたちだが、化粧をしたりしていつもより気

合が入っている。

それを見た俺はピンと来た。

多分、昨日の夜にメイドに渡したチョコレートだな。

測量に出立する前に、マイレンにお菓子を渡してやろう。

料理人のサンバクとユリウスもいて、ちょっと離れた所で獣人たちも朝飯を食べている。

プリムラの護衛であるニャレサも一緒だ。

「ケンイチ！」

白いワンピースを着たリリスがやってきた。

「お、リリスおはよう」

「なんじゃそれは?! 妾にはそのようなことをせぬくせに」

リリスが不満を言っているのは、アネモネを抱いて連れてきたことだ。

リリスのときは、部屋に置いてきてしまうからな。

「アネモネは、まだ小さいからいいんだよ。なあ、アネモネ」

俺の言葉を聞いた彼女は、腕から飛び降りると黙って食卓についた。

やっぱり、もう起きていたのに甘えていただけだったのか。

「リリス、次から彼女は自分で起きてくるってさ」

「むう……」

リリスが食卓についた。

「聖騎士様 あゝおはようございます」

「はい、おはよう。アマランサス」

妙にアマランサスが上機嫌だが、彼女の言葉に俺は耳を疑った。

「今日から始まる探索に、妾も同行しますわえ」

「ええ？ リリス？」

「昨晚、母上と話し合って決めた。やはり、ケンイチだけで行かせるのは少々不安じゃ」

「私もいるけど……」

「朝も起きられずに、抱っこされて降りてくるお子様は黙っておるがよい」

「子どもじゃないし！」

「「ぐぬぬ……」」

2人のにらみ合いを止める。

「それじゃ、アマランサスが同行するってことでいいのかい？ そりゃ彼女は間違いなく戦力になるから頼もしいけどさ」

「そうである。母上が同行しておれば、妾も心配が減る。それに――悔しいが、妾が行ってもなにもできぬのは事実じゃし」

「そうだね」

「「ぐぬぬ……」」

またリリスとアネモネがにらみ合う。

「解った、それじゃアマランサスが一緒だな」

「聖騎士様あゝ！」

アマランサスが抱きついてきたので、アネモネが割って入ろうとしている。

「アマランサス、くっつき過ぎ！」

「ほらほら、朝食にしよう。腹が減っては冒険ができないぞ」

ベルとカゲにも猫缶をやって皆で食事を摂ると、ユリウスに確認をする。

「ユリウス、今日から留守にするが、よろしく頼む」

「お任せくださいませ」

一応、日数の予定なども打ち合わせているのだが、上の台地がどのぐらいの広さかも解っていない。

知られているのは、アストランティアやアキメネスから見られている部分だけ。

その奥がどうなっているのか、誰も知らない。

元世界なら、探検家という職業の人がいたのだが、食うのが精一杯のこの世界には無縁の存在のようだ。

「プリムラ、財務とマロウ商会のほうは？」

「問題ありません」

プリムラの後ろにはマーガレットが立っているが、俺のメイドたちと上手くやっているようだ。

サクラのメイドは領主の俺が雇い主だが、マーガレットはマロウ商会のメイド。

守備範囲が違うので、ぶつかることもないのだろう。

そのかわり、プリムラ関係の仕事は、ウチのメイドはやらなくなってしまった。

そういう取り決めになったのだろう。

「ケンイチ！ 何日ぐらいかかるにゃ？」

ちよつと離れた場所からミャレーの声が聞こえてくる。

「解らんが――川の測量をして、水源を調べるだけの予定だからな」
「それじゃ旦那、台地の上をぐるりと測量するわけじゃないんだね？」

ニヤメナの言うとおりで。

それをやったら、どのぐらいの時間がかかるか見当もつかない。

台地の広さがどのぐらいあるのかも解っていないのだ。

今回は川の周りを測量して、あの転移門がある場所を確かめる仕

事が第一。

そして水源を確認して、サクラに戻ってくるルートになる。残る者たちは心配そうな顔をしているが――。

「そんなに心配はいらないよ。何回も行ってるが、上に魔物はいないしね」

魔物どころか、普通の獲物すらいない。

ネズミや蛇の類はいるようだが、どこかに抜け道があるに違いない。

朝飯が終わったので、俺たちは出発することにした。

準備は最低限、荷物は俺のアイテムBOXの中に全部入っているのだ。

そのまま家を出ても、シャングリ・ラがあればなんとかなる。

普通なら、数ヶ月前から道具を揃えたり食料を買い込んだり準備が大変だろうが――それが、すべてアイテムBOXとシャングリ・ラで賄える。

これがチートでなくて、なんなのであろうか。

「よし！」

気合を入れる。

パーティーは、俺とアネモネ、護衛にアマランサスと獣人たち。

リリスが一緒のときは戦闘で気を使ったが、アマランサスならばその心配もない。

はっきりにって、この中で一番強いし。

たとえ魔物がいたとしても、彼女に対抗できるのは、いわゆるボスクラスであらうか。

ズラリと並ぶメイドたちが見送ってくれる。

「「「いつてらっしゃいませ、ご主人様」」」

「それじゃ出かけてくるよ」

メイドたちに、箱に詰まったお菓子をやる。

「気をつけるのじゃぞ？」 「お気をつけて」

リリースとプリムラも見送ってくれる。

「ねえねえ、どこに行くのお?!」

騒ぎを聞きつけてやってきたのは、長い耳を揺らしたエルフだ。

「ちょっと上の土地の測量に行ってくる」

「ええ？ 上って何かあるのお？」

「いや、なにもないが、辺境伯領の領地なのだから、把握しておかないと駄目だろ？」

エルフにも、転移門のことは秘密にしておいたほうがいいだろう。

「うわー、つまんなそう……」

仕事だから、つまるとまらんの問題ではないのだ。

うるさいエルフがついてこないようなので、一安心。

「ケンイチ様！」

犬人のワルターがやってきた。

「おお、ワルター。ちょっと上を調べるために出かけてくるからな」
俺は崖を指差した。

「例のあれですか？」

「それもある。誰にも話してないだろうな？」

「もちろんでございます」

「留守中、頼むぞ」

彼に犬用のチュールをやった。

「かしこまりました」

彼がそれを受け取ると嬉しそうに尻尾をパタパタと振っている。

「それじゃ出発！」

列になって崖まで行くと、俺たちは足場を上りはじめた。

225話 測量開始

俺は崖の上の測量に出発した。

自分の領地を調べる——これも領主の仕事だ。

そういう仕事でさえ、人に任せてしまふ領主もいるようだが、部下の言うことを100%信用できるのだろうか？

行ってもいない場所を行ったといって報告することもあるだろう。せめて一度は、自分の目で確かめたほうがいいと思うのだが。

大会社の社長が、現場を一度も見ないとかありえるだろうか？

——いや、あるかもしれないな。

たとえそうだとしても、俺は見ておきたいので現場に出かけるわけだ。

パーティを組んで足場を登り始めた俺たちを、石工たちが不思議そうな顔で見ている。

「領主様、どうしたんですかい？」

「この台地の上を測量するんだよ。領主の仕事さ」

「ええ？　ここをですかい？」

「ああ、今まで誰もしたことがなかったんだろう？」

「そりゃそうですけど……なにもない所を調べてもなあ……」 「そうだなあ」

石工たちが顔を見合わせている。

なにもないと——誰かが調べたのだろうか？

いや、誰も調べたことがないのに、なにもないと決めつけて誰もなにもしないのだ。

「まあ、領主の仕事なんだな」

「領主様ってのは大変でございますねえ……」

ここで切り出されている石は、サクラに建築されている住宅の基礎などに使われている。

建築中の俺の屋敷にも使われているが、一体いつになったら完成するのか、まったく不明だ。

とりあえず俺の住む所より、住民の住宅のほうが先だからな。

俺たちの生活は、いつもの家とコンテナハウスがあれば困っていないし。

いや、困ってないと思っているのは、俺だけなのかもしれないが……。

さり気なく聞いたりしても、女性陣が不満を漏らしたことはない。なにせ、ゼロから領地を開拓しているのだ。

多少の苦労はするし、贅沢もできないぞ——と最初に言っているし。

歩いていつも寝ている離を通り過ぎると、浅い森に到達した。

台地の上にも木は生えているのだが、腐葉土が少ないために大木になれずに低木のままの森がずっと広がっている。

いったい、どこまで広がっているか不明。

あの転移門があった場所も森の中だったが、ずっとこのような景色が続いているのだろう。

森の中は暗いので、あまり草が生えておらず車で走行できる。

ちよっと木の間隔が狭い場所などもありそうだが、回り道をしたければクリアできるだろう。

どうしても進めない場所は木を切ってもいい。

車で走りやすそうだが、ドワーフの住んでいる洞窟のように穴が空いている場所もあるかもしれないから注意しなければ。

俺は、アイテムBOXから方位磁石を出して、方角を確認した。

とりあえず、目指すのは滝壺に流れ込んでいる川。

「方角は――北のはず」

俺たちは車に乗り込むと北に向かい、川を目指すことにした。

アイテムBOXから車を出して皆で乗り込む。

その川はこの台地の上を流れており、崖に到着するとサクラの象徴となっている滝に姿を変える。

川の水源も気になるが、流れの近くにオダマキに繋がる転移門がある。

転移門から飛ばしたドローンに川が映っていたからな。

まずは川を測量しながら、あの転移門を探す。

それが第一目標だ。

俺のパーティーは、アネモネとアマランサス、そして獣人の2人と森猫たち。

少数精鋭だ。

一緒に来たがっていたリリースには可哀想だが、未開の土地の探索なんてのは危険だしなあ。

この上には魔物はいないのは解っているが、それでもなにがあるか解らんのが冒険ってやつだ。

魔物はいないが、空を飛べる敵なら襲ってくる可能性があるし。

川に到着したので、早速測量を始める。

森猫たちは、周囲をパトロールしながらついてきているようだ。

彼らなら、数十kmぐらいは行動範囲に入ってしまう。

今回の測量も湖の外周と同じように、方位磁石とレーザー距離計を使った簡易的なものだ。

以前は獣人たちに板を付けた棒を持って走ってもらい、そこまでの方位と距離を測定していたが、今回使っているのは、オレンジ色

のカラーコーン。

軽いので重ねて沢山持っても、獣人たちなら5〜10個持つても平気。

それを適当な場所に置いてもらい、レーザー距離計を覗く。

本当は、この台地の外周の測量もしたいのだが、何日かかるか解らんし今回は川だけにするつもり。

距離を測ると図面に書き込み、車に乗ると移動を繰り返す。

水際は木が生えておらず走りやすいが、ドワーフのいた洞窟のよ
うに、台地の上まで穴が貫通している場所もある。

車に乗っていても、台地の上から洞窟の中まで落っこちたら、ただでは済まないだろう。

気をつけねば……。

川を見ていると気になる。

普通の川はどんどん浸食によって流れが変化していくのだが、この川はどうなのだろうか？

アイテムBOXからシャベルを取り出し――川の底を調べると、固い岩盤の上に作られた水路に近いことが解る。

これは人工的に作られたものだろうか？

ここにあった転移門は明らかに人によって作られたのは間違いないだろう。

――ということは、ここには人がいたということになる。

それを作った連中が、岩盤を削って水路を整備したのだろうか？
これらを作った奴らの正体を考えつつ距離計を覗くと、レンズの向こうでミャレーが手を振っている。

対するニャメナは半裸になって尻尾をフリフリ腰をクネクネ、色っぽいポーズを決めている。

「あ……」

彼女の後ろからカゲが近づいてきているのだが、まったく気がついていない。

揺れる尻尾にじゃれつかれて、ニャメナが飛び上がった——油断大敵である。

彼女の恥ずかしい恰好を見ながら、地図に数値を書き込む。

「聖騎士様、それはなにを覗いておられるのかえ？」

「獣人たちまでの距離を測っているんだよ」

アマランサスに距離計を渡して覗かせる。

「む？ 遠くが近くに見える——この変な模様は？」

「それは俺が使っている数字だ」

「これが？」

「私にも見せて！」

アネモネが距離計を受け取ると覗き込む。

「距離は——400メートル！ アマランサスに解りやすく言うとなんぞ1／4リーグだよ」

「アネモネは、それが解るのかえ？」

「うん！ ケンイチから習ったし」

俺が教えたというか、アネモネが元世界の本を読んで覚えてしまったのだが。

「なんと！ 聖騎士様！ 妾にもその言葉を教えてたもれ！」

「ええ？ なんで？」

「聖騎士様が使っている言葉なら、妾も覚えねば」

「そんなことはないと思うがなあ——そうだ、アネモネがアマランサスに教えてあげればいい」

「うん、いいよ」

「それでは師匠。お願いいたしますぞえ？」

「師匠ってなあ」

「言語の師匠なのでですから、師匠ですわえ」

「まっかつせつなっさっい！」

あ、これはアキラの真似だ。

もう、すぐに真似るんだから。シモネッタまで真似たらどうしよう。

計測が終わったので、車に乗り込んで獣人たちがいた場所に行く。そこには印として三角コーンが置いてあるので回収する。

「聖騎士様、それは？」

「これはタダの印さ。軽くて持ち運び便利」
たまにドローンを飛ばして周囲を調べる。

あの転移門があった場所は、ニヤメナによるとアキメネスの近くだというから少なくとも50～60kmは先になるだろう。

1日20kmほど測量をしても、3日はかかる。

薄い森の中を走り、測量を続け昼になった。

一旦作業を中止して昼飯にする。

「旦那、これで唐揚げを作ってくれよ！」

ニヤメナが、処理をして肉になった鳥を持ってきた。

測量の間、暇なので狩りをしていたらしい。

まあ、立っているだけだし、ダンスも飽きるだろう。

魔物はいないが鳥は沢山いるようで、獲物には困らないようだ。
ここには天敵があまりいないからな。

「おお、いいぞ」

アイテムBOXからテーブルとコンロなどの道具を取り出すと、

大鍋に油を注ぐ。

この油は、アキラのマヨから作ったもので、品質的には無問題。彼の指から出るマヨネーズも問題ないのだから、それから分離した油が大丈夫なものも道理ってやつだ。

どうせ最終的には処理をしてバイオディーゼル燃料にしてしまうのだから、揚げ物に使ったほうがリサイクルになる。

元世界じゃ、天ぷら屋から出た廃油などを加工して、バイオディーゼル燃料にしていたようだし。

じゅうじゅうと唐揚げの揚がる音が響き、香ばしいにおいが辺りに漂う。

「おら、揚がったのから、どんどん食べ！」

余ったらアイテムBOXに入ればいいのだから、作りすぎて困ることはない。

「やったにゃ！」「ヒャッハウ、食い放題だぜ！」

「ケンイチの作る料理が一番好き！」

「うちもにゃ！」

サクラにいと俺とテーブルが分けられているのだが、旅に出れば皆が一緒に飯が食える。

「せっかく作ってくれているのに、サンバクの前で言うんじゃないぞ？」

「ほほほ、王宮料理人も形無しじゃな」

俺は米が食いたいので、冷凍食品のおにぎりを取り出した。

米の飯を咀嚼しながら、俺はあることを思いつく——そうだ、湖の畔で米を作るのも面白いかもしれない。

まあ、俺が食うだけなら、シャングリ・ラで買ったほうが早いのだが……。

「にゃー」「みゃ」

ベルとカゲにも焼いた鶏肉と猫缶をあげた。

おにぎりを食いながら、のどかな風景の中で緑を堪能する。
森の中にはマイナスイオンがくとかいう話もあったのだが、ほんまかいな？

俺が元世界で住んでいた場所は、山の中の限界集落。

それならマイナスイオンで溢れていたはずだが、老人の病人だらけだったような気がするし、健康な者が多かった印象もない。

飯も食い終わったので、再び測量を始める。

こんな長閑な場所で、トラブルがあるのかね？

——そんな呑気なことを考えていると、車で移動中にトラブルが起こった。

川沿いを走っていたのだが、際に木が立っていたので大きく迂回。
そのときに、ハンドルを取られた。

「うお！」

「にゃー！」

いきなり車が大きく揺れて、車体後部が沈み込む。

慌ててデフロックしたが、脱出不可能。

徐々に地面が俺の目線に近づいてくる。

「ケンイチ！」

後ろからアネモネが叫ぶ。

「アマランサス！ 窓から外に出られないか？」

俺が手元のスイッチで全席の窓を開けると、ベルたちが素早く脱出。

すでに車体は地面の下に落ち込んでいるのでドアは開かない。

車体は尻から落ち込んでいるので、地面に一番近いのは運転席の窓だ。

「任せてたもれ！」

椅子を後ろにスライドさせると、アマランサスが俺の膝の上を仰向けに通って、窓から懸垂のように這い出た。

「さすが！ 次はアネモネだ」

彼女の手を掴むと、窓の外に送り出す。

外にいるアマランサスが彼女の手を握ると一本釣り。

最後は俺だ。

アマランサスは、男の俺も軽々と地面の上へと引っ張り上げてくれた。

女性に助けられるなんて少々恰好が悪いが、そんなことを言っている場合ではない。

ズリズリと穴の中に落ちていく車をアイテムBOXに入れる。

「収納！」

そして、穴の開いていない場所に再び出した。

土だらけ、傷だらけになったラ○クルがバウンドして落ちてくる。

「うわちゃー！ まあ、しゃーない。使えば傷がつく道理」

こんな場所で冒険に使って無傷で済むと考えるほうが甘い。

いや、こういう車は、こういう場所で使うために作られたものだ。

こんな姿になるのは、本望だと言えるのではあるまいか。

そう考えると、この傷だらけの車体が、歴戦の老戦士のように見えてくるから不思議だ。

「ケンイチ！ どうしたにゃ」「旦那！」

俺たちの異変に気がついた獣人たちが、離れた場所から駆けつけ

てくれた。

800mほど離れていても、彼女たちの足なら40秒ほどだ。

「召喚獣が、穴に落ちてしまっただけ」

「そいつは鉄で重たいからねえ」「下まで落ちなくてよかったにや」
こんな大穴が開いてしまっただけで、水が溜まらないだろうか？

それとも、ドワーフたちが住んでいる洞窟みたいに外に通じていたら、水の流れが変わってしまうな。

「にやー」

ベルがやってきて、俺の足にスリスリをしている。

「まあ、こんなこともあるさ」

昔の戦車で、塹壕に落ちないように鋼鉄製の尻尾をつけたものがあつたが、そういう風にすれば車体が全部落ちるのは防げるかもな。大規模に陥没したら、その対策をしてもマズいだろうが……まあ、ビビっていても仕方ない。

領主の務めとして前に進むしかない。

「アネモネ、怖いならミャレーたちと一緒にいてもいいぞ？」

彼女たちに背負ってもらえば、車よりも穴に落ちる確率が低いはず。

「なんで私にだけ聞くの？ アマランサスだっているのに」

「アマランサスが、こんなのでビビると思えんし」

「ほほほ、そうじゃの」

「私だって、大丈夫だし！」

「本当か？」

「本当！」

アネモネが大丈夫だと言うので、そのまま傷だらけの車に乗り込

むと出発した。

その後は問題もなく、穴に落ちることもなかった。暗くなったのでキャンプを張り、いつものコンテナハウスを出す。皆に薪を集めてもらい、地面で焚き火をする。

薪が湿っていても、アネモネの魔法で乾燥させてもらえば、すぐにカラカラになるし問題はない。

暗くなった中、森の中にオレンジ色の光が灯る。

昼間はコンロを使ったが、夕飯の料理は焚き火でやってみた。

適当な岩や石がないので、アイテムBOXの中にあったコンクリブロックを使ってかまどを作る。

おお、これぞスローライフって感じでいいね。

貴族にもなったのに、スローライフもクソもないような気がするが、別に偉ぶるつもりもないし、生活を変えるつもりもない。

夕飯のメニューはカレー。

またかよとは思うが、皆がそれでいいと言うのでは、俺も反対するつもりもない。

昼に作った唐揚げが沢山あるので、唐揚げカレーになった。

ベルたちにも衣を剥がした唐揚げと猫缶をやる。

「うみゃー！ うみゃーで！」 「ははは！ 旦那のカレーは最高だぜ！」

ニヤメナとアマランスはビールを飲んでいる。

唐揚げにビールは合うと思うが、カレーはどうなのか。

「ケンイチ、これって何日ぐらいかかるにゃ？」

ミヤレーが言っているのは測量のことだ。

「さあな。川の測量だけだから、1ヶ月はかからんと思うが……」

正直、この台地がどのぐらいの大きさがあるのか解らんし。

近くから見れば崖しか見えないし、全体像を見たくて遠く離れた崖は見えなくなる。

惑星は丸いので、水平線に隠れてしまうのだ。

近くにあるのに調べた者も測った者もない——それがこの台地だ。

階段などを作って、皆に利用したりする手もあると思うのだが、アストランティアがあるユーパトリウム子爵領を調べても、そんな記録はどこにもない。

おそらく隣のツンベルギア子爵領でも同じだろう。

「それじゃ、1ヶ月は旦那の料理をたらふく食えるってわけか」

「そうだにゃ！ にゃはは！ ケンイチの愛人の特権にゃ！」

本当は彼女たちに、仕事の報酬などを渡さなければならぬのだが、こういう料理を食べさせることによって相殺させてもらっている。

彼女たちがそれでいいと言うので、そうさせてもらっているわけだ。

どのみち食事の用意はしなければならぬので、それでOKなら俺もありがたいしな。

アネモネがカレーの皿を持って、俺の膝の上に乗ってくる。

「むふー」

「アネモネ、なぜ当然のように聖騎士様の膝に座るのじゃ？」

「私の場所ー！」

「妾も座りたいのじゃが？」

「やー」

「喧嘩しないで、順番に座りなよ」

飯を食い終わったので、コンテナハウスに皆で入ると明かりを点

けた。

大きなダブルベッドを2つ並べる。

初日なので、皆で一緒に寝ることにしたのだ。

ベッドの上で裸になっているニヤメナにブラシをかけてやる。

うつ伏せになっている背中にブラシが這うと、尻尾が俺の腕に巻き付いてくる。

「なーん→」

「トラ公、その声は止めるにやああ！」

彼女の声に反応して、ミヤレーの尻尾が太くなっている。

「にゃー」

ベルがベッドに乗ってくると、俺の背中にスリスリ。

「アネモネ、ベルとカゲにブラシをかけてやってくれ」

「うん、いいよ」

アイテムBOXから、ブラシを2つ取り出す。

獣人たちと、森猫のブラシは個別になっている。

においが混じると嫌だと思うので分けてみた。

彼らは、特ににおいに敏感だし。

「ケンイチ！ 駄目だにゃ！　トラ公にそういう触り方したら……」

「んーんにゃあ……」

ニヤメナの尻がプルプルと震えだす。

「ぎゃああああ！　トラ公がまた小便漏らしたにゃ！」

ミヤレーが大騒ぎするので、アネモネの魔法で綺麗にしよう。

「うにゃああ」

今度はミヤレーのブラシかけだ。

「天国にやあああ、こんな気持ちいいの絶対に他の女には渡さないにやあ」

ブラシを掛け終わったあと、ミヤレーをひっくり返して彼女の腹に顔を埋める。

「ほわええ、柔けえええ。フワフワじゃん」

「私もやるー！」

森猫たちのブラシを掛け終わったアネモネもやってきて、ミヤレーの腹に顔を埋めた。

「にやはははは！ ケンイチ、アネモネ、くすぐったいにやはははは！」

ミヤレーは、ニヤメナのように、ビクンビクンとはならないようだ。

「今日は、このまま一緒に寝るか」

「うん」

俺の背中に、ニヤメナがやってきて毛皮を擦り付ける。

「旦那は、俺のほうでもいいぜえ」

「そうか」

彼女をひっくり返して、腹に顔を埋めた。

「クンカクンカ、香ばしいいい匂い」

「ああ、旦那……」

「ケンイチ、またトラ公が小便漏らすにや」

「大丈夫だ」

このまま、本番に雪崩込みたいところだが、アネモネがいるのにそんなことはできない。

アマランサスのほうをチラ見する。

「アマランサス、そんなにむくれるな。明日は君の日にするから」
「承知しましたわえ……」

その夜は獣人たちの毛皮に包まって寝た。

— — — — — ◆ ◆ — — — — —

——測量を始めた次の日の朝。

キャンプでの定番の朝飯である、グラノーラを皆で食う。

こいつも人気の食事なのだが、飽きられている節はない。

まあ簡単なので、俺も楽でいいのだが。

リリースがいると追加でゆで卵やらを作らないと全然足りないのだが、このメンバーなら大丈夫だ。

足りない人には、シャングリ・ラで買った菓子パンをやる。

「甘くて美味いにゃー！」

ベルたちにも猫缶をあげた。

「お母さん、周囲はどうだ？」

「にゃー」

「やはり、なにもないか……人工的な建造物などは？」

「にゃー」

なにもないらしい。

飯を食い終わったので皆で出発。

測量しながらそのまま進み、2日目の昼。

昼飯を食っている俺の所にベルがやってきた。

「にゃー」

「なに？ 見つけた？」

「にゃ」

オダマキと繋がっている魔法陣の場所を見つけたらしい。

「よし！ 飯を食ったら案内してくれ」

「にゃー」

飯を食い終わると、測量作業は一旦中断。

皆で車に乗り込むと――ベルに案内してもらい、魔法陣がある建物に案内してもらう。

「なるほどなあ。サクラから約30リーグ（50km）か。ニャメナの見立て通りだな」

「やったぜ！」 「多分、まぐれだにゃ」

「そんなことはないだろ。山の形が一緒だと、ちゃんとした証拠も示していたしな」

「どうでえ、クロ助」 「ぐぬぬにゃ」

意外と近く、5分ほどで到着。

距離は、俺たちがいた場所から2kmぐらいか。

少々斜めに走ってきたようなので、川に一番近い場所なら、1kmぐらいしか離れていないのではないだろうか。

「おおーまさしくこれだ！」

1階が開いた、石造りのとんがり帽子のような建物。

「うにゃー！」 「おおっ！ やったぜ！」

中に入ると魔法陣が描かれている。

「ここにあったのかあ」

辺りをグルグルと見回す。

周囲は開けていて、大きな木などは生えていない。

なにかそういう魔法でもかかっているのだろうか？

たとえば、土の栄養を丸ごと抜き取る魔法などがあれば、ぺんぺん草も生えなくなるだろう。

豊穰の杖で栄養が得られるなら、その逆の魔法があってもおかしくはない。

サクラから50kmの場所。

測量しながら進んだので2日半かかってしまったが、道を整備すれば1時間で到着できるだろう。

到着して魔法陣を使えば、1000km近い道のりをひとつ飛びこりゃ、かなり便利になる。

オダマキが隣町だ。

アイテムBOXから出したドローンを飛ばして、川の方角を確かめる。

今日は、このまま川までの道の整備をしよう。

アネモネに協力してもらい、腐葉土のゴーレムを出してもらおう。

表面を覆っている薄い腐葉土を魔法で集めちゃうと、下は固い岩盤。

腐葉土の厚みは数十センチしかない。

これじゃ、大木は育たないわけだ。

根も浅いので、アネモネのゴーレムが押しただけで、すぐに倒れてしまう。

「コ○ツさん召喚！」

倒した木はコ○ツさんでぶつ切りにして、アイテムBOXに収納した。

夕方になるまでに、川から遺跡までの道が完成した。

川辺には解りやすいように、看板を立てておく。

こんな場所までやってくるやつもないだろう。

それに崖の上に上るためには、俺が作った足場を上る必要がある。怪しいやつがいればすぐに解るし、ここまでの移動は徒歩しかない。

馬を崖の上に上げられるとは思えんしな。

「ふう、こんなもんか……」

俺が額の汗を拭っていると、ミヤレーがなにかを持って走ってきた。

「ケンイチ、魚にゃ！」

「魚？　ここにいるのか？」

ミヤレーの手を見れば、虹色のマスが握られていた。

身体は少々小さいが、湖にいる種類と同じものらしい。

下から滝を上ってきたのだろうか？

そういう話も聞いたことがあるが、さすがにあの滝は上れないと思う。

鳥に食われた魚の卵が消化されずに出てきて、そこで孵る——なんて話も聞いたことがあるが……。

「うーん」

まあ、こんなことで悩んでいても仕方ない。

いるものは、いるのだ。

ミヤレーたちは、独自に焼き魚のカレー風味を作るらしい。

それじゃ、俺たちはなにか別のものを食うか……。

メニューを考えると、獣人たちと森猫たちが耳をくるくる回している。

「どうした？」

「鉄の召喚獣の音にゃ」

「ええ？」

しばらくすると、川辺を白いプ○ドがやってきた。
運転しているのは――アキラしかない。

「ケンイチ！」

こんな所までやってきたのか。

俺は窓から手を出して手を振るアキラを見て、心の中で苦笑いをした。

226話 湖？

サクラの隣にある台地の上を測量中。

台地の外周も把握したいが、どのくらい広いのか見当もつかない。とりあえず、サクラに流れ込んでいる川の測量をすることにした。この川の近くには例の転移門もあり、それも発見することができた。

サクラから約50kmほど離れているが、道が整備されれば1時間ほどで転移門までやってこられる。

車をアイテムBOXにいれて転移門でオダマキまで飛べば、約1000kmが一瞬。

海辺のオダマキが隣町だ。

こんなの元世界にだってなかった。

魔法の世界恐るべし。

川から転移門までの簡単な道を整備して、夕飯の準備をしていると車の音。

やって来たのはアキラだった。

こんな所までやってきたらしい。

「ケンイチ！」

アキラが車の窓から顔を出して手を振っている。

「アキラ、こんな所までやってきたのか」

車を停めると、彼が降りてきた。

「酷いじゃねえか。面白そうなのに俺をおいていくなんて」

「測量だぞ？ 全然面白くねえよ。超地味な作業だが、例の転移門は見つけた」

俺は、転移門に続く道を指差した。

「マジか。やっぱりここにあっただな？！」

「そうだ」

「ちょっと見てきていいか？」

「いいぞ。その間、俺たちは飯の用意をしておく」

「やったラッキー！ ちょうど腹が減ってたんだよ」

彼は、サクラで晩飯を食おうと思っていたに違いない。

俺がいないサクラじゃ、飯を食わせてくれとは言いつらいだろうしな。

アキラが車に乗るとヘッドライトを点灯させ、作ったばかりの道を転移門に向けて走り出した。

車ならあっという間に行って帰ってこれるだろう。

「忙しないのう……」

アキラの行動にアマランサスが呆れている。

「まあ、アキラはああいうやつだし」

それはいいとしてなにを食うか――。

いつもカレーとか言っていた獣人たちは、自分たちが獲った魚でカレー風味焼き魚を食べるらしい。

この川には驚いたことにマスがいる。

湖にいるマスと同じ種類だ。あの高さ10mほどある滝を登ってくるのだろうか？

いや、俺の地元の溪流でも、高さ2〜3mの滝があるとそこから先には魚がいないとか言われていた。

それじゃ10mの滝はやっぱ無理か。

俺はシャングリ・ラの冷凍食品コーナーを眺めて、チャーハンと餃子にすることにした。

うーん、そうだな——4人だから6人前作るか。

余ったらアイテムBOXに入れればいいし。

「ぼちっとな」

ドサドサと食品のパッケージが落ちてきたので、アイテムBOXから調理器具を出して、地面で調理を行う。

こいつが、キャンプの醍醐味ってやつだ。

チャーハンは大きな鍋に入れて、アネモネの魔法で加熱してもらう。

「いつもすまないねえ」

「それは言わない約束だにゃー！」

「なんで、ミャレーが答えるんだよ」

「にゃはは！」

餃子は魔法で解凍してもらったあとに、フライパンで焼き目をつけるか——あとはスープだな。

中華なのでインスタントの中華スープをアイテムBOXから出した。

コンロを加熱して温めてもらった餃子を、油を引いたフライパンに投入。

蓋をして、しばし待つ。

「いいにおい！ おいしそう！」

アネモネがクンカクンカして、餃子の焼ける香ばしいにおいを吸い込んでいる。

チリチリと焼けるフライパンを眺めていると——ベルたちが戻ってきて、俺に身体を交互にスリスリし始めた。

「腹が減ったんだな？」

辺りはかなり暗くなったので、アイテムBOXからランプを出す。アイテムBOXから猫缶を出して、ベルたちに食べさせていると、明るく輝くヘッドライトが戻ってきた。

「アキラ、もうすぐ飯ができるぞ」

「やったぜ！ 本当に転移門はここにあったんだな」

アキラが車から降りて、自分のアイテムBOXに収納した。

「ここから飛べば、海までひとつ飛びだ」

「刺し身が食いたくなったら、ここに来ればオツケーってことか」

「オツケーにゃ！」

アキラは、獣人たちが食べている魚に気がついたようだ。

「魚？ もしかして、ここで獲ったのか？」

「ああ、この川には魚がいるらしい」

「まさか、あの滝は上れねえだろう？」

「俺もそう思う」

俺たちの話に、アネモネが食いついた。

「魚って滝を上れるの？」

「2mぐらいの高さなら、飛び跳ねて登っていくぞ。アネモネちゃん」

アキラの説明に彼女が聞き入っている。

「へえ」

「ウチの田舎にもそういう滝があったぞ」

「魚留めの滝ってやつだな。その上にいる魚は放流したもんだ」

「魚釣り用にか？」

「そうだな」

「俺は溪流釣りをしないからなあ」

アキラが、俺の車の傷に気がついたようだ。

ここには人も魔物もないので、出しっぱなしなのだ。

「ケンイチ、ちょっと見ないうちに、車が歴戦になったじゃねえか」

「ああ、穴に落ちてしまつてな。途中で大穴がなかったか？」

「あそこに落ちたのか、ははは」

話しているうちに料理ができた。

「ほい、アキラとアマランサスに、ビール」

「うひょ！」 「ありがとうございますわえ」

「旦那！」

泣きそうな顔でニヤメナがやってきた。

「そんな顔をするなつての。ちゃんとやるよ、ホイ！」

「やったあ！」

「おお、餃子うめえ」

アキラが餃子をぱくついている。

ビールには餃子のほうが合うらしい。

「チャーハンもいいできだな」

「美味しいよ！」

「美味じゃのう。最近、サンバクが具を包んだ料理を出すようになったのう」

アマランサスもビールを飲みながら餃子を食べている。

「俺が出した餃子とかシウマイに影響を受けていると思う。穀物の皮で包む料理ってのは種類が多いからな」

「なるほどのう」

アキラがビールを一息ついて話し始めた。

「ケンイチ、センセにあの魔法陣を見せてやってもいいか？」

「レイランさんならいいぞ。魔法の専門家だしな。なにか解るかもしれない」

「よっしや！ センセ、飛んでくるぜ！」

「そうなの——悔しいが、帝国の魔法は王国より進んでおるようじゃし」

アマランサスも賛成のようだ。

「転移魔法とやらが復活すれば、この世界がひっくり返るぜ？」

アキラはそう言うが――。

「復活できればいいが……」

正直、空間拡張とかテレポーションとか、どうやっているか見当もつかん。

飯を食い終わったのだが、寝るまで暇だ。

只人で麻雀をする。

アマランサスは初めてだが、頭がいいので覚えるのが早い。4回ほど楽しんだあと、寝ることにした。

コンテナハウスから、ちよつと離れた場所にアキラのテント。

その反対側に獣人たちのテントを出した。

今日の俺は、獣人たちのテントの中だ。

コンテナハウスには、アネモネとアマランサス、そして森猫たちが寝ている。

俺は、ふかふかの毛皮に包まって寝ることにした。

[illegible]

――転移門を見つけて、アキラと合流した次の日。
皆で集まって朝飯を食う。

いつもグラノーラなのだが、今日は普通にパンと牛乳、そしてスープ。

早起きした獣人たちが、食える山菜を見つけてきてくれたので、そいつでサラダを作った。

元世界のミヤマイラクサに似ている。

葉っぱに棘があって刺さると痛いのだが、茎が食える。

ぶつ切りにしてお浸しにしたあと、ドレッシングで和えるとシャキシャキして美味しい。

「ケンイチ、このあとは？」

アキラが今後の予定を聞いてくる。

「このまま測量を続けて水源まで行く。こんな台地の上の川の水源がどうなっているか、興味がある」

「そうだな。元世界で有名なギアナ高地は、あそこに降った雨だけで川や滝ができているって話だったが……」

「でもあそこは、降水量がかなり凄いんだろ？」

「たしか、そんな話だったな」

あそこのテーブル・マウンテンは高さ数百から数千mだ。

世界から隔絶された独自の生態系やらが発達しているらしいが、この台地はせいぜい10m、規模が違う。

地上とほとんど変わらない。

こんな場所に、川が流れているなんて不自然だろう。

その大元を確かめる必要がある。

「聖騎士様、それは聖騎士様の故郷の話かえ？」

「まあな、ここより凄いテーブルみたいな山があって……」

「見てみたい！」

アネモネがそう言うのだが、うーん——そうだ。

俺がシャングリ・ラでギアナ高地の検索をすると——写真集が出ている。

これなら文字が読めなくても大丈夫だろうが、アネモネは日本語読めるんだけどね。

「ポチツとな」

本が落ちてきたので、アネモネに見せた。

「ほら、こういう山なんだ」

「すごい！」

「ほう！こんなに巨大で平らな山があるのかえ？」

「ここは世界から隔絶されて、独自の生物などがいるんだ」

「ケンイチ、そんな本まで出せるのか？」

「まあな」

「ギ ア ナ 高 地」

アネモネが、タイトルの文字を読んでみせる。

「ええ？ アネモネちゃん、その言葉が解るのかい？」

彼女が日本語を読めたので、アキラも驚いているようだ。

「うん！ ケンイチに教えてもらった」

「すげー！」

「はは、マジで凄いよな」

ほとんど彼女の独学なんだけどな。

「ケンイチ、下の文字はなんて書いてあるの？」

「ん？ LOST WORLDだな、失われた世界って意味だ」

「この文字も習いたい！」

「ええ？　これは、俺もあまり知らないんだけどなあ」
単語だけなら辞書を購入すればいいが、文法やはすっかり忘れた。

「そうなんだ」

「アキラ、英語は？」

「はは、だめだ。外国だろうが身振り手振りでなんとかなるし」
それはそれで凄いなと思うが。

「妾も読めるようになるのじゃ、師匠！」

アマランサスが、アネモネを崇めている。

「まっかつせつなっさっい」

「ほらあ、アキラの変な言葉をアネモネが真似するんだよ」

「フヒヒ、サーセン！　でも、王妃様が、アネモネちゃんに弟子入りしたってことか？」

「そうらしい」

「普通はそんなこと、中々できないぜ？」

王族が平民に頭を下げて弟子入りするなんてなあ。

俺もそう思う。

「凄い山だにゃー！」　「すげえ崖だぜ！」

獣人たちも後ろから、アネモネの持っている本を眺めている。

「ケンイチ、これってどのぐらいの高さがあるにゃ？」

「ええと1／4リーグから1リーグぐらい」

「そんなに高い崖にゃ？！」　「こんなの絶対に登れっこねえ！」

「自力じゃむりだろうな。ドラゴンとかワイバーンを調教して、空を飛んでなら……」

「そんなの聞いたことがないにゃ！」

アキラに帝国の話を聞く。

「帝国にドラゴンライダーとか、そういうのはいなかったのか？」

「ないな。俺がドラゴン倒したってのも前代未聞だったってぐらいだし、ティムなんて無理だろう」

アマランサスに聞いても、メリッサがティムしたレッサードラゴンが最上位らしい。

「そうか」

話が脱線したな——目的地の話に戻す。

「あんな転移門なんて代物があるぐらいだ。川の水源には、水が湧き出す魔法陣とかがあるかもしれない」

俺の言葉にアキラが顔をしかめる。

「ええ？ そんなの帝国でも聞いたことがないぜ？」

「ゲームだとクリエイトウォーターとかあるじゃん。そういう魔法は？」

「ないない、センスに聞いてみたことがあるが、ないって話だったな」

「水が湧き出る魔法があれば、農地も広がるのになあ」

「あったとしても、膨大な魔力がいるんじゃない？」

確かに、転移の魔法陣はかなりの魔力を消費するようだった。

「ほら——アキラのマヨパワーみたいに、対価なしで水がジャーっと……」

「まあ、そう考えると、マヨの代わりに水が出るやつがいてもおかしくはねえが——そりゃ、マヨ以上にチート能力だな」

「俺もそう思う」

マヨがなくても生活に困らないが——水は人間が生活するのに絶

対に必要なものだし。

飯を食い終わったので、道具を片付けて出発する。

「アキラどうする？ 車を1台にするか？」

森猫たちは車に乗らずに、森の中をパトロールしながらついてきているので、座席は余っている。

「いや、のんびりしたいから俺は1人で行くわ」

まあ、俺たちが測量している間は、彼は暇だろう。

あちこち散歩したりするのかもしれない。

—————◆◆———

——そのまま、なにごとくもなく測量は進み、1週間がたった。

あの転移門から150kmは進んだことになる。

最低でも、この台地は200km以上の大きさがあるってことだ。
ドローンを飛ばしてもまだ先に続いている。

朝起きて、皆で飯を食う。

「ふああああ」

アキラがパンを喰みながら、大きなあくびをしている。

「やっぱりつまらない冒険だったろ？」

本当になにもなくて、測量しているだけだったからな。

ここには魔物がいないのも解っているし。

「まあ、こんなもんさ。それにアストランティアにいても、大してやることもねえし」

「こんなに遊び回ってばかりいたら、レイランさんに愛想つかされないか？」

「ははは、いつものことだし。センセだって魔法の研究始めたら、何日も部屋から出てこねえとかざらだし」

「アネモネはどうだ？」

「私は、ケンイチといれば楽しい」

「妾もじゃえ」

「ウチもそうにゃ！」 「でも、多少は刺激があったほうがいいよなあ」

ニヤメナは少し飽き気味のようだな。

「にゃー」「みゃー」

ベルとカゲの森猫組は、新しい土地のパトロールができて、退屈はしていないらしい。

たまに鳥などを獲って狩りをしているようだし。

飯のあと、出発する前にドローンを飛ばす。

見える範囲にはなにもないようで、この台地の果てもない。

つまり、まだまだ続くってことだが、川が流れているってことは、俺たちの行く先が微妙ではあるが、高くなっているということなのだろう。

歩いていても傾斜を感じることはないのだが、川はそれなりのスピードで流れており——そのまま進むと、サクラの滝になるわけだ。

「ふわぁー、マジでなにもないな」

アキラが、ドローンのコントローラーについているモニタを覗き込む。

「だが、そろそろ、果てが見えてきてもいいと思うんだがなあ」

「この上だけでも、一つの領土として十分な広さがあるな」

「ここに城を築けば、天然要塞として十分に機能すると思うが……」
「そうだな、ここなら城壁や堀は要らねえし、どこから来るかしらねえが水もあるし」

「台地の上で、畑もできそうだがなあ」
アマランサスに聞いても、この台地の開発が議題に上がったことはないという。

「その前に、ここがこんな土地だと誰も知りませんでしたわえ」
元々、アストランティア周辺も森だったので、そっちを切り開くのが最優先になってた感じかな？
こんな台地の上を開発するとなると、金もかかるしな。

午前中は川を伝い測量を続けて、昼になった。
昼飯を食う前にドローンを再度飛ばす。
だが背の低い森森、そして森——だが。

「ん？」

「ケンイチどうした？」

「森の切れ目から、なにかキラキラ光っているような……」
ドローンを限界高度まで上げても解らない。

「それじゃ、飯を食ったら俺がひとつ走りして、見てくるぜ」

「おお、そうだな。それじゃ頼んだ」

「あいよ」

昼は冷凍食品の肉まんを食う。
アネモネのリクエストだ。

彼女の魔法で温めれば、すぐに食べられる。

「うみゃー！」「あちあち！」

獣人たちが大喜びで、肉まんを頬張る。

「これは素朴だが、美味しいの……」

「美味しい！」

肉まんには玉ねぎが入っているが、獣人たちが食べても大丈夫なのは、先刻承知。

獣人たちは問題ないが、元世界と同じように森猫には食べさせられない。

俺たち——ここでいう只人と獣人たちは、ほとんど変わらないのだが、身体的な構造の違いが、やはりある。

かかる病気も違うし、毒の効き目も違うようだ。

たとえば人間は、唾液にデンプンを溶かす消化酵素が含まれているが、獣人たちにはそれが無いように思える。

口の中で糖ができないので虫歯もない。

こんな生理的な違いが多々ある。

「ケンイチ、辛子はあるか？」

「ああ、あるぞ」

シャングリ・ラで、チューブ入りの辛子を買う。

「ポチツとな」

落ちてきた黄色のチューブをアキラにやる。

「おお、これこれ」

彼は肉まんに辛子をつけて食うのが好きらしい。

確かに辛子がついているものもあるな。

俺はつけたことがないが。

「アキラ、それはなんにゃ？ 土か、ピーかにゃ？」

「ピーじゃねえよ！ 香辛料だ、香辛料！」

アキラから香辛料と聞かされて、香辛料好きな獣人たちが辛子に

飛びついた。

「辛いやー！」 「おお！ こいつは効くぜ！ 肉につけて食ったら美味いかも」

「ああ、確かにマスタードソースであるからなあ」

アキラのつぶやきに、俺は膝を打った。

なるほど、肉まんに辛子ってのは、肉にマスタードソースみたいなもんか。

昼飯を食い終わり、アキラが一足先に川の流れる先に向かうことになった。

「アネモネとアマランサスも、アキラについていてもいいぞ」

「私は、ケンイチと一緒にいる」

「妾もじゃ」

それを聞いたアキラが車に乗り込んだ。

「それじゃ、ひとつ走りしてくるわ」

「おお、頼む」

出発する彼を見送り――俺たちは、そのまま測量を続けていたのだが、アキラが1時間ほどで戻ってきた。

「ケンイチ！」

戻ってきた彼が、車を降りるなり叫んだ。

「なんだ?! なにかあったか?」

「湖だよ! 湖!」

「ええ? こんな台地の上に湖? マジで?」

彼の話では、この川の水源は湖らしい。

どうやら、そこで行き止まりのようだ。

「ああ、マジマジ！」

興奮する2人の間で交わされる内容は、おおそオッサン同士の会話ではない。

すっかりガキ同士の会話だ。

結構大きな湖で、真ん中に城らしきものもあったらしい。

「アキラ、ホントにゃ?!」

ミヤレーが耳と尻尾を立てている。

口には出さないが、彼女もちよつと飽きてきていたのだろう。

「本当だぞ」

「ケンイチ、ウチらも見えてきていいかにゃ?!」 「おいおいクロ助。仕事はどうするんだよ」

「その三角形を、ところどころに置いていってくれればいいぞ」

「やったにゃ!」 「ったくしょうがねえな」

測量は、三角コーンが置いてあれば大丈夫だな。

獣人たちは喜び勇んで、その湖とやらに行ってしまったが、俺には仕事がある。

それに明日になれば、測量しててもそこにたどり着くことになるのだから、慌てる必要もない。

湖とやらを見に行った、獣人たちも1時間ほどで戻ってきた。

彼女たちの脚の速さは車と変わらない。

「ケンイチ! 本当に湖があったにゃ!」 「旦那、本当に城みたいなものもあったぜ!?!」

「そうか」

「今日中に、湖まで行くにゃ?」

「いや、湖のちよつと手前で泊まろう」

「どうした？ なにかあるのか？」
アキラが俺の顔を覗き込む。

「いや、こんな場所にある湖だ。普通じゃないだろ？ 湖に魔物がいたりとか——そういう可能性もある」

「あの、クラーケンみたいなやつか？」

「クラーケンはないと思うが、夜に湖の畔は危険かと思う。一応、念の為だ」

そこにベルが帰ってきた。

「お母さん、この先に湖があるってさ」

「にゃー」

「え？ 行ってきた？」

「にゃー」

「え？ 本当かい？」

「ケンイチ、どうした？」

「ベルが湖の畔で、魔物に襲われたらしい」

「マジかよ！」

「やっぱり、うかつに近づくのは危険だな」
ベルに魔物の種類を聞く。

「大きな空を飛ぶ魔物らしい……」

「ドラゴンか、ワイバーンか？」

「にゃ」

アキラの言葉をベルが否定した。

「大きな鳥だと言っているぞ」

「鳥？ ロック鳥とか？」

アキラが俺にも聞き覚えのある単語をつぶやく。

「ああ、そういう感じかもな……」

「ロックってなにに出てきたんだっけ？」

「たしか——千一夜物語……じゃなかったか」

「シンドバッドとか、そういうのか？」

「多分」

俺もうろ覚えだが——鳥なら鳥目なので夜は大丈夫だと思うし、木々の間に入れば襲ってこれないだろう。

ただしそれは、魔物が鳥だけならの話。

敵がそれだけとは限らないし、湖に迂闊に近寄るのは危険だ。

「よっしゃ！ 面白くなってきやがったぜ！」

「とか言ってるくせに、いつもビビって腰を抜かして、小便漏らすにゃ」

胸の前で拳を合わせるニヤメナをミヤレーがからかう。

「うるせえ！ クロ助！」

「聖騎士様、当然調査はするのかえ」

「まあな。俺としては危険は御免だが、ここまで来て調べないわけにはいかんだろう」

「やったあ！ 冒険らしくなってきた！」

アネモネが、フンス！ と、ガッツポーズをしながら鼻をならしている。

「また聖騎士様の偉業に新たなる1頁が追加されてしまうのかのう。まったく困ったものですわえ、ふふふ」

まったく困ったものなのは俺のほうなのだが——確かに危険だとはいえ、こんな場所にある湖の正体を確かめたい。

しかも中の島に城？

もうドキドキわくわくの素敵な冒険の予感しかない。

「アキラは？」

「フヒヒ、ここまできたら、やるっきゃナイトだろ」

「なんだそれ懐かしいな。オッサンにしか解らんネタだろ」
「はは」

俺たちは、件の湖から3km手前でキャンプを張り、明日の朝一で湖に向かうことにした。

227話 脚がある！

サクラの近く、崖の上に広がる台地を測量している。

全部を測量するには時間がかかりすぎるので、今回は川の周辺だけ。

その測量によって、オダマキに通じている転移門の場所も発見した。

途中でやってきたアキラも合流して、川の上流へと向かっていたが、先にパトロールをしていたベルから興味深い報告を受ける。

川の先には、大きな湖があるという。

湖の中の島には城らしきものが見えるらしい。

こりゃ、冒険の予感しかないが——そこには空を飛ぶ魔物がいるという。

こいつをなんとかしなくてはならない。

目的地の湖まであと3kmに迫った地点。

俺たちはキャンプをすることにしたが、安全を考えて森の中に陣を構えた。

「ケンイチ、ここで大丈夫かじゃ？」

「相手が鳥っていうなら、数リーグ先からでも見えると思うがなあ」

「それじゃヤバいんじゃないのか？ 旦那！」

獣人たちが少々ビビっている。

空飛ぶ魔物ってのは、やっぱり天敵なんだろう。

「大丈夫、森の中なら突っ込んでこれないし、だいたい鳥ってのは暗闇で目が見えないからな」

「そうなのかい？ アキラの旦那」

「まあ、鳥目っていうぐらいだし、はは」

「獣人たちは鳥目を知らないらしい。」

「彼女たちは夜目が利くので、ピンとこないのだろうか？」

「聖騎士様、鳥は夜でも目が見えるぞえ？」

「ええ？ そうなのか、アマランサス」

「はい」

「え？ マジで？ ずっと勘違いしてたわ」

「俺もアキラも知らなかった。」

「でも、ドラゴンとかも夜は飛ばないんだろ？」

「まあ、帝国でも聞いたことはないな」

「そういえば、フクロウなどはむしろ夜行性だしなあ。」

「普通の鳥でも夜目が利くのか……。」

「目は見えても、森の中まではやってこないだろう。」

「俺たちはおにぎりとかップ麺。獣人たちは自分たちで捕まえた鳥を焼いて、カレー粉と塩で食っている。」

「なんだか美味そうなのだが……。」

「湖に面白いものがあればいいね！」

「アネモネがカップ麺を食べながらそんなことを言うのだが……。」

「失われたお宝とかな、フヒヒ」

「あるかなあ」

「でも、こんな場所に来たやつなんていないんだろ？ それじゃ盗掘もされていないだろうし、その可能性は十分にあるんじゃないか？」

「まあな」

「元世界のピラミッドのことを思い出したな。」

建物が誰かの墓だったりしたら、荒らしてもいいものなのだろうか？

「誰かの墓とかの可能性は？」

「まあ、そう言われると、墓荒らしはちょっと気が進まないかな？」

「そんなのお宝優先にゃ！」 「そうだよ旦那！」

ええ？ 獣人的にはそうなのか？

「そうだな。判断は現場で調べてからだな」

「私は、冒険優先！」

「恐ろしい魔物がいるかもしれないんだぞ？」

「そんなの、ケンイチといれば平気だから！」

「妾も、聖騎士様と一緒にならば平気じゃ！」

夕食が終わったあと——暗闇の中、皆からちよつと離れた場所で、アマランサスと夜のお遊び。

俺を独り占めできると、彼女も張り切っている。

「ふー、聖騎士様ともつと早く出会えておればのう」
ベッドに寝転ぶ俺の胸にアマランサスが顔を埋めている。

「早く出会っても、王妃じゃ手が出せなかったろ？」

「そのようなものは、さっさと放り出せばよい！」

「そう簡単に行くかよ。お城でのできごととは偶然に偶然が重なって起きたことだし。そもそもリリスから祝福を受けないと、聖騎士になれなかったわけだし」

「そ、それはそうじゃが……」

「俺なんかより、アマランサスのほうがよほど聖騎士っぽいが？」

「妾が？」

彼女が驚いたように身体を起こした。

鍛え上げられたアスリートのような上半身が俺に迫ってくるが、その機能美——およそ王妃の身体ではない。

これじゃ、国王陛下も齒が立たないだろうと思われる。

「ああ、聖騎士の祝福を授けるといいうのが王族であるリリスの能力だとすると、その力を内包している王族がいてもおかしくないだろう？」

これだけの身体と能力が、後天的なものだけとは考え難い。

「つまり、妾が自らに祝福を与えて聖騎士となったと申すのかえ？」

「まあな」

「そのようなことがあるはずがない！　ぎゃあああ！　あぐぐ！」

突然、激昂したアマランサスが、裸のままベッドの上で転がり始めた。

今の発言が主人に対する反抗だと取られたのかもしれない。

「落ち着けアマランサス、そういう可能性もあると言っただけだ」

「聖騎士様は、妾のことが嫌いなのかえ？！　ぎゃあああ！」

「違う違う！　なんでそういう話になるんだ！　大丈夫だ、なにがあってもお前を守ってやるから心配するな」

「ほ、本当かえ！？」

「そうじゃなきゃ、裸でこんなことするかよ」

「聖騎士様 あああ！」

涙を流したアマランサスが俺に抱きついてきて、子どものように泣いている。

この話題は止めたほうがいいな。

あくまで俺は聖騎士で、彼女はその聖騎士に助けられたお姫様なのだ。

それなら奴隷紋を外せばいいと思うのだが、なぜか解らんが彼女はそれを拒否している。

奴隷としてこき使われるのはOKらしいなあ。
まったく意味不明だ。

——アマランサスと遊んだ次の日。

朝飯を食ったら出発する。

残りは3kmほどらしいので、測量は一旦中止する。

作業をしている間に、空飛ぶ魔物に襲われたりしたら大変だ。

3kmぐらいなら、いつでも測量が可能だしな。

川を遡ると、皆が言うように開けた場所に湖がある。

ほぼ円形で直径は300mほどだろうか。

ちょうど森の切れ目付近で俺たちは偵察を始めた。

畔までは約200m——背の低い草むらで覆われており、白や赤の花が咲いているのも見える。

木はまったく生えておらず、見渡しがいい。これじゃ間違いなく敵に見つけてくれと言っているようなもんだ。

下は湿地かと思ったのだが、地面はしっかりしている。

湖の中心部分に中の島が見えるので——俺はアイテムBOXから双眼鏡を取り出した。

双眼鏡を覗く。

緑に埋もれた白い石造りの建物らしきものが見える。

「ああ、たしかに建物が見えるな。上に高くないので城かは解らん……」

見た感じでは平屋に見えるが、緑に埋もれているので不明だ。

「ケンイチ、私にも見せて！」

アネモネが俺の隣でぴょんぴょんしているので、双眼鏡を彼女に渡した。

「中の島は随分デカイな」

俺はアイテムBOXから、レーザー距離計を出した。

「一番奥の岸まで約300mで、中の島まで約100m」

「つまり、丸い300mの湖の真ん中に100mの島があるってことだな」

アキラが地面に図を描いた。

「そういう感じだろう」

アイテムBOXの中には船外機付きのボートが入っているから、渡るのは問題ないだろう。

問題は、空飛ぶ魔物ってやつだが……。

「アネモネ、なにか見えるか？」

「うーん……あ！ なにか動いている！」

「どこら辺だ？」

「右端のほう……」

俺はアイテムBOXから、天体望遠鏡を出した。

オダマキの海岸で使ったやつだ。

こいつなら、魔物の正体まではっきりとみえるだろう。

ただし、像は逆さまに映るけどな。

アネモネに、白い望遠鏡の横についているファインダーで当たりをつけてもらう。

最初は低倍率接眼レンズで目標を捉える。

上下左右逆に動くので相手を捉え難いが——確かになにかいる。

「お？ いたぞ?!」

「マジか」

目標を捉えたので、接眼レンズを高倍率のものに切り替える。

天体観測だと俺たちのいる惑星が自転しているのでどんどん動いてしまうが、これはそんなことはない。

焦点ノブを回して、映し出されたその姿は——鋭い目と大きく鋭い黄色いくちばし。

茶色の羽毛に覆われている巨大な生き物。

「驚か？ 鷹？」

「ケンイチ、見せてくれ」

「ホイ」

アキラに接眼レンズを譲る。

「おう、確かに驚っぱいな。アメリカにいるアレだろ？」

「あれは、ハクトウワシかな？」

「それそれ、イーグル○ムだっけ？ そんな面だな」

「ケンイチ！ 見せて見せて！」

首に双眼鏡をかけたアネモネを始め、獣人たちやアマランサスにも見せる。

「なんだにゃー！ こんなに遠くが近くに見えるにゃ！」 「でも、逆さまだぜ？」

「それは仕方ない。そういうものなんだ」

皆が望遠鏡を覗いているので、俺はドローンを使って、空中から探索することにした。

ドローンなら100mぐらい飛ばせるので、あの島の形ぐらいは撮れるかもしれない。

そのためには湖の畔まで近づかないと。

俺は車を召喚したのだが、それを見てアキラが心配そうにしている。

「おい、ケンイチ大丈夫か？」

「車のスピードなら平気だろう。それに2tほどあるこいつを持ち上げられるとも思えんし」

「俺は知らんぞ？」

「にゃー」「みゃ」

ベルとカゲも心配そうだ。

「お母さん大丈夫だ。なにはともあれ、やってみないことには先に進めんし」

「任せた」

「ケンイチ！ 弩弓を出してにゃ」「そうだよ旦那！ 俺たちも行く！」

「私も！」

「妾もじゃ！」

アキラと森猫たちは残るようなので、アイテムBOXからクロスボウを取り出して獣人たちに配った。

彼女たちが弦を張って矢を番える。

「オツケーにゃ！」「よっしゃ！」

アキラに手を振ると、車を出発させた。

畔までは200mぐらいあるので、背の低い草むらを車で押し分けて走る。

地面はしっかりとしているので、タイヤを取られる心配もない。

途中から砂地に変わり、それが畔まで続いている。

湖面は鏡のように澄んでおり、青い空と白い雲、そして中の島を逆さまに映し出していた。

車を停車させると、ドローンの準備をする。

アネモネには双眼鏡で監視を頼む。

「発進〜！」

4つの小さなプロペラを持ったドローンが飛びたつと、コントローラーの液晶画面には、湖の景色が映し出されている。

徐々に高度を上げると、建物の様子が見えてきた。

どうやら建物も円形に建てられている感じだが、全体像を掴むためには高度が足りないようである。

「くそ……」

俺が苛ついているとアネモネが敵の状況を教えてくれた。

「ケンイチ！ 魔物が動いたよ！」

「よし！ 撤収！」

——とか言っている間にドローンが攻撃を受けたようだ。

コントローラーのモニタに巨大な影が見えたと思ったら、映っていた景色がグルグルと回り映像が途切れた。

墜落したらしい。

「畜生！」

俺は車を発進させると、ジグザグ走行を始めた。

「どうだ！ 生き物にこんな動きは不可能だろ！」

ハンドルを切った場所——車の右側に茶色の巨大な生物の影が現れて、地面に爪が突き刺さる。

この車と同じぐらいの大きさ——ということは全長は5mってことになるが、翼はもっとデカイ。

広げたら10mぐらいになるんじゃないだろうか。

「ふぎゃー！」 「んにゃろー！！」

左右に振られる窓から身を乗り出した獣人たちが、クロスボウを右側に一斉発射した。

2本の矢が魔物に刺さったようだが、ダメージは……。

「巨大な鷲？」

「でもケンイチ、脚が四本あるよ！」

「グリフォン?!」

地面に巨大な影を落とす大きな翼と、鋭い爪。

鷲っぽいのは前側だけで、後ろ足は馬のように見えるが……。

上半身と大きな翼は茶色だが、後ろは黄土色の体で羽毛は生えておらず、黒い尻尾と蹄が見える。

草をかき分けて、車は森に近づいていく。

「聖騎士様！ 妾を降ろしてたもれ！」

「馬鹿を言うな！ お姫様を守る聖騎士が、お姫様降ろしてどうするんだ！」

「ケンイチ撃っていい？」

助手席でアネモネが目を輝かす。

「いいぞ、時間稼ぎになるが——大丈夫か？」

「まかせて！ 光弾よ！ 我が敵を討て！」
マジックミサイル

後ろの座席にいったアネモネが、窓から魔法の矢を放った。

白く輝く光の矢が魔物に3本ほど向かったが、弾かれてしまったようだ。

効果は薄い感じだが、敵はバランスを崩して地面に着地したため、土と千切れた草が舞う。

いい時間稼ぎにはなった。

「もうすぐ森だ！」

俺は車を走らせて、そのまま森の中に飛び込んだ。

森の中に入れば、障害物だらけで簡単には飛び立てなくなるため、今度は向こうが不利になる。

ここまでは追ってこないだろう。

そのまま待機していると――俺の予想どおりに巨大な魔物は、そのまま自分の巣に戻ったようだ。

「ふう……」

俺はハンドルに突っ伏して、深呼吸をした。

「多分、空飛ぶ召喚獣を使ったので、縄張りを荒らされたと思ったにゃ」「そうだよ旦那」

「ああ、なるほどな」

アキラの車が近づいてきた。

「おおい、ケンイチ。大丈夫か？」

彼が窓から顔を出す。

車の横には森猫たちも一緒だが、あの魔物相手では、流石にベルたちも歯が立たないだろう。

「大丈夫だが、脚が4本あったぞ？　鳥じゃないな」

「ああ、そう見えた気がする。ちょうどラ○クルと同じぐらいの大きさだったな」

「車に乗ってりゃ、さらわれる心配はないと思うが……湖は渡れないな」

「水の上じゃ逃げ場所がないしな」

車から降りて作戦会議をする。

「グリフォンだと思ったが……アキラ、帝国で見たことがあるか？」

「いいや、初めて見たな」

「お城の魔物の図鑑に載ってたよ」

アネモネはお城でコピーしたほとんどの本に、すでに目を通してしまった。

「本当か？」

「うん」

「でも、ちょっと違うんだよなあ。後ろが馬みたいだったぞ？」

「グリフォンって、ケツがライオンみたいだった気がするが……」

アキラがつぶやくが、俺もそんな感じがする。

俺はシャングリ・ラの電子書籍から、ファンタジー系のモンスター図鑑を購入した。

そこから似たような魔物を探す。

ペラペラとページをめくると、それっぽい魔物がいた。

「これか？ ヒポグリフ」

「ああ、聞いたことがあるな……ヒポポタマス」

「それはカバだろ？」

「そうだったけ？ フヒヒ、サーセン！」

「それはいいが、あれをどうやって倒す？ ワイバーンより動きが速かった気がする」

「そうだな——驚みたいに上空から、急降下攻撃してくるんじゃないかね？」

「それじゃ、時限爆弾を付けるのも難しいだろうなあ……」

ワイバーンのときは、背後が崖で急降下攻撃ができなかったことが俺たちに有利に働いた。

あのときは地の利に恵まれたが、ここは平地でひたすらに見渡しいい。

今回は魔物に地の利がある。

——とはいえ、どきどきわくわくの巨大な遺跡のようなものを目の前にして、ここで引き返す選択はない。

どうしても倒せないのであれば、応援を頼むのもやぶさかでないが、まだまだその段階ではないしな。

「ケンイチ、銃か大砲は作れないのか？」

「アキラが考えてるような代物は無理だ」

彼が言っているのは、元世界にあったピストルやライフルのことだろう。

「まあ、火薬はあるし単管に詰めればできなくもないが——実験をやってる暇もないし、暴発する未来しか見えない」

単管の後部に鋼板を巻いて強化しないと爆発するだろうな。

「手作り銃はヤバいぞ？」

爆薬や爆雷も作っているし、いまさらと言えばいまさらだが。

「うゝん」

「聖騎士様、妾が囹になりますゆえ」

「はい、却下」

俺は、アマランススの申し出をすぐさま却下した。

彼女はそれが気に入らないようであるが、冗談じゃない。そんなことができるか。

だいたい——昨日の夜、守ってやるって話をしたばかりじゃないか。

「旦那、毒はどうだい？」

黙って話を聞いていたニヤメナから提案が出た。

「毒か……」

「ほら、お城のネズミを毒で始末したじゃないか？」

「いいかもな！ 毒なら見ているだけでいいし。危険も少ないだろう」

「でも、肉が食えなくなるにゃー」

ミャレーが妙なことを心配し始めた。

「俺もヒポグリフの肉とか食ってみたいけど、諦めるしかないかな」

「にゃー」「みゃ？」

森猫たちが俺の所にやってきてスリスリしている。

「お母さんまでそんなことを言うのかい？ 安全第一だよ」

「そうだな、ご安全に！」

「ヨシ！」

俺はアキラの言葉に右手の人差し指を突き出した。

早速、作戦を実行に移す。

毒を撒いておけば、後は見ているだけでいいのだから、こいつは楽だ。

まずは、シャングリ・ラで肉を10kgほど買う。

豚肉でいいだろう。こいつは撒き餌だ。

次に毒だが、王宮のネズミ退治につかったときと同じ一斗缶に入った不凍液を使う——ジエチレングリコールだ。

甘いにおいがあるので、敵をひっかけやすい。

「甘い、いいにおいだにゃー」「美味そうなおいだな、クロ助」

俺の周りで鼻のいい獣人たちがウロウロしている。

「前も言ったが毒だからな。飲むなよ？ マジで死ぬぞ」

俺が一斗缶の不凍液をバケツに移し替えていると、アキラが覗き込んでいる。

「ケンイチ、ジエチレングリコール入りのワインを、友好の証とかいって敵に送るってのはどうだ？」

「人間相手の戦の話か？」

「そうそう——不凍液入れたワインは甘くて美味くなるだろ？ ガ
ブガブ飲んで中毒を起こしたところに奇襲をかける」

「願わくは、その手を使う日が来ないことを願うよ」

「さすがアキラにゃ！ 卑劣にゃ！」 「ドン引きだぜ」

「なるほどのう……」

獣人たちはドン引きして、アマランサスは感心している。

「褒めてくれてありがとう、ははは」

「帝国じゃ、そういう仕事もやってたのか？」

「まあな」

彼はポツリとそう言って、なにも話さなくなってしまった。
なにかトラウマ的なことを思い出したのかもしれない。

帝国はブラックだと言っていたが、相当なブラックだな。

準備が整ったので、肉と不凍液をアイテムBOXに入れて畔に向
かう。

車で畔の砂地にやってくると、板を広げてその上に肉を置くと、
すぐに戻ってきた。

ヒポグリフなら頭は驚——相当に目はいいだろう。

砂地に置かれたなにかに、すぐに気づくはずだ。

俺たちは、それを離れた所から見たいればいい。

森の出口に三脚を立てて、その上に双眼鏡を固定する。

テーブルや椅子などをアイテムBOXから出して、監視所を作る
と交代で見張る。

アネモネ用に乗る台も用意——態勢は万全だ。

まったりとお菓子やジュースなどで一休みしていると、双眼鏡を
覗いているアネモネが声を上げた。

「ケンイチ！ 来たよ！」

「お?! ちょっと見せてくれ」

「うん」

双眼鏡を覗くと――確かにヒポグリフが板に置いた豚肉をついばんでいる。

「さて、不凍液は飲むかな？」

「ケンイチ！ 見せてにゃ！」

「ほい」

「にゃー！ あ、入れ物に入っている、あの毒を飲んでるにゃ！」

「マジか」

「うにゃー！」

「クロ助、俺にも見せろ！」

代わってニヤメナが双眼鏡を覗き込む。

「飲んでる飲んでる！ 頭が鳥でケツが馬？ あんな化け物初めて見たぜ！」

「他にいないってことは、ここで作られたものとか？」

俺のつぶやきにアキラが反応した。

「ああ、ゲートキーパー的な。しかし魔法で魔物が作れるのかねえ。そんな話は帝国でも聞いたことがなかったぜ？」

「そんなことが簡単にできるのなら、魔物を作りまくって戦略兵器として使いまくりだろうし」

「まあな」

魔物は綺麗に肉を平らげたようである。

不凍液が入ったバケツもひっくり返っているので、飲み干したようだ。

さて、毒は効くだろうか？

キャンプをしつつまったりと待つ。

ヒポグリフの巣を監視するために、三脚に固定した天体望遠鏡を設置したが、こいつは像が反転して見えるので扱いづらい。

シャングリ・ラから正立プリズムというのを購入した。

これを使えば普通に見えるので、他の者たちにも好評だ。

少々暗くなるが、昼間に使うので問題ないだろう。

そのまま飯を食い、アキラたちは酒を飲む。

森猫たちには猫缶をあげた。

暗くなってしまったので魔物がどうなっているか解らないが、夕方から巣でじっとしているので、夜に襲われることはないだろう。

ベルたちのパトロールでも、他に魔物はいないようである。

「魔物がいるなら、中の島の建物の中じゃね？」

「にゃー！ 多分、ダンジョンになっているにゃ！」 「俺もそう思うぜ、旦那」

「あれは、どう見ても人の手で作られたものみたいだしなあ」

この場合は人工のダンジョンってことになるのだろう。

飯を食い終わったので、アネモネと一緒に寝る。

森猫たちも一緒だ。

「んふー！ もう！ 中々私の番に回ってこない！」

「そう言うなよ、アネモネ」

「私だけのケンイチだったのに！」

まあねえ、大人ぶってはいるけど、まだまだ甘えたい年頃だと思うし。

彼女と一緒に、森猫たちにブラシをかけて寝た。

——魔物に毒を食わせた次の日。

朝飯のグラノーラを食いながら、ヒポグリフの観察をする。

「あ！ 動いたよケンイチ！」
魔物の様子が気になるのか、急いで朝食を食べたアネモネが、望遠鏡を覗いている。

「様子はどうか？」

「うーん、別になんとも変わっていないみたい」

「元気そうか？」

「うん」

「あの魔物にゃ、不凍液は通じないのか……なにか他の毒を……」

「ケンイチ、そんなものがあるのか？」

「聖騎士様？」

アキラとアマランスが、俺のほうを見ている。

俺は、魔物退治に使えそうな知識を思い出した。

228話 溺れる

サクラの近くに広がる広大な台地を測量中。

とりあえず川だけを測量しているが、本当に広大で数百kmに広がっている。

これを全部測量するとなると、どれだけ日数がかかるか解らない。この仕事が無事に終わったら、少しずつ人を雇って測量させるのもありかもしれないが――。

この世界の方式で測量をさせたら、一体何年かかるやら……。

川を遡った俺たちは湖を見つけた。

その中の島に見える遺跡らしきもの。

これはもう素敵な冒険の予感しかない――と思ったのだが、遺跡にはヒポグリフらしき魔物が住み着いていた。

こいつに毒を飲ませて倒そうと試みたのだが、失敗に終わった。

1度失敗したからといって、ここで諦めるわけにもいかない。

しばし悩んでいた俺は、ある元世界の知識を思い出し、シャングリ・ラを検索した。

「これだ！」

俺は目当てのものを見つけた。

ヒポグリフは獣というよりは鳥の要素のほうが大きいのではないだろうか？

それなら、獣に効く毒よりも鳥に効く毒のほうが効果が高いはず。

俺は痛み止めなどに使われる薬を大量に購入した。

バサバサと葉のパッケージが落ちてくる。

「ちょっと手伝ってくれ」

「にゃー？」「なにをするんだい旦那」

「この箱を開けて、中の茶色の薬を出してこの器に入れてくれ」

本当はオレンジ色なのだが、それに相当する単語がないので説明がしづらい。

近いのは炎色なのだが、こいつの色はそれとはちよつと違うような気がするし。

「ケンイチ？ これって鎮痛剤か？」

アキラがオレンジ色の錠剤をつまみ上げた。

「ああ、こいつが鳥種に禁忌だって聞いたことがあった。やつが鳥なら効くかもしれん」

「なるほどなあ。獣じゃないのか……確かな……」

「——と思っただけだぞ。これが上手くいくかわからん」

「ふうむ……聖騎士様は、薬学にも詳しいのだのう……」

アマランサスが俺の後ろで作業を見ていたのだが、手伝いはじめた。

「一つ欠点がある。こいつは苦いんだよな」

「ああ、ケンイチ、透明なセロハンみたいなのやつがあったろ？ 苦

い薬を飲むときに使う……」

「あゝえゝと、なんだっけ」

「あゝえゝと……」

「あれだよあれ！」

「そう、あれ」

「2人とも、なに言ってるにゃ？」

ミャレーが首を傾げている。

「オッサンになるとな、単語が中々出なくなるんだよ」
オッサンが2人で腕組みをして、ウンウンと唸っていると思いい出した。

「お、お……」

「オブラートか！」

「そうそう！ それだ！ ははは！ まったく、オッサンはしゃーないな。ケンイチ、ビール」

「おいおい」

アキラは祝福の力でアルコールを分解できるので、出してやる。

「ははは、サンキュー！」

「ニヤメナも少し飲むか」

「ええ？ いいのかい、旦那？」

「少しならいいだろう。戦闘もないだろうし」

「妾はいらぬぞえ？」

「うーん、うーん、それじゃ俺もいらねえ……夕方の楽しみにとっておく」

ニヤメナは飲みたそうだが、有事に備えるという気持ちのほうが大きいのだろう。

「ははは、すまん俺だけ」

アキラがビールを飲みながら笑っている。

ビールの話をしながら錠剤を千粒ほど出し終えた。

「旦那、これが毒なのかい？」

ニヤメナが、錠剤を爪の先で摘んでいる。

「いや、俺たちには毒じゃないが、鳥には毒になるんだ」
「へ」

もちろん、鎮痛剤だって大量に飲んだら、人間にだって毒だけだな。

それはいいが、こいつをどうやってヒポグリフに飲ませるかだな。

俺は、さっき話に出たオブラートを購入してみた――200枚で500円だな。

透明なペラペラを1枚取り出すと、口に入れてみる。

「これって濡れると溶けるんじゃないのか？」

肉の中に混ぜ込んで溶けてしまうと使えないが、俺のつぶやきにアキラが反応した。

「いや、溶けないと思ったけどな……」

アキラはそう言うが、俺の口の中では溶けている。

オブラートで包んだ飴なども口の中で溶けるしな……。

試しにアイテムBOXから水を出すと、オブラートを浸す――が溶けない。

どうやら体温で溶けるようで、水に溶けているのではないらしい。初めて知った。

「へーそうなのか。それじゃオブラートは使えるな」

錠剤を10錠ずつぐらいにわけてオブラートで包んでいく。

獣人たちの手じゃ、やりにくいらしい。爪も生えているしな。

ヒモを結んだりとかは器用にこなしているのだが……。

アネモネにも手伝ってもらう。

「ケンイチ、なんでこんなことするにゃ」

「この薬がすごく苦いんだよ。魔物に食わせる前に吐き出されちゃ毒が効かないだろ？」

「そんなに苦いのかい？」

「あ……」

俺が止める前に、ニヤメナが一粒摘むと口に中に放り込んだ。

「ぐええ！ ペっ！ ペっ！」

好奇心からだろうが、彼女はすぐに薬を吐き出した。

「いくら毒じゃないからと言って、信じられんことをするなあ」
「ががぎぎ……あぎぎ、にがああああ！」

尻尾から背中まで毛を逆立てた彼女が、のたうち回っている。

のたうち回るほど苦くはないと思うのだが、獣人たちにはそう感じるのかもしれない。

「だから言っただろう」

「まったく、トラ公はアホだにゃ」

「ほら、水だ。口をゆすげ」

ニヤメナが俺の手からペットボトルを取ると、うがいをして水をなんかいも吐き出している。

「鎮痛剤って苦いのが多いよな」

「鎮痛剤の大本になった、ヤナギの木がすでに苦いしな」

「良薬口に苦しって言うけどなあ」

「イブ○ロフ○ンとかも苦いし……」

そんなことより準備はできた。

再びシャングリ・ラから肉を買って、オブラートに包んだ薬を埋め込んでいく。

今度は肉を20kgほど買い込んでみたが、魔物を毒殺なんて、あまり褒められた偉業とは言えないと思うが。

「普通に戦って討伐するなら、物語になると思うが——毒殺ってのはどうなんだ？」

「真正面からぶつかるだけが闘いではありません。敵の弱点を突く――聖騎士様の知略を誇ることができましょう」

アマランサスがそういうのだから、そういうものなのだろう。

そもそも、貴族の偉業をまとめた物語ってのが、面白おかしく誇張されたものだしな。

俺の場合は誇張していないのだが、それを読んだ者は、いつもの誇張されたものと認識しているのかもしれない。

成り上がり者が目立ちたくて、派手に書いていると――。

巷にいる吟遊詩人も誇張しているらしいしな。

そういう文化なのだから仕方ないが、普段から誇張されたものを使ったりして、それで報告書になるんだろうか？

戦などになったら、昔の大本営発表みたいな感じになりそうだなあ。

「アネモネはどうだ？ 毒より、真正面から闘いたいかい？」

「ケンイチと一緒に闘いたいけど、ケンイチが怪我とかしたら嫌だし……」

「それなら安全なほうがいいと？」

「うん」

俺だってそうだ、家族を危険な目にあわせたくない。

肉をいじりながらアキラが叫ぶ。

「ケンイチ、勝てばいいんだよ！」

「勝てば官軍か？」

「そうそう、どんな汚い手を使っても勝てば英雄ってやつよ」

「昨日話していた、毒入りワインとかか？」

「ははは、そゆこと」

「妾は共和国の無敗の將軍とやらに飲ませてやりたいのう……」

「帝国皇帝じゃなくてか？」

「そちらは、まだ話し合いができる余地があるわえ」

同じ女同士として、通じるものがあるということなのだろうか？

「そりゃ、甘い上物ワインとかいって、毒入りワインを共和国に流通させ弱体化を狙うって手もあるとは思うが——人としてやっていいことなのか？」

「殺られる前に殺れ——この世界の鉄則だぜ？ ケンイチ」

「うーん……」

俺たちが危ない話をしている横で、獣人たちが肉を食いたそうだ。

「ケンイチ！ この肉美味そうだにゃ！」 「口直しに食っていいか？」

「生は駄目だぞ？」

「食わねえよ！」

皆で食べるように1kgほど取り置く。

昼は焼き肉にしよう——とか思っていたら、ベルとカゲに肉を取られた。

「おい、ベル！」

肉を啜えた彼女たちは、あっという間に消えてしまった。

まあ、彼女たちはいつも生肉食っているから平気なのだろうか？ 野生の豚じゃないし、そんなに危ない病気とかはないと思うのだが。

生肉の中に葉を仕込み終えたので、俺が1人で車に乗って湖の畔に設置しに行く。

昨日置いた板がそのままになっているので、そこに置けばいいだろう。

畔の砂地に到着したので、車から降りると板の上に仕込んだ肉を出す。

見渡せば鏡のような水面をした美しい湖。

深度はどのぐらいあるのだろうか？

人工のものなのか、それともカルデラのようなものなのか。

この世界に観光みたいなものはないが、元世界なら間違いなくよい観光地になっただろう。

ウロウロしていると、ヒポグリフに襲われる心配があるので、早々に撤退。

皆の所に戻ってきた。

「ケンイチ、また待つのか？」

アネモネが、三脚に載せた望遠鏡を覗いている。

「そうだな。待つのも作戦のうちだし」

「戦わずに魔物を排除できるなら、それに越したことはないぜ？

無理やり『なんとかせよ！』とか言われるより100倍マシだ」

アキラの話では、帝国の皇帝はあまり悠長な性格ではないらしく、力押しが多いという。

「もうなあ、他の將軍たちからも皇帝の説得をやらされたりして大変だったぜ」

かの皇帝はアキラの話なら聞くのだそう。

「随分と愛されていたみたいじゃないか」

「冗談ヨシ子さん。俺にはセンスがいるからな」

話を聞いていると、アキラも皇帝に好意があったのではないだろうか？

それではばらく彼女に付き合っていたと――。

そのあと皇帝が今の地位が盤石になったから逃げ出した……。

アキラと話をしていたら、アネモネが叫んだ。

「ケンイチ！ 来たよ！」

「どうだ？ 食べてるか？」

「うん、食べてる食べてる！」

オブラートは機能しているってことか。

どのぐらいの量が入れば効くのかも解らんしなあ。

1発で効かなかったら、再度不凍液攻撃もしてみるか。

「あれで効かなかったら、俺の油を湖に撒いて火をつけようぜ」
アキラが物騒なことを言い出す。

「ストップ・ザ・環境破壊だろ」

「ははは、遺跡も油で満たして火を点ければ、攻略が簡単だぞ？」

「それは最後の手段にしてくれ。これだけの美しい所を燃やすのはもったいないだろ？」

それにアイテムや貴重な資料があるかもしれないしな。

「聖騎士様は、ここをなにかに利用するつもりなのかえ？」

「ここを別荘にしたりできるかも——」

「確かに景色は素晴らしいわえ」

「ここに街を作ればなあ……」

この大地の上は腐葉土が少なく、畑には向かない。

サクラから100km以上離れているし、ちよっと現実的じゃないかな？

難しいが、なんとかできないかと考えてしまうほどに、この景色は美しい。

美しい景色を眺めつつ、結果がでるまでしばらく待つことにした。

「まあ、旦那が待つっていうなら待つぜ。あんなのと喧嘩したんじ

や、命がいくつあっても足りねえし」

「そうだにゃー」

「珍しく意見が一致しているじゃないか」

「そういうときもあるにゃ」

昼は焼き肉を食い、夕飯はシチューのリクエストをもらったので作った。

そして夜は、ちょっと離れた場所で獣人たちとハッスル（死語）。毛皮をなでなでしつつ、次の日になった。

朝飯のグラノーラを食いながら、望遠鏡を覗く。

今日も天気はよい。湖は波一つなく、鏡のように澄む。

「うん？ 巣の中で突っ伏しているような」

魔物はまだ寝ているのか？

それとも毒が身体に回って調子が悪いのか。

「見せて！」

アネモネに見せてやると、台の上に乗って彼女が覗き込む。

「今日は頭を上げてないね」

「もしかして、毒が効いたのかもしれない」

「ほんじゃ、飯を食ったら早速やるか？」

俺もアキラの話に同調した。

「そうだな、ちょっと挑発してみよう」

「やるにゃー！」 「まってました！ 急いで食うぜ！」

「別に急がんでもいいよ」

飯を食い終わったので、望遠鏡などをアイテムBOXに収納すると、皆で車に乗り込んだ。

運転席側にベルがやってきたので、窓を開ける。

「にゃー」

「安全を確認したら行くって？ 解ったよ」

ベルとカゲは森の中で、俺たちの様子を見ているようだ。

やはり天敵というのが解っているのだろう。

エンジンをかけて出発する。

「にゃー！ 行くにゃー！」 「おおっ！」

なん回か車で走っているの、草むらには道ができています。

そこをトレースするように走る。

そのまま砂地にやってきて、しばらく走り回ってみたが敵は動かない。

車を停めるとアイテムBOXから双眼鏡を取り出した。

「動いている気配はないな……」

巢で固まったままだ。

「ケンイチ、見せて！」

アネモネに双眼鏡を渡すと、1人で車から降りてドローンの用意をする。

「アネモネ、見張っててくれ」

「うん」

1号機はヒポグリフに撃墜されてしまったので、2号機を買う。前と同じものは売っておらず、新型に変わっていたので、それを購入。

ちよっと信頼性に欠ける某国製だが、次から次へと新型に変わるそのバイタリティは羨ましい。

「ポチツとな」

ダンボールの箱が落ちてきたので、クワッドローターのドローンを組み立てる。

プロペラなどがセットされていないのだが、組み立ては簡単だ。コントローラーも前とほぼ同じだが、カメラの画素数が上がっているらしい。

カメラユニットは日本のソニー製らしく、4Kで録画できると書いてある。

マジかよ——なんでもかんでも、どんどん画質が上がるなあ。

640×480とかでザラザラの動画でも喜んで観ていたオッサンなので、画質はあまり気にしないんだが、素直にすごいと思う。感心している間に組み立てが完了したので、ドローンを発進させた。

「おおっ！ ケンイチ新しいのか？」

アキラが、コントローラーについている液晶画面を覗き込んでいる。

「そうだ。前に落とされたやつも回収しておかないと……」

「沈んだんじゃね？」

「プラが多いから、浮かぶと思うんだがなあ」

話している間に、青い空の下を飛び、ドローンが遺跡に近づいていく。

「ケンイチ！ 魔物が起きたよ！」

「マジか！」

慌てて高度を落とすと、水面近くを飛行させる。

一定高度を保ちながら飛行——なんてことも簡単にできるので、難しい操作はいらない。

多分、あの身体じゃ泳ぎは下手だと思うので、水面近くまで降下させたのだが――巨大な水柱が上がった。

「うにゃー!」 「旦那! 魔物が湖に落っこちたぜ!」

「なんか墜落したような感じだったが……」

アキラの言うとおり、俺の目にもそんな感じに見えたので双眼鏡を覗き込む。

翼を水に漬けて、魔物がジタバタしているのが見えた。

「あれじゃもう飛べないだろう。近づいて止めを刺すか」

「放っておけば、死ぬんじゃない?」

「まあ、それが確実だとは思うが、これ以上待つのもな」

「それもそうか」

皆の意見も聞いてみるが、止めを刺して中の島に上陸することで一致した。

そうと決まれば、ベルたちを呼ぶ。

「おおーい! ベル! 行くぞー!」

俺の声が聞こえたのか、黒い疾風が草の間を走ってきた。

「にゃー」 「みゃ」

「魔物は湖に落ちたんだ。止めを刺して、向こうに上陸する」

俺はベルに中の島を指差した。

「にゃ」

当然、一緒に行くらしい。

俺は畔に船を出した。

サクラの湖で使っている船外機つきの船だが、普段は収納してある。

住民たちが使う船には、カールドンが作った船があるしな。

船は半分水に浸かっているのだが、ここには栈橋はない。
車を移動させて船に横付けして栈橋代わりにする。
車のボディを伝って船に乗ればいい。

真っ先に森猫が2回車の上をジャンプして船に乗り込んだ。
次にアネモネを抱き上げて、車の上に載せてやる。

アマランサスは、華麗にジャンプして船に乗り込み、俺とアキラも船に乗った。

車をアイテムBOXに収納すると、獣人たちに船を押ししてもらう。

「行くにゃー!」 「行くぞー!」

「大丈夫か?」

「大丈夫にゃ!」 「おりゃー!」

獣人2人に押されて船が水に浮かぶと、押した彼女たちも飛び乗ってきた。

さすがに身が軽い。

皆が揃って船に乗ったので、アキラに操船を頼む。

「ほんじゃアキラ、頼む」

「おっしゃ任せろ」

アキラが船外機を始動させると、船をバックさせて岸から離れた。
十分に離れたところで船をターンさせて、水に浸かった魔物の所に向かう。

肉眼でも見える距離だ。

「アキラ、最初は魔物の周囲を、ぐるりと円を描く感じで」

「オッケー!」

「オッケーにゃ!」

魔物の巨大な翼は開いた状態で水に浸かっており、バタバタと動かしはいるが――これではもう飛び立てまい。

鳥ってのは地面などを蹴った反動で飛び上がる。

水に浸かつてはそれまでできないだろうし、水鳥のように水面を滑走するようにも見えない。

「よし、頭のほうにゆっくりと接近」

「了解！」

船が微速で魔物の頭に接近した。

巨大な鷲の頭が半分水没している。

「さて、どうやって止めを刺すかな——弩弓で頭蓋を貫けると思っ
か？」

「やってみるにゃ！」

鳥ってのは軽量化するために、骨は硬くはないと思うが。

獣人たちに、アイテムBOXから出したクロスボウを渡した。

弦を引くと、彼女たちは矢を番え狙いを定める。

「いっくにゃー！」「よっしゃ、せーの！」

呼吸をピッタリ合わせると、2本の矢がクロスボウから発射され、
見事に鷲の頭を貫通。

羽毛に覆われた魔物は頭を水没させて、そのまま動かなくなった。

「やったな！」

「頭を狙えば防御力は低いみたいだな」

アキラの言うとおり、上空からの一撃離脱に特化した魔物なのだ
ろう。

普段なら恐ろしい相手だが、水に落ちてしまっただけの射的の
的にしかならん。

ゆっくりと魔物に近づくと、水中に馬のような下半身も沈んでい
る。

普通の馬は泳げるのだが、こんな翼が生えた身体では泳ぐことも

できないだろう。

合体したら最強生物になるどころか、弱点が強化されてしまったらしい。

生物ってのは進化の果てに最適化されて、その形が決まっている。それを強引に合成しても、ろくなことにならないってわけだ。

「収納！」

巨大な魔物がアイテムBOXに収納された。

「やったにゃ！」「なんだかんだで仕留めちまうんだから、旦那はすげえ！」

「でも、ちょっと物足りないね」

「まあ、安全第一だよ、アネモネちゃん」

「アキラの言うとおりだな」

「ああ、これでまた聖騎士様の偉業に新たなる頁が……」

アマランサスが両手を合わせて感激している。

「毒殺したのに、艱難辛苦の闘いの果てに凶悪な魔物を倒した物語として語り継がれるのか？」

「過程はどうあれ魔物の遺骸があるのですから、そこに向けての物語を作ればいいのですわえ」

これなら拾った魔物の屍かばねでも物語が作られそうな勢いだな。

なにはともあれ俺たちの行く手を阻む魔物は退治した。

上陸する前に、叩き落とされてしまった先代のドローンの亡骸を探しつつ、湖を探索する。

水はとても澄んでいて底まで見える——水深は数十メートルってところだろう。

魚は沢山いるようだが、他の魔物はいない。^{マス}

またクラーケンでもいたらどうしようかと身構えていたが、魔物

はいないようだ。

こんな場所に湖なんて水源はどうなっているのか、まったくの不明。

川になって流れているってことは、滾々と水が湧いているはずなのだが、ここは他の土地より高い位置にある。

普通では、水が湧くなんてありえないはずだと思うのだが……。

「あつたぜ旦那！」

ニヤメナがドローンを見つけてくれたので回収したが、バキバキに壊れてしまっていて、こいつはもう使用不可能だ。

ゴミ箱に投棄して、新しいものを使うことにしよう。
結構役に立ってくれたな。いままでありがとうな。

ドローンと魔物を回収したのち、俺たちは中の島に上陸することにした。

「ケンイチ、あそこがいいんじゃない？」

アネモネが指差す方向に石でできた栈橋のような場所が見える。

こいつはおあつらえ向きだ。

そこに船を留めて、俺たちは島に上陸した。

石造りの遺跡らしきものを見上げると、草に覆われていて、沢山の白い鳥が巣を作っていた。

「ケンイチ、船を収納しなくてもいいのか？」

「ここに盗むやつはいないだろう。いつでも逃げられるように、ここで留めておこう。俺になにかあったら、こいつで逃げてくれ。アキラの召喚獣くそまもあるから逃げられるはずだ」

「私は、ケンイチと一緒にいるから！」

「当然妾もじゃ！」

「ウチもにゃー！」 「俺だってそうだぜ」

「皆の気持ちはありがたいが、どんな不測の事態が起こるかわからんしな」

皆に確認をしてみたが、困難な冒険に臨む意思は固い。
それならまずは――建物の中に入る前に周囲の把握だな。

ここからならドローンで遺跡の全体を見渡せる。

229話 電車ゴッコ

俺たちは、台地の上を流れる川を辿り湖を発見した。

そこに巣食っていたヒポグリフという魔物を、毒殺という手段で撃破。

ちよつと卑怯か？――いいのだ、俺は英雄や勇者ではない。

楽して倒せるのに無理に戦う必要はないのだ。

スケルトンだって、アイテムBOXに入れるという手段で倒したではないか。

それに見ているものはいないのだから、艱難辛苦の果てに凶悪な魔物を倒したと言っても、それが正史になる。

歴史つてのは勝った者が作れるのだ。

魔物を倒した俺たちは湖の中心になる中の島に上陸した。

緑に埋もれた石造りの遺跡。

獣人たちはお城だと言っていたが、お城っぽくはない。

遺跡の所々には白い鳥が巣を作っており、繁殖地になっているようだ。

「ケンイチ！ どうするにゃ？！」

「まずは、空から全体像を見てみよう」

俺はアイテムBOXから新しいドローンを取り出した。

今まで使っていたものは、ヒポグリフによって破壊されてしまったのだ。

自分の縄張りを荒らす生き物だと思ったのだろう。

完全に破壊されてしまったので、もう使用不可能だ。

2号機を空に飛ばす。

「うひゃー！ やっぱり旦那の召喚獣はすごいぜ！」

「たかーい！」

同じクワッドコプタータイプで、限界高度は100m。

多分電波法かなにかの法律で出力が決まっているせいだと思われる。

中を開けて改造すれば、もっと飛距離を延ばせるかもしれないが……。

まあ、いまのところ、これで困ってはいない。

飛んでいる様子は、コントローラーについている液晶画面で見ることができる。

映し出された映像は、直径30mぐらいの穴が開いており、深さは50mぐらいだろうか――。

下になにかガラス製のドームらしきものがあるように見えるが、そこまでドローンを降ろすのは難しそうだ。

もっと近づいてからのほうがいだろう。

穴の岩肌に沿って建物が造られているが、人工物があるのは俺たちのいる側だけらしい。

反対側は岩肌のまま、それが下まで繋がっている。

穴は真円に近く、どう見ても人工的に開けられた穴だ。

「ケンイチ！ 見せて見せて！」

「アネモネ、ちょっと待ってな。皆にも見えるようにしたほうがいいだろう」

ドローンを呼び戻すと、アイテムBOXからノートパソコンを取り出した。

今の映像は、コントローラーのSDカードに記録されている。

そいつを取り出してノートパソコンに入れば、皆で映像を見ることができる。

「あ、絵が出た！　すごい！」

「うにゃー！　鳥から見るとこんな景色なのきゃ？」　「すげー穴だな！　どうやって掘ったんだ？」

「ぱつと見、なにかの実験施設みたいな感じだが……」

アキラの言葉だが、俺の第一印象もそんな感じだった。

「これほどの建築物を造るとなると費用と人手はいかほどだろうのう……」

やっぱり為政者のアマランサスはそこらへんが気になるか。

「アマランサスの言うとおり——これだけの建築物を造るためには膨大な費用と人手が必要だ。それだけの大工事が行われれば王国が気づかないはずがないが……」

「それでは聖騎士さま、これは先史時代のものなのかえ？」

「解らん——そこまで古いようにも見えないがなあ……」

さて、見れば入り口らしきものもあるが——罨がある可能性もある。

準備をしよう。

まずは安全帯だな。

シャングリ・ラで安全帯を購入するが、安物で役に立たないと困る。

それなりのものを購入することにした。1本9000円が6本。それにつなぐハーネスが1本4000円。こいつは5本。

「皆、これを巻いてくれ」

「旦那、これは？」

「落とし穴除けだ。皆で繋がってれば、1人落ちそうになっても平気だろ？」

「なゝる」　「トラ公は、そんなことも解らないのきゃ？」

「うるせえ！」

「先頭は獣人たちに任せたいが……」

「ウチらのほうが反応が早いじゃ！」

「俺もそう思うんだよ、悪いけど頼む」

「任せてくれよ、旦那！」

「ここを調べ終わったら、ブラシをかけまくってやるからな」
俺の言葉を聞いたニャメナが、尻尾を立てている。

「なに今から盛^{さか}ってるじゃ？」 「盛^{さか}ってねえよ！」

「アキラ——あとは罠^{わな}っていったらどんな感じだ？」

「そうだな、よくあるのが矢が飛んでくるやつだな」

「なるほど」

壁から仕掛けられた矢が飛んでくる——ありがちな。

それらの対策するために、アイテムBOXからポリカーボネート製の透明な盾を取り出した。

「前に使った透明な盾にゃ！」 「確かに、これなら矢は通さねえぜ」

皆と罠^{わな}について話していると、元世界のゲームを思い出した。

なんか侵入者に罠^{わな}を連続で当てて倒すゲームがあったな。

「あと、丸い石のゴロゴロとか？」

「ははは、ゲームや映画だと定番だが、そういう罠^{わな}には出会ったことがないぞ？」

この手の探索もしたことがあるアキラでも、丸い巨石のゴロゴロには遭遇してないらしい。

「もしかして、作るのが大変なんだろうか？」

「多分な」

「高いところに持ち上げるのも大変だしなあ」

「罠^{わな}が発動するたびに、それをしなければならんし」

一応、獣人たちにも聞いてみる。

「石が転がってくるとか聞いたことがないぜ？」 「攻城戦で石を落とす話は聞いたにゃ」

「それとはちよつと違うんだがなあ」

どうも丸い石のゴロゴロは、俺たちの世界独特の文化らしい。

まあないならないで越したことはない。

そんな罨じゃ、ポリカの盾じゃ防げないし。

アネモネの聖なる盾プロテクションの魔法ならなんとかなるかな？

準備ができたので、石でできた入り口らしき場所から入る。

扉はなくてただの通路だが、ベルたちが入らない。

「ベル、一緒に行かないのか？」

「にゃー」

「ええ？ 解った」

「ベル姉さんはなんだった？」

アキラが通訳を求めてくる。

「この島の外周を探索してから行くってさ」

「はは、そっちが気になるのか」

ベルとカゲに別れを告げて中に入ると、巨大な円形の縦穴に埋め込まれた石造りの建物の中。

正面は吹き抜けており、そのまま縦穴に落ちてしまう構造だ。

柵などもなく、建物を支えている太く四角い柱以外はない。

左右を見れば——幅が5mほどの廊下も縦穴に沿って作られており、円弧を描いている。

「おおーすげー！」 「すごいにゃ！」

「おい、危ないぞ」

獣人たちが際まで行つて、下を見下ろしている。

これじゃ安全対策の意味がない。

とりあえず、そこまでは安全らしいので俺たちも向かう。

下を覗くと――びゅうびゅうと風が吹き抜け、下まで50mほどの巨大な縦穴が開いている。

「こりゃまたすげーな！」

アキラが叫んだ。

「すごい！」

「なんともみごとじゃのう」

「これ、絶対に観光地になるのになあ」

「ははは、この世界にやそういう概念がないからな」

「帝国でもないのか？」

「まあ、貴族なら別荘ぐらいはあるがな」

アマランサスに聞いても、景色を見たりするために旅行をするこ
とはないらしい。

この世界の人間が旅行をするとなると、商売かなにか目的があつ
て、その地に向かうということだ。

俺はアイテムBOXからドローンを出して再び飛ばした。

空中から俺たちのいる場所を見ると、下にもずっと階下が続いて
いるようだ。

続いてドローンを降下させる。

やはり、ガラスで覆われたドームのようなものがある。

温室かなにかだろうか？

知られていない未知の植物園とか？

吹き抜ける風の音だけではない。

俺の気のせいかもしれないが、なにか低周波の音か振動のような
ものが聞こえるような気がする。

「なんか、ゴー！　っていう地響きのような音がしないか？」
「するにゃ！」　「するぜ旦那。これは滝の音だと思うが……」
獣人たちが耳をクルクルと回している。

「滝？」

ここは地上から10m――いや、川が流れているってことはサクラのほうが低くなっているはずだから、この湖はもっと高い位置にあるのか。

下まで50mってことは、あそこが本来の地上の位置なのかもしれない。

岩盤の中に滝があって、湖の水が直接流れ落ちている場所があってもおかしくはない。

「ケンイチ、あそこがゴールなら、ここから降りれば一直線だけだな」

「途中も調べたいんだが……その前に50mもロッククライミングしたくないぞ」

「はは、冗談だよ。ゲームみたいにショートカット見つけてボスを倒せば終了ってわけじゃないからな」

「下に階が続いているってことは、落とし穴の心配はないか……」

「そうだな。もし穴が開いたとしても数メートルだ」

「だが、1メートルは一命取るだぞ？」

念の為に、安全帯をつけることにして、電車ゴツコのようにハーネスで皆を連結する。

当初の予定どおりに先頭は獣人たちである。

罾を感知するために1.5mほどの鉄の棒をもたせた。

本来は、ロープを固定するもののように、先端が輪になっている。

そして壁側にはポリカーボネートの透明な盾。もちろん矢除けである。

アネモネは盾を持って歩けないので、俺にくっついてる。

最初は通路を左に曲がって進む。

「盾は壁側にな！」

「旦那、なんで壁側ばかり注意するのさ」

ニヤメナのつぶやきにすぐにミャレーが反応した。

「トラ公はホントにアホだにゃ！ そっち側には空が見えているのに罠なんかあるはずないにゃ」

「そー！ うるせえ！ ちょっと勘違いしただけだ！」

彼女はミャレーにそう言われて、そのとおりだと思ったのに違いない。

獣人たちが、ゴツゴツと鉄の棒で床を叩きながら歩く。

今のところ問題はない。

「ケンイチ、部屋があるにゃ」

「入ってみるか」

ミャレーが盾を構えて部屋に入った途端――短い矢が飛んできて透明な盾に命中した。

彼女が耳を伏せている。

「お、やっぱり罠があるのか」

「旦那、罠が生きてるぜ」

「準備しておいてよかったな」

ホッとしたのだが部屋の中は空。

空部屋なのに罠だけあるのかよ。

部屋を出て左にずっと進むと、行き止まりになった。

完全な石の壁で、その向こうは岩盤。なにもなさそうだ。

「ケンイチ、ケンイチの重機で床を壊して下に降りねえ？」

アキラが早速探検に飽きたのか、そんなことを言う。

「まてまて、使えるならあとで使いたいんだけど——こんな立派な施設なら、秘密基地にしたら素敵じゃん？」

「う？ うーん、気持ちは解る。それじゃ——」

アキラからの提案は車を使うこと。

SUV車に乗れば、人が落ちるような落とし穴に落ちないし、盾をくりつければ矢も防げるだろうと言う。

その前に車を出して床が抜けないだろうな？

まあ、これだけの石材を使っいて2メートルはどうってことはないと思うが……。

とりあえず車を出すと様子を見る——大丈夫だ。

そのあと皆に手伝ってもらい、透明な盾を右側面に並べて固定してもらった。

ちなみに固定はダクトテープを使う。

「キター！ アメリカ人の正義！ ダクトテープ！」

アキラが灰色のダクトテープを張りながら喜んでいる。

「ケンイチ、右側だけでいいの？」

「反対に進むときは、後ろ向きに進めばいい」

「バックで進んで落ちるなよ、ははは」

「そこまで運転が下手じゃないぞ」

まあ、矢なら車のボディは貫通しないと思うのだが、盾は念の為。これ以上傷もつけないな。

取り付けることはできたのだが、ドアの開け閉めが少々面倒。

まあ、歩くよりは速いか。

「よし、皆乗れ」

「「おっ！」「」

乗員は6人なので余裕だ。助手席にはアネモネが乗っている。後ろにはアキラとアマランサス。3列目シートはいつもの獣人たち。

車で廊下をそろそろと走る。

別に問題はないらしいようだが、俺が気にしすぎなのだろうか？少々心配しすぎの感はあるのだが、部屋の罨は生きていたしなあ……。

そのまま車が進むと行き止まりで、右側に部屋、左側に下に行く階段がある。

「ケンイチ、あそこの部屋を見てくるにゃ」

「頼むから2人で行ってくれよ」

「解ったにゃ」

このラ○クル、リアゲートを後ろから開けられるように改造がされている。

中古なので、前のオーナーが改造したものだろう。

まさか異世界で獣人たちに使われるなんて夢にも思わないだろうが。

獣人たちは、ダクトテープで車の側面に貼り付けられた透明な盾を引っ剥がすと、2人で部屋に向かう。

ミヤレーが先頭で部屋を覗いたのだが――。

「みゃ！」

「どうした?!」

「また、矢が飛んできたにゃ！」

「やっぱり、罨は生きているのか——廊下にもあるかもしれんから注意しないとな」

彼女たちを待っていると部屋の所で騒いでいる。

「おゝい、なにかあったか？」

「なにもないけど、下から棘が出てくる罨があったにゃ！」

「あゝ、そういうのもあるよなあ」

獣人たちが戻ってくると、盾を張り直した。

下に向かう階段があるので、俺たちも車から降りる。

「でも旦那。下から棘が出てくる罨は床に穴が開いているから、暗い所以外は大丈夫だと思うぜ」

「それじゃ、足下が暗い場所だと注意しないとな……」

元世界で平和に平々凡々と過ごしていれば、こんな人の悪意に晒されることはない。

これはこれで探検らしくていいのだが、これは遊びやアトラクションではなくてマジだ。

罨にかかれば大怪我から致命傷までありえる。

「下に降りるか……」

一応、マッピングもする。

「ケンイチ、私にやらせて！」

「それじゃ頼む」

マッピングはアネモネに頼んだ。

「廊下に部屋が2つと罨が——あるよっと」

「いつのものか知らんが、まだ動くのがすごいな」

アキラの言うとおりだが、動いたり動かなかったりってのも逆に怖い。

1回目は錆びついて動かなかったのに2回目には罫が稼働したとか――。

ブツブツ言いながら下に降りる。

まったく同じ作りなので、再び車を出すとバックで移動した。

途中の部屋を探してもらうも、なんもなし。

廊下の端まで行くと、再び下に降りる階段。

「ずっとこの調子かね？」

「そうかもな」

アキラが物足りなさそうな顔をしている。

「聖騎士様の身に危険が及ばぬようであれば、妾はそれでよいわえ」

「まあ、攻略しやすいなら問題はないが……」

「この巨大な施設が聖騎士様のものになりますわえ」

「うん、それは素直に嬉しいけどな」

再び車に乗って移動――今度は前進だ。

少々、冒険と呼ぶには間抜けな感じも否めないが、わざわざ危険を冒すこともない。

部屋があったので、再び獣人たちに調べてもらう。

「うにゃー！」

ミヤレーとニヤメナが慌てて、部屋から出てきた。

「どうした?！」

「スケルトンにゃ！」

「え?!」

ついに魔物が出たか!

彼女たちは盾しか持っておらず、武器がない。

それにスケルトンといえば俺の出番だ。

俺は運転席から出ると、スケルトンの前に立つ。

目の前に現れた魔物は、カタカタ動く骨で古びた剣を持っていた。

「収納！」

生き物ではないスケルトンはアイテムBOXに収納できる。

そのまま廊下の縁まで行くと、入れたばかりのスケルトンを外に出した。

空中に現れたスケルトンは、そのまま落下していく。

「うにゃー！ バラバラになったにゃ！」 「ははは、こいつはいつ見ても笑えるぜ」

アイテムBOXから双眼鏡を出して下を覗く。

確かにスケルトンがバラバラになっており、動く気配はない。

散らばった骨を見て、獣人たちがゲラゲラと笑っている。

どうやら魔物を高い所から落下させて倒す——という行為が彼女たちのツボを刺激するらしい。

下にあるガラスの温室らしきものが壊れたかと思ったのだが、大丈夫のようだ。

ガラスに見えるが、ガラスじゃないのか？

なにか他の透明素材か？

それはそれで欲しい。

ここまで順調だったのだが、壁にぶち当たった。

文字通りの壁だが——そこに小さな通路があり、岩盤の中に下に向かう階段がある。

真っ暗なのだが、LEDライトもあるし別に困ることもないだろう。

「はーこう来たか……」

俺は頭をかいた。

「つくことは、向こうの岩盤の中にも、なんらかの施設があるか——
ゆっくりと下りつつぐると回り込んで階下に繋がっているか……」

アキラが縦穴の対面にある岩盤を指差した。

「とりあえず、俺たちが入ってみるぜ！」
名乗りを上げたのはニャメナだ。

「大丈夫か？」

「旦那の透明な盾もあるし、明かりもある！ 矢除けもできるって」

「これは、ゴロゴロ転がる岩の予感かもな」

アキラが不吉なことを言う。

「けど、この通路の幅なら、転がってきても大した石じゃないような……」

「50kgぐらいある玉がぶつかったら結構なダメージがあるぞ？」
アキラの言うことも一理ある。

獣人たちが安全帯をハーネスでつないで2人で入ってみるようだ。
頭にはLEDヘッドライト。両側に透明な盾を持ち、矢の罠に備える。

「ガスが出てもガスマスクもあるし、なんとかなるだろう」
——そう思っていたが、獣人たちの叫び声が聞こえてきた。

「ぎゃああー！」 「ふぎゃああー！」

「おい、どうした?！」

慌ててミャレーとニャメナが戻ってきたが、盾が透明な粘液で濡

れている。

「なんだこりゃ?!」

透明な粘液を指で掬ってみると、ヌルヌルと指に絡みつく。

「なにこれ! ヌルヌル!」

「ほう、これは面妖な」

「これってローションみたいだな、ははは」

「俺もそう思ったが……こりゃスライムか?」

「いや、旦那! こいつは触手だよ」「そうだにゃ!」

彼女たちの話によると、イソギンチャクみたいな生物らしい。触手をニョロニョロと伸ばしてきて、獲物を捕獲する。

「刺されるとトンデモなく痛いんだぜ?」「腫れるにゃ!」

「大丈夫か? 刺されなかったか?」

「大丈夫、旦那の盾のおかげさ」

「ふう……そうきたか……」

そのイソギンチャクがどのぐらいいるかも不明だが、スライムのときに使ったゴム胴長があれば大丈夫だろう。

スライムも刺胞を持ち、刺してくる生き物だったが、分厚いゴム製のあれには歯が立たなかった。

「アキラ、スライムのときに着たゴム胴長で突破できる」

「ああ、あれか……確かにな」

「私の魔法で倒しながら進むのは?」

アネモネは魔法を使いたいようだ。

「通路の中にどのぐらいの触手がいるか解らんし、もっと強い敵が出てきたときのために魔法は残しておくべきだろう」

「ふむ、聖騎士様の言うとおりじゃの」

「うん」

「それじゃ、俺の油を流し込んですべて焼き払うってのは？」

アキラがまた物騒な提案を出してきた。

「いよいよとなったら、それも仕方ないが、アイテムやら本やらがあると困る」

「まあ、アイテムがある可能性はあるな……」

「その前に、一番下から火を点けないと、手前しか燃えないんじゃないかね？」

「それもそうだ……」

彼は実際に油の海に魔物を沈めて焼き殺したことがある人物。

魔物の殲滅が目的ならそれでもいいが、今は探索をしている最中だ。

オダマキのダンジョンにあったような超常のアイテムがあったりすると困る。

元世界の科学でも再現できないようなチートアイテムがあるなら是非手に入りたい。

「旦那、本当にその穴の中に突っ込むのかい？」

ニャメナは、イソギンチャクが嫌なようだ。

「他に手がないだろう」

「下に降りちゃだめかい？」

「下？」

どうやら、ロープなどで下の階に降りてショートカットを狙っているようだ。

「うーん？ 獣人たちは身軽だから大丈夫だろうけど」

「私も大丈夫だよ！」

アネモネはそう言うのだが、ロープで下まで降りられるか？

「うーん……そうだ！」

俺はシャングリ・ラを検索した。探すのは縄ハシゴである。

8 mほどのものが2万6千円で売っている。

「ポチツとな」

ガチャと黄色い縄ハシゴが落ちてきた。

「縄ハシゴか——でもケンイチ、こいつを引っ掛けるところがないぞ？」

この手の縄ハシゴは、ベランダの手すりなどに引っ掛けるようになってるのだが、ここにはそんなものがない。

「縄でできたハシゴにゃー！」

獣人たちが伸ばして遊んだりしているが、俺はシャングリ・ラから鉄筋を2本購入した。

そいつを壁に開いた空き部屋に入れると、入り口の部分で横にして固定する。

ここに縄ハシゴを固定するとハシゴの長さが足りないので、こいつにロープを結んでひっぱっていく。

ロープの先に横にした鉄筋を結び、ここに縄ハシゴを引っ掛ければいい。

ハシゴの先端は、カラビナフック状になっているので、ガチャンと固定できる。

ハシゴの後端を空中に放り投げて下に垂らすと準備完了だ。

「旦那、下まで届いているぜ」

「これなら、私でも降りられる！」

「まあ待て待て、アネモネ。まずは偵察だ。皆で行ってなにかあつ

ても、このハシゴじゃ逃げるに逃げられない」

「うにゃー！ 任せるにゃ」「俺たちの出番だぜ！」

獣人たちは活躍できる場面が多くて、張り切っているようだ。

ミャレーとニャメナが、背中に透明な盾をくくり着けると、縄ハシゴを降りていく。

さすがに身が軽く、ひよいひよいと軽業師のよう。

「うにゃー！ にゃはは！」

「こらあクロ助！ わざと揺らすんじゃねえ！」

「こら！ 無茶するな！」

彼女たちの無茶っぷりに、たまらず注意した。

まさか、このぐらいでロープは切れないと思うが、こっちが見てハラハラするわ。

心臓に悪い。

ここから覗き込んでも下は見えない。

ドローンを出すか迷っていると、叫び声が聞こえてきた。

「ふぎゃー！」

これはミャレーの声だ。

「どうした！？」

下に降りるべきか、ドローンを出して確認すべきか？

俺は判断に迷った。

230話 燃える

サクラにある滝。

そこに流れ込む川を測量しながら遡ったら、湖と遺跡を見つけた。明らかに人が作ったもののようなのだが、皆の意見ではダンジョンになっている可能性が高いらしい。

ここまで来たら、探検をしないわけにはいかない。

俺たちは決死のダイブを敢行した。

少々のトラブルを躲して進むと、行く手には通路から溢れる触手が待ち構えていた。

刺されるととても痛いらしい。

俺がシャングリ・ラで購入した装備で躲せると思うが、獣人たちが階下ヘシヨートカットしたいと言いつ出した。

サイトで購入した縄ハシゴを伝って、階下に降りた獣人たちが――そこからミャレーの叫び声が聞こえてきた。

「ふぎゃー！」

「おい！ 大丈夫か？！」

俺たちのいる所から、階下の様子がうかがい知ることができない。俺が次に打つ手を考えていると、下から笑い声が聞こえてきた。

「はははは！」

「トラ公！ 笑ってないで助けるにゃ！」

「おい！ 大丈夫なのか？！」

俺の問いかけに反応が返ってきた。

「ひひひ！ 大丈夫だよ、旦那！ クロ助が落とし穴に落ちそうになっっているだけだから」

「ふう」

俺は胸をなでおろした。

「トラ公は性格悪いにゃ」

「お前には言われたくねえ——おっと！」

会話の途中でなにかがぶつかった音がする。

「どうした？！」

「旦那！ ここには降りてこないほうがいいねえ。罨だらけみたいだよ」

「部屋みたいなのは沢山あるにゃ！」

ミヤレーも落とし穴から這い出たようだ。

このままじゃ様子がまったく解らんので、ドローンを出すことにした。

4つのプロペラを持ったドローンが飛び立つと、空中から階下の偵察をする。

下は廊下の長さが少々短く、部屋の入り口らしきものが並んでいるが、階段も出口もない——袋小路だ。

その下には廊下の層はしばらく見えず、岩肌が続いている。

奇妙な作りだ——そう思っていると異変が起こった。

沢山並んだ部屋から白い骨がヨタヨタと出てきたのだ。

出てきたスケルトンは30体ほど。

「スケルトンにゃ！」

「畜生！ 罨だな！」

動きは遅いが確実に彼女たちを囲みつつある。

「2人とも戦うな！ ハシゴで戻ってこい！」

俺の言葉に、獣人たちが縄ハシゴに飛びついた。

あんなカタカタと動くスケルトンでは、縄ハシゴなんて登ってこれまい。

登ってきたミヤレーとニヤメナの手を俺とアキラとで掴んで引き上げた。

「ふう！ あそこは多分罠部屋にや」

「罠部屋？」

「ああ、俺たちは落ちなかったけど、落とし穴に落ちるとあの行き止まりの部屋に落ちて――」

「スケルトンに囲まれてボコボコにされるわけか」

「しかも、普通じゃ上れないにや」

脱出不可能の上に魔物が次々と襲ってくる――そこで詰みだ。

これがゲームなら回避できない詰みはクソゲーだが、これは現実。確実に侵入者を殺しにきているわけだ。

「旦那のハシゴがあるから戻ってこれたけどよ。こんなの造ったやつは性格悪いぜ」

ニヤメナが縄ハシゴを指差した。

「聖騎士様、妾が下に行って片付けてきますわえ」

アマランサスが自分の剣を取り出した。

「私の魔法で吹き飛ばす？」

「いやいや、スケルトンと言えば――この俺でしょう」

皆にそう言う俺は、縄ハシゴに掴まると途中まで降りた。

ハシゴの下には白いスケルトンたちがわらわらと集まり、剣を振る動作をしている。

別にアンデッドの相手をするために、律儀に下まで降りることは

ない。

ハシゴの途中で俺は叫んだ。

「収納！」

いや、叫ぶ必要はないのだが。

近づいてきたスケルトンを次々とアイテムBOXに収納する。

スケルトンは最初から死んでいるので、アイテムBOXに収納でき
るのだ。

収納が終わると、上に上がってステータス画面で確認——全部で
30体のスケルトンが収納された。

それが終わったら次にやることは決まっている。

断崖ともいえる階層から、スケルトンを落つことすのだ。

アイテムBOXから出されたスケルトンが次々と落下してバラバ
ラになる。

それを見た獣人たちが、また大受けしてゲラゲラと笑っている。

どうやら彼女たちはこの絵面がツボにはまるらしい。

全部出し終わったので、双眼鏡で下を覗くと、バラバラになった
スケルトンが山になっている。

後で回収できるなら、魔石を回収したいところだ。

サクラでこれをやってもよかったのだが、あそこの崖は低いんだ
よな。

スケルトンに適度なダメージを与えられそうにない。

まあ、一体ずつ出して、皆でタコ殴りをしてもいいのだが……。

双眼鏡でさらに覗く——円形の底の中心部分が黒く塗られている
のが解る。

そこになにかいるようなのだが……。

床が黒い上に、影になっているのでよく解らない。

「これで最後だろう」

スケルトンを出すと下まで落下していく。

俺はそれを見て、古いアニメを思い出した。

道を走るダチョウのような鳥をコヨーテが追っかけ回して、ひたすら崖から落ちるのだ。

そのシーンにそっくり。

それを見て笑っている獣人たちに言う。

「笑っているが、その触手がある通路を通るしかなかったぞ？」

「にゃ！」「し、しょうがねえ……」

笑っていた獣人たちが真顔になった。

ミャレーはそれほどではないようだが、ニャメナは本当に嫌そう。

「ニャメナ、そんなに苦手なら上で待っててもいいが……」

「冗談じゃねえ！ 獣人が切り込みから逃げたなんて、一生馬鹿にされちまう」

「そのとおりだにゃ。切り込み、先行偵察、索敵、獣人の仕事にゃ。それができないとなるとにゃ」

獣人たちは体力があって素早く、パワーもある。

その反面、難しい作戦などには向かないため、どうしても先頭で突撃する切り込み隊や、単独での偵察、索敵の仕事が多くなる。

俺たちのこの探検でも、獣人たちが先頭に立っているのはそのためである。

「わかったが、無理はするなよ」

「旦那あ、止めてくれよ！ そこは俺のケツを蹴り飛ばすぐらいしてくれよ！」

「それじゃ触手を突破したら、尻と尻尾をなでてやる」
それを聞いたニャメナが尻尾を立てた。

「よし！ やるぞ！」

「現金なトラ公だにゃ」

話はまとまったので、装備の準備をする。

以前購入した全身タイプの黒いゴム胴長は2着しかない。

追加で4着購入した――1着1万円、4着で4万円だ。

一緒に溶接用のゴムマスクを買う。こいつも4つ。

「ポチツとな」

真っ黒なゴムの服がドチャと落ちてきた。

「ネズミの時とかに使ったものより分厚いにゃ」

「薄いと刺胞が刺さるかもしれないからな。それじゃ意味がない。

こいつはスライムの攻撃も通さなかったので、触手の刺胞も防げるだろう」

アイテムBOXから衝立^{ついたて}を出して、女性陣に着替えてもらう。

こいつは下着姿か裸じゃないと着られない。

服の上に着ても中がムレムレになるから、服がびっしりとなつてしまうだろう。

「確かに、これなら平気だにゃ」

「ただ、すごく暑いから覚悟しておくように」

「解ったにゃ」「触手に刺されるよりはマシだ」

どうも、ニヤメナは触手に刺されたことがあるようで、それがトラウマになっているらしい。

本当なら無理はさせたくないのだが、獣人たちのプライドやらが色々絡んでくるので、彼女たちの好きにさせるしかない。

衝立の向こうで女性陣が着替えている間に俺とアキラも着替えるが、アネモネはこっちだ。

アキラには後ろを向いてもらい、アネモネのスーツを作る。

なにせ子ども用のゴムスーツなど、シャングリ・ラにも売っていないから作るしかない。

裸になった彼女に合わせて黒いゴムをカッターで切り、ダクトテープを使ってつなげる。

「変なの！」

「我慢してくれよ」

「うん」

「またこれを着る羽目になるとはな」
アキラが黒いゴムを持ってブツブツ言っている。

「中に飛び込んでこないだけマシだろ？」

「はは、そうなんだけどな」

全員で着終わった。

「これじゃ、ベルたちが一緒にきても、ついてこれなかったかもしれない」

「猫用のスーツはないからな」

アキラの言うとおりだ。

人用のスーツを切って貼って作るのも無理があるし……。

頭にLEDヘッドライトを装着して、真っ黒なゴム服に身を包んだ連中がズラリと並ぶ。

「にやははは！ みんな変だにゃ」 「あまり笑いこっちなえぞ、クロ助」

確かに異様だ。

「誰も、こんな恰好の中身が麗しき美女だとは思わないよなあ」
俺はアマランサスの黒いスーツ姿をマジマジと見つめた。

「聖騎士様のご命令ならば、妾はどんな恰好でもいたしますわえ」
彼女の的には平気らしい。

「よし！ 暑いから、とつとと突入するぞ」

「わかったにゃ！」

中はすでに暑くなってきた。

ゴムスーツの中では水分が蒸発しないので、自分の汗でずぶ濡れになる。

獣人たちは汗をかかないが、その分暑さに弱い。

熱中症にならないように注意が必要だ。

皆で両側に透明な盾を構えて突入する。

先頭を行くミャレーは、両腕に盾をくくりつけた。

もちろん矢避けであるが、先頭の彼女は鉄の棒で罫を探らなくてはならない。

盾を持って両手がふさがっているとそれができないので、そのための処置だ。

触手があるので他の罫はないと思うのだが、あつたら困るし洒落にならない。

それに左手の岩盤は薄いので、罫の動作機構を入れるスペースがないように思える。

矢が飛んでくるとすれば、右側からだろうが——念には念を入れる。

ビビるやつほど長生きをするのだ。

ミャレーを先頭にして、つぎにニャメナ。

その後を俺とアネモネ。

彼女は盾が持てないので俺の陰に隠れている。

俺たちの後ろには、アキラとアマランサスが続く。

先頭のミヤレーはゴツゴツと鉄の棒で床を小突きながら進む。

獲物が入ると周りから一斉に白いニョロニョロが出てきて、俺たちに絡みついた。

なんかこんなの見たことがあるなあ。

ムーなんとかいう昔のアニメで。

「ひいい！」

俺の前に行くニャメナが悲鳴を上げた。

触手自体には、大したパワーはないようである。

巻き付かれても、ギユウギユウと締め上げられることはないようだ。

「にやはは、トラ公の情けない声は心地良いにゃ」

「うるせえ！」

そのまま進む――別の罠はないようであるが油断は禁物。

「まさか、こんな所を突破できるとは思ってないのかもな」

俺の後ろでアキラがつぶやく。

「まあな。でもスケルトンなどの手合なら、この中でも平気だろうな」

「ああ、そういうのを手先として使っている連中なのかも……」

「アンデッドを手駒に使う、アンデッドの親玉か――それってのは、どんなのがいるんだ？」

ドラゴンのスケルトンもいたが、あれに知性があるとは思えなかったし。

「聖騎士様、それはリッチじやろう」
後ろからアマランサスの声がした。

「ああ、リッチか。なるほどなあ」

「おお！ スモーク・オン・ザ・ウォーター！ ジャズジャズジャ
ン、ジャズジャズジャザーン！」

後ろからアキラの声が聞こえてくるが、エアギターをしているらしい。

「それはリッチー・ブ○ックモアな。オッサンしか知らん」

「ライオン練り歯磨きリッチーみたいなやつもいたろ？」

「ライオン……？ もしかして、ライオ○ル・リッチーか？ ライ
オしか合ってねえ！」

「ははは！ 高校の学祭で弾いたぜ」

「アキラ、ギターも弾けるのか？」

「まあ、ちよつとな。それに楽器ができると女を引っ掛ける成功率
が上がる」

「マジすか先輩？ そこんところをちよつと詳しく」
俺は後ろを振り向いた。

「こんなチャランポラン（死語）な人が楽器を弾けるなんて！ み
たいな、ギャップ萌えがハマるらしい」

「マジか、チャランポランなんて久々に聞いたわ」

「そっちかい！」

アキラが横の触手にツツコミを入れた。

「アキラって楽器を弾けるの？」

下からアネモネの声がする。

「リユートみたいのを弾けるらしい」

「へえ」

アキラの話はいいとして――。

「そういえば王宮にあった魔法の本にもリッチのことが書いてあったような……」

「禁呪に至る病だね！」

俺の下からアネモネの声がする。

そう、その本は彼女も読んだはず。

「そんな化け物がこの奥にいるのか？」

「ヤバいのがいたら、すぐに逃げるにゃ！」 「俺もクロ助の意見に賛成するぜ」

「いや、俺も最初からそのつもりだし。倒せそうもない敵と無理に戦うこともない。アマランサスは不満かもしれないが」

「そんなことはありませんぞえ？ 聖騎士様が怪我でもなされたら……」

アマランサスの心配そうな声が後ろから聞こえる。

「まあ、祝福の障壁みたいなものもあるし、そう簡単には……」

「それじゃケンイチ。素早い撤退を可能にするためには、こいつらが邪魔だろ？」

アキラの言うこいつらとは、横から俺たちを襲っている触手だ。

「うーん、そうだな」

「そこでだ。この上の階にはなにもなかったろ？ どうだ？ 下から火を点けて燃やすってのは？ フヒヒ」

「アキラの旦那、怖いぜ！」 「まったくだにゃ」

「確かに、こいつらを駆除すれば、素早く撤退できるな……」
「そのとおり！」

アキラは、触手を燃やしたくて仕方ないらしい。

まあこのウニヨウニヨは確かにうざいし。この施設を使うにしても、いずれは駆除しないと駄目になるだろう。

移動する度にこんなゴムスーツなんか着てられない。

「下から燃やすなら、大丈夫か……それじゃ試しにやってみるか？」
「よしきた！」

アキラは突如、張り切り始めた。

アマランサスの後ろに回ると、最後尾から彼のマヨネーズが噴射される。

どうやら、ゴムスーツを着けていても指からマヨネーズは出るらしい。

いつ見ても不条理な光景だ。

それを言ったら俺のシャングリ・ラだって、十分に不条理だけだな。

マヨネーズ塗れになった触手が次の瞬間に油塗れになる。

彼の特殊能力の「分離」だ。

俺たちのいる所まで油が垂れてこないか心配だが、彼の出す油は植物油でドロドロしている。

いわゆるサラダ油みたいなもので、階段をサラサラと流れ落ちるようなことはないらしい。

俺たちはそのまま階段を進み、小部屋にやって来た。

小さな四角い窓が開いており、そこから俺たちがいた階層が見える。

なにもないようだが、十分に注意する。

「ここでホッとさせて、油断させるつもりかもしれん」
「ありえるな」

俺の言葉にアキラも同調した。

皆で周囲を警戒するが、杞憂に終わったようだ。

一旦、ゴムスーツを脱ぐ。

皆、汗だくだが、女子が脱ぐので俺たちは小さな窓から外を眺めている。

「あちちち！」

「うにゃー！」「ぎゃー！ 死ぬ！」

特に汗をかかない獣人たちはキツイようである。

水浴び用に、プラケースに入っている水とバケツを出してやる。

これまでの経験から、冒険に備えるために水は多めにアイテムBOXに備蓄済だ。

獣人たちはそれを頭からザバザバと被り始めた。

「おい、悪いが身体にタオルを巻いてくれ。そっちを向けんし」
アイテムBOXから人数分のタオルを出す。
隠してくれないと、俺たちも水浴びがでんし。

「別にアキラに見られてもいいにゃ」

「そうはいかねえ。俺の家族とケンイチがこういう場面に遭遇することだってあるしな」

「まあな」

親しき仲にも礼儀あり。

獣人たちは裸を見られても平気だってこともあるんだろうが、アネモネとアマランサスもいるし。

皆がタオルを巻いたので、ニヤメナを呼ぶ。

「よしよし、頑張ったな」

頭をなでなでして、約束どおりにお尻をモミモミ、尻尾をなでなでしてやる。

「あ、旦那あ……なーん→」

「ふぎゃあ！」

ミャレーが尻尾を太くして、背中の毛まで逆立てているように見える。

よほど、このニャメナの鳴き声が嫌らしい。

耳を伏せている彼女の頭をなでていると、落ち着いたようである。彼女たちを衝立の後ろに隠れさせて、俺とアキラも水浴びを始めた。

「ぷはーっ！　こりゃ効くぜ！」

「魔導師なら、プロテクション聖なる盾を唱えながら歩けるのかな？」

「難しい計算しながら歩くみたいなものだから、ストレスが半端ないと思うぜ。一旦切れたら触手の餌食になっちまう」

「時間をかければ攻略できそうだが……ちよつとずつ触手を切り刻みながらとか、ちよつとずつ魔法で燃やしながらとか……」

「そんな悠長を許してくれるとも思えんが」

「ケンイチ、そんなことをやってて、後ろからスケルトンが来たらどうするにゃ」

「そうだよ旦那。挟み撃ちを食らうぜ。狭い通路じゃ逃げ道もねえし」

衝立の向こうからミャレーとニャメナの声がする。

「まあ、そうだなあ」

ゲームなら、そういう攻略法もありだとは思うが、さつきもいたがこれは現実だ。

ターン制でもないし、敵が待っててくれることもない。

ちよつといい小部屋があったし、時間は昼頃だ——俺たちは昼飯を食うことにした。

ちよつとのんびりしすぎのような気もするが、腹が減っては戦はできぬ。

魔物がやって来れば、獣人たちがすぐに気がつくだろう。

食えるときに食っておかないと。

一応、皆の意見も聞いたが食事に賛成のようだ。

「食えるときに食うにゃ」

「戦ってる最中でも、ちよつとした時間での食事が、体力の差に繋がることだってあるし」

獣人たちの言葉だが、戦いの経験値が多いから言える言葉だな。

「アキラもそうか？」

「まあな。食える時に食わないと、いつ食えるか解らるときもあるしな。チャンスを逃したらずっとデスマーチだったとか」

「アキラ、デスマーチってなんにゃ？」

「え？ あゝ、延々と続く地獄への一本道？」

「なんとなく解ったにゃ……」 「あゝそれかあ」

獣人たちも色々と察したようだ。

そういう経験があるのかもしれない。

只人グループは、お湯を沸かしてカップ麺。

獣人たちはインスタントカレーとパンを食べるようだ。

できあがったカップ麺をすすりながら、アキラが小窓の所に行く
と外を眺めている。

「俺たちのいた階層のちょうど対面にきたんだな」

「最後まで行くと、次の階層に降りられるんじゃないだろうか？」

「多分な」

斜めにぐると縦穴の外周を回って、次の階層へ行く造りか。

普通に階段を降りていくだけだと思ったら、意外と複雑な構造をしているらしい。

飯を食い終わったので、黒いゴムスーツを着て再び下に降りるこ

とにした。

あと半分の行程だ。

「さてえ！　ここから火を点けてみるか！　いいよな、ケンイチ！」
アキラの目がギラギラと輝いている。

「いいが——魔法は節約だぞ」

「それじゃガソリンを少々……」

彼が自分のアイテムBOXからガソリンを出そうとしている。

「いや、ガソリンはヤバいだろ？　巻き込まれたら洒落にならんぞ？
もうちょっと安全な焚付とかにしてくれ」
シャングリ・ラから焚付を買い——1500円ぐらいで売っている。

そいつを組んで、その上にさらに大きな木を組む。

キャンプファイヤーの要領だ。

「ほい、点火はガスバーナーで」

俺が渡したガスバーナーで、アキラが焚付に火を点けた。

彼が撒いた油が白い煙を上げて気化して、それに火が点く。

焚付が燃え上がり、オレンジ色の炎ともうもうとした白い煙がドンドン通路の中を登っていく。

空気が温められて上昇していくと同時に、窓と階下から新しい空気が入ってくる——煙突効果だ。

油まみれになった触手に炎が燃え移ると、グネグネと強烈な断末魔のダンスを始めた。

相手は魔物とはいえ少々可哀想に思える。

「うわあ、エゲツねえ……」 「ああはなりたくないにゃ」

「これならもう消えないだろ、ははは！」

アキラが燃え盛る炎の前で小躍りをしている。

「これじゃ登り窯と一緒にだからな。多分触手は全部消し炭になるんじゃないね？」

「ケンイチ！　なんで下から空気が入ってくるの？！」

アネモネが目を輝かせて質問をしてくるので、煙突効果の説明をしてやる。

「それじゃ、下から上に火を点けたほうが安全だね！」

「そうだぞ、アネモネちゃん。俺が魔物を焼き殺したときにも斜面を利用したんだ。緩めの斜面でも十分な効果を得られる」

アキラが、帝国でやった作戦を説明してくれた。

「そうなのか？　魔物を油の海に沈めて焼き殺したって噂だったが……」

「高温に晒せばいいんだから、油に浸すことはねえ」

「それもそうだ。こういう狭い通路に押し込めて火を点ければ最高だな」

「まったく理にかなっておるのう……」 「そうだね」

アマランサスとアネモネは感心しているのだが、獣人たちはビビりまくっている。

「旦那も怖いけど、アキラの旦那もこえええ」 「まったくだにや」
後半の階段は、前半より触手は疎ら。

階段を降りる俺たちに、びゅうびゅうと風が吹き付ける。

「これだけ、風が流れているならこの通路も簡単に火が点くぜ」
「ここも油を撒いているのか？」

「ああ、やっている」

触手が少ない分、後半はあまり時間がかからずクリアできた。
下の階層に到着すると、上と似たような構造で湾曲した廊下が続く。

その上を見上げると轟々と黒い煙が通路から噴き出し続けている。

「あちちち！ あちー！」

俺たちは周囲を確認してから衝立を立てると、皆でゴムスーツを脱ぎ始めた。

再び、水の入ったプラケースとバケツを出す。

ザバザバと水浴びをしながら正面の岩肌を見ると――俺たちが昼飯を食べた小部屋の小さい窓。

あそこから半周回って、ここまで降りてきたのだ。

「さて、ここからも火を着けるか」

アキラが短パン1丁になって、バーナーを持っている。
見るからに危ないオッサンだ。

早速火をつけようとしたのだが、中々点かない。

吹き込む風があまりに強くて、吹き消してしまうらしい。

「ケンイチ、悪い。焚付をくれ」

「はいよ」

俺は再び焚付を用意した。

もっと大きな火種が必要かもしれないので、アイテムBOXから薪も出す。

パンツスタイルで、薪を組むアキラの姿は実にシュールだ。

「その姿は、怪しい放火魔か」

「むしろくしゃしてやった、でも反省はしていない」

少々荒っぽい作戦だが、これで帰りの道はスッキリとしていることだろう。

なにかあっても素早い撤退が可能になる。

皆で水浴びをしたあとは、テーブルと発電機を出して、ジェットヒーターで乾燥。

轟々と風を出す機械の前で、獣人たちがダンスを踊っている。

さて、身体を乾かしたら、次の階を攻略しないとな。

231話 黒い魔獣

サクラの象徴にもなっている滝。

その滝に流れ込んでいる川をさかのぼり、転移門を発見して水源も見つけた。

水源には湖があり、中の島には遺跡がある。

これは探検するしかないということで中に入ると――そこはダンジョン化していた。

様々な罠や、魔物を退けて階下の下っていく。

触手というイソギンチャクのような魔物をクリアしたときに、アキラが階下から火を点けた。

通路を焼き払って綺麗にしておけば、帰りや逃げるときも楽じゃないか？

皆の意見が一致したので、少々荒っぽいが――アキラの指から出るマヨネーズの油を使って、魔物に放火した。

触手から身体を守るために着てきたゴムスーツで、皆が汗びっしより。

獣人たちは汗をかかないが、暑さで水浴びはするので結果的にずぶ濡れ。

皆で水浴びをして、アイテムBOXから出したジェットヒーターで身体を乾かす。

服だけならアネモネの魔法も使えるのだが、乾燥^{ドライ}を人体に使用するのは危険だ。

男はすぐに乾くのだが、女性は髪の毛があるから大変。同じように毛皮を着ている獣人たちも同様だ。

大量に汗をかいたので、シャングリ・ラから経口補水液を購入して皆に配る。

「飲み物にゃ？」 「俺はエールのほうが……」

「ダメダメ。まああまり美味くはないと思うが、とりあえず薬だと思っただけ」

「まあ、これだけ汗かいたら、ビールはマズいな」

「アキラ、お酒は駄目なの？」

「アネモネちゃん。酒ってのは、身体の中の水を出す効果があつてなあ」

「汗をかいて、身体の水が少なくなっているところに、酒を飲んだりすると――」

「まあ、『くっっ！』 って感じで飲みたくなるけどな。水分補給にならねえし」

「なるほどのう、理にかなっておるのう」

「でも、甘くて普通の水より美味いにゃ」

獣人たちは暑さに弱いので心配だ。

「2人とも大丈夫か？ 調子が悪くなったら早めに言ってくれよ。無理すると結局皆の足を引っ張ることになるからな」

「大丈夫だよ旦那」 「そうにゃ」

まあ、獣人たちは基本的に体力が半端ないからなあ。

服を着たら、またこの階の探検だ。

他の階と同じように弧を描いた廊下が続いているので、車を出した。

皆で車に乗り込み廊下を進む。

「ははは、こんなダンジョンの攻略法ありか？」

アキラが後ろの席で笑っているが、クリアできればなんでもいい

のだ。

だいたい、車を使おうと言い出したのはアキラなのだが。

「別にゲームじゃないんだから、ルールはないだろ？」

「そりゃそうだ」

車の右側にはポリカーボネート製の盾が固定されていて、矢避けを行う。

ゆっくりと石の床を進み、廊下の中央部分まで来ると、右側に下に降りる階段らしきものがある。

右側は岩盤なので、その中を進むってことか。

意外と複雑な造りだと驚くが、ダンジョンっていうぐらいなんだから、それも当然か。

「ケンイチ、階段にゃ！」

「下に行く道はそこしかないみたいだな」

廊下の先を見る――扉も部屋もないし、階段もない。

ハンドルを右に切ると、階段の前まで行ってみることに。

「うお！」

突然、激しい衝撃が車を襲う。

どうやらフロントタイヤが落ち込んだようだ。

「落とし穴だにゃ」

ミヤレーとニヤメナがリアゲートから出てフロントタイヤを確認している。

「下に行く道だと喜んで走ってきたところを、下に落っこつことすんだろ？」

「トラ公が引っかかりそうな罠にゃ」

「落とし穴は、クロ助も引っかかっただろ?!」

「みんな、注意して車から降りてくれ」
皆が車のドアを盾にしながら降りる。

ドアには透明な盾がくくりつけられているので、矢ぐらいでは貫通できない。

「問題ないみたい」

「そのようじゃの」

アネモネとアマランスも周囲を確認している。
どこに罠があるか解らんし。

「まあねえ。こんなの住居不法侵入だからなあ、撃退されてもこちらら文句は言えないんだけど」

元世界のゲームに慣れてしまっていると、ダンジョンでアイテム拾ったり宝箱開けたりが当たり前になってしまっている。

勝手に民家に上がりこんで、タンス開けたりツボを壊して薬草を手に入れたりしているしな。

まあ、ダンジョンでアイテムを拾うのはこの世界でも合法なので、倫理観が欠如しているなんてことは言われないのだが……。

俺のつぶやきにアキラが反応した。

「ははは、まさにそのとおりだな。だが解っちゃいるが解るわけにはいかんってわけよ」

何もないようなので、落とし穴に前輪が落ちてしまった車をアイテムBOXに収納した。

車がなくなると、目の前には暗い下りの通路。

通路は暗いのだが、ゴールの向こうはオレンジ色の光が灯っているように見える。

「うっ！」

ニャメナが耳を畳んで、尻尾を下げている。

明らかになにかを警戒している仕草だ。

「どうした？」

「なんかやべえにおいがする……」

「クンカクンカ……これワン公のにおいきゃ？」

「そんなケチなもんじゃねえぞ？　こりゃ」

獣人たちは、なにかヤバイもののおいを感じ取っているようだ。どうやら犬のような魔物らしい。

「俺たちからすると、犬と熊のにおいつて似たような感じだと思うんだが、やっぱり違うのか？」

「ああ、こいつは熊じゃねえな。嗅いだことはねえにおいだけど——半端な魔物じゃねえ」

遭ったこともない熊のにおいに犬はビビるって話も聞いたことがあるから、においにもランク付けみたいなものがあるのだろうか？

ニャメナは耳を閉じて、ぷるぷると小刻みに震えている。

「そんなに恐ろしいなら、この先に行かなくてもいいぞ」

「旦那！　さっきも言ったけど、先陣から獣人が逃げたなんて言われたら一生馬鹿にされる」

「そんなことを言っても、こんなに震えているじゃないか」
固まっているニャメナを抱き寄せて、背中をなでてやる。

「あっ！　……旦那、頼みがあるんだけど……」

彼女が小言で俺に話すのだが、恥ずかしいのかもしれない。

「もっと、ぎゅっとしてほしい……」

「お？　こうか？」

ニャメナの身体を力を入れて抱きしめる。

抱くというか——サバ折りに近い。

普通の女なら悲鳴を上げるところだろうが、獣人の身体は鋼のように強靱だ。

「よし！ 旦那、大丈夫だ！」

彼女が俺から離れると、自分の頬をバシバシと叩く。

気合を入れているらしいが、さっきと違い活力を取り戻したように思える。

「ほら、ミヤレーも来い」

いつものように軽口を叩くと思ったのだが、黙って俺になでられている。

彼女は普段と変わらないように見えたのだが――俺の目の前にある大きな目が尋常ではない。

彼女もかなりのプレッシャーを感じているようだ。

「おい、ミヤレー大丈夫か？」

「大丈夫にゃ」

「本当か？」

「大丈夫にゃ」

どうにも心配なのだが、獣人たちが前に行くと言えないので、いつもの布陣でいく。

皆で電車ゴツコのように繋がり、下りの階段を降りる。

黒い通路の両側には、罾などを組み込むための十分なスペースがあり、罾がある可能性は高い。

LEDヘッドライトを頭に装着した獣人たちを先頭にして列を作り、両側に盾を持って階段へと足を踏み出す。

おそるおそる進むが反応はない。

「何もないみたいだね」

下に隠れているアネモネが俺のほうを見上げる。

そのまま進むと——なにか見えてきた。
太くて黒い縦の線。

「な、なんにゃ?」「こりゃ——鉄格子?」
真っ先に獣人たちが取り付いた。

「は」

俺も駆け寄り、黒い鉄格子らしきものを握るが——扉らしきものはなく、太い鉄の棒だけ。

何本か横棒も入っており、上下左右がガッチリと構造材に固定されている。

手で叩いてみても、びくもしない。

俺はアイテムBOXから、LEDライトを取り出して階段に置いた。

「うにゃ!」「おりゃ!」

獣人たちが蹴りを入れているが、まったく効き目がない。

「これって、扉もないのにどうやって入るんだ?」

アキラも鉄格子をバシバシと手で叩いている。

「基本的に入りしめないのか、それともどこかに抜け道があるのか?」

「でも、ケンイチ。こんなのクリアするのは簡単だぜ?」

「壊すのか?」

「ああ、横か下をケンイチの重機でぶち壊せばいい」

「鉄格子じゃなくて脇をやるのか」

「そうそう」

小型のユ○ボなら、この通路にもギリ出せると思うが——それは最後の手段だな。

「壊さなくても、鉄格子1本切れば通り抜けできるだろう？」

「まあ、確かに」

俺はアイテムBOXから、発電機とプラズマカッターを取り出した。

おっと、こいつにはコンプレッサーも必要か。

「プラズマカッターか？」

「これなら1本ぐらい切れるだろう？」

機械を接続して、発電機とコンプレッサーを回す。
けたたましい音が通路の中に響く。

「う、うるさいにゃ！」 「うるせえ！」

獣人たちが耳を閉じるが、構わずデカイクリップを鉄格子に挟んだ。

プラズマカッターとはいうが、原理はアーク溶接機と変わらない。
電線をショートさせるとまばゆい閃光と火花を出すが、その熱を使って部材を溶かして溶接したり切断をする。

俺はカッターを鉄格子に近づけた。

「あれ？」

アークが飛ばない。

うんともすんともいわない。

「ケンイチ、どうした？」

「これって鉄じゃないのか？」

電気が流れる部材じゃないと、こいつは使えない。

シャングリ・ラでテスターを買う。

普通は電流や電圧を測る機械だが、導通も測れる。
端子を当ててみるが――反応なし。

「鉄じゃないみたいだな」

アキラのつぶやきを聞きながら、シャングリ・ラでディスクグラインダーと、ダイヤモンドカッターを買う。

どうせ、ここでもしか使わないと思うから一番安いやつでいい。

ディスクグラインダーとダイヤモンドカッターで5000円だ。

発電機につないでスイッチを入れると、ディスクカッターがすごい勢いで回りだす。

手でしっかりと持って、黒い鉄格子に近づける。

いや、鉄じゃないから鉄格子ではないのだが……。

刃が当たると、凄まじい火花が飛び散り、ディスクが真っ赤に加熱した。

「ふぎゃ！」「うおっ！」

大量の火花を見た獣人たちが、飛び上がる。

「すごい！」

「凄まじい火花じゃのう！」

アネモネとアマランサスも驚くが、俺のほうは手応えがない。

ディスクを離してみても、黒い棒には傷一つついておらず、火花はディスクカッターが減ったものだった。

「なんじゃこりゃ？」

「もしかしてアダマタイトか？」

アキラのつぶやきに、俺も合点がいった。

「あゝ」

俺がなにか口に出そうとした瞬間、獣人たちが騒ぎ始めた。

「旦那！　なんか来るぜ！」　「ふぎゃー！」

珍しく、彼女たちがバタバタしている。

とりあえず道具をそのままにして、階段を上がろうとすると――。
オレンジ色だった通路の出口が真っ黒になる。

「「グワァァ！」」

ルビーのような6つの光る何かが向かってきて、黒い格子に衝突した。

生臭さと酷い獣のにおいが、通路に充満する。

黒い巨体に巨大な3つの口が開き――赤い腔内には、なにものでも噛み砕きそうな白い歯がLEDの光に輝いて見える。

「ぎゃああー！」　「ふぎゃー！」

獣人たちが、全身の毛を立てて1mは飛び上がった。

格子に衝突したのは、俺たちの車の倍ほどの大きさ。

真っ黒なので、全体の形はよく解らないが――巨大な犬のような身体に3つの頭が見える。

鋭い爪を立てて格子をガリガリとやり、牙をむき出して齧りつこうとしている。

黒い格子が本当にアダマントタイトだとすれば、こんな攻撃では破壊できないだろう。

「なんだ?!　これってケルベロス?!」

あまりのできごとに俺は腰を抜かして、階段に尻もちをついた。

「マジでそんな感じに見えるが……」

アキラの台詞からも、初めて見たようだ。

「聖騎士様は、あの魔物を知っておるのかえ？」

「まあな」

アマランサスが剣を出して構えた。
いくら彼女でも、こいつに敵うとは思えん。

「ふはは！ 相手が生き物なら俺の出番だぜ！」
アキラが大口を開けて歯をむき出しにしている、ケルベロスに近づいた。

「喰らえ！ マヨパワー全開！」
彼が指から出したマヨネーズを噴射すると、大量の黄色いウネウネが黒い獣を襲う。

「ゲハッ！」
アキラの必殺攻撃だが、少し入ったところですぐに口を閉じられてしまう。

それどころか、未知の力に警戒したのか、少々距離を置かれてしまった。

「畜生！ 分離！」
アキラの掛け声で、大量の黄色のウネウネが油に変わる。

「アネモネちゃん！ ファイヤーボール！」

「うん！ むー！ ファイヤーボール 憤怒の炎！」

「ちよっと待てえ！」

俺が止める前に、ファイヤーボールが発射されてしまった。

オレンジ色の火の玉が黒い格子を擦り抜けて、漆黒の巨体に衝突。
巨大な火柱になった。

「全力退避！ 上まで駆け上がれ！」

俺はアネモネを持って、階段を駆け上がった。
慌てて上の階まで駆け上がりひっくり返ると、通路から火柱が噴

き出す。

ぐるりと見渡すと、みんな無事のようだ。

「煙突効果で危ないって言ったばかりだろ！」

「悪い悪い」

「ごめんなさい」

俺に叱られたアネモネがしょんぼりしている。

「今のはアネモネは悪くないな。全部アキラが悪い」

「フヒヒ、サーセン」

彼は修羅場をくぐっているから平気だろうが、こっちは素人に毛が生えたようなものだからな。

とりあえず炎が収まるのを待つ。

「やったかにゃ？」

ミャレーそれはフラグだな。

「多分、致命傷にはなっていないと思うが……」

「くそお、あんな化け物見たことがないぜ……」

ニャメナはまだ全身の毛が逆立っている。

皆の反応を見ると、この世界でも見かけない魔物らしい。

アマランサスも知らないようだっし、お城にある魔物図鑑とかそういう類の本にも載っていないのかもしれない。

あの破壊不可能な格子のおかげで足止めを食らったが、逆にいえばこっちは安全ということだ。

とりあえず、喉がカラカラになったので飲み物を出す——少々悩んだがポカリにしよう。

「はあはあ……」

喉の中がへばりつくような感じだ。

「ふっふっふ」 「ふっ！」

隣を見ると、獣人2人が毛を逆立てて大きく肩で息をしている。
こんな2人は初めて見る。

「2人とも大丈夫か？」

彼女たちにもポカリをやった。

「大丈夫、大丈夫だよ、旦那」 「大丈夫にや」

どうもそんな感じに見えないんだがなあ。

まあ、とりあえず落ち着くまで1服することにした。

「ケンイチ、どうする？ 拘束の魔法が使えりゃいいんだが……」
バインド

「その魔法知らない……」

アキラによると、魔物を拘束してその間に口にマヨネーズを入れるらしい。

「けど、口が3つもあるぞ？ 拘束の時間が間に合うのか？」

「そ、そうなんだよなあ」

そういえば、ソバナの魔導師が使っていたな。

大型の魔物だと数秒しか止められないと言っていた。

一つの頭を潰すのが精一杯だし、さっきの攻撃が失敗したことで、
こちらを警戒するかもしれない。

「う、うーん……警戒されると、爆発物もちよつと無理になるな……」

「離れた場所に仕掛けて、地雷みたいにするのは？」

「遠隔操作のユニットも作れると思うから、できないこともないと思うが……」

「そうか、これから作るのか……」

「手持ちはタイマー爆弾だけだからな。それに頭が3つだと1発で死なないかもしれない」

「その頭が3つってのが面倒だよなあ——3つの頭に同時に爆弾を……って無理か？」

通路で戦闘となると、頭が通路いっぱいになりそこしか狙えない。

「聖騎士様、進言させてもらってもよろしいかえ？」

「なんだいアマランサス」

「あまりに困難な敵なら、撤退も考えるべきなのではないのかえ？」

「まあ、君の言うとおりだ……あ、そうだ！」

俺は安全な方法をひらめいた。

「なんだケンイチ？」

「安全な方法といえば毒があるじゃないか。外にいたヒポグリフもそれで倒したし」

「なるほど——毒なら見てればいいってわけかい旦那」 「そうだよ」

獣人たちも落ち着いてきたようだ。

「まあ、バカ正直に正面から戦う必要なんてないしな」

「ケンイチ、あの格子はどうするの？」

アネモネの疑問ももっともだが、それもいい手を思いついた。

早速準備を始めると、シャングリ・ラでまた肉を20kgほど買う。

犬の化け物なら肉が大好きだろうし、カリカリのドックフードも買ってみるか。

あまり安物だと食わないかもしれないので、少々高めのものを買う——20kgで8000円ほど。

最後に今回の作戦の肝となるものを買う。

450gで1000円だ。4.5kg分購入したので、1万円也。

「ポチッとな」

肉とドッグフード、そして決め手のものが落ちてきた。

パウチの袋に入っているものが10個。

「なんだこりゃ？ キシリトール？」

「ああ、犬ってのはキシリトールが禁忌だろ？」

「そういえば聞いたことがあるな。重篤な低血糖を起こすとか何とか……」

「そうだ」

話している間に、獣人たちが生肉をつまみ食いしている。

食欲があるってことは平気なのか。

「旦那、なんだい、その——もぐもぐ袋は？」

「食うか喋るかどっちかにせんかえ」

あまりに行儀が悪かったのだろう。

アマランサスからクレームが入った。

「甘い毒だ」

「またかい！？」「またにゃ！？」

獣人たちが露骨に嫌そうな顔をする。

普通の毒ならいいのだろうが、甘い毒ってのが理解不可能なのだろう。

パウチに入った袋の封を切る。

「なんかすごい甘い香りがするんだけど？」「そうだにゃ」

獣人たちが目をキラキラさせて舐めたような顔をしている。

袋の中にアキラが指を突っ込んだ。

「ん？ 甘いな！」

「ア、アキラの旦那大丈夫かい？！」 「ふぎゃー！」

「まあ、俺は大丈夫だ」

「おい、アキラ。皆が真似をするから止めてくれ」

「悪い。でも獣人にキシリトールは大丈夫じゃね？」

「いや、万が一があったら困るだろ？ 低血糖だと回復^{ヒール}の魔法で治らん可能性もあるし」

「魔法で血中糖分が増えるとも思えんからな」

「俺もそう思う」

もし魔法で血糖値が増えるなら食事をしなくてもいいことになるが、そんな話は聞いたことがない。

肉とドッグフードにキシリトールを混ぜ込む。

なんか卑怯くさい作戦ばかりのような気がするが、あんな化け物とバカ正直に真正面から戦う必要はない。

俺の作業を、食べたそうに獣人たちが眺めている。

しょうがない——俺は、アイテムBOXからチュールを取り出した。

「ほい、こっちを舐めているろ」

「やったにゃ！ 美味しいやつにゃ！」 「これこれ！」

美味しいものを口にしていれば、毒を口に入れたとは思わないだろう。

混ぜ込んだものをプラケースに突っ込んで、アイテムBOXに収納する。

アイテムBOXがあれば、オレ1人でなんとかなる。

俺は階段を降り始めた。

「旦那、どうするんだよ！」 「ケンイチ、なにするにゃ」

「お前ら、そこにいろ。肉を置いてくるだけだからな」
通路に入ると、さっき置き忘れたLEDライトが光っていた。
そこまで行くと、黒い格子の前に立った。

「収納」

なんのことはない。

アダマントタイトだろうがなんだろうが、アイテムBOXに入れればいい。

黒い格子は俺の前から姿を消した。

今度は通路を塞ぐときが大変だと思うが、ちゃんとその方法も考えている。

そのまま階段をそつと降りると、オレンジ色に染まっている階下まで行く。

頭を出して見つかるとヤバいので、アイテムBOXから鏡を取り出して、左右を確認した。

これなら頭を出す必要がない。

背の高い石造りの廊下が左右に延びており、等間隔で明かりが灯っていて明るい。

多分魔法の光だと思うのだが、今まで俺が見てきた魔法の光は青白いもの。

普通の魔法の光と、ここに灯っているものは違い、白熱電球のような色を発して廊下を照らす。

何もいないのを確認して廊下に出ると、アイテムBOXからさっきの肉を取り出した。

ビクビクしながら通路の真ん中に肉を設置していると、一番奥の左側に黒い影が見えた。

「え?!」

巨大な黒い魔物が姿を現すと、まっすぐにこちらに向かってくる。

「キター！」

クソ、やっぱりピンピンしているじゃねえか。

俺は慌てて階段に戻ると、坂の途中で叫んだ。

「ダンプ召喚！」

以前使っていた中古のダンプが召喚されると、鉄板がひしゃげるような音を立てる。

そのまま階段をずり落ち引っかけた止まった。

ダンプは傷だらけになってしまったが、こんなのは動けばいい。

車検のない異世界なら、壊れても使えるしな。

ダンプの向こうで魔物が吠えているのが聞こえるが、さすがに鉄のダンプを破壊してこちらまでやってくる様子はない。

あとは毒入りの餌を食ってくれるかどうかだ。

232話 窒息

サクラの上に広がる前人未到の台地。

その果てにあった湖と遺跡という、とても素敵なシチュエーション。

こりゃ探検するつきやない——ということとで遺跡に潜り始めた。
ダンジョン化していると思われる遺跡を攻略していると魔物たちに次々と襲われる。

そのうち強敵と遭遇した。

黒くて山のような身体から突き出た3本の頭。

ルビー色に輝く身も凍るような目——ケルベロスってやつだ。

この世界にいる普通の魔物と違うようで、誰もその正体を知らないという。

かなりの強敵なのは間違いないのだが、なにも馬鹿正直に真正面からやり合う必要はない。

俺は魔物に毒を盛って、弱体化させることにした。

俺たちを誘う下層に降りる斜めの階段。

そこを塞いでいたアダマンタイトでできたと思われる、黒い格子があったのだが、それをアイテムBOXに入れて取り除いた。

下層に降りて毒を入れた餌を置くと——ケルベロスが襲ってきたので、アイテムBOXからダンプを出して通路を塞いだ。

今、ダンプの向こうにデカイ魔物がいて、ウロウロこっちを探しているのが解る。

さすがに鋼鉄製の乗り物を破壊して、こっちに来るようなことは

できないらしい。

低周波の唸りが収まると、何かを食べる音が聞こえてくる。

これは、毒入りの肉を食っている音らしい。

あの図体なら数十kgある肉でもあつという間に平らげてしまうだろうが——果たして毒は効くだろうか？

犬に似ているから、犬に禁忌とされている毒を選んだのだが、本当に効くかどうかは不明。

いきあたりばったりの出たところ勝負になっているが、作戦としては間違っていないはずだ。

餌を平らげたのか、魔物が移動を始めて足音が小さくなっていく。どうやら、廊下の奥のほうが定位置らしい。

俺は、ダンプの下に潜り込んだ。

階段の段差をズリズリと腹ばいでクリアして、そっと廊下を覗く。俺が置いた餌は全部なくなっていた。

「やったな」

俺は小声でつぶやく。

毒が効くまでには時間がかかるだろう——一旦、皆のところに戻ることにした。

「旦那！ どうだい?!」 「ケンイチ！」

獣人たちがやってきた。

「ケンイチ、大丈夫？」 「聖騎士様！」

「アネモネ、アマランサス——心配するな大丈夫だ」

「餌は食ったかい？」

アキラが作戦の成否を心配している。

「ああ、廊下に置いた餌は全部なくなっていた。あとは毒が本当に

効くかどうかだな」

「どのぐらいの時間で効くんだ？」

「うーん？　ちょっと待ってくれ」

俺はシャングリ・ラで犬の病氣の本をゲットした。

電子書籍で読んでもいいのだが、皆のいる場所でそれをやるとシャングリ・ラを使っているのがバレてしまう。

「ポチッとな」

表紙に犬の写真が載っている本が落ちてきたので、ペラペラと捲る。

「そんな本も作れるのか？　どんな知識でも出し放題じゃねえか」

「まあな。キシリトール——あつたぞ」

「どんなもんだ？」

「30分から60分で症状が出ると書いてあるな」

「そんなに早いのか。犬が食うとマジでヤバいんだな」

10kgの犬が1gのキシリトールを食べただけで、重篤な症状が出たと書いてある。

「ケンイチ！　見せて見せて！」

犬の本をアネモネに見せる。

「うーん？　アキラ、あのケルベロスって何キロぐらいあると思う？」

「ざっとラ○クルの2倍だから4t——多く見積もって5t！」

「えーと……」

10kgの犬が1gでヤバいから、約10000分の1か。

ケルベロスが5tってことは、5000kgで、盛ったキシリトールは4・5kgだから——約1111分の1。

「食わせたらヤバい量の10倍は食った計算になる」

「それじゃ確実だな。1時間後に作戦を開始すればいいってことだ」
「そうだな」

俺とアキラが話していると、後ろでなにやら騒々しい。

アネモネが読んでいる本を見ていた獣人たちが騒いでいるようだ。

「ぎゃああ！ ワン公の身体の中まで描いてあるじゃねえか！」
「ふぎゃああ！」

犬の病気の本なので、解剖図なども詳しく描いてあるのだ。

どうやら、この世界に解剖学みたいな学問はないらしい。

そう言えば――王宮で手に入れた本の中にも生物図鑑のようなものはあったのだが、医学書やら解剖図のようなものはなかったな。

「俺は、こういう本で勉強したから、身体の中についても詳しいんだよ」

医者ではないから詳細はしらないが、絵を書くために解剖学はそれなりに勉強した。

生物学とかも好きだしな。

「ほう、リリスが聖騎士様は賢者だと申しておったが……」

「けど、こういうのは禁忌なんだろう？」

「まあ、そうじゃろうのう。じゃが聖騎士様の知識を見ると、この世界には必要なものだと考えさせられるのう……」

「それは間違いない。身体の構造が解れば魔法での治療も発達するかもしれないぞ」

俺たちが話しているところに、ニャメナがやってきた。

「だ、旦那……」

「どうした？ ニャメナ」

「お、俺が死んだら、俺の身体は旦那の好きにしていいいからさ……」

なんか、そんなことをいいながら、耳を伏せてプルプルと震えている。

「前もそんなことを言ってた気がするが——そんなことはしないから心配するな」

「で、でもよ……」

ニヤメナを抱き寄せて背中をなでてやると、本当に震えているのが解る。

「ははは、よしよし」

「ケンイチ！　ウチもなでるにゃ！　いつもトラ公ばかりでずるいにゃ！」

ミヤレーの顎の部分をなでてやると、耳をパタパタさせている。

「よし、あと1時間だな！　ケンイチ、ビールとツマミ！」

「マジかよ」

アキラは、祝福でアルコールを分解できるので、飲酒は問題ない。テーブルと椅子を出してやり、ビールやら飲み物、ツマミとお菓子を並べる。

それとアイテムBOXからタイマーを出した。

タイマー爆弾用に使っている、キッチンに置くタイプだ。

60分にセット。

「これでアラームが鳴れば、突撃開始ってわけだ」

アキラがプルトップを取るとビールを飲み始めた。

ニヤメナも飲みたいようだが、彼女はアルコールを分解できない。駄目だな。

「ああ、みんなにも戦闘に参加してもらおうから頼むぞ」

「任せて！　魔法は使っていいんだよね！」

「もちろん」

「妾にも任せてたもれ」

「でもよ、毒が効けば危険はないんだろ？」 「そうだにゃ」

獣人たちはお菓子を食べ始めた。

ニャメナは、せんべいをバリバリと小気味よい音を出してかじっている。

白い牙がチラリと見えるのだが、いかにも硬そう。

「効いても弱体化だけなら、戦闘はしなくちゃならないからな。どのぐらい毒が効くのかさっぱりと解らんし」

「真正面からガチで当たるよりはマシだろ。ゲームでも状態異常攻撃は常套手段だからな」

「そういえばそうだな」

話をしていると、皆の緊張も解けたようだ。

そこにタイマーのアラームが鳴った。

「わ?!」 「んにゃ?!」

タイマーの音に、獣人たちが飛び上がる。

「よし、時間だ!」

「よっしゃ! やるか!」

「うん!」

「任せてたもれ」

テーブルと椅子をアイテムBOXに収納すると、獣人たちにクロスボウを渡して、皆で斜めの階段を下る。

俺たちの目の前には鋼鉄のダンブ。

「よし、戻れ!」

「は、いつ見ても非常識な魔法だぜ」

ニャメナがため息をつくが、シャングリ・ラで買ってアイテムB

OXに入れているだけなのだが。

通路を塞いでいたダンプがなくなったので、下の廊下まで降りて左右を見回す。

「なにもいないな？」

「どうするケンイチ」

「大きな音を立てて、おびき出してみるか？ 向こうの突き当りの奥に隠れているようだ」

「ははん、なるほどなあ」

俺はアイテムBOXからメガホン型の拡声器を出した。

いつぞやお城で使ったやつだな。

すっかりとアイテムBOXの肥やしにやっていた。

「あゝあ！ 只今マイクのテスト中！ おらあ！ この畜生め！ 命が欲しかったら、かかってこい！」

「うにゃー！」 「おらおらどうした！？ 魔物なら根性見せてみよう！」

皆でワイワイと、かなり騒々しくしたのに反応はゼロだ。

さっきは餌を置いただけでやってきたのにな。

「ここはドローンの出番だな」

アイテムBOXからクワッドローターのドローンを出して発進させた。

甲高い虫の羽音のような音を立てて飛行機械が通路を飛んでいく。目標は通路の突き当りだ。

「あの空飛ぶ召喚獣に偵察させるんだね！」

「まったくもって便利じゃのう。これでは、どこにいても敵が隠れることすらできぬわえ」

「空から敵の城壁の中を偵察したりするのにも使えるかもな」

「すごいにゃー」

シャガを討伐したときも、周りが明るかったら偵察に使えたかもな。

廊下を突き当りまでいって左に回ると――いた。

「いたぞ、うずくまっている。生きてはいるようだな……」

「あれだけ騒いでもやって来ないってことは、かなり毒が効いているんじゃないのか？」 「そうだにゃ」

「ケンイチ、行く？」

アネモネが気合を入れている。

「そうだな。襲ってきたら防御の魔法を頼む」

「うん」

突進だけなら、プロテクション聖なる盾で防げるだろう。

ソロリソロリと進み、角の奥を窺う。

黒山のようなデカイ魔物が大きく腹で呼吸をしており、酷い獣のにおいと生臭さが漂う。

3つの黒い頭を床につけて、グルグルという低周波も聞こえてくる。

赤い目はどんよりと曇り、キラキラとした輝きを失う。

「くさっ！」

思わず鼻を摘み、吐き気をこらえる。

「うぐぐ……」 「ぐにゅにゅ……」

俺でもくさいのだから、鼻のいい獣人たちには応えるだろう。

「ケンイチ、動かないみたいだぞ？」

アキラの言うとおり、目は動いているのだが身体を動かす気配はない。

「よし、やるか！ アネモネ頼むぞ？ アマランサスは援護を頼む」

「任せて！」

「任せてたもれ！」

「皆、下がってくれ！ コ〇ツ戦闘獣召喚！」

空中から現れた黄色い重機が石の床に落ちて、カタピラが火花を散らす。

これだけの大音響が響いたというのに、目の前の魔物は全く動かない――いや、動けないのかもしれない。

俺はコ〇ツさんに乗り込むと、エンジンを始動。

アネモネが、ぴょんと重機に飛び乗り運転席にやってきた。

運転席は高い位置にあるので状況を把握しやすい。

排気ガスが心配だが、斜めになった階段から換気されるに違いはない。

ガタガタと石の床を傷つけて重機が魔物の前に迫ると、皆はその後ろに隠れてサポートの機会を窺う。

俺はレバーを動かし、鋼鉄のアームに取り付けられたアダマンタイトの剣を掲げた。

この段階になってもケルベロスはまったく動かない。

「コ〇ツ必殺剣！ 闇から生まれた魔物を涅槃に返す、一筋の光の刃！ 相手は死ぬ！」

巨大な剣が振り降ろされると、中央の魔物の頭が真っ二つになった。

血が噴き出し石の床が黒く染まっていく。

「ギャオン！」

犬の声のようだが低くハモった叫び声。

悲鳴を上げたケルベロスが飛び上がったのだが、体を支えることができなくてヨタヨタしている。

立ち上がっただけで精一杯のようだ。

「くらいやがれ！」「うにゃー！」

獣人たちからクロスボウが発射されたが、まったく効いてるようには見えない。

倒れそうになりながらも、巨大な黒い壁がこちらに向かってくる。

プロテクション
「聖なる盾！」

アネモネの魔法で出現した透明な盾に、倒れそうになった黒い魔物の巨体が衝突した。

「はっ！」

剣を構えたアマランサスが、重機のアームを踏み台にして高くジャンプ。

まだ生きている左側の頭の鼻面に乗っかると、その場でくるりと1回転。

巨大なマズルが2つに裂け、鋭い切り口から鮮血を噴き出す。

「ギャオン！」

やはり低い犬のような叫び声だ。

「よっしゃ！ 俺の出番か！？ おら！ マヨパワー！！」

鼻が潰れたので、口を開けて息をしている魔物の腔内に、アキラの指先から出たニユルニユルが注ぎ込まれる。

「ゲボッ！」

「オラァ！ 鼻の中にもだっ！」

黄色いマヨを吐き出したら、次は吸わねばならない。吸えば、気道の奥深くまでニユルニユルが入り込む。そうになったら、もう自力で取り出すことはできない。

ケルベロスは巨体を横倒しにして、脚をバタバタさせ始めた。
断末魔である。

俺は、残る最後の魔物の頭に狙いを定めると、重機に装着されている巨大な剣を掲げた。

「おりゃ、串刺しだ！」

横向になって舌を出している魔物の頭に、アダマントタイトの刃が突き刺さる。

そのまま黒い頭を石の床に縫い付けると、運転席から顔を出した。

「アキラ！ 真ん中と右の頭にも、マヨを突っ込んでくれ。どれが息をしているか解らん」

「おっしゃ！ まっかつせつなっさいっ！」

破壊された頭でも気道が通っていれば、空気が通るかもしれない。頭が3つってどういう構造になっているのか、さっぱりと解らん。食道や気道も3本あって、胃や肺に繋がっているのだろうか？

魔物の身体の構造なんて考えても解らんが、全部の口をマヨで埋めれば間違いない窒息死するだろう。

どんな強力な魔物でも生き物であれば窒息からは逃れられない。万物窒息である。

そうやってアキラはドラゴンも倒して、ドラゴンスレイヤーとなったわけだ。

3つの気道をすべてマヨで塞がれて魔物はビクビクと痙攣し、脚をデタラメに動かし始めた。

「うわぁ、いつみてもエゲツねえ」「あんなの、めっちゃ苦しむに決まってるにゃ……」

「ははっ、ドラゴンのやつも窒息して七転八倒してたからな」

アキラはドラゴンに自ら飲み込まれて、マヨ攻撃をしたという。

「ドラゴンの中で平気だったのか？」

「潰れるようなことはなかったな」

「空気は？ マヨに塗れてたんだろ？」

「頭に小さな樽を被ってな、空気の間隙を作ってた」

「それでも飲み込まれたくはないなあ……」

「俺だって2度と御免だ」

話しているうちに、痙攣していた黒い小山は動かなくなった。

「やったな」

「おう！」

「うおお！ やったぜ！ こんな化け物を倒すなんてよお！」 「こんな見たこともない化け物なら自慢できるにゃ」

「聖騎士様あ！」

コ○ツを降りてきた俺に、アマランサスが抱きつく。

「しかしなあ、まったく戦闘の役に立たなかったのが……」 「仕方ないにゃ、普通の獣人にこんな化け物を相手にできるはずがないにゃ」

獣人たちはあまり活躍できなかったので、しょんぼりしている。

「そうだけだよお……」

「ほら、この魔物も立派な牙を持ってるぞ？ また飾りを作ればいい」

獣人たちは仕留めた獲物の牙などで、飾りを作って自慢をする。口が3つもあるので牙も沢山ある。

立派な犬歯だけで6本だ。

「ええ？ でも俺たちが倒したわけじゃないのに……」 「そうにゃ」

「そんなことはない。ここに来るまでに十分に役に立ってくれただろ？ 化け物がいると真っ先に気づいたのも、お前たちだし」

「獣人で、こんな化け物とガチでやりあって倒した――なんてことになったら、マジで英雄ものだぜ」

「そうだにゃ」

「手伝ったってだけでも自慢はできるだろう？」

「そうだけだよ……」

どうにも、獣人たちは戦闘であまり活躍できなかったことに、引け目を感じているようだ。

まあ、無理に押し付けることもない。

俺は、3本の頭を持つ黒い魔物の前に立った。

「これで、アイテムBOXに収納できれば、確実に死んでいるってことになる」

「そうだな」

「収納！」

黒い巨大な魔物は、謎の空間に吸い込まれて、石の床には血溜まりだけが残った。

「やったあ！」

「聖騎士様！ やりましたぞえ？！ 新たなる偉業が増えましたわえ！」

「こいつをサクラに持って行って、住民に見せてやろう」

「こんなの見せたら、サクラにいる獣人たちがみんな旦那にひれ伏すと思うぜ！」 「そうだにゃ！ 獣人は、強いやつが正義にゃ」

「大きさから言えば、クラーケンもデカかったが……」

「こっちのほうが、獲物って感じがするじゃねえか」

「そうなのか」

どうやら獣人たちの感覚からすると、そうらしい。

なるほど——と考えていると、ニャメナが俺に抱きついてきて体をくねらせる。

息が荒くて明らかに興奮している。

「ああ！ 俺はもう我慢できないぜ！」 「トラ公！ 盛ってる場合じゃないにゃ！」

「ほらほら、こんな所じゃできないからな」

「はあはあ……そんなあ……ふぎゃー！」

ニャメナが、その場で毛を逆立てて飛び上がった。

「わあ！」

彼女に抱きつかれていた俺も一緒に飛び上がった。

なにかと思ったら、ミャレーがニャメナの尻尾を引っ張ったのだ。

「な、なにをしゃがる！ クロ助！」

ニャメナが痛い尻尾をナデナデしている。

「やることあるにゃ」「ちっ！ 解ってるよ！」

他に敵がいなかったかとか、確認することが色々ある。

ニャメナも、冷静なミャレーに手荒い突っ込みを入れられて正気に戻ったようだ。

あのデカブツがウロウロしてたってことは、この廊下には罠はないはずだ。

アイテムBOXから車を出して廊下を端から端まで走る。

「なにもないにゃ！」 「あんな化け物がいたってのに、ハズレかよ」
獣人たちが3列目シートでブーブー文句を言っている。

「いやいや、あいつは門番で、この先になにかあるのかもしれない」

ぐるりと調べて魔物がいた場所まで戻ってくると、皆で車から降りた。

石の床には黒い染みが広がっている。

「ケンイチの見立てでは、この先になにかあるってことだろ？」
アキラがこちらを見るとニヤリと笑っている。

「まあな」

まっすぐな廊下を左に曲がると、ケルベロスが寝床にしていたと思われる場所がある。

「くせえ！」 「鼻が曲がるにゃ」

「うっぷ」

「確かに」

アネモネとアマランサスも鼻を摘んでいる。

そこを通り過ぎると、突き当たりを右——そしてすぐに突き当たりを左。

また長い直線の廊下が現れた。

「ここにも魔物がいるの？」

「解らぬのう……」

彼女たちの言うとおりになにかいるかもしれないが……。

アネモネが書いているマップを見せてもらう。

廊下の右側が岩盤、左側が穴側になっているはず。

再びアイテムBOXから車を出すと、廊下を走る。

遺跡の中を車で走るなんて、通常じゃ考えられないな。

アイテムBOXがあるからできる芸当だ。

「ケンイチ！ 部屋があるにゃ！」 「その隣にもあるぜ！」
獣人たちが言うように部屋が2つ見える。

とりあえず車で廊下の端まで行ってみると、また左に曲がっているようだ。

これから察するに――円筒形の穴を囲んで直線の廊下が四角に囲んでいる構造ではなからうか。

罨などはなかったので、バックで部屋場所まで戻って車を降りた。

リアゲートから降りた獣人たちが、扉に駆け寄ると押したり引いたりしている。

鉄ではないが、木を積み重ねた分厚い木の板でできているようだ。

「旦那！ 鍵がかかっているぜ！」 「びくもしないにや」

「よし、どいてろ――ユ○ボ召喚！」

久々に緑色のユ○ボが落ちてきた。

座席に乗り込むとエンジンを始動させ、ガラガラと扉の前まで行く。

「久々のユ○ボアタック！ それは、オープン・ザ・ゲート・オブ・バビロン！」

俺は運転席のレバーを操作して、鋼鉄のバケットを扉に打ちつけた。

鋼の爪がなんなく木の扉を破壊して、真ん中から2つに折れる。

「うひょー！ すげえぜ！」 「うにゃー！」

「これが噂に聞く盗賊行為じゃな！」

なんだかアマランサスが目をきらめかせている。

高貴な人は悪事に憧れでもあるのだろうか？

車体を進めて、そのままドアを押し倒した。

部屋の中は明かりがなく、真っ暗。

「罨があるかもしれないから気をつけろよ」

アイテムBOXからLEDランタンを出して、部屋の中を照らす。

「本だ！」

真っ先に叫んだのはアネモネだった。

6畳ぐらいの部屋の両脇に本棚があり、そこにボロボロの本がパラパラと並べられている。

疎らにみえるが――それでも20冊ぐらいはあるか。

「おおっ！ 結構あるなあ」

アキラも本棚まで行って、眺めている。

「なんだよ、本かよ」「ウチらには関係ないにや」

獣人たちにとっては、本はお宝ではないらしい。

まあ、字が読めるわけじゃないしな。

「読めそうか？」

「さてね……」

アキラが1冊の本に手を伸ばした。

彼が手にとった本から白い霧のようなホコリが舞い、LEDランタンの光が筋のように見える。

「んー、帝国の文字に似ている気がするが……ちよっと読めない所もあるな」

ページが分厚い。

羊皮紙ってやつだろうが、普通の紙より長持ちするんだろうか。

「帝国の文字って難しいのか？」

「いや、母音と子音が一緒に書いてある文字だから、50音の変換表を作ればすぐに読めるようになる」

「それプラス解読作業が必要になるか……」

「まあ、センセに頼んでみれば？　そういうものの専門家だし、センセの持ってた本の中に似たような文字のものがあつた気がする」

「全部デジタル化すると思うからデータで共有すればいい」

「そうだな」

「すごい魔法の本もあるかも！」

一番興奮しているのは、本好きのアネモネだ。

俺も嬉しいのだが、他のメンバーからは不評。

あまりうれしくないらしい。

やはり、お宝といえば金銀財宝ってことなのだろうか。

隣の部屋にも本があり、俺たちはプラケースに本を入れて、アイテムBOXに収納した。

あとで、じっくりと研究をしなければ。

でも、これって窃盗なんじゃ——どうにも異世界式に慣れない俺だった。

233話 不死者

古代の遺跡と思われるダンジョンを探検中。

途中にいたケルベロスらしき魔獣を毒殺という、ちょっと卑怯っぽい手段で倒した。

勝てば官軍——倒せばなんだっていいんだ。

バカ正直に真直面から当たって、家族にけが人が出たらどうする。

俺はそんなのは嫌だね。

そのためには、卑劣という誹りも堂々と受けよう。

ケルベロスを倒した奥で、ホコリを被った古い本を見つけた。

全部で20冊ほどある。

古書としても貴重なものだろう。

アキラの話では、レイランさんに頼めば翻訳も可能だと思われるので、是非ともコレクションに加えなくては。

通路の探索は終わったが、他になにもない。

俺は再びアイテムBOXから車を出すと、皆を乗せて走り出した。通路の突き当りを右に曲がって左に曲がる。

自動車教習所のクランクを思い出す。

車の窓のここがクランクのここに来たら、ハンドル2回切ってみたいな教え方だったが、あんなの役にたたないよな？

でもまあ、あれでなんとか車に乗れるようになるんだから、あの教えかたで合っているのかもしれないが……。

アキラにもその話を振ってみる。

「ははは、確かななあ。俺のときもそんな教えかただったなあ」

「あれってば、全国共通なのか」

「一応、それで乗れるようになるわけだし……」

「そうだなあ」

アキラも俺と一緒に意見のようだ。

とりあえず形から入ることも大事ってわけだな。

アキラが彼の知り合いについて語ってくれる。

「俺の知り合いにさあ——半年間ずっと教習所の外周だけグルグル回っていたやつがいてな……」

「なんで外周だけ？」

「それしかできないというか、それも怪しいから他のことができなかったんだよ」

「ええ？ それで免許は取れたのかい？」

「教習所って9ヶ月だか、10ヶ月ぐらいの日数制限があるらしいんだけど、それで取れなくて一回退学して入り直して取った」

「それでも取れるのはすごいような……」

「まあ、俺もすごいと思ったよ、はは」

俺たちの会話に、他の連中は意味不明だろ。

そんな話をしているうちに、またクランクだ。

「まさか、ずっと続くってことは……おっと！」

俺はブレーキを踏んだ。

通路はそこから階段になっている。

その先も見えるが——通路一面に黒い溝。

通路の一部が切られて穴が開いている。

侵入者避けか、さっきのケルベロスが入ってこないようにする仕掛けか。

見たところ、そんなに幅はないので、ケルベロスならジャンプできそうだが……。

階段もラ○クルで降りられないこともないが、どの道穴は越えられない。

皆を降ろすと階段を降りる。

そのまま通路を進むと溝に到着した。

幅は5mぐらいか――両脇にはキャットウォークもなく、歩くことはできない。

明かりで穴を照らす。

深さも5mほどか、下には棘のようなものが見えるが、中は綺麗なのでここまで侵入した者は今までいないようだ。

「こういうのには、白骨死体が引っかかってたりするもんだが」
アキラの言葉に俺はうなずいた。

「こんな所までやって来たやつがいなかったんだろう」

「旦那、普通はあの触手が突破できないよ」

「そうだな」

「ケンイチどうするの？ 橋を架ける？」

アネモネの言葉に返答しようとする、ミヤレーが声をあげた。

「ケンイチ、これは簡単にゃ！ 壁走りをすればいいにゃ！」

壁を猛スピードで斜めに駆け上がり、ジャンプするらしい。

確かに獣人たちの脚力とスピードがあれば可能だし、実際に似たようなことをやったことがあるのだろう。

「まてまて、向こうがどうなっているか解らん。渡って安心したところには罠がある可能性もある」

「ああ、ありがちな」

アキラが、なにかを思い出すようにつぶやく。

「それじゃ、どうするにゃ」

「そういえば、前に丸太で橋を架けたことがあったわえ」

「やっぱり、そいつでいこう」

俺のアイテムBOXには丸太が入っている。

この丸太、結構活躍する場面が多い。

斜面を転がしたりすれば、武器にもなるしな。

「なんだ簡単そうだな」

「ところが、いつも苦勞するのが、アイテムBOXから丸太を横にしか出せないんだ」

「んゝああ、そういえばそうだな。アイテムBOXから出すときに、長いものは横向きに出てくるな」

アキラも収納の特性に気がついたようだ。

「そんな感じなので、穴の途中にポジションを取って丸太を出す必要がある」

「なるほどな」

橋を架けたりするときも、川に入り水に浸かって丸太を出した。

俺はアイテムBOXから重機を取り出した。

「コ〇ツさん召喚！」

運転席に乗ると重機のエンジンを始動させる。

「アキラちよつと来てくれ」

「はいよゝ」

彼に簡単な操作を教える。

彼はクレーンの免許も持ってるぐらいだ、バックホウも扱えるだろう。

「この左のレバーを左に倒すと、バケットが前に出るから。右に倒すと戻る」

実際にやってみせる。

「解った、簡単だな。あのバケットに乗って穴の途中まで行くって寸法なのか？」

「そうそう。他のレバーはいじらないでくれよ。バケットから落ちたら助からん」

「ははは、大丈夫だって」

一応、バケットにロープを結んで、安全带をつけた。
これなら落ちても、下の棘に突き刺さることはない。

「旦那！ あの召喚獣は、アキラの旦那の言うことを聞くのかい？」
「大丈夫にゃ？」

この世界の人間は、未だに重機が俺の召喚獣だと思っている。
特に獣人たちは疑いをまったく持っていないようだ。

こんな鉄の塊が、動力で動くなんて想像もつかないのかもしれない。
いい。

カールドン辺りは、こいつは叡智の結晶だとすでに気がついてい
るかもしれないが……。

「心配するな。おーい！ アキラ」

彼に合図を送ると、バケットが前に出始めた。

「動いたぜ！」 「うにゃ！」

徐々に穴の上にせり出していく。

バケットが伸び切ると、俺は身体を乗り出して穴の上で叫んだ。

「丸太召喚！」

召喚じゃないんだが、格好をつけてみた。

バケットの右側に低い木琴のような音を立てて、丸太が落ちてき
てゴロゴロと転がる。

丸太はアイテムBOXに入るように約10mでカットしてあるの
で、5mほどのこの溝には、十分な長さがある。

「落とし穴にゃ！」

ミャレーの言うとおり、反対側の岸に落とし穴が現れた。

丸太が落ちたショックで罾が起動したのだろう。

「ありゃ！ 壁走りしてたらやばかったかも……あぶねえ」

ニヤメナが尻尾を立てている。

「やっぱり、渡りきって安心してるところに罾が置いてあったか
……」

落ちてきた丸太は端までゴロゴロと転がって、落ち着いた。

「もう1本！」

アイテムBOXからもう1本丸太を出す。

「アキラ、戻してくれ！」

「おう！」

バケットがガクガクと戻り始めた。

床に到着すると安全帯を外して、アキラと運転を代わる——次は
俺の出番だ。

重機を操作して床に出た丸太を右端までゴロゴロと転がし、通路
の壁に2本並行してピタリとくっつけた。

両脇が穴よりは、片側が壁のほうが安定するだろうし、渡りやす
いだろう。

壁に手について渡れるしな。

運転席から降りると重機を収納し、シャングリ・ラを検索。

探すのは車輪止め。

トラックなどを駐車するときに使う、タイヤと道路に挟める三角形のあれだ。

ゴム製で2個セット、1000円ぐらいだな。

そいつを2セット購入して、2個を手前、あとの2個を奥に使う。丸太の下に車輪止めを置くと、つま先で蹴り入れた。

「一番乗りにゃー！」

「罨に気をつけろよ」

「オツケーにゃー！」

ミャレーが長い鉄棒を持ってぴよんぴよんと飛び跳ねながら丸太橋を渡ると、向こう側を探索し始めた。

床をバシバシを叩きまくっている。

「うぎゃ！ まだ穴があるにゃー！」

どうやら落とし穴だらけらしい。

探索が終わったので、皆で壁に手をつけながら渡る。

「まったく、このようなこと聖騎士様でなければ不可能じゃわ」

「その前に触手で詰むだろ？」

このアキラの言葉にニャメナが反応した。

「アキラの旦那。まずは湖を渡る船がねえよ」

「船を作る前に、ヒポグリフを倒さないと！」

アネモネの言うとおりだが、アイテムBOXなどがなければ、計画段階でやることが山程ある。

「その前に、数ヶ月の探索を始めるための拠点を何箇所かに設置して、食料などの備蓄をしないとな」

「そのような多大な年月と国家予算をつぎ込んでの探索を、聖騎士

様とわずか数人で……これが偉業でなくて、なんなのであろうか？」
アマランサスはそういう立場の人間だったので、この探索にどのぐらいの予算と人手が必要が試算している最中だろう。

「そりゃ、こんな台地の上なんて誰も探索しないよなあ」

金がかかりすぎる上に、なにもないんじゃないかな。

普通は、こんな遺跡にたどり着くことすらできないだろう。

まあ、この台地の上には、俺たちが掘り起こした祠などもあったから、足を踏み入れた人間もわずかながらはあるようだが……。

深い溝を渡りきり落とし穴を回避して、俺たちは通路の終点に到着した。

「旦那！　なんだか、いそうな気がするぜ。念の為に弩弓を出してくれ」 「ウチのものじゃ」

「解った」

俺は戦闘のプロである獣人たちの直感を信じた。

アイテムBOXから出したクロスボウとコンパウンドボウを獣人たちに渡す。

ミャレーは弦の張り具合を確かめ、ニャメナはボウの弦を引くと矢を番え——ジッと照準を見てから背負った。

突き当りの左から、日の光が入ってきている。

そろそろ底なのではなかろうか？

そう思いながら左に曲がると——。

「おおっ！」

俺たちが出たところは、円形のホール。

崖の影が落ちて床の半分が暗くなっており、直径は30mほどか。上を見ると、透明な材料で屋根が覆われていて、中心にポツカリ

と穴が開く。

ホールの壁からは、黒い木のようなものが伸びて透明な屋根を支えている。

その屋根の上には俺が階上から落つこととしたスケルトンがバラバラになって散乱していた。

骨を落とした衝撃でも、この屋根は壊れなかったらしい。

「にゃ!」 「ここが奈落の底ってわけかい?」

「つくことは、ここにボスがいるってことになるが……」
アキラがダンジョンの構造をつぶやく。

「それって絶対にいるものなのか?」

「絶対ってわけじゃないが、あのスケルトンやらケルベロスを作ったやつはいることになるぞ」

「ケンイチ、真ん中になにかある!」

アネモネが、影になっているホール中心を指差した。

よく見ると、なにかあるようだ。

そこまで行って確かめようとしたが、目標を中心に円を描くように3mほどの溝が掘られている。

俺たちは、溝の手前で止まった。

「玉座?」

「旦那! 骨が座ってる!」 「にゃ!」

「骨?」

獣人たちの言うとおり、白骨死体が椅子に座っているように見える。

頭を覆うように細かい刺繍の入った緑色のローブを着ているが、顔は骸骨だ。

骨の腕や指にはアクセサリーが沢山光り、椅子には杖がよりかかっている。

かなりの年月が立っているように見えるのだが、ローブがほこりをまとっているようにも見えない。

そういえば、俺たちが通ってきた通路にもホコリが積もっている場所はなかった。

「お宝にゃ!」「こいつはすごいぜ!」

彼女たちは骸骨の格好を見て、金目のものがあると踏んだのだろう。

「この主か……?」

俺は独り言でつぶやいたつもりだったのだが……。

『そうだ——横奪者どもよ』

骸骨が顔をあげて、窪んだ目の中に紅い光を灯した。

「うえ?!」「生きてるにゃ?!」

獣人たちの毛が逆立つ。

「スケルトンか?」

『ふふふ……そのような下等なものと一緒にされては困るな』

ここの主が玉座に座り直す。

確かに、スケルトンはかくかく動くだけで喋ったりはしなかった。

「いやあの——申し訳ない。ここに主がいるとは思っていなかったもので……」

『散々、我が城を荒らしておいて、よく言う』

「なぜ、バレてる!?!」

「そりゃケンイチ……」

アキラが、屋根に乗っている骨の残骸を指差した。

「フヒヒ、サーセン！」

アキラの口癖が移ってしまった。

「あなた、リッチだよね?!」

骸骨を見て、アネモネが叫んだ。

『ほう……わっぱのくせに私を知っているのか』

「……ケンイチ、わっぱってなに？」

アネモネが俺のほうを見る。

「子どもって意味だよ」

「子どもじゃないし！」

『ふはは——わっぱと言われて腹を立てるのは、わっぱの証拠』

「むう！」

「アネモネ、ちょっと待て。話し合いができそうじゃないか。先にぶっ放すなよ」

「……」

ちよつと不機嫌なアネモネだが、とうのリッチはアネモネのほうを見ていない。

取るに足らない存在だと思っているのだろう。

それよりも——彼が立ち上がりゆらゆらと揺らめく指先がゆっくりとアマランサスを差した。

『この地に流れてきて1000年——また私の前に立ちふさがるのか？ 聖騎士よ』

「ち、違う！ 妾は聖騎士ではないぞえ?!」

ああ、やっぱりかあ……そうだよなあ。

能力からみても、アマランサスが聖騎士だよなあ。

思わぬ指摘にうろたえるアマランサスに、骨が笑う。

『ふはは、お前が聖騎士でなければなんだと言うのだ?』

骸骨が、外れそうな顎を開けて笑っているのだが、あの顎はどういう構造になっているのか。

身体も床から浮いているのか、スケルトンのようなカタカタ音もないし、なめらかに動く。

細かい模様が入ったローブが揺れて、風に吹かれたヤナギのよう。

「聖騎士様なら、そこにおわすわえ!」

アマランサスが俺を指差す。

俺か?

「祝福を受けたのが聖騎士っていうなら、そっちの男もそうだろう」
俺はアキラを指差した。

「あ、俺か? フヒヒ、サーセン!」

『どういふことかは知らんが、聖騎士に連なるものを生かして返すわけにはいかん——煉獄に踊りし亡者の嘆きよ、ゲヘナの門より湧き出て敵を焼き尽くせ』

俺たちが入ってきた入り口が閉じると、リッチの周りに青い光が集まり始めた。

「ええ? 問答無用?!」

「さすが、ボスだな」

『死ね——^{ヘルファイヤー}火炎連弾』

「皆! かたまれ!」

俺は、剣を取り出したアマランサスを抱き寄せた。

リッチが放ったのは、ファイヤーボールの上級魔法らしい。

無数の火の玉がマシンガンのように俺たちを襲う。

アンデッドで火に弱いはずなのに、自ら炎の魔法を使うのか?

「むー！ 聖なる盾！」
プロテクション

敵が放った炎に対抗するために、アネモネが防御魔法を展開する。一面に炎の弾が撒き散らされたが、ここはすべてが石造り。延焼するようなものはなにもない。

アネモネの透明な盾に阻まれて火はすぐに消えたが、熱気は残っている。

「あちち！ 毛が焦げる！」 「ぎゃあ！！」

獣人たちの身体から漂う焦げ臭いにおいが、辺りに充満する。

俺たちの頬や手の皮膚もチリチリと焼けるような感じがするが、アネモネの魔法から出たら酷い火傷を負ってしまうだろう。

加熱された空気は天井の穴から吹き抜け、床に開いた溝から新しい空気が入ってくるようだ。

『ほう……』

リッチの目が怪しく赤く光る。

一番小さなアネモネが魔法を使うとは思っていなかったのかもしれない。

「やりやがったな！ これでも喰らえ！」 「フシャー！」

獣人たちが背負っていたクロスボウを構えると、リッチに向けて発射した。

俺がシャングリ・ラから購入したクロスボウは、かなりの威力があるのだが――相手は骨だ。

ローブに命中したのだが、貫通してそのまますり抜けてしまった。中身がスカスカなので、これは仕方ない。

「くそ！」

奴はアンデッド――つまり死んでいる。

「ケンイチ、やつを収納できないか?!」

アキラの言うとおり、スケルトンと同じようにアイテムBOXに収納できるはずだ。

収納できたら、ゴミ箱に投入すればいいが――。

「ここだと、やつとの距離がありすぎる!」

アイテムBOXに入れるためにはもっと近づかないと。

「聖騎士様! 妾が!」

「ちょっと!」

俺が止める間もなく、アマランスが剣を構えて溝を飛び越えた。彼女の脚力であれば、3mぐらいのジャンプは造作もないだろう。

「いやあ!」

そのままアマランスがリッチに急接近して飛び上がると、細身の剣が頭蓋の上に振り降ろされた。

プロテクション
『聖なる盾』

魔物が唱えた魔法が彼女の剣を弾き飛ばすと、チリチリとした光の欠片が放射線状に飛び散る。

「ニヤメナ! 俺を溝の向こうに放り投げてくれ!」

「ええ?!」

「早く!」

彼女が俺の身体を掴むと、頭上に抱え上げた。

「うおりやあああ!」

「あああああ!」

俺の身体を抱え上げたままダッシュすると、溝の反対側まで放り

投げられゴロゴロと転がった。

「あたた——板？」

そのとき、溝に隔てられたこの空間が、黒い板張りの床だと気がついた。

板だが木製ではない。

その間にも、アマランサスの鋭い斬撃が次々とリツチに叩き込まれていたが、すべて防がれているようだ。

男としてどうかと思うのだが、アマランサスを盾にして、彼女の背中に駆け寄った。

「収納！」

必殺の収納である——が、反応なし。

もしかして、防御魔法越しに収納できないのかもしれない。

一応、アイテムBOXも魔法扱いみたいだし。

防御魔法のせいなら、そいつを破壊すればいい。

「そんな防御魔法、こいつで吹き飛ばしてやる！　コ○ツ戦闘バード
ジョン召喚！」

俺は打撲した場所をさすりながら、黄色の鋼の巨体を召喚した。

空中から現れた重機が、黒い床に落下して大きな音を立てる。

ここの床はかなり強固で、巨大な重機が落ちてもびくともしない。魔法かなにかで強化してあるのだろうか？

黒い——もしかしてアダマンタイト？

『おおおっ！』

不死の魔物も、鋼鉄の魔獣には驚いたようだ。

骸骨には表情がないので、どんな顔をしているかは不明だが、確かに驚愕の声をあげた。

俺は重機の運転席に乗り込むと、エンジンを始動させた。

「アマランサス、下がれ！」

魔物を釘付けにしていた彼女の攻撃と入れ替わりに、巨大なアダマントタイトの刃が、不死の頭蓋を水平に薙ぎ払った。

『おおっ！』

透明な防御魔法を吹き飛ばし、後ろに下がったリッチに追撃を加えるため――ペダルを踏み込むと鋼鉄の車体を前進させて巨剣を振り上げた。

「コ〇ツ両断殺！ それは、現世^{うつしよ}にしがみつく未練多き亡者を、幽^{かく}

世^{りよ}に還す一撃！ 相手は死ぬ！」

『ふっ……至高の障壁^{ハイプロテクション}』

振り降ろされた巨剣が透明な壁に阻まれた。

空中で止まった剣から光の粒子がパラパラと飛び散り、床に落ちてバウンドする。

プロテクション
聖なる盾の上位魔法、至高の障壁である。

そのとき、部屋全体がゴロゴロと地響きを立てて、うなり始めた。

「なんの音だ？」

『汝の力を示す光弾の輝きよ、我が敵^{マジックスピーア}を討て』

いつの間にかリッチの隣にスケルトンが召喚されて、そいつの口が詠唱をしている。

「なんだそりゃ、ずるいだろ?!」

この骸骨は至高の障壁を展開しながら、召喚したスケルトンに攻撃の魔法の詠唱をさせているのだ。

普通の魔導師はそんなことはできない。

アネモネがいつも使っている魔法矢^{マジックミサイル}の数倍大きい光の槍が影の中に5本現れて、俺に狙いが定まる。

『中々、面白い余興だったぞ——死ね』

防御の透明な壁がなくなると、それによって止められていたアダマタイトの刃が空を切り、光の槍が俺に向けて打ち出された。

「聖騎士様！」

アマランサスの叫び声が聞こえる。

「ちょっと——」

光の槍の輝きに、俺は死を覚悟した。

その一瞬で、この世界にやってきてからのことが脳裏に浮かんでは消える。

俺の目の前がまばゆい光で満たされたのだが、輝きは止まりそのまま固まっていた。

「むー！ ハイプロテクション 至高の障壁！」

アネモネの詠唱で顕現した巨大で透明な壁によって光の槍が遮られたのだ。

『ぬ？！ まさか、わっぱが至高の障壁を使うとは……』

「子どもじゃないし！」

リッチが撃ち出した魔法は、いつのまにか重機の隣にやって来ていたアネモネの防御魔法によって、阻まれたのだ。

光が消えると、魔物の身体に変化が現れた。

なにか黄色いウネウネしたものが降りかかっている。

「ははは！ リッチのマヨネーズがけの完成！ こりゃ不味そう！」
コ〇ツさんを挟んで、アネモネの反対側にはアキラもやって来ていた。

2人とも、獣人たちによって放り投げられて溝を越えてきたのだ。

魔物が魔法を打ち出したときに防御魔法を切ったので、そのスキをついてアキラがマヨネーズを噴射したのだろう。

ドラゴンをも倒した彼の必殺の攻撃だが、相手はアンデッドで最初から死んでいるし、呼吸もしていない。

マヨネーズで窒息させることは不可能。

それは彼も解っているに違いない。

「アネモネ、アキラ！ 無茶をするな！」

「私がケンイチを助けるんだから！」

「まあほら。俺もドラゴンスレイヤーとしていいところを見せない駄目だし――分離！」

魔物にかけられたマヨネーズが、アキラの声とともに茶色の油に変わる。

『こ、これは油か？ 面妖な……』

さすがの不死者も、自分の身体を見回してアキラのトンデモ攻撃に戸惑っているように見える。

アンデッドの類は火に弱い。

これで火を点けられれば、ダメージを与えられるかも……。

こいつは自分で火の魔法を使っていたが、油まみれになったことで、火系の魔法は封じることができたはず。

やつの攻撃の1つを縛ることはできたが、こんな化け物にどう対処すりゃいい。

俺たちがやって来た扉は閉ざされて、退路はすでに絶たれている。俺たちのすぐ後ろには3mの溝。

まさに背水の陣。

「旦那！」 「うにゃ！」

獣人たちも、溝を越えて重機の側にやってきた。

サクラに帰るためには、こいつを倒すほかない。

ケルベロスが地獄の番犬とすれば、ここは地獄の一丁目か？
やっぱりリリースを連れてこなくてよかったよ。

233話 不死者（後書き）

11月27日 アラフォー男の異世界通販生活 コミカライズ 第
3巻 が発売になります

234話 決着

俺たちは古い遺跡を見つけた。

そこはダンジョンになっており、住み着いていた魔物を撃破して最下層らしき場所に出ると、待っていたのはボスらしき魔物。

アネモネがそいつの正体に気づいた。

リッチだ。

この世界の書籍によれば、高位の魔導師が自らを召喚して魔物と化したものらしい。

当然アンデッドなのに魔法が使える。

こいつはフロアボスってことになるが、ゲームではないので無理に戦う必要はない。

相手が知能を持っているなら話し合いの余地はある——と思ったのだが、そうもいかないらしい。

俺たちが遺跡の中を荒らしてしまったのがバレってしまったし、なによりリッチには、聖騎士に少なからず因縁があるようである。

おそらく以前にいじめられたとかそういう理由であろうが、その聖騎士本人ではないのだから勘弁してほしい。

坊主憎けりや袈裟まで憎いってやつか。

すでに退路は絶たれて、リッチという高位の魔物と戦うしかなくなつた状況である。

一合したあと、アキラのマヨネーズによってやつの火炎の魔法は封じたが——問題は次だ。

円形の空間の中心にリッチが立っており、戦いを始めてから、なにやらゴロゴロという低周波音が鳴り始めたのが気になる。

「どうする!？」

リッチと対峙する。

やつの凄まじい攻撃魔法は、アネモネの至高の障壁ハイプロテクションでなんとかしのいだが、彼女もあの魔法は1回しか使えない。

大魔導師と呼ばれているレイランさんやメリッサに話を聞いても、アネモネの魔力はかなり多いらしい。

その彼女が1回でガス欠になるぐらいなので、それだけ至高の障壁には魔力を注ぎ込む必要があるのだろう。

初めて使ったときに比べて、倒れるぐらいのガス欠にはなっていないようだが――。

そう考えると、やつの魔法も限界に近いのではなからうか？

「聖騎士様! 打って出ましょう! もう至高の障壁も使えないはずですわえ!」

アマランサスも俺と同じ考えのようだ。

「よし! 解った!」

もう少し近づくことができれば、アイテムBOXに収納できるのに。

「光弾よ! 我が敵を撃て!」
マジックミサイル

2発の光弾がアネモネの上に出現すると、魔物に向けて連続で発射された。

プロテクション
『聖なる盾』

奴は魔導師だ。

魔法で防御するしかないだろう。

「いやあ!」

アネモネの魔法の着弾と同時にアマランサスが仕掛ける。
十重二十重の斬撃が、次々と魔物を斬りつけるが透明な盾に阻まれた。

まだ、聖なる盾の威力は残っているようだが――。

「こいつはどうだ！」

俺のレバー操作で、コ〇ツさんに装備されたアダマンタイトの大剣が唸りを上げる。

『む？』

「喰らえ！ コ〇ツ両斬波！ それは山をも両断する神代の一撃！

相手は死ぬ！」

『ふ――至高ハイプロテクションの障壁』

「なにっ?!」

干からびた魔物が唱えた至高の防御魔法で、鋼鉄をも両断するアダマンタイトの刃が止まる。

『ふははは！』

「こいつはまだ使えるのか！」

「おい！ ケンイチ！ ヤバイぞ?!」

アキラが叫んだときには、リツチの隣に召喚されたスケルトンの口で紡がれた詠唱が終わっていた。

『汝の力を示す光弾の輝きよ、我が敵を討て』
マジックスピア

「くそおお！」

叫んでみても、手遅れだ。

「聖騎士様！」 「ケンイチ！」

透明な壁が消えると、光の槍が俺を襲う。

もう、アネモネの防御魔法は残っていない。

彼女たちを率いた俺の責任だ。

全部俺が悪い。

一瞬の後悔のあと、迫りくる光に覚悟を決めたとき、黒い疾風が俺の横をとおり過ぎたのが見える。

それが空中にジャンプすると、敵の魔法の光を弾き飛ばした。

弾かれた魔法が逸れて、背後の壁に衝突。

ガラガラと石材が崩れる音が響く。

「にゃー！」

「ベル！」

コ○ツさんの前に構えた黒く美しい毛皮。
地上からここまで降りてきたベルだった。

『ええい！ またこのヌルヌルか！ 鬱陶しい！』

どうやら防御魔法が切れたときに、またアキラがマヨネーズを噴射していたようだ。

敵にちよつとしたスキがあれば、なんとか勝利を手繰り寄せようとする。

さすが歴戦の勇士。

「みゃ」

小さく鳴く声が聞こえる。

重機の後ろにはカゲもいるようだ。

ベルが身体を張って、リッチの攻撃魔法を弾いてくれたらしい。

黒い森猫とリッチが対峙したのだが様子がおかしい。

魔物が固まったまま動かなくなって、ベルをジッと見つめていたのだが……。

『ふ、ふははははは！』

突然、魔物が外れそうな顎をカタカタさせて、笑い始めた。

「ふしゃー！」

ベルが、リッチの笑いに毛を逆立てて怒っている。

『まさか、こんなところでお前に会うことになるうとはな——』

「ふしゃー！」

『亡国の王妃が、畜生の姿で生きながらえているとは、これが笑わずしておられようか、ふはははは』

「しゃー！」

ベルが、めっちゃ怒ってる。

「え？ 王妃？！ ベルが？！」

いつぞや、夢の中で黒髪の女性に出会ったが、それが彼女の本当の姿なのだろうか？

これが本当かは解らないが、元人間だとすれば、彼女が人語を理解するのも当然だ。

亡国っていつの話だ？

いや、問題はそこじゃない。

現在目の前にいる敵をどうにかしなければ。

「ベル！ どいてくれ！」

俺は再びペダルを踏み込むと、車体を前進させて鋼鉄の腕に装備されている大剣を振り上げた。

「うおおお！」

渾身——いや、俺が力を込めたわけではないが、鉄の魔獣がアダマタイトの剣を振り下ろした。

至高の障壁という大魔法を2回使って、さすがのリッチも魔法切れだと思ったのだが——。

再び剣が透明な壁に阻まれた。

「なんだそりゃ！　ずるいぞ！！」

『ふはははは！』

骸骨が憎たらしくカタカタと笑う。

だいたいアンデッドになったんだから、そんな感情とやらは捨てるべきじゃないのか？

アホなことを考えていると、ベルの声が聞こえる。

「にゃー！」

「なんだって？！　水車！？」

「ケンイチ！　ベル姉さんなんだって？」

「そうか！」

俺は、彼女の言葉を理解した。

このリッチとの戦いが開始されてから、ゴロゴロという振動が始まっていたのだが、俺はその正体に気がついた。

俺は重機をバックさせると、床に向けて剣を振り下ろす。

青い火花をチリチリと散らし、黒い刃が板の継ぎ目に食い込む。

かなり丈夫な黒い床だが、一枚板ではなく複数の板がつなぎ合わせてあるので、そこを突く。

板の隙間に巨剣を差し込んで無理やりこじ開けた。

こんな強烈なパワーはこの世界にあるまい。

コ○ツさんのパワーに負けて黒く長い板が弾け飛ぶ。

「おっと！　あぶねえ！」

ガラガラと板が転がり、危うくアキラに当たりそうになったが――
――悪いが非常事態だ。

板が外れた所から、グルグルと回る円形のものが見え隠れしている。

「アネモネ！ こいつはゴーレムのコアだ！」

「え？！ ——解った！」

彼女が俺の言葉の意味を理解したようだ。

「むー！」

目を閉じる彼女の周りに青い光が浮かぶ。

『ふはは、この舞台の意味が解ったようだが——それがどうした？ お前らに打つ手はもう残っていないぞ？』

リッチの周りに光の粒子が舞い、透明な壁がなくなると同時に頭上に白い魔法の槍が浮かんだのだが……それが突然、弾け飛んだ。

「む！」

アネモネが目を見開いた。

『な、なんだと？！』

「光弾よ！ 我が敵を撃て！」
マジックミサイル

小さな大魔導師の周りに10本の魔法矢が顕現して、次々と魔物に向けて撃ち出された。

『せ、プロテクション聖なる盾！』

リッチが、辛うじてアネモネの魔法矢を弾いたのだが、かなり焦っているように見える。

「やった、アネモネちゃん！ 押してるぞ！ 俺もマヨネーズ噴射だ！」

アキラの声が響くと、黄色いウネウネが骸骨に飛んでいく。

「妾も加勢するぞえ！ カダン流剣術奥義！ 百花繚乱！」
剣を構えたアマランサスが一気に間合いを詰めて、縦横無尽に斬

撃を繰り返す。

白い刃が防御魔法にふれると、沢山の光の粒子になって飛び散り舞う。

それは、本当に風に舞う花びらのようにヒラヒラと舞っては消える。

『ぬう！ 鬱陶しい！ うぬぬ！ わっぱには、もう魔力が残って
いなかったはず?!』

「子どもじゃないし!」

「説明しよう！ この下で回っていたゴーレムコアは、魔力発生機
だな？ 俺も似たようなのを作ったから解る」

『お前が?!』

骸骨の表情は解らんが、驚いているように見える。

多分、驚いているのだろう。

「そうだ!」

「ああ、旦那！ この床の下でグルグルしてるのが、あの魔石に充
填する機械のデカイやつだって言うのかい？」 「ほんとにゃ？」

「そんでな——骸骨が、ここで惰眠を貪っている間に魔法も発達し
て、ゴーレムコアを乗っ取る方法が発明されたんだよ」

『な、なんだと!』

「言っておくが、もうこのデカイコアは新型の魔法で書き換えてし
まったので、乗っ取り返すのは不可能だ」

「うん！ すごいよこれ！ 魔力がどんどん流れ込んでくるのが解
る!」

この骸骨は、魔力発電機から魔力をもらってデカイ魔法を使いま
くってたってわけだ。

やっぱりチートじゃん！ ってわけのわからんシャングリ・ラッ
てもものを使いまくっている俺が言えた立場じゃないけどな。

その魔力発電機も名義を書き換えてしまったから、もうアネモネのものだ。

コアを動かしている動力は、水車を利用しているのだろう。ここに入ったときに、獣人たちが滝の音が聞こえるといっていたが、そいつを水車の動力として利用しているのに違いない。

「うちの大魔導師様を子どもとか馬鹿にしたから、しっぺ返しを食らったんだよ」

「うん！」

『うぬぬ！ それがどうしたというのだ〜っ！！』

リッチがブチ切れると、黒いオーラのようなものが魔物の身体から吹き出した。

「まだ力が残っているのか？！」

『闇より生まれし漆黒の眷属、深き混沌の縁から這い出し我が声に応えよ』

魔物の魔法が唱えられると、無数の黒い穴が床に開き、そこからスケルトンが這い出てきた。

ここにいるスケルトンは、こいつが呼び出したものなのか。

「よし！ スケルトンは俺に任せろ！」

重機から降りると、俺はスケルトンの大群の前に立った。

「ケンイチ！」

「大丈夫だアネモネ——収納！ 収納！ 収納！」

近づいてきたスケルトンが、次々とアイテムBOXに収納された。

『な、なんだと！？』

リッチが消えるスケルトンに驚く。

まあ当然だな。

こんな攻撃は食らったことがないだろう。

「アンデッドってのは当然死んでいる。死んでいるってことはものだから、アイテムBOXに入るんだよ」

『ぐぬぬ……そのようなことが』

「お前に近づけば、たとえ高位のアンデッドのリッチといえども、アイテムBOXに収納できるんだ」

「しまっちゃんおじさんだな」

「はい、どんどんしまっちゃんからねえ」

『うぬ！ 光弾よ！ 我が敵を撃て！』
マジックミサイル

リッチが唱えた魔法矢が、透明な壁によって阻まれた。

「プロテクション
聖なる盾！」

大魔導師同士の魔法の応酬だが、このままやってもきりがない。

俺は局面を開くべく、シャングリ・ラを検索して大きな凹面鏡を購入するとアキラに放り投げた。

「こりゃ……あ！ なーる！」

凹んだ鏡と天井から差し込む光を見て、アキラも気がついたようだ。

この鏡は太陽光を集めて調理に使うもので、某ロボットアニメにも出てきた——ソーラナントカってやつだ。

古代ギリシアの賢者アルキメデスは、鏡で集めた光を使って船を焼き払ったという。

アキラは凹面鏡を脚で踏みつけると、それを使って光を集め始めた。

本来調理に使うクッカーなので、焦点距離が短い。

脚で踏んだのは、その焦点距離を延ばすためだ。

アキラが集めた光が、まばゆい光点になってリッチに向かう。

プロテクション
『聖なる盾！』

骸骨が再度、防御魔法を唱えた。

鏡で集めた光は魔法ではない。

防御魔法という透明な壁だが、物理攻撃は弾いても相手の姿は見える。

つまり可視光線は通過できるってわけだ。

光り輝く点がリッチの身体に当たると、すぐに白い煙が立ち上り始めた。

魔物の身体には、アキラがぶっかけたマヨネーズの油がたっぷり染み込んでいる。

「おっ！？」

リッチがなにかしようとした瞬間、白い煙に火が点いて、干からびたアンデッドの身体に火が点いた。

『ぎゃああああ！』

ファイヤーボール

「むー！ 憤怒の炎！」

アネモネの周りに青い光が舞い――追いつきの炎の弾がリッチに命中すると、一瞬で火の柱と化し燃え盛る松明のようになった。

『ぐおおおっ！』

「やっぱり、ダメージってあるのか」

「そりゃそうだ」

俺のつぶやきにアキラが反応した。

「骨になっているから、痛点とかないんじゃないかと」

「肉体的な痛みってよりは、霊魂的にダメージが入るんじゃない？」

アンデッドの身体がどうなっているか解らんが、とにかくダメージが入って苦しんでいる。

今がチャンスだ。

残りのスケルトンの処理を他の皆に任せると――俺は、アイテムBOXからSUV車を取り出した。

「おい、こいつで殺るんじゃないのか？」

アキラがコ○ツさんを指差す。

「そいつは振る動作が大きすぎるので、ロードキルしてみようかと」アキラと話しながら、運転席に乗り込むとエンジンをかけた。そのとき、黒い影がリッチのもとに走ると、いきなり骸骨がひっくり返った。

『ぎゃ！』

「みゃ！」

リッチをひっくり返したのはカゲだ。

俺は、ドアも半開きのままアクセルを踏み込むと、4つのタイヤが音を立てて車が急発進する。

こんな素早く動く鉄の魔獣があるとは、夢にも思わないだろう。

『く……おのれ』

カゲの力によってひっくり返った魔物が、車に向かって攻撃しようとしているのか、青い光が見える。

あいにく魔法の詠唱より車のほうが早く、鋼鉄の車体が魔物の身体に衝突。

鉄の軋む音を聞いて俺はブレーキを踏み込んだ。

ゴムのタイヤが鳴る音を聞きながらハンドルを左に切ると、弾き飛ばされた骨が、そのまま黒い床の上を滑っていくのが見える。

アンデッドの身体は、この舞台を囲っている深い溝の手前で停止。俺は車を降りると、リッチの所に駆け寄った。

『う……』

横倒しになった骨が、苦し紛れに指先を上げてなにか魔法を唱えるような仕草を見せたのだが――俺の横を再び黒い疾風が走った。

「ベル！」

俺の前には、リッチの頭を啜えた黒い森猫。

『離せ！ この畜生めが！』

「しゃー！」

骸骨の言葉に憤慨したのか、ベルが黒い床にガツガツと頭蓋を叩きつけ始めた。

『止めろおおお！』

やばい、彼女が本気で怒っている。

こんなに激怒しているベルを見たことがないので、そっと彼女に頼んだ。

「お母さん、そいつをアイテムBOXに収納したいんだけど……」

「……」

ベルが頭蓋を口から離すと、床にガツンと打ち付けた。

バウンドした骨がゴロゴロと床を転がっていく。

『この偉大なる――』

リッチがなにか言おうとしたのだが、俺は構わず叫んだ。

「収納！」

他のスケルトンと同じように、高位のアンデッドも同じようにアイテムBOXに吸い込まれる。

頭が吸い込まれたら、身体は動かなくなった。

あの頭蓋の中に魔石があったのかもしれない。

そして、俺たちのいる舞台の下で回っていた魔力発電機も停止した。

床下にあるデカイコアはアネモネが乗っ取ったが、動力源が生きていたため回り続けていたのだ。

そいつが止まったのだろう——リッチの魔法かなにかで紐付けされていたに違いない。

「ケンイチ！」

アネモネが走ってきて俺に抱きついてきたので、抱き上げて頼ずりをする。

「おおっ！ やったぜ！」

「旦那あ！ すげえよ！ あんな化け物を倒すなんて」「すごいにやー！」

アキラと獣人たちもやってきた。

「まったく、また喉がカラカラだよ。なん回、喉がカラカラになれば気が済むんだ」

俺はアイテムBOXから缶コーヒーを取り出して、一気飲みをした。

「さすが聖騎士様あ！」

アマランサスも抱きつくが、聖騎士ってのはアマランサスのことなんじゃ——だが、この話は止めておこう。

「お母さんもうありがとうな」

「しゃー！」

彼女はまだ怒っている。

「そんなに怒るなって」

ベルの黒い毛皮を背中から尻尾にかけて、ナデナデしてやる。

「みゃ」

「おお、カゲもありがとうな！」

カゲの黒い毛皮もナデナデ。

「やったなケンイチ！ 大物退治じゃねえか」

「いや、皆のおかげだよ。アキラもありがとうな。あの通路の触手を燃やさなければ、ベルがここまでやってこれなかった、さすがだ」

「まあ結果論ってやつだよ結果論！ 俺もそこまで深く考えてなかったし、ははは」

彼は笑うが、リッチのスキを見てマヨネーズなどで突破口を作ってくれたのは確かだ。

「でもお母さん。よくリッチの魔法の元が魔力発電機だと解ったな」
「にゃー！」

「え？ そうなのか？」

「ベル姉さんはなんだって？」

彼女の話では、上にある湖は転移魔法によるものらしい。

ベルとカゲは俺から離れて、ホールの中をクンカクンカと探検を始めた。

「それじゃ、湖の底に転移魔法の魔法陣があって、どこからか水を持ってきていると――」

「どうやらそうらしいな」

それならば、こんな場所に湖があるのも魚がいるのも説明がつく――って物理的なものを無視しているから、説明になっているかと言われれば、微妙な話なのだが。

「でも、水を転移させて、その水で水車回してって、もう永久機関

じゃないか」

「そう……だな」

アキラが、腕を組んで首を傾げる。

物理の法則なら、ものを持ち上げるのに相当のエネルギーを消費するが、魔法ならそいつを無視できるのかもしれない。

たとえば10m転移させるのも100m転移させるのも大して違わないとすると……。

——とはいえ、俺も魔法のことはよく解っておらず、なにか制限みたいなものがあって無限のエネルギー源となるのを阻んでいるのかもしれないが。

「うはあ、魔法ってのはやっぱりすごいな。でも無限に取り出せるエネルギーがあるのに、科学がまったく発達しないってのは……」
「そのきっかけがねえんじゃね？ 発達が始まればあつという間だと思っぜ」

「いやあ——そんなことになったら、絶対に戦争に……」

元世界の歴史を見れば一目瞭然。

無限のエネルギーなんて持っているなら、兵器に転用すれば世界を簡単に征服できる。

力を持ったら使いたくなるのが、人の常。

「多分な……」

「俺は、そのきっかけになるのは止めておく」

俺が生きている間に、転移魔法を公開するつもりもないし。

ハマダ領のために使うならいいけどな。

話はそれぐらいにして、アイテムBOXを確認する。
そこには【ミイラ 1】となっている。

「そうか、ミイラか……」

奴はアンデッドで、頭だけで生きていた。

つまり、この状態でもまだ生きていて、出せば魔法も使ってくるので、もう出せない。

あの頭蓋の中にはかなり大きな魔石が入っていると思うが——もったいないが、ここから出すのは危険過ぎる。

俺は、そのままリッチの頭を、ゴミ箱へシュートした。

これで終了である。

一段落ついたので、残った身体のほうに向かう。

骨を覆っていたローブは焼けてしまっている。

これじゃもう使えないだろう。

多分、なんらかの付与がついたものであるが、これも破棄だな。見れば、カラカラに干からびた指に指輪がハマっているのが見える。

「ふうむ……」

「ケンイチ！　なんかすることあるにゃ？！」

「うーん——あ！　そうだ、あの天井のところに転がっている骨から魔石を集めてくれ」

「解ったにゃ！」　「旦那、任せろって！」

獣人たちがピョンとジャンプをすると、天井の端に掴まってそのまま屋根に飛び上がった。

相変わらずの身の軽さだ。

「ケンイチ、リッチの頭はどうする？」

「もうゴミ箱に放り込んだ。頭でも動いていたし、あの状態でも魔法が使えるとか怖すぎる」

「あれでスケルトン召喚して頭を持たせりゃ機動力が手に入るし、他のやつと身体を入れ替えたりすればいいんだからな」

「まったく悪趣味過ぎる。そんなことまでして長生きしたくないが

……」

「歳をとると死にたくねえ——って思うんじゃないのか？」

「まあ確かに……若い頃は、パツとやって40ぐらいで潔くくたばるのもいい——なんて考えていたが、その歳になってみたら冗談じゃねえし」

「ははは、俺だってそうだ。まだまだ面白いことが山程あるんだ。こんな所で死んでたまるか」

俺はアキラと話しながら、リッチの指輪を手に入れた。

死体から剥いだ指輪なんて——と思うが、なにか特別なものかもしれない。

2つの指輪をアイテムBOXに入れてみる。

【素早さの指輪】

【力の指輪】

——と表示されている。

「おお！ こりゃ、レアな魔法のアイテムかな？」

「どうした？」

「アキラ、今日の礼をやる。素早さアップと、パワーアップ、どっちがいい？」

アイテムBOXから指輪を取り出すと、彼に見せた。

「魔法のアイテムか？ 別に気を使わんでもいいぞ？」

「いや、礼をするときに礼をしないと、頼みにくくなるし」

「そうか——それじゃ、パワーアップだな」

「本当にパワーアップするか解らんのだが……」

「まあ、リッチが持っていたレアなアイテムってのは間違いない。

帰ったらセンセに調べてもらおう。そしてそのあと——ウヒヒ」

「なんだ？ なにをするんだ？」

「パワーアップするなら、センセと24時間耐久駅弁売ゴッコがで

きるじゃん」

「ああ、そういう……」

話を聞いていたアネモネとアマランサスが、不思議な顔をしている。

この世界に駄弁なんて売ってないからな。

それはそうと、アネモネの前で下ネタは止めてほしい。

リッチの身体を調べてから、アイテムBOXに入れる。

やっぱり【ミイラ 1】と出る。

数百年生きてきて——いや死んでいたのか、ミイラ扱いも可哀想な気もするが、話し合いに応じてくれなかったのだから仕方ない。魔物といえど、意思疎通ができれば共存の道があったのかもしれないのに……。

まあ、ベルや聖騎士となにか因縁があったみたいなので、ちよつと無理だったか。

などと、ちよつと感傷に浸りながらゴミ箱へポイ。

ホールを中心の舞台から移動するために、車と重機をアイテムBOXに収納してから溝にハシゴを渡す。

3mぐらいなので、アルミのハシゴで十分だ。

皆が移動したら、中心にあった黒い板をアイテムBOXに収納しようとしたのだが……ちよつと考える。

「あとでいいか……」

それに先にやることがある。

俺たちが入ってきた入り口が閉まったままなので、再びコ〇ツさんを出してこじ開けた。

人1人が通れる隙間があれば帰れるが、ボスを倒しても開かないんじゃない、ここで詰むだろ。

まあゲームではないので、ボスを倒したら開く必要はないのだが。

「ケンイチ！　ここになにかあるよ！」

俺が重機から降りると、反対側にいたアネモネが叫んだ。

部屋の外周を回って、急いでそこまで行くと彼女の前に宝箱があった。

こいつも黒いので、アダマントイトかなにかでできているのだろうか？

「おーし！　鍵か！　俺に任せてくれ」

アキラがやってくると鍵を開け始めた。

外装は不明だが、鍵の形式はよくあるタイプのように、すぐに開く。

「アキラ、あいたか？」

「おう！　御開帳！」

彼が蓋を開けると、金色の座布団の上に紅い正八面体が鎮座していた。

その大きさは、拳2つ分。

「なんだ？　宝石か？」

「ケンイチ！　これって若返りの神器だぞ！」

「え？！　マジで？！」

「ああ、皇帝が持っていたのと同じものだと思う」

若返りの神器というと、帝国にあって皇帝が若返りに使うという

――あれか？

俺は、紅い宝石を手にとると、アイテムBOXに入れてみた。

【神器 1】

と表示されている。

若返りとは書いてないが、神器なのは間違いない。

「なんじゃと!? 若返りの神器?!」

俺がアイテムBOXから神器を出してアキラに渡すと、それがアマランサスに渡された。

俺たちからちよつと離れた場所で、アキラとアマランサスがある――だこーだ言っている。

帝国皇帝がどうやって神器を使っているのかレクチャーしているようだ。

「ケンイチ! なにかすごいものがあつたにゃ?!」 「さすが旦那だぜ!」

「まだ、なにかない?」

獣人たちとアネモネが箱の中を覗き込んでいると、青い光が瞬き始めた。

「な、なんだ?! 魔法か?!」

見れば床が光っている。

「なんにゃー!」 「旦那!」

「ケンイチ!」

その次の瞬間、俺は闇の中にいた。

235話 出た先は

俺たちは遺跡の探索を行い、その最下層にたどり着いた。

そこにいたのはリッチと呼ばれる高位のアンデッド。

皆の協力でそいつを倒し、魔石や宝箱をゲット。

その中に――なんと帝国の皇帝が使っているといわれる「若返りの神器」らしきアイテムがあった。

神器を見たことがあるらしいアキラに確認してもらったが、間違いないようだ……。

こりゃ、大発見！――と思いきや。

突然、光に飲み込まれて――次の瞬間、俺たちは闇の中にいた。

真の闇だ。まったく何も見えない。

自分の目の前に、手を持ってきてもそれすら見えない。

まさか、本当に地獄への門だったとか……？

「なんじゃこりゃ！」

「にゃー！」「うおっ！」

この声は、ミャレーとニャメナだな。

獣人の2人はいるようだ。

「いしのなかにいる」

この声はアネモネなのだが……困ったもんだ。

「アネモネ、アキラのマネは止めなさい」

「ふひひ、サーセン！」

コレもアキラではない、アネモネだ。

もう、すぐに真似するんだから。

「こらっ！ もう」

「アネモネ、アキラみたいになったら、ケンイチに嫌われるにゃ」

「女である性格だったら、クソやべえよな」

獣人たちも俺と同意見のようだ。

オッサンならあれでもしょうがないが、子どもが真似するのはよろしくない。

「じゃ、止める」

「まったく、お前ら余裕あんな」

俺は暗闇の中で頭をかいた。

「にゃはは」

「獣人たちでも、なにも見えないか？」

「少しでも明かりがないとにゃー」 「俺も駄目だ」

「んゝまいったな」

「これにゃ、前になったのと同じやつにゃ」 「旦那、これって転移の門で飛ばされたんじゃない……」

暗闇から声だけが聞こえる。

本当になにも見えない。

「多分な——お前たち、なにがあるか解らないから動くなよ。今明かりを出すから」

アイテムBOXのウィンドウを開くと白く光って見えるが、その光は他の人には見えない。

これってやっぱり、俺の脳みその中でそう見えているだけなのか？

アイテムBOXからLEDランタンを出して、地面に置いた。

下は石造りで硬い。もう1つ明かりを出して周囲を照らす。

壁がみえるが、石造りで人工物らしい。
いったいどこに飛ばされたのやら。

「ふう、明るいにゃー」「旦那、飛ばされたのは4人かい？」
俺とアネモネ、そして獣人たち。
森猫たちもいない。

「そうらしいが、周囲に気配は？」
「何もないぜ？」

獣人たちが、クンカクンカして耳をクルクルと回している。
においは——かび臭く、空気も淀んでいる。

多分、数百年とか長い間、空気が入れ替えられていないのだろう。

下にも埃が積み重なっているので、しばらく誰も訪れたことがない場所のようだ。

埃を手でどけると、魔法陣らしきものがあるが——力を込めても吸われる感じがしない。

魔法陣が死んでいるらしい。

所々欠けているので、破損しているのだろう。

「まいったなこりゃ、一方通行か。一体どこに飛ばされたのやら……」

「——ということは、どういうことなんだい？」

「トラ公はアホだにゃ、あそこに戻れなくなったにゃ」

「うるせーって、マジかい旦那！」

ニヤメナも、この状況に気がついたようだが——。

「ああ……」

「はあ——しゃーねえなー」「そうだにゃー」

獣人たちは別に慌てている節もない。

アネモネも、その場でしゃがんで魔法陣を指でなぞったりしている。

「お前たち、平気なのか？」

「だってなあ……俺たちだけでこんなことになったら、そりゃやべえけどさあ」

「ケンイチがいればなにも困らないにゃ」

「アイテムBOXからご飯も沢山出てくるしね」

「アネ嬢の言うとおりでぜ」「そうだにゃー！」

そりゃ、今アイテムBOXに入っているものを使えば、この暗闇で死ぬまで生活することも可能。

もちろん、そんなことをするわけないけどな。

とりあえずの心配はなさそうだが、あの魔法陣はどうやって起動したのか。

リッチはすでにゴミ箱に入っていたし、腹が減ってないってことは、俺の魔力が使われたわけでもないだろう。

「うーん、近くにデカイ魔石でもあったのかな？」

「転移の魔法陣が動いたこと？」

俺のつぶやきに、アネモネがこちらを見た。

「ああ」

「誰の魔力も使われていなかったはずだから、多分魔石だと思う」「やっぱりそうか……」

リッチが使っていたデカイ魔石がどこかにあったのに違いない。

さて、それはいいとして——置いてきてしまった連中はどうしただろうか？

途中の触手はアキラが焼いてしまったので問題ない。

湖も船が置いてあるから渡れる。

サクラへ帰るにしても、アキラの車があるから大丈夫だろう。彼のアイテムBOXにも食料ぐらいは多少はあるだろうしな。

「うゝん……」

「どうしたんだい旦那」

「いや、置いてきてしまった連中のことだ」

「あの顔ぶれなら大丈夫だろ？」 「そうだにゃー！」

「竜殺しのアキラもいるし！」

「そうだよなあ。ハッキリいって、俺よりかなり強いし実戦経験も豊富だ。アキラのアイテムBOXもあるしな」

「うん」

とりあえず、安心したら腹が減ったな。

聖騎士の力を使ったわけじゃないが、ハラペコだ。

食えるときに食っておこう。

幸い、ここにはなにもいないようだ——多分な。

うず高く積もっている埃を見ても、誰もここにいないのは明白。

もし、なにかが接近しても、獣人たちが気がつくだろう。

リクエストを取るのだが——答えは。

「カレーにゃ！」 「カレー」

どんだけ好きなんだ。

「そうだな、俺は肉まんとおにぎりを……そうだ」

シャングリ・ラを検索してみると、見つけた。

そいつを購入してみると、ビニル袋に包まれたものが落ちてきた。

「肉まん？」

「肉まんってやつにゃ」

「こいつはちょっと違うんだよなあ。アネモネ、魔法で温めてみてくれ」

「うん！」

彼女が魔法で加熱すると、獣人たちがその正体にすぐに気がついた。

彼女たちの敏感な鼻が反応したのだろう。

「カレーにゃ?!」「カレーのにおいだ！」

俺が買ったものの正体は、カレーまん。

元世界にいたときも、肉まんばかり食っていて、こいつはしばらく食ったことがなかった。

あと、ピザまんとかもあったなあ。

ついでに購入して、食べ比べを試してみる。

メーカーは有名な中○屋なので、食い慣れた味ってやつだ。

「おおっ！ 肉まんはカレーにもなるにゃ?!」「うめー！」

えらい勢いで食べているので、すぐになくなりそうだ。

喉につかえるので、中華スープも用意した。

「こっちはチーズ？ これも美味しいね」

「色々と種類があるけど、最後は普通のに戻っちゃうんだけどなあ」
もちろん、あんまんもあるのだが、個人的には好きではない。

俺とアネモネは、おにぎりも食べているが、獣人たちはカレーまんをバクバクと頬ばっている。

「頑張ってくれたから、いくらでも食っていいぞ？ 普通のカレーもですか？」

「ほんとかにゃ？」 「腹減ったから腹いっぱい食うぜ！」

肉まんを食べ終わると、アネモネが俺の膝の上に乗ってきた。

「えへへ」

「なんで嬉しそうなんだ」

「しばらく、ケンイチを独り占めできるし……」

「独り占めって——獣人たちもいるだろ？ それに、この暗闇から脱出しないと駄目なんだぞ？」

「大丈夫大丈夫！ なんとかなるにゃ！」 「ああ、旦那といえば、怖いものなんかねえ」

「その割には、トラ公は魔物に尻尾を逆立ててたにゃ」 「うるせえ！ クロ助だってそうだろうが！？」

「なんだもう、緊張しているのは俺だけなのか？」

他の3人は、まったくそんな感じはしない。

「あー、ニヤメナ——ちよつと、ここにきなさい」

アネモネを膝の上から降ろすとニヤメナを呼んだ。

「え？ なんだよ旦那……」

「いいから」

ニヤメナの手を引っ張ると膝の上にうつ伏せに乗せて、背中をなでる。

「にゃあああ！」

「なんだ可愛い声を出して」

「だって……」

「ベルがいないから、俺はニヤメナをなでて、心の平穏を保つことにするんだよ」

彼女の背中から尻尾にかけての毛皮を指でなでる。

素晴らしい手触りは、俺の心を癒やしてくれるわけだ。

「ふっ、ふっ」

ニヤメナはプルプルと震えて、俺になでられるのを我慢している

ように見える。

「嫌なら止めるが……」

「そ、そんなことないし……」

「ケンイチ！　ウチもなでるにゃー！」

ミヤレーが抱きついてきたので交代する。

「おう！　なでるぞ！」

ミヤレーは俺の膝の上に腹を出して乗ってきた。
ふさふさの短い毛の手触りが最高だ。

「お腹触らせていいのか？」

「ケンイチならいいにゃー」

無防備な腹を晒すっていうのは信頼の証なのだ。

「うりうり」

「うにゃ」

ミヤレーも目をうつとりさせて、完全に俺に身を任せている。

「お腹はふわふわだなあ」

「これで、しばらくケンイチを独り占めにゃ、あとはトラ公がいなきゃ完璧だったのににゃ」

「そうはいくかよ！」

「獣人の男たちもなあ——そんなに毛艶のいい女が好きなら自分たちでもブラシ掛けをしてやればいいのに」

「やつら、そんなことは絶対にしないにゃ」 「そうだよ、旦那」

どうも男がそういうことをするのは恥になるらしいが、隠れてやっている奴らもいるのではないだろうか？

獣人たちには彼らの文化があるので、とやかくは言えないが……。

俺の家族の女たちも、只人グループと獣人グループに完全に分かれている。

お互いに干渉というか、まったく興味がない。

只人のライバルは只人で、獣人のライバルは獣人という具合。

獣人たちも、相手が獣人の女だともものすごく警戒する。

「さて、心の平穏はなった。少し探索するか」

女たちにLEDライトを持たせて、周囲を調べさせる。

明かりはアネモネの魔法があるが、なにがあるか解らるので小魔法といえども無駄遣いはできない。

リッチ戦でも、アネモネの大魔法を温存し続けたことが勝利に繋がったと考えている。

ライトが照らし出す構造物は通路になっていて両側に壁がある――石造りだ。

方向感覚がわからんので、方位磁石を出した。

通路は東西に延びているようなので、とりあえず東へ向かうが――5分ほどで行き止まりになった。

完全に壁なので、この先になにかあるようには思えない。

多分、岩盤なのではあるまいか。

次は、来た道に戻り反対側に行く――方位磁石で西方向だ。

歩き始めると、すぐに獣人たちが反応した。

「ケンイチ、なにか居るにゃ!」 「白いのがいる! このにおいは……骨じゃねえか?!」

「スケルトンか――ここもダンジョン化しているのか?」

そんなことを考えていると、骨がこちらを向くと襲ってきた。

「うにゃ?!」

「速い！」

スケルトンなら、カタカタと動いてきて動きは遅い。

アイテムBOXに入れば楽勝とか油断していたのだが、この相手は速かった。

普通のスケルトンとは違い、立派なアーマーを着込んだこのスケルトンは動きが段違いだ。

ゲームでいうところの上位種ってことになるのか？

一瞬で間合いを詰められそうになり、アイテムBOXに収納できる間合いに入る前に切られるか相打ち。

相打ちでは、こちらに分が悪い。

俺になにかあれば、他の3人がこの暗闇の中で詰んでしまう。それだけは避けねばならない。

「くそ！ コンテナハウス！」

俺は一旦間合いを取るためにコンテナハウスを出した。

いつそこのスケルトンが下敷きになってくれればと思ったのだが、敵は落下してきたコンテナハウスを避けた。

動きがいい。

空振りしたコンテナハウスが、大きな音を出して通路にこだまする。

「旦那！」 「ケンイチ、大丈夫にゃ!？」

「ケンイチ！」

「アネモネ！ 火炎や爆裂は使うなよ。魔法矢で牽制をしてくれ」
閉所空間で炎や爆発はマズい。

酸素がなくなる可能性もある。

「うん！ 光弾よ！ マジックミサイル 我が敵を討て！」

アネモネが魔法の詠唱に入ると、俺はアイテムBOXからロープ

を出して、獣人たちに投げた。

「2人で引っ張って、やつの脚を引っ掛けられないか？」

カゲがいれば、魔物をひっくり返すのも簡単なのに。

「うにゃ！」「解ったぜ」

「コンテナハウス、収納！」

コンテナハウスがなくなると、白く輝く魔法矢が次々と発射されて魔物に向かう。

魔法で片がつけば簡単なのだが、アネモネが打ち出した矢を、スケルトンは剣を振って弾き飛ばした。

「げっ！ そんなのありか？」

白い魔法矢を次々と弾いていたスケルトンの足元に、獣人たちが引っ張る縄が迫る。

剣を振りながら縄も避けようとしたのだろうが、片足が引っかかってバランスを崩した。

「チャンス！」

俺はアイテムBOXから、ユ○ボを召喚した。

この狭い場所じゃ、コ○ツさんは大きすぎる。

俺は運転席に乗るとエンジンを始動させた。

鉄の魔獣に乗ってしまえばこっちのもんだ。

相手が剣を持っていようが、鋼鉄のバケットに敵うはずがない。

「ユ○ボ大回転！ それは、漆黒に染まる幽世の遺恨を切り裂く光の刃！ 相手は死ぬ！」

スケルトンは、グルグル回る鋼鉄のアームに剣で立ち向かおうとしているが、無駄なあがきだ。

あっけなく弾き飛ばされて、床に転がったところにバケットが振

り降ろされた。

「アディオス！ グレロフランコ 白き戦士よ！」

ユ○ボの直撃で骨がバラバラと散らばったが、床にへばったまま、まだ動いている。

俺は重機から降りると、動いている部分をアイテムBOXに収納した。

「やったにゃ！」 「やったぜ旦那！」

「ふう——やっぱり戦力は少々落ちるな」

「まあ、人数が少ないんだから、しょうがないよ旦那」 「そうだな
や」

「戦いは数だよ兄貴！ ってアキラがいつもいつてた」

半分ギャグなんだろうが、アキラは帝国で実戦をかなり積んできたから実感だろう。

スケルトンが落とした剣を拾う。

「結構いい剣だな」

「見せてにゃ！」

ミャレーに渡す。

雑魚のスケルトンが持っていた剣はボロボロのなまくらばかりだったが、こいつは普通に鋼鉄の剣だ。

ユ○ボのバケットを切りつけたりに、あまり損傷がない。

「中々の強敵だったな。もしかしてダンジョン化しているのか？ あんなのがゴロゴロいるとなるとヤバいな……」

心配になるが、先に進まざるを得ない。

「ケンイチ！ なにかあるよ」

アネモネが指差した所には小さな箱。

あとで確認しよう——アイテムBOXに入れると、皆で先に進む。

何回か折れ曲がった道を進むと、スケルトンが待っていた。

10体ほどだが、さっき戦ったような強敵ではない。

普通のスケルトンだ。

雑魚なら俺の敵ではない。

動きの鈍いスケルトンに近づいて、アイテムBOXに収納すればいいのだから。

他の3人に牽制してもらいつつ、アイテムBOXに入れる。

「収納！」

あっけなく片がついた。

その先には、5体のスケルトン。

次は2体のスケルトン。

「徐々に魔物が弱くなってるにゃ」「普通と逆だぜ？」

「あの強いスケルトンが、ダンジョン化しているここの親玉だったんだろう。俺たちは転移でいきなり出てきてしまったから」

「普通は入口から入って弱い敵から戦っていくのに、いきなり裏口から親玉の所に出ちゃったんだね？」

アネモネの言うとおりだろうな。

「つまり敵が弱くなってきたから出口が近い——ということだな」
「なーる、さすが旦那だぜ」「解ってなかったのはトラ公だけだにや」

「うるせえ！」

数分進むと行き止まりだったが、壁で閉ざされているとかではなく、通路が崩落して土砂で埋もれている。

「はあ、土砂崩れのせいで、この通路がふさがってしまったのか」
「それじゃ、これをどかせば外に出られる？」

「多分な」

「ケンイチ、ゴーレムのコアを出して」

この土砂をゴーレム化して、土砂を通路から押し出す作戦だろう。
アイテムBOXからコアを出して、土砂の所に置いた。

「むー！」

真っ暗なので、魔法の青白い光がよく見える。

キラキラと光り、辺りを照らしだす。

繰り広げられる幻想的な光景は、切羽詰った状況だというのに、
それを忘れさせてくれる。

まあ、彼女たちを見ていると切羽詰っているのは、俺だけのよう
な気がするのだが……。

青い光に包まれたゴーレムのコアが土砂の中に入っていくと、目
の前の山が生き物のように動き始めた。

さて、通路に詰まっているものが多いと押し出すのは無理だと思
うのだが……。

彼女は、コアを先に送って動きを探っているらしい。

土砂の先に空間があれば、そこに押し出すつもりだろう。

魔法は100mぐらいならコントロールできるようなので、そこ
までに空間があるか外に出れば土砂を押し出せる。

駄目なら、重機を出して土砂をアイテムBOXに入ればいい。

コアのこの使いかたが解っていれば、峡谷の土砂崩れも簡単に片
付けられたのにな。

アネモネの魔法が終わるのをジッと皆で待つ。

かなり時間がかかっているのだが、彼女の魔力は持つのだろうか？

「アネモネ、無理をしなくてもいいぞ？」

魔法中はトランス状態なので、俺の声が聞こえているか微妙だ。待っていると、土砂崩れの上のほうが崩れて、わずかながら光が入ってきた。

こっちは真っ暗なので、わずかでも光があれば光って見える。

1人ぐらいは通れるぐらいの穴だ。

「光にゃ！」「おおっ！ やったぜ！」

アネモネの魔法が切れて、その場にしゃがみこんだ。

「大丈夫か？」

「はあはあ……うん、大丈夫」

「先に行って、偵察を頼む」

俺は獣人たちに仕事を頼んだ。

「オッケーにゃ！」「任せろ！」

俺はアネモネの状態を見て、シャングリ・ラを検索——介護用のおんぶ紐を購入した。

「これに脚を通して」

「これって、赤ちゃん背負うやつじゃない？」

どうやら、この世界でも赤ちゃん紐はあるらしい。

それよりもっと高度なものだけだな。

「まあな。アネモネを背負っても、両手が使えないとマズい」

どうも、赤ちゃんみたいな格好になるのが恥ずかしいが、そんなことを言っている場合ではない。

彼女はフラフラで、まともに歩ける状態ではないのだ。

待っていると、すぐに獣人たちが戻ってきた。

「ケンイチ！ 大丈夫にゃ！ 先に繋がっているにゃ！」 「旦那！ 狭いのはここだけで、奥はもうちょっと広いぜ！」

「解った！ ありがとうな！」

恥ずかしがる彼女を、少々強引におんぶ紐に押し込めて背中に背負う。

「アネモネ、大丈夫か？」

「うん……」

背中で彼女がモジモジしているのが解るが、ここを脱出するのが先決だ。

両手両足を使って瓦礫を上る。

そういえば、昔こんな感じでビルを登るゲームがあったような……。

上まで到着すると、今度は横になって這い、狭い所をクリアする。

そこをクリアすると中腰で進むことができ、100mほどで石造りの床に出た。

すでに通路内はかなり明るくなっており、出口が近いことをうかがわせる。

「先を見てくるにゃ！」

「気をつけろよ」

「大丈夫だよ、旦那！」

獣人たちがすごいスピードで石の通路を走っていく。

俺はアネモネを背負っているので、ゆっくりと進んでいると、すぐに先に行った2人が戻ってきた。

「ケンイチ！ 外だにゃ！」 「森の中だぜ！」

「森の中?!」

彼女たちと一緒に通路から出る。

まぶしい日の光で目がくらみ、思わず掌で庇^{ひか}を作る。

目の前に広がるのは、鬱蒼とした森。

未開のジャングルだ。

後ろを振り返ると、遺跡の入り口を思わせる建築物。

すぐ近くに、頂きに白いものが積もる山脈が見えるので、どうやら山の麓らしい。

「えーっ？ いったいどこに出たんだ？」

「ネリネ山脈の麓じゃね？」

ニャメナが言うネリネ山脈は王国にある連なる峰だ。

俺たちが住んでいたカダン王国は東西2本の山脈に囲まれており、その東側がネリネ山脈ということになる。

「いや、もう1つの西の山脈の可能性だってあるぞ？」

「それじゃコスモ山脈にや？ それだと共和国の近くになるにや」

共和国——正式名称はマグロイア共和国。

チル將軍という英雄が国をまとめて革命を起こし、王政をひっくり返して共和国を作った。

ご多分に漏れず、そういった革命で国がまともになることはなく、王政の頃に比べても酷い有様になっているらしいのだが……。

国境は山脈の頂点で分かれておらず、西の山脈であるコスモ山脈の西側も一応王国領となっているのだが、共和国側も領有権を主張している。

双方領有権を主張している割には入植は行われておらず、それどころか調査もされていない前人未到の土地。

「いやまてまて——山脈の麓ってだけで、ほかはまったく解らん。

ひよっとしたら帝国かもしれんし……」

「帝国なら、共和国よりマシだにゃ」

アキラの話を聞いても、ソバナで帝国側に行ったときも、王国とそんなに変わらない印象だったし。

「はぁ……共和国側でないのを願うしかないな。とりあえず、ここを拠点にして調べていくしかないか……」

「うにゃー！」 「任せてくれよ旦那！」

「えいえいおー！」

「お前ら元気だな」

俺の不安と裏腹に、皆は元気いっぱいだ。

「さっきも言ったけど、ケンイチといれば食いっぱいくれることはないにゃ！」

「そうそう、部屋を出せば温かいベッドや毛布もあるしよ」

「私は、ケンイチを独り占めく！」

アネモネが俺に抱きついてきた。

いや、まいったなあ。

王国側ならなんとか帰れるだろうし帝国ならソバナを目指せばいいが——共和国側だったらどうやって帰ろう……。。

236話 石化！

リッチを倒してダンジョンを攻略したと思ったら、どこかに飛ばされた。

飛ばされた暗い通路は、ダンジョンになっていたようで、スケルトンなどと遭遇。

だいぶこちらの戦力は減ってしまったのだが、このぐらいならなんとかなる。

飛ばされたのは俺とアネモネ、そして獣人たち。

アキラやアマランサス、森猫たちとははぐれてしまった。

俺が転移先から戻ってこないことに気がついて、彼らも非常事態だと認識しただろう。

すぐさま、サクラに引き返すに違いない。

魔物を軽く捻って外に出たのだが、どこかの山の麓らしい。

ここが王国内なら帰れると思うのだが、隣の帝国や共和国の可能性もある。

帝国なら王国とそんなに変わらない印象だったし、ソバナから王国側に戻れるが……。

ここが共和国だったら、どうするか……。

国の制度も文化も違う国からどうやって王国に戻る？

——それが問題だ。

悩むのはあと。

そろそろ日が傾く頃だ。

キャンプの準備を始めなくてはならない。

「今日はここに泊まるにゃ？」

「そうだな、今から動けないし——とりあえず周囲の確認だけしてみるか」

俺はアイテムBOXからドローンを取り出し、準備が完了するとすぐに発進させた。

周囲は全部未開の森。後ろは山脈。

これだけじゃ、いったいどこなのかさっぱりと解らん。

ドローンでの周囲の確認で解ったことは、約4km四方にはなにもないってことだ。

「ケンイチ！ 周りを見てきてもいいかにゃ？」 「旦那！ 俺も俺も！」

なんだか、獣人たちがそわそわしている。

見たこともない新しい土地なので、探検してみたいのだろうか？

それに獣人たちなら迷子になることもあるまい。

彼女たちは自分たちのおいをたどってキャンプに戻ってこられるからな。

「ああ、いいぞ。周囲に魔物がいないか確かめてきてくれ」

「解ったにゃ！」 「行くぜ！」

彼女たちに武器と装備を渡す。

武器は剣とコンパウンドボウ、そしてクロスボウといつもの装備だ。

索敵は獣人たちの専門分野だ。

只人よりも速く駆けて、スタミナも山盛り。

においを辿れば迷うこともない。

「気をつけろよ」

「うにゃー！」 「俺はやるぜ！」

武器を持った獣人たちが、あっという間に森の中に消えていった。

「ふう……こちらは飯の用意でもするか」

「うん！」

久々に、アネモネにパンを焼いてもらう。

彼女はなんだか嬉しそうだ。

「遭難してるんだが怖くはないのか？」

「うん、ケンイチと一緒にだからへーき！」

それならいいが、俺の仕事とヘマで巻き込んでしまったようなもんだからなあ。

このまま帰れなかったらどうしよう。

——とはいえ、同じ大陸にいる限り、アイテムBOXとシャングリ・ラにあるものを使えば、絶対に帰れるはずだけどな。

森は車で走り、川や湖はボートで進む。

一番心配な水や食料にも困らないわけだし。

病気などもアネモネの魔法と俺の祝福の力があるし。

大丈夫だとはいえ、油断はできないけどな。

ドラゴンでも出てこない限りは——出てこないよな？

テーブルを出して飯の用意をしていると、ミヤレーとニヤメナが帰ってきた。

手に大きな鳥の首を握っている。

「これで唐揚げ作ってにゃ」「俺も！」

「おお、いいぞ」

獣人たちに鳥を捌いてもらい、唐揚げにする。

ニヤメナにはビールを出してやった。

怖い我慢して彼女は頑張ったしな。

「うみゃー！ うみゃーで！」 「かー！ 唐揚げに、このエールが合うんだよなあ！」

ミャレーが唐揚げを食べて、ニャメナが美味そうにビールを飲んでいる。

しかし、アキラがいないと随分と静かだな。

「アキラがいないと静かだね」

「あはは、アネモネもそう思ったのか。俺も、彼がいるとどうしてもツツコミを入れちゃうしなあ……」

飯が食い終わる頃には辺りが暗くなる。

ダンジョンの出口だった所に、コンテナハウスを出した。

中の敵は全滅させたので、後ろから敵がこないことは解っている。

一応念の為、以前に使った丸太製の「入」型の障害も設置してみた。

未開の土地でなにがあるか解らんし、念には念を入れる。

いつも言っているが臆病な者が勝つのだ。

久々に4人で寝るのだが、その前に獣人たちにブラシをかけてやることにした。

いつもは森猫たちが一緒だったが、今日からはしばらくいない。裸になった獣人たちが俺に絡みついてスリスリしてくる。

その姿は大きな猫のようだ。

ニャメナを掴まえると、膝の上に乗せてブラシでなでる。

「さて、アキラたちは無事に帰れたかなあ？」

「アキラとアマランサスがいれば、大丈夫にゃ」 「あっああつ、そ、そうだよ、旦那」

ニャメナの身体にブラシをかけてやる度に、彼女が尻尾を立てて身体をくねらせている。

「2人とも強いしね」

「アネモネの言うとおりだな」

聖騎士の力を内包している元王妃と、帝国のドラゴンスレイヤー――最強タッグだ。

「それに、魔道具がついている船もあるし、アキラには鉄の召喚獣もいるにゃ」

「湖に船を置いたままにしていたのは正解だったなあ」

いや、強敵にあったら、すぐに逃げるつもりだったのだ。

まさか閉じ込められて無理やり戦わされる羽目になるとは……。

「ニャメナ、山の形とか見たか？」

「あ、あつ……み、見たけど、解らなかったよ」

彼女の身体がプルプルと震えているので、頭をなでてやる。

獣人たちはキスをしない。

相手が只人だと真似をしてすることもあるのだが、獣人同士だとそういう文化がない。

その代わり、よくにおいを嗅いでクンカクンカする。

「そうか」

以前、転移門で飛ばされたときは、彼女が山の形で位置を特定してくれた。

見たことがない山ばかりということは、やっぱり王国内ではないのか。

「山の上まで登れば、かなり見渡せるんだがなあ……」

「そんなことができるの？」

アネモネが興味津々なのだが。

「うゝん、無理だろうなあ。山頂は氷点下で雪が降っているし」
「氷点下ってなに？」

「えゝと、氷ができるより寒いってこと」

「そんなに寒かったら死んじゃうかも……」

東西どちらの山脈も、万年雪で覆われていることから、6000
〜7000m級だと思われる。

実際、王都とソバナをつなぐベロニカ峡谷などの限られた場所か
らしか山脈を越えることができない。

それでも海に近くなれば山脈も低くなる。

ここから見る限りでは、そういった地形は見受けられず、海の近
くではないらしい。

「しかも、高い山ってのは空気が薄いんだ」

「そうなのきゃ？」

「ああ、かなり息苦しくなるし、人によっては病気になって動けな
くなることもある」

「へえゝ」

「凍傷も怖いぞ。手足が凍って腐って落ちる」

「みゃ！」

その話を聞いたミヤレーの尻尾が毛羽立ってふさふさになった。

「そ、そんなの絶対に無理じゃんか……」

ニヤメナがちよつとぐったりしてきたようにつぶやく。

「だから山越えをするやつがないんだよ」

「トラ公！ そろそろ代わるにゃ！」

今度は、ミヤレーにブラシかけしてやる。

「うにゃゝ」

解らないながらも、徐々にパズルが集まってくるな。

その後はベッドに入ると4人で包まって寝た。

— — — — — ◆ ◆ — — — — —

——わけのわからん場所に飛ばされて次の日。

いつもと同じような朝だが、まったく知らない場所。

皆は普段と変わらんが、俺だけがプレッシャーを感じているのか。
一応、年長者だし貴族だし、皆を守らねば……。

アキラたちはサクラに戻っただろうか？

まだ早いかな？　もしかして俺たちが戻ってくるかもしれないと待っているだろうか？

サクラに戻っていれば、ことの顛末をリリスやプリムラに話してくれるだろう。

心配だろうが、転移門で飛ばされるという事態になにもできない。

皆で朝食のグラノーラを食べながら話す。

「ケンイチ、今日はどうするにゃ？」

「ここにいても仕方ない。西に移動して人里を探す。そうすれば、ここがどこだか解るだろう」

「なかったら？」

アネモネがグラノーラをスプーンで掬ったまま、こちらを見ている。

「ここに帰ってきて、しばらく暮らすしかないなあ。だってどうしようもできないし」

「アキラたちが転移門を使って助けに来てくれるんじゃないかい？

旦那」

「いやあ、ここに来てても帰れないのだから、二重遭難になるだろう

よ」

アキラたちは、今俺たちがどうなっているか、まったく解らない状態。

俺たちは転移に失敗して死ぬ可能性だってあった。

暗闇の中でアネモネが言った「いしのなかにいる」は冗談でもなんでもなかったのだ。

死ぬ危険性があるのに、再度転移門を使って俺たちを追ってくるのは無謀過ぎる。

「でも、人数が多いほうが帰れるかも……」

アネモネがつぶやく。

「そうだけど、そんな危険を冒してくれとは、アキラたちには言えないなあ……」

飯を食い終わると、コンテナハウスや障害物を収納して出発の準備をする。

移動した所に戻ってこられるように、ピンク色のスプレーで印を付けていこう。

「アキラの旦那たちがやってきても、これなら解るかもな」

「まあ、それも兼ねているが……」

正直期待はしていない。

俺としても、そんな危険は冒してほしくないし。

アイテムBOXからSUV車を出した。

燃料の軽油はアイテムBOXの中にたっぷりとあるし、このままでも数千kmは走れる。

それだけ走れば、どこかに着くだろう。

「ケンイチ、ウチは走っていくにゃ!」 「旦那、俺も!」

獣人たちは走って森を進むようだ。

確かに森の中なら、彼女たちの脚のほうが速い。

それに、いつもよりすぐ元気がいい。

俺のせいでこんなことになったのに、嫌な顔をせずについてきてくれるのだから、ありがたい。

彼女たちのためにも、なんとしてでもサクラに帰らなくては。

俺とアネモネで車に乗り込むと、獣人たちのあとを追って出発した。

この車の天井には方位磁石がついている。

メーターが2つ並んでいて、左側が方位磁石だ。

GPSナビの時代に方位磁石なんて——と嫌味を言われたりしていたのだが、こういうときにはありがたい。

メーカーの人も異世界で役に立つからといって、装備したものではないだろうが。

右側のメーターは、高度計らしい。

値はほぼゼロなので、ここが低地であるのは間違いない。

異世界の気圧が元世界と違っていたりしたら役に立たないのだが——この世界に来てから気圧の違いを実感したことはないので、さほど変わらないと思われる。

天井の方位磁石を見ながら真西に進む。

途中、500mほど進んだら、窓からピンクのスプレーを出して木に印をつけていく。

これなら迷うことはないだろう。

まあ、獣人たちがいるからにおいを辿ってもらえばいいのだが——いや、彼女たちになにかトラブルがあったりする最悪の展開も想定しなければ。

ビビリのほうが長生きするのだ。

途中の森で、定番の敵である黒狼とキバ熊を倒して車は進む。
さすがに俺みたいなオッサンでも経験値が貯まるんだなあ。

魔物退治も手慣れてきたが、強くなったと思ったときが一番危ない。
い。

高名の木登り——車の運転とかも慣れてきたときが一番危ないっ
ていうのが定説。

注意しなければ。

時速20kmで5時間——つまり100km走って昼食にした。
たまにドローンで周囲を確認するが見事に森しかない。

途中の森の中に綺麗な花とかもあるのだが、見ている余裕がない。

「にやははは！ 行けども行けども、なにもないにゃ！」 「まった
くだぜ、ははは」

獣人たちがパンを食べ、コーヒー牛乳を飲みながら大笑いしてい
る。

「お前ら元気だな」

「こんな大きな森は久しぶりだにゃ」

「アネモネは大丈夫か？」

「全然平気！」

皆が明るいのはいいことだ。

「しかし、これって旦那がいないとマジで即詰みだったな、あはは
ニヤメナが上機嫌そうに笑う。

「獣人たちなら獲物も取れるし、逃げ足も速い。詰むってことはな
いだろう」

「まあ、旦那の言うとおり、只人よりはしぶといかもな」 「そうだ

にゃ」

昼飯を食い終わったので、再び出発。

しばらく進むと――途中で小高い丘に遭遇した。

「ケンイチ、どうするにゃ？ 回り道するにゃ？」

獣人たちの脚ならどうってことはないと思うが、俺とアネモネには少々キツイ。

ドローンを飛ばして周囲を見るが、結構大きな丘であり、回り道すると時間がかかりそう。

「このぐらいなら、こいつで上れると思う」

俺は鉄の召喚獣を指差した。

「本当にゃ？」 「大丈夫かい？」

「まあ、駄目だったらしょうがない。迂回しよう」

「俺たちが、旦那たちを担いで登ってもいいぜ？」

「そんなことさせられないよ。まあ、多分大丈夫だ」

まっすぐに登れなくても、斜めにジグザグに登ればいけるはず。

ラ○クルをデフロックすると、斜面を登り始めた。

フロントガラスに山が迫ってくる――かなりの急斜面だがいける。

崖状になっている場所などは避けて斜めに走り、登れる場所を探す。

「すごいにゃー！ こんな所も登れるのにゃ！？」 「そいつはすげえやつだな」

獣人たちには少し先行してもらい、頂上部を調べてもらうことにした。

「クンカクンカ、鳥のにおいがするにゃ！」 「これは大物だぜ?!」

「トラ公行くにゃ!」「おうよ!」

どうやら鳥のにおいがするらしく、獣人たちが張り切って先行を始めた。

また鳥を獲って、唐揚げにするつもりなのだろうか?

斜面が緩やかになり、もう少して登り終わる——という所で、獣人たちが慌てて戻ってきた。

「ふぎゃー!」「旦那! なんかいた! なんかいたあ!」

「なんかってなんだ? 鳥じゃないのか?」

そう思ったのだが、丘の頂上部から白いものがやってきた。
白くて巨大ななにか。

「ちょっとまってえ! 魔物か?! 引き連れてくるなよ! アネモ

ネ掴まれ!」

「うん!」

獣人たちからすれば、群れのボスは俺。

一番強いやつに戦って欲しいということなのだろう。

彼女たちには偵察などをやってもらっているので、役割分担ともいえるのだが……。

俺はアクセルを踏み込むと急発進したのだが、ローギアでしかもデフロックしているからそんなにはスピードは出せない。

斜面で木を避けながら車で走る俺たちの前に現れたのは、白くて巨大な鳥。

確かに鳥だが、なんか鶏っぽい。

「クワァァァ!」

もしかして、あいつの縄張りに入ってしまったのかもしれない。
魔物から逃げるよう回り込みながら斜面を登ると、そいつが俺た

ちの車を追いかけてきた。

鳥は鳥なのだが、尻がおかしい。

「ケンイチ！ お尻から蛇が出てる！ 何あれ?!」

アネモネが鳥の尻を指差している。

「え?! もしかしてコカトリス?!」

コカトリスだったら、ヤバイ。

こいつって石化のガスかなにかを吐くんじゃなかったか？

斜面を登りきり、頂上部を目指す。

「クワアアア！」

車でジグザグに走る俺たちに、コカトリスの口から白いものが噴き出された。

「おわああ！」

慌ててハンドルを切ると、白い霧が当たった場所にあった木や草などが白く変色している。

すげええ！ 車の高張力鋼板も、石化するのだろうか？

それはそれで試してみたいような——いや、そんなことを言っている場合ではない。

頂上部付近は木が少なく走りやすい——というかなにも生えていない不毛の地。

そこに石を組んだようななにかがあり、大きな鳥の羽などが見える。

「あ！ もしかして、やつの巣か?!」

ここら一帯は、コカトリスのガスのせいで、不毛の地と化しているのだろう。

大きな石の巣を回り込むようにして、その背後に隠れた。

「アネモネ、ここらへんは木が生えていない。ぶっ飛ばしてもいいぞ」

俺たちの姿が見えなくなったことで探しているのだろう。

魔物の足音が止まっている。

獣人たちも俺たちを追ってきていなかったもので、近くにはいないはず。

大丈夫だ。

「解った！ むー！」

魔物のガスを食らっても車体が石化するだけで、生身よりは耐久性はマシだろう。

車内で発動した魔法の青い光が、中に溢れる。

巢の陰に隠れ――その向こうにいるであろうコカトリスへの、魔法による当てずっぽうの攻撃だ。

エクスプロージョン
「爆裂魔法！」

石の壁の向こうで、青い光が瞬き赤い爆炎に姿を変える。

振動で車が揺さぶられて、爆発の衝撃波で石の壁が崩れると、ボンネットとフロントガラスを直撃した。

「うわ！」

目の前が真っ白になる――フロントガラスが割れたのだ。

続いて吹き返しの風が轟々と爆炎の中心に流れていくと、ガタガタと揺れるハンドルに必死にしがみつく。

轟音は、しばらくすると静かになった。

物音は聞こえない。

「ふう！」

車を降りると、そっと石の壁から辺りを窺う。

敵がいた付近には5mほどのクレーターができており、土を被ったコカトリスが埋まっていた。

直撃はしなかったもので、まだ生きているようだ。

止めを刺さなくては。

「コ○ツ戦闘バージョン召喚！」

地響きを立てて、黄色い重機が落ちてきたので、運転席に乗り込むとエンジンを始動。

レバーを操作すると、アームの先端についたアダマンタイトの巨大な刃を振り上げ、コカトリスの白いクビに狙いを定めた。

「コ○ツ断頭断！ それは、愛と哀しみに満ちた死の執行人！ 相手は死ぬ！」

大量の土を巻き上げて、振り降ろされた切っ先が地面にめり込む。クビを両断されたコカトリスは、残った身体が突然デタラメな動きを始めたが、すぐに事切れた。

「ふう……これで大丈夫だろう」

俺は重機の運転席で仰け反ると、天井を見た。

一応、高い場所から周囲を確認するが、なにもいない。

実は番でもう1匹いるとか、そういうのは勘弁な。

「ケンイチ！ 大丈夫？！」

重機の下にアネモネがやってきた。

「ああ、大丈夫だ」

さて、獣人たちはどこに行ったか。

どこかに隠れていると思うんだが……。

とりあえず、アネモネの魔法には巻き込まれていなかったようで

一安心。

重機から降りると、アイテムBOXからメガホンスピーカーを取り出して呼びかけた。

『おい！ 魔物は倒したぞ、ミヤレーとニヤメナ出てこい！』
待っていると、すぐに獣人たちがやってきた。

姿勢を低くして耳を伏せ、周りをキョロキョロ見回している。

「だ、大丈夫にゃ？」 「旦那……」

「大丈夫だ。そこに転がっている」

俺はクビが離れた白い魔物の身体を指差すと、獣人たちを抱き寄せた。

2人とも、カタカタと震えているのが解る。

どうも獣人たちは、突発的な遭遇に弱い気がするな。

彼女たちの毛皮をなでて、落ち着かせてから車の所にいく。

「ミヤレーとニヤメナは周囲を警戒」

「解ったにゃ」「解った……」

2人とも、さっきまでのハイテンションが嘘のように、しょんぼりとしてしまった。

逃げてなにもできなかったのを気にしているようだ。

ボロボロになってしまった車をなでる。

「あゝ、ついにアカンかあ」

フロントガラスは割れて、ボンネットはボコボコになってしまった。

まあ、これでも走れるけど、フロントガラスがないのはまずいな。
ボディの一部に、コカトリスの息吹を浴びたようで、白く変色し

ている。

その部分は石にはなっていないようだが、指で握るとポロポロと崩れてしまう。

「召喚獣、死んじやった？」

「はは、大丈夫だよ」

俺は、車をアイテムBOXに収納した。

ボコボコでもちよい乗りとかで使えるだろう。

車はないと困るから、新しいのを買うか……。

数々の冒険でボロボロになっていたが、今日のが止めになってしまった。

シヤングリ・ラで中古車を検索する。

車種はやっぱり、ラ○クル——なにせ実績が違う。

白いボディで、10万km走った中古に目が止まった。

ちよっとリフトアップしており、フロントにカンガルーバンパーが装備されている。

ロードキルも多いし、これは欲しい装備。

年式は古いが値段は200万円也。

「ポチッとな」

躊躇はないし、金の心配をしている場合ではない。

なにせ、これがないと帰れないのだから。

白いボディが落ちてきたので、早速エンジンをかけてみる。

ディーゼルエンジンのキンキン音が響く——問題ない。

「ちよっと違う……」

新しいラ○クルを見て、アネモネがつぶやいた。

「直して、強化したのを呼び出したんだ。大丈夫だよ」

どうも、アネモネの魔法で召喚獣を傷つけてしまったと思っているらしい。

「うん」

燃料が入っていないので、バイオディーゼル燃料を補給する。

買った車ってのはどうして満タンにしてくれないのか。

そういうサービスの所もあるけどさ。

普通は入ってないんだよねえ……。

満タンになったので、各部をチェックしてアイテムBOXに収納した。

大丈夫だ。

今日の移動はここで終わりにして、ここにキャンプを張ることにした。

ここがコカトリスの縄張りだと解っている魔物は、ここにやってこないだろう。

安全地帯になっていると思う。

ひとまず落ち着こう。

237話 他の国に住む森の住民

リッチを倒したあと、転移門でどこかに飛ばされた。どうやら一方通行らしく元の場所に戻れない。

目の前に広がっているのは、鬱蒼とした森。

とりあえず人家を探して、ここがどこかなのか確かめる必要がある。

地理が解れば車もあるし船もある。

なんとかなるに違いない。

人はそれを希望的観測と言うが……。

深い森の中を車を真西に進め、大きな丘を越える。

そこにいたのはコカトリスと思われる大きな魔物。

アネモネの魔法でこれを撃破して、魔物の巣らしき場所で一泊することになった。

大きな戦闘をしたので一旦落ち着いたほうがいい。

キャンプを張るためにコンテナハウスを出す。

戦闘で逃げ回っていたためか、獣人たちがしょんぼりしている。

まだ耳を伏せてビクビクしているので、彼女たちを抱き寄せてナデナデしてやる。

「はは、気にするな。突然デカくて見たことがない魔物が現れたんで、びっくりしたんだろ？」

「……そう、にゃ……」 「面目ねえ……」

元世界で観た、びっくりして走り回る猫の動画を思い出してちょっと笑ってしまう。

獣人たちも落ち着いたようなので、コカトリスの白い死体をアイテムBOXに収納した。

見たこともない魔物がどんどん溜まるなあ……。

こいつは鳥なので食べそうであるが、解体するなら水のある場所にしたほうがいい。

ここで解体したら、キャンプができなくなってしまうし、血の匂いによって他の魔物を呼び寄せる可能性もある。

その前に、こいつが番だつがいと困るのだが……今のところのその様子はない。

大きな羽毛に覆われているので、素材としてなにかに利用できるかも。

サクラに帰って皆に見せるのが楽しみだ。

「ケンイチ！ こっちに来るにゃ！」「旦那！」

獣人たちが呼ぶので、石で組まれた円陣の中に行ってみる。

コカトリスはここを巣として利用していたようだが、正確な円を描いているので、なにかの遺跡のようにも見える。

石組を登って、獣人たちと一緒に中を覗く。

たくさんの羽根や小枝の中に丸くて大きなものがあつた。

長さ50cmぐらいある白い卵。

「でけえ！」

「大きいにゃ！」「食えるのかな？」

「まあ食えるんじゃない？ 卵の中ってのは、身体の内臓ができる前の状態だから、これで毒ってことはないだろうし」

もしかして孵りかけかもしれないが……。

「へえ」

「お前ら、俺が蜘蛛の卵を食ったときは、ギャーギャー言ってたの

に」

「だって旦那！ あれは蜘蛛じゃないかよ。こいつは鳥だし」「そうだにゃ」

虫は駄目だけど、鳥はOK——ってことらしい。

手で卵を触る——殻は凸凹だがつるつるしており、すごく硬そう。

「ケンイチ！ 私も見たい！」

アネモネの手を掴んで引っ張り上げてやる。

「ほら」

「すごい！ 大きな卵！」

「こいつもアイテムBOXに入れるか……サクラの連中に食わせてやろう」

「ここでは食べられない？」

「これだけの量があっても、処理に困ってしまう。コカトリスの解体もそうだが、人手が必要だ」

「あれは人数がいないと無理だぜ」「それも水がある場所がいいにゃ」

獣人たちも俺と一緒の意見のようだ。

巣の中はくさいので、卵をアイテムBOXに入れたら撤退する。

この卵は有精卵で生きているかもしれないが、アイテムBOXに入れた瞬間に死んでしまっただろう。

「卵があったってことは、雌なんだろうな」

「多分、そうにゃ」

「でも旦那。雄が現れるってことは？」

ニャメナが耳をクルクルと回している。

「雄が近くにいたら、戦闘になって雌の鳴き声を聞いた途端にここに駆けつけると思うが……」

「ウチもケンイチの言うとおりでと思うにゃ」

「周りに怪しい気配や、鳴き声は？」

「ないぜ!」 「あれだけデカいものが近づいてくれば、すぐに解るにゃ」

落ち着いたので、ちょっと遅めの昼飯を食う。

今は――多分、1時頃だな。

インスタントもので済ませる。

肉を焼いたりして、いいにおいをさせると魔物を引き寄せてしまふかもしれん。

俺がこの世界の森で初めてキャンプしたとき、焼き肉をやった黒狼を呼び寄せてしまった。

自分で言うのもなんだが、平和脳ってのは恐ろしい。

「こんな森の深くでも普通に飯が食えるにゃんて、ケンイチがいるからできるにゃ」 「まったくその通りだな」

俺は飯を食いながら、あることを思い出した。

「おっ、そうだ! スケルトンをやったときに箱があったよな」
アイテムBOXから、その箱を取り出す。

100均のタッパーぐらいの黒くて小さな箱だ。

「なにが入っているにゃ?」 「いいものが出てくるんじゃない?」
「わくわく」

こんな小さな箱に罫があるってことはないだろう。

鍵はかかっていないようなので、蓋を開けてみた。

中は赤い布が張られており、その中に白いコインが一枚。

「にゃんだ銀貨かにゃ?」「なんだよ」

獣人2人がコインを覗き込んで、ガツカリした表情をする。

「ちょっと待て——ふうん」

俺は、コインに力を送ってみると、丸い板が淡く光始めた。

「これは白金貨だな」

「にゃにゃ! すごいにゃ!」「それじゃ、ああいうスケルトンがたくさん出るダンジョンがあれば、大金持ちだな」

「けど、あのスケルトンはかなり強かったぞ? 普通に戦ったら、結構苦戦すると思うがなあ」

「それでも白金貨になるとなりや、命知らずがわんさかやってくるぜ?」

「命がけの博打は——感心しないなあ……」

アネモネにも白金貨を見せてやる。

「むー!」

彼女もコインに魔力を注ぎ込むと、淡く光り出す。

「ミャレーとニャメナに、褒美でやろうか?」

「冗談じゃねえよ、旦那。俺たち逃げ回っていただけじゃねえか」「そうだにゃ」

「いや、その前の仕事の分だよ。ダンジョンで先行してくれたり、リッチ戦と一緒に戦ってくれただろう?」

「俺ら見てただけじゃん」「にゃ」
「なんだかんだと言って、もらってくれない。」

一応、アイテムBOX内にある彼女たちの共通フォルダの中に入れておく。

「だいたいにゃ。前からもらっている金もまったく使っていないにゃ」

「散々飲み食いさせてもらっているし、これ以上はなにもらねえ」

「にやはは、ウチは獣人で一番金持ちだにゃ」

「金があるなら、家を建てるって手もあるぞ？」

「家なら、ケンイチからもらった鉄の家で十分じゃ」

「そうだよなあ。あれがあれば普通の家なんて、玩具みたいなものだ。魔物に襲われてもびくともしねえし」

獣人たちに物欲はあまりないらしい。

実際、彼らの稼ぎは家賃とメシ代、飲み代に変わってしまう。

男なら、女を買って散財する。

それが獣人たちだ。

「ベルたちも連れてきたかったね」

「探す場所がたくさんあるから、喜ぶだろうな」

ベルと言えば、リッチの話では亡国の王妃だとか言っていたな。

「ケンイチどうしたの？」

アネモネが俺の顔を覗き込んでくる。

「いや、リッチのやつが、お母さんをどこかの国の王妃だと言ってただろ？」

「うん」

「元人間なら、言葉が解ってもおかしくないなあ——と思ってな」

「やっぱり、あの森猫はちよつと違うと思っただにゃ」「だいたい普通の森猫は、あんなデカくないしな」

でも、元王妃かあ——そう考えると、ちよつと失礼なことを色々としちゃったな。

まさか元人間だとは思わないし。

「あの骨が嘘ついたかもしれないにゃ」

「いや、ベルもやつと知り合いだったみたいだから、それはないだ

ろうな」

「リッチは何年ぐらい生きてたのかな？」

「わからん、やつは500年前にあそこに来てきたと言ってたし、その前からリッチをやっていたとすれば、1000年ぐらいはたっているのかもしれないなあ」

さすが、ノーライフキングなんて言われるぐらいの魔物だな。

「エルフ並にゃ」

「そう、長生きしているエルフなら、あのリッチや、なくなった王国のことも知っているかもしれないな」

そうだとはいえ——エルフでも1000年生きている長寿つてのは中々いないのでは……。

飯を食い終わったら、獣人たちは周囲のパトロールに向かうらしい。

戦闘でいいところを見せられなかったので、他で挽回するつもりだろう。

彼女たちには十分に働いてもらっているので、気にしなくてもいいのだが。

コンテナハウスの中のベッドに寝転がり、アネモネと一緒に本を読む。

彼女は俺と2人っきりで楽しそうだ。

「むふふーケンイチと2人っきりー」

彼女が俺の上に乗ってくる。

「本当に2人きりになってしまったらどうするんだ？」

「やったあ——ケンイチ独り占めえ」

アネモネが俺に抱きついてきて、シャツをクンカクンカしている。

まったく堪えてない。

まあ、暗くて殺伐としているよりは全然いいけどな。

夕方になったので飯を食い、ちよつと離れた場所にコンテナハウ
スをもう1つ出し、そこで獣人たちと寝る。

明日は、アネモネと2人きりで寝る約束をして、今日は獣人たち
との戯れだ。

たっぷりと可愛がってやった。

————◆◆————

——獣人たちの毛皮に埋もれて寝ていると、夜中に起こされた。

「旦那！ 囲まれたぞ?!」 「にゃ！」

「え?! 魔物か?!」

獣人たちの言葉に慌てて飛び起きる。

さすがに寝ぼけている場合ではない。

ここは前人未到の森の深層なのだ。

なにがいてもおかしくない。

「獣の気配じゃねえな……」

「それじゃ人か？」

人なら、ここがどこだか解るはずだ。

ファーストコンタクトを成功させなくては。

獣人たちが窓から外を眺めている。

空には月が出ているので、彼女たちの目なら十分に見えるだろう。

「……これは、もしかしてエルフじゃねえか？」 「ウチもそう思う
にゃ……」

エルフ？

俺はアイテムBOXからナイトビジョンを取り出して窓から外を覗く。

単色の緑色の景色の中に白い人影が見える。

彼女たちが言うように耳が長いようだ。

「前にもこんなことがあったなあ。またエルフの縄張りに入ってしまったのか」

デジャヴユってやつだ。

「仕方ないにゃ、こんな場所誰の土地かも解らないにゃ」「そうだよ旦那」

さて——一見排他的ではあるエルフ。

サクラにいるセテラを見ている感じでは、敵意がないと解れば受け入れてくれるはずだが……。

「外に出てみるか……」

「旦那、大丈夫かい？」

「解らんが、うちにいるエルフの感じからすれば、大丈夫だろう？」

「まあねえ……」「なんか街で言われているエルフと随分違ったにゃ」

排他的と言われているのだが、仲間だと認められるとすごい馴れ馴れしい。

すごい近距離までずいずい入り込んできて、人間との距離感の違いを感じる。

個人所有の概念がなくて、すべてが共有財産という彼らの文化からくるものだ。

俺はLEDライトを持つと、ドアを開けて外に出た。
光を掲げて両手を上げて叫ぶ。

「俺はケンイチ！ 怪しいものじゃない！ エルフなら言葉が解る
だろ？」

俺はエルフからもらった翻訳の指輪をはめている。
呼びかけは彼らに聞こえているはずだが、なにかが飛んできて足
元の土に刺さる。

「うお！」

矢だが——ここは慌てたら駄目だ。
敵じゃないことを示さなくては。

「敵じゃない！すでに他のエルフと交流があるものだ！」

「本当か！？」

暗闇から返答が来た。

「言葉を翻訳する指輪をエルフからもらっている。親密な関係でな
ければ、もらえるものじゃないだろう？」

「お前が殺して奪ったかもしれん！」

これは男の声だな。

「そんなことはない。お前らが好きなチェチェもあるぞ」

「……」

彼らは、なんだかんだと言って、外の刺激に飢えている。

彼らの村で料理をしている俺たちのものを興味深そうに食べてい
た。

俺はシャングリ・ラから業務用のチョコを購入——透明な袋に入
った白黒で四角いチョコがたくさん詰まっているやつだ。

1kg入って1700円とお得。

手元にこういうのがあると、ついつい手が伸びてしまって危険な
食いものだ。

そいつを声がする暗闇に向けて放り投げたのだが、しばらくすると返答があった。

「……これは、なんだ?!」

「チエチエを使ったお菓子だ。甘くて美味しいぞ!」

「……」

1人のエルフが暗闇の中から出てきた。

金髪の短い髪で、緑色のチャイナドレスみたいな服を着ている。

背中には弓を背負い、腰のベルトには剣を差す。

へそが出ているのだが――多分若い男だろうなあ。

ツリ目で大きな金色の瞳がLEDの光に反射してキラキラしている。

まるで少女漫画に出てくるようなキャラだが――声が男だ。アキラが好きそう……。

「どうやって食う」

エルフが透明な袋を差し出す。

「こうやって食うんだ」

俺は袋を開けると、透明な包み紙を取って口に放り込んだ。

「……」

「ほら、なんともないだろ?」

「それじゃ、こっちを食ってみろ!」

男が袋の中からもう1つチョコを取り出した。

毒でも入っているのではないかと警戒しているらしい。

同じように包み紙を取って、口に放り込む。

「大丈夫だろ?」

「……」

俺が美味しそうに食べているので、彼も興味を持ったのだろう。慣れない手つきでチョコの包装を剥くと、においを嗅いでいる。

「……いいにおいだが、硬いな」

「美味いぞ」

「……カリ」

おそろおそろ少しかじってみたようだが、その仕草が少々女の子っぽくって可愛い。

「……んぐ……あ、甘い」

「甘いだろう？」

「美味いぞ！　これがチェチェなのか？！」

「精製して砂糖を入れたものだから、原型は失っているがな……」
「はぐはぐ！」

気に入ったのか、エルフは他のチョコの包装も剥くと口に放り込んだ。

「んほんひひは？」

「なにを言っているかわからんぞ？」

「どこから来た？」

「ダリアの近く」

本当はアストランティアなのだが、ダリアのほうが大きくて有名だ。

「ダリア？　どこだ？」

「王国だ、カダン王国のダリア……」

「なんだと！？　どうやってこんな場所まで？！」

エルフの言い分からすると、ここは王国ではないのか？

「うーん、言っても信じてもらえるのか解らんが――ダンジョンの中

にあった転移門で飛ばされた」

「転移門?!」

サクラのエルフにも秘密にしていることだが、他に言い訳が見つからない。

ここは正直に話してしまったほうがいいだろう。

嘘について、あとでボロが出ると困る。

「知らないか? 遠く離れた場所に、あっという間に飛ばされるんだ」

「年寄りなら知っていると思うが……」

「お前は若いのか?」

「ああ」

やっぱ若いエルフなのか——といっても100歳とかなんだろうけど、ちょっと仕草が子どもっぽい。

「待っている」

エルフが、チョコの袋を持って暗闇に消えた。

色々と聞きたいことはあるのだが、ここでもうつついても仕方ない。彼らと信頼関係を築くことが先決。

慎重にいかなくては……。

「旦那、大丈夫かい?」「にゃ」

獣人たちが、窓から顔を出している。

「ああ、任せておけ」

アネモネが寝ているコンテナハウスをチラ見するが、明かりは点いていないので、まだ寝ているのだろう。

しばらく待っていると、暗闇から口の周りにチョコをつけたエルフの男たちがやってきた。

7人ぐらいか。

「お前の名前は？」

真ん中にいるのはリーダーらしき男で、髪が長い。

耳が長いマジイケメンだ。

やっぱりエルフを見るとファンタジーって感じがするね。

皆が装備をつけた同じようなチャイナドレスっぽい服を着ている。

「ケンイチだ。一応、商人をやっている」

まあ、貴族っていうよりはマシだろう。

「こんなところですか？」

「そっちの男にも言ったが――」

再度同じ説明をエルフにすると、円陣を組んでなにやら相談を始めた。

「その黒い箱は？」

エルフはコンテナハウスを指差した。

「これは移動するときの俺たちの家だ。普段はアイテムBOXの中に入っている」

「アイテムBOX？」

「おい、ミヤレーとニヤメナ、ちょっと部屋から出てくれ」

「はいよ」

2人がコンテナハウスから出てきた。

「獣人がいるのか？ 奴隷か？」

「違う、俺の家族だよ。そっちには小さい子が寝ている」

俺の言葉にエルフがコンテナハウスまで走っていった中を覗く。

「本当に子どもが寝ている！」

「うゝむ……」

唸るエルフたちに、アイテムBOXを見せてやることにした。

「召喚！」

アイテムBOXから、椅子などを出して見せた。

「おおっ！」 「本当にアイテムBOXだ」 「久々に見たな」

「しかも、そんな沢山のものが入るアイテムBOXとは……」

「これに荷物を入れて商人をしている。なにか欲しいものはないか？ お近づきの印に提供するぞ？」

俺はアイテムBOXから砂糖と塩を出した。

この手の取引では定番で、どちらもこの世界では簡単には手に入らない。

前のエルフも欲しがっていたしな。

王国では専売になっていたのだが、帝国や共和国でもそうなのだろうか？

「おおっ！」 「砂糖と塩?!」 「本当だ！」

「1つ聞きたい、ここはどこなのだろう？」

「特に地名はないが、只人たちは共和国とか呼んで国を作っている。その僻地だ」

あちやゝ！ やっぱり共和国かよ……。

俺は心の中で頭を抱えた。

「ミヤレー、ニヤメナ、共和国だってよ」

エルフの言葉は獣人たちには解らないので、通訳してやる。

「うにゃゝ」 「マジで……」

2人とも耳を閉じ尻尾を垂らして、テンションだだ下がりである。

「それよりも！」

エルフが大声を出した。

「な、なんだ？ なにか気に障ったか？」

「ここは、コカトリスの巣になっていたはずだが？」

「ああ、それなら俺たちが退治した」

「なんだと！？ 我々エルフでも対応に苦しんでいたのに、只人で商人のお前が！？」

「それじゃ証拠を見せてやるよ」

俺はアイテムBOXから、コカトリスの死体を出してやった。

白い羽毛に覆われた魔物の屍^{かばね}が落ちてくる。

「おわっ！」 「ほ、本当にコカトリスだ！」 「すごい！ 首を一刀両断？！」

「ぐぬぬ……」

なにやらリーダーが悔しそうな顔をして俺を睨んでいる。

「欲しいならやるが……」

「只人からエルフが恵んでもらうだと？！」

もしかしたら、リーダーらしきエルフのプライドを傷つけてしまったのだろうか？

「いやいや、あくまでお近づきの印ってことで、贈り物と考えるもらえば。利用価値は高そうじゃないか」

「ウエエラ、この羽根は使えるよ？ もらおうぜ？」 「そうだ」

「うう……」

他のエルフが男の下に集ってきて説得しようとしているのだが、リーダーが腕を組んで苦々しい顔をしている。

簡単には只人の力を認めたくないということだろうか。

「俺も、人手がなくて解体できないから困っていたところだ。肉だけ欲しいのだが……」

「それでは解体の手間賃として、部材を貰えるということでもいいのか？」

「ああ、そう思ってもらって結構だ」

エルフたちはまた円陣を組んであーだこーだし始めた。待っていると結論が出たようだ。

「俺たちの村に来てもらっていいか？」

「それは敵意がないと解ってもらえたということか？」

「まあな。それに、こんな魔物を倒すやつと戦って、我々がただで済むとも思えん」

「そんなことはないだろう。エルフなら皆すごい魔法が使えるんだろう？」

「そ、それはそうだが……」

リーダーらしきエルフの横から別のエルフが顔を出した。

こちらも髪が長いが、ちよつとタレ目のエルフだ。

「昼頃、デカイ爆発があったろ？ あれもお前がやったのか？」

「いや、爆裂魔法^{エクスプロージョン}の魔法は、そっちで寝ている小さい子が使った」

「なんだと?! 子どもが?」

リーダーが俺の言葉に驚いた。

「うちの大魔導師様だぞ? 子どもって言わないでくれよ、本人が怒るからな」

「うう……」

「ケンイチ、他の魔物も見せてやったらどうかにゃ?」「そうだぜ旦那。こいつら驚くぜ」

獣人たちにはエルフが何を言っているのか解っていないが、それらしい雰囲気を感じたのだろう。

「そうだな」

俺はヒポグリフを出してやった。

「なんじゃこりゃ？」 「鳥なのか馬なのか?!」 「こんな魔物は初めて見るぜ!」

どうやらヒポグリフってのは普通にいる魔物ではないらしい。
ゲートキーパーとして、あのリッチが作ったものなのだろうか？

「ほんじゃ、つぎ」

次にアイテムBOXから出てきたのは、黒い3つの頭を持つ巨大な犬。

「げっ!」 「……」 「うわ……」

エルフたちが言葉を失っている。

「俺たちが魔物を倒したってことを信じてもらえるだろうか？」

「……解った。失礼なことを言ったのを詫びる。お前たちは一流の戦士と魔導師だ」

どうやら解ってもらえたようで、なにより。

「さっきも言ったが、このコカトリスは進呈するぞ？ 友好の証だと思ってくれ」

「……解った。これだけのものを仕留める猛者が下手な小細工はすまい」

「その魔法の明かりはもらえないのか？」

エルフの1人が、俺のLEDライトを指差す。

「こいつは特殊な魔法で動く魔道具だから俺にしか使えん」

「お前も魔導師なのか？」

「まあな——治癒魔法とかも使えるぞ」

「本当か？」

エルフの男がナイフを取り出し、自分の腕を切ると血が流れる。

俺の能力を試すためだと思うが随分と思い切ったことをするな。

まあ、彼らも治癒魔法は使えると思うので、俺が嘘をついたとしても大丈夫だという判断だろう。

俺はエルフの腕を左手で握り、傷口に右手を当てる。

「ふああっ！」

エルフが変な声を出して手を引っ込めたのだが、すでに血は止まっている。

うっすらと傷は残っているが、すぐに塞がるだろう。

「おお、本当だ！」「しかも早い！」

エルフが早いって言うぐらいだから、早いんだろうな。

「うう……」

「どうした？」「顔が赤いぞ？」「耳まで赤くなってら、はは」

治療を受けたエルフが仲間にかかわれているが、俺の力の副作用によるものだろう。

ああ——もしかしてアキラのやつは、この力をエルフに使って遊んでいるのか？

俺たちの能力が本当で、敵性種族ではないと理解してもらえたよ
うだ。

彼らの案内でコカトリスを持ってエルフの村に行くことになった。
ここでキャンプをするよりは安全だろう。

まったく未知の土地で、味方になってくれる種族がいるのは心強

い。

出した魔物を収納すると、アネモネが寝ているコンテナハウスに向かう。

可哀想だが、暗い中寝ている大魔導師様を起こす。

「ケンイチ……どうしたの？」

目を覚ました彼女が俺に抱きついてきた。

「この近くにいたエルフたちと接触した。彼らの村に行くことになったんだ」

「エルフ？」

彼女が目をこすっている。

「彼らの村に着くまで、召喚獣の中で寝てていいぞ」
「大丈夫……」

彼女はそう言うのだが、なんかうつらうつらしている。

とりあえず車を出して彼らの村に向かおう。

それにしても、ここは共和国か。

どうやって帰ろう……。

俺はため息をついた。

238話　こういう種族らしい

転移門で、どこだか解らん土地に飛ばされた。

とりあえず人里に向かうために真西に出発。

丘の上を占領していたコカトリスを撃破して、そこでキャンプをした。

その夜、キャンプをお客様が訪れる。

近くに住んでいるらしい、エルフたちだ。

彼らの話によると、ここは共和国の一角であるという。

なんてこったい。

愚痴を言っても始まらないが――まさかと思っていたが、よりによって共和国とは。

王国と共和国は国交も貿易もない。

一応貿易をしている帝国とは一線を画する、一番近くて一番遠い国ってやつだ。

エルフたちに敵意がないことを解ってもらえたので、彼らの村に向かうことにした。

ここでキャンプするよりは安全だろうという判断だ。

寝ているアネモネを起こして、2つのコンテナハウスを収納。
新しい相棒となる白いラ○クルを出す。

「おお?!」「なんだ?」「馬なしの馬車?!」

「こいつは、俺の鉄の召喚獣だ。馬よりも速く走ることができる」

「はっ?　馬よりも?」「只人は身の程知らずで、ホラ吹きだと聞

いていたが……」

ここのエルフにはそんな調子で伝わっているのか。
まあ、論より証拠。鉄の車の能力を見せてやればいい。

「ミヤレーとニヤメナ」

「旦那、俺たちは走っていくよ」

「解った」

獣人たちは暗闇でも見えるしな。

俺とアネモネが車に乗り込むと、エルフたちがニヤニヤしていたのだが、エンジンの咆哮を聞くと飛び上がった。

「吠えた！」「なんだ?!」「本当に生きているのか?!」

暗いのでライトを点ける。

「うおっ!」「眩しい!」「魔法の光か?!」

俺は窓を開けて、あたふたしているエルフたちに話しかけた。

「後ろをついていくから、先導してくれ」

「……」

「どうしたにゃ?」「大方、旦那のことを馬鹿にしていたのに、すげえ魔法とか、鉄の魔獣とか出したんでビビっているんだろ」

「いつものことだにゃ」「まあ旦那もなあ、普通のオッサンにしか見えないからな……ふひひ」

エルフたちは顔を見合わせていたのだが、結論が出たらしい。
丘を降り始めたので、車を走らせてついていく。

「アネモネ、大丈夫かい? 寝てていいよ」

「うん……」

彼女はうつらうつらして眠そうだ。

危険がないと解っているので、寝てても大丈夫。

エルフが、後ろをついていく俺たちのほうをチラチラ見ているが、鉄の魔獣の走り方が気になるようだ。

ヘッドライトにエルフたちの白い身体が浮かぶ。

その姿は本当に妖精のよう。暗い森の中を走るでもない歩くでもないが、只人が普通に歩くよりはかなり速い。

これじゃ俺とアネモネが歩いてついていくのは一苦勞だな。

——とはいえ、俺たちが徒歩であれば、合わせてくれたと思う。

それに少々恰好悪いが、獣人たちに背負ってもらう手もある。

まあそれが一番速いとはいえ、俺がおぶられるのは、かなり抵抗がある。

やっぱり男としてはなあ——おぶりたいけど、おぶられるのはちよつとな。

運転席の隣に最初に会った若いエルフが来たので、窓を開けて走りながら話す。

「その窓はガラスなのか？　すげえな」

「どうだい、只人も中々やるもんだろ？」

「ああ！」

若いせいなのか、他のエルフたちよりも車に興味津々のよう。

なんか、前もこんなシーンがあったな。

新しいものに興味を示す者が一定数いるってことなんだろうけど。

「興味があるのか？　なら乗ってみるか？」

「いいのか？」

「もちろん」

車を停めると、降りてドアを開けてやる。

若いエルフはおそろおそろ後ろの座席に乗り込むと室内を見回している。

「只人が乗っている馬車みたいだな」

「はは、馬がいなくても進む以外は似ているな」

元々、車の原型は馬車だと思うし、似ていて当然だな。

「よし、行くぞ」

車を発進させる。

「おお！　すげええ！　馬なしで動いている！」

「エルフって、暗闇でも目が見えるのか？」

「目というか精霊の力を借りて、見えないものを見ているって感じかな」

「へえ」

しばらく走っていると、また俺の隣にエルフがやってきた。

このエルフは、俺が治療してやったタレ目のエルフ。

「あゝ、ツイツツラ！　お前、なに乗ってんだ？！」

「へへっ！　いいだろう！」

「なんだよ、俺も乗せろよ！」

「べえっ」

後ろを見れないが、外に向けて舌を出しているらしい。

エルフでも舌を出したりするのか。

窓を開ける。

「お前も乗るか？」

「いいのか？」

「まだ乗れる」

「やったあ」

車を停めてドアを開けると、タレ目のエルフが乗り込んできた。

「すげー！」

最初のエルフと同じように、車内を見回す。

エルフが2人いると車内に草の香りが充満する。

「よし、発進！」

ドライブに入れてアクセルを踏み込むと、車が咆哮を上げて前に進んだ。

「おおっ！ 馬もないのに進む！ 魔法なのか？！」

「俺の独自魔法^{ユニーク}ってやつだ」

「はー、噂には聞いたことがあるが、只人には変わったやつがいるんだな」

エルフが車内でキャッキャウフフしているので、うるさいのだから。

アネモネの機嫌が斜めだ。

「村はまだなのかい？」

「もうちょっと先だ！ もっと速く走れないのか？」

タレ目のエルフがはしゃいでいる。

「走れるが——道が解らんからな」

「俺が教えてやるよ」

「これに乗ったままで解るのか？」

「ああ、大丈夫だ。このまま真っ直ぐだ！」

精霊の力ってやつか。

前の村では、その話は聞かなかったからな。

俺が聞かないから、話題に出なかったただけかもしれないが、サクラに帰ったらセテラに聞いてみよう。

先行するエルフたちを追い越すと、ライトを点けてラ○クルが森の中を疾走する。

草をなぎ倒し木の根っこを乗り越えようと、倒木が見えてきた。

「こいつは越えられない。迂回する」

車は回り道をしたが、エルフと獣人たちが、ぴよんぴよんと倒木を飛び越えていく。

「平地は速いけど、大きな段差は駄目か」

「そのとおり、なんにでも弱点はある」

倒木をクリアすると、再びスピードを上げてエルフたちに追いついた。

結局、同じスピードで走っていることになるな。

しばらくすると村の周辺に到着したようだ。

「ここで待っていてくれ。ちよいと族長に報告してくる」

「頼むよ」

タレ目と若いエルフが、車を降りて暗闇の中に消えていった。

エルフの集落の近くなので、村に入れてもらえないとしても、こちらへんは安全なのだろう。

車で待っていると獣人たちがやってきた。

「旦那、ここで待つのかい？」「にや？」

「ああ、彼らの族長に報告するようだ」

「……」

助手席が静かだと思ったら、アネモネはスヤスヤと寝ていた。まあ、深夜だし仕方ない。

「ふわあああ！」

30分ほど待ち、ニャメナが大きなあくびをするとエルフが戻ってきた。

「待たせてすまないな。族長がお会いになる」

「こいつで乗り込んでいいのか？」

「ああ」

車に乗り込むと、ライトを点けてエルフの集落に入る。

広場の手前で車を停めると、エルフの案内で族長の家に向かう。以前訪れたエルフの村と同じように草や木でできた家が並んでいるのだが、その中でも少々目立つ大きな家に案内された。

すだれのような草で編まれたものを捲り中に入ると、中も草で作られていて枯れ草のにおいが充満する。

ちよつと納豆っぽいか。

蒼白い魔法の光でうっすらと明るい部屋——その一番の奥に長いストレートヘアのエルフがいた。

キラキラと美しい金髪が床に流れており、横すわりのような恰好で草でできた枕に肘を載せている。

前に訪れた集落の族長は袴かみしもみたいな服を着ていたが、ここのお偉いさんは、他のエルフと同じようなチャイナのような服。

パツと見美人に見えるのだが、男——だろうな。

さすがのエルフも眠いと見えて、普段でも細そうな目がより細く見える。

「夜分に申し訳ない。商人のケンイチという者だ」

「族長のエイリラだ。ウエエラの話によると、王国から転移門で飛ばされてきたと……」

やっぱり声が男だ。

「まあ、信じてもらえないかもしれないが、そうなんだ」

「古に失^{いにしえ}われてしまった転移門の技術だが、まだ動くものがあつたとはい……」

「ダンジョンにリッチがいてな、そいつが管理か研究をしていたものらしい」

「リッチ?! そのような化け物を相手にしたのか?」

「細いエルフの目が見開いたのだが、彼はリッチを知っているらしい。」

「ああ、俺の他にも強い仲間がいてな。そいつらと離れ離れになつて、俺たちだけ飛ばされてきた」

「ふゝむ……なるほど、事情は解つた。ここに滞在していくがいい」

「寛大なお心に感謝する。礼として俺たちが仕留めたコカトリスを進呈しよう」

「それも聞いたが……本当に仕留めたのか?」

彼は少々疑っているようだ。

明日の朝、アイテムBOXから獲物を出してやれば納得することだろう。

「ああ、アイテムBOXの中に入っているが――その話は明日でいいだろうか? 何しろ眠くてな」

「はは、それは私もそうだ。それでは詳しい話は明日ということ――最後に1つだけ聞いてよろしいか?」

「なんだろう?」

「そのエルフの指輪を誰からもらつた?」

族長が言っているのは、俺の指にはまっている翻訳の指輪だ。

「前に訪れたエルフ村の族長からだ……えゝと、名前はなんだつたかなあ……確か、メーサラだったような……」

「あいわかった、休むがよろしい」

納得したらしい。

知り合いなのだろうか？

「感謝する」

一礼すると族長の家から出て皆の所に戻る。

ニヤメナが車にもたれかかり、ミャレーはタイヤの下にしゃがんでいた。

「旦那、どうだった？」 「にゃ？」

「大丈夫だ、滞在の許可をもらったよ」

「さすが旦那だぜ」 「偏屈なエルフとよく交渉なんてできるにゃ」
俺の印象ではそんな感じはしないのだが、彼らとの話は元世界の契約やら取引の概念と近いのだろうか？

個人的には、そんなに違和感を覚えていない。

むしろ、そのあとだ。

仲間と認識されると、途端に距離感がゼロになるのが、すごく気になる。

まあ、そういう文化なので仕方ないのだが。

郷に入れば郷に従えって言うしな。

アイテムBOXからコンテナハウスを出すと、車の助手席からアネモネをお姫様抱っこしてベッドに移す。

「お前達もここで寝てくれ」

獣人たちがやってくるとベッドに飛び込んだ。

「ふわああ！ まさかエルフとまた一緒になるとは」 「そうだにゃ」

「この森には森猫がいないのかな？」

「さてねえ」 「いるかもしれないにゃ」

俺は外に戻ると車を収納した。

その様子を若いエルフが見ている。

「そいつは自在に呼びだせるのか？」

「そうだ、詳しい話は明日にしてくれ。眠いしな」

「はは、俺もそうだ。ウエエラのやつが夜襲をかけるってうるさくてな。まあ怪しいやつじゃなくてよかったよ」

強力な爆裂魔法を使う連中が敵だった——なんてことになれば、大変だからな。

彼らが警戒するのも理解できる。

エルフは手を振ると、自分の寝床に戻るようだ。

さて、俺も寝るか。

向こうも警戒しているだろうが、こちらも警戒している。

いきなり知り合った連中を100%信用するのもなんだが、悪意は感じない。

エルフと付き合ってみても、裏があるような連中でもないし、ベルもエルフは信頼していたしな。

俺が神経質だけな気がするが——なにか異変があれば、獣人たちが気づくだろう。

彼女たちは悪意や殺意に敏感だし。

「ふわああ……とりあえず寝よう」

まったく波乱万丈すぎるぜ。

それよりも、アマランサスやアキラはどうしただろうか？

サクラに戻れたかな？

心配なのだが、ここで心配しても始まらない。

俺たちは俺たちで、王国に戻る努力をしなくては。

共和国の連中と対峙して戦闘——なんてことになるのは勘弁してもらいたいんだけどなあ。

相手が魔物ならともかく、生身の人となると……。

それでも家族を守るために、相手が人間でも躊躇はしないつもりだが。

――――◇◇――――

――エルフの村に来て次の朝。

朝起きると、窓の外から沢山のエルフが覗き込んでいた。

「うわ！」

前もこんなことがあったな。カーテンをつけたほうがいいか。

一応、ドアには鍵はついているので、中に入ってくることはないと思うが。

初めてなので愛想よくしないと――第一印象は大切だ。

昨日の連中から事情は聞いているとは思うけどな。

俺はドアを開けると、外に出てにこやかに挨拶をした。

昨日の夜は男ばかりだったが、女性もいるが身体の凹凸は少なく、どちらか判断に迷う者も多い。

「おはようございます。商人のケンイチでございます」

「ねえねえ！ コカトリスを倒したって本当なの？」

俺の近くにやってきたのは、長い金髪を真ん中わけにした女性。声が女なので、女――だと思う。

服装は全員がチャイナみたいな服で統一されているようだ。

男もその服装なので、余計に男女の判別が難しい。

人数は30人ぐらいか。

エルフってのは小分けで暮らす種族らしい。

「ああ、今見せてやるよ。ちょっと広く空けてくれ。下敷きになっ

ちまうぞ」

エルフたちに、十分なスペースを空けさせると、アイテムBOXからコカトリスを出した。

「よつと！」

白い羽毛に覆われた魔物が出てくる。

「「「おおっ！」「」「すごい！」」本当にコカトリスだ」「え？ なに？！ どこから出たの？ アイテムBOX？！」

男たちは昨日見たやつらが多いので、声が少ない。今、驚いているのは女性陣だ。

コカトリスの尻尾は蛇なので、そこに驚く声も聞こえる。

「そうだ、アイテムBOXから出した」

「こんなに大きなものが入るアイテムBOXなんて」
エルフたちが白い魔物に群がりはじめた。

「昨夜、族長にも話したが、お近づきの印にこいつを贈呈する」
「本当にもらっていいの？」

コカトリスに群がるだけではなく、上によじ登るやつまで出てきた。

お山の大將気取りか、まるで子どもだ。

うちの獣人たちでも、そんなことしないぞ。

「ああ、俺たちには人手がなくてな。こんなの解体できないし」
「解体は川でする必要があるんだが、運んでもらえるか？」

昨日のリーダーだったエルフがやってくると、上に乗っていたエルフに降りるように伝える。

色々と部材が傷むかもしれないし、正しい判断だと思う。

「ああ、朝飯を食ったらいつでもいいぞ」

「助かる」

「それから欲しいものはないか？ 小麦粉、塩、砂糖、色々あるぞ」

「ありがたいが、皆で話しあって決めてからでいいか？」

「もちろん」

俺の所に女のエルフたちがやってきた。

当然、耳が長く美女揃いで、身体は細く皆が元世界のモデルのよう。

華奢に見えるのだが、これで結構パワーもあるしスタミナもあるという、このファンタジー世界に君臨している究極の二足歩行生物だ。

「ねえねえ、昨日の夜にさ、ツイッツラが甘いチェチェを食べたって自慢してたんだけど……」

ツイッツラというのは、若いエルフだな。

「これか？」

俺はシャングリ・ラの履歴から、昨晚と同じ業務用チョコを購入した。

「これなの?!」「わああ!」

女たちが透明なチョコの袋に群がる。

「おいおい、外の食い物を勝手に食って、族長に怒られないか？」

「大丈夫!」

「これってどうやって開けるの」

「こうやってやるんだよ」

昨晚の若いエルフがやって来て、得意げに透明なパッケージを開くとチョコを口に放り込んだ。

「ずるい!」「私も!」

次々とエルフの女たちがチョコを口に入れていく。

「あまーい!」「おいひい!」「すごい!」

「口に合ったようでよかったよ——あ、そうだ。ちょっと聞きたいことがある」

俺はリーダーをしていたウエラというエルフに声をかけた。

「なんだ?」

「俺が前に訪れたエルフの集落では、チェチェの木の病気で実が採れなくなって困っていたんだが、ここは大丈夫なのか?」

「……いや、そうか——他の地域でも病気が広がっているのか……」
エルフの表情からすると、ここらへんでも木の病気が広がっているようだ。

「早めに植林や隔離して、手を打ったほうがいいぞ?」

「解った、族長に伝える」

朝の挨拶は済んだので、コカトリスをアイテムBOXに収納したあと、コンテナハウスに戻って飯を食おうとしたのだが……。

俺の後ろについて、エルフたちがぞろぞろとコンテナハウスに入ってきてしまった。

「なにや!」「うおっ!」

突然のエルフの訪問に、獣人たちが驚く。

狭い部屋の中が、草に似たにおいでいっぱいになる。

「へー、中はこんな感じなのねえ」「鉄の家か」

「ねえねえ、この鉄の家もあなたのアイテムBOXの中に入っているの?」

「そうだ。そうじゃないと、こんなの持ち運べないだろう？」

「すごい、これならどこにでも行けそうねえ」

「こいつで海に行ったり帝国に行ったりしたぞ」

これは少々誇大表現だ。

帝国に行ったときは、ログハウスのキットの家だったし。

「「へえ」」

エルフたちは興味津津なのだが、俺たちは朝飯を食いたいんだがなあ……。

「ほら、これをやるから」

「コレってパン?!」「柔らかい!」

エルフたちにパンを与えて、コンテナハウスから追い出した。

「エルフってみんなああなのにゃ」

「そうみたいだな、はは」

「でも旦那。こんな見知らぬ土地で、味方になってくれるのはありがたいぜ」

「そのとおりだな」

アネモネが不機嫌そうだが仕方ない。

無礼無作法というなかれ、これがエルフたちの文化なのだ。

いつも外で飯にするのだが、外はエルフたちでいっぱい。

ベッドをアイテムBOXに収納して、コンテナハウスの中で食事にすることにした。

シャングリ・ラでいつも買っているパンと、インスタントのスー
プ。

獣人たちは肉が食いたいようなので、ハムを買ってやった。

「美味いじゃ!」「酒が欲しくなるな」

「だめだぞ」

「ケンイチ、これからどうするの？」

パンを頬張りながら、アネモネが心配そうな顔をしている。

「とりあえずエルフと付き合って、この土地の情報を引き出す」

「なにも解らないのは困るしね」

彼女の言うとおりだ。

「共和国の話なんて聞いたことがないにや」「街の酒場にだって、そんな噂も聞こえてこないぜ」

帝国の話は結構入ってきているのだが、ソバナで貿易もしているし、一応国交もあるのだが――共和国は違う。

「そりゃ共和国に行ったやつも、向こうからやって来たやつもないわけだし」

――かの国から伝わっている情報といえば、チル將軍という英雄が王政を倒して、エルフの原始共産制を模倣した共和国を作ったということ。

その共産制は上手くいつておらず、国は赤貧にあえいでいる。

贅沢三昧をしていた王侯貴族が皆殺しになって最初は喜んだ平民たちだったが、そのあとに訪れたのはより過酷な爪に火を灯すような暮らし。

かの將軍は、皆が幸せになれる理想の国をマジで作ろうとしているのかもしれないが、世の中そんな甘くはない。

理想や理念だけで飯は食えないのだ。

飯を食い終わったのでエルフたちと一緒に川に行く。

なにせ巨大な獲物なので、村にいる暇なエルフが全員で行くらしい。

獣人たちやアネモネもついてくるようだ。

「川は遠いのかい？」

「いや、それほど遠くはない」

エルフの距離と只人の距離は違うので、俺は車を出した。

「おおっ?!」「なんだ?」「鉄の箱?!」

エルフたちが驚くのだが、一々説明してられない。

昨夜、俺たちと一緒にいたエルフから説明を受ければいいだろう。エルフたちに構わず、発進することにする。

「ミャレーとニャメナは?」

「ウチらは、走っていくにゃ」「おう!」

車に乗り込みエンジンをかけると、不意に後ろのドアが開く。振り向くと、昨日の若いエルフとタレ目が乗っている。

「おいおい」

「いけいけ!」「コレに乗ったほうが楽チンだぜ」

下手に知能が高いから、一度ドアを開けただけで操作の仕方を覚えてしまったらしい。

「やれやれ……」

俺は、構わず車を出した。

「あゝっ! なんであんたたちが鉄の箱に乗ってるの?!」

車に乗り込んだエルフを見て、女たちが指を差してギャーギャー言っている。

「へへ、こいつは鉄の魔獣なんだよ」「馬なしで馬車みたいに走るんだぜ」

「なにそれ!」「ずるいんだけど!」

自慢する2人に、他のエルフたちが不満を漏らしているが、まる

で中高生だ。

セテラがいたあの村だけかと思ったのだが、エルフという種族はみんなこんな感じらしい。

まともに相手をしてもらえない。

これで皆が数百歳の爺婆ばかりなんだからな。

まあ、エルフに歳を聞くのは無礼らしいので聞かないが。

川の場合は後ろに乗っているエルフたちが知っているそうなので、俺は車を森の中に入れた。

239話 文化の違いはいかんともしがたい

転移門で飛ばされた俺たちは、深い森の中でエルフたちと出会った。

彼らから仕入れた情報では、ここは共和国の辺境らしい。

うすうすそんな気はしていたのだが、まさか本当にそうだとは。

共和国についての情報がなにもない俺たちは、しばらくエルフたちと一緒に行動して、情報を集めることにする。

彼らとの友好の証として仕留めたコカトリスを提供することになった。

水がある所でない解体できないそうなので、近くにあるという川に向かう。

「行けーイケイケー！」 「うおお！ はえええ！」

俺の車の後部座席に乗っているエルフたちが騒いでいる。

昨晚にファーストコンタクトした、若いエルフとタレ目のエルフだ。

前に出会ったエルフたちも、やたらと距離感が近いのが気になったのだが、あの部族だけではなくてエルフ全体がこういう感じらしい。

エルフたちには個人の財産という概念がなく、全てが部族のもの。道具があっても共有財産なので誰が使ってもOKらしく、こんな感じになるのだろう。

まあ俺たち只人の感覚からすると、ちょっと距離感が近すぎて遠慮なさすぎなのだが、村で世話になるから仕方ない。

郷に入ったら郷に従わねば。

車の横には、獣人たちが走ってついてきている。

エルフたちも森の移動速度には自信があるのだろうが、スピードでは獣人たちに敵うまい。

しばらく車で進むと川が見えてきた。

かなり大きな川でゆったりと流れており、川幅も100mぐらいある。

前のエルフの村の近くにも川があったし、水源に近いってのは住む場所を決めるのに結構重要なことみたいだな。

川岸に車を止めたのだが、いつも利用している場所らしく草を刈ったりして整備されている。

いや、エルフだから魔法で草を生えなくしているのだろうか。

車から降りたので、アイテムBOXに収納した。

「ついたぜー！」 「やっぱりはええわ！」

エルフが2人、車の速さに喜んでニコニコしている。

「うひょー！ でかい川だぜ！」 「にゃ！」

獣人たちが川を眺めている場所は、ちょうど湾のようになっており、栈橋や船などもある。

向こう岸に渡ったりするのだろうか？

「ここにコカトリスを出していいのか？」

「まあ、仲間が来るまで待っててくれ」

「解った」

しばらく待つことにすると、ニヤメナがやってきた。

「旦那！ 俺、いいことを思いついたぜ！」

「なんだ？」

「この川を下っていけば、海に行けるだろ？」

「ああ」

「そこから、海岸沿いにオダマキに行けばいいんじゃない？」

「おお？　そこに気がつくとは、やはり天才か……」

「いやあ……」

珍しくニャメナがくねくねして照れている。

「そいつは止めたほうがいいかなあ？」

ニャメナの意見に異議を唱えたのは、タレ目のエルフだ。

「なにか問題があるのか？」

「ああ、川はスライムだらけだ」

「それは知っている。王国の湿地帯もスライムだらけだし。スライム避けの方法もある」

「なんだって？　その方法は？」

彼らの表情を見ると、こここのエルフたちもスライム避けの方法を知らないようだ。

「友好の証はコカトリスで払っているから、その他の情報には対価が必要だぞ？」

「ちえ！　それじゃ、ここらへんの地理についての情報と引き換えつつてのは？」

「よし、乗った」

エルフの話では、下流に行くと大型の魔物が生息しているらしい。陸上ならいくらでも戦いかたもあるが、船の上で戦闘は不利だな。今は4人しかいないし。

もう1つ、川を渡るとかなり遠いが只人の村があるらしい。

「そこと取引しているのか？」

「ああ、たまに小麦粉やら塩やら……でも貧乏な村なんで、いつも、かつかつみたいでなあ。取引もままならないんだよ」

ここらへんは未開拓地域だと思っていたが、共和国の開拓団が入

っているらしい。

情報をもらったので、スライム避けの方法を教えてやることに。
俺はアイテムBOXからゴーレムのコアを出した。

「こいつに微弱な魔力を流し続けることで、スライムを避けることができる」

「こんなもんで？」

「エルフはゴーレムを使わないのか？」

「使わないなあ——でも、そういうことなら、代わりになるものがある」

エルフが、そこら辺の草をむしって魔法を使う。

青い草がみるみる茶色になった。

川岸の砂地に座り込むと、流れるような手付きで縄をなう。

あつという間に縄が完成すると、男はやにわに服の裾を捲って縄に小便を引っ掛け始めた。

黄金水なんて言われるが、エルフのそれは透明。

たまたまなのか、いつも透明なのかは不明だが。

「ちょっと……」

人前でこういうことを平気するのがエルフらしい。

子供の前で———と思ったら、アネモネが俺の後ろからそのシーンをじゅっと見つめていた。

なにをしているのか興味はあるらしい。

「ほら、これだ！」

エルフが滴る縄を俺に差し出す。

「ちょ、ちょっとまったあ！」

「ひゃ！」「うにゃ！」

俺と一緒に、獣人たちも飛び上がる。

いくら文化が違うとはいえ、少々リアクションに困るだろ。

「ああ、エルフの排泄物は、只人のみたいに変なにおいなんてしないぞ」

「そう、そうなのか？ いや、でも勘弁してくれ」

「まあいいや。お前の話が本当なら、こいつでも効き目があるはずだ」

男の話では、エルフの排泄物は微量の魔力を含んでいるらしい。俺たちが困惑していると、残りのエルフたちがやってきて、そこに男が走っていく。

滴る縄を持って、なにやら説明をしていたのだが、エルフたちが一斉に散り始めた。

「いったいどうしたにゃ？」 「エルフってのはなにを考えているか、さっぱりと解かんねえ」

只人でいきなりものを股間から出して用を足しはじめたら、ただの変態である。

皆はエルフの言葉が解らないので、余計にそう感じるのだろう。

「彼の話だと、あの縄にスライム避けの効果があるらしい」

「そうなんだ！」

アネモネもエルフの行動を理解したようだ。

彼らの言葉が解るのは俺だけだなあ。

しばらくして、エルフたちが追いつてくるように見つけてきたのは、透明なスライム。

「ああ、実験するためにスライムをさがしていたのか」

本来は透明なのだが、砂まみれになっていてその形がよく解る。俺もそこに行くことにした。

「そのスライムで実験するのか？」

「さっきのことが本当ならな」

「本当だって」

手に持っていたコアをアネモネに差し出すと、魔力を少々注入してもらおう。

まあ、俺がやってもいいんだが……。

「こいつは、本来はゴーレムのコアなんだが、こいつを近づけると――」
スライムがすすすつと逃げていく。

「「本当だ!」「」」「スライムが逃げる」

「当たり前だ、これを船につけて実際にスライム避けとして使っているんだからな」

「そこで俺のこいつの出番だ!」

男が縄を近づけると、コアと同じようにスライムが逃げ始めた。

「「「おおおっ!」「」」「こんな簡単な方法でスライムを避けられるなんて!」

「朝一のを取っておけばいいってわけね」

昨日いた、エルフのリーダーもはしゃいでいる。

なんか下ネタでキャッキャウフフしているのを見ると――小学生か!　ってツッコミを入れたくなってしまうが、それでスライム避けになるなら、「エルフ水」とかいって売れないかな?

「なあ、それって効果どのくらい保つんだ?」

俺の質問にエルフの1人が答えてくれた。

「徐々に魔力は抜けると言うから半日ぐらいじゃね?」
「お昼頃にまたひっかければいいよね?」

女のエルフも平気でそんなことを言う。

「あゝそうかあ。スライムに引っ掛けて逃げたのは、小便が嫌じゃなくて魔力から逃げてたのか」

「俺もやったわ、ははは」

エルフたちは、スライムの行動に合点がいったようであるが、半日しか保たないんじゃないや。売り物にはならないな。

スライム避けはおまけだ。

ここにやってきた目的である、コカトリスを出す。

アイテムBOXから白い魔物を出すと、水しぶきが上がる。

「「「おおっ」」」

とりあえず、エルフたちが解体する約束なので、彼らにまかせる。エルフたちは、コカトリスの周りでバシバシと水をかけ始めた。

「コカトリスを濡らすのか？」

「ああ、濡らしてから、魔法で冷やす」

「濡らすのなら、俺たちがやってやるよ」

ここはアネモネの出番だ。

ゴーレムコアを川に投げると、彼女の魔法が発動して青い光が川に集まっていく。

コアの周りに水が集まり、まるで透明で巨大なスライムのように盛り上がった。

「「「おおお！」」」

「その小さい彼女がやっているの!？」 「中々やるじゃねえか!」
エルフも驚くアネモネの魔法で、盛り上がった水がコカトリスの上に覆いかぶさり、川岸に大きな波が押し寄せる。

白い羽毛がずぶ濡れになった。

「よし！　ほんじゃ俺たちの出番だぞ」

リーダーの掛け声で、コカトリスの周りにエルフたちが集まって、冷却の魔法を使い始めた。

沢山の青い光が宙に舞う。

これだけの魔法を使えるエルフがいるなら、あっという間に冷えるだろうな。

冷やし作業が完了すると、エルフたちが白い魔物に群がり始めた。剣を立ててコカトリスの腹を裂くと、赤い内臓が水の中にこぼれ落ちる。

「毒腺を傷つけるな！」

リーダーが作業するエルフたちに指示を飛ばしているので、近くで見学をさせてもらう。

「コカトリスの石化の毒ってどういう仕組みなんだろう？」

「アレは、毒と魔法の複合だな」

「へえ、それじゃその毒腺があるってことなんだな」

「そのとおり、傷をつけて毒に汚染されると、肉が食えなくなる」

「エルフでも鳥の肉は食うんだろ？」

「ああ」

「こいつは尻尾が蛇なんだが、蛇の肉は？」

「たまに食う。鳥みたいない味だから、違和感はない」

まあ、鳥類って恐竜などの爬虫類から分岐した生き物らしいからなあ。

図鑑で見る始祖鳥とか、羽の生えた恐竜だし。

エルフたちは手慣れた作業で、コカトリスをどんどん解体していく。

美男美女揃いで全員魔法が使える、知能も運動能力も高い。

究極の二足歩行生物なわけだが、この世界を支配するみたいな話はまったく聞かない。

むしろ俺たち只人の生活圏から離れて、交わらないようにする文化だ。

たぶん、そういうのには興味がないんだろうな。

平和といえは平和だが、まったく新しい進歩がない生活のように思える。

エルフたちに気になることを質問してみた。

「エルフってのは、ずっとこういう生活をしているのか？」

「まあな」

「いつ頃から？ この地に只人が入植してから1000年って聞いているが……」

「はは、この国やら、その前の王国ができてから1000年だが、その前にも入植が繰り返されて滅んだりしているのさ」

「じゃあ、エルフたちは、それを遠くからずっと見物していたわけか……」

「只人ってのは、野花のように蔓延ったと思ったら、パッと咲いてパッと散る。そして、また野原に逆戻り」

エルフの男が手を広げて呆れている。

「あゝ、エルフから見るとそう見えるかもなあ……そのエルフは、何年ぐらいここにいるんだ？」

「俺たちは――」

彼らから聞いた話によれば、エルフたちがこの世界に入植してから5000年ほどたっているという。

日本で言うと、縄文時代から現代までずっと同じ生活をしてきたことになる。

「まさか5000年も生きているわけじゃないんだろ？」

「はは、俺たちの寿命は、せいぜい1000年ぐらいだ。古エルフたちはそのぐらい生きたって話もあるが」

「へえ」

1000年でも十分に長生きだ。

人間の10倍だからな。平安時代から現代まで生きてるって感じか。

「うちにも物好きなエルフがいるんだが、そんな話をしたことがなかったからなあ」

「へえ、只人と一緒に暮らすエルフねえ。そりゃ物好きだな。只人なんてすぐに年老いて死んじまって、森に帰る羽目になるのに」

「その物好きは、なんて名前なんだ？」

他のエルフも話に入ってきた。

作業に飽きたらしい。

「セテラだけど……」

「「……」」

皆の動きが止まって、無言になる。

「どうした？」

いったいどうしたというのだろう。

「エルフってのは、名前である程度家系を辿れるんだ」

ここの族長も、他の族長の名前を出しただけで解ったみたいだしな。

「それじゃ、辿れる家系がない系統の名前だっていうのか？」

「もしくは……」

エルフたちの疑いの眼差しが俺に向く。

俺の言っていることが嘘だっていうことらしい。

「ケンイチ、どうしたの？」

言葉は解らないが、雰囲気は怪しくなったのが、アネモネにも解ったのだろう。

「おい、俺の所にエルフがいるってのは、嘘じゃないぞ？　――あ、そうだ」

俺はアイテムBOXから、タブレットを取り出した。

前にセテラを写した写真があったはずだ。

そいつをエルフたちに見せた。

タブレットの中に、金髪の耳の長い女が映る。

「生きているみたいな絵だな！」 「こりやすげえ！」 「魔道具か？！」

「その女のエルフと一緒にいるんだ」

「「……」」

騒ぎに作業を止めてしまったエルフが集まってきて、セテラの写真を覗き込む。

「なんか、おかしいのか？」

「いや、これだけのものを見て疑うわけじゃないんだが……」

この大陸に入植した「始まりのエルフ」たちは全部で50人。

その内、女性が20人で19人が子孫を残したという。

エルフの子どもは母親の資質を継ぎ、それが代々伝承されるらしい。

「つまり――この大陸にいるエルフは全員19人にたどり着く？」

「その通りだが……」

「こいつにはそれがないってことよ」

横から別のエルフが出張ってきて、タブレットの絵をツンツンした。

「おっ！ 絵がデカくなるぞ！」

「ああ、こうやって、指2本で開くようにすると——」

「マジだ！ すごい！」

すぐにタブレットの操作を覚えてしまって、指をスライドさせて他の写真も見始めた。

「ちょっと、只人にはプライバシーってもんが、プライバシーじゃ解らんか——えーと、なんて言うんだ？」

「おっ？！ 他のエルフもいるぜ！」 「これは森猫だぜ！」

エルフにはプライバシーってものがないらしい。

——とはいえ、俺はエルフではないので、タブレットを返してもらった。

「このエルフは、集落では普通に暮らしていたがなあ」

「そうなのか」

「俺のことを信じられんというなら、村から出るが……」

「いや、これはエルフの問題なので只人には関係ない。いずれ、そいつに会う日もくるだろうし、そのときに聞けばいい」

「エルフの指輪をもらっているのは確かだし、エルフと付き合いがあるのも確かなんだろう」

「それは間違いないぞ」

俺は指にはまっている指輪を見せた。

ちよいと、エルフとの間が微妙になってしまったんだが——あのセテラめ。

帰ることができたら話を聞かんな。

エルフたちと変にギクシャクしていると、叫び声が聞こえてきた。

「うにゃあああ!」「クロ助待ちやがれ!!」

獣人たちが見えないと思ったら、森の中に入っていたらしい。

ミヤレーが叫び声を上げながら走ってくる。

そのあとをニヤメナが追っかけているのだが、手になにか黒いボールのようなものを持つてくる。

「にゃ!」

ミヤレーが俺の陰に隠れると、俺の胸で黒いボールが炸裂した。

「いてえ!」

胸の辺りをチクチクする感触。

見ると俺の胸から腹にかけて、5cmぐらいの黒い板のようなものが多数ぶら下がっている。

腕を上げると、そこにも黒いものが。

「クロ助! てめえ旦那の陰に隠れやがって!」

獣人たちが俺の周りをぐるぐると周り始めたのだが、ミヤレーの背中に黒いボールが炸裂した。

「ふぎゃ!」「へへへ! ざまあみさらせ!」

見れば、ニヤメナの身体にも多数の黒い板がぶら下がっている。

当然、黒いボールがぶつかったミヤレーの背中もだ。

一枚引っ張ってみると、プチンという抵抗とともに板がとれた。

2本の足が生えた板状で、中央部分が少し膨らんでいる。

「なんだこりゃ、デカいだつ引っ付き虫こんびか?」

色々な呼びかたがあるとは思うのだが、引っ付き虫で通じると思う。

衣服につく雑草の種だ。

うちの地元では、だっこんびという。

「ケンイチ、それってなに？」

アネモネが俺の服についている板を取った。

「これは草の種だよ。獣などにくっついて遠くに運んでもらい、勢力を拡大するんだ」

「へえよくできてるね」

「それで――どちらが先にやったんだ？」

「こいつ……」

ニヤメナがミヤレーを指差した。

「それじゃ、ミヤレーが悪いな」

「にやははは！」

ミヤレーは、まったく応えてない。

「まったくもう、どうやって取るんだ」

「どうやってって、一枚一枚取るしかねえよ。旦那」

「頑張るにゃ」

「あゝあ、うちの男どもと似たようなことをやってるう」 「あはは」

板だらけになった俺たちを見て、女のエルフたちがニヤニヤしている。

「どうやら、この引っ付き虫遊びは、ここのエルフの男どもの定番のいたずららしい。」

くつついてしまったものは、しょうがない。皆でプチプチと引っ付き虫を取り始めた。

数百枚はあるだろう。ひたすら無言で取る――くそ面倒くせえ。

「あ、そうだ」

俺は地元で聞いた話を思い出して、シャングリ・ラを検索した。あるものでなでると、すぐに取りれるという話を思い出して、そいつを購入したのだ。

落ちてきた白いもので、服をなでると――。

「まあ、なんということでしょう！ 引っ付き虫が綺麗に取りれたではありませんか！」

俺が買ったのはウエットティッシュ。

こいつでなでると、引っ付き虫が全部ウエットティッシュに移るのだ。

どうやら服の繊維よりウエットティッシュの繊維のほうが絡みやすいためらしい。

「なんだい旦那！ それって魔法かい！」 「うにゃ！」

「ほら、お前たちも使ってみろ。この濡れ布で拭くと取れるから」

俺からウエットティッシュをもらった獣人たちが、自分たちの毛皮をなで始めた。

「すごいにゃ！」 「マジで、なでるだけで取れるぜ！」

「アネモネ、獣人たちの背中を拭いてやってくれ」

「うん、解った」

アネモネがウエットティッシュを持って、ミヤレーの背中を拭き始めた。

「なにそれ！」 「魔法の布？」

俺たちを見ていたエルフたちも集まってきて興味津々。

「お前ら、解体はいいのか？」

「こっちのほうが面白そうだし」 「冷やしているし、夕方までに終

わればいいよ」

アバウトだなあ。

有言実行なのか——エルフたちの言うとおり、コカトリスの解体も夕方までに終わり、俺たちは肉を100kgほどもらった。エルフたちも保存が利かないので、沢山はいらないらしい。彼らの話では、塩漬けするようだ。

——そして、空が赤く染まる中で、もらった肉を使い唐揚げを作った。

癖もなく、旨味も豊富で大変美味。エルフたちも唐揚げを食べている。

「おおっ！　これが只人の料理か！」「カリカリで美味しい！」

「鳥と卵と小麦粉だから、エルフも大丈夫だと思うが」

「大丈夫、大丈夫！　これだけ美味しいなら、なにが入っててもいいよ！」

結構アバウトだな。

男女ともに好評なので、一安心。

その唐揚げを、獣人たちも美味しそうに食べていたのだが、いつもと少々違う。

テンションがすごい高いのだ。

特にミャレーが。

「ケンイチいゝにゃーゴロゴロゴロ……」

飯を食っているときでも俺の身体に抱きつき、喉を鳴らして色っぽい目で俺に迫る。

「おい、これってもしかして、獣人たちの女のアレか？」

「にやははは！」

「旦那——実はなんか俺も……ハアハア、もう我慢できねえ！」
ニヤメナ、お前もかい！

2人とも俺に迫ってくる目つきが尋常じゃない。

獣人特有の発情期ってやつだ。

以前にあったときから、もう1年たったのか？

アネモネに事情を話すと理解してくれたので、ちょっと離れた場所
所にコンテナハウスを出した。

ここには、男の獣人たちがいるわけではないので、襲われる心配
はないと思うが……。

発情期を迎えた2人の相手をするのは、かなり大変だ。

噛みまくられて爪を立てまくられて、全身血だらけになった。

まあ、こんな状態になっても、祝福があるのですぐに血は止まる
し、飯を食べばすぐに復活する。

いやあマジで大変。

2人ともこの状態では狩りもできないし、森の中を移動もできな
い。

なにもできないので、エルフの村でしばらく過ごすことにした。

日がな一日ベッドの上で裸になっている彼女たちは、大きな猫み
たいな感じ。

言葉も少なく、ただひたすらに俺の身体を求めてくる。

発情期は5日ぐらいと聞いていたのだが、ずっと相手をしてやっ
たせいか、3日ほどで落ち着いた。

——彼女たちが正気に戻った朝。

「め、面目ねえ！ 旦那！」

アネモネが寝ていたコンテナハウスで朝飯を食う前に、ニャメナが手を合わせた。

「別にいいよ。獣人たちの身体がそうになっているんだから」

「でもよお……旦那にあんなことやこんなことや……ああ」

かなりの状態異常だが、記憶はあるらしい。

ニャメナ的にはかなり恥ずかしかったようだ。

「元々スケベなんだから、もう諦めるにゃ」

「うるせえ、クロ助！」

「ウチは楽しめたにゃー。いつも、アレが来ると嫌な思いしかしにやいけど、ケンイチと一緒にいられて、よかったにゃー」

「お、俺だってそうだ」

ニャメナが胸を張る。

「まあ、周りが危ないときに、アレが来なくてよかったよ」

「そうだね」

しばらく放置になってしまったアネモネには悪かったが、不機嫌な様子はない。

獣人たちのことを理解してくれているようだ。

さてさて、これからどうするか。

川を下るか、川を渡って人里に行くか。

人里といっても、俺らは敵国の人間だしなあ。

コンテナハウスの中でテーブルを出し食事をする。

これからの決断を迷っていると、獣人たちの耳がピンと立った。警戒して、リーダーのようにくるくると回している。

「どうした？ 敵か？！」

「これは……アキラの召喚獣の音にゃ」 「そうだ、旦那！」
「ええ?!」

マジで？

240話 始まりのエルフ

俺たちは、転移門で共和国に飛ばされたらしい。

深い森の中でエルフと出会い、情報を収集中だったのだが――獣人たちに発情期が来てしまい、滞在中。

その発情期も明けて次をどうすべきか、朝食を食べながら判断しあぐねていたのだが、獣人たちが突然、耳をくるくると回し始めた。すわ、魔物かなにかか？ と心配したのだが、獣人たちはアキラの車の音だという。

「え？！ アキラのか？！」

「間違いないにゃ」「ああ、この音はそうだよな」
慌てて食べていた朝食を放り出して外に出ると――俺の耳にも車の音が聞こえてきた。

草木が折れる音を響かせて森の中から出て来たのは、アキラの白いプ〇ド。

フロントにカンガルーバンパーもついているし、シュノーケルも装備しているので間違いない。

「おーい！」

俺が手を振ると、車の窓を開けて男が手を振った。

「ケンイチ！ 生きてたか！」

手を振ったのは、もちろんアキラだ。

車が走ってきて、コンテナハウスの隣に止まった。

「転移門で来たのか？ 無茶しやがって」

「ははは！」

助手席のドアが開くと、金髪の女が走ってきて俺に抱きつく。

「聖騎士様あ！」

「アマランサス、お前まで」

「妾は聖騎士様の奴隷なのですから、当然ですわえ！」

「いやあ、ケンイチがいなくなった途端に、アマランサスさんの行動の早いこと」

「当たり前であろ！」

そのとき、足になにか絡みついた感触がする。

下を見れば黒い毛皮が2体——俺の足にスリスリしている。

「ベルとカゲも来たのか？」

「にゃ」「みゃ」

「当然ってか……いやあ、まさかここまで追っかけてくるとは……」

「ケンイチ、森の中にピンクで印をつけていたろ？」

「ああ、迷ったときに備えてな」

「それを追ってきた。んで、丘の上でエルフに会ったら、村に変な鉄の箱の家を出した只人がいると聞いて——こりゃ、ケンイチかねえなど」

「まあ、そのとおりだったな。ああ、でもダンジョンの暗闇はどうした？ 真っ暗だったろ？」

「ああ、光よ！^{ライト}の魔法があったから——ほら」

アキラが車の後部座席を指差した。

「生きてたのねえ」

軽い調子で男のエルフと一緒に車から降りてきたのは、おかっぱの金髪と長い耳——エルフのセテラだった。

「ええ？ セテラまでやってきたってことは——、一度サクラに戻

ったのか？」

「そうそう、俺とアマランサスさんまでいきなりいなくなったら、ヤバいからな。説明をしに戻るようになって、少々遅れた」

「いや、サクラに事情を話してくれて助かるよ」

さすが、アマランサスだ。

ハマダ領の政を預かる俺とアマランサスがいきなりいなくなれば、そいつが全部リリースに行く。

何も知らないでただひたすらに俺の帰りを待つのと、もしかして帰ってこない可能性がある――のとは、対応がまったく違う。

「お姫様にも事情は話したぜ」

彼の話では、俺を助けてくれと、プリムラから泣いて頼まれたらしい。

「リリースの反応は？」

「呆れていて、心配はしてなさそうだったが」

彼女はかなり気丈だし、人の上に立つ人間だ。取り乱したりしたところを見せるわけにはいかないのだろう。

「ほらなあ、ドラゴンスレイヤーとしては、美女の涙の懇願に応えないわけにいかねえだろ？」

「無茶すぎるぞ。まとめて全滅する可能性だってあるのに……」

騒ぎを聞きつけて、コンテナハウスからアネモネと獣人たちも出てきた。

「あ、BBAが来た」

「BBAじゃねえ！ このちびっこめ！」

セテラがアネモネを捕まえると、抱き上げて頬ずりしている。

このエルフは女好きだから……。

「いやあああ！」

アネモネは嫌がっているのだが、それよりもセテラに聞きたいことがある。

「ひどいじゃない！ もう！ 転移門とかあんな遺跡とか、あんな面白いものがあるのを隠してたのねえ？」

「別に隠していたわけじゃ……いや、転移門は秘密にしていたな」俺の言葉を聞いたエルフが、腕を組んでむくれている。

どうやら、セテラが魔法陣を調べて、アキラの魔力を使って飛んできたらしい。

「セテラ！ それよりも——このエルフたちに、お前のことを疑われてしまったぞ？ 存在がありえないエルフだって」

「ああ、解ってる。多分、ここらへんには来たことがないんでしようよ」

俺の言葉にも彼女には動揺がない。

いつものルーチンワークのような反応を示している。

「彼らは、ここが共和国だと言ってたぞ？」

「え？！ マジかよ！？ よりによって共和国？ かあ、詰んだ？」

「だから言ったのに。無茶しやがって……」

セテラが、一緒に乗ってきた男のエルフに族長に会わせろと言っている。

「大丈夫なのか？」

一応、彼女に確認を入れる。

「うん、大丈夫だから、任せてえ」

セテラは飄々として、軽い足取りで男のあとをついていく。

「平気なのか？」

「さあな」

アキラにも、始まりのエルフの話をするが――。

「俺のパーティーにいたエルフからその話は聞いたぞ？」

「そうか、アキラのパーティーにはエルフがいたんだっけな」

「始まりのエルフは50人。そのウチ女は20人で、19人が子どもを残したって話だろ？」

「そうそう、このエルフたちも同じ話をしていたが、最初のエルフは5000年前だと言っていたぞ？」

「そんな前からエルフたちは住んでいるんだな」

俺たちがいたカダン王国は約1000年の歴史があるらしいが……。

「にゃー」

俺の足下にいる、ベルにも話を聞いてみる。

「ベル、リツチのやつが、君を王妃だと言ってたが、いつの時代なんだい？」

「にゃー」

今は猫だし、森の中で暮らしていたので、なん年たったか彼女にも解らないらしい。

「でもカダン王国の話ではないんだ」

一緒に話を聞いていたアマランススが話に加わる。

「それでは、カダン王国ができる前に存在していた王国の話ということになりますわえ」

「その王国の話というのは、記録などは残ってないのかい？」

「初代のカダン国王が国をまとめたときに、土着の民から集めた話

ぐらいしか……」

「その話が、『禁呪に至る病』なの？」

アネモネがリッチが載っていた本の題名を出す。

「そのとおりだわえ。聖騎士という言葉も、土着の民が口にしてたものをそのまま取り入れたのじゃ」

奴隷の身分から成り上がった男が、不思議な力を持った土着の民の女性から祝福を受けて、敵を打ち破る力を得て国を立ち上げたのが、カダン王国の成り立ち。

そのときにも、リッチと戦ったのかは不明。

「でも、お母さんがリッチと一悶着あったのは事実なんだろう？」
「にゃ」

彼女の話では、宮廷魔導師だった男が自らを召喚してリッチとなり、ものが腐敗する禁呪を使って国を滅ぼしたという。

そのときに、リッチと戦ったのが祝福の力を持つ王妃と聖騎士と呼ばれた男。

「それで、お母さんはリッチを倒したのかい？」

「にゃー」

「まあねえ。そこで倒していたら、あそこにリッチはいないか……」
リッチは逃げ延びて、襲い来る魔法の腐敗から逃れるために、召喚魔法の中に身を隠したのだという。

この世界の召喚魔法はアイテムBOXと似ていて、魔法で作った空間にもものを入れられる。

アイテムBOXと違うのは、アイテムBOXには生物は入らないが、召喚魔法の中には入れることができるのだ。

便利そうに見えるのだが、召喚魔法に生物を入れると魔物化するらしい。

「よく、そんなことをしたなあ」

「にゃ」

「聖騎士に強引に入れられたのか？」

王妃を守るためとはいえ、彼女が魔物化する可能性もあったと思うが、祝福の力に一縷の望みを託したのだろうか。

一か八かだと思いが無茶すぎるだ。

「それじゃ、お母さんも祝福持ちだったのか」

「にゃー」

「えー？ でも魔物にはならなかったが、森猫に……」

「にゃ」

結果的に――また聖騎士と出会ってリッチを仕留められたから、よかったらしいが……まあ、ベルがそう言うならいいけど……。

彼女としてみれば、命を懸けた念願がかなったということになるのだろう。

「にゃー」

ベルが俺の身体に黒い毛皮をスリスリしてくるので、顎の所をなでてやると、ゴロゴロと大きな音を立てて目を細めている。

「ええ？」

俺は言葉に詰まった。

運命的に彼女と聖騎士は結ばれる運命にあつたというのだが、これはさすがに訳せない。

アマランサスがこちらをじゅっと見ている。

「それじゃ、人間の身体に戻る方法ってのは……？」

「にゃ」

ないらしい。

「ないのか、ベルの黒い髪の毛は綺麗そうだったんだがなあ」
俺のつぶやきにアネモネが反応した。

「ケンイチ、ベルの髪が黒いってなんで解るの？ 毛皮が黒いから？」

「夢の中でな。人間のベルと会えるんだよ」
「そうなの？」

アネモネが怪訝な顔をしているが、事実だし。
まあ、信じてもらえそうにない。
ベルの耳元で囁く。

「ベルの本当の名前で呼んだほうがいいのか？」
「にゃ」

ベルのままでいいらしい。
彼女の本当の名前はセレスティスというようだが、これは秘密にしておこう。

「つまりだ、まとめると――ベル姉さんは、はるか昔の王国の王妃様で、あのリッチと戦った後遺症で森猫になってしまったと……」
「にゃ」

アキラが要約してくれた話に、ベルがうなずく。

「すごいにゃ！ もしかして、森猫ってみんな誰かの生まれ変わりのかにゃ?!」 「マジですげーよ！」
「そ、そんなわけないだろ？ ないよな？」
「にゃ」

俺の不安と獣人たちの話をベルが否定した。

まさかそんなことはないと思うが、カゲも話すことはできないとはいえ、俺たちの言っていることは理解しているようだし、妙に知能が高いのが気になる……。

「まさか、カゲはお母さんと戦った聖騎士の成れの果てってことは？」

「にゃ」

「違う？ あっそう、ははは」

「それじゃ、ワンコロたちは生まれ変わると、黒狼になるにゃ？」

「そうだよ、そうに違いねえよ、旦那！」

「いや、本当にそうだとすると、犬人が黒狼を殺せないのは当然ってことになるがなあ」

まさか、そんなことはないだろう。

俺たちが殺しまくっている魔物が、人の生まれ変わりだなんて考えたくもない。

「でもようケンイチ、この世界に例の畜生鳥みたいな管理者がいて、命の輪廻転生を管理しているかもしれねえぜ？」

「やめてくれ。考えたくもない」

アキラがいう畜生鳥ってのは、ある漫画に出てくる生命の生と死を司る、不死の鳥。

「ケンイチ、管理者ってなあに？」

「そうだなあ、一番近いのは神様だと思うが……」

「ふーん。本当にいるのかな？」

「解らん。俺も、あったことないし」

皆で森猫とこの世界のことを話していると、エルフたちが戻ってきた。

どうやら話し合いが済んだようで、ここの族長もいる。

ベルたちは、周囲のパトロールに出かけるようだ。

「納得できる話し合いになったのか？」

セテラに声をかける。

「もちろんよねえ」

俺の言ったことを信じていなかったエルフたちも、俺の所にやってきた。

「ケンイチ殿。疑いの眼差しで見ってしまったことを謝罪する」

「ああ、いいってことよ。あくまで特殊な例なんだろう？」

「そういうことだ」

族長も俺の所にやってきた。

「あなた方は、すでにエルフの同胞と言える。好きなだけ、ここに滞在しても構わない」

「はは、そんなに長居するつもりもないが、お言葉に甘えよう。そうそう——そちらに提供する必要な物資の話し合いはできただろうか？」

「はい——しかし、本当にもらってもよろしいのか？」

「構わんよ。前にも言ったが、友好の証ということだ」

「それでは……」

族長の言葉どおり、塩と小麦粉、それと香辛料を渡した。

砂糖の提供も申し出たのだが、断られてしまった。

他のエルフたちからはブーイングが出ていたが、エルフの教義的にそぐわないものなのだろう。

俺がシャングリ・ラから購入した物資を出すと、それを担いでエルフたちが戻っていく。

それを見た俺はアキラに話しかけた。

「アキラの好きそうな子がいるぞ？」

「え？ どこだ？」

「右端の若い子」

彼は標的をみつけたようだ。

「お？ いいねえ。いっちゃう？」

「はは、それは、アキラに任せるよ」

彼が喜び勇んでエルフの所に走っていくと、何やら話をしている。彼も翻訳の指輪を持っているからな。

様子を見守っていると、アキラがバタバタと走ってきた。

「どうした？ 振られたか？」

「ケンイチが食わせてくれた、甘いチェチェがあるならいいと」

「ああ、チョコか」

俺はシャングリ・ラから業務用のチョコを一袋購入した。

「ほいよ」

「サンキュー！」

アキラがまたバタバタとエルフの所に走っていった。

2人でどこかに行くらしい。

彼がこちらに向けて手を振っている。

前に、そんな趣味じゃないと言っていたような気がするが、まったく隠すつもりもなくなったようだ。

「アキラの旦那も好きだねえ！」 「よくやるにゃ」

「ケンイチ、私もチョコを食べたい……」

「ほい、食べすぎないようにな」

「やった！」

「妾もじゃ！」

「ウチも！」 「当然、俺も！」

「まあまあ——それじゃ皆で座ってお茶にするか。セテラも座って話を聞かせてくれ」

「いいけどお、そんなことに興味あるのお？」

彼女は俺の言葉に訝しげな顔をしている。

「あるに決まっているだろう？」

エルフは只人やら他の種族のことはまったく興味がないので、俺たちがエルフのことに興味を持つのが理解できないのかもしれない。テーブルを出して皆で囲むと、チョコやお茶を並べる。

俺はブラックコーヒーにした。

ニヤメナは酒のほうがいいと思うのだが、朝っぱらから酒はいかん。

——と思ったのだが、俺はあることを思いついて、シャングリ・ラを検索した。

「ポチツとな」

落ちてきたのは、白い紙の箱に入ったウイスキーボンボン。

22粒で3000円とちょっと高めの高級チョコだ。

普通のチョコなら100円ちょっとで買えるのだから、1粒約130円っていうのはかなり高い。

元世界でも、買ったことがないような高級チョコ。皆に一粒ずつ渡す。

「これもチョコ？」

「まあ、アネモネでも1つぐらいなら平気だろう」

「なにか特別なもののなのかなの？」

「解ったにゃ！ 甘い毒入だにゃ！」 「そんなの食ったら死んじまうだろ！」

真っ先に、エルフのセテラがカラフルな包装を解いて口に放り込んだ。

「んなあ？ これって、チェチェの中にお酒が入っているのねえ！」
「なんじゃと？ 酒？」 「マジかよ」

エルフの言葉を聞いて、酒好きのアマランサスとニヤメナが、ボンボンを口に入れた。

セテラが話しているのは共通語なので、うちの家族にも理解できる。

「おおっ！ 本当に酒が入ってるぜ！ うめー！」

「これは……菓子に直接酒を入れるとは——なんという……」

「サンバクに教えたなら喜ぶだろうな」

「これは、考えもつきませんでしたわえ」

「美味しい！」「美味いにゃー！」

アネモネとミヤレーもボンボンを食べている。

俺も子供の頃に食べたが、平気だったから——まあ大丈夫だろう。

「ほんじゃ、セテラとアマランサスとニヤメナには、もう1つずつ」

「なんでえ?!」「ずるいにゃ!？」

「ええ？」

俺はアネモネとミヤレーの思わぬ反撃に、たじろいだ。

「ほんじゃ、アネモネとミヤレーにもやる」

「やったにゃ！」

チヨコもいき渡ったところで話を進める。

「ほんで、セテラ。さっきの話だが？」

「本当に話すの？」

「エルフの秘密で漏らせないってなら、諦めるが……」

「そんなことはないんだけど、知ってどうするの？」

俺がエルフのことを知りたがっているのが、彼女には本当に理解できないようだ。

「俺とアキラが知りたい情報が含まれているかもしれないからだ」

「まあ、いいけど――始まりのエルフのことは聞いた？」

「ああ、50人で女が20人。子孫を残したのが19人って話だろ？」

「そう！　その中で、子孫を残してない1人ってのは私なの」

「え？　ええ？　！　ちょ、ちょっとまってくれ？」

「なあに？」

俺のリアクションに、セテラが不思議そうな顔をしている。

えーと、始まりのエルフってのは、5000年前って話じゃなかったか？

「それじゃ、セテラは5000歳だっているのか？」

「うん」

「じゃあ、本当のBBAじゃん！」

エルフの本当の歳を聞いて真っ先にその言葉を口にしたのはアネモネだ。

「BBAっていうなよ、ちびっこめえ！」

「ちびじゃないし！」

「「ぐぬぬ」」

「こら、アネモネ。やめなさい」

「ふう」

アネモネが横を向いてしまった。

「それってどのぐらいの歳にや？」　「解んねえ……」

獣人たちには、まず5000という数字が理解できない。

「えーと、カダン王国が5回滅びるぐらい」

「そんなにBBAなのじゃ？　！」　「大BBAだ！」

「BBAっていうなよ！」

獣人たちにも止めさせる。

「エルフというのは、そんなに長寿なのかえ？　初めて聞いたが……」

セテラの話聞いていたアマランサスが、もう1つボンボンを口に入れた。

「普通は1000年ぐらいで、森に入っちゃうんだけどね」
森に入る――要は自殺のようなものらしい。

日本でいうと、即身仏に近いのだろうか。

「セテラはそれをしないで、ずっと生きていると」

「まあね。森に入るのは義務でも決まりでもないわけだし」
セテラも口にボンボンを入れるが――まさか5000年も生きて
いるなんて。

そんなことがあり得るのか？　少々疑問だが、彼女が嘘をつく理
由もない。

「まさか永遠に生きられるとか、そういう生物なのか？」

「いやあ、それはないと思う。そろそろ寿命がきそうなんだよねえ。
ケンイチたちは、歴史上初めて老衰で死ぬエルフを見ることができ
る貴重な体験をするかもよお」

彼女を延々と長生きさせる原動力はなんなのか？

ただの気まぐれなのか？

「現世にしがみつくのは未練があるとか、なにかやりたいことがある
とか……？」

「別にしがみついているわけじゃないけどお。そうねえ、死に損な
っただけかな。後は惰性でズルズルと――でもねえ、最初は使命が
あったのよ？」

「使命？」

「そう！ エルフってのは、本来はもっと大きいのお！ その身体をいじって、この星に合うように調整したから、それを見届ける仕事ねえ」

「調整って、遺伝子レベルでいじったってことなのか？ エルフにはそんな知識と技術が？」

「遺伝子ってのが、なにか解らないけどお。身体の構造を支える最小単位のことよね？」

「そうだ」

待てよ——エルフたちは入植してきたと言っていたが……。

「エルフもここに入植してきたらしいが、どこからやってきたんだ？ 海を越えてきたのか？」

「違うのお」

彼女は空を指差した。

「もしかして、他の世界から？」

「そうねえ」

俺はアイテムBOXからスケッチブックを取り出すと、恒星とそれを中心に回る惑星を描き、外からやってくる矢印を描いた。

「こういうことか？」

「うん」

「なに言っているか、全然解らんじゃー！」 「さっぱりだぜ？」
そりゃ解らんだろう。

こんな話を理解できるのは、俺とアキラだけだ。

「私の言っていることが理解できるってことは、ケンイチたちもそういう世界からやってきたってことでしょお？」

「まあ、そのとおりのような違うような……」

「ケンイチ！ 私にも教えて！」

アネモネにがぶり寄られて、俺は困惑した。
果たして話していいものなのか……。

「うーん……転移門があっただろ？ あれみたいな感じで、俺とアキラは他の土地から飛ばされてきたんだよ」

この話は以前、アマランサスに話したが……。

「それでは、以前に聞いたとおり聖騎士様はカダンの人間ではないと？」

「そういうことだな」

アマランサスの言葉を聞いて、アネモネがすねている。

「私は聞いてない……」

「黙っていて悪かったんだが——こんな話は信じてもらえそうにな
いし」

「ケンイチ！ どんな世界から来たの？！」

俺はシャングリ・ラから東京の本を購入した。

「ほら、ここに載っている、こんな世界だ」

「すごい！ 石の林？！」

「これは——まさか全部石の家なのかの？！」

アネモネとアマランサスが本を食い入るように見つめている。

「すごいじゃ！」「なんじゃこりゃー！」

「はあーやっぱりねえ」

エルフが納得したようにつぶやく。

「エルフの故郷ってのも、こんな感じなのか？」

「そうねえ」

「その割には、俺の船とか召喚獣に乗って喜んでたけど……布を縫

うミシンだって」

「ああ、昔のことは、ほとんど忘れちゃったんだよねえ」
「忘れた？」

「だってえ、5000年よお？ そんなに沢山の記憶は頭に入らないからあ。全部捨てたのお」

自分たちが文明的な暮らしをしていたらしいことは、うっすらと覚えているが、ほとんど忘れてしまっているらしい。

覚えているのは、ここ500年ぐらいのことだという。

「それじゃ知識も技術も？」

「もちろん、こんな世界じゃ役に立たないでしょお？ ミシンだっけ？ あれはびっくりしたのは確かよ。あんな機械なかったしい」
要するにレトロ過ぎて、なかったらしい。

彼女の説明だと、布は分子同士を結合させるので、縫ったりする必要がなかったという。

どんな形状の服でも1枚構造でできるってことだ。

全部忘れてしまっているから、船やら車に乗っても喜んでいたわけだ。

元々は、もっとすごい乗り物にも乗っていたはずなのに……。言葉は悪いが、ボ○老人……。

「なにか悪口を考えてるう？」
セテラが俺の顔をジッと見つめている。

「いや、ゲフンゲフン！」
彼女が普通のエルフたちと同じ暮らしをしていたのも、そのせいか。

エルフの先進的な科学力やら知識を全部捨てて、原始的なエルフの生活を選んだのだろう。

俺はアイテムBOXからタブレットを取り出した。

「ああ、うん——こういう板も使っていたような気がするう」

セテラがタブレットを持って、裏表を見ている。

彼女が言うように星の外からやって来たのであれば、星の海を渡るってことになる。

要は恒星間航行技術を持っていたわけで、当然タブレットのような情報端末もあっただろう。

「エルフたちは宇宙を渡る術を持っていたのか？」

「宇宙^{黒い海}つてのがなにか解らないけどお、星の外に広がる空間なら、アグ・イルと呼ばれていたわあ」

ああ、やっぱりなあ。

アキラが帰ってきたら、彼とも話し合わないとだめだなこりや。

241話 ルート選択

エルフの村に滞在していたら、アキラとアマランサスが追っかけてきた。

どこに飛ぶか解らない転移門を使ったらしいが、多分アキラの魔力を使ってチャージしたのだろう。

なんて危ないことをするんだろうか、と思ったのだが、助けに来てくれたんだからありがたいことだ。

アキラたちと一緒にエルフのセテラもやってきた。

理由は面白そうだからという、エルフらしい理由。

そのエルフだが、なんと5000年前から生きている古参のエルフらしい。

彼女は俺たち只人が使っているという共通語を話すことができるが、そのぐらい生きていれば、話せてもおかしくない。

彼らは俺とアキラと同じように外の世界からやってきたという種族。

この世界にやって来た日本人のように、ある日突然にここに立っていた——というわけではなく、星の海を旅してきたらしい。

それが本当なら、元世界よりはるかに進んだ恒星間航行技術を持った世界からやって来たことになる。

俺たちを遥かに上回る知識と技術を持っているはずだが、5000年も生きてきたことで、そのほとんどを忘れてしまったようだ。

つまり他のエルフとほとんど変わらず、なんとなく古代の記憶がある——程度らしい。

彼女の話が本当なのか、それともボケたエルフの妄想なのか、それは不明だが、文明的なものを見せても理解をしているようなので

彼女の言っていることは間違いないのだろう。

セテラと話をしていると昼前になった。

アキラが姿を現す。

昼飯を食いに来たのだろうか？

「アキラ、昼飯か？」

「ああ」

「さっきの彼には振られたのか？」

「いや、夜に会うことになっている。ウヒヒ」

彼が指で輪っかを作って指を出し入れしている。

アネモネの前では止めてほしいのだがなあ……。

「この辺りのことを色々と聞けそうだぞ？」

「それはよかったが――それより話がある」

俺の真面目な顔に、アキラも真剣な表情になる。

「なんだ？ 深刻な話か？」

「そういう感じではないんだが、俺たちにも関わりがある話だ」

「そうか、それじゃ飯を食いながら話すか」

「ああ」

秘密の話し合いのため、うちの家族から離れた場所で飯を食う。

「悪いが、アキラと大事な話がある」

「うん、解った」

「多分、エロい話だにゃ？」 「そうなのかい、旦那？」

「違う違う。アマランサスも悪いな」

「聖騎士様がそうおっしゃるということは、相応の大事なのでしよう」

「どちらかというと、俺とアキラについての話だからな」

彼女たちは、肉まんとかレーまんにするようだ。
どうやらハマったらしい。

ちょっと離れたところで俺たちも食事にする。

セテラも一緒なのだが、カップ麺にした。

このエルフはカップ麺が大好きなのだ。

「3分間待つのじゃぞ？」

お湯を入れて、カップ麺ができあがるのを待つことにした。

「それでケンイチ、話ってのは？」

3分たったので、早速アキラがカップ麺をすすり始めたのだが――
。

昼前に話したことをアキラにも伝える。

「ぶほっ！ マジで？」

俺の話を聞いたアキラが、カップ麺を吹き出した。

「マジらしい」

「そんなに私のことが興味あるの？」

「エルフのことじゃなくて、俺たちが置かれているこの状況がどうなっているのか、解るかもしれないからな」

「ああ、そういうこと」

俺の話にセテラがつまらなそうにうなずいた。

「でもケンイチ――宇宙船でやってきたのと、ある日突然この世界の大地の上に立っていたのとじゃ全然違うぜ？」

「まあ、そうだけど。この世界がどうなっているのか、断片を知ることできるかもしれない」

「でもよお、そんなにすごい技術と知識があれば――」

「いや、全部忘れているらしいんだが」

「は？」

「5000年分も記憶を保持できなくて、ほとんどの記憶を破棄してしまったらしい」

「なんだそりゃ、ただのボケ老人かよ」

「バカ！」

アキラが俺が言わなかったことを口に出してしまった。

その瞬間、彼のこめかみにエルフの爪が食い込む。

「あいだだだだ！ 頭が割れる！」

「今、面白いことが聞こえたけどお？」

「気のせいです！ ぎゃあああ！ すみません、ごめんなさい！」

美しくて聡明なエルフ様！」

アキラの頭から爪が取れた。

「口は災いの元だな」

「かぁゝいてえ！」

頭から血が流れているが、彼も祝福を持っているからすぐに回復するだろう。

「ふん、私に対する愛はないのか」

「悪い、アキラも悪気があったわけじゃないんだ」

「悪気がなければ、なにを言ってもいいわけえ？」

「そうだな、ごめんよ」

「ふん」

エルフが伸びたカップ麺を食べ始めたのだが、啜って食べたりはできないようだ。

俺もカップ麺を食う。

「でもよおエルフ様。エルフたちは、勝手にこの星に流れ着いたのか？」

「いいえ、私たちを導き入れたこの星の管理人がいたわあ」

「ほらあ、ケンイチ！ 管理人だぞ、管理人！」

管理人の存在を聞いたアキラが嬉しそうだが、俺は嬉しくない。
俺たちの変な能力はその管理人のせいなのだろうか？

「はあ、そいつはいてほしくなかったなあ……」

「でも、5000年前の話だから、生きているかは解らないけどねえ」

「そりゃそうだが……その管理人ってのは、なんなんだ？ 神様か？」

「そんなわけはないと思うけどお。エルフより科学が進んだ種族っただけだと思うけどお」

進みすぎた科学は魔法と変わらんってやつか。

カップ麺を持ったアキラが、ポーズをつけながら話し始めた。

「あ……ありのまま今起こったことを話すぜ！ ファンタジーだと思っていたら、いつのまにかSFになっていた。な、何を言っているのか、わからねーと思うが」

「俺も解らんよ」

「そうだよなあ」

俺はあることを思い出した。

「あ！ 夜になると、月の表面がキラキラと光っているんだが、あそこに管理人がいるのか？」

「違うと思うけどお。あれは、外敵からこの星を守るための自動防衛兵器だと聞いていたしい」

セテラはキラキラがなにか知っているらしい。

外敵？ そんなものがあるのか？

少々心配だが――アランサスの話では、ここ1000年でそのような者が王国を襲ったということは話していなかったが……。

「ふう——ケンイチ、なんか元の世界には戻れそうにないな」

「別に戻れなくてもいいけどな。俺は、ここでの生活を楽しんでい
るし」

「まあ、ケンイチの能力なら、ここの生活でも困ることはないよな
あ」

「まあな」

「ケンイチの能力って、こういうものを作ったりできることお？」

「そうだ。セテラは俺の召喚獣の正体に気がついてるんだろ？」

「そうねえ。実物は見たことはなかったけど、原始的な内燃機関の
乗り物？」

「正解だ」

電気自動車よりもっと進んだ、チューブの中を走るエアカーなど
がある世界なら、化石燃料の内燃機関などなかっただろうな。

「エルフが最初50人ってのは解ったが、この大陸中にいるのか？」

「さてねえ。多分いるんじゃないのお？ 行ったこともない場所も

沢山あるしい」

まあ、そりゃそうか。

「どのぐらいの人口だと思う？」

「そうねえ、多分多くても2000人ぐらい？」

「5000年もあって、そのぐらいにしか増えないのか？」

「元々の故郷でもそんな感じだったしい」

寿命が延びてすべてが緩慢になり、科学の進歩も止まり、生物と
しての進化も止まった。

「皆が、美男美女で不老、知能は高くて、スタミナも筋力もある……
」

俺がいつもいう、究極の二足歩行生物がエルフだ。

「そうそう、誰がなにをやっても同じだからねえ。こんな暮らしをしているのお」

それがエルフの原始共産制の基礎になっており、それを手本として建国されたのが、この共和国。

「それを上っ面だけ真似ているだけののような気がするが……」

「まあ、そういうことよねえ。欲があるのに、できるものとできないものが一緒に同じことをするなんて無理だと思うんだけどお」

「セテラ姉さんの言うとおりだな」

まだ頭が痛いのか、アキラがこめかみあたりをさすっている。

「エルフが降りたのは、この大陸だけか？」

「いいえ、他の大陸にも降りてるわ」

「交流は？」

「まったくなし」

初期の頃は通信機などがあったのかもしれないが……。

「そもそも、なぜこの星にやってきた」

「故郷が戦で滅んでえ、もう一度最初からやり直そうとねえ」

「文明を捨ててか？」

「そう」

それじゃ、知識や技術を覚えていなくても仕方ない。

最初から捨てるつもりだったのだから。

「そして、管理人とか呼ばれている者に導かれて、この星にやってきた……」

「そういうことになるねえ」

エルフたちと、この星の成り立ちは解った。

「さて、ケンイチこのあと、どうする？」

「セテラは、転移の魔法陣は知らないのか？」

「うーん、元々はエルフのものなんだけどお。すっかり忘れちゃってるからあ」

「え？ エルフの魔法なのか？」

「なんだよ、全然役に立たねえじゃねえか、このBBA」

そういったアキラの頭にセテラの爪がめり込んだ。

「あいだだだだ！ ぎゃあ！」

懲りないねえ……。

「じゃあ、あの遺跡を作ったのもエルフ？」

「多分、違うと思う。エルフと交流があった種族が作ったんでしようよ」

「その記憶はないのか？」

「あるようなないような」

「……」

アキラがまたなにか言おうとして、口をつぐんだ。

彼女が言うように5000年分の記憶を全部覚えておけているのは酷だ。

外付けのHDDのように、入れ替えができればそんなことも可能だと思うが。

大昔のエルフなら、そんなこともできたかもしれない。

「それじゃ、あの壊れた魔法陣は直らない……」

「そうねえ」

「魔法陣で元には戻れない。ここは共和国——となると、ルートは2つ」

「2つ？」

エルフの攻撃で負傷したアキラが、こめかみの辺りをなでている。

「そうだ。川を下り、海に出てから海岸沿いに進めば王国領だ。オ
ダマキの近くまで行けば街道がある」

「なるほど？ そりゃそうだ！」

「だが、エルフたちの話によれば、海獣がいるらしいんだよな」

「海獣……か？」

「アキラは、どんなものか解るか？」

「海獣って言っても色々あるぞ。ワニみたいなやら、亀み
たいのやら、サーペント、シードラゴン、エトセトラ……」

「イルカやオットセイなんかも海獣だと思うが」

「そんなのならないけどな。川の上で襲われると厄介だぞ？」

船の上だと足場も悪いしな。

クラーケンのときのように、魔物1匹に多人数がいればいいのだ
が。

「なんか、エルフたちの話だと、沢山いそうなんだよなあ」

「よし——今夜、エルフに色々聞いてみよう！」

「趣味兼、情報収集を頼むわ」

「まっかつせつなっさっいっ！ そして、もう1つのルートは地上
か？」

「そうだな。確か王都から西に向かっている街道が、共和国につな
がっているはず」

「西にあるのは、セジーナね。でも、その先には共和国の砦があっ
て往来はできないはずよお？」

セテラが西の都市を知っているようだ。

「でも、道伝いに戻るとなるとそこしかない。山脈を越えるわけに
はいかないし」

「山脈には万年雪が見えるから、6000m以上あるだろうしなあ」
素人がそんな山越えするなんて自殺行為だし、山脈を越えたとし

でもその東側に広がるのはアニス川周辺に広がる大湿地帯。

魔物やスライムの大群を相手にしながら、大湿地を横断するのはちょっと無理。

そうなると共和国の砦を突破するしかない。

「まずは――川を下ってみるか」

俺の提案にアキラがうなずいた。

「そうだな。その海獣ってやつを拝んでみないことには。意外となんとかなるかもしれねえし」

「そうだといいいんだがなあ」

獣人たちも川を下ることを提案していたので、反対されることはないだろう。

アネモネとアマランサスも俺についてくるはず。

話し合いは済んだので皆の所に戻る。

「旦那、難しい話は済んだのかい？」

「ああ。勝手に決めて悪かったが、とりあえず川を下ることになった」

「言い出したのは俺だから、別に反対はねえぜ」「ウチもにや」

「私もいいと思う」「妾は、聖騎士様の仰せのとおりに……」

「アマランサス、別に反対意見を言ってもいいんだぞ？」

「そのようなことをすれば、妾の首が絞まりますゆえに」

「そろそろ奴隷も止めないか？」

「……」

アマランサスが黙って横を向く。

嫌だと言うと、奴隷紋に反逆とみなされるからだ。

「それじゃ、明日の朝一で、川を下ることにしよう」

「よっしゃ！」「うにゃー！」

「海に出られたら、オダマキの近くまで行けば帰れるからね！」
アネモネの言うとおりだが懸念がある。

「けど、無事に下ればいいけどなあ」

「エルフたちが言ってた、魔物のことかじゃ？」

「そうだよ。どのぐらいの数がいるかだな」

「スライムなら、旦那の作ったスライム避けがあるじゃん」

「あれは、スライムにしか効かないからなあ」

「でも、旦那。エルフが見せたアレもあるじゃん」

「あれか？」

そこにセテラがやってきた。

「なにになに？ なにを見せてもらったのお？」

彼女にエルフが披露してくれた、スライム避けの方法を話す。

「他の場所でそういうのを聞いたことがあるか？」

「ないけどお——ははあ、なるほどねえ。そう言われれば使えるかもねえ」

「今まで、そういうことを試したことがなかったんだ？」

「ないわねえ。他種族と交わるとこういうことがあるので面白いのよねえ」

確かに、種族が違えば文化も違う。

教育のレベルも違うし考えかたも違うから、自分たちでは考えつかないようなことを考えつく連中がいてもおかしくない。

「その割にはエルフは排他的って言われるが？」

「他の種族の文化に侵略されるのが嫌なのよねえ。私はそんなことないのだけどお」

「うーん——それじゃ、あまりエルフたちには会わないほうがいい

かな？」

「それは、私たちのほうが調整するから、ケンイチはあまり気にしないでもいいかもよお」

そうなんだ。

まあ、俺もあまり深入りするつもりはない。

彼らとて、なん千年もこの生活をしてきたのだから、今更変える気も必要もないはず。

エルフのことを考えている俺を見て、セテラがニヤニヤしている。

「なんだ？ なにを笑っている？」

「只人って、他の人の排泄見るのが好きなんですよ？」

「はあ？ 好きじゃないぞ？ どこの情報だ」

いや、このエルフは只人の街にもいたらしいから、そういうやつがいたのかもしれない。

だれだ、そんなとんでも情報を植え付けたやつは。

「聖騎士様あ！ そのようなことをなさるなら妾があ！」

いきなり、アマランサスが抱きついてきた。

「しないしない！」

「恥ずかしいけど……ケンイチならいいよ」

アネモネがもじもじしながら答えている。

「よくないよくない！」

「お、俺だって！ は、恥ずかしいけど……」 「にやはは
獣人たちまでそんなことを言う。」

「止めなさい、そんな趣味ないから！」

「えー？ そうなのお？」

「そうだよ！ まあ、アキラ？」

黙って話を聞いていたアキラにも同意を求めたのだが……。

「……フヒヒ、サーセン」

「あー！ アキラに聞いた俺が馬鹿だった。だが俺はそういうことはないからな！」

なんで、こんな話になったんだ。

別にアネモネの魔法があるなら、わざわざエルフのゴニョゴニョを使う必要はない。

アホな話をしていると、ベルたちが戻ってきた。

「にゃー」

「お母さん、なにかおもしろいものはあったかい？」

「にゃ」

なにもなかったらしい。

「そうそう、ベルの国って転移魔法あったのかい？」

「にゃ」

「え？ 研究されていた？」

あのリッチが、どうやら転移魔法の研究をしていたようだ。

それじゃ、あの遺跡の中にあった本の中にそれっぽい資料があるのだろうか？

「んーそうだ」

俺はアイテムBOXから、遺跡で手に入れた本を取り出した。

「セテラ、これって読めないか？」

「ん？」

長いこと生きているなら、古代の文字も知っているはずだ。それも忘れたと言われてしまったら、それまでだが……。

「ん？ これは読めるよ」

「そうなのか？ アネモネに読み方を教えてやってくれ」

「いいよ。当然見返りはあるんでしょねえ？」

「見返りってなんだ？ エルフが金を欲しがるとは思えないし……」

「当然、ケンイチのか ら だ——」

セテラの長い手足が俺に絡みついている。

まるで巨大な女郎蜘蛛に抱きつかれているような感覚に襲われると、アネモネが割って入ってきた。

「だめええ！ そんなのなら、本が読めなくてもいいから！」

「ええ？ 古代の魔法に興味ないのかい？」

「……興味あるけど……ケンイチのほうが大事だし……アキラは、レイランでも読めるって言ってたし……」

アネモネがもじもじしながら答えているが、あの古い本に興味があるのは間違いないらしい。

「まあ、うちの大魔導師様がそういうことだから、エルフ様はまた今度な」

「ええええっ！？ そんなのずるいんだけどお！」

「ずるいってなんだ。お前はエルフの大使で、うちの家族じゃないだろう」

「それじゃ家族にしてよお！」

セテラが再び、俺に抱きつく。

エルフは細いのだが力が強いので逃げられん。

「エルフのセリフを借りると、どうせすぐに死んじゃうんだぞ？」

「それでもいいからあ！」

「とりあえず、それはサクラに戻れたら考えよう。今はそれどころじゃないし」

「確かにねえ」

エルフとの会話を他の家族がちょっと離れた場所で見ている。

「にゃー」

「なんだか、また増えそうじゃね？」 「今度はエルフにゃ？」

「……」

アマランサスは反対なのだろうが、口に出すと奴隷紋が反応するので黙ったままだ。

「エルフならサクラに帰らずに、ここに住めばいいじゃない」

「そうはいくか！」

アネモネの言葉に、セテラが憤慨する。

「やっぱりセテラが住んでいたエルフの集落に戻りたいのか？」

「違う！ ケンイチと一緒にいたほうが面白そうじゃない」

「ああ、そういうことね。それじゃとりあえず帰らねば」

「そうねえ」

あとから来たベルにも今後の予定の説明をする。

「にゃー」

彼女も川を下ることを了承してくれたようだ。

「お母さんは戦闘になっても見ているだけでいいからな」

優れた能力を持つ森猫とはいえ、船の上ではその能力は発揮できないだろう。

「ああ、ケンイチ」

「なんだ？」

「ケンイチの船、湖に置きっぱなしなんだが……」

「大丈夫だ、アイテムBOXにもう1隻入っている」

いよいよとなったら、ゴムボートもあるしな。
ゴムじゃちよつと心もとないが……。

——そのまま時間がすぎ夕方。

この村の族長にも明日の朝一で発つことを告げて、エルフも入れて皆で食事にすることにした。

セテラに料理のアドバイスを求めると、カップ麺がいいと言う。

皆で沢山食べるなら袋麺のほうがいいだろう。

大鍋で袋麺を作り、皆で分けて食べることにした。

鳥肉ならエルフたちでも食べられるので、コカトリスの肉入りラーメンだ。

獣人たちは、ラーメンが苦手なのでカレーを食べているが。

ベルたちには、コカトリスの肉と猫缶をあげる。

使い捨ての紙の丼にラーメンを入れてやると、プラのフォークでハグハグとエルフたちが食べている。

「うめえ!」「こりゃワームか?!」

前もこのやり取りを聞いたな。

「小麦粉をねって長く伸ばしたものだよ」

「へえ、只人ってのは変わったものを食うんだな。でも、これはスープに絡んでうめえ!」「俺らでも作れるんじゃない?」

「まあ、小麦粉があればなんとかなると思うが……」

彼らが驚いているのは長いラーメンだけではない。

俺のやった丼を掲げて下から覗いている。

「なんじゃこりゃ? 紙の器? 只人はこんなものを使っているのか?」

紙の井なんて、もちろん見るのは初めてだろう。

「違う違う、俺の魔法で作ったものだから、使っているのは俺だけだ」

「へえ」

「すげー！」

セテラのアドバイスどおり、ラーメンはエルフたちに好評なようだ。

エルフの好きな味なのだろうか？

アキラは――若いエルフの所に行って、樹の下で2人でラーメンを食べながらイチャイチャしている。

これは彼の趣味なのでなにも言うまい。

あのエルフから色々と情報を聞き出してくれるという話だしな。それに期待しよう。

242話 エルフの村から出発

トラップなのかは不明だが、転移門で共和国に飛ばされた。

現在位置も不明で、王国のサクラに帰れるかどうか不明だったのだが、俺たちを追ってアキラやアマランスもやってきた。

もちろん森猫たちも一緒だが、そこにエルフのセテラもいた。

彼女から聞かされる、この大陸の歴史は驚くべきものだった。

エルフ——彼らは宇宙からやってきた移民だったらしい。

俺たちの言葉で異星人ってことになるが、にわかには信じがたい。そう考えるのが普通だとは思うのだが、エルフ種族全体で口裏を合わせて嘘を言う理由もない。

——ということは、事実なのだろう。

——アキラたちが追ってきた次の日の朝。

アキラは昨晚一緒に遊んだと思われる若いエルフを連れて朝帰りしてきた。

短い金髪が輝く細い腰を抱いたりして朝からイチャイチャである。

ああもう、本当に。あとで、レイランさんに怒られても知らんぞ？

「ケンイチ、ツイツツラにも飯を食わせてやってくれ」

「それはいいけど——まさか、そのエルフも連れていくって言わないよな」

「ええ？ アキラ、ダメえ？ 僕は、アキラともっと一緒にいたいんだけど」

エルフがアキラに抱きついてしなを作っている。

「はは、大丈夫だって心配すんな」

マジでこのエルフを連れていくつもりだ。
そんなに気に入ったのだろうか？

「いや、アキラが連れていくっていうなら俺は文句はないんだが、
なにかあるか解らんぞ？ いいのか？」

「魔物なら平気だよ？」

「いや、途中で村に帰れなくなったらどうする？」

「まあ、そのときはそのときさ」

エルフも引き下がらない。

「俺たちは川を下るつもりなんだが、それでもいいのか？」

「ああ、それもアキラから聞いたけど、でっかい魔物がいるぞ？」

「ケンイチ、どうやら首長竜みたいな魔物がいるらしい」

アキラが、エルフから情報を仕入れてきたようだ。

ちゃんとやることはやっている。

いろんな意味で。

「ええ？ マジか……でも、一度見てみないことには……」

「それじゃ、やばかったら陸路に変更ってことで」

俺もアキラの案に賛成した。

「エルフの村を離れていいのか？」

「ああ、あまり村を離れてはだめってことになっているが、エルフ
にとって2〜3年は、数ヶ月と変わらんからな」

「どうやら、このエルフは100歳未満らしく、本当に若いエルフ
だ。」

「それじゃ、100歳過ぎたら別の村に行くってことか」
近親による血が密になるのを防ぐためであるが――。

「そうだよ。それが少し早まっても大丈夫ってことさ」

「ええ？　もしかしてあの山脈を越えてもいいって言うのか？」

俺は万年雪が積もるコスモ山脈を指差した。

「別に、どこどこに行っちゃだめなんて、決まりもないしね」

「そりゃ、俺たちの村の近くにも2箇所、エルフの集落があるけどなあ……」

「問題ないだろ？　エルフはエルフ。元々19人の母親から生まれた、みんな親戚みたいなもんだ」

「はあ、アキラの旦那もまったく物好きだぜ」 「そうだにゃ」

獣人たちも呆れているが、個人の趣味にとにかくは言えない。

エルフも納得しているようだし、拒む理由もない。

それに、エルフなら魔法も使えるし、戦闘能力もかなり高いだろう。

貴重な戦力になる。

土地勘がまったくない俺たちの貴重な情報源にもなるしな。

「だいたいだな！　男の最大のロマンである男の娘が目の前にいるんだぞ？」

彼も自分の趣味を、もう隠すつもりもないようだ。

「ああ、お菓子とかに入っているやつな。天津甘栗とか」

「そりゃ、マロンやろ！」

アキラのツツコミが入る。

彼はいつもこのネタで1人ボケ1人ツツコミをしているのだが、今日は俺がボケてみた。

「その男の娘が目の前にいるんだ、据え膳食わずにいられようか、いやいられない！」

「カッコ反語」

「そのとおり！」

「アキラの心意気は解ったが、男のロマンという最大の同類項で囲むのは止めてくれ」

「ちえ、ケンイチなら解ってくれると思ったのに……」

「いやいや……」

そんなことを言われても困る。

「まあ、俺は己のロマンを追求するから」

「僕もアキラのためにがんばるよ」

また、エルフとイチヤイチヤしているのだが、彼をサクラに連れて行って大丈夫なのだろうか。

まあ、なにがあってもアキラの自己責任だから、俺は知らん。

とりあえず朝飯を食う。

いつものグラノーラだ。

エルフは牛乳はだめなので、調整豆乳を使っている。

「うめー！　なんだこれ！」

「美味しいよねえ」

新旧2人のエルフが、グラノーラをほお張りながら微笑んでいる。片や5000歳で片や100歳未満だが、姿形は姉と弟。

人間では信じられないような光景だ。

森猫たちには、いつもの猫缶。

椅子から降りると、美味しそうに食べているベルの背中をなでる。

「お母さん、人間と同じ食べ物のほうがいいかい？」

「にゃ」

「とても美味しいから、これでいいってか？　それならいいけど」
元人間って聞いてしまうと、猫缶でいいのかな？　っていう疑問

が出てくるよな。

まあ、猫になってしまったから味覚も猫になっているだろうし、それなら猫の味覚に合わせた猫缶のほうがいいのか。

なんだかモヤモヤが残るが、彼女がこれでいいと言っているのだから、これでいいのだろう。

美味しそうに食事を平らげると、2匹で森の中に散歩に向かう。

俺はテーブルに戻ると、エルフの家族について聞くことにした。彼らは100歳を超えると別の村を目指す。血が濃くなるのを防ぐためだ。

「セテラ、エルフの近親婚ってどんな影響が出るんだ？」

「ええ？ 食事をしているときに、そんなこと聞かう？」

「ああ、スマン」

セテラが渋々教えてくれたが、死産が多いらしい。

「ケンイチ、エルフって凄い早産で生まれるんだよ」

「へえ？ そうなんだ」

アキラがエルフの育児の方法を教えてください。

彼はエルフと一緒に暮らしていたので、エルフの社会に詳しい。

超早産で生まれた未熟児は食事もできないし、放置すればすぐに死んでしまう。

元世界なら、未熟児で生まれても保育器があるが、この世界にはもちろんそんなものは存在していない。

そこで、エルフが村を上げて、24時間つきっきりで精霊を使って支援をするという。

「つまり魔法で保育器を作るわけか」

「まあ、そうだな」

「しかし、なんでそんなに早産なんだ？」

「あの腰を見てみる、赤ん坊が産道を通らないんだよ」

「ああ、そうなのか……そりゃ大変だな」

「ケンイチ！ 産道ってなに？」

黙って俺たちの話を聞いていたアネモネが、会話に入ってきた。

「ううん？ ううん……」

こういうことを教えてもいいものなのだろうか？

まあ、アネモネは賢いから大丈夫だろう。

俺はシャングリ・ラで骨格標本を検索した。

ちょうど骨盤の骨格標本が3500円ぐらいで売っている。

もちろん本物ではなくて樹脂製だし、大きさも小さい。

実物の1／3ぐらいの大きさだろうか。

学校の理科室にもあった骨格標本だが、昔は本物もあったらしい。

「ポチツとな」

「みぎゃあ！」 「ぎゃああ！」

目の前に落ちてきた骨格標本に、獣人たちが叫び声を上げた。

「そんなに驚くなよ。作りものだって。骨がこんなに小さいわけないだろう」

「だって、子供の骨じゃ……？」

「違う違う」

獣人たちにおいを嗅がせて触らせてみると、模型だって理解したようだ。

「まったく朝から心臓に悪いぜ……」 「まったくだにや……ケンイチは、なにをするか解らないから、怖いにや」

「悪い悪い」

「して聖騎士様。その腰骨の模型がなんだと申されるかえ？」

「ほら、この穴が産道だ」

腰骨——つまり骨盤の真ん中には、丸く穴が開いている。

「なるほどのう……」

「ここを赤ちゃんが通って生まれてくるので、この穴より赤ちゃんが大きくなると……」

「そうなんだ……それじゃエルフは、この穴が小さいんだね？」

「アネモネも理解できたようだが、子どもにこんなことを教えてもいいのだろうか？」

「多分な——あの腰をしてみる。細いだろう？」

「うん」

皆の視線が、セテラの腰に集まる。

「ちょ！　ちよつとお！　朝から、そんな視線を向けなくてくれるう！？」

珍しくセテラの顔が赤い。

「……」

俺の話を聞いて、アマランサスが少々難しい顔をしている。

こういう解剖学的事実は禁忌らしいからな。

「アマランサス、スマンな。こういう話は聞きたくはなかったか？」

「いいえ、王侯貴族でも、難産の果てに命を落とす者がおりますので、おそらくはこういったことが原因なのかと……」

「女のケツがデカいと安産型なんて言われるけど、経験則的な理由があるんだろうな」

「うむ」

「でも、ケンイチ、赤ちゃんが生まれてこないときはどうしたらいいの？」

「あーうーん」

「どうしたの？」

俺は答えを迷った。

「これは言っているいいものか……」

「私は平気」

「妾も、もしや助けることができる女子おなごが増えるやもしれぬゆえ」

「帝王切開だよ」

「そ、それは？」

そんな単語、この世界にはないので、アマランサスが首を傾げている。

「解りやすく言うと——お腹を切って赤ちゃんを取り出すんだ」
「びゃ！」「ひっ！」

全身の毛を逆立てた獣人たちが立ち上がったのを見て、俺は「しまった」と心の中でつぶやいた。

彼女たちは、逃げるようにそのまま森の中に消えてしまった。

「あゝあ、まずかったかな……」

「でも、ケンイチの世界の医療行為では、普通に行われていたんでしようお？」

エルフたちは平気のようだ。

セテラは、かなり進んだ医学を経験していたはずだとは思いますが、若いツイツツラも平気なのは意外だ。

「まあな。それに腹を切っても死ぬことはないし」

「そうなのかえ？」

「なあ、アキラ」

「ああ——でも、この世界でやるのにはハードルが高すぎるな」
「はあどるってなに？」

聞き慣れない単語に横にいたツイツツラが反応した。

「こうやって、飛び越える柵みたいなもんだな」

「ああ、そういうこと」

アキラが飛ぶ真似をしての説明に、エルフも納得したようだ。

「つまり、より沢山の民の命を救おうとするならば、それに相応しい技術と知識が必要になるというわけじゃな」

「そうだな。だが、この世界じゃ禁忌になっているようなことが多いし。獣人たちの反応を見ても解るだろう」

あの様子だと、母子ともに危険と言っても帝王切開なんてできないだろう。

民の理解を得られないまま、サクラでそんなことを強行すれば領の経営が崩壊する。

それどころか、異端者として王国から追放される可能性すらあるな。

「うむ……」

「この世界には治癒魔法があるとはいえ、今の話の難産とかは魔法でなんともならないしな」

「治癒魔法でえ、治らないものも多いよお。たとえば流した血が増えることはないし」

それを補うためには輸血が必要になるが、それがまた大問題だ。

この世界で実施するには不可能に近い。

「アネモネ、今の話は全部内緒な？」

「うん」

「まあねえ異端者として吊し上げを食らって、最悪火炙りねえ」

「そうなるのは勘弁してもらいたいが——ありえる話だ」

朝飯を食い終わったが、獣人たちがどこかに行ったまま、戻って

こない。

嫌われてしまっただろうか。

エルフのツイツツラが、族長の所に行ってくるという。

「族長に相談なしに、村から出ることを決めてしまってた大丈夫なのか？」

「いずれは、この村を出るんだし」

ツイツツラと入れ替えに他のエルフたちがやってきたので、チョコをやる。

「今日、発つのか？」

「ああ、エルフが1人一緒に行くって言ってるんだが、大丈夫だと思うか？」

「ツイツツラだろ？ あいつもそろそろ旅立ちの日が近づいているから、それが多少早まるだけだろ」

エルフたちからみても問題ないらしい。

チョコの人気のせいか、沢山のエルフたちに囲まれると草のにおいが充満する。

1人だと気にならないが、やっぱり沢山いたり狭い部屋の中で一緒にだと、においがするな。

嫌なおいではないのだが……。

「ああ、そうだ」

セテラに質問を試みる。

「なあに？」

「この大陸の始まりのエルフは50人って聞いたが、他の大陸にもエルフたちはいるのか？」

「多分、降りてるはずよ」

彼女の話では、この大陸の反対側や、南半球にも大陸があるらし

い。

「そっちでは、すごく繁栄していたりして？」

「どうかしらねえ」

彼女の反応だとその可能性は薄いらしい。

「他の大陸にも只人はいるのか？」

「それは解らないわあ。管理人がその種族をどれだけこの星につれてきているのかも知らないし」

「それじゃ他の人類が、めっちゃ文明発達してたりして……」

「海はヤバいつて聞くけど、空を飛べばなんとかなるな」

海は巨大な魔物がうようよいるらしい。

アキラの話によると、かつて帝国でも外洋に出ようという計画があったが、魔物に襲われて頓挫したようだ。

「皇帝から聞いたのか？」

「まあな」

「皇帝？」

突然出てきた単語にエルフたちが訝しげな顔をしている。

「この男は、帝国皇帝の懐刀だったんだよ。歴史上初めてドラゴンを倒した男だぞ？」

「ドラゴン?!」 「はは、まさかなあ」 「よくある只人のホラ話だ」
エルフたちが金髪を揺らしながら笑っている。彼らはドラゴンズレイヤーの話を信じていないらしい。

まあ、目の前で見たことがないから、仕方ないのかもしれないが。

「エルフでドラゴンを倒したという話は？」

「ない」「ない」「そんなのあるはずがない」「あれは動く災害だからな」

「そうねえ」

ドラゴンはさておき、他の大陸の話が気になる。

「アマランサス、他の大陸から人が流れ着いたとかそういう噂は？」

「聞いたことがないわえ」

まあ、オダマキでも、そんな話は聞いたことがなかったからなあ。

「でもアキラ。他の大陸の文明が残っていて高度に発達していれば、いずれはファーストコンタクトに」

「平和的なファーストコンタクトならいいが、侵略だとヤバイぞ？」

「向こうが近代兵器じゃ、多少火薬やなにやらがあっても手も足も出ないな……」

「そうだなあ、そうじゃないことを願うしかねえな」

セテラの言う、この世界の管理人つてのが本当にいるなら、なんとかしてくれるんじゃないだろうか？

根拠もなにもないが。

別の大陸の文明について話し合っていると、ツイッツラが戻ってきてアキラに抱きついた。

「大丈夫だったか？」

「ああ、お祝いとして、村の財産から短剣と弓の持ち出しが許されたよ」

「弓なら、ケンイチから貸してもらえばいい」

アキラの言葉に、エルフも関心があるようなので、アイテムBOXからコンパウンドボウを出してやる。

「ほら、これだ」

「す、すげー！　なんだこれ！」

ツイッツラが、玩具をもらった子どものように目を輝かせている。

「魔物退治にはそれを貸してやる」

「やったあ！」

はしゃぐツイツツラだが、他のエルフたちは戸惑っているように見える。

その様子をみてセテラがつぶやいた。

「ほら、これなのよねえ」

「あ……」

彼女の言いたいことが解ったような気がした。

外からの文明が持ち込まれて、持つ者と持たざる者が分けられてしまう。

これを防ぐために、彼らはすべての財産を共有するという原始共产制を営んでいるのだ。

「セテラ殿の言うとおりだ」

エルフたちを分けて、長い金髪を揺らして族長が現れた。

「迷惑をかけて申し訳ない。我々は、すぐにここを発つことにする」

「そのほうがよいだろう」

彼らには彼らの歴史と暮らしがある。

土足で踏み込んではいけないのだ。

族長の指示によってエルフたちが解散したので、出立の準備に入る。

森猫たちは戻ってきたが、獣人たちはまだだ。

さっきのことを怒っているのだろうか？

「おい！ ミャレーとニャメナ！ 出発するぞー！」

俺の呼びかけからしばらくすると、ガサガサと茂みが動いた。

耳を伏せて尻尾は地面にへばりついており、明らかに警戒している。

「悪い！　かなり俺は無神経だったな。もう、ああいうことは言わないから」

「お、俺たちは旦那に命あずけてるから――そ、それはいいんだけど……」 「にゃ」

「もう言わないし、俺が言ったようなことを、することもないから心配するな」

「……解った」 「にゃ」

アネモネに話したりするときは、獣人たちのいない場所で話さないためだな。

彼女たちは耳がいいから、ヒソヒソ話ぐらいでは聞き取ってしまう。

どうもアキラと一緒にだと、元世界にいる感覚で喋ってしまうからなあ。

いや、これじゃアキラが悪いといっているようなものか……。

そもそも俺の配慮が足りてないのが原因だ。

エルフといい獣人たちといい、他種族への対応の試験があるとするれば、これじゃ落第――反省すべき点が多い。

こういう話がサクラに広がってしまうと、せっかく集まった住民が離れてしまうかもしれない。

自重しなくては。

出発間際になって、エルフたちとの関係が微妙になってしまったので、そそくさと逃げるように出発する。

実に気まずいが俺が悪いのだ。

車をアイテムBOXから出した。

「お？！　ラ○クル新しくなってるじゃん」
アキラが車を変えたのに気がついたようだ。

「歴戦でボコボコになってしまってたな。フロントガラスも割れてしまったし」

「なんだ、色々とあったんだな」

「はは、まあな。あとでゆっくりと話すよ」

「オツケー、よっしゃ！」

アキラもプ○ドを出した。

「すげー！　アキラも鉄の召喚獣もすげー！」

「はは、凄いだろう？」

「森の中を楽に移動できるんだよな！」

「もしかして、ケンイチの召喚獣に乗ったのか？」

「ああ！　最初に会ったところから帰るときに」

ツイツツラが、アキラの車の周りをぐるぐると回っている。

「ほら、俺の隣に乗れ」

「解った」

エルフはアキラの助手席に座るようだ。

それを見て、俺たちも車に乗り込む。

俺の隣にアネモネ、後ろにはセテラとアマランサス。

3列目シートには獣人たちが乗るが、森猫はちよつと厳しい。

「お母さん、アキラの車に乗ってもらっていいかい？」

「にゃー」

「いつもすまないねえ」

「にゃ」

彼女が、カゲと一緒にアキラの車の後部座席に乗り込んだ。

無理に乗せることも可能だが、森猫たちも座席が広いほうがいい

だろう。

3列目シートに乗っている獣人たちは、テンションが低く、じっとしている。

いつも明るい彼女たちが沈んでいると、俺の罪悪感もマシマシである。

あとで彼女たちには再度謝ろう。

「出発！」

こちらを見ているエルフたちに心で感謝しながら、川に向けて出発する。

エルフと一緒に行ったときに方角は覚えていたので、車の天井についている方位磁石を見れば迷うことはない。

それに、アキラの車にはこの辺の地理に詳しいエルフも乗っているし、俺の車の轍も残っている。

そのあとをトレースすればいいのだ。

急ぐ必要もないのでゆっくりと車を走らせたが、30分ほどで川に到着した。

コカトリスを解体したのと同じ場所だ。

「この川かあ」

アキラたちが車から降りてきた。

ベルとカゲがやってきて、俺の脚にスリスリをしてくる。

彼女たちの毛皮をなでながら、アキラと話をした。

「そうだ、結構デカイ川だろ？」

「川幅は100mぐらいありそうだな」

サクラの近くにある大湿地帯と同じように、ここらへんもずっと平地らしい。

川の流れはゆったりで、人が歩くぐらいの速さか。

俺は、アイテムBOXからボートを出した。
ここにはエルフが使っている栈橋があるので、そのまま使える。
アイテムBOXから出したのは、2隻ある船外機つきボートの片方で、以前に使ったスライムよけのコアがそのまま装着されたものだ。

アネモネにコアを起動してもらえば、そのまま使えるだろう。

もう1隻は、遺跡に置いたまま。

アキラのアイテムBOXに入れないので、そのまま放置してきたらしい。

まあ、ここで船がなくても再度購入すればいい。

同じ9mの中古船があればの話だが。

魔物が出るという川で、ゴムボートではかなり不安だ。

「ツイツツラ、魔物が出るっていう川を下るんだが、覚悟はできているのか？」

一応、新入りのエルフに決意を聞いてみる。

「アキラがいれば大丈夫なんだろう？ 竜殺しなんだからさ」

「確かにそうだが……水の上でマヨ攻撃は使えるか？」

「はは、解らん——が、窒息は無理だが油はかけられるぞ？」

「けど、火を点けても水に潜られたら終了だし」

「まあ、なんとかなるって」

大丈夫かな？

俺たちは船に乗り込んだが、獣人たちはまだ黙ったまま。

あゝ困ったな。

俺が全部悪いんだけど……。

243話 子供かゝ

エルフの村に滞在していたが、出発する間際になってエルフたちとの関係が微妙になってしまった。

エルフたちだけではない、獣人たちとの関係もだ。

俺とアキラが話していて、この世界の禁忌に触れてしまったせいなのだが、不注意すぎた。

この世界にはこの世界の常識がある。

元世界の優れた技術や知識だからといって、それがすべて受け入れられるとは限らない。

どうも元世界の常識で色々と話してしまうので、もっと注意しなくては……。

それはさておき、新しい仲間が加わった。

アキラについてきたエルフの男——ツイツラだ。

どうもアキラのことを気に入ったらしくイチャイチャしているのだが、彼を連れていって大丈夫なのだろうか？

まあトラブルになってもアキラの家族の問題なので、俺に口出しはできない。

エルフなら戦闘能力は高いし、魔法も使える。

戦力として欲しい。

俺たちは、エルフの村を出て川を下る作戦に出た。

川は当然海へとつながっており、海まで出ればオダマキの近くまで行ける。

そこまで行けばハマダ領にも帰ることができるだろう。

問題は川には沢山のスライムと、海獣がいるということだ。

スライムは、ゴーレムコアを使ったスライム避けがあるから無問題だが――エルフの話によれば巨大な首長竜のような魔物がいるらしい。

とりあえず、それがどんなものか確かめてみないことには、判断ができない。

川を下るのが不可能となれば、残すは陸路しかないわけだが……。

皆で船外機つきの船に乗る。

ぎゅうぎゅうづめだが仕方ない。

2艘ある船のうち、1艘は遺跡の湖に置いてきてしまったのだ。

アキラのアイテムBOXにも入らなかったらしい。

操舵はいつものようにアキラだが、船舶免許を持っているので、彼が適任だろう。

まあ、俺が動かしてもいいのだが、アキラもすすんでやってくれているし。

川幅は100mぐらいあるし流れはゆったりだし、船のスピードが上げられる。

ボートは船外機の唸りを上げ、水面を切り裂いて進む。

「おおおっ！　すげー！　川の上をこんな速く進めるなんて！」
いつもは舳先には獣人たちがいるのだが、今日はエルフたちが占拠している。

俺はほぼ真ん中におり近くにはアネモネとアマランサス。

下には森猫たちが香箱座りしてじっとしているが――まあ、猫にとって水はあまり得意な場所ではないだろう。

獣人たちは俺の後ろにいるのだが、じっと景色を眺めている。

いつもワイワイと騒々しい獣人たちが静かだと、ちょっと寂しい。

「これってアキラが動かしているのか？！」

「おう！　見ろ見ろ」

アキラが得意げに船外機を動かして蛇行運転を始めた。
エルフにいいところを見せたいのだろう。

「ははは！　すげー！」

「アキラ、無茶すんなよ」

「はは、大丈夫。まーかせて！」

いやいや、こっちが大丈夫じゃねえ——そんなことを考えている
と服を掴まれた。

いつもはアネモネなのだが、彼女とは違った力強い引っ張り。
手探りすると毛皮の手。

これはニャメナだな。

手を引っぱり抱き寄せると、頭をなでる。

黙って抱かれてはいるが、まだ耳は伏せているので、俺のことを
警戒はしているのだろう。

まあ、嫌われているようではなくて、一安心。

「ふぎゃー！」

「な？　なんだ？」

突然抱きつかれて船から落ちそうになった。

「わ！」　「なんと！」

アネモネとアマランサスもバランスを崩している。

「こら、ミヤレー危ないだろ」

「なんで、ウチを差し置いて仲良くなってるニャ！」
「……」

ミヤレーの言葉にもニャメナは黙っている。

「船に乗る前にも言ったけど、俺が悪かったよ。無神経すぎた、ス
マン」

「獣人の里でも、子どもを生むとき死んじゃう女がいるにや。ケンイチの言うとおりにすれば、そういう女が助かるのも解るにや。でもにや……」

まあ、やはり俺の言ったことには、かなりの抵抗があるのだろう。

「獣人たちには獣人たちのしきたりがあるんだろうから、それを強制したりはしないよ。心配するな」

「にや……」

俺に抱きついている、ミヤレーの頭をナデナデしてやる。

「まあねえ、種族によりいろんな禁忌があるのは仕方ないよお？」

セテラが舐先で俺たちのほうを見てつぶやいた。

「そうだろうな。さっきもエルフたちと気まづくなってしまったし」

「子どもの話といえば、エルフは早産って話したけど、どうやって早産させるか知ってるう？」

「いや、アキラは？」

「俺も知らん。早産ってのは聞いたが……」

セテラが話してくれるエルフの秘法。

「あのねえ、魔法を使って早産させるのよ。お腹の中で大きくなっちゃうとケンイチの言うとおりで、産道を通れなくなってしまうからあ」

「そうなのか……」

「だからねえ、種族によっていろんなことがあるのは、仕方ないことなのよお」

「なるべくお互いを尊重できるように暮らしていかねば……でも、いいのか？ エルフの大事なことを話してしまっ」

「まあ、別に秘密でもなんでもないしい。ケンイチたちなら大丈夫でしょお？」

「信用してくれるのはありがたいが……」

獣人たちとのわだかまりも消え、船はそのまま進む。

スライム避けが効いているのか、透明な魔物たちはまったく寄つてこない。

「へえ、このスライム避けは大したものねえ」

「うちの大魔導師様製だからな」

「えへん！」

アネモネが胸を張る。

「エルフは、ゴーレム魔法を使わないのかい？」

「まあ、あまり使わないわねえ。その代わり精霊魔法を使うから森の中には精霊というものが沢山いて、それらの力を借りているらしい。」

エルフは代謝の半分ぐらいを精霊に肩代わりさせているので、精霊がいないと動けなくなるという。

「それじゃ精霊がない場所では生きていけない……」

「そうねえ」

「街とかは平気なのか？」

「定期的に森に行けば平気よお」

万能な究極二足歩行生物にも意外な弱点があったな。

じつとしていれば、精霊だけで食事をしなくてもいいらしい。

なんだそれ？ 仙人かなにかかな？

「まさに霞を食って生きる不老不死だな」

「別に長生きしたっていいことはないんだけどねえ」

このなにもない森の中で1000年とか考えると——それはちょっと嫌だな。

でも、平安時代から戦国時代を経て、江戸太平から文明開化、2

つの大戦からの急成長してネット時代へ——それらを一気に見られるのは楽しそうじゃね？

波乱万丈の人生だと思うけどなあ。

獣人たちも落ちつきを取り戻し、船は進む。

「そう言えば、子どもって言えばさあ……」

セテラが思い出したようにつぶやいた。

「ん？　なんだ？」

「ああ、うーん——これは言っちゃってもいいのかなあ」

「なんだ？　俺たちのことか？」

「そうなんだけどお」

セテラが子どもがらみで話があるようだが、いったいなんの話なのだろうか？

出産の話をしていたから、出産関係だろうか？

「大丈夫だ、話してくれ」

「そう？　それじゃ話すけどお——ケンイチとアキラは、私たちエルフのように他の世界からやってきた種族ってことで間違いないのよねえ」

「ああ」

「それじゃ、只人じゃなくて——そうねえ稀人っていうのかしらあ」

「ん？　俺たちは只人じゃないのか？　言葉も通じるし、身体の外見も同じだと思ってたが……」

「そうねえ、私から見るとちょっと違うかなあ？」

俺とセテラの会話にアキラも入ってきた。

彼も稀人ってことになる。

「それで？　俺たちが、その稀人だとなにが問題だ？」

「ケンイチは貴族だからあ、世継ぎが問題になるんじゃないかなあ———と思ってえ」

「は？　なんで？」

「只人と獣人って子どもができないでしょ？　エルフと只人も無理い」

「え？　も、もしかして、それって……？」

「しばし、待て！　なんじゃと？」

黙って話を聞いていたアマランサスも、エルフの言っていることに気がついたのか、顔色が悪い。

つまり、稀人と只人との間にも子どもができないってことだ。

「そ、そうなのか？　いままで避妊をしてきたのに意味がなかったってことなのか……そうだ、アキラは？」

「あゝ、うゝん。そうはつきり言われると、ちょっと堪えるなあ。

実は、うちの家族とも生でやりまくってたんだが……」

彼は、もうこの世界で家庭を持つつもりだったので、避妊はしていなかったらしい。

「それにセンセに子どもができれば、皇帝の側近をやめられるかなとか考えてたんだが……」

「できなかった？」

「そう」

アキラがマジ顔をしているので、本当らしい。

俺は頭を抱えた。

「あうう……まさか、そんな罨があらうとは——リリースやプリムラになんて説明をしよう……」

「別に、貴族の跡取りなら養子でもいいでしょうお？」

「そりゃ、そうだが……」

「？」

なんだかよく解ってない、アネモネが不思議そうな顔をしている。

「ははあ、ちびっこには、なにを言ってるか解らないのかあ」
セテラがいやらしい笑いを浮かべている。

「ちびっこじゃないから！」

「アネモネ——俺とアキラは、君たちと種族が違うから、子どもが
できないんじゃないかという話なんだよ」

「……え?!」

彼女もやっと解ったらしい。

「驚くよなあ。俺も普通に姿形が一緒だから、同じ人間かと思って
いたら……」

「ケンイチの赤ちゃんほしかったのに……」

アネモネがしょんぼりと下を向く。

「いやいや、まだ決まったわけじゃないから、エルフの言っている
ことが間違っている可能性もあるし」

「そうだったら、いいんだけどねえ」

「……」

「これを聞いて、ケンイチから離れる女も出るんじゃない？」

「そんなことはありませぬわえ！」

「うおっ！」

いきなりアマランスが大声を上げたので驚いた。

「妾は、聖騎士様がなに者であろうとも、影を踏まぬように後ろを
ついていきますわえ」

「もちろん私もだよ！」

「にゃー」「みゃー」

「それに、妾の歳で子どもなど……」

「女性に歳を聞くのは失礼だと思って聞いてないが、30代半ばだろ？　まだまだ大丈夫じゃない？」

「ケンイチ、俺たちのいた世界じゃそうかもしれないが、この世界で30代半ばで初産ってのはかなり高齢出産だぞ？」

アキラは帝国でもあちこち回っていたそうだからな。

この世界の文化に詳しい。

「そうなのか――あ！　そういえば、リッチの所で拾った神器はどうした？」

「俺のアイテムBOXの中に入っている」

「アキラってアイテムBOXも持っているんだってな！　すごいよ！」

「ははは」

アキラはエルフに褒められて、得意満面な顔をしている。

突然の情報に困惑してしまったが、まだ解らないだろう。

アキラも、この世界に来て2年ぐらいらしいし。

たまたまって可能性だってある。

いきなり、まさかのとんでもない爆弾だったな。

昼頃になり、船の上で簡単に食事を済ませることにした。

皆にパンやインスタントのコーンポタージュスープなどを配る。

ベルたちには猫缶だ。

船で揺られながらお食事タイム。

「アイテムBOXはすごいな！　こんなに美味しい食べ物も沢山入っているのか？」

ツイッツラは、甘くて柔らかいパンに驚きの声を上げている。

「まあな。でも、エルフたちと違ってすべて共有財産って概念はな

いから注意してくれよ」

「ああ、それは知ってるよ。俺たちの間でもよく話題になる。でも、只人たちが作っている共和国ってところは、エルフの真似をしてるんだぜ？」

彼はポタージュにパンを浸して食べている。

植物系のスープなので、エルフにも大丈夫だろう。

「そうらしいな」

「それも上手くいってないらしいけどお」

「なんでもできるエルフと同じことをしようとしても、どだい無理ってことだな」

「まあねえ」

後ろのほうで獣人たちも食事をしているが――静かだ。なんとも声をかけづらいし、様子をみよう。

途中で燃料を補給しつつ、船は順調に進み夕方になる。

スライムは問題ないし、噂の海獣とやらは出てこない。

時速30kmほどで8時間近く走ったので、240kmほど移動したことになる。

――とはいっても、川は曲がりくねっており、実際に進む距離ははるかに長くなるだろう。

サクラからオダマキが1000kmぐらい離れていたことを考えると、そのぐらいの距離があることは十分に考えられる。

日が暮れる前に、接岸できそうな場所を探して上陸してしまう。

船は係留したままにしておく。

ここで、盗むやつもないだろう。

上陸すると草むらの中に、颯爽とベルとカゲが突っ込んでいく。

彼女たちに恐怖心とかはないのだろうか？

俺たちじゃ――なにがあるのか解らないのに、いきなり突っ込んでいくなんて無理。

たとえば、触れるとかぶれる葉っぱなんかもあるしな。
森猫や獣人たちは毛皮を着ているので、肌に毒が直接触れることはなく、かぶれに強い。

上陸したら草ボーボーなので、まず草を刈る。
アイテムBOXからエンジン式の草刈り機を取り出して、エンジンをかけた。

「わっ！ うるせー！ なんだあ！」

突然の轟音に、ツイツラが長い耳を塞いでいる。

彼らは耳がいいのでうるさく感じるかもしれないが、獣人たちが平気なんだから大丈夫だろう。

草を刈ろうとしたら、アネモネに服を引っ張られた。

「ケンイチ、私に任せて」

「解った」

アイテムBOXから、ゴーレムのコアを取り出すと、すぐにアネモネが魔法を使いはじめた。

木でできた十字架に青い光が染み込むと、周りの草が団子になっていく。

「へえ、そういう使いかたもあるのねえ」

アネモネの魔法にセテラが感心している。

巨大な草の団子が、ゴロゴロと転がり雪だるま式にどんどん大きくなった。

大きくなったら、俺のアイテムBOXに入れて、ゴミ箱に投入すればいい。

いや、こいつは肥料に使えるな。
保存しておこう。

草が刈り終わったので、コンテナハウスを出す。

「ケンイチ、俺たちはあそこにキャンプするからよ」
彼はエルフとキャツキャウフフするつもりだ。

「それじゃ、もう1個コンテナハウスを出すぞ。テントじゃ危ないだろう」

水辺の近くなので、スライムやら他の魔物に襲われる可能性がある。

スライムはスライム避けやエルフの小○でなんとかするだろうが、他の魔物には効かないだろう。

コンテナハウスの中にはベッドなどが置いてあるので、そのまま使える。

「アキラ、なにかいるものがあるか？」

「うーん、ビール！ と、ツマミ！」

「それは飯を食うときに渡すよ」

「やったぜ！」

「アキラ、ビールってなんだ？」

ツイツツラが聞き慣れない単語に首を傾げている。

「只人が飲んでいるエールみたいなもんだ」

「へえ」

エルフたちは、飲酒はどうしているのだろう——ツイツツラに聞いてみる。

「たまに只人の村に行ったりすると、物々交換で手に入れたり……」

「エルフたちはどんなものを持っていたりするんだ？」

「好評なのは薬草だね。村には医者がないようだったし」

「でも、噂によると――村を作ると医者や魔導師などが政府から送られてくるって話だったが……」

「確かにやってきたらしいんだけど、まったくやくたたずで、村人たちが追い出したらしいよ？」

「けど、中央から派遣された人間を追い返したりしたら、まずいことにならないか？」

「普通はそうみたいだけど」

中央からの援助は打ち切られたが、もともとろくな物資が送られてこなかったのも、村人たちは自給自足の生活に切り替えたようだ。それでエルフとも取引をしているらしい。

「まあ、それじゃ政府の意味ないしなあ。でも反逆罪とかにはならないのか？」

「一応、監視人みたいのが残っていたんだけどさ――ほら、やらエルフを崇拜してるじゃん」

「ああ、共和国はエルフの村を参考にして国を作ったって話だからな」

「エルフと仲のいい村には手出しができないようだよ」

「なるほどなあ……」

コンテナハウスの設置もできたので、アネモネと協力してスライム避けを設置する。

「それじゃ泊まる所の準備もできだし、食事の準備でもするか」
俺の提案にエルフが手を挙げた。

「はいはい！ 俺、細い虫みたいのがいい！」

「虫ってラーメンだな――解った。アキラは？」

「俺もラーメンでいいぞ」

「それじゃ、みんなラーメンで、獣人たちはカレーにしてやろう」
多人数なので、カップ麺を止めて袋麺を鍋で作る。

少々多めに作って伸びてもアイテムBOXに入れておけば、いつでも食える。

「アキラ、ちょっと鍋を頼む」

「おう」

「ほい、ビールとツマミ」

ビールはカートンで、ツマミは袋だ。

「おお！ こいつはかつちけねえ！」

彼がラーメンをかき混ぜ始めたのだが――アキラとツイツツラを見ていると、1つのビールを回し飲みしている。

「……？」

俺はその光景に固まった。

それだけではない、ツマミも食いかけと一緒に食べたりしている。なんだろう？ エルフの文化的なにかか？

アキラはエルフとも暮らしていたそうなので、たぶんなにかあるのだろう。

それはさておき、俺は獣人たちにやるカレーを用意しよう。

お詫びのために、シャングリ・ラを検索して、高いレトルトカレーを探す。

お？ 激肉カレーとかいうのがある。なんと1袋1000円。

デカイ牛肉がゴロゴロ入っているパッケージだが、これで肉が入ってなかったら詐欺だな。

2つをカートに入れた。

「ポチッとな」

落ちてきたカレーをアネモネにあたためてもらう。

紙の皿に盛れば完成だ。真っ黒なカレーだが、パッケージに偽り

なくデカイ肉がゴロゴロ。

これは当たりだ。

「ほら、2人ともカレーを食って機嫌を直してくれ」
2人の前にカレーを差し出す。

「うう……うなーん！」 「うみゃー！」

獣人の2人が、カレーを持っていて俺に抱きついてきた。
ミヤレーだけじゃなくて、ニヤメナもにゃーにゃー言っている。

「こら、待て待て、高いカレーが溢れる！」

「なあああん」「にゃーん」

2人が泣いている。

獣人は涙を流さないが、泣いている彼女たちと一緒に抱きしめた。

「お前たちが泣く必要はないだろう。俺が悪いんだからさ」

「なああん！」 「にゃーん！」

「ほら、カレーが冷めちゃう」

カレーを掬ってニヤメナに近づけると、泣きながらパクリと食いついた。

ミヤレーにも食わせてやる。

お腹がいっぱいになっても離れてくれないので、俺は飯を食いそこねたのだが、あとでパンでも食おう。

——とか考えていると、獣人たちの耳がピンと立つ。

「敵か？」

彼女たちが黙って首を振る。

「にゃー」「みゃー」

草をかき分けて出てきたのは森猫たちだった。

「アネモネく、森猫たちに食事をやってくれ」

「うん」

猫缶を出してやってアネモネに頼む。

彼女が猫缶を皿に開けると、森猫たちは美味しそうに食べ始めた。アネモネが森猫の黒い毛皮をなでているので、俺も獣人たちの毛皮をなでてやる。

「今日是一緒に寝るか」

「なん」「にゃ」

2人が短く返事をした。

彼女たちに嫌われていたわけではないらしい。

暗くなってきたので、俺はシャングリ・ラからもう1つコンテナハウスを購入した。

こいつは便利すぎる。

これの存在を知っていたのなら、ログハウスのキットを作らないで最初からこれ1本だったろうな。

まあ、その前に自分で家を作ってみたいという衝動があったわけだが、それだけではない。

スローライフといえば、ログハウスみたいな建物という固定観念がどうしてもある。

ああいう家に住んでみたい——というのは男のロマンというやつだ。

皆が寝るコンテナハウスより少し離れた場所に鋼鉄の部屋を設置。アネモネとアマランサスを説得した。

まあ、2人も解ってくれているらしいが——解ってくれないやつもいる。

「私もお、一緒に寝ていい？」

セテラが俺と獣人たちの所にやってくる。

「ちょっと空気を読んでくれ」

「ええ？ そんなのどうやって読むの？ 稀人ってそんな能力があるの？」

「いや、そうじゃなくて察してくれ」

「なにを？」

セテラは悪気があって言ってるわけじゃない。

本当に通じていないのだ。

「うーん、今日は獣人たちとじっくりと話したいことがあるので、エルフ様はご遠慮してくれないかな？」

「うん、解ったあ」

このように、しっかりと話せば理解してもらえる。

「よし、俺たちも寝ようぜ」

「うん」

アキラとツイツツラが、腰を抱いて一緒にコンテナハウスに入る。

その日の夜は、森の深淵に獣人たちとエルフの声が響いた。

244話 巨大な首長の魔物

俺たちはエルフの村を出発して川を下り始めた。

川から海に出れば、海岸伝いにカダン王国に戻れると思ったからだ。

ニヤメナの提案だが俺もそれが一番早いと思う。

丸1日が過ぎて240kmほど進むが、川が曲がりくねっているため、直線距離は稼げていないかもしれない。

接岸できる場所を見つけると、コンテナハウスを出して1泊。

アキラは、エルフの村でナンパしてきた男の娘とイチャイチャしている。

こんなときでも色恋沙汰を忘れないとはさすが歴戦の勇者。

まあ趣味に関しても、個人の自由なのでなんにも言うつもりはない。

一晚コンテナハウスで過ごした獣人たちは俺にベツタリで、身体をスリスリしている。

嫌われたわけじゃなかったのよかった。

そんな俺たちをみて、アネモネがなにか言うかな？――と思っていたのだが、彼女は本を持ってエルフに色々と質問をしている。

アネモネが持っている本は、リッチがいた遺跡から盗んで――ゲフンゲフン手に入れたものだ。

そこに書かれている古代文字をセテラが読めるらしい。

どうやら魔法やらの資料らしいので、失われた技術の復活が可能になるかもしれない。

うちの大魔導師様に期待だ。

皆で朝飯を食べる。

森猫たちには猫缶だが、食べている森猫たちの背中をなでて、すぐに出発する旨を告げた。

パトロールに出かけられると困るからな。

「すぐに出発するから、周囲の警備はしなくていいぞ」
「にゃー」「みゃー」

朝食を食い終わったので、アイテムBOXにコンテナハウスとスライム避けを収納した。

たとえスライムが進入したとしても鉄の箱を突破できるとは思えない。

他の魔物に関しても森猫や獣人たちが反応していなかったので、問題なかったのだろう。

やはり敵感知センサー担当がいると安心だ。

夜もぐっすりと眠れる。

俺だけじゃどこから魔物が襲ってくるかまったく解らんし、初めての森の中で逃げ回ったときのような状態になると思う。

獣人たちは、エルフたちの接近にもすぐに気がついたしな。

出発準備も整ったので、係留してある船に皆で乗り込んだ。

操るのは今日もアキラだが、船を出す前に燃料を入れる。

「その燃料ってなにからできてるの？ 有機物でしょ？」

セテラが俺の持っているガソリン缶を不思議そうに見ている。

これは、アキラのマヨから作った油ではなくて、シャングリ・ラから購入した2スト燃料だ。

成分は2ストオイルとガソリンの混合液。

「地中から湧く化石燃料だが、どうやってできるかは諸説があって

……」

「へえ」

エルフの世界では化石燃料はなかったらしい。
もしかして過去にはあったのかもしれないが、そういうものをま
ったく使わない社会になっていたのだろう。

「あれ？ 地面に埋まった生物の化石じゃなかったか？」

「それが一般説だけだな」

「俺たちがガキの頃は石油はあと30年で枯渇するとか言われてな
かったっけ？」

「俺もそう聞いたぞ。小学生の頃に読んだムック本に載ってた」

「それどころか増えてるよな？ 新しい油田も見つかってるし」

「そうなんだよなあ」

俺の服をアネモネが引っ張る。

「化石燃料って？」

「えーとな、油が地面から湧いてくるんだよ」

「地面から油が？」

「俺たちの世界だとそういう場所があったんだ。もしかしてこの世
界にもあるかもしれないがなあ」

「元世界でも地表に湧き出ている油田もあるって話だが、帝国でも
そういう噂は聞いたことがないな」

アキラのいた帝国でも、燃える井戸やらの話はなかったらしい。

俺はアマランサスにも聞いてみた。

「アマランサス、王国でそういう噂や報告は？」

「聞いたことがありますぬわえ」

「ケンイチ、石油じゃなくて先に石炭だろう」

「帝国では？」

「ない」

もちろん王国でもない。

ガソリンを入れ終わり、アマランサスと話していると獣人たちがスリスリしてくる。

「なゝ」「にゃゝ」

「どうした？」

2人の頭をなでてやる。

なにかあるわけではない、ただ甘えたいだけのようだ。

獣人たちをなでていると、アキラの口にした単語にアマランサスが反応した。

「聖騎士さま、石炭というのは？」

「黒くて燃える石だな」

「石が燃えるとな？」

「石が燃えるにゃ？」

ずっと、「にゃゝにゃゝ」言っていたミヤレーが久々に会話をした。

頭をなでながら街の噂に詳しいニャメナにも聞く。

「街でそういう噂を聞いたことは？」

「そんな話は――聞いたことがない――かな？」

いつもの勢いはないが、獣人たちは平常運転になりそうな感じだ。

「実物を見せてやればいいんだが……そうだ」

俺はシャングリ・ラで石炭を検索した。

「ケンイチ、出発するぞ」

「おう、やってくれ。話はたゆたいながらもできるからな」

「オッケー」

「オッケーにゃ！」

ミャレーにも元気が戻ってきたようだ。
ウインドウに表示される商品を眺める――。

豆炭とか、オガ炭とか、練炭とかが売っているから、石炭も売っているかと思ったのだが――売ってない。

以前ドワーフたちにコークスを渡したのだが、コークスは売っているのに石炭は売ってない。

燃料として使うならコークスのほうがいいのかもしれないな。

石炭を探していると、教育用の鉱物のサンプルとして、セット販売されているものを見つけた。

砂鉄、コークス、石炭、鉄鉱石の鉱物サンプルだ。

値段は5000円と少々高いが、この世界で石炭を探したりするための資料として使えるので購入してみた。

購入ボタンを押すと白い蓋の小瓶に入った資料が落ちてくる。

その中の黒い塊が石炭だ。

俺は蓋を開けて、中身を出してアマランサスに見せてやる。

「アマランサス、コレが石炭。つまり石の炭だ」

「こ、これがかえ?!」

アマランサスが石炭を握ったり、天にかざしたりしている。

普通の木炭は軽いが、石炭は重い。

「ほ、本当に石のようだが……」

「炭が地面に埋まってぎゅっと潰れたものだと思えばいいかな?」

昔の植物の化石だから少々違うのだが。

「ケンイチ、見せて見せて!」

アネモネにも見せてやる。

「ほい」

「黒くて硬い——本当に燃えるの？」

「それじゃ燃やしてみるか」

こういうのは、実際に実験して見せるのがいい。

石炭を皿に乗せて、トンカチで少々叩くと小粒を出す。

カセットバーナーで炙ると、石炭が燃え始めた。

「本当に石が燃えてるにゃ?!」 「旦那! 俺にも見せてくれよ」
獣人たちも調子が戻ってきたようだ。

「懐かしいな。石炭なんて久々に見たぜ」

俺のやっていることを眺めていたアキラがつぶやいた。

「まあ、俺もそうだ。小学校以来かな？」

「教室のストーブがよく石炭ストーブでな。離れた石炭小屋まで取りに行くのが嫌でな」

アキラは親の都合で、日本全国を巡っていたようだが、雪国にいたこともあるようだ。

当然、俺も小学校は北海道の田舎だった。

「俺もそうだったな。日本全国共通なのだろうか？」

「さあな。あの頃は石炭が安かったんだろう」

「多分な」

「ケインチの魔法で石炭を作れるなら、それを使えばいいんじゃないかね？」

「いや、こいつは対価がめちゃ高いんだよ。こんなの使ったら破産しちゃうわ」

「そうなのか。でも、ドワーフたちにコークスを渡してたよな」

「コークスは確かに作れるが……」

いつもいっているが、俺の能力をベースにしては領の経済は組み立てられない。

俺になにかあったら即詰みするからだ。

俺は普通の人間でいつ死ぬか解らないゆえ、この世界の技術で生産できるものを利用して領を運営していかなければならない。

アキラが油を出せるからといって、彼を生体油田としてモノカルチャー経済を構築したらどうなるか。

彼がなにかあれば、瞬時に経済は破綻するだろう。

「このようなものがあれば、火石や薪や木炭を使わずに済むわけじゃない」

「あるところには大量にあるから、大量に掘れば安く供給できるってわけだ」

「さすが旦那だぜ、こんなものを持ってるなんて」「そうだにゃ」
獣人の2人が、また俺にスリスリをしている。

なんだかボディタッチが増えたが、これで心を落ち着かせているのかもしれない。

そのままにしてやろう。

「それって地中に埋まっている炭よねえ？」

「エルフの故郷にはなかったか？」

「多分、あったようなあ……」

セテラの話では、エルフの科学文明は物質を自在に合成することができるレベルにまで達していたようだ。

そりゃ恒星間航行技術があるのなら、そのぐらいは可能なのだろう。

そんな連中が石炭やら石油を欲しがるわけがない。

「エルフって光の速さより速く飛べたりは？」

「超光速航法ね——もちろん、それがないと恒星間航行なんてできないしい」

やっぱりなあ。

アネモネも俺たちがなにを話しているかは、よく解っていない。

「それじゃ、火石みたいなものが、地面に埋まっているの？」

アネモネが石炭を返してくれた。

「まあそうだな。地表近くに露出していれば掘り出して使うことができるんだがなあ」

どこかの誰かが偶然見つけてくれるのを期待するしかないか。

船はそのまま進み、俺の身体には獣人たちがスリスリをずっと繰り返している。

アネモネとセテラは古代文字のお勉強。

ずっとアキラに操船させておくのも悪いので、俺が代わることにした。

激しい操船じゃなければ、別に俺でも問題ない。

流れも緩やかだし、まっすぐすすんで、カーブがきたら舵を切る。

それだけだ。

俺と代わったアキラは、舳先にいるツイツラの所に行ってイチヤイチヤしている。

そのうち、彼のアイテムBOXから出したチョコをエルフと一緒に食べ始めた。

アキラが一口食べると、ツイツラの口の中にそれを放り込む。

それも、エルフ的ななにかの慣習なのだろうか？

イチヤイチヤしている2人を見たセテラが、なにを思ったか、アキラからチョコを貰って俺の所にやってきた。

半分チョコを食べると、それを俺の口元に持ってくる。

「なんだ？」

「もう、私に対する愛はないのお？」

俺の態度を見てセテラがふくれっ面を見せたのだが、その光景を見てアキラが笑い始めた。

「ははは、ケンイチ！ 自分の食っているものを人に渡すってのは、エルフの最上級の愛情表現なんだよ」

彼の言葉を聞いて俺は合点がいった。

「ああ、そういう……」

「ん」

しょうがない。俺はセテラが差し出すチョコを口に入れた。

「むう！」

それを見て、顔を赤くして険しい表情になったのはアマランサスだ。

どこからか出したチョコを口に含むと、俺に抱きついてきた。

多分、自分の小さなアイテムBOXの中におやつとして忍ばせてあったものに違いない。

「こら、アマランサス危ない」

「ん」

俺は、船外機から手を離してアマランサスを抱きとめたのだが、彼女がなにをやるうとしているのか、やっと解った。

「口移しは止めなさい」

俺の言葉にアマランサスの動きがピタリと止まる。

彼女には奴隷紋があるので俺の命令には逆らえず、止まったまま泣きそうな顔をしている。

普段の調子だと止まるときと止まらないときがあるのだが、今は

ちょっと強めの調子だったのかもしれない。

俺は本気で止めてほしいと思ったのが、そのまま口に出てしまったのだろう。

彼女の顔を見て、ちょっと罪悪感が湧く。

「解ったから」

彼女と唇を重ねて、溶けかかったチョコを口で受け取る。

「ケンイチ、私のは？」

見ればアネモネもチョコを持っている。

多分、アキラからもらったのだろう。

「アネモネも口移ししたいのかい？」

「ううん、はい」

さすがに口移しは恥ずかしいと思ったのか——彼女が指でつまんだチョコを俺に差し出したので、口で受け取る。

口の中にチョコが3つ。

「口の中がチョコだらけだよ。ミャレーとニャメナも真似するのかわ？」

「にゃ？ ウチらはいいにゃ」「そうだよ旦那」

まあ、獣人たちはキスをしないからな。

俺のアイテムBOXから出したチョコを獣人たちにやった。

「ほい」

俺は普通に受け取るかと思ったのだが、ニャメナが口でチョコを啜えた。

「うちもにゃ！」

「ほら」

俺の手からパクリとミヤレーがチョコを食べる。

「な〜ん」「うにゃ〜」

彼女たちがまた身体をスリスリしてくる。

「なんだ、お前たち。随分と甘えたさんになったな」

その様子を、船の底で丸く香箱座りしている森猫たちが、呆れた顔で見ている。

チョコを食べている間、一休み。

なんでこうなったんだっけ？

エルフの慣習のせいか。

さすが種族が違うと色々あるな。

そのあと、再び船は川を下り始めた。

のんびりとした風景が延々と続く。

噂の魔物も姿を現さない。

船の舳先では、アキラとツイツツラがイチヤイチヤしている。

「なんだか平和だなあ」

思わず口に出してしまったのだが、俺はハッとした。

これってフラグじゃね？

その考えが頭によぎった途端、水面が盛り上がった。

バシヤバシヤという激しい水しぶきを上げて水面から伸びる長い

首。

全身緑色でワニのような鱗が見える。

竜のようだが――首の長いトカゲ？

高さ5mほどあるので、尻尾まで入れたら全長は20mぐらいか？

「ギャオオオン！」

大きく口を開けるその叫び声からして、あまり歓迎されている風

ではない。

縄張りに侵入した者に対する警告音と取るのが、妥当だろう。

「アキラ、操縦を代わってくれ」

「ほいきた！ ツイツツラ、弓だ！」

「うん！」

アキラがアイテムBOXから弓を出すとエルフに渡し、バタバタと船の操縦を俺と代わる。

戦闘時に船を自由自在に操るとなると、俺の腕では無理だし、彼のほうが適任だろう。

水面じゃ必殺マヨも使えないしな。

「旦那！ 俺にも弩弓をくれ」

「あれに効くかあ？ それよりアネモネ！ 魔法を！」

「私はあ？ なにをすればいいの？」

「エルフ様は奥の手だから座っててくれ」

「解ったあ」

「聖騎士様！ 妾を前に！」

アマランサスが自分の剣をアイテムBOXから取り出した。

「そんなことできるか！」

「やあ！」

ツイツツラが、コンパウンドボウから矢を放ったのだが、目の近くに命中して弾かれてしまった。

硬い鱗が矢などは通さないらしく、これじゃ刃物も通るか危うい。コ○ツ戦闘獣に装備しているアダマントタイトの剣なら切れるかもしれないが、ここじゃ重機なんて出せない。

「むー！ 光弾よ！ マジックミサイル 我が敵を討て！」

エクスプロージョン 爆裂魔法を使うには距離が近すぎて俺たちも巻き込まれる。

コカトリスのときのように隠れる遮蔽物があればいいのだが、ここは水面だ。

「アキラ、やつとの距離を取ってくれ」

「はいよ!」

アネモネの周りに顕現した白い光の矢が4本、海獣へ向かう。

「ガオン!」

首や頭部に魔法が命中して仰け反ったのだが、効いているようには見えない。

魔物が魔法の攻撃に怯んだ隙に、船は反転して魔物から離れ始めた。

「アネモネ、もう一発!」

「いっくよ!」
エクスプロージョン
「むゝ! 爆裂魔法!」

青い光が赤い爆炎に変わり、魔物を包み込む。

水面を走る衝撃波が俺たちを襲い、船が激しく揺れる。

「「「おおおっ!」」」

「うにゃああ!」 「ゆ、揺れる!」

森猫たちは船底に伏せるようにじっとしているが、さすがの森猫も水の上では戦えない。

「やったか?」

「アキラ、それはフラグだろ?」

「あ……フヒヒ、サーセン!」

その立ったフラグの回収作業が、早速始まる。

爆炎が晴れると長い首が再び俺たちを追尾し始めたのだが、相手も無傷ではない。

鱗もあちこち剥がれて各所から赤い血を流している。

「くそ！」

「もう一発いく！」

「ちょっと待てアネモネ！」

俺は、アイテムBOXからタイマー爆弾を取り出して、10秒にセツトした。

爆弾にはトリモチがついており、相手にくつつくので、スイッチを入れるとすぐにニヤメナに渡した。

「ニヤメナ！　すぐに投げろ！」

「うおお！　おりゃああ！」

投擲を彼女に頼むのは、コントロールがいいからだ。

敵との距離、およそ30mを直線で進み、爆弾は長い首の中間辺りにくつついた。

頭は揺れているし的小さい。

確実に当てやすい首を狙ったのだろう。

さすがニヤメナ、いい判断だ。

そう思った瞬間、鋭い爆発音が響く。

緑色の鱗がバラバラと水面に飛び散り、えぐれた首の部分から赤い血がバシャバシャと流れる。

「アネモネ、今だ！　えぐれた場所に魔法を撃て！」

「むー！　光弾よ！　我が敵を討て！」
マジックミサイル

アネモネの放った魔法矢が魔物のえぐれた首部分に命中すると、閃光をともない激しく爆発。

その衝撃で首の上半分が吹き飛んだ。

魔物の鱗には耐魔法効果があるようだが、内臓にはないらしい。水面に長い首が落下して、ドロドロとした赤いものが水面を漂う。さすがに首が千切れたし、この状態なら間違いなく死んでいるだ

ろう。

「今度こそやったか？」

「うにゃー！」「やったぜ！」

「この状態で生きているとは思えんが……」

アキラの操船でゆっくりと近づくと、アイテムBOXに収納を試みしてみる。

「収納！」

俺が収納したのは千切れた首から上だが、目の前から消えた。

収納できたってことは死んでるってことだ。

残念ながら、胴体のほうは巨大すぎてアイテムBOXに収納できない。

解体すれば可能だろうが、ここでそんなことは不可能。

もったいないが諦めるしかない。

「おお！？ 首長の魔物をやっちまうなんて、すげー！ マジでお

前ら只人なのに、マジですげーな！」

「ツイツツラ、俺の言ったとおりだろ？」

「今度は、アキラのすげーところを見せてくれよ！」

どうやら、アキラは俺たちの魔物退治の話もエルフにしていたようである。

「ははは、俺の力は水の上じゃ役に立たねえからな」

「水に油を撒いて火を点けるってのは？」

俺の言葉にアキラが反対意見を示す。

「相手が水生生物だと、水に潜られて終了だからなあ……それになり大量に撒かないと」

そりゃそうだ。

「ケンイチ、エルフはなんて言ってるの？」

「こんなデカイ魔物を退治できて凄いつて褒めてる」

「えへん！」

その言葉を聞いたアネモネが胸を張る。

「相手があんなのじゃ、ウチらはまったく手も足も出ないにや」「クロ助の言うとおりだぜ」

「俺も、爆発する魔道具を投げてもらうために獣人たちがいないと困るんだけど」

「それなら任せてくれよ、旦那！」

俺たちの戦闘能力に、ツイツツラも感心しているようだ。

「伊達にコカトリスとかデカイ魔物を仕留めてないね」

「まあな」

「聖騎士様、このあとはいかがなさいますえ？」

アマランサスの言葉に俺は悩んだ。

「うーん……」

「まだいるかもしれないよお」

セテラの言うとおりだ。

魔法も効きづらいようだしな……。

「よし、次に魔物に遭遇したら、引き返して陸路を選択しよう」

「俺もケンイチの話に乗った」

アキラが賛成してくれたあと、他の皆も賛成してくれた。

「決まりだな——悪いアキラ。そのまま操舵をやってくれ。いつ魔物に遭遇するか解らん」

「オッケー」

「オツケーにゃ！」

アキラが船外機の側で操舵を担当するので、ツイッツラが彼の足下にやってきた。

彼が持っていたコンパウンドボウをアキラのアイテムBOXに収納してもらう。

「アイテムBOX——便利だなあ……」

アキラのアイテムBOXを見て、エルフがつぶやく。

「エルフに持っているやつはいなかったのか？」

「ここら辺のエルフじゃ聞いたことがないよ」

そうなのか。

エルフってのは魔法に堪能ってイメージなのだが、魔法とアイテムBOXは別物らしい。

そういえば、魔法を使えないアマランサスやマロウもアイテムBOXを持ってるしな。

船の上で話していると、魔物の死体があつという間に透明なもので覆われた。

「スライムだ！」

ツイッツラが叫んだ。

「うにゃ?!」「こんなにいるのかよ！」

「へえ、ちびっこが作ったスライム避けは、本当に優秀なのねえ」「えへん！」

エルフも認めるアネモネの魔法。

彼女は凄い大魔導師として、歴史に名前を残すかもしれない。

そのまま船は進み、船の上で昼食を食べたあと川下りを続けたのだが――。

前方に首長の魔物が見える。

「あちゃーやっぱり、まだいるのか……」

「ケンイチ、こりゃ無理っぽいぜ」

「ああ、俺もそう思う。あんなの相手に連戦は無理だ」
皆に確認して、引き返すことにした。

さすがに、このさき化け物が何頭いるか解らんのに、戦闘をしつつ川を下るのは無理がある。

ルートがここしかない！　　つてのなら、死中に活！　　で一点突破もありだとは思うのだが。

ボートが反転すると、突然目の前の水面が盛り上がった。

「おおっと！」

アキラが舵を取って水の小山を避けると、大量の水しぶきを上げて鱗に覆われた長い首が現れた。

「ここにもいるにゃ！」　「魔物だらけだぜ！」

「聖騎士様！？」

「このまま突っ切る！」

アキラが叫んだ。

「了解！」

アキラがスピードを上げると、水面から次々と長い首が現れて落ちた水滴が水面を叩く。

「ちょっとまって！　なん匹いるんだ？！」

「魔法使う？！」

「ふふふ——それじゃ、ちょっと調子に乗っているちびっこに、本物の魔法を見せてあげるう」

そう言ったエルフの周りに、青い光がまわりつき始めた。

「爆ぜよ蒼き衣を纏いし小人達——我が敵を貫く刃となれ。爆裂小
球！」
スライ まと ブラズマクラ

集まってきた首長の上に閃光が走ったかと思うと、それは光のシ
ヤワーになって敵に注ぎ始めた。

数千の小さな光の弾が、魔物や水面に衝突すると、けたたましい
爆音が鳴り響く。

もうもうと水蒸気が舞い上がり、川の上に白いカーテンがかかっ
たようになった。

「エルフの魔法、すごい！」

アネモネも目を輝かせて、魔法の威力を小さな瞳に刻み込んでい
る。

「魔法の散弾か！」

エルフのすごい魔法に感心したのも束の間、セテラが俺の所に倒
れ込んできた。

「後は頼むう」

「マジで?!」

どうやら、いまの一発で魔力を使い果たしたらしい。

そのぐらい大きな魔法らしく、広範囲に使える殲滅魔法のようだ。
彼女の大魔法で後ろの魔物たちは行動不能になっているようだが、
前方にもまだ首長がいる。

「アキラ、最高速でぐり抜けてくれ」

「オッケー！」

彼がエンジンを吹かすと、ボートは水面を飛ぶように走り出した。

「うにゃにゃ!」「うおお!」
皆がボートにしがみつく。

「すげー! はえー!」

ツイツラはアキラにしがみついている。

俺はアイテムBOXからあるものを取り出した。

「爆雷投下あ!」

クラークン戦に使った爆雷である。

なにかあるか解らないので、武器は常に製作してアイテムBOXに保存してある。

数秒後、爆雷が爆発。

川底の泥まで巻き上げて、コーヒー牛乳色の巨大な水柱が立った。

「うにゃ!」「すげー!」

水中衝撃波の威力は半端ではない。

鋼鉄やらチタンの潜水艦がひしゃげるぐらいの威力なのだ。

近くにいた首長の魔物はすべて行動不能になっただろう。

爆発で湧き上がった波に乗り、俺たちはその場から遁走したのだが――これってただの自然破壊では?

俺の頭にそんな言葉が浮かんだ。

245話 ダークエルフは？

俺たちはエルフの村を出ると船に乗って川を下る。

海に出てから海岸沿いに王国に入るルートを目指すことにしたのだが、ここには首長竜のような魔物がいるという。

まずは1頭と接敵して、なんとか倒したのだが、次に待ち構えていたのは魔物の群れ。

こりゃ川を下るのは無理——ということで、命からがら遁走して、元の地点に戻ることにした。

俺たちは船の上で、ホッと一息つく。

エルフのセテラは大魔法を使ったせいでぐったりしている。しばらくは動けないだろう。

「ふー、やばかったな」

アキラが額の汗を拭っている。

「ここらへんにもいるかもしれん。注意しないと」

「にゃー」

「しかたないよ、お母さん」

ベルとカゲが船底で尻尾をふりふりしている。

戦闘に役に立たなかったことを気にしているようだ。

いくら森猫でも船の上じゃ仕方ない。

「まさか、あんなに数がいるとはな」

「ちよっと旦那、いいかい？」

俺が悩んでいると、ニャメナが手を挙げた。

なにか意見があるようだ。

「なんだい？ ニヤメナ」

「旦那は、船を作ってサクラから川を下って海に出るって言うってたけど、あの川にもさっきのやつらがいるんじゃない……？」

「あ……そ、その可能性はある」

俺は彼女の言葉に腕を組んだ。

この世界で、大河があるのにまったく利用されていないのはなにか理由があるはずだ。

スライムのせいかと思っていたのだが、もしかして考えが甘かったのかもしれない。

あんなのを一々相手にするんじゃ、陸路を進んだほうが楽だ。

「この川と平行して、森の中を進むって手もあるがなあ」

「魔物は平気か？」

「そうなんだよなあ。転移門の出口から、エルフの村に行く途中でもコカトリスに出会ったし」

「ああ、ツイツツラから聞いたぞ。エルフが肉とか羽根とかもらったと」

彼からベッドの上で聞いたのだろう。

「そうなんだよ」

「それじゃ、前のラ○クルがボロボロになったのも……」

「アネモネの魔法でぶっ飛ばした」

「えへん！」

アネモネが胸を張る。

「そりゃ見たかったなあ」

俺とアキラの会話を聞いて、獣人たちが小さくなっている。

コカトリス戦では、いい所を見せられなくて逃げ回っていたからだろう。

ツイツツラから陸路のルートを聞く。

「いつも行ってる村から山脈沿いに進むと、峠を越えることができる道があるらしいよ」

「多分、王都からセジーナにつながっている道じゃろう」

アマランサスの話では、コスモ山脈を越えるルートってのはそこしかないと言う。

帝国と王国をつないでいるベロニカ峡谷のような場所だと思われる。

なにせ王国と共和国の国交がないので、使えるかどうかも解らないが、昔は使えたらしい。

共和国がまだ王国だったころは、それなりにカダン王国とも交流があったようだ。

現在はまったく使われていないので、どうなっているのかも解らない。

最悪、自分たちで道を作って進む可能性まであるな。

「はあ……まるでガンダーラに行く気分だな」

「おお、懐かしいな。夏目○子さん美人だったなあ」

「はは、そうだな。でも二部は微妙」

「シルクロードまで行ってロケしたとか言ってたのに……」

オッサンにしか解らん会話だ。

気分は重いが行くしかない。

徒歩や馬では、どのぐらいかかるか見当もつかないが、俺たちには文明の利器がある。

歩く油田であるアキラがいれば燃料に困ることはないしな。

「さて、アイテムBOXに入っている燃料だけで数千kmは走れる

はずだが……」

「俺のアイテムBOXにも、結構残っているぞ」

「アキラがいれば、バイオディーゼル燃料はいくらでも作れるしな」

「ははは、まかせなさい！」

アキラと話していると服を引っ張られた。

「ケンイチ」

「どうした、アネモネ」

「セテラ大丈夫？」

彼女は魔力切れを起こしたらしいエルフが心配のようだ。

「たぶん魔力切れだろうから大丈夫だろう」

——とはいえ、俺たちのために大魔法を使って、ヘロヘロになってしまったんだ。

治療をしてやらんな。

エルフのお姉さんの所に行く。

なにせ5000歳だ。

「大丈夫か？」

セテラは船底に長い足を折り曲げてへたり込んでいる。

「これだけ深い森の中なら精霊が沢山いるから、すぐに回復するわあ」

彼女はそう言うのだが、顔が白くていかにも調子が悪そうだ。

俺の力を使って治療をするため、彼女の額に手を当てて強めに回復^ルを使う。

「はわっ！ はわああ！」

彼女の身体がバタバタと飛び跳ねる。

それが収まると、ぐったりしたままだが一気に顔色はよくなった。

「ちょっと、よくなったか？」

「よ、よくなりすぎよお……」

「そりゃ、よかった」

エルフの様子を見ると、また服を掴まれた。

「ケンイチ、私もそれ……」

「ええ？　——もう、なでなで」

まあ、彼女も魔法を使って消耗しているし……アネモネの頭もなでてやる。

「ふわああ……」

彼女はすごく幸せそうな顔だが、小さいときからこういうことを覚えると、よろしくないのではなからうか？

うちの大魔導師様の頭をなでていると後ろから抱きつかれる。

「聖騎士様あ、妾もじゃあ」

「しょうがないなあ——なでなで……」

「はううん……」

アマランサスの幸せそうな顔を見ていたツイツツラが、アキラに抱きついた。

「アキラあ……僕もあれえ」

「ははは、よしよし」

「あっああ〜」

彼に頭をなでられたツイツツラが、アキラに抱きついたまま身体をくねらす。

アキラも祝福持ちなので、俺と同じ力が使えるわけだ。

「アキラ、その力を使ってエルフをナンパしているのか？」

「ははは、バレちゃしょうがねえ」

いいのかな。

アストランティアに戻ったらとんでもないことになるそうだけど。皆をなでなでして、獣人たちだけ仲間はずれてわけにはいかないだろう。

ミャレーを膝の上に乗せて、腹をなでてやる。

「にゃーゴロゴロ……」

お腹の細かい毛をなでてやると、彼女が目を細めている。

腹には毛に隠れて副乳があるのだが、これは機能しているのだろうか？

「ミャレー、下の乳からも母乳が出たりするのか？」

「にゃ？ 子どもが生まれると大きくなったりする女もいるにゃ」
どうやら機能することもあるらしい。

へえ——と感心してしまうが、興味心に駆られてあまり突っ込んだことを聞くと、またドン引きされてしまう。

気をつけねば。

「なくん」

今度はニャメナを膝の上に乗せて、尻から尻尾にかけてをなでなで。

彼女は尻尾をピンと立てて、気持ちよさそうだ。

「にゃー」

この声はベルだ。

俺が女たちと遊んでいるので呆れているらしい。

戦闘のあとで、緊張感に欠けるのではなからうかと——そう言いたいようだ。

船尾では、アキラとエルフがイチャイチャしている。
そのツイツラとへたり込んでいるセテラを見て、あることに気がついた。

「アキラ、この世界ってダークエルフはいないのか？」

「さあ？ 聞いたことないな？ エルフたちに聞いても、ダークエルフ自体を知らない様子だったぞ？」

彼もダークエルフのことを聞いてみたようだ。

やっぱり気になるよな。

だってダークエルフといえば、ムチプリンってのがデフォルトだし。

「アキラ、ダークエルフってなに？」

ツイツラも、自分たち以外のエルフの種族についてなにも知らないらしい。

「5000歳のお姉さんはどうなんだ？」

「……うるさいわね……私に対する愛はないのか」

5000歳と言われるのが、かなり嫌らしい。

「美しいエルフのお姉様は、知らないのか？」

「……なんで、ダークエルフのことなんて知ってるのお？」

「なぜか知っているのだ」

「ケンイチの世界にもエルフがいたの？」

「いなかった——が、今日の前にいるエルフのような生物がいるんじゃないかと言われていた」

「ダークエルフも一緒にい？」

「そのとおり。なあ、アキラ」

俺はイチャついているアキラに話を振ってみた。

「はは、そうだな。俺たちが思ってたようなエルフだよなあ」
「ああん」

彼がツイツツラの身体をなで回している。

「おいしい、アキラ。昼間から頼むぜ。アネモネもいるし」
「フヒヒ、サーセン」

そのアネモネは、じゅっと2人の様子を凝視している。
すごい興味がありそうで困ったものだ。

「ほんで？ ダークエルフってのはいるみたいだが……？」

「この大陸には降りてないと思うけどお」

「ちえ、そうなのか。新たな目標ができたのと思ったのになあ」
「なんで、あんな奴らに会いたいのよお」

「ダークエルフっていえば、エルフとは肌の色が違っててボン・キ
ユツ・ボン——だろう？」

俺は想像する体型をジェスチャーで表現してみた。

「「「じゅっ」「」」「にゃー」

女たちの視線が俺に集まる。

「いやいや、手を出すとかそういうのじゃなくて、純粋な興味対象
としてだな——」

「私がいるじゃない！」

そう言うアネモネを抱き寄せて頭をナデナデする。

「そうそうアネモネがいるけど、単に珍しい種族に会ってみたいっ
ただけだから」

「嘘！」

「嘘じゃないよ。そう、コレは男のロマン」

「あゝあのお菓子に入ってるやつね」

アキラのいつものボケが始まりそうなので止める。

「それは、もうええっちゅねん！」

俺はアネモネを抱いたまま、セテラに手を差し出した。

「なにい？」

「長寿と繁栄を」

「……なんで、そんな古式の挨拶を知ってるのお？」

「なぜか知ってるんだ」

やっている俺もまさか通じるとは思わなかった。

「ケンイチの世界にもエルフがいたんじゃないの？」

「どうかなく？」

俺たちの思い描いていたように見てくれは最高だが、中身がちよつとなあ。

なんか、人間なんてどうでもいいようにしか見てない気がするし。

「エルフとダークエルフがいて、他には種族がいなかったのか？」

「いたけど……ここにはやって来ていないと思うわあ」

「なにか理由があるのか？」

「知識と技術を捨てきれなかったから……」

「もしかして、ここにやってくる条件ってのが、それだったのか？」

「この管理者にしてみれば、星を改造されたり好き放題されたら困るでしょお？」

「まあ、そうだな」

セテラの話からすると、惑星改造やら自由にできるぐらいのテクノロジーがあったらしい。

そんな奴らが戦争を起こしたら、星の1つや2つは吹っ飛んでしまっただろう。

ここに来たやつらは、そういうものを捨てて、ただひたすらに平和に生きる道を選んだ者たちのようだ。

エルフたちの教義や道徳が不明なのだが、俺たちとそんなにかけ離れているような印象は受けない。

船の上で会話をしつつ、緊張感もなくまったりとしてしまったが、魔物の追撃はないようだ。

多分、あそこから先が奴らのテリトリーなのだろう。

それから2日半ほどかけて、元の場所に戻ってきた。

やはり川がゆっくりでも流れているせいで、下りよりは多少時間がかかるらしい。

元の場所に戻ってくると、岸边にエルフたちがいた。

「おおーい！ ウェエラ！」

ツイツツラが、仲間に手を振っている。

「どうしたんだ？ 戻ってきたのか？」

「下流に首長の魔物が沢山いてさ！ 陸路で行くことにしたんだ」

「ははは、だから無茶だと言ったんだ！」

言ったか？ 魔物はいるとは聞いたがなあ……。

彼らは長年この地に住んでいる間に、周囲の探索をしていたのだろう。

経験則から首長の存在を把握していたのだ。

まあ、俺も信じていないわけではなかったが、あんなに沢山いるとは……。

サクラから川を使う計画も心配になってきた。

やっぱり船を建造する前に、川を通して調べたほうが良かったか。

笑うエルフたちに手を振ると対岸に船をつけた。

そこから森の中に細い獣道のような筋が続いている。

「ふう……ここが陸路の始まりか」

「長い旅になりそうだな」

アキラの言葉に獣人たちが反応した。

「心配いらないよ、アキラの旦那！」「そうにや、ケンイチさえいれば、どんな長い旅でも困ることなんてないにや」

「私のケンイチだし」「にゃー」

ベルはアネモネの言葉に異議があるようだが、ここは黙っておく。

「まあ、そのとおりだが、大きな怪我とか病気にかかる可能性もあるし、油断は禁物だ」

「さすが聖騎士様。そのとおりでございますわえ」

「僕はアキラと一緒にいいから」

ツイツラがアキラに抱きついた。

「それじゃ、私はケンイチにい」

エルフに抱きつかれると、パワーがあるので振りほどけない。

「セテラ、召喚獣の用意をするから、ちょっと離れてくれ」

「もう、このままでもできるじゃん」

エルフがベタベタして離れない。

「ケンイチ、エルフに食い物を分けたりするからだよ」
アキラの言葉にハツとなる。

「ええ？ マジか」

あれが愛情表現なのは解ったが、それだけでこうなるのか？

しようがない。抱きつかれたままラ○クルを召喚した。

アキラも自分の車を出して、ツイツラと乗り込む。

彼らは2人でイチャイチャドライブをするようだ。

まあ、なんの楽しみもない森の中のドライブだから、彼らの行動は正しいのかもしれない。

アキラの車には、森猫たちが一緒に乗っているのだが、少々気の毒だな。

こちらに乗せてあげたいのだが、スペースがない。

ベルに聞くと、向こうでいいらしいので少々我慢してもらう。

車に乗り込んだのだが、あることに気がついて、アキラの所に行く。

「スマン、アキラ。無線機を取り付けるから少しまってくれ」

「オッケー」

「オッケーにゃ！」

リアゲートを開けて、ミャレーが張り切っている。

この車も車内からリアゲートを開けられる改造がされているようだ。

獣人たちも、やっと元に戻ったらしく一安心。

それより無線機だ。

まさかアキラが来ると思っていなかったので、新しい車に無線機を取りつけていなかった。

シャングリ・ラの履歴から、前と同じものを購入して取り付け。取り付けといっても、アンテナを外に出すのと、シガーソケットから電源を取るだけだ。

固定は両面テープでおこなっているし、テキトー。

要は動けばいい。

時間があれば天井に取り付けるのもありだが……まあ、これで困

らないだろう。

取り付けができたので、アキラにも言って動作チェックをする。
ドアを開けたまま無線機の電源を入れて、マイクを取ると横のス
イッチを押した。

「あゝあゝ、只今マイクのテスト中」

『聞こえるぞ』

スピーカーからアキラの声が聞こえる。

「こっちも聞こえる。これで大丈夫だな」

『アキラ！ ＊I（＊＆＆@＃＊＊？』

聞こえてくるのはツイツツラの声だが、聞き取れない。

『こいつは離れた場所と話すことができる魔道具だ』

『＊\$＊^%＊＊！』

どうやらスピーカーから聞こえる音声を翻訳できないようだ。

一旦機械を通した音声は翻訳できないらしい。

これって相手の思考を読んでいるとか、そういう魔道具なのだろ
うか？

「アキラ、大発見だ」

『なんだ？ どうした？』

「機械越しだと自動翻訳が効かない」

『ええ？ そうなんだ。初めて知ったわ。それじゃ、向かい合っ
て話さないと駄目ってことだな』

「そうみたいだな」

出発準備ができたので、森中の細い道を進み始めた。

完全に道からタイヤがはみ出ているが、元々獣道のような細い道

なので仕方ない。

腐葉土に轍を作りながら2台の車が黒い森の中を進む。

多少の高低差はあるが、デフロックすれば問題なく越えられる。

どうしても越えられない段差なら、車を降りてから一旦アイテムBOXに収納してから越えればいい。

大容量のアイテムBOXがあるからできる芸当だ。

順調に進んでいたのだが、後部座席からクレームが入る。

「ちよっとお、なんでちびっこが当然のように、ケンイチの横に座ってるのお？」

「ここが私の席だし」

アネモネも5000歳のエルフに譲らない。

「その座席が嫌なら、後ろの召喚獣に移ってもいいんだぞ？」

俺のその言葉を聞いて、ぶつぶついいながらセテラが引込んだ。

「私に対する愛はないのか」

ここに来てから、このフレーズを何回も聞くのだが、エルフ的な言い回しなのだろうか。

サクラにいたときには聞かなかったのだが。

彼女の言動を不思議に思っていると、アネモネが叫んだ。

「ケンイチ、前に黒狼の群れ！」

「おっ！？ いるなあ」

暗い森の中に、うようよした黒い群れが見える。

離れてみると、虫の集団のようだ。

30頭ぐらいだろうか？ 結構でかい群れだな。

「アキラ、前方に黒狼の群れだ」

『どうする？ やるのか？』

「いや、こちらを襲ってくる気がないのなら、やり過ぎす」

向こうもこちらを発見したようだが、見たこともないいきものなので、戸惑っているように見える。

群れのあちこちで首を伸ばし、こちらを見て警戒中だ。

クラクションを鳴らす。

音に驚いて一瞬群れが動いたのだが、すぐに止まってこちらを見ている。

「アネモネ、群れの中に爆裂魔法エクスプロージョンの小を。火事にならない程度のやつを頼むよ」

「解った——むー！ 爆裂魔法エクスプロージョン（小）！」

暗い森の中に青い光がきらめくと赤い爆炎に変わる。

魔法の顕現によって、数匹の黒狼が吹き飛ばされて宙に舞う。

黒い群れが瞬時にその形を変えて、その場から離れ始めた。

どうやら戦うとヤバい相手ということが解ったようだ。

戦わずに済むなら越したことはない。

車を走らせると、吹き飛んで腐葉土の上に転がる黒狼を回収した。

爆発の圧力で死んだ圧死ってやつだな。

血抜きはできないが、アイテムBOXに入れておく。

貴重な食料だし取引にも使える。

俺とアネモネが黒い獣を回収していると、セテラがやってきた。

「アネモネ、中々やるねえ」

「もう、ちびっことは言わないのか？」

「正直、大魔導師の域に間違いなく足突っ込んでいるから、言わない」

「それじゃ、私もBBAって言わない」

「今言ったあ！」

アネモネが逃げようとしたのだが、エルフの身体能力に敵うはずがない。

あっさりと捕まって抱えあげられると、頬をすりすりされている。

「やめろーお！」

アネモネが本当に嫌がっている。

「えへへ、いやだあ止めないい」

そこに獣人たちがやってきた。

「アネ嬢がすごいから、俺たちのやる仕事がねえよ。これで飯を食わせてもらっていいのか心配になるぜ」「そうだにゃー」

「そんなことはないだろ？ 周囲の警戒や偵察の仕事、獲物の解体やら色々とやってもらっているじゃないか」

「そんなことでいいなら、いくらでもやるけどさあ」「うにゃー」

「ミャレーとニャメナは十分に役に立っているから心配するな。遠慮なく飲み食いしていいから」

彼女たちの働きからすれば、給料や分前をもっと出してもいいのだが、使うあてがないと彼女たちは受け取っていない。

一応、アイテムBOXにある彼女たちのフォルダには金をいれてはいるんだけどな。

黒狼を追い払い、俺たちは更に森の中を進む。

同じ風景がずっと続くような錯覚に囚われ始めた頃、水面が見えてきた。

深い森の中に広がる、大きな湿地帯だ。

所々に光が差込み、水辺に集まっているのか大型の昆虫の姿も見える。

トンボだろうか？

「こりゃ車では進めん」

俺たちは車から降りた。

アキラの車から降りてきたツイッツラの話では、丸太を倒して作った道があるという。

彼の案内で、湿地帯の近くまで進むと――話のとおり、水に浸った丸太の道が現れた。

本場に丸太の上だけが道になっている、文字どおりの一本道。

湿地帯には所々に島があり、そこには木が生えているのだが、それを倒して道を作ったらしい。

整備されているわけでもなく、丸太もぞんざいに倒されており根っこも枝もそのまま。

根と枝が邪魔をして、1mほど水面から浮き上がるような形で橋が架かっている場所もある。

つながっていない場所も、エルフの身体能力なら飛び越えることも可能だろうが、只人には少々キツイ。

数メートルの距離をジャンプするなんて無理だ。

「ここを進むのか」

「まあね。エルフ用に作られた道だから、只人には大変かもな」
ツイッツラが丸太の道を指差した。

「獣人たちも、このぐらいなら大丈夫そうだな」

「まあね。このぐらいは余裕さ」「任せるにゃ」

「にゃー」「みゃ」

もちろん森猫たちも余裕か。

返事をしたベルたちは、俺たちをおいて一本道を渡り始めてしまった。

ずっと車に乗っていたので、退屈だったのかもしれない。

「只人といっても、アマランサスは平気だろうが」

「任せてたもれ」

「ケンイチ、このぐらいなら、ケンイチのアイテムBOXに入っているものでなんとかなるだろう？」

「まあな、まかせろ。こんなこともあるかと——ってやつだ」

俺もそれなりに経験値があがっているせいか、このぐらいでは動揺しなくなってしまったな。

246話 突撃虫

俺たちは王国に戻るために、エルフの村を出発した。

最初は川を下る予定だったのだが、多数の首長竜のような魔物がいて断念。

出発地点に戻ることにした。

そこからエルフの村とは逆方向の対岸に渡り、離れた場所にある只人の村を目指す。

その村から出ている道が、王国に戻るができる街道につながっているらしい。

川を下れないとなると、そこしか道がない。

森の中を海まで進むという手もあるのだが、川にいたあのような魔物がうじゃうじゃいるとなると、どんな危険が待ち構えているのか解らない。

村から道が出ているということは、その周囲は森の深部よりは安全だろうという判断だ。

ダリアから森の中を通っていた街道も比較的安全だったしな。

森の中をSUV車でひたすら走り、黒狼の群れを追い払うと――俺たちの目の前には広大な湿地帯が広がっていた。

足を踏み入れるとズブズブと足を取られそうな、巨大な水たまりに丸太でできた一本道が続く。

エルフたちが適当にそこに生えている木を倒して作った道らしい。

「丸太橋を進むしかないな」

「ここは車じゃ無理だな」

アキラも車をアイテムBOXに入れた。

「ケンイチ、K100みたいのは作れないのか？」

「K100ってあれか？　クソ懐かしいな」

昔のTV番組でバルーンタイヤを履いた機関車がでてきたのだ。

「あれって湖みたいな場所も走ってたじゃん」

「そうそうーってオッサンしか解らんネタだな」

バルーンタイヤのバギーとかシャングリ・ラで検索してもない。
ホバークラフトも無理。

プロペラで進むボートも当然売ってないので、徒歩で進むしかない。

「アネモネ、無理そうならニヤメナにおぶってもらえ」

「大丈夫だよ」

「そうか、気をつけてな」

「うん」

「なんでえ私は心配してくれないのお？」

セテラが不満のようだが、エルフが作った道だ。

「エルフが作ったんだから、エルフなら通れるってことだろう？」

なんで心配する必要があるんだ？」

「そのとおりじゃの」

「ぶう、私に対する愛はないのか」

エルフがむくれているのだが、アキラの所に行ってヒソヒソ話をする。

「アキラ、エルフが私に愛がどうの——って言うようになったんだが、これってなにかあるのか？」

「ああ、それは親密になると出てくるエルフの慣用句だよ。相手の

好意を確かめるときに使われる」

「えく？」

「ははは、随分と好かれたな」

「それじゃ、ツイツツラも言うのか？」

「多分、そのうち言うと思う」

うーん、なにせ他種族だからな。

話を聞くと宇宙人みたいだし……。

まあ、多少の文化の違いは受け入れねばならない。

俺たちは列になって、丸太の道を進み始めた。

大木を倒してそのまま橋になっているので、根っこと枝が支えて平均台のように宙に浮くような形になっている所もある。

水に浸かった丸太は全体が緑色に苔むし、全体が色とりどりのき
のこで覆われたものもある。

歩きにくいし滑る。

下は水だが、湿地なので深さはないだろう。

落ちて怪我をすることはないだろうが、あちこちからポコポコ
と泡が立っている。

底に積もったヘドロが発酵してガスを放出しているのだ。

ときおり、ドブのような異臭が漂ってくる。

周りを見渡せば、透明な翅はねを持ったカゲロウのような虫が沢山飛
ぶ。

「ツイツツラ、あの虫は危険はないのか？」

「大丈夫だよ。危ないと言ったら猛スピードで突っ込んでくる、ケ
ーって虫がいるから。それは危ない」

「突っ込んでくるとどうなるんだ？」

「獲物を倒して、卵を産み付けるんだよ」

「子供のための狩りか！」

俺とツイツラの会話にアキラが入ってきた。

「それって、シュツルムケイファだろ？　ここにいるのか？」

「いるよ——甲高い音が聞こえたら伏せたほうがいいよ。木も簡単に貫通するから」

「アキラ、それって帝国にもいるのか？」

「ああ、いる場所にはいる。すごいぞ、鎧を着ても簡単に貫通するからな」

「マジで？」

彼の話では、マジで弾丸並の威力らしい。

鎧を着た騎士を2体まるごと貫通したこともあるという。

「旦那、なにを話しているんだい？」「にゃ？」

「凄い速度で鎧も貫通する虫がいるらしい」

「げ?!　それって突撃虫じゃ?!」「マジにゃ?　いるにゃ?　どこにゃ？」

獣人たちが辺りをキョロキョロと見回す。

どうやら彼女たちもその虫を知っているらしい。

「近づくとも音がするらしいから、獣人たちなら解るだろ？」

「た、多分解ると思うけど……」「とんでもない所に来たにゃ……」

ミヤレーが尻尾を下げて深刻そうな顔をするってことは、よほどヤバいのか。

「アマランサスは知っているか？」

「知りませぬ」

「まあ、お城の中にいれば関係ないからなあ」

「アキラ!　プロテクション聖なる盾は効く?」

「アネモネちゃん、弱い防御魔法だと貫通するぞ」

「どうしよう……」

アネモネが魔法での虫対策をしたいようだが、有効策があるならレイランさんあたりが実行しているはずだ。

「なんだか、とんでもねえ所に——うわああ！」

足を滑らせたアキラが、背中から下に落っこちた。

「アキラ！」

「ぷはっ！」

すぐにアキラが立ち上がったのだが、澄んでいた水がかき混ぜられて、コーヒー牛乳のような色に変わっている。

「大丈夫か？」

「大丈夫だが——くせえ！」

アキラが自分の服をクンカクンカしている。

どうやら、水の底にたまっていたヘドロに塗れてしまったようだ。

「よし、アイテムBOXから——」

俺はアルミハシゴを出すと、丸太に立て掛けた。

「サンキュー」

彼が、ヘドロにハマった足を交互に引き抜き、ハシゴに足をかけた。

ズブズブとハシゴもめり込んでいくが、ある程度沈んだところで止まる。

アキラが丸太の上に戻ってきた。

「くそ〜ヒデ目にあつたぜ……」

「くせえ！」 「くさいにゃ！」

鼻のいい獣人たちが逃げたいようだが、ここは一本道だ。

「アネモネ、魔法で綺麗になるか？」

彼女が魔法の準備を始めたのだが、ツイッツラが名乗り出た。

「僕がやるよ！ 洗^{クリン}浄！」

青い光が舞うと、すぐにアキラの服が綺麗になったのだが、ずぶ濡れなのはそのまま。

^{ドライ}乾燥の魔法は人体に使うと危険なので、使えない。

「土がある島の所まで慎重に行こう」

「ハックシヨイ——畜生！ あ、いけね」

「やっぱりオッサンならでるよなあ、畜生が——」

なぜか、オッサンがくしゃみをする、語尾に畜生がつく。

「うるせえ」

鼻をすするアキラが珍しく不機嫌そうだ。

自分だけ落っこちたので、バツが悪いらしい。

アキラのことを笑いながら丸太の上を歩いていたのだが——。

「ん?!」「にゃ!?!」

獣人たちが耳をくるくると回している。

「どうした？ 敵か?! 何も見えないが……」

ずっと湿地帯なので視界はクリア——敵らしき敵は見えないが、ニャメナが大声を上げた。

「伏せろ！」

慌てて、彼女の言うとおりに苔むした丸太の上に伏せる。

緑色の苔はちょっと湿っていて、ふわふわ。

そんなことを考えていると、高周波音を響かせて、なにかが上を

とおり過ぎた。

「アキラ！ ケーだよ！」

ツイッツラも叫ぶ。

「旦那！ マジでやべえよ！」 「突撃虫にや！」

「ええ？ まじで？ 早速フラグ回収かよ！」

「ケンイチ、間違いないぞ！」

その虫に遭ったことがある全員がそういうのだから間違いないの
だろう。

「どうする？ 動けないぞ？！」

「やつらが超高速を出すのは1回か2回だから……」

「聖騎士様！ 妾を盾に」

「鎧を着ても軽く貫通するんだろ？ 馬鹿なことを言うな」

アマランサスを止めていると青い光が舞い始める。

「むー！」

丸太に伏せているアネモネがプロテクション聖なる盾の準備に入ると、俺の目の
前で炸裂音とともに丸太が爆発した。

木っ端が宙を舞い、木の香りが鼻腔に飛び込んでくる。

虫が丸太を貫通したのだ。

その衝撃波とともに丸太も真っ二つになって俺も落下。

ヘドロの洗礼を浴びた。

「ぶへっ！ くせえ！」

ずぶ濡れの泥まみれになる。

本当にドブのようなにおい——くさいが懐かしい。

ガキのころは下水もなく、生活排水は地下浸透であちこちにドブ
があった。

そこに落ちたりしたら大変なことになるのだが……。
懐古に浸っている場合ではない。

丸太はくの字になったが、皆はかろうじて落ちていない。
一番近くにいた俺だけがあおりをくらったようだ。

「ケンイチ、早く上がってこい！ 多分、もう大丈夫だ」
虫が2回超高速を出したので、もう大丈夫という判断だろう。

「今のうちに移動しようよ！」
ツイツツラもアキラの意見に同意している。

「それって燃料ぎれとかなのか？」

「ああ、やつらケツから超高压のガスを噴出して超高速を出すんだ」
「生物ロケットかよ……」

くの字になった丸太が水面に浸っているので、そこから這い上がり皆で急いでその地点を去る。

足場のいいところまでやって来ると、アネモネに魔法を頼んだ。

「むー！ 洗^{クリン}浄！」

アネモネの魔法で、においは取れたがずぶ濡れだ。

「ハックシヨイ、畜生！」

「ほら、ケンイチだって畜生って言うじゃん」

「あ、いけね」

ついつい癖だな。

慌てて次の丸太橋を渡り先端まで行っただが、その先がなく5mほど離れている。

「さて、丸太を出すかゴムボートを出すか」

「朽木が多くて、ひっかかりそうだぞ？」

「うーん、そうだな」

水面といっても湖や池のような綺麗な場所ではない。

凸凹しており、朽木なども沈んでいる。

俺はアイテムBOXから丸太を出すことにした。

活躍することが多い丸太だが、毎回縦に出すことができなくて苦労する。

丸太をアイテムBOXから出すと、絶対に横に出てくるのだ。

「ん？ 待てよ……この距離ならアルミハシゴを出したほうがいいか」

アイテムBOXからハシゴを取り出した。

「ニヤメナ、こいつを持ち上げて水面に渡してくれ」

「解ったぜ、旦那」

軽量なアルミとはいえ、持ち上げると結構重い。

彼女はそんなハシゴを軽々と持ち上げて、縦にすると水面に倒した。

水しぶきが舞い、白いハシゴの道ができる。

「どれ、強度的には大丈夫かな？」

このハシゴなら、丸太橋よりは渡りやすいはずだ。

俺のアイテムBOXに入っている丸太は細いので、2本出さねばならない。

ハシゴに足をかけて踏みしめてみる——大丈夫のようだ。

「1人ずつ渡ってくれ」

まず最初に俺が渡る。

大丈夫なのを見て、後続も次々と渡りはじめた。

「アネモネ、大丈夫か？」

「大丈夫だよ」

丸太だと心配だが、ハシゴなら平気だろう。

獣人たちは中間までジャンプして2歩でクリアだ。

アキラが渡ったあと、ツイッツラが渡る。

「この白いのって金属なの？ 銀？」

見たこともない金属を見て、エルフが気になるようだ。

「その金属は魔法の触媒に使えるからな」

「えっ?! 本当？」

アキラの言葉にツイッツラが反応した。

「あとで試させてやるよ」

「やったあ！」

少年のようなエルフが渡り切ると、アキラに抱きつく。

「こら、まだ濡れてるんだぞ？」

「平気だよ」

最後にセテラが渡ったので、ハシゴをアイテムBOXに収納した。

「じー」

セテラが俺のほうをじっと見ている。

「なんだ？ どうかしたか？」

「アイテムBOXの中にいろんなものが入っているんだねえ」

「まあな」

彼女ならアルミの存在は知っているだろうし、触媒になるのも知
っているに違いない。

この世界ではアルミの錬成ができなかったので、手に入らなかった

ただろうが。

「エルフが故郷から持ってきた優れた知識やらテクノロジーで、世界を支配しようと考えなかったのか？」

「そういうのが嫌で逃げてきた連中ばかりだったしい」

「全員が全員、そうってわけでもないんだろ？」

「そういうことをすると、管理者からなにされるか解らないしい」

「その管理者って本当にいるのか？」

「私たちがあ、やってきたときはいたよお？」

エルフが5000年生きてて、そのエルフと同じぐらいのテクノロジーを持つ管理者なら、5000年生きててもおかしくはないが……。

「まあ、実際に俺とアキラも連れてこられたしな」

「なにが目的かさっぱりと解らんが」

変なチートを授けて面白がっていると考えるのが妥当なのだが……。

「俺たちもそれなりに楽しんでいるからいいんだが……アキラは、苦労したみたいだけどな」

「まあな。俺のは完全に外れスキルだろ——なんだよ、マヨネーズって。最初はアイテムBOXもなかったし」

ここで、いるかどうか解らん存在に愚痴を言っても仕方ない。森の中が暗くなってきたので、俺たちは先を急いだ。

「ケンイチ、あそこに島がある」

アネモネが指差した先に、小高くなっている島があり、小さな木が生えていた。

その周りにはフェアリーリングがあり、小さなきのこが踊るように並んでいる。

草はあまり生えておらず、ほとんどが苔で島全体が緑色。

「うにゃ!」「やった!」

獣人たちが俺の頭を飛び越して一回転。

こんな滑りやすい丸太の上で流石の運動能力だ。

「一番乗りにな」 「いえー!」

獣人たちの所まで行くと、アキラと一緒に服を脱ぐ。

ここには男の裸を恥ずかしがるような女はいないから平気だ。

アイテムBOXから出したバスタオルを腰に巻くと、ズボンも脱ぐ。

服やズボンなどを脱げば、乾燥の魔法が使える。

すぐにアネモネが仕事をしてくれた。

「むー! 乾燥!」
ドライ

「アキラのは僕がしてあげるよ。乾燥!」
ドライ

アネモネとエルフの魔法で、服とズボンから白い煙があがりすぐにサラサラになる。

「ふー! 一息ついたぜ」

アキラの腰から取ったバスタオルをツイッツラが首に巻いてはしゃいでいる。

エルフの感覚からすると、アキラのものは自分のものなのだ。

「ケンイチ、あのバスタオルもらっていいか?」

「ああ、いいぞ」

「ケンイチい、私もその布がほしいんだけどお……」

セテラは人間の街にもいたことがあるらしいので、一応人のものと自分のものは区別をつけているようだ。

ツイッツラも只人と一緒に住むなら、理解してほしいところだが

……。

まあ、アキラがなんとかするだろう。
セテラにもタオルをやると頬ずりをしている。

ちようどいい場所があったので、今日はここにキャンプを張るところにした。

すでに暗くなりつつあり、ここからは動けない。

この場所は危険かもしれないが、一本橋の上やら水の上よりはいいだろう。

「アキラ、さっきの突撃虫は夜にも飛ぶのか？」

「ああ、明かりはマズい。明かりに目掛けて突っ込んでくるからな」
「LEDの明かりなら平気だろう。あれには虫が集まってこないからな」

「虫って紫外線に集まるんだっけ？」

「確かそうだと思った」

彼の話では、体温と動物の吐く息を辿って、目標を見つけられるらしい。

動物の吐く息——つまり二酸化炭素だ。

「鎧を貫通するなら、コンテナハウスもだめだろうな」

「多分」

恐ろしい。

「火を使えないから、アネモネの魔法で温めてもらうか」

「俺の魔導コンロも大丈夫だぞ」

「じゃあ、お湯を沸かしてくれ」

魔法と魔導コンロからは、二酸化炭素は出ないが、人の息に寄ってくる可能性がある。

そうとはいえ、飯を食わないわけにもいかないし……。

「オツケー」

「オツケーにゃ！」

「旦那！ カレーにしてくれよ！ カレー！」

獣人たちはカレーでいいというので、アネモネに魔法でパウチを温めてもらう。

これですぐに食える。

エルフたちはインスタントラーメンを食べたいようだ。

どうも、あれが気にいったらしい。

獣人たちはカレー、エルフたちはラーメン。

好みがハッキリと分かれている。

俺たちもラーメンを食べることにして、鍋で袋麺を作ることにした。

エルフも結構食べるからな。

只人グループは、ラーメンと冷凍チャーハンにした。

この手の冷凍チャーハンは、中々侮れない。

下手に自分で料理するより美味しいのだ。

「美味しいにゃー！」 「うめー！」

獣人たちはカレーを頬張り――ちょっと離れた場所では、アキラとツイツツラが、ラーメンを交互に食べさせあっている。

あれがエルフ式らしい。

それを見たセテラが、俺にも彼女のラーメンを差し出してくる。

「はい」

「ええ？」

セテラのくせに、すごい悲しそうな顔をするので仕方なく食べる。食べたなら、俺のラーメンを食べさせてやらないと駄目ってことだ。

「ほら」

俺が箸でラーメンを取ってやると、それをエルフが食べている。
毎回これをやるのか？

「むー！ ケンイチ！ 私も、あーん！」

アネモネが箸でラーメンを差し出してくる。

「ええ？ あーん」

アネモネから食べさせてもらうのだが、考えてみれば人間でもこういうことをしないでもない。

アネモネとアマランサスにも食べさせてやって、なんとか収まった。

そういえば、森猫たちはどうしたのだろう。

彼女たちなら心配は要らないとは思うが……そんなことを考えていると、暗闇からベルが現れた。

「にゃー！」「みゃ」

「食いねえ食いねえ、飯食いねえ」

彼女たちにネコ缶を開けてやる。

彼女の黒い背中をナデナデしながら、質問してみた。

「お母さん、なにかいたかい？」

「にゃー」

「え？ スライムか……」

スライムとは面倒だが……。

「でも、スライムなら私のスライム避けでなんとかなるよ？」

「アネモネの言うとおりだな。スライム避けを使いながら進もう」
それに足場が悪すぎる。

なにかスパイクのようなものはないだろうか？

シャングリ・ラで検索してみると、いいものを見つけた。

靴に取り付けることができる鋼鉄製のスパイクだ。

鎖とゴムを使い靴を亀甲縛りのように包み、スパイクを装着する。
1対で2000円ぐらいだ。よかったら人数分買うか。

「こりゃいい。ポチツとな」

ガシャッと銀色のスパイクが落ちてきた。

「お？　なんだそれ？」

購入したものが気になったのか、アキラが俺の所にやってきた。
爪楊枝を咥えながら歩いてくるその姿はまさにオッサン。

「あと付けのスパイクだよ。靴に取り付けることができる」

「おっ！？　こりゃいいじゃん！　こんないいものを持っているなら、最初から出してくれよ！　あんなくせえ所に落ちる必要なかったじゃん！」

「ははは、俺も今気がついた」

キラキラした銀色が気になったのか、獣人たちもやってきた。

「旦那、なんだいそれは？　武器かい？」　「鉄の爪にゃ？」

「違う、足に付ける滑り止めだよ」

俺の靴に付けてみせるが、たしかに武器としても使えるかもしれないが。

「へ」

感心している獣人たちにも聞いてみる。

「お前たちも使うかい？」

「そんなの要らないよ」　「そうだにゃ」

そういえば、足場の悪い場所でも彼女たちはスイスイと進んでいた。

「エルフたちは？」

「要らないよお」

それじゃ、使うのは只人グループだけってことか。

小さな島だがコンテナハウスを3つ出す。

ちよつと斜めになってしまっているが、ご愛嬌。

苔の上はふわふわなので、あそこで寝ても素敵そうなのだが、意外と湿っぽい。

それに小さな虫も沢山いるので、たかれてしまうだろう。

ベルによればスライムもいるらしいので、周囲にスライム避けを設置した。

これで準備万端。

今日はアマランサスの相手をしてあげないと。

「それじゃ私もお」

エルフが俺に抱きついてきた。

「ええ？」

——というわけで3人で夜更けまで遊ぶ。

セテラがアマランサスにちよつかいを出すのを止めさせるのに苦労した。

エルフはどっちでもいいらしいのだが、アマランサスはそうではない。

男から見ている分には、絶世の美女同士の絡みは絵面的に最高のシチュエーションなのだが、アマランサスが嫌がっている。

奴隷紋で強制することもできるが、彼女が可哀想だ。

— — — — — ◆ ◆ — — — — —

——小さな島にたどり着いた次の日の朝。

アネモネにパンを焼いてもらい、インスタントスープで食事を取った。

甘いものが食べたい者には、缶詰を出してやる。

「あ、甘くてうめえ！」

缶詰の甘さにエルフが目を丸くしている。

「ほら、俺のもやる」

「あゝん」

なんて、アキラとツイツラがまたやっている。

それを見るとセテラもやりたがるので勘弁してほしいのだが。

食事も終わり、今日は靴にスパイクを装着して丸太の道を進む。
この区間だけで10kmほどあるようなのだが、よく作ったものだ
なと感心する。

エルフには無限ともいえる時間があるので、長年かけて作ったもの
だろう。

そういえば大木が根っこから倒れているのだが、どうやって倒し
ているのか。

ツイツラに聞いてみる。

「木に登って縄を上につぶだろ？ 重量が軽くなる魔法を使ってか
ら引き倒すんだ」

「重量が軽くなる魔法——只人には使えない魔法か？」

「さあね。もしかして使えるやつもいるんじゃない？」

「アキラ、レイランさんは？」

「いや、魔法というか超能力の類じゃね？」

サイコキネシスとかテレパシーとか……使うと髪が逆立っちゃうやつか。

「使えれば便利だよなあ」

「そうだな」

でも、エルフには使える者がいるので、そういう魔法があるのは事実らしい。

食事が済んだあと、俺達は再び丸太の一本道を進むことになった。

247話 キングな敵

エルフの村を出た俺たちは、森の中の湿地帯を進んでいる。

エルフたちが湿地の上に生えている木を倒して道を作ったものなのだが、なにせ足場が悪い。

丸太は腐っているし、苔も生えていて滑る。

只人グループは、俺がシャングリ・ラから購入したスパイクを靴に装着して進む。

「こんないいものがあるなら、最初から出してくれよ」

アキラがスパイクの効き具合を確かめながら、まだブツブツ言っている。

「俺だって落ちたんだからいいじゃないか。気が付かなかったんだよ」

「ちえ」

どうもツイツツラの前で恰好悪いところを見せてしまったのを気にしているらしい。

どうでもいいけど、エルフにそんなに入れ込んで平気なのだろうか？

サクラに戻ったら血の雨が降りそうで怖い。

1本橋の上を歩くので歩みは遅く、橋のかかってない場所は、ハシゴや丸太を出したりして俺がなんとかしなくてはならない。

これがエルフと獣人たちだけなら、ひよいひよいと先に進んでしまふんだろうがなあ。

森猫と獣人たちは先行して偵察をしてもらっている。

俺たちに合わせて歩いていたんじゃ、逆に疲れるだろう。

「エルフたちも先行して、湿地が終わる所で待っててくれてもいいぞ?」

「ええ? 僕はアキラと一緒にいたいから」

「私もお、ケンイチと一緒にいたいしい」

「それならいいけどな」

見渡せば見たこともないような大量のきのこや、美しい花。

可能なら調べて写真に撮ったりしたいところだが、当然そんな暇はない。

きのこは食材にも使えるが――その前に食えるかどうか、調べる術がない。

元世界には、触るだけでアウトなきのことかあったが。

「ツイツツラ、触るだけで毒が回るきのことか植物とかあるのか?」

「ああ、あるよ。そういうのは見つけたら注意してやるから」

「ありがとうな」

「カエンタケとか、そういうやつだろ?」

「そうそう、あとなんだっけ――葉っぱを触ると痛みで死んじやう植物とか」

「ん? ネットで見たな……クソして葉っぱでケツを拭いたら死んじまったんだっけ?」

「あゝそれそれ」

「そんな怖い草とかあるの?」

アネモネが俺の服を掴まえて心配している。

「森の中って結構危険なんだぞ? 草むらとかは、なるべく入らないほうがいい」

「うん」

「ダニとか、刺す虫もいるしな」

「アマランサスも気をつけてくれよ」

「承知いたしましたわえ」

特にアマランサスは、王宮からあまり出たことがない女性だ。
ダニなんて虫すら知らないだろう。

「アキラ、ダニに食われたことは？」

「ある！ いつの間にか食いつかれて、ピンポン玉ぐらいになってよ」

「それは怖い。沢山に食いつかれたら貧血で死ぬな」

「黒狼とかに取り付いて、ピンポン玉の塊みたいになっているやつを見たことがあるぞ」

「うわぁ、絶対に見たくねえ」

ぶつぶつが駄目な恐怖症ってあったと思ったが、そういう人が見たら卒倒するな。

「ダニって伝染病持っていることも多いしな」

リケツチアとかツツガムシ病とか、ナントカ出血熱もそうじゃなかったか。

「ねえ、ケンイチ」

「なんだい、アネモネ？」

「ピンポン玉ってなに？」

「ああ、それか」

俺はシャングリ・ラからピンポン玉を購入した。

カラフルなピンポン玉だが、沢山詰まって1400円也。

こんなの買っても使わないと思うが、アネモネの遊びに使えるかもしれない。

「ほい、このぐらいの大きさの玉だ」

「わぁ！」

「ダニって虫が食いつくと——血を吸ってこのぐらいの大きさまでデカくなるらしい」

「怖い」

「あのダニはマジでヤバイぞ」
話をしながら列になって丸太の上を歩く。

「ふう……」

いつも車移動なのだが、運動不足ということはない。
元世界にいたときに比べたらかなり運動量も増えてるし、祝福の力もあるからな。

飯さえ食えれば疲れ知らずだ。

アイテムBOXから飲み物を出そうとした、そのとき——。

「ん？ 叫び声が聞こえる！」

ツイツラの耳がピコピコ動いている。

獣人たちほど自在に動くわけではないが、エルフたちの耳もそれなりに動く。

身構えていると、前から丸太橋の上を獣人たちが走ってくる。
かなり必死なので、なにかから逃げているようなのだが……。

「ええ？ またか？」

魔物を引っ張ってくるのは止めてほしいのだが——とはいえ、この湿地帯じゃ逃げ場所がない。

この場所で彼女たちを責めるのは、ちょっと酷だろう。

「なんだケンイチ?! 魔物か?!」

「解らん! なにから逃げてるんだ?!」

そのとき、獣人たちの後ろがゆらゆらと揺れているように見え、丸太橋を飲み込むような形でこちらに向かってくる。

「なんだ?! なにか透明なものだ」

「聖騎士様、あれはスライムではないのかえ?!」

「スライムか?! でも、かなり大きいぞ?」

幅は10mぐらいはありそうに見える。

「スライムキングか、キングスライムか。それが問題だ」

アキラがボケるが、非常事態なので彼に突っ込んでいる暇はない。スライムといえばスライム避けがある。

相手がデカいとなれば、スライム避けもデカいほうがいいだろう。俺はアイテムBOXから、大ゴーレムを作るためのコアを取り出した。

こいつはスライム避け用に作ったものじゃないが、同じように使えるだろう。

「アネモネ、これをスライム避けにしてくれ」

「うん! むー!」

その間にも、スライムは結構な速さで押し寄せてくるが、その前に獣人たちが俺たちの頭上を飛び越えた。

「ぎゃあああ!」「にゃあああ!」

「できた!」

「よし!」

丸太の上に巨大スライム避けを設置して、走って逃げる。

このときにも鉄製のスパイクがいい仕事をしてくれた。

普通の靴じゃ、走って逃げることもなんてできないだろう。

巨大な透明なジェルが、スライム避けの近くまでやって来たのだが、怯むことなくスライム避けの上を通過した。

「おわあ! 止まらないぞ?!」

「聖騎士様どうするのじゃ！」

剣で切ったりしても死なない。
ただ分裂して増えるだけだし。

「アネモネ、魔法は使うなよ！」

「うん！」

魔法で攻撃しても効き目が薄いし、命中しても分裂してしまう。
乾燥の魔法なら使えるかもしれないが、動き回る敵には使えないし、こんなデカイ敵を乾燥させるには時間がかかる。

電撃は効くが……コントロールが難しいらしい。

「ほんじゃ、俺のマヨパワーで！ マヨパワー全開！」

アキラの構えた指から大量のマヨネーズが噴射された。
黄色いヌルヌルの束が巨大スライムに向かう。

「マヨが効くか？」

「解らん」

彼の行動に半信半疑だったのだが、スライムの動きが止まり、透明だった身体の中に黄色いものが溜まり始めた。

「美味しい餌があったんで、どんどん食っている？」

「まあ、成分は卵と油だからな。そりゃ美味しいだろう」

透明な身体の中にカスタードクリームのような黄色いぷよぷよが浮かんでいる。

その光景は美味そうに見えるのだが、そんな呑気なことを言っている場合ではない。

「おりゃああ！ どんどん食え！」

「腹が一杯になったら、俺たちのことなんてどうでもよくなるかな？」

「おそらく――けど、ケンイチ。満腹になって栄養補給を完了したスライムは、分裂するぞ?」

アキラがマヨ噴射を続けて5分ほど経過。

透明な魔物は、それ以上は黄色い餌を食べなくなり、動きが完全に止まった。

丸太橋にぶら下がるような形で左右に分かれて、下は水面に届いている。

「つまり満腹ってことか……」

「ははは、みたいだな」

「すごい! アキラ!」

ツイツツラが、帝国のドラゴンスレイヤーに抱きついた。

「動かなくなっただけえ?」

「そうみたいだが、回り込むとなると水の中に入らないとダメだし――マヨを消化したらまた追ってくるかもしれない」

「乾燥させるのは?」

アネモネがスライムを指差す。

「魔法で乾燥させるにはデカすぎるな」

「アネモネちゃん! あのスライムをゴーレム化するってのは」「やってみる!」

アキラの言葉にアネモネがうなずいた。

俺も一瞬いい考えだと思ったのだが――彼女の魔法で青い光が舞うも、変化なし。

どうやら、いきものでゴーレムは作れないらしい。

つまり人間を集めてゴーレムにしたりはできないってことだ。

「うーん」

俺は、アイテムBOXから以前に使った鉄筋を取り出した。

「おい！ ニャメナ！」

ぐるりと見渡したのだが、どこにもいない。
いったいどこまで逃げたんだ。

「しゃーない。アキラ、以前渡した力の指輪を試してみないか？」
リッチを倒したときに手に入れた指輪の一つをアキラに渡してある。

「ああ、あれか」

彼が自分の袋から指輪を取り出して、それに合う指を探していたのだが、面倒になってテキトーに押し込めた。
まあ、どの指でもはめてりゃいいのだろう。

「おし、やってみるか」

彼が俺から鉄筋を受け取ると――投げやりのように振りかぶり、それをスライムに向かって投げつけた。

結構な重さがあるので普通に投げるのは難しいと思ったのだが、結構勢いよく飛んだ。

これが指輪の効果か？

重い鉄の棒は半分ほどスライムにめり込んだのだが、攻撃を受けたはずの敵はまったく動かない。

ダメージがないのか、腹いっぱいなので動かさないだけなのか。それともアキラが言ったように、分裂の準備に入っているのだろうか？

「聖騎士様、どうするのかえ？」

アマランサスも剣を構えているが、彼女の剣でもこいつには敵わない。

「セテラ、雷撃の魔法を撃ってくれ。ここからなら、あの鉄の棒に雷が落ちるはずだ」

「解ったあ……青き雷よ——」

青い光が舞い、彼女の金髪がひらひらと宙になびいたあと、魔法が顕現して青白い稲妻となった。

「我敵を切り裂く剣となりて宙を走れ——電撃！」
ライトニング

不規則な光の束がスライムに向かい、アキラの突き刺した鉄筋に落雷した。

攻撃を受けた敵は一瞬飛び上がり、俺たちにも緊張が走ったのだが、すぐ動かなくなり白い煙を上げている。

以前、スライムに電撃を食らわせたときと同じように、甘い香りが漂ってくる。

「あゝ、なんかこのにおいを嗅ぐと食いたくなるんだがなあ」
アキラが漏らす言葉に俺は同意した。

「食っても、多分甘くないと思うが——においはいいよな」
スライムの粉末を加熱したものを香料に使ったりできるかもな。

「それはいいとして——ケンイチ、死んだか？」

「解らん。試してみよう」

俺はゆっくりと、スライムに近づくと叫んだ。

「収納！」

叫んでみたが、アイテムBOXには入らない。
入らないってことはまだ生きているわけだ。

それとも、収納の大きさ制限に引っかかっているのかもしれないが——目を凝らしてみると、中ではなにかが動いているような気がする。

小さなスライムなら、セテラの電撃で致命傷になったが、これだけ大きいと麻痺にとどまるようだ。

「だめか？」

アキラが心配そうに見ている。

「それでも瀕死状態には違いないと思うが」

「アキラの黄色いのって毒なの？」

「いや、毒じゃないんだが……」

ツイツラにどうやって説明しようか、アキラも困っている。

まあ指からマヨネーズってのはなあ——俺でも意味不明だ。

格好悪いところを見せてしまったので、汚名返上といきたかったところだろうが、果たしていいところは見せられただろうか？

普通のいきものなら、マヨパワーで万物窒息が使えるだろうが、相手がスライムではそうもいかない。

ちよっと怪しいが、ツイツラの表情を見ると、アキラの作戦は上手くいったようだ。

「まあ、食いすぎればなんでも毒だけだな」

「そうだな」

俺はしばし考えたが——前と同じ作戦でいくか。

シャングリ・ラで購入したシリカゲル入りの猫砂をぶっかけて、スライムの水分を奪う作戦だ。

シャングリ・ラで、猫砂を買う。5Lの袋に入っているものが4袋セットで2500円。

こいつを2セット買う。

購入ボタンを押そうとしたが、ここで押すと落ちてくるのは一本橋の上。

足場がないので下に落っこちてしまう。

「うーん？ そうだ！」

アイテムBOXから、触手のときに使ったゴムスーツを出して、穿く。

「ケンイチ、どうするんだ？」

「まあ、見てろって」

一本橋の上にアルミハシゴを出すと、スライムに立て掛けた。それによじ登ると、シャングリ・ラからブルーシートを買う。なんだかんだで、このブルーシートってやつは便利だ。

購入ボタンを押して落ちてきたブルーシートをスライムの上に広げると、その上に乗ってみる。

ハシゴが当たる部分にもブルーシートを入れる。

素手で触ると、スライムの刺胞がまだ残っているかもしれない。それを防ぐために、この青い膜を使ったわけだ。

「おおっ！ ポヨンポヨンだ！」

その場でジャンプすると、ちょうどいい反発具合。こりゃ、トランポリンの代わりになる。

「ケンイチ！ それ、私もやりたい！」

どうやら俺が楽しそうなので、アネモネもやってみたいらしい。

「ブルーシート敷いたから大丈夫だろ。注意して登ってくるように」
「うん」

「僕も僕も！」

ツイッツラが一緒になって手を挙げている。

100歳近いはずなのだが、アネモネと同じぐらいの精神年齢なのではあるまいか。

「私もお！」

5000歳のBBAもやってみたいらしい。
皆でハシゴを登ってきた。

「すごい！」

アネモネがスライムの上で、ポンポンとジャンプしている。

この世界にはトランポリンなんてないから、こんな経験は初めて
だろう。

ベッドの反発もこんなに激しくはないしな。

「おもしれー！」「あははは！」

2人のエルフもジャンプしながらはしゃいでいる。

それよりも俺にはやることがある。

スライムは麻痺状態だが、止めを刺さないと復活する可能性もあるしな。

俺はさっきカートに入れた大量の猫砂の購入ボタンを押した。

「ポチッとな」

ブルーシートの上にドサツと落ちてきた猫砂を拾い上げる。

「おおい、遊んでないで、こいつをぶっかけるのを手伝ってくれ」

「ああ、猫砂をかけて乾燥させるのか？」

「アキラ、この砂はなに？」

「これか？ これは水分を吸い取る砂だ。こいつを使ってスライムの水分を吸い取るわけよ」

「すげー！」

皆で袋を開けると、バサバサとスライムにかけ始めた。

俺たちはスライム山の頂点に立っているから、ここから撒けば、まんべんなく猫砂をかけられる。

「アネモネは、乾燥の魔法をかけてみてくれ」

「うん、解った！　むー！　乾燥！」^{ドライ}

これだけ大きなものだから、魔法を使っても簡単には乾燥できないだろう。

「僕も手伝うよ。乾燥！」^{ドライ}

どうやらツイツラも魔法でサポートしてくれるようだ。

もうひとりの5000歳は、面白がって砂をかけまくっている。

「聖騎士様、スライムの身体を切り裂いて、中にこの砂を流し込んでどうかの？」

「ええ？　切って分裂しないだろうな」

「真つ二つとかじゃなければ大丈夫じゃね？　それにさっきの電撃で全体的に麻痺しているようだし」

「それじゃやってみるか」

アマランサスにブルーシートに切れ込みを入れてもらい、アキラと一緒にめくる。

スライムの肌がむき出しになったので、そこに猫砂を撒きアマランサスに頼んだ。

「アマランサスやってくれ」

「かしこまりました——やっ！」

彼女が振る広い刃が、猫砂まみれになったスライムの肌を切った——と思う。

ゴムスーツに覆われた手をつっ込むと確かに切れているが、弾力があり過ぎて傷口を開くのが難しい。

「こりゃ、傷口を開くのが大変だ」

「ケンイチ、ゴーレムのコアを一つ出して」

「ん？ いいぞ？ なにか思いついたのか？」

「えへへ」

彼女は笑っているが、青い光とともにコアに猫砂を集めはじめた。魔法でできた砂の川を、そのままスライムの傷口に詰め込んでいく。

「ああ、なるほど——猫砂をゴーレム化して、傷口に入れているのか」

「うん」

「こりゃ、すごいぞアネモネ！」

彼女の頭をなでてやるが、考えようによっては傷口に塩を詰めるような極悪なことをしているな、こりゃ。

「ふわああ」

俺に頭をなでられて集中力が切れたのだろうか？
ゴーレムがただの猫砂に戻ってしまった。

「ねえ！ 私もお！ そのふわあってやつをやってよお！」
5000歳がそんなことを言うてくるので、しかたなくなでやる。

「ふわああこれ、好きい！」

「聖騎士様 あ！ 妾もしてたもれ！」

「あゝはいはい」

仕事が進まないじゃないか。

こんなことしてて、スライムが復活しないだろうな？

「アキラあ！ 僕もあれやってえ！」

「おう」

アキラが、彼に抱きついたツイッツラの頭をなで始めた。

「ふわぁあ……」

どうやら男にも効くようだ。

そのあと、アマランサスの剣で切り刻みまくり、アネモネのゴーレム魔法で猫砂を突っ込むという作業を繰り返し、スライムの巨体は徐々にしぼんでいった。

その間にエルフ2人により乾燥魔法もかけている。

「おお、すげーカラカラになったぜ」

アキラがスライムに蹴りをいれているが、カサカサと乾いた音がする。

乾燥した皮膚には亀裂が入り、アカギレのようになった所から、ドラゴンスレイヤーが飲ませたマヨネーズが流れでていた。

「色々な複合攻撃をしたからな」

「聖騎士様、これで仕留めたといってもよろしいのかえ？」

「よし、皆スライムから降りてくれ」

元の大きさでは、アイテムBOXに入れるのは少々怪しい大きさだったが、乾燥してかなり縮まった。

皆がスライムから降りると俺は叫んだ。

「収納！」

目の前からカラカラになった砂まみれのスライムが、アイテムBOXの中に吸い込まれた。

「やったぜ！」

アキラがガッツポーズしたところに、エルフが抱きついた。

「すげーよ！ あんな大きなスライムを倒すなんて！」

「まかせろ！」

「それじゃ私はあ、ケンイチに抱きつくう！」

「こら」

「私もお！」「妾もじゃ！」

アネモネとアマランサスが俺に抱きついていっていると、一本橋の上をトボトボと歩いて獣人たちが戻ってきた。

「お前ら、どこまで行ってたんだ？」

「……」

2人は耳を伏せ尻尾を垂らし、しょんぼりとして俺の前に立っている。

叱られた子供のような。

「ほらほら、2人ともおいで。怒ってないから。見てみる、スライムもやつつけたぞ？ もう、怖くないから」

2人を抱き寄せて、なでなでしてやる。

「旦那あ……」「うにゃああ……」

2人が泣いているのだが、この土地にきてから情緒不安定のような気もするな。

まったく未知の土地ということで、微妙にストレスを感じているのだろうか？

彼女たちのためにも、王国に早く戻りたいのだが……。

障害物をクリアしたので、そのまま進むことにする。

「アキラのマヨネーズがスライムから漏れているが、大丈夫だよな？」

「卵と油だし、化学物質は含まれてないと思うから、汚染とかは問題ないだろ？」

「動物や虫の餌になるか」

「そう思うぜ」

「あのアキラの黄色いのってなんなの？」

セテラがマヨネーズの正体を気にしているようだ。

「なんなの？　って聞かれても、美味しい魔法……かな？」
返答に困る。

「俺にも解らんよ。こんな能力をつけた管理者だか神様ってやつに
言ってくれ」

「まあ、そうだよな。普通はマヨネーズ能力なんてつけないしな」
「絶対に面白がってるに違いねえ」

アキラが神様に恨み言を言っているが、生体無限油田と考えると
半端ないチートなのは間違いないのだ。

彼1人いれば、南の島で栄枯盛衰を突っ走ったナウルのような、
モノカルチャー経済の国が出来上がる。

それに気がついてた為政者が、この世界にはいなかったわけだ。

「アキラ1人いれば、中東のような国が作れるんだぞ？」

「そういう文明があればな。生体油田として使われるなんてまっぴ
らごめんだが」

一応、彼もその可能性について考えてはいたらしい。

「美味しいって食べられるのお？」

セテラは、アキラの黄色いウネウネに興味があるようだ。

「ああ、美味しいぞ？」

「僕は食べさせてもらったよ！　すごく美味しいんだ！」

ツイッツラは、アキラのマヨネーズを食べたらしい。

意気消沈している獣人たちを従えつつ、和気あいあいと話をしな

がら丸太橋をクリアしていると——湿地の終わりが見えてきた。

ゴール地点の木の根元に黒い影がいる——森猫だ。

彼女たちも俺たちに気がついたらしく、丸太の上をこちらまでやってきた。

さすがのバランス感覚。

丸太の上でも、普通の地面と同じように歩く。

そりゃ、飼い猫だって塀の上を平気で歩くしな。

このぐらいは余裕か。

「お母さんたち、待っただろ？」

「にゃー」

待ってはいたが、暇はしてなかったようだ。

「デカイスライムと遭遇したんだが、お母さんたちは見なかったか？」

「にゃー」「みゃ」

どうやら遭ってないらしい。

俺たちは、ちょうどタイミングが悪かったか。

色々あったが湿地帯をクリアしたので、また車が使える。

ほんと胸をなでおろすが、心配ごともある。

あの突撃虫ってのに、車が標的にならないだろうな？

248話 共和国の村

超高速で飛び回る虫や巨大なスライムを退けて、俺たちは湿地帯をクリアした。

湿地帯の先はまた深い森になる。

エルフの話では、あと半日ほどで到着できると言う。

森の人の脚で半日ってことは、車なら2〜3時間だとは思うのだが、到着する頃には暗くなりそうだ。

村にお邪魔するなら、明るいうちにしたい。

もし拒絶されたら、泊まる場所を探したりして右往左往することになるしな。

湿地帯の近くはスライムが怖いので、車で30分ほど森に入ってからキャンプを張ることにした。

ラ○クルをアイテムBOXに収納すると、コンテナハウスを3つ出す。

飯の準備をしながらツイツツラに村の話を聞こうとしたのだが、獣人たちがしょんぼりしたままだ。

アイテムBOXからチュ○ルを出して、彼女たちにやる。

「ほら、これでも舐めて元気を出せ」

「でもよお……旦那あ」「にゃ……」

耳を伏せて、彼女たちの気持ちを表しているかのように尻尾は垂れ下がる。

やっぱり戦闘で逃げ回ることが重なったことを気にしているようだ。

「気にするな。強い敵がいたら、俺やアキラに任せればいいんだ」
「私もいるし！」

アネモネが話を聞いていたのか、椅子を並べながら声を上げた。

「そうそう、うちには大魔導師様もいるしな」

「でもよお……」 「うにゃー……」

「俺から離れたらブラシをかけてくれる男がいなくなるぞ？」

「……」

それはどうしても捨てがたいらしい。

抱き寄せて頭をナデナデしてやったら落ち着いたのか、チュールを舐め始めた。

獣人たちをなでながら、エルフと行き先である村の話をする。

「俺たちが村に行っても大丈夫だろうか？」

見るからに怪しいし、こんな森の中で商人とか言っても信じてもらえない。

まさか本当のことを言うわけにもいかんし。

それに共和国に転移門のことも知られたくない。

「エルフがいれば、拒絶することはないと思うけど」

ツイツツラも、その村に行ったことがあるらしい。

あんな湿地帯を簡単に通り抜けることができるのだから、エルフの身体能力も半端ない。

俺は車や重機がないとなにもできないからな。

「その村ではエルフは歓迎されているのか？」

「ああ———というか、この国自体がエルフの里を模倣して作られているから」

「エルフは偉大な先生みたいな感じか……」

「そうそう、共和国は神様ってやつを拝むのを禁止しているしね」

「もしかして、エルフは神様代わりになっているのか？」

「うーん、そうなのかなあ……」

エルフたちも確信は持てないらしいが。

「それじゃ、村に行っても心配はいらないか……」

「村には医者もいないようだし、回復魔法ヒールを使える人もいなかったから、エルフが歓迎されているだけかもしれないけどね」

共和国の制度は、必要な人材が中央から送られてくるという話だったが……。

「王国で聞いた噂によれば——そういう人材は、各村が平等になるように中央から送られてくるんじゃないか？」

「そうなんだろうけど、本当に役に立つ人がいないらしいよ。今から向かう村では、医者だという只人を追い出してしまったらしいし」

「そうなのか」

役に立たずデタラメな治療をするので、村人が医者を追い出してしまったという。

そりゃそうだな、そんなことをしていたら治るものも治らなくなってしまう。

そのような村の運営を巡って、管理をしている役人と村人の対立が絶えないようだ。

夕飯は皆で食えるようにカレーにしたが、エルフたちはカレーが駄目なのでカップ麺にする。

金髪の森の妖精たちがカップ麺でいいと言うのだから悩む必要はないが、いつも同じ麺なので変わったものにしてみるか？

「エルフって辛いのが駄目だよな？」

「うん」

——となると、カレー味や、チリトマトも駄目だ。
美味しいのに……。

「それじゃシーフードでいってみるか」

「ケンイチ、カップ麺なら俺にも」

アキラはカップ麺も食べるらしい。

「カレーの他にカップ麺も食うのか？」

「俺もカップ麺を食べないと、ツイツツラと一緒に食べられないじゃん」

「あゝはいはい」

俺はちよつと呆れて購入のボタンを押した。
バラバラとシーフードのカップ麺が3つ落ちてくる。

「お湯は俺の魔導コンロを使うから、いいぞ」

「オッケー」

「オッケーにゃ！」

チュ○ルを舐めて、ミヤレーもちよつと元気が出たらしい。
森猫たちにもネコ缶を出してやる。

俺たちのカレーもレトルトだが、ぶつ切りのコカトリスの肉をカレー粉で炒めてから、カレーをかけた。

香ばしいカレーのにおいに、獣人たちも鼻をヒクヒクさせている。

ちよつと離れた場所では、ツイツツラとアキラがラーメンを食べながらイチヤイチヤしている。

エルフたちは箸を使えないので、プラ製のフォークを使う。
アキラとツイツツラを見たセテラが俺の所にやってきた。

「ケンイチ、あーん」

彼女のラーメンをフォークで差し出してくる。

「ちょっと待て——アネモネ、皆にカレーを盛ってくれ」

「うん！」

食事の準備をしているのに、セテラが待ってくれない。

「ほら、ケンイチ、あーん」

「それはいいが、俺の食べ物じゃエルフは食べられないだろう？」

「ケンイチが食べてから、私に食べさせてくれれば？」

仕方ないので食う。

俺が食ってから、セテラにも食べせると彼女は嬉しそう。

これがエルフ流の愛情表現だっていうのだから、付き合ってやる。

この国はエルフが崇められているわけで、彼女たちがいればかなり優位に交渉が進められるのは想像に容易い。

彼女のご機嫌を取るのもやぶさかではないだろう。

——とはいえ、彼女のことは嫌いではないし、仲良くやって異種族間同士の架け橋になればと思っている。

「ケンイチ！ あーん！」

今度はアネモネがカレーの乗ったスプーンを差し出してくる。

「聖騎士様！ 妾もじゃ！」

アマランサスも対抗意識を燃やしまくる。

俺が自分で食う前に腹がいっぱいになりそうだ。

アネモネとアマランサスにカレーを食べさせて、獣人たちにも食べさせてやることにした。

「ニヤメナ、ここにおいで」

俺は自分の膝を叩いた。

「え？ ……いいよ、旦那」

彼女が恥ずかしそうにモジモジしている。

「ほら、俺のことが嫌いになったのか？」

「そ、そんなことねえけど……」

恥ずかしそうに彼女が俺の膝の上に乗ってきたので、毛皮をなでながらカレーを食わせてやる。

美味しそうにカレーを食べると、俺に擦り寄り喉をゴロゴロと鳴らす。

「ウチもにゃ！」

ミャレーが後ろから抱きついて顔を出してきたので、彼女にもカレーを食わせる。

そのまま顔をスリスリされると、カレーのにおいが顔につきそうだ。

「よしよし、今日は皆で一緒に寝るか」

獣人たちが情緒不安定なので、群れで寝たほうが落ち着けるんじゃないだろうか。

チラリとアネモネやアマランサスを見たが、OKらしい。

彼女たちも解ってくれている。

「セテラはどうする？ 1人で寝てもいいが」

「なんでえ！ 私だけなんで仲間外れなお？」

「いや別に仲間外れじゃないから、一緒に寝るなら寝てもいいが」

「それじゃ一緒だし」

皆で夕食を食べ終わったので、コンテナハウスに入った。

3つ出したのだが、1つは収納して、ちょっと離れた場所でアキラとツイツラが一緒だ。

鉄の箱の中に入れば熱と二酸化炭素に寄ってくるという、あの突撃虫の襲撃もないだろう——多分。

コンテナハウスの中にベッドを3つ出し、獣人たちにブラシかけをしてやる。

「なーん」「うなーん」

ベッドの上にうつ伏せになった獣人の2人が、背中にブラシが這う度に変な声を漏らす。

腰から尻尾にかけてなでてやると、腰がピクピクと上がってくるのが面白い。

「アネモネ、ベルたちにもブラシかけをしてやってくれ」
アイテムBOXから取り出したブラシを彼女に渡した。

「うん」

「にゃー」「みゃ」

森猫たちも、ベッドの上で黒い毛皮にブラシをかけられて、気持ちよさそうにしている。

「ねえ、私もお！」

セテラが俺の背中に抱きついてきた。

「お前に毛皮はないだろ？」

「ちゃんとあるしい」

彼女が自分の金髪を指差したので、俺は新しいブラシをシャングリ・ラから購入した。

セテラに後ろを向いてもらうと、金髪にブラシをかける。

綺麗なストレートヘアなのでブラシに髪が絡むことなく、すぐに終わる。

「はい、終了」

「ええーっ！ もっとやってよお！ その獣人たちには沢山やっていたじゃない」

「そんなことを言われても、そもそも毛の量が段違いだし」

「もう！ 私に対する愛はないのか」

どうしろってんだ。

困っているとアネモネが手を挙げた。

「はいはい、私も！」

アネモネも俺の所にやってきたので、彼女の黒い髪にもブラシをかける。

初めて彼女に出会ったときにはボサボサだった髪も、今では天使の輪が光っている。

こちらもすぐに終わってしまった。

「はい、おしまい」

「もっと！」

「君もか」

呆れていると、アマランサスが編み込んだ自分の髪を慌てて解き、俺の所にやってきた。

いつも金髪を編み込んでアップにしているが、それを降ろすと背中の中の辺りまである。

「聖騎士様 あ、妾もじゃ……」

「アマランサスは髪が長いからブラシのかけがいがあるな」

彼女の柔らかい金髪にブラシをかけ終わると、皆でベッドに寝転ぶ。

俺は獣人たちと一緒に寝ることにした。

彼女たちには早く元気になってもらわないとな。

「それじゃあ、私はアネモネと一緒に寝るう」

セテラがアネモネに抱きついた。

「やめろおお！」

アネモネは本当に嫌そうである。

小さな魔導師に嫌われてしまったエルフが、チラリとアマランサスを見たのだが……。

「貴殿には申し訳ないが……」

エルフト、聖騎士の力を持つらしいアマランサスの身体能力はほぼ互角。

無理やりするのも難しいだろう。

「ケンイチいゝ！」

2人に嫌われたセテラが俺に抱きついてきた。

「獣人たちと一緒になら寝てもいいぞ」

「うん」

なんだか子供みたいなのだが、これで5000歳だからなあ。

結局、セテラが一番いいポジションを取ってしまった。

まあ、いいけどね。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

——湿地帯をクリアした次の日の朝。

森の深部でのキャンプで少々心配だったのだが、何事もなく朝を迎えることができた。

皆で食事を取る。

エルフたちは普通に食パンを食べているが、バターなどは駄目らしいので、マーガリンにジャムを載せて食べている。

彼らはバターを知らなかったが、においを嗅いで牛由来のものとすぐに解ったようだ。

一緒に俺は、マーガリンに砂糖を載せて食べる。

俺が暮らしていた北海道だと、こういうパンが普通に売っているのだが、なぜかイギリスサンドという名前で売っている地域もあるらしい。

なぜイギリスなのかは知らん。

「お、ケンイチ。俺もそれ！ 北海道で売っているパンだよな」
アキラもマーガリンと砂糖で食べるらしい。

彼は北海道で暮らしていたこともあるので、食べたことがあるみたいだ。

類似品で、マーガリンにジャムを載せたものも商品として売られている――マジで。

気になる獣人たちを見ると、だいぶ元気が出たようだ。
パンを食べている彼女たちの所にいくと座り込んで話す。

「大丈夫か？」

「にゃー」

ミャレーの頭をなでて、顎をなでてやるとゴロゴロと大きな音を出す。

「ニャメナは？」

彼女の頭をなでると、なぜか泣きそうな声を出す。

「旦那あ……あまり優しくしないでくれよ……」

「え？ 別にいいだろ？ 優しくされたら困るのか？」

そこにベルがやってきて、俺の背中に身体を擦り付け始めた。身体を擦り付けて、180度ターンして反対側を擦り付ける。

手を伸ばして、彼女の黒くて艶やかな毛皮をモフモフ。
この手触り、やはり只者ではない。

「ほら、お母さんにも優しくしてあげてるよな？」

「にゃー」

俺がなでてやっているベルが目を細めていると、いきなりニャメナが抱きついてきて押し倒された。

「うなーん！」

突然のできごとに、ベルも逃げた。

「わぁ！ どうした？！」

「なーん！」

俺の言葉に返事もせず、彼女は顔をスリスリしている。

「トラ公！ 朝っぱらからなにをしてるにゃ！」

「うるせえクロ助！ いいところなんだから黙ってる！」

「ははは、喧嘩すんな」

ニャメナの下敷きになったまま、彼女の背中をナデナデ。

尻尾もなでてやると、俺の腕に長い尻尾が絡みついてくる。

「なーん」

「ミャレーもなでてやろうか？」

「要らないにゃ。朝っぱらからトラ公の痴態を見たら、ドン引きしたにゃ」

「痴態って言うな！」

よしよし、会話だけ聞いていると元気が戻ったようだな。

獣人たちも復活したようなので、食事の後片付けをして出発の準備をする。

アイテムBOXから車を出した。

「エルフの脚で半日ってことは、こいつだと2〜3時間ってところだろう」

「昼前には着くな」

「そうだな。それにしてもやつと人里だよ……」

「エルフが協力的で助かったな。彼らがいなかったら詰んでたぜ、ははは」

「笑い事じゃないぞ、アキラ。そんな場所に追っかけてきたんだから」

「まあ、やってきちまったものはしゃーない。それに、あのアマランサスさんを前にしてNOと言える状態じゃなかったし」

「それは悪かったなあ……」

「聖騎士様！ 妾は……」

アマランサスが悲しそうな顔をしている。

俺に非難されていると思っているのだろう。

「アマランサス、別に怒っていないから心配するな。危険な所に敢えて突っ込むのを止めてほしいだけなんだよ」

「妾は聖騎士様の奴隷ゆえ、命を懸けるのは当然でございます」

どうしても止めろって言えば彼女は逆らえないのだろうが……そこまでする必要もない。

「助けにきてくれたことは感謝しているんだよ」

「はい……」

これで彼女やアキラになにかあれば、俺は後悔してもしきれないだろう。

そもそも、こんなことに巻き込んだのは俺なのだ。

——とはいえ、領主になってしまったからには、領主の仕事をしなくてはならんし……。

やはり、森の中でひっそりと暮らして、スローライフを満喫して

いるべきだったのか。

そんなことを言っても、後のカーニバル。

貴族になってしまったものは、今更覆せない。

万が一のことがあっても、それを受け止めなければならぬし、それが責任ある立場にいる人間の義務。

粛々と前に進むだけだ。

皆を車に乗せると、2台の車が暗い森の中を進み始めた。

森の中をエルフがつけた細い道が続く。

2時間半ほど走ると、突然森を抜けて目の前に畑が広がった。

それだけではなく、道がなくなってしまったのだ。

まさか、畑の中を車で爆走して畝を破壊するわけにもいくまい。
俺たちは車を止めて周囲を見回した。

「ケンイチ、畑で道がなくなっちゃったね？」

アネモネとアマランサスも畑を眺めている。

作物もまばらで草ボーボー、畑の状態はあまりよろしくない。

木が生えてないから畑だと理解できたが、これだけみたら野原とさほど変わらない。

「そうだな——ツイツツラ、ここからどうやって行くんだ？」

「僕たちは、畑の中を通ってたけど」

「それはマズいな……距離はどのくらいだ？」

「僕たちの脚ですぐだよ」

距離感覚がまったく解らん。

「んー、エルフの移動速度が俺たちの2倍だと仮定して——5〜6kmって感じかな？」

「にゃー」

ベルが先行して、場所を突き止めてくれると言っているのだが…

…。

「いや、お母さん。森猫が姿を見せると、狩りの対象になってしま
うかもしれないし」

「にゃ」

普通の人間には、森猫は高級な獲物でしかない。
悩んでいると獣人たちが手を挙げてくれた。

「旦那、俺たちが行ってもいいぜ？」「にゃ」

「いや、一緒に行こう。エルフと行動をともしたほうが安全だ」
「それは言えるよ。僕なら知っている只人がいるかもしれないし」
ツイツツラも俺の意見に賛成してくれる。

「その村ができて、どのぐらいたっているんだ？」

「うーん、10年ぐらいたったのかなあ……」
ちよっと、あやふやらしい。

エルフたちには暦もないみたいなので、時間の感覚が怪しい。
なにせ時間が無限にある種族なのだから、慌てる必要もないわけ
だ。

俺はアイテムBOXからドローンを取り出して空に飛ばした。

「なんだ?! すげえ! あれも召喚獣か？」

空飛ぶドローンにツイツツラがはしゃいでいる。

男子らしく、こういうガジェットにはエルフでも血が騒ぐらしい。

「どうだ、ケンイチ? 村が見えるか？」

一緒にアキラが、ドローンのコントローラーに映る映像を観てい
る。

「なんだ?! ああの召喚獣が観ている景色を見られるのか?」

「ああ」

「すげー! 只人のくせにやるじゃん!」

基本的にエルフが只人より上だと思っっているせいか、こういうセリフがナチュラルに出る。

俺は、エルフってのは究極の二足歩行生物だと思っっているのなんとも思わないが、彼らの言葉にカチンとくる只人も多いかもしれない。

「ふーん」

セテラもモニタを覗き込む。

「故郷には、もっと高度なものがあつたんだろ?」

「うーん、多分あつたと思う」

それはさておき、はるか遠くに村らしきものが見える――気がする。

モニタに移ったのは村だけではなく、ポツポツと人の姿も見える。

「アキラ、村だぞ。あの方角だ」

俺はアイテムBOXから方位磁石を取り出し、方位を確認した。

「おう、やったな」

「多分あと4kmぐらいだな」

「それじゃ、一時間ぐらいか」

「人の姿が見えたから、そこまで行けば道が解るかもしれない」

「おう、そうだな」

アネモネが俺の服を引っ張った。

「ケンイチ、言葉って通じるの?」

「え？ 帝国でも文字は違うけど、言葉は通じたから大丈夫なのは？ アマランサス？」

「ここに王国があったときに交流があったが、通じておったぞえ？」
「それじゃ大丈夫だろう」

俺たちは車を収納すると、畑の畝うねの中を進み始めた。

元世界の畑に比べたら、あまりにも寂しい畑だ。

草取りも十分にされておらず、雑草なのか作物なのか解らん。

そのまま1kmほど進むと、作業をしていた村人とファーストコ
ンタクト。

恰好は――一言でいえばボロボロ。

お世辞にもいい格好とは言えず、身体はやせ細り頬はこけ、顔色
もよくない。

農具ではなく棒きれのようなものを持っている。

まあ、この畑の状態であれば、あまり作物が採れていないのが一
目瞭然だが。

俺は声をかけてみた。

「こんにちはー！」

俺の言葉に農民たちが驚いて固まった。

予想もしない所から声をかけられて驚いたのだろう。

まさか人が森の中から出てくるなんて思ってたに違いな
い。

「エルフ様！」

「え？！ エルフ様！？」 「エルフ様！」

すぐに農民たちが集まってきた。

その数5人。

農具ではなくて棒きれに見えたそれは、やはりただの棒だった。

「エルフ様！ 病人がおるのです。また助けていただけますか？」
農民がエルフたちの所にやって来たのだが、ツイッツラは手を振っている。

言葉が解らないのだ。

俺とアキラの言葉は、指輪があるから解るのだろうが、彼らの言っていることはまったく解らない。

「セテラ、通訳してくれ」

「解ったあ。病人がいるって？」

「おおっ！ 私たちの言葉が！ エルフ様！」

あのエルフの村には只人の言葉を話せる者がいなかったらしい。

「ツイッツラー——いままで、どうやって村人たちと会話していたんだ？」

「取引の間だけ指輪を貸していた」

「そうなんだ」

「エルフ様の言葉を?!」

農民たちの驚きは、エルフたちとコミュニケーションを取っている俺に向かう。

「俺は商人のケンイチ。エルフたちと取引をしている者だ。そちらの村に伺いたい」

「商人？」 「こんな所に？」 「なんと？」

「なあに？ 私たちの言うことが信じられないの？」

セテラのちょっと厳しい言葉に、農民たちがたじろいだ。

彼女は、農民たちの訝しがる表情にカチンときたようだ。

「いいえ！ そんなエルフ様のおっしゃることを疑うなんて、滅相

もねえ！」

「それじゃ、村に案内してくれるう？」

「解りましただ……」

やはり、この先の村ではエルフを信仰しているようだ。

エルフと一緒に行動しててよかったな。

コミュニケーションもすんなりと取れるかもしれない。

それにしても粗末な生活をしているように見える。

王国の貧乏な村でも、もうちょつとマシだ。

249話 まるで原始人

俺たちは深い森を抜けて、エルフたちと一緒に共和国の村に到着した。

他国の人間なのだが言葉は通じるし、エルフたちがいるおかげでトラブルを避けられそうだ。

共和国はエルフの社会を参考にして作られており、森の妖精たちは人々から尊敬されている。

ツイツラの話では、これから訪れる村では医者などが不足しているらしい。

エルフが訪問したときに病気や怪我などの治療などを対価にして物資を得ていたようだ。

その到着した村だが、畑は草ボーボー。一見すると原野のよう。粗末な格好をした村人たちも、農具を持っておらず木の棒を持っていた。

もしかしたら鋤^{くわ}なども満足になく、木の棒を使っているのだろうか？

王国の貧乏な村でも、ここまでは酷くなかった。

村人に案内されて村に行く。

地面に杭を立てて、そこをロープで結んだだけのフェンスで囲まれている。

中には家——というかバラックが並ぶ。

建築資材に板がないのだろうか？ 板を使っている家も少なく、藁や細い木の枝を編んで壁にしているらしい。

屋根も藁葺き屋根だが、元世界で昔見た茅葺の屋根より数段劣り、

村人たちの服装もボロボロで、疲れ果てた顔をしている。

小さな子供にいたっては裸の子が多い。

村人がこちらをじっと見ているのだが、突然の訪問者がなに者か判断をしかねているようだ。

——とはいえ、エルフがいればトラブルにはならないだろう。

「エルフ様」「エルフ様が2人も……」

やはり、ここではエルフは尊敬されているらしい。

村を見渡してアキラが俺の所にやってきた。

「これはひでえな」

アキラのひそひそ話にうなづく。

アネモネが黙って俺の服の裾を掴んだ。

「これが、共和国の実態かえ……」

国を治める為政者だったアマランサスにとっては、これは見たくない光景のはず。

国の舵取りが悪ければ、国中の村がこうになるのだから。

「旦那、獣人たちもいるぜ?」「結構いるにゃ」

意外、村人の1／3ぐらいは獣人たちだが、皆が裸。

つまりなにも着ておらず、毛皮がボーボー——言っちゃ悪いが、まるで野生動物のよう。

それに、猫人も犬人も一緒に住んでおり、只人たちとも分け隔てがないように見える。

人種の隔てなく平等で、村の全部の財産が共有財産。
なるほど平等かもしれない。

俺は嫌だが。

「森猫だ……」「森猫様……」

猫人の何人かが、その場でひざまずいた。

それはいいのだろうか？ あとでトラブルにならないか？
……。

「ツイツツラ、この村で取引なんてできたのか？ ものがなにもないように見えるが……」

「塩や小麦粉はなんとかあったよ？」

「そうなのか？」

どう見ても、物資がありそうには見えない。

案内してくれている男に尋ねる。

「ここの責任者に会わせてくれ」

「もしかして郷長だべか？」

「郷長……ツイツツラ、郷長つてのは村長と同じなのか？」

「それは中央から派遣されている集落の管理者だよ」

「うん？ もしかして、その郷長とは違う、あなた方のまとめ役がいるのか？」

「へえ、いますだ」

「その人に会わせてくれないか？」

「解りましただ」

男が案内してくれたのは1軒の家。

他と同じようにボロボロの草葺きの家だ。

壁も草でできており、玄関にも扉はなくゴザがかかっている。

建築方式を見ればエルフの村とほとんど一緒なのだが、こちらはみすばらしく見える。

エルフの村はそんな風には見えなかったのに……。

男が中に入ってしばらくすると、30歳ぐらいの背の高い男が出てきた。

穴だらけのシャツに、半ズボンのような下。

元々普通のズボンだったものを切ったのか千切れたのか。

茶色の髪はボサボサだが、だらしないというか諦めている感じはしない。

他の村人と違い目にしっかりとした意思が見える。

身なりを整えたらイケメンだろう。

挨拶をしようとした俺だが、男は無視をしてエルフの前にひざまずいた。

「エルフ様、けが人と病人がおります。助けていただけませんか？」

「用があるのはあっちねえ」

セテラが俺のほうを指差したのだが、彼女が発した言葉に驚いたようだ。

エルフは只人の言葉をしゃべれないという認識だったのだろう。

「エルフ様が我々の言葉を……」

「そのエルフは長生きしているので、只人の言葉を喋れるんだよ」「お前は？」

男が立ち上がった。

どうやら、俺にひざまずくつもりはないらしい。

まあ、そりゃそうだ。俺だってそのつもりはないし。

「俺は商人のケンイチ。エルフたちと取引している者だが、わけあって森に迷い込んでしまった」

「商人？　こんな所に？」

男は明らかに警戒をしている。

案内してくれた村人にも商人と言ってしまったのだが、この国に商人はいるのだろうか？

全財産が共有財産だっていうし、すべて配給制とかになっている

ならば、商人がいらないのかも……。

だが、商人という言葉は知っているので、それ自体はいるのかもしれない。

「商人というわりには、なにも持っていないが……？」

「俺はアイテムBOX持ちだ」

いつも使っている鍋を収納から取り出してみた。

「アイテムBOX！」

「俺の身元は、そのエルフが保証してくれる」

「まあね。私の言うことを信じるならねえ」

男はしばらく考えていたのだが、エルフの言うことを信じるようだ。

「失礼した。私はマサキといいます」

男が頭を下げた。

「ここの郷長とやらとは違う、村の長——ということで間違いないのだろうか？」

「ええ。私が村を取りまとめているのは事実です」

「さっき言ったとおり、俺は商人だ。なにか欲しいものがあれば取引するが？」

「……ほ、欲しいものがあるのは山々ですが、我々には金もありませんし……」

「対価になるなら、なんでもいいが？」

「物資も底を尽きかけてまして……なにも。あるとすれば……」
マサキという男が下を向いてしまった。

彼の表情から見て人身売買みたいなことなのだろうが、それは受けられない。

畑の作物があるが常にギリギリなのだろう。

そりゃ、あんな畑で肥料もなく作物が豊富に採れるはずがない。
焼き畑をしている風でもなかったしな。

「おい、ツイツツラ。こんな状態の村とどうやって取引していたんだ？」

「前に来たときは、こんなに酷くなかったんだよ？」
エルフが話す前ってことは、5年とか10年とかそんな話なんだろうけど。

「エルフ様と普通に会話を……」

「さっき言っただろ？ エルフと取引しているから、会話ができる指輪をもらっている」

俺は指にはまっている指輪を見せた。

「それは本当よお」

セテラも俺の持つ指輪の正当性を主張してくれた。

「それは解りましたが……我々には、なにも残っていないのです」
彼の深刻そうな顔が、全てを物語っている。

「それでは情報を買うよ。色々聞きたいし、答えてくれたら対価を払う」

「なんなりと……」

彼の反応を見て、正直に話してもいいと思った。

「実は、俺たちは共和国の人間じゃない」

「そう——なのですか？」

彼が訝しげな顔をしているが、信じられないのも仕方ない。
悪いが、転移門のことを話すわけにもいかないしな。

「ああ、理由は言えないが、エルフが住んでいる近くの森に迷い込んだ」

「そのようなことが……」

「それでな、この国のことを色々と聞きたいんだ」

「解りました」

まずは、俺の身分を適当に商人と言ってしまったのだが、この国にも商人はいるらしい。

地方には回ってくることもなく、支配階級やら、他国との貿易を行なっている連中のようだ。

なんだ全然平等じゃないじゃん。

要は経済ピラミッドがぶっ壊れて、ひたすら底辺が広がって一部だけが高い塔になっただけだな。

「村には、物資や人材が配給として送られてくると聞いたが？」

「満足に送られてきたことはありません。役に立たない人材を送られてきてもただの穀潰しなので、拒否したら物資も送られてこなくなりました」

素人みたいな医者がやって来ても役に立たないだろうし、下手したらかえって悪化する。

それなら民間療法や薬草でも使ったほうがマシだし、回復魔法ヒールを使える魔導師ってのは結構貴重な存在。

各村々に送り込むほど、数もないだろう。

そんなこんなで、医者も魔導師もいないらしい。

「それじゃ今は自給自足なのか」

「はい」

自給自足と言っても限度がある。

大工がいなければ家は作れないし、鍛冶屋がいなければ農具も作れない。

布だってなんらかの方法で糸を紡いで機織り機がなければ作れない。

いし、布がなければ服だって無理。

それでこんな村の有様なのか。

初期に持ち込んだものだけを使って、なんとかやってきたに違いない。

これならまだ貴族支配のほうがいいような気がするが……。

「俺たちは王国に行きたいのだが、道はあるか？」

彼は黙って指をさした。

コスモ山脈と並行するように、道があるようだ。

道と言っても整備された道ではなくて、獣道に毛が生えたようなものらしいが。

その道をたどれば、かつて王国と交易するのに使われていたという峠道につながる街道に出ることができるのだろう。

「それだけ情報をもらえば十分だ。対価の物資として、なにを優先したい？」

「魔法による治療か、薬を……」

エルフたちにも治療をしてくれと言ってたからな。

「回復魔法^{ヒール}は使えるが、治らんものもあるぞ？」

「それは承知している」

「それじゃ、病人やけが人を連れてきてくれ」

「本当に治療できるのか？」

「ああ」

「解った、すぐに集める！」

男が村中を走り回る。

「にゃー」

ベルが俺の所にやってきた。

危険はないようなので森に行くと言う。

「よしよし、飯時には戻っておいで」

「にゃ」「みゃー」

森猫たちが畑の方に走っていく。

草ボーボーなので、すぐに姿が見えなくなった。

リーダーの男が走り回ったので、すぐにけが人と病人が集まってきた――人数は10人ほど。

怪我をしている者には、まずは傷口を消毒してから魔法を使う。

脚を怪我して、化膿している頭の剥げた爺さんがやってきた。

ベルに使った抗生物質の軟膏があったはず。

それをアイテムBOXから取り出すと、傷口に塗って俺の祝福を使う。

これが魔法かは解らないが、回復ヒールの魔法と効果は同じだ。

受けた者がちょっとハイになるのが、少々違うところだが。

化膿した場所の腫れが引いてきた。

「あとは、この薬を飲んでくれ」

俺はアイテムBOXから鎮痛剤を取り出して、爺さんに渡した。

「むー！ 回復ヒール！」

アネモネは子どもたちを治療しているが、裸の子たちはなんとかしなくてはならない。

――とはいえ、大人がボロボロなのに、子供にピカピカの洋服を着せるのも……。

見れば60〜70人ぐらいの村人がいるので、全員に服は配ってられない。

「うーん」

俺はシャングリ・ラから麻のシーツを購入した。

そいつを半分に切って、真ん中に頭を通す穴をあける。

頭を通して、腰を縄で結べばなんちゃってワンピースの完成だ。これでも裸よりは、かなりマシだろう。

子供は10人ぐらいだったので、シーツを5枚買って、全員に作ってやった。

男の子も女の子も同じ格好だが、贅沢は言っていられないはず。

「ケンイチ、こっちも終わるぞ」

「サンキュー」

同じ祝福持ちのアキラとエルフたちにも手伝ってもらう。

回復ヒールが使えるものが5人いるから、患者が10人いても、1人で2人治療すれば終わる。

「おおっ！ 身体が楽になった！」 「ありがとうございます！」

「本当は栄養のあるものをもって、なん回か治療をしたほうがいいんだがなあ」

「回復魔法ヒールを使える方がこんなにいらっしやるなんて！」

この村のリーダーも驚く、うちのパーティの最強っぷり。

最後は俺の所にきた背の高い獣人の女だ。

明るい茶色の毛皮で腹が白いが、2mぐらいあるんじゃないだろうか。

筋骨隆々の男の獣人たちよりデカくて、元世界のスーパーモデルのよう。

服を着ておらず裸なので毛皮の様子がよく分かる。

髪の毛までつながる長い毛は、ボサボサで汚れており毛艶もよくない。

毛艶がよければ美人さんだと思うのだが残念だ。

見ればいつのまにか他にも獣人の女たちがいる。

どうやら俺は獣人の女たちに好かれることが多いのだが、ここで

もそうなのだろうか？

俺に向けられる視線を遮るように、ミャレーとニャメナが牽制している。

「ミャレーとニャメナ。問題を起こすなよ」

「旦那、向こうの出方次第だよ」「そうにゃ」

「はい、次はお前か？」

俺の前に女が立った。

「よろしく頼むよ……」

彼女が恥ずかしそうにしているが、獣人たちは裸でも問題がない。恥ずかしそうにしているのは裸だからではないのだ。彼女に症状を聞いてみる。

「どこが悪いんだ？」

「……」

彼女が黙って後ろを向く。

「な?!」「にゃ!?!」

女の尻尾の部分を見て、ミャレーとニャメナがダッシュでいなくなった。

尻尾の付け根部分が禿げていて、それが尻尾の途中まで続いているが、地肌が見えると只人の裸と変わらんな。

これは多分皮膚病だろう。野良犬や野良猫でこんな具合になっているのを、ネットで見たことがある。

獣人たちは毛並みや毛艶で優劣をつけるらしいので、彼らにとってこれは厳しい試練だと言える。

「これは、かゆいだろ？」

「ああ、痒くて眠れないときがある……」

確か、人にも伝染るやつだな。

「これは他のやつにも伝染るから、一緒に寝たりしたら駄目だぞ？」

「だから、いつも1人で寝てるんだ」

「それは、いい判断だな」

どうやって治療をするか考えていると、離れた所から声がする。

「旦那！ それって伝染るやつだぞ！」 「全身の毛が抜けてハゲになるにゃ！」

ああ、犬や猫だけではなく、野生動物でも罹患するのがいるらしいからな。

熊などの毛が全部抜けて、別の生き物みたいになったのを見たことがあるし。

「うーん」

シャングリ・ラで皮膚病の薬を検索するが、処方箋が必要な人用の薬などは売ってない。

検索でヒットするのは、犬猫に使う皮膚病の薬だ。

毛皮を着てる時点で、只人よりは犬猫に近い気もするし……これを使ってみるか。

本当は生理機能が違うからヤバいんだよなあ。

人間には薬でも、他のいきものには毒になることもあるし。

シャングリ・ラから皮膚病薬のクリームを買う。

まずは消毒か。

「ひゃ！」

消毒アルコールの冷たさに、女が飛び上がった。

「ふーん、尻尾の付け根ってのは、こんな具合になっているのか」

「み、見ないでくれよ……」

「見ないと治療できないしな」

瓶に入った軟膏を指で掬い、禿げている部分に塗り込む。
ちよつと広い範囲に塗ったほうがいいだろう。

「うにゃあああん！」

女の腰がプルプルと震えている。

「変な声を出すな」

「だ、だってよお……」

「だ、旦那あ！ そいつにくつつきすぎだろ?!」 「そうだにゃ！」

「そんなこと言っても、掴まえてないと塗れないし」

尻尾にも塗り込む。

「うにゃ！」

女の身体がビクビクしている。

最後の仕上げに、回復ヒールの祝福だ。

「おりゃ！」

「ひゃあああ！」

茶色の毛皮が、その場に座り込んだ。

「しかし、これで本当に治るのかなあ」

相手が寄生虫とかだと、回復ヒールを使っても意味がないような気がするが。

寄生虫と言えば、全員に虫下しを飲ませたほうがいいのかもしれないが……。

シャングリ・ラを見ても、人間用の虫下しは売ってない。
あるのは犬猫用ばかりだ。

「ケンイチ、これって疥癬だろ？」

アキラがやってきて、獣人のハゲた毛皮を見ている。

「まあ、多分な。寄生虫が原因なのに回復ヒールが効くと思うか？」

「さあな。祝福ってぐらいだから、なんでも効くんじゃね？」

「ならいいけどなあ」

とりあえず、やってみないことには解らない。

へばっている獣人の女を抱き起こす。

「あっ！ 触らないでくれよ……」

彼女の身体を触ってみても、村人のように痩せている感じではない。

獣人であれば森に入って獲物を獲れるので、飢えることがないのだろう。

「これだけ獣人たちがいるなら、畑作業より狩りをしたほうが腹を満たせるんじゃないのか？」

「たまに狩りもやっているけど、これだけの人数を狩りで養うってのは大変だよ」

彼女の言うとおり、毎日獲物を獲ればすぐにいなくなってしまう。近場の獲物の数が減ったら遠くまで遠征する羽目になるしな。

「それなら、獣人たちだけで逃げだして、独立したほうがいいんじゃないのか？」

「生まれたときから皆と一緒になんだ。そんなことはできないよ」
ここにいる獣人たちは、生まれてからずっと只人と一緒なので、逆に獣人部族のしきたりを一切教えられていないらしい。

それしか知らないの、獣人たちだけで暮らすという考えすらないようだ。

王国の獣人たちをこういう場所に押し込めたら、確実に独立の話

が出るだろう。

彼らは只人に近い獣人と言えるが――これは種族に対する文化破壊だな。

俺の心の底辺に黒いものが渦巻くが、ここは自重だ。

治療が終わり皆が感謝していると、俺の所にアネモネがやってきた。

「この村の皆を助けてあげられないの？」

彼女が悲しげな顔をしてそんなことを言う。

「うーん、ここは他の国だからなあ」

俺の領であれば、村人に投資しても皆が頑張ってくれればそれが戻ってくるわけだが、他国の人間を助けたとしてもそれがない。

俺たちがここを発ってしまえば、もうそれっきり。

子供の純粋な気持ちに、政治やらなんやらという大人の事情という、黒いもやもやで包まれた言葉で返すことしかできない。

「だって可哀想だよ？」

「アネモネはそういうが、ここで多少の物資を渡してもすぐに元に戻ってしまうわけだし」

「それじゃ、皆をケンイチの所に連れてくれば？！」

彼女が嬉しそうな顔をするのだが、それも問題がある。

「うーん、他国の人間を勝手につれていくのは、拉致だからなあ」

「アネモネちゃん、下手にそういうことをすると戦争になったりするんだぜ？」

アキラの言うとおりで。

「なあ、アマランサス」

「そのとおりじゃの。王国の人間が他国に乗り込んで、農民を拉致した——などということになれば、国際問題間違いなしじゃ。戦争になったりすれば、まちがいなく聖騎士様の責任を問う声上がる」
「……」

彼女には政治の難しい話は解らんだろうが。

王国の村ならまだ手があるんだが、ここは他国だ。

「じゃが、聖騎士様がどんな決定を下しても、妾はついていきますぞ？」

「はは、ありがと」

「私もそうする……」

「ゴメンな、アネモネ」

彼女には悪いが自重する場面だ。

ちよつと大人の事情という格好悪いところを見せてしまったので、ちよつと挽回しておくか。

「ちよつといいか？」

俺はリーダーの男に声をかけた。

「俺のアイテムBOXの中に、道すがらで獲った魔物などが入っている。それなら分けてやれるが？」

「本当ですか？」

「ああ」

溜まる一方で処理しきれないからな。

とりあえず、よく獲れる黒狼を10頭ほど出した。

彼の話では村人は71人らしい。

まあ10頭を解体すれば、70人ぐらいは食えるだろう。

ここにはアイテムBOXがないので、多く出しても保存に困るだろうし。

物資がないということは、塩なども限られた分しかないはずだ。

「「おおっ！ 肉だ！」」

いつの間にか集まってきていた、村人たちから歓声があがる。

「処理はしてないから、そちらでやってくれ」

「承知した」

「塩はあるか？」

「……ない」

シャングリ・ラから業務用の塩を買う。

25kgで2000円と安いが、ここでは貴重品だ。

「ポチッとな」

茶色の紙袋が落ちてきた。

「ほら、こいつをやる」

「こ、これはもしかして塩か？！」

「そうだ、このぐらいあればしばらくはなんとかなるだろう？」

「ありがたい！」

リーダーの男がひざまずいて感謝している。

まあ、このぐらいなら俺の財布も痛くないしな。

「あ！ そうだ」

俺はアイテムBOXに入れたままの首長の魔物を思い出した。

身体は巨大で収納できなかったので、首だけが入っている。

アイテムBOXから出すと、長い魔物の首が出現した。

「うわああ！」 「魔物だ！」 「ぎゃあ！」

「俺たちが倒したものだから、もう死んでる」

「こ、これを……？」

「ああ、食えるなら食ってもいいぞ？ 処分に困るだろうし」

その前に食えるだろうか？

まあ、レツサードラゴンやらワイバーンも食えたし、巨大な爬虫類みたいなもんだから問題ないと思うが。

ナイフを取り出すと、薄ピンクの肉を少し切って、アネモネの魔法で加熱してもらう。

それを口に入れる――脂身のない鶏肉だな。

変な味もしないし、妙な臭みもない。

少々の毒があっても祝福持ちの俺には効かない――とアキラが言っているが、まだ試していない。

「うん、普通に食えるぞ？」

「ほ、本当か？」

「ああ、黒狼より美味いかもしれん。鳥肉みたいな味だと思えばいい」

俺の言葉を聞いて、ワツと村人たちが群がった。

余ったら塩を追加して、干し肉やら塩漬けにすればいいだろう。

これでしばらくなんとかなるだろうか？

250話 郷長という虎の威を借る狐

次々と襲ってくるトラブルを片付け、エルフの案内で共和国の村に到着した。

情報は仕入れられたが、住民はかなりボロボロの状態。

アネモネは可哀想だと言うのだが、こりゃ他国の問題だからなあ……。

——とはいえ、まったく無視なのも不憫だ。

幸いアイテムBOXの中には、倒した魔物などが余っている。

このままじゃ増える一方なので、少しばかり放出。

塩なども、シャングリ・ラで買えば安いので与えることにした。

久しぶりのご馳走なのか、住民たちは張り切って魔物の解体を始めた。

首長の魔物は食えるか心配だったが、一口食べてみても鳥のような味で問題ない。

ドラゴンやワイバーン系の味だ。

住民たちのリーダーの男に話を聞く。

「塩がないと暮らせないんじゃないのか？ どうやっているんだ？」

「そ、それは……」

「エルフとの取引にも塩が入っていたと聞いたが？」

「し、塩はある所にはあるんだ……」

「そうなのか？」

男が黙って、村の外れにある家を指差した。

あちこちにあるバラックと違い、板を使ってある高床式の家——
玄関には階段が見える。

立派ではないが、まだ家としての体裁を保つ。
明らかに村の家とは違う。

「あそこにいる郷長が持っているんだ……」

「ははあ、中央から配給が来ると、あそこに行くのか？」

「そうだ」

「だが、この村の様子からすると独り占めしている？」

「……そうだ」

「そこからどうやって物資をもらう？」

「女などを差し出す……」

その話を聞いてアマランサスが憤慨した。

「呆れた為政者もあつたものじゃの！」

「送り込まれてきた人材を拒否したりしたせいで、こうなっているのか……」

「そうなのだ」

中央から約束された人材は送られてこない。

物資は独り占めされる。

「そんなやつ、ぶっ殺しまえばいいのに」「そうにや」

獣人たちが物騒なことを言うが、これじゃいつ反乱が起きても仕方ない。

「そんなことをすれば、完全に物資が絶たれてしまう」

「通貨は流通してないのか？」

「中央にはあるらしいが、ここにはない」

通貨はないし、余っているものもないから、他の村との売買もできないってことか。

送られて来る物資と自給自足だけでなんとかするわけだ。

「税金は？」

「収穫した麦の5割ほど」

「5割かぁ……それじゃ食うものも残らないだろう」

ごまかそうにも、郷長という男が作付面積を管理しているので、できないらしい。

時間がある限り森の中で狩りや食い物を採取して、なんとかしのいでいるようだ。

「それでなんとかするしかないのだ……」

「やれやれ、国を潤したいのか滅ぼしたいのか解らん」
アキラの言うとおりだ。

皆で暗い顔をしていると、1人の男がやってきた。

中肉中背で、黒い頭はボサボサで無精髭を生やした男。

顔には大きな鼻が目立つが、そのほかに特徴といったものはない。変哲もない麻のシャツとズボン姿だが、村人のボロボロよりはい服装をしている。

手にはワイン瓶らしきものを持っており、物資として送られてきたワインも独り占めしているに違いない。

こんな時間から飲んでいるのか、顔が赤い。

「これはエルフ様！ またなにか取引でございますかな？」

男は広場にいるエルフたちに気がついたようだ。

当然ツイツラやセテラは、関係ないので黙って首を振る。

「それにしても賑わっているじゃないか？ 新しい獲物が手に入ったのか、ヒヒヒ」

男が村人たちが群がっている黒狼や首長の魔物を見て、いやらしそうに笑う。

こいつが郷長という男か。

中央政府の威光を借りて物資を独り占めしているらしい。
まさに虎の威を借る狐。

「おお?! なんじゃこりゃ、竜?!」

男が、デカイ獲物に驚いている。

当然、村人たちからは煙たがられているようで、誰も相手にはしていない。

完全無視されている状態なのだが、その状態でも態度を崩さないのだから心臓に毛が生えているのか、よほど鈍感なのか。

エルフがいるのであれこれ媚を売って無視されていたのだが、すぐに俺たちに気がついた。

そりゃ、村人たちのボロボロとはまったく服装が違うからな。

「なんだお前ら、見ない顔だな」

下から上まで舐めるような視線で俺たちを見ている。

「はじめまして、我々は商人の一行でして」

「なに?! 商人だあ? 商人なら、ものはどこにある?」

「私はアイテムBOX持ちでして」

俺は、シャングリ・ラから買った一番安い赤ワインを買って、男に差し出した。

「むほ! こりゃ良さそうなワインだな! 見事なガラス瓶だ!
素晴らしい!」

「はい」

「どこから来た?」

「それは、ちょっとお話しできませんが、これで一つご勘弁を――」
俺は、もう1本ワインを男に渡した。

「なに?!」

男の顔が険しくなる。

暗にもっとよこせと言っているのだろう。

意地汚い男だが、学はありそうに見える。

中央の学校を出て、こんな僻地に飛ばされたんじゃ、ひん曲がるも無理もないとはいえ――。

俺はシャングリ・ラから、赤ワインの12本セットを買った。

色々なワインの詰め合わせセットだ。

紙の箱に入ったワインが落ちてきたので、それを男に差し出した。村人たちからどよめきが起こる。

「それではこれで――」

「ふん! おい、いい女を連れているではないか! その女に酌をさせろ」

男が指差したのはアマランサスだ。

王国における女性の頂点ともいえる存在に酌をさせるなんて、本当はかなり大それたことなのだが、この男がそんな事情を知るはずもない。

今いる中で一番いい女を指差したのだろう。

まさか、エルフに酌をさせるわけにもいくまい。

彼らはエルフを崇めているからな。

「彼女は私たちの護衛をしている戦闘奴隷でして、そのような教育は受けておりません。なにか失礼があったら大変でございます」

「そのような些事はどうでもいいわ! 俺の相手をしろ!」

アマランサスがそんなことを聞くはずがない――男の話も聞いておらず、横を向いている。

だいたい俺がゆるさんし。

そんなことをさせるぐらいなら、ここで一暴れしたほうが簡単だが、村の住民に迷惑がかかるな……。

俺たちにやられた鬱憤晴らしに、村人たちにさらなる嫌がらせをするに違いない。

アマランサスがそっぽを向いていると、男が激昂した。

「このアマ！ このワシを誰だと思っているか！」

こんな男、アマランサスなら片手でひねるところだが、衝突寸前の間にセテラが入った。

「それじゃあ、私が酌をしてあげるう」

「え、エルフ様が、我々の言葉を?!」

予想もしなかった森の妖精の言葉に男が驚嘆した。

「あらあ、私じゃ酌の相手に相応しくないって言うのお？」

「そ、そんなことは……」

いきなりの展開に男がしどろもどろになっている。

まさか、エルフからそんなことを言われるとは思ってもいなかったのだらう。

弱い者にはとことん強く、強い者には尻尾を巻く。

なんか小物を絵に描いたようなやつだな。

「まあまあ、服などもございますよ」

シャングリ・ラから一番安い男物のズボンやらシャツを買う。

安物とはいえ、この住民たちが着ているものに比べたらはるかに上等——男は目を丸くした。

「うむ……解った、見逃してやろう……」

「ありがとうございます」

さすがにビビったのか、エルフの酌は断るようだ。

「おい！ 荷物を俺の家に運べ！ それから、その肉も半分もって

こい」

男が村人たちが解体している魔物を指差した。

「おい！ 商人！」

「はい」

「ワインも足りないぞ！」

「あとで、樽をお持ちいたしますので」

「よし！ 中々話が解るじゃないか、わはは！」

郷長の姿が見えなくなると、俺はリーダーの所に行って話を聞いた。

「肉を半分もよこせて——保存できるのか？」

「いいえ、ああやって村人から巻き上げて権力を誇示しているので
す」

要はただのマウント行為か……。

保存できない肉はただ腐ってしまうだけ。

土に埋めたりして肥料にするらしいが、支配している村人の気力を削ぐ意味もあるんだろうな。

せっかくの肉を切り分けると、支配される側はフラフラした足取りで郷長の所に黙って運んでいく。

「ひでえな」

その光景を見たアキラがつぶやく。

俺も同意見だ。

「独裁国家ってなんで反乱が起きないだろうと不思議に思っていたんだが、こうやって精も根も奪ってしまうんだろうな」

「まあ、そういうのは話には聞くが、実際に見るとキツイな。帝国が天国に思えてきたぜ」

「まったくひでえな、こんなの王国だったら反乱間違いなしだぜ」

「そうだにゃ」

黙って見ていたうちの獣人たちが俺の所にやってきた。

「ケンイチ……」

悲しそうな顔をしたアネモネが、俺の服を掴む。
解っちゃいるがなあ……。

村人たちがセテラの周りに集まり始めた。

「エルフ様！ エルフ様のお慈悲を！」

「ええ？ 私には関係ないしい」

「そんな……」

いつもなら、エルフとの意思疎通は無理なのだが、セテラには言葉が通じる。

この機会に！ ——とばかりにセテラにすがったのだろうか、彼女のそっけない言葉に、住民たちは言葉をなくした。

「エルフは、只人の社会には常に傍観者だし」

「勝手に崇めて、勝手にすぎるなって話だよな」

ツイツツラもつぶやくと呆れている。

「そのとおりい」

彼らは只人のゴタゴタなどに興味はないのだ。

「それにすぎる相手を間違えてるわあ」

セテラが俺を指さした。

「おい、俺に振るなよ」

「だって領主様じゃない」

「まあ、そうだけどな……」

村人を代表して、ここのリーダーがやってきた。

「あなたはいったい……？」

その前に確かめたいことがある。

「こういう国って密告やら、民が民を監視する仕組みがあったりするんだが？　それは？」

「いいえ……他の都市では行われていると聞いたことがあります、ここの住民は一致団結しています」

あるらしい。

本当に、やることはどこの世界でも同じか。

「それじゃ、なにを話しても、あの郷長に漏れることはない？」

「はい」

俺は住民たちの顔を見回して、ため息をついた。

「仕方ない——本当のことを話すが、俺は山脈の向こうにある王国の領主だ」

「領主様？」

「まあな。とある事情でここまで飛ばされてしまったわけだ。それは、そのエルフが証明してくれる」

「彼が言っていることは本当よお」

今度は俺に村人たちが群がりひざまずいた。

「お助け下さい領主様」 「お助けを……」

「おいおい、そういうのが嫌で王侯貴族を倒して、今の国になったんじゃないのか？」

「それは、そうだと聞いておりますが……ここまでひどかったとは聞いていませんでした」

このリーダーは共和国に代わってからの世代らしいが、年寄連中

は王国時代を経験している者たちだ。

その者たちが昔のほうがよかったと言っており、不平不満を漏らす。

ここは見えておりの酷い有様だが、行き詰まっているのは、この村だけではない。

ほとんどの村や街でも、生産性が落ちて物資不足になっているらしい。

「助けると言ってもどうする？ あの手を越えるのか？」

俺は後ろを見て、白い万年雪を頂き延々と続く山脈を指差した。

「領主様は、峠への道順を我々に聞かれました——ということとは峠から王国へ帰還するつもりなのでは？」

「ああ、そのつもりだ」

「私たちも、連れていっていただきたい！」

「かなりの距離があるんだぞ？ 森も続いているし、魔物もうようよいる。途中で命を落とすかもしれない」

「承知しております」

「んだ！」 「そうだ」 「こんな地獄で朽ち果てるぐらいなら……」

アネモネがやってきて、俺の服を掴んだ。

「魔物なら私がやっつけるから……」

俺を見つめる汚れなき大きな瞳。

それに応えたいのは山々だが、可哀想だからといって、ゆく先々で困っている人を全員助けることはできない。

彼女ももう少し大きくなればわかってもらえるだろうが……。

打算もなく純粋な気持ちだけで物事が進むのならいいのだが、世の中はそうもいかない。

トラブルになると知りつつ、それを選択するのは為政者としては少々まずい。

「う、うゝん」

俺は悩む。

小さな大魔導師の信頼も失いたくないしなあ。

俺がどんな選択をしても――多分、うちのパーティーからは異論は出ないと思うが……。

「村の獣人たちはどうする？」

俺が治療をした背の高い女に聞いてみた。

「森猫様が傍にいる只人が悪人のはずがないし……」

「王国の獣人たちは、下に見られることが多いぞ？　俺の領は違うが」

「それなら、旦那の領で暮せばいいんだろ？」

「そうだがなあ――おい、大人たちは？　王国は大人と猫人が分かれて住んでいるんだぞ？」

「旦那のとももそうなのかい？」

黒い毛皮を着た狼のような男が答えた。

「いや、一緒だな」

「それなら問題はねえ」

「そうか？　いきなり文化が違うから、面を喰らうことが多いと思うぞ」

「俺たちは普通に働けて飯が食えればいい」

「そうだ」「そうだ」

初めて見たのだが、大人の女もいる。

最初はオサゲかと思ったのだが、どうやら垂れ下がった長い耳らしい。

「お願いします！」

改めて、住民たちのリーダーが懇願する。

「……この場で決めることはできない。そちらも皆で飯を食いながら話し合ってみてくれ」

「……はい」

村人たちも納得してくれたようだし、腹も減っているのだろう。食事の準備を始めるようだ。

俺たちもコンテナハウスを出した。

ここに長居するつもりはないし、できれば明日には出発したい。そろそろ昼なので昼飯の準備をしながら皆と話す。

「ケンイチ、どうする？」

アキラが心配そうだ。

さすがに、こいつは国際問題になるからなあ。

「うーん、まいったね」

村人はおよそ70人。

70人の人間を引き連れて、旅をするシミュレーションを試みる。

まあ、彼らも苦しい旅になることは承知の上、一か八かの勝負に賭けるつもりなので、多少の苦労も理解しているだろう。

苦労といっても、俺のアイテムBOXに入っている物資とシャングリ・ラを使えば、ここで暮らすよりはマシな旅ができる――はず。多分、彼らが決死の覚悟をしているよりは楽ちんな旅になる。

「俺は旦那に従うぜ」「ウチもにや」

獣人たちは俺の決定に従うらしい。

「いいのか？」

「旦那の言うことに間違いはないし」「ウチもそう思うにゃ」
信頼してくれるのは嬉しいけどなあ。

「当然、妾もじゃな」

「私も！」

アネモネも手を挙げた。

「私たちは、どうでもいいかなあ」

「そうだね、エルフには関係ないことだし」
エルフは我関せず。

「俺も部外者だしなあ」

「だがアキラ。あれだけの人数を引き連れていけば、絶対にトラブルに巻き込まれるぞ？ それはいいのか？」

「まあな。俺たちで行ってもどうせトラブルになるし、ははは」
彼は、自分のアイテムBOXから出したビールを、ツイツツラと
回し飲みしている。

彼の言うとおり、俺たちが峠の入り口まで行ってもすんなりとは
いかないだろう。

そこには国民を逃さないためのなんらかの防止策があるに違いな
いし、それを突破しなければならぬ。

「そうなる——どの道、国際問題になるのか……」

「まあ、強引に国境を突破したとなれば大問題だな。どうせ大問題
になるなら、アネモネちゃんの大魔法で盛大にドカンといくか、は
はは」

「いっくよー！」

アネモネが張り切っているのだが、穏便に済ませたいところ。

まあ、無理だろうなあ……。

昼飯を食い終わると、あのリーダーがやってきた。

「どうした？」

「全員で決めた。あなたについていく」

「もう決めたのか？」

「ああ、すでに後がないんだ。今年は不作で、税で半分取られたら何人生き残れるか解らない」

それでもここは森があるので、まだマシな状態らしい。

森が近くにはない街や集落では物資不足から人身売買などが横行して、人肉食も行われているという。

「しかし、そんなに不作になるかなあ……」

農具がないとか問題は多々あるだろうが、なにかが根本的に間違っているのではないだろうか？

そう思って彼らに話を聞いてみると、色々とありえないことをやっているようだ。

彼らの長いスコップのような農具を見せてもらう。

地面に差し込む農具のようだが、なんに使うのだろうか？

「これは？」

「コレは種を植えるときに使います」

彼の話では、地表から50cmほどの深さに種を植えるらしい。

「なんでそんな深さに……」

「根が沢山伸びて、丈夫に育つのです」

「はあ……」

悪い予感がしたが――密集農法も行われているようだ。

つまり農作物を密集させて植えれば、同じ面積でも倍採れるという理屈に基づく。

ぶっちゃけありえないのだが。

「おい、ケンイチ……これって」

一緒に話を聞いていたアキラが渋い顔をしている。
彼もこれを知っているようだ。

「ああ、たまたま似たような考えを持ったやつが中央政府にいたのか——それとも俺たちと同じ転移者か？」

「ありえるな」

エルフの原始共産制を参考にしたと言っていたが、そういう人物が中央にいる可能性も出てきた。

なにはともあれ彼らの決意は解ったし、ここで農業をやってもこれじゃ発展は望めない。

このままでは、いずれは全滅する。

俺は彼らを助けることにした。

リーダーには仲間の下に戻らせて、いつもの生活をしてもらい、
箝口令も敷く。

そりゃ、足抜けがバレたら大変なことになるからな。

「さて、そうすると、あの郷長ってやつが邪魔だな」

「片付けるなら俺が殺ってやるぜ？ ケンイチには無理だろうし」
俺だってやる時にはやるが——。

「まて、俺にいい考えがある。任せてくれ」

「はいよ」

俺の言葉を聞いた獣人たちが騒がしい。

「旦那のいい考えって絶対にヤバイやつだろ？」 「トラ公の言うとおりじゃ」

「そんなことないよ」

「ぜってー嘘だ」「そうだにゃ」

どうも獣人たちには、逆の意味で信頼が厚いらしい。

やることが決まったので、まずは本格的なワイン樽を買う。

1樽2万5000円で、立派な樽が落ちてきた——高さは70cmほど。

新品なのでピカピカ——3樽買う。

次に、こいつは樽だけなので、中身をどうにかしなければならぬ。

シャングリ・ラで、一番安いワインを探す。

郷長という男に渡したものが安かったが、この樽を満杯にしなければならぬので、大量に必要だ。

もっと大容量のワインを探すと、バッグインボックスというものがあつた。

こいつは安くて3Lで1500円ぐらいだが、あまりに不味いという意味がないので一つ購入してみた。

購入ボタンを押すと、ドスンとぶどうの絵が描いてある立方体の紙の箱が落ちてきたので覗く。

紙パックなのか？——と思ったら、紙の箱の中にプラ製のナイロンバッグのようなものが入っている。

「へえ、こういうものもあるのか」

試し飲みをしてみる。

シャングリ・ラからスポイトを買って、グラスに注いでみた。

赤い液体がグラスの中に溜まる。

「聖騎士様、その絵の描いている紙の箱は？」

「これはワインだよ」

酒の味にうるさい、アマランサスに試飲を頼む。

グラスを受け取った彼女は、クルクルと回すようにしてから一口含んだ。

「ふむ——若いですが、これは上等のワインですわえ」

この世界では、少々ともない代物でもワインとして流通しているの、元世界の安物でも十分に美味しいワインということになるのだろう。

こんなの飲んだことがなかったので少々心配だったが、アマランサスがOKだというなら、問題はない。

「ケンイチ、俺にもくれ」

「旦那！ 俺にも！」

ウチの飲んべえグループがワインの試飲をせがむので、注いでやった。

「こりゃテーブルワインなんだろうけど、十分だな」

「うめー！ こりゃ、うめー！」

そりゃ街の食堂なんかで出てくるものよりは、遥かに上等だ。セテラも飲みたそうなので、飲ませてやる。

「あら、これは美味しいわあ」

エルフの口にも合うようだが、ツイツツラは飲まない。

「でも、ケンイチ——これでなにをするんだ？ あの男にやるのか？」

「まあな。だが、ただでやるつもりはない」

俺はアイテムBOXからメスシリンダーを取り出して——シャン

グリ・ラからエチレングリコールを購入した。

「これが最後の決め手だ」

「ケンイチ、まさか——」

アキラも落ちてきた透明な瓶を見て、俺のやろうとしていることに気がついたようだ。

「そのまさかだな」

「いいのか？ それに使うことで、もしかしたら関係ない善人も巻き込まれることになるかもしれないぞ？」

「それも覚悟の上だ」

獣人たちも俺の用意したものに気がついたようだ。

「旦那、それって……甘い毒ってやつだろ？」

「そうだ」

ニャメナの顔が恐怖に染まり、尻尾が逆立って極太になる。

彼女たちから、なにを言われても仕方ない。

他のいい方法が思い浮かばないのだ。

251話 毒ワイン

俺たちは共和国の村にたどり着いた。

彼らの暮らしぶりは貧窮しており、まさに崩壊寸前。

エルフの一言から、俺が隣の王国の領主だと話してしまった。

彼らは、村から出て王国に行きたいと言う——つまり亡命だ。

このままここにいても餓死を免れないと悟ったのだろう。

作物が不作でも森で食料はなんとか手に入るから、10人ぐらいは生き残るかもしれないが、その先はどうなるかまったく解らない。共和国から逃げて森の中で自給自足をするか、村を放棄して他の村に併合されるか……。

併合されたとしても、他の村でも似たような状況らしい。

ここから逃げても好転しないというわけだ。

都市では食糧不足から、人肉食まで行われている——なんて話もあるらしい。

そんな状況下、彼らに他の選択肢がなくなったものと思われる。

そこで問題になるのが、ここを管理している郷長だ。

やつをなんとかしなくてはならない。

まあ、殺してしまえば手っ取り早いのだが、なるべくならそんなことはしたくない——とか綺麗事を言いつつ、もっと酷い非人道的なことをしてしまうのだが。

俺はシャングリ・ラからワインと樽を買った。

バッグインボックスとかいう代物で、紙の箱にワイン入りのビニルの袋が入っており、こんなものがあると初めて知った。

容量は3L——こいつをどれだけ買えば樽がいっぱいになるだろう。

俺が行う非人道な行為の肝となるのが、サイトから買ったエチレングリコール。

今までなん回も使った甘い毒である。

それを見た獣人たちが、俺がなにをするか解ったようで恐れおののいている。

彼女たちには嫌われてしまうかもしれないが、民と王国を守るためだ。

俺はアイテムBOXから、メスシリンダーを取り出してワインを入れた。

どのぐらい甘い毒を入れればいいのか調べるためだ。

とりあえずシャングリ・ラで売っている電子書籍から、毒物に関する本を漁ってみる。

致死量は100mLと書いてある——結構飲んでも平気のようだ。混合率は4・1にしてみるか……。

メスシリンダーに毒を注ぐと、試し飲みをしてみる。

試し飲みと言ったが、口に含むだけだしすぐに吐き出す。

それに俺には祝福があるので毒は効かない——というアキラの話だ。

「ひえ！」「ふぎゃ！」

俺が毒入りのワインをあおったので、獣人たちがおののいている。

「ぷっ！ 本当に甘くまろやかになるんだな」
すぐに水でうがいをする。

「ケンイチ、俺にも試させてくれ」

「はいよ」

アキラにもメスシリンダーを渡すと、彼がそれを口に流し込んだ。

「ぺっ！ マジで甘い！」

アキラもうがいをしていると、アマランサスがソワソワしている。どうやら、ためしてみたいらしい。

「だ、大丈夫か？」

「飲まなければよいのであろ？」

「まあ、そういうことになるが……」

彼女もワインを口に入れ、味を確かめたあと口を手で隠すとすぐに吐き出した。

口をゆすがせる。

「なんと！ 本当に甘い毒とは！ これでは毒とはまったく気づかぬ！」

彼女が驚くのは無理もないし、俺が甘い毒だと言っても信じていなかったのかも知れない。

「こんな毒があったら、毒殺に使われまくりだろ？」

「恐ろしい……これが知れた時点でワインなど、飲めなくなるわえ……」

「アネモネ、君は駄目だぞ？」

「……うん」

興味はあるようだが、身体が小さいってことは少量の毒でも効くってことだ。

確かめさせるわけにはいかない。

「ははあ……確かに分子構造的に、甘い毒ってのはあるわねえ」

セテラがワインを覗き込んでいる。

知識は忘れてしまったというが、なんとなくは覚えているのだろう。

面白がっているが、毒を試してみたいという酔狂はないようだ。

「ケンイチ、エルフにも効くと思うか？」

「生理機能がまったく違うだろうしなあ。たとえば、俺が使ったキシリトールも人間は平気だが、犬にはアウトだし」

「エルフが毒なんて飲んでも、体内の精霊で分解されるから意味ないけどお」

「そうなのか？」

「うん……まあ、絶対ではないけどねえ。でも、この世界にあるものなら、ほとんど平気じゃないかしらあ」

さすが究極の二足歩行生物。

だって科学を極めた超生命体だしなあ……。

まあ、エルフのことはいい。

あの郷長に渡すための、ワインを用意する。

樽の容量を調べると――約160Lらしい。

――ということは、あのワインのバッグインボックスは3Lなので……53個必要。

その中にエチレングリコールを1…4で入れるから……32L…128Lか。

1樽につき、3Lのワインが42個で、それを3樽用意するから、全部で――えーと、126個！

ワインは5個パックで6000円なので、全部で約15万円。

エチレングリコールは、20Lの缶入りが1万円で、それが4つ必要だな。

計算した個数を、シャングリ・ラで購入すると、ドサドサとワイ

ンの紙の箱が落ちてきて山積みになる。

「おい、ミヤレーとニヤメナ！ この箱に入っているワインを樽に移してくれ」

「……解ったよ、旦那」「にゃ」

彼女たちに漏斗を渡す。

どうも彼女たちは恐ろしい毒を使う作戦に乗り気じゃないみたいだな。

「ケンイチ、俺も手伝うぜ」

「灯油ポンプを出すか？」

「そんなのも作れるのか？」

「ああ」

電池式の灯油ポンプなら、1個500円ぐらいで売っている。

一緒に単一電池も買う。

「ポチッとな」

落ちてきた灯油ポンプをアキラに渡す。

彼は、これがなにか知っているので説明はいらない。

「しかも電池式のやつか」

「石油ストーブに使ってたが楽ちんだぞ？ 獣人たちも使うか？」

「樽に移すだけだろ？ そんなの要らないよ」「そうだにゃ」

乾電池を入れると、早速アキラが使い始めた。

「おお、こりゃ楽ちん」

「北海道で使わなかったのか？」

「俺が牧場に住み込んでときには、こんな便利ななかったぞ？」

「そうなんだ。そういえば普及したのは最近かなあ……」

オッサンの最近つてのは10年前とかになるので、若者と話すと

きにジェネレーションギャップを感じてしまうことが多々あるが。
アラフォアの10年前は30代だが、20代の10年前は小学生
だからなあ……。

そりゃ、ジェネレーションギャップがあるだろう。

「アキラ、僕にもやらせてよ」

「おお、いいぞ」

アキラとツイツラがワインを樽に移しながらイチヤイチャして
いる。

「すごい！ 面白い！」

「ふくん便利ねえ」

エルフたちが楽しそうだが、こういう便利グッズはエルフの世界
にはなかったのだろうか？

「うくん？ そういう雑用は精霊がやっていたからあ」

「精霊？」

「うん」

セテラの話の聞いてみると――どうやらロボットのようなものらしい。

森にいるんだかよく解らないものも精霊だし、お手伝いロボットも精霊と言うようだ。

言語の体系もまったく違うので、それに相当する単語がないだけ
かもしれないが。

ワインを樽に入れ終わったので、試飲用の瓶も作る。

これで準備完了だ。

樽をアイテムBOXの中に入れて、郷長の所に行く。

他の家よりちょっと上等な板張りの家の前に到着すると、板の階

段を上った。

ちよつと横から裏を見ると馬がおり、簡素な馬車もあるようだ。あいつを使って、中央と連絡を取っているのだろう。

一呼吸置いてから、ドアをノックする。

「誰だ！」

「先ほどの商人でございます」

「なにか持ってきたのか？」

「はい、ワインの樽をお持ちいたしました」

「よし！ 入ってこい！」

ドアを開けて中に入ると、板張りの部屋の中に所狭しと物資が並んでいる。

小麦粉の袋や、塩の袋。なにかが入っている樽。

こいつが全部独り占めして溜め込んでいるものだが、村人は70人ちよいいるので、まともに暮らせばこれでも足りないだろうな。

男が物資に囲まれたソファーにふんぞり返って座っていた。

それを見た俺はアイテムBOXから、毒ワイン樽を3つ出す。

「これでございます」

「ほう！ いい樽だな！ これだけでも価値がある」

「ありがとうございます」

「うむ」

男は樽をまじまじと見て満足そうだ。

「実は――この樽のワインは、大変貴重なワインでして」
「なに！？」

俺はアイテムBOXから瓶の毒ワインを出すと、グラスに少量注ぐと差し出した。

「ご賞味ください」

男はグラスを受け取ったのだが、口をつけずにクンカクンカしている。

どうやら警戒しているようだ。

意外と用心深いらしい。

まあ、村人から憎まれているのは解っているはずだから、仕返しを恐れているのかもしれない。

物資の代わりに女を要求したりしているのだから、当然だ。

「お前が飲んでみろ」

男が、グラスを差し出してきた。

「それでは――」

俺はそれを受けると、中の赤いワインを飲み干した。

このぐらいなら影響はないだろうし――俺には祝福がある。

「よし！ もう一度つげ！」

男に言われるまま、俺はグラスにワインを注いだ。

俺からグラスを受け取った男だが、まだ警戒している。

じっと見つめていたのだが、やっと赤い液体を口に含んだ。

「む！？ 甘いぞ！？」

「そうです。これは大変貴重で数千に1本できるかどうかという、甘いワインです」

「なんと！ こいつは驚いた！ もっとよこせ！」

男に瓶を渡すと、盛大にグラスに注いで飲み始めた。

「このワインは、どうやって作る！？」

男はこのワインの製法が気になるようだ。

「醸造蔵の秘伝なので私もあまり知らないのですが、ぶどうの木が

ある病気にかかると、凄く甘い実をつけるそうでした……」

「それを集めてワインを作ると、こんな味になるというのか？」

「おそらく……」

「ふむ……」

男がじつとグラスを見つめている。

俺が話したのは、貴腐ワインの話なのだが、もちろんこいつは貴腐ワインなんかではない。

毒甘味料入りのワインだ。

用心深い男だ。

咄嗟の話題を振って、俺にボロを出させようとしたに違いない。返答をする俺の様子を見て、真偽を確かめるつもりだったのだろう。

嘘を信じさせるには、ほんのちよつと真実を紛れ込ませればいい。毒ワインという虚構の演出をするために、貴腐ワインという真実をスパイスとして入れたのだ。

男がふたたびワインを飲む。

実に満足そうだ。

「どうでしょう、これを中央に献上すれば、あなた様の地位も――」
「なるほど！ そのときには、お前も引き立ててほしいということだな」

「そこまでは望みませんが、中央の方々とお取引できればと思っております」

「ふむ――面白い！ ふひひ、この俺にも運が回ってきたということか」

男はワイングラスを掲げて上機嫌なので、引き上げることにした。外に出ると、3時頃だろうか。そろそろ日が傾き始めている。

郷長の家を離れると、村のリーダーがやって来た。

「やつに、なにか渡したのですか？」

「ああ、たつぷりとワインを渡したので、今日は上機嫌で飲みつづれるだろう」

「それで……そのあとは、どうするのでしょうか？」

「今日の真夜中、ここを発つ。気取られないように、なるべく静かに急いで」

「はい！」

「なにか持っていくものはあるのか？」

「いいえ、我々にはなにもありません。農具すらないのです」
農具もないのに、農業をやれなんて無茶すぎるよな。
それでも多少の荷物はあるらしい。

リーダーに皆に伝えるように言って別れた。

彼らのことは彼らでやってもらおうしかない。

俺は村人たちの顔も知らないしな。

皆の所に戻る。

「ケンイチどうだった？」

アキラが少々心配顔をしている。

「酒を渡したら喜んで飲んでた」

「ひええ……毒ともしらねえで……」 「恐ろしいにや……」

獣人たちは耳を伏せて完全にビビっている。

「やつは酔い潰れるだろうから、今日の真夜中にここを出発する」
「おう！ でもケンイチ、あれだけの人数がいるが、大丈夫か？」

「まあ、おそらくは……」

大型の観光バスでも買おうかと思ったのだが、全長が10m以上あるとアイテムBOXに入らない。

それに峠を走るとなると、王都とソバナの間にあるペロニカ峠みたいな曲がりくねった道だろう。

大型バスが走るのとは不可能ではなからうか？

崩れた場所などがあれば、どうしても一旦乗り物から降り、アイテムBOXに収納して渡ることになる。

やはり大型バスは無理。

そこで、ト○タのコ○スターマイクロバスをもう1台買う。

シャングリ・ラで検索すると、ほどよい程度のものが350万円です売っていた。

ここにきてケチっていられない。

なにせ70人ちよいの村人がいるのだから。

こいつは28人乗りだが、1台に35人〜36人が乗る。

かなりぎゅうぎゅう詰めになると思うが、なんとか気合で乗ってもらうしかない。

運転手はアキラと俺しかないのだ。

アネモネとセテラならもしかして……それは最後の手段だな。

「ポチツとな」

白いマイクロバスが落ちてきた。

程度はいつも使っているのと同じぐらいだな。

「ケンイチ、これでいけるのか？」

「ケンイチ！ これは前に使っていた子と違う子だね！」

「え？ アネモネちゃん、そうなのか？」

アネモネはよく見ていて、形が違っていると解ったのだろう。

「これは新しいコ○スターだ。いつも使っているやつと2台体制で行くしかない」

「もっとデカイバスは？」

「作れないこともないが、アイテムBOXに入らない」

「そ、そうか……いや、大型バスだと悪路が駄目だな」

「多分」

なにせ道なき道を進むからな。

いつものラ○クルなら平気なのだが、少々マイクロバスには荷が重いかもしれない。

心配だが選択肢がこれしかない。

「旦那！ いつものやつと2匹で行くのかい？」 「にゃ？」

「そうだ。1台だと乗り切らないからな」

「ううむ……一氣に70人も人間を運んでしまうとは……さすが聖騎士様……」

アマランサスも腕を組んで感心している。

軍隊の移動にも使えるとか思案を巡らせているに違いない。

無論、そんなのに使うつもりはないのだが、今回の事件をきっかけに共和国との戦端が開かれれば、俺は責任を取らなくてはいけない。

そのときに召喚獣を使えと言われたら、拒否できないだろう。

「へえー、こういうものもあるのねえ。重力制御で飛んだりはしないの？」

「無理無理」

エルフは重さを変えられる魔法を持ってるようだから、それを使えば空も飛べるかもしれないが。

「アキラ、運転大丈夫だよな？」

「ああ、任せろ」

「それじゃ、こっちにも無線機をつけるか」

シャングリ・ラの履歴から前と同じ無線機を購入して、運転席に取り付けた。

「アキラ、燃料を頼む」

「ほいきた」

アキラが、自分のアイテムBOXからバイオエタノール燃料を取り出して、マイクロバスに入れ始めた。

「すげー！ この鉄の召喚獣も、ケンイチが作ったのか？」

ツイツツラがバスの車体をペタペタと触っている。

「ああ、こいつはアキラが操る」

「すげー！」

100歳近いってのに、見た目も行動もまるで目をキラキラさせた少年のようだ。

一応、オイルと空気圧のチェックをする——問題なし。

過酷な道のりになると思うからな。

少々心配だが、そこは信頼の日本製。

過酷な外国の環境でも走っているのをTVなどで観たことがある。

70人ちよいの村人を乗せて、頑張ってくれるはずだ。

そこに村人のリーダーがやってきた。

「そ、それは……?!」

「えーと、マサキだっけ？」

「はい、そうです」

「これは俺の召喚獣だ。お前たちを乗せて運んでいく」

「こ、これに乗る？ 馬車ではないのですか？」

「まあ、馬なしで動く馬車みたいなものだと思いますばい」

実際にアキラに運転してもらう。

一応、問題がないか、チェックをしたほうがいいからな。
アキラがマイクロバスに乗り込むと、エンジンを始動させた。

「おおっ！ う、唸ってますが、大丈夫なのですか？」

「ああ、大丈夫だ。術者の言うことしか聞かないからな」

「アキラ、ちょっと動かしてみてください。余り派手に動かすと、あい
つにバレる」

「オッケー！」

「オッケーにゃ！」

ツイツラとアネモネと、獣人たちが乗り込んだ。

乗り込んでも、前に進んでバックするだけだが。

「す、すごい！ 本当に馬なしで動いている！」

「これに全員を乗せて、ここを脱出する」

「はい——しかし、追手の心配はありませんか？」

「それは心配しなくてもいい。こいつはどんな馬よりも速いし、休
まずに走れるからな」

「食事もしないのですか？」

「食事は俺が作った特殊な油を食べるから、心配いらん」

「解りました」

マサキがマイクロバスを見つめており、その目は希望に満ちてい
る。

俺に助けを求めたが、決死の覚悟で生きてたどり着くことはでき
ないかも——と考えていたに違いない。

それが夢や幻ではなくなったのだ。

「戻って皆に伝えてくれ。腹ごしらえをしたあと、コレに乗って深
夜に出発だ。はしゃいで気取られるなよ？」

「解っております。静かに確実に行動いたします」

「頼む」

「はい」

彼が礼をすると仲間たちの下に戻った。

あれこれやっているとい日が傾いてきたので、LEDランプを点けて皆で飯を食う。

夕飯になると、森猫たちも戻ってきたのでネコ缶をあげる。

「お母さん——今日の夜に、村人を連れて夜逃げするからな」
彼女の黒い毛皮をなでながら話す。

「にゃ」

「え？ 助けると思った？ でも、為政者の目から見て、今回の作戦はどうなの？」

『確かに国家間の取り決めからすれば褒められた行動ではないけれど、義をなくした主には従う者もいなくなるわ』

「つまり、そういう選択肢があってもいいと」

『そうね——まあ、この場合は私でも助けると思うし』
ベルも反対ではないらしい。

皆の所に戻るとスープをすすする。

「さてさて、70人分の食事をどうしたもんかね？」

「旦那、道具と材料だけ渡して、やつらにやらせればいいんだよ」

「そうだにゃ、なにもケンイチが作ってやる必要はないにゃ」

「まあ、そうだよなあ」

その前に70人分とか不可能だし。

「聖騎士様の召喚獣に乗せてやるのじゃ。そのぐらいは苦勞してもらわぬと」

アマランサスがつぶやいた。

「まあねえ、小麦粉とか塩とかもらえるだけでも凄いんじゃない？」

セテラの言うとおりかもしれないが、そこにツイッツラが入ってきた。

「ねえねえ、エルフもケンイチの村に行ったらただで飯が食えるのかい？」

「このエルフの大先輩は、大使ってことでタダ飯食ってるけど、仕事をしなくちゃだめだぞ？　ここから連れていく70人だって森を開拓させるんだから」

「そうなのか」

ツイッツラが残念そうなのだが、彼はアキラの所にいれば飯が食えるだろうよ。

その前に、レイランさんがなんて言うか知らんが。
俺は知らね。

「にゃー」

「ええ？　お母さんは楽しみだって？」
どうやら修羅場を楽しみにしているらしい。

飯を食い終わると、準備を始める。

マイクロバス
コ○スターをアイテムBOXから出して2台並べた。
ぐるりと回って車体のチェックだ。

そして夜がふけ、辺りを暗闇が包むと、村人たちが集まり始めた。

「皆、静かに行動しろ。村人を半分に分けて、この箱に乗り込め」

「あ、あのこの鉄の箱が俺たちを運んでくれるって本当ですかえ？」

「ああ、驚くのはあとにしろ。静かにな」

「はい」

「少々窮屈だろうが、ここで暮らすよりはいいだろう?」

「もちろんでございます」

わずかばかりだが、彼らも荷物をもっているようだ。

草や木の枝で作られたカゴを持っている。

その中身は――なにかと思ったら、俺がやった肉の余りだ。

そのまま車内に持ち込んだら、ヤバいことになりそうなので、シヤングリ・ラから60Lのプラボックスを20個購入。

落ちてきた箱に肉やら荷物を入れてもらう。

これなら蓋も閉まるし、においも漏れない。

肉の他には、俺がやった塩の袋だ。

箱を買ってやり、村人たちが蓋を開けたのだが、なぜか獣人たちがその中に入り始めた。

小さな箱の中に獣人たちが座り、みっちり詰まっている。

「なぜ入る?」

「いや、なんとなく、入りたくなっちゃって……」

猫が箱に入りたがるようなもんか?

猫人たちが満足そうにしているのだが、そのために買ったのではない。

彼らを追い出して、村人たちに荷物を詰めさせた。

箱に肉を詰め終わったら、コンテナハウスを1つ出す。

「荷物は、この鉄の箱に入れてくれ」

村人たちは俺に言われるまま、荷物をコンテナハウスに次々と入れていく。

搬入し終わったら、アイテムBOXに収納すれば腐ることもない。肉に雑菌などがついていても、完全に滅菌される。

荷物が積み込み終わったコンテナハウスを収納してから、皆に車に乗るように促す。

その様子を見守っていると獣人の女がバスの屋根に乗ろうとしている。

「おい、そこじゃなくて、中に入るんだよ」

「旦那、あたいは病気持ちだから……」

「そんな所に乗ると危ないんだが……」

「馬車の上にも乗ったことがあるから大丈夫だよ」

うーん？ 獣人の身体能力なら大丈夫か？

彼女の病気は伝染るので、確かに他の獣人たちと一緒にするのはまずい気がするし……。

「ちょっと走ってみて危なかったら他の手を考えるから、すぐに教えてくれよ」

「解ったよ」

出発しようとしたが——気になることがある。

俺はマサキを呼んだ。

「なにか？」

「ものすごい速さで突っ込んでくる虫を知ってるか？」

「はい——しかし、ここらへんにはいませんが……」

「そうか、それならいいんだ」

村にはいないが、森にはいるかもしれないなあ……。

車ってのは巨大な熱源と二酸化炭素発生源だ。

虫から見たら格好の獲物に見えるかもしれない。

うーん……。

252話 旅は道連れがいっぱい

俺は共和国の村から、住人をかつさらう計画を実行に移すことにした。

彼らの荷物をアイテムBOXに入れて、マイクロバスコ○スターに乗るように促す。

「よし、この鉄の箱に乗り込め」

村人たちが俺とアキラの号令で、おそろおそろマイクロバスに乗り始めた。

通路にある補助席も出して、子どもたちは大人の膝の上に乗せてもらう。

かなりぎゅうぎゅう詰め。

こんな乗り方をしたら危険なのだが、非常事態につきそうも言うてられん。

「こ、こんないい椅子に座ってもいいだべか？」「ふかふかだべ？」
身体の高い獣人たちなどは詰めたくても詰められない。
どんな格好でもとりあえず乗ればいい。

俺が皮膚病の治療をしてやった背の高い女は、マイクロバスの屋根に乗っている。

元世界の途上国でも、バスの屋根に乗っているのを見たことがあるから、平気なのか？

危ないようなら、なにか手を考えなくてはならない。

「旦那！」

後ろから声がしたので、見れば獣人の男が立ち上がっている。

「なんだ？」

「屋根の上に乗っていいのかい？」

「まあ、場所がないんで仕方ないし、あの女は病氣持ちだし」

「俺たちも屋根に移れば、もうちょつと楽に乗れるぜ？」

「それは構わんが――いいのか？」

「ああ、俺たちなら高い所も平気だからよ」

獣人たちが屋根に乗るといので、準備をしてやる。

窓を少し開け、ロープを通して屋根の上をグルリと一周させる。

馬の手綱のようにこいつに捕まれば、多少は安全なのではなからうか。

我ながら無茶苦茶のような気がするが、とりあえずなんでもいい。ここから脱出することが先だ。

獣人たちと屋根に乗る準備をしているとアキラがやってきた。

「ケンイチ、こっちの獣人たちも上に乗りたいとか言い出してるけど」

「そうか、それじゃロープを準備しよう」

必要分のロープを出して、こちらと同じように車体に巻きつけた。

獣人たちが屋根に乗って準備完了だ。

俺はバスに乗り込んだ。

「よし！ 皆、乗ったか！」

「「はい」」

皆が小さな声で返事をした。

「乗り残しはないだろうな？」

「大丈夫でさ」

アキラのマイクロバスに連絡を入れる。

「アキラ、そっちはどうだ？」

『ははは、かなりぎゅうぎゅうだが、なんとか乗れた』

「おお、なんだべ？ 声が聞こえるだ」「すげー」

村人たちは驚いているのだが、ヒソヒソ声で話している。

「ほんじゃ、アキラ出発するぞ」

『オッケー！』

「オッケーにゃ！」

「ふわあああ！」

俺の隣の補助席に乗ったアネモネが大きなあくびをした。

助手席にはセテラが乗っており、アマランサスとうちの獣人たちは、乗降口の所に座っている。

森猫たちは、俺の横の床だ。

ちょっと狭いが猫だから狭いところは大丈夫だろう。

エンジンを始動させる。

「おお、吠えだしただ！」 「なんだべか？！」

ライトを点灯する。

「おお！ 明かりが点いただ！」 「すごい明るさだ」 「魔法の光だべか？！」

「後ろにいるやつも明かりを点けたぞ！」 「おお！」

村人たちがエンジンの音やヘッドライトの明るさにざわついてい
るが、車を発進させた。

「出発！」

行く手には、暗い森の中に続く一本道。

一本道といっても直線ではない。

大木の間を縫うように道が続いているだけ。
エルフの獣道よりはマシだが、およそ整備された道ではない。
これからなにがあるのかまったく解らない。

俺はアクセルを踏むと、ガタガタと車体を揺らしながらマイクロバスを森の中に進めた。

暗い道を進みながら独り言をつぶやく。

「どうしてこうなった？」

俺は暗い森の中、道とも言えないような細い道をマイクロバスで揺られながら走る。

後ろの座席にはぎゅうぎゅうに詰まった村人たち。

その更に後ろにはアキラが運転するマイクロバスのヘッドライトの明かり。

2台で70人以上の村人を運んでいる。

彼らを助けたのは、うちの小さな大魔導師に言われたからではない。

彼らの境遇を顧みて、数年たたずに全滅するのが目に見えたから――人道的な観点から助けた。

俺だって、これがどんなにまずいことか知っている。

他国の住民を拉致して連れ去ったなんてことになれば、こりゃ国際問題間違いなしだが――。

見捨てられなかった。

決して後悔はしないはず。

ずっと、あの村の住民はどうなっただろう――と気に病むよりはましだ。

そう考えてしまう俺は、為政者には向いていないのかもしれない。

ガタガタと揺れる暗い道をひた走る。

前方を照らすヘッドライトの明かりと、メーターに灯るカラフルなライト。

俺の膝の上には、なぜかカゲがいる。

まあ、運転の邪魔になるわけじゃないので、いいのだが。

オートマなので右足だけで運転できるし。

窓を開けて、屋根に乗っている女に声をかける。

「おい、大丈夫か？」

「凄いね！ 馬なしなのに、馬より速いよ！」

彼女の声を聞いているぶんには、全然余裕のようだ。
さすが獣人。

「ふあああ」

俺の隣に座っているアネモネが、またあくびをした。
補助席なので、そのまま眠るのは難しいだろう。

「アネモネ、眠いだろうがちょっと我慢してくれよな」

「うん」

アネモネの隣の助手席にはセテラが座っているが、眠たそうには見えない。

「旦那、どのぐらい進むんだい？」 「にゃ？」

後ろから獣人たちの声が聞こえる。

彼女たちは、入り口のドアの所にアマランサスと一緒に座っている。

元王妃をそんな場所に座らせるとかありえないのだが、他に場所はないし、彼女も進んで民の役に立とうとしている。

「3時間ほど進む」

スピードは出せてせいぜい30kmだが、3時間走れば90kmは村から離れられる。

「旦那の召喚獣でそれだけ走れば、追いつけっこねえ」「獣人なら追いつけるけど、村の獣人たちは皆連れてきたにゃ」

いや、やつは追ってくるだろうか？

村人がいなくなれば、すぐに中央に報告に行くはずだ。

あのワインを手土産に持って。

そのときに、あれが活躍してくれることを願う。

俺のすぐ後ろに座っているマサキに声をかける。

「マサキ、しばらく辛抱してくれよな」

「いいえ、このようなものに乗せていただけるとは……いったいどのぐらい進むのですか？」

「とりあえず、今日中に50〜60リーグは進む」

「いったいどのぐらいの距離なのか、私には解りません……」

どうやら、村の連中は読み書きそろばんがまったく駄目らしい。

獣人たちと同じレベル——いや、それどころかまったく教育されていないので、獣人たちより悪い。

こりゃ先が思いやられる。

「マサキには、村長になってもらわにゃならんから、読み書き計算を覚えてもらうぞ？」

「もちろん、教えていただけるのであれば、ぜひ！」

「おお、やる気あるねえ」

俺は無線機のマイクを取った。

「アキラ、そっちはどうだ？」

『異常なくし！ 早く止まって、一杯やりたいところだぜ』

「悪いが、3時間ほど走る」

『オッケー!』

「オッケーにゃ!」

無線機から聞こえてくる声に、後ろの村人たちが驚くので、魔道具だと説明する。

これもいつもの光景だ。

予定どおり3時間ほど走り、オドメーターは100kmを示している。

いいペースだ。

そろそろだと場所を探していると、いい感じで開けている所を発見。

車を止めた。

「アネモネ、眠たいところを悪いが、ゴーレムを使って草刈りをしてくれ」

「うん」

彼女はかなり眠たそうだが、頑張ってもらうしかない。

車から降りて、マイクロバスのヘッドライトが照らす中、アイテムBOXからゴーレムのコアを出す。

アネモネが自分の頬を叩いて気合を入れた。

暗闇に魔法の青い光が舞う姿は、まさにファンタジー。

ゴーレムコアに草がドンドン絡みつき、雪だるまのようにデカくなる、あつという間に綺麗なスペースが出現した。

草刈り機より静かだし、なにより早い。

「「「おおおっ! 草があつという間に!」」」

「ウチの大魔導師様にゃ」「そうだぜ!」

獣人たちが村人相手に得意げに話している。

丸めた草は色々と使いみちがあるので、アイテムBOXに収納し

た。

「やった！ アネモネありがとう」

「私が助けてって言ったんだから、頑張る！」

そこに、アキラがやってきた。

「ケンイチ、どうする？」

「ちよっとまってくれ、コンテナハウスを2つだすから」

アイテムBOXから鉄の箱を2つ出すと、ちよっと離して並行に並べる。

「ここにコ○スターを2台くっつければ、鉄で囲った陣地になるだろう？」

「なるほど！」

アキラがバスに戻ると、コンテナハウスに直角にくっつけた。

俺も車体を転回させて昇降口が内側になるようにマイクロバスをくっつけたが、一人が通れるぐらいの隙間を空ける。

ここが玄関になるわけだ。

外周には以前作った「入」型のバリケードを設置——鉄で囲った陣地の中にLEDランタンを複数置く。

バスから村人たちを降ろすと、皆がおそろおそろの辺りを見回す。

「皆、集まってくれ。ここで野宿する」

「解りました」

リーダーのマサキが村人たちに指示を出している。

「鉄で囲まれているから、魔物の襲撃も大丈夫だろう」

「はぁ〜こりやすげえ」「まるで砦だなあ」「んだ」

「獣人たちもこれだけいれば、敵の接近にはすぐに気づくはず」

「任せておくれよ！」

背の高い獣人の女が返事をした。

獣人たちはずっと屋根の上にいたが、まったく問題ないようだ。

彼らはまだ裸のままだが、朝になったら服を用意してやらないと。

「お前、名前は？」

「あたいは、ナンテン！」

「え？ にゃーとかみゃーじゃないのか？」

「違うよ？」

彼女の言葉が気になり他の獣人たちの名前を確かめてみると、皆が普通の名前だ。

それを聞いたうちの獣人たちも変な顔をしている。

一応、獣人たちにも名付けのルールみたいなものが存在しているらしいが、それから完全に外れてしまっているからだ。

「獣人たちの文化そのものが破壊されてしまっているのか……」

彼らが獣人たちの社会の中で上手くやっていけるのだろうか？

それとも、交わらないまま終えてしまうのだろうか？

そこに森猫たちがやってきた。

「にゃー」「みゃー」

「は、はい！ ありがとうございます！」

ナンテンが、ベルにペコペコとお辞儀を始めた。

そこに村の獣人たちが集まってきて、森猫の説法を聞いているように見える。

文化はなくなりつつあるが、森猫が神の使いというのは残っているらしい。

これは最後に残った信仰なのだろう。

彼らのことは少々心配だが、とりあえずは眠らないと。

そのまま地面に眠らせるわけにはいけないので、シャングリ・ラ

で毛布を検索すると、2枚で2500円のものがある。

サイトでも最安値のものだが、これでもこの世界の毛布よりは数倍上等だ。

2500円×36セットで約9万の出費だが、これがしばらく彼らの布団になる。

多少の出費が重なるが、これは先行投資だ。

なにせ彼らは着の身着のままどころか、なにももっていない。

少々投資をしても、彼らが村を作って農業を順調に営んでもらえばすぐに回収できる。

「ポチッとな」

ドサドサと毛布が落ちてきた。

「「「おお！ 毛布だ！」」」

「1人1枚やる」

「こ、こんな上等な毛布をもらってもいいですか？」 「すげーふわふわだ！」

村人たちが毛布に頬ずりをしている。

「ああ、いいぞ」

「「「おお！」」」

話を聞けば、彼らは毛布もなく、草で編んだゴザなどを布団や毛布代わりにしていたらしい。

それでも暮らしていけるのだから、それはそれで凄いのだが……。王国の貧乏な村でもここまで酷くない。

俺がちよっと神妙になっていると、うちの獣人たちがやってきた。

「だから旦那、俺が言っただろ？ 美味しいもん食って、旨い酒飲んで、ふかふかのベッドに寝られるんだ。他になにもいらねえんだよ」

「そうだにゃ」

「お前たちが、そう言うならいいんだが」

話をするよりも眠らねば。まだまだ先は長いのだ。

そのまま地面に寝ると湿気が上がってくるので、皆で協力してブルーシートを敷く。

「領主様、これは？」

「俺のことはケンイチでいい。この青い布は俺が魔法で作ったものだ。水を通さない」

「「おおっ！」」

「寝る前に便所に行くものは、2〜3人で固まって、そこにある明かりを持っていけよ」

俺は地面に置いてある、LEDランタンを指差した。

「解りました」「解りましただ」

村人たちが固まって、用を足しに鉄の囲いの外に行く。

初めて車に乗ったので疲れたのか、村人は複数人で固まるとすぐに毛布に包まり眠り始めた。

助け合っていかなければ生き延びることができなかったのだろう。皮膚病を患っている獣人のナンテンはマイクロバスの屋根に飛び乗った。

屋根の上で寝るらしい。

ちよっと可哀想だが仕方ない。

村人たちを確認したあと、俺たちもコンテナハウスに入って寝ることにする。

「ケンイチ、俺たちは向こうを使ってもいいんだろ？」

「ああ」

アキラとツイツツラは別のコンテナだ。

まさか、この状態でゴニョゴニョしないとは思うが……。
怪訝に思いつつも部屋の中に入ると、ベッドに飛び込む。

頬でベッドの感触を確かめていると、俺の背中にベルが香箱座りをした。

「お母さん、重いよ」

「にゃー」

カゲも俺にすりすりをしている。

「ふう……なんか知らんが疲れた」

アネモネは俺に抱きついたまま、もう眠っている。

「この先、なにが待ち構えておるか解りませぬが、妾は聖騎士様についていくわえ」

「すまん、こんなことに巻き込んで。やっぱり俺は為政者には向いてないのかもしれん」

「そんなことはありませんわえ」

「そうそう、多少の失敗なんてよくあることなんだからさあ、ドーンといったらあ？」

エルフが金髪を揺らしてそんなことを言う。

「あまり失敗はしたくないんだが……犠牲者とか出たらどうする？」

「政にはある程度の犠牲というのもつきものよお」

エルフからそんなことを言われるとは思っていなかったな。

セテラは只人の社会にもいたらしいので、年の功ってやつだろう。

「あまり申したくはありませんが、妾もエルフと同じ意見ですわえ」

「にゃー」

俺の背中に乗っている森猫が俺の耳元でつぶやく。

「お母さんも同意見か——まあ、そうだよなあ」

政治は、理想論や綺麗事ではすまない。

民が100人いたとして、絶体絶命のピンチに55人助かり45人の犠牲が出ると解っていても、その選択をしなくてはならない。

そのときに俺に選ぶことができるのだろうか？

「旦那！ 俺たちもいるから心配するなって！」 「そうだよ」

「ありがとな」

会話はそのぐらいいにして、明日からの強行軍に備えて寝ることにした。

明日の朝は少々遅めに起きることになるだろうが、やむを得ない。追手がかかる心配はないのだから、慌てる必要もない。

俺たちが乗っているマイクロバスは、この世界のどんな乗り物よりも速いからだから。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

——村を出て次の日の朝。

コンテナハウスで、ベルに起こされる。

「おはよう……」

ドアを開けてほしいようなので、開けてやるとカゲと一緒にスルリと出ていった。

窓から見れば、すでに起きている住民たちも多い。

あの村には明かりなどは一切なかったようなので、夜明けとともに仕事をし、日が暮れると家に戻る生活をしていたに違いない。

元世界でも明治ぐらいまではそんな感じだったのだろうか。

大正生まれの婆さんが女学生の頃に電気が来たと言っていたしなあ。

コンテナハウスの外に出ると、村人たちとマサキに挨拶をする。
マイクロバスを動かすと、彼らの荷物を収納したコンテナハウスを出した。

「毛布や青い布なども、この中にしまってくれ」
「解りました」

マサキが指示をして毛布をしまうと、肉の入ったプラボックスなどを外に出す。

彼らの食事を用意しなくてはならないが、これだけの人数分を揃えるのは難しい。

道具や材料など必要なものを渡して、彼らに自ら食事の用意をしてもらうしかない。

「うーん？　まずは鍋か」
「シャングリ・ラで鍋を検索する。」

元世界で普通の鍋というとアルミ鍋なのだが、この世界でアルミはまずい。

この世界だとアルミは魔法の触媒になってしまうからだ。
——そうなると鉄鍋か……。

昔話に出てくるような囲炉裏に吊る鉄鍋が2000円で売っている。
る。

これなら棒を立てれば、かまどを作らなくても済む。
1個購入してみた。

「マサキ、お前たちに鍋をやりたいんだが、これでいいか？」
「え？！　こんな立派な鍋を？！」

「ああ、なん個欲しい？」

「あ、あの、なん個でもいいのですか？」

「ああ……」

マサキが住民たちに聞き取りを行った結果、全部で25個ということになった。

シャングリ・ラで鉄鍋を24個追加購入する。

「ポチツとな」

ガラガラと大きな音を立てて鉄鍋が落ちてきた。

「凄い！ 鉄の鍋だ！」

鍋に村人たちが群がる。

「鍋とか皿とかなくて、どうやって食事を作ってたんだ？」

「草で編んだものを――」

草でカゴを編み、そこに大きな葉っぱを入れることで鍋にしたり食器代わりにしていたらしい。

湿気がある葉っぱなどは、すぐに燃えたりはしないようだ。

「それでお湯沸かしたりとかスープとか作れるのか？」

「はい」

「へえ」

それはそれで逆に凄い。

毎日が完全なるサバイバルだな。

「あとは――水か」

シャングリ・ラから2Lのペットボトルに入った水を買う。

9本入りで1200円。こいつを10箱購入した――1万2000円で180L。

そのうち川などがあれば水を補給しよう。

生水はそのままでは飲めないが、アイテムBOXに入れば滅菌できる。

鉋毒などは除去できないので注意は必要だが。

「これは水……ですか？」

マサキが透明なペットボトルを持って、眺めている。

「ああ、浄化してある水だから、そのまま飲んでも大丈夫だ」

「ありがとうございます！」

「ゴミが出たら、まとめておいてくれ」

「解りました！」

あとは――芋がいいな。

焼いて食えるし、鍋にも使える。

そう思ってシャングリ・ラを探してみたが、ジャガイモは売っておらず、あるのはさつまいもだけ。

「さつまいもでもいいか」

そのまま食っても美味いし。

訳あり品を10kg4000円、100kg買う。

購入ボタンを押すと、芋が入ったダンボールがドサドサと落ちてきた。

「マサキ、これもやる。異国の芋だ。見てくれは変わっているが、そのまま焼いて食っても美味い」

「ありがとうございます！」

その他は――1000円の包丁を20本。

200円の浅い皿が50枚、600円の深い皿が50枚。

6本入り660円のスプーンを12セット。

最低限のものを揃えるのに、結構な数が必要だ。

「あとは魔法の粉だな」

「魔法の粉……？」

俺がシャングリ・ラで購入したのは化学調味料。

「スープなどにこれを一振り入れれば美味くなる」

「本当ですか？」

「ああ」

村人たちは、ガラスの瓶に入っている白い粉を掲げて見ている。
まあ、使ってみれば解るだろう。

揃えるものを揃えたはずだが、村人たちがぞろぞろと陣地の外に出ていく。

「どうした？」

「あの、薪を拾いに行ってきます」

「そうか、燃料がいるのか」

シャングリ・ラにも薪は売っているし、俺のアイテムBOXに入っている丸太を割ればいいのだが、時間がない。

薪が足りないようなら、サイトで購入しよう。

30分ほどで村人たちが戻ってくると、火打ち石を使い始めた。
どうやら荷物の中に入っていたようだ。

王国にはマッチみたいな火石というものがあるのだが、ここにはそれすらないらしい。

木をすり合わせて、弓引きでギコギコするよりはマシだろうが：
俺は見かねて、シャングリ・ラで購入した徳用マッチをマサキに手渡した。

「マサキ、お前に魔法の火付け棒を渡す」

マッチを擦って点けてみせる。

一箇所の焚き火に火が点いたら、それを持って他の焚き火にも火を入れればいい。

使うマッチは1〜2本で済む。

「す、すごい！」

「王国には、これと違うが火付けの道具があるからな」

「そ、そうなのですか……」

なにからなにまで原始的な生活をおくってきたらしい。

皆が焚き火の上に棒を組んで、そこに鍋を吊り下げ始めた。

この方式なら、石を組んだりしてかまどを作らなくていい。

村での生活も竪穴住居みたいなものだったようだ。

「さてえ——あとは着るものだな」

村人が着ているものはボロボロをとおり過ぎて、すでに服の体裁をなしていないものも多い。

獣人たちは裸のままだし。

子供たちには麻のシャツで簡易的な服を作ってやったので、当面はあれでいいだろう。

大人の男たちにはデニムのズボンとTシャツ、女たちは、デニムのオーバーオールとTシャツ。

獣人の男たちは、デニムの半ズボンとTシャツ、女たちは、デニムのミニスカとTシャツ。

これを人数分購入——総額で20万円ちょっと。

村一つ立ち上げるのに、このぐらいなら安いもの。

農具や道具などは、辺境伯領についてからでいいだろう。

そうになると、また住居の問題が出てくるなあ。

とりあえず、テントなどでしのいでもらうしかあるまい。

マサキを呼んで服を渡す。

「飯を食い終わったら、これに着替えてくれ。大きさが合わないようなら、言ってくれ」

「あ、あの……本当に服をいただいても？」

「ああ、王国のどんな貧乏な村でも、もうちょっとマシな服装をしている。うちの領民になるんだ。このぐらいいはしてやらないとな」

「ありがとうございます！」

「それから、獣人たちにも服を着させてやってくれ」

俺が、半ズボンとミニスカを見せた。

「王国では、獣人たちでも最低限の衣をまとうことになっているんでな」

「解りました」

飯のあとと言ったが、飯の用意をしていない連中は服に群がった。同じものを購入しているから、優劣はないはずだ。

多少のサイズ違いは我慢してもらうしかない。

あとは――ああ、靴だ。

自作の草履のようなものを履いている者が多いし、獣人たちは裸足。

「うーん？」

靴はなにがいいだろうか？

道は悪いし、畑仕事にも使えらるとなると――長靴か？

シャングリ・ラで一番安い長靴を1足800円、人数分購入。

子どもたちには子供用の長靴にした。

安いのは耐久性に劣るのだが、とりあえずはなんとかなるだろう。

必要なものを村人たちに渡して、俺はコンテナハウスに戻って飯を食うことにした。

253話 森の中を進むキャラバン

俺たちは共和国の村から、村人を連れ出した。

これは他国の住民の拉致なので、大きな問題になるかもしれないが、見過ごすことができなかった。

やはり俺はタダのオッサンで、為政者なんかには向かないのかもしれない。

いまさら後悔をしても――いや、後悔はしてないのだが、やってしまったからには彼らを俺の領まで連れていかねばならん。

深夜、大木の間を縫うように作られた道ともいえない道をたどり、森の中を3時間ほど進む。

移動に使ったマイクロバスのトリップメーターは100kmほどを指している。

俺とアキラが運転している車は、この世界のどんな生き物よりも速い。

瞬間的な速度なら獣人たちの方が速いのだが、あの村の獣人は全部連れてきてしまった。

追手をかけるのは不可能だろうし、あの郷長と呼ばれる小物が俺たちを追ってくるとは思えない。

とりあえず村人たちはなにも持っていないので、自炊をさせるための食材と道具を揃えて彼らに与えた。

あとは自分たちでなんとかしてもらう。

さすがに70人以上の村人の食事を人数分用意するのは無理だ。

村人たちも、もらった食材と道具を使って料理を始めたのを見届けると、俺たちもコンテナハウスの中で朝食にする。

そこにアキラとツイッツラもやって来た。

「オッス、アキラ」

「オッスオッス！」

「一緒に飯を食おう」

「おう」

コンテナハウスの中のベッドをアイテムBOXに収納して、飯にする。

料理はできないのでインスタントやグラノーラが中心。

「美味しい！」「美味しいねえ」

インスタントものでも、エルフたちには評判がいい。

森猫たちにはネコ缶。

俺たちの食事だけ別なので村人たちには申し訳ないし、少々気になるのだが――コンテナの窓から村人たちを見れば、俺が与えたものを使って料理を作って食べている。

サツマイモはそのまま焼いて食べているようだが、すごい喜んでいるようだ。

サツマイモは甘くて美味いからな。

黒狼と首長竜の肉を使って、スープも作ったらしい。

なんとかなっている様子。

「へへ、ケンイチ大盤振る舞いだな」

「村一つを新規に立ち上げようってんだから、それなりの投資は必要さ。彼らはマジでなにも持っていないし」

「そうだなあ……帝国でも、あんな貧乏な村は見たことがねえよ」
アキラも俺と同じ意見のようだ。

「あれじゃ原始人と変わらんよなあ」

村人の姿を見て俺はため息をついた。

「旦那、獣人たちにも服を着せるのかい？」 「にゃ？」

「王国では獣人たちも服を着ているから、着せるしかないだろう」

「ケンイチ、村の人は食べるものとか平気？」

アネモネが村人たちの心配をしている。

「とりあえず必要なものは渡してきたよ。さすがに70人以上の食事となると用意できないし」

「まあ、それはしゃーないなあ」

アキラも窓から外を眺めている。

「アキラ、どうした？」

「下手に畑を作らないで、焼き畑をやっていたほうがよかったかもしれねえなあ……」

「だが中央からの指令は森の開拓なんだから、やるしかなかったのだろう」

「森だとそれなりに食料も手に入るが、都市部ではどうなっているのやら——くわばらくわばら、考えたくもねえ」

アキラがグラノーラを食べながら身震いをしているが、さぞかし悲惨なことになっているんだろうなあ……。

残念ながら助ける術はない。

自分たちの国は、自分たちでどうにかしてもらわないと。

革命政府を倒しての反革命ってことになるだろうが、かえって酷くなる可能性すらある。

「アマランサス、共和国が倒れて無政府状態になったら、カダン王国は侵攻すると思うか？」

「せぬじやろうのう……そんな体力は今の王国にはないゆえ。それ

に侵攻すれば逆に難民が押し寄せるわえ」

「ああ、それはある」

元世界でもよくある事例だ。

その前に、帝国に睨みを利かせつつ、共和国に侵攻するような体力は王国にはない。

「――となると、峠に砦を作って難民を食い止めなけりゃ……」

「峠の下には砦がすでにあるわえ。峠を越えてくる者がおらぬゆえ飾りと化しておるが……」

「アキラ、帝国はどうだ？」

「ブリュンヒルデは、国力をアップさせるのが最優先だと言っていたので、無視するか王国に押しつけるつもりだろうな。ハッキリ言って貧乏な国に侵攻するメリットがねえ」

土地を手に入れても荒れ放題の原野、国民を手に入れても貧民しかないんじゃないかな。

豊かな土地や鉱物資源があるから、それを争奪するために戦争になるのであって、なにもない国を襲っても仕方ない。

そういえば共和国の向こうってのはどうなっているのだろう？

アマランサスに聞いてみる。

「ユリオプス王国というのがありましたが、共和国ができてからまったくの音信不通ゆえ……」

「どうなっているか解らないのか？」

「うむ――じゃが、峠もなく平地で陸続きなので関係は続いていると考えるのが妥当だろうのう」

「それじゃ共和国が倒れたら、そっちへ流れ込むか」

「少なくとも着の身着のまま峠は越えられねえと思うわ」

アキラの言うとおりで。

アネモネは暗い顔をしたまま黙って食事をしている。

黒くてドロドロとした大人の社会を目の当たりにしてしまったの

だ。

そりゃ暗くもなる。

ハッキリ言っ——誰も関わり合いになりたくなく、共和国には人知れずひっそりと滅亡してほしいというのが、周辺国の思惑じゃないだろうか……。

「やれやれ、本当に只人の国ってのはねえ」「勝手に国を作って間拔けな踊りを踊って勝手に滅ぶと」

エルフたちがグラノーラを食べながらまた嫌味を言っているが、彼らからみればそう見えるのも仕方ない。

朝食を食べ終わったので、コンテナハウスを収納して村人たちの様子を見に行く。

「マサキ、飯は食ったか？」

「この魔法の粉は凄いです！　一振りですープの味が見違えるように」

「そうだろう」

元世界の地元では、爺婆たちにとって化学調味料はなくてはならないもの。

戦後のものがないときに、一振りですんなものも美味くなる——爺婆たちにとっても魔法の粉だったのだろう。

「はい！　この芋も素晴らしいです！　こんな美味しい芋は初めて食べました。ぜひとも、これを育てたいのですが！」

村人たちは、サツマイモに飛びついたようだ。

「畑を耕して、その芋を植えればドンドン増えるから、育てていいぞ」

「「おおおっ！」」

「こんな美味しいものを腹いっぱい食えるなんて！」

村人たちは喜んでいるが、千里の道を一步踏み出したばかり。

「気が早いぞ？ まだまだ先は長いんだ」

「はい！」 「んだ！」 「んだな！」

死んだような顔をしていた村人たちに活気が溢れている。

やっぱり頑張れば豊かになれるという希望があれば、目が輝く。

彼らは水が貴重なのが解っているので、洗いものもせずに焚き火の灰を入れて葉っぱや草で拭いたりしている。

草をまとめれば簡易のたわしになるし、灰のアルカリで油は落ちる。

アルカリで殺菌もできるから理にかなっているな。

川などがあつたらまとめて洗えばいいわけだし。

それに俺のアイテムBOXに収納すれば、雑菌などは全部死滅するからより安全で食中毒の心配もいらない。

ただボツリヌス菌やO-157などが出した毒素などはそのままだから、油断はできないが。

「全員、服も着たな」

「こんな立派な服をいただいて、ありがとうございます」 「ありがとうございます」

サイズが合わない者は、個別にサイズを注文してやる。

多少、服が違うが仕方ない。

「服が違うからとかいって、イジメたりするなよ？」

「そ、そんなことはしません」

そこに村の獣人たちがやってきた。

「旦那、あたしたちも、やっぱり着ないと駄目かい？」
ナンテンや獣人たちも一応服を着てみたようだが、着慣れない様子でウロウロしている。

「王国では、獣人たちも服を着ることになっているんだよ。うちの獣人たちを見れば、ちゃんと服を着ているだろう？」

「わかつちやいるけどさあ」

「まあ慣れてくれ。結構似合っているじゃないか」

彼女はデニムのミニスカと、Tシャツをきている。

「そ、そうかい？」

「ああ」

彼女はうちの獣人たちをチラチラ見ているのだが、なにか気になるのだろうか？

「どうした？　うちの獣人たちがなにか気になるのか？」

「随分と綺麗な女たちだね……」

「俺が毎日ブラシをかけてやっているからな」

「ええ？　……ブラシかけ……？」

「森猫たちもなでてやっているぞ」

そこにベルがやってきた。

「なあ、お母さん」

「にゃー」

彼女の黒光りする毛皮をナデナデしてやる。

「いいなあ……」

「金を稼げば、ブラシぐらいは買える——あ、そうだ。尻尾を見せてみる」

「あ、うん……」

彼女がくると尻を向けると、ミンスカに穴が開いている。
自分の爪かなにかで穴を開けて尻尾を出したのだろう。

「獣人用の服ってのがなかったからな」

彼女の尻尾の付け根が皮膚病で禿げているのだが、そこを消毒してやる。

「うにゃ！」

消毒が終わったら回復^{ヒール}だ。

尻尾の付け根をモミモミしてやる。

「なななくん」

ぷるぷると震えているナンテンが可愛いが、それを見ていた他の獣人の女たちがじりじりと俺の所に迫っている。

村からやってきた獣人の女はナンテンを入れて5人だが、そのうち2人は犬人だ。

なぜすぐにでも俺に抱きつかないでじりじりしているのかといえば、ミヤレーとニヤメナが威嚇してプレッシャーをかけているからだ。

「ほい！ 治療終わり！」

「にゃ！」

「旦那！ そいつの毛皮もなでてやるとか言い出さないよな?!」

「そうにゃ！」

うちの獣人たちが妙な心配をしている。

獣人ハーレム要員にするんじゃないかと心配しているようだ。

「ただ治療しているだけだ。早く治さないと、他の獣人たちに感染したら大変だろ？」

「そ、そうだけどさあ……」 「うにゃ」

「なーん」

うちの獣人たちと話していると、ナンテンが俺に身体を擦り付けてきた。

「ぎゃああ！ てめえ！」 「ふぎゃああ！」

ミヤレーとニヤメナがナンテンを突き飛ばすと、身体をスリスリして、においを上書きしようとしている。

「くせえにおいをつけやがって！」 「そうにゃ！」

「あんたらばかり、ずるいじゃないか！」

村の獣人たちから抗議の声上がるが、ミヤレーとニヤメナは聞き入れない。

「うるせえ！ 旦那は俺たちのもんだ！」 「そうだにゃ！」

「くさい？」

うちの獣人たちに言われて、ナンテンが自分の身体をクンカクンカしている。

「くさくないから心配するな」

俺は獣人たちにブラシを買ってやった——1人1個だ。

「ほら、毎日自分たちでブラシかけをしろ」

ブラシには紐がついているので、腰の部分にぶら下げてやる。

村の獣人たちの毛皮がボサボサなのは、手入れをしていないからだ。

獣人たちは毎日結構な毛が抜けるため、ブラシをかけてそれを取り除いてやらないと、古い毛が取れずに絡みつきボサボサになってしまう。

俺からブラシを受け取った獣人たちは、早速自分の身体にブラシをかけ始めた。

わさわさと毛の塊が宙を舞う。

獣人たちとの話は済んだので、マサキの所に行く。

「とりあえず必要なものは揃えたと思うが、あとは自分たちで稼いで、自分たちで追加してくれよな」

「稼ぐ……金を稼げるんですか？」

村人たちが不思議そうな顔をしている。

「基本は自給自足だが、農作物が余ったら他に売れば金になるぞ。金が手に入ったら他のものを買えばいい」

「「おおおっ！」」「本当に、自分たちの食い扶持以上のものを作れるのか？」

「俺が教えるとおりに農業をやれば、もっとたくさんの収穫が望める」

「そうなのですか？」

「ああ、それに俺の領では、水産加工場を作ったり砂糖を作ったりと色々やっているぞ」

「砂糖ですか？ それはすごい！」

この世界で砂糖は高級品だが、順調にハマダ領での生産が増えれば、もっと手軽に使えるようになるだろう。

「最初は税金を取らないから、早く自分たちの生活を軌道に乗せることだけを考えてくれればいい」

「税金はないのですか？」

「なにもないところからは取れないだろう？ 儲けられるようになつたら取るからな」

「あの……税金はどのくらいになるのでしょうか？」

村人たちはそれが心配だろうな。

頑張っても稼ぎの半分も取られたんじゃない。

俺も税金を取られて頭にくることが多かったから、それは解る。

「稼ぎによるが、2割から3割だ」

「本当にそれだけで？」

「まあ、王国でも税金が高い所は5割って話もあるみたいだが、うちの領はそんなには取らないから心配するな」

「「「おおっ！」」」

「さっきも言ったが――まずは、俺の領に着くのが目的だからな」
「解りました」

出発に備えて、荷物を村人用のコンテナハウスに入れてもらう。
腹も膨れたし目的ができたので、村人たちの表情も明るく動きも軽やかだ。

「よし！ 皆、また鉄の箱に乗り込んでくれ」

「「「解りました」」」

皆がマイクロバスの中に乗り込むと、昨日と同じようにナンテンと獣人たちが屋根に上る。

「おい、獣人たちは。そこで平気なのか？」

「大丈夫だよ」「大丈夫でさ」「おうよ」
問題ないらしい。

「明るいから、もうちょっと速度が出せるかな？」

――とはいえ道が道なので、やっぱり難しいか。

皆が乗り込んだのを確認してから出発をする。

「アキラ大丈夫か？」

『アキラ、*&&^%\$』

ツイツラの声が聞こえるが、翻訳できない。
アキラの声だけが返ってきた。

『オッケー！』

「オッケーにゃ！」

ト○タのコ○スターが異世界で動き出した。
本当に今更なんだが、異世界で通販が使えるとか、いったいどう
いう力なのだろうか？

アキラのマヨネーズも大概だけだな。

「ケンイチ、今日はあ、どのくらい走るのお？」

セテラが助手席で耳をピコピコさせている。

「解らんが、進めるだけ進む。道がよければいいんだがな」

俺の悪い予感的中した。

マイクロバスは順調に乗客を揺さぶり2時間ほど走ったのだが、
突然動かなくなった。

故障などではなく、道がぬかるんでスタックしてしまったのだ。
少々、地盤が悪い場所らしい。

水はけが悪く、なにかが原因で水がたまっているらしい。

「しょうがねえ……」

「聖騎士様」

アマランサスが心配そうにしているが、方法は一つしかない。

「アキラ、スタックだ。道が悪すぎる。皆を降ろしてしばらく歩く
ぞ」

『やっぱり駄目か。了解！』

道を魔法で凍らせる手もあるかもしれないが、貴重な魔法をそんな
ことで使うわけにはいかない。

なにが起こるか解らないのだ。

スタックしたら皆を降ろして、バスをアイテムBOXに収納すればいい。

魔法は温存するに越したことはない。

ウチの家族にも長靴を買ってやり、それを履かせると外に出た。

「あはは、変な靴う〜」

セテラが長靴を楽しんでいるのだが、それを履けないで困っているのが森猫たちだ。

このまま泥の中に入れば、真っ黒な毛皮が泥まみれになってしま
う。

「にゃー」「みゃー」

森猫たちが本当に嫌そうな顔をしているので可哀想……なにかいい方法は……。

「そうだ!」

俺はシャングリ・ラから、プラ製の真っ赤な大型ボブスレーを購入した。

雪国で子どもが乗って遊ぶものを、泥の上に浮かべる。

「お母さんたちは、これに乗ってくれ」

「にゃー」「みゃー」

「ニャメナ、紐を引っ張ってやってくれ」

「任せてくれよ旦那」「ウチも引っ張るにゃ」

真っ赤な船に乗った森猫たちを獣人たちが引っ張っていく。

これで鉄の箱の中は空になった。

「よし！」

マイクロバスをアイテムBOXに収納すると、アキラたちが乗っていたバスの所に行く。

「ケンイチ、悪い！ こっちにも長靴をくれ」

「はいよ」

アキラたちにも長靴を買ってやる。

バスから村人たちが降りたのを確認すると、アイテムBOXに収納した。

「「おおおっ！　すごい！」」

「悪いが、道がよくなる所まで歩くからな」

「「はい」」

ぬかるみを皆で列になって歩く民族大移動。

ぬかるみが酷いところには丸太を出して、その上を歩く。

本当に丸太は大活躍だ。

時間があつたら、森の木を切り出すか……。

皆が丸太を渡し終えたら、終いからアイテムBOXに回収していく。

ちよつと泥だらけになってしまったが、アイテムBOXに入れて出すだけなので、俺の手は汚れることはない。

そのまま入れておいて池や川があつたら洗えばいいし。

1時間ほどかけて、地面がすっかりしている所までやってきた。

「ふう、やつとかよ。こんなの馬車で通れないぜ？」

アキラが泥だらけの長靴を草で拭いている。

村人たちがそうやっているの、真似をしているようだ。

シャングリ・ラから買った水を使って長靴を洗うとか、そんなブルジョワなことをするわけにもいかないしな。

「前は通れたのかもしれないが、あとで水没したとか？」

「ああ、なるほど、そういう可能性もあるか……けど、そんな所に村を作ったら、補給ももらえずに壊滅するぞ？」

「そうなった村も多いんじゃないのかなあ……」

「うわあ……帝国に転移してよかったわ。死ぬよりはブラックのほうかなんばかマシだし……」

アキラの話では、仕事は命がけだったけど食うに困っていたわけじゃないらしいし。

「マサキ、他の村の話などは？」

「補給隊から、たまに聞くぐらいで」

人知れず全滅してしまった村の話など入ってくるはずがない。

この深い森の中で廃墟になっている村もあるってわけだ……なんと恐ろしい。

最初に王国じゃなくて、ここに転移してたらどうなっていたんだろうか？

シャングリ・ラで物資は買えるが、商売をしないとチャージがでない。

森の中に生息している動植物を手当り次第に売却に入れてみるという手もあるが……。

サクラの崖から掘り出した鉱石に値段がついたぐらいだ——たとえば、美しい花の苗など値段がつかないだろうか？

ありもしない架空の攻略法を考えながら、マイクロバスをアイテムBOXから出した。

「よし、また乗ってくれ」

長靴を草で拭いた村人たちが、次々に乗り込んでいく。

少々汚れてしまったが、王国領に入ったら余裕ができる。

そのときにアネモネに魔法でバスの中を綺麗にしてもらえばいい。

全員が鉄の乗り物の中に乗り込み、またギュウギュウ詰めになると、道なき道を走り始めた。

屋根には獣人たちが乗っている。

マサキの話では、この道が峠につながっているというのだが、彼もそれを確かめたわけではない。

補給隊の噂でそう聞いただけだが、王国の地理と共和国の地理に鑑みると、方向的には間違っていないと思う。

俺たちの横に見えるコスモ山脈という連峰を横に見ながら走れば、いずれは目的地である峠にたどり着く。

ガタガタと車に揺られていると、獣人たちが騒ぎ始めた。

「旦那！ 突撃虫だ！」

上からナンテンの声が聞こえる。

俺は無線機のマイクを取った。

「アキラストップ！ エンジン切ってくれ！」

『なんだ?!』

「突撃虫だ！」

「旦那！ 右側だ！」

俺の後ろにいるニヤメナが叫ぶ。

「アネモネ！ 右側に防御魔法！ 皆も伏せろ！」

村人たちは一斉に座席に伏せた。

「むー！ 聖なる盾！」

バスの右側に青い光が舞う。

エンジンが止まると、皆が座席で息を飲み静まり返る。

俺たちの耳では音は聞こえない。

「……旦那、通り過ぎたぜ」「うにゃ」
ニヤメナが小声でつぶやく。

「本当か？」

『ケンイチ！ シュツルムケイファか？！』

『アキラ！ &*&&\$#\$\$\$！』

ツイツツラの声が無線機から聞こえる。

「そっちの獣人たちも気がついたか？」

『ああ、ツイツツラに防御魔法を使ってもらった』

「まだうろついているかもしれないから、しばらく停車する」

『了解』

防御魔法について、アネモネにちょっと聞きたいことがある。

「アネモネ、防御魔法を斜めに出せるか？」

「うーん？ 多分大丈夫だと思う」

「斜めにすることで防御力を上げられるんだ。今度試してみてくれないか？」

アイテムBOXから出したスケッチブックに図を描いて説明をする。

「うん」

ひだんけいし
「避弾経始ねえ」

セテラがスケッチブックを覗き込む。

「さすが、エルフは知っているか」

「まあねえ」

彼女が、その原理をアネモネに説明してやっていると、獣人たち

も加わってきた。

「旦那、俺たちも知っているぜ」「盾を斜めになると、少ない力で敵の攻撃を逸らせるにゃ」

「そう、それぞれ。それを防御魔法でもできないかなあ〜と思ってな」

「さすが聖騎士様は博識じゃのう……」

アマランサスは感心しているが、それどころではない。

あの虫は車の外板も簡単に貫通するのだ。

この森は簡単には俺たちを行かせてはくれないらしい。

大型の魔物より、小型の甲虫のほうが恐ろしいとは……。

254話 黒い甲虫

共和国の村について俺たちは、村人の原始人のような生活に驚いた。

物資も満足に配給されておらず、人々の生活はギリギリ一杯。

次の収穫も満足に望めず、このままでは全滅してしまうという。

見かねた俺は、国際問題になるのも覚悟で村人たちを助けることにした。

情緒によって領の行く末を決めてしまう俺は、きっと為政者には向かない人間なんだろうが、ここで彼らを見捨ててしまえば、きっと後悔する。

そう思った俺は行動を起こした。

2台のマイクロバスを用意すると、彼らを全員乗せて暗闇に紛れて出発したのだ。

まるで絵に描いたような夜逃げ。

彼らに生活に必要な物資を渡し、ぬかるみにマイクロバスが埋まり、脱出したと思ったら――一難去ってまた一難。

ココらへんに生息しているという、突撃虫という甲虫に襲撃されることになった。

獣人たちの耳で虫の接近を感知したら、車のエンジンを止める。

虫は、温度と二酸化炭素に寄ってくるらしいからな。

アキラから連絡が入る。

『ケンイチ、なにかいい方法はねえか?』

「鉄板は出せるけど、装着するのに時間がかかるし、それで防げな

いかもしれん」

『鉄板なら相当厚くないと駄目だぞ?』

シャングリ・ラを検索すると鉄板は売っているが……。

こいつを溶接でくっつけるとなると、重量の問題も出てくるし。

今でも完全に定員オーバーなのだ。

重量オーバーで車体に故障でも発生したらヤバイ。

サイトを見ると、売っているのは20cm×30cmで9mmの鋼板。

コ○スターの側面は7m×2mほどのスペースがある。

ここをシャングリ・ラで買った鋼板で埋めるとなると……片面で223枚が必要。

両面だと466枚で、サイトにあるデータは1枚3.5kgらしい。

466枚全部取り付けたとなると――約1.6t……。

おおそ中型の車1台分になる。重量オーバーなんてもんじゃない。

値段は1枚2500円だから466枚で116万5000円。

こいつが2台分だ。

鉄の重さで問題があるなら、シャングリ・ラにはチタン板も売っている。

こいつなら軽いが……値段がめちゃ高い。

費用は鉄板のざっと3倍〜4倍。

もちろん、人の命は金には代えられないが……。

「時間と費用を考えると、獣人たちに頑張ってもらい、羽音が聞こえたら防御魔法でしのぐのが一番コスパがいいと思う」

『そうかぁ。事前に知って時間があれば、じっくりと改造もできるんだらうけどな』

「そうだな」

ニヤメナが運転席にやってきた。

「旦那！ 俺たちも外に出たほうがいいか？」

「いや、ミヤレーとニヤメナは窓を開けて外の音を聞いてくれ」

「解ったにゃ！」

俺の話を聞いたマサキが、すぐに席の交換を始めた。

ミヤレーたちを窓側に座らせたのだ。

「アキラ、獣人たちに周囲の音を拾うために耳を立てるように頼んでくれ」

『おう！』

「たのむ——アネモネも魔法を頼むな」

「うん！」

「ケンイチ、私にはあ？」

「セテラも頼むぞ」

「わかったあ！」

「聖騎士様！ 妾は？」

「アマランサスも頼む」

「心得ました！」

マイクロバスの窓を開けて出発する。

ミヤレーとニヤメナが窓から頭を出しているのが気になるが、非常事態だ。

「窓から頭を出すと危険だから、気をつけてくれよな」

「解ってるよ、旦那」

屋根に乗っているナンテンたちも木の枝やらが危険なのだが、獣人たちのタフさに甘えてしまおう。

それから1時間ほど進む。

「旦那！ 来たぜ！」 「来たよう！ 左側！」
ニャメナと、屋根に上ったナンテンからの声が聞こえてきた。

「アキラ、停止する！」

『おう！』

エンジンを止めると、アネモネの聖なる盾プロテクションを使ってやり過ぎす。
左側に透明な魔法の盾が顕現しているが、上手く斜めに設置できているらしい。

じっとしていると、上から声が聞こえてきた。

「通り過ぎたよ！」

「ありがとう、ナンテン！」

「にはは」

上から彼女の笑い声が聞こえるが、飯を腹いっぱい食っているせいか、とても元気だ。

「アネモネ、上手く斜めに防御魔法を出せたみたいだな」

「うん！」

マイクを取って、アキラの車に連絡を入れる。

「アキラ、帝国ではなにか防ぐ手はなかったのか？」

『ああ、そういえば家畜用に虫除けのアイテムがあったはずだが…』

「ここで作れないか？」

『センセがいればなんとかあったと思うが、どういう仕組みなのか解らん』

助手席に座っているエルフの大先輩に聞いてみる。

「セテラは、そういう魔法は？」

「普通の虫除けの魔法なら知っているけどねえ」

「アキラ、虫除けの魔法は使えないのか？」

『普通の虫除けの魔法は設置型なんだよなあ』

「つまり、移動できない？」

『そう』

たとえばキャンプをしている所で、虫除けの魔法なら使えるが、移動する車などには使えないってことか。

移動をするためには、アイテム化して持ち運びできるようにしなければならぬようだ。

「アキラ、あまりに頻繁に襲われるようなら、なにか手を考えよう」
『オッケー！』

「オッケーにゃ！」

再び車が走り出す。

「セテラ、魔法の虫除けはキラーホーネットみたいなデカイやつには効かないのか？」

「ああいう類は無理ねえ。あくまでも小型の虫用」

「そうなのか」

蚊取り線香みたいなもんだな。

大型の虫には強烈なやつが必要ってわけだ。

30分ほど走ると、今度は右側からの襲撃だという。

プロテクション

アネモネに聖なる盾を使ってもらうと、車体の右側に大きな音と閃光が走った。

「「「うわあああ！」」「「「きやああ！」」「「

座席に伏せている村人たちから、悲鳴が上がる。

「虫が衝突したのか?!」

アキラから無線で連絡が入った。

『ケンイチ！ 大丈夫か？！ すげえ、光と音がしたぞ！』

「大丈夫だ、アネモネの魔法が防いでくれた」

「えへん！」

「やるねえ、小さい大魔導師さんは」

「ケンイチのためだもん！」

エルフにも褒められて、アネモネはご満悦のようだ。

「右、左、右と来たから、もしかして1つの個体だったのか？」

「あゝ旦那の言うとおりかもなあ」「そうだにゃ」

「そうかもしれない」

家族と話していると、屋根からナンテンが飛び降りて、なにかを探している。

「ナンテン、どうした？！」

しばらくウロウロしていた彼女だが、俺が座っている運転席の窓の所にやってきた。

手に持っていた、なにか黒いものを差し出す。

「旦那、これ」

彼女が差し出したのは、カブトムシのような真っ黒な甲虫。

大きさもカブトムシに近く、つやつやと光っている。

カブトムシは角が上に伸びているが、そいつがまっすぐに水平に伸びて流線型を成す。

この形態が超高速を出すのに一役買っているようだ。

「へえゝこいつがそうか」

手にとってみると、軽くて黒光りして、顔が映りそう……。ちよっと格好いいんだが。

元世界でも、子どもに人気が出そう。

「これ、もらっていいか？」

「うん」

「ほんじゃ、対価でこれをやる」

俺はアイテムBOXから、チュールを取り出した。

「ほれ、これをやる。王国じゃ働いたら対価を貰えるから、それに慣れたほうがいいな」

「これは？」

「こうやって、先端を切って舐める食べ物だ」

「だ、旦那俺にも」「ウチにもにゃ」

「ここでお前たちにやったら、後ろの獣人たちにもやらんとまずくなるだろ？」

「うう……」「うにゃー」

俺の言葉を聞いたナンテンが、チュールをおそろおそろ舐める。

「ん！ ペロペロペロペロペロ――」

舐め始めた彼女が、一心不乱に舐めている。

「美味いだろ？ 旦那のために尽くせば、そういうのがもらえる」

「そうだにゃ」

ミヤレーとニヤメナが窓から顔を出して、よだれを垂らしている。

「はぁあ、こういう美味しいものがもらえるから、獣人が旦那の傍にいるんだね！」

「それだけじゃない。酒も飲めるし、ふかふかのベッドもある」「毎日、ブラシをかけてもらえるにゃ」

「いいなあ……」

「あいにく、獣人の愛人枠は俺たちの分で埋まってるから無理だけ

どな」「そうにゃ」

やっぱり、愛人粹ってことになっているのか。

まあ、やることやっているわけだから、そう言われても仕方ないが。

獣人たちのことはさておき、ナンテンからもらった黒い虫を皆に見せる。

「ほう！　これが、その虫かえ？！」

「すごい！　初めて見たぜ」「ウチもにゃ」

「ふわあ！」

うちの家族にも見せてやるが、その前に――。

「アイテムBOXに収納」

収納できないってことは、こいつはまだ生きている。

そういえば、動かないが脚が開いたままだ。

虫が死ぬと脚が閉じる。

「アネモネ、こいつを魔法で温めてくれ、お風呂よりちょっと熱いぐらいの温度で」

「うん！　^{ウォーム}温め！」

加熱をすると虫の脚が閉じたので、これで確実に死んだだろう。

こんどは乾燥してもらおう。これで保存ができるはず。

個人的にも保存しておきたい逸品だ。

男の中に埋もれている、少年の心をくすぐって止まない。

「有名なのに、見たことがないのか？」

「旦那、普通は殺られて終了か、すぐに逃げるんだよ。立ち向かったなんて聞いたことがねえ」「うちもにゃ」

「セテラは？」

「あそこらへんにはいなかったしねえ。いても捕まえることはなかったし」

ワイワイしていると、無線で連絡が入った。

『ケンイチ、どうした？ 大丈夫か？』

「俺たちを襲っていた突撃虫を捕まえた」

『へえ？ 捕まえるの難しいんだぜ？ 帝国なら、好事家が高く買うんだが』

「うえ！ 虫を買うのかい？ なにか薬になるとか？」
アキラの言葉にニヤメナが反応した。

どうやら帝国には、甲虫の格好よさが理解できる男が多いらしい。確かに、これは欲しくなると思うが。
試しに、シャングリ・ラの買取に入れてみる。

「うえ！」

「ど、どうしたんだい旦那？！」 「にゃ？」

「な、なんでもない」

シャングリ・ラの買取価格に表示されたのは、100万円。

マジか——でも、ハッキリ言って、こいつと対峙するのは命がけだ。

割に合わないような……。

いつまでも止まっていると、後ろで待っているアキラたちに悪いので、突撃虫をアイテムBOXに収納すると車を発進させた。

「さっき捕まえたのが、1匹で俺たちを襲ってたならいいけどな」

「それなら、もう襲ってこなくなるね」

「まあな」

余計な出費と時間の心配なくて済むしな。

ナンテンを屋根に戻し、それから数時間走ったが虫の襲撃はなし。
後ろの車に連絡をいれた。

「アキラ、そろそろ飯にするか？」

『おう！ そうだな』

そろそろ昼近くだろ。

俺が車を停止させると、すぐにベルたちがドアの所に向かう。

「ミヤレー、そこを開けてやってくれ」

「解ったにゃ」

「お母さん、止まっているのは1時間ほどだからね」

「にゃー」「みゃ」

2匹の森猫が黒い疾風となって、暗い森の中に消えていく。

ここはまだ未開の森だ。一体どこまで森が続いているのか。

途中に分岐などもないし、一本道。

入植者などはいいるのだろうか？

こんな場所に送り込まれたら、命がけの罰ゲームだな。

皆で車から降りる。

「ほんじゃ、昼にするか？」

「うん」

アネモネが微笑み、獣人たちが伸びをしていると、マサキがやってきた。

「あ、あのー」

「1時間ほど、ここにとどまる。俺たちは軽く飯にするが、お前たちはどうする？」

「ひ、昼に食事などをしたことがないので……」

「そうか——でも、座りっぱなしで疲れただろう。休んだり、出すものを出したほうがいいぞ？」

「それでは、食料や薪を調達しに、森に行ってもいいですか？」

「ああ、いいぞ。遠くに行って迷子にならないようにな」

「はい！」

アキラに連絡を入れる。

「アキラ、村人たちは昼めしを食わないで、森で薪拾いをするらしい」

『おう！ こっちもそんな話をしていたところだ』

「1時間ほど停車するっていつてくれ。まあ、時計がないので解らんだろうが」

『解った、そう伝える』

車から降りて、村人たちのコンテナハウスを出してやる。

今のうちに薪やらを拾っておけば、すぐに夕飯のときに準備ができるだろう。

獣人たちは狩りをするようなので、クロスボウを貸してやることにした。

「おおい、獣人たち集まれ」

「なんだい、旦那？」

ミャレーとニャメナも来たのだが、彼女たちは関係ない。

村の獣人たちは、犬人も猫人も一緒だ。

犬人の女が俺の近くにやってきて、しっぽをパタパタさせているのだが、ミャレーとニャメナが威嚇して近づけないようにしている。

「森の中で狩りをするなら、これを貸してやる」

俺はアイテムBOXからクロスボウとコンパウンドボウを取り出した。

「「おおっ！　すげえ！」」

「弩弓は使ったことがあるか？」

「「……」」

どうやら弓などを作ったこともないらしい。

普通の獣人たちは、親や部族の者から武器や罾の作り方を習うらしいが、そういう文化も破壊されてしまっているのだろう。

彼らにクロスボウの使い方を説明する。

「こういう武器だってことは知っているんだろう？」

「ああ」「兵隊が持っているのを見たことがある」「私は見たこと
ない」

どうやら、そこから教えないとだめらしい。

「普段はどうやって獲物を獲ってたんだ？」

「石とか槍とか……」

槍といっても、鉄の鏃やじりがついた立派なものではない。

枝を石器などで尖らせただけのものだ。

停車している時間が短いので、使い方が解る獣人たちにだけクロスボウを渡した。

「そんなに長い間止まってないからな。時間になったら音を出して
教える」

「音？」

俺はバスに戻ってクラクションを鳴らした。

「うわぁ！」「ひっ！」

大きな音に獣人たちが飛び上がる。

「この音なら、聞けば解るだろ？」

「ああ……」「それじゃ、行ってくるか!」「こんなすげえのがあれば、すぐに鳥が獲れるぜ!」

「時間があつたら、弩弓を知らないやつにも教えてやってくれ」

「解ったぜ」

猫人と犬人が仲良くしていると妙な感じがするが、文化的なものが破壊されているから、疑問にも思わないのだろうか。

これがいいのか悪いのか……確かに平等といえば平等だが。複雑な思いでいっぱいだ。

俺たちのコンテナハウスも出して、道の真ん中で軽く昼食にする。どうにも村人たちのことを考えると気が引けるが、やむを得ない。村人たちも気を使っているのか、コンテナハウスには近づかないようにしている。

「中々大変だな、ケンイチ」

アキラがカップ麺をすすりながら、口を開いた。

「すまん、巻き込んでしまつて」

「いってことよ。アマランサスさんの押しに負けたとはいえ、押しかけたのは俺だし、ははは」

「だが、村人を抱えてても、進む速度はそんなに変わらんとと思う」

「まあ、この道じゃな」

「世界旅行でこういう道を走ったことは?」

「ん、オロシアに行ったときに近いと思うが、あそこは全部が泥まみれだったしなあ」

ツンドラ地帯とかそういう場所だろうか?

普通はオロシアには行かないと思うが……。

「聖騎士様、オロシアという国は、どのような所なのでしょう?」

「ん? デカイ帝国でな、革命でこのこと同じような共和国制にな

ったんだが、また革命が起きて帝政に逆戻り」

「そうそう、俺が大学中退したあたりだったかなあ」

「皇族は全部皆殺しになったとか言われてたのに、生きてたんだよな」

「俺がオロシアに行ったのは、帝政に戻ったあとだな。共和国だった頃は、秘密警察だらけで危なくて行けたもんじゃなかったし」

この共和国にも秘密警察とかあるんだろうか？

こういうのはセツトになっているようなものだから、ありそうな気がするが……。

「セテラ、エルフの本星も共和制だったのか？」

「まあ、似たようなものだけど、一応帝室はあったしい」

「ええ？ 帝国だったのか？」

「うん、皇族はハイエルフって言われてたあ」

「ハイエルフってマジでいるのか？」

「へー、でもハイエルフより、ダークエルフに会いてえな」

アキラの言葉に、セテラが彼を睨みつけるが何するものぞ。

「この大陸にダークエルフはいないから、ツイツラは会ったことないんだよな」

「知らないよ、そんな連中は」

「まあ、ここに降りてこなくて、よかったわあ」

「じゅっ」

気づくと、アネモネがじっとこちらを見つめていた。

「なんだい？ アネモネ」

「なんで、そんなにダークエルフに会いたいのか？」

「え？ まあ、そんなに会いたいわけじゃないけど、見たことがない種族だから興味はある」

「只人って胸が大きいのが好きだけどお、ケンイチたち稀人もそう

なのお？」

「まあその、なんというか……ゴニョニョ」

「俺はどっちでもいいかな？」

「——といいつつ、レイランさんは爆乳やんけ」

「フヒヒ、サーセン！」

「彼女と初めて会ったときに、『ファイヤー！』」

「ジャストミート！」

俺の掛け声に、アキラが続く。

「——とか言っただろ？」

「ははは、バレてるし」

オッサンの会話にアネモネが入ってくる。

「胸がいいなら、私のを触れば！？」

小さな大魔導師様が俺の所にやってきて胸を突き出してくるのだが、正直困る。

「妾の自慢の胸もあるぞえ？」

まあ、確かにアマランサスの胸は形がよくて美しい……そうじゃなくて。

「だから、胸は関係ないんだって」

「うそ！」

「うそじゃないよ」

アネモネを抱き寄せて、ナデナデしてやる。

「ふわあ！ もう！ そうやってすぐにごまかすん——ふわああ！」
アネモネをナデナデしていると、俺のところにエルフがやってきて抗議を始めた。

「ああっ！ それ、私にもやってよお！ 私に対する愛はないの？！」

また始まった……。

仕方なくエルフを抱き寄せて、頭をナデナデしていると、大きな耳がピコピコしている。

俺は、その耳を両手で掴まえて、スリスリしてやる。

「\$*！」

セテラが変な声を出してその場で固まった。顔が耳まで真っ赤になっている。

「あゝケンイチ、エルフの耳は敏感なので、あまり触らないほうがいいぞ？」

「え？ あ、そういえば、そうだったな」

なぜか、ツイツツラまで顔が赤くなっている。

シャングリ・ラを検索して、ちよつと大きめのリビングソファを購入。

「ポチツとな」

落ちてきたソファ―にセテラを寝かせると、外の様子を見に行く。そろそろ村人たちが森から戻ってきているようだ。

拾ってきた薪をコンテナハウスの中に入れている。

これを使えば、夕飯もすぐに用意できるわけだ。

「「「わああ」」」

なにやら歓声が聞こえてきた。

なにごとかと思ったら、狩りに行った獣人たちが帰ってきたらしい。

彼らの手には、鳥が数羽ずつ握られている。

「旦那！　こりやすげえよ！　簡単に鳥が獲れる！」
ナンテンが鳥とクロスボウを掲げて喜んでいる。

「そうか、そりゃよかったな。狩りのときにはそれを貸してやるから、頑張って獲ってくれ」

「やったぜ！　これで肉がたくさん食える！」

「「わああ！」」

獲物を村人たちが囲んでワイワイと大騒ぎだ。

今までは石や手製の槍を使っていたらしいが、そんなものでよく獲物が獲れるなあ――と感心する。

なせばなるもんだ。

そりゃ食わないと飢えるんだから、命がけだよな。

停車して、そろそろ一時間になる。

「おい！　ベルウ！」

森猫を呼ぶと森の中から走ってきた。

彼女の黒い毛皮をなでながら、マサキに人数を確認させて、置いてきぼりがないか確かめる。

クラクションを使う必要はないようだ。

全部で71人のはずだから、数えると71人間違いなくいる。

まあ、村人たちはお互いに全員が知り合いなので大丈夫らしいが。そりゃ、運命を共にした連中だからなあ。

助け合わないと死んじまうわけだし……。

なんというハードモード。

俺の家族をコンテナハウスから出すと、鉄の箱をアイテムBOXに収納する。

セテラはなんだかフラフラしているが、大丈夫だろうか？

「セテラ、大丈夫か？」

「……大丈夫だけどお、いきなりやらないでよね？　びっくりするからあ……」

「悪い、エルフの耳が敏感だったとか知らなかったものでな」
「今日は許してあげるう……」

皆でマイクロバスに乗り込むと、再び道なき道を進み始めた。
果てしない未開の森の中。

こんな所を本気で開拓するつもりだったのだろうか？
いや——元世界でも、俺の住んでいた北海道は、ほとんどが原野だったわけだし。

重機のない時代に、先人が艱難辛苦の果てに開拓して、居住地や田畑を広げたものだ。

俺の爺さんも、長槍持ってヒグマと戦ったらしいな。

いきなり北海道の原野にぶち込まれたら、異世界転移とさほど変わらない。

ヒグマというエンカウトする魔物もいるしな。

俺が住んでいた北海道のことを思い出していると、前方になにか見えてきた。

道をなにかが横切っている。

近づくとその正体がすぐに解った——川だ。

しかも橋がまったく架かっておらず、幅は10mぐらい。
流れもそこそこ速い。

俺はマイクを取った。

「アキラ、川だ。しかも橋がない」

『くわあ！　マジか！』

バスを降りて様子を見に行くと、アキラも降りてきた。

「はぁ〜マジで川だぜ」

アキラが腰に手を当てて呆れたようにつぶやく。

「簡単な橋があっただけど流されたのか」

橋桁の土台らしきものもないので、丸太橋のようなものがあつたのかもしれない。

「もしくは、水なし川だったけど、今は流れているとか」
「ありえる」

さてさて、このままマイクロバスで渡るのは不可能だが、一番簡単な方法は……。

俺は思案を巡らせた。

255話 三毛

俺たちはマイクロバス2台で、71人の村人たちを連れて未来に向けて脱出中だ。

ろくに道がない森の中を、走る走る走りまくる。

超高速で突っ込んでくる虫に襲われたりしたが、今のところは他の魔物とエンカウントしたりはしていない。

転移した直後に遭遇したコカトリスなどには可能な限り遭いたくない。

——といっても、こればかりは神のみぞ知る。

ここには神様じゃなくて、管理人とかいうのがいるだけらしいが。

それなりに順調に進んでいたのだが、俺たちの歩みが止まった。

目の前に川が現れたのだ。

残念なことに橋が架かっていない。

橋桁の土台などは見当たらないので、簡単な橋が架かっていたのだが流されてしまったか——それとも、普段は水なし川だが水位が上がっているのか。

橋があったかどうかはこの際どうでもよく、多数の人間を効率良く向こう岸に送る算段をしなくてはならない。

アキラと2人で流れを見てみると、村人たちも集まってきた。

「ケンイチ様」

「マサキ、ちょっと待て。今、渡る方法を考える」

うちの家族もやって来て、川の流れを眺めている。

森猫たちも車から降りて辺りを探索しているようだ。

「旦那、いつもの船で渡るのが手っ取り早いんじゃないやね？」「そうだな」

「そうだなあ……やっぱり、それがいいか」

そうは言ってみたものの人数が多いしな。

川の流れは少々速いが、深さは人間の腰ぐらいに見える。
試してみたいことが頭に浮かんだ。

「よし、ダンプで渡ってみるか」

「ダンプなら腰が高いから多少の水没は平気か？」

俺の提案にアキラが反応した。

「町が水没しているのに、ダンプが走っているのを見たことがあるし」

「タイヤが水没するあたりまでは平気かもな……」

大型免許を持っているらしいアキラでも、水の中を走ったことはないらしい。

アイテムBOXから、いつぞや買った黄色い救命胴衣を取り出して着た。

「おし！ 皆、ちょっと離れてくれ」

ざわざわと皆がスペースを空けてくれたので、ダンプを召喚する。
ボロボロサビサビのダンプだが、こいつも結構役に立ってくれているな。

魔物の盾になってくれたりとか。

俺の呼びかけに応えて、巨大な鋼鉄の塊が落ちてきて地面を揺るがす。

「」「おおおっ！」「」「新しい鉄の魔獣じゃ！」「すげー！」

目の前に現れたダンプに村人たちが興奮している。

「ケンイチ、これってどのぐらい走ってるんだ？」

「メーター読みだと70万kmか」

「さすが、ダンプは丈夫だな」

「まあな。元々ヘビーデューティ用に作られているわけだし」
セテラがダンプの周りをぐるぐると歩いていく。

「へえ、これは別の乗り物ねえ」

「まあ、そうだ」

「ケンイチ！ 私も乗る！」

「ダメダメ、危ないから。どうなるか解らんし」

「ぶう」

アネモネが拗ねているが、これはちよつと危ない。

そのまま流されるかもしれないし。

以前に購入したオレンジ色の救命胴衣を着込んで気合を入れる。

タイヤの上にあるステップに足をかけてダンプに乗り込んだ。

運転席が高い場所にあるから乗り込むのは結構大変。

たまにしか使っていないから、燃料はいつぞやに入れたままで満タ
ンだ。

多少は減っているが、ここで使うぐらいじゃそんなには減らない
だろう。

キーをひねってエンジンをかけると、鋼鉄の車体がブルブルと身
震いを始める。

「「「おおおっ！」「」」」

村人たちから歓声が上がった。

彼らの声援に送られて、俺はギアをローに入れるとザブザブと川

の中に進入する。

ドアを開けて、下を見る——やはりタイヤが丸ごと沈むぐらいの水かさがある。

これなら楽勝かな——と思ったのだが、ちょうど真ん中辺りでハンドルを取られたと思ったら、車体がちよつと斜めになったまま、動かなくなってしまった。

ローに入れてもバックに入れてもタイヤが空回りしている。

川底が柔らかいので、スタックしてしまったようだ。

運転席からは、すぐ目の前に岸があるのだが。

「かぁーやっぱり駄目か」

勢いよく突っ込めばよかったのか、いやなにがあるか解らんに、それは無謀か。

運転席で考え込んでいると、ドンドンと荷台から音がする。

窓を開けて上を見ると、車体の上に獣人たちが飛び乗っていた。

まあ、彼らの身体能力ならこのぐらいジャンプするのは余裕だろう。

「旦那！ このままこいつを橋にして、渡っちまえばいいんじゃないかね？」 「にゃー！」

運転席をニヤメナが覗き込んでいた。

「そうだな……」

川幅はおよそ10m——ダンプの全長は7mとすれば、前後で1.5mしかない。

実際、運転席の目の前には対岸がある。

俺はドアの窓枠に足をかけて、ダンプの上に出た。

後ろのほうでは、心配そうな顔をして村人たちが成り行きを見ている。

俺は荷台に移ると、アイテムBOXから5mのアルミハシゴを出

した。

「このハシゴを、かけてやってくれ」

「ホイきた！」

近くにいた虎柄の猫人が、ハシゴを軽々と持ち上げて岸に降ろしてくれた。

さすがパワーがある。

「アキラ、動かないように河原に埋めてくれ」

「オッケー！」

「オッケーにゃ！」

ハシゴの様子を確認していると、獣人たちが騒がしい。

「このハシゴ、すげえ軽いぜ！」「銀みてえだけど……」

「そいつは旦那が魔法で作った金属で作られているんだ」「そうにや」

「「「おおお」」」

ニヤメナが得意気にアルミハシゴの説明をしている。

そのうちに、アルミハシゴをもう1本ショッピング・ラから買う。落ちてきたハシゴをダンプのフロント部分にもかけてもらう。

「うーん？ 荷台から運転席の屋根に上るハシゴも必要だな」

ここにも短いアルミハシゴを買って立てかけた。

子どももいるし、段差のある所には3段のステップ台を設置。コケると危ないので、マットも敷いてみるか。

これで地面から一直線に道が繋がった。

まるでアスレチックみたいだが、落ちたら川に流されてしまうから遊びではない。

要所には力持ちの獣人たちを配置して、サポートしてもらう。

彼らなら片手で只人を持ち上げられる。

ダンプのリアの部分からハシゴを降りてみる。

大丈夫そうだ。

ハシゴを確認していると、黒い疾風が上に駆け上がりジャンプした。

「にゃー」「みゃ」

森猫たちだ――さすが野生動物。

反対側に降りると、すぐに対岸のパトロールを始めた。

今度は俺たちの番だ。

「マサキ、1人ずつハシゴを登って、この山を越えてくれ」

「は、はい……」

「ハシゴを登ったことはあるか？」

「大丈夫です」

木の枝や蔓などで、ハシゴを作ることはあるらしい。

草葺の屋根とかがあったから、確かにハシゴがないと作れないよな。

「子どもは――どうする？　ハシゴを登れない子は、後で獣人たちに背負ってもらうか」

「それがいいと思います」

「解った、そうしよう」

「それでは大人から行きます」

「慌てる必要はないからな。ゆっくり登ってくれ」

「はい！」

まずは、大人から1人ずつハシゴを登っていく。

獣人たちのサポートがあるから、手を引っ張ったりしてもらい、次々とクリアしていく。

子どもも元気な男の子は挑戦してみるようだ。

「大丈夫か？」

「平気だよ！」

俺が作ってやった麻シーツのワンピースを着た男の子が、ハシゴを登っていくと獣人たちに手を掴まれて宙に浮く。

下からみると丸見えなのだが、女の子はどうしよう。

やっぱり獣人たちに担いでもらったほうがいいだろうな。

女性陣もハシゴを登るのは抵抗があるようだが、登ってもらえないな。

獣人なら大人も担げるとは思うが……。

マサキに頼んで、女たちが登る間は、男たちに見ないようにしてもらうしかない。

最後に、担ぎ紐で子どもたちが獣人たちに担がれてダンプ山もクリア。

問題なく全部の村人たちが向こうに渡り終わった。

次はエルフたちだが、ポンポンとジャンプするようにあつという間に渡る。

彼らは獣人たちと同じぐらいの身体能力を持っているので当然だ。

「聖騎士様、いきますわえ」

「おう」

アマランサスも同じように、ジャンプして軽々とクリア。

「アネモネ、大丈夫か？」

「平気！」

彼女も俺について、あちこち歩きまわっているので随分とたくましくなった。

あとは俺とアキラだけだ。

「アキラ、先に行ってくれ。俺は、コ○スターを収納してから行く」
「はいよ」

マイクロバスを収納し終わると、アルミハシゴを登る。

登り終わるとすぐに収納するを繰り返して、対岸にたどりついた。
最後にダンプに残っていた獣人たちが飛び降りて、全員無事に渡川完了。

「さて……」

俺はアイテムBOXからゴムのスーツを出して、足だけ通した。
スライムや触手のときに使ったものだ。

水に濡れてもアネモネの魔法で乾かせばいいのだが、すぐに出発したいし、わざわざ濡れる必要もない。

太ももあたりまで水に浸かると、俺は叫んだ。

「収納」

水に浸って斜めになっていたダンプがアイテムBOXに吸い込まれた。

中では時間が止まっているので錆びることもないだろう。

サクラに戻ったら乾かしてやらないと。

結構役に立ってくれるしな。

ゴムスーツを脱ぎながら、俺はあることに気がついた。

「ここで水が補給できるな」

これだけの人数がいれば、水の消費も多い。

今は最低限の水をシャングリ・ラで買って、村人たちに与えている。

ここで水を汲んでもアイテムBOXに入れば、滅菌ができる。

水が沢山入るといえばドラム缶か……。

以前、ドラム缶風呂に使っていたものもあるが、ここは新規に購入しよう。

そのまま村人たちに瓶代わりに使ってもらえばいい。

新品ではなく再生品らしいが、使えればなんでもいい。

1つ1万円ぐらいだ。5つ購入。

ドラム缶5つがガランと落ちてくると、そこにマサキがやってきた。

「ケンイチ様、なにか……」

「この鉄の筒の中に水を持っていこう。皆で水を入れてくれ」

「解りました!」

シャングリ・ラでプラ製のバケツを10個ほど購入して村人たちに渡す。

これらが全部彼らの村での財産となるわけだ。

もちろん農具なども渡さないとだめだし結構費用がかかるが、村が発展してくればすぐに回収できる。

村人たちがバケツでドラム缶に水を入れ始めた。

200Lのドラム缶が5つなので、全部で1000Lなのだが、200Lは俺たちが使わせてもらおう。

これでしばらく持つのではないのだろうか。

いれ終わったドラム缶をアイテムBOXに収納。

村人たちのコンテナハウスを出し、その中にドラム缶を入れて再び収納。

「マサキ、今の水は自由に使っていいいからな」

「ありがとうございます」

アイテムBOXで滅菌されるとか言ってもちんぷんかんぷんだろ

う。

この世界の人間は生水を飲まず、ワインや沸かした水を飲むのがデフォルトなので、水あたりの心配はないはず。

「マサキ、水石というのは使っていたか？」

「いいえ……」

「王国では、水の浄化に使ったりするんだが、それもないか」

まあ、アイテムBOXの滅菌効果でなんとかなるだろう。

水の確保も完了したので、対岸に再びマイクロバスを2台出す。

「こんな川の渡り方をするなんて……」 「まったく普通じゃ考えられねえだ」

「ウチのケンイチは特別なのにゃ」 「王国にだって、こんな魔法を使えるやつはいねえ」

実際はアイテムBOXなので、容量がデカいやつがいれば馬車ぐらいは出せるかもしれない。

「よし！ 皆、また乗ってくれ〜！」

ぞろぞろと、それぞれのマイクロバスに村人たちが乗り込んでいく。

俺のコ○スターの上には、Tシャツ姿のナンテンが座っている。

「ナンテン、大丈夫なのか？」

「平気だよ、旦那」

「お〜い！ ベル〜！」

俺の声を聞きつけたのか、森から森猫たちが飛んできた。

俺もバスに乗り込むと運転席に座る。

「マサキ、大丈夫そうか？」

「はい」

俺はマイクを取った。

「アキラ、そっちはどうだ？」

『問題なし』

「それじゃ出発するぞ？」

『オッケー』

「オッケーにゃ！」

皆を乗せたマイクロバスは再び走り始めた。

ガタガタと揺れるバスの中で、一緒に村人たちも揺れている。

ぎゅうぎゅう詰めながらも、人々の顔には笑顔が溢れて余裕が出てきたように思える。

川から2時間ほど進み、そろそろ昼飯の時間だと考えていると、両側の森の中から毛皮が出てきた。

あまりに毛皮がボサボサなので、魔物かと思ったのだが裸の獣人らしい。

数は3人——黒と灰トラは男の獣人だが、左側にいる三毛は細いし女だろう。

1人は手製の弓らしき武器をもっており、残りも剣を持っておらず棍棒を装備している。

俺は急ブレーキを踏んだ。

「「「うわぁ!」」」

車内に村人たちの叫び声が響く。

『ケンイチどうした!?!』

スピーカーから聞こえてきたアキラの声に無線機のマイクを取る。

「前方に盗賊みたいな連中だが、脱村した村人かもしれん」
『了解!』

「聖騎士様、処すかえ？」

アマランサスがやる気になっているが、とりあえず止める。

「までまで、やむを得ずこんなことをしている連中かもしれん」

「処す？」

アネモネが、アマランサスの言葉に首を傾げているので、意味を教えてやる。

「それじゃ、私の魔法で処す？」

「ちよっと、まってくれ」

「これで轢いたら？」

エルフが物騒なことを言い出した。

「待てっちゅーの！ 話を聞いてからだ」

俺は窓を開けて首を出すと、相手に話しかけた。

「お前ら盗賊か？！ 盗賊なら容赦はしないぞ？！」

「食料があるなら置いていけ！ そうすりゃ命は取らねえ」

俺はシャングリ・ラから木刀を買った。2000円ぐらいのやつだ。

そいつをアマランサスに渡す。

「アマランサス、殺さないように」

「心得ましたわえ」

アマランサスがドアを開けて外に出ると、敵の弓が彼女に向いた。どうやら、弓を持っている男がリーダー格のようだが、その弓はプルプルと震えている。

正体不明のなにかに乗っている謎の一団。

最初は魔物かなにかかと思ったが、人が乗っていたので、切羽詰まっていた彼らは攻撃を仕掛けたのだろう。

弓に臆することなく、アマランサスがすたすたと獣人たちの前に出ると――足を少し開き、切っ先を地面スレスレに落として、直立不動の姿勢。

そのまま彼女が敵と睨み合っていると、マイクロバスの屋根に乗っていた獣人たちも次々と地面に降りてアマランサスの周りに集まってきた。

その様子をベルがフロントガラスに手をつけて心配そうに見ている。

しばらく震えていた敵のリーダーらしき男だったが、本能的にアマランサスに敵わないと悟ったのだろう。

弓を放り投げて両手を地面についた。

地面にカラカラと転がる弓は、木の枝に縄を張っただけの原始的なもので、大した威力はなさそう。

獣人なら、そこらへんの石を拾って投げたほうがよほど威力があると思われる。

「頼む！ 子どもたちは助けてやってくれ！」

頭を地面に擦りつけて懇願する獣人に敵意は感じられない。

やっぱりなにか事情があるようだ。

俺はバスから降りると、話を聞くことにして男の前に立った。

「俺が、この集団の責任者だ。お前ら盗賊じゃないのか？」

「へ、へい。村が崩壊して、子どもたちだけでも逃してくれと頼まれて、村から逃げたんで……」

獣人たちなら獲物が獲れるので、子どもたちが飢えないで済むという親たちの判断だろう。

苦渋の決断だったに違いない。

「その郷長は？」

「逃げたあとなので解らねえが、多分村人たちが刺し違えたんだらうと」

「反乱か……」

どうせ死ぬなら一太刀浴びせてから——と考えてもおかしくない。

「へい」

子どもを呼んでもらう。

森の中から出てきたのは、男女大小合わせて10人の子ども。

ボロボロのシャツを着て下はむき出し、素っ裸の子供も多数いる。髪はボサボサで汚れまくり、足も裸足で泥だらけ。

獣人たちは平気だろうが、裸足で怪我をしたりすれば、破傷風などが心配だ。

確かに獣人たちでも、これだけの人数を食わせるのは大変だろう。武器などがあればいいが、彼らがもっているのは手作りの原始的な弓と棍棒。

この国の獣人たちは文化を破壊されて、獣人のコロニーから得られる生きるための情報を教えられていない。

「おねげえします！ 子どもたちだけでも！」

俺は両手をついている獣人の所にしゃがみ込んで、右手に連なる山脈を指差した。

「山脈が見えるだろ？」

「へい……」

俺が突然関係ない話をしたので、男が少々困惑している。

「俺たちは、あの山を越えて隣の王国を目指している」

「この国を出るんっすか？」

「そうだ、お前たちも来るか？」

「行きます！ 連れていってくださいえ！ こんな国は、もうまっぴらだ！」

このまま放置はできないだろう。

子どもたちもたくさんいるしな。

ここに残したら、どれだけ生き残れるか解らない。

「だが、少々問題がある。乗り物の中は一杯で、もう屋根しか残っていない」

「連れて行ってくれるなら、どこでもいいですぜ！」

獣人たちは大丈夫みたいだが、子どもはなあ。

中に乗せてやりたいが……。

「あの……俺も行ってもいいんですか？」

もう1人の男と、三毛の女がやってきた。

素っ裸なのだが、三毛の毛皮を着ているせいか、裸には見えないのは他の獣人たちと一緒に。

「ああ、ここに置いていくわけにもいかんだろ？」

「あの……俺、力も弱いし、なにもできないし……」

「なにかできることはあると思うから、そういうのを見つければいいぞ？」

俺はシャングリ・ラからブラシを買うと、彼らに与えた。

「ほら、ブラシをやる。毎日毛づくろいをするように」

「本当にもらってもいいんで？」

3人の獣人が、集まってブラシを見ている。

「ああ、王国では、自分のものは自分で管理するようになるから、そういうのには慣れてくれよな」

「話には聞いてます」

三毛はなんだか元気がないな。

獣人ってのは、もっと活気に溢れているもんだが、
もしかして腹が減っているのかもしれない。

「おい！　ここで飯にしよう！」

俺は後ろの車に声をかけた。

「おう！」

アキラもバスから降りて俺の所にやってきた。

そのあとに続いて、ぞろぞろと村人たちも降りてくる。

村人たちは昼を食わないので、薪拾いや狩りに出かけるようだ。

「そいつらも連れていくのか？」

「しょうがねえ。置き去りにするわけにもいかないだろう？」

「そうだなあ――でも、これ以上増えたらどうする？」

「そ、それはそのときに考える……」

マジでいきあたりばったりだ。

我ながら呆れる。

「にゃー」「みゃ」

森猫たちが俺のところに来てきた。

「お母さん、彼らも連れていくからな」

「にゃ」

「森猫様が！」「へへっ！」

新入りの獣人たちが地面に這いつくばった。

これもいつもの光景だが、彼らにも服を着せないと。

他の村人と同じものを購入してやった。

「あの〜旦那……これって女もの……」

三毛がミニスカを手を持ったまま、もじもじしている。

「ん？ なにか問題があるのか？」

そこにうちの獣人たちとアネモネがやってきた。

「旦那、そいつは男だぜ？」

「え?! 三毛の男?!」

「はい、そうです……」

「えええ〜っ!? 初めて見た! お前らよく解るな」

「そりゃ、においが男だし」

そういうもののなか。

それじゃ騙されるわけがないよなあ。

「お前の名前は？」

「アオイ……」

「アオイか——よし! お前は、俺の所に来ないか？」

「ええ〜っ! ちょっと旦那!」 「うにゃ?!」

うちの獣人たちは反対のようだが。

「だって珍しいだろ? やっぱりレアキャラは確保しないと」

「ケンイチ、その毛皮は珍しいの?」

「アネモネ——三毛ってのは普通、女しくないんだよ」

「そうなんだ!」

「ネットゲだとレアは普通でSSRとかだな」

アキラも初めて見たらしく、アネモネと一緒にアオイの毛皮を眺めている。

皆から見られている彼は恥ずかしそうだが。

「エスエスアール? ネットゲをやらないから解らんし」

「それにしても——ケンイチもこちら側に来たか……うんうん」
アキラが俺の肩に手を乗せて、なにやらうなずいている。

「そんなじゃねえし」

そこに難しい顔をしたアマランサスがやってきた。

「聖騎士様のなさることに反対はいたしませんがえ——増やすなど言われてませんでしたかえ？」

「彼はそういうのじゃないぞ？ 珍しいから手元に置きたいだけだし。だいたい男だぞ？」

「あゝねゝ、多分旦那なら大丈夫だとは思うけどさ……」 「只人は男に言い寄る変なやつが多いからにゃ。アキラとかにゃ」

「フヒヒ、サーセン！」

アキラがゲラゲラと笑っているが、彼はエルフ専なので少々違うような気がするが。

「で、でも……」

「俺の仲間になれば、こういうのも食べられるぞ？」

俺はアイテムBOXから、チュールを取り出すと、封を切ってアオイにやった。

「それをなめてみる」

「はぁ……ペロペロペロペロペロ」

「落ちたな」「にゃ」

ニヤメナとミャレーが諦めたような顔をしている。

ちよつと強引だが、アオイを仲間に加えた。

一緒にいた獣人たちも、アオイが虚弱体質なので俺に面倒をみてもらいたいようだ。

彼にもTシャツと、サスペンダータイプの半ズボンをやった。

それから、子どもたちは汚れているので綺麗にしなくては。

「むー！ 洗^{クリン}浄！」

アネモネの魔法で綺麗にしてやると、麻のシートでワンピースを作ってやり、全員に着させる。

男も女も一緒だが仕方ない。

靴は子ども用の長靴を履かせた。

全員腹ペコらしいので、とりあえず簡単に飯を食わせてやるが、飢餓状態ではないらしい。

獣人たちが獲物を獲って食わせていたおかげだ。

シャングリ・ラから購入したパンを食わせてやった。

初めて食べる甘くて柔らかいパンに、一言も言わずに、もくもくと口を動かす。

うちの家族にも飯を食わせるが、俺にはちょっと仕事がある。バスの屋根に子どもたちが乗れるようにしなくてはならない。

「アキラ、悪いがちょっと手伝ってくれ」

「いいぜ」

2人でマイクロバスの屋根に登り、そこに張ってあるロープに輪っかを作る。

ロープワークはアキラが得意なので、やり方を教えてもらう。

電車のつり革のような輪っかができたら、シャングリ・ラから購入した安全帯を繋ぐ。

これで屋根に乗った子どもたちが落ちる心配もないだろう。

本当は、子どもたちを中に乗せてやりたいが――育った村も違うし、いきなり代わってくれと言われても困惑するだろう。

今回助けた獣人と子どもたちがどこの所属になるかは、あとで考

えなくてはならない。

獣人たちはフリーにして、子どもたちは孤児院みたいな施設を作る手もある。

なにはともあれ、辺境伯領に帰ってからの話だな。

256話 狩りの時間だ！

共和国の村から住民を拉致して遁走中。

目指すは、王国に続いているという峠を越える山岳道。

ほとんど道じゃないような道を進んでいるが、方向的には合っているはず。

多数の村人たちを乗せて頑張って走っているT社のコ○スターマイクロボスも、まさか異世界を走るとは思っていなかっただろう。

次々と襲ってくる障害物をクリアして道を走っていると、脱村した住民たちに襲われた。

獣人3人と子どもが10人。

アキラの提案で、コ○スターの屋根に乗るルーフキャリアを設置した。

そういうものがあるのかーと、シャングリ・ラを検索してみると、売っていたので早速購入。

力自慢の獣人たちがいれば、キャリアの設置もらくらく。

ついでに後ろに取り付けるハシゴもあったので取り付けた。

これで乗り降りもスムーズに、多少は安全に屋根に乗れるようになる……かな？

アキラの車にも取り付けたが、上に乗っている獣人たちの反応は上々だ。

保護した獣人の中に、なんと男の三毛というレアキャラがいて、すかさずポ○モンゲットだぜ。

やっぱりレアキャラは欲しくなるよなあ。

家族には少々反対されたのだが、強引に仲間にしてしまった。

サクラに帰ったら、リリスやプリムラをなんとか説得しなくてはならない。

まあ彼は男なので問題ないと思うのだが。

困ったのが、新たに保護した連中の処遇。

最初の村人たちに面倒を見てもらおうと思ったのだが、彼らもいっばいいいないので、難しいらしい。

しかも仕事の戦力として乏しい子どもばかり。

こりゃ、こちらで面倒みるしかなかった。

まあ、獣人3人と子ども10人ぐらいなら、なんとかなるだろう。

新しく保護した連中をマイクロバスの屋根に乗せて、森の中をひた走る。

多少の改造を施してみたとはいえ、これ以上は保護できないぞ？

どうしよう……心を鬼にして、お断りするか……。

シャングリ・ラとアイテムBOXというチートがあっても、物理的に不可能なことはある。

可哀想な人々を助けてほしいと懇願するアネモネにもそれは解るだろう。

道を走り続けて変化が現れ始めた。

道が徐々に広くなってきているのだ。

これは交通量がそれなりにあることを示している。

それと同時に、脇道に何本か遭遇した。

脇道の先には開拓村があると思われるが、寄り道はしていただけない。

これ以上は助けてあげられないしな。

空にグラデーションがかかり始めて、トリップメーターを見れば600km弱。

あの村から、どのぐらいの距離があるものか解らないが——ひとつ仮説を立てた。

あの遺跡にあった転移門は、山脈を越えるために作られたものではあるまいか。

もしそうだとすれば、最短距離で山脈の麓に出たはずだ。

サクラから王都まで約500km弱。

西に水平移動したとすれば、そろそろ目的地の街道が見えてきてもおかしくない。

道が広くなったことと合わせても、目指す街道は近いと思われる。

車を止めると、コンテナハウスと一緒に並べて、再び四角形の陣地を作る。

村人たちは料理を始めたので、俺たちも飯の準備をした。

寸胴に水を入れてアイテムBOXに入っていた肉を使ってスープを作る。

なんの肉か忘れてしまったものもあるが、食えれば無問題。

とりあえず、だしの素を入れればなんでも美味くなるの法則である。

俺たちが料理をしている間、新入りの獣人たちは狩りに行くようだ。

俺はシャングリ・ラから、新しいコンパウンド式のクロスボウを購入した。

「ほら、狩りをするならこれを貸してやる」

俺はリーダーの灰色のトラ柄にクロスボウを手渡した。

「うおっ！ アイテムBOX?!」

「そうだ、見たことがあるか？」

「軍隊のお偉さんの側近で1人だけ……」

「そいつはどんな仕事だったんだ？」

「お偉さんの荷物運びでさあ」

「ははは……なんだそりゃ」

完璧にアイテムBOXを私物と化しているな。

俺が手渡したクロスボウを灰トラが見ているのだが、彼の身体と村から連れてきた獣人たちを見比べる。

やはり食糧事情がよろしくないせいか、王国の獣人たちより細い印象だ。

「こ、こりやすげえ！　こんな立派な弩弓は見たことがねえ」

「弩弓は知っているんだな？」

「へい、あつしは軍隊にいやしたので」

「軍隊にいたのに、なぜ開拓に？」

「それが……」

お偉方の物資の横流しを指摘したらしい。

「つまり不正を指摘したら追放されたと」

「そのとおりで……なにが平等な国だ！　全部嘘っぱちじゃねえか！」

そう吐き捨てた彼は仲間の獣人とともに、クロスボウを持って森に向かった。

そのあとを子どもたちがついていくが、近くで薪拾いをするようだ。

「矢はなるべく回収して使ってくれよ」

「がってん！」

残ったのは、男の三毛であるアオイ。

「アオイは狩りは駄目か？」

「うん、力もないし、走ってもすぐに疲れてしまうし……」

普通の獣人の男と比べてかなり細い。
俺が女と間違ったぐらいだしな。

「それじゃ、他の獣人たちとは一緒に行動できないな」
「うん……」

やはり普通の男のように暮らせないのにコンプレックスがあるよ
うだ。

「鼻や耳は利くんだろ？」

「それには自信があるよ！」

「それじゃ、そういうので活躍してくれればいい」

「うん……」

「例えば、突撃虫が近くにいたら解るだろ？」

「それは解るよ！ 独特の羽音だし！」

さすが獣人だ。

「こんなに助けちゃってどうするのお」

セテラが呆れているが、仕方ないだろう。

「とりあえず、なんとかなる」

現時点でギリギリ乗れているしな。

もう1台コ○スターを買うって手もあるが、運転手が問題だな。

エルフなら知能がかなり高いし、セテラなら記憶はなくしている
が元文明人。

教えたなら運転できるのではないだろうか？

取らぬ狸の皮算用ってやつだが、エルフにとって只人のトラブル
などどうでもいいこと。

行き倒れを助けたいので、車を運転してくれと言ってもいい顔は
しないだろう。

もし頼むとすれば、それ相応の対価を求められると思って間違い

ない。

「アオイ、村であつたできごとを教えてください」

「うん、いいよ……」

アオイから彼らの境遇などを聞く。

やはり餓死者が出るなどの相当悲惨な状態だったらしい。

子どもたちを逃すために、最後の力で反乱を起こしたようだ。

暗い気持ちになっていると灰トラが帰ってきた。

手には鳥が握られているが、羽根などが耖られてすでに処理をされているようだ。

子どもたちも戻ってきて、手には薪を抱えている。

「ははは、この弩弓はすげえぜ！」

「狩りや戦闘のときには、そいつを貸してやるからな」

「いったい、あんたはなに者なんده？」

「俺のことはケンイチでいい。山脈の向こうにある王国の貴族だ」

「貴族?! なんでそんな人がこんな場所に?!」

「まあ、色々とあつてな」

「そうだにゃゝ色々とあつたにゃゝ」 「まったくだぜ……」

ミヤレーたちは、あまり活躍できなかったのを思い出したのか、しょんぼりしている。

俺から見れば十分にやってくれているんだけどな。

そもそも、こんな事態に巻き込んだのは俺の責任だし。

彼らが火を起こすので、マッチを与えてやる。

それから食器やスプーンなどだ。

「こんないいものをいただけるので？」

「「わゝい!」」

俺が作ってやった麻のワンピースを着た子どもたちがはしゃいでいる。

「向こうの村人たちにも与えているし、俺の領民になるんだから遠慮はするな」

「領民……」

灰トラが心配そうな顔をしているが、ミャレーとニャメナがやってきた。

「心配する必要はないにゃ」「そうだぞ？ 旦那の所は、獣人にも別け隔てなく接してくれるからな」

多分、彼が心配しているのは、そこらへんではないと思うのだが。共和国は只人と獣人たちを分けていなかったようだし。

「わかりやした」

彼はそう言うと、焚き火で鳥を焼き始めた。

そうそう、彼らの荷物を入れるためのプラボックスも必要だな。

「荷物はこの箱の中に入れてくれれば、全部俺のアイテムBOXに収納してやる」

アイテムBOXのデモンストレーションをしてやった。

「「わああ！」」

収納されて箱が消えたのを見て、子どもたちから歓声があがった。料理に必要な塩や、胡椒なども与えてやる。

「塩と香辛料?!」

こちらでは普通では手に入らないのだろう。

「自由に使っていいぞ？ 肉料理にはあるとないのでは段違いだし。」

向こうの連中にも与えているから遠慮はするな」

「ありがとうございます」

獣人がペコリと頭を下げた。

「そういえば、お前の名前は？」

「あっしは、マツです」

やっぱり王国の獣人たちのような名前ではないようだ。

料理は焼いた肉にスープ、そしてパン。

エルフたちは肉が駄目なので、カップ麺とパンを食べている。

俺たちは、アイテムBOXに入っていた謎肉を——彼らは自分たちで獲っていた鳥を焼いて食べている。

目を丸くして黙々と食事をする子どもたち。

食べるのに忙しくて、話している余裕もないようだ。

鳥肉を食べているマツの所に、ミャレーとニャメナが向かう。

なにをするつもりかと見ていると、手にカレー粉の赤い缶を持っている。

「ケンイチの仲間になったなら、ウチらも仲間だにゃ」「新入り、よろしくな」

「へ、へえ……よろしくお願いしやす……」

「近づきになるから、これを分けてあげるにゃ」「俺らが旦那からもらった宝ものな」

そう言って、ミャレーがマツの鳥肉に黄色い粉をかけた。

「クンカクンカー——これは香辛料?!」

「そうにゃ、これをかけると、なんでも香辛料料理になる魔法の粉にゃ」「そうそう」

マツが鳥肉を口にかぶりついた。

「うめえ！　なんだこりゃ！」

「カレーにゃ」 「うめえだろ？　旦那のために頑張れば、もっと美味いものも食えるぜ？」

「うおお！　俺はやるぜ！　俺はやるぜ！」

どうやら2人は、新人に先輩面をしたいだけらしい。

まあ問題ないだろう。

獣人たちには獣人たちのしきたりがあるので、彼女たちに任せる。俺たちが食べている謎肉は多分黒狼だと思う。

あれこれ溜まりすぎてなにがなんだかよくわからん。

クラーケンもまだまだあるんだが、彼らは食うだろうか？

味は悪くないと思うんだが。

そういえば、このクラーケンがないとイカクンを作っている水産加工場が止まっているだろうなあ。

リリースやプリムラも心配しているに違いない。

早く戻りたいところだが……。

飯が終わったので皆で後片付け。

焚き火の灰でこすって、水で流す。

そのまま放置しておけば自然に乾くが、俺たちには、アネモネの^{クリーン}_{ドライ}洗浄と乾燥の魔法がある。

食器などを綺麗にしてアイテムBOXに収納していると、アオイが耳を立てた。

「どうした？」

「向こうから、なにか来る」

「なんだ？ ケンイチ、敵か？」

アキラがビール缶を片手に辺りを見回している。

アオイが右斜めの暗い森を差した。

真っ暗で本当になにも見えない。

「うにゃ？」 「俺には聞こえねえ」

ミヤレーやニヤメナにも感じないらしい。

「お母さんは？」

「にゃー」

感じないらしいが、用心に越したことはない。

「警戒だ！ 獣人たちは、クロスボウを持って上に上がれ、右手前

方！ 村人たちは鉄の陣地の中央に！」

「ねえ、私はあ？」

「エルフたちは待機。最後の切り札で」

「解ったあ」「解った」

ツイツツラもアキラのアイテムBOXから出した弓をもらって準備に入った。

俺の所にいる10人の子どもは、コンテナハウスの中に入れる。

子どもたちにじっとしているように伝えと、俺も久々にコ〇ツ戦闘バージョンを陣地の外に出した。

今までは川や湿地帯で活躍の場がなかったからな。

「「「おおおっ！ なんだ？！ 鉄の魔獣！？ あれもケンイチ

様の魔法か！？」」

地面を揺らして出てきた黄色い鉄の魔獣に、屋根の上に乗っている獣人たちが驚く。

「静かにしろ！」

「「……」」

静まり返る中、アオイに再度確認すると、彼が耳をクルクル回す。

「アオイ、まだ近づいているか？」

「うん」

離れてはおらず、確実に接近中らしい。

敵もハンターらしく、風下から近づいてきているという。
しばらくすると他の獣人たちも騒ぎ始めた。

「なにかくるぞ！」 「マジだ！」

「シャー！」 「シャー！」

ベルとカゲも唸り出す。

「来るぞ！ 構えろ！」

俺も重機の運転席に座ってエンジンを始動させると、鋼鉄の巨体が震えて、黒い排気ガスを噴き出す。

「私も乗る！」

アネモネが運転席に乗ってくると精神統一を始めた。

アマランサスも自分のアイテムBOXから剣を取り出すと構える。
皆の戦闘態勢が整うと――黒い森の中、ベキベキと枝が折れる音とともに巨大な黒いなにかが現れた。

「アネモネ、^{ライト}光よの魔法を」

「むー！ ^{ライト}光よ！」

空中に浮かんだ光の玉が、敵の正体を照らし出す。

「牙熊だ！」

獣人たちから声が上がった。

強い光に警戒したのか、魔物は赤い目を輝かせて二本足で立ち上がり威嚇を始める。

デカイ！ バンザイした手は俺の操縦している重機ぐらいの高さがある。

「一斉射撃！！」

獣人たちから、一斉にクロスボウと、コンパウンドボウが発射された。

白くきらめく矢が次々と黒い身体に突き刺さる。

「グワアアア！」

地面に手をついた牙熊がこちらに突進してきた。

「む！
プロテクション
聖なる盾！」

黒い巨体が壁にぶつかる。

魔物の猪突はアネモネが出した透明な盾に阻まれた。

「グワア！！」

牙熊がその場でまた立ち上がったので、アネモネの魔法を切ってもらおう。

魔物の立ち位置を見て、閃いたことがあったのだ。

「コ○ツさん召喚！」

ノーマルバージョンの黄色い重機が落ちてきて、魔物の頭上に落下した。

ちょうど敵の立ち位置が、アイテムBOXから出てくるポイントになっていたのだ。

「グワアアア！！」

鉄の塊の下敷きになるという突然のできごとに黒い毛皮が半狂乱になった。

下半身が挟まれて、上半身だけでジタバタと脱出を試みている。
チャンスである——追撃を行う。

「一斉射撃！」

これだけの時間があれば、クロスボウも弓も装填が完了している。
白い矢が次々と魔物の上半身に打ち込まれた。

俺も重機を前に出すと、装備されている黒い巨剣を振り上げる。

「コ○ツ一刀両断！ それは黒き魂を涅槃ねはんじやくじょう寂静へ帰す、闇の一撃！」
振り下ろされた黒い刃が衝撃とともに地面ごと魔物の上半身を両断した。

黒いものが飛び散り、地面にも溜まりが広がっていく。
さすがにスイカのように真っ二つになれば、巨大な熊だって死ぬ。
ピクリとも動かない。

「「「うおおお！」」「「「あおおおん！」」」

遠吠えをしているのは犬人のようだ。

俺はコ○ツさんから降りると、黒い毛皮の収納を試みる。
魔物が死んでいれば、アイテムBOXの中に入るはずだ。

「収納」

魔物の屍かばねは、アイテムBOXに収納され、目の前から消えた。

「「「うおおおっ！」」」

獣人たちが盛り上がっているが、もう一回魔物を出した。

「マサキ！」

「はい！」

「お前らにやるから、解体して食料にしてくれ。これだけあれば、しばらく食えるだろう」

「いただけるんですか？」

「ああ、言っておくが、あまり美味くないぞ？」

「肉が食えるなら、贅沢は言いません！　ありがとうございます！」
まあ、臭みがあるが、胡椒などがあれば食えないことはないだろう。

それよりは腹を満たすのが先決のはずだ。

すでに辺りは暗いのだが、LEDランタンを辺りに配置して、魔物の解体を行う。

そのために必要な剣鉈を追加、包丁だけじゃちょっとキツイだろう。

砥石も20挺ずつ与えたが、包丁はもっとあったほうがいいと思う。

まあ、それはあとで考えよう。

限られた物資の中でやりくりしてもらって、儲けが出るようになつたら揃えてもいい。

なんでもかんでも渡してしまうのも、少々考えものだ。

まずは、アネモネの魔法で冷やしてもらうつもりだったのだが、金髪を揺らしてエルフがやってきた。

「ああ、私がやったげるよ——冷却」
リフリジレーション

セテラが魔法を使うと、青い光が黒い毛皮に染み込んでいく。

「ありがとうな」

「おチビちゃんばかりにやらせちゃ可哀想じゃない」
「むう」

仕事を取られたアネモネはちょっと不機嫌だが、エルフが手伝っ

てくれるのはありがたい。

「ははは、俺の出る幕がまったくねえな」

アキラはツイツラとビールを飲み直している。

祝福を使つて、アルコールを分解して戦闘に備えてくれていたら
しい。

「アキラ、サンキュウ」

「たいしたことなくてよかったよ。ここでドラゴンでも出たら、終了だな」

「妙なフラグを立てるのは止めてくれ」

「フヒヒ、サーセン！」

解体に参加していない村人が、セテラの下に集まってきた。

「エルフ様、ありがとうございます！」「ありがとうございます！」

村人たちもセテラに感謝している。

数十人の大人に群がられた魔物はあっという間にバラバラになつて、俺が渡したプラボックスの中に詰められていく。

それがコンテナハウスにしまい込まれて、そのままアイテムBO
Xに収納すれば腐ることはない。

「矢は回収して使ってくれよ」

「解りやした！」

「うひょう、肉が冷てえ！」

セテラがかけた魔法で、魔物の肉は冷え冷えた。

冷蔵庫に入っていたひき肉でハンバーグを作ったりすると、結構
手が冷たい。

そういえば、獣人たちの手でハンバーグは無理だなあ。

毛だらけになるし……。

「それで腐るのを防いでいるんだから、我慢しろ」

「すぐに冷やさないと、肉がくさくなってくえなくなるんだよな」
アキラもそういうのを経験したらしい。

「くさくても、食べねばならないことも多々ありましたので……」
マサキが言うとおりに、食い物がなければ多少においがついていても、食わざるをえない。

不味いだけで死ぬわけじゃないからな。
そこにアネモネがやってきた。

「私も経験があるよ」

「アネモネちゃんもあるのか？」

「うん」

アキラの間に彼女は小さくうなずいた。

「鳥を捕まえたんだけど、次の日に食べようとしたらガチガチになって――でもお腹が空いていたから食べた」

「アネモネちゃんの親からさばき方を教えてもらったりはしなかったのかい？」

「教えてもらってなかった……」

鳥のさばき方を教えてもらうために、旅の商人に捕まえた鳥を渡して教えてもらったのだ。

その旅の商人というのが、マロウ商会のマロウだったらしい。

「ええ？ それじゃ、アネモネちゃんは故郷でマロウさんに会ったのか？」

「うん、ケンイチと一緒にダリアに着いて思い出した」
マロウと出会ったときにプリムラが一緒だったら、シャガに捕まったときにすぐに解っただろうけどな。

「俺もそれを聞いて驚いたよ。そりゃ、マロウは商売で自らあちこちに出かけているから、出会っててもおかしくない」

「アネモネちゃん、鳥を捕まえられるんだ。でも、そのときは魔法は使えなかったんだろ？」

「うん。枝をたくさん払って山にすると、その中に小鳥が入り込むの」

「そこを、棒でぶったたくらしい」

俺は以前、アネモネが考え出した狩りの仕方を聞いている。

「ええ？　それで獲れるのか？」

「うん！」

「はえゝすげえな。たくましすぎる」

「腹が減って切羽詰まれば、なんとかしちゃうもんだよ」

そこに子どもたちが集まってきた。

「それで鳥が獲れるの？」

「うん、獲れるよ。でも、くくり罠を作ったほうが簡単かも」

「「教えて！　教えて！」」

「アオイ、村の獣人たちは罠の作り方とか知らないのか？」

「知らない……教えてくれる人がいなかったし」

「そりゃ、そうだ」

アネモネの罠は、俺がシャングリ・ラで買った本や、獣人たちから教わったものだ。

獣人たちは親や部族の大人から狩りの仕方や罠の作り方を教わるのだが、そういう文化も破壊されてしまっているの、ここにいる者たちは狩りが上手くない。

持って生まれた体力とスタミナ、そして反射神経だけで狩りを行っているわいだ。

「時間があつたら、うちの獣人たちから罠の作り方を習えбайい」

「ははは、任せろ」「任せるにゃー。でも、ウチは厳しいにゃ」
買なら子どもでも獲物を捕まえられるが、時間がかかるだろうか
ら今の旅の間は使えないだろうけどな。

解体したものをどんどんプラボックスに放り込む。

箱が足りないので追加で購入。

この箱はこのまま彼らの新しい村で使ってもらってもいいだろう。
アルミなどは危険だが、プラスチックはなんの問題もない。

金に困って売るようなら、俺が買い戻せばいいわけだし。

まあ、大丈夫だとは思うが……なにせ、一からあれこれと教えな
いと駄目だからなあ。

いままでより、ハードルが高いぞ？

暗い中で解体作業は続き、コンテナハウスの中は熊肉で一杯にな
った。

「これでしばらく、肉には困らないだろう？」

「ありがとうございます！ ケンイチ様！」

「俺の領に帰るまでには栄養をつけてもらって、すぐにも働いても
らわないと困るからな」

「「はい」」

熊の解体が終わったので、皆で寝ることにした。

村人たちは鉄で囲まれた陣地の中にブルーシートを敷いて。

新しく仲間になった獣人たちと10人の子どもたちは、追加で出
したコンテナハウスの中で寝てもらおう。

アキラとツイツラはいつものように別のコンテナハウスに向か
う。

「アオイ、お前はこっちだぞ？」

「お、俺も仲間と一緒に寝ます」

「寝るのはいいが、ちょっとおいで」

「は、はい」

俺たちのコンテナハウスの中にアオイを招き入れて、ベッドに乗せるとブラシかけをしてやる。

アネモネにはいつものようにベルたちのブラシかけをしてもらう。

「な、なーん！」

背中にブラシをかけられているアオイが変な声をあげた。

逃げようとしているのだが、気持ちいいので逃げられないようだ。

「せっかく綺麗な毛皮をしているんだから、毎日ブラシかけしてやるからな」

「なーん」

ブラシにはワサワサと毛の塊が絡みつき、すぐに野球のボールぐらいの大きさになった。

「ふ、ふううう」「むうう」

なにやら、俺たちを見ていたミヤレーとニヤメナの様子がおかしい。

「どうした？」

「ふぎやあああ！」「なああーん！」

2人が俺に抱きついてきて、身体をスリスリし始めた。

「なんだヤキモチか」

ヤキモチと言っても通じないだろうが。

「ほら、アオイ。前は自分でブラシをかけろ。毎日ちゃんとするんだぞ？」

「なん……」

彼はブラシを持って、仲間がいるコンテナハウスに戻った。
さすがに一緒に寝るわけにはいかないだろう。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

——新しい仲間が増えた次の日。

また旅の一日が始まる。

そろそろ街道に出てもいい頃だが……。

朝飯を食い終わり出発の準備が完了すると、俺はドローンを飛ば
してみた。

限界の高さまで上昇させて、道の先をしてみる。

はるか先に、なにか城壁のようなものが見える気がする。

——ということは、あそこが目的地ってことになるのかもな。

257話 ショートカット

道なき道を進んだり、橋がなかったり、虫に襲われたり、脱村した村人に襲われたりと、中々に波乱万丈だ。

色々トラブルに巻き込まれてはいるが、峠に続く街道というのは、そろそろだと思われる。

朝食のあと、ドローンを飛ばして道の先を見ると、はるか先に城壁のような白い構造物が見えた。

多分、あそこが俺たちの目的地だろうが、いったいどうやってクリアしたもんか。

「うーん」

ドローンの画面を見てみると、アキラがやってきた。

「ケンイチ、なにか見えたか？」

「ああ、城壁のようなものが見えるんだが」

「お？ やったじゃん。そこを突破すれば、峠に行けるんだろ？」
「多分な……しかし、どうやって突破したもんか」

「エルフを先頭に立たせて、亡命エルフ様のお通りだっ！ で行けねえか？」

「いくらエルフを崇めているからといって、国外脱出をさせてくれるかな？」

「とりあえずやってみて、駄目だったら強行突破だろ？」

「そのためにも、ちょっと近くに行って、地理や城壁の構造などを把握しないと駄目だな」

「そうだな」

「よし！ でも、目標が決まるってのは、行動のしがいがある」

「俺の油を城壁の中に流し込んで、火を点けるってのは？ スモーク・オン・ザ・オイル」

アキラが物騒なことを言い出した。

「なるべく穏便にこうぜ？」

「フヒヒ、サーセン！」

「アキラが、また物騒なことを言ってるにゃ」 「旦那とアキラの旦那が一緒だと、やべえ予感しかしねえ」

獣人たちも、ちよつと引いている。

「そこは共通項でくららないでほしいなあ。俺は一応、平和主義者なんだよ？」

「自分で平和主義者とか言っているやつで、平和主義者はいないんだなあ」

「ははは、まあな」

「ケンイチ、どうするの？」

やってきたアネモネが俺のシャツを掴む。

彼女も、今後の作戦が気になるようだ。

「まずは近くまで近づいて、地理を把握してから作戦を練る」
いきあたりばったりで、突破はできないだろう。

「うん、解った」

「エルフたちもそれでいいな」

「まあねえ」「いいよ」

長のマサキや、村人たちにも告げるが、彼らは俺についてくるしかない。

とりあえず作戦は決まったので、地理を把握できる場所まで行く。

皆をマイクロバスに乗せると出発した。

多分10～20kmほどの距離だろうから、ゆっくりと走っても30分ほどで近くまで行けるだろう。

念の為、10分走るとドローンを飛ばして様子を見る。

『ケンイチ、どうだ?』

「あと10kmぐらいだな」

『それじゃすぐか』

ガタガタと悪路を進み、かなり近づいたので車から降りるとドローンを飛ばす。

城壁が見えていたが、砦のようだ。

近くに川が流れていて、そこから水を引き込んだ堀が囲っている。砦の前には、バラックの家が広がっているのだが、まるで難民キャンプのよう。

街道の上に砦が建っているので、道を進むとなると砦を越えないと駄目だが、別にバカ正直に道を進む必要もない。

俺たちの目的は砦の攻略ではなくて、峠に進むことなのだ。俺の見た景色をスケッチブックに描いて皆に説明をする。

「確かに妾たちの目的は、砦を落とすことではないからのう」

「別に戦争をしにきたわけじゃないからな」

「しかし、これだと敵からの侵略に備えているのではなくて、民を逃さないように通せんぼしているようだな」
図を見ていたアキラがつぶやく。

「そうだな——アマランサス、一応ここらへんも王国領ってことになっっているんだよね?」

「そのとおりですわえ」

かなり昔に領土の割譲がされたのだが、峠を越えてこちらに住む者もおらず、そのままにしていたところ、共和国が誕生してうやむやになってしまったらしい。

王国としても、どうでもいい土地のようだ。

王国内でも、開拓が終わってない土地がいくらでもあるからな。わざわざ不便な土地に行く必要もない。

「うーん？」

「どうしたケンイチ」

「川沿いに道があるわけでなし、警備が甘いような……これだと簡単に川越えできそうだが」

「国境越えるのに、川を泳ぐとか普通にあるしな」

「元世界じゃ地雷原とかあったが、そんなものがあるわけもなし」計画は決まった。

「川越えだ。このまま道から外れて川を目指し、そこを渡る」

そうすれば砦にはバレないし、村がなくなったとしても王国の間が関与しているとは思うまい。

「あの、ケンイチ様」

マサキが手をあげた。

「なんだ？」

「あの乗り物というか召喚獣ですか？ 森の中を走れるのでしょうか？」

「いや、無理だな。全員、徒歩で川を目指す。大変だが頑張ってくれ」

距離的には2〜3kmといったところだろう。

川より、そこから先のほうが長いのだ。

「はい」

「荷物は全部旦那のアイテムBOXの中だし、俺たちは全員手ぶらだぜ？ 普通じゃこんなことは考えられねえ」

獣人の1人がそんなことを言う。

「そうだにゃ、こんなのケンイチだからできるにゃ」「旦那がいなかったら、即詰みだぜ？」

まあ、普通は難民となると、わずかな荷物を持って食料にも事欠く――そんなイメージだが、俺のアイテムBOXがあれば、そんなことにはならない。

方針が決定したので皆で車を降りると、固まって歩きはじめた。アイテムBOXから出した方位磁針で方向を確認。

ふわふわの腐葉土の上を歩き始める。

村人の周囲には、敵の気配を察知するのが得意な獣人たちを配置した。

長距離の移動は子どもたちが可哀想だが、頑張って歩いてもらうしかない。

年寄りもそれなりにいるが、皆健脚だ。

それはすなわち、弱った年寄りはすぐに死んでしまったからだと思ふ。

俺の足下にはベルと一緒に歩き体をこすりつけてくるので、歩きにくい。

「お母さん、監視を頼むな」

「にゃー」

「アオイ、お前の耳にも期待してるぞ」

「ああ、任せて！」

彼の耳は、他の獣人たちよりかなり性能がいい。

ここで突撃虫などにエンカウントしても、かなり遠くから接近が解るだろう。

俺の前を歩く三毛の毛皮が逆光でキラキラと光っている。
ブラシをかけて抜け毛を処理しただけで、随分と違うもんだな。

「だいぶ毛皮は綺麗になったな」

「あ、あの……ありがとうございます……」

「せっかく綺麗な毛皮なんだから、大事に手入れをしないとな」

アオイと話していると、ミヤレーとニヤメナが寄ってきてスリスリを始める。

「男に嫉妬するなよ」

「どうだか、あぶないにゃ」「そうだぜ」

アキラみたいな趣味はないんだがな。

獣人たちには後ろにも警戒させるが、こんな所で挟撃されたら大変だ。

敵に襲われたときの、シミュレーションを行う。

コンテナハウスを4つ出して、四角に囲んでその中に村人を入れるのがいいか……。

咄嗟になら、敵の正面に2個でもいい。

正直、80人以上を守るのはかなり難しい。

最悪、犠牲者が出ることも覚悟しなくては……。

俺が助けると言ってしまったからには、犠牲者が出たときの責を負うつもりではいる。

森の中を周囲を警戒しつつ、薄暗い中を1時間ほど進む。
幸い魔物などには遭遇しなかった。

「水の音がしてきたにゃ!」「旦那、川が近いぜ!」

「解った」

「ケンイチの言ったとおり、警備やらない感じだな」
アキラがツイツツラと一緒に周囲を見回している。

「そうだな。見張り台などもないし、人の入った気配すらない」

「なんだか、拍子抜けねえ」

セテラは少々物足りないような顔をしているが、安全なのに越したことはない。

「村々は物資不足で喘いでいるようでしたし、軍も物資不足で困窮しているのではないかえ?」

「アマランサスの言うとおり、その可能性はある」

周囲のにおいをクンカクンカしていたアオイだが、突然耳を伏せた。

「う!」

「どうした?!」

「な、なにかすごい獣臭が……」

「クンカクンカ、嗅いだことがないにおいだにゃ」「確かに、変なにおいがするぜえ」

うちの獣人たちも、なにかのにおいを感じているのは確かなようだ。

においはするが気配はないらしい。

なにやらいるのは間違いないが、とりあえず川まで行ってみることに。

川の周りに生息している魔物でもいるのだろうか?

それなら、川には近づく者がいないので、警備をする必要もないってことなのか。

川の蛇行でできたと思われる三日月湖を迂回する。

水面には白い花が群生しており写真を撮りたい衝動にかられるが、もちろんそんなことをしている場合ではない。

後ろ髪を引かれていると突然森が切れ、キラキラと反射する水面が見えてきた。

「おう、着いたぞ！」

「「「おおお……」」」

村人たちからどよめきが起こる。

川はそんなに大きくはないし浅いようだが、流れが少々速い。

山が近いので傾斜があるのだろう。

白い川砂利も見えている。

村人たちはなにも感じていないようだが、アオイは耳をくるくると回している。

「アオイ、どうだ？ なにかいそうか？」

「はい、周りに気配が結構あります」

「クソー―どうしたもんか」

少々危険だが、渡らざるを得ない。

岩を突破するわけにもいかないし、川沿いになにかいるとすれば、迂回しても無駄なのだろう。

「ケンイチ、どうやって渡る？」

「みたところ幸い浅いようだ。前と同じダンプ作戦でいこう」

「オッケー」

「オッケーにゃ！」

ベルとカゲが俺の所にやってきた。

「にゃー」

「それじゃ偵察を頼むよ」

「にゃ」「みゃ」

2匹バラバラに周囲のパトロールに出発した彼女たちを見送る。獣人たちにも周囲の警戒を頼むと、俺はアイテムBOXからダンブを出した。

こいつを川に入れて、その上をアスレチックのように渡るわけだ。川になにかいるとすれば、水に浸かっての徒歩やボートで川を渡るのは危険だろう。

「ケンイチい、私はあ？」

「村人たちの護衛をしてやってくれ。エルフ様が近くにいれば心強いだろ？」

「そうなのお？」

彼女は村人のほうをチラリと見たが、あまり乗り気ではなさそうだ。

エルフたちにとって、村人たちの優先順位は低いように見える。セテラにとって、興味の対象は俺なのだろう。

それはいいとして作戦を進める。

「よし！ ダンプ召喚！」

地面を揺らして落ちてきたダンプに乗り込むと、エンジンを始動させる。

こいつも水の中に浸ったりして可哀想だが、働くクルマの運命だ。さだめ異世界で頑張ってもらえないかな。

ギアをローに入れると、川べりの段差をクリアして水の中に進入する。

川は浅く流れは速いが、ダンプを流すほどの威力はない。流れの真ん中でダンプを停止させると、ドアを開けて下を覗く。

「なにか？ いるのか？」

もしかして、ピラニアみたいな魚がいたりすれば、そりゃヤバいが……。

川の水面を観察していると、獣人たちが騒ぎ始めた。

「どうした!？」

窓から外に出ると荷台に上がる。

アイテムBOXからアルミハシゴを出すと、荷台の後ろに立てかけた。

「なにかくるぞ!」「うにゃー!」「旦那!」

ハシゴから地面に飛び降りると、ベルが走ってきた。

「にゃー!」

「え?! カメ?!」

「え?! カメか!? ケンイチ!」

「ああ、ベルがそう言っている」

「やべえぞ! 強力でクソ硬え魔物だ」

カメの甲羅はドラゴンの鱗以上の硬度らしい。

川に沿ってくるらしいので、村人たちを下がらせて、コンテナハウスを出した。

2つで直角を作って、その角中に村人たちを避難させる。

「旦那! 黒いのが来たぜ!」

ニャメナの声で指差す方向を見ると、右手から黒い山がのそのそ近づいてくる。

カメの歩みを想像して遅いかと思ったのだが、人がゆっくり走るぐらいの速度だ。

「ケンイチ! 反対側からも来た!」

アネモネの声で左手を見ると、そちらからも山が接近中だった。

「とりあえず右手からやる！ アネモネ、左手を魔法で抑えてくれ！ アマランサス、アネモネの援護を！」

「承知いたしましたわえ！」

「ここは——ホイールローダー召喚！」

コ○ツさんの戦闘バージョンかと思ったのだが、ドラゴンより硬いとなると切れないかもしれない。

——となると、カメの弱点といえはひっくり返せば……。

大きなタイヤを履いたオレンジ色の巨体が落ちてきたので、運転席に乗り込んだ。

久々に使うが大丈夫か？

いや、アイテムBOXに入れておけば時間は止まったまま。

前に使ったままで止まっているはず——少々不安を感じながらキ―をひねると、一発で始動。

黒い咆哮を上げた。

「よし！」

俺はギアを前進に入れると、アクセルを踏み込んで魔物に向かって突進した。

相手もデカいが、質量からすればこちらのほうが上だろう。

ぶつかり合いなら重いほうが勝つ！

バケットを降ろして黒い山をすくい上げるように激突した。

なんとも例えようのない、くさいにおいが鼻に飛び込んでくる。

相手は3mほどあるカメ——というよりは、子どもの頃の図鑑で見たワニガメに似ている。

甲羅も六角形になっておらず、苔むしていて草が生えて花が咲いていた。

巨大な口には鋭い牙が見えており、食いつかれたら身体がちぎれ

て即死だろう。

「おりゃああ！」

レバーを操作すると、ワニガメの下に滑り込ませたバケツを勢いよく持ち上げる。

バケツにあおられた魔物が勢いよく土とともにひっくり返った。地面が掘り起こされてカビ臭いにおいが、辺りに立ち込める。

「「「おおおっ！」「」」

魔物の周りを囲んでいた獣人たちから歓声が上がった。

「ケンイチ、丸太だ！」

聞こえてきたアキラの声に従って、アイテムBOXから丸太を出した。

「野郎ども！ この丸太を持ち上げて、魔物の口に突っ込め！」

「「「うおおお！」「」」

獣人たちが丸太に集まってくると、それを持ち上げた。

映画でドアを打ち壊すときに、こんなシーンを見たことがあるが、アキラはなにをするつもりなのだろうか？

「突っ込め！」

「「「うおおお！」「」」

丸太を持った獣人たちがワニガメ目掛けて呐喊とっかんした。

攻撃の先端が魔物の口に近づくと大きな口を開けて、それを迎え撃つ。

丸太に鋭い牙が食い込み、メリメリと木が木っ端のように割れていく。

案の定すごい口とパワーだ。

あれに挟まれたら、人間の身体など真っ二つになるだろう。

元世界にいたすっぽんは食いついたら離さないなんて言われていたが、この魔物もガッチリと丸太に齧りついてしまった。

「そのまま押さえていろよ！」

「「「おおお！」」」

獣人たちの筋肉が盛り上がると、ワニガメとの綱引きが始まった。それから離れたアキラは、魔物の口の間近まで接近すると叫んだ。

「おりゃああ！ マヨパワー全開！」

彼の指から、黄色い粘液がワニガメの口内に噴射された。

止めどもなく噴射されるマヨに、魔物の口はすぐに満杯になった。

「ゲボッ！」

大きな音とともに黄色いものが吐き出されるが、アキラの指から噴射されるそれは止まらない。

ついには吐き出されることもなくなり、ワニガメの体内はマヨで満たされてしまった。

こうなれば、丸太にかじりついてはいられない。

魔物は黄色いものが詰まった口を開いた。

「よし！ 離れろ！」

「「「うおおお！」」」

獣人たちが丸太を担いでその場から離れると、ワニガメはひっくり返ったままバタバタと暴れ始めた。

「ははは、万物窒息！」

アキラが言うとおりに、どんな最強の生き物でも窒息からは逃れられない。

彼は、こいつでドラゴンも倒しているのだ。

「ケンイチ！ こっちも！」

俺はアネモネの声で、彼女のほうを見た。

プロテクション

聖なる盾の魔法で、アネモネがもう一匹のワニガメを押さえ込んでいる。

「アネモネ、すぐに行く！」

「ケンイチ！ ゴーレムのコアを出して！」

「おう！」

彼女にはなにか策があるようだ。

おれは、小さな大魔導師の言うとおりに、アイテムBOXからゴーレムのコアを出した。

「むー！」

プロテクション

アネモネが聖なる盾の魔法を解くと、透明な壁がなくなり再び小山のような魔物の進撃が始まる。

「アネモネ！」

迫りくる巨大な魔物に微動だにしない彼女だったが、目の前に土の壁が出現した。

彼女がコアを使って、森の土のゴーレムを作ったのだ。

そのまま土の壁は大きな波のように魔物を襲い、そのまま敵をひっくり返す。

土を被り逆さまになっているワニガメがジタバタしている。

「野郎ども！ 今度は向こうだ！」

アキラはアネモネがひっくり返した魔物を狙うようだ。

「「「おお！」」」

「丸太は持ったか！？」

「「「おおおっ！」」」

「そりゃー！ 突撃っつ！」

「「「うおおおっ！」」」

再び丸太を持った獣人たちが魔物に突撃する。

このカメは口の周りになにかが来ると反射的に噛んでしまうようである。

口が塞がれば、アキラのマヨ攻撃が炸裂する。

あっという間にワニガメは、ひっくり返ったまま窒息した。

「よっしゃ！ 勝どきを上げろー！ ウラーウラーウラァア！」

「「「ウラーウラーウラァア！ うおおおっ！」」」

「やったにゃあ！」 「やったぜえ！」

なんか獣人たちが盛り上がりまくっているが、魔物を倒して終了ではない。

川を渡って、その先に行かねばならないのだ。

まだ先は長いのだが攻撃のパターンはできた。

「アネモネ、よくやってくれた。ゴーレムでひっくり返すのは使えるな！」

「うん！」

「あはははっ！」

笑い声が聞こえてきたので、そちらを向くと、コンテナハウスの上でセテラが腹を抱えて笑っていた。

「こっちは真剣にやっているんだぞ？」

「あはは、ごめん。でもさあ、魔物をそんな風に倒すなんてえ」

魔法は通さないし剣でも切れないので、かなり苦戦する魔物らしい。

「アキラたちはどうやって対処していたんだ？ マヨで窒息させるのは決め手だろうけど」

「俺のパーティーには、センセの拘束バインドの魔法があるからな」

「ああ、そいつで拘束してからマヨ攻撃か」

「はは、そゆこと。でも動き回っている敵には使えないからな。不意打ちするなどの工夫が必要になる」

そこにツイツツラが走ってきてアキラに抱きついた。

「すごいよアキラ！ あんな魔物を簡単に倒しちゃうなんて！」

「はっはっは！ これが竜殺しの実力ってやつよ！」

「竜殺し?!」 「竜殺しだって?!」

「アキラは、帝国でドラゴンを初めて退治した男にゃ」 「アキラの旦那は帝国の皇帝の懐刀だったんだぜ？」

「ええ?!」 「なんで、そんな偉い人が、こんな場所に」

「はは、色々あってな」

まあ、そのとおりだな。色々とありすぎて話すと長くなりすぎる。それはいいのだが、アキラとツイツツラが抱き合って、キスなんてしている。

「おいおい、昼間からちよつと自重してくれよ」

「フヒヒ、サーセン！ いやあ、ちよつと盛り上がっちゃまってなあ」

——といいつつ、アキラの手がエルフの下半身をまさぐっている。

「デカイ魔物を退治したから、お祝いをしたいところだが、まだ先は長い。しばらくおあずけだぞ？」

「そうだな」

アキラの話では、ひっくり返すことができれば腹は柔らかいので剣が通るという。

「それなら、落とし穴とかも使えそうだな」

「ハメることができれば、俺のマヨ油も使える」

「つまり、火炙りか……」

「火炙りといえば、こいつは美味いぞ？」

「食えるのか？」

「ああ、内臓は臭くて駄目だが、肉は締まっていて味が濃い」

「すっぽんみたいなの？」

「ああ、それぞれ……」

この世界は、カメを食う習慣がないようだが……。

「お前ら、食うか？」

獣人たちに聞いてみても、気味悪がって誰も手を挙げない。

飢餓でこれしかないというなら食うのだろうが、積極的に食いた
い獲物ではないらしい。

「仕方ない。俺たちで消費するか」

「ははは、美味しいのに」

アキラは笑っているが、日本人はなんでも食い過ぎだからな。

戦闘が終わったので、コンテナハウスを収納して村人にも魔物を
見せてやる。

「こ、こんな大きな魔物を……」

マサキの周りに村の獣人たちが集まってきた。

「あの旦那は竜を殺したこともあるってよ」

「ドラゴンを?!」

「ああ、帝国でも王国でも、竜殺しは有名だぞ？　ここらへんには
噂も伝わってないか？」

「……はい」

まあ、交流がまったくないってことはそうなんだろうなあ。

共和国とカダン王国の反対側にある王国と取引があるらしいが、
そこからは噂は入っていないのだろうか？

いや、統一の国祖である將軍様より偉くて強い人間がいたら困ることになるから、情報が検閲されているのかも。

共和国で宗教が禁止されているのと同じように。

魔物を倒したというのに、マサキがしょんぼりしている。

「どうした？」

「あの……我々は、なんのお役にも立ちませんで……」

「戦闘は、戦闘が得意なやつに任せればいいんだよ。農民が武器を取ってなんの役に立つ？」

「確かにそうなのですが」

「適材適所、不得意なことに首をつっこむ必要はない」

これで首をつっこみたがるやつがいたら、ハッキリいつてかなり面倒なことになる。

働きの者の無能とか、無能な味方は有能な敵より脅威——とか言われるやつだな。

それはさておき、敵は排除したのだが、アオイの話だと反対側にも気配を感じるらしい。

川を渡って対岸の敵も排除しなくては。

258話 追撃

俺は共和国の村から村人を引き連れて王国に帰る途中だ。

マイクロバスで道ともいえない道を進み、峠に通じる街道付近までやってきた。

峠の入り口には大きな砦があり、道を塞いでいる。

ここを突破する必要があるわけだが、バカ正直に真正面から挑む必要はない。

途中から森をショートカットして川を渡り、砦を迂回する作戦に出た。

敵の警備らしきものもないので楽勝かと思いきや――川にはカメが生息していた。

カメといっても、元世界の可愛いものではなく、巨大なワニガメのような魔物だ。

アキラの話では、甲羅はとても硬くドラゴンの鱗をしのぐ強度だというが、巨大なカメの魔物といえどもひっくり返せばタダのカメ。アキラのマヨによる万物窒息攻撃で、なんなく撃破した。

最初は面食らうが、攻略の仕方が解れば恐れることはない。

カメを退治した俺達は、川を渡ることにした。

「にゃー」

俺の足下にベルがやってきてスリスリしている。あまり活躍できないことを気にしているようだ。

「はは、大丈夫だよ。お母さん」

しゃがんで彼女の腰のあたりをトントンしてやると、気持ちよさそう。

いきなりゴロリと横になってしまった。

「ほら、そんな所に寝転がると、葉っぱだらけになっちゃうから」そんなことをしている場合ではないのだが、ベルが動かない。

しょうがなく、お腹をナデナデしてやると、獣人の女たちが周りを囲んでいた。

ジリジリと寄ってきているのだが、ミャレーとニャメナが牽制している。

「ほら、お母さん！ 川を渡るよ！」

俺に急かされて彼女が身体を起こした。

黒い毛皮が葉っぱだらけなので払ってやる。

「アオイ、敵は？」

俺が途中で拾った三毛の男。

最初女かと思ったのだが、男だ。

元世界のオスの三毛猫が珍しいように、この世界で三毛の男も珍しいらしい。

体力や力はからつきしたが、嗅覚と聴覚はずば抜けている。

「今のところは――相変わらず、向こうにはなにかいるみたいだけど」

他の獣人の男と同じように、俺が渡した半ズボンを穿いているのだが、個人的にはミニスカを穿いてほしい……。

「こっちで倒したカメと同じやつがまだいるのかもな」
カメをひっくり返すのに使った重機を収納して、川を渡る準備をする。

ダンプはすでに川に浸けているので、あとはアルミはしごを車体に渡せばいい。

途中の川を渡るときにやったダンプアスレチック作戦と同じだ。獣人たちに協力してもらい、ダンプの車体にアルミはしごを設置していく。

こういう作業には獣人たちの力が欠かせない。連れているのが全部獣人なら、この作業自体がいなくなるわけだが。

先に獣人たちを渡らせて、対岸の警戒にあたらせる。
今のところ異常はないらしい。

「マサキ、村人たちを渡らせてくれ」
「解りました」

ダンプアスレチックは2回目なので、村人たちも戸惑っている様子もないし、余裕も感じられる。

子どもたちも笑ってふざけたりしているが、油断は禁物だ。

「こら、まだ魔物がいるんだから、遊んでいる場合じゃないぞ？」
「「はぁい」「」」

子どもたちに注意を促し、肅々と渡らせた。

なにごともなく皆が渡り終えたので、アルミはしごを回収してダンプを収納する。

「「「おおっ！」「」」

鉄の塊が出たり消えたりするのに、村人たちはいまだに慣れないようだ。

「皆、疲れているだろうし、腹も減っているかもしれないが、ここでは休めないぞ」

「ここはヤバいにゃ」「旦那の言うとおりだぜ」

「アキラ、大丈夫か？」

「まっかつせつなっさい！」

「「「おおうっ！」「」」

獣人たちも雄叫びを上げた。

車を出せば魔物の追撃なんて軽く振り払えるんだが、ラ○クルはともかくマイクロバスで森の中は走行できない。

村人たちを集合させて、出発させようとしていると――右手から警戒にあたっていた獣人が走ってきた。

「来た！　またあのカメだぜ！」

続いて左手からも来たようだ。

またコンテナハウスを並べて陣地を作って、その中に村人たちを入れた。

「アネモネ、左手からのカメを頼む！」

「うん！」

アイテムBOXから出したゴーレム用のコアを出す。

「アマランサス、アネモネの護衛を！」

「心得ました！」

小さな大魔導師と、金髪の聖騎士が配置につく。

アマランサスは否定しているが、彼女の力は聖騎士に準じるもので間違いない。

「こっちは、ホイールローダー召喚！」

空中からオレンジ色の重機が落ちてきた。

「ケンイチ、私たちはあ？」

「エルフたちは、村人たちの護衛を頼む」

「解ったあ」

「僕は、アキラと一緒に行くよ！」

ツイッツラがそう言うのだが、獣人たちと一緒に丸太を持つのだろうか？

「よし、丸太も召喚！」

ゴロゴロと出てきた丸太に毛皮が群がる。

「丸太は持ったか！」

「「「おおっ！」」」

すっかりアキラは、獣人たちの戦闘指揮官だ。

実際に帝国では、部隊を指揮することもあったらしいので、まさに適任ともいえる。

巨大カメに対する作戦は今までと同じように、俺の重機とアネモネの魔法でひっくり返す。

獣人たちが持った丸太を魔物の口に突っ込み、アキラのマヨで窒息させる。

とりあえず地上にいる魔物なら、アキラの黄色いウネウネは無敵。なにもない場所なら、火攻めにも使えるのだから、強力な戦略兵器と言っても過言ではない。

瞬時に2頭の巨大なカメを無力化して、窒息させた。

「「「ウラーウラーウラアア！」」」

獣人たちが盛り上がりまくる。

やはり、強いリーダーに率いられて強敵に勝つ——というのは、彼らの本能を刺激するのだろう。

仕留めたカメをアイテムBOXに入れると、アオイに周囲の気配を探らせる。

「アオイ、どうだ？」

「うん、気持ち悪い感じはなくなったと思う」

敵はいないようだ。

人数も増えたし、川があるんだ。

水の補給をしていくか。

上が開いたドラム缶を追加で10個購入して、獣人たちに水で満たしてもらう。

これだけあれば、なんとかなるだろう。

「それじゃ——出発に備えて、ちょっと周囲を確認するか……」

アイテムBOXからドローンを出して、森の上に飛ばすと周囲を確認する。

「砦の方角があっちだから……」

一緒に出した方位磁石でも確認して、進路を決めた。

「よし！ 出発！」

「「はい！」」

「獣人たちは、群れを囲むように広がって周囲を警戒」

「「おう！」」

「アオイは俺の傍に」

「うん」

彼は足も遅く、体力もない。

つまり只人より多少はマシぐらい。

普通の獣人たちと一緒に行動はできない。

彼もそれを気にしているようなのだが、ここは適材適所。

アオイには優れた聴覚と嗅覚があるのだから、それを活かせばい

い。

走るのが遅いなら自転車に乗せたりすればいいかもな。
ミャレーとニャメナも自転車には乗れたから、訓練すれば乗れる
ようになるかもしれない。

森の木漏れ日の中を30分ほど進む。

どこからか様々な鳥の声が聞こえるのだが、楽しんでいる余裕はない。

日がくれる前に、この森を脱出しなければならない。

夜の森は、魔物や夜行性の獣が活性化する――非常に危険だ。

これだけの人数を守るとなると、かなり困難になる。

黒狼なら、マイクロバスや車、コンテナなどを総動員すれば、鉄
の防壁に手出しはできないだろうが、それで防げないような大型の
魔物が現れた場合、即詰みだ。

先を急いでいると、アオイの耳がクルクル動いている。

「どうした？」

「たくさんの人の声が聞こえる気がする……あっちのほう……」

「なに?!」

彼の話では左手かららしい。

アオイの言うとおり、そちらの方角から周囲を警戒していた獣人
が走ってきた。

「ケンイチ様! 向こうからたくさんの人の声と、においがしてき
やしたぜ!」

これは敵に間違いないだろう。

「なんだ? 追手か?」

「ああ、もしかして――俺たちが盛り上がり騒ぎすぎたんで、バレたかな？ フヒヒ、サーセン！」

アキラが頭をかいているが、十分な働きをしてくれた彼を責めるわけにはいくまい。

俺はアイテムBOXから、ラ○クルを出した。

「セテラとマサキ、村人を率いてあっちの方角へ」
エルフに方位磁石を渡す。

「ケンイチ様！ おいらたちは?!」

途中で拾ったマツという獣人だ。

「獣人たちは、村人たちの警護だ。追手は俺たちがやる」

「解りやした！」

「にゃー」

ベルとカゲが俺のところに来てきた。

「お母さんは、村人たちと一緒にいてやってくれ」

「にゃー」「みゃー」

「アオイ、お前はこっちだ！」

彼の手を引っ張り、ラ○クルの後ろに乗せた。

助手席にはアネモネ、後部座席にはアマランサス、三列目シートには武器を持ったミャレーとニャメナ。

アキラは、自分のアイテムBOXからプ○ドを出して、ツイッツラと乗り込むようだ。

「た、対人戦闘か……」

正直、アネモネには殺しをさせたくない。

こういう世界で暮らしている限り、避けられないのかもしれない

が、せめてもう少し大人になってから……。

俺は甘いのだろうか？

俺を縛っている元世界の常識ってやつにさいなまれつつ、エンジンを開始して、アクセルを踏み込んだ。

「うわあああ！」

後ろからアオイの声が聞こえる。

「すごい速さだ！」

「ケニイチの召喚獣の速さはこんなもんじゃないにゃ」「お前みたいな弱っちいのは嫌いんだけど、旦那のお気に入りじゃしょうがねえ」

ルームミラーで後ろをチラ見する。

獣人たちは上下関係がはっきりしている。

アオイは、2人の下ということになったらしい。

彼が優れた嗅覚と聴覚で活躍してくれば、2人も同等の存在と認めることだろう。

手元のスイッチで、彼がいる座席の窓を開ける。

「アオイ解るか？」

「このまままっすぐ！」

木の間を縫うように走ると、銀色のなにかが見えてきた。

車を停止させて、アイテムBOXから出した双眼鏡を覗く。

プレートアーマーを着た兵士の一団。

馬に乗っているのが数人と、あとはあまり上等とは言えない防具を身にまとい、槍を持った兵士たち。

人数は30人ほど——獣人たちは見えない。

彼らは強大な戦闘力を持っているのに、なぜか騎士団などには配備されていない。

戦術などの細かな指示が伝わらないせいもあるのだろうが、使い

どころはいくらでもあるのに、軽んじられている。

共和国の連中には恨みはないが——ここで皆殺しにしないと、王国に逃げた一団がいるのがバレてしまう。

まずは馬に乗ったやつを確実に仕留めないと。

さすがに乗用車でロードキルするのはつらい。

俺は車から降りると、ホイールローダーをアイテムBOXから出した。

こいつを使って正面からぶち当たり蹴散らす。

ホイールローダーに乗り込むと、アキラの車がやってきた。

「ケンイチ、どうする？」

「敵は30人ほどだ。俺が真ん中に突っ込むから、バラバラになった敵を各個撃破で仕留めてくれ」

「はいよ」

「アオイ、アキラの鉄の箱に乗ってくれ」

「うん！」

重機の運転席にアネモネが乗ってくる。

「私は？」

「敵の所にコアを出すから、土のゴーレムを作って足止めだ」
これなら直接彼女が手を下すわけではないから……。

「解った！」

「アマランサスと獣人たちは、逃げた敵の掃討を」

「解ったにゃ」「任せてくれよ旦那」

「心得た」

剣を出した元王妃に尋ねる。

「アマランサス、大丈夫か？」

「聖騎士様、問題ありませんわえ」

「そうか」

俺は重機のエンジンをかけて深呼吸をした。

「呐喊ー！」

ギアを前進に入れて、アクセルを踏み込む。

巨大なタイヤが森の土を掴み、木々を間を縫って走るとすぐに敵の部隊が見えてきた。

ホイールローダーの運転席は高い場所にあるので、状況は把握しやすい。

突然、森の中から現れた鉄の魔物に、兵士たちは固まった。

敵の真ん中にいる馬に乗った奴らを鋼鉄のバケットで薙ぎ払う。

馬に鉄の爪が食い込み、そのまま押し倒されると、巨大な黒いタイヤに巻き込まれてバラバラに――。

馬が可哀想だが仕方ない。

俺を恨んでくれていい。

「「「うわあああ！！」」「「ぎゃあああ！」」」

重機を作った人たちも、こんなことに使うつもりで作ったんじゃないだろうけどなあ。

「アネモネ！」

「うん！ むー！」

運転席からアイテムBOXを開き、土の上にコアを出した。

青い光が舞うと、森の土が集まってスライムのように動きだす。

黒い波のようにウネウネと、兵士たちの足下を飲み込んだ。

魔法に捕らわれなかった兵士が四方に散り始めるが、そこを矢が襲い始めた。

アキラの車に乗ったツイツラと、そこから降りた獣人たちが発射したものだ。

1人、また1人と倒れていく。
魔物ならともかく、相手が人となるとなんとも言えない気分になる。

こんなことに慣れてしまっている自分が恐ろしくはなるが――80人以上、俺の家族を入れたら90人近くの命を守らないといけない。

1人の兵士が剣を抜いてアマランサスのほうへ向かうが、一合した瞬間に真っ二つになった。

残っている兵士たちに最後の止めを刺すため勢いをつけねばならない。

そのために一度重機をバックさせた。

アネモネが作り出した土の沼にはまり残っているのは、馬から落ちた指揮官クラスの男が1人と兵士が5人ほど。

このまま、一気に決着をつけようとしたのだが――。

残った兵士がなんとか足を引き抜くと、指揮官を刺殺して剣を放り投げた。

ちよつと立派なプレートアーマーを着た髭の男の断末魔の叫びが森に響く。

突然のできごとに俺は重機を止めて、運転席から身を乗り出した。

「なんのつもりだ！」

「あんたら峠を越えるつもりなんだろう?!」 「助けてくれ!」 「俺たちも連れていってくれ!」

兵士たちを見れば、一段と装備が粗末。

ボロボロの革の鎧らしきものを着込み、下はなにも穿いていない。フリチンなのだろうか？

この男たちは、昔の日本でいう足輕のような者たちなのだろう。

「そんなことを言って、俺たちを油断させるつもりじゃないんだろ
うな？」

「違う！」「こんな国もうごめんだ！」「このまま餓死するぐらい
なら、山に登って死んだほうがマシだ！」

「……アネモネ、魔法を解いてくれ」
彼女の頭をなでる。

「うん」

足下を捕まえていた魔法が解かれると、男たちは鎧を脱ぎ素っ裸
になって、地面に手をついた。

なにも持っていないアピールだろうが、兵士たちは痩せて骨と皮
状態。

村人たちと一緒に栄養状態がよくなかったことが、うかがい知れ
る。

「頼む！」

「……うーん……なにか妙なことをしたら、すぐに首が飛ぶと思っ
てくれ」

「わ、解りました！」「やった！　こんな国とはおさらばだ」

兵士たちは喜んでいるのだが、鎧も服もボロボロ。

足もつかかけサンダルのようなものを履いてるだけ。

シャングリ・ラから一番安いシャツとズボンを購入して放り投げ
た。

足下は、村人たちと同じ安い長靴をやる。

「そいつに着替えろ」

「こ、こんないいものをもらえるんで？」

兵士たちが新品のシャツを掲げて、見たこともないといった顔を

している。

「ああ」

彼らが喜んで着替えをしていると、剣を納めたアマランサスがやって来た。

「聖騎士様、こやつらを連れていくのかえ？」

「砦に帰すわけにはいかないから、連れていかないと殺さねばならんし……見れば下級兵士だ」

「許してくださいえ！」「なんでもしますから！」

兵士たちの必死の訴えに、アマランサスがため息をついた。

「妾は反対はせぬわえ」

「アマランサス……」

「なんでしようかえ」

「人を斬って平気なのか？」

「これが初めてではありませぬわえ」

まあ彼女と初めて会ったときも、死合をさせられて殺されそうになったしなあ。

——とはいえ、あまり突っ込んで聞く話ではないな。

兵士たちを着替えさせている間、俺は死体の回収を行う。

アイテムBOXに入れてゴミ箱に投入してしまえば、死体もなにもかも残らない。

ここにやって来た部隊がどこに行ったのかすら解らなくなる。

当然、王国の貴族がこんな場所にいて、共和国の村人を拉致して逃げたなんて誰にも知られないわけだ。

馬の死体も入れる。

馬は食料にもなるし、馬肉は好きなのだが……これを食べるのは忍びない。

村人たちが食べるようなら、食料として分け与えよう。

デカイカメもあるし、戦利品がドンドン増えるな。

「し、死体が……」

兵士たちが、消える死体に恐れおののく。

「証拠を消すために、俺のアイテムBOXに死体を入れていただけだ」

「アイテムBOX……」

「知っているだろ？ アイテムBOXは」

「は、はい——軍の偉い人が、物資を運ぶのに雇っているのを見たことがあります……」

マサキがそんなことを言っていたが、本当なのか。

しかも、軍の物資じゃなくて主に私物を運んでいるらしいし。

俺は、死体の回収から戻ってくると——増えてしまった乗客を乗せるため、アイテムBOXからハ○エースを出した。

こいつは4WDでLSDも入っているから森の中でも平気なはずだ。

入れ替わりにホイールローダーを収納する。

「「「おおおっ！ こ、これは？！ て、鉄の魔獣？！」「」」

「こいつらは、俺の魔法で作り出した鉄の召喚獣だ」

「だ、大魔導師様！」

兵士たちが、地面に手をついてペコペコし始めた。

色々と説明するより、とりあえずこの場を離れなければならない。

アキラたち以外をハ○エースに乗せると、放置したままのラ○クルの傍に行き、アイテムBOXに収納。

先行している村人たちを追いかける。

「おおっ！」「森の中をこんな速度で」「すげえ魔法だ！」
車に乗った兵士たちが、外に流れる景色に感動している。

「こんなのは共和国にはないにゃー！」「旦那の魔法はこんなもん
じゃないぜ？」

「あの、そちらの女の子も大魔導師様なんですよ」
アオイが助手席に乗っているアネモネを指差した。

「えへん！」

「え？！ あんな子どもが！？」

「子どもじゃないし！」

兵士たちの言葉を聞いたアネモネがむくれる。

「うちの大魔導師様を怒らせないでくれよ」

「も、申し訳ございません！」

村人たちの追跡は、獣人たちの鼻を使ってやってくれている。
おいをたどれば、すぐに追いつける。

5分もすると村人たちが見えてきた。

「おおい！」

「ケンイチ様！ ご無事でしたか！」

「まあな。魔導師でもいいれば、危なかったが……」

「こんな僻地に使える魔導師なんてやって来るはずがねえし」「そ
うだな」

兵士たちの話では、魔導師は少ないらしい。

すぐに徴用されるので、魔法を使っても黙っている者が多いとい
う。

「エルフ様！」「エルフ様が2人も！」

エルフの存在に気づいた兵士たちが、セテラとツイッツラに頭を

下げている。

当の金髪の耳長たちは、そんなことには興味がないので迷惑そうに手を振った。

どこかに行けという合図だろう。

「ケンイチ様、その者たちは？」

マサキが、初めて見る男たちに警戒をしている。

「俺たちを探しに来ていた兵士だが、こちらに寝返った」

「はい、なんでもしやすから、連れていってくれえ」「お願いします！」「もう、こんな国は嫌だ！」

兵士たちの必死の訴えに、自分たちと同じ境遇だと解ったのだろう。

反対する村人たちはいなかった。

「ありがてえ！」

男たちが抱き合って喜んでいるのだが、問題もある。

「しかしケンイチ、コ○スターに乗せられるか？」

「屋根になら、あと5人ぐらいはなんとかなるだろう」

我ながら無茶苦茶だと思うが、他に手がない。

森の中を歩きながら、兵士たちから話を聞く。

「兵士たちは、俺たちを追ってきたのか？」

「はい。森の中から雄叫びが聞こえると――」

「フヒヒ、サーセン！」

アキラが、またあたまをかいている。

「いつも、越境する者がいないか監視しているのか？」

「普通なら、川を越えられる者がいないと解っているので……」
あの砦は、敵の侵入よりも自国民を逃さないようにするためのものらしい。

「だが、雄叫びが聞こえてきたので、川を渡った連中がいると——俺たちを追ってきたのか……」

「はい……あの、川にはカメがいたと思うのですが……」
やはり川には恐ろしい魔物がいるので、警備が薄くなっていたらしい。

「それなら俺たちが退治した。全部で4匹仕留めたぞ？」

「ええ?! あのカメを4匹も! 剣も槍も通さないのに!」
アイテムBOXからカメを出して見せてやる。

「「ひえええ!」」

「ほ、本当に……」

兵士たちが恐れおののく。

「ちなみに——止めを刺したのは、そこにいるアキラだ」

「ふはは、まっかつせつなっさい!」

「アキラは帝国でドラゴンを倒した竜殺しなんだよ!」

ツイッツラの言葉に、兵士たちが不思議な顔をしている。

彼の言葉が解らないのだ。

「アキラは帝国でドラゴンを倒した有名人なんだ」

「え?! ドラゴン?!」 「ドラゴン?!」

兵士たちがざわついている。

「噂を聞いたことは？」

「い、いいえ……」

「まあ、革命を起こして国を統一した国祖の將軍様より強い男がいると困るだろうしなあ、はは」

「ほ、本当にドラゴンを？」

「ああ、帝国でも王国でも有名人だぞ」

男たちが歩きながら顔を見合わせている。

やはり情報はシャットアウトされていたようだ。

「やっぱり、嘘ばかりだった……」 「そうだな……」

昔の大本営発表のように、中央から流れてくるのは景気のいい話ばかりなのだが、地方では貧困に喘いでいる——というのが実情か。新参の何人かは都市部からあの砦に派遣されてきた兵士らしい。

こいつらから、共和国の軍や都市の様子も聞けそうだな。

259話 峠の入り口

共和国を抜けて王国へ目指して帰還中。

森を抜けたり、川を渡ったり、魔物を倒したり前途多難だが、その度に連れていく人たちが増えていく。

普通なら、こんな大所帯を抱えて移動なんてのは自殺行為だが、俺にはアイテムBOXとシャングリ・ラというチートがある。

アイテムBOXの中には、今まで倒した魔物の肉がたっぷり入っているし、金があればシャングリ・ラの通販も使える。

移動には車も使えるし、まさに無敵だが、かなり無茶をしているのも事実。

今回増えたのは砦にいたという5人の兵士たち。

軍部にかなり不満を持っていたらしく、立派な装備を持った指揮官らしき男を倒したら、すぐに寝返った。

その男たちに話を聞く。

「それじゃ、あの砦は住民たちを越境させないための砦なのか」

「そうです」

俺もそうじゃないかと思っていたのだが、本当にそうだったとは。

「誰も王国が攻めてくるなんて思っていませんでした」

「そりゃ、こんな国を攻めても難民を抱えるだけだし……豊かな土地やら鉱物資源があるわけでもないしな」

アキラと話していたとおりだ。

砦内部の生活も困窮しており、わずかな食料を求めて砦の前に広がる集落に出向くことも多々あったらしい。

食料以外の物資を横流しして食い物と交換するわけだ。

「砦の前にあった町は？」

「あれは、各地方からの脱村者が集まってできた町です」

「ああ、正式な町ではないのか」

「はい」

隙きあらば砦を突破して、王国に亡命しようとした連中が集まってできた町ということだが――。

「アマランサス、共和国からの亡命者っていたのか？」

「いいえ、報告を受けたことはありませんぬ」

着の身着のまま、峠を突破することは不可能ってことになる。

峠では食料が調達できないから馬車などで大量の食料を持ち運ぶ必要があるが、峠の整備は長い期間停止している。

まともに通行できる状態とは思えない。

「峠なんて崖しかないだろ？ 食料を運ぶためにはアイテムBOXがいるな」

アキラの言うとおりだな。

「しかも大容量のやつが必要だ」

アイテムBOX持ちなんて、それでなくても人数が少ないのに。

「あの……これだけの人数の食料などは……？」

「大丈夫、今話に出た大容量アイテムBOX持ちが俺だ」

「そ、そうなんですか！」

「そっちのアキラもアイテムBOX持ちだし――まあ、食料のことは心配するな」

「は、はい」

村人、他の村から逃げてきた者、元兵士――呉越同舟とはこのことか。

マサキに声をかける。

「兵士について、なにか偏見とかは？」

「いいえ、上層部はともかく、下級兵士は私たちと同じ境遇でしうし」

彼や村人の顔を見ると、多少の偏見はあるようだが、圧政に苦しむ仲間という認識のようだ。

「にゃー」

森猫が俺の脚に絡みついてくる。

「村人たちを守ってくれてありがとうな」

「にゃ」

「そ、その森猫は？」

兵士たちが心配そうな顔をしている。

彼らにとって、森猫も森林に住んでいる魔物の一種という認識しかないのかもしれない。

「彼女たちも俺の家族だから丁重に接してくれよ。人語も理解するから悪口とかも駄目だぞ？」 ははは」

「承知いたしました」

「一緒に峠を越えるってことで、俺の正体を明かしておこう」

「はい」

「俺の名前はケンイチ。王国の貴族だ」

「貴族様ですか？ し、しかし、なぜこんな場所に……」

「詳しくは言えないが、山脈のこちら側に紛れ込んでしまったんだ」

「聖騎士様——元来、ここら一帯も王国の領土なのですわえ」

「そういえばそういう話だったな。共和国の兵士たちもそれは知っているのか？」

「は、はい」

そこにアキラがやってきた。

「領土を主張するために、先に開発して実効支配するつもりだったんだろう」

「まあ、ありがちななあ。けど王国としてもここらへんはどうでもいいわけで……」

「共和国の民だけが、僻地に駆り出されて割を食っているわけだ」「さ、さすがは貴族様、色々なことを知っているんですね」

兵士が感心しているのだが――農民も兵士も学校にも行っておらず、決められたことを守って毎日を過ごすだけ、国がどうなっているかなんて知るよしもない。

本当なら、農民を教育するための人材が中央から送られてくるはずなのに――待てど暮らせどそんなものは送られてこない。

「民に学がなければ、なにも知らないから、異議を唱えられたり反抗されることもないからな」

俺のつぶやきにアキラが反応した。

「けど民の底上げができなければ、国は貧乏なままだぞ？」

「そうだな」

彼が元世界で世界旅行をしたときのことを話してくれる。

「貧乏な国は国民も貧乏なんだが、どうやって金を稼いだらいいのか、それすら知らないやつが山程いたぜ」

「お、俺たちも解りません……」 「私たちもです」

兵士と、マサキたちがうなだれる。

あの村じゃ、余分な作物ができてても売ることすらできないし、金が手に入ったとしても使う場所がない。

「そういうチュートリアルを教えてくれるのが学校なんだが――チ

ユートリアルって日本語でなんていうんだ？」

「うーん？　そういえば日本語に対応する言葉がないような――基本的な知識を教える教育とでもいえるのか」

「やっぱり学校ってのは大事だよな」

「そうだな。最初は親から教わるが、親によってばらつきがあるし」

「獣人は部族から教わるにゃ！」

ミャレーが手をあげた。

「獣人たちの方法もいいよな。3人集まれば文殊の知恵じゃないが、知識が広がる」

セテラにエルフたちの教育方法も聞いてみた。

「エルフたちも部族単位で教育とかするの？」

「そうだねえ。それに定期的に入れ替わっているから各部族間での情報の伝達も行われているし」

「ああ、そうか」

エルフは生まれてから100歳をすぎると、他の村に行く。

そうやって、ゆつくりと知識が広まっていくわけだ。

なにせ彼らの寿命は長い。

話をしているエルフに兵士たちが驚いている。

「エルフ様が我々の言葉を……」

「このエルフ様は大先輩だからな。共通語も喋れる」

「そうなのですか……」

「僕は駄目だよ」

ツイツラの会話は俺とアキラには通じるのだが、村人たちや兵士にはまったく通じない。

最初に聞いたエルフの言葉はすごく発音が難しそうだった。

アキラの話では、エルフには声帯が2つあるらしく、それを使っ
てすごく複雑な発音をするらしい。

普通の人間ではエルフ語を話すのは無理に近い。

逆にエルフなら、その複雑な声帯と知能の高さでどんな言語でも話せるのではないかと思う。

「そっちのエルフは駄目だけどな。俺とアキラは解るんだが……」

「エルフ様が2人も……」

「共和国に招聘されているエルフもいるんだろ？　そういう連中はしゃべれるんじゃないのか？」

「なん人かは、いると聞いたことがありますが、言葉までは……」
底辺の兵士に、中央のことなど解らないということらしい。

「村人たちには先生を雇って、勉強やら農業のことを1から教え込まないと駄目だなあ」

「なにせ共和国の農業知識はデタラメだからなあ」

アキラの言うとおりだが、彼の言葉にマサキがしょんぼりしている。

「我々にはなにが間違っているのかすらも解りません……」
彼に少々説明を試みる。

これで理解できるかどうかは不明だ。

「畑ってのは家だ。地面の上に飯が置いてあると思え」

「は、はい……」

「置いてある飯の数以上に家の中に人が入ってきたら、どうなると思う」

「……皆が飯を十分に食べられないと思います」

「飯が食べられないと、徐々に皆が飢えていくだろう？」

「はい」

「畑に必要な以上の作物を植えるっていうのは、そういうことなんだよ」

「解りました」

理解できたようだ。

「それから種を深く植えれば、根が丈夫になるってのも嘘っぱちだからな。森の草花を見てみろ——地中に植えなくても緑を謳歌しているだろう？」

「あ、あの……おうかというのは……」

「ああ、丈夫に育っているだろう」

「はい」

兵士たちに中央のことを質問してみる。

「農民たちに教えているあんな農業を推進しているのは、中央の誰がやっているんだ？ 将軍様が自らやっているのか？」

「いえ、農業省がやっていると聞きましたが……」

初めて共和国制になったわりには、組織や制度が整いすぎてないか？

「その農業省って所のトップ——じゃない、一番偉いやつは？」

「さあ……解りません」

下級兵士にそんなことは解らないか。

兵士になっても、学校に通えるのは上級士官だけらしい。

「まあ、俺の領にいたら、覚えることがいっぱいあるな」

「お願いいたします。村の総力をあげて、がんばります！」

只人のことは只人に頼んでもいいが、獣人たちのことは獣人たちに頼むしかない。

「ミャレー、他からやってきた獣人たちにも、サクラの獣人たちは色々と教えてくれるだろうか？」

「多分、大丈夫だにゃ。偏屈で底意地が悪いやつもいるけど、困っ

ているやつをさらに騙したりする只人みたいなやつはいないにや」

「うは、耳が痛い」

俺とアキラとで苦笑いをする。

「たしかに溺れている犬は棒で叩け——みたいなやつもいるしなあ」
「只人ってそんなことするにや?!」 「うええ!」
アキラの言葉にミヤレーとニャメナがドン引きする。

「いやまあ、たとえだよたとえ」

話をしながら森の中を歩いているが、周囲は獣人たちが警戒している。

ついでに俺が貸してやったクロスボウなどを使い、歩きながら狩りをして獲物をゲットすると俺の所に持ってくる。

俺のアイテムBOXに入れ、彼らのおかずになるわけだ。

「旦那! たくさん獲れたよ」

ナンテンが鳥の首を持っている。

「おお、ナンテンは狩りがうまいな」

「えへへ」

「そのぐらい、ウチらはいつもやってるにや」 「そうだぜ」

「張り合うなって」

俺が新入りを褒めるので、うちの獣人たちが気に入らないらしい。
ナンテンは俺にスリスリをしたいようで、もじもじしているのだ
が——。

俺の背後で、ミヤレーとニャメナが牽制している。

「スリスリぐらいいいだろう?」

「変なおいがつくから駄目にゃ」 「そうだよ旦那」

変なおいとか言われて、またナンテンがしょんぼりしている。

「変じゃないから気にするな——そうだ、尻尾はどうだ？」

彼女の尻尾の付け根を見せてもらう。

だいぶ赤みが引いている。

「ひゃ！」

消毒して薬を塗ってやると、彼女は狩りに戻っていった。

自分たちの食事は自分たちで用意をしろと言ってしまったので、狩りを認めなくてはならない。

今のところは危険はなさそうだし。

その獣人たちに守られている村人たちも、薪などを拾う。

ある程度まとまると俺の所に持ってきてアイテムBOXに入れる。

少しの時間も無駄にしない——働き者たちだ。

そうしないと食えなかったので、これが普通だったのかもしれないが。

狩りをしている獣人たちには加わらず、俺と一緒にいるのは三毛のアオイ。

彼は虚弱で、狩りをするだけの体力がないのだ。

いつでも味噌っかすなのを気にしているらしい。

「アオイ、お前は罠の作り方を教えてもらえ」

「罠ですか？」

「ああ、罠を使えば、力や体力がなくても獲物を獲ることができるからな」

「私が教えてあげるよ！」

アネモネが手を挙げた。

「彼女はいろんな罫を知っているぞ？」

獣人たちに教えてもらったものと、俺がシャングリ・ラで買った本を基にして色々な罫を考案している。

もちろん彼女は魔法が使えるので、罫を使う必要はないのだが。まあ、趣味みたいなものだと思います。

「お願いします」

「うん！」

俺が色々教えてあげたアネモネが、今度は先生になるのか。

俺もこの世界の役に立っていると実感できるのは、中々に感慨深い。

もう彼女も立派な大人だよなあ。

ずっと歩き続けているが、森の中は危険なので食事が摂れない。

人が通らない街道に出ても危険度はあまり変わらない気がするのだが、休むなら多少は開けている場所のほうがいい。

たまにドローンを飛ばし方向を確認すると、森の切れ目に道らしきものが見えてきた。

かつては街道だったはずだが、今は半分森の中に埋没しかけている。

「おおっ！ 空飛ぶ魔道具？！」

「あれは、ケンイチの召喚獣だよ」

「召喚獣……すごい」

——アネモネが得意気に説明しているのだが、彼女の知能ならすでにこれがタダの道具だと気づいているかもしれないなあ。

エルフ旧文明の生き残りであるセテラは当然知っている。

俺たちはやっと街道に出た。

「出たはいいが……草がぼうぼうだな」

道にも草が生えており、道の近くまで森が押し寄せているが、俺たちが出発してきた村の周辺の道路よりはまだ道になっている。

多分、百年以上踏み固められた街道は、まだガッチリと固まったままだ。

「だって数十年ほとんど使ってないんだろ？　しゃーない」

アキラの言葉どおり、この共和国ができてから王国との交流は断絶している。

ここを通る者もいなくなってしまったのだ。

果たして峠は通行できるのだろうか？

「しかし、王国に戻るためには、ここを通るしか方法がないしな」

「そうだぜ？　まあ、崩れていたりしてもケンイチの重機があればヘーキヘーキ」

アキラはお気楽だが、俺には責任がある。

ここまで連れてきて、駄目でした——ってわけにはいかない。

道の様子を見るとアマランサスがやってきた。

「聖騎士様、ここで休むのかえ？」

「いや、ここはまだ砦から近い。俺の召喚獣で追手が追いつけない距離まで進もう」

「承知いたしました」

「よし！　コ○スター召喚！」

「「「おおおっ？！　鉄の箱？！」」」

兵士たちは、突然空中から出現した鋼鉄の乗り物を見て驚いている。

「こいつは俺の言うことを聞く、鉄の魔物だ」

「なんと……」

「これに乗っていれば、馬がいなくても運んでくれるんだよ」「すごい速いんだよ!」

途中から一緒になった子どもたちが、兵士に説明をしてくれている。

新入りの世話は子どもたちにまかせ——2台のマイクロバスをアイテムBOXから出すと、また村人たちを分乗させる。

兵士たちも屋根に乗ることになってしまいが仕方ない。

「皆、森の中を歩いて疲れただろう。腹が減ったとは思いますが、もう少し頑張ってくれ」

「大丈夫です。村にいたときのことを考えれば……」
マサキの言葉に、村人たちもうなずいている。

「兵士たちは大丈夫か?」

「最近、ろくに飯にありつけていなかったのですが、なんとか大丈夫です」

「まあ、この先は、こいつが運んでくれるから歩かなくてもいい」
「あの……本当なのですか?」

兵士たちも信じられないような顔をしているのだが、動き出せば解るだろう。

2台のマイクロバスに分乗しても、屋根の上まで人が一杯。

元世界の映像で、屋根まで人が一杯に乗っている映像を見たことがあるが、まさにそんな感じに。

屋根にはルーフキャリアをつけ、安全帯もつけさせている。

屋根に乗った兵士たちによれば、この先には村も砦もないというので、これ以上人が増えることはないようだ。

バス2台でなんとかなるだろう。

薄暗くなってきたのでライトを点ける。

「アキラ、そっちはどうだ？」

『オッケー』

「オッケーにゃ！」

いつものミャレーの声が聞こえる。

「ほんじゃ出発！」

2台の中と外に乗客を満載したマイクロバスが走り出した。

「「「おおおっ!? う、動いている!!」」」

「馬がないのに動くなんて!」「「ははは」」」

上から、屋根に乗った兵士たちの驚く声と、獣人たちの笑い声が聞こえてくる。

この世界では馬で動く馬車が当たり前だからな。

馬なしで動く乗り物なんて初めて乗ったのだろう。

バスは当然エンジンで動いているのだが、サクラでカールドンが作っている魔導モーターを使えば、魔力を使って車を動かすことができるようになる。

ただ、電池代わりになる大きな魔石が必要になると、それにエネルギーを注入する魔導師が必要で、それをクリアしないことには普及しそうにない。

順調にバスは進む。

草に覆われてしまっているが、道はしっかりしているので走りやすい。

後ろの車と連絡を取る。

「アキラ、すぐ走りやすいな」

『おう! さすが街道だぜ』

そのままバスで2時間ほど走る――トリップメーターは70 km 弱を差している。

走りやすいので、もっとスピードが上げられそうなのだが、今は屋根に人が乗っている。

スピードを出してギャップでジャンプなどをすると危険だ。

徐々に峠が近づいているのか、道路に傾斜がついてきた。

馬車なら大変なところだが、車ならどうってことはない。

かなりの乗員オーバーしているが、普通に走っている。

まあ、燃費はかなり悪化しているだろうが、バイオディーゼル燃料はたっぷりあるし。

暗闇の中、黒と青に染まりながら道の途中にちよつとした高台が見えてきた。

キャンプを張るのにちょうどよさそうなスペースが広がっている。

「アキラ、よさそうなスペースがある。ここでキャンプしよう」

『了解』

『&**&*』

ツイツツラの声が聞こえてくる。

腹が減ったとかいっているのだろうか？

「うーん、お腹が空いたかもお」

セテラも腹を押さえているので、俺の予想は合っているようだ。

「精霊がいれば、大丈夫なんじゃなかったのか？」

エルフは精霊とやらに新陳代謝の一部を任せているらしい。

「食べなくても平気だけど、お腹は空くんだからあ」

飢餓状態になることはなくても、空腹感はあるようだ。

そう言われればそうか。

高台に車を止めて、LEDライトで辺りを照らすと、なにやら瓦礫のようなものが見える。

どうやら家の残骸のようで、屋根が落ちた家がたくさん並ぶ。木造の家は朽ち果てているが、石造りの家は壁がしっかりと残っている。

ここは元宿場町だったらしい。

バスを降りたアキラがやってきた。

「ケンイチ、ここって町の跡だな」

「みたいだな。街道が使われなくなったんで、住民がいなくなってしまったんだろう」

この光景を見て、俺はピンときた。

これは使える。

「収納！」

俺はためしに、壁が残っている家を収納してみると――目の前にある家がアイテムBOXに入った。

このぐらい原型をとどめていれば、家として認識をされるようだ。これなら、ここからサクラに移築できる。

壁が残っているなら、あとは屋根をなんとかすれば、住めるようになるはずだ。

「ケンイチ、これを持っていくつもりか？」

「ああ、どのみち村人たちの住処は、どうしても必要になるしな」
それでなくとも、サクラじゃ住宅不足なのだ。
使えるものはなんでも使う。

住宅不足に光明が見えたが、とりあえず飯だ。
いつものように、コンテナハウスとバスを並べて、鉄の陣地を作る。

新しく加わった兵士たちは、俺たちのグループだ。

あとから加わった獣人たちと子どもたち、そして兵士たちで新しい村を作ってもいい。

土地ならいくらでもあるしな。

「にゃー！」

ベルとカゲが、周囲のパトロールを始めた。

獣人たちにも周囲を警戒させる。

村人たちの荷物用のコンテナハウスを出すと、そこから材料やら食器などを取り出して食事の準備をしていく。

LEDランタンなども彼らに貸し出してあり、使い方も教えた。
筒状になったランタンを引っ張れば点灯するのだから、簡単だ。
電池式なので、切れたら俺の所に持ってくるようにと伝えてある。

「おおおっ！？ 魔法の明かり?!」「明るい！」

兵士たちがLEDの明かりに目を細めている。

「俺が作った魔法のランプだ」

「す、すごい！ すごい速さで進む鉄の魔獣といい、大魔導師様だ」

「これから先は、あの鉄の魔獣で進むから、もう歩く必要はない」

「王国までですか？」

「ああ、俺の領地まであれで行く。途中で道がなくなっていたりした場合は降りて歩く羽目になるかもしれないが」

「解りました」

村人たちが料理を作り始めたので、こちらでも料理の用意をするか。

「ケンイチい、お腹空いたあ!」 「僕も!」
エルフの2人は、まったく手伝ってくれないのだが、いざという
ときの秘密兵器なので仕方ない。

「ケンイチ、私もパンを焼く?」
アネモネの焼き立てのパンは美味いが今日は遅くなってしまった。
シャングリ・ラのパンにしよう。

アイテムBOXに入っている魔物の肉などは、村人たちに提供する
予定なので、主にインスタントで済ませてしまう。

少々単調になりがちではあるが、それプラス簡単な惣菜なども作
って、飽きさせないようにしなければ。

のんびりとした旅行であれば、色々としみながら進むのである
が、そうではない。

一刻も早く辺境伯領に帰らなくては……とはいえ、焦って強行軍
にする必要もない。

ゆっくりと急いで確実に前に進むのだ。

幸い峠の入り口まで来ており、共和国軍の心配もなくなった。
だが、安心するのはまだ早い。

この峠は過去数十年間使用されておらず、先がどうなっているの
かまったく解らないのだ。

飯を食い終わったら、廃墟をアイテムBOXに入れていく。
数えたら50戸以上は使えるのがある。

仲のいい家族はシェアするって手もあるしな。

「「「おおおっ!」」」

家が消えるたびに、村人たちから歓声があがる。

「村を丸ごと移植とは、聖騎士様のお力には、いつもながら驚かされるわえ」

アマランサスもアイテムBOXに収納されていく家に、なかば呆れている。

「これらの家を、お前たちが作る村に移築してやるからな」

「い、家をもらえるのですか?!」

「ああ、暮らすには必要だろう。早く稼げるようになってもらわないと駄目だからな。これは投資だ」

「「「おおおっ!」」」

「喜ぶのはまだ早いぞ? まずは、この峠を越えないと駄目なんだからな」

俺は、目の前にそびえたつ山を指差した。

260話 崖と絶壁

共和国の村から人を連れて、王国への帰路の途中。

俺たちは峠のふもとに到着した。

ちようにいいスペースがあったと思ったら、峠の宿場町の廃墟らしい。

ここでキャンプを張ることにした。

使えそうな建物が多いので、アイテムBOXに入れて再利用を考えている。

共和国に変わる以前に建築された建物らしく、しっかりとした作りが多い。

屋根などは落ちてしまっているが十分に使える。

それでなくとも、サクラは住宅不足だ。

共和国から村人たちを連れていっても、皆の寝床がない。

それをここから持っていく廃墟で賄えればと思っている。

共和国が倒れて、この峠がまた使われるようになったときに、ここから資材を運んでしまおうとまたゼロからの開発になると思うが、それがいつの日になるかは解らない。

いつになるか解らない未来より、村人たちの明日だ。

旅は道連れ世は情けでドンドン乗員が増えるのだが、いまのところなんとかなっている。

これ以上増えたらちよっとマズいのだが、途中で一緒になった兵士たちの話では――ここから先には人が住んでいないらしい。

共和国に変わり、カダン王国との国交が断絶してしまったので、峠がまったく使われなくなってしまったせいだ。

——峠のふもとでキャンプをした次の日の朝。

コンテナハウスの中で目を覚ます。

ベッドの俺の上にはアネモネが乗っている。

「ん……」

「アネモネ、朝だぞ？」

「ん……」

彼女の頭をなでなでしてやると、アネモネを腹の上から降ろして外に出る。

ドアを開けると、ベルとカゲがするりと出ていった。

昨晚作ったマイクロバスとコンテナハウスの鉄の陣地の中で、村人たちが食事の準備をしている。

彼らは働き者——いや、働かなければ飢えて死ぬしかなかったのだ、そうするしかなかったのだろう。

サクラで村を作って、少しでも余裕ができればいいのだが。

途中で一緒になったアオイたち獣人と、10人の子どもたちは別のコンテナハウスで寝た。

砦近辺で一緒になった兵士たちは、大型テントで寝ている。

下級兵士たちの砦での生活も中々大変だったらしく、普通に眠れるだけでも彼らは喜んでいた。

昨晩は暗くて解らなかったが、本当に町の廃墟だ。

石造りの家はだいぶ収納したが、まだ使えそうなものがある。

潰れている木造家屋も、端材などがそのまま使えるだろう。

この世界で板を作ったりするのは、大変な労力が必要になる。もったいないので可能な限り回収しなくては……。

皆の所に戻ると外で食事を作る。

寸胴に肉を入れたインスタントスープと、シャングリ・ラで買ったパン。

アオイたちのグループと、新参の兵士たちが美味しいと喜んでいる。

「う、美味しい！　こんな美味しい食事を食べていいんですか？！」

「まあ、旅をしている間だけな。領地についたら食い扶持を自分で探さないとだめだぞ？」

「それは解っています」

「自分たちで森を開拓して農業をするというなら、援助もする。共和国みたいに関先だけじゃないぞ？　ちゃんと面倒はみるからな」

「はい！」

痩せ細った兵士たちの顔にも明るい表情が浮かぶ。

ここから先はバスに乗っての移動だ。

屋根に乗ったりして大変だろうが、歩くよりはいいだろう。

飯のあとは引き続き家屋の収納をする。

「瓦礫をアイテムBOXに入れるのは、ちょっと大変だなあ」

ある程度まとまっていないと、個別に認識されてしまって1個1個収納しなくてはならない。

さすがにそれは面倒くさい。

そこにアネモネがやってきた。

「ケンイチ、あれを集めればいいの？」

「ああ――そうか、ゴーレムのコアで集めればいいのか」

「うん！」

大型のゴーレムのコアを出して、アネモネに瓦礫を集めてもらう。瓦礫でゴーレムを作るわけだ。

土や水でゴーレムが作れるなら、瓦礫でだって作れる。

ガラガラと木材が集まってくと、まるでスライムのように動き

回り、瓦礫を次から次へと飲み込んでいく。

「「「おおっ！」」」

食事の片付けをしている村人たちが、魔法で動き回る瓦礫に驚いている。

「す、すごい魔法だ……」

兵士たちも彼女の魔法に驚嘆したまま固まっている。

「うちの小さな大魔導師様だから、敬ってくれよな」

俺はゴーレムを操っているアネモネを指した。

「ははっ！」

うちの大魔導師に礼をする兵士を横目に、大きな山にまとまったものの収納を試みた。

「収納！」

目の前から山が消えた。

「「「おおっ！」」」

また村人たちが沸く。

アネモネのおかげで瓦礫のほとんどを収納できた。

これで村作りもはかどることだろう。

「マサキ、ここにあったものを移築して、お前たちの村を作ってやるからな」

「あ、ありがとうございます」

突然彼が、地面に膝を折ると泣き始めた。

「まてまて、泣くやつがあるか」

「我々一同、ケンイチ様のためにつくしゅましゅ」

「「ケンイチ様」」

今度は村人たちが集まってきて膝をついた。

その光景に、アマランサスもうなずいている。

「これぞ、正しき為政者の姿。さすが聖騎士様」

「本当お、領主様っばいよねえ」

セテラも長い耳をピコピコさせて俺をからかってくる。

「まいったな」

「はは、ケンイチ。モテモテじゃねえか」

アキラとツイツツラも笑っているが、まだまだ先は長い。

村人たちを立たせた。

「ほらほら、出立の準備をしてくれ。まだ王国に着けると決まったわけじゃないんだぞ？」

「「はい！」」

「アキラ、峠が通行できるか解らないんだぞ？」

「まあ、しばらく使ってねえみたいだし、道の崩落やら埋まってるかもあるな」

「そうだろう？」

「でも、ケンイチの重機とアネモネちゃんの魔法があれば、ヘーキヘーキ」

「うん！」

アネモネがガッツポーズをしているが――。

「だいいいがなあ」

ここでいくら心配してても始まらない。

俺たちは出発の準備を始めた。

村人たちの荷物を専用のコンテナに入れて、収納する。

「おゝい！ ベルう！」

俺の呼びかけに森猫たちも戻ってきた。
準備が終わると皆でマイクロバスに乗り込み、ルーフキャリアのハシゴで屋根の上にも登らせる。

「峠のサンダーロードを走って、屋根の上じゃスリル満点だと思うが……」

「しゃーねえ、こんだけ増えたんじゃ、どう詰めても中には乗れねえし」

村人たちの乗車をアキラと一緒に見ているが、彼の言うとおりで。

「おゝい！ しつかりと、その金具を繋ぐんだぞ？」

獣人たちが安全帯とハーネスの使いかたを教えてやっている。

昨日の夜は適当に乗せてしまったが、今日は険しい峠道だ。

右に左に揺られて大変なことになる。

兵士たちも、屋根に乗っている子どもたちの真似をして、ルーフキャリアにハーネスを繋ぐ。

おっかなびっくりだが、なんとかなっているようだ。

「ナンテン、アオイ、大丈夫か？」

「大丈夫だよ旦那！」 「はゝい」

皆が乗り込んだので、俺とアキラも運転席につく。

「アキラ、そっちはどうだ？」

『問題なし』『&*&&^%』

ツイッツラの声も聞こえる。

「ほんじゃ、出発進行！」

『オッケー!』

「オッケーにゃ!」

無線機からのアキラの声に、いつものミャレーの声がバスの中に響く。

アクセルを踏むと、マイクロバスは坂道を登り始めた。

しばらく直進しながら徐々に坂がきつくなってくるが、バスなら問題ない。

『ケンイチ、今日はどの辺まで行くんだ?』

「いくらゆっくりでも、頂上付近までは行きたいなあ」

『向こうの峠は、頂上に宿場があったが、ここにもあったのかね?』

「あ! そうだな、もしかしてあるかもしれない」

頂上にも宿場の廃墟があったら、それも使えるな。

『ケンイチが根こそぎ持っていたら、ここを使うようになったら大変だな』

「まあ、俺もそれは考えたよ。でも、それがいつになるか解らないし」

「そのときは、ケンイチが他から家を運んできてあげればいいですよ?」

「はは、アネモネの言うとおり——というか、本当にそうになったら、お城からそういう任務を賜るかもしれない」

『そうだな、ありえる』

その前に、共和国が潰れるのが前提になるが……。

「その可能性はかなり低いと言わざるを得ませんわえ」
俺の後ろからアマランサスが首を出した。

「やっぱり、アマランサスもそう思うか?」

「はい、そう簡単には国は倒れませぬ」

「旦那！　旦那の毒入りワインが、中央に持ち込まれたとしてもかい？」

ニャメナの言うとおり、あのワインが効果を発揮してくれても、この国は倒れてはくれないかもなあ。

「一度できた国ってのは、なかなか倒れないものなんだよ。ここを統一した將軍様ってやつが死んだとしても、家族や取り巻きの誰かがあとを継ぐだろう」

「そうねえ——王国で王様が死んだってえ、他から代わりを見つけてきて玉座に座らせるだけだし。結局、頭をすげ替えるだけなのよねえ」

セテラが嫌味な顔をして、そんなことを言う。

「まったく、耳が痛いのお」

エルフの言葉に、アマランサスが渋い顔をしている。

暗に王族なんて誰がなったって意味がないと揶揄しているのだ。

ガタガタと車体を揺らしてバスが坂道を登っていくと、目の前にそびえ立つ崖が迫ってきた。

どうやら右側に壁を見ながら、峠を登っていくようである。

道幅は馬車2台分は確保されているのだろうが、俺たちの乗っている文明の利器は少々幅が広い。

道が狭くなっている部分など、結構ギリギリである。

周りに木も草もまばらになってきて、本格的な峠道になってきた。右側には切り立つ壁、左側には断崖絶壁。

当然ガードレールなんてものはないので、落ちたら下まで真っ逆さま。

鉄の箱に乗っている俺たちは、全員投げ出されてその生涯を終え

る。

元世界の道路は、ハンドルを切るとスムーズにコーナーがクリアできるように設計されている。

コーナーの途中で半径が変わったりすることはないが、ここは違う。

崖の道なりに作った道路なので、超複合コーナーの連続——スピードはまったく出せず時速10kmがいいところ。

崖を削って作った道は、いつ崩れてもおかしくない。

「ふへへ……」

思わず変な笑いが出る。

横をチラ見すると、アネモネがこっちを見ていた。

村人たちも恐怖で騒ぐかと思っていたのだが、ひたすらじっとして息をひそめている。

運転に集中したいので、静かなのはありがたい。

曲がりくねった道は、コ○スターの最小旋回半径ギリギリだ。

多少こすっているが、走れば傷がつくのだから気にしない。

ボロボロになっても走ればいいのだ。

どうしても曲がりきれない場所は、いったんバスから降りるしかない。

「アキラ、そっちはどうだ？」

『ひやはは！　こりゃいつ落っこちてもおかしくねえな！』

「もっとデカイバスを出さなくてよかったよ」

大型の観光バスじゃ、この道は無理だ。

『ああ、これで正解だな』

「それか、もっと小型のハ○エースを使って、ピストン輸送するか」
『それもアリだな』

「うにゃー！　すごいにゃ！」　「ははは、こりや落ちたらやべえな！」

ミャレーとニャメナも元気だ。

獣人たちは高い所が平気らしいからな。
屋根に乗っている連中も平気だろう。

窓を開けて上に声をかける。

すぐ横には、岩の壁が迫ってきている。

「おゝい！　大丈夫か？！」

「平気だよ旦那！　岩の壁に手が届くよ！」

上から壁に反射したナンテンの声が聞こえる。

「危ないから止めとけ」

普通につぶやいたので只人なら聞こえないだろうが、ナンテンには聞こえているだろう。

「只人や子どもたちは震えているけど、ここじゃ逃げ場もないしね」
彼女の言うとおり、ここを切り抜けなければ新天地にはたどり着けない。

たとえ時速10kmでも5kmでもいい。

前に進みさえすれば、いずれは王国にたどり着く――って、ここは王国らしいのだが。

言葉を変えよう、峠を降りられれば俺たちの勝ちだ。

そんな事を考えていると、早速第一の関門がやってきた。

180度折れ曲がるスイッチバックだ。

マイクロバスじゃターンできない。

「アキラ、ストトップ！」

『どうした？』

「180度ターンだ」

アキラと一緒にバスを降りると、確認をしに行く。

目の前には見事な180度ターン。

そこから落ちたら当然、真っ逆さま。

「はー、こいつは馬車でもキツイんじゃない？」

アキラが、ジグザグの頂点を見てつぶやく。

「馬車ってステアリングがないから、どうやって曲がっていたんだろうな？」

「ステアリング付きの特殊車両とか？」

「それを使って、奥にスペースはあるから何回も切り返ししたとか……」

「かもな……」

見れば、奥のスペースに残骸のようなものがある。

もしかして、ここに方向転換を手伝うのを生業にした人間が住んでいたのかもしれない。

「はあ」

悩んでいても仕方ない。

皆をバスから降ろすと、アイテムBOXに収納。

切り返し場所から離れた所に、再度召喚した。

今度は壁が左側にあるので、少し隙間を空けないと乗車できない。

「ちょっと乗る場所が狭いが、乗り込んでくれ」

「「はい」」

車体と壁の隙間を通って、村人たちが乗り込んでいく。

ルーフキャリアについているハシゴを使って、屋根の上にもよじ登る。

切り返し場所で、ベルとカゲがクンカクンカしてるが、ここにはなにもない。

その間に、アキラのバスから村人たちの降車が完了していたので、アイテムBOXに収納した。

「「「おおっ」」」

消える鉄の箱に村人たちから歓声が上がる。

同じように切り返す所から離れた場所に再びバスを出した。

「まったく、非常識ねえ」

「只人にもこんな連中がいたなんて」

エルフたちがなにか言っているが、褒め言葉と取ろう。

「只人じゃなくて、稀人だって話だったろ？」

「そうねえ。只人じゃこんなことはできないわあ」

「でも、この分だと、もう1回切り返し場所があるな」

「だろうな——これだと逆方向だし……」

しばらく崖の道を進むと、俺の予想どおりに、180度ターンの切り返し場所が見えてきた。

再び皆を車から降ろすと、アイテムBOXに収納。

切り返しをクリアした場所に再び出す。

これでまた進める。

登り始めたときと同じように、また壁が右側になった。

「さすが、旦那だぜ！」「そうだにゃ！」

「魔法で動く鉄の魔獣を簡単に出したり消したり——ケンイチ様は凄い……」

運転席の後ろで、獣人たちとマサキがうんうんと唸っている。

まあ、こんな具合に峠道をクリアするやつはいないだろうなあ。

さらに俺たちを困難が襲う。

「アキラ、ストップ！」

『どうした?!』

「落石だ！」

車を停止させると、乗用車ぐらいある落石が道を塞いでいる。

土砂崩れではなく単発の落石だが、大きい。

マイクロバスを降りると岩の所まで行く。

「収納！」

これは簡単だ。

アイテムBOXに入ればクリアできる。

「おーい！ 獣人たち、手伝ってくれ〜！」

「よっしゃ！」 「ホイきた！」

獣人たちがバスの屋根から飛び降りてきた。

「小さい石を拾って谷に捨ててくれ。細かいのはアイテムBOXに入れるのが大変なんだ」

「任してください！」

獣人たちが石をポイポイと谷に捨てると、あっという間に綺麗になった。

逆にたくさんあるなら、アネモネのゴーレム魔法を使ったほうがいいのだが、このぐらいなら人海戦術のほうが早い。

「皆、飯をちゃんと食っているせいか、動きがいいな」

「もちろんでさあ！」 「飯さえ食えれば100人力よ！」 「いつもは腹減って腹減って……」

皆が村での貧しい暮らしを思い出したのか、しょんぼりしている。

「この峠を越えることができれば、もう飢えることはないんだ」

「そうだ！」「オレはやるぜ！　オレはやるぜ！」

「「うおおお！」」

獣人たちが、拳を突き上げて雄叫びを上げる。

興奮している獣人たちを屋根に乗せると、再び走り始めた。

地形に合わせて掘られたジグザグの道をひたすら進み、なん回クリアしたか忘れるぐらいの右コーナーを曲がる。

「おわあ！」

俺は、突然現れた目の前の光景に急ブレーキを踏んだ。

「「うわああ！」」「「きゃあ！」」

バスの中に悲鳴が響く。

フロントガラスから見える凄まじい光景。

長さ十数メートルに渡って道路が崩落していたのだ。

「わあ！」「崩れてるねえ」

アネモネとセテラがフロントガラスを覗き込んでいると、無線からアキラの声が聞こえてきた。

『ケンイチどうした！？』

「道の崩落だ！」

『ありゃー！』

「派手に崩れてるにゃ！」「やべえ」

「聖騎士様」「ケンイチ様」

「アマランサス、マサキ——心配するな、今見てくる」

「はい」

車を降りると、アキラもやってきた。

「うお、派手にいつているなあ」

崖を見て竜殺しが頭をかいている。

彼自慢のマヨパワーもこういう場面では活躍しようがない。

「まあ、こうなっているんじゃないかと思ってたよ」

「どうする？ ケンイチ」

際を見れば、人が1人通れそうなスペースはある。

「あのキャットウォークを通るしかないだろうなあ」
俺は端を指差した。

「ああ、やっぱり？」

皆を車から降ろして1人ずつ渡らせるのだが、当然命綱などが必要だろう。

「おーい！ 獣人たち、また手伝ってくれ！」

「ほいきた！」 「よっしゃ！」

獣人たちが車の屋根から降りてきたので、アイテムBOXから出したロープを手渡す。

1人にロープを腹に巻いてもらい、向こうまで行ってもらう。

「ちょっと危険な仕事だぞ？」

「がってん！」 「俺が行く！」 「俺に任せろ！」

獣人たちが円陣を組んでなにかを始めた――じゃんけんだ。

「」「チケタ！ チケタ！」 「」

そういえば王国の獣人たちも、じゃんけんらしきものをやっていたな。

「へっへっへ！」

どうやら渡る者が決まったらしい。

得意満面だが、こんな場所でも彼らは恐怖を感じていない。

腹にロープを巻くと、まるで平地を走るように向こうに渡ってみた。

「大丈夫そうだな……それじゃ、なん人が向こうに渡って、この縄をピンと張ってくれ」

「「「がってん！」」」

ロープの端と端を獣人たちが持ってピンと張る。

屋根に乗っていた兵士たちをモデルにして、ハーネスの使い方を教える。

「張られた縄にこの金具を通せば、安全に渡れる。万が一、足を踏み外しても下まで落ちることはない」

「「「……」」」

理屈は解るだろうが、やはり怖いのだろう。

可哀想だが、ここを越えねば次に進めない。

只人の村人たちと俺達の分のハーネスを購入した。

崩落している場所が他にもあるかもしれないし、ここで全員分購入したほうがいいだろう。

使わなかったら、シャングリ・ラの買取に入ればいいわけだし。

「ポチツとな」

落ちてきたハーネスを皆につけさせて、キャットウォークを渡らせる。

1人、また1人と平均台のような狭い道を歩いていく。

小さな子どもたちは、獣人たちに抱いて渡ってもらう。

「エルフたちは？」

「そんなのいらない」 「僕もいらない」

エルフたちは金髪を揺らして妖精のように渡り、森猫たちも平気な顔をして渡っていった。

「私も行く！」 「妾もじゃな」

フンスと気合を入れたアネモネがおっかなびっくり渡り、そのあとをアマランサスがスタスタと続く。

彼女は武術の達人らしく、こんな場所でも正中線がぶれることはない。

最後に残ったのは俺とアキラ。

「アキラ、先に行ってくれ。俺はコ〇スターを収納してから行く」

「オッケー！」

誰もいなくなったマイクロバスの所に行くと、俺は叫んだ。

「収納！」

鉄の召喚獣をアイテムBOXに突っ込んだ俺が渡り、最後にロープを張っていた、獣人たちが渡り終えた。

「おっしゃ！ クリア！」

「やったぜ！」

「「「おおっっ！」」」

「皆も怖かったと思うが、この他にもこういう場所があるかもしれない。だが心配することはないぞ」

「同じ感じで渡ればいいにゃ」 「クロ助の言うとおりだぜ」

「「「おおっっ！」」」

まあ最初はおっかなびっくりだろうが、慣れればどうってことはない。

ただ、キャットウォークすらない崩落現場があったらどうしよう

かなあ……。

不安ではあるが、それを口に出したり表情に出したりはできない。村人たちを元気づけて、サクラまで連れていかねばならないのだ。

途中のなん箇所かで休憩と食事を取り、山崩れがあった場所ではアネモネのゴーレム魔法で土砂を押し流した。

ベロニカ峡谷のときに、このゴーレムの使い方を知っていればなあ。

もっと簡単に土砂を除去できたのに……。

——といってもあとのカーニバル。

それだけアネモネが成長した証だと喜ぼう。

そろそろ峠の頂上が見えてくる頃、空はオレンジと紫のグラデーション模様になり、ちぢれ雲が浮かんでいる。

マイクロバスのトリップメーターは約80km——時速10kmで10時間ほど走ってこの距離だ。

途中で色々な障害物をクリアしてこの結果なので、いいタイミングで頂上に到着することができた。

「やったぞ！ 峠の頂上だ」

頂上はちょっと広くなっている場所があり、やはり建物の廃墟が何軒がある。

「ケンイチ様！ なにか変なにおいがするよ！」

屋根の上から聞こえてきたのは、アオイの声だ。

「変？」

『ケンイチ、どうした？』

「アオイが、変なにおいがすると言っている」

『どうする？』

「ここまで来て下がれない。偵察隊を出すか」

『了解！』

「ウチが行くにゃー！」 「俺もだぜ！」

「だ、大丈夫か？」

「任せるにゃー！」

ミヤレーとニヤメナに頂上付近の偵察を頼む。

早くしなければ、暗くなってしまう。

なにかいたとしても、暗闇で戦うのはかなり不利になる。

俺が焦っていると、獣人たちの叫び声が聞こえてきた。

「ふぎやあああ！」 「ぎやあああ！」

あゝ、なんかデジャヴュ……。

261話 頂上決戦

断崖絶壁に、ひたすら続く細いサンダーロード。

一歩間違えると奈落の底へ真っ逆さま。

王都とソバナを繋ぐベロニカ峡谷も中々すごかったが、あそこは現役で使用されており、整備もそれなりにされている。

こちらは共和国と王国が国交断絶してからまったく使われておらず、荒れ放題。

落石はあるわ崩落はあるわで、洒落にならないアトラクションの連続。

それでもベロニカ峡谷で経験値を積んだことが生きているし、アネモネの魔法も進歩している。

以前には俺の重機で土砂の排除などをしていたが、彼女のゴーレム魔法を使って同様の作業を簡単にできるようになった。

なんとか夕方には頂上付近に到達して、キャンプを張れそうだ。

ベロニカ峡谷と同じように、頂上には宿場町の跡があるらしい。

やれやれとホッとしたのもつかの間、屋根にいるアオイが不穏なおいをキャッチした。

なにかがいるらしい。

俺はミヤレーとニヤメナを偵察に出したのだが……。

2人は叫び声をあげながら戻ってきた。

デジャヴである。

「おい、どうした?！」

「なんかいた! なんかいたにゃあ!」 「旦那! デカイのだぜ!」

血走った目をした2人が、逃亡せずに俺の後ろに隠れた。
毎回毎回逃げ出しては、さすがに格好悪いと思ったのか、なんと
か踏ん張っているようだ。

頑張って耐えている彼女たちだが、耳を伏せ尻尾を太くしてカタ
カタと震えている。

そこにアキラがやってきた。

「ケンイチ、どうする？」

「山の上にいるってことは、ワイバーンあたりだろうか？」

「ああ、多分な。けど、真竜じゃないことを願うぜ」

「はは、ここにはドラゴンスレイヤーがいるじゃないか」

「あんなのは、もうまっぴらごめんだぜ？ それにここじゃ、ドラ
ゴンの口に入る方法がない」

彼が帝国でドラゴンを倒したときには、4階建ての建物から敵の
口の中に飛び込んだらしい。

「ケンイチ様！」

心配そうな顔をしたマサキがやってきた。

「ワイバーンかなにかがいるらしい」

「ワイバーンですか？！」

バスの窓を開けている村人たちや、屋根に乗っている獣人たちか
らもどよめきが起こる。

「大丈夫だ、ここに帝国の竜殺しがいるし、俺もワイバーンなら倒
したことがある」

「本当ですか？！」

「本当にゃ！」「俺らと一緒に倒したんだよ」

「私も手伝ったよ！」「にゃー」

アネモネとベルたちも降りてきた。

アマランサスも一緒だ。

「聖騎士様、いかがなさいますかえ？」

「当然、打って出る。ここを通過するしか、道はないからな」

「承知いたしましたわえ」

「マサキ！ 皆を集めて、後ろにできるだけ下げられ。やる気のある獣人たちは武器を取れ！ 強制はしないぞ？」

「「「おおおっ！」「」」

獣人たちが雄叫びを上げて、次々とバスから飛び降りた。

欠員はないようで、全員が参加するようだ。

「おいおい、大丈夫か？ 相手はワイバーンらしいんだぞ？」

「竜殺しがいれば平気じゃないですかい！」 「それにケンイチ様の鉄の魔獣もいるし」 「大魔導師様にエルフ様もいる！」

なんだかやる気まんまんだ。

カメを倒したりして自信をつけたのだろうか。

それに、ここにはアキラという歴戦の勇士がいる。

彼を群れのボスと認めているのだろう。

強いボスがいれば、群れはまとまり強敵に立ち向かえるようになる。

彼らはアマランサスの力にも一目置いているようだ。

「森猫もいるしな」

「にゃー」

ベルが俺の脚に身体をスリスリしている。

「お前たちはどうする？」

一応、俺の後ろに隠れている、うちの獣人たちにも聞いてみる。

「や、やるに決まっているにゃ！」 「そ、そうだよ！」

まあ、他の獣人たちがやる気になっているのに、弱味は見せられないってところだろう。

獣人たちの上下関係にも響く。
舐められたら終了なのだ。

「そうか、それじゃー」

アイテムBOXからクロスボウやら、ポリカの透明な盾を出してやる。

追加で購入しようとしたのだが、前に購入したものが売っていない。

やむを得ず、3人一組とかで使ってもらう。

それに戦闘は俺やアネモネがやるので、獣人たちの仕事はそれの援護だ。

別に敵に肉迫するわけじゃないが、前に購入したカットラス刀や、新規に購入した剣鉈を与える。

銃刀法があった元世界準拠のシャングリ・ラには大型の刀剣がない。

いざというときのために、ドワーフたちに作ってもらったほうがいいかもしれない。

それは帰ったときに考えよう。

「ケンイチ、私はあ？」

「セテラは、村人たちを守ってくれ。魔物を倒しても村人に犠牲者が出たんじゃ意味がない」

「解ったあ」

「僕は、アキラと戦うよ！」

ツイツツラが、アキラのアイテムBOXから出したコンパウンドボウを受け取った。

「頼む。ここまできたら、お前たちもやるだろ？」

俺は途中から合流した5人の兵士たちに尋ねた。

「兵士だったのに、ここでやらなきゃ男がすたる」

「ははは——まあ、正面での戦闘は俺たちがやるから、弩弓で援護してくれ」

彼らにクロスボウを購入して渡した。

まったく戦争するのは金がかかるぜ。

「すげえ弩弓だ!」 「王国はこんな武器を使っているのか……」
ここで説明をしている時間がない。

「よし! 皆、準備はできたか!？」

「「おう!」」

「うにゃ!」 「くそ! 俺もやるぜ!」

さて、俺も召喚獣を出すか。

巨剣を装備したコ○ツ戦闘バージョンもいいが、相手は空を飛んで素早い。

機動力があつたほうがいいだろう。

ここはホイールローダーか。

「よし、ホイールローダーだ!」

オレンジ色で巨大なタイヤを持つ鋼鉄の魔獣が空中から落ちてきて、バウンドする。

「「「おおおっ!」」」

獣人たちから歓声上がる。

俺は運転席に乗ると、エンジンを始動させてライトを点灯させた。辺りはすでに薄暗くなりつつある。

勝負をつけるにしても、早いほうがいいだろう。

それとも皆で一旦後退して、魔物が留守のときを見計り突破した

ほうがよかっただろうか？

色々と頭の中をぐるぐると思いが駆け巡るが、皆の士気も上がっている。

やるっきゃないだろう。

「私も乗る！」

アネモネが運転席に乗ってくる。

「ケンイチ！ 俺たちはバケットに乗せてくれ！」

「危ないぞ？ 大丈夫か？」

「へーきへーき」

元世界なら、完全に「ヨシ！」案件だ。

バケットを少し上げると、そこにアキラたちが乗り込む。

アマランサスやベルたちも、バケットに入ったようだ。

「アキラ大丈夫か？」

「オッケー！」

彼の声を確認してから後ろを見て、マサキと村人たちの様子も確認。

列をなして道を下っていくのだが、薄暗い中にセテラの金髪が目立つ。

問題ないようなので、ギアを前進に入れて発進。

こうこうとライトを灯しながら進むホイールローダーの後ろに、獣人たちの列が続く。

峠の頂上付近に近づくと見えてくる、町の廃墟。

国破れて山河あり——共和国は破れてはいないが、この国を象徴するような景色だ。

ボロボロだが、ふもとの町と一緒にまだ使えそうなものも多い。

「どこらへんにいるんだ？」

偵察をしたミャレーとニャメナに場所を聞く。

「廃墟の奥のほうだよ旦那！」 「にゃ！」

町の中を進むとすぐに大きくて黒い小山が見えてきた。

どうやら巣を作っているようで、そこに猫のように丸くなっている。

身体より、折りたたまれた翼が目を引く。

「「……」」

獣人たちも息を吞んでいるのか、静かだ。

「ケンイチ！ 真竜じゃなくてよかったな！」

バケツトから降りたアキラのいうとおり、こいつはワイバーンだ。

俺たちが接近しているのだが、寝ているのだろうか？

チャンスかもしれない。

「後ろ！ 魔法で先制をぶちかますから、鉄の魔獣の後ろに固まれ」

アキラたちも後ろに回った。

いよいよ決戦だが、いつも使う粘着爆弾の在庫がない。

忙しくて作っていないのだ。

車をずっと運転しっぱなしだし。

粘着爆弾はないが圧力鍋爆弾ならある。

「ニャメナ！」

「なんだい、旦那！」

アイテムBOXから出した、圧力鍋爆弾を彼女に渡した。

「いつものやつだ。魔物の前に投げてくれ」

「任せてくれよ！」

彼女にいつも頼むのは、コントロールがいいからだ。

「アネモネ、銀色の鍋に魔法を頼む！ 皆、陰に隠れろ！」

「解った！ うん！ むー！」

彼女の精神統一に呼応して、薄暗い中に青い光が舞う。

「おりやああ！」

ニャメナが投げた銀色の鍋が宙を飛び、魔物の前に着地した。

あの爆弾は鈍感なので投げたぐらいじゃ爆発しない。

それゆえ起爆剤が必要なのだが、それがアネモネの魔法だ。

「爆裂魔法（小）！」
エクスプロージョン

ガランガランと鍋が転がる音で、魔物が敵の接近に気づいたよう
だ。

長い首を持ち上げたのだが、もう遅い。

鍋に青い光が集まり、白い煙となって炸裂した。

「ギョエエエツ！」

突如爆炎に包まれたワイバーンが、叫び声を上げた。

耳をつんざく爆音と衝撃波が地面を這い、俺たちの所まで到達す
ると、ヒュンヒュンと礫の飛ぶ音を鳴らす。

「「「おおおっ！ すげえええ！」」」

爆炎を見た獣人たちから歓声が沸き起こる。

成功したアネモネの先制攻撃だが、これで倒れるほど魔物は甘く
ない。

「キョエエエツ！」

かなりのダメージを負ったようだが、血まみれになって侵入者―
つまり俺たちに向かって突進してきた。

「む！　プロテクション　聖なる盾！」

小さな大魔導師が出した透明な盾に、魔物の突進が阻まれた。肉の潰れる音と、鱗がこすれる音が聞こえてくる。

「撃て撃て！」

防御魔法がなくなると、獣人たちが持っていた武器から次々と矢が放たれた。

放物線を描いていく白い矢が、ワイバーンの鱗に叩き落とされる。硬い魔物の防御を貫通できないようだ。

俺の出番だ。

「おりゃ！　発進！」

アクセルを踏み込むと、鋼鉄のバケットを正面に構え魔物に突進した。

鉄の召喚獣の激突に、ワイバーンがもんどり打ってひっくり返る。

「翼の膜は薄い！　膜を破れないか？」

とりあえず、やつの飛行能力を奪わないと。

空に飛ばれると、こちらが不利になる。

「光弾よ！　我が敵を討て！」　マジックミサイル　「*%\$*%*！」

アネモネの上に顕現した白い光の矢、ツイッツラが構えたコンパウンドボウからも、光の矢が飛んでいく。

ツイッツラのはエルフの魔法らしい。

「ギョエエ！」

2人の魔法の攻撃が命中すると、ワイバーンの右翼を引き裂いた。

「はっ！」

今度は剣を構えたアマランサスが前に出る。

「アマランサス！」

確かに彼女は強いが、相手がワイバーンでは——という俺の心配をよそに、華麗なステップで魔物の牙をかいぐり敵の懷に飛び込んだ。

「やあっ！」

彼女の気合とともに、ワイバーンの左翼が下から上に切り裂かれ、ぶらぶらと垂れ下がる簾すだれのようになった。

「「うおおおおっ！」」

アマランサスの活躍に、獣人たちが沸く。

これで魔物は空に上ることはできないだろう。

元々、これだけの巨体を飛ばすのは、かなり難しいはず。

高所からハンググライダーのように滑空して離陸していたのではあるまいか。

それなら高所でしか生息していないのも理解できる。

「おっしやあ！」

俺は再び、ホイールローダーでの体当たりを行なった。

「ギヤアアアア！」

鋼鉄の体当たりで吹っ飛び転がるワイバーンだが、魔物が寝ていた場所が若干高くなっていて、端材などで囲まれていた。

丸くなった陣地の中に白くて丸いものが見える。

俺の記憶から似たようなものを検索するのだが——それは卵のようだ。

卵といっても、巨大なワイバーンのものなので1mぐらいの大きさ。

重機が乗り上げたことでいくつかは割れ、孵りかけの中身が出てしまっている。

それから察するに――ここは、こいつの巣だったのか。そいつは悪いことをしてしまったが、こちらも多数の村人を抱える身なんであ。

弱肉強食――悪く思うなよ。

ひっくり返るワイバーンの前に、腕を組んだアキラが立った。

「待たせたな！」

「「「おおおっ！ 待ってました！ 竜殺しの旦那！」」」
なんだか知らんが、凄い盛り上がっている。

「おりゃあ！ ぶっかけマヨフルパワー！！」

「「「おおおっ！」」」
アキラの両手から、大量の黄色いニュルニュルが噴き出して、ワイバーンの上に降りかかっている。

文字通りのぶっかけだ。

近づくことができれば、彼の必殺――万物窒息が使えるのだが、今回は無理だろう。

「ギョエエ！」

身体にまとわりつく謎の物体を、魔物が懸命にこそぎ落とそうとしているのだが、どう見ても無理だ。

黄色に染まったワイバーンを見て、アキラが叫んだ。

「分離！」

彼の掛け声とともに、大量のマヨが茶色のどろどろに姿を変えていく。

「「「なんだ?! なんだ、ありゃ?!」」」
彼のこの技を獣人たちは初めて見ただろう。

カメのときは、マヨを直接口に突っ込んで窒息させただけだからな。

「アネモネちゃん、火だ!」

「うん! むゝ!」 「*^&*」

アネモネと同時に、ツイツツラも魔法の準備に入っただのか、2人の周りに青い光が集まっていく。

「むー! ファイヤーボール 憤怒の炎!」 「*^%^^&」

多分、ツイツツラが唱えたのも炎の魔法だろう。

火炎放射器のような放物線を描いた炎の橋が、ワイバーンまで届いた。

2人の魔法の炎によって、周囲がオレンジ色に照らし出される。
アキラが出すマヨの油は植物油で簡単には燃えないが、十分な火力があれば白い煙となり一気に気化して炎となる。

「ギョエエエ!」

たっぷりの油に浸されたワイバーンが、巨大な松明と化す。

敵まで距離があるのだが、頬がじりじりと熱い――すごい熱気が伝わってくる。

魔法に耐性があっても、アキラの油に火が点けば、本当の火炎地獄だ。

叫べば肺の中まで炎が入り込む。

「「「おおおっ!」」」

すでに暗くなりつつある峠に巨大な松明が灯り、辺りを照している。

まるで昼間のように明るい。

「おっしゃあ！」

俺はホイールローダーを前進させて、燃え盛るワイバーンを突き飛ばした。

「グギャア！」

魔物の巢の裏手は崖になっていて、そこに炎をまとった敵が落下していく。

重機の運転席から降りると崖の下を覗いた。

10mほど下に、燃えるワイバーンがまだうごめいているのが見える。

「重度のやけどを負っただろうし、すぐに死ぬと思うが――」

ちよっと可哀想と思ってしまったのだが、相手は魔物。

情け無用。

「ロックフォール！」

アイテムBOXから、峠で入れた岩を取り出して下に落とす。ガラガラと巨大な岩が転がっていき、ワイバーンに命中した。

「「「おおおっ！」」」

一緒に谷底を見ていた獣人たちから歓声があがる。

「それってアイテムBOXから出したただけだろ？」

アキラのツツコミが入った。

「まあな。丸太フォール！」

複数本の丸太が、ガランガランと崖を転がり敵を押しつぶした。この攻撃によって、敵は完全に息の根が止まったようだ。

「「おおおっ」」

「ワイバーンをやったぞ！」

「勝どきを上げろ！ ウラァ！ ウラァ！ ウラァアアア！」

アキラが、勝どきの音頭を取る。

獣人たちが、めっちゃ盛り上がっている。

ワイバーンを倒したなんて、最高の自慢話がきただろう。
どこの酒場に行ってもヒーロー間違いなしだ。

「にゃー」

ベルとカゲが俺のところに来て、身体をスリスリしている。

「お母さん、今日は活躍の場所がなかったな」

「にゃー」「みゃ」

2匹とも気にはしてないらしい。

「ふう……おくい誰か、避難している皆を呼んできてくれ。鉄の箱に乗り直すよりここまで歩いたほうが早いだろう」

「おいらが行ってきやす」

マツが手をあげてくれた。

「頼む！ ああ、これを持っていってくれ」

彼に、LEDランタンを何個か手渡した。

「行ってきやす！」

彼を見送ったのだが、獣人たちは興奮冷めやらぬといった感じで、ざわざわしている。

「んもうっ！ アキラ！ 魔法をなんであの子に頼むの！」

どうやらツイツツは、彼がアネモネに魔法を頼んだのが、気に入らないようだ。

頼むのなら自分に頼めと言いたいのだろう。

「悪い悪い」

アキラはプリプリと怒っているエルフを抱き寄せると、唇を重ね尻を揉み始めた。

おいおい、公衆の面前でなにをするつもりだ。

ちよっとハラハラしていたのだが、アキラがツイツツラを離した。

「ケンイチ、今日ぐらいい酒を飲ませてもいいんじゃないね？」

「そうだな。カメを退治したときもお預けだったしな」

シャングリ・ラで一番安い甲種焼酎を30本買う。

4Lで2000円だが、この世界の酒より上等だ。

全部で120Lか、村人全員で飲んでも1L以上飲めるから、十分に足りるだろう。

ついでに、プラの使い捨てカップも買う。

100個入でちょうど1000円があるが、こういうのはペラペラだ。

もうちよつと大型でしっかりしたタイプのほうがいいだろう。

50個で1500円のを2つ購入。

「ポチッとな」

焼酎とカップがドサドサと空中から落ちてきた。

「これは酒だ。今日は好きなだけ飲んでもいいぞ？」

「「「おおっ！」「」」

早速、獣人たちが酒に群がった。

アキラが、蓋の開けかたやらをレクチャーしている。

「聖騎士様、他の敵は大丈夫かえ？」

宴会をやらかそうとしている俺たちにアマランサスが心配してい

る。

「アオイ！ なにか感じるか？」

俺から言われた彼がクルクルと耳を回している。

「大丈夫みたい」

「そうか」

「それにケンイチ、竜種は縄張り意識が強いから、この近くには他の竜種もいないってことだ」

「そうなのか。さすがに竜殺しは竜に詳しいな。まるで竜博士だ」

「ははは、まっかつせつなっさっいっ！」

こんな山の上には、森の中にいるような狼や熊はいないだろう。いるとすれば空を飛ぶ魔物だろうが、鳥の仲間は鳥目のはず。とりあえず大丈夫だと判断した。

俺やアネモネは飲まないし、アマランサスはウワバミ。アキラも、祝福の力を使ってアルコールは分解できる。

万が一敵の襲撃があっても大丈夫だ。

「飲まないやつには、これをやる」

俺はアイテムBOXからチュールを取り出した。

「あたかもそっちがいい！」

飛びついたのは、ナンテンだ。

「アオイはどうだ？」

「俺も、こっちで……」

彼もチュールを取るようだ。

「ちょっと、ミャレーとニャメナは手伝ってくれ」

「なんだい旦那！」 「にゃ」

2人にもチュ○ルをやった。
それから、ここにやってくる村人たちのために彼らのコンテナハ
ウスを出す。

「ケンイチ、どうするの？」

アネモネも俺の所にやってきた。

「下に降りて、ワイバーンを取ってくる」

ワイバーンの卵もあったようだが、とりあえず屍かばねを拾ってこよう。

「確かにもったいないぜ」「ワイバーンは美味いにゃ」

「そのとおり——アキラ！ 村人たちが来たら飯を食うように伝え
てくれ。酒も飲んでいいとな」

「オッケー！」

「オッケーにゃ！」

村人たちはアキラに任せて、俺はアイテムBOXからロープを取
り出した。

以前も峠で谷底に降りたが、今日は10mぐらいでそんなに高く
はない——とはいえ、辺りは暗くなりつつあるので回収するならさ
つさとやらないとマズい。

明日の回収では、肉が使えなくなってしまう。

「アネモネは料理をしていてくれ」

「解った！」

「旦那！ おめでたい日はカレーだろ？！」「そうにゃ！」
おめでたくななくても彼女たちは、カレーなのだが。

「それでいいなら簡単だが」

アキラもそれでいいというので、インスタントカレーにした。
エルフたちはなにを食べるのだろう。

彼女たちは肉を食わないから、ツイッツラに聞くとインスタントラーメンでいいと言う。

毎日ラーメンで飽きないのだろうか？

今のところ飽きていないらしい。

ちょっとシャングリ・ラを検索してみると、レトルトのおかずセツトが5000円で売っている。

15種類ぐらいで肉もあるのだが、芋の煮付けとかマメとひじきの煮物など、家庭料理のおかずのようなものが多い。

これなら食べられるのではないだろうか？

一揃い購入してみた。

エルフたちも^{ウォーム}温めの魔法が使えるから、すぐに食える。
アキラがいれば大丈夫だろう。

料理はアネモネとアキラに任せて、俺は崖下に向かう。
アイテムBOXからロープを出して獣人たちに持ってもらうわけだ。

「あたいも手伝うよ！」

ナンテンもやってきてくれた。

獣人が3人いれば、俺1人ぐらいなら軽々と持ち上げられる。

以前に崖のロッククライミングで使ったハーネスを出すと、装備してロープを繋ぐ。

アイテムBOXからLEDヘッドライトを取り出して、頭に装着。
彼女たちにロープを持ってもらい、俺は崖に脚をかけた。

「頼むぞ」

「任せるにゃ！」 「大丈夫だよ旦那！」

「あの、俺は……」

アオイがウロウロしているのだが、彼には周囲の警戒を頼む。

「それじゃ降ろしてくれ」

「はいよ」

暗い谷の底へ、ずるずると降りていく。

今回は10mなので、すぐだ。

ワイバーンを燃やしていた炎はすでに消えており、タンパク質の焼けるにおいが下から上がってくる。

爪や髪の毛が焼けるようなにおいで、鼻をふさぎたくなる。

暗い谷底に到着すると、LEDヘッドライトで辺りを照らす。

焼けただれたワイバーンは完全に死んでいるようだ。

これは使えるのだろうか？

まあ、解体して駄目だったら、アイテムBOXのゴミ箱に投入すればいい。

まずは岩をアイテムBOXに収納してから、丸太も入れる。

岩も丸太も武器として十分に使えることが解ったので、これを利用しない手はない。

峠にまだ落石があるかもしれないので、そのときにもとっておくとするか。

最後にワイバーンの死体を収納すると、上から人の声がたくさん聞こえてくる。

「ケンイチ様！」

上から声がするので見上げるのだが、暗いのでよく解らん。多分、マサキの声だと思う。

「今、戻る！ おゝい、引っ張り上げてくれ！」

「解ったにゃ！」

俺の身体が引っ張られていく。
崖を蹴って歩くように上を目指した。
さて、これから勝利の宴会だな。

262話 酒を飲む

峠の頂上でワイバーンと遭遇——これを退治した。

いつも使っている粘着爆弾などが在庫切れだったのだが、前回の遭遇と違いアキラやエルフたちもいる。

彼らに協力してもらい、無事に魔物を倒すことができた。

ここは山の上なので、森の中に生息するような熊や狼もいない。竜種も縄張り意識が強いようなので、複数いることはないらしい。敵もいないし、峠の頂上まで到着したということで、ここで一区切り。

酒を入れて宴会をすることになった。

カメやワイバーンを討伐したお祝いという面もある。

俺の率いる難民たちの士気を上げるという点からも、こういう一区切りの行事は重要だろう。

俺が谷底でワイバーンの回収作業をしていると、避難させていた村人たちが頂上までやってきた。

彼らのコンテナハウスを出してやったので、飯の準備を始めている。

戻った俺は、ワイバーンの屍かばねをアイテムBOXから出してみせた。

「「「おおおっ！」「」」」

「こ、これがワイバーンですか！」

少々焼け焦げている魔物の死骸の前で、村人たちのリーダーであるマサキが驚いている。

「ワイバーンの討伐を見られたなんて、孫の代まで自慢できるぞ？」
「それだけではありません。鉄の召喚獣に村人全員を乗せて、すごい距離を走るなんて……まるで夢物語です」

「ケンイチ様、只人の脚じゃ軽く1ヶ月はかかる距離を数日でやってきたんですぜ？」

村人たちを連れてきてくれたマツがそんなことを言う。

「それに休まなくてもいいし、飯も食わないし……」

ナンテンが離れた場所に置き去りにしてしまったマイクロバスを見ている。

あそこまでいくのが面倒だし、回収はあとでいいだろう。

こんな場所には誰もいないから、盗られる心配もない。

「そうでもないぞナンテン。飯は俺が作った特殊な油を食うんだ」

「そうなのかい？」

「ああ、そろそろ給油したほうがいいな。明日の出発の前に入れよう」

「そうだな」

アキラがすでに、ツイツラと一緒にビールを飲んでいる。

エルフたちもビールはお気に入りようで、セテラにせがまれて彼女にも渡した。

「ほらほら、飯を食って、今日は酒も飲め。ワイバーンは傷むと困るから収納するぞ」

「「「おおおっ！」「」」」

盛り上がっている獣人たちが手を上げた。

一方の村人たちは、隠れていたただけなので少々バツが悪そう。

「遠慮することはない。騒ぐときは騒がないとな」

早速獣人たちは、酒を開け始めた。

ニヤメナが焼酎のペットボトルの開け方を、得意気に伝授している。

「うおっ！ うめえ！」 「こんなうめえ酒なんて！」 「しかも、すげえ強え！」

シャングリ・ラで一番安い焼酎だが、獣人たちには評判は上々のようだ。

ダリアやアストランティアの獣人たちにも評判は良かったので問題は無いはず。

甲類焼酎でも、この世界の酒に比べたら遥かに上等だ。

この世界にもワインならいいものがあるようなのだが、スピリッツとなると醸造技術も遅れているし蒸留技術もない。

それをもっているのはドワーフたちだけだ。

酒を持った獣人たちが1人また1人とアマランサスの所にやってくる。

彼女の戦闘を見て、やはり只者ではないと悟ったのだろう。

「姐さん」

獣人たちから注がれた酒を、あぐらをかいたアマランサスが飲み干していく。

その姿は、まさに女傑。

彼女1人でも、国の一つぐらいいは取れそうだ。

そりゃ、かつて奴隷の身分から成り上がり、国を統一したという豪傑の子孫なのだ。

そりゃ俺だって、先祖は松前藩の役人だったとか聞いたが、今はただの凡人。

数少ない生粋の道産子なのだが、比べるべくもない。

ウワバミの彼女にはこのぐらいいは楽勝だが、この獣人たちは、あ

まり酒は飲んだことがないらしい。

——というか、物資不足で飲めなかったのだ。
飯さえ食えないのだから、酒どころではない。

獣人たちが俺の所にもやってきた。

「ケンイチ様にも」

「俺もか」

普段は飲まない俺だが、ここで断っちゃ彼らに悪い。
プラのカップに入った焼酎を飲み干す。

「おお！ さすが、ケンイチ様も豪胆だあ！」

俺の飲みっぷりに獣人たちが沸く。

普通はこんな飲み方をしたら急性アルコール中毒にでもなってヤバいが、俺にはチートがある。

授かった祝福の力を使えば、体内アルコールも瞬時に分解できるのだ。

アキラに言われて試していなかったが、本当にすぐに酔いが覚めた。

毒も効かないと言っていたが、これはマジだろう。

挨拶まわりが終わったので、彼らで飲み直すらしい。

「この酒は結構強いから、ワインみたいに飲むなよ。ぶっ倒れるぞ。飯も食えよ」

「ひやはは！ 酔い潰れるまで酒を飲むなんて、俺の夢だったんだ！」

「俺もだぜ！」

喜ぶ彼らだったのだが……。

「……あ、あいつも酒が好きだったのに、ちくしょう！」

1人の獣人が言った言葉に、辺りが静まり返る。

おそらく死んだ仲間を思い出したのだろう。

「そうだな、そうだったな」

「やつの分まで飲もうぜ」

獣人たちは一つのスープの鍋に固まると、皆で食って飲み始めた。普段は只人たちと一緒に食事を摂っているのだが、今日は共闘した仲間と一緒に飲みたいのだろう。

その中にアキラがいて、なにやら話している。

帝国での体験談とかそういう感じだろうか？

竜殺しの生の話を聞けるなんて滅多にない体験だしな。

今日は、好きにさせてやる。

途中で拾った兵士たちも5人で集まって酒を飲み始めた。

俺がインスタントカレーとパンをやると、美味そうに食べている。

「こりゃ香辛料料理か？」「こんなの滅多に食べねえ……」

兵士たちもカレーは大丈夫のようだ。

俺たちもカレーを食べ始め、エルフたちはインスタントラーメンを食べ始めた。

「野菜中心のおかずがあるから、エルフにも大丈夫だろう。気に入ったものがあつたら食べてみてくれ」

「うん」「へえ、いろんな料理があるね。でも全部茶色だ」

まあ、和食で醤油ベースなので仕方ない。

それにエルフなら精進料理みたいなものもいいはずだから、和食も合うはず。

途中で拾った10人の子どもたちも俺たちと飯を食べ、マツとアオイともう1人の獣人も一緒だ。

いきなり米は無理なので、パンとカレーの組み合わせだが。

見たこともない料理に最初は戸惑っていた彼らだが、一口食べるとすぐに黙々とカレーを食べ始めた。

「どうにゃ？ 美味いにゃ？」 「旦那に言わせると、カレーは正義らしいからなあ」

「う、うまい！」

「美味しい！」

元々獣人たちは香辛料料理が好きだ。

マツとアオイが気にいるのは当然だが、古今東西この異世界にやってきてもカレーが嫌いな子どもには会ったことがない。

ミャレーの言うとおり、カレーは正義ということが改めて証明されたということになる。

「ほら、マツ。お前も酒を飲め」

「こいつは、かっちけねえ」

俺からプラのカップをもらったマツが焼酎を飲み始めたのだが、すぐに泣き出した。

「おいおい、お前もか？」

「申し訳ねえ。村の皆にも、こんな美味しいものを食わせてやりたかった……」

「親たちが盾になってくれたから、子どもたちが助かったわけだし」
「ううう……」

マツが泣きながら焼酎をあおり、カレーをかきこんだ。

アオイもしょんぼりしているが、カレーを食べている。

子どもたちは——大丈夫そうだ。

親がいなくなっても、懸命に前を向いて生きようとしている。

普段から裕福な生活をしていて、こんな状況に叩き込まれたら、泣いたり落ち込んだりするところだが、彼らの普段の生活はそうで

はなかった。

こんな場所でも、飯が食えて眠れるだけでも天国といえるのかもしれない。

「これで、山は越えましたわえ」

アマランサスは俺が渡した焼酎を飲んでいるが、彼女のは少々高いやつだ。

500mlで5000円ぐらいする。

まあウワバミなので、安い焼酎でもいいと思うのだが……。

今日は質にこだわりたいらしいので、いい焼酎を渡した。

「ケンイチ！」

「竜殺しはあっちでなくてもいいのか？」

最初は獣人たちと飲んでいたアキラが戻ってきた。

「お通夜みたいになっちゃったからな。俺とツイツツラは完全に場違いだ」

「アキラやエルフたちも感謝している」

「よせやい、ははは。やらんとくたばるだけだし、やるっきゃないぜ」

「そうだな」

話しているとセテラが抱きついてきた。

「それじゃ、今日のお礼はあ？」

「BBAなにもしてない」

カレーを食べていたアネモネがポツリとつぶやく。

「BBA言うな！ このちびっこめ！」

カレーを持ったアネモネと、カップ麺を持ったセテラが睨み合っている。

「「ぐぬぬ……」」

「喧嘩は止めなさいって」

俺の言葉で、エルフが髪をかきあげて座り直した。

「しょうがないでしょお、ケンイチがあいつらの面倒みろっていうんだからあ」

「村人たちにとって、美しくて強いエルフ様が心の支えになるからな。少しでも不安は少ないほうがいい」

「ケンイチだって凄いのにな」

「俺のことは誰も知らないが、エルフが凄いつてのは、この大陸の人間なら誰でも知っているからな」

「勝手に崇めないでほしいんだけどなあ——私たちは只人なんて興味ないしい」

アキラの話では、帝国のエルフたちもこんな感じらしいので、元々こういう種族らしい。

そりゃ不老だし、能力も桁違い、元々は超文明の生き残りだっていうぐらいだし、普通の人間なんて原始人にしか見えないのかもしれないが。

「俺だって只人だが？」

「ケンイチは違うじゃない」

まあ、俺とアキラは異世界人だから違うのだが、中身は一緒ではないのだろうか？

セテラの話では、種族が違うから子どももできないだろうって話だし……。

元世界に帰るつもりもないし、帰れない。

この世界で根を張るなら子孫を残せないと困るんだが、なにか方法はないものか。

「エルフなどより、聖騎士様のほうが凄いに決まっておる！」

そう言っただけに抱きついてきたのは、アマランサスだ。

ちよつと赤い顔をしているので、酒が回っているのかもしれない。ウワバミなので、理性を失うことはないと思うが。

「あの……聖騎士様ってなんですか？」

アオイが小さく手を挙げた。

「ある王族から力をもらって契を結んだのが、聖騎士様って呼ばれるらしいんだが、一般には知られていない」

「そ、そうなんですか？」

「そこにいるアキラも、帝国皇帝から力をもらった聖騎士なんだが」「フヒヒ、サーセン！でも、帝国じゃ聖騎士とは言われてなかったけどな」

アキラが、ビールを飲みながら俺の出したつまみを食べている。食いかけをツイツツに食わせてやっているが、あれがエルフ式の愛情表現らしい。

それを見ると、セテラも同じことをしようとしてくるので厄介だ。

「はい、あーん！」

「はいはい」

セテラから貰ったつまみを食べて、俺の食っていたカレーを食わせるところなのだが、彼らは辛いのが苦手。

アキラからつまみをもらうと、それを齧って半分をセテラにやる。普通ならこんなことはしないのだが、これがエルフ風なのだ。やらないと、「愛がない」とか、また言い出す。

セテラがアマランサスを退けて、俺に抱きついてきた。

「うーん」

目の前にピコピコと動くエルフの長い耳があるので、そっとなで

る。

「ん……」

エルフの耳は普通なら触らせてくれないらしいが。

「もーっ！ ケンイチは私の！」

反対側からアネモネが抱きついてきた。

「おーっ！ さすが、ケンイチももてだな」

そういうアキラも、ツイツツラとイチャイチャしている。

その場で始めそうな勢いなんだが、勘弁してくれ。

「しょうがないなあ」

セテラとアネモネの頭をなでてやる。

「「ふあああ」」

アホなことをやっているうちに飯を食い終わった。

獣人たちは、まだ泣きながらちびちびと酒を飲んでいる。

まあ、そういうときもあるだろう。

そのぐらい大変な思いをしたんだろうし。

俺は、廃墟を物色して使えそうなものをアイテムBOXに収納することにした。

LEDライトで照らしながら、辺りを散策する。

ふと、目が止まったのがワイバーンの巣。

「あ、そういえば、卵があったような……」

木材や枝などが積み重ねられた巢を乗り越えようと、割れた卵がな
ん個がある。

卵は巨大で1mほど。

「うぐ……」

卵はかなり育った状態で、ホビロンみたいな感じで放り出されていた。

巣のにおいも酷く、思わず晩飯とご対面するところだ。

それらをアイテムBOXに入れて、ゴミ箱へ投入する。

残っている卵が2つあるが、残りも同じ状態でちよつと食えないだろう。

いや、食うかな？

卵は村人たちに聞いてから処分することにするか。

こいつはまだ生きていると思うが、アイテムBOXに入れば死んでしまう。

巢はワイバーンの糞で汚れて異臭を放っており、ばつちいが、これは肥料に使えるだろう。

鶏糞は高級肥料だし、これも使えるのではないか？

アイテムBOXに収納した。

とにかく、連れていく村人たちの村を作るとしてもなにもない。使えるものは、どんどん使う。

廃墟の様子も見て、10棟ほど見えそうな物件があった。

この宿場町を建設するときには、多大な労力がかかったと思う。

このまま残しておけば、再び峠が開通したときに見えそうではあるのだが、それがいつになるかは解らない。

俺が生きている間に、共和国が滅びないかもしれないし、そのときはそのときで考えればいいさ。

このまま峠を下ったふもとにも、宿場町の廃墟があるかもしれない。

そこも見えそうだったら回収しよう。

使えるものはなんでも使うのだ。

皆のところに戻る。

獣人たちはまだ飲んでいるが、放置して俺たちは寝ることにした。
マサキを呼ぶ。

「ここには敵はいないようだから、鉄の陣地は要らないだろう？
不安なら用意するが……」

「いいえ、ケンイチ様のおっしゃるとおりにいたします」
見れば、村人たちはほとんどが焚き火の前で毛布にくるまっている。

ちびちびと酒を飲んでいた獣人たちも半分は轟沈。
大丈夫だろうか？

「ここは、山の上だから冷えるかもしれない。追加の毛布を出すか？」
すでに、森の中を走っていたときに比べて冷え込んできている。
獣人たちは自前の毛皮があるので平気だろうか。

「大丈夫だと思いますが……」

「うーん。しかし風邪でもひかれたら大変だ」

毛布を買おうと思ったが、いいことを思いついた。

今晚だけのげればいいんだ。

使い捨てカイロはどうだろうか？

カイロを検索すると30枚入りが500円だ。

とりあえず10箱買う。

ドサドサと黄色い箱が落ちてきたので、中身を取り出してマサキに説明してやる。

「これは魔法で温くなる袋だ。こうやって揉むと温くなる。やってみろ」

「こうですか？」

マサキが俺の真似をして両手でもみもみを始めた。

「どうだ？」

「あ！ 温かくなってきました！ これは凄い」

「これを、1人に3つほど皆に配ってやれ」

「ありがとうございます！」

「結構熱くなるので、肌には直接つけないようにな。やけどするか
らな」

「解りました！」

マサキが黄色い箱を持って、村人たちの所に走っていった。

箱には12時間保つて書いてあるし、今晚はこれでなんとか
るだろう。

俺の所にいる子どもたちと獣人たちは、コンテナハウスの中に
るので大丈夫なはず。

コンテナハウスに戻ると、セテラが抱きついてきた。

「ねえ、ケンイチいーしょうよお」

「するってなにを？」

「もう、知っているくせにい」

「皆いる所でできるはずないだろ？」

「それじゃ、皆一緒にすればいいじゃん」

「アネモネがいるのに、できるか！」

白いワンピースの寝間着に着替えたアネモネも俺に抱きついて
きた。

「ケンイチ、私もしたい」

「はいはい、もうちょっと大きくなってからなあ」

アネモネを抱いたまま、寝転がって毛布をかぶる。

「ぷう」

なんだかアネモネが不満そうだが、できるはずがない。
そこにセテラも潜り込んできた。

「私も一緒にねるう」

「おいおい、5000歳のお姉さまは勘弁してくれよ」

「5000歳言うな！」

「BBA」

「BBAじゃない！」

毛布の上にアマランサスが飛び込んできた。

「うごっ！」

「聖騎士様あゝ！ 妾だけ、なぜ仲間外れなのかえゝ！」

「ちがうちがう……仲間外れにしてないから」

「ま、混ざりてえ……」 「落ち着くにゃ、トラ公」

もみくちやにされていると、獣人たちの声が聞こえる。

「にゃー！」

ベルの声でアマランサスが避けると、俺の腹の上に黒い毛皮が香箱座りになった。

「重いよ、お母さん」

「にゃ」

首をなでるとゴロゴロしているので、どいてくれそうにない。

横を見ると、アマランサスが悔しそうな顔をしているので、あとで慰めてやらんと……。

「ふう……」

俺はそのまま眠りについた。

— — — — — ◆ ◆ — — — — —

——ワイバーンを討伐した次の日の朝。

俺の上に乗っていた皆を降ろして、外に出る。

コンテナハウスのドアを開けると、ベルとカゲがずるりと出ていった。

外は少し霧がかっていて、肌寒い。

標高が高かったので雲の中なのだろうか？

その光景を見て、村人たちにカイロではなくて毛布を追加してやるべきではなかったかと後悔した。

獣人たちが飲み会をしていた場所には毛布を被って、丸くなった獣人たちが寝ていた。

グデゥっとした寝顔をしていて、なんだか可愛い。

別に寒がっているような様子は見えないが、彼らは自前の毛皮があるからな。

村人たちの所に行くコンテナハウスを出してやる。

すでに起きている者もいて、食事の準備が始まっていた。

廃墟の残骸を集めてまとめているようだ。

薪に使ったりするのだろう。

「おはよう、寒くなかったか？」

「ケンイチ様！ ケンイチ様からいただいた、温かい袋は凄いですね！」 「これのお陰で朝までポカポカでした」

男たちが大事そうにカイロを持っている。

彼の嬉しそうな顔を見て、ホッとした。

使い捨てカイロは十分に機能してくれたらしい。

「それは昼頃まで温かいから、そのまま持っていればいいよ」

「ありがとうございます！」

村人は問題なさそうなので、散歩がてらマイクロバスの所まで行く。

ちょっと離れた場所に置きっぱなしだったので、回収しないとな歩いていると霧が晴れてきて、山々が連なる壮大な景色が見えてきた。

到着したときにはすでに薄暗かったから、よく解らなかったが、これは素晴らしい景色だ。

アイテムBOXからカメラを出すと、あちこちを写真に収める。こんな景色は、日本にいたままじゃ見られなかったな。

写真を撮りながらバスの所に到着した。

「収納！」

アキラのバスも収納する。

今日は、出発する前にバイオディーゼル燃料を入れないとな。

このまま上手く峠を降りることができれば、あとは王国の街道。整備されている道なら、スピードを上げることができる。

「えーと、この峠を降りて1日、王都まで1日、サクラまで1日――トラブルがなければ3日か4日だな」

いや、屋根に人を乗せているからなあ。もうちょっとかかるか……。

霧の中から、ベルとカゲがやってきた。

パトロールしてきたらしい。

ベルの毛皮をなでたあと、皆の所に戻る。

マイクロバスを邪魔にならない場所に再び出した。

「ケンイチ様、おはようございます」

村人たちから挨拶をされる。

「おはよう。寒くなかったか」

「はい、このお陰で」

人々がカイロを抱いている。

丸くなっていた獣人たちも皆起きていた。

「随分と飲んでいたみたいだが、宿酔二日酔いになってないか？」

「大丈夫でさ」「それよりも……」

「どうした？ なにかあったのか？」

「いえ、ケンイチ様からもらったこいつを腹に抱いて寝たら――ガキの頃親父やおふくろに抱かれて寝たときのことを思い出しちゃって……」

「あ、俺もだ」「オイラも……」

獣人たちがまた、しんみりしてしまった。

「お前たちの親は？」

「成人したときに、別れ別れになっちゃって、それっきりで……」
「どうやら、皆がそうらしい。」

「あの、ケンイチ様」

そこに、マサキがやってきた。

「マサキ、おはよう」

「おはようございます。村では、成人すると他の村に行くことになっ
っているのです」

「ええ？ それじゃ、逆に別の村からお前たちの村に来た連中もい
るのか？」

「はい……」

なんということだ。

共和国はエルフの社会を参考にして作られたと言っていたが、そ

んなことまで真似していたとは……。

エルフが村を渡り歩くのは、狭い村で血が濃くなるのを防ぐため。元世界で俺が住んでいた限界集落でも、交通機関が発達していなかった昔——人の往来がまったくなく近親婚が繰り返されて、色々とマズいことが起きた。

それを考えると理にかなっているとはいえ……。

家族を強制的に引き離すなど、国のやることではない。

「俺の領地では、そんなことはないから心配するな」

「ありがとうございます」

俺の家族の所に戻ると、皆で朝食にする。

俺たちや子どもたちは、インスタントスープにパン。エルフたちは、グラノーラに豆乳をかけて食べている。

「アキラ、出発する前に燃料の補給をしよう」

「オッケー」

「オッケーにゃ！」

「「「オッケーにゃ！」」」

子どもたちが、ミャレーの真似をしている。

子どもはすぐに真似するからなあ。

へんな事を覚えないといいが……。

飯のあと、後片付けをして出発の準備が整うと、皆でマイクロバスに乗り込む。

上にはルーフキャリアをつけて、後ろにはハシゴがあるので、かなり降りしやすくなった。

獣人たちなどは、ジャンプしてキャリアに掴まると、そのままひよいと飛び乗る。

「皆乗ったか?!」

「「「おう!」」」 「「「はい」」」

「にゃー」 「みゃ」

元気な返事を聞くと、車の周りを一周。

最終チェックをしてから運転席に乗り込んだ。

エンジンをかけると、マイクを取る。

「アキラ、そっちはどうだ?」

『問題なし!』

「それじゃ出発!」

バスは、峠の下り道を進み始めた。

263話 巻き込まれる

共和国の村人をマイクロバスに乗せて、王国へ帰国中だ。

この峠も王国のはずなので、すでに王国には入っているのだが、前途は多難。

崖っぷちと谷底の間を蛇のように這う道を進み、なんとか峠の頂上に到着。

頂上にはかつての宿場町の廃墟があったのだが、そこにはワイバーンの巣ができていた。

こいつを倒さないことには先には進めないので、皆の力を使ってワイバーンを撃退。

また魔物の討伐数が増えた。

こんなに魔物退治している貴族っているのだろうか？

今回のできごとを全部物語にしたら、全何巻になるだろう。

いや、お城に報告するとなると、なぜ共和国にまで飛ばされたのか、話さなくてはなくなる。

転移門のことは隠しておきたいのだが、リリースはどう対応しているだろうか？

俺が単に留守だとして、通常業務を行なって欲えていればいいのだが……。

あまり留守にしている時間が長いと、お城に怪しまれるが、長くてもあと1週間もあれば済む。

通常なら、この世界は移動に長時間を費やす。

1ヶ月ぐらい予定が遅れてもどうってことはない。

宿場町の廃墟で1泊した俺達は、峠を下り始めた。

下りの道は結構植物が多い。

道にも植物がはびこっていて、崖の上から落ちてきている木などもある。

落石なども多いので、バスから降りるとアイテムBOXに収納しながら進む。

「ケンイチのアイテムBOXがあれば、どんな道でも進めるにゃ」「そうだな」

「あまりデカイものは入らないから、どんな道でもってわけにはいかないぞ?」

「大丈夫大丈夫、旦那ならなんとかしてくれるって」「にゃはは」
獣人たちは、あまり深刻に考えないのがデフォルトらしく羨ましい。

いや、俺があれこれ考えすぎなのだろうか?

性分で余計なことまで考えてしまうとはいえ、なにかあったときの対策とかシミュレーションは必要だ。

落石や倒木はあるが、道が崩れていないのはありがたい。

こちら側は地盤はいいのかもしれないな。

無線機のマイクを取る。

「アキラ、そっちはどうだ?」

『問題なし!』『&^%\$\$\$^』

ツイッツラの声が聞こえてくる。

「セテラ、なんて言っているんだ?」

「大丈夫って言ってるんだよお」

「そうか」

しばらくバスは曲がりくねった道を進む。

特に危ないのはブラインドコーナーだ。

コーナー自体も危険なのだが、その先がどうなっているのか解らない。

突然、道がなくなっている可能性だってある。

十分に注意しなければならぬ。

「丘を越え行こうよっつくらあ」

いつも俺が歌っているので、アネモネとアマランサスが続きを歌ってくれる。

調子よく進んでいると、アオイが俺の所にやってきた。

「ケンイチ様、滝の音がする」

「滝?!」

アオイの言葉を疑ってしまったが、道がなくなっていて滝になっていた。いたりしたら詰む。

そのまま注意して進むと、ミヤレーとニヤメナも気がついたようだ。

「旦那! 聞こえてきたぜ!」 「そうにや」

これは間違いないな。

獣人たちの言うとおり、俺たちの前に現れたのは水の流れ。

滝といっても、大きな滝ではなく、道の上を水がバシヤバシヤと流れている状態だ。

ここらへんは岩盤なので、水の流れでも削れることもなかったのだろう。

それとも比較的新しい滝なのだろうか?

この状態でも、長い年月をかければ徐々に岩肌が削れて、峡谷が作られるのだと思う。

俺は無線機のマイクを取った。

「アキラ、滝になっている」

『マジか！ 車で突っ切れそうか？』

「多分、大丈夫だろうが、屋根に乗っている連中が流されてしまうな」

『どうする？』

「うーん」

しばし考える。

「アキラはそこで待って、上に乗っている連中を降ろしてやってくれ」

『オーライ』

「オーライにゃ？ また新しいのにゃ」

アキラの出した単語にミャレーが反応しているが、それどころではない。

「俺がハ○エースで戻ってきて、ピストン輸送する」

『な〜る』

彼も、俺の作戦が解ったようだ。

作戦が決まったので、迅速果敢に行動する。

まずは、俺のマイクロバスの屋根に乗っている連中も降ろす。

「このまま滝に突っ込むと、おまえたちが流されてしまうから、一旦降りてくれ」

「俺たちや濡れても大丈夫ですぜ？」

「水の流れを甘く見ると大変なことになるぞ？」

獣人たちが耐えられても、子どもは無理だろう。

アキラの車の上からも獣人たちが降ろされているのを見て、降りる気になったようだ。

「先に渡ったら、お前たちを迎えにくるから、そこで待っていてくれ」
「「へーい」」

アキラの車からも降ろされた連中と合流して、大きな塊ができた。それを確認すると運転席に戻り、車を発進させると、徐行運転で滝に突入する。

水の流れとともに、たくさん植物もぶら下がっている。
栄養と水を求めた結果だろうか。

ワイパーを全開にしたが、前がよく見えない。

体験したことがないような土砂降りの中に突入したようになった。ものすごい力でマイクロバスの外板を叩き、凄まじい音が車内にも響く。

まるで巨大な圧力で押しつぶされるような感覚。

「「ひいひい！ うわあああ！」」

車内に村人たちの叫び声が響く。

5秒ほどで滝を抜けたが、ものすごい時間が進むのが遅かった。思わず走馬灯が回りそうだ。

無線が入る。

『ケンイチ、大丈夫か？』

「ああ、大丈夫だ。こりゃ、上に乗っていたら完全に流されるな」
獣人たちを降ろしてよかった。

『ははは、無理だろ？』

これがアトラクションなら面白い体験になるだろうが、流されたら崖下で一巻の終わり。

こりゃ洒落にならない。

100mほど進み、バスから降りた。

「皆はここで待っててくれ」

「「はい」」

アイテムBOXからハ〇エースを出すと、滝の中に戻るわけだ。こいつでピストン輸送をする。

アイテムBOXのいいところは、立ち位置で車の向く方向を変えられるところ。

方向転換できないような狭い道でも、向きを変えられる。

運転席に乗り込むと、来た道を戻り滝をくぐる。

こいつはマイクロバスよりは幅が狭い。

滝の内側を通ることができるよう、あまり影響がないようだ。

皆の所に戻ると車から降りて、一旦アイテムBOXに収納する。車の向きを変えるためだ。

再び出すと、スライドドアを開けた。

「よし、ここに乘ってくれ」

「「へい」」

最初は獣人たちに乘ってもらう。

村で助けた獣人たちは猫人犬人合わせて12人。

あとで拾ったマツたちは3人だが、アオイは俺の車に乗っていた。全部で14人だ、問題なく乗れるだろう。

「あまり詰めなくてもいいぞ。なん回か往復するつもりだからな」
短距離なので、補助席を出す必要もない。

通路にも立ち乗りをしてもらう。
もつとも頭がつかえるので、しゃがむことになるが。

「旦那は、こういう鉄の召喚獣も呼び出せるんだね」
ナンテンが、白いボディをベシベシと叩いている。

「そうだ、ナンテンも乗ってくれ」

車に乗るように促していると、獣人の女たちに抱きつかれた。
4人の女たちが、俺の身体にスリスリしている。

「ほら、そういうことしている場合じゃないぞ？」

「もう！ いつも、あの怖い女たちが見張ってるしさあ」 「少しぐ
らいいじゃない」

「ハフハフ！」

目の前でびよんぴよんしているのは、2人いる犬人の女だ。

尻尾をパタパタとさせているが、犬人なので尻尾パタパタは嬉しい証拠だ。

耳がピンとしている黒髪の女と、茶髪のたれ耳。
しょうがないので、頭をなでてやる。

「ほら、乗った乗った！」

獣人たちを詰め込むと、運転席に乗り込んだ。

「ほい発進！」

「「「おおっ！」」」

すし詰めの獣人たちから声が上がる。

そのまま滝の中に飛び込むと、バシャバシャと天井を水が盛大に
叩くが、バスするときよりは酷くない。

黒いものが動いたと思ったら、滝の所にベルがいた。
水を飲んでみるみたいだ。

「こりゃ、すげえ！」 「雨の中で動いても雨に濡れねえってことだ
よな？」

「そうだ。もっと道がよければ、獣人が走るスピードで延々と走り
続けることもできる」

「「「ほっっ！？」」」

獣人たちの声は、信じているのかいないのか？

半信半疑って声をしている。

話している間に滝を渡りきり、俺たちの家族の所に到着した。

皆を降ろすと、また滝を渡って戻り、今度はあとで拾った子どもたちと兵士たちを乗せる。

全部で15人。

楽勝だ。

子どもたちは鉄の魔獣にも慣れたようで、滝を渡ってもはしゃいでいる。

小さい子は順応が早いのだが、兵士たちはまだおっかなびっくり。滝の音を聞いて、車体にバシバシと水をかぶると、悲鳴を上げている。

「子どもたちは平気なのに、大人が悲鳴を上げるなよ」

「ケンイチ様、そ、そんなことを言われても……」

「ははは」

そんな話をしている間に滝を渡り、皆の所に到着した。

残っているのは、アキラのマイクロバスだけだ。

バスに乗り込むと、無線機のマイクを取る。

「アキラ、いいぞ——渡ってくれ。滝の圧力は結構凄いから気をつけてくれよな」

『オッケー！』

「オッケーにゃ！」

「「「オッケーにゃ！」」」

子どもたちが、にゃーにゃーとミャレーのマネをしているのだが、子どもが好きな彼女が怒るはずもなく、からかわれてむしろ喜んでいる。

アキラの車両が動き出して、ゆっくりと滝に向かった。
滝行のように激しい水の流れに打たれており、外から見るとかなりの水量があるのが解る。

「「「おおーっ」」」

見物している獣人たちからも声上がる。

「やっぱり、上に乗せたまま突破はできなかったな」

それだけでなく、危険は避けるべきだ。

アキラのマイクロバスが俺たちの所までやってきた。

「アキラどうだった？」

「かなりの水量だな。満員で重量があるのが、よかったのかもしれないえ」

「そうだな」

皆が揃ったところで、そろそろ昼頃だ。

村人には悪いが小腹が減った。

休みついでに、昼飯にすることにした。

「マサキ」

「はい！」

「悪いが、俺たちは軽く食事をさせてもらおう」

「解りました」

彼に頼まれて、村人たちのコンテナハウスを出す。

どうやら滝の水を汲んだりするらしい。

「滝は気をつけてくれよ。流されてしまったら助けるすべがない」

「解っております」

その前に、下まで落ちたら即死だろうしな。

「うゝん」

「ケンイチ、どうした？」

「川の水より、ここの滝のほうが、水が綺麗で美味そうだな——と
思ってたな」

「確かに、なんとかのおいしい水みたいだな」

「そうそう」

「魔物の糞とか小便とか混じってねえだろうし」

「ははは、まあ元世界でもエキノコックスとかあったしなあ」

そういうこともあるので、生水は厳禁なのだ。

アメーバ赤痢になったりすることもあるしな。

マイクロバスの陰で飯を食う。

どうも俺たちだけ飯を食うってのは慣れないが、仕方ない。

俺たち家族と、あとから拾った獣人たちと子どもたちで軽く食事を取る。

5人の兵士たちは遠慮するらしい。

屋根の上に座っているだけなので、それほど腹も減っていないようだ。

飯が終わると俺も滝に水を汲みに行き、鍋に水を入れてみる。

すごく冷たくて綺麗な水だ。

この山脈の上は万年雪が残っているので、雪解けの水なのかもしれない。

一度アイテムBOXに収納してから、取り出して口に入れてみる。

「こりゃ、美味しいな」

なんとかのおいしい水に対抗できるぐらいに美味い。

これで酒を作ったら美味そうなのだが、ここまで汲みにくるわけにもいくまい。

「なにしてるのお？」

暇なのか、セテラがやってきた。

「水の味を確かめているんだよ」

「それで味はどう？」

「美味しいな」

「へえ」

村人たちがこちらを見ているのだが、俺は特殊だからといって皆に釘を刺す。

「真似するなよ？」

まあ、最初からやらなけりゃいいのだが、水の味が気になるじゃないか。

新規にドラム缶を1つ購入して、滝の水で満たすとアイテムBO
Xに収納した。

「おいしい、出発するぞ」

「「「はーい！」」」

皆でぞろぞろと列になって、マイクロバスまで戻った。
屋根の上にも再び乗るのを見たあと、再度確認。

「ヨシ！」

大丈夫だ。

ベルとカゲも戻ってきて、バスに飛び乗った。

俺も運転席に戻ると、エンジンを始動する。

「アキラ、行くぞ？ 大丈夫か？」

『問題なし！』

「よし！ 出発！」

初めての滝で大きなトラブルがなくてよかった。

もっと大きな滝だったら、詰んでいたかもしれない。

その場合、なにかいい手があるだろうか？

アネモネの防御魔法で水を逸しながら渡るとか？

そのまま車は、ウネウネとした峠道を時速10kmほどで下り続け、時間は多分3時頃になったと思う。

凹んだコーナーを回ってくると、上からバラバラと石が降ってきた。

「落石か?!」

「ケンイチ様! 凄い音だ!」

後ろにいた、アオイが叫ぶ。

そのままスピードを上げて抜けようとしたのだが、地面から湧いてくるような低周波が響いてきた。

窓から上を見ると――ゆっくりと山がこちらに迫ってくるように見える。

目の前が崩れて、巨石で道を塞がれた。
間に合わない。

「アネモネ、防御魔法! デカイやつ!!」

「む! むー!」

アネモネの青い光が集まっている間にも山が崩れてきている。

「「「うわああ!」」」 「「「きやああ!」」」

「――至高の障壁!」
ハイプロテクション

アネモネが唱えた最大級の防御魔法によって、巨大な透明な壁が山崩れはなんとかせき止めている。

かろうじて止まっているだけで、魔法が消えれば流される。

至高の障壁の上からも土砂が越えてバラバラと降り始めており、時間はあまりない。

俺はバスの後ろを確認した。

——まだ逃げるスペースがある。

「全員降りろ！ 後ろに走っていけ！ 早くしろ！！」

「うみやああ！」 「わああ！」

ミヤレーとニヤメナがドアを開けて真っ先に飛び降りた。

彼女たちが昇降口の前にいるので、降りてもらわないと村人たちも脱出できない。

続いてアオイ、ベルとカゲも飛び出した。

「「「わあああ！」」」

車内は阿鼻叫喚——補助席を出しているので、簡単には降りられない。

皆が椅子を乗り越えたりしている。

「窓からも出られる者は出ろ！ 間に合わん！」

上から降りた獣人たちが手伝って、窓から村人たちを引っ張りだしている。

「アマランサス！ お前も行け！」

「いやじゃ！ ぎやあああ！」

アマランサスが頭を押さえて椅子に頭を打ち付けている。

俺の命令に逆らったので、激痛が走っているのだろう。

「うう……」

「アネモネ！」

デカイ魔法を発動させたままなので、アネモネの顔色がみるみる悪化していく。

俺はアイテムBOXから、大きい魔石を取り出した。

「む！」

力を込めると、黒い魔石の中に青い光が灯る。

「アネモネ、これを！！」

彼女と一緒に、それを握る。

ここからしばらくは魔力を引き出せると思うが、そう時間はない。

「セテラ！ お前も降りろ！」

「ええ？ 私も付き合うけどお？」

「そんなことを言っている場合か！」

「聖騎士様！ 妾は死ぬまで一緒だわえ！」

アマランサスが俺に抱きついてきた。

「そんなことをしている場合か！」

その間にも村人たちが順調に脱出している。

俺はシャングリ・ラを開いて、敷布団を10枚買った。

目の前に落ちてきた、まだビニル袋に入ったままの布団を、ガラスやハンドルの前に敷き詰めた。

これでショックを吸収できないだろうか——という浅はかな考えだ。

無線からアキラの声が聞こえるが、応答している時間がない。

「ケンイチ……！」

もうアネモネが限界っぽい。

後ろを確認する。

皆が降りているのを確認してから、アネモネ、アマランサスと一緒に布団にくるまった。

「アネモネ、いいぞ！」

彼女から青い光が抜けると上から土砂が一気に押し寄せてきた。

アネモネを固く抱きしめる。
突然暗くなり、横倒しになったかと思うと、轟音とともにゴロゴロと転がりはじめた。

「うおおおっ！」

「あはははは！
プロテクション 聖なる盾！」

セテラの笑い声が聞こえるのだが、なにがおかしいのだろうか？
エルフのやることはさっぱりと解らん。

ボタンボタンと連続でひっくり返り目が回る。

まるで洗濯機の中にぶち込まれているようだが、敷き詰めた布団のお陰で痛い思いはしていない。

あまりのできごとに走馬灯が回る暇もない。

フロントガラスが割れて車内に土砂が侵入してくると、カビ臭い冷たい土が顔に当たる。

運転席はセテラが唱えた防御魔法で支えられているらしく、潰れたりする気配はない。

10回転ほどしたところで動きが止まった。

「生きてる……アネモネ？」

「大丈夫」

「アマランサスは？！」

「大丈夫だわえ」

「ふう……」

アネモネと抱き合いながら、彼女の髪にため息を吹きかける。

ホッとしているとエルフの抗議の声が聞こえてきた。

「私に対する愛はないのか！？」

「はいはい、5000歳のお姉さんは大丈夫ですか？」

「5000歳言うな！」

「だいたい、なんでセテラが残ってるんだよ」

「助けてあげたのに、それを言う?!」

「ありがとうな」

「もう! それにしても、5000年生きてやっとな死ねるかな〜と思っただけで、中々死なないものねえ」

「なんだ、死ぬ機会を探しているように聞こえるが?」

「そうかもねえ」

とりあえず、潰れるのは免れただけで助かったわけではない。

土の中に埋まり真っ暗なので、アイテムBOXからLEDランタンを出した。

車内は窓から入ってきた土で塗れ、セテラの魔法と俺が出した布団によって、運転席の空間だけがなんとか確保できている状況だ。

無線機のマイクを取ってみた。

壊れてないか? 見た目には大丈夫そうだが。

「アキラ、聞こえるか?」

『ケンイチ! 生きてるか?!』

「まあ、なんとかな」

『助けに行くか?!』

「いや、二次災害になる可能性があるから、止めてくれ」

『わ、解った』

いつも飄々としているアキラだが、珍しく慌てているように聞こえる。

『旦那あ!』『うにゃー!』

無線機から、ミャレーとニャメナの声が聞こえる。

「大丈夫だって他の連中にも言ってくれ。それと逃げ遅れたやつがないか確認を頼む」

『任せろ』

マイクを放り投げた。

「ふう……とりあえず、ここから脱出しないと」

「私がやるう？」

「アネモネは限界だ。できるならやってくれ」

「解ったあ」

暗い中に赤い玉が見えたと思ったら、大きな炸裂音が響く。

破れたフロントガラス部分から、さらに土砂が流れ込んでくる。

「酷くなってねえか?!」

「それじゃ、もう1回」

「ちよつと……」

再びの炸裂音が響くと、割れたガラスの向こうに白い光が見えてきた。

「やった!」

「もう1回やるね」

再度炸裂音が鳴ると、土砂が上方に吹き飛ばされた。

火山が噴火するように、土砂を吹き飛ばしたのだ。

「よし、これで出られる」

土に布団を敷くと、崩れたフロントガラス部分から這い出る。

「これって、爆裂魔法エクスプロージョンなのか？」

「違うよ。空気を圧縮してから、解放したのお」

圧縮したガスボンベに穴を開けるようなもんか。

さすが元文明人。空気を圧縮すると色々と使えると知っているわけだ。

車体はもう駄目だろうが無線機はまだ使える——そう思ったのだが、もたもたしていると再度の土砂崩れに巻き込まれる可能性がある

る。

諸々諦めて俺が先に出ると、次はアネモネだ。

「アマランサス、送り出してくれ」

「承知いたしましたわえ」

ぐったりとしたアネモネをアマランサスが上に送り出してくれたので、小さな手を掴んで引っ張りあげた。

土砂は斜め45度で積もっており、30mほど落下したようだ。崖の上から皆が覗いているのが見えたので、手を振ってみせる。

「「うおおおっ！」」

歓声が湧き上がったのが聞こえてきた。

無事を祝ってくれているのはありがたいが、こちらはそれどころではない。

まだ崩れてくる可能性もあるし、実際に小さな石がパラパラと転がってきている。

「アマランサス！」

彼女の手を掴んで引き上げると、俺に抱きついた。

「あとにしろ、セテラ！」

最後はエルフの手を掴んだ。

「ふう、死に損なったわあ」

「嬉しそうに言うなよ」

「だって、好きな男と一緒に死ねるなんて機会、そうそうないからあ」

あっけらかんとそんなことを言う、エルフに少々面をくらう。

「おまえなあ……」

俺が言いかけると、斜面を人の大きさぐらいある岩が転げ落ちてきた。

巨大な岩が土煙を上げて、サッカーボールのようにバウンドして襲ってくる。

「聖騎士様！」

「おわあ！ セテラ！ 防御魔法を！」

アネモネは完全にアウトなので、エルフに頼るしかない。

プロテクション
「聖なる盾」

彼女の魔法にぶち当たると、岩が進路を変えて落ちていった。

「ふう……ありがとうな」

防御魔法を斜めにして、岩の進路を逸したのだろう。

「アネモネ、大丈夫か？」

「うん……」

彼女は精根尽き果てて、もう1歩も動けない状態だ。

俺が担いで斜面を登るしかない。

以前に使った担ぎ紐を取り出して、アネモネを背中に担いだ。それから、アイテムBOXからスパイクを取り出す。

「アマランサスも足につけろ」

「承知」

「セテラは？」

「いないいい」

「いいのか？」

彼女はぴょんと飛び上がると、斜面をスタスタと登り始めた。
なにかの魔法か？

「おおい！」

「なあに？」

「そんなに簡単に登れるなら、ロープを持っていってくれ」

「ふん……」

セテラが俺をじっと見ている。

彼女を少々蔑ろにした俺に対する、抗議の視線だ。

「俺が悪かった！ お前が望むようにしよう！」

「解ったあ」

アイテムBOXから出したロープの端をセテラに持ってもらうと、上まで届けてもらう。

エルフはスタスタと斜面を上って、皆の所にまで行ったようだ。

ロープが張られたのが解る。

「よし！ アマランサス、俺の後ろに続け」

「承知いたしましたわえ」

俺はそのロープを掴むと、アネモネを背負って土の斜面を登り始めた。

264話 様子を見る

王都に戻る途中、険しい峠を2台のバスが走る。

数十年使われていなかったので荒れ放題で、崩れている場所もある。

それをなんとかクリアしてきたのだが、半日もすれば麓に届く――という場所で山崩れに巻き込まれた。

大量の土砂をアネモネの魔法で支え、村人たちをなんとか逃がすことに成功。

俺とアネモネ、アマランサスとエルフのセテラが、土砂に巻き込まれた。

洗濯機の中に放り込まれたかのごとくシェイクされたが、なんとか4人とも無事。

土砂に埋まったバスを這い出ると、皆の所に戻った。

「「「おおおっ！」「」」」

待っていた村人たちから歓声が上がる。

「うにゃー！」「旦那ああああ！」

ミヤレーとニヤメナが俺に抱きついてきたが、俺はアネモネを背負ったままだ。

獣人たちの頭をなでてやる。

「泣くな泣くな」

「うにゃあああ！」

ミヤレーが俺から離れない。

「皆に心配かけてすまなかったが、まずはアネモネを降ろさせてくれ」

皆に下がらせる。

アイテムBOXからベッドを出すと背中から彼女を降ろした。

その上にアネモネを寝かせる。

こんなことができるのも、便利な収納があるからだ。

「アネモネ、ごめんよ。こんな小さな子に無理をさせてしまって彼女の手を握る。」

「小さくないから」

「そうか、そうだな。ごめん」

この世界では大人扱いなのかもしれないが、俺の中では彼女はまだ子どもだ。

彼女には悪いが、どうしてもそういう風に見てしまう。

アネモネの頭に手を乗せると、祝福の力を使う。

「ふあああ……」

「そのまま休んでな」

「うん」

「にゃー」「みゃー」

ベルとカゲもやってきて、俺の脚にスリスリを繰り返している。

「お母さんにも心配かけたな」

「にゃ」

黒い毛皮をなでていると、アキラがやってきて俺の肩に手を載せた。

「いやあ焦ったぜえ。悪いがケンイチの心配より、ここから先のことを考えちゃったよ」

「まあ、そりゃ仕方ない」

「ここでケンイチに死なれたら、90人近くがにっちもさっちもいなくなつて詰むからな」

彼の顔を見ても、ことの深刻さが解る。

「はは、悪い悪い」

「自分が危ない目に遭つてなくても走馬灯って回るんだな。初体験だわ、ははは」

大容量アイテムBOXも使えなくなるし、バスをこの場に置いて徒歩でサクラを目指さなくてはならなくなる。

食料も水も俺の収納の中だ。

アキラのアイテムBOXにも多少の物資は入っているが、これだけの人数を支えることはできない。

彼の収納にはバイクや車も入っているので、王都まで先行して救助を要請するという手もあるが、王家が動いてくれるとは限らない。これらのことが一瞬で脳裏を走ったのだろう。

竜殺しと呼ばれた男が力なく笑っていると、マサキが俺の前に飛んできた。

「なにもケンイチ様は悪くありません。命を懸けて私たちを救ってくれるなんて――共和国ではなかったことです！」

他の村人たちも俺の前にやってくると膝をついて泣き始めた。

「ありがとうございます」 「ありがとうございますだあ」

覚悟を決めてこの旅に賭けたとはいえ、よほど恐ろしかったのだろう。

「ほら、エルフ様の魔法で助かったんだ」
今度は村人たちがセテラの所に行った。

「もう、全部ケンイチのためだからあ！」
彼女は村人に崇められるのが嫌らしい。

「それにしてもよく助かったね」
村人たちに崇められているセテラを見て、ツイツツラが笑っている。

「運がよかったのと、セテラのおかげさ」

「ああ、もう！」

セテラが村人から逃げて、俺の後ろに隠れる。
俺は皆のほうを向くと、静かに頼んだ。

「とにかく、一旦落ち着かせてくれ」

アネモネが寝ているベッドの縁に座り、アイテムBOXから出した缶コーヒーをゴクゴクと飲むと、ため息をついた。

「ふうう……ははっ」

なぜか笑いがこみ上げる。

「マサキ」

「はい」

「全員いるか？」

「います」

「アオイ——お前の仲間と、あとから加わった兵士たちは」
「全員いるよ」

彼が言うように、マツや兵士たちの姿も見える。

「そうか……」

俺は残っているコーヒーを持って、山崩れの上を見た。
高さは100mぐらいあるだろうか？

草や木が生えている山が、皮を向かれたように茶色の肌を露出させている。

「聖騎士様……」

アマランサスが心配そうな顔をしている。

「まあ、まてまて」

俺は缶に残ったコーヒーを飲み干すと、アイテムBOXの中に入れて、代わりにドローンを取り出した。

まずは上空から偵察だ。

小さなドローンが飛び立ち、空から見た光景は――かなり大規模な土砂崩れ。

高さ100m幅50mといったところか。

偵察の終わったドローンを収納した。

「ふう……」

やたらと喉が乾くので、もう1本缶コーヒーを飲むと、隣に寝ているアネモネの様子を見る。

「アネモネもなにか飲むか？」

「……だっこ」

「はぁ？」

彼女が両手を伸ばしてきたので、抱っこしてやる。

「あゝ！ それ、私にもしてよお」

エルフが俺の後ろでブーブー文句を言っている。

「セテラ」

「なあに？」

俺は立ち上がると、彼女の手を引っ張り、背中から抱き締めた。

身体をなで回し、耳をそっとなでる。

「あっ！ 耳は……」

そのまま、崩れている山の上が見える位置までやって来た。

「崩れた上を見てください」

「うん……んん！」

「エクスプロージョン爆裂魔法の魔法は使えるのか？」

「使えるけど……んっ」

彼女が身体をくねらす。

「崩れている一番上に撃ち込んでくれ」

「ちよつと……このままじゃぁ撃てないからぁ！」

彼女が顔と耳を真っ赤にして、俺の手を振りほどいた。

「もう……」

セテラが魔法を使うようなので、アキラのマイクロバスを収納すると、500mほど村人をバックさせた。

アネモネのベッドも獣人たちに担いでもらい、一緒に下がらせる。俺とエルフだけが現場に立って魔法を使う。

彼女が気合を入れると、崖の上に青い光が集まり始めた。

「むん！ ハイエクスプロージョン高位爆裂魔法！」

青い光が赤い爆炎に変わると、土砂が舞い上がり衝撃波が耳に届く。

エルフが引き起こした爆発が引き金になって、地鳴りを立てて再び山が崩れ始めた。

俺たちが立っている道路も揺れているのが解る。

地響きで、山からたくさんの鳥が飛び立つのが見えた。

魔物の有無は解らんが、鳥はいるらしい。

後ろを見ると、村人たちが頭を抱えて地面にへばりついているの
が見える。

屈強な獣人たちもこれは怖いらしい。

しばらくすると地すべりはゆっくりと止まったが、まだバラバラ
と大中の岩が転げ落ちている。

経過を観察してから皆の所に戻った。

「アキラ、これで地盤のゆるい所や危ない場所は崩れたと思うので、
崩落が落ち着くまで数日待とうと思う」

「解った」

「ふう……」

「埋まったバスは取りに行くのか？」

彼がマイクロバスが埋まっている辺りを指差す。

「いや、今の崩落で完全に埋まっただろう。掘り起こすのは危険だ
し、あそこにたどり着くのが大変だ」

「あんな場所から掘り起こすやつもいねえか」

「土の中なので、湿気ですぐにボロボロになると思うが……」

「そうだな」

「まゝた、コ○スターを用意しないとなあ」

「はは、お疲れさまです」

まあ金はあるし、コ○スターは定番の車種なんで弾に困ることは
ない。

こういうことがあるからボロボロの中古で十分なんだよ。

共和国に来てからラ○クルも1台潰してしまったしな。

皆を集めて今後の方針を伝える。

「悪いが、ここに数日留まって、山の斜面が落ち着くのを待つ」

「解りました」

「落ち着いたら、徒歩で崩れている土砂を乗り越えて向こうに渡る」
「そうだな、ここで慌ててもしゃーねえ」

アキラの言うとおりだ。

急いては事を仕損じるってな。

慎重には慎重を重ねる。

キャンプすることが決まったので、コンテナハウスを横に並べて出した――なにせスペースがない。

列車のようにはつながっておらず、距離が空いている。

こんな場所で魔物の危険は――どうだろう？

「アオイ、なにか生き物の気配は感じるか？」

「鳥はたくさんいるのが解るよ。色々な鳴き声が聞こえる」

「その他は？」

「うーん……」

「解らないか？」

「ごめんなさい……」

「気にするな。鳥がいるってことは、空飛ぶ魔物がいるのかもしれない。告死鳥ってのは人は襲わないのか？」

こういう場所には黒い大きな鳥が生息している。

王都とソバナの間にあるベロニカ峡谷にも生息していた。

「普通は大丈夫だけど、小さな子どもや赤ん坊がさらわれることがあるよ」

ニャメナは心配ないと言うが、鳥なら夜は大丈夫だろう。

鳥目っていうぐらいだし。

「だが、警戒はしよう。夜中に交代で見張りを立てる」
こういう仕事は獣人たちの出番だ。

耳も鼻もいいし、夜目も利く。

「「「がってん！」」」

ここから移動するにも、俺のマイクロバスが埋まってしまった。使うためには色々と準備が必要なので、すぐに動かせない。

アキラの車でピストン輸送って手もあるが、ここから多少移動しても危険性は変わらないだろう。

ちょうど日も傾き始めたので、皆が食事の準備を始めた。

まさか、こんな場所でキャンプすることになるとは……。

アネモネがダウンしているので、インスタントもので固める。

獣人たちはいつものようにカレー。

俺が保護した子どもたちもカレー。

俺とアキラとアマランサスは、冷凍のチャーハンと餃子。

エルフたちはカップ麺。

そろそろエルフたちも飽きるんじゃないだろうかと、いつもと違うカップ麺をシャングリ・ラで買ってみた。

——とはいっても、舌が肥えているエルフたちなので、ちょっと高めのカップの麺を買う。

ディスカウントストアのワゴンに入っているようなカップ麺は、口に合わないかもしれない。

辺りが薄暗くなる頃、料理ができあがった。

「うん、これも美味しいねえ」「美味しい」

エルフたちが、いつもと違うカップ麺を食べている。

「たまに変わった種類もいいだろ？」

「こんなのが色々種類があるのお？」

「あるぞ。中には口に合わないものもあるかもだが」

「ふうん、はいケンイチ」

セテラが俺に麺を食わせにくる。

今日は、色々と世話になってしまったから、おとなしく言うことを聞くことにしよう。

「アキラアキラ！」

ツイッツラもアキラに麺を食べさせて、ついでにキスなんてしてる。

「「あ！ チューしてる！ チューだ！」」
子どもたちの前だったのに……。

「ケンイチい！ 私もおチュー！」
セテラがカップ麺を持ったまま、俺に迫ってくる。
今日は断りにくい。

エルフと絡んでいると、アネモネの機嫌が悪くなる。

「むー！」

むくれている彼女だが食欲がないようだ。
デカイ魔法を長時間展開したので、消耗したのだろう。

俺の力でかなり回復はしたようなのだが、食欲はイマイチらしい。
アネモネがベッドで食事ができるように、ベッドテーブルを購入
——7200円だ。

ベッドをまたぐようにテーブルを置けば、そのまま食事が取れる。

「食欲がないとはいえ、なにか食べないとな……そうだ」
病気といえば桃缶だ。

桃缶を購入——2個で1000円。

ついでに桃のネクターと炭酸水を買ってみた。
皿に桃缶を開けて、ネクターは炭酸水で割る。

「アネモネ、これならどうだ？」

「うん、美味しい」

「ケンイチい！ 私にもお！」

セテラが俺に抱きついて、スリスリしてくる。

ベルの真似だろうか？

「はいはい、ほれ」

残りの桃缶をセテラにやった。

「これって甘くて美味しいい！」

「ケンイチ、俺にもくれ」

「はいよ」

アキラにも桃缶をやったのだが、ツイツツラが欲しがったようだ。甘やかしているなあ……まあ人のことは言えんか。

アマランサスがこちらをじゅっとみているので、彼女にも桃缶をやった。

アネモネのベッドの下では、ベルとカゲが猫缶を美味しそうに食べている。

ベルは元王妃様らしいのだが、猫缶でいいのだろうか？

少々心配になるが、いつも美味そうに平らげているしなあ。

人の心で獣の身体ってのはどういう感じなのだろうか？

「うみゃー！ やっぱりカレーはうみゃー」

獣人たちは、ほぼ毎日食ってるんだけど飽きないのだろうか？

子どもたちもカレーを食べているが、まだ飽きていないようだ。

食事が終わり暗くなったので、獣人たちに見張りをする者の選出をさせた。

1時間ずつ10人交代だ。

彼らにLEDランタンと、安いアナログ時計を渡す。

数字は読めないが、針の動きで解る。

焚き火のオレンジ色の光の前で、見張りをする連中に説明を始めた。

「こいつが時計だ。この長い針が1周したら交代な」
時間調整の摘みで針を回してみせた。

「なるほど、これなら解るっすねえ」

「見張っているやつになにか起きるかもしれないねえから、2人で見張りしたほうがよくないっすか？」

「居眠りするやつもいるかもしれないねえし」
なるほど、彼らの言うとおりだな。

「それじゃ、2人1組でこの針が1周したら交代ってことにするか」
参加するやつを労うために、ツマミと酒を出した。

「「「おおっ！」」」

「見張りが終わってから飲めよ？ 順番があとのやつは先に飲んでもいいが、酔っ払って仕事をしないように」

「だ、大丈夫でさあ」
ちよつと怪しいのだが……。

「へまをすると皆に迷惑がかかるからな」

「「「へいっ！」」」

見張りの連中が酒をもらえたのを見て、後悔しているやつらもいる。

「あゝっ！ チケタに負けなけりゃ！」
チケタってのはじゃんけんのことだ。

「まあ、仕事はいくらでもある。王国に入ると魔物はいなくなるが、盗賊やらが多くなるからな」

盗賊まがいをしていたマツとアオイたちが、俺の話を聞いてちよつとバツが悪そう。

警備のローテーションは決まったようなので、彼らに任せた。人に任せるのも上に立つ人間の仕事だ。

皆が眠りにつく頃になると、焚き木が燃える明かりが所々に並んでいる。

いつもは固まって寝ているが、スペースがないので分散しているようだ。

焚き木は彼らが森の中で集めていたものがまだあるらしい。

峠を下れば森もあるので、また薪も集められるだろう。

彼らの様子を見てから、俺たちもコンテナハウスの中に入った。

アキラはいつものようにツイツラと2人。

俺は、アネモネとセテラと一緒にだ。

アマランサスと獣人たちには悪いが、今日は活躍した2人を労わないとな。

アネモネをお姫様抱っこして、コンテナハウスの中に入ると、ダブルベッドの上に乗せる。

アイテムBOXから彼女の寝間着を出して着せてあげた。

「むー」

セテラが一緒なので、アネモネの機嫌が悪い。

「助かったのは、セテラのお陰もあるんだし。今日はいいだろう」「そうだよお。今日はちびっこ寝てあげるからさあ」

エルフの長い手足が、アネモネを抱え込んだ。

「やめろおお！」

アネモネは本当に嫌そうだ。

仕方ないので、2人の間に入ってベッドに寝転がった。

これが一番いいーと思ったのだが、裸になったセテラが俺の身体をなで回し、変な所に入ってくる。

エルフが寝るときには裸になるのが普通らしいのだが。

「むー！」

対抗して、アネモネも白いワンピースの寝間着を脱ぎ始めたので、止める。

セテラには、シャングリ・ラで麻のロングワンピースを買い、着せることにした。

「これを着てくれ」

「うん」

彼女に手渡すと、なんだか嬉しそうに着ている。

「うん、似合ってるな」

まあ、金髪が美しく体も細い。脚なんて超長い。なにを着ても似合うはずだ。

胸はぺったんこだけどな。

再び寝転がると、セテラが俺の身体をなで回す。

今日は彼女には世話になったので、多少は許してやろう。

俺が諦めて寝転がっていると、ドアからカリカリと音がする。起き上がり、ドアをそっと開けると、ベルがスルリと液体のように入ってきた。

「お母さんも来ちゃったか」

「にゃー」

黒い頭をなでてからベッドに戻ると、俺の上に彼女が乗ってきた。

「お母さん、重いんだけど……」

「にゃー」

いつもこう言うのだが、彼女が降りてくれたためしがない。

ベルが飽きて降りてくれるのを願うしかないのだ。

彼女がやってくると、セテラも俺にちよっかいを出すのをやめる。

ここらへんの上下関係はどうなっているんだろう。

歳だけなら、セテラが一番上のはずだがなあ。

そんなことを考えつつ、明かりを消すと眠りについた。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

「敵だああ!!」

——暗い中、突然の大声で飛び起きた。

そのまま、ドアを開けてコンテナハウスの外に飛び出す。

シャツを着ていたはずなのだが、いつのまにか脱がされていたのに気づく。

セテラがやったのだろう。

村人たちの所に行くと、皆があちこちに塊になっている。

どこから敵が来るか解らないので、動けないのだ。

道の下りも上りも真っ暗でなにも見えない。

「どうした!？」

俺は、見張りをしていたらしい獣人の所に駆け寄る。

すぐ後ろにセテラも起きてきた。

「上の方でガサガサと、なにかが動いたんで！」
アイテムBOXの中からLED投光器を取り出してスイッチを入れると、暗闇に明るい光の筋が走る。

彼の言うとおりの木々や草が揺れており、なにかがいるのは間違いない。

なにか白い胴体と、赤く光る目が見えたような気がする。
暗闇を照らす鋭い光の攻撃に向こうも躊躇しているようだ。

「ケンイチ、おチビちゃんはどうするのお？」

「彼女は疲れている。今夜は俺たちでやろう」

「解ったあ」

セテラもそう感じていたのだろう。

俺の考えに同意してくれた。

「聖騎士様！」「旦那！」「うにゃ！」

アマランサスと獣人たちもやってきた。

得体の知れない敵と睨みあいをしていると、アキラたちも姿を見せる。

アキラも上半身裸だ。

「ケンイチ！ どうした?!」

「なにか白い生き物がいる。大きさはかなりデカイような気がするが……」

「ツイツツラ、あぶり出せ」

「解った」

アキラのアイテムBOXから取り出された、コンパウンドボウがエルフに渡された。

「*%\$*%！」

ツイツツラの言葉とともに、白い光と化した矢が敵らしき物体に向かう。

「ギィィ！」

光が炸裂すると同時に、なにかが擦れるような声を上げて、白い物が茂みから飛び出した。

道の上に8本脚の魔物が現れた。

「「うああああ！」」「」

村人たちが逃げ惑う。

「洞窟蜘蛛にゃ！」

以前、俺たちが洞窟で倒した蜘蛛と同じ魔物。

「オスカ小さいメスか？」

「旦那、わかんねえ！」

解らんが、とにかく洞窟蜘蛛で間違いない。

俺の横から黒い影と白い影が、蜘蛛に向かってジャンプをした。

「ベル！ アマランサス！」

森猫と、剣の達人の先制攻撃だったが、ダメージが入っているようにには見えない。

「ははは！ 虫なら俺に任せろ！ おりゃああ！ マヨパワー全力噴射！」

アキラの両手から噴射された黄色いウネウネが、白い蜘蛛の上にな山盛りになった。

「ギィ！」

マヨ塗れになって驚いた蜘蛛が、ジャンプして山に入ろうとしたのだが、すぐに転げ落ちてきた。

道路の上で逆さまになってジタバタしている。

「虫ってのは、身体の隙間から呼吸しているんだ」

「それを塞がれたので呼吸ができないのか？」

「ははは！ そのとおり、万物窒息！」

白い蜘蛛の身体は魔法に耐性があるらしいが、マヨの窒息には為す術もない。

「よし！ 止めだ！ 分離！」

彼の言葉で、黄色いマヨに塗れた蜘蛛が茶色に染まる。

「ツイツツラ、火炎だ」

「＊％％％！」

ワイバーン戦のときに見せた、ツイツツラの火炎魔法。

火炎放射器のような山なりの火炎の束が、蜘蛛に向かって伸びる。油まみれになった白い蜘蛛は、すぐに火だるまになった。

「ギイイイ！」

しばらくジタバタしていた蜘蛛の脚がゆっくりと閉じていく。

「やったにゃ！」 「やったぜ！」

ちよっとフラグっぽいが、もう大丈夫だろう。

一応、アオイに確認してみる。

「アオイ、他に気配は？」

「ないと思う——嫌な感じもしないよ」

「そうか」

白い蜘蛛を見る。

外側の甲殻は焼けていないようだが、身体の隙間から火炎が入り込んだのだろう。

あるいは火炎によって酸素が奪われて酸欠になったか。

「「「おおおおっ！」「」」

獣人たちの雄叫びが上がった。

さらに白い蜘蛛の所まで行くと、村人たちもおそろおそろ集まってくる。

「これが蜘蛛……」「こんなデカイものが」

「以前、俺の領地にも出てな。退治したんだ」

「もっとデカかったにゃ！」「そう！　こんなにデカイんだ」

ニヤメナが身振り手振りで、メスの大きさを表そうとしているが難しい。

細かいトゲトゲが生えている白い甲殻を叩く――硬い。

「中は焼けたけど、外側は使えるだろうな」

「そうだな」

「アキラとツイツラが仕留めたから、君らのものだぞ？」

「もらっていいのか？」

「もちろん」

彼のアイテムBOXには入らないので、とりあえず俺が収納することにした。

「売るなら王都のほうが高く売れるぞ？」

「そうか、そいつは楽しみだな」

彼も生活資金が必要だしな。

カメも止めはアキラが刺したから、半分は彼らのものだ。

「防具を作ったりしたらどうだ？」

「俺の防具かあ……」

どうもアキラの戦い方には合わないみたいだが。

それはさておき、獣人たちを集める。

「敵は倒したが、まだいるかもしれん。引き続き警戒を怠らないように」

「「がつてん！」」

獣人たちが盛り上がっていると、アネモネも起きてきてしまった。

「……どうしたの？」

「ああ、蜘蛛が出てな。アキラが退治してくれたところだ」

「……どうして私を起こしてくれなかったの？」

「君は、昼間の騒ぎで酷く疲労していたじゃないか」

「……」

そこにアマランサスがやってきた。

「聖騎士さまは、そなたの身を案じてくれているのじゃ。無理を申してはいかん」

「……」

彼女が黙ってうなずいた。

「ほら、見張り以外は寝た寝た！ まだまだ先は長いんだぞ？」

俺たちもコンテナハウスに歩き始めたが、アネモネがフラフラしている。

彼女のところにいくと、お姫様抱っこで持ち上げた。

「無理しないほうがいい」

「うん」

彼女も解ってくれているようだ。

「アマランサス、ありがとう」

俺の傍にやってきたアマランサスに礼を言う。

「聖騎士様は、間違っておりませぬ」

ベルが俺の足下でスリスリしている。

「にゃー」

「お母さんもありがとう」

カゲがいなかったのだが、コンテナハウスのドアの所にいた。

「アネモネを守ってくれたのか？　ありがとう」

「みゃ」

「ちびっこだから、みんなから大事にされてるねえ」
セテラがアネモネをからかっている。

「ちびっこじゃないし……」

「はいはい、おとなしく寝ような」

アネモネの頭をなでる。

「うん……」

「私にも、そういうのやってよお！」

「5000歳のおねえ様が、張り合うなよ」

「5000歳言うな！　私に対する愛はないのかぁ？！」

文句を言うセテラと一緒にコンテナハウスに戻る。

皆と一緒に寢床に戻ると眠りについた。

265話 山崩れを渡る

サクラに戻る途中の峠越え。

なんとか頂上はクリアして、もう少しの所まで来ているのだが、
がけ崩れに巻き込まれた。

死も覚悟したのだがなんとか助かり、崩れた現場で崩落斜面が落ち着くのを待っている。

一晩過ごしていると、山のどこかに潜んでいた洞窟蜘蛛に襲撃されたのだが、アキラのマヨを使ってこれを撃退。
なんなく退けた。

——がけ崩れの次の日の朝。

起きると皆で食事を取る——皆で一緒に食べられるグラノーラだ。
俺達は牛乳で食べているが、エルフたちは豆乳だ。

カップ麺と同じように、グラノーラが凄い気に入ったらしい。
途中で拾った子どもたちにも人気だ。

「ケンイチ」

「ん？ なんだい、アネモネ？」

「もう大丈夫だから」

「ああ」

彼女の顔色もいいし、ちゃんと朝食も食べている。

「ちびっこは寝てたらあ？」

セテラのからかいに、アネモネが俺を睨む。

「もう、大丈夫だから」

「解った。頼りにしているから」

——とはいえ、あまり危険なことはさせたくないのだがなあ……。ベルとカゲは、猫缶を食べ終わると崩れた斜面に向かった。どうやら斜面を探索するらしい。

俺が気がついたら斜面にいたので、どうすることもできない。お母さんの判断に任せよう。

食事が終わると村人たちの所に向かう。

空は快晴でいい天気なのだが、俺たちの行く手を阻む土砂の山。頭を抱える状況だが、以前にベロニカ峡谷でやったように、重機を使って取り除く必要はない。

俺たちだけがクリアできればいいのだ。

「マサキ、食料と水は大丈夫か？」

「はい、まだ大丈夫です。滝で水を汲んでおいて、よかったです」

「まったくなあ。まさかこんなことになるとは……」

彼らに貸し出しているコンテナハウスは、そのつど俺のアイテムBOXに収納している。

そうすれば、水や食料が傷むことがないからだ。

彼らの村でプレゼントした黒狼の肉や、途中で遭遇した熊の肉も、まだ新鮮なまま。

「今日一日、様子を見る。まだ、ちょっと崩れているしな」
「解りました」

話している間にも、小さな岩がコロコロと転がってきた。

数kgの岩でも人にぶつかれば大怪我、当たりどころが悪ければ死ぬこともありえる。

「」「ケンイチ様ー！」「」

四方八方から子どもたちに群がられる。

「朝飯食べたか？」

「「うん！」」

頭をなでてやる子どもたちの表情も明るく、顔色もいい。

彼らの主食は、小麦粉を使ったトルティーヤのような薄い塩味のパンだ。

少しもらって食べてみたが、肉を挟んで食べたりしても結構美味しい。

まあ、使っているのが俺が渡した小麦粉のせいもあるかもしれないが。

村にいたときは、これすら減多に食べられなかったのだから、食生活は大幅に改善している。

崩落現場にやってくると、アイテムBOXから取り出したドロインを飛ばす。

上昇させると、がけ崩れの全容が見えてきた。

幅は50mほどだが、崩れた頂上の高さはドロインの上昇限度と同じ高さ——つまり100mってことだ。

「はは、よく生きてたな」

「ケンイチ、見せてくれ」

「ほい」

やってきたアキラにコントローラーの画面を見せてやる。

「うわあ、こりやすげえな。普通じゃ助からんだろ。こんなの」

「セテラが防御魔法で潰れないようにしてくれたし、俺も布団を敷き詰めて、頭を打ったりしないようにしたからな」

「はあ、ケンイチ以外じゃ無理だな。俺のコ○スターが巻き込まれてたら終了だった」

「ツイツラはデカイ防御魔法を持っていないのか？」

「ないみたいだな」

「セテラなら持っているかもしれないが……」

「あのBBAもなにを考えているのか、さっぱりと解らん」

エルフと付き合いの長いアキラでも、セテラは少々異質らしい。

「まあ、エルフだし……というか、5000歳だし」

「だよな、はは」

「なあに？　もしかして私の悪口言ってるう？」

俺たちの所にエルフが姿を見せた。

「いや、セテラはデカイ防御魔法は使えるのか？」

「使えるけど、通常だと魔力が少々足りないわあ」

そういえば、川で首長竜にデカイ攻撃魔法を使ったときも、いきなりぶっ倒れてたな。

「それじゃ、俺がアネモネに渡した魔石みたいなものがあれば、なんとかなると？」

「そうねえ」

それじゃ、いざというときのために魔石を用意しておいたほうがいいな。

ドローンを降ろすと、俺にはやることがある。

まずは新しいコ〇スターの購入だ。

シャングリ・ラで車を探す。

くたびれてても走ればいい。

ピカピカの新型を買っても、今回みたいなこともあるしな。

「ポチッとな」

銀色のロングボティが落ちてきた。

走行距離18万kmで300万円。

まあ無難な所だろう。

今まで2台とも白だったが、シルバーを購入してみた。

シャングリ・ラを見ると、走行距離500kmぐらいの車体が並んでいるのだが、新車っぽいと800万円ぐらいするんだな。

元世界じゃ、こんなの買えなかった。

異世界にやってきて買えるようになったなんて、ちょっと複雑な気分。

「おう、新しいコ○スターか」

「まあな。これがないと始まらない」

「今度は、シルバーなんだな」

「たまに違う色もいいだろ」

燃料タンクにバイオディーゼル燃料を入れて、エンジンをかけてみる。

一発始動で順調だ。

ここで不調でも返品は利かないだろうし、サイトに書いてる説明を信じるしかない。

いや、買取に入れば少しは戻ってくるのか。

「これって対価はどのぐらいなんだ？」

「日本円で300万相当だな」

「結構するなあ」

「本当に金貨を突っ込むと、市場から金貨が消えてしまうのでヤバい。価値のあるものならなんでもいいんだが」

「ケンイチの力も色々制限があるんだな」

「アキラが作ったマヨ油だって、大量に市場に流したら値崩れするだろ？」

「そうだ。他国に潜入して、マヨ油モノカルチャー文化を作って、いきなりトングズラするってこともできる」

彼は生体油田なので、そのぐらいのことは本当にできるだろう。アキラの話では、1日にドラム缶100本ぐらいは普通に作れるらしい。

銀色の車体に村人たちが集まってきた。
暇なのだろう。

「この新しい召喚獣が、お前たちを俺の領まで運んでくれる」
子どもたちが俺の周りに集まる。

「ケンイチ様、白い子は死んじゃったの？」

「そうだな。俺たちを守って、あそこに埋まってしまった」
俺は、バスが埋まっている辺りを指差した。

「可哀想……」

「皆を運んで主を守るのが仕事だから、使命をまっとうしたんだよ」
「しめいて？」

子供に説明が難しい。

「与えられた仕事ってことだな。皆も俺の領地へ向かうために、助け合うだろう？」

「うん……」

正確にはちょっと違うかもしれないが、なんとなく解ってくればいい。

村人たちが集まってくると、当然獣人の女たちも集まってくるので、ミヤレーとニヤメナがすぐにやってきて警戒を始める。

いつもの言い争いだ。

なでるぐらいならいいと思うのだが、他の女のおいが移るのが許せないらしい。

これは只人には解らない感覚だ。

——とはいえ、元世界でも移り香がどうのとか、香水のにおいが
くとかあるので、それと似たようなものか。

「ナンテン」

「はいよ」

「ちよっと尻尾を見せてみる」

「うん」

彼女が恥ずかしそうに尻尾を見せる。

「お？ 毛が生えてきたぞ？ これは治ってきてるんじゃない？」

「ほんとうかい?!」

「ああ」

「やった!」

歓喜のあまり、ナンテンが俺に抱きつく。

「こらあ！ なにするにゃ!」 「どさくさに紛れやがってえ」

うちの獣人たちがブーブー言っているが、治って嬉しいのだろう。

「これが全身に広がると、毛が全部抜け落ちてしまうからな」

「み、見たことがあるにゃ……」 「お、俺も……」

「もし、そうになったらどうするんだ？」

俺の言葉に獣人たちが顔を見合わせている。

「皆とは一緒にいられないから、一人でどこかに行くにゃ……」
自然に治るとは考えられないから、そのまま衰弱死してしまうの
か。

うちの獣人たちや、共和国の獣人たちも同じようにするらしい。
彼らにとっては、そのぐらい深刻な病気なのだ。

「治ってよかったな。いや、まだ治ってないか——もう一回消毒して魔法を使ってやろう」

俺のは、魔法とはちょっと違う感じもするが。

アイテムBOXから出した消毒液を塗って、力を使う。

「な、なーん……」

ナンテンがプルプルと震えている。

「毎日ブラシしているか？」

「し、してるよ」

「よっしゃ、こんなもんだろ。完全に治るまで診てやるからな」

「あ、ありがとう……」

「ぐぬぬ……」

なぜか、ミヤレーとニヤメナがぐぬぬしている。

病気なんだから仕方あるまい。

「他の者たちも、毛皮に異常があったらすぐに教えるんだぞ？」

「「へい！」」

獣人たちのことはさておき、コ○スターだ。

車体は問題ないので、次に無線機。

埋まった車体についていたのはまだ使えたが、取りに戻れない。

新しく購入するしかないので、同じものを購入する。

ラ○クルや、アキラのプ○ドにも載っているから、都合5台目か。

いや、ラ○クルも1台潰したので、6台目か。

アキラのバスも出して、無線機のテストをする。

「アキラ、聞こえるか？」

『おお、バッチグー！』

「カッコ死語だな」

『はは』

さて、次は屋根に載せるルーフキャリアだ。

これは力自慢の獣人たちに手伝ってもらわないと。

シャングリ・ラで購入した白いキャリアが、獣人たちの手で屋根に載せられた。

俺とアキラで電動工具を使って固定していく。

「そうだ、ケンイチ。コ○スターで、トレーラーみたいのを引っ張っているのを見たことがあるぞ？」

「へえ。おもしろそうだな」

早速、検索してみる。

コ○スター用の、ヒッチメンバーというのが売っているな。

でも、これって取り付けに加工がいるんじゃない？……

どうせやることもないし、購入してみた——7万円である。

購入ボタンを押すと、コの字型の黒い金具が落ちてきた。

バスと同じ幅らしいので、かなり大きくて重い。

コの字の真ん中に丸いものが突き出ている。

ここで連結するようだ。

「ケンイチ、それは？」

「これがトレーラーをつなぐための金具らしい。説明書にはヒッチメンバーと書いてある」

「へえ。この丸いので合体するんだな？」

「そうらしい——でもこいつは、フレームに穴を開けてボルトで固定すると書いてあるなあ」

「やってみようぜ、どうせやることもねえし」

アキラの言うとおりだ。

「そうだな」

これでトレーラーを連結できれば、人を運ぶ人数が増やせるし。ここのような曲がりくねった峠道は駄目だな。

「アキラ、これって牽引の免許はいるのか？」

「重量が750kg以上のやつは免許がいる——けど、ここじゃ関係ねえし」

「そうか」

彼は牽引免許も持っているらしいからな。

まずは、車体を持ち上げるために、ウマ（ジャッキスタンド）を買う。

赤い三角形で脚が3本ある。

1個で3tまでいけるらしいが、4つ使えば12t——持ち上げるのは後ろだけだ。

大丈夫だろう。

さて、持ち上げるためにフロアジャッキを購入したが——いい手を思いついた。

力自慢の獣人たちに持ち上げてもらい、ウマを4つ噛ませる。こっちのほうが早い。

車体の後部が持ち上がったら、フロアジャッキを使ってヒッチメンバーをバスのフレームに当てる。

地面にウレタンマットを敷くと、アキラが下に潜り込んだ。

「あくなるほど、ここに穴を開けるのか」

車の下からアキラの声が聞こえてくる。

「穴の大きさは？」

「多分、16mmだと思うが」

「どのぐらいの大きさからいく？」

「6mmでいいんじゃない？」

こういうのは、小さい穴を開けてから徐々に大きなドリルを使う。アイテムBOXから充電ドリルドライバーを出すと、6mmのドリルビットを入れて、アキラに手渡した。

「あと、10mmと16mmのドリル」

「サンキュー」

下から鉄の削れる音が響いてくる。

「アキラ、レンチのソケットは？」

「うーん、多分24」

アイテムBOXから、充電式のインパクトレンチと24mmのソケットを用意した。

「ケンイチ、レンチ。仮止めだ」

「ほい」

下から、レンチの音が聞こえてきた。

アキラは反対側もやるらしい。

「腕が疲れたら、俺が代わるぞ？」

「大丈夫。祝福持ちだからな」

そこにミャレーたちがやってきた。

「ケンイチ、なにやってるにゃ？」

「いつも使っていた召喚獣が死んでしまったので、代わりを用意している」

「頑張ってたのにゃ」「旦那を守って死んだんだから、やつも本望だぜ？」

「そうだな」

話している間に、取り付けが完了したようだ。

「せっかくジョイントが取り付けできたし、つないでみるか」

「キャンピングトレーラーを作れるのか？」

「多分」

中古のトレーラーが250万円ぐらいで売っている。

高級車で有名なツイード製らしいが、1.5t少々あるので牽引免許なしでは運転できない。

——とはいっても、ここは異世界。

免許なんて関係ない。

心配なら、免許を持っているアキラに運転してもらえばいいわけだし。

その前に、無駄遣いしまくっているような気がするが……いや、これは先行投資だ。

他の地方から村人を集めることがまたあるかもしれないし——と、自分に言い訳をしながら購入ボタンを押した。

目の前にデカイキャンピングトレーラーが落ちてくる。

色は白で、普通の乗用車ぐらいの大きさがある。

「おお？ 随分デカイやつだな。これは免許が必要なやつだろ？」

「そうみたいだな」

アキラと一緒にトレーラーの内部に入ると、茶色のニスを塗られた豪華なインテリアが俺たちを出迎えてくれる。

小さな窓に、テーブル、組み替えるとベッドになるソファー。

台所とトイレも完備。発電機もあるので電化製品も使える。

俺が作った家より豪華だ。

「あゝそうかあ。最初に自分で家を作ったが、こういうキャンピングカーって手もあったなあ」

「アメリカ製のデカイモーターホームを作ってみるとか？」

「でも、最初は金がマジでなくてギリギリだったからなあ。やっぱりアレが最善だったかな？」

2人で収納などを開けてみる。

「おっつ、さすがヨーロッパ製だな」

アキラが家具を手で触ってチェックしている。

「今はEUじゃないか？」

「EUの志は認めるが、金持ちも貧乏人も一緒になってサイフも一緒なんて無理があるよな」

「はは、そうだな」

「やっぱり西洋家具の本場は違うな」

「そりゃそうだが、日本だって障子貼って和筆筒を並べたら……似合わないか」

「そもそも、そういう文化自体がなくなりつつあるし」

「あゝ、和室がない家とかも多いしな」

取り扱い説明書があったので読んだのだが、重大なことが書かれていた。

「ありゃ！」

「どうした？」

「走行中は乗車できません——って書いてある」

「そうなのか？ まあ、たしかにシートベルトもないし、動いている最中にソファとかに座っていたら危険ではあるが……」

「やっぱり危ないか……」

「そうなんだろうな……」

こいつは盲点だったが、キャンピングカーなんて使ったことがないので知らなかった。

こりゃまた盛大に無駄遣いをしてしまったぞ。

「固定の宿泊施設として使えなくもないか……」
たとえば、急なお客様の泊りの場所として。

荷物が積めるカーゴトレーラーもあるが、それなら俺のアイテムBOXがあるしなあ。

俺はマイクロバスとキャンピングトレーラーを、アイテムBOXに収納した。

「まあ、暇つぶしにはなったな」

アキラが両手を上に上げて、伸びをしている。

とりあえずマイクロバスは再び使えるようになったので、これでサクラまで行くことになる。

この峠を越えれば、車が壊れるような場所はないだろう。

「ケンイチ、暇だから麻雀しようぜ」

「それはいいな。そうするか。しかし面子が……」

「エルフかアマランサスさんなら、頭いいからすぐに覚えられるだろう？」

「あの2人を入れると、俺たちに勝ち目がなくなりそうな気がするが」

「大丈夫、ははは」

アキラは笑っていたのだが、麻雀を教えたエルフとアマランサスにボコボコにされた。

だいたい、ルールどころか点数計算まで一発で覚えるとか、どういう頭をしているのだろうか。

確率計算だけで勝てるものではないとはいえ、こんなに差があるのか。

プリムラも強かったしなあ。

会社の社長とか政治家とか、麻雀強いやつが多いって聞くから、生まれたときから持っているツキってやつが違うんだろうな。

どうせ俺は凡俗ですよ。

麻雀している俺たちを、獣人たちが囲んで興味深そうに見学している。

博打が好きなのだろうが、もっと簡単なルールじゃないと覚えられないだろう。

麻雀のルールやら計算は複雑怪奇すぎるからな。

ギャラリーはアマランサスが一番多い。

美人で腕っぷしも強い、酒も強い、博打も強い——これで人気が出ないはずがない。

獣人たちは強い者に従うのだ。

麻雀をしていると暗くなってきたので、村人たちのコンテナハウスも出して飯の用意を始める。

その頃には森猫たちが戻ってきていた。

「お母さん、向こうはどうだった？」

「にゃー」

彼女の話では、崩落現場を過ぎれば道は綺麗らしい。

それではここが最後の難所ってわけか。

飯を食い終わったら、やることもないので寝るとしよう。

今日見ていた様子では、崩落はかなり落ち着いた。

明日から作業に入れるだろう。そのために英気を養わなくては。

今日はセテラと寝る。

アネモネは不機嫌そうだが、エルフには色々と手伝ってもらわな

いといかんからな。

落石の危険から村人たちを守るために、防御魔法を使う。
いざというときにアネモネ1人の魔法では、範囲が広くてカバー
しきれないだろう。

そのためには、エルフのご機嫌を取らないとな。

別に彼女のことを嫌いで、嫌々やっているわけではない。

他種族ということで、多少の文化の違いはあるが、魅力的な女性
だ。

彼女の白くて細い氷の結晶のような身体を堪能して――寝る。

――――◇◇――――

――崩落現場で待機して次の日の朝。

朝起きると皆で飯を食う。

エルフの相手をしたので、アネモネが不機嫌だが仕方ない。

「アネモネ、今日は頼むぞ？ 体調は大丈夫か？」

「……うん」

「セテラにも、ちょっと手伝ってもらうことになる」

「いいよぉ」

アネモネと正反対に、セテラはご機嫌だ。

「旦那、俺たちは？」 「なにをするにゃ」

「他の獣人たちと一緒に道を作ってもらうからな」

「解ったぜ！」 「うにゃ」

「俺たちは待機か」 「そうだね」

アキラとツイツラがグラノーラを食べている。

竜殺し自慢のマヨも、岩石には通用しないからな。

「ツイツツラには、予備の盾役として待機してもらう」

「いいよ」

「アマランサスも待機」

「承知いたしました」

戦闘がなければ、彼女の出番はないだろうな。

食事のあと、ドローンを飛ばして再度現場をチェック。

崩落は収まったらしいが油断はできない。

万全の態勢でいく。

コンテナハウスなどを収納すると、出発の準備をして村人たちを集める。

「マサキ、獣人たちを使って、崩落斜面に道を作る」

「はい——私たちもお手伝いを……」

「いや、力も体力もある獣人たちに任せろ。逃げるのも早いしな」

「そのとおりですぜ」「ははは」

幅50mほどだ、獣人たちの総力を上げればそんなにはかからんだろう。

シャングリ・ラで、シャベルを10本購入する。

1本800円なので、10本で8000円。

10人の獣人たちがシャベルを持って、斜面に入る。

余っている連中は崖の見張りだ。

落石があったら皆に知らせる。

幅が50mの斜面の16m地点にアネモネ、32m地点にセテラを配置する。

「落石があったら外に逃げるか、魔導師の陰に隠れろ。魔法で弾いてくれる」

「」「おおおっ!」「」

50mの斜面を10人で掘ったら、1人当たり5mだ。

獣人たちのパワーならすぐに終わる。

車を通すわけじゃないから、人が1人歩ける道幅があればいい。
連れているのが全部獣人たちだったら、こんなことをしなくても、
そのまま渡って終了なんだがな。

道ができれば、早速村人たちを渡す。

間隔を空けて、1人また1人と村人たちが狭い道を足下を見て渡
っていく。

一斉に渡ってしまうと、なにかあったときに、逃げるに逃げられ
なくなる。

俺が途中で拾った兵士たちも渡る。

子どもは獣人たちが担いで渡ったが、これが一番早い。
獣人なら子供を2人抱えても平気だ。

「上は見るな、足下だけを見て渡れ。上はちゃんと見張りが見てて
くれる」

「「「はい」」」

「落石があったら、魔導師の所に集まるように」

「「「はい」」」

順調に村人たちが、半分ほど渡ったところで――。

「落石だあ！」

見張りの獣人が叫んだ。

「慌てるな！ 魔導師の所に！」

人間の頭ぐらいの岩が落ちてくるが、斜面を転がるので時間が少
々ある。

プロテクション
「「聖なる盾！」」

村人たちがアネモネとセテラの下に避難すると、2人が同時に防御魔法を唱えた。

アネモネも盾を斜めに出しているようで、あのときにしっかりと学んだようだ。

幸い通り過ぎていったが、飛ぶようにバウンドしていった岩は、かなりのスピードが出ていた。

「ひい！」

アネモネの下にひざまずいていた村人の女が悲鳴を上げた。

あれが命中すれば、人間は弾き飛ばされて谷底まで真っ逆さまだ。身体にも深刻なダメージを負うことになる。

岩は通り過ぎたが、落石によって併発された細かい石が崩れてきて防御魔法に当たっている。

あの石でも当たればただでは済むまい。

石の崩れも収まったので、再び渡りを再開——村人たち全員が1時間ほどで渡り終えた。

「さて、行くか。最後は俺たちだ」

「おう！」

獣人たちは先に渡って待っている。

俺が先頭で後ろがアキラ、そのあとをアネモネ、アマランサス、ツイッツラがついてくる。

セテラは渡り終えた場所で待っていた。

斜面から降りて、街道の道に足をついた。

「ふう！ 無事に渡り終えたな」

「「はい、ありがとうございます！」」

「いや、皆に怪我がなくてよかった——マサキ」

「はい！」

「あの、シャベルは村にやるからな」

「ありがとうございます！」

彼らのコンテナハウスを出すと、シャベルを収納した。
つぎに2台のマイクロバスを出す。

やっとこれで次に進める。

峠もそろそろ終点に近いはずだ。

266話 隠し畑

俺たちはサクラに戻るために峠越えをしている。

使われなくなって数十年たってしまった廃道だ。

落石はあるわ、魔物はいるわ、最後は土砂崩れに巻き込まれた。久しぶりに走馬灯が回ったが、なんとか切り抜けられた。

たくさんさんの難民を連れた、その旅が節目を迎えようとしている。この難関を越えれば、あとは平地だけだ。

王国内なら街道は整備されているし、スピードも上げられるので、サクラまで3〜4日で到着できるだろう。

なにもトラブルがなければだが。

俺としても、なにがなんでも急ぐつもりはない。

無理をして事故ったりすれば、大変なことになるしな。

せっかく、1人の脱落者も出さずに難所を越えられたんだ、平地ほど引き締めていかない。

がけ崩れの現場を徒歩でクリアした俺たちは、再びマイクロバスに乗って走り出した。

俺が乗っているト○タのコ○スターは、新規に購入した銀色の車体。

今まで働いてくれたバスは、土砂の下敷きになってしまい回収不能だ。

あの峠は使われることはしばらくないので、土砂に埋まったまま朽ち果てていくだろう。

曲がりくねった下り道を進んでいくと、周りの緑が濃くなり傾斜がゆるくなってくる。

もう森の中で道にもたくさんの草が生えているが、ここが使われていない証拠。

晴天の中、そのうち道がまっすぐになり、崖もなくなった。

「ケンイチ！ 道がまっすぐになったね」

「ああ」

俺はアネモネに返事をしながら、無線機のマイクを取った。

「アキラ、どうやら峠を抜けたようだぞ」

『ははは、まさに波乱万丈だったな』

「がけ崩れに巻き込まれるとか、人生初体験だし」

『俺も、自分が巻き込まれたんじゃないのに走馬灯が回る初めての体験だったぜ』

後ろからミャレーが顔を出す。

「ケンイチ、峠を抜けたにゃ？」

「ああ」

「やったあ！ さすが旦那だぜ！」

「「「おおおっ！」」」

村人たちもどよめく。

「それでは、私たちは王国に入ったのですか？」

マサキが村人たちを代表して俺に聞いてきた。

「ああ、そういうことになる」

「「「やったあ！」」」 「もう、飢えることはないんだ」 「そうだ！」

後ろから村人たちの歓声があがる。

それを聞きながら、俺は窓を開けた。

「おゝい！ 峠は抜けたぞ！ もう怖い思いをすることも、そんな
にないと思う」

「「「おおおゝっ！」」」

上から獣人たちと子どもたちののはしゃぐ声が聞こえてくる。

1人の脱落者も出ないでよかったが、その脱落者に俺自身がなる
ところだった。

まったく一寸先は闇ってのは本当だな。

草は生えているが、道はまっすぐでしっかりしている。

これなら、少しスピードを出しても大丈夫だろう。

——といっても、今までの時速10kmから20〜40kmほど
に上げるだけ。

スピードを上げててもギャップなどがあつたら、バウンドして屋根
にいる連中を振り落としてしまう。

なにより安全第一だ。

たまに休憩を入れて、その間に村人たちは薪などを拾っているよ
うだ。

休憩が終わり再び車を走らせると、無線機のマイクを取る。

「アキラ、少しスピードを上げる」

『了解』

「後ろから見て、屋根の乗っている連中の様子はどうか？」

『問題ないみたいだぜ？』

「そうか」

スピードを上げて休憩を入れつつ4時間ほど走る。

途中に何箇所か集落跡のような場所があったので、廃墟から見え
そうな家をアイテムBOXに入れた。

石壁しか残っていない家ばかりだが、屋根を張ればまだ使える。
バスを走らせて昼前になった頃、突然森が開けた。
かなり広い畑が広がっており緑の麦が揺れている。

「おお、畑だ！ この近くに村があるのか」

「「「おお！ 凄い畑だ！」」」 「こんなに豊かに実っているのか？！」」

後ろの座席から村人たちの声が聞こえてくる。

元世界の畑からすると、たいしたことはないのだが、あの村の畑に比べたら雲泥の差。

彼らが驚くのも無理もない。

「大丈夫、お前たちも、すぐにああいう畑を作れるようになる」
「本当ですか？！」

「ああ、そのためには、色々と農業を学ばないとな」

「「「はい！」」」

「わぁ、畑だ！」

アネモネも窓の外の畑を眺めている。

「ちゃんとした畑は久々って感じがするよな」

「うん！」

「にゃー、やっと帰ってきたって感じがするにゃ」 「まったくだぜ」
獣人たちも、人の営みを感じてホッとしているのだろう。

「……」

後ろをチラ見すると、アマランサスが難しい顔をしている。

「アマランサス、どうした？」

「いえ」

「ここらへんに村か町があるってことなんだろうけど、なんていう

ところなんだ？」

「……ここらへんには、町はないはずですわえ」

「え？ セジーナって西の都市があるって話では……」

「セジーナはもつと東です」

西の都市を知っているらしい、セテラにも聞いてみる。

「そうねえ。ここらへんはセジーナではないはず」

エルフも知らないようだ。

「かつて、峠の入り口にカリンという宿場町がありましたが、峠の封鎖でなくなったということでしたわえ」

俺が廃墟から家を拾ったどれかが、カリンという宿場町だったらしい。

「アマランサスは、ここらへんの視察には訪れていない？」

「セジーナには何回か訪れたことがありました……」

「西の砦があったという話だったけど？」

「そのとおりですわえ。共和国が来るはずもないので、形骸として残っているだけで」

「その話は、前に出たな」

「砦の先にはなにもないということでしたので、遠くから見ただけで視察は終わりましたわえ」

「それじゃ、ここは王国の未管理地域？」

「そうなりますかえ」

廃村寸前の土地で、領主がいないという所はある。

以前に俺が拾ってきた村の住民がいた所などがそうだ。旨味がないので領主のなり手がいない。

税を取ると村が生きていけないので免除されているのだ。ここらへんが共和国とは違う。

もちろん、それを悪用して私腹を肥やせば罰せられる。

脱税にもなるし。

「開拓したての土地も数年は税が免除されますわえ」

「集落や村の収入が安定する前に搾り取ってしまうと、潰れてしま
うからだろう？」

「そのとおりですわえ」

ただひたすらに税を取ることなく、しっかりと土地に合わせた税
収が行われているということだ。

「どこからか流れてきた連中がチマチマと開拓したにしては、規模
がデカすぎるなあ」

「おそらくは、貴族が絡んでおるのでしょう」

「それじゃ計画的な脱税？」

多分、脱税をしているのは村ではなくて、ここらへんを治めてい
る貴族だ。

「そういうことになりますかえ」

「ケンイチ、どうするの？」

畑を見ているアネモネが俺に聞いてくる。

「え？ どうもしないよ。だって人の領地だし。一応、お城には報
告はするとは思うけど」

「それで動かなかつたら、王家が絡んでいるということだよねえ」

「む……」

セテラがアマランサスに嫌味な視線を送る。

「ちょっと前まで政まつりごとをしていたアマランサスが知らないんだ。王家
は絡んでないだろう」

「王家って言ったって、1つじゃないんでしょうお？」

「エルフの言うとおりで、完全に否定することはできぬ」

それ見たことか——そんな顔をセテラがしている。

「まあまあ——とりあえず、町や村があつたら聞き込みぐらいはしてみよう」

「これだけの規模であれば、小規模な集落では管理しきれまい」

「そうだな」

「にゃー」

アネモネと一緒に外を見ているベルが呆れている。

「そう言わないでお母さん。古今東西、こういうのはどこにでもあることだし」

元世界でも、税を逃れるための隠田おんでんというのはあったことだし。

「むう……」

アマランサスが難しい顔をしている。

どう処理したものか、悩んでいるらしい。

もう王族ではないので無視してもいいのだろうが、彼女は国を捨てたわけではない。

民や国を食い物にする貴族が許せないだけだろう。

「まあ、こういう場合にヤバイのは外国勢力との結託だろうけど、幸い峠が使われていた形跡がないし」

「聖騎士様の言うとおりですわえ」

なぞの農地を見ながら道を走る。

道は整備されており、明らかに使われている様子が見える。

途中で村人らしき人々とすれ違うと、彼らは驚いているように見えた。

まさか、こんな場所に人が来るとは思ってもみなかったに違いない。

今は使われていない峠を通って。

「ケンイチ、村が見える」

アネモネの言葉に俺はマイクを取った。

「アキラ、ちょっと停車する」

『オッケー』

バスを停車させると、バスから降りてアイテムBOXから出した
双眼鏡を使う。

「旦那！ どうしたのさ！」

上から、ナンテンの声が聞こえる。

「うゝん」

「あそこに見える村になにかあるのかい？」
彼女が村を指差す。

「たいしたことじゃない。お前たちは待っててくれ」

青空と白い雲が漂う中、双眼鏡に映るのは数百人規模の村。
やはり村があるのか。

一応、写真も撮る。

「ケンイチ、どうした？」

バスから降りて、アキラもやってきた。

「どうやらアマランサスの話では、ここらへん一帯が隠し畑らしい」
「あゝ、帝国でもあったぜ？ 森の深くが切り開かれて、突然畑に
なっているとか」

「空から見たら一発で解るだろうが、そんなものはないしな」
「ああ、元世界でも大麻やケシの畑が見つかったりするやつ」

話に出たのでドローンを飛ばしてみた。

上空から見ると、やはり広範囲に渡って開墾が行われており、麦畑が広がっていた。

このドローンは空中からの映像も記録できるので、録画をする。

「報告するのか？」

「一応な。報告しても動かなかったら王族もグルじゃないかと、セテラが嫌味を言っていたが」

「まあ、ない話ではないな」

ここを摘発するなんてのは俺の仕事ではないので、最低限の報告だけして終わりだ。

わざわざ火中の栗を拾いにいく必要もあるまい。

村を過ぎると、また森の中を進む。

しばらく進むと砦が見えてきた。

砦の前には川が流れており、跳ね橋が上がっているらしい。

川には他の橋はないようなので、ここを通るしかないようだ。

「アキラ、砦があるが跳ね橋が上がっているな」

『また迂回するのか？』

「いや、ここは王国領だし、逃げる必要はないと思うが……」

あくまで正攻法でいいだろう。

とりあえず砦の前までバスを進めた。

アマランススの話では、形骸化した砦にはろくに兵士も残っていないということだったが――。

ちゃんと整備もされており、砦の上には銀色の鎧を着た見張りの兵士の姿も見える。

いや――共和国からの侵入者に備えているのなら、それも当然なのだが、今はその心配はない。

実際にあの峠を馬車や馬で突破するのは無理だろう。

俺のチートがあったからこそ突破できたはず。

俺はバスを降りると、アイテムBOXから拡声器を出して砦に呼びかけた。

「俺は、ケンイチ・ハマダ辺境伯だ！ 跳ね橋を降ろしてもらいたい」

「……」
これだけ大きな声を出しているのだから、聞こえているはずだ。
俺に続いて、アマランサスとアネモネも降りてきた。

「おい！ 聞こえているだろう？！」
俺の声に反応したのか、砦の上にいた兵士がこちらを向いた。

「辺境伯様だかなんだかしらねえが、許可なくここを通すわけにはいかねえ！」

「許可って、誰の許可だ？！」
「ここらへんを治めている貴族様に決まってるだろう？！」
横にいるアマランサスに貴族の名前を聞く。

「この辺一帯はシラー伯爵の領地ですわえ」
「あれ？ どこかで聞いたような……」

「橋の普請で、テントの中に公爵と一緒にいたはずですよえ」
「ああ！」
俺は手を叩いた。

「白金貨までやったのに」
「そうです」
再び、砦に呼びかける。

「それじゃ、シラー伯爵に取り次げ！」

「そんなことができるか！ だいたい、お前らはどこから来たんだ！ ここは通行できないようになっていたろう！？」

もう1人の男が出てくると、俺に弓を向けた。

「この怪しいやつめ！」

「ちょっと！」

躊躇なく発射された矢が、放物線を描いて飛んでくるのが解る。

とてもスローモーションで——これも走馬灯の一種だろうか。

俺に向けられた悪ふざけっぽい悪意だが、俺の前に出たアマランサスの剣によって叩き落とされた。

「この無礼者！」

アマランサスが砦の兵士に剣を突きつけ、怒りの声を上げた。

「いやあゝ誤射だよ！ 誤射！ ははは」「そう、1発なら誤射なんだよ」

砦の上で兵士たちが笑っている。

「聖騎士様、処すかえ？」

アマランサスが激怒しているのだが、俺だって怒りたい。

艱難辛苦の果てに、やっと王国にたどり着いたってのに、味方からこの仕打ち。

「くそ、やりやがったな。こちらら、ただのオッサンじゃないんだぞ」

——そうは言ってみたものの、さてどうするか？

アイテムBOXに入っている岩と丸太で川をせき止めて、重機を渡すか。

いや——重機が渡れるぐらいに綺麗に道ができるとも思えんし。

せき止めたら川があふれるしな。

「うーん、しょうがねえ。ぶっ壊すか」

「それじゃ、私が処す出番だね」

遠距離攻撃なので、ここはアネモネの出番だろう。
目標は跳ね橋の上。

「アネモネ、跳ね橋の上が鎖につながっている」

「うん、そこを壊せば、橋が倒れてくるね！」

「そういうこと。左右にあるから両側を壊してくれ」
「解った」

後ろにいる、獣人たちにも声をかける。

「獣人たち、戦闘準備だ！」

「「へーい！」」

彼らに透明なポリカの盾と、クロスボウを渡す。

「任せてくれよ旦那！」 「そうだにゃ！ 狙撃するにゃ？」
ミヤレーとニヤメナにも武器を渡した。

「いや、待て待て」

「ケンイチ！」

アキラとツイツラがやってきた。

「こちらを攻撃してきたので、少々強引にやる」

「まあ、正当防衛だしな」

アキラに跳ね橋の上を壊す作戦を説明した。

「それじゃ、右側は僕がやるよ！」

ツイツラも協力してくれるらしい。

「それじゃ、アネモネは左側な」

「うん！」

俺たちが本格的に戦闘の準備を始めたのが上から見て解ったのか、砦の兵士たちが右往左往している。

だいたい、こっちは貴族を名乗っているんだ。

貴族を騙れば死罪だってあるこの国で、あの対応はない。

「だが、もう遅い」

「それじゃ、いっくよ〜！ む〜」

アネモネとツイツラの周りに青い光が集まり始めたので、獣人たちに告げる。

「おい、兵士たちは殺すなよ。殺すと面倒なことになるかもしれない」

「じゃが聖騎士様。貴族に矢を放ったとなれば、これは重罪ですわえ」

「まあ、なにも知らん下っ端の兵士たちだし」

「承知いたしました」

アネモネとツイツラの魔法が炸裂した。

「爆裂魔法！」
エクスプロージョン

アネモネの魔法が青い光から赤い爆炎に変わる。

跳ね橋の左側上部を支えている城壁部分を吹き飛ばした。

「***@***！」

エルフの頭上に現れた、巨大な光の矢。

これはマジックミサイルの上位互換の魔法だろうか。

白い矢が放たれると、右側の城壁を貫通した。

跳ね橋を支えていた鎖が断ち切られたことで、跳ね橋が落下。

川を飛び越え岸に激突――数回バウンドして轟音を鳴り響かせた。

「「「おおおっ！ やったぜ！」」」

「こんなすげえ魔法があれば、城を落とすのも簡単だぜ！」

獣人たちが吹き飛んだ石の壁を見て盛り上がっている。

「ケンイチ様！ 突っ込みますか？！」

獣人たちが今にも突撃しそうなので、止める。

マジな戦ではないし、砦に見えている相手はせいぜい十数人の部隊だろう。

脅すだけで十分だ。

俺はもう一度拡声器を取った。

「おい！ 聞こえるか！ 今度は大魔法で砦ごと吹き飛ばす！ 給料安いんだろ？ それに見合うのか、よく考えろ！」 給

もちろんこれはハツタリだ。

アネモネの魔法を最大にしても砦は吹き飛ばせない。

「まってくれえ！ 降伏する！」

砦の兵士たちが両手を挙げて並び始めた。

この世界でも、降伏には元世界と似たようなポーズをするらしい。まさか、こんなデカイ魔法が使える大魔導師がいるとは思わなかっただろう。

「今、そちらに向かう！ おかしな真似をするなよ！」

「解った！ 撃たないでくれ！」

一応、獣人たちに武器を装備させたまま、マイクロバスに乗せた。

「向こうは降伏したんだから威嚇するだけだぞ？ 撃つなよ？」

「大丈夫でさあ」

一応、念を押す。

「頼むぞ。アキラ！」

「おう！」

「アネモネ、ツイッツラ、ありがとうな」

「うん」「任せてよ」

皆と一緒に運転席に戻る。

「にゃー」

「はは、お母さんの活躍場所はなかったな」

「私のもねえ」

エルフが暇そうに助手席で腕を組んでいる。

俺たちはバスを発進させると、落ちた跳ね橋の上を慎重に渡る。
もちろん、1台ずつだ。

なにせ屋根の上まで人が乗っている定員オーバーのバスだ。

橋が落ちたりしたら洒落にならん。

砦の門をくぐり、中に入る。

中はコの字形になっており、反対側はなにもないし、かなり崩れている。

この砦は元々、共和国の侵入を防ぐためのものだ。

正面だけを修復して使っているらしい。

2台のバスが砦に進入すると、魔法で崩れた瓦礫が転がっている
ので、注意して進む。

ここを守っていた十人ほどの部隊が、下に降りて武器を地面に置いていた。

反抗の意思がないと示しているのだろう。

俺はバスを降りたが――バスの上からは、獣人たちがクロスボウの照準を兵士たちに合わせている。

俺の後ろには護衛のアマランサスがいるし、この状態でなにかできるとは思えないが。

「さっきも言ったが、ケンイチ・ハマダ辺境伯だ」

「馬なしで動く、鉄の魔獣？」

兵士たちが、マイクロバスを見て驚いている。

「そうだ。お前らは貴族に弓を向けたってことで、重罪になる」

俺の前に1人の兵士が飛び出して、膝をついた。

背は小さいが、横に広いガッチリとした体型の男。

身体も四角いが顔も四角い。

「辺境伯様！ 私1人の責任です！ 部下たちは、私の命令に従っただけです！ 何卒、私の首だけで収めてくださいますようお願い申し上げます！」

いくら俺が貴族だからといって他領の人間を処罰することはできない。

撃たれたのは間違いないので、正当防衛ってことにしてもいいんだが。

「お前が、ここの責任者か？」

「は、はい！」

「聞きたいことがある。砦の向こうにある畑は――隠し畑だな？」

「そ、そうです……」

「よし！ お前だけ俺たちと一緒に来い。シラー伯爵に抗議する」

「し、承知いたしました……」

ここの責任者ってことは、隠し畑がどういうことか知っているはずだ。

「それじゃこの砦は、隠し村を外部から隠して、中にある村から村人を逃さないようにするためか」

「はい……物資は定期的に運び込まれます……」

「それじゃ、共和国と似たようなことを王国の貴族がやっていたことになる」

俺の所にアマランサスがやってきた。

「そうですわえ。物資が行き渡っているだけ、多少マシとはいえ」

「あの村の住民たちに自由はないのだから、これは大問題だ」

「はい、おそらくは、ここで脱税された金は反王家勢力の資金源になっていると思われますわえ」

「ああ、あのナントカって公爵と一緒にいたシラー伯爵も、反王家派とか言ってたなあ」

「エキナセアベアです」

「そう、それ」

政治のゴタゴタは勘弁してくれよなあ。

「俺は別に王家に不満もないし、今のままでも構わないから王家派ってことになるか」

「そうですわえ」

「アマランサスもいるしなあ」

「私は籍を抜いた身でありますし」

「それでも、影響力はデカいと思っているよ」

「興味はありませぬ。すべては聖騎士様のために」

「王国のためじゃないのか？」

「はい」

もう戦闘はない。

皆から武器と防具を回収するとアイテムBOXに収納。

捕まえた砦の責任者をバスの屋根に乗せると、アキラの車に行く。

「アキラ、ここを治めているシラー伯爵がいる、セジーナという都市に行く」

「オッケー」

「ここからそんなに遠くはないようだ」

「車での話だろ？ ははは」

「まあ、そうだ」

馬車だと丸一日とかかかる距離なんだろうな。

車を走らせること1時間——砦から森になりすぐにまた畑が広がる。

王国の一番西にある都市、セジーナが見えてきた。

砦から距離にして約40km。

多重の堀と城壁に囲まれており、かつては共和国の侵攻に備えた城郭都市であることをうかがわせる。

道には人も多く、前に馬車がいたりすると、追い越すのが大変。堀に架かった橋を何箇所か渡り、やっと城郭の門に近づいた。

「止まれー！」

帷子と革の鎧を着て槍を持ち、警備をしている兵士に止められる。

「なんだ、これは！？ 馬はどうした？！」

窓から顔を出して、兵士に説明をする。

「こいつは魔法で動く、鉄の魔獣だ」

「……アストランティアの近くに、そんな魔獣を使う貴族様が住んでいるとか、聞いたことがあるが……」

「それが俺だ。ケンイチ・ハマダ辺境伯だ」

「こ、これは失礼いたしました！ 辺境伯様！」
兵士が気をつけをして、背筋を伸ばす。

「通っていいかい？」

「どうぞ！」

もめなくてよかった。

いくら貴族だからって無茶はできん。

門を壊したのは――あれは正当防衛で不可抗力だし。

屋根まで人を乗せたマイクロバスが、城壁の中に進入した。

一応、車体と門のクリアランスを確認する。

「ナンテン！ 頭の上は大丈夫か？」

「はは、門の天井に手がつくぜえ。大丈夫だよ、旦那！」
心配なので降りて目視する。

大丈夫だ。

さて、シラー伯爵邸を訪ねるか。

まあ、会ってはいくれないだろうが。

267話 案の定

俺たちは峠をクリアして王都に向かっている。

街道が王都につながっているので、やむを得ず王都に向かうが、気持ち的にはスルーしたい。

どんな理由があったとしても、共和国の住民を連れてきてしまったのだ、お城に報告をしないわけにはいかないだろう。

とぼけてスルーしても、住民たちの交流が始まればそういう噂が広まってしまう。

あとからバレて苦しい釈明をするぐらいなら、最初から報告したほうがいいし、どうしても報告しないといけない案件も見えてしまったしな。

どうしてもお城に報告しなければならぬというのは――王国の西の都市であるセジーナの手前で隠し畑を見つけてしまった。

反王家派の資金源を見てしまっただけは、お城をスルーできない。

お城で実権を握っているアルストロメリア様を初めとする、円卓会議やらの面々に報告をする必要がある。

そうなる当然、共和国に至った経緯――つまり転移門の説明もなくてはならないわけで、それを考えると少々頭が痛い。

それでもオダマキに通じている転移門のことは秘密にするつもりでいる。

共和国にとばされた転移門も、魔石のエネルギーが切れて使えないってことでいいだろう。

実際に、俺とアキラぐらいしか使える者がいないのだが、巨大な魔石に魔力を少しづつ溜めれば使えると思う。

まさか、あの転移門を使って軍隊を送り込むとか言い出すはずがあるまい。

あんな原生林地帯を占拠をしても王国にメリットがまったくないし、だいたいこの国にそんな力はない。

それに街道を塞いでいた砦から貴族の俺に向けて矢を射られた。これは見過ごすわけにはいかない。

いや、見過ごしてもいいのだが……。

「貴族は貴族らしい行動をせぬと、民にも舐められますぞえ？ それに砦を破壊した行動に関して正当性を主張せねば、こちらが悪役の誹りを受けますわえ」

などと、アマランサスにも言われてしまう。

やっぱりそうか？ そうだよなあ。

彼女のアドバイスに従い、今回の騒動に抗議をするため、ここら辺一带を治めているシラー伯爵に会いに行く。

車を進めると、伯爵領で一番大きな街、セジーナが見えてきた。多重の堀と壁に守られた城郭都市。

その中にバスを入れる。

当然、住民たちからは奇異の目を向けられることになるのだが、もうすでに慣れっこだ。

そろそろ大きな湖の近くにあるアストランティアに、鉄の魔獣を使う変な貴族がいる——そんな噂が、ここまで流れてきていてもおかしくない。

馬なしで動く鉄の魔獣を見る住民の目から、そんなことを考えてしまう。

街の住民から注目の的だが、バスに乗っている村人たちも街の風

景に釘付けになっている。

「うおっ！　　すげえ人がある！」「ものがたくさん！」「食べ物もある！」

後ろの座席から村人たちの声が聞こえてくるが、屋根に乗っている獣人たちや子どもたちも騒いでいる。

特に驚いているのが、物資の豊富さだ。

元世界の使い捨て文化に比べたら大したことはないのだが、共和国の惨憺たる状況に比べるとここは天国らしい。

「はわー、いろんな食べ物のおいがしてくる」

鼻のいいアオイがクンカクンカしている。

「ケンイチ様！　あれは！」

マサキが言っているのは、脚で地面を蹴って進む自転車——ドレイジーネのことだろう。

もう、こんな街まで広がっているのか。

「あれはドレイジーネという乗り物だ。俺が考えたもんだが」

「あれを！？　ケンイチ様が！？」

「ああ、マロウ商会ってところで売り出している」

そろそろコピーも出回っているかもしれないが。

「「へっ」」

村人たちから感心する声が漏れるが、元世界の自転車がネタなので、やたらと感心されるとちょっと複雑。

運転席の後ろにいるアマランサスに、この都市について尋ねる。

「アマランサス、セジーナの人口ってどのくらいなんだ？」

「15万ほどだと言われています」

「アストランティアより多いね」

アネモネがフロントガラス越しに街の様子を見ている。

「ここから王都は近いので、みな王都に行ってしまうようですわえ」

「別に王都に行っても、なにかあるってわけでもないのになあ」

「只人ってのは、群れたがるよねえ」

セテラが、嫌がるアネモネにちよっかいを出してからかっている。

「そりゃ只人ってのは、エルフみたいに強くないからな。基本的に弱いから、身を寄せ合って生きるしかない」

エルフなら、森の中で1人で狩りをして1人で暮らすなんてことを100年ぐらい余裕でこなす。

基本的に違う生き物なのだ。

「にゃー」

森猫になったベルもそうだろうな。

そんな話をしていると、多重の堀に囲まれた屋敷が見えてきた。

あそこがシラー邸らしい。

石墨で補強された堀は公園のようになっており、元世界なら観光地になっていただろう。

そのぐらい見事な景色だ。

共和国から一番近い都市ということで、本格的に防御陣地を敷いた街として作られたらしい。

「はあ、こんな屋敷もいいなあ」

「聖騎士様、あの土地ではこのような陣地は無理ですわえ」

「まあ、解ってるよ」

あそこなら崖の上の大地に城を作ったほうがいい。

天然の要塞になる。

橋の手前まで来て停止すると、無線機のマイクを取った。

「アキラ。すぐに戻ってくるから休んでいてくれ」

「オッケー！」

アキラと話していると、座席に座っている村人たちがざわついて
いる。

「どうした？」

「あ、あの……この立派な建物が、ここの領主様のお屋敷ですか？」
後ろにいるマサキが、外を見てつぶやく。

「そうらしい」

「……」

村人たちが顔を見合わせている。

多分、王国の格差ってやつに、戸惑っているのではないだろうか。

「共和国の連中は、王侯貴族がこういう暮らしをしているのが気に入らないといって、革命を起こしたんだよな」

「そ、そうです」

「その結果、みんなが食えないほどの貧乏になって平等にはなっ
ってことだ」

「……」

元世界でも、大国の植民地として栄えていた国が独立して、最貧
国に転落なんてのも結構あるし。

「ここまで連れてきて言うのもなんだが、王国とて格差もあるし、
家も食い物もない貧民と呼ばれる人々も多数いる。決して天国では
ない」

「はい、それは解ります」

「共和国と王国、どちらにも欠点はあるんだが、死人の数は王国のほうが少ないとは断言できる」

「……この街の様子を見れば解ります」

「まあ、俺も領主だが、民から搾取して私腹を肥やしたりはしないから安心しろ」

「解りました」

確実に言えるのは、全国民を100%幸せにすることなんてできないってことだな。

元世界で最古の王朝は紀元前約3000年ぐらい前らしいが、人類の歴史5000年をかけても全国民が幸せでした〜そんな国は存在していない。

悲しいかな、これが現実だ。

俺は、公園のような見事な景色を眺めながら、堀にかかる橋にバスを進めた。

堀は多重になっているため、その数だけ橋もあるのだが、すべて石造り。

満員バスが乗っても落ちることはあるまいが——念のため、アキラのバスは堀の外で待ってもらうことにした。

橋を渡り終わると門の前に到着。

白い2階建ての屋敷は、黒い鉄製の柵で囲まれており、中には木が植えられて庭が整備されている。

「はあ、随分と金を持っているようだなあ」

「そうですわえ」

「隠し畑で儲けた金で維持してるんでしょ？ ケケケ」

セテラが嫌味そうに変な声で笑う。

こんな見事な屋敷が、昨日今日に作られたものではないだろうが、

維持に膨大な金がかかるのは確か。

「と、とまれー！」

鎧を着た2人の兵士たちがバスを止めたのだが、明らかに動揺している。

得体のしれない鉄の乗り物が、人を満載にしてやって来たのだから、動揺するなというほうが可哀想だ。

俺はエンジンを停止させると、バスから降りた。

「俺は、ケンイチ・ハマダ边境伯だ。シラー伯爵にお目通り願いたい」

「へ、边境伯さま?!」

「し、少々お待ちください」

なにやら相談をしていた兵士たちだったが、結論が出たのか1人が屋敷に向かって走り出した。

「まあ、アポなしだしなあ」

そこにアマランサスも降りてきた。

「おそらくは——あれこれと理由をつけて会わないと思われま^えすわ
え」

「多分な……」

それでもしばらく待っていると、黒い服を着た髭の男がやってきた。

スマートで背が高く、ロマンスグレーの髪はいかにも執事風。

名前は——そう、セバスチャンだろう。

それしかない。

「ハマダ边境伯様、主はただいま留守にしております」

「それなら仕方ない」

俺は屋根に乗せてきていた、砦の責任者を降ろした。

「この男が指揮する部隊が、俺たちに向けて矢で攻撃を仕掛けてきた」

どこで攻撃を受けたかは言わなかったが、責任者の顔を見て解ったのだろう。

「……砦がある地域は立入禁止区域になっておりまして、侵入者に対する攻撃は致し方ありません」

「そうか？ アマランサス」

「なんでございましょう」

彼女の名前を聞いた執事がピクリと反応した。

「天下の往来である街道に、勝手に関所を作って通行を禁止したり、攻撃を仕掛けたりというのは認められているのか？」

「いいえ、認められておりませぬ。そのようなことをするのは、山賊やら盗賊といった輩ですわえ」

「それじゃ、俺が砦を通ってもなんら問題がないってことだな」

「はい」

執事が冷や汗をかいて、プルプルと震えている。

「……へ、辺境伯様の抗議の旨は、主に伝えますので、今日のところはお引取りを……」

「まあ、伯爵本人がいないんじゃないしょうがない。この男は置いていく」

俺は、砦の責任者を引き渡した。

「……はい」

「あとで文章にて正式に抗議することにするが——俺たちは、砦の

向こうで面白いものを見てしまったんだよなあ」

「……」

執事が青ざめて、今にも倒れそうになっている。

「俺たちはこのまま王都に向かい、お城に報告に上がるから、そのつもりで」

「……承知いたしました」

執事は深々と礼をした。

俺がここで騒いでも、なんの得にもならない。

辺境伯領にもメリットがないし、一緒にいる村人たちをトラブルに巻き込むわけにもいくまい。

彼らの安全第一だ。

王家に報告してもご機嫌取りにしかないが、今回俺がやらかったことに対しての緩衝材として役に立つだろう。

俺は車に戻ると、その場でUターンをして橋を渡り始めた。

無線機のスピーカーが鳴る。

『ケンイチ、どうだった？』

「伯爵は留守だと、知らんぷりされたよ」

『まあ、そんなところだな』

俺は車を王都に向かう街道に戻した。

そのままバスを進めて街を抜けると、畑の中を進む。

街から離れて畑が途切れた小さな森の中で、昼食をとることにした。

街道は交通量が多いので、脇の草を刈って場所を作る。

休憩したり食事をするにしても、なにせ抱えている人数が多いので場所を選ぶ。

「アオイ、周囲に敵は？」

「ん、大丈夫だと思う」

一応、獣人たちにも警戒をさせる。

草を刈るのは、アネモネのゴーレム魔法の出番だ。

集めた草はアイテムBOXに入れて、堆肥などに使う。

無駄にはできない。

昼食を摂るのはいつも俺たちだけで、そういう習慣のない村人たちは総出で薪を拾い集めている。

ずっと働きづめだった彼らも、生活に余裕ができて余興や趣味などを楽しむ時間ができたりするだろうか。

人はパンのみに生きるにあらず。

昔の偉い人の言葉であるが、生活に余裕がないと文化が生まれない。

農業だけではなくて、他の才能を開花させる村人もいるかもしれない。

共和国では、たとえどんな優れた才能があろうとも農作業に放り込まれる。

国が定める平等の名のもとにおいてだ。

俺の家族と、途中で拾った子どもたちも一緒に軽く食事を摂る。

森猫たちはパトロールに出かけた。

食事をしている間も、横の街道ではひっきりなしに馬車が通り過ぎる。

王都が近いので、100万以上の民を養うための物資を運び込んでいるのだ。

皆がアイテムBOXを持っている世界なら、馬車も減らせるのだろうが、この世界では収納の能力を持っているのは稀な存在。

都市を支える物資は馬車による輸送が支えている。

このまま王都まで行けると思うが、泊まる場所はどうか…。

「さて、王都に到着する頃にちょうど夕方になりそうなんだよなあ」
「ケンイチ、泊まる場所がないよ」

アネモネの言うとおりだ。

「俺は、お城の庭を借りようかと思ってたんだが、いきなり行って駄目だと言われたら、かなり困るな」

「呆れた、そんなことを考えてたのお？」

セテラが呆れているが、どうせ報告はしなければならぬ。

王族の面々が会ってくれないなら、すぐに王都を離れて泊まる場所を探す必要がある。

「とりあえず、お城には報告しないと駄目だしな。上手くいけば、報告の褒美として庭を使わせてもらえるかなあ〜と思ってな」

「聖騎士様、お城が駄目なら、妾が懇意にしていた貴族の庭でもよろしいかえ？」

「そりゃ願ったり叶ったりだが、いきなり押しかけて大丈夫か？」

「おそらくは……」

「それに、君はすでに王族籍がなくなり、奴隷なわけだし……」

「あの者たちであれば、些細なことにはこだわらぬと思いますがえ」
いや、些細じゃないし。

「なにせ、この人数だからな。いきなり100人ぐらい泊めてくれて、かなり難しいと思うぜ」

アキラがツイツラと一緒に、飯の代わりにビールを飲んでいる。

「そうなんだよなあ………よし！　今日はここでキャンプして、明日の昼頃にお城に行くか」

「それなら断られても王都を抜けてキャンプ場所を探せるな」

王都に着くのは簡単だが、泊まる場所を探すのにリスクがありすぎる。

ちよつとのんびり過ぎるだろうか？

サクラで待っているリスやプリムラのことを考えると、いち早く帰ったほうがいいとは思うのだが、転移門のこともあるし、見てはいけないものを見てしまったしなあ。

これも貴族としての務めだ。

色々と考えているとアキラが話しかけてきた。

「ケンイチ、追手は大丈夫だろうか？」

「あゝそうだな。伯爵のところから追手がやってきている可能性はあるな」

「だろ？」

「でも、トリップメーターで80kmぐらい進んだので、馬なら1日では追いつけないと思うが」

「そうか……そうだな。それじゃ大丈夫か」

「多分」

予定は決まったので、マサキを探す。

「おい！　マサキ」

「はい、ケンイチ様」

「今日はここで野宿をして、明日の昼に王都に入る。このまま王都に行っても泊まる場所を探せないからな」

「申し訳ございません。人数が多くて……」

「連れてきてしまった俺に責任があるんだから心配するな」

そこにミャレーとニャメナがやってきた。

「旦那！　ここで泊まるなら、狩りをしてきていいかい？！」　「ウチもにゃ」

「いいぞ」

彼女たちにクロスボウと、コンパウンドボウを貸す。

「やるにゃー」　「俺はやるぜ！　俺はやるぜ！」

他の獣人たちも狩りをしたいらしい。

武器を貸してやることにしたが、矢も少なくなってきたのでシャングリ・ラから補充だ。

やはり、まっすぐな矢じゃないと狙った所に飛ばない。

結構重要だ。

「ケンイチ様、小物ならそこらへんの枝で作った矢で十分ですぜ」

「いただいた矢は、大物用にとっておきやす」

「ああ、好きにしていーいぞ」

彼らから見ると、シャングリ・ラから購入した矢は、とんでもない上等なものに見えるらしい。

まあ、工業製品で寸分変わらず同じものがあるんだから、この世界じゃちょっと作るのが難しいオーパーツだ。

獣人たちが狩りに行ってしまったが、ポツンと残っているのがアオイである。

彼は身体が弱いので、皆についていけない。
留守番だ。

「アオイには大切な仕事があるぞ。その素晴らしい耳で周囲の警戒だ」

「はい、解ってます」

人がいなくなったので、のんびりする。

草を刈った場所にデッキチェアを出して寝転がり、セテラとアマランスにも出してやった。

木の枝がいい感じで日除けになっているし、まったりとしよう。

森の中でマイナスイオンがたっぷりだし、鳥のさえずりも聞こえてくる。

マイナスイオンってなんちゃって科学だっけ？

まあいいか。

「ふう……」

目を閉じる。

ずっと運転していたから疲れた——いや、祝福があるので肉体的な疲れはないのだが、精神的になあ……。

たくさんの人々の命が俺の双肩にかかっているわけで。

色々と考えていると、俺に誰かが乗ってくる。

まあ目を閉じてても解る——アネモネだ。

「アネモネさくん、重いんだけど」

「えへへ」

今回の旅は彼女がいてくれて助かった。

頭をなでなでしてやる。

「ふあああ」

目を閉じたままアネモネをなでなでしていると、ふと軽くなった。

「ん？」

——と思ったら、いきなり腹の所にずしりときた。

おいで解る。セテラだ。

「お姉さん、重いんですけど」

目を開けると、エルフが俺に馬乗りになっている。
マジで重い。

「んふふ」

彼女が俺の両手を持つと、自分の身体にタッチさせてくる。

「昼間からそういうことはしないぞ」

「ケチィ」

そんな悪態をつきつつ、腰を前後に動かしたりしている。

エルフに憧れがある人なら夢のようなシーンだが、彼らとしばらく付き合ったあとだと、少々ウザい。

「なぜ俺なんかに構う？ エルフから見たらツマランやつだろ？」

「そんなことないけどお。私と話ができる時点でこの世界の住民じゃありえないしい」

星間航行やらしていた古代のエルフに比べたら、元世界の科学はしょぼいが、一応それなりに発達はしていたからな。

彼女が使った魔法——空気を圧縮して破裂させるとか、その原理が理解できるし。

こんどは彼女がぺたぺたと俺の身体を触り始めた。

セテラに気になることを聞いてみる。

「エルフって不老で歳は取らないけど、マナが腐るって話を聞いたんだが？」

「そ、そんなわけないでしょ？！ 誰が言ったの、そんなことお！
マナはマナで通じるらしい。」

「ただの噂だよ。それじゃにおいがきつくなったりは？」
「するわけないでしょ！」

それもそうだ。

俺の上に乗っているエルフは5000歳。歳でおいがきつくなるなら、すでに異臭を放っているに違いない。

「ひどい。そんなに私のことが嫌いな？」

「悪いごめんよ。エルフのことをなにも知らないからさ」
まあ確かに、思いつきりセクハラだったな。
いつもの癖が出てしまったようだ。

「むー！ 私も乗る！」

とか言って、アネモネも俺の上に乗ろうとしている。

「ちょっとアネモネ！ 無理だから」

3人の体重がかかった時点で、デッキチェアが潰れてしまった。
折りたたみができて、開くとストッパーが利くのだが、それが壊れてしまったようだ。

「あゝあ」

「ははは、ケンイチ！ モテモテだなあ」

そういうアキラもツイツラとイチヤイチヤしている。

その光景を、ちょっと離れた場所から見ている村人たちの視線に気がついた。

皆がこちらをジッと見つめている。

彼らが崇める森の精霊を、俺とアキラが侍らせているのだ。
いや、侍らせているんじゃないけどな。

村人たちから見れば、そう見えるに違いない。

「はいはい、エルフ様は降りて。村人たちが見ているから」
「えゝ、あいつら関係ないじゃん」

2人に降りてもらうと、壊れてしまったデッキチェアを収納した。直せると思うから、サクラについたらやるか。

「ケンイチ、コンテナハウスを出してくれ」

「いいけど、なにをするんだよ」

「フヒヒ、なにをするに決まってるじゃん。どうせやることもないし」

「マジか」

こっちは真っ昼間からか。

彼には世話になっているし、拒否することもできない。別に悪いことをするわけじゃないしな。

ちよつと離れた場所にコンテナハウスを出してやった。

「ケンイチ、私たちもしよお？」

「なにを？」

「もう、知ってるくせにい」

5000歳が、しなを作っている。

「BBAしつこい」

「BBAって言うな！ このちびっこめ！」

「ぐぬぬ……」

アネモネとセテラをなだめていると、変な叫び声が聞こえてきた。

「ギャア！ ギャアアア！」

なにかと思ったら、獣人たちが捕まえてきた森の鳥。

首を握られた鳥がバタバタと暴れていたのだが、獣人たちがその場で首を刎ねて解体を始めてしまった。

カオスである。

獣人たちが鳥を解体しながら耳をクルクルと回して、コンテナハ

ウスの方角で止まっている。

「さすが竜殺しの旦那。エルフ様とやりまくるなんてなあ」

「まったくなあ」

へんなことで感心されている。

普通の獣人たちにもバレているので、彼らより耳がいいアオイにも当然筒抜けになっている。

彼が顔を赤くしているのだが、こればかりはどうしようもできない。

俺は別のデッキチェアを出して昼寝。

アネモネとセテラは、リッチのところでは手にいれた本の解説をしているようだ。

そっちのほうも、サクラに帰ったら本格的に作業が進むものと思われる。

そのまま夕方になる。

鳥肉がたくさん手に入ったので、全部を使って唐揚げを作ることにした。

シャングリ・ラで、直径40cmのアルミの大鍋を購入してサラダ油を張る。

満杯にする必要はない。

材料が浸るぐらいでいいのだ。

揚げ粉は市販のものを購入して、人海戦術でまぶす。

それを一気に揚げれば100人分ぐらいはすぐに用意できる。

コンテナハウスに籠もっていたアキラとツイッツラも出てきた。

2人共賢者タイムだろうか。

悟りを開いたような顔をしている。

「これは美味しい!」「こんな美味しいの、初めて食べた!」
村人たちにも唐揚げは好評である。

「おおーっ! うめー!」「熱々! うめえ!」
もちろん獣人たちにも好評である。

「美味しいにゃー!」「うめー!」
ミヤレーとニヤメナは、赤い缶のカレー粉をかけて食べているのだが、そのにおいが獣人たちのところにも漂ってきているようだ。皆が鼻をヒクヒクさせて、羨ましそうに見ている。
やっぱり香辛料が好きなんだろうなあ。

「よし! 獣人たちは戦闘にも参加してくれたし、色々と働いてくれている。褒美としてこれをやろう」
俺はシャングリ・ラから、ミヤレーたちが持っているものと同じカレー粉を購入した。

ガラガラと空中から現れた赤い缶に、獣人たちが歓声を上げる。

「「「おおーっ!」「」」」

「ほら、1人1個ずつ取っていいぞ」

「こ、香辛料なんて本当にいいんですかい?」

「ああ、自由に使え」

「「「うおおお!」「」」」

皆が奪うように取っているのだが、心配しなくても人数分ある。彼らは袋もかばんも持っていないので、人数分の巾着を買ってみた。

巾着は白い麻製で、こちらの技術でも作れるものだ。

大中小3つ揃って800円。

腰紐に固定できる。

大きいものは、長い紐で肩にかけたりできるだろう。

共和国では個人財産は認められていなかったが、これからは自分の財産を管理しなくてはならない。

そういうことも1から教えてやらないと駄目なのだ。

「ほら、これもやる。自分のものは自分で管理するように」

「やった!」 「ありがとうございます!」

腹がいっぱいになったら皆で寝る。

一応、獣人たちを交代で見張りに立てているのだが、念の為だ。

明日はやっと王都だ。

268話 王都のマロウ商会

王国と共和国を隔てる峠をやっと通過。

これからの道のりは楽ちんだと思っていたら、隠し畑を見つけてしまった。

アマランサスの話では、反王家派の資金源になっている可能性が高いという。

街道を塞いでいた砦から攻撃も受けたので、ここらへん一帯を治めているシラー伯爵に抗議に向かったのだが、会うことができなかった。

そのまま西の都セジーナをあとにした俺たちだが、問題になるのは次の宿泊地だ。

順調なら夕方に王都に到着することができが、俺たちは多数の難民を抱えている。

俺の狙いは、広いスペースがあるお城の庭である。

お城が対応してくれるならば、相手にはアルストロメリア様が出てくるはず。

そこで色々と報告をしながらお城の庭を借りてキャンプしてしまうおうという算段だ。

駄目ならそのまま王都を抜けて、人気のない街道の脇でキャンプを張る。

そう決めてから、王都には向かわずに途中の森でキャンプをした。

――朝起きると、皆で食事を摂る。

共和国に飛ばされてから、なん回目の食事だろうか。

そろそろ家に帰りたいもんだ――そう考えて、サクラが故郷だと

認識している俺がいた。

住めば都か。人は異郷に生まれて故郷に帰るとい言葉もあったな。

食事が終わると、再び皆でマイクロバスに乗り込んだ。

もう魔物がいるような地域ではないので、皆の顔も明るい。

このまま順調なら、昼には王都に到着できるだろう。

「すげー！ 見渡す限りの麦畑だ！」 「「おおっ！」」

王都に近づくと畑ばかりになる。

やはり主食の麦が多いが、野菜畑も青々とした緑をしている。

「そりゃ王都の民を支えているからな」

「こ、このぐらいの畑がないと、都市の住民は食わせていけないのですね……」

後ろからマサキの声が聞こえる。

「共和国だと、自分たちの食い扶持も不足していたからな」

「王都に近いから人が多くなってきたにゃ！」 「にぎやかだぜ！」
獣人たちの言うとおりだ。

街道は整備されていて十分な幅もあるのだが、輸送の馬車や人が多くて、あまりスピードを出せない。

馬車や人々を追い越すと、驚きの表情を向けてくるのもいつものことだ。

鉄の乗り物に、屋根まで人が満杯に乗っているのだから当然だろう。

馬車でこんなことをしたら、馬が牽くことができない。

上の獣人たちが騒々しいので、道行く人たちに手を振ったり挨拶をしたりしているようだ。

「よく、兄弟！ そんなへんてこなものに乗ってどこから来たんだ？！」

声がしたので横をみると、虎柄の獣人が並走していた。
おそらく手紙を届ける飛脚だと思われる。

「俺たちは、共和国から来たんで」

「はあ？ 共和国う？ はっはっは！ 面白い冗談だぜえ！」

「いや、冗談じゃねえし」

「はっはっは！ 気をつけていけよ」

そういえば皆に口止めをするのを忘れていた。
窓を開けて、屋根にいる獣人たちに注意する。

「おい！ 共和国から来たってのは、なるべく秘密にしてくれ！」

「あ！ さーせん！」

上の獣人たちもマズいと思ったのかもしれない。
バスの後ろに乗っている連中にも話す。

「マサキ、共和国から来たってのは秘密にしてくれよ。他国の人間だとあまりよく思わないやつもいるかもしれないし」

「解りました」

「誰も知らない森の中からやってきてえ——とか言っておけ」

まあ、嘘は言っていない。

マイクを取って、アキラのバスにも同じことを告げた。

『オッケー！ 後ろの連中にも言っておくぜ』

「頼む」

それでも徐々に噂が漏れるだろうけどな。

俺が共和国から連れてきた！ ——と、断言しなければ事実にはならんし。

バスが進むと住宅や集落の数が増えて、街道の先には王都が見えてきた。

「「「おおっ！」」」

村人たちから、驚きというかため息に似た声が漏れる。

俺は無線機のマイクを取った。

「アキラ、王都が見えたぞ」

『おっ！ やつとここまで来たかあ』

「いや、今回は本当に死ぬかと思ったが……」

『ははは、そうだな』

「ブラック企業の帝国から逃げてきたのに、こんな危ないことに巻き込んですまなかったな」

『ははは、いいってことよ。俺が勝手についてきたわけだし』

「でも、転移門で飛ばされるのは、付き合う必要はなかっただろ？」

『それも気にするなって』

「ありがとうな」

『はは、照れるぜえ』 『*＆*＆*』

ツイツツラの声が聞こえる。

なんと言っているのだろうか。

「セテラも王都には来たことがあるんだろ？」

「うん、でも前に来たときよりも大きくなっているみたいだけどお」

「前っていつの話なんだよ」

「うーん？ 100年ぐらい前？」

さすがエルフはタイムスケールが違う。

「只人と知り合いになって、今度遊びに来るよーって100年後だったら、死んでるぞ？」

「それは私も理解しているからあ」

俺は後ろをチラ見した。

「アマランサス、お城まで道案内を頼むよ」

ナビゲーションは、運転席の後ろにいるアマランサスだ。

「任せてたもれ」

王都の道は侵入者からお城を守るために迷路のようになっている。
軍事機密のため、王都の地図などは販売禁止。

地図などを持っていれば、スパイの疑いをかけられても仕方ない。

王都に近づくバラックの家が増え、それが塊になって街を形成している部分もある——貧民街だ。

「マサキ、この国の王都だって、こういう家も仕事もない連中が住んでいる場所があるんだ」

「はい……でも、豊かに暮らしている人たちのほうが多いです……」

「まあ、共和国の全員貧乏で平等よりはなあ」

貧民街の様子を、フロントガラスからアネモネがジッと見ている。

「アネモネ、彼らを全員助けてくれって言われても無理だぞ？」

「解ってる……」

「でも、国がよくなれば、徐々にああいう人たちも減らせるはずだ」

「うん……」

アネモネは頭がいいので、解っているだろう。

「ケンイチ様あゝ」

突然、後ろからマサキの顔が出てきたのだが、涙を流している。

「うおっ?! なんだ!?!」

「ケンイチ様は、我々のような他国民を助ける前に、あのような人

々を助けなければならぬお方なのに……」

マサキの言うのは貧民街にいる者たちのことだ。

「そう言われれば、あそこにいる者たちに悪い気がするが……」

王国の貴族なのだから、他国民を助ける前に自国民を助けろと言われれば、返す言葉もない。

「それなのに、我々のために命がけであんな危険な峠を越えてくださり……」

「まあ、なんだその——成り行きだから気にするな」

「ありがとうございます」

山崩れに巻き込まれてから、マサキの崇めぐあいが上がったような気がする。

あまり崇められても困るのだが。

俺はただのオッサンだし。

人々と馬車の間を縫うように王都に入る。

建物の多さと人の多さに、後ろの村人たちからも声上がる。

あの村から比べたら、ここは天国だろう。

「ここにもドライジーネって乗り物が！」

そう、王都にはたくさん走っているな。

さすが大都市——流行に敏感だ。

マロウは脚で漕ぐタイプも開発していたようだが、上手くいっているのだろうか？

魔石モーターが簡単に作れるようになれば、動力タイプも作れるかもしれないし。

「石造りの大きな建物が沢山あるぞ！」 「おーっ！」

王都には3〜4階建ての建物も多く、人口密度も高い。

これだけ人がいれば、消費される物資の量も桁違いだ。

「アマランサス、案内は大丈夫か？」

「はい、王都の構造は頭に入っておりますゆえ」

多分、戦略上重要だからってことなんだろうなあ。

王族の嗜みってやつだ。

峠もウネウネ道路だったが、ここも石畳のウネウネ道路。

まっすぐな道がないのは凄い。

それでも王都に住んでいる人たちは迷わないで生活できるので、慣れというのは凄い。

感心していると、大きな商店らしき建物が見えてきた。

お客もたくさんいて、店先に馬車が止まり商品の受け渡しをしている。

道が狭くなっているのです、すり抜けが大変だ——とか思っていると、見かけた姿がある。

俺はクラクションを鳴らした。

ついやってしまったのだが、当然街の人間は飛び上がって、こちらを見ている。

人を満載にした得体のしれない鉄の化け物が、近づいてきていたことに気がついたのだ。

「あ！」

アネモネも彼に気づいたらしい。

「どうしたのお？」

エルフが不思議そうな顔をしている。

「知り合いだ。マロウ！」

俺の掛け声より先に、彼は俺のことに気がついたようだ。

そりゃ、この国で馬なしで動く乗り物なんて持っているのは、俺しかない。

俺はマイクを取った。

「すまんアキラ、ちょっと停車する」

『どうした?』

「マロウがいた」

『ああ! そういえば、ここはマロウ商会だったような……なん回か来ているんだが、道が覚えられねえ』

アキラは、俺から借りた4トトラックで、王都のマロウ商会まで運送のバイトをしてたりする。

マイクロバスを道に寄せ、止めてから降りると、マロウがやってきた。

「これはケンイチ様! 王都にいらっしゃるなら、連絡をしていただければ!」

彼は普段のようにニコニコしている。

マロウ商会には世話になったのに、呼び捨てにしたり、様をつけられるのは未だに慣れない。

「俺のこと、なにも聞いていなかったか?」

「はい? もしかして連絡の行き違いがありましたかな? それならば、申し訳ございませんでした」

「いやいや、違うんだ。お城にちょっと用事があったな」

「そうですか。しばらく領主様が留守にするということでしたが、このことでしたか」

マロウが、マイクロバスの上に山積みになっている獣人や子どもたちをチラ見している。

どうやら、サクラからマロウ商会へと、俺がいなくなったという連絡をされていないようだ。

もちろん、プリムラにはリスが連絡しているだろうから、彼女の下で情報が遮断されているのだろう。

そりゃ領主の俺がいなくなれば、民に動揺や混乱が広がる。

せっかく軌道に乗りかけている領地で、それは避けたいというリスやプリムラの配慮だろう。

「それより、マロウ商会は王都でも繁盛しているようだな」

ダリアにあるのが本店で、王都にあるのが支店ってことになる。

「これもケンイチ様のお陰でございます」

彼が揉み手をしながら、ニコニコしている表情から見ても商売が上手くいっているのがわかる。

「それはよかった」

「あの……こんな場所でなんなのですが、お願いがございまして…

…」

「ん？ なんだい？」

彼によると、頼んだ商品が中々入荷しないで、困っているそうだ。そりゃ俺が留守にしているから、シャングリ・ラから買っているようなものは、品不足になっている。

特に足りないのが洗濯バサミらしい。

それなら簡単なので、シャングリ・ラから木製の洗濯バサミをたっぷりと買う。

購入ボタンを押すと、ドサドサと袋につまった洗濯バサミが落ちてきた。

1袋に100個入っているので、それを50袋購入した。全部で5000個だ。

これでもすぐにはけてしまうだろうけど。

「おい！ 人を回してくれ！」

マロウが馬車から荷物を降ろしている者たちに、急遽手伝わせた。次に彼が欲しがったのが、シャンプーとリンス。これは貴族の奥方連中に高く売りつけるらしい。

「どうせ、高そうな瓶とかに入れ替えて売るんだろ？」

「はい」

それなら特大の詰め替えようでいいか。

シャンプー、リンスも2L入ってて1500円ぐらいだ。

リンスとコンディショナーってなにか違うのか？

オッサンなので解らん。

似たようなもんだろ。

「ポチツとな」

2L入りの詰め替え用パッケージが10個ずつ落ちてきた。

「おおっ！」

「詰め替えて売るのだから、これでいいだろう？」

「ありがとうございます！」

マロウと話していると、アキラもやってきた。

「マロウさん、久しぶり！」

「おお！ アキラ様まで」

アキラを捕まえてヒソヒソ話をする。

「マロウ商会には、俺たちが行方不明だと知らされていないらしい」「そうなのか」

マロウと向き直る。

「アキラ様も留守ということで、運送が遅れております」

「はは、悪いな。ちよっと大事な用事があったもんでな」

「そうでしたか」

「あ！ そうだ。 アキラの獲物をマロウ商会に売ったらどうだ？
王都なら買う貴族がいるだろう？」

「そうだな」

その話を聞いたマロウの目が光る。

「なにか素晴らしい商売の予感がしますぞ？ その売り物とは？」

「洞窟蜘蛛なんだ」

「おおっ！ 洞窟蜘蛛！ 実は、洞窟蜘蛛を求める貴族の方々が多くいらっしやいます」

「そうなのか？」

「以前、ケンイチ様が、王家を通じて洞窟蜘蛛をお売りになられたことがあったとか……」

「ああ、そうだな。巨大なやつを売ったんだ。いい値段がついた」

「その蜘蛛から作られた白い鎧が評判になりましたな。同じものを求める貴族の方があとを絶ちませんで」

洞窟蜘蛛の甲殻は白く硬い。おまけに魔法の耐性があるから魔法を弾く。

その素材から作られた鎧は、超高額商品らしい。

「どうせ前線に出ることもない貴族が、そんな立派な鎧なんて必要ないだろうに」

「ははは、違いねえ」

アキラも笑っているが、帝国でも似たような感じらしい。

マロウの話では、白い鎧は鉄よりかなり軽量だという。

軽くて疲れないし見栄も張れる。

こりゃ買うっきゃないでしょう。

「それじゃ、洞窟蜘蛛を持ってきたのは、タイミング——じゃなかった、ちょうどよかったな」

「はい！」

マロウが見たいというので蜘蛛を出してやった。

見物客が多いので、場所を空けてもらう。

「ほいっと！」

ひっくり返って脚を閉じた白くて巨大な蜘蛛が、石畳の上に現れた。

「きゃあああ！」「おおおっ！」「魔物?！」

あちこちからどよめきと、悲鳴が上がる。

石畳を走っていたドライジーネも脚を止めて、こちらを見ている。まあ、プリムラに見せたときもぶっ倒れたから、女性にはちょっとしたきついだろうな。

ここで出す必要もなかったと思うが、これはマロウが考えた宣伝に違いない。

マロウ商会はこういうものも扱えるんだぞ——というアピールだ。

「これは損傷ありませんな」

「油で焼いたんだけどな、燃える気配はなかった」

アキラが戦闘中のことをマロウに説明している。

「おそらくは焼け死んだというよりは、炎で酸欠になって死んだのでは？」

「どちらにしろ、これはよいものです！」

マロウの顔が紅潮して目が光っている。

「それでマロウさん。どのくらいで引き取ってくれる？」

アキラが交渉を始めた。

「そうですね……金貨120枚（2400万円）！」

「「おおおっ！」」

周りで見ている野次馬から歓声が起こる。

「前に王都で売ったときは、小さなオスが金貨80枚（1600万円）だったから、いい値段じゃないか？」

「よし！ 売った！」

「ありがとうございます！」

アキラから見ても、これはいい取引だろう。

マロウもホクホク顔だ。

「実はまだある」

「ほう?!」

商人の目が光った。

「道を空けさせてくれ」

マロウ商会のスタッフが総出で、野次馬の相手をしてくれる。

人もかなり集まってきたので、これは大きな宣伝になるだろう。

「それで、ケンイチ様?!」

彼は待ちきれない様子だ。

「これだ」

俺はアイテムBOXから、カメを取り出した。

「「おおおっ！」」

「これは?!」

「これはカメだな。こいつの甲羅は、ドラゴンより硬いらしいぞ?」

「本当でございますか?!」

「ああ、間違いない」

アキラが俺に代わって返答した。

「カメと蜘蛛を仕留めてくれたのは、アキラなんだよ」

「ほっ! さすが帝国の竜殺しでございますなあ」

そのマロウの言葉に、ギャラリーが反応した。

「竜殺し?」 「竜殺しだって?!」 「帝国の竜殺しって酒場の噂で聞いたことがあるぜ」

周りがざわつき始めた。

「帝国の竜殺しは、黄色いウネウネを指から出せるって聞いたぜ!」
ギャラリーからそんな声が飛んできたので、それにアキラが反応した。

つかつかと、やじを飛ばした男の所に行く――。

「手を出してみろ」

男が出した掌に、マヨが山盛りになる。

「「「おおおっ!」」」 「本物だあ!」 「すげえ!」

「ねえ! 私にも出して!」

今度は妙齡の女性の手にマヨを出してやった。

「「「おおおっ!」」」

なんだか知らんが、めっちゃ盛り上がっている。

野次馬はアキラに任せて、こっちは商談にしよう。

「これで盾を作れば、白い鎧と一緒に売ることができそうだが」
「それは素晴らしいですな! ドラゴンの鱗より硬い盾!」

「あ——しかし鎧が白で、盾が黒だと少々合わないか」

「そんなことはございません。白い端材を使って装飾を施すとか、手はありますから」

「そうだな、さすがマロウ」

「マロウさん、こいつの肉も美味いんだぜ？」

アキラが野次馬の所から戻ってきた。

「まことでございますか？」

竜殺しの言葉にマロウが乗り出した。

「ああ、身が詰まっていて旨味が濃い。噛めば噛むほどに旨味が溢れる」

「おおお……」

周りのギャラリーもカメの味を想像しているのだろうか？

アキラの説明に皆が聞き入っている。

「これだけの材料の加工となると大変だろうが……」

加工が大変なら、サクラに持ち帰ってドワーフたちに加工しても
らう手もある。

「おそらくは問題ないと思います。王都に住み着いているドワーフ
たちもいますので」

「そうなんだ」

前の蜘蛛も鎧として加工できたようだし、王都にも腕の立つ職人
がいるのだろう。

石畳の上に置かれた白い蜘蛛と巨大なカメに、黒山の人だかりが
できている。

これは、マロウ商会にとっては大きな宣伝になるだろう。

「おい！」

マロウが従業員に合図をすると、奥からのんびりとした大きな男が出てきた。

骨太のパワータイプに見えるが従業員の制服を着ている。

「お呼びだべか？」

「ああ、こいつを奥の裏庭に運んでくれ」

「解ったっす」

力にものを言わせて担ぎ上げる？ まさか、こんな大きなものを1人で？

そんなことを考えていると、目の前から洞窟蜘蛛が消えた。

「アイテムBOX？」

予想外の展開に俺は驚いた。

「はい。大変誠実で優しい男なのですが、この力を悪事に利用されていたようで」

「そりゃ大変だ。俺と同じようにマロウと知り合いになってよかったな」

「そう言っていただけると、商人としても冥利に尽きます」

亀の買取価格は金貨100枚（2000万円）。

少々安いが、これで盾を作ったりして評判になれば、もっと価格があがる。

アイテムBOXに入っている他のカメを売るのはそれからでも遅くはないだろう。

俺たちがマロウと話し込んでいると、しびれを切らしたのか、アネモネが車から降りてきた。

「ケンイチ！」

「おお、これはアネモネさん。お久しぶりです」

彼は、アネモネを一人前の魔導師として扱ってくれている。
まあ、そこら辺の魔導師が裸足で逃げだすぐらいの実力と実績だし。

「こんにちは！」

「そうだ——マロウは、昔彼女に会ったのを覚えているか？」

「え？ アネモネさんに？」

「うん！」

「ウルップの近くで鳥を売ったそうだが……」

「おお！ 思い出しました。あの時の女の子が、アネモネさんだったとは！」

「そう！ マロウに、鳥のさばき方を教えてもらった」

「そのときに、プリムラはいなかったらしいな？」

「はい、なんというめぐり合わせでしょうかね……」

やっぱり成功する者は、いろんな才能を持つ人を引き寄せる力が働くのかもしれない。

「あのーアキラさん……」

「なんだいマロウさん」

「マヨをわけていただけじゃないでしょうか？」

「おお、そうだな。留守にしていたから、供給が止まっていた悪かった」

「いえいえ、滅相もございません」

アキラは、マロウ商會にマヨネーズの卸売をしていたようだ。

「早めに売ってくれよ。あまり日持ちしないからな」

「はい、それはいつものとおりに」

「マヨって、日持ちするイメージだな」

「やっぱり、あの容器に入っているのが重要らしい。すぐに酸化してしまっただけ」

「ああ、チューブに入っているのが残り少なくなると変な味になるやつか」

「それよ」

マロウとの話は尽きないが、俺はあることを思い出した。

「マロウ、伝書鳥って使っているか？」

「はい使っておりますよ。これによって、マロウ商会がいち早く情報掴むことができます」

「よかった——それじゃ、サクラに連絡を入れてもらえないだろうか？」

「承知いたしました」

文面は——こちらケンイチ。今は王都にいる。すぐに帰る——これでいいだろう。

まあ数日中に帰れるのは確実だが、無事なことを伝えればサクラに残っている連中も安心するはず。

ちょっと寄り道をしてしまったが、俺たちには行く場所がある。マロウ商会の従業員を使って、道に群がる野次馬を整理してもらうと、お城へと出発する。

「——「おおおっ！」」「馬なしで動く鉄の魔獣！」「すげー！」
「アストランティアの近くに住んでいる貴族様が、鉄の魔獣を操るって聞いたぜ？」」

「へっっ！ それじゃあの方が……」

ワイワイと盛り上がっている野次馬をわけて、再びお城に向けて走り始めること1時間。

やっと、お城の裏門が見えてきた。

堀の上に石の橋が架かっているので、まずは俺のマイクロバスだ

けが渡る。

裏門の前でバスから降りた。

そこには、前に来たと同じように重そうなプレートアーマーを着た兵士が2人立っている。

「こんにちは」

俺の顔をみた兵士が直立不動になった。

「こ、これはハマダ辺境伯様！」

「え？ 俺のことを知っている？」

「以前にも、いらっしゃいましたから！」

ああ、前に来たときと同じ警備の兵士らしい。

俺のことを覚えてくれていたようだ。

ありがたい。

「約束がないのに無理を承知で頼むんだが――アルストロメリア様にお会いできないかな？ とても大切な用事があると」

「はっ！ しばしお待ち下さい！」

「無理を言っているのは解っているので、時間が許す限り待つよ。美味しいお土産もあると伝えてくれ」

「かしこまりました！」

兵士の1人が、お城の中に走っていった。

「しょうがない」

皆もバスから降りてきた。

「頭の堅い杓子定規な連中が、臨機応変に対応するかえ？」

「解らんが、アマランサスだってそこにいたのに」

「妾は尻を叩くほうじゃったが」

「尻って……」

橋の上にテーブルと椅子を出した。

「ふー、お城はあまり変わってないみたいねえ」

セテラもやってきて、椅子に座ると伸びをした。

さすがのエルフも車に乗りっぱなしで疲れたのだろう。

どうやら彼女は、ここを訪れたことがあるらしい。

アキラとツイツラもやってきた。

「本当に数日で共和国の森から王都までやってきたんだね？ 凄い速さだよ」

「ははは、普通じゃ考えられねえよな」
「うん」

「ケンイチ、大丈夫そう？」

アネモネも椅子に座ると、その下にベルとカゲが潜り込んだ。

「まだ解らないな」

お土産で釣ればいいんだがなあ。

だめだったら、すぐにここを発つしかない。

269話 アルストロメリアと話し合う

俺は難民を連れて王都に到着した。

ここからサクラまでは1日あれば到着できる。

いや、屋根に人を乗せているから2日かな？

ここまでやって来れば街道に危険はないので、慌てる必要はない。せっかく戻ってきたのに、事故や怪我でもしたら大変だ。

急いては事を仕損じる。

たくさんの難民を抱えているので、行動が制限される。

少人数ならどうとでもなるのだが、さすがに90人以上を抱えていると、できないことが多い。

キャンプするにしても、それなりの広さが必要だし。

街の中で宿に泊まることも不可能だしな。

王都のお城に到着した俺は、王族のアルストロメリア様を訪ねた。面識はあるし色々と贈り物をしているので、便宜を図ってくれるかもしれないという期待。

報告したいこともあるしな。

共和国から難民を拾ってきたことも、この際に話したほうがいいだろう。

裏門の前にある石橋の上にテーブルと椅子を出して、のんびりと待つ。

俺たちはのんびりだが、バスに乗っている村人たちはちよつと退屈だろう。

森の中のように、ちよつと降りて薪拾いってわけにはいかない。

皆で飲み物を飲みつつ、シャングリ・ラで買った商品を箱に詰めて待っていると、女性の声がした。

「辺境伯！」

その声のほうを見れば、白いドレスに金髪を編んでまとめた女性がいる。

以前は、普通のウェーブヘアだったのだが、今はアップにしているらしい。

親族なので似ているのは当然だが、背は小さく細いミニアマランサスといった感じ。

アマランサスは、武人やアスリートのような体つきなのだが、彼女は普通の細い女性だ。

後ろには黒い制服を着た護衛の騎士を引き連れており、前に世話になった顔も見える。

「これは、アルストロメリア様には、ご機嫌麗しく——」

「よいよい！ いったい何用じゃ」

「まずは、これを」

俺はお土産が詰まった箱を差し出した。

さっき見繕ったものだ。

「おおっ！？ これは、チョコじゃな？！」

「はい」

「こちらの小瓶は？」

ファンデーション

「これは化粧水と、白粉、紅でございます」

「おおっ！」

飛びつくように驚いたのだが、ピタリとその動きが止まった。

「なにか？」

「喜ぶのは早い、そなたいったい何が望みじゃ？」

「ちょっとお城の裏庭を貸していただけたらと」

「はあ——あの鉄の箱に乗っている連中を、庭で野営させようと
言うのじゃろ？」

「お察しのとおりで」

「解らいでか！　そなた、以前もそのようなことをやっておったし
の！」

俺は彼女に近づこうとしたのだが、騎士団に囲まれた。

すぐさま反応したアマランサスが俺の前に立つと、騎士団が気圧
されジリジリと下がり始めた。

彼らはアマランサスの恐ろしさを知っているからだ。

「よい、騎士団は下がれ」

不満げな騎士団が下がると小声で囁いた。

「国と王家にも関係する、重要なご報告があります」

「まことか？」

「はい」

「聖騎士様は、嘘を申しておらぬ」

「ふん、王族籍を捨てて、奴隷に落ちた女の言葉など聞こえん……
の……う」

アルストロメリアの顔が、徐々に青くなってガタガタと震え始め
た。

アマランサスが威圧しているからだ。

「はいはいアマランサス、ちょっと話がややこしくなるから」

「妾と聖騎士様がおれば、城ごと粉碎してここを我らの居城にでき
ますわえ？」

「そんなことをするつもりはないよ。アルストロメリア様、お時間
を少々いただけますかねえ？」

「……やむを得ん。誰かある！」

「はい、アルストロメリア様」

メイドが1人やってきた。

栗色のウエーブヘアをしてメガネをかけている、見たことがないメイドさんだ。

「午後の予定は全て取りやめじゃ」

「はい」

「ケンイチ！ さっきのチョコはまだあるのか？」

「ありますよ」

「謁見の予定があった貴族どもに、土産を持たせてやれ」

「かしこまりました」

メイドが俺をじゅっと見ている。

余計な仕事を増やしやがって——という抗議であろうか。

他の理由を考えるならば、マイレンを筆頭にしてお城のメイドを大量に引き抜いたことに対する抗議であろうか。

俺は追加でチョコを購入した。

貴族用には、立派な箱に入った高級チョコ。

それとは別に、透明な袋に入った一山いくらのお徳用チョコを買った。

「綺麗な箱は貴族の方々へ、こっちのはメイドたちで食べてくれ。

仕事を増やして済まないな」

「……」

「毒味とかいいんですかね？」

メイドが黙ってチョコを受け取ると、お城の中に戻っていった。

「そなたがそんなことをするとは思えぬ。だいたい、そなたたちの戦力を以ってすれば、毒などを使わずとも、この城を制圧できるのじゃろ？」

「まあ、はは」

「それに、エルフまでおるではないか！」

アルストロメリアは、テーブルでお菓子を食べているエルフたちに気がついたようだ。

見ればひと目で解るか。

「いますよ。そのための辺境伯ですし」

「よくもまあ、あの偏屈な連中を手懷けたものじゃのう」

「お褒めいただき、ありがとうございます」

「別に褒めてはおらぬが、やつらの言葉は解るのか？」

もうしかたなく、俺の願いを聞いているのが解る。

「はい、私と竜殺しが解りますし、女性のエルフは我々の使う共通語も話せます」

「ほう……」

「あのー、獣人たちもたくさんいるのですが、大丈夫ですかね？」

「構わぬ」

王族の許可が出たので、裏門からマイクロバスを2台入れた。

中は十分な広さがあり、90人以上いても平気だ。

バスが停車するとワイワイと人が降り始めた。

ベルとカゲも飛び降りて、裏庭にある花壇の辺りをクンカクンカしている。

「いいかー、ここはお城の中だからな。ここから動かないように」

「「へーい！」」

マサキがやってきた。

「あ、あの！　ここは王様がいるお城なんですよね？」

「そうぞ」

「大丈夫なですか？」

「ここから動かなければ大丈夫だ。ウロウロすると間諜だとか言われるから、ここで飯食って寝るだけにしろよ」

「わ、解りました」

「おゝい、お母さんもあちこち行かないでくれよ」

「にゃー」

解っているんだろうな。

「凄い……」

アオイがその場でぐるぐると回って、辺りを見ている。

目が回らないのだろうか？

ここには敵もないし彼の耳も鼻も出番がない。

お城の裏口のある部分、壁がえぐれて通路になり、たくさんの柱が並ぶ。

そこに俺たちを見張るように騎士団の連中が10人ほど並んでいる。

俺はそこに行くと、騎士の1人にチョコを差し出した。

「お前たちも食わないか？」

「任務中ですので」

「以前、ミレットーだったかな？ 女騎士がいたと思ったが」

「彼女は配置換えになりました」

そこにアルストロメリアから声がかかる。

「ケンイチ！ その報告というのを、さっさとせい！」

「あゝはいはい」

俺は彼女の所に行くと白いテーブルと椅子を出した。

ガラスのティーカップを購入して並べる。

クリスタルカットされていて、方向によってキラキラと輝く。

透明なガラスで作った、こういうカップはこの世界にはないだろ

う。

テーブルに座る2人を、俺の家族は遠くから眺めている。

「ほう！ 見事なものだな」

彼女はガラスのカップを持つと、日に掲げた。

そのカップのために紅茶も淹れようと思ったのだが、面倒なのでペットボトルに入った紅茶を買う。

「私が普段飲んでいる常温のもので、味はイマイチかもしれませんが」

「たまに不味いものを飲んでみるのも一興だろうて」

彼女がガラスのカップに注がれた紅茶を飲んだ。

「ふむ、そんなには悪くない。喉が乾いたときなどには、これでいいかもしれん」

ご機嫌を取るためにケーキも買おう。

シャングリ・ラを検索する。

個人的にタルトが好きなので、どうも目がタルトにいつてしまう。俺も食いたいののでイチゴタルトにした。

「ポチッとな」

箱に入ったホールのタルトが落ちてくる。

茶色の生地の上には真っ赤なイチゴが花のように乗っている。

「ほう！ これは美しい！」

「切り分けますよ」

白い皿と包丁を出して切り分ける。

「もっと大きく切るがよい！」

彼女が指示したのはホールの1／4。

マジで？ 俺は1／8にした。

「うむ！ 美味である！ この口の中に広がる甘味と酸味！」

「お口に合ったようで、安心しました」

アルストロメリアがこちらをじゅつと見ている。

「なにか？」

「そなたがサンバクを引き抜いたせいで、宮廷料理も茶菓子もかなり水準が落ちたぞ？」

「私が引き抜いたのではありません。サンバクが私についてきたのです」

「同じことである！」

「申し訳ございません」

俺は頭を下げた。

「まあよい——それで？！ あの者たちは？！」

「さて、どこから話しているのか……？」

「そんなに複雑な話なのか？」

「はい」

「どこからでもいいので、話してみるがよい」

俺は、彼らが共和国の住民だということを、アルストロメリアに話した。

「なにっ!？」

彼女の反応に護衛をしている騎士団がざわつく。

それを彼女が手で止めた。

「彼らを共和国から連れてきたんです」

「いったいどうやったのじゃ？」

急に顔を突き合わせて、ひそひそ話になる。

「あの鉄の箱に乗せて……」

「そうではない！」

「えーとですねえ——私の領地に広大な台地がありますでしょ？」

「アゲラタム高地じゃな」

「そこを測量していたら遺跡を見つけまして」

「ほう……」

オダマキに行く転移門のことは秘密だ。

「その遺跡にいた魔物を倒しつつ、最下層に降りたんです」

「ダンジョンになっていたのか？」

「まあ、そんな感じですよ。そして、その下にはリッチがいます」

「リッチ?!」

アルストロメリアが立ち上がったので、再び騎士団がざわめく。

彼女が騎士団を制すと、ゆっくりと座った。

「それでどうした？」

「リッチを倒したのですが、そこで転移門の罠に巻き込まれて

……」

「は?!」

彼女が口を開ける。

固まる姿が中々かわいい——いや、そうではない。

「転移門ですよ転移門」

「なんじゃと！」

再びアルストロメリアが立ち上がった。

「落ち着いてください」

「落ち落ち、これが落ち着いていられるか?!」

「その転移門で山脈の向こうの共和国まで飛ばされて、命からがら

戻ってきたんですよ」

「はく転移門など、神話に出てくる失われた技術じゃぞ？」
彼女がストンと座った。

「嘘だと思ふなら、アマランサスに聞いて下さい」
彼女がアマランサスのほうをチラ見した。

「必要ない。しかし、そのようなことが……」

「本当です。それで、死にそうだった村人たちをあの鉄の箱に乘せて、艱難辛苦の果てに王都までたどり着いたんです」

彼女は椅子にもたれかかり、空を見ている。

「その転移門とやらで帰れたのではないのか？」

「いえ、飛ばされた先の転移門は壊れておりまして、一方通行でした」

「はくなるほどのう……それは理解したが、これは外交問題に発展する恐れが……」

「それは大丈夫です」

「なんじゃと？」

「目撃者はいませんから、村人が逃亡していなくなったただけだと処理されるでしょう」

アルストロメリアに共和国の惨状を説明する。

「共和国は、そのような状態になっておるのか」

「勝手なことをいたしまして申し訳ございません。しかし、彼らの惨状を目の当たりにすると、放ってはおけず……」

「うむむ……」

彼女は眉をひそめ、渋い顔をしている。

一步、政を間違えれば、王国とて同じことになるので、当然だ。

「ほとんどの村や都市で飢餓が続出して、食人まで行われているとか」

「なに?!」

「彼らからの情報です」

俺は村人たちを指した。

なにを話しているのだろうと、彼らが心配そうにこちらを見ている。

「ふむ」

「それに住民を連れてきたのがバレたとしても、峠は完全に崩落してしまっているの、抗議のためにこちらに来ることは不可能です」

「そなたたちが越えてきたのにか？」

「私が大型のアイテムBOXを持っているのをご存知だと思いますが？」

「うむ、食料や物資などを大量に持ち運べるというわけか……」

アルストロメリアがタルトを口に放り込むと、なにかを考え込んでいる。

「そのとおり——それゆえ峠を越えられたのです。実際、山崩れに巻き込まれまして、あの鉄の魔獣を1頭犠牲にしまいました」

「よく死ななかったの？」

「まあ、死んだと思いましたけどね、はは」

今考えても、走馬灯が回りまぐりのイベントばかりだ。

思い出しても肝が冷える。

生きているのは、凄い能力を持っている家族と仲間がいるからだ。アイテムBOXからスケッチブックを出して、今までの経路を説明する。

「なるほどのう。その転移門を使えば、共和国までひとつ飛びというわけか」

「魔法陣を稼働するためには大量の魔力が必要なので、簡単にはいきませんが」

「そうじゃろうのう……」

上手く丸め込めたようだ。

「それに、もう一つ重大なお話が……」

「まだあるのか？」

「西の都市、セジーナがありますよね」

「シラー伯爵領じゃな」

「昔の砦の名残があるのはご存知でしょう」

「ああ、あるのう。伯爵の話では形骸化しているので、もう稼働していないということじゃったが」

「その砦の向こうで、広大な隠し畑を見つけまして」

「なんじゃと!？」

再びアルストロメリアが立ち上がった。

「アマランサスも知らないと言っていたので、アルストロメリア様も当然……」

「知らぬ。そのような場所を開墾していたと、届け出を受けておらぬしな」

開墾数年は税金が免除されるが、それを過ぎたらそれに応じた税を納めなければならない。

彼女がアマランサスを手招きした。

「なんじゃ？」

アマランサスは奴隷の身分なので、こんな口の利きかたをしたら手打ちものなのだが、この国に彼女にそんなことをできる者がいない。

「シラー伯爵領で、広大な隠し畑を見つけたというのは本当か？」
「うむ、あそこは届け出されておらぬはず。妾の視察のときも、砦の先にはなにもないと説明を受けて追い返された」

「シラー伯爵は反王家派らしいので、その勢力の資金源になっているのでは？」

一応、俺が撮った写真と動画を見せた。

「私が魔道具を使って保存した絵です。ここが砦で——広大な畑が広がっているのが見えるでしょう？」

アルストロメリアがじゅっと動画を見つめている。

「クソ、あのバツフエめ」
タヌキ

アルストロメリアが親指の爪を噛んだ。

「以上です」

「あいわかった！ はるばる、ご苦労だったな！」

「それでは、裏庭を使っても？」

「構わん」

「明日の朝には発ちますので、それまでお借りいたします」

「うむ」

彼女が騎士団のところに行くと、黒い制服が集まってきた。

「アルストロメリア様」

「全騎士団の準備をさせろ！ 非常勤の魔導師もじゃ！ 妾は円卓

会議の爺どもを集める」

彼女が右手を掲げた。

本当に国王陛下は飾りになっちゃってるんだなあ……。

いいのかなあ。

その元凶が俺にもあるのだが。

「「ははっ！」」

「会議のあと作戦を伝えるゆえ、それまで待機。それから、あの者たちを監視する必要はない」

アルストロメリアが俺たちを指した。

「承知いたしました」

「準備急げよ！」

「直ちに！」

バラバラと騎士団の連中が散っていく。

俺の言葉だけなら簡単には信じなかったかもしれないが、元王族のアマランサスの証言もあるとなれば、話は別だ。

「ええ？ まさか一戦交えるつもりか？」

「武力を伴った取り調べですわえ。相手が抵抗する可能性があるゆえ、最初から兵力を集めて対処いたします」

「時間をかけると証拠隠滅もあるし、相手に色々と手を打たれる可能性があるか」

「妾たちが伯爵邸を訪れたので、もう手を打っているかもしれないせぬ」

「手を打つといっても、あの広大な土地をなかったことにはできないだろうしなあ」

「徹底抗戦に備えて、すでに守りを固めておるかもしれませんぬ」

「最初から大きな戦力で向かえば、相手が戦意喪失するかもしれないし。結果的に犠牲者も少なくて済むか……」

「そのとおりですわえ」

「その前に、伯爵の手の者が俺たちを追ってきているとすれば、途中で接触するかも」

「ありえますわえ」

俺は残ったタルトだけ持って、茶器とテーブルと椅子をアイテムBOXに収納した。

「やったあ！」

俺が持っていたタルトが突然奪われた。

誰かと思ったらセテラだ。

彼女は皿ごとホールのタルトを持って逃げてしまった。

「「……」」

咄嗟のできごとに、皆が固まっている。

「BBAあ！」

真っ赤なタルトを食えるかと目をきらめかせていたアネモネが、目の前から獲物を取られて憤慨している。

「はいはい、そういう言葉遣いをしないの」

コンテナハウスを出すと、追加でタルトを購入。

うちの家族には、その中で食べてもらう。

村人たちとの食事格差が、どうにも気になってしまいがやむを得ん。

「やったにゃ！」「やったぜ」

獣人たちも甘いものは楽しみにしているらしい。

家族がおやつタイムをしている間に、キャンプの準備をしている村人たちの所に向かう。

準備はいつもと一緒だが、ここは外敵に襲われる心配が一切ない。

この国の中で一番安全な場所といえる。

まあ、俺のことを快く思っていない連中が、暗殺にやってきたりはするかもしれないので、一応警戒はしている。

獣人たちがたくさんいるし、森猫たちもいるので、敵意がある者の接近にはすぐに気がつくだろう。

安全な場所なのだが、逆に気を使うこともある。
トイレの場所だ。

森の中とか道端なら、そこら辺でもOKなのだが、ここでは
そうもいかない。

ちょっと離れた場所にユ○ボを出す――久々の出番だ。

穴を掘ってブルーシートを入れると、そこにプラケースを置く。
板を渡してスチール製の小屋をかぶせる。

簡易トイレの完成だ。

出発するときに全部アイテムBOXに入れてから埋め戻せばいい。
排泄物は、アイテムBOXのゴミ箱に投入。

手も汚れない。

アイテムBOX様様である。

人数が多いので同じものを2つ作った。

俺たちはのんびりだが、お城の中は騒々しい。

バタバタと人と物資が集まってくる。

俺のバスは、ほぼ1日で走破してしまったが、普通の騎兵や馬車
が移動できる距離は1日で数十km。

伯爵領まで5〜7日はかかる。

その分の食料や物資などを、急遽用意しなくてはならない。

「おそらく商人どもは、今日は徹夜になるはずですわえ」

「それじゃ、マロウ商会も駆り出されるんだろうか？」

「間違いありませんわえ」

お城の皆が忙しそうにしているので、俺たちが邪魔になるんじゃないかと少々心配。

なるべく壁際の隅っこに移動したが、大丈夫のようだ。

このままシラー伯爵領まで付き合えとか言われたらどうしようか
と思ったのだが、そんなことはなかった。

俺がたくさんの難民を連れていることに配慮してくれたらしい。王族の心遣いもあるのだが、俺にあまり借りを作りたくないのだろう。

ハマダ領が力をつけすぎるのもよくない。

現在でも、国軍にも負けず劣らずの戦力を所持しているのだから。

空はちよつと日が傾き始めた。

夕飯の準備をしながらアマランサスに尋ねる。

「アマランサス、伯爵領の戦力ってどのぐらいなんだ？」

「子飼いの貴族を集めても、おそらくは500騎ほどでしょう。民を徴兵する時間はないと思われますわえ」

「それだと、王家は数千の騎兵を用意するのか」

「定石だとそうなりますわえ」

「そりゃ金がかかって大変だ」

「しかし見過ごすわけにはまいりません」

「そうだなあ」

片がつけば、今までの未納の税金のかたに、私財などがボツシュートされる。

戦費はそれで賄えるか。

まあ、崩れて閉鎖された峠を通過して誰かやってくるなんて、伯爵は想像できなかっただろう。

運が悪かったな。

それはさておき、夕飯だ。

「なにを食う」

「カレーにゃ！」「カレーだな」

いや、獣人たちはそれでいいだろうが……。

途中で拾った子どもたちもカレーでいいいらしいので、カレーを鍋

で作る。

「にゃー」「みゃ」

森猫たちが戻ってきたので、一足早くネコ缶をやった。

皆で野菜と芋の皮を剥いてもらうと、鍋に煮込む。
あとはカレールーを入れれば完成なので、簡単だ。

「さて、俺たちはどうする？」

「はいはい、リクエスト」

アキラが手を挙げた。

珍しい。

「スパゲッティ」

「スパゲッティか。それならエルフたちも食えるな」

「だろ？」

パスタじゃなくて、スパゲッティところがオッサンだ。

「なにスパゲッティする？」

「スパゲッティといえば、ナポリタンやろ」

「やっぱり、そうなるか」

オッサンでスパゲッティといえば、ケチャップを使ったナポリタン。
ン。

「エルフがいるので、肉なしになるがいいか？」

「合点承知の助！」

時代劇に出てくるけど、合点承知の助の語源はなんだろうなあ。
そんなことを考えつつ、アキラには寸胴でシヤングリ・ラで買ったスパゲッティを茹でてもらう。

生パスタなどではなくて、一山いくらの乾燥麺だ。

俺はデカイフライパンで刻んだにんにくを炒め、ケチャップを大量に投入する。

そいつを焦げ付かないように、じっくりと炒めていく。

こうやって炒めることで、ケチャップに入っている酢を飛ばすのだ。

そうすると、甘くて美味しいスパゲッティができる。

「今日のは赤いけどお？ 血とか内臓じゃないよねえ？」

セテラがケチャップソースを覗き込んでいる。

「違う、果実を潰したものだ」

トマトは野菜なのか果実なのか、日本じゃ野菜ってことになっているが、色的には果実っぽいのでそうした。

「へえ」

最後に茹で上がった麺とケチャップソースを絡めれば完成。

「お？！ 甘くて美味しい！」

一口食ったアキラが声をあげた。

「ふふふ、ナポリタンにはちょっと自信があるからな」

「びっくらたまげた門左衛門！」

オッサンしか知らないネタを。

「今日のはスープに浸ってないのねえ？」

「旦那たちが、また虫を喰っているぜ」「虫にゃ！」

「虫じゃないっての」

まあ、ラーメンより麺が太いので管虫っぽく見えないこともない。

「美味しいかもお」「美味しいね」

2人のエルフが声をあげた。

「はぐはぐ！」

アネモネが口の周りを真っ赤にして食っている。

「ほう、これは単純だが美味しいのう……」

元王族も納得する美味さ。

スパゲッティにケチャップを使うと、エタリア人がブチ切れるが、これが日本の味よ。

「簡単に美味いってのは男の料理の基本だからな」

食事が終わると、コンテナハウスを出してアネモネと一緒に寝る。
森猫たちも一緒だ。

「ん、やっとケンイチと2人」

アネモネがベッドの上で、俺にくっついて離れない。
そこに森猫たちもやってくる。

明日出発して、上手くいけばサクラの近くまで行けるぞ。
やっただ。

リリスやプリムラは心配しているんだろうなあ。
早く無事な顔を見せてやらなくては。

270話 街道をひた走る

王都に到着した俺達は、お城を訪れてアルストロメリア様に面会。共和国に行ってしまったことを報告した。

最初はスルーするつもりだったが、シラー伯爵領の隠し畑などを見つけてしまつては、報告しないわけにはいかないだろう。

報告を受けたアルストロメリア様は、騎士団を出して伯爵領に圧力を加えるつもりだ。

隠し畑で私腹を肥やし、軍備などを強化していれば、反逆と言われても仕方ない。

以前に、反王家派に誘われたこともあったが、無視してよかった。まあ、アマランサスがいるのに、王家と対立なんてできるはずがないが。

共和国からの難民と一緒に、お城の裏庭でキャンプをする。こんな場所で1泊するなんて、俺たちぐらいのものだろう。アルストロメリア様の懐の深さに感謝といったところか。色々とお土産を持ってきたかいがあったのかもしれないが。

——お城の裏庭で1泊して、朝起きる。皆でワイワイと朝食だ。

裏庭は広いので十分なスペースがあるし、薪などの物資もまだ残っている。

途中の森などで拾ったりしたのがよかった。

お城は相変わらず騒がしくて、騎士団の出発のための裏方をして

いる者たちは徹夜をしたようだ。

今も裏門から馬車が入ってきている。

うちの家族の食事は、いつものようにグラノーラだ。
森猫たちにもネコ缶をあげて、黒い毛皮をなでる。

「お母さん、やっとサクラに帰れるよ」

「にゃー」「みゃ」

森猫たちは、俺と一緒にならどこでもいいみたいで、特にサクラに愛着があるというわけでもないらしい。

定住しないでいつも森の中をさまよっていたせいであろうか。

朝食が終わったら出発の準備に入る。

荷物をコンテナハウスに入れて俺のアイテムBOXに収納した。

コンテナハウスと入れ替わりにマイクロバスを召喚。

アキラと一緒にバイオディーゼル燃料を補給した。

「燃料も持ちそうだな」

アキラがバスの周りを見ている。

「いつも余分に作っておいてよかった」

「備えあれば憂いなしってか」

「そうだな。今日中にアストランティアの近く——いや、もしかして無理をすればサクラに到着できるかもしれない」

「まあ、あんまり無理をする必要もないんじゃない？」

「そうだな。事故でも起こしたら大変だし」

「高名の本登りよ」

多分、走り続ければ真夜中に到着できたりはするが、やっぱり危険か。

燃料を入れ終わると村人たちに告げる。

「朝の用を足すなら今のうちだぞ？　またしばらくは街の中を走るので、降ろすことができないからな」

ワイワイと、トイレが順番待ちになる。

100人近くいるのに、2箇所しかないので仕方ない。

いざとなれば、シャングリ・ラに売っている簡易のトイレキットでも使うしかないか。

まあ、街を抜ければ、男なら道端で立ちションもできるしな。

用足が終わったら、小屋と汚槽をアイテムBOXに入れて、ゴミ箱に投入すれば手も汚れない。

そのあとはユ○ボで穴を埋め戻せば終了。

地面にカタピラの跡がついてしまったので、獣人たちにシャベルで消してもらおう。

「よっしゃ、これで出発準備できたな。皆、乗り込め」

「「へーい！」」

この旅にも慣れたのか、村人が次々と車に乗り込んでいく。

獣人たちは後ろにハシゴがあるのに、屋根のキャリアに飛び乗ったりしている。

子どもたちを荷物のように掲げて、ひよいひよいと屋根に乗せていく。

もう手慣れたものだが、この旅もあと1～2日だ。

出発の準備をしていると、金色の髪を結ったアルストロメリアがやってきた。

初めて見たのだが青いワンピースの上から銀色の甲冑を着込む。

レリーフが彫られてピカピカの甲冑だが、装甲の厚みはないようでペラペラに見える。

飾りみたいなのだろうか。

腰には細い剣も装備していて勇ましい。

「これはアルストロメリア様おはようございます。随分と勇ましい恰好でございますね」

「世辞はいらぬ」

「そんなことはありません。とても似合っておいですが、まさか前線に立たれるのでしょうか？」

「あの爺どもでは役に立たぬであろ！」

爺つてのは円卓会議の面々のことだ。

確かに、年寄りには少々きつい仕事だろう。

「もう準備はお済みになったのですか？」

「昼前には出立したいと思っておるので、急がせておる」

「物資の供給をしている商人たちも大変だ」

「そなたが懇意にしておる、マロウ商会も加わっておるぞ」

「まあ、すでに王都でも大店になりつつありますから、当然でしょう」

「そなた、マロウ商会に洞窟蜘蛛とカメを持ち込んだそうだな」

「いえ、持ち込んだのは彼です」

俺は帝国の竜殺しを指した。

「フヒヒ、サーセン」

「どうやらマロウが王家にも洞窟蜘蛛で鎧を作らないか、持ちかけたらしい。」

「王家も買うとなれば、値段を釣り上げることができるからな。さすが大商人。」

「洞窟蜘蛛の鎧は軽くて丈夫らしいですよ。女性が装備するにも適しているのでは？」

「ふん、マロウにも同じようなことを言われたわ」

今回のように前線に立つことを考えると、見るからに華奢な彼女には必要なのではと思ってしまう。

アマランサスなら必要ないだろうが、彼女は見るからに普通の女性だ。

さて、帰りの挨拶を済ませると俺たちは帰路につくことにした。もしかしたら、アルストロメリアは俺たちも軍勢に加わってほしいのかもしれないが、あいにく多数の難民を連れている。

彼女もそれを察してくれたのだろう。
まあ、シラー伯爵領がどんなに私腹を肥やしていたとしても、国軍の騎士団を超える戦力は持っていない。

そのあと出発しようとしたのだが……。

裏門の石橋に馬車が詰まっていて身動きが取れない。

食事をしたときには石橋の上もクリアだったので、そのまま車を用意してしまったのだが、どうやら渋滞が始まってしまったらしい。

石橋は狭く、バスがすれ違うスペースがない。

馬車が2台ならなんとかなるのかもしれないが、この世界のものではないバスに合わせては作られていないのだから当然。

「ケンイチ、どうするの？」

アネモネが馬車の列を見ている。

「仕方ない」

俺は無線機のマイクを取った。

「アキラ、石橋の上が渋滞で動けなくなってる。徒歩で渡る」

『はは、しゃーねえ』

彼も苦笑いをしている。

「マサキ、せっかく乗ってもらって悪いが石橋の上が一杯で通れない。一旦降りて歩いて渡る」

「解りました」

「しょうがないにゃー!」「でも、詰まってるんじゃないかなぜ?」

「こりゃ、街を出るのにも時間がかかるかもねえ」

エルフが呆れるように伸びをしているが、騎士団が移動を始めたら、さらに時間がかかるかも。

今のうちに街を出ないと増々遅くなってしまう。

マサキが村人たちに指示を出す。

村人たちが降り始めたので、屋根にいる獣人たちも困惑しているようだ。

「おい、どうしたんでえ?」

「石橋の上で馬車が詰まっているから、歩いて渡るそうだ」

村人と獣人の会話が聞こえてくる。

窓を開けて、上にいるナンテンに話しかけた。

「ナンテン、子どもたちも降ろしてやってくれ」

「解ったよ旦那」

皆が降りたのを確認すると、2台のバスをアイテムBOXに収納した。

「はーい、2列に並んで、馬車や作業をしている人の邪魔にならないようにな」

「「へーい」「」」

「朝は空いていたのにな」

アキラもそう思っていたらしい。

「突然、混み始めたな。朝の納品が重なったんだろうか」
村の子どもたちは大人たちと手をつなぎ石橋の上を渡り、途中で拾った孤児たちは子供同士で手をつないでいる。
石橋の上には納品待ちの馬車が並んでいるが、人が通るスペースぐらいはある。

「獣人だ――なぜお城に」「おい！ あれはエルフか?!」「初めて見た……」「森猫もいるぞ?!」
あちこちから色々な声が聞こえていたのだが、1人の男が俺の所にやって来た。

黒い帽子と黒いベストを着た中年の男である。

「おい！ その森猫を売ってくれないか!?!」
石橋の上の馬車の列に並んでいるということは、この男も商人なのだろう。

「森猫は家族なので、金では売れないな」
「そこをどうにかならないか？ こんな見事な森猫は見たことがない!」

「その者！ ハマダ辺境伯様に無礼であろう!」
俺の横にきたアマランサスの一喝に、辺りがどよめく。

「え?! 貴族様!?!」「辺境伯?」
「はは、貴族に見えないかもしれないが、ハマダ辺境伯だ」
俺の言葉を聞いた商人が、後ろに跳んで腰を90度に折った。

「知らぬこととはいえ、ご無礼をいたしました!」
「構わん。でも、森猫は家族なので売れないな」
「ははっ! 申し訳ございません」
普通の人間からすると、森猫は獣でしかないからなあ。

騒ぎも収まり、村人たちが橋の上を渡っていたのだが――。

「めんどくせえ！ よっと！」

1人の獣人がそう叫ぶと、橋の欄干に飛び乗った。

「おいおい」

「俺はこっちから行くぜ」

男が欄干の上を走り始めた。

地面の上を走るがごとく、まるで自然でブレることもない。

「それってありかよ！」 「それじゃ俺っちも行くぜ！」 「俺も」

獣人たちが次から次へと、欄干の上を走り始めた。

「落ちるなよ」

「わはは、そんなことありえませんか！」

俺の言葉にも、獣人たちはひよいひよいと欄干の上を渡り終えた。

「ええ？ それってあり？ それじゃ私も」

獣人たちに続いたのはエルフたちだ。

彼女たちのバランス感覚や身体能力も、人間には真似ができないほどすばらしい。

あつという間に渡り終えると、獣人たちと一緒に手を振っている。

皆が石橋を渡り終えたので、人のいない場所を探すのだが、馬車の列は橋の向こうまで続いていた。

アルストロメリア様は早々に出立したいと言っていたが、これはちよつと無理なのでは？

馬車の列と人を避けて左に曲がり路地に入ると、真っ暗な日の当たらない路地。

バスが出せそうな幅があったので、そこで出すことにした。

ここなら目立つこともないだろう。

「よし、バス召喚」

俺のマイクロバスが路地に姿を現した。

幅がぎりぎりといった感じだが、バスのドアなら外側に開くことはないので、乗り込むスペースはある。

「なんとかなりそうだな」

続いて後ろにいくと、アキラのバスもアイテムBOXから出した。

「おお、ぎりぎりだな」

アキラがやって来たが、俺と同じことを考えていたようだ。

「人が多い街で、アイテムBOXから大物を出すのは大変だ」

「まず、人やものがないスペースを探すのが難しいからな」

その点、人が少なく十分なスペースがあるお城の裏庭ってのは、最適な場所だったのだが、仕方ない。

用意ができたので、俺とアキラはマイクロバスに村人たちを乗せはじめた。

「さく乗ってくれくなん回も乗り降りさせて、すまん」

「いいえ、滅相もございません」

「よっと！」

獣人の1人が、建物の壁を使つての三角飛びで、バスの屋根に掴まった。

それを見た他の獣人たちも真似をし始めると、ぴょんぴょんと曲芸のように次から次へとジャンプが始まる。

すげー身体能力。

これだけ見ても格闘戦では獣人にかなわないのがよく解る。

皆が、バスに乗りこんだようだ。

「マサキ、全員いるか？」

バスの運転席につくと、後ろを見て確認する。

「大丈夫です」

「おいナンテン、上にいる連中はみんなそろっているか？」

「いるよ、旦那」

無線のマイクを取る。

「アキラ、そっちはどうだ？」

『オッケー』

「オッケーにゃ！」

「おっしや、それじゃ発進！」

ウインカーを左に出すと、バスを発進させた。

異世界でウインカーを出す必要はないのだが、後ろにいるアキラのためだ。

無線機で意思疎通しなくても、ウインカーやハザードだけで、それができる。

共通の価値観を持つってのはかなり重要なことなのだ。

そのために国は、民を支配するのに教育や宗教を使ったりする。

逆に確固たる共通の価値観があれば、敵にも支配されにくいってわけだ。

人類の歴史が開闢して、元世界でも数千年たっても、多種多様な言語や宗教がなくならないのは、そのせいもあるのだろう。

アマランサスの案内で、バスの列は迷路のような王都の道を進む。人は多い、馬車も多い、ドライジーネはウロウロ——交通法規はゼロ。

めっちゃ神経を使う。

どこから人が出てくるか解らんし、走っているとドライジーネが近づいてきて、バスの側板をバシバシ叩いたりする。
もう勘弁してくれ。

「早く街から出てええ」
無線機のマイクを取る。

「アキラ、大丈夫か？ 気をつけてくれよ」
『解っちゃいるが——ゴラァ！ 近づいてくるんじゃねえぞ！』
スピーカーからアキラの怒鳴り声が聞こえてきた。

今日は南に抜けるので、マロウ商会の前は通らない。
それから1時間ほどかけて、迷路の街を抜けたのだが、まだ人と馬車は多い。

「よっしゃ！ これでまっすぐサクラだ！ ふう！」

「うにゃー！ 共和国から長かったにゃ！」 「あんな森の奥地から帰ってこれるなんてさすが旦那だぜ」

「共和国に飛ばされたのはちょっと困ったが、前人未踏の地の果てとかじゃなくてよかったよ」

まったく人がいない場所だったら、現在位置すら解らなかつただろうしな。

共和国でも、エルフたちと接触できたのが大きかった。

エルフもいなければ、無理矢理でも川を下り、人のいる場所をさがす——そんな大冒険になったに違いない。

俺たちは川〇浩探検隊じゃねえんだ。

そんなのは御免被りたい。

それでもアイテムBOXとシャングリ・ラがあれば、なんとかな

りそうだけどな。

大昔、地球の隅々まで探検していた者たちにもこの能力があったら、さぞかし仕事がかどったことだろう。

大昔の探検家と自分を重ね合わせていると、サクラへ続く街道が見えてきた。

「ここは以前にも通ったから、知った道だな。これだけでも帰ってきたって気分になるよ」

「やったにゃー！」「けど、旦那。この先の橋って落ちてなかったっけ？」

そういえばニャメナの言うとおりだ。

「一応、流通は再開しているようだし、まだ仮橋だろうけどなんとかなるだろう」

「この街道は、王都にとっても大動脈。手を打っているはずですよ」

アマランサスは政治の中枢にいた人間。

彼女がそう言うなら間違いないだろうが、この世界は手作業が中心で時間がかかる。

「ケンイチ！」

「なんだい？ アネモネ」

「家に帰ったらなにをしたい？」

「まずは、リリスとプリムラに謝らないとなあ」

「ぷー、そうじゃなくて」

アネモネが、なぜかほっぺたを膨らませている。

「え？ とりあえずゆっくりしたいが、村人たちの村を作らないと駄目だし。やることが山盛りだよ」

「ケンイチは少し休んだほうがいいと思うけど……」

「まあ、祝福の力があるから疲れたりしないし」

「うん……」

「彼らのまず住む所を作らないと、生活ができない。アネモネにも手伝ってもらうから」

「解った」

「ちびっこには、大人の世界は無理よねえ」

話を聞いていたセテラが、アネモネをからかう。

「ちびっこじゃないし」

「喧嘩しない」

「ぷー」

すねているアネモネだが、やはり家が近くなっているのが嬉しいのだろう。

表情が明るい。

俺が作った家を滝の傍に置いた、あそこが故郷になっているんだよね——と実感する。

街道を進み、馬車や人がまばらになってくるとバスのスピードを上げた。

時速40km、場所によっては50kmぐらいの速度が出ている。

王都とアストランティアの間は400kmちよつとなので、10時間もあれば到着できる。

もちろん途中で休んだり食事もあるのでやっぱり、無理をせずに途中で1泊したほうがいいか。

元世界の常識で考えてしまうのでは危険だ。

そのまま3時間ほど走ると、大きな都市であるイベリスの手前——川にかかった橋が見えてきた。

以前、大雨で増水して橋が流されてしまった場所だが、あるとき

に見た景色とまったく違っている。
なにもない場所に橋だけが架かっていたのに、小さな町ができて
いるではないか。

後ろの車に連絡を入れる。

「アキラ、橋だ。一旦停止する」

『了解』

バスを停止して近くまで行くと、橋の様子を見る。

石を使った立派な本橋は、未だに建築中であり、左側のちょっと
離れた場所に木造の仮橋が作られていた。

普請の現場では力自慢の獣人たちが多数働いており、作業員の宿
泊施設やら、物資を売る商店、そして娼館。

そこに物資を運び込む商人たち。

本当に新しい町が1つできあがっている。

どこからか切り出して運んできたらしい石を積んだ馬車も沢山並
ぶ。

俺の所にアキラもやって来た。

「これだけの人数を一々運んでいられねえから、ここに町を作った
んだな？」

「そうだろうな。これだけ街ができあがってしまうと、新しい宿場
町としてそのまま残ってしまうかも知れないな」

「ありえる」

アキラと一緒に仮橋のほうを見に行く。

木製の橋で、馬車が1台通るのがやっとの幅。

欄干もないし、馬車が橋から落ちないか心配なのだが……。

橋の近くにいた男に銅貨を渡し、話を聞く。

武器を持っているので、ここを警備している兵士だろう。

どうやら橋は一方通行になっているらしく、1時間ごとに切り変わるようだ。

「橋が狭いけど、落ちたりする馬車はいないのか？」

「はは、たまに落ちるぜ」

「馬って結構臆病だからな、突然なにかに驚いて飛び上がったりするし」

アキラは馬の牧場で働いたことがあるので、そういうのを見たことがあるらしい。

「芝の境目を飛び越えたり、自分の影に驚いたりするのを見たことがあるな」

「そうそう」

橋の下を見ると馬車の残骸が転がっている。

こりや大変だが、この世界の技術力ではそうは簡単に橋を完成させることはできない。

まずは橋桁を設置する所を囲って水を抜き、そこに土台を作る。土台同士をつなぐようにアーチを作ったら、その上に水平な部分に乗せて完成。

テコや滑車を使った原始的なクレーンはあるのだが、それを動かすのは全て人力。

コアモーターなどを使えば、滑車の巻取りなどは自動でできるかもしれない。

それでもかなり作業効率は違うはず。

俺の重機を出せば早いのだが、普請をしている貴族の面子もある。成り上がりの俺が、でしゃばってもいい顔はしないだろう。

本気で俺に頼むつもりなら王家から命令が出ているわけで、それがないってことは、俺が出る必要はないってことだ。

「さて、この橋じゃマイクロバスは無理だな」

「屋根にも乗ってるし、橋が崩壊すると思うぜ、フヒヒ」
皆をバスから降ろして、一方通行が切り替わってもいいように待機しておかないと。

チャンスを逃すと、また1時間待つことになる。
俺とアキラは慌ててバスに戻った。

「おゝい、また降りて歩くぞ。架かっている橋が仮橋なんで、こいつが渡れない」

「「へい」」

皆には悪いが、また降りて歩いてもらう。

「にゃー」

ベルとカゲが散歩に行きたそうだが、ここは人が多い。

一応、飼い主がいるという証はついているが、驚かれると思う。
彼女もそれが解っているのか俺の傍から離れない。

「もう、ケンイチのあれを使えば、橋なんてすぐにできるのに」

「それに、アネモネのゴーレムもな」

「うん」

彼女の頭をなでてやる。

たとえばゴーレムで水も動かせるから、ポンプもなしに水を掻き出したりも可能だろう。

いままでそういう使われかたをしてなかったようだが。

「貴族たちにも華を持たせてやらねばならん」

「アマランサスの言うとおりだ」

「只人ってのは、変な面子にこだわるからねえ」

セテラが、橋に使われている材木の上をぴよんぴよんと飛んでい

る。

「特に貴族様はな、フヒヒ」

アキラはツイツラと手をつないで歩いてラブラブだ。

いいのか？ 今日か明日には、アストランティアに着くんぞぞ？

まあ、自己責任だけどさあ。

「よし、皆固まって歩け」

ぞろぞろと皆で歩くと、橋の所で並んで待つ。

背負子を担いだ、単独の商人も結構いる。

町や小さな村でも渡り歩いて商売をしているのだ。

向こうからたくさんさんの馬車が渡ってきているが、上手く渡れるものだと感心する。

俺たちが並んでいる間にも、村人の列から1人抜け2人抜けして
いる。

多分、雉撃小便ちに行っているのだろう。

男なら立ちションでもいいが、女はそうもいかないよなあ。

30分ほど待っていると、一方通行が切り替わった。

前にいる商人たちについていくと、橋の端を歩いているので、それ
れに続く。

俺たちの横をガラガラと馬車が通り過ぎていく。

下を見ると量は少ないが澄んだ水がキラキラと光を乱反射させて
いる。

その中にはここから落ちた馬車の残骸。

それほど高くはないので、死なないとは思うが――いや、当たり
どころが悪いとなあ。

橋の長さは30mほどなので、数分で渡り終えた。

「ふー、すぐにイベリスだが、そこを抜けてアキメネスの先まで行けるだろうか」

「ケンイチ、ゆっくり行こうぜ。そんなに急いでどこに行く」
昔にそんな交通標語があったのだ。

「まあ、安全第一だ」

橋の反対側にやってきたが、ここにも商人や旅人などが集まっている。

場所がないのでバスを出せない。

少々歩くと開いているスペースを見つけ、コ○スターを出した。

「よし、また乗ってくれー。もう休み以外で降りることはないと思うぞ」

「「へーい」」

皆で乗り込むとメンバーを確認。
全員いる。

「おし、出発！」

バスの列は再び走り出し、大都市のイベリスを抜けて、日が傾く手前にアキメネスを通過できた。

そのまま順調に街道を走り続けて、森の手前でキャンプを張る。

左手には、大きな湖であるカズラ湖の水面。

やはり今日中には到着できそうにないが、明日には確実にアストランティア、サクラには到着できるだろう。

俺たちの先に見える森は、俺が重機を使って用水路を掘った場所だ。

用水路の周りには、すでに農地が作られて村もできている。
仕事があれば人が集まるからな。

晩飯を食い終わると、グラデーションがかかった空に向けて伸びをした。

「明日にはサクラか」

「やっと帰ってきたな」

「いやあ、まさかあんなことになるとは……」

「いや、まったく」

アキラと2人で苦笑い。

波乱万丈の旅も明日で終了だ。

271話 帰郷

共和国から遠路はるばる遠回りをして、アストランティアの手前まで戻ってきた。

俺の領地も、もうすぐだ。

ゆつくりと走っても今日中には到着できる。

俺たちがキャンプしたのは、かつて重機を使って用水路を掘った湖の近く。

森の中は危険なので、手前でキャンプを張った。

——なにごともなく、次の日。

朝飯を食べ終わると、マサキの所にいく。

「マサキ、今日中には到着できる」

「はい！ ありがとうございます！」

「まだまだ感謝するのは早いぞ？ 森を開墾して村を作らないと駄目だからな」

「村人全員で、がんばらせていただきます！」

「まあ、森を切り開くのは俺とアネモネが手伝うから、すぐに終わると思うが」

「す、すぐにですか……？」

俺の言葉に信じられない様子だが、無理もない。

以前に開墾した村の住民も似たような感じだったし。

すべて人力で伐採して、根っこを取って地面を耕して——なんてやっていたら、いつになるか解らんし。

村人たちのコンテナハウスを収納して、バスの準備をしていると、

ベルが散歩から戻ってきた。

朝イチで、カゲと一緒に俺からネコ缶をねだると、すぐに散歩にかけてしまったのだ。

「お母さん、今日中には到着するよ」

「にゃー」

飯を食べ終わった獣人たちも伸びをしている。

「にゃー！ やつと家に帰れるにゃ」 「せっかく旦那から家をもら

ったのに、誰かに取られてねえだろうな」

「リリースがいるんだ、領の政は普段と**まったく**同じだよ」

「だったらいいけどさあ」

「私は、このままケンイチと旅をしてもいいんだけど……」

「妾もじゃ」

アネモネとアマランサスがそんなことを言う。

「家族だけならそれもいいけど、守らないとだめな人がたくさんいるのは大変だよ」

「むふふ！」

「私もお、ケンイチと一緒になら、いいなあ」

セテラが俺の身体に腕を絡めてきた。

「エルフと一緒にだと、俺があつという間に爺さんになって終了だろうが」

「もう生きるの飽きたしい、ケンイチが死んじゃうときに私もいっしょに逝こうかなあ」

「ただの人間の俺に、エルフがなんでこだわるのかが解らん」

「ええ〜いいじゃん〜」

「別にいいけどさ」

俺とエルフの間にアネモネが割り込んだ。

「離れろ」

「なんだよ、ちびっ子」

「ふん、もうすぐおっきくなるし」

むくれるアネモネの頭をなでる。

「まあな。成長期に入ると、本当に1年に一回りぐらいずつ伸びるしな」

俺も第二次性徴期には1年で15cm以上伸びたしな。

本当に子どもから、あっという間に大人になるよなあ。

アネモネもスラリと背が伸びて、スレンダーの美女になると思う。彼女が思春期に入ったら、どうなるんだろうなあ。

俺のことなんてどうでもよくなって、同世代の男の子と仲良くなったりするかもしれないし。

それはそれで、ちょっと寂しいが。

「ケンイチ、こっちはオツケーだぞ」

「アキラ——悪いけどな。アストランティアのレイランさんの所に行きたいだろうが、皆を先にサクラまで乗せていってくれ」

「大丈夫大丈夫、さすがに最後まで面倒みるぜ」

アキラが自分のバスに戻ると、村人たちに囲まれた。

「竜殺し様、道中ありがとうございました」

「はは、いいってことよ」

「竜殺し様、また魔物を倒したときのお話を聞かせて」

彼が子どもたちにも囲まれている。

どうやら、バスに乗っているときに、帝国での彼の活躍を話してやっていたようだ。

コ○スターには室内放送用にマイクも装備されているので、それ

を使ったのだろう。

準備ができたので、村人たちがバスに乗り込んだ。
屋根にあるキャリアにも獣人たちと、子どもたちが乗っていく。
途中で拾った共和国の兵士たちも元気だ。

「旦那の領地ってどんな所なんだい？」

上からナンテンの声がする。

彼女の皮膚病はすっかりよくなったようだ。
毛が生えてきて、元の状態に戻りつつある。

「大きな湖のほとりだぞ。魚もたくさんいる」

「そんな大きな湖に魔物とかいないのかい？」

「皆で退治したから大丈夫だ。森の中も、あまり魔物はいないぞ」

「へえ」

大きな魔物は、近所に住み着いていた洞窟蜘蛛によって、食われてしまったからな。

棚からぼたもちってやつだ。

「ウチらも戦ったにゃ！」 「バカでかい、ウニヨウニヨした化け物だったぞ」

ミヤレーとニヤメナが屋根に乗っている獣人たちに説明をしているが、タコとかイカとか見たことがない者たちに、言葉だけの説明は難しい。

「よし、出発だ。ミヤレーとニヤメナも乗ってくれ」

「にゃ」「よっしゃ！」

森猫たちも乗り込んだ。

エンジンをかけると、後ろのバスにも確認を取る。

「アキラ、大丈夫か？」

『問題なくし！』

「ほんじゃ、出発」

晴天の下、2台のバスはゆっくりと走り始めた。

この街道は、なん回か走っているので道の荒れ具合も把握している。

マイクロバスはすぐに森の中に入った。

この森は短く、すぐに抜けられる。

バスで走るなら10分ほどだろう。

横を見れば、俺がコ〇ツさんで掘った用水路が流れている。

なにごともなく進み、もう少して森が切れる場所まで来ると前から馬車がやってきた。

いつもの光景なので、そのまま通過しようとしたのだが、向こうが手を振っているように見える。

スピードを落とすと、馬車の運転席から女性が降りて走ってくるのが見えた。

「あ！」

フロントガラス越しに見ていたアネモネが気がついた。

俺も女性の正体に気がつくのと、慌ててバスから飛び降りる。

「ケンイチ！」

走ってきた女性が俺に飛び込んできた。

勢いよく突っ込んできたので、思わず後ろに倒れそうになる。

「プリムラ！」

「ケンイチ！ ケンイチイイ！」

馬車に乗ってきたのはプリムラだった。

おそらくは王都に向かうマロウ商会の馬車なのだろう。

一昨日、王都のマロウ商会から伝書鳥を飛ばしたのだが、その手紙を見て、ここまでやってきたに違いない。

「ごめんよプリムラ。心配をかけて」

「うわあああああ！」

必死になだめるのだが、プリムラが泣き止まなくて困っていると、アキラがやって来た。

急に止まったので、なにごとかと思って様子を見に来たのだろう。

「おっと、プリムラさんか」

「アストランティアから、ここまでやって来たらしい」

「王都から、伝書鳩を飛ばしたからな」

鳩じゃないけど。

「うああああん！」

「プリムラ、プリムラ。もうすぐサクラに帰れるから、そこでゆっくりと話そう」

どんなになだめても彼女が俺から離れてくれない。

こりゃ困ったぞ。

「ケンイチ」

ドアからセテラが首を出している。

「どうした？」

「私が運転しようかあ？」

「できるのか？」

「うん、見てて覚えてほしい。アグイルを進む船に比べたら簡単だし」

そりゃ彼女は宇宙を飛ぶ宇宙船がある世界からやってきた宇宙人だ。

船の操縦からすれば車の運転なんてなあ。

「アキラ、ちょっと待っててくれ。セテラに運転を教える」

「運転ができるやつが増えれば、俺たちも楽ができるな。俺もツイッツラに教えてみようかな？」

「知識はないかもしれないが、知能はべらぼうに高いはずだから、いけるかもな」

「だがまあ、人が乗ってないときに教えることにするわ」

「そっちのほうがいいか」

アキラのほうはそれでいいが、こっちはプリムラが離れてくれな
い。

心配かけた手前、無理に引き離せないし。
セテラに任せてみるか。

プリムラが乗ってきた馬車に話を聞くと、やはりマロウ商会の馬
車らしい。

乗っていた男には銀貨を1枚渡し、そのまま王都に向かってもら
うことにした。

プリムラを抱いたまま手を振って馬車を見送る。

「さて――」

俺はプリムラを抱いたままバスに向かう。

「お嬢！」

ニヤメナの問いかけにも、彼女は俺にひつついたまま離れない。

「ケンイチ、ウチらは上に行くにゃ」

「そうか悪いな」

「旦那、いいってことよ」

ミヤレーとニヤメナ、そしてアオイが屋根のキャリアに移った。

「もう、プリムラ！ ケンイチに迷惑かけてる！」
アネモネの言葉にも、プリムラは俺から離れない。

「まあまあ、彼女も俺のことを心配してくれたんだし」
「むー！」

怒るアネモネより、セテラの運転だ。
エルフはすでに運転席に座っていた。

「この丸いので、操舵をするんでしょ？」

「そう。足元の右が速度調節、左が制動」

「そして、このレバーで運転状態の切り替え」

「そうだ。駐車するときは一番上、その次が後退、次に入れると動力の伝達が切れる」

「前に進むときはここねえ？」

セテラがATセクターのDを指した。

あとは大まかな操作を教えると、彼女が手を叩いた。

「これだけ？」

「そう」

「重力の心配とか軌道計算をしなくてもいいのね？」

「地上でそんなもの必要ないのに決まっているだろう」

「はは、こういう冗談も通じるから、ケンイチがいいのよねえ」

「むー！」

エルフと仲良さそうに話していると、アネモネがむくれている。
その間にもプリムラは俺にくっついたまま。

とりあえずエンジンをかけて、前進と後退を繰り返す。

問題ないようだ。

説明したことも一発で覚えている。

確かに、こんな記憶力で5000年も生きていたら、脳みそがオーバーフローするだろう。

昔のことを忘れるってのは、自己防衛のために必要なことなのかもしれない。

無線機で後ろのバスに連絡を入れる。

「アキラ、待たせた。いけるようなので出発する」

『オッケー！』

『アキラ*＆*ハ*＊*＊』

『はは、人のいない所だな』

多分、ツイッツラも車の運転をしてみたいと言っているのかもしれない。

車は普通に走り始めた。

問題もなく、あぶなかつしいところもない。

速度も俺が走っている速度を覚えていたのだろう。

それに合わせて走ってくれているようだ。

本当にエルフはすごい。

改めて思う。

こんなにすごい力があれば、この世界を統べることも可能だろうとは思うのだが、一度は自分たちの世界を破滅に導いた彼らだ。

二の舞いになるまいと、自重しているように思える。

車は進み数時間でアストランティアが見えてきた。

上からミャレーたちの声が聞こえるが、俺達の目的地はあそこではない。

俺はエルフの運転を見ながらバスの床に座っているが、その間にもプリムラは俺に抱きついたまま。

「セテラ、次の道を右に入ってくれ」

「解った」

俺が森をぶち抜いて作ったサクラへの一本道。

土の道で凸凹しているため、慎重に走ってもらう。

ギャップを乗り越えると、バスの車体が大きく揺れる。

「「「おおおっ！」「」」

屋根の上から声が聞こえる。

「大丈夫か？！」

「にゃー！」

獣人たちは耳がいいので、俺の声も聞こえるようだ。

10分ほどで森を抜けると、懐かしい風景が広がっていた。

俺が作ったキットの家を見ると、ここが故郷だと実感できる。

サクラを出てリッチを倒してからだと、半月ぐらいぶりの我が家だ。

車が止まると、俺は真っ先に車から降りた。

当然、プリムラが抱きついたまま。

俺のあとを追って、森猫たちも飛び出す。

「うおお！ やったあ！ 帰ってきたぞお！」

思わず雄叫びを上げる。

「「「おおおっ！」「」」

屋根の上に乗っている獣人たちも、俺に合わせて雄叫びを上げた。

「おお？！ あれが湖？！」 「向こう岸が見えないぞ？」 「海つてやつじゃないのか？！」

サクラの前に広がる湖の大きさに、戸惑う獣人たちの声が聞こえ

てくる。

そこにメイドたちが慌てて走ってきた。

「おかえりなさいませ、ご主人様！」

まっさきに走ってきたのは、メイド長のマイレンだ。

「しばらく留守にしまったな。出迎えご苦労」

「いいえ、領主様の大切なお仕事を支えるのが、我らメイドの務め」
遅れて他のメイドたちが並んだ。

「「「おかえりなさいませ、ご主人様！」」」

「はい、ただいま」

そこに獣人娘3人組と大人のワルターがやってきた。

「あれ？ ケンイチ様、おかえりなさい」「おかえり」 「おかえりなさいませえ」

「ケンイチ様、留守の間、大きな問題はありませんでした」

「ワルターご苦労」

「して、あの者たちは？」

彼が車に乗っている獣人たちを指した。

「途中で拾ってきた新しい村の住人たちだ。猫人たちは大人と一緒に住んでいたのが偏見がない。仲良くしてやってくれ」

「承知いたしました」

バスに乗っている連中にも降りるように伝えた。

ワイワイと、バスから降りて第二の故郷になる土の感触を確かめている。

「ケンイチ！ よく戻ったな！」

メイドと一緒に慌てて走ってきたのは、白いブラウスに枯れ草色

のズボンを穿いたりリスだ。

彼女の顔も半月ぶりだが、俺の顔を見て狼狽しているようには見えない。

彼女は王族で、主人になにかあったとしても、覚悟ができているせいかもしれない。

「君にも多大な心配をかけた」

「そのとおり！　じゃが、なぜプリムラがひつついておる！」

「帰ってくる途中で会って、このまま離れてくれない」

「そなた！　抜け駆けしおったな！」

「……」

リスの言葉にも、プリムラは俺の胸に顔をくつつけたまま。

「もう、ずっとこんな調子なんだよ。王都から帰るって連絡はもらったのか？」

「うむ、マロウ商会の鳥を使った連絡でな。あれは便利じゃのう」

「そうだな」

「それで?!　いったいどこに飛ばされたのじゃ！」

「まあ、待て待て――マサキ！」

村人の代表をリスに紹介する。

「はい、ケンイチ様」

「彼女が、俺の正室――リスだ」

「これは、初めてお目にかかります」

「リスじゃ！　よしなに」

「俺にくっついてるのが、側室のプリムラ。ここの流通を賄っている大商会の娘だ」

「よろしく願います。プリムラ様」

「……」

マサキの言葉にも、彼女はくつついたまま。

「しばらく自由時間だ。正室と色々話さなくてはいかんし」

「解りました。森に行っても？」

いきなり見知らぬ土地に来てしまったし、手持ち無沙汰。なにもすることがないから森に行って薪拾いをするらしい。

「ああ、こちらへの森は安全だし大丈夫だ」

「それでは失礼します」

村人たちが森に向かう。

うちの獣人たちは、自分たちの家を確認しているようだ。

「リリス様」

「おお、アキラ殿もご苦労じゃったの！」

アキラの横には手を繋いだツイツツラがいる。

「いやはや、世界の果てに飛ばされてやっと帰ってきましたよ、ははは」

「一体、どこに飛ばされたのじゃ？」

「リリス、それは今から話すゆえ」

「母上」

アマランサスとアネモネもやってきたので、テーブルと椅子を出すことにした。

「ケンイチ、今日はもういいだろう？ 俺はちよいとセンセの所に行ってくるからよ」

「ツイツツラを連れてか？ 本当に大丈夫なんだろうな？」

「へーきへーき、ははは」

本当かよ。

絶対だな！ 百万遍そうだな！ って言いそうになったが堪える。アキラは、自分のアイテムBOXからプードを出すと、若いエル

フを乗せてアストランティアに向かった。
マジか——いや、彼のことよりこっちだ。

椅子に座ろうとしたのだが、プリムラが離してくれない。
やむを得ず、長椅子を出して隣に座らせた。

「ほら」

膝を叩くと、彼女が俺の膝枕に頭を乗せてきたので、金髪をなでてやる。

どうやら、これで落ち着いてくれたらしい。

「むー！」

不機嫌そうなアネモネが、エルフの長い手足に絡め取られた。

「私が抱っこしてあげるう」

「ぎゃー！ 止めろお！」

アネモネは本当に嫌そうだ。

「うーむ、プリムラに言いたいことが山程あるが、今日はケンイチの話のほうが先じゃ」

「ゴメンナリス。心配をかけた」

「主の留守を守るのも正室の務め」

今回の事情を詳しく知っているのは、リリスとプリムラだけのようだ。

アストランティアにいるカナンには知らせていないらしい。

彼女は自分の仕事を抱えているしな。

いらぬ心配をかけて仕事に影響するとマズい。

テーブルにつくと、リリスに今まで起こったことを話す。

「共和国?! そのリッチの城は共和国につながってあったのかえ?」

「ああ、あそこにあった転移門は、山脈を越えての移動などに使われていたんじゃないかな?」

「ううむ……あの者たちは?」

リリースが、村人たちを指差した。

お城でアルストロメリアに話したと同じ話をする。

「なんと——王室が容認したならよいが……」

「大丈夫、峠は完全に使えない状態になっているから、向こうから来ることもできないだろう」

「峠の様子はそんなに酷いのかえ?」

「あちこち崩壊とがけ崩れで通れる状態じゃないよ。巨大なアイテムBOXを持っている俺だから帰ってこられた」

「そうじゃろうのう……」

彼女にも、シラー伯爵領のことを伝えた。

「なに? 隠し畑?」

「うむ、広大な隠し畑じゃ」

アマランサスの言葉にリリースの顔が曇る。

「して、その報告は?」

「もちろんしてきた」

「円卓会議の年寄りどもはなんと?」

「アルストロメリア様が先頭に立って、すぐに騎士団を伯爵領に向かわせることになったらしい」

「なんと、そんなことになったのかえ……ケンイチの帰り道にとんでもないものを見つけてしまったのう」

「いや、まったくだよ。でも、アマランサスがいてくれたから気がついた。俺だけだったら、そのまま通り過ぎてしまっただろう」

皆で攻撃は受けたので、伯爵に抗議するぐらいで終わりだったな。柵からぼたもち状態だ。

「そうだろうのう……」

「伯爵は反王家派みたいだから面倒なことになるかも」

「やつとつながっている、エキナセアベア公爵にも波及するかもしれない」

「あゝ下手すると内戦？」

「解らぬが、覚悟をしておいたほうがいいかもものう……」

「うわあ……」

戦争なんて勘弁してくれよ。

——と言いたいところだが、貴族になってしまったからには、それも避けられん。

一応、王家派ということにしておかないと、一緒に制裁を食らってしまうし。

そうになると領民にも迷惑がかかる。

「それにしても、あの滝の上に遺跡とはのう……」

「あれは利用価値があるかもしれないし、道を整備すれば別荘や城としても使える」

「ここから遠すぎるじゃろ」

「まあ、俺の召喚獣がいれば問題ない」

そこに紋章官のユリウスがやってきた。

「これはケンイチ様、おかえりなさいませ」

「彼には話しているんだろ？」

「うむ」

「色々心配をかけた」

「いいえ、ケンイチ様なら、必ず戻ってくると信じておりました」
「けど今回のことは、物語にして報告とかできないことばかりだ」

「やむを得まい。場所が場所だ」

リリスが腕を組んで難しい顔をしている。

俺から共和国の話を聞いたユリウスが驚く。

「噂にしか聞かない共和国の真実の姿ということになりました」

「そうだな。まったく酷いところだった」

しかし、共和国の国民はそういう国を選んでしまったのだ。

王国も帝国もまったく関わるつもりはゼロみたいだな。

関わりたくないというのが本音だろう。

俺が郷長という男に持たせた毒入りワインで、多少のダメージを与えられるかもしれないが、致命傷になるとは考えにくい。

考え込んでいると、料理人のサンバクがやってきた。

——そうだ、サクラには彼がいるから料理を作らなくてもいいんだ。

なんだか、ホッとしてしまった。

「ケンイチ様！」

「サンバク、しばらく留守にしてスマン」

「早速、夕食から準備に取り掛かせていただきます」

「お城に寄ったらアルストロメリア様に——俺がサンバクを引き抜いたから、王宮料理の味が落ちたと、嫌味を言われてしまったよ」

「それは、申し訳ございません」

「あ、そうだ！」

俺はアイテムBOXに入れていたものを思い出した。

ちよつと場所を空けてもらうと、広場に獲物を出して皆に見せる。

「「「おおおっ」「」「「きゃあ！」「」」

興味深そうに周りから見ていたサクラの住人からどよめきが起こ

り、そしてメイドたちから悲鳴が上がった。

「おおう！」

リリースも声を上げた。

「ケンイチ様、コレは?!」

俺が出したのはひっくり返った状態のカメ。

サンバクも見ることがないのだろうか？

固いボディをペタペタと叩いている。

「これはカメだよ。肉がすごい美味いらしい。これで料理を作ってもらえないだろうか？」

「お任せください！」

「それから、皮も甲羅もものすごく硬くて素材として使えるようだから、取っておいてくれ。あとでドワーフたちに加工してもらおう」「かしこまりました！」

サンバクは手の空いている獣人たちを集めると、川までカメを運ばせた。

そこで解体をするらしい。

初めて解体をする獲物なのだが、大丈夫だろうか？

「あー、自分で料理をしなくてもいいのは楽ちんだなあ……」

「「ぷー、私はあ、ケンイチの料理がいいのにい」」

セテラと、彼女に抱かれたアネモネが不満げだが、やっぱり美味しい料理が作ってもらえるってのは楽だ。

「随分と魔物も倒したようじゃの？」

「リリースにも、あとで話してあげるよ」

久々にのんびりしていると、車の音が聞こえてきた。

アキラのプ○ドだ。

車が止まると、アキラとツイツラが降りてくる。

アキラは車をアイテムBOXに収納すると、そのままどこかに行ってしまった。

「なにがあつたのじゃ？」

「さあ？」

1時間ほどすると馬がやってきて、そこから降りたのは黒いドレスと爆乳のレイランさん。

彼女の姿を見て、アキラの行動を察した。

「ケンイチ様、アキラを見かけませんでしたか?!」

「さつきチラリと見たんだが、どこかに行ってしまったて……」

「そうですか」

普段と変わらぬように見える彼女だが、ただならぬオーラが漂っている。

「あのー、レイランさん。相手が男でも駄目ですか？」

「……」

俺の言葉を聞いた彼女が鬼のような形相になる――怖い。

「失言です。失礼いたしました」

思わず敬語。

そのままレイランさんは、ドスドスと馬を引いて集落のほうに向かった。

アキラの行方の聞き込みをするのかもしれない。

「いったい、どうしたのじゃ?!」

「アキラがエルフを連れてきたからだろうな」

「ああ、先程のエルフか？ ケンイチの言葉から察すると男のよう

だが」

「そう、男だね」

「なるほどのう……」

リリースがなにやらニヤニヤしている。

「ケンイチ様！」

この声はカールドンだ。

「しばらく留守にして悪かったな」

「いいえ、滅相もございません」

「だが、旅の途中で古代の魔導書らしきものを見つけてきたぞ？」

「な、なんと！」

「エルフが古代語を読めるようなので、アネモネと一緒に解読してもらおう」

「承知いたしました！」

彼の顔を見ると、目の下にクマができています。

「なんだか顔色が悪いようだが」

「これはお恥ずかしい……少々徹夜が続いております」

「身体は大事にしてください。これから面白いことが山程待っているからな」

「はい！ もう、いくらでも研究のネタがありまして、寝ている暇もありません」

「いや、寝てくれ。君に倒れられたら大変だ」

「ははっ！」

——なんて礼をしているのだが、また徹夜しちゃうんだろうな。まあ仕事が楽しくて仕方ないってことは、たまにある。

学者や芸術家ってのは気分で効率が違うから、気持ちよく仕事をしてもらうのが肝要だ。

無理をしない程度には頑張ってもらおう。

料理ができるのを待っていると、テーブルに豪華な料理が並んだ。アキラが言ったように、カメの肉は確かに美味かった。

非常に歯ごたえがあり、肉が詰まっている。

食べたことがない味だ。

本当は盛大なパーティーでもしたいところなのだが、俺が行方不明だったのは秘密にしているので、それもできない。

それはいいのだが、食事のときにもプリムラは離れてくれず、食事もしてくれない。

俺から少し食べさせてやると、少し食べてくれた。

村人たちも食事をして、村の広場でそのままキャンプ。

明日からの開墾作業が待っている。

リリースの許可を取り、プリムラと一緒に寝る。

心の広い正室に感謝だ。

271話 帰郷（後書き）

長い間、ご愛読していただいた、アラフォー男の異世界通販生活ですが

今回を含めて、あと5回で完結となります。

ありがとうございました。

272話 管理者

俺たちは、やっとの思いでサクラに帰ってきた。

戻ってきたが、ハマダ領は平穏そのもの。

俺が行方不明ということは伏せられていて、知っているのはリリスとプリムラ、それと紋章官のユリウスだけ。

通常の業務として、領地の測量をしているということになっていたらしい。

沢山の難民を連れて戻ってきたことについても、前に同じことをやっているので、誰も不思議に思っていないようだ。

サクラに帰ってきた次の日から、はるばる旅をしてきた村人たちの集落を作る作業が始まった。

以前作った村から、少々奥まった場所に村を構える。

こちらは人数が多いので、すぐに大きな村になるのを想定してだ。同時に代表者を決めて、読み書きそろばんの勉強も行う。

まずは代表者が覚えて、それを村人たちに教える。

一緒に農業の仕方も教えなくてはならない。

あまりに一般からかけ離れた農業をしていたので、それをまず教える必要がある。

千里の道も一歩からだが、彼らにあるもの、それは情熱だ。

それほど困難ではないだろう。

開墾から数年は税も免除されているから、それまでに村を軌道に乗せることが目標だ。

共和国から連れてきた子どもや、アストランティアにいる孤児のために、サクラにも孤児院を作ることにした。

そこで身寄りのない子どもたちを預かる。

初代の院長には、ダリアにいたアマナをひっぱってきて、彼女になってもらった。

すでに彼女は、ダリアで数人の子どもたちを預かっていたのだが、その子どもたちごとサクラで引き取る。

ダリアから連れてきたアマナに、共和国から連れてきた子どもたちの生い立ちを説明した。

無論、他言無用だ。

俺の話を聞いていた彼女は、泣き出してしまった。

「そ、そんな酷い地獄みたいな国があるんですか、旦那?!」

「本当に大変な国なんだ。この子どもたちを逃がすために、親たちは反乱を起こしたらしい」

アマナが子どもたちを抱き寄せた。

「よしよし、みんな酷い目にあったねえ。ここじゃ、もうそんな心配はいらないからねえ」

「そんな感じなので、子どもたちはロクな教育も受けていないんだよ」

「よござんす! 私に任せてくださいよ!」

「よろしく頼む。金の心配は要らないからな」

とりあえず20人ほどのキャパだが、人数が増えるようであれば増築も可能だ。

孤児院にはマロウ商会も出資しており、優れた人材がいれば商会でスカウトする。

村の立ち上げや、孤児院の建設作業の間、俺の家族との話し合いをすることにした。

議題は、子作りについてだ。

俺と一緒に行動していた者たちは、セテラの言ったことを聞いて

いたのだが、ここに残っていたリリス、プリムラ、そしてカナンは知らない。

俺の家の前に集まり、テーブルにつくことこのいきさつを話す。
言い出しっぺであるセテラも一緒に、お菓子をつまむ。
家の後ろでは、領主の屋敷が建築中である。

「むむむ……子作りかえ……」 「……」

難しい顔をしている、リリスとプリムラだが、カナンはそんなに深刻そうではない。

元世界なら別に問題ない年齢ではあるが、この世界で初産で高齢出産という年齢になるので、抵抗があるのかもしれない。
それはアマランサスも一緒だ。

「俺がリツチの城で見つけてきた若返りの神器があるが、あれを使うと子どもが作れなくなるらしいからなあ」

アキラがいた帝国では、神器を使って皇帝が若返り、国を治めるという君主制になっているという。

「うむむ……」

やはり正室として跡取りのことを真っ先に考えるリリスが、一番難しい顔をしている。

「まあ、なんとかするよ」

「なんとかとは？」

「あちこちで、ダンジョンやらを色々攻略すれば、そういうのに役に立つ神器とかが出現したりするかもしれない」

「そう、都合よくいくかのう……」

「そうでなければ種族の壁を突破できない」

「ケンイチが、私たちと違う種族だなんて……」

プリムラがつぶやく。

俺が旅から帰ってきたときには、3日ほどべったりくっついて離れてくれなかった彼女だが、今は立ち直っている。

まだ、たまに変なときがあるが、そのぐらいのストレスが彼女を襲ったということなのだろう。

まったく彼女には心配をかけてしまった。

その彼女にも、俺が違う世界からやって来たということは話してあった。

俺自身も同じ人間だと思っていたので、まさか子どもが作れないほどの種族の壁があるとは思わなかった。

この世界では只人と獣人の間で子どもがつかれないが、それと同じぐらいの種族の隔たりがあるということだ。

元世界に戻れないのであれば、この世界に根を下ろすために、なにか手を考えなくてはならない。

話し合いのあと――カナンが、作ってきてくれた俺の正装を見せてくれた。

試着してみると、金糸の刺繍が入った赤い上着と、黒いズボン。背中には赤いマントと、ちょっと派手だが、もっと派手だったらどうしようかと思っていた。

赤い上着も少し暗い色でそんなにキラキラしている感じではない。他の貴族たちももっと派手なので、このぐらいのでちょうどいいのだろう。

出かけるときは、これを着ていけば、ひと目で貴族だと解るに違いない。

「ありがとう、カナン」

「いいえ、色々してもらっているのに、このぐらいいか恩返しができます」

「そんなことはないぞ」

「ありがとうございます」

——そんな感じで、帰ってきてから1ヶ月ほどたった、ある日。

「よお！ ケンイチ！」

「お？ アキラ、久しぶり！」

そう、俺たちが帰ってきたその日、レイランさんに追われて森の中に入ったきり、行方不明だったアキラが顔を出したのだ。

エルフのツイツラと一緒にだ。

「どうしたんだ？ レイランさんは大丈夫だったのか？」

「いやあ、追われた追われた、ははは。一ヶ月ぐらい逃げ回ってたよ」

「それで問題はないのか？」

「まあ、話し合いはついた」

そんなことを言いつつ、ツイツラとイチヤイチヤしている。

本当に大丈夫だったのだろうか。

まあ、彼の家庭のことなので、口出しは無用だが。

それから1ヶ月ほど新しくできた村の面倒をみたり、領主の仕事をこなしていたのだが――。

王都から特急の飛脚で召集令が来た――戦である。

俺が見つけたシラー伯爵領の隠し畑に端を発する反王家派への攻撃は、拡大の一途をたどっていた。

隠し畑を持っていたシラー伯爵は、押し寄せる王家の騎士団を見た途端に降伏。

かなりの領地を没収されて、それで手打ちになったのだが、それでも引き下がらなかった貴族たちがいた。

大都市イベリスを抱える、エキナセアバア公爵領である。

支配下の貴族を従え、徹底抗戦を構えてイベリスに籠城した。

軍を持たないハマダ領だが、戦力を出さないわけにはいかない。

獣人たちの中から志願兵を募り、シャングリ・ラから買った物資を使って100人ほどの部隊を作った。

参加したのは、俺を始めとして、アネモネとアマランサス、そしてセテラ。

エルフは戦には興味がないようだったが、俺の護衛として参加してくれた。

実質俺が治めている子爵領からは、アキラとレイランさん、そしてツイッツラ。

ツイッツラもアキラの護衛をするようで、直接戦闘には参加しない。

数自体は少ないのだが、国軍に匹敵する戦力だ。

今回は平地の移動だったので、思い切って大型バスを購入。

試しにアイテムBOXに入れてみたのだが、やっぱり入らない。

アイテムBOXに入らないものは、買えないのかと思ったがそんなことはなかったぜ。

そいつに獣人たちを全員山盛りに乗せて移動して、一足早くイベリスの城壁に到着。

そのまま、あとからやってきた王家連合軍に加わった。

城壁の出入口に各貴族と国軍が集結。

城壁の周りには貧民窟もあるので、集まれる場所は限られる。

俺はアキラと一緒に大型バスの上から辺りを見ていた。

「はぁ〜本格的な戦は初めてだぜ〜」

彼が帝国でやっていたのは、僻地のモンスター退治とか、皇女を守っての撤退戦とかそういう地味な戦闘が多かったらしい。

軍と軍がぶつかる、正式な戦闘というのはこれが初めてのようだ。

「スマンなアキラ、付き合ってもらって」

「いいってことよ。それにこんな戦、ケンイチのアレがあれば一発で終わるだろ？」

彼の言葉通り、戦はすぐに終結した。

アネモネの防御魔法で強化された重機で城壁を崩し、そこから国軍が流れ込んだのだ。

通常、門を巡っての戦闘がメインになるこの世界の戦からかなり逸脱した作戦だったので、公爵軍の対応が遅れた。

戦闘に入っても、敵の主力の真ん中をホイールローダーで突っ切って攪乱する俺の作戦に敵は大混乱に陥った。

見たこともない鉄の魔獣に蹂躪された敵軍が逃げるところを虱潰しにされて、次々と降伏。

最後まで徹底抗戦を辞さなかったエキナセアベア公爵は、堀に架かった橋を落とし、城に立て籠もり徹底抗戦を仕掛けてきた。

決戦の地である堀の周りに、王家派の貴族たちが群がった。

集まったのは、王都の近辺にいる諸侯だけである。

王都から遠く離れた貴族たちは、集まるだけで1ヶ月以上かかることになる。

すぐに駆けつけた俺などは、例外中の例外だ。

「ケンイチ！」

堀の縁でテーブルを出して待っていると、アルストロメリアが俺の所にやってきた。

「これはアルストロメリア様。鎧を新調なさったのですね。大変お似合いでございます」

彼女は真っ白な鎧を着ていた。

おそらく洞窟蜘蛛の甲殻で製作した鎧だろう。

マロウ商会がアキラから買った蜘蛛を使って、鎧に仕立てたに違いない。

「世辞は要らぬ！」

「お世辞ではありませんが……」

「そのようなことはどうでもいい！　これでは魔法も届かぬ！　あなた、なんとかせい！」

彼女が顔を赤くしている。

「ええ？　私がですか？」

「そなたならなんとかするじゃろうが！」

「んー、騎士道らしき戦いとか、そういうのじゃなくてもいいんですかねえ」

「ええい！　長引くと金がかかるのじゃ！　金が！」

彼女が人差し指と親指で輪っかを作った。

戦争には金がかかる。

長引けば長引くほど戦費が増大して、国庫を圧迫する。

彼女の的には、つまらんことで余計な金を使いたくないのだろう。

アルストロメリアの言葉を受けて、俺が取った作戦は――。

コ○ツさんで崩れた橋の瓦礫を掬い、それを弾として敵城に打ち込む作戦。

通常なら、トレビュシエットと呼ばれる固定型大型投石機を攻城兵器として使うのだが、それをコ○ツさんで代用したのだ。

土を掘り返し重機を斜めにして固定。

ワイヤーをバケットに溶接して、発射には急遽その場ででっ上げたロック機構を使う。

ワイヤーの先は袋状になっており、そこに瓦礫や石を入れる。

ぐるぐると重機を回転させて、ワイヤーを固定しているロックを外せば、瓦礫が飛んでいくわけだ

車体の回転スピードは常に一定なので、瓦礫の重さだけ同じにすれば同じ場所に命中する。

仕組みは手で投げる投石機とまったく変わらない。

大型攻城兵器であるトレビュシェットも作動させるのに錘を使っているだけで、仕組みは同じ。

それを重機で代用しているだけだ。

「にやははは！」「うひょー！」

バケットに乗り込んでいるミャレーとニャメナが歓喜の声をあげている。

危険だからと説明したのだが、彼女たちはバケットに乗り込んで、タイミングよくロックを外す役目を買って出ている。

やり始めて10回ほど失敗が続いたが、タイミングを掴むと同じ場所に飛ぶようになった。

獣人たちは頭で考えるのは弱い、身体で覚えることに関しては強い。

改めて非常に危険だと思うのだが――彼女たちが任せろ！　と言って聞かない。

他の手段もないので任せることにした。

あとで考えると――ワイヤーを外すのには、バッテリーと火薬を使う手もあったかも……。

完成したにわか作りの大型投石機によって、巨大な石が放物線を

描き、次々と敵城に打ち込まれた。

「「「おおおっ！」「」」

命中する度に味方から歓声があがる。

手柄を取られた貴族たちは面白くなさそうだが、下っ端は怪我もなく勝ち戦が堪能できるので大受けだ。

数十発の石が命中し、城が半壊したあと、ついに白旗が揚がる。

打ち込んだ瓦礫が、籠城していた公爵に命中したのだ。

主が戦死したことで戦はあっけなく終結。

反王家派は王国から駆逐された。

現在、エキナセアベア公爵領は、国領扱いになっている。

戦が終わり、バスでハマダ領に戻ると、またプリムラがくつついたまま離れなくなってしまった。

彼女なりに心配してくれた結果なのだろうが、これも貴族の仕事だ。

「ううむ、これが貴族の正室の役目ではあるし、ケンイチなら戻ってくるとは思っているのだが――なんと心臓に悪いことよ」

リスにもストレスがかかっているのが十分理解できたので、そのあとは家族サービスに努めた。

購入した大型バスはアイテムBOXに収納できないので、野ざらし状態。

ここは雨もそんなに降らないので、腐食の心配をあまりしなくてもいい。

また使うときがあるのだろう。

戦で家族に心配をかけたと、いくら家族サービスを頑張っても、

リリスをはじめとした女性陣に妊娠の気配はなし。

セテラの言ったことは間違っていないかったようだ。

どうにかしなければならぬのは解るが、皆目見当もつかない。

それは同じ境遇にいるアキラも一緒なのだが、彼はもう諦めている節がある。

俺は貴族になってしまったからには、跡取りの問題がある。

どうしても子どもができないとなれば、養子をとることも考えなくてはならない。

戦から半年が過ぎて、王国には平穏が戻りつつある。

イベリスの住民にはほとんど犠牲者は出なかったので、人々が普段の生活を取り戻すためにはそうは時間がかからなかった。

そうしているうちに、オダマキで建造していた船が完成したと連絡を受ける。

マロウ商会主導による、アニス川河口からの川路の探索が始まったのだが――いきなり問題にぶち当たった。

共和国の川に生息していた首長竜の仲間が、アニス川にも多数生息していたのだ。

駆除は不可能ということになり、川を使った物資の運搬計画はあつけなく頓挫した。

残念なことだが、失敗してもタダで起きないのがマロウ商会。

建造した船をそのまま帝国との海路貿易に使用することに決めたようだ。

俺としても建造した船をそのまま放置しても、宝の持ち腐れ。

マロウ商会に貸し出すことにした。

貿易がうまくいけば、追加で船を建造することも考えているという。

アニス川を運河にする計画は頓挫してしまったが、ハマダ領では

さらに別の計画が進行中だ。

領の重要産業になると思われる、魔石モーターの開発。

そのためには魔石の安定的な確保が必要になる。

現在魔石は魔物を倒すことによって得られているのだが、これはあまりに効率が悪い。

そこで魔石を効率よく生産できないかと技術開発が行われているのだが、その核心技術がリッチ戦で手に入れた古代の魔導書。

エルフのセテラとアネモネ、そしてカールドンが行った魔導書の解読の結果。

空間を拡張する魔法を発見した。

これは、ダンジョンなどにも使われている魔法らしく、色々と応用が利きそうだ。

空間拡張の魔法を得た俺が始めたのは、コンテナハウスの拡張。

「おおっ！　こりゃ、すげー！」

「マジかよ」

俺とアキラが空間拡張されたコンテナハウスに足を踏み入れて目を回す。

コンテナハウスの中が延々と、はるか奥まで繋がっているのだ。どういう仕組みが解らんが、各コンテナハウスには窓がついていて日が差し込んでいる。

「ケンイチ、奥にも窓があるけど、どこに繋がっているんだ？」
アキラが怖いことを言い出す。

「さあ、怖くて考えたくないが……」

「こういうのは試してみるに限る」

「おい、大丈夫か？」

「さあ？」

——と言いつつ、アキラが窓を開ける。
本来ならそこはあってはならない空間。

「うお？」

窓を開けた先には、またコンテナハウスが繋がっていた。

「窓から窓に繋がっているのか？」

「これぜったいにヤバイやつだよな？」

迷ったら戻れなくなるとかそういうやつだろう。

色々と検証してみたいが、今は止めておいてそっと閉じた。

窓を閉めると、先に進む。

しばらく進むと二股の分岐になっていて、その先も続いている。

まるでコンピュータゲームのような90度のコーナーが続く迷路。

「やべえ、これってダンジョンじゃん」

さすがのアキラも、想像を絶する空間にビビっている。

「魔物は湧いていないが、そのうち湧くってことだよな？」

「多分な……あとでセンセを連れてこよう。どういう反応するか楽しみだぜ」

この空間はそのまま使えるし、魔物が湧いたら俺のアイテムBOXに入れてゴミ箱に投入すればいい。

そう思っていたのだが、この魔法は設置式らしく、大きく動かすと効力が切れるようだ。

つまり、アイテムBOXに入れた途端に魔法の効力が切れて、ただのコンテナハウスに戻る。

空間を拡張したまま持ち運んだりはできない模様。

ちよっと残念。

それでも空間拡張魔法は使えることが解った。

最初は、この拡張空間で毒の花を栽培し、養殖したスライムに食わせて魔石を生成させる――そんな計画だったのだが、もっと効率のいい方法を思いついた。

ダンジョンを育てて、そこに冒険者を入れて魔物を狩らせる。

その魔物から出た魔石をハマダ領で買い取ればいいのだ。

通常、こういう仕事はギルドがやるのだが、領が管理しているダンジョンなので、領がやる。

魔石は集められるし、冒険者は金になるから公共事業としてうつつけ。

冒険者が集まれば、宿屋や店、娼館などもできるし、生活が安定すれば定住する者も現れるだろう。

計10箇所のコンテナハウスダンジョンを設置して、ハマダ領のダンジョン経営がスタートした。

大きく育ってしまい手がつけられなくなったダンジョンは、俺のアイテムBOXに入れて破棄すればいい。

冒険者にとっては便利な稼ぎ場ができたことになる。

ダンジョンに湧くのはスケルトンが多く、そいつを倒せばいいわけだが、深層には中ボスや大ボスもいる。

大物を倒せば一攫千金も夢ではない。

サクラにダンジョンができたら、見たことがある顔が次々とやってきた。

ダリアで知り合ったり、シャガの討伐戦で一緒だったやつらが出稼ぎにきたのだ。

無茶をして怪我などしなければいいが……。

診療所などの設置は行なっているが、なにがあってもハマダ領は責任を持たない。

ここは、そういう場所だ。

すべてが自己責任——そうなのだが……。

「男爵！」

俺は知った顔を見つけて、男を呼び止めた。

「ああ！ 辺境伯様！ 見つかってしまいましたか」

コンテナハウスダンジョンの近くで俺が見つけたのは、ノースポール男爵だ。

「なぜ、こんな所に？」

「いやあ、ははは」

苦笑いする彼だが、どうやら自領の戦闘団と腕試しにやってきたらしい。

そりゃ実戦経験を積むのは大事だが……。

「領主である男爵に、なにかあったらどうする」

「しかし、戦闘訓練も欠かせないものですから」

彼の言い分も解るし一理ある。実際、うちの警備団やらも、ダンジョンで訓練をしている。

俺に彼を止める権利はない。

男爵の親貴族はアスクレピオス伯爵だし。

「やれやれ」

俺は苦笑いをするしかない。

このダンジョン経営で集められた魔石を使って、魔石モーターの生産も始まった。

街から集められた女子工員が働く工場も建てられて、扇風機や洗濯機、ドライジーネなどに搭載される予定である。

それらの試作もマロウ商会によって行われている。

景気がよくなれば市場もできる。

これまたダリアの市場で見かけた商人たちが、出稼ぎにやってきた。

俺が最初に出会ったフヨウという商人も見かけたのだが、馬車に荷物を沢山積んでいたから商売は上手くいっているようだ。

— — — — — ◆ ◆ — — — — —

ハマダ領の経営は順風満帆で軌道に乗ったのだが――。

まあ、魔法では解決できない問題もある。

たとえば跡取りのこととかな。

俺が将来のことを少々悩んでいると、空からなにかがやってきた。

「おい！ あれは？！」「なんだ？！ 魔物か！？」

俺はマロウ商会で打ち合わせをしていたのだが、外が騒がしい。続いて報告を受けると慌てて外に飛び出した。

「なんだありゃ？」

空に浮かぶ、白い鉄アレイ。

そう表現させるを得ない物体が青い空に静止していて微動だにしない。

丸い球が2つ上下に並び、繋がっている。

その未確認飛行物体は湖の近くにいますようだ。

いったいなんなのか？ これは近くまで行って確認したほうがいいだろう。

俺はアイテムBOXから、ラ○クルを出した。

運転席に乗り、アクセルを踏み込むと、クラクションを鳴らしな

がら進む。

住民たちが皆空を見ているので、こちらに気がつかないのだ。

「ケンイチ！」

アキラの姿が見えたので車を止めた。

「アキラ、来てたのか？」

「ああ、なんだありゃ？！」

彼も空に浮かぶ白い物体を見たらしい。

「解らん。けど魔物じゃないだろ？ 明らかに人工物だ」

「俺もそう思うぜ」

「ケンイチ！」 「ケンイチい！」

アネモネとセテラもやってきたので、車に乗せる。

最近彼女たちは、魔法の研究で一緒にいることが多い。

いつも喧嘩しているように見えるのだが、仲がいいのか悪いのか不明だ。

結果は出しているので、悪くはないと思うのだが。

そのアネモネだが、最近少し姿が変わってきた。

背が伸びてきているのだ。これは成長期に入ったのであろうか。

ラ○クルが湖の畔に到着すると、白いアレイは湖の上に浮かんでいた。

どう見ても超常の物体である。

「ケンイチ、あれって反重力かなにかで浮かんでいるよな？」

「多分、どう見ても人の手で作ったものだろうし。セテラ、覚えては？」

「ん〜？ あるようなないような……」

「役に立たねえボケ老人だな——アダダダ！」
アキラがセテラからアイアンクローを食らっている。

「これってもしかして、セテラが言ってた、この世界の管理者か？」
「そうかもねえ」

「エルフたちも、かつてはこういう乗り物に乗っていたのか？」
「まあ、そんな感じ」

やはり恒星間航行技術を持った超科学文明だったんだろう。

「しかし——」
なにが目的だろうか？

俺たちの排除？　しかし巻き込まれたのは俺とアキラのほうだし。
好き好んでこんな世界にやってきたわけではない。

「ケンイチ、あれなあに？」
アネモネが白い物体を指す。

「多分、人が乗っている乗り物だと思うが……」
「どうやって浮いているの？　魔法？」

「いや違うと思う」
アキラが言ったように、重力制御かなにかで飛んでいるのだろう。
俺たちもSF映画やらの知識で一応知っているが、あくまでも概
念的なものだ。

元世界にもそんなテクノロジーはない。
俺たちの周りに、サクラの住民たちも集まってきてしまった。

「聖騎士様！」
慌ててアマランサスと獣人たちもやってきた。

「ケンイチ！」　「旦那！　敵かい？！」

「多分、敵じゃないと思うんだが」

皆が見守っていると、白いアレイが湖のすれすれまで降下。

水面に反射して白い影が逆さまに映っている。

人だかりが静まり返ると、白い物体が砂浜までやってきて、少し上昇した。

下面の球体が開くと、その部分から人影が見える。

どうやら管理者というのは二足歩行生物らしい。

これが、セテラが言う管理者という者たちなのであろうか？

273話 地球が静止する日

領の経営が軌道に乗ったと思ったら、空から謎のお客様だ。
空飛ぶ白いアレイに乗っている。

エルフの話に出てきたこの世界の管理者というやつだろうか。
湖まで行くと、その白いアレイが近くまでやってきて、下面から
人らしき影が現れた。

どうやら二足歩行生物のようである。

セテラの話でも特に形状は明言されていなかった。

おそらくは人型生物だとは思っていたが、本当にいるとは。

「アキラ、人っぽいぞ？」

「ああ、会話が通じなさそうな宇宙人じゃなくてよかったな」

「いや、文化がまったく似てなくて、倫理観がまったく違うとか？」

「あゝ、それはありそうで怖いなあ。俺たちをさらって、へんな能力つけて放り出すやつらだぜ。まともだとは思えん」

まとも——と言えるのは、俺たち人間から見てもそうだってだけで、
倫理観が違うなら彼らにとってそれが正しいことかもしれないし。

すぐに近くまでやって来たその人型は、黒い上下の服を着て、黒
い髪の男。

身長は俺たちと同じぐらいで、歳は——20代後半か。

その男のすぐ後ろに小さな女の子らしき影がある。

白いワンピースを着て、ちょっと緑っぽい肌をしている。

髪もなんだか黒っぽい緑に見えるのだが気のせいだろうか？

人見知りをしているのか、男の陰に懸命に隠れようとしている。

女の子はどう見ても人間じゃないのだが、男のほうは――。

「おいケンイチ、あれって日本人っぽくねえか？」

「そう見えるか？ 俺にもそう見える」

その男が俺達に気づいたのか、こちらに向かってくる。

ここの責任者だと解ったのか。

それとも、俺が乗ってきたラ○クルから、この世界にいる異分子だと気づいたのだろうか。

「止まれ！ なに者だ！」

俺は、歩いてくる男を制止した。

「あんた日本人か？」

男の発した言葉に俺は戸惑った。

「ああ――俺から見ると、君も日本人に見えるんだが」

「ははは、まあ――俺も元日本人だよ。この世界の管理者の代理をしている」

彼が後ろにある白いアレイを指差した。

あれも管理者から借りているものらしい。

「やっぱりそうなのか？」

「ああ、元日本人な」

「いやそっちじゃなくて、管理者ってほうだが……」

「管理者を知っているのか？」

「そこのエルフから聞いた」

俺はセテラを指差した。

「うえ！」

男は、セテラの顔を見て驚いたようである。

「どうした？」

「いや、知り合いのエルフに似ててな。この大陸にもエルフがいるのかよ……」

「それなりの数が住んでいるみたいだ。ダークエルフはいないみたいだが」

「そうなのか」

「……」

彼は俺たちの訝しげな視線に気がついたようだ。

「まあ、疑うのも無理もないが」

「いや、疑ってはいないのだが……」

「それから、俺は不老なんで見えた目より歳を食ってる、敬語はなしだがいいか？」

「不老……」

「本当だぞ」

「解った」

「ちよっと待ってくれよ！」

会話にアキラが割り込んできた。

「なんだ？」

「俺たちをこんな世界に連れてきた意味を教えてくださいませんか！」

「あんたも日本人か？」

「そうだ！」

男が後ろにいる女の子となにやら話している。

「日本人が2人生き残っているとされてやって来たんだが、2人揃っているとは思わなかった」

「それで！俺たちをさらって、こんな世界に突っ込んだ理由は？」

！」

「ああ、それを説明するためにやって来たんだ」

「そうなのか？」

アキラは熱くなっているが、俺はそうでもない。

「ああ、原因はこいつだ」

彼が、後ろに隠れている女の子らしき生物を指差した。

少し前に出そうとしたのだが、必死に抵抗しているようだ。

「その子は人間じゃないよな？」

「そのとおり」

「え?! それって精霊じゃないのお？」

後ろにいたセテラが女の子の正体に気づいたらしい。

「これを知っているエルフがいるのか？」

「エルフの本星にいた精霊でしょ？」

「ご明察だ」

「彼女は、この星に入植したエルフの生き残りなんだよ」

俺は、戸惑う男にセテラを紹介した。

「始まりのエルフに生き残りがいたのか？ 入植は5000年前だぞ？」

管理者という連中も、最初に入植したエルフに生き残りがいるとは夢にも思っていなかったようだ。

「間違いないらしい」

「はあ、こりゃびつくらたまげた門左衛門だなあ」

なるほど、オッサンしか知らないネタを知っているらしい。

本当に見た目は若いが、中身はオッサンのようだ。

「そんなことはどうでもいいんだよ!」

男の会話にアキラが切れ始めた。

彼は、この世界にやってきて苦労したようだからな。

文句の1つも言ってもやらないのだろう。

「あんたたちを、この世界に呼び込んだのは、こいつらだ」

「その女の子だったのか?」

「ああ、こいつは人じゃないし、太古の昔にエルフに作られた人造生命体だ」

「そうなのか?」

彼の話では、この精霊という連中が、俺たちをこの世界に連れてきたらしい。

「おい! ふざけんな! そんなガキになにができるってんだよ!」

「こいつらは人型をしているが、超々生体論理素子で、いうなれば生体コンピュータなんだ」

「どのぐらい凄いのか、さっぱりと解らんが……」

「そうだな。例えるならば——こいつらが1人か2人いれば、地球のネット環境なら一瞬で掌握できるぐらいの能力だ」

「ええ? セキュリティとかがあってもか?」

「そんなものは、こいつらにかかれば塵芥も同然」
「なんだかすごい能力の持ち主ってのは解った。」

「それじゃ、その子たちがなにかしたってことか……」

「この世界のシステムの穴について、好き勝手していたってことだ」
「システム?」

「この世界の管理システムだ。この星は自然な環境に見えるが、管理者による管理を受けている」

「それをいじられたと?」

「そうだ——干渉が巧妙に隠されていて発見が遅れた。大変申し訳

ない」

男が頭を下げた。

「それで、俺たちをここに連れてきたわけは?!」

アキラが腕組みをして、男を睨みつけている。

彼は、女の子がやったと信じていないのかもしれない。

「それが――大変申し訳ないのだが、精霊たちのただの遊びなんだ」
「はあ?!」

アキラが男に掴みかかりそうになっているが、俺には心当たりがある。

「んゝあゝ、なんかそんな感じがしてたんだよなあ……」

確かにアキラと一緒に、そんな話をしていた。

神様みたいな連中が、俺たちを異世界に放り込んで面白がっているんじゃないかと……。

特に、アキラが持っているマヨネーズ能力とか見れば、真面目にやってないことは明白だし。

「今回、このようなことに巻き込んでしまい、お二人にはそれ相応の対価を払う用意がある」

「対価ってなんだよ」

アキラが男を睨みつける。

「なんでも――こちらで用意できるものがあるなら用意する」

「たとえば金か?!」

「それも可能だ。地金ならいくらでも合成できるし」

「うゝん、別にいまさら金をもらってもなあ」

現状、領の経営が順調なら、いくらでも金は稼げる。

アキラだって、自分から出るマヨでも油でも売れば、食うに困る

こともない。

この世界で余分な金をもらっても使いみちがないのだ。

それに大量の金などを市場に流し込んだら経済が破綻する。

それはアキラも解っているだろう。

「それじゃ！　そこにいるケンイチと同じ能力をくれ」

アキラが欲しいのは、俺の通販能力らしい。

俺の物資の出どころが通販だというのは、彼にも内緒にしていたのだが、それがバレたら怒らないだろうか？

男と精霊が話している。

どうやらコミュニケーションは言葉ではないらしく、甲高い音が聞こえる。

「ちょっと時間をもらえば可能だ。亜空間収納も広げることができるぞ？」

「その収納ってのは、アイテムBOXのことだな？」

男が、精霊とまた会話をしている。

「そうだ」

「それは承知した。そちらは？」

彼が俺を指した。

「うーん？　別に俺はなあ……」

2人の願いを聞いた男が、ちょっとほっとしたような表情を見せた。

「そうか——2人とも元の世界には未練はないのか？」

「まあ、未練がないと言えば嘘になるんだが、別に帰りたいとも……ここで家庭も持ってるし仕事もある」

「そちらは？」

「俺もない。こっちには女がいるからな」

「元世界には男の娘はいないしな」

「フヒヒ、サーセン！」

周りを見渡すが、皆があっけにとられている。

まあ、話がまったく見えないだろうし。

「2人とも、元世界に未練がないようでよかった」

「もしかして元世界には帰れないのか？」

「いや、帰れるんだよ。でも、帰ってもなにもないというか……」

男が口を濁す。

「え？　どういうことなんだ？！」

男にアキラが詰め寄った。

「言葉のとおり、元世界——地球に帰っても誰もいないんだ」

「な、なんで？！　なにかあったのか？」

「もしかして核戦争とか？！」

俺の言葉に彼の表情が曇る。

「まあ、たしかに戦争はあったんだが、人類が全滅したのはそれじやなくてな」

男の口から語られる衝撃の事実。

地球に小惑星が落ちて、人類がほぼ全滅してしまったらしい。

「「マジか……」」

俺とアキラ、2人で絶句する。

まさか、こんな形で世界の終わりに出会うことになるとは……。

「今は絶賛氷河期中。全滅って言ったが、僅かながらは生き残っているみたいだが」

男もアイテムBOXらしきものを持っているらしい。

そこからタブレットを出して、地球を外から見た映像を見せてくれた。

ぶ厚い雲に覆われていて、隙間から見える大地や海も真っ白になっている。

「ケンイチって言っていたな？ そちらさんのいた場所は？」

「北海道だ」

「お？ 俺も北海道だよ。北海道は——現在マイナス70度ぐらいだな。東京でマイナス45度」

冬だからこの気温なのではない。一年中この気温ってことだ。

一緒にタブレットを見ていたアキラが崩れ落ちて、砂浜に大の字になった。

「ほんじゃ——俺たちは、逆に拉致されて助かったってことかよ」

「まあ、そういうことになるかな。地球に残っていたら確実に死んでいただろうし」

「それじゃ日本も全滅なのか？」

「いや、日本人だけ1000万ちょい生き残っている」

「「え?!」 どこに!？」」

俺とアキラの声がハモった。

「俺の国と日本との間に、門ゲートが繋がってたんだよ、知らないのか？」

「日本と異世界がつながる？ 知らねえよ、そんなの！」

アキラが砂浜に寝転がったまま、ふてくされたように吐き捨てた。

「ケンイチは？」

「俺もだ」

「うゝん？」

男が下にいる精霊とかいう女の子と話を始めた。

「なにがどうした？」

「どうやら、こいつらが2人を拉致してからしばらく放置していたらしくて、20年ぐらいたっているようだ」

「ええ？ それじゃ浦島太郎状態……」

「そんな感じかな」

「異世界とつながるなんて——そんな状態になって、よく諸外国がおとなしくしてたな？」

アキラの言うとおりだが、異世界の技術やら資源やらを考えると、絶対にちよっかいを出してくるだろう。

「おとなしくしてないぞ？ すったもんだで日本と諸外国が戦争になった」

「えゝ？！」

異世界と門がつながった日本には、異世界の技術と資源が流れ込み、未曾有の好景気になった。

当然、面白くないのが諸外国である。

あの手この手で、ちよっかいを出してきたらしい。

そうなれば国内でもナショナリズムが台頭する。

蝸牛角上の争いのあと、日本では急進右派政党が政権を握り、憲法改正からの軍拡への道を進み始めたという。

「異世界の技術ってなんだ？ 魔法か？」

「いや、魔法は日本人には使えないし——コレだよ」

男がアイテムBOXから、黒い石を取り出してみせた。

「それって魔石」

「そう。こいつは簡単に電池になるんだ。発電にも使える」

「え？ そうなのか?!」

完全リサイクル、完全無公害、究極の電池——そりゃ世界がひっくり返るし、諸外国は日本叩きをするわ。

「そりゃ、どこの国も面白くねえだろう」

アキラの言うとおりだ。

「まあ、綺麗事と御託を並べてたよ。異世界の技術や知識は人類の共有財産なんだから、独り占めするべきでないとか、門は国連で管理するべきだとか、はは」

「ああ、解った……」

下からつぶやきが聞こえた。

「なにがだ？ アキラ」

「ある距離に近づけば、小惑星が落っこちてくるって解っていたはずだ。それに対策をしなかったってことは、全世界が異世界に逃げ込めばいいと——そう考えてたんだろ？」

「そのとおり。それで世界大戦になったってわけさ」

「よく日本が勝てたな」

「まあ、異世界からの知識でかなりの技術革新が起きたし、俺がこいつで色々吹き飛ばしたからな」

男が白いアレイを指差した。

「えー？ そんなのありか？」

「そりゃ門は俺の国に繋がっているからな。ふざけた連中を入れるわけにはいかないし、陛下と民を守らねばならん」

彼は、日本とつながった国の科学者で、全権大使でもあるらしい。魔法と科学を融合させて数々の発明をし、地位と財を成した。

「そりゃそうだが……」

「日本とは軍事同盟も結んでいたし当然。それに俺は、管理者からあれを借りて、この世界を任されているからな」

管理者とか言われている超科学を持っているやつから借りたわけ、あの白いものは超絶な戦闘能力を持っているらしい。

某国の空母打撃群を吹き飛ばし、核ミサイルを撃ってきた国は都市を10箇所ほど灰にしたという。

「マジで核とか使ってきたのか？」

「ああ、そんなやつらに手加減無用だろう？ 俺は常に100倍返しだし」

「しかし、犠牲者が……」

「やらなきゃ日本人が5000万〜6000万人は死んだぞ？ 先に撃ってきたのはやつらだし、綺麗事では済まん」

「そ、それはそうだが……」

やらねばやられる。

この世界でも、それは同じか。

「要は、門だけあればいいってことだから、日本なんて更地になってもよかったってことなんだろう」

アキラがつぶやくが、そのとおりなんだろうな。

「そのあとが傑作——世界中で子どもの映像とか流し始めて、『人類は皆兄弟』とか『愛し合うべき』とか言い出してな」

「お前ら先に核ミサイル撃ってきたやろが?! って話か」

「本当にそれなんだよなあ。そのあと、各国の代表が話し合いをしたいとか言い出したから国連に行ったんだよ、俺が。一応、異世界側の全権大使だしな」

「それで？」

「国連の中に入った途端に暗殺された——異世界への障壁になって

いるのが俺だから、俺さえ片付ければなんとかなるとか思ったんだろうなあ」

「暗殺って生きてるじゃないか」

「そりゃ当然、撃たれたのはダミーだし、ははは。バレバレだったの」

その展開を読んでいたこの男が、立体映像のようなダミーを使っていたらしい。

もちろん、そういうテクノロジーは、管理者というやつから提供されたものようだ。

「当然100倍返しなわけだが、ただその場を吹き飛ばしたんじゃおもしろくない」

「それで、なにをやったんだ？」

アキラが興味深そうに身を乗り出した。

「立体映像を使ってな、死んだ俺が復活してドラゴンになってから周りを吹き飛ばした」

もちろん立体映像に、ものを破壊する力はないだろうから、それに合わせた攻撃が行われたのだろう。

その様子は全世界に生中継されたらしい。

「ははは、そりゃ傑作だったろうな！」

アキラが腹をかかえて笑っている。

彼と男は気が合いそうだ。

「映像が残っているぞ。観てみるか？」

男がそう言うと、空中に映像が表示された。

確かにTVなどでよくみる国連のホール——その中央で男が突然倒れると、それがドラゴンの姿になる様子が映し出されている。

映画のCGなんてチャチなものじゃない。

どう見ても本物だ。

これがオーバーテクノロジーってやつか。

「こりゃ、全世界がぶったまげただろうな」

アキラの言葉に俺も同調した。

「そうだな、異世界にはとんでもない魔法があると勘違いしたかもしれない」

「この事件から異世界を崇拝するやつらが増えたんだが、それだからと言って助ける義理はないからな」

そもそも異世界という土地があるからといって、世界の全人口が避難するなんて不可能である。

「自分たちで自分の首を締めたのか」

「まあ、そういうことだな。このときは国連ごと周り5 km四方が灰になったわけだし」

この段階で、とつくに日本は国連を脱退していたらしい。

「ケンイチ」

話を聞いていたアネモネが俺の服を引っ張った。

「なんだいアネモネ？」

「なにを話しているの？」

「え？」

「アネモネにはちょっと難しいかなあ……」

「その前に、言葉が解らない」

「ええ？」

どうやら、アネモネを始め、他の見物客にも男がなにを話しているのか解らないらしい。

「どういふことだ？」

アキラが首をかしげる。

「そりゃ当然だよ、地元の人間には翻訳プラントが入ってないからな」

「「翻訳プラント？」」

俺とアキラの言葉がダブる。

「脳みその中にそういう回路が組まれているんだ」

「ええ？　だって日本語話しているし、文字だって五十音順で……」

「そう脳みその中のプラントが無理やり変換しているだけだよ」

「それじゃ、他の人に見えないものが見えたりするのも……」

「翻訳プラントって言ったけど、2人にはもっと高度なものが組み込まれていて、通常じゃ起こらないようなことの制御が行われている」

男の話を総合すると、俺のアイテムBOXやら通販機能の制御も、そのプラントという一種の生体コンピュータが行なっているらしい。

プラントの話はさておき、アネモネに話の内容を説明してやる。

「他の国が助けてほしいってことなんだよね？」

「そうらしいな」

「助けてあげられなかったの？」

「うーん……それはなあ」

「聖騎士様、その向こうの世界というのはどのぐらいの民がおるのですかえ？」

政治となると、一緒に話を聞いていたアマランサスも気になるらしい。

「えーと、ざっと70億ぐらいか」

「無理！ 無理ですわえ！ そのような数の難民など受け入れられるわけがありませんわえ！」

アマランサスの顔がひきつる。

「そのとおり——今ここに門ができて、『向こうの世界がピンチなんだ、助けてくれ！』と言われて、すぐに数億の民を受け入れられるか？ って話なんだよね。まして数十億なんて」

「そんなのデキツコナイス」

「そうだろう？」

話が長くなりそうなので、俺はアイテムBOXからテーブルと椅子を出した。

「飲み物は？」

「コーヒー」

「はいよ」

コーヒーを飲みながら話は続く。

一緒に座った女の子には、ケーキを出してあげると、手づかみで食べている。

口の周りがクリームだらけだ。

「でも、君の国は日本人を受け入れたんだよね？」

「うちの陛下はお優しくてねえ。日本が保有している全部の金きんと引き換えに、1000万人だけ受け入れた」

金を取ったのか。

「それで1000万人だけ生き残ったのか……」

「そうだな——でも、毎日大量輸送しても1000万人の移動はギリギリだったよ」

男の話では、日本から異世界に1000万人を避難させるのがやっとなららしい。

地球に衝突する小惑星の軌道が判明して、その日まで約2年。

ずっとグダグダと揉めて、局地的な戦闘を繰り返して実際に異世界への移住が本格的に始まった時点で、残り1年。

そりゃ、1日1万人運んでも1000日かかるんだ。

一日3万人運んで333日。

異世界とつながる通路は、バスやトラックが通れるぐらいのスペースしかないらしい。

「それで？ その1000万人の人選ってのはどうやったんだ？
かなり揉めただろう？」

アキラがコーヒーを飲みながら話す。

「15歳から30歳までの独身で健康な男女から中心に選んだ。あとは、政治家や技術者、知識層だな」

「ガキや年寄りや生産性に欠けて、リソースを消費するだけだからな」

病氣などをしてても物資は限られているし、介護のために貴重な労働力となる大人の手が塞がる。

とにかく、なにもないので、若くて健康な労働力だけが求められたわけだ。

「苦渋の決断なのは日本人全員が解っていたから、限られたところからしか反対は起きなかったな。肅々と、生き残るために選ばれた人たちの異世界への移動が進んだ」

「「……」」

俺とアキラが言葉を失う。

まさか、日本がそんなことになっていたとは……。

「それじゃ、日本に残っていたとしても、俺たちみたいなオッサンじゃ異世界への切符を手にするとはなかったということだな」

「そうだよなあ」

オッサン同士で顔を見合わす。

「けど、日本の人口は1億2000万人——確率からいえば約1／10だ。2人の知り合いとか親戚とかがこの世界に来ている可能性はある」

「あゝ、俺はほとんど天涯孤独だしなあ。親戚づきあいはずerotたし」

確かにアキラはそんな話をしていた。

「俺には弟がいたが——拉致られてから20年たっているわけだろ？ それじゃ、とくに30歳は越えているだろうしなあ。それにやつは結婚してたし」

「弟さんの子どもは？」

アキラが俺の弟のことを色々と聞いてくる。

「いたな。俺がいなくなったときに高校生だったと思ったから……」

「それじゃ可能性はあるんじゃないかね？ 確率1／10だし」

「入国者名簿があるから、チェックできるぞ？」

「本当か？ それじゃたのむ。浜田勇氣……だったはず」

つか、数回しか会ったことがないんだよなあ。

弟にすら10年以上会ってなかったし。

ここで死んだかもと聞かされても、ピンと来ない。

俺の話を聞いた男が、タブレットでデータの検索を始めた。

「んゝ、これかな？ 北海道道南——浜田勇氣（男）ってあるぞ」

「本当か？！」

「ああ、間違いない」

「日本人の入植地域ってどうなんだ？ 物資不足とか深刻じゃないのか？」

「ここ10年ぐらいでそれなりに復興したぞ。一応、資源もあるしな。全部うちの国からの借金だが」

「でも、日本人が本気になりゃ、焼け野原からでもあつという間に復興するからなあ」

アキラが空を見上げてつぶやく。

「まあ、うちの陛下もそれを知っているから、金を貸し付けているんだが」

「もし、そこに行くことがあれば援助してやりたい」

「お？ 目的ができたな」

俺が叔父だと言っても信用してくれないかもしれないが、「あなたのお父さんに世話になったことがある」でいいわけだし。

「さて、それじゃ2人とも、ここに居残るってことでいいのだろうか？」

「ああ」

俺はまったく問題ないが、アキラはどうだろう。

「俺もそうだな。日本には戻れないし、いまさら日本人街に行ってもなあ」

「ここにいたほうが、楽な生活ができそうだしな」

彼も残るか。

「そうなる——2人とも、なにかを忘れてないか？」

「忘れる……？」

「なんだ？」

「ここに根を下ろすとなると必要になるだろ？」

俺は彼のいうことを理解した。

「ああ！ 子どもか！」

「あゝ、そいつがあったな！ それじゃ子どもを作れるようにしてくれ！ すげーテクノロジーがあるなら、それぐらいはできるだろう？」

アキラも忘れていたようだ。

あまりにショッキングな事実が発覚したからな。

「もちろんできる。俺も苦勞したからな」

「あんたも子どもがいるのか？」

「ああ、えーと、なんんだっけ？ ——おそらく10人以上かな」
「相手1人じゃないよな？」

「もちろん。けど、突然増えたりするからなあ」

彼の子どもにはエルフもいるらしい。

「エルフと子どもってできるのか？」

「いや、これはかなり困難だな。なにしろ遺伝子の構造とかまるで違うし」

「それでも作れるのか？」

「作れるというか——ハッキリいって母親のコピーだな。俺の遺伝子なんて限りなくゼロだと思う」

人間とエルフの子どもということで、セテラが興味津津なのだが、かなり難しいらしい。

「子どももできるようになるのか……」

「そのとおりだ。だが施術を受けると、今度は日本人とは子どもが作れなくなるからそのつもりで」

「それは了解だ。いまさら日本に未練はないし」

「ケンイチ」

後ろに立っていたアネモネが、俺の服をひっぱる。

「なんだい？ アネモネ」

「赤ちゃんが作れるようになるの?」

男の言葉は解らないが、子どもを作る話をしているのは会話から解るようだ。

「なるらしいよ」

「よかった……」

アネモネとの会話を聞いていた男が訝しげな表情をしている。

「人の趣味に口を出すわけじゃないが、子どもが相手つーのは……」

「君の考えているようなことはないから」

「一応、信じるが……」

男が椅子から立つと頭を下げた。

「この度、2人を騒ぎに巻き込んでしまったことを、この世界の管理者に代わり再度謝罪する」

「まあ、しゃーねえ。変な能力を与えて変な世界に放り込むなんて、ガキみたいなことをする神様だと思ってたら、マジでガキだし」

アキラが少女を睨みつけると、彼女が男の後ろに隠れた。

相手が子どもじゃ、ボコボコにするわけにもいかないし、それなりの対価をもらって納得するしかない。

それに——この世界にやって来なければ、俺たちは死んでいたのだ。

「俺も納得したから、謝罪を受け入れる」

「感謝する。それでは今から俺の国に向かおう」

「今からか?!」

突然すぎる。

こちらにも準備があるのだが。

「こちらに来ることは、あまりないだろうし、行くなら今が一番いい」

「その施術に時間はどのくらいかかるんだ？」

「そうだな——1週間ぐらいか」

「うーん」

「どうしても時間の都合がつかないなら、あとで迎えをよこすが。座標は記憶したので、あのポッドだけで来れる」

「アキラはどうだ？」

「俺はいつでもオッケー」

「オッケーにゃ！」

なぜか獣人たちがはしゃいでいる。

俺の子どもができるかもしれないということで、前祝いだろうか。

「うーん、スマンが、1時間だけ待ってもらうことは可能だろうか」

「大丈夫だ」

「それじゃ、1時間で準備する」

「了解した」

慌ててテーブルと椅子を収納すると、車に乗る。

男が車を見てうなずいている。

「ラ○クルか——俺も乗ってるぞ。異世界なら最高の選択だ」

「俺もそう思う」

「俺も一緒に行っていいか？ 村を見学したい」

「領を立ち上げたばかりなので小さな村だぞ？」

「領主なのか？」

「ああ」

領主なんて七面倒臭いことをやるとは、本当にご苦労様——そんな顔をしている男も村に来るようだ。

別に見せて困るものもないし、いいけどな。

274話 俺たちの国もこうなるのだろうか？

サクラを突然訪れた男。

この世界を管理している管理者の代理だと言う。

超常の科学力で動いていると思われる乗り物を使っていることからも、間違いないものと思われる。

彼の口から語られる元世界の状況に、俺とアキラは絶句した。

地球はすでに絶滅状態だと言うのだ。

結果的に、こんな世界に放り込まれた俺たちは逆に命拾いをしたことになる。

チートがあるせいで、元世界とほぼ変わらない生活ができていしな。

マヨネーズ能力とかいう変な力をもらったアキラは、苦勞したようだが……。

管理者の代理として、男の謝罪を受け入れた俺たち。

詫びの対価として、子どもを作れるように身体を改造してもらえららしい。

種族の違いから子どもが作れないことに困っていた俺たちには、まさに渡りに船。

男の話ではすぐにその場所に向かうという。

これは困った。

いきなりそんなことを言われても——少々困惑した俺だが、この機会を逃したら次はないかもしれない。

砂浜に放置してあったラ○クルに皆で乗り込むと、男も一緒に乗り込んだ。

彼はラ○クルの3列目シートに座る。

どうやらサクラを見学してみたいらしい。

一緒にいた精霊とかいう女の子は、白いアレイの中に押し込めたようだ。

結構乱暴に扱っているようなのだが、大丈夫なのだろうか。

車を走らせて慌てて家まで戻ると、リリスに事情を話す。

「ちょっと待て！ そなたの言っていることが理解できぬのだが？」
俺の突然の申し出に、彼女はかなり困惑している。

「俺の身体を治療して、子どもが作れるようにしてもらえるんだ。
次の機会はないかもしれない」

「そ、それが本当なら素晴らしいのじゃが……」

「というわけで、1週間ほど留守にする」

「そなた、悪魔かなにかに騙されているのではないのかえ？」

「そんなことはない——と思う」

彼の言っていることはすべて辻褄が合っているし、騙す理由がない。

それに同じ日本人だし——というのは理由としては、ちょっと浅いかもしれないが。

リリスとユリウスに領のことを頼むと、外に出た。

プリムラがいらないが勘弁してもらおうしかない。

あとでなにか言われるかも知れないが——まあ仕方ない。
いつものように怒られることにしよう。

男が村の見学から戻ってきた。

「あの魔石モーターってのは面白いな」

「あれはゴーレム魔法なんだよ」

「ゴーレム？　へえ。魔石からの力を直接回転運動にできているから効率がよさそうだ」

「魔法を使うから、この世界でしか使えないが。サンプルをやるよ」
「ありがたい。それから、人が群がっていたのは人工ダンジョンか？」

「そうだ、ポップする魔物を倒して魔石を生産している」
「システムを上手く利用しているなあ」

「ははは……」
この男にそう言われると、本当にゲームでもしているんじゃないかと思えてくる。

「奥方には、なにか言われなかったか？」

「悪魔に騙されているんじゃないかと……」

「ははは、そりゃ俺は地元じゃ悪魔とか言われてるけどなあ」

男がゲラゲラと笑っていると、アキラが来た。

「ケンイチ、お姫様は？」

「問題なし」

「それじゃ行こうぜ！」

「行くか」

行こうとすると、アネモネが俺の所に走ってきた。

「ケンイチ！　私も行く！」

「アネモネ、ちょっと無理だよ。無理無理」

「ぷー！」

拗ねても駄目なことがある。

「あのポッドの中は狭いから、4人で一杯なんだ」

「ゴメンな、待っててくれよ」

「解った……」

まあ、乗り物に乗れないとなれば引き下がるしかない。
俺の乗り物なら強引にでも乗せるのだが、他人の乗り物だし無理は言えない。

「アマランサスとセテラも悪いが、留守番な」

「仕方ありませんぬ」

「ちえ、つまんないのお」

男がセテラを見つめている。

「あのエルフは本当に5000年生きているのか？」

「本人申告だから確かめようがないが、船で宇宙を越えてきたって
言っているから間違いないと思う」

「そうか」

そこにベルとカゲがやってきた。

「お母さん、ちょっと1週間ぐらいでかけてくるからな」

「にゃー」「みゃ」

彼女の黒い毛皮をなでてやる。

「なんだそれ!？」

男が森猫に驚いている。

「森猫だよ、そちらにはいないのか？」

「いない——なんだそれ、すげー羨ましいんだけど」

「そんなこと言われてもな。獣人たちはいないのか？」

「いるけど……そんな大きい猫は……欲しい」

男は興味津々って顔で、森猫のことを見つめている。

大陸や島によって、動物や植生に違いがあるらしい。

元世界でもそうだったから、この世界でも当然同じことが起きる
のだろう。

ベルとカゲは駄目だが、彼なら森猫を捕まえるぐらいはできると
思うが……。

皆に別れを告げると、男3人でラ○クルに乗り込む。

車で湖にたどりつき、今度は白いアレイの中に乗り込んだ。

未知の乗り物の中は白くてシンプル。

どういう仕組みか解らないが、窓のように外周の一部が透けて外
が見える。

「俺たちは上にいるから、下にいてくれ」

「解った」「オッケー」

中は確かに狭いが、子どもならあと1人乗れそうな感じもする。

まあ、なにがあるかまったく解らないので、アネモネには留守番
してもらうのがいいだろうな。

一体どうなるか？

ちよつとドキドキしていると、俺たちが乗り込んだそれは、ふわ
りと宙に浮いた。

みるみる地面が離れていく。

かなり速く感じるのだが、加速度などは感じない。

上空から見た俺たちがいた世界は大陸だった。

俺はドンドン小さくなる大陸を見て、心の中でため息をついてい
た。

まさか、こんなことになるなんて……。

白い乗り物は、あつという間に高度を上げて宇宙の境目が見える
地点まで上昇。

なんと宇宙旅行まで体験できてしまったわけだ。

「どこまで上昇するんだ?!」

「ここらへんから水平移動に移る。下でスピードを出すとき色々と不味いことになるからね」

上から男の声がする。

空気の薄いところまで上昇してからスピードを出すのだろう。

アレイの上下に部屋があつて、男と精霊という女の子が上。

俺とアキラが下にいる。

部屋は狭いがなんとかなる。

「こりゃ宇宙旅行だぞ?」

「ははは、元世界でこんなことやったら、いくら金がかかるか解らねえ」

アキラと2人で、青い星の風景を楽しむ。

「アキラ、なにか飲むか?」

「いいねえ。それじゃコーラ。ポテチもつけて」

「あいよ」

シャングリ・ラからコーラとポテチを買う。

手が汚れるのが嫌なので、箸も買うか。

「ふう……、俺にもこの力が手に入るのか」

「まあ、手に入ったらびっくりすると思うが……」

「手品にはタネがあるんだろ? 楽しみにして待つさ」

窓から見える景色は壮大だ。

白い雲が青い海の上に渦を巻いている。

宇宙ステーションからの写真でこんなを見たが、まさかこの目で見られることになるとは……。

アキラと一緒に食べているポテチに目をやる。

色々とその世界のことを知らされると、このシャングリ・ラがどういう原理なのか気になる。

ちよつと聞いてみるか……。

「おい、俺たちの能力ってどういう仕組みなんだ？」

「そうだな。マヨネーズとかどこから出てくるんだよ」

「さっき体内プラントの話をしただろ？」

上から声が聞こえてくる。

「ああ」

「プラントのサブ脳から管理システムにアクセスして、望んだものが転送されてくる」

「それじゃ、やろうと思えばなんでも呼び出せるんじゃないか？」
アキラがポテチを箸でつまんでいる。

「転送できるものには大きさの制限があるから、なんでもってわけにはいかないな」

「それじゃ、今呼び出せる大型の車両ぐらいが限界ってことなのか」

「そうだな」

「あの転移門ってのも同じ仕組みなんだろうな」

「多分……」

アキラとひそひそ話をする。

「言っておくが、俺たちの国にはそういう変な力を持ったやつはいないんだ」

独自魔法ユニークとかいうものは、帝国やカダン王国があるあの大陸だけらしい。

「それじゃ俺たちだけ？」

「ああ、あの大陸は特に、この精霊たちの遊び場になってしまっ

いるから、色々と生活の中にシステムが入り込み過ぎている」

「ダンジョンとかいうのもそうなのか？」

「そうだな。普通に考えたら魔物が湧いたりとか、アイテムドロップしたりとか変だろう？」

「それはそうなんだが……」

アキラと2人で顔を見合す。

子どもの遊びに命がけで付き合わされているようなものなのだから、笑えない。

「でも、ダンジョン使って魔石集めとかしちゃっているしなあ」

「便利なシステムは、利用したほうがいいと思うぞ」

「そういうものだと思って諦めるしかねえな。アトラクションとかゲームみたいなもんだよ」

アキラの言うとおりか。

だが普通の魔法とかはどうなのだろう？

「普通の魔法とかも、そのシステムとやらの干渉なのか？」

「いや、普通の魔法は——」

この世界に充満している精霊と呼ばれるものを使って引き起こされる現象らしい。

男が連れている少女が人工精霊ならば、空中に漂っているのも精霊。

すべてが、エルフたちによってバラ撒かれたものらしい。

「それについてはセテラは話してくれなかったな」

「魔法文化というものも、エルフが持ち込んだものだし」

「そのエルフは宇宙人だって話だったが、この世界にいる住民たちは？」

「宇宙進出した元人間だよ。自分たちで遺伝子いじくり回しているので、大分変わってしまったっているけどな」

「え?! マジで？」

「ちょっと待て、それじゃこの世界は未来なのか？」

アキラの言葉どおり未来ってことになるよ……ここは地球？

「ここが未来の地球とか、そういうオチか？」

「いや、ここは違うぞ」

「そうなんだ……でも、未来って……」

「地球と繋がっているって言ったろ？　ここは地球とは別の次元なんだよ」

「どのぐらい未来なんだ？」

「確か――1万年ぐらいじゃなかったか」

「そんなに？」

「いや、宇宙の歴史からすれば、1万年でも10万年でも、誤差みたいなもんだし」

「その人間の成れの果てが、なんで魔法とか使える？」

アキラの質問に男が答える。

「この世界の住民たちは、さっき話した体内プラントを使って精霊をコントロールしているんだよ。遺伝的にそういう器官が身体に組み込まれているわけだ」

そんなに遺伝子をいじったりしているなら、レガシー人類である俺たちと子どもなんてできないはずだ。

そういうテクノロジーを持ち込んだのもエルフのようだ。

「俺たちのは後づけだったけど、生まれもってそういう器官があるよ」

「そういうことになる」

「それじゃ、そのシステムとやらをいじくれば、どんなパワーアップでも可能ってことか……」

アキラがシステムについてつぶやく。

「それが俺たちの祝福の力なんじゃね？」

「なるほどなあ」

「もしかしたら、魔石とかの対価なしで、レポートとかもいけるかも」

「解った――要は、あの精霊とかいうガキと仲良くなれば、やりたい放題ってわけだ」

「言っておくが、こいつらは俺にしか懐かないから、仲間にするとか無理だぞ」

上から声が聞こえてきた。

どうやら俺たちの会話が聞こえていたようだ。

「フヒヒ、サーセン！」

彼の話によれば、この世界に避難している日本人によって、魔法の研究もされているらしい。

日本人に、その体内プラントを移植する実験なども行われているという。

今のところは成功していないようだが――今、地球上を襲っている氷河期が明けるまで数百年。

時間はたっぷりある。

アキラと話す。

「この星の地形ってどうなっているんだろうな？」

「さあ、管理者っていうなら、惑星のデータとか持っているだろ？」

『マップを見ますか？』

「「うお？」」

突然聞こえた声に2人でたじろぐ。

「誰だ？」

『私は、このポッドのAIです』

「はー、人工知能……」

『そうです』

「AIといっても、全然不自然じゃないし普通だな」

アキラの言うとおり、人間の通信と言われても気づかないだろう。一応、女性の声なので彼女ということにして、星のマップを出してもらおう。

空中に画面が出て、星のマップが表示されている。

俺のアイテムBOXやら、シャングリ・ラの画面の出方によく似ているが、これは脳内に表示されているわけじゃなくて実際に空中に出ている。

その証拠にアキラにも見えているのだ。

「俺たちがいたのは、太陽の動きから北半球だと思う」

「南半球でも太陽は東から出て西に沈むぞ？ でも、動きは反対になるがな」

「そ、そうなんだ？」

頭がこんがらがるが、アキラは世界中を旅をしたそうだからな。

『表示したい場所がありますか？』

「それじゃ、俺たちがいた場所を表示してくれ」
場所が表示された。

スケールを出してもらうと、3000km四方の大陸だということとが解る。

真ん中が砂漠になっているのが目につく。

「へえ、こんな感じになっていたのか」

「ほとんど移動してなかったから、随分と狭い範囲で戦っていたなあ」

「まあ、井の中の蛙大海を知らずってやつか」

「はは……」

アキラが苦笑いをしている。

「俺たちが向かっているのは？」

『この大陸です』

表示されたのは、俺達が住んでいた場所と同じぐらいの大きさ。

「ここに、地球のオーストラリア大陸を重ねて表示したりできる？」

『可能です』

隣に見慣れた大陸が重なった。

ほぼ同じ大きさである。

「ほんじゃ、俺たちがいた大陸もオーストラリアと同じぐらいの大きさってことだな」

アキラの言うとおりだが、この大陸は普通の大陸と少々異質なところがある。

普通の大陸は、海からの湿った空気が流れていくと、その途中で雨を降らせる。

そのあと大陸の中央にきたときには空気が乾燥しているわけだ。

そのため大陸の中央は砂漠になることが多い。

実際、俺たちがいた場所もそうになっていたが、この大陸の真ん中は密林。

なにかわけがあるのだろうか？

「ちょっと聞きたい」

『なんででしょうか？』

「大陸の中心部まで密林が広がっているように見えるんだが、水源がなにかあるのか？」

『大陸の地下には巨大な地底湖が広がっており、植物はそこから水

を汲み上げています』

「そうなのか」

どうやら地下には独自の生命圏もあるらしい。

大量の水があれば、植物から蒸発した水分で雲ができて、また雨が降る。

そうやって水分を自給自足しているようだ。

「すげえな。その地下って調査はされているのか？」

アキラの質問にA Iが答えてくれる。

『何回か調査はされていますが、ほとんどが未知の領域です』

「おお、川〇浩探検隊が生きてたら番組になってたな」

「そうだな」

その大陸の反対側にも、もう1つ大陸がある。

「大陸間の航路って整備されているのか？」

『いいえ、海上は巨大生物が多数生息しているので、通常艦船では航行不可能です』

「巨大生物……」

その生物の図が表示された。

巨大なクラーケンやら、サーペントがうじゃうじゃいるらしい。

「こりゃ海に行くのは無理ゲーだな」

アキラの言うとおりだ。

「王国も帝国も、海路をまったく使っていないということは、昔にやってみて懲りたんだろうな」

「帝国でも、海にはデカイ魔物がいるってことで、海岸沿いの航路しか使えないって話だったしな」

それは王国でも、まったく同じだ。

話をしていると、共和国のことを思い出した。
そのことを男に質問してみる。

「俺たちのいた場所の隣の国にも、元世界の人間がいるんじゃないのか？ それっぽい知識が広まっていたようなんだが」

「ああ、いたようだが、すでに死んだらしい」

男の話からすると、やはり他の転移者がいたようだ。

「死んだ——最近か？」

「いや、かなり前のようだ」

それでは国を立ち上げただけですぐに粛清でもされたのか。
今となっては確かめる術もない。

やはり精霊とかいう連中に仕組まれた、命がけのゲーム。

こいつは洒落にならない。

変なチートを与えられて、命がけのゲームの駒にされるのがよかったのか。

それとも地球に残ったまま、隕石の衝突に巻き込まれて死ぬのがよかったのか。

究極の選択だ。

1時間ほどで目的地である大陸が見えてきた。

マップで見たように、中心が鬱蒼としたジャングルになっている。

「これから降下する」

上から声がする。

「解った」

「さて、鬼が出るか蛇が出るか——」

「国自体は、俺たちの国とさほど違わないんじゃないのか？」

「でも、日本と繋がっていたんだろ？ それなりにテクノロジーと
か入ってきてるんじゃないか？」

「そうか——そうだな」

下を見ると、延々と続く果てしない森の隣に大きな都市が見えて
きた。

その周りには豊かな穀倉地帯。

近くを巨大な崖が大陸を引き裂くように走っているのが見える。

どうやら、ここがこの国の王都らしい。

「なんだ？ すげー！ 星型要塞か！」

「おう！」

巨大な都市が丸ごと、ギザギザの城郭と堀でぐるりと囲まれてお
り、沢山の塔が立つ。

その上には高射砲らしきものまで見える。

マジで要塞だ。

沢山の家々が城郭から溢れて、周辺まで広がっているようだ。

アキラと2人で驚いていると上から声が聞こえてきた。

「日本との共同で、公共事業を行なって作ったんだよ。予算は1兆
円以上かかった。最終的には1兆5000億だったかな？」

「そ、そんなに金があるのか？」

「色々と売るものもあったし、海岸には原油も出るしな」

「マジか……」

「この公共事業に使った重機が大量に入ってきていたせいで、移民
してきた日本の復興を早めることができたんだ」

「原油が出るなら、ガソリンやら軽油に困る必要もねえしな」

アキラが下を見ながらつぶやく。

長く続く崖の上には白く美しい城も見える。

「海岸には製油プラントもあるしな」

「石油製品があるのは強いなあ」

「だな」

「都市の人口はどのぐらいなんだ？」

「今は70万人ぐらいだな。俺がやって来たときは十数万ほどの僻地の都市だった」

日本と繋がったことで、ここまで発展したのだろう。

高度を落とすと、異世界らしくない近代的な建物も見えてくる。

「ここにも日本人が住んでいるのか？」

「ああ、王都の近くにある日本人街に住んでいるのは、世界が終わりになる前に入植してきていた人たちだ」

「そいつらは勝ち組じゃん」

アキラの言うとおりかもしれない。

「老後を緑豊かで空気が綺麗な異世界で——とか、そんなことを考える爺婆がいそうだな」

「実際、そういう人も結構いたぞ。それに王国は、タックスヘイブン特区を作って日本企業を誘致していたからな」

「へえ、そんなこともしていたのか」

「うちの陛下は金儲けが大好きなので、儲かることはなんでもやるんだ」

「それで政治は大丈夫なのか？」

「もちろん。敵に対しては暴虐非道なこともするが、自国民には優しい方だよ」

それならいいが——まあ、下を見ても都市はにぎやかで発展しているように見える。

その他、気になるのは巨大な白い卵型の建造物と、裾が広くなっている高く白い塔。

彼の話では、卵のほうは発電機で、塔は新興宗教団体の施設らし

い。

「新興宗教団体なんて、よく認めたな？」

「いや、この国で信じられている神様を祀る新興宗教団体なんで問題ない」

「ええ？ 異世界の神様を信じてるのか？」

「まあ、神様というか、この世界の管理者のことなんだが」

「その管理者って神様なのか？」

「違うな。科学力が超発達したただの生命体だよ。やることなく、いつも暇してるやつだ」

「そいつらにとっては、こういう街の発展も、シミュレーションゲームをやっているような感覚なんだろう？」

アキラの愚痴に男が反応した。

「おおよそそんな感じだが、力があるのは間違いないので逆らうのはおすすめしない」

「解ってる」

地上にいる虫みたいな俺たちが、どこにいるのか解らない神様みたいな連中に逆らえるはずがない。

それに、俺たちの力だって管理者のシステムやらを利用しているわけだし。

それを停止されてしまったら、俺とアキラはただのオッサン。

手も足も出ない。

「そりゃ、身体を自由自在に作り変えることができるような連中相手じゃどうしようもないだろ？」

アキラの言うとおりでが——ベルの身体とか、どうなっているんだろう？

本当に生まれ変わったのか？

脳みそだけ入れ替えた？

そういう設定のNPCとか？

この乗り物のAIですら、普通に話していて不自然さは感じない。どこまでが本物で、どこまでが作り物なのか？
考えると怖くなるので止める。

「そういうことだ」

下に見える白い卵型の発電機も、管理者から貸し出されているものらしい。

「その管理者って月に住んでいるのか？」

「いや、月は侵入者に対する自動防衛システムなので無人だ」

「望遠鏡で見て、街の灯りみたいのが見えただがなあ」

「システムは生きているが、誰も住んでいない」

「そうなのか……」

月に行かないと、この異世界騒ぎは終わらないと思っていたのだが、こんな迎えが来るとは。

街を見ると、太いアスファルト舗装された道路が、森の中を突っ切って崖の中に消えている。

そこには砦が作られて、封鎖されているように見える。

「ケンイチ、あそこが門ゲートとかいう場所らしいぞ？」

「らしいな」

あそこを通れば元世界に戻れるが、もう故郷は存在しない。

「そもそも、なんで異世界とつながることになったんだよ」

「管理者が、今の地球のラグランジュポイントにいるからだ」

「はあ？　そ、それじゃ地球に隕石が落ちるのも阻止できただろう？
すげえ科学力を持っているんだろ？」

「そんなことをしても管理者にメリットがない」

上から冷たい男の言葉が響く。

「それよりも、惑星に巨大隕石が落ちるなんてイベントを外から見物したほうが面白いってわけだ」

「くそ！　とんでもねえ野郎だぜ……その管理者ってのはよお！」

「一応、俺も頼んではみたんだが、取り合ってもらえなかった」

「なんて野郎だ！」

アキラが吐き捨てる。

「そうは言うが、管理者がいてもいなくても隕石は地球に落ちたわけ、全人類の全リソースをつぎ込めば、小惑星の軌道を逸らすことができたはずだと、やつらは断言している」

異世界に通じる穴があったことで、自分たちだけ抜け駆けしてそれに逃げ込めばいいと——思ってしまったわけだ。

全人類が団結し、危機に立ち向かわなかった報いというべきか。

下には鉄道や高速道路らしきものも見える。

やはり、かなり日本の技術が浸透しているようだ。

「それで？　俺たちはどこに行くんだ？　お前さんが、その施術やらをしてくれるわけじゃないんだろ？」

アキラが少々ふてくされている。

「はは、俺には無理だな。もうすぐ、その場所に到着する」

男の言うとおりに、乗り物は崖の近くに到着した。

下には懐かしいアスファルト舗装の道路もある。

ガソリンで動く車も止まっているのだが、それはシャングリ・ラで買ったラ○クルとかがあったから、さほど目新しくもない。

「おお、ケンイチ。なんだか、すげえ懐かしい景色だな！」

「そうだな。ここらへんは日本みたいだ」

その先を見ると、崖の中になにかあるようで、白い材料でできた入り口がある。

「しばらく上方で待機」

『かしこまりました』

男が白いアレイに声をかけると、ゆっくりと浮き上がった。目で追うと――そこでふっと消える。

「消えた？　なんだ？」

「遮蔽したんだよ」

「そんなこともできるのか」

恐るべし管理者のオーバーテクノロジー。

3人で壁の中にあるらしい建物の中に入ったのだが――そこには外からは考えられないような光景が広がっていた。

「おおっ、こりやすげえ」

中にあつたのは高い天井の駅らしきホール。

俺が見る限り、トラムのターミナル駅に見える。

グレーの5両編成の車両が並び、左手を見ると沢山の下向きのエスカレーター。

下から人が上がってくるのが見える――日本人の女性だ。

思わず声をかけたくなくなってしまいが、それじゃ変なオッサンだ。自重する。

「でも、外見と中身が違っているんじゃない？」

「ここは、管理者の技術が使われている特区だからな」

サクラでコンテナハウスを拡張する魔法を使ったが、あれの拡大版みたいな感じか。

俺たちはトラムの1つに乗り込むと、トンネルの中を進む。視界が開けると清潔そうな白い街が見えてきた。

「ここに住んでいるのは日本人なのか？」

「そうだな」

どういう状況でこういう場所に住むことになったのか、まったくの不明だが、まるで未来の都市のようだ。

駅に到着すると、俺たちは白い建物に向かった。

「外観から病院っぽいが」

「そうだな」

俺はアキラの言葉にうなずいた。

白い建物の中に入ると、広いホール。

真ん中が吹き抜けになっていて、そこに受付がある。

そこで男が受け付けをしてくれると、白い看護服をきた女性の看護師がやって来た。

黒髪のすごい美人だが、なにか作られたような感じに見えなくもない。

「どうぞ、こちらに」

どうやら彼女が案内をしてくれるようだ。

「処置が終わったら迎えに来るから。待っててくれ」

「俺たちの希望を全部伝えてくれたのか？」

「ああ、ポッドに乗っている精霊から、データがきているから大丈夫だ」

「そうか解った」

男と別れて看護師について歩いていく。

「だ、大丈夫なんだろうな？」

アキラが心配そうだ。

「ここまで来たら覚悟を決めるしかないだろう。わざわざ俺たちをはめるために、こんな場所まで連れてきたとも思えんし」

「そうだけだよ……」

ここまで来たら、なるようにしかならん。

どの道、ここで処置を受けるしか子どもを作れるようになる手段がないのだ。

白い通路を歩き、エレベーターに乗り、俺たちはある部屋に連れていかれた。

部屋に足を踏み入れると、そこはSFの世界。

映画の宇宙船のような様々な機器が並び、透明なチャンバーが横たわっている。

「これってガラスじゃないよな？　もしかして幻の硬化テクタイト……」

透明な入れ物を触っていると、看護師が俺たちに服を脱ぐように言ってきた。

「んー、しょうがない」

俺が服を脱ぎ始めると、アキラが看護師の所に行く。

「フヒヒ、脱がしてくれない？」

「はい、それでは」

本当に彼女がアキラの服を脱がし始めて、あっという間に裸にしてみました。

「おお！　まるで流れるような作業だ、すげー！」
彼が変なことに感心している。

裸になったオッサン2人で、透明なチャンバーの中に寝る。

「お手柔らかに頼むぜえ」

「次に気がついたら、処置は終わってますよ」

へえ〜とか思っていると、俺は気を失った。

275話 異世界通販生活（完）

突然空からやってきた謎の男。

その男はこの世界を管理している者たちの代理人だという。

異世界のあらましを、男から説明を受けた。

アキラと2人で納得したような、してないような複雑な気持ちだが、元世界はすでに滅んでいるためにどうしようもない。

納得できる対価をもらって諦めることに――。

そのために、男が住んでいるという国を訪れた。

そこには管理者の息がかかっている地域が存在し、そこで身体をいじってもらえるらしい。

人間の身体を簡単にいじり、世界を簡単に滅ぼすことができるという管理者。

その正体は不明だが、俺たちでは手の出しようがない。

男が乗ってきた小さな白い乗り物だけで、地球の大都市を滅ぼすだけの力があるのだ。

病院らしき所につれてこられて、施術を受ける。

寝て起きたら終わっているらしい。

――俺は白い病室で目を覚ました。

身体を起こすと隣でアキラが寝ている。

「個室じゃないのか」

まあ無料だし仕方ない。

自分の身体を見ると、白い入院着が着せられていた。

ベッドの横には、俺の着ていた服が畳んで置いてある。

横を見れば窓が見えるので、ベッドを降りるとそこまで行く。

窓ははめ殺しになっているようで開かないらしいが——そこから見える景色はSFの世界のよう。

ここが俺たちがいた世界と同じ世界なんて、ちょっと信じられそうにない。

窓を見ながら唸っているとドアが開いて、看護師の女が入ってきた。

「お身体の具合はどうでしょうか？」

「うーん、特に問題はないようだ」

「シミュレーションの結果でも問題なしだったので、すぐにでも退院できます」

「これで本当に、この世界の人間と子どもが作れるようになったのか？」

「はい、間違いありません」

本当ならいいが……。

なんだか狐につままれた気分だ。

ステータス画面を開いてみる——まったく同じで、アイテムBO
Xも開ける。

「うーん……」

俺の隣で寝ていたアキラも目を覚ました。

「オッス、アキラ」

「オッス……これって終わったのか？」

「はい、施術は問題なく終了しています」

しばらく、ぼーっとしていたアキラだが、気合を入れるためか自分の頬を両手で張った。

「おっし！ ケンイチ、例の力ってどう使うんだ？」

「ああ、ステータスオープン」

「ええ？ マジで？」

「マジで」

「ステータスオープン……わっ！ マジでなんか出たわ！」

彼は喜んでいるが、俺にはまったく見えない。

これは個人の脳内で完結している処理らしい。

傍からみると、俺もこんな感じだったのか。

「下になにかあるだろ？」

「ん？ シャングリ・ラ……？」

「そうそれ」

アキラがバタバタしている。

「これか？！ はは、マジか！ あゝ、まさか通販サイトだとは思わなかったぜ」

「そこで対価を入れると、ものが買える」

「はあゝなるほどなあ。対価ってなんでもいいのか？」

「金でもいいが、買取りって場所があるから、そこに突っ込めば査定してもらえる」

「へー……お？！ そうだ、俺のマヨネーズとか買ってくれねえか？ そしたら無限増殖できるやんけ」

興奮しているのか、アキラが妙な言葉遣いになっている。

「チャージするなら金貨がおすすめだぞ？ 銀貨は価値が低い」

「それじゃ金貨を1枚チャージ」

相変わらず、金貨1枚で20万円のレートらしい。

「おお！ これで買い物すればいいんだな？」

「なにか買ってみるのか？」

「まあ」

そうしていると、彼のベッドの上に、口が広い蓋付きの瓶が出てきた。

「それをどうするんだ？」

「こいつにマヨネーズを入れるわけよ」

「もしかして、そいつを買取りに出すつもりか？」

「そゆこと、フヒヒ」

アキラがマヨネーズ入りの瓶をアイテムBOXに入れたのだが、すぐに結果が出た。

「買取り拒否?!」

「あゝ、やっぱり駄目か」

「んゝ、ラベルを貼ったらどうだ？」

彼がシールのラベルとマジックを買って、なにやら書き始めた。

「えゝと、超自然マヨネーズ。添加物は一切使っておりません」

「そんなので騙されるか？」

「やってみなきゃ解らんだろ？」

結果は――NO。

「そりゃそうだ」

「くそっ！」

「自己出産みたいなことはできないようになってるんだろ？」

「そうかな？ どこかに抜け穴があると思うが……」

「多分、アキラの油を加工して、バイオディーゼル燃料にすれば買収してくれると思うぞ」

「そんな面倒くせーじゃん」

アキラがあれこれ試していると、ずっと看護師さんが立っている。

「アキラ、看護師さんが待っているぞ」

「お？ ああ、悪い悪い！ 面白くてな、つい入院着から服に着替える。」

「看護師さ〜ん、着るの手伝ってくれねえ？」

「かしこまりました」

すると流れるような手さばきで、アキラの服を着せていく。

「おお！ すげー！ ねえ、お触りオツケー？」

「おい、アキラ」

彼の悪ノリを注意したのだが、看護師さんから意外な言葉が返ってきた。

「どうぞ」

「へ？ いいの？ 触っちゃうよ」

アキラが女性の身体をベタベタと触り、スカートの中にも手を入れる。

「おいおい」

呆れてその様子を見ていると――彼が突然、声を上げて飛び上がった。

「うわっ！」

彼の腕に鳥肌が立っている。

「どうした、アキラ？」

「ついてるものが、ついてねえ。穴もねえ」

「は？」

「残念ながら――私は、看護機能が優先されておりますので、その

ような機能が実装されていません」

「ええ？ も、もしかしてロボット？」

「はい、私は自動人形です」

どうやら、アンドロイドとかそういう類のものらしい。

傍目からは、どうにも人間だが、よくよく見ると――違う。

最初に覚えた違和感は、これか。

俺も一応、絵を仕事にしてきた人間だからな。

2人で服を着ると1階のホールに向かう。

さっきの看護師の件で、アキラは少なからずショックを受けているようである。

「そんなにショックか？」

「いやあ、最初からロボットだと知ってれば、そんなにショックではなかったとは思うんだがなあ……」

「コーヒーだと思って飲んだら烏龍茶で、慌てて吐き出したみたいなものか」

「はは、そんな感じかな」

ホールに到着すると、しばらく待つように言われた。

2人で、椅子に座って待つ。

懐かしい日本製の自販機などもある。

まだ製品などを作っているのだろうか？

それとも在庫を入れているだけ？

待っていると、1人のメイドさんがやってきた。

黒い髪をして、黒いスカートに白いエプロン姿のメイド。

この国でも、メイドはメイドの姿らしい。

「ケンイチ様と、アキラ様ですね」

「ああ」

「こちらへどうぞ」

彼女についてトラムに乗って外に出ると、あの男が待っていた。

「よお！ 施術は上手くいったようだな？」

「ああ、色々ありがとう」

「あとは帰るだけだが、どこか行きたい所はあるか？ 親類がいるようだったから、そこに連れて行ってほしいというなら、連れていってもいいぞ」

「……それじゃ頼む。アキラ、いいか？ スマンな回り道をさせてしまつて」

「いいつてことよ。俺も日本人の街を見てみたいしな」
アキラも賛成してくれた。

「あの白い乗り物なら、すぐに到着できるんだろう？」

「そうだな」

「あっ！ そうだ！」

アキラがなにかを思い出したのか、声を上げた。

「どうした？ アキラ」

「ダークエルフを見てえな」

「ああ、それなら俺も興味がある」

「はは、それじゃ途中でダークエルフの集落に寄ってみるか」

「いいのか？」

「まあ、ちょっと覗くだけならな。俺の所や街にもいるんだが、探すのが面倒だ」

彼の話では、ダークエルフと一緒に暮らしているらしい。

「もちろん、いるのはダークエルフだけじゃないんだろ？」

「まあな。エルフもいるし獣人もいるが」

「やっぱりなあ。異世界といえど、ハーレムだしなあ」

アキラの言葉に男が苦笑いをする。

ここにいる3人は、それぞれが多数の女性を囲っているので、お互いに詮索はしない。

駐車場に行くと、上空から白いアレイが現れて下に降りてきた。先に男とメイドが乗り込んでから、俺とアキラが乗り込む。

「そのメイドさんもハーレム要員なのか？」

「彼女は、管理者から貸してもらっている自動人形だ」

「ええ？」

アキラが変なポーズで固まる。

「どうした？」

「彼が病院の看護師に手を出して、ショックを受けててな、ははは」

「あれは最低限の機能しかない自動人形だが、こいつは違う」

男の話では最高級品らしい。

「それじゃ、ナニをナニする機能もついているのか？」

アキラはどうにもその機能が気になるらしい。

「そうらしいが、試したことはない」

「うーん、俺もロボットとやるのはなあ……」

「あんな美人で爆乳のレイランさんやら男の娘がいるしな」

「フヒヒ、サーセン」

白いアレイはゆっくりと飛び上がると、ギザギザの城郭を持つ街を飛び越えた。

「辺境伯領も、こんな具合に発展できるのかなあ？」

「ここは日本と繋がったせいで、テクノロジーやら元世界の富が流れ込んだんだろ？」

「そうだなあ」

だが、シャングリ・ラが日本の代わりにならないだろうか。
アキラもシャングリ・ラを使えることになったし、上手く使う方法を考えれば発展に加速がつけられるが……。

「だがまあ、近代化だけが皆の幸福ルートとも言えんし……」
アキラの言葉ももつともだ。

俺の一存で辺境伯領の命運が決まるし、下手すると多数の住民たちが路頭に迷う。

ここの管理者のように遊びでやるわけにはいかん。

要所には大砲らしきものも見え、男がいう門^{ゲート}の方向を狙っている。
敵が来るとすれば、あそこから——ということなのだろう。

「日本につながる門はまったく開けてないのか？」

「実は、なん度か調査隊が送り込まれている」

彼の話では、資源調達のためだと言う。

雪に埋もれた都市鉱山から、使えるものを掘り出そうというのだろう。

門が都市の近くなら——という条件がつくが。

「その門ってのはどこに開いたんだ？」

「東京のT川の近くだな」

「それなら街まで行けば使えるものを発掘できるかもしれないな」

「そういうことだ」

線路の上を黒い煙を吐いて走る蒸気機関車が見える。

「あれ、日本の蒸気機関車じゃないか？」

「そうみたいだな」

「ゼロから作ったものもあるが、中古をレストアしたものも走って

いる」

「蒸気機関ってことは、石炭もあるのか？」

「ああ、大規模な露天掘りが行われているぞ。ちょうどダークエルフの村に行く手前に鉱山があるから、上空を通る」

彼の言うとおり、すり鉢状になった露天掘りの鉱山が見えてきた。鉱山の周りには街ができて、沢山の人たちが働いているのが見える。

重機も動いているようなのだが、半分は人力だ。

「ほえ〜ここじゃ、産業革命があったのか」

アキラが下の鉱山を見て、ため息をつく。

「やっぱり石炭が出たのが大きかったが、ボイラーは石炭と魔法の併用で動いているぞ」

「なにかメリットがあるのか？」

「普通はお湯を沸かすのに時間がかかるが、魔法ならすぐに沸くからな」

魔法でお湯を沸かし、温度の維持には石炭を使っているのか。なるほどなあ。

俺たちの国でも石炭が出たら、参考にさせてもらおう。

鉱山の上を飛び越えると、乗り物は高度を落とし始めた。

側板が透明になった窓から、森の中に動いている人たちが見える。浅黒い肌で黒い革の装備をしている者たちだ。

「彼らがダークエルフだ」

「そうなのか！ もっと近くに寄れねえか？」

アキラが窓にかじりついている。

『映像を拡大しますか？』

乗り物のAIから返事がくる。

「頼むぜ！」

画面の一部が拡大されて、ダークエルフという人たちの姿がよく見える。

長い耳に銀髪でボン・キュツ・ボンのスタイル抜群。
まるで映画に出てくる戦士のようなだ。

「ファイヤー！」「ジャストミート！」

2人の声がハモる。

「おおっ！　すげー！」

「写真撮れないかな？」

俺はアイテムBOXから、カメラを出してマクロ撮影を試みた。
モニタの解像度は凄く高く、まるで肉眼で見ているような映像。
マニュアルで焦点を合わせるといけそうだ——写真を数枚撮る。

「エルフのやつらは最低だが、ダークエルフの女性はまともだ」
上から男の声が聞こえる。

ここでもエルフの評判はよろしくないらしい。
まあ、文化的な違いを理解されないことが多いのだろう。
なんといっても宇宙人だし。

だが、ちょっと待てよ、ダークエルフの女性はまともってことは
男は駄目なのだろうか？

「ダークエルフの男は駄目なのか？」

「小学校の教室で騒いでいる男子——みたいなやつらだからな」

「なんとなく解った」

「頭はいいはずなのに、アホみたいな詐欺にひっかかったりするし。
意味が解らんよ」

彼は、ダークエルフたちとも付き合いがあるらしい。
念願のダークエルフを見たので、日本人街を目指す。

森の上を飛ぶと近いらしいのだが、色々な場所を見せてくれるようだ。

下を見ると、延々と続く直線道路が見える。

ここを通って日本人が避難していったらしい。

距離的には1000kmほど。

乗り物がない者は、歩いて約束の地へ向かったという。

健康な若者でなければ、その時点で脱落確定だ。

「ここにスーパーカーを持ち込んで、最高速トライアルとかやった連中もいたんだぜ」

「ははあ、どこにでもいるなあ、そういうやつら」

アキラが呆れている。

異世界には道交法はないが、事故を起こせば異世界の法律で処罰される。

奴隷に落ちて強制労働とかな。

実際に、そうなったやつらがいて、そのニュースが流れた途端に無茶するやつらはいなくなったらしい。

次に見えてくるのは巨大な穴。

「なんだこりゃ！」

アキラが下を見て叫んだ。

「デカイ穴か……」

「俺の師匠が魔法の実験で開けた穴だ」

「えー？ 魔法でこんなこともできるのか？」

「まあな。お前たちと一緒にいるエルフなら、このぐらいはできてもおかしくはないんだぞ？」

「そうなのか？ でも、ちょっと大きな魔法を使ってぶっ倒れてい

たが……」

「それをクリアする方法が――実はある。教えられないがな」
「どうせ、危ない方法なんだろう？」

「まあ、危なくはないんだが教えられない。察してくれ」

「うちの子にそんなことはさせられないから、別にいいけどな」
左手には、石油コンビナートが見えてきた。

「おおうっ！ 本当に石油が出るんだなあ」

「港に金属製の船が泊まっているぞ。なんだか軍艦っぽいが」
アキラの指す方向に、銀色の船が泊まっている。

「洋上プラットフォームの近くにサーペントやらが出るんで、そのために配備されているんだ」

一応、ここもこの国が所持している軍の一部らしい。

「やっぱり、石油があるとないとでは大違いだなあ」

「俺が使っていた重機や車も軽油がないとただの鉄の塊だしな」
通販とかいうチートがなければ、石油を見つけてこういう製油所まで作らないと車や重機が使えないってことだからな。

そのまま乗り物は海岸沿いに進み始めた。
するとすぐに見えてくる巨大な都市。

異世界に避難した1000万人の日本人が肩を寄せ合い暮らしている街だ。

その周りを埋め尽くす畑や田んぼ。

この世界に稲はなかったので、日本から持ち込んだものだろうが、都市の食糧事情を賄うには少々心もとない。

見るからに物資不足がうかがい知れる。

それにこの世界には化学肥料がないはずだ。

「世界が終わる前に日本の技術援助で、肥料工場を作ったんだよ。そこから若干供給している。なにせ、我が国がファーストだから、多くは渡せない」

男が教えてくれた。

日本が異世界から買っている物資はすべて借款だが、日本側にも小規模ながら製鉄所や肥料工場が立ち上がりつつあるらしい。

都市にはビルも見える。

体裁が整っているようにも見えるが、ほとんどがバラックのような建物。

同じ形が並び、長屋や仮設住宅団地のようなものも見える。

車も走っているのだが数は少ない。

エンジン剥き出しの車体に荷台を取り付けたようなトラックも走っている。

とりあえず、なんでも使おうということだろう。

「はあ、戦後の焼け野原みたいな感じか……」

アキラのつぶやきに上から声がする。

「ここは原生林だったんだ。そこを一から開墾したんだから、これでも開けたほうさ」

本当になにもないゼロからのスタート。

ここまでするにも、多大な労力がかかったことだろうが、都市として機能しつつあるようにも見える。

前の日本から察するに、ここから加速度的に発展する可能性もある。

戦後はなにもなかったが、ここには今まで積み重ねた日本の全てがあるわけだし。

街の奥のほうに、堀と壁に囲まれた大きな建物が見えた。

「あの、大きな建物は？」

「あれは皇居だよ」

「ああ、そりゃなあ……」

「そうだよなあ」

アキラと俺で納得する。

その横には戦車やヘリコプター、森を切り開いた長い滑走路も見える。

ジェット機がなん機か止まっているが、使われているのだろうか？

「兵器は使われているのか？」

アキラが下にある兵器群を見ている。

「ああ、ドラゴンが出たりするからな」

「ドラゴンか……まあ、たしかに近代兵器なら、ドラゴンでも大丈夫だと思うが……」

「そうでもない。あいつら防御魔法を使うし」

「そうなのか？」

俺はまだ、本物のドラゴンに出会ったことがないからな。

ドラゴンが出ると、日本からの要請を受けてこの白いアレイを使って撃退するらしい。

もちろん有料だ。

「ドラゴンを倒したことは？」

「俺はないが、こっちのアキラは倒したことがある」

「大きさはどのくらいだった？」

「そうだなあ、30mくらいだったはず」

「口をカンカン鳴らして火を噴くやつだろ？」

「ああ、それだ！」

「それは亜竜だな。真竜だと、もうふた周りほどデカイ」

「え?! マジかよ！」

アキラが命がけで倒したのよりさらにデカイドラゴンが来たら、王国はどうなるのだろうか？

その対策も考えていたほうがいいのかもしれない。

こちらの大陸から、武器を融通してもらう手もあるな。

「武器のメンテとかどうしているんだ？」

「かなり苦勞しているようだな。もう部品を作ろうにも簡単には作れないし」

そのため、門から雪の都市の中に入って、資源を調達しようという話になっているようだ。

近くの自衛隊基地に行けば、部品を調達できるって寸法だ。

男の話では、すでに自衛隊ではなく国防軍ということになっているらしい。

話の間にも乗り物は下降を続けて、街の近くまでやってきた。

「これだけの密集している住宅街で、俺の身内の場所が解るのか？」

「大丈夫、住所は調べたから」

戸籍などもしっかり管理されているようだ。

そのまま乗り物が降下すると、ある長屋の前に降りた。

同じタイプのコンクリートブロックと木製の長屋が10棟ほど並び、沢山の子どもたちがいる。

子どもは異世界には避難してこなかったそうだから、この子どもたちは、異世界で生まれた子どもたちということになる。

彼らにとっては、ここが故郷ってことになるのではないだろうか？

「このまま、この白いので降りて平気なのか？」

「まあ、こいつは有名だからな。はは、大丈夫」

白い乗り物に乗っているこの男も、かなりの有名人らしい。

長屋の屋根はバラバラで、板やら鉄板やら草葺もある。とりあえず、使えるものはなんでも使う——そういった感じ。下水が完備されておらず、地下浸透なのか異臭が漂う。元世界の俺の地元も数十年前までは、こんな感じだったのだ。そのおいにすら郷愁を感じる。

「ここに来ていいこともある」

男の言葉に俺は振り向いた。

「いいこと？」

「地震がまったくくない。あと台風もないし雪も降らない」

普通の低気圧による嵐はあるが、熱帯低気圧ではないようだ。

「耐震の設備や津波対策に金を使わなくてもいいのはデカいな」
アキラの言うとおりで、その分を復興のために使えるってことだし。

「でも、そのための技術が退化してしまうんじゃない」

「それはあり得るけどな」

「それに英語を勉強する必要がなくなった、ははは」

「そりゃいいな」

アキラが男と一緒に笑っている。

その代わり、異世界と商売するためには異世界語を学ぶ必要がある。

女性名詞と男性名詞がある、面倒くさいタイプの言語らしい。
英語のほうはかなり簡単だと言う。

男との会話を終え簡素な家の前に立つと、小さな札が下がり——浜田と書いてある。

本当にここだ。

高校生の彼が、親元を離れて1人で異世界にやって来て、どれだけ苦労したのだろうか？

それを考えるだけで、ちょっと目頭を押さえる。
オッサンになると、涙もろくなっていかな。

「「わあああゝっ！」「」」

白いアレイの所に子どもたちが集まってきた。
物珍しいのだろう。

「ははは、ガキだらけだな。産めよ増やせよか？」
子どもたちはアキラに任せよう。

「ふう……」

俺は深呼吸をしてから、ドアをノックした。

「ごめんください」

「はい」

中から声が聞こえる。

若い女性の声だ。

ドアが開くと、黒髪の女性が顔を出した。

当然だが、日本人でTシャツにジーンズ姿である。

歳は――20歳ぐらいであろうか。

黒い髪を後ろでまとめて、ちょっと痩せており、頬がこけているようにみえる。

「こんにちは、ここは浜田勇氣さんのお宅で間違いないでしょうか？」

「はい……どちら様でしょうか？」
もちろん日本語だ。

どうしようか一瞬迷ったが――俺は正直に相手に伝えることにした。

「あの――私は勇気君のお父さんであるケンジの兄で、ケンイチと申します」

「……え?!」

「こちらに勇気君がいると先日知って、訪ねてきたのですが……」
「も、申し訳ございません、主人は仕事に出ておりました」
「どうやら、彼女は勇気君の奥さんらしい。」

「それなら仕方ない。彼が元気であればそれでいいのです」

「主人には、そう伝えますので……」

「よろしくお願いいたします。あの……、ここで物資とかで欲しいものはありますか?」

「え?! 物資?! あ、あの……不躰で申し訳ございませんが、お米があれば……」

米か、米なら任せろ。

早速シャングリ・ラで、25kgのコシヒカリを1万円ですつ購入。

あまり大量にあっても虫が湧いたりするし。

「ポチツとな」

茶色の米袋がドサッと2つ落ちてきた。

「お米!」

女性が米袋に飛びついた。

「塩などは?」

「お塩は海から取れるので……あの、砂糖もあるなら、お願いできないでしょうか?」

「解りました」

シャングリ・ラで1kg200円の砂糖を10袋買う。
砂糖が貴重なら物々交換にも使えるだろう。

海辺でサトウキビ栽培も行われているらしいが、量が少ないらしい。

食料もそうだが、こういう世界なら医薬品も貴重だろう。

バ○アリンやら、キ○ベジンなどをダース単位でやる。

えーと、おっとここは正露丸も必要だな。

「ありがとうございます！　ありがとうございます！」

女性が物資を抱きしめて礼をしている。

「ママァ！」

奥から半ズボンの男の子が出てきた。

彼は勇気君の息子か。

栄養状態がよろしくないのか、青っ鼻を垂らしている。

これもまた懐かしい光景だが――跡取りがいれば、俺がいなくても浜田家が日本でつながる。

勇気君に会えなかったのは残念だが、ここでずっと待つわけにはいかない。

「さて、戻ろう」

「本人に会わなくてもいいのか？」

「ああ……物資を渡したが盗まれたりしないだろうな？」

「一応、警察組織はきちんとしているので、大丈夫だと思うが」

男の話では、政府機関もしっかりと機能しているようだ。

女性に挨拶をすると、集まった子どもたちを散らして白いアレイは、カダン王国に向けて飛び立った。

— — — — — ◆ ◆ — — — — —

——俺たちがサクラに帰って1年少々が過ぎた。

あの男が言うとおりに、帰ってきて数ヶ月で、リリースとプリムラが妊娠した。

俺の身体の改造は上手くいったらしい。

今日はリリースの出産の日。

俺は家の前にテーブルを出して、コーヒーを飲んでいた。
ここでジタバタしても仕方ない。

家の裏では、辺境伯の屋敷が棟上げも済み工事が進む。

完成まであと半年といったところか。

次の子どもは、屋敷での出産となるだろう。

アストランティアのアキラの所も、レイランさんとくっところの女騎士が妊娠して、そろそろ生まれるらしい。

最近彼も、こちらに顔を出していないが、いそがしくて遊んでいない場合ではないと思われる。

なにはともあれ赤ちゃんラッシュだ。

今日の出産にともない、アマナとセテラが産婆役をしてくれている。

俺は外で黙って待つだけ——こういうときの男は無力だ。

外で飲んでいた缶コーヒーが3本ほど空になると、赤ん坊の元気な泣き声が聞こえてきた。

そわそわしてしまうが、呼ぶまで入ってくるなど言われているので、じっと待つ。

家のドアが開いた。

「聖騎士様！」

アマランサスが呼んでいるので、家の中に入る。

ベッドの上にリリスと小さな新しい生命がタオルに包まれて寝ていた。

覗き込むと、かすかな金髪で真っ赤な顔をして小さな手をしている。

黒髪は遺伝しなかったらしい。

リリスに似たなら美男子になるだろうし、俺としてはそっちのほうがいい。

「ケンイチ……」

金髪をボサボサにして、疲労困憊といった顔をしたリリスがベッドに横たわっていた。

彼女の手を両手で握る。

「リリス、ありがとう。皆もありがとう!」

「私が診ているんだから、大丈夫だったでしょう?」

セテラは魔法でサポートをしてくれたらしい。

「セテラもありがとう!」

「ケンイチ!」

アネモネが泣きながら抱きついてきた。

彼女も後学のために出産を見ていたのだ。

「赤ちゃん産むって大変だな」

「うん……」

俺に抱きついたままのアネモネが頷いた。

「よしよし」

かなり背が伸びた彼女を抱きしめて、頭をなでてやる。
去年の今頃より10cm以上大きくなった。

「元気な男の子だよ！ 旦那の跡取りが出来たねえ、ヒヒヒ」
「アマナもありがとう」

皆に礼を言っていると、ドアが開いた。

「ケンイチ！ 生まれたにや？！」 「旦那！」

「こらあ！ 獣人たちは入るんじゃないよ！ 毛が舞うからね！」
「うにゃー！」

ドアの外で、獣人たちがバタバタと暴れている。

「ケンイチ様のガキの誕生を祝ってえ！ ウラー！ ウラー！ ウ
ラーアア！」

「「ウラー！ ウラー！ ウラーアア！」」

こりゃ、ここぞとばかりに獣人たちはどんちゃん騒ぎをするつもりだな。

出産を間近に備えたプリムラは、アストランティアのマロウ商会にいるが、数日中にこちらに移動してくる予定だ。

近々産まれる予定。

アキラの所も生まれるし、ベビーラッシュが続くな。

「聖騎士様！ 妾も子どもを産んでから、神器を使うことにいたしましたわえ！」

「だ、大丈夫か？」

「聖騎士様のお力があれば、怖いものなどあるはずがありませんまい」
「それじゃケンイチい！ 私もお！」

セテラも俺に抱きついた。

「エルフと子どもを作るのは、かなり難しいって話だぞ？」

「ええ〜？ なんとかなるでしょう？ あいつに頼んでよお」

あいつつてのは、例の管理者の代行をしているという男のことだ。彼からタブレットをもらって、いつでも連絡ができるようになってる。

管理者が整備しているネットにもアクセスできて、異世界に移住してきている日本人たちもこのネットを使っているという。

日本が異世界で政府機能やら戸籍を維持できているのもこいつの力が大きいらしい。

外にいる獣人たちをかき分けて、誰かが入ってきた。

「遅れた！」

慌てて入ってきたのは、カナンだ。

「どうした？」

「赤ん坊の産着を作ってきたんだ！ デザインが中々決まらなくてな！」

「おおっ！ ありがとう！」

早速、白いフリフリがついた産着を赤ん坊に着させた。

「旦那、子どもの名前は決めたかい？」

アマナの質問に俺は答えた。

「ケンジにしようと思う」

出産が近づいてからずっと考えていた——これは弟の名前だ。

もう再会はかなわないが、彼の分まで健康に育ってほしいと思う。

「」「おおおっ！」「」

名前が決まったことで、外の獣人たちが盛り上がる。

獣人たちの隙間から、ベルとカゲも顔を出した。

この国での新しい俺の異世界通販生活が今始まるのだ。

E
N
D

275話 異世界通販生活（完）（後書き）

丸4年に渡り連載してきたアラフォー男の異世界通販生活ですがこれにて完結になります。
今までご愛読ありがとうございました。

この作品の詳細については以下のURLをご覧ください。
<https://ncode.syosetu.com/n2945eg/>

【アニメ化決定！】アラフォー男の異世界通販生活

2025年3月8日14時00分発行